

ゲッターロボサーガ デ レマス版

E.T.c

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時は2011年――。

人類の前に恐竜帝国と名乗る敵が襲来した。

宇宙から降り注ぐ宇宙線の一つ『ゲッター線』を研究する科学者、早乙女博士は本来宇宙開発用であった作業ロボット『ゲッターロボ』を戦闘用として改造し、恐竜帝国に對抗しようと立ち上がる！

しかし、早乙女博士が育て上げた早乙女達人をリーダーとする初代ゲッターチームは、恐竜帝国との前哨戦で力尽き、命を落としてしまう。

急遽、新たなチームの編成を迫られた早乙女博士は、研究所への出資を行っていた、宇

宙を駆けるアイドルの育成を目指すアイドルプロダクションに話を持ち掛け、三人のアイドルをゲッターのパイロットとして選抜するのだった。

パイロットとして選ばれた島村卯月、渋谷凪、本田未央の三人は自分達のプロデューサーからゲッターロボを託され、迷いながらも恐竜帝国の襲来から始まる幾多の戦いに身を投じていく――。

目次

第1部 始動編

第1話『ニュージエネレーション、出撃』

!! 1

第2話『三大メカザウルス、襲来』

51

第3話『ニュージエネレーション解散』

!?! 93

第4話『大雪山おろし』

第5話『強敵! キャプテン・ニオン!!』

212

第6話『マシーランド決死行!!』

264

第7話『決戦! ゲッター対ゲッター!!』

314

第8話『無敵戦艦ダイ』

第9話『最終決戦!! 恐竜帝国の落日!』

410

第2部 "G"編

第1話『新たなる力! 発進、ネオゲッ

ターロボ!!』

第2話『決意! 戦いの渦へ!!』

498

第3話『結成、Gチーム』

第4話『熱血乙女A!!!』

第5話『飛翔、熱きその名はゲッター烈』

622

火!!

663

物の脅威!!

995

第6話『恐竜帝国最期の日! (前編)』

第13話『大海獣決戦!・後編 相伝、

704

大雪山おろし!!』

1041

第7話『恐竜帝国最期の日! (後編)』

第14話『ゲッター宇宙へ! 未知なる

745

遭遇!!』

1092

第8話『新たなる敵、百鬼帝国』

第15話『晶葉デビュー、アイドルの道

781

!』

1130

第9話『発進、ゲッターロボG!!』

第16話『壮絶!ゲッター軍団VS量

834

産型ドラゴン軍団!!』

1169

第10話『その名はロッキング・ガール

第17話『その名は真ゲッターロボ!』

ズ!』

892

1218

第11話『悪夢の細菌兵器』

950

第18話『彼女達の刃 (前編)』

第12話『大海獣決戦!・前編 古代生

1264

幕間『真編』	1664
!!』	1664
第26話『目覚めの時、真ゲッターロボ』	1599
第25話『激闘!!明日を信じて!』	1564
第24話『列島震撼!!』	1523
第23話『百鬼帝国の真実』	1469
第22話『アトランティスの守護神!』	1418
第21話『胡蝶の夢』	1341
第20話『非道の魔王鬼!!』	1307
第19話『彼女達の刃(後編)』	

前編『虚空からの襲撃者』	1731
後編『時は来たれり』	1792
第3部“大戦”編	
第1話『Beat Soul, & Rocking my Heart』	1862
第2話『不滅のマシン、ゲッターと共に!』	1914
第3話『新たなる支配者!!我が名はランドウ!!』	1957
第4話『怒りに力を』	1997
第5話『アメリカン・ヒーロー、テキサスマック参上!!』	2034

第6話『誇りを賭けた戦い』	—	2068
第7話『新たな舞台へ!』	—	2119
第8話『アラスカ戦線』	—	2163
第9話『我ら、スーパーロボット連合』	—	2208
!!	—	2247
第10話『悪魔の兵器』	—	2280
第11話『神か悪魔か、真ゲッターロボ』	—	2280
ボ	—	2280
第12話『飛べ、焰のごとく!!』	—	2336
第13話『出発、過酷な旅路へ!!』	—	2393
第14話『アラスカ脱出』	—	2448
第15話『シベリアの城塞!超兵器・ボ ルガ!!』	—	2489
第16話『戦う意味』	—	2541
第17話『生命を賭ける前哨戦』	—	2576
第18話『勝利を目指せ!!』	—	2609
第19話『決戦、ドラゴンタートル!!』	—	2651
第20話『決戦、ドラゴンタートル』	—	2687
2	—	2687
第21話『決戦、ドラゴンタートル』	—	2720
3	—	2720
第22話『辛勝』	—	2746

第23話『欧州恐竜帝国』――

タードラゴン!!』―― 3124

第24話『甦る帝王!!』――

第33話『南海の死闘!真ドラゴンを

第25話『強くなりたい』――

討て!!』―― 3180

第26話『超気圧の壁!脅威、メガタイ

第34話『掴み取れ!私達の未来!!』

フーン!!』――

第27話『戦いは誰が為に』――

第4部“異”編

第28話『想いを掛けた決死行!!』

第1話『来たる、鬼』――

2964 第29話『死力の追撃戦!!』――

第2話『アーク、胎動』――

第30話『北極原の戦い!!』――

第3話『仔竜、吠える』――

3041 第31話『北極圏を血に染めて』

第4話『キリクが駆ける』――

3085 第32話『蛇牙城陥落!覚醒、真ゲツ

第5話『不動明王』――

第33話『蛇牙城陥落!覚醒、真ゲツ

第6話『姉と妹』――

第34話『蛇牙城陥落!覚醒、真ゲツ

第7話『旅の始まり』――

第8話 『双竜激突』	—
第9話 『響く歌声』	—
第10話 『蠢く蜥蜴』	—
第11話 『死線』	—
第12話 『暴竜の城』	—
第13話 『彼方へ…』	—
第14話 『異界変』	—
第15話 『舞が如く』	—
第16話 『犬と猿と』	—
第17話 『溪、出撃す』	—
第18話 『集う者達』	—
第19話 『新たなる竜』	—
第20話 『友紀、猛る』	—

4019398539423901384438133777372937033666363435863541

4471	最終章	第21話 『黒い高樓』	—
	前編 『Step on Stage』	第22話 『明の星々』	—
		第23話 『輝き共に』	—
		第24話 『女神の黄昏』	—
		第25話 『散る命、胸に』	—
		第26話 『真竜がいく』	—
		第27話 『四神降臨』	—
		第28話 『遙かなる旅路』	—
	番外編 『折り重なるセカイ』	—	—

444843804331426842234187414341064073

第1部 “始動” 編

第1話 『ニュージェネレーション、出撃!!』

~~~~~ 巖流島 ~~~~~

達人「おい！山岸、御門、桐谷！聞こえるか!?…プロトゲッターチーム、返事をしろ!!…クソツ!!」

達人「一体なんだってんだ！あのトカゲの化けモンはよ…！」

『達人、私だ。聞こえているか?』

達人「その声、父さ…早乙女博士っ！」

早乙女『無事だったか。そちらでは今一体何が起こっている?』

達人「…。どうもこうもありません。ゲッターの合体試験中に突然妙な奴が…！」

早乙女『妙な奴…?』

達人「こいつです」

イーグル号のカメラが捉えている映像を研究所に送る。

早乙女『こやつは……!』

達人「博士…何か心当たりが…!？」

早乙女『……。今世界各地で、この機械恐竜に似た兵器が複数確認されている』

達人「……何ですって……!」

早乙女『中には明らかな人語を話す個体も現れ、彼らはこう言っているそうじゃ……』

早乙女『——『我らは恐竜帝国』——とな』

達人「……恐竜帝国……!?!」

早乙女『各国の軍隊が相手をしているが、とても相手にならん。達人、ゲッターはまだ調整中じゃ。速やかにそこから離脱してくれ』

達人「……離脱……。冗談でしょ? 博士……っ!」

機首を敵へと向ける。

早乙女『何をする気だ! やめろ、達人!!』

達人「プロトゲッターチームはあいつに全滅させられたんだ……! 黙って引き下がるかよ!!」

達人「チエエエンジゲッターアアアア……ッ!!」

達人のイーグル号に追隨していた二機のマシンと合体して、一体の巨大ロボッ

トが姿を現す。

達人「ゲッターアートマホオオオウクツ!」

肩から取り出した斧を右手に構え、敵に向かって躍り掛かるゲッター1。

??? 『ギヤオオオオオンッ!!』

達人「クソッ! くたばりやがれ、このトカゲ野郎!!」

機械恐竜の首元にトマホークを叩き込み、完全に密着した距離で蹴りや拳を喰らわせる。

??? 『キシヤアアアアッ!!』

達人「ぐおお?! …こいつ、離せ!!」

機械恐竜もゲッターの体に食らいつき、その巨体を悠々と持ち上げた。

達人「…思った以上に出力が上がらない…! やはり、調整不足の影響か…!」

??? 『ギヤオオオオオンッ!!』

達人「ぬおおおお!!?」

宙に持ち上げたゲッター体を、首を振り回して放り投げる。

ゲッターの体は、地面を抉りながらも飛び続け、近くの山肌に激突して止まった。

達人「ぐはあっ!! …畜生…!」

早乙女『状況は圧倒的に不利じゃ! 達人、帰還するんだっ!!』

達人「はあ…はあ…はあ…っ! こんな力を持った敵を…野放しになんてしておけま

せんよ、父さんっ!」

切れた口内から流れ出した、鉄の味のする唾を嘔み締めながら、達人は操縦桿を押した。

達人「うおおおおおおおつ!!」

早乙女『達人おおおおーっ!!』

~~~~ 数分後 戦闘終了 ~~~~

すっかり荒れ果てた戦場に、ゲッターの機影のみが浮かぶ。

至る箇所の装甲が割れ、剥げ、ボロボロとなったゲッターは、同じようにボロボロの体となり、動かなくなつた機械恐竜の頭を手に持ったトマホークでかち割つた。

達人「へっ!ざまあ……みやがれ……」

そのまま崩れ落ちるゲッターの機影。

~~~~ 早乙女研究所 ~~~~

研究員「アンノウン、ゲッターロボ、共に沈黙。…戦闘、終了したようです」

早乙女「ゲッターの……パイロットは……?」

研究員「…はい。ゲッターロボ、プロトゲッターロボ共に生体反応消滅……。…パイロットは……」

早乙女「……」

早乙女「……」

研究員「博士、どちらへ?」

早乙女「…少し、一人になって考えたい……。一人にしてくれ」  
研究員「はっ………了解」

早乙女「……………」

早乙女（恐竜帝国…メカザウルス…。人類にも私にも、立ち止まっていられる時間はない、か……）

早乙女「早く選ばねばならん。新たな戦士たちを…ゲッターを乗りこなせるものを」

第一話『ニュージェネレーション、出撃!!』

くくく プロダクションビル 事務室 くくく

卯月「おはようございますっ！」

凜「おはよう、卯月」

卯月「あ、凜ちゃんっ。もう来ていたんですね！」

未央「しまむー！私もいるぞ〜♪」

卯月「はいっ♪未央ちゃんも、おはようございますっ！」

未央「ん。これで全員揃った感じ？」

凜 「後は…プロデューサーだけだね」

未央 「そっか、それにしてもここに私達だけ呼び出して何の用だろう……」

卯月 「そうですね……。ニュージエネの私達三人だけ集合なんて…何があつたんでしよう…?」

凜 「大事な話がある、つてだけで、詳細は当日、みんな揃つてからだもんね」

未央 「…全く、もったいつけるよ。ウチのプロデューサーは」

卯月 「あははは……」

凜 「未央じゃないけど…。気にはなるよね。一体どんな話なんだろう」

未央 「…もしかして、私達ニュージエネの解散とか!？」

卯月 「ええ!?! そんなの…私嫌です!」

未央 「ははは。嫌だなしまむ。冗談だよ、冗談!」

卯月 「…もう、未央ちゃんく!」

未央 「あつははつ! 悪かつたつてく。ごめん、ごめんつ」

凜 「その辺にしときなよ、未央。…今はそんなに人がいないけど、騒いで良いつて訳じゃないんだから」

未央 「はいはい。いつ。気を付けますつてしぶりん。だからそんな怖い顔しないでよ

」



卯月「…でも、凜ちゃんの言葉じゃないですけど、静かですね。事務所も…」

未央「…だねえ。ここ来るまでの間もあまり人見掛けなかったし、閑散としたもんだよ、ホント」

凜「みんな都心は危険だから、って地方に疎開したもんね…」

未央「戦線もすぐそこまで迫ってきてるって。この前ラジオで聞いたし、ここら辺もいつ危険区域になるか…」

卯月「私達、どうなっちゃうんでしようか…」

凜「それもこれも、いきなり現れた恐竜帝国のせい、か…」

未央「もう半年になるんだっけか…」

卯月「疎開したみんな…元気にしていると良いんですけど……」

凜「みんな地方でそれなりに活動してるって、前にプロデューサーが言ってたから、大丈夫だと思うけど…」

未央「電力も通信も、軍や研究施設が優先だからね。ホントに無事かどうかは確認できないって言うのが…」

凜「やりきれないよね、何か…」

卯月「私達にできること、って、他にないんでしようか…」

未央「うん？それは、私達がアイドルとして、歌って踊る以外で、ってこと？」

卯月「…はい」

凜「ないよ。…私達はアイドルだけど…それを取れば只の女子高生なんだよ？」  
「何も無い。…何も出来ないよ……」

卯月「凜ちゃん…。…私、そんな風に考えたくないです」

凜「じゃあ何？卯月も銃を手にとって奴等と戦う？それとも兵器に乗るの？」

卯月「…そう言うことは…出来ませんけど…。でも、私達にだって、きつと、色々なことができると思うんです」  
「だから……」

凜「どうしようもない…。…どうしようもないんだよ、卯月……」

未央「あーはいはい！この話、やめ！おしまいっ!!」

卯月「………」

凜「………」

未央「あー………ははは…。何か、空気悪いね？…話題変えよっか」  
ガチャツ

P「お早う御座います。ニュージエネレーションの三人、全員揃ったのでしょうか？」  
未央「………あつ、プロデューサー！遅い！」

P「それは…どうも、すいませんでした…。…お二人は、どうかなさったのでしょうか？」

か？」

卯月 「い、いえ……。何も……」

凜 「……別に」

P 「?…:…:…:…:…:…:…:。なら、良いのですが」

未央 「それよりもプロデューサー! 話ってなに!」

P 「そうですね…。…:…:…:…:…:…:。本題に入る前に一つ」

P 「皆さんは、早乙女研究所、と言う研究施設を御存知ですか?」

卯月 「早乙女研究所…:…:…:…:…:…:ですか?」

凜 「確か…:…:…:…:…:…:…:。未知のエネルギー線を研究してる、宇宙開発を専門にしてる研究機関だ

よね」

P 「そうです。よく、御存知で」

凜 「…:…:…:…:…:…:…:。別に。たまたま近代史の授業の時間にやって、覚えてただけだよ」

卯月 「その研究所が、どうかしたんですか?」

P 「はい。実は私達の所属するこのプロダクションは、その早乙女研究所に出資協力してまして…:」

未央 「嘘お!?!…:…:…:…:…:…:。何で!?!」

P 「詳しくは伺いませんですが、何でも、プロダクションの社長が、研究所の所長

である早乙女博士の研究理念に強く共感なされたそうで……」

卯月「それで、出資を……」

P「…はい。いずれは、宇宙の星空を舞台にしたステージをアイドルに与えたい、と…」

未央「宇宙のステージか……。何かロマンティックじゃんっ」

凜「…それで、その研究所と、私達と呼ばれたのに、何の関係があるの？」

P「…それですが、皆さんはこの数カ月中のスケジュールを覚えているでしょうか？」

凜「今度はスケジュール？」

卯月「…ええ……と、確か無人島でサバイバル生活を送ったり……」

未央「体育会系バラエティ番組で次の日動けなくなるくらい筋トレしたり……アレ？」

凜「体を張った仕事が多かったよね。…それがどうしたの？」

P「はい。…それも踏まえて、三人に受けていたきたい仕事があるんです」

未央「仕事？…何かなー、勿体ぶっちゃって！」

P「はい……。…その、仕事ですが……」

卯月「…？プロデューサー？」

その時、プロダクションビルが僅かに揺れる。

卯月 「きやつ……!」

未央 「じ、地震……!」

凜 「いや、……もしかして……。プロデューサー!」

P 「つ!とにかく、ここから出ましょう!何かあるか分からないので、三人は私の後ろを着いて来て下さいっ」

三人 「はい(……)」

事務室入り口の扉を開いて、廊下へ出る。その廊下の先、数十階の窓ガラスの向こうに見えていたのは、

メカザウルス 『キシヤアアアアアツ!!』

未央 「メ、メカザウルス……!」

卯月 「き……きやあああああああつ!!」

P 「落ち着いて下さい!……まずは、こちらです」

凜 「それで、プロデューサー。どこに行く気?」

卯月 「どこについて……避難しないんですか……!」

P 「それは……。……これから、先程のお話の続きをお見せします」

未央 「ちよ……つ!それどころじゃないでしょ!早く逃げなきゃ……!」

P 「今回三人を呼び出したのと、アレが深く関係しているんです」

未央 「あれ、つてメカザウルスが…?」

P 「その通りです。一先ず急ぎましょう」

凜 「今は言うとおりに付いて行くけど…」

P 「取り合えず、この廊下を抜けてエレベーターで地下へ向かいます」

凜 「地下!」

卯月 「あ、ああ……!!」

未央 「どうしたの!?!しまむー!」

卯月 「あ、ああ……、メカザウルスが……こつち、に……!」

プロダクションビルの方へと向き直ったメカザウルスが、今まさに口を開け、攻撃を加えようとしていた。

未央 「うわあー…ホントだ。ウチのビルこの辺りじゃ一際大きくて、目立つもんなく……」

凜 「そんな悠長なこと言ってる場合……!」

未央 「いやホント。命の危機が迫ると、人って冷静になるんだなあつて……」

凜 「何を呑気に、つて……メカザウルスが……!」

メカザウルスの口からミサイルが放たれる。

卯月 「いやあああああつ!!」

『ミサイル発射にやんつ!!』

事務所までの数メートルの間、メカザウルスのミサイルが、別方向から飛来したミサイルに撃ち落とされる。

凜 「…い、生きてる…!何なの…?」

未央 「あ、あれは…!」

卯月 「戦闘機…ですか…?形の違うのが、三機も…!」

『おつ待たせにや〜ん、Pちゃん!大丈夫だった!』

卯月 「この声…みくちゃん!」

P 「…どうやら、間に合ってくれたようですね」

くくくプロダクションビル 屋外 くくく

みく 「うにやあああつ!騎兵隊の到着にやあ!!」

瑞樹 「どちらかと言ったら、猫にウサギの愛玩動物隊じゃないかしら?」

菜々 「あ、それ良いですねー。もちろんナナは可愛いウサギさんです!キャハツ☆

みく 「うにゆう…」。今一つまとまりにかけるにやあ…」

瑞樹 「良いじゃない?緊張で自分を見失ってるよりは。自分らしくって、分かるわ」

P 『前川さん、川島さん、安部さん。聞こえますか?』

みく「その声はPちゃん！バッチリ聞こえてるよ！」

瑞樹「そちらに負傷者はいないかしら？」

P『はい、皆さんの救援のおかげで。助かりました』

菜々「いいんですよ礼なんて！それよりも、早く卯月ちゃん達を連れてつてあげて下さいっ！」

P『はい、そうさせて貰います。……ここは任せても？』

瑞樹「心配はご無用っ！」

みく「バッチリ仕事をこなして見せるから、プロデューサーも自分の仕事、きっちり頑張るにゃ！」

P「…はい。それではしばらくの間だけ、宜しくお願いします」

瑞樹「ええ。でも約一名、体力が一時間しか持たない娘もいるから、なるべく手早く、ね？」

菜々「な、なんで今その話をするんですか!?それじゃあまるでナナが足手まといみたいじゃないですか！」

みく「菜々ちゃんは足手まといなんかじゃないにゃ。ちゃんとした仲間の一人にゃ！」

菜々「みくちゃん…っ！…ホント、みくちゃんは良い子ですね…！」



瑞樹 「言い方がおばさん臭いわよ？」

菜々 「っ！な、菜々は17歳、ですよー？」

メカザウルス 『キシヤアアアアアンツ!!』

みく 「話はそこまでにや。メカザウルスがお待ちかねで首伸ばしてるにや。Pちゃ  
んっ！」

P 『はい！皆さん、こちらです』

卯月達の手を引いて、エレベーターのある廊下奥に向かって歩き始める。

みく 「よし、瑞樹さん、菜々ちゃん！準備良いかにや!？」

瑞樹 「ええ。何時でも良いわよ！」

菜々 「やりましたよ！ナナ達で！」

みく 「うーっし、行つくにやー！」

みく 「チエーンジゲッター！」

みく 「うう…にやあああああ!!」

くくく プロダクションビル 中央ロビー くくく

未央 「さ、三機の戦闘機が……」

凜 「合体して、ロボットになった……!？」

卯月 「…まさか、メカザウルスと戦うつもりじゃ……!」

未央「ええ…!?」

凜「そう言うことなの？プロデューサー」

P「……」

凜「あの戦闘機、動かしてたのってみくだよね？」

卯月「みくちゃんだけじゃありません…。葉々ちゃんや、瑞樹さんも一緒にいました」

未央「…どう言うことなの？プロデューサー…!?」

P「…。今は、移動を優先します。こちらへ」

エレベータの扉を開け、乗り込む。目的地はエレベータのボタンには記されていない、地下。

卯月「……」

凜「……」

未央「……」

P「……」

静かに音を立てて、エレベータが地下に降り立つ。扉が開かれた先に見えたのは10メートル程の長い鉄の廊下と、その先の嚴重に固く閉ざされた鉄の扉だった。

未央「うわぁ…、怪しさ満点だね」

P 「…行きましょう」

プロデューサーを先頭に歩みを進める。

P 「先程の、前川さん達の件ですが…」

凜 「!」

P 「彼女達は、アイドルがあの機体に乗った場合、どのような弊害が生じるのかを研究する為に編成されたテストパイロットチームです。…あのロボットも、研究用のプロトタイプに過ぎません」

凜 「アイドルが…あの機体に乗る?あの、ロボットに…?」

未央 「そのためのテストパイロットチームって事は…正式なパイロットチームもあるの?」

卯月 「…ちよつと待って下さいっ!…それって…!?!」

P 「はい。おそらく島村さんの想像通りかと」

扉の目の前に辿り着き、懐からカードキーを取り出す。

P 「言い訳のように聞こえるかもしれませんが、本来はこの様な事の為に、皆さんを集めたわけではありません」

凜 「…どう言うこと…?」

P 「来るべき未来、その新時代の先駆けとなる存在…。貴女方のユニット名にはそ

う言った由来があり、その為に私も、社長も、早乙女博士も議論を重ねました」  
 「なので、この様な結果になってしまって、本当に申し訳ありません」

未央「…っ！な、何言ってるのさ…。プロデューサー…話が見えないよ…？」

P「きつと、これは貴女方にとつても、最悪の選択でしょう。ですが、貴女方三人なら事態を良い方向に持つていくことができる、私は信じています」

卯月「…プロデューサー…」

P「……これが、私から新ニユージエネレーション世代の皆さんにお願いする、新たな仕事です」

プロデューサーの手により、カードキーが引かれ、パスワードが解かれ、目の前の重厚な扉が重々しい音を立てて開かれる。

卯月「……これは……」

扉の先に、三人が目撃したモノ、それは…、

凜「赤い…ロボット……」

未央「さつき見たロボットに似てる…。あつちは白かったけど」

P「これが…早乙女研究所の開発した、人類を恐竜帝国から救う切り札——」

その名も、

P「——ゲッターロボです」

卯月「ゲッター…!?それがこのロボットの名前……」

P 「はい。そして、皆さんにはこれから……」

P 「このゲッターロボに乗り、人類を救って頂きます」

くくく プロダクションビル 屋外 くくく

みく「うにやああああっ!!?」

プロトゲッターが、近くの雑居ビルへと倒れ込み、舞い上がった土煙の中に沈む。

みく「痛たたた……。試作機の性能の低さは如何ともし難いにやあ……」

瑞樹「みく、私と変わります。：相手との性能差はスピードでカバーよ！」

みく「分かったにや！」

メカザウルス『キシヤアアアアアッ!!』

みく「オーブンゲットにや！」

メカザウルスの攻撃が、プロトゲッターに突き込まれる直前で、ゲッターは再び三機のマシンに分離し、順番を入れ換えて上空でまた重なる。

瑞樹「チェンジゲッター! 2ウツ!!」

そして先程のプロトゲッター1よりも華奢な身形をした、プロトゲッター2がメカザウルスの正面に着地する。

瑞樹「さ、ここからは張り切って行かせて貰うわよ……。ドリルストームッ！」

左腕のドリルをフル回転させ、発生させた竜巻をメカザウルス目掛け放つ。

メカザウルス『シヤアアアアアッ!!』

瑞樹「やあ!!」

竜巻に煽られて怯んだメカザウルスに対し、ドリルを構えて飛び込む。

瑞樹「くっ……! 勢いが足りない……!?!」

菜々「そ、装甲を破れてません……!」

みく「メカザウルスの反撃が来るにやあ!」

瑞樹「っ!」

メカザウルス『キシヤアアアアアッ!!』

腕を大きく振りかぶって振るわれた一撃を、右手のアームで辛うじて受け止める。

瑞樹「……ちよつと、この子は力比べが苦手なのよ……?」

みく「このままじゃ押し負けちゃうにや!」

瑞樹「…確かにこれは、思った以上に不味いかしらね…」

瑞樹(時間、巻きで頼むわよ…プロデューサー君……!)

くくく プロダクションビル ゲッターロボ地下格納庫 くくく

卯月「……………」

未央「……………」

P 「……………」

凜 「…幾つか、質問したいんだけど……」

P 「はい、何でもしようか？ 渋谷さん」

凜 「うん、じゃあまず一つ目だけど、何で事務所の地下にこんなものがあるの？」

P 「…全てはこの日の為に、予め用意されていました」

凜 「ふうん。つまり私達が最終的にゲッターのパイロットになるのは、決まっていたことなんだ？」

P 「…はい。そう言うことになります」

未央 「ちよつと、何でさ!?! だって私達、アイドルって位しか取り柄の無い、只の女子高生だよ!?!」

卯月 「その通りです…！普通の乗り物だって動かしたこと無いのに…いきなりロボットなんて……」

P 「それは承知の上です。…ですが、このゲッターを動かすにはある程度の適正が必要なので…」

卯月 「私達に、その適正が…?」

P 「はい。ニュージェネレーションとは、ゲッターへの高い適正値を持つ適格者三名によつて編成されたアイドルユニットなのです」

未央 「…そんな…ッ! このロボットに乗るために、私達三人集められたって事…!?! 口

ボットに乗って、戦うために……!」

P 「それは違いますっ!」

未央 「違わないよ! さっきプロデューサー、自分で言ってたじゃんっ! 全てはこの日のために、って……!」

「プロデューサーの言うこの日ってメカザウルスが攻めてきてる今の事なんでしょ!」

P 「っ……! それは……違うんです……! 私を、信じて下さい……っ!」

卯月 「プロデューサー……」

凜 「…プロデューサーをあんまり苛めたらダメだよ。未央」

未央 「しぶりんっ」

P 「渋谷さん……!」

凜 「ここの扉を開ける前、プロデューサーが何て言ってたのか思い出してよ。未央、卯月も」

未央 「……プロデューサーが……」

卯月 「来るべき未来、新時代の先駆けとなる存在……」

凜 「そのためのニュージエネレーションだって、言ってくれたよね?」

未央 「だけど……!」

凜 「プロデューサーでも、どうしようもなかったんだよ。変えようがなかった、変わ



りようがなかった。だから……」

「プロデューサーが只戦うために私達をゲッターに乗せるんじゃない、つて……そこは信じてあげたい」

卯月 「凜ちゃん……」

みく 『ちよつとPちゃん!?まだ話は纏まらないのかにや?』

菜々 『は、早くしてくれないと……、ナナもみんなもいよいよピンチですつ。……きやああ!!』

卯月 「みくちゃん、菜々ちゃん……っ!」

P 「前川さん、菜々さんそれに川島さんも……もう暫くの辛抱、お願いしますっ!」

凜 「待っててみく。今行くから!!」

P 「渋谷さん!」

凜 「考えてる暇はないんでしょ?だったら……」

みく 『その声は凜ちゃんかにや?……ま、待ってるにや……でも、早くしないとみく達アイドルがしちやいけない顔に……きやあつ!!』

卯月 「みくちゃん……!」

凜 「時間がない……。プロデューサー、ハッチはどこ?」

未央 「待ってよ、しぶりん、しまむー……!!」

P 「本田さん……」

未央 「……一つだけ聞かせて、プロデューサー」

P 「……はい、何でしょうか？」

未央 「もし、ここで私達が乗らない、って言ったらどうするつもりなの？」

P 「……。上の皆さんと、貴女方を避難させて、ここにセットされた自爆装置を起動させます」

卯月 「そんな……そんな事したら……プロデューサーは……！」

P 「私の事は良いのです。皆さんを守ることが出来れば……。……皆さんをお守りする事が、私の務めですから」

未央 「プロデューサー……」

凜 「私は一人でもやるよ……。みく達を助けないと」

卯月 「……わ、私もやります……！」

凜 「卯月……」

卯月 「プロデューサーのお話を聞いて、やっぱり、甘えちゃいけないって、何か出来ることを探していたのに、逃げたらダメだなって思ったんです……。だから……」

凜 「良いよ。気持ちには十分に分かったから……」

P 「渋谷さん、島村さん……申し訳ありません……。っ！」

凜 「…で、未央は？」

未央 「……………」

未央 「はくくあ！二人がそんなやる気満々じゃ、面倒臭いなんて…言える雰囲気じゃないじゃん」

卯月 「未央ちゃん…！すいません、私達のせいで…」

未央 「いいいいいいよ、しまむーが気にすることじゃないって…」

「それに…悪の恐竜帝国に立ち向かう正義のアイドルって、何かヒーローみたいで格好いいじゃんっ!？」

卯月 「未央ちゃん…!」

凜 「全く、遊びじゃないんだよ……。でも、決まりだね」

未央 「おう！」

卯月 「はいっ!」

P 「皆さん……………!本当に、申し訳ありませんっ…………!」

未央 「もうく!何でプロデューサーが謝るの?…そこは素直に、ありがとう、で良いんだよ!」

P 「つ……………!はいっ……………」

未央 「よおくし!んじゃ、ちやつちやと準備に取り掛かろう!プロデューサー、コク

ピットつてどこ?」

凜 「そこで、どうして未央が仕切るの?」

未央 「え…? あははは…、そこは、ほらニュージェネレーションのリーダーだから」

卯月 「それよりも早く行きましょう! みくちゃん達が心配ですっ!」

凜 「そうだね…」

くくく プロダクションビル 屋外 くくく

菜々 「チエ〜ンジゲッター3!」

アスファルトの地面を歪めて戦車のような下半身を持つ、プロトゲッター3が大地に着陸する。

菜々 「いただきますよ〜! ゲッターミサイルツ!!」

プロトゲッターの肩から放たれたミサイルが、メカザウルスに命中し爆ぜる。が、

瑞樹 「…目標、健在…!」

みく 「まったく効いてないにや…!」

菜々 「う、ウソおー!?!」

瑞樹 「所詮プロトタイプだもの…。威力はお察し、つてところね」

菜々 「そ、そんな事…つて、きやあああああつ!?!」

メカザウルスの放ったミサイルの内一発がプロトゲッターに命中して爆ぜ、さらに数

発のミサイルも周囲に拡散した。

瑞樹「っ…!!ダメージレベル上昇!いよいよピンチね…!」

菜々「うう…!!っ!ちよつと待って下さいっ…さつき、こつちから逸れてミサイルが飛んでった方向って…!!」

瑞樹「!?!」

みく「Pちゃん達のいる地下格納庫のハッチにや!!」

くくく プロダクションビル ゲッターロボ地下格納庫 くくく

卯月「きやつ!」

未央「すごい揺れたね」

凜 「上のハッチの方に命中したみたいだけど…」

P 『皆さん、そちらの方は、大丈夫だったでしょうか…?』

未央「こつちはゲッターのコックピットの中にいたからねえ。私はなんともないよっ!」

卯月「同じく、大丈夫ですっ」

凜 「私の方も…。プロデューサーの方こそ大丈夫?ハッチの残骸がそつちに落ちていったみたいだけど…」

P 『こちらの方も…何ともありません…。…大丈夫です…』

凜 「そう？それなら良いんだけど…、プロデューサー？」

P 『…それよりも、マニュアルに目は通して頂けましたか？』

未央 「アレを一気に覚えるのは大変だけど、まあ動かし方くらいなら…」

卯月 「私も、要点だけですけど…」

P 『…流石です。それではこれから起動に入りますが、先ほどの衝撃で、エネルギー供給システムに異常が発生したようです』

卯月 「ええ!？」

未央 「それってヤバイんじゃない?…」

P 『はい。…ですので、私はこれから此方のコンピュータでエネルギータンクを人為的に暴走させ、ゲッターに対してエネルギー供給を行います』

凜 「それって…大丈夫なの?」

P 『…ゲッターはゲッター線で動くロボットですから…大丈夫なはずですよ』  
未央 「げったー線?」

P 『はい。早乙女博士が研究している新たな宇宙線の事で、ごく僅かな媒介から多量のエネルギーを放出するとか…。私は専門家ではないので、詳しいことまでは分かりませんが…』

卯月 「とにかくトンでもなくすごいエネルギーって事なんですね!？」

未央「うわあ……しまむーざっくり言ったなー。ま、そんな所なんだろうけど……」

凜「……にしても、ゲッター線の力で動くからゲッターロボか……安直なんだね」

P『そうですね。……それでは、皆さんを送り出す前に……確認しておきたいのですが……、皆さんの搭乗割りです』

P『まずは島村さん。一号機、イーグル号』

卯月「はいっ！」

P『次に渋谷さん。二号機、ジャガー号』

凜「はい」

P『最後に本田さん。三号機、ペアー号』

未央「二応確認しときたいんだけど、この搭乗割りの理由は？」

P『……皆さんの適正と、相性の結果です』

未央「ふうん。じゃあ私が今機体を上から数えて一番下にいるのも、偶然？」

P『……縁の下の力持ち、と言う事で……』

未央「……んふっ！分わかりましたよーっと、本田未央、了解でありますっ！」

P『……。それでは、エネルギー供給を始めます。……渋谷さん、そちらからのコントロールで、ゲッターの動力部分の整備ハッチを開放することは可能ですか？』

凜「ちよつと待つて……マニュアル見ながらだから……。えつと、これでマニュアル

操作：整備ハッチ間接操作：ハッチ開放……」

パシユウウウ……！

機体内部から圧が抜けて、ゲッターの腹部辺りが開き、淡い薄緑色の球体が露出する。

卯月「コレがゲッターの動力炉……？」

P 『厳密には違いますが……、これで大気中に放出されたゲッター線を吸収してくれるでしょう』

未央「ほえ……！なかなか便利なんだね」

P 『一応、最終手続ではあるんですが……。それよりも、エネルギー暴走を始めます。コックピットに乗っている貴女方にも衝撃がある筈ですから、操縦桿を決して離さないで下さい。良いですね？』

三人「はい（っ）！」「」

P 「それでは、エネルギータンクを暴走状態にします……！」

コンピュータに取り付けられたありとあらゆる計器のスイッチやダイヤルを切り、最後にガラスで固く閉ざされた隅のレバーを勢いよく叩き割って取り出し、引いた。

~~~~ プロダクションビル 屋外 ~~~~

メカザウルスによって吹き抜けになった地下格納庫への通路を背後にプロトゲッターとメカザウルスが組み合せて押し合いを続ける。

瑞樹「負けちゃダメよ！分かるわね、菜々さん!？」

菜々「い、言われなくつともそうしたいんですが…パワーが…!」

ギユルルルルルルウウンツ!!

前進の意思を示すプロトゲッターの無限軌道だが、確実に押され、少しずつ後退している。

みく「まずいにやあ…このままじゃ…!」

抵抗の意思を見せようと、両足のペダルを強く踏み込んだ。直後――、

ギユンツ!!

みく「な、何にや!？」

瑞樹「後ろ…!?いえ、地下の方から…!」

菜々「これは…:ゲッター線のエネルギーですか!？」

三人が振り返るとそこには、地下格納庫から天を高く貫く巨大な光の柱が出現していた。

くくく ??? くくく

卯月（ここは…:）

目を覚ましたのは、淡い薄緑の光の中。暖かく包み込む光の中、彼女は見た。

白の無を。

広大な宇宙を。

そこにある無数の星々。

——地球。

魚、トカゲ、猿…数多生きる動物達、その生命。

…そして、人類——。

それは、この宇宙が誕生した永い歴史、地球という星で過ぎた進化の系譜。果たして、その先にあるものは——！

卯月（…ゲッター…!!）

『——卯月っ!!』

くくく 屋外 市街地 くくく

卯月「——あつ…!!ここは…?」

凜「大丈夫?卯月」

卯月「…凜ちゃん。それに、未央ちゃんも…ここは、外ですか…?」

メインモニターの右下に二つのウィンドウが現れ、見知った二人の姿を映す。

凜「そ。私達、エネルギーの流れに乗って、外に出たみたい」

未央「しまむー大丈夫?さつきことは違うトコ見てたよ?絶対」

卯月「あ、ははは…（何だっただんでしよう…今の…）」

P 『……三人とも、無事ですか?』

卯月 「あつ……!プロデューサー……!そっちも何ともないですか?」

P 『……島村さん……。全員、ご無事のようですね』

未央 「モツチロン!」

凜 「何とかやれそうだよ。プロデューサー」

みく 『Pちゃん、卯月ちゃん、みんな!ゲッターの起動に成功したにや!?!』

卯月 「この通信……みくちゃん!」

凜 「……ゲッターの姿がさつきと違う……」

菜々 『はいっ!今この姿はプロトゲッター3と言って、私が動かしています!』

未央 「ウサミンやるう!」

瑞樹 『細かい話は後回しよ。……いきなり実践だけど、やれるかしら?』

凜 「この形態だと、卯月がメインパイロットで操縦できるみたい……。卯月、出来そう?」

卯月 「な、なんとかやってみます……!」

ゆつくりとゲッターを地上へ降ろし、プロトゲッターが拘束するメカザウルスの後ろにつける。

卯月 「えーつと……、歩くには、両足のペダルを……」

ググツ ツダアーン!

左右の足が絡み合うようにもつれ、盛大にスツ転ぶ。

未央「…痛たたた…、もう…しいまあむ…!」

みく『何してるにや!!』

卯月「ご、ごめんなさい…!うまく足元が見えなくて…!」

菜々「出てきてくれたのは嬉しいんですけど…、こつちもう限界ですよ!」

瑞樹「菜々さん、一先ずは放り投げちやいましょう」

菜々「でも、そしたら卯月ちゃん達が狙われちゃうんじや…」

瑞樹「…今はこの状況から抜け出すことが先決よ。甘やかしてもいられないわ」

菜々「そ、それもそうですね!…:…:…:それでは、気合いを入れて…:…:!!」

菜々「そおとおおいつ!」

力任せに両腕を振りあげ、メカザウルスを遠くへ放り投げる

菜々「どうです!?!プロトゲッター3のパワーは!?!」

みく「カツコつけてきめてる場合じゃないにや!…:…:あ、足場が崩れて…:…:!!」

菜々「…ええつ!」

崩れた足場から、地下格納庫への穴へと転落しかかるプロトゲッター。

みく「うにやああああああつ!!」

瑞樹「つつ……!早く、オープンゲットしなさい……!」

菜々「りよ、了解つ……オープンゲットオ!」

三機の戦闘機へ別れ、一度上空へ逃れる。

菜々「ふへえ……。一時はどうなることかと……」

瑞樹「一息吐いている暇はないわよ!直ぐにでも卯月ちゃん達を助けに行かないと!!」

みく「分かってるにや!もう一度ゲッター1にチェンジして援護に向かうにや!」

瑞樹「ええ。分かったわ」

菜々「りよー解です!行きますよー!」

みく「うにやああああんつ!」

みく「チェンジゲッター1ツ!」

卯月「あわわ……!早く立ち上がらないと……」

凜「卯月、来るよ……前!」

卯月「えっ……!うわわ……!」

咄嗟に操縦桿を引いて、突撃してきたメカザウルスを躲すが、代わりと言うように、反

対側に転がって尻餅をつく。

卯月「た、立たなきや……きやあつ！」

未央「もお、しまむーは相変わらずだね〜」

卯月「す、すいません……っ！立ち上がりたんですけど、思うように動かなくて……」
みく『ゲッタートマホーク！』

卯月達の乗るゲッターとメカザウルスの間にトマホークを右手に携えたプロトゲッターが立ちはだかる。

卯月「みくちゃんっ！」

みく『みく達が食い止めるから、落ち着いて立ち上がるにや！』

卯月「は、はいっ……！」

みく『さあ、どこからでも掛かってこいにやあ！』

トマホークを片手に、メカザウルスと立ち回る。

卯月「みくちゃん……」

凜「さ、私達も、いつまでも甘えてられない。行くよ」

卯月「は、はい……！」

しかし、卯月達の意味に反してまた、隆起したアスファルトに躓いてつんのめるように転倒してしまう。

卯月「あうう…、ごめんなさい…」

未央「んー、しゃあないっ！この、未央ちゃんにお任せあれ！」

卯月「…え？」

未央「足回りなら、ベアー号のコックピットからの方がよく見えるから、細かい補助は任せてよ」

卯月「未央ちゃん……」

凜「機体のバランス制御ならこつちからでも出来る。卯月は上半身の動きだけに集中して！」

卯月「凜ちゃん……、二人とも…ありがとう……」

凜「礼なら後でも良いよ、それより立ち上がるよ……」

未央「オーライ！3、2、1、で合わせるよ、良い!?」

卯月「…はい！」

未央「よし、行くよ…せーの……」

三人「3、2、1！」

これまでぎこちなかったゲッターの挙動が、嘘のようにスムーズに立ち上がる。

凜「次は一步、歩いてみよう？」

卯月「はいっ！」

凜 「…セーのっ!」

三人 「「3、2、1!」」

一步、二歩と少しずつ、着実に歩みを進めていく。

P (島村さん、渋谷さん、本田さん……)

瑞樹 「へえ……」

菜々 「スゴいですね〜! 流石、ニュージエネレーションの三人ですっ!」

みく 「瑞樹さん、菜々ちゃん…余所見してる場合じゃ……にやあっ……!」

プロトゲッター三人 「「きやああああああ!!」」

強靱なメカザウルスの顎にトマホークを捕まれ、そのまま先程の仕返しと言うように彼方に投げ飛ばされるプロトゲッター。

未央 「みくにゃん!?! みんなっ!?!」

凜 「攻撃しよう卯月!」

卯月 「はいっ!……何か武器は……!」

未央 「っ……! さっきみくにゃんが使ってた奴……こつちにもないかな!?!」

卯月 「でも、どうやって取り出せば……」

P 『「叫んで下さい!」』

凜 「…プロデューサー!」

P 『…叫んで、操縦桿を引いて下さい。それで操縦桿がマルチ入力になります』

未央 「だつてさ、しまむー!」

卯月 「はい! みくちゃんみたいに…」

卯月 「ゲッタートマホーク!」

ゲッターの肩が開き、そこから取り出したトマホークを携える。

未央 「よおーし、思いつ切りやつちやえ! しまむー!」

卯月 「はいっ! …ええええいっ!!」

アクセル全開、と言うようにフットペダルを踏み込んで加速をつけ、一気に距離を詰めていく。

メカザウルス 『キシヤアアアアアッ!!』

一閃。トマホークを大きく振り上げ、力任せに叩き下ろす。

凜 「っ! 反撃、来るよ退がって!」

指示に合わせゲッターを一步後ろへ。そのゲッターの鼻先をメカザウルスの尻尾が薙ぎ払っていく。

未央 「うっはあゝ…! ギリギリ…!」

凜 「敵も相当怒ってるみたいだから気をつけて」

卯月「分かりました！」

未央「どう、しまむー。怖くない？」

卯月「はい！…怖いですけど…怖くないですっ…！二人がいてくれるので」

未央「えへへ…そっか……」

凜「照れるのはあと、次が来るよ…！」

卯月「っはい！」

メカザウルス『グオオオオオンツ!!』

力に任せ、強引に突っ込んできたメカザウルスを軽く身を翻して躲し、メカザウルスの首をヘッドロックして動きを抑える。

メカザウルス『グギヤア!?ギヤオオオン!キシヤアアアアツ!!』

卯月「う…うう…、すごい力…」

未央「まだこんなにパワーが余ってるの!？」

凜（卯月も未央も…私も…、だけど、結構消耗してる…。このまま長引かせる訳には…!）

未央「…何かさ、こう…ドーンつと使える必殺技みたいな武器はないの…!？」

凜「そんな都合良いのなんて——」

みく『——ゲッタービームにゃ!』

凜 「…っ!?!」

瓦礫を押し退けて、何とかと言った様子でプロトゲッターが立ち上がる。

卯月 「…みくちゃん…頭から血が…」

みく 『…ちよっぴり切っっちゃっただけにや…、みくの事なんかより、ゲッタービームを撃つのにや…!』

卯月 「…ゲッタービーム…。それが必殺技なんですな…」

みく 『…そうにや…。コツはゲッタートマホークの二倍はお腹に力を入れて叫ぶのにや…っ!』

卯月 「はいっ、分かりました!…凜ちゃん、未央ちゃん…!」

凜 「大丈夫、あとは任せたよ」

未央 「ドーン、と派手につぶちかましちやえ!」

卯月 「はいっ!…行きます…すう…」

卯月 「ゲッター…!ビィーームツ!!」

卯月の全力を尽くした叫びと共に、腹部のシャッターが開き、ビームの発射口が姿を顕す。

そこから撃ち出されるのは、高出力のゲッターエネルギーを収束した、淡いピンクの輝きを持つ破壊の閃光。

至近で発射されたゲッタービームはメカザウルスの体を焼き、深く抉り、突き抜け、破壊した。

メカザウルス『グギャ……オ……オオオ……！』

膝から崩れ落ち倒れ伏すメカザウルスの体は直ぐに炎に包まれ、黒煙を上げて爆発した。

卯月「……。……やった……？」

凜「倒したの……？私達が……」

未央「メカザウルスを……！」

三人「……っ……！」

卯月「やった！やりましたよ！私達、やったんです！」

凜「うん。ちゃんと分かっているって、だから落ち着いて……」

未央「……でも、これってすごいことだよ！連合軍だって苦戦する相手を……私達で倒しちゃったんだよ？」

凜「……そうだね、ちゃんと分かっているよ。……たった一機のロボットが……」

瑞樹「……やれやれ。先が思いやられそうね……あんなにはしゃいじゃって……」

菜々「まあまあ、良いじゃないですか！今日のこの一勝は、明日への大事な一勝です

よー！」

瑞樹「…それもそうね」

みく「…何だか、菜々ちゃんもちよつとおばさん臭い言い方だにやあ…」

菜々「な、なななな…何言ってるんですか!? 確かにナナはみくちゃんよりは年上ですけど、れつきとした17歳なんですよ!?!?…キャハッ!」

みく「…そんなことより、二人とも喋ったりして大丈夫? 怪我の具合の方は?」

瑞樹「…貴女よりは重症だけど、大丈夫よ。応急処置は済んだし…、研究所まではなんとか持ちそうよ」

菜々「ナナも右に同じですー!」

P『…皆さん、お疲れ様です』

みく「Pちゃんっ!」

卯月「プロデューサー!」

P『…お怪我の方は、…御座いませんか…?』

未央「バツチリ! ニュージェネの方は、しまむーが鼻打っただけだよ!」

卯月「ちよつと! 未央ちゃんっ…!」

みく「テスターチームの方は重症にや……みくも瑞樹さんも菜々ちゃんも、精密検査が必要にや…」

凜 「テスターチーム？」

瑞樹 「ええ…、それが私達のチーム名よ」

P 『了解しました。テスターチームの皆さんは研究所で必ず検査を受けてください』

テスターチーム 「了解（にや）…！」

凜 「プロデューサーも、早くここを離れよう。今迎えに行くから」

P 『……。いいえ、それは出来ません…』

卯月 「…ええ？」

みく 「…な、なんでにや!？」

P 『……ずつと…、隠していましたが…先程の衝撃で…負傷を…もう、長くは持ちません…』

菜々 「そ…そんな…」

未央 「つ…！…そんなのウソだよお！だってきつきは…何でもないって、平気そうだったじゃん…!!」

P 『…それは…、皆さんを安心させる為に吐いた…嘘、です…』

凜 「そんな…そんな事って…！」

瑞樹 「…みく、プロトゲッターを上げなさい」

みく「えっ!?!」

P 『川島さん……』

瑞樹「…皆まで言わなくても、分かるわ。…私達には、立ち止まっている時間はない、でしょ?」

P 『……はい……』

未央「つだからって……!プロデューサーを、そのまま置いていくなんて……!」

瑞樹「…もう一つ、私達が早くここから離脱しなければならぬ理由がある」

未央「……え?」

P 『……はい……。実は先程、エネルギー供給の為暴走させたエネルギータンクが……臨界に達しつつあります』

卯月「……それって、……どういうことですか……?」

P 『……、じきに臨界を超えたエネルギータンクは、その出力に耐えきれず暴発……。この一帯を巻き込む大爆発を引き起こします』

凜「……。……もう、どうにもならないの?」

P 『……はい……、これ以上は、手の施しようがありません……地上にいる皆さんだけなら、まだ逃げ切れる筈です……早く……離脱を……』

凜「そんなのズルいよ!」

P 『渋谷さん……っ!』

未央 「そうだよ! 第一、プロデューサーがいなくなったら……! これから私達はどうするのさ!?!」

P 『直ぐに、とはいきませんが……後任が、決まる筈です……』

卯月 「そんなのイヤですっ! 私達のプロデューサーは……プロデューサーでない……」

凛 「プロデューサー! プロデューサーには、まだまだ聞きたいことは山程あるんだよ……! ゲッターのこと……、私達のこと……」

「その責任から逃れて、……私達を見捨てる気……!?!」

P 『……、……、申し訳ありません……』

凛 「謝って誤魔化さないでよお!!」

瑞樹 「みく! ゲッターを止めて!」

みく 「……合点にやあ!」

地下格納庫に飛び込もうとしたゲッターをプロトゲッターが羽交い締めにして取り抑える。

卯月 「離して……! みくちゃん、離してくださいっ! プロデューサーを助けに行くんです!」

みく 「行っただって無駄って言うのが、分からないにや!?! うー……ん大人しくするにや!!」

P 『テストチームの皆さん…』

菜々「別に、プロデューサーの決断に納得した訳じゃないですから…!」

みく「ただ、さっきの瑞樹さんの言葉と、ゲッターを失っちゃいけないって事が分かっているから、今こうしているだけにや」

P 『…申し訳、…ありません』

菜々「…謝るくらいなら、少しは卯月ちゃん達の気持ちを考えたらどうなんです…!? 貴方を失ったら、あの子達がどれだけ傷つくのか…」

瑞樹「…そこまでよ。時間がないわ。…プロデューサーの覚悟を、無駄にしてはダメよ」

みく「…わかったにや…。Pちゃん、さようならは言わないにや…」

みく「っ…!プロトゲッター、フルパワーにやああ!!ゲッターウイング!!」

白のマントを翻し、ゲッターを抱えたプロトゲッターが、宙へと上がる。

卯月「イヤ…!離してください…っ!イヤああ!!」

凜「プロデューサー…!プロデューサー!!」

未央「離してって言ってんじゃん!この、この…!…鬼!悪魔!人殺し!!」

みく「鬼でも悪魔でも…!どう思われたって、みく達は卯月ちゃん達を連れていくにや。みく達がどう思われても、Pちゃんの覚悟と意志を無駄にするなんて出来ない

にや!!」

瑞樹「みく……」

みく「辛い役ばかり、瑞樹さん一人にやらせないにや……」

菜々「悪役になる時は、チーム三人、全員一緒ですよ!」

瑞樹「……。二人とも、……ごめんなさい……」

高度をぐんぐん上げ、プロダクションビルから遠ざかっていく二機の機影。

「イヤあ……プロデューサー、プロデューサー!」

くくく プロダクションビル 地下格納庫 くくく

P 「……ふう……」

P (……意識が朦朧としてきました……。死ぬ、とはこう言う事なんですかね……)

P 「!?」

プロデューサーの周囲が仄かな緑色の明かりに包まれる。

P (……ゲッター線……。エネルギータンクのメルトダウンが始まったようですね

……)

思い立ったように、空中を漂うゲッター線の粒子の光に手を触れる。

P 「!?……これは……!」

その瞬間、プロデューサーの脳裏に、ありとあらゆる事が伝わる。

たな刺客メカザウルスを送り込む――！

次回、ゲッターロボ×CG 第二話

『三大メカザウルス、襲来』に、チエンジゲッター！

第2話 『三大メカザウルス、襲来』

~~~~~  
???

「おお、あの光……あの輝き！紛う事なきゲッター線……！」

「ううむ……。忌々しきゲッター線めえ……。幾千万の時を越えて尚、我らに立ち塞がるかッ!!」

「いかながなさいます？ゲッター線をエネルギーとするあのマシン……。ゲッターの使徒が現れたとなれば、計画の一部修正もやむを得ぬと思いませんか？」

「何、心配することはありませぬ。我が帝王よ。サル共の造った玩具如き、瞬く間に駆逐してご覧に入れましょう」

「油断してはならぬ。ゲッター線は我らが先祖を地下深くへと追いやった悪魔の力。いかにサル共が過ぎた力を持ったに過ぎぬとしても、我らにとってあれが忌むべき存在だと言ふことは変わらぬ！」

「……よもや、ゴール様はサル共の造ったあのゲッターロボとやらを怖れておいで？」  
「これ！口が過ぎるぞ、バット將軍っ!!」

ゴール「良い、下がれ、ガレリイ」

ガレリイ「ご、ゴール様……ははあつ！」

ゴール「……して、バット將軍よ。うぬの先程の問いだが……在るがままに答えよう。儂は、ゲッターを恐れている」

ガレリイ「!?……ゴール様っ!？」

バット「——お言葉ですが……。恐竜帝国の王たるゴール様のその御言葉……。民の耳に触れらようものならば、兵達の士気にも関わるものですぞ？」

ゴール「……無論、それは承知の上としておる。しかし、現実ではどうだ？我ら恐竜帝国の科学の粋を集めたメカザウルスが、悉くも敗れ去つたではないか」

バット「それは……」

ガレリイ「データ不足の問題もあります……！奴等のゲッターロボを分析する時間さえあれば……！」

ゴール「サル共を一気にこの地上から排除出来ると申すか？」

ガレリイ「必ず……っ！」

ゴール「……。良かろう……。バット將軍！」

バット「はあつ!!」

ゴール「直ぐにお主が誇る精鋭達を集め、直ちにゲッターに向かわせるのだ！ゲッターの力を見極めよ、徹底的にだ」

バット「御意っ！」

ゴール「我らの敵は只一つ！忌まわしきゲッター線の使徒、ゲッターロボ！…儂の怖れるこの仇敵、ガレリイの科学とバットの精兵で、見事討ち倒すことが出来たのであれば、うぬらにこの帝国、そして帝王の座を譲ろうではないか」

ガレリイ「ゴール様…！」

バット「…そのお言葉、二言はありませぬな？」

ゴール「当然。儂はこの恐竜帝国の王なるぞ」

バット「…」。ガレリイ！貴様の造り出したメカザウルスを二、三体ほど借りるぞ」

ガレリイ「早速、出撃されるので？」

バット「無論。手負いの獣を狩るのは容易い。…しかし、尚も連中が追手を凌ぐほどの力を持っているとすれば…」

ガレリイ「とすると…？」

バット「恐竜帝国の闘将としてこの戦い、存分に楽しめると言うものだッ！」

ガレリイ「ふふ…。丁度良いのがあります。それを持って行かれるが宜しいかと」

バット「あい分かった！」

ゴール「ふふふ…！行けい！我が恐竜帝国の精鋭達よ！惰眠を貪り、地上の支配者を気取る愚かなサル共に真の地上の支配者が誰であるのか、その身を以て思い知らせるの

だ!!」

バット「はっ!我らが帝王、ゴール様の為に!!」

ガレリイ「ゴール様の為に!!」

「「「「ゴール様の為にいいいいいい!!」」」」

第二話『三大メカザウルス、襲来』

くくく 山岳部 森林地帯 くくく

都心部を遠く離れ、眼下に山林を置く上空をゲッターとプロトゲッターが、並列して飛行する。

卯月「うう……。うっ……。グスツ……」

みく「どう?少しは落ち着いた?」

凜「うん……。だいぶ……。ありがとう」

未央「……受け入れなきやいけない事、なんだよね。ゲッターの事も、プロデューサーの事も全部……」

瑞樹「もし嫌なら、今から降りても構わないのよ?」

未央「ううん……。今更降りるつもりなんてないよっ!ね、しまむー、しぶりん!」

卯月「……グスツ……。……はいっ……。……!」

凜「私達からプロデューサーを奪った恐竜帝国を倒すためにも、ゲッターから降り



るわけなんてない…ッ！」

菜々「…皆さん、お強いんですね…っ」

みく「何で菜々ちゃんが泣きそうになってるにや…」

瑞樹「貴女達の気持ちは充分に分かるけど、無茶をしてはダメよ？」

凜「…分かってるよ。ありがとう、瑞樹さん」

未央「そう言えば、何でみくにやん達が私達より先にゲッターのパイロットやつてるのさ？」

みく「にや？Pちゃんに聞かなかつたにや？」

瑞樹「私達は、貴女達…というよりもアイドルね。アイドルがゲッターに乗っても問題がないか、それを計るために編成されたテストパイロットチームよ」

みく「面倒臭いから、気軽にテストチームとでも呼んでくれれば良いにや」

未央「いや、それは分かってるんだけどさ、瑞樹さん達がそのチームに選ばれた理由だよ」

卯月「…そう言えば、ゲッターに乗るのにもある程度の適正が必要だって、プロデューサーが言っていましたよね？」

瑞樹「そうね。ゲッター線適性値の事かしら？勿論私達三人とも、その適性はクリアしているわ」

菜々「ただ、卯月ちゃん達にはほんのちよつと劣りますけどね！」

みく「それで確か：みく達が卯月ちゃん達よりもタフそうだから、とか言われた気がするにや……」

凜「そう言えば、三人つて結構バラエティとかで体張った仕事よくしてるよね」

みく「まゝつたくその通りにや！お陰で世間での認識も、すっかりバラル扱い！」

瑞樹「良いじゃない？広く世間の人たちに知られている：スターつと言つても過言ではないわよ？」

みく「みくはお茶の間を笑わせる芸人系アイドルじゃなくて、みんなを癒す可愛い猫アイドルなの！方向性真逆にや!!」

卯月「あははは……」

瑞樹「まあまあ、恐竜帝国との戦いも激化していく現状、お茶の間を笑わせることだつて大切な事じゃない。貴重な役回りをさせてもらつてると、私は思っているわよ？」

菜々「そーですよっ！全く関係無いと思つてることで、コツコツ積み重ねていけば、いつかビックな仕事に繋がるかも知れないんですから！不貞腐れないで頑張りましょ？ね！」

未央「流石ウサミン！しまむーと同じ年とは思えない説得力っ！」

菜々「えっ!?あ、ああ……！ナナは、下積みも長いですからね！その分、卯月ちゃん達

とは経験してきてることも違いますからねっ！」

卯月「そんなにずっとアイドルに憧れて来てるんですか！私より前から下積みしてるってことは…、大体小学生くらいから、ですか!？」

菜々「え…ええ…！ナナは、思い立ったら一直線なので…：キヤハツ☆」

凜「それで…乗ることになった理由は分かったけど、どうして戦闘まで?」

瑞樹「それは…やっぱり他人事じゃないもの」

みく「凜ちゃん達は、自分達が巻き込まれたことは仕方ないって思えるかもしれないけど、そんな凜ちゃん達を、みく達は放って置けなかったの」

菜々「乗り掛かった船って奴です♪一緒に戦わせてください。…足を引つ張るだけかもしれないけど」

瑞樹「一言余計よ」

卯月「そんな理由で…?」

みく「大変な思いをするのは、卯月ちゃん達三人だけじゃないにや」

瑞樹「私達三人も、貴女達と一緒に行くわ。…だから、三人だけで抱え込まないで?」

未央「みくにやん…：瑞樹さん、ウサミン…!」

菜々「あはははっ!…：あら…?」

プロトゲッターが一度大きく揺れて高度を落とす

未央「ど、どうしたの!？」

瑞樹「ゲッターウイングの調子が…」

みく「さつき最大出力出しちゃったからにやあ…。思ったよりも早く限界がきたみたい」

菜々「どうしましょう!?!一度分離しますか?」

瑞樹「いえ、ゲッターも私達も、損傷が激しいから、下手に分離しても墜落の危険性が増えるだけよ」

卯月「…分離?」

みく「にやあ。ゲッターは元々、三機の飛行マシンが合体してるにや」

未央「そう言えば、プロデューサーがちらつとだけど言ってたね」

凜「ゲッターが、その元のマシンに分離するのが、オープンゲット?」

みく「そんな感じ。まあ、今の状況なら無理に飛行しなくっても、森の中を走っていけば研究所には着けると思うにや」

菜々「その分、研究所に着くのも遅れちゃいませんか?」

『その心配はいらない』

凜「この声は…?」

未央「しづりんあそこ、何かちっちゃいのがいるよ!」

卯月「あれは…？」

瑞樹「BT-23、通称ビイト。日本自衛隊で採用されてる防衛兵器ね」

未央「…何でそんなのがここに？それも一機で」

凜「…一体誰が」

「私だ」

ゲッターとビイトとの映像回線が繋がる。

卯月「あつ…、晶葉ちゃん！」

未央「うん？しまむー知り合い？」

卯月「はい…！と言うより、同じ事務所に所属してるアイドル、晶葉ちゃんですよ！」

凜「…。ごめん、全然分かんない」

晶葉「君達ニューージェネレーションとは違って、まだメジャーデビューすら叶っていないからな。覚えてもらっている方が不思議なくらいだ」

未央「…だつてよ？」

卯月「え…？そんなことないですよ。ほら、前に自己紹介してもらったじゃないですか！」

晶葉「確かに…半年も前の話だったかな。改めて自己紹介させてもらおうと、私は池袋  
晶葉。…天才科学者だ」

瑞樹「…自称天才、ね。分かるわ」

晶葉「頭に自称をつけるな！」

菜々「それで、晶葉ちゃんは どうしてここに？ ビイトなんかに乗って…」

晶葉「プロトゲッターの損傷の具合が気になってな。早乙女博士に許可をもらって、先に出迎えに来たと言うわけさ」

みく「そう言うことならちよつと待つにや。今ゲッターを降ろすから」

ビイトの前にゆつくりと降下し、そのプロトゲッターにビイトのマニピレータが触れる。

晶葉「——ふむ…。予想以上に損傷が激しいようだな…」

みく「何だか、上手く飛べないみたいなの」

晶葉「何：？：？：ふむ、ゲッターウイングに問題はない。とすると、問題はゲッター炉心の方か？ そうなると、研究所に戻らないとどうしようも出来んが…」

未央「ふえゝ…、スツゴい…。一回見ただけで、そんなの分かるの？」

晶葉「完全な状態のゲッターは頭で記憶してるからな。記憶の形と違うところが認識できれば、後は原因を探るだけ」

未央「ホントに天才なんだ…」

晶葉「私は事実しか口にしないが？ ……うむ、ゲッター炉心に問題はない。これなら

何とか、応急処置で飛べるようには出来るだろう」

菜々「ホントですか!？」

晶葉「ああ…。念のため、このビイトには応急処置の為の修理ユニットを積んでいるからな。…すまないが、ニュージエネレーションの三人は、周囲の哨戒に出てくれないか？」

卯月「しようかい？」

凜「周りを偵察して来いってこと」

未央「確かに、修理中に敵に襲われたらたまったもんじやないもんね」

卯月「あ、そう言うことですか。分かりました、島村卯月、哨戒に行ってきます！」

晶葉「ああ、頼む」

くくく 森林地帯 くくく

未央「——にしても、大変なことになったね」

凜「うん、昨日までは普通の一人のアイドル。それがロボットのパイロットになっ

て地球を救うなんて…」

卯月「正直、未だに実感ないです……」

未央「だよねえ…」

凜「何?今更怖じ気付いた?」

未央「ま、まっさかく！やると決めたからには、一步も引きませんよ！」

卯月「そうです！こうなったら、出来るところまでやりましょう？」

未央「そ、そうだよね！よし、トカゲでもサラマンダーでも、何でも掛かってこいでんだ！」

凜「それ、全部は恐竜とは違うけど？」

ピコーン…

卯月「…あれ？」

未央「何？どったのしまむー？」

卯月「さつきレーダーに反応が…あれえ？」

凜「……上だ！卯月!!」

卯月「ふえ……？」

こちらから遙か遠くを飛び去っていくプテラノドンのような影。

未央「ホントだ！追おう、しまむー！」

卯月「え、ええ……！そんないきなり……？」

凜「あいつが市街地へ行けば、また被害が増えるかもしれない……。それを阻止するんだよ、卯月!!」

卯月「は、はい……！分かりましたっ！」



卯月「ゲッターウイング!!」

真紅のマントを翻し、ゲッターが宙に舞い上がる。

晶葉『——どうした、敵襲か?』

未央「うん。敵のメカザウルスを見つけた!急いでやつつけてくる!」

晶葉『…畏かも知れない、深追いはするんじゃないぞ』

卯月「分かりましたっ!」

晶葉との通信を終えた後、飛行するメカザウルスの後を追った。

~~~~ 山岳部 ~~~~

卯月「——追い付きましたよ!」

未央「流石ゲッターロボ!何とかより早い、つて奴?」

凜「真面目にやっつて未央。戦闘に入るんだから……ん?!」

卯月「どうかしたんですか!?!」

凜「目の前のメカザウルスと同じ反応が近くにある…。しかも二つ」

未央「合わせて三つ…。もしかなくても、誘き出された?」

卯月「そんなあ……!はじめから、罠だったって事ですか!?!」

凜「…だからって、このまま引き下がる訳にはいかないね」

未央「おっつと見た目の割りに熱いね、しぶりん!燃えてるね!しまむーは?覚悟良

「い？」

卯月「え、えつとお…。：はいつ、頑張りますっ！」

目の前の飛行メカザウルスに狙いを定めて、戦闘態勢を取る。

卯月「い、行きますよ…！」

凜「っ！ダメだ、卯月！」

卯月「え…。？きやあつ！」

死角から飛び込んできたミサイルもろに受けてよろける。

未央「う、うう……。一体どこから……。？」

凜「後ろからだよ！さっきの奴が回り込んできた！」

陸上メカザウルス『キシヤアアアアツ!!』

未央「トリケラトプスみたいな奴…。あいつか！」

凜「二体ずつ相手してくれる訳じゃないか…。当然だけど」

卯月「そんな…。！挟まりました…！」

陸上メカザウルス『キシヤアアアアツ!!』

飛行メカザウルス『ギヤアアア!!』

前と後ろに現れた二体のメカザウルスと睨み合う。

卯月「っ…。！きやああつ!？」

しかし、また別の方向からミサイル群がゲッターを襲う。

凜 「また……!」

未央 「……っ! 今度はあっち! 湖の方!」

水棲メカザウルス 『ガアアア!!』

卯月 「さ、三体同時に……!?!」

未央 「敵さん、幾ら何でも本気出しすぎじゃないの……? 序盤ステージなんだし、もうちよつと手加減してくれても……」

凜 「本当に序盤ステージだとしたら、もうちよつと敵いるでしょ」

卯月 「ふ、2人とも何の話してるんですか?」

三体のメカザウルスの一斉攻撃が始まる。

三人 「……きやああああああああつ!!」

みく 「卯月ちゃん達はどうなってるにや!?! ここからじゃ、何が何だかさっぱり分からないにやあ!」

晶葉 「……複数のメカザウルスに囲まれているらしい」

菜々 「そんな……! なら、こんなところでのんびりしてないで早く助けに行かないと……!」

晶葉「馬鹿言え。プロトゲッターは今修理中だぞ？応急修理が済んだとしても、その状態で行って何になる？足手まといになるだけだ」

みく「それなら…、みく達は無理でも晶葉ちゃんが行けば……」

晶葉「行ったところで、どうにもならん。言っただろう？足手まといにしかならないと」

卯月&凜&未央「「きゃああああああああつ!!」」

瑞樹「…私達が慌てても仕方ないわ。まずは、ここから私達に出来ることを探すのよ」
菜々「私達に、出来ること…？」

瑞樹「そう。直接助けてはあげられなくても、何かサポートすることは出来る筈よ」

みく「で、出来ることって言っても…」

晶葉「……。いや、一つだけ手はある」

菜々「晶葉ちゃん、その手って、まさか……!」

晶葉「ゲッターチェンジだ…!敵も陸・海・空で一機ずつ、それぞれの地形に適応したゲッターにチェンジ出来れば…。今メインを張っている卯月の負担も軽減できるはずだ!」

みく「で、でもでも、ゲッターチェンジはタイミングを合わせるのが難しいよ!ゲッターに乗ったばかりの卯月ちゃん達が、実戦でいきなり成功させるのは…」

菜々「そうです！ ナナ達だつて自分達がアイドルであることを忘れるくらい地獄の特訓をして、半年掛かってやっと出来るようになったんですよ!？」

瑞樹「二人の言うとおりね。でも、私達と彼女達…違うところが一つだけあるわ」

みく「それはなんにや？」

瑞樹「彼女達は、ニュージエネレーションって言うアイドルユニットだった、つて言うことよ」

みく&菜々「……」

晶葉「そうだ。アイドルとしてなら連携も団結力も君達より遥かに凌駕している筈…。それに賭ける」

みく「…天才科学者なんて自分で言っておきながら、とんでもない博打にや。計算もクソもあつたもんじゃないにや」

晶葉「…言ってくれるな。確かに計算に裏打ちされたものじゃない。だが、確証はある!」

晶葉『卯月。ニュージエネレーションの三人、聞こえているか?』

—。

晶葉『ニュージエネレーションの三人。まだ死んではいないな』

卯月「う、うう……。…晶葉ちゃん?」

凜 「私も未央も、みんな無事だよ。未央の冗談に付き合ってたら、死にかけたけど」
未央 「ちよつと！それって私のせい？私は少しでも戦闘の緊張を解そうと……」

晶葉 『それだけ元気なら大丈夫そうだ。いいか、この状況を乗り越えるには、ゲッターを分離させしかない』

凜 「ゲッターを分離……、さっき言ってた……」

晶葉 『ゲッターは状況に応じて三つの形態に変形できる。それは知っているな？』

卯月 「は、はい……」

晶葉 『そのために先ず、機体を分離させるんだ』

未央 「そ、そんな事……、いきなり言われたって……。——……うわあっ!!」

三体のメカザウルスの攻撃は苛烈さを増す。

凜 「くっ……！今は話し合っている時間はない……！晶葉、どうやったら分離できるの？」

晶葉 『ああ。まずは右の操縦桿、そのすぐ隣に三つの小さいレバーがあるだろう？』

卯月 「……これ、ですか……？」

晶葉 『ああ、それだ。左から順に番号がふつてあって、今はゲッター1形態だから、1のレバーだけ倒れている筈だ』

未央 「そうみたいだね」

晶葉『そのレバーを一気に引き戻せ。分離コードは“オープンゲット”だ』

卯月「オープンゲット……」

晶葉『いけ！敵は待つてはくれないぞ！』

三大メカザウルス『グウアアアアアッ!!』

凜「——よし、やろう。…卯月、未央」

未央「おう！ここまで来たら、やるつきやない！」

卯月「はい……！プロデューサーの為にも、こんな所で負けるわけにはいきません……！」

三大メカザウルス『『『キシヤアアアアッ!!』』』

晶葉『攻撃が来る……！今だ!!』

卯月「オープンゲット！」

三大メカザウルスから放たれたミサイルを晶葉の声のタイミングで、分離して攻撃を
躲す。

凜「ぐっ……!!」

未央「うおっ……!!」

卯月「あうう……!!」

三機のゲットマシンに分かれて、初めに感じたのは、驚異的な重圧。

未央「何……これ……？」

凜 「……意識が、持っていられる……っ！」

晶葉 『ゲットマシン形態時は、ゲッターロボの時よりもゲッター線による身体保護効果が薄い。本来のパイロットスーツを着ていれば、ある程度は大丈夫なんだが……。今は、耐えてもらうより他ない』

未央 「そう言うことは予め言っておこうよ……っ！」

凜 「卯月、そっちの方は大丈夫？」

卯月 「……………」

未央 「しまむー？もしかして気絶してる!？」

卯月 「……いえ、でも……………」

静かに、促されるようにゲットマシン用のハンドルに手を描ける。

ギユウウウウウウツツ!!

未央 「すごい……………」

晶葉 『とても初めて操縦しているとは思えんな』

凜 「卯月、どうして……？」

卯月 「私にも分かりません……。けど、分かるんです！」

未央 「ん？どう言うこと？」

卯月 「何て言ったら……いいんでしょう……？でも、このゲットマシンは普通のマシン

と違うんです！」

凜 「それは…合体してロボットになるマシンだからね…」

卯月 「そうじゃなくて…！何て言うのか、普通にただ機械を動かすようにするんじゃない、その…心で動かす、みたいな…？」

凜 「心…？心で機械を動かす…」

卯月 「はい…。私の言ってること、よく分かんないですね？えへへ…」

未央 「……。いや、ちよつと分かるな！」

ギユウウウイイインツツ!!

凜 「未央?！」

未央 「こんなじゃじゃ馬みたいなマシン、力任せに操ろうとしたって、言うこと聞いてくれないんだよ！…だったら…！」

空高く先を行くイーグル号に追い付くように、ベアー号も高度を上げる。

晶葉 『早速、操縦のコツを掴み始めたか…』

凜 「二人とも…一体どうやって…」

未央 「しぶりん！怖がっちゃダメだよ！」

凜 「……え？」

卯月 「自分が飛ぶって思うんです！…ジャガー号はマシンじゃない、凜ちゃん自身で

すっ！」

凜 「私、自身……。ッ！」

間一髪。陸上メカザウルスの側面スレスレを横切り、接触を避ける。

未央 「しぶりんっ！しぶりんはいつも物事を難しく考えようとするけど、今は難しく考えちゃダメ！」

卯月 「考える、ではなく、思うんです！凜ちゃんっ！」

凜 「未央、卯月……。……」

眼を閉じ、肩の力を抜く。

凜 「考えず……。思う……。……」

漆黒に落ちた意識は、一瞬でジャガー号のコックピットを離れて大空へ飛び立つ。

凜一人の体では、落下するだけの大空の中、その体にはあらゆるコードが巻きつき、鉄が全身を覆い、ジャガー号が一つになる。

ジャガー号が、飛ぶための翼をくれる。

卯月 「凜ちゃんっ！」

未央 「しぶりん！」

凜 「！」

カッ、と目を見開き、眼前に迫った山肌を余裕で躲す。

ギユイイイインツ!!

凜 「…そつか。そう言う事なんだ」

未央 「やったじゃん! しぶりん!」

凜 「卯月と未央、二人のお陰だよ」

飛行メカザウルス 『キシヤアアアツ!!』

晶葉 『感動は後にしろ。メカザウルス・バドが来るぞ』

未央 「…バド?」

晶葉 『即興だが、相手にコードネームを着けてみた。名前が無いよりはやりやすいだろう?』

卯月 「それは…、どうなんでしよう…?」

晶葉 『ちなみに、陸上にいるのがザイ、湖に陣取っている奴がズーだ。中々だろう?』

凜 「…何か安直だね」

未央 「この際何だっていいよ! 私達を弄ぼうとしたのを、たつぷり後悔させてやろうじゃんつ!」

卯月 「やりましょう! 凜ちゃん、未央ちゃん!」

ギユインツ!!

三機のゲットマシンが、隊列を整えてまずは飛行メカザウルス、バドに迫る。

バド『キシヤアアアアッ!!』

未央「右!」

凜「左!」

卯月「上!」

バドから放たれたミサイルを三方向に別れて躲し、すぐさま反転して隊列を整える。

未央「よおーし、反撃だ!しまむー、しぶりん!3、2、1で同時にミサイル、行くよ!」

凜&卯月「了解(です)!」

未央「3、2、1…発射!!」

三機のゲットマシンから放たれたミサイルがバドの体に当たって弾け、黒煙を上げる。

三機はその黒煙の中を抜け、バドの背後へ回った。

卯月「チェンジゲッター1ツ!」

卯月のイーグル号を戦闘に、三機のゲットマシンが一つとなり、今再び赤いマントを翻し、赤い姿を持ったゲッター1が姿を現す。

未央「一気にトドメだよ、しまむー!」

卯月「はい!ゲッタートマホーク!」

肩からトマホークを抜き打ち、構える。黒煙を翼で振り払ったバドは肉薄されまいと一度距離を取る。

凜 「そんな距離を取ったところで……！」

卯月 「トマホークには、こんな使い方もあるんです！」

トマホークを一度水平に持ち、後方へ引き下げる。

卯月 「トマホーク、ブウーメラン!!」

後方に下げた腕を前方に振り扇いでスイングし、こちらに全速力で突っ込んできたバドにトマホークを投げ当てる。

バド 『グギヤアアアッ!!』

ブーメランのように回転し、投擲されたトマホークはバドの右翼を奪い、バドの飛行力を失わせた。

卯月 「たあああっ！」

戻ってきたトマホークを直ぐ様キャッチし、地面に墜ちるバドを一閃。墜落する前に斬り伏せた。

森の中へ墜落したバドが爆炎を上げる。

ザイ 『ギヤオオオオンッ!!』

卯月 「オーブンゲット!!」

仲間の仇討ち、とばかりに放たれたザイのミサイル連射攻撃をオープンゲットするこ
とで巧みに躲す。

凜 「次は私がやるよ」

卯月 「お願いします！ 凜ちゃん!!」

凜 「チエーンジゲッター2ウ!!」

ザイの攻撃が届かない上空で隊列を入れ替え、ジャガー号が先頭になりベアー号、
イーグル号と続き、合体する。

空高くから地上に降り立ち、ザイと対峙するのは、左腕がドリル、右腕がハサミのよ
うなアームになったジャガー号の白を基調とする細身の機体、ゲッター2!

晶葉（オープンゲットばかりでなく、他形態へのチエンジも難なくやつてのけるとは
…。やはり……）

凜 「サイか恐竜がよく分からない奴……何処からでも掛かってきなよ!」

未央 「お、いよいよマジになっちゃう? しぶりん!」

卯月 「凜ちゃん、頑張つて下さい!」

ザイ 『ギヤオオオオンツ!!』

自慢の角をゲッターに向け、力の限り突進してくる。

凜 「ふっ……ゲッタービジョン!」

ザイの攻撃をまともに受けた…筈のゲッターの姿が消える。

ザイ『??』

驚き、辺りをキョロキョロと見回す。

凜 「こっちだ!」

地面から姿を現したゲッターは、そのままザイの背後を取り、右腕のアームを一発。

ザイ『ギャワアアッ!?!』

完全に虚を突かれ、怯んだザイにゲッター2は容赦しない。

凜 「トドメだ…!ゲッタードリル!!」

ギルイイイインッ!!

左のドリルが唸りをあげ、ザイの分厚い表面装甲を貫いた。

ザイ『グギヤアアアッ!?!』

凜 「…しゅといね……。なら、これで…!」

一度ドリルを引き抜き、その穴にアームを引っかけ跳躍する。そのままゲッターの体を90度、ザイの体に垂直に立たせ、ザイの胴体中央に二撃目のドリルを叩き込む。

ザイ『ゴギヤアアアッ!!』

堪らず、崩れ落ちるザイの体。ゲッターが飛び退くと同時に爆炎と化した。

ズー『キシヤアアアッ!!』

凜 「くっ……!!」

すかさず、メカザウルス・ズーのミサイルがゲッターに降り注ぐ。

未央 「次は私の番だ! 凜、代わって!」

凜 「…そうだね、ここは任せるよ」

未央 「おうっ!」

凜 「オープンゲッター!」

再びゲッターから三機のマシンに分離。ズーが陣を取る湖を屈指して飛行する。

菜々 『未央ちゃん、聞こえていますか!』

未央 「ウサミンツ!」

菜々 『ゲッター3にチェンジするつもりでしたら注意してください。ゲッター3への変形は、タイミングが一番シビアです!』

未央 「ok、ウサミン! アドバイスありがとう!! 行くよっ、しまむー、しぶりん!!」

卯月 「はいっ!」

凜 「ok、やろう!!」

湖の中央で三機は一度急上昇。ジャガー号だけ隊列から離脱し、湖面の水上を低空で駆ける。

水上を行くジャガー号を捉えたイーグル号、ベアー号が垂直に重なり、

未央「チエーンジ！ゲッターアアー3イツ!!」

合体を終え、水上に盛大な水柱を上げ、下半身にキヤタピラを備え、独特なシルエツトを持ったゲッター3がズーの前に立ちはだかる。

未央「へっへっへん！満を持して、真・打・登・場!!…何ちゃって……」

凜「もう…、ふざけてる場合?」

未央「えっへっへっへ☆ほんのジョークジョーク……うわっ!?!」

卯月「きやあああつ!」

容赦なく繰り出されるズーの猛攻。

未央「痛たた…。うへへ…!こんな攻撃、ゲッター3にはなんてことないよ!」

卯月「ううっ、未く央くちやくん!攻撃が全部こつちに当たってるんですけど…」

未央「あつはははく…。しまむー、ファイツ!」

卯月「そんなあ…」

未央「よし、そんじや一丁!行つくよ、ゲッター3ツ!」

勢いよく操縦桿を倒し、ゲッターを最大戦速で前進させる。

未央「ダブル、ナツクル!!」

ズーに肉薄し、ゲッターの両拳をズーに突き出す。伸縮自在の蛇腹状のアームが伸び、ズーの全身を湖の底へと叩き付ける。

ズー『グギヤアアアツ!!』

未央「あ、こらっ！動くな!!」

ズー『ギヤオツ!!』

立ち上がろうとするズーに伸ばしたアームに、ズーの二頭の首が絡み付く。

未央「お?」

ズー『キシヤアアアツ!!』

首を捻り、ゲッターの体を持ち上げ、放り投げた。

未央「うわああ!!」

湖面に叩き付けても尚もゲッターの腕を手離さず、二度目の投げに移ろうとするズーの首に、ゲッターは手指を首に食い込ませてしがみついた。

ズー『グギヤ!?!』

未央「うおお…!!しつこいの…つてえ…!!嫌いだよ!!」

ゲッターを立ち上げる動作で逆にズーを投げ返す。

未央「どっせい!!」

ズーを投げた勢いに乗り、ゲッターを中へと飛び上がらせ、そのままズーにのし掛かる。

ズー『ギヤアアア!!』

未央「ふっふっふ…っ！パワー、アームツ！フルパワー!!」

ゲッターの足元から脱出すべく暴れまわるズーに対し、トドメと言うように、ゲッターのアームに力を込め、

未央「——うりやああ!!」

豪快にズーの二頭を引きちぎる。

未央「ゲッターミサイル!!」

最後のメに足元のズーの体を放り投げ、両肩からゲッターミサイルを撃ち込み、メカザウルス・ズーを爆砕した。

晶葉「——周囲に残存する敵の反応は無いようだな」

瑞樹「一先ずは終わりっことで、良いのかしら？」

晶葉「ああ」

みく「あ！卯月ちゃん達が帰って来たにや！」

卯月「——皆さーん！お待たせしました！」

未央「いやあ、流石に二度目の戦闘、なかなかハードだったよ…!」

菜々「でも、スゴかったじゃないですか！ゲッター3での合体を一発で成功させるなんて…!」

みく「みく達はなかなか上手いかななくて、シミュレーションで50回は死んだにや」

未央「ふっふーん！そこはまあ、チームとしてのコンビネーションの違いですかな？」
凜「もう……。未央つてば、すぐに調子にのつて……」

瑞樹「……でも、それは事実かもしれないわよ？実際、私達は3人でチームを組んではいても、アイドルとしてはみんなソロだもの」

晶葉「それを見越しての3人アイドルユニットであつたわけだしな。……さ、長居は無用だ。次の攻撃が来る前に、一度研究所へ行くとしよう」

6人「了解（にや）」

（（（（ 早乙女研究所 屋外 （（（（

晶葉「さ、着いたぞ。ここが早乙女研究所だ」

凜「ふうん……。民間の研究施設つて聞いてたけど、結構大きいんだ」

卯月「すごく立派ですね！」

晶葉「ふっ……。当然さ。ゲッター線の研究には、政府も大きく期待を寄せているんだ。政府以外にも、出資しているところもあるしな。私たちのプロダクションのような、な」
みく「なんでそこで晶葉ちゃんが威張るの……？」

未央「……それにしても、バイトつて自力で飛べたんだね」

晶葉「ああ、このプロペラか。……でなければ飛行するゲッターを迎えに行こうとは考えないさ」

卯月「あっ！研究所の入り口に誰かいますよ？」

瑞樹「あれは、早乙女博士！」

凜「…あれが!？」

菜々「はい！ゲッター線研究の第一人者で、ゲッターロボの開発者…」

晶葉「付け加えるとすれば、卯月達3人をゲッターのパイロットとして選び出した張本人、早乙女博士だ」

ゲッター、プロトゲッター、ビイトの3機がゆっくり研究所の敷地に降下する。

晶葉「早乙女博士、ただいま帰還しました」

早乙女『うむ。プロトゲッターは、直ぐに格納庫に運んでくれ。直ちに修復作業に入る』

晶葉「了解」

みく「やあーっと今日のお仕事完了にや……」

瑞樹「一息入れられるわね。…こう言うのは嫌だけど、流石に疲れたわ」

菜々「何だか久し振りに、一日がすごーく長く感じましたよ……」

晶葉「…ゲッターの方は？」

早乙女『無論、直ぐに各部のチェックじゃ。だが、パイロットの3人はここで降ろしてくれ』

卯月「えっ？」

早乙女『ゲッターに選ばれた3人、この目で直に見てみたい』

凧（……選ばれた？ゲッターに……）

晶葉「了解、博士。それじゃ、ゲッターは私のビイトで運ぶから、三人はここで降りてくれ」

未央「はぁーい」

~~~~~ 早乙女研究所 正面玄関前 ~~~~~

凧（晶葉に言われた通り、ゲッターから降りて来たわけだけ……）

未央（どうしよう、この人間近で見るとスッゴク怖い……） コゴエ

凧（ダメだよ未央、そんなこと言っちゃ） コゴエ

未央（でもだつてさ、実験のためとか言つて2、3人は殺してそんな悪人顔じゃん）  
コゴエ

凧（未央！） コゴエ

卯月（でも、さつきから全然何も喋りませんけど……）

早乙女「……。君が、島村卯月君だね？」

卯月「は、はいっ！」

早乙女「渋谷凧君」

凜 「っ…………はい！」

早乙女 「本田未央君」

未央 「え…はい！」

早乙女 「……………」ジーツ

卯月 「あ、あの……………何か……………」

早乙女 「……………ふっ ニコッ

3人 「!?!?!」

早乙女 「いやいや、怖がらせてしまつてすまないな？この年にもなると、アイドルなんてものにはほとほと無縁でな。物珍しくもある」

未央 「は、はあ…」

卯月 (以外と…気さくな人、なのかな?)

早乙女 「いきなりこのようにことに巻き込んでしまつて、本当に申し訳ない……………」

卯月 「そんな…！博士の責任じゃないですから…。頭を上げて下さいっ！」

早乙女 「そう言うわけにもいかん。…巻き込んでしまった者として、ケジメは着けなければ」

凜 「本当に良いですから。…最終的に、乗るつて決めたのは私達だし」

早乙女 「…そうは言うが、本当であれば儂の息子、達人のゲッターチームが担当する

筈だったんじゃ」

卯月「…そのゲッターチームの皆さんは？」

早乙女「恐竜帝国が初めて現れたときの戦いで壊滅した」

卯月「っ…!! それじゃあ、博士の息子さんは…!!」

早乙女「…恐竜帝国に殺されたようなものじゃな」

卯月「そんな…!!」

早乙女「恐竜帝国に対し、復讐心が全くないと言えば嘘になる。…だが、君達に儂の復讐の代替わりをさせようとしているのかと言えば、それもまた違う」

凜「…どう言うこと？」

早乙女「儂は純粹に、このゲッターの力で人類を救うきっかけになってくれればと思っておる。復讐は、二の次じゃ」

未央「きっかけ？ 私はてっきり、ゲッターで人類を救え、なんて大それたこと言われるのかと思ってたよ」

早乙女「それは土台、無理な話じゃよ。いかに人類科学が発展しようとも、たった一つの機械で万人が救える訳ではない」

早乙女「ただ一つ、きっかけを作るだけだ。ゲッターの活躍が、人々に希望をもたらしてくれば、軍の士気を高めることに繋がれば…。些細な状況変化の起爆剤に過ぎ



ん

凜 「……………」

早乙女 「だから、あまり無理はせんでくれ。彼との約束もあるからの」

卯月 「彼……？」

凜 「プロデューサー、だよね」

早乙女 「ああ……。全く、惜しい男をなくしてしまった」

未央 「プロデューサーのこと知ってるの？」

早乙女 「些細なきっかけじゃが君達3人を彼が預ける時、一度だけな。立派な夢と、それに対する誠実な姿勢を持つ、素晴らしい男じゃった」

凜 「プロデューサーの、夢……」

早乙女 「……来るべき未来、人々が宇宙へ飛び出し、新たな生活圏を獲得する新時代……。その時代に相応しい、宇宙そらを舞台に踊るアイドルを育てる。彼はそう、儂に話してくれだよ。まるで、途方もない夢を抱く少年のようにな」

卯月 「プロデューサーが、そんな事……」

未央 「私達に言ってる。そんな事」

早乙女 「さあ、今日は色々なことがあつて、もう疲れたじゃろ？この研究所は君達を歓迎する。君達のための部屋は既に用意してある。ゆっくりとはいかんかもしれんが、

今は休めてくれ」

~~~~ 早乙女研究所内 通路 ~~~~

3人「……………」

未央「……。あ、あのさ……」

「ア……ミオ……」

未央「……え？」

「卯月ちゃんに、凜ちゃんも！」

卯月「あつ、美波さんに、アーニヤちゃん！」

アーニヤ「Da……。お久し振りです」

未央「こちらこそだよ！元気してた？」

美波「勿論よ。三人とも、元気そうで良かったわ」

凜「二人ともどうしてここに？」

卯月「もしかして、美波さん達もゲッターのパイロット、なんて……」

美波「ええ、そのとおり」

未央「ホントに！ホントのホント？」

美波「と言っても、あなた達の予備パイロットだけどね」

未央「予備パイロット？」

アーニヤ「Да、ゲッターは、3人乗り…。だから、誰か…一人でも欠けてしまえば、性能が、落ちてしまいますね」

美波「そんな時の為の予備パイロット、つて訳」

未央「へえ…。つまり二人は、私達のために？」

美波「ええ。3人は、あんまりお世話になりたくないと思うけど」

凜「でも、どうして？ゲッターに乗って戦うつて、すごく危険なことなのに…」

美波「それは、凜ちゃん達だって同じことじゃない？」

凜「そうだけど…」

美波「だから、私達も何かの力になればつて、見て見ぬ振りなんて出来ないもの」

アーニヤ「…ワタシにも、ミナミにも、ゲッター線…高い適正があります。なら、П

реДварителЬНЫЙ…予備、のパイロット、やりたい、自分の意思で！」

卯月「…それが、美波さんとアーニヤちゃん、二人の考えなんですか？」

美波「ええ。だから、これからよろしくね？卯月ちゃん、凜ちゃん、未央ちゃん？」

卯月「…はい、よろしくお願いしますっ！」

凜「よろしく」

未央「えっへへ♪こちらこそ、よろしく！ミナミン、アーニヤン！」

アーニヤ「Да。宜しく、お願いしますっ」

美波「さ、アーニヤちゃん。私達は訓練に行こ？」

アーニヤ「Da, それじゃあ、アーニヤは、ここで…」

美波「今日は色々あつただろうけど、ゆつくり休んでね？」

卯月「はい、それじゃあまた…」

美波「うん。またね」

~~~~~ 早乙女研究所 所員宿舎 一室 ~~~~~

未央「つはあく！疲れたあく……」

部屋に入るなり、手前のベッドに寝転がる。

凜「…だらしないよ？」

未央「いーじゃん！今は誰も見てないんだしさあく。ね、しまむー？」

卯月「…ええ？あ、ああ…。そうですね…！」

未央「あくあく。どうしたのボンヤリして？」

卯月「いえ…。これから私達、どうなっちゃうんでしょう…？」

未央「う…ん。そんなの、なるようにしかならないと思うけど…？」

卯月「ええ…」

凜「未央の言うとおりかもね。今はとにかく、目の前で起きていくことを一つずつ片付けていくしかないと思う」

卯月「やつぱり、…そうですね」

未央「もうう！しまむーは難しく考えすぎ！シンプルに行こう、ね？今日は離ればなれになつてたミナミン達とも再会できたんだしき！」

卯月「…そうですね！また、みんなと一緒に活動できるんでよね！」

未央「そーだよ！みんな集まれば、こんな不安だつてなくなるし……」

凜「……プロデューサーも一緒にいてくれたら、なんて」

卯月「……」

未央「んー……ああ、はいはい!!そうやってネガティブになるのはなし！このノリおしまい！」

未央「今一番にやんなきゃなのは、しぶりんもしまむーも、親に連絡すること！……私もだけど。今日からはここが私達の拠点になるわけだし、ね？」

卯月「未央ちゃん……」

凜「…そうだね」

未央「分かったならさっさと行つた行つた！電話で連絡するなら、部屋じゃなくて、外でできてよね！私が部屋でするから！」

凜「また、そんな勝手な……」

卯月「いい、いいじゃないですか！ほら、みんな個人で伝えなきゃいけないことは違う

んだし。ね、凜ちゃんも行きましよう？」

凜 「う、うん……」

二人が部屋から出て行き、その足音が遠ざかっていく。

未央「……はあ。まったく……。二人揃って、本当に危ういんだから……」ポフィン

未央「ん〜……！ベッドはふかふか！これは新品だねえ」

ベッドにうつ伏せになり、枕に顔を埋める。

未央（……プロデューサー……）

未央「……しまむーは、気、遣ってくれたのかな？……まさか、ね……」

未央（でも……）

「う……うう……つ。く……つ。ごめん、ありがとう。しまむー——」グスツ……

つづく

## 第3話『ニュージェネレーション解散!?!』

第3話『ニュージェネレーション解散!?!』

~~~~ 早乙女研究所 パイロットルーム ~~~~

瑞樹「……よし、と。これでバッチリよ」

卯月(パイロットスーツ)「あのお…、これがゲッターのパイロットスーツ…何ですか？」

菜々「そうですよっ！卯月ちゃんも凜ちゃんも未央ちゃんも、よく似合ってます！」

凜、「あ、ありがとう…」

未央「でもさ、これ…」

卯月「ちよつと体にぴったり過ぎじゃないですか…?」

晶葉「うむ。しかし、ゲッターはその操縦特性もあつて、動きやすい格好の方がいいからな」

みく「普通の戦闘機とかのパイロットが着るような野暮ったいのじゃ無理っつて訳にゃ」

未央「つて言っただつてこれ、ほとんど全身タイツつて言うか…」

卯月「何だか水着みたいで、恥ずかしい…」

凛「耐久性とか、ホントに大丈夫なの？」

晶葉「その点に関しては心配無用だ。それで、通常の耐Gスーツと同じくらいのGに耐えられるし、薄いようで、簡単には破れん」

未央「アキつちが言うなら、そうなんだろうけどさ…」

みく「別にコックピットなんて誰かに見られるわけでもないし、堂々としてればいいにや」

凛「流石に、そこまで割り切るのはちよつと…」

瑞樹「まあ、確かに恥ずかしいものは仕方ないわよね。ほら、これを使いなさい」

凛「これって…」

未央「薄いチョッキに…スカート？」

菜々「パイロットスーツの上から、それを着るんですよ。そうすればボディラインが隠れます！」

瑞樹「私達も、この年でそんな格好をするのは、流石に恥ずかしいもの。薄手だから、ゲッターの操縦にも差し支えないわ」

卯月「成る程〜！ありがとうございますっ♪」

凛（それにしても、瑞樹さんの言う”達”って…）

晶葉 「出撃時に混同しないように、三人それぞれに色分けもしておいたぞ」

みく 「卯月ちゃんはピンク、凜ちゃんは蒼色、そんでもって未央ちゃんがオレンジ。三人の個性を揃えた色、みたいな感じでスツゴク似合ってるにや!」

未央 「へへくんっ。そうでしょう、そうでしょうっ!」

凜 「なんでそこで未央が威張るの?」

晶葉 「まあまあ、これで衣装合わせは終わり。各自着方はしっかり覚えておくようにな。最低、2分以内には着替え終われるようにな」

卯月&凜&未央 「二了解(っ)!」

晶葉 「よし、では3人には明日から、本格的な実機訓練を行ってもらおう。マニュアルによる座学も引き続き行っていくからそのつもりでな。特に未央、お前は講習中に寝過ぎだ」

未央 「えー!だつて講習の授業ペースが早過ぎるんだもんっ。ちよつとは生徒を労つてよ、晶葉せんせえ」

晶葉 「残念だが、お前達に優しく講義している時間的余裕はない。乗ると決めた以上弱音は許さん。覚悟と気概を見せてもらおうぞ」

未央 「ぶーっ。ワカリマシター」

卯月 「未央ちゃんっ、あとで甘いものでも食べに行きましよう?」

未央「おおつ、しまむーは優しいなく！私の仲間はしまむーだけだよ…っ！」ダキツ
卯月「ふえっ…！もう、未く央くちやくんっ」イチャイチャ

凜「まったく、簡単に餌付けされるんだから…」

未央「んー？どうかしたのかい、しぶりんっ？」

凜「…別に」

未央「もーう！そんないじけなくてもいいじゃん！可愛いなあ、もうしぶりんはっ！」
ダキツ

凜「っ!?ちよつと、いきなり抱きつかないでよ…」

未央「そんな照れるなよ♪私としぶりんの仲ではないかく♪」

卯月「すつかり機嫌も良くなって、良かったですね。凜ちゃん！」

凜「な、なんで私が…っ！」

未央「ふっふっふ…！良いではないか、良いではないかく」

凜「未央、ちよつといい加減に…！手付きが、女子じゃない！」

晶葉「…：やれやれだな。一体誰の爪の垢を煎じて飲ませてやればいいんだ？あの3

人に」

みく「別に、今に始まったことじゃないにや。この状況でもマイペースを崩さないなら、神経の太さはみく達以上にや」

菜々「そうですよ！仲良き事は美しきかな、って奴ですっ!!」

瑞樹「二人の言うとおりよ。距離感はずかにちよつとアレかもしれないけど、何処に居ても自分達を見失わないのが、チームワークの維持にも繋がるのよ」

晶葉「そのようなものか…。人とのコミュニケーションの仕方は、私にはよく分からん」

瑞樹「その人に合った、色んなやり方があるものよ。何時か晶葉ちゃんにもわかるわ」。

こうして、卯月、凜、未央3人の一人前のゲッターパイロットになるための訓練の日々が始まった――。

…… 会議室。

晶葉「――であるからして、この場合は焦って操縦桿を引くのではなく、手放すのが正解であつて……」

未央「Z z z …」

晶葉「言ってる傍から寝るな！本田あ!!」

…… シミュレーター・ルーム。

アーニヤ「アー…、今のは、б е с п о л е з н ы й ……ダメ、です…。リンの速度が速過ぎます」

凜 「分かったよ、アーニヤ。もう一度ははじめからお願い」
アーニヤ 「Да。よろこんで」

美波 「卯月ちゃんの方は？少し休憩にする？」

卯月 「い、いえ！こつちも始めから、相手してください！」

美波 「ふふつ、気合いバツチりね。それじゃあシミュレーション、始めるわよ！」

…… 夜、上空。

卯月 「うわあ……！夜の空って、ホントに真っ暗……」

凜 「研究所の周辺じゃ、地上に街灯もないし、周囲を見渡しても、あるのは星明かりだけ」

卯月 「綺麗……」

未央 「うっひゃく！これじゃ計器から目が離せないや！」

瑞樹 「暗いところには、自然に慣れてもらうしかないわね」

みく 「今日は初めての夜間飛行だから、みく達のサーチライトを見失わないように気を付けるにゃ」

菜々 「皆さーん？しつかり着いて来て下さいいねー？」

凜 「うん。宜しく頼むよ、テスターチーム」

瑞樹 「頼まれたわ。それじゃ、夜間飛行訓練、開始！」

くくく 早乙女研究所 管制室 くくく

晶葉「——3人とも、夜間飛行訓練も問題はなさそうだな…」

早乙女「…訓練は捗っておるか？」

晶葉「早乙女博士!…今のところは、と言ったかんじですね」

早乙女「これは、なかなか厳しいようだな」

晶葉「恐竜帝国が何時襲つてくるとも分かりません。彼女達の成長はめざましいですが、現状では、不安要素を多く残していると、言わざる終えません」

早乙女「ふむ…」

晶葉が見つめていたコンピュータのディスプレイに視線を落とす。

早乙女「ゲットマシンの操縦には、なかなか慣れんか」

晶葉「ゲットマシンはゲッターとはまた感覚が違いますからね。2回目の戦闘で感覚で扱って見せたとは言え、それだけではこの先の戦いには勝てません」

早乙女「ゲットマシンの操縦は、戦闘機のものと同じ。空軍パイロット並の専門知識が必要になる。時間が掛かるのは止むを得んが…」

晶葉「後は、3人が何処までやってくれますかです。私も専門家じゃない以上、偉そうには言えませんからね」

早乙女「うむ。色々なものを背負っているからと言って、急いはいかん。彼女達が

倒れることは、私としても本意とするところではない」

晶葉「分かつているつもりです。そう言えば、博士はどうして管制室に？ 確か、政府の担当官から連絡が来ていたのでは？」

早乙女「ああ…。政府のお偉方連中にせっつかされてな。儂も、気分転換が必要だと思ってたまでじゃ」

晶葉「ははは…。気持ち、お察しします」

早乙女「恐竜帝国との戦いを終わらせたいという気持ちは皆一様だと思うのだがな。政府の椅子に座る連中は、たった2回の戦闘だけでゲッターを、百戦錬磨の英雄だと思っているらしい」

晶葉「継るモノがなければ、尚更そうなりますよ」

早乙女「まったく、本来自分達が継り付かれる存在だと言うことを忘れておるな」

晶葉「ははっ。弁論や理屈で、恐竜帝国は倒せませんよ」

早乙女「その通りかもしれんが、ならば資金援助ももう少し渋らないで貰いたいがな。お陰で、プロトゲッターの整備は滞っておる」

晶葉「プロトゲッターと言えば、博士」

早乙女「何じゃ？」

晶葉「実は、私なりにプロトゲッターの改良を考えていたんです」

早乙女「プロトゲッターの改良だと…?」

晶葉「はい。恐竜帝国との初陣で、改めてプロトゲッターの力不足を感じました。更なる戦いに備え、戦力強化は急務だと思います」

早乙女「それ故の改良、というわけか…」

手渡された資料に目を通す。

晶葉「どうでしょうか…?資金難、という問題も、この研究所にある廃材を利用して、ある程度は工面できるはずですよ」

早乙女「…確かに。これならば、儂が以前開発して破棄した試作品の部品でなんとかなりそうだな…」

晶葉「もし私に一任して下さいるのであれば、博士に手間はかけさせません。どうぞしやう?」

早乙女「分かった、いいだろう。この案にある設計図に、特別な問題点は挙げられない。晶葉君にも、科学者としてよい経験になるじやろう。君に一任するから、やってみなさい」

晶葉「っ!はい…っ!」

早乙女「だが、根を詰めてはいかんぞ。君もまた、まだ人から教えを乞う立場だと言うことを忘れずに。己の興味しか集中できん人間に、精神的進歩も望めんからな」

晶葉「分かりました。助言、肝に銘じておきます」

早乙女「うむ。よろしく頼むぞ——」

「」 早乙女研究所 談話室 「」

未央「つつはああ〜!!つつかれたあ〜……」

卯月「今日の訓練も、一段とハードでしたね……」

凜「お茶持ってきたけど、…飲む?」

未央「おつ、しぶりんサンキュー!」

卯月「…ありがとうございますっ」

未央「ゴックゴックゴツ…ツ!ぷっはあく!生き返るぜえ〜っ!!」

凜「……未央、少しだらしないよ。ここ、プロダクションと違って、普通に男性職員

の目もあるんだしさ」

未央「おつと。これは失礼。また未央ちゃんが、無意識のうちにこのナイスバディー

な魅力で職員さん達を誘惑しちゃった?」

凜「……………」

未央「わ〜お…。しぶりんの目付きがスツゴいクール……」

凜「……とにかく、気を付けて、ね?」

未央「ぶー!だって、そうは言うけどさあ、ここに来てから訓練、仕事、訓練、レッ

スン、訓練、学校だよ？これじゃいくら未央ちゃんが体力自慢でも身が持たないよお〜」
凜 「それは、確かにそうかもしれないけど……」

未央 「過重労働だ！労働基準法違反だ!!未央ちゃんは断固として抗議する所存であるっ!!……っって感じだよ……。まったく……ん？」

卯月 「……………」

凜 「卯月？」

卯月 「え…………？ああ、はい……！どうかしたんですか？凜ちゃん？」

凜 「どうかしたって、別に……。それよりも、大丈夫？」

卯月 「え？……はい、すいません……。少し、ぼおつとしちやつて……」

未央 「しまむーがボーツとしてるのはいつもの事だけだよ……。ホント大丈夫？なんか、顔色悪いよ？」

卯月 「そんな事……、大丈夫ですよ……！ほら、この通り……。島村卯月、元気一杯ですっダブルピース」

凜 「……………」

未央 「……………」

卯月 「もう！二人揃って、心配し過ぎですっ……あ、そろそろ私、明日の準備をしなぐちやいけないので、お先に失礼しますね？」

凜 「う、うん……。おやすみ」

卯月 「おやすみなさい」

一人、宿舎に向かって歩き去っていく卯月。

凜 「…心配だね、卯月」

未央 「うん。……それにしても何か忘れてる気が……あーっ!!」

凜 「どうかした? いきなり飛び上がったって……」

未央 「国語と理科と近代史! 明日までに課題やらなきやいけないの、忘れてた……」

凜 「はあ、そんな事……」

未央 「そんな事って、酷いよしぶりんっ! 私の進路の単位に関わってくるんだよ!」

凜 「自業自得でしょ? ま、頑張んなよ」

未央 「えー! しぶりん冷たい! 『私が手伝ってやろうか(キリツ)』位言ってくれたっ

て、罰当たらないじゃん?」

凜 「え、イヤだよ……。第一、通ってる高校が違ったら、教えてる範囲も違うんじゃない?」

未央 「そんなマジレス……。ええい、何時からそんな正論ぶちかますようになったんだ! しぶりんそれでもアイドルなの!」

凜 「リアリストだ、よ」

未央「……」

凜「そんなシラケないでよ…。振ったのそっちじゃん」カア：／／

未央「いやまさかしぶりんがやるなんて、思わなくてき。何かごめん」

凜「あ、謝らないで…。余計惨めになる！」

未央「それじゃあ課題手伝って、ね？滑った罰ゲーム！」

凜「だから滑った訳じゃ…。でもまあ、いいよ。手伝う」

未央「やった！やつぱり持つべきものは掛け替えのない親友と、背中を預けられる

チームメイトですなあ〜」

凜「どっちも私でしょ、それ…。…一つだけ、私からもお願い聞いてもらってもいい

？」

未央「んー？はいはいー！何でもどうぞ？この不肖、本田未央。親友でチームメイト

のしぶりんが脱げとお命じになるのならシャツの一枚や二枚——」

凜「待つて、そう言うことじゃないから。言ってもいけないのに脱ぎ出さないで、ここ

共有スペースだから。待つて、待てステイ。……」

未央「…しぶりんクールな視線で見下ろすのは禁止だぜ…。癖になっちゃう…」モ

ジモジ…／／

凜「まったく…。人が大事な話したい時に、一々茶化すんだから」

未央「え？大事な話……つて？」

凜「……うん。あのさ——」

〃〃〃 翌朝 卯月私室 〃〃〃

卯月（——う……う……うん……。もう、朝……。起きなきや……）

カーテンの隙間から、陽光が差し込む。

卯月（う……つ。朝日、眩しい……。お布団、気持ちいい……。あと、五分だけ……何て、いきませんよね……。はあ……）

諦めの吐息を吐いて、上体を起こす。

卯月「う……つ。あ……！体、おも……つ。昨日の疲れ、まだ抜けてないのかなあ……？」

「きやつ……！」 ドテンツ

足をもつれさせて、盛大に転ぶ。

卯月「痛たたた……。うへつ……えへへ……。私つて、ホントドジだなく……」

ふらりと立ち上がり、時計を確認する。

卯月「いつけない！そろそろ送迎の車が出ちやう！急いで準備しなくちや……！」

そう思い立ち、着替えを始める。

〃〃〃 市街地 通学路 〃〃〃

卯月「……」

「しーまむーらさーんっ！おっはよー！」

卯月「うあ…？相川さん……。おはようございます……」

相川「あつらあく！朝から辛気臭い顔して、どしたの？」

卯月「…そんな酷い顔してますか？」

相川「そりやもう、推しの限定ガチャで盛大に爆死したみたいなのよ？」

卯月「相川さんの言うことって時々よく分かりません…」

相川「あく、まあまあ！私の事よりそっちだよ。…もしかして、仕事で何かあった？」

卯月「いえ、そう言うわけでは…」

相川「ふうん。ま、島村さんって頑張りすぎるところあるから、適度に息抜き、ちゃん

としなきゃダメだよ？」

卯月「そ、そうですね…、気を付けます。…ふふっ」

相川「仕事の話と言えば、この間のラジオ、聞いたよ？スツゴク面白かった！」

卯月「あつ、そうですね？…ありがとうございますっ」

相川「いやいやあく。いいんだって、今の私にはラジオ聴くくらいしかファンとしてしてやれることないんだから」

相川「でも、こうなつてくるとあれだな。卯月雲の上の人になつたみたいで、なんか、こう、遠くの人？みたいなの」

卯月「そんな事ないですよ……。相川さんは私の大切な友人ですから」

相川「うおっ……！嬉しいこと言ってくれるじゃん。感動した！今度ファンレターと

一緒に差し入れて駅前の抹茶タルト入れとくから！」

卯月「あ、ありがとうございます……。あれ？」 フラア……

相川「ちよつと島村さん、ホントに大丈夫……って、島村さん!!」

相川さん……そんな血相変えてどうしたの？

あれ……？声が……出ない……。体……動かない……。

意識が……—。

……

……

……。

…… 恐竜帝国 マシンランド ……

バット「——キャプテン・ザンキ！」

ザンキ「ははっ！こちらに……！」

バット「うむ。次の戦、貴様に任せる」

ザンキ「はっ！遂にこの日が……！キャプテンの名を背負う者として、必ずや將軍バツ

ト様、ひいてはゴール様の期待に応えて見せましょう!」

バット「既にゲッターの手により、数多のメカザウルスが破壊された。その雪辱を晴らし、恐竜帝国に勝利の栄光をもたらすためにも、爬虫兵を統べるキャプテンの中でも、百戦錬磨の将と謳われるザンキ、貴様にならゲッターの首、狩り取つてくることも容易かろう?」

ザンキ「無論!この日のために、ガレリイ長官より賜ったメカザウルスを改造しておいたのです。必ずやゲッターの首を、玉座の前に掲げてみせましょう!」

バット「それでこそキャプテン!良き心意気、期待しておるぞ?」

ザンキ「はつ!必ずや、この命に代えましても!全ては、恐竜帝国そして、帝王ゴール様のためにイイ!!——」

くくく 市街地 都立総合病院 くくく

卯月「——…うつ、うく…ん…?…ここは……」

「あら…。目が覚めた?」

卯月「あ、ママ…」

卯月母「おはよう。大変だったのよ?貴女がいきなり倒れたって、学校の先生から連絡が入って…」

卯月「倒れ、た…?それじゃあ、ここって…」

卯月母「病院よ。卯月のクラスメイトだった…えーっと、誰だったかしら…」

卯月「相川さん？」

卯月母「そうっ。その、相川さんって方が、連絡してくれたみたいよ？あとで感謝しなきゃね」

卯月「そうだったんだ…」

卯月母「…お医者様が言うには、過労だそうよ」

卯月「過労…」

卯月母「最近忙いって言うのは聞いてたけど…、ちよつと無理しすぎなんじゃない？いくらなんでも女子高生の卯月が過労で倒れるなんて…。最近家は帰ってこないことも多いし…」

卯月「う…うん…！そんな事、ないよ？その…最近は、ちよつと寝るのも遅くなっちゃてて…それで、少し寝不足だっただけだから」

卯月母「そんな事言って…。また同じようなことがあったら、お母さん心配よ？」

卯月「もう大丈夫！私は、大丈夫だから…」

卯月（ゲッターのパイロットになったことは、ママ達にも内緒…だもんね。心配掛けられないって…）

卯月母「本当に？」

卯月「うん。…みんな頑張ってるの。みんな、私と同じように、ううん。私よりもずつと。だから、私も、もつともつと頑張らなくちゃ。こんなところでへばつてなんていられない…!」

卯月母「卯月…」

「お邪魔しまーす」

卯月「あ、未央ちゃん、凜ちゃん! お見舞いに来てくれたんですね?」

卯月母「あら、卯月のお友達?」

卯月「うん。アイドルの…」

卯月母「そう。娘がいつも、お世話になってます」

未央「あ、いや…、あははは…こちらこそ、いつも娘さんにお世話になってます!」

凜「あの、少し3人で話したいことがあるので…」

卯月「え…?」

卯月母「分かったわ。…それじゃ卯月、お母さん帰るけど…また何かあったら、すぐに連絡をいれるのよ?」

卯月「あ…、うん。来てくれてありがとう…。ママ」

卯月母「どういたしまして。…それじゃあ、あとはお願いね? 未央さんと、凜さん?」

凜&未央「はい(っ!)(っ!)」

病室をあとにするのを見送る。

凜 「あれが卯月のお母さんか……。面と向かつてちゃんと挨拶したの、はじめてな気がする……」

未央 「へへっ……！ 優しそうな人だったね？ しまむーにそっくり」

卯月 「そ、そうですか？ えへへ……、ありがとうございます」

未央 「いやいや。そんな事よりもびつくりしたのなんのって！ しまむーが倒れたって……」

卯月 「……そうですね。心配させちゃって、ごめんなさい……」

未央 「ホントだよー！ もうっ、無茶してない、大丈夫なんて私達に言っておいて……。心配して千葉からゲットマシンで直行しようと思っただからね？」

卯月 「え……ええ……」

凜 「……未央の言うことは、半分冗談だとしてもき、本当に心配したんだから。私たちの間で、気を使ったり、隠し事したりするの無しにしようって、約束したじゃん」

卯月 「あうう……。ホントにごめんなさい」

凜 「今回は過労で済んで良かったけど……、もつと取り返しのがつかないことになったかも知れないんだから……。もつと自分の体を労りなよ」

未央 「まあまあしぶりん。しまむーも反省してるみたいしさ？ あんまり責めないで

…。しまむーも、しぶりんの気持ち分かってあげなきやダメだぞ?」

卯月「はい…。だけど、やっぱり自分が情けないです…。このくらいの事で倒れちゃうなんて…」

未央「そ、そんな事ないよお。しまむー、私達の中で一番頑張ってるじゃんっ」

卯月「…ありがとう、未央ちゃん。でも、自分でも分かってるんです。凜ちゃんも未央ちゃんも、二人とも私なんかよりずっと頑張ってる…。私が2人の頑張りに応えるために、もつともつと頑張らなきや、つて。こんなところで寝てちゃ、駄目なんだ…!」

グッ…

未央「あ、しまむー!」

卯月「あ…、きやあつ!」

バタンツ

上手く立ち上がることが出来ず、ベッドの上から転倒。

未央「あくあ、言わんこつちやない。そんな体で、無理してもダメだつて…」

凜 「未央」

未央「えっ、何?しぶりん」

凜 「……」

未央「…しぶりん、目が怖いよ」

卯月「大丈夫です、未央ちゃん。ちゃんと、一人で立てますから……」

凜「卯月……」

未央「あ、そゆこと」

卯月「……私って、ドジだから、ミスも多いし、合体する時も二人にタイミングを合わせてもらって……。私が、二人の足を引つ張つちやいけないんです。これから戦うって言なら尚更、2人に甘えるわけには、いけないんです！」

未央「……」 チラッ

凜「……ん」

卯月「……? どうしたんですか? 未央ちゃん、凜ちゃん……。2人で顔合わせて……」

未央「そうだね、しまむーの言う通りだ。こんな風にされるの、ホントに迷惑」

卯月「え、……え? 未央ちゃん、今、なんて……」

凜「私も同感。いっつも一人で無茶するし、その事を言っても、ちつとも聞いてくれない」

卯月「凜ちゃんまで……。どうしたんですか、そんな事!」

未央「いい機会だから、はつきり言うね」

凜「ゲッターから降りてくれないかな? 卯月」

卯月「……え? い、いや……! 何で、そんなのイヤです!」

未央「またあ?もう我が儘に付き合わされるの、勘弁してほしいんだよね」

卯月「っ!」

凜 「人には得て不得手があるって。どんなに頑張っても、出来ないことは出来ないよ」

卯月「そんな…!見捨てないで!私、まだ頑張れますから!」

未央「頑張る。頑張る頑張るって、ウンザリなんだって!」

卯月「っ…!未央、ちゃん…」

未央「そんなに頑張っつてどうするの!?!立派なパイロットになつて、一人前のパイロットになつて?それで死ぬまで戦うつもり?」

卯月「そ、それは…」

凜 「…そんなに頑張りたいなら、卯月のやりたいことで、卯月の好きなことで頑張ればいい」

卯月「凜、ちゃん…」

凜 「私達は、それを影から見守ってるから」

卯月「そ、それじゃあ…!2人は、2人はどうするんですか…?」

凜 「私達は、ゲッターのパイロットをするよ。アイドルは、平和になった後の世界で、きつと出来るから」

卯月「そんな……そんなのっ……そんなのっ……ないです！それなら、私も一緒に！」
未央「だーかーらー！それはもう無理なんだって。私達が限界。分かってよ」卯月
“ ”

卯月「っ！……もう、終わり、何ですか？」

未央「そう、終わりだよ、お終い。これから、私達はパイロットとして、卯月は、ア
イドルとして生きるんだ」

卯月「それって……！」

凜「応援してるよ。頑張ってるね」

卯月「ま、待っててください！凜ちゃん、未央ちゃん!!」

未央「へへっ、シー・ユー・アゲイン！また逢う日まで、さー！」

ガラツ

卯月「未央ちゃん……。凜ちゃん……」

卯月「……」

卯月母「……卯月？さつき卯月のお友達が、血相変えて出ていったけど、何かあつたの？」

卯月「……あ、ママ」

卯月母「卯月？」

卯月「あはっ…。2人に嫌われちゃいました、私…」

〃〃〃 総合病院 屋外 〃〃〃

未央「はあ…はあ…っ！待ってよ、しーぶりーん…っ！待ってってば！」

凜「……」

未央「はあ…はあ…はあ…。まったく、嫌われるのってやつばイヤだね。メンタルのよくないよ」

凜「……」

未央「おまけに、しぶりんはちよつぴり本音漏らしそうになるし…。しまむーに嫌われる事でゲッターパイロットやめさせる大作戦、半分失敗だよ？」

凜「…未央だつて、本音言いかけてたじゃん」

未央「あれ、そうだっけ？まあいいか、これでしまむーも、わざわざ戻ってこようとは思わないよね」

凜「…だといいいけど」

未央「…だよねえ。しまむー、あれで結構アクティブだから。このくらいじゃ引き下らないかも」

凜「ちよつと、何無責任に言ってるの？これ以上、卯月に無茶をしてほしくない、卯月にはアイドルでいてほしいって、そう思ったから、未央に今回の事、相談したのに…」

未央「そりゃあ、そうだけどき。でもさ、今回の事って、冷静に考えると私達の勝手な願いを、しまむーに押し付けただけだよな？」

凜「それは…」

未央「だからさ、次はしまむーが一方的になっても、私達は文句言えないよ。もししまむーが、私達の願いとは逆方向の答えを出したとしたら、その時は…」

ヴー　ヴー　ヴー

未央「ん、あれ？…ごめん、私の携帯だ…つと、アキっち…？」

凜「晶葉？何か、ヤな予感がするね」

未央「へ、変な言い方やめてよ…。…つと、はあい、もしもしアキっち？貴女のちゃ・ん・未・央☆だぞっ♪」

晶葉『…掛けてきたのは私だが、早速切つて良いか？』

未央「まったまたく！未央ちゃんのを和ます粋なジョークじゃないっ！アキっちつたら、頭が固いんだから」

晶葉『そういうキャラ付けは、ウチの所ではウサミン星人一人で充分だ。…それより、本題に入りたいんだが、いいか？』

凜「メカザウルスが出たんでしょ」

晶葉『凜も一緒か、都合が良い。お察しの通り、敵襲だ。君達ゲッターチームに出撃

要請が入っている』

未央「分かった!すぐに準備するよ」

晶葉『まあ待て。今お前の携帯のGPSで、現在地を特定している。そこに無人のゲットマシンを飛ばすから、そこで待っていてくれ』

未央「そうなんだ…。あ、でも今病院にいるからここにゲットマシン着陸させたら、色々迷惑かも」

晶葉『…何?…確かにそのようだな。何故病院に?』

凜「卯月が倒れたんだよ。…過労でね」

晶葉『何だと?!それでは、イーグル号には…』

凜「…そつちから、美波かアーニヤを乗せてよ」

晶葉『分かった。前日に予備パイロットとの合体訓練をしていて正解だったな。しかし、卯月が過労で倒れるとはな…』

凜「…それで、この戦闘が終わったら晶葉に話しておきたいことがあるんだ」

晶葉『話…?』

未央「その辺りは始めたら立て込みそうだから、帰ってからってことで」

晶葉『ああ、話の件は分かった。取り敢えず今は…そうだな、そこから少し移動したところに広めの公園がある。ゲットマシン2機くらいなら着陸させられそうだ。今地

『図データを送るからちよつと待ってくれ』

凜 & 未央 「分かった(！)」

晶葉との通信が途絶え、代わりに周辺のマップが未央の携帯に送られてくる。

未央 「…よしっ！行こう、しぶりん！」

凜 「うんっ！」

くくく 総合病院 屋上 くくく

卯月母 「……そう、そんな事があったの」

卯月 「私、全然駄目ですよ。年上なのに…。2人にあんな風に言われるなんて…」

卯月母 「そうねえ。確かに、先輩としてなら、情けないわよね」

卯月 「ううくくつ。そんなはつきり言わなくてもおく」

卯月母 「けど、どうして2人がそんなこと言ったのか、ちゃんと分かってるんでしょ

？」

卯月 「……」

卯月母 「ねえ、卯月？」

卯月 「ママ……」

卯月母 「全部、お母さんに正直に話してみない？」

卯月 「え……？」

卯月母「貴女が嘘を吐いてることくらい、お母さんには分かるわよ。今までそんな、隠し事なんてしてこなかった卯月が…」

卯月「……」

卯月母「きつと、私を心配させないため、何でしょう?けど、そうやって一人で抱え込んでいても、卯月。貴女に良いことなんて一つもないわ」

卯月「けど…、それは…」

卯月母「卯月?」

ウウウウウウウウウウツ!!

卯月「これは…!?!」

卯月母「非常警報!?こんな時に、嫌ね…」

卯月（メカザウルスが来るんだ…、この市街地に…）

卯月「凜ちゃん、未央ちゃん…!」

卯月母「先ずは自分の心配をしなさい。ここも危ないかもしれない、シエルターに避難しましょう」

卯月「それは…」

卯月母「さあ早く!」

卯月「あ…、ああ…!」

卯月（私は、一体どうしたら…）

くくく市街地 上空 くくく

未央「ベアー号、発進完了！さあて、今日の敵はどいつだあ？どこからでも掛かって来なさ〜いっ！」

美波「まだ会敵までには時間があるわ。落ち着いて」

凜「イーグル号には、美波が乗ってるの？」

美波「ええ。卯月ちゃんほどじゃないかも知れないけど、宜しくねっ」

未央「オツケーだよ、ミナミン！それよりも、緊張してない？」

美波「ふふっ、大丈夫よ未央ちゃん。ちよつと怖いけど、自分でやるって決めたことだもの！二人の足を引っ張らないように、やってみせるわ！」

凜「うん。その意気だよ。……と、そろそろ敵が見えてきた…！」

未央「あれだね！何か昔の人が書いたスタンダードな恐竜って感じだけど……」

美波「…でも、頭にドリルが付いて、右腕のあれは…何て言うのかしら。あれもドリル？」

凜「見た目の感想は良いから、戦闘態勢、合体フォーメーション！」

未央&美波「了解!!」

『フフフ…！ハハハハハッ!!遂に現れおったな！待っていたぞ、ゲッターロボ!』

未央「喋った!?!」

凜 「あのメカザウルス、人が乗ってる…?」

『いかにもツ！我こそは、バット將軍に仕える爬虫人軍一の猛将と謳われるキャプテン・ザンキツ!!』

ザンキ 『恐竜帝国の頭脳、ガレリイ博士より賜り、我自身が改造を施した、この究極のメカザウルス・ゼンIIの力を以て、その憎きゲッター線の使徒、地獄に送ってくれるわ!!』

凜 「まったく…。口上が長いんだよ」

美波 「Iも知らないのに、いきなりIIだなんて言われても…」

未央 「ホント！暖気だか鈍器だか知らないけど、あんたの思うようになんかさせないツ！ゲッターロボが相手になってやる！」

ザンキ 『望むところ！さあ、早くゲッターロボに合体しろ!!』

凜 「合体する時間をくれるって言うの？バカにして…っ！」

美波 「それだけ、自分の実力に自信があるのかも。気を付けていきましよう」

凜 「分かった。でも、美波さんはまだ実戦経験がない。地上戦には地上戦、ここはゲッター2で勝負する！」

未央 「りよー解つ！ミナミン、しぶりんのリードについてって！」

美波「ええ！分かったわ！」

ジャガー号を先頭に、3機のマシンが空中で連なる。

凜「チエーンジゲッターー！2ツ!!」

合体した、ゲッター2が地上に降り立つ。

ザンキ『ふん…。随分と華奢な、頼りない奴が出てきたな…』

未央「見た目で判断しないことだね？しぶりん、ゲッター2の速さを見せちゃってよ」

凜「言われなくつても…。ゲッタービジョン！」

叫び、右の操縦桿を倒す。ゲッターが高速移動を始め、ゼンⅡを中心に円を描くように取り囲む。

ザンキ『うむう!?これは…。!』

ゲッター2の高速移動の中心で、ゼンⅡは右往左往。

凜「今だ…。ゲッタードリル!!」

ギルイイイイインツ!!

ゲッタードリルが唸りを上げ、ゼンⅡの背後目掛けて、突進していく。が、

ガギンツ

凜「!?」

未央「ウソオ！」

美波 「ゲッタードリルが…メカザウルスの装甲に、阻まれた!?!」

ザンキ 『ふむ…蚊が刺したか?』

振り向き様にゼンⅡが左の腕を振りかぶり、ゲッター2に降り下ろす。

凜 「っ…!」

ゲッタービジョンの高速機動でゲッター2を引き、攻撃を躲す。

美波 「きやあつ!」

未央 「大丈夫!?!ミナミン!」

美波 「え、ええ…。慣れない重心移動で、ビックリしちゃっただけだから…」

凜 「ゲッターキック!」

ゲッター2がゼンⅡの体を蹴り上げ、距離を取る。対するゼンⅡにダメージが入った

様子はない。

凜 「な、何て固さなの!?!」

ザンキ 『そんなものか?…温い、生温いぞお!!』

未央 「奴の攻撃が来る…!…! 躲して!」

凜 「言われなくつても…っ!」

ゼンⅡの頭部からドリル型のミサイルが放たれ、ゲッター2目掛けて飛来する。凜は

それを巧みに躲していく。

ザンキ『はははっ！小賢しいな！小躍りするのが好きと見える！』

凜「ぐっ……！」

ザンキ『だが、俺は余興は好かん!!』

凜「!?!」

ゼンⅡの右腕のドリルが回転し、生まれた旋風がゲッター2の挙動を乱す。

凜「う……つく……！」

未央「し、しぶりん……！しっかり！」

凜「ドリルストームみたいな技を……！」

美波「凜ちゃん、前!!」

体勢の崩れたゲッター2に、ゼンⅡが迫る。

ザンキ『受けるか？我が必殺の一撃!』

凜「……ああ……！」

ザンキ『ハンドソルド!!』

回転する右腕、ゼンⅡのハンドソルドがゲッター2の鳩尾を深く抉り、ゲッター2の体を遠く離れたビルまで吹き飛ばした。

美波「きやあああああっ!!」

土煙を上げながら、アスファルトの地面に沈み込むゲッター2。

未央「痛つつつ…っ。しぶりん、ミナミン生きてる?」

美波「ええ、何とか…」

凜「こつちも…。まだ視界がグラグラするけど…」

未央「あいつ、強いね。これまで戦ってきた奴とは段違いだ」

凜「だからって、ここで逃げるわけにはいかないんだ!」

憎々しげに視線を上げる。ゆつたりとした動作でゼンⅡはこちらに近づいてくる。

凜「ドリルストームツ!!」

高速回転させたドリルから竜巻を発生させ、ゼンⅡを巻き込む。

ザンキ『何の小細工だ?』

凜「ドリルミサイル!」

ザンキ『フンツ!』

ドリルストームに乗じて撃ち出したドリルミサイルも、ゼンⅡの尻尾に軽く撃ち落とされる。

ザンキ『全く、全くもってつまらん!期待していたゲッターが、まさかこの程度の相手だったとは…!!』

凜「くっ…!まだまだあ!卯月の未来を守るって、決めたんだ!こんな相手くら

いッ!!」

ザンキ『はははははあッ! 気合いは十分だなあ! だが、気合いだけでは勝負には勝てぬぞ!!』

未央「自分が一番戦いを楽しんでくるくせに、偉そうな事を……!」

美波「でも、あの人の言っている事に間違いはないわ。気合いが空回りしているわ、凜ちゃん!」

未央「それは確かに、言えてるかも! しぶりん、スピードで勝てないならパワー勝負だ、ゲッター3で相手だよ!」

凜「……そうするしかないみたいだね。——オープンゲッター!」

ザンキ『ほう、まだ楽しませてくれるか』

ゲッター2は3機のマシンに分離。隊列を組み替えて、再度連なる。

未央「チェンジゲッター3イ!!」

ザンキ『フンッ! 今度のは、何と歪な……!』

未央「あー! ゲッター3をバカにしたなあ!?! 私のゲッター3をバカにするのは、このパワーを見てからにしるお!!」

ザンキ『力比べか、面白い!!』

未央「パワーアームッ!!」

気合い一発。ゲッター3のパワーアームと、ゼンⅡの両腕が組み合う。

未央「ギ…ギ、ギ、ギ…!!」

ザンキ『ほう、さっきの奴より味はある!』

未央「へっへっへっ…!!少しは見直してくれた?」

ザンキ『ああ、少し、な!!』

未央「うわあっ!」

パワーアームをそのまま持ち上げられ、地面へと叩き付けられる。

未央「うぐう…!!」

凜「何やってんの、未央…」

ザンキ『味のある相手だがそれまでだな!力だけで、この俺のゼンⅡには勝てん!』

美波「これは、次はいよいよ、私の出番かしら…?」

未央「イツツア、ピュンチ…。流星の未央ちゃんも、冷や汗出ちやうよ…」

くくく 総合病院 屋外 くくく

卯月「はっ…はっ…はっ…!!」タタタツ

卯月母「どうしたの、卯月!早く、急いで…!!」

卯月「あ…ま、待って…!!ママ!」

卯月母「卯月…?」

卯月「はあ…はあ…はあ……」

卯月母「…卯月、メカザウルスはそこまで来てるのよ？早く避難を」

卯月「ゲッターの、パイロットだったの。私」

卯月母「え？」

卯月「何て、信じてもらえないよね。今は、ゲッターを下ろされちゃったし」

卯月母「もしかして、さっきの友達との話って…！」

卯月「戦いたいたか、戦いたくないとかそういうのは、正直言ってよく分かんない。巻き込まれたみたいなき感じだし…。だけど、何て言うのかなあ…」

卯月母「卯月、貴女…！」

卯月「分かってる、ちゃんと分かっているつもり。ママには心配してほしくない。私だって、危ないことはしたくない。だけど…」

卯月母「…だけど？」

卯月「気付いたの。結局それって、周りを言い訳にしているだけだって」

卯月母「それでいいじゃない」

卯月「ママ…？」

卯月母「周りを言い訳にしたって、いいじゃない…。逃げ出す口実にしたって、いいじゃない。後で取り返しの付かないことになって、家族が哀しむより、ずっとマシよ！」

卯月「…ママ」

卯月母「卯月、貴女は良い子よ。お母さんとお父さんの、自慢の娘。誰かにやれって言われたら断れない、優しい子」

卯月「……」

卯月母「だから、責任に感じているんでしょ？自分がやらなくちゃって、そんな事ないのよ」

卯月母「危ないことは、それが出来る専門の人達がいる。誰かが無理しなくちゃいけないことなんて、この世にはないんだから」

卯月「…そう、だよ。きつと、そう…」

卯月母「そうなのよ。貴女が逃げたって、誰も貴女を責めたりしない、悪く言ったりしない。だから、お母さんと逃げましょう？」

卯月「…ごめんなさい」

卯月母「卯月？」

卯月「私がここで逃げたら、誰に責められなくても、悪く言われなくても、きつと私は、自分で自分を許せないから」

卯月母「……！」

卯月「だから、ごめんなさい！パパとママの自慢の娘は、悪い子になります！」 ダッ

踵を返して母親に背を向け、メカザウルスと、ゲッターのいる方へと走り出す。

卯月母「あ……！待って……！待ちなさい、卯月い!!」

くくく 市街地 大通り くくく

未央「——ゲッターミサイル!!」

ザンキ『ミサイルっ!!』

ゲッター3の肩から放たれたミサイルと、ゼンIIの頭部からのミサイル同士がぶつかり合い、周囲を黒煙が包み込む。

未央「げえっ！煙幕で全然見えない……!?!」

凜 「レーダー見て！真正面っ!!」

ザンキ『フンツ!!』

黒煙を振り払って姿を見せた、ゼンIIの尻尾がゲッター3を強かに打ち付ける。

未央「う……わあっ?!」

美波「大丈夫!?!未央ちゃん!」

未央「へへっ……！へーき平気っ！タフが取り柄のゲッター3！そう簡単にはやられません!」

凜 「何て自慢げに言ってるけど、勝算はあるの?」

未央「それは、とりあえず……こう、やってみる!」

ゲッター3の両腕のパワーアームをゼンIIに向かって伸ばし、羽交い締めにする。

ザンキ『むうっ！これは…!?!』

未央「そおお…りやっ!!」

力任せに宙へ持ち上げて、そのまま近くのビルに叩きつける。

未央「へっへっ！どおだっ！ゲッター3、パワーで勝機がなくても、物理的衝撃なら、ダメージを与えられるはず！」

凜「…後でビルのオーナーから苦情来ても知らないよ」

美波「確かに今ある中では最善かもしれない（ビルの被害はともかく…）。でも…」
倒壊したビルから起こった土煙の中から、再びゼンIIが姿を現す。

凜「あんまりダメージ受けた様子ないね」

未央「ウソオッソ…。今ので致命傷くらいにはなるはずだけど…」

凜「頼りにならないダメージ計算だよ…」

ザンキ『キャプテンが乗り込むメカザウルスだぞ？この程度の衝撃で倒れるものか
!』

凜「それで、次の手は？他にまだあるんでしょ？」

未央「えっ、うっん…と…。っ、次の手は…」

美波「次の手は？」

未央「に、逃げるんだよお……？」

ザンキ『次はこちらの番だぁーっ！っ！！』

未央「ひゃ……！」

美波「未央ちゃん避けて！！」

未央「ゲッター3に回避なんて、無理……」

凜「諦め早っ！」

ザンキ『ハンドソルドッ！！』

ゼンⅡのハンドソルドによる一撃で、低重心で重量感のあるゲッター3が宙を舞う。

未央「が……あっ！あ、あああっ！！」

キヤタピラの下半身をゼンⅡに向けて、背中から地面に倒れ伏したゲッター3。

未央「やつば……！押ししても引いても、立てない……っ！」

凜「ちよつと未央……！しっかりやってよ……！」

未央「んなこと言われなくっても、分かっているけど……！この、この……このっ！」

虚しく空中で回転するゲッターの無限軌道。

ザンキ『グハハハッ！！我が帝王・ゴール様っ！ご覧になっておいでですか!?このザン

キが、憎きゲッターの息の根を止め、その首を貴方様に献上致しますぞッ！！』

未央「このお……！好き勝手言ってくれちゃって！」

未央「え？」

卯月「わ、私だって…私だって、う…うんざり…」

美波「な、何があつたの？卯月ちゃん?!」

卯月「やつぱり言えませんか!!」ピヤーツ

美波「ええ…」

ザンキ『ええい、無力なサル共の小娘が、このキャプテン・ザンキの戦に割って入るとは!』

起き上がれないゲッター3に背を向け、卯月の正面に立ちはだかる。

未央「に、逃げて!しまむうー!!」

卯月「うう…っ!」

ザンキ『何をしに来たかは知らんが、死に急ぎたいのならば、そうしてくれるツ!』
グオツ

ゼンIIのハンドソールドが、振り上げられる。

未央「させるかあっ!!」

ザンキ『ぬ、ぬう!?!』

倒れた姿勢のまま、パワーアームを伸ばし、ゼンIIを拘束。

ザンキ『き、貴様…っ!まだ…!?!』

未央「ゲッター3は男の子ツ！これが私の底力あ!!」
ゼンIIとゲッター3の力が拮抗する。

凜「今の内に早く！逃げて、卯月っ!!」

卯月「…逃げません!!」

凜「え…っ」

卯月「私は逃げませんよ」

未央「しまむー…卯月っ！言ったじゃん！私達に、卯月はいらなくて」

美波（いらぬ…？…そう言うこと、なの？）

卯月「そんなの、関係ありません！」

凜「関係、ない…？」

卯月「はい…っ。凜ちゃんの勝手にも、未央ちゃんの勝手にも、私が従う必要なんて、

無いんです！」

未央「そんな、勝手な…」

卯月「必要とされなくなつて良い、2人に嫌われたつて、私…構いません！それでも、

私、分かつたんです！」

凜「…何を」

卯月「アイドルとか、友達とか、家族とか…。みんな大切に、大事だから！私が、守

りたいてって！」

凜 「そんなの、卯月じゃなくても出来るでしょ」

ザンキ 『ええいつ！離せ、離さんかつ!!』

未央 「あんたは……！ちよつと大人しくしてよっ!!」

パワーアームの力を込め、ゼンⅡの体をキツく縛り上げる。

ザンキ 『うぐう……!?!』

未央 「そうそう、良い子だ」

凜 「卯月は、トップアイドルになるんでしょ？」

卯月 「…はい。その夢は、今だって変わりません」

凜 「だったら……!」

卯月 「でも、私が目指すアイドルは、私が思い描いたアイドルの姿は、私一人じゃ、意

味無いんです！」

凜 「そんな事……!」

卯月 「パパやママ、友達に支えられて、隣に凜ちゃん達がいてくれて……。みんな手を取り合って、笑い合える。それが、私の目指すアイドルです」

卯月 「だから、私の隣には“アイドル”の渋谷凜と、本田未央がいてくれないと、イヤなんです！」

未央「イヤって、子供じゃないんだよ?そんな、わがまま…」

卯月「そうです。これは、私のわがまま。でも、気付いちやっただです。ゲッターに乗って、はじめてメカザウルスと戦った、あの日に」

未央「何を…」

卯月「…何も出来ないと思ってた。わたしは、何の力もないちっぽけな女の子で、あんな大きな、メカザウルス相手には逃げることしか出来ないって、今まではそう思ってたんです」

卯月「でも、違う。私でも戦える!私が、守りたいって思った人達を、みんなの笑顔を守る事が出来る。ゲッターの力で!」

美波「……………」

凜「だから、戦うって言うの?アイドルの未来を諦めて…」

卯月「諦めません!トップアイドルにだって、絶対なれますよ。平和になったら、きつと!」

未央「へへっ、意外と欲張りなんだ」

卯月「はいっ♪島村卯月、欲張っちゃいます!」

未央「…だつてさ、どうする?しぶりん」

凜「……………」

バチンッ

凜 「!?…な、何…?」

ゲッター3が突然分離。

未央「ウツソ…。私、オープンゲッターなんて言っていないよ?」

美波「いざという時のための、強制分離システム。ゲッターの分離自体は、メイン以外のコックピットからでも出来るのよ」

未央「つて事は、ミナミンが」

美波「ええ。誰かが背中を押してあげなくちゃ、でしょ?」

凜 「……」

美波「何があつたかは、聞くつもりもないけど。だけどやつぱり、凜ちゃん達は3人で一つのチームじゃない」

未央「…よおーしっ!分かった。しぶりん!」

凜 「…何?」

未央「私はもう、覚悟を決めた。私は卯月と行く!」

凜 「……」

未央「しぶりんは?」

凜 「…かだよ」

未央「ん?」

凜「…バカだよ、みんな。ホント。戦いなんて、いつ終わるか分かんないのに、アイドルなんて、何時まで続けられるか分かんないんだよ?」

未央「でも、夢を諦めた後に叶えたアイドルだって、何年もしぶとく頑張つて夢を叶えたアイドルも、私達は知ってるよ?」

凜「……」

未央「そのために頑張ろうって言うんだ。これ以上、私達が言えること、ないんじゃないかな?」

ザンキ『何の話をしているのか分からんが、貴様らの思い通りになど…』

凜「……させないよ」

ザンキ『ぐう…っ!?!』

ジャガー号のミサイルが、ゼンⅡの足を止める。

未央「しぶりん!」

凜「美波は早く卯月のところに行つて!ここは私と未央で引き受ける」

美波「分かった!何とか持ちこたえて、頼んだから!」

凜「そつちも、卯月の事は任せたよ」

美波「ええ、任せて——」

イーグル号は着陸の態勢に入り、ジャガー号とベアー号はゼンⅡの方へと向かう。

凜 「卯月が乗り込むまでの時間を稼ぐよ、未央！」

未央 「合点！ミサイル発射〜！」

ザンキ 『ぬう…!?羽虫共が…!そんな豆鉄砲でえ…!!』

2機のマシンが弾幕を展開する一方、イーグル号は卯月の待つ地点へとゆっくり降下する。

卯月 「美波さん…」

美波 「さあ、卯月ちゃん。凜ちゃんと未央ちゃんが待ってるわよ」

卯月 「…はいっ」

美波 「…何だか、羨ましいな」

卯月 「え…」

美波 「本気でぶつかり合って、自分の思ってることを正直に言い合えるのが」

卯月 「美波さん…?」

美波 「若いからとか、子供だからとかじゃない。貴女達3人が、心から信じ合っている証なのよね、きつと」

卯月 「えつと…、はい。私は凜ちゃんも未央ちゃんも、みんな大好きだから！」

美波 「ふふっ。それなら、ちゃんと卯月ちゃんの手で、守ってあげて？」

ハーフフェイスのヘルメットが受け渡される。

卯月「…はいっ！ありがとうございますっ、美波さん！」

美波「いつてらっしやい、卯月ちゃん！」

卯月「はいっ!!」

パチンツ

ハイタッチを交わして美波に別れを告げ、イーグル号の操縦席に滑り込む。

卯月「——計器に異常はなし。改めてよろしくね、イーグル号……」

計器をチェックし、チャームポイントのポニーテールを解いて美波から預かったヘルメットを被る。

卯月「…すう……。——島村卯月、行きますっ！」

操縦桿とフットペダルに力を込め、勢いよくイーグル号は空へと舞い上がる。

卯月「凜ちゃん、未央ちゃんっ!!」

未央「しまむーキター!!」

卯月「お待たせしました。——イーグルミサイルツ!!」

イーグル号の機首下部から、二筋のミサイルを撃ち出し、ゼンⅡの足元で土煙を発生させる。

ザンキ『目眩ましのつもりか……この程度……ッ!!』

ゼンⅡが土煙を振り払う間に、3機のマシンはイーグル号を先頭に天空へ。三つの心が青空の中で一つになる。

卯月「チエエーンジゲッターアアーッ!!」

日の光を受け、赤いマントを翻し、ゲッター1がゼンⅡの前に降り立つ。

ザンキ『更に姿を変えてきたか…。だが、今更乗組員を一人入れ換えたところでえ!!』

悠然と立ちほだかるゲッター1に、ゼンⅡは自慢のハンドソルドを掲げ、猛然と突撃。

ザンキ『ハンドソルドッ!!』

卯月「っ!ゲッターレザー!!」

対する卯月は、振り下ろされたハンドソルドを右腕のカッターで受け止める。

ガキインツ

ザンキ『…何ッ!?!』

卯月「ここからが、ゲッターの本番です!」

わずかにゲッターレザーを捻ることで、絡み付いたハンドソルドの刃をへし折る。

ザンキ『ば、バカなあ…!?!俺の、ハンドソルドが…?』

卯月「これで、もう怖いものなしですね」

ザンキ『おのれえく!このッ!』

ブオンツ

卯月「ゲッターウイング！」

水平に放たれた尻尾の一撃を、翼を広げ、宙に舞い上がることで躲す。

卯月「ゲッターキック!!」

ザンキ『ぐお……!!』

そしてそのまま、ゼンⅡの頭部目掛け、後ろ回し蹴りを放つ。

ザンキ『小娘があくくッ!!くらえッ!』

卯月「っ!」

ゼンⅡの口から断続的に放たれるミサイルを、空中を縦横無尽に駆ける事で難なく掻い潜る。

ザンキ『おのれ、ちよこまかとおく!!』

未央「敵さん、随分頭に血が上ってるようですなあ?」

卯月「ッ! ゲッタートマホーク……!——ブーメラント!!」

ザンキ『!?!』

ゲッターⅠ目掛けて飛来したミサイルを、投射したトマホークが悉く蹴散らし、そしてゼンⅡの頭頂の角ドリルを削り取る。

ザンキ『うおおおおおッ!!?!俺の角があ?!』

卯月「ゲッターパアンチッ!!」

怯んだところに急加速。勢いを乗せたゲッターの拳が、ゼンⅡを吹き飛ばした。

ザンキ『う、うぐ…う』

ゼンⅡの装甲を歪ませながら、それでも尚立ち上がる。

ザンキ『な、何故だ…？先程までのゲッターに、こんなパワーはなかったはず…。何故いきなり、これほどのパワーアップを!!』

卯月「貴方には、きっと分かりませんよ！」

ザンキ『何い!!』

凜「ゲッターは三人の力が一つになってはじめて、100%の力を発揮するロボット！」

未央「つまり——!!」

ゼンⅡの鳩尾にゲッターキックが炸裂し、ゼンⅡがよろける。

ザンキ『ぬぐあ…!!』

卯月「三つの心が一つになれば！」

凜「無敵の、ゲッターの力は……っ！」

未央「百万パワー!!」

態勢を崩したゼンⅡの頭部を捉え、地面に叩きつける。

ザンキ『が…はっ!!三つの心一つに、だと…？そんな非科学的なもので、このゼン

IIが負けると言うのか!」

凜 「だから、アンタには一生分かんないんだよ」

未央 「しまむー、一気にトドメだ!」

卯月 「はいっ! ゲッタートマホークツ!!」

ゲッターがトマホークを大きく振り上げる。

卯月 「トマホーク、ブウウーメランツ!!」

勢いよくトマホークを投擲し、ゼンIIを斬り裂く。

卯月 「たああああ!!」

素早く戻ってきたトマホークを掴み、追撃を加えるため突貫する。

卯月 「えいっ!」

右手に担ったトマホークを水平に振り被るように、一撃。

卯月 「えいっ!」

フルスイングしたトマホークを、すかさず返し、やや振り上げ気味に二撃目。

卯月 「えええええいっ!!」

ザンキ 『ぐおおっ!?!』

三撃目はトマホークを両手でしっかりと構え、大上段から力任せに一気に振り下ろす

!

ザンキ『うう……、おのれおのれおのれえ!!』

全身にダメージを受け、満身創痍のゼンⅡの身を低くし、辺り構わず突撃する。

凜「まずい……卯月、空中に回避だよ!」

卯月「分かりましたっ……」

ザンキ『させぬわあ!!』

マントを広げ、空中の逃れようとするゲッター1にミサイルを放ち、牽制する。

ザンキ『くうらえええいつ!!』

卯月「……っ!きやああああ!?!」

ゲッター1に飛び付き、勢いのまま、ビルの残骸へと押し倒す。

凜「ぐっ……まだこれだけパワーを残してるなんて……」

未央「もう!無茶苦茶過ぎい!!」

両腕、両脚ともにゼンⅡによって拘束され、全く身動きが出来ない。

ザンキ『認めぬ……認めぬぞ!このゼンⅡこそが、地上で最強のメカザウルスなのだ!

それを、たかが小娘如きに!』

凜「随分と、傲慢だね」

ザンキ『余裕を見せていられるのも今の内よ!』

卯月「くっ……!」

拘束されているゲッター1の装甲が軋みを上げ、ゼンIIに踏みつけられる両脚の装甲には亀裂が生じる。

ザンキ『フハハハハ!!泣け、叫べ!己の無力の前にみつともなく喚き散らすが良いっ!!』

卯月「っ…!」

未央「あゝらら、ゲッターロボの大ピンチ?流石の未央ちゃん達も一貫の終わりなの?」

凜「未央、ふざけすぎ」

ザンキ『その余裕が何時までもつかない?』

未央「えー?そっちこそ、こんなことくらいで、もう勝ったつもり?」

ザンキ『何を言う!追い詰められているのは貴様らだぞ!貴様らこそ、いい加減に覚悟を決めるんだな!』

未央「…本当に、もう…。何て言ったらいい?」

凜「さあ?『相手が勝ち誇った時、その相手は既に敗北している』とで言ってみたら?」

未央「お、それはちよつとカッコいいかも」

ザンキ『何時までもふざけおつてえ…!これで息の根を止めてくれる!』

ゼンⅡの口内にエネルギーが溜められていく。

凜 「はあ…。ホント、下調べが甘いよ、恐竜帝国！」

ザンキ 『何を?!』

未央 「ゲッターの必殺技はツ——!!」

カシャン

ゲッター1の腹部中央が円形に口を開ける。

ザンキ 『しまっ——!?!』

一瞬。

卯月 「ゲッタアアア…! ビイイームツツ!!」

放たれた一筋の閃光。ゼンⅡの頑強な表面装甲を穿ち、恐竜の肉体を焼き、その輝きはゼンⅡの体を貫いて宇宙を引き裂く。

ザンキ 『ぐ…つ、おおおおお!?! なんとおお! こんなことがアアアアツ!!』

叫びはそのまま断末魔の響きとなり、メカザウルス・ゼンⅡは爆散した。
—。

未央 「た、倒した…。」

凜 「なかなかの強敵だったね…」

卯月 「…はい。これから、こんな敵が増えるのでしょうか?」

未央「さあ?でも、私達三人にゲッターの力を合わせれば、どんな敵だって怖くないよ!」

凜「……………」

コンピュータのディスプレイに視線を落とす。視線の先は、各ゲットマシンの出力値だった。

凜「…さつきはノリであんなこと言ったけど、美波が乗ってた時より、イーグル号の出力が上がってる…?これが、あのザンキとか言う奴が言ってた、急激なパワーアップの理由?」

卯月「…?凜ちゃん、どうかしましたか?」

凜「卯月…。ううん、大したことじゃないよ。…それより、ホントに良かったの?」

卯月「はいっ!多分、後悔はしません。だって…」

未央「だって…?」

卯月「未央ちゃんと凜ちゃんが、いてくれますから♪」

凜「……………」

未央「ええ〜いつ、照れること言ってくれなせ!しまむーは」

卯月「え、ええつ…。そんな、可笑しな事言ってますよね?私…」

—くう…

卯月「……あ……」

凜「……今の、何？」

未央「プッ……！あつははっ！しまむ……！お腹空いた？」

卯月「あ、あの……。ちよつと、笑わないで下さい……っ！朝から何も食べてないのっ！だから……」

凜「それでよくゲッター動かせたね……」

未央「あははは！ふ……ふひひ……っ！あー、お腹、お腹痛い……っ」

卯月「も、もう未央ちゃんっ！笑わないで下さいってば……!!」

未央「あつははっ！ヒ——ごめんごめんっ。それじゃ、晩御飯の時間だし帰ろうか、私達の場所に！」

卯月「……はいつ！」

凜「……」

晶葉『——ははっ！まあ良かったじゃないか。無事に丸く収まったみたいで』

凜「晶葉……」

晶葉『これでもう、戦いが終わった後の話、と言う奴は必要なくなつたかな？』

凜「……知つてたの？何を話すか」

晶葉『卯月が疲労を重ねていた事については、早乙女博士も懸念していた。それに今

回の病院送り。大体検討は尽く』

凜 「うん……。まあその通り何だけどき……」

晶葉 『何だ？ 卯月が戻ってきたのが、不満か？』

凜 「いや、そうじゃないよ。…取り敢えず、ね。丁度いい、今データを送るから、ちよつと見てくれない？」

晶葉 『データ、だど…？ これは、ゲッターエンジンの出力値か……これは……』

凜 「やつぱり、正常な数値じゃないんだね」

晶葉 『計器の異常じゃないのか？ でなければ、こんな……』

凜 「それは、専門じゃないからよく分かんない。けど、私のジャガー号と未央のベアー号は正常値みたいだったから、どうなのか気になって」

晶葉 『そうか……。機材のトラブルかもしれない。今はこの数値の事は、忘れていてもいいだろう』

凜 「そう。晶葉に任せちゃっていいかな？」

晶葉 『ああ。それよりも、今日の敵の事があったんだ。これから恐竜帝国との戦いは、一層激しくなっていくだろう。今は先ず、体を休めることだけ、考えてくれ』

凜 「分かった。何か分かったら教えてよ」

晶葉 『うむ。では、私はこれで一度失礼する』

凜 「うん。それじゃ…」

凜 (ゲッターロボ、か…。私達を選ばれたのは本当に、偶然だったのかな…)

〳〳〳 数日後 都内某所 〳〳〳

卯月 「――…ついにこの日が、来ましたね」

未央 「もう本番前だけど、ホントにこれで良かったの？」

卯月 「…はいっ！多分、今の私達じゃ両方上手くやろうなんて、やっぱり無理なんだと思います」

凜 「でも…」

卯月 「良いんですよ！それに、アイドルとして、みんなを笑顔にするなら、戦いが終わってからの方がきつと良いに決まっていますから！」

凜 「…うん、そうだね。それじゃあ、行こう！私達の足跡を残しに…っ！」

未央 「あー！ズルいしぶりん！そうやってカツコ良く締めるのは、リーダーである私の勤めじゃん！」

凜 「分かった分かった。ほら、ファンのみんなが待つてるんだから。手短かに、ね？」

未央 「うー！…：ニュージエネレーション、行くぞお!!」

卯月 「はいっ！」

凜 「ふふっ…：行こう！」

3人「ニ生!ハム!メローンツ!!」
ワアアアアアアアアアアツ!!

その日――、

アイドルユニット・ニュージェネレーションズは、その活動を休止した。
つづく

第4話 『大雪山おろし』

未央「いつくぞ〜！ゲッターミサイルツ！！」

ゲッター3の肩からせり出した一対のミサイルが、線を描いて飛翔し、目標のメカザウルスへと命中する。

メカザウルス『キヤオオオオオンツ！！』

未央「へっへ〜んっ！どんなもんだい!?!」

メカザウルス『キシヤアアアアツ！！』

未央「いっ、っ!?!」

爆煙の中から咆哮上げ姿を見せたメカザウルスのミサイル攻撃を、辛うじて躲す。

凜「まだトドメを刺せてない！ゲッター2にチェンジして！」

未央「なっ…！何でさ！メカザウルス一匹くらい、ゲッター3だつて…!」

凜「決定力が足りてないんでしょ！ミサイル一発で倒せないのがその証拠。地上の

敵が相手なら、ゲッター2のドリルで粉碎してやる！」

未央「…つたくもう。やるからにはキツチリ仕留めてよね！」

凜「任せてよ」

未央「…オーブンゲツト！」

凜 「チエンジゲツター2!!」

メカザウルス『グア…?』

凜 「ゲツタードリル！」

素早く変形したゲツター2が、高速機動で敵のレーダーからも姿を消し、背後からのドリルの一刺しでトドメを刺す。

凜 「…戦いはスマートに、ね」

未央「ヒュー♪流っ石、クールしぶりんは言うことが違うね」

凜 「敵の増援は……ないみたいだね。今日のところはこんなもんか…」

卯月「本当にお疲れさまでした！凜ちゃん、未央ちゃん！」

未央「どーって事ないって！あと二、三体は相手に出来るね!!」

凜 「調子に乗らない。実際のところ、未央一人じゃ危なかったでしょ」

未央「そんな事ないよー！しぶりんの方こそ、ドリルがあるからってドリル一辺倒じゃ、いつか敵に対策されるんじゃない？」

卯月「ま、まあまあ凜ちゃん、未央ちゃ…」

晶葉『…ああつ、まだ生きているな。戦闘終了直後だというのに、元気な奴等だ』

未央「アキっちー？アイドルが体張って頑張ってるのに、その言い方はないんじゃないな

い？」

晶葉『ははっ、労っているつもりだったんだがな。まあいい。3人共着実にゲッターを乗りこなしつつあるようだな』

卯月「そうですか？ありがとうございますっ！」

凜「卯月は一番努力してたもんね。当然の成果だよ」

未央「私だって頑張ってるよう」

凜「そうだね。でも、目立とうとして前に進み過ぎるのは、やめた方がいいと思うよ」

未央「むっ……」

凜「ゲッター3のパワーとタフさを生かすつての分かるよ？けど、どうやったつてゲッター3じゃ……私や卯月が前に出た方がいい時だつてある。リーダーなんだから、その辺りはしっかり判断してもらわないと」

未央「私のゲッター3じゃ力不足だつての？だから、足を引っ張つて……！」

卯月「未央ちゃん！凜ちゃんは何もそんな事……！」

晶葉『まあ、先ずは帰還してくれ。今回の報告もある。そんなところでグダグダしていても仕方ないだろう？』

卯月「り、了解です！ゲッターも整備したいし、私達も休まなきゃ！ね？凜ちゃん、未

央ちゃん？」

凜 「…そうだね。何時までも窮屈なパイロットスーツを着てるわけにもいかないし」

未央 「……」

――。

〳〳〳 早乙女研究所 シャワー室前更衣室 〳〳〳

凜 「ふう……」

卯月 「シャワー、やっぱり気持ちいいですね！ 戦闘だとしても、汗、一杯かいたやいますから！」

凜 「仕事終わり、やりきったって思えるよ。ま、恐竜帝国の奴等はこっちの都合考えてくれないから、この後出撃ってこともあるかも知れないけど」

卯月 「い、イヤな事言うのやめてくださいよ」

凜 「プロトゲッターロボも今は改装中。今何かあつたら、私達の力だけで何とかしなきゃ」

卯月 「何とか、ですか…。うう、大変ですけど、頑張らなくちゃですよ！ ねえ、未央ちゃん」

未央 「……」

卯月「未央ちゃん？」

未央「…やっぱり納得いかない！」

卯月「…え？…ええ？…ええ？何ですか？いきなり…」

未央「ゲッター1にはゲッタービーム、ゲッター2にはゲッタードリル！どつちも一撃必殺の武器があるのに！」

凜「……さっきの話、まだ気にしてるの？別に、ゲッター3が頼りない分は、こつちでもフオロー出来るからさ」

未央「言ったね！今、頼りないって、はつきり！」

凜「だって……事実だし。ねえ、卯月」

卯月「そ、それは……あはは……。どうなんでしょう……？」

未央「…しまむー、暗に否定してないよね、それ…」

卯月「うええええ！それは……別に、そのお…」

凜「卯月に噛み付かない。ここで何をどう言ったって、事実是不変らないでしょ」
未央「う、っ……！」

凜「第一、ゲッターは元々宇宙開発用の作業ロボットだったんだから。そう都合よく、一撃必殺の武器が各形態に付いてるわけじゃないじゃん」

未央「それは……じ、じゃあどうしてゲッター1やゲッター2には都合よくビームや

ドリルが付いてるのさ？」

凧 「……。多分、スペースステブリ破壊したり、衛星間で作業したりするのに必要だったんでしょ」

未央 「それ、全部一つで足りるよね？」

凧 「……」

未央 「ちよつとは何とか言ってみたらどうなんだい？ええ?!」

卯月 「み、未央ちゃん落ちて着いて！」

未央 「離せしまむー！理屈ばかり振りかざす……！そんな野郎には修正が必要なんだ
！」

凧 「……ゲッター3お得意の水中戦も、上手く立ち回れば私達でも何とか出来るしね」

未央 「な^んつ……?![!]な、な……な……なあ!」

卯月 「凧ちゃん！」

未央 「くくく……つ！うう……つ！いいつ、私もうゲッターパイロットやめる！」 ダツ

卯月 「あつ、未央ちゃん……！」

凧 「……アイドル活動も止めてるのに、パイロットやめたら、どこに行くんだらうね

？」

卯月 「え？あゝ、あははは……。はあ……——」

未央「酷いもんだよ！チームメイトだつて言うのにさ！こつちは真剣に考えてるんだから！」

未央「えーい！こうなつたらもう、早乙女博士に直談判だあ!!」

~~~~~ 早乙女研究所 所長室前 ~~~~~

晶葉「失礼しました」

未央「ん？アツキー？」

晶葉「ん？おお、未央か。珍しいじゃないか、お前がこんなところまで来るとは」

未央「あ……まあね。相談とか色々、博士に話したいことが、ね」

晶葉「博士に？あー、今はやめておいた方がいいだろう」

未央「？ どしたの？」

晶葉「ついさつき政府の関係者から連絡が来たばかりだな。気が立っている」

未央「気が……？」

晶葉「ここの運営は現状、政府からの資金提供で賄われているからなあ。向こうにとつては、確実な成果……つまり、恐竜帝国の一日も早い打倒を望んでいる。その為に毎日のようにせつつかれては、な……」

未央「あ……あははは……。博士も何かと大変なんだ？」

晶葉「まあ、な。一科学者であり、ここの責任者だからな。やらねばならぬ事が多い上、果たさねばならんことも多い。これ以上、博士の気苦労は増やさない方がいいだろう」

未央「そつか……。でもなあ、ううん……」

晶葉「ゲッターに関する事となら、博士に代わって私が聞くぞ。大方、ゲッター3の話だろう、戦闘終了時に、凜としていた、な——」

~~~~~ 早乙女研究所通路 ~~~~~

晶葉「ふむ……。ゲッター3の武装強化、か」

未央「ね、恐竜帝国との戦いは、これからも激しくなる。どっちにしたって何時までも今の状態で戦い続けるのだから、厳しい筈だよ！」

晶葉「尤もらしいことを言うな。確かに、ゲッター1や2に比べてゲッター3はほとんど武装化されていない。見るからに貧弱ではあるが……」

未央「でしよ!? だったら……!」

晶葉「だが、拡張性の問題もあるんだ。元々ドリルを搭載していたゲッター2、スタンダードな人型で武器を手持ちさせやすいゲッター1、という具合にな」

未央「……」

晶葉「ゲッター3に、何かを積み込む余地があるか？」

未央「……さっきの理屈で言うんだったら、手に何か持たせるとか…」

晶葉「下半身がキヤタピラであるゲッター3は、その分ゲッター1より等身が落ちる。銃火器じゃ狙いは付けづらいだろうし、近接武器なら殴った方が早いだろうな」

未央「……」

晶葉「とまあ理屈的な話をしてみたが、現実問題研究所も今多忙でな。正直なところゲッターの改装に手を回している余裕がない、と言うのが、本当のところかな」

未央「多忙? あ、ここ、格納庫…」

『晶葉ちゃん…お待ちしてましたよ♪』

未央「うえ? ウサミン? どうしてここに…。パイロットスーツまで着て…」

菜々「あ、未央ちゃんも一緒にですか? さっき戦闘を終えたばかりなのに…。お疲れ様です!」

未央「ああ、こちらこそお疲れ様で…。じゃなくて!」

晶葉「これから改装中のプロトゲッターロボのテストなんだ」

未央「プロトゲッター? ああ、さっきしぶりんも言ってた」

菜々「何時までも格納庫を占領して、迷惑なんて掛けられませんからね!」

未央「さっき晶葉が忙しいって、言ってたの…」

晶葉「それこそ、恐竜帝国の侵攻も激化してきたからな。一日も早く、プロトゲッター」

をさせるようにしておかなければな」

未央「そっか…それじゃ、私もあんまり我が儘は言えないね」

晶葉「理解が早くて助かる」

菜々「ナナ達も、一日も早くプロトゲッターの調整を終えて、少しでも未央ちゃん達のお役に立てるように頑張りますからね！」

晶葉「それじゃあ早速プロトゲッターに乗り込んでくれ。事前に説明してあると思うが、炉心をゲッターのモノと同型に換装してある。不良はないと思うが、初期起動は慎重にな」

菜々「了解ですっ！それじゃあコックピットへ急ぎます！」 タツタツ

未央「私らのゲッターと同じ炉心…。って事は、性能もほとんど同じになるってこと？」

晶葉「装甲は前のままだがな。それと、新たに私が設計していたこの武装をプロトゲッターに搭載することになる」

未央「新しい武装？…おっきなガトリングだ」

晶葉「通称ミサイルマシンガン。ゲッター3のミサイルを参考にした小型ミサイル弾を、レーザー誘導で目標に追尾させながら放つ連装砲だ」

未央「ふえ、大したもん生み出すねえ、アキっち」

晶葉「ルーツがあつたから、それを踏襲しただけ。大したことはないさ。それに、ミサイルマシンガン開発に至つては、ゲッター3に感謝しなくてはならない」

未央「ゲッター3に？」

晶葉「ミサイルマシンガンはゲッターミサイルを参考にしたと言つたらう？あれがなければ、プロトゲッターの武装強化は果たされなかつた」

未央「……」

晶葉「なあ、未央」

未央「何？」

晶葉「科学者である私がこんな話をするのも可笑しいが、もつとゲッターと向き合つて見たらどうだ？」

未央「ゲッターと、向き合う……」

晶葉「確かに、ゲッタービーム、ゲッタードリル。その二つはメカザウルスを倒すためにも大事な武装だ。だが、どんな戦いだつて、武装の強さ、量だけが勝敗を決するわけではない」

晶葉「ゲッター1や2にそう言つた代表的なものがあるように、ゲッター3にはどんな重量級のメカザウルスを投げ飛ばすパワーと、いかなる攻撃にも耐えうるタフさがある」

晶葉「自分が乗り込むマシンを見つめ直して、その性能を生かす。武器に頼らないことだって、戦い方の一つの筈さ」

未央「武器に頼らない、戦い…」

菜々『晶葉ちゃん！こっちは準備OKです！何時でも出られますよお!!』

晶葉「そうか。今ハッチを開ける。研究所の外に出たら、直ぐにテストを開始するぞ」

菜々『了解です!』

未央「ありがと、アキっち」

晶葉「礼を言われる意味が分からないな。話を聞いておきながら、結局は自分で頑張れと言っただけなんだからな」

未央「それでもだよ。まだよく分かんないけど、方向性は見えた」

晶葉「…そうか。なら、何よりだ」

未央「私、もっと頑張ってみる。ゲッター3は私の半身みたいなもんなんだもん!誰かに頼るんじゃないで、まずは自分で、出来ることをやってみなくちゃ!」

未央「本田未央!頑張りますぞ!!」

—。

くくく 深夜 ゲッターチーム寝室 くくく

卯月「…:スヤスヤ」

凜 「……………」

未央「——…つと、言ってみたもの！そう直ぐに思い付いたら、誰にも相談なんてしてないよねえ」

未央「タフさとパワー、生かすって言ったって、それこそゲッター3は独特なシルエツトしてるし………つて、やめやめ！」

自分のベッドに飛び入る。

未央「ローマは一日にしてならず……果報は寝て待てつて言うしね。一眠りして、目が覚めたらいいアイディアも浮かぶさあ……………」 Z Z Z ……

……………

……………

…

くくく ???? くくく

未央「——…う、うん…?え、わわっ！こ、ここどこ!?…う、宇宙…?!」

未央「う、宇宙はダメだつて！い、息があく！………つて、普通に息できてる…?…つて言うか私、ベッドに入って、果報は寝て待てつて…。つて事はあ……何だ夢かあ」

未央「ん？夢だからつて、なんで私は宇宙にいるんだ？意識もはつきりしてるして…」

爆発音が響き渡る。

未央「きゃっ!」

爆発音が連続し、辺り一帯が爆炎に包まれる。

未央「夢だからって何でもありません!音も衝撃も、宇宙じや響かないって!……つて……」

立て続けに続く、爆炎を眺める。

未央「戦闘……誰かが戦ってる……?何、あれ……?気持ち悪い……!あの生理的に無理な奴と戦ってるのは……」

『ゲッターアアートマホークツ!!』

未央「ゲッターロボ!」

未央のよく知るゲッターロボが、黒い体に幾つも目が付いた異形の化け物と戦っている。

ゲッター1『オラオラオラア!!』

暴れる、と言った表現がしつくり来る動きで、ゲッター1はトマホークを両手に持ち、化け物を切り刻んでいく。

化け物『シヤアアア!』

ゲッター1『しやらくせえ!ゲッター!ビィビィームツ!!』

腹部から放たれる閃光が化け物の群れを焼き払う。

化け物『キシヤアア!!』

ゲッター1『へっ、オープンゲット!』

『詰めが甘いじゃないか、——m』

ゲッター1『るせエ! テメエに譲ってやるんだよ。感謝しやがれ!——t』

『はっ! なら、遠慮なくやらせてもらおう! 行くぞッ!!』

未央「——? 今何て言ったの? あのゲッターに乗ってる人の名前? よく聞こえなかった……」

『チエンジ、ゲッター2ッ!』

ゲッター2『インベーター共、生きて帰れると思うな……! ドリルストオーーム!!』

ゲッタードリルから生み出された強力な竜巻が化け物の自由を奪い宙へと持ち上げる。

ゲッター2『ゲッタードリル! うおおおっ!!』

防御もままならない化け物をドリルを掲げたゲッター2が貫いていく。

未央「っ、強いつ! 私達なんかよりずっと……! でも、なんなのさこれ! ホントに夢!?!」

化け物『グギヤアアアアッ!!』

未央「っ! さっきまでの奴より段違いに大きい……!?!」

ゲッター1 『へっ！中々歯応えがありそうな奴が出てきたじゃねえか！大丈夫か隼！』

ゲッター2 『ふん…！お前に心配されるまでもない！』

ゲッター1 『なら、お手並み拝見だ』

『おいおい2人共、誰かを忘れちゃいねえか？』

ゲッター2 『やれるのか？—シ』

『へっ…この手の相手こそ、この——蔵様にお任せあれつてね』

ゲッター1 『調子のいい野郎だぜ…』

ゲッター2 『だが、武——の言うことも間違いない』

ゲッター1 『なら、やってもらおうじゃねえか。手間、掛けんじゃねえぞ』

『なあに、竜——が昼寝してる間に終わらせてやるさ！行くぜっ！』

『チェンジ！ゲッターアアア3イイ!!』

未央 「げ、ゲッター3!？」

ゲッター3 『へへっ！ゲッター3、見参っ!!』

未央 「あんな大きいの相手に…！む、無理だよ！ゲッター3じゃあ…！…！どうする気

なの…?』

化け物 『グギヤアアアアッ!!』

化け物から伸びた触手のようなものが、ゲッター3を襲う。

未央「ああ……っ！言わんこつちやない……。ボコボコにされてる……」

ゲッター2『おい武——何時まで遊んでるつもりだ!?』

ゲッター3『へへっ、ちよいとしたサービスって奴よ……!』

ゲッター1『サービス精神旺盛なこつて!なんなら、俺も協力してやろうか?』

ゲッター3『そいつは勘弁、つと……それじゃ、名残惜しいが決めてやるとしますかあ!!』

ゲッター3『パワーアームツ!!』

伸ばしたゲッター3の両腕が化け物に巻き付き、拘束。そのまま、ゲッター3のパワーに任せ振り回し始めた。

未央「あ、あれは……!!?」

ゲッター3の回転が臨界を越え、巨大な竜巻と化す。

ゲッター3『必殺!大雪山つ!おろしいいいー!!』

体勢を崩し、放り投げられた化け物は近くの隕石群に衝突して、活動を停止した。

未央「大雪山おろし……。ゲッター3のパワーを最大限に生かした、必殺技……」

未央「これだ……—っ」

……—。

未央「これだあー!!…って、あれ？」

ガチャ

卯月「――未央ちゃん、朝ですよ。そろそろ起きないと…」

未央「あ、しまむーおっはー!」

卯月「おはようございますっ!…あれ? 何だか未央ちゃん良いことでもありました?」

未央「え? どうして?」

卯月「何だか、何時もより表情が明るいので…何かあったのかなあ、って」

未央「ん? 何々い? しまむーは、表情の変化で私に何かあったのか分かるくらい、何時も私の事見てくれるの? 嬉しいねえ」

卯月「え? あ、いや…それは…そのう…」

未央「えへへ…!」

卯月「あー! もう、未央ちゃんったら、あんまりからかわないで下さいよお!」

未央「ごめん、ごめんって! 朝ごはん食べ行くんでしょ? 私着替えちゃうからさ!」

卯月「はいっ! 私、着替えが終わるまでそとで待ってますね?」

未央「はいはい! それじゃ、ちよつと待っててね♪」

ガチャツ バタンツ

未央「へへ〜…！大雪山おろし、かあ…！よおしっ！」

未央「頑張るぞお!!」

卯月「未央ちゃんどうしました？」ガチャ

未央「あ…！いやいや、何でもない…っ！」

卯月「？」

〜〜 後日 仮設事務所 〜〜

未央「プロダクションビルがメカザウルスとの戦闘でなくなったのは知ってたけど、私達以外の娘は今このプレハブを事務所にしてたんだ〜」

未央「…まあ、恐竜帝国との戦いが続く限りはまた壊されるかもしれないし、仕方ないんだろうけどさ、ちよつと可哀想に思えてきたかも…」

未央「えーつと、それであの子もここにいる筈なだけだな。んー…つと、お、いたいた！有香ちーん！」

有香「…ちん？つて、未央さんじゃないですか！お久し振りです！」

未央「んー、ひっさしぶりだね〜！まだ疎開してないって聞いてたからホントビックリだよ〜！」

有香「…両親にも散々言われたんですけどね…。やっぱり、アイドルは続けていきたいですし、最近はずっとロボの活躍もあつて東京都心は平和な方ですから」

未央「へえ、そうなんだ？」

有香「ええ！それにしても、未央さんがここに来たのは、初めて何じゃないですか？」

未央「あー、うん。それなんだけどね……。有香ちゃん、これからちよつち時間ある？」

有香「？ええ、これからはもう。レッスンは午前中だけでしたし……」

未央「そつか。ちよつと良かった！じゃあ、ちよつと力を貸してくれないかな？」

有香「はい？」

~~~~~ 近所の公園 ~~~~~

有香「ええー!?未央さんがあのゲッターロボのパイロット!?…し、しかも凜さんも、卯月さんもニュージェネレーシヨンの三人で!」

未央「えへへ……。まあね。これ、周りの人には内緒にしてくれるかな？一応、無用な混乱を避けるため、つて事で伏せてあるんだ」

有香「あ、そうそれはそうですね……。分かりました。しかし、先月のニュージェネレーシヨンの活動休止宣言の裏にそんな事情があったとは……」

未央「うん。三人で考えて、平和になるまでは、つてね」

有香「成る程！頑張ってください！私は応援しています。私に出来ることがあれば、何でも言ってくださいね！出来る限り、力になりますからっ！」

未央「そう言ってもらえるのはありがたいな。それじゃあ、早速だけど……」

有香「はいっ。不肖・中野有香、何のお願いでしょう?」

未央「うん。単刀直入に言うのと、柔道教えて!有香ちゃん!」

有香「はい?じ、柔道…ですか?」

未央「そう!」

有香「一応言っておきますが、私が習っているのは空手、ですよ?」

未央「それは知ってるよ。けど、身近で格闘技をやってる人って言ったら、私の中じゃ有香ちゃんしかいなかったんだよお!」

有香「そう言えば…:…:…:そうかもしれないね…:。だとしても、パイロットのお仕事と柔道を習うことに一体どんな関係が?」

未央「ああ、それは…:ね?まあ細かい説明は省いちやうけど、人間の格闘技とかを戦闘で応用出来ないかなー、と思ってさ」

有香「はあ…:。でも、相手はメカザウルスですよ?テレビで見たことありますけど…:恐竜型の」

未央「ま、まあ確かに人間相手とは勝手が違うかもしれないけどさ!柔道の投げ技ぐらいなら使えそうじゃん!」

有香「それはまあ…:…:…:どうなんでしょう?。野生の熊を投げ倒した人の話は、聞いたことがあります、恐竜は流石に…:」

未央「まあまあともかく！考える前にまず行動してみろ、だよ！やって無駄になることはない筈！」

有香「……そうですね。やる前から、意味がないなんて決めつけても仕方ないんです！力を貸すと言った以上、やりきりましょう、未央さん！」

未央「その意気だ！よろしくね、有香ちゃん！」

有香「なら、早速基礎練習からですっ！ローマは一日にして何とやら、万里の長城も、踏破には先ず一歩からです！」

未央「んく……、合ってるような、何か間違ってるような？」

有香「細かいことはいいんです！ほら、日輪は高く、熱く燃えています！あれが沈みきらない内に、行きますよ未央さん！」

未央「夕日に向かって走るとか、そういう奴じゃなくて？って言うか、有香ちゃんどこ行くの!?走るの早っ！ま、待ってよ！」

こうして、2人の血と汗の滲む、熱い青春の特訓が始まった――。

……………

未央「えいっ！」

有香「甘い！甘いですよ！そんな受け身では……」

グワオ

未央「わあー！」

有香「このように投げられでもしたら最期、一瞬で意識を持っていかれてしまいますよ！……未央さん？」

未央「」

有香「……気を失っている!？」

………

未央「あの……。これは……」

有香「見ての通り、鉄下駄です！」

未央「いやー……。見れば分かるけど……。……まさかホントに存在するとは……」

有香「さあ！先ずはこれを足に馴らしましょう！そうと決まればランニングです！」

ダツ

未央「あ！ちよ……。……っ！待つて！有香ちゃん早い！つてかこれ足動かな……。……！ちよつと……置いてかないで！有香ちーんっ!!」

………

未央「せいっ！」

胴着を着せた丸太を一本背負いも動きで背負う。

有香「腰が入ってない……。……本当の背負い投げと言うのは……。こうっ！」

ドワア ベキヤツ

未央「ま、丸太を根本からへし折ったー!？」

有香「どうです!？さ、未央さんも先ずは見様見真似でも!」

未央「いや…、普通の女子高生には、無理い?」

有香「何をやる前から諦めているんですか! やっても見えない内に、どうこう言っても仕方ない、それは未央さんの言ったことですよ!」

未央「それは、そうだけどさ…」

有香「ネバーギブアップ、ドントシンク・フィール! さあ!!」

未央「有香ちゃん、先ず落ち着いて…? 何か、圧が…熱い。ははっ、ね?」

有香「さあ!!」

……………

有香「さあ、次です! 未央さん、何時まで寝てるんですか! まだここは、柔道の入り口にも過ぎないんですよ!」

未央「はあ…はあ…はあ…つ。ちよ、ちよつとタイム…。動けないって、最初から、いきなり、こんな…!」

有香「何甘えたこと言ってるんです?! いつ恐竜帝国が襲ってくるかも分からないんですよ? 時間は有意義に使い、己の技を磨くべきではないですか!」

未央「そもそも、技を磨く段階までいつてないんじゃないやあ…」

有香「物の例えです！」

未央「……はあ…」

有香「未央さん！」

未央「…やっぱり私じゃ、無理なのかな…。こんなトコで躓いてるんじゃないや。有香ちゃんがゲッターに乗ったら、私より強かったりして…」

有香「……」

未央「なんて、えへへ…。つて、有香ちゃん？」

有香「甘えてんじやねエ!!」メコオ

未央「鳩尾っ!!」

有香「どうです!?!私の尊敬する、ある人直伝の修正拳です!」

未央「しゅ、修正拳…?」

有香「私をやつてどうするんです!?!未央さんが、守りたいんじゃないやなかつたんですか!?!未央さんに…!守りたいものがあるんじゃないんですか!?!未央さんは、それを捨てて、そこから逃げ出して、納得するような人間だったんですか!?!」

未央「有香ちゃん……」

有香「未央さん……」

未央「ごめん……。私が間違ってた……。…もう弱音なんて言わないつ、まだ付き合ってくれるかな？」

有香「当然です！どこまでだつて付き合いますよ！」

未央「……」

有香「……」

夕焼けが2人を照らす。

未央「有香ちゃん！」ダキッ

有香「未央さん！」ダキカエシッ

こうして、この世界にまた一つ、熱い友情が生まれた――。

早乙女研究所・食堂。

有香「――ほ、ホントにいいんですか？部外者の私が、ここの食堂でご馳走になっ

ちやつて……」

未央「いーのいーの！私からの、ちよつとしたお礼だと思つて！ここのご飯めちやく

ちや美味しいんだから！」

有香「ホントですか？そ、それじゃあ遠慮なく……いただきますつ」

未央「いただきますつ」

有香「そう言えば、どうして柔道なんです？」

未央「えつ、その話は前にしたと思うけど？」

有香「いえ、私に教わるのなら、それこそ素直に、空手の方が良かったんじゃないですか？」

未央「あー。そういう話……」

有香「何か、参考にしてている技とかがあるんですか？ 投げ技にも、拘つてるみたいですよ」

未央「んーとね、無いこともないんだ。ほら、私そつち方面詳しくないからさあ」

有香「どういう技なんです？ 宜しければ教えてもらえれば、もしかしたら私が知っているかもしれないし」

未央「んー……。何て言ったらいいんだろう？ こう、グワァー、つと勢いよく、力任せに相手を……こんな感じ、グルンツって回してぶん投げる……みたいな」

有香「……」

未央「分かる？」

有香「……大雪山おろし」

未央「へっ、大雪山？」

有香「北海道の大雪山が由来らしいです。その技の考案者は、大雪山おろしを使い、自身のご二倍もの体格を誇る大熊を投げ伏したと」



未央「な、何かとんでもない話だね……。……。ん？その話って、前に有香ちゃんがしてた……」

有香「はい。狂暴な野生の熊を倒した。その人こそ、大雪山おろしの生みの親・巴武蔵先生です」

未央「ん？」

未央（武蔵って言う名前、聞き覚えがあるんだけど……。何処だったかな……）

有香「その技は繊細にして豪胆。相手の隙を見極め一瞬で懐に潜り込み、動きを押さえた相手を強引に手元に引き寄せて体勢を崩し、軸足の捻りと共に全身で加えた回転の遠心力で相手から抵抗力を奪い、一度にして相手を地面に叩き伏せる力業……」

未央「な、何か聞いてるだけで、とんでもなさそうな技つてのが伝わってくるんだけど……」

有香「そう！この技はとんでもない技なんです！」

未央「ゆ、有香ちゃん……？」

有香「本来柔道とは、綴る字が如く。柔よく剛を制す、川のように相手の流れを掴み、抑え、制す。大雪山おろしにはそれがない」

未央「そ、そうなの……？」

有香「荒々しく、こちらの動きで強引に相手を引き込み、自由を奪い制圧する。その

技には、ただただ相手を倒すという力強いだけが感じられる、在りし日の武蔵先生の剛さと猛々しきさを感じるこの出来る、伝説の業と言つても過言ではありませんっ！」

未央「く、詳しいんだね？有香ちゃん」

有香「当然です！武蔵先生は、大雪山おろしを編み出した当時に、空手界の異端児として名を馳せていた、流竜馬先生と異種格闘技戦で凌ぎを削り合い、互角に渡り合った事で空手界の人達の間でも有名ですから」

未央「ふうん？それじゃあ、その流竜馬って人も結構な有名人？」

有香「結構なんでもものじゃありません！磨き上げられた技の全ては日本刀のように美しく、掟破り、型破りな立ち居振舞いでありながら、自分の信念は決して曲げない！大胆さと潔さを併せ持った、正に異端児にして天才！破天荒と言う言葉はこの方のために存在すると言つても過言ではない、空手界のスターです！」

未央「か、空手界のスター、ね…」

有香「今では隠居してしまって、その行方は誰も知らないようですが。竜馬先生、武蔵先生、お二人が日本の格闘技界に残した功績は、計り知れないものなんですよ！」

未央「そ、そんな大御所が若い時に生み出した技を、これから覚えようっていうのか、

私は…！」

有香「怖じ気付いてなんていられませんよ、未央さん！気持ちで負けてしまったら、形

だけでも勝つなんてことは出来ないんですから！」

未央「お、おう……！って言うか有香ちゃん、何かやる気になってる？」

有香「ええ！未央さんから大雪山おろしという言葉聞いて、さらにやる気が出てきました！」

有香「空手界のスター！私の尊敬する流竜馬先生と凌ぎ合った武蔵先生！その人が残した技を、現代に、たくさんの人達を守るために会得する！やりましょう、やってやれないことはありません！」

有香「明日からは、もっと気合い入れて行きますよー!!」

未央「お……おう……」

未央（なんか、大変なことになってきちゃったな……。保つかな、私の体。あはは……）  
 〃〃〃 数日後、早乙女研究所内 〃〃〃

「……お……は……よ……う……」

卯月「おはようございまー…未央ちゃん!」

未央「うっはっはっは……。しまむー朝から元気だな……。何かあったの?……」

凜「何かあったのはこっちの台詞。…顔色悪いよ?」

未央「んえ……あー…私が?……あっはっはは……。そんなわけないよー……」

卯月「そんなことないわけないです!喋り方もいつもと違って変ですよ!」

未央「えー……？私はいつもこんなダヨー……。変わってないってー……」

卯月「う、嘘です！こんなので可笑しいに決まっています！」

未央「ダイジヨープ大丈夫だから……。ただの寝不足……。そう寝不足なだけだから……」ヨレヨレ

卯月&凜「……」

——その日の夜。

有香「あ、あの……！ホントに大丈夫なんですかあ？」

未央「大丈夫だって！一応、有香ちゃんもう無関係な人じゃないんだしき？」

有香「そうは言いますけど……。ここ、ゲッターのシミュレーターですよ？流石に色々、重要機密とかなのでは？」

未央「まあまあ。コーチが近くに来てくれた方が、指導も行き届くつてもندیしょ？」

有香「それは、未央さんの言うとおりにかもしれませんけど……」

未央「ま、見つかつても大丈夫！責任は全部私が取るから！大船に乗つたつもりでいてよ！」

有香「そんなこと……！それは悪いですよ！」

未央「いいからいいから。それじゃあ、チェンジゲッターシミュレーション！スイッチオン!!」

有香「何ですか？それ……」

ブオン、とメインモニターが点灯し、スクリーンに架空の木々や空のフィールドを作り出す。

有香「これは……すごい……！」

未央「でしょー？下手なゲーセンのアーケードより、ずっとリアル、ってね！」

仮想世界でゲッター3を走らせる。

有香「……ゲッターの操縦は、基本そのペダルを踏むだけでいいですね」

未央「ん？まあ他の1とか2だともっと細かい挙動を踏み込みの力加減で調整するんだけど……、ゲッター3はベタ踏みしてる事の方が多いかな？」

左右の手で保持した操縦桿を動かし、ゲッター3の両腕を動かす。

未央「腕は基本これ。レバーの押し加減で上半身の動きも連動して動くから、自分の体を動かすみたいには操縦桿を握りながら操作すれば、大体思った通りに動いてくれるよ」

有香「ほお〜！随分簡単なんですな？」

未央「……ま、基本誰にでも動かせるように設計したみたいだし。……だから、こうやって上半身の動きに柔道のアクションを加えれば……！」

正面に捉えた仮想敵のメカザウルスを一本背負いに放り投げる。

有香「おお！スゴいですね！」

未央「ゲッター3は下半身がキヤタピラだから、こう、腰を深くして投げる、って言う動作がちよつと出来ないんだけど…、その分パワーがありますから。力任せに、いける！」

有香「…柔道として、なら根本的に間違ってますが。メカザウルスが相手となる実践では、それでも十分生かせそうですね…！」

未央「うん！あとは大雪山おろしの動きをマスターするだけだ！」

有香「押忍！大雪山おろしの型はビデオ研究で確認済みです！あとはこのシミユレータで繰り返しいきましょう！」

未央「よろしく！有香ちゃん！」

有香「お任せください！未央さん！」

凧「……まったく、こんな遅くまで。メカザウルスの襲撃があつたらどうするつもりなのか……？」

卯月「晶葉ちゃんに報告しますか？」

凧「……。…今はいいよ。好きにさせたら？」

卯月「凧ちゃん……」

凜 「別に……規則違反がどうか、きつく言える立場じゃないってただだから。……もう行くよ。見つかったら、面倒くさいことになりそうだし」

卯月 「……♪はいっ！……うふふ♪」

凜 「……何？」

卯月 「いいえっ！何でもありませんよー♪」

——そして、さらに数日が経った、ある日——

ウウウウウウウウウツ!!

基地全体に響き渡る、けたたましい警報。

みく 「な、何にや!?!」

瑞樹 「聞こえるところ、警報。敵よ」

みく 「にやにや!?!こうしちゃいられないにや!早く出撃を……!」

瑞樹 「落ち着きなさい。私達のプロトゲッターは現在調整中よ」

みく 「にゅ!?!そういうええそうだったにや……。つてことは、みくたちの出番は今回は

これで終わり!?!」

瑞樹 「……まあ、そうなるわね」

みく 「にやー!そんなのいやあーにやあー!!もつと活躍する場面がほしいにや〜

!!」

瑞樹「分かるわ」

~~~~ 早乙女研究所 格納庫 ~~~~

凜 「卯月！準備できてる!？」

卯月 「私は大丈夫ですけど……、まだ未央ちゃんが……！」

凜 「つ………未央……こんな時に……！」

未央 「——いやあー！ごめんごめん！お待たせー！」

卯月 「未央ちゃん!?……あんまり遅いから、何かあったのかと……」

未央 「大丈夫、大丈夫！ほら、このとおり何ともないからさー！さ、ちゃっちやと出撃しようー！」

凜 「……未央……」

未央 「しぶりん……。どったの?……は、早く出撃を……」

凜 「その前に……、っ！」

未央 「！」

卯月 「未央ちゃん……。その手……」

パイロットスーツの上に羽織った、いつものパーカーのポケットに忍ばせていた両手は隙間なくテーピングが施され、うっすらと血で滲んでいた。

凜 「どうしたの?この手」

未央「これは……そのう……」

凜「この手じや…、ゲッターの操縦なんて無理だよ。代わってもらおう」

未央「それは……やだよ」

凜「つー！どうして!?!こんな手でゲッターなんか動かしたら、二度と使い物にならないかもしれないんだよ!?!」

未央「それでも、だよ。…私、きっとこの日のために今までやって来たって、そんな気がするから」

凜「この日のために!?!寝る間も惜しんでシミュレーターに入り浸って?…それで、期待の必殺技とやらは完成したの!?!」

卯月「凜ちゃん……」

未央「…知ってたんだね。…確かに、私の大雪山おろしはまだ完成してない……」

凜「だったら……!」

未央「でも!…この戦いでまだ足りない、あと一つが…掴めそうな気がするから!…この機会を逃したら、もう見えなくなつて、一生掴めなくなるような気がするから!だから、私は行く!!」

凜「未央……」

卯月「……私も、未央ちゃんに任せてみたいかな、つて思うかな……?」

凜 「卯月!？」

卯月 「…多分…多分ですけど…、きつと大丈夫ですよ!きつと、凜ちゃんが思つていような最悪の事態になつてなりません!それに、もし、未央ちゃんの身に何かあつたとしても、私と凜ちゃんでは何とかする。チームつて、そういうものだと思ふんです」

未央 「…ねえしぶりん。しまむーの言葉はあやふやすぎでちよつとあれだけど…」

卯月 「うえ!?そ、そんなことないですよー?」

未央 「——今回だけ…じゃないかもしれないけどさ!未央ちゃんなら出来るつて、そう信じてみてよ!」

凜 「……」

凜 「……仕方ないね…」

未央 「しぶりん!」

凜 「ただし!無茶は禁物!ダメだと判断したら、強制分離してでも帰還するからね!わかつた!」

未央 「つ……あ、あ、あ、さー!!」

凜 「よし、卯月、行くよ!」

卯月 「はい!」

頷きを交わし合い、それぞれのゲットマシンのコックピットに滑り込む。

卯月「イーグル号、準備完了ですっ！」

凜「ジャガー号、いつでもいけるよ」

未央「ベアー号発進準備よろし!!」

卯月「それじゃあ未央ちゃん!よろしくお願いします!」

未央「おっけー!」

未央「ゲッターチーム、出撃!!」

早乙女研究所の三つのカタパルトから、ゲットマシンが空へと飛び出していく。

~~~~~ 太平洋 洋上 ~~~~~

卯月「うう……、海面からの上昇気流が……。上手く飛べません……」

凜「卯月、あまり無理しなくていいよ。この様子だと、合体もいつも以上に大変になると思うし、気をつけて」

卯月「はいっ、大丈夫です!」

凜「…それにしても、水中からの攻撃なんて……」

晶葉『図らずも、未央の言ったとおりになったな。水中…ましてや海中での戦闘となるとゲッター1も2も使い物にはならない』

未央「つまり、今回はゲッター3一択って訳だね?」

卯月「……未央ちゃん」

未央「しまむーそんな心配しなくても大丈夫だつて！自分の体の事は、自分がよく知ってるよ」

卯月「…はい！未央ちゃんを信じます！」

有香『未央さん!!』

未央「—え？有香ちゃん!? どうして…!」

美波『研究所の入り口で、警備員さんと揉めてたから話を聞いてみたら……』

アーニャ『アー…、ミオを応援したい、と。だから、ワタシ達が頼んでここに入れてもらいました』

晶葉『本来なら部外者立ち入り禁止なんだがな。聞けば、未央の特訓に付き合ってたそうじゃないか? なら、立派な関係者だな』

未央「みんな……」

有香『未央さん…。昨日も寝る間を惜しんで特訓してたのに……』

未央「有香ちゃん……。だーい丈夫!! 今日こそ、ぶっつけ本番で完成させて見せるよ!」  
有香『…押忍!! 頑張つて下さい!!』

未央「おう! バッチリ見ててね?」

晶葉『よし、三人ともいいか? 敵は深海800メートルの所を低速で侵攻中だ。予想される上陸ポイントには大規模な石油コンビナートがある。なるべくなら海底で、素早

く撃退してくれ』

未央「りよー解!しまむー、しぶりん!いくよ!!」

卯月「はいっ!」

凜「うん!」

未央「よーっしっ!チエーンジゲッターアアー!3イツ!!」

ジャガー号が海面すれすれを低空で飛行し、その上にイーグル号、ベアー号の順に突き立つように重なり合体を行う。

頭部に変形したベアー号の両サイドから、独特な蛇腹の両腕が出現し、ゲッター3への変形を完了。大きく水飛沫を上げて、海底へと潜航する。

未央「えーっと、それで敵さんの方は…っど…」

卯月「水中は暗くて…目視しにくいですね…」

凜「そのためのレーダーとソナーだよ。卯月、索敵は任せたよ」

卯月「了解!任せてください!」

未央「こつちもメインカメラのライト着けとかないと…!」

ゲッター3の両目のライトが辺りを照らしながら、深度は750メートルを越え、海底の岩礁地帯へと降り立つ。

未央「っ…!っどと、酷い足場……。しまむー、メカザウルスの反応あった?」

卯月「——…。はいっ！ここから前方に、二時方向！距離、200メートルです！」

未央「うわっ！結構近付かれてた!?…でも、暗くてまともに見えない!!」

凜「これだと…よくて100メートルが有視界だからね。もう少し近付かないと…」

未央「そんなこと言って…、近付いてる間に攻撃されたら…」

卯月「っ…!!メカザウルスから熱源反応！すごいスピードでこっちに向かって来ます！」

未央「それって…——」

言い終わらぬうちに、飛来したミサイルがゲッター3に着弾する。

卯月「きゃああああ!!」

未央「つつ…!!…しまむー、しぶりん！大丈夫!?」

凜「こっちは大丈夫。今の衝撃で…うん、浸水箇所もなし。…まだ大丈夫だよ…！」

未央「了解！今度はこっちからの反撃だ!!」

凜「どうするの?」

未央「位置はしまむーがソナーで捉えてる！だったら…!!」

地面からゲッター3を浮かし、ジャガー号の推進器を使い、水中を滑るように移動す

る。

未央「近付いて直接殴るっ!!」

凜「——いた!あそこだ!」

未央「ゲッターパンチ!うおりやああ!!」

海底の暗闇から姿を表した亀のような見た目のメカザウルス・モバの甲羅に目掛け、ゲッター3の拳を降り下ろす。

未央「もう…一丁!!」

二撃目の拳をパワーアームで伸ばし、モバを海底に叩きつける。周囲に濃い土煙が舞う。

未央「へへん!どんなもんだい!!」

凜「油断しないで!次が来る……!」

モバ『キシヤアアアア!!』

甲羅の隙間から放たれたミサイルをゲッター3は水中を巧みに泳いで躲す。

卯月「…す、すごい……」

未央「…伊達に毎晩シミュレータを繰り返してない!水中戦はお手のものってね!」

回避行動を繰り返しながらモバの正面に向かい、

未央「ゲッターミサイル!!」

ミサイルを撃ち込む。しかし、発生した爆煙の中から、ゲッター3目掛けてモバが高速で飛び出す。

未央「おわっ!?!……な、何だよ!全然効いてないじゃん!?!」

凜「……思った以上にあの甲羅が固いみたいだね。こっちの攻撃が無力化されてる」

未央「一応、敵もこっちの戦力を分析してきてるって訳か……。これは、大雪山おろしを決めるしか……ッ!!」

卯月「次の攻撃、来ます!」

ゲッター3の周囲を取り囲むように泳ぎながら、モバはゲッター3に向かってミサイルをばら撒く。

未央「ぐっ……!」

両腕を交差させてガードし、直撃は避けるものの、衝撃がコックピットを震わせる。

凜「っ……!今はまだ大丈夫だけど……、これ以上攻撃を受け続けたら……ヤバイね……」

卯月「きやつ……!でも、相手の動きが速過ぎて……、ゲッター3じゃ動きを追いきれません!」

凜「機動力の違いも念頭に入れてきてるわけか……。どうするの?未央!」

未央「ど、どうするって……言っただって……」



卯月「！メカザウルスがものすごい速度でこっちに向かって来ます！」

凜「……………っ！未央、避けて!!」

モバの巨体がゲッター3に迫る。

未央「分かっているっ！こんな体当たりくらい……………っう——!!」

両手の激痛。操縦桿を強く握った拍子に傷が開いたらしい。白いテープリングに赤黒い色が深く滲む。

未央「っ——……………こんな時に……………っ!!」

直後。

衝撃。ゲッター3が海底を跳ねるように激しく飛び、コックピットが揺さぶられる。

卯月「きやああああああああああっ!!?」

未央「っ……………っ……………!!」

最後の大きな衝撃。どうやら近くの岩礁に当たって停止したようだ。

未央「う……………っ! ……っはあ……………はあ…。二人とも、大丈夫?」

卯月「…ちよつとクラクラしましたがけど、怪我はないです!」

凜「こつちも大した損傷はないよ。…未央の方こそ、大丈夫?」

卯月「額から…血が……………!」

未央「へっへっへ……………!それなら大丈夫。寧ろスッキリして目が覚めたくらいだよ」

凜 「……それなら安心だ」

未央 「……二人とも……ゴメン……!!」

卯月 「えっ？」

未央 「大丈夫だ、何て言っておきながら……攻撃を避け切れなかった。私の怪我のせいだよ……。ホントゴメンっ!!」

凜 「……はあ……。何を今さら……謝ってるの？」

未央 「え？……でも……」

卯月 「大丈夫です！私も凜ちゃんも未央ちゃんなら出来るって、そう思ってますから。自信を持って下さい!!」

凜 「そうだよ。ここまで来たら、一蓮托生。今さら泣き言なんて、聞かないから」

未央 「しまむー……しぶりん……。……っ……!!」

額から目頭を伝い落ちる血流を拭う。

未央 「ありがとう……っ！いくよ!!」

卯月 「はいっ！」

凜 「……でも、何か手はあるの？」

未央 「もう一度……敵が突っ込んできたタイミングで大雪山おろしを決める！今はそれしか手はない!!」

凜 「…無茶苦茶な博打……。大雪山おろしだって、まだ完成してないんでしょ？」

未央 「させる！…この一度きりのチャンスで!!」

有香 『未央さん!!』

未央 「有香ちゃん!!」

有香 『未央さんにあと足りないのは間合いとタイミングだけです！そこがバツチリ合えば、大雪山おろしは成功する筈です!!』

未央 「タイミングと間合い……。成功させる秘訣は!？」

有香 『時間があれば、教え込むことはできます。でも、敵が向かってる今、言えることはただ一つ……』

有香 『——気合いです!!』

未央 「…ふふっ！気合い、か……。よおーしっ!!」

パチイン!!

左右の頬を両手でひっぱ叩く。

未央 「よ…っしやああああー!!気合い入ったー!!どっからでもかかってこーい!」

高速で向かって来たモバは、一度ゲッター3を素通り。海中を大きく迂回し、さらに速度を上げてゲッター3に迫る。

凜 「さっき以上の体当たりをお見舞いするつもり…!?どうするの未央!？」

未央「勿論、正面から受け止める！」

凜「正気!？」

未央「トーゼン!ここで避けたって、あのスピードだよ?捕まえる前に逃げられちゃうよ!だったら、正面から向かって来たのを受け止めるのが手っ取り早い！」

凜「…相当の無茶だけど…やるしかないか…っ!」

未央「しまむーも覚悟決めて!お願い!!」

卯月「はいっ!いつでも大丈夫です！」

未央「ふふっ…!心強いや…!!」

モバが目前まで迫る——!

未央「しぶりん!私に合わせてジャガー号の機銃を撃って!」

凜「分かった!」

未央「いくよ、ゲッターミサイル!!」

両肩のミサイルとジャガー号の機銃でモバの氣勢を削ぐ。

未央「今だ、パワーアームツ!!」

爆煙からモバが飛び抜ける直前で、ゲッター3の腕を伸ばし、モバ頭部の両側を押さえる。

未央「つつ…!しぶりんっ!!」

凜 「任せてー！」

ジャガー号のコックピットで凜が強くフットペダルを踏み、ゲッター3のキャタピラの踏ん張りを効かせる。ベアー号のコックピットでは、強く握りしめた両手から操縦桿を伝って血の汁が滴っていた。

卯月 「私だって！」

イーグル号の操縦桿を前へと倒し、モバを受け止めるゲッター3に三人分の力を伝える。

三人 「二うおおおおおおおおおおおおおおつ!!」

未央 (痛くない痛くない痛くない……——)

未央 「——痛く……なああああいつ!!」

遂に、ゼロ距離まで迫ったモバのすべての力を押さえ切る。

空かさず、パワーアームをモバの背後まで回し、全身を蛇腹の腕で捕縛する。

未央 「へ……っつ！へっへっ……！もう逃がさないよ……!!」

卯月 「思いつきり……やっちやっつて下さい！」

未央 「うわあああああああ!!」

抵抗を示すモバを拘束したまま、左右のキャタピラをそれぞれ違う方向に向けて、ゲッター3を回転。その回転を次第に強めていく。

モバ『ぐ、ぐぎや……』

ゲッター3が回転することで、モバには遠心力とそれを押さえる拘束力の二つの力が生じ、その間で生まれた圧力がモバの強固な甲羅を軋ませる。

未央「まだだよ……！ まだまだあ!!」

凜「これは……潮の流れが……!?!」

限界まで加速したゲッター3の回転が海中に潮の流れを生み、やがてそれはゲッター3を中心に巨大な渦潮となってモバを襲った。

モバ『……グア……ッ』

未央（——よし……！ トドメ……っ!!）

未央「必殺……！ 大雪、山っ！ おおろしいいいいいいっ!!」

締め、ゲッター3はパワーアームの拘束を解き、モバを渦潮の中へと解き放った。しかし、二つの過重と渦潮による激流によってボロボロに破壊されたモバには、もはや戦う力は残されておらず、渦潮で海中を高く上がった後、海底に墜落して爆散した。

未央「やった……？ はは、やった！ 完成したよ！ 私の大雪山おろし!!」

有香『押忍！ 見事な形でした！ もはや、完璧と言っても良いでしょう!!』

未央「イエーイッ！ 有香ちゃん見てくれた？ 有香ちゃんのお陰だよ！ ありがとうっ!!」

有香『いい、いえ……、私はそんなつ……。ただ頼られたので、助言しただけですから……!』

未央「謙遜しなくても良いって!有香ちゃんがいなかったら完成しなかったのも事実何だからさ!」

有香『それは……いいえ、ありがたく、お礼を受けておきます!この大雪山おろしで、これからも恐竜帝国との戦いを頑張つて下さい』

未央「おう!未央ちゃんに任せておきなさいって!ねえしまむー、しぶりん!……つて二人ともどつたの?」

凜「……どうしたのつて……未央はなんともないわけ?」

未央「え?……うん」

卯月「……目が回つて……クラクラします……」

凜「これ、同乗者へのダメージもキツイんだけど……うっ……!」

未央「あ……それは、慣れてもらうしかないね……あはは……あはははは……!」

凜「笑い事じゃ……ない……!」

卯月「……もう、ダメです……。吐きそ……—うえ……」

未央「うわあああああ!ちよつとしまむーストップ!ここでそんなことしたら、しまむーアイドル生命終わっちゃう!せめて研究所に戻るまで耐えて!頑張つて!しま

むー!!」

卯月「未央ちゃん……。ありがとう……。でも、ゴメンね？私……。もう……。ムリ……。おええ……。――」

未央「しまむー?!しまむうううううー!!?」

〃〃〃 後日 森林公園 ランニングコース 〃〃〃

有香「それで……。あの後どうなつたんです？ゲッターが帰ってきた後、晶葉さんが物凄い形相で管制室から出ていきましたけど……」

未央「あはは……。その顔で私に一言『ゲッターに無茶させ過ぎだー!』って言った後、イーグル号のコックピット見て顔色真っ青にしてたよ?」

有香「……色々大変だったみたいですね……」

未央「まあねえ。お陰で大雪山おろしはしまむーが回転に慣れるまで使用禁止になつちやうし……。ま、そんな事よりも、アイドル生命に致命的なダメージを受けたしまむーの方が心配だよ」

有香「あはは……。そうですね……」

有香「しかし、大雪山おろしの習得は終わったのですから、こうやって毎朝私の早朝練習い付き合ってくれなくてもいいんですよ?」

未央「いやあく何か私も習慣になつちやつて……。やらないと逆に落ち着かないんだ



よねえ」

有香「ふふっ！何ですか？それ」

未央「ま、継続は力なり、ってやつかな？……ん……？あれは……」

有香「え……？あ、あの人は……！」

未央「あつ！ちよつと待つてよ！有香ちゃん!!」

有香「お早う御座います！」

男「ん？おお、有香じゃねえか。…そつか、この公園はお前の練習場所だったんだな」

有香「押忍！先生も珍しく朝早いですね！何処かへお出掛けですか？」

男「だから、俺はお前の先生じゃないつて……。俺の方は…あれだ俺向きの用があつて

な」

未央「ひい……ひい……つ！有香ちゃん速い……！ちよつと待つてつてば……！」

有香「ああ！未央さん！すいません、置いてきてしまつて……先走るような真似を

……」

男「有香、こいつは？」

有香「同じ事務所のでアイドルをしている、本田未央さんですよ！」

男「ふうん。そーいやお前、アイドル何てやつてたな」

有香「押忍！」

男「…そんなんでアイドルとかホントにやれてんのかあ？」

未央「はあ…はあ…っ！それで、この人は…？私も紹介してほしいかなー、何て」

有香「押忍！流先生です！」

未央「ん？流ってことは……」

男「だから！俺はお前の道場には世話になってるが、お前の先生ではねえって言ってるんだろが!!」

有香「良いじゃないですか！いつそもうウチの先生になりませんか？そしたら師範も喜びます！」

男「…ったく、埒があかねえ。未央とか言ったな？お前、こいつの言うことは聞かなくていいぞ」

未央「え、あ…はい」

男「でだ。俺は流拓馬。あんま覚えなくていいと思うがよ、一応、ヨロシクな」

未央「は、はい！本田未央です！は…はじめまして？」

拓馬「おう」

未央「それで、有香ちゃんとはどんな関係で…？」

拓馬「別にどうこうって訳じゃねえんだが…。前にこいつんとこの道場に借金取りが来ててよ。それで、親父直伝の借金取り撃退法で追っ払ってやったら、いやに感謝され

てな。それからはいいつのトコの道場で世話になってんだ」

未央「そ、そーなんですかー。親父の……そう！その親父って……！」

拓馬「なんだ？親父を知ってんのかよ。俺の親父は流竜馬だぜ？」

未央「やつぱり……！」

拓馬「親父が有名なのは知ってたが、まさかアイドルにまで顔が売れてるとはよ。親父も鼻が高いだろうぜ」

未央「そんな、他人事みたいに……」

拓馬「親父は親父だ。俺には関係ねえ」

未央「あー、そうなんだ……ですか……」

有香「でも、そのお父さんを越えるために武者修行で全国行脚中何ですよね？」

拓馬「うるせえ！お前は黙ってろ！」

未央「全国行脚って……すごいですね！」

拓馬「そうでもないさ。要は相手がいなくて暇なだけだしな」

未央「いやいやいや。あ、でもってことは、その内ここからいなくなっちゃうわけ

ですか……？」

拓馬「ま、近い内にな」

有香「え!?そんな……！それじゃあ、道場の師範になつてくれるって話は……！」

拓馬「それはオメエが勝手に言ってるだけだろうが！俺は知らねえよ!!」

有香「…でも、流先生の教え方は上手いって、専ら有名ですよ？」

拓馬「だから何だ！俺は、一ヶ所に留まるつもりはねえんだよ。…と、未央！」

未央「は、はい！」

拓馬「そう言うわけだ。これっきりの縁かも知れねえから、これだけは言つとく」

未央「はい？」

拓馬「アイドルとして、有香をヨロシクな」

未央「——はい！勿論、任せてください！」

拓馬「ふっ…！いいダチを持ったじゃねえか、有香。それじゃあ、俺は行くぜ」

有香「あ、ああ…！待って…！」

拓馬「あばよ、ダチ公」

---

未央「はあくあれが流竜馬の息子さん…。何て言うか、オーラが違ったね？」

有香「……」

未央「有香ちゃん？」

有香「…拓馬さん……」

未央「えっ、有香ちゃん……もしかして…」

有香「はっ……み、未央さん……どうかしました？」

未央「あ、いやあ……何でもない……。あははは……っ！」

有香「……そうですか。よし、こうしてはいられません！私も、もつと強くならなければ！行きますよ！未央さん！！」

未央「あ、え？ちよ……ちよつと待ってよ！有香ちんってば！有香ちーん！！」  
つづく

## 第5話 『強敵！キャプテン・ニオン!!』

未央「大雪山おもしろい〜〜っ！」

気合の咆声と共に、ゲッター3の腕をしならせて放り投げたメカザウルスが、天高く舞い上がる。

未央「ゲッターミサイル！」

空中の敵に向かって一対のミサイルを放ち、メカザウルスにトドメを刺す。

未央「ふう〜！戦闘終了〜。我ながら、ゲッターの強さには感服ですなあ？」

卯月「えへへ…！未央ちゃん最近絶好調ですね♪」

未央「そりやあもう！有香ちゃんの教えてくれたこの大雪山おろしさえあれば怖いものなしだよ！」

凜「卯月も回転に随分慣れてきたみたいだしね」

未央「そ、最近じゃ大雪山おろしする時のバランス調整も手伝って貰ってるくらいだし」

卯月「えへへ…。ゲッター3の時に私に出来る事って少ないし、それくらいはお手伝いできたらな、って」

未央「うんうん。しまむーは立派ですな〜」

凜「それじゃ、そろそろ帰還しようか」

卯月「そうですね!」

未央「合点!それじゃあ:オープンゲット!」

~~~~~ 恐竜帝国 マシーランド ~~~~~

ゴール「ええい!またしてもゲッターロボにしてやられたか!」

バット「申し訳ありませんゴール様。奴等、日増に力を増し、メカザウルスの性能向上が間に合わぬので御座います」

ゴール「言い訳など聞きたくないわ!何故だ?何故勝てぬ!?恐竜帝国が誇る闘将であるバット、貴様が育て上げた精兵と、恐竜帝国の頭脳であるガレリイの作り上げたメカザウルスの、二つの力を合わせても何故ゲッター相手に勝てんのだ!!」

ガレリイ「:それはやはり、奴等が最大の武器として使うゲッター線に拠るところがあるでしょう。ゲッター線を使われてしまえば、いかに頑強なメカザウルスと言えど只ではすみません!」

ゴール「そんなことは百も承知ではないか!問題はゲッター線と言う前提を、いかにして覆すかだ!」

ガレリイ「その件で、ゴール様に一つ、提案が御座います」

ゴール「む？何だ、申してみよ」

ガレリイ「ははっ！確かに、ゴール様の言うとおり、ゲッター線とは我らが天敵であり、忌むべき存在であります。…ですが」

ゴール「？」

ガレリイ「その力を、逆に我々が利用すると言うのはいかがでしょうか？」

バット「バカな…！その様な事…まさか!？」

ガレリイ「バット將軍の予期する通り。実は既にこちらに連れてきております」

「……」

ガレリイ「…まだ若いですが。先日一族の長の座に着き、その実力も、多くのキャプテンから期待されております」

「…地竜一族の長、キャプテン・ニオンに御座います」

ゴール「我ら爬虫人類の中でも、唯一ゲッター線に対する耐性を持つ地竜一族か…」
ガレリイ「はい。彼らの強靱なゲッター線への耐性を利用し、ゲッターロボを我らの手中に納めればこの戦い、最早勝ったも同然…！」

ゴール「成る程…」

ニオン「帝王ゴール様！此度の抜擢に伴い、お願いしたいことがあります！」

ゴール「…申してみよ」

ニオン「私がサル共の手からゲッターロボを奪い、ゴール様の元に捧げた暁には、我ら地竜一族の自治独立を認めて頂きたいのであります!」

バット「何い!? 貴様ア! 自分が何を言っているのか…!」

ゴール「下がれ、バット將軍。…ニオンと言ったな? 良かろう。貴様が我が手中にゲッターロボを捧げることが出来れば、貴様の望み、叶えてやる」

バット「ご、ゴール様!」

ゴール「良いではないか、バット將軍。貴様には出来ぬことを、この若造がやろうと
言うのだ。違うか?」

バット「ぬう…っ」

ゴール「では、キャプテン・ニオンよ。ゲッターロボの強奪、やってみせい」

ニオン「はっ! このニオン、地竜一族の自治獲得の為、命を賭して! 必ずやゲッターロボを手に入れて御覧に入れましょう!!」

~~~~~ 早乙女研究所 上空 ~~~~~

青く広い大空を六機のマシンが飛行していく。

みく「うにやく! 調整の終わったプロトイーグル号はご機嫌だにやく♪」

晶葉『ははっ。そうだろう? 見た目は以前と変わらないが、中身は全くの別物だから

な」

瑞樹「上昇性能、加速力：どちらもマニュアルで見たゲッターロボの能力とほぼ同じね」

晶葉『エンジンはゲッターロボと同じだからな。…とは言え、装甲材質は以前のものとは変わらないから、無茶は禁物だぞ』

菜々「心得ましたよっ♪プロトゲッターの操縦は、ナナ達テスターチームに任せて下さい！」

晶葉『うむ。頼りにしている。それでは、そろそろプロトゲッターの性能評価の為、ゲッターとの模擬戦を開始してくれ』

テスターチーム「二了解！」

未央「待つてましたー！私達だって、先輩達が休んでいる間に実戦を積んで成長したつて所を見せてやろうじゃんっ！ね、しまむー、しぶりん！」

卯月「はいっ！精一杯頑張ります！」

凜「ゲッターとの戦闘記録…。有効に使わせてもらおうよ……！」

瑞樹「ふふっ、やる気十分つてところかしら。こつちも負けてられないわね」

みく「ゲッターのパイロットはみく達がずっと先輩だつてことを改めて思い知らせてやるにや！」

菜々「ナナだつて若い子にはまだまだ負けませんよー!」

六機のマシンが、空中で乱れるように螺旋を描き、それぞれのチームに別れて相手方のチームと距離をとつて、隊列を組む。

みく「チェンジゲッター!ーにやあ!!」

卯月「チェンジゲッターアアアーッ!!」

紅白二色。二体のゲッターが相對する。

みく「ミサイルマシンガンにや!」

卯月「くっ……!」

プロトゲッターが背中から取り出したミサイルマシンガンを構え、ゲッターにミサイル弾の雨を注ぐ。

みく「にやっつぶ……!まだまだコンマ数秒、合体のスピードはみく達の方が速いにや!」

未央「ぬぬぬ……!調子に乗つてくれちゃつて……!」

凜「先手を取られた……なら、卯月!」

卯月「はいっ!」

凜の指示に阿吽の呼吸で応え、ゲッターは切りもみ回転。全身をゲッターウイングのマントで覆い、ミサイル弾をやり過ぎす。

みく「何にや!？」

そのままゲッターは積乱雲に突入。プロトゲッターの視界から逃れる。

みく「にやううう…、どこに言ったにや?」

瑞樹「目だけで探してはダメよ!リーダーで追つて!」

菜々「ああもうちよつと遅いです!卯月ちゃん達、来ますよ!」

みく「ど、どこからにや!？」

菜々「後ろです!!」

ズワオ

プロトゲッターの背後に回ったゲッターは、大上段に構えたゲッタートマホークを振り下ろす。

未央「取った!」

菜々「甘いですよ!未央ちゃん!」

みく「オーブンゲッター!!」

プロトゲッターを分離させ、攻撃をやり過ごす。

卯月「分離された…!？」

凜「早く追わないとこっちも分離を!」

卯月「はい!オーブンゲッター!!」

卯月達のゲッターも分離し、地上に向かうテスターチームを追走する。

瑞樹「チエンジゲッター2!ゲッタードリル!!」

地表すれすれで合体を行い、プロトゲッター2のドリルで地中へ潜行する。

凜「次はゲッター2勝負か…。望むところだよ!卯月、未央!」

凜「チエンジゲッター!2ウ!!」

ゲッター2へ合体し、地上に降り立つ。

未央「あれ?瑞樹さんを追わないの?」

凜「地中は視界が効きにくくて、待ち伏せされたら厄介だからね。それが瑞樹さんの狙いかもしれないし、ここは地上で迎え討つよ。卯月!ソナーの方、宜しく頼んだよ!」

卯月「分かりました!」

地表の揺れを感知するソナーと、パイロットの全神経を研ぎ澄ませ、気配を探る。

未央「はてさて…。瑞樹さんはどこから来るか…。背後か」

凜「真下か…」

卯月「!来ました!右方九時方向から振動、近付いてきます!」

凜「っ!」

卯月の示した方向にゲッター2の右手アームを伸ばし向かって来たドリルを受け止

める。が、

凜 「…っ？ドリルミサイルだけ!？」

未央 「そんなっ!?!それじゃあ、本体は…!」

瑞樹 「——こっちよ!」

反対方向の左から姿を現したプロトゲッター2のゲッターアームがゲッター2を強かに打ち付ける。

凜 「…いつの間につ!」

瑞樹 「ドリルミサイルと同時にゲッタービジョンを使ったのよ。凜ちゃんになら、分かるわね?」

凜 「っ…!完全にやられた…!」

卯月 「凜ちゃん、落ち着いて下さい!」

凜 「…分かってるよ。卯月」

瑞樹 「さあ!お喋りはそこまでよ!」

左腕にドリルを戻したプロトゲッター2が、今度こそゲッタードリルを構え手向かってくる。

凜 「ドリルストーム!」

瑞樹 「うっ…!」

凜 「オーブンゲッター！」

直進してきたプロトゲッター2をドリルストームで牽制し、素早くゲッター2を分離させる。

未央 「チェンジゲッター！3イ!!」

未央 「パワーアーム！」

ゲッター3への合体を終え、蛇腹腕を伸ばし、プロトゲッター2を拘束する。

未央 「そおりやあああつ!!」

瑞樹 「きやあああ！」

拘束したプロトゲッター2をそのまま高々と放り投げる。

みく 「瑞樹さん！早く分離するにや！」

瑞樹 「え、ええ……！——オーブンゲッター！」

地表に激突する寸前でプロトゲッター2を分離。そのまま隊列を入れ換える。

菜々 「チェンジツ!!ゲッター、3ツ！」

続いて、プロトゲッター3に合体し、ゲッター3と対峙する。

未央 「……へえ。ゲッター3で私に挑んでくるとは、いい度胸じゃん？」

菜々 「ナナだって、未央ちゃんよりずっと早い内からプロトゲッター3のパイロットなんですよ！いくらそつちに大雪山おろしがあつても、負けません！」

未央「それじゃ、先輩の実力を見せてもらおうかな…つとお!!」

二機のゲッター3はほぼ同じタイミングで加速し、両手をぶつけて組み合った。

~~~~ 早乙女研究所 管制室 ~~~~

早乙女「……」

晶葉「どうですか？プロトゲッターロボの改修具合は？」

早乙女「…上々じゃな。儂の造ったゲッターと同等なんじゃ。よくやったじゃないか」

晶葉「元が良いですから。私は何も特別なことはしてませんよ」

早乙女「しかし、プロトゲッターの改修を提案したのも、その草案を出したのも晶葉くんじゃ。この結果は、君が上げた立派な成果じゃよ」

晶葉「…そうなるんでしょうか？だとしたら、嬉しいですけど…。えへへ…っ」

未央『大雪山おろしい~~~~!!』

菜々『あれええええええええ!!』

早乙女「む。どうやら勝負がついたようじゃな。この辺でテストを終わらせるとしよう」

晶葉「ええ。せっかく改修したプロトゲッターをまた壊されたら敵いませんしね」

早乙女「うむ。ゲッターチーム、テスターチームの諸君。模擬戦はそこまでする。

速やかに基地へ帰還するように」

「早乙女研究所 談話室」

アーニヤ「ヤー…。皆さん、お疲れ様です」

未央「おつ、アーニヤン、ミナミン！お疲れ」

凜「二人は、シミュレータで訓練？」

美波「ええ。予備扱いだけど、いつ何があるか分からないもの。操縦技術は向上させておかないと」

卯月「今度私たちもお手伝いしますね」

美波「ふふっ…。ありがとう卯月ちゃん。みんなは実機で訓練だったみたいだけど？」

凜「うん。みくと菜々と瑞樹さんのチームとね」

アーニヤ「プロトゲッターロボ…。調整が終わったんですね？」

未央「そ。だから改修作業後の試験飛行を兼ねて、私達のゲッターと模擬戦したって訳」

美波「結果は？」

未央「快勝も快勝！我ながら、自分の強さに感心しちゃうなあ〜！」

凜「未央、あんまり調子に乗らない。合体するまでの時間は、まだ向こうの方が速いんだから」

アーニヤ「それで、みく達は…？」

卯月「みくちゃん達なら、晶葉ちゃんの所ですよ。プロトゲッターを操縦した時に気付いたところとか、報告しに行ってます」

アーニヤ「Понятно。…なるほど」

未央「いやあくしかし、ホント大雪山おろし様様ですなあ」

美波「…そうなの？」

未央「ホントホント。小細工無しの力業はメカザウルスにも有効だし、これさえあれば何が相手でも負ける気がしないね！」

凜「まったく、すぐ調子に乗るんだから。あんなの、すぐに対策されて使い物にならなくなるのがオチだよ」

未央「ん、ん〜！心配ご無用！…それより、自分の心配したらどうかな？さっきの模擬戦で一人だけ被弾してたし」

卯月「未央ちゃん！そんな言い方やめようよ！…あれは、ドリルミサイルに反応しちゃった私のミスだし…」

凜「いや、卯月は悪くないよ。反応できなかった、私のミス。次は失敗しない」

未央「実戦に次なんてないよ？」

卯月「未央ちゃん!!」

凜 「……」

未央 「…何さ」

凜 「いや…、未央の言うとおりだよ。私が二人に甘えてた。ごめん」

卯月 「あ…っ！凜ちゃん待って！」

談話室を後にする凜を急いで追う卯月。

未央 「何だよ、もう…——」

卯月 「…待って下さい！凜ちゃんっ!!」

凜 「…卯月…何？」

卯月 「はあ…はあ…。未央ちゃんの事、気にしてるんじゃないかなって…」

凜 「…別に？未央言ったことなら気にしてないよ。いつもの事だし」

卯月 「でも…、だったら…！」

凜 「未央が調子に乗って、先走らないかそれが心配なだけ。…今の未央に何を言っても、聞こえてないみたいだし」

卯月 「…それは」

凜 「今はそれだけだから、気にしないで。あと、今晚は久し振りに実家の花屋の方に帰ってるから」

それだけを言い残して、宿舎の方に去っていく凜。

卯月「…凜ちゃん」

〃〃〃 数日後 都内 市街地 〃〃〃

ニオン（サル共の調査の為に潜入して一週間か……。——しかし……）
 周囲、人垣を成す人の群れに目を向ける。

ニオン（自分のすぐ隣に敵が潜んでいるとも気付かず呑気なものだ）

『みんなにやー！ニ元気にしてたかにやー！?』

ワアアアアア!!

ニオン「……何だ？」

足を向けた。商店街の真ん中ほどに位置する広場。

瑞樹「——今回はこの商店街の応援ライブに集まってくれて、本当に嬉しいわ。有り難う！」

ワアアアアア!!

菜々「それでは一番手々！みくちゃんから、聞いて下さいっ！『おねだりShall we 〃?』!!」

ニオン「これは……。ふん、まったくサル共というのは、理解し難い文化を築く。これ

から出陣でもあるまいに、歌や踊りが何になると言うのだ」

鼻で笑って、その場から離れる。

ニオン「…愚かで情弱な生き物。いかにゲッター線を味方につけていたとは言え、こんな奴等に数多くの恐竜帝国の精鋭達がやられてきたとはな。今が内部調査と言う任務でなければ、今すぐにも潰してやりたい奴等だ…!…:…ん?」

スンスン

ニオン「これは、この匂いは…:…花の匂い…? アイツの好きな…」

~~~~~ 商店街裏 小さな公園 ~~~~~

『♪ずっと強く そう 強く あの場合へく走り出そう♪』

ニオン（…人間。こんな所にもか…:。しかし、その女以外は見当たらないと言うに…）

『♪過ぎていく 時間取り戻すように 駆けて行く 輝く靴♪』

ニオン（こいつは誰に歌っていると言うのだ?）

『♪今はまだ 届かない 背伸びしても 諦めない いつか辿り着ける日まで♪』

ニオン（…不思議だ。何故、俺が聞き惚れているのだ…!?!）

『♪目を閉じれば 抑えきれない♪』 …:…誰?!』

ニオン「あ…:…と、…邪魔してしまったか?」

ニオン（何をしている!?俺は!いくら人工皮膚で人間に化けているとは言え、このよ  
うな小娘相手にバレることあれば……!）

凜 「…別に。大通りの方でライブやってるのに、こっちに気付いたの?」

ニオン「まだバレてはいない、か…」人の多いところは、苦手だな。それに、花の匂  
いが…」

凜 「花の?ああ、公園のか。…外国の人?」

ニオン「ま、まあな。…出稼ぎ、という奴だ。大した者じゃない」

凜 「だろうね。そんなボロボロのコート着て、帽子まで。一瞬、ホームレスじゃない  
かと警戒したけど」

ニオン「(こ、こいつく〜!) …もう歌わないのか?」

凜 「いや、どうしよう。まさか人が来る何て思ってもいなかったし」

ニオン「俺の事は気にしないで、好きに歌うといい。…俺は偶々通り掛かっただけだ  
から」

凜 「…私の事は、別に知ってる訳じゃないんだ?」

ニオン「?」

凜 「…いや、何でもない。外国の人だもんね。丁度いいや、折角だし、一曲聴かせて  
あげる」

凜 「アイドル活動止めて、結構経ったけど、自主LESSンは欠かしてないから!」

ニオン 「?あいどる...?」

戸惑うニオンを余所に、凜は歌い始める。

♪ ずっと強く そう強く あの場所へ 走り出そう♪

♪ 過ぎていく 時間取り戻すように 駆けて行く輝く靴♪

♪ 今はまだ 届かない 背伸びしても 諦めないいつか辿り着ける日まで♪

♪ 目を閉じれば 抑えきれない 無限大の未来が そこにあるから♪

♪ 振り返らず前を向いて そして沢山の笑顔をあげる♪

♪ いつも いつも 真っ直ぐに見つめて♪

♪ 弱気になったりもするよ そんな時には強く抱き締めて♪

♪ 強く そう強く あの場所へ 走り出そう♪

ニオン 「.....」

凜 「くく♪...つと、どうだった?」

ニオン 「...あ、ああ。何と言えればいいのか」

凜 「こういう歌は、嫌い?」

ニオン 「違う!そうじゃない!...お前の歌は、こう、心の奥底から沸き上がってくる

.....何かがあるというか...: 分かりやすく言うと」

凜 「…言うところ？」

ニオン 「——お前の歌は、別に嫌じゃない」

凜 「……。嫌じゃない、つか……。そつか、ふふ…っ！」

ニオン 「何故笑う？」

凜 「別に。ただ目の前でファンが一人出来るのが見れたのになって」

ニオン 「ふあん…？さつきからお前は何を言っている？」

凜 「凜。私は渋谷凜。お前じゃない。…あんたは？そう言えば、名前聞いてなかったけど」

ニオン 「俺、か……。俺は…ニオン」

凜 「ニオン、か。変わった名前、って外国人なんだから当然か」

ニオン 「…お前はいつもここで歌っているのか？」

凜 「ううん。今日は偶々、知り合いのライブがあったから」

ニオン 「そうか…。どこに行けばまたお前の歌を聞くことが出来る？」

凜 「何？そんなに気に入ってくれたの？」

ニオン 「ああ」

凜 「……。…まあ、時々なら、ここで歌ってもいいかな。普段なら、人通りも少なそうだし…」



ニオン 「本当か…!？」

凜 「う、うん…。でもあんまり期待しないでよ。私だって忙しいから、来れないことだつてあるし…」

ニオン 「そうか…」

凜 「…もう行くの?」

ニオン 「ああ…。俺も仕事があるからな。…また、ここに来る」

凜 「そう」

卯月 「凜ちやくんっ!…どうしたの?」

凜 「ううん。…何でもない」

卯月 「そうですか? 何だか嬉しそう? です。何かいいことでもありました?」

凜 「嬉しい事、なのかな?…ふふっ」

卯月 「? 変な凜ちゃん。つと、そうでした! 早くしないと、みくちゃん達のライブ終わっちゃうですよ!」

凜 「分かった。今行くよ」

凜 (…ニオン、か。ふふっ、変わった人…)

ニオン（——っ！俺は何をしている!? たかがサル如きと、関わり合いを持つなどと……っ！）

ニオン「……しかし、あの人間の歌。いや、渋谷凜、と言ったか」

ニオン「アイツの歌、悪くなかった、な……——」

「ニオン隊長。ここにおられましたか」

ニオン「——ザットか。ギットとビットの二人は？」

ザット「計画通りです。上手く軍の関係施設へ潜入出来ました」

ニオン「容易いものだな。後は、二人の連絡待ちと言う事か」

ザット「はい。ギットとビットの二人なら上手くやつてくれる筈です。我々は一般市

民の中に紛れ込み、もう少しサル共の情報を集めましょう。……隊長？」

ニオン「何だ？」

ザット「どうかされましたか？ なにやら、上の空のようですが……」

ニオン「……。何でもない。お前は引き続き俺とは別行動でサルの情報を探れ。連絡は何かあったときだけで良い。定時連絡の必要はない。サル共に感付かれる危険があるからな」

ザット「はっ！ それでは隊長、ご武運を」

ニオン「ああ、お互いにな。……」

ニオン（これは任務だ。我々爬虫人類の中でも忌み嫌われてきた地竜一族を帝王ゴールの支配から解放する為、その為の任務なのに……!）

ニオン（あの女の歌を、また聴きたいなどと……!どうしたというんだ?俺は……!）

~~~~~ 早乙女研究所 会議室 ~~~~~

未央「ゲッター量産化計画~~~~?」

早乙女「そうだ。日本政府は、これまでのゲッターロボの活躍を高く評価している」

卯月「活躍なんて……。そんな立派な事は何もしてませんよ!ただ、言われた通りの事をやって来ただけです……」

瑞樹「その言われた事をやったのは、間違いなく卯月ちゃん達よ。自信を持ちなさい?」

卯月「それで、良いんですかね……?えへへ……」

早乙女「うむ。それで、恐竜帝国の侵攻も激化してきている事も併せ、日本国内部における防衛力の強化が、昨日国会の場で可決された」

美波「……その為のゲッターロボの量産化、ですか?」

晶葉「その通り。日本でのスーパーロボット級の建造は日米平和条約で永年固く禁じられてきたが、恐竜帝国の苛烈な攻勢を受けて、国連連中も日本の防備強化を認可せざるを得なくなった、と言ったところかな?」

菜々「これまでゲッターロボは、あくまで民間の研究施設が開発した宇宙開発用の作業用ロボット、って事で誤魔化してたんですよね？」

アーニャ「ダー……。抜け目、ないです」

みるく「予め作業用で作られてたロボットに自衛の為に武器を着けただけです、って、とんだ屁理屈にゃ」

凜「ともかく、これで大手を降って日本でもスーパーロボットが作れるようになった、って事なんだ」

早乙女「色々条件はあるがな。一先ずは、設計図を流用し易い、ゲッターを陸上自衛隊の施設で開発する運びとなった」

晶葉「整備性向上の為、一部機構の簡素化。操縦特性の習熟を手早くするなどの目的で、ゲットマシンへの分離・合体機能の省略など、多くの要素が省かれるが、そのお陰で作業行程も短縮された」

未央「具体的にはどのくらい？」

晶葉「一週間後にはテストタイプの三機がロールアウトする予定だ」

未央「うっわあ、何だか楽しみ！」

瑞樹「それで、その話を私達にするって言う事は……博士？」

早乙女「うむ。実はお前達にその量産型ゲッターロボの起動試験を手伝ってもらいた

「い」

卯月「手伝う、ですか？」

早乙女「具体的には、起動試験の後に行われる模擬戦闘試験の対戦相手じゃ」

菜々「あー、ナナ達その量産型ゲッターを動かすとかではないんですね？」

晶葉「量産型ゲッターには、自衛隊が用意した正規パイロットを使う。そうでなくては、意味がないからな」

瑞樹「確かに、言われてみればそうね」

美波「私達は乗れないんですね…。ちよつと、残念かも」

アーニャ「ダー…。ゲッターに搭乗する、チャンス、だったかも知れませんね」

晶葉「二人については…。まあおおい、考えている事はある。もうしばらく辛抱してくれ」

早乙女「先方は、ゲッターロボの正規パイロットである卯月くん、凜くん、未央くんの三人との模擬戦を希望している。…どうかね？」

未央「もつちろん受けるよね？しまむー、しぶりん！大人相手でも負けるつもりなんてないよ！」

卯月「私は、別に構いませんけど…。凜ちゃんは？」

凜「…うん」

未央「ん、何々？しぶりんは自衛隊員の前で恥じをかくのが怖いのか？」

凜「っ……。別に、誰かさんが張り切りすぎて、合体事故起こすのが不安なだけ」

未央「むっ……。誰かさんって誰さ？」

凜「自覚あるんじゃない？浮わついた気持ちでゲッターに乗って、恥じをかくのは未央の方だよ」

未央「……どういう意味さ？」

凜「そのまんま。失敗すれば死だよ」

未央「この……っ！」

卯月「み、未央ちゃんも凜ちゃんも、喧嘩はやめて……」

早乙女「やめんかつ!!」

未央「っ?!」

凜「!」

卯月「ひやつ！」

早乙女「……。確かに君達の活躍は評価に値しよう。君達のもたらした結果、多くの人々の命が救われた事も事実じゃ。だが……」

早乙女「そのような些細な事で諍いを起こしてどうする!?敵はその心の隙を狙ってくるのだぞ!!」

凜「……………」

未央「……………」

スクツ

卯月「あつ、凜ちゃん…」

凜「頭を冷やしたいの。一人にして」スタスタ

卯月「あう…」

瑞樹「これは、当日は私達が模擬戦の相手になった方が良さそうね?」

早乙女「瑞樹くんの言う通りかも知れんわう」

みく「まったく!こんな大事な時に、何やつてるにや!」

菜々「あああう…!そんな他人事で良いんですか?」

瑞樹「こればかりは、あの三人…いいえ、凜ちゃんと未央ちゃん次第だもの。私達

は、周りでカバー出来る事をしましょう」

美波「二人供、早く仲直りして出来ると良いんだけど…」

アーニヤ「беспокойтсья…心配、ですね…」

くくく 都内某所 くくく

ザツト「——以上が、昨日ギットから受けた調査報告になります」

ニオン「ゲッターロボの量産とは、サル共も我々を滅ぼすのに随分必死だな」

ザット「隊長、いかがなさいますか？」

ニオン「我々にとっては良い好機だ。そのゲッターロボの量産型とやらが完成する日、それは人類の守護神などではなく、我々爬虫人類の尖兵となる」

ザット「しかし、どのようにして？」

ニオン「ふんっ。小細工など必要ない。正面から堂々と、量産型ゲッターロボを戴いていく！」

ザット「…了解しました。では、潜入中のギットとビットにも、召集を掛けておきます」

ニオン「頼む」

ザット「隊長は？」

ニオン「作戦の決行は一週間後だ。その準備しておく。一週間後、同じ時刻、同じ場所、落ちて合おう」

ザット「はっ！了解しました！」

ニオン「ではな、頼むぞ。…くれぐれも作戦決行前にサル共に感付かれることのないようにな」

ニオン「——今日が最後のチャンスかもしれないな」


~~~~~ 商店街裏 小さな公園 ~~~~~

凜 「——あ」

ニオン 「お……」

凜 「来たんだ」

ニオン 「……。ほぼ毎日、ここには来ていた。……またこうしてで会えたのは、今日が初めてだな」

凜 「……ごめん」

ニオン 「気にするな。元より来てくれと頼んだつもりもない。今日だって、気晴らしにここへ来たんだろう？」

凜 「そう言うの、分かる人？」

ニオン 「顔を見れば分かる。今のお前は、そういう顔をしている」

凜 「そう……」

ニオン 「……なあ、良ければ少し、話をしないか？」

凜 「え？」

ニオン 「お前とこうして会うのが、今日が最初で最後になりそうなんだな」

凜 「故郷に帰るの？」

ニオン 「そんな所だ」

凜 「…分かった。良いよ、こっちも時間あるし。ちょっとだけ、付き合つてあげる」  
 ——— 一時間後。

ニオン 「———そうか、お前の実家は花を売っているのか。…道理で」  
 凜 「何？」

ニオン 「お前から、ほんの少しだが花の匂いがすると思つてな。この汚ならしい排ガスの匂いが充満した街中で、すぐに区別出来る匂いだつた」

凜 「それ、口説いてる？」

ニオン 「そんなつもりはない。ただ、少しだけ故郷の家族が懐かしくなつただけだ」  
 凜 「ふうん。ニオンの家族か…。どんな人？」

ニオン 「父は尊敬していた。母は、優しくつた。妹は我が儘だつたが、それでも家族として、かわいい奴だ」

凜 「…尊敬してた、優しくつた、つて…？」

ニオン 「俺の両親は妹がまだ小さかつた頃に死んだ」  
 凜 「ごめん…」

ニオン 「気のするな。命あるものはやがて死ぬ。それが自然の摂理だ」  
 凜 「…それで、納得できるんだ？ニオンは」

ニオン 「ああ。妹も、仲間もいる。まだ孤独ではないからな」

凜 「…羨ましいな」

ニオン 「…お前も、誰か大切な人を亡くしたことがあるのか？」

凜 「……。うん。ついこの間、ね」

ニオン 「そうか。……」

凜 「ニオン？」

ニオン 「確かに、命ある者の死を受け入れるのは必要だ。だが、死んだそいつの事を中心の中で思い続けるのも、悪いことだとは思わん」

凜 「そうやって思い続ける事が、ただの未練がましい行為でも？」

ニオン 「そうやってお前が思い続けているのなら、そいつは死んではいけない。今も生きてるさ、お前の中でな」

凜 「私の、中……」

ニオン 「そう。だから、死んでいった者を忘れるな。そいつの分も立ち上がり、生き続ける」

凜 「その人の分も、生き続ける、か……。ニオンの言う通りかも。けど——」

ニオン 「何だ」

凜 「その言い方、カッコつけ過ぎ」

ニオン 「何っ!？」

凜 「ふふっ……！冗談。少しだけ、心が軽くなった気分だよ。ありがとう」  
ニオン 「っ！」

ニオン （ありがとう……。か、人間が、爬虫人であるこの俺に……）  
凜 「何？どうしたの？」

ニオン 「ふふっ……！何でもない。ありがとうと言われるくらいなら、お礼の一つでももらおうか」

凜 「良いよ。何？」

ニオン 「……歌を一曲……聴かせてくれ」

凜 「……一曲でいいの？」

ニオン 「ああ。あの一曲がいいんだ」

凜 「そっか。分かった」

凜 「~~~~♪~~~~♪~~~~♪」

ニオン 「……」

凜 「……ふう。どうだった？」

ニオン 「ああ、良い歌声だったよ。国へ帰る、良い土産になった」

凜 「そう。それなら良かった」

ニオン「それじゃ、俺はもう行く」

凜「……うん」

ニオン「……。何だ、最後にさよならは言ってくれないのか？」

凜「また会えるかな？」

ニオン「……さあな。だが多分、もう会うこともないだろう。お互いに、その方が良い」

凜「その方が良いって……？」

ニオン「俺には俺の、お前にはお前の、生きる道があると言うことだ。お前は、俺な  
んて言う些細な存在に囚われず、これからを生きれば良い」

そう言い残して、公園から立ち去るとする背中に、

凜「私、忘れないから！ニオンの事、絶対忘れないから!!」

ニオン「……」

夜、人気のない公園に凜が一人だけ残った。

——　そして、一週間後。

くくく　富士火力演習場　くくく

卯月「スゴいですね！この広い土地、全部自衛隊の敷地なんですか？」

瑞樹「ええ。富士火力演習場。元は陸上自衛隊の所有地よ」

未央「これだけ広大なところだったら、ゲッターが何機暴れても大丈夫だね？」

菜々「だ、だからって、あまり派手に暴れるのはなしですよ…」

凜「ふん…」

未央「……ふんっ」

みく「ねえ、瑞樹さん？今日の模擬戦、この二人をゲッターに乗せて本当に大丈夫にや  
？」

瑞樹「仕方ないわよ。ゲッターのシートは譲らないって、そこだけ頑なに拒んだんだ  
もの」

みく「…そうは言ってもにや〜」

瑞樹「まあ、あの二人も本来ならプロのアイドルだもの。本番になればしつかりやつ  
てくれると信じてるわ」

菜々「それに、念のためにプロトゲッターも持ち込みましたからね。もしもの時は、ナ  
ナ達でフォローしましょう」

みく「もしもの事態が不安過ぎるにや〜…」

隊員「早乙女博士、それにゲッターパイロットの皆さん。お待ちしておりました」

早乙女「今日はよろしく願います」

隊員「こちらこそ。…まだ、模擬戦闘試験まで時間がありますので、宜しければ量産  
型ゲッターロボまでご案内しましょうか？」

卯月「あ、私見てみたいです！量産型ゲッターロボ！」

美波「訓練で目の当たりにする前に、間近で、つて言うのには私も賛成かも」

瑞樹「なら、みんなで行きましょうか？」

早乙女「そうじゃな。では、頼めますか？」

隊員「勿論ですとも。さあ、こちらです」

〈〈〈 量産型ゲッターロボ格納庫 〉〉〉

整備員A「おい見ろよ！本物のニュージェネレーションだぜ！」

整備員B「マジだ！新田美波さんに、川島瑞樹さんもいるぞ！」

整備員C「くうくうっ！生きてて良かった!!」

整備員D「おい、後でサイン貰いに行こうぜ！」

整備員A「あ、ズリイ！こいつ色紙持ってきてやがる！」

整備員C「へへっ！俺あこのシャツにして貰うから良いもんね！」

整備員A B D「その手があったか!!」

隊員「あはは、すいません…。職場上、女っ気が少ないもので」

瑞樹「良いのよ。慣れてますから」

卯月「あははは…」

菜々「良かったら後で、貴方にもサイン、してあげましょうか？」

隊員「よろしくお願いします。実は、皆さんの案内をする事が決まってから、同僚にサインをせがまれました……。さ、こちらが量産型ゲッターロボです」

未央「へえ。量産型ゲッターって白いんだ」

隊員「本機はロールアウトされたばかりですから。白いは今だけですよ」

みく「にやあ。白くても別に良いと思うにや。カッコいいし」

アーニヤ「ですが、それでは、プロトゲッターと被ってしまいますね？」

美波「そうね……。横に並んでるところを想像すると、区別がつかない……」

みく「にや……。それは由々しき問題にや。今回の試験が終わったら、早速色を変えてもらわないと」

技術者「これはこれは、早乙女博士。よく来て下さいました」

早乙女「挨拶は結構。調子はどうですか？」

技術者「概ね順調、と言ったところですか。たった今、起動試験に成功しましたよ」

晶葉「ふむ……。量産化を想定して縮小したゲッター炉心と、ゲッター線増幅装置に不具合はないみたいだな」

技術者「……こちらは？」

早乙女「池袋晶葉くん。まあ、僕の助手のようなものじゃ」

技術者「ほお……。この年でねえ……」



晶葉「おい。年齢で馬鹿にしてくれるなよ?早乙女博士の研究論文に目は通したし、ゲッター線研究に対して造詣もある」

技術者「ホントですか?」

早乙女「事実じゃ」

技術者「…ほお」

警備員「た、大変です〜〜!!」

隊員「どうした!…何だ!その怪我は…:…っ!」

警備員「き、恐竜帝国が…:…!爬虫人類が…:…!ゲッター…を…狙っ…て…:…!」

卯月「っ!大丈夫ですか!?!」

瑞樹「卯月ちゃん下がって。…もう、死んでるわ」

卯月「そんな…」

晶葉「しかし博士。ゲッターを狙って、って言うのはどう言う意味でしょう?」

早乙女「…ひよつとすると、奴等、どこからか量産型ゲッターの情報手に入れて、驚異になる前に破壊するつもりかもしれない」

未央「そんな…!折角出来たばかりなのに…。そうだ!私達が量産型ゲッターに乗っちゃえば!」

早乙女「ならん!ゲッターの破壊が目的である以上、メカザウルスも近くに潜んでい

る可能性が高い。お前達三人は自分達のゲッターの中で待機じゃ！」

卯月「分かりました！行きましよう！凜ちゃん、未央ちゃん！」

凜「うん！」

未央「合点！」

ゲットマシンの元へ駆け出していく三人。

瑞樹「私達も行きましよう。何が起こるか分からないわ」

みく「了解にや！菜々ちゃん！」

菜々「はいはい！いつでも大丈夫ですよ！」

早乙女「儂らは避難するぞ。何時ここに爬虫人が来るとも限らん！」

美波「分かりました」

アーニヤ「ダー！ゲッターに乗れないのが、悔しい、です」

早乙女「言っても始まらん。行くぞ、こっちじゃ」

「ああ…!?爬虫人がゲッターの格納庫につ！」

ザット「隊長ありました！量産型のゲッターロボです！」

ニオン「よし！目的を阻む者は殺せ！」

ギット「フルシユアアアア!!覚悟しろサル共オ!!」

美波「きやあああああ！」

晶葉「伏せろ!美波!!」

パラボラアンテナのようなものが付いた銃らしきものを構える晶葉。

晶葉「喰らえ!池袋晶葉様特製の細胞破壊光線だ!!」

キューンキューンキューン

ギット「ゴワアアアアア:!!」

塵芥と化すギット。

技術者「スゴイ……!爬虫人を一撃で!」

晶葉「どうかかな?少しは天才科学者つて言うのを信じてもらえたかな?」

アーニヤ「ウラー……。早乙女博士とは違う意味で、天才、ですね……」

美波「死ぬかと思った……」

ニオン「ぐっ……!ギットがやられたか……!ザット、ビット!もうサルには構うな!

ゲッターに乗り込んでしまえば、連中も手出し出来ん!」

ザット&ビット「了解!!」

早乙女「何!?ゲッターに乗り込むだど!」

晶葉「奴等、ゲッター線を浴びても平気なのか!」

早乙女博士達が驚いている間に、ニオン達は量産型ゲッターへと乗り込む。

隊員「ああ……!量産型ゲッターが!」

ニオン「ふははははは……！愚かなサル共よ！今日からこの力は、我々恐竜帝国の為に使わせてもらおうぞ!!」

凜『……今の声!?!いや、まさか……』

ニオン「……む!?!」

卯月「どうかしたんですか？凜ちゃん」

凜「……いや、何でもない。……気のせいだ、きつと」

未央「それより状況はどうなってるのさ!?!」

晶葉『——最悪の状況だ。量産型ゲッターが、爬虫人によつて奪われた!』

卯月「奪われた、つて……！そんな!」

未央「連中はゲッター線に弱いんじゃないやなかったの!?!」

早乙女『理由は分からん。連中にも、ゲッター線に対して、抗体を持つ種がいたのか

もしれん』

瑞樹「ともかく、目の前で起こっていることが事実、と言うことね?」

早乙女『そうじゃ。……奴等に量産型ゲッターを悪用されるわけにはいかん。君達の手

で破壊してくれ』

未央「そんな……!?!」

菜々「ナナ達の力で、ゲッターを……!?!」

晶葉『詳しく話し合っている時間はない。ゲッターに乗った爬虫人に逃げられる前に量産型ゲッターを破壊するんだ!』

凜 「了解。やろう、卯月、未央」

卯月 「そんなこと言っちゃって…! 凜ちゃん!」

凜 「こうしている間に爬虫人に逃げられる。ゲッターが恐竜帝国の手先になったら、そのせいでもっと多くの人が悲しむ事になるんだよ!? そうなる前に、早く!」

未央 「くっ…! ゲッターチーム、出撃するよ!!」

瑞樹 「みく、こちらも続くわよ」

みく 「はじめっから選択肢なんてねえのにや! テスターチーム、発進!!」

くくく 富士樹海 くくく

ニオン 「むっ!…追ってきたか! ゲッターロボ!!」

ザット 「ここは私とビットが! 隊長は撤退して下さい!」

ニオン 「何を言い出す! 敵はゲッターロボだぞ!」

ビット 「こちらも、ですよ! 数が同じなら、何とかなるかもしれません!」

ニオン 「…しかし!」

ザット 「今回の作戦には、我ら地竜一族の解放が掛かってるんでしよう!」

ビット 「だったら、隊長のゲッターだけでも持ち帰って下さい。そうすれば、一族の

悲願が、叶います!!」

ニオン「お前達……。……」

ザット&ビット「隊長!」

ニオン「俺の前で犠牲になることは許さん。こつちの数が増えれば奴等に勝てるかも知れんだろう?」

ザット「隊長……」

ニオン「俺とザットで赤い方のゲッターを狙う。ビットはもう一機のゲッターをやれ!」

ビット「了解!!」

ニオン「来るぞ!各自散開!我々地竜一族の意地を、奴等に見せてやれえ!!」  
卯月「量産型ゲッター捉えました!三機とも、こつちを迎え撃つようです!」

凜「逃げるのはやめたみたいだね。数の上では、向こうの方が上か……」

瑞樹「こつちを倒した方が早い、そう思ったのかもしれないけど、ゲッターの操縦はこつちの方がプロなのよ?」

みく「昨日の今日ゲッターに乗った奴なんか、負けるもんか!返り討ちにしてやるにゃ!」

未央「敵の隊長格は量産型のゲッターに乗ってるんでしょ?まずは、そいつから倒

した方が良くない?」

菜々「確かに……。そうすれば、敵の指揮が混乱するかもしれません」

瑞樹「量産型ゲッター1とゲッター2はそっちへ向かってるみたいね。頼めるかしら

?

未央「任せてよ!代わりに、そっちに来てる量産型ゲッター3の相手、頼みましたよっ

!

瑞樹「任せなさい。それじゃ、各チーム、散開!」

ゲッターチーム、テスターチームが左右二手に別れる。

凜「相手は二体、臨機応変に行くためにも、ゲッター1でいこう」

瑞樹「パワーにはスピード。こっちはゲッター2でいくわよ!」

その他全員「二了解!!」

卯月「チエーンジゲッター!1ツ!!」

瑞樹「チエンジ、ゲッター!2!!」

それぞれにフォーメーションを組み、ゲッターロボに合体する。

ビット「ゲッターミサイル!」

瑞樹「当たらないわ!」

量産型ゲッター3から放たれたゲッターミサイルをひよい、と軽快な身のこなしで躲

していく。

瑞樹「ドリルツ、ストーム！」

ビット「ぐわあっ!!」

瑞樹「ゲッターアーム!!」

ドリルストームで怯んだ量産型ゲッター3に、マジックハンドのゲッターアームを叩き込む。

ビット「うわっ……! まだまだ……隊長とザットがゲッターを倒すまでは……!」

瑞樹「っ!」

パワーアームでプロトゲッター2に絡み付く。

ビット「うわあああああ!!」

瑞樹「あ、あああ!?!」

そのまま、プロトゲッター2を天高く放り投げるが、プロトゲッター2は、ふくらはぎや背中の推進器で空中で姿勢を建て直す。

瑞樹「ふう……。助かったわ。ありがとう、みく、菜々さん」

みく「このくらい朝飯前にやあ」

菜々「チームのフォローは完璧ですからね! あと、さんは要りません!」

瑞樹「けど、想像以上にやるわね。流星と言うか、なんとと言うか……」



みく「性能はほぼ互角にや!こうなったら、腕の違いを見せるしかないの!」  
菜々「こつちがこんなので、卯月ちゃん達の方は大丈夫なんでしょうか…」

ザット「ゲッタードリル!!」

卯月「きやつ…!」

凜「卯月、後ろだ!」

ニオン「やああああああー!!」

卯月「うう…っ!」

量産型ゲッター2の攻撃を囫とし、背中から奇襲をして来た量産型ゲッター1のゲッタートマホークを、同じゲッタートマホークで受け止める。

未央「しまむー何やってんのさ!しまむーが無理なら変わるよ!」

卯月「だ、大丈夫です…!…はあーっ!」

ガキイン

ニオン「何っ!?!」

卯月「やあー!?!」

ザット「隊長、危ない!!——…ぐわっ!」

量産型ゲッター1のトマホークを弾き飛ばして、大上段から降り下ろしたゲッター1

のトマホークを、割って入った量産型ゲッター2が受ける。

卯月「そんな…!？」

凜「仲間を庇った…?」

ニオン「ザット、怪我はないか!？」

ザット「はい!まだやれます!!」

ニオン「よし!でええやああああああ!!」

ザット「ぬおオオオおオオ!!」

卯月「きやああああああああ!!？」

量産型ゲッター2のマジックハンドと、量産型ゲッター1の拳のダブルパンチを受けて、背後に倒れ込むゲッター1。

未央「痛ててて…。しまむー平気？」

卯月「は、はい…。何とか」

凜「卯月、次が来る!!」

卯月「え…?」

ザット「取った!」

卯月「っ!」

そこからは卯月の反射だった。ゲッター1に向かって来た量産型ゲッター2のゲッ

タードリルを、ゲッターレザーを展開した左腕で弾く。重心をずらされた量産型ゲッター2は、無防備な上半身をゲッター1に晒した。

ザット「しまっ——!?!」

卯月「——ゲッタービーム!」

すかさず、ゲッタービームを量産型ゲッター2目掛けて照射。その上半身を瞬く間に融解させた。

卯月「はあ…はあ…はあ…つ!」

未央「や…った…?」

ニオン「ザット…!おのれえ!」

凜「!!?!」

ニオン「貴様ら…!よくも、ザットをくらくッ!!」

凜「この声…:…やっぱり、間違いない…:…!」

未央「?! どうかした、しぶりん?」

ニオン「でえやああああああ!!」

未央「しまむー!ゲッター起こして!早く!」

卯月「は、はい…:…ゲッターウイング!」

凜「まさか、爬虫人だった…?そんな、嘘…」



凜 「——私達を探ってたの?」

ニオン 「…そうだ。最も、お前がゲッターのパイロットだとは、あの時は思いもしなかったがな」

凜 「お互い様だよ。知らない内に、爬虫人の知り合いが出来てたなんてね」

ニオン 「貴様が宿敵のゲッターのパイロットであるならば容赦はせん!覚悟オ!!」

凜 「くっ…!卯月、私がやる。ゲッター2に変わって!」

卯月 「えっ、でも…」

未央 「今のしぶりんじゃ無理だよ!しまむー、私が目を覚まさせてやるッ!」

卯月 「え?…ええ?」

凜 「未央を黙ってて!アイツは私がやる…!それが、私のけじめだ!」

未央 「私情で状況もまともに見えてないのに、立派な言葉だけ言ってるんじゃないよ!」

凜 「状況が見えてない…!それは、そっちじゃない?!」

未央 「何をう…!事情も話さないで、勝手に怒ってる奴の、言う言葉?!」

凜 「未央には関係ないじゃん!これは、私個人の問題だ!」

未央 「私達は、チームで戦ってるって言ってるんじゃない!」

卯月 「2人共、喧嘩は…:きやあつ!!」

量産型ゲッター1の蹴りが、ゲッター1の鳩尾に突き刺さる。

卯月「ぐう……！」

凜「卯月っ！」

ニオン「動きが乱れたな！今の内にやらせてもらおう！」

凜「ニオン……！」

未央「しまむー！このままじゃやられちゃうよ。私が大雪山おろしで決めてやるから  
！」

凜「だから、何でそうなる……!?!」

卯月「もうやめてくださいっ！」

ニオン「フンツ、仲間割れか。こんな奴等にザットは……消えろツ!!」

凜「卯月、危ないっ！」

卯月「え——？」

量産型ゲッター1のトマホークが、ゲッター1のコックピットブロックがある頭部に、直撃した。

未央「しまむー!?!」

フラフラと、操作を失い、地面に落下していくゲッター1。

未央「しまむー！返事をして、しまむー！」

凜「いない……」

未央「えっ……」

凜 「コックピットに、卯月がいない!」

未央 「ウソ……何処に……!?!」

その姿は、墜落したゲッター1から遙か上の、上空。

凜 「卯月イっ!?!」

卯月 「——」

ニオン 「……ふん」

その身一つで、地に落ち行く卯月を、量産型ゲッター1が拾い上げる。

未央 「!?!」

凜 「……卯月をどうするつもり?」

ニオン 「……大切か?この仲間は」

ビット 「た、隊長くく!!」

ニオン 「っ!ビット!?!」

ニオンが通信に応じ、視線を向けると、既に大破し、撃破寸前の量産型ゲッター3の姿があった。

ニオン 「ビット!」

ビット 「た、隊長……!自分は、もう……駄目です!せめて……隊長だけでも生還し……我

ら、地竜一族の悲願を……—」

瑞樹「これでトドメよ」

量産型ゲッター3のコックピットである頭部を、ゲッタードリルが粉碎する。

ニオン「ビット……。くっ……」

量産型ゲッター1が高度を上げ、ゲッター達から距離を取る。

凜「待て!!」

ニオン「こいつは人質だ!」

凜「っ!?!」

ニオン「返してほしくば、貴様らのゲッターを渡せ」

未央「そ、そんなこと……出来るわけ……!」

ニオン「ならば、仲間の命はどうなっても良いと言うことだな?」

未央「卑怯なあ……!」

ニオン「考える時間はくれてやる。何が最善か、じっくりと考えることだな!」バツ身を翻し、戦場から去っていく量産型ゲッター1。

みく「待つにゃ!逃がすかア!!」

未央「待って!アイツの手には、しまむーが!」

瑞樹「何ですって!?!」



みく「どういう事にや!?!」

凜「掴まったんだ…。ゲッターが被弾して…。割れたコックピットから、投げ出されて…」

菜々「そんな…。まさか!?!」

みく「どうしてそんなことに…。!? 2人は一体何をして…。!」

瑞樹「そこまです。今2人を、責めるべきじゃないわ」

みく「瑞樹さん。……」

凜「卯月……」

つづく

## 第6話 『マシ—ンランド決死行!!』

激しい殴打音が早乙女研究所内に響き渡る。

菜々「み、未央ちゃん……！落ち着いて……っ！」

未央「っ……！黙って殴られて……！それで許して下さいって!? そう言うの、虫が良いって言うんじゃないの？ 凜っ!!」

凜「っ……」

未央「ああっ!? ちよつとは何か言ったらどうなの!? あのニオンってのは誰!? アンタはどうしてえ……！頭では利口な癖に、そうして一人で抱え込んで！ 何とか出来るって！」

凜「……頭に血が上ってるだけの猿に、言うことはないよ」

未央「猿……？ 猿って言ったのか……ええ!?!」

強く握った拳で、凜の頬を殴り飛ばす。

未央「フ—ッ、フ—ッ、フ—ッ……ッ!!」

瑞樹「そこまで。ちよつとやり過ぎよ。未央ちゃん」

未央「瑞樹さん……!?! 止めないで」

みく「感情に任せたまま行動するのが、猿だって言うんじゃない?」

未央「……っ」

瑞樹「元々、お互いに不和があつて、それが爆発したのは、分かるわ。けど、同じ思  
いがあるのは、それだけじゃないでしょ？」

未央「同じ、思い……」

菜々「卯月ちゃんを連れ去られて、悔しいってことです」

未央「……！」

みく「少なくとも、今は味方同士で争つてる場合じゃないんじゃない？」

凜「……ニオンは、家の近くの公園で、偶々会っただけだよ」

瑞樹「偶々？」

凜「うん。今思えば、変装して潜入してたんだと思う。ゲッターの情報を集めるた  
めに」

瑞樹「成る程……」

みく「偶々会つて、それだけ？」

凜「……それだけだよ。本当に」

菜々「……そのニオンさんは、卯月ちゃんを人質だつて、言つたんですよね？」

凜「うん……。返してほしかつたら、私達のゲッターを渡せつて」

菜々「ゲッターを!?!」

瑞樹「恐竜帝国は、ゲッターに散々苦しめられているものね。対価としては、妥当と言ったところだけど…」

凜「勿論、ゲッターを渡すつもりはないよ」

未央「それじゃあ、しまむーはどうするの!?!」

菜々「それを、これから話し合おうんです」

未央「……」

凜「未央……ごめん…。卯月を拐われたのは、私のせいだ。私が、ニオン相手に、動揺したから」

未央「…何さ、いきなり」

凜「それだけじゃない。大雪山おろしを覚えてから、勢いに乗ってる、未央が心配だった。だから、必要以上に辛く当たった。…ごめん」

未央「そんな…。いきなりしおらしくなって、謝らないでよ…。私だって、その、しぶりに言われるの、しぶりんが私にやきもち焼いてるだけだって、そう思ってたんだからさ。だから、その…」

未央「ごめんっ！私も、しぶりんの気持ちを考えてなかった」

凜「ううん、良いんだよ。こっちだって…」

みく「一先ずは、一件落着かによ?」

葉々「はい…っ！良いですね…！青春ですなっ!!」 ジーン…

みく「にやつ!? ナナちゃん鼻水! もうく、アイドルがしちゃいけない顔してるよ…」

瑞樹「さて、落ち着いたからと言って、ゆっくりしてる時間はないわよ。私達に考え

てる時間は、そうない筈だから——」

——。

くくく マシーンランド メカザウルス格納庫 くくく

ニオン「……」

「ご苦労だったな、キャプテン・ニオン。ゲッターロボ強奪の任、大義である」

ニオン「…キャプテン・ランバ。このマシーンランドの指揮官、だったか」

ランバ「いかにも。しかし、直接本隊に合流せんとは、解せん話だな」

ニオン「地竜一族と言えどゲッター線の影響を全く受けんと言うわけではないから

な。マシーンランド本隊に合流するよりも、こちらの方が近かったというだけの話だ」

ランバ「成る程。…して、後ろのそれは？」

ニオン「…不本意ながら、連れてきた人質だ」

ランバ「それで、サル共の手から逃げおおせたと言うわけか。分かった。本隊に合流

する前に、その猿の身柄もこちらで預かろう」

ニオン「助かる。人間の小娘など、ゴール様のいる本隊には連れていけんからな」

ランバ「よし。おい、そのの！この猿を捕虜用の独房にぶちこんでおけ」  
爬虫人兵「はっ!!」

—— 独房。

卯月「うう……ん——」

~~~~~ 早乙女研究所 談話室 ~~~~~

未央「痛ててて……！アーニヤ、もつと優しく……」

アーニヤ「アー……我慢、して下さい。もう少し、ですから、ミオ」

凜「ごめん、美波。こんなことに、手伝わせちゃつて……」

美波「良いのよ。気にしないで？私達に今手伝えることつて言ったら、怪我の手当てくらいなもの」

アーニヤ「ダー。Оскорбительный……悔しい、です」

未央「あーにゃん……」

凜「大丈夫。卯月は必ず、助けて見せるから」

アーニヤ「リン……」

未央「それが、少なくとも私達の責任だよ」

晶葉「傷の手当ては、終わったかな？」

凜「晶葉！」

晶葉「みく達から聞いたぞ？随分派手にやったそうじゃないか」

未央「それは…」

凜「こつちのことは、いいよ。それよりも、卯月の居場所は？」

晶葉「ああ。卯月の現在地については、既に把握済みだ。尤も、捕捉するまでには、大分時間がかかったが」

未央「捕捉？アキつち、一体どうやって…」

晶葉「これだ」

手にしたノートPCの画面をそこにいる面子に見せる。

未央「これは…」

美波「拡大された日本地図に、この赤い点は…発信器か何か？」

晶葉「その通り。ゲッターのパイロットである以上、何が起こるか分からんからな

…。用心の為、各パイロットスーツにはGPSが内蔵されている」

アーニヤ「と言う事は…この点がウツキ？」

晶葉「ああ。今卯月が身ぐるみ剥がされてさえないなければ、彼女がいるのは間違いなく、ここだ」

凜「ここ…。桜島？」

晶葉「そう。座標はその地下を指している」

未央「地下!？」

美波「爬虫人はゲッター線を嫌うから、妥当と言えばそうだけど……」

凜「そこに、敵の本拠地がある……?」

晶葉「今、早乙女博士と整備班が急ピッチでゲッターの整備を行っている。明日の早朝、05:00には修理完了予定だ」

凜「明日……」

晶葉「早乙女博士は……整備班の連中も、勿論私も。ゲッターの復活を信じている。大切な仲間、島村卯月の無事もだ。彼女を救う、その為に研究所は今一つになっている。……後は、ゲッターを動かすパイロット次第だ」

凜&未央「……」

晶葉「今回の件は既に皆承知している。誰が悪いと言うものではないが、それでもまだお互いの間にわだかまりがまだあるのなら……」

凜「やるよ……。私は」

美波「凜ちゃん……」

凜「私のせいだからとか、そんな責任感は当然あるけど……それだけじゃない。卯月
は大切な……友達だから……友達は自分の手で助けなきやつ!」

アーニャ「……ミオ?」

未央「私も、凜と同じだよ。卯月は代わりなんてない、大切な友達なんだから…。うん…無くしたくない！絶対に!!」

晶葉「ふっ…。心配する必要もなかったか」

美波「ふふっ。そうよ？ニュージエネレーションの絆は世界二なんだから!」

アーニヤ「ダー！Наиболе：一番は、モチロン、ワタシとミナミ、ですぬ!」

未央「えー！何それ!？」

晶葉「ふふっ。一先ず、明日の朝までは動きたくても動けん。お前達は明日に備えて休んでおくんだな」

未央「うん！ありがとう、晶葉!!」

晶葉「…お前にちゃんと本名で呼ばれるのが、落ち着かなくなる日が来るとはな」

くくく マシンランド 独房 くくく

卯月「う…う…ん…。ん？ここは…?」

卯月「私…。そうだ、量産型ゲッターの攻撃を受けて、コックピットから投げ出され…」

記憶の回顧と共に、空中に投げ出された恐怖を思い出す。

卯月「あ、ああ…っ！—…ううっ…!だ…大丈夫。私は生きてます。…生きてます」

卯月「はあ…はあ…はあ…っ！…こ、ここが何処なんでしょう…?」

視線を向けた先、目に映った重厚そうな鋼鉄のドアに近寄る。

卯月「…あ、あの。誰かいませんか？…？誰か？」コンコン
「気が付いたか」

卯月「その声は、量産型ゲッターを奪った…爬虫人さん？」

ニオン「ああ。覚えていたか。その通りだ」

卯月「そ、そつか…！それじゃあ、宙に投げ出された私を助けてくれた…。本当にありがとうございますっ」

ニオン「……」

卯月「……？」

ニオン「…自分の置かれた状況の確認よりも、礼を言うのが先か？」

卯月「え？でも、助けていただいたのは事実ですし。だったら、一番先にお礼を言わないきゃ…。あの…」

ニオン「ん？…ニオンだ。キャプテン・ニオン」

卯月「キャプテン・ニオンさん！私は島村卯月です！よろしくお願ひします！」

ニオン「あ、ああ…」

卯月「それで…キャプテンさん」

ニオン「名前はそっちではない！」

卯月「え？違うんですか？」

ニオン「キャプテンと言うのは恐竜帝国の階級のようなものだ。だから俺の事は…ニオンと呼べ」

卯月「そうだったんですか！ありがとうございます♪優しいんですね、ニオンさんは」

ニオン「つ…!?や、さしい…だと…!?」

卯月「はい！言われたことはありませんか？」

ニオン「ないっ!!」

卯月「そうなんですか？意外です！ふふふっ」

ニオン（な、何なんだ、この女…!?調子の狂う…!）

ニオン「ここは敵地だと言うのに、随分と余裕だな？」

卯月「あ…やっぱりここって、ニオンさんのお家だったんですね」

ニオン「お家…?意味は少し違うが、まあそのようなものだ。回りにいるのは貴様の敵だらけ。助けなど誰も来ないぞ」

卯月「心配してくれるんですか？」

ニオン「誰が貴様らサル共など…っ!」

卯月「…正直、少しうん。結構怖いです。臭いだって、雰囲気だっていつもいた所

と違う…。不安で、怖くて…泣き出しそうです」

ニオン「ならば、何故泣かん？叫ばん!?自分の命可愛さに命乞いをして、みつともらしく助けを求めん!?何故お前は、笑っている!？」

卯月「不安で怖いから、笑うんです!」

ニオン「意味が分からん!恐怖で精神がイカれたか?」

卯月「違います!笑顔は、私が持っている一番の長所なんです!笑顔は、私の…うん。私達人間の活力なんです!」

卯月「だから、笑えばどんな悪い事でも乗り越えられます!笑顔は、私に勇気をくれるんです!」

ニオン「勇気い?くだらんっ!そんなもの、今何の役に立つと言うのだ?下手に意地を張って、殺されるだけだ。命よりも、笑顔が大事だと言うのか!？」

卯月「命は大事です!パパとママから貰った、世界に一つだけの欠け替えのないものです!だけど…、同じくらい笑顔だつて大切なんです!私は、色んな人達が泣いたり、憎み合ったりする世界なんかより、みんなが笑顔で幸せに暮らせる世界の方が大好きです!!」

ニオン「くだらんっ!!くだらんくだらんくだらん!!これでも同じことが言えるかあつ!!」

ニオンが独房の中に入ってくる。

ニオン「怖いだろう？ 貴様らから住む場所を奪い、大切な人を奪い……！ 全てを奪う爬虫人類だ」

卯月「っ……！ 大切な、人……！」

ニオン「泣けよ、叫べよ！ ゲッターの無い貴様に、何ができる!? 己の無力を嘆けえ!!」

卯月「……。——私、ニオンさんの……貴方の事は怖くありません」

ニオン「何だと!?!」

卯月「肌の色が違って、爪や体の形も少し違うかもしれないけど、そんな人間だつて同じです！ 人間だって、色んな肌の人や変わった姿をしてる人だつて沢山います！ ニオンさんは、それと何が違うつて言うんですか!?!」

ニオン「……違う！ ハツタリを言つても分かるぞ！ 貴様が俺を恐れている事は!」

卯月「恐れませんか！ だつて……だつて、凜ちゃんが心を開いた人ですから!」

ニオン「り……ん……？ 渋谷凜か!?!」

卯月「そうです！ 正体を知らなかったからかもしれないけど、それでも、凜ちゃんが心を開いて、ニオンさんだつて、感じた筈です！ 心から人と接するつて言う事を……！」

ニオン「黙れええええええええええつ!!」

卯月「っ……!?!」

ニオンが卯月の首を締め上げ、腕に力を込めたまま持ち上げる。

卯月「…か……はっ！」

ニオン「これでもまだ、同じ戯れ言を言えるか？ 貴様のような小娘の首をへし折れる
 など、簡単なことだぞ……！」

卯月「——ツカ……！……や……め……て……！」

ニオン「はははっ！ 良いぞ、ついに命乞いか！ 口程にもない」

卯月「……つり……ん……ちゃんか……ツカハ……！ 悲し……む……か……ら……！」

ニオン「そうだな。貴様がここで俺に殺されれば、あの小娘もさぞ悲しむことだろう
 な」

卯月「違……う……っ！」

ニオン「違……う、だと？」

卯月「ニオン……さん……が……！ 人を……殺し……ツハ……！ ちや……たら……、ヒュー……ヒュー……
 ……悲しんじやう……か……ら……！」

ニオン「俺が？ 何故、俺が貴様らサル共を殺す事に、何故奴が悲しむ必要がある!!？」

卯月「ア……貴方は……凜……ちゃんの……大、切な人……だか……ら……！」

ニオン「俺が？ 馬鹿な！ 俺とあいつは爬虫人類と人間だぞ!? それなのに、何故大切な
 人と言ひ切る？ 答えろ!!」

卯月「ヒュー…ヒュー…ヒュー…ヒュー…」

ニオン「…クソツ!!」

卯月「うあ…っ!」

半ば八つ当たりのように、乱暴に卯月を床に放り投げ、独房を後にする。

くくく マシンランド 通路 くくく

ニオン「おい、その看守」

爬虫人兵「はっ!何でしょうか、ニオン様」

ニオン「妙な真似はせんようしつかり見張っておけ。いいな?」

爬虫人兵「はっ!了解致しました!」

ニオン「それと、絶対に独断で奴を傷付けるな。くれぐれも、頼むぞ?もしもあの人間に何かあれば、その時は…!」

爬虫人兵「は、はいい!!」

ニオン「分かれば良い。では頼んだぞ」

ランバ「おお。どこに言ったかと思えば。こんなところで何を?」

ニオン「ランバ。少し人間に尋問をな」

ランバ「そうか。それで首尾は?」

ニオン「…全くだ。何も知らん、人間のただの小娘のようだ」

ランバ「ふむ。それは残念だったな。だが……まあ丁度良い」

ニオン「どういう意味だ？俺を探していたようだが……」

ランバ「ああ。その用事も、ついでに済ませてしまおう。こつちだ」

ニオン「？」

ランバ「何、お前が本隊に帰還する前に、少し楽しんでもらおうと思つてな」

ランバを先頭に、マシーンランドの奥へと足を進めていく。

~~~~ マシーンランド ??? ~~~~

ニオン「これはっ……!!？」

ニオンが目撃したのは、恐竜帝国に捕えられた、人間の捕虜達であった。捕虜達はガラス張りのケースの中に押し込められ、ある者の皮膚は焼け爛れ、ある者は脳や臓器といったものの一部をみつともなく晒して横たわっている。

ランバ「ふふふっ……！愉快だろう？地上の支配者を気取る、憎きサル共の苦しみのたうち回る姿は」

ニオン「これは……何をしている？」

ランバ「おや、ニオン殿のお気には召しませんでしたかな？何、私が指揮するこのマシーンランドは人間虐殺研究所も兼ねている、と言うことだよ」

ニオン「人間虐殺研究所……!!？」



ランバ「そう。いかにすれば人間を簡単に手早く地上から一掃できるかと言う事を、各地から集めた捕虜共を使って実験しているんだよ」

ランバ「細菌、熱、毒、化学兵器……。どれもサル共を一掃するには十分なんだが……どれも地上支配後、恐竜帝国にも大きな障害となるのう」

ニオン「…こんなことを、ゴール様も認めていると言うのか!？」

ランバ「無論。むしろこれは、ゴール様直々の命によって遂行されている。何者も、口を挟む事は許されん」

ニオン「ゴール様が、直々に…!？」

もう一度、眼下の地獄絵図に眼を落とす。

ニオン「コレが恐竜帝国のやり方なのか…!？」

ランバ「ニオン殿。貴殿もあまり真面目に考えなされるな。このサル共に勝てば地上での暮らしは我ら恐竜帝国のものになるんだぞ?それに手段など選んでいてどうする?」

ニオン「これでは最早戦争ではない!一方的な虐殺ではないか!？」

ランバ「その通りだとも。その何が悪い?手段は問わず、恐竜帝国が勝てば良いのだ。ふはははは…!!」

ニオン「っ…!聞くに絶えん!こんなもので得られる民達の平穏など…っ!」

卯月『笑顔は、私の…うん。私達人間の活力なんです!!』

ランバ「ふははは！愉快、愉快じゃ！実に愉快っ!!」

ニオン「これが活力だと言うのか…!?俺達、爬虫人類の…っ!」

—。

くくく 格納庫 ゲットマシン発進カタパルト くくく

アーニヤ「ホントに、イーグル号には、誰も乗らなくて…いいんですか？」

凜「うん。イーグル号のパイロットは、必ず連れて帰ってくるから」

みく「トーゼンにや！卯月ちゃんを連れて帰ってこれなかったら…、ここに帰ってくる必要もないにや!!」

未央「分かてるよ。もし卯月を連れて帰れなかったら、…その時は、ゲッターを自爆させて、敵の拠点をお土産に卯月の後を追うよ」

菜々「未央ちゃん、それは…!」

瑞樹「貴女達の覚悟、しっかりと確認したわ。最悪の結果を残さない為にも、行きなさい!」

凜「うん!いつてきます…!」

晶葉「いつてらっしやい。ただいまと言えるのを、待ってるぞ」

未央「ゲットマシン!発進!!」

くくく 上空 くくく

凜「そろそろ鹿児島湾……。桜島上空か。…未央」

未央「恐竜帝国の拠点は、もう目前、って訳だね」

凜「その割には、大分静かだけど…」

早乙女『——ゲッターチーム、応答せよ』

凜「早乙女博士！」

早乙女『凜くん。そろそろ目的地上空だが、様子はどうだね?』

未央「様子も何も、以前変わり無しって感じ」

凜「本当に、この地下に敵の本拠地が?」

早乙女『拠点を悟られないように、息を潜めているのかもしれない。くれぐれも油断せんでくれ』

凜「了解」

早乙女『桜島は今尚活動している活火山だ。恐竜帝国も、もしかしたらその潤沢なマグマエネルギーを求め、そこに拠点を置いている可能性が高い』

未央「つまり、敵の拠点が置いてある場所は…」

凜「マグマ層の近く…!」

早乙女『ゲッターの装甲なら、マグマの熱にも数分なら耐える事が出来るだろう。し

かし問題はパイロットの方じゃ。マグマの放つ熱によつてコックピット内部も高温となり、幾らパイロットスーツで守られているとはいえ、長時間は耐えられるものではないかろう」

未央「うへえ、水持つてくるんだつたなあ」

凜「そんな高温状態なら、水筒の水も直ぐに沸騰しちゃうよ」

早乙女『地下100mからはこちらの通信も届かん。だからこれが、俺からの最後の通信になる』

早乙女『くれぐれも、無茶はせんでくれ。君達まで失つたら、元も子もないからの』  
未央「博士……。了解！」

凜「：地中を進むならゲッター2だ。未央、イーグル号の誘導は任せたよ」

未央「おう！任せたよ、凜！」

凜「チェンジゲッター！2ウツ!!」

上空でゲッター2にチェンジし、桜島沖に飛び込む。

海底を数歩進み、一点で静止。

凜「卯月の反応は、大体この辺りか……」

凜「ゲッタードリル！」

勢いよくドリルを地面に突き刺し、潜行を開始する。

早乙女「…頼んだぞ。凜くん、未央くん」

くくく 地底 くくく

未央「ううく…。何だか蒸し蒸ししてきたなあ」

凜「もうとつくに地下100mは過ぎてる。…私達はすっかり、孤立したわけだ」

未央「……」

凜「何?今更怖くなったの?」

未央「そ、そんなんじゃないやい!ただ、卯月を助け出すんだ、つて、武者震いで…」

凜「頼りにしてるよ。未央が気を紛らわせてくれるから、こつちも落ち着いていられる」

未央「ちよつとちよつと、私のポケにも返してくれる人がいなきや意味ないよ!」

凜「うん。大丈夫、全部返すから。言葉を絶やさなくてもらつて良い?そうしないと

色々と、押し潰されそうで」

未央「しぶりん…」

凜「ん…?」

ゲッター2のドリルが岩盤を砕いて、明るい空間が拓けてくる。

凜「ここは…」

未央「マグマの渓谷だあ!!」

マグマに転落しないよう、微かに突き出た岩盤の突起を足場に歩を進める。

凧「…どうやら、硬い岩盤を避けて掘ってるうちに卯月の反応があるポイントから、だいぶ離れたみたいだ」

未央「それで、目的地はこっち？」

凧「うん。こっちで合ってる筈。…あれは」

凧と未央の目の前に巨大な影がそびえ立つ。

未央「あれは、地底なのに…山？」

凧「…間違いない。卯月がいるのは、あそこだ」

未央「ええ!? あんな地獄の針山みたいなところに!？」

凧「反応はあの山の中からしてるんだよ。間違いがなければあの山…いや、あの要塞が…」

未央「恐竜帝国の本拠地!」

ゲッター2が近づくほど針の山の様相を見せていたその陰影はハッキリとしてくる。

未央「見れば見るほど、人工物には見ええないけど…」

凧「私達とは文化が違うって事かな」

未央「入り口、何処から入れるか、分かる…?」

凧「普通見えるところにはないと思うし、さすがに正面から堂々とは行けないよ」

未央「それはそうだけどさく……。そうだ、裏に回ってみよう」

凜「分かった」

ゲッター一機がギリギリ通れる幅の道を回り、マシーンランドの裏側へ。

凜「…これは」

未央「水…？上から落ちてきてるみたいだけど」

凜「…この上つて言ったら…」

未央「桜島沖の海水か……。そつか！この海水で中の熱を冷ましてるんだよ！」

凜「爬虫人類でも、このマグマに近い環境は過酷って事？」

未央「そ！もしそうだとすれば…」

ゲッター2のカメラを使い、海水の落ちる広大な水溜まりを注意深く観察する。

未央「…あつた！海水を取り込む吸水口だ！」

凜「そこならなら、この中に侵入できる？」

未央「多分。この針山のどこに繋がってるかは分からないけど」

凜「冴えてるね、未央」

未央「そりや勿論。卯月の命が掛かっているかもしれないんだから。…それより2のま

まで大丈夫？ゲッター3なら、これくらいの潮流耐えられるけど…」

凜「今ここで合体すれば、敵に感づかれる可能性が高い。吸水口の潮流は激しいかも

しれないけど、ゲッター2のまま侵入するよ」

未央「分かった。姿勢制御のサポートはするから、凜は前進することに集中して」

凜「うん。ありがと。…それじゃ、行くよ——ッ！」

~~~~ マシーランド内部 冷却室 ~~~~

爬虫人兵「交代だ」

爬虫人兵2「おつ、ご苦労さん。…にしても、このマシーランドの中の見張りとか、ホントに必要なのか？」

爬虫人兵「仕事に文句言うなよ。万に一つってこともある」

爬虫人兵2「こんなマグマの近くまでわざわざ攻めてくる奴がいたら、そりゃ余程神経のブツ飛んでる奴だろうよ」

爬虫人兵「そう言うなって。お陰で前線に出なくていい、楽な仕事なんだからよ」

爬虫人兵2「はははっ！ 違う。…：…ん？」

爬虫人兵「どうした？」

爬虫人兵2「いや、今貯水プールの中に、何かが…」

爬虫人兵「何だ？ また魚でも紛れ込んだか？」

ズズズズズ…

ズオオツ

ゲッター2「!!」

爬虫人兵2「あ、あ、ああ…ッ!!」

爬虫人兵「神経ブツ飛んだ奴が来たぞおおおおお!!」

マシーンランド 内部

凜「中に入れた!?!」

未央「入って早々、敵に見つかったけど?」

凜「どのみちゲッターの巨体だったら遅かれ早かれ見つかったよ。なら、堂々とした方がいい」

未央「敵に見つかってこれから迎撃が出てきて、どうやって卯月を見つけ出すのさ?」

凜「派手に暴れる! そうすれば、卯月だって私達が来たのに気付くし、混乱に乗じて脱出できるかもしれない」

未央「え、えらくシンプルだね…?」

凜「そういう方が好きでしょ?」

未央「勿論! さ、そうと決まれば盛大に恐竜帝国の本拠地を破壊してやろう!!」

凜「うん! 卯月と合流するまで力の限り破壊してやる…っ!!」

凜「ドリルミサイルッ!」

ゲッター2のドリルがマシーンランドの薄い外壁を破壊し、風穴を開ける。

未央「そうだ！手当たり次第にぶっ壊せ!!」

爬虫人兵3「て、敵襲！」

爬虫人兵4「ゲッターだ！ゲッターロボが攻めてきた！」

歩兵の爬虫人兵が、ゲッター2に対して携行したライフルを放ち、ゲッター2の表装に小さな火花を弾かせる。

未央「…流石に生身の爬虫人を撃つするには、抵抗があるな…」

凜「卯月の命と、天秤に掛ける気はないよ！」

凜「ドリルストーム!!」

爬虫人兵、s「こわああああああっ!!」

メカザウルスすら持ち上げるゲッター2のドリルストームが爬虫人兵の群を舞い上げ、下の貯水プールへと叩き落としていく。

凜「卯月…!!どこにいるの…?」

くくく マシーンランド メカザウルス格納庫 くくく

ランバ「えええいっ！状況はどうなっている!？」

爬虫人兵「はっ！ゲッターロボは冷却室のある第三区画を抜け、メカザウルスの第二格納庫がある第五区画に侵入しようとしています！」

ランバ「よもやゲッター自ら襲撃してこようとはな…！面白いッ！」

ニオン「随分と慌ただしくなってきたな。ランバ」

ランバ「ニオンか。此度の襲撃、流石に驚いたが、何のことはない。そこで見ているが良い」

ニオン「ほう？」

ランバ「我がマシンランドを、連中の墓場にしてくれるわ！私が帝王ゴール直々に賜りし、このメカザウルス・ギガでなあ!!」

ニオン「……」

くくく マシンランド メカザウルス格納庫 くくく

凜「ゲッタードリル!!」

ゲッター2がまだ誰も乗り込んでない無人のメカザウルスをドリルで打ち砕く。

凜「…つと、これで何体ぐらい倒したんだろ」

未央「さあ？多分十機は超えてると思ったけど。取り敢えず、この格納庫にあるメカザウルスは全部やつつけたんじゃない？」

凜「そうだといいけど。金属反応が一つ、こっちに向かつてる」

未央「…ホントだ！しかもこれまでに見たメカザウルスよりも圧倒的に金属反応が強い！」

凜「相対距離30！この壁一枚向こうだ来るよ！」

未央「先手必勝だよ！凜」

凜「分かっている！ゲッター1だけの武器と思われてるかもしれないけど…」

凜「——ゲッタービームツ!!」

ゲッター2の両目からゲッター1のものとは質の異なるビームを放ち、外壁後と、向こうに現れたメカザウルスを攻撃する。

未央「やったの!?!」

凜「まだまだ！金属反応は消えてない!」

「クッククックツ……この程度か？ゲッターロボ!」

凜「何……?」

ランバ「この程度ならば、恐るるに足らず!」

未央「無傷……嘘でしょ!?!爬虫人もメカザウルスもゲッター線には弱い筈なのに!」

ランバ「我らが何時までも、ゲッター線に怯え続ける種族だと思っていたか!このメカザウルス・ギガこそ、ゲッターを倒すために生まれた、ゲッター線を克服したメカザウルスなのだ!!」

未央「ゲッター線を克服した!?!」

凜「今までにない強い金属反応はそれが原因って事だね。きつとあの全身を覆ってる装甲がゲッター線を中和してるんだ!」

未央「な、成る程…」

ランバ「中々に聡いな。しかし、それだけがこのギガが対ゲッター用のメカザウルスと言われる所以ではないぞ！」

凜「どういう事!？」

ランバ「見せてやろう! 戦闘モード、対ゲッター2!」

メカザウルス・ギガの両腕が内部へと格納され、代わりにゲッター2のドリルとマジックハンドを模倣した腕が姿を現す。

未央「…何だよそれ! ただ武器を真似ただけじゃん!!」

凜「そんなので対ゲッター用何て、笑わせないで!」

ランバ「ならば向かってくるといい」

未央「凜!!」

凜「速攻でカタを付ける…!」

凜「ゲッタービジョン!」

瞬間的な高速移動で、ギガの背後へと回り込む。

凜「ゲッタードリル!!」

ランバ「——ッ!」

凜「何…!?!」

背後からのゲッタードリルをギガのマジックハンドが受け止める。

ランバ「貴様らの戦闘パターンは全てこのメカザウルス・ギガに記録されている…」
ランバ「貴様がゲッタービジョンを使ったあとに、こちらの死角に回り込むことは既に計算済みよ!!」

凜「うあつ…!!」

マジックハンドでゲッタードリルを掴んだまま、ゲッター2を投げ飛ばす。

凜「っ——うう…」

未央「凜!大丈夫!?!」

凜「何とかね…。そっちはなんともない?」

未央「勿論!凜が上手い具合に受け身をとってくれたからね」

凜「…気づいてたんだ」

未央「当たり前じゃん!それよりも今は…」

凜「こいつをどうするか、だね」

未央「まさか私達の戦闘データが全部記録されてるんじゃないや、下手に手は出せないね」

凜「こつちが動いた瞬間返り討ちだからね。…何か手はある?」

未央「…一個だけ。思い付いたことがあるんだけど」

凜「何?」

未央「これは三人揃わなきゃ、卯月が揃わなきゃ使えない……!」

凜「そっか……。けど、今相手に背中を見せるわけにはいかないね」

未央「その通り!だから……卯月が来るのを信じて待つ!」

凜「分かった!」

未央「一先ずはゲッター3だよ!耐久力なら、あっちの方があつ!」

凜「よし、オープンゲッター!!」

ランバ「ほう……このスペースで合体する気か。だが、どの姿で現れようと無駄なこ
と」

未央「チェンジ!ゲッター3イッ!!」

分離した三機のマシンがギガをすり抜けて背後で合体する。

ランバ「ふははは!知っているぞ!ゲッター3、貴様の必殺技は大雪山おろしだったな。だが、こんな狭い空間でそれが出来るかな?」

凜「相手の言うとおりで。どうやって戦うつもり?」

未央「ふっふっくん!そんなのはやってみなくちゃ分からない!」

未央「パワーアーム!!」

ゲッター3の剛腕がギガを取り押さえる。

ランバ「むっ!?!」

未央「そおおおりやあああああ!!」

そのまま、大雪山おろしではなく、力任せに放り投げた。

未央「大雪山おろしには、こんな使い方だつてある!」

ゲッター3を一気に回転させる。

未央「大雪山!おろしパンチ!!」

そして、落下してきたギガを大雪山おろしの回転と遠心力を込めた拳で、思いっきり殴り付ける。

くくく マシーンランド 独房 くくく

卯月「あうう……!すごい揺れ……一体外で何が」

卯月「きやあつ!!」

轟音と土煙を巻き上げ、卯月のいる独房の背後が崩れ去る。

卯月「ケホツ……ケホツ……。これは、量産型ゲッター……!」

ニオン『まだここにいたか』

卯月「ニオンさん……!」

ニオン『状況は大方察していると思うが、俺達にとっての敵……ゲッターが現れた。貴様を救うためにな』

卯月「やっぱり……。凜ちゃん、未央ちゃん……!」

ニオン『乗れ』

量産型ゲッターの手を卯月の前に差し出す。

卯月「凜ちゃん達と、戦うつもりですか？」

ニオン『まさか。今の俺の任務はこのゲッターを恐竜帝国本隊まで持ち帰る事だ。性能がゲッターロボより劣る今の状態では、勝てるものも勝てんしな』

卯月「だったら…」

ニオン『お前も俺と来い。お前には、まだ利用価値がある』

卯月「利用価値、ですか…?」

ニオン『そうだ。お前は、奴等からゲッターを奪うための人質だ。こんなところで失うわけにはいかない』

卯月「……」

ニオン『お前も命は粗末にしたりはあるまい。乗れ…!』

卯月「…どうして、そんな話を私にするんですか？」

ニオン『何…?』

卯月「私が入質だって言うのなら、黙って無理矢理、連れ出せば良いでしょう!？」

ニオン「……」

卯月「…やっぱ、貴方は優しい人です」

ニオン『どういう意味だ？』

卯月「私を、助けてくれるんですよね？この独房を破壊して、凜ちゃん達のところに、ゲッターのところに行かせるために……！」

ニオン『フツ……甘く見られたものだな。俺の言葉に偽りはない。第一、辺りは火の海。爬虫人の兵もいる。辿り着けると思っているのか？』

卯月「凜ちゃんと未央ちゃんが頑張つて来てくれたんです！だから私も頑張らないと！絶対に……辿り着いてみせます!!」

ニオン『そうか……。——ふんっ!!』

卯月「きやあっ!!」

量産型ゲッターの拳が卯月の独房の扉を破壊する。

ニオン『——行け』

卯月「ニオンさん……」

ニオン『勘違いするなよ。今の何の力も持たない貴様を倒しても意味がない。完全ではないゲッターを倒しても意味がないと思つたから、手を貸すだけだ』

卯月「……」

ニオン『尤も、貴様がここから無事にゲッターの元に辿り着けるとも思つてはいないがな』

爬虫人兵「な、何の音だ!？」

爬虫人兵2「み、見ろ!人間を閉じ込めた独房が……!!」

ニオン『——はあっ!!』

爬虫人兵, s「うわあああああっ!？」

扉を破壊した拳を横にスイングし、集まった爬虫人兵を纏めて殴り飛ばす。

ニオン『さあ早く行け!そして渋谷凜に伝えろ!貴様との決着は必ずこの手で付けるとな!!』

卯月「…分かりました!ありがとうございますっ!」

独房を飛び出して駆け出していく卯月。

爬虫人兵3「捕虜が逃げたぞー!追えー!!」

ニオン『ふん……!』

爬虫人兵3「ぐへえっ!」

卯月を追うため、仲間に召集を掛けようとした爬虫人兵を量産型ゲッターの拳を降り下ろし、潰した。

くくく マシーンランド メカザウルス格納庫 くくく

ランバ「ぐぬぬ……!中々やるではないか、ゲッターロボ」

未央「へへっ!そりゃね。卯月を助け出すまでは、負けるわけにはいかないって!」

ランバ「見上げた根性だ。…だが！」

メカザウルス・ギガの伸縮する両腕がゲッター3を拘束する。

未央「ぐっ…！今度はゲッター3のパワーアームのパクリい…!？」

キヤタピラを逆走させて、ギガの拘束から逃れようとするもパワーが上がらない。

未央「くっそおっ！どうなってるのさ、凜!!」

凜「…ダメだ！やっぱりいつもよりパワーが上がらない！卯月がいないと……!」

ランバ「これでどうだああああ!!」

二人「きやあああああっ!!」

ギガのパワーによって軽々と投げ飛ばされる。

未央「くう…！強い…っ!!」

凜「ゲッターを真似した奴の戦法もだけど、性能もこれまでメカザウルスとは段違いだ…!」

ランバ「ぐっはっはっはっはっは！当然ではないか！貴様らよりも遥かに優れた科学技術を持つ我ら恐竜帝国が、ゲッターを超えるメカザウルスを造れんとでも？」

未央「何い…!?!」

ランバ「ふははははは!!このメカザウルス・ギガが量産された暁には、貴様らゲッターなど相手ではないわ!!」

凜「そんな事、あるわけない……!」

未央「凜の言うとおり!ゲッターと私達がいる限り、お前たち恐竜帝国の好きには…絶対にさせない!!」

アクセルを踏み締めて、ゲッター3を突撃させる。

未央「うおおおおお!!」

ギガと組み合う。

ランバ「馬鹿が!パワーはギガの方が上だと言っておろう!」

未央「力比べなら、ゲッター3だつてえ…ツ!!」

ランバ「返り討ちにしてくれるはああ!!」

簡単に投げ飛ばされ、外壁に叩き付けられるゲッター3。

未央「ぐう…っ!!」

ランバ「くらえええいっ!!」

ギガの背中のミサイルが、容赦なくゲッター3を襲う。

未央「きゃあああああっ!!?」

凜「うっ…!ダメ!ジレベル上昇!…これ以上は!」

ランバ「ふははは!!遂にゲッターも年貢の納め時だあ!!」

未央「っ!まだまだだ!!ゲッターは…こんなもんじゃ…!!」

ランバ「死ねえ!!」

凜「っ!」

「させません!!」

ロケット弾がギガの横つ面に当たり、爆ぜる。

ランバ「何だ!?!」

未央「あれは…」

卯月「はあ…はあ…はあ…!」

凜「卯月!」

卯月「凜ちゃん、未央ちゃん!」

未央「そのロケットランチャーは?」

卯月「そこに落ちてたのを、さっき拾いました!」

未央「拾ったって…」

凜「でも、無事でよかった…」

卯月「はいっ!二人も…:助けに来てくれるって、信じてました…:…!」

爬虫人兵「いたぞお!脱走者だ!!」

未央「っ!パワーアーム!!」

爬虫人兵, s 「ぐわあああ〜!!?」

卯月の背後に迫った爬虫人兵を勢いよく伸ばしたパワーアームで吹き飛ばす。

未央「卯月掴まって！」

卯月「はいっ！」

ゲッター3の中指辺りにしがみついたのを確認し、腕を引き戻して胴体にあるイーグル号のコックピットへと運ぶ。

ランバ「私を忘れてはおらぬかあ!？」

未央「ゲッターミサイル!!」

ランバ「ぐわっ!!」

ゲッターミサイルに怯んでいる隙に卯月はイーグル号のシートへと滑り込む。

凜「大丈夫? いけそう?」

卯月「はい! 大丈夫です!!」

凜「分かった。もう少しだけ頑張つて。それと、…ごめん」

卯月「…全部、無事に脱出できてからお話ししましょう。今は恐竜帝国を倒します!」

ランバ「おのれ…! 捕虜をみすみす取り逃がすとは…。こうなれば、ゲッターごと纏めて始末してくれる!!」

未央「よし、三人揃ったからにはこつちのもんだ!」

凜「さつき言つてたね。卯月が揃えば、奴を倒す秘策が出来るつて」

卯月「秘策、ですか？」

凜「奴は今までの私達の戦闘データを分析して開発されたメカザウルス…。単純に変形しただけじゃ勝ち目は薄いよ？」

未央「だから、まずはチェンジゲッターを繰り返し返して敵を攪乱する！」

卯月「何だか分かりませんが、分かりました！」

未央「オープンゲッター！」

三機のマシンがギガの周囲にまとわり着くように飛び、ギガの動きを牽制する。

ランバ「小癪な…！ゲッター1へ変形する気だな！」

卯月「チェンジゲッター1！」

ランバ「やはり！戦闘モード、対ゲッター1……」

卯月「オープンゲッター！」

ランバ「何い!？」

凜「チェンジゲッター2！」

凜「オープンゲッター！」

未央「チェンジゲッター3！」

未央「オープンゲッター！」

ランバ「な、何だこいつら……!？」

卯月「チエンジゲッターー！」

ランバ「ふふ…っ！また分離するつもりだろう？そんな事繰り返しても意味はな…」

卯月「ゲッターキック!!」

ランバ「ぐふう…!!?」

卯月「オープンゲット！」

ランバ「く、くそお…！こやつら、これではどの形態で仕掛けてくるかまるで分からん!!」

未央「ふふっ！行動パターンが三つもあれば、流石の爬虫人類も反応出来ないでしょ」

凜「で、次はどうするの？」

未央「まずはゲッター2のドリルとスピードで攪乱攻撃！」

凜「分かった！チエンジゲッター！2ウツ!!」

凜「ゲッタードリル!!」

ランバ「ぬう!？」

凜「ゲッタービジョン！」

ランバ「こいつ…正面に…!!」

凜「アンタが教えてくれたからね。死角ばかりがいいわけじゃないって!!」

ランバ「どわあっ!!」

ギガの周囲をゲッタービジョンで高速移動しながら、真つ正面にゲッタードリルを突き込む。

凜「オープンゲット！」

未央「チェンジゲッター！3イツ！！」

未央「ゲッターミサイル！！」

ランバ「のわっ!？」

未央「パワーアーム！！」

ミサイルで怯んだギガをパワーアームで縛り上げる。

凜「未央、思いつきりやって!!」

未央「合点！——必殺、大雪山おろしいいいいい！！」

マシーンランドの中央で大雪山下ろしが竜巻を起こす。

未央「オープンゲット！」

投げ飛ばされ、マグマの海に落ちたギガをゲットマシンが追う。

凜「トドメは！」

未央「卯月のゲッタービームで!!」

卯月「分かりました！」

卯月「チエエエエエンジゲッターアアアー!!1ツ!!」

ランバ「ふんっ……！馬鹿め……このギガにゲッター線は効かぬ事を忘れたか!?」

卯月「未央ちゃん凜ちゃん！二人も一緒に！」

未央「オツケー！やってやろうじゃん!!」

凜「三つの心を一つに……ッ!!」

未央「ゲッター！」

凜「ゲッター！」

卯月「ゲッターア……ッ！」

三人「「「「ビイーーーームッ!!」」

三人の心を合わせた極大クラスのゲッタービームがギガの全身を貫く。

ランバ「ぬ、ぬおお!?これは……！我らの計算を凌駕しておる!!?こんな、こんな事が……!!?」

凜「100%計算できない力……」

未央「それが私達の友情パワーって奴？」

卯月「終わりです……！これで!!」

ランバ「お、おわあああああああああああああつ……!!」

マグマの中で爆散して消えるメカザウルス・ギガ。同時に大地が激しく鳴動を始めた。

未央「な、何…!？」

凜「…桜島は活火山!今のゲッタービームで活動が刺激されて…噴火が早まったんだ!」

卯月「そんな…!早く脱出しなきゃ…!」

最高速で、火山の噴火口から脱出するゲッター1。

程なくして、地下のマシーナランドを巻き込んだ桜島の大噴火が始まった――。

~~~~ 早乙女研究所 談話室 ~~~~

菜々「あ、あわわわ…!」

卯月「……」 ツーン

凜「……」

未央「……」

菜々「ど、どうすればいいんですか?あれ…」

瑞樹「ま、私たちじゃどうしようもないわね」

みく「あゝそれは卯月ちゃん、珍しく切れてるにや。何と言うか、そう言うオーラで分かるにや」

瑞樹「分かるわ」

晶葉「帰ってきて早々。正座させられる羽目になるとはな。あの二人も…」

卯月「……。いいですか？ 凜ちゃん、未央ちゃん。私は怒ってます」

未央「……はい」

卯月「私が敵に捕まったとか、戦闘で喧嘩した事を怒ってるんじゃないやありません。それで周りに迷惑を掛けたことを怒っているんです。分かりますか？」

凜「……重々、反省しています」

アーニヤ「ウツキ……、スゴク、怒ってます。ワタシのМ а т ь……ママより恐いです」  
美波「普段滅多に怒らない人ほど、怒らせると怖いものなのよ（私も気を付けよう……）」

卯月「今回は私一人で済んで、お二人が助けてくれたから、何もなくて済みました。……でも、コレがもつと沢山の人だったら、もつとたくさんさんの犠牲に繋がっていたら……っ？」  
凜「卯月……」

卯月「私……イヤ、なんです……。もう、プロデューサーみたいに大切な人の誰かがいなくなるのは！ だから……！」

ギユツ

未央「あ……！ う、卯月……？」

卯月にキツく抱き締められる凜と未央。

卯月「もう絶対、こんな喧嘩しないで下さいっ……！ 凜ちゃんでも、未央ちゃんでも居

なくなったら……私、私っ……!!」

凜「……ごめん。私、自分の事しか見てなかった。本当にごめん」

未央「私も。自分勝手にみんなを引っ張って、ごめん。絶対に、卯月の前から勝手に居なくなったりしないから」

卯月「約束、ですよ……?」

未央「うん。約束」

凜「私も、約束する」

未央「だから、またよろしく頼むよ。——しまむー、しぶりん!」

卯月「……はいっ!未央ちゃん!凜ちゃん!」

凜「やっぱり、未央にはそうやって呼ばれた方がしっくり来るかな」

未央「ふふっ。何それ……あははは!」

卯月「ふふふっ♪」

凜「ふふっ……!」

瑞樹「——やれやれ、やっと一段落ね」

早乙女「じゃが、まだ予断は許されんぞ」

みく「早乙女博士!?!」

晶葉「……しかし博士。今回の件で敵の本拠地……マシーンランドは倒せたのでは?」

早乙女「それだが、ゲッターの記録した映像を見る限り、あれが連中の本隊ではないだろう」

アーニヤ「えっ……？」

早乙女「敵の本拠地にしては規模が小さすぎる。それに、もし敵の本拠地ならば、簡単に発見されるようなことはせん筈じゃ」

菜々「もし、あそこがホントに敵の本拠地だったら、捕まってた卯月ちゃんを殺すなら……、それなりの措置をとってたって事ですか!？」

早乙女「うむ。儂はあれは、無数にある恐竜帝国の侵略基地の一つだと考えておる」

美波「それじゃあ……！侵略基地の一つを失った敵は……！」

瑞樹「……勝利に焦って一大攻勢を掛けてくるかもしれないわね」

『ふははははは——!!』

卯月「っ!？」

早乙女「この声は……!？」

研究員『は、博士……！至急、管制室に来て下さい!』

晶葉「一体何が起ころうと言うんだ!？」

凜「未央、卯月！私達も行こう！」

未央「お、おう……！」

卯月「分かりました！」

~~~~~ 早乙女研究所 管制室 ~~~~~

早乙女「何事じゃ!?何があつた!?!」

研究員「さ、早乙女博士……あれを……空を見て下さいっ!」

卯月「あれは……!」

研究員の指す空に映っていたのは巨大な爬虫人類の影だった。

『驕り高ぶる人間共よ。我が名は恐竜帝国帝王、ゴール!!』

みく「恐竜帝国……!」

菜々「帝王……っ!」

瑞樹「ゴールですって……!?!」

ゴール『これまで貴様らに散々煮え湯を飲まされ続けてきたが……、それも今日で最後

だ!!』

ゴール『我ら恐竜帝国は、これより人類に対し、最終作戦を開始する——!!』

美波「さ、最終作戦ですって!!!」

凜「勝手なことを……!卯月、未央出撃だよ!」

晶葉「待て。行つても無駄だ」

卯月「晶葉ちゃん!」

晶葉「よく見ろ。あいつの姿は、積乱雲に投影した立体映像だ。今ゲッターで出撃しても意味はない」

未央「くっ…！それじゃ、どうしろって…」

アーニヤ「落ち着いて下さい。…今は、話を最後まで聞きましょう」

ゴール『これより一週間。貴様ら人類に猶予をやろう…』

ゴール『大人しく恐竜帝国の軍門に下るか、我らが誇るメカザウルスに蹂躪されるか。貴様らにとって尤も相応しい最後を選ぶが良い』

ゴール『今から何処へ逃げようと、我らに倒される結末は変わらんのだからな。ふはははは——ッ!!』

空に霧散して消えていく帝王ゴールの影。

未央「畜生！言いたいことだけ言って消えやがってえ!!」

美波「今から一週間後に、恐竜帝国の一大攻勢が…」

瑞樹「最悪の状況になったわけね」

みく「美波ちゃんも、瑞樹さんもそんな弱気でどうするにや!」

卯月「そうです！私達にはまだ、ゲッターロボがあります！負けるかなんて、まだ分りませんよ」

菜々「でも、ホントにナナ達で勝てるんでしょうか…?」

凜「やつてもないことで答えは決めたくない。私は最後まで諦めないよ……！」

早乙女「……今のゴールの宣戦布告、来たのはここだけか？」

研究員「いえ。正確ではありませんが、あの宣告は日本全国に発せられた可能性があります。現に内閣府と防衛省から早乙女研究所に緊急の連絡が入っています」

早乙女「ぬう……！ここに来て正念場とは……、タイミングが悪すぎる……！」

晶葉「ですが、やらなくてはなりません」

早乙女「晶葉くん……！」

晶葉「帝王ゴールが作った猶予一週間。それで講じ得る対策を考え、万全の状態を……。それが出来なければ、人類は滅ぶだけです。そうでしょうか？」

早乙女「……。ふふふ……。晶葉くんの言うとおりかもしれん。瀬戸際はとうの昔に迎えていたのかも知れんなあ」

晶葉「早乙女博士……！」

卯月「私達も、覚悟は出来てます！」

凜「プロデューサーを失った、あの日にね」

未央「恐竜帝国はこの手で滅ぼす！だからこんな日が来るのも、分かってたよ」

みく「勝つか負けるかなんて、そんなのどうでもいいにゃ！」

瑞樹「ただ、何か出来るのに何もせずにいるのは落ち着かないわよね。分かるわ」

葉々「ナナだって、ナナだって…！怖いですけど…このままアイドルに続けることが出来なくなる方が、ナナにとってはもっと怖いんです！」

美波「恐竜帝国に見せなくちゃね。人間の底力って奴を！」

アーニャ「D a。ワタシ達だって、負けません!!」

早乙女「諸君…：…」

早乙女「これより早乙女研究所は、恐竜帝国との決戦に備える為、非常事態宣言を発する！」

早乙女「アイドル活動をしている者も、この一週間の活動を休止し、研究所での活動に専念してもらう！」

早乙女「ここが人類と、恐竜帝国との正念場じゃ。すまんが、諸君の命を預からせてくれ!!」

全員「了解（にや）っ!!」

つづく

第7話 『決戦！ゲッター対ゲッター!!』

~~~~~ 市街地~~~~~

市民「おい、早くしろ！」

市民2「分かっているわよ！この子が……」

市民「どうした……って、何だ、その大きなぬいぐるみは!?!」

子供「これ、パパに買ってもらったものだから……」

市民2「荷物になるから置いてきなさいって言ってるのに……」

市民「……。いいじゃないか。ぬいぐるみの一つくらい」

市民2「アナタ！」

市民「これから先、生き残れるかも分からないんだ。宝物くらい、持たせてやれ」

市民2「……」

市民「恐竜帝国の侵攻が何時になるかも分からない。急ぐぞ」

市民2「……分かったわよ。ほら、ついてらっしゃい」

子供「うん！」

ブロロロ……

瑞樹「……今の最後の避難民に、なるのかしらね」

みく「ここから先は、危険区域で立入禁止区域されたから、多分間違いないと思うよ」  
瑞樹「この街も、大分静かになったわね」

菜々「そりゃあ、恐竜帝国の宣戦布告があつて6日目。帝王ゴールの言葉通りなら、明日が総攻撃の日ですからねー」

みく「東京全域も、恐竜帝国の総攻撃の標的にされる可能性が高いから、少しでも遠くに逃げよつて思うのは当然にゃ」

瑞樹「今更、何処へ逃げたつて一緒だと思ふけどね」

みく「…瑞樹さん。みく達がそう言うのは不謹慎だと思ふにゃ」

瑞樹「分かつてるわよ。ただ、結局どこに行つても同じなら、自分の死に場所くらい自分で決めたいと思わない?」

菜々「ナナ達が死ぬ時は、それはゲッターのコックピットの中ですから。選ぶようがないんじゃない?」

みく「そうとも限らないよ。恐竜帝国との戦いに勝つて、みく達が生き残れば、死に場所は選べるようになるにゃ」

瑞樹「…前向きね。貴女」

みく「伊達に大阪で生まれてないよ。瑞樹さんだつて同じでしょ」

瑞樹「そうね。当然私も、死ぬまで諦めるつもりはないわよ」

菜々「勿論ナナだって同じですよ！3人よらば何とやら。必ず勝って、平和を取り戻して見せましょう！」

瑞樹「ええつ。その為に、与えられた任務はしっかりこなしましょう！」

菜々「はいつ、ナナ達の買い出し作戦、必ず完遂させましょう！」

みく「買い出しと言う名の、誰もいないスーパーからの略奪、じゃないの？」

瑞樹「非常事態につき、よ。それじゃあ二人とも、飛ばすわよ！」

一台の白いワゴンが、誰もいない首都高速を走り抜けていった――。

くくく 早乙女研究所 格納庫 くくく

古田「大将！ゲッターロボが帰ってきまうす！」

整備主任「おう。ドックへの搬入が終わった奴から整備に入れ!!」

古田「了解ッス！」

主任「…っはあ」

晶葉「随分と深い溜め息だな？主任」

主任「！これは、晶葉女史。お疲れ様です」

晶葉「女史と言う呼び名は止めてくれと……それに、私に対してはそう堅苦しくしないでいいと、毎度言っている筈だが？」

主任「いやいや、そう言うに値する御仁だと思つてますぜ? 少なくとも、早乙女博士と肩を並べられるつて事だけで立派ですわ」

晶葉「肩を並べてなど…。どれだけ天才を自称していても、ここでは若輩の科学者駆け出しだ」

主任「そんな事はねえですよ。もつと自分に、自信を持ちなつて。俺が晶葉ちゃんくらの年の頃は、近所の敷地に小便垂らして、学校のセンセに説教食らつてましたから! あははは!!」

晶葉「そ、そうか?…それよりも、忙しそうだな?」

主任「ああ。ご覧の通り、つてえ感じです。連日連夜、恐竜帝国の侵攻に備えて偵察、警戒ですからね。ゲッターだつて悲鳴をあげます」

晶葉「そうか…:…すまない。私達科学部でもう少し正確に恐竜帝国の本拠地を探し出すことができれば…」

主任「そんな事ありません! 恐竜帝国のマシンランドの位置を特定出来るようになったのは、間違いなく早乙女博士や晶葉ちゃんの努力のお陰じゃないですか! 現に、この6日間の内に日本国内だけでも三ヶ所のマシンランドを破壊できてる!」

晶葉「しかし、そのいずれも敵の本拠地ではなかった」

主任「ですが、確実に恐竜帝国の痛手になつている筈です!」

晶葉「それは…」

主任「ゲッターを何時でも100%の状態で戦闘に出せるように、コンディションを整えてやるのが俺達の仕事です！ですから、晶葉ちゃん達はゲッターの損傷の事なんか考えず、人類を守ることだけを考えて下さいよ！」

晶葉「…すまない。気遣い、感謝する」

主任「このくらいで感謝されるんなら、この戦いが終わったらボーナスでも出して欲しいですな！がははは!!」

晶葉「ふっ。まあ、ボーナス代わりにって訳じゃないが、今はこれくらいだな」 つस्ता  
ドリ

主任「こいつは……？」

晶葉「私の所属しているプロダクションで売っていた栄養剤のようなものだ。整備班全員分くらいは用意してあるから、後で他のみんなにも分けてやってくれ」

主任「他の連中も喜ぶでしょう。有難う御座います」

晶葉「何、今君達整備班に倒れられたら困るからな。ゲッターを完璧に仕上げられるのは、全世界広しと言えど、君達くらいしかいないんだから」

主任「こいつあ蔵しい。替えがきかないとは、とんだブラック企業に来ちまったもんだ！」



晶葉「ははっ!精々ゲッターの為に身を粉にしてくれ」

主任「了解了解と。…んで、ここに何の用だったんです?」

晶葉「…用、とは?」

主任「ただ差し入れを持ってくる為に、いつも管制室に籠ってる晶葉ちゃんが出てくるわけではないでしょう?この年になれば、それくらい分かります」

晶葉「…。主任には敵わない」

主任「大したことじゃありません。…それで?」

晶葉「——明日、正確に言えば、予定としては明日、か。その戦い、勝てると思うか?」

主任「……」

晶葉「私達が持ち得るのは、ゲッターロボだけ。戦力差があるなんて言うのは、はじめから分かっている」

晶葉「だが、さっきも話した通り、連中のマシンランドを潰していく内に、奴等恐竜帝国の総戦力の底の見えなさが鮮明になって、…怖いんだ」

晶葉「この総攻撃に、ホントにゲッターと言う戦力だけで乗り切れるのか。そもそも、乗り切ったところで、戦いは終わりじゃない。恐竜帝国との戦いは、ほんの始まりに過ぎないのではないのか?」

主任「……」

晶葉「子供の下らない弱音だ。主任達も大変なものな。分かって、いるのだが……」

主任「勝ってもらわなくちゃ、困るでしょ」

晶葉「主任？」

主任「勝ってもらわなくちゃ困るって、そう言ってるんです。これからも、その先があつたとしても、だ」

晶葉「……。それは、勝算は……と言うニュアンスではないな」

主任「ええ。難しいことなんぞ、俺にや分かりません。だけど、俺に女房や娘がいて、他の奴等にも守りたい奴がいるんですから。その代表のゲッターロボには勝ってもらわにやいかんです」

晶葉「全ての人間が、自分の守りたいもの全てを守れるわけではないからな。……そうか、責任重大なのは、私達ではないか」

主任「馬鹿なことだつて、分かってます。年端もいかねえ女の子達に、自分達の命を預けて。自分は安全な後ろで結果を待つだけ。替わつてやれるなら替わつてやりたい……！」

晶葉「……それは多分、全ての日本国民が思っていることだ。主任一人が抱え込むことじゃない」

主任「ええ。でも、俺にやあいつらと同じ年くらいの娘がいるんです!だから、あいつらが戦場に出て、戦ってるってえ事実がとんでもなく辛い……!」

主任「けど俺にや、ゲッターに乗る資格がねえ!どんだけ頭下げて早乙女博士に頼み込んだって、絶対乗せてもらえねえし、乗ったとしても体に掛かるGや合体の衝撃で気絶しちゃうのだって分かりきってる!」

主任「だから!俺あゲッターを、どこへ出しても恥ずかしくねえくれえに完璧に仕上げて、あいつらに託してやるんですよ!頑張ってくれよ、って。ついでに人類や女房や、娘の未来も乗せてやってね」

晶葉「主任……。それが主任のこの戦いへの気持ち、か?」

主任「へいっ!なんだか少しこっ恥ずかしいですが、俺の気持ちです!だから晶葉ちゃんも、心配なんかしねえで信じましょ!あいつらが、笑顔で帰ってくる勝利って奴をよ!」

晶葉「……そうだな……って、頭を撫でるな!わ、私は、子供扱いされるのも嫌いなんだ……!」

主任「ははっ!こいつは失礼……どちらへ?」

晶葉「私の気は済んだ。管制室の方へ戻らせてもらおうよ」

主任「そうですか。これからお仕事、頑張って」

晶葉「それはお互い様だろう?……話を聞いてくれて、ありがとう。心が晴れた気分だよ」

主任「へへっ、ただ鬱憤を吐き出しただけです。大したことはしてねえや」

晶葉「私も、科学者として……いや、一人の人間として、信じてみるよ。ゲッターロボの勝利と、この地球の支配者があんなトカゲ人間なんかじゃない、って事をさ」

~~~~~パイロット待機室~~~~~

未央「ふいふい! 今日まで疲れたー!!」

卯月「はいっ、それじゃあこれをどうぞ! さつき晶葉ちゃんから貰ったスタドリです!」

未央「おお! 懐かしのこのラベルは!——っん、つく、ごくっ! くう!——キンキンに冷えてやがる……っ!」

卯月「ふふっ。凜ちゃんもどうぞ?」

凜「ああ、うん。ありがとう」

未央「どつたのしぶりん。また考え事?」

凜「……うん。今回もあいつは出てこなかったな、って」

卯月「あいつ……ニオンさん、ですか……?」

凜「恐竜帝国が総攻撃までの期間を一週間って決めたのは、私達に対して戦力的余裕

を見せつける他に、強奪した量産型ゲッターの解析や改造の必要があったからだと思うんだ」

凜「だから、量産型ゲッターの改造が終わる前に、何としても見つけ出して破壊したかったんだけど……」

未央「ん……。奴等がゲッターを使えるようになったって言うのは、確かに脅威かもしれないけど、心配しすぎじゃない?」

凜「ううん。ゲッターの強さは私達人人が知ってるんだから。心配しすぎってことは、ないんじゃないかな」

未央「それは……そうかも知れないけどさ」

凜「帝王ゴールとしては、ゲッターに対抗できる切り札として、利用したいはずだから……間違はなく敵の指揮中枢のある本隊の守備についていると思うんだけど……」

未央「つまり、今日破壊したマシンランドにそのニオンって爬虫人がいなかったから、今回の本隊じゃない、違うって事?」

凜「うん。私はそうだと思うてる」

卯月「凜ちゃんは……」

凜「どうしたの?卯月」

卯月「凜ちゃんは、ニオンさんと……戦うつもり、なんですか?」

凜「…そうだよ」

卯月「でも…！凜ちゃんとニオンさんは心を通じ合わせた、大切な人じゃないんですか？」

未央「……」

凜「……。…確かに、そうだったかもしれない。でもそれは、もう過去の事だよ」

未央「…しぶりんは、それでいいの？」

凜「良いも何も、あいつは自分が爬虫人類だって言うのを隠してたんだよ？」

卯月「それは、私達だって同じです。ゲッターのパイロットだって言うの、黙ってたじゃないですか」

凜「…爬虫人類は、私達からプロデューサーを奪った。憎むべき敵だよ」

未央「しぶりん…」

コンコン

卯月「…？はあい」

晶葉「卯月か。今そこに三人全員いるか？」

凜「うん。私も、未央も揃ってるよ」

未央「何かあった？」

晶葉「いや、明日に備えてのちよつとしたミーティングだ。各員の配置箇所などを今

一度確認したいから、休んでるところを悪いが会議室に来てくれ」

凜「そう言うことなら」

卯月「分かりました。すぐ支度しちゃうので、ちよつと待っていて下さい」

未央「それと、スタドリありがと!!」

晶葉「ああ、今の私に出来る精一杯だからな。…それでは、会議室で待っているぞ」

~~~~~ 翌日 ~~~~~

ゴール『ふふふふ……。ついに、ついにこの時が来たのだ』

ゴール『我らが先祖がゲッター線によつて住み処を追われ、地下深くに逃れ幾世霜

……』

ガレリイ『……』

バット『……』

ゴール『長かった。そして、長く、辛い苦しみの生活もついに報われる!』

ニオン『……』

ゴール『行けい!恐竜帝国の戦士達よ!この美しき青く澄んだこの星を、我ら恐竜帝

国の手に取り戻すのだ!!』

ワアアアアア!!

——領空。

空自兵「へへっ……！来たぜ。恐竜帝国の航空兵力の大群だ！」

空自兵2「大した数だが、こつから先にや俺達が絶対に通さねえ!!」

空自兵「よし、第一、第二、第三小隊は各自で散開。向かってくる敵を片っ端から太平洋に叩き落とせ!!」

空自兵， s 「了解!!」

——領土。

通信士「敵メカザウルス群、第一次防衛線を突破！BT第2師団が後退してきます！」  
陸自兵長「くそお……！トカゲ共めえ……っ！BT第3師団は速やかに前進！撤退してくる第2師団と何としても合流し、生還させろ!!」

BT P パイロット 「了解！つっても隊長！連中、どれだけ撃つてもキリがねえ!!」

兵長「いつものガッツはどうしたあ!!メカザウルスとの性能差くらい、腕と気合でカバーしてみせい!!」

BT P 「大事なトコで根性論ツスか!？」

兵長「ええい！貴様では話にならん！おい、お前！ありったけの火器と爆薬持ってこい！あんなトカゲ風情……俺が一人で駆逐してやる……っ!!」

陸自兵「そ、それはあまりにも無謀と言うものですよ、兵長殿くっ!!」



通信士「へ、兵長殿!!」

兵長「今度は何だ!!?」

通信士「だ、第二次防衛線……突破されました……!」

BTP「っ……!マジかよ……!」

兵長「っ……何てこった……!」

——領海。

通信士「巡洋艦あさぎり、ご、轟沈……!」

旗艦長「慌てるな!各艦に伝達!直ちに陣形を組み直し、あさぎりを失った分をカバーだ!!」

通信士「了解!」

副官「しかし、実際状況は圧倒的に不利です。海中からの攻撃に、戦艦では無力……。如何なさるおつもりですか?」

旗艦長「この日本の海を、奴等の好きにさせてたまるか!いざとなれば、本艦をぶつけてでも連中の動きを止めてみせる」

副官「勝てますかね?それで」

旗艦長「勝たねばならん。陸海空と、それぞれの方向から攻められている以上、ゲッターロボの救援も期待できん」

副官「敵の総戦力に対し、ゲッターロボはそのプロトタイプと合わせて二機ですか…。正直絶望的過ぎですね。…白旗でも掲げてみませんか？」

旗艦長「…それが通じる相手ならば、な。今はそんな気など毛頭ない」

副官「左様で」

通信士「本艦の直下より、熱源接近！」

旗艦長「ぐう……っ！面舵、急げえ!!」

〃〃〃 市街地 〃〃〃

市民「くそおろ！この街は安全なんじゃなかったのかよ！」

市民2「文句を言うなら敵に言え！そんな事より、さつさと逃げるぞ！」

子供「うう……！痛いよ、怖いよ……！」

市民「おい、あそこに子供が転んでるぞ！」

市民2「マジかよ。メカザウルスの足元じゃねえか……っ！」

市民3「誰かぁ！誰かうちの子を助けてえ!!」

市民「……」

市民2「……」

市民3「お願いよ……！誰かぁ!!」

メカザウルス『キシヤアアアツ!!』

子供「うわあああああああつ!!」

「ゲッタービーム!!」

メカザウルス『!?』

ドワツ

子供を踏み潰そうとしたメカザウルスをゲッタービームが貫き、破壊する。

市民「やつた!?ゲッタービームだ!」

市民2「ゲッターが…ゲッターロボが来てくれたのか!?……ん?」

市民「おい、ゲッターロボって、あんな女みてえな見た目してたかよ」

市民2「俺に聞くなよ。新型かなんかだろ。…多分」

市民「しかも2機も、どうなってやがるんだあ、こいつあ…」

美波「もう大丈夫よ。怪我はない?」

子供「うん…!どうもありがとう!お姉ちゃん…?」

市民3「本当に、もう…なんとお礼を言えいいのか…」

美波「いえ。それよりも、今度はお子さんの手を離さないであげてくださいね」

市民3「はい…!行くわよ!」

子供「う、うん!…頑張ってね、ゲッターロボ!」

美波「ええ!ふふっ!ありがとう」

アーニヤ「ミナミ…。避難民の救助は…」

美波「大丈夫。無事に救助できたわ」

アーニヤ「そう…。良かった、です」

美波「ええ。急場凌ぎとは言え、このゲッターQも、メカザウルス相手には役に立つみたいね」

アーニヤ「П р а в и л ь н о。これで、この街の人達の避難が終わるまで、時間を稼ぎましょう…！」

美波「ええ。これまで燻ってた分、思いつきりぶつけましょう！」

アーニヤ「Да！」

くくく 海上 くくく

通信士「あ、あ、ああ…!？」

旗艦長「これは…?!？」

副官「海面から、メカザウルスが、持ち上がっている!？」

旗艦長「い、一体何者だ…？誰がこんなこと」

「う、うう…：…うりやあああ!!」

海面に持ち上がったメカザウルスが遠くの海面に叩きつけられる。

旗艦長「あ、あれは…！ゲッター、ロボ…?!？」

未央「へっへっへん!ゲッター3!ただいま参上!」

旗艦長「な、何故だ!何故ここにゲッターが…!」

未央「ここだけじゃないよ!」

旗艦長「何!?!」

くくく 空中 くくく

「う、うわあああ!」

空自兵「滝崎いー!畜生があ!!」

「トマホーク、ブウーメラン!!」

メカザウルス『ギャッ!』

空自兵「…っ!何…!?!」

空自兵3「今の攻撃は…!?!」

卯月「お待たせしました皆さん!ゲッター1、これから皆さんを手助けします!」

くくく 陸上 くくく

ギユルイイイイン!!

兵長「な、何だ、こいつは…っ!?!」

陸自兵「こ、これは地下からの…ど、ドリルです!」

兵長「ドリルウ!?!」

BTP「おいおい、この日本でドリル持つてる奴つつたら……!」

凜「自衛隊の人、大丈夫?」

BTP「出やがったな……!ゲッターロボ!」

凜「こちらゲッター2。恐竜帝国との戦いを終わらせに来たよ」

兵長「ゲッターが、俺達を助けに来たのか……?」

通信士「兵長殿、どうやらここだけではなく、空や海にもゲッターロボが現れ、戦闘を開始したとの事です!」

兵長「何……?」

BTP「……どういこうった?」

凜「私達も、恐竜帝国に立ち向かうために、色々考えたってトコかな?」

凜「……」

くくく 昨夜 早乙女研究所 くくく

未央「ええ……!ゲッターを三つに分ける!」

早乙女「そうじゃ」

晶葉「一応、この研究所にはデータ収集用とその予備として建造されたゲットマシンの予備機が存在する」

早乙女「その予備機単体に武装は取り付けられておらんが、卯月くん達ゲッターチー

ムのゲッターとは互換性が一緒じゃから、それぞれで合体することは出来る」

卯月「つまり、私達が今乗ってるゲットマシンとその予備機で合体して…」

凜「三人それぞれで、メカザウルスを迎撃する事が出来るようになる、って訳？」

晶葉「その通りだ」

未央「でもそれって、大丈夫なの？」

早乙女「何がじゃ？」

未央「いや、その…性能とか…」

晶葉「確かに、ゲッターロボは三人のパイロットが乗ってはじめて真価を發揮する。だが、予想される恐竜帝国の攻勢に対し、贅沢も言つてられん」

早乙女「ゲッター単体の性能は落ちるかもしれないが、実数上の戦力は三倍じゃ」

未央「なーんか薄く伸ばしただけって感じもするけど…」

凜「それでも、戦力差は埋められる。後は、パイロットの腕でカバーってトコかな」

未央「おお、しぶりんやる気満々じゃんっ」

凜「まあね。いつまでも二人に頼りつきり、って訳にはいかないし」

卯月「そんな事ないですよ！私だって、いつも凜ちゃんに助けられています！」

凜「…そう言うことじゃ、ないんだよ」

卯月「？」

早乙女（……）

晶葉「……」

凜「まあ、何にせよ単機操縦での戦闘になるって事は、当日は油断できない。二人とも大丈夫？」

未央「もつちろんですとも！この本田未央ちゃんにお任せあれ！」

卯月「私も、精一杯頑張りますっ!!」

——現在。

凜（今回のゲッターの三分割……。戦力を分散するって言う狙いもあるんだろうけど、きつとまだ、早乙女博士には別の狙いがある……）

BTP「——おい、おい！聞こえてつか？ゲッターのパイロットさんよ」

凜「！え…何、ごめん……」

BTP「つたく、援軍に来てくれたのには感謝するけどよく……。そんな棒立ちされてちや困るぜ」

凜「ごめん……。敵の勢力は？」

BTP「ここから東に20km先の地点、第二次防衛線を突破して尚も侵攻中だ。その数は10や20じゃあ利かねえ」

凜「そうなんだ。分かった」



BTP「勇ましいねえ。…しかし、まさか天下のゲッターロボのパイロットが、女だったとはよ」

凜「可笑しい?」

BTP「いや、少し驚いたくらいだよ」

凜「ふうん。一応、ゲッターのパイロットになる前はアイドルもやってただけど、知名度ないかな」

BTP「アイドルルウ?これはまた…因みに何て名前だ?」

凜「渋谷凜。ニュージエネレーションってアイドルユニット、知らない?」

BTP「ニュージエネレーション…渋谷凜っていや…!超大物じゃねえか!」

凜「…そんなに?」

BTP「ああ…。何てたって俺が知ってるくらいだ。一ヶ月くらい前に活動休止したってニュースがあつたが…こんな訳があつたとはな」

凜「こんなご時世だと、危なくておちおちアイドルもやってられないってトコかな」

BTP「だから自分でトカゲ退治ってか?」

凜「そう言うこと。――敵反応I k m圏内、来るよ!」

BTP「了解!終わったらサインしてもらわにやな…。仲間に自慢できるぜ」

凜「その為にも死ねないね。……」

凜(ゲッターのエネルギーは相変わらず、か……。やっぱり私一人じゃ上がるものも上がらない……)

凜(……)

凜「卯月は……。卯月は大丈夫なのかな？」

ㄱㄱㄱ 空中 戦闘区域 ㄱㄱㄱ

卯月「ゲッターアアアアービィーームッ!!」

メカザウルス, s 『ギヤアアツ!!』

メカザウルス・バド 『ギヤアツ!!』

卯月「——っ……!!」

卯月「ゲッタートマホオオークツ!!」

バド 『グギユルア!?!』

卯月「ゲッターアールザアアア!!」

卯月「はあっ!!」

空自兵3 「す、すげえ……」

空自兵 「おい、ボサツとするな!」

空自兵3 「り、了解! すいません!!」

空自兵「……。しかし、ゲッターの戦闘は間近で見るのははじめてだが、凄まじいな。」

鬼気迫る、とはまさにこの事か」

卯月「ダブルトマホーク、ブウーメランッ!!」

卯月(すごい…。すごいすごい!ゲッターがまるで私の手足みたいに、自由に動く!)

卯月(出撃する前までは凜ちゃん達がいらない不安で一杯だったけど…。今はそんなことない!)

卯月「っ!やああっ!!」

バド『ギヤッ!』

卯月(相手の動きが分かる…。ゲッターが教えてくれるんだ。全部…!)

卯月「うわああああっ!!」

空自兵4「ゲッター1、後方の大型メカザウルスに接近!」

メカザウルス・ギギ『グギヤア!!』

卯月「これは…。羽根の生えた爬虫人類!?——こんなもの…っ!」

メカザウルス・ギギから放たれたコウモリ人間をゲッター1は腕や足を振り回し叩き落としていく。

卯月「これで終わりです!」

ギギ『ギイ!?!』

卯月「ゲッターアアアービイイームッ!!」

ギギ『ギギヤア!』

空自兵4「て、敵大型メカザウルス、撃墜……!」

空自兵「す、すごい……!ゲッター」機で状況を180度引っくり返しちまった……!」

卯月「はあ……はあ……はあ……つ」

卯月（やれる……!今の私なら……）

卯月「日本のみんなを、守ってみせます……つ!!」

~~~~~ 市街地 ~~~~~

美波「ゲッタートマホークツ!」

メカザウルス『ギヤツ!』

美波の乗る赤いゲッターQのトマホークがメカザウルスを両断する。

美波「ふうっ、敵機撃墜……。アーニヤちゃん、そっちは大丈夫?」

アーニヤ「Да。こちらも、敵機撃墜、です」

美波「そう。それじゃあ、この辺のメカザウルスは全部やつつけられたの?」

アーニヤ「今の所、レーダーに敵機は……。——!?!」

美波「何か来る!?!」

アーニヤ「すごく速い反応が3つ……?」

美波「1つになった?このパターンって……!」

『ゲッターの反応を関知して来てみたが……どうやらハズレだったようだな』

アーニヤ「…っ!…ゲッターロボ!」

くくく 海上 くくく

未央「いつくぞお!必殺、大・雪・山おろしっ!!」

メカザウルス・モバ『グギヤオオオン!!』

未央「へっへっくん、どんなもんだい!」

旗艦長「なかなか、大したものですね」

未央「へへっ!そうでしょうそうでしょう!」

旗艦長「援軍、感謝します。この海域の残敵は、後は我々が」

未央「え、でも…」

副官「アイドルに我々の本職を奪われるつもりはありませんな」

旗艦長「我々以上に、ゲッターの助けを必要としている人達がいる筈です。貴女はそ

ちらへ」

未央「…分かった!」

通信士「ありがとう、ゲッターロボ!」

未央「ふふっ。どういたしまして!——さて、と…」

晶葉『未央!そつちの手は空いたのか!』

未央「あ、アッキー！うん、この海域の目ぼしいメカザウルスはやつつけたよ」

晶葉『ちようど良かった。直ぐに美波達の援護に向かってくれ！』

未央「え？それってどういう…」

晶葉『恐竜帝国のゲッターロボが現れたんだよ！』

未央「えっ!?それってあの、キャプテン・ニオンとか言う…」

晶葉『ああ。パイロットまでは正確に分からんが…。だが、いくら二機あるとは言えゲッターQでは相手が悪い。至急援護してほしい』

未央「分かった！待っててねミナミン、アーニャン…!」

凜『待って!』

未央「しぶりん!」

凜『待って未央。美波達のところには、私が行く』

未央「え!」

凜『未央のいる位置からだ、美波のところまで時間が掛かるし、ゲットマシンになるより、ゲッター2の方が機動力も上だよ』

晶葉『確かに、凜の言う通りかもしれんが…』

未央「待ってよ!しぶりんの方は、まだメカザウルスが一杯じゃあ…」

凜『BT部隊のお陰でなんとか戦況は持ち返したよ』

BTP 『おう!後はトカゲ共をギャフンと言わせるだけだ!』

未央 「え?今の誰!？」

凜 『とにかく、私の代わりに未央がここに来るまでなら何とかなる』

未央 「でもさあ…」

凜 『そう思うんなら、未央が陸の支援に来て!』

未央 「…分かったよ。貸し一つ、後でジューズ一本奢りだからね!」

凜 『分かった。ありがとう』

未央 「礼はいいよ。その代わり、刺し違えても、つてのは無しでね」

凜 『分かってる。それじゃ——』

プツン——

晶葉 『…行っただか』

未央 「そだね。さて、と……私も急がないとお!」

未央 「オーブンゲットオ!!」

くくく 市街地 くくく

アーニヤ 「くっ…!」

ニオン 『……』

美波 「アーニヤちゃん下がって!」

アーニャ「ミナミ!!」

美波「ゲッターアートのマホークツ!」

ニオン『…遅い!』

美波「きやあつ!?!」

アーニャ「あうつ…!」

既に倒れているアーニャのゲッターQの上に美波のゲッターQが重なる。

ニオン『どれ程のものかと思つてみれば、他愛のない…。所詮、紛い物のゲッターか』

アーニャ「С и л ь н ь й ……つ、強い…っ!」

美波「つ…。。。。。。。私達だってえ——!」

ゲッターQがニオンのゲッターロボに取り付く。

ニオン『ほう…?』

美波「アーニャちゃん! 私ごと撃つて!!」

アーニャ「え…!?!」

美波「ゲッターQのゲッタービームじゃ、威力が足りないかもしれないけど。私の機

体の炉心を暴走させれば!」

アーニャ「H e r …! 出来ません…!!」

ニオン『甘いな。勝機を捨てるとは。そして、手の内を晒した時点で…』

ニオン『このダイノゲッターには勝てんツ!!』

美波「きやあつ!!?」

アーニヤ「ミナミツ!!」

ダイノゲッターロボの膝蹴りがゲッターQの鳩尾に炸裂し、ゲッターQが高々と宙を舞う。

アーニヤ「アア…!ミナミ…ゴメン、なさい…ツ」

美波「……」

ニオン『さあ、次は貴様だ』

アーニヤ「つ!…ウワアアアアアアアツ!!」

ニオン『ふん…。素人が』

怒りに任せ、操縦桿を倒したアーニヤのゲッターQを、ダイノゲッターは足払いで捌く。

アーニヤ「ウツ…!?!」

ニオン『——おおりやつ!!』

無防備な体勢を晒した、ゲッターQにダイノゲッターは容赦なくその拳を振るう。

アーニヤ「きやあああああああつ!!」

二機を合わせて、瓦礫の中に沈むゲッターQ。

美波「う、ああ……」

アーニヤ「ううっ……」

ニオン『どうした？この程度で、もう終わりか』

二機にトドメを刺すべくゆっくり歩み寄る。

ギルイイイイン!!

ニオン『来たか……』

凜「……」

ニオン『ゲッター2!!』

凜「……ニオン……やっぱり、アンタ何だね」

ニオン『いかにも。そしてこのゲッターこそ、貴様らから奪った量産型ゲッターロボを元に、恐竜帝国の科学力を結集して完成した……ダイノゲッターロボだ!』

凜「ふん……。恐竜モチーフにするなんて最低だね」

ニオン『何……?』

凜「別に……。私達に言葉何て要らない。全力で行かせてもらおうよ」

ニオン『ふん……。一人で立ち向かうつもりか?』

凜「……丁度いいハンデだよ——!」

瞬間。ゲッター2の姿が消える。

ニオン『何——!?!』

凜「ゲッタードリルツ!!」

ニオン『っ!!』

背後からのゲッタードリルを、ダイノゲッターの腕のレザークッターで辛うじて受け止める。

ニオン『ゲッターア……トマホークツ!!』

凜「——!」

ニオン『っ——!?!』

ゲッタービジョンによる高速回避により、ゲッタートマホークが空を裂く。

凜「——ええええあっ!!」

ギユルイイイイン!!

ゲッター2のドリルとダイノゲッターのトマホークが火花を散らす。

ニオン『ふっ……!やはりな……ッ!!』

凜「何っ!」

ニオン『先程の紛い物との戦いではここまではならなかった……ッ!!』

ニオン『やはり……本物のゲッターとゲッター乗りとの戦いは楽しいっ、楽しいぞおっ!!』

凜「所詮は、戦うことしか知らない一族か！」

ニオン『何をっ！』

凜「アンタ達はゲッター線で滅んだんじゃない……！その戦いを好む心が滅びの道を進んだんだ!!」

ニオン『ほざけえっ!!』

凜「っ!？」

ダイノゲッターのトマホークがドリルごとゲッター2を宙へ打ち上げる。

凜「くっ……!!」

ニオン『ゲッターによって選ばれ、ゲッターによって戦える者が……いい気になるなあ!!』

翼竜を模した翼で、ゲッター2を追走し、その腹にゲッタートマホークを打ち据える。

凜「がはっ……!!」

ニオン『死ねえ!』

凜「……ドリル、ストームッ!」

地に伏し、空を仰いだままの姿勢で放たれたドリルストームが、ダイノゲッターを捉える。

ニオン『チィッ……!このダイノゲッターを、甘く見るなあ!!』

凜「ドリルミサイル!」

ドリルストームの竜巻の中を、ジェット噴射したドリルが突き抜ける。

ニオン『——オープンゲットオ!』

凜「何っ?!」

ニオン『見くびってくれるな。こちらもゲッターロボなら分離できるのは道理!』

凜「チツ…!」

ニオン『そして見るがいい!我ら恐竜帝国の科学の力を!』

ニオン『チエエーンジ!ゲッターアアアアアアアアアア2ウウツ!!』

凜「そんなっ、まさか…!」

凜の目の前に、ゲッター2に姿形がよく似た。右腕にテイラノサウルスの頭部を模したアームを着けた、ダイノゲッター2が姿を現す。

凜「…奪われた量産型ゲッターは、他の形態には合体出来なかった筈」

ニオン『ふふふ。だから言っただろう?恐竜帝国の科学の全てを結集したとな』

ニオン『このダイノゲッターには、貴様らゲッターロボから得た全ての戦闘データを元にした三形態への変形機構が組み込まれている』

凜「…つて事は、当然ゲッター3にもなれるつて事」

ニオン『能力面で貴様らゲッターに劣りはせん。そして、このダイノゲッター2なら

ば、貴様のゲッター2のスピードにも負けはしない…っ!」

凜「……」

ニオン『ハンデなどと……追い詰められたのは貴様の方だったなあ!!』

凜「——ッ!」

ニオン『遅い——!』

ゲッター2のゲッタービジョンに合わせて、ダイノゲッター2の高速移動で追走する。

凜「くっ……!」

ニオン『ふははは……!どうした!?動きが止まって見えるぞ?ゲッター2!!』

凜「!」

ニオン『ティラノハング!!』

凜「げ……ゲッターアーム!」

振りかざされたティラノサウルスの頭の形をした右腕に、ギリギリでゲッター2のアームを噛み合わせる。

ニオン『こんなものでえ!!』

凜「うっ……!?!」

ティラノサウルスの顎が、ゲッターアームを噛み砕く。

ニオン『えええやあっ!!』

凜「ぐっ…!!」

そのまま、顎を閉じたティラノハングで、ゲッター2を殴り飛ばす。

凜「…ツハ…ア…ツ！」

ニオン『何…!?!』

反射的に、ダイノゲッター2の足を払う。

地面に倒れ伏す両者。

凜「はあ…はあ…はあ…っ！」

ニオン『どうした。息が荒いぞ?もう手も足もないなどと言って欲しくはないな』

凜「…まさか」

ニオン『ふふっ…!そうでなくては面白くない…ツ!』

凜「っ…!」

ニオン『全力を出しきった貴様を潰す…。人間を、ゲッターを超える。そうではなくて

は、俺はあ!!』

凜「私だつて…!私から、大切な人を奪った恐竜帝国に、爬虫人類に負けるつもりは

ない…!私があ!!」

「ダメエエエエエエエエツ!!」

ニオン『何だ!?!』

凜「この声——!?!」

卯月「二人とも……それ以上は、やめて下さい!!」

凜「卯月!?!」

ニオン『ゲッターがもう一機か……。面白いっ!』

卯月「二人とも、これ以上の戦いはやめて下さい!二人がこれ以上戦う理由なんてないじゃないですか!」

ニオン『戦う理由がないだと……!?ふぎけるな……っ!!』

凜「こいつの言う通りだよ。卯月、私と相手は爬虫人類……だったら、戦う理由はそれで十分……!」

卯月「そんな事……!そんな事ないです!人間だから、爬虫人類だから戦うなんて、そんなの間違ってます!!」

凜「間違ってますよ!!こいつは……プロデューサーを殺した、そんな奴の仲間なんだよ!?!」

卯月「でも、ニオンさんが殺した訳じゃないです!」

凜「同じだよ!結局こいつも、戦いを……殺しを楽しむ奴だった!私が来るのがもう少し遅かったら、美波とアーニヤだって、こいつに殺されてたんだよ!?!」

卯月「っ……!それでも……それでも……!二人は心を通わせることが出来た。違います

か!？」

凜「——それは…っ!」

卯月「二人がその時、何があつたのかは分かりません。だけど、ニオンさんは、凜ちゃんの歌を聞いたんじゃないんですか!? 凜ちゃんは、ニオンさんに何か感じたんじゃないんですか!？」

凜「——私は…!」

卯月「私達は敵同士かもしれませんが。けど、言葉を交わして分かりあえるかもしれないなら、それを諦めないで!!」

ニオン『……』

ニオン『言いたい事はそれだけか? 小娘』

卯月「!ニオンさん…!」

ニオン『歌などと…。人間共の作ったまやかしなどに……動じんっ!!』

卯月「…っ! まやかしなんかじゃ…!」

ニオン『安息も安寧も平穏もいらん…! 貴様らゲッターロボを倒し、我が地竜一族を恐竜帝国から独立させ、長きに渡り受けてきた差別と侮蔑から同胞達を解放する! ただその為に、俺はあ!!』

凜「来る…! 卯月下がって!」

ニオン『俺の迷いを……断つ!!』

ダイノゲッター2のドリルが唸りを上げる。

凜「…もう分かったでしょ。こいつらと分かり合うことなんて不可能なんだよ」

卯月「そんな……!仲間から差別を受けるのが嫌だからって戦うんですか!?!ただ、それだけの事の為に……!」

ニオン『それが我々の全てさ!差別を受けたことのない貴様には、分からぬことだろうがなあ!!』

凜「卯月っ!!」

ゲッター1に向けられたダイノゲッター2のドリルを間に入ったゲッター2が庇い受ける。

ゲッター2の右肩が完全に吹き飛ぶ。

凜「ぐう……!」

卯月「凜ちゃん!?!」

凜「大丈夫。大した事ないから。…それよりも、卯月は下がってて」

卯月「でも……!」

凜「卯月の気持ちは、もう分かったから。後は、私が決着を着ける……っ!」

卯月「そんな……!」

凜「卯月の言う通りだよ。私はニオンに始めて会ったとき、何かを感じたんだよ。恋愛とか、そういう感情で一括りに出来ない何かを」

凜「だけどね。私は、私一人の感情で、たくさんの大切な人を失いたくない」

卯月「凜ちゃん……」

凜「……それに、アイツも、決着を着けるのを望んでる。ゲッターと、私との」

凜「だから全部終わらせる。私の想いも全部。だからここで待ってて」

卯月「凜ちゃん!」

ニオン『話は終わったか?』

凜「こつちはね。そつちこそ、別れを言うべき人がいたんじゃないの?」

ニオン『ウンケ……妹の話、覚えていたのか』

凜「まあね」

ニオン『ならば、余計な世話だ。片腕のゲッターで俺に勝つつもりか』

凜「最初に言ったでしょ。……いいハンデだつて」

ニオン『ふん……っ!』

凜「……ドリルがあれば十分——!」

カッ

そこから始まったのは、超高速下での鏝迫り合い。

ほぼ地上すれすれの位置で、互いの死角を奪い合い、その都度にドリルをぶつけ、足を狙い、隙あらばコックピット目掛けて必殺の一撃を放つ。

爬虫人類であるニオンは爬虫人類特有の反射神経と反応速度で。

人間である凜は半ば直感で。一瞬でも気を緩めた瞬間が命取りとなる極限の状態で、二機のゲッターは己の刃であるドリルを交え続けた。

凜「はあ……はあ……はあ……はあ……っ!!」

ニオン『……ふっ！中々やるな、人間……!』

凜「当然!2000年も生き残ってきたのだから、単なる偶然じゃないよ!」

ニオン『ふっ!面白い!ならば、俺も全力で相手をしよう!!』

ニオン『ティラノチェンジツ!!』

ダイノゲッター2が機械のティラノサウルスへと姿を変える。

凜「…それがアンタの全力の姿って訳?」

ニオン『そう!この戦い、生き残るために進化したこの雄々しき姿こそ!地球最強の姿!!』

凜「ふうん……。御託はいいよ。来な」

ニオン『このダイノゲッターのティラノモードを見てもその余裕……。果たしてどこまで持つかな!』

グワオ

卯月「は、速い…!？」

凜「ガッ…!」

ゲッター2の腹部へと噛み付いたティラノサウルスの顎が無人のベアー号のコックピットを引きずり出す。

凜（…未央が乗ってたらヤバかった!）

未央「——くしゅんっ!」

ニオン『でえええいっ!!』

凜「つつ!」

ティラノサウルスの踏みつけを地面を転がって躲し、勢いに乗じて立ち上がる。

凜「っ…!っはあ…はあ…!」

凜（パワーも、スピードも、向こうの方が上、か…。おまけに、さっきの一撃でベアー号の制御系が破壊されて出力が低下してる…。ゲッター自体が動かなくなるのも、時間の問題、か）

ニオン『どうした。追い詰められているのが心配で伝わってくるぞ?』

凜（くっ……。こうなったら、一か八か……!）

ニオン『死ねえ!!』

テイラノサウルスの突撃に合わせ、上空に跳躍。

ニオン『逃がすか!』

跳躍したゲッター2の右脚を噛み砕く。

凜「…オープンゲット!」

ニオン『何っ!?!』

テイラノサウルスが噛み付いたイーグル号だけを切り離した。

凜（これで機能停止は目前……!）

凜「間に合え——!」

ニオン『!?!』

凜「ゲッタードリルツ!」

ジャガー号とベアー号がドッキング状態、通称、ゲッター2、3の渾身のドリルは、テイラノサウルスの頸椎を貫いた。

ニオン『ば、馬鹿な……!?!』

頭を失った為、強制的にダイノゲッターへと戻る。

凜「っ……!ぜいっ!」

最後の力を振り絞り、ドリルミサイルを放つ。正確に放たれた一撃は、ダイノゲッター2の頭部を破壊。

ニオン『くっ……!だが、まだだ!まだダイノゲッターに変形すれば……!』

卯月「そこまでです!」

ニオン『小娘……!?!』

卯月「もう勝負は着きました。貴方の負けです。ニオンさん……!」

ニオン『まだだ!まだ俺は負けてなあい!』

卯月「意地を張らないで下さい!……もし、これ以上のやるつて言うなら、私が相手になります!!」

ニオン『!?!』

凜「卯月……」

卯月「もう……負けていたんです。ニオンさんが、凜ちゃんに出会った、その時に……!」

凜「……」

ニオン『……。くそっ……!何故だ?俺にはやらなければならない事が、俺の使命があると言うのに……。何故、この女の歌を忘れられん!?!』

ニオン『この女の事を、頭の中から拭い去れん!?!』

ニオン 『何故人間如きに……心を開いてしまふ……!?何故だ!?』

卯月 「……。 ……それは、私にも分かりません」

ニオン 『何イ……!?』

卯月 「それは、ニオンさんの気持ちだから。誰かが分かっちゃいけないことなんじゃないかなって。えへへ……」

ニオン 『俺の、気持ち……』

卯月 「あ、でも……一つだけ」

卯月 「私は、マシーンランドに捕らえられた時、ニオンさんに助けられました」
凜 「……そんな事が」

卯月 「だから、ニオンさんの事、優しい人なんだって思ったんです。だから、その時の感謝の気持ちを、忘れるなんて出来ません!」

卯月 「ニオンさんとなら、きっと分かりあえる……。それが私の想いで、私の気持ちですっ!」

ニオン 『あれは……お前に利用価値があると思ったからやったことだ。俺の計算の上での行動だった』

卯月 「それでもです!!」

ニオン 『……』

ニオン『ふっ……。敵わんな。貴様には』

卯月「ニオンさん……。それじゃあ……!」

ニオン『ああ。俺の負けだ。……完敗だ』

凜「いいの? そんなあつさり、認めちゃって」

ニオン『そうだな。その小娘の馬鹿正直さに、呆れ果てたのかもしれない』

卯月「え、ええー! 何ですか、それ!」

ニオン『お前こそいいのか? 全ての爬虫人類は、お前の仇なんだろう?』

凜「それは……もういいよ。もしここで私がアンタを殺したら、今度は私がアンタの妹に命を狙われるかもしれないんだから」

凜「そう言うのの繰り返しは、勘弁してほしい……」

ニオン『そうか……。ありがとう』

凜「え?」

ニオン『何でもない。ふっ……』

卯月「あ! ニオンさん、今笑いました?」

ニオン『何……?』

卯月「いい笑顔でしたよ! やっぱり、人間も爬虫人類も、笑顔が一番です♪」ニコッ

凜「ははっ……。私も、卯月には敵わないかも」

卯月「え？何ですか？凜ちゃん」

凜「ううん。何でもない」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

卯月「きやつ!？」

凜「!?これは、地震…!？」

ニオン『いや、違うぞ…!この揺れは…まさかつ!？』

『ふははは…!ご苦労だったな、キャプテン・ニオン』

ニオン『この声は…バット將軍か!』

卯月「バット將軍って!？」

凜「さあ…。でも、將軍って言うくらいだから、きつとスゴい偉い人なんじゃない?」

バット『いかにも。我こそは帝王ゴールに仕える懐刀!』

凜「口ばかり偉そうに…!そう言うなら、姿を見せたら?」

バット『良かろう。刮目し、そして絶望するがよい…!これこそが!』

ドワオオオ

卯月「な、何ですか…!これ!？」

凜「スゴく、大きい…!？」

ニオン『まさか、完成していたとは…。いや、これを完成させる為に、俺を囿と使っ

たな!バットオ!!』

バット『フフフ…。恐竜帝国の礎となれることを、喜ぶが良いニオンよ。これこそが、真にゲッターを打ち倒し、恐竜帝国の悲願を成し遂げる為の究極兵器。その名も――』

バット『無敵戦艦ダイよ!!』
つづく

第8話 『無敵戦艦ダイ』

〜〜 北海道 上空 〜〜

みく「ゲッタアアー！ミサイルマシンガンッ!!」

みく「うくにやにやにやにやにやにやにやにやにやにやっ!!」

ドウドウドウドウトツ!!

ガトリングのような砲塔から放たれる無数の小型ミサイル弾が、空中を飛行するメカザウルスを地面に撃ち落としていく。

みく「ふっふっん♪どっんなもんにや?」

菜々「今ので、有視界内のメカザウルスは粗方全滅ですよ! ナイスファイトですつ! みくちゃん!」

瑞樹「流石晶葉ちゃん謹製の新装備、と言うべきかしらね? メカザウルスの生命に反応して絶対に外さないミサイルの機関銃なんて」

みく「ホント、天才にや。: 早乙女博士とは別の意味でね」

晶葉『——それはどういう意味だ』

菜々「あ、晶葉ちゃん...」

みく「晶葉ちゃん謹製のミサイルマシンガンが、スゴいって話をしてたの。お陰で北海道エリアの戦闘も大分片が付いたにや」

晶葉『ほう、そうか。それは丁度良かった』

瑞樹「丁度? どういう意味かしら?」

晶葉『こればかりは見てもらった方が速い。この映像を見てくれ』

プロトゲッターの通信用モニターに、無敵戦艦ダイの姿が写し出される。

みく「にやつ!? 何なのにな? こいつ!」

菜々「メカザウルスですか? それにしては、要塞みたいに大きい気がするんですけど……」

瑞樹「一緒に映ってるのは……ゲッター1? ということは、これは卯月ちゃんが担当してた関東エリアの?」

晶葉『いや、このメカザウルスが現れたポイントは、美波達が担当していた東北エリアだ。が、こいつの進路は東京……』

菜々「そ、そそそそんな!? もしこんなのが首都東京で暴れたら……」

晶葉『ああ。日本の都市機能は完全に終わる』

みく「何とかして止めなくちゃ!」

瑞樹「だったら、ここで話している暇はないわね」

晶葉『そう言うことだ。今は卯月のゲッター1が対応しているが、美波達のゲッターQはダメージを負い、一緒にいる凜のゲッター2は大破して使い物にならない!』

みく「未央ちゃんは間に合わないの?」

晶葉『まだメカザウルスと戦闘中だ。とにかく、卯月の元に急いでくれ』

瑞樹「緊急事態なのは分かるけど、どうしてそんなに急かすのかしら?」

晶葉『卯月のゲッター1のゲッター線量が危険域に達しつつある!このまま単身で戦わせ続けるのは危険だ!!』

みく「!?」

瑞樹「それって…!」

くくく 無敵戦艦ダイ 戦闘区域 くくく

ニオン『どういう事だ、バット將軍?!話が違うぞ!』

バット『話が違う、か?では、お前にその話をしたのは、誰だったかなあ?』

ニオン「!?」

バット「我らの目的は当初より変わらぬと言うことよ。戦闘力の低下したゲッター1機にも勝てぬ者など、恐竜帝国にはいらぬう!!」

ニオン『俺を囷として使った…!!バットオオオッ!!』

バット『今更気付いたとて遅いわ!しかし…:…貴様は囷として、十分過ぎる働きをし

た』

ニオン「何い……?」

バット『この、無敵戦艦ダイ起動までの時間稼ぎをしてくれたのだからなあ。…だからもう、思い残すこともあるまい?』

凜「…え?」

卯月「危ないっ!」

ニオン『!』

半ば反射での行動。咄嗟に、ゲッターがダイノゲッターに覆い被さり、そのままダイノゲッターを抱え込んで、その場を飛び去る。直後、激しい砲撃の嵐が、ダイノゲッターが停まっていた地点を襲っていた。

ニオン『ぐっ……!バットめえ……!俺を始末するつもりか!!』

凜「今、味方を撃つたの?アイツ……」

バット『ハッ!汚らわしき地竜一族など、同胞ではないわ!』

卯月「ちりゆう……?」

ニオン『っ……!?!』

バット『我ら爬虫人類の中でただ一つ、ゲッター線に抗う耐性を身につけた地竜一族…。そんな連中をのさばらせておいては、恐竜帝国の安寧に関わる!』

卯月「だからって……！仲間じゃないんですか!?ニオンさんが何の為に、ここまで貴方達に従ってきたと思ってるんです!？」

バット『個人の感情など知ったことではない。忌むべき存在は、抹消しなければならぬのだ!!』

卯月「そんな……！そんな、考え方って……！」

ニオン『ならば……俺がゲッターを倒せば、地竜一族を解放すると言うのは嘘だったのか!』

バット『無論。尤も、この世に残された地竜一族は、最早貴様ただ一人だな』

ニオン『何だと!』

凜「それじゃあ、ニオンの家族や仲間は……」

バット『とうに始末したわ』

ニオン『……何、だと……?』

ニオン（ユンケ……ッ!）

ニオン『バアットオオオオオ!!貴様あああああッ!!』

バット『おっと、お前の好きにはさせぬ』

ニオン『何!?ダイノゲッターのコントロールが……っ!?!』

バット『我らに反旗を翻すかもしれぬ者に、過ぎた力を授ける訳はなからう?ダイノ

ゲッターロボは、何時でもこちらから、制御圏を奪うことが出来る』

ニオン『…端から都合の良い捨て駒として、処理するつもりだったと言うことか?!』

バット『然り。さあ、貴様も仲間の元へと送ってやろう』

ダイの砲塔が再びダイノゲッターに向けられる。

ニオン『くそっ……ユンケ……っ!』

凜「ニオンっ!」

放たれる砲火。

ガキイン

バット『何い!』

ニオン『貴様……ッ!』

凜「……卯月」

ゲッター1のトマホークがダイの砲撃を弾き返した。

卯月「……smせんっ!」

バット『……何?』

卯月「許しませんっ!人の想いを利用して、踏みにじって!貴方みたいな人を絶対

……絶対につ!許しはしませんっ!!」

バット『こやつ……何たる気迫！本当に小娘の持つ気迫なのかア!!』

ニオン『…何のつもりだ?』

卯月「あの時のお礼です」

ニオン『あの時、だと…?だが……俺にはもう、生きる理由などない』

卯月「なら、探せばいいじゃないですか！生きていることを、諦めないで下さい！」

ニオン『これ以上生き続けて、何になると言うんだ?』

凜「それを探すんだよ！今死んだって、その、ユンケって人だって嬉しくないよッ！」

ニオン『貴様に何が分かるッ!』

凜「分かんない！アンタの事なんて、これっぽっちも分かんないよ！けど、誰だって、大切な人には生きていて欲しいって気持ちは分かる。大切な人がいなくなったら、悲しいって……辛いつて分かるから……！」

ニオン『渋谷凜……。そうか、貴様……』

卯月「凜ちゃん、動けますか?」

凜「ジャガー号だけなら、何とか。それよりも……」

卯月「ゲッターQ……！美波さん、アーニヤちゃん！」

アーニヤ「う、う……」

美波「こつちなら心配しないで？機体に損傷はあるけど、まだまだ戦闘は可能よ！」

アーニヤ「Da。ワタシも、大丈夫です…ツ！」

卯月「良かった…。それじゃあ、凜ちゃんは一度、研究所に帰還して下さい」
凜「…卯月一人でやる気?…大丈夫?」

卯月「美波さんもアーニヤちゃんもいますから、大丈夫です!それに…
バツト『…』」

卯月「あの人に背中を見せるなんて、出来ません…っ!!」

アーニヤ「…何だか、今日のウツキは、何時もと違いますね?」

美波「…ええ。ちよつと怖いくらい」

凜「…。何にせよ、無茶はしないで」

卯月「はい!精一杯頑張ります!!」

凜「(会話になつてない…)…アーニヤ、美波。卯月の援護よろしくね」

アーニヤ「任せて、下さい…」

美波「足手まといにはならないわ!」

凜「うん。それじゃ、すぐ戻ってくる…っ!」

地上から上昇し、早乙女研究所へ進路をとる。

卯月「よおし…!」

美波「どうするの?」

卯月「まずは足を止めなきや…。美波さん、危ないかもしれないですけど、ダイの前足に向かつて攻撃を仕掛けて下さい」

美波「分かったわ。やってみる！」

卯月「アーニヤちゃんはどこでニオンさんを守りながら援護お願いします！」

アーニヤ「Да。任務、了解……です」

ニオン『…敵の施しは、受けんつ！』

アーニヤ「Упрямы……強情、意地つ張り、よくない……です。アナタを助ける理由、アーニヤにはありません。けど、リンと、ウツキの、トモダチ……絶対守つてみせます！」

ニオン『……』

卯月「それでは、攻撃開始です！」

アーニヤ&美波「了解っ！」

号令に合わせ、美波のゲッターQがダイの前足に飛び込む。

美波「ゲッタートマホーク!!」

肩からゲッタートマホークを抜き放ち、大樹の幹のような前足に斬り掛かる。

ダイ『ギャオオオン!!』

美波「っ……! 流石に固いわね……。それなら——!」

美波「トマホーク、ブーメラン！」

ダイ目掛けトマホークを投げ、反動で素早く後退する。

美波「ゲッターアービームツ!!」

ダイ『キシヤアア!?!』

ダイの前足から黒煙が上がり、一瞬、大きく鑪を踏む。

美波「卯月ちゃん、今よ！」

卯月「はいっ！」

その隙に、ゲッターがダイのブリッジ目掛け飛び上がる。

卯月「ゲッターアートマホーク!!」

ガキイン!

卯月「!?!」

ゲッターの振り下ろしたトマホークが、ダイのブリッジ下の格納庫から現れた何かによつて弾かれた。

バット『このダイを倒すつもりか、片腹痛い!』

美波「あれは……!」

バット『貴様らの相手など……このダイの護衛用として開発された——』

ニオン『ダイノゲッター、ロボツ!?!』

バット『ブラックダイノゲッターで十分!!』

卯月「ブラックダイノゲッター…!?けど、爬虫人類にゲッター線は……」

バット『無論、こいつはゲッター線を使用している訳ではない。名ばかりのゲッターロボ……しかしなあ!!』

卯月「!!」

ブラックダイノゲッターがゲッター1をブリッジから蹴落とす。

バット『それを補って余りある性能……! 貴様らのゲッターとも劣りはせぬぞ!』

アーニヤ「ウツキ! 大丈夫!」

卯月「はいっ!——っ!」

目前に迫ったダイの前足を転がることで辛うじて躲す。

美波「無敵戦艦に加え、あのゲッターとも相手をしなくちゃいけないなんて……」

卯月「それでも、やるしかありません! これ以上、この街を破壊させるわけにはいきません!!」

バット『この戦力差を見ても臆せぬか。面白い!』

ブラックダイノゲッターが翼を広げ、ダイのブリッジから舞い降りる。

バット『貴様はこのバット自らが、直々に相手をしてくれよう!』

卯月「!?」

ブラックダイノゲッターに対峙するように、ゲッター1は身構える――!

「早乙女研究所 格納庫」

ゲットマシンを三機格納出来るドックにジャガー号と大破したベアー号がドッキン
グしたゲッター2のみが帰還する。

主任「よしっ!先ずはゲットマシンを手動で切り離せ!」

凧「ごめん。ジャガー号だけ動かせれば良いから、急いでお願い!」

主任「おう!俺達に任せな!」

凧「ありがと!」

急ぎ足で格納庫を離れ、管制室を目指す。

凧「晶葉っ!」

晶葉「凧か!丁度良かった」

凧「私も、晶葉に聞きたい事がある」

晶葉「大体は察しがつく。先ずはこれを見てくれ」

凧「……」

晶葉の手元のディスプレイ。そこに映し出されているのは、

晶葉「お前と未央、それに卯月。三人それぞれのゲッターが今出力しているゲッター
線量だ」

凜「私のゲッター2の数値が0になってるのは、ゲッター自体が大破してるからか。それよりも…」

晶葉「ああ。卯月のゲッター1のゲッター線量が異常に増幅している」

凜「未央の数値と比較しても二倍以上か…。計測は何時？」

晶葉「現在進行形、実数値だ。特に数十分前から、ゲッター線の上昇が著しい」

凜「バット将軍が現れた辺り、か…。また上がった…」

晶葉「急ぎ、北海道で戦闘中だったテスターチームを向かわせているが、このままでは危険だな」

凜「…具体的にどうなるの？」

晶葉「ゲッター自身の炉心が持たん。そうなる前に、炉心に取り付けられた制御装置が作動して活動停止すると思うが…。最悪、炉心そのものがメルトダウンを起こして、機体は爆発する」

凜「そうなら…。ゲッターも、卯月も…!」

晶葉「ああ。しかし問題は、どうしてここまでゲッター線量が上がっているのか、と言う事だ。計器の故障を疑いたくなる」

凜「……。ゲッターが、卯月の怒りに反応した…?」

晶葉「怒り？」

凜「詳しくは、説明できないけど。今卯月は、出現したバット將軍に対して、強い怒りを覚えてる。その念にゲッターが呼応したとすれば…」

晶葉「まるで、ゲッターが生きているみたいなの言いだな。そんな事が、ありえるか？」

早乙女「違う。そうではないぞ。晶葉くん」

晶葉「早乙女博士!? 今までどちらに?」

凜「…違う、つて、どういう事?」

早乙女「ゲッターは、生きておるのだ!」

晶葉「生きている…? エネルギーが…? 意識を持ち、考え…: 自身判断で、行動すると…!?!」

早乙女「そうだ! それが今、これで証明された!! 卯月くんの乗るゲッターロボは、未央くんが乗るものよりも、凜くんが乗るものよりも、明確にその性能差を示している…! 乗り手の感情に反応し、その心に、応えるようにだ!!」

凜「そのために、わざわざ私達をバラバラに、ゲッターに乗せて出撃させたつて訳?」

晶葉「え?」

早乙女「…やはり気付いておったのか」

晶葉「そんな…。どういう事です? 博士!?!」

早乙女「晶葉くん。ゲッター線は、我々が思っている以上の代物なのだよ」
晶葉「博士……？」

早乙女「我々は、今まで以上にゲッターの事を知らねばならん。ゲッターは私に……いや、島村卯月に何をさせようとしているのか。私はそれが知りたい」

凜「…その為には、手段を選ばないつもり？」

早乙女「手段を選んでおれんのは、人類全体もまた、同じだと思うがの」
凜「……」

早乙女「卯月くんの覚醒と、恐竜帝国の武力放棄に伴う人類の存亡の危機……。偶然だとするならば、出来すぎているとは思わんか……？」

凜「…私には、何も分からないよ」

早乙女「ならば、その目で確かめることじゃ」

凜「その目で……？」

早乙女「目の前の真実から目を背けているようでは、望むべきモノは何一つ得られせん」

晶葉「真実……？それが……」

早乙女「だから儂は、この戦いに賭けたのだ」

晶葉（馬鹿げてる……！）

凜「博士の御託は分かったよ。それで、どうするの？このままだと、ゲッターは乗った卯月もろとも爆発するよ？」

早乙女「無論、黙って見とるつもりはない」

主任「凜ちゃん、どこだ!? ジャガー号修理完了だ!!」

凜「……」

早乙女「さあ、出撃じゃ。君が卯月くんを助けるんじやよ」

晶葉「……!」

凜「分かったよ。卯月は、大切な友達だから」

晶葉「凜っ……!」

管制室を立ち去る。

凜「ごめん、主任さん」

主任「ああ、凜ちゃん。…どうしたんだ？おっかない顔してるぜ？」

凜「別に…。それよりも、早く出撃しなきゃ。卯月が危ない」

主任「へ、へえ…」

凜（……）

~~~~~ 無敵戦艦ダイ 戦闘区域 ~~~~~

卯月「ゲッターオートマホオオウクツ!!」

バット『何のっ!!』

ゲッター1とブラックダイノゲッターのトマホークが激しく打ち合う。

卯月「っ!」

バット『フハハハ…! 忌々しいサルめが、もう負けはせんツ!!』

卯月「!!」

打ち合いに怯んだゲッター1にブラックダイノゲッターの追撃が襲う。

卯月「…あつ——!」

吹っ飛ばされた空中で何とか態勢を立て直し、着地する。

美波「大丈夫!? 卯月ちゃん!」

卯月「はいっ! そちらはどうですか?」

美波「流石に、ゲッターQが二機だけだと苦しいわね…」

アーニヤ「後、もう一機居てくれたら、何ですけど…!」

バット『無駄話をする余裕があるかあ!!』

卯月「っ!」

ブラックダイノゲッターのトマホークの横一線の重撃を、こちらのトマホークで辛うじて受け止める。

卯月「くうくう…!」

何歩分か後退して、持ち堪える。

美波「待つてて卯月ちゃん！今加勢するわ！」

卯月「駄目です！美波ちゃん達は、ダイの攻撃に専念して下さい！」

アーニヤ「でも…」

卯月「こつちに砲撃が向かってこないだけで十分助かってます！だから、この敵は私  
が…！」

美波「…分かったわ」

卯月「お願いします！うわあああああ!!」

バット『馬鹿の一つ覚えが！ーフンッ！』

再びトマホークが鏑迫り合う。

卯月「っ！」

バット『ぬっ!？』

ブラックダイノゲッターの足を払い、転倒させる。

バット『なんと!？』

卯月「てええええい!!」

転倒したブラックダイノゲッターに向かい、トマホークを振り下ろす。

バット『だが…!』

卯月「!?」

ゲッター1の一撃を受け止めたのは、ブラックダイノゲッターの両肩からさらに出現した副腕だった。

よく見ると、ゲッター2よろしくドリルとマジックアームが着いている。

卯月「これは…!?!」

バット『言ったであろう…。このブラックダイノゲッターこそ、恐竜帝国の科学を結集させて開発した最高傑作』

バット『ブラックダイノゲッターこそ、究極のゲッターロボなのだああ!!』

卯月「きやああああ!!?」

副腕でゲッター1を持ち上げ、そのまま放り投げた。

アーニヤ&美波「卯月(ちゃん)っ!!」

卯月「うう…」

バット『ほう…。まだ立ち上がる気力が残っているか…』

卯月「当たり前です! 貴方みたいな人に…この国の人達を、私の大切な人達を…!

好きにはさせませんっ!!」

バット『ふん。貴様の仲間が殺される様を見たくないと言うのなら…!』

バット『貴様から先に血祭りにあげてくれるわあ!!』

トマホークを掲げてブラックダイノゲッターが迫る――！

「パワーアーツアアームツ!!」

バット『ぬうつ!』

トマホークを掲げたブラックダイノゲッターの腕を、後ろから現れた蛇腹腕が捕らえ動きを拘束する。

アーニャ「パワーアーム…!アレは…!」

卯月「菜々ちゃん!」

菜々「はいっ!ウサミンこと安倍菜々、定刻通りにただいま参上ですっ!!キャハツ☆」  
バット『プロトゲッターロボか!小癪な…!』

瑞樹「あら、貴方にだけは言われたくないわよ。私達のゲッターロボをパクるなんて」  
みく「菜々ちゃん!こんな奴派手にぶん投げるにやあ!!」

菜々「了解ですっ!そおおれええ!!」

蛇腹腕をしならせ、豪快に放り投げる。

バット『おわああああ!!』

瑞樹「ついでにミサイル!この位置からなら行けるわよ!」

菜々「はいはっ!プロトゲッター3、大一番の大盤振る舞いです!!」

ダイ『キャオオオン!!』

ダイに対してミサイルを乱れ撃ち、ダイを怯ませた後、卯月の元に合流する。

みく「卯月ちゃん、大丈夫かによ？」

卯月「はいっ！ありがとうございます！」

瑞樹「何とか、間一髪って感じね」

美波「北海道地区の方は、もう大丈夫なんですか？」

菜々「その事でしたら問題なしです！ちやくんとお掃除してきましたから！主にみくちゃんが！」

瑞樹「それに……あれをこのままほつとしても、碌な事にならない事ぐらい分かるわ」  
みく「ともかくここから一気に逆転といくにや！」

バット『うぬぬ……。忌々しきゲッターロボめ……！』

瑞樹「来るわよ。大丈夫かしら？菜々さん」

菜々「はいっ！ナナだつてゲッターのパイロットです！」

卯月「でも気を付けて下さい！あの黒いゲッターは今までのどんなメカザウルスより強力です！」

菜々「分かりました！——行きます！瑞樹さん！」

瑞樹「心得たわ！」

プロトゲッター3、ジャガー号の機首から機関砲を放ち、ブラックダイノゲッターを



牽制する。

バット『こんな豆鉄砲でええ〜〜!』

瑞樹「あら、別にそれが攻撃だなんて言っていないわよ?」

バット『!?』

菜々「とおおおおりやああああ!!」

ブラックダイノゲッター目掛け、凄まじい勢いでプロトゲッター3が突撃する。

バット『何をつ…!?』

菜々「——せいっ!!」

猛烈な体当たりと共に、ブラックダイノゲッターを打ち上げた。

バット『ぐわああああ〜!!?』

菜々「どうです!? 必殺、ゲッタータツクルの威力は!?」

みく「この攻撃、イーグルの揺れが激しいにや…!!」

瑞樹「まあまあ良いじゃない。菜々さんが未央ちゃんに対抗して必死で編み出したん

だから」

バット『おのれ、試作機と侮ったか…!?』

瑞樹「菜々さん! 相手方と上がる前に動きを押さえて!」

菜々「了く解! パワーアーム!!」

バット『ぐおっ！離せ、離せ!!』

みく「卯月ちゃん今にや！ゲッタービームを撃ち込んで!!」

卯月「はいつ！ゲッターアア——」

卯月「ビィィー……う……っ!？」

ゲッター1の射出口から漏れ出したのは、閃光のビーム、ではなくゲッターエネルギーそのもの。

美波「何!?どうしたの!？」

卯月「分かりません！急にエネルギーギアが下がって…」

血を流すように、ゲッターエネルギーを溢れさせながら崩れ落ちるゲッター1。

卯月「き、機能停止!?!何で……動いて!？」

バット『フハハハ……!折角のチャンスも無に帰したな!』

菜々「——っ!?!きやああ!!」

ブラックダイノゲッターの副腕が蛇腹腕を持ち上げ、反対側へと投げ落とす。

菜々「うう……」

瑞樹「うっ……!」

みく「さ、災難……にや……!」

卯月「菜々ちゃん瑞樹さん、みくちゃん!!」

バット『次は貴様の番だあっ!!』

卯月「——っ!？」

バット『でいやああ!!』

卯月「あ、あああああああ!？」

ブラックダイノゲッターのトマホークがゲッターに深々と突き刺さり、薙ぎ払いによつてゲッターが宙を舞う。

卯月「ガハッ…!!」

美波「くっ…!! 私達の距離じゃ間に合わない!？」

みく「は、早く立て直さないと!」

菜々「わ、分かっているんですけど、車輪が地面に食い込んじゃって…!」

バット『トドメだああああああ!!』

瑞樹「菜々さん! 分離するのよ!!」

菜々「そうか! その手が…——」

バット『死ねえええええええいつ!!』

アーニヤ「だ、ダメ…!」

「パワーッアアーム!!」

アーニヤ「K T O!？」

バット『またしても……！しかし、プロトゲッターは動けぬ筈っ』

瑞樹「一体誰が……」

未央「フフンツッ！必殺、大いっく雪山！おろしいいいいいいいっ！！」

グワオオ

バット『おおっ!!?』

菜々「ゲッター3！」

アイドル全員「未央（ちゃん）っ!!?」

未央「へっへっん！みんな、お待たせ♪」

卯月「どうして……？九州エリアで戦ってた筈じゃ……」

未央「んんんそうなんだけどねえ。一応常時通信はオープンにしてたから」

みく「それで、危ないと思って急いで来たの？」

未央「そのとおり！大事な大事なしまむーのピンチに、美少女未央ちゃん颯爽登場

!!って訳。ドンピシャだったでしょ？」

「どこが？ギリギリ相手に打たせちゃったみたいだけど？」

未央「な、何を……!？」

卯月「凜ちゃん！」

凜「お待たせ。……何とか最悪の事態は避けられたみたいだね」

未央「もつちろん！何たって、未央ちゃんが駆けつけましたからね！」

凜「…ま、そう言う事にしといてあげるよ」

未央「むー。言い方に感謝を感じない」

卯月「あ、あはは…。まあまあ」

瑞樹「揃ったのね、ゲッターチーム!!」

凜「卯月、ゲッターの調子はどう？分離は出来る？」

卯月「それなら…：はい！大丈夫そうです！」

凜「なら…：未央！」

未央「そだね。私達、三人揃ったところで！」

卯月「合体ですね！派手にいきましようっ！」

凜「…卯月が未央に合わせるなんてね」

未央「行くよ！しまむー、しぶりん！」

卯月「はいっ！——オープンゲッター!!」

未央「オープンゲッター!!」

凜「!」

二機のゲッターがそれぞれの無人機を捨てゲッターマシンとなつて機首を上げ、ジャガー号がそれに追従する。

バット『来るか!!』

先行したイーグル号とベアー号。間にジャガー号を入れて、三機のマシンが空中で連なる。

卯月「チエエエエンジゲッターアアー!ー!ツ!!」

凜（…やつぱり。卯月のイーグルのゲッター線量が安定した）

未央「さあ、こつから私達三人のステージだよ!しまむー!」

卯月「はいっ!ゲッターアートマホオウークツ!!」

バット『性懲りもなく向かって来るか!』

ガキイン

ぶつかり合う二振りのトマホークが火花を散らす。

バット『このブラックダイノゲッターは負けんっ!!』

卯月「そんなものでええええ!!」

バット『むっ!?!』

ブラックダイノゲッターのトマホークに亀裂が生じ、碎け散る。

バット『ば、馬鹿な…!何故!?!』

ニオン『愚かな男だな。バット將軍』

バット『貴様、ニオン…!?!』

ニオン『俺でさえ一人乗りのゲッターに負けたのだ。三人揃ったゲッターに、勝てるものか』

バット『そんな非科学的な理由で、この私が負けると言うのか——!?』  
バット『!?』

ゲッター1の放った浴びせ蹴りがブラックダイノゲッターを弾き飛ばす。

バット『ぐう…。な、なんなのだ…!?このエネルギーの源は!?』

卯月『私達の力の源……それは!!』

卯月『貴方への怒りと!』

未央『熱い血潮!』

凛『そして、正義を抱いて。戦う為……勝つ為に!』

三人『二飛び出せゲッターアア!!』

バット『ぬあああああつ!』

両手にトマホークを二刀流で構え、ブラックダイノゲッターの副腕を切り落とす。

バット『ふ、フフフ…!私とて、恐竜帝国100万も兵を預かる將軍!このまま、只

では死なんっ!!』

未央『な、何?!いきなり抱きついてきて——』

凛『!奴の機体の温度が上がってる…!?自爆する気だ!卯月!!』

卯月「はいっ！ゲッターアア……！」

卯月「ビィーームツ!!」

バット『う、う……うおわああああ!!』

零距离から、ゲッタービームが浴びせられる。

バット『も、申し訳ありませんゴール様！ゲッターを仕留め損ない……先に地獄へと

旅立たせて頂きます！地獄にて、ゴール様の勝利と、恐竜帝国の栄光を——』

バット『うぎやああああああああ!!』

機体の限界を超え、大爆発を起こす。

みく「や、やったの!？」

瑞樹「それは禁句よ」

美波「でも……流石にあの爆発じゃ、流石に生きてないんじゃ……」

未央「ふうい……!とんでもない相手だったね」

卯月「はい……。まさか、自爆するつもりだったなんて……。凜ちゃんが気付くのがもう

少し遅れていたら……」

凜「安心するのはまだ早いよ。二人とも」

卯月「はい……!最後に大物が一体……」

未央「無敵戦艦ダイ!!」



ダイ『ギャオオオ!!』

みく「うにやあ…。さつきより狂暴になってない?」

瑞樹「もしかしたら、あのブラックダイノゲッターがこれの制御装置になっていたのかも」

菜々「え、だとしたら…」

ダイ『グワアア!!』

美波「きやああつ!」

アーニヤ「ミナミイツ!」

ダイの各所にある砲座が一斉に辺り構わず砲撃を開始する。

未央「うおつと! 瑞樹さんの言ってる事、当たってるっぽい!」

みく「こんな手を付けられない状態の、どうやって倒せばいいにや!」

卯月「こつちにもゲッターがこれだけいるんです! パワーを一点に集中させれば…!」

晶葉『…それが、そうも言ってられなくなったようだぞ』

凜「晶葉! どういう事!」

晶葉『全国に出現していたメカザウルスがそつちに集結している』

瑞樹「私達を包囲して、一気に殲滅するつもり!」

晶葉『ああ。正しく、前門の狼後門の虎だな』

みく「んな事悠長に言ってる場合!？」

ダイ『ギヤアアオツ!!』

菜々「あ、あわわわ…!ちよつとプロトゲッター3じゃ避けきれない…っ!」

瑞樹「一度分離しましょう!ゲッター1にチェンジするのよ!」

みく「そっちの方が砲火を避けるのが楽かもしれないや!」

菜々「そ、それもそうですね!——オープンゲッター!!」

みく「チェンジゲッターアアーツ!!」

アーニヤ「周囲四方から、敵メカザウルス…来ます!!」

瑞樹「みんな、準備はいいかしら?」

みく「モツチロン!何時でも大丈夫にや!!」

凜「卯月、私達の狙いは、無敵戦艦ダイだよ!」

卯月「はいっ!決着をつけましょう!」

未央「…とは言っても、具体的にはどうすんの?正面切つて戦つても、返り討ちだよ

？」

凜「…一寸法師つて昔話、あるよね?」

未央「…成る程。その作戦、いいね!」

みく「美波ちゃん、アーニヤちゃん！みくに合わせて、一緒にゲッタービームを撃つて！」

瑞樹「私達で卯月ちゃん達の突入を援護するのよ！」

美波「はいっ！」

アーニヤ「Da!」

みく「それじゃあ、行くよ……！3、2、1……」

みく&美波&アーニヤ「トリプルゲッタービームツ！！」

三筋のビームが殺到するメカザウルスを焼き払う

みく「卯月ちゃん！ビームの間を飛ぶにゃ！」

卯月「分かりました！——ゲッターウイング!!」

赤いマントが翻り、三つのビームの僅かな隙間を一直線にダイに向かって駆け抜ける。

メカザウルス・バド『キシヤアアアア!!』

卯月「邪魔です！」

メカザウルス・バド『グギャツ!?!』

ビームを掻い潜って、ゲッターに躍り掛かるメカザウルスをゲッターレザーの一撃の元に伏していく。

ダイ『ギャオオオオン!!』

ダイの双頭が目前に迫り、ダイが火球を溜めた口を開ける。

ダイ『!!』

卯月「オーブンゲツト!!」

ダイが火球を放つと同時に、三機のゲッタービームの援護が途切れ、その瞬間に合わせゲッターは分離する。

凜「チェンジゲッター2!」

凜「ゲッタードリル!」

ダイの頭部後方でゲッター2にチェンジし、左の頭部に着地、ゲッタードリルを回転させ、ダイの脊髄を破壊し喉の中へと侵入する。

メカザウルス's『キシヤアアア!!』

みく「ゲッターアトマホークツ!」

ダイの中に潜入したゲッターを追撃せんと殺到するメカザウルスにプロトゲッターがトマホークを片手に切り込む。

みく「ゲッターを追わせたりはしないにやん!」

菜々「そう言っても、早く離脱しないと私達もダイに倒されちゃいますよ!」

みく「あわわ…! そうだったにや…」

後ろから襲い掛かってきたダイの嘔みつきを辛うじて躲す。

瑞樹（頼んだわよ……三人とも……!）

くくく 無敵戦艦ダイ 体内 くくく

未央「ひえええくく!メカザウルスの体内って、こんな感じなんだあ!」

卯月「なんか、恐竜の体に機械が埋め込まれて……何と言うか、気持ち悪いですね」

凜「卯月の気持ちは分かるけど……。今はそんなところに目を向けてる場合?」

未央「あははは……。まあそうだねえ……」

卯月「それで、今はどの辺りなんですか?」

凜「さあ……。食道をだいたい進んできたから、そろそろ胃か腸に出ても可笑しくはない

と思うけど……」

未央「そもそも恐竜の体の構造なんてよく分かんないし、普通の恐竜と同じ構造して

んのかな?メカザウルスって」

凜「……。こうなったらこの壁を壊して動力部を探すしかないか」

未央「うわっ、しぶりん極端」

凜「外で戦ってるみく達の為にも、あまり時間は掛けられないし、当てずっぽうでも道

なりにいくより動いた方がいいよ」

凜「ゲッタードリル!」

ギユルイイイイイン

卯月「うっ…」

未央「ギャーツ、グロい！」

ダイの肉をゲッタードドリルで穿ち抜きながら前進する。

凜「思った以上に内部が広いな…。熱探知を使えば…！」

凜「未央、卯月。何か熱源の反応はあった？」

未央「いや、こつちには何にもー？」

卯月「こつちも同じですね…」

凜「この体内で、強い熱源の反応があれば、それが動力部の可能性が高いんだ」

未央「分かってるよー。でも、こんなちっちゃいセンサーとにらめっこばっかじゃ、目が疲れて色盲になっちゃう」

卯月「あはははは…。——…アレ？」

凜「何かあった？卯月」

卯月「はい…今、左の方に…」

凜「左だね。ようし…」

ゲッター2の進路を言われた方へと向ける。

ピコーン ピコーン ピコーン

凜「あつた…！卯月の言った方向に…」

未央「こつちのセンサーでも確認したよ、つと。…ほうほう…これはこれは…」

卯月「どうかしたんですか？」

未央「相当高い熱量だね…。コンピュータによると、周辺の温度だけでも1000度を超えてる。ゲッターでギリギリ耐えられるかどうか、って感じ」

卯月「それって、ゲッターは無事でも私達がどうにかなつちやうんじや…」

凜「前にマグマ近くで戦闘したこともあるし、大丈夫でしょ」

未央「そうそう！早乙女博士の話じや、ゲッターでもマグマの熱ぐらいまでは耐えられるみたいだし、心配しない、しない！」

卯月「ええ…」

凜「壁を抜けるよ。動力部に出る」

ゲッタードリルが向こう側へと貫通し、明かりの漏れる広い空間へと出る。

未央「これが、ダイの動力部!？」

卯月「大きな心臓…!」

凜「周りに取り付けた機械で産み出すエネルギーを増幅してるのか…」

未央「流星に、これを破壊するにはゲッタービームしかないね」

卯月「はい！みくちゃん達の為にも、時間はかけられません！」

凜「頼んだよ……!!——オープンゲット!!」

卯月「チェンジゲッター1!」

卯月「ゲッターアアビーームツ!!」

ゲッター1から放たれたゲッタービームがダイの動力部を赤熱させ、メルトダウンを引き起こす。

未央「うおっ!?なんか雰囲気ヤバくない?」

凜「動力部が爆発するんだ!卯月、急いで脱出するよ!!」

卯月「分かりました!ゲッターウイング!!」

動力部へと侵入した入り口から、出口を目指して全速力で飛翔する。

凜「……っ!!」

未央「お、お兄ちゃっくん!!」

卯月「——間に合っ……つ!」

くくく 戦闘区域 くくく

みく「うにやにやにやにやにやにやにやにやにやにやにや——!」

カチッ カチッ カチッ

みく「チィ……ツ!弾切れ……!?!」

メカザウルス『キシャアア!!』



みく「うにやああ!!」

弾の切れたミサイルマシンガンを襲い来るメカザウルスに叩きつけ迎撃する。

菜々「や、ヤバイですよー! ジリジリ追い詰められてます!」

みく「にやー! 卯月ちゃん達はまだなのー!」

瑞樹「そろそろ私達も、満身創痍って感じね」

美波「アーニヤちゃん立てる!」

アーニヤ「Da……まだまだ……!」

瑞樹「ゲッターQは私達の後ろに下がりなさい! 特にアーニヤちゃんのは、その損傷で戦闘は無理よ!」

ダイ『グルギヤアアアアアアアアア!』

みく「!?ダイが……」

菜々「苦しんでる……!」

アーニヤ「ウツキ……。上手くいったよう、ですね」

瑞樹「ぼさつとしてないで! 私達も離脱するわよ!」

美波「は、はい……!」

瑞樹「みく、二人を抱えて空中に離脱。出来るわね!」

みく「ふ、フルパワーで何とかやってみせるにや!!」

菜々「二人とも、しっかり掴まっついて下さいねー?」

美波「はい!…アーニヤちゃん!」

アーニヤ「いつでも…大丈夫、です。Спасибо…:…お願いします」

みく「みんなまとめていくよー!ゲッターウイング!!」

みく「上がれええええ!!」

白亜のマントを広げ、上空へと逃れる。

その直後、地上の無敵戦艦は、多くのメカザウルスを巻き込む大爆発を起こした。

みく「にやあああああ!!」

美波「きやあああ…!!?」

アーニヤ「ア、アアアアア…!!」

爆音と衝撃。凄まじい爆炎がプロトゲッター達を包み、生まれた衝撃波と気流がゲッ

ターウイングの流れを乱し、地上へと墜落させた。

みく「痛たたたた…。みくの鼻、曲がってないにや…?」

菜々「みくちゃんのお顔は大丈夫ですよ。…鼻血はスゴいですけど」

みく「うにやああ!?!何じやこりやああああ!?!」

美波「卯月ちゃん達は…ツ!?!」

各々が、固唾を飲んで爆心地である中心に目を凝らす。

ピコーン ピコーン…

アーニャ「…っ！反応ありました！ゲッターロボです!!」

瑞樹「…よかった」

みく「やあつたにや！みく達ゲッター軍団の大勝利にや!!」

菜々「ゲッター軍団？」

瑞樹「どこかの芸能人派閥みたいなネーミングセンスね」

美波「…？みんなちよつと待つて。ゲッターの動きが…おかしい？」

アーニャ「…え？」

未央「…私、生きてる？ねえしぶりん、しまむー？私達、生きてるんだよね？」

凜「…つうつ！あちこち痛いけど、未央の顔が見えるつて事は、死んじやいないみた  
いだね」

未央「あははははっ！何それ？私達まとめて天国に召されたつて可能性もあるじゃん  
？」

凜「こんな鋼鉄のコックピットの中が天国なら、私は遠慮するよ」

未央「ははっ！違う！…しまむー？」

卯月「…？はい…？未央ちゃん？」

未央「よかつた。ずっと返事がないからどうかしちやつたのかと…」

凜「未央の方もそうだけど、モニターの調子が良くないね。卯月の姿がノイズで見えない」

未央「爆発の影響が残ってるのかな？モニターだけじゃなくあっちこっちに支障出てるみたいだし。…ああコンピュータがアラート表示で真っ赤つか」

卯月「二人とも…みんなも、無事…ですか…？」

未央「この通り、つて、今は見えないか…。大丈夫だよ、私もしぶりんも。ちよつと怪我しちゃったけどね」

凜「それに、プロトゲッターとゲッターQの反応も確認したから、みんなも無事なんじゃないかな」

卯月「…そうですか。…よかった」

未央「大丈夫？しまむー？なんか、息が弱いけど…」

卯月「私ですか…？私は…」

凜「…っ！卯月、敵だ!!」

メカザウルス『キシヤアアアッ!』

卯月「あっ…」

メカザウルスの突撃をもちに受け、地面に倒れ込むゲッター1。

未央「うわっ!」

凜「卯月…!?どうしたの?今の攻撃を避けられないほど、ゲッターは壊れてないよ!」  
未央「待って!今の衝撃でモニターが回復して…。っ!?!」

卯月「——凜ちゃん、みおちゃん…。ごめんなさい…」

凜「う…づ、き…?」

卯月「私の方が…。壊れちゃったみたい、です…」

凜「その傷…。顔に刺さった破片は…!?!」

卯月「え、えへへ…。目が全く見えません…。コックピットも警告音ばかりで、反応が鈍いですし…」

卯月「でも、凜ちゃんと未央ちゃんの方は無事みたいですね…。分離するので、ジャガー号とベアー号で、離脱して下さい…」

凜「…。そんな事、出来るわけない!」

卯月「お願いです…。直ぐにでも、メカザウルス増援は来ますから…。身軽な方が、上手く離脱できます…」

未央「何言ってるのさ!?!ゲッター2にチェンジして地中に潜れば敵だつてやり過ぎせる!」

卯月「チェンジ出来るなら、そうするんですけど…」

凜「待って!卯月!」

卯月「凜ちゃん…」

凜「私がゲッターを操縦する」

未央「そ、操縦するつたつて…どうやって?」

卯月「そうですね。コンピューターは壊れちゃってますから、凜ちゃんのコックピットからはコントロール出来ませんよ…?」

凜「…ゲッターは合体してる時だけ、整備用の通路がそれぞれのコックピットまで直結してる」

凜「その通路を使って、イーグル号のコックピットまで行つて、直接動かす!」

卯月「そんなの…ダメですよ…。危険すぎます…」

未央「そうだよ!しづりんが移動してる最中に敵の攻撃を受けたりしたら…」

凜「それでも、卯月を見殺しにするよりはずっといい!」

未央「だったら私が…!」

凜「ベアー号のコックピットからじゃ距離がありすぎる。私が向かった方が近いし、結果的に行動が早く済む」

未央「で、でも…」

凜「これ以上話してる時間はない。私は行くから」

未央「…分かった。しまむーをお願い…」

凜「任せて」

座席後ろの整備用ハッチをこじ開け、中の通路を進む。

未央「それじゃしまむー。しぶりんが行くまで、機体を分離させちゃダメだよ？」

卯月「凜ちゃん…。未央ちゃん…」

未央「さて、と問題は、しぶりんが着くまで敵が来なきやいいんだけど…」

メカザウルス『キシヤアアア!!』

未央「やつば黙ってちやくれないか…」

メカザウルス『キシヤアア!!』

未央「!？」

『ハアツ!!』

メカザウルス『グギヤアアアツ!!』

未央「……っ!?!何?どこから…!」

ゲッター1に飛来したメカザウルスを脇から投擲されたトマホークが切り裂く。

未央「っ!?!ダイノ、ゲッターロボ…!?!」

ニオン『……ふん』

未央「どう、して…?」

ニオン『勘違いするな』

未央「え？」

ニオン『お前達は、生きる意味を失った俺に生きろと言った。そんな奴等に死なれたら、目覚めが悪くなると思っただけだ』

未央「へー、ふーん。ほー」

ニオン『何だ!?!』

未央「へへっ♪何でも?…でも、しぶりん達の言つてた通り、ホントに優しいんだね?」

ニオン『……。だから、それは貴様らの勘違いだと——』

ニオン『——言っている!』

手に構えたトマホークで、群がるメカザウルスを両断する。

凜「——ニオン。…ありがとう」

小さく感謝を眩きながら、鉄の梯子をよじ登り、イーグル号のコックピットまでの出入口のハッチを蹴り破る。

凜「卯月っ!大丈夫!?!」

卯月「…凜ちゃん。ニオンさんが…」

凜「うん、分かってる。卯月は少しゆっくりしてて」

卯月「うう……ごめんなさい」



卯月をシートの後ろへと移す。

凜（酷い怪我……。アイドルなのに……。痕が残らなきゃいいけど……）

凜「さあゲッター。もう一踏ん張り、研究所までお願い……！」

凜「ゲッターウイング！」

ゲッターに残された力を振り絞り、上昇を開始する。

瑞樹「凜ちゃん！」

凜「瑞樹さん……。みんなは無事？」

瑞樹「ええ、みんな大なり小なり怪我してるけど、全員無事よ」

凜「よかった……」

瑞樹「それより、どうして貴女がイーグル号のシートに……？」

凜「色々合つて、さ……。ダイノゲッターが敵を食い止めてくれる。その隙に離脱しよう」

瑞樹「信用していいの？」

凜「うん……。私を、信じて……」

凜「はあ……。はあ……。はあ……。はあ……。」ポタポタ

凜の蒼いパイロットスーツの脇腹辺りが赤黒く滲み、色の濃い液体が凜の足元へと滴り落ちる。

瑞樹「凜ちゃん……まさか、貴女も……」

凜「ふふっ……。思った以上にダメみたい……。だから、お願い……。一緒に来て……」

瑞樹「……。分かったわ。みんな聞こえたわね？ゲッターを守りながら、研究所まで帰還するわよ！」

みく菜々美波アーニャ「了解!!」

失速ギリギリの速度で飛行するゲッター1をカバーしながら、戦闘区域を後にする。

ニオン『行った、か……』

メカザウルス's『グギヤアアツ!!』

ニオン『ふん……。俺とて爬虫人。人類に荷担する理由はないが……』

ニオン『手負いの者を易々と追わせるほど、冷血でもないぞお!!』

——???

ゴール「——機は熟した！恐竜帝国の同胞達よ！」はらから

ゴール「既に、無敵戦艦ダイを失い、バット将軍も恐竜帝国の栄光を願ひ散っていった。我らの払った犠牲は、あまりにも大きい」

ゴール「しかし！ゲッターに痛手を与え、人間共に大しても損害を与えたのも事実！」

ゴール「今、この時より、我ら恐竜帝国の最終作戦を開始する!!」

ゴール「マシーンランド浮上！この血この星を、我らの安住の星とするために！全て

の人類を根絶やしにするのだあ!!」  
ワアアアアア!!

つづく

## 第9話 『最終決戦!! 恐竜帝国の落日!』

~~~~~ 早乙女研究所 ~~~~~

閑静だった早乙女研究所内の廊下を、2台の担架が慌ただしく駆け抜ける。

卯月「……」

凜「……」

未央「しまむー、しぶりんっ!!」

瑞樹「落ち着いて、未央ちゃん!ここは医療班の人達に任せましょう」

晶葉「とは言つたものの…、この研究室にある設備では…。まず血液だけで足りるか

どうか…」

未央「そんなこと言わないで、二人を助けてよ!天才なんでしょ!?!」

晶葉「人体は専門外なんだ!私にはどうしようもない…っ!」

未央「どうしようもないって…!しまむー達は、命を懸けて戦つて、こんなことになつ

て…。晶葉はどうしようもないって!」

瑞樹「そこまでよ。晶葉ちゃんに当たつても仕方ないでしょう?」

未央「……」

菜々「あの、血液って卯月ちゃんと凜ちゃんの二人分ですよね?二人の血液型は…」

瑞樹「卯月ちゃんはO、凜ちゃんはB型ね」

みく「それならみくの血を使って!みくは卯月ちゃんと同じO型だから…」

菜々「それなら、ナナもB型です!」

晶葉「……それが最善か…。すぐに準備に取りかかる。こつちに付いて来てくれ」

菜々「はいっ」

みく「分かったよ」

美波「あの…、私達も…!」

アーニヤ「何か…お手伝い、出来ることは…!」

瑞樹「貴女達は自分の傷の手当てに専念しなさい」

アーニヤ「でも…っ!」

瑞樹「貴女達だって、軽傷って訳じゃないでしょ?きちんと手当てを受けて、これからに備えること。それが今の貴女達に一番重要なことよ」

美波「……。分かりました…」

所員「医務室は島村さんと渋谷さんの手術で使用しますので、新田さんとアナスタシアさん、二人の手当ては談話室の方で。お願いします」

美波&アーニヤ「はい………」

瑞樹「未央ちゃん、貴女も。二人の事が気になるのは分かるけど、今は体を休めなさい」

未央「瑞樹さん……」

未央（しまむー……しぶりん……。…私は――）

卯月「……」

凜「……」

「」 早乙女研究所 会議室 「」

所員「これが、今から一時間程前に、千葉の都心部に出現した恐竜帝国のマシーナードです」

早乙女「ふむ……。これまでのものよりも遥かに大きいな」

晶葉「直径は10km以上。都市一つを丸々飲み込んでます」

早乙女「恐竜帝国の本拠地と見て間違いはなさそうじゃな」

所員「はい。問題はそれだけでなく、マシーナード内から大気組成を変化させる硫黄などの大気ガスが辺り一帯に散布されています」

晶葉「窒素52%、酸素8%、アルゴン1.4%…解析不能の5.2%も含めて、空気中の二酸化炭素の量も増え続けている」

早乙女「連中め……。大気の状態を白亜紀のものにするつもりか」

晶葉「そうすれば、地上は爬虫人類にとって住みやすい環境になるでしょうが、我々人類にとっては……」

早乙女「…政府の対応は？」

所員「依然、沈黙を続けています」

早乙女「ゲッターを当てにしているつもりか……。端から頼りには出来ん、か」

所員「ここで我々が何も出来なければ、戦術兵器の使用も考えられるでしょうか？」

晶葉「充分にあり得る話だな。日本政府が決断しなくても、より上の組織が、強行するかもしれない」

早乙女「もしそうなれば、例えマシンランドを何とか出来たとしてもこの国は終わりじゃ」

晶葉「とんでもない過ちが強行される前に、私達で何とかしなくてはならない。問題は……」

早乙女「ゲッターの整備の状況はどうなっておる？」

整備主任「はい。ゲッターのダメージはかなり深刻です。作業員を総動員して、ゲッター機の整備に集中したとしても、完璧に仕上げるには翌朝まで掛かります」

早乙女「我々にそんな猶予は残されてはおらん。完全でなくても、何とか今日中に仕上げるんじゃ」

主任「出来る限りの事は、やってみます」

晶葉「問題は、パイロットの方、だな」

早乙女「……」

医者「安部さん達の協力のお陰で、ここにある設備だけで、何とか手術は成功しました。ですが、渋谷凜・島村卯月兩名とも精密検査を出来ていません。ですから、外的な負傷は勿論、神経：精神、どこまでダメージを受けているかは、目が覚めてからでないと判断できかねます」

晶葉「外傷の具合は？」

医者「両者とも、全治1ヶ月以上は掛かります。医者立場としては、直ぐに出勤、というのは……」

晶葉「卯月と凜は勿論、二人に血液を提供してくれたみくと菜々も、出撃させるわけには行かないな。美波とアーニヤに関しては、無理をすれば出撃させられないこともないが……」

早乙女「現状、満足な状態で動けるのは未央さんと瑞樹くんだけか……」

晶葉「二人を同じゲッターに乗せたとしても、ゲッターを最大限發揮する事は出来ない。その状態では、勝算もありません」

早乙女「ぬう……」

くくく 格納庫 ゲッターロボ整備ドック くくく

未央「……」

瑞樹「まだ、こんなところにいたのね」

未央「……瑞樹さん」

瑞樹「駄目じゃない。キチンと体を休めてないと。卯月ちゃんと凜ちゃんが動けないのに、貴女にも何かあつたら、大変よ?」

未央「ホント、……どうして私なんだろう」

瑞樹「……未央ちゃん?」

未央「私が一人残つてたつて……何が出来るわけじゃないんだ。それなら、しまむーかしぶりんが無事だった方が……」

瑞樹「それ、本気で言つてるの?だとしたら、お姉さん怒るわよ」

未央「だつてさ、私じゃ何にも……出来ないんだよ」

瑞樹「未央ちゃん……っ!」

未央「本当ならさ、卯月達の仇討ちだー、つて、一人でもゲッターに乗つて出撃して、戦えたらいいんだよ。でも、それが出来ない……!」

未央「……怖い……」

瑞樹「……」

未央「卯月達を傷付けた恐竜帝国が怖い、あんな数で襲い掛かってくるメカザウルスが怖い、ゲッターに乗って戦うのが怖い……」

未央「死ぬのが、怖いよ……」

瑞樹「未央ちゃん……」

未央「だから、このままここにいて、何もしなかったら……死ななくていいのかな、つて。痛い思いをしなくていいのかな、つて。一人でずっと考えて、そんな自分が嫌で嫌で……」

未央「とんだ卑怯者だよな？リーダーだ何だつて言つて、卯月達に頼ってばかりで、一人になったら……こんな……。ただの臆病者だよ……」

瑞樹「……」

震える未央の体を、そつと抱き寄せる。

未央「瑞樹さん……？」

瑞樹「そんなの、当たり前前の事じゃない」

未央「当たり前前の……事……？」

瑞樹「そう。私の手、握ってみて？……分かる？」

未央「……震えてる」

瑞樹「ええ、私も怖いよ。未央ちゃんと同じ事を、同じように」

瑞樹「こればかりは、きつとどれだけ年を取っても一緒よ。人は誰でも、死ぬのは怖いし、傷付くのが怖い。…一人ならね」

未央「一人なら……」

瑞樹「仲間がいるから、分かち合える友達がいるから、どんな困難にだって挑戦できる。そうでしょ?」

未央「…うん……」

瑞樹「だから、怖かったら頼つてのいいのよ。泣いてもいいの。私は貴女に、勇気をあげられる友達ではないかもしれないけど、痛みを分かち合える、仲間なんだから」

瑞樹「私と貴女で、今出来ることを考えましょ?それは単純に、戦うって事だけじゃないから。戦うのが嫌なら、卯月ちゃん達が目を覚ますの信じて待つてあげれば良い」

未央「瑞樹さん……!ありがとう……っ」

瑞樹「良いのよ、このくらい。…涙を見せない、何て言うのはね?もう少し大人の女がすることなんだから」

晶葉「未央、瑞樹。ここにいたか。……ん?」

瑞樹「あら、晶葉ちゃん。どうかしたの?」

晶葉「いや、ああ。卯月が目を覚ましたぞ」

未央「!しまむーが!」

晶葉「ああ。驚異的な回復力だな。今医者が軽い問診などを行っている」

未央「分かった!ありがとう!」

晶葉「ああ、つて、速いな……」

瑞樹「仕方ないじゃない?あの子にとって、大切な友達なんだもの」

晶葉「……それもそうか」

〃〃〃 医務室 〃〃〃

未央「しまむー!」

卯月「――ああ……」

医者「ほ、本田さん……!」

未央「良かった……良かったあ……!体は大丈夫?どこか痛いところはない?お腹減ってる?何か足りないものはない?スリランカの首都は言える?」

医者「本田さん、落ち着いて下さい……」

未央「しまむーは怪我人なんだから、ゆっくり休んでいいんだよ?そだ、スタドリ持つ

てくる――!」

卯月「……あ、あのおく……」

未央「ん、何?どうかした?」

卯月「——その…どちら様、ですか？」

未央「……え？」

~~~~~ 所長室 ~~~~~

早乙女「記憶喪失？」

医者「はい。恐らく、脳に強い衝撃を受けたことが原因と思われます。言語機能などに問題はみられません。気付いた時には自分が誰かも分からない状態でした」

早乙女「治るのか？」

医者「シヨック性の記憶障害の為、一時的なものかと思われませんが、何時記憶が戻るか、などは……」

早乙女「ここに来て、このような障害が生じるとはな……」

医者「……。それに加えて、もう一つ、博士に報告しなければならぬことがあるのですが……」

早乙女「何じゃ？」

医者「はい。島村さんは、ゲッターに関する記憶を拒絶している可能性があります」

早乙女「何じゃと？」

医者「私や、途中で訪れた本田未央とのやり取りの中で、ゲッターに関する話題が出た際に、一種のパニック障害と似たような状態に陥りまして……。ともかく、強い拒絶反

応を本人が示していました。リハビリの段階で、ゲッターに触れさせるのは危険かと

早乙女「……本人は、今どうしておる？」

医者「はい。医務室で、今は本田さんが付き添って話し相手になつていますが……」

早乙女「……」

~~~~~ 医務室 ~~~~~

卯月「へえ、そうなんですか？私、アイドルだったんですねっ。アイドル……アイドル！何だかその響き、頭の中でびびつと来ます！」

未央「それは良かった。顔の傷も浅いみたいだし、これならアイドル復帰も大丈夫そうだね！」

卯月「うわあ！私、アイドルやれるんですか？楽しみですよっ！」

美波「ええ。それはもう、飛びつきり売れっ子のアイドルだったんだから！」

アーニヤ「Да。Наиболее：事務所一番のトップアイドルです」

卯月「そんな……。そうだとしたら、ファンの方々をガツカリさせないように、頑張らないと行けませんね……」

未央「大丈夫だよ！しまむーは努力家だったんだから！コツさえ思い出せば、直ぐに上達間違いなしだつて！私も手伝うし！」

卯月「ホントですか？それじゃあ、その時は、よろしくお願いしますね？本田さん！」

未央「……お、おう!この未央ちゃんにお任せあれ!」

卯月「……それにしても、どうしてアイドルがゲッターロボのパイロット何かに……」

「
アーニャ!」

卯月「ゲッター……?」

未央「しまむー?……しっかり!」

卯月「う、あゝ ああああああああああ……!!?」

美波「卯月ちゃん!?ゲッターの事は考えちゃダメ!卯月ちゃん!」

卯月「うゝ あゝ あ……ゲッター……ゲッター……!あゝ ああああああつ……!」

分からない!分からないよお!!」

未央「しまむー落ち着いて!」

アーニャ「Успокойтесь, пожалуйста!ウツキ!!」

卯月「思い出さなくちゃいけない大切なモノが……頭の片隅にあるものが出てこない

……!」

未央「もういいよ!卯月い!!」

卯月「どうして……どうして!ゲッターを思い出そうとすると、体はこうして震えるのに!どうして何も出てこないの!?!」

みく「な、何の騒ぎなの!？」

菜々「これは……卯月ちゃん……!？」

瑞樹「待つてなさい!今医者を連れてくるから!」

卯月「うう……。一体何が……何が私の頭の中に……こびりついて離れない……つ
!」

~~~~~ 医務室 外 ~~~~~

菜々「未央ちゃん……」

未央「な、菜々さん……。しまむーは……」

瑞樹「今、鎮静剤を打って落ち着いたところよ」

未央「……そうですか……」

みく「第一、今ここに居るのが良くないよ。早くちゃんとした病院に……」

未央「……」

菜々「みくちゃんっ!」

みく「うっ……。みくは、別に変なつもりで言ったんじゃない……。ただ、ここに居てもゲッ  
ターを思い出しちゃうんじゃないかって……」

未央「……大丈夫。分かっている。みくにゃんがしまむーの事思っている。言ってくれて  
るって事くらい……」



みく「……」

未央「ただ、しまむーがゲッターと一緒に私達の事も忘れちゃったのって、やっぱり辛かったのかな、ってさ……」

菜々「そんな事は……!」

瑞樹「…未央ちゃん、あまり悪い方に考えるものじゃないわ。ネガティブな感情は別のネガティブも招いてくる。卯月ちゃんの事、シヨックなのは分かるけど、貴女が貴女自身を責めたところで、卯月ちゃんの記憶は戻るものじゃないでしょう?」

未央「……」

瑞樹「今日は部屋に戻って休みなさい。貴女が眠って、目覚める頃には凜ちゃんも目を覚ますわ。そしたら、二人でしっかり、卯月ちゃんに寄り添ってあげればいいのよ」

未央「……。うん。そうする……」

おぼつかない足取りで、医務室を後にする未央。

菜々「……心配ですね、未央ちゃん……」

みく「にやあ……」

未央（今の私に…出来る、事……—）

~~~~ マシーンランド 指令室 ~~~~

ゴール「状況はどうなっておる?」

ガレリイ「はっ。この辺り一帯の大気の置換は9割以上完了しております」
 ゴール「早乙女研究所は？」

ガレリイ「主だった動きはみられておりません。奴等のゲッターも、無敵戦艦ダイとの戦闘でだいぶ損傷を受けた様子。そう易々とは動けません」

ガレリイ「その点に関しては、バット将軍も良い働きをした、と言うところでしょうな」

ゴール「うむ。しかし我らが宿敵ゲッターロボ。その痕跡を残しておくことは、後に至って憂いとなる。奴等を完膚なきまでに破壊し尽くすのだ!!」

ガレリイ「御意。直ぐにメカザウルス部隊を送りましょう。ゲッター亡き早乙女研究所など恐るるに足らず!」

ゴール「ゲッターに勝利し、我ら恐竜帝国に永遠の平和をもたらすのだあ!!」

くくく 早乙女研究所 くくく

——ゲッターチーム自室。

未央「——ふう……。：しまむーもしぶりんもいないと、部屋が広いね……。」

未央（しまむー……。しぶりん……。）

ウウウウウウンツ ウウウウウウンツ

けたたましいサイレンと研究所全体を包む震動。

未央「な、何……!?!」

所員『メカザウルス出現!繰り返す、メカザウルス出現!非戦闘員以外の所員は、速やかにシエルターに避難して下さい』

未央「…アイツら……。ゲッターにトドメを刺しに来たのか……!」

~~~~~ 格納庫 ~~~~~

みく「ほ、本当に一人で出撃するつもりにや!?!」

瑞樹「ええ。満足に動けるのは、私だけだもの。当然でしょ?」

菜々「だからって、無茶です!操縦桿握っているだけでも、ナナ達が……」

瑞樹「卯月ちゃん達に血を分けたんでしよう?だったら大人しく研究所で休んでなさい」

い

みく「大人しく出来るわけないよ!」

瑞樹「コックピットで気絶されるよりマシよ。分かるわね?」

みく「うにゅ……」

——タツタツ

未央「瑞樹さん……!」

瑞樹「未央ちゃん……。何しに来たの?ゲッターはまだ整備中よ」

未央「私も行く」

瑞樹「駄目に決まってるでしょう？」

未央「でも……！」

瑞樹「貴女にもしもの事があつたら、誰がゲッターを動かすの？ゲッターが、私達人類に残された最後の希望なのよ？」

未央「それは……そうだけ……」

瑞樹「いい？今は大人に格好つけさせなさい？貴女が動くのは、そのあと」

瑞樹「ステージは暖めておくから、ゲッターが復活したら、バッチリ決めなさい！」

未央「っ……！私、は……！」

瑞樹「みく、プロトイーグル号借りるわよ！」

みく「分かった……。でもきつと、ううん、必ず生きて帰ってくるにや！」

瑞樹「当たり前じゃない！」

主任『川島さん、ゲッターの整備に手一杯で、プロトゲッターは万全な整備が出来てねえエネルギーゲインのリミットラインには注意してくれ』

瑞樹「分かったわ。：研究所もみんなも守らなくちゃいけないとはいえ、無茶はできないって事ね」

主任『そう言うこつた。こつちが不甲斐ねえばかり…、すまねえ！』

瑞樹「気にしないで。お互い、出来ることに全力で向かいましょう。——プロトゲッターロボ、出るわよ!」

研究所のハッチが開いて、白亜のマントをはためかせたプロトゲッターが飛翔する。

瑞樹「1、2、3…。大した数ね……。でもっ——!」

ゲッターウイングの内側、背中へと手を伸ばしてミサイルマシンガンを取り出す。

瑞樹「こつちに負けるつもりなんてないわよ…。っ!ゲッターミサイルマシンガンッ!!」

ボウボウボウツ!

銃口から放たれたミサイル弾が、夜の森に赤の火線を描く。

瑞樹「ゲッタートマホーク!」

ミサイルマシンガンを左手で担って腰に据えて構え、右手でトマホークを抜き打ち、肉薄したメカザウルスを横一闪、両断する。

メカザウルス『キシヤアアツ!』

瑞樹「くうっ…。!死角から!」

「危ない!」

バラバラララ!!

メカザウルス『グギャア!』

木の影からプロトゲッターを狙ったメカザウルスを後方から飛来した火線が弾いて怯ませる。

瑞樹「今ねっ!」

銃撃で怯んだメカザウルスをトマホークで真つ二つ。

晶葉「ふはははは…っ! どうだ? とっておきの劣化ゲッター線弾の威力は!」

瑞樹「晶葉ちゃん!」

晶葉「何とか間に合ったようだな。援護する」

瑞樹「援護って、そのビイトで?」

晶葉「ビイトだと侮ってもらっては困るな。この私が改造に改造を重ねて完成させたその名も『BT-23 池袋カスタムSP・TYPE-28EX』だ!」

瑞樹「心強いわ! 少しでも戦力が必要なんだから。これでもう百人力よ!」

晶葉「ああ! 私達で人類の希望を守る、素晴らしい題目じゃないか!」

~~~~~ 格納庫 ~~~~~

みく「あ、あのビイトは他にもないの!」

主任「他に、つたつてなあ…。ありやあ晶葉ちゃんが個人的に手を加えてた奴だから、他には作業用のビイトしかねえぜ?」

菜々「それでも構いません! ナナ達もここで燻っているわけには……!」

主任「馬鹿言っちゃいけないえ! 作業用で武器もろくについちやいなんだぜ? それに、そもそもお前さん達は出撃しちや駄目だつてさつき言われたばつかだろ!」

みく「うううう!」

未央「戦つてる…。みんな。戦つてるんだ……私だつて——!」

未央「つ!」タタツ

菜々「…未央ちゃん?」

未央「私に……! 今、出来る事! それは——!」

くくく 医務室 くくく

卯月「……あ、本田さん」

未央「やつほ。どう? 少しは落ち着いた?」

卯月「…はい、何とか……。その格好、出撃なさるんですか?」

未央「うん。敵が来るからね」

卯月「そう、なんですか。気を付けて下さいね?」

未央「あんがとね。それと…」

凜「……」

未央「しづりんは、まだ起きない、か」

卯月「はい。私はずっとここに居ますけど、それらしい兆候はない…ですね」
未央「そつか。ま、その方が丁度いいかな？」

ギョツ

卯月「?…本田さん？」

眠ったままの凜の手をそつと握る。

未央「しぶりん。しまむーをお願い。それと、勝手だけど、私に勇気を頂戴」
……。

未央「——よし、つと。これでOK！それじゃ、迷惑かけたね」

卯月「本田さん！」

未央「……ん？」

卯月「あの、…死なないで、下さいね？——絶対」

未央「……。うん…分かった！」

タツタツタツ……

卯月「本田さん……」

凜「……んあ——」

凜「未央……？」

~~~~~ 格納庫 ~~~~~



主任「古田ア! 2番と3番のケーブルはどうなってやがる!」

古田「は、はい! 確認してくるツス!」

主任「つたく……! ゲッターの整備も終わってねえって時に……メカザウルスなんかも来やがって……。——ん!」

主任「ゲッターに火が入りやがった……? まさか——!」

整備のためにあちこちに繋がられたケーブルやパイプ管を引き千切りながら、ゲッターが動き出す。

古田「うわっ!」

主任「ゲッターが動く!? やめろ! そいつはまだ動ける状態じゃねえんだぞっ!」

未央『そんなこと言っても、ここまでしつかり動く、流石の整備だよ、主任!』

主任「未央ツ!! お前、自分が何してるか分かってンのか!? ゲッターまだ完全じゃない!」

未央『だとしても、ここでじっとして、ただやられるのを待つてるだけなんて、ゲッターだつて望んでないよ!』

主任「だからつて、お前が急いだつてなんにもなんねえだろうが! いいからとつとゲッターから降りろ!!」

未央『ほら、早くそこどいて! ゲッターに踏み潰されちゃうよ!』

主任『未央!!』

未央『もう自分の目の前で、大切な仲間が傷付いて、それを黙って見てるだけなんて嫌なんだよ!こんなの、アイドルの私達ができることじゃない!』

主任「み、未央…お前え……!」

未央『だからこんな戦いは早く終わらせるんだ!もう誰も悲しまないように、私の友達が、これ以上苦しめないようにする!そのために、私は行くって決めたんだ!!』  
ゲッターウイングがはためく。

古田「た、大将…。どうするっスか?」

主任「……ええい!これ以上格納庫を破壊されても面倒だ!ゲッターを出撃させろ!!」

古田「り、了解ッス!!」

未央（しまむー、しぶりん…みんな。私、ほんとに小心者だけど…だけどみんな、一生懸命頑張ってるんだもん!）

未央『私だつて、今私に出来る事。精一杯やってみるよ!』

未央『だから、力を貸して…!行くよ、ゲッターロボ!!』

未央「ゲッターウイング!」

赤のマントを翻し、ゲッターは夜の空へと舞い上がる。

晶葉「あれは……!」

瑞樹「何!?ゲッターが出撃した?!——…ッ!」

視線を反らした隙に肉薄したメカザウルスを、間一髪で斬り伏せる。

晶葉「何故だ!?どうしてゲッターを出撃させた!主任!!」

主任『すまねえ!!けど、未央ちゃんは格納庫をぶっ壊してでも出撃するつもりだった。そんな事されるぐれえなら、素直に出してやった方がいい』

晶葉「何だと……!」

未央「瑞樹さん、アキっち!」

晶葉「未央!研究所に戻れ!そんなゲッターじゃ、メカザウルスの相手だって出来はしない!」

未央「そんなの、やってみなくちゃ分からない!」

晶葉「分かりきっている!私だって、ゲッターの性能は把握しているんだぞ!」

未央「アキっち、戦いは1割の技術と、9割の気合いと根性だつて!」

晶葉「バカなことを言うな!感情論で勝てるなら、恐竜帝国などつくに滅ぼしてやる!」

未央「あつははつ、そうかもね」

晶葉「第一、3人乗りのゲッターにたった一人で…。まともな能力も発揮できないぞ

！

未央「一人じゃないよ！しまむー達は乗ってないかもしれないけど、二人の想いを乗せれば何時だつて100万パワーだよ！」

晶葉「何を言ってる!?!無茶苦茶だ！」

瑞樹「行きなさい！未央ちゃん!!」

晶葉「瑞樹!?!何を言っている?!」

未央「うん！友達のため、仲間のために、私はやるよッ！」

瑞樹「そう。なら、貴女がしたいことを成しなさい。ここは、私達が守るから！」

未央「お願い！——オープンゲット！」

ゲッター1が分離して、研究所を離れる。

晶葉「あつちの方角は、マシーンランドの……?瑞樹!何故行かせる!?!」

瑞樹「見たでしよう?あの子の覚悟を」

晶葉「覚悟で状況は変わらん!勝算があるのか!?!」

瑞樹「止めたつて止まらないわよ。なら、行かせてあげましょう」

晶葉「っ!どうしようもないのか……」

瑞樹「私達も話している暇はないわ!次が来るわよ!」

晶葉「…了解!」

くくく 千葉県 市街地 くくく

ガレリイ『フツホツホツホツ……!ゲッターがいなければこうも容易いとは』

ゴール『興醒めだな。早急に地上の完全支配を進めなければ』

未央「調子に乗ってられるのもそこまでだよ!!」

ゴール『むっ……!』

ガレリイ『ゲッター……!?しかし、あの損傷では、まともに動けるはずがありません!!』

未央「この街で……これ以上の無法は!私と、ゲッターが許さない!!」

ゴール『ふっ!今さらゲッターが現れたところでどうにもならんわあ!!』

ガレリイ『手負いでノコノコ出てきたことを後悔するが良い!』

ゴール『行けい!メカザウルス軍団よ!今こそ憎きゲッターロボに引導を渡すのだ

!!』

メカザウルス『ギヤオオオオオツ!!』

未央「来たな……っ!いけ!各機ミサイル一斉発射!!」

先頭を切つて突出したメカザウルス・バドをゲットマシン3機のミサイル一斉攻撃で墜とす。

未央「よし!分離状態でも、無線でコントロール出来る……あとは私の腕次第、だね

!。——行くよ!!」

メカザウルスの弾幕を掻い潜りながら、上空で編隊を組む。

未央「チェンジ！ゲッターアア！スリーツ！！」

上空から、地上にいたメカザウルスを押し潰して、ゲッター3が降り立つ。

未央「さあ……どつからでも掛かってきなよ！トカゲどもツ！！」

~~~~ 早乙女研究所 管制室 ~~~~

未央『うおおおおつ！！』

アーニヤ「……ミオ……」

みく「うう……！！外の敵は!?まだ掃討終わらないの!？」

所員「は、はい……！！断続的にメカザウルスが現れているようで……」

美波「本隊にあれだけの戦力を残しておきながら……こつちにもこれだけ戦力を送れ

るなんて……!!」

菜々「底が知れないと思ってましたけど……。ここまで圧倒的な差では研究所も、未

央ちゃんも！」

凜「……どういう、事……?」

みく「凜ちゃん……!!」

アーニヤ「傷の具合は……。まだ起きては、ダメです……!!」

凜「私の事はいいよ。それよりも、どうして未央が一人で出撃してるのさ!？」

菜々「未央ちゃんから、言い出したんです……。恐竜帝国決着を着けるって」
未央『うわあああ!?!』

スクリーンの向こうで、ゲッター3が敵の猛攻を受けて大きく仰け反る。

凜「だからって、どうして一人で行かせたの!?!」

美波「それは…、気付いたら未央ちゃんがもうゲッターに乗り込んで……」

菜々「ナナ達には、どうすることも出来ませんでした……」

凜「何で……っ!」

アーニャ「リン……!」

凜「っ……!」

未央『……あ。えへへ……。これ、研究所に映ってたの?もしかして』ピースピー
ス

凜「っ!未央!」

未央『おつ、しくぶりくん!気が付いたんだ!良かったあ……』

凜「今すぐ研究所に戻って!私も一緒に戦う!」

未央『あく……、今ここでそう言われても、ねえ……?』

凜「未央!!」

未央『まあまあ。心配しないで、そこで見てなさい、つて!』

未央『パワー……! アアアーム!!』

ゲッター3の伸びた両腕がメカザウルスを捕らえる。

未央『これが未央ちゃん必殺のお……! 大雪山つ! おおろしいいいいいいいッ!!』

周囲に展開したメカザウルスを巻き込むほどの凄まじい竜巻を起こし、多くのメカザウルスを吹き飛ばす。

美波「すごい……」

未央『一人で出てきたからには、いつもより上手くやってみせるから……——うおっ!?!』

放たれた2本のミサイルが直撃し、ゲッター3が土煙の中に消える。

凜「未央っ!?!」

みく「待って、様子が変だよ……」

凜「……? 煙幕が、晴れて……。ゲッターが……」

菜々「いない?」

未央『ゲッタードリルッ!!』

メカザウルス『ギャオ!!』

アスファルトの地面から突き出したドリルが、その場にいたメカザウルスを粉碎しながら地中に姿を現す。

アーニャ「ゲッター2!」

凜「何時の間に変形したの……?」

未央『しぶりん、しまむーの事は……』

凜「……うん、分かっている。記憶喪失、何だよね?」

未央『そ。だからしぶりんは、しまむーの傍に居てあげて?お願い』

凜「そんな…、そんな遺言みたいなお願い…、聞けないよ!」

未央『そんなこと言わずに、さあ?その代わりに、私もしぶりんと、しまむーの想いを借りて戦ってみせるから』

凜「嫌!そこから生きて、帰ってきてくれる、つて。約束するまでは絶対に嫌!」

未央『あはは……。相変わらず強情だなあ、しぶりんは。あ、でもその分愛されてると思えば、それでも良いか、つとお!』

未央『うわああああああ!!?』

凜「未央お!!」

くくく 市街地 くくく

一体のメカザウルスが、ゲッター2を羽交い締めにし、ビルへと押し倒す。

未央「ぐつ……!こんのお……!!」

未央「ドリルミサイールツ!!」

メカザウルス『ギョワア!!』

ドリルミサイルで吹き飛ばしながら破壊。

未央「ドリルハリケーン！」

メカザウルス's『クシャアアア!?!』

メカザウルス・ウル『ガアオツ!!』

未央「っ……!コイツ……!?!」

狼のような姿のメカザウルスに飛び掛かれ、押し倒される。

ウル『グルアアア!!』

未央「う……あ……あああああつ!!」

ウルの牙がゲッター2の右肩に食い込み、衝撃が未央のコックピット全体に響く。

凜『未央!撤退して!!未央——!』

未央「それは出来ない……相談だあ!!」

ウル『ガアツ!!』

未央「オーブンゲット！」

間一髪、ゲッターを分離し、難を逃れる。

未央「行くよ……!しぶりん、しまむ……!!力を貸して……」

ガレリイ『はっ！直ちに』

未央「……………このっ……………!!」

メカザウルス『ギヤアッ!』

未央「つたく、次から次へと……………。恐竜じゃなくて昆虫の間違いじゃないかね……………」

メカザウルス『キシヤアア!!』

未央「——っ!」

トマホークが線を描き、メカザウルスを断つ。そのゲッター1の背後で、ビルが突然瓦解した。

未央「何!?!……………っ!」

崩壊したビルの土煙の中から伸びた透明な触手に、両手両足を拘束される。

未央「こ、これって……………!動かない……………っ!」

『フツホツホツホツ……………!ゲッターロボよ。私の開発したメカザウルスを相手に、よくも戦い抜いたと誉めてやろう』

未央「別にアンタに誉められても嬉しくないって……………っって言うか誰!?!」

ガレリイ『フホホホ……………。この恐竜帝国一の科学者、ガレリイを前にしても臆せぬか』

未央「ガレリイだかガレレオだか知らないけど、知らない奴に怯えたりするもんか

……!」

ガレリイ『だが、ここから先はこの私と、このメカザウルス・ゲラが相手だ。貴様の好きにはさせません!』

未央「へんっ! 追い詰められてるのはそっちじゃんか! いいよ。ゲッターの力、その身にたっぷり思い知らせてやる!」

未央「ゲッタービーム!」

ゲッターが放ったゲッタービームは、メカザウルス・ゲラに直撃する。しかし、

ガレリイ『ハン! そんなもの効かぬわあ!』

ビームはゲラの中に消え、ゲラの体を大きく成長させる。

未央「嘘お!? ゲッタービームを吸収したって言うの!?!」

ガレリイ『フホホホ! このゲラこそ究極の対ゲッター用メカザウルスなのだ!』

未央「っ! ゲッタートマホーク・ブローメラン!!」

ガレリイ『無駄と言うに!』

ゲッターが投擲したトマホークも、ゲラの体内に入って消える。

未央「…っ! ビームみたいな光学兵器はダメ、トマホークの物理攻撃もダメ…。一体

どうしたら……!」

ガレリイ『貴様に残された手などない! 大人しくゲラの餌食になると良い!』

未央「うっ……！まさかコイツ、ゲッターを拘束した触手から、ゲッターエネルギーを直接吸収してると言うの!？」

ガレリイ『行け！我がメカザウルス軍団よ！今こそゲッターにトドメを刺すのだア!!』

メカザウルス1『ギヤアッ!』

未央「ぐっ……!」

メカザウルス2『キシヤアアアア!!』

未央「うう……っ!」

メカザウルス3『グギヤアア!!』

首に、足に、腰に。メカザウルスが巻き付き取り付き、或いは噛み付いて、ゲッターの動きを封じていく。

未央「ぐううううう……!」

~~~~ 早乙女研究所 管制室 ~~~~

みく「な、何なのあれっ！卑怯くさくない!？」

凜「くっ……!このままじゃ未央が……」

早乙女「問題はそれだけではない」

菜々「早乙女博士!」

アーニヤ「Столлько……?それだけ、とは……?」

早乙女「今、ゲッタービームを吸収した時の奴の増幅量を計算してみた。奴はエネルギーを吸収した分だけ巨大化しておる」

美波「確かに、ゲッターを拘束してる今も、ちよつとずつ大きくなってますけど……」

早乙女「そうじゃ!そして、このままゲッターのエネルギーを吸収され尽くされてしまえば、日本列島は巨大化したあのメカザウルスに覆われる!」

アーニヤ「Такие……!そんな事が……!」

早乙女「ああ……。微量で膨大なエネルギーになる。ゲッター故に、日本は滅びる事になるかもしれない!」

凜「つ……!未央!未央聞こえる!?今すぐ分離して離脱して!」

未央『——しぶりん?そんな、今更尻尾巻いて逃げ出すなんて……イヤだね!』

みく「変な意地張らないで!このままだとゲッターのせいで日本が滅びるんだよ!それでも良いの?」

未央『それじゃあ……、今離脱すればアイツが倒せるの!?アイツはゲッター線だつて吸収するんだよ?そんな奴に立ち向かう方法、ある!』

みく「それは……」

美波「それをみんなで話し合おうつて言うんじゃない!未央ちゃんだけで結論を急が

ないで！」

アーニヤ「ゲッターも…、もちろんミオも…：失うわけにはいきません！」

菜々「だから大人しく帰って来て下さい！こんなところで意地の張り合いなんてして  
も、何にもならないですよ！」

未央『みんな…：…そうだね』

凜「未央…：…！」

未央『でも、ごめん。私、アイツを倒す方法、分かっちゃったんだ』

凜「…どうやって…：…！」

未央『ごめん…：ごめんね、凜』

凜「待つてよ。どういう事？謝る意味が分かんないよ！」

未央「——ふふ…：。あははははは…：っ！」

ガレリイ『どうした？己の死が迫って可笑しくなったか？』

未央「私は正気だよ。…いや、可笑しくなったのかもしれない」

キュイイイイイ…：

ガレリイ『何だ…：…。ゲッターが輝きだして…：…』

未央「ゲッターの力…：…。そんなにほしいなら、くれてやるよ！トカゲ野郎!!」



キユイイイイイン!!

ガレリイ『こ、これは……………!』

ゴール『ガレリイ! 一体何が起こっている!』

ガレリイ『め、メカザウルスが…………私のメカザウルスが溶けていく……………!』

ゴール『馬鹿な…………!? マグマ熱にも耐えるメカザウルスだぞ!? それが地上で溶けるなど、あり得ぬ!』

ガレリイ『…………ゲッター線——!』

ゴール『何い!』

ガレリイ『ご覧なさい! メカザウルスが…………メカだけを残して溶けていく……………!』

ゴール『ゲッター線……………!』

未央「へへっ……………! どう? ゴール、ガレリイ! これが! アンタらの祖先を地下深くに閉じ込めた……………!」

ゲッターの腕を自身の腹部に振じ込み、腹部の装甲を押し広げて開き、切腹した侍がそのはらわたを引き摺り出すように掴み、掲げあげたのは、

未央「エネルギーの源だよ……………っ!!」

ゲッターロボの、心臓。

~~~~ 早乙女研究所 ~~~~

卯月「?…えつと…、ここは…?あゝ…、トイレに行ったただけなのに、広くて迷っちゃった…」

早乙女「——待て!それ以上は危険じゃ!早まるんじゃない!!」

卯月「!? うん?ここは……」

凜「早乙女博士の言う通りだよ!エネルギーを臨界まで引き上げて、自爆でもするつもりなの!」

菜々「そこで未央ちゃんがそんな事しても誰も喜びませんよお!!」

アーニヤ「Подумайте еще раз!!ミオツ!」

卯月「管制室…?それに…今、自爆って……!?!」

未央『ははは……。博士の言う通り、危ないかもしれない。けど、あのバカでつかいマシーンランドを吹っ飛ばすには、これが一番手っ取り早いかもしれないよ!』

美波「本気で言ってるの…?今自分が何をしようとしているか……っ!」

未央『ゲッター炉心をわざと暴走させて、膨大なゲッターエネルギーを拡散させる!幾らあのクラゲメカザウルスがエネルギーを吸収するからって、これだけの量のエネルギーを、一度に吸収できる訳じゃない!』

みく「それで、あのメカザウルスと、恐竜帝国を一度にやつつけるって言うの?ふざけたこと言わないで!!」

瑞樹『こちらプロトゲッター! 研究所周辺に出現したメカザウルスの掃討が終わったわ。今から未央ちゃんの救援に向かう——!』

晶葉『いいや。その必要はない』

凜「晶葉……!?!」

晶葉『こちらからもゲッターの炉心のスキヤンを行った。…ゲッター炉心は直に炉心融解し、エネルギーを放出して爆発する……』

晶葉『今からプロトゲッターで行っても、…もう間に合わん……っ!』

美波「そんな……っ」

瑞樹『……でも、だからって黙って見ているなんて出来ないわ』

みく「瑞樹さん! みく達も連れてって!」

菜々「もう自分の体の事なんて言ってられません! だから、ナナ達も乗せて下さい!」

瑞樹『……分かったわ。表で待ってるから、急いで来なさい』

みく&菜々「はいっ!」

晶葉『——行かせて良いんですか?』

早乙女「…本人達の、納得のいくようにさせてやれば良い」

晶葉『……』

みく「……っ! 卯月ちゃん!」

凜「……えっ……?」

卯月「え……あの……」

みく「……みく達は先を急ごう! 菜々ちゃん!」 タツタツ

菜々「え……!? あ、はいっ!」 タツタツ

未央『しまむー……。 どうしてそこに?』

卯月「え、あの……私は、ただ道に迷っちゃって……」

未央『あははっ、しまむーらしいや』

卯月「そうじゃなくって……! 自爆って、聞こえてきましたけど、ど、どういう事ですか!?!」

未央『そっか、聞いてたんだ……』

卯月「そんな、どうしてですか? どうして、そこまでして……!」

未央『どうして、か……。 それは、ある人の為、かな?』

卯月「ある、人……?」

凜「……っ」

未央『そ。ある人が、私にとって、大切な人達がもう二度と辛い思いをしなくても良いように。 ずっと笑顔で、平和に暮らしていけるようにする為に、だよ?』

凜「だったら……」

凜「だったらその為に、違う大切な人を傷つけても良いって言うの!」

卯月「渋谷、さん……?」

未央『たはっ……!それを言われると、ちよつとキツイんだけど……ね?』

卯月「本田さん……。約束したじやないですか、絶対に生きて帰って来て下さいって」
未央『あははは……!しまむーにそんな顔されると、決心が揺らいじやうなあ……でも』

未央『ごめん、しまむー。約束、守れないや』

卯月（本田さんが死ぬ決意をした……?ゲッターで戦って勝てないと分かって、それで……!）

卯月（私……?私は、どうして……そんな事……!）

卯月「う……あ、あああああああつ!!」

凜「卯月しつかり!未央!卯月にこんな思いさせて……、アンタそれでも……!」

未央『ホントごめん。生きて帰れたらこの埋め合わせは幾らでもするからさ!……もし、それが出来なかつたら、その時は……』

未央『私のお墓に、線香の一本でも供えておいてよ♪』

凜「ふざけないで!未央……!未央お!!」

「未央おおおおおおおおおお!!」

未央「——さあて、お・待・た・せ☆爬虫人類……!!」

ガレリイ『いかん……!このままでは……ッ!』

ゴール『は、早くゲッターにトドメを刺せえ!!』

ガレリイ「と、トドメを刺そうにも、ゲッターから放出されるゲッター線が膨大で、通常のメカザウルスでは近付く事すら出来ません!」

ドロオツ

ガレリイ『げ、ゲラの触手が溶けてゆく……!?!増大するゲッター線の量をゲラが処理出来ないのか!?!』

未央「ははっ!アンタの自慢のメカザウルスも、ゲッター相手では歯が立たないみたいだね!」

ガレリイ『さ、さ、さ……サルめがあ!貴様らなどに私のメカザウルスが負けるなど……!』

未央「ふふふ……!ちよつとは驚いた?そうこなくちや困るんだよねえ!こつちだつて命懸けてるんだからさ!!」

未央「私だつて、ゲッターエネルギーを臨界まで引き上げたら、こんなスゴい事になるなんて思ってもみなかったよ!でも……!」

未央「コレが、これこそが!貴様ら爬虫人類が最も恐ろしかった、ゲッターの光だ!!」
——カアツ

ゴール『ぬう…!?』

未央「ここでもう一度…、ゲッター光線で滅ぶんだよ…ツ!ト、トカゲ野郎…:つ!!」
ゴール『そ、そんな馬鹿な…:!!人間より優れた…:優良種たる我らがここで終わる筈がない——!』

未央「温かい心も、涙も持たない冷血野郎の爬虫人類!!ここで終わるんだ…:アンタらはあ!」

ゴール『おのれええええええ!!』

『やめてええええええええつ!!』

未央(凜…:卯月…:。後は、頼んだよ…:——)
カツ——

卯月「未央ちやああああああんつ!!」

瑞樹「——:ゲッター炉心の爆発光を確認したわ…:つ」

みく「そ、そんな…:!!」

菜々「この距離からでも、ハッキリと確認出来るなんて…:。あの緑色の光が、広がっ

て……」

瑞樹「ゲッター線の爆発光よ。全て燃やして、消してしまうのよ。ゲッター線が、
全て——」

みく「こんな……こんなキレイなのに……っ！残酷すぎるよ……!!」

瑞樹「——爆発光が消えたわ。：行くわよ」

菜々「行ってく……何処に？」

瑞樹「まだ希望を捨てては駄目よ。……生存者は、いるかもしれない」

みく「そ、そうにや！すごい爆発だったけど、脱出装置で上手く脱出したかもしれない
いよ——」

菜々「そ……そうですね！未央ちゃんなら、要領よく出来ているかもしれません！」

みく「そうと決まったら一秒でも速く救援に急ぐにや！」

菜々「はいっ!!」

瑞樹「……」

~~~~~ 早乙女研究所 ~~~~~

卯月「あ……あ、ああ……!!」

卯月「未央、ちゃん……」

美波「卯月ちゃん……記憶が……」



卯月「はい。ハッキリと思い出しました……。未央ちゃんは、私の為に……。記憶を無くした私の為に……っ!!」

凜「う……っ……っく……!!未央……馬鹿……っ!」

晶葉「博士。現地に到着したテスターチームから、映像送られてきます」

早乙女「うむ。正面モニターに出してくれ」

晶葉「了解」

美波「——これって……」

アーニヤ「酷い……」

早乙女「……都市は壊滅か……」

晶葉「はい。住民のほとんどは疎開して、人的被害は皆無だったかと思われませんが……」

早乙女「その人々は故郷を無くしたと言うわけか……」

晶葉「衛星からの映像では、半径7kmに渡って巨大なクレーターが出来上がっています。……クレーターの範囲内には、何も残されてはいないものと」

凜「何……っで……!!」

凜「何で、どうしてそんな落ち着いてられるの!?!私達の仲間が!未央が!あそこで……!!」

早乙女「甘ったれるな!!」

凜「!?」

早乙女「儂らは今、人類防衛の最前線にいる!人類の未来を背負って戦う者が、例え少女だったとしても、仲間の死に涙を流している暇があるのか!?!いや、ある筈がない!!」

凜「でも、大切な仲間だったんだよ……?」

早乙女「ならばその者の名を胸に刻め!二度と忘れぬように!お前自身が明日を生き、人々を守り、平和を取り戻す!その糧とする為に!!」

凜「糧なんて……そんな言い方……!」

晶葉「落ち着け。博士の言う通りだ。今の私達には、悲しんでいる時間なんてない」

凜「晶葉まで……!」

晶葉「……こんな惨劇を、もう二度と繰り返さない為に、私達は一日も早くゲッターをより深く知らねばならん」

晶葉「ゲッター線の研究が進めば、今日のような悲劇を回避出来るかもしれない。そうだろう?」

凜「それは……」

晶葉「それに、まだ死んだと判断するのは早いんじゃないか?今は現場の調査に行ったテスターチームの報告を待とう」

凜「……………うん」

早乙女「——すまん、晶葉くん」

晶葉「良いんですよ。科学の発展には、犠牲は付き物。そうやって、割り切る事は……  
で……きます……から……っ!」

早乙女「晶葉くん……」

みく『た、たた大変にや〜っ!!』

早乙女「っ!どうした!?!」

卯月「みくちゃん!?!」

みく『一面焼け野原で……何にも見当たらなかったけど、見当たる筈ないんだけど  
……………!レーダーが探知で、察知して……生体反応を……………!』

晶葉「ええい、要領を得ん!落ち着いてゆっくり、要点だけ話せ。いいな?」

みく『わ、分かったにや!ええとお……………んと……………!』

みく『未央ちゃんが生きてます!!』

凜「えっ……………!?!」

早乙女「何!?!」

晶葉「それはホントか!?!」

みく『ホントもホント!みくも信じられなくて、レーダー3回確認しちゃった!!』

瑞樹『私達も確認したわ。ホント、九死に一生って奴なのかしらね』  
菜々『とにかく、この映像を見て下さい!』

晶葉「これは……!」

凜「イーグル号……。いや、ゲッターの頭部!」

菜々『そうです! 未央ちゃんは出撃する時イーグル号に乗ってましたから! 微かですけど、生体反応もそこから出ています!』

凜「は……ははっ……。前から大した奴だとは思ってたけど……!」

晶葉「素直に脱帽だな……。大した生命力だ」

美波「良かったわね……。凜ちゃん!」

アーニヤ「X o p o 3 o !!」

凜「うん……うん……っ!!」

晶葉「よし、そうとなったら直ぐに未央を回収してくれ。私は、念の為病院の手配をしておく」

みく『了解っ! 待ってるにや未央ちゃん!』

卯月「……」

卯月「——良かった……。っ! 本当に……未央ちゃんっ……。!」

早乙女（あの爆発で、生き残るだど……?）

早乙女（爆発の直前で上手く脱出装置を起動出来たか?……いや、あの時の未央くんにそんな余裕はなかった筈……）

早乙女（ならば……”ゲッターが助けた”?）

早乙女「……」

早乙女「知らねばならんか。もつと、ゲッターと言うものを」

早乙女「ゲッターよ。お前は儂に、儂達に一体何をさせるつもりだ?この戦いも、まだ始まりに過ぎないとも言うつもりか……?」

早乙女「ゲッターロボ……!!」

第一部 完

## 第2部 ” G ” 編

## 第1話 『新たなる力！発進、ネオゲッターロボ!!』

第1話 『新たなる力！発進、ネオゲッターロボ!!』

~~~~ 早乙女研究所 外 ~~~~

凜 『それじゃあ、ここでお別れだね』

卯月 『はい……。あの、未央ちゃんにはよろしくお願いします』

凜 『うん。未央の事は任せて。…ゲッターの事も』

卯月 『……はい』

凜 『ほら、可愛い顔が台無しだよ？これからアイドルとして復帰するんだからさ』

卯月 『分かってます……。分かってますけど…私、自分が情けなくて』

凜 『そんな事ないよ。卯月は一生懸命頑張ったじゃん。ただ、今回の仕事は卯月の性に合ってなかったって、ただそれだけ』

卯月 『それじゃあ、凜ちゃんは大丈夫なんですか？』

凜 『私は……大丈夫だよ。それに、この仕事は私達のプロデューサーが私に残してくれた、最後の仕事だから』

卯月『そうですか……。あの、私がこう言うのは可笑しいかもしれないけど、——頑張ってください』

凜『うん。卯月も』

卯月『はい。それじゃあ……。』

凜『うん。——』

——さよなら。

晶葉『行つたか』

凜『晶葉。——うん』

早乙女『彼女を失つたのは人類にとって大きな痛手になるかもしれんぞ』

晶葉『早乙女博士……。』

凜『関係ないよ。たった一機のロボットに人の人生を左右させることなんて出来ない。卯月は、自分の意思でゲッターを降りたんだ』

凜『なら、後はここに残った私達だけで頑張るだけだよ。卯月が言ったようにね』

晶葉『卯月を失つた分は、これまでの戦いの経験で何とかするしかない、か』

晶葉『しかしそうなると、またメンバーを一から集め直さないといけないな』

凜『分かつてる。また一から作るうよ。前の私達のチームに負けない最高のゲッターチームと……。』

凜 『——新しいゲッターロボを……!』

——1年後。

「……やん……う……づきちちゃん……」

「卯月ちゃん!」

卯月 「うえ……つ! あ、ああはい! おはようございます! ……響子ちゃん?」

響子 「ようやく目を覚ましてくれました……。おはようございます。卯月ちゃん」

卯月 「えへへ……。ごめんなさい、響子ちゃん、…美穂ちゃん」

美穂 「いえ……! 別に謝られるようなことでは……」

響子 「でも、いつもはしっかりしてる卯月ちゃんが、ライブ前に居眠りなんて珍しいですね?」

美穂 「昨日お家で何かあった? 緊張で眠れなかったとか……」

響子 「卯月ちゃんに限って、そんな……」

卯月 「あはは……。緊張で眠れなかったって訳じゃないんですけど、実は昨日、友達と電話を……」

響子 「電話って、どのくらいですか?」

卯月 「えつと……、3時間くらい……かな?」

美穂 「さ、3時間!?!」

響子「そんなに一体、何を話してたんです!？」

卯月「え……?普通に世間話とかだけど……」

響子「世間話で3時間も電話で話さないですよ……」

卯月「そ、そうかな……?」

美穂「あつ……!そろそろステージに移動しないと、時間がありませんよ?」

響子「えっ?もうそんな時間!？」

卯月「い、急いで移動しましょう!」

卯月（恐竜帝国との戦いから、一年が経ちました）

卯月（世界は、一応の脅威も去って、少しだけ残った恐竜帝国残党との小規模な戦いが続いている程度で、普通に私の周りで暮らしている人達には何の影響もないくらい安全で、平穏としています）

卯月（私は、ゲッターロボから降りてから一年。早乙女研究所を離れて、新しくなったプロダクションでアイドルとして活動を復帰させてもらいました）

卯月（復帰する時は色々と立て込んでましたけど、今はそれも落ち着いて、新しいプロデューサーの元でほんのちよつとだけ後輩の小日向美穂ちゃんと五十嵐響子ちゃんの二人と共に、新たなアイドルユニットを結成し、今はアイドルとして、順風満帆です

！)

卯月（——ただ……）

卯月（正直なところ、この一年間、ゲッターのパイロットをしていた皆さんとは、一度も連絡出来ていません……）

卯月（皆さん、アイドルとして少しづつ活動を再開していると言うことは、風の噂で耳にします。だけど、時にはレッスンをお休みしたり、ドタキャンが入ったりもあるみたいで、やっぱり皆さんは、まだ……）

卯月（ゲッターに乗っているのかな——）

~~~~~ ライヴ会場 ステージ裏 ~~~~~

卯月「遅くなりました！…プロデューサーさん！」

新P「ん？おお、やつと来たか」

美穂「遅れてしまってごめんなさい！」

新P「良いよ別に。遅れたつつつて、まだ5分前だ。充分、優等生じゃねえか。——それよりもだ」

響子「はい！」

新P「今日のライヴは散々打合せしてつと思うが、要はお前らのCDの販促ライヴだ。規模はあまり大きくねえが、まだまだお前ら『ピンク・チェック・スクール』を知らねえ

奴らに知ってもらおうチャンスでもある。バシツつと決めていってこい!」

3人「二はいつ!!」

新P「よし、行け!」

——ライヴ中。

卯月『ねえ聞いて、素敵な恋をしてるの——♪』

卯月（フアンの皆さんの前で歌って、踊る。みんな笑顔で、拍手をくれて…）

響子『DOKI DOKI 超えて——♪』

美穂『BAKU BAKU してるハート——♪』

卯月（響子ちゃんとも、美穂ちゃんとも、前の事を気にしないで仲良くできてる。…

これで良いんだ。これで……私のやりたかった事は……）

「……」

卯月「——っ……!」

響子「——?」

美穂「……?」

卯月（今は……）

「……」

卯月（間違いない……。あれは……——）

——ライブ終了後。通路。

卯月 「凜ちゃん！」

凜 「…卯月」

卯月 「……。来てくれてたんですね……」

凜 「たまたま通り掛かって、ポスターが見えたから」

卯月 「…そう、ですか……」

卯月 「……あの……！」

凜 「良いライブだったよ」

卯月 「え……あ、はい。ありがとうございます」

凜 「また、笑えるようになったんだね」

卯月 「それは……！」

凜 「嬉しかった」

卯月 「っ……！」

凜 「実はね、私もまた、アイドルとして復帰するんだ」

卯月 「ホントですか!？」

凜 「ホント。ほらコレ、デビューライブのチケット」

卯月 「へえ……『トライアドプレミアム』……」

凜 「良かったら来てよ。私の用事はそれだけ。それじゃ……」

卯月 「あのっ……!」

凜 「……」

卯月 「凜ちゃんがアイドル復帰するってことは、恐竜帝国は滅んだんですよね? 私達の戦いは、終わったんですよね!」

凜 「卯月……」

卯月 「……」

凜 「それは違う」

卯月 「え……?」

凜 「でも……」

卯月 「でも……?」

凜 「卯月には関係ない」

卯月 「そんな…関係ないって……凜ちゃん!? ちょっと待って下さい! 凜ちゃん!!」

「……」

~~~~~ 市街地 ~~~~~

「おっかえり」

凜 「……加蓮」

加蓮 「旧友との再会は楽しかった？」

凜 「何か言いたげだね」

加蓮 「べつにつにー？凜が昔のチームメンバーに未練残してても、アタシには関係ないし。」

加蓮 「ただ、今のメンバーはアタシ達なんだから、その辺は分けて貰わないと。一応、『トライアドプリムス』のリーダーとして、ね？」

凜 「……。分かつてる。別に卯月に未練があるわけでもないよ。：卯月には、スポットライトのステージの上の方が似合ってるし」

加蓮 「そう？じゃあ私達にお似合いなのは空飛ぶ棺桶の中？」

凜 「……」

「おい加蓮。その変にしてやれって」

加蓮 「奈緒。：ごめん、つい調子に乗っちゃったかな？」

奈緒 「からかい過ぎるの、お前の悪い癖だぞ」

加蓮 「だからごめんって。でも、今のメンバーのアタシ達をほっぽって、凜は昔の女に会いに行つてたんだよ？奈緒を寂しくないの？」

奈緒 「あ、アタシは：別に……？」

加蓮 「ふうん。アタシは、寂しいかな？」

奈緒「はあ!?お、お前……」

加蓮「ふっ。奈緒も偶には、素直になった方がいいんじゃない?」

奈緒「な……加蓮!凜をからかうのやめたからって、アタシをからかうのはやめろよ

!

加蓮「あは♪バレたか」

奈緒「バレるよ!」

凜「……」

奈緒「ちよ、おい凜。お前も何も言わずに勝手に行くなつて!」

凜「コレから帰って訓練だよ。私達には、ゆっくりしてる時間なんてないんだから」

加蓮「流石、我らがリーダーは熱血だね」

凜「…何?」

加蓮「何も」

スタスタ

奈緒「おい凜!加蓮も!…つたく、少しはチームワーク考えろよなあ!!」

くくく 控え室 くくく

新P「オーツス島村。遅かったな」

卯月「すみません!実は、その…道を聞かれて」

美穂「……」

新P「そうか。ま、別に理由はなんでも構わねえんだが。コレで全員か」

新P「取り敢えずは、ライブお疲れさん」

3人「二「お疲れさまです（っ）!!」二」

新P「ふつ、相変わらず元気な奴らだ。もう一つくらい仕事入れても大丈夫そうだな」

響子「えっ? まだお仕事出来るんですか!？」

新P「あく、冗談だよ冗談。いくら俺でも早々直ぐに仕事なんか入れられねえつての」

響子「そんなぁ……」

卯月「残念ですね……」

新P「つたく、からかいがいのねえ。真面目なのは良いんだがよ」

美穂「えと…それじゃあ、今日はもうお仕事終わりになるんですか?」

新P「だな。折角だし、飯でも食い行くか? 奢ってやるぞ」

響子「良いんですか?」

新P「おう。遠慮なんかすんなって。どうせ金なんざあっても、使う時がねえんだ。

「こんなときくらい、奮発しねえとな?」

美穂「そんな…悲しいこと言わないで下さい…!」

新P「はっはっ! 悲しいことなんざ一つもねえよ? 俺が忙しくしてんのは、お前らを」

人前のトップアイドルにするためだからな」

新P「夢を作るってのはつまらねえ事じゃねえ。今は充実してるし、お前らもこうして結果だしてくれっから、金使って遊ばなくても充分楽しいぜ」

響子「プロデューサー……」

新P「で、どうする?行くか?」

卯月「えつとそれじゃあ……ご馳走になりますか?響子ちゃん、美穂ちゃん」

響子「そうですね。打ち上げにはピツタリだと思います!」

美穂「私も、この後特に予定もないから大丈夫だよ」

新P「おし、決まりだ。んじゃ俺は車表に出してくっから、お前らは帰る支度して待つてろよ」

3人「ニはいつ!!」

——移動中。

卯月「えつと……次の交差点を右、ですな」

新P「おう。ナビしっかり頼むぞ島村」

卯月「はい。任せて下さい!」

響子(プロデューサーの助手席……いいなあ……)

美穂「……」

響子「?美穂ちゃんどうかした?」

美穂「あ、ううん。何かどんどん街が賑やかになつてゐるなあつて」

響子「街?ああ、疎開先からたくさん人が帰つて来てゐるつて事ですか?」

新P「そうだな。お陰で復興も早く進んで、この辺はもうほとんど元通りだからな。仕事先も増えてきたし、ホント平和さまさまだな」

響子「でも、東京はこうですけど、他の都市や、…千葉の方は……」

新P「ああ、テレビで見たが、ありやあ酷えもんだ。とても人の住める場所なんかありやしねえ」

卯月「……」

響子「あ……ごめんなさい。卯月ちゃんこういう話は……」

卯月「う、ううん……!いいんですよ!全部、ホントの頃ですから」

響子「でも……」

卯月「本当に大丈夫です!それに、もう関係ないことですから」

卯月「私には、関係ないことですから……」

美穂「……」

~~~~~ その日の夜。 自宅 卯月自室 ~~~~~

卯月「——はい……はい、ふふっ。そうですね、そろそろ……」

卯月「はい。それではまた明日。学校でお会いしましょう。お休みなさい」

卯月「……」

携帯電話を手放し、ベッドへ。

卯月「ふう………」

卯月「……」

卯月「……」

p r r r r r p r r r r r p r r r r r

卯月「!? ——っは、はい!もしもし、卯月です!」

新P『おう、島村。俺だ。やっぱまだ起きてやがったか』

卯月「ぶ、プロデューサーさん!?!」

新P『つたく……夜更かしで長電話すんのも大概にしろって、何時も言ってるだろ』

卯月「す、すいません……」

新P『……まあいいや。今回はそんなことで説教するために電話した訳じゃねえし

な

卯月「そうでした。そう言えば、ご用件は……」

新P『ああ、単刀直入に聞くぞ——』

新P『——お前、まだゲッターパイロットに未練があるか?』

卯月「——っ!?…ど、どうしたんですか?いきなり……」

新P『あの時お前は誤魔化してたけどな、偶々見てたんだよ。お前が渋谷凪と話してんのをよ』

卯月「…そうだったんですか」

新P『その後も復興の話をしてる時も気にしてたみてえだしな。ともかく、渋谷凪に会ってたことを俺達に隠すつてのは、お前の中に申し訳なさがあるからだ』

新P『何が申し訳ねえかは、ゲッターのパイロットに戻りや、今の仲間を裏切ることになるっつう不安だ。どうだ?間違っつつか?』

卯月「…私の事、よく見てくれてるんですね」

新P『担当アイドルのケアも、俺の仕事の1つだからな』

卯月「…私は——」

新P『…。いいか、島村。1つだけ言っとくぞ』

卯月「はい」

新P『お前がどういう想いで、今アイドルやつてるのかは知らねえ。けどな、半端な覚悟でいんのなら、ステージに上がんじゃねえ』

卯月「——」

新P『それは、小日向にも、五十嵐にも、アイドルそのものに対しても侮辱してるよ

うなもんだ』

卯月「…はい」

新P『いいか、必ず答えを出せ。直ぐにとは言わねえ。が、お前がだからだから続けるつもりなら、こつちから遠慮なく切らせてもらおう。——分かったか?』

卯月「……はい」

新P『俺が言いたかったのはそれだけだ。出来る事なら、お前の一番の初志を忘れずにいてもらいたいもんだ』

卯月「分かり、ました……」

新P『おう、それじゃあな。しつかり休めよ』

卯月「はい。プロデューサーさんも。——お休みなさい」  
プツン——

卯月「……」

卯月「……私の初志、か——」

卯月（それは……）

卯月「……ん?外に…誰か……。あれは……」

美穂「……」

卯月「美穂ちゃん!?!」

くくく 外 くくく

卯月「美穂ちゃん！」

美穂「…卯月ちゃん……。ごめんね？こんな時間に……。電話したんだけど、繋がらなくて」

卯月「そ、それは、別に構わないんですけど……」

卯月（どうしよう……。私が長電話してたせいだよね……）

卯月「それより、寒くないですか？良かったら私の部屋に上がって行って下さい」

美穂「ううん。いいの。外の方が、その…二人きりになれるから」

卯月「え？」

美穂「あ、ええと、変な意味じゃないよ？ほら、今家には卯月ちゃんのお母さんとかいるでしょ？」

卯月「ああ、なるほど…。ママやパパに聞かれたら、不味い話なんですか？」

美穂「ううん。そういう訳じゃないけど…その……」

卯月「？」

美穂「ちよつとお散歩しない？気分転換って訳でもないけど……」

卯月「？…はい……、良いですけど——」

————— 数分後。 —————

卯月「……」

美穂「……」

卯月（美穂ちゃん……ずっと考え込んでるみたいだけど……）

美穂「あ、あの……！卯月ちゃん……！」

卯月「っ！な、何ですか？」

美穂「あのね、聞きたいことがあるの」

卯月「聞きたいこと？はい。何でしょう？」

美穂「あのね……その、卯月ちゃんは……私の前からいなくなったりしないよね？」

卯月「……それは……どういう、意味ですか？」

美穂「ん……あ、ごめんね。いきなり変な事聞いて」

卯月「い、いいえ！私も、ちよつと意味が分からなくて……ごめんなさい」

美穂「……。実は、私……友達がたくさん疎開しちやつて、まだみんなこつちに戻つて来てないんだ」

卯月「……そうなんですか」

美穂「私の地元の……熊本の方でも、この前戦闘があつたみたいで、そつちの友達も逃げ遅れて……重症で病院にいるつて連絡があつて……それで……」

卯月「……」

美穂「今日のライヴの後、卯月ちゃん遠い目をしてた……」

卯月「…そう、ですか？」

美穂「うん。プロデューサーさんに食事に連れていつてもらったくらいから、何だか、遠くを見てるみたいで……」

美穂「何だかそのまま、私達を置いて遠くに行っちやいそうな、何となく、そんな気がして……」

卯月「そんなこと！そんな、こと……」

美穂「……。卯月ちゃんが、前はゲッターに乗ってたって言うのは知ってるよ？卯月ちゃんが、人一倍責任感や使命感が強いのも」

美穂「けど、それだって前の…昔の話だよ？今は関係ないことだよ？」

卯月「美穂ちゃん……」

美穂「私、ヤだよ。卯月ちゃんがゲッターに乗って、私達の知らないところで戦って、傷ついて、遠くに行っちやうのなんて……」

美穂「私一人だけ残されるのなんてヤだよ！卯月ちゃんには傷ついてほしくないし、戦つてもほしくない。ゲッターになんて、乗ってほしくない！」

美穂「私を…置いていかないで……！」

卯月「…美穂ちゃん……」



美穂「う…つぐ…うわああああ——!!」

美穂「——…つく…ごめんなさい…。私、気が動転しちゃって…」

卯月「いいんですよ。誰だって、置いていかれるのは怖いですから」

卯月（私も…あの時、未央ちゃんがゲッターを自爆させた時に…）

美穂「卯月ちゃん？」

卯月「みんな同じです。みんな、恐竜帝国との戦いで大切な人と離れ離れになって…、辛くて泣きたくて、そう言うのを我慢して生きていますよね」

卯月「だから、そういう人達を、私達が歌って、励ませればって、今は思ってます」

美穂「卯月ちゃん…それじゃあ……!」

卯月「どんなことがあっても、美穂ちゃんや、響子ちゃんを見捨てることなんてありませんよ!」

美穂「良かった…」

卯月「ふふっ。それじゃあそろそろと帰りましょう?随分遠くまで来ちゃいましたし」

美穂「うん、そうだね。ここ、何処だろう?」

卯月「話ながら、夢中で歩いている内に知らないところまで来ちゃいましたね……」

美穂「本当……。あ、丁度あそこに人がいますよ。ここが何処かだけでも聞いてみましよう?」

卯月「そうですね——いえ、ちよつと待つて下さい」

美穂「? どうかしました?」

卯月「あの人、ちよつと様子が可笑しくくないですか?」

男? 「フシユルウウウ……」

美穂「え……?」

男? 「しまムら……ウヅき……」

男? 「見つけた……!」

美穂「きやつ……!」

卯月「爬虫人類……!こんな街中にまで!」

爬虫人「ご、ゴール様の仇イイイ!!」

美穂「いや……こつちに……!」

卯月「逃げましょう!早く!!」

美穂「う、うん!」

爬虫人「フシユルアアアア!!」

美穂「は、速い……!」

卯月（やっぱり身体能力は爬虫人の方が……何かあれば――）

卯月「!」

美穂「お、追い付かれちゃう!」

卯月「美穂ちゃん! 頭下げて!!」

美穂「卯月ちゃん!」

卯月「コレで――!!」

爬虫人「クアアツ!!」

卯月「てえい!」

爬虫人「!?」

近くの側溝の上に乗せられていた重石代わりのコンクリートブロックを、勢いよく爬虫人に叩き付ける。

爬虫人「ウギヤアアアアア!!」

美穂「す、すごい……」

卯月「さ、今の内です! 早く行きましょう!!」

美穂「そうだね!」

タツ　タツ　タツ

美穂「はあ……はあ……はあ……。こ、ここまで来れば……」

卯月「はあ……つ。いえ、爬虫人類の嗅覚は人間の何倍とありますから……引き離れたくらいだと逃げきれないと思います」

美穂「そんな！じゃあどうしたら……？」

卯月「それは……」

美穂「そうだ！もうすぐ行けば繁華街に出れそうだよ？人通りの多いところに逃げ込めばあつちも手を出してこれないんじゃない？」

卯月「ううん向こうにとっては人の数なんて関係ありません。寧ろ被害が増えちゃうかも……。何とかして、被害を出さずに逃げきらなきゃ」

美穂「でも、バスはもう最終過ぎてるし……今何処にいるかも分からないと、電車の駅だつて！」

卯月「……」

卯月「……私が時間を稼ぎます。美穂ちゃんはその内に」

美穂「え……？な、何で……」

卯月「あの人の狙いは私です。なら、姿を見られても目的さえ果たせれば、きつと美

穂ちゃんを追うことはしない筈…。だから……」

美穂「そんなの嫌だよ!私が卯月ちゃんを置いていくなんて!」

卯月「でもそれしか!どちらかが生き残るには今はそれしかないんです!このまま一緒に逃げてたら、美穂ちゃんだって狙われるかもしれないですよ!」

美穂「でも、やっぱりヤだよ!独りにしないって、さつき約束してくれたじゃないですか!」

卯月「それじゃあ響子ちゃんを独りにするんですか!」

美穂「っ——!」

卯月「今ここにいない響子ちゃんが、私達を失ったらどうするんですか?響子ちゃんだけじゃない、プロデューサーさんだって、みんな!」

美穂「……だけど、それは卯月ちゃんだって!」

卯月「二人いれば、悲しみも分け合えます。私と、恐竜帝国とのいざこざに美穂ちゃんは関係ないですから」

美穂「そんな…ヤだ……」

爬虫人「フルシユウウウ……!追イ付いたゾ…。追イカケツこハ終ワリか?」

美穂「は、爬虫人……!」

卯月「来ました。さ、美穂ちゃんは早く行って下さい」

美穂「ヤだ…嫌だ……!!」

卯月「早く!!」

美穂「っ……!!」

美穂（本当に…本当に、逃げるしかないの……?）

爬虫人「死ネエエエエ!!」

卯月「っ!？」

美穂「嫌…逃げるのも死ぬのも……」

美穂「いやああああああ!!」

「卯月!」

卯月「この声…凜ちゃん!？」

凜「そつちの子も!目を閉じて!!」

美穂「?」

卯月「美穂ちゃん、言うとおりに!」

直後、爬虫人と卯月の間に投げ落とされる小さな物体。

——カッ!

物体が破裂した瞬間、辺り一面をまばゆい閃光が包む。

爬虫人「ギヤアアアアッ!!」

美穂 「う、うう……」

卯月 「閃光弾……これは……」

凜 「今の内に!早くこつちへ!」

卯月 「凜ちゃん……。分かりました!いきましよう、美穂ちゃん!」

美穂 「うん……!」

卯月 「助けてくれて、ありがとうございます!」

凜 「礼を言われることは、何もしてないよ。こつちも準備するのに、ちよつと手間取ったし」

卯月 「私達が襲われてるって、分かってたんですか?」

凜 「うん。一応、見張りはつけてたし」

美穂 「それって、ずっと卯月ちゃんをつけてたって事ですか!?!」

凜 「そうだよ。こんなことがあった時の為にね。卯月だって、分かってたでしょ?」

卯月 「……はい」

美穂 「でも、卯月ちゃんはもうゲッターに乗ってないのに……」

凜 「そんな事情なんて向こうはお構いなしだよ。例えゲッターから離れようと、恐竜帝国を討ち滅ぼしたのが卯月じゃなくても……卯月はゲッターロボのパイロットだつ

たんだ。向こうにとっては、それだけで恨むに足る理由になるんだよ」

美穂「そんな……」

凛「着いたよ。コレに乗って」

卯月「コレって、研究所でも使ってたジープ……」

凛「うん。コレで奴の追跡逃げるよ」

卯月「コレなら、あの人から逃げられそうですね！」

凛「そう上手く行くといいけど……。ほら、あんたも乗って」

美穂「わ、私も……」

卯月「行きましょう。ここでお別れするのは危険ですから」

美穂「そうだね。それじゃあ、失礼します……」

「お、卯月ちゃん久し振りッス！」

卯月「あ、古田さん！」

美穂「えーつと……」

卯月「美穂ちゃん、この方、研究所でゲッターの整備をやってる古田さんです」

古田「よろしくッス」

美穂「ど、どうも……」

古田「いやあ卯月ちゃんの活躍は聞いているッスよ」



凜 「古田さん、世間話は後で良いから、出して」

古田 「了解ッス！」

ブロロロロロ……ン

卯月 「どこまで行くんですか？」

凜 「一先ずは研究所まで。あそこが一番安全だしね。あそこまで逃げきれば、向こうも一度手を引いてくれると思うけど……」

美穂 「引いてくれると、思う……？」

凜 「そこまで何事もない筈が……」

直後、ジープの背後からけたたましい破壊音が響く。

凜 「ないか。やっぱり」

美穂 「メカザウルス……本物の……」

卯月 「一体何処から……」

古田 「地下ツスよ。あいつら、自分の力で仕留め損ねた時の為に自分のメカザウルスを近くに隠しておいてるんす」

爬虫人 「フギヤアアアア!!」

人型で頭に2匹のトカゲをくっ付けたメカザウルス・ドバが卯月達を乗せたジープに迫る。

古田 「あのメカザウルス、ボロボロツスね。所々継ぎ接ぎツスよ」

凜 「応急処置での修復つてことは、また単独で行動してる残党か。ゲッターなら何てことないけど…」

爬虫人 『死ネ！死ネ！死ネエエエエ!!』

ドバの胸から放たれるミサイルが、ジープの走るアスファルトを破壊していく。

凜 「車じゃ不利か！」

卯月 「ど、どうするんですか!?!このままじゃ逃げきれませんよ！」

凜 「予定変更だね。古田さん、想定Bの合流地点に！」

古田 「了解ツス！」

卯月 「合流地点、ですか？」

凜 「安心して。向こうがメカザウルスを使ってくるくらい、こつちも予想済みだよ。その為の下準備だったからね」

卯月 「…?」

凜 「先ずは奴を市街地から遠ざける！」

古田 「フルスロットルで行くツスからねー！しっかり掴まって下さいよー！」

~~~~ 廃工場 ~~~~

卯月 「だいぶ郊外まで来ましたね。それに、ここは…」

凜 「ここは恐竜帝国との戦いの時に放棄されたんだ。今は誰も使っていない」

古田 「中も入り組んでるし、逃げ込むには最適って訳ツスね!」

美穂 「め、メカザウルスが来ちやうよ!」

凜 「大丈夫。それも計算の内だから。古田さん、次の角を右に」

古田 「はいッス!」

美穂 「きやあ!」

卯月 「美穂ちゃん、大丈夫?」

美穂 「卯月ちゃん…うん、急にハンドルを切ったから、よろけちゃった」

凜 「もう少しだから、あとちょっと頑張って」

卯月 「でも、さっきからどんどん奥に向かってますけど、この先って……」

最後の角を曲がり、行き止まりに突き当たり停車。

美穂 「い、行き止まり!」

卯月 「どういうことですか?凜ちゃん!」

爬虫人 『グゲゲ…。今度こそ、追い詰めた』

美穂 「ああ…今度こそ終わりです…」

卯月 「本当にここで良かったんですか!?凜ちゃん!」

凜 「うん。ここ、大丈夫」

爬虫人『終ワリだア!!』

ドバの頭部に収まったトカゲの片方から、その巨大な尻尾が振り下ろされる——
ギュルリイイイイイン……

爬虫人『ギャツ!?!』

ジープに向かって真っ直ぐに振り下ろされた尻尾。その尻尾を上空から急降下してきた赤い機影が断ち切る。

卯月「このロボットは……」

ジープとドバの間に着地し、落下時の衝撃で発生した煙幕が晴れたあと、そこに姿を表したのは、

美穂「ゲッター……ロボ……?」

「りーん!どうだよ、アタシの登場のタイミングは?」

凜「バツチリ。絶妙だったよ。奈緒」

卯月「……奈緒、ちゃん……?」

奈緒「へへっ……!」

加蓮「ま、空の上ですつと待機してたら、タイミングなんて測りたい放題だもんね?」
奈緒「ちよつ……それは言うなよ……」

爬虫人『忌まわしきゲッターロボ! ゴール様の仇イ!!』

加蓮 「仇なんて言われても、アタシ達知らないんだけど」

奈緒 「ドリルアームガン！」

爬虫人 『グギャツ!!』

赤いゲッター2の両腕のドリルの先端から放たれた光弾が、ドバを地へと平伏す。

凜 「奈緒。今の内に」

奈緒 「分かっているって。宜しく頼みますよ！リーダー！」

奈緒 「オープンゲット!!」

ゲッターが三機のゲットマシンに分かれる。

卯月 「凜ちゃん……」

凜 「あれは、ネオゲッターロボ」

卯月 「ネオゲッター？」

凜 「一年前の戦いで大破したゲッターの代わりに、その戦闘データを流用して開発された、真正銘戦闘用の、新しいゲッターだよ」

卯月 「新しいゲッター……。あれが……！」

卯月 「うっ……！」 スウ……

凜 「卯月……!? その、顔の傷は……?」

卯月 「ダイとの戦いで出来た傷です。普段は目立たないんですけど、今みたいに感情

が昂ったりするとこんな風に……」

美穂 「ライヴの時は、メイクで隠してるんですけど……」

凜 「卯月……。……」

一機の蒼いゲットマシン、ネオイーグル号が凜の目の前に降下してくる。

凜 「……」

来ていた衣服を脱いで、全身を隙なく覆う、蒼いスーツ一枚の姿になる。

美穂 「パイロットスーツを、何時も着込んでるんですか？」

凜 「このゲッターはある事情でね、パイロットスーツを着ないと、乗れないから」

古田 「はい、凜ちゃん。これ」

古田が手渡したのは、重厚な大きめのジェラルミンケース。

凜 「ありがとう」

素早くケースを開け、中に入っていた白い装甲板のようなものを、体の決められた位置に着けていく。

凜 「――よし」

パイロットスーツを着込み、ネオイーグル号へ向かう。

卯月 「凜ちゃん……」

凜 「卯月。よく見ている」

卯月「は、い……?」

凜「私達の戦いは、まだ終わってない」

卯月「っ!」

古田「卯月ちゃん達はこっちへ!ネオゲッターチームの戦いの邪魔にならないように避難するツスよ!」

卯月「ネオゲッターチーム:」

古田「そうツス。あの三人が今の人類を守る、最高のゲッターチームツスよ!」

ネオイーグル号が上昇する。

凜「お待たせ」

奈緒「凜の割りには、随分遅かったな?」

凜「茶化さないで。積もる話もあったんだからさ」

奈緒「ま、そういうことにしといてやるよ」

加蓮「早く終わらせよう。夜更かしはお肌の天敵だよ」

凜「:…かもね。フォーメーション123、ネオゲッター1で片を着ける」

奈緒&加蓮「了解(?!)」

凜を乗せた蒼いネオイーグル号を筆頭に、赤いネオジャガー号、黒っぽいネオベアー

号が続く。

加蓮「!」

先ずはネオジャガー号とネオベアー号がドッキング。ネオベアー号のエンジンが伸びて脚になり、ネオジャガー号のエンジンは背中の位置へと格納される。

奈緒「凜!」

凜 「いつでもいいよ!」

凜 「ゲッターチェンジ!!」

——ガキイン

最後にエンジンを両腕に、機首を頭部に変形させたネオイーグル号がドッキング。ゲッターの両目に火が灯り、合体を完了。

爬虫人『グギヤア……。出たナ、ネオゲッターロボ……!』

空中で合体を終えたネオゲッターが地上に降臨する。

爬虫人『ウルギユアアアアア!!』

凜 「——シヨルダーミサイル!」

口から火炎、胸からミサイルと放たれたドバの一斉砲撃に、ネオゲッターは、背中のバーニア上部を開いてミサイルを合わせる。

爬虫人『グギヤア……』

凜 「——っ!」

砲撃とミサイルが弾けた、煙幕の中をネオゲッター1は怯むことなく駆ける。

——ガンツ

肉薄と同時に右拳を突き出し、ドバを仰け反らせ、

ガンツ!

続けて左のローキック。ドバの足を払い、転倒させる。

凜 「——っ!はあああ!!」

倒れ伏したドバの鳩尾に、渾身の拳を突き入れる。

爬虫人『グギヤアアアア!!』

加蓮 「ヒューー!凜、やるう♪」

凜 「フツ。加蓮のリクエストに応えるよ。これでトドメを刺す!」

凜 「チェーンナックル!」

ドバに突き入れた拳をスライドさせながら射出。ドバを工場の壁面へと叩き付ける。

鎖で繋がれた拳は、役目を終わるとネオゲッター1の元へと戻った。

凜 「奈緒、加蓮。ネオジャガーとネオベアーのエネルギーをネオイーグルに!」

奈緒 「おし、了解!」

加蓮 「きっちり仕留めなよ?リーダー?」

凜 「分かつてる！」

ネオゲッター1を巡るプラズマのエネルギーが両腕部へと収束。ネオゲッターが両手を合わせることでそのエネルギーは凝縮され、大出力のプラズマ球となる。

凜 「プラズマ……サンダー!!」

ネオゲッター1は、それを槍投げの要領で投擲。実際の槍のように鋭く延びたプラズマ球は、立ち上がったばかりのドバの胴体を貫き、破壊した。

爬虫人『ゴ、ゴール様……ッ!』

最後の眩きを残し、メカザウルス・ドバは爆炎に包まれた。

戦闘は終わった。

卯月（ネオ、ゲッターロボ。新しいゲッター……新しいゲッターチーム……）

——凜 『私達の戦いは、まだ終わってない』

美穂 「卯月ちゃん……」

卯月 「凜ちゃん……!」

煌々と燃える炎の中に立つネオゲッター1を見上げる。

卯月 「私は——」

つづく

第2話 『決意！戦いの渦へ!!』

くくく プロダクションビル レッスルーム くくく

トレーナー「1、2、3、4、5、6、7、8！1、2、3、4、5、6、7、8！
……」

トレーナー「……。そこまで！」

響子「はあ……はあ……はあ……はあ……」

美穂「はあ……はあ……。ふう……」

卯月「……」

トレーナー「島村どうした？動きが固いぞ」

卯月「すいません！」

トレーナー「挙動が迷いがちだ。考え事をしながらレッスンには臨んでほしくないな」

卯月「は、はい……」

トレーナー「悩みがあるなら、プロデューサーや五十嵐達を頼れ。その為のチームだろう？」

卯月「そんな…悩みなんて……。私は——」

トレーナー「……。今日のレッスンはここまでだな。各自、ストレッチを忘れるなよ」

響子&美穂「はい!お疲れ様です!!」

卯月「……お疲れ様です……」

—— 談話室。

卯月「今日はおめんなさい。私のせいで、レッスン中止になっちゃって……」

響子「そんなの気にしなくていいんですよ!誰にだって調子悪い時くらいありますから」

卯月「そうかもしれませんが……」

響子「それよりも、どうします?思いがけなく時間空いちやいましたけど?」

美穂「……」

響子「ほら、美穂ちゃんも!」

美穂「あ…ご、ごめん……!ちよっとぼんやりしちゃって……」

響子「もう、卯月ちゃんも美穂ちゃんも…。二人揃ってぼんやりしちゃって。…それじゃどうです?カラオケとか!ボイスレッスンも出来ませんでしたし」

美穂「う、うん……!いいんじゃないかな?」

卯月「私も、良いと思います」

響子「よし、それじゃあ行きましょう？ パーッと歌って、悩みも全部吹っ飛ばしちゃいましょう！」

卯月「は、はい……！ 分かりましたから落ち着いて、手を引っ張らないで下さい……！」

卯月（響子ちゃん、私達に気を遣って……）

卯月（それなのに、私は——）

—— 昨夜。戦闘終了後。

プシユウウウ……

ネオゲッターのキャノピーが開く。

凜『……』

卯月『凜ちゃん！』

凜『来ないで！』

卯月『えっ!?!』

凜『こっちは、卯月の居ていい場所じゃない』

卯月『でも……！ 私……！』

凜『……』

凜『今、私が居る場所は、卯月には何の関係もない場所だから』

凜『卯月には平和で、幸せなアイドルのステージの上が、一番似合ってるよ』

卯月 『それは、凜ちゃんだつて同じです!凜ちゃんだつて、アイドルじゃないですか!私と同じ……………!』

凜 『卯月……………』

凜 『違う』

卯月 『え?』

凜 『私と卯月は違うよ。何もかも、決定的に』

卯月 『そんな……………な、何が違うって言うんです!?!』

凜 『私は、ゲッターに乗ってる』

卯月 『……………!』

凜 『私は、アイドルとしてステージに立つことよりも、ゲッターに乗ることを選んだ。卯月は……………その逆』

卯月 『それは……………!』

凜 『私は、みんなを笑顔にしたいって、アイドルの世界に戻った卯月を、こっちに戻すような真似はしたくない。今は、奈緒も加蓮も、新しい仲間がいてくれるしね。だから……………』

凜 『今の私達には、卯月は必要じゃない』

卯月 『凜ちゃん……………』

——現在。

卯月（凜ちゃんにはああ言ってたし、私も、アイドルとして活動することは大切だって分かってます。だけど……）

響子「はい。次、卯月ちゃんの番ですよ？」つマイク

卯月「響子ちゃん……。ありがとう」

卯月（アイドルとしての私……。パイロットの私……）

卯月（私は……）

——しばらくして、街中。

響子「楽しかったですね！また、みんなで来ましょう？」

美穂「うん……！私も、少し気分転換になったかな？」

卯月「そうですね……。是非、またみんなで……」

美穂「……」

響子（卯月ちゃん……。やっぱりまだちよつぱり引き摺ってるのかな……？）

「あら？……もしかして……」

卯月「——え？」

美波「やっぱり卯月ちゃん！」

卯月「美波さん!?どうしてここに……じゃなくて、お久しぶりです……!」

美波「相変わらずね。それで、こっちの二人が……」

響子「い、五十嵐響子です……!」

美穂「こ、小日向美穂です……っ!」

美波「確か……今一緒にユニットを組んでる娘達よね?はじめまして、新田美波です」

ニコッ

響子「い、いえ……ラブライカとしてのご活躍は予々……(ほ、ホンモノだ……!)」

美波「ふふっ。今日は三人でお出掛け?メンバー同士仲が良いのね?」

卯月「そうなんです!えっと、美波さんは……?」

美波「私?私は、仕事の話をちよつと、ね。今終わったところだけど」

美波「あ、そうだ。卯月ちゃん、これから時間あるかしら?」

卯月「ええ?確かに、今私達も帰るところですけど……」 チラッ

美穂「……あ、私達の事なら、気にしないで?久し振りに会ったんだし……」

響子「そうですね!積もる話もあるだろうし、どうぞ、お二人でごゆっくり!」

卯月「すみません……。ありがとうございます」

響子「そんな、気にしないでっば」

響子(私達より、ゲッターに乗ってた頃の卯月ちゃんを知ってる人方が、相談に乗っ

てくれそうだし……。ちよつとだけ悔しいけど)

美波「いい仲間を持ったわね。私からも、ありがとう」

美穂「そんな…、お礼されることなんて、何も……」

美波「いいのよ。単なる気持ちだから。それじゃ卯月ちゃん、行きましよう？」

卯月「は、はい…！それじゃ響子ちゃん、美穂ちゃん、また明日ね？」

響子「はい、お疲れ様です！」

美穂「うん。また、明日……」

~~~~~ 早乙女研究所 格納庫 ~~~~~

古田「大将！ゲットマシンの格納、完了しました！」

主任「よし、すぐに各部と変形機構のチェックだ。遅れると今夜も徹夜だぞ！」

古田「了解ッス!!」

凜「……ふう」

奈緒「凜、お疲れ〜」

凜「お疲れ、二人とも」

加蓮「それじゃ、私達先に上がってるけど、良いよね？」

凜「うん。今日の所はゆっくり休んで、明日に備えて」

奈緒「あいよ。お前もリーダーだからって、気負いしないで偶には息抜きしろよ？」

凜「……そうだね。肝に命じておくよ」

奈緒「おう」

加蓮「流っ石奈緒。優しく」

奈緒「な、何だよ…。こんなところで茶化すなつての」

加蓮「別に茶化してるつもりで言ってる訳じゃないって。本当にそう思ったから、そう言ってるだけだよ？」

奈緒「な…な、な……。……。さ、先に行ってるからな!…全く、もう……。!」ス夕

加蓮「ふふ…。耳まで真っ赤にしちゃつて。カーワイー♪」

凜「ほどほどにしてあげなよ。ああいうのは、馴れてないから可愛いんだから」

加蓮「分かっているって。でもほら、奈緒つてばあんま自分に自信があるタイプじゃないから。もうちよつと自信持つてもいいと思うんだよね」

凜「でもホントは自信ない奈緒も可愛い？」

加蓮「もちっ♪」

凜「…ほら、奈緒が行っちゃうよ」

加蓮「あーあ、奈緒待つてー!歩くの早いよー」タツタツ

凜「……はあ」

「よ、お疲れだねえ？」

凜 「え——?」

未央 「リーダーやってる感想はどうだい? しぶりんっ」

凜 「未央……退院してたんだ?」

未央 「つい、一昨日ね。忙しいと思って、しぶりんにもしまむーにも連絡はしなかったけど」

凜 「本音はサプライズしたくて?」

未央 「もちっ♪」

凜 「……」

未央 「おうい、さっきの相方とは随分対応が違うんじゃないのかい!」

凜 「そんな事ないよ。…取り敢えず、無事で良かった。本当に」

未央 「あ、ああ……。ごめん……。心配した?」

凜 「当たり前じゃん。ゲッターで自爆して、1年も入院して……。逆に心配しないと思う?」

未央 「う……。ごめんなさい」

凜 「別にいいよ。自爆したのは1年前で、退院したのは一昨日の事なんでしょ。なら、別に蒸し返すでもないし」

未央 「は……。あんがと。んじゃ、お許しついでに、これから時間ある?」

凜 「これから訓練の終了報告をしに。そのあとなら、別にいいけど?」

未央 「うっし、了解!待ってるね」

凜 「…それじゃあ、また」

未央 「へえ〜!これがネオゲッターか…。テレビで何度か見たけど、やっぱり現物は迫力が違うね?」

凜 「私は乗ってる側だからなんとも…」

未央 「これが今の日本防衛の要、かあ〜」

凜 「そうだね。動力はゲッター線じゃなくて通常動力のプラズマエネルギー。サイズも、元のゲッターより一回り小さいけど、戦闘力は前のゲッターを軽く越えるよ」

未央 「ほお、そりやすごい。ゲッター線を動力にしなかったのには訳が?」

凜 「詳しくは聞いてないけど、このゲッターを造る為に使った橘研究所の作業用ロボットの動力を、機体の完成を急がせる為にそのまま使ったんだって」

未央 「橘研究所?」

凜 「うん。ここと技術協力してる、北海道にある宇宙開発研究所だよ」

未央 「ふうん」

凜 「結果的には、プラズマのお陰でエネルギーは安定してるし、適正もないから誰で

も乗れる。それに、ゲッター自身がこのサイズなら、プラスマエネルギーでも十分だしね」

未央「成る程。恐竜帝国の残党を倒すだけなら、ちようど良いって訳だ？」

凜「まあ、そんなところ。…乗ってみる？」

未央「あー……。いや、遠慮しとく」

凜「? どうして？」

未央「いやあ〜…あはは……。実は、ゲッターで自爆した影響と言いますか、少し後遺症が残ってます」 ギュツ…

凜「右腕……。酷いの？」

未央「大した事はないんだけどね。でも、ゲッター線を使っていないってことは、ネオゲッターの操縦って結構ピーキーなんじゃない？」

凜「…そうだね。専用の耐Gスーツを着ないと、耐えれないレベルだし」

未央「でしょ？ 医者が言うには、あんまり力んだり、衝撃加えるのは良くないってさ」  
凜「それじゃ……」

未央「ネオゲッターの操縦は、ムリだね」

凜「……ごめん」

未央「な〜んでしぶりんが謝るのさ？」

凜 「だって、そんな後遺症まで背負って…。あの時の戦い、未央一人に背負わせなければ……」

未央 「それは結果の話じゃん？先の事が分かって、行動する人間なんていないよ」

凜 「でも……」

未央 「もう一つ、結果的に言えばしぶりん達がゲッターに乗らなかつたお陰で、今こうしてネオゲッターチームは順調に機能してる」

未央 「もししぶりに何かあつてたら、ネオゲッターチームもまた違う形になつてたんだよ？」

凜 「それは……そうかもしれないけど」

未央 「だーかーらー！結果オーライだって。しぶりんの気にすることじゃないよ」

凜 「そうかな……」

未央 「そーだよ！それに、さつきしぶりんも言つてたじゃん？1年前の事、今さら蒸し返してもしょうがないって」

未央 「だから、1年前の事で謝るのはなし。これからを前向きに話していこうよ？」

凜 「うん……」

未央 「それでよしっ」

凜 「……。そう言えば、さ」

未央「何？」

凜「この前、卯月に会ったよ」

未央「……そーなんだ」

凜「未央は、卯月がゲッターから降りたって言うのは？」

未央「聞いてはない。けど、アイドルとして活動再開したのは聞いてたから。もしかしたらあってね」

凜「…そっか」

未央「それで？しまむーと再会して、何話したの？」

凜「話したことはないよ。ただ、もうこっちには戻ってきちゃダメって」

未央「成る程。アイドルの世界が、しまむーには一番似合ってるもんね。いや、私  
もだけど」

凜「うん。元々全く世界が違うんだから、こんな思いをするアイドルなんて、少ない  
方がいいよ」

未央「そうだね。でもさ……」

凜「？」

未央「今居る場所から離れて、じっくり考えなくなる時だってあるよね？」

凜「それは……」



未央「しまむーに戦ってほしくないってしぶりんの気持ちは分かるよ? だけど、一方的に相手の気持ちを否定するのは、間違ってるんじゃない?」

凜「……」

未央「しまむーがどう考えてるかなんてしまむー本人にしか分かんないけど」

未央「もししまむーがしぶりに否定されても、それでも戻って来るとしたら……その時は、ね?」

凜「うん……」

未央「うんうん。それじゃあそろそろしぶりんの仲間を紹介してよ♪」

くくく 都内某所 喫茶店 くくく

卯月「それで、その時に響子ちゃんが——」

美波「ふふっ♪」

卯月「あ、すみません……。何か、私ばかり喋っちゃって……」

美波「ううん。いいのよ、気にしないで? 卯月ちゃんの話、もっと聞きたいな」

卯月「ほ、ホントですか……?」

美波「勿論。だって、そうやって話をしてる時の卯月ちゃんって、ホントに充実してて、すごく輝いているんだもの」

卯月「か……がやいて……ますか? 私」

美波「ええ！この1年間、私も忙しかったけど、その間卯月ちゃんは平和で満ち足りた毎日を送ってたんだなあって」

卯月「そう、ですか……」

美波「？ ごめんなさい…私何か……？」

卯月「いい、いいえ！美波さんの言う通りなんです。言う通りだと、思うんです」

美波「卯月ちゃん？」

卯月「私、ゲッターから降りて1年…。プロダクションの人から、新しいプロデューサーの元でユニットでアイドル活動させてもらえて、私がアイドルに復帰したのをママもパパも友達も、みんな喜んでくれて…」

卯月「美穂ちゃんも響子ちゃんも、みんな良い子で、ピンク・チェック・スクールとしての活動のその一つ一つもまた1から始めていくんだって、どれも大切な思い出…」

卯月「——でも、何か違うんです。みんなでライブをして、ステージの上で歌ってもグラビアの撮影で、カメラの前に立っても」

卯月「何だか、私一人が浮いてる感じで、今いる場所も、自分が本来いる場所じゃない、って。そんな気がして…」

卯月「ズレ…って言うんですか？私が見ている景色を、私が今歩んでる道を、こうし

と一緒に歩みたかったのは、もっと違う…別の人とだったんじゃないかなって……」

美波「……」

卯月「あ…。また、私一人で、変なこと話しちゃいましたね……。すみません……」

美波「ううん、ちつとも変なことなんかじゃない」

卯月「え……?」

美波「最後に卯月ちゃんが言った別の人って、凜ちゃんと未央ちゃんの事でしょ?」

卯月「……っ」

美波「分かるよ。ずっと一緒に『ニュージエネレーション』だったんだもの。楽しいことも、辛いことも一緒に乗り越えてきた、ね」

卯月「……」

美波「でもね、それは卯月ちゃんが拘ってるだけだと思うの」

卯月「拘る……?」

美波「うん。卯月ちゃんにも成し遂げたい夢や、思い描いた未来に……。だけど、今いる場所が卯月ちゃんの選んだ道で、目の前にあることが現実だよ」

美波「卯月ちゃんはズレって言ったけど、それは単純に思う通りになってない現実を否定したいだけ」

卯月「それ、は……」

美波 「それって美穂ちゃんと響子ちゃん、あの二人に失礼だと思わない？」

卯月 「……」

美波 「あの子達は、貴女にとって凜ちゃんや未央ちゃんの代わりでしかないの？」

卯月 「それは違います!!」 ガタッ

客1 「何…喧嘩…?」

客2 「おい、あれって……」

客3 「えっ、もしかしてアイドルの……」

ザワ… ザワ…

卯月 「あ……」 ストン

美波 「熱くなっちゃったわね…」

卯月 「ごめんなさい……」

美波 「私の方もごめんね? 卯月ちゃんの気持ちを考えないで」

卯月 「そんな事……」

美波 「……」

卯月 「……」

。

美波 「あ、あのね…? 実は私、今度映画の仕事が入ったの」

卯月「えっ!? ホントですか?」

美波「まだ正式に決まった訳じゃないけどね。ドキュメンタリーの映画に、出てみないかって。勿論、受けるつもり」

卯月「映画なんて、スゴいじゃないですか! 頑張ってください! 公開したら、絶対見に行きますから!」

美波「ありがとう。演技なんてほとんど経験ないし、不安だけど、やっぱりチャレンジしてみたって気持ちの方が強いから。……でもね」

卯月「? はい:~?」

美波「撮影が結構ロングスケジュールみたいでその間は他のお仕事ができないのよ」

卯月「へえ、映画でももんね。どのくらい掛かるんですか?」

美波「今日の最初の打ち合わせで聞いた話だと、1年くらい:~?」

卯月「い、1年:~!?!」

美波「ドキュメンタリー映画だから……。撮影にもそれなりに期間が必要みたいなの。ひよつとしたら、もつと掛かるかも……」

卯月「で、でも:~撮影がそんなに続いたら……」

美波「ええ、体型維持とかの事もあるし、何より、不測の事態があったら怖いから:~ゲッターは降りるつもり」

卯月「そんな簡単に…?!いい、良いんですか…?!?」

美波「良いも何も、仕方ないじゃない?ちよつぴり悔しいけど」

美波「でも私は、私を必要としてくれる人のために、頑張りたいから!」

卯月「私を必要としてくれる人…!」

美波「そう。アイドル新田美波として活動するのも、ゲッターのパイロット新田美波として活動するのも、私にはおんなじ。私を必要としてくれる人がいるから」

卯月「みなさんは、何て言ってるんですか?」

美波「勿論、みんな賛成してくれたわ。ただ、アーニヤちゃんだけは少し寂しがつてたけど」

卯月「そっかあ…、ラブライカとしても活動出来なくなっちゃうんですね」

美波「ええ…。だけど、応援してくれたアーニヤちゃんの為にも、精一杯やらなくちゃ!」

卯月「どうして…:…:どうして美波さんはそうやって一人で頑張れるんですか?」

美波「一人で?それは違うよ、卯月ちゃん」

美波「さつきも言った通り。私にはアーニヤちゃんやみんな、勿論卯月ちゃんも。たくさんの仲間がいるから。そう言う仲間達と築いてきた思い出や経験が、私の背中を押してくれるの」

卯月「仲間との思い出や、経験……」

美波「そう。それが私に勇気をくれて、私を新しい世界に旅立たせてくれる」

卯月「新しい世界……?」

美波「うん。まだ私が知らない世界。それを知っている人達に出会わせてくれる世界。私に無限に可能性を教えてくれて、同時に困難や不可能を教えてくれる世界……」

美波「仲間がいるって言う現実が、私に自分の世界を広げるチャンスを与えるの」

卯月「スゴいな……美波さん……。私には、とても……」

美波「そんな……。特別なことじゃないわ。だから、私は卯月ちゃんに、卯月ちゃんの過ごした1年を、否定してほしくないの」

卯月「えっ?」

美波「卯月ちゃんにとって、今の環境は、思い描いてたものとズレてるのかもしれない。実感が持てないのかもしれない」

美波「だけど、卯月ちゃんの歩んだその1年は、色んな新しい人達と出会って、卯月ちゃんにはない価値観や物の見方を知って、間違いなく卯月ちゃんの世界を広げたいじゃない?」

卯月「あ……」

美波「ふふっ……。無駄なことなんかじゃないのよ。だから、この1年で新しく出来た

お友達や新しく知り合った人達を大切にしてあげて？」

美波「卯月ちゃん自身で経験したことや、積み重なった思い出が、卯月ちゃんが何か大きな決意をする時、絶対に背中を押してくれる。大きな力になってくれる筈だから」

卯月「大きな、決意……」

美波「私が言いたかったのはそれだけ……かな？ごめんね？何か偉そうに語っちゃって」

卯月「い、いいえ……！美波さんの言う通りです！私、周りを見てなかったのかもしれない」

卯月「だから、自分が一人ぼつちな気になっていたのかもかもしれません」

美波「卯月ちゃんは一人じゃない。今の仲間は勿論、私だっているんだから」

卯月「あ……。そうですね。ありがとうございます」

美波「ううん、いいのよ。友達じゃない？私達」

卯月「はいっ！」

美波「ふふっ。——あら、話し込んでたら、もうこんな時間……。そろそろ帰りましようか？」

卯月「はい。何だか名残惜しいです」

美波「惜しむことなんてないじゃない。これからだって、何度だってお話しする機会



はあるんだもの」

卯月「そうですね!あの、改めてですけど…映画、頑張ってください!応援してますから!仲間として、…お友達として!!」

美波「ええ。新田美波、頑張ります♪」

~~~~~ 翌日 レッスルーム ~~~~~

卯月（昨日は美波さんに出会えて、本当に良かったな…）

卯月（私の世界はまだまだ小さいかもしれないけど、だけど、今はこの世界で精一杯頑張らなくちゃ!）

卯月（だって私には、心強い仲間がいるんだもん!

ガチャツ バタン

卯月「おはようございますっ!美穂ちゃん、響子ちゃん!」

美穂「あ、卯月ちゃん…。おはよう」

響子「おはようございますっ♪卯月ちゃん」

トレーナー「お、島村。今日はいつも以上に良い表情をしてるじゃないか。これなら、昨日のような不安は心配しなくて良さそうだな」

卯月「はい!トレーナーさん、私、精一杯頑張ります!今日も明日も、明後日も!」

響子（良かった…。卯月ちゃん、吹っ切れたみたい）

トレーナー「よし、その意気だぞ島村。よし、今日は特別プログラムを組んでやる。五十嵐と小日向もしっかりついてくるんだぞ！」

響子&美穂「は、はい!!」

卯月「響子ちゃん、美穂ちゃん、3人で力を合わせて、頑張りましょうね！」

美穂「は、はい……! 私も、足を引つ張らないように、しっかりついていきます!」

響子「気合い充分な卯月ちゃんに負けないように、お互いに頑張らなくちゃですね?」

卯月「頑張りなら、私だって負けてません!」

響子「私だって!」

美穂「わ、私も……!」

トレーナー「うんうん。モチベーションもバツチりなようだな。今日は有意義なレッスンになりそうだ」

トレーナー「それじゃあお前達、レッスンを始めるぞ! 先ずは準備体操からだ!」

3人「はいつ!!」

—————
数時間後。

トレーナー「よし、休憩!」

響子「はあ……はあ……。お疲れ様です」

美穂「……ふう」

卯月「お二人とも、大丈夫ですか？」 つ水筒

響子「あ、有難うございます。卯月ちゃんは、何ともなさそうで、スゴいですね」

卯月「そんな事…。美穂ちゃんもお水…大丈夫？」

美穂「あ、ありがとうございます。頂きます…」

美波「卯月ちゃん♪」

卯月「美波さん…！今日はこっちに来てたんですか？」

美波「ええ。今日は事務所で打ち合わせだったから。卯月ちゃん達はこれからお昼

？」

卯月「あ、はい！ちょうど今休憩をもらったところですよ」

美波「そう。実は私もなのよ。良かったら一緒にどうかしら？」

卯月「良いですね！響子ちゃん達は…」

響子「ごめんなさい。まだ動けそうにないです…」

美穂「わ、私も…」

卯月「そうですね…。あの……」

美波「私は構わないわよ。二人が回復するまで一緒に待ちましょう？」

卯月「良いんですか？」

美波「勿論。やっぱりご飯はみんなで食べた方が美味しいし、こうしていてもたくさ

んお話出来るもの」

卯月「あ、ありがとうございます！」

美穂「すいません…。私達のせいであ、お昼遅くしちゃって…」

美波「気にしないで？それに、動けない二人を残して行くっていうのも、気が引けるから」

ズズズズズ……

響子「——きや……！」

美穂「じ、地震……？」

卯月「いいえ、多分違います…」

美波「この揺れ方は……」

——屋外。

メカザウルス『キシヤオオオオン!!』

——。

響子「め、メカザウルス……!?!」

卯月「こんな街中に出てくるなんて!」

美波「地中深くを掘り進んできたのよ!——とにかく、二人を置いていかないで良かったみたいね」

卯月「そうですね! 私達に掴まって下さい!!」

美穂「あ、ごめんね? 卯月ちゃん…」

響子「その、よろしくお願いします…」

美波「しつかり掴まって。建物が揺れたりするかもしれないから、お互いに壁を伝いながら、落ち着いて降りるわよ!」

3人「二はいっ!!」

メカザウルス『キシヤアアアア!!』

美穂「ひっ……! あ、あの……! このままだと、避難が間に合わないんじゃない…!」

響子「私達の事は良いですから! 卯月ちゃんと、美波さんだけでも…!」

卯月「そんな出来るわけじゃないじゃないですか!」

美波「卯月ちゃんの言う通りよ! 何が起こっても、最後まで諦めちゃダメ! 助かるならみんな一緒に、でしょう?」

美穂「で、でも……」

メカザウルス『キシヤアアアア!!』

響子「メカザウルスが、こつちに……!」

美波「っ……!」

美波（もうあまり時間はない…。一体どうすれば……）

卯月「……………！」

美波「卯月ちゃん!？」

卯月「諦めません!何があっても、絶対に!ここにいる全員に、生きててほしいから!みんなで、笑顔でいたいから!」

美穂「卯月ちゃん……………」

メカザウルス『グオオオオオ!!』

美波(ダメ……………!もう間に合わない……………!)

美波「……………え……………?」

響子「見てください!窓の外!」

卯月「あれは……………」

美波「ゲッターQ!^{クイーン}!」

アーニヤ『ミナミ!ウヅキ!大丈夫、ですか?』

美波「アーニヤちゃん!どうして貴女が!？」

アーニヤ『アー……………ゲッターQの修理が終わって、その、обучение…訓練を、さつきまでして……………』

卯月「そこに出撃命令が出たわけですか……………」

アーニヤ『Да。Хорошо…いい、タイミング…バッチリ、ですね』

美波「助けに来てくれたのは嬉しいけど…待つて、このまま戦うつもり!？」

アーニヤ『……。ネオゲッターの出撃には時間が掛かります。他のゲッターも、まだ万全じゃありません』

美波「だからって、ゲッターQ一機じゃ無理よ!」

アーニヤ『心配要りません。ミナミとウツキ、それに…ウツキのお友だち。みんなワタシが守つて見せます……!』

ゲッターQがメカザウルスに向き合う為、一步前へ進み出る。

メカザウルス『キシヤアアア!!』

ゲッターQを敵と認識したメカザウルスは、一気呵成にゲッターQへ襲い掛かる。

美波「アーニヤちゃん!」

アーニヤ『クツ……!』

前傾をとつて放たれた体当たりを何とか受け止める。

アーニヤ『ツ…ア…ア……!』

捕縛したメカザウルスの鳩尾に膝蹴りを一発。それで浮き上がった相手に両手を添えた掌底を打ち込み、再び距離を取るように突き飛ばす。

美穂「きや……っ!」

響子「スゴい揺れ……」

卯月「美波さん！アーニヤちゃんが戦ってるうちに早く！」

美波「え、ええ……。分かって……いるけど……！」

アーニヤ『ゲッタービーム!!』

ゲッターQの腹部から放たれるピンクの閃光。真つ直ぐに倒れたメカザウルスに向かつて伸び、直撃する。が、

メカザウルス『グウ……』

メカザウルスの装甲は、ゲッターQのゲッタービームを弾き、尚も立ち上がる。

響子「ゲッタービームが効かないなんて……」

卯月「耐ゲッター線処理……。これじゃ、アーニヤちゃんは……！」

アーニヤ『……。ゲッタートマホーク!』

ゲッターQが静かにトマホークを構える。

美波「ダメ……!逃げて——!」

アーニヤ『ハア……ッ!』

美波の叫びも虚しく、トマホークを大上段に掲げメカザウルスへと飛び掛かるゲッターQ。

——ガキンツ

メカザウルス『グア……?』

アーニャ『ウツ……』

ゲッターQのトマホークは、メカザウルスの肩口を少しだけ切り裂いて止まった。
アーニャ『ツ……!!』

トマホークを引き抜こうと試みるが、メカザウルスの筋肉によって挟まれたトマホークはびくともしない。

メカザウルス『グガアアア!!』

アーニャ『ツ……ア……!!』

回転したメカザウルスの強烈な尻尾の一撃が、ゲッターQの胴体を打ち据える。

アーニャ『……!!』

重力を無視して、水平方向に吹き飛ぶゲッターQ。その向かう先は、

卯月「美穂ちゃん、響子ちゃん危な……!!」

卯月達のいる、プロダクションビルへと激突した。

美穂&響子「きやあああああつ!!」

激しい揺れと衝撃がその場にいた者達を襲う。

響子「……けほっ、けほっ……」

卯月「二人とも、大丈夫ですか?」

美穂「卯月ちゃん……!私達を庇って……?」

響子「こ、これ……血が……卯月ちゃんの血が……!」

卯月「私は大丈夫ですから。お二人に、お怪我はないですか?」

響子「う、うん……。お陰で……ありがとうございます……」

卯月「いえいえ。間に合つて良かったです。後少し遅かったら、崩れた足場と一緒に、地面に落ちてましたから……」

美穂「あ、ああ……」

卯月「怖かったですよね。……美波ちゃんは……」

美波「アーニヤちゃん!? しつかりして、アーニヤちゃん!」
ゲッターQコックピットを覗き込む。

アーニヤ「……」

美波「アーニヤちゃん……!」

卯月「美波さん!」

美波「卯月ちゃん……」

卯月「アーニヤちゃんは……?」

美波「怪我をして、気を失っているみたい」

卯月「それじゃあ、早く連れて逃げないと……!」

美波「……。卯月ちゃん、アーニヤちゃんをお願い」

卯月「……み、美波さんは……?」

美波「私は…、みんなが避難する時間を稼ぐわ」

卯月「そんな…待って下さい!」

美波「どのみち、ここにゲッターがある以上、敵に狙われる。だったら、誰かが動かして、狙いを逸らさなきゃ」

メカザウルス『……ズシン…ズシン…』

美波「時間もあまりないわ。卯月ちゃんも早くここから離れて!」

アーニヤが使っていたヘルメットを被り直し、ゲッターQのコックピットに滑り込む。

卯月「美波さん……!」

アーニヤ「うう…ミナミ……?」

——コックピット内。

メカザウルス『……』

美波「損傷は…酷いけど、動かない訳じゃない。ゲッタービームが通じないのだけ、厄介だけ……!」

崩れたビルから起き上がる動きと、飛び出す動作を同時に行い、メカザウルスにタックルを仕掛け押し倒す。

メカザウルス『グギヤア!』

美波「戦い様はある……! ネオゲッターチームが到着するまでの時間、稼がせてもらおうよ!」

~~~~~ 首都高速 道路上 ~~~~~

『あー、緊急車輛が通ります。一般の車輛は、速やかに退去せよ』

『従わない場合は、実力で排除する! 一切の責任は負わない! 繰り返し返す——』

—— ネオジャガー号 コックピット内。

奈緒「うわあ……。相変わらず派手にやつてるな、この輸送車輛。後で苦情とかこねえのか?」

加蓮『非常事態なんだし、仕方ないんじゃない?』

奈緒「非常事態……。ネオゲッターを運ぶ為とは言え、この車二車線占領するくらいデカいもんな」

加蓮『ま、何とかなるでしょ。中にはここに車捨てて避難してる迷惑な奴もいるんだしや』

加蓮「『……はあ……』

奈緒「? どうした加蓮? 少し、顔色悪いか?」

加蓮『……そんな事ない。ちよつと最近、出勤が多くなつてうんざりしてるだけ』

奈緒「あく、確かにそうだよなあ。近々1年前みたいな攻勢があったりしてな？」

凜『二人とも、お喋りはそこまで。そろそろ作戦区域だよ』

奈緒「了解!メカザウルスなんて、とつとと街から追い出してやる!」

加蓮『…了解』

奈緒「…おい、ホントに大丈夫か?もう出撃前だけど、無理はすんなよ?」

加蓮『大丈夫だよ。奈緒こそ、私の事心配し過ぎで、合体の時に失敗したりしないでよね』

奈緒「だ、誰がそんな事で失敗するかよ!」

未央『それじゃあ、かみやん、カレン、しぶりん聞こえる?』

凜『未央…?オペレーターやってるの?』

未央『そ。研究所にいるんだし、このくらいの手伝いはね。それで、そろそろ発進シークエンスに入るけど、各機のスタンバイはOKかい?』

凜『こっちは何時でも…、加蓮、ホントにやれるんだよね?』

加蓮『凜まで…。心配し過ぎ。私もネオベアー号も準備OK。何時でも出れるよ』

未央『どーすんの?一応、最終判断決めるのはしぶりんだけ?』

凜『……。分かった。奈緒、ネオジャガー号は?』

奈緒「オールグリーン!何時でも出れるよ!」

凜 『了解。それじゃ、未央各機スタンバイ完了だよ』

未央 『はいはい。それじゃハッチを開けるよ！カタパルトが上がったらって、これは言わなくても大丈夫かな？』

輸送車輛の後部が開き、斜めにせり上がるように各ゲットマシンが姿を見せる。

奈緒 「…よし……………」

加蓮 「…はあ…………ふう…………。…っ！」

凜 「……………」

未央 『それじゃリーダー？号令お願い♪』

凜 「分かってる。——ネオゲッターチーム、発進！」

奈緒&加蓮 「発進！」

エンジンに火が点き、3機のマシンが大空へ舞い上がる。

凜 「敵は……………」

奈緒 「確かゲッターQが足止めしてくれてるんだっけ？」

凜 「ゲッターQの性能はそれほど高くない。早めに合流したいけど…」

加蓮 「あそこじゃない？私らの事務所があるトコの近く。煙が上がってる」

奈緒 「確かに、ありや戦闘の粉塵だ」

凜 「…いた。ゲッターQとメカザウルスだ」

未央『ネオイーグルのカメラから、メカザウルスのデータ照合出来たよ。データ送るね』

加蓮「メカザウルス・ギロか…」

凜「ギロは確か、スピードに優れたメカザウルス…」

奈緒「それなら、アタシの出番だな」

凜「（こ）は任せるよ。市街地での戦闘だから、気を付けて」

奈緒「おう!そんなじゃ、行くぜ!」

ネオジャガー号が速度を上げ、後ろを2機が続く。

奈緒「ゲッターチェンジ!!」

加蓮「——うっ……!」

ネオジャガー号が先頭になり、赤い装甲を主体とするネオゲッター2へと合体した。

——。

美波「——きやあつ!」

ゲッターQが倒れ込む。

メカザウルス・ギロ『キシヤアア!!』

美波「くっ……!トマホーク……!」

ギロの振り下ろした爪の一撃を、辛うじてトマホークで受け止める。

ギロ『ギギ……!!』

美波「うっ……!!もう、ダメなの……?」

奈緒「ドリルアームツ!!」

ギロ『?! ギャア!』

右方向から飛び込んだ、ネオゲッター2のドリルがギロを吹き飛ばす。

美波「ネオゲッター2……!奈緒ちゃん!？」

奈緒「お待たせ美波さん!加勢するよ!」

凜「奈緒、敵が起き上がるよ」

奈緒「あいよー!ネオゲッター2の力を見せてやる!」

奈緒「ドリルアームガン!」

ギロ『シヤアツ!』

手指を収納したネオゲッター2の手首から放たれる光弾を、ギロは自慢の高速移動で掻い潜る。

奈緒「くっ、この……!当たれえ!!」

熱が入ってマシンガンのように連射するが、数発がギロの表面を掠る程度で致命傷とはならない。

凜「熱くなり過ぎだよ奈緒!一旦下がって!」



奈緒 「つて言ってもよお、何で一発も当たらないんだよ!」

加蓮 「奈緒の射撃が下手何でしょ」

奈緒 「加蓮、お前なあ……」

凜 「敵が来る——!」

奈緒 「え?」

ギロ 『グギヤアツ!!』

加速を加えたギロの尻尾が、的確にネオゲッター2を打ち飛ばす。

加蓮 「つゝゝゝ!奈緒〜!」

奈緒 「痛たた…。悪い……」

凜 「…あの尻尾は厄介だね」

奈緒 「射撃がダメなら接近戦だ!尻尾なんて切り落としてやる!」

奈緒 「プラズマブレード!!」

ネオゲッター2が、腕の中から取り出したプラズマブレードを正眼に構える。

奈緒 「勝負っ!」

ギロ 『グアツ!!』

上段から振り下ろしたプラズマブレードを、ギロは正面から両腕の爪で対峙する。

奈緒 「おいおい…、プラズマの刃を素手で受け止めるかよ?普通……」

ギロ『——ギギヤア!!』

奈緒「なんの!」

アツパーのように打ち出したギロの爪攻撃を上体を反らして躲し、がら空きになった脇腹をプラズマブレードで狙う。

ギロ『ギイツ!』

奈緒「にやろっ!」

ギロは強引に体を捻って攻撃をいなし、反動で打ち出した蹴りをネオゲッター2に打ち込む。

ネオゲッター2もこれは回避。数歩引き下がって体勢を整え、着地したばかりのギロにプラズマブレードの切っ先を突き込む。

一進一退の攻防を数檄繰り返す。

凜「奈緒、動きに無駄が多くなってきたよ!エネルギーの消耗が激しい」

加蓮「これじゃ埒が明かないね……」

奈緒「分かっているけど!こいつ、伊達にゲッター線対策の装甲着けてるだけあって想像以上に堅いぞ。ネオゲッター2じゃ、攻め手がない……!」

凜「……こうなったら一か八か……、ネオゲッター1にチェンジしてプラズマサンダーの一撃で仕留めるしかないか……」

奈緒「それしかなさそうか…?頼む!」

加蓮「……了解」

凜「敵の攻撃をオープンゲットで躲して、合体の時間を稼ぐよ。奈緒、タイミングは良いね?」

奈緒「うわ…ドキドキすんな……。おい」

ギロ『キシヤアア!!』

凜「——今だ!」

奈緒「オープンゲットオ!!」

力任せに突貫してきたギロをゲッターを分離させて巧みに躲す。が、

加蓮「う……!ぐっ……!」

凜「加蓮?」

加蓮が分離の衝撃に耐えきれなかった。

奈緒「加蓮っ!」

空中で失速し、機首を落とすネオベア号。

地面を滑るように墜落し、ビルに撃墜して土煙を生む。

奈緒「加蓮!!」

凜「落ち着いて、奈緒!」

奈緒「凜！これが落ち着いてられっか!!」

凜「気持ちに分かるけど！奈緒はここで敵の足止めをして。私が加蓮を見てくる」

奈緒「何でだよ…。逆の方が良いんじゃないかねえのか？」

凜「市街地での垂直離着陸には、それなりに技術がいるし、それに……」

凜「加蓮を出撃させて大丈夫って判断したのは私だから。私にはその責任がある」

奈緒「……。分かったよ。話してる時間もないしな。加蓮の事、よろしく頼んだぞ」

凜「うん、分かっている。それじゃここをよろしく」

奈緒「ああ！凜にも加蓮にも、メカザウルスを近づけさせやしないって！」

凜「信じてる。お願い！」

加蓮を追ってネオイーグル号を着陸させる為、高度を落としていく。

奈緒「信じてる、か……。それを言われたら頑張らないわけにはいかないな！覚悟しろ

よトカゲ野郎!!」

くくく プロダクションビル 1Fフロア くくく

トレーナー「島村、小日向、五十嵐！」

卯月「トレーナーさん！それに、プロデューサーさんも！」

新P「お前ら、無事だったか！」

響子「プロデューサーさんも……。良かった……」

新P 「こつちもお前らになにもなくて良かったぜ…。そいつは？」  
アーニヤ「……」

トレーナー「アナスタシア…。酷い怪我だな。直ぐに手当てをしないと！」  
美穂「——っ！……きやあっ！」

凄まじい轟音が直ぐ近くから響き渡り、土煙がここまで流込む。

新P 「っ……………！何だっつてんだ！」

卯月「ゲットマシンが…墜ちた？」

響子「えっ…？それじゃあ、ゲッターは……………？」

トレーナー「近くに墜落したのだとするとここも危ないな。急いで避難を！」

卯月「……………」

新P 「待て、島村」

卯月「プロデューサー…さん……………」

新P 「どこに行こうつてんだ？避難シエルターはそつちじゃないぞ？」

美穂「卯月ちゃん……………？」

卯月「……………。皆さんは先に避難して下さい。私…行かなきゃいけないところが出来たんです」

響子「卯月ちゃん……………！」

新P 「やめろ。そこはお前の行く場所じゃねえ」

卯月 「そうかもしれないません。でも、行かなきゃいけないんです!」

新P 「どうしても行くのか?」

卯月 「……はい」

新P 「お前が”そっち”に戻るなら、俺はお前のプロデューサーを降げる。ピンク・チエック・スクールも解散だ。…そう言ってもか?」

美穂&響子 「!?!」

卯月 「……」

響子 「…じ、冗談ですよね……?プロデューサー……」

新P 「……」

響子 「…そんなぁ……」

新P 「どうなんだ、島村?」

卯月 「……響子ちゃん、美穂ちゃん」

美穂 「卯月ちゃん……」

卯月 「——ごめんなさい」

振り返らず、駆け出していく。

響子 「そんな……!卯月ちゃん!」

美穂「卯月ちゃん待ってえ！」 ダッ

新P「小日向!？」

トレーナー「待つんだ!小日向!島村あ!!」

――。

卯月「は……っ、は……っ、は……っ!」

――『私は、卯月ちゃんの過ごした1年を否定してほしくないの』

卯月「私――!」

――『この1年で新しく出来たお友達を大切にしておいて?』

卯月「私は……!」

――『卯月ちゃん自身で経験したことや、積み重なった思い出が、卯月ちゃんが何か大きな決意をする時、絶対に背中を押してくれる。大きな力になってくれる筈だから』

卯月「私は!」

ネオベアー号墜落地点。

卯月「はあ……はあ……はあ……」

崩れた瓦礫を足場にコックピットへと駆け上がり、ハッチを開ける。

加蓮「……うっ」

卯月「大丈夫ですか!？」

加蓮 「アンタは……。どうしてここに……。？」

卯月 「酷いケガ……。とりあえずコックピットから降ろします！ 動かないで下さいね」

加蓮 「そつか……。アタシ、意識が遠くなって……。墜落したんだ……。情けないね」

卯月 「そんな事ありません！ 私達の為に、立派に戦ってくれました！」

加蓮 「アンタ……」

「卯月……。？」

卯月 「……凜ちゃん……」

凜 「どうして卯月がここにいるの？ ここは危ないんだよ？ 早く避難しなきゃ……！」

卯月 「お願いがあつて、来ました」

凜 「……何？」

卯月 「ゲッターに乗せて下さい」

凜 「つ……。何を言ってるのか、分かってるの……？」

卯月 「虫の良い話なんて言うのは、分かっています。自分からゲッターを降りて、今更なんて思うかもしれませんが。けど……」

卯月 「ゲッターで、戦わせて下さい。その為にここに来ました」

凜 「つ……。！ 何で……。どうして!? 今の卯月には、今の仲間だって、居場所だってある！



ゲッターの操縦席が、卯月の居場所じやないんだよ!？」

凜 「それなのに……、卯月は今の仲間を見捨ててるつもり!？」

卯月 「それは違います!見捨てません!その大切な仲間を守る為に行くんです!」

凜 「……。前にも言ったよね?こっちは、卯月の居場所はないって」

卯月 「……はい、憶えてます。凜ちゃんの言うとおり、このゲッターに、凜ちゃんのチームに、私が入り込む余地なんて無いと思います。…でも、それでも」

卯月 「私は、ゲッターから降りて、アイドルとして活動して…それを支えてくれた人達の為に、また戦います!!」

凜 「っ!…卯月……」

「卯月ちゃん!!」

卯月 「……美穂ちゃん!？」

美穂 「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……っ」

卯月 「そんな…追い掛けて、来たんですか?危ないのに、どうして……!」

美穂 「——…これは、——…ま……から、だよ……!」

卯月 「えっ?」

美穂 「卯月ちゃんが、大切な仲間だからだよ!」

卯月 「美穂ちゃん……!」

美穂「卯月ちゃんこそ、どうして…？一人にしないって言ったのに…。仲間だって、それなのに！」

美穂「私が、頼りないから？いつもみんなに頼ってばかりで、何も出来ないから…？」

美穂「イヤ…。イヤだよ……。置いていかれるのも、残されるのも……！」

卯月「美穂ちゃん！」

美穂「!?」

卯月「…一人になんて、させません」 ニッコツ

美穂「卯…月、ちゃん……」

卯月「美穂ちゃんは、ゲッターから降りて、事務所に戻って来た時、私に一番最初に笑い掛けてくれた。それに、どんなときだって笑顔で、頑張ろうって言うてくれた」

美穂「……」

卯月「その笑顔があつたから、また笑うことが出来たんです。私は、美穂ちゃんの笑顔に助けられたんです」

凜「卯月……」

加蓮「完敗だね。これは」

美穂「……うう…グスツ……つく…。卯月ちゃん……！」

卯月「だから、今度は守らせて下さい。美穂ちゃんの笑顔と平和を！」

美穂「卯月ちゃん……。私は……」

美穂「卯月ちゃんには、遠くに行つてほしくない。辛い事とか、危ない事をしないで  
なんかしないで、一緒に逃げてほしい……」

美穂「——だけど、言います!」

卯月「……はい!」

美穂「私達を……私達の街を……守つて、下さい……!」

卯月「はいっ!!」

卯月「それじゃあ、この娘をお願いします」

美穂「は、はい……!大丈夫ですか……?」

加蓮「アタシは大丈夫じゃないけど……。アンタもよく言つたよ……普通友達に言えない。  
い。あんな事」

美穂「はい……。でも、帰ってきてくれるつて、約束してくれましたから」

加蓮「そっか……。ちゃんと信頼してんだ……」

卯月「——よし……!」

凜「話はまとまった?」

卯月「凜ちゃん……。あの……」

凜「ほら、これ」

ポスン

卯月「これは……?」

凜「1号機のヘルメット。3号機には私が乗る」

凜「卯月には、1号機の方が似合ってるよ」

卯月「凜ちゃん……ありがとうございますっ!!」

凜「卯月の1年の意味……間近で見分かったよ。一緒に行こう!」

卯月「はいっ!」

それぞれのマシンのコックピットへと収まり、2機のゲットマシンが瓦礫の中から大空へと飛び立つ。

美穂「——行つてらっしゃい、卯月ちゃん」

奈緒「チィ……!凜はまだかよ……っ!」

憤りを込めてミサイルを打ち込むがギロは巧みにそれを回避する。

美波「はあああっ!!」

ギロ『グギャツ!!』

ギロが身を翻した場所へと先回りし、ゲッターQが組み付く。

奈緒「美波さん!?ゲッターQで無茶は!」

美波「無茶でも何でも…こいつを暴れさせるわけには…——!!」

パワーの劣るゲッターQでは、直ぐに拘束を解かれ、投げ飛ばされる。

美波「きゃあああああ…!!」

奈緒「美波さん!!…こいつ…!!」

機首のバルカンを乱射しながら、ネオジャガー号を突撃させる。

奈緒「うおおおおお!!」

「奈緒、合体するよー」

奈緒「この声……凜か!」

ネオジャガー号の両サイドを2機のゲットマシンが上昇して通り抜ける。

奈緒「凜!加蓮は大丈夫だったんだな!」

凜「いや、加蓮は降ろしたよ」

奈緒「凜…?どうしてネオベアーのコックピットに…?そんじゃ、今ネオイーグル

には誰が…!」

卯月「——っ!」

美波「う、卯月ちゃん!」

奈緒「どうしてアイツが…」

凜「細かい説明は後です!卯月は今パイロットスーツを着てないんだ!ゲットマ

シン状態じゃ、長くは保たない。早く合体するよ!」

奈緒「わ、分かった……!」

ネオジャガー号と、ネオベアール号が1列に直列する。

ギロ『グアア……!』

美波「やらせないわよ!」

合体フォーメーションに入ったゲットマシンに攻撃を掛けようとするギロを、ゲットターQが阻止する。

美波「私だってまだ……!やれることがあるんだから!!」

凜「奈緒、2号機と3号機を連結させたら、コントロールを私に」

奈緒「お、おう。その方がいいよな……」

順調にネオジャガー号とネオベアール号がドッキング。

奈緒「ゆ、ユーハブコントロール」

凜「アイハブコントロール。卯月、今行く」

機体のコントロールを確認し、機首を勢いのまま上昇を続けるネオイーグル号へ。

凜「卯月、聞こえる?機体を安定させて!」

卯月「~~~~!!」

凜「やっぱり無理か……マニュアルでやるしか……」



奈緒（何だ？その妙にリアルな例えは…）

卯月「あの…、私の顔、大丈夫ですか？ちゃんと島村卯月出来てますか？」

凜「大丈夫。ちゃんとアイドルの、可愛い卯月の顔してるよ」

奈緒（そもそも致命的に傷残ってるけどな。化粧で隠してるらしいけど…）

卯月「え…えへへ♪そうですか？私、可愛いですか？」

奈緒「つておいしい、二人で乳繰り合うのは勝手だけだよ…。今、絶賛落ちてるぜ？アタシら」

卯月「えっ？」

ズシンッ

卯月「うう……。すごい揺れ……」

上空から豪快に着地して、ギロと対峙する。

美波「卯月ちゃん…」

卯月「美波さん……。美波さんは退がっていて下さい！」

美波「…分かったわ。お願いね、卯月ちゃん」

卯月「はい！任せて下さい！」

ギロ『ギャオオオオン!!』

卯月「——いきますっ!!」



ネオゲッター1の姿に咆声をあげたギロに合わせ、ネオゲッター1を突撃させる。

卯月「っ!」

ギロ『ギイヤツ!』

ネオゲッター1の放った右ストレートをヒラリと躲し、ギロは蹴りを放つ。

卯月「うっ……!」

奈緒「何やってんだ!? 1年振りにゲッター動かす奴にいきなり実戦なんて無理だったんじゃないのか!?!」

凜「……。私は、卯月を信じることにした。奈緒も私の事を信じて」

奈緒「……ったく……」

ギロ『グギヤア!!』

卯月「くっ……!」

蹴りで横倒しになったネオゲッター1に馬乗りになり、ギロは爪を立てた連撃を打ち込む。

卯月「っ! っ! くっくっ!」

防戦一方のネオゲッター1。

美波「卯月ちゃん!」

卯月「大丈夫ですっ!!」

卯月（最初のゲッターに乗ってた頃と違う…。敵が大きくて、怖い……！———）

前傾したギロの頭部に思いっきり頭突きを打ち、怯んだ隙に蹴り上げ、ネオゲッター1の上から弾き飛ばして空かさず立ち上がる。

卯月「守る為に戦うって、決めたんです！もう何処へも逃げませんっ！」

ギロ『ギャッ！』

起き上がったギロはグルグルとネオゲッター1の周囲を高速移動で周回し、動きを封じる。

卯月「これは……」

凜「動きに惑わされないで。奴の攻撃は単調だよ」

卯月「分かってます！こういう時は———！」

卯月「チェーンナツクル!!」

チェーンナツクルを明後日の方向へ。手の形を貫き手にして放ったチェーンナツクルは、地面へと深く突き刺さり、ネオゲッターとの間に鎖を張る。

ギロ『ガッ———!?!』

張りつめた鎖に引つ掛かり、ギロが空中で盛大に一回転して地面へと転げ落ちる。

卯月「今です！」

動きを止めたチャンス逃すことなく、ネオゲッターでギロを捕縛。

ギロ『グガガ……!!』

凜 「卯月、そいつの尻尾が一番厄介だ」

卯月 「尻尾ですね!分かりました!」

ダンッ

ギロ『グギアアアア!!?』

ネオゲッター1の手刀で、ギロの尻尾を叩き切る。

ギロ『ギ……ギギ……』

大事な尻尾を失い、バランスが取れず、ヨレヨレとした動きでネオゲッターから距離をとろうとする。

奈緒 「アイツ、上手く動けないのか!」

凜 「トドメを刺すなら今だね……。奈緒!」

奈緒 「お、おう!ネオベアーと、ネオジャガーのエネルギーをネオイーグルに送るぞ!」

凜 「卯月、使い方は……」

卯月 「大丈夫です!先ずは……こう!」

自分の胸の前に、操縦桿を突き合わせるように持っていき、ネオゲッター1の手を打



卯月「また一からの復興になるんですね……」

凜「うん。恐竜帝国が……、メカザウルスがこの世に存在する限り、戦いは続く」

卯月「はい。だから、一日も早く戦いを終わらせなくちゃならないんですね。私達と、ネオゲッターが……!」

美波「卯月ちゃん……」

卯月「美波さん……!」

美波「……戻るのね?ゲッターの所に」

卯月「……はいっ!美波さんの言った通り、この1年で失いたくない大切な人が、たくさん出来ましたから♪」

美波「そう……。ふふっ、良い笑顔。それなら、もう大丈夫そうね?」

卯月「はい、後は……!」

新P「……島村」

卯月「プロデューサー。……みんな」

響子「……」

美穂「……」

卯月「皆さん、無事でしたか……。良かった……」

新P「他人の心配ばっかだな、お前は。自分の事は良いのか?」

卯月 「はい。覚悟は出来てますから」

新P 「ほう…そうか？なら、何を言われても良い覚悟は出来てんだな？」

卯月 「……はい」

新P 「そうか。んじや、島村」 スツ…

卯月 「っ——！」

ポン

卯月 「……え？」

卯月の頭に優しく手が置かれる。

新P 「——必ず、生きて帰ってこい」

卯月 「プロデューサー……！良いんですか？」

新P 「ただし！人様に見せられる顔で、姿で帰ってこい。…これが条件だ」 ニツ

卯月 「プロデューサー……！はい——」

卯月 「島村卯月、頑張ります！」

響子 「卯月ちゃん！」 ダキッ

美穂 「卯月ちゃん！」 ダキッ

卯月 「わぶっ……。き、響子ちゃん…美穂ちゃん……苦しい……」

響子 「ケガしないでなんて、無理な話かもしれないですけど、絶対…絶対無茶しないで

下さいね?」

美穂 「私達3人でピンク・チエック・スクールで、何時まででもここが卯月ちゃんの居場所だからね!」

卯月 「二人とも…。はいっ♪」

奈緒 「へへっ、見てるこつちが恥ずかしくなるな」

凜 「…そうだね」

奈緒 「何だ?凜はやきもちとか妬かないのか?」

凜 「まさか。あれは、卯月が1年で得た、大切なものだから」

奈緒 「へえ…っつて、どこ行くんだよ?」

凜 「私達の大切な仲間のトコ。奈緒だって、内心心配で気が気じゃないんじゃない?」

奈緒 「ぼっ…いべ、別に気が気じゃないとか…そこまで心配してないし…。加蓮は、大切なチームメイトだけど…」

凜 「別に誰も加蓮のトコに行くなんていってないけど?」

奈緒 「な、っ……………」

凜 「ま、加蓮の所に行くんだだけだね」

奈緒 「~~~~!もう何なんだよ!行くならとつとと行くぞ!からかったからって仕返

ししやがってえ……」

凜 「あ、待ってよ奈緒。ここでそんな急ぐと、瓦礫に躓いて転ぶよ?」

奈緒 「知るか!どいつもこいつも、アタシをオモチャにして……!」

凜 「あ、待ってってば、奈緒……」 クルツ

凜 「良かったね。卯月——」

新P 「おい、お前ら!お前らでよろしくするのは分かるがよ…、俺まで巻き込むなって!こら、くつつくな!!」

卯月 「良いじゃないですか!今日は私達ピンク・チエック・スクールの新しい出発の日なんですから!」

新P 「やめろ!瓦礫の山で祝うなんざアイドルのすることじゃねえ!」

美穂 「な、仲間外れは寂しいですし…ね?」

新P 「何が、ね?、だ!俺とお前らじゃノリが違うんだよ!!」

響子 「私も負けてられない……!」

新P 「おい、お前今妙なこと言わなかったか!」

新P 「と、とにかく……!お前ら密着し過ぎなんだよ……!色んなもん当たって……チツクシヨウ!!」

ウガ———!!



笑い声はどこまでも響いて――。

つづく

## 第3話 『結成、Gチーム』

—— 一年前。

~~~~~ ロックフェス会場 ~~~~~

メカザウルス 『キシヤアアアンツ!!』

たくさんの人が集まった会場で、メカザウルスが暴れまわる。

? 『くつそお…。何だつてこんなところに、メカザウルスが来なくても良いじゃないか……ツ!!』

メカザウルス 『グオオオ!!』

メカザウルスが放つたミサイルが辺り一面に着弾し、周囲に爆炎の花を咲かせる。

? 『キヤツ……う、うう……』

? (怖い……。怖くて一歩も……。動けない……。このままじゃ……。誰か……!)

子供 『うわあああん! パパア……ママア……。怖いよ……。どこお……。!!』

? (あんな所に……。子供が……。!? 親とはぐれたんだ……)

? (……)

メカザウルス 『キシヤアア!!』

子供『うわぁーん！怖いよぉー!!』

? (?!)

? 『君！大丈夫!?!』

子供『…お姉ちゃん…、誰…?』

? 『パパとママはきつと無事だから！だから今は私と一緒に逃げよう？ここにいたら危ないよ!』

子供『…うん』

? 『よしっ!』

子供の手を引いて走り出す。

メカザウルス『グルルウ……』

そんな二人に、メカザウルスが狙いを定める。

メカザウルス『キシヤアア!!』

? 『攻撃が来るの——!?っ……この子だけでも……!』

子供『パパァー!!ママァー!!』

メカザウルスのミサイルが迫る——。

『!!』

? 『——あ、あれ?生きてる……』

子供『お姉ちゃん！あれ!!』

? 『あれって……—ゲッターロボ!!』

メカザウルスとの間に割って入ったゲッターロボが、手に携えたトマホークでミサイルを叩き落としていた。

ゲッター『あの！大丈夫ですか?』

? 『!? 女の子の声……?』

? (それも、私と同じくらいのことかな……?)

ゲッター(B)『しまむー、私達が来たんだから、そりや無事つしよー!』

ゲッター(C)『未央、油断大敵。とにかく、これ以上被害を増やさない為にも速攻で片を付けるよ』

ゲッター『了解です!あの、そちらの方!私達がメカザウルスを相手しますから!その内に避難して下さい!』

? 『そ、そうだね!ありがとう!ゲッターロボ!!』

子供『ありがとうゲッターロボ!!』

ゲッターに背を向け、走り出す。

ゲッター『いきますよおー!ゲッタートマホーク!!』

メカザウルス『キシヤアアツ!!』

? (ゲッターロボ、かあ…。スゴいな…。私くらいの子でもあんな強くて、カッコよくて……)

? (私にも出来たら…。いや、ムリ、かな……。?)

? 『あはははは……。』

子供 『お姉ちゃん…。?』

? 『ああごめん。何でもないから。避難所に着いたら、一緒にパパママ探そう?』

子供 『うんっ!』 ニッコツ

? 『……。』

? (怖がって…。逃げてるだけで……。今の私、全然ロツクじゃない……)

『もつとロツクに……。強く…。なりたい……。ツ!!——』

—— 現在。

運転手 「おい、起きろよ。そろそろ目的地だぜ?」

? 「——…んあ……。は、はいく……」

運転手 「しつかし、いい年のお嬢さんが、トラック野郎の車なんかで寝るもんじゃねえぜ? 妊娠させらちまう」

? 「あう……。ごめんなさい……」

運転手 「ははっ! いいって事よ! 生憎俺には若い嫁さんも子供もいるしなあ。ま、紳

士からの教えって事で胸に刻んでくれ」

？ 「あゝ…、ありがとうございます？」

運転手 「そうそう。…と、それじゃあ目的地だ。着いたぜ」

？ 「！…全然見えないですけど……」

運転手 「目的地はこの坂を上がっていった先だ。そこには検問があるからな、ここからは歩いて行ってくれ」

？ 「そう言うことですか……。分かりました！ありがとうございます！」

運転手 「何、このくらい、御安いご用よ！」

ガチャ バタン

運転手 「しかし、この先にや……。ま、深くは聞かねえけどよ、気を付けなよ！」

？ 「はい！分かってます！」

運転手 「熊や猪ならまだ可愛いがよ、爬虫人類の残党に出くわしちまつたら目も当てられねえからな！」

？ 「あ、あゝ……。はい……」

運転手 「ま、こんなご時世だ。お互い長生きしようぜ。んじやな！」

ブロロロロオ……

？ 「あのおじさん……。最後に脅かさなくても……。…ううん……。…」 パンパン

両頬を叩いて気合いを入れ直す。

？ 「よおーし、目的地はもうすぐだ！気合い入れて行くぞおー！！」

ブロロロロオ… バシヤアン

？ 「うわあ！」

坂を上がつていく通りすがりの車が、盛大に泥を跳ね上げていく。

？ 「気を付けろおー！！バツキャロー！！」

――

―― 車内。

卯月 「あれ？」

所員 「どうかしました？」

卯月 「今……人がいたような……」

所員 「まさか。ここは人里からも遠く離れた、民間の車はバスだって通ってない遠隔地ですよ？」

卯月 「……。それもそうですね」

所員 「さ、そんなことより、そろそろ着きますよ」

卯月 「…はいっ！」

卯月を乗せた研究所の車は、検問を抜け研究所の敷地へと。

卯月「うわあ——！」

所員「…ようこそ、早乙女研究所へ」

~~~~ 早乙女研究所 正門前 ~~~~

ガチャツ バタン タタツ

卯月「凜ちゃん、奈緒ちゃん、加蓮ちゃん！おはようございます!!」

凜「卯月…。おはよう」

卯月「私の事、待っててくれたんですか？」

凜「まあね」

奈緒「全く…、こここの誰よりも早く出迎えたいからって、大変だったんだぞ？」

凜「奈緒！」

卯月「凜ちゃん、今の話本当ですか？」

凜「う…それは……」

卯月「凜ちゃん…」

凜「………そうだよ」

卯月「ホントですか？ありがとうございます！」 ニッコツ

凜「うう…」

加蓮「あ、凜が照れてるー♪」



奈緒 「そうだな。…へへっ……」

凜 「奈緒、今日の訓練メニュー2倍だからね」

奈緒 「何でアタシだけ何だよ!？」

卯月 「あははははは…。加蓮ちゃんは、あの後は大丈夫ですか？」

加蓮 「うん。ちゃんと治療は受けたしね。この通り、疲れの方も、だいぶ抜けたよ」

卯月 「それならいいんですけど…。無茶はしないで下さいね？」

加蓮 「ん。了解了解つと。ブランクの人に追い抜かれないように頑張りますよ」

卯月 「はいっ♪それじゃあ頑張り勝負ですね!」

奈緒 「何だよその勝負?」

凜 「気を付けた方がいいよ加蓮。頑張りで卯月の右に出るものはない…」

奈緒 「何でお前もその勝負を受け入れてんだよ!？」

卯月 「あの、奈緒ちゃん朝からそんなに声を張らない方が…」

奈緒 「原因お前だからな!？」

凜 「それじゃ、先ずは所長室に行こっか?早乙女博士も会いたがつてる」

卯月 「分かりました!」

凜 「奈緒と加蓮は、訓練の準備。今日は卯月を1号機に固定して、奈緒と私を入れ換えながらの合体シミュレーションだけど、奈緒も気を抜かないでね」

奈緒「了く解つ！」

加蓮「了解」

卯月「ふふつ。リーダーが板についてますね？」

凜「…やめてよ。リーダーとか、そんな慣れないんだから」

卯月「ふふつ。それじゃあ奈緒ちゃん、加蓮ちゃん、また後で」

奈緒「おう」

加蓮「またね〜」

その場を離れる卯月と凜。

奈緒「……あれが凜と一緒に戦ったゲッターチームの一人、か…」

加蓮「普通の子だよ。凜や未央と比べると」

奈緒「言うなよ。ちよつと思っただからさ」

加蓮「ちよつと思ってるじゃん」

奈緒「……」

—— 所長室。

早乙女「卯月くん。よく戻ってきてくれた」

卯月「はい。またお世話になります」

早乙女「君の復帰は、私としても歓迎するが、本当にいいんだな？」

卯月「……はい！」

早乙女「……そうか」

早乙女「よく、覚悟を決めて来てくれた」

卯月「早乙女博士……」

早乙女「この1年で状況は様変わりしている。恐竜帝国も最早残党と成り下がったが、それでも人類に対する攻めの姿勢を崩したわけではない」

卯月「……」

凜「早乙女博士は、近い内にまた、恐竜帝国の攻勢があると判断してるんだよ」

卯月「!? それって……!」

早乙女「うむ。これまでの散発的な出現頻度……。敵は我らのネオゲッターを分析していると考えてもいいだろう」

早乙女「そして奴等は力を溜めている……。今度こそこの地上を自分達のものにする為にな……!!」

早乙女「その為に、力があるのじゃ! 1年前のあの戦いを知る、経験のある戦力が!! その為に、卯月くん……!」

卯月「はいっ! 分かっています! 私が今出来ること……、その為に、私はゲッターに乗って戦います!」

早乙女「うむ。早速じゃがネオイーグル号の実機を使い、マニュアルでの操縦訓練じゃ！」

卯月「はいっ!!」

—— 早乙女研究所 訓練空域。

ゴオオオオオオオオオオツ

卯月「——!!」

凜「……………」

加蓮「っ……! (は、速い……………!)」

凜 (3号機……………ネオベアーの動きが遅れてる…か……………)

卯月「加蓮ちゃん、大丈夫ですか? こっち、もう少し速度を落としますね!」

加蓮「大丈夫! 余計な事しないで!」

卯月「で、でも……………」

凜「加蓮の言う通りだよ。訓練で手を抜いたら、訓練にならない!」

加蓮「言ってくれるね……………」

凜「言われたくないなら、着いてきて」

加蓮「……………っ!」

ネオベアー号が速度を上げる。

卯月 「加蓮ちゃん……」

―― 訓練終了後 格納庫。

卯月 「つふうくく！一心地ですうく……」

奈緒 「オーツス、お疲れー」

卯月 「あ、奈緒ちゃん。次はよろしくお願いしますね！」

奈緒 「おう！ネオジャガーなら、凜よりアタシの方が乗り慣れてるからな。バッチリ合わせてやるよ！」

凜 「それは聞き捨てならないね」

奈緒 「げえ……。凜……」

凜 「確かに、2号機への搭乗経験は少ないけど、私も元はジャガー号のパイロットだったんだから」

奈緒 「それはそうだけど……」

卯月 「まあまあ凜ちゃん」

凜 「卯月もだよ」

卯月 「へ？」

凜 「さっきの飛行訓練、私の速度について来れはしてたけど、機体を振動させ過ぎ」

卯月 「うっ……」

凜 「無理に加速して、追い付こうとするから、強引にやってるのが機体に出てる。気を付けないと、合体時に空中分解なんて事もあるんだから」

卯月 「はい……。すいません……」

凜 「次の訓練は30分後だから、それまでゆっくり休憩して、それじゃ」 タツタツ

卯月 「こ、怖かったですね……。凜ちゃん」

奈緒 「……な。訓練の時だけ人が変わるみたいだぜ……。ありや……」

「まあ、今現在メカザウルスに有効打となりうるのはネオゲッターだけだからな。壊すことのないよう、丁寧に扱ってほしくはあるな」

卯月 「この声は……」

晶葉 「それに、パイロットが逸るばかりでは、訓練も成果は上がらん。そうだろう？」

卯月 「晶葉ちゃん！それに……」

未央 「オッス。おっ久さく♪しまむー？」

卯月 「未央ちゃん！退院してたって、聞いてましたけど……」

晶葉 「後遺症があつてな。ゲッターには乗れんが、今は私の助手の真似事をしてもらっている」

未央 「真似事って何さー？こんな優秀な助手は他にはいないぞ？アキっち？」

晶葉「……ああ、そうだな」

未央「間が気になるなあ」

晶葉「私の事よりも先ずは、ほら」

未央「えっ？」

卯月「未央ちゃん……ッ」ウルウル

未央「ええ!?!しまむー?何で、泣いて……」

卯月「未いゝ央おゝちやゝゝんっ!!」ダキッ

未央「うおっ!?!し、しまむー……?どうどう……」

卯月「何で……何で連絡くれなかつたんですか!」

未央「しまむー……」

卯月「それは、私も……ちよつと疎遠になつちやいましたけど!それでも、心配したんですから!!」

未央「……ごめん」

卯月「いえ……、いいんです。こうして、また会えて……本当に……嬉しい……」

未央「ふふっ……おーおー、よーしよーし。もう大丈夫だから。もう、一人で何処にも行かないから」

卯月「未いゝ央おゝちやゝゝん……!子供扱いしないで下さい……」

未央「よしよーし。私だって嬉しいんだよ？しまむーとこうやってまた会えてさ。やっぱり再会を泣いて喜んでくれるって、良いもんですなあ〜」

凜「何の話？」

未央「う、っ…。しぶりん、いたの…？」

凜「そりゃ、博士に一回目の訓練結果を連絡してきただけだからね」

未央「そっかあ…そうだよね…」

凜「……悪かったね。熱い血潮も涙も持たない冷血野郎で」

未央「もおーう、誰もそこまで言っていないよー！拗ねないでっば、しぶりん」

凜「……誰も拗ねてない」

未央「拗ねてるじゃんっ！しぶりんもこっち来て一緒に再会の喜びを分かち合おうよう！」

凜「……」

卯月「そうですよ！今からでも、ね？」

凜「……」

卯月「凜ちゃ〜ん♪」

未央「しぶり〜ん♪」

凜「……」 ススッ…



晶葉 「…相変わらず、仲が良いんだから」  
奈緒 「見てるこっちは余所でやってってくれって感じだけどな」

「あつきはくく！新品のナットとボルト届けて来たよ☆」

晶葉 「お、お疲れさん」

卯月 「晶葉ちゃん？その子は——？」

晶葉「ああ、初対面だったか。彼女は……」

莉嘉「やつほー☆城ヶ崎莉嘉だよー！カリスマJCアイドル目指して頑張ってるから、ヨロシク☆」

卯月「か、カリスマ……？」

莉嘉「そ。お姉ちゃんみたいなカッコいいアイドルになるんだ☆」

卯月「へ、へえ……うん？お姉さん？城ヶ崎って……」

凜「ほら、私達も何度か一緒に仕事したことあるでしょ？」

卯月「うくん……あ、城ヶ崎美嘉ちゃん！」

未央「そうそう。リカは美嘉ねえの妹なんだよね？」

莉嘉「へっへくん！アタシのお姉ちゃんだって、ニュージエネに負けず劣らず、有名なでしょ？」

卯月「そうですね……。美嘉ちゃんにもお仕事何度も助けてもらって……。……という事は、姉妹揃ってアイドルなんですネ？」

莉嘉「そう！何時かはお姉ちゃんと肩を並べられるくらい、立派なカリスマアイドルになって見せるんだから！」

卯月「スゴいですね！頑張ってください！」

莉嘉「うんっ！卯月も応援、ヨロシクね☆」

凜 「で、その将来有望なJCアイドルが、こんな所で何してるの？ここ、一応関係者以外立ち入り禁止だよ？」

莉嘉 「？ 何って、見ての通り晶葉のお手伝い」

凜 「お手伝いって…、晶葉」

晶葉 「どうしてもとうるさくてな…。まあ、主任には内緒にしてくれないか？」

凜 「……。私は別にいいけど、危ない所に顔出しちゃダメだって、また主任に怒られるのは莉嘉本人だからね？」

莉嘉 「フフンだ。ヘーキヘーキ。今日はちゃんと、主任が足りない資材を発注しに行くのを見計らってから来たからバレないもんねー」

凜 「…そういうのをちゃんと、って言わない」

卯月 「…何だか大変そうですね？」

未央 「あつはは。リカが格納庫にいる度にこうなんだもん。こっちは慣れちゃったよ」

卯月 「いる度…って、そんなに頻繁に出入りしてるんですか？」

奈緒 「1週間あれば4日から5日位はいるな」

卯月 「そ、そんなに……」

晶葉 「まあ、あの時期は何にでも興味を示す年頃だからな。その目線から見れば、こ

こは好奇心を刺激するもので溢れてるだろう」

加蓮「整備班の人達も、莉嘉には甘いしね。可愛がりたいのは、分かるんだけどさ」  
未央「あ、カレン」

加蓮「人が向こうで静かに休んでたときに何の騒ぎかと思えば…、何時ものアレ？」

晶葉「まあそんなところだ」

卯月「でも、流石に止めないと行けませんよね…。周りの人達にも迷惑掛かつちやいますし…」

未央「う〜ん…。それはいいんじゃない？」

卯月「え？」

加蓮「そうだね。そろそろ…」

「くおらあつ!!莉嘉ア!!手前えはまたこんなトコに来やがって…」

莉嘉「い、っ…。この声は…」

主任「つたく、どんだけ警戒しても入ってきやがる…。ネズミか?お前えは…」  
莉嘉「は…あはは…。ネズミよりだったら、ライオンの方がカツコよくて好きかな」

?

主任「うるせえ!何かあつてからじゃ遅えつていつも言つてんだらうが!!」

ゴンツ☆

莉嘉「いゝっつた。あゝい!!アイドルの頭殴るなんてサイテー!!」

「これは莉嘉が悪いよー?主任さん、何時も莉嘉の心配ばつかしてるんだから……」

莉嘉「うえ……お姉ちゃん!」

美嘉「全く……。アタシみたいなアイドルになるんでしょー?それがこんな所で油売ってていいの?」

莉嘉「うっ……それは……」

美嘉「ホント、ウチの妹が何時もすいません……」

主任「いや、良いんですよ。美嘉さんが頭下げなくても。悪いのは全部、そつちですから」

莉嘉「そつち!」

美嘉「だってよー莉嘉あ?ほーら、アンタも早く頭下げる」

莉嘉「うー……!って言うか、主任さんお姉ちゃんにだけ敬語とか可笑しくない?エコヒーキだー!」

主任「俺は何時だって使うべき相手には敬語だぜ?」

莉嘉「アタシはそうじゃないって!」

主任「ま、そう言うこつた」

莉嘉「ひどっ!」

美嘉「ほーら、訳分かんないこと言ってるんで、さっさと謝んなよー？主任さん、ア  
ンタが居なくなつたかもって、一緒に探すの手伝ってくれたんだから」

莉嘉「うっ……。…ごめんなさい……」

主任「つたく……。分かつてりやあいんだがな。いいか？格納庫つてのは、専門の  
おつかない機械がわんさかあるんだ。最悪、命を落とすかも知れねえ」

主任「そんな危険なトコだから、扱いに慣れた俺ら以外は入っちゃ行けねえんだ。分  
かつたか？」

莉嘉「うう……」

主任「返事っ!!」

莉嘉「は、はい……!」

主任「よし。なら、ほらよ」ガポツ

莉嘉の頭にヘルメットを被せる。

莉嘉「……え？」

主任「危ねえ場所なんだから、ヘルメットくらいしろ。それを被つて、俺の言う事を  
ちゃんと聞くんなら、これからも入ってきていい」

莉嘉「主任さん……!えへっ、えへへ……!ありがと☆」

主任「フンツ、大したことじゃねえや。現場にいる仲間の安全管理も、俺の仕事だか

らな」

莉嘉「仲間……」

美嘉「あくはいいい。ヘルメット貰ったんなら、今日はもう帰るよー」グイグイ

莉嘉「あ！ちよ……！お姉ちゃん痛い、痛い！首のとこ引つ張らないでよー！襟が伸びるー！！」ズルズル

美嘉「それじゃ主任さん、アタシ達はこれで。どうもありがとうございました」ペ  
コッ

主任「ああ、いいんだよ美嘉ちゃん。美嘉ちゃんもお仕事、頑張つて」

美嘉「勿論。妹の応援もいいけど、アタシの応援もヨロシク♪」

主任「勿論だとも。俺はどつちかってーと、アンタの方が好みだ」グツ

美嘉「そう？フフツありがと★」

莉嘉「ちよ……！お姉ちゃん、いい加減話してつてばく！一人で歩けるよ！お姉  
ちやあく……ん！！……」

格納庫を後にする城ヶ崎姉妹。

卯月「……あ……、何と言うか……、嵐みたいな人達でしたね？」

晶葉「あの姉妹に関しては、何とも言えんな」

未央「あ、主任がこつち来るよ」

主任「よう、卯月ちゃん。久し振りじゃねえか。元気してたか？」

卯月「あ、はい！主任さんも元気そうで、良かったです！」

主任「がははっ！嬉しいこと言ってくれるねえ。こつちも、また卯月ちゃんの笑顔がこうしてみれると思うと、部下の奴等も元気付けられるつてもんよ」

卯月「ホントですか！そう思ってもらえたら、嬉しいです♪」ニコニコ

主任「おう！その顔その顔。ホント卯月ちゃんはいい笑顔で笑ってくれるなあ」

卯月「ありがとうございますっ♪」ニコッ

晶葉「むっ……？整備班のアイドルは、私じゃなかったのかな？」

未央「アキっちかく……アキっちはファン層が限定されてるからなあ」

晶葉「それはどういう意味だ!？」

主任「そうそう。それに、俺はやっぱ、もつとこう成熟した？乳と尻のでけえ女の方が好みだからよ」

主任「ウチの女房も、若い頃はそりやもう魅力的でな……」

晶葉「……くっくッ！それ以上はセクハラだぞ……！このお……っ！」ワナワナ

未央「ま、まあまあアキっち落ち着いて？アキっちだつてその内主任がビックリするくらいのナイスバディになれるつて！」

晶葉「うるさあああいつ!!」ブンッ



主任「おわっ!?お、おい晶葉! 工具を投げるな! ここには精密機械だつてあるんだぞ  
!?!」

晶葉「問答無用く!!」

未央「うおっ! アキつちがキレた!」 ダツ

主任「おい、未央! 手前え一人で逃げようとしてんじやねえ!」 ダツ

鬼気迫る表情の晶葉から、慌てて逃げ出す親父とアイドル。

晶葉「待てえー!!」

未央「何で私までえく!!」

晶葉「お前も同・罪、だあく!!」

未央「うひひく!!」

未央&主任「お助けく!!」

凜「ま、自業自得だね」

卯月「あ、あははは……。 ……あ」

凜「うん、どうかした?」

卯月「あ、いえ……研究所の奥のハンガーって、今使ってたんですね? ネオゲッター以外のゲッターが見当たりませんでしたけど」

凜「ああ、今ちよつとした理由で、前のゲッターは北海道の橘研究所で修復中だから

ね」

卯月 「それじゃあ、みくちゃん達も見当たらないのは……」

凜 「うん。修復中のゲッターの試運転のために、北海道に出向中なんだ」

卯月 「なるほど……」

凜 「ついでに何か番組のロケもやってるらしいよ?」

卯月 「へえ。それで、そのゲッターを他の所で修復してる理由って言うのが、奥のハンガーですか?」

凜 「そ。折角だし、ちよつと見学する?」

卯月 「はい!」

二人で格納庫を突き抜け、奥のハンガーへ。そこには、

卯月 「これって……!新しい、ゲッターですか!?!」

凜 「まだ開発中だけどね。丁度博士がいる。——早乙女博士!」

早乙女 「——ん? おお、卯月くんに凜くんか。二人とも、ゲッターGの見学かね?」

凜 「はい」

卯月 「ゲッターG?」

早乙女 「うむ。これからの戦いの更なる激化を想定して、政府から依頼された。完全戦闘仕様のゲッターロボじゃよ」

卯月「完全戦闘仕様……」

凜「以前のゲッターロボは、宇宙開発用だったものを急遽戦闘に耐えられるように改造しただけに過ぎないから。でも、このゲッターは違う」

卯月「はじめから、戦う為に作られたゲッターロボですか……?」

早乙女「うむ。先の恐竜帝国との戦いで得られた戦闘データを元に、設計を見直し、表面装甲は勿論、各関節部や合体時のドッキング部の強度の強化……」

早乙女「更に、儂が新たに開発したこのゲッター線増幅装置により、そのスペックは以前のゲッターの10倍まで引き上がるじやろう」

卯月「じゅ、10倍……! そんなに……」

早乙女「故に、ゲッターロボを越えるゲッター……。ゲッターロボ『G』と呼んでおる」  
卯月「ゲッターロボG……。それが完成したら……」

凜「だけど、マシンの性能が上がる分、パイロットに掛かる負担や、要求される技術レベルは格段に上がる」

早乙女「うむ。その為のパイロットの選抜を、凜くんに一任しておる」

卯月「そうなんですか?」

凜「まあね。今のところ、1号機は卯月、2号機には私が乗ることで決定してる。後は……」

卯月「3号機のパイロットですか…」

凧「…うん。未央が怪我の後遺症でゲッターGには、乗れないとすると…」

卯月「今のところは、加蓮ちゃん、ですか？」

凧「いや、加蓮は確かに技術では問題ないんだけど、体力の方が。同じように奈緒も。あつちは体力的には問題ないんだらうけど、技術で加蓮に及ばないね」

早乙女「ままならんな」

凧「元よりそう簡単に面子が揃うなんて思ってたけど、せめてゲッターGの負担に耐えられて、かつ3号機の操縦特性にあった人間がいれば…」

卯月「3号機の特性、ですか…」

早乙女「従来通り、ゲッターGの3号機をメインにした形態はパワー重視の水中戦用じゃ」

凧「そう言う意味でも、奈緒は今2号機に乗ってるから、今から操縦の転換は難しいかな…」

卯月「成る程…」

所員「あのおく…。早乙女博士…」

早乙女「むっ。何じゃ？政府からの電話なら、俺はいないと伝えておけ」

所員「いえ、そう言う話ではなく…。その…」

早乙女「ふむ……」

所員「正門前の検問所で、不審な人物が騒ぎを起こしているらしく……」

早乙女「何じゃと……？またフリーのカメラマンか何かか？……全く……」

凜「私が確認してこようか？」

早乙女「むっ……。しかしアイドルである君一人を行かせるわけにも……」

凜「でも、博士にはゲッターGの完成に集中してほしいし、私は、次の訓練は手が空くから、丁度いいと思うよ？」

早乙女「ふむう……」

卯月「凜ちゃん、私も……」

凜「卯月はもうすぐ訓練でしょ。何かあったら警備の人もいるし、大丈夫だから」

早乙女「……分かった。それじゃあよろしく頼むとするか」

卯月「凜ちゃん、気を付けて」

凜「爬虫人類相手でもないんだし大丈夫だよ。それじゃ、行ってくる」

—— 検問所。

「——だーかーらー！」

門番「……ですから、困ります……」

凜「お待たせ、大丈夫？」

門番 「ああ、凜さん。…すみませんお忙しいところを…」

凜 「いいよ別に。で、アンタが不審者？」

？ 「なっ…！不審者…?!？」

凜 「見た感じ高校生みたいだけど、何の用？山で遭難したなら、麓の町までなら車出すけど？」

？ 「違ーう！私遭難者じゃない！私は…——」

？ 「ゲッターのパイロットになりたくてここに来たの！」

凜 「…は？」

門番 「さっきからこの調子でして…」

凜 「あくあ…、厄介だね。これは…。警察呼ぼうか」

？ 「待って！通報しないで！」

凜 「全く…。ここがどんな場所か分かって来てるなら余計質が悪い。ね、門番さん警察に補導してもらおう」

門番 「了解しました」

？ 「待って待って待って！話を聞いて！ねえ、その…アンタも私と同年くらいだけど、早乙女研究所の人なの？」

凜 「………そうだよ」

？ 「だったらお願い！この通り！私をゲッターに乗せて下さい！！お願いしますっ  
!!」

凜 「…本気で言ってるの？」

？ 「はい！だから誠意だけでも伝えようと思って、私服じゃなくて制服で…」

凜 「スゴい泥まみれだけど？」

？ 「これは、ここに入っていく車に掛けられたんです！」

凜 「それは…悪かったね」

？ 「いえいえ、別にいいんですよ。って、話はそこじゃなく！」

凜 「分かってるよ。アンタ、何か軽い感じで言ってるけど、ゲッターに乗るって言う

ことは、巨大な敵と戦うってことだよ？」

凜 「それを、お遊び感覚で考えてほしくはないかな」

？ 「遊びだなんて、そんな風に考えてません！実は私、一年前メカザウルスに襲われ  
てるのを、ゲッターロボに助けられたんです！」

凜 「……へえ」

？ 「その時に感じたんです。ゲッターに乗ってるのって、私と同じ女の子じゃない  
のかなって、だったら、私にも乗れるのかなって」

凜 「乗って、メカザウルスと戦う？」

? 「そうです！ 正面向いて戦えるなら、もう逃げる必要もなくなります！」

凜 「逃げる必要がないって…、逃げるのが、嫌なわけ？」

? 「当たり前です！ 逃げるなんて、何かこう、ロックじゃないじゃないですか!!」

凜 「ふー…ん。……ん？」

凜 (ロック……?)

凜 「まあそれは置いておいて、どのみち簡単には乗れないけどね」

? 「ええ!? 何ですか!?!」

凜 「ゲッターに乗るのだから、適正があるんだよ。私達だって、その適正があるから乗ってるわけ」

? 「へえ、そうなんですか…って、乗ってる!?! ゲッターに!?!」

凜 「そう。ゲッターのパイロットじゃなきゃ、研究施設にこんな女子高生、居るわけないでしょ？」

? 「いや、そうでもないと思うけど…って言うか、それじゃあ1年前に私を助けてくれたのって!」

凜 「私達だね。多分」

? 「そうなんだあ〜！ 偶然だね〜！ それじゃ、偶然ついで私にもパイロット適正があるかどうか、見てください!」



凜 「嫌だよ。一々民間人にまで検査の手を回してるほど、ここにも余裕はないからね」

？ 「そんなあ〜…」

凜 「ま、どうしてもパイロット適正があるか知りたかったら…って、あ——」  
？ 「？」

話し込む二人の側を一台のバンが通り掛かる。

新P 「よう、こんなトコで何やってんだ？おたくら」

凜 「卯月のプロデューサー。それに、美穂と響子もいるんだね」

響子 「お疲れさまですー！」

美穂 「えっと、接客中…ですか…？？」

凜 「いや、そう言う訳でもないんだけど…。そっちも卯月の迎え？」

新P 「ああ。卯月は訓練の後、事務所でレッスンだからな。ちと早いけど、ドライブがてらみんなで行くこうってなってるな」

凜 「ドライブの目的地にしては、場所可笑しいでしょ」

新P 「まあいいじゃねえか。そっちは…お取り込み中だったか？」

凜 「まあね。でも丁度よかった」

新P 「あ〜？」

凜 「卯月のプロデューサー。この娘、アイドルにしてみない？」

新P 「は？」

？ 「はいいい!？」

？ 「あ、アイドルって、あのフリフリに衣装着て、歌って踊ったりしてる…あのアイドルウ!？」

響子（ちよつと偏見があるような……）

凜 「そ、どうかな？」

？ 「いや、いやいやいや！無理でしょ普通。って言うか、私、一回アーティスト部門のオーディション応募したことあるし。…通知は帰ってこなかったけど」

凜 「アーティスト…？なら、そっち方面に興味があるってことじゃん」

？ 「いやいや！でも、アイドルとかタイプじゃないし、何て言うかほら、私からはロツクなオーラが滲み出てるから、アイドルなんて、似合わないんじゃないかなーって」

美穂（ロツク……）

凜 「そうかな？十分アイドル向きだと思っただけ…」

？ 「ええ!?!わっかんないかな。この私のロツク魂が！」

凜 「全然分かんない」

？ 「うっ…。だ、第一、ゲッターのパイロット目指すのと、アイドルになるの、何の

関係があるのさ!？」

凜 「…ウチの事務所だと、所属してるアイドルやアーティスト全員に、ゲッターのパイロット適正の検査をしてるんだよ」

？ 「そ、それじゃあ…!」

凜 「そ。ここで駄々こねてるより、事務所所属のアイドルになった方が、パイロットになれるチャンスがあるって事」

？ 「うゝ…ん、成る程、そう言うことかあ…」

凜 「それで、プロデューサーとしてはどうかかな?」

新P 「…見た目は悪くねえ。声も出るし、素質はあるだろう。だがな…」

凜 「うん」

新P 「アイドルになる、動機が不純すぎだ。俺ア個人として真剣にアイドル目指してる奴しか面倒見ねえんだ」

？ 「そんな!」

凜 「ま、普通はそうだよ。目の前で違う目的の為にアイドルになりますなんて言われたら、ふざけないでって私も思うよ」

？ 「ううー……」

？ (ゲッターの事を置いておいても、私が目指してるのはロックミュージシャン…)

だけど、ロックなアイドルって言うのも何か存在感あつてカッコいい…かも？

？ 「……やる！私、アイドルやります!!」

新P 「おう、何のためにだ？」

？ 「それは…私は……」

「多田李衣菜！ロックなアイドル目指して、頑張ります!!」

響子 「ロックな……」

美穂 「アイドル…？」

新P 「ほう…。面白え」

李衣菜 「そ、それじゃあ…!」

新P 「お前えの覚悟がどんなもんか見定めさせてもらう。乗んな」

李衣菜 「あ、ありがとうございます!」

凜 「……」

凜 (少し面倒なことになりそうだったけど、これで一先ず大丈夫そうかな?)

凜 (これでパイロット適正がちゃんとした結果が出れば、きつと諦めもつくと思うし、アイドルとして、活動にも専念してくれる筈)

凜 「面倒な問題は、一先ず解決かな」

訓練を再開したネオゲットマシンが大空を飛んでいった――。

数時間後 プロダクション 会議室。

卯月「——それで、その李衣菜ちゃんって子とプロデューサーは今手続きに行ったんですか」

美穂「そうみたい。面白い子だよ」

卯月「そうですね…。ロックなアイドル…どんなアイドルでしょう…」

響子「想像できませんね…」

美穂「私も、ロックとか、あんまり聞かないし」

卯月「仲良くできるといいですね」

美穂「うんっ。折角の新しいお友達だもんね！」

響子「それで…、レッスンは終わっても、大事な話があるから残ってるーってプロ

デューサーは言っていましたけど…」

卯月「はい。一体何のお話でしょう？」

美穂「何だろ？新しいお仕事の話かな？」

ガチャツ

新P「オーツス待たせたな。全員、ちゃんと揃ってつか？」

3人「はいっ！」

卯月「って、あの、李衣菜ちゃんは？」

新P「ああ、今日は帰した。お前らへの顔合わせやらスケジュールの調整とかは明日だ」

美穂「そうなんですか…」

新P「ま、俺としちやあこつちの用もあつたから、今日は時間割けねえつてのもあるんだけどな」

響子「そうです！何ですか？お話つて」

新P「ああ、何だ口で説明すんのも面倒臭えから、一言で言うどだな…」

新P「お前ら3人、それと今日見付けてきた多田李衣菜。その4人に合わせて新たに2人、俺が面倒見ることになった」

美穂「…え？」

卯月「それつて…」

新P「要するに、お前らの後輩だ」

響子「後輩…。後輩かあ……」

美穂「そう言えば、さっきの李衣菜ちゃんもそうですけど、私達が先輩…」

卯月「ふふつ。一気に3人の子の先輩ですね？」

新P「まあしばらくは下積みとして、ピンチエのお前らと一緒に行動させる。俺だけじゃなく、お前からアイドルのいろはを教えてもらえればと思つてよ」

美穂 「ど、どうしよう…。私、ちゃんと出来るかな……。？」

卯月 「大丈夫ですよ！こういうのは、自然体でいいんです！自然体で！」

新P 「お、流石の先輩は、言うことが違うねえ」

響子 「それで、その子達とはいつ顔合わせになるんですか？」

新P 「実はもう連れてきてる」

美穂 「ええ!？」

響子 「な、何で一緒に紹介してくれないんですかあ！」

新P 「ま、まずは話してクッションいれてからと思つたからよ。…それじゃ、お前ら入っていいぞ」

「はい」

ガチャ パタン

美穂 「……」

響子 「この子達が……」

新P 「おう、それじゃあ自己紹介！」

かな子 「は、はい！三村かな子です！よろしくお願いします！」

智絵里 「緒方、智絵里……です……。その…、よろしくお願いします……」

卯月 「三村かな子ちゃんに緒方智絵里ちゃんですね！初めまして。島村卯月です！よ

ろしくお願いします！」

響子「私は五十嵐響子つて、言います。ヨロシクね！かな子ちゃん、智絵里ちゃん！」

美穂「えつと…、小日向美穂です…。よ、ヨロシク…」

新P「おう、2人ともまだ来たばかりだから。お前ら、いじめんなよお？」

響子「誰もそんな事するわけないじゃないですか！」

新P「ははつ、だな。お前らに限つて、だな。違くない」

響子「全くもう…。プロデューサーは…」

美穂「えつと、智絵里ちゃん、つて呼んでいいのかな…？」

智絵里「あ…は、はい…。好きなように呼んで下さい…。せ、先輩…！」

美穂「あ、その、私の事も、そんな堅苦しい呼び方しないでいいよ？気軽に、美穂つ

て呼んでくれれば」

智絵里「そ、そんな…！先輩を呼び捨てにするなんて…！」

美穂「いや、あの、ホントに気を遣わなくても大丈夫だから…。私も、そう言うの慣

れてないし…ね？」

卯月「ふふつ。二人ともガチガチですね？」

響子「あれじゃあ、どっちが後輩か分からなくなりそう」

かな子「あ、あのっ…！」



響子「あ、かな子ちゃん…って呼んでもいいのかな？」

かな子「は、はい…！全然大丈夫です」

響子「分かった。それで、何かな？かな子ちゃん」

かな子「あの…、私、お菓子を作ってきたんです。良かったら皆さんで…どうですか？」

卯月「わあ！美味しそうなクッキー♪」

響子「これ、ホントにかな子ちゃんが作ったんですか？」

かな子「はい…。私、お菓子作りが大好きで…」

響子「そうなんだ。すごく美味しそう。ほら、美穂ちゃんも、智絵里ちゃんも。こっちに来てみんなで食べましょう？」

美穂&智絵里「は、はい…！」

ワイワイ ガヤガヤ

新P「…つたく、直ぐに騒がしくなりやがって…。」ニヤリ

卯月「プロデューサーさん！プロデューサーさんもどうですか？」

新P「お、サンキュ」

卯月「2人とも、良かったですね。これなら直ぐに打ち解けられそうです！」

新P「…そうだな…。」

卯月「？ プロデューサーさん、何だか浮かない顔してます？」

新P「ああ、悪い。なあ、島村。一つだけ、お前に言っておかなきゃならねえことがある」

卯月「はい？ 何でしょう？」

新P「今日紹介した新人の2人…。その内の三村かな子の方な、アイツ、パイロット候補だそうだ」

卯月「えっ!? …かな子ちゃんが……」

新P「事務所に来たときの検査でゲッター線適正ありと判断されたそうだ。それは本人にも伝えてある」

卯月「かな子ちゃん自身は、何て言ってるんですか？」

新P「『考える時間を下さい』だよ」

卯月「そう、ですか…」

新P「ゲッターのパイロットになるかどうか、それは当人次第だ。しかしな、幸か不幸かここにはゲッターパイロットの先輩である、お前がいる」

新P「三村が乗るか反るか、お前が見定めてやれ」

卯月「私が…ですか…?」

新P「何もゲッターに乗るほうに誘導しろってんじやねえ。もし、乗りたくない思っ

てるとしたら、ちゃんとそっちに背中を押してやれって話だ」

新P「誰かが無理矢理押し付けるってのは、良くねえからよ」

卯月「そうですね…。うう、頑張ります!」

かな子「あの…、卯月、さん…?」

卯月「ひや、ひやいつ!」

かな子「きやつ…!ごめんなさい…私、いきなり…」

卯月「あ、ああううん!かな子ちゃんが悪い訳じゃないから…。それで、何ですか?」

かな子「あ、はい。実は、卯月さんにお尋ねしたい事が…」

卯月「あー、はい!アイドルの事で、ですか?」

かな子「い、いえ…あのゲツt…」

卯月「アイドルの事ですよね!それなら、みんないるあつちでゆつくりお話ししましょう!ね?ね?」

かな子「あ、ああ卯月さん待って!手を引つ張らないで下さい!」

新P「…つたく、ホント頼むぜ…」

それから――、

――別の日、

かな子「あ、卯月さん……」

卯月「あ、プロデューサー！いいところに！ちよつと質問が……」

新P「お、お！お前えここ男子便所だぞ！中まで入ってくんない！」

卯月「あ、あああああああ!!すいませえくん!!」 ダダッ

かな子「卯月さん……」

——また別の日、

かな子「卯月さん……」

卯月「あ、忘れ物しちやつた……！取りに戻らなきゃ！」

響子「あ、卯月ちゃんそっちさつきワックス塗つてたから走らない方が……」

卯月「きゃあ!!」 ステーン

かな子「卯月さん……っ!!」

——さらに、別の日、

かな子「うだ……」

卯月「ああ……っ！持病の過労が……」 バタッ

かな子「う、卯月さん!?!しつかりして下さい！持病の過労って何ですか!?!卯月さん？」

卯月さん!?!」

かな子「卯月さんあああああんっ!!」

。。  
。 。 。 早乙女研究所 格納庫 。 。 。

卯月 「つはあゝゝゝ……！」

未央 「珍しくおつきな溜め息だねえ、しまむー？」

卯月 「未央ちゃん……。ごめんなさい……」

未央 「いや別にいいよ。こっちはこの前アキつちにセクハラした罰でひたすらネジ切りさせられてるだけだし」

卯月 「主任さんはスマキにされて吊し上げられましたね……」

未央 「全く、この1年で強かになったよ。アキつちは。女同士なんだし、セクハラ関係ないと思うんだけどな」

卯月 「はあ……」

未央 「また溜め息」

卯月 「私……嫌な先輩だって思われてますよね？」

未央 「そりゃあね、都合悪いってはぐらかされて逃げられるんだもん」

卯月 「うう……。はつきり言わないで下さい……」

未央 「ははっ、ここで卯月に気にするなって言っても、無駄な話でしょ？」

卯月 「だってえゝゝゝ！」

未央「はいはい、どうどう」

卯月「未いい央ちゃあああああん!!」

未央「…しまむー的には、どう思ってるの?」

卯月「それは…、ゲッターには…乗ってほしくはないです」

未央「ほお、何か意外」

卯月「そうですね?でもやつぱり、戦うなんて、するものじゃないですよ」

未央「そりゃあそうだね。私らだってアイドルで、一女の子だし」

卯月「はい。私達の場合は、敵が攻めてきてる最中で、考えてる時間なんてなくて…」

未央「あの時はただガムシヤラだったね。戦う理由は後から着いてきた感じ?」

卯月「かな子ちゃんは、優しい子ですよ。だからきつと、戦ってくれて、君しか出来ないんだ、って言われたら断れないんだと思います」

卯月「だけど、その優しさに甘えちゃいけない。押し付けちゃいけないです」

卯月「優しい人が一番辛い思いをするなんて、可笑しいじゃないですか?」

未央「ちゃんとその子の事見てるんだね。なら、そのままそう言えばいいだけなんじゃない?」

卯月「それは…:…そうですね。でも、私の言葉が、かな子ちゃんの人生を左右すると思うと…」

未央「あつはは！ままならないね。しまむーも」

未央「――…あ」

卯月「未央ちゃん、どうしたんですか？」

未央「…しまむー、後ろ」

卯月「後ろ？…あ…」

卯月「かな子ちゃん…」

かな子「…」

未央「ほくらあー、しまむーがあんまりはぐらかすから…」

卯月「うう…それは…」

かな子「あ、あの…！お話があるんです！」

卯月「は、はい…！何でしょう…っ!？」

未央「しまむー落ち着いて」

かな子「あの、その…」

かな子「私をゲットマシンに乗せてくれませんか？」

卯月&未央「「えっ？」」

かな子「…え？」

卯月「な…何だ…何だ…」　へなへな…

かな子「あの…、私、何か…」

未央「ンフツ…。いやいや、しまむーが勝手に一人で力んでただけだから」　ハハツ  
かな子「？」

——ネオイーグル号　発進カタパルト付近。

かな子「これがネオイーグル号…」

卯月「カッコいい、ですか？」

かな子「はい！卯月さんも、パイロットスーツに着替えると、雰囲気変わりますね」

卯月「あはは…。かな子ちゃんにも、予備のサイズが合うのがあって良かったですね」

かな子「そ、そうですね…」

卯月「きつくはないですか？」

かな子「は、はい…。ちよつとだけ…」

かな子（お腹回りが…）

卯月「？　大丈夫ですか？サイズが合わないのなら、また探し直した方が…」

かな子「い、いえ！これ以上お手数をお掛けするわけにはいきませんから…っ！」

卯月「そうですか？では、そろそろ行きましょうか？」



かな子「はいっ」

——ネオイーグル号 コックピット内。

卯月「んしょ…つと。後ろ、狭くないですか？」

かな子「あ、はい…。寧ろ広くないですか？」

卯月「まあ、今はそうでもないですけど、合体すると結構派手に動きますから」

かな子「そ、そんなに…？」

卯月「熱が入っちゃうって言うのもありますけどね…。えへへ…」

卯月「こちらネオイーグル、管制室聞こえますか？」

晶葉『ああ、こちらはばつちり聞こえているぞ』

卯月「あ、今日のオペレーターは晶葉ちゃんですか？」

晶葉『ああ。一応、候補生とはいえ民間人を乗せることになるからな。何かあれば、こ

ちらでサポートする』

卯月「よろしく願います！」

かな子「よ、よろしく願います…！」

晶葉『今回の出撃は、研究所付近の哨戒も兼ねていると言うことも忘れないでくれ』

卯月「はい！」

晶葉『特に、卯月は1年のブランクでゲットマシンの操縦に問題があると凜から報告

を受けているからな。しっかり習熟してくれ』

卯月「うう…そんなはつきり言わなくても……」

晶葉『ほら、出撃前に気を落とすんじゃない。発進許可が降りた。出撃してくれ』

卯月「……。分かりました。かな子ちゃん、発進直後は一番衝撃が掛かるので、しっかり捕まっついて下さい」

かな子「分かりました！」

卯月「よし…。島村卯月、ネオイーグル号、いきまーすっ！」

かな子「——っ！」

ドシユウ

—— 管制室。

早乙女「卯月くんは出たようじゃな」

晶葉「早乙女博士」

早乙女「同乗者の、候補生の様子は？」

晶葉「出撃前に着せたパイロットスーツにバイタルを測る機械を取り付けましたが…今のところ問題なしですね」

早乙女「発進直後に血圧が上昇しているようだが？」

晶葉「ゲットマシンにはじめて乗るからだ…。現に現在は安定してます」

凜 「二先ず、最初の問題はクリアか……」

奈緒 「あのかな子って奴、丈夫そうだったもんな」

加蓮 「でも大事ななのは本人の意思でしょー？現に、あの子だってお試して感じて乗ったんでしょ？」

未央 「何事も考えるより体験して決めるらしいよ？特に、この事に関してはね」

奈緒 「ま、戦うのは遊びじゃねえ。軽い気持ちで入ってくる奴よりはマシだけだよ」

凜 「奈緒の言うとおりだね。この際、メカザウルスくらい現れてほしいけど……」

未央 「しぶりーん……、不吉なこと言うのやめよーよ……」

早乙女 「いや、その方がデータもとれるし、何より、本人のためだろう」

加蓮 「早乙女博士まで……。中途半端でいるよりはいいんだろうけど」

晶葉 「さて、彼女はここからどうなるか……」

くくく 早乙女研究所 近隣空域 くくく

かな子 「うわあ……。夕日がキレイ……」

卯月 「かな子ちゃん、そっち変なのはありませんか？」

かな子 「あ、はいっ。こちら異常なし、です！」

卯月 「ふふっ、そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ。何か反応があればリーダーに映りますし、目視は念のためです」

かな子「そうなんですか？でも、スゴいですね。アイドルの仕事もしながら、こんなことまで……」

卯月「訓練も兼ねてますからね。それに、ゲットマシンに乗れる人間は限られています……」

かな子「……」

卯月「それで……、その、かな子ちゃん」

かな子「はい？」

卯月「そろそろ話をして大丈夫ですよ」

かな子「え……」

卯月「二人つきりになりたかったんですよ？格納庫には未央ちゃん達もいたし、こなら、私が通信さえ切ってしまえば二人つきりですから」

卯月「次の定時連絡までは時間があるので……言いたいことがあれば……」

かな子「卯月さん……。私……」

かな子「どうして私何だろうって、ずっと考えてたんです」

卯月「……」

かな子「私なんて、喧嘩するのも嫌いで、相手を叩いたり、自分が傷付いたりするのだって嫌いです。だから、もつと相応しい人がいるじゃないかって」

かな子「私なんて、私なんか、こんなロボットのパイロットなんて、不似合いです。出来れば乗りたくなんてありません。…でも……!」

卯月「分かります。…怖いですよ?」

かな子「卯月さん……?」

卯月「誰だつて怖い思いなんてしたくありません。それが普通で、それでいいんです。だからかな子ちゃん、かな子ちゃんらしく生きて下さい」

かな子「私らしく……」

卯月「はい♪それは、この鋼鉄の棺桶の中じゃない筈です!」

かな子「卯月さん…私は……」

ピッ ピッ ピッ

卯月「——ん?レーダーに何か…。——これは!」

かな子「ど、どうかしたんですか!」

卯月「最悪の事態です…!かな子ちゃんは後ろにしつかり座っていて下さい。——研

究所、早乙女研究所!聞こえますか!」

晶葉『ああ、問題ない。どうした?』

早乙女『まさかメカザウルスか!』

卯月「はい!位置は研究所から北北西に40キロ、ポイントD地点です!」

晶葉『了解した!』

凜『スクランブルだ。行くよ、加蓮!』

加蓮『全く、空気読まないのは相変わらななんだから…』

晶葉『よし、凜と加蓮が向かうまで辛抱してくれそれとも、一度研究所に戻るか?』

卯月『……』

かな子『……』

卯月『いえ、このまま目標を牽制します!』

かな子『!』

晶葉『……いいんだな?』

卯月『…予測は出来た事ですから』

晶葉『分かった。くれぐれも無茶はしないようにな』

卯月『了解!』

一度通信を切る。

かな子『卯月さん…!? どうして……』

卯月『目標のデータをデータベースに確認…。メカザウルス・モバ……前に未央ちゃんと戦った…』

かな子『卯月さん!』

卯月「かな子ちゃん、しっかり掴まっついて下さい!」

かな子「え……きゃあ!!」

ネオイーグル号の速度を上げ、戦闘機動を取り、メカザウルス・モバに接近する。

卯月「ミサイル、発射あ!!」

モバ『キシヤアア!!』

奇襲を受けたモバは悲鳴を上げてネオイーグル号を見る。

モバ『ゴアツ!!』

背中の中を甲羅を一部開き、トカゲの姿を模した触手をネオイーグル号に向ける。

卯月「くっ?!以前は、こんな攻撃は……!」

ハンドル状の操縦桿を握りしめ、触手による攻撃を掻い潜る。

かな子「きゃあああああ!いやああああああ!!」

卯月「泣いていいんです!叫んでいいんです!!」

かな子「う、卯月さん……!」

卯月「死にたくないって思うのが、怖いって思うのが、当然の事だから……!嫌なことから逃げたいって言うのが、普通だから!!」

卯月（だから、私の事も、ゲッターの事も、嫌いになって……!そうすれば……!!）

卯月「かな子ちゃんが乗る必要なんて、無くなるんです!」

ガクンッ

卯月「——っ!？」

一つの触手がネオイーグル号を捕らえる。

卯月「しまった——!？」

ネオイーグル号を捕らえた触手がコックピットに向けてその目を光らせた瞬間、触手の途中が第3者の攻撃で爆散した。

卯月「っ……!？」

急いで機首を上げる。

凜「大丈夫?・卯月」

卯月「凜ちゃん、加蓮ちゃん!」

加蓮「やつほ、お待たせく。間一髪だった感じ?」

卯月「はい、ありがとうございます!」

凜「よし、それじゃあ、ネオゲッター1に合体して一気に決めよう」

卯月「いえ、ネオゲッター3でいきます!」

加蓮「えっ、アタシは別にいいけど…ホントにいいの?」

卯月「はい。相手は装甲が厚く、パワーもありますから。ここはネオゲッター3で力比べです!」



加蓮「そう言うことね。OK、やってやろうじゃん……！」

凜「それじゃ、行くよ……！フォーメーション3！」

ネオベアー号を先頭にして、三機のマシンが連なる。

加蓮「ゲッターチェンジ!!」

ネオイーグル号の機首が真ん中で割けて鋭利なホーンとなつて背中になり、ネオベアー号の双頭エンジンは屈強な両腕に。

ネオジャガー号は大きく変形して、その巨体を支える赤い二本の脚となり、地響きと土煙を上げて大地に降り立つゲッターを力強く支える。

加蓮「——ネオゲッター3……参上……」

夕陽を受けて、黒く鈍く輝く巨体を以て、ネオゲッター3がメカザウルス・モバと対峙する。

卯月「かな子ちゃん」

かな子「は、はい……！」

卯月「ここ、どうぞ」

かな子「そこつて……」

ゲッターロボの操縦席。

凜（卯月……。かな子に戦闘を体験させる気で……）

加蓮 「そう言うこと。ま、こっちは思いつきりやらせてもらおうけど……！」  
モバ 『キシヤアアア!!』

モバが再び、触手を放出してネオゲッター3を捕縛に掛かる。

加蓮 「これで捕まえたつもり？ 残念だけど……！」

ネオゲッター3が強引に腕を持ち上げ、モバの体勢を崩す。

加蓮 「逆だよ！」

力任せに巻き付いた触手を引っ張り、モバを引き寄せる。

凜 「加蓮、そいつの甲羅は堅牢だから、腹を狙って！」

加蓮 「分かってる！」

モバの前足を掴んで無理矢理に立たせ、即座に直蹴りを腹部に当てる。

加蓮 「凜！」

凜 「うん。脚部スラスター全開！」

加蓮 「フットバーナー！」

ネオゲッター3の足の裏のスラスターを点火し、モバの腹部を灼熱の炎が焼く。

モバ 『ギョアアアア!?!』

バーナーの熱に耐えるように、モバも足を踏ん張り、ホールドされた前足を突っ張るように突き出してネオゲッター3を押し倒した。

加蓮「あうっ……！」

凜「反撃！すぐ来るよ！」

加蓮「っ……！」

モバ『クアツ!!』

口を開けたモバに咄嗟に腕を全面に出して放たれた火炎を防ぐ。

かな子「うう……あゝ あああ……！」

卯月「大丈夫ですか？かな子ちゃん。でも、目を背けないで、しっかりと見て下さい」

かな子「っ……し、……っ……！」

卯月「これが戦うって言うことです……！」

かな子「う……づき……さん……！」

かな子（そんな、卯月さんだって、辛そうなのに……。……）

モバ『ゴアアア!!』

かな子（ゲッターのコックピットで見るメカザウルス……。大きくて、怖い……！）

かな子（こんなの立ち向かって……。メカザウルスとだけじゃない、恐怖感と戦い

ながら……）

凜「っ……加蓮！何時まで敵のいいようにさせておくつもり!?!」

加蓮「大丈夫。お遊びは……。ここまで！」

加蓮「ゲッタートルネード！」

ネオゲッター3の首回りのファンを高速回転させ、発生した旋風が、モバの火炎を掻き消して、モバを大空へと打ち上げる。

モバ『グガアッ!?!』

加蓮「——ふっ！」

落下してくるモバにネオゲッター3は握った拳を突き上げ、

加蓮「つああああああつ!!」

ネオゲッター3の剛腕が、モバの甲羅を打ち砕く。

かな子「……卯月さん、よく分かりました。卯月さんが伝えたい事……」

卯月「かな子ちゃん……」

かな子「私……腕も足も震えて、頭の中も真っ白で……。でも一つだけ、スゴく怖いって言うのだけ、思い浮かんできて……」

かな子「こんな思いなんて、二度としたくありません……」

卯月「それじゃあ……!」

かな子「でも……!」

卯月「……!?!」

かな子「それは、卯月さんも一緒なんですよね?」

卯月「……」

凜「加蓮」

加蓮「言われなくつても。これ以上戦い長引かせたら、ネイル手入れする時間なくなっちゃう」

凜「……ふっ。そうだね……！」

ネオゲッター3は、モバに突き立てた拳をまた、大きく突き出し、もう一度モバを上空へ。

かな子「私に恐怖を教えてくれた。それは、卯月さんも同じ思いをしてるから。そう感じてくれるから、ですよね？」

卯月「それは……」

かな子「だから、お願いがあるんです！」

かな子「私を……！まだ不束者で、未熟者な私ですけど……卯月さんを支える、仲間の一人にさせてもらえませんか？」

凜「プラズマエネルギーをホーン部に収束……！加蓮、タイミングは任せるよ！」

モバが落下を始める。

卯月「かな子ちゃん……それは……！」

かな子「はいっ！こうして皆さんが戦ってる姿を見て、戦闘の恐怖を知って、私なり

に考えて、決めました！」

かな子「私は……」

加蓮「これで木っ端微塵だよ……！」

ネオゲッター3の背中中のホーン部に蓄積されたプラズマが、青白くスパークして溢れださんと弾け飛ぶ。

加蓮「プラズマブレイクツ!!」

かな子「私は、ゲッターに乗ります！」

トドメと放った加蓮の叫び、かな子の決意と覚悟を秘めた言葉。二人の意志を示すように、ネオゲッター3のホーンから、稲妻のような大出力のプラズマの奔流が天高く走った。

メカザウルス・モバを貫いたその光は、モバの全身を焼き、砕き。黄昏の迫った空に美しい爆炎の花を咲かせた。

—— 戦闘終了。

卯月「……一つだけ、勘違いしてますよ。かな子ちゃん……」

かな子「はい？」

卯月「ゲッターに乗らなくなったって、かな子ちゃんは私の、大切なお友達です」

かな子「……」

かな子「はい。それでも、私は…、私が怖いと思っ  
ている事を知って、私の思いを分  
かってくれた貴女の事をもっと近くで支えたい  
って。そう思ったんです」

卯月「かな子ちゃん…っ。そうですねか…  
…かな子ちゃん…」

卯月（ありがとう…）

凜「…」

加蓮「何一人で黄昏てるんだか」

凜「加蓮…。いいでしょ。今くらいは」

加蓮「ま、アタシがどうこう言うことでも  
ないし？…一先ずは…」

加蓮「バカが3人揃った、って感じ？」

卯月「？」

かな子「…？」

凜「…フツ」

つづく

## 第4話 『熱血乙女A!!!』

~~~~ 早乙女研究所 近域 ~~~~

澄み渡る快晴の空を、3機のゲットマシンが行く。

凜 「かな子、機体が揺れてる。もう少し速度を落ととして」

かな子 「は、はい……！」

卯月 「大丈夫です！シミュレーター通りにやれば問題ないですから。もう少し肩の力を抜いて、リラックスしましょう！」

かな子 「は、はい……！リラックス……リラックス……！」

凜 「それじゃあ、はじめるよ」

卯月&かな子 「了解っ！」

ギユウウウウンツ

凜 「ツ！——…1、2号機ドッキング完了…異常なし。卯月、そっちは？」

卯月 「はい、こっちも大丈夫です！」

凜 「了解。後は……」

卯月 「かな子ちゃん、行きますす！」

かな子「い、何時でもどうぞ!」

卯月「!」

ガキンツ

かな子「げ、ゲッターチェンジ!」

問題なく変形が行われ、ネオゲッター3への変形を完了。

ネオゲッター3は眼下に広がった湖へと着水し、湖底に降り立つ。

かな子「…ふう……」

凜「合体に成功したくらいで安心しない。次、直ぐ戦闘訓練に入るよ!」

かな子「す、すいません…っ! えっと…——きやあ!」

視界の狭い湖底で、何処からか放たれた攻撃がネオゲッター3を揺らす。

かな子「うう……。相手の位置を……」

卯月「今の攻撃で、ポイントを捕捉しました!ここから2時の方向です!」

かな子「にじ…2時の方向…、ええと……こつち!」

凜「逆!」

かな子「すいません!」

言われた方に向きを変え、有視界で目標を捕捉する。

仮想標的へ……

かな子「見つけた……!この位置なら……」

かな子「ゲッタートルネード!」

首のファンを標的に向け、ゲッタートルネードが、湖底の泥を巻き上げて一直線に進む。

仮想標的へ……> スカッ

かな子「あ、あれ……?」

卯月「発射角度がズレてます!修正して、もう一度……」

凜「ダメだ、先に向こうの攻撃が来る。かな子!防御して!」

かな子「は、はい……きやああ!」

指示が間に合わず、ネオゲッター3を再び、魚雷の模擬弾が襲う。

かな子「す、すいません……!」

凜「……いや、大丈夫。それよりも……」

卯月「射角誤差修正完了……。かな子ちゃん、もう一度!」

かな子「はいっ。ゲッタートルネエードッ!」

仮想標的<?!?!>

ゲッタートルネードが命中し、破壊される仮想標的。

かな子「や、やった……?やりましたあ……」

卯月 「はい！おめでとうございますっ！」

凜 「ちよつと手間取ったけどね……。まあ、悪くないかな」

凜 「ともかく、これで訓練終了。お疲れ、かな子」

卯月 「お疲れ様です♪早く帰投しましょう」

かな子 「……」

卯月 「？ かな子ちゃん、大丈夫ですか？顔色悪そうですけど……」

かな子 「卯月ちゃん、凜ちゃん……私……」

卯月 「はい？」

かな子 「訓練が終わって……安心したら、お腹が空きました……」 グウ……

凜 「……」 ズルツ

卯月 「うふふっ！もうお昼過ぎちゃいましたもんね。研究所に戻ったら何か食べます

か？」

かな子 「ホントですか!？」 パアア

凜 「そんな事言つて……。訓練の報告が先だよ」

かな子 「そんなあ……！」

~~~~~ 早乙女研究所 所長室 ~~~~~

早乙女 「初めての飛行訓練、ご苦勞じやったな。かな子くん」

かな子「あ、ありがとうございますっ！」

早乙女「改めて、ゲットマシンを操縦してみた感想はどうかね？」

かな子「はい……。何と言うか、その変な感じです。私、まだ車も運転したことないに……」

卯月「そう考えると、私達、一段飛ばしにマシンに乗ってる気がしますね」

凜「二段と言うか、階段飛び越えて違う階に行つたつて感じもするけど」

早乙女「君達に非常識的な事をさせておるな。……ともかく、初飛行で何事もなくて良かった。それだけでも、かな子くんには素質がある」

晶葉「合体までの時間は8・6秒。実戦にはやや長いタイムだが、はじめてにしては要領良く出来ている。ネオゲッター3との相性も良さそうだ」

早乙女「卯月くんや凜くん、未央くんにつづくスペシャルかもしれんな」

かな子「そんな……。私はそんな……。すごい存在じゃないですよ」

晶葉「そう謙遜するな。ゲットマシンを怖がっていない時点で、君には才能が十分に備わつておる」

かな子「そうなんですか？」

晶葉「ああ。あのネオゲッターマシンですら、一体何人のパイロット候補生がやめていったことか……」

卯月「あ、あはは……」

凜「偉い大学出ただけで、天狗になってた連中には良い薬だよ」

早乙女「それもそうじゃ。軟弱な奴にゲッターは操縦出来ん。それだけ、君は誇つても良いんじゃないよ。かな子くん」

かな子「は、はい……！」

凜「だけど、これからは実戦も経験する事になるんだ。ゲッターに乗って日が浅いからつて、ゆつくりしていい訳でもないからね」

かな子「はい！」

晶葉「良い返事だ。これからは期待出来るな。…それじゃあ博士、私はそろそろ……」

早乙女「うむ。気を付けてな」

卯月「晶葉ちゃん、これからお出掛けですか？」

晶葉「うん？ああ、これから少し、静岡の方にな」

卯月「静岡？」

凜「静岡と言えば、今そこでゲッターロボの量産用生産プラントを建設中だつて聞いたけど……」

かな子「ゲッターの量産……ですか？」

早乙女「うむ。ネオゲッターは勿論、今開発中のゲッターロボGも元はその為に造ら

れたものじゃからな」

卯月「それで、その生産プラントに晶葉ちゃんはどんな用事で？」

晶葉「ああ、この度めでたく、そのプラントの生産ラインの一部が完成してな。試運転も兼ねて新しいゲッターロボを一機建造中なんだよ」

かな子「新しいゲッターロボ!？」

凜「私達が戦ってる裏でそんな事を…」

晶葉「隠すつもりもなかったんだがな。だが、計画が上手く軌道に乗るまでは、下手に期待もさせたくなかった」

卯月「それで、どんなゲッターロボなんですか？」

晶葉「気になるか？フン…幸いここに設計データがある。見たいか？」

卯月「はいっ！」

3人揃って、晶葉の提示した設計データに目を落とす。

凜「これは…」

かな子「うわあ…。この新型は女の子の形なんですわね？」

晶葉「名前はゲッターロボ斬。旧ゲッターロボの設計を基に、くノ一の意匠を付加して機体の柔軟性や運動性を重点的に向上させた。まあ、旧ゲッターの発展型の一つだな」

卯月「成る程……。何だか今までのゲッターと雰囲気違って…可愛いですね！」

晶葉「そうだろう？今までのゲッターはゴツくてイカツかったが、こちらは対照的に丸くしたから、デモンストレーションでも華がある」

凜「そういう……。これ、晶葉が設計したの？」

卯月「えっ、そうなんですか？」

晶葉「ああ、その通りだとも。と言つても、さつきも言つたとおり、初代ゲッターロボの設計データを参考にさせてもらったが」

かな子「それでもスゴいじゃないですか！私より年下なのに、ゲッターロボを作れちゃうなんて！」

晶葉「フフンツ。それは、天才だからな。これから、こいつの最終試験を兼ねたテストフライトが行われる予定なんだ」

卯月「そうだったんですか。それじゃあ、引き留めちゃったりして、ごめんなさい！」

晶葉「いや、こつちもお前達に話す良い機会になったしな。構わんよ」

凜「テスト、上手くいくと良いね」

晶葉「無論さ。この天才、晶葉博士の傑作なのだから、失敗などさせてたまるか」

晶葉「——しかし、なあ……」

凜 「何か問題でも？」

晶葉 「ああ、実はまだ、正式なパイロットが決まってないんだ」

卯月 「それは…：そうですね。いずれ私達も、ゲッターGに乗ることを考えると…」

晶葉 「専属となる、斬の正規パイロットが必要になる。今工場の方ではアーニヤがテストパイロットになって各種テストを行ってくれてはいるが…」

卯月 「アーニヤちゃんが…」

凜 「最近見ないと思ったら…」

晶葉 「アーニヤを数に入れて、最悪私を入れたとしてもあと一人、メンバーが足りんかな子「加蓮ちゃんと奈緒ちゃんはどうなんです？」

晶葉 「あの二人は…：ネオゲッターの予備パイロットだろう？これから何が起こるか分からない以上、迂闊に専属には出来んよ」

卯月 「最悪の事態も…：つて、晶葉ちゃん、ゲッターの操縦が出来たんですか？」

晶葉 「失敬な。お前がいなくなってから1年間、私ももしもの時を想定して訓練を受けたさ」

晶葉 「お前達程適正もなく、長時間の操縦には耐えられんが、それでも動かすことくらい出来る」

凜 「未央も怪我で操縦は無理らしいしね。今のメンバーじゃ、奈緒達を転換させた



方が早い気もするけど……」

晶葉「やはりそれしかないか……」

卯月「あれ？そう言えば今日未央ちゃんが見当たりませんか？」

かな子「そうですね……。いつも訓練後は報告まで付き合ってくれるのに……」

凜「自称・Gチームのアドバイザーらしいからね」

卯月「あはは……」

早乙女「未央くんなら、朝から君達の事務所へ向かったよ」

凜「事務所に？」

早乙女「うむ。何でもアイドル復帰の第一歩とか言っておったが……」

くくく プロダクション 1F エントランス くくく

未央「おつはようございま〜すっ!!」

ガヤガヤ オハヨウ オハヨウミオチャン ガヤガヤ

未央「ん〜！懐かしいなあ、この空気。うん、ホントはこつちが本来居る場所なん

だけどねえ、つと」

「う〜ふ。相変わらずですね。未央ちゃん」

未央「むむっ！この声は……！」

藍子「お早う御座います。未央ちゃん」 ニッコツ

未央「あーちゃん！久しぶりだね！何時振りだろう…？」

藍子「未央ちゃんが最後に私のラジオに出演した時だから…：一年…：ひよつとしたら、もつと前かもしれないね」

藍子「私は、テレビで未央ちゃんの活躍、見させてもらいましたけど」

未央「えへへ…。何か恥ずかしいね」

藍子「その…：怪我の具合はもう大丈夫なんですか？」

未央「へーきへーき！このとーり！アイドル活動するには、全く支障ないよ！」

藍子「だと良いんですけど…」

未央「ほらほら、あーちゃんそんな心配しない。つて言うかさ、あーちゃんもここに居るつて事は、あーちゃんも今日はお仕事の話か何かなのかな？」

藍子「あれ？聞いてないんですか？」

未央「何を？」

藍子「私と未央ちゃん、ユニットを組むことになったんですよ」

未央「ええー!?!」

藍子「ホントに聞いてないんですか？」

未央「うん。私、アイドル活動復帰に向けて話がある、つて言われて呼び出されて来ただけだし…」

藍子「そうなんですか……。それじゃあ、私が教えちゃったのは何か不味かったかも……」  
未央「いいよいいよ。どうせ知ることはなるんだしさ。それよりもっと詳しく聞かせて?」

藍子「はい。と言っても私もあまり詳しくは聞かされてないんですけど……」

藍子「何でも、私と未央ちゃん。それに、新しく入ってきた新しい子の3人でユニツトを組んでデビューする、らしいです」

未央「新しい子……。?どんな子なんだろう?」

藍子「さあ……。今日はその事の初顔合わせだつて聞いてますし……。それまでのお楽しみでしょうか?」

「おっはようございまあーっすっ!!!」

未央「うおっ?!私を上回る声量の挨拶!?一体何者——!?!」

藍子「挨拶で判断するところなんですか……?」

「はじめまして!日野茜です!今日からこちらでお世話になることになりました!!よろしく願いますっ!!!」

藍子「スゴい……。茜ちゃん、かあ……。体育会系なのかな……」

未央「多分ね。それよりもうくくん……」

未央「何だか嵐の予感……」

くくく 夜 早乙女研究所 談話室 くくく

未央「ふひい……。疲れた……」

卯月「大丈夫ですか？未央ちゃん」

晶葉「しかし、ゲッターに乗っている未央をも凌ぐ体力とは。気になるな、その茜と  
言う人物」

凜「晶葉、分かっているとと思うけど、これ以上アイドルからスカウトするのは……」

晶葉「分かっていると。しかし、女性型のゲッターなんだ。むさ苦しい男連中を乗  
せると言うのも考えものだろう？」

凜「それは……。そうかもしれないけど……」

未央「お二方、ちよつとは私を気遣ってくれてもいいんじゃないかな……。？」

かな子「未央ちゃん、チョコレートでもどうですか？小さめなので、疲れていても口  
に入ると思うんですけど……」

卯月「温かい飲み物持つてきましようか？少し体をリラックスさせた方が……」

未央「……おお、天使が見えるよ……。天国は地上にもあつたんだ……」

凜「何言ってるの。ふざけてないで、現実に戻ってきなよ」

未央「ああんしぶりん酷い」

晶葉「それで？その新人と言うのは、一体どんな破天荒な奴だったんだ？」

未央「破天荒って程でもないよ…、ただ——」

—— 数時間前。

茜 『高森藍子さんに、本田未央さんですね！はじめまして！日野茜です！これからよろしくお願いします!!』

未央 『いや、それはさつき聞いたって言うか…』

茜 『あれ!? 何処かでお会いしたことありましたか？ 初対面だと思ったのですが…!』

未央 『そういう訳じゃ…：まあいいや…』

藍子 『それで…、茜ちゃん、でいいのかな?』

茜 『はい！よろしくお願いします！先輩!!』

藍子 『せ、先輩…』

未央 『私達にそんな堅苦しい呼び方はしなくていいよ。これから同じユニットのメンバーとして活動するわけだし』

茜 『し…しかし！芸能界では、先輩を敬うことが大切と…！それが出来なければ生き残れない弱肉強食の縦社会だと…!』

未央 『そんな殺伐とは…：うゝ…ん…』

藍子 『そこで悩んじゃうんですかあ…？…す、少なくとも、私達の関係はそう殺伐と

したもののじゃないはずですから、ね?』

未央『そ、そう! 私達、年も近いんだし…先輩後輩って呼び合うのはなしで! フラットにこう!』

茜『分つかりました! では、未央さん、藍子さんで!』

未央『うんうん。いい感じだよ、茜ちゃん!』

茜『ちん…?』

藍子『あはは…。未央ちゃんの独特な呼び方です』

未央『独特なんて…。私なりに親しみを込めたソウルネームのつもりなだけ?』

藍子『そ、ソウル…』

茜『ソウル…つまり、魂ですね! んんん! 何とも燃え上がってくる感じです!』

未央『んおお…。いい感じに熱血だね、茜ちゃん』

茜『はいっ! よく言われます! 熱血最強!! 何時でも全力全開です!!』

藍子『な、何だか本当にこの部屋全体が暑くなっっていくみたいですね…』

茜『うー! 体がウズウズしてきました…! そうだ! レッスン前に準備運動なんてどうですか?』

藍子『準備運動…?』

茜『はいっ! 私、今日がはじめてのレッスンですが、レッスンを受ける前に、体を動



かな子「大変でしたね…。足、筋肉痛とかないですか？」

未央「あははは…。それは大丈夫…。これでも鍛えてますから。ゲッターで」

凜「まあ、結局は走る距離を聞かなかった未央の自業自得でしょ」

晶葉「しかし…。10キロ走って顔色一つ変えずレッスンを受ける、か…」

未央「ああ、その後帰る時もダツシユで帰ったような…」

晶葉「ふふ…！面白くないか」

凜「だから……。晶葉は…」

晶葉「何、これは科学者としての純粹な好奇心だよ」

晶葉「気になるじゃないか。私達に近い年で、ゲッターに乗っている訳でもないのに体力と身体能力に恵まれた人間と言うものも」

卯月「確かに…。そう言われれば、そうかもしれないね…」

凜「ちよつと…卯月まで…？？」

晶葉「……よしっ」

未央「あはは。アキつちつてば、良からぬ事企んでる顔だねえ」

かな子「よ、良からぬ事つて…。未央ちゃんも面白がつてません？」

〳〳〳 数日後 スタジアム 〳〳〳

晶葉「——晴れ渡る青空……」



卯月「まさに運動日和ですね！」

晶葉「そして今日このスタジアムで、アイドル達の体力が試される、夢のスポーツの祭典が開かれる……！その名も——！」

晶葉&卯月「アイドル☆スポーツフェスティバル（〜）!!」  
ギャラリー〜ワアアアアアア!!

晶葉「と言うわけで始まったアイドル☆スポーツフェスティバル。司会は私、アイドル界切つての頭脳派・天才科学者こと池袋晶葉と……」

卯月「島村卯月、はじめての司会も頑張りますっ！」

晶葉「我々二人が大いに盛り上げるぞ」

卯月「あ、アシスタントとして私のユニットメンバーの美穂ちゃんと響子ちゃんもよろしく願いますね？」

響子「はい！精一杯頑張ります！」

美穂「よ、よろしく願います！」

晶葉「では早速、選手入場と行こうか」

卯月「そうですね！それでは先ずは青コーナー！」

卯月「体力はまだまだ未知数！だけど、持ち前のチームワークで勝利を目指します！  
チーム・トライアドプリムスの入場でーす!!」

ワアアアアアア!!

凜 「まさか晶葉の企画が通るとは…」 ボソ…

奈緒 「凜、ここまで来たらやるしかねえぞ。諦めろ」 ボソ…

加蓮 「アタシ、こう言う体張った仕事つて、ちよつと憧れてたんだよね〜!」 キラキラ  
ラ

奈緒 「一人妙にテンション上がってる奴居るし…。ま、ゲッターに乗ってるからには普通のアイドルに負けるわけにもいかないよな!」

凜 「…結局奈緒もやる気満々じゃん…。私も、ここまで来た以上やるからには、負けたくないけど…!」

卯月 「尚、トライアドプリムスにはゲストとして、アナスタシアちゃんがメンバーに加わります!」

凜 「ヨロシク頼むよ。アーニヤ」

アーニヤ 「Da. よろしくお願い、します…。絶対、勝ちましょうね?」

晶葉 「続いて赤コーナー。こちらは期待の新アイドルユニットがCDデビューに先駆け登場だ。チーム・ポジティブパッション!」

茜 「うおおおおお!!この場所!この空気!テンション上がってきますねえ!!」

藍子 「あ、あの…。何だか私、場違いな場所にいる気が…」 ウンドウニガテデスシ

…

未央「あーちゃん大丈夫だって。もう少し気楽に気楽に」

茜「未央さん！藍子さん！絶対に勝ちましようね!!」

藍子「はいっ…!?そ、そうですね…」

未央「もつちろん！しぶりのチームにだって負けないくらい、私達の絆パワー、見せつけてやろうじゃん！」

晶葉「そして、ポジティブパッションにゲストメンバーとして加わってくれるのは、我が事務所切っつてのカリスマアイドル、城ヶ崎美嘉だ」

美嘉「やつほー。3人ともヨロシクー★」

未央「おーう！美嘉姉えヨロシクー！」

卯月「さて、両チームともやる気はバツチリみたいですね！」

晶葉「ああ。では、ルールを説明しよう」

晶葉「チームは4人一組。両チームは各競技毎に代表者を一名選出し、計4つの競技に臨んでもらう」

卯月「そして最後に、4人全員で参加するリレー競争を行って、全部で5つの競技での勝敗の数で優勝を決めるんですね？」

晶葉「そう言うことだ。ではサクサク行こう。まずは第一競技、パン食い競争だ」

卯月「それでは各チーム、出場する人を選んで下さ〜い！」

奈緒「ホッ。競技内容は普通なんだな。研究所の訓練みたいなのをやらされるのかと思つた」

凜「流石にそこまでは……しないでしょ。…多分」

加蓮「それで？誰が行くの？ハンバーガーが吊るされてるなら、アタシが行つても良かったんだけど…」

奈緒「中身グチャグチャになるだろ…。吊るされてたら…」

アーニヤ「あー、もし良かったら…私が行つても、良いですか？」

凜「アーニヤが？」

アーニヤ「Да。実は、ずっと、やってみたかつたんです。パン食い競争…」

凜「……。そつか。いいよ、行つてきて」

アーニヤ「Спасибо！有難うございます！リンツッ！」 タツタツ

加蓮「良かったの？」

凜「うん。まあ、こんな事で時間を無駄にも出来ないしね」

加蓮「あ〜、そう言う事」

奈緒「どう言う事だよ？」

加蓮「教えな〜い♪」

奈緒「何だよ!？」

未央「おつ、向こうはアーニヤンが出てきたみたいだね」

美嘉「可愛い顔してるけど、あれでもゲッターのパイロットやってるんだよね。アタシらの方はどうしよっか？」

茜「では、先鋒は一番新米の私がつ!」

未央「ああ、ああ〜!ステイステイ。茜ちゃん落ち着いて」

茜「むっ!未央さん!何故止めるのです!？」

未央「茜ちゃんは私達の最終兵器だからね。ここは温存の方向で」

茜「そ…そうなのですか?では…仕方ありませんね…」 ストン

美嘉（アレで納得出来ちゃうんだ…）

藍子「あの…それなら、私が最初に行っても良いですか…?」

未央「お、あーちゃん行っちゃう?」

藍子「はい。今回はあんまりお役に立てなさそうですし…」

未央「うっし、分かりました!ドーンとぶつかる気持ちで行ってきなさい!」

茜「ファイト!ガッツ!!何よりも最後まで諦めない心が大事ですよ!藍子さん!」

藍子「は、はい…。それじゃあ、行ってきますね…」

未央「よおし、アーニヤンあーちゃん対決だ。気張っていこう!!」

美嘉「いや、意味分かんないし……」

卯月「両選手出揃ったようです！」

アーニヤ「オー、アイコ。ヨロシク、お願いしますね」

藍子「は、はい……。や、やるからには全力で勝ちに行きますよ！」

アーニヤ「Ja。ワタシも、負けません！」

晶葉「それでは選手はスタート位置に着いてくれ」

アーニヤ（……）

藍子（一番手だもん……。ここで恥ずかしいところなんて見せられない……！）

卯月「それでは位置について……。よい……！」

卯月「——どんっ！」

藍子「へっ！」

卯月「おおーっと藍子ちゃん選手前のめりに突っ込んで行きましたあ！」

晶葉「地面に、な」

美穂「あ、あの……。大丈夫ですか……。？」

藍子「あう……。？」

カメラマン「ススッ……」

卯月「動きのいいカメラマンさんがここぞとばかりに藍子ちゃん選手に寄って行きま

す……!!」

晶葉 「流石、動きが手慣れてるな……。倒れ込んで突き出た藍子選手のお尻を執拗に撮っている……」

奈緒 「そこ実況してないで止めろよ!!」

未央 「むっ、茜ちゃん!」

茜 「!! 何でしょうか?未央さん!」

未央 「大事な私達のあーちゃんの最大の危機だ!」

美嘉 「いや、最大の危機って……」

未央 「こうなったら強行手段だよ!あーちゃんの恥ずかしい動画がスタッフに回収されて編集されて、ネットに拡散される前に、力づくでカメラを破壊するしかない!」

茜 「未央さん……これは……!!」

未央 「茜ちゃんなら、この距離からカメラを狙って破壊できる筈だよ!」

茜 「成る程!このボールを使ってあのカメラを破壊するんですね!」

未央 「任せた!」

茜 「分つかりました!!」ズシッ

茜 「では……いききます!!」

茜 「ストラアアアアイクッ!!!」

ブンツ　ゴシヤアツ

美嘉「」

卯月「な、何と云うことでしょうか!? ポジティブパッションチームから投げられたボールが、正確にカメラマンさんの担いだカメラを破壊しました!!」

晶葉「何、カメラの代わりならいくらでもあるさ。カメラマンに大事がないようで何よりだ」

美嘉（茜が投げたのってどう見ても砲丸投げの鉄球…だった、よね……?）

晶葉（砲丸の球を野球ボールみたいに投げるか…。フッフ…）

卯月「あ、騒動の裏でアーニヤちゃんがちゃっかりゴールです!」

アーニヤ「…クリームパン、美味しい、です」　キラキラ

晶葉「なら、勝敗はトライアドプリムスチームの勝ちだな」

卯月「そうですね! では、勝利したトライアドプリムスチームには1ポイントが入ります!」

奈緒「……納得いかねえ…」

凜「奈緒、何深刻な顔で唸ってるの? ほら、次の競技だよ」

晶葉「――さて、次の競技は借り物競争だ」

卯月「両チームは代表者を決めて下さ〜い!」



奈緒「そんなじゃ、サクツと終わらせてくるか」

美嘉「お、奈緒がアタシの相手々？手加減なしだよ★」

奈緒「当たり前だつて。これでもアタシだつて、ゲッターのパイロットなんだからな」

晶葉「双方共にやる気十分なところでルール説明といこう」

卯月「はい！先ずは50m。スタートしてからこちら、借り物の内容が記載された手紙が置いてあるテーブルまでの50mを走ってもらいます」

晶葉「手紙を開け、確認するまでのタイムラグがあるからな。ここで差を着けておくと、有利に働くかもしれないぞ」

卯月「そして、借り物競争と言えば、何と言つてもこちら！借りるものが書かれた手紙です！」

晶葉「一応、手紙はトライアドプリムスチームとポジティブパッションチームで分けられている。間違つて相手チームの手紙を取ることの無いように、気を付けてくれ」

卯月「借り物が用意できれば、いよいよラストスパート！向こうの500mトラックを一周です！」

奈緒「無駄に距離遠くねえ!？」

美嘉「何？自信ないの？」

奈緒「…まさか」

卯月「それでは選手の人は位置に着いて……」

奈緒&美嘉「……」 スッ……

卯月「よーい……ドンッ!!」

ダッ

卯月「ほぼ同時にスタートを切りましたね!」

晶葉「うむ。今のところはほぼ横並び……いや、奈緒の方がリードしてきたか」

卯月「はい!奈緒ちゃん選手が手紙ゾーンに先に到着したようですよ!」

晶葉「まあ、50m程度だからタツチの差で美嘉も到着だが、どうなる?」

奈緒「さてと……アタシのは何だ……?」

『天使』

奈緒「……は?」

「あ、あの……」

奈緒「ん?」

智絵里「えと……」

奈緒（——状況を説明しよう。紙に書いてあった内容が理解できず目を白黒させていたら、後ろから声を掛けられ、振り返ってみるとそこには天使の姿をした智絵里がいた）  
奈緒（何を言っているのかさっぱり分からねえと思うが、どういう状況なのかという

説明を、アタシも誰かにしてもらいたい)

智絵里「あ、あの……その……、私……!」

奈緒「……分かったよ」

智絵里「え……?」

奈緒「天使なんだろう!なら、一緒に行くぞ!」

智絵里「は、はい……!」

卯月「奈緒ちゃん選手、後ろに突如出現した天使の手を取って走り出しました!」

晶葉「あの天使のドレスとこのか?アレは走り抜くそうだな……」

卯月「天使の手を引いて走るその姿はまるで、魔王の追手から逃れる勇者のようです

!」

奈緒「へ、変な例え方すんな!」

晶葉「あの局面でも突っ込みとは……。して卯月よ、その手にある黒いノートは何だ?」

卯月「これですか?表現とか、何かの役に立つと思ってアイドルのお友達から借りた

単語帳です!」

晶葉「……成る程……」

美嘉「えつと……アタシは……?」

『熱血乙女A』

美嘉「はあ？何コレ…？」 キョロキョロ

美嘉「あ、アタシのトコには誰も来ないんだ…。だったら尚更何だろ…。」

卯月「おっと、美嘉ちゃん選手は一旦チームの元に帰るようですね…。」

晶葉「ふむ…。さては借り物の内容でチームメイトと相談するつもりか」

卯月「奈緒ちゃん選手は既に走り出しています。この相談が思わぬタイムロスにならないと良いんですけど」

未央「——うゝゝん…。『熱血乙女A』ね…。聞き覚えある？あーちゃん」

藍子「いえ私は何も…。何なんでしよう？」

美嘉「それが分かってたら苦労しないって。あちゃあ…こうしてる間にも離されてるな…。」

茜「うー…ん!!このままでは負けてしまいます!!仕方ありません!美嘉さん!私と共に行きましょう!!」

美嘉「へ?」

茜「熱血!!それは正に赤く!熱く燃える私!乙女!それも、私で合ってますね!!

そして最後のA!!コレは間違いなく日野茜のAですっ!!」

茜「すなわち!『熱血乙女A』…!コレはこの私、日野茜の事だったんですよ!!」

藍子「そ、そうだったんですか〜!」

美嘉「いや、それで納得するのも可笑しいと思うけど……」

未央「ううん。あながち間違いないかもよ。美嘉姉え」

美嘉「ええ……」

茜「そうと決まれば善は急げですっ!!」 ダツ

美嘉「ちよっ……! そんな引つ張らなくても……つて、引く力強ツ?! い。 った!! 痛たた  
た!! 腕、腕千切れるよコレ!?! ちよ、ちよつとスタツフさん止めてええええ……!」

藍子「……選手の筈の美嘉さんが引き摺られていきます……」

未央「晶葉の好奇心の為なんだ……。許して、美嘉姉え」

茜「トラーーーイッ!!」

卯月「茜ちゃんが物凄い勢いで土煙を上げながら追い上げていきます!!」

晶葉「美嘉は……顔が青白いな。首が絞まっているのか」

美嘉「う。う……。もう……駄目……。莉嘉あ……ゴメンねえ……!」

卯月「さあ! 先を走ります奈緒ちゃん選手との距離を詰めていきます!」

晶葉「ゴールまでの距離は200m。奈緒選手はこのまま逃げ切れるか……」

茜「うおおおおおっ!!」

奈緒「くっそ! 爬虫人類か何かかよアイツ!!」

智絵里「はあっ……奈緒……ちゃん。はあ……はあ……わた、私……もう……」

奈緒（智絵里はこれ以上は限界か…。走りにくい格好してるし、仕方ねえ——！）  
ガバツ

智絵里「あ……！」

卯月「こ、コレは……！奈緒ちゃん選手、智絵里ちゃんをお姫様抱っこしましたあ!!」

晶葉「日頃の訓練の成果が出たな。意外過ぎる形で」

加蓮「奈緒やるう〜♪」

卯月「その姿は正に、傷ついた女神を必死に守り抜こうとする勇者…いえ、女騎士ですっ!!」

奈緒「輪を掛けて茶化しにくるんじゃないやねえ!!」

智絵里「あ、あの……!!」

奈緒「しつかり捕まってるよ。振り落とされんな！」

智絵里「は、はい……!!」 ギュツ

凜（しかも無駄に決まってる…）

茜「あと少しで追い抜けます！ボンバー—————ッ!!」

奈緒「おりやああああああ!!」

卯月「ご、ゴオオオールツ!!勝ったのは……」

卯月「——ポジティブパッションチームですっ!!」

ワアアアアア!!

奈緒 「つはあく〜! 負けたあく〜!」

智絵里 「あの、すみません…! 多分、私のせい…ですよね…」

奈緒 「そんな事ないって。智絵里だってそんな動きづらい格好して、頑張ってたじゃんか」

茜 「いやあく〜ギリギリの勝負でした! お陰で、良い試合が出来ました! ありがとう  
ございますっ!!」

奈緒 「……おう」 へへッ

響子 「それでは、手紙の内容と借り物があっているか、確認するします!」

奈緒 「確認って…、する必要あんのか?」 ペラ

響子 「はいはい…と……。それでは『天使』さん? 自己紹介お願いします」

奈緒 (…ん? 自己紹介…?)

智絵里 「は、はい…っ! うう……」

奈緒 「うん…?」

響子 「ほら、恥ずかしがらないで? あんなに練習したじゃない!」

智絵里 「はい…! あ、あの…えっと…、私……」

智絵里 「——だ、大天使チエリエル…です……!」

奈緒「」

響子「はいっ♪手紙内容通り、正解ですっ！」

奈緒「…って、それがやりたいだけじゃねえか!!」

美穂「えと、ポジティブパッションチームは…『熱血乙女A』…。はい、正解です」  
美嘉「」

美穂「って、それどころじゃなかった…! 担架を…スタッフさん早く担架をくく!」

卯月「2戦目から熱戦でしたね…:…晶葉ちゃん?」

晶葉「…どうだ?」

スタッフ（研究所所員）「はい。やはり計算に間違いありません」

晶葉「そうか。500mの距離を1分足らずで走りきるとは…」

スタッフ（所員）「平均時速は40kmを切ります」

晶葉「短距離走のアスリートか?…:…どんなスプリンターでも500mも全力で走りきるの、そうはいないと思うが」

スタッフ（所員）「脚力は勿論ですが、体力、持久力どれを取っても群を抜いています」

晶葉「ふふふ…。ますます面白くなってきたな」

卯月「…ええ…:…と…:…」

かな子「あの…:卯月ちゃん?」



卯月「? かな子ちゃん…?」

かな子「……」 オドオド…

卯月「! ……」 コクリ

凜「……ん」 コクツ

晶葉「……。やれやれ…。面白くなって来たところ何だかな…」

晶葉「では、選手の皆さん。ギャラリーの方々も。盛り上がってきたところ申し訳ないが、ここで一旦休憩に入る」

? ザワザワ ザワザワ… ?

晶葉「再開は後ほど。では、解散!」

くくく スタジアム外 輸送車輛内 くくく

凜「——状況はどうなってるの? 早乙女博士」

早乙女『うむ。メカザウルスが現れたのはつい先程。場所は群馬県の上野原じゃ』

凜「上野原か…。ここからじゃ時間が少し掛かるか…」

早乙女『今は自衛隊が出動して時間を稼いでおるが、とても敵う相手ではない』

凜「分かっている。古田さん、群馬県に入ったらそこでネオゲットマシンを発進させ

て。そこからなら、飛んでいった方が速い」

古田「了解ッス! それじゃあ飛ばしていくッスから、酔わないで下さいね〜!」

ギユルウウウウウウウッ!!

早乙女『よろしく頼んだぞ。3人とも』

凜「了解」

卯月「それにしても…メカザウルスはどうして何も無い山奥に現れたんでしょう?」

凜「さあ…。ひよつとしたら陽動の可能性もあるけど、山の麓には町もある。どのみち放つてはおけないよ」

かな子「……」

卯月「かな子ちゃん……緊張してます?」

かな子「は、はい……」

凜「初の実戦だからね。緊張と恐怖、両方か…」

卯月「…やっぱり、怖いなら無理しなくても良いんですよ?」

かな子「それは良いんです…。自分で決めた事ですから。それより、あの…」

卯月「何ですか?」

かな子「…お菓子を食べれば、少しは緊張が解れると思うんです…!」

卯月「お、お菓子…?」

凜「けど、そんなの何処に…」

かな子「こんな事もあるかとコックピットの中に日持ちするお菓子を置いてあるん

です」

卯月「え……？」

かな子「あ！心配しなくても卯月ちゃん達のコックピットにも入ってますよ？シート  
の後ろです」

凜「ホントだ……」

かな子「ですから、その……今の移動中だけ、コレを食べても良いですか？そしたら、  
きつと初陣も大丈夫だと思っくんです！」

卯月「はあ……そう言う事なら……」

かな子「ありがとうございまふ♪」 モツシヤモツシヤ

凜（言いながら食べてる……）

凜「……コレなら、初陣も大丈夫そうだね……」

くくく スタジアム 控え室 くくく

未央「美嘉姉え大丈夫？」

美嘉「ううく……ん……」 ナイゾウガトビダス……

未央「……こりやしばらく駄目そうだ……」

藍子「それにしても、どういう事でしょう？」

未央「あーちゃん……どういいう事って？」

藍子「確か打ち合わせでは、休憩はもう少し後、でしたよね？」

藍子「それがいきなり休憩になるなんて……。まさか……」

茜「何です!? どういう事なんですか!？」

未央「まあまあ、二人供。あーちゃんが考えるほど、深刻なことでもないって」

藍子「でも……」

未央「撮影が順調なら、休憩の時間が早まることだつてあるじゃん? そう言うもんだつて」

藍子「……」

ガチャ

晶葉「未央、いたか」

未央「アキつち……。どつたの?」

晶葉「ちよつと、な」

未央「……。分かつた」

藍子「未央ちゃん……」

晶葉「すまん。少しの間、未央を借りるぞ」

未央「大したことじゃないから、すぐに戻るよ。あ、あと茜ちゃん、落ち着かないからつて部屋から出て走り回ったりしないですよ?」

茜 「分つかりました!!」

未央 「ははっ。良い返事! それじゃアキっち、行こっか」

晶葉 「ああ」

ガチャ バタン

藍子 「未央ちゃん…」

茜 「藍子さん、そんな心配そうに、どうしたんですか?」

藍子 「…ううん。何でもありませんよ?」

茜 「そんな風な顔じゃありませんよ! 何か思っていることがあるら、一人で抱え込まないで、私に打ち明けてください!!」

藍子 「茜ちゃん…。ふふっ、茜ちゃんは優しいですね」

茜 「優しい、ですか? そんなこと言われたのは初めてです…! / 活発とか、暑苦し  
いならよく言われるんですけど…!」

藍子 「ふふっ…。私も、茜ちゃんくらい元気があって、活発だったらなあ…」

茜 「…何か、悩み事ですか!」

藍子 「…ううん。悩み事では…ないんです。ただ、心配、というか…: 悔しいって  
言うか」

茜 「悔しい、ですか…?」

藍子「はい。今未央ちゃんが晶葉ちゃんと出ていきましたけど…。きつと私達に心配させないようにしてくれました」

茜「…どういう事です?」

藍子「未央ちゃんは、ゲッターのパイロットで戦っていたから…」

茜「げったー…?あの、ゲッターロボですか!」

藍子「未央ちゃん…、普段明るくして、笑って…。私達が気に掛けないようにしてくれてますけど、前にゲッターで戦って怪我をして…、その後遺症がまだ残ってるんです」

茜「そ、そうだったんですか!」

藍子「未央ちゃんはそんな素振り全然見せてくれませんが…。そんな辛い思いをしてまで、もう戦わなくなつて良いのに…」

茜「藍子さん…」

藍子「私達が、未央ちゃんにしてあげられる事って、何も無いんでしょうか?」

茜「それは…：分かります!!」

藍子「…」

茜「あ!あああああああ!!その、えつと!あの!!ですね?!藍子さんが未央ちゃんの事を心配しているのは分かりました!そして、未央さんも私達に心配してほしくないって事も!」

茜 「でも、それなら……! やっぱり笑ってあげるのが一番なんではないでしょうか!」  
藍子 「笑って、あげる……?」

茜 「それが、未央さんが一番望んでいることなんじゃないですか!?! どんなに心配でも、私達が暗い顔をしていたら駄目だと思っんです!」

茜 「だから笑って、何でもないって未央さんが帰って来たら、笑顔でおかえりと! 言ってあげましょう!!」

藍子 「茜ちゃん……」

茜 「あ! あああつ!! け、結局何の解決にもなつてませんね……! すいません!」

藍子 「ううん。そんな事ないよ」

茜 「え!?!」

藍子 「茜ちゃんの言うとおりです。未央ちゃんは、いつも笑顔で帰ってきてくれるんですよ? だから私達もちゃんと笑顔でお帰りなさいって、言っってあげましょう?」

茜 「……はいっ! 合点承知です!!」

スタジアムの外から、けたたましい破壊音が響く。

藍子 「きやつ!?!」

茜 「藍子さん! 窓の外を!」

藍子 「あ、アレって……!」

つ  
つ  
く



## 第5話『飛翔、熱きその名はゲッター烈火!!』

~~~~~ 山奥 ~~~~~

メカザウルス・ウル『グオオオオオ!!』

自衛隊のBT-23を相手にメカザウルス・ウルが暴れまわる。

BT隊員『だ、第3小隊壊滅……こ、こちらの部隊ももう保ちません……!』

BT隊員2『残弾も残りわずかです!隊長、一時撤退の指示を……!』

BT隊長「うるせえ!! 後ろにや市街地があるつてのに引き下がるかよ……!この機をぶつけてでも、ここは絶対に死守だ!!」

BT隊員『そ、そんなあ……!』

ウル『ガアアアア!!』

BT隊員『う、うわああああ!!?』

BT隊長「す、鈴木いい!?」

狼のような強靱な牙を持つウルの顎に一機のBTが捕らえられる。

BT隊員『た、助けてくれえ!!』

BT隊長「野郎っ!!」

バラバラバララッ

2機のBTは僚機の捕らえられた顎に火力を集中させるが、ウルはビクとも動かない。

ウル『!!』 メキメキ…

BT隊員『う、うわああああああ!!?死にたくねえよおおおお!!』

ドウ ドワ オ

ウル『ギョワアア!!』

BT隊長「な、何だ!?何処の部隊の攻撃だ!？」

突如、空中から飛来したミサイルがウルの顎に命中し、BTが解放される。

BT隊員『た、助かった……』

BT隊長「大丈夫か!？」

BT隊員2『隊長!アレを!!』

BT隊長「あ、アレは……!」

グワ アッ

BT隊長「来やがったか……ゲッターロボ!!」

卯月「自衛隊の皆さん!ここまでありがとうございますっ!」

凜「後は私達が引き継ぐから、ピイトは下がって!」

B T隊員2 「よっしやあ！よろしく頼むぜ！ゲッターチーム!!」

B T隊長 「…やれやれ。これじゃ、どっちが大人か分からねえな…」

かな子 「え…つと…、敵のはメカザウルス・ウル…」

凜 「足の速い奴が相手って訳」

かな子 「あの、あれって恐竜って言うよりはオオカミ…」

凜 「そういう突っ込みはなし。向こうも見た目にこだわってないんだよ。きつと」

卯月 「ネオゲッター1で一気に決めますか？」

凜 「…いや、先ずは相手の速さに合わせる。ネオゲッター2で行くよ！」

卯月&かな子 「了解っ!!」

ウル 『ガオオオオン!!』 バシユッ

ウルの口から放たれたミサイルを三方向に分かれて躲し、機首を上げて上空で隊列を
組み直す。

かな子 「ま、真ん中って一番緊張するなあ…!」

ガキインツ

凜 「ゲッターチェンジ!!」

ネオイーグル号の蒼がすらりと伸びて2本の脚になり、左右に分かれたネオジャガー号の推進器が一回り大きくなって肩。中からはドリルと一体になった下腕が突き出す。

ネオベアアー号の推進器を背中に背負い、ネオゲッター2が大空に君臨する。

ウル『ギャオオオン!!』バシユバシユツ

凜「っ!」

対空ミサイルの連射を高機動で躲し、そのまま右腕を突き出してウルに向かって加速。

凜「ドリルアアアームツ!!」

唸り上げるドリルの一撃を、ウルは横に跳んで躲し、そのまま着地したネオゲッター2の左腕に噛み付く。

かな子「り、凜ちゃん……!」

凜「……っ!」

左のドリルを回転させてウルを引き剥がし、

凜「ドリルアームガン!」ドウドウツ

見せた腹に数発のプラズマエネルギー弾を撃ち込む。

ウル『ガオツ!』

ドリルアームガンでよろけたウルだが、直ぐに体勢を立て直し、再びネオゲッター2に飛び掛かる。

凜「くっ……!しっ……!……!」

蹴りを放ち、一度ウルから距離をとったネオゲッター2。

ウルは、凜達を攪乱するように左右に素早く動き、隙を伺っている。

卯月「……上手く狙いを定められませんよ!？」

凜「意外に賢いね。中に爬虫人が乗ってる……?」

かな子「ど、どうするんですか……? 速さは直角ですけど、向こうのがタフです!」

凜「……仕方ない。防御力の差はスピードと手数でカバーする!」

凜「プラズマブレード!!」

ネオゲッター2の右手首からブレードの柄を掴み取り、プラズマの刃を現出させる。

凜「——やあっ!」

プラズマブレードを逆手に持ち、ウルに肉薄。応じるように爪を立てて飛び上がったウルと一閃交える。

凜「……………」

プラズマブレードを爪に弾かれ着地。直ぐ様振り返る。

ウル『グルウウ……!』

ウルの口が何か柄のようなものをくわえている。

凜「アレは………」

卯月「メカザウルスもプラズマブレードを……!」

ウルのくわえた柄の左右から、ネオゲッター2のプラズマブレードと同様のプラズマ刃が伸びる。

凜 「人様の技を真似するなんて、いい度胸してるね……！」

ウル 『——ガウ！』

自身のプラズマブレードを握り直し、襲い掛かるウルに向き合う。

キンツ キイイインツ

左右から振られる2本のプラズマ刃を1本のプラズマブレードで迎え撃つ。

かな子 「こ、こつちもブレードを2本出せば……!？」

凜 「二刀流はエネルギーを余計に使う！それに、この手の勝負で重要なのは、得物の

数だけじゃない！」

凜 「——はああつ!!」

気合一閃。大きく振り仰いだプラズマブレードの一迅がウルを大きく弾き飛ばした。

凜 「はあ……はあ……はあ……。っ」

プラズマブレードを握り直し、構えを正す。

『オホホホホホ！無様よのう……、ネオゲッターロボ』

凜 「何!？」

卯月 「声……？あのメカザウルスから……!？」

かな子「それじゃあ、メカザウルスのパイロットが!？」

凜「いや、違う……!？」

『いかにも。妾は、貴様ら愚鈍なサル共の無意味な抵抗を見物しているに過ぎん』

かな子「私達を愚鈍なサルなんて……」

凜「所詮はそつちも、下賤な爬虫人類つてわけ」

卯月「二体誰なんですか!?!貴女は!？」

『フフ……、妾か?妾こそ、この地上世界の新たなる支配者!!』

かな子「ち、地上世界の……」

凜「新たなる支配者……!？」

『然り!我が名は恐竜帝国女帝、ジャテェゴよ!』

卯月「恐竜帝国女帝……ジャテェゴ……!？」

凜「それで?その女帝様がわざわざ何の用?」

ジャテェゴ『頭が高いぞ、メスザル』

かな子「メスザル……?」

ジャテェゴ『此度は醜く無惨に散ってゆく貴様らサル共の最期を見届けに来たのだ』

ジャテェゴ『貴様らに話すことなど、何も無いっ!!』

凜「コイツ……端からこつちを見下して……!」

卯月「見せてやりましょう！あの人に、ネオゲッターと私達の力を！」

ジャテীগ『クククツ……アハハハハ!!——無知とは恐ろしいものよ……』

凜「何!?!」

ジャテীগ『言つた筈だ！此度はネオゲッターロボの最期ではなく、貴様らサル共の最期だ!!』

ジャテীগ『コレを見よ!!』

卯月「アレは——！」

~~~~~ 市街地 ~~~~~

メカザウルス・ブル『ブオオオオオオ!!』

地下から突如姿を現したメカザウルス・ブルが市街地で暴れまわる。

晶葉「くつ……。やはり山奥に出たのは囿か！」 スチャツ

言いつつ、連絡用のインカムを装着する。

晶葉「未央、そっちの準備はどうだ？」

未央『バツチリ！何時でも出れるよ!』

晶葉「よし、今すぐに出てくれ。敵はスタジアムの正面だ」

未央「了解っ！行くよ、カレン！」

加蓮「アイアイサー、つと！」



ギユウウウウンツ

エンジンが唸りを上げて、ブルの前に立ち塞がったのは、黄色と青、2機のBT。

加蓮「ゲッターに乗るつもりで、まさかこんなのに乗るとは思わなかったよね」

未央「まあまあカレン。街中に隠せるようなのってビイトしかなかったし、今回限り我慢して…」

ブル『グウウ…』ズシツ　ズシツ

晶葉『敵が動き出したぞ！お喋りはそこまでだ！』

未央「——了解！ゲッターに乗れなかったとしても、出来る事があるってトコ！見せつけちゃいますか!!」

ブル『ブオオオオオオオツ!!』

未央「一斉射撃!!」

加蓮「……っ!」

ババババババババババツ

BTの両腕部の機関砲が火を噴き、ブルの表装を弾いて爆ぜる。

未央「えっへへ♪どんなもんだい!?!晶葉女史特製の劣化ゲッター線弾の威力は…」

丨つて…」

ブル『グワオオオオオオ!!』

未央「やっぱ対ゲッター線処理い…?」

ブル『ブモオオオオオオツ!!』

未央「おおっと!?!」

ブルの両拳を合わせた打ち下ろしを、ピヨコンと跳ねて躲す。

未央「あつぶな……。こっちは一撃喰らったらお陀仏なんだから、勘弁してよね!」

パララララララッ

ブル『ウゴオオオオオ!!』

未央「ありやりや…。駄目だこりや。こっちの火力じゃ装甲抜けないや」

加蓮「そこは、戦術と腕で何とかするんじゃない?」

未央「キツツイ事に言うねえ…。けど、やってみるつきやないか!」

未央「来いっ! 牛か恐竜か曖昧野郎!!」

ブル『ブモオオツ!!』 ブンツ

未央「っ!」

ブルの放った強烈な右ストレートの一撃を、BTの手足、頭部全てを収納した状態で受ける。

未央「見せてあげるよ! コイツのたった1つの最高の取り柄!!」

殴られた衝撃に乗ってブルの頭上へ。

未央「大雪山おろしの要領で…」

未央「スピン、アタアアアアアーツク!!」

空中でBTを高速回転させ、重力落下に任せてブルの脳天に衝撃を打ち下ろした。

ブル『!!?』

想定外の手段による攻撃に、不意を突かれたブルはアスファルトの地面にめり込み、それをクツション代わりに使った未央のBTは着地を決める。

未央「へへん!今度こそ、決まったね」 ブイツ

加蓮「やるじゃん。目回らない?」

未央「大雪山おろしで鍛えられましたから」

晶葉「――よし、こっちは避難してきた人はこれで全部か?」

アーニャ「Da。ゲッター斬は、どうなりました?」

晶葉「大丈夫だ。向こうの工場で自動操縦に設定して、今こちらに向かっている。もうすぐ到着する筈だ」

晶葉「後は、機影が見えてきたら、私のこの腕時計型簡易リモートコントローラでこちらに誘導すればいいだけだ」

奈緒「ホントに大丈夫なんだろうな?」

晶葉「心配するな。私の発明に間違いはない」

奈緒「そっちじゃなくてさ。そっちもだけど、ゲッターだよ。この間出来たばつかなんだろ？」

晶葉「それこそ心配はいらない。最終試験はクリアしたし、合体機構にも問題はないいきなりの実戦でも問題はないさ」

ブル『ブモオオオオオ!!』

晶葉「…未央の奴、調子にのってメカザウルスを怒らせたな…」

アーニヤ「ЭТО Право:そうですね。ここも、危ないです」

奈緒「おい、ゲットマシンが来たみたいだぞ」

アーニヤ「あの機影は…、間違いありませんね…。アキハ、お願いします」

晶葉「うむ。ではこのリモコンで誘導して…:…うん？」

奈緒「どうかしたのか？」

晶葉「ああ、一号機の烈火号のコントロールが利かない」

奈緒「はあ!?!お前さつき、自信満々に大丈夫だって言ったばつかならどろ!?!」

晶葉「それはそうだが…。マシントラブルではなく電子トラブルだから…。向こうの作業員も、そればかりは見抜けなかったか？」

奈緒「そんな言い訳してる場合か!」

アーニヤ「! 烈火号の機首が下がっていきます!」

晶葉「不味いな…。墜落するぞ」

土煙を立てて、ゲットマシン、烈火号が墜落する。

奈緒「おい、どうするんだよ!? あそこには避難して来た人達だつて居るんだぞ!!」

晶葉「心配するな。あそこは、避難者がいる区画とは逆方向の筈だ」

晶葉「ともかく、奈緒は烈火号が墜落した場所へ向かつてくれ。私達も、それぞれのゲットマシンと合流する」

奈緒「分かったよ!…つたく!」

烈火号が墜落した場所へと走り出す。

未央『アキつち、何かあったの? 後ろで爆音がしたけど』

晶葉「未央か。ああ、ちよつとしたトラブルだ。心配ない」

未央『そう? なら、新型ゲッターはまだ?』

加蓮『2機で踏ん張ってるけど、こっちもそろそろ限界だよ…?』

晶葉「それなんだが、到着までにもうしばらく掛かりそうだ。もう少し足止めできないか?」

未央『ええ〜? でも、援軍もゲッター以外は期待できないみたいだし、一丁頑張ってみますかあ!』

晶葉「頼む。私達も少しでも早く合流できるように努力する」

加蓮『帰ったらハンバーガー奢りだよ。高い奴』

晶葉「生きて帰れたら何だつて奢るさ。——ではな」ピッ

晶葉「：よし、紫電号と金剛号の調子は良さそうだ。行くぞアーニヤ、こつちだ」

タツ

アーニヤ「Дa! x o p o ш o」タツ

~~~~~ スタジアム内 ~~~~~

藍子「うう〜ん：」

茜「藍子ちゃん！大丈夫ですか？」

藍子「うん。私の方は、何とも：」

茜「スゴい揺れでしたね：：：戦闘が近くまで来てるのでしょうか!？」

藍子「分からないけど、私達も急いで避難シエルターの方に行った方が良いかも」

茜「そうですね！気絶した美嘉さんは、さつきスタツフさんに連れられて行きましたし」

藍子「：ゴメンね茜ちゃん。私が、カメラを持ち出すのに手間取ったせいで避難が遅れて：」

茜「いえ！そんなことはありません！藍子ちゃんもカメラも無事で、オールオツケーです!!」

藍子「あ……」

茜「!? 私、何か可笑しい事を言いましたか？」

藍子「……。そう言えば、さっき私を心配してくれた時もそうだったけど……。今、私の事ちゃん、って」

茜「あ……ああああああああああああああ……!!」 カア／／／

藍子「あ、茜ちゃん落ち着いて！」

茜「——す、すすすすいません!! 藍子ちゃ……いえ、藍子さん!!」

藍子「そんな……。気にしないで? 呼び方なんて気にしないよ」

茜「しかし……アイドルとして、私は後輩……! 藍子さんは先輩ですから……! そこはしっかりとメリハリを付けなければ……!」

藍子「それは……。確かに、アイドルとしては私は先輩かもしれないけど……。でも、やっぱり茜ちゃんには藍子ちゃんって、呼んでほしいな」

藍子「私は、先輩後輩って関係じゃなくて、茜ちゃんとはお友達になりたいから……」

茜「藍子さん……! いいえ! 藍子ちゃん!!」

藍子「はいっ♪——ふふっ」

スタジアムが微かに揺れ、再び爆音が響く。

藍子「……また……」

茜 「戦いがだんだん近付いてる気がします……！急ぎましょう！」

藍子 「うん！ここを曲がれば……ああ!？」

茜 「通路が……瓦礫で塞がれてます！」

藍子 「もしかして、さっきの衝撃で、スタジアムの一部が壊れたの？」

茜 「仕方ありません……！反対側から迂回しましょう！」

藍子 「でも……、そっち側はさっき何かが墜落して、やっぱり道が塞がれてるんじゃない

……」

茜 「スタジアムを壊して墜落したなら、瓦礫の上をよじ登って行けるかもしれないませ

ん！」

茜 「どちらにしろ、ここに居るよりは安全な筈です！」

藍子 「……分かった、行こう！」

茜 「はいっ！走っていきましよう!!転ばないように気を付けて下さい！」

藍子 「ぱ、パン食い競争の事は思い出させないで！」

タツタツタツ

――。

藍子 「はあ……はあ……はあ……」

茜 「はっ……はっ……はっ……！」

藍子「や、やっぱり瓦礫が……道が塞がって……!」

茜「——いえまだです!見てください藍子ちゃん!天井に穴が開いています!」

藍子「ほ、ホントだ……」

茜「私が先に登って、藍子ちゃんを引き上げます!少しだけ、待つて下さい!!」

藍子「だ、大丈夫……?危なかったら、直ぐに戻ってきて下さいね?」

茜「りよー解です!!では……!」

茜「ファイト……!!イツツパアアアツ!!」

微かに突き出た残骸を足場に、壊れた天井から表へと顔を覗かせた。

メカザウルス・ブル『ブオオオオオ!!』

眼前にブルの投げた何かが迫る。

茜「——!?!藍子ちゃん!伏せて!!」

藍子「え……?きや——!」バサツ

咄嗟に、飛び降りて下に居た藍子を庇うように覆い被さった。

二人の真横を通り過ぎた破壊音が、耳の奥までつんざく。

藍子「う……う……」

茜「大丈夫ですか!?!藍子ちゃん!」

藍子「わ、私の方は……、何も……。茜ちゃん……!?!」

茜 「へへへ……！かすり傷です！大したことありません！」

藍子 「……そ、それなら……良かった……けど……」

茜 「それよりも見てください！今ここに突っ込んできたものです！」

藍子 「アレって……、黄色いビイト……？」

茜 「はい！アレだけの距離を飛ばされたんです！パイロットが怪我をしてるかも……

！」

藍子 「あ、茜ちゃん！待って……」

プシューウ……

未央 「っ痛たたた……。メカザウルスの奴……派手にやってくれちゃって……！」

茜 「み、未央さん……!?!」

未央 「え——。茜ちゃんに、あーちゃんまで……!?!どうして……!?!」

藍子 「私のせいなんです……。私のせいで、避難が遅れちゃって……」

未央 「そうなんだ……。こつちも戦闘で戸惑って被害がここまで……。ごめんっ！」

藍子 「いえ、そんな事ないです！未央ちゃんは立派に戦っているじゃないですか！」

茜 「それよりも、怪我がないようにで安心です！」

未央 「二人とも……。へへっ、体は丈夫だよ。何たって、自爆したゲッターから助かつ

たんだからね」

藍子「自慢になつてません！」

未央「へへへ…つと——」

ブル『ブモオオオオオ!!』

未央「カレン一人じゃ荷が重いよね。そろそろ行かないと…」

BTを起こす。

藍子「ま、また行くつもりなんですか!？」

未央「もちつ！少なくともかみやんがアレに乗り込むまでは、時間を稼がないと！」

藍子「アレ…?」

未央の送る視線の先、そこには墜落したゲットマシンがある。

未央「私がアレに乗れたら、手っ取り早いんだけど、今の私には、ね…」ギユツ

藍子「未央ちゃん…」

茜「……い」ググツ

未央「二人の避難の時間も稼がないや。だから、あーちゃん達は下がって?」

藍子「そんな…!ダメ、です!次やられたら、死んじやうかもしれないですよ?」

茜「~~~~!」グググツ

未央「そんなこと言つても、今戦えるのは私しかいないじやん?」

藍子「それでも!無茶と勇氣は違います!」

茜 「うーーーーー……………っ!!」 グググググッ!!

未央 「あ、茜ちゃん…?」

茜 「未央さん!!」

未央 「お、おう…。何…?」

茜 「私に!ゲッターの動かし方!教えて下さい!!」

藍子 「茜ちゃん…!そんな、何で…?」

茜 「私なりに考えました!そして思いました!私がゲッターを動かせば話が速いと!!」

藍子 「どう考えたらそんな結論に…?」

茜 「でも!パイロットの方が来るまで待てません!それにその間、未央さんに無茶をさせるわけには行きません!藍子ちゃんも言っていました!」

藍子 「確かにそうだけど…」

茜 「私、無鉄砲で、お転婆で前向きなのが取り柄なんです!このまま引き下がるなんて出来ません!」

藍子 「だからっていきなり…。無理だよ…!」

茜 「無茶で無理で、無謀なのは分かっています!でも出来ないって諦めたら!何にも出来ないんです!!」

藍子「茜ちゃん…」

未央「…本気なんだね？」

藍子「未央ちゃん！」

茜「はいっ！元気があれば何でも出来るって！証明します!!」

未央「……。分かった。ハッチの開閉スイッチは直ぐ横にあるよ」

茜「っ！ありがとうございますっ!!」 ダッ

藍子「未央ちゃん！いいんですか!？」

未央「うん。多分ね、あーちゃん…茜ちゃんは、ああなったら止まらないよ」

藍子「……」

未央「多分私の知ってる誰よりも、ゲッターに乗るのに向いてると思うんだ。…嬉し
い事じゃないけど」

未央「でも…ならさ、何時でも追い風で、トライ決めさせたいじゃん？」

藍子「…茜ちゃん…」

—— 烈火号コックピット。

茜「乗りました！」

未央『茜ちゃん聞こえる?』

茜「未央さん！」

未央『通信は無事みたいだね。それじゃあ、茜ちゃんが今座ってるシートの後ろにヘルメットがある筈だから、それを着けて』

茜「——これですね！では！」 ガポツ
ウウウウン…

茜「！ 回りが明るくなりました！」

未央『よし、動作チェックも問題なしだ！そしたら後は、ペダルを踏んで、操縦桿を前に！』

茜「ペダルを踏んで！操縦桿を前に！！」
ゴオツ

奈緒「はあ…はあ…！あと少して、ゲットマシンのところに…——」

瓦礫の山の中から、勢いよく烈火号が飛び出す。

奈緒「な?!烈火号が…何で…！」

茜「う——う…ううう…!!」

未央『茜ちゃん！操縦桿を少し戻して！速度を落として!!』

茜「は…は…は…！——」 ガクンツ

烈火号の速度が安定する。

茜「つ…つ…つ…は——！はあ…スゴい衝撃…！息が出来なくなるかと思いました

た!」

晶葉『どう言うことだ未央!?!』

未央『どうもこうも、非常事態ってただだよ』

晶葉『非常事態って……』

未央『それに、本人の意思と覚悟を見た!だから、後は茜ちゃんに任せる!』

晶葉『合体するのは私達なんだぞ!?!』

アーニヤ『Не Волнуйтесь. Акиハ……。心配しないで下さい』

晶葉『アーニヤ……。しかし、なあ……』

アーニヤ『ミオが、やれると言うんです。ワタシは、ミオを、信じます』

アーニヤ『それに、今、空を飛んでいる人達の気持ちは、一緒、じゃないですか?』

晶葉『空を飛ぶ……。私達の気持ちか……』

ブル『ブオオオオ!!』

茜『メカザウルス!アナタに私の友達も!誰も!傷付けさせませんよ!!』

晶葉『……。ふっ……。そうだな!』

晶葉『おい、新米!聞こえるか?』

茜『はいっ!私はどうすれば良いでしょうか!?!』

晶葉『素直なのは良いことだ。いいか?真っ直ぐ、上に飛べ。後は私達が合わせる』

茜 「真つ直ぐ……上に!!」

ゴオツ

操縦桿とペダルを操作して、烈火号を真上に、垂直に傾け上昇させる。

晶葉 『ほう……。既に烈火号の操縦を把握している、か。いや、研ぎ澄まされた野性の勘か』

アーニヤ 『いきます！アキハ！』

晶葉 『分かっている！後に続くぞ！』

烈火号の後を追って、アーニヤの駆る紫の紫電号と、晶葉が操縦する黄色の金剛号が続く。

ブル 『グオオ……』

加蓮 「おっと」

ババババババツ

ブル 『ギヤアツ!?!』

加蓮 「アンタにはまだアタシ達の相手をしてもらわなきや。余所見しないでよね」

未央 「あーちゃん、そっち狭くない？」

藍子 「いいえ、こっちは大丈夫です！」

未央 「分かった！ちよつとの間怖いだろうけど、我慢してて！」

藍子「未央ちゃんが生きてくれるから…。それに、茜ちゃんだって頑張ってるだもん！私だって…！」

加蓮「一般人乗せて戦闘なんて、大丈夫？」

未央「今からシエルターに避難するよりはこっちのが安心だしね。それに、こっちの方が守ってやるって気合いが入る…！」

加蓮「そういうもん？まあ、ゲッターが来るまで、お互いに頑張ろっか…！」

バラバララララララッ…

—— 上空。

晶葉「——行け！」

タイミングを読み、勢いよく操縦桿を押して紫電号の機体後部に金剛号の機首を合わせ、ドツキンング。

晶葉「…ふう…。アーニヤ、タイミングは任せる。ゲッター斬はこの中でお前が一番乗り慣れているからな」

アーニヤ「D a. 任せて下さい」

晶葉「茜、紫電号が烈火号と合体したら、衝撃がある筈だ。そしたら操縦桿の右上、そこにもう一つレバーが見えるな？」

茜「レバー…？これの事ですか？」

茜 「烈ツツツ!!」

烈火号、紫電号の翼は大きく、美しい4枚の飛翔翼と変形し、大空を舞う妖精が如きゲッターを支える。

茜 「火アアアツ!!」

旧ゲッターではトサカのように天を突き刺していた左右の角は、下へ垂れ落ちた兎の耳のようであり、愛らしさを際立たせる。

桃色の体。美しく、女性らしいライン。しかし目付きは鋭く、敵に対する闘志を漲らせている。

アーニヤ「……ホツ。無事……成功、ですネ」

晶葉「ああ、どうだ茜。コレがお前の、いや私達のゲッターロボ……」

茜 「ゲッターロボ斬……ゲッター烈火!!」

――。

ヒュウン ズシンツ

ブル『ギャツ!?!』

加蓮 「ようやくご登場?」

未央 「待ってたよ!」

藍子 「茜ちゃん!」

アーニヤ「ツ……！」

晶葉「荒っぽい着地だ……が、今はそんな事はどうでもいい……！」

茜「——メカザウルス!!ここからはこのゲッター烈火が相手ですっ!!」

~~~~ 山奥 ネオゲッター戦闘区域 ~~~~

ジャテীগ『ゲッター烈火じゃと!?!』

凜「ふふふ……。私達人類を、甘く見過ぎたみたいだね!」

卯月「成長するのは、貴女達だけではありません!」

かな子「私達だって、人間だって進化するんです!」

ジャテীগ『何を……!しかし!ここで貴様らを葬ってしまえば同じ事!』

ジャテীগ『やれ!メカザウルス・ウル!!』

ウル『ガオオオオン!!』

ジャテীগの命を受けたウルがネオゲッターに襲い掛かる。

凜「甘く見過ぎだ……言ったよね!」

凜「ネオゲッタービジョン!!」 ブウンツ

ジャテীগ『むっ!?!』

高速に移動したネオゲッター2の分身をウルが引き裂き、本体はウルの背後に姿を現

す。

凜 「――はっ!」

大上段に振りかぶった腕を大きく振り下ろし、ウルの背中にプラズマブレードを突き立てる。

ウル 『ギヤアアアアア!!?』

背後からの攻撃に苦しみ、のたうち回るウルから、ネオゲッター2は一度距離を取り着地。

凜 「後輩だつて頑張ってるんだ。気合い入れ直すよ! 卯月、かな子!!」

かな子 「はいっ!」

卯月 「ここからが私達の本番ですっ!」

再び、戦闘態勢でプラズマブレードを構え直す。

くくく 市街地 くくく

晶葉 「いいか茜。敵は機体表面に対ゲッター線処理を施している。このままの状態ではゲッター-烈火の必殺技も効かない」

晶葉 「だから先ずは接近戦で奴の装甲を削るんだ!」

茜 「りよー解! いきますっ!!」

ペダルを強く踏み込み、ゲッター-烈火が一步踏み出す。

茜 「うおおおおお!! トラー………イッ!!」

晶葉 「馬鹿……！正面から突っ込む奴があるか!？」

ブル 『!!』 ブンッ

真っ直ぐに突進したゲッター烈火を、ブルの尻尾が強かに打ち付ける。

アーニヤ 「キャツ……！」

茜 「あたたた……！すいません!!アナスタシアさん!晶葉さん!」

晶葉 「コイツは新型なんだ!扱いは慎重に頼むぞ！」

茜 「は、はい……！」

ブル 『ブモオオオオオ!!』

アーニヤ 「!? メカザウルス、突っ込んできます!!」

晶葉 「このままビルごと押し潰す気か!」

未央 「させないよ!カレン!」

加蓮 「OK。フォローは任せて!」

2機のBTの機銃斉射が、ブルの氣勢を削ぎ落とす。

ブル 『ギヤアアア!』

晶葉 「よし、今の内だ。ゲッターを起こせ!」

茜 「は、はい……っ!」

ビルを支えにゲッター烈火を立ち上がらせる。

茜 「う……ううう……!!」

晶葉 「どうした!? 何故攻撃しない!？」

アーニャ 「アー、さっきアキハが、慎重に、って言ったから……？」

晶葉 「(素直か!?) ……ああもう! 分かった! 好きにやれ! 壊しても構わん!!」

茜 「好きに……壊しても……!! 了解っ!!」

晶葉 (コイツは馬鹿か!? 単純か!? いや、単純バカか!)

茜 「トラーーーーーイッ!!」

機銃斉射を行うBTの間をすり抜けるように走り、ブルにタックルを決める。

ブル 『グオオ!!』

茜 「おりゃああああ!!」 ガンツ

マウントポジションで倒れたブルに跨がり、両拳を連続して殴打する。

ブル 『ブモオ!!』 バシユツ

茜 「おっと!？」

頭頂の角をミサイルのように放った攻撃を、上体を反らして紙一重で躲す。だが、その拍子にバランスを崩しブルの上から転げ落ちてしまう。

ブル 『ブオウ!!』

茜 「ほっ!」

地面に尻餅を着いたゲッター烈火に振り下ろされた拳をいなし、その腕を伝って身を起こし、ブルの肩を両手で弾いて、宙へ躍り上がる。

太陽を背にして、空中で全身を捻り一回転。後方宙返りを決めてブルの背後に着地する。

晶葉 「おいおい……ホントに壊す気じゃないだろうな……」

アーニヤ 「でも、スゴク……ПЫШНОСТЬ……華麗、です」

晶葉 「……無茶苦茶って言うんだよ。コレはな」

茜 「うう……肉弾戦だけでは埒が明きませんね……」

晶葉 「それなら火斬刀を使い。両肩に収納してある筈だ！」

茜 「かざんとう……？ど、どうやって出すんですか!？」

アーニヤ 「武器の名前を叫んで、右の操縦桿を押して下さい！それで、ГОЛОС……」

音声、がマルチ入力されます！

茜 「マルチ……にゆう……？よく分かりませんが、こうですね！」

茜 「火斬刀ツ!!」

ゲッター烈火の左右の肩から、黒い金属の塊が飛び出し、空中で刃先の方が大きいクワリのような剣へと変化して、ゲッター烈火の両手に収まる。

茜 「おお……これさえあれば、鬼に金棒です!!とあ……!!」



両手で火斬刀をクルリと一回転させ、持ち直したあと、突貫。

ブル『オオ!!』

茜 「フンツス!!」

先程と同じ要領で打ち据えてきた尻尾を火斬刀で受け止める。

茜 「言った筈です! 鬼に金棒だと! てりやー!」

尻尾を弾き、尚もブルへ肉薄。軽く跳ね上がり、大上段から2刀の火斬刀を振り下ろす。

ブル『ゴゴオオオオ!!』

二筋の線がブルの胴体を突き抜ける。

茜 「ツ!!」

引き戻した火斬刀を水平に構え、打ち据えるようにブルの鳩尾へ2刀を叩き込む。

アーニヤ 「以外に堅い、ですね…」

晶葉 「いや、装甲に歪みが出来た。茜! 同じ場所にもう一撃叩き込め!」

茜 「了解ですつ! ———てええりああああ!!」

右の火斬刀を深く握り直し、やや低く身構えたブルに半身大きく振り仰いだ突きの一撃を叩き込む。

ブル『ゴギヤアアア!!?』

火斬刀を手放し、勢いでブルを吹き飛ばす。

ブル『グ…ググウ……!!』

藍子「ま、まだ立ってこれるんですか!？」

未央「ま、メカザウルスだしね。…つと、よし!カレン!標準を私の撃つ場所に合わせよう!」

加蓮「? 未央の後に撃てばいいんだね。了解」

未央「うん!ファイヤー!」

加蓮「——っ!」

土煙の中から身を起こそうとするブルに、2機のBTが火線を合わせる。

ブル『グアアアア!!』

突き込まれた火斬刀によって走った亀裂が、BTの射撃を受けて爆ぜ、装甲を廃した内部機構を曝け出す。

未央「今だよアキっち!」

晶葉「よし!茜、一度左右の操縦桿を引き戻してから『斬魔光』と叫んでレバーを押し出せ!」

茜「はいっ!いきます!!斬——!」

言われた通りに操縦桿を引き戻し、ゲッター烈火の両拳を腰溜めに置いた姿勢に。

茜 「魔——!!」

ゲッター烈火の胸部前方に淡くゲッター線が光輝く。

茜 「光おおおおお!!」

操縦桿を一杯の力で押し出し、その動きに合わせてゲッター烈火も両腕を突き出す。

茜 「ボンバー——————ッ!!」

そして、ゲッター烈火の元から淡い桃色を帯びたゲッター線の光が放たれた。

ブル 『グォ——』

斬魔光は、ブルの破壊され内部機構を露出した部分へと直撃。

ブルの上半身をも飲み込む巨大な激流となって、ブルを光の中へ押し流した。

やがて、巨大な爆炎を生み、メカザウルス・ブルは消滅した。

くくく 山奥 くくく

凜 「——っ!」

ウル 『ガウッ!』

2つの剣閃が中空で交差する。

凜 「……」

ウル 『……ガッ!?!』 ガクッ

崩れ落ちたのはウルの方だった。

ネオゲッター2のプラズマブレードが、ウルの左後ろ足を切り落とし、バランスの取れなくなったウルは、その場に崩れてのたうつ。

凜 「…トドメを刺すよ」

スラストターが火を噴き、ネオゲッター2は大空へ舞い上がる。

卯月 「かな子ちゃん、ネオイーグルのエネルギーをそちらへ託します！」

かな子 「はいっ！ えつと…、ネオイーグル、ネオベアーのエネルギーを、右のドリルアームへ収束…！」

ドリルアームが、これまでにない唸りを上げて、ドリルの周囲に溢れ出すプラズマエネルギーをスパークさせる。

凜 「……ネオゲッター2、最高速……！」

かな子 「ドリルアーム臨界！ 凜ちゃん、何時でもいけますっ！」

凜 「ありがとう。——っはあ！」

最高速度で、ネオゲッター2はウルへ突進。全身に大きなうねりを伴ってプラズマを纏った、巨大な竜巻と化す。

凜 「——トルネエエエード！ アタック!!」

激突の瞬間、急制動で衝撃波を生み、ドリルで貫いたウルの体を内側から粉碎。

ウルの胴体を完全に破壊し、大地に着地したネオゲッター2の背後で盛大な爆炎の華

を咲かせた。

卯月「やりました!」

かな子「勝った…? 私達が勝ったんですか!」

凜「そうだよ。お疲れ様、二人とも」

ジャテীগ『おのれ…!おのれゲッターロボ!』

凜「何だ、まだ消えてなかったの?」

卯月「ジャテীগさん! 貴女がどんな手を使って来たって、私達とゲッターロボが、必ず貴女の野望を砕いてみせます!」

ジャテীগ『フフフ…。悔しいが貴様らの強さは認めてやろう…っ!』

ジャテীগ『しかし! 最後に勝利するのは我々恐竜帝国よ!!』 フハハハ!!

かな子「な、何なんですか…? この人…、負けたのに…笑ってる!」

早乙女『Gチームの諸君、聞こえているか?』

3人「早乙女博士!」

卯月「どうしたんですか?」

早乙女『緊急事態だ。落ち着いて聞いてくれ――』

早乙女『つい先程、小笠原諸島沖200kmの海域で、未確認の大型潜水艦が確認された』

凜 「大型潜水艦…!? どうしてそんなものが…?」

ジャテীগ 『フホホホホ!! それこそ我らが恐竜帝国最後の方舟、恐竜艇よ』

卯月 「恐竜艇…っ!」

かな子 「でも、ただの潜水艦じゃ上陸しても意味ないんじゃない?」

ジャテীগ 『甘いわ! 恐竜艇の内部には、各地に散らばっていた我が臣下のメカザウルスが、数千と搭載されている!』

卯月 「す、数千…!? そんな数のメカザウルスが、もし東京に上陸したら…!」

ジャテীগ 『フハハハハ!! ネオゲッターのエネルギーが残り少ないのは目に見えておるわ!』

ジャテীগ 『最後の瞬間を震えて過ごすの良いわ! フハハハハ…!!』 シュウン…  
かな子 「ジャテীগの映像が、消えていく…!」

凜 「どうするの!? 博士!」

早乙女 『うむ。まさか匣を使用した2段作戦ではなく、3段構えの策とは…!』

卯月 「とにかく、ネオゲッターは一度研究所に戻らないと!」

凜 「ネオゲッターの回復を待つてれば恐竜帝国に上陸される…。何とかしないと…!」

茜 『私が行きますっ!!』

かな子「あ、貴女は……!」

茜『ゲッター-烈火は、まだピンピンしてます!それに、目標までの距離も、そう離れてません!』

早乙女『……。本当に大丈夫なのか?晶葉くん』

晶葉『はい。先の戦闘である程度の損傷が出てますが、ゲッター-烈火で戦闘を継続する限りは、問題ありません』

早乙女『…そうか。では、先行して敵の進行を押さえてくれ。こちらにも直ぐに増援の手配をする』

晶葉『お願いします』

卯月『どうして…茜ちゃんが…?』

凜「卯月、考えるのは後だ。博士、ネオゲッターは補給のため、このまま帰投します」

早乙女『分かった。整備班には連絡しておく』

凜「有難うございます。作戦は一刻を争う、最大戦速で日本の空を縦断だ!」

卯月「はいっ!」

かな子「了解ですっ!」

市街地

晶葉「——はい。お願いします。では…」

茜 「研究所への連絡は終わりましたか？」

晶葉 「ああ、パイロットを変えている時間もないから、このまま行くぞ！」

アーニヤ 「D a. 了解、です」

茜 「それでは行きま——…あ」

茜 「藍子ちゃん…」

藍子 「……茜ちゃん…」

茜 「えつと…あの…ですね……。その…」

藍子 「……。えへっ、行つてらっしやい！」

茜 「藍子ちゃん…」

藍子 「止めるわけにはいかないから…。それに、私には無理でも、茜ちゃんなら出来るって、信じてますから！」

藍子 「だから、どこまでも走り抜けて！茜ちゃんらしく！」

茜 「……はいっ!! 日野茜! 全力全開! 全身全霊!! 粉骨碎身で行ってきます!!」

藍子 「粉骨碎身は、メッ、ですよ！」

茜 「えへへへ…」

藍子 「ふふふ…♪——」

茜 「それでは行きましょう! アーニヤさん、晶葉さん!!」



アーニャ「Да。守りましょう…？みんなで、みんなの мир…平和を！」

晶葉「飛翔翼を展開しろ。それで飛行が出来る」

茜「はいっ！飛翔翼!!」

4枚翼が閃き、ゲッター烈火を大空へ。恐竜挺の出現した海域へと一直線に飛んで行く。

茜「全身全霊！全然オーケー!!今日も熱き乙女行動で……!!」

茜「トラーーーーーイ!!!」

つづく

## 第6話 『恐竜帝国最期の日!』（前編）』

~~~~~ 早乙女研究所 ~~~~~

古田 「大将! ネオゲッターが帰ってきます!」

主任 「おーっし!! 着陸準備急げ! ゲッターの整備と補給は、輸送車に載せてからだ」

主任 「——プラズマエネルギー用の供給パイプ、長さが足りんぞ! とつとと延長パイプ持ってこい!!」

プシューウ…

次々と着陸したネオゲットマシンを、待機した輸送車輛に誘導し、載せていく。

凜 「主任!」

主任 「おお、凜ちゃん」

凜 「大丈夫? 屋外での整備はやった事ないけど…」

主任 「ああ、色々てんやわんやだが、この程度でどじ踏む連中じゃねえさ」

凜 「そう…。…ネオゲッター、再出撃にどれくらい掛かりそう?」

主任 「…完璧な状態で飛ばすなら、1時間は掛かるな」

凜 「エネルギーが充分補給できればいいよ。10分で何とかして」

主任「…凜ちゃん、焦るのは分かる。だが、整備士として最低限の整備はさせてもらう。30分だ」

凜「……分かった。お願い」

主任「任せろ!」

卯月&かな子「凜ちゃん!」

凜「二人とも」

卯月「整備、どのくらい掛かるって…?」

凜「30分だってさ」

卯月「そんなに…?」

凜「焦ったところで、整備不良があったんじゃ何にもならない。私も卯月も、クールダウンが必要だってさ」

卯月「……そうですね。分かりました」

凜「かな子も、ちよつとだけど休んで」

かな子「いえ……!私は大丈夫です!」

凜「初陣で疲れてるのは、見てれば分かるよ。次の戦闘は海中での戦闘もあるかもしれない。体を休めるのも、私達の仕事だよ」

かな子「……はい」

卯月「一緒に行きましょ♪かな子ちゃん」

二人並んで、談話室の方へ向かう。

主任「――凜ちゃんは一緒に行かねえのかい？」

凜「……少しでも戦闘の状況が知りたい。私は管制室へ行くよ」

主任「了解！そこなら、修理が完了したのも見えるな」

凜「うん。それじゃあゲッターをお願い」

主任「おうっ！」

凜「……ゲッター斬は、今頃戦闘空域か……」

くくく 太平洋上 くくく

晶葉「――もうすぐ遭遇予想ポイントか……。茜、マニュアルは頭に入ったか？」

茜「は、はい……！全く全然入りません!!」

アーニヤ「……戦闘続き、で……Н а т я ж н о й……緊張してれば……、無理ありません

ネ……」

晶葉「……。お前は初陣で充分ゲッターを動かしてる。細かい挙動の事はいいから、

烈火の武装だけでも頭に叩き込んでおけ」

茜「了解ですっ!!」

晶葉「……はあ……」

アーニヤ「アキハ…。不安、ですか？」

晶葉「…まあな。まさかこんなにも早く恐竜帝国が攻勢に出てくるとは…」

晶葉「ゲッターGも、まだ完成していないと言うのに…な…。」

アーニヤ「恐竜帝国の動きは、предположение…想定、出来ないものでした。アキハが、悔やむ事、ではありません」

晶葉「そうは言われてもな…。言えば、この日のためにゲッターGの開発を続けてきたんだぞ？」

晶葉「科学者として、間に合わなかつたと言う事実は、悔やまれるよ」

アーニヤ「Там нет такой вещи…そんな事、ありません」

アーニヤ「今日までアキハも、サオトメ博士も、みんな頑張りました。ワタシ、知っています」

アーニヤ「ゲッターGがなくても、ワタシ達は…勝ちます。そうすれば、ゲッターGも、元の宇宙開発用のロボット、なりますね」

アーニヤ「それは…、とても、болшой…素晴らしい事だと…ワタシは思います」

晶葉「…」。ゲッターGは、宇宙開発の為に使え、か。確かに、アーニヤの言うとおりかもしれない」

晶葉「戦う事が、ゲッターの本懐ではない。…大切な事を思い出せた気がする。ありがとう、アーニヤ」

アーニヤ「He Волнуйтесь…気にしないで…下さい。仲間、なら…当然ですわね」

晶葉「ふふっ…。そうだな。だが、その為にはまず、勝たなくては」

アーニヤ「Да! その通り、ですっ! ワタシも、モチロンアカネも、頑張りましょうね♪」

茜「え?! ええああはいっ! 一緒に! 頑張りましょう!!」

晶葉「いまいち締めまりが悪かったな…」

各コックピット全てに、警告音が響き渡る。

茜「な、何ですか!?!」

晶葉「っ! アーニヤ!!」

アーニヤ「Да! レーダーに反応! 方向、12時…! 距離2kmのMope…海中に、所属不明の大型反応です!」

晶葉「真つ直ぐ、か…! 連中、本当に正面から勝負を挑んでくるらしい」

茜「……………」ゴクリ…

アーニヤ「…!?! 目標から、多数の反応の展開を、確認…! その数…! …およそ、20

!!

晶葉 「対空の迎撃機か!…: 茜、烈火の武器は全て頭に入ってるな?」

茜 「はいっ! バッチリです!」

晶葉 「よし。いいか、私達の目標は、あくまで敵の潜水艦だ」

晶葉 「迎撃機は無視して構わん! 私達の進路を妨害するものだけ、火斬刀で叩つ斬れ

!

茜 「了解ですつ! — 火斬刀ツ!!」

火斬刀を抜き打ち、鋭くゲッター烈火を前傾させる。

茜 「トラーーーーーイッ!!」

動きを溜めるように、一度腰を後ろに引いてから加速。メカザウルスの群れに飛び込
んで行く。

アーニヤ 「目標識別! メカザウルス・バドです!」

バド 『キシヤアアアン!!』

茜 「チェストーーーー!!」

ズバア

前方に躍り出たバドの一機に、正面から火斬刀を斬り入れ両断。

バド, s 『グアアアア!!』

バドの群れが次々に口から放つ音波攻撃を掻い潜り、ゲッター烈火を海面に僅かに姿を覗かせる恐竜艇に接近させる。

メカザウルス・モバ『ゴアアアツ!!』

茜「っ!?! くうう…!!」

海中から突然姿を現したメカザウルス・モバのミサイル攻撃を、反射でゲッター烈火を急上昇させて躲す。

アーニヤ「海中にもメカザウルス…!?!」

晶葉「恐竜艇の上へ回れ! 母艦の近くなら、敵も迂闊に攻撃できまい」

茜「了解っ!」

恐竜艇上部に高度を落とし、範囲外に出ないよう飛行する。

茜「敵の攻撃が止まりました!」

晶葉「しかしデカいな…。こうして露出してる部分だけでも、小島程はあるか…」

アーニヤ「マシーナランド、を…思い出しますね」

晶葉「ああ。ひよつとすると、マシーナランドを自由に航行できるように改造したのかもな」

茜「攻撃しますか!?!」

晶葉「うむ…そうだな。頼む」

茜 「了解っ!——斬魔光ツ!!」

恐竜艇に向かって斬魔光を放つが、容易く弾かれてしまう。

アーニヤ 「ゲッター線対策…」

晶葉 「期待はしていなかったが…。やはりはじめに表装に傷を入れるしかなさそうか…」

茜 「一先ず火斬刀で攻撃します!」

ゲッター烈火が火斬刀を振り被る。

アーニヤ 「!?!待ってください!上空から…何か…」

茜 「どうしたんですか!?!」

晶葉 「コレは…速い奴が来る!」

アーニヤ 「一機…、後続のバドより、3倍の速さで接近…直上!」

茜 「!?!」

『でえええええい!!』 ブウンツ

紙一重。身を翻したゲッター烈火の眼前を鋭い3本の爪が通り抜ける。

茜 「あ…危ないところでした…!」

『ほう…。奇襲を仕掛けたつもりだったが…。なかなか見事な反射神経だ』

茜 「喋る爬虫人…!何者ですか!?!」

『フン……我が名はキャプテン・ラドラー。同胞達の無念……覚悟してもらおうぞ！ゲッターロボ！』

茜 「キャプテン・ラドラー……!?!」

晶葉 「キャプテンクラスが出てきたか……!」

茜 「何ですか!?!キャプテンクラスとは!」

晶葉 「恐竜帝国の戦闘隊長だ。メカザウルスの性能も、奴の技術レベルもコレまでとはまるで違うぞ!」

茜 「……強敵登場!……ってわけですか!」

アーニヤ 「――来ます!」

茜 「!!」

ラドラー 『覚悟お!』

鋭い爪と火斬刀が鏝ぜり合う。

茜 「ぐ……うう……!」 グググ……

晶葉 「パワーは互角……!?!」

ラドラー 『貴様らのゲッターロボのデータを解析し、ガレリイ博士が最後に作り上げたこのメカザウルス・シグ!』

ラドラー 『例え新型が相手だろうと劣りはせぬっ!!』 ゴオ

茜 「ッ!!」

咄嗟にゲッター烈火を後方にバック転。ゲッター烈火が通り過ぎた後を、シグの口から放たれた火球が薙ぎ払う。

ラドラ 『チツ! コレも躲すとは…!』

アーニヤ 「x o p o Ⅲ o! アカネ!」

茜 「ゲッターの性能のお陰です!」

晶葉 「よし、態勢を立て直して反撃……ぐあつ!?」

ゲッター烈火の背後に、バドの音波攻撃が命中する。

茜 「しゅ、周囲のメカザウルスを忘れてました…!」

晶葉 「大丈夫だ。この程度で墜ちるゲッター斬じゃない…」

アーニヤ 「ですが、状況は危険…です!」

晶葉 「ああ。空中と海中のメカザウルスに、キャプテンクラスまでいるとは…」

晶葉 「一度高度をとれば、それでも海中の敵の攻撃は躲せるが…」

茜 「それでは! 恐竜挺の侵攻を止められませんか…!!」

晶葉 「だな。……せめてあと一手、こちらに手があれば……コレは…!」

ラドラ 『動きを止めた? 観念したのか?』

ラドラ 『しかし! 散っていった同胞の無念を晴らすのだ。一思いにはやらんぞ!』

ラドラ『行けえ！メカザウルス達よ！そのゲッターをズタボロにするのだ!!』

バド，s『キシヤアアアンツ!!』

バドの群れがゲッター烈火に迫る――。

ドドドドドドドドドド

ラドラ『な、何だ!?コレは!』

ゲッター烈火に迫ったバドの群れが、彼方から響いた轟音と共に一掃され、海面に墜落していく。

ラドラ『ど、何処からの攻撃だ!?奴等に増援など…』

ラドラ『!?』

晶葉「フフン！戦闘中は、相手ばかりではなくレーダーにも気を遣うことをオススメするぞ」

砲火が放たれた地点。ゲッター烈火よりさらに後方。そこに現れたのは、

ラドラ『ゲッターロボ!』

赤い装甲、赤いマントを翻し、大空に立つその姿は正しく、

茜「ゲッターロボ！ですね!!」

『ジャーンジャジャジャーン!!』

みく「つてえ、コレじゃあみく達、やられ役の噛ませ犬、ならぬ噛ませ猫みたいじゃ

!!
」

瑞樹「あら? 強ち間違つてないんじゃないかしら?」

アーニヤ「テスターチーム…」

菜々「は〜いつ☆そのとーり! ウサミン星…ではなく、北海道からの速達便ですよ。間に合いましたか?」

晶葉「ふっ…、ドンピシャだ!」

茜「ダブルゲッター揃い踏み! コレで形勢逆転です!」

ラドラ『何を…! ゲッターが一機増えたところで、所詮は旧式! 行け、メカザウルス達よ!』

バド, s 『キシヤオオオン!!』

瑞樹「ふふっ…! 逸っちゃって」

菜々「このゲッターはただ単に元のを復元した訳じゃないんです! それを見せてあげちやつて下さい! みくちゃん!」

みく「お任せにやん!」 ジャコツ

ゲッター1が両手に担った、ガトリングのような銃口を持った銃を構え直す。

みく「——ゲッターマシンガンツ!!」

ドウドウドウドウドウドウツ

銃口が旋回して、ゲッターマシンガンが吼える。

バド，s『!?』

ゲッターマシンガンから高速で放たれる弾丸が、ゲッター1目掛けて飛来したバドの群れの翼や体を射抜く。

瑞樹「動きが止まったわ！今よ！」

みく「合点!!にゃ！」

ゲッター1が背中中のマントを首から下、全体に纏わせる。

みく「まとめて吹っ飛ぶにゃあ！スパイラルゲッタービーム！」

マントの内側から、無数に拡散されたゲッタービームが周囲にばらまかれ、ゲッターマシンガンで被弾したバドを撃墜する。

茜「あ、あんなマントの使い方があるんですか!？」

晶葉「並みのゲッターエネルギー量で出来る芸当じゃないさ。試作型のゲッター線増幅装置は、しっかり機能しているようだな」

菜々「はいっ！今のゲッター1の性能は、以前に比べておよそ5倍ですよ！」

みく「お陰で、モンスターマシンに磨きがかかったにゃあ…。みく達でも、慣らしに随分時間をとられちゃったし…」

瑞樹「あら？なら卯月ちゃん達のネオゲッターと交換する？」

みく「絶っつ対お断りにや!もう慣熟飛行は勘弁してほしいよ」

アーニャ「フフ…。ミク、大変だった、みたいですね?」

ラドラ『ま、まさかここまでとは…!——…っ!?』

動揺を隠せないラドラに、ゲッター烈火が体当たりで肉薄する。

茜「さあ!貴方の相手は私達です!!」

晶葉「みく達のお陰で空の敵は数を減らした!直ぐに増援はあるだろうが、コイツは私達が倒す!」

アーニャ「Так、ミク達は、海の敵の相手を、お願いします」

みく「分かった!上は任せたまよ!——菜々ちゃん!」

菜々「い、何時でもどうぞ!」

みく「オープンゲットオ!!」

菜々「チエエーンジ、ゲッターー!3イイ!!」

空中でゲッター3に合体し、盛大に海中へダイブ。

メカザウルス・モバ's『グルウ…』

メカザウルス・ジカ's『…!』

菜々「コレは…:盛大な歓迎ですね…」

みく「1、2、3…ざっと数えただけでも20は軽く越えるにや!」

菜々「そんな数をナナ一人で相手するんですか〜!!」

瑞樹「泣き言言わない。ゲッターの力を信じて、よ。分かる?」

菜々「わ、分かるわ…」

みく「それが返せたなら余裕のよっちゃんにや」

菜々「うう…。分かりましたよ! ナナだつてアイドル業界で揉まれてきたんです! こんな事じゃへこたれませんかよ!!」

瑞樹「そうそう、その意気よ」

菜々「どりゃー! ぞすこーい!!」

〜〜 早乙女研究所 〜〜

整備士「ね、ネオイーグル号、整備完了…! 何時でも飛ばます!」

古田「ネオゲットマシン各機、エネルギー供給も充分です…」

主任「おう! みんなよくやったな。この後があつたら、全員にラーメン奢つてやる」

卯月「み、皆さん精魂尽き果ててますね…」

主任「何、こんなもんだ日常茶飯事だ」

凜「主任もありがとう。この短時間で、ネオゲッターを完璧に仕上げてくれた」

主任「お礼なんか要らねえ。代わりに、勝つてこい! じゃねえと部下達こいつらの楽しみも無

くなつちまうからな」

かな子「はい!必ず……!」

卯月「行きましょう!凜ちゃん、かな子ちゃん!」

「ちよおとおつと待ったああああ!!」

かな子「あれは……」

凜「加蓮と……未央のビイト?」

未央『ギリギリセーフ!!しまむーとみむっち、二人にお届け物だよ!』

卯月「私達に……?」

美穂&響子&智絵里「二卯月ちゃん、かな子ちゃん!」

卯月「美穂ちゃんと響子ちゃん!それに智絵里ちゃんまで……。どうしたんですか?」

響子「渡したいものがあって、未央ちゃんに頼んで乗せてきてもらったの」

かな子「渡したいもの……?」

智絵里「あの……、コレ……」

美穂「みんなで作ったんです。急な出撃で、渡し損ねちゃったから……」

かな子「コレって……、四つ葉のクローバーのクッキー?」

智絵里「はい……。四つ葉のクローバーは幸運の証だから、お守り代わりになると思っ

て……」

響子「かな子ちゃん、ゲッターのパイロットになって日が浅いから、私達で何か勇気

付けられないかなって、みんなで考えたの」

美穂「私、お菓子作りとか初めてだったから、ちよつと形が歪なのも混ざっちゃったけど…でも、味はみんなのと変わらないと思うから…！」

卯月「みんな……ありがとう…！」

かな子「本当にありがとう…！みんなの分も、私頑張るから！」

卯月「はい！私とかな子ちゃんと、それに凜ちゃん。3人の力を合わせて、必ず勝つて帰ってきますから！」

凜「……」

「何？あつちがそんなに羨ましい？」

凜「奈緒…加蓮…」

加蓮「やつほ。でも、別に改まって言うこともないけどね」

凜「分かつてる。必ず勝ってくるよ」

奈緒「頼むぞ。ウチらのリーダーがいなくなつたんじや、トライアドプリムスも成り立たないんだから」

凜「奈緒…」

奈緒「な、何だよ…？」

凜「ゲッター斬…乗れなくて、残念だったね…」

奈緒 「それを今蒸し返すのかよ!？」

凜 「フフツごめん、冗談」

奈緒 「まったく…。でも、いつもの凜で安心した。アタシ達が心配することは、何も無さそうだ」

凜 「当たり前でしょ。この中で一番、ゲッターに長く乗ってるんだから」

卯月 「凜ちゃんーん!」

凜 「卯月」

卯月 「はい、これ、凜ちゃんの分です♪」

凜 「私の分まで…」

かな子 「当たり前じゃないですか。私達3人で、1つのチームです!」 ミオ>ワタシ
ハ—?」

凜 「…そうだね」

凜 「それじゃあ行ってくるよ」

加蓮 「はいはい。ちゃつちやと行って、サクツと終わらせてきてよ」

奈緒 「勝利の土産話、期待してるからな」

主任 「ようっし!ゲッター輸送車出るぞお!!」

ブロロロロオ…

美穂 「…卯月ちゃん、かな子ちゃん…頑張つて……」

—— 車内 ネオベアー号コックピット。

かな子 「……」

卯月 『——良かったですね。かな子ちゃん』

かな子 「卯月ちゃん…。何だか、ちよつと食べるの勿体ないです」

凜 『きつと3人の思いが込められてるよ。味わつて食べなくちゃ』

かな子 「はい…。ちゃんと帰つて、味の感想とお礼、言わないと!」

卯月 『負けられませんね…。この戦い……!』

凜 『もちろん、かな子のためだけじゃなくて、ね』

かな子 「分かっています!こんな戦いは早く終わらせちゃいましょう!」

クツキーの入った袋の封を開封し、中から1つクローバーのクツキーを取り出す。

かな子 「…あむ……」 サクッ

かな子 「うん…美味し」

ブロオオ…ン キキイ

凜 「海岸沿いに着いた。そろそろ出撃だよ」

卯月&かな子 「はいっ!」

輸送車輛の荷台部分が開き、コックピット内に光が満ちる。

ウイー……ン……

卯月 「1号機、ネオイーグル号。スタンバイオツケーです!」

凜 「2号機、ネオジャガー号。出撃準備完了」

かな子 「3号機、ネオベアー号。スタンバイ完了……。い、何時でもどうぞ!」

かな子 (…智絵里ちゃん、響子ちゃん、美穂ちゃん…みんな。行ってきます…!)

凜 「――発進!」

ゴオツ

~~~~ 戦闘空域 ~~~~

ラドラ 『――はあっ!』

茜 「っ!!」 ガキンツ

上空から落下を加えて振り下ろしたシグの両爪を、交差させた火斬刀で受け止める。

茜 「ていつ!」

ラドラ 『ふんっ!』 ヒュン

即座に、浴びせ蹴りを放つが、シグは上空へと高度を上げて逃れる。

茜 「……!」

晶葉 「追うな!」

茜 「し、しかし……!」

晶葉「いいか、絶対にこの恐竜艇上部から離れるなよ」

晶葉「技量は向こうのが遥かに上なんだからな。こうしていれば、こつちの死角が減る」

茜「死角から一撃もらう確率が減るってことですか？」

晶葉「そうだ。ついでに向こうも自分の主力艦を迂闊には攻撃できないからな。光線や火球での攻撃をしてくる確率が減る」

アーニヤ「確かに…、敵がビームや、火球を使ってくるのは、水平方向、から仕掛けてきた時…だけ、ですね」

晶葉「それだけ攻撃範囲が限定されれば、こちらは対処しやすい」

茜「でも！潜水艦に潜られたらダメじゃないですか!？」

晶葉「それは大丈夫だろう。きつきからその兆候が見られない。きつと、艦がデカ過ぎてこれ以上潜水できないんだ」

アーニヤ「Дурацкий：間抜けな…理由、ですね…」

ラドラ『ふむ…。追ってこない、か。そこに取り付かれては厄介なのだが…、向こうには頭もキレルパイロットが乗っているのか…』

ラドラ『—ならば!』グンッ

晶葉「来るぞ…。迎撃準備、用意はいいか？」

茜 「モチロンです! 次は攻撃を躲して、一撃入れてみせます!」

ラドラ 『せやつ!』

茜 「おおおう……!」

水平方向、正面から突撃してきたシグの爪攻撃を受け流し、

茜 「りやあああああ!!」

後ろ回し蹴りで、シグの脇腹を狙う。が、

アーニヤ 「——キヤアツ!」

ゲッター烈火の動きを予測していた様に、シグの直蹴りがゲッター烈火の鳩尾に叩き込まれる。

ズンッ

茜 「……カハッ!」

晶葉 「か、カウンター……だと……!」

ラドラ 『動きから乗って日の浅い素人だと言うことは分かっていた……』

ラドラ 『このラドラ、貴様らとは潜り抜けた修羅場の数が違う!!』

晶葉 「こちらの動きは折り込み済みだったと言うことか……」

晶葉 「茜! 立てるか!」

茜 「……」

晶葉「茜？どうした!?返事をしろ！」

茜「……うう……うう……うう……！」

アーニヤ「もしかして…、向こうのGyx…気迫、に気圧されて…！」

茜「う……ううう……！」 カタカタ…

晶葉「成る程…。勘が鋭い分、歴戦の戦士が出すプレッシャーも感じやすいのか……ぐはっ!」

ゲッター烈火が吹き飛び、恐竜艇の甲板上に叩き付けられる。

ラドラ『動きに精細さが消えたな。ゲッターのパイロット…、終わりか?』 ガンツ

晶葉「グッ……!茜!しっかりしろ!!こんなところで終わっていいのか!」

茜「うう……!」 カタカタ…

ラドラ『…フンツ!』

アーニヤ「キヤアアツ!」

シグがゲッター烈火を踏みつける。

アーニヤ「…ダメ、です…!このままじゃ…ゲッターが…!」

晶葉「……。やむ終えん…ゲッターを強制分離させて…——うわあ!」

アーニヤ「アキハ!」

茜「!! あ……き……は……さん……?」



再度の踏みつけによって、金剛号のコックピットで、小規模の爆発が起きる。

晶葉 「うっ……ハア……ハア……。だ、大丈夫だ……」

アーニヤ 「しかし……、血が……」

晶葉 「大した傷じゃない……。バイザーが割れただけ……うっ……」  
盛大に鼻血を噴き出す。  
ブパツ

アーニヤ 「アキハツ!!」

茜 「血……! あきは……さん……ッ!?」 ドクン……

晶葉 「くっ……! 問題ない……! 大丈夫、私は大丈夫だ!!」

茜 「そんな……! 私、私のせい、で……? 晶葉さん……!」

茜 「うう……っ!」 ドクンッ

ラドラ 『トドメだ! 一思いに終わらせてやる!』 グワッ

茜 「うううううううう!!」 ガッ

ラドラ 『何!?!』

シグが持ち上げた脚をそのまま掴み、

茜 「うわああああああああああ!!」

そのまま立ち上がり、押し倒した。

ラドラ 『こ、こいつ……! 怒りで……我を……!』

茜 「うおおおおお——!!」

雄叫びを上げ、倒れたシグに飛び掛かり、マウントで連続して殴打を叩き込む。

茜 「ふん！ふんっ!!ふんっつ!!うおあああああ!!!」

シグの頭を甲板に叩き付け、起き上がり蹴り飛ばす。

アーニヤ 「何て、戦い方……」

晶葉 「プレッシャーを怒りで払い除けるとはな……。だが、危険だ……」

茜 「あ、あああああああああああああああつ!!」

ゲッター 烈火が猪突猛進に走り出す。

ラドラ 『一度虚を突かれたが……、怒りに任せた攻撃を見切るのは……!!』

茜 「はあああああああああ!!」

ラドラ 『——容易い!』

がむしやらの攻撃を躲し、その鳩尾に膝蹴りを一発。

ゲッター 烈火は宙を舞うが、直ぐに反転。獣の様に四つん這いで着地を決める。

茜 「フーーーーッ!フーーーーッ!!」

アーニヤ 「いけません!このままでは……!」

晶葉 「ああ。しかし、烈火の状態では1号機のコントロールが優先される。我々では

どうすることも出来ん」

晶葉 「――どうする…?」

凜 『――ゲッター斬、何かあったの?』

晶葉 「凜…! Gチームか!」

かな子 『皆さんお待ちせしました!』

卯月 「状況を教えてくださいますか? ゲッター斬の動きが尋常とは思えないんですが…」

晶葉 「そうだ。今茜は我を失っている」

茜 「うわああああああああああ――!!」

晶葉 「ぐっ…とにかく、一度でいい。こいつを止めてくれ!」

凜 『頭を冷やすって訳か…。分かった。卯月、かな子、ネオゲッター2にチェンジだ』

卯月&かな子 「了解っ!」

凜 「ゲッターチェンジ!」

上空でネオゲッター2へ合体し、狙いをゲッター烈火に定めて急降下する。

凜 「そこまでだよ」 ガシッ

茜 「うっ!?! うわあああああああああああ!?!」 ジタバタ

ゲッター烈火を羽交い締めにするネオゲッター2を引き剥がそうと、ゲッター烈火は

滅茶苦茶に動く。

ラドラ『…何だ？仲間割れか？』

かな子「うう…。茜ちゃん…大人しくして…！」

茜「うあああああ!!?うわあああーっ!!」

凜「つ…！全く手の掛かる…！アンタみたいなのは…！」 パツ

茜「!？」

ネオゲッター2がゲッター烈火を解放。突如抵抗を無くしたことで、バランスを失ったゲッター烈火に、

凜「フンッ！」

延髄切りを見舞い、倒す。

アーニャ「アッ！」

卯月「だ、大丈夫ですか？」

晶葉「…ああ、我々もゲッターも損傷は軽微だ。ナイスだ、凜」

凜「大した事じゃないよ」

茜「う…うう…！」

晶葉「気が付いたか？茜」

茜「あきは…さん…?——私は…」

晶葉「少し我を忘れていただけだ。…立てるか？」

茜 「は、はい……!」

晶葉 「よし。凜達、助かった。あいつとの決着は私達で着ける。お前達は海中のテストチームの支援に向かってくれ」

卯月 「テストチームが……」

凜 「大丈夫なの?」

アーニヤ 「H a. 任せてください」

凜 「……分かった。かな子!」

かな子 「はい! 何時でも覚悟は出来てます!」

凜 「心強いね……。——オーブンゲット!」

かな子 「ゲッターチェンジ!!」 ガキンツ

ネオゲッター3に合体し直し、海中へと姿を消す。

茜 「あ、晶葉さん……アーニヤさん……!」

晶葉 「何だ? 不安なのか?」

茜 「私では……今の私では……!」

アーニヤ 「H e t. そんな事、ありません」

晶葉 「アーニヤの言うとおりだ。相手はこちらより実力は上かもしれない」

晶葉 「だからと言って、ここで引き下がるのか? お前は、それでいいのか!?!」



スを吹き飛ばす。

菜々「うう……。数が多すぎですよ!」

ジカ『キシヤアアア!!』

菜々「わわっ! ゲッターミサイル!!」 ドワツ

ジカ『グギヤアツ!!』

菜々「もう! これ以上近付いてこないでください!!」

瑞樹「モテモテじゃない? 羨ましいわ」

菜々「コレがファンなら大歓迎ですよ!」

みく「実際メカザウルスにモテても良いことなんて一つもないにや」

菜々「全くそのとおりですっ!——ゲッターミサイル! ゲッターミサイルツ! ゲッターミサイル!!」

メカザウルスを近付けさせまいと、あちらこちらにゲッターミサイルをばらまく。

みく「ちよ……! コレじゃあ煙で前が見えないにや!」

瑞樹「一機、煙幕を抜けてくるわよ!」

菜々「ええ!?!」

モバ『ゴガアアツ!!』

菜々「いやあ——!! 死ぬならせめて、ステージの上で死にたかった……!」

みく「縁起でもない上に迷惑事この上ないにやあ！」  
ズンッ

菜々「な、何ですか…？」

瑞樹「良かったわね。海の藻屑にならなくて済んだわよ」

かな子「ネオゲッター3、参上です！」

ネオゲッター3の拳がゲッター3に迫ったモバを砕く。

みく「かな子ちゃん…！みんな…！！」

凜「間一髪。間に合ったみたいだね」

卯月「皆さん！大丈夫ですか!?!」

かな子「ここからは私達がお手伝いします！」

瑞樹「…やっぱり若いっていいわね。頼りになるわ」

菜々「な…それはナナに言ってるんですか!?!」

みく「ナナちゃんの場合は若いとかそれ以前の問題な気もするにや」

菜々「酷っ！」

凜「相変わらず賑やかだね。テストチーム」

卯月「はい！ピンチでしたけど、なんか安心しちゃいました！」

かな子「卯月ちゃんも凜ちゃんも…、危機的状况だったんですから…。もう少し心配



してあげましょう…?」

凜 「かな子もあの人達と深く接していくようになれば分かるよ。それよりも…」

モバ 『ギヤアツ!』

ジカ 『グウウ…!』

凜 「かな子、準備はいい?」

かな子 「はい…!」

卯月 「かな子ちゃん、海底付近は視界が狭いですから、こちらでサポートします。けど、かな子ちゃん自身でもソナーに気を配るのを忘れないで下さいね」

かな子 「分かりました…。…訓練通り…。…リラックス…。…リラックス…。…」

ジカ 『グギヤアツ!!』

凜 「来るよー!」

かな子 「——ふっ…!」

正面から勢いよく突っ込んできたジカを、真正面から受け止める。

ジカ 『グウ!?!』

かな子 「うう…!うわああああ!!」

ガツチリホールドしたジカを高々と持ち上げ、海底の岩礁に叩き付ける。

周囲に波紋と衝撃が伝わり、ジカは活動を止めた。

かな子「や…やった…!!?!…まず一体…」

凜「このまま一気に攻めるよ」

かな子「り、了解!」

卯月「テスターチームも手伝ってください!」

菜々「え?あ、ああはいつ!!」

かな子「ゲッタートルネエード!」

海中で起きた激しい渦の潮流に、多くのメカザウルスがバランスを崩し、渦の中心に引き込まれる。

凜「今だよ!」

かな子「フィンガーネット!」

ネオゲッター3の手の平から巨大なネットを放射。メカザウルスを一網打尽にする。

卯月「行きますよ、菜々ちゃん!」

菜々「い、何時でもどうぞ!」

かな子「えええええ…いつ!!」

メカザウルスの入ったネットをブン回し、海中へ放る。

菜々「ゲッターミサイル!!」

そこへ、ゲッター3がゲッターミサイルを撃ち込み、一網打尽にしたメカザウルスを

まとめて撃墜した。

みる「バーツチリ! 息の合ったコンビネーションだったにや!」 bグツ

菜々「あ、アドリブは得意ですからね…」

凜「まだ敵が全滅した訳じゃない。どっちも気を抜かないで」

菜々「は、はいっ…!」

かな子「了解です!」

モバ, s『グアアアア!!』

卯月「メカザウルスの第2波、来ます!」

瑞樹「ここからは各個撃破で、いいわね?」

凜「うん。こっちはゲッターが2体。メカザウルスが何体来たって負けないよ」

みる「2号機。パイロット同士の自信がスゴいにやあ…」

菜々「でも、ネオゲッターのお陰で状況が好転したのは事実です!」

卯月「このまま一気呵成もいいですけど、奥で静かにしてる恐竜艇も不気味です! 皆さん、気を引き締めていきましよう!」

かな子「はい! メカザウルスを倒して、恐竜艇を止める…。やってみせます!」

——海上。

茜「ううりやああああ!!」 ガンツ

こちらから距離を取ろうとするシグに、ゲッター烈火を執拗に接近させ、左右の火斬刀を振るう。

ラドラ『ぐっ……！こやつら……』

晶葉「ふっ、貴様の狙いは分かっている」

アーニヤ「この距離なら、バドに支援攻撃……させられませぬね！」

ラドラ『恐竜挺から離れたと思えば……。このっ！』ブンッ

茜「おわっ?!」

下からの爪攻撃の打ち上げを紙一重で躲す。

晶葉「臆するな！引っ付け！」

茜「りょー解っ!!」

ラドラ『チイツ……!』

はじめに左右の突きを、その後は火斬刀の動きを薙ぎに変え、更には蹴りなどの動きも織り混ぜていく。

ラドラ『勝ち目などないと言うに……!そんな動きで、俺が倒せるかあ!!』

執拗に張り付くゲッター烈火を払い除けるように、シグが大振りに爪を振るう。

茜「つううっ……!!」

ゲッター烈火の頭部へ残り数センチというところで、シグの爪を火斬刀で受け止め

る。

茜 「はあ…はあ…はあ…!!」

晶葉 「大丈夫か!? 茜!」

茜 「大丈夫です! まだ戦えます! 私も、ゲッターも!」

茜 「チエエエエー! ストオオオー!!」

負けじと、ゲッター烈火もフルスイングの一撃を放ち、シグの腕を弾く。

茜 「もう! あなたの殺気なんかには、負けはしません!!」

ラドラ 『いい気になるなよ…! 人間!』

茜 「!?!」

シグの両目が輝き、破壊光線が火を放つ。

晶葉 「まだ手段を残していたか!」

アーニヤ 「いけません…! シグとの距離が…!」

ラドラ 『フハハハハ…! やれ! メカザウルス共っ!!』

バド, s 『キシヤアアア!!』

ゲッター烈火を包囲するように、バドの群れが殺到する。

茜 「~~~~っ!!」

咄嗟に、火斬刀の柄尻を合わせ、薙刀状に。

茜 「合わせ風車!!」

それを、捻りを加えて投げ飛ばす。

バド、s『?!?』

回転する火斬刀は、ブーメランのように水平に放物線を描いて、殺到したバドの群れを一掃する。

ラドラ『こいつ…っ!』

茜 「奥の手はこちらにもあります!」

ラドラ『だからと言って、こちらとの戦力差を覆せるわけでもあるまいに!』

アーニヤ 「覆します! B Y : アナタを倒して…!」

ラドラ 『倒すだと…? この俺を!』

茜 「倒します! 必ず! 勝ち目がなければ、自分の力で切り開きますっ!!」

ラドラ 『青二才の集まりが…! 調子に乗るなあ!』

茜 「——トラ——ー——イッ!!」

キイイイ…ン バキイッ

渾身の気合いと勢いを付けて振り下ろされた火斬刀が、シグの爪を打ち砕く。

ラドラ 『な…?!? バカな…こんな事が…!』

ラドラ『ッ!まさかコレを狙って、わざと爪の攻撃を……!』

晶葉「気付くのが遅かったな。金属とは、連続して荷重を受けると、脆く壊れやすくなるものだ」

晶葉「まして、それほど小さく、斬る為に繊細に加工した爪ならばな!」

アーニヤ「こつちの火斬刀との耐久力と、賭けでしたけど、ネ」

晶葉「だが、賭けには我々が勝利した、という事だ」

ラドラ『ぐぬう……』

晶葉「それともう一つ、私には勝算があった」

ラドラ『勝算……だと……!』

晶葉「そう。お前は自分の強さに自信を持った、誇り高い戦士だ。そう言うものほど、持ちやすいそれは……!」

ゲッター「烈火が大きくかぶりを振る。」

晶葉「——驕りだ」

茜「たああああ——!!」

ゲッター「烈火による回転斬りが、シグの胸に深く刻まれる。」

ラドラ『ぐああああ——!?!』

恐竜艇の甲板上へと倒れ込むシグ。

ラドラ『ぐっ……！私の驕り……だと！？人間風情が……ふざけおって……！』

晶葉「それだよ。その見下しきつた態度が、驕りだつて言うんだ」

ラドラ『くそっ！まだ……まだだ……！このラドラ……同胞達の無念を晴らすまでは……っ！』 ユリアア

茜「女々しい人ですわね！貴方も！」

ラドラ『何だと……？』

茜「復讐がなんですか！？敵討ちに、何の意味があるんですか！そんなもの、ただ貴方が満足したいだけでしょう？」

ラドラ『何が分かる……？貴様ら人間に……何が分かる……！？』

茜「分かりません！昔の事に囚われて！前を向かない人の事何て……分かるつもりもありませんっ！！」

ラドラ『貴様アアアア!!』

シグの両目が妖しく光る。

茜「アナスタシアさん！晶葉さん！正面对決です!!力を貸して下さい!!」

アーニヤ「Конечно!もちろん!気持ちちは、一緒です!!」

晶葉「ゲッター斬の全エネルギーは既に託してあるぞ!やれ!」

ゲッター烈火が構える。





アーニヤ「Да! x o p o ш o! アカネ!!」

晶葉「やれやれ…。まだ決着は着いていないと言うのに、気の早い奴等だ」フツ：

茜「どうします!?! 私達も海中の戦いに参加しますか!?!」

晶葉「いや、あれだけの斬魔光を撃つたんだ。ゲッターの損傷も手伝って、分離と合体が出来んよ」

晶葉「それに——」

バド, s 『ギイ…ギイ…!』

アーニヤ「まだ、空中にも敵は残っています、か…?」

晶葉「メカザウルスは一匹たりと逃がさん。私達は、私達の戦いを続けよう」

茜「了解ですつ!…ここまで来たら、とことんやってやるだけです!」

ゲッター烈火が、再び飛翔翼を広げ、空へと舞い立つ。

茜「恐竜帝国との決着は任せましたよ! 卯月さん! 皆さーん!!」  
つづく

## 第7話『恐竜帝国最期の日! (後編)』

~~~~~ 恐竜艇 ブリッジ ~~~~~

爬虫人兵 「め、メカザウルス・シグ…撃破されました…!」

ジャテীগ 「何じやと!?では、先ほどの揺れは…」

爬虫人兵2 「海中のメカザウルス、損耗率80%突破!陣形、維持できません!」

ジャテীগ 「ええいゲッター共めえ…!窮鼠の分際で足掻いてくれる…!」

爬虫人兵 「じ、ジャテীগ様…!ここは一度退かれた方が…」

ジャテীগ 「……」

ザシュツ

爬虫人兵 「ぐはあ……」

爬虫人兵, s 「ひ、ひい!」

ジャテীগ 「狼狽えるでない!!」

爬虫人兵, s 「!!」

ジャテীগ 「海中の戦力が無くなったところで、まだ本艦が残っておるではないか」

ジャテীগ 「恐竜挺、戦闘配備じゃ!」

爬虫人兵2 「し、しかしジャテীগ様！この恐竜艇の装備は、大陸攻撃用に温存しておくのでは…」

ジャテীগ 「…ほう……。妾に意見すると…？」 ギロツ

爬虫人兵2 「ヒツ…！め、滅相ありません……」

ジャテীগ 「……。フンツ！元よりゲッターを倒さねば覇道はなし得ぬのだ」

ジャテীগ 「ならば、本艦の全力を以てすれば、今海中にいる2機のゲッターなどどうでもなろう？」

ジャテীগ 「そうなれば、残るのは、ラドラとの戦いで疲弊したゲッター1機のみ」

ジャテীগ 「手負いの獣なぞ、それこそどうともなるといふもの」

爬虫人兵2 「…は…ハッ！仰る通りであります！」

ジャテীগ 「ならば早く準備に取り掛かれ！」

爬虫人兵2 「り、了解っ!!」

ジャテীগ 「フフフ…。ゲッター共め…見ておれ。貴様らなど今ここで海の藻屑としてくれよう」

~~~~~ 海中 ~~~~~

かな子 「はああっ！」 ドワッ

ネオゲッター3の豪腕が、メカザウルス・モバの頭を碎き破壊する。

卯月「…だいぶ数が減ってきました?」

凜「そうだね。ソナーで見る限り、メカザウルスの反応は減ってる」

菜々「や、やっと終わりが見えてきたんですね…」

瑞樹「なに言ってるのよ。まだ大本命の潜水艦が待ちかねてるわよ」

菜々「わ、分かってますけど…、第一、あんなのどうやって攻略するんですか!?!」

凜「確かに、見た目はマシーンランドくらいデカイ。だけど…」

卯月「誰かが作ったものなら、壊せない筈はない筈です!」

菜々「な、何だか無茶苦茶な理論言われた気がするんですけど…」

瑞樹「それが若さよ。分かるわ」

みく「!? ナナちゃん、その潜水艦の方から、熱源が接近してるにや! きつと魚雷だ

よ!」

菜々「ええ!?!」

直後、激しい振動と衝撃がゲッター3とネオゲッター3を襲う。

かな子「きゃっ?!?!」

卯月「っ…!! 大丈夫ですか? かな子ちゃん!」

かな子「は、はい…。ちよつとビククリしただけ…。ゲッターも私も、大丈夫です!」

凜「ずつと黙ってて不気味だったけど、ようやく重い腰を上げたみたいだね」

『フホホホ！如何かな？ゲッターロボ！』

卯月「ツ！！女帝ジャテェゴ……！」

ジャテェゴ『フフ……、いかにも。この恐竜艇の力の前に跪くがよい!!』

ドドドドドドドドド

恐竜艇の全身から、大小様々な魚雷が放たれる。

菜々「こ、こんなの聞いてないですよー!?」

瑞樹「敵の能力は未知数だったんだから、当然じゃない?」

みく「のんきにツツコんでる場合にやあ!?!」

かな子「うう……っ!」

ジャテェゴ『——喰らうがよい!』

恐竜と言うよりは、魚類を模した恐竜艇の口部がゆつくりと開き、巨大なハリケーン

が海底の泥を巻き上げて渦巻く。

菜々「う、うわわっ!?!これは——」

凜「かな子、踏ん張って!」

かな子「は、はい……!」

海底を踏みしめて、ハリケーンの起こす圧力に耐えるネオゲッター3。だが、

菜々「ふ……ふんぬう……!こ、こっちはもう限界です……!——ああっ!」

ゲッター3はそうはいかなかった。

菜々「じ、Gチームの皆さまあーくん! 後はお任せしまああーすー……!」

海底から押し流され、彼方へと消えていくゲッター3。

かな子「ああ!? ゲッター3が……!」

ジャテীগ『フハハハハ! これで残るは貴様らだけよ!』

凜「……バカにしないで。テスターチームは、あれくらいでやられるほどヤワじゃない……!」

かな子「少しは気遣ってあげましょうよ!」

卯月「テスターチームなら、うまく離脱してますから!」

卯月「それよりも問題は、私達だけでどうやってアレを攻略するかです!」

かな子「……。……それなら、あの……私に考えがあります!」

凜「ホント?」

かな子「はい。考えと言うより、ほとんどギャンブルに近いと思うんですけど……」

卯月「この際なら何でもありです! 試してみましよう!」

かな子「……はいっ! それじゃあ、行きます!」

かな子「——タンクモード!!」

ネオゲッター3の脚部から、キヤタピラのようなローラーが姿を現す。

かな子「っ！」

思いきりよく、ペダルと左右の操縦桿に力を入れ、加速。

海底の隆起した地面を、ネオゲッター3が高速で駆け抜ける。

ジャテীগ『特攻か？しやらくさい！』

尚も続く恐竜艇の魚雷を、ネオゲッター3の両腕を体前面でクロスさせ、防御しながらも速度は緩めない。

かな子「後少し……えいつ！」

恐竜艇底部に滑り込む。

卯月「そっか、これなら……！」

ジャテীগ『何をしておる!?早くゲッターを墜とすのじゃ!』

爬虫人兵『だ、ダメです!この位置で攻撃すれば、本艦にも誘爆の恐れが……!』

ジャテীগ『ぬう……!ならば艦の速度を上げい!早く奴を振り払うのじゃ!』

かな子「させません!」

ネオゲッター3の両拳を突き入れ、ガッチリと固定する。

凜「それで、これからどうするの?」

かな子「それは…… — 晶葉ちゃん!」

晶葉『むっ、どうかしたか?』



かな子「あの、今からネオゲッター3のメインカメラの映像を金剛号に送ります」

かな子「侵入できそうな箇所を解析してもらえませんか？」

晶葉『そんな事か。任せろ、造作もない事だ』

かな子「お願いします」

卯月「これで中に侵入できれば…!」

凜「そうだね。でもこの状態、長くは保たないかも…」

かな子「結果が早く出ることを祈りましょう…」

ネオゲッター3の頭部を左右に動かして、恐竜艇の底部全域をカバーするように映す。

晶葉『——出たぞ。今の位置から右に30メートルと言ったところか』

晶葉『そこが空洞になっている。メカザウルス用の通路かは知らんが、そこからなら侵入出来るだろう』

かな子「分かりました。ありがとうございます」

晶葉『…気を付けろよ。恐らくだが、中に入ってしまったえばこちらとの通信は途絶される』

晶葉『そうなれば、私達ではサポート出来ん。何があっても、お前達3人で切り抜けるんだ』

凜 「分かってるよ。晶葉こそ、忙しいのに手伝ってくれてありがとう」

卯月 「空中のメカザウルスはお任せします！頑張ってくださいー！」

晶葉 『何、こつちも山場が過ぎた。もう少しで片が付く』

晶葉 『そうしたら、外からサポートしてやるさ』

茜 『そちらももうすぐです！ファイトオーーーーーッ!!』

アーニヤ 『Удачи…もう一踏ん張り…ですよ♪』

卯月 「茜ちゃんにアーニヤちゃんも…ありがとうございます…！」

凜 「よし、行こう！かな子」

かな子 「はいっ！…30メートル…！」

恐竜艇から振り落とされないうよう、ネオゲッター3の腕にしつかりと力を込めながら、指定されたポイントへじわりじわりと移動する。

かな子 「——ここですね！」

ポイントに着くと、恐竜艇から脚を離して、恐竜艇に対して垂直に。

かな子 「えいっ！」

ネオゲッター3の背中中のホーン部を、恐竜艇艦底に突き刺し、

かな子 「プラズマブレイクッ！」

最大出力のプラズマブレイクを流し込む。

卯月「うう…っ!」

凜「っ…!」

かな子「おおおおお…!」

プラズマブレイクが艦底部を爆砕。表面を覆っていた装甲が砕け、内部に海水が浸水する。

その流れに乗って、ネオゲッター3を内部へ滑り込ませる。

ガシユンツ

隔壁が閉じて、海水が排水される。

かな子「…侵入、成功ですね…!」

卯月「うう…。ちよつとビリつとしました…」

凜「あの距離で最大出力とは…、思いきった事するよ。全く…」

かな子「あ、あはは…」

卯月「それにしても、ここ、何処なんでしょう?」

凜「さあ…。無駄に広くて…細長いけど…。メカザウルスの搬入口か、カタパルト的な奴なのか…」

凜「ともかく進もう。向こうも侵入に対して動いてるはず…。迎撃が来る前に動力炉を押さえるんだ」

卯月「私と凜ちゃんのモニターをサーモグラフィに変えます。動力炉なら、熱量で判別できる筈ですから」

卯月「かな子ちゃんは、周囲を警戒しつつ、前進して下さい!」

かな子「分かりました!よろしくお願いします!」

凜「早速奥の方が真つ赤を通り越して白くなってるね…。かな子、とりあえずこのまま前進だよ」

言われた通りに進む。

かな子「あの、これって通路に従った方がいいんですか?」

凜「まさか。通路が何処に繋がってるかも分からない以上、最短ルートを突っ切る

よ」

かな子「ええ!」

ネオゲッター3の前に隔壁が立ち塞がる。

かな子「これは…」

凜「壊して」

かな子「でも…」

凜「壊して」

かな子「……。ごめんなさいっ!」

ベリベリと壁を引き剥がしてひたすら真っ直ぐ突き進む。

かな子「えいつ!」

卯月「あのく…、何か変なパイプとかケーブルとか問答無用でぶった切ってますけど、これって大丈夫なんですか?」

凜「このバカデカイ潜水艦が動かなくなってくれる分には、好都合だよ」

卯月「それはそうですけど……」

凜「と言うか、卯月はなんでさつきからカップケーキを食べてるの?」

卯月「これですか?何かコックピットの中に入ってたので!」モグモグ  
かな子「あ、気付きました? 出撃前に言いそびれちゃったんだけど……」

卯月「スゴく美味しいですよ」

凜「……私のもとにも入ってる……。——」モグッ

凜「——美味し……」

卯月「あ、熱源の反応が近くなってますね……」

かな子「はい……。多分コレが、最後の隔壁だと思っんですけど……」

ガンッ ガンッ ガンッ

数発殴つても、壁が凹むばかりで変化がない。

凜「流石に堅いか……。かな子、もう一発プラズマブレイクだ」

かな子「了解！」

卯月「…ふふっ♪」

凜「……何？」

卯月「口元、カッパケーキの欠片が着いてますよ？」

凜「っ!？」ゴシゴシ…

凜「…気合いを入れ直すよ…」

卯月「はいっ♪」

かな子「それじゃあ、凜ちゃん卯月ちゃん行きますっ！」

凜「何時でも」

卯月「お願いします！」

かな子「——プラズマブレイクッ！」

高圧の電撃が、分厚い隔壁を破碎する。

シューウ…

かな子「ここが…」

卯月「この船の動力部、ですか？」

かな子「大きいですね…」

凜「そりゃ、これだけの大きさの潜水艦を動かしてるくらいだからね」

卯月 「早く破壊しましょう!」

かな子 「はいっ!」

凜 「? 待つて! レーダーに何か…」

卯月 「敵ですか!？」

かな子 「あ、辺りには何も見当たりませんけど…」

凜 「違う…。…下だ!」

かな子 「えっ——?」

足元の鉄の床面を突き破り、姿を覗かせた触手のようなものが、ネオゲッター3の足に絡み付き、その巨軀をひっくり返す。

かな子 「きゃあっ!？」

卯月 「な、何ですか!？」

『フホホホホ!』

凜 「このいけ好かない笑い声…。女帝ジャテェーゴ!」

ジャテェーゴ 『いかにも。この恐竜艇に侵入しようとは、見上げた覚悟よ!』

ジャテェーゴ 『その意気に免じて、妾が直々に…このメカザウルス・ボアで汝らを処刑してくれるわ!!』

鉄の床面を破壊し、ネオゲッターの目の前に姿を現す。

凜 「…また趣味的なメカザウルスを…！」

卯月 「もう恐竜じゃなくて人型じゃないですか！」

かな子 「まさか…、恐竜帝国のリーダーが直接出てくるなんて…！」

凜 「かな子…ビビってる暇はないよ。ここが正念場だ…！」

卯月 「そうです！向こうのリーダーが出てきたのなら、それを叩けば指揮系統が落ちる筈です！」

かな子 「はいっ！みんなの分も、戦って…勝ってみせます！」

かな子 「——タンクモード！」

タンクモードを使い、一気に加速して、メカザウルス・ボアに迫る。

かな子 「はああっ！」

ジャテゴ 『甘いわっ！』 シュルツ

ボアの片腕2本、合計4本の鉄製のムチが自在に伸び、ネオゲッター3の両腕を捕縛する。

かな子 「これは…——きゃああ!?!」

そのまま、ネオゲッター3を軽々と持ち上げ、隔壁へと叩きつける。

かな子 「うう…！」

卯月 「何てパワー…!!かな子ちゃん、大丈夫ですか!?!」



かな子「はい……まだ、やれます!」

凜「パワーも厄介だけど…、あのムチも相当厄介だ。気を付けて! かな子」

かな子「き、気を付けろと言われても…」

ジャテーゴ『フッフフ…』

凜「来る——!」

かな子「つ……!」 ギャルルルウンツ

足のキヤタピラを高速回転させ、突き出したムチの攻撃を躲す。

ジャテーゴ『フホホホ! 狩りとは獲物が逃げ惑うほど面白いわっ!!』 ヒュンヒュ

ンツ

凜「バカにして……かな子、先ずはあいつの動きを止めるんだ!」

かな子「はいっ!」

ボアを中心に円を描くような動きでドリフトを決め、ボアの背後に回る。

ジャテーゴ『……ぬっ!』

かな子「ゲッタートルネエード!!」

反応されるより早くゲッタートルネードを撃ち、ボアを釘付けにする。

ジャテーゴ『ぐう……!』

卯月「エネルギー充填……完了! 今です! かな子ちゃん!」

かな子「プラズマブレイクッ!!」

最大出力のプラズマブレイクを、ボアに直撃させる。

ジャテীগ『ぐああああ!!?』

かな子「や、やった!!」

凜「……いや」

ジャテীগ『こんなもの…効かぬ!』

ボアはプラズマブレイクを弾く。

かな子「そんな…」

ジャテীগ『このボアは、貴様らのネオゲッターを葬るために開発されたもの…』

ジャテীগ『プラズマなど、とうに対策しておるわ!』 シュンツ

動きの止まったネオゲッター3に、ムチが振り下ろされる。

かな子「あうっ…!」

卯月「どうしますか!? 凜ちゃんっ!」

凜「……。どうやらあいつの装甲は、ゴムみたいな絶縁体で出来てるみたいだね」

かな子「そんな…! それじゃあ、こっちの攻撃は…全く効かないって事ですか!?!」

凜「いや、そうでもない。さっきも見た通り、プラズマブレイクを完全に無効化した

訳じゃないんだ」

卯月「それじゃあ、プラズマブレイクを上回るプラズマ攻撃なら、効果があるって事ですね?」

凜「そう。ネオゲッター1のプラズマサンダーなら、あいつの装甲を抜ける筈だよ!」

ジャテীগ『遺言の相談は終わったか?』 シュルンツ

ネオゲッター3の胴体に、ムチが巻き付く。

かな子「しまっ——!」

ジャテীগ『ふんっ!』

ネオゲッター3を持ち上げ、床面に叩きつける。それを3度繰り返し、ネオゲッター3を再び壁面へと。

かな子「う、うっ……ネオゲッター1って言っても、どうやって変形するんですか!」

かな子「この空間の広さじゃ……とても……!」

凜「それでも、やるんだ」

かな子「無茶です!操縦を一步でも間違ったら……機体がバラバラですよ!」

卯月「無茶でも、やるしかありません」

かな子「卯月ちゃんまで……!」

卯月「私達は、負けられないんです!ここでやられても、合体に失敗しても同じなら

…私は、可能性に賭けます！」

凜 「かな子、みんな同じなんだ。負けたくないし、死にたくない」

凜 「だけど、私達を信じて！自分自身を信じて！」

かな子 「凜ちゃん…」

ジャテীগ 『さあ、この一撃でトドメを刺してやろう…！』

凜 「いい？次に奴が仕掛けてきたタイミングがチャンスだ」

かな子 「……分かりました…！」

ジャテীগ 『死ねい!!』 ヒュンッ

かな子 「——オープンゲット!!」

ネオゲッター3を突き刺そうと伸ばした触手を、分離して躲す。

ジャテীগ 『何い!?奴等め、この空間で分離など正気か…?』

凜 「っ…！——正気で勝てるなら、こんな事しないんだけどね」

卯月 「貴女を倒すためなら、どんな事だって…！」

かな子 「……っ！」

ジャテীগ 『ハンッ！面白い！ならば合体する前に、貴様ら1人ずつにトドメを刺し

ていくだけよ!』

ボアがムチを振るう。

かな子「くく!?!」

ジャテীগ『遅いの!先ずは貴様よ!!』

卯月「――させませんっ!!」

ネオベアー号を狙ったボアを、ネオイーグル号がミサイルで攻撃し、動きを封じる。  
ジャテীগ『ぬう…!?貴様ああ!!』

かな子「卯月ちゃん…!」

凜「かな子…今の内だ…!」

かな子「…はいっ!」

ネオジャガー号とネオベアー号が、何とかドッキングに成功する。

凜「卯月っ!」

卯月「今行きます!」

自分達が突入してきた通路を使い、機体を縦一列に。

卯月「ゲッターチェンジ!!」

ジャテীগ『させぬわっ!!』

ボアの伸ばしたムチが何かに当たり、通路の奥から爆発が生じる。  
ジャテীগ『……。ははっ!やった、やったぞ!』

「チエエーオンナックル!!」

ジャテীগ『何!?!』

黒煙の奥から、鎖に繋がれた拳が姿を見せ、ボアを強かに打ち付ける。

ジャテীগ『ぐふう……!ま、まさか……!』

卯月「そのまさかです!」

チエーンナツクルが引き戻っていき、黒煙から姿を現す、ネオゲッター1。

ジャテীগ『チィ……。合体を許すとは……!しかし!』

卯月「貴女を倒しますっ!」

ジャテীগ『抜かせ!!』

卯月「シヨルダミサイル!!」

両肩にせり上がった背部バーニアのミサイル発射口を開き、こちらに伸びたムチを破砕する。

ジャテীগ『な、何じゃと……!』

卯月「たあっ!!」

爆煙をもともせず、ネオゲッター1が拳を構えてボアに立ち向かう。

卯月「!!」

ジャテীগ『ぐううっ……!』

ネオゲッター1の打ち下ろしの右拳が、ボアの頭部を揺らす。

卯月「はっ!」

バランスを崩したボアの鳩尾に、すかさず膝蹴りを打ち込む。

ジャテェゴ『おうっ……!』

卯月「やあああっ!!」

くの字に折れたボアに、後ろ回し蹴りを叩き込み、ボアを後方の隔壁まで吹っ飛ばした。

ジャテェゴ『ぐう……!まだじゃ……この程度で……妾は倒れぬぞ!』

卯月「っ……!」

凜「予想はしてたけど、やっぱ固いね」

卯月「だったら叩くまでです。何度でも……!」

かな子「スゴい……。卯月ちゃん……何だか別人みたい……」

卯月「いきまますっ!」

ボアに肉薄。

ジャテェゴ『ボアのムチを破壊したところで……いい気になるなあ!!』

迎撃に立ったボアの蹴りが、ネオゲッター1の脇腹を打ち据える。

卯月「くう……!」

ボアの攻撃に踏ん張って耐え、ネオゲッター1は蹴り出した足をしっかりと掴みと

る。

ジャテীগ『何!?!……ぬううう!?!』

そのままボアをジャイアントスイング。目一杯回転させて、反対側へ投げ飛ばす。

ジャテীগ『——ガッ!』

卯月「ここまでです!女帝ジャテীগッ!」

ジャテীগ『まだだ……まだ終わらぬ……!我が世の春を迎えるまで……妾は負けぬ!!』

卯月「……寂しい人ですね。貴女も」

ジャテীগ『何!?!』

凜「ちつぽけな夢に取り憑かれて……アンタを支える奴は、誰も居ないんだ」

ジャテীগ『世迷い言を……妾は恐竜帝国を統べる女帝なるぞ!』

ジャテীগ『王とは孤独!誰かを頼って、王政は成り得ぬ!』

かな子「だから、貴女は負けるんです!」

ジャテীগ『何を勝ったようなことを……この恐竜艇には数千を越えるメカザウルスが今も待機しているのだぞ!』

ジャテীগ『妾が命を下せば、直ぐにそのメカザウルスが駆け付け、貴様らなどもの時間も掛からず殺してくれるわっ!!』

凜「だけどそれをしなかった。アンタは女帝のプライドに駆られて、先走ったんだ」



ジャテーゴ『……!今からでも、メカザウルスをここに呼びつけてくれる……!』  
卯月「だから、遅いんです!」

ジャテーゴ『遅い……!?!』

かな子「だって、私達は一人で戦ってるんじゃないやありませんから!」  
ズウウウウウンツ

爆発音が轟き、恐竜艇全体が細かく振動する。

ジャテーゴ『?! 何じゃ? 何事じゃ!』

爬虫人兵『じゃ、ジャテーゴ様! 大変です!!』

ジャテーゴ『分かっておる! 何が起きているかだけを説明せんか!!』

爬虫人兵『げ、ゲッターロボが……! 海上のゲッターロボが……!』

ジャテーゴ『?!』

—— 海上。

茜「やりました! 潜水艦が煙を上げてます!」

晶葉「フフンツ! どうだ? 2機のゲッターの出力を合わせれば、敵の対ゲッター線処  
理も怖くない」

みく「何と言うか……。レベルを上げて物理で殴る、感が否めないのにや……」

瑞樹「いいじゃない? 何でもありって言うのも、悪くないわ」

菜々「この調子で、ドンドン行きましょー!」

アーニヤ「Da! イケイケゴーゴー、ですな♪」

みく「……まったく、調子のいい連中にやあ……。茜ちゃん、もう一発、合わせるにやあ!」

茜「了解です! いきますよ!!」

みく「ゲッタービーム!」

茜「斬魔光!」

みく&茜「ダブルゲッタービィィーームツ!!」

—。

ジャテীগ「ツ!!? メカザウルスは…航空のメカザウルスは何をしておる!?!」

爬虫人兵『お、恐らく全滅されたものと…』

ジャテীগ『馬鹿な…! まだ機体は残っていた筈じゃぞ!?!』

爬虫人兵『事実です。それと…』

ジャテীগ『何じゃ!?!』

爬虫人兵『先程の攻撃で、格納庫と…パイロットの待機室がやられました…』

ジャテীগ『何…じゃと…! それでは…!』

爬虫人兵『ジャテীগ様! 後退の指示を! このままでは…——ぐわあ!?!』 ザザア

ジャテীগ『!? おい! おいどうした!? 返事をせい! ——何と……!』

卯月「これで…貴女はホントに一人です」

ジャテীগ『つ…! ネオゲッターロボ…!』

凜「アンタ達が勝てるチャンスは、いくらでもあった。それこそ、いくらでもね」  
かな子「貴女の慢心と妄執が、それを消したんです!」

凜「ま、私達にとつては、それが好都合だったけど」

ジャテীগ『ふざけるな…! ふざけるなあ!!』

卯月「…貴女が恐竜帝国を滅ぼしたんです!」

ジャテীগ『まだだ! まだ滅んでおらぬ…! 恐竜帝国は終わらぬう!!』

凜「……。憐れだね」

卯月「…チエーンナツクル!」

遮二無二突撃してきたボアを、チエーンナツクルがその脚元を掬い取る。

ジャテীগ『——ギヤツ!』

倒れ伏した隙を逃さず、チエーンナツクルを引き戻す動きで、その脚を絡めとつた。

卯月「はあああ——!!」

チエーンをしならせ、ボアを動力炉目掛け投げ飛ばす。

ジャテীগ『ウギヤアアアア!!』



凜 「メカザウルスじゃ死ぬことも出来ず、この潜水艦と運命を共にする、かな子」  
かな子 「は、早く脱出しませう!?! 動力炉が爆発しちゃいますよ!」

凜 「慌てなくても分かつてるよ。…卯月、行こう」

卯月 「……うん」

静かにその場を後にする。

—— ネオゲッター脱出後。

ジャテীগゴ 『うう……! うぐぐう……! おのれ……、おのれゲッターロボ!!』

ジャテীগゴ 『何故あのようなサル供を選ぶ!? この地上で優れているのは、地上で一番優良足るは……我ら爬虫人類ではないのか!?!』

ジャテীগゴ 『フハハ……! フハハハハハッ!!』

ジャテীগゴ 『殺せッ! 殺せ殺せッ!! 一思いに殺せええッ!!』

ジャテীগゴ 『ここで帝国の最後を見届けるくらいなら、みつともなく命を晒すくらいなら……殺せえ……! 誰か殺してくれええ!!』

『ならば、我がその望み、応えてやろう』

ジャテীগゴ 『?! 誰じゃ!?!』

カッ

ジャテীগゴ 『ウギヤアアアア……!——!!』

——海上。

アーニヤ「ネオゲットマシンの脱出を確認！」

菜々「全員無事!?手足は…着いてますか!？」

凜「菜々さん…。心配しすぎ」

卯月「見てください！私達全員、このとおり、五体満足ですよ！」

かな子「死んじやうかと思いましたが…」

茜「でも！皆さん何事もなくて良かったです！大勝利じゃないですか!？」

みく「これで一件落着！めでたしめでたしにやん？」

晶葉「ああ、これ私達の戦いも終わり…——ん？」

アーニヤ「…? どうかしましたか？」

晶葉「いや、——何だこれは…！上空から…何か…」

——カッ

菜々「うわわわっ!?な…なな何ですか!?!これは！」

瑞樹「これって…高量子のビーム…?」

晶葉「ああ…。しかも、我々のゲッタービームとは、比べ物にもならないほど高出力

だ！」

凜「そんな…そんなものを一体誰が…！」

かな子「皆さん!見てください!恐竜艇が…!」

上空からの謎のビームを受けた恐竜艇が海の藻屑となって消える。

卯月「そんな…!あんな巨大な潜水艦が…一瞬で…!」

みく「にや?何か空が急に暗く…」

晶葉「暗くなつたんじゃない!これは…!」

アーニヤ「巨大な…円盤…?」

凜「いや、要塞…!」

『私の用意した余興は楽しんでいただけただけかな?ゲッターチーム諸君』

卯月「!?誰ですか?貴方は…!」

茜「卑怯ですよ!そんなデカブツに乗って、素顔も見せないなんて!」

『ハハハ…。生憎、この百鬼要塞にはそのような無駄な機能は付いていなくてね。私も、

君たちに姿を見せられないのが残念だよ』

かな子「百鬼要塞…!?それがあの円盤の名前…?」

晶葉「ひやつき…百鬼、百鬼か!」

菜々「百鬼夜行とかの百鬼ですか!」

みく「姿も見せないで鬼を名乗るなんて、気取った連中にや!」

『フフフ…。そうだな。我が名はブライ。この百鬼要塞を擁する百鬼帝国を統べる百鬼

大帝』

茜 「ひや、百鬼帝国!？」

凜 「ブライ…百鬼大帝…?」

ブライ 『貴様らとトカゲ供が共倒れになってくれるのを待っていたのだがね。よくそれだけの戦力であのトカゲ供を倒せたものだ』

ブライ 『その点は、素直に称賛するでしょう』

瑞樹 「敵の大将のわりには、以外と殊勝なのね」

みく 「けど、同士討ちを狙うなんて、やっぱみみっちい奴なのにな」

ブライ 『しかし、漁夫の利とは立派な兵法でもあろう?』

凜 「語る舌は持たないみたいね。兵法と卑怯を混同するなんてさー!」

ブライ 『これは手厳しい。しかし、相對するにはそれだけの気概がなくては話にならんからな』

卯月 「やっぱり、戦うんですか?」

ブライ 『無論。その為の後顧の憂いとなるトカゲ供を始末したのだ』

ブライ 『これで君達も私の相手に集中できよう?最高の戦いが出来ると言うものだ』

凜 「卯月、何を言っても一緒だよ。こいつ、落ち着いた言動のわりに思考が戦いにしか向いてない」



晶葉「確かに、こちらとの会談なりで戦いを回避しようとする気配が見られないな」  
晶葉「寧ろ戦いを好意的に見ていると言うべきだろうか?」

アーニヤ「ワタシ達の新たな敵…という事で、いいんですか?」

ブライ『そうとも。君達のそのゲッターロボと、私が率いる百鬼帝国精鋭百鬼衆…この地球を舞台にした盛大なショーが始まると言うわけだ』

卯月「戦いがショーだなんて…。ある筈がありません!」

みく「ボッコボコにされるのがお望みなら、今からでも相手になつてやるにや!」

茜「何処にいるか分かりませんが…!そこで首を洗つて待つて下さい!」  
ピ  
シ  
ッ

ブライ『戦闘意欲があつて素晴らしい限りなのだが、今日のところはほんの挨拶代わりだ』

ブライ『君達はトカゲ供との戦いで既に疲弊している。そんな状態で戦つてしまつては、フェアではなからう?』

みく「ぐっ…ぐぬぬう…!」

凜「アイツの言うとおりでだよ。悔しいけど。ネオゲッターもエネルギーをほとんど使いきつて、研究所に帰るのが精一杯だ」

晶葉「ああ。寧ろ相手にとって好機と言えるこの状況で、見逃してくれる事を感謝し

なければならぬくらいだ」

菜々「悔しいですけど…。本当に悔しいですけど…今はあの人の言うとおりにするしかないんですね」

瑞樹「いいじゃない。今くらい好きに言わせても。後で思い知らせて上げるわ。私達を今見逃したしたのが、間違いだったって事を…！」

ブライ『フフフ…！この状況でも鬪志は折れぬか。つくづく面白い奴等よ』

ブライ『今から貴様らとの戦いが楽しみになって来たぞ』

ブライ『それではしばらく、我々は姿を消すでしょう』

ブライ『次に会う時は、貴様らが我々と対等に戦う力をつけた時だ。その時を楽しみにしているぞ…！』

『フハハハハハハハハ…！』 シュウウ…

卯月「百鬼要塞が、消えていく…」

晶葉「これは…さつきまでのがホログラムかと疑わしいくらいの光学迷彩だ」

晶葉「熱や姿はもちろん、質量まで感知できないとは…、我々を遥かに凌ぐ科学力を持っているな…」

みく「フンツ！高笑いを残して！あんな偉そうな奴の鼻っ柱なんて、叩き折って爪研ぎの板にしてやるにゃ！」

瑞樹「でも、それだけの強さを感じさせる相手だったわ」

菜々「そーですねえ〜。姿が見えないだけに、こう、威圧感だけ伝わってきて、とにかく怖かったですよ〜」

茜「うう…っ!」

アーニヤ「アカネも、感じましたか…?」

茜「はい…! 圧倒的な存在感と、圧倒的な力量差を…!」

茜「あれに打ち勝つには、私達はもつともつと! もつと強くならなければいけませんっ!!」

かな子「そんな人達と、これから戦わなくちゃいけないんですか…?」

凜「弱音なんて吐いてる場合じゃないよ。相手から現れたんなら、それを倒すのが、ゲッターに乗ってる私達の使命だよ」

卯月「そうですね…。そんな相手が来ても負けられない…絶対に…!」

晶葉「まあ、先ずは帰還しよう。みんな待ってる。百鬼帝国への対処策はそれからだ」  
アーニヤ「…。アキハ、顔色、良くない、ですか?」

菜々「確かに顔が青白いですね…?大丈夫ですか?」

晶葉「あはは…。お前達のようにはいかな。…やはり。無茶をし過ぎた」

凜「? 晶葉…?」

晶葉「……」

卯月「晶葉ちゃん!?しつかりして下さい!晶葉ちゃん!」

——晶葉ちゃん!

~~~~ 後日 ~~~~

早乙女「ゴホンツ。それでは、晶葉くんは未だ入院中だが、君達に新メンバーを改めて紹介しよう」

茜「日野茜です!やるからに絶対無敵!元氣爆発!熱血最強!!完全勝利で突っ走ります!!よろしくお願ひしますっ!!」

早乙女「本来は一時的な協力者のような立ち位置であつたが、本人の意思により、これからはここで正式なパイロットとして訓練を受ける事になつた」

早乙女「みんな、よろしく頼む」

凜「本当にいいんだね?ひよつとしたら、もう元の生活には戻れなくなるかもしれないけど」

茜「はい!!自分なりに考えて、両親とも相談して決めました!!」

卯月「因みに、両親はなんと……」

茜「信じた方に突っ走れと!!」

かな子「何だか……茜ちゃんのご両親って感じですね……」

未央「まあ、でもこれでゲッター斬のパイロット問題がクリアできたんだし、いいんじゃない? ユニット共々よろしくね、茜ちゃん」

茜「はいっ! 一所懸命、頑張ります!!」

瑞樹「ふふつ、また賑やかになりそうね」

奈緒「つたく、先輩を差し置いて正規パイロットかよ」

加蓮「まあまあ、ゲッターGが完成したらネオゲッターのパイロットに復帰だし、それまで我慢したら?」

瑞樹「そうね。新しい敵が出てきたんだもの。パイロットなんて、直ぐに足りなくなるわよ」

菜々「ふ、不吉な事言わないで下さいよ〜!」

早乙女「ふふつ。予備パイロットに関しては、心配いらんかものお」

みく「にや!?! どういう事にや?」

早乙女「茜くんが正式パイロットになったのと合わせて、君達に新しい候補生を紹介しよう」

凜「候補生? それってまさか…」

卯月「? 凜ちゃん知ってるんですか?」

早乙女「まあ、凜くんが知っておっても差し支えないじやろうな。——入りなさい」

「はいっ！」 ガララッ

卯月 「あ！貴女は…」

凜 「……やっぱり…」

「どうも〜！多田李衣菜です！ロツクなゲッターパイロット目指してるんで、よろしく！」

李衣菜 「…と、こんな感じですかね？」

みく 「ろ、ロツクな…」

奈緒 「パイロット、だつてえ？」

菜々 「こ、これは…」

瑞樹 「波乱の予感ね。分かるわ」

つづく

第8話『新たなる敵、百鬼帝国』

~~~~~ 格納庫。 整備ドック ~~~~~

プシユウウ…

晶葉「——う〜…む…」

「やつほ〜。難しい顔して、またパソコンとにらめっこ？」

晶葉「…加蓮。珍しいな。1人か？」

加蓮「ううん。途中まで奈緒と一緒にだったけど、あんまり遅いから置いてきちやった」

晶葉「遅いって、ドコにだ？」

加蓮「んー、麓。今研究所手前の登り坂上がつてきてるんじゃない？」

晶葉「麓とは…、車を使えば良いだろう？」

加蓮「いや、いい天気だったし？何かここ来てから、体の調子がいいんだよね〜」

晶葉「全く…。付き合わされた奈緒が不憫だな」

『晶葉ー。大将見なかったー？』

晶葉「ん？ いや、こちらには来ていないが…」

『ホントー？…んじゃあドコ行っちゃったんだろうなあ…』 キュイイイイン…

加蓮「…今のビイトに乗ってたのって、リーナ？」

晶葉「ああ。喜ばしい事に、今ゲッターチーム各員に欠員は出ていないからな」

晶葉「だから、コックピットだけゲッターと同じにしたビイトに乗せて、訓練代わりに整備を手伝わせている」

加蓮「ふうん…。主任は喜びそうだね」

晶葉「マシンの馬力は役に立つからな。思わぬ補充になっただろう」

加蓮「それで？ 晶葉は何とにらめっこしてたの？」

晶葉「これか？ これは、ゲッター斬の各スペックの数値を洗い直していたところだ」

加蓮「あ、ハンバーガーあるじゃん。一個頂戴」 パクッ

晶葉「別に構わんと言うか、もう食べているのかと言うか…、話を聞く気ないだろ」

加蓮「だって専門的な事は分かんないし…？ ゲッター斬のスペックなんて見て、どうするの？」

晶葉「…。まあ、今度ゲッター斬を近くの工場に預ける事になってな。それで、先方にデータが見やすいように、整理をな」

加蓮「成る程ねえ。それってここじゃ出来ないの？」

晶葉「ウチには稼働してるゲッターだけでも3機もあるし、ゲッターGの建造も追い込みだからな。作業員は割きたくない」



加蓮「そう言えば、格納庫は賑やかになったよね。毎日人が動いてる」

晶葉「百鬼帝国とか言う奴等の為に、1日も早く戦力を整えなくてはいけないからな。ネオゲッター、旧ゲッターのオーバーホールも、急ピッチだ」

加蓮「大変なんだから。あ、ポテトも貰っていい？」

晶葉「お前、意外にマイペースだよな」

ウウウウウウ…ン ウウウウウウ…ン…

加蓮「ん？ 非常警戒のサイレン？」

晶葉「そのようだな…って、それは私のコーラだぞ！」

加蓮「堅い事は言わない言わない。これから出撃かもしれないし…」

所員『日本政府からの通達！先頃、日本領空内にて、所属不明の戦闘機を確認。尚、戦闘機とのコンタクトは不能！待機中のゲッターチームに出動要請!!』

加蓮「——ね？」

晶葉「…卯月とかな子は地方ロケで、テスターチームは各々仕事中か」

加蓮「斬チームは、ゲッターが整備中で出撃できないんでしょ？」

晶葉「分かったが…。人のは盗るんじゃない」

加蓮「ごめんっ♪」

加蓮「それじゃあ出撃準備に行くね。そのうち凜も来ると思うし」

晶葉 「…おう。帰ってきたらハンバァーとコーラくらい奢ってやる」

加蓮 「ゼロカローリはヤだよ？」

晶葉 「……分かったから早く行け」

加蓮 「はいはい♪行つてきまーす！」

奈緒 「はあ…はあ…はあ……。やつと着いた〜…」

加蓮 「奈緒遅い〜。ほら、出撃だよ」

奈緒 「はあ!?何だよ、今来たばっかで、何も分かんないぞ？」

加蓮 「いいから。ほら、あんまりのんびりしてると、また凜が来たときに何か言われるよ?」

奈緒 「ちよ…!もう何なんだよ!?一息くらい入れさせろー!ツ!!」

くくく 日本上空 くくく

凜 「——それで?その所属不明の戦闘機とやらの正体は掴めたの?」

晶葉 『いや、相変わらずこちらからの応答には反応なし。空自の偵察機が撮影した所属不明機の映像がコレだ』

凜 「コレは…」

晶葉 『70年代頃に開発されたジェット戦闘機に酷似しているが…、こんなタイプの機体を採用している国は、存在しない』

凜 「…百鬼帝国か…」

晶葉 『可能性は高い。もちろん、アレが戦力の全てではないだろう。向こうにとって  
もコレは偵察の可能性がある。戦闘は慎重にな』

凜 「手の内はあんまり見せるなつて？」

晶葉 『向こうが全力を出した時の為に、こっちも温存しておかないとな？』

凜 「……分かったよ」

プツッ

奈緒 「…踏んだり蹴ったりだよ…。ホント…」

凜 「奈緒、どうかした？少し疲れてるみたいだけど」

奈緒 「何でもねえよ。さ、さっさと仕事終えて帰ろう。明日も仕事あるんだからさ。  
アイドルの方の」

凜 「？ そう…ならいいんだけど」

加蓮 「相手は戦闘機なんでしょ？なら、余裕なんじゃない？」

凜 「分かんないよ。相手が初めて見るタイプである以上、警戒はしておかないと」  
前方に所属不明機の機影が見える。

凜 「……取り敢えず、ネオゲッター2で行くよ」

奈緒 「えっ？良いのかよ。こっちの手の内は見せない方針で行くんじゃなかったのか

「？」

凜 「あんな偵察機崩れくらい、さっと倒せるでしょ」

奈緒 「…しやーない！やってやりますか！」

気合を入れ直して、フォーメーションを組み直す。

奈緒 「ゲッターチェンジ!!」

ネオゲッター2に合体すると同時に、所属不明機が散開する。

奈緒 「来るかあ…？そっちから来るんなら、容赦しないぞ！」

機首を反転させ、ネオゲッター2に向かってきた1機に狙いを定める。

奈緒 「こっちの方が早いんだよ！」 ドシユウツ

右腕に左腕を添えて、ドリルアームガンを撃ち放つ。

所属不明機 『?!?!』

奈緒 「へへっ!!コイツら、全然大した事ないじゃん！」

1機撃墜した、ネオゲッター2の背後を、接近したもう1機の所属不明機が機銃で攻撃する。

奈緒 「そんな豆鉄砲が効くかよ！」 ドシユツ

所属不明機 『?!?!』

所属不明機 『?!?!』

奈緒「そこお!!」 ドウツ

奈緒「おりやあ!」 ドドドツ

クルクルと回転するように動きながら、迫り来る敵を次々に撃破していく。

奈緒「後1機! フフン! 気分はニュータイプって感じだな」

凜「調子に乗らない。ほら、最後のが来るよ!」

所属不明機『!!』 バシユツ

奈緒「何だよそんな攻撃!」 ヒョイ

加蓮「あ、そっちは…」

ネオゲッター2がヒラリと躲したミサイルが、その先にあつた高速道路を破壊する。

奈緒「…あっちゃあ…」

凜「走ってる車がいなくて良かったね」

奈緒「な、何で下にあるって教えてくれなかったんだよ!」

凜「普通回りを見ながら戦うもんでしょ?」

加蓮「あくあ、コレはまた、公共事業費がかさんで国会で問題になるね…」

奈緒「何言ってるんだよ!」

凜「また税金が上がるよ? それでもいいの?」

奈緒「うう…。畜生く〜!」 グワツ

右腕のドリルを一杯に回転させ、所属不明機に迫る。

加蓮「八つ当たりだ」

奈緒「うるせえ！——こんにやろっ！」 ギャルンッ

ドリルアームが、所属不明機を砕き、辺りは静けさを取り戻す。

奈緒「はあ…はあ…はあ……」

加蓮「お疲れ〜奈緒。戦闘はこれで終わり？」

凜「二応、報告を受けたのは5機だったし、周囲に敵らしい反応も見られないから…。これで終わりだね」

加蓮「了解了解。それじゃあ道路の再建は道路工事の専門家に任せるとして、アタシらは帰りますか」

奈緒「ああ…」

加蓮「まだ気にしてるの？ 奈緒のお陰でネオゲッターの損傷は少なくともすんだんだし、結果オーライだって」

奈緒「対価デカ過ぎだろ…」

加蓮「人的被害が出てないし、いーんじやない？ 高速使って移動する人には、ちよつと迷惑かもだけど」

凜「ん？ そう言えば…この道路…。こつち方向つて確か……」

くくく 某縣市街地 ビジネスホテル内 くくく

卯月「本当にありがとうございます！ 凜ちゃん達のお陰で、助かっちゃいました！」  
かな子「ロケが終わって帰る途中、帰りの高速道路が敵襲で壊されたって聞いて、どうしようってプロデューサーも頭を抱えてたんです」

卯月「それを凜ちゃん達がホテルの手配とか素早くやってくれて…」

凜「その事はいいよ。半分以上、こっちの責任みたいな所はあるし」

晶葉「それに、ここには元々宿泊する予定だったからな。大した苦労はなかったさ」

美穂「あのく…。本当に良かったんですか？ 晶葉ちゃん達は…」

晶葉「何、これから行く工場に事情を話して、夜勤の者が使う休憩室を貸してもらえ  
ることのなった」

晶葉「私はそっちを使う。どうせ作業員と一緒に作業しなくてはならないんだ。  
そっちの方が都合がいい」

響子「あ、プロデューサーさん！」

新P「おう」

智絵里「それで…、あの、皆さんのご家族に連絡…着いたんですか？」

新P「ああ。一先ず、事故でお前らが帰れなくなった事と、何日か娘さんを預かる事  
に関して、了承をもらってきたよ」

美穂「何日…。そんなに掛かるんですか？」

新P「高速が破壊された影響でな…。下の国道の方は車でごった返してるぞ」

新P「車の量がいきなり増えた影響で、事故とかも起きてるみてえだし、マトモに通れるようになるには、2、3日は掛かるな」

卯月「そんなに…」

凜（奈緒は連れてこなくて正解だったかな…）

かな子「私達はここで足止めになるんですね…」

新P「ん。ま、なっちまったもんは仕方ねえし、何とかって敵共のせいにして、お前らは仕事の疲れを休めてくれ」

新P「ちよつと落ち着かねえと思うがな」

卯月「はい。プロデューサーは…？」

新P「幸いパソコンは持ち歩いてるからな。事務所から書類をデータで貰って、仕事する事は出来る」

響子「こんな非常事態なのに、大変ですな」

新P「俺にとつちや嬉しい悲鳴みたいなもんよ。お前らが売れてきた証拠だからな」

かな子「そう言えば、李衣菜ちゃんもCDが出たんでしたっけ？」

新P「ああ、やる気はあるし、見た目も歌も運動能力も悪くねえ。全く、いい拾いも



んさせてもらったよ」

凜 「いや、そんな感謝されることは何も…」

新P 「そういや李衣菜か…。アイツどうすつか…。俺が直接見れない以上現場の移動とか…。チクシヨ」

新P 「俺は事務所の連中と電話で話してくる。お前ら、外出は好きにしていすが、何が起こるか分からねえ。必ずまとまって行動しろよ！」 タタツ

美穂 「はいっ！…ってもう行っちゃった…」

卯月 「忙しそうですね…。ちゃんと休めているんでしょうか…？」

響子 「今度、みんなで何かお礼しませんか？」

かな子 「良いですね！手作りのお菓子をプレゼントするとか…」

智絵里 「私、プロデューサーに感謝したい事…。たくさん、あります…」

凜 「…それじゃあ晶葉、私はそろそろ行くよ」

晶葉 「うむ。気を付けてな」

卯月 「あれ？凜ちゃん帰っちゃうんですか？」

凜 「うん。百鬼帝国が動き出したんだ。早く戻って警戒と準備をしなくちゃ」

かな子 「あの、私達も一緒に…」

凜 「卯月達はこっちに残って。その方が、みんな心強い」

卯月「それは……。…分かりました。気を付けて下さいね」

凜「うん。二人も。それじゃ」スタスタ

晶葉「さてと、お前達、これからどうする？」

卯月「これから……。ですか……。…どうしましょう？」

響子「そうですね……。こんな事になるなんて、誰も思いませんでしたから……」

美穂「プロデューサーは外出してもいいって言ってたけど……」

智絵里「この街の事、あんまり詳しくないし、プロデューサーさんの言っていたとおり、何か起こったら……」

かな子「でも、気分転換は必要ですよ？」

晶葉「そうか……。確かに今日はもう遅いしな。しかし……」

卯月「？ 晶葉ちゃん、何か提案があるんですか？」

晶葉「もしお前達が良ければ、だが、明日工場見学でもしないか？」

5人「「工場見学？」」

——翌日。市街地

卯月「へえ……。神重工業、ですかあ……」

晶葉「そうだ。国内シェア90%。日本自衛隊はもちろん、民間にも普及しているB  
T—23の整備、開発を一手に引き受ける重機メーカーだ」

晶葉「日本国内での大型ロボの普及は、この神重工業が皮切りになったと言っても過言ではないな」

かな子「大企業なんですね…。元からロボットの開発をしてたんですか？」

晶葉「いや、元は作業機械の製造会社だったらしい。神重工業の体制が現在の形になったのは、今の社長に代替わりしてかららしい」

響子「と言うより、ホントに私達まで一緒に来ちゃって良かったんですか？ 部外者なんじゃない？」

晶葉「心配はいらない。お前達には、いつも卯月達を借りてしまつて申し訳ないと思つているからな」

晶葉「こんな事で、そのお返しになるとは思つていないが…」

智絵里「そんな…。借りているなんて、そんな事…。卯月ちゃん達は、ホントに立派なお仕事をしているだけで…」

美穂「智絵里ちゃんの言うとおりですよ！ それにこうして、全く一緒にお仕事出来ないって訳でもないですし…」

美穂「私なんて…ドジだし、体力もある方じゃないですから、卯月ちゃん達ホントにスゴいなのもいつも尊敬してるくらいで…」

卯月「尊敬なんて…。美穂ちゃんだって、毎日レッスン頑張ってるじゃないですか！」

響子「そーですよ！この前なんて、苦手だったステップを克服して、トレーナーさんに誉められてたじゃないですか！」

美穂「それは…そうだけど…。まだまだ出来ないことも多いし、私なんて全然…」

晶葉「やれやれ、外野の私が口を挟むのもアレだが、もう少し自信を持った方がいいんじゃないか？」

美穂「うう…」

智絵里「あ、あの…！私も、いつも美穂ちゃんにレッスン、分からないところ教えてもらったり、一緒にお話したり、いつも元氣もらってます…！」

智絵里「だから、あの…あんまり気落ちしないで下さい！み、美穂ちゃんは…私のあ…憧れ、ですから…！」

美穂「智絵里ちゃん…」

晶葉「さてと、それではここから、中に入るぞ。廊下から工場内を見るだけだが、工場と通路の間にはガラス一枚しかないからな。一応、騒音には注意してくれ」

晶葉「後、工場内には何かとあるからな。場内の撮影も遠慮してくれよ」

5人「二はい（！）二」

晶葉「よし、それでは行こうか」

— 神重工業内。

響子「——！」

智絵里「うう……」

美穂「そ、外からだとそうでもなかつたけど、中に入るとやっぱりスゴい音ですね……」  
卯月「そうですか？ 私達がいとも研究所で聞いているのと、あまり変わらないような……」  
かな子「ちよつと研究所よりも騒々しいくらいですよ……。やっぱり研究所の格納庫よりずつと大きいですから」

晶葉「元々あそこは軍の施設でも、整備工場でもないからな」

響子「早乙女研究所って、宇宙線の研究施設でしたよね？」

晶葉「そうだ。宇宙から降り注ぐ未知の宇宙線、ゲッター線についての調査と究明を目的としている。時々忘れられるが」

卯月「今ではゲッターロボが4機もありますからね」

美穂「自衛隊の人達より戦力があるような……」

晶葉「現状、ゲッター線をエネルギー変換し、ロボットの動力源として運用しているのは早乙女研究所だけだしな。その気になれば、世界征服だって出来るんじゃないか？」

智絵里「せ、世界征服……?!」

晶葉「もちろん、そんな事の為にゲッター線を使うつもりはないがな」

響子「へえ…。やっぱり研究者っていうだけあって、考えもしつかりしてるんですね」

晶葉「…一応言っておくが、私はお前達と同じアイドルだぞ？」

智絵里「え……」

響子「ええ〜!？」

晶葉「そんなに驚くかな」

響子「えっ、だっていつも白衣着てるし…、事務所で見たこと全然ないし…え？本当に？」

かな子「本当らしいですよ？私をはじめで聞かされた時はビックリしましたけど…」

智絵里「私も、ちょっとビックリしました…」

美穂「私も…。てっきり研究所のお手伝いさんなのかと…」

晶葉「揃いも揃って…。まあ、今はアイドル活動は休止状態だから、致し方あるまい」

卯月「でも、レッスンくらいはした方がいいと思いますよ？研究所にも、待機中の時の為に、簡易レッスンルームがあるんですから」

晶葉「う、うむ…。善処する」

響子（あ…。これ結局やらないパターンですね…）

晶葉「……さ、さあ先へ進もう」

かな子（話題を反らしましたね…）

美穂「…それにしても、すごい数作ってるんですね」

晶葉「ああ、日本国内での需要はそう多くないが、それでも1日に300機ほど製造されている」

かな子「やっぱり、自衛隊に行くものが多いんですね」

智絵里「ホントですね…。あれにも、あっちのにも…自衛隊のマーク…」

晶葉「百鬼帝国の襲来を受け、日本国内でも再軍備が決定したからな」

晶葉「今はドコモ、恐竜帝国との戦いで”手”が足りん」

響子「ビイトだけで、足りるんですか？」

晶葉「無論戦力は微々たるものさ。しかし、日本での戦闘用スーパーロボットの開発は制限されているからな」

晶葉「ゲッターロボだけが、特別例外なんだよ」

かな子「私達が頑張らなくちゃいけないって事ですよね…!」

晶葉「うむ。今は数が用意できないが、ゲッターの量産計画も軌道に乗りつつある。それまでなんとか…。すまん」

卯月「そんな謝らないで下さい！選ばれたっていうのは偶然ですけど…、やるって決めたのは、私達ですから！」

美穂「……」

晶葉「そう言ってもらえるとありがたい——つと、着いたな」

卯月「ここは？」

晶葉「ここは、我々早乙女研究所協力してもらう為に作ってもらった仮設整備場だ」  
かな子「仮設……ですか……？」

晶葉「ゲッターのサイズでは、例えゲットマシンでもビイト用のドックには収まりきらないからな」

晶葉「私達は屋外でも構わないと言ったのだが、先方がそれでは預かる意味がない、と言われてな」

響子「何て言うか、すごい協力的なんですね？」

晶葉「お陰で、万全な状態でゲッターを整備出来るが……。ここには現在預けているゲッター斬と、それ以前に預けていたものがもう1機ある」

卯月「もう1機、ですか？」

晶葉「それを、改修が始まる前に見せておこうと思つてな。特にお前には馴染みが深いはずだ」

卯月「私に……？何だろう……」

晶葉「まあ、見てからのお楽しみという事で、早速中に入ろう」

ガチャツ



## — 仮設整備場。

美穂「——…これって…」

智絵里「白い…ゲッターロボ、ですか…?」

かな子「コレは…、私もはじめて見ました。卯月ちゃん、コレって…」

卯月「プロトゲッターですね!」

かな子「プロトゲッター?」

晶葉「ゲッターロボの試作機。分かりやすく言えば、お前の乗っているネオゲッターやゲッター斬の、お爺ちゃんみたいなものだよ」

かな子「へえ…。そんなゲッターが…」

卯月「研究所で見なかったので、廃棄されちゃったのかと…」

晶葉「まさか。恐竜帝国との決戦の時に活躍したコイツには、まだまだ戦える力が残っているさ」

晶葉「ただ、これから激化する戦いには、力不足なのは間違いない。そんなところに神重工業から改修作業をウチでやりたいって言う連絡を受けたのさ」

卯月「それで、ずっとここに預けているんですか…」

晶葉「先日、本格的な改修用の設計図案が出来たと聞いてな。折角だし、この姿を知る者に最後見てもらおうと、な」

卯月「そうですか……。プロトゲッターが……」

かな子「卯月ちゃんにとつても、思い入れのあるゲッターなんですか？」

卯月「はい……。プロトゲッターには、色んなピンチを助けてもらいましたから」

晶葉「モニター越しによく見ていたから、自分が乗っていたゲッターより覚えているじゃないか？」

卯月「ふふっ、そうかもしれません」

「——晶葉さん？」

晶葉「ん？ああ、これは……山崎さん。整備場の視察ですか？」

「はい。出張中の社長に代わって……。そちらの方々が昨日言っていた？」

晶葉「はい。アイドルグループ『ピンク・チェック・スクール』のと、後輩のアイドル達です」

響子&美穂&智絵里&かな子「二は、はじめまして……！」

卯月「はじめまして！えっと、晶葉ちゃん。この人は……？」

晶葉「ああ、紹介がまだだったな。この人は——」

山崎「はじめまして。社長秘書をしている、山崎です」

卯月「社長の秘書さんだったんですか……。私は……」

山崎「島村卯月さん。それにそつちの子が、三村かな子さん。二人の活躍は、よく耳

にします。もちろん、両方の意味でね」

卯月「ありがとうございます♪」

かな子「あ、ありがとうございますっ！」

晶葉「ゲッター斬の調子はどうですか？それと、プロトゲッターコイツの調子も」

山崎「どちらも良好ですよ。特にプロトゲッターの方は、晶葉さんが来てくれたお陰で格段に作業ペースが速まりました」

山崎「流石に、ゲッター線については私共の方ではノウハウ不足だったので、とても助かります」

晶葉「早乙女博士の研究レポートを参考にしたまでです。私のした事なんてほとんどありませんよ」

山崎「ご謙遜を。聞けばあのゲッターロボ斬は、晶葉さんが基本設計をなさったそう  
で。ご自身の実力の賜物でもあるでしょう？」

晶葉「そんな事は…あるのかな？アハハハッ！」

響子「何だか、年下とは思えませんね。晶葉ちゃん」

智絵里「年上の人にも、あんな堂々と話してて…。私なんか、同じ年の人でも、初  
対面の人とはムリなの…」

卯月「晶葉ちゃんは、普段から早乙女博士や整備主任さんみたいな大人の人に囲まれ

ているので…、特別だと思えますよ」

かな子「それにしても、あの山崎さんって人、スゴいですね…」

かな子「社長の代わりに、工場の視察をして、仕事内容までしっかり頭に入ってるなんて…」

山崎「みな、毎日している事です。特別な事ではありませんよ」

かな子「や、山崎さん…!？」

山崎「それに、部下の目線に立って、と言うのは、社長の理念でもありますから。現場の空気を知らなければ、社員が望むものも分かりません」

卯月「社員一人一人が、大切な仲間みたいなもの、ですか？」

山崎「仲間、というよりは、家族…ですね。世知辛い話ですが、会社が利益を得る為にも、社員はかけがえのない存在ですから」

美穂「家族…」

山崎「ええ。優秀であっても、そうでなくとも。社の営業に関わる、大切な人達ですから」

響子「何か良いですね…。私、感激しちやいました!」

山崎「ふふつ、有難う御座います」

山崎「さて、それではここからは私が、皆さんを案内しますね？」

卯月「え？晶葉ちゃんは…」

晶葉「すまん。連れてきて申し訳ないが、ゲッター斬の調整を手伝わなければ」

かな子「成る程…。でも、迷惑じゃないですか？」

響子「山崎さんもお忙しいんじゃない？」

山崎「いえ。先程もお話ししたとおり、今は視察の途中です。迷惑などにはなりませんよ」

かな子「そうなんですか？それじゃあ…」

卯月「はいっ。よろしくお願いします♪」

4人「お願いします！」

山崎「ふふっ。こちらこそ。それでは、ビイトの整備ドックの方から行きましょうか？」

—。

くくく 百鬼要塞 くくく

ヒドラー「ブライ様。偵察にしました偵察部隊ですが、どうやら全滅したようです」

ブライ「———。そうか。それで？肝心の情報は掴めたのか？」

ヒドラー「はい…。それが、連中はネオゲッターロボのみが出撃し、1つの武装のみ

で我が方の戦闘機を撃破したと…」

ブライ「あくまで手の内は見せん、と。フフフツ……。小賢しい連中だ」

ヒドラー「私もそれに同意いたします。どうせ我らに殲滅される命……。人間共には潔さと言うものはないようですな」

ブライ「……。グララー、グララー博士はいるか？」

グララー「こちらに。ブライ様」

ブライ「お前の開発した百鬼メカの調子はどうか？」

グララー「はっ。準備は万端。何時でも人間共に総攻撃を仕掛ける事は可能です」

ヒドラー「では直ぐに打って出しましょう、ブライ様。人間如きに遅れを取るわけにはいきませぬ！」

ブライ「逸るな。まずは忌むべきゲッターロボ。奴等を滅ぼさん事には始まらない」

ヒドラー「はっ……。しかし……。お言葉ですが……。ブライ様がそこまでゲッターに執着される理由が分かりませんが……」

ブライ「お前が知る必要はない。ただ、これから我らが覇道を進むのに、障害となる。それだけを分かっていれば良い」

ヒドラー「は……。はっ！失礼しました！」

ブライ「それに、我々が簡単に殲滅させてしまつてはつまらんだらう？シヨーは始まつたばかりなのだ。先ずは楽しまなければ」 スツ

ブライ「——我が百鬼帝国の栄えある百鬼衆共よっ！」

ブライ「遂にゲッター線の使者、ゲッターロボとのショーをはじめの時が来た！」

ブライ「その戦いの先鋒……。我こそはという者はいるか！我こそはこの百鬼の長、ブライにゲッターロボの首級を捧げ、永劫の名誉と英雄の称号を獲るに相応しいと思う者は名乗りを上げええいいっ！」

「それなら俺が行くぜい！」

ブライ「……ほう、一角鬼。貴様か」

一角鬼「応ッ！先鋒とあつちや黙つてられねえ！ブライ様、その大役……是非この一角鬼に!!」

ブライ「……うむ。百鬼衆の一番槍と謳われる一角鬼ならば、この役、適任であろう。やってみせい！」

一角鬼「へへっ……！ゲッターロボの首を必ずやブライ様の元に……百鬼、ブラアアアアアイツ!!」

百鬼衆「……百鬼、ブラアアアアアイツ!!」

ブライ「フッフツ……」

——百鬼要塞 通路

「……一角鬼」

一角鬼「あん？何でえ、鉄甲鬼かよ。野郎の見送りなんざ要らねえぜ」

鉄甲鬼「女が来ないのはお前の日頃の行いだらう。昨日も呑んで暴れたそうじゃないか」

一角鬼「…チツ。耳の早え奴。ありや俺のせいじゃなくつてな、半月鬼が挑発したのが悪いんだよ」

鉄甲鬼「乗ったのはお前だろう？胡蝶鬼がまたぼやいていた」

一角鬼「そうかよ。で、まさか世間話をする為に引き留めた訳じゃねえんだろ？」

鉄甲鬼「……」

一角鬼「出番代わってほしいってんなら聴けないぜ？先鋒の大役は、この一角鬼様が拝命したんだからな」

鉄甲鬼「それについては、俺も納得している。こちらとしても異はない」

鉄甲鬼「だが、しくじりは許されない前哨戦だ。…油断するなよ？」

一角鬼「応！優しい事で、俺の心配か？涙が出てくるぜい……！」

一角鬼「心配しなくても人間相手だ。下手打ったって負けやしねえ。俺が遅れなど、取るまいよ！」

鉄甲鬼「…だといいのだがな……」

一角鬼「ハンッ！お前はここで指でもくわえて、俺の活躍を目に焼き付けてくれ



りやあそれでいいんだよ!!」

鉄甲鬼「……。分かった。旨い酒を用意して待っている。必ず帰ってこいよ」

一角鬼「それこそ要らねえ心配だ!ちよつくら一暴れしてくらあ!待ってるよ、人間共!!」

~~~~~ 市街地 ~~~~~

早朝の市街地をけたたましい破壊音が揺るがす。

——ホテル 一室。

卯月「ふわっ……。地震ですか……?」

かな子「う、卯月ちゃん!そんな呑気なこと言ってる場合じゃ……!」

卯月「あ……。かな子ちゃん。おはようございます……!」

かな子「おはようございます……って、だからそんな呑気なこと言ってる場合じゃないんですって!また寝ないで下さい……!」

卯月「うう……。ん……。あと5分……」

かな子「あと5分待ってたら死んじやいますよ!——敵襲ですっ!」

卯月「ふえ……。て……。敵襲!?!」

かな子「窓の外を見てください!」

卯月「っ!!」 ガバッ

窓に外から見える市街地では、頭に1本角を生やした体躯のいいロボットが暴れ回っている。

卯月「アレが…百鬼帝国のロボット…？」

かな子「今プロデューサーさんが美穂ちゃん達の確認に行つてて…。あとは卯月ちゃんだけです！早く避難しましょう！」

卯月「うわあ待ってください！寝癖が…」

かな子「命と髪の毛、どっちが大切なんですか!？」

卯月「それは…、もちろん髪の毛です！」

かな子「…。3分…3分だけですからね！」

卯月「はいっ！急いで準備しちやいますから！」

—— 1F ロビー。

卯月&かな子「お待たせしました!!」

新P「遅えぞ！」

卯月「すいません!!」

かな子「私達以外は、みんな避難出来たんですか？」

新P「ああ。俺達も急ぐぞ。あのデカブツが何時こつちに向かつて来るか…」

智絵里「うう…」

美穂「智絵里ちゃん！きっと大丈夫だから、避難所まで頑張ろう？」

智絵里「美穂ちゃん……」

新P「おい！お前らもなにやっつてんだ行くぞ!!」

響子「あ、待ってください！プロデューサー……!」

直ぐ近くで破壊音が響き、百鬼帝国のロボットがビルの隙間から姿を見せる。

響子「きゃあ!!」

新P「五十嵐っ！大丈夫か!」

響子「私は大丈夫です！美穂ちゃんと智絵里ちゃんは……」

美穂「私は大丈夫です！」

智絵里「ひう……っ」

響子「智絵里ちゃん！どうしたの!」

智絵里「い……いや……っ……。助けて……動けません……」

美穂「智絵里ちゃん！しっかり！」

新P「どうした!」

響子「智絵里ちゃんが……動けなくなっちゃって……!」

新P「んだと!?!待ってろ！直ぐ行く!!」

一角鬼「がははははっ！ゲッターはまだかよ？こんなんじや、この辺が廃墟になつちま

うぜ」

卯月「うう……。ゲッターがあれば……」

かな子「ネオゲッターは……凜ちゃん達はまだですか!？」

一角鬼「おらよお!!」

卯月&かな子「!?!」

ロボットの右腕が、ビルを破壊するために振るい上げられる。

ガキイインツ

卯月「——?あれ……?」

かな子「見てください!アレって……」

卯月「プロトゲッター!!」

プロトゲッターが、ロボットを羽交い締めになっている。

一角鬼「コイツ……!?!」

『ふふっ。間髪髪だつたな』

卯月「その声……晶葉ちゃんが動かしてるんですか?」

晶葉『そのとおりだ。っ!!』

力任せに、ロボットを押し倒す。

一角鬼「ぐわあっ!」

晶葉『やはり工場に泊まらせてもらって正解だったな…』

卯月「ゲッター斬はどうしたんですか？」

晶葉『茜とアーニヤの準備に時間が掛かる。こっちの方が早かったのさ！』

かな子「晶葉ちゃん！敵が起きます！」

一角鬼「ふ…フフフ…！聞いてたのと色が違うが…。会いたかったぜえ…ゲッターロボ！」

晶葉「百鬼帝国…。プロトゲッターとはいえ、これ以上の勝手は黙ってられんぞ！」

一角鬼「フフ！やはりこの街にゲッターがあるって言う情報は正しかったみてえだな

！」

晶葉「何…？こっちの情報を把握しているだど？どうやって仕入れたかは知らんが…

！」

晶葉「ゲッタートマホーク!!」

プロトゲッターがトマホークを構える。

晶葉「聞いても答えてはくれんだろうしな！」

プロトゲッターがロボット、メカ一角鬼に肉薄。

晶葉「くらえっ！」

大上段に、トマホークを振り下ろす。

ガキンツ

晶葉「何っ!？」

一角鬼「…おう。こんなもんか？」

晶葉「コイツ…ゲッタートマホークを片手で…」

一角鬼「こんなもんかよおゲッターロボ!!」

受け止めたゲッタートマホークをそのまま、片手でプロトゲッターを放り投げる。

晶葉「ぐわああ…!!」

一角鬼「つまんねえ…。つまんねえぞ!こんなもんじゃねえだろ!?!ゲッターロボよお

!!」

晶葉「っ…!」

智絵里「いやああ!!」

新P「緒方!ちゃんと立たねえとホントに死んじまうぞ!」

智絵里「死…。死ぬ…。?いやあ!!」

響子「もうっ!プロデューサー!余計なこと言わないでください!」

新P「わ、悪い…」

美穂「い、急がないと…!さっきの衝撃で…天井が崩れそう…!」

新P「分かってるよ!ほら、立て!緒方!」

智絵里「いや……いやっ！いやああ!!」

響子「ダメ……！恐怖で混乱してるみたい……」

美穂「……」

美穂「智絵里ちゃんっ!!」

智絵里「!!」

響子「美穂……ちゃん……?」

美穂「怖いのはみんな一緒だよ?私だつて怖いもん。ほら……」ギユツ

智絵里「美穂、ちゃん……。手……震えて……」

美穂「ね?でも、こうやって手を繋げば……。えいつ」

智絵里「あっ……」

美穂「うんっ。立てたね」

響子「美穂ちゃん、スゴいです!」

ピシッ。ピシッ

美穂「あ……」

智絵里「み、美穂ちゃん……。ありが……」

美穂「智絵里ちゃんっ!!」ドンッ

智絵里「え……?」

勢いよく、プロデューサーに向かって智絵里を押し出す。

ズ シャ ア ツ …

一瞬の出来事だった。

智絵里「え…え…え…?」

視界一杯に崩れ落ちた瓦礫が広がる

新P「小日向…」

響子「い…いやあああああああ——!!」

かな子「う…そ…」

卯月「——っ!!…」

かな子「卯月ちゃん?」

卯月「私と代わってください! 晶葉ちゃん!」

晶葉「卯月!?!…ぐう…!?!」

メカ一角鬼に蹴飛ばされ、ビルに崩れ掛かる。

卯月「私がプロトゲッターに乗ります!!」

晶葉「卯月が…?…そうか…。頼む」

晶葉「ゲッタービーム!!」

一角鬼「のわっ!?!」

メカ一角鬼にゲッタービームを撃ち、怯ませて時間を作る。

その隙に卯月をプロトゲッターの手に乗せ、口部のコックピットへ。

卯月「晶葉ちゃん!? 怪我してるじゃないですか!」

晶葉「こんなもの…掠り傷にもならんよ。…後を頼む」

卯月「はいっ! 任せてください!」

卯月と入れ替わり、晶葉はゲッターの手から、地上へ。

一角鬼「ハンツ! 選手交替つかあ? 今度の奴は楽しませてくれんだろうな?」

卯月「戦いを楽しむ人…! 貴方だけは許しませんっ!」

勢いよく操縦桿を倒し、メカ一角鬼へプロトゲッターを突貫させる。

一角鬼「うおっ!?!…へへっ、中々のタツクルだな。さっきの奴よりは、好感触だぜ!」

卯月「くくくっ!!」

一角鬼「おっと!」

メカ一角鬼の懐に、プロトゲッターを深く潜り込ませ、股下に入れた足を突っ張り、背

負い投げの要領で持ち上げ、投げ飛ばす。

一角鬼「ぐはあ!!」

卯月「はあ…はあ…」

卯月（柔道の授業、真面目に聞いてて良かった…）

晶葉「つつ……！派手にやってくれるな……。卯月は……！」

かな子「晶葉ちゃん、ここは危険です！一緒に避難しましょう！」

晶葉「いや、私は金剛号の元へ向かう。そろそろ準備が出来たはずだ」

かな子「分かりました。……無理だけは……しないでくださいね」

かな子「皆さん！早くいきましよう！」

響子「……で、でも……、美穂ちゃんが……」

かな子「大丈夫です！きつと無事で……、誰かに助けられています！」

響子「そんな保証……どこにも……。さ、探してあげないと……！」

新P「……かな子の言うとおりだな。行くぞ」

響子「プロデューサーさん!?美穂ちゃんを……見捨てろって言うんですか!?!」

新P「バカ野郎っ!!死にてえのか!お前えは!!」

響子「っ！」

新P「……誰も見捨てろなんて言わねえよ。だがな、お前がここに残って、何かあつて、それで悲しむのは誰だ？」

響子「……。……お父さん……お母さん……」

新P「まだ悲しませちゃいけねえ奴が山ほどいんだろ?なら、そいつらの為に、死に急ぐような選択はしちやいけねえ」

響子「ヒック…。ツン…グスツ」

新P「泣いてんじゃねえよ。何、あいつは図太い九州女だ。そう簡単にやくだばんねえよ」

響子「…プロデューサーさあん…」

新P「だから五十嵐も、今は自分が生きる事だけを考えろ」

響子「…グスツ…。…はいっ!」

新P「よしっ!緒方!お前も動けるか!」

智絵里「…あ…ああ…」

新P「…。俺が担いで行くしかねえか…。三村、手え貸してくれ」

かな子「は、はいっ!」

晶葉「—さてと、私も急がなくては…!」

キイツ バタンツ

「ひよっとして、池袋博士かな?」

晶葉「…私を博士と…—貴方は…」

「もし急ぐのなら、キイツと一緒に乗っていかないか?少々、珍しい拾い物もしたしな」

晶葉「拾い物…?」

「ああ。その処遇についても、君と相談したい。一緒に来てくれるかな?池袋博士」

「……ん……。私……生きてる？」

美穂（体が揺れて……。車の中……。？でも、どうして……）

美穂「——う〜ん……。ん……。ここは……。？」

「気が付いたか？ここは、私の私用の車内だ」

美穂「車内……。？どうして……。？確か私……。？ホテルに……」

「確かに、君はホテルの近く、道路のど真ん中に倒れていた」

美穂「道路の真ん中……。？どうしてそんなところに……。？」

「さあな。お前さんが言っていたホテル……。正確にはホテルの残骸だったが、アレは酷い壊れ具合だった……」

「瓦礫が落ちてくる衝撃で、道路まで飛ばされてきたんじゃないか？……だとすれば、とんでもない強運か、悪運の持ち主になるが」

美穂「私を……。助けてくれたんですか？」

「フツ……。それはどうかな？君がアイドルだと言う事を知っていて、身代金目的で誘拐したかもしれないぞ？」

美穂「ツ!？」

晶葉「その心配はいらない」

美穂「え…!?! 晶葉…ちゃん…!?!」

晶葉「この人は昨日行つた神重工業の社長だ。その点は、心配いらんよ」

美穂「じゃ、社長さん…?」

社長「フフツ…。ネタばらしが早過ぎやしないか?」

晶葉「生憎、追い詰められている者をからかう趣味はなくてな」

社長「そういういきり立つな。確かに悪趣味だったかもしれないが、緊張している時にラックスさせるもの大事な事だ」

晶葉「そうかもしれないが…。なぜ美穂まで工場に連れていく必要がある」

社長「君達から預かっているゲットマシンの無事を確認するのが最優先だ。シエルタワーに寄っている時間はなくてな」

晶葉「本当にそれだけか? 貴方の口調からは、それ以外の”裏”を感じる」

社長「そこまで分かっているのなら、答えはもう君の中で出ているんじゃないのか? 池袋博士?」

晶葉「…」

美穂「あ、あの…。喧嘩は…」

晶葉「美穂はゲッターには乗せんぞ」

美穂「!?!」

社長「何故、それを君が決めるのかな？」

晶葉「本人の意志だ!! 貴方にはそれが分からないのか!？」

美穂「……」

晶葉「確かに、美穂にはゲッター線への適正があつた! しかし、本人がゲッターに乗る事を拒絶した!」

社長「では、君が乗って動かす、か？」

晶葉「無論だ」

社長「その折れた右腕を庇って、か？」

美穂「え……？」

晶葉「……」

社長「どれだけ自然に振る舞っていても分かる。君はさつきプロトゲッターに乗って戦っていた。それはその時に出来たものだろう？」

美穂「晶葉ちゃん……」

晶葉「こんなもの……怪我の内に入らんさ」

社長「私から言わせれば、怪我をしている者をロボットに乗せて戦わせようとする方が、残酷だと思うが？」

晶葉「だが、戦いには強い意思が必要になる。戦う意思のない者を、ゲッターには乗

せられない！」

社長「それを決めるのは、本人だとは思わないか？なあ、小日向美穂くん？」

美穂「……っただけ、いいですか？」

社長「何だ？」

美穂「貴方は一体……、何者なんですか？」

社長「私……私か。そんなもの、決まっている」

社長「私は、これから先、お前に地獄を見せる男だ」

美穂「地獄……」

社長「さあどうする!?仲間と共に地獄へ落ちるか、自分一人が安全な所で助かるか！」

美穂「私は……」

晶葉「脅しに屈するな！自分の意志を持って！美穂っ!!」

美穂「!? 私……私は……っ！」

――。

卯月「ゲッター！ミサイルマシンガン!!」

ドウドウドウドウドウッ

一角鬼「こんな豆鉄砲が……効くかあゝ!!」

卯月「っ！やっぱり、プロトゲッターだけだと……！」

バラバララララッ

一角鬼「!? 何だ!？」

卯月「アレは…烈火号に、紫電号!!」

茜「卯月さ〜ん!!お待たせしましたあ!!」

アーニヤ「金剛号の準備は、まだ…ですけどここからはワタシ達が援護、します!!」

一角鬼「ハンツ!カトンボ風情が…!何が出来る!？」

メカ一角鬼の角の先端から、青白いビームが放たれる。

茜「うわつと!!カトンボとは失礼ですね!ゲットマシンは、ただの戦闘機じゃありませんっ!!」

ビームを掻い潜りながら、烈火号はメカ一角鬼に迫る。

茜「ミサイル発射!!」

至近距離で、ミサイルをお見舞いする。

一角鬼「ぬおっ!?!何の…これしきっ!」

卯月「まだです!!」

一角鬼「っ!？」

卯月「ゲッターキック!!」

ミサイルで怯んだ隙に、プロトゲッターが迫り、空中からの飛蹴りを炸裂。

一角鬼 「ぐわあ…!!」

茜 「アーニヤさん！同時攻撃です！行きましよう!!」

アーニヤ 「Ha！タイミングは、合わせます!!」

ガードの崩れたメカ一角鬼にすかさずミサイルを2機同時に撃ちだし、当てる。一角鬼 「ぐおお!!小賢しい小手先の戦術でえ…!!ふざけるなあ!!」

メカ一角鬼の口のカバーが開き、無数のミサイルが周囲に撃ちだされる。

茜 「いっ…!!」

アーニヤ 「キヤツ…！」

卯月 「茜ちゃん！アーニヤちゃん！」

アーニヤ 「大丈夫、です…。少し、驚いた、だけ…」

茜 「ですが…これでは迂闊に近付けません!!」

卯月 「…どうしたら…！」

アーニヤ 「!? 皆さん！金剛号です！」

茜 「本当ですか!?!」

卯月 「晶葉ちゃん、間に合って…アレ？」

茜 「金剛号の軌道が可笑しいですね？アレではまるで素人…」

「きやあああああああ…！」

卯月「この声……！美穂ちゃん!？」

美穂「っ!!……ち、ちゃんと飛んでえくっ!!」

卯月「どうして美穂ちゃんが……」

晶葉『……私の判断だ』

卯月「晶葉ちゃん!?今どこにいるんですか?」

晶葉『神重工業の仮説ドックだ。たつた今、美穂を金剛号に乗せて、送り出してやったところだ』

卯月「何で……何で美穂ちゃんを乗せたんです!？」

晶葉『それは……』

美穂「それは私の意志だよ!卯月ちゃん!」

卯月「美穂ちゃん……!？」

美穂「私……戦うの、嫌で適性検査で適正があつた時……逃げました」

美穂「でも……!卯月ちゃんとか、かな子ちゃんとかみんなが戦つてる姿を見て、私、思つたんです!逃げちゃダメだ、逃げたら、何にもならないんだつて……!」

卯月「そんな事……!誰でも出来る訳じゃありません!誰だつて、逃げていいんです!」
美穂「これ以上……!誰かの後ろに隠れ続けたら、きつと……、大事なものも見えなくなつちやうんです!何にも出来なくなつちやうんです……!」

美穂「私…そんなの嫌です!!」

卯月「美穂ちゃん…」

晶葉『無駄だ卯月。美穂の意志は堅い。美穂自身で、出した答えなんだ』

卯月「…そんな……」

ガタタンツ

美穂「あ、ああん……!お願い…金剛号……!言うこと聞いて……!」

一角鬼「へっ!何だよ、やつと3機揃ったかと思つたら、とんだ期待外れみてえだな

……」

一角鬼「とつとと沈みな!!」

卯月「いけない……!金剛号を守らなきや……!——っ!」

強引にメカ一角鬼にタツクルを食らわせ、押し倒す。

一角鬼「おおっ!?!コイツ……!」

卯月「やらせません!美穂ちゃんも誰も!」

美穂「うう……!」

茜「ええ……と……小日向……美穂、さん!でしたっけ?まずは深呼吸しましょう!!」

アーニャ「力任せでは、ゲッターは、動かせません……リラックス、しましょう。ね?」

美穂「あう……。ごめんなさい……」

茜 「謝る必要なんてありません！私達は仲間じゃないですか！」

美穂 「仲間……」

アーニャ 「そうです。どうして、とか、誰、なんて、まだ分かりません」

茜 「でも！守りたい大事なものの為に飛ぶんです！！それなら！私達はもう仲間です！！」

美穂 「……はい……はいっ！」

茜 「アーニャさん！初めての美穂さんは真ん中にしましょう！ゲッター紫電です！！」

アーニャ 「Daa！低速合体……やってみせます！」

烈火号と紫電号が空中で一度大きく宙返りをし、速度を金剛号に合わせて、紫電号を先頭に、烈火号が最後に続く。

美穂 「あ、あの……」

茜 「えいっ！」

美穂 「きやつ……！」

先ずは烈火号が金剛号とドッキング。速度を落としながら、紫電号が迫ってくる。

茜 「美穂さん！初めてで、怖いのなら代わりますよ！」

美穂 「うん……うん」

美穂（私がやるって、決めたんだもん……!）

美穂「私がやります!!」

茜「分かりました!!」

アーニヤ「……」

紫電号の後部が、目前まで迫る。

美穂（逃げない……!逃げない逃げない……逃げないもん!!）グッ
操縦桿を握る手に力が入る。そして、

ガキーンッ

茜「アーニヤさん!!」

アーニヤ「チエンジ!ゲッターアアーシデンツ!!」

ゲッターが変形する。

全体に細身のシルエツト。色は紫と薄紫が基調で、間に金剛号の黄色のアクセント。
右腕はシャープなドリル。左腕は、ハサミのように上下に別れたマジックハンドに
なっている。

一角鬼「雑魚が!しやらくせえ!!」

卯月「きやあつ!!」

一角鬼「!?」

プロトゲッターを押し倒したメカ一角鬼の目の前。高層ビルの屋上に、颯爽と降り立つゲッター紫電。

美穂「これが…ゲッターのコックピット…」

茜「覚悟はいいですか!?!美穂さん!」

美穂「……はい!」

一角鬼「へへっ!ようやくお出ましかよ?待ちわびたぜ…!おらあ!!」

アーニヤ「…ゲッター影分身!!」 ヒュンッ

メカ一角鬼のビームを受けたゲッター紫電の姿が空中に掻き消える。

一角鬼「残像だとお!?!本物はどこだ!?!」

アーニヤ「こちらですッ!!」

一角鬼「っ!」

高速で回り込んだのは、背後。

アーニヤ「いやあああ!」

空中での、後ろ回し蹴りを。

アーニヤ「Y p a a a!!」

着地して、左のマジックハンドを閉じて、勢いよくかち上げる。

一角鬼「うごおお!?!」

アーニヤ「ウツキさん！大丈夫ですか!？」

卯月「アーニヤちゃん…。私は大丈夫です…」

アーニヤ「一気に行きましょう!!」

卯月「はいっ!!」

プロトゲッターがミサイルマシンガンを構え直し、ゲッター紫電は、ドリルにエネルギーを収束させる。

卯月「ええええいっ!!」

アーニヤ「蛇旋光っ!!」

ミサイルマシンガンの銃撃に合わせ、ドリルに溜めたエネルギーを放射状に放つ。

一角鬼「うおおおっ!!」

ミサイルマシンガンの実弾と蛇旋光の光弾が、メカ一角鬼の装甲をボロボロに破壊していく。

一角鬼「バカな…!?負ける!?俺が…人間風情に…っ!!」

シュンツ

一角鬼「うっ…!？」

メカ一角鬼の目の前に、ゲッター紫電が姿を現す。

一角鬼「…鉄甲鬼…すまねえ——」

アーニヤ「千！極ツ！針ツツ！！」

ギユルルウウウンツ

ゲッター紫電のドリル、千極針が、メカ一角鬼を貫き、メカ一角鬼は事切れたように崩れ落ちる。

アーニヤ「……」

ゲッター紫電がメカ一角鬼の元から離れた直後、メカ一角鬼は巨大な爆炎となり、消滅した。

美穂「……終わった…？」

茜「勝った…！勝ちましたよ！美穂さん！アーニヤさん！！」

アーニヤ「フフツ…！ победа…勝利、みんな無事…。嬉しい、ですね♪」

美穂「そつか…。私、戦って…勝ったんだ…。何もしてないけど…！良かった…」

卯月「美穂ちゃん」

美穂「…卯月ちゃん」

卯月「……」

美穂「……」

茜「ああゝあの！卯月さん！これは…ですね…！」

卯月「美穂ちゃんを、よろしくお願いしますね」 ニコッ

茜「…へ!？」

アーニヤ「マ…任せて、下さい…」

美穂「あの…それじゃあ…」

卯月「誰も、やりたいって言うのは、止められませんから♪」

アーニヤ「良かった…ですね♪」

茜「はいっ!!大団円!終わり良ければ全て良しです!!」

卯月「そうですね…。帰りましょう!みんなが待つてる、私達の場所へ!」

美穂「—はいっ!」

くくく 神重工業 社長室 くくく

社長「…ゲッターは勝ったか」

山崎「そのようで。しかし街も、我が社も、被った被害は甚大ではありません」

社長「仕方あるまい。恐竜帝国との戦いの時もそうだった。戦いとは、そういうものだ」

山崎「…。今回の襲撃で、自衛隊から連絡が。急ぎ、ビイトの整備と増産を行ってほしいそうです。金に糸目はつけないと」

社長「フツ…。軍備に使うその金を、少しでも復興に回せばいいものを…」

山崎「社長…?」

社長「…何でもない。政府連中の顔色を伺いながら、ゲッターの改良も引き続き行う。プロトゲッターの回収を確認次第、作業員に作業に取りかかるよう伝える」

山崎「かしこまりました。それにしても、どうしてなんです？社長がそこまでゲッターに引き付けられるのは」

社長「引き付けられる、か…。その通りかもしれない。私自身にも分からないが、惹かれるんだよ。ゲッターに」

山崎「惹かれる…とは？」

社長「さあな。しかし興味深いと思わないか？ただの民間研究所が、アレほどのロボットを何機も作り上げているなんて…」

山崎「社長は、何か裏があると？」

社長「そうじゃない。そうじゃない、が…不自然さはあるな。世界中何処を探したつてゲッター線を動力に運用している話は聞かない」

社長「まるで、誰かが早乙女研究所にゲッターを造らせている。そんな気がする」
山崎「それが、ゲッターに惹かれる理由、ですか？」

社長「勿論それだけじゃない。単純に格好いいロボットに惹かれる男心もあるよ」

社長「私が後20年ほど若ければ、私自身が志願して、乗り込みたいくらいだ」

山崎「止してください。会社はどうなるんです？」

社長「フフツ……。人間、余計な権力は持つものじゃないな」

山崎「……社長？」

社長「フツ……。全て冗談だ。私はゲッターの整備ドックの状態を見てくる。君は負傷した作業員の様子を見てきてくれ」

山崎「……。かしこまりました。社長……—神、隼人社長」

社長「フツ……」

つづく

第9話 『発進、ゲッターロボG!!』

~~~~~ 百鬼要塞 ~~~~~

鉄甲鬼「…何…!!? やられただと…! 一角鬼がか!？」

百鬼兵「は、はいい…! その通りでございますっ…!!」

鉄甲鬼「貴様あ…! それを知りながら何故今までそれを俺に隠していた!!」

百鬼兵「か、隠していたなどは…! ただ、無用の混乱を避ける為と…ヒドラー元帥閣下から…箱口令が…」

鉄甲鬼「…チツ」 バサツ

百鬼兵「ヒイ!」

鉄甲鬼「…」 ツカツカ…

「何処に行こうってんだ?…鉄甲鬼よお」

鉄甲鬼「…半月鬼か。決まっている。一角鬼の吊い合戦だ」

半月鬼「ほう…。真面目なアンタが、良いのかい? 百鬼の戒律を犯すような真似をして…」

鉄甲鬼「戒律など恐れるものか! 仇討ちもせず…、何が友か!!」

半月鬼「意気込むのは良いが、ちったあ落ち着くんだな。お前さんの百鬼メカは、まだ調整中の筈だぜ？」

鉄甲鬼「っ……！」

半月鬼「つたく……。何時も落ち着いてるようで、熱くなりやすい。一角鬼の戦死を、前にだけ黙っているという元帥の判断は、正解だったみたいな」

鉄甲鬼「お前は……お前は悔しくないのか!？」

半月鬼「んなもん悔しいに決まってるだろうがあ!!」

鉄甲鬼「!？」

半月鬼「野郎とは……一角鬼の野郎とはまだ決着が着いてなかったのによ……。ゲッターなんかにはやられやがって……！」

半月鬼「これが悔しくなくて何に何だよ!？」

鉄甲鬼「……そうか。すまない……。浅慮だった」

半月鬼「……いや、気にしねえでくれ。俺だつて分かってんだ。この怒りをぶつけんのは内輪じゃねえ。……ゲッターの野郎だつて事はな……！」

鉄甲鬼「まさか……出陣するのか？」

半月鬼「ああ。御上から達しが出た。次は俺と、独眼鬼や三頭鬼、それに巨雷鬼の旦那も入れての大喧嘩さ」

鉄甲鬼「一度に4人も百鬼衆を…!？」

半月鬼「俺と独眼鬼と三頭鬼はゲッターの相手。巨雷鬼の旦那が火力で早乙女研究所を落とすのさ」

鉄甲鬼「殲滅作戦…!それに相応しい相手と判断したのか…ブライ大帝は」

半月鬼「いや、違うな」

鉄甲鬼「違う?どういう事だ？」

半月鬼「御上は楽しんでおられるのさ。戦いを。だから人間共への攻撃のレベルを上げて、更に楽しめる相手かどうか見極めたいのさ」

鉄甲鬼「何だと…?それでは!」

半月鬼「俺達がここでゲッターを討ち取りや、御上のお遊びも終わる。って訳だ、お前に仇討ちのチャンスは回ってこねえ。…残念だったな」

鉄甲鬼「…:そうだと良いがな…」

半月鬼「フツ…。まあ過度に心配しなさんな。次の号令が出次第出発する。精々上手い酒を用意して待つてるんだな」ツカツカ…

鉄甲鬼「…:」

—。

~~~~~ 早乙女研究所付近 上空 ~~~~~

美穂「……」

茜「美穂さん!!」

美穂「きやつ……!び、ビックリした……」

茜「ああ!失礼しました!ですが、緊張していませんか!」

美穂「……は……だ、大丈夫です!シミュレーターでは出来たんですから、本番だつて……!」

アーニヤ「Да……ミホ、この数日で、とても……とつても、上達……しました」

アーニヤ「だから……大丈夫です。きつと、上手くいけますね。 беспокoитъ с я……心配、しないでください」

美穂「アーニヤちゃん……。うんっ!」

茜「それでは……合体フォーメーションに入りますよー!!着いて来てくださーいー!!」
「ゴォ」

美穂「あ、茜ちゃん……!待って……!」

アーニヤ「フフツ……。リョーカイ!」

グオオオオオン……

—— 早乙女研究所 敷地内。

奈緒「ほおっ!やつてるやつてる。上手いもんだな、あの新人」

加蓮「何処かの誰かが初めて来た時と大違いだね？」

奈緒「…誰の事だよ…？」

加蓮「さあ？」

晶葉「順応性が高いのは事実だな。扱い辛い金剛号を、よく扱えている」

加蓮「やつぱさそういうのあるんだ？」

晶葉「まあな。金剛号は、ゲットマシンの中では大型で、鈍重な方だ」

晶葉「その分、旋回や上下降で掛かる負担も大きい。これは、設計者である私のミスでもあるが」

加蓮「それはないんじゃない？現にああして飛べてるんだし」

奈緒「でも良いのか？金剛号取られちゃって」

晶葉「私は構わないさ。所詮科学畑の人間だ、研究所でやりたい事は山ほどある。それに、美穂は私以上の事を出来ているしな。文句はないさ」

加蓮「ふうん？あつさりしてんだ、その辺。あつちの誰かと違って」

奈緒「あつちの？」

李衣菜「……ぶー……ぶー……」 ムスツ

加蓮「あははっ♪すんごい膨れ顔」

晶葉「李衣菜じゃないか。そんなところで…どうした？」

李衣菜「…納得いかない」

晶葉「は？」

李衣菜「納得いーかーないー!」

李衣菜「私の方が先に研究所来てるのに、どうして後から来た方がゲッターのパイロットなのさ？」

晶葉「それは…まあ、チャンスがなかったな」

李衣菜「チャンスがないって何ー？不公平だー!」

奈緒「あはははっ!ま、リーナはせめて、シミュレーターで上手くに飛べるようになってからむくれるんだな」

李衣菜「うっ…」

晶葉「離陸失敗に着陸失敗、それと不注意による墜落…と。よくもまあここまでミスを重ねられるものだ」

李衣菜「な、並べないで…。余計凹むじゃん…」

晶葉「まあ、ロボの状態での操縦は成果を伸ばしているから、長い目で見れば問題ないだろう」

李衣菜「長い目で、かあ…」

加蓮「ゆっくり頑張ればいいんじゃない？しばらく出番は無いんだし」

李衣菜 「出番ないって…はつきり言うなあ…、加蓮は」

キユイキユイキユイキユイ

奈緒 「何だ!?!何のサイレンだあ!?!」

加蓮 「初めて聞く音だね」

晶葉 「ああ、ゲッター 炉心が暴走したな。また失敗か…」

奈緒 「暴走って…!大丈夫なのかよ!?!」

李衣菜 「大丈夫。すぐに収まるよ」

>…:

加蓮 「ホントだ」

李衣菜 「あくあ、また私に仕事かあ」

晶葉 「ぼやくな。頼りにされてるんだから」

李衣菜 「良いように使われてるって言うの。それ。…んじや、ちよつと行ってくる」

晶葉 「気を付けてな」

タツタツタツ

加蓮 「…んで?さつき、また暴走したって、言つてたけど?」

晶葉 「うむ。ゲッターGの完成間近だと言うところで、座礁に乗り上げてしまつてな」

奈緒 「それでさつきのサイレンか…。炉心がどうかしたのか?」

晶葉「いや、炉心の方ではなく、それに付随するゲッター線増幅装置の方だ」

加蓮「確か、炉心のゲッターエネルギーを高めるんだっけ？」

晶葉「ゲッターGが従来の10倍の性能を発揮するに必要なものだ。アレなしでゲッターGの完成はない」

奈緒「増幅装置の問題って言うのと…、数値が目標に達しないとかか？」

晶葉「いいや。その逆だ」

奈緒&加蓮「その逆？」

—— 数分前。ゲッターG建造ドック。

卯月『……』

早乙女「それでは、これよりゲッターGの起動試験を開始する」

凜&主任「………」

早乙女「卯月くん、君のタイミングで始めてくれ」

卯月『はいっ！』

……ウウウ……ン

所員「ゲッターエネルギー、供給開始」

凜「今回こそは……頼むよ………」

所員「エネルギーレベル、上昇を確認。 ……20……30……40……。尚も上昇」

早乙女「前は80で安定せんかったな」

所員「……65……70……75……80突破！」

主任「いける……いけるぞ!!」

キユイキユイキユイキユイ

早乙女「何じゃ!？」

所員「げ、ゲッター線……急上昇!どんどん上昇して……100を超えます!!」

早乙女「いかん! 炉心がオーバードを起こすぞ!」

凜「ゲッターGの非常ブレーカーを落として!」

所員「は……?」

凜「早くっ!!」

所員「り、了解っ!!」

バチンツ ……ヒュウウン……—

ゲッターG>……。

凜「卯月っ!!」 ダッ

主任「畜生っ! 失敗か……!」

早乙女「前回と同じじゃったな。ゲッター線の供給レベルが一定を超えると、エネ

ギーの制御が出来ず、無制限に増大する」

主任「一体どうなってるんです？今現在増幅装置が弾き出して数字は、技術班の連中が計算した数値を大きく上回ってる」

主任「これが計算ミスってんなら、そいつはもう技術屋なんて名乗れねえレベルの誤差ですぜ？」

早乙女「……」。装置は正常、増幅装置に問題はない。であるならば、問題は炉心の方にあるんじゃない？」

主任「炉心に？しかし、炉心の点検は毎日やってます。今日だって……」

早乙女「そうではない。要求される酸素量、血液の循環に、心臓がついていけない。そういう話じゃよ」

主任「増幅装置に対して炉心の許容量が低すぎるって……冗談でしょう!?アレは間違いない、この研究所で開発した最新型です！アレで耐えられんのでしたら、今の技術じゃ無理ですぜ！」

早乙女「無理でも、やらねばならん。そうしなくては、人類に明日はない！」

主任「……。手は尽くします。リーナ！いるか!？」

李衣菜『もうスタンバイ出来てますよ』

主任「おう、速えじゃねえか。……取り敢えず炉心をバラす。ゲッターから周辺の機械を全部取っ払ってくれ」

李衣菜『ええ〜!?全部私じゃないですか〜!ちよつとは手伝ってくださいよ〜』
主任「うるせえ!こつちは慣れねえ頭脳労働で気が滅入ってんだ!ちつたあ頭ん中ま
とめる時間をくれ!」

李衣菜『……分かりましたよお〜……。ちえ…』
プツンツ

主任「…はあ……」

早乙女「…苦勞を掛けるな。君にも、李衣菜くんにも」

主任「ウチの班にビイトを操れる奴アあいつしかいませんからね。ホント、頼りにな
る奴つすよ」

—— ゲッターG コックピット。

凜 「卯月っ!!」

卯月 「……う〜……。凜ちゃん?」

凜 「大丈夫?何処かケガしたりは…」

卯月 「ないですよ。心配しすぎです」

凜 「けど、この傷…」

卯月 「それは元からある奴です…」

凜 「あ……。ごめん…」

卯月「構いません。ふふっ…、心配してもらえて、嬉しかったですから」

凜「……ふざけないで」

卯月「はいい♪」

李衣菜『さつてとく。ゲッターのご機嫌はどうかなつと…』 ガシユウン…

ジユウ…

李衣菜『あつつつ?!び、ビイトの手が焦げたく〜!』

李衣菜『一先ず冷却冷却…。冷却剤つと…』

李衣菜『つと…!コックピットの2人!卯月に…凜?今冷却剤使つてゲッター冷やすから!速く退かないと、一緒に冷やすよ〜?』

卯月「すいませ〜ん!と言うわけなので、先ずは降りましょうか?」

凜「…そうだね」

—— 談話室。

卯月「——甘くていい匂い…。かな子ちゃん!皆さん!」

かな子「卯月ちゃん。お疲れ様です」

みく「お疲れにや〜ん」

瑞樹「試験、また失敗みたいね?」

凜「そつちの方はもう少し気長に構えるかな。これは?」

菓々「時間も時間なので、ちよつとしたお茶会のようなですよ！」

卯月「そういうえば：もう3時ですか」

かな子「今日は結構時間がとれたので、ケーキとかたくさん作れたんですよ♪」

莉嘉「アタシもねー、一緒に手伝ったんだよ！」

卯月「そうなんですか？ 莉嘉ちゃんが作ったのはどれなんです？」

莉嘉「んとね〜——」

美嘉「手前にあるのと、それと：あとあつちも。形悪いのは大体莉嘉のだよね？」

莉嘉「もう！ お姉ちゃん酷い〜！」

かな子「ま、まあまあ……。形悪くても味には関係ないですし、それに、莉嘉ちゃんお菓子作り初めてとは思えないぐらい手際よかったですよ」

美嘉「ホント!? フフン、やっぱアタシって才能あるのかな？ 何にでも！」

莉嘉「かな子が上手くフォローしてくれたお陰でしょー？ 全く、危なっかしくて見て

るこつちがハラハラしたよ」

凛「フフツ、大変だね。お姉ちゃんも」

未央「まーまーしまむーもしぶりんも、先ずはこつち来て座ってさ。ささ、起動試験

で疲れたでしょう？ 疲れをとる意味でもささ、ケーキにする？ ココアにする？」

未央「それともくわ・た・し？」

卯月「あ…ああ、はい…」

未央「むくく。しまむーそっけなくい！」

凜「…ん？つて言うか、未央こっちにいたんだ？」

卯月「そう言えばそうですね。前まで私達と一緒にしたけど…」

未央「んー。最近ちよくつとね。みむつちも1人前になってきたし、私もこころで一念発起でもしてみようかと」

凜「何それ？」

未央「フフン。秘密♪これからの未央ちゃんの活躍に乞うご期待、つて事で！」

卯月「??」

未央「それよりも未央ちゃんのボケにそろそろツツコんでよくつ！」

みく「ホンツト、賑やかなメンバーだにや」

瑞樹「ふふつ、分かるわ。ここに来るアイドルの子達が増えたのもあるけど、卯月ちゃん達にも余裕が出てきたからかしらね」

菜々「アイドル的にもパイロット的にも、後輩が出来て大変でしょうけど、それでもみんなキラキラしてて…。ああ、若さつて素晴らしいですね！」

莉嘉「アハツ☆菜々ちゃん何かアタシのお母さんみたいー！」

菜々「おかつ…!?う。うん…！ナナは下積みで経験豊富ですからね。ちよつと皆さん

より年上の意見も分かるんですよ！」

瑞樹「そうよ。ホントは莉嘉ちゃんのお母さんなんて目じやないくらい年う——」

菜々「ノoooooooooo!!それ以上は禁句です!!」

美穂「あれ？皆さん集まって…。どうかしたんですか？」

未央「お、みほちー！訓練終わり？お疲れ〜」

アーニヤ「ooooooooooいい匂い、ですね。Чаепитие…お茶会、ですか？」

菜々「そうですねー！よろしければ斬チームの皆さんもどうぞ♪」

茜「いただきます!!——ん~~~~!!やっぱり運動の後は糖分ですね!」

みく「ゲッターの操縦訓練が運動かにな…」

瑞樹「これじゃあ、私達も後輩にすぐ抜かれちゃうわね」

茜「ん~~~~!!喉…詰まつ……………」

美穂「た、大変…!お茶…お茶…!」

かな子「これ…こつちです!これを…!」

美穂「あ、ありがとうございます…!茜ちゃん…!」

茜「ンン…ツ…ング…ング…ツプハア!生き返りました!!ありがとうございますっ

!」

かな子「いえいえ…。それより、お菓子は一杯ありますから、どんどん食べてください

い♪」

茜 「はいっ！アーニヤさんも、美穂さんもさあどうぞ!!」

アーニヤ 「спасибо…♪」

美穂 「あの、流石にこんなには食べれない…」

瑞樹 「ふふっ、スゴい山盛りじゃない。訓練終わりに…大丈夫？」

かな子 「あの…！まだまだありますから…」

みく 「ホント、飽きないにやあ…」

ウウウウウウツ ウウウウウウツ

卯月 「!?」 モグッ!?

未央 「しまむークリームついてる」

凜 「これは…」

所員『政府からの出動要請!! 港湾地帯に、百鬼帝国出現! 待機中のゲッターチームは、
全員直ちに出击せよ!!』

みく 「全員直ちに、って…そんな一気に来たの!？」

瑞樹 「港湾地帯って事は…危険ね」

菜々 「コンビニナートもあります! 被害が広がる前に、迎撃しないと…!」

未央 「原油価格高騰は勘弁だもんね…。よおし!」

卯月「皆さん！出撃しましょう!!」

凜「待って。私達は待機だよ」

かな子「えっ!?!」

凜「ネオゲッターは奈緒達に任せる事になってたでしょ？私達はゲッターGの所で待機だよ」

卯月「……仕方ないですね……」

茜「問題ありません!!私達で片付けてきますから!!」

アーニヤ「ウヅキ達は……ゆっくり、ПРАЗДНИК……休んでいて下さい」

卯月「はい……。美穂ちゃんも気を付けて。初陣ですから」

美穂「は、はい！気を付けて……行つてきます!!」

ダダダッ

莉嘉「みんなー！頑張れー☆」

美嘉「さーとと、ウチらは後片付けでもしよつか？みんなが帰つて来たときのために、色々仕度しとかないと」

莉嘉「はーい☆」

卯月「私にも手伝わせてください」

美嘉「え？いいの？待機中なんじゃ……」

かな子「ゲッターGは動きませんし、何かしてないと落ち着きませんから」

美嘉「ふくんそっか。それじゃ、お皿洗いよろしく★」

卯月&かな子「はいっ!」

凜「……」

〃〃〃 格納庫 ネオゲットマシン輸送車輛発進口 〃〃〃

奈緒「——つたく、相変わらず退屈させてくれないよな!」

加蓮「久々の実戦かあゝ…。奈緒、そっちの仕度は出来てる?」

奈緒「ああ、こっちは大丈夫だ」

奈緒「おーい!ネオイーグル号には誰が乗るんだー!?!」

李衣菜『わた——』

奈緒「お前は引つ込んでろ!これから出撃つて時にビイトの巨体は邪魔なんだよ!」

李衣菜『……』 シュン…

加蓮「まあまあ。凜がいないのは初めてだからって、あんまりピリピリする事ないん

じゃない?」

奈緒「べ、別に…ピリピリしてなんか…」

「奈緒ちゃん!加蓮ちゃん!おっ待たせしましたあゝ!」

奈緒「ん?この声って…」

加蓮「菜々さん？」

菜々「はい！これからネオイーグル号は私、安部菜々が担当いたしますよ〜！」

キヤハツ☆

奈緒「んん…？でも菜々さんって1号機の搭乗経験ありましたっけ？」

菜々「それは…その…。いろんなメンバ―チェンジがありました…。ですが！ゲットマシンの搭乗経験は皆さんより上ですからね！大船に乗ったつもりで任せてください！」

加蓮「菜々さんなら一安心だね。ヨロシク」

菜々「はい〜！こちらこそ…！それより、ネオゲッター用のパイロットスーツって、思ったよりキツいんですね…。キツそーだなー、とは思っていたんですけど」

奈緒「まあ確かに…ちよつと窮屈でキツいけど…。そうでもないよな？」

加蓮「慣れれば大したことないよ」

菜々「慣れ…ですか…」

菜々（慣れ…と言うよりもナナの場合は…。ううん！ナナは…ナナは永遠の17歳ですから！負けてられません！）

菜々「よおーし！！張り切っていくぞー！！」

奈緒「うおっ!?どうしたんだ？いきなり…」

加蓮「ふふっ、前のリーダーとは偉く違うね。面白い」

奈緒「面白いって言うかあ……?」

奈緒「ん? ちょっと待てよ。こっちに菜々さんが来てるって事は、ベアー号の方には……」

—— 格納庫 発進カタパルト。

瑞樹「——本当に大丈夫なのね?」

未央「もう、心配性だなあ。瑞樹姐さんは」

瑞樹「そりゃそうよ。無茶をするのは若者の特権だけどね? それで将来を潰してほしくないわよ。分かるでしょ?」

未央「分かるわ!」

瑞樹「……あのねえ……」

みく「もう心配するだけムダだよ。瑞樹さん」

瑞樹「みく……。けどね……」

みく「未央ちゃんはこうなつたら聞かないよ。なら、本人が大丈夫って言ってる以上、みくはそれを信じようって思うの」

未央「流っ石みくにゃん! 話が分かるう〜♪」

みく「別に、納得したつもりはまだないにや。今回のがお試しで、それでダメなよう

なら降ろすからね！」

未央「……おっ、怖い」

みく「絶ツツ対！無茶は禁物だからね!!」

未央「了々解つ！さ、後ろがつかえてる。早く出撃しようよ！」

瑞樹「……。しようがないわね……！」

みく「つて言うかみく達、何てチーム名で出撃するの？」

瑞樹「……そう言えばそうね」

未央「そりやあ勿論、本田未央と愉快な……！」

瑞樹「却下」

未央「せめて最後まで言わせてえく!!」

みく「却下にや」

未央「ちえく……。大阪出身はお笑いに厳しいなく……。それじゃあM3チーム何てどう？」

瑞樹「M3？」

未央「ミオとミズキとミク。3人の名前の頭文字を取って、3人だからM3。ホントは☆☆★(ミツボシ)チームにしようとも思ったけど、そっちはまた却下されそうだったから」

みく「…何となく安直な気もするにやあ…」

瑞樹「でも、シンプルでいいんじゃないかしら？それで行きましよう！」

未央「よし、決定〜！」

瑞樹「それじゃあ、M3チーム、出撃するわよ!!」

未央「オーー!!」

みく「仕方ないからノツてやるにやあ!!」

ゴオツ

。

美穂「うう…。遂に実戦かあ……」

晶葉『怖い。美穂』

美穂「晶葉ちゃん…。ううん、怖く…ないよ」

晶葉『自分の気持ちには嘘を吐くな。大丈夫、戦いが怖くない何て者はここには居ないさ』

美穂「それは…」

晶葉『人間は2通りだ。怖いと言うのを、勇気や違う感情で押し殺せる者と、そうでない者』

美穂「……」

晶葉『お前がやると決めたんだ。なら、甘い事は言わん。だが、怖さに押し潰されそうになったら、仲間を頼れ』

美穂「仲間……」

アーニヤ「……」

茜「！」

美穂「アーニヤちゃん……茜ちゃん……」

茜「晶葉さんの言うとおりですよ！私達がフォローします！！大船に乗ったつもりでいてくださいー！」

アーニヤ「Тревожность……不安、も、恐怖も、ワタシ達で分け合えば、3分の1……ですな」

晶葉『心強い柱だ……。が、気を付けろよ。そっちの大船は、丈夫だがじゃじゃ馬で、手を離すとすぐ何処かへ行ってしまう』

茜「恐縮です！」

美穂「……ふふつ。分かりました！みんなの手をちゃんと繋いで離しません！」

晶葉『フツ……その意気だ。さ、斬チームの発進準備が整った。頼むぞ、リーダー？』

茜「リョーカイです！！それでは、ゲッター斬チーム！発進ですよー！！」

アーニヤ「Да！シデン号、いきます！」

美穂（……大丈夫。きつと出来る……ううん、出来る！）

美穂「——小日向美穂、金剛号、出撃しまあーす!!」

ゴオツ

——。

~~~~ 港湾地帯 ~~~~

三頭鬼「アヒヤツヒヤツヒヤツヒヤ!!ここら一帯を火の海に変えてやるぜえ!!」  
ゴアツ

名前の通り3つの首を持つメカ三頭鬼のそれぞれの口から放たれる火炎が、コンビ  
ナートの原油に引火し、宣言通りに辺り一帯を火の海に変えていく。

独眼鬼「チイツ……!相変わらず野蛮な奴め……。いい加減やめんか!暑くてかなわん  
!」

三頭鬼「おおつと、こいつは失礼。俺はこの景色が好きでねえ……。赤く、熱く、正に  
地獄の鬼の戦場に相応しいって奴だぜ!アヒヤヒヤヒヤヒヤ!!」ゴアツ

独眼鬼「つ……!狂鬼め……。半月鬼!ゲッターはまだ現れんのか!?このままでは味方に  
焼き殺されてしまう!」

半月鬼「そう慌てなさんなって。直に敵さんの方から……。——む?ほら、お出でな  
すつたようだぜ?」

美穂 「酷い…」

みく 「太平洋の沿岸が火の海とか、笑えない冗談にや」

三頭鬼 「アヒヤツヒヤツヒヤツヒヤ!! どうだい、キレイだろ? この燃える炎はよお!!」  
茜 「ちつともそうは思えません!! 私の燃える心の炎の方が! もつと美しく! 真っ赤に燃えています!!」

瑞樹 「張り合わないの。…さて、ネオゲッターが合流するまでは、このまま時間を稼ぐわよ!」

未央 「数が揃うまでは合体したらむしろ危険だもんね。了解! みんな、2人1組作って〜!」

アーニヤ 「Da! ミホ、先行します。フォロー、してください」

美穂 「は、はい…!」

未央 「茜ちゃん! ゲットマシンでも動き、合わせられる?」

茜 「もちろんです! 置いていかれはしません!」

みく 「みく達は代わり映えのしないペアって分けにや」

瑞樹 「ゲットマシン2機で百鬼メカ1機…。これでギリギリってところね」

2機編成を組み、それぞれに百鬼メカに向かつて散開する。

半月鬼 「へえ、合体しないって? 舐められたもんだ」



三頭鬼「ぬん…っ!?」

イーグル号が囷となつて注意をそらし、その背後に迫つたジャガー号が高速のミサイルを連続で射撃。メカ三頭鬼を大きく揺るがせた。

三頭鬼「ぐっ…!こいつらあ…!ただの戦闘機の性能じゃねえぞ!」

半月鬼「ゲッターといや、ロボットばかりかと思つていたが…、これは考えを改めにやならんか」

未央「おや?今更かな?」

瑞樹「私達がゲッターに乗る以上、ゲットマシンくらい乗りこなせてなくちゃ話にならないじゃない」

独眼鬼「好き勝手言いおつて…!正々堂々勝負する気はないのか!」

茜「その言葉、そっくりそのままお返しします!!」

独眼鬼「っ!」

半月鬼「ははっ!アンタの負けだけぞ独眼鬼。神出鬼没で出て来て、周囲をこんなにしてりやあ世話ねえや」

独眼鬼「違つ…!周囲の所業は私ではなく三頭鬼が…!」

半月鬼「お仲間だぜ?俺ら」

独眼鬼「……」

美穂「…な、何かちよつとやりづらいですね…」

みく「ちよつぴりだけど急激に親近感沸いたにやあ…」

アーニヤ「…ミオ達、そつくりですね」

未央「えー!? 私あんな不真面目じゃないよう。いつも真剣だよ?」

瑞樹「いつも平常運転って事よね。分かるわ」

未央「ぶーっ! 瑞樹姐さんひーどーいー!!」

ドシユウツ

ベアー号の直ぐ脇を、ミサイルが通り抜ける。

未央「……えー…」

半月鬼「…さてと、話の腰を折つたのはこつちだが、そろそろ再開させてもらおうか」

茜「油断させて不意打ちとは…卑怯です! もう許しません!!」

美穂「……今のはこつちも悪いような…」

アーニヤ「…アー…逆ギレ、ですね」

三頭鬼「ハンツ! 何にしたって同じよ! お前らをここに呼び寄せた時点で、俺達の作戦は半分成功してるみてえなもんだしよ!」

みく「何…? どういう意味にや!!」

三頭鬼「ははははっ! 直に分かるぜ! 手前えらの研究所の壊滅をもつてなあ!!」

美穂「か、壊滅…？」

くくく 早乙女研究所 格納庫 くくく

激しい爆発音と破壊音が、格納庫全体を揺るがせる。

主任「おわつと…!?!」

李衣菜『主任!』

振動で崩れ落ちる資材から、ビイトが主任を庇う。

主任「お、おお…。助かったぜ…リーナ」

李衣菜『いえ…。それにしても今の振動…。まさか研究所が襲撃されてるんじゃない…。』

主任「研究所に敵が近付けば警報がなるはずだ。…それがねえって事は…」

再び、爆発と振動が格納庫を襲う。

李衣菜『こっちの警戒外からの長距離攻撃…!?!』

くくく 上空 くくく

巨雷鬼「ほっほっほっほ…。楽なものよう」

巨大な巡航ミサイルに鬼の上半身が乗ったような、メカ巨雷鬼から、無数のミサイルが発せられる。

巨雷鬼「いかにゲッターが強力な兵器と言えど、このメカ巨雷鬼の長射程には敵うま

い」



巨雷鬼「尤も、そのゲッターも若造供が相手しとる以上、儂を阻むものなど無いも同然じゃがのう。ほっほっほっ」

百鬼兵『巨雷鬼様！こちらの次弾装填完了致しました！』

巨雷鬼「うむ。重畳重畳。では、メカ要塞鬼共々、波状攻撃ぞ」

メカ巨雷鬼とメカ要塞鬼のミサイルを交互に、絶え間なく放つ。

巨雷鬼「これだけの爆撃…。向かった先は間違はなく焦土であろう…。それに耐えられれば、この戦も面白いのじゃが…」

~~~~~ 港湾地帯 ~~~~~

みく「——そんな！だったらお前達は、そんなに大所帯出て来て、囷だったって事!？」
半月鬼「そう言うこつたな。ま、俺達が出てきた以上、お前さん達も黙ってはいられまい。そこを突いたのさ」

瑞樹「悔しいけどその通りね。破壊される街を見捨てるなんて出来ないもの」

美穂「で、でも…!ゲッターの居ない研究所を狙うなんて…!」

未央「鬼が鬼の居ぬ間に何て、冗談にもならないよ!」

独眼鬼「はっはっはっ!知謀を巡らせた者が勝つのだ!卑怯などとは言わせんぞ!」

「だったら、アタシ達の事も卑怯なんて言えないな?」

茜「!!この声は…!」

三頭鬼「っ…!!何処だ…!!」

ズボア

半月鬼「!? 三頭鬼!後ろだ!」

三頭鬼「…!!?」

メカ三頭鬼の背後。アスファルトの地面を突き破り、ネオゲッター2が姿を現す。

奈緒「——ドリルアーム!!」

ギャルルルルツ

ネオゲッター2の回転するドリルの腕が、メカ三頭鬼の中央の頭部を破壊する。

半月鬼&独眼鬼「三頭鬼!!」

奈緒「へへっ、奇襲されるばっかだと思ったら大間違いだぜ!」

菜々「話は通信で全部聞かせてもらいました!」

加蓮「要するに、アンタ達をちやっちょと倒して、研究所も守ればいいんでしょ?」

独眼鬼「そんな芸当が出来ると思ってるのか!?早乙女研究所が先にやられるわ!」

晶葉『それはどうかな?』

未央「アキっち!」

晶葉『研究所は新たに開発したゲッターエネルギー障壁で無事だ。お前達は目の前の

敵に集中してくれ』

瑞樹「そんなものを開発していたなんて、知らなかったわ」

晶葉『まだ実用段階を経ない試作品だからな。しかし、そんな甘い事も言ってもらえない』

茜「いよおーし！並ば一気呵成に！攻めましょう!!」

独眼鬼「うぬぬぬ…！三頭鬼！いつまで寝ている!？」

三頭鬼「おうっ!!」 グルンツ

奈緒「いゝ いっ!？」

いきなりネオゲッター2に振り返った左右2つの頭部から発せられた火炎を、素早く跳んで躲す。

奈緒「くっそお…！こー言うのは真ん中が本体って言うセオリーじゃないのかよ！」

加蓮「それは奈緒、アニメの見過ぎ」

三頭鬼「ぐわははは！その通りよ！このメカ三頭鬼は3つ全ての首が一心同体！1つを倒せばよいなどと言う考えでは、倒せはせぬわ!!」

奈緒「チクシヨウ…！好き勝手言いやがって…!」

瑞樹「みんな、私達も合体よ。奈緒ちゃん達はそのまま上空の敵をお願い!」

奈緒「了解っ!」

瑞樹「地上の敵はゲッター2で相手しましょう。みく、未央いいわね？」
みく「ここは瑞樹さんに任せるにやん！」

未央「バツチリ決めてみせてよね！」

瑞樹「ええ、任せてちょうだい。——行くわよ！」

茜「アーニヤさん！こちらもゲッター紫電！お願いします!!」

アーニヤ「Da!ミホも、続いてください！」

美穂「は、はいっ！」

アーニヤ「では…、行きます!!」

瑞樹「チェンジ！ゲッターアアー2ツ!!」

アーニヤ「チェンジゲッター！シデンツ!!」

ゲッター2とゲッター紫電、2体のゲッターが地上に降り立つ。

半月鬼「ようやくお出ましって訳か」

奈緒「野郎…。すばしっこそうだけど、スピードならネオゲッター2だって負けてないんだからな！」

独眼鬼「来い！ゲッター共！その細腕、へし折つてくれるわ！」

瑞樹「上等よ。やれるものなら、やってみなさい！」

三頭鬼「アヒヤヒヤヒヤヒヤ!!精々楽しませてもらうぜえ!!」

アーニャ「ッ……！戦いを楽しむような人達に、負けるわけには、いきません……！」

奈緒「プラスマブレード!!」

瑞樹「ゲッタードリル！」

アーニャ「千極針！」

3機のゲッターがそれぞれの得物を構えて肉薄。

奈緒「でりやあ!!」ブンッ

半月鬼「ふんっ……！」グオッ

奈緒「こいつ……！」

半月鬼「はあっ!!」

奈緒「わわっ!?!」

ネオゲッター2は大空を舞台に、メカ半月鬼にプラスマブレードを振りかざし、対するメカ半月鬼も、胸についた三日月を模した巨大なカッターで、ネオゲッター2の表装を狙う。

独眼鬼「くらええい!!」ゴオッ

瑞樹「っ……！ゲッタービジョン！」

独眼鬼「こいつめ……！一瞬で距離を……！」

瑞樹「はっ！」

火炎を発するメカ独眼鬼の口をゲッターアームで挟み込み、封じる。

独眼鬼「ぐぬぬ…」

瑞樹「これで…!」

独眼鬼「させぬわ!!」

瑞樹「!?!」

メカ独眼鬼の懐に向けて放たれたゲッタードリルを、4本の爪でできた左腕で掴み、回転を止める。

未央「何て馬鹿力!」

みく「早く離れるにや!瑞樹さん!!」

瑞樹「分かってるわ…!?!」

直ぐ様離脱しようとした、ゲッター2の鳩尾に、メカ独眼鬼の蹴りが突き刺さる。

未央「いったあゝ…。衝撃もろですよ…!」

みく「そのわりに元気そうにや」

瑞樹「2人共ごめんなさい…。油断したわ」

独眼鬼「ふふふ…。ゲッターと言えどこの程度か!」

瑞樹「余裕綽々でいられるのも、今の内よ!!」 バッ

アーニャ「ヤアッ!!」

三頭鬼「これでどうだ？」　ゴアッ

アーニヤ「ツ……！」

左右の頭部から放たれる火炎を距離を取って躲す。

茜「真ん中が破壊されたと言つても……！左右から全方位に攻撃されては厄介ですな……！」

美穂「これじゃあ上手く近付けない……。どうするの？アーニヤちゃん！」

アーニヤ「……こうします！」

アーニヤ「ゲッター影分身！」

ゲッター紫電が、幾重にも分身する。

三頭鬼「これは……攪乱する気か!？」

アーニヤ「蛇旋光！」

三頭鬼「うぐぐ……！」

メカ三頭鬼の周囲を高速移動しながら、千極針に集束したエネルギーを拡散させて放つ蛇旋光で、動きを封じる。

三頭鬼「こんなもの……！ぜりやああつ!!」

左右の頭部が前後左右に回転し、放たれる火炎で分身を瞬く間に消していく。

三頭鬼「これで……!?!」

分身を全て焼き払ったあと”本体”が見当たらない。

三頭鬼「まさか…!？」

思わず足元に視線を落とすが、地面が動く気配はない。

アーニヤ「——ワンパターンでは、ありません」

三頭鬼「!？」

ゲッター紫電が姿を現したのは、真上。

アーニヤ「Y p a a !!」

千極針を回転させ、縦一閃にメカ三頭鬼を貫く。

三頭鬼「——!!」

爆炎と化し、炎の中に消えていくメカ三頭鬼。

半月鬼「はっ…!!三頭鬼がやられたか…!」

奈緒「お前…仲間が死んでも何ともないのかよ!」

半月鬼「…まさか!その分の仕返しは、お前達にさせてもらおう!」ギャンツ

奈緒「っ…!!こいつ…さつきよりスピードが…!」

半月鬼「死んでいった三頭鬼だけじゃねえ!一角鬼の無念も、その身で味わえ!!」

メカ半月鬼の体当たりが次第に命中していき、ネオゲッター2の腕や脚を少しずつ切

り裂く。

加蓮 「…男の復讐何て女々しいね…」

菜々 「確かに、仲間がやられて、悔しいのは分かります。でも…」

奈緒 「先に仕掛けてきたのはそっちで、こっちはたくさんの人の平和が掛かってるんだ！」

奈緒 「例え敵に恨まれても、負けるわけにいくかあ!!」

プラズマブレードが、突撃してきたメカ半月鬼を受け止める。

美穂 「や、やった…」

茜 「先ずは一体です！」

みく 「そっち片付いたのなら、ちよつとこっち手伝ってほしいにや！」

アーニヤ 「分かりました。今、そちらに…」

独眼鬼 「ふふっ。そう上手くいくかな？」

未央 「?」 どういう意味!？」

ズズズ… キラッ

美穂 「?」 アーニヤちゃん…海の中に…何か…!」

アーニヤ 「エツ…?」

ズバシヤアッ

茜 「(…)(…)(これは!」

アーニヤ「百鬼メカ：!？」

独眼鬼「随分待たせたな。海王鬼」

海王鬼「へっ！俺の出番がなくなっちゃうかと思つたぜ！」

海王鬼「ゲッター共！これがホントの奥の手つて奴だぜ！」

海から出現した巻き貝の頂点に鬼の上半身が着いたようなメカ海王鬼が、貝の下から伸びる触手でゲッター紫電を絡めとる。

アーニヤ「ウツ……！」

そのまま海中に引きずり込まれるゲッター紫電。

未央「アーニヤン！みほちー！」

独眼鬼「おっと！相手を間違えてもらっちゃ困るぜ！」

瑞樹「まさか伏兵まで用意してたなんてね……！」

みく「どうするにや!?!このままじゃ……」

くくく 早乙女研究所 ゲッターG建造ドック 管制室 くくく

所員「早乙女博士！早く避難を!!」

早乙女「……。ここを落とされれば全て終わりじゃ。どこへ逃げても同じじゃよ」

所員「ですが……」

早乙女「……」

ゲッターG>……

早乙女「ここで我らも終わりか……。ゲッターGの完成を目前にして……
ゲッターG>……

——…ウウウ…ン……

早乙女「何じゃ?!?何が起こっている!?!」

主任「博士え!大変です!ゲッターGのエネルギーが、突然上昇を始めました!」

早乙女「何?どういう事じゃ!?!炉心を取り外していたはずでは……」

主任「いえ、炉心の解体作業中に敵の襲撃があつたんで、作業を中止させていたんです。しかし……」

所員「ゲッターGのエネルギー上昇……止まりません!!」

早乙女「ゲッターが……1人で勝手に動いているのか……!?!」

所員「ゲッターエネルギーレベル……100を突破!……しかし、安定していません……!」
ゲッターGを擁する、ドック全体が緑色の光に包まれる。

主任「この状態で……安定してるとつての……?」

早乙女「似ている……この状況、あの時に!」

主任「あの時……。初めて博士がゲッターの起動テストをした時……!」

早乙女「そうじゃ。あの時も、エネルギー循環が上手くいかずテストは失敗じゃった」

主任「だけどそのあと、突然ゲッターが動き出して…起動に成功した」

早乙女「最初は一度多量のエネルギーを流して、その後出力を落とした事で循環が上手くいったと思っておった…。しかし違った！」

早乙女「ゲッターは呼応している！自らに立ち塞がる敵に！自らの行く手を阻もうとする困難に！」

主任「そんな！それじゃあ、ゲッター線に意思があるとしても言うんですかい!？」

早乙女「……。そうとしか、今は考えられん」

主任「……。意思をもったエネルギー…。そんなもんがあるとしたら…」

早乙女「ゲッター…。お前は、儂らに何をさせようとしておる…?」

ゲッターG>……

—— 通路。

莉嘉「きやあつ！」

美嘉「莉嘉！大丈夫!？」

莉嘉「うん…。ちよつと転んじやっただけ…。何ともないよ！」

凜「…一瞬収まった振動が、また大きくなってきたね」

かな子「もしかして、さつき展開したって言ってたバリアの限界が近づいてるんじや

…」

卯月「とにかく、莉嘉ちゃんと美嘉ちゃんは地下のシエルターに！あそこなら、最悪研究所が破壊されても無事で済みます！」

美嘉「それは分かっているけど…アンタ達は どうするの？」

卯月「私達は…ゲッターGのところに行きます」

莉嘉「ええー!?でも、ゲッターGって動かないんでしょ？」

早乙女『——卯月くん、凜くん、かな子くん。ゲッターGの発進準備が整った。直ぐにドックまで来てくれ』

美嘉「え…?」

凜「このタイミングで…?今まで動かなかったのに…」

かな子「何にしてもいいじゃないですか！これで出撃できます！」

卯月「今研究所を守るのは私達だけです！行きましょう！」

凜「うん…!」

莉嘉「頑張れー☆ゲッターGチームー！」

卯月「はいー！任せてください！」

凜（本当にどうして…?まるでこの、計ったようなタイミングで…）

~~~~~ 港湾地帯 ~~~~~

奈緒「ぐっ…!」

半月鬼「終わりだ！ゲッターロボ!!」

加蓮「奈緒、何時まで遊んでるつもり？」

奈緒「別に遊んでるつもりじゃ…」

菜々「ですが、このままじゃいけませんよ！防戦一方です！」

加蓮「もし私に気を遣ってるつもりなら、あつちに行つた時に怒るよ？」

奈緒「……。分かったよ…つたく！」

半月鬼「ゲッターめ…。何をするか分からんが、これでトドメだ！」ズワツ

奈緒「ネオゲッタービジョン!!」

ネオゲッター2の高速移動。プラズマブレードを逆手に持ち替え、メカ半月鬼に迫る。

半月鬼「何…?!」

奈緒「おらよっ！」

プラズマブレードでメカ半月鬼を弾き、上空へ吹き飛ばす。

菜々「やりました！相手に追い付きましたよ！」

奈緒「加蓮！プラズマエネルギー、最大出力だ！」

加蓮「ふうん、本気？消耗大きくなるから稼働時間も制限されるけど？」

奈緒「追い付くだけじゃ駄目なんだ！相手を越えないと…！」

加蓮「……はいはい。菜々さん、ちゃんと口閉じててくださいね」

菜々「え？どういう事で……って……うひひいひいひい!!」

ネオゲッター2の急加速。凄まじい速度で残像を生みながら、メカ半月鬼に肉薄。

半月鬼「こ、これがこのゲッターの本領って事か……!？」

奈緒「終わりだ！」

ザンツ

メカ半月鬼を通り抜け様、瞬間の合間で斬撃を繰り返し、切り刻んだ。

半月鬼「——っこう、鬼……——」

空中で爆炎が華となって散る。

奈緒「はあ……はあ……はあ……はあ……。どんなもんだよ……？」

菜々「うう……。目が回りますう……」

加蓮「後は瑞樹さんと……、アーニヤちゃん……」

独眼鬼「死ねえい!!」

瑞樹「っ!!」

伸ばされたメカ独眼鬼の脚に右腕を乗せ、跳躍して躲す。

独眼鬼「チイツ……! チョロチョコと……すばしっこい奴め!!」

瑞樹「ドリルミサイル！」

独眼鬼「うおっ!!」

空中で身を捻り、撃ち出したドリルがメカ独眼鬼を穿つ。

独眼鬼「こんなもの……効くかあ!!」

瑞樹「!?」

胴体に浅く刺さったドリルを払いのける。

みく「全く効いてない!?ゲッター2のパワーが足りないの!？」

未央「相当頑丈そうな奴だし、パワーにはパワーだよ!瑞樹姐さん!」

瑞樹「……。意地を張ってる場合じゃ、なさそうね」

瑞樹「ドリルストーム!」

再度展開したドリルを高速回転させ、発生した竜巻でメカ独眼鬼の動きを抑える。

独眼鬼「ふん……!こんなちやちな竜巻如き……」

瑞樹「オープンゲット!」

独眼鬼「んっ……!？」

未央「チエエーンジゲッターアアー3イイ!!」

素早く分離。メカ独眼鬼の背後で合体したゲッター3が振り返ったメカ独眼鬼と対峙する。

独眼鬼「姿を変えても同じ事!海の仲間と共に、藻屑となれい!!」



未央「ゲッター3を甘く見ないでもらいたいね！それに、茜ちゃん達だつて負けないよ！」

未央「うおりやあああ!!」

独眼鬼「クアツ!!」

ゲッター3とメカ独眼鬼が激しくぶつかり合う。

——海中。

アーニヤ「ツ!…ツ!」

茜「どうです!? 抜けられそうですか!」

アーニヤ「HeT…ダメです…。相手のパワーが強すぎ、ですね…」

茜「絶体絶命!ですか…!」

美穂「……」

アーニヤ「ミホ?」

美穂「チェンジしましょう…」

茜「えっ!?!」

美穂「水中戦なら、私の金剛が最適の筈です! だから!」

茜「危険過ぎです! 水中での分離と合体は、水圧の計算が掛かる分相応の技量が求

められます! パイロットになったばかりの美穂さんでは…!」

美穂 「出来ます！必ず成功させます!!」

茜 「!!」

美穂 「——!!」

海王鬼 「がははは！ここで終わりだ！藻屑にしてやるぞ！ゲッター!!」

ミシミシッ

ゲッター紫電の表装が軋みを上げる。

アーニヤ「キャツ……обсуждение……アー、話し合い、をしている時間は、なさそうですね」

茜 「しかし……」

アーニヤ「ここで終わるなら……потенциал、可能性に賭けます。ウツキなら、きつとそう言います」

茜 「！」

アーニヤ「ミホ、チャンスは一度、です。必ず успех……アー成功？させましょう、ね♪」

美穂 「——はいつ！」

海王鬼 「死ねえい!!」

アーニヤ「オープンゲット！」

メカ海王鬼が触手に渾身の力を加えたタイミングで、ゲッター紫電は分離し、拘束が解かれる。

海王鬼「逃すかあ!!」

メカ海王鬼が伸ばした触手の攻撃を掻い潜り、ゲットマシンは機首を海底へ向けて縦一列に。

美穂「……チェンジゲッター金剛おお!!」

ガキーン

海底に激しい土煙が巻き上がり、着地と同時に合体が完了する。

他のゲッター3系統と遜色のないがっしりとしたマツシブなガタイ。

筋肉が隆起したような金剛号の肩。そこから伸びる腕も太く、逞しい。

紫電号が変形したキャタピラを唸らせて、海流も潮流も受け付けずそびえるその姿こそ、

美穂「ゲッター金剛、推参…です…!!」

両拳を突き合わせて、海底に降りてくるメカ海王鬼と対峙する。

海王鬼「ほう…。この海で俺と戦うつもりか…。面白い」

美穂（さつきまでと違う…。相手が大きく見える…。だけど…!!）

美穂「やります！ やってやりますっ!!」

キヤタピラの無限軌道が激しく回転。海底の泥を巻き上げ、メカ海王鬼へと突進。海王鬼「——っ!? こいつ…何と言うパワーか！」

正面から受け止めた海王鬼を、圧倒して押し退ける。

美穂「うわああああ——!!」

海王鬼「面白い…! 誠…面白いぞ! よもや海底で相撲を取ろうとは!」

美穂「ああああああ!! 破岩掌おっく!!」

突っ張り、ならぬゲッター金剛の岩をも砕く張りがメカ海王鬼に炸裂。

海王鬼「ぬうう…!!」

岩礁を幾つも破壊しながら、メカ海王鬼は吹き飛ばす。

美穂「ええええええくくい!!」

海王鬼「この…好きにはさせん!」

美穂「!?!」

メカ海王鬼の巻き貝の部分が回転。激しい潮流が発生し、ゲッター金剛の足を止める。

アーニヤ「ツツ…! ミホ…!」

美穂「大丈夫…大丈夫です! こんな事で…!」

ギョルルルルルウン…

美穂「ゲッター金剛は止まりません！」

ペダルに掛ける足により力を込め、フルスロットルのゲッター金剛が、激流や巻き上がりぶつかる岩も物ともせず敢然と突き進む。

海王鬼「こ、こいつ：!？」

そして渦の中心、メカ海王鬼の目前にそびえ立つ。

美穂「うおおおおお!!」

渾身の右拳がメカ海王鬼を海中高々と突き上げる。

美穂「炸薬！修羅・爆雷ツ!!」

合掌するように手を合わせたあと、自身の背後から取り出したのは、ゲッターミサイルの2回り以上のサイズがある、巨大な爆雷。修羅・爆雷。

美穂「てえええ：：やっ!!」

修羅・爆雷を回転をかけたスローイングの上、海中に打ち上げたメカ海中鬼にぶち当たる。

爆炎こそ生じないものの、その爆発の衝撃が海面に巨大な水柱を作った。

独眼鬼「何だ!?!海王鬼がやったか！」

未央「：：へへッ！隙あり〜！」

海中の爆発に気を取られたメカ独眼鬼に、パワーアームを伸ばして絡み抑える。

独眼鬼「くっ……！こいつ……仲間が気にならんのか!? 貴様の仲間がやられたのかもしれないのだぞ!!」

未央「へへへっ！仲間を信頼してれば、仲間の勝利を信じるってね！」  
みく「んで、アンタは自分の心配をした方がいいにやって話」

独眼鬼「何だと!？」

瑞樹「リサーチが足りないんじゃないかしら？ジャーナリスト失格よ。それじゃ」

未央「ゲッター3のこの姿勢から出る技と言えば！おりや!!」

メカ独眼鬼に組ついたまま、勢いよく回転を始める。

独眼鬼「おわあ~~~~!!?」

未央「必殺！大雪山おろしいいいい~~~~!!」

大雪山おろしで回転させた相手を、直上ではなく海へ向かって投げる。

未央「行ったよ！斬チーム!!」

美穂「はいっ！」

ザパアッ

海面へ急浮上したゲッター金剛がベストタイミングでメカ独眼鬼の目前へと出現し、ゲッター3へ殴り返す。

未央「よし来た！大雪山……！」

戻ってくるメカ独眼鬼の前に、ゲッター3を再び回転。

未央「：おろしパーンチ!!」

大雪山おろしの回転を加えた拳が、メカ独眼鬼の装甲を砕き、内部を破壊し、反対側へ貫き、最後は爆散して消えていく。

未央「よつしやあく！ブイツ！へへっ」

瑞樹「全く…、肝が冷えたわよ」

茜「でも！私達の勝利！やりましたね！美穂さん!!」

美穂「え…？あ、そ、そうだよね…。私が…、えへへ…」

奈緒「初出撃で初金星って、やっぱ才能あるんじゃないのか？あの新人」

加蓮「今日はみんな頑張ったって事でいいでしょ。あく早く帰ってシャワー浴びたい…」

奈緒「おいおい、まだ仕事は残ってるぞ。早く研究所を攻撃してる奴を何とかしないと…」

晶葉『それについてはもう心配いらない』

アーニヤ「アキハ！」

未央「心配いらなくて、どゆ事？」

晶葉『ああ、つい先程ミサイル攻撃している敵に対して、ゲッターロボGが発進した』

くくく 日本上空 くくく

百鬼兵『こちらのミサイル…反応消滅…』

巨雷鬼「消滅?!消滅とはどういう事じゃ!？」

百鬼兵『言葉通りです…!恐らく、撃墜されたものと…』

巨雷鬼「撃墜…?!確か早乙女研究所には、もう戦力は残されておらんはずじゃろう？」

百鬼兵『事実です!』

巨雷鬼「わ、我々も知らんゲッターが…!？」

百鬼兵『…!?!敵機反応…急速接近!その数…3!』

巨雷鬼「何い!？」

百鬼兵『は、速い…!あ、反応が1つに…!この反応は、間違いありません!』

巨雷鬼「どこじゃ!?!何処にもおらんぞ!」

百鬼兵『巨雷鬼様!雲の中です!!』

巨雷鬼「雲のつ——」

ズバアツ

巨雷鬼「うっ…!」



百鬼兵『き、巨雷鬼様!?!』

雲の中から現れた赤い機影が、メカ巨雷鬼の体を通り過ぎて、上体の下のミサイルとを真つ二つに両断する。

巨雷鬼「バカな…!?この儂がこうも…容易く…!」

百鬼兵『巨雷鬼様…!!?!』

呆気なく、爆発四散するメカ巨雷鬼。

百鬼兵『い、一体誰が巨雷鬼様を…!!?!』

百鬼兵2『あそこだ!太陽の…!』

夕刻が迫り、傾き始めた太陽を背に、輝く赤い装甲。

体躯は旧ゲッターよりも1回り大きい。

かな子「——…ここ、これが…本当のゲッターロボの性能…!?!」

凜「…そう言えば、かな子はゲッター線駆動のゲッターに乗るのはこれが初めてだったね」

凜「正直、私も驚いてるけど…」タラア…

卯月「これが、新しい力…ゲッターロボG…!」

卯月「——ゲッター…ドラゴン!!」

百鬼兵2『ど、どうするんだ!?!』

百鬼兵『決まってるだろ！迎撃するんだよ!!』

百鬼兵3『俺達だけですか!?百鬼衆だつていないのに…!?』

百鬼兵『バカ野郎！分かんねえのか!?百鬼衆の力なしで、新型のゲッターを倒したとなりや…俺達や英雄だぜ！それこそ百鬼衆の仲間入りだつて夢じゃねえ!!』

卯月「向こう、動きませんね…」

凜「きつとこつちにいきなり出てこられて混乱してるんだ。やるなら今だね」

卯月「分かってます！——マッハウイング!!」

ゲッタードラゴンがたなびくマントの翼を開き、メカ要塞鬼に迫る。

百鬼兵3『ひいっ！く、来る…!!』

百鬼兵『は、早く迎撃…！急げ!』

かな子「う、動いた!」

卯月「任せてください!」

メカ要塞鬼から撃ち出されるミサイルの雨の中をヒラリと躲して、ゲッタードラゴンは飛ぶ。

百鬼兵2『な、何て機動性だ!』

百鬼兵『…か、艦載機を出せ！艦載機に迎撃させるんだ!!』

凜「またゾロゾロと…出てきたね」

卯月「大丈夫です！このゲッタードラゴンなら……！」

飛んできた百鬼戦闘機を引き付けるように飛び、縦に横に、急上昇急降下を繰り返し、戦闘機群を翻弄する。

百鬼パイロット『な、何だあの機動は!? 一体どうやって飛んでやがんだ!?』

卯月「…今ですね」

卯月「ダブルトマホークツ!!」

素早く、肩からトマホークを抜き打つ。

卯月「ブゥーメラン!!」

瞬時に迫る戦闘機群に振り返り、トマホーク2本を投擲。追ってきた戦闘機群を一網打尽にする。

百鬼兵2『せ、戦闘機隊…全滅……!』

百鬼兵『バカな……! 人間だぞ!? 人間が造った兵器なぞに……!』

百鬼兵3『さ、最初から無理だったんだ……! 性能が違い過ぎる……!』

百鬼兵2『し、新型ゲッター…本艦に接近……!』

百鬼兵『!? …うわああ!!』

メカ要塞鬼全体に走る振動。それだけで、ゲッターが取りついたので分かる。

百鬼兵3『ひ、ひい……! ゲッターロボだあ!!』

ブリッジの目の前に大きくそびえる、ゲッタードラゴン。

卯月「——スピンカッター！」

百鬼兵『うひゃああ!!』

ゲッタードラゴンの腕のカッターがブリッジを破壊。幾人かの百鬼兵クルーが外へと投げ出される。

凜「卯月、流石に可哀想になってきたよ。これで終わりにしてあげよう」

卯月「…はい。ゲッター…！」 キュオ…

百鬼兵「ひっ！お助け…——」

卯月「ビィーーム!!」 カッ

至近距離で放たれたゲッタービーム。

その威力はメカ要塞を容易く貫き、彼方へと真つ直ぐ伸びていった。

動力部をも焼き付くされたメカ要塞鬼は、爆炎の華となって、黄昏の空に大輪の華を咲かせた。

~~~~ 早乙女研究所 管制室 ~~~~

莉嘉「やったあ〜☆ゲッターロボ大勝利〜！」

主任「つたく、無茶な戦い方しやがる…。まあた整備が大変じゃねえか」

李衣菜「そう言う割りに、顔が綻んでますよ、大将？」

主任「……バカ野郎！ゲッターGが一応でも動いてくれて安心してんだよ。それよりも、今夜も徹夜で作業だからな。覚悟しろよ」

李衣菜「お、女の子に野郎って……。ってか大将？また徹夜って、私これでもアイドルなんですけど！大将？大将く!?」

美嘉「ま、一先ず安心だね。それじゃ莉嘉、みんなを迎えに行こっか？」

莉嘉「うん！」

早乙女「……」

—— 早乙女私室。

早乙女（ゲッターロボG……。何とか完成したか……）

早乙女「……」

早乙女「ゲッター……今のタイミングでゲッターGを完成させたのは、我々を守るためか？我々人類を……」

早乙女「何の為に？……お前に辿り着けば、それが分かるのか？」

早乙女「——真ゲッターロボ」

つづく

第10話 『その名はロッキング・ガールズ!』

~~~~~ 都内 ~~~~~

皆さんこんにちは！私、多田李衣菜です。

ロックなアーティストを夢見て、憧れていた芸能界。

ロックなんていいなあ、なんて、ぼんやり考えていただけの、ゲッターパイロット見習いをしてるごく普通の学生でした。

それがついこの間、ロックなアイドルとしてデビューして、また新たな転機が訪れようとしています！

—— プロダクションビル。

李衣菜 「おはようございます！」

慶 「あ、李衣菜ちゃん〜！お早う御座います！」

李衣菜 「あ、ルキさん！どうも！」

慶 「もう〜李衣菜ちゃんまで…、その呼び方やめてくださいい〜!!」

李衣菜 「あはは！いいじゃないですか。可愛いですし」

慶 「可愛いって…。これでも私、李衣菜ちゃん達のトレーナーなんですけど…」

李衣菜 「分かってますよ。…あの、今日は…」

慶 「あ、はい。話は聞いてます。どうぞこちらへ!」

李衣菜 「はいっ!」

李衣菜 (いよいよかあ…。ちよつと緊張するな…)

慶 「着きました。こちらですよ」

李衣菜 「は、はい!」

慶 「ここを今日から、控室として使って下さいね!…つて言っても李衣菜ちゃん達は、あんまりここ使いませんかね…」

李衣菜 「ありがとうございます!…あの、他の2人は…」

慶 「ふふつ、もう来てますよ!それじゃあ頑張ってください!」 スタスタ

李衣菜 「そっか、もう来てるんだ…」

李衣菜 (私は今日、ここで…——)

ガチャツ

莉嘉 「こつちも美味しく!やっぱかな子ってお菓子作るのが天才だね☆」

かな子 「ほ、本当?!?よかったあ。こつちは何時もと味付け変えてみたんですよ」

李衣菜 (かな子と莉嘉の2人と、ユニットを結成します!)

—— 数日前。

くくく 早乙女研究所 格納庫 くくく

李衣菜「お疲れ様でした〜！」

古田「あ、李衣菜ちゃん、お疲れツス〜！」

スタスタ

奈緒「おーつす。だいぶ作業着が似合うようになってきたじゃんか」

李衣菜「…冗談やめてよ。これでも一応、アイドルやってるんだから。…ああ、すっかり油臭くなっちゃった。早くシャワー浴びたい…」

加蓮「あ、今日はあっちでも仕事なんだ？」

李衣菜「うん。つて言っても、今日はレッスンだけだけど。今度また小さいライブハウスでライブ出来る事になったしね」

奈緒「へえ〜。アタシよりアイドルしてんじゃん」

加蓮「アタシ達、学校終わったら基本、こっちで待機だしね」

奈緒「ホントたまーにレッスンとか仕事入るくらいでさ。あくあ、アタシもステージの上が懐かしくなってきたな〜」

李衣菜「ははっ。でも、大変だよー？明日は久々に学校だし。ここで好きにやらせてもらう以上、アイドルの仕事にも手を抜かないってのは、プロデューサーとの約束だから仕方ないけど…」



加蓮「そう言えば、訓練の合間に卯月や瑞樹さんとかに学校の課題みてもらってたっけ？」

李衣菜「授業に遅れないようにね。でも、不安だなく…」

かな子「皆さま、お疲れ様です。お茶にしませんか？」

莉嘉「休憩だよ☆」

主任「お、かな子ちゃん。もうそんな時間か」

主任「おう！お前えら!!休憩だ！一息いれるぞ!!」

整備班一同「はくくいつ!!」

主任「…つたく、こんな時だけ元気な奴等だぜ」

李衣菜「かな子、それに莉嘉も2人共すっぴんここに馴染んでるって感じだね」

奈緒「あの2人が、揃ってお菓子を持ってきたら、それがこの作業員の休憩時間、つ

てなってるくらいだしな」

李衣菜「ん…?って言うか、奈緒達が今のタイミングでここに来たのって…」

加蓮「あつはは♪細かい事は気にしない、気にしない」

かな子「李衣菜ちゃん達も良かったらどうぞ♪たつくさん、用意してありますから」

奈緒「お、サンキュー」

加蓮「ありがと」

莉嘉「今日のは、アタシが作ってるのも混じってるよ☆見分けられるかな？」

奈緒「お、ホントか？」

加蓮「全然分かんない。上達したじゃん」

莉嘉「えへへ……♪そうでしょ？」

かな子「はい。李衣菜ちゃんも」

李衣菜「え、あ……いや……、私はこれからレッスンだし……シャワー浴びて着替えたいから、いいかな……？」

かな子「え……？……そうですか……」 シュン……

李衣菜「あ……ああ……やっぱーっだけ！別に、そんな急いでないし！」

莉嘉「あはは☆リーナ弱い！」

李衣菜「莉嘉あ！ちよ……弱いとか、そんなんじゃないし……。これは……！！！」

新P「李衣菜……。お前まだこんなトコにいやがったか」

李衣菜「うえ……！ぷ、プロデューサー！？どうしてこんなトコまで……！」

新P「そりや、待ち合わせ時間過ぎてもお前が来ねえから、迎えに来たんだから」

李衣菜「うええ！？もうそんな時間……！？シャワーは……！」

新P「んな時間ねえよ。お前が居残りレッスン希望ってんなら、それでも構わねえが」

李衣菜「居残り……！？家に帰って課題やる時間なくなるの嫌だなく……。せめて、着替え

だけでも!」

新P「どうせあつちでジャージに着替えんだからいいだろ。別に」

李衣菜「あ、油臭いままで男の人と小1時間車の中って、女のプライドが許さないんですー!」

新P「女…。女ねえ…」

李衣菜「つ…!どこ見て言ってますかー!」 ガバツ

新P「つと悪い。それはお前のファンに失礼だったよな…」

李衣菜「このつ…!」

奈緒「ほらほら、着替えんだろー。早く更衣室行かないと、ホントに時間なくなるぞー?」

李衣菜「うう…!でもお…」

かな子「まあまあ落ち着きましょう?ほら、甘いものでも食べて」

莉嘉「こそ。カリカリするのよくないよ?」

李衣菜「私はカリカリ何てしーないー!って言うかな子は、さつきから私の口にお菓子をねじ込もうとしないでえ〜!」

新P「……ふむ」

かな子「まあまあ、美味しいから大丈夫だよ〜」

李衣菜 「それ理由になつてな…モガモガ」

莉嘉 「あはは☆リーナリスみたい〜！」

李衣菜 「見てないで助け…！死んじやう！お菓子で溺れるから〜！！」

新P 「…よお、お前えら」

かな子 「？ はい？」

李衣菜 「モガモガ…」

莉嘉 「何〜？」

新P 「ユニットを…組んでみねえか？」

—— そして現在。

~~~~~ 夜 Gチーム待機室 ~~~~~

卯月 「——…それで李衣菜ちゃん達とユニットを…」

凜 「前々から思つてたけど、卯月のプロデューサーつて変わつてるよね。センスと

言うかきつかけと言うか…」

かな子 「あはは…。それで今日、顔合わせだったんです。仲良く出来るといいなあ」

凜 「でも確か、莉嘉は2人と担当違ったよね？」

かな子 「はい。その辺りはプロデューサーさんもちゃんと確認して、許可とつたらし

いですよ」

卯月 「莉嘉ちゃんのプロデューサーは何て？」

かな子 「『ウチのアイドルが有名になる分は何してもいい』らしいです」

凜 「随分と器の大きいプロデューサーだね…」

卯月 「でも、遂にかな子ちゃんもユニットデビューですか…」

凜 「研究所関係者でのユニットは、百鬼帝国が襲来した時も融通が利くから…、プロデューサーも、それを考えて選んだのかな？」

卯月 「そ、それだけじゃないと思いますよ？」

かな子 「……」

卯月 「？ どうかしましたか？ かな子ちゃん」

かな子 「…はい。ユニットでライブなんて、私初めてで…。卯月ちゃん達のライブで、バックでなら何回か踊ったこともありませうけど…」

凜 「メインで合わせるのとじゃ、全然違うから。不安があつて当然だよね」

かな子 「私もそうですけど、李衣菜ちゃんも。ずっとアイドル活動はソロでしたから…」

卯月 「いきなり合わせてくださいって言っても、難しいかもしれませぬ…」

かな子 「はい…」

バアンツ

未央「話は聞かせてもらったよ!!」

凜「未央。盗み聞き?」

未央「出て来て早々盗み聞き扱いとは相変わらずハードだねえ、しぶりん。私はみくにゃん達との訓練の帰り。通りがかったのは、ホントにまたまだよ?」

かな子「そ、それで未央ちゃん!あの…聞かせてもらったって…」

未央「ふっふっふっふっ…!任せなさい!私に良い考えがある!」

—— シミュレーター室。

李衣菜「で、未央の鶴の一声で集まった訳だけど…」

莉嘉「スゴイ!ホントにアタシがシミュレーター使つて良いの?」

未央「もっちゃん!早乙女博士から許可はもらつてるよ。みほちー達も最近の実機での訓練が多くなつてきたから、あんまりシミュレーター使わないし」

凜「あれから一日足らずで…。行動力だけはあるんだから」

未央「そりゃ、可愛い可愛い後輩の為ですから!…つて言うより、行動力”だけ”つてどういう意味?」

かな子「…確かに、3人の息を合わせるには、合体シミュレーターは最適だと思いますけど…」

卯月「不安ですか?」

かな子「…ちょっとだけ」

卯月「それなら大丈夫です！私達も、最初は3人…ニュージエネの3人でいたから合
体できたんです！」

凜「あの頃の私達とは、状況が真逆だけどね」

未央「一緒一緒！ゲッターの中でもステージの上でも、重要なのはコンビネーション
とチームワーク！ってね☆」

莉嘉「ねーねー難しい話は後でも良いからさ。もう入っていいでしょ？アタシ、早
くコレやってみたい！」

李衣菜「莉嘉？いくらシミュレーターだからって、気を抜いて掛かると痛い目見る
からね？」

莉嘉「ええく！そんなのやってみないと分かんないじゃん！」

李衣菜「分ーかーる。私だって、最近やとまともに飛べるようになったんだから…」
未央「まあまあ、2人共落ち着いて。今日は肩慣らしって感じだから、シミュレータ
ーの感覚を掴めればって事で」

卯月「とりあえずやってみましょう！」

莉嘉「わーい☆」

李衣菜「最近やとと飛べるようになった、その実力、見せてやるんだからあ！」

—— 数分後。

李衣菜『な、何で…!?!』

スクリーン「CRASH」

かな子「だ、大丈夫ですかあ〜?」

莉嘉「リーナア〜また墜落〜?これじゃあ合体訓練始められないよ〜?」

李衣菜「うう〜…どうしてこんな…」

凜「……今の搭乗割りつてどうなつてたつけ?」

卯月「え〜…つと、ちよつと待つてください…」

卯月「かな子ちゃんか3号機、莉嘉ちゃん1号機、李衣菜ちゃんが2号機です」

凜「……」

未央「リカは1号機と相性良いみたいだねえ。2号機もそこそこ…。パイロットにするわけじゃあないんだけど」

凜『李衣菜、何を力んでるのか分からないけど、動きが固いよ。もつとゲットマシンごとの性能の違いを把握して……』

李衣菜「そんなの分かつてるよ!ただ、今のは調子が出なくて…!」

凜『相手は李衣菜の調子に合わせてくれないよ。相手を想定した訓練じゃないけど、チームに迷惑掛けてるって自覚持つて』

李衣菜「う……」

かな子「わ、私は気にしてませんから……! ゆっくり、落ち着いてやりましょう?」

未央『甘いよみむっち! デビューまでは間がないんでしょ? ここでのんびりしてたら、本格的なダンススレススンが始まる前に本番だよ?』

かな子「それは……:そうですけど……」

李衣菜「むうう……! って言うか第一! どうして莉嘉がそんな上手く操縦出来るのさ?! 納得いかない!」

莉嘉「ふっふっふ! それはま、才能って事かな? へへん☆」

李衣菜「はあ? 何それ?!」

未央『実際、私達だつてぶつつけ本番で飛ばしたしね?』

卯月『美穂ちゃんとか、茜ちゃんもゲットマシンの操縦は躓きませんでしたね……』
凜『そう考えると、ゲットマシンで墜落してる人って、そんな見た事ないかも』

莉嘉「じゃありーナが下手つぴ何だ?」

かな子「莉嘉ちゃん! 流石にそれは言い過ぎだよ!」

李衣菜「……:にさ」

卯月『李衣菜ちゃん?』

李衣菜「何さ何さ何さ! みんなして!」

かな子「り、李衣菜ちゃん。落ち着きましよう?」

莉嘉「そーだよ! ジョーダンじゃん!」

李衣菜「冗談!? こっちは冗談で墜落してるつもりじゃないんだよ! 一体このシミュレーターで何個自分の死体の山築き上げたと思ってるの!?!」

かな子「誰もそんな話してませんよ!」

李衣菜「それをさ! たった今シミュレーターに乗ったばつかみたいのが簡単に動かしで! それが才能だつて言うんなら、莉嘉がゲッターに乗つて戦えばいいじゃん!」

卯月『李衣菜ちゃん…』

凜『本気で言ってるの、それ? 莉嘉にそんな事、させられると思ってる?』

李衣菜「…ふ、ふんだ! どうせ私なんて、ずっと一人で飛べもしない能無しだよ…! 悪かったね! 余計な時間とらせちやつて!」

ガタツ バタンツ

かな子「李衣菜ちゃん!」

未央「しくぶりん…。煽つてどうするのさ?」

凜「…ごめん。未央が考えて準備してくれたのに、台無しにしちやつたね」

未央「うゝゝん、それは別に。それよりも…」

莉嘉「…アタシ、悪いこと言っちゃった…?」

未央「冗談って言うのは、良くなかったかもね」

卯月「李衣菜ちゃん、時間を見つけてはここにいて、1人で猛特訓してましたから…。それで、やっと最近飛べるようになったんです」

未央「お、しまむーよく見てる」

卯月「えへへ…。頑張ってる人って、応援したくなりませんか？私も、出来ないままにいるのって嫌ですから、気持ち分かるんです」

未央「流石、ウチらの頑張る代表は言う事が違うね」

凜「頑張って頑張って…。その成果を、目の前で簡単に越えていかれたら、それは嫌にもなるよね」

莉嘉「……」

莉嘉「アタシ、謝ってくる！」

バタンツ タツタツタツ

かな子「莉嘉ちゃん!」

卯月「かな子ちゃん」

かな子「? はい?」

卯月「着いて行ってあげてください。喧嘩って気まずいですよ」

かな子「……」

卯月「誰か、間に入って手を繋いであげる人が必要なんです。かな子ちゃんなら、きつと出来ます♪」

かな子「…はいっ！」

ガチャツ　タツタツ

未央「…いやあ、青春だねえ〜」

凜「そうやって、達観したみたいなさ言つてると、すぐ老けるよ」

未央「それちよつと酷くない？未央ちゃんにはまだまだ先の明るい未来があるんですから！」

凜「そうだね。先が明るすぎて前、見えてないもんね」

未央「しぶりんはさ、この1年で煽るの上手くなったよね？」

卯月「……。もう〜2人共！あつちが仲直りしそうな時に、こつちで喧嘩しないでくださいよ〜!!」

〜〜〜　早乙女研究所　敷地内　〜〜〜

李衣菜「…グスツ」

リーナードコー？

李衣菜「…ン…。莉嘉？」

莉嘉「あ、いたー☆こんな所何してんの？」

李衣菜「……何でもないよ。ほっといて」

莉嘉「……」

李衣菜の隣に、体育座りで腰を落とす。

李衣菜「な、何……?」

莉嘉「あのねー。アタシのお姉ちゃんってスゴいんだー☆」

李衣菜「……は?」

莉嘉「お掃除も洗濯も、ご飯だって作れて、ギャルでアイドルで。何でも出来るの!」

李衣菜「はあ……」

莉嘉「そんなお姉ちゃんがアタシの自慢で、お姉ちゃんみたいになりたいんだ! アイドルになったのもそれが理由!」

李衣菜「そ、そうだったんだ……」

莉嘉「でも出来ないことも多くって、時々嫌になる事もあるんだ。どうしてお姉ちゃんみたいに出来ないんだらうって」

李衣菜「……莉嘉……」

莉嘉「だから、初めてお姉ちゃんがやった事もないような事で褒められて、嬉しかったんだ! アタシだって出来る事があるんだって」

李衣菜「……」

莉嘉「だから…その…、ごめんなさい！アタシリーナの気持ち、全然考えてなかった！」ペコリ

李衣菜「な…！そんな謝らないでよ！莉嘉は何も悪くないじゃん…！」

莉嘉「でもお…」

李衣菜「莉嘉は悪くないんだって！誰だって褒められたら嬉しいし、喜ぶ事が悪い事だったら、誰も感情出せなくなっちゃう！」

莉嘉「リーナ…」

李衣菜「悪いのは…私！自分が出来ないからって莉嘉に嫉妬して。ロックになりた
いって言ってるくせに小さい事気にして…。おまけに莉嘉に…謝らせて」

李衣菜「私の方こそごめん！気分悪いよね？隣で不貞腐れたりされたら」

莉嘉「そんな事ないよ！アタシだって、リーナの気分悪くさせちゃったんだから…！」

李衣菜「あはは…。やっぱり私に、ユニットを組むのはまだ早かったのかも。メン
バーの気持ちも分からないなんて、これじゃあまだまだ…。」

「そんな事、言わないでください！」

李衣菜「…え？」

莉嘉「かな子…」

かな子「どうして…どうしてそんな事言うんですか!？」グスツ

かな子「私達、まだ始まったばかりじゃないですか! それなのに、そんな簡単に……諦めちゃうんですか!?! 諦められるんですか!?!」

李衣菜「……それはっ」

かな子「私は嫌です! まだ結果も出してない、何の足跡も残してない……。そんなの認められるわけじゃないじゃないですか!」

かな子「1人で勝手に結論だして、勝手に決めつけないでください! そんなの……そんなのロックじゃないです!」

李衣菜「ロック……!」

かな子「だから、だから……私は……ウウ……グスツ……」

莉嘉「かな子く? 一旦落ち着こ? ね?」

かな子「うわあああああん!! 莉嘉ちゃああああくくん!!」

莉嘉「きゃっ……! かな子鼻水……! やっ……ちよつと誰かティツシユ……ティツシユくく!!」

—。

かな子「ズズツ……。す、い、ま、せ、ん……。卯月ちゃんから、李衣菜ちゃんと莉嘉ちゃんの間になるようにって言われて来たのに、全然出来ませんでしたく……」

李衣菜「いやあ何て言うか、私達も冷静になれたし、十分だと思うよ? うん」

莉嘉「そーそー。結果オーライだつて！」

かな子「そうは言つても〜:~!」

李衣菜「雨降つて、地面がなんとやらつて奴?ともかく、かな子もこれ以上気にするのなし!」

かな子「……」

李衣菜「簡単に諦めるのはロツクじゃない…。かな子の言うとおりでよ」

かな子「李衣菜ちゃん……」

李衣菜「私、2人の事全然考えてなかった。……ごめん!」

莉嘉「アタシも!みんなで支え会うのが、ユニットだもんね!……ごめんなさい!」
かな子「いいんですよ。分かってくれたら……。これから3人で頑張りましょう?」

李衣菜「うん!」

莉嘉「ね、早くみんなの所に帰ろ?」

李衣菜「そうだね。卯月達にも、謝んなきゃ」
グオオオオオオ……

莉嘉「!? な、何!?!」

李衣菜「な、何かの…唸り声みたいな…」

かな子「あ、あの…!」

李衣菜「か、かな子…どうしたの!？」

かな子「その…今の音は…」

莉嘉「何か知ってるの!？」

かな子「知っているとどうか、その…」

李衣菜「何!?!はつきり言ってます!」

かな子「私の…お腹です」

李衣菜「…は?」

かな子「その…、みんなで仲直りして…安心したら…。その、お腹空いちやっして…」

~~~~~  
百鬼要塞 ~~~~~

胡蝶鬼「……」

鉄甲鬼「胡蝶鬼…。何を見ている?」

胡蝶鬼「見て分からないかい?人間社会へ偵察に出た、スパイが持って帰った映像さね」

鉄甲鬼「それが?」

映像『——輝く世界の魔法♪』

胡蝶鬼「ああ。連中も面白い事してるもんだ、なんてね」

鉄甲鬼「くだらん。生きてる上で、何の価値にもならん事だ」

胡蝶鬼「そうかい？戦いに明け暮れてばつかの連中より、よっぽど素敵じゃないのさ」  
鉄甲鬼「胡蝶鬼……。貴様まさか、人間に感化されたのではあるまいな？」

胡蝶鬼「まさか。アタシだって百鬼衆の1人だよ。こんな風なキラキラした美しいものだって、何時だって破壊してやるさ」

鉄甲鬼「……。なら、良いのだが」

胡蝶鬼「ただね。そう、美しいと思つたのさ。アタシだって歌を歌うし舞いも踊るけど、これはそんなのとは違う」

鉄甲鬼「違う……。何が違うと言うのだ？」

胡蝶鬼「アタシの知つてる舞みたいに、厳格じゃない。神聖さもない。賑やかで、華やかで何より——」

胡蝶鬼「踊つてる奴も、見てる奴も、みんな笑つてるだろう？」

鉄甲鬼「笑顔……。それが何になると言うのだ」

胡蝶鬼「ここも、だいぶ静かになつちまつたもんさ。……なあ、鉄甲鬼」

鉄甲鬼「……何だ」

胡蝶鬼「アンタ、最近笑つたのって何時だい？」

鉄甲鬼「……」

胡蝶鬼「戦士として、勝つた負けたじゃない。1人の鬼としてさ」

鉄甲鬼「それは……」

胡蝶鬼「ふっ……。そんな風に、笑ってみたいもんだねえ……」

映像『——ほら、笑顔になりたい人♪いつせーの! 唱えてみよう♪——』

~~~~~ 数日後 都内某所 ~~~~~

かな子「いよいよ本番ですね……」

李衣菜「……」

かな子「李衣菜ちゃん、緊張してます?」

李衣菜「……うん」

莉嘉「えー何でー!? リーナ歌も出してライブだつて一回やったんでしょー?」

李衣菜「そんな事言つたつて……ライブしたのだから一回だけだし、大体こう言うのつて、毎回緊張するものなの!」

莉嘉「そんなあ〜! アタシステージの経験ないから、李衣菜を頼りにしてたのに……!!」

李衣菜「わ、私じゃなくたって、かな子だってステージ上がり慣れてるでしょ?」

かな子「え……わ、私もステージって言っても後ろで踊つただけで……。メインでステージに立つなんて初めてだよ〜!」 アワアワ

新P「よ、テンパってるな。お前ら」

莉嘉&李衣菜 「プロデューサー!!」

かな子 「卯月ちゃんに、凜ちゃん達も」

卯月 「3人共、昨日あまり寝られてないみたいでしたから」

凜 「ちよつと様子見。大丈夫?」

未央 「差し入れも持ってきてあげたよ!」

かな子 「あ、ありがとうございます…!」

凜 「かな子にはいつも差し入れもらってばっかだしね」

卯月 「たまには、私達から恩返しです!」

莉嘉 「アタシ達ももらっていいの?」

未央 「モツチロン!」

李衣菜 「何かかな子がユニットメンバーで助かったかも」

新P 「それで?大丈夫なのか?出来そうか」

かな子 「:ちよつぱり緊張してます」

卯月 「でも、合体シミュレーターで特訓始めた日から、ぐんと合ってきたじゃないですか!」

未央 「正確にはリーナ達がケンカ終えて帰って来た辺りから、ね」

李衣菜 「ケンカって、それほどの事じゃないですよ…」

凜 「そうなの？それじゃあ、あれは何？」

李衣菜 「あれは……そう！デイスカウト！メンバーで親睦を深めるって言うか……」

未央 「それを言うならデイスカッションでしょ？」

李衣菜 「……」

莉嘉 「あはは☆リーナカッコ悪い」

李衣菜 「う、うるさい……誰にだって失敗はあるでしょー？」

かな子 「もう……。こんな時にやめてください！」

新P 「おいおい……。本番前からやめてくれよ」

未央 「ホントツト、すっかり仲良しになったよねえ」

凜 「そうだね。あのくらいなら私達も日常茶飯事だしね」

卯月 「ホントですわね。それが理由で私が恐竜帝国に拐われたり……。大変でしたわね？」

未央 「あ……。今更なんだけど、あの時の事……もしかしなくても怒ってる？」

卯月 「いえー？全然怒ってないですよ」 ニコニコ

未央&凜（卯月の笑顔が怖い——）

新P 「さーて、と。それじゃあ、本番前に緊張は解けたみてえだな？」

李衣菜 「……」

莉嘉「……」

かな子「…はい！」

新P「うし！お前らロッキング・ガールズの華々しいデビューだ！行つてこ……」

瑞樹「——大変よ！みんな！」

新P「な、何だ!？」

未央「瑞樹姐さん！」

凜「みくも。…2人は研究所で待機だったはずじゃ……」

みく「そこからゲットマシン飛ばしてきたにや！研究所が百鬼帝国に攻撃されてるの

！」

卯月「本当ですか!？」

凜「…穏やかじゃなさそうだね……」

瑞樹「今ネオゲッターとゲッター斬が出撃して応戦してるわ」

みく「けど、むこうの百鬼メカも2体いて、すごく強くて押され気味なの！」

未央「そんな！それじゃあ私達もすぐに出撃しないと！」

瑞樹「ダメよ。旧ゲッターの性能では、今からだと間に合わないわ」

未央「そんな……！」

瑞樹「もし、間に合うとすれば、それはゲッターGの……」

凜 「ゲッターライガーのスピードってわけ?」

瑞樹 「……」 コクリ

みく 「今、研究所から、ネオゲットマシン運搬用の輸送車を使ってゲッターGのゲットマシンをこっちに運んでる。後5分くらいで到着のはずだよ」

卯月 「でも……! かな子ちゃんはこれからステージが……!」

瑞樹 「作戦は一刻を争うのよ! こればっかりは……待つてあげられないわ……」

卯月 「そんな……!」

かな子 「……私、行きます!」

卯月 「……え!?!」

凜 「……ホントにいいんだね?」

かな子 「早乙女研究所は、日本の……ううん、この世界の希望です。……それは、分かっていますから」

莉嘉 「そんな……。アタシ達のライブは? どうなっちゃうの!?!」

かな子 「……ごめんなさい」

莉嘉 「……ヤだ。ヤだヤだヤだ!」

李衣菜 「……ダメだよ、莉嘉。我が儘言っちゃ……」

莉嘉 「だってえ……! 初ステージなんだよ? デビューライブなんだよ? ここまでみんな

で頑張ったんじゃない！諦められるわけじゃないよ!!」

李衣菜「莉嘉…」

「やつほー★何か慌ただしいけど、トラブル?」

卯月「…?…えー…つと…」

新P「おい。ここは関係者以外立ち入り禁止だぞ」

?「ふーん?それじゃあ…——」

帽子とサングラスを外す。

?↓美嘉「これなら、顔パスだよね★」

新P「お前えは…」

莉嘉「お姉ちゃん!」

美嘉「ライブ前の妹応援しに来たら、何かゴタゴタしてるっばいし?…あ、ごめんそ

こちよつと借りるね」

かな子「は、はい…!」

美嘉「メイクセットは…ちよつと足りないけど、アタシの今の手持ちと合わせればな

んとかなるか」

未央「美嘉姉、何してるの?」

美嘉「うん?ちよつとね」

凜 「まさか、ステージに立つつもりじゃ…」

美嘉 「う〜くん…やっぱこのカツコ、変装用だし、地味かな?」

新P 「地味とか、そう言う問題じゃねえだろ。第一、お前が歌う曲だつて用意してねえのに、どうやって間を持たせるつてんだ」

美嘉 「曲がなくても、マイクがあれば歌は歌える。そうでしょ?」

新P 「そりゃあ…」

美嘉 「莉嘉達のステージは、アタシが出て場を繋ぐ。かな子や卯月ちゃんは、その間にちやつちやと倒してきちやつてよ★」

かな子 「でも…、私に戻ってくるまで、一人で場を繋ぐなんて…」

美嘉 「ふふつ、一人なんかじゃないよ」

莉嘉 「え…?」

「あ、あの…!」

卯月 「響子ちゃん…智絵里ちゃん…!」

未央 「あーちゃんまで…!みんな、来てくれてたんだ…!」

藍子 「大切なお友達のライブですから。応援くらい駆け付けますよ」

響子 「悪いかなつて、思ったんですけど、話はここで聞かせてもらいました!」

智絵里 「あの…、私達にも、何かお手伝い出来ること、ありませんか?させてください」

い！」

美嘉「ね？」

李衣菜「みんな……！」

莉嘉「ありがとう!!」

美嘉「ロッキング・ガールズのステージはアタシ達が整える。だから、卯月達は早く仲間を助けに行つてあげて？」

美嘉「こつちにだって、心強い仲間がいるんだからさ★」

卯月「——はいっ！」

瑞樹「そろそろ貴女達のゲットマシンが着く頃よ。行きなさい！」

凛「うん。戦いを終わらせて、必ず帰つてくる。みんな、それまでかな子を借りるよ」

かな子「必ず……必ず帰つてきますから……！」

莉嘉「うん！頑張つて！かな子☆」

李衣菜「バッチリロツクに、決めてきなよ！」

かな子「はいっ！」

卯月「ゲッターGチーム、出撃です!!」

タッタッタッ

美嘉「さてと、それじゃあウチらで軽く、打ち合わせでもしよっか？」

みく「今回ばかりはみくもアイドル猫ちゃんとして手を貸すにや！」

瑞樹「本来はこつちが本業だもの、腕が鳴るわね」

未央「アイドル未央ちゃんもサプライズ登場〜！これはステージも大盛り上がり間違いないですよ〜！」

響子「いつそ会場にお客さんが入りきらないくらいに、私達のファンで埋め尽くしちゃいましょう！」

藍子「それで、もつとたくさんの人にロックン・ガールズの事を、知ってもらおう機会を作つてあげましょう」

智絵里「私に何が出来るかなんて分からないけど…。みんな、頑張ってるんだもん。私だって、精一杯頑張らなくちゃ…！」

美嘉「そ。あの子達があタシ達を守つてくれる分、しっかりあの子達の場所を守らなくっちゃ！」

李衣菜「美嘉…さん…！私達も…」

美嘉「ダーメ★」

莉嘉「でも…！」

美嘉「今ステージに上がつちやつたら、ステージの新鮮さがなくなつちやうでしょ？」

李衣菜&莉嘉「……」

美嘉「それは、アンタ達2人が、かな子と3人一緒に経験しなきゃいけないことだから」

美嘉「だから2人は、かな子の事信じてちゃんと待つてあげな？」

李衣菜「…分かったよ」

莉嘉「アタシ達、舞台袖からお姉ちゃん達の事応援してる！」

美嘉「うん！それだけでも心強いよ」

美嘉「さて、と…」

新P「…スゴいもんだな」

美嘉「何？アタシのファンになっちゃった感じ？」

新P「お前がそうやって動いてくれるのは、正直に助かる。妹のために、そこまでしてくれるなんてな」

美嘉「う〜ん…。それもあるけど…——」

新P「あるけど、…何だ？」

美嘉「やつぱ悔しいじゃん？百鬼帝国なんか、アイドルにとって大切なデビューラ
イヴを台無しにされるなんて」

新P「……」

美嘉「それは多分、今ここに集まって、助けようとしてくれるみんなが思ってることだから。アタシが特別なんじゃないよ?」

美嘉「アイドルだったら、当然の事★」

新P「アイドルなら当然、か…。やっぱすげえよ。お前ら」

美嘉「あはっ★ありがと♪」

美嘉「それじゃあみんな〜!」

アイドル一同「二……二」

美嘉「いきなりのステージで、リハもないしどう動けばいいかなんてみんなさっぱりだと思うけど、でも、みんなならやれるって信じてるから!」

みく「トーンにや!」

瑞樹「生の放送番組でも不測の事態なんていくらでもあったわ。このくらいお茶の子さいさいよ!」

響子「アイドルとしてなら、私だって負けてません!」

未央「みんなやる気だね。やろうよ美嘉姉!」

美嘉「うん!張り切って、いつも通り、いつも以上に!ステージを盛り上げていこう!!」

アイドル一同「二オーオー!!」

——屋外。

運転手「ゲットマシンがここから出るぞお！道開けるお!!」

警備員「歩行者の人も建物の中に退避してください！危ないから近付かないで！」

かな子「スゴい……」

凜「まるでモーゼの十戒だね」

卯月「ドライバーの皆さん！警備員の皆さん！ご協力どうもありがとうございます
!!」

運転手「何、スーパーロボットのパイロットで可愛い娘ちゃん頼みなんだ！どうつて事あねえよ!!」

警備員「ピンチエCDシングル買いました！応援します！頑張ってください!!」

卯月「ありがとうございます!!……—それではゲットマシン、出撃!!」

凜「……っ！」

かな子「!!」

ゴオツ

輸送車から発進したゲットマシンは直ぐに急上昇で高度を上げ、

凜「チェンジ、ライガーアアー!!」

空中で1つに合体。ライガー号の蒼いカラーリングを基調とし、しなやかに細く伸び

る手足。

左腕はドリル、ではなく金属がココナツのような形状をしたグラブ。右手は五指の手指になっている。

背中から左右のやや斜めに伸びるウイングの両端、ジェットノズルから火を放ち、ゲッターライガーが空中で一度静止する。

オオ!? ワアアアア!!

卯月「時間がありません! 急ぎましょう、凜ちゃん!」

凜「分かっている! ここまでゲッターを運んでもらったんだ…!」

早乙女研究所の方向へゲッターライガーを加速させる。

凜「遅れた分は、ライガーのスピードで取り返す!!」

ギョーンッ

くくく 早乙女研究所 屋外 くくく

菜々「うひゃあ!」

ネオゲッターが横殴りに吹っ飛ばされ、山肌に激突する。

加蓮「菜々さん、大丈夫?」

菜々「へ、平気です! ウサミン星人は、打たれ強さが取り柄ですから!」

奈緒「なんかそのフレーズ久々に聞いたな…」

茜 「大丈夫ですか!? ネオゲッターチームの皆さん!」

ネオゲッターのフォローのため、ゲッター烈火が駆け寄る。

大輪鬼 「グヘヘ…」

飛竜鬼 「ヒヒヒ…!」

美穂 「私達しかいない時に、2体も百鬼メカが現れるなんて…!」

アーニャ 「Да…しかも、空と地上から…、とても неприятность…厄介です」

大輪鬼 「ヘヘツ…! コレが噂のゲッターの実力かよ? 俺1人でも十分だぜ!」

飛竜鬼 「何い! 大輪鬼、獲物を独り占めするつもりか!」

大輪鬼 「誰もそんな事言つてねえだろうがよ! お前には、一番の獲物をやるつてんだよ」

飛竜鬼 「ああ、成る程。そう言うことか」

メカ飛竜鬼が高度を上げる。

奈緒 「ヤロー…! 先に研究所を攻撃するつもりかよ!」

菜々 「晶葉ちゃん! 研究所のバリアは、あとのくらい保ちそうですか!」

晶葉 「エネルギー残量は8割程だ。が、これ以上長引けば、長くは保たんぞ…!」

!」

メカ飛竜鬼の投下した爆弾がエネルギーバリアに当たって爆ぜ、衝撃波が研究所を揺るがす。

加蓮「ともかく、こつちに話し合いをしてる余裕はなさそうだね…」

茜「研究所はやらせませんよー!」

ネオゲッターが立ち上がったのを確認して、ゲッター烈火が高度を上げ、メカ飛竜鬼に迫る。

菜々「茜ちゃん!?ここは協力を…!」

大輪鬼「おらよっ!」

菜々「きやあ!」

メカ大輪鬼の巨大な車輪のような腕が、ネオゲッターを激しく打ち付ける。

加蓮「菜々さん!話し合いの時間はないって言ったよ」

菜々「加蓮ちゃん、ありがとうございます!」

ネオベアー号に乗る加蓮の踏ん張りで、ネオゲッターは倒れず、数歩下がって踏み留まる。

奈緒「こーいう時は、こつちはこつちで片付けるに限るって!」

菜々「…それしかないみたいですね…!」

菜々「シヨルダーミサイル!!」

大輪鬼「おっと!」

結論後、即座に放ったショルダーミサイルは、メカ大輪鬼に命中にし、黒煙を上げる。
が、

大輪鬼「何だあ…?羽虫でも当たったか?」

菜々「ぜ、全然効いてないんですけどお!」

加蓮「相手が堅い…。ネオゲッター1じゃパワー足りないかもね」

菜々「そんなあゝゝ!」

大輪鬼「今度はこっちの番だあ!!」ギャルルウンツ

メカ大輪鬼は両腕の車輪を高速回転させる。

菜々「な、なな何ですかアレ!?あんなの聞いてないですよ!!」

奈緒「そりや、初戦の相手だしな」

菜々「あんなのに当たったら死んじゃいますよおゝ!」

加蓮「菜々さん!アタシと代わって!」

菜々「え?加蓮ちゃん!」

加蓮「力比べにはゲッター3が基本でしょ?ネオゲッター3で何とかしてみる」

奈緒「けど、相手は鬼だぞ?大丈夫か?」

加蓮「フフ…鬼もは虫類も一緒でしょ?菜々さん、早く!」

菜々「わ、分かりました……!」

菜々「オーブンゲエツト!!」

加蓮「ゲッターチェンジ!」

ズシンツ

大輪鬼「くらええ!!」

加蓮「っ!!」 ガシツ

回転する車輪を向けて突撃してきたメカ大輪鬼を、思いきりよく踏み込んで車輪に掴み掛かる」

大輪鬼「ほほう。このメカ大輪鬼にパワーで勝負を挑むとは……!」

加蓮「菜々さん! ネオイーグルの分のエネルギーをネオゲッター3の両腕に集めて!」

菜々「は、はい……!」

加蓮「奈緒は踏ん張り、ヨロシクね♪ここで力負けするわけにはいかないんだから」

奈緒「おう! って、割りと負担デカいぞコレー!」

加蓮「……。大丈夫、ほんのちよつとの辛抱だから……!」

ガキインツ

空中では、火斬刀を構えたゲッター烈火とメカ飛竜鬼がぶつかり合う。

飛竜鬼「コイツ…意外にやるな…！空中戦において右出るものは百鬼帝国にいないと言われた俺と、互角に渡り合うとは…！」

茜「空中戦を得意とするのは、ゲッター烈火も同じです！」

アーニヤ「ですが、このままでは…アー…！ジリ貧、です」

茜「何とか好転するきっかけは掴めませんか…！」

美穂「せ、せめて…あと一機ゲッターがいてくれたら…」

飛竜鬼「今だ！」

茜「っ！」

加速による突撃に、頭頂の角からの破壊光線を織り混ぜた光線を、ゲッター烈火の身を捻って躲す。

茜「斬魔光お!!」

飛竜鬼「そんなもの！」 ヒュンッ

茜「むう…やはり素早く動く相手に斬魔光は当たり難いですか！」

アーニヤ「いけません！相手に、距離をとられると…、こちらに有効手段が、なくなつて…！しまいます！」

茜「それもそうでした！では、死んでも距離はとらせません！」

美穂「死んだらダメだよ!」

ヒュウウウン…

加蓮 「…っ！そろそろ、マズイかも…」

奈緒 「あ、脚に感覚がなくなってきた…」

菜々 「加蓮ちゃん？奈緒ちゃん！若い2人が頑張っているのに…！その痛み、ナナが代わってあげられるのなら代わってあげたい…！」

大輪鬼 「グヘヘ…！そろそろ終わりか？ん？」

「加蓮、奈緒。お疲れ様」

大輪鬼 「むっ!!」

飛竜鬼 「何奴!!」

奈緒 「へ…へへ…。遅えーぞ…」

「ごめん。そこ、代わるよ」

加蓮 「こつちが場を持たせた分、後はしっかり頼んだよ…」

大輪鬼 「何だ!? 貴様ら、誰に話をしてる!？」

奈緒 「ハッ…！アンタには関係ないこつた！」

加蓮 「…あ。あっ!!」

大輪鬼 「ぬっ!？」

最後の力を振り絞るように、ネオゲッター3がメカ大輪鬼の両腕をかち上げる。

加蓮 「…オープンゲット！」

加蓮 「頼んだよ。凜！」

凜 「——ドリルアアアームツ!!」

ネオゲッターが分離して離脱し、右腕の五指が変形したドリルを構え、ゲッターライガーがその空いた空間に飛び込み、メカ大輪鬼の左腕を粉碎する。

大輪鬼 「ぎゃああ!?!き、貴様は…!」

茜 「ゲッターライガー!!」

凜 「ふうん? 頑丈そうな奴だと思ったけど、そうでもないみたいだね」

飛竜鬼 「コイツ…!」

卯月 「凜ちゃん」

凜 「マツハ・スペシャル！」

シュンツ

飛竜鬼 「な…! 消え…!?!」

大輪鬼 「後ろだ！」

飛竜鬼 「は…?」

凜 「遅いよ」

メカ飛竜鬼が振り返るより早く、その後頭部に左腕のグラブをぶち込み、メカ飛竜鬼

を地面へと叩きつける。

飛竜鬼 「カハツ……! コイツ……空中で俺より早く動けるのか……!?!」

凜 「正確には飛べるようになった分、ゲッター2より速度は落ちてるんだけどね」

飛竜鬼 「何だと……!?!」

凜 「時間がないんだ。そっちのヒョロいのは茜達に任せるよ」

飛竜鬼 「ヒョロ……!」

茜 「合点です!」

大輪鬼 「ぐう……! 貴様……! さつきは勢いをつけて俺の腕を破壊したんだろうが、そんな見るからに非力な奴に2度同じことはさせんぞ?」

凜 「……そう」

シユンツ

マツハ・スペシャルで、ゲッターライガールの姿が再び消える。

大輪鬼 「また後ろか!?!」

いない。

大輪鬼 「何処に行った!?!」

凜 「チエーン・アタック!」

大輪鬼 「上え!?!」

ジャララッ

ゲッターライガーのクラブが重石になった、左腕から射出された鎖が、メカ大輪鬼にまとわりつく。

大輪鬼「グオオオ!?!」

凜「力任せにやったんじゃ、簡単には解けないよ」

大輪鬼「小癩な〜!!」

凜「——はっ!」

大輪鬼「おお……!?!」

チェーン・アタックの鎖をしならせ、持ち上げ、メカ大輪鬼の巨体を岩肌へとぶつけた。

凜「こつちの見た目が非力なら……——」

大輪鬼「グフツ……」

凜「そつちは見てくれだけの、木偶の坊だね!」

茜「チェストオオ——!!」

飛竜鬼「ググツ……!」

両手に火斬刀を担い、肉薄するゲッター烈火を鬱陶しげに振り払う。

飛竜鬼「コイツ……突っ込むことしか頭にないのか!?!」

茜 「突っ込むだけとは失礼ですね!」

美穂 「そ、そうですね? 茜ちゃんも、ちゃんと考えることありますよね?」

茜 「もちろんです! 今日 of 晩御飯と、明日 of 朝御飯と…!」

飛竜鬼 「ただのバカかああ!!」

茜 「うわつと!!」

怒声と共に、打ち出してきた両腕のロケットアームを反射で躲す。

茜 「あ! 明後日の事まで聞かないでください!! そんな先の事まで分かりません!」

美穂 (…どうしよう、ホントにバカなのかも…)

菜々「加蓮ちゃん、疲れてるところ申し訳ありませんが、もう一踏ん張りです! 茜ちゃん達の援護を!」

加蓮 「分かってる。ゲッタートルネード!」

ネオゲッター3の首回りのファンが回転し、メカ飛竜鬼目掛け、巨大な竜巻が発生する。

る。

飛竜鬼 「フン! こんな一直線の竜巻如き…!」

加蓮 「フィンガーネット!」

飛竜鬼 「むっ?! しまった…!」

ゲッタートルネードを躲したメカ飛竜鬼を、放射状に展開されたネットが捕縛する。

奈緒「こつちが本命って事！」

飛竜鬼「ええい！網が絡み付いて動けん…！」

加蓮「放電、開始…！」

バリバリバリッ

飛竜鬼「うおおお!?!」

加蓮「今だよ！斬チーム！」

アーニヤ「X O P O W O ! アカネ!!」

茜「ちえりやああああ!!」

電流に焼かれるメカ飛竜鬼を、ゲッター烈火の火斬刀が、ネットごと切り裂く。

飛竜鬼「グッ…！」

茜「そして——!!」 ガシッ

ふらつき、態勢の整わないメカ飛竜鬼を、

茜「必殺！プラズマ落としてす!!」

下で構えていたネオゲッター3の背中中のホーン部分に突き刺した。

加蓮「プラズマ落とし、ね…！」

菜々「加蓮ちゃん！何時でもいけますよお〜！」

奈緒「アタシ達を弄んだ分、思いつきりぶちかましてやれ!!」

加蓮 「はいはい……—プラズマブレイク!!」

ホーンに突き刺さったままのメカ飛竜鬼に、直接プラズマブレイクを流し込んで爆砕。巨大な火柱を作る。

加蓮 「ヒューー♪ちよつと派手にやり過ぎちゃった?」

大輪鬼 「ひ、飛竜鬼い!!」

凜 「コレで残るのはアンタだけだよ」

大輪鬼 「……この……! 女子供共があああ!!」

凜 「!?」

所構わず暴れ始めたメカ大輪鬼の前に、一旦距離をとる。

大輪鬼 「俺達を舐めしくさりやがってえええええ!!」

凜 「マジギレって奴? カッコ悪い……」

卯月 「けど、これ以上放置するのは危険です!」

凜 「さっさとトドメを刺すに限るね。……かな子!」

かな子 「は、はいっ……!」

凜 「ポセイドンにチェンジ、いけるね?」

卯月 「あの猛攻の中を抜けられるのは、ゲッターポセイドンだけです!」

かな子 「分かりました!……行きます!」

大輪鬼「うおおおおお!!」

凜「オーブンゲット!」

滅茶苦茶に車輪を振り回すメカ大輪鬼をオーブンゲットで掻い潜り、ゲットマシンは一度上空へ。

かな子「チエンジゲッター!ポセイドオオオン!!」

ガキインツ　ズシンツツ

そして、木々や大地。山をも震撼させて、巨躯のゲッターが大地に舞い降りる。

大輪鬼「な、何だコイツは…!?!」

大木の丸太を悠に越える太さの腕、厚く、頼もしい装甲に包まれた胸部。背中には、コレまた巨大な、ミサイルにも見えるロケットブースターが2本。

マツシブなメカ大輪鬼をさらに上回るような巨体の、ゲッターポセイドンの勇壮に構える。

大輪鬼「見てくれなんぞに…!惑わされんぞ!」

メカ大輪鬼が口を開き、中から小型のミサイルが姿を覗かせる。

大輪鬼「飛竜鬼の仇い!!」

それをゲッターポセイドン目掛け断続的に打ち出し、ゲッターポセイドンの姿がミサイルの雨に包まれる。

美穂「かな子ちゃん!」

加蓮「よく見て。ゲッターは無事だよ!」

かな子「……」

打ち当たり、表装で爆ぜるミサイルをもともせず、悠然とゲッターポセイドンはその一歩を踏み出す。

大輪鬼「バカな……!こんな事が……!」

一歩。

大輪鬼「死ね!死ね!死ねえ!!」

一歩。

大輪鬼「俺の攻撃が……まるで効いてねえとでも言うのかよお……」
一歩。

ゲッターポセイドン「……ズズズツ……」

大輪鬼「あ……あああ……!」

ゲッターポセイドンが、間近でメカ大輪鬼を見下ろす。

大輪鬼「ふ、ふざけるなあ!!」

ギャルルル……ガンッ

回転する車輪を、ゲッターポセイドンは容易く受け止める。

かな子「はあああつ!!」

ドワオ

大輪鬼「……あ?」

ゲッターポセイドンの渾身の拳が、メカ大輪鬼の装甲を砕き、内部を破壊し、反対側へ貫く。

ゲッターポセイドンが拳を引き抜くと、メカ大輪鬼は力なくその場に崩れ落ちた。

かな子「ストロングミサイル:!!」

背中の安全装置が外れ、ロケットブースター、ストロングミサイルがせり上がる。

それをゲッターポセイドンはその手に掴み、メカ大輪鬼へと掲げ、

かな子「ツ!!」ゴツ

そのまま一直線に、叩き付けた。

——爆発。

その後数分間、磁気嵐によって早乙女研究所のレーダー各種が使用不能になるほどの火災と黒煙。そして衝撃波を辺りに生んだ。

茜「な、何も見えませんね……百鬼メカは……卯月さん達は怎么样了!?!」

アーニヤ「Подождите……爆発の影響で……レーダーが……何も、見えません

……!」

美穂「見て! 煙が、晴れて……!」

姿を現したのは、太陽に装甲を輝かせる、ゲッターポセイドン。

菜々「アレだけの衝撃を、間近で受けて……」

奈緒「ほとんど無傷って、ホントどこまでトンデモ何だよ?」

加蓮「さあね。そう言うもんなんでしょ? ゲッターって」

菜々「そこはナナに聞かれても……分からないですよ……」

かな子「——はあ……はあ……はあ……」

凜「二件落着。かな子、お疲れ様」

卯月「さ、早く帰りましょう! ライヴステージがかな子ちゃんを待ってます!」

かな子「はい! 早く2人の所に帰らなくちゃ……!」

奈緒「おいおい何だあ? ライヴを中止して来たんじゃないのかよ?」

凜「うん。協力者がいてくれたお陰で、ライヴを中止にしなくてすんだんだ」

奈緒「協力者……?」

卯月「はい♪とつても頼りになる、とても大切な人達です!」

奈緒「ふうん……、まあよく分かんないけど、ライヴがまだだつてんなら、アタシ達も

見に行くか?」

菜々「良いですねえ。たまには客席側から、皆さんを応援です! キヤハツ♪」

茜 「それは！私達も行っているのでしょうか!？」

美穂 「さ、流石にゲッターチームは1チームくらい残った方がいいんじゃない?」

晶葉 『行ってきても構わんぞ』

美穂 「晶葉ちゃん!」

晶葉 『おそらく、今日はもう百鬼帝国も来ないだろうしな。それに、お前達のゲッターも整備が必要だろう?』

晶葉 『その間は、羽を伸ばしてもいい。早乙女博士からのお墨付きだ』

アーニヤ 「хошоро!! Спасибо:アキハ!サオトメ博士ツ!」

茜 「よおしくし!それじゃあ早速みんなで向かいましょう!!」

晶葉 『おいおい、流石にお前達のゲッターは置いていってくれよ。整備ができん』

卯月 「でしたら、皆さんゲッターGへどうぞ!」

加蓮 「こんな大人数、ゲッターに乗れるの?」

茜 「そんな時は気合いです!世の中大抵の事は気合いで何とかできます!!」

凜 「やれやれ…。これは、賑やかな帰還になりそうだね…」

かな子 「いいじゃないですか!たまにはこう言うのも、楽しくて好きです♪」

凜 「フフツ…。そうだね。たまには、こう言うのもいいか…」

くくく そして、ライブ会場 くくく

凜 「これ…どういう事…!？」

奈緒 「ここ、ライブ会場があった場所だよな…？」

茜 「こんな事が…あり得るんですか!？」

美穂 「かな子ちゃん達のライブ会場が…」

かな子 「どうして屋外になってるんですかあ〜!!？」

凜 「出撃前に確認してたけど、ここ、交差点だったよね？」

卯月 「確か…。今は半分くらい人で埋め尽くされちゃってますけど…」

加蓮 「ステージ代わりにしてるの、よく見たらゲットマシン輸送車輻だ」

菜々 「一体何がどうなってるんでしょうか？」

卯月 「ちよつと、プロデューサーに電話してみますね…」

prrrr prrrr

新P 『おお、卯月か。お前らがゲットマシンで戻ってきたのが、バッチリ見えてんぞー』

卯月 「プロデューサー！一体どうなってるんです？どうして会場が屋外になってて、みんなヒートアップしてるんですか!？」

新P 『ああ。ほら、美嘉達ステージ出たろ？』

卯月 「？ はい。それは承知してますけど…」

新P『そしたら、小さいライブに美嘉達が出てるって、ファンの間でネットで大騒ぎになってな』

卯月「……」

新P『つたく、どこから聞き付けてきたか知らねえが、会場に人収まなくなっちゃまってな』

新P『そしたらたまたま、ゲットマシンの着陸ポイントで確保してた場所あるし、ゲットマシン帰ってくるまでなら輸送車使っていいって言うし、な?』

卯月「な? って言われても、どうしてこんな人が?!?」

新P『ホントにな。俺も予想外すぎて、現状に着いていけてねえ』

アーニヤ「アー…パツ、と見ても…、1000人?2000人?」

茜「数えきれないくらいです!美嘉さん達はスゴいですね!!」

凜「茜には同意するけど、これじゃ、ゲットマシンでの着陸は無理だね…。ゲッターに合体しよう」

卯月「そうですね!ともかくにも、かな子ちゃんを降ろさないと。ドラゴンに合体します!」

かな子「皆さん、しっかり掴まってください!」

卯月「チェンジ・ドラゴン!!」

ワアアアアア ゲッターダ！ ゲッタードラゴンダロ!? ホンモノダ！ カッコイ
イ!!

美穂 「す、すごい熱気…」

卯月 「ご、ご来場の皆さん！ゲッターの足元から退いてください!!ゲッターが着陸し
ます!」

ウツキチャンノコエダ！ ゲッターガオリテクルツテヨ！ サガレー!! ワー!

ワー!

ズシンツ

人垣の只中にゲッタードラゴンが着陸。下腹部辺りに手を持っていき、かな子達を降
ろす。

凜 「卯月は!？」

卯月 「私は、ここにいます。ゲッターに人が入ってきたら大変ですし…」

凜 「…分かった!ゲッターをお願い」

卯月 「はい!凜ちゃん達も、かな子ちゃんの応援、よろしくお願いします!」

凜 「任せて!」

卯月 (かな子ちゃん…。頑張ってください…)――

―― 舞台裏。

かな子「はあ……！はあ……！はあ……！お待たせしましたあ！」

莉嘉「かな子！」

李衣菜「おかえり。大丈夫？疲れてない？」

かな子「大丈夫です！あの……」

李衣菜「見た？集まってくれた人」

かな子「は、はい……！」

李衣菜「私が初めてライブしたとき以上だよ。あんな人達の前で、これから歌うんだ……」

莉嘉「……」

李衣菜「すごい、プレッシャーだよね……」

かな子「あ……あの……！」

李衣菜「サイコーにロックじゃん！」

かな子「……え？」

莉嘉「リーナの言うとおりでだよ！アタシ達、こーんな人が一杯集まった場所でこれからデビューするんだよ！」

莉嘉「お姉ちゃんでも、どんなアイドルでも歌ったことのないステージでデビューライヴなんて、サイッコーの思い出になるよ☆」

かな子「莉嘉ちゃん、李衣菜ちゃん……!」

莉嘉「コレも、かな子がゲッターに乗っててくれたお陰だよ!アリガト☆」

かな子「っ……!……はいっ!」

李衣菜「うしっ!今の美嘉達のトークが終わったら、いよいよ私達の出番だよ。気合を入れていこう!」

莉嘉&かな子「オー(☆)！」

美嘉「——さてと、それじゃあそろそろ、アタシ達の出番も終わりだね」

エー——!!

未央「ちよいちよいちよい!このライブの主役が誰か、お忘れじゃないかい?」

瑞樹「そうそう。それに、これから歌を披露する子達だって、私達に負けなくらい輝いていて、魅力的よ。分かる?」

ワカルワツ!

藍子「それなら、是非この後もしっかり聞いていってほしいです」

ハー——!!

みく「ホント約束だよ!もし1人でも帰ったりしたら、罰として百裂猫パンチにや!!」

ミクニャンノファンヤメマス オレモ ジャアオレモ

みく「何でにや!?て言うかこっさりじゃあ、つて行った人!『じゃあ』つて何にや!」

響子「あはは…！冗談は置いておいて、今日デビューする子達は、私達の大切なお友達でもあるんです！」

智絵里「だから、私達と一緒に、応援してくれると…嬉しい、です！」

みく「あの…2人共、みくのを冗談、で流されるのは、ちよつと辛いにや…」

瑞樹「まあまあそのくらいにして。それじゃあ美嘉ちゃん、締め、よろしく頼むわね？」

美嘉「まっかせてー★」

美嘉「みんなー！これから歌ってくれる子の中には、アタシの妹もいるんだ！」

美嘉「アイドルとしてはまだまだ駆け出しで、ずっとアタシの後ろを追いかけてくるばっかで…。まだまだ、半人前だと思う」

美嘉「だけどその分、初ライブのこの日の為に、ずっと誰よりも頑張つて、今日この日を迎えたと思うんだ！」

美嘉「だから、興味がなかったとしても最後まで聞いてほしいかな？」

美嘉「これは、1人の姉としてじゃなく、1人のアイドルとして、そして今ここにいるアイドル全員のお願ひ！」

アイドル一同「…」ペコッ

美嘉「だから、最後まで楽しんでいってね★」

ワアアアアア!!

美嘉「みんなー!!それじゃあねー!!」

ワアアアアア!!

—。

莉嘉「お姉ちゃん…」

美嘉「莉嘉…。ニヒツ★舞台は最高に温めてきたんだから、台無しにしたら許さないからね★」

莉嘉「…うん☆」

李衣菜「よおーし!それじゃあ行こうか!その熱が冷めないうちに!」

かな子「はいっ!」

李衣菜「ロックン・ガール…!」

李衣菜&かな子&莉嘉「ニ——ゴ——ッ!!」
つづく

第11話 『悪夢の細菌兵器』

—— 山岳地。

凜 「マツハ・スペシャル！」

シユンツ

白髪鬼 「うっ…!?!」

凜 「ドリルアアアームツ！」

白髪鬼 「ぐわあっ!!」

背後に回り込んだゲッターライガーのドリルアームが、メカ白髪鬼を背中から貫き、打ち砕く。

かな子 「やりました！」

卯月 「周囲に他の敵の反応はありませんね」

凜 「さ、早く帰ろ。…ライブに遅れる前に」

——。

くくく 百鬼要塞 くくく

ヒドラー 「ぐぬぬ…。おのれえく…ゲッターロボGめえ…!」

百鬼兵「解析班からの報告では、ゲッターロボGの性能は、現存するどの百鬼メカの性能も凌駕しているとの事です」

ヒドラー「呑気な事を……！早急に対抗策を考えんか!!」

百鬼兵「は、はっ！」

ヒドラー「……くそお……！」

グラー「苛立っておられるようですな。ヒドラー元帥？」

ヒドラー「グラー博士。コレが苛立たずにいられるか!?百鬼衆は、我らが百鬼帝国が誇る精鋭の筈だ！」

ヒドラー「それをこうも手玉に取るとられるは……！」

グラー「お気持ちお察しします……。ブライ大帝のお考えも分かり兼ねますな？何故こうまでゲッターに執着なさるのか……」

ヒドラー「そうだ！先ずはゲッターを持たない周辺の国から支配し、外堀を固めてからじっくり攻めれば良いものを……！」

グラー「落ち着きなさい、ヒドラー元帥。皇帝侮辱罪は元帥と言えど重罪は免れませぬぞ」

ヒドラー「……」

グラー「しかし、ヒドラー元帥の言う事も尤も。勝ち目のない戦ばかりしていても意

味はない。そうですね？」

ヒドラー「…ならばどうすれば良いのだ？」

グラー「簡単な話です。無敵の鎧を壊そうとしても意味はない。ならば、鎧を着ている中の人間を直接、攻撃すれば良いのです」

ヒドラー「…どういう意味だ？」

グラー「ある国に潜伏させたスパイからの情報です。お耳を」

ヒドラー「ふむ…」

グラー「——」 ヒソヒソ…

ヒドラー「…！それは本当か!？」

グラー「スパイの情報に、間違いはないかと」

ヒドラー「そうか…。フフフ…。ゲッターめえ…今に見ておれ。必ずや貴様らを…

！

——。

くくく 数日後。日本上空 くくく

李衣菜「——ウウツヒョー！やっぱシミュレーターと本物じゃ、全然違うよね〜！
最っ高〜!!」

ネオイーグル号が、大空狭しとロールを繰り返す。

奈緒「李衣菜！あんま無茶な飛び方して、1号機壊すなよ〜！」

李衣菜「だ〜い丈夫！こんな高さで墜落しな〜——わわっ!?」

一瞬コントロールを失い、高度を落とすネオイーグル号。

李衣菜「おっととととと…。危ない危ない…」

奈緒「ほらな、言わんこつちやない」

李衣菜「えへへ…」

加蓮「ちよつと〜。こつちにぶつかってこないでよね」

奈緒「余計な仕事増やしたらただじゃ済まないからな！」

李衣菜「はいはい。分かってますって！」

奈緒「つたく、飛行訓練の代わりだからって、菜々さんが代わってくれたんだから、気を引き締めて飛べよな〜」

加蓮「まあまあ、リーナは初飛行なんだからさ。少しは多目に見てあげないと」

奈緒「加蓮…、そんな事言ったってなあ…」

かな子「奈緒ちゃん達も、大変ですな〜」

加蓮「かな子こそ。こんなのがユニットのリーダーじゃ、アイドル活動も大変なんじゃない？」

李衣菜「ちよつと、それってどういう意味〜？」

奈緒「あはは！それにしても、豪華だよな。ゲッターGに護衛してもらって、北海道まで遊覧飛行なんてな」

かな子「遊覧飛行って…、これもちゃんとしたお仕事のですよう…」

凜「奈緒も油断してると、李衣菜と一緒に真つ逆さまだよ？」

奈緒「アタシは大丈夫だよ。素人じゃないんだから、そんなへましないって」

李衣菜「墜落の引き合いに私を出すのやめてよ〜！」

卯月「でも、折角ならアーニヤちゃん達も連れてきたかったですね」

凜「仕方ないよ。早乙女博士の話だと、橘研究所の方から、ゲッターGを指名してきたらしい」

加蓮「ゲッターGが早乙女研究所を離れるのに、ゲッター斬まで離れるわけにはいかないしね？」

奈緒「にしても、向こうはゲッターGに何の用があるんだ？」

かな子「詳しくは着いてから話すって言っていましたけど、一体何の話なんでしょうね？」

凜「さあ、ゲッターGを指名してくる以上、穏やかな話じゃないんだろうけど…」

卯月「百鬼帝国絡みなら、私達だけでも気を引き締めていかないとダメですね…！」

凜「卯月の言うとおり。でも、まだ深くは考えずに行こう」

かな子「分かりました」

李衣菜「あ、折角だから合体しない？ね。1回だけ！」

奈緒「お前はちよつと空気読め！」

凧「ふふつ。李衣菜には残念だけど、そろそろ目的地が見えてきたよ」

卯月「アレが…ですか？」

かな子「スゴく立派な建物ですね！」

加蓮「ひよつとして、早乙女研究所より大きいんじゃない？」

凧「それはそうかも。正式な名前は、国際航空宇宙技術公団N I S A R…」

卯月「ねいさー…？」

凧「そ。あくまで民間研究所の早乙女研究所と違って、こっちは世界中に幾つもの支部をもつ国際組織の1つ」

奈緒「へえ、スツゴいトコ何だなく…」

凧「その極東支部。それがここ、橘研究所だよ」

くくく N I S A R 極東支部 橘研究所 くくく

橘「皆、早乙女研究所からよく来てくれた。ようこそ、橘研究所へ。歓迎するよ」

凧「お久し振りで、橘博士」

橘「おお、凧くん。久し振りだな。ネオゲッターの試験運用以来か…」

奈緒「何だよ。凜はここに来たことあるのか？」

凜「うん。元々、ネオゲッターはここで開発されたのは宇宙開発用ロボが元になってるから。その試験運用の時に何度か、ね」

橘「3機に分離する変形マシンなど、私の所にはノウハウがなかったからね。科学者である晶葉くんや、直にゲッターに乗っていた凜くんの意見はとても参考になったよ」

加蓮「ふくん。それじゃ、今回はネオゲッターの里帰りって訳？」

凜「こつちにはネオゲッターの改装に直接関わった人達もいるから」

橘「ネオゲッターにより本格的なオーバーホールを行うのなら、こちらが最適、というわけだ」

李衣菜「オーバーホール？それじゃあ、整備の為にネオゲッターをわざわざ北海道に運んだって事ですか？」

凜「うん。G 鉱石の錬成が出来るのは、日本じゃここくらいだけみたいだからね」
李衣菜「G 鉱石？」

橘「北極でのみ採掘される強力な磁力を発する鉱石だよ」

橘「柔軟なゲッター合金ではないネオゲッターロボは、その磁力を応用した形状記憶合金によって、合体・分離等、各種変形を行っている」

卯月「へえ〜。だから私達のゲッターより見た目頑丈そうなんですわね」

凜「けど、その分ゲッター合金と違って金属疲労があつて、定期的に装甲を全部張り替えないといけない、らしいよ？ 晶葉が言うには」

かな子「だから、ネオゲッターをここに運んで、オーバーホールつて事なんですか？」

加蓮「それなら、最初からネオゲッターだけここで使つてればいいのにね」

奈緒「だな、そつちの方が面倒がなくていいもんな」

橘「尤もな意見なのだがね。こゝも、国際組織に所属する以上、色々な制約があつてな。そう簡単にもいかないんだよ」

奈緒「大変なんだな。大人つて」

卯月「それで、橘博士。私達まで呼んだのはどうしてなんですか？」

李衣菜「確かに。ネオゲッターの整備だけでいいなら、卯月達は必要ありませんよね？」

橘「……」

かな子「橘博士？」

橘「その事については別室で話そう。Gチームの諸君は着いて来てくれたまえ」

卯月&かな子「？ ……了解」

李衣菜「あの…、私達は…」

凜 「李衣菜達は自由にしてて。この研究所の中でも、見学してればいいよ。それじゃ」

スタスタ

奈緒 「見学してればいいって言われてもさ……」

李衣菜 「右も左も分かんないんじゃないじゃ……ねえ？」

加蓮 「ま、テキトーにブラブラしてて良いって事でしょ？一応入構証は貰ってるんだし」

奈緒 「あ、加蓮待ってって！どこ行くんだよ！」

加蓮 「こんな所でぼんやりしてより、中歩いてた方がいじゃん？ひよっとしたら、アタシ達みたく、暇そうにしてる人がいるかもしれないし」

奈緒 「暇そうにしてる人って……」

李衣菜 「ははっ……！それは言えてるかも」 タツ

くくく 橘研究所 所長室 くくく

橘 「さて、先ずは私の呼び掛けに応じてくれて、ありがとう」

凜 「博士、前置きはいいよ。本題は何なの？」

橘 「ははは。相変わらず手厳しいな、君は。……では」

卯月 「何かあったんですね？」

橘 「うむ。実は、つい先日、この北海道上空に未確認の航空機が侵入、研究所近辺の山岳地帯に墜落してな」

卯月 「未確認の航空機…?」

凜 「まさか、百鬼帝国!」

橘 「……。うむ、私達もそうではないかと仮定している」

かな子 「それで、その航空機がどうかしたんですか?墜落したんですよね?」

橘 「…実はな、航空機が墜落した付近にあった、1つの集落…そこに住んでいた数十名の住人が、原因不明の変死を遂げ、集落は壊滅した」

卯月 「壊滅…!」

凜 「原因不明って、言ったけど…?」

橘 「住人の死因は不明。…いや、不明と言うことにされている」

かな子 「されている、って…、橘博士は、その原因が何か分かってるんですか?」

橘 「……。墜落した機体には、宇宙細菌が積まれました」

かな子 「宇宙細菌…って、何なんです?」

橘 「我々が人類が遠くない未来、宇宙に進出した際、必ず脅威となるとされているものだ」

卯月 「人類の…脅威…?」

橘 「そうだ。おそらく、集落にはそれが蔓延したのだ」

凜 「どうしてそんなのが分かるの？」

橘 「我々の間で研究されていた宇宙細菌と、犠牲となった者の症状が酷似している。犠牲者の報告を受けた時、私は間違いなく宇宙細菌だと確信した」

かな子 「そんな危ないのが蔓延してるんだったら、こんな所で悠長にしてる場合じゃないんじゃない？」

橘 「心配はいらんよ。その宇宙細菌は大気に含まれる窒素に弱く、外気に触れると数分と経たず、死滅する」

橘 「現状で、地上に蔓延してる宇宙細菌はほぼ無いと言っても良いだろう」

卯月 「そうなんですか……。良かったあ……」

橘 「しかし、私は今回蔓延した宇宙細菌が全てではないと推測している」

凜 「墜落した機体から漏れ出た宇宙細菌が、全部じゃないって事？」

橘 「宇宙細菌はカプセルに入れて、厳重に保管されていた筈だ。それこそ、ちよつとやそつとの衝撃では壊れないように、しっかり封がされていた筈だ」

橘 「今回の墜落で壊れず、残った宇宙細菌があつても可笑しくはない」

卯月 「分かりました！それを探す調査に、私達が同行すればいいんですね？」

橘 「その通りだ。百鬼帝国が関わっているとすれば、必ず連中も出てくるだろう。」

そうだったら、私達ではどうしようもない」

かな子「確かに、向こうも百鬼メカを出してくる可能性は考えられますね…」

橘「うむ。どうかかな？私達に、力を貸してはくれんか」

凜「橘博士には、コレまでにもお世話になってるし、何より、そんな危険なものを百鬼帝国の手に渡すわけにはいかないよ」

卯月「任せてください！宇宙細菌の脅威から、一緒にみんなを守りましょう！」

橘「……。…うむ。そうだな…」

凜「……」

—— 橘研究所内。

「さて、と。コレで研究所の中は全部かな…」

李衣菜「ありがとうございます！えっと…」

翔「橘翔。こちらこそ、今をときめくアイドルの道案内なんてさせてもらって光栄だよ」

李衣菜「そんな…。今をときめくなんて…」

翔「そう謙遜しないで？ボクでも知ってるよ。キミ、最近メジャーに出てきたロッキング・ガールの子でしょ？」

李衣菜「ユニット名まで覚えてくれてるなんて…」

奈緒「何顔赤くしてんだよ」

李衣菜「い、いいじゃん。別に……」

翔「ふふっ。ボクもコレでも女の子だからね。ああいう、キラキラした世界にも憧れたりするよ」

加蓮「だつたら一回オーデイション受けてみたら？アタシでも出来てるんだし、翔さんなら、意外と良いトコまでいけるんじゃない？」

翔「む、無理だよ……そう言うの、向いてないし……。それに、今の仕事も小さい頃からの憧れだからね」

奈緒「そうだ、よかったのか？宇宙船外活動の訓練中だつたんだろ？」

翔「ううん。訓練は一段落して、これから一息つくところ。だから施設の案内の終点もほら、談話室」

加蓮「ああ、成る程」

翔「——あ♪」

李衣菜「……あつ！いきなりどこ行くんです？翔さん……って……」

翔「あ〜りすちゃん♪」

ありす「……翔さん。こんにちは」

翔「ありすちゃんも、珍しいね？こんな所で。散歩？」

ありす「…そんなところです。ずっと部屋に籠っているのも、退屈なので」

翔「何だろ。言ってくれば、ボクが案内してあげたのに」

ありす「翔さんは訓練だったでしょう。私にかこつけて、サボろうとしないでください」

翔「あはは…。別にサボろうとしてたわけじゃ…」

李衣菜「翔さん…この子は…?」

翔「ああみんな。ごめんごめん。この子はボクの親戚の橘ありすちゃん」

ありす「はじめまして。橘…ありすです」

李衣菜「ありすちゃんかあ…。私は…!」

ありす「知ってます。貴女は多田李衣菜さん。隣が神谷奈緒さん、一番後ろが北条加蓮さん。…で、合ってますよね?」

奈緒「うおっ!?アタシ達の事まで知ってるのか」

加蓮「もしかして、アイドル好き?」

ありす「そういうわけではありませんが…」

翔「ありすちゃんはこう見えても、アイドルだったんだよ?」

李衣菜「え!?!ホントに!?!」

ありす「……」

翔 「まあ、今は休業中なんだけど……」

加蓮 「そうなんだ？」

ありす 「……不本意ながら」

翔 「東京は危ないからってねえ……。ありすちゃんの両親が。せめて自分の娘くらい安全な所について」

奈緒 「それでか……」

翔 「……」なら、最低限の防衛設備もあるし、いざって時には核にも耐えるシエルターがあるから……。親戚のつてつて事で、ウチで預かってるんだ」

李衣菜 「そうだったんだ……。大変なんだね？」

ありす 「……別に、大変じゃありません。両親とは、コレがあればいつでもテレビ電話で会えますからっ」 つたブレット

奈緒 「ははっ、そうか」

加蓮 「いい時代になったね。ホント」

ありす 「……。それじゃあ、私はそろそろ失礼します」 スツ

翔 「あ、ありすちゃん！待って！」

ありす 「……何ですか？」

翔 「えっと……。そうだ！今日これから、みんなで山にでも行かない？」

奈緒 「みんなでつて事は…アタシ達も？」

翔 「もちろん！折角北海道まで来たんだし、北海道の自然を感じていきなよ！」

李衣菜 「うくん…。そう言われればそういう気もしますけど…」

翔 「ね、お願い！ボクに協力して！」 コゴエ

李衣菜 「ええっ!? つてか翔さん顔近…」 コゴエ

翔 「実はありすちゃん、ここに来てから、まだ上手く馴染めていないみたいなの」

コゴエ

李衣菜 「え…?」

翔 「私達に気を遣ってるみたいで…、こっちから話しかけても距離を置こうとする

し…」 コゴエ

翔 「ね? こういう所にいると、外からのお客さんもお偉いさんばかりだし、私達を

助けると思つて…。ね?」

加蓮 「いーんじやない? 別に」

李衣菜 「加蓮…」

加蓮 「どうせネオゲッターの整備が完了するまで、ウチらも暇なんだし。ここで所員

さんの邪魔になるよりは、外に出た方が気分転換になるんじゃないかな?」

加蓮 「ね、奈緒?」

奈緒 「お、おお……！おお？」

李衣菜 「う……ん……。じゃあ、行こっかな……！そうしよう！」

翔 「ありがとう！この恩は、必ず返させてもらうからね！」

ありす 「話はまとまったんですか？翔さん」

翔 「バーツチリ！今車庫からバイク引張ってくるから！」

奈緒 「え……、バイク使うのか？」

翔 「もちろんそうだけど……。あ、もしかして、バイクの免許……」

李衣菜&奈緒&加蓮 「持っていない（よ）」

翔 「あちや……。まいったなあ……」

ありす 「……全然まとまっていじやないですか……」

翔 「あ、あはは……。……そうだ！」

一同 「「？」」

~~~~~ 山岳地帯 ~~~~~

卯月 「そろそろ先行した橘博士達との合流地点ですね」

かな子 「でも、流石北海道って感じですよ。緑が豊かで……。ああ！やっぱりお茶と

お菓子を持ってくれば良かったあ〜！」

凜 「もう、かな子ってば、ピクニックじゃないんだから……」



かな子「えへへ……♪ごめんなさい……」

凜「別にいいけど……。一応、警戒は続けておいて。……」

卯月「凜ちゃん、さつきから何か考え事ですか？」

凜「卯月……。……ちよつとね」

かな子「さつきの橘博士とのお話の事考えてたんですか？」

凜「うん……。さつきの博士の説明、やけに詳しくすぎるな、って」

卯月「そうですね？ 橘博士も、宇宙開発の科学者なんですし、今回の宇宙細菌の事だつて、知っていて当然の事何じゃないですか？」

凜「……。博士の言動も妙だった。……何か、言いかねているような……」

かな子「博士が私達に隠し事してらつて事ですか？」

卯月「まさかあ〜！ 凜ちゃんの考えすぎですよ！」

凜「そうだといいけど……」

かな子「考えすぎは良くないですよ。帰ったら一緒に甘いものでも食べてリラックスマしましょう♪——あら？」

卯月「どうかしましたか？ かな子ちゃん」

かな子「いえ、百鬼帝国が出たとか、そんなんじゃないですけど……。この辺では、珍しい反応があつて……」

凜 「確かに、リーダーに反応がある…。これは……」

卯月 「橘研究所の、ビイト…?」

加蓮 「研究所にたまたまあったのはいいけど、よく貸してもらえたよねえ」

奈緒 「ホントな。一時はどうなるかと思っただけど…」

翔 「ま、そこはボクの日頃の行いに感謝って事で！」

李衣菜 「それは分かったけどさ…」

李衣菜 「何で操縦が私なのさー…ツツ!!?」

ありす 「…あまり乗り心地はよくないですね」

加蓮 「ちよつと李衣菜く。もっと揺れ抑えれないのく?このままだと酔っちゃいそう」

李衣菜 「無茶言わないでよ!こいつ山岳用に開発されてるんじゃないんだから…。それに、元々3人乗りなのに無理矢理5人も乗せるから!」

奈緒 「じゃあお前山まで歩くか?」

李衣菜 「だから!何で!面倒な事は全部私なのさつて、聞いているの!!」

翔 「それは、だつて李衣菜ビイトの搭乗経験あるつて言うから…」

李衣菜 「そりゃあ…、ビイトは乗り慣れてるけどさ…」

李衣菜「でも、私が普段乗ってたのとは操縦法もだいぶ違うし、…大体一緒だけど」  
奈緒「どっちだよ？」

李衣菜「とーにーかーくー、操縦席小さいし、モニターも小さいし見辛いし！もうっう  
！加蓮は車長席行ってよ！」

加蓮「いやほら、アタシが車長席座っちゃうと違う感じになっちゃうし？」

李衣菜「何の話!？」

『—その不審なBT、止まってください!』

奈緒「んあ？」

李衣菜「この声って…、卯月!？」

卯月「えへへ…♪どうですか？今の、ちよつと雰囲気出てました？」

凜「そっちの声は奈緒に李衣菜…。みんないるの？」

李衣菜「そっちも勢揃いでって…ゲッタードラゴン!？」

地上を歩くビイトに、低空飛行でゲッタードラゴンが迫る。

ありす「コレが本物のゲッターですか…」

翔「ボクもはじめても見ると…、ほえ…でつかいね〜」

凜「そっちにいるのは翔。それに、知らない子もいるみたいだけど…」

かな子「凜ちゃん、知り合いの人ですか？」

凜 「うん。橘博士の娘さんだよ。…それで、そっちの女の子の方は…」

卯月 「橘ありすちゃんですね！」

奈緒 「卯月、知ってるのか？」

卯月 「はい。同じアイドルの子ですよ？以前一緒にお仕事した事があります！」

ありす 「……確かそれ、私、一度挨拶しただけのような気がしますが…」

奈緒 「マジかよ…」

凜 「前にもこんな事があったね。ホント、人の顔を覚えるのは得意なんだから」

卯月 「えへへ…。特にアイドルの子は、みんな可愛いですから。すぐに覚えられます

よ」

ありす 「あ、ありがとうございます…」

奈緒 「それで、何でゲッターがこの辺飛んでるんだよ？」

加蓮 「この辺で何かあった？もしかして、百鬼帝国？」

凜 「ううん。まあ、そうなるかもしれないけど。その為の対策ってトコかな？」

李衣菜 「何それ？全然意味分かんない」

かな子 「詳しい事は話せないんです。ごめんなさい…」

卯月 「とにかく、もし散策するなら、この先は危険なのでやめておいた方がいいと思います」

加蓮 「そつかあゝ。それじゃあどうする？引き返す？」

翔 「あ、それなら、この山を下っていったところにきれいな川があるよ。そこなら問題ないでしょ？」

凧 「あんまり山の奥に行かないなら、別にいいと思うけど……」

翔 「行かない行かない！それじゃ李衣菜ちゃん、ボクが案内したげるからヨロシク！」

李衣菜 「結局操縦は私……。リョーカイ！みんな、揺れるからしつかり捕まっつてよー！」

奈緒 「おわっ！お前、そう言うのは揺れる前に言えー！」

ガシヨガシヨツ

卯月 「あはは♪何だか賑やかで、楽しそうでしたね？」

かな子 「そうですね……。話してるだけで、ちよつと気分転換になったかも」

凧 「さ、早く博士達に合流しよう。こうしてる間に、百鬼帝国に襲われてたりしたら大変だし」

卯月 「分かりました！それじゃあ、こつちも飛ばしていきますよー！」

—— 川のほとり。

加蓮 「うう〜ん♪この時期だと、まだ少し冷たいね……」

奈緒「おーい！川の流れ速いんだから、あんま奥の方行くなよー！」

加蓮「ふっつ、へーきへーき。ほら、奈緒もこっち来なつて」

奈緒「わーわー！引つ張るなつて！ずぶ濡れになつても着替え持つてきてないんだから……！」

バシヤアアッ

李衣菜「うわあ……。加蓮のはしやいでるトコつて、初めて見たかも……」

翔「普段は大人しい子なんだ？」

李衣菜「うう……ん……。普段大人しいつて言うよりは……。何か聞いた話だと、昔は病弱だつたらしいし」

翔「へえ。全然そんな感じしないね？」

李衣菜「ホント、ゲッターは人を変えるね……つて、ありすちゃんは？」

翔「ホントだ。しっかりした子だし、1人で遠くに行つたりとか、危ない事はしな  
と思うけど……」

李衣菜「何かあると大変だよ。探しに行こう」

翔「そうだね」

――。

ありす「……」

あります「奈緒さん達の声が聞こえなくなりましたか……。それだけ皆さんから離れたと言うことですか……」

あります「……………」

あります「(こうやって歩いてても、両親の所に辿り着けるわけじゃ……)」

あります「……………何を考えているんでしょう……。ママや、パパは……私の事を第一に考えて、私をここへ……」

あります「……………」

あります「……………。戻りましょう……。翔さん達が心配してしまいます」

キラン

あります「ん……？アレは……………」

スツ……

あります「何でしょう？カプセル……のようですが……。中には何も入っていないみたいですね……」

アリスチャーン！ アリスチャンドコー？

あります「この声は……、翔さんに……李衣菜さん」

翔「あ！ありますちゃんいたー！もう、何してるの？こんな所で」

あります「すいません……。ぼうつとしたいたら、歩きすぎてしまったみたいです」

翔 「自然は人を行動的にしてくれるって言うけど、あんまり一人で遠くに行ったりしたら危ないよ？この辺りは熊だつて出るんだし」

ありす 「…ごめんなさい」

翔 「ま、ありすちゃんが無事ならそれで全然オッケーだよ！さ、早くみんなの所に帰ろ？」

ありす 「翔さん…」

李衣菜 「あたたた…。やつと追い付いた…」

翔 「お、李衣菜ちゃんおつそ〜い！そんなんじや、ゲッターのパイロットが務まんないぞ？」

李衣菜 「そんな事言われても、山の中は歩き慣れてないし…。それより、ありすちゃんは!?大丈夫？怪我とかしてない？」

ありす 「はい…。この通り、何ともないです」

李衣菜 「良かったあ〜…。ん？何、それ？」

ありす 「これですか？さつき川の方で…。上流から流されてきたんでしようか？」

翔 「確かに、上流の方には集落があるって聞いた事あるけど…。にしてもこのカプセル…。う〜…ん」

李衣菜 「翔さん、心当たりあるんですか？」



翔 「うーん。前に父さんの部屋で似たようなものの写真を見たような気がするけど…」

李衣菜 「じゃあ、これ橘研究所の？」

ありす 「もしくは、研究所に関係のあるもの、という事になりますね…」

李衣菜 「でも、ならなんで、そんなのがここに？」

翔 「さあ…。分かんない」

ありす 「ともかく、研究所のものなら、持ち帰った方がよくないですか？」

翔 「そうだね。あー…でも、ビイトに乗せて帰るのはなあ…」

ありす 「揺れますもんね、スゴく。割れたりしたら、どうなるんでしょう…？」

翔 「さあ？空みたいに見えるけど、何かヤバイウイルスとかだつたら目も当てられないなあ〜」

李衣菜 「それなら大丈夫！いざという時のために、あのビイト、飛べるから」

翔 「ホント!?それじゃあ、飛んで帰れば揺れは少なめだね!」

ありす (…何で行きの時は飛ばなかったのか、という話ですが…。やめておきましょう)

翔 「よーし、そうと決まったら、早く戻ろつか?あんまりボク達が持つてるのもよくないし」

李衣菜 「そうだね。びしょ濡れになってる奈緒達も心配だし」

ありす 「あの2人は何をしてたんですか…」

ガサツ

李衣菜 「ひっ!? な、何…!?!」

翔 「もしかして、熊かな…? ありすちゃん、危ないから下がって…!」

ありす 「は、はい…!」 ギュツ

ガサガサツ

李衣菜 「や、やっぱりこっちに来る…!?!」

翔 「音があんまり大きくないかな…? 熊じゃない…?」

ありす 「だったら、何なんですか…?」

翔 「よく分かんないけど、歩いてくる音が人間みたいな…」

李衣菜 「人間…!?!」

「ふふふ…。ようやく見つけた…。感謝するぞ、人間共…!」

ありす 「あ、頭に角の生えた人…!?!」

李衣菜 「百鬼帝国…! 誰?! アンタは!?!」

ヒドラー 「私の名前はヒドラー。さあ、早くそのカプセルをこちらに渡してもらおう

か」

李衣菜 「このカプセル、もしかしなくても百鬼帝国の…!?!」

翔 「このカプセルはなんなの!?!アンタ達、これを使って何をするつもり…!?!」

ヒドラー 「貴様らが知る必要はない!早くその小娘の持っているものをこちらに寄越せ!」

ヒドラー 「さもなければ…!」 チャキツ

ありす 「ひっ…!?!」

李衣菜 「っ?!…へ、へえ…百鬼帝国の連中も、銃なんて使うんだ?」

ヒドラー 「残念ながら私は戦闘が苦手だね。それに、こつちの方が相手を屈服するのは、実に効果的だろう?」

翔 「ありすちゃん、絶対渡しちや駄目だからね…」

ありす 「は、はい…」

ヒドラー 「あくまで抵抗するか。まあいい、貴様らを全員殺してしまえば用の済む話だ」

李衣菜 「……!」

「お前の思い通りにさせるかよ!」 バッ

李衣菜 「——奈緒!?!」

奈緒 「くらえっ!」

ガバアツ

ヒドラー「ぐおっ!?何だこれは…!?!」

奈緒「へへっ!びしょ濡れになった上着の両袖に石を詰め込んでやったぜ!コレで上着が絡み付いて、時間稼ぎにاندらる…!」

加蓮「得意になるのはそこまで」

李衣菜「加蓮まで!」

ヒドラー「ぐぬぬ…前が見えん!何処だあ!」

加蓮「今の内に逃げるよ。こっち!」

李衣菜「分かった!翔さん、ありすちゃん、行こう!」

翔「うん!ありすちゃん、動ける?」

ありす「だ、大丈夫です…!」

タツタツ

ヒドラー「くそお…!逃がすか!戦闘部隊に連絡を…!」

—。

李衣菜「ありがとう奈緒、加蓮!」

奈緒「礼なんかいらぬよ。こっちも、凜から連絡を受けて探してたんだし」

李衣菜「凜達から…!?!」

加蓮「近くで百鬼帝国が出たって。危ないから、アタシ達は研究所に戻った方がいいって」

奈緒「まさか、もう遭遇してるとは思わなかったけどな」

加蓮「李衣菜達が山の方に入っていくのは、一応見てたから」

ありす「……」

翔「ありすちゃん、怖い？」

ありす「こ、子供扱いしないでください！怖くなんか……！」

加蓮「……で、今ありすが持つてるのが、連中の狙ってるものって訳……」

奈緒「向こうも躍起になってるって事は、相当ヤバイもんがそのカプセルの中に入ってるって訳か」

ありす「……」

加蓮「息抜きのもりが、厄介な事に巻き込まれたねえ」

李衣菜「ともかく、危険なものだったら何としても守らなくちゃ！百鬼帝国に渡すわけにはいかないよ！」

奈緒「分かってるって！よし、ビイトが見えてきた！」

急いでビイトに乗り込む。

李衣菜「百鬼帝国も動いてるかもしれない。操縦は私がやるから、奈緒は火器管制を

お願い。加蓮は索敵、翔さんとありすちゃんは、車長席に！」

奈緒「任せろ！」

加蓮「了解」

翔「ありすちゃん、しつかり捕まってるんだよ！」

ありす「はい……！」

李衣菜「よし、ビイト発進！」

ギューピーンッ

加蓮「……早速反応。戦闘機が空から来るよ！」

李衣菜「っ!?!」

戦闘機による爆撃が、ビイトの周囲の木を焼き払って爆ぜる。

ありす「きやあ……!と、飛んで逃げた方が速いんじや……」

李衣菜「ダメ……。飛べば狙い撃ちにされる」

奈緒「敵の狙いも、アタシらを炙り出す事か」

加蓮「なら、このまま森の中を走り抜けた方が得策だよね」

李衣菜「ホントなら、山の方走って逃げたいけど……」

翔「あんまり揺れるのはちよつと……」

李衣菜「……だね。奈緒、反転するから、反撃よろしく！」

奈緒「つつても、バルカンくらいしかないけどな！」

ビイトを反転させ、バツク走行で森の中を疾走しながら、上空の戦闘機に狙いを定める。

バババババババツ

奈緒「おい李衣菜！もう少し機体を安定させろ！これじゃ当たるもんも当たらない！」

李衣菜「無茶言わないですよ！ただでさえ悪路走ってるのに、これ以上速度落としたら相手に捕捉されちゃうよ！」

ありす「り、李衣菜さん……！前……！」

李衣菜「え……？」

ガコンツ

僅かに突き出した岩塊に足を取られ、ビイトが一瞬、宙を舞う。

李衣菜「う、うわあああああああっ!？」

落下の衝撃で2回、3回と丸みを帯びたビイトが回転し、幾本の木々を薙ぎ倒してようやく制止する。

奈緒「痛たた……。モニターぐらい見て操縦しろ……」

李衣菜「ご、ごめん……。つ……！ありすちゃん、カプセルは……！」

ありす 「な、何とか大丈夫みたいです…。割れてはいません」

李衣菜 「そっか…。良かったあ…。」 ホッ

加蓮 「安心してる場合じゃないよ。敵の爆撃が来る…。」

李衣菜 「っ！防御体勢…。」

ビイトが手足と頭部を機内に格納し、完全なドーム状の防御姿勢をとる。

李衣菜 「くくくっ！」

ありす 「きやつ…。」

翔 「ありすちゃん、大丈夫だからね…。」

防御姿勢をとったビイトに、容赦なく戦闘機の爆撃が襲い、コックピットが振動する。

奈緒 「どうするんだ!? このままじゃ、いくらビイトが頑丈でも保たないぞ!」

李衣菜 「分かってる…。!分かってるけど、今防御姿勢を解けば、それこそビイトは木っ

端微塵だ!」

加蓮 「何か手はないの? 李衣菜、ビイトには色々詳しいんでしょ?」

李衣菜 (…………)

ありす 「うう…………」

李衣菜 「…仕方ない。ありすちゃん! 翔さん!」

ありす 「はい…っ!」



翔 「何!?!」

李衣菜 「2人でカプセルを挟んで、しっかりと守ってください!」

翔 「何をするのか分からないけど、分かったよ!」

李衣菜 「よし…。マニュアルでやるのは初めてだけど…」

操縦桿を握りしめ、ペダルを踏み込み、勢いよく左右の操縦桿を前後逆の方向へ。

奈緒 「うわあああああああああゝゝ?!!」

爆煙と爆風を振り払って、ビイトが高速回転を始める。

李衣菜 「ここまで来たら、せめて一太刀ゝゝ!!」

駒のように回転しながら、敵陣の方へ。投下された爆撃の衝撃を利用して、ビイトは

空へ。

百鬼兵 「なっ…!?!」

李衣菜 「必殺スピリアタックだゝゝゝ!!」

グ  
ワ  
オ  
オ

回転の勢いとビイトの自重で戦闘機を押し潰し、1機を粉碎して地上に華麗な着地を決める。

加蓮 「うえ…。吐きそ…」

翔 「ありすちゃん大丈夫?顔白いけど…」

ありす「だ、大丈夫で……ウプツ」

奈緒「李衣菜、もうこれ禁止な……」

李衣菜「あはは……でも、これで爆撃から抜けられたし、敵も動揺してる。逃げるなら今だね！」

加蓮「そうかもしれないけど、研究所の方に逃げてるけど、ホントにそれでいいの？」  
李衣菜「どういう事？」

加蓮「研究所に逃げ込んだだけで、向こうが諦めるとは思えないな……って。もしかしたら、研究所の人も巻き込んだんじゃないかも」

奈緒「あー、確かにそれは一理あるかもな」

加蓮「ネオゲッターは装甲張り替え中でしょ？爆撃で壊したら大変だよ？」

李衣菜「つて言われても、そしたら何処に逃げれば……。ビイトの内蔵エネルギーじゃ、そう遠くには行けないし……」

『——西だ！』

李衣菜「ん？この声って……」

翔「父さん！」

橘「今君達のいる場所から西へ移動してくれ。そこに、ビイトならば入れそうな空洞がある。私達も今そこにいる」

ありす「そこにいる、って…、なら、どうやって私達の現在地を把握してるんですか？」

橘 「彼女らのカメラの映像を受信してね。今、そちらに到着できたようだ」

ありす 「彼女…ら…?」

卯月 「スピンカッター！」

李衣菜 「ゲッタードラゴン！卯月さん！」

後方から敵陣に突っ込んだゲッタードラゴンが、腕のスピンカッターで瞬く間に戦闘機群を一掃していく。

卯月 「遅れてすいません！」

かな子 「百鬼帝国の足止め到手間取っちゃって…」

凜 「愚痴を溢しても仕方ない。遅れた分、一気に片を付けるよ！」

卯月 「了解です！——ゲッタートマホーク…！」

両肩からトマホークをそれぞれ左右の腕で抜き打ち、

卯月 「…ブーメランツ!!」

それぞれを左右に投射。挟撃を掛けようとした2機の戦闘機をそれぞれ破壊。

卯月 「っ！」

戻ってきたトマホークを即座にキャッチ。

卯月「はあっ!!」

直後に上昇し、上空から迫った1機を両断する。

李衣菜「ウツヒョク!やるう!」

奈緒「ゲッターがくりや、こつちのもんだな!」

加蓮「今の内だよ。橘博士達と合流しよう」

李衣菜「了解!任せて!」

卯月「……。今ので、近くの戦闘機を一通り倒せましたか?」

かな子「そうみたいです。右も左も、前にも後ろにもそれらしい影は見当たりません」

凜「…:妙だね。百鬼メカが出てこないなんて」

卯月「そう言えば、そうですね」

かな子「向こうにも余裕がないんでしょうか?」

凜「まさか。何か百鬼メカを出せない理由があるのか…。それとも使えないのか」

卯月「使えないって、どういう事ですか?」

凜「さあ?そこまでは」

かな子「っ?!大型の反応、こつちに向かつてきます!」

凜「一番最初に反応のあった奴だ。卯月!多分これがラストだ、気合い入れていく」

よー」

卯月「はいっ！——マッハ・ウイング！」

ヒドラー「おのれえ…、やはり私兵だけでゲッターを圧倒する事はできんか…」

ヒドラー（ブライ大帝に内密に計画を進める以上、百鬼衆は使えんと言うに…！）

百鬼兵「ゲッタードラゴン、こちらに向かって速度をあげます。どうなさいますか？」

ヒドラー「決まっておる。対空ミサイル発射だ！」

百鬼兵「しかし…」

ヒドラー「しかしもかかしもあるか！ゲッターに邪魔をされ、人間の女子供にまでコケにされたのだ！」

ヒドラー「このままおめおめと逃げ帰っては、私の立つ瀬がないではないか！」

ヒドラー「ならば、このジェット要塞、ジェロニガンで、ゲッターだけでも血祭りにあげてくれる！」

百鬼兵「りよ、了解です！」

シユババツ

卯月「ツ！！」

ジェロニガンの左右から放たれるミサイルを、巧みなローリングで躲していく。

ヒドラー「今だ！突っ込め！」

卯月「!?」

ミサイルの爆煙から姿を覗かせたゲッタードラゴンに、ジェロニガンが機首から突撃を掛ける。

卯月「くっ……!」

何とか体勢を整え、ジェロニガンを受け止めるゲッタードラゴン。だが、

凜「要塞が相手じゃ、出力が違う……!」

ジェロニガンの推力に圧され、次第に高度を落としていき、着地。

卯月「くくく!! かな子ちゃん……! 踏ん張り、お願いしますっ!」

かな子「任せてください! ふんぬくく!!」

ギギギツ……

ヒドラー「なかなかしぶとい奴だな……」

卯月「当たり前です! 私達は、貴方達に負けるわけにはいかないんです!」

かな子「宇宙細菌なんて、そんなとんでもないモノを使おうとしてる人を、許しておくわけにはいきません!」

ヒドラー「何だ? 何を言っている?」

凜「白々しいよ。わざわざ宇宙から宇宙細菌何てモノを手に入れて、人類を抹殺する兵器を作ろうなんてさ」

凜 「やっぱりアンタ達は鬼そのものだよ！」

ヒドラー 「何……？……何だ、そう言うことか？あははは！これは傑作だ！」

卯月 「な、何が可笑しいんです……!？」

ヒドラー 「ならば教えてやろう！その宇宙細菌を宇宙から採取したのは我々ではない！」

かな子 「……え？」

ヒドラー 「貴様ら人間が、手に入れたものだよ！」

凜 「……!？」

卯月 「う、嘘です！そんなの……！」

ヒドラー 「嘘なものか。我々も宇宙細菌の存在については知っていたがね、どうしても、本物のサンプルを手に入れる事が出来なかった」

ヒドラー 「ところが、ある国のスパイからの連絡で……、その国が宇宙細菌を手に入れ、ジェット機で輸送する事が分かったのよ……」

ヒドラー 「後はそのスパイが、ジェット機にちよつと細工をしたって訳さ」

卯月 「嘘ですっ!!」

ヒドラー 「嘘ではない！何なら、貴様らの傍にいる橘という科学者に聞いてみるといい、そいつなら全てを知っている！」

かな子「どういう事です…!？」

ヒドラー「何故なら、ジェット機が運んでいた宇宙細菌の行く先が、その橘研究所  
だった訳だから!!」

かな子「そんな…!」

凜「でも、それならジェット機が橘研究所の近くで墜落したのも説明がつく…」

卯月「つまり、凜ちゃんが気にしてた…、橘博士の隠し事って…」

凜「今アイツが言った事、まるっとそのまま、だろうね…」

李衣菜「博士！ホントなんですか？博士！」

橘「……」

翔「あ、あれだよ、父さん…。うち、国際組織だから…、それで仕方なく…。そう  
だよな？」

橘「……」

翔「父さん…!」

ヒドラー「ふはははっ！思い知ったか！それが人間という生き物だ！人間は百鬼帝国  
という敵を前にしても尚、大量殺戮兵器の開発をやめようとせん!」

ヒドラー「我らよりよっぽど鬼ではないか!」

卯月「——それが…!」



ヒドラー「むっ…!?!」

卯月「それが何だかって言うんですか!!」

グワアアツ

ヒドラー「うおおっ?!」

卯月「みんな、良い人だっています！悪い人だっています！良い人が悪い人に抵抗するんです！」

卯月「宇宙細菌だって、いつか良い人が越えていきます！私達はそうやって、今日まで進歩してきたんです！」

卯月「宇宙細菌を、悪い事にしか使おうと考えていない貴方達とは、やっぱり違います！」

ありす「卯月、さん…」

加蓮「ま、その通りって言えば、そうだよね」

奈緒「正義は必ず勝つ、って奴だな」

卯月「だから、私は貴方を倒します！私達の力…ゲッターの力で!!」

グオンツ

ゲッタードラゴンをジェロニガンの機首下へと潜り込ませ、足を使ってジェロニガンを空の彼方へ蹴り上げる。

卯月「ゲッタービイームツ!!」ズアツ

ヒドラー「ぐおっ……!ひ、被害状況を知らせい!」

百鬼兵「さ、左舷に被弾!メインエンジン損傷……!高度、維持出来ません!」

ヒドラー「サブフライトシステムに切り替える!」

百鬼兵「はっ!ですが、サブフライトシステムですと、これ以上の戦闘行動が不可能

となります!」

ヒドラー「ぐぬぬう……!やむ終えん、撤退する!動ける機関を最大!」

百鬼兵「はっ!」

ヒドラー「おのれゲッターロボめえ……!この屈辱はいつか必ず……!」

凜「百鬼帝国が逃げていく……!」

かな子「追わなくて良いんですか!?!」

卯月「:はい。今日のところは。探していたものは、見つかったようですし」

凜「そうだね。深追いは禁物だし」

かな子「……:そうですね」

~~~~~ 橘研究所 所長室 ~~~~~

橘「今回の件について、日本政府は情報を制限するそうだ。航空機の墜落は、あくま

で事故だったと」

凜 「集落の壊滅は、どう説明するの?」

橘 「単に集落で伝染病が蔓延し、手遅れになったただだけ、だそうだ。航空機の墜落と、何ら因果関係はない」

卯月 「そんな…!橘博士はそれで良いんですか!？」

橘 「…:少なくとも今は、宇宙細菌についての情報を無闇に流すべきではない。宇宙細菌に対して、何の対抗手段も持っていない現状ではな」

凜 「百鬼帝国の相手だけでも大変なのに、宇宙細菌の存在まで知れ渡ったら、不安が増すばかりだもんね」

かな子 「理屈は分かりますけど…」

加蓮 「それじゃ、博士は宇宙細菌の特効薬を研究するために、ここに宇宙細菌を運ぼうとしたって訳?」

橘 「信じてくれとは言わんよ。だが、卯月くんが言ってくれたように、世の中には善人と悪人がいる」

橘 「私は卯月くんの言う言葉の中で、良い人でいたいと思っているよ」

奈緒 「…:恐竜帝国とか、百鬼帝国とかじゃなく、人間が滅びる時は、人間自身が原因になるかもな」

李衣菜 「それでも、私達は戦うよ。みんなの平和を脅かすような奴等とさ」

卯月「そうですね…。いつかみんなが色々な国の人安心して、笑顔になれるそんな日が来るまで……」

つづく

第12話 『大海獣決戦!・前編 古代生物の脅威!!』

~~~~~ 百鬼要塞 ~~~~~

要塞全域に、重苦しいサイレンが鳴り響く。

鉄甲鬼「何事か!」

百鬼兵「はっ……! 研究区D-89区画にて異常発生!」

鉄甲鬼「D-89区画……? あそこでは確か、グラ―博士が見つけた古代生物の化石を研究していた筈だ」

百鬼兵「はいっ! 研究していた古代生物の復元に成功、しかし同時に古代生物が巨大化し、暴れ始めたとの事で……!」

鉄甲鬼「何……? むう……やむ終えん、D-89区画を含めたD区画全域を閉鎖、百鬼要塞から切り離すのだ」

百鬼兵「はっ……? しかし、D区画にはまだ避難できていない多くの研究員が……」

鉄甲鬼「この百鬼要塞の被害には返られん! 被害がD区画が出る前に、やるんだ! 責任はこの鉄甲鬼がとる!」

百鬼兵「は……はっ! 了解!」

ガコンツ

百鬼兵「D区画の切り離し、完了しました」

鉄甲鬼「直ぐに被害状況をまとめ、報告せよ」

百鬼兵「はっ！では…」 タタツ

胡蝶鬼「うるさいねえ…。何の騒ぎだい？」

鉄甲鬼「胡蝶鬼…。何でもない。問題は解決したところだ」

胡蝶鬼「解決って…。要塞がボロボロじゃないのさ」

鉄甲鬼「ああ…。これでは、百鬼メカもしばらく出撃できん…」

胡蝶鬼「何だい？思わぬ休息ってかい？…やだねえ——」

百鬼要塞から切り離されたD区画。

それは生きた古代生物を中に入れたままの、深い海の中へと消えていった…。

くくく 都内 イベント会場 くくく

卯月「皆さくん！ピンク・チエック・スクールです！」

響子「今日は、私達のミニライブ&握手会に来てくれて、ありがとうございます♪」

美穂「最後まで楽しんでってくださいね♪」

ファン♡ワアアアッ!!

—— イベント終了後、控え室。

卯月 「皆さん! お疲れさまです♪」

響子 「フアンのみ人も喜んでくれて、大成功で間違いないですよね?」

新P 「おう。しかし、用意した会場にファンが収まりきらなくなるとはな。お前らも立派になったもんだ」

卯月 「えへへっ♪ありがとうございます!」

響子 「これも全部、プロデューサーさんのお陰です!」

新P 「やめろよこそばゆい。それに、俺の仕事だって、アイドルあつての物種だろうが」

響子 「でも、私達だけじゃ、ここまで来れませんでしたから!」

卯月 「私達、ホントにプロデューサーに感謝してるんです♪」

卯月 「プロデューサーがいるから、毎日アイドルとして楽しく過ごせてるなって」

新P 「…へへっ、そうかよ」

卯月 「はいっ!」 ニッコッ

新P 「……よし、別なトコで仕事してる智絵里とかな子と合流して、打ち上げと行くかあ!」

響子 「分かりました! すぐに準備しちやいますね♪ね、美穂ちゃん?」

美穂「……」

卯月「美穂ちゃん？」

美穂「あ…、はい？何ですか？」

響子「もう、プロデューサーさんの話聞いてなかったんですか？」

響子「これから打ち上げに行くから、早く準備しちやおうって。まだアイドル衣装の

ままで…」

美穂「あ、ごめんなさい…！少しぼうつとしちやって…！すぐ着替えますから！」又

ギツ

響子「ああ！プロデューサーさんのいる前で着替えちゃダメですよ…！プロデュー

サーさんも、何黙って見てるんですか！」

新P「あ…いや、役得と思って…」

響子「もう…！何が役得ですか…！冗談言っていないで、外で待つて下さい!!」

新P「お、おう…。んじやあ、外に車回して待つてるからな」

卯月「……」

~~~~~ その日の夜 上空 ~~~~~

晶葉『卯月、午前中の仕事の疲れは残っていないか？』

卯月「大丈夫です！1年前と違って、バッチリ体力、着けてますから！」

晶葉『そうか。余計なお世話だったかな?』

凜「卯月に關しては、もう心配要らないんじゃない?それよりも心配なのは…」

かな子「……」

卯月「かな子ちゃん、大丈夫ですか?」

かな子「へ…?あ、卯月ちゃん…!だ、大丈夫です!」

凜「ホントに大丈夫?今日も朝から仕事で、ろくに休んでないんでしょ?昨日の夜も出撃があつたし!」

かな子「全然大丈夫ですよ!これでも、体力には自身があるんです!」

晶葉『今のところ飛行にも問題ないようだが…』

かな子「そうですね?なら、早くテストを始めちゃいましょう!」

卯月「……。分かりました!ドラゴンに合体します!」

ギユンツ

卯月「チエーンジ、ドラゴンツ」

卯月「…ええつと、新しく搭載された武器は…」

晶葉『ゲッターレーザーキャノンだ』

卯月「はい!ゲッターレーザーキャノン!!」 ガシヤコン

両腕内部に折り畳まれて格納された武装が、卯月の声に応じて変形し、長銃のような

形に姿を変えて、右手に保持される。

卯月「…大きいですね……」

晶葉『出力と、射撃精度を意識した結果だ』

凜「確かに、取り回しにくそうだけど、距離をとって戦うなら、頭のゲッタービームよりこつちの方が使いやすそうだね」

晶葉『打ち上げたバルーンはそこから38 km前方だ』

凜「射撃ははじめてだから、狙いはしつかり」

卯月「はい！みくちゃんに教わったように、やってみます！」

銃身を正面に向けて構え、中程辺りのグリップを左手で握り銃全体を安定させる。

卯月「……！」

バシユウツ

晶葉『…ん、命中を確認。はじめてでよくやったものだな』

凜「見た感じ、ゲッタービームよりは威力低そうだけど……」

晶葉『ゲッターG自体からエネルギーは使ってないからな。個別にエネルギーを充填したコンデンサを内蔵している』

晶葉『これで、ゲッターGのエネルギー残量がある程度気にせず戦える筈だ』

卯月「そうですね。凜ちゃんが言ったみたいに扱いやすいです。反動は空中でも少な

「いみたいですし」

凜 「でも、実際の戦闘だと、今みたいにゆっくり狙いをつけてる時間はないよ?」

卯月 「う…それはく…」

晶葉 『せめて、動きながらもある程度は狙えるようにならなくてはな』

卯月 「う…が、頑張ります!」

凜 「その意気だよ。卯月」

晶葉 『これから連続して、場所と高度を変えながらバルーンを打ち出す。なるべく戦

闘機動をとりながら撃つんだ』

卯月 「分かりました!お願いします!」

かな子 「…」 ウトウト…

—— 早乙女研究所 管制室。

晶葉 「ゲッターレーザーキャノンの調子は?」

所員 「はい。エネルギー、安定しています。ゲッターコンデンサーにも目立った問題

点は見受けられません」

晶葉 「そうか…。引き続き射撃テストを続行する。エネルギーの変化から目を離さな

いでくれ」

所員 「了解です!」

早乙女「晶葉くんの開発した、新たな武装の調子は良さそうじゃな」

晶葉「早乙女博士！ええ…新武装の射撃テストは良好です。このまま結果を出せば、直ぐにでも次の戦闘で使えるでしょう」

早乙女「細部のチェックを怠ってはならんぞ」

晶葉「分かっています。早乙女博士の方も、研究の方はよろしいのですか？最近、地下の方に籠っている事が多いようですが…」

早乙女「地下の方が、煩わしい政府連中から解放されて、研究に没頭出来るんじゃよ」

晶葉「…海外の方では、百鬼帝国の攻勢に対して劣勢になっている国もあるとか」

早乙女「うむ。今のところ、大攻勢を受けていないのはこの日本だけじゃ」

晶葉「敵は、明らかにゲッターに執着しているようですからね…」

早乙女「百鬼帝国の目的は分からん。しかし、敵がゲッターを狙ってくれるのであれば好都合」

晶葉「それだけに、負けるわけにはいかない、ですか…」

早乙女「ゲッターこそがこの国の最初で最後の砦じゃからな。…しかし…」

晶葉「気がきましたか？」

早乙女「1年前と同じじゃからな。新しく迎え入れたパイロット達にも、疲れの色が見えてくる頃じゃろう」

晶葉「はい。現に、今日のかな子の動きは、精彩を欠いています」

早乙女「ゲッターGとゲッター斬は日本の最大戦力じゃからな。必然、彼女達に頼りすぎてしまう」

早乙女「特に、斬チームもアーニヤくん以外は経験が少ないからの。この辺りでガス抜きは必要か…」

晶葉「休暇と言っても、研究所においては落ち着く事も出来ません。どうですか？彼女達を何処か観光地に旅行に行かせては」

早乙女「慰安旅行と言う訳か。それも悪くないかもしれんな」

晶葉「次いでに李衣菜と莉嘉も連れて行かせましょう。その方が、楽しくなる筈ですから」

早乙女「良いじゃろう。計画の方はすまんが…」

晶葉「ええ、私の方で予算を計算しつつ、練ってみます」

早乙女「よろしく頼む。すまん、君にも苦勞を掛けて」

晶葉「いえ、この程度なら。何時もの彼女達に対する恩返しのようなものですから」

くくく　そして、某観光都市　くくく

卯月「んくくくっ♪いい天気になって、良かったですね!」

茜 「このところ、雨が続いてましたからね！皆さん！晴れ女ですか！」

美穂 「ふふっ♪茜ちゃんがいいたから、雨雲もどこかに飛んでいっちゃったのかな？」

茜 「そうですね！雨雲でもなんでも、気合いで吹き飛ばせます！」

卯月 「それは流石に無理があるんじゃないかなあ…？」

凜 「ホント、晶葉や早乙女博士は勿論、未央達にも感謝しないとね」

かな子 「本当に良いんでしょうか…。私達がお休みなんてもらっちゃって…」

李衣菜 「ここまで来たら言いっこなしだよ？百鬼帝国が出たとしても、ネオゲッターや旧ゲッターがあるから大丈夫って言ってたし」

凜 「忙しい時こそ息抜きは必要だよ。これからの戦いに備えて、今日と明日はゆっくりしなくちゃ」

卯月 「こんな素敵な旅行を立ててくれた、皆さんの期待に応える為にも、ですね♪」

かな子 「…そうですね。ここまで来たら、楽しまなくっちゃ損ですよね！」

李衣菜 「そぞ。ちゃんとみんなにお土産買って行ってさ、良い思い出作ろうじゃん！」

アーニャ 「ホントに、いい天気で…駅の前も、人がたくさん、で…。スゴく華やかですね！」

かな子 「そうですね。こんなに活気を取り戻してるところもあるなんて…」

凜 「この辺りは、恐竜帝国の時も襲撃が少なく、復興が早く進んだところだよ」

莉嘉「もう〜!折角のお休み何でしょ〜?そう言う湿っぽくなりそんな話はなしなし☆」

李衣菜「莉嘉の言うとおりに!そう言う後ろ暗い所は今日限り忘れてき、貰った休暇を楽しようよ!」

凜「…ふふつ。それもそうだね」

卯月「それじゃあ、どこから周りましょう?」

凜「もう。先にホテルに行つてチエックインが先でしょ」

卯月「え?あはは…。そうでした…」

凜「晶葉からホテルの場所の地図はもらつてるし、みんなまとまつてる内に行こう」

一同「…はーい!(☆)」

卯月「こういう時、凜ちゃんがいると、頼りになりますね〜」

李衣菜「…この中の年長組つて、誰だっけ?」

茜「はっ…!凜さんでは…!?」

かな子「茜ちゃん…」

美穂「あはは…」

莉嘉「ほらほら、何時までも駅前でじつとしてないでさ!まずはホテルに向かつて、レッツゴー☆」

アーニヤ「ゴー♪」

卯月「チエツクインを済ませた後はどうします?」

凜「そうだね…。お昼まだだったから、先にみんなで何か食べに行つてつてなると
…、時間中途半端になつちやうね」

卯月「それなら…」

凜「どこかみんなで行きたい所あるの?」

卯月「はいっ。…ふふっ♪」

—。

茜「トラーーーーーイツ!!食後の運動ですー!」 ダツ

アーニヤ「あ!待つて、ください!アカネ!」 タツ

莉嘉「あ、アタシもー☆」 タタツ

李衣菜「あはは…。みんなはしゃいじやつて…」

卯月「ふふっ。李衣菜ちゃんも行つてきたらどうですか?」

李衣菜「いや、私はパス。茜の体力には着いてけないって」

凜「それにしても、都市のど真ん中にこんな立派な森林公園があるなんてね」

李衣菜「ねー。流石観光地って感じ?」

卯月「はい!晶葉ちゃんから行き先を聞いて、ちよつと調べてみたら出てきて、羽を

伸ばすならここかなって」

凜 「確かにここなら、ゆっくり休息も出来るし、茜みたいに走り回ってストレス発散も出来る……」

ボンバアアアアアア!!

李衣菜 「少し羽目外しすぎじゃないかな……?」

卯月 「ゲッターのコックピットは茜ちゃんには狭いから、色々溜まつてるのかもしれない……」

凜 「ケガだけはしないように、ちゃんと見張つとかないと、かな?」

李衣菜 「つて言うか、卯月達は体動かささないの?」

卯月 「ええ。私達は、こうして木に寄り掛かって、一心地ついてますから。それに……」

美穂 「すー……、すー……」

かな子 「……」 ムニャ……

李衣菜 「あれ……。寝てる?」

卯月 「2人を放っておけませんから」

美穂 「……寝てません……。寝てま……」 Zzzz……

かな子 「美味しいから……大丈夫……です……すう……」

凜 「ふふつ。夢の中でも寝てるの?」

李衣菜 「かな子も、食後にあれだけデザート食べて、まだ食べ足りないの？」

卯月 「やっぱり疲れてるんですよね……」

凜 「2人はまだパイロットになって、日が浅いから。激戦の連続でもあったし」

卯月 「そうですね……。丁度、1年前の私達と似たような状況ですか」

凜 「あの時は、瑞樹さん達位しか頼りになる人はいなかったけど、今は私達がしっかりと見守っていかなくちゃ」

卯月 「はい。今は私達が、先輩ですもんね」

李衣菜 「そう言えば、その先輩方達は、今どうしてるのかな？」

卯月 「私達だけお休みもらっちゃって、やっぱり少し申し訳ないですよ。ちゃんとお土産買って帰らないと」

凜 「お土産に関しては同意だけど、そんなに気にする程でもないんじゃないかな？」

卯月 「どういう事ですか？凜ちゃん」

凜 「ん？まあ、瑞樹さん達も、だいぶ早乙女研究所に馴染んでるって、そう言うこと
くくく 早乙女研究所 くくく

未央 「ふいふいふい！まさか研究所の中に、大浴場があるなんて知らなかったな……」

瑞樹 「ふふつ。普段はシャワーで済ませちゃうから、全然気が付かなかったでしょ？」

奈緒 「ホント。言っておいてくれたら、いつでも使えたのにさ」

菜々「まあ本来は徹夜してる整備班の為の施設ですからね。あまりナナ達が使つて、男性の方達に迷惑を掛けると言うのも…」

未央「そつか。浴場1つしかないけど、男性女性つて時間が決まつてるわけでもないんだ?」

瑞樹「そうよ。今回も、卯月ちゃん達が旅行に行ったから特別つて事で、使わせてもらつてるんだから」

みく「まあ、みく達は前々から何回か使わせてもらつてるけどね」

加蓮「何それ?ズルくない?」

瑞樹「未央ちゃんよりも先輩チームの特権ね。分かるわ」

奈緒「しかしこれ、ただのお湯じゃないよな。温泉?」

瑞樹「いえ、入浴剤よ」

未央「入浴剤?」

菜々「今週のは何でしたか?」

瑞樹「確か…、『世界の秘湯百九十選』ベナン共和国」だったかしら?」

奈緒「何処だよそこ」

みく「最早そこに温泉があるのかどうかすら分からないにや」

加蓮「でも、良いのかな?アタシ達までこんなリラックスして」

菜々「良いんじゃないですかね〜？」

奈緒「良いも悪いも、百鬼帝国が出てこないんだもんな」

未央「向こうも何かあったのかねえ」

瑞樹「そうねえ。何時ものスペインなら、そろそろ現れてもおかしくないけど…」

みく「きつと百鬼帝国もお休みしてるのにな」

菜々「それなら気が楽で良いんですけどね。やっぱり平和が一番ですう〜」 ホフウ

：

瑞樹「…嫌な予感がするわ」

未央「お、元アナウンサーの勘？」

瑞樹「いいえ、女の勘よ。こういう時は、そっちの方が当たるのよ」

加蓮「不吉な事言うね」

瑞樹「まあ、私が気にしすぎなのかもしれないし、あんまり細かく気にする事ないわ
よ」

奈緒「でも、平和な時こそアタシらが気を引き締めていかないとな」

未央「しまむー達に迷惑掛けるわけにいかないもんね」

奈緒「その通りだな。よし、加蓮、菜々さんそろそろネオゲッターの哨戒の時間だ。先
上がってるぞー」 ザパア

加蓮「はいは〜い」

菜々「リョーカイです!」

未央「ふう…。私らはどうしよつか?」

みく「折角だし、みくはもう少し浸かってるにや」

瑞樹「私は上がらせてもらうわ。久し振りに運動もしたいもの」

未央「お、それじゃあこれから、湯上がり卓球でもどうですか?」

瑞樹「…負けないわよ?」

未央「ふふ〜ん。んじゃ、決定〜。負けた方が牛乳奢りね」

瑞樹「あら、卓球の相手もしてくれる上に奢ってくれるなんて、後輩だからって気を

遣わなくても良いのよ?」

未央「ふふふ…」

瑞樹「うふふつ…」

みく「2人共…。運動もほどほどにするにやあ…」

〜〜〜 翌日 〜〜〜

卯月「うわあ〜…。見てください凜ちゃん! いい眺めですよ!」

凜「うん。ちゃんと見えてるって。全く、いつもゲッターでもっと高い所から見るのに」

卯月「ゲッターに乗ってる時はあんまり景色に集中してる余裕ありませんし、それに、観覧車は別ですから!」

凜「…そうなんだ……」

卯月「ここからかな子ちゃん達も見えるかな?」

凜「いや、流石にそれは…、みんなは今それぞれ街の中にいるんだし」

卯月「ふふつ。みんな今頃何処で何してるんでしょう…」

—— アミューズメント施設。

カッ

茜「ストラア—イクツ!!」

カ…キインツ

茜「出ました!ホームランですよ!!」

アーニャ「おお…。x o p o 3 o、アカネ!スゴい運動神経、です!」

茜「えへへ…。ありがとうございますっ!!」

美穂「本当…。茜ちゃんは運動も出来て、スゴいなあ…」

茜「ムツ!美穂さんは運動苦手ですか!」

美穂「あ…え、えーつと、少しだけ」

アーニャ「でも、ライブでの、ダンス…振り付けは、完璧ですね」

美穂 「あれは、出来るようになるまで何回も練習してるからで…」

茜 「その通りですよ!!」

美穂 「え…?」

茜 「努力は人を裏切りません!今は運動が苦手でも、頑張れば、為せば成ります!」

美穂 「そうかなあ…?」

茜 「はいっ!桃栗3年、柿は万年です!!」

アーニヤ 「…柿は、8年ですわね…?万年は、亀、です」

茜 「あれっ!?そうでしたか!」

美穂 「…ふふっ」

茜 「ともかく!ローマの道は1歩からです!」

アーニヤ 「千里…」

茜 「幸い、この施設にはスポーツを体験できる物が沢山あるそうですから、今日は美穂さんの運動克服を目指して頑張りますよ!」

美穂 「え…ええ!」

アーニヤ 「面白そう、ですね。アーニヤも、お手伝い、頑張ります…!」

美穂 「ええ!?!」 トメテクレナイノ!」

茜 「それでは、近くの施設から制覇していきましょう!!」

美穂「制覇っ!？」

アーニャ「オー♪」

美穂「待つて!何か目的代わつて…、あ、引つ張らないで…!」

茜「トラーーーーーイッ!!!」

美穂「あああああああああ…!!」

—— ケーキバイキング。

かな子「んーーーー♪このケーキ、美味しくて何個でも行けちやいそうです♪」

李衣菜「うわあ…」

莉嘉「……」

かな子「あれ?2人はもう食べないんですか?」

李衣菜「う、うん…。私はもうお腹一杯かなー…」

莉嘉「あ、アタシも…」

かな子「そうなんですか?まだ時間はたっぷりあるのに…。時間一杯、食べないと勿体ないですよ?」パクッ

かな子「んーーーー♪これも美味しっ♪」

莉嘉「かな子さつきから食べてるペース変わらないけど、お腹大丈夫なの?」

かな子「はいっ!何だかケーキを見てるだけで食欲が沸いてくる感じで、今ならあそ

ここにあるケーキ全部食べれちゃいそうです!」

李衣菜「流石にそれはやめなつて! お店が可哀想だよ」

かな子「そうですよね…。私以外にもケーキ食べたい人は一杯いますし、それに、時間が足りません…」

李衣菜(時間制限があつて良かった…)

莉嘉「何か前に一緒にケーキバイキング行った時より食欲増えてると思うんだけど…」

李衣菜「そんなに食べて、後でレツスンで地獄見る事になつても知らないよ?」

かな子「ゲッターに乗ってるから大丈夫だよ」 パクッ

莉嘉(もしかして、かな子の食欲ってゲッターのせいなんじゃ…)

かな子「2人共、本当に食べないんですか? 何なら私が何か選んで持つてきましょうか?」

李衣菜「い、いや、本当にいいよ…。気持ちだけで充分だから…!」

莉嘉「そうそう! ケーキバイキングはかな子のリクエストなんだし、アタシの事はいいから…!」

かな子「そうですか…? それじゃあ、おかわり持つてきますね♪」 ガタッ

李衣菜「う、うん…。(あの山みたいなのを一瞬で…)」

莉嘉「前々から思ってたけど、スゴいよね。かな子って」

李衣菜「だねー。ああやってさ、幸せそうに食べてるの隣で見るとさ」

莉嘉&李衣菜「見てるだけでお腹一杯なんて言えない（よね）」

—— 観覧車。

凜「——卯月はさ……」

卯月「はい？ すいません、景色を見るのについで夢中になっちゃって……。何か言いました？」

凜「……いや、何でもない」

卯月「えく？ もう、何ですか？」

凜「それよりも、もうすぐ地上だよ」

卯月「えっ？ あ、ホントですね……」 シュン……

凜「そんなに名残惜しい？」

卯月「あ、いえ。名残惜しいって言うより……その……、楽しい時間が終わるのは、ホントに早いなあ……なんて」

凜「……」

卯月「あつ！ 別にゲッターに乗るのが嫌とか、そう言う訳じゃないんです。……けど」

卯月「こんな時間が、ずっと続けばいいのにな……」

凜 「……。続くようにすれば、良いんだよ。私達で」

卯月 「凜ちゃん……!」

p r r r r p r r r r p r r r r

卯月 「……私の携帯ですつ。すみませんっ……!」

凜 「気にしてないから。早く出た方がいいんじゃない?」

卯月 「は、はいっ、そうですよね……!——……かな子ちゃん?」

卯月 「もしもし?かな子ちゃん?……突然どうしたんで……」

卯月 「莉嘉ちゃんがいなくなっただ!?」

凜 「……卯月」

卯月 「は、はい……!」

携帯のスピーカーをオンに。

かな子 『……はい……。今、私達ケーキを食べ終えて、次は李衣菜ちゃんの言っただギターシヨップに行く途中だったんです』

かな子 『人混みがすごいから、はぐれないように気を付けようね、って話をしてたら

……』

凜 「莉嘉がいなくなっただね?」

かな子 『……はい……』

凜 「全く、何て言うフラグ回収の早さ…」

かな子 『ごめんなさい…。私も、しっかり手を握ってあげれば良かったんですけど…』
李衣菜 『私も！気が逸つてみんなより先に歩いてたから…』

凜 「…とにかく、前に言つてたお店に戻つてるとかは？」

かな子 『はい、一度、大急ぎで戻つたんですけど、そこにもいなくて…』

凜 「入れ違いになつたのかも…」

卯月 「莉嘉ちゃんの方には掛けてみたんですけど？」

李衣菜 『私がさつきから何度も掛けてるんだけど、全然でない…』

かな子 『きつと、莉嘉ちゃんも私達を探すのに夢中で、気付いてないのかも…』

凜 「…分かつた。かな子達は、もう一度前いたお店に戻つて、近くを探してみて」

かな子 『はい！分かりました』

凜 「私と卯月も探すの手伝うから、後で現在地の目印になりそうなのをメールで送つて」

卯月 「それじゃあ、一旦切りますね！」

かな子 『はい！それじゃあ、また後で…』

プツッ

—。

莉嘉「かな子ー?リーナー?まったく2人していなくなっちゃうなんて、ホントどこ行っただらろ……うん?」

? 「ほー……」

莉嘉「えつと……何?」

少女「そなたー、何かお困りでしたー?」

莉嘉「え……?どうして……」

少女「お顔にそう書いておりましたー。何か……途方に暮れているものとー」

莉嘉「えっ、え!?分かるの?」

少女「然りー。そなたの内に渦巻く不安や焦燥も、わたくしには伝わってくるので

すー」

莉嘉「不安なんて……怖くなんかないもんっ!」

少女「ふふっ。そなたはお強い人なのですな。ふむふむ……。承知致しましたー」

莉嘉「え……?」

少女「こちらでしたー」

莉嘉「え?あの、どこに行くの?」

少女「失せ物探しは芳乃の得手でしたー。そなたの思う人々の所に、わたくしが導き

ましょー」

莉嘉「芳乃……？」

少女「あ……申し遅れましてー」

芳乃「わたくしはー、依田は芳乃と申しましてー。以後ー、よしなにお願い致しますー」

かな子「もうー、莉嘉ちゃん、どこ行っちゃったんだろう……」

李衣菜「かな子ー。そろそろ卯月達が合流する頃だよ？先に合流した方が良くない？」

かな子「おれは、分かってるけど……。でも、もう少しだけ……きやつ……」

ドカッ

かな子「あたたた……」

李衣菜「かな子！大丈夫？」

かな子「わ、私は全然……。それよりも、ごめんなさい……。ぶつかっちゃって……」

男「いや、こちらも余所見をしていたからな。悪いのはお互い様……。……お前は」

かな子「はい？あの、何処かでお会いしたことありました？……ファンの方、とか……」

男「……。渋谷凧を……。知っているか？」

かな子「凧ちゃん……。はい。今も一緒に来てますよ？」

男 「そうか……。アイツの言うとおり、因果かもしれないな……」

李衣菜 「あの……。凜の知り合い……ですか?」

男 「……いや、それよりも丁度良い。人を探している」

李衣菜 「人……?」

男 「ああ。年は多分……お前達と同じくらいなんだが、背はお前達よりも随分小さい」

男 「髪が下まで長くて、幼い顔立ちをした女なんだが、この辺で見掛けなかったか

?

李衣菜 「いや、こっちも人探してましたけど、そんな子は……」

男 「そうか……」

かな子 「そうだ!こっちの人探しにも協力してくれますか?金髪の女の子なんです
!」

男 「金髪か……。この辺りは、そう言う髪色の人間が多いようだが……」

李衣菜 「うっ……!確かに……。結構派手な感じで、バッジとかシールとか着けた鞆身に
付けてるんですけど……」

男 「ふむ……。すまない、こちらにも心当たりはないな」

かな子 「そうですか……」

李衣菜 「お互いに収穫なしですね……」

男 「うむ。だが、俺の方は神出鬼没だからな。忘れた頃にひよっこり顔を出すかもしれん」

李衣菜 「何ですか、それ……？」

男 「お前達も簡単には諦めない事だな。探している奴が、大切な仲間ならばな」

李衣菜 「はいっ！勿論、絶対諦めるつもりはありません！」

男 「ふっ……」 スタスタッ

かな子 「行っちゃった……」

李衣菜 「さ、私達もそろそろ卯月達に合流しよう？」

「その必要はないよ」

李衣菜 「凜！」

凜 「まったく……。チームメイトを一生懸命探す気持ちは分かるけど、もう合流場所

の店からだいぶ離れてるじゃん」

かな子 「……ごめんなさい」

茜 「ノープロブレムですよ！私もはぐれかけましたから！」

凜 「茜は先走って探しに行こうとするからでしょ」

茜 「面目ありません!!」

李衣菜 「あれ？アーニヤと美穂は？」

茜 「それが、ちよつと美穂さんを運動させ過ぎまして!アーニヤさんは美穂さんの看病をしています!!」

卯月 「茜ちゃん達、何してたんですか…?」

凜 「とにかく、今動ける面子だけで、莉嘉を探そう」

かな子 「そうですね…。あ、凜ちゃん」

凜 「何?」

かな子 「さつき凜ちゃんの知り合いの人に会いましたよ?」

凜 「知り合い?」

卯月 「凜ちゃん、この辺に知り合いなんていたんですか?」

凜 「いや…。どんな人だった?」

かな子 「えつと…。背がすごく高くて…、スラツと細くて…」

李衣菜 「ちよつと目付き鋭くて怖い感じだけど、鼻筋の通ったイケメンって感じの人だったよ?」

凜 「ふうん…。背が高くて、細身…」

凜 「まさか、ね…」

「あー!ホントにいたー!!」

卯月 「この声…。もしかして…!」

かな子「莉嘉ちゃん！」

莉嘉「リーナ！かな子！みんな☆」

李衣菜「もう〜！どこ行つてたの〜？みんな心配して探しに来てくれたんだからね？」

莉嘉「えへへ〜。ごめんなさい☆」

凜「ともかく、何事もなくて良かったよ」

茜「ええ！事故や事件に巻き込まれでもしたら、美嘉さんに申し訳ありませんからね！」

卯月「でも、よく私達を見つけてくれましたね？」

李衣菜「さつき、ホントに、つて言つてたけど？」

莉嘉「あ、うん☆実はあの子が…つて、あれ？」

茜「誰か一緒に探してくれたんですか？」

莉嘉「あれ〜？さつきまで一緒にいたんだけどな〜」

凜「莉嘉が合流したのを見て、安心して帰っちゃったんじゃない？」

莉嘉「ええ〜？まだお礼言つてなかったのに…」

卯月「その人と一緒に、私達を探してたんですか？」

莉嘉「うん！スツゴいんだよー！アタシ探してなんかなくて、その子の後ろを着いて

歩いてただけでみんなの所に着けたの!」

李衣菜「はい?何それ、オカルトじゃあるまいし」

莉嘉「ぶー!嘘じゃないもんホントだもん!失せ物探しが得意なんだって!」

男「……」

芳乃「ニオン殿、お待ちを。芳乃はニオン殿のように早くは歩けないのです」

ニオン「別に、俺はお前に着いて来いなどと頼んだ覚えはないが」

芳乃「むー。ニオン殿はいけずでして」

ニオン「何処に行っていた?」

芳乃「少しばかり所用をば。人助けも、わたくしの務めであるが故に」

ニオン「人助け、か。俺をしっこくつけ回すのも、お前の言う人助けか?」

芳乃「つけ回してなどは。ただ、人々の失せし物を探しだすのが務めであるように、新たな兆しを見つけ出すお手伝いを致すのも、芳乃に与えられた使命でして」

ニオン「フンツ。調子の良い事を。生まれた故郷を失い、仲間もとうに存在しない俺に、何を見つければ」と

芳乃「…つかぬ事を伺いますが。そなたはこの光景をどう思いまして?」

ニオン「人間の作った街か?歪そのものだな」

芳乃「またバツサリとー」

ニオン「自然と共生していない。人間共は路端に植物を植える事で共生と言っているらしいが、そんなもの、連中の自己満足でしかない」

ニオン「爬虫人類はこんな自分だけに都合の良い人工物など造らなかつた」

芳乃「自然とは脅威なもの。爬虫人類の後に生まれた人々は、自らや大切なモノを守る為、自然に対し砦を築き、日々を生きる力を得たのです」

ニオン「自然に対し強い者が生き残る。それが世界の理だ」

芳乃「しかし、宇宙からゲッター線が降り注いだ時、爬虫人類もまた、生き延びる為に地底深くへと逃げ延びたのでしょー？」

ニオン「……」

芳乃「そして地下にわたくし達人間と大差のない巨大都市：マシーンランドを築いたとー。その影響が、自然に対し何処にも出ていないとー、言い切れましてー」

ニオン「我々と人間は同じだと言いたいのか」

芳乃「然り。全てのものは一つに等しいのでして。全ては同じ所より生まれ、そして、還つてゆくのです」

ニオン「お前の言っている事は何一つ理解できんな」

芳乃「……」

ニオン「芳乃?」

芳乃「…彼方より災厄の兆しが見えましてー。直ー、嵐になるものとー」

ニオン「嵐…。百鬼帝国とやらか?」

芳乃「否ー。これはー、百鬼帝国などではなくー。孤独故の深い哀しみとー、現在への怒りー。そして、強い憎悪を感じましてー」

ニオン「呑気に構えていて良いのか?そんなものが迫っているとしたら、ここも危ないんだろう?」

芳乃「心配には及ばずー。猛き竜の戦士達が、暗雲に光明をもたらしてくれましてー」
ニオン「猛き竜の戦士、か…。フンツ…」

くくく 太平洋上 くくく

みく「青い空、広い海、周囲に不審なものはない。今日もまったく異常なしにや」

晶葉『そうか。もうすぐ日本領海線だ。しばらく辺りを見回したら、こちらへ戻ってきてくれ』

みく「了解にやん!」

未央「あたたた…。あちこち筋肉痛で…。あう…。!」

みく「自業自得でしょ。結局あれから、瑞樹さんとどれだけ卓球してたにや」

未央「えーっと、確か3セット先取の5マッチで…」

瑞樹 「2対2で同点で最終ゲームに入って、デュースになったのよね」

未央 「そうそう。それから取って取られてを…40回くらい？」

瑞樹 「で、お互いに限界まで凌ぎを削りあって、気付いたら朝になってたのよね」
みく 「粘りすぎにや」

瑞樹 「ホント、朝まで起きてたのなんて何年振りかしらね」

未央 「いやいや、瑞樹姐さんが若いんだって。筋肉痛にもなつてないみたいだし」

瑞樹 「甘いわね、未央ちゃん。筋肉痛って言うのはね、遅れてくるものなのよ」

みく 「後でナナチャンから湿布を貰っておくにや」

瑞樹 「心得てるわ。それはそうと、そろそろ戻らない？」

未央 「だね。領海線越えたら、外交とか色々めんどく…——ん？」

瑞樹 「どうかしたの？」

未央 「ちよつと2人とも、下見て」

みく 「何にや!?!あれ!?!」

瑞樹 「巨大な影…。潜水艦かしら」

未央 「この辺潜水艦が通るなんて報告は…、アキっち!アキっち!」

晶葉 『——何だ?異常事態か?』

未央 「みたいなものね!ね、今日この海域に潜水艦が入るなんて情報あった?」

晶葉『いや、そんな情報は受けていないな』

瑞樹「そうなるよこの影は所属不明の潜水艦か…」

みく「百鬼帝国…!?!」

未央「威嚇射撃で出方を見てみるよ!」

晶葉『人間側の潜水艦だと後々面倒だ。絶対当てるなよ!』

未央「分かってますって!——ミサイル発射!」

ペアー号から放たれた2発の対潜ミサイル。

爆発の衝撃が海上に水柱を生み、そこから姿を現したのは、

ギャオオオオオンツ!!

瑞樹「!? 何なの? コイツ…!」

未央「か…: 怪獣だあ!!」

晶葉『そんなSF映画じゃあるまいに!』

未央「それじゃあ何だったの! アキっちの方にも映像見えてるでしょ!」

晶葉『それは…、まさか古代の恐竜の生き残りか?』

瑞樹「にしたって大きすぎるわよ!」

怪獣《キシヤアアアア!!》 ボッ

みく「にやにや!?! あいつ、一杯ある足みたいなの先の頭から火を噴いたにや!」

未央「大体どんな生き物だよ！胴体みたいなでつかいトコにも顔があつて、一杯生えてる足か触手みたいのものにも、竜みたいな顔がついてる生き物つて！」

瑞樹「確かに見たことがない。けど、こちらに攻撃すると言う意思が確認できた以上、放置しておくのは危険ね！」

未央「相手した事ないタイプだけど、いっちょ派手にやつてみるつきやないか！」

晶葉『直ぐにネオゲッターチームにも召集を掛けて出撃させる。それまでは無茶するんじゃないぞ！』

未央「善処はするよ！——みくにゃん！瑞樹姐さん！」

みく「よろしくにゃ！」

瑞樹「任せたわよ！」

未央「チェンジゲッター！3イイ!!」 ガキインツ

ゲッター3へと合体し、海中へ。

瑞樹「成る程。全体を見ると、クラゲみたいな全体をしてるのね」

未央「クラゲの親玉、つて割にはでかすぎる気もするけど…。コンピュータの計測が…全長500m!？」

みく「うえ…。みくこういうのダメにゃ…。未央ちゃん、早くやつつけるにゃ！」

未央「つて言われても、どこから攻めれば…」

怪獣《グギャアアアア!!》

瑞樹「向こうから来てくれるわよ!」

未央「それは勘弁!」

次々に襲い来る竜頭のついた触手を、ゲッター3の拳で払い除ける。

未央「このっ!このっ!こうなったら破れかぶれだ!」

未央「ゲッターミサイル!!」

目前に迫った竜頭に、至近距離からゲッターミサイルを浴びせ、破壊する。

怪獣《ギャオオツ!》

みく「やったにゃ!」

未央「へへっ!どんなもんだい!」

瑞樹「待って!様子が変よ…!」

未央「え…?」

ゲッター3の目の前で破壊された部分の断面が膨らみ、隆起して、

みく「な、治っちゃったの!」

未央「コイツ、なんてインチキ…!」

瑞樹「インチキでも事実よ!一旦距離を取って!」

未央「言われなくとも!」

海底に着地し、急ぎのバック走行で距離を取る。

みく「こんなのどうやって倒せって言うにやあ！」

未央「策がなくとも、取り敢えず当たって碎けてみるしか、ない！」

キヤタピラの唸りを高鳴らせ、海底の隆起した岩礁を遮蔽物にして触手の攻撃を躲しながら距離を詰める。

瑞樹「どうするの？」

未央「真ん中の顔面に至近距離からミサイルを叩き込んでみる！」

みく「あそこまで行けるにや!？」

未央「相手の再生能力がどこまであるか知らないけど、触手があそこから生えてるんならそこが相手の中心って事でしょ？」

瑞樹「そうね…。中枢なら、神経が集中してるから…痛手を負わせられるかもしれないわね」

怪獣《ギヤオツ!!》

未央「っ!!」

岩礁を突き破って口を開け放った竜頭を、ゲッター3を上昇させて回避。

何本かの触手が、岩礁にかじりつき、一瞬動きを止める。

未央「今だ！」

ゲッター3が動きを止めた触手の上を伝い、怪獣の目前へ迫り、

未央「ゲッターミサイルツ!!」

至近距離でのゲッターミサイルを浴びせる。

怪獣《キュアアアアア!?》

みく「こつちの攻撃が効いてるにや!」

瑞樹「これで少しは効き目があれば良いんだけど…」

怪獣《ギョアアアアアツ!!》

未央「お、怒ったあゝ!」

怪獣の咆声に呼応するように、暴れ始めた触手の上から振り落とされる。

未央「くくつう…!」

怪獣《キシヤアアアアア!!》

着地したゲッター3に四方八方から触手が襲い来る。

みく「か、回避にや…!」

未央「精一杯やつてるけど…、ゲッター3の機動力じゃあ…」

凄まじい勢いで迫る触手が、ゲッター3の履帯を砕き、腕の蛇腹を破壊し、表面装甲

を削っていく。

瑞樹「不味いわね…。このままじゃゲッターが水圧に耐えられない…!」

「ゲッタートルネード！」

未央「!?」

ゲッター3と、触手の間に割って入った旋風が、触手の猛攻を断ち切る。

菜々「お待ちせす！M3チームの皆さん！」

未央「ネオゲッター3……！カレン！」

加蓮「今の内に体勢を整えるよ。こっちに！」

未央「おう！」

ゲッター3とネオゲッター3が合流する。

加蓮「晶葉に言われて飛んできたけど、何あれ？」

奈緒「洋モノB級映画のモンスターよりヤバイぞ……。あれ、どうやって倒せば良いん

だ？」

加蓮「……さすがにあれば、フィンガーネットじゃ捕獲できないよね……」

未央「触手の根本、胴体みたいなトコが一応弱点みたい」

加蓮「……オツケー。それじゃ、そこに突撃してプラズマブレイクか」

菜々「そ、そこまでどうやって向かうつもりですかあ……？」

加蓮「そりゃあ……ゲッター3なら……」

未央「パワーで……！」

加蓮&未央「押し通る!!」

加蓮「タンクモード!」

ネオゲッター3は脚部を無限軌道へと変化させ海底から、履帯の壊れたゲッター3は海中から、それぞれの最大速度で怪獣に突撃を掛ける。

怪獣《ギユアアアア!!》

未央「お…!」

加蓮「はっ!」

襲い来る触手を拳で殴り飛ばしながら、徐々に距離を詰めていく。

未央「ゲッターミサイル!」

怪獣までの距離が中程に入った所で、ゲッター3がミサイルを放ち、ネオゲッター3の正面に“穴”を作る。

未央「カレン!」

加蓮「プラズマブレイク…」

怪獣《ギアアアアアア!!!》

怪獣まであと僅か、と言うところで、突如怪獣の口から響いた波動。

加蓮「ぐっ…!?!?!」

咆声の波動に堪らず、ネオゲッター3は勿論、ゲッター3まで弾き飛ばされる。

未央「い、今のは…」

晶葉『気を付けろ！恐らく、高周波による音波攻撃の一種だ。まともに食らえばゲッター3でも装甲がもたない！』

加蓮「超音波攻撃って訳…」

瑞樹「ここまで来て、そんな隠し玉を持っていたなんて…」

菜々「待つてください！まだ何かするみたいですよ！」

みく「何にや…？触手を回転させてる…？」

晶葉『!? 不味い…！急いでそこから離れるんだ！』

一同「「!?」」

回転した触手がその速度を増し、やがて巨大な渦の流れを作り出す。

未央「おお…っ!?!」

加蓮「ネオゲッター3でも、脱出できない…!?!」

巨大な渦潮が、ゲッターを含め、辺りのものを巻き上げる。

奈緒「うわあああああああ!?!」

みく「うにやあああああ!?!」

激しい渦潮が高水圧の壁となってゲッターを叩き付け、巻き上げられた岩塊が、ゲッターに衝突し、ダメージを与えていく。

未央「ぐっ……」

加蓮「っ……」

大破寸前の2体のゲッターが、海底に叩き付けられる。

晶葉『潮流攻撃……。マリン・ボルテックスか……!』

瑞樹「……ダメージチェック……浸水箇所、閉鎖……」

みく「みんな……、生きてるにや……?」

菜々「い……生きてるのが不思議なくらいです……」

奈緒「チクショウ……。あんなのもう一発でも喰らったら、完全にアウトだぞ……!」

未央「こつちもつかうかしてちゃ……。いられないか……!」

最後の力を振り絞るように、ゲッター3を走らせる。

菜々「ま、まだ戦う気ですか……!?!撤退しましょう!」

未央「コイツをこのまま、のさばらせて置くわけには、行かないってね……!」

瑞樹「それには、賛成ね……」

未央「こつちだって最後の手段だぁー!!」

未央「パワーアーム……!」

ボロボロの蛇腹腕を伸ばし、怪獣に絡ませる。

奈緒「まさか……。あれを投げるつもりか……!」

菜々「やめてください！そんな事したらゲッターも未央ちゃんも持ちません…！」
未央「ぐうう…っ!!大…雪山…!!」

500m超の巨体を、一回転させる度に、ゲッター3の腕が歪み、軋む。

未央「おもしろい…!!」

怪獣をなんとか投げ飛ばした瞬間、ゲッター3の両腕は、バラバラに崩れ去った。

未央「カレェン!!」

加蓮「っ…!!」

水平に投げ飛んだ怪獣を、ネオゲッター3が最大速度で追う。

奈緒「どうする気だ!」

加蓮「アイツの動きが止まった瞬間に、0距離から最大出力のプラズマブレイク…!!」

菜々「今の状態のネオゲッターでそれをやったら…!電流がコックピットまで…!!」

加蓮「迷ってる時間は…ないよ…!!」

岩礁に叩きつけられた怪獣に、勢いに任せてネオゲッター3のホーンを突き立てる。

加蓮「――プラズマ……ブレイクッ!!」

青白いプラズマ光が、海底を眩く照らす。

菜々「きゃあああああ!!」

奈緒「う…ぐっ…!!」

加蓮「っ……………」

怪獣《ギョアアアア!?》

最大のプラズマブレイクで怪獣を焼いた後、エネルギーを失ったネオゲッター3は、海底へと没した。

未央「……………はあ…、や、やったの…?」

怪獣《グウウ……………》

未央「コイツ…。まだ、生きて……………」

ゲッター3もまた、力を失ってがくり、と項垂れる。

怪獣《……………》

光を失っていくコックピットの中で、怪獣が何処かへと退散していくのを感じた。

未央「あんだだけ痛め付けば……………しばらく動けない…よね……………」

未央「……………へへっ、ざまあみろ…だ……………——」

みく「……………」

瑞樹「……………」

加蓮「……………」

菜々「……………」

奈緒「……………」

う
う
う
う
……
……
。

第13話 『大海獣決戦!・後編 相伝、大雪山おろし!!』

~~~~~ 早乙女研究所 会議室 ~~~~~

卯月 「——晶葉ちゃん!!」

晶葉 「…おお、卯月。お帰り」

卯月 「あ…ただいま帰りました…って、そんなこと言ってる場合じゃ…!」

凜 「未央達がやられたって、聞いたけど?」

晶葉 「まあな」

かな子 「そんな…気楽な…!」

晶葉 「落ち着け。私達が慌てても仕方ないだろう」

卯月 「相手は百鬼帝国ですか?」

晶葉 「いや、まったく別の脅威だ」

卯月 「まったく別の、脅威…?」

晶葉 「そうだ。あんなもの、敵とは呼べん。厄介な災害だよ」

凜 「どういう事?」

晶葉 「これを見てくれ」 ブウン

会議室の大型スクリーンを点ける。

かな子「これは…、恐竜…？」

卯月「クラゲ…じゃないですか？ほら、脚が一杯生えてますし」

凜「晶葉…これが…？」

晶葉「ゲッター3及びネオゲッター3のカメラ映像に残された脅威だ」

凜「これが未央達を…！」

晶葉「卯月達が帰ってくるまでに個人的に調べてみた。白亜紀以前…ジュラ紀に生息していたとされる、ドラゴノザウルスという種に酷似している」

かな子「酷似しているって…、同種じゃないんですか？」

晶葉「ドラゴノザウルスの全長は大きいもので、20mそこそこ。しかし今回現れたものの全長は目測でも500mは超えている」

卯月「ご、500m…?!そんな大きな恐竜がいるんですか…？」

晶葉「通常の生物の進化で、そこまで巨大な進化を遂げる事は、まずないだろう」

卯月「じゃあ、どうして…？」

晶葉「…これを見てくれ」ピッ

リモコンで映像を切り替える。

晶葉「ゲッター3に付着していた、ドラゴノザウルスと思われるモノの肉片、その遺

伝子の解析映像だ」

卯月「……難しい事はよく分かんないんですけど、これで巨大化の原因が分かるんですか?」

晶葉「それが直接的な原因かは分からない。だが、原因の1つがあると、私は考えている」

卯月「……?」

晶葉「分かりやすく言うと、有害物質に対する抗体だ」

かな子「抗体……」

晶葉「現代とジュラ紀とでは、海の水質は大きく異なる。特に、現代の海は人間による開発や自然破壊によって、大昔には存在しなかった有害物質が汚染している」

晶葉「ドラゴノザウルスがそれらの有害物質に対抗するため、その体に幾つもの抗体物質を作り、その結果巨大化したとしても不思議ではない」

かな子「昔は存在しなかった体に悪いものに立ち向かうために、体を大きくして強くしたって事ですか?」

晶葉「簡単に言えばそういう事になるな」

凜「それじゃあ、今のドラゴノザウルスは人間が作ったようなものって訳?」

卯月「そんな……!」

晶葉「…残念ながら、凜の言うとおりかもしれない。人間は、少し地球に対して独善的に改造しすぎたのかもしれない」

凜「そもそも、そんな巨大な生物が今の今まで何処に潜んでいたのだったのも、気になるよね」

晶葉「だが、いるものは事実として受け止めなくてはな。受け止めた上で、作戦を講じなくてはならない」

卯月「…倒すんですか？そのドラゴノザウルスを」

晶葉「私の話を聞いて同情したのか？だが、巨大に進化するしか生きる術がなかった以上、奴は現代に不適合な存在なんだよ」

晶葉「我々の手で葬る事が、せめてもの償いだ」

卯月「そんなの…！人間の勝手な理屈じゃないですか！」

かな子「…卯月ちゃん……」

晶葉「なら、ドラゴノザウルスを見逃すか？あいつはゲッターを下した。未央達に重症を負わせたんだ。一番容態の酷いものは、未だ目を覚まさん」

卯月「でも…」

凜「未央達だけじゃない。ドラゴノザウルスは、もつと多くの人を襲うよ」

卯月「そんなの、まだ決まった訳じゃ…！」

晶葉「いや、既に襲われている」

卯月「!?」

晶葉「今分かっている時点で、ドラゴノザウルスの主な食料とされているのは、原油だ」

凜「原油の元々を考えれば、自然ではあるね…」

晶葉「その為、海外へ原油を運ぶタンカーが、既に何隻も奴に沈められている。奴にとつては原油が目当てだろうが、当然乗組員も犠牲になっている」

卯月「……」

晶葉「電気の普及が進んでいるとはいえ、まだ生活の一部を化石燃料に頼っている以上、このまま原油が狙われ続けるのは国際的な混乱を招く」

晶葉「それだけじゃない。そんな化け物がのさばっているのは、貿易業も成り立たず、生活物資のほとんどを輸入に頼っているこの国はいずれ枯渇する」

晶葉「ドラゴノザウルスの存在が、どれだけ社会に対して弊害を生んでいるか、少し考えれば分かるだろう?」

卯月「晶葉ちゃんの言っている事は分かります。けど……!」

凜「卯月」

卯月「凜ちゃん……!」

凜 「私達は、たくさんの人の笑顔を守る為に、その障害になる脅威と戦うって、そう決めたはずだよ」

卯月 「……」

凜 「卯月の気持ちは痛いくらい分かるよ。卯月は優しいし、ドラゴノザウルスを生んだのは私達人間だよ」

凜 「だけど、私達は戦わなくちゃいけない。人間の勝手で生んだものと、人間の側に立つ者として」

卯月 「……」

晶葉 「――私も少し頭を冷やしてくる。斬チームは、今は格納庫だったか」

晶葉 「斬チームも揃い次第、ドラゴノザウルス撃滅作戦の概要を説明する。色々思うところはあると思うが、今は少し、休んでおけ」

――。

くくく 格納庫 くくく

美穂 「これが、ゲッター3……?」

大破を通り越して、スクラップ同然となったゲッター3を見上げる。

李衣菜 『派手にやられたよ。まったく…』

美穂 「整備班の人も大変だね…」



李衣菜『大将曰く、1から作り直した方が早いってさ。こんなになっただんじや、無理もないけど』

美穂「それだけ激しい戦闘だったって事だよね…」

李衣菜『そうだね…。…くそっ』

美穂「李衣菜ちゃん？」

李衣菜『ああ、いやゲッターがこんなになるまで戦ってる時に、何してるんだろくなつて』

李衣菜『今の私、全然ロックじゃない。…これじゃあ、ここに来る前と何も変わってない』

美穂「そんな事…」

李衣菜『いつけね!こんなところで油売ってる時間もなかったんだった。ゴメン美穂、そう言うわけだから!』

美穂「あ…!」

李衣菜を乗せたBTが遠ざかる。

美穂「…」

茜「美穂さーんっ!!」

美穂「茜ちゃん…!アーニヤちゃんも…」

アーニヤ「Доброй вечер…こんばんは、です。ミホ」

茜「お一人で…何やら黄昏ていたようですが！何かあったんですか!」

美穂「べ、別に黄昏てたは…。…ちよつと…怖くなっちゃって」

茜「怖く…?ですか!」

美穂「うん…。ほら見て、これ、ゲッターなんだよ?」

茜「ボロボロですね!最早鉄屑です!」

美穂「う、うん…。そうなんだけど、そんなハッキリ…」

アーニヤ「アー、ミホは、ゲッターをこういう風にした、相手が怖い…ですか?」

美穂「…うん。これから、そんなのこれから戦うのかなーって」

美穂「それにね、さつき李衣菜ちゃんが来たんだ」

アーニヤ「リーナ、が…?」

美穂「悔しがってた…。ゲッターに乗って、戦えないって。私、それに何も返してあげる事が出来なくて」

美穂「ダメ、だよね…?李衣菜ちゃんの分も戦ってあげるとか、私が仇討ちしてあげるとか、そういう事、言ってあげられるようにならなきゃ、って分かっているのに…」

アーニヤ「でも、怖い?」

美穂「…。先に戦ってたみんなは無事だったけど、私は、何時もみたいに変なとこ

ろでドジして、死んじやうんじやないかとか、2人を巻き込んだんじやうんじやないかって」

茜 「う〜む…!それは気負いすぎではありませんか!」

美穂 「…え?」

茜 「私も!当然アーニヤさんも!死ぬつもりなんてありません!!でも、人は死ぬ時には死ぬんです!それを恨む事なんて出来ません!」

茜 「ならば一蓮托生ですつ!私は美穂さんに命を預けます!美穂さんも私に命を預けてください!!」

アーニヤ 「Da…勿論、ワタシもですつ!」

美穂 「茜ちゃん…アーニヤちゃん…!」

茜 「心配しなくても、私達は勝ちますから!晶葉さん達が立案してくれた作戦に賭けましょう!」

アーニヤ 「アキハ…作戦…。そうでした!アカネ、ミーティングの事、忘れてます」

美穂 「ミーティング?」

茜 「そうでした!これから、今後の動きについて説明すると!晶葉さんが言っていた!」

アーニヤ 「それで…、ミホも、連れてきてほしいと。一緒に行きましょう?」

美穂 「う、うん…。分かった——」

## — 会議室。

凜 「ただいま」

卯月 「奈緒ちゃんと加蓮ちゃんの様子はどうでした？」

凜 「…2人共、戦闘のダメージは抜けきつてない、つて感じだったよ。加蓮はまだ眠ったままで、奈緒は起きてたけど、無理に気丈にした」

卯月 「奈緒ちゃんらしいですね…」

かな子 「他の人達は…！」

凜 「テスターチームと未央ならもう大丈夫だって。さっきリハビリがてら、歩いてる瑞樹さん達に会ってきたよ」

卯月 「何と言うか、スゴいですよね…」

凜 「伊達に丈夫さで選ばれてないからね。瑞樹さんとみくは、強引に使った大雪山おろしの影響で、気絶してただけつてもあるし」

かな子 「あの、菜々ちゃんは大丈夫だったんですか？奈緒ちゃんや加蓮ちゃんと同じく、ネオゲッターのプラズマを受けたんですよね…？」

凜 「それが…、本当に何でもない感じで挨拶されて、ちよつとビックリした…」

かな子 「それって、体が丈夫とか以前に、スゴい回復力じゃないですか？」

凜 「ホント。ドラゴノザウルスとやらもビックリの回復力だよ」

茜 「皆さん！お待たせしましたー!!美穂さんを連れてきましたよー！」

凜 「茜……。これで斬チームも全員か。後は博士達を待ただけだね」

「その必要はない」

美穂 「さ、早乙女博士：!?何時の間に……」

早乙女 「今しがた、茜くんが走っていくのが見えての」

凜 「それでナイスタイミングって訳」

晶葉 「再三言うが非常時以外、研究所内は走るのは禁止だぞ。大事な機材を運んでる

時だつてあるんだ」

茜 「善処しますー！」

晶葉 「まったく……。では、揃ったところで話を始めよう」

早乙女 「みんな、腰を下ろして、ゆっくり聞いてくれ」

卯月 「博士、ゲッターの整備は……?」

早乙女 「作業員を総動員して、早急に対処しておくが、破損具合が酷い。特にネオゲッターは、新たな装甲を橘研究所から取り寄せなければ足らんくらいだ」

美穂 「旧ゲッターの状態も見てたけど、あれをすぐに終わらせるっていうのは、作業員の人も大変だと思うよ」

凜 「ドラゴノザウルスには、ゲッターGとゲッター斬の2機で挑むしかないって事

か…」

早乙女「身も蓋もない言い方だが、ゲッターGを初めに撃たせなくて良かったのかもしれん」

早乙女「ドラゴノザウルスに関して、何の情報もない状態で戦ったのであれば、ゲッターGとて負けていたかもしれないからな」

かな子「そんな相手と…、ゲッター2機だけでどうやって戦うんですか？」

晶葉「確かに。ドラゴノザウルスは相当な再生能力を持っている事も先の戦いで確認されている。並大抵の火力では歯が立たないだろう」

晶葉「くわえて、有害物質への抗体を持っている為、毒物や化学兵器も、何処まで通じるか分からない」

早乙女「現状で、海中のドラゴノザウルスに対して、有効な手段は限られているだろう」

凜「海中で手段がなければ、奴を海上に誘き出せばいい」  
かな子「そんな無茶苦茶な…」

晶葉「いや、凜の言うとおりだ。相手が得意の土俵で、戦う必要はないのだからな」  
早乙女「これを見てくれたまえ」 ピッ

茜「これは…電波塔ですか!？」

アーニヤ「H e t : 電波塔のみたいなのが、4つ…。ただの電波塔ではない、ですネ？」

晶葉「アーニヤの言うとおり。これは、アメリカが開発した戦略兵器、プラズマディフアレーターだ」

卯月「戦略兵器：!?!」

晶葉「そうだ。この4本のタワーで囲まれた500m四方の空間に、凝縮したプラズマエネルギーを放出、超高密度のプラズマフィールドに敵を閉じ込め、プラズマの超光熱で一気に焼き払う戦略兵器だ」

晶葉「そのプラズマ出力は、ネオゲッター4機分に相当すると言われている」

かな子「ネオゲッター4機分：!?!そんな兵器が開発されていたなんて：：」

早乙女「プラズマディフアレーターを使用するには、この4本のタワーを建設する必要がある。タワーは使用時以外格納しておく事は出来るが、兵器としては運用性に乏しい」

凜「でも、今回の敵に対しては最適って訳？」

早乙女「うむ。ドラゴノザウルスを所定の位置に誘導さえ出来れば、容易に発動できる上、核のように周辺への被害は少なくて済む」

晶葉「今回はドラゴノザウルスのサイズを考慮して、1km四方の長大なプラズマ

「デイフアレーターを敷設する」

美穂「で、でもそんなものを一体何処に造るんですか？まさか日本じゃ…」

晶葉「心配には及ばん。作戦にはこの無人島を使う」ピッ

アーニヤ「無人島、ですか？」

晶葉「ああ、この無人島は先日、海底火山の噴火によって出来たもので、人間は勿論あらゆる生物が存在しない事は調査済みだ」

凜「そこにその戦略兵器とやらを設置して、ドラゴノザウルスを誘導するのは分かったけど…」

茜「問題は…どうやってそのドラゴノなんちゃらを陸に上げるか！ですね!!」

美穂「確かに、500mも大きいものを陸に上げるなんて、ゲッター2機でも大変そう…」

早乙女「それについても、一応作戦は講じてある。…晶葉くん」

晶葉「はい。水棲生物であるドラゴノザウルスを陸地に上げるのは並大抵ではない。ただ、前回の戦闘から、私はある可能性を見出しました」

卯月「それは…、何ですか？」

晶葉「ああ」

晶葉「ゲッターポセイドンによる大雪山おろしで、ドラゴノザウルスを目標地点に投



げ入れる」

かな子「そ、そんなの無理ですよ!」 ガタツ

晶葉「無理じゃない。実際、先の戦闘でゲッター3は大破した状態からドラゴノザウルスに対して大雪山おろしに成功している」

アーニヤ「ゲッター3の2倍、以上のパワーのゲッターポセイドンなら、余裕、という事ですね?」

かな子「でも、大雪山おろしって、未央ちゃんが何日も頑張って身に付けた必殺技なんですよね?」

凜「うん。一見単純に力任せに投げ飛ばしてるように見えて、間合いやタイミングを測るのには、十分な練習と経験が必要になる」

卯月「作戦の開始まで、私達にはどのくらいの期間があるんですか?」

晶葉「プラズマディフレーターの設定には資材の輸送を含めて10日、試運転やテストに4日:」

美穂「合わせて14日:2週間くらいあるんですね」

早乙女「その間、日本の自衛隊と米軍が協力して、ドラゴノザウルスによる被害を最小限に抑える為の陽動作戦を実施する」

晶葉「かな子にはその間、大雪山おろしを習得する為の特訓を行ってもらいたい」

かな子「2週間で、大雪山おろしを…」

凜「2週間を長いとるか短いとるか…」

卯月「私達も、感覚だけなら分かるんですけど…」

「そういう事なら、任せてよ」

凜「未央…、寝てなくて大丈夫なの？」

未央「へへっ、後輩に大事な必殺技を教えようってのに、おちおち寝ていられませんってね！」

卯月「でも、酷いケガです…。杖まで突いて…」

未央「恐竜帝国との決戦に比べたら、大した事ないよ」

未央「それで見むっち、大雪山おろしを覚えなきゃってわけだけど…」

かな子「そ、そうですけど…」

未央「任せて！バツチリ形にしてあげる！」

かな子「でも、本当にいいんですか？そんな簡単に…」

未央「急を要する事態だからね。それに、今のしまむーとしぶりんの相棒は、みむっちだから」

早乙女「話はまとまったかの？」

かな子「…はいっ。未央ちゃん、よろしくお願いします！」

未央「おう!任された!」

早乙女「斬チームには、自衛隊と共に陽動作戦にも参加してもらおう」

美穂「陽動…。つまり、ドラゴノザウルスがタンカーとか、船を襲わないようにすればいいんですね?」

晶葉「ゲッター2機を容易く退けた相手だ。くれぐれも無茶はするなよ」

茜「リョーカイですっ!!」

アーニヤ「Da:任せてください」

美穂「卯月ちゃん達の分も、私が頑張らなくっちゃ!」

早乙女「よし、斬チームの出撃は明朝だ。今日は各自、体を休めておくように」

未央「私達は早速特訓始めようか?シミュレータールームに行こっ!」

かな子「分かりました!」

卯月「私達も出来る範囲でサポートします!」

凜「時間はないけど無理は禁物だよ。かな子が倒れたら、意味ないんだからね」

晶葉「……」

早乙女「不安か?晶葉くん」

晶葉「ええ、作戦に関しては、まあ半々と云ったところでしょう。かな子達がうまくやってくれば、問題はありません」

晶葉「問題は、百鬼帝国に一切動きが見られないという事です」

早乙女「我々にとつては都合がいいが、樂觀視はできません、か」

晶葉「ただでさえゲッターが2機しかいない以上、最悪の事態は想定するべきです」

早乙女「そうじゃな。今は作戦が無事に成功することを願おう——」

—。

かな子「それで、レッスンルームに来ましたけど…」

凜「床の上に畳を敷いて、ここで特訓する気？」

かな子「シミュレーターじゃなくて良いんですか？」

未央「いいのいいの。ゲッターでやる前に先ず、体で経験しないとね？わたしもそうだったし」

凜「でも、未央はケガしてるよね？その体で柔道なんて出来るわけないし」

かな子「そうですね。胴着にも着替えてませんし…。私は、さつき着替えましたけど…」

未央「私は謂わばコーチだよ？みむつちの相手はちゃんと違う人に頼んであるって」

かな子「違う人って…？」

未央「ま、入ってきてもらおうか。どうぞ〜」

卯月「押忍！島村卯月、柔道でも空手でも頑張ります！」

かな子「う、卯月ちゃん…!?!」

凜 「前に教わった…有香じゃないの?」

未央 「うん。今回はスケジュールが合わなくてね」

かな子 「卯月ちゃんは柔道とか、経験あるんですか?」

卯月 「はい!前に学校で習った事があります!」

凜 「それって体育の授業だよね?ホントに大丈夫?」

未央 「まあしまむーだから、為せば成るって。一先ず一回組み合ってみよう?」

凜 「そういうノリでいいんだ…」

卯月 「それじゃあかな子ちゃん、よろしくお願いしますね!」

かな子 「は、はいっ!よろしくお願いしますっ!」

未央 「ではお二方、見合って見合って…」

凜 「それ相撲」

未央 「——ファイツ!」

ガッ

卯月 「っ!」

かな子 「…!」

凜 「さて、体格ならかな子の方が若干有利だけど…」

卯月「うう…せいっ！」　グワッ

かな子「きやつ……！」

未央「キレイな背負い投げ！」

凜「やつぱりゲッターでの戦闘がある程度活かされてる……！」

かな子「ガッ……！」

未央「決まった……！」

凜「言ってる場合!? かな子変な声出してたけど……！」

卯月「大丈夫ですか? かな子ちゃん? かな子ちゃん!？」

かな子「——」

未央「ありや? 気絶しちゃってる?」

凜「……これは、前途多難だね。色々と——」

~~~~~ 数日後　空母甲板　~~~~~

茜「う……ん! いい朝ですね!! ここでの生活も慣れてきました!」

美穂「作戦が終わる度に研究所に帰るわけにはいかないもんね。ゲッターも、甲板の上で整備を受けて……」

茜「しかし……ここにしていると自分がアイドルである事を忘れてしまいそうです! 早くステージの上に戻りたいですね!」

美穂 「ふふっ。そうだね。ここ、男の人ばかりでちよつと怖いし…。あ…みんな一生懸命戦ってるのは分かってるんだけど…」

茜 「ですね!ここが私達の居場所というわけではないですからね!」

美穂 「例の兵器の設置も順調みたいだから、後は研究所にいるかな子ちゃん達だね」

茜 「そつちの状況は分かりませんが!きつと大丈夫でしょう!作戦本番までに必ず完成させてくれます!」

美穂 「ふふっ、信頼してるんだ?」

茜 「はいっ!未央ちゃんを信じてますから!!」

アーニヤ 「Доброе утро…おはようございます…。アカネ、ミホ」

美穂 「アーニヤちゃん、おはよう」

茜 「おはようございます!!それで、今日の予定はなんと!?!」

アーニヤ 「あ…、今日は艦隊全体の Поставка…補給、です」

美穂 「じゃあ、今日は陽動おやすみ?」

アーニヤ 「そうですね。一応、私達は、戦闘機隊と一緒に、ドラゴノザウルスの監視をします」

茜 「分かりました!今日この近くを通る船はありますか!?!」

アーニヤ 「Нет。今日は、この周辺海域を航行する、船舶はない、と…」

美穂 「ドラゴノザウルスに狙われそうな船がないなら、気持ち楽なのかな？」

アーニャ 「Aa：ワタシ達の出撃は11時と、17時：後深夜から明け方までです」

美穂 「夜間監視もあるんだ……。時間空いた時にしっかり睡眠とっておかなきゃ……！」

茜 「夜は暗いですし、何もありませんからね！うっかり眠ってしまいます！」

美穂 「私達の誰かが起きてれば、ゲッターも墜落する事はないもんね」

茜 「最初の出撃は11時ですか……！まだかなり時間が空いていますね！早速寝直しますか！」

美穂 「あはは……。それもいいけど、ちよつと勿体ないかも……」

アーニャ 「それなら……。あー、また、釣竿、借りてきましたよ」

茜 「おー、いいですねー！では、今日も食料確保に協力といきますか!!」

美穂 「ここに来て毎日それなってるけど……。ホントに良いのかなあ？自衛隊の人、みんな忙しくしてるのに……」

アーニャ 「Aa：でも、ワタシ達に出来る事……。ここでは、少ないですね……？」

美穂 「……私達つて、ホントに何も出来ないんだなあ……」

茜 「当然です！私達はアイドルですからね！」

美穂 「……クスツ……。そう、だよね……」

茜 「ああ！そうと決まれば、出撃に向けて英気を養いましょう！」

アーニャ「ワタシ達で、大漁、ですっ♪」

美穂「ふふっ。茜ちゃん、またすぐ走り出さないでくださいね?」

茜「はいっ!善処します!」

—— 早乙女研究所。

かな子「……」

未央「みむっち、今日からシミュレータでの練習を始めていくよ」

かな子「はいっ!よろしくお願いします!!」

未央「うん!作戦開始まで4日…。みむっち自身の方ではそれなりに形になってきて

はいるから、あとはその感覚をゲッターに活かすだけだよ」

かな子「はいっ!出来る限りで、やってみせます!」

未央「よし、それじゃあ特訓開始だ!しまむー、シミュレータをスタートさせて!」

卯月『分かりました!2人の健闘を祈ります!』

ブウン…

かな子「!? ゲッタードラゴンが相手ですか!」

未央「みむっちには悪いけど、時間がないからいきなり実戦形式でやらせてもらうよ

!」

かな子「それ以前に、未央さんドラゴンを扱えるんですか!？」

未央「多少の違いはあれど同じゲッターだからね! シミュレータくらいなら、私にでも!」

凜『シミュレータでも性能のデータは実機とほぼ同じなんだ。動かしてるのが未央だからって油断していると返り討ちに合うよ!』

かな子「了解です!」

未央「しぶりんが地味に酷い!」

かな子「やあ!」

未央「ん? おっと——」

正面から突っ込んできたゲッターポセイドンを怯なす。

かな子「えい! えい! えい!」

未央「甘いよみむつち! そんな大振りに動いたんじや、百鬼メカだつて捕まってくれないよ!」ブンツ

ゲッタードラゴンの放ったローキックが、ゲッターポセイドンの足を払い、転倒させる。

かな子「あうっ!」

未央「さ、早く立ち上がって! 特訓はまだ始まつてもいないよ!」

かな子「ううう……!うわああ!!」

両手を地に着けて、跳び跳ねた動きですかさずゲッタードラゴンに組み付く。

かな子「ええー!いつ!」

未央「……えい!」

かな子「きやつ……!」

組み付いた勢いで、大雪山おろしに持つていこうとした、ゲッターポセイダンの軸足を再び払い、逆サイドへと転げ倒す。

かな子「うう……!」

未央「踏み込みが足りん!」

未央「その時の運や勢いで出来るほど、大雪山おろしは簡単じゃないよ!」

かな子「……す、すいません……!」

未央「謝るより先に立つ!本番の相手はドラゴンより巨大な化け物なんだから、ドラゴンくらい簡単に投げられるようにならなきゃ免許皆伝には程遠いよ!」

かな子「は、はいっ!」

未央「それじゃあもう1回最初から!」

かな子「はい!」

卯月「……スゴい熱と迫力ですね……。未央ちゃん」

凜 「そりや、あと4日で後輩に大雪山おろしを授けなきやいけないわけだし。未央なりに焦つてゐるんでしょ？」

卯月 「向こうの方では、施設の設定が終わつてゐる頃ですか……」

凜 「うん。確か今日から晶葉や橘博士も立ち会つて、起動試験が始まるはずだよ。それで問題がなければ、後は私達だけだ」

卯月 「大雪山おろしを扱い慣れてもいないのに、いきなりピンポイントに投げ込むなんて……」

凜 「無茶でもやるしかない。実力で足りない分は、後は運に頼るしかないよ」

卯月 「今更ですけど、本当にかな子ちゃんがやらきやいけないのかな？今回だけポセイドンに未央ちゃんが乗るとか……」

凜 「最初に合体してから、未央を乗せれば、出来るかもしれないけど。でも、今日みたいな状況が、今回だけとは限らないから」

卯月 「……この後の、先の事を考えてつて事ですか？」

凜 「そんな時、都合よく未央がいてくれるとは限らないから。これはかな子の為でもあるし、これから先の事為でもあるんだよ」

卯月 「でも、体を壊したら何にもならないですよ……。せめて私達にも何か出来る事があれば……—そうです！」

凜 「何処に行くの?」

卯月 「お茶とお菓子を用意するんです! 何時もかな子ちゃんがしてくれた事、今こそ返さなくっちゃ!」 タタツ

凜 「行っちゃった…。まったく、何かしてないと落ち着いていられないんだから…。フツツ…」

凜 「——ん?…博士から通信…?まさか…!」

早乙女 『凜くん、訓練は順調かね?』

凜 「…良好とは言えないね」

早乙女 『そうか…』

凜 「何かあったの?」

早乙女 『うむ。実はドラゴノザウルスが進路を変え、プラズマディフレーターを設置している無人島に接近しておる』

凜 「いきなり…?どうして…」

早乙女 『詳しい事は分らん。施設設置の為に船舶が複数出入りしているところを感付かれたのかもしれない』

凜 「島に向かう船舶の燃料を狙って、って訳…。陽動艦隊、ゲッター斬はどうしてるの?」

早乙女『ああ、タイミングの悪い事に百鬼帝国の勢力に遭遇してな。ゲッター斬はそっちの対応に追われている』

凜「百鬼帝国……ここ暫く大人しかったのに、いきなりだね」

早乙女『元々こちらの都合に合わせてくれる連中ではない。現状を踏まえ、作戦本部はドラゴノザウルス殲滅作戦を強行すると決定した』

凜「本当に……？ プラズマディフレーターも、今日設置が終わったばつかなんだよね？ 試運転もなしに、ぶっつけ本番でやる気？」

早乙女『仕方あるまい。ゲッターを欠いた今、陽動艦隊にドラゴノザウルスの進路を変えさせるだけの余力は残されていない』

早乙女『それよりも問題は……』

凜「私達だね」

早乙女『…そうじゃ。プラズマディフレーターが上手く作動しても、大雪山おろしが成功しなければ意味はない』

凜「やってみせるよ」

早乙女『……その言葉、信じてもいいんだな？』

凜「私達はゲッターチームだから。出来ないなんて言つてられない」

早乙女『分かった。すぐに出撃準備に取りかかってくれ』

凜 「了解」

ピッ

卯月 「凜ちゃん……」

凜 「聞いてたの? なら、話は早い」

卯月 「いくらなんでも無謀です!」

凜 「不測の事態は、想定してたはずだよ」

卯月 「でも、何も今強行しなくても……!」

凜 「いや、今じゃなきやダメなんだ」

卯月 「どうして……?」

凜 「ドラゴノザウルスが島に向かってるって事は、少なくとも島が戦場になる」

凜 「もし万一でも、プラスマディフレーターが破壊されるような事になれば、次は

いつ作戦を執行できるか分からない」

凜 「チャンスは二度、ある訳じゃない私達は1回のチャンスに全力を尽くすしかない

んだよ」

卯月 「……」

凜 「かな子、未央特訓を中止して。出撃だよ」

かな子 『出撃って……、どういう事ですか?』

凜 「状況が変わったんだ。作戦の結構が早まった」

未央 『マジい……？まだ大雪山おろし半分も完成してないよ？』

凜 「でも、やるしかない」

かな子 『……』

卯月 「かな子ちゃん……」

かな子 『分かりました。すぐに出撃の準備をします』

卯月 「!! 良いんですか!？」

かな子 『よ、良くはないです……。不安だけど……不安で一杯だけど、でも、ゲッターに乗って戦うってそういう事の連続だと思っから……!』

かな子 『だから、やります!大雪山おろし……ぶっつけ本番で、完成させます!』

未央 『いよっ!よく言っただみむっち!みむっちももう立派なゲッターチームの一員だね』

かな子 『そ、そうですか……?』

未央 『そ!だから最後に、大雪山おろしを成功させる一番のコツを教えてあげる!』

かな子 『コツ……。何ですかそれは……!』

未央 『ふふふ……!それはね……ズバリ!気合!!』

かな子 『き、気合ですかあ?!』

凜 「未央も、はじめはそれで大雪山おろしを成功させたわけだしね。以外と洒落になつてないかも」

かな子 『そ、そうなんですか…。分かりました!私、気合で頑張つてみます!』

凜 「よし、ゲッターGチーム、出撃だよ——!」

~~~~~ 無人島 ~~~~~

—— ガキンツ

アーニヤ「:っ!」

美穂 「アーニヤちゃん大丈夫!」

茜 「空気を読まないのは察してましたが、こんな時でも弁えないとは思いませんでした!」

「はははっ!俺もブライ大帝直々の命令で、あの古代生物の捜索に出て、まさか貴様らがこんな事してるとは思いもしなかったぜ!」

黒塗りの百鬼メカがゲッター紫電に迫る。

「大したもんだぜあの古代生物はよ!あれを本格的に俺達の制御下におけりやあ、ゲッター打倒だつて夢じゃねえぜ!!」

「だがその前に、テメーの首はこの闇竜鬼が獲る!そうすりゃ俺にも箔が付くつてもんだ。もう他の百鬼衆共にも笑わせやしねえ!」

茜 「残念ですが！私達の首はそんな叩き売りはしていませんので！」

アーニヤ 「ゲッター影分身!!」

ゲッター紫電が無数の分身の中に掻き消える。

闇竜鬼 「ふん！上だな」

アーニヤ 「!?」

正確に打ち出された右腕のチェーンアンカーが、急降下で迫ったゲッター紫電に突き刺さる。

アーニヤ 「アアッ!」

姿勢を崩され、地に叩き落とされるゲッター紫電。

闇竜鬼 「俺のメカ闇竜鬼は、全身がレーダーの役割を持っている。小細工は通用せん！」

茜 「くあく〜！ゲッター紫電では相性が悪いですか!」

美穂 「向こうの反応も早いし、おまけにレーダーに映りにくくて、しつかり見てないと見失っちゃいます！」

アーニヤ 「おそらく、あの黒い色が、特殊な塗料なのでしょう…。本来は隠密行動用なのでは…」

茜 「両腕のアンカー以外は武器らしいものも装備してませんしね!」

美穂「相手のリーダーを掻い潜って近付いて、アンカーで捕縛する…?」

アーニヤ「ムア…きつと、ドラゴノザウルスを捕縛するために出てきたんですね…」  
茜「烈火にチェンジしますか!?!」

アーニヤ「H e T…相手が捕獲に優れていると推測できる以上、1対1の状況で、チェンジするのは危険、です」

美穂「じゃあ、このまま紫電で戦うしか…!」

闇竜鬼「お喋りはそこまでにさせてもらおうぜえ!!」

アーニヤ「っ!!」

射出されたチェーンアンカーを寸でで躲す。

アーニヤ「…蛇旋光!」

闇竜鬼「チィ…ッ!前が見えん!」

蛇旋光を広範囲に放って目眩ましにし、ゲッター紫電はその中を正面から突っ切る。

アーニヤ「千極針ツ!!」

闇竜鬼「くう…!?!」

咄嗟に身を仰け反らせたメカ闇竜鬼の表面を千極針が削る。

茜「やりました!小細工がダメなら、正面からに限りませねっ!」

《グギャオオオオオ!!》

アーニャ「いけない……!ドラゴノザウルスが……!」

美穂「だ、大丈夫ですっ!」

ゴオオッ——!!

美穂「Gチームが来ました!」

—。

かな子「チェンジ、ポセイドーン!!」

空中で合体したゲッターポセイドンが海中へ潜行する。

ドラゴノザウルス《……》

卯月「間近で見ると更に大きく見えますね……!」

凜「これは、未央達も苦戦する筈だよ。かな子、まずは落ち着いて攻めるよ」

かな子「はいっ!……落ち着いて……深呼吸……」

橘『Gチームの諸君。聞こえているかね?私だ。橘だ』

卯月「橘博士!」

橘『今こちらで、プラズマディファレーターのエネルギーをチャージしている最中

だ』

橘『装置を作動させるには後10分は掛かる。それまでなんとか時間を稼いでく

れ』

卯月「了解です!」

凜「聞いた通りだ。先ずは10分、こいつの足を止めるよ」

かな子「足を止めるって言っても、1機だけでどうやって…」

凜「ポセイドンのパワーと火力を信じる!」

かな子「わ、分かりましたあ!」

凜の言葉に気圧されるように、ゲッターポセイドンをドラゴノザウルスに飛び込ませ、

かな子「ええいつ!」 ガンッ

その顔面に、渾身の拳を叩き込む。

ドラゴノザウルス《ギャアアアツ!!?》

卯月「入った!?!」

かな子「い、いえ…!あの表面、何か柔らかくて…手応えがありません!」

ドラゴノザウルス《キシャアアアアツ!!》

凜「かな子避けて!」

かな子「え…!——きゃああ!」

反撃と言うように、真横から打ち込まれた触手の竜頭の一撃がゲッターポセイドンを打ち据える。

かな子「うう……」

卯月「流石ゲッターポセイドンですね……。あれ一発くらいじゃ、機体はビクともしません……」

凧「一発くらいじゃ、ね。何発も喰らうとそうはいかないよ。かな子！」

かな子「は……はい！」

態勢を立て直し、ゲッターポセイドンを海中で浮遊させ、追撃に襲い掛かる竜頭を躲けていく。

かな子「うう……っ！ストロングミサイル!!」

正面に迫った竜頭に、ストロングミサイルを抱え、叩き込む。しかし、

卯月「ダメです！すぐに再生が始まってます！」

かな子「こ、これじゃあ数が多すぎてじり貧ですよお!!」

凧「弱音は最後の最後に吐く！取り敢えず距離を開けて！」

かな子「り、了解！」

足裏のスクリューを使い、大きく後ろへ後退。岩礁へ足を着ける。

凧「そこでゲッターサイクロン！」

かな子「ゲッターサイクロン!!」

ゲッターサイクロンが海中に作り出した海流の乱れが、竜頭の挙動を乱す。

かな子「これは…」

凜「これで向こうの触手の攻撃は凌げる」

ドラゴノザウルス《グギャアアアア!!》

卯月「ドラゴノザウルスが、触手を大きく開いて…!」

凜「マリリン・ボルテックスが来る…!かな子!」

かな子「はい!」

両足をキヤタピラへと変形させて、ゲッターポセイドンが海底を駆ける。

ドラゴノザウルス《ギャオオオオ!!》

ドラゴノザウルスの下部から放たれたマリリン・ボルテックスが、海底を打ち、岩礁を  
 抉る。

卯月「うう…。すごい引力…。引き込まれます…!」

かな子「でも、ポセイドンのパワーなら…!」

ひたすら操縦桿を前に倒し、強引にマリリン・ボルテックスの引力から抜ける。

かな子「レバーが軽くなった…?な、何とか…」

卯月「反応が遅れてれば、私達もあんな風に…」

海中を漂う岩塊に視線を送る。

凜「言ってる場合じゃない。まだ戦闘中だよ。気を引き締めて!」

かな子「は、はい……！」

ドラゴノザウルスに向き直る。

凜「…：プラズマディファレーターの方は、順調だといいけど…」

—。

闇竜鬼「成る程！それがお前らの狙いか！」

美穂「あ！百鬼メカがプラズマディファレーターの方に！」

アーニヤ「行かせません！」

メカ闇竜鬼の正面に立ちはだかる。

闇竜鬼「どきな！」

メカ闇竜鬼の剛腕が、ゲッター紫電を打ち据える。

アーニヤ「キヤアツ！」

茜「無茶です！ゲッター紫電では、耐久戦は持ちこたえられません！」

アーニヤ「…：それでも、コレは破壊させません！」

ゲッター紫電を起こし、メカ闇竜鬼に向かい、千極針を突き出す。

アーニヤ「ハア!!」

闇竜鬼「！」

アーニヤ「!？」



腰を屈め、ゲッター紫電の攻撃を躲し、

闇竜鬼「——フンツッ！」

下から打ち上げるように放ったアンカーの拳が、ゲッター紫電の鳩尾にめり込む。

美穂「あ…きやつ——！」

衝撃が、金剛号のコックピットに走る。

打ち上げられたゲッター紫電は、空中で大きく弧を描いて地面に急落下。全身を激しく打ち付ける。

アーニヤ「ウウ…。ミホ…ケガないですか…？」

美穂「——わ、私は大丈夫…。体丈夫だから…。えへへ」

茜「しかしマズイですよ…！相手がプラズマなんとかの方に向かってます！」

美穂「は、早く何とかしなくちゃ…！アーニヤちゃん！」

アーニヤ「подожди те…！今、再起動を…！」

闇竜鬼「うらっ!!」 バゴッ

茜「プラズマなんちゃらが！」

美穂「鉄塔が一本でも破壊されたら…。アーニヤちゃん！」

アーニヤ「待って…く…ださい…！足が地面の隙間に挟まってしま…！」 ガンツ  
ガンツ

闇竜鬼「これで終わりだあ!!」

アーニヤ「………っ!」

——ブオンッ

闇竜鬼「ぐはっ!?!」

美穂「あれは——!」

茜「ゲッタートマホークです!!」

美穂「でも、ゲッター斬とゲッターG以外で動けるゲッターなんて、研究所には……」

アーニヤ「あのトマホークは……まさか——」

アーニヤ「ダイノゲッターロボ!?!」

闇竜鬼「ぐう……。ふふふ……。何者かと思えば、人間共に敗北したトカゲ野郎のパチモ

ノゲッターじゃないか」

ニオン「ふんっ。卑怯な手しか使えん鬼共には、その品のない姿はお似合いだな」

闇竜鬼「何を……!」

アーニヤ「キャプテン……ニオン……!」

美穂「ニオン……さん……。それがあのゲッターのパイロットの名前……?」

茜「恐竜帝国のゲッター……何ですか!?!それがどうして私達を……!?!」

ニオン「勘違いするな」

ニオン「俺は、百鬼帝国とやらの実力がどんなものか、一度手合わせしてみたかっただけだ」

「素直ではないのでしてー」

茜「何です!?!女の人の声…!?!」

ニオン「お前は黙っている、芳乃。今からでも3号機のコックピットから引きずり下ろしてもいいんだぞ」

芳乃「それはー、あまりいい判断ではないと思ひましてー。だいのゲッターの性能が下がってしまいますよー?」

ニオン「……」

ニオン（…確かに、芳乃を乗せてからダイノゲッターのゲッターエネルギーが上昇している…。何者なんだ…?こいつは）

芳乃「他の何者でもなくー。芳乃は芳乃でしてー」

ニオン「……チツ」

ニオン「何をしている女ゲッターロボ!とつとと分離しろ!分離すればそこから抜けられるだろう?」

茜「ダイノゲッターが百鬼メカの注意を引いてくれれば、ゲッターチェンジする時間ができます!」

アーニヤ「信じるしか、ありませんか……！」

アーニヤ「オープンゲット！」

闇竜鬼「ゲッターめ！好きにはさせんぞ！」

ニオン「貴様の相手は俺だ！」

ダイノゲッターが、メカ闇竜鬼に飛び込む。

闇竜鬼「ぐっ……！こいつ、ロートルゲッターの当て馬の癖に……！」

組み付いたダイノゲッターを、一本背負いの要領で投げ飛ばす。

ニオン「チィッ……！」

闇竜鬼「貴様が望むのならその通りに……！」

ニオン「!?」

闇竜鬼「二番先に葬ってやるよ！」ズワッ

茜「チェンジゲッター！烈ッ！火ア!!」

茜「火斬刀!!」

ガキンッ

ダイノゲッターに降り下ろされようとしたアンカーアームの一撃を火斬刀が受け

止める。

ニオン「貴様……！」

茜 「これで貸し借りはなしです!」

茜 「でやっ!!」

受け止めた腕を払い上げて吹き飛ばす。

閻竜鬼 「このお……!」

ニオン 「海の化け物がこっちに迫っている! さっさとケリを着けるぞ!!」

芳乃 「2つの力を合わせましょー」

茜 「合体光線ですね! 分かりました!!」

閻竜鬼 「1機増えたくらいで…調子に乗るなあ!!」

ニオン 「…バカめ。——ゲッタービームツ!!」

茜 「斬っ! 魔光お!!」

2機のゲッターから放たれた2つの閃光が、走り、飛び込んできたメカ閻竜鬼を貫いた。

閻竜鬼 「…お、俺だって百鬼衆の1人なんだぞ…。こんなところで…! 俺があ!!」

ニオン 「終わりだ!」

茜 「ボンバー……ツ!!」

閻竜鬼 「が…が、がああああああああ!!?」

爆炎。

辺り一帯に熱と衝撃が広がり、メカ閻竜鬼は黒煙となつて消滅した。

茜「やりました！逆転勝利!! 貴方のお陰です!! ありがとうございます!!」

ニオン「…驚くほど素直な奴だ」

芳乃「様々な形はありましてー。彼女のようにー、そなたとも歩み寄る事もできましょー」

ニオン「人間に降れと言うのか？」

芳乃「降るのではなくー。手と手を取り合いー、共に歩むー、友であるならばー」

ニオン「……ふん」

アーニヤ「ドラゴノザウルスが来ます。ワタシ達も早くここを離れましょう」

美穂「かな子ちゃん、大丈夫かな…?」

茜「大丈夫です! 心配は要りません! かな子さん達ならば、絶対やつてくれますから!!」

—。

かな子「—きやあ!」

卯月「かな子ちゃん、しっかり!」

かな子「はいっ! ゲッターサイクロン!!」

横倒れになったゲッターポセイドンに牙を剥いて襲い掛かった竜頭をゲッターサイ

クロンで制し、

かな子「ええーい!」

渾身の力で殴り飛ばす。

かな子「どれだけ相手しても、数が多くてキリがありません!」

凜「…博士! プラズマディファレーターはどうかになってるんです!」

橘「凜くん。少々のトラブルはあったが、問題はない。プラズマディファレーター、

いつでも作動可能だ!」

卯月「百鬼メカも茜ちゃん達が退けてくれたんですね!」

凜「聞いた通りだ! かな子、特訓は不十分だったと思うけど…」

かな子「はい…! 強引に行っちゃいます!」

凜「投擲ポインントはこっちで指示するよ。それまでを、お願い!」

かな子「…未央ちゃんの大雪山おろしを…!」 グツ

操縦桿を握る腕に力を入れて、ゲッターポセイドンを加速させる。

ドラゴノザウルス《グルアアアツ!!》

卯月「くくく!」

凜「…っ!」

かな子「あう…! ま…まだまだあう!!」 グワツ

打ち付ける竜頭が、ゲッターポセイドンの装甲に歪みを生じさせる。が、勢いは決して衰える事なく、ゲッターポセイドンは進む。

かな子「えいつ！捕まえました…！」

ドラゴノザウルスの中央の顔面を抑え、海底に1度叩き付ける。

かな子「落ち着いて…。後は、気合で——！」

ドラゴノザウルスの表面に拳を突き入れ両腕を安定させ、地に足を着けたゲッターポセイドンが、足裏のキヤタピラで回転を始める。

かな子「う、う…ううううう…!!」

卯月「良いですよかな子ちゃん！その調子です！」

凜「口閉じて！舌噛むよ！」

かな子「うわぁ——うわぁぁぁぁぁぁぁ!!」

ドラゴノザウルス《グギヤアアアア!?!》

やがて回転は速度を増し、海底に巨大な竜巻を生んで、周囲の岩礁を穿った。  
—。

橘「…、これは…！」

晶葉「あれだけの巨大生物を回転させれば、海上にも影響が出るか…！」

橘「だがこれは、我々の予測以上だ！」



晶葉「それだけかな子が頑張ってくれていると言う事でしょう? 私達も早く避難を

!

橘「やむをえん、プラズマディフレーターは時限装置で作動させよう」

茜『晶葉さん!橘博士!まだそこにいますか!?』

晶葉「茜……!ゲッター烈火か!」

美穂『今避難しても、あの津波からは逃げられません!』

茜『ですから、ゲッター斬に乗ってください!早く!!』

晶葉「そうか……。分かった。すぐ行く。橘博士!時限装置は?」

橘「……。よし、大丈夫だ。これで30秒後に作動するはずだ」

晶葉「でしたら、早く!」

橘「うむ。かな子くん、後は頼む」

――。

かな子「うわあああ~~~~!!」

凜「……」

卯月「……」

かな子「~~~~!!」

凜「――今だ!」

かな子「ツツ！大く雪うく山…！おろしいい…！！」

凜の示したタイムリングで、豪快にドラゴノザウルスを海上へと打ち上げた。

ドラゴノザウルス《!!?》

かな子「たあっ!!」

ドラゴノザウルスを追いかけて、プラズマデイフアレーターのポジションへと、殴り飛ばす。

橘「3…2…1…!!」

アーニヤ「プラズマデイフアレーターが作動します…!!」

卯月「!?」

瞬間、巨大な青白い閃光が辺り一面を照らした。

ドラゴノザウルス《クキヤアアアアツ!!》

晶葉「成功か!？」

茜「眩しすぎて何も見えません!!」

凜「プラズマデイフアレーターは正常に作動してる…!!ドラゴノザウルスが焼けてるよ!」

かな子「やっつたんですか…?これで、本当に…」

ドラゴノザウルス《キヤアアアアア…!!》

卯月「……いえ、待ってください!」

メカ閻竜鬼の攻撃を受けた1本の鉄塔が、大きな火花を上げる。

晶葉「くっ……!もう少しだけ持ってください……!」

橘「いかん!鉄塔が爆発する!」

爆発と共に鉄塔が崩れ、バランスを失ったプラズマデイファレーターが強制的に停止する。

凜「ドラゴノザウルスは……!」

ドラゴノザウルス《……グアア……》

橘「信じられん……!あれだけのプラズマにさらされながら、まだ生きているとは……!」

卯月「かな子ちゃん!ドラゴンに変わってください!」

かな子「卯月ちゃん!」

卯月「あと少して、倒せるはずなんです!だったら、ゲッタービームでトドメを刺します!」

かな子「分かりました!」

かな子「オーブンゲット!」

茜「私達もお供しますよ!」グワア

卯月「チェーレンジ、ドラゴンツ!!」ガキイン

茜「斬魔光!!」

卯月「ダブルゲッタービィームツ!!」

2筋の閃光がドラゴノザウルスに照射され、青白い光に包まれていた無人島は、今度は薄緑のゲッター線の光に包まれる。

ドラゴノザウルス《!!!》

巨大なキノコ雲を生む爆発となり、ドラゴノザウルスは無人島と共に太平洋の海に沈んだ。

卯月「……」

晶葉「作戦は成功だな」

凜「そうだね……。これでこの海域も、また穏やかになる」

アーニャ「もう、巨大生物の脅威に、誰も、怯えなくていいんですね?」

茜「また私達の相手は、百鬼帝国だけになったわけですか!」

美穂「うん……。でもなんだか、ちよつとだけ可哀想……」

橘「うむ。言わば、ドラゴノザウルスも現代の被害者だったのだからな」

かな子「私達が環境破壊を続ければ、またドラゴノザウルスみたいな巨大生物が、現れるかもしれませんね……」

橘 「そうならんように、我々は変えていかなければならない人類そのものの在り方を……」

ニオン 「——フンツ」

芳乃 「挨拶はよろしいのでしてー? 大切な人がいるのでしょー?」

ニオン 「大切な者など何処にもいない。それに、『今はまだその時ではない』んだらう?」

芳乃 「然りー。わたくし達と竜の戦士達が刻を同じくするにはー、まだ少々ー、時期尚早でしてー」

ニオン 「ふん。お前が何を考えているかは知らんが、そうそう思う通りになどなりはしないぞ」

芳乃 「わたくしの意味などはそこにはなくー。あるのはー、巨大な意思のうねりの中にあるー、定め、でしてー」

ニオン 「巨大な意思、か。あいつらは、それに飲み込まれていくだけか」

芳乃 「今は見守りましょー。竜の子らが、真の戦士となるその時までー」

つづく

## 第14話 『ゲッター宇宙へ！未知なる遭遇!!』

~~~~~ 作戦指令室 ~~~~~

隊長「……」

オペレーター「迎撃ミサイル、まもなく目標に着弾します」

隊長「……うむ」

オペレーター「3……2……1……着弾！」

隊長「目標は？」

オペレーター「現在確認中……。目標の反応……消失……！やりました！」

隊長「——……ふう」

緊張が解け、安堵の空気が拡がる。

隊員「いやあ、隕石が落ちてくるなんて聞いた時は一瞬ビビりましたが、何とかなるもんですね」

隊長「ああ、我が国の防空能力も、日々進化していると言うことだな」

オペレーター「隊長、破壊した隕石の破片が、幾つか領土内に落下すると思われます」

が、そちらへの対応は？」

隊長「早乙女研究所がやってくれるそうだ」

オペレーター「早乙女研究所が？」

隊員「そう言えば、あそこも元は宇宙開発の研究施設でしたね」

隊長「落下物を是非とも研究したいそうだな。日本の防衛もあると言うに、忙しい連中だ」

隊員「そうつすよね。ぶつちやけこの国、防衛をゲッターに任せつきりで、俺達必要ありませんもん」

オペレーター「それな」

隊長「こら。怠慢だぞ」

隊員「失礼しましたー」

隊長「我々是我々で警戒と監視を続ける。何かあつてからでは大変だからな」

隊員「隕石にエイリアンなんて、SFの話でしょう？」

隊員「ふっ…。そうであつてくれればいいがな——」

〓〓〓 翌朝 早乙女研究所 談話室 〓〓〓

卯月「ふわああ〓〓〓あふ…」

凜 「スゴい欠伸だね…」

卯月 「昨日の夜は、隕石騒動もあつたお陰で、結局寝られなくて…。寝不足です…ふわあ…」

凜 「少しだけでも仮眠をとつたら？ 私達の警戒態勢は、もう解除されてるんだし」

卯月 「そうなんですけど、せめて回収班の人達が帰ってくるまでは…、私だけ…休むわけには…すう…」 Zzzz…

かな子 「言いながら寝ちゃいましたね…」 アハハ…

凜 「もう、座りながら寝たら体に良くないよ。せめて部屋まで行ってから…」

卯月 「ふみや…？ がんばりま…ひゅ…」 Zzzz…

かな子 「…ダメみたい…ですね？」

凜 「…仕方ない。そつちのソファに寝かせよう。かな子、手伝って」

かな子 「はくい」 トテトテ

2人で卯月を担ぎ上げ、ソファに寝かせる。

卯月 「……」 スヤスヤ…

かな子 「ホント、可愛い寝顔ですよね」

凜 「…そうだね。ロボットに乗って百鬼帝国と戦ってるなんて、そんな風には思えない」

かな子「あの…、ちょっとだけ聞いてみたい事があつたんですけど…」

凜「ニオンの事?」

かな子「ど、どうして…?」

凜「ついこの間、アーニヤ達が話してたしね。かな子は恐竜帝国との戦いの時の事、あんまり知らないし」

かな子「その…知り合いの人…なんですか?」

凜「まあね。1度だけ、顔を合わせた事があるよ」

かな子「恐竜帝国の人とですか…?そ、それで、どんな印象だったとか…」

凜「印象…そうだね、冴えない、って感じ」

かな子「さ、冴えない…」

凜「ホント、冴えない、普通の人だったよ。ただの通りすがりの、それだけの。人間に変装して、私達の目を誤魔化してたわけだけど」

かな子「…。凜さんは、もし次にその…ニオンさんに会う機会があるとしたら、どうしたいんですか?」

凜「どうしたい…」

かな子「……」

凜「どうもしないよ。ニオンは私達の…敵なんだ。私達はニオンの故郷を滅ぼもし

た。恨まれても仕方ないし、敵対するなら、また何度だって戦うだけだよ」

かな子「でもニオンさん、女の人といるって言ってましたよね？」

凜「そう言えば、茜が言ってたっけ。『ダイノゲッターの通信から女の人の声を聞いた』って」

かな子「その人も、恐竜帝国の人…なんででしょうか？」

凜「どういう事？」

かな子「…もし…。もしかしたら、ですよ？もしニオンさんが今私達みたいな人間と一緒にいて、もし私達と一緒に戦ってくれる…。そうなったら、凜ちゃんはどうかか？」

凜「そんな事になったら……」

凜「——…どうもしないよ」 フツ…

かな子「…ふふっ」

かな子（口ではああ言ってるけど、満更じゃないみたい…。素直じゃない、のかな？）

凜「何？1人でニヤニヤして」

かな子「何でもありませんっ♪」

凜「？ 変なかな子」

みく「たっだいまにゃくん」

かな子「みくちゃん、M3チームの皆さんも、おかえりなさい」

凜「回収作業お疲れ様。結構時間かかってたみたいだけど?」

未央「たっだいまくしぶりんみむっち。いやあ、落下物の破片がなかなか見つからなくてねえ」

瑞樹「砕けた破片は、ほとんど大気との摩擦で燃え尽きてたみたいね」

みく「何にもない森の中を行ったり来たりするのは、もう勘弁してほしいにや…」

かな子「大変だったみたいですね。あつ、お茶の用意!すぐにしちやいますから、待っててくださいねっ」

瑞樹「いつも悪いわね。たまには手伝うわ」

かな子「ありがとうございます」

未央「おやおや?しまむーはおやすみかい?」

凜「うん。未央達が帰ってくるまで、頑張つて起きてるって言ってただけど」

未央「そんな無理しなくてもいいのに。ほんとしまむーはいつも頑張つてばっかりなんだから…」

卯月「スヤア……未央ちゃん……大雪山おろしは……レッスンに使えませんよ……」

未央「……どんな夢見てるんだろ」

凜「……さあ……」

かな子「お茶の用意が出来ましたよ〜」

未央「お、待ってましたー!」

みく「今日はおはぎにゃ〜!」

かな子「和菓子は初挑戦なんですけど、ついこの間、仕事で一緒にいたアイドルの子に作り方を聞いて〜」

瑞樹「あー、大体どの子なのか分かるわ」

みく「すーっごく美味しいよ!やっぱりかな子ちゃんはお菓子作りの天才にゃ!」

かな子「えへへ…。ありがとうございます!」

凜「それで、回収した隕石の事なんです…」

瑞樹「…その事なんですけど」

凜「?」どうかしたの?」

瑞樹「私達が回収した物…、あれは隕石って言うよりは…」

—— 格納庫。

李衣菜『…何です?これ…』

主任「何ってそりゃあ…。人工物の外壁、だろいなあ…。パツと見る限りじゃ…」

李衣菜『人工物の外壁…?』

主任「ああ。月面に何個か作られてる、各国の研究施設の外壁に使われてる素材に似

てる」

李衣菜『そんなのがなんで地球に降ってくるんです?』

主任「俺が知るかよ」

李衣菜『それになんか：黒いゴムみたいなのがこびりついてますし。これも外壁の素材かなんかですか?』

主任「いや、こんな妙なもんが使われてるなんざ聞いた事あねえよ。ホント何なんだ?こいつあ…」

グチユツ ギョロ

主任「!?」

李衣菜『しゅ、主任離れて!!』

?《ウ…ウルシヤアアアアア!!》 ガバアツ

主任「か、怪物だあ!?!」

李衣菜『こ、コイツう…!!』 グシヤツ

?《ウギヤツ!?!》

ビイトのアームが突如姿を現した未確認生物を潰す。

主任「な、ナイスだ…リーナ…。よくやった…」

主任「古田あ!古田はいるか!?!」

古田「はいっ！何ですか大将！」

主任「倉庫から液体窒素持ってこい！いくらなんでも絶対零度で凍らせりやあ、この怪物もどきも大人しくなるだろ」

古田「了解ツス!!」

李衣菜「はあ…はあ…。何なの…？コイツ…」

—。

— 数日後。

卯月「——ツツ！」

凜「……っ！」

かな子「くく!!!」

グオオツ

卯月「——…ツプハア!!大気圏離脱、です！」

かな子「ふうくく、やつと息が出来ますよ。出撃前にあんまり食べてこなくて良かったあ〜」

凜「ゲッタードラゴン単機で大気圏離脱できるのは知ってたけど、このやり方はあんまりしたくないね」

卯月「…ですね。……それにしても見てください！地球がキレイですよ！」

かな子「本当ですね…。ホントに青くて真ん丸で、宝石っていう意味がよく分かりますね」

凜「…そうだね」

かな子「落ち着いて考えたら、宇宙に出たアイドルって、私達が初じゃないですか?」
凜「そりゃあ、本当なら適正試験があつて、何カ月だって訓練して、やっと宇宙に出れるんだから」

卯月「それを私達、数回のシミュレータで済ませちゃいましたけど…」

凜「実際の無重力の感じはどう?」

卯月「うゝ…ん…。今は静止状態なので、よく分かりません。ただ、操縦桿がいつも飛んでる時より全然軽いかも…?」

凜「そっか。戦闘になるかもしれない。月までの移動中に感覚は掴んでおいて」

卯月「分かってます。まずは晶葉ちゃんと早乙女博士を乗せたシャトルを待ちましよう」

かな子「月面調査に同行ですか…」

卯月「博士の話だと、月にあるゲッター線の観測施設との連絡が途絶えた…んでしたっけ?」

凜「うん。それで、李衣菜が言つてた未確認生物が着いてた落下物の破片が、その施

設の外壁と一致したんだってさ」

卯月 「その生物が観測施設を襲ったって事ですか？」

凜 「それをこれから調査しに行くんだよ」

かな子 「破片にくっついてたのは、ビイトでも潰せるくらい小さかったらしいですけど？」

凜 「それがその生物の本当の大きさかも分からないし、ひよつとしたらもつと大きいのかも」

かな子 「折角の宇宙進出だっっていうのに、目的が怪物退治なのはちよつと残念ですね」

卯月 「そうですね…。いつか、いつかきつと、怪物もない平和な宇宙に出て、そしてたら……」

凜 「そしたら？」

卯月 「みんなで歌を歌いたいですね！スターライトステージですよ！」

凜 「…いいね。そうなるように、私達でしよう」

卯月 「はいっ！」

かな子 「博士達のシャトルが来ましたよ！」

卯月 「よし、それじゃあ月まで超特急でレッツゴーです！」

凜 「博士達を置いて行ったらダメだよ」

卯月「わ、分かってますよう…」

「…」 月面 「…」

晶葉「——…人類宇宙開発の出発地点、月か…」

早乙女「人類の夢の出発地点。人類の宇宙への進出は、ここを目指すところから始まっている」

晶葉「早乙女博士がゲッター線を発見されたのも、月面だったそうですね」

早乙女「ああ。全くの偶然じゃったよ。あの時の月面衛星の建設に携わってなければ、或いはゲッター線を発見する事もなかったのかもしれない」

晶葉「大気層のある地球とは違い、宇宙空間ではより多くのゲッター線を観測できる…」

晶葉「月面の観測施設は、そのために建設された施設でしたよね？」

早乙女「そうじゃ。観測施設には、ゲッター線を自然観測するための機材だけではなく、宇宙空間でのゲッター線の増幅量を測定するためのゲッターエネルギー炉もあった」

早乙女「もし観測施設が何者かに襲われ、壊滅していた場合、エネルギー炉の暴走の危険性も考えねばならん」

晶葉「ゲッターほどのロボを動かしているエネルギーですからね…。月で恐竜帝国と

の決戦の…千葉の二の舞はごめんです」

早乙女「せめて何事もなく終わってくれれば良いのだが…」

パイロット「博士、そろそろ観測施設が見えてきます」

早乙女「分かった。晶葉くん、着陸の準備をしよう」

晶葉「はい」

パイロット「——？ ちょっと待ってください」

早乙女「何事じゃ？」

パイロット「はっ。今一瞬だけ、レーダーに何かが…」

早乙女「何か、じゃと？」

晶葉「外には何も変化は見られません…」

凜『こつちでも確認したよ』

早乙女「凜くん、ゲッターGもか」

卯月『はい！ほんの一瞬でしたけど、私達3人、それぞれのレーダーでも捉えています』

晶葉「ふむ…。では間違いはないか…。この月面に、何か潜んでいるという事か」

卯月『ゲッターを降ろして、確認してみます！』

早乙女「頼む。くれぐれも、無茶はせんようにな」

卯月『了解ですっ！』

卯月「——つと!」

卯月「凜ちゃん、かな子ちゃん、何か気になるものはありますか?」

かな子「いえ、こつちの方には何も…。レーダーの方にも反応ありません」

凜「こつちも同じだよ。これだけ静かなら、動いてるものがあれば分かりそうなものだけど…」

卯月「やっぱり誤作動ですか…?」

凜「まさか、ゲッターとシャトルの両方で同時に…?」

かな子「——…待ってください…!私の方に、今微かに…」

卯月「反応があつたんですか!」

かな子「はい!まだあります…、これって…ゲッターと同じ位置?」

卯月「? どういう事ですか?どこにも、何も見えませんか?」

凜「違う。上にも周りにも何も見えないなら、答えは1つ…」

凜「——下だよ!」

卯月「!」

声に合わせて飛び上がった、ゲッターの足元があつた場所に亀裂が走り、大地が割れ、それが姿を現す。

?《シャアアアア!!》

かな子「で、出ました!…大きい!…」

凜「ゲッタードラゴンと同等か…」

?《キシアアア!!》

卯月「っ!」

突然飛び掛かってきた怪物を、両腕をクロスさせて受け止める。

かな子「近くで見ると余計に気持ち悪いです…」

凜「こつちと話し合う気はないみたいだね。卯月!」

卯月「はいっ!ゲッタービームツ!!」 シュオツ

?《!!》

ゲッタードラゴンの額から放ったゲッタービームを、背を仰げ反らせて躲す。

卯月「…ずいぶん身軽ですね…」

凜「もしかして、コイツが観測施設を…?」

卯月「分かりませんが、ビームがダメなら…」 ヒュツ

卯月「トマホークで格闘戦です!」

両手に携えたトマホークを構え、一直線に加速。

卯月「ええーいっ!」 ブオンツ

?《!!》 ドウルンッ

卯月「!?」

凜 「コイツ…自分の体を液体みたいに變化させて攻撃を躲した!」

卯月 「トマホークブーメランッ!!」

?《シャアア!!》

上空へ逃亡した異生物に放ったトマホークブーメランも、液体のように体を軟化させ、躲される。

かな子 「一体どんな体してるんですかあ!」

早乙女『卯月くん、相手は未知の宇宙生物だ。こちらの常識は通じないぞ!』

卯月 「何とか動きを抑えられればいいんですけど…!」

凜 「卯月、ライガーにチェンジしよう」

卯月 「ですけど、それじゃあ凜ちゃんがいきなり宇宙での実戦になっちゃいますよ?」

凜 「相手の動きを予想できないんじゃない、ドラゴンの機動性じゃついていけない。それならライガーの方がまだ勝ち目があるかもしれない」

凜 「宇宙戦の動きは、やりながら慣らす!」

?《シャオオオオン!!》 グワッ

卯月 「ッ!考えてる時間はないみたいですね…」

卯月「オーブンゲツト！」

凜「チェンジライガー！」

宇宙空間でゲッターライガーに変形、背中のロケットバーニアが火を噴き、ライガーを加速させる。

凜「っ！確かに空気が抵抗がない分操縦桿が軽い…。油断すると何処までも飛んでいつちやいそう…！」

かな子「凜ちゃん！相手が正面に来ます！」

凜「!?」

正面で待ち構えようとした異生物を軽く躲したつもりが、大きく逸れて月の岩肌にゲッターライガーを衝突させる。

卯月「あうっ！」

かな子「きやつ…！」

凜「2人共ごめん！直ぐに立て直す！」

？《キシヤアアア!!》

素早く立ち上がったゲッターライガーに異生物が迫る。

凜「何時までもそつちの都合のいいようには…！ライガーミサイル！」

正面から突っ込んできた異生物をライガーミサイルで迎撃。月の大地に黒煙を生む。

?《!!?》

卯月「やりました!」

凜「いや、まだだよ……!」

?《ウシヤアアア!!》

黒煙の中から突っ込んできた異生物を跳躍で躲す。

かな子「た、高く飛び上がりすぎなんじゃ……」

凜「やっぱりまだ上手く感覚が掴めないか……。なら!」

凜「チエーンアタック!」 ジャララッ

ゲッターライガーの鎖を伸ばし、先端のクラブを月面に喰い込ませて、強制的に姿勢

制御をとる。

凜「……!」

そのままロケットを点火。喰い込ませたクラブを支点としてゲッターライガーを円運動で回転させ、

凜「これで……!」

そのまま、ゲッターライガーの動きに翻弄されていた異生物を蹴り伏せる。

?《フシヤアアア!?!》

凜「今だ……!——ドリルアアアームッ!!」

ギユルウウンツ

地面に揉んどり打った異生物をドリルで穿ち貫き、粉碎。辺りに異生物の肉片らしきものを撒き散らす。

かな子「うう……っ」

凜「……ふう」

卯月「……終わった、んですか？」

凜「……多分ね」

かな子「それにしても何と言うか……、手応えが無さすぎる気が……」

凜「でももう辺りに反応はないし。とりあえず博士達に合流しよう」

卯月「いよいよ目的地の観測施設ですね……」

くくく ゲッター線観測施設前 くくく

卯月「これは……」

晶葉「予測できた事とは言え、酷いものだな」

凜「月に廃墟を作ったのは、日本が一番最初だね……」

晶葉「皮肉のつもりか？」

凜「……めん」

卯月「これじゃあ、生存者なんて……」

早乙女「いや、最後まで諦めてはいかん」

早乙女「私と晶葉くんがエネルギー炉のある区画を調べてみる。卯月くん達は居住区域のある区画を頼む」

凜「了解だよ」

卯月「それにしても、ホントに1人で残って大丈夫ですか?かな子ちゃん」

かな子『は、はい…。さっきの戦闘で、少し気分が良くないので…』

晶葉「あんな間近で、不定形生命体が飛び散るのを見たんだ。無理もないな」

凜「うん。それにああいうのが他にまだいないとも限らない。ゲッターには誰か1人くらい残していかない」と

早乙女「いざという時は、シャトルとゲッターを頼んだぞ」

かな子『任せてください!それまでここでスイーツでも食べて気分転換してますから!』

凜「あれを見た後で何かを食べようと思えるなら、十分神経が太いと思うけどね……」

——施設内。

晶葉「——博士はどう思われます?」

早乙女「この施設の惨状の事か?それとも…」

晶葉「先程遭遇した未知の異生体の事です」

早乙女「…何とも言えんな。地球上に生息する、あらゆる生物に類似しない特徴を持つ存在だ」

晶葉「こちらの常識がまるで通用しない相手でしたからね。私達の見識が、また覆された」

早乙女「うむ。百鬼帝国でも手一杯の現状、あんなものの存在を公表すればたちまち混乱の渦は拡がる」

晶葉「では、博士のは今回の発見を秘匿すると?」

早乙女「まさか。地球圏に現れた個体はあれで全てとは思えん。ここで存在を隠しても、いずれは明らかになる事じゃ」

晶葉「地球はまた、新たな脅威への対抗策を講じなければならぬわけですか…」

早乙女「…一刻も早く、あれを完成させなくては…」

晶葉「あれ?あれとは何です?博士」

早乙女「何でもない。年寄りの戯言じゃよ」

晶葉「……」

早乙女「さて、動力室に入るぞ。ここにエネルギー炉もある筈じゃ」

晶葉「了解です」

ガシユウ:

晶葉「これは……!」

早乙女「ふむ……。地球に落ちてきた破片に付着していたものと同じじゃな」

晶葉「それが動力室全体に……。博士!あまり近付いては危険です!」

早乙女「いや、動く気配がまるでない。完全に死んでおるようじゃ」

晶葉「どういう事です?」

早乙女「分からね。破片に付着していたモノは仮死状態で、何らかの原因……落着の衝撃などで活動が再開したのかもしれない」

晶葉「……。これだけ近付いても、触れてみても反応はなし、か……。確かに死に体のようですがどうしてここに、しかもこれだけの数が?」

早乙女「何もかもはこれからじゃ。晶葉くん、ここにある奴等の死骸のサンプリングを。破片に付着していたものと違いを比較したい」

晶葉「了解です。博士は?」

早乙女「儂はエネルギー炉の方を見てくる。何かあれば知らせてくれ」

晶葉「分かりました。お気をつけて」

—— 居住区域。

凜「……うん。この辺りはまだ酸素があるみたい」

卯月「良かった…。それじゃあちよつとマスク外しちゃいますね」スツ…

卯月「…ふう。宇宙空間に出るからつて、この密閉型のマスク、少し息苦しくないですか？」

凜「普段ハーフフェイスのヘルメット被つてる私達が、ヘルメットごと替えなくてもいいようにあるものだから。少しは我慢だよ」

卯月「それは分かりますけど…。あ、でも見てください凜ちゃん。月の重力は軽いから、体がこんなに」フワー

凜「もう…。はしゃがないで。一応、生存者の搜索を任されてるんだから」

卯月「えへへ…。ごめんなさい」

卯月「でも、可笑しいですね？生存者はともかく、ここ、入ってから人がいた形跡が見当たらないつて言うか…」

凜「生きてるなら、もつと奥に避難したのかもしれないよ。ほらこれ見て。別れる前に博士からもらったこの施設の見取り図」

卯月「そんなのもらつてたんですか？」

凜「まあね。ほら、これを見るとこの奥の方に避難シエルターつて書いてある」

卯月「ホントですね。あ、もしかしてここに…？」

凜「うん。生存者がいるとすればきつとここだ。だから先ずはそつちの方から探し

てみよう」

卯月「はいっ!誰か1人でもいてくれるといいんですけど…」

凜「……くれぐれも、私から離れないでね?」

卯月「分かっていますっ♪」フワー

凜「言ってるそばから…。どこ飛んでくの卯月!」

――施設外。

パイロット「……それでうちの嫁がね――?」

かな子「あははっ。ホントですか?それ」

パイロット「ホントホント。かな子ちゃんには嘘つかないって」

かな子「ふふっ。私は素敵だと思いますよ?」

かな子「あ、そちらのリーダー、異常はないですか?」

パイロット「大丈夫。さっきからにらめっこしてるけど変化なしで、俺の方が降参し
ちまいそうなんだから」

かな子「こつちも同じですね…。博士達、何事も無いといんですけど…」

パイロット「それに関しちや問題ないと思うよ?みんな、タフなんですから」

パイロット「それよりも、さっきかな子ちゃんが差し入れてくれたこのカップケーキ、
ホント美味しいよ」

かな子「ホントですか!?! ありがとうございます!」

かな子「宇宙空間だと味覚を感じにくくなるって聞いた事あるので、少しお砂糖多めに入ってるんですよ」

パイロット「え?」

かな子「お砂糖の摂りすぎはあまりよくないですけど、味覚感じにくくなるんじゃないですかね?」

パイロット「あ…うん」

かな子「だからそう、これは仕方ない事なんです…。それにもしこれで体重に変化でもその分またゲッターに乗れば…」

パイロット（ゲッターをダイエットに使ってませんか…。この子…）

かな子「はあく…。それにしても、月から地球を眺めながらのスイーツって、特別な感じがしますね」

パイロット「まあきつと、月まで来てお菓子食べようとする人は少ないからね」

かな子「卯月ちゃんにも言いましたけど、本当に青くて、丸くて…」

パイロット「……」

かな子「丸くて…丸い…。あ! 次は大福とか作ってみようかな〜!」

ピーン…

かな子「あら?今レーダーに、何か……」

卯月「ここが避難シェルターですか?」

凜「その出入り口だね。…ハンドルで密閉するタイプみたい。卯月、手を貸して」

卯月「はい」

凜「それじゃ、いくよ。…んっ!」 ギギ…

卯月「んしょ……んしょ……つと」

ギギ…ギ… プシュツ

卯月「開きました!」

凜「中の方は…、だいぶ静かだけど…。っ!」

卯月「凜ちゃん?どうかしましたか?」

凜「見ない方がいいよ」

卯月「え…?う…っ!」

凜「手遅れ…だったみたいだね…」

卯月「凜ちゃんは平気なんですか…?」

凜「平気じゃない。平気なわけないけど…。卯月は?」

卯月「私は……ごめんなさいっ!」 タタツ

凜 「無理もないよ。……」

凜 （研究所との通信が途絶えたのは数日前……。とすると、原因は餓死……）

凜 （でも、普通シエルターって言うんなら、籠ることも考えてそれこそ何日分も食料を備蓄してあるはず……）

凜 （何かの原因で、食料が切れていた……？それにしても、何か可笑しいって言うか……） スツ……

凜 「——っ!？」

卯月 「——はあ。ダメだな……私……。凜ちゃんは我慢してるって言うのに……」
パアンツ

卯月 「な……今度は何ですか!？」

パアンツ パアン パアン……

卯月 「じ、銃声……!?凜ちゃんのいる方……。一体何があつて……」
タツタツタツ

卯月 「凜ちゃん!？」

凜 「逃げるよ、卯月!」

卯月 「ちよつと待ってください!何かあつたって言うんですか!？」

凜 「理由が聞きたいならあいつに聞いて!」

卯月 「あいっ…?」

?2《フシャアアア!!》

卯月 「ひっ…!…さっきの…隠れてたんですか!?!」 ダツ

凜 「寄生してた…」

卯月 「え…?」

凜 「シエルターにいた死体に寄生してたんだ!」

凜 「密閉されたシエルターの中で、死体の中に潜んで息長らえて、誰かがシエルターを開けるのを待ってたんだ!」

卯月 「そんな…そんな事って…!…それじゃあ私達は…」

凜 「利用されたようなもんだね。少なからず、そのくらいの知能は持ち合わせてる敵って事だよ」

?2《キシヤアア!!》

卯月 「お、追い付かれちゃいます!」

凜 「っ!」 チャキツ

パアン パアン パアン

?2《キシヤアアア…!?!》

凜 「今のうちだ!」

卯月「…鉄砲、撃てたんですね…」

凜「護身用に、簡単なものだけね。生きて帰れたら、卯月にも教えてあげるよ」

卯月「私は…遠慮します…」

凜「ふっ…。今はあいつから逃げることをだけを考えよう。博士達も心配だ」

卯月「は、はい…っ！」

—。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ…

早乙女「むっ。何じゃ!？」

晶葉「博士!」

早乙女「晶葉くん!」

晶葉「振動が地下から迫ってます!」

早乙女「付着物のサンプルは?」

晶葉「バッチリ、十分な数を採取してあります!」

早乙女「よし、長居は無用じゃ。早く卯月くん達と合流しよう」

タッタッタツ… ガタンツ

凜「早乙女博士!」

早乙女「凜くん!卯月くんも、無事だったか!」

卯月「この揺れは…?」

晶葉「良くない事が起こる前触れだよ。早く退散しよう」

?3《グアアアア!!》ゴシヤアア

晶葉「…ふう、間一髪だったな」

卯月「また出てきた…!今度は地面から、さつきより大きい…!」

凜「私達を追っていたのとは、別の個体だ」

晶葉「何?お前達も追いかけていたのか?」

卯月「はい…。もうそんなに距離ないですよ!追い付かれちゃいます!」

早乙女「何、心配することはない——」

?2《キシヤアアア!!》

?3《グアアアア!!》

ギユアアアアア…ッ

早乙女「ふむ、やはりゲッターチームは、全員優秀じゃな」

凜「ゲッターライガー!」

かな子『卯月ちゃん凜ちゃん!皆さん!大丈夫ですか!』

晶葉「ああ、ベストタイミングだ」

かな子『今のうちです!卯月ちゃん達はコックピットに、早乙女博士達は、ライガー

の手に!』

凜 「分かった。卯月、行くよ!」

卯月 「はいっ!」

晶葉 「シャトルの方はどうなってる?」

かな子 『もう発進準備は終わってます!あとは晶葉ちゃん達が乗り込むのを待つだけです』

—。

かな子 「凜ちゃん、コントロールをお返しします」

凜 「ん。2号機の操縦もいけるんじゃない?」

かな子 「そんな…。凜ちゃんほどじゃないですよ」

卯月 「凜ちゃん、かな子ちゃん見てください!相手の様子が…」

? 2 << — >> ズゾゾ…

? 3 << — >> ズゾゾ…

かな子 「一ヶ所により集まって…」

凜 「合体してる?いや、どちらかと言えば吸収、同化…?」

? <<フシャアアアアア!!>>

かな子 「さ、最初に戦った奴ですか!?!」

卯月 「いいえ!最初に戦ったのより大きいです!」

凜 「仲間を吸収して、より大きくなったってトコ?とにかく、さっきの戦闘では倒しきれなかったみたいだね」

早乙女 『卯月くん、聞こえるか?』

卯月 「早乙女博士!そっちは大丈夫ですか?」

早乙女 『ああ、こちらは大丈夫だ。無事、離脱できた』

晶葉 『残るはGチームだけだ』

凜 「すんなり月から離脱できればいいんだけど…」

? 《シャアアアアアツ!!》

凜 「——っ!」

異生物の攻撃を跳び上がって躲す。

早乙女 『敵は明らかにゲッターを標的にしておるぞ!』

凜 「大人しく返してはくれないみたいだね」

卯月 「そもそもこんなのを月に残していけません!」

凜 「相手するしかないか…!」

凜 「——ライガーミサイルツ!」 バシユツ

? 《…ギアア…?》

かな子「効いてない…!？」

凜「大きくなつて、打たれ強くなつたつて訳…?」

卯月「代わつて下さい!あのくらいの大きさなら、ライガーよりドラゴンの方が戦いやすいかもしれません!」

凜「卯月の言うとおりかもね」

?《キシヤアアアア!!》 シュツ

凜「オーブンゲツト!」

異生物から突き出した触手を躲してゲッターを分離。相手の背後で1つに。

卯月「チエーンジ!ドラゴンツ!!」

卯月「ゲッターレーザーキャノンで…!」

異生物の背後を回りながら、構えたレーザーキャノンの狙いを定める。

卯月「えいつ!」 バシユウ

ゲッタードラゴンの放つたレーザーキャノンは、異生物の胴体に命中する。が、?
?《キシヤアアアアアアアアアツ!!》

凜「レーザーキャノンが効いてない!?むしろ吸収した?」

かな子「相手が、さつきよりも大きく…!」

早乙女『なるほど、そう言うことか!』

卯月「どういう事ですか!？」

早乙女『ゲッター線じゃ。奴等の狙いは最初からゲッター線だったんじゃ!』

凜「だから、数ある研究施設の中で、こだけ狙われたって訳」

かな子「そんな…!ゲッター線をエサにする相手と、どうやって戦えって言うんですかあ!？」

晶葉『いやある。ゲッター線をエサにするなら、たらふく食わせ続けてやればいい』

凜「…過剰摂取ってやつだね」

卯月「でも、相手に限度がなかったら…?」

晶葉『無論、ギャンブルなのは百も承知だ。だが、このまま何もせず、手をこまねいているわけにもいかないだろう?』

?《キシヤアツ!!》 ブオンツ

卯月「ツ!？」

凜「卯月、他の手を考えている時間はない!」

卯月「…。分かりました…。なら、シャインスパークを使います!」

かな子「いや、シャインスパークですか!？」

早乙女『確かに、シャインスパークなら、一度に与えるゲッター線量が多い。ゲッタービームより確実かもしれん』

かな子「でも、シャインスパークは、今までシミュレーションでしか試した事があり
ませんよ！」

晶葉『ああそれに、シャインスパークはゲッターGの全てのエネルギーを使い切る』
晶葉『加えて、発動には3人それぞれのコックピットに備えたペダルを同時に入力し
なければならぬ』

早乙女『3人のタイミングが10分の1秒でもずれればシャインスパークは失敗だ
！』

晶葉『よりリスクな賭けになるぞ……！』

凜「どのみち一か八かだ。やるなら倒せる確率が高い方がいい」

卯月「凜ちゃんの言うとおりです！それに、ここで成功できないと、これからも成功
させるなんてできないですよ！」

かな子「それはそうですけど……。：分かりました！私も覚悟を決めます！」

卯月「はい！3人の心を1つに合わせるんです！」

グンツ

ゲッタードラゴンを急上昇させる。

卯月「ゲッターアアーシャインツツ!!」

両腕を大きく開き、ゲッターの力を解放する。

凜 「!!」

かな子 「~~~~!!」

卯月 「……いきますっ!!」

ゲッター線の色に光り輝くゲッタードラゴン。そのまま月面で身構える異生体に向けて急降下する。

凜 「…タイミングは分かってるね!」

卯月 「はい!バッチリです!!」

かな子 (3…2…1……)

凜 「それじゃあ頼むよ、卯月!」

卯月 「はいっ!」

異生体が目前に迫る。

卯月 「シャイン……!スパアアアーク!!」

タイミングを、心を合わせてゲッタードラゴンから放たれた光を放つシャインスパーク。

? 《シャアツ——!!?》

果たして、その破壊力は——!

ドワオ

凜 「や、やった!？」

卯月 「はい……これが、ゲッター線の輝き……」

かな子 「……キレイ……」

凜 「そうだね。だけど、たくさん命を一度に奪う事もできる、危険な光だ」

卯月 「だから、3人の心が揃って、初めて使える力なんですネ」

凜 「それを使う私達は、使い方を誤らないようにしないとね」

シユウウ……

かな子 「光が消えていく……」

卯月 「敵は……」

凜 「直撃したのは確認したんだ。だとしたら、あれで生きてるわけ……おっと」

ゲッタードラゴンが力を失う。

早乙女 『Gチーム諸君、皆、生きてるかね?』

凜 「早乙女博士。私も卯月も、かな子も全員無事だよ」

卯月 「シャインスパーク、成功しました!」 ブイツ

晶葉 『こちらでもゲッター線の爆発光を確認した。よくやったな』 フツ

凜 「まあね。私達、チームだから」

かな子 「えへへ……」

早乙女『それで、相手は倒せたのか?』

凜 「月に新しいクレーターを1つ作っちゃったんだよ?直撃したんなら、逃げられないと思う」

早乙女『ふむ…。一先ずは退ける事ができたか』

晶葉『問題はこれからだぞ』

卯月「はい…!百鬼帝国と戦いながら、あの相手とも…!」
つづく

第15話 『晶葉デビュー、アイドルの道!』

~~~~~ 早乙女研究所 談話室 ~~~~~

李衣菜 「会議の場が談話室なんて、珍しいですね?」

早乙女 「うむ。こっちの方が、みんなリラックスできるだろう?」

李衣菜 「リラックスって…。プロデューサーもいるし…」

新P 「おう」

李衣菜 「…どっちの仕事の話なんです?」

瑞樹 「まあまあ。それを含めての話なんですよ、博士の言うとおりリラックスし  
ようじゃない」

新P 「そういう事だ」

早乙女 「話を始める前に、先日我々が月面で新たに脅威となりうる存在と遭遇したの  
は、皆知っているな?」

美穂 「卯月ちゃん達が倒したって言う、あの……」

みく 「インベーターって、名前が着いたにや」

凜 「インベーター…侵略者、ね」

晶葉「私達が遭遇したインベーターは月面で倒したが、無論、その1体が全てではないだろう」

かな子「月の観測施設には、別のインベーターもいましたしね…」

早乙女「インベーターの報告を受け、政府はゲッターによる軍備強化を決定。国連でも、承諾された」

菜々「遂にゲッターロボが量産されるんですか…」

晶葉「予てより建設されていた、ゲッター量産プラントが無駄にならず、一安心といったところだよ」

早乙女「君達には、ゲッターパイロットの先輩として、より一層活躍してもらおう事になるだろう」

アーニャ「ワタシ達が、これからゲッターのパイロットになる、人達のお手本、になるわけですね？」

卯月「それで、軍備強化の話は分かりましたけど…、プロデューサーはどうして…?」  
新P「ま、こっからは俺の出番ってこったな」

卯月「?」

新P「自衛隊の方じゃ、ゲッター量産プラントが完成して、先行量産されたゲッタードラゴンが直ロールアウトするそうだ」

新P「そこで、量産型ゲッタードラゴンの完成を記念したデモンストレーションを、自衛隊で開催する事になった」

奈緒「ほく。なかなか豪勢な話じゃん？」

加蓮「だね。こつちじや、ちつちやいライブハウスでライブやるのが、やつとなのに」

新P「それに関しちや、愚痴言つたつて仕方ねえな。…ともかくだ」

瑞樹「私達に、そのデモンストレーションで歌えつて言うのね？」

新P「…流石に察しいいな」

瑞樹「私達でプロパガンダをしろつて事でしよう？」

茜「ぶろばんが…？プロパンがどうしたんですか！」

アーニヤ「Heeアカネ。プロパン、ではなく、プロパガンダ、です」

茜「そのく…ぶろばんだと言うのは何ですか？」

未央「まあ、簡単に言えば宣伝、まあ政治とか何とか、そういうのに絡んだ宣伝つて事だね」

凜「詳しいじゃん」

未央「お？これでも未央ちゃんは文武両道で通つてるんだぞ？」

新P「ここにいる連中は知つてると思うが、既に卯月達ニュージエネレーションのメンバーは、ゲッターのパイロットととして世間に認知されてはいる」

アーニャー「ですが、ウツキ、ミオ、リンの3人以外：ワタシ達がパイロットなのは、ただ秘密、です」

新P「だが、ゲッターとアイドルに接点があるという事は、向こうにとつちや格好の材料になる」

李衣菜「何ですか？つまり、私達、客寄せパンダって事じゃないですか!」

新P「そう腐るな。理由や相手はともかく、こんな大口からの仕事なんざ滅多にないんだぞ?」

みく「確かにお仕事制限されてるみく達にとつて、これは貴重な機会にや」

奈緒「これだけのアイドルが出演できるイベントなんて、今時期ないぞ?」

美穂「少なくとも、フアンの皆さん達に、ライブを見せてあげる事は出来るんですよね?」

新P「そうだ。だからこれからお前達には、パイロットとしての仕事に並行して、本業の方にも力を入れてもらいたい」

早乙女「今日から軍の記念式典開催までの期間、特別シフトを敷く」

早乙女「これまでゲッター2機体制だった哨戒任務を1機で担当してもらい、君達にはアイドルのレッスンに集中してもらおう」

加蓮「アイドルの仕事に集中できるのか。ここは1つ、アタシも気合い入れてかな

いと」

凜 「その間に、百鬼帝国が何もしてこないといいたいんだけど」

かな子 「最近日本にはあまり現れませんが…。何かを待つてるような…」

晶葉 「分からない事を議論しても仕方ないさ。ま、とにかく当日まで頑張ってくれ」

新P 「何他人事みたいに言ってるんだ？」

晶葉 「む？」

新P 「晶葉、お前もこの式典でデビューしてもらうんだぞ？」

晶葉 「は？」

晶葉 「はあああああああ!!？」

卯月 「やりましたね！晶葉ちゃん！遂にアイドルデビューです！」

晶葉 「いや、いやいやいや!!待ってくれ、可笑しいだろう？」

新P 「あ？何も可笑しかねえだろ。お前は元々事務所のアイドルなんだからな」

晶葉 「それは…そうだが」

新P 「元より、事務所にいなきや早乙女研究所に就く事もなかった。その恩返しはし

てもらわねえとな？」

晶葉 「ぐ…ぬぬう…。しかし、私にも研究所で任された仕事があつてだな…」

早乙女 「晶葉くん…」



晶葉「早乙女博士……」

早乙女「君のステージが立つを、私は楽しみにしておるぞ」

晶葉「早乙女博士……!」

早乙女「その間は、君に任せていた仕事も研究も、我々で分担して行おう」

早乙女「晶葉くんは、何も気兼ねすることなくアイドル活動に専念してくれたまえ」

晶葉「早乙女博士……」

みく「これで決まりつてもんにゃ」

新P「そうだな。それとも何か? 天才でもアイドル活動の両立はできないってか?」

晶葉「……ふん! 面白い! やつてやろうじゃないか! アイドルもロボもどちらも極め

てやろうじゃないか!」

晶葉「私は、諦めるのが嫌いだからな!」

新P「ふつ……! そうこなくっちゃ面白くねえ。これからアイドルとして、厳しく面倒

見てやるぜ」

晶葉「いいだろう。君が助手と言う訳か。言ったからには、私を一人前のアイドルに

してもらおうぞ」

熱く握手を交わす晶葉とプロデューサー。

卯月「何だか、本番も上手くいきそうな予感がします!」

凜 「そう？ 私には、嵐の前触れにしか思えないんだけど」

未央 「まあまあ鬼が出るか蛇が出るか。どうなるかは晶葉次第なんだから、私達は楽しく見守ろうじゃない！」

—— こうして、池袋晶葉のアイドル活動が始まった——。

〃〃〃 翌日 プロダクション レッスンルーム 〃〃〃

晶葉 「——うあゝ……」

卯月 「大変です！ 晶葉ちゃんが死んでます！」

美穂 「し、死んではいないんじゃないかな……」

智絵里 「は……早くお水を……！」 パタパタ……

新P 「ホントに驚いたな……。まさかここまで体力がないとは……」

晶葉 「ふ……ふふ……。私自身驚きだよ……。それでもゲッターの予備パイロットとして、ある程度の訓練は受けていたつもりだったんだが……」

新P 「疲れて動けねえんなら、無理に動くんじゃないやねえ。寝てろ」

晶葉 「……すまない」

かな子 「晶葉ちゃんは、元は運動とは無縁ですから……」

卯月 「ゲッターに乗ると、アイドルとして歌って踊るとじゃ、体の動かし方も体

力の使い方もまるつきり違いますからね」

晶葉「…分かってはいた…。分かってはいるつもりだった…」

智絵里「お待たせしました…!お水をどうぞ…」

晶葉「ありがとう…。智絵里…」

新P「頭で考えるのと、実際にやってみんのかな、全然違えだろ?」

晶葉「…ああ、改めて思い知らされたよ…」

美穂「プロデューサーさん、どうするんですか?初日からこれじゃあ…」

新P「…。つたく、まず第一に、晶葉、お前えにはアイドルらしさが足りてねえんだよ」

晶葉「むっ…。それは常に研究に明け暮れていたから…と言うのは言い訳にはならない。面目ない」

新P「だから、ソコんとも含めて、ライブまでの残り期間、みっちり特訓していくぞ。題して——」

かな子「題して?」

新P「池袋晶葉アイドル化特訓だ!」

かな子「そのまんま…」

—。

茜 「——と、言うわけで！やって参りました河川敷！」

茜 「やはり体力をつけるには運動が一番です!!」

晶葉 「それは理解できるが…。お前が私のコーチなのか？」

茜 「はい！晶葉さんが、体力的にインドア系なのは晶葉さんのプロデューサーから聞いてます！」

茜 「学校でラグビー部のマネージャーの経験もある私が、ピシバシ鍛え直してあげますので大船に乗ったつもりでいてください!!」

晶葉 (…沈まなければいいのだが…)

茜 「では！まずはウォーミングアップ、ランニングです！このまま河川敷を30キロいきますよー!!」

晶葉 「まで。いきなりウォーミングアップでハーフマラソン以上走るのか？」

茜 「ハッ！そうでしたね！晶葉さんは今日が初日でした！初日に飛ばしすぎは良くないですね！」

晶葉 「ああ。分かってくれたようでありがたい」

茜 「ではハーフマラソンの距離でいきましよう！私の後ろを着いてきてくださいねー!!」 ダーッ

晶葉 「全然分かってない…。と言うか、私を置いていくなあ!!——」

数分後。

茜 「ふうっ！私は少し走り足りませんでした、いい汗かきましたね！」

晶葉 「——」

茜 「晶葉さん!?大丈夫ですか?息してますか?AED必要ですかー!!」

晶葉 「……いや…不要だ…。あと、耳元でうるさい…」

茜 「これは失礼しました!意識確認とAEDの確認を同時にやっちゃいました  
!」

晶葉 「そうか…。…そんな事より…水をくれ……」

茜 「水!?水ですね!はいどうぞ!お茶です!!」

晶葉 「水……」

茜 「お茶です!!」

晶葉 「……」 ゴクゴク…

茜 「あまり飲みすぎてはいけませんよ!かえって疲労が溜まってしまいます!」

晶葉 「分かっている…。助かった。ありがとう」

茜 「いえいえ!ではペースも考えて、10分後にトレーニングを始めましょうか!」

晶葉 「ま、まだやるのか…?」

茜 「当たり前です!何て言っちゃって今のはウォーミングアップですからね!」

茜 「ここからが、本格的なトレーニングです！まずは腹筋100回！そのあと腕立てとスクワット！」

晶葉 「結構あるんだな……」

茜 「ハードなダンスのあるステージをこなすには、足腰のトレーニングは欠かせません！走り込みも入れて、反復横跳び！いずれも100回！」

晶葉 「……」 フラ……

バタツ

茜 「晶葉さん!?大丈夫ですか?晶葉さん!？」

晶葉は、これから続くであろう途方もないトレーニングメニューに目眩を覚えていた。

これから毎日、ハーフマラソンと100回に拘った筋トレを繰り返すのだ。

そのうち晶葉は、考えるのをやめた。

茜 「晶葉さあぁーっ!!」

――

卯月 「昨日は大変でしたね……」 アハハ……

晶葉 「……まったくだ。とりあえず今日のトレーニングを休みにしてくれた助手には感謝だが、代わりにレッスルームなんか呼び出して何をする気だ？」

卯月「はい!それはですね……」

卯月「これです」 ニッコツ

晶葉「これ?」

卯月「はい、だからこれですよー!」 ニッコツ

晶葉「……。ああ、笑顔か」

卯月「そうです!アイドルにとつて、笑顔は大事ですからっ♪」 ニッコニコツ

晶葉「確かに、研究所にいた頃は作り笑いなんて考えたこともなかったな」

卯月「違いますよ!作り笑いじゃありませんっ」

晶葉「違うのか? : : フアンを喜ばせるためにするものだろうか?」

卯月「そうかもしれませんが、誰かに喜んでもらおうとか、ご機嫌とりでするものじゃないんです!」

卯月「ちゃんと自分で心から、楽しいと思うから出てくるものなんです!」

晶葉「 : : 成る程な。卯月はアイドル活動を楽しんでるから、そんな風に自然に笑顔になれると言うわけか」

卯月「はい!だから晶葉ちゃんも、笑顔になるレッスンをしましょう!」

晶葉「だからレッスルームと言うわけか」

晶葉「しかし、そう簡単に言われても、そういう仕草に慣れてる卯月と違って、私は

日常的に笑顔など作ったことがないからな……」

卯月「難しく考える事はありません！自分で楽しい事とか、嬉しかった事とかを考え  
て……。こんな風に——」

卯月「——♪」ニコリッ

晶葉「……」

晶葉（……尊い……）

卯月「晶葉ちゃん？どうしたんですか？すっかりしてください、晶葉ちゃん！」

晶葉「……ああ——」

卯月「晶葉ちゃん！」

晶葉「天にまします我らの父よ——」

卯月「晶葉ちゃん!?!どうしたんです突然膝なんてついて……。わ、私に祈らないでくだ  
さい！」

晶葉「——ハッ……！す、すまない。何故か突然目の前に女神が現れてきたような気が  
してな……」

卯月「め、女神ですか……？やっぱり、昨日の疲れがまだ残ってるんじゃない……」

晶葉「いや、それはあるかもしれないが……大丈夫だ。私は冷静だ」

卯月「そ、そうですか……？とりあえず晶葉ちゃんも笑顔の練習をやってみましょう！」



晶葉「うむ……。そうだな。……」

晶葉（……）。楽しい事、嬉しい事だったな……。私にとって、それはやはり実験が上手  
くいった時……。ロボが完成した時……）

晶葉「フフン！つまりこう言うことか！」

卯月「晶葉ちゃん……。それは……！」

晶葉「どうだ？なかなか上出来だろう？」 ドヤアツ

卯月「見事なドヤ顔です……」

――。

加蓮「――よし、それじゃあどこから行こつか？」

晶葉「……今日は休日のはずなんだが？」

美嘉「お休みだから、みんなでシヨツピングに行くんでしょ？」

加蓮「そーそー。みんなから聞いてるよ？晶葉白衣以外ろくな服持ってないって」

晶葉「確かに、衣装に費用を掛けた事はないが……」

美嘉「晶葉だつて女の子なんだから。ちよつとはファツションに興味もつた方がいい  
に決まつてるじゃん★」

加蓮「だから今日は休日のシヨツピングも兼ねてファツションコーディネートのレッツ  
スン、つて訳」

美嘉「ま、これでも一応カリスマフアツションリーダーとか巷で言われてるしい？晶葉の事だつてバツチリコーディネートしてあげる★」

晶葉「ふむ…。何故だろうな。2人の言っている事は射ているはずなんだが、妙に嫌な予感がするぞ」

美嘉「そんなの気のせい気のせい♪晶葉は全部、アタシらに任せちゃつていいんだからね」

加蓮「そう肩に入れないで、リラックスして委ねていいんだよ？」

晶葉「悪魔の誘い文句のようだな」

加蓮「そんなわけないって♪早く行くよ」

美嘉「レッツゴー★」

晶葉「……」

加蓮「やっぱ晶葉はピンクが似合うよね。何時も髪結つてるリボンも赤とかそつち系のが多いし」

美嘉「でもそれだと無難すぎじゃない？たまにはこう青とか黒とかでこう、シツクに大人っぽく……」

加蓮「あ、それいいかも…。じゃああとでリボン扱つてる店にも行こうよ」

美嘉「オツケー★」

加蓮「おー、いい感じいい感じ。結構似合ってるよ。晶葉」

晶葉（パンツルック）「そ、そうか…？こう言うのは履き慣れないんだが…。足が窮屈だな」

美嘉「その分スラツと細く見えるでしょ？」

晶葉「…子供の背伸びとは言わないか？」

加蓮「そんな事あるわけじゃないじゃん！…それじゃあ次は…！」

晶葉「……」

美嘉「——じゃあ次これ着てみて——」

加蓮「——その次はこっち。で、その次は…——」

晶葉「お前ら、私を着せ替え人形にして楽しんでるだけだろ——!!」

——その日の夜。

ガチャツ

晶葉「……はあ…。休みだと言うのに、倍疲れた…」

響子「あつ！晶葉ちゃん、おかえりなさいっ♪」

晶葉「ああ、ただいま。響子」

晶葉「すっかり寮のこの、響子の部屋で世話になってしまっているな…」

響子「細かい事は気にしないでいいんですよ！晶葉ちゃんがアイドル活動に専念するためだから、ですよね？」

晶葉「そうだ。これまで向こうに傾倒し過ぎたからな。少しはメカや、ゲッターからは離れた方がいいだろう？」

響子「その…、無理はしないでくださいね？」

響子「晶葉ちゃんがアイドル活動を楽しいって思ってくれた方が、私もみんなも嬉しいですから」

晶葉「分かっている。私もこの数日で、それなりにでも充実感を感じているよ」

晶葉「ゲッターの研究や、装備の開発では得られない、また違った充実感をな」

響子「それならいいんです。あ、晩御飯まだでしたよね？すぐに支度しちやいますっ」

晶葉「私も何か手伝おう」

響子「いいですよ気を遣わなくても。自室だと思つて寛いで待つていてください」

晶葉「そう言われてもな…。私としては、黙つて待つているのも心苦しいんだが」

響子「あつ、それなら、お風呂が沸いてますよ。先に汗を流してきたらスッキリするんじゃないんですか？」

晶葉「ふむ…。何から何まで、すまないな」

響子「いえいえ。家事は得意ですから。この部屋にいる間は、この部屋の事は全部私に任せてくれちやつてもいいんですよ?何時もやつてる事ですから」

晶葉「ふふっ。響子と結婚できる男は相当な幸福者だな」

響子「そ、そうですか?」

晶葉「ああ。こんな事で世辞を言うつもりはない」

響子「そうですかあ…。えへっ…えへへ…」

ジューツ

晶葉「きよ、響子…!鍋が吹き出している…!」

響子「え…?あ…!熱っ!」

晶葉「大丈夫か!」

響子「う、うん大丈夫…。あはは…失敗失敗…。うっかりしちやつた…」

晶葉「まったく…。大した事ないのならそれでいいが…。とにかく患部は水で冷やしておけ。火傷に効く薬は、部屋にあったか?」

響子「あ…ちようど切らしてた…と思う…」

晶葉「…仕方ない。近くの薬局に行つて買つてこよう」

響子「ごめんなさい…」

晶葉「いや、こんな事でもない、普段のお返しが出来ないからな。気にする事じゃ

ないさ」

晶葉「いいな、患部はしつかり冷やしておくんだぞ？」

晶葉「料理をしていけば日常的にある事かもしれないが、油断は大敵だ。大した事のない傷病が重症化する事だってある」

響子「はい。ふふふっ♪」

晶葉「何だ？」

響子「あつ、笑っちゃってごめんなさい。何だか晶葉ちゃん、お母さんみたいだなつて。私より年下なのに、そんなにしつかりしてて……」

晶葉「……ふっ。そんな事ないさ。では、行つてくる」

響子「はいっ、いつてらっしやい♪」

ガチャツ

—— こうして、晶葉のアイドルデビューに向けた日々は過ぎていった——。

~~~~~ 自衛隊施設 量産型ゲッタードラゴン 格納庫 ~~~~~

李衣菜「ふええ……!! コレが量産型のゲッタードラゴン……」

瑞樹「本来一般人の筈の私達が、こう言うのを一般公開に先駆けて見学させてもらえるのは、ちよつとしたお得感があるわよね」

みく「つて言つても、正直ゲッタードラゴンなら何時も研究所で見てるにや。その量

産型なら、見た目も大して変わらないからお得感もちよつと落ちるにや」

早乙女「最初はカラーリングを替える案もあったんだがね。無理に差別化を図る必要はないだろうと」

早乙女「それに、見た目は変わらんとっても、合体機構を省略した分、機体各部の強度は増している」

瑞樹「生存性や安定性では、こちらの方が優つていふことね。わかるわ」

菜々「しかし…、ゲッタードラゴンが複数並んでる光景つて、ゾツとしないですねえ…」

瑞樹「そうね。なまじゲッタードラゴンのスゴさは、目の前でよく見せられているもの」

李衣菜「セキュリティとか、大丈夫なんですか？前に量産したゲッターロボは恐竜帝国に盗まれたつて聞きましたけど…」

早乙女「その点については抜かりはない。何時、百鬼帝国のような勢力に狙われてもいいように、この施設にはビイトが常駐している」

早乙女「そもそも、この格納庫の存在自体、自衛隊内でも広くは知られていない」
みく「にや？ そうなの？」

早乙女「うむ。ゲッター量産計画に関しては箝口令が敷かれている」

早乙女「この場所を把握しているのは、我々ゲッター関係者と、一部の自衛隊幹部、そして量産型ドラゴンのテストパイロット達だけじゃ」

李衣菜「量産型ドラゴンのテストパイロット？」

早乙女「元々、量産型ドラゴンは自衛隊で運用予定だから。そのテストパイロットも、自衛隊から選りすぐった精鋭が選抜されている」

李衣菜「へえ〜」

瑞樹「ちようどあつちで、卯月ちゃん達と話しているのがそうよ」

李衣菜「えっ？ そうなんですか？ ……どれどれ……」

「は、はじめまして！ 矢部明一等兵であります！」

「自分は小野田勉。階級は同じく一等兵です！」

「宮崎翔……。俺は伍長だ」

「内藤剛夕！ 二尉、隊長補佐であります!!」

卯月「は、はじめまして……。島村卯月です」

かな子「み、三村かな子です。（スゴい迫力……）」

凜「体力だけはあるしそんな面子を揃えたみたいだね。私は渋谷凜。それでアンタが……」

「はっ！ 自分は伊賀利……。階級は三佐。一応、このテストパイロットチームのリーダーっ

て事になってます」

凜 「ふうん……。ま、見た目は悪くないかな」

伊賀利 「有難う御座います！」

卯月 「凜ちゃん……。何だか自衛隊の人に風当たり強くないですか？」

凜 「……めん。ネオゲッターの正規パイロットを決める時に色々あったからね……」

宮崎 「おっと、その時の軟弱者共と一緒にされちゃ困るな」

矢部 「その通りです！俺達はその時の反省を踏まえ、更に厳しい特訓を経て選抜された精鋭であります!!」

凜 「ゲッターは、体力と力任せだけで動かすものじゃないからね……」

矢部 「それは……そうではありますが……」

卯月 「で、でも！伊賀利さんは訓練成績でトップだったんですよね？」

伊賀利 「はいっ！……と言っても、全てシミュレーターでの結果になります……」

小野田 「伊賀利三佐の実力は本物です！自分がまだBT隊に所属していた時の恐竜帝国との戦いでは、幾度となく伊賀利三佐のBTに命を救われました！」

かな子 「ビイトでの戦闘経験があるんですね」

内藤 「伊賀利三佐の実力は、チームの全員が認めるところだぜ！なんなら、正規のゲッターチームの一員にだってなれまアす!!」

伊賀利「おい内藤！それは流石に言い過ぎだぞ！」

伊賀利「すいません…。こいつらも一応、自衛隊員としてプライドがあるみたいで…」
卯月「いいんですよ、気にしないで下さい。自分の仕事に大事な思いがあるって言うの、スゴく分かりますから」

伊賀利「とにかく、本日はゲッター操縦の先輩として、自分達の訓練に付き合ってくださいと言うことで」

卯月「私が量産型ドラゴンに乗ってもいいんですか？」

伊賀利「是非お願いします。経験の少ない我々とは、やはり得られるデータが違いますから」

凜「量産化されるのがドラゴンだけってなると、私達はここで見学だね」

かな子「そうですね。あ、差し入れにスイーツも持って来てあるんですよ！」

かな子「皆さんが訓練してる間に準備しちゃうので、終わったら皆さんで食べましょう？」

小野田「よっしゃア！それが聞ければ訓練にもますます身が入ると言うもんですぜ！」

宮崎「現金な奴だな」

アハハハハッ

李衣菜「あのく、1つ質問いいですか？」

卯月「李衣菜ちゃん？」

伊賀利「はい？何でしょう」

李衣菜「さつき量産されるのはゲッタードラゴンだけ、みたいに聞こえたんですけど……」

伊賀利「そうですね」

李衣菜「それじゃあ、量産型ドラゴンのハンガーの奥にあるのは何です？…ネオゲッターじゃないんですか？」

瑞樹「確かに。しかも、1、2、3形態1機ずつ置いてあるわね」

伊賀利「ああ、確かにあれは、そちらで運用されているネオゲッターロボを参考に開発された、量産型ネオゲッターロボです」

李衣菜「やっぱり！」

伊賀利「しかし、性能では圧倒的にドラゴンに劣りますから。これから行われる量産型ドラゴンの操縦技術習熟と、パイロット養成目的の訓練用として、本格的に量産はされません」

瑞樹「各形態ごとに開発されてるのは？」

伊賀利「最初、量産型ドラゴンとのコンペでは、3機による連携を軸に開発が進めら

れていたんですよ」

伊賀利「結局、生産コストとパイロットの操縦技術への負担から、採用される事はなかったんですよ」

瑞樹「ここに残ってるのが、その時の名残と言うわけね」

早乙女「量産型ドラゴンのデモンストレーションの際も展示はされると言うことじゃ。何も、日の目を見ずに終わるわけでもない」

李衣菜「でもなんか残念ですね。ネオゲッターもネオゲッターで良さはあると思うんだけど……」

伊賀利「そう仰られるんですしたら、乗ってみますか？」

李衣菜「えっ、いいの!？」

伊賀利「訓練用ですから、整備とエネルギーの補充は出来ています」

伊賀利「ここにいると言う事は、貴女もゲッターのパイロットなのでしょうし、どうです？我々と訓練に参加されては」

李衣菜「おっ、いいねえ。私だって訓練でそこそこゲッターは動かしてるし、ネオゲッターでもドラゴンに勝っちゃうかもよ？」

伊賀利「ははっ、それは楽しみです」

そして――、

李衣菜『あれ〜!?』

量産型ドラゴンの背負い投げで、量産型ネオゲッターは華麗に宙を舞うのだった。

みく「…まあ、そうなるにや」

菜々「あはは…。あら、そう言えば晶葉ちゃんが見当たりませんね…?一緒に来てたんじゃないかったですか?」

みく「晶葉ちゃんにや?晶葉ちゃんなら、…ほら」

菜々「?」

晶葉「18612586732157919841484882916447060
9575270695722…」ボソボソ…

菜々「な、何ですかあれ!?晶葉ちゃんどうしちゃったんですか?」

みく「何か円周率を数えて気持ち悪く落ちて着けてるらしいにや」

菜々「えんしゅ…?なんでそんな事を…。目も何か虚ろですよ!」

みく「そうしないと、うっかりやりかけの研究テーマの事思い出してアイドル活動に集中出来なくなっちゃうらしいにや」

菜々「そ、そこまで追い詰められてるんですか…?」

晶葉「0917567…——ええいつ!」

菜々「…晶葉ちゃん……」

くくく 数日後の夜 響子の部屋 くくく

響子「菜々さんが寮を、それも私の部屋を訪ねてくれるなんて、珍しいですね？」

菜々「ナナの部屋…ウウン！ウサミン星とは正反対の方向にありますからねー」

菜々「今日は折り返って、晶葉ちゃんに相談したい事があります。それでお伺いした次第です！」

晶葉「私に？」

菜々「はい！実は…、まずは見てもらった方が早いですね。これを見てください」

晶葉「これは…ウサギの絵か？よく書けてると思うぞ」

菜々「本当ですか？いや、鉛筆を持ったのは久々で、ちよつと自信なかつたんですけど…つて、そこではなく！」

菜々「実はそれ、ナナなりに考えたその…ロボットのデザインなんですよ」

晶葉「ロボだと？」

菜々「はい。次のライブで、何かいい演出はないかなとナナなりに思考しまして…」
響子「それで、このウサギ型のロボット…ですか？」

菜々「ロボットのバックダンサーがいたら、ステージの雰囲気にも合いますし、ファンの皆さんも喜んでくれるんじゃないかと」

晶葉「つまりなんだ、私にこのロボットを作ってほしい、と？」

菜々「はい…。駄目ですか…?」

晶葉「…ふうむ…。しかしな、菜々も分かっていると思うが、今私はライブの為に口ボからは離れていてな…」

菜々「これは全くライブに関係ない事じゃないですから!ライブ演出の、小道具作りのお手伝いです!」

響子「確かに、ライブを盛り上げるためなら、仕方ないかも…」

菜々「そうですそうです!あまり時間は取らせません!こういう事って、同じアイドルである晶葉ちゃんくらいにしか頼めませんから!」

晶葉「そ、そうなのか…?…!」

晶葉(成る程…。そういう事か…)

菜々「…どうですか?駄目ですか…やっぱり…」

晶葉「いや、いいだろう!面白い!」

菜々「やってくれますか…!ありがとうございます!」

晶葉「では、早速機能など、要望があれば聞こうか」

菜々「は、はい!あのですね…あ、響子ちゃんすいません…。少しうるさくなっちゃうと思うんですけど…」

響子「全然全然!私の事は気にしないでください!」

響子「あ、コーヒーでも淹れますね。ちよつと待つててくださいい！」

晶葉「ああ、ありがとう、響子」

菜々「ナナは砂糖多めでお願ひします」

響子「はいっ♪」

晶葉「はじめよう、まずは何から——」

菜々「はい、それじゃあまずはですね——」

チュンチュン チュンチュン

晶葉「——んあ……。朝、か……？」 ゴシゴシ

晶葉「あ……このタオルは……響子か……」

響子「ん……。スウ……」 Zzzz……

菜々「——んん……。ナナはもう飲めませんよ……。楓ちゃん……。 Zzzz……

晶葉「どんな夢を見ているんだか……」 スツ……

晶葉「……ありがとう、はこちらの方だ。ありがとう、菜々——」

~~~~ ライヴ当日 自衛隊所有地 特設会場 ~~~~

客「いやあ~~~~、まさか自衛隊のイベントでアイドルのライブが見れるなんてな〜。

ホント、公務員様様だよ」



客2 「何言ってるんだよ。こういうのやるのだって、使われてるのは俺らの税金だぞ、ぜ・い・き・ん」

客 「いいじゃねえか別に。こういう事やって一般市民楽しませてくれるんならよ。そういう事にこそ金は使うべきだって」

客2 「はあくく……。ホント、呑気な奴……」

客 「……。なあ、それよりも」

客2 「何だよ？」

客 「あそこにいるのつてさ、前にテレビで見たことあるけど、早乙女博士じゃね？」

客2 「は？まさか。世界に誇る日本の頭脳が一般席なんかにいるわけねえだろ」

客 「けどよお……。隣にいるのも橘博士に見えるし……」

客2 「はっはっは！それこそないない！何だ？いい歳した科学者が2人揃ってアイドルのライブを見学つてか？」

客 「……だよな。あり得ないよな！」

客2 「当たり前だろ？そんなの。第一、自衛隊にお呼ばれして来てたとしても、そういうのは普通来賓席とかってあるだろ？」

客 「そうだな。そりゃそうだよな！あはははは！」

客2 「あははははは！」

橘 「――やはり私達は、ここでは少々目立ちすぎるようですな」

早乙女 「うむ。白衣くらい脱いでくれば良かったか」

橘 「それ以外にも問題はありそうですが……。やはり我々の年齢がここでは不相応な  
のでは？」

早乙女 「居心地が悪いのであれば、今からでも来賓席に言ってもいいんだぞ」

橘 「まさか。来賓席って言っても、会場の一番後ろじゃないですか。それではス  
テージに立つ晶葉くんの姿がちゃんと見えない」

早乙女 「ふふつ。貴方まで楽しみにしてくれていたとは、意外じゃったよ」

橘 「この歳になって、孫が一気に出来たような気分ですてね」

橘 「晶葉くんには科学者として期待していますが、アイドルとしての彼女の晴れ舞  
台となれば、楽しみにもなりますよ」

早乙女 「そうじゃな。彼女はまだ若い。科学一辺倒に傾倒しすぎるには、まだ若すぎ  
ると言うもの」

早乙女 「これから、様々な事を経験して、立派な科学者となってほしいものじゃ」

橘 「先達である我々が、良い指標となれば良いのですがな」

早乙女 「……そうじゃな」

「お、いたいたー。父さーん、早乙女博士ー！」

橘 「ん？おお、翔。それに、ありすくんも。おかえり」

ありす 「どうも…」

翔 「いやあ、スゴいね。量産型ゲッターのデモンストレーションってだけ聞いてたけど、屋台まで出てて。ちよつとしたお祭りみたいだよ」

早乙女 「自衛隊の企画した、お祭りのようなものだからな。何か面白い物はあったかね？」

翔 「スゴいんですよ！スゴく大きなイチゴ飴の屋台があつて…、ね、ありすちゃん」  
ありす 「…はい。思わず2つも買ってしまいました」

早乙女 「ほう。ありすくんはイチゴが好きか」

ありす 「はい。イチゴは栄養バランスも整った、完璧な果物です。独特の酸味や甘さも悪くないですし」

翔 「ホントイチゴの事になると人が変わるよねえ。前に出されたイチゴパスタはどうかと思うけど」

ありす 「悪くないと思ったのですが…」

橘 「パスタの材料もパンと同じ小麦粉だからな。その点では、ケーキと変わらないんだろうが、レシピに問題があるんだろうか」

翔 「父さんも真面目に分析しないでよ！」

早乙女「はっはっはっ！賑やかですな。そちらは」

橘「困難が続いていますが、毎日楽しく過ごさせてもらってますよ。この子達のお陰で」

早乙女「ありすくんも、北海道の方でアイドルとして活動を始めたそうじゃないか」  
ありす「：以前にゲッターで戦ってる卯月さん達の姿を目の当たりにして、どんな小さな事でも、私に出来ることがないか考えた結果です」

翔「今や北海道の希望の星だもんね、ありすちゃん」

ありす「そんな…。大袈裟です」

橘「謙遜する事はない。ありすくんのように誰かに希望を与えるような存在は、こんな時代だからこそ必要だ」

早乙女「ありすくんも、アイドルとしてやるべき事を見つけた。そう思ったからこそ今日こうして卯月くん達の応援に来てくれたのじやろう？」

ありす「：はい！」

早乙女「うむ。思う存分、彼女達の本来の姿をその目に焼き付けて行ってくれ」

翔「あー、早く始まらないかな。ボク、アイドルのライブを生で見ると、はじめてなんですよ」

早乙女「そうじゃな。今頃、晶葉くんも舞台裏か……」

—— ステージ裏。

晶葉 「菜々、そっちのウサちゃんロボの調子はどうだ？」

菜々 「はい！こっちの子はバッチリですよ！ネジ1つ緩みはありません！」

卯月 「それにしても…、たくさん作りましたね…」

奈緒 「一体何機あるんだあ？パツと見ただけでも10機以上あるぞ…」

晶葉 「ウサちゃんロボの量産には、私と菜々のポケットマネーと、早乙女研究所からの協力で製作されている」

未央 （世界有数の科学力の無駄遣い…でもないのか）

ウサちゃんロボ 『ウサウサ！ウーサー！』

美穂 「きやつ！この子達しやべれるんですか？」

晶葉 「バックダンサーを務める事も考えて、人工知能を搭載した副産物のようなものだ。AIのプログラミングには、事務所のあるアイドルが協力してくれた」

凜 （もしかして、あの子かな…?）

加蓮 「って言うか、晶葉結構平然としてるけど、緊張とかしてない？」

晶葉 「ああ。こうやってロボをいじっていると、自然と心も落ち着くんだけ」

卯月 「ルーチン、って言うのですか？」

晶葉 「かもしれん」

瑞樹「でも、晶葉ちゃんの出番は一番最初なんだから、そろそろ準備しないと」

晶葉「おお、もうそんな時間か。――では」

李衣菜「晶葉、頑張って！」

晶葉「……まさか李衣菜に応援されるとは思っていなかったな。行ってくるよ」

晶葉（ステージ前……。アイドルとしてのステージライブ、か……）

晶葉（不思議だな。今まで緊張するような場面は幾つもあったが、それ以上に胸が高鳴っている）

晶葉（この種の緊張ははじめてかもしれない。果たして……）

スタツフ「晶葉さん、お願いします！」

晶葉「――……すう……。ツ！行くかつ！」

ダンツ

晶葉「！」 バツ

カンキヤクへワアアアアアア!!

晶葉（これが……アイドルのステージ……!）

翔「晶葉ちゃんーん!!」

橘「……」

早乙女「……」

晶葉「——♪」

晶葉（これが、これこそが……!）

新P「……」

響子「どうですか？プロデューサーさん」

新P「…何とかものになったな」

響子「はいっ♪」

晶葉「~~~~♪」

晶葉（そうか……。そう言うことだったのか……）

アーニャ「アキハ、立派、です！」

茜「はいっ！私達も負けていません！うおおおおおおお!!!」

藍子「あ、茜ちゃん……！気が早いよ……!」

晶葉「~~~~♪——!!」 ダンッ

ワアアアアアア——!!

晶葉（今、全てがわかった——!）

—— デビューライブ終了。

晶葉「……はあ……はあ……はあ……」

新P「おう、お疲れさん」

晶葉「プロデューサー……。卯月……」

卯月「お疲れさまですつ！どうでしたか？」

晶葉「…卯月達が、このステージを守ろうとする気持ちだが、わかったよ」

卯月「ふふっ……！」

晶葉「正直、ステージに立っていた時の事は覚えていない…。私は、やれていたのか？」

新P「ま、まずまずってトコだな」

晶葉「そうか…」

新P「今日来た奴等はみんな卯月や凜の、他のアイドル達のファンだ」

新P「中にはお前に目を着けてくれる奴もいるかもいれねえが、それからファンの心をどれだけ掴めるかは、お前次第だ」

晶葉「分かっている。私自身、いい舞台上でデビューさせてもらえた。心から感謝している」

晶葉「ありがとうプロデューサー。君は最高の助手だな」

新P「ハッ……！礼を言うにはまだ早えぜ。なんならとことん、極めてみなよ」

晶葉「ああ！そこがどこだろうと、私がやり遂げて見せるところを、見せてやろうじゃないか！」



アーニャ「アキハ、ステージの上でも、キラキラ、輝いていました」

茜「最早立派なアイドルですね！言う事ありません!!」

未央「よし！私達も負けてられないね！あーちゃん、茜ちゃん！」

藍子「か、勝ち負けとかの問題じゃないような気がしますけど…」

瑞樹「何にせよ、モチベーションが上がるのはいい事よ。後輩に負けずに頑張ろうつて言う未央ちゃんの気持ちは、わかるわ」

みく「この調子でドンドン来てくれたファンを盛り上げちゃうよー！みんなでー…えいつ、えいつ、おーっ!!」

一同「おーっ!!」

—— ステージ外。

かな子「——んんん♪このイチゴ飴、程よい酸味が効いてて美味しい♪」

かな子「食べ物の屋台、スイーツの屋台もたくさんあって、ホントイベントが一日だけなのが勿体ないなあ」

かな子「あれ？あそこにいるのって…」

宮崎「……」 コソコソ

内藤「……」 コソコソ

かな子「内藤さんに…宮崎さん…？こそこそ何してるんだらう？」

かな子「あつちは量産型ドラゴンの格納庫の方だけど、ドラゴンのデモンストレーションまではまだ時間はあるよね？」

「はっ……はっ……はっ……だ、誰かー！その人達を止めてくれー!!」

かな子「伊賀利さん？どうしたんですか？そんなに慌てて……」

伊賀利「か、かな子さん……その2人は……それらは、本物の内藤と宮崎じゃないんです！それらは……」

宮崎・内藤？「!!」 ダツ

伊賀利「百鬼帝国です!!」

かな子「ええっ!?!」

つづく

# 第16話『壮絶!ゲッター軍団VS量産型ドラゴン軍団』

!!』

~~~~ イベント前夜 ~~~~

小野田「うゝ、ヒック!よし、もう一件行きましょ〜!」

伊賀利「こら、明日は大事な日だぞ。飲み過ぎだ」

内藤「そんな隊長ゝ。俺らはみんな大丈夫ですよ!」

矢部「そうですそうです!酒が怖くて百鬼帝国が倒せますかってい!」

宮崎「つたく、実戦すらまだなのに、度胸だけは一人前の奴等だぜ!」

「……」

小野田「あん?何だテメー?」

「……」

矢部「何だ?ずっと黙ってばっかりで…。不気味な奴だぜ」

内藤「俺達が誰か分かってんのか?」

伊賀利「おい、小野田、矢部、内藤も。止めないか」

「……」

内藤 「ンだよ……何か用があるならハッキリしやがれってんだ！」 グンツ

伊賀利 「おいつ！大事な日の前にトラブルは……！」

内藤 「何だこいつ……！額に角が……！」

宮崎 「ひや、百鬼帝国……！」

百鬼兵 「!!」 グオンツ

――。

くくく 現在 イベント会場 くくく

伊賀利 「その後、自分達は数人の百鬼兵に囲まれ、その状況では不利だと判断し、皆散り散りになって逃げたんです」

かな子 「ほ、他の皆さんは……」

伊賀利 「……自分は、下水道の中に身を潜め、何とかやり過ごす事が出来ました」

伊賀利 「ですが……！他の隊員は……！あいつらに殺されて……皮を剥がされ……！」

かな子 「そんな……っ！」

伊賀利 「自分1人……おめおめと生き残って……！ううっ……！」

かな子 「た、立って下さい！伊賀利さんが生き残ってくれたお陰で、私達は百鬼帝国の計画に気付く事が出来たんです！」

かな子 「だから立って……行きましょう！他の隊員の人達の為にも……！」

伊賀利 「かな子さん…!はいっ!」

ダツ

茜 「あつ!かな子さん!あつちに美味しいマカロンの屋台が…つて、どうしました

!?追いかけてこですか!」

かな子 「あ、茜ちゃん…!その2人を止めて…!その2人は…!」

宮崎(百鬼兵) 「どけえ!小娘え!!」

茜 「むっ!」

かな子 「百鬼帝国の人の変装なんです!」

茜 「そういう事でしたら!トラーーーイッ!!」

ドワ オ

百鬼兵 「グォ——!」

力強く踏み込んだ茜の強烈なタツクルが、襲い掛かる百鬼兵を、逆に宙へと打ち上げる。

百鬼兵2 「大丈夫か!」

百鬼兵 「何だあいつ…!?並みの小娘の力じゃないぞ!」

茜 「見た目に惑わされてはいけませんよっ!こう見えてもゲッターのパイロットです!」

百鬼兵「何イ……！ゲッターのパイロットは、小娘でもこんな力をつけさせるのか……！」
かな子「茜ちゃんだけ特別ですっ！」

茜「そんなことよりかな子さん！ここは私と伊賀利さんに任せて皆さんにこの事を伝えてください！」

茜「もしかしたら他の所からも百鬼帝国が侵入してパニックになってるかもしれない！せん！」

かな子「分かりました！茜ちゃん、伊賀利さん！お願いします！」

茜「はいっ!!」

伊賀利（普通に言ってるけど、この子アイドルじゃ……）

茜「ぼうつとしてる暇はありませんよ！いいですか！伊賀利さん！」

伊賀利「だ、大丈夫です！本来戦闘行為は我々の領分ですから、相手が例え百鬼兵でも！」

茜「それではいきますよ！ボンバアアア……!!」

藍子「……きやッ！」 ドタッ

未央「あーちゃん！」

凜「未央、下がって！」

耳のイヤリングを取り外して百鬼兵に向かって投げる。

ドンッ

百鬼兵3「ウワアッ!」

未央「ヒューッ!流石アキっち謹製のイヤリング爆弾!」

凜「そんな事言つてないで、今の内に!」

未央「合点!あーちゃん立てる?」

藍子「は、はい…。ごめんなさい未央ちゃん…」

奈緒「つたくよく!毎度毎度あたしらのライヴ台無しにしがつて〜!百鬼帝国のヤロー!」

凜「言ってる前にゲッターの所に急ぐよ。きつと奴等の狙いは量産型ドラゴンだ」

奈緒「分かっているよ!愚痴の1つでも言つてないとやつてられないっての!」

加蓮「まったく、百鬼帝国の連中にはここまでの企画と準備をしてるプロデューサーとスタッフさんの苦勞を思い知らせてやりたいよね…」

凜「受けた恨みは倍以上にして返す!今は堪えるターンだよ」

藍子「り、凜ちゃん達…、何だか目が怖い…」

未央「ゲッターに乗つてると、血の気が多くなるのかなあ…?あはは…」

藍子「……他の所にいる皆さんは大丈夫でしょうか……!」

新P「オラア!!」 ドゴオ

百鬼兵4「グフツ……!」

新P「相変わらず頭の角に栄養が言ってる奴つてのは、空気が読めなくていけねえな……?」 パキ……パキ……

響子「ぶ、プロデューサーさん……!」

新P「おう、五十嵐、緒方。怪我はねえか?」

智絵里「は、はい……!プロデューサーさんは……?」

新P「あん?こんな肩慣らしにもなっちゃいねえから心配すんな」

響子「いえ、そこは心配してないんですけど……」

百鬼兵5「何だこいつ……。何故俺達を恐れない!」

新P「あ?百鬼帝国が怖くてアイドルプロデューサーが出来るかってんだ!」 ゴツ

百鬼兵5「カツ——!」

新P「俺アよお、テメエらには心底うんざりさせられてんだ」

新P「テメエら百鬼帝国のお陰で、電気も物資も何も制限されて、アイドル活動にだつて支障きたしまくりで!」

新P「折角入った大口の仕事も台無しにしゃがつてよお……!真夏の蚊の方がよっぽど

大人しくてマシだぜ」

新P「テメエら、覚悟できてンだろな？」ギロツ…

百鬼兵4・5「ヒツ…!」ガクガクブルブル

新P「これまでテメエらに台無しにされてきた分、のしつけて返してやつから覚悟しやがれッ!!」

ドゴツ バキッ メキヤッ ギャーッ

智絵里「…怖くない怖くない怖くない…!」フルフル

響子「百鬼帝国の方だよね? 智絵里ちゃん…?」

—。

百鬼兵「べ、別方向から侵入した部隊との連絡途絶…! 恐らく、人間側の手に落ちたかと…」

ヒドラー「どいつもこいつも使えん奴ばかりか! 人間如きに遅れをとるとは!」

ヒドラー「—何をまたついている!？」

百鬼兵「は…、格納庫の電子ロックを解除するのに、少々手間取ってまして…」

ヒドラー「そんなもの、さっさと爆破してしまえ!」

百鬼兵「はっ!」

重厚な鋼鉄製の扉を爆破して、格納庫へと侵入する。

ヒドラー「おお……！遂に見えたぞ……！まみゲッタードラゴンよ！」

ヒドラー「この力があれば、この世界も我々百鬼帝国のものだ！」

晶葉「そう簡単にいかせるか！」

ヒドラー「むっ!？」

凜「自分達の戦力で勝てないから盗人なんて、百鬼も落ちたもんだね！」 チャキ

伊賀利「……」 チャキ

隊員 s 「……」 チャキ

百鬼兵「し、四方を完全に包囲されています……！ヒドラー様……！」

ヒドラー「ええい臆するでない！各自散らばれ！誰でも良いから速く量産型ドラゴン

に乗り込むのだ！

百鬼兵 s 「はっ！」

伊賀利「撃てえ!!」

バババババババツ

百鬼兵「グワツ!!」

晶葉「くらえ！改良した細胞破壊光線銃だっ！」 ミヨインミヨイン

百鬼兵「オワア……——！」

ヒドラー「ちい……！ここまで来て、作戦を失敗に終わらせるわけには……！」

凜 「ゲームセットだよ」

ヒドラー 「貴様…ッ！」

奈緒 「へへっ！百鬼なんて言っても大した事ないじゃん」

加蓮 「アタシらも大した事してないけどね。とにかく、ライヴを邪魔したツケを払ってからおうじゃん？」

ヒドラー 「ぬ、ぬぬう……」

『ヒドラー様!!』

ブオンツ

奈緒 「凜ッ！危ない！」

凜 「くっ……！」

横から飛んできた巨腕を間一髪で避ける。

加蓮 「量産型ドラゴン…！盗られちゃったの!？」

『ご無事ですか？ヒドラー様!』

ヒドラー 「牛餓鬼か？よくやった！」

牛餓鬼 『人間の攻撃が危険です！ドラゴンの手に!』

ヒドラー 「うむ！」

奈緒 「あつ、クソ！逃がすかア！」

凜 「もう手遅れだよ。危ないから下がって！」

奈緒 「チツクシヨ……！」

凜 「ゲッターを盗られたらゲッターで取り返すしかない。奈緒と加蓮はネオゲッターの所に急いで！」

加蓮 「凜は？」

凜 「卯月達と合流する。とにかく百鬼帝国に暴れまわられる前に、私達のゲッターで止めるんだ」

凜 「伊賀利さんも！部隊を下がらせて！このままじゃ被害を大きくするだけだ！」

伊賀利 「り、了解……！撤退、撤退……！」

ヒドラー 「他の者も何人かはドラゴンに乗れたようだな……」

ヒドラー 「よし、牛餓鬼よ。私はあれがいい。あのドラゴンのコックピットに私を運ぶのだ」

牛餓鬼 『はっ！』

ヒドラー 「ふふふ……！遂に手に入れたぞ……！無敵のゲッタードラゴンの力を！」

ヒドラー 「お前達……！力の限り暴れる……！奴等人間共に奴等のゲッターの力を以て、その恐怖を叩き返してやるのだ……！フハハハハハ……！」

—— 格納庫外。

李衣菜「量産型ドラゴンが!?…あれ、こっち側の誰かが動かしてる訳じゃあ、ないよね…」

少女「きゃあ!」ステレンツ

李衣菜「! 君、大丈夫!?!」

少女「お姉ちゃん…、ありがとう…」

李衣菜「怪我がないんならいいんだよ。ほら、早くお母さんのところに!」

少女「うん!」

タツタツタツ

李衣菜「…時間は稼がないとね…。よし…!」

避難する人々を掻き分け、量産型ドラゴンと反対側の格納庫に向かう。

李衣菜「——…よし、展示用に立ててあったけど、エネルギーは残ってる!」

ウウン…

李衣菜「行くよ!量産型ネオゲッター!」

ギンツ

早乙女『——量産型ネオゲッターが動いているのか?誰じゃ!?!』

李衣菜「早乙女博士…と橘博士!管制塔にいるんですか?なら、避難状況を教えてください!」

橘 『李衣菜くん、気持ちには分かるがやめるんだ。そのゲッターで量産型ドラゴンの相手をするのは無理だ!』

李衣菜 「いざとなったら機体をぶつけて脱出しますよ! 私だって、ロックアイドルを極めるまで死ぬつもりなんてありませんから!」

李衣菜 「今大事なのは、避難している人達が無事避難できる時間を稼ぐ! 違いますか?」

早乙女 『うむ。今、卯月くんや未央くんが中心となつて避難誘導にあたっている』

早乙女 『敵の襲来を早期に気づく事が出来たお陰で、円滑な避難が行えている。あと20分、いや15分だけでもドラゴンの動きを止めてくれ!』

橘 『早乙女博士!』

早乙女 『スタンバイ出来ているゲッターチームも直に出撃する。何も李衣菜くんだけに負担を背負わせるわけではないさ』

李衣菜 「…でも、卯月が避難誘導してるって事は、ゲッターGの出撃は遅れるのか? キッツいなあ…。けど!」

量産型ネオゲッター1を一步前進。

李衣菜 「…これ、ネオゲッター用のマシンガン、かな?」 ヒョイ

李衣菜 「ううん…。銃は撃った事ないけど…、何も持たないよりマシか!」

右手にマシンガンを担い、ゆっくりとした歩調で格納庫を出て、量産型ドラゴンと対峙する。

李衣菜「…初陣の相手がゲッタードラゴンなんて、なかなかロックな展開じゃん…!」
ヒドラー「ほう…。たった1機で出てくるとは、見上げた度胸だな」

李衣菜「トーゼン!ゲッターは私達人間のなんだから、そう簡単には渡せないってね
!」

言いながら、腰だめに構えたマシンガンを乱射する。

李衣菜「うわわっ!?!反動で銃身がブレる!?!」

牛餓鬼「こいつ、素人か!」

李衣菜「あ、甘くないですよ!ゲッターの操縦訓練はちゃんと受けてるんだから!」

李衣菜「もうっ!ドラゴンが味方に登録されててロックオンできない…!こうなった
らマニユアルにして…!」

李衣菜「えっと…。今度は銃をしっかりと押さえて、コツは目標をセンターに入れて…
」

李衣菜「スイッチ!!」

バラバラララッ

李衣菜「当たった!」

牛 餓鬼「……フンツ」

李 衣菜「…効いてない？」 ヤツパリ

牛 餓鬼「当然だ。そんな豆鉄砲が通じるわけがない事など、貴様らがよく知っている事だろうか？」

李 衣菜「そりゃあそうだけどさ…。なら…ツ！」

左拳を握り、

李 衣菜「チェーンナツクルツ!!」

鎖付きの拳を飛ばす。

牛 餓鬼「バカめツ!!」

李 衣菜「えっ!？」

半身翻した量産型ドラゴンが、目の前を通過する形となったチェーンナツクルの鎖を掴み取る。

牛 餓鬼「それえいつ！」

李 衣菜「うわあああ!？」

掴んだ鎖を利用され、量産型ネオゲッターが宙を舞い、量産型ドラゴンが密集した地点へと叩き付けられる。

李 衣菜「ぐ…ぐうう…!!」

牛餓鬼「口ほどにもない。所詮小娘の動かすゲッターか」

李衣菜「何をつ……!他人ひとのもの盗んできて、デカイ口叩くなあ!!」

起き上がり、遮二無二量産型ネオゲッターを突っ込ませる。

牛餓鬼「フンツ!それが——!」

李衣菜「ガッ……!」

組み付いた量産型ネオゲッターを、まるで赤子を弄ぶ様に軽々と持ち上げ、膝を鳩尾に一発。

牛餓鬼「戦いを知らない素人だと言うのだツ!!」

浅く宙に浮いた量産型ネオゲッターを蹴り飛ばす。

李衣菜「うわあああああああ!!」

百鬼兵「おっと!遊んでやるぜ。おらよ!」

量産型ネオゲッターを捕らえた量産型ドラゴンが、また更に別の量産型ドラゴンへと。

李衣菜「グッ——!」

百鬼兵2「へへへっ!オラア!!」 ガンツ

李衣菜「ウツ……!」

百鬼兵3「今度はそっちだ!」ゴツ

李衣菜「ア、アアアアアッ!?」

百鬼兵4「まだまだ行くぜ!!」ドカッ

李衣菜「くくくッ!!」

サツカーボールの様に次から次へと、量産型ネオゲッターは蹴り上げられ、パス回しされ、最後に格納庫の壁面へと打ち付けられる。

李衣菜「——う……う……ま、まだだよ……!」

ヒドラー「見下げ果てたものだ。無様な姿を晒しても尚、闘志は衰えぬか」

李衣菜「このまま……、ロックじゃないまま終われない!」

牛餓鬼「言葉の意味はよく分からんが、心意気は立派だな。ならば——」

牛餓鬼の量産型ドラゴンが来る。

李衣菜「くッ……!」

牛餓鬼「己の理想を抱いたまま、……死ね!」

李衣菜「——ッ……!」

ヒユウ……ン——

茜「チエーンジゲッターアアア!!烈ッ!火ア!!」

茜「——てえりやああ!!」

牛餓鬼「何ッ!?——うぐッ!」

空中から自由落下してきたゲッター烈火の踵落としが、量産型ドラゴンの頭部にクリーンヒットする。

李衣菜「ゲッター斬…。茜ッ！」

茜「おつ待たせしました〜!李衣菜さん!お怪我はありませんか!」

李衣菜「私なら大丈夫!助けてくれてありがとう!」

茜「さあ!ここからは私も相手になりますよ!偽物ゲッター集団!」

美穂「べ、別に偽物じゃないんじゃない?」

アーニヤ「Да…ミホの言うとおり、です。相手の能力は、オリジナルのゲッタードラゴンと同じ、ですね」

李衣菜「それどころか、装甲の厚さなら向こうの方が上だよ!」

美穂「改めて向かい合うと、ちよつと怖いかも…。これだけの数の、ゲッタードラゴンなんて…。」

茜「怖じ気づいてはダメですッ!こういう時は、気合いで折れた方の負けですよッ!」

アーニヤ「Теория Дух…精神論、ですが…。アカネに同意します」

李衣菜「だね!私のネオゲッターだって、まだまだ動けるんだから!」グググッ

瓦礫の中から量産型ネオゲッターを起こし、何とか立ち上がる。

奈緒「まあまあ。危ないところがあれば、あたしと加蓮でもフォローしますから!」
加蓮「いざとなったら、ネオゲッター2でも、3でもいけるから、菜々さんは無理しないで」

菜々「あ、あははは…」

菜々(ううう…。2人の優しさが、痛い…)「…!」

アーニヤ「これで、こちらの戦力は、5機、ですか」

「いいや!まだあと2機残ってるよ!アーニヤン!」

未央「チエーンジゲッター!!ワアアンツ!!」

瑞樹「未央ちゃん!」

みく「旧ゲッターを1人で動かしてるの!」

未央「2人共もお待たせー!今は1機でも戦力がほしいところでしょ?」

瑞樹「それは分かるけど…、無茶はしないでよ?」

未央「分かってますって!この本田未央ちゃんに任せなさい!」

みく「…いまいち頼りにやあ…」

未央「酷っ!」

李衣菜「…ええつと、未央は2機って言ってたけど、後1機は…」

「自分です!」

美穂「伊賀利さん！…大丈夫なんですか…？」

伊賀利「はい…。自衛官として、民間人である皆さんだけを戦わせるわけにはいきません！」

伊賀利「それに、百鬼帝国には部下をやられました！その仇討ちは自分が！」

茜「理由がどうあれこちら側にも量産型ドラゴンがいるのは心強いですね！一緒に戦いましょう！」

瑞樹「茜ちゃんの言うとおりにね。伊賀利さんの量産型ドラゴンを中心に、陣形を組みましょう」

みく「リーナちゃん、間違つて伊賀利さんの量産型ドラゴンを撃たないように気を付けるにや」

李衣菜「な…っ！そんなの分かってるよ！」

牛餓鬼「むうう…。雑魚ばかり次から次へと…！」

ヒドラー「所詮は烏合の衆。ゲッタードラゴンの力を手に入れた我々に敵う相手ではないわ」

ヒドラー「牛餓鬼よ。私は、作戦の第2段階に移る。見事、人間共のゲッターを打ち砕いてみせよ」

牛餓鬼「ヒドラー様…。はっ！」

ヒドラー「では、任せたぞ」

茜「あー！機逃げますー！」

牛餓鬼「ヒドラー様は追わせんぞ！人間！」

瑞樹「：どのみち、こいつらをこの場に野放しには出来ないのよね」

みく「そつちがその気なら、みく達が相手になってやるにやあッ！」

牛餓鬼「面白い。これだけのゲッタードラゴンを相手にして、そんな旧式機ばかりの集団で勝てるつもりでいるとは」

アーニヤ「H e T : 戦いは、機体の性能で、するものじゃ、ありませんね」

菜々「ゲッターの性能の差が、戦力の決定的な差じゃないって、ナナ達の実力で教えてあげますー！」

牛餓鬼「せいぜい吠えろ。各機、攻撃開始ッ！」

伊賀利「皆さん！百鬼帝国が来ます！」

李衣菜「よーしっ！反撃開始だよッ！」

みく「リーナちゃんはこつちにや！」

瑞樹「李衣菜ちゃんのゲッターは損傷もしてるんだから。私達と後方支援よ」

李衣菜「：リョーカイ」

茜「トラー！ー！ー！イッ!!」

百鬼兵「突っ込んでくるだど!」

百鬼兵2「バカか!?! 生身はともかく、性能差のあるゲッターで、このドラゴンが倒されるわけ……!」

茜「てりやつ!!」

百鬼兵「グフツ!」

掌底。

茜「せいっ!」

百鬼兵「コツ……!」

袈裟蹴り。

茜「とぁー! ツ!」

蹴り上げで顎を打ち上げ、量産型ドラゴンを昏倒させる。

百鬼兵2「こ、コイツ……!」

茜「パワーと装甲では劣りますが、機動力と柔軟さならばゲッター烈火の方が上ですッ!」

百鬼兵2「たかが一機倒したくらいで、調子に乗るな……!」

菜々「——シヨルダーミサイルツ!!」 ドシユツ

百鬼兵2「ぐお……!?!」

菜々「油断大敵ですよ!——未央ちゃん!」

未央「オーライ、ウサミン!ゲッターマシンガン!」 ジャコツ

未央「オララララララララ——!!」

ドドドドドドドドドドドド

ショルダーミサイルで動きの止まった目標に、ゲッターマシンガンを集約して浴びせ、

未央「トドメはく…茜ちゃん!」

茜「火斬刀ツ!!」

上空からの重力落下と共に打ち下ろした二刀の火斬刀で、量産型ドラゴンを粉碎する。

伊賀利「皆さん、すごい連携だ…!自分も負けてられません!」

伊賀利「ゲッタートマホーク!!」

牛餓鬼「ツ!」

2機の量産型ドラゴンが鏝迫り合う。

伊賀利「ぐ…ぐぐう…!」

牛餓鬼「貴様とは性能が互角だったな。…だが」

牛餓鬼の量産型ドラゴン背後から、新たに2機の量産型ドラゴンが姿を現し、伊賀利

を強襲する。

伊賀利「しまっ……!!」

バラバラララッ

百鬼兵 s 「!?!」

2機の量産型ドラゴンが集中した火線を受け、爆炎に吞まれる。

牛餓鬼「何だ!」

瑞樹「一騎打ちの邪魔をしちゃ、いけないわよね」

李衣菜「こつちもー機じゃないって言うの、忘れてない?」

牛餓鬼「小癩な……!」

伊賀利「——今だ!」

伊賀利「でええいっ!!」

牛餓鬼が気を抜いた一瞬の隙を突き、伊賀利の量産型ドラゴンが競り勝つ。

牛餓鬼「ぐわあッ!」

百鬼兵「牛餓鬼様!」

牛餓鬼「私はなんともない!それより、すぐに態勢を立て直せ!」

百鬼兵 s 「はっ!」

倒れた牛餓鬼の量産型ドラゴンを庇うように、他の量産型ドラゴンが壁となって立ち

塞がり、量産型ネオゲッターの火線で倒れた量産型ドラゴンも身を起こす。

みく「伊賀利さんも一旦下がるにや!単機で突っ込むのは危険だよ!」

伊賀利「了解ッ!」

未央「あの壁を突破するのは簡単じゃないねえ:」

加蓮「向こうの頭を叩くのが一番なんだけどね」

アーニヤ「そういうところは、相手も、ちゃんと考えてます」

奈緒「しつかし流石はドラゴン。なかなかタフだよ」

瑞樹「私達の重火器なんて、豆鉄砲みたいなものだしね」

みく「尚更攻撃の手を止めるわけにはいかないにや!」

菜々「相手が倒れてくれるまで、撃ち続けるだけです!」

伊賀利「では引き続き、ゲッター斬と旧ゲッター、ネオゲッターの3機で攻撃を!量

産型ネオゲッターのお3方は、自分の援護を!」

一同「了解ッ!!」

~~~~~ 展示格納庫前 ~~~~~

凜「卯月ッ!かな子!」

卯月「凜ちゃん!そっちの方の避難は?」

凜 「民間人の避難は終わったよ。逃げ遅れた人も、いないみたい」

卯月 「そうですか……。何とか皆さんを避難させる事が出来ましたね」

かな子 「戦いが、拡がってますね……」

凜 「みんなドラゴン相手によく持つてる方だよ。私達も行こう！」

卯月 & かな子 「はいっ！」

走り、それぞれのマシンに乗り込む。

晶葉 『……卯月、Gチームの全員は、ゲットマシンに搭乗したか？』

卯月 「晶葉ちゃん！今は、管制塔ですか？」

晶葉 『ああ、管制塔から、李衣菜達の戦闘の状況を捉えている』

凜 「すぐに状況を教えて。私達も加勢する」

晶葉 『いや、卯月達は離脱した量産型ドラゴンを追ってくれ』

かな子 「そんな……！李衣菜ちゃん達が、危ないんじゃないんですか？」

晶葉 『今のここの状況よりも、離脱したドラゴンの行き先の方が危険なんだ』

凜 「ドラゴンの行き先？」

早乙女 『連中の狙いは、建造中のゲッターエネルギープラントじゃ』

早乙女 『そこが奪われるだけならまだしも、もし爆破などされたら大変な事態になる』

橘 『最悪、日本全体がゲッター線に汚染され、人間が住む事など許されない地にされ

てしまうぞ』

卯月「そんな…!」

早乙女『ゲッター線はまだ解明されていない事も多い。だから断言はできませんが、危険な事態は回避せねばならん!』

晶葉『だからGチームは離脱した量産型ドラゴンを追撃し、エネルギープラントを守るんだ!』

卯月「…分かりました。Gチームで、エネルギープラントを守りますッ!」

凜「戦闘に出遅れた私達が都合がいいか…。奈緒、加蓮、聞いてた?」

奈緒『おう!こっちはあたしらに任せとけて!』

加蓮『ウチに帰れなくなったら承知しないんだからね?来週、某ハンバーガー店に限定メニュー出るんだから』

凜「それなら、来週は奢らせてよ。今回のお礼に」

加蓮『マジ?やった♪アタシますます張り切っちゃうんだから!菜々さん、代わって代わって!』

菜々『ふえ…!?何です!?いきなり…って、わあああ!』

通信機から爆発音が響く。

凜「ふふっ。張り切りすぎて倒れないように、つと…ごめん卯月、かな子」

卯月「いえいえ！全然待ってませんでしたよ？」

かな子「来週は私達も連れてってくださいね？」

凜「…2人は自腹だよ」

かな子「ええー！」

凜「当然でしょ、特になな子は。食べ過ぎて、またトレーナーさんにシゴかれても知らないよ」

かな子「うっ…！それは…」

卯月「そろそろ出撃しましょう！エネルギープラントと、来週みなでお出掛けするために！」

—。

牛餓鬼「むっ！あれはゲッターG…。ヒドラー様を追う気か！」

未央「隙あり！」

牛餓鬼「グッ…!？」

ゲッター1が量産型ドラゴンにタックルを仕掛け、組み付く。

未央「へへっ…！しまむー達は追わせないよ！」

牛餓鬼「ふふっ…！愚かなものだ。オリジナルのゲッターG無しに、この状況が覆せると言うか！」

未央「言うね! 私達は、何時だつてゲッターGの性能頼みに戦ってきた訳じゃないなあ  
あいつ!!」

力任せに、ゲッターが量産型ドラゴンを薙ぎ倒す。

加蓮「みく、アタシに合わせて!」

みく「合点にや!」

加蓮&みく「ダブルゲッタートルネエードツ!!」

牛餓鬼「おおお…!?!」

2機分のゲッタートルネードが、量産型ドラゴンを吹き飛ばす。

伊賀利「トドメだ…! ゲッタービィーーム!」

牛餓鬼「チィ…ツ!」

百鬼兵「牛餓鬼様、危な…! ぐおお…!?!」

ドオンツ

李衣菜「別な奴が盾になったの!?!」

美穂「もう少しかったのに…」

牛餓鬼「人間め…! よくも…ツ!」

茜「昨日の今日ゲッターに乗ったばかりで、私達に勝てると思わないでくださいッ

!!」

美穂（それは私達もあんまり言えないような…）

牛餓鬼「ふざけるなよッ！貴様らにも味合わせてやる…！ゲッターの恐ろしさと言うものを！」

未央「面白い事言うじゃん！そっちだつて思い知るといいよ！人間の、土壇場の馬鹿力つて奴をさ！」

くくく ゲッターエネルギープラント 建設予定地 くくく

B Tパイロット「うわあああつ!?だ、脱出だあ！」

B Tパイロット2「つ、強すぎる…！ビイトだけでゲッターを止めるなんて、やっぱ無理だぜ!!」 バババツ

ヒドラー「フンツ！弱すぎる…！やはり人間の力などこんなものか…」

ヒドラー「いや、ゲッターの力が凄まじいのか！」ズンツ

B Tパイロット2「ぎゃあつ!?!」

量産型ドラゴンのトマホークが、容易くビイトを粉碎する。

ヒドラー「フハハハハハッ！人間共め、貴様らの抛り所とするゲッターの力に恐れ慄くがいい！フハハハハハハハハハハッ!!」

卯月「そこまでです！」

ヒドラー「むっ！」



卯月「チエエエーンジツ!ドオラゴーノッ!!」

ヒドラー「フンツ!——ゲッターレーザーキャノン!」 バシユツ

卯月「ゲッターレーザーキャノンツ!」 バシユウツ

地上の量産型ドラゴンと、空中のゲッタードラゴンの双方から放たれた光線が、中空で激突し、周囲に電磁波を帯びた爆発を生む。

卯月「っ!?」

ヒドラー「面白い!ゲッタードラゴン同士での戦いか!」

凜「バカだね。同じゲッタードラゴンなら、こつちがずっとよく知ってる!」

爆炎の中を肉薄した量産型ドラゴンと、今度はトマホークで鏖迫り合う。

ヒドラー「ゲッターの事を貴様らが知っているならば、こちらは戦闘の事を貴様らより知っている!」

卯月「ううっ…!」

量産型ドラゴンが、ゲッタードラゴンを打ち払う。

ヒドラー「ゲッタービーム!」

卯月「マツハ・ウイング!!」

ヒドラー「トマホークブルーメランだ!」

卯月「!? スピンカッター!」

体勢の崩れた所を狙ったゲッタービームを、マツハ・ウイングで上昇して強引に躲し、放たれたトマホークを、スピнкаッターで打ち払って弾く。

凜 「アイツ、前に思ってたけど、口ばっかりの奴じゃないね……！」

かな子 「はい……！ はじめて乗ったゲッタードラゴンを、あそこまで乗りこなすなんて……！」

卯月 「それだけこつちを調べ尽くしてらるって事ですよね……！」

凜 「こつちだって負けられないよ、卯月……！」

卯月 「分かってます……！」

卯月 「ゲッタートマホーク……！」

卯月 「トマホークブーメラン……！！」

ヒドラー 「フンッ……！」

ゲッタードラゴンが投じたトマホークを、量産型ドラゴンは容易く払う。

ギョんッ

その間にゲッタードラゴンは急速に移動。量産型ドラゴンの背後に回る。

卯月 「ゲッターレーザーキャノン……！」

量産型ドラゴンを中心に置き、円を描くように断続的にレーザーキャノンで攻撃する。

ヒドラー「ぬう……!」

卯月「ゲッターキック!」

ヒドラー「ぐっ……!」

レーザーキヤノンの連続攻撃で、足の止まった量産型ドラゴンを蹴り弾く。

ヒドラー「小娘め……! なかなかやりおる……」

凜「そつちもね」

卯月「ゲッターの力を……貴方達に渡すわけにはいかないんです!」 グオンツ

量産型ドラゴンを殴り飛ばす。

ヒドラー「ゲッターは貴様らに過ぎた力だ! 我々に使われてこそ意味がある!」

かな子「そんな事を……!」

凜「アンタ達の勝手にはさせない……させるわけない! 卯月!」

残った1本のトマホークを構え、量産型ドラゴンに肉薄。

ヒドラー「むうう……!」

量産型ドラゴンのスピнкаッターと、ゲッタードラゴンのトマホークが打ち合う。

卯月「くう……! はっ!」

今度はゲッタードラゴンが競り勝つ。

ヒドラー「あと1歩……あと1歩なのだ……! 貴様の相手などしておれん!」

凜 「卯月、アイツは先にゲッターエネルギープラントを狙う気だ」

卯月 「そんな事をさせません！」

ヒドラー 「うおおおおお——!!」

卯月 「うわあああああッ!!」

~~~~~ 自衛隊 施設 ~~~~~

未央 「トドメだ、いがりん!!」

伊賀利 「ゲッタービーム!! (い、いがりん…?)」

百鬼兵 「うわあッ!」

ドオンッ

みく 「やった!これで残すは1機にや!」

牛餓鬼 「ぐう…!!何故だ!?戦力でも、性能でも優れているはずなのに…!!」

奈緒 「何だ?1人になって、焦りはじめたってか?」

アーニヤ 「これが、ワタシ達の、実力です!」 ドヤア

牛餓鬼 「たかが十数年生きた程度の下等生物が実力などと…!バカにするな!」

グッ

量産型ドラゴンが突撃する。

瑞樹 「貴方達の寿命が、どれ程のものか知らないけど……」

菜々「他人ひとを見下す人はもう負けてるんです!」

牛餓鬼「バカにするなあ!!」

菜々「ミミンツ!」

加蓮「きやあつ!」

立ちはだかったネオゲッター3が軽く弾かれる。

牛餓鬼「負けるわけにはいかない…!我が父のためにも、負けることは許されないのだあ!!」

茜「火斬刀ツ!!」

ガキインツ

暴れまわる量産型ドラゴンに割って入り、ゲッター烈火が火斬刀で勝負を挑む。

牛餓鬼「女ゲッターが…!勝てると思うかあ!!」

茜「気持ちなら、常に勝っています!百鬼帝国になんて絶対負けません!」

牛餓鬼「ふざけた事を…!どけえ!!」

茜「うおおああつ!」

ゲッター烈火を制し、量産型ドラゴンが立つ。

加蓮「何なの…コイツ…?いきなり…」

早乙女『みんな!一刻も早くそこから退避するんじや!』

美穂「早乙女博士!？」

早乙女『奴はゲッター線増幅装置のリミッターを外している!今の奴は爆発寸前の核爆弾みたいなモノじゃ!』

奈緒「リミッター!？」

みく「爆発寸前って…!そんなのどうやって止めたらいいにゃ!？」

菜々「ここ、ここには一般人だつて残ってるんですよおっく!？」

未央「それなら私に、いい考えがある!アーニヤン!」

アーニヤ「Да…ミオに合わせます…!」

未央&アーニヤ「オーブンゲット!!」

アーニヤ「チェンジゲッター紫電ツ!」

アーニヤ「ゲッター影分身!」 シュババツ

分身したゲッター紫電が、量産型ドラゴンを囲うように駆ける。

牛餓鬼「こんな小細工如き…!ゲッタービーム!」

回転させてゲッタービームを撃ち、分身を消し去っていく。

未央「パワーアームツ!!」

多重に増えるゲッター紫電の分身の合間から、ゲッター3の蛇腹腕が伸びて、量産型

ドラゴンを拘束する。

未央&茜 「「ビィイームツツ!!!」」

牛餓鬼 「ゲッタービーム!!」

同時に放たれたゲッター烈火とゲッターのゲッタービームと、量産型ドラゴンのゲッタービームが激突。

牛餓鬼 「ぐ…ぐうう…!…な、何故だ!?こっちは人間程度では制御できない程のパワーが出ているんだぞ?!」

牛餓鬼 「…：ロートルと雑魚に負ける…!?!」

未央 「甘いねっ!」

茜 「私達は、死んでも負けられないんです!」

アーニヤ 「機体の強さ、では、負けるかもしれませんが、思いの強さ、では負けません…!?!」

美穂 「1人1人の力じゃ、貴方に勝てないかもしれないけど、私達3人、未央ちゃんと4人で力を合わせれば!」

未央 「勝てないものなど、何もなあいつ!!」

牛餓鬼 「感情で強さが変わると言うのか!?ロボットだぞ?!」

茜 「細かい事はいいんです!結果として、私達は貴方に勝ちますツ!!」

未央 「気合いの見せ所だよ!茜ちゃん、アーニヤン、みほちー!!」

4人「「「ボンバー………ッ!!」「」」

牛餓鬼「——…うっ………ち、父上……—」

ゲッター烈火とゲッター1のゲッタービームが、量産型ドラゴンのビームを払い除け、貫く。

——轟音。

ダブルゲッタービームの勢いに呑まれ、量産型ドラゴンは高く成層圏まで打ち上がり、爆発の衝撃は地上まで響いた。

李衣菜「わわっ!」

菜々「操縦桿にビリッと来ますねえ…」

奈緒「とりあえず、これで盗まれたドラゴンは全部か?」

加蓮「………そうみたい。もうみんな機能停止してる」

奈緒「戦闘終了かあ。今回は流石に骨が折れたな」

みく「まさかゲッタードラゴンと戦うなんて、誰も思わないにや」

李衣菜「気が付いたら、もう夕暮れかあ…」

菜々「それだけ激戦だったって事ですなえ…。ナナももうクタクタで…」

加蓮「早く帰ってシャワー浴びたい…」

奈緒「しっかし、李衣菜よく無事に切り抜けたな?」

みく「あんだだけボコボコにされて、リーナちゃん事態に怪我とかないの？」

李衣菜「うゝ…ん…？　そう言えばお腹のところ冷たいような…：…なんじやこりやあ
!？」

腹部に当てた手の平に、ベツタリと血がつく。

みく「…：…思つたより重傷そうだにや」

李衣菜「あつ！　痛い！　仰け反つたら全身痛い！…：え、衛生兵——!!」

奈緒「あははははは！」

瑞樹「これが若さねえ」

伊賀利「皆さん立派な戦士と言う事ですか」

瑞樹「あの子達が慣れたらいけない事よ。もちろん、私もね」

伊賀利「分かつてます。その為にも自分達が…」

茜「瑞樹さ——んっ!!」

瑞樹「茜ちゃん、斬チームは全員大丈夫なの？　怪我はないかしら？」

美穂「はい！　私達は何とも…」

アーニヤ「みんな、軽傷、です」

茜「どうします!?　卯月さん達の援護に向かいますか!？」

瑞樹「私達のゲッターの損傷もあるし、卯月ちゃん達を信じましょう」

未央「ま、便りがないのは大丈夫な証拠だつて。こっちは破壊された施設も何とかしないといけないし、手が必要だよ」

美穂「怪我した人の手当てとかも手伝った方がいいよね」

アーニヤ「アー、あつちのリーナも、怪我人ですね…?」

李衣菜「うわっ!痛い!血が出てる!死んじやう!」

奈緒「おいこら!ゲッターに乗ったまま暴れるな!被害が増える!止まれえ!!」

アーニヤ「アー…止めないと、ですね?」

美穂「あはは…」

茜「奈緒さー!んっ!今手伝いますよおー!!」

ゲッター烈火が走っていく。

未央「ふう…。戦闘が終わっても騒がしいんだから」

未央「こっちは終わったよ。あとは頼んだからね、しまむー、みんな…!」

—。

卯月「……はあ……はあ……はあ……」

ヒドラー「ふん…。随分としぶとい奴等だ。だが、人間の体力では私達には及ばん!」

凜「卯月、大丈夫?私ならいつでも代わるよ」

かな子「こっちもポセイドンなら何時でもいけます!」

卯月「凜ちゃん、かな子ちゃん、ありがとう…。でも、まだ…！」グンツ
ゲッタードラゴンを加速させ、量産型ドラゴンに肉薄。

卯月「スピנקッター！」ギャルツ

ヒドラー「フンツ！」

スピנקッターを振るうも、トマホークによつて簡単に打ち払われる。

ヒドラー「お返しだツ！」

卯月「きやあつ！」

体制の崩れたゲッタードラゴンの鳩尾に、量産型ドラゴンのゲッターキックが突き刺さり、ゲッタードラゴンは墜落。

卯月「ううっ…！」

ヒドラー「トドメだあ!!」キユオオ…

ヒドラー「ゲッタービィーーム!!」

凜「今だよ！」

卯月「…っ！ オープンゲエェツト!!」

ヒドラー「ん!？」

ゲッタードラゴンに向かって、真っ直ぐ伸びたゲッタービィーム。

その光跡を伝うように、分離したゲットマシンは上昇し、量産型ドラゴンの背後へと。

かな子「チエーンジ、ポセイドンッ！」

かな子「ええいつ！」

ゲッターポセイドンへ変形し、量産型ドラゴンにのしかかり、そのまま地上へ、轟音と土煙を上げてたたき落とす。

ヒドラー「ぐわあああつ?!…貴様ら…：…最初からこのタイミングを狙って…?」

凜「ドラゴンなら互角、ライガーならスピードで圧倒できてもパワーで勝てない」

凜「なら、ポセイドンの一撃に賭けるだけだけど、鈍足なポセイドンじゃ、飛行できるドラゴンを捕まえるのは一苦労だからね」

かな子「これで捕まえました!覚悟してください!——うおおっ!!」

グワアツ

渾身のポセイドンの拳の一撃が量産型ドラゴンの装甲をひしゃげさせ、打ち砕く。

ヒドラー「ぬう…!!抜かったわ!」

卯月「かな子ちゃん!未央ちゃんとの特訓の成果を!」

かな子「はいっ!いきますよお…!!」

かな子「うわあああ——!!」

量産型ドラゴンを持ち上げ、ゲッターポセイドン回転。

ヒドラー「のわあああああ…!?!」

ヒドラー「ええい…ッ!あと一歩、あと一歩と言うところで…!」

ヒドラー「だがまあいい。量産型ドラゴンの設計データは手に入ったのだからな」

ヒドラー「覚えておくがいい!今度の相手は貴様ら自信だと言う事を!」

ヒドラー「貴様らの誇るゲッタードラゴンの力が、貴様ら自身に牙を剥くのだ!ヌハハハハハハハッ!」

卯月「ヒドラーは、脱出したみたいですね」

かな子「どうしますか?捕まえて、色々お話を聞くとか…」

凜「…いや、今回はいいや。第一目標のエネルギープラントは無事なわけだし。それに、今回は戦いが長引きすぎた」

卯月「今の状態で、百鬼帝国に援軍を呼ばれたら…」

凜「そう言うこと。一刻も早く、少しでも長く、休息を取ろう…!」

——管制塔。

晶葉「…:はい、はい。そうか、分かった。警戒態勢はそのまま維持で頼む。…:では」

晶葉「Gチームは、エネルギープラントを守りきったようです」

早乙女「そうか…:…:ふう…:」

橘「厄介な事になりましたな。いずれ百鬼帝国も、量産型ドラゴンを実戦に投入し

てきます」

橘 「戦いの激化は必至ですぞ」

早乙女 「うむ。我々も手をこまねいている訳にはいかんな。——晶葉くん」

晶葉 「はい？」

早乙女 「君が以前話していたネオゲッターロボの強化計画、実行に移す時が来たようだ」

晶葉 「…喜ばしい事では、ありませんね。ですが、分かりました。部屋にあるデータをまとめておきます」

早乙女 「うむ」

橘 「資材等で不便があつたら言いなさい。私の研究所でも、出来る限りは協力しよう」

晶葉 「有難う御座います。——では」

早乙女 「…：…：儂も急がねばならん、か…：——」

——。

~~~~~ 数日後 早乙女研究所 談話室 ~~~~~

晶葉 『——この問題の答えは……』



瑞樹「晶葉ちゃん、初バラエティにしては出番多いじゃない?」

晶葉「足跡は残したと思ってるからな。しかし…、こうしてテレビに出てる自分を見ると言うのは、何と言うか、こそばゆいな…」

みく「デビューライブは大成功、テレビ出演も出来て、アイドルとしてはもう言う事なしにや!」

晶葉「助手の手腕が優れているんだよ。私が何か出来た訳じゃない」

菜々「でも、バラエティでのトークも、ライブのトークも、みんな晶葉ちゃんがやった事ですから、自信持つてください!」

晶葉「そうか?…そうだよな」

奈緒「ん?そーいや、いつもうるさい李衣菜はどこ行ったんだ?」

凜「あの量産型ドラゴンとの戦いの後、精密検査したら左右の肋骨が1本ずつ折れてたって」

加蓮「だから入院。一週間」

奈緒「…ははっ。それじゃあしばらくは研究所も静かになるか…」

みく「奈緒ちゃん、張り合う相手がいなくて寂しいにや?」

奈緒「な…そ、そんな訳ないだろ!むしろゲッターとロックで鬱陶しいのがいなくて清々するくらいで…」

早乙女「ゲッターチームの諸君、入院中の李衣菜くんを除き、全員揃っているな？」  
卯月「早乙女博士？」

未央「珍しいですね？博士がこんな時間にこんなところに」

早乙女「うむ。実は君らに重要な話がある」

美穂「重要な話、ですか？」

早乙女「先の事件を機に、激化が想定される今後の戦いに備える為、早乙女研究所の機能を新たに設備の整った新研究所に移設する」

瑞樹「新研究所……？」

晶葉「博士、そんな話今まで……」

早乙女「急遽話が進んだ事でな、君にまで回すのが後回しになってしまった。すまんな」

晶葉「あ……いえ……」

早乙女「……研究所の移設に伴い、現在使用している研究所は閉鎖、以後私と、未央くん」

未央「えっ？あ、はい！」

早乙女「私の助手と未央くん。彼女以外の立ち入りを禁止する」

未央「ええ……!?わ、私……？」

凜 「……」

早乙女 「既に決定した事だ。皆思う事はあると思うが、異論は認めん」

一同 「……」

早乙女 「新研究所への移設は、来週から順次行う。私物を持ち込んでいるものは速やかにまとめておくようにな。…では」

つづく

## 第17話『その名は真ゲッターロボ!』

李衣菜「ウウ…ツツヒヨオオオー!! エンジン新しくして、私の可愛い娘ちゃんはまだます上機嫌だね…っと!」

雲1つない快晴の空を、ネオイーグル号が飛行機雲を生んで上昇していく。

奈緒「おいっ! 相変わらずだけど調子乗んたって! 今日はお前の慣熟飛行も兼ねてるけど、1番の目的はネオゲッターを新早乙女研究所に運ぶ事だつての、忘れるなよなあ!!」

李衣菜「分かってるって! 未央が抜けた穴埋めるためにも、早くゲッターに慣れないとね!」

ギョオオオ…ン…ツ

奈緒「…つはあく…。全つ然分かってないって…」

加蓮「ふふっ。結成早々気苦労? 奈緒」

奈緒「あのなあ…。ゲッター壊されて1番困るのはあたしらだろー」

李衣菜「ヒヤッハー!!」

奈緒「……つたく、アイツをパイロットに推薦した奴誰だよ」

加蓮「んー…、消去法じゃない?」

奈緒「畜生…。消去法で貧乏クジかよよよ!!」

~~~~~ 新早乙女研究所 所長室 ~~~~~

晶葉「……だから、それは報告書の通りだと言っているだろう?」

晶葉「何?話が違う?それならこちらと同じ事をそっくりそのまま同じ言葉をお返しするぞ」

晶葉「いいか?今は本人がいなくて、私の言葉は早乙女博士本人の言葉と受け取ってもらわなければ」

晶葉「その為の利権と保証を、博士から預かっている。それを証明して見せろ?なら、博士に直接連絡を取ってみるんだな」

晶葉「……取れるものならば、だがな」 ボソツ

晶葉「ともかく、そちらが今示した意向を撤回しないなら、こちらにだって考えがある」

晶葉「いいか?ゲッター線の研究とゲッターロボの開発技術は今我々が独占している」

晶葉「何れゲッターG開発技術を、国連経由で世界に提供するにしても、そのオリジ

ナルは我々が保有していると言うことに変わりはない」

晶葉「ふむ……。これを言っても分からないか？ゲッターの技術を、世界に向けて売
出せば、買いたいと言う人間ぐらい、すぐに見つかる」

晶葉「分かるな？取引先は、いつでも変えられる」

晶葉「尤もその場合、この国の安全は保証できませんがなあ？」

晶葉「……」

晶葉「そうだ。はじめからそう言っていればいいんだ。全く、無駄な時間を取らせる
な」

ガチャンツ

晶葉「……子供が相手だと思って足元を見おつて……」

コンコン

晶葉「……誰だ？」

凜『晶葉？私』

晶葉「凜か……。開いている」

凜「失礼するよ」ガチャツ

晶葉「外が騒がしかったようだが？」

凜「ああ、ちよつとだけ面白いものがね」

晶葉「面白いもの?」

凜「李衣菜がネオイーグルの新型エンジンをオーバーヒートさせて、機体を空中3回転させて新研究所の敷地内に墜落。迫力満点のアクロバット・ショーだったよ」

晶葉「……。新型エンジンはまだデータが少ない。丁重に扱ってもらいたいものだな」

凜「荒れてるね。さつきも扉の向こうから、物騒なのが聞こえてたけど?」

晶葉「外まで漏れてしまっていたか…、いかなな…」

凜「相手はまた政府の?」

晶葉「ああ。言ったことも、無論ただの脅しだよ。連中だってそこは分かっていると
思うが」

凜「それでも予算の削減って?全く懲りないんだね…」

晶葉「政府としても、軍の再編成だけでなく、地域の復興、インフラ整備…、政治の
仕事には金が掛かる」

凜「けど、百鬼帝国がいる限り、いくら復興を急いだって。インベーターだって出て
きてるんだし」

晶葉「敵を倒せ悪を蹴散らせだけで、求心力の得られない時代だ。戦わない人間に
とっては、悪を倒して得られる平和より、今目先の安全の方が大事なものだ」

凜 「それで復興を銘打って自分の得点稼ぎ……。全く遅いんだね、政治家って」

晶葉 「そうでなければ国民の暮らしを預かって、政など出来はしない。連中の頭の下げる相手は、その辺にいる中間管理職のサラリーマンより多いかもしれない」

凜 「……この戦いの先を見据えているだけ、前向きなことなんだね」

晶葉 「それが例え自身の地盤と地位を維持するだけのものでもな。政治家と言うのは実際に戦っている私達よりも明確に、平和と言う結果を国民に見せなければならぬ。彼らも彼らで苦しんでいるのさ。だからと言って、私達への支援を打ち切らせるつもりは、毛頭ないがな」

凜 「平和は黙ってるだけじゃ得られない、ね。特に今の時代は。息苦しいね、何か……」

晶葉 「戦争と平和は二律背反という事だ。平和を守るために武装した筈が、何時の間にか誰かの平和を奪っている」

凜 「私達みたいに？」

晶葉 「……すまないな」

凜 「こつちこそごめん。別に晶葉が悪いわけじゃないよ」

パイロットヲダスゾー リーナアブジカア!!? へへッ、スイマセン…… コノバカヤロ

ウガア!! ギャーッ!!?

晶葉 「李衣菜が救出されたようだな」

凜 「機体の方も損傷は軽いみたいだし、ギリギリでダメージ・コントロールできたみたいだね」

晶葉 「土壇場と咄嗟の時の判断力は、凄まじい奴だ」

凜 「本人自体、無駄にタフにできてるみたいだしね」

晶葉 「“ロック” だけにか？」

凜 「……」

晶葉 「コホン……それで、凜の方の用事はなんだ？」

凜 「ああ、これ。この間やったパイロット全員のバイタルチェックの結果と、チーム

別の訓練の報告書」

晶葉 「むっ、すまないな。凜にもこんな管理職みたいな事をさせて」

凜 「別にいいよ。こう言うのも、職業体験みたいなものだし。ね、晶葉所長？」

晶葉 「嫌味のもりか？……所長代理だ」

凜 「もう所長みたいなものでしょ？あれから博士から連絡は？」

晶葉 「……昨夜一度だけあったな。研究所移設の、進捗状況の確認のようなものだった

が」

凜 「……早乙女博士はさ、今、何してるんだらうね？誰もいなくなった研究所で、たつ

た一人で」

晶葉「さあな。昨日の電話も、心ここに非ず、という感じだった。きつと一人になって、誰にも邪魔されず、研究に没頭しているんだろう」

凜「目の前にある百鬼帝国の脅威に、宇宙からの敵……。博士も何かを感じてるって事だよね……」

晶葉「そうだな。様々な脅威に備えるためにも、私達は一層、ゲッター線を究明しなければならぬ。……そんなところに来ているんだな」

凜「私達は今まで、ゲッター線に頼って戦ってきたけど、肝心のゲッター線の事は何も分かってない」

晶葉「……ゲッター線とは何か、か」

凜「それ単体で何十倍にも増幅される無尽蔵の夢のエネルギー……。ただそれだけなら、どうして私達みたいな小娘が選ばれたの？」

晶葉「ゲッター線適正……。凜達はそう言われて、ゲッターに乗せられたのだったな」
凜「それなら、ゲッターを量産する意味は何？」

晶葉「確かに、ゲッター線適正の話が事実なら、ゲッター量産化計画と辻褄が合わん」
凜「……ひよつとしたら、ゲッター線適正、はじめからそんなもの無かったのかも

……」

凜 「私達は、私達のプロデューサーや早乙女博士でもない、他の誰かに選ばれたとしたら……!」

晶葉 「…やめよう。憶測で語るのは、好きじゃない」

凜 「…ごめん。熱くなりすぎた」

晶葉 「いいさ。博士の手伝いじゃないが、私達にも何か分かる事があるかもしれない」

晶葉 「ゲッター線とは何か、それを私達の方でも調べてみようじゃないか」

凜 「それじゃあ、私はそろそろ行くよ」

晶葉 「引き留めて悪かったな。これからの時間は…レッスンか?」

凜 「ううん。午後からだけでも、授業受けてこようと思つて」

晶葉 「真面目だな。私も、人の事を言つてはいられんか」

凜 「晶葉もたまには学校の友達に顔出してあげなよ。アイドル活動の方も、忙しくなつてると思うけど」

晶葉 「心に留めておくよ。どこに百鬼帝国が潜んでるかもしれない。道中は気を付けてな」

凜 「晶葉こそ。今の晶葉の敵は、百鬼帝国だけじゃないんでしょ?」

晶葉 「心配無用だ。私には、コイツがいる」

ウサツ ウサツ

凜 「…ウサちゃんロボ…。使えるの？」

晶葉 「コイツは護身用に開発した特別仕様さ。どんな仕様かは、お披露目する時のお楽しみだな」

凜 「そんな機会ない方がいいけど…。それじゃ、またね」

晶葉 「ああ、いつてらっしやい」

凜 「…ん。いつてきます」

ガチャツ バタン…

晶葉 「……ふう」

晶葉 「……」

—凜 『……ひよつとしたら、ゲッター線適正、はじめからそんなもの無かった？』

—凜 『……プロデューサーや早乙女博士でもない、他の誰かに選ばれたとしたら……』

晶葉 (そうなのか…？もしそうだとしたら、私達を選んだ誰かとは……。博士……)

晶葉 (ん？…これは、卯月のバイタルチェックのレポートか…)

晶葉 「？ この数値は……」

~~~~~ 学校 ~~~~~

凜 「——…早乙女博士…。日本が誇る宇宙開発研究者で、ゲッター線を発見、研究する第一人者か……」

凜 「……。ネットに書いてあるような情報はこんなのか」

凜 「ゲッター線にせよ、早乙女博士の事にせよ、一般常識程度の事以外は書かれていないか……」

凜 「一番近くにいた私達以上の情報なんて、はじめから期待するだけ無駄だったかも」

ツンツン

学友 「凜……凜……」 コゴエ

凜 「……ん？何？」

「ン、ン……ッ！」

凜 「……先生」

先生 「久々に登校してきたと思えば、私の授業中に携帯とはいいい度胸だな？」

凜 「……スマホですよ」

先生 「機種の話をしているんじゃない！」 ガツ

先生 「これは没収しておく。放課後職員室に取りに来なさい！」

凜 「……」

先生 「分かったな…!？」

凜 「…はい」

―― 放課後。

学友 「いやあ、災難だったね、凜？」

凜 「それでもないよ。悪いのは、こつちだし」

学友 「お、発言は優等生。で、スマホ返してもらえた？」

凜 「うん。2、3小言付きで」

学友 「うわあ…、くわばらくわばら」

学友2 「気を付けなよ？特に数学の佐山先生、凜に目付けてるから」

凜 「みたいだね。今度から気を付けるよ」

学友 「にしても珍しいね？凜が授業中にスマホ見てるなんて」

凜 「ちよつと気になる事があつて。そういう時つて、悪いと思つてもやつちやわな  
い？」

学友 「あー分かる分かる。どーしても気になる時つて、あるんだよねー」

学友2 「ふうん？ね、そんな事より帰りどつか寄つてかない？」

凜 「うーん…。明日は朝から仕事だし、親にも顔見せたいから、あんまり遅くまで

は、付き合えないけど」

学友2 「お、いいよいいよ。凜がいるってだけで、マンネリ化した女子会も盛り上がるから」

学友 「それちよつとあたしに酷くない？」

学友2 「まあまあ。それじゃあ、レッツゴー!だよ!」

凜 「…ふふっ」

——そして夜。凜の実家。

凜 「——うん、うん。もう分かったから!お弁当はいらないって!」

凜 「やんなきゃいけない課題残ってるから!それじゃ!」

バタンツ

凜 「…ふう、全く。帰ってくる度にお弁当用意しようとするんだから…」

凜 「明日は仕事終わったらそのまま研究所だから、家に戻って弁当箱置いてる時間なんてないのに…」

凜 (それで研究所の方に弁当箱溜まっちゃって…、アレ研究所引越す時一緒に持っていてちやっとなー…)

凜 (帰る時に持ってこようって思ってるのに、いつも忘れちゃうから、卯月達にも迷

惑掛けて——…)

——卯月『研究所からお仕事に行く時に、これがあると食堂からおかず詰めてお弁当代わりにできて便利なんですよー♪』

——かな子『そういう訳なので、またお弁当箱、借りちやいますねっ♪』

凜「……そうでもないかも」

ポフンツ

ベッドに横たわる。

凜「……」

凜（何だか、今日は何時よりも疲れたな……。久々に友達に会って、騒いで……）

凜（1年くらい前まで、アレが当たり前の日常だったはずなんだけど……）

凜「……ヤバ……眠っ……。課題……やん……な、きや……」

凜「……」 Z z z

――

凜『……（？）は……』

凜『――夢？』



凜 『でも、何も無い…。一体ここは…。』

『——ゲッターから離れた感想は、どうだった?』

凜 『誰ツ!?』

『誰でもいいだろう?…フツ、物足りないって顔じゃないな。まだ飢えてはいないか』

凜 『名前を名乗らないんだったら、顔ぐらい見せたら!?』

『ゲッターの事を知りたいんだら?』

凜 『!?』

『今のお前さんには、何一つ知る事は出来んだらうがな』

凜 『何で!?何を根拠にそんな事を…!』

『お前さんの手は、もうどっちも一杯だからさ』

凜 『…手…?』

『…家族、学校、友人。そして、アイドル。お前は色んなモノを持ち過ぎているのさ』

『ゲッターに触れるには、お前が今持っている全てを捨てるだけの覚悟がいる』

凜 『全てを、捨てる…!?』

『お前さんはそつちの世界の“俺”だからな。いずれ分かるさ。島村卯月の事も』

凜 『卯月…?卯月がどうしたの!?』

『いいか。全てを知りたければ島村卯月を守れ。そして彼女と共に戦え!そうすれば自

ずと答えに辿り着く』

凜 『ちよつと待つて! どうしてそこに卯月がいるの!?! 卯月がゲッターに選ばれたのは、偶然じゃないの?』

『…そう、島村卯月が選ばれたのは、必然だ』

凜 『必…然…!』

『もう彼女はゲッターから逃れられない』

凜 『!?! 逃れられないって…、どういう事…!?!』

『全てはこれからだ、渋谷凜。島村卯月を守れ。それがお前がゲッターに乗る理由だ』

凜 『待つて! まだ聞きたい事は…——うっ…何…?…意識が…——』

凜 「——…ッ!」 ガバッ

凜 「はあ…はあ…はあ…。今のは…」

ハナコ 「…クウン…」

凜 「…ハナコ。入ってきてたの?」

ハナコ 「ハッ…ハッ…」

ギユウ

抱えあげると、こちらを心配するかのようじやれついてくる。

凜 「ふふつ、くすぐりたいよ。……」

凜 (全てを捨てる覚悟、か……)

ハナコ 「……?」

凜 (あの声……、前に一度聞いた事がある)

凜 (……そう、ゲッターのオーバーホールで訪れた工場の社長……。確か、名前は……)

凜 「神……隼人……」

~~~~~ 翌日 某スタジオ ~~~~~

凜 「……おはよう……」

奈緒 「おう、おはよう凜……って、どうした!? ひどい顔だぞ?」

凜 「ちよつと寝不足で……」

凜 (結局アレから一睡も出来なかった……)

加蓮 「声も酷いし……。そんなんで大丈夫?」

凜 「大丈夫……。仕事になればスイッチ入るから……」

奈緒 「ホントかあ……?」

加蓮 「ま、凜なら大丈夫でしょ。要領いいし、慣れてるし」

奈緒 「……それもそうだな」

奈緒「けど、本気で辛かったら言えよ？今凛に倒れられたら、あたしただけじゃなく、みんな困るんだからな」

凛「うん、ありがとう」

加蓮「お、奈緒、お姉ちゃんみたい」

奈緒「少なくとも2人よりは年上だよ！」

加蓮「そうだっけ？」

凛「たまに忘れるよね」

奈緒「ああもうとつとと行くぞ！3人揃って遅刻とか、恥ずかしいだろ」

加蓮「分かっているって。待つてよ、奈緒ー？」

凛「……」

卯月「…凛ちゃん？」

凛「…あ…、卯月」

卯月「偶然ですね！…何だか、目の下に、スゴい隈が出来てますけど…？」

凛「…奈緒達にも言われた。寝不足なだけだから、心配しないで」

卯月「そうですか？なら、いいんですけど…」

卯月「凛ちゃんに、奈緒ちゃんもここにいてるって事は、トライアドプリムスのみんな

で、撮影のお仕事ですか？」

凜 「うん。テレビ雑誌の表紙をね。そのあと、ちょっとしたインタビューもだけど。卯月達も?」

卯月 「はい! 私は美穂ちゃん響子ちゃん達と一緒に、週刊紙のグラビアです!」

凜 「そっか、頑張ってる」

卯月 「はいっ! お互いに頑張りましたよう!」

凜 「うん、それじゃ……」

卯月 「撮影終わる時間が近かったら、一緒に帰りましょうね」

凜 「……卯月」

卯月 「……はい?」

凜 「……いや、やっぱりなんでもない」

卯月 「……?」

スタスタ……

——『もう彼女はゲッターから逃れられない』

凜 (私は、何で……。卯月……)

~~~~~ 数時間後。ビルの外 ~~~~~

奈緒 「う~~~~んっ! 今日の仕事はこれで終わり」

響子 「本当におんなじ時間に終われるなんて、奇遇ですね」

加蓮「ふふっ、実はちよつと待ったんだけどね〜」

響子「そうなんですか？」

加蓮「そ。凜がどうしてもって言うから」

凜「仕事前に卯月にあつた時、一緒に帰ろうって話してたし、私が仕事終わって様子見に行つたら、もう少して終わりそうだったから」

美穂「な、何だか悪いです…」

奈緒「気にすんなよ！どうせあたしらはこれからフリーなんだし、ちよつと待つくらい大した事ないって」

加蓮「折角みんな集まつてるんだし、これからどつか遊びにいかない？」

卯月「良いですね〜！何処に行きましょうか？」

美穂「あ、私は、この後斬チームで夜間警戒班でお仕事が入ってるから、研究所に行かなきゃ」

加蓮「え〜、残念」

美穂「ゴメンね？埋め合わせは、絶対するからっ」

凜「あんまり気にしなくていいよ。警戒任務、頑張つて」

美穂「うん。それじゃあ」

奈緒「おう、またな〜」

響子「あの…、実は私も…」

卯月「響子ちゃん？何か予定があるんですか？」

響子「はい。予定って言うほど大袈裟なものじゃないですけど、お買い物と、明日の準備がちよつと…」

卯月「分かりました。それじゃ、また明日、ですな」

響子「はい。お疲れ様です！」

奈緒「…結局いつものメンバーが残ったな」

加蓮「アタシはこの面子でもいいけど、他に誰か誘ってみる？」

凜「つて言っても、みんな仕事だったりで、結局来れる人もいないと思うけど」

卯月「あ、それならさつき連絡来たんですけど、未央ちゃんも近くで仕事あったみたいですよ？連絡とってみますか？」

奈緒「結局いつものメンバーかあ〜」

——カラオケボックス。

未央「——…ずっと強く、そう強く、あの場所へ♪走り出そう〜！」

卯月「未央ちゃん上手です〜！」 パチパチ

凜「…で、何で私の歌？」

未央「いいじゃないしぶりん。カラオケ来てまで別に自分の持ち歌つてもないじゃん

「？」

凜「それはそうだけどさ」

未央「つて、次誰もいれてないの？」

加蓮「ちよつと休憩〜。デュエットとかで結構歌つたし」

奈緒「こうしてゆつくりするのも久し振りだしな。ここ数日は研究所の移設で忙しかつたし」

未央「そうだね〜。私も何だか人の温もりが懐かしいよ」

奈緒「今は前の研究所で早乙女博士と2人だもんな」

未央「そーそー。早乙女博士に助手として引き抜かれちゃったからさ〜」

加蓮「それにしても、何で未央なんだろうね？早乙女博士の仕事手伝つてる人つて結構いるんですよ？それこそ、晶葉だつていいわけじゃん？」

未央「まあアキつちには新研究所の方を任せたいつて、最初から博士は言つてたし、ホントの所員の人も、アキつちのフォローをしてほしいつてことですよ」

加蓮「ふうん、そんなもんなのかな…？」

未央「そうそう。でもさ、誰もいない食堂で1人で食べるご飯つてね、寂しいよ…？ただっ広い食堂でさ。支度も何も全部自分でやるの」

奈緒「それは…、寂しいな。確かに」



卯月「でも、何だかんだ言っても未央ちゃん、こっちの研究所にもたまに顔出してますよね?」

未央「うん。まあ、基本は早乙女博士から連絡来たら顔出す感じだし」

凜「二々移動するもの大変なんだから、そっちですつと待機してればいいのに」

未央「え、っ?…:ヤだよ」

奈緒「何で?」

未央「えつ、それは…:その、何て言うかな」

加蓮「煮え切らないな。ハッキリ言っちゃいなよ」

未央「うゝ…:ん…。変だと思わない?」

凜「それは、言ってみないと」

未央「うゝ…:ん…。実は、さ…:…」

卯月「はい…:」

未央「幽霊、出るんだよね。最近。研究所に」

加蓮「はい?」

奈緒「未央、早乙女博士と2人つきりがそんなにイヤなのか?」

未央「違うって!本当なんだって!私見たもん!この目でハッキリと!」

未央「薄ぼんやりした変なのが廊下の角曲がつていくトコ!」

奈緒「薄ぼんやりって…、結局分かんないんじゃないか？」

卯月「見間違いかじゃ、ないんですか？」

未央「しまむーまで…。私はホントに見たの！信じてよ！」

奈緒「黙れ！お前は1週間の謹慎だ！」

加蓮「何それ？」

凜「…ともかく、そんなにイヤなら、他の人に代わってもらえばいいんじゃない？」

未央「だから、そんなじゃないって…。それに、博士の仕事の手伝いって、新型ゲッターのテストパイロットみたいなもんだから、他に代わりって言っても誰もいないし…」

卯月「えっ？新型ゲッター、ですか？」

未央「うん。あれ？私のはつきりしぶりんかアキっち辺りが知ってると思っただけ

ど…？」

奈緒「何か聞いてるか？凜」

凜「いや、私は何も…」

未央「へえ…。じゃあ博士はみんなに内緒にしてるんだ」

凜「…具体的には、どんな事してるの？」

未央「どんな事って言われても…、コックピットに入って、起動試験とか、簡単な挙

動とか。…変わった事はしてないと思うけど?」

凜「……」

奈緒「けど、新しいゲッター造るだけなら、別に研究所分けなくてもよくないか?」

加蓮「研究所が動いてると、政府の目があったりして煩わしいんでしょ」

奈緒「そのゲッターの開発に専念したいってことか?」

未央「私が助手に選ばれたって言うのも、そういうのがあるとと思うよ? ほら私、腕に後遺症もあるから、健康なパイロットを抜くより、使いやすくないかな?」

卯月「かもしれませんね。百鬼帝国の攻撃も激しくなってきましたし」

奈緒「そうだな。そういう意味じゃ、未央はテストパイロットに適任なのか」

未央「その通り! だから研究所がちよつと不気味でも、我慢して博士に協力しなきゃ  
!」

凜「……」

卯月「凜ちゃん、どうかしたんですか?」

凜「……。いや、何でもないよ。ごめん。次、私が曲いれてもいいかな?」

~~~~~ 旧早乙女研究所付近 ~~~~~

アーニャ「チェンジゲッター紫電ッ!」

合体を終えて着地したゲッター紫電と、早乙女研究所に襲来した百鬼メカが対峙する。

輪魔鬼「チツ…。随分反応が早エじゃねえか…」

美穂「哨戒中に、たまたま百鬼帝国に遭遇するなんて…」

茜「それにしても、どうして百鬼帝国は前の研究所を狙ってきたのでしょうか？」

美穂「単純に研究所が変わった事を知らないんじゃない？」

アーニヤ「研究所の機能を移しても、まだここには、サオトメ博士が残っています。やられるわけにはいきませんッ！」

輪魔鬼「死ねェ!!」

アーニヤ「!」

頭部の代わりのように突き出たメカ輪魔鬼のドリルを躲して、ゲッター紫電のドリルを突き立てる。

アーニヤ「千極針！」

ガキッ

輪魔鬼「クッ！これならどうだ！」

メカ輪魔鬼がドリルの先端から怪光線を放つ。

アーニヤ「——ゲッター影分身！」

輪魔鬼「コイツあ…分身の幻術かア!?本物は一体どいつだつてんだ!」

ヒュ…ンツ

輪魔鬼「後ろか…ツ!」

アーニヤ「——Ураааа!!」

グギャンツ

振り返り様のメカ輪魔鬼の怪光線を掻い潜り、懐に入ったゲッター紫電の千極針が、メカ輪魔鬼の左腕を粉碎する。

輪魔鬼「チィ…!俺一人ではゲッター相手には不利か…」

輪魔鬼「ならば!」

メカ輪魔鬼は自身のドリルを地面へと突き立て潜行。

茜「なっ!逃げる気ですか!」

アーニヤ「Не избежать…逃がしは、しません…!」

ゲッター紫電も地中に潜行し、メカ輪魔鬼を追撃。

茜「土の中で相手の位置が分かるんですか!」

アーニヤ「地中用のソナーがあります!位置は、捉えています!」

美穂「あ、アーニヤちゃん…!」

アーニヤ「как ие?どうか、しましたか?」

美穂「ゲッター紫電のエネルギー量が、急上昇してるの！」

アーニヤ「えっ!？」

美穂「もうすぐ臨界だよ！何が原因か分からないけど、これ以上の追跡は……！」

アーニヤ「……仕方ありませんね……」

追撃の手を止め、ゲッターを静止させる。

美穂「あ……、エネルギーの上昇が、止まった……？」

茜「百鬼帝国には逃げられてしまいましたか……！仕方ありません！一度、新研究所の戻りましょう！」

アーニヤ「……。Da……そうですね……」

くくく 夜 早乙女研究所 所長室 くくく

晶葉「新型ゲッター……。未央がそんな事を……」

凜「ゲッター線研究に疎通してる晶葉じゃなくて、未央が助手に抜擢されたのも分かるよ」

晶葉「しかし、私が博士から聞かされていたゲッター開発計画は、ゲッターロボGで打ち止めになっている筈だが……」

凜「開発計画の予定にないゲッターを作ってる？」

晶葉「だとしたら私達にも、政府連中にも機密にして、一体どんなゲッターを開発し

ているというんだ?」

凜 「それは私が晶葉に聞きたい事だよ」

晶葉 「…ゲッターGを超えるゲッター…。それがどういうものかは想像できないが、博士が直接携わる以上、それが妥当な答えだろうな」

凜 「早乙女博士は、一体何を考えてそんなものを…」

コンコン

晶葉 「? 誰だ?」

アーニヤ 『アーニヤ、です』

晶葉 「ああ、アーニヤか。開いているぞ」

ガチャツ

アーニヤ 「失礼、します…。戦闘終了の報告書、持ってきました。…?」

アーニヤ 「リンもいたんですね? 2人で話し合い、ですか?」

晶葉 「そんなところだ。どれ、報告書を預かろう」

アーニヤ 「はい」

凜 「百鬼帝国に逃げられたって聞いたけど?」

アーニヤ 「Да:я сожалею:すいません…。不測の事態が起きてしまつて…」

晶葉 「コレがそうか…」

凜 「…ゲッター紫電のエネルギー量が急上昇してる？」

晶葉 「ある一定の時点で急上昇してるな。臨界点の危険域まで達している」

凜 「それで追撃を断念するしかなかったって訳だね」

晶葉 「炉心暴走を起こさせるわけにもいかないしな」

凜 「まして、早乙女研究所の近くで、ね」

アーニヤ 「спасибо…ありがとう、ごさいます…」

凜 「そう気を落とさないでいいよ。斬チーム、3人全員に何もなかった事が、一番な
んだから」

晶葉 「しかし、エネルギー上昇の原因はなんだ？」

アーニヤ 「Даа…研究所の地下に、潜行した時、でした…ね」

晶葉 「何…？そうなると、原因は…」

凜 「早乙女研究所の地下だね」

晶葉 「丁度、凜が言っていた新型ゲッターと話が繋がるかもしれないぞ？」

アーニヤ 「？ 何の話、ですか？」

晶葉 「こちらの話だ。アーニヤ、ご苦労だったな。今日のところはゆっくり休んでく
れ」

アーニャ「…? 分かりました…。お休みなさい」

ガチャツ バタン…

晶葉「…ふう。未央の言う謎の新型ゲッターと、ゲッター紫電のエネルギー増加か…」

凜 「早乙女博士が、研究所の地下でゲッターにエネルギーを注入してるとすれば、話は合うね」

晶葉 「しかし何故博士は人払いをして、ゲッターを開発する必要がある?」

凜 「全ては研究所の地下、か…。研究所の地下って、あんまり馴染みないんだけど、何かあるか晶葉は知ってる?」

晶葉 「確か…。博士が政府の煩わしい小言から解放される為の地下研究室と、ゲッター線研究で出た廃棄物の処分場があると聞いたが…」

凜 「聞いた…。? 行ったことはないの?」

晶葉 「ない。と言うより、研究所では博士以外の誰も、地下には行った事はないんだ」

晶葉 「完全な未知の領域。ゲッター線の謎があるとすれば、相応しい場所ではあるな」
凜 「博士が一人で研究に没頭できる場所…。それにゲッター線研究の廃棄場か…」

晶葉 「ゲッターが生まれ、そして死んでいく場所。差し詰めゲッターの冥府…: いったところか」

凜 「珍しいね。晶葉がそんな例え方するなんて」

晶葉 「ふふつ、これを見ればそんな例えも出てくる」

凜 「これは、卯月のバイタルチェックの…、コレが？」

晶葉 「よく見てみる。体力、肺活量、筋力。身体能力が軒並み茜並みだぞ」

凜 「……確かに。卯月の見た目全然変わらないから、分からなかった」

晶葉 「そもそも茜の時点で、あんな華奢な体である身体能力は可笑しいんだがな。しかし卯月の身体能力の上昇はもつと妙だ」

晶葉 「卯月が戻ってきてから一月毎にバイタルを取ってはいるが、身体能力が向上し始めたのは、丁度ゲッターGに乗り換えた辺りからだ」

凜 「晶葉は、ゲッターと関係があると思ってるの？」

晶葉 「何も根拠がないわけではない。私自身、気になって研究所から持ち出した博士の研究資料を洗い直してたんだが…」

晶葉 「これを見てくれ」

凜 「随分古い資料だね…。博士がゲッター線を見つけた辺りの…？」

凜 「『ゲッター線進化論』…？人類は地球へのゲッター線の大量照射が原因で誕生したって、書いてあるけど？」

晶葉 「恐竜帝国は、ゲッター線の大量照射で地上から地下に追いやられたと聞く」

晶葉 「そのあとに進化が進んで類人猿が誕生したとすれば、話を通ずる部分がある」
 凜 「でも、話が飛躍しすぎなんじゃない？この資料自体、学会で相手にされなかったみたいだし」

晶葉 「そうだな。だが重要なのは進化の部分だ」

凜 「卯月の身体能力の上昇……。ゲッター線で進化したって？見た目は変わらないけど」

晶葉 「見た目の明確な変化が、進化の証ではないさ」

凜 「……。そもそもゲッター線は、ごく少量で膨大なエネルギーを生み出す媒体だったんでしょ？」

凜 「それがどうして生物の進化に関わってくるの？」

晶葉 「確かに、そこに繋がりはない。だが、何故恐竜帝国はゲッター線に選ばれなかったのか、ゲッターは何故、人類を選ぶのか」

凜 「まるで、ゲッターが生きて意思をもってるみたいな言い方だね」

晶葉 「だから言ったんだ。早乙女研究所の地下は、ゲッターの冥府だと」

凜 「……どちらにせよ、全てを知っているのは、早乙女博士だけか……」

晶葉 「早乙女博士だって全容を把握していないかもしれない」

晶葉 「ゲッター線……。これはひよつとすると、人類の手には負えないものなのかも知

れないな」

凜 「……。だとしても、私達はその力で、戦っていかなくちゃいけない」 スクツ

晶葉 「何処へ行くんだ？」

凜 「分からない事は分かる人に聞く。授業の基本だよ」

晶葉 「ふむ……？しかし今研究所は閉鎖中。警備も厳しくなっている。部外者が立ち入るのは厳しいぞ？」

凜 「大丈夫だよ。私の協力者にお願ひするから」

くくく 旧早乙女研究所 敷地内 くくく

未央 「——…お、来た来た。やつほくく！しーぶりくん！」

凜 「未央。ごめん、待たせた？」

未央 「んくく、それなりに。でも突然だね。電話じゃダメだったの？」

凜 「うん。電話越しだと、聞き出せないかもしれないし、そもそも繋がるかどうかも分からないから」

未央 「ふうん。ま、とにかくこつちだよ。着いてきて」

凜 「……………」

未央 「うん。地下への入り口は電子ロックで、解除キーは博士しか知らないからさ。通気孔からだったら、地下まで繋がってると思うんだけど」

凜 「ここから入って、下を目指せってことね」

未央 「そゆこと。だけど…」

ガシャンッ

凜 「…ッ!?ゴホッ ゴホッ…!」

未央 「アニメやドラマと違って、結構埃とか溜まってるんだよね…。蜘蛛の巣も張ってるし…。ホントに行くの?」

凜 「ゴホッ ゲホッ…。…ここまで来て、引き下がれないよ。それじゃ」 ゴソゴソ

…

未央 「あ、しぶりん!」

未央 「行っちゃった…。…。」

通気孔内から侵入し、真下に落ちること数回。衣服を雑巾代わりに、通気孔に着いた埃をキレイに拭き取り、頭をはじめ、至るところに蜘蛛の巣を絡み付かせる。

そうして、小1時間ほどの時間を掛けて、ようやく辿り着いた地下らしきフロアに通じるダクトの金具を銃で撃ち抜いて破壊し、廊下へと出た。

凜 「…こんな事なら、ジャージ着てくればよかったかな…」 ゴホッ

凜 (今まで見たこと無い通路…。だいぶ下に来た筈だし、ここが地下で間違いないと思うけど…)

凜 「博士は一体何処に…」

『……………』

凜 「誰!？」

P 『……………』

凜 「プロデューサー!？」

P 『……………』 スウ…

凜 「あ、待って！」 ダツ

凜 「……………いない?…そもそも私達のプロデューサーは…」

凜 「だとしたら、あれは…。前に未央が言ってた…」

凜 「……………」

凜 「プロデューサーがこつちに消えたって事は、こつちに行けって事だよな?それ

なら…」

コツコツ…

くくく 研究所地下 廃棄場 くくく

早乙女 「……………」

凜 「見つけた…!早乙女博士!」

早乙女 「凜くんか…。そろそろ来る頃だと思っておったよ」

凜 「…? 私が来るって、分かってたの?」

早乙女 「ふふ…。そんな気がしただけじゃ。最近、妙に勘が冴えてな」

凜 「この人が本当に早乙女博士…? 頬がやつれて…、頭も全部白髪頭で…」

早乙女 「儂の体を心配しておるのか? それなら、心配はいらんよ」

凜 「!?」

早乙女 「勘が冴えとると言ったじやろう。今なら凜くんの考えている事が手に取るように分かるようじゃ」

凜 「……」

早乙女 「体調も、これまでに考えられないくらい、すごぶる調子がいい」

凜 「……」

早乙女 「自分の体が、自分のものであって自分じゃない」

早乙女 「体が軽い。体だけでなく、魂まで若返った気分じゃ」

早乙女 「これもゲッター線のお陰か…」

凜 「ゲッター線の? 博士一体何を…」

早乙女 「何しろ、この地下一帯のゲッター線濃度は、通常空間の15倍ある」

凜 「!? そんな…!」

早乙女 「儂の昔の研究資料を読んだんじやろう?」

凜 「…読んだよ。あの荒唐無稽で飛躍した科学者どころじゃないイカれた妄想の事？」

早乙女 「手厳しいな。だが、儂とて何の根拠もなくあの論文を書いたわけではない」
凜 「根拠…?」

早乙女 「分かる」のだよ。ゲッターを通して、自分が何故今ここにいるのか、人類と言ふ種が、何をもって今もこうしてこの姿を保っているのかを！」

凜 「早乙女博士…アンタは、何を考えているの!？」

早乙女 「ふふ、凜くん…。君も知りたいんじゃないやろう?ゲッター線の素晴らしさを！」

凜 「ゲッター線の素晴らしさ…?そんなものを知るために、こんな頭がどうにかならいような場所で、たった一人で研究してれば、幻聴だって誇大妄想だってするようになるよ」

早乙女 「頭がどうにかなる、か…。確かに、並みの神経の人間ならばそうかもしれないな」

凜 「ゲッター線研究の廃棄場って聞いてたけど、まさかゲッターの墓場だったなんてね」

早乙女 「そうじゃ。ゲッターの誕生には、莫大な時間と、多くの犠牲が払われてきた」
凜 「一体どのくらいの人を犠牲にして来たの?私達もその数の中って訳?」

早乙女「そうなるか、ならんかはお前達次第じゃろう。…卯月くんを除いてな」

凜（また卯月…!）

凜 「どうしてそこで卯月が出るの？卯月が、ゲッターにとつて卯月はなんだつて言うの!？」

早乙女「ふふ。気付かぬのも無理はない」

早乙女「現に、彼女はゲッターに出会う前までは、何処にでもいる普通の女の子だったのじゃからな」

凜 「そうだよ？卯月は、今も昔も変わらない、ただアイドルに憧れて、みんなに笑顔でいてほしいって願ってるだけの、普通の女の子だよ！」

早乙女「彼女は特別だよ」

凜 「ツ…!」

早乙女「凜くんも知っているじゃろう。卯月くんが乗っただけで、ゲッターの能力は著しく上昇する」

早乙女「彼女には、ゲッター線を増加させる能力ちからがある」

凜 「そんなの…!それがどうしたつて言うの!？」

早乙女「卯月くんの力が、この先必要になるという事じゃよ」

早乙女「いや、卯月くんの力だけではない。ゲッターも進化しなくてはならん！」

凜 「ゲッターも進化…?」

早乙女 「卯月くんの力はゲッターを得て、更に進化を続けている。このまま行けばいずればゲッターGですら、その力を抑えきれなくなるだろう。かつての旧ゲッターロボのように」

凜 「…恐竜帝国との決戦の時…。卯月が1人で乗ったゲッター1がエネルギーを暴発させたの…、原因は卯月自身だったって言うの?」

早乙女 「器が小さすぎるんじや。今のままでは、卯月くんを中心に増幅されたゲッター線は溢れてしまう」

ゴゴゴ…

凜 「何…? 地鳴り…?」

早乙女 「ふふふ…。彼も求めているのじゃよ…。自身に相応しい、能力を持った御子を!」

凜 (廃棄場の奥…、何かある…。あれは…)

凜 「私達の知らない、ゲッターロボ!」

早乙女 「かつて、刀を鍛える鍛冶師は、幾つもの刀を打ったあと、真打ちとなる1本を鍛え上げたという」

早乙女 「とすれば、旧ゲッターロボと、ゲッターロボGを経て作り上げられたコレは、

まさしくゲッターロボの真打ち、真ゲッターロボと言ったところじやろう」

凜 「真…ゲッターロボ!」

ペア…ッ

凜 「今度は…、廃棄されたゲッター達が…光って…!」

早乙女 「この空間は高濃度のゲッター線に満ちていると言ったじやろう?それに、このゲッター達の残留ゲッター線が反応してこうなる」

凜 (コレが…。この輝きが、ゲッター線…!なんて…!)

早乙女 「美しいじやろう?」

凜 「…早乙女博士!アンタはここで、一体何をする気なの!?卯月に何をさせるつもり!?」

早乙女 「……」

凜 「早乙女博士!!」

早乙女 「——敵が来る」

凜 「!」

未央『早乙女博士!そこに、しぶりんもいるの!?!とにかく、レーダーに反応があつて、インベーターが降りてくる!真っ直ぐここに!』

凜 「インベーターが…どうして…?」

早乙女「気付いておるんじや。自分達の真の敵が、ここにいるという事をな」

凜「ゲッターが、真の敵…!？」

早乙女「出撃じや。じきにゲッターGがここに来る」

早乙女「今奴等に真ゲッターがやられる事があれば、人類の進化は未来永劫闇に葬られる！」

凜「人類の進化…?」

早乙女「そんな事があつてはならん！だから行くのじや！凜くん、卯月くんと共に！」

凜「……………」

未央『しぶりん、聞いている？今新研究所の方に連絡したら、しまむー達が来るって！だから早く上がってきて！』

凜「…分かった。だけど、博士にはまだ聞きたい事が山程あるから。その時は、全部話してもらおうよ」

早乙女「必ず、全てが分かる時が来る。儂の口から、真実を聞かずともな」

凜「ッ！」 ダッ

タッタッタ…

早乙女「……時は近い、か」

くくく 旧早乙女研究所 近域 くくく

かな子「早乙女研究所が見えてきました!」

卯月「インベーターが、もう研究所に向かつてますね……!」

かな子「前の百鬼帝国の時もそうでしたけど、どうして皆さん、こっちの研究所を狙うんでしょう? 何だか、偶然じゃないような気がするんですけど……」

卯月「分からない事は考えても仕方ありません! 無人のライガー号を、自動操縦で研究所の正面に着けさせます! 凜ちゃんが乗り込むまで、ゲットマシンで時間を稼ぎましょう!」

かな子「……了解です! ちょっと怖いけど……」

卯月「研究所にいる博士にも、未央ちゃんにも手は出させません!」

――。

凜「はっ……はっ……はっ……!」

未央「しぶりーん! 博士とは話せた?」

凜「二応はね」

未央「それで、聞きたい事は聞けた?」

凜「うん……。半分半分つてトコかな?」

未央「何それ?」

凜「今は何も分からないよ。知ろうとしたけど、向こうはもつと奥が深いみたい

だった。今はそれしか言えない」

未央「……そっか。それじゃ、頑張つて！今の私には、応援する事くらいしか出来ないけど」

凜「心強いよ。…それじゃ！」

未央「うん！」

凜「——ライガー号、発進！」

ゴォッ

かな子「いってくださあい！ミサイルッ！」　ボシユツ

インベーダー《キシヤアアアアア！！》

かな子「ひいっ！やっぱりダメですよ！ゲットマシンのミサイルじゃ、当たった瞬間再生してます！」

卯月「踏ん張つてください！もう少し……！」

凜「お待たせ、卯月、かな子！」

卯月「凜ちゃん！」

凜「現状、奴等を倒すには、ゲッター線を過剰に吸収させるしかない」

卯月「つまり、ゲッタービームを撃てるゲッタードラゴンの出番ですね！」

凜「そういう事。かな子、行くよ！」

卯月「はあ——！」

スバアツ

卯月「ツ……！ゲッターレーザーキャノン！」

正面に立つたインベーターを縦一閃に切り開き、そこに、零距离からのレーザーキャノンを連射して叩き付ける。

ドワツ ドワツ

インベーター《ギヤアア……》

かな子「ゲッターレーザーキャノン、威力が上がってませんか？」

卯月「晶葉ちゃん強化してくれたんですね？ありがとうございます！」

凜「……って、卯月は言ってるけど？」

晶葉『まさか。研究所の移設と、所長代理の仕事に精一杯で、そんな余裕はない』

かな子「え？なら、どうして……」

凜（……）ピッ ピッ

凜「……。晶葉、このデータを、そっちでも記録しておいて」

晶葉『これは……、各ゲットマシンのゲッターエネルギーの出力値……だが、実数値か？』

凜「リアルタイムで計測してる。間違いはないと思うよ」

晶葉『そうか……。だが……、ううむ……』

凜 (卯月は、ゲッター線を増幅させる。その力すらも進化してる…)

凜 (増大した卯月の力は、いつかゲッターGを越えて、真ゲッターに…。そのあとは?)

凜 「ゲッター線は進化を促すエネルギー…。なら、その進化の果てって…」

卯月 「ゲッターアア…! ビイイ…ムツ!!」

つつく

第18話 『彼女達の刃（前編）』

~~~~~ 百鬼帝国 道場 ~~~~~

鉄甲鬼「……………」

牛劍鬼「……………」

鉄甲鬼「ッ！」

牛劍鬼「！」

カッ——

鉄甲鬼「せいいいッ!!」

牛劍鬼「キエエイツ！」

ザンッ

——。

鉄甲鬼「——ぐっ……！」 ドサッ

牛劍鬼「ふふふ……。まだまだ青いの。鉄甲鬼。気合いばかりが先行して、精細さが欠けておるわ」

鉄甲鬼「牛劍鬼様も、相も変わらぬ劍の冴え。空の英雄と謳われた技巧は、一線を退

いても健在だと、思い知らされました」

牛剣鬼「世辞はよさぬか。身の程は弁えているつもりだ」

牛剣鬼「今は貴公が前線で指揮する身。そのような若い世代の者達に、己一代で磨きあげた技の全てを授ける事が、残された余生でワシが為すべき事よ」

鉄甲鬼「ありがたい話です。しかし、聞いた話ですが、今度出陣なさると?」

牛剣鬼「……………」

鉄甲鬼「牛剣鬼様?」

牛剣鬼「少し一息淹れよう。茶を用意してくれんか?」

鉄甲鬼「…分かりました」

牛剣鬼「……………ふう」

鉄甲鬼「牛剣鬼様……。此度の出陣、志願された理由は、先の牛餓鬼殿の件が原因ですか?」

牛剣鬼「……息子が戦場で死んだのは、戦士として誇らしいよ。牛餓鬼の死は、ワシの中で納得しておる」

鉄甲鬼「では……」

牛剣鬼「年寄りの冷や水みたいなものだ……。ワシもここで老いさらばえて果てるよ、戦場に死に場所を探そうとな」

鉄甲鬼「牛剣鬼様…それは…」

牛剣鬼「ふふふ…。案ずるな、鉄甲鬼よ。これでも百鬼帝国に、ブライ大帝に忠誠を誓った身。その忠義は褪せん」

牛剣鬼「我が身果てるとなれば、素っ首にかじりついてでも、ゲッターを地獄の供に連れて参るわ」

鉄甲鬼「はっ…！流石の忠義、感服いたしました」

牛剣鬼「それで、もう鉄甲鬼。お主に頼みがあるのじゃ」

鉄甲鬼「何で御座いますしょう？この若輩者に遂げられるものなら、如何様にでも」

牛剣鬼「儂の行く戦場に、立ってはくれぬか？」

鉄甲鬼「は…？しかし、私の百鬼メカは…」

牛剣鬼「その事については承知しておる。此度の戦は、連中の拠点である早乙女研究所を直接攻めるのが、作戦の第一段階だ」

鉄甲鬼「ゲッターに乗っていない、丸裸の連中を先に仕留めるのですね」

牛剣鬼「うむ。同時に、連中の持つゲッターに関する情報、あわよくば研究所そのものを手に入れる事が目的でもある」

牛剣鬼「無論、連中も何の抵抗もなしとはいかぬであろう。最悪、研究所が手に入らぬと判断した場合、ワシが百鬼メカで研究所を破壊する」

鉄甲鬼「成程。つまり、牛剣鬼様は、後方で陣頭指揮を執られるという事ですね」

牛剣鬼「そうじゃ。そこで突入部隊の戦闘指揮を鉄甲鬼、お主にやってもらいたい」

鉄甲鬼「承知致しました。そういう事であれば、不肖、この鉄甲鬼、牛剣鬼様に微力ながらお力添え致しますよう」

牛剣鬼「うむ。よろしく頼むぞ。ふふつ、ゲッターを操る奴等め、精々首を洗って待つておるがよいわ——」

~~~~~ 海岸 ~~~~~

卯月「よ~~~~しつ！未央ちゃん！いつきますよお〜！」

バシイツ

未央「ブベラツ!?」

美穂「み、未央ちゃん!?大丈夫!」

未央「いつた~~~~。しまむー、今のビーチボールの衝撃じゃなかったよ? 一体何したの?」

卯月「そ、そうですか? 普通にサーブしたつもりなんですけど……」

美穂「ビーチボールのサーブであんなに飛ばないと思うけど……」

茜「うおおおお!! いいサーブですね! 卯月さん! では、次は私と勝負です!!」

卯月「いいですよ! それじゃあ、いきますね!」

バシイッ バシンッ バシイッ バシイッ バシイインッ
茜 「あっはっはっはっ——！」

卯月 「あっはははっ——！」

美穂 「……え、え……つと……」

未央 「いやあくスゴいねえ……。今どつちがスマツシユ返したの？」

美穂 「えつと……、ど、どつちでしょう？」

未央 「そもそもスマツシユをスマツシユで返すのってルール上どうなの？それとも、常人にはスマツシユに見えてるだけで、あれホントはトスだつたり？」

美穂 「あ、あははは……」

未央 「笑って現実逃避しないでよみほち……」

新P 「——おい、お前ら！午後からステージもあんだから、ここで体力使い切るなよ——！」

未央 「ああ、それなら大丈夫だよ、しまむーのプロデューサーさん」

新P 「あ？」

未央 「そのうちビーチボールが持たなくて終わりだと思うから」

ペアアンツ

未央 「ほら」

新P「……」

美穂「あ……あ、でも、ありがとうございます！プロデューサーさん！」

美穂「ライヴは午後からなのに、早く現地入りして、私達にこんな素敵なりフレッシュの時間をくれて……」

新P「ん？ああ、研究所の連中からも、頼まれてた事だしな……」ボソツ……

美穂「はい？」

新P「何でもねえよ。お前らみてえな学生共はもう夏休みだし、丁度いいだろ？」

響子「美穂ちゃん！未央ちゃん！プロデューサーさんも！こつちに来てゆっくりしませんかー？」

藍子「冷やしておいたスイカも、食べ頃ですよ？」

未央「だってよ、行こ！みほちー」

美穂「うん！プロデューサーさんも……えいつ」ムギユツ

新P「あ、こら腕掴んで……、引っ張んなって！」

響子「……」

藍子「あ、あの？響子ちゃん？何だか急に表情が険しく……」

響子「……何でもないですよ？」ニコー

藍子「ヒツ……」

凜 「……」

凜 (…神隼人社長とゲッターとの間に、目立った関係はなかった…。じゃあ私の夢に出てきたのは…)

凜 (いや、夢の中の声はそつちの世界って言ってたし、もしかしたら別の世界って事も……)

凜 「ふっ…。流星にそれはないよね…」

かな子 「落ち着きませんか?」

凜 「…かな子、ちよつとね。ここ何日か、研究所で忙しくしてたからかな」

かな子 「凜ちゃんくらの歳で、ワーカーホリックはダメですよ。たまにはゆつくりしないと。かき氷をどうぞ?」

凜 「ありがとう。でも、どうしても研究所の事が過ちやつて。…気になる事もあるし」

かな子 「最近、晶葉ちゃんとよく何か調べ物してますよね。それですか?」

凜 「まあね。まだ答えに辿り着いてないから、ここで話す事は出来ないけど…」

かな子 「ふふっ。いいんですよ。そんな事も全部、今は忘れちゃいましょう♪」

凜 「かな子…」

かな子 「いいじゃないですか。たまの時間に、こうしてのんびりリゾートライフ!

気持ちも晴れやかになりますよ！」

凜 「……うん、そうだね」

かな子 「天気も待っててくれてたみたいで、こんな気持ちのいい天気の下で食べるスイーツは、また格別、美味しいですね♪」

かな子 「はあく〜っ♪もうずっとこうしていたいなあ〜」

凜 「かな子……」

かな子 「さ、凜ちゃんも一緒に」

凜 「……冷たいものばっか食べてると、代謝落ちるよ？」

かな子 「……」

凜 「私が言うのもなんだけど、かな子、さっきから動いてないし、それだとますます……」

かな子 「……う……」

凜 「う……？」

かな子 「うう……っ、誰ですか……！私が忘れようとしていた事を思い出させようとする人は……！」

凜 「忘れようとしてたんだね……」

〜〜 新早乙女研究所 敷地内 〜〜

みく「にやあく。今頃卯月ちゃん達は、南国バカンスを楽しんでる頃かにや…」

瑞樹「正確には浜辺でのサマーライブよ」

みく「でもライブまでの待ち時間とかは遊んでるんでしょー?」

瑞樹「それは、前に折角の旅行を台無しにしちやつたもの。今度こそ楽しんできてほしいじゃない?」

みく「ま、みく達も研究所が避暑地代わり。都内じゃあ猛暑なんて言ってるけど、山の中にある研究所は涼しくて快適にやあく」

菜々「ですなあ。ナナもお外にいるのにほとんど汗かかなくて…」

瑞樹「化粧直しも少なくて、助かるわね」

菜々「ホントですよ!これが都内だったら何分に一回化粧室に行かなきゃ…つて、何を言わせるんですか!瑞樹さん!」

瑞樹「私が言わせたんじゃないわ。勝手に落ちたのよ」

菜々「ぐぬぬぬ…。な、ナナはまだ若いですから!直すのに手間の掛かるメイクなんてしてません!ナチュラルメイクです!」

みく「:ナナちゃん、ここじゃファンの目はおるかメディアの目もないんだから、たまには素直になつた方がいいと思うにや」

菜々「それはありえませんが!みくちゃんだつて、プライベートだからって猫キャラや

めますか!？」

みく「猫 キヤラ」じゃないにや! みくは何時だつて猫ちゃんの妖精だもん♪だから戦闘中だつてこれはやめられないにや!」

瑞樹「何というか、そう言うところは本当に尊敬できるわ。貴女達」

莉嘉「あつははは! 待てー、アーニヤちゃん! くうらえ☆」

アーニヤ「リカ…! 鉄砲、2丁は卑怯、です…!」

莉嘉「わははは! 卑怯もらつきようもあるものか!」

パシヤツ パシヤツ

みく「…楽しそうにやあ」

瑞樹「みくもやって来たらどう? 水鉄砲でサバイバルゲーム。きつと楽しいわよ?」

みく「うにやあ、みくには今日までに終わらせなくちゃいけない課題があるから、それが終わるまでは遊べないにや!」

瑞樹「それでさつきから小さく唸つてたのね。分からないところがあつたら、力になれるわよ?」

みく「本当にどうしようもなくなつたら頼りにしてるにや」

菜々「しかし、計画表まで立てて、本当に真面目ですねえ」

みく「休み明けにはテストもあるにや! ゲッターとアイドルのお仕事で学校抜ける事

多いけど、だからってクラスのみんなに置いていかれるわけにはいかないの！」

ビュオンツ——

みく「ぎにやー?!?みくの課題があ!!」

パシャンツ

莉嘉「あ、ごめん。いきなり目の前に飛んでくるから」

みく「うにや~~~~!!みくの課題が水浸しにやあああ!!」

瑞樹「莉嘉ちゃんを怒鳴っても仕方ないわよ」

みく「研究所のストレスを低空飛行してるバカは何処の誰にやああああああ!!」

アーニヤ「アー、あれは…ネオイーグル、ですな」

菜々「李衣菜ちゃん達、新生ネオゲッターチームは実機で合体訓練中でしたな」

みく「リーナチャンのぶわあかああああああ——ツ!!!」

—— 上空。

李衣菜「へ——…クシユン!今誰かに最高にロツクって言われた気がする…」

奈緒「何バカな事言ってるんだ?いいから早くこちに高度を合わせてくれよ」

李衣菜「へへっ、ごめんごめん!低空でチキンレースするの割りと楽しくて」

奈緒「それでこの前、地面スライディング滑走して、格納庫にダイナミック突入して

主任に殺されかけたの、もう忘れたのか?」

加蓮「奈緒、そろそろいい？こっちは準備できてるけど」

奈緒「お、悪い。何時でもいいぞ！」

加蓮「ん。それじゃ——」

計器類をチェックしながら、ネオジャガー号にネオベアー号をドッキングさせる。

加蓮「——ふう」

李衣菜「よーっし！次は私の番だあ〜！」

奈緒「おい！お前の場合はもう少しゆっくり、落ち着いてやれよ。いいな？」

李衣菜「分かってますって！心配しなくても……！」

奈緒（ホントに分かってんのか〜？）

李衣菜「……」

奈緒「……」

李衣菜「……」。ああ！こう言うのって苦手！勘でいかせてもらうよ……！」

加蓮「ちよ…マジい？」

奈緒「李衣菜、待て……！」

ガシヤアンツ

加蓮「ツ……！」

奈緒「〜〜!?!」

李衣菜「…ふう〜！どう？李衣菜の実力、パーフェクトでしょ？」

奈緒「チツ…。ゲッターチエーンジ!!」

掛け声に合わせ、ネオゲッター2に変形する。

李衣菜「オツケー、オツケー！んじゃ、次はネオゲッター1に合体いくぜえ〜！」

奈緒「お前この野郎！加蓮をサンドイッチにする気か!？」

李衣菜「え、別にいいじゃん？ちゃんと合体できたんだし、結果よければオールオツケーって事で」

奈緒「なるかよ！」

李衣菜「えーっ!？」

奈緒「第一、タイミングが早いんだよお前は！そんなのも計れないで、よくパイロットになろうと思ったよ！」

李衣菜「そうかなー？私の計算だと、奈緒の降下タイミングも早かったような…」

奈緒「ま…!?!あたしが悪いって言うのかア？」

加蓮「あつははは！そこまでにしときなつて奈緒もリーナも。それとも何ー？2人と、喧嘩するほど仲がいいって感じ？」

奈緒&李衣菜「それはない！」

加蓮（息ピツタリじゃん……）

くくく新早乙女研究所 所長室 くくく

晶葉「——ふむ……。現状で、新型のエンジンに換装したネオゲッターの出力は30%の上昇か」

主任「ええ。それで、旧ゲッターよりは性能が上がる筈だ」

晶葉「それでもゲッター斬には及ばず、か。これ以上手を加えることはできないか？」
主任「無理を言っちゃいけないえですぜ晶葉ちゃん！新型のエンジンを改造つても、パイロットの負担を考えると……」

晶葉「そうか……。ゲッターエネルギーで動いていない以上、パイロットに負荷の掛かる改造はできないか……」

主任「他のゲッター系列とは勝手が違いますからね。そうなるとまたパイロットスーツに手を着けなけりやならなくなりますよ」

晶葉「なら、前に打診していた武装の方はどうなっている？」

主任「あつちは概ね晶葉ちゃんの設計図通り。後はテストして、実際にネオゲッターに持たせた時どう作動するか……」

晶葉「そうか。百鬼帝国の攻勢は、日に日に増している。なるべく早い段階で実践で使えるようにしてくれ」

主任「分かっています。が、こつちとしちゃ、もう少し丁寧に準備を進めたいところも

ある」

主任「何せ、その武器を使うのが、アイツだからなあ…」

バアンツ

奈緒「晶葉ッ！いるかア！」

主任「お、神谷ちゃん。どうした？血相替えて」

晶葉「せめて、ノックぐらいしてもらいたいがな」

加蓮「ホントだよ…。帰ってくるなり、ここに一直線なんだもん。まったく」

奈緒「それどころじゃないって！メンバーを替えてくれ！」

晶葉「…？メンバーを、か？…加蓮とは特に問題ないと思つたが」

奈緒「李衣菜の方だよ！あんなのとこれ以上チームを組めるか！」

晶葉「…まあ、そう言うだろうとは思つていた」

主任「リーナの奴あ、どうも熱が入ると周りが見えなくなるところがあるからな」

主任「リーナがネオゲッターのパイロットになってから、ネオイーグルの損傷が増え

たぜ」

奈緒「なら、なんで！」

晶葉「他に乗り手がないからな」

奈緒「晶葉だってパイロットの訓練を受けているだろ!？」

主任「バカ言っちゃいけないえ！晶葉ちゃんは、今この研究所にとって欠け替えのねえ存在だ！」

主任「もし何かあった日にやあ……！」

晶葉「……と、いう事だ。私も手助けになるのなら、ゲッターに乗って戦う気概はあるのだが」

晶葉「何分、この研究所でやらなければならない事があるのでな」

奈緒「……」

晶葉「まあ、李衣菜も今まではビイトで1人、訓練してたわけだしな。チームプレーに不馴れな部分もあるだろう。それを、察してやれ」

奈緒「察してやれ……って、フォローはあたしらってかあ!？」

晶葉「当然だろう。お前の方が、ゲッターパイロットとしてキャリアがあるんだからな」

奈緒「……けどなあ、このままじゃネオゲッターだって、あたしらだってどうなるか……」

晶葉「……生きてるじゃないか」

奈緒「は？」

晶葉「ネオゲッターは開発の試験段階で、何人も脱落者を出している」

晶葉「しかし、現在のネオゲッターチームは数度の訓練で3人とも生存している」

晶葉「それだけでも優秀なチームだとは思えないか？」

奈緒「……っ」

加蓮「……」

——その夜。

奈緒『——ここは……—』

奈緒「——ゲッターのコックピット……？」

『よおしっ！いっくぞー！』

奈緒『おい……待って……！』

ゴガツ メリメリ……

奈緒『嘘だろ……！待ってくれ……！』

メキツ…… バリツバキツ

奈緒『イヤだ……ヤツ……、死にたくな……—』

——グシヤツ

~~~~~ ネオゲッターチーム 待機室 ~~~~~

奈緒「——わあああああつ!？」

奈緒「はあ……つ、はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……」

奈緒「今の……夢……？何だつてあんな夢を……」

加蓮 「ん〜…もう何〜？」

奈緒 「加蓮、ごめん起こしちゃったか？」

加蓮 「ごめんじゃないよ。まして、低血圧なんだから〜…」

奈緒 「悪かったって。ちよつと、…夢を見てさ」

加蓮 「夢…？」

奈緒 「そ。ちよつと…：…ヤな夢、でき」

加蓮 「…ふうん？ま、何でもいいけど。同室のチームメイトにくらい迷惑掛けないでよね」

奈緒 「ごめんごめん、って…李衣菜は？」

加蓮 「いないの？…トイレじゃない？」

奈緒 「トイレって…、まあ、そうだよな」 ボフンツ

加蓮 「で？どんな夢見たの？」

奈緒 「何だよ、言わせんのか？」

加蓮 「悪い夢は、言った方が気が楽になるんじゃない？」

奈緒 「…合体訓練中に失敗して、ゲットマシンにサンドイッチにされた」

加蓮 「怖かった？」

奈緒 「こ、怖くなんか…」

加蓮「ウソ。奈緒、スツゴい汗掻いてるよ？」

奈緒「誰だって、死ぬのは怖いだろ」

加蓮「だねー。アタシだって、こんな若さで死にたくはないし」

奈緒「最近見た事なかったのに……、李衣菜のせいだな……」

加蓮「……前は結構見てたんだけ？」

奈緒「……そりゃあ、ゲッターの操縦に慣れる前までは、そうやって思ったりするだろ」

加蓮「ふうん……」

奈緒「どこ行くんだ？」

加蓮「ちよつとトイレ。奈緒ももう寝たらら？明日も訓練だよ」

奈緒「分ってるよ。それじゃ」

加蓮「うん。おやすみ」

——シミュレーター室。

李衣菜「……！……！……うっわあ……！またダメかあ……」

李衣菜「今日はこれで最後に……いや、あともう一回！」

加蓮「へえ。以外に熱心なんだ？」

李衣菜「……加蓮。どうして……」

加蓮「トイレの帰りにね。灯りが漏れてるのなんて見たら、気になるでしょ？」

李衣菜「そっか……。ヤナトコ見られちゃったな……」

加蓮「何で？別に、アタシ達に遅れてる分頑張ろうってんでしょ。恥ずかしかることでもないんじゃない？」

李衣菜「いやあく……。誰かに頑張ってる姿見られるのって、ロックじゃないし……」

加蓮「……は？……プツ、あははは！何々それ？」

李衣菜「ちよっ……！別に笑わなくたって！」

加蓮「あはは……！ごめん、でも、リーナたまにそんな事言ってるよね？ロックがどう、なんて」

李衣菜「ロックは私の生き甲斐なんだから、意識するに決まってるじゃん！」

加蓮「生き甲斐ね……。まず、ロックってなんなの？」

李衣菜「えっ？ロックって言うのは……、その……そう！ロックって言うのは、口で説明出来るものじゃないんだよ」

加蓮「とか言って、リーナがまいち分かってないんじゃない？」

李衣菜「そ、そんな訳ないって……」

加蓮「……」

加蓮「まさかだけどさ、ゲッターに乗るのもロックだからー、とかじゃないよね」

李衣菜「あつははは！流石にそれは。私だって、ゲッターに乗る意味くらい分かってるよ……」

加蓮（そつか……。流石にそりやそうだよね）

加蓮「だったら何でパイロットに？」

李衣菜「えっ？またいきなり……。どうして？」

加蓮「いや？深い意味はないけど。ただ、リーナってわざわざ志願してまでここに來たつて聞いたから。何でなのかなーって」

李衣菜「あ……あははは……。そういう事ね。……んと、何て言ったらいいのかな？」

加蓮「……」

李衣菜「う……ん……。……やっぱナイショで」

加蓮「はい？さんざん待たせておいて、それ？」

李衣菜「いーじゃんいーじゃん！あんまりそういう事言うのもロックじゃないから！ね？」

加蓮「ね、つて……。リーナが思ってる以上に、ロックって万能じゃないから」

李衣菜「う……ん……。もういいでしょ！ほら、もう遅い時間だし、加蓮は帰って寝なきゃ！私ももうちよつと訓練に集中したいし！」

加蓮「……アタシも一緒にやっついていい？」

李衣菜「はいい〜!？」

加蓮「どうせ合体シミュレーションでしょ。そう言うのって、一人でやっても意味なくない？」

李衣菜「それはそうだけど…。ちよつと意外」

加蓮「そう？」

李衣菜「うん。加蓮って、もう少しこういう事にドライかと思ってた」

加蓮「ま、努力とか根性とか？そーゆーの、得意じゃないけど。けど、たまにはいいかなって」

李衣菜「そういうノリなんだ…」

加蓮「そ。ノリだよノリ。ノリに合わせて、ちよつとくらい付き合ってもいいでしょ？」

李衣菜「…別に断る理由はないし、別にいいけど…」

加蓮「じゃあ決まり。リーナがミスする毎に、ジューズ奢りだからねっ」

李衣菜「はあ!?!…付き合わせるんじやなかった…!」

〜〜 翌日 新早乙女研究所 上空 〜〜

李衣菜「よおーしっ!今日も張り切っていくぜえ〜!!」

奈緒「張り切りすぎてネオイーグル墜とすなよな〜!」

李衣菜「大丈夫！今日は無事に飛んで帰れそうな気がするから！」

奈緒（それが普通なんだけどな…）

李衣菜「加蓮も着いて来てる〜？」

加蓮「バツチリ。仲良くランデブーしてる2人の機影は、見失ってないよ」

奈緒「だから！仲良くなんてしてないだろ!?フツーだ、フツー！」

加蓮「そんなムキに何なくてもいいじゃん」

奈緒「いいから、早く合体するぞ！ネオゲッター3だ。この状態から、加蓮を先頭にフォーメーションを変えながら、合体するんだからな！」

李衣菜「隊列入れ替わる時にぶつかるなって言いたいでしょ！分かってるって！」

奈緒（…ホントに分かってんのかア?）

加蓮「やることは分かってるんだから、早速始めるよ！」グンツ

ネオベアー号が速度を上げ、先頭を行くネオジャガー号とネオイーグル号を追い抜きに掛かる。

李衣菜（加蓮は上からか…。よし!）

ネオイーグル号は速度と高度を落とし、潜り込むようにネオジャガー号の下へ。

奈緒（……）…クツ

加蓮「ちよっ……!?奈緒、何で機首上げて…!？」



奈緒「——えっ？」

ガンツ

微かに機首を上げた、ネオジャガー号の鼻先と、上空を追い越そうとしていたネオベアー号の下部が接触。

李衣菜「何…？」

加蓮「リーナ！そこ離れて！」

李衣菜「!? ……ツ！」

上空の変化を察し、咄嗟にネオイーグル号を旋回させて、隊列から離脱。

接触によってコントロールを失い、失速したネオジャガー号が墜落コースに入るのは、それから程無くだった。

奈緒「わあああああああツ!?」

李衣菜「奈緒ッ！」

加蓮「リーナ、アタシについて来て！」

加蓮「——！」

ネオベアー号の機首を落として、急降下。

李衣菜「もしかして…、降下しながら合体する気!? 無茶苦茶な！」

スピードを上げてネオジャガー号を追い越しに掛かるネオベアー号の後を追う。

加蓮「……………ぐうっ……！」

加蓮（凜みたく、繊細な動きが出来る訳じゃないけど——！）

加蓮「何とかなれ！」

ガゴンッ

墜落するネオジャガー号を強制的にドッキング。僅かに機首を上げて制動を掛ける。

加蓮「リーナ……！早く……っ！」

李衣菜「ええい、ままよ！」

地面に激突する勢いで、ネオイーグルに急加速を掛けて2機を追い越し、ドッキング。

ガコッ

李衣菜「ゲッターチェンジ!!」

ドオ……………ンッ

山中に響き渡る轟音。辺り一体を包み込む土煙。後の、静寂——。

その中から、ネオゲッターが姿を現す。

李衣菜「痛たた……。うう……ん、生きてる……？」

加蓮「……何とかねえ……。変形しながら墜落する瞬間、死んだ、って思ったけど」

李衣菜「加蓮が言うのと、それ洒落になってないから」

奈緒「……………」

加蓮「……。さて、一旦基地に帰ろっか？ちよつとトラブルのあった事だし……」

—— 格納庫。

主任「……つたく、よくもまあこんな無茶やらかしてくれたな」

晶葉「しかし、咄嗟の判断にしては優秀だな。後2秒合体するのが遅れていたら3人まとめて地獄行きだったが」

李衣菜「それで、ゲッターの調子は？」

晶葉「事故原因になったネオジャガーの損傷自体は軽いな。問題はネオイーグルとネオベアーの方だ」

主任「急加速と強引なドッキングで、エンジンが焼き付いてらア。この調子じゃ、ラジエーターまでダメんなってるだろうし」

加蓮「それじゃ、今日の訓練は……」

主任「無理に決まってるんだろ。今日1日は大人しくしてんだな」

晶葉「ふむ……。丁度いい機会かもしれないな」

晶葉「主任、ネオイーグルの整備は私がするから、主任達整備班はネオベアーの整備とネオジャガーの点検を頼む」

主任「了解。さて、ボチボチ始めますか！」

李衣菜「晶葉は1人で大丈夫なの？」

晶葉「一人じゃないさ。私にはこの、整備用メカニック・ウサちゃんロボがいる」  
Mウサちゃん『ウサー!!』

李衣菜「ははっ…。それじゃ、安心だ」

奈緒「……………」

李衣菜「…あゝ…のさ、大丈夫？ケガとかしてない？」

奈緒「…何だよ」

李衣菜「いやあゝ……………」

奈緒「言いたいことがあるなら、ハッキリ言えばいいだろ」

李衣菜「いや、いつもは私がミスしてるから、そんなエライ事は言えないよ」

奈緒「……………そうだよ。何時もだったら、お前がミスするから…！」

李衣菜「うん。ごめん」

奈緒「あたしだって、ゲッターのパイロットなんてやってるんだ。戦って死ぬならしょうがねえって思えるさ」

奈緒「けどな、仲間のミスで死ぬなんてみつともないだろ！…そう思ってたのに…ッ  
！」

李衣菜「……………」

加蓮「だったら、ゲッター降りれば？」

李衣菜「加蓮……。流石にそれは……」

加蓮「はあ……。ホントト、優しいよねー、リーナは。ヘドが出るくらい」

李衣菜「……？」

加蓮「奈緒もいい加減にしなよ。そんな言い訳が何時までも通じる訳じゃないって、奈緒だつて分かつてるんでしょ？」

奈緒「……………」

加蓮「少しは何とか言ったら？」

李衣菜「加蓮、やめなつて。奈緒だつて、珍しくミスして動揺してるんだからさ……」

加蓮「……。リーナは、ホントに奈緒が失敗したの、今日が初めてだと思つてる？」

李衣菜「何言つてるの？加蓮……。それじゃ、奈緒がいつも失敗してるみたいな……」

奈緒「ツ……！」 ダッ

李衣菜「奈緒!?いきなり何処に……!」

加蓮「追わなくていいよ」

李衣菜「どうして!？」

加蓮「今更恥ずかしくなつたつて?……バカみたい」 ボソツ

李衣菜「加蓮……。冷たいよ。そういうの」 ダッ

加蓮「……はあ……」

くくく 山中 くくく

李衣菜「奈緒くく！どこまで行くのさく！ちよつと、待つてつてばくく！！」

奈緒「……………」

李衣菜「……………はあ…、やっと止まってくれたあ…」

李衣菜「こんな山奥まで来たら、熊とか色々、危ないよ？研究所に帰ろ？加蓮にも謝つ

てさー…」

奈緒「…何だよ！」

李衣菜「え？」

奈緒「何でついて来るんだ!?あたしはゲッターを降りる!もう決めたんだ…!」

李衣菜「……………」

奈緒「だから、ついて来るなよ……………」

李衣菜「……………本当にそれでいいの？」

奈緒「あん!？」

李衣菜「奈緒だつて、自分で決めてゲッターに乗つてたんじゃないの？」

奈緒「関係ないだろ。元々柄じゃなかったんだ。あたしは、普通の女の子で、ただのアイドル。それで良かったんだ！」

李衣菜「そんなのかな子だつて、茜だつて、…私だつてそうだよ。奈緒だけ特別じゃ

ない！」

奈緒「人には出来る事と出来ない事がある！お前でも、みんなが出来るからって、あたしにも出来るなんて思うなよ……！」

李衣菜「…どういう事？」

奈緒「分かってたんだよ……！最初から。自分が臆病だったのは」

奈緒「先輩にリードされて、ようやく出来るようになって……。後輩にだって、気を回せない！」

奈緒「体よくお前に擦り付けてただけなんだ。自分の失敗と、下手さ加減をさ！」

奈緒「加蓮はそれを分かった。だから、あんな事言ったんだ。アイツは悪くない」

李衣菜「…ごめん」

奈緒「は!?!何で、今の流れでお前が謝るんだよ？」

李衣菜「私、バカだからさ。ゲッターに乗れるって、舞い上がっちゃって。訓練でミスしてばっかで、奈緒に余計な気ばっかり遣わせてたみたいだから」

奈緒「そんな事……！お前は、もっと怒ったっていいんだぞ!?!」

李衣菜「何で？さっきも言ったじゃん。私は誰かにあーだこーだ、エラソーに何て言えないって」

奈緒「け、けどよ……！それは……」

李衣菜「んー…。それじゃあ……」

ペシッ

奈緒「あだっ」

でこぴん。

李衣菜「これでおあいこ。次からは、一緒に頑張っていこ？」

奈緒「おあいこって…、ってか、次い!? あたしは、今日限りゲッターを降りるんだぞ  
!？」

李衣菜「降ろさない。奈緒は絶対、私が降ろさせない」

奈緒「…どんな権限があつて、そんな事言うんだよ？」

李衣菜「権限なんかないよ。けど、出来ないって、それだけで諦めるなんて、そんな  
の……」

奈緒「…：そんなの？」

李衣菜「ロツクじゃないからね！」

奈緒「……」

奈緒「ハッ！バツカじゃねえの？」

李衣菜「むっ！言うに事欠いてバカつて何さー？」

奈緒「ふんっ！相変わらずのバカさ加減に呆れたんだよ！そんな調子じゃ、お前と



チーム組みたがる奴なんて、とんだ酔狂しかいねえな」

李衣菜「むーっ！そんな事……！」

奈緒「だから……——」

李衣菜「！」

奈緒「だから、お前のバカに、もうしばらく付き合ってやるよ」

李衣菜「……へへっ！」

李衣菜「ありがと、奈緒」

奈緒「バーカ。仕方なく、付き合ってやるんだからな。勘違いすんなよ？」

李衣菜「はいはい。分かっていますっ」

奈緒「ホントか？」

李衣菜「あはははっ！」

奈緒「……へへっ」

ガサガサッ

李衣菜「っ!？」

奈緒「な、何だ？熊かア……？」

李衣菜「だ、だったら逃げないと……！ゲッターもないんじや、私達に勝ち目なんてな

いよ！」

奈緒 「わざわざ熊相手にゲッターは使わないだろ」

李衣菜 「悠長に突っ込んでる場合…!？」

「お、何だ？こんなところに、人間の小娘かよ？」

奈緒 「コイツら、頭に…角…!？」

李衣菜 「百鬼帝国！」

百鬼兵 「これから早乙女研究所を攻めるつて時に、とんでもない邪魔でも入るかと思つたが、すぐ片が付きそうだぜ」 チャキツ

李衣菜 「!？」

百鬼兵 「死ねえ！」

李衣菜 「奈緒危ない！」 バツ

奈緒 「いゝっ…!？」

バババババババ

李衣菜 「くっ…!？」

奈緒 「李衣菜！大丈夫か!？」

李衣菜 「…か、掠り傷だよ…。それより早く！」

奈緒 「お、おう！」

百鬼兵 「逃がすかあ！」

バラバラバララッ

奈緒「くう……！無茶苦茶撃ちやがって……！」

李衣菜「……奈緒、私が時間を稼ぐ。奈緒1人だけでも、研究所のみんなと合流して……」

！

奈緒「はあ!?今のお前1人置いていけるかよ！」

李衣菜「けど……！このまま2人やられるよりマシでしょ？」

奈緒「バカな事言ってるねえで走るぞ。1人なんて、絶対させるないからな！」

李衣菜「奈緒……」

百鬼兵「チイ……ッ！こいつらチヨロチヨロと……！」

百鬼兵2「何やってる!?相手は小娘2人だけだぞ！」

百鬼兵「フン！黙ってろよ」

百鬼兵「ヒヒッ！これで仕舞いだ……！」

ブロオオ……ンッ ガキヤッ

百鬼兵「ゴハアッ!？」

百鬼兵2「な、何だあ!？」

奈緒「ネオゲッターの輸送車！」

加蓮「奈緒！李衣菜、無事？」

奈緒「加蓮！それに主任さんも。どうしてここに…」

主任「研究所が、百鬼帝国の攻撃を受けてんだ」

奈緒「えっ!?!」

加蓮「今、晶葉達が、応戦してる。私達は、ネオゲットマシンと一緒に脱出して、人と合流しに来たの」

主任「まさか百鬼帝国の別動隊と遭遇してるとはよ。とにかくここから離れるぜ！早く乗りな！」

奈緒「おう、李衣菜、早く！」

李衣菜「うん…」

加蓮「…？ リーナ、どうしたの？」

奈緒「敵に撃たれたんだ！早く…手当てしないと…——！」

くくく 新早乙女研究所 施設内 くくく

バラバラバラララッ

警備隊員「ぐわっ!?!」 バタッ

鉄甲鬼「ふん、他愛のない。鎧袖一触とはこの事か…」

鉄甲鬼「攻撃部隊前進！このまま連中の格納庫を押さえるぞ」

百鬼兵 s 「了解ッ！」

瑞樹「ほら、菜々さん！銃の撃ち方は、一緒に訓練したでしょう!」

菜々「ナナには…、ナナには撃てません!」

瑞樹「訓練でちゃんと出来てたじゃない!」

菜々「げ、ゲッターでロボットをやつつけるのと、生身の相手を撃つのは違いますよお  
!」

瑞樹「…仕方ないわね…。みくちゃん、菜々さんを連れて先に格納庫に逃げなさい」

みく「でも、それだと瑞樹さんが1人になっちゃうよ!」

瑞樹「動けない菜々さんを、庇いながら戦うよりマシよ」

鉄甲鬼「…ここには女と子供が3人だけか?」

瑞樹「早く行きなさい!」

みく「…分かった…。けど、必ず、必ず合流するにやあ!!」

タッタタッタツツ

瑞樹（こんな時でもキャラを崩さないのは、流星ね）

瑞樹「さて…」

百鬼兵「…」 ジャツ

鉄甲鬼「待て、お前達」

百鬼兵「鉄甲鬼様…?」

鉄甲鬼「下がっている。ここは、私一人で充分だ」

百鬼兵「……ハッ！」

瑞樹「…随分優しいのね？」

鉄甲鬼「たった一人で私に立ちはだかるものに、敬意を表するだけの事」

鉄甲鬼「まさか、貴様一人で私を倒せるなどと、思っているわけではなからう？」

瑞樹「さあ？それは分からないわよ。私にだって、考えがあるんだから」

鉄甲鬼「そうか。では……」

鉄甲鬼「——ッ！」 シュバツ

瑞樹「ツ……！」 チャツ

パアンツ

鉄甲鬼「ムウン！」 カキンツ

瑞樹「……！」

鉄甲鬼「フンツ！」

瑞樹「カハッ……！」

鉄甲鬼に突き飛ばされ、壁に叩き付けられる。

瑞樹「カハッ……！ゲホッ……ゴホッ……！」

鉄甲鬼「人間風情が……。そんな豆鉄砲など、当たると思うか？」

瑞樹「うぐっ……!!」

首を鷲掴みにして、持ち上げる。

鉄甲鬼「随分細いな……。腕も脚も。とても戦士の者とは思えん」

瑞樹「そ……そうね……。元々戦士なんて、大層な者じゃないもの」

鉄甲鬼「何……?ならば何故我々に立ち向かう?戦士でない者は、逃げるのが道理ではないのか?」

瑞樹「何でかしらね……。私だって、こんな事ごめんだって、思ってるわ。けど……」

鉄甲鬼「けど……?」

瑞樹「貴方今、油断したわね?」

パンツ

零距离から、鉄甲鬼の腹部を撃ち抜く。

鉄甲鬼「ぐう……!!?」

ドサツ

瑞樹「ゲホツ……!ゴホツゴホツ……!」

百鬼兵「鉄甲鬼様!?!おのれえ……!」

バババババババ

百鬼兵「な、何だ!?!ぐはあっ!?!」

百鬼兵 s 「うわあああ!？」

晶葉 「瑞樹! 無事か!？」

瑞樹 「晶葉ちゃん……! 後ちよつとで、危なかったわね……」

晶葉 「生きているのなら上出来だ! 後はこの……」

ウサちゃんロボ 『ウサー!!』 ジャコンツ

バララララララッ——

百鬼兵 s 「ぐわあ——!!?」

晶葉 「迎撃用コンバット・ウサちゃんに任せろ!」

鉄甲鬼 「貴様ら……!」

瑞樹 「貴方に撃ち込んだのは、晶葉ちゃんの特製の細胞腐食弾よ。早く手当てしない

と、危ないわよ?」

百鬼兵 「鉄甲鬼様……! 他の突入部隊とも、連絡が途絶しています……!」

晶葉 「フン! コンバット・ウサちゃんが役に立っているようだな」

鉄甲鬼 「くう……! 格納庫を目前にしておきながら……!」

鉄甲鬼 「……撤退だ!」

鉄甲鬼 「女!」

瑞樹 「……私?」



鉄甲鬼「最後に貴様の名前を聞かせてもらおう！」

瑞樹「名前：川島、瑞樹よ」

鉄甲鬼「川島瑞樹：！我が名は鉄甲鬼！貴様の名、しかと覚えたぞ！」

タツタツタツ：

晶葉「因縁をつけられたな？」

瑞樹「：別にいいわ。今、助かったのなら、ね」フラツ：

晶葉「大丈夫か!？」

瑞樹「ふふふ：。アイドルやめても、女優で食べていけるかしらね？」

晶葉「ああ：、そうだな。みくと菜々を逃がして、一人で耐えてみせたんだ。立派な

女優だよ」

瑞樹「：ありがと」

ズウウウ：ン：：

瑞樹「：揺れ？」

晶葉「連中が百鬼メカを出してきたか」

晶葉（研究所は既に防御態勢に入っている：。百鬼メカが目の前にいるとすれば、迂闊に解除してゲッターを出撃させることは出来ないか：）

晶葉「後は頼んだぞ：。ネオゲッターチーム：」

李衣菜「……」

加蓮「…酷いね。銃弾は貫通してるみたいだけど…」

主任「ダツシユボードの中に、止血剤が入ってる。それで何とか、応急処置できるはずだ」

加蓮「ありがと」

奈緒「ホントにあたし達にやらせる気か!? 李衣菜がこんな状態で、飛べるわけないだろ!」

李衣菜「…私は、やるよ」

奈緒「李衣菜!」

李衣菜「さつき主任から聞いたでしょ? 今研究所を守れるのは、私達と、ネオゲッターロボしかない」

加蓮「リーナ、じっとしてて」

プシューッ

李衣菜「~~~~ッ!?!」

奈緒「ほら見ろ! そんな傷で、戦うなんて出来るわけないだろ!」

李衣菜「出来る!」

奈緒「ツ…!？」

加蓮「……これでよし、と。応急処置は済んだよ」

李衣菜「ありがとう、加蓮。それじゃ、いこつか！」

加蓮「りよーかい」

奈緒「お、おいおい！本気かよ!?!加蓮！」

加蓮「もう考えてる時間もあんまりないしね。百鬼メカはすぐそこだし。アタシはリーナを信じる」

奈緒「……………」

李衣菜「よーし、気合い入れて出撃だー！」

主任「待ちな」

李衣菜「大将…?？」

主任「お前達のネオゲッターは現状、応急処置が済んだだけの状態だ。ネオゲッターには専用の輸送車があったからこうして持ち出せたわけだが…」

主任「正直、どこまで出来るか分からねえ。合体の衝撃で爆発しちゃうかも知れねえ」

主任「ネオゲッターの合体は、一度だけだ」

李衣菜「ネオゲッターも私と一緒に訊ね。分かった！」

加蓮「どうするの？」

李衣菜「出撃してすぐネオゲッター1に合体する。相手は地上型だし、そっちの方が対処とれるはずだよ」

加蓮「ん。りよーかい。ほら、奈緒行くよー?」

奈緒「ああもう!もう好きにしるよさつき!付き合つてやるつて言つちまつたからな。地獄だつて何処だつて付き合つてやるよ!」

加蓮「さつき?」

奈緒「こつちの話だよ!」

李衣菜「…ありがと、奈緒。よし、行こう!」

駆け出して、それぞれのマシンに乗り込む。

李衣菜「――発進!!」

つづく

## 第19話『彼女達の刃（後編）』

~~~~~海~~~~~

卯月「ふわあ~~~~」 プカプカ

かな子「のんびりですnee~~~~」 プカプカ

藍子「昨日のライヴ、たくさん来てくれて、良かったですnee~~~~」 プカプカ

かな子「凜ちゃんのサプライズステージも決まって、ライヴも大成功!」

かな子「打ち上げも楽しくって、今日一日はお休み!もう言う事なしですnee~~~~」

美穂「あ、あの……!」

卯月「はい~~~~?何かしたんですか?」

美穂「私達こんなんびりしちやって、いいんですか?」

卯月「どういう事ですかあ~~~~?」

美穂「う、卯月ちゃん……。そんなりラックスしきった顔で……」

美穂「じゃなくて……!何と言うか、そのつ、ヤな予感がするんです!私達がこうして
る間にも、百鬼帝国が出てくるんじゃないかって……!」

かな子「美穂ちゃんの心配も分かるけど、こうやって羽を伸ばすのも大切だよ」

美穂「それは、そうかもしれないけど……。でも、私達は、ゲッターのパイロットなんだから……！」

藍子「気にしすぎですよ。もし非常事態が起こったら、研究所から連絡があるんですよね？」

美穂「うん……」

藍子「なら、連絡がないって事は、何も起きてないって事ですから、心配するだけ損ですよ！」

美穂「ううん……」

卯月「ほら、折角の青い海なんですから、何時までもそんな暗い顔してちゃメツ、ですよっ」

かな子「今日は、わざわざプロデューサーが用意してくれたお休みなんですから。楽しんでまなきゃ！」

美穂「う、ううん……。でも……」

卯月「あんまり思い詰めてちゃダメです！気分転換に、あの島まで競争しましょう！」

藍子「あ、あの島って……。あの遠くにちっちゃく見えてるの、ですかあ？」

かな子「あそこってどのくらい離れてるんです？さすがに無理なんじゃ……」

卯月「為せば成ります！やってやれないことはありません！」

美穂「な、何だか最近、卯月ちゃんが茜ちゃんみたい……」

ワイワイッ

未央「遊泳してるグループは、何だか賑やかだねえ」

凜「未央は珍しいね。卯月達と一緒に行かないの？」

未央「うーん？たまにはね。それに、一人で遠く見てるしぶりんも気になるし？」

凜「そう……」

未央「で、実際どうなの？研究所には定時連絡してるんでしょ？」

凜「うん。さつきは所員の人が出て、こっちは大丈夫だ、つてさ」

未央「アキつちじゃなかったんだ？」

凜「ま、研究か整備の方で、手が離せないのかもしれないし」

未央「そっか。じゃ、私達もしばらくのんびり出来るね」

凜「未央はもう出撃しないでしょ。もし仮に何か起きてたとしても、あつちで解決できる程度つて事だろうね」

未央「だね。リーナも頼りになるようになってきたし。そろそろ私達も引退ー？」

凜「だから、未央は今何もしてないでしょ……」

~~~~~ 新早乙女研究所 外 ~~~~~

牛剣鬼「……」

牛劍鬼「……鉄甲鬼がしくじったか……」

牛劍鬼「まあよい。そうでなくては、ワシがここに来た意味がないと言うもの」  
牛劍鬼「では、行くとしようか」

——李衣菜「ちよ……と待ったあ……!!」

ギユウウンツ

牛劍鬼「……ほう……? 思いの外出迎えが早いのに」

牛劍鬼「さあ、爪なき鳥を落としても面白くはない。早くゲッターとなれ!」

李衣菜「ネオゲッターチーム参上! こっから先には、行かせない!」

奈緒「……」

李衣菜「あれ? 2人ともスルー?」

加蓮「ごめん。努力、根性の次に、熱血系も私のキャラじゃないから」

李衣菜「もう……! ノリ悪いなあ……」

李衣菜「ま、いつか。奈緒、加蓮! 続いているね! ソツコーで合体、行くよ!」

奈緒「お、おう!」

加蓮「向こうが待ってくれてるのが、癪だけど!」

3機連なつて、高度を上げる。

奈緒「……」



——グシヤツ

奈緒「っ……！」

加蓮「ちよつと、奈緒〜？」

李衣菜「どうしたの？奈緒！」

奈緒「な、なあ……やつばネオゲッター2にチェンジしないか？」

加蓮「はあ？何を今更……」

奈緒「だって、私が間に入るより、李衣菜と加蓮が下に着いた方が安心出来るだろ？」

李衣菜「大丈夫！奈緒なら出来るから！」

奈緒「な、何を根拠に……」

李衣菜「私は、奈緒を信じてる！」

奈緒「……」

牛剣鬼「何をしておる！年寄りを焦らす作戦か!？」

加蓮「……お爺ちゃんは短気みたいだよ？」

李衣菜「それなら……仕方ない！」

奈緒「お、おい……！何する気だ!？」

加蓮（ふうん……？）

李衣菜「最初に私と奈緒でドッキングする。加蓮はその後押し込んで！」

加蓮「りよーかい。思いつきり行くから、そのつもりで」ニヤ…

奈緒「加蓮…顔が悪いぞ……？」

李衣菜「よし…」

ネオイーグル号が速度を落とす。

奈緒「り、李衣菜!？」

李衣菜「じつとしてて！」

奈緒「ッ！ 分かった…！」

ゆつくりと機体後部から高度を落として、慎重にネオジャガー号とドツキングする。

李衣菜「ふうく…。一先ず成功く…」

奈緒「ぶつつけ本番だったのか!？」

李衣菜「そりやあ、先頭が後ろに下がって合体なんて、普段しないしね」

奈緒（コイツ…）

李衣菜「敵が何時までも待ってってくれると思えない。加蓮！」

加蓮「はいきた！」

ドツキングした2機を押し込んで、ネオベアー号がドツキング。

李衣菜「ゲッターアアーチエエーンジツ!!」

高高度でネオゲッター1への変形を終え、豪快に地面に着地。

李衣菜「よおろしつ！合体完了！百鬼帝国！ここからは私のネオゲッターが相手だ！！」

牛剣鬼「…時間を使わせおって。よもや、素人ではあるまいな？」

李衣菜「それは戦ってみれば分かる事だよ」

牛剣鬼「然り。よい自信を持つておるようじや。その意地、鼻先から砕いてやるわ！」

牛剣鬼「我が名は牛剣鬼！嘗ては空の英雄と讃えられし武士なり！」ものぶ

牛剣鬼「我が剣の錆になりたくば、推して参るがよい！！」

奈緒「コイツ…、今まで戦ってきた百鬼兵と、雰囲気が違うぞ！」

李衣菜「うん。気合いつて言うか、気迫つて言うか…。とにかく、私にも分かるよ」

加蓮「にしても剣かあ。不用意に近付くのは危険だよ？」

李衣菜「だったら…」

李衣菜「シヨルダーミサイル！」

牛剣鬼「甘いわ！」

初手に放ったシヨルダーミサイルは、容易く避けられる。

加蓮「真つ直ぐ飛ぶだけのミサイルじゃ、ダメみたいだね」

李衣菜「晶葉か主任に、追尾付けてって相談してみよっかな…」

牛剣鬼「次はこちらから行くぞ！」

牛剣鬼「キエエエエイツ!!」

奈緒「李衣菜、避ける!」

李衣菜「分かっている…!」

紙一重。つんのめり、尻餅をつき、不恰好になりながらも、メカ牛剣鬼の剣戟を躲していく。

牛剣鬼「ええい、ちょこまかと…!それでも戦場に立つ戦士か!」

李衣菜「攻撃に当たりさえしなければ何でもあり、…つとお!」

牛剣鬼「ぬっ…!」

背中のバーニアに火を点け、高く跳躍。ついでと言うように、メカ牛剣鬼を蹴りつけ距離をとる。

奈緒「大丈夫か!」

李衣菜「このくらい軽い軽い!」

奈緒「無理して傷口開かせるなって言ってるんだよ!」

李衣菜「それこそ問題なし!私とネオゲッターの戦いは、まだ始まったばかりだよ!」

李衣菜「研究所!管制室、誰がいる!」

所員『は、はい…!池袋博士の指示で、待機してあります!』

李衣菜「さっすが晶葉!早速だけど、ポイントL-05地点に、ライフル射出して!」

所員『了解です！』

李衣菜「…早乙女研究所の敷地は、ゲッターの敷地ってね！」

地下深くから打ち出された、長方形の武装パレットに入った大型ライフルを、ネオゲッターの手に取る。

李衣菜「いけっ！」 ドオンッ

重低音の銃声が響く。

牛剣鬼「むっ…！これは…！」

李衣菜「中身は散弾だよ！これなら、最小の動きで回避なんて出来ないでしょ？」

牛剣鬼「小細工を巡らせてきたか…！」

李衣菜「どんどん行くよー！」

ガンッガンッ

牛剣鬼「——しかし！」

ガキインッ

李衣菜「ウツソ…！」

奈緒「散弾をまとめて切り払いやがった…！」

李衣菜「そんなのってありい？」

牛剣鬼「端から飛び道具に頼ろうと言うのが、既に検討違いよ。この牛剣鬼、間合い

外からの攻撃など幾度も想定しておるわ！」

加蓮「ま、そりやそうだよね」

李衣菜「悠長に言ってる場合？ どうすんの、これ…」

加蓮「…飛び込む？」

奈緒「これから投身自殺するみたいに言うなよ！ あたしはごめんだからな！」

加蓮「でも、ネオゲッターの操縦は、リーナなんだよね〜」

奈緒「えっ…」

李衣菜「うおおおおおおお!!」

メカ牛剣鬼目掛けて、ネオゲッターが走り出す。

奈緒「うわああああああ!? このバカあああああああ——!!」

牛剣鬼「策もなく飛び込んでくるか…。愚か者め！」 ブオンツ

李衣菜「ッ！」

振り抜かれた剣に対し、差し出した前足に踏ん張りを効かせ、上体を前に倒し空を切らせる。

牛剣鬼「むっ!？」

李衣菜「…トラアア—イッ!!」

奈緒「茜か!？」

。 屈み込んだ状態から、思い切りよく踏み込み、タックルで組つく。

茜 「プウワツション——!!」

響子 「きやつ!?今の、くしゃみですか?」

茜 「誰かが私を呼んでいる気がします!!」

響子 「どういう事ですか…?」

。

李衣菜 「こんだけ近付いたら、自慢の剣は振れないね?」

勢いのまま、メカ牛剣鬼を押し倒す。

牛剣鬼 「ぐっ……!!?」

李衣菜 「はあああっ!!」

牛剣鬼 「狙いが単調!」

李衣菜 「!?!」

マウントポジションで振り下ろされた、ネオゲッターの拳を受け止める。

牛剣鬼 「上を制したとて、ワシを降した事にはならん!」

単純な力比べ。ネオゲッターは、遠く劣っている。

李衣菜 「ぐあっ!」

加蓮「体勢を立て直して！相手の攻撃がくる……！」

牛剣鬼「せえいつ！」

李衣菜「！」

倒れた姿勢から、ネオゲッターを横方向に1回転させて、大上段の一撃を躲す。

牛剣鬼「ぬんっ！」

李衣菜「そら！」

咄嗟に、手前に落ちていた大型ライフルを掴み、メカ牛剣鬼に放る。

メカ牛剣鬼の剣が、ライフルを両断する間に、ネオゲッターを後方に1回転させて立ち上げる。

牛剣鬼「仕留め損ねたか」

李衣菜「ふうく……！間一髪く……。これで何とか、仕切り直しだね」

奈緒「バカ野郎！寿命がいくらあつても足りねえよ！こんな戦い方！一緒に見てる方がハラハラしてくる……！」

李衣菜「そうく？割とみんなこんな感じだと思うけど……」

奈緒「凜はそんな戦い方しないよ！」

牛剣鬼「いくら逃げおせようとも勝筋など見えてこんぞ」

牛剣鬼「いい加減に、覚悟せよ……！」　チャッ



李衣菜「へへっ…！スゴみ効かせたって無駄だよ！勝負はまだまだこつから、どう転ぶかなんて分かんないんだから！」ググッ

奈緒「けど現実問題どうすんだよ？このまま長期戦って言ったって、ネオゲッターのプラズマエネルギーはそんな持たないぞ？」

李衣菜「一か八か…、プラズマサンダーを使うよ」

奈緒「正気か？相手はまだピンピンしてるのにか？」

李衣菜「ギリギリまで接近戦して、隙を見つけて撃つ。隙があるかは分からないけど…」

奈緒「思いっきりギャンブルじゃねえか、それ」

加蓮「でも悪くないね。何もしないよりは、面白そう」

李衣菜「でしょ？奈緒はとにかく、何時でもプラズマサンダーを使える状態にしておいて」

奈緒「…了解…！」

牛剣鬼「ゆくぞお!!」

メカ牛剣鬼が来る。

李衣菜「…ッ！」

李衣菜（相手に圧されるな…。私…！）

李衣菜「だああああ——！」

ガッ

牛劍鬼「ツ！むううく…!?」

ガードするようにクロスさせた両腕を突き上げ、振り下ろさんとしたメカ牛劍鬼の腕を受け、止める。

李衣菜「シヨルダーミサイルツ！」

その距離でシヨルダーミサイルを命中させ、双方の視界は爆煙で曇る。

牛劍鬼「目眩ましか？…小癩な…！」

劍を振るい、爆煙を切り払う。

牛劍鬼「っ…!?!」

その先には、両手の狭間に青白いプラズマ光を湛えるネオゲッター1。

李衣菜「小癩でも充分だよ…ツ！」

李衣菜「プラズマサンダーアアア—!!」

至近距離から、プラズマサンダーを叩き付ける。

——爆発。

奈緒「やったか!?!」

加蓮「磁気嵐でリーダーが…。倒したと考えるのは早計だよ」

李衣菜「…みたいだね。来るよ…！」

黒煙の中から姿を現すメカ牛剣鬼。その姿は、

奈緒「ほ、ほとんど無傷…冗談キツいって…！」

李衣菜「…ツ」

牛剣鬼「そんなものか？」

李衣菜「…何？」

牛剣鬼「そんなものかアアア!?」

李衣菜「ツ!? うわっ…！」

黒煙を巻き上げて姿を覗かせた、メカ牛剣鬼の剣が、ネオゲッター1の脇腹を打ち据

え、吹き飛ばす。

加蓮「きやあっ！」

うつ伏せの状態で地面に落下。衝撃がコックピットに走る。

李衣菜「大丈夫!? 加蓮…！」

牛剣鬼「そんなものか? そんなものなのか? ゲッターよ」

李衣菜「くっ…！」

牛剣鬼「今のが貴様らの最大の攻撃か? ならば…」

牛剣鬼「貴様らに用などないわあ!!」

李衣菜「ッ！」

踏み込みと同時に振り下ろされた剣を横に飛んで躲す。

牛剣鬼「ふんっ！」

が、直後にメカ牛剣鬼はその剣をネオゲッター1目掛け投じる。

李衣菜「ぐあっ…!?!」

回避行動と姿勢制御が間に合わず、真っ直ぐ伸びた剣が右肩のアーマーを破砕させ、バランスを崩したネオゲッター1はその場に転倒。

李衣菜「ぐっ…ぐうう…！」

何とか身を起こすも、アーマーを破砕した衝撃は、右腕全体に拡がっており、右肩から血のようにオイルが垂れる。

李衣菜「あっはは…!派手にやられちゃったかな…?」

奈緒「見た目のやられ方が派手なだけだ!ネオゲッターの右腕はまだ辛うじて動く!」

李衣菜「奈緒…、ありがと。それが分かれば…!」

ネオゲッター1が、戦闘態勢をとる。

李衣菜「はあ…はあ…。ッ！」

一步踏み込んで加速し、万全な左の拳を振りかぶる。

牛剣鬼「その程度で……！」

李衣菜「わわっ……！」

ネオゲッターの拳を払い、腕を掴み、メカ牛剣鬼が体を捻ってそのままネオゲッターを投げ飛ばす。

ズウウン……

地面に大の字で横たわり、倒れ伏すネオゲッターを余所に、メカ牛剣鬼は自身が投げた剣のもとへ。

牛剣鬼「なんと他愛のない……。やはり素人か」

李衣菜「……へへっ。そうやって油断させる作戦かもよ？」

牛剣鬼「そう考えるものが、簡単に口に出すのか？」

李衣菜「さあ。どうか……？」

奈緒「おい、大丈夫なのか？息荒いぞ……？」

李衣菜「大丈夫大丈夫！ちよっと頭がクラクラしてるだけ……！」

ネオゲッターを立ち上げ、気合いを入れ直すように戦闘態勢をとる。

李衣菜（本当は大丈夫じゃないけど……。……っ痛う……）

右の脇腹。応急処置を施していた患部から、赤い滲みが広がっている。

牛剣鬼「どうした？動きが鈍いぞ」

奈緒「李衣菜…、ホントは…!？」

李衣菜「大く丈夫だつて！さ、仕切り直しだ！」

加蓮「……」

李衣菜「いづくぞ〜!!」

ネオゲッター1を走らせ、突撃。

牛劍鬼「…一思いに楽にしてやろう。来いっ！」

李衣菜「チエーンナツクル!!」

メカ牛劍鬼の剣に、チエーンナツクルを絡めさせる。

李衣菜「これでアイツの剣を…!」

牛劍鬼「…ふんっ！」

李衣菜「あ…ちよっ…!」

メカ牛劍鬼が剣を捻り、鎖をしならせ、ネオゲッター1を引き寄せる。

李衣菜「わっ…!」

牛劍鬼「死ねえい！」

奈緒「李衣菜ッ！」

李衣菜「〜〜〜!!」

寸前で上体を反らし、メカ牛劍鬼の劍戟がコックピットの表装を削る。

李衣菜「……!」

李衣菜「風通しがよくなったね……!」

奈緒「んな事言ってる場合か!」

李衣菜「このっ……!」

メカ牛劍鬼の鳩尾を蹴りを放つ。

牛劍鬼「ぬんっ!」

劍の腹が、ネオゲッター1の頭部を打ち、横に倒す。

牛劍鬼「はあああっ!!」

李衣菜「ギッ……!」

振り下ろされた劍を、張りつめた劍で持ち手を押さえ、寸前で受け止める。

牛劍鬼「この……!覚悟を決めい!」

李衣菜「ギギ……!そう簡単に、誰が諦めるって!」

グググ……

奈緒「押し負けてるぞ!」

加蓮「ネオゲッターのパワーじゃ、ね……」

牛劍鬼「こんなもので……、この程度の実力の者に、牛餓鬼は負けたと言うのか!」

李衣菜「牛……餓鬼……?」

牛劍鬼「ふっ……。敵であれば知らぬのも無理なからう……」

奈緒「お前みたいにたまに名乗ってくる奴もいたけどな」

牛劍鬼「牛餓鬼はまだ百鬼衆の一員ではない」

牛劍鬼「かつて百鬼兵の1人として、貴様らに勝負を挑み、そして死んだ」

加蓮「ふうん……。で、その大した事ないのがどうしたって?」

牛劍鬼「牛餓鬼は……牛餓鬼はワシの倅だった!」

李衣菜「え……?」

奈緒「何……だって……?」

牛劍鬼「ワシも戦士としてならした男。立派に務めを果たした死であるならば、戦士として納得できよう」

牛劍鬼「しかし!1人の親として、倅を殺した者達を許す事など出来ん!」

奈緒「親が仇討ちって訳か……」

牛劍鬼「牛餓鬼を討つたのは、実力から見ても貴様らではなからうが、ゲッターの首を牛餓鬼の墓前に捧げる!覚悟せい!」

加蓮「好き勝手な事言ってくれちゃって……!」

奈緒「身に覚えのない恨みで殺されてたまるかってんだ!」

李衣菜「——……けるな……!」



加蓮「リーナ？」

李衣菜「ふぎけるなああああ!!」

牛劍鬼「!？」

ネオゲッターの力が増す。

奈緒「おい…、それ以上は……」

李衣菜「お前達の、お前らのせいで、どれだけの人が家族と離れ離れになったと思ってるんだああ!!」

チエーンナツクルの鎖が千切れるのも厭わず、メカ牛餓鬼を押し切り、頭突きで突き飛ばす。

牛劍鬼「ぐう…っ!？」

李衣菜「ただちよつと離れただけじゃない、もうずっと、一生会えなくなった人だっているんだぞ!?!それなのに……!」

右手でメカ牛餓鬼の頭を掴み、左手を失った左の腕で殴り付ける。

李衣菜「アンタだけ仇討ちって言うかあああツ!!」

ゴスツ ガンツ ズガツ

牛劍鬼「ぐふっ…!?!おお…!」

李衣菜「このっ……!」

加蓮「ちよつとリーナ…！落ち着きなつて…！」

李衣菜「ううああああ!!」

奈緒「ダメだ…！こつちの声聞こえてない！」

牛劍鬼「素人が…！舐めるなあ!!」

ネオゲッターを蹴り飛ばす。

李衣菜「うぐっ…！」

牛劍鬼「単純な怒りなどで、この牛劍鬼を越える事など出来ん！」

李衣菜「はあ…っ！まだだ…！アンタみたいな奴に絶対負けない！」

奈緒「少し落ち着けよ李衣菜！一体どうしたってんだ!？」

李衣菜「誰だつて戦いたいんだよ！みんな…家族を、大切な人を奪われて！」

李衣菜「なのに！戦う力もないから！仇討ちだつて出来ない人はたくさんいるんだよ！」

李衣菜「だから、私はそんな人達の代わりになるつて決めたんだ！その為に、ゲッターに乗るつて！」

奈緒「李衣菜…」

加蓮「それがリーナの戦う理由つて訳…」

牛劍鬼「ふんっ！思いだけでは、成し遂げられぬわっ！」

「そうだな。力があれば、また違うな」

奈緒「この声は……！」

李衣菜「晶葉！」

晶葉「李衣菜の覚悟、確かに聞いたぞ！」

ブロオオオオンッ

牛剣鬼「むっ！何奴！一騎討ちにトラックで乗り込んでくるとは……！」

古田「ひいっ！生きた心地がしないッスよっ！！」

晶葉「李衣菜、受け取れ！」

輸送車輛の後部ハッチが開き、突き出した柄が、ネオゲッター1に差し出される。

李衣菜「これって、剣……？」

晶葉「そう！ネオゲッター2の華奢な腕には使えず、ネオゲッター3には必要ない」

加蓮「必要ない、ね……」

晶葉「ネオゲッター1の為に作り上げた必殺剣、その名も、ソードトマホークだ！」

李衣菜「ソードトマホーク……」

奈緒「鏢の部分がトマホークになってる意味は……？」

晶葉「デザイン性には突っ込まないのがセオリーだ」

奈緒「そ、そうか……」

李衣菜「ともかくありがとう、晶葉。これでまた戦える」

加蓮「でももう左手ないよ？どうするの？」

李衣菜「そこは何とか、する！」

片手でソードトマホークを構える。

牛劍鬼「ふんっ…！その状態でこのワシと剣で勝負しようとは」

牛劍鬼「その無鉄砲さ、後悔するがいい！」

お互いに剣を構え、相對する。

晶葉「古田、全速前進だ。今の内に離脱するぞ」

古田「り、了解く！こんなところからは一刻も早く離れるツス〜！」

プロオオオオン…

李衣菜「——…はっ！」

牛劍鬼「セイッ！」

——  
ザンッ

李衣菜「ぐっ…！」

牛劍鬼「ふんっ」

李衣菜「でえええええいつ!!」

牛劍鬼「!？」

刹那の交差。メカ牛剣鬼の一太刀で左肩口に傷が入るのも構わず、振り返り様に刃を向ける。

牛剣鬼「くっ……！」 ガキンツ

李衣菜「うう……ああああ——!!」

鏢迫り合い。気合いでネオゲッターが勝る。

李衣菜「このおー……ッ!!」

牛剣鬼「まだ……負けん！」

李衣菜「ぐっ……!!」

剣の柄で弾き、ソードトマホークを上げたネオゲッターの胸部に、深々と剣を突き入れる。

奈緒「李衣菜!?!」

李衣菜「まだ……掠り傷ううう!!」

しかし、ネオゲッターは臆する事なく、寧ろ更に、メカ牛剣鬼の剣を体に突き込んでゆく。

李衣菜「これで、もう離さないよッ！」

牛剣鬼「こ、こやつ……!それだけ痛め付けられながら、何故……!?!」

加蓮「そりゃ、息子の仇討ちもそうだけど、誇りとか威信なんてもので戦ってるアン

タとは、まるつきり違うわけだしね？」

牛剣鬼「何：!? 貴様らには、戦士の誇りが無いとでも言うのか？」

加蓮「あるわけ無いじゃん！ 私達は、戦士じゃなく、アイドルだから」

牛剣鬼「アイドル：!? アイドルとは何だ!？」

加蓮「アンタには一生、分かる訳ないね」

奈緒「取り敢えず、今の李衣菜にあるのは……—」

李衣菜「お前を倒すって事だけだああ!!」

上段にソードトマホークを振り下ろし、剣を握ったメカ牛剣鬼の右腕を肩から切断する。

牛剣鬼「ぐおおお!!」

牛剣鬼「コイツ……。今のコイツを支えておるのは、力なき民人への想念か……!」

牛剣鬼「だが、この牛剣鬼とて想いの強さでは負けん……!」

牛剣鬼「でいええええいつ!!」

李衣菜「つゝゝ!!」

態勢を整え、烈迫のメカ牛剣鬼と正面から打ち合い、轟撃を重ねる。

李衣菜「ぐうううう……!」

牛剣鬼「ぬうううんつ!!」

李衣菜「いやあああああつ——!!」

ガツキイ………

一瞬が一時にも感じられる刹那。

メカ牛剣鬼の剣が、閃いて宙を舞う。

牛剣鬼「——!!」

李衣菜「ふんっ！」

ソードトマホークを振り下ろし、メカ牛剣鬼の肩から袈裟に切り開き、致命的な傷を与える。

牛剣鬼「……ふ……ふ……ふ……。想いの強さが、ほんの僅かに勝っていたと言う事か……」

李衣菜「牛剣鬼……」

晶葉『終わりだな。李衣菜、トマホークサンダーだ』

李衣菜「トマホークサンダー？」

晶葉『ソードトマホークは、ネオゲッター専用の剣。当然、プラズマエネルギーを使えるようになってる』

李衣菜「成る程……」

ソードトマホークを構え直し、メカ牛剣鬼に向かう。

牛剣鬼「自惚れるなよ、小娘……。これから先、想いだけでは絶対に越えられぬ壁が待つ

ておるぞ…」

李衣菜「分かってる。でも、その時は何としても越えてみせるよ。仲間と一緒に」

奈緒「お前…」

牛剣鬼「仲間、か…。ふふふ…、面白い…!」

牛剣鬼「ならば、貴様らのその足掻き、冥土でしかと見届けさせてもらおう…」

李衣菜「うん。息子さんよろしく」 チャキ…

ネオゲッターが、ソードトマホークを水平に構える。

牛剣鬼（復讐を誓った戦場で、よき眼差しの戦士と出逢う…。なんと数奇な運命で

あつたか…）

李衣菜「でええやああああ!!」

メカ牛剣鬼の胸に、ソードトマホークが突き立つ。

牛剣鬼「牛餓鬼、今行くぞ…!」

李衣菜「トマホオオオーク、サンダアアーツ!!」

メカ牛剣鬼を包む、眩く青白いプラズマの閃光。

その光熱は、メカ牛剣鬼を内側から溶かし、砕き、破壊していった。

激しい炎の柱は、爆音を伴って、牛剣鬼の魂を息子の元へと送る。

李衣菜「——牛剣鬼…。アンタは戦士として立派だったよ」



李衣菜「でも、その戦士としての誇りが、アンタも、牛餓鬼も殺したんだ……！」

奈緒「李衣菜……」

加蓮「……」

ヒュ……ウウ……ン…… ガクツ

李衣菜「な、何……!？」

奈緒「エネルギー切れだよ。……つたく……」

李衣菜「エネルギー切れ……?……はは……!良かったあ……」

奈緒「何がいいんだよ!?!ゲッターもこんなポロポロになるまで戦いやがつて……」

加蓮「おまけに、これから私達を巻き込む気満々だし。毎回こんなんじゃ、先行き不

安だよ?」

李衣菜「あ、あはは……。そこはまあおいおい、慣れていきますって……」

奈緒「そんなトコまで付き合えるか!お前が慣れるまでに誰か死ぬぞ?」

李衣菜「だ、大丈夫だよ……」

奈緒「はあ?何を根拠にそんな……」

李衣菜「結構な強敵だったけど、こうしてみんな生きてるんだ……」

加蓮「元気に、とはいかないけどね」

李衣菜「ははっ、そうだね。……けど、ゲッターの力に、私達の、この悪運の強さがあ

れば、例えどんな相手が来たって負けたりしない……よ……」

奈緒「……」

奈緒「へっ……!どんな理屈だよ?そりや……」

李衣菜「だから……、私達は……!」

奈緒「!? おい、李衣菜?どうした?」

李衣菜「——」

奈緒「おい、李衣菜!可笑しな冗談はやめろよ!おい、返事しろ!!」

加蓮「な、奈緒……!リーナの信号が……!」

奈緒「李いい衣菜あああああ——!!」

くくく 翌日 早乙女研究所 くくく

—— 医務室。

医者「——:頭部裂傷、腹部貫通創、大腿骨の複雑骨折。……おまけに出血多量による貧血と。常人であれば全治に1ヶ月以上掛かりますが……」

医者「李衣菜さんの回復能力が異常なのか、既に全身の治療が進んでいます。経過観察で2週間、様子を見ましょうか」

李衣菜「へへへっ……。昔っからケガが治るのだけは早かったんだよね」

奈緒「へへへ、じゃねえよ!つたく……。変に心配させやがって……」

加蓮「ホンツト、医務室にリーナが担ぎ込まれる時なんて、本気で死んだと思って側から離れようとしなかったんだから」

奈緒「あれは…！お前が変な冗談で李衣菜が死んだと思いついてしまったからだろ！」

加蓮「だからそれはごめんって。こっちのコンピューターも壊れてて、リーナが信号が表示されなかったんだって！」

奈緒「勘弁してくれよ…。まったく…」

李衣菜「心配してくれたんだ…？」

奈緒「あ…、それは…その…っ」

加蓮「…」 ニヤニヤ

奈緒「なんだよ。…ああもう、ただ単に、チームメイトが目の前で死なれたら、寝覚めが悪いつて、それだけだよ…」

李衣菜「そうなんだ…」

奈緒「当たり前だろ！」

李衣菜「それでもありが…いや、ごめん…」

奈緒「…だあー！もう、気にするなよな！お前の無茶な戦いで、あたしらだつて無傷じゃないんだ」

奈緒「ほら、見えんだろ、この頭の包帯！ぱっくり切れちまって…。痕が残ったらど

うするつもりだあ？」

李衣菜「あはは……」

奈緒「笑い事じゃねえ！アイドルだったのに……、加蓮も、打ち身で酷いんだぞ？」

加蓮「アタシなら別に、ケガくらいなら大した事ないけど？痕残るようなものでもないし」

奈緒「お前なあ……」

李衣菜「まあまあ。もしなんかあったらさ、その時は、私が責任とるからさ！」

奈緒「……は？」

李衣菜「たーかーらー、もし奈緒の頭に傷が残って、アイドル続けられないってなったらさ」

李衣菜「その時は、私が責任とるから！」

奈緒「……」

奈緒「くくくつ／＼」 カアツ

李衣菜「奈緒？顔赤いけど、どうかした？」

奈緒「……ば、バカ……っ！」

ドタドタ バタンツ

李衣菜「っ！……何なの……？ホント……」

加蓮「……天然ジゴロ……」ボソ……

李衣菜「へ？なんか言った？」

加蓮「別にー？リーナもこんなで、ネオゲッターもボロボロじゃ、しばらくアタシらも暇になるなーって、それだけ」

李衣菜「うゝっ……！ごめん……」

加蓮「ま、精々大人しくしてるんだね。主任も見舞いに來るって言ってたから」

李衣菜「うわっ、マジかあ……。色々ありがとね、加蓮」

加蓮「まあいいよ。嬉しいチームになりそうだし」

李衣菜「え？そうかなあ……」

加蓮「リーナの戦う理由、ちゃんと聞いたから」

李衣菜「え……。あはは……」

加蓮「……それじゃ、奈緒追いかけなきゃ」

李衣菜「うん、それじゃ」

加蓮「今度見舞いに來る時は、ハンバーガーくらい差し入れに持ってくるよ」

李衣菜「それ、自分で食べたいだけじゃないの？」

加蓮「さあー？それはどうだろ。……じゃね」

ガチャッ バタンッ

李衣菜「…？ 加蓮なりの友好表現なのかな？」

李衣菜「にしても、嬉しいチームね…へへ…！」

李衣菜「——ツつつ…！痛いっ…！笑ったら、お腹の傷が…、痛た…」

李衣菜「え、衛生兵——！！  
つづく

## 第20話『非道の魔王鬼!!』

~~~~~ 市街地 ~~~~~

李衣菜「よおっし、と！これで終わりっ！」

虫の息で倒れ伏したインベーターの頭部を、ソードトマホークで突き潰し、念入りに押し込んでトドメを刺す。

奈緒「つたく、インベーターの連中、何もこんな街中に現れなくても……」

加蓮「ね。すっかり静まり返っちゃって、正にゴーストタウンだね」

李衣菜「インベーターが来なかつたら、ここも繁華街なのにね……。復興もまた一からやり直し……」

晶葉「インベーターが出現するポイントは、ゲッター線の関係施設か、人間の密集している都市部に集中している」

加蓮「ゲッター線だけじゃなくて、人間も目の敵にしてるって言うの？」

晶葉「これまでもニューデリーやカイロ……人間の密集している都市部に、インベーターの襲来は確認されている。人類に対して敵意に似たモノを感じられるのも事実だな」

李衣菜「インベーターにも、そう言うの分かるの？」

奈緒「第一、インベーターはゲッター線をエネルギーに活動してるんだろ？何でアタシらに襲いかかってくるんだ？」

晶葉「分からも。或いは、エネルギー源としてゲッター線を利用し始めた我々を、餌を奪う敵対存在と認識して襲ってきているのかもしれない」

加蓮「ふうん…」

李衣菜「でさー晶葉、これでいいんだよね？」

晶葉「恐らく大丈夫だろう」

加蓮「恐らくって、頼りないなあ」

晶葉「以前に卯月達に捕獲してもらったインベーターを解剖して、得られた情報だ」

晶葉「実証データが少ないから間違いない、とは言えないが、それでインベーターにトドメを刺す事は出来た筈だ」

奈緒「ホント、あの目みたいな目立つ奴が弱点なのかよ？」

晶葉「連中の肉体と言える黒い部分、それ自体は極微細な微生物の集合体のようなものだった」

加蓮「だからあいつら、液体みたいに自由に体を変形させて、こっちの攻撃を躲したり、狭い隙間に入り込んだりしてるわけだよな？」

晶葉「バクテリアのような単細胞生物を寄せ集める事によつて、ゲッターほどの巨体を構成しているが、ならばどうやってその体を維持していると思う?」

李衣菜「その、単細胞な連中だけじゃダメなの?」

奈緒「簡単にまとめんな。ただのバカの話してるみたいだぞ」

李衣菜「バカつて…、間違つてないでしょ?」

晶葉「まあな。単細胞生物と分類される種には基本、我々のような思考能力はない」

李衣菜「ほら」

奈緒「ムッ」

加蓮「2人とも、晶葉の話聞こうよ」

晶葉「コホンッ。ともかく、生物として単純すぎる故、インベーダーの体を構成する細胞部分自体には、その肉体を維持しようと言う機能はない」

晶葉「ならば、インベーダーを構成する体の何処かに、肉体を維持するための指令を出す器官がある、と考えるのが妥当だろう」

奈緒「そう言うのつて、普通ここ…脳みそじゃないのか?」

晶葉「そうだ。だがインベーダーは、生物のような姿をしてこそいるが、さつきも言つた通り実体は微生物の集合体。ゲッター線を吸収して生命活動を行っている都合上、消化器官のようなものさえなければ、全身に信号を送る頭脳だって存在しやしない」

加蓮「人間みたいな思考能力を持たず、本能だけで動く生き物……」

晶葉「だが先にも言った通り、その体を支え、全身に指示を送る、分かりやすく言つたところの核となるモノが存在する。それが――」

李衣菜「たつた今私が破壊した、この目みたいな奴つて事……」

晶葉「インベーターの中でも一際目を引くこの黄色い目のような器官……。解剖を進めて詳しく調べてみたところ、人間で言う神経のようなものも確認された」

晶葉「この神経のようなものを使って、全身の細胞に肉体の指示の信号を送っている可能性が高い」

奈緒「可能性が高いつて……」

晶葉「現に、今インベーターは活動を停止し、再生する兆しはないだろうか？」

李衣菜「そう言われれば、ううん……」

晶葉「私の仮説は今、ここで立証されたわけだな。このインベーターの核となる部分、それを全て破壊しさえすれば、ゲッター線を用いずとも奴等を倒せる！」

奈緒「え、つ……？全部なのか？」

晶葉「ああ。奴らに黄色い目のような器官は無数にあるからな。どれが中核とも検討がつかん」

加蓮「例えば中核があつたとしても、欠片の1つでも残つてれば、そこから再生してく

る可能性があるって訳だしね」

晶葉「念には念を入れて、な。奴らの器官の全てを根絶やしにして、完全に機能停止させる。これに勝る安全策はないよ」

加蓮「つて言われても、1体1体にそれじゃあ骨が折れるどころじゃないよ」

奈緒「加蓮の言うとおりだぞ。今日だって、10体のインベーター相手にネオゲッター1機で、全滅させるのに1時間は掛かっているからな。ネオゲッターも中破だし」

李衣菜「でも、ネオゲッター3のプラズマブレイクで焼き殺したり、ネオゲッター2のプラズマブレードで切り刻んだり、上手くやってたじゃん？」

奈緒「お前が問題だってんだよ！またコックピットに被弾しやがって！」

晶葉「血を流した李衣菜の顔も、だんだんと見慣れた気がするな」

加蓮「もう心配して気疲れするだけ損だよ」

李衣菜「もうくっ！何さみんなして！ちよつとは私の体を気遣ってくれてもいいんじゃない？」

奈緒「こつちも慣れたって言うてんだよ。：お前自身、特に何ともないんだろ？」

李衣菜「まあね！頭の傷もこのくらいなら一晩寝れば治るし。：っ痛たた……」

奈緒「こりゃ、精密検査の結果が楽しみだな」

加蓮「何処が折れてるか、賭けてみる？奈緒」

奈緒「…右胸骨」

加蓮「そう？じゃあ私は左頸骨かな」

李衣菜「2人とも不謹慎ーッ！」

晶葉「はははっ！友情麗しい限りだな？」

李衣菜「これは仲良しって言わない！」

古田「あの…、晶葉ちゃん？」

晶葉「おお、古田。すまない、どうした？」

古田「状況が終了したなら、早く帰りましょうよ…」

晶葉「ん？それもそうだな。こんな廃墟同然の市街地で長話もないか…」

古田「つて言うより！何時までソードトマホーク運ぶためにこんな最前線まで無茶しなくちやならないんツスカ!？」

晶葉「む…。それはおいおい何とかするさ」

李衣菜「古田さんそれはないんじゃないですか？私はいつもここで戦ってるんですよ。」

古田「李衣菜ちゃん達はいいいツスよ…。装甲板でしっかり守られたゲッターの中なんすから…」

古田「こっちはね!?薄い防弾ガラス1枚の輸送車ツスよ!？」

李衣菜「それは…まあ……」

晶葉「私も同乗してるんだがな」

古田「こんなのいくら命があつても足りないツス！横暴ツス！待遇改善を要求してストライキも辞さないツス……！」

李衣菜「わあああ……！まずい！古田さんがキレた！」

晶葉「これは、古田がヒートアップする前に研究所に帰らないとな」

ピピッ ピピッ

加蓮「何の音？」

晶葉「こつちの無線に連絡だな。そう言えば、さつきまで戦闘警戒中で、無線を封鎖していたが……」

ガチャッ

晶葉「私だ。何かあったのか？」

美穂『——晶葉ちゃん?! わた…私だけ……!』

晶葉「美穂か。どうしたんだ？何やら慌てているようだが……」

美穂『あの…あの…! ごめんなさいっ! 私のせいで……!』

晶葉「落ち着け。話が急すぎて分からん。まず何があった？」

美穂『あの…っ。私が悪くて…、悪いの…! そしたら茜ちゃんが……!』

晶葉「茜……？」

李衣菜「ねえ、確か斬チームって……」

奈緒「今の時間は、哨戒任務中だったな。今日は、九州方面か」

晶葉「美穂、お前が悪いのは分かったから、一度落ち着いて。状況をはじめから、正確に報告するんだ」

美穂『一度落ち着いて……。落ち……。着いて……。』

晶葉「どうした？」

美穂『う……。うえええええん——!!』

晶葉「どうした!?! おい、美穂? 美穂!」

アーニヤ『アー、……アキハ?』

晶葉「アーニヤ! 美穂と一緒にだったのか。丁度いい、美穂の代わりに説明を頼めるか?」

アーニヤ『Да……その、分かりやすく、簡単に言くと、ですね?』

晶葉「うむ」

アーニヤ『アカネが、百鬼帝国にСнижение……撃墜、されました——』

~~~~~ 数分前 九州上空 ~~~~~

美穂「……お天気、あんまりよくないね」

アーニヤ「Da…そうですね。こういう日は、積乱雲に注意、してください」

美穂「う、うん…！そうだね…っ。下手に雲に突っ込んで、雷に当たっちゃったりしたら大変だもんね」

茜「アーニーニヤさー！美穂さー！美穂さー！！」ズアツ

アーニヤ「アカネ…」

美穂「真つ黒な雲を突っ切って…。スゴいなあ…」

茜「!!? お2人、どうかしましたか!?!」

美穂「な、何でもないよ?それで、南の方はどうだったの?」

茜「はい!私が見てきたところは全く異常なしですっ!!」

美穂「そっか。…熊本方面は異常なし、と…」

茜「退屈でした!」

美穂「な、何も無いのは良いことだよ!平和ってことなんだし…」

アーニヤ「ですが…、あまり動きがない、というのも、変、です」

美穂「そうなのかな?確かに、前に新しい研究所が襲われたって言った日から、あんまり百鬼帝国の人襲ってきてないけど…」

アーニヤ「百鬼帝国の…ブライは、ワタシ達に、堂々と啖呵、を切ってます」

アーニヤ「このまま大人しく引き下がるとは、思えません。何処かで、力を蓄えてい

るに決まっています！」

美穂「だから油断できないって、言ってることは分かるけど……」

茜「大つ、丈夫です！百鬼帝国がどんな手段で出てこようと！私達のゲッター軍団が正面から打ち砕いて！百鬼帝国を打ちのめしてやります！」

美穂「ふふつ、頼もしいなあ」

アーニヤ「——…？」

美穂「アーニヤちゃん…：どうかした？」

アーニヤ「アー、今、微かに、ですが…、レーダーに金属反応が…」

美穂「金属って…、この辺りは山だよ？」

アーニヤ「Да…：レーダーの誤認でなければ…。一度、高度を落としてみましょう」

美穂「あつ、アーニヤちゃん！」

紫電号に続いて、金剛号、烈火号と高度を下げ、雲の下に出る。

アーニヤ「これは…！」

茜「ビンゴみたいですね！何かの工場ですか？基地のようにも見えます！」

美穂「で、でも可笑しいよ！これだけの規模の基地なのに、レーダーにちゃんと映らないなんて！」

アーニヤ「……」。今、衛星からの映像と、リンクしてみました。衛星写真には、この



基地は映ってません」

美穂 「どう言うこと?」

アーニヤ 「アー…、恐らく、ですが。ジャミングの一種のようなもの、だと、思いますが」

茜 「ジャミル…?それってなんですか!」

美穂 「ジャミングだよ…。つまり、可笑しな電波を出したりして、この基地そのものを隠してること?」

アーニヤ 「Да…возможно…。こうして発見するには、肉眼で見つけるしかなかったでしょう?」

美穂 「そなたっ!早く、研究所に連絡を…!」

アーニヤ 「Нет…:ジャミングが、仕掛けられている以上、ここからでは、通信は出来ません…」

美穂 「…:ホントだ。早乙女研究所、応答してください!」 ザザー

茜 「連絡してる暇もなさそうですよ…:迎撃機が出てきました!」

美穂 「私達をここから帰さないつもりなの!」

アーニヤ 「? 戦闘機だけ、ですか…?」

茜 「そのようですよ!」

シユバツ

茜 「これなら楽勝ですな！」

美穂 「あ、茜ちゃん！」

茜 「ミサイル発射アー！！」

ズドツ ズドントツ

速度を上げて急降下しながら、上昇してきた百鬼戦闘機の先鋒2機を、すれ違い様にミサイルで破壊する。

百鬼兵 「な、何だあ!？」

茜 「合体するまでもありません！このままゲットマシンで叩きます！」

百鬼兵隊長 「奇襲にやられたか…。各機、連携を崩すな！突出した1機に狙いを絞れ  
！」

百鬼戦闘機が、烈火号に殺到する。

美穂 「あ、茜ちゃん…！」

アーニヤ 「…仕方ありません。ミホはそのまま、研究所との通信を続けてください。  
雲の上に出れば、ジャミングの範囲から出られるはずですよ」

美穂 「あ、うん！…アーニヤちゃんは？」

アーニヤ 「アカネの援護、行きますっ！」

ゴアツ

研究所と連絡を取るため、金剛号は上昇し、紫電号は烈火号に続くため速度を上げる。百鬼兵隊長「数ではこちらが勝っている！四方から包囲しろ！合体される前に仕留めるんだ！」

茜 「うう~~~~っ！」

バラララララッ

茜 「ツ!？」

百鬼兵隊長 「ツ！後ろ…!? 奴の援軍か…！」

茜 「アーニヤさん！」

アーニヤ 「アカネ！機動力でワタシが囮になります！アカネはその隙に攻撃を！2機で1機、確実に仕留めます！」

茜 「リョーカイです！」

アーニヤ 「では！」

百鬼兵隊長 「攻撃開始！」

ババババババッ

四方からほぼ同時に降り注いだ、機銃掃射による弾幕の雨を左右に別れてやり過ぎす。

アーニャ「こちらですよ！」

百鬼兵「俺達を攪乱するつもりか？面白い！」

紫電号後部をふらつかせ、相手を挑発するように飛びながら、狙いを引き付ける。

百鬼兵「機体をふらつかせようが……！」

茜「そこですつー！」

百鬼兵「しまった…ツ！」

ズドオンツ

茜「1機撃破です！幸先快調ですな！」

百鬼兵隊長「うぬう…。やはりゲッターほど簡単、とはいかないか」

百鬼兵「隊長！妙だと思いませんか？」

百鬼兵隊長「何？どうしたと言うんだ？」

百鬼兵「ゲッターは3機で合体するマシンの筈でしょう？1機足りません！」

百鬼兵隊長「…成る程、2機で狙いを引き付けて、残りの1機が援軍を呼ぶ算段か。…

させんぞ！」

百鬼兵隊長「各機、紫のは囷だ！先ずはピンクの機体に攻撃を集中させろ！」

茜「…こちらを狙ってきましたか！望むところですよ！」

アーニャ「アカネ！あまりミホから離れては、いけません！」

百鬼兵隊長「貴様の相手は私だ！」

アーニヤ「ツ!?!」

上空からの奇襲攻撃を、紫電号を捻って躲す。

百鬼兵隊長「そちらも慣れているのだろうか、戦闘機での戦闘はこちらに分がある。ここは抑えさせてもらおうぞ！」

機銃の雨が、紫電号目掛け降り注ぐ。

アーニヤ「ツ~~~~!!?!振り切れない……!」

茜「大変です!敵機が1機、美穂さんの方に!」

アーニヤ「そんな……ツ!」

茜「く~~~~!!」

百鬼兵「逃がさんぞ!」

茜「このお~~~~!!」

百鬼兵「ぐおっ!?!」ズドンッ

茜「今ですね!」

茜「美穂さアア~~~~んッ——!!」

ギョオッ

美穂「——研究所……早乙女研究所!応答してください!お願い……!」

美穂「…ダメ…。もう少しここから距離をとらないと……」  
ピーッ ピーッ

美穂「!?」

百鬼兵「もらったぜ！」

美穂「て、敵が……！回避を……」

百鬼兵「させるかよっ！」

百鬼戦闘機の機銃が、金剛号の装甲の上を弾く。

美穂「きや…きやあぁっ……！」

百鬼兵「ははっ！何だよこいつ！まるで素人じゃねえの！」

美穂「金剛号が堅いお陰助かったけど、ミサイルを撃たれたら……！」

百鬼兵「ならとつとと死にな！」

美穂「——っ……！」

金剛号に狙いを定め、ミサイルが放たれる。

茜「美穂さ————んッ——！！」

金剛号に覆い被さるように、烈火号が重なる。

美穂「茜ちゃん！」

烈火号のエンジン部に被弾。小さな朱の華が、微かに咲く。

茜 「美穂さん……私よりも、今の内に……」

美穂 「え……あ、うん！——…当たって……」

被弾した烈火号の影から、金剛号がミサイルを放つ。

百鬼兵 「何……？ぐわあっ——!?」

撃墜。

茜 「やりましたね！」

美穂 「そ、それどころじゃないよ……大丈夫なの！」

茜 「掠り傷です！私に怪我はありません……ですが——」

烈火号が高度を落とす。

美穂 「茜ちゃんっ!!」

茜 「えーっと、エンジンの消火は……！出来てますね！再起動は……無理ですか！」

美穂 「ま、待ってて！今、合体を！」

茜 「ダメです！何とか操縦桿でコントロールできてますが、落下の衝撃の振動を押

さえられません！」

茜 「このまま合体すれば、美穂さんも墜落に巻き込まれる危険があります！ですか

ら、来てはいけません！」

美穂 「で、でもお……！」

茜 「私の方は大丈夫ですから！今の内に離脱を！敵もアーニヤさんが陣形を崩してくれたようですよ！」

アーニヤ「ハァ…向こうの、4機の内、2機、撃墜しました。逃げるなら今、ですね」  
美穂「……分かった。必ず、必ず迎えに来るから…ッ！」

茜 「期待してお待ちしてまあ〜す!!」

烈火号が、山間に消えていく。

アーニヤ「さ、ワタシ達も早く…。態勢を整えなくては、いけません…ね」

美穂「グスツ…。うん…。必ず、助けに来るから…だから……」

美穂「ごめんなさい…。茜ちゃん……」

くくく 現在 新早乙女研究所 くくく

莉嘉「ふーん、そんな事があつたんだ〜」

美嘉「大変だったね…。ほら、とりあえず顔拭きな」 つたオル

美穂「私が…つ、私が通信に集中しすぎたせいで…もう少し周りに気を配ってれば、茜ちゃんは…！」

アーニヤ「HeT…それは、違います。ミホ、自分の務め、しっかりと果たそうとしてました。それは、悪い事じゃ、ないです」

美嘉「アーニヤの言うとおりでしょ？過ぎた事を気にしすぎても仕方ないって。前向



きに来ることを考えてこ？」

莉嘉「かな子が作っててくれた牛乳寒天があるよ！これ食べて元気出そ☆」

美穂「い、以外とさっぱり…」

美嘉「毎日訓練とか哨戒で、疲れて帰ってくるパイロットのために、サラツと食べやすいのを、つてき」

美嘉「まずは、美穂もゲッターも、元気になるトコからだよ。遠慮しないで食べちゃいな」

美穂「う、うん…。ありがとう、美嘉さん、莉嘉ちゃんも」

莉嘉「えっへへっん！」 ドヤツ

アーニヤ「アー、アキハ？ワタシ達の、ゲッターの調子は、どうですか？」

晶葉「ん？損傷自体、大した事はない。金剛号が被弾したそうだが、元々装甲は厚い。機銃の銃弾程度では傷が付く事はないさ」

晶葉「アーニヤも、ゲットマシンの状態で上手く立ち回ったじゃないか。戦闘記録ではかなりの混戦だったようだが、ゲットマシンは無事に持ち帰った。無茶な機動が、多少エンジンに響いているがな」

アーニヤ「Я сожалю…:すいません…」

晶葉「いいさ。充分許容範囲内だ」

アーニヤ「では……」

晶葉「ダメだ」

アーニヤ「……まだ、何も言っていないです……」

晶葉「どうせ直ぐに出撃するつもりなんだろう？それは、許可できない」

アーニヤ「……でも」

晶葉「敵襲があつた昨日の今日だぞ？向こうだつて防備を固めてる」

晶葉「それに、ゲッターはもちろん、アーニヤにも休息が必要だ。茜が心配なのは分かるが、今は落ち着け」

アーニヤ「……D a a : 分かりました」

晶葉「敵機に撃墜されたとはいえ、その状況なら茜も無事だろう。この研究所でかの子についてタフなくらいだ」

アーニヤ「そう、ですね……。アカネを信じて、今は待ちます……」

くくく 山中 くくく

茜「むう……」 カチャカチャ

茜「むううくく……？」 カチャカチャ……

茜「むうううううくく……!？」

ポフンツ

茜 「ッだあああああああーッ! 分かりませんッ!! 何が『猿にも分かる』です

か! この整備マニュアルは! 私は猿以下ですか!」 ウキーツ

茜 「——!?!」

咄嗟に物陰に身を隠す。

「おい、本当にこつちで合ってるのか?」

「ああ、さつき確かに、こつちから爆発音が聞こえた」

茜 (…百鬼兵ですか…。厄介ですね…)

百鬼兵1 「おい、見ろよ! ゲットマシんだ!」

百鬼兵2 「マジだ…。パイロットはコックピットにはいないな…」

百鬼兵1 「まだそう遠くには行っていない筈だ。この辺りを探すぞ」

百鬼兵2 「おう」

茜 (不味いですね…。! 相手は2人。最悪、強行突破もできませんが…。!)

ガサガサッ

茜 (?!)

百鬼兵1 「誰だ!」

百鬼兵2 「ゲッターのパイロットか!?!」

「う、うわああああつ!!」

「百鬼帝国め！くらええ!!」

茜（子ども!?!）

百鬼兵1「ぐわっ…!何だ、このガキ!」バキッ

少年「わああああ!!」

少年B「マサルッ!」

百鬼兵2「2人まとめて死ねえ!!」

マサル「うわああああ正兄ちやっくん!!」

少年B「ツッッッ!」

茜「トラーーーーーイッ!!」ドワオ

百鬼兵2「何…!?!うおっ…!」

2人の少年に向かって銃を構えた百鬼兵を、タツクルで怯ませ、手放した銃を奪い取る。

百鬼兵2「き、貴様…!」

茜「銃を突き付ける人は!突き付けられる人の気持ちを知るべきです!!」

バラバラッ

百鬼兵2「う…ごお…!」

茜「っ…!」

百鬼兵「この……!」

茜「ッ!」

背後から忍び寄った百鬼兵の拳を、間一髪腰を屈めて躲すが、代わりに羽交い締められる。

茜「ぐ、ぐうぐう!!」

百鬼兵「へっへっへっ……! 女子どもが調子に乗るなよ! このまま絞め殺してやる!」

茜「~~~~ッ!」 ジタバタ

マサル「え、ええええいつ!!」

百鬼兵「ぐへっ!」

百鬼兵の後頭部を、バットののような棍棒で殴り付ける。

百鬼兵「くう……! このガキ……」

マサル「い、今だよ! 正兄ちゃん!」

少年「往生せいやああ!!」

百鬼兵「!!——」

鉄パイプを加工したらしい鉄筒から、炸薬のようなものが飛び出し、百鬼兵の上半身を破裂させた。

少年「や、やった……!」

茜 「ありがとうございます！お陰で助かりました！」

少年 「へへっ！ねーちゃんこそ！ねーちゃんがいたお陰で命拾いましたぜ！」

マサル 「うわああああん！怖かったよ！正兄ちゃ〜くん！」

少年 「つたく、こいつは…。このねーちゃんだつて女なのに百鬼帝国の奴らに飛び掛かつてつたんだぞ？」

マサル 「でもお〜…。怖いものは怖いんだもん！」

少年 「はあ…。仕方ねえな…」

茜 「お2人はご兄弟なんですか？」

少年 「おう。俺、正吉つてんだ。だから、正兄」

茜 「成る程！私は、日野茜と言います！好きな食べ物はお茶です！」

正吉 「はははっ！何だよそれ。お茶は飲み物だろ？」

茜 「そうですか！では、好きな飲み物はお茶で！」

正吉 「ははっ、面白えねーちゃんだなあ」

マサル 「…ねえ」

茜 「はいっ！何でしょう？」

マサル 「…お姉ちゃん、この飛行機に乗ってきたの？」

茜 「はいっ！そうです!!」

正吉 「マジ？ スッゲエ！ ねーちゃん飛行機乗れんのか!？」

茜 「ええっ！ ただの戦闘機じゃありませんよ！ ゲットマシンです！」

マサル 「ゲットマシンって、あの、テレビによく出てるゲッターロボになるっていう

…?」

茜 「それです！」

正吉 「ええ〜マジかよ〜？ ねーちゃんみたいな女でもゲッターのパイロットになれるのか？」

茜 「流石に誰でも、と言うわけではないようですが！ 適正があれば、乗れるらしいです！」

マサル 「…適正…」

正吉 「…ま、ねーちゃんは百鬼兵をぶつ飛ばすくらいに強いからな。信じてやるよ」

茜 「ありがとうございます！」

正吉 「で、あの飛行機、壊れてんのか？」

茜 「はい！ 先程被弾してまって！ マニュアルがあるんですが、全くチンプンカンプンで困ってます！」

マサル 「…あんまり困ってるって感じしないけど」

正吉 「…飛行機、ちよつと触ってみてもいいか？」

茜 「? はい! どうぞ!」

正吉 「……」

黒く焦げ付いたエンジン部へと近付き、手では触れず、目で損傷箇所を探す。

茜 「メカに強いんですか?」

正吉 「一応な。実家が車の修理屋でさ。親父にも色々仕込まれてんだよね。飛行機見るのははじめてだけど」

茜 「そうなんですか! それで?」

正吉 「ああ…。見た目焦げてるからダメーじあるみたいだけど、表面がちよつと歪んでるだけだよ」

茜 「でも、片方のエンジンが動かないんです!」

正吉 「それじゃあ、配線関係…かも。どちらにせよ、ここじゃ直すのは難しいぜ?」

茜 「そうですか…。困りましたね! 搜索しに来た百鬼兵が戻らないと、不審がつて別の百鬼兵が来てしまいます!」

マサル 「そんな…。それじゃあ早くここから離れないと!」

茜 「ですが! 烈火号をこのままにしておくわけにはいきません! 百鬼帝国に奪われるだけは阻止しなければなりません!」

正吉 「なあ、エンジン、壊れてるのは片方だけで、もう片方は動くんだろ?」



茜 「はいーそれが、何か!？」

正吉 「それなら——」

—。

正吉 「ヒヤッホー——!! 最高だぜえ——!!」

マサル 「ひいひい——!!」

ガガガガガ——ッ

烈火号が、山の斜面を滑り降りていく。

茜 「しかし、考えましたね!」

正吉 「だろお? 墜落場所のすぐ目の前が急斜面だったからさ。片方だけでも、エンジ

ン吹かして押してやれば、こんなもんだぜ!」

マサル 「降ろしてええええええ!!」

正吉 「何だよ! 俺たちがゲットマシンに乗れる機会なんて、この先絶対ないんだか

ら! もっと楽しめよ!」

マサル 「無理だよ! だ、第一これ、どうやって止まるの…?」

茜 「どうやって止まるんでしよう!？」

マサル 「ええ——!!」

正吉 「何、坂の勢いで滑ってんだ。平らになれば止まるだろ」

茜 「あ！それもそうですね！」

マサル 「そう言うものなののおくく!!？」

急斜面を下る烈火号は、しばらくして川辺の剥き出した岩に乗り上げて止まった。

――。

茜 「いやあく！なかなかスリリングでしたね！」

正吉 「ああつ！お陰で村の近くまで一つ跳びだつたぜ！」

茜 「おー！もうそんな近くに!？」

正吉 「おう！後はうー…んと、トラックで引つ張れば持つてけるかな」

茜 「トラックの運転もできんですか！それも、父親の教えで？」

正吉 「…まあな。へへつ！そんじやトラック持つて来つから、マサルの面倒見ててくれ！」タツタツ…

茜 「了解しました！」

マサル 「……うえ……気持ち悪い……」

茜 「大丈夫ですか？しつかりしてください！」

マサル 「う、うん……」

茜 「とりあえず烈火号から降ろしますね！外の空気を吸えば、少しは気分も良くなるでしょう！」

担ぎ上げて烈火号から降ろし、適当な芝生の上に寝かせた後、一度烈火号のコックピットに寄ってから川辺に向かい、戻る。

茜 「水を持ってきましたよ！川の水なので、衛生的にはあまりよくないと思います  
が、何もしないよりはマシです！」

マサル 「あ、ありがとう…って、ヘルメットに？」

茜 「これを…ボンバア…ツ!!」

バシヤアアアツ

マサル 「……」 ポタポタツ

茜 「どうですか？夏、熱射病で倒れた部員によくやるのですが、スッキリしませんか  
!？」

マサル 「……ツプ」

茜 「？」

マサル 「ははは…あはははは！」

茜 「!? どうしました!?私、何か変なことを！」

マサル 「ご、ごめんなさい…！そんなんじゃないんだけど…。何だか可笑しくって…

あは、あはははっ！」

茜 「…そうですか！それなら仕方ありませんね！」 アハハツ

笑い合う2人の声が、しばらく川辺一帯に響き渡る。

正吉「お、何だ？俺を抜いて盛り上がるなよ！」

茜「正吉さん！」

正吉「お待たせ！取り敢えずこれで飛行機を牽引して、運べるところまで運んで、そこで隠そう！」

茜「分かりました！さ、行きましょう！マサルくん！」

マサル「う、うん……！茜……」

茜「？」

マサル「茜お姉ちゃん！」

茜「はいっ!!」

――。

くくく 村 入り口 くくく

茜「ここがお2人の暮らしている村ですか！」

正吉「そうだよ」

茜「しかし……！のどかと言うか、静かすぎると言いますか！寂れてませんか？」

マサル「……」

正吉「そりゃ、無理もねえよ。だって、今この村には大人が1人だっていやしねえん

だ」

茜 「何故?!」

マサル 「…百鬼帝国だよ」

茜 「百鬼帝国が…?!」

正吉 「ねーちゃんもあそこにいたって事は、山奥の奴等の基地を見たんだろ?」

茜 「はい! 烈火号で周囲を哨戒中に見つけまして! 敵機の迎撃に合いました!」

正吉 「だからあそこに墜落してたのか…。ともかく」

マサル 「その百鬼帝国の人達が、ボクの母ちゃんも父ちゃんも、みんな連れてっちゃったんだ」

正吉 「俺は、親父が車の荷台のところに隠してくれたから無事で、マサルもまあ似たような状況で助かったんだ」

茜 「そんな事が…!」

マサル 「百鬼帝国の人、巡回に来るお巡りさんとも入れ替わっちゃって…。だから基地の事が都心の方にも届かないんだよ」

茜 「なら、お2人のどちらかが街に出て知らせればいいじゃないですか!」

正吉 「俺も最初はそう思ったんだけど、百鬼帝国の奴等がどこに潜んでるかも分からねえのに迂闊に動くのは危ないと思ってさ」

マサル「どのみち、ボクたち子ども相手じゃ、大人の人は話を信じてくれないよ」

正吉「奴等はここに一度来てるから、もうここに人はいないと思ってるんだ。だから、ここに潜んで暮らしてれば、取り敢えずやり過ごせる」

茜「やり過ごして、それでどうするんです?」

正吉「まあ、話はまず後ろのマシンを隠してからだ。そしたら、俺の仲間達にもねーちゃんを紹介してやるよ」

茜「仲間…? まだいるんですか!」

正吉「おう! へへっ、頼りになる奴等だぜ?」

—。

くくく 村の外れ アジト くくく

正吉「お前ら、今帰ったぞ!」

少年「正吉! お前、今までどこ行ってたんだよ?」

正吉「悪い悪い。遅くなっちまった」

少年「ホントだぞ…! あんまり遅いから、みんな心配して、何かあったんじゃないかって!」

正吉「へへっ、悪かったってケンジ。こつちも色々あったんだよ」

ケンジ「色々で納得できるか! ちゃんと説明しろ」

正吉「…山菜採りの帰りの途中、百鬼帝国の奴等に出会っちゃってな」

ケンジ「何だって…!」

男の子「ま、まさか俺達の居場所が奴らにバレたんじゃ…」

正吉「ははっ、そりやねえよタツオ。出くわしたのは2人。どっちも倒しちやっただらよ。死体も隠してきたし、まだここに人がいるって、そうバレねえって」

ケンジ「何? お前とマサルだけで倒したのか?」

正吉「いや、このねーちゃんに助けてもらった」

茜「…こんにちは!」

ケンジ「は? 誰だよこの女の人」

正吉「たまたま俺とマサルが百鬼帝国の奴等に出くわしたところを助けてくれたんだ」

タツオ「へ、へえ。見た目によらず、強いんだ…」

正吉「そしてなんと聞いて驚け…! このねーちゃん、ゲッターのパイロットなんだぜ!」

ケンジ「はあ? またそんなでまかせを…。女の人があんなすごいロボット操縦出来るわけないだろ」

正吉「俺もそう思ったけどよ。でも、ねーちゃん1人で百鬼帝国の奴等を吹っ飛ばし

ちやうくくらい強いんだぜ？それでも十分だろ？」

ケンジ「まあ、確かに」

茜「それで、正吉さん！」

正吉「何だ？」

茜「そろそろ私に、この子達を紹介してもらってもいいですか！」

正吉「お、そうだった。忘れるとこだったぜ」

正吉「まずこいつ、俺のダチのケンジだ」

ケンジ「はじめまして。事情はあるみたいですけど、正吉を助けてもらって、ありがとうございます」

茜「いえいえ！こちらが助けられたようなものですから！ともかく、よろしくお願  
いします！」

ケンジ「よ、よろしく…」

正吉「で、ケンジの横にくっついてるのが、マサルについて臆病なタツオ」  
タツオ「よ、よろしくお願います！」

マサル「ぼ、ボクは臆病じゃないよ…！」

正吉「百鬼帝国相手にビビってた奴が何言つてんだよ」

正吉「それで、部屋の隅の方で何も言わねえでこっち見てるのがトミオ」



トミオ「……………よろしく」

茜「よ…よろしくお願ひします！（いたのに気付きませんでした！）」

正吉「コレが俺達『少年愚連隊』のメンバースー！」

茜「少年愚連隊!?!」

ケンジ「この村で何とか逃げ延びた俺達の総称ですよ」

正吉「それで、これから百鬼帝国に反抗するチームの名前でもある！」

茜「反抗…！子ども5人だけで、ですか!?!」

正吉「もちろん！村の大人は百鬼帝国に連れてかれちゃった！街の大人は頼りに出来ねえ！」

正吉「だったら、この村に残った俺達だけで、百鬼帝国に連れ去られた家族を取り返すんだ！」グッ

茜「ですが！どうやって…!」

正吉「へっへっへっ…!心配は無用だぜねーちゃん。俺達にだってちゃんど武器があるんだ」

マサル「これを見てよ」

茜「これは…ダイナマイトですか!」

正吉「トミオはこの村の村長の子どものなんだ。だから、村で使う火薬なんかも、家で

管理してる」

トミオ「……………火薬は山の石切場にある。持ってこようとすれば、まだまだあるよ」

タツオ「これも…。ダイナマイトから抜いた火薬で作った鉄パイプ銃だよ」

茜「さつき百鬼兵相手に正吉さんが使っていた…」

正吉「一本で一発しか使えねえが、ダイナマイトをそのまま持ち歩くより持ちやすいし、火薬量も調整してあるからダイナマイトより出が速い」

正吉「こういう工作は、ケンジの得意分野だ」

ケンジ「まあ、こう言うことの為に勉強してる訳じゃないんだけどな…」

マサル「この鉄パイプ銃も、倉庫にたくさん縮まってあるよ！」

正吉「おう、それなんだがな、今の内に出しといて、火薬が湿気ってないかチェックしといてくれ」

ケンジ「…いいよやるのか？」

トミオ「……………」

タツオ「…………」

マサル「…ううっ…」

正吉「おうよ！俺達は今日まで、さんざん準備してきた！ダイナマイトの使い方も、鉄パイプ銃の撃ち方も！嫌になるくらい練習してきた！」

正吉「俺は今日、ねーちゃんに会って、これがチャンスなんだと思ったぜ！」

茜「えっ！私ですか！」

正吉「そうだぜ！ねーちゃんがここに来てくれたってことは、少なくともゲッターのパイロット達に、百鬼帝国の基地の場所が伝わったって事だぜ！」

ケンジ「ゲッターが来てくれるかもしれない…？」

正吉「ゲッターが来てくれりゃあ俺達だって百人力だ！だけど、百鬼帝国の奴等、もしかしたら人質にするために親父達を連れてったかも知れねえだろ？」

マサル「それは…：…うう…」

正吉「だから俺達で先に連れ戻すんだよ！」

茜「成る程！それはいい考えですな！」

正吉「俺達にだって武器はある！それに、ねーちゃんが百鬼帝国から奪った武器もある！あと必要なのは、戦いをおっ始める覚悟と勇気だけだぜ!!」

ケンジ「…：…そうだな…：…俺達子どもだけで生活ったって、限界がある。いつかはやんなきゃだよな」

タツオ「いよいよかあ…：…ううっ…！武者震いしてきたぜ…：…！」

正吉「野郎共ッ！覚悟を決めろ！勇気を振り絞れ!!この村に残されたのが俺達だから、だから俺達がやるんだ!!」

「「オウツ!!」」

茜 「もちろんっ! 私もお手伝いしますよ! 派手に暴れてやりましょう!!」

正吉 「よし! 決行は明日だ! 今日には派手に決起会だ! やるぞ、野郎共お!!」

「「オオーオーオーツ!!」」

—— その夜。

正吉 「それじゃ、ねーちゃんはこの部屋を使つてくれ」

茜 「ありがとうございます!」

正吉 「布団はタツオに用意させといた。俺達は別に雑魚寝でもいいけどよ、流石にねーちゃんまでとはいかねえからな」

茜 「私は別に気にしませんよ!」

正吉 「俺達が気にして眠れなくなつちまうよ! ほら、ケンジなんてずっとねーちゃんを意識しつぱなしだったろ?」

茜 「そーでしたか?」

正吉 「以外にニブいんだな、ねーちゃんつて…」

正吉 「まあいいや。ともかく、ねーちゃんは客人なんだから、特別扱いしてトーゼンだろ?」

茜 「でも、烈火号の修理まで任せてしまって、その上お風呂までいただいてしまいま

したし！さらに布団なんて！ぜーたくをしすぎではないですか!？」

正吉 「いいんだよ気にすんなって！…風呂に関しちや、いいもん見せてもらったし…」

茜 「？ 何か!？」

正吉 「な、何でもねえよ！マシンの方だって、応急処置以上の事はできてないし…！」  
正吉 「とにかく！明日は決戦なんだ！ねーちゃんも戦力として暴れてもらうんだから！充分英気を養ってくれよな！」

茜 「はいっ！必ず！皆さんの父さんや母さんを取り戻しましょうね！」

正吉 「つたりめえだ！んじゃ、おやすみ！」

茜 「おやすみなさい!!」

ガチャツ バタンツ

茜 「……よし！それでは寝ますかっ!!」

コンコン…

茜 「？ 誰ですか？」

「……お姉ちゃん」

茜 「その声はマサルくん！どうぞどうぞ！入ってください！」

マサル 「…お邪魔しまーす」

茜 「どーかしたんですか!？」

マサル 「その、眠れなくて…」

茜 「そうですか!ではこちらへ!」

マサル 「…迷惑じゃない?」

茜 「当たり前です!さ、何して遊びましょうか!」

マサル 「遊ぶ前提なんだね…」

茜 「眠くなるには体を動かすのが一番です!ハッ!となると走るのが一番と言うことには!」

マサル 「は、走るのはいいよ…。もう夜遅いし」

茜 「そうですね!夜に山道を走るのは危険ですね!」

マサル 「う、うん…。そうだね…」

茜 「…? マサルくん、さつきから元気がありませんが、どうかしましたか?」

マサル 「…?あ、ああの…!」

茜 「何か悩みですか!いけません!若いうちから悩みを抱えると言うのはよくありません!」

茜 「私なんかで頼りになるとは欠片ほども思ってますが!打ち明けるだけでも気が楽になるはずです!—さあ!!」

マサル「そんな……！頼りにならないなんて、そんな事ないよ！」

茜「そうでしょうか？」

マサル「うん……！だって、茜お姉ちゃんはすごい元気で、ゲッターのパイロットで、あんな怖い百鬼帝国にも、怖がらずに立ち向かって……」

茜「マサルくん……？」

マサル「僕なんかと全然正反対で……、むしろ僕がみんなの足引つ張つちやうんじゃないかなって……」

茜「明日の決戦、怖いんですね？」

マサル「……こゝ、怖くないよ……」

ムギユツ

マサル「あ、茜お姉ちゃん……？」

茜「いいんですよ。怖くっても」

マサル「え……？」

茜「怖いなんて、当然じゃないですか。私だって、怖くないから戦ってるんじゃないんです」

マサル「お姉ちゃんも、怖いのか？」

茜「はい。怖くて怖くて、堪らない時がありますよ」

マサル「じゃあ、何で戦えるの？」

茜「自分で決めたから、ですね。それに――」

マサル「それに？」

茜「怖いって言うのを、知っているから戦えるんです。きつと皆さんも怖いでしょうから。1人でもたくさんの人に、そんな思いをしてほしくないんです」

マサル「……」

茜「なんて……、私の理由は後付けみたいなものですけどね。そういう思いを持って戦いに臨んでいる人を間近に見てましたから」

マサル「怖いを知ってるから、戦える……？」

茜「そうです。怖いものが分かるから、それと同じ気持ちで、誰かにさせてはいけな  
いから、私達は戦うんです！」グツ

マサル「……やっぱり強いんだね。お姉ちゃんは」

茜「これが強さだって言うんですしたら、マサルくんも強くなれますよ」ニコツ

マサル「本当に？」

茜「もちろんです。だってマサルくんは、男の子ですからっ！」

マサル「根拠がよく分らないよお？」

ネーチャンタチウルセエゾ…… イイカゲンネロヨナア



マサル「……あ……」

茜「あ……あははは！怒られてしまいましたね！ではそろそろ寝ましょうか！」

マサル「そうだねっ。……あの……っ」

茜「何ですか？」

マサル「もしかして、このまま寝るの？」

ギユウウウ……

茜「はいっ！寝付きが悪い時は、温もりを感じれるものを抱き締めるのがいいと！

私の仲間が言っていましたよ！」

マサル「温もり……。こ、これは……」

茜「その人は寝る時はいつもクマのぬいぐるみを抱いて寝てると言っていましたか

！ここにはなんのぬいぐるみもないので、私で我慢してください！」

マサル「う、うん……って、そうじゃなくてね……？」

茜「Zzzz……」

マサル「もう寝てる!?……これじゃあ僕がお姉ちゃんのぬいぐるみじゃないかな……」

茜「……」スヤア……

マサル「……お姉ちゃん……」

マサル「来てくれて……ありが……とう……」—— Zzzz……

くくく 翌朝 森 くくく

茜 「よし、烈火号はここに置いておけば大丈夫ですね！」

ケンジ 「だ、大丈夫なのか？…こんなギリギリまで近付けて…。レーダーとかでバレたりするんじゃないのか？」

正吉 「これから突撃するんだ。向こうから来てくれた方が好都合だぜ！」

タツオ 「ええ〜!？」

茜 「大丈夫ですよ！辺りは静かですし、多分まだ気付かれてません！」

正吉 「いざという時は、ねーちゃんにこいつで大暴れしてもらわねえとな！」

トミオ 「……と言っても、応急処置で上手く飛べるか分かんないんだろ？」

正吉 「うるせえな！何もねえよかマシだろ！」

マサル 「うん…！大丈夫！きつと上手くいくよ！」

ケンジ 「何だよ？えらく気合いが入ってるじゃないか」

正吉 「昨日なんかいいことでもあったのか？」

マサル 「そ、そうじゃないけど…。でも、僕だつてやる時はやるよ！お、男だもん！」

茜 「そうですよ！その意気ですよ！」

正吉 「？ま、全員がやる気になってんなら、何だつてできるな！」

茜 「はいっ!! やつてやれないことはありません！このまま全身全霊！熱血勝利です

!!」

正吉「よおろろっし!行くぜ——!!」

——百鬼帝国秘密基地。 正門。

百鬼門番「——?何だ?」

ブロオオ……オオンッ

百鬼門番「トラック!?!」

百鬼門番2「我々のじゃない!止まれえー!!」

門番の弾幕付きの制止を正面から乗り切つて、1台のトラックがゲートを突き破つて突入。

百鬼門番「て、敵襲ろろ!!」

正吉「はっはあぁ!強行突破成功ろ!!」

タツオ「じ、寿命が縮むかと思つたよ……!」

正吉「もうあの世に片足突つ込んだみてえなもんなんだから諦めろ!……それよりも」

百鬼兵「止まれえええーッ!!」

正吉「出てきやがったな……!野郎共!準備はいいかあ!?!」

ケンジ「バッチリ!」

正吉「よし、弾幕をばら撒けええええ!!」

掛け声と共に、トラックの荷台からダイナマイトを撒き散らす。

百鬼兵「うわっ！ダイナマイトだ！」

百鬼兵2「バカ野郎！導火線に火が着いちやいねえ！奴等の脅しだ！」

トミオ「では、脅しついでにこちらもどうぞ……」

百鬼兵2「なっ……！」

トミオ「パパの秘蔵コレクションで作った、火炎瓶」

高そうな洋酒の瓶から溢れた、濃度の高いアルコール。

瓶の口に入れた紙に灯った火を拐い、それはたちまちに火炎の水流となって辺りに拡がり、地面に転がったダイナマイトに引火する。

静寂を混乱に変える、爆発。

正吉「たーまやーまやー！！」

ケンジ「おい！もつと速度を上げろ！俺達も爆発に巻き込まれるぞ！」

正吉「分ーかつてますつて！んじや、このまま基地の中に殴り込みといきますかあ！！」  
アクセルを踏みしめ、速度を一杯に高めたまま基地施設内に突っ込む。

百鬼兵「うわああー！！」

百鬼兵「こいつ……！乗ったまま乗り込んでくるとは！」

百鬼兵「おう、トラックから誰か降りてくるぞ！」



正吉 「ねーちゃんに続けえー!!」

百鬼兵を近付かせまいと、鉄パイプ銃で懸命に牽制する。

事前に打ち合わせたフォーメーションで、一気に基地の奥まで進軍していく。

正吉 「何だよ、以外にチョロいじゃねえか！」

ケンジ 「奇襲が効いてるだけだ！今に本隊が出てくる、油断するな！」

茜 「ボンバアアアアー!!」 グオツ

百鬼兵 「ひい……！」

茜 「さあ！捕まえた人達は何処ですか!？」

百鬼兵 「し。知らない……！」

茜 「さあ！さあさあさあつ!!」

百鬼兵 「ひつ……ここ、この奥だ……！そこに捕虜を入れる収容所がある……」

茜 「そうですか！ありがとうございますっ!!」 ゴスツ

百鬼兵 「あう……！」

茜 「ちゃんと知ってるんじゃないですか！正吉さん！皆さんも！こちらです！行き

ましようー！」

マサル 「うん！」

正吉 「おう！」

タツタツタツ

トミオ「……見えた」

タツオ「あの扉で合ってるの？」

茜「——!?待ってください!」

マサル「何……?茜お姉ちゃん——」

「何の騒ぎだ——?」

ケンジ「明らか偉そうな奴!」

正吉「この基地の大将か!」

茜「百鬼衆……!」

「おう、いかにも。俺は魔王鬼。この基地を用意させた張本人だが?」

茜「大将が出てきたなら話が早いです!早速倒して、捕らえられた人達を返しても

らいます!」

魔王鬼「たかが数匹の子ネズミがいい威勢だが、何だ?捕らえた人間を取り返しに来

たのか」

茜「そうです!早く解放してください!でないと、痛い目を見ますよ!!」

魔王鬼「…フツ。いいぞ」

タツオ「え……?」

茜 「何ですって!？」

魔王鬼 「捕虜を連れて帰るんだろう? こちらも折角こさえた基地を滅茶苦茶にされるのも気が滅入るんだわ」

魔王鬼 「こつちのようはとつくに済んだしな。だから、連れて帰っていいぞと言ったんだ」 ニヤア…

正吉 「怪しさ満点じゃねえか」

茜 「罨ではありませんよね?」

魔王鬼 「それをこちらに聞くとは、おかしな話だが。まあ、罨だと思ふなら好きにしろ。その場合は、俺の気分次第で捕虜の命がないかもしれないがなあ?」

マサル 「そんなあ!」

茜 「行きましょう! 皆さん!」

ケンジ 「だけど! 相手の誘いに乗るなんて…!」

茜 「元々の目的が達成できれば万々歳じゃないですか! それに、どんな罨があつたとしても、それは覚悟の上です!」

正吉 「ねーちゃんの言うとおりだぜ!」 ここでビクビクしてても始まらねえ! 俺は行くぜ!」

タツオ 「あ、待ってよ!」 ダッ



タツタツタツ…

茜 「……………」

魔王鬼 「…………フフツ」

ガチャツ

正吉 「親父い！お袋！」

正吉父 「正吉！」

正吉 「親父いー！！」 ダツ

マサル 「父ちゃん、母ちゃん！」

ケンジ 「父さん！母さん！」

タツオ 「お父さん、お母さんっ！」

トミオ 「パパ……………」

皆、それぞれの両親の元へ駆け出す。

茜 「皆さん……………良かったですね！」

正吉 「おう！これも全部、ねーちゃんのお陰だぜ！」

タツオ 「ありがとう！お姉ちゃん！」

茜 「いえ！私は何もしていません！皆さんの勇気が実を結んだんです！」

正吉母 「あの…、貴女は…？」

茜 「どうも！日野茜です！」

正吉 「へへっ、親父達を助けるのに協力してくれたんだぜ？」

正吉父 「それは…、まだお若い…女の子なのになんて無茶を…」

正吉 「心配要らねえって！何たって、ねーちゃんはゲッターのパイロットなんだからよー！」

正吉母 「ゲッターのパイロット!? こんな、女の子がかい？」

茜 「はいっ！正吉さんたちの話を聞いて、手助けしました！」

マサル 「スゴいんだから！百鬼帝国だって突き飛ばしちゃうんだよ！」

正吉母 「こんな女の子がねえ…」

茜 「さあ皆さん！こんな所に長居は無用です！早く脱出しましょう！」

正吉 「おう！村のみんな！俺達に着いてきてくれ！」

茜を先頭に、来た道を真っ直ぐ出口に向かい、基地から脱出する。

茜 「門を出ますよ!!」

正吉 「よっしゃ！ここまで来ればこつちのもんだぜ！」

正吉父 「う…！ぐ…！」

正吉 「親父!?!どうしたんだよ!?!」

正吉父 「分からない…！体が急に…動かない！」

マサル「正兄ちゃんのお父さんだけじゃないよ！村の人みんな……！」

ケンジ「一体どうしたんって言うんだ!？」

グワアアア

正吉母「正吉い！」

正吉「お袋お!!」

茜「皆さんの体が宙に浮いて……！何かに引き寄せられてるんですか!？」

ガシヤツ ガシヤツ ガシヤンツ

タツオ「そんな……！お父さんやお母さんの体が……！」

トミオ「機械のパーツになっていく……！」

マサル「う、嘘だよ……！パパア……！ママア……!!」

「ワハハハハハハツ!!」

茜「この声はさっきの！魔王鬼とか言っていましたか!？」

魔王鬼「そうだよ。どうだア？久しぶりの再会は楽しんでくれたか?」

正吉「うるせえ！手前え……！親父とお袋に何しやがった!？」

魔王鬼「フフフ……。見ての通り分かるだろう？ちよつと改造させてもらった」

マサル「パパとママと、村のみんなが1つになってる……?」

茜「まさか！あれは、百鬼メカ!？」

魔王鬼「その通り！貴様らの家族も、今は俺の手足よ!!」

村人が変形して出来た胴体に、魔王鬼自身が頭部となって合体する。

魔王鬼「俺のメカ魔王鬼が完成したのだ!!」

正吉「この野郎……！よくも親父達を……！」

ケンジ「みんなを返せ!!」

ダイナマイトや鉄パイプ銃でメカ魔王鬼を攻撃する。

魔王鬼「フフフ……。いいのか？貴様らが攻撃すれば、貴様らの家族も傷つくぞ？」

正吉「なっ……!?!」

タツオ「うう……っ！」

トミオ「ひ、卑怯だぞ……！みんなを利用するなんて……！」

魔王鬼「だから最期に会わせてやったんだろう？冥土の土産も出来た。もう思い残す

事もあるまい」

魔王鬼「苦しまずに……死ね！」

ドワツ ドワツ

魔王鬼「くっ……！ミサイルだと……！何処からだ!?!」

茜「あれは！紫電号と金剛号！アーニヤさんと美穂さんですか！」

ケンジ「やめろ！やめてくれえ！その百鬼メカは百鬼帝国だけじゃないんだ!!」

茜 「…チャンスは今ですね…! 正吉さん!」

正吉 「ね、ねーちゃん…!」

茜 「私は烈火号で、上のゲットマシンと合流します! 正吉さんたちは避難を!」

正吉 「でも、親父達が…」

茜 「私が助け出します!」

マサル 「どうやって?」

茜 「何とかしてみせます! 私は、ゲッターのパイロットですから!」 ダツ

マサル 「茜お姉ちゃん!」

—。

茜 「—烈火号、上手く動いてくださいね…!」

ウウウ…ン…

茜 「よし! テイクオフです!」

ゴツ

茜 (上手く飛べました! が、やはり応急処置の方は出力が今一ですね…! 長くは飛べませんか!)

美穂 「茜ちゃん!」

茜 「美穂さん! アーニヤさん! その百鬼メカを迂闊に攻撃してはいけません!」

アーニヤ「ん…?どう言うこと、ですか?

茜「詳しい話はあとですつ!こちらはエンジンの調子が今一つなので、早急に合体です!ゲッター烈火!いきまますよつ!」

美穂「わ、分かったよ…!」

茜「チェンジ!ゲッターアアアアアア!!烈ッ!火アア!!」

上空で合体。メカ魔王鬼と退治するよう、正面に着地する。

アーニヤ「——それで、あの百鬼メカは…」

茜「あの百鬼メカには、迂闊に手を出してはいけません!」

美穂「どうして?」

茜「あの百鬼メカ…、頭以外は民間人なんです!」

アーニヤ「?!」

美穂「そんな…つ!」

魔王鬼「証拠を見せてやろうか?」バラバラ…

メカ魔王鬼の左腕が崩れ、人の形に戻って地面に落ちる。

魔王鬼「フフ…」

再び、人がメカ魔王鬼の左腕を形成していく。

美穂「こんな…こんな事って…!」

アーニヤ「c e p t...!」

茜「頭です! 頭さえ破壊できれば...! 少なくとも無力化出来るはずです!」

美穂「そんなに上手く...、行くのかなあ...?」

茜「何もしないよりは、当たって碎けるだけです!」

茜「火斬刀!!」

両手に火斬刀を握りしめて、突貫。

茜「うおおおおお!!」

魔王鬼「正面から策もなく...。馬鹿が!」

茜「ッ!」

メカ魔王鬼の拳による一撃を、咄嗟に火斬刀をクロスさせて防ぐ。

茜「ぐうううう!」

美穂「すごいパワー...!」

アーニヤ「相手の攻撃力は、こちらより上...! 真正面からぶつかるのは危険、です!」

美穂「烈火の運動性で攪乱して! 茜ちゃん!」

茜「リョーカイしました!」

言葉と同時に火斬刀を捨て跳躍。メカ魔王鬼の腕を支柱に、地面を蹴り上げる勢いを利用して宙返り。メカ魔王鬼の背後に回る。

魔王鬼「想像以上に身軽か…」

茜「——ッ！」

メカ魔王鬼の頭に掌底。

魔王鬼「ぐうっ…！」

茜「せりやあああああつ…!!」

美穂「待って！茜ちゃん！」

茜「—！」

ゲッター烈火が追撃の手を止める。

魔王鬼「フフ…。俺の体に攻撃してもいいのかなあ？」ニタリ…

茜「うう…！」

アーニヤ「とことん外道ですね…！」

魔王鬼「フハハハ…！何とでも言うがいい。くらえええええ!!」

メカ魔王鬼の角から放たれた雷撃が、ゲッター烈火を打つ。

茜「があああああああつ…!!」

美穂「きやあああああつ！」

茜「ぐう…！思うように攻撃できないのでは、攻め手が限られます！」

アーニヤ「何とか、頭部だけでも、切り離せば…」



魔王鬼「何だ？離れてほしいのか？なら——」

メカ魔王鬼の頭部が宙に浮く。

アーニヤ「分離した!？」

茜「今がチャンスです!」

美穂「待つて！様子が変だよ!」

茜「!？」

頭部が分離した、メカ魔王鬼の体が、細かく別れて1つ1つのパーツ単位で浮遊している。

茜「これは……!」

魔王鬼「いけ」

浮遊するパーツが、濁流のように一気にゲッター烈火に襲い掛かる。

茜「ぐお……!あ、ああああああつ!!」

無数のパーツが、ゲッター烈火を打ち付け、地に叩き付ける。

茜「カハツ——!」

魔王鬼「ハツハハハ!! 楽しいなあ？ 打つ手もなく、一方的にやられるだけの相手を見下ろすと言うのは!」

再び、パーツと頭部がメカ魔王鬼に合体する。

茜 「っ……！アーニヤさん……！ゲッター烈火の調子は……？」

アーニヤ 「アー……、各間接部へのダメージは大きいです。が、動けない事はない、です」

茜 「ありがとうございます！……それなら……！」 グググッ……

ゲッター烈火を起こす。

美穂 「でもどうするの？このまま続けてたつて……」

茜 「相手が隙を見せるまで！諦めるわけにはいきません！」

アーニヤ 「それなら……、ワタシに предложение……提案、あります」

美穂 「提案……？」

魔王鬼 「何か策があるつもりかもしれませんが、好きにはさせませんぞ！」

茜 「ッ……」

メカ魔王鬼の打ち下ろしの拳を、跳び跳ねて回避。

茜 「おちおち話している時間はありませんか！」

美穂 「何とか時間を稼げれば！」

ボンッ

アーニヤ 「В з р ы в !？」

魔王鬼 「何だ!？」

美穂 「茜ちゃん……あれって!」

茜 「少年愚連隊の皆さん!」

正吉 「百鬼帝国のヤロー!」

ケンジ 「父さん達を返せ!!」

マサル 「このっ!このっ!!」

タツオ 「ええいつ!」

トミオ 「許さない……許さないぞ……!」

茜 「皆さん!避難してくださいと言ったはずですよ!」

正吉 「ねーちゃん!俺達にだって戦える力は残ってるんだぜ!」

ケンジ 「父さん達を好きに利用されて、黙ってなんていられません!」

魔王鬼 「ええい、鬱陶しい蟻共だ!踏み潰してくれる!」

茜 「させません!」

ゲッター烈火が、メカ魔王鬼に組つく。

魔王鬼 「その程度の力で……!」

メカ魔王鬼の裏拳が、ゲッター烈火の眉間を打ち、引き離す。

茜 「ぐわっ!」

マサル 「お姉ちゃん達をいじめるなあ!!」

ボンツ

魔王鬼「くくくツツツ!! 力の差が分からない虫けらと言うのは、本当に目障りだな!」

美穂「——逃げてえ!!」

魔王鬼「吹き飛ばえい!!」

雷撃が、地面を貫く。

「「うわああああ————!!??」」

茜「皆さん——!」

—。

正吉「——うう……。みんな…、生きてるか…?」

正吉「つ!…ケンジ、トミオ…タツオ…!」

マサル「ううん…。正兄ちゃん…」

正吉「マサル…ツ!」

マサル「みんなは…?」

正吉「ダメだ! 見るな!」

マサル「うっ……!」

マサル「そんな…。みんな、さつきまで一緒だったのに…!」

正吉「…百鬼帝国のせいだ…! 百鬼帝国が現れなきや、端からこんな事にはならな

かったんだ!」

マサル「正兄ちゃん!?どこに行くの!？」

正吉「んなもん決まってるなあ!ケンジ達の吊い合戦だ!仲間の仇を討たねえで、隊長なんて言ってるかよ!」ダッ

マサル「そんな…!僕たちの力じゃ無理だよ!ダメだよ、正兄ちゃん!」

マサル「正兄ちゃんあああああん——!!」

—。

茜「うわあああああつ!!」

ゲッター烈火の飛び蹴りが、メカ魔王鬼の頭部を強かに打つ。

茜「よくも…よくもよくもよくも!正吉さん達を!仲間のみんなを!!」

魔王鬼「ハハハハッ!足掻け足掻け!どれだけ足掻いたところで俺には勝てん!」

茜「うおおああああ——!!」

魔王鬼「ぐう…!?コイツ、俺の体を狙ってきた…?」

美穂「お、落ちていて…!茜ちゃん!」

アーニヤ「ですが…、アカネが怒る理由も分かります!この百鬼衆を…許すわけには、いきません!」

茜「はいっ!!私の全身全霊に掛けて、必ず倒します!!」

美穂 「火に油を注がないでえ!!」 ヒーンツ

魔王鬼 「もはや形振りには構ってられないか。所詮は百鬼に劣る人間風情よ!」  
ボンツ

魔王鬼 「なつ……! まだ……!」

アーニヤ 「あれは……」

美穂 「ダイナマイトの爆発!」

茜 「正吉さん! 生きてたんですね!」

正吉 「おう。マサルも無事だぜ。だが、ケンジ達は死んじまった!」

茜 「そんな……!」

正吉 「それもこれも貴様らのせいだ! 百鬼帝国!!」

メカ魔王鬼に向かって、幾つもダイナマイトを投げる。

正吉 「鬼ども! この地上から消え失せろ! ここは俺たちのものだ!!」

魔王鬼 「…面白いことを言う」

正吉 「俺たち人間のものなんだ! これ以上お前達鬼どもをのさばらせてたまるかあ  
!!」

美穂 「ダメだよ! ダイナマイトなんかじゃ、百鬼メカは倒せない!」

茜 「百鬼メカの相手は、ケンジさん達の仇は私がとります! だから早く、逃げてくだ

さい!!」

正吉「へへっ!女のねーちゃん達が戦ってるのに、男の俺が逃げられつかよ!」

魔王鬼「覚悟だけは…、一人前だなあ!」

正吉「ぐっ…!!」

メカ魔王鬼の手が、正吉を掴み上げる。

正吉「ぎやあああああっ!!」

茜「正吉さん!」

アーニヤ「ダメです!アカネ!今下手に動いたら、手の中の子供が…」

魔王鬼「フハハハハッ!貴様らが動こうと動くまいと同じよ!」

魔王鬼「こんな小さな体で、地上の支配者気取りとは!貴様ら人間の脆弱さ、その身を以て思い知るがいい!」 ギチギチ…

正吉「ぐわああああ!!」

茜「正吉さん!」

魔王鬼「ふはははーっ!このまま押し潰される!!」

正吉「—っ!へ…へへへ…!」

魔王鬼「!?何が可笑しい?」

正吉「上手く掛かりやがったな…!百鬼帝国…!」 バサア…

魔王鬼「コイツ……！体中に爆弾を巻いてるのか!？」

美穂「もしかして、最初からそのつもりで……!」

アーニヤ「самоубийца……」

正吉「へへっ……！この土地も、俺たちの家族も好き勝手にさせねえぜ!」

魔王鬼「このお！爆破する前に握りつぶしてくれよう!!」

正吉「バーカ!もうとつくに導火線に火は着いてんだ!どっちにしたって無駄さ!」

正吉（マサル……。強く生きろよ……!）

爆発。

メカ魔王鬼の腕に噴き上がった爆炎と黒煙は、メカ魔王鬼の左腕の肘までを瞬時に包み、破壊していった。

茜「——そ……んな……」

魔王鬼「うぐう……。人間風情が、小癩な真似を……!」

アーニヤ「アカネ!気をしっかり持ってください!」

魔王鬼「まあいい。また人間どもを捕まえてきて改造すればいいだけだ。素材はこの国だけでも1億以上いるからなあ?」

茜「あ……ああああ……っ!」

美穂「茜ちゃん!しっかりして!」





何度も。

茜 「絶対に許さない——!!」

殴り付け、地面へと叩き付ける。

魔王鬼 「くっ……!コイツ……!離せえ!!」

隻腕になったメカ魔王鬼の腕に振り払われるが、ゲッター烈火は空中で宙返り、四つん這いの姿勢で着地。

茜 「フーーーーー!!フーーーーーツ!!」

美穂 「あ、茜ちゃん……?」

アーニヤ 「アカネ……、怒って、います。これまでにないくらい、激しく!」

茜 「うあああああああああああああ、あ、あ、っ!!」

爪を立てるように手を構え、飛び掛かる。

茜 「フウ……!フツ……!アアアアアア——!!」

魔王鬼 「ふ……ぐっ……!こうなれば、機体を分離させて……!」

ゲッター烈火の執拗な攻撃に、思わずメカ魔王鬼を分離させ拘束から逃れる。

茜 「ツ!」

魔王鬼 「どうだ?」

アーニヤ 「マズイ……!アカネ!ゲッターを分離、させてください!」

美穂 「どう言うこと?」

アーニヤ 「相手の、分裂攻撃を躲すんです! ゲットマシンになって、押し寄せる、パーツの流れに乗れば……!」

美穂 「でも、そんな事ほんとに出来るの!？」

アーニヤ 「やってみないと、分かりません! アカネ!」

魔王鬼 「もう遅いわ! 行け! 我が手足よ! ゲッターを八つ裂きにするのだ!!」

茜 「——!!」

再び押し寄せる分裂したメカ魔王鬼のパーツを、両腕を交差させ肩を小さく締めて上体を隠す防御の姿勢でやり過ごす。

美穂 「きやあああああつ!!」

アーニヤ 「ウウツ……!」

茜 「!!」

アーニヤ (このままでは、みんなもゲッターも……。仕方ありません、ゲッターを強制分離させて……!)

アーニヤ 「……?」

茜 「うう……っ!」

その目の怒りは、未だ衰えず。

茜 「ア、ア、ア——!!」

ゲッター烈火がメカ魔王鬼のパーツの中を走り出す。

美穂 「あ、茜ちゃん……きゃあつ！」

体にぶつかる破片が、ゲッターの装甲を穿ち削り、表面装甲を破壊しても構う事なく、ゲッター烈火は疾駆する。

茜 「オオ……!!」

途中、身を低く腰を落とし、地に落ちた火斬刀を回収。そのまま真っ直ぐに、最奥にいる魔王鬼本体の正面へと。

茜 「ダアアアアアアアアツ!!」

魔王鬼 「——!!」

その眉間めがけ、逆手に持った火斬刀を深々と突き入れる。

美穂 「や、やった……!」

魔王鬼からの制御を失ったパーツがボロボロと地上に落ち、人の姿を取り戻していく。

茜 「ガア……ア、ア、アアアアアアア——!!」

しかし、ゲッター烈火は止まらず。地に叩き伏せたメカ魔王鬼を、その原型がなくなり、ただの金属塊と成り果てるまで、火斬刀で斬り続けた。

茜 「フーーーーーッ! フーーーーーッ!!」

それでも、怒りは鎮まらず。

茜 「——」

その矛先は、百鬼帝国の基地へと。

百鬼兵 「ひっ……! ゲッターが来る……!?!」

百鬼兵 「た、回避——ッ!」

司令塔の魔王鬼がやられ、混乱の渦中にある基地へ、ゲッター烈火が往く。

美穂 「茜ちゃん! それはダメだよ……!」

制止の声。金剛号のコックピットからの停止信号ももはや意味はなく。足の動きが

止められても尚、両手で地を這いずりゲッター烈火は基地を目指す。

百鬼兵 「あ、ああ……!」

美穂 「やつ……。ダメ……!」

茜 「フンッ!」

百鬼兵にめがけ、振り下ろされたゲッター烈火の手。水風船を潰したように、パツと赤い飛沫が弾ける。

美穂 「つ……!」

アーニャ「……ミホ、目を瞑っていてください……。耳も、塞いでいた方がいいと、思

います」

美穂「あ、アーニヤちゃんは、平気なの…?」

アーニヤ「H e r t : そんなわけ、ないです。けど…」

茜「フンツッ!フンツッ!フンツッ!フンツッ!——」

ゲッターと言う、巨大な脅威の襲来に、戸惑い逃げ惑う百鬼兵達を、腕で薙ぎ払い、立ち上がり足で踏み潰していく。

アーニヤ「これが、アカネの怒り、なんです。こんな思いを、アカネにも、誰にもさせたらいけません」

アーニヤ「アカネの怒りを、ワタシ自身の思いに変えて、二度と味わいたくない気持ちにするためにも、目を反らすわけにはいきません」

美穂「アーニヤちゃん…」

バラバララッ カン カンッ

茜「ツ!?!」

1人の百鬼兵が、ゲッター烈火に機銃を向ける。

百鬼兵「化け物めっ!」

茜「——」

美穂「だ、ダメ…!逃げてえ!!」

茜 「ー!」

百鬼兵 「ガツ!?は、離せえ!!」

抵抗を示した百鬼兵を掴み上げる。

ミシツ メリメリツ

百鬼兵 「ギャアアアアアツ!!」

美穂 「——っ……!」

ググググ

百鬼兵 「オ……ゴオ……——」

グシヤツ

茜 「はあ……っ、はあ……っ!はあ……っ!!」

茜 「——斬魔光オツ!!」 ビュンツ

基地そのもの全てを破壊するように放たれた斬魔光が、辺り一帯を焦土へと変える。

茜 「はあ……!はあ……!敵は!まだ、残った敵は!」

アーニヤ 「……もう、百鬼帝国はいませんよ」

茜 「いない!」

アーニヤ 「周りを見てください。もう、終わっただんです」

茜 「終わった……?しかし……私はまだ……何も……!」

美穂「もういいんだよ。茜ちゃん」

茜「え……？」

美穂「もう充分、みんなの仇は取れたよ。私これ以上、茜ちゃんが鬼になるのを見てられない……！」

茜「そんな……！私は……まだ……！誰も、何も助けられてない……！守れてません……！」

美穂「茜ちゃん……」

茜「私……は……！あ、ああ……ああ……！！」

茜「うわあああああああああああ、あ、あ、あ、っ——！！」

焦土となり、燃え尽きた大地。黄昏の空に、その叫びは虚しく響いた——。

——。

くくく 1時間程経って。 村周辺 くくく

卯月「……」

ゲッター烈火を見上げている。

卯月「ゲッター烈火の両手、真っ赤ですね……」

凜「まともな戦い方じゃない。茜の怒りがまだ伝わってくるみたいだね……」

かな子「足の裏まで、こんな真っ赤で……うつ……！！？」

凜「あんまりまじまじとみない方がいいよ。肉片とか色々、着いてるから」



かな子「…先に言ってください…」 ウプツ…

卯月「それで、助けられた人達は？」

凜「今あつちで、晶葉が診てるよ」

晶葉「――ふむ…」

村人「……」

晶葉「素晴らしいな。百鬼帝国の技術力と言うものは。触ってみた感じも、体温も人間と大差ない」

晶葉「言われなければ、機械だと言う事に全く気付かないレベルだ」

村人「そ、それで…!」

晶葉「ああ。本来なら研究所に1人でも連れ帰って精密検査といきたいところですが、コントロールしていた百鬼衆がやられたのであれば、特に問題はないでしょう」

晶葉「無論、百鬼帝国が再び利用するために制御装置を作らなければ、ですが」

村人「そう、ですか…」

晶葉「その…、体の事はショックだと思えますが…」

村人「分かっていますよ。幸い、人の出入りの少ない村です。我々がこの体を受け入れて、気を付けて生活していけば、余計な問題を起こさずに済むでしょう」

晶葉「私達早乙女研究所や政府の方でも全力でフォローします。なので、生きてくだ

さい」

村人「はい……。それは、我々を救うために命を賭してくれた子供達のためにも……」

——墓前。

マサル「……」　グスツ……

美穂「……」

アーニヤ「……」

茜「マサルくん……！その……！」

マサル「正兄ちゃん……。ケンジ兄ちゃん、タツオ、トミオ……。ぼく、強くなるよ！」

マサル「そして、兄ちゃん達の分も全力で生き抜いて見せるから、天国で見守つててね！」

茜「……」

マサル「お姉ちゃん達も！」

茜「は、はい……っ！」

マサル「仇をとつてとは言わないよ。だけど、必ず百鬼帝国を倒して！ぼくみたいな思いをする子供が、これ以上出ない為にも」

茜「はい！分かつてます！こんな事をする百鬼帝国を許しておくわけにはいきません！」

茜 「ですから、百鬼帝国を倒します！ 私達の、ゲッターの手で!!」

つづく

## 第21話『胡蝶の夢』

~~~~~ 早朝 寮室 ~~~~~

「……うう……ん……んっ……」

ピピピツ　ピピピツ　ピピピツ　カチツ

「うう……ん………。…よしっ！」　ムクリ

ゆっくりと身を起こして伸びを一つ。カーテンを開け、日差しを受け、

響子「ん……ん……！今日もいいお天気！このお日様に負けなくらい、私も頑張らな
いとっ」

歯磨き、着替え、洗顔……。素早く身支度を終え部屋を出る。

—— 食堂。

響子「おはようございます！」

寮母「おつ、おはよう、響子ちゃん。今日も朝から仕事かい？」

響子「いえ、今日は夕方からなんです！だから、学校に行く前に事務所に寄って、プ
ロデューサーさんにお弁当を渡さない」と

寮母「忙しいね。こっちの支度は終わってるから、台所は好きに使いな」

響子「ありがとうございます！」 トタトタッ

小走りに台所に入り、昨日の打ちに作っておいたお弁当用のおかずを冷蔵庫から取り出して弁当作りを開始する。

寮母「相変わらずの手際だね、ホント。響子ちゃんをお嫁さんに貰う男が羨ましいよ」

響子「えへへ…。寮母さんにそう言ってもらえると、嬉しいですっ♪」

寮母「ホント、何だってアタシは女に生まれちまったんだらうね」

響子「で、でも、寮母さんが毎日作ってくれるご飯は、私なんかじゃ足元にも及ばないくらい美味しいですし、遅い時間に帰ってもお夜食用意してくれたり…。寮母さんがいなかったら、私もみんな、困っちゃいますよ！」

寮母「あはは！そうかい？ま、それしか取り柄がないからねえ」

響子「この前晩御飯に出してくれた煮物の作り方、今度のお休みに教えてもらっていいですか？」

寮母「勿論さ。響子ちゃんになら、アタシの知ってる料理の作り方、全部教えたっていいんだから」

響子「ホントですか!？」

寮母「ああ。そしたら、響子ちゃんが2代目寮母さんで、アタシヤ引退だね」

響子「そんな…。出来ますかね？」

寮母「あはははっ！アタシにだって出来るんだから、響子ちゃんならみんなのお母さんになれるよ！」

響子「みんなのお母さんに……」

ガチャツ

美穂「ふわあ…おはようございまして…あふっ…」

寮母「おはよ。って言っても、まだお眠さんだね」

響子「美穂ちゃん！こっちに帰ってきてたんですか？」

美穂「うん…。今日は哨戒任務のシフトじゃないから…。溜まった着替えとか取り替えるのと、ついでに……」

寮母「その年で軍人の真似事は堪えるね。昨日なんて夜遅くに帰ってきたんだよ」

響子「そうなの？」

美穂「寮に帰ろうと思って支度してたら、出撃の警報が鳴っちゃって…」

響子「大変なんだね…」

寮母「ささ、朝御飯は出来てるよ。まずは1日のエネルギーを摂って、シャキツとしな」

美穂「はひい…。ありがとうございまして…ふう……」 Z Z …

寮母「コイツはダメだね。今日も学校で居眠りかい？」

響子「あ、あはは……」

寮母「……と、響子ちゃん、時間はいいのかい？」

響子「ホント……！急いで準備しちゃうないと……！」　パタパタ……

寮母「あ！ゆっくり食べてる時間はないだろうけど、ほら、おむすびくらい持っていきな」

響子「よ、用意がいいんですね……」

寮母「時間ない娘向けだよ。ここには、時間にルーズな娘も多いからねえ」

響子「あははっ。ありがとうございます！」

響子「それじゃ、行ってきます！」

寮母「ん。いつてらっしやい」

美穂「いつてらっしやい、響子ちゃん。……」　ZZZZ……

寮母「美穂ちゃんも！あんまりゆっくりしてた遅刻だよ！」

美穂「ああ……！はいい……！」

タツタツタツ……

~~~~~　百鬼要塞　~~~~~

胡蝶鬼「……」

鉄甲鬼「また諜報員の持ち帰った映像鑑賞か」

胡蝶鬼「ああ。アンタは、何だい？虫の居所が悪そうだね？」

鉄甲鬼「人間共から手に入れたゲッタードラゴンの量産に平行して、百鬼メカも量産される事になった」

胡蝶鬼「へえ？ま、人間共の技術で出来たものよりも、そっちのがノウハウがあるんだ。当然と言えば当然さね」

鉄甲鬼「一角鬼達が魂を掛けて操ったものを、能力の劣る将兵風情が乗りこなせる筈があるまい」

胡蝶鬼「あつははは！何だい？そんな事で腹を立ててたのかい？」

鉄甲鬼「当然だ！百鬼メカとは云わば我々の分身。それを易々と兵達に与えようとは…。ブライ大帝も何を考えておられるのか…」

胡蝶鬼「そんなもの、連中との決戦に決まってんだろ？この日本とか言う小国を支配するにも、もう何人も百鬼衆を犠牲にしてるんだからねえ」

鉄甲鬼「手数を揃えたところで、小兵の乗った百鬼メカであのゲッターを打ち破れるとでも？」

胡蝶鬼「さあね？もとより、百鬼衆たったって戦術知略は専門じゃないんだ」

胡蝶鬼「勝負は時の運。なる時は何とかなるもんだよ」



鉄甲鬼「相も変わらず悠長な事を…」

画面『——♪』

鉄甲鬼「こやつは…!」

胡蝶鬼「ん?人間に知り合いがいるのかい?」

鉄甲鬼「…以前、早乙女研究所を襲撃した時に会った、確か名前は…川島瑞樹と言ったか」

胡蝶鬼「へえ?そんじや、ゲッターのパイロットつてのは、アイドルもやつてるもんなんだね」

鉄甲鬼「あいどる?」

胡蝶鬼「こうやつて歌つて踊つて、同じ人間の男共を喜ばせる連中の事だよ。人間はそう呼んでるらしいね」

鉄甲鬼「ふむ…。アイドル…」

瑞樹『——何が待ってるの?迷ったその先、行つてみたい——♪』

胡蝶鬼「ふふつ、アンタも興味が湧いてきたかい?」

鉄甲鬼「まさか。俺が興味があるのは、あくまでゲッターに乗った連中だ」

胡蝶鬼「…:はあ…。まったく、何でこの連中と来たら、揃いも揃つて頭ン中が戦いばつかなのかね」 スクツ

鉄甲鬼「どこに行く？」

胡蝶鬼「ちよつとした気分転換さ。戦い以外の話題しかない男共の相手なんてしてたら、こつちの気が滅入っちゃうよ」

胡蝶鬼「じゃあね。そつちもせいぜい頑張るんだよ」 ヒラヒラ

鉄甲鬼「…何を考えている…？ 胡蝶鬼…」

〃〃〃 夕方 某ビル 楽屋 〃〃〃

響子「……」

智絵里「……」

ガチャツ

新P「おう。何だ？ 今をときめくアイドルが2人揃って。死刑執行直前の囚人みてえな顔しやがって」

響子「プロデューサーさん…。質悪いですよ」

新P「つつたつて、もういつもの事だろうが。いい加減、お前らも慣れろよ」

響子「……慣れたくありません」

新P「はあ…。やれやれだな。つたく」

智絵里「それで…！ プロデューサーさん！ 卯月ちゃん達は…」

新P「今連絡が来たトコだ。戦闘は無事終了。卯月も美穂も、もちろんかな子も。誰

「人ケガ人もなく、今こっちに向かつてるそうだ」

智絵里「良かったあ……」 ホツ……

響子「智絵里ちゃん達のユニット『ピンキーキュート』のデビューが、流れなくて良かった」

新P「そこは俺も一安心してトコだがな。卯月達の到着を待つ都合上、先方に話して歌唱順も入れ替えてもらった」

新P「智絵里達は、トリだ」

智絵里「と、トリ……ですか……?」

響子「わっ……。責任重大ですね……」

新P「向こうもこっちの都合を汲んでくれた上で、本来トリを飾るはずだったアーティストも納得してくれた上で、決まった事だ」

新P「そうそう融通なんて利かせられねえ。覚悟を決めんだな」

智絵里「……はいっ」

新P「へっ、緒方にしちやあいい返事だ」

響子「智絵里ちゃん、ホントに大丈夫?」

智絵里「だ、大丈夫……ですっ! 私達がこうやってる時間も、卯月ちゃん達が守ってくれた時間だから……! だから、私もちやんと、応えなきや……!」

智絵里「だから、きつと…大丈夫…！」

新P「おう、その意気だ。心配ねえ。今日この日まで、緒方は人一倍努力してきたんだ。努力は人を裏切らねえ」

新P「だから、自分を信じる。緒方！」

智絵里「…はい！」

響子「頑張つてね、智絵里ちゃん！」

新P「おいおい、他人事みてえに言ってるが、頑張るのは五十嵐も一緒だろが」

響子「え？私ですか？」

新P「緒方の前には五十嵐のステージがあるのを忘れたか？」

新P「五十嵐がソロで立つのは今日が初だからな。後輩の心配すんのは分かるが、自分の事に気を回したって誰も責めねえぜ」

響子「あははは…。ソロの事は、勿論覚えてますけど、やっぱり卯月ちゃんも美穂ちゃんも立つ、みんなのステージの方が気になりますよ！」

響子「もしステージが失敗しちゃったら、きつとみんなと同じくらい悔しいし、大成功なら、みんなで喜びを分かち合いたいじゃないですか！」

新P「お人好しだな。五十嵐は」

響子「えへへ…。それが私の取り柄ですからっ♪」

新P 「しっかし、上手く事が運んでくれたもんだ。島村達も収録時間ピッタリに納めてくれたみてえだしよ」

智絵里 「パイロットのお仕事もして、アイドルまでなんて……。大変じゃないんでしよ  
うか」

響子 「きつとスゴく大変なんでしよけど、私達には全然、そういう素振りを見せたりはしませんよね」

新P 「俺達に心配かけさせたくねえつてのはあるんだろうな。ともかく、トンでもねえ奴等だ」

新P 「今度、政府から表彰されるみてえだしな」

響子 「……何だか、どんどん遠くの存在になつてるような気がします」

新P 「不安か？」

響子 「はい……。卯月ちゃん達がどんどん遠くに行っちゃつて、私達の手の届かないところに行っちゃうんじゃないかって。そんな気がするんです」

新P 「大丈夫だ」

響子 「プロデューサーさん……」

新P 「アイツらは自分が何のために戦つてるかちゃんと分かつてるよ。アイツらが戦えてるのは、帰ってくる場所がちゃんとあるからだ。それは、家とか学校とかそういう

当たり前のところだけじゃねえ。ここも、だ。分かるな？」

響子「…はい」

新P「だから、余計な心配なんかすんじやねえ。俺達はただ、何でもねえって帰ってきた島村や小日向、三村。あと多田もか。ソイツらに、何でもねえようにおかえり、って言つてやりやあいんだ」

響子「——はいっ！」

スタツフ「島村卯月さんと、小日向美穂さん、到着しましたア！」

智絵里「…思つたより、早い…？」

響子「スタツフさんの人、何か慌ててましたね。もしかして…」

新P「アイツら…、またゲッターで飛んできやがったな！交通整理大変だつってんのに…！」

——そして、収録終了。

くくく 寮前 くくく

響子「本当に、今日はお疲れ様でした！」

美穂「お疲れ様ですつ、プロデューサーさん！」

新P「お疲れはお前らの方だろうが。特に小日向、出撃直後の撮影だつてのに、失敗もなしでよく頑張ったな」

美穂「い、いえ…。プロデューサーさんが気を遣ってくれて、歌唱順を入れ替えてくれたお陰です。それで、緊張する前に、少しリラックス出来て…」

新P「そか。ま、俺としちや今日本がどうなってるかも分かるんだが、アイドルの方にもちゃんと精を出してもらわねえとよ」

美穂「はい…！頑張ります！」

新P「仕事の方も順調に増えてきてる。テレビを作ってる側も、百鬼帝国なんぞに負けられねえって息巻いてる」

響子「学校でもどこでも、不安や心配を抱いてる人が沢山いますよね…」

新P「それを和らげるのがお前質アイドルの仕事だ。俺達の仕事は、今の時代だからこそ活きるんだよ」

響子「分かりますっ！戦場に出て戦うだけじゃない、みんなの日常を守るお仕事ですよね？」

新P「そういうこった。これからも頼むぞ、2人共」

響子「はい！」

美穂「こちらの方こそ、よろしくお願いします!!」

新P「おう。…んと、それと五十嵐、ほら」つ弁当箱。

響子「あ、どうも。今日も完食ですか？」

新P 「五十嵐のは店に出てるものと違って上手いからな」

響子 「プロデューサーさんって、いつも残さず食べてくれるから、作りがいがあるますっ♪」

新P 「また明日も頼むぜ。つつても、時間がねえなら、無理しなくてもいいからな」

響子 「はいっ♪よろしくお願いしますね！それじゃあ、また…」

美穂 「おやすみなさい、プロデューサーさん！」

新P 「おう、2人も、ゆっくり休んでくれ」

プロオオ…ン

響子 「……」

美穂 「…ふふっ」

響子 「な、何…?」

美穂 「あ、ごめんね？でも、よかったね、お弁当褒めてもらって」

響子 「こ、これは…。あの人、放っておくとインスタントとか、そういう、体に悪いものばかり食べちゃうから…。だから、別に変な意味なんてないですよ？」

美穂 「ふふ。そう言うことにしておいてあげる」

響子 「あ…、ほら！今日はもう遅いですし、早く部屋に戻って休みましょう？明日の支度とかもしておかないと…」



美穂 「あ！響子ちゃん待って！」

タツタツタツ… ガチャリ――。

くくく 繁華街 くくく

男A 「よよおねえちゃん。1人寂しく、何してんの？」

男B 「もしかしてカレシにフラれた？ならさ、俺らと遊ばない？」

女 「……」 ツカツカ

男A 「おいおいシカトかよ？」

男B 「全ツ然退屈させないからさア。ね、ちよつとくらい時間あるでしょ？」

女 「……」

男A 「おい、マジ聞こえてんのか？ねえちゃんよお！」

男B 「金髪きれいだねえ。ひよつとして外人さんかな？」

女 「……」 チラッ チラッ

女 「何だい？ひよつとして、アタシに話しかけてたのか？」

男A 「他に誰がいるってんだよ？」

女 「悪いねえ。てつきりアタシの後ろに、とんだアバズレでもいたのかと思つてさ」

男A 「アアン!?ねえちゃん舐めてんのか？」

男B 「よせよ！折角振り向いてもらえたのに、またチャンスを棒に振る気か？」

女 「ははっ！悪いけど、三ピンと飲む気はないよ。声掛けるんなら、自分の顔と位をよく考えるんだね」

男A 「テメエ!!」

男B 「よせてって！女相手に警察沙汰とか勘弁だぜ！お前今月何回目だよ!？」

男A 「つるせえ！ここまでコケにされて黙って引き下がれるかよ！」

男B 「だーかーらー!——!」

「おい」

男A 「あん?……!——へブツ」

打ち上げた拳が、男Aの体を跳ね上げて吹き飛ばす。

男B 「ひっ……!あ……あっ……!」

「おい」

男B 「ひい……っ!は、はいい……!」

「とつとと失せろ」 ギロツ

男B 「は、はひい……!し、失礼しましたあ……!!」 ダア——

「……つたく、あんな輩がまだのさばってんだな。見ててイラつくぜ」

「そこの、手エ出されちやいねえか?」

女 「お陰様でね。何かされそうになった手前で、アンタが助けてくれたからねえ」

「そうか。そいつあ良かった」

女 「で？何も見返りなしで茶々入れに来た訳じゃないんだろ？」

「まあな。へっ」

女 「何をしてほしいんだい？アンタならそうだね…。顔は悪くないから、お酌くらいなら付き合つてやるよ」

「まさか。酒は好かねえんだ。飲み飽きてるからよ」 ニツ

「先ずはご挨拶だ。俺は、こういうもんでね」 つ名刺

女 「…？芸能プロダクション…アイドルプロデューサー…？」

新P 「そう。アイドル、やってみるつもりはねえか？」

—。

新P 「—…と、言うわけで、これから俺とここでアイドル活動していく事になった、

胡蝶蘭さんだ」

胡蝶 「よろしく頼むよ」

一同 「(二)よ、) よろしくお願いします！(二)」

響子 (スツゴい…キレイな人…)

胡蝶 「…何だい？」

響子 「あつ、いえ…何でもない、です…」

胡蝶「……ふうん」

新P「あー、胡蝶は田舎から出てきたばつからしくてな、まだこの辺りの事に疎い。最近の流行りとか、まあ若者のお前らが上手くフォローしてくれ」

卯月「分かりました！それで、お休みの日に呼んだんですね」

新P「ああ。正直悪いと思つたんだが、顔合わせは早い方がいいのと、親睦を深めるなら丁度いいと思つてな」

新P「尤も、お前らの方で他に先客がなきや、の話だな」

響子「私の方は大丈夫ですよ！お部屋のお掃除したかったな、くらいで」

智絵里「私も…、予定とか、全然決めてなかったです」

かな子「私達も同じだよな？」

美穂「そうだね。この間出撃があつたばかりで、警戒待機も瑞樹さん達と李衣菜ちゃん達がやってくれてるから…」

胡蝶「…出撃……？」

新P「そーいや言つてなかつたか。そつちにいる島村と三村、小日向。あと今日はここにやいねえが多田李衣菜って奴も、みんなまとめてゲッターロボのパイロットをやつてる」

胡蝶「こんな子供達がかい？」

卯月「えへへ……。自分でも不釣り合いな事してる、って思う事はあるんですけど……」  
胡蝶「何か理由があるんだね？」

卯月「はいっ！明日のため、みんなのために頑張るって決めたんです！ね？」  
かな子「はい♪」

美穂「うんっ！」

胡蝶「へえ、何にせよすごいじゃないのさ。言って簡単に出来る事じゃないよ」

新P「ま、その分急な出撃とかでスケジュールが狂う事が多々ある。これからそういう言うことも出てくるだろうから、予め把握しといてくれ」

胡蝶「あいよ」

美穂「ホントに、プロデューサーさんにも響子ちゃん達にも目一杯迷惑かけっぱなしで、申し訳ないです……」

智絵里「そ、そんな事……全然気にしてないよ……！」

響子「智絵里ちゃんの言うとおり！今日は1日お休みなんだし、ゲッターの事も忘れて遊びましょ？」

卯月「はいっ！今日はみんなで、親睦会です！」

新P「おう、くれぐれもトラブルだけは起こすなよ」

かな子「プロデューサーさんは行かないんですか？」

新P「女所帯に俺だけ混ざれるかよ。それに、俺には俺の方で、仕事が残ってるしよ」  
響子「日曜日なのに、大変ですね…。体だけは怖さなくてくださいね？」  
新P「心配されるまでもねえよ。社会人は体が資本なのは分かってたんだ」  
新P「お前えらこそ。大人にあんま氣イ遣わなくていいから、今日は思いつきり羽を伸ばしてこい」

卯月「プロデューサー…！はいっ♪」

響子「それじゃあ、行ってきます」

新P「おう、車と百鬼帝国には氣を付けてな」

胡蝶「……」

—。

卯月「それじゃあ、先ずはどこから行きましようか？」

かな子「あ、それなら、私ずつと行って見たかったケーキバイキングのお店があるんですけど……」

胡蝶（…まさか、こんなところでゲッターのパイロットに出会えるなんてね。なんて運命の巡り合わせかい？）

卯月「——？」

美穂「——♪」

胡蝶（まるで隙だらけじゃないか。これなら、今ここでアタシー人でもこいつらを――

↓

卯月「――…あ、胡蝶さん」クルッ

胡蝶「（気付かれた？）…な、何だい？」

卯月「改めましてですけど、よろしくお願ひします！」ニコッ

胡蝶「…?!…あ、ああ…よろしく…」

胡蝶（何だ…？コイツの、さっきの表情…。闘志が削がれて、気持ちが…安らいでいくような……）

響子「胡蝶さん、どうかしたんですか？」

胡蝶「な、何でもないよ…。ちよつと気が抜けちまつてね…」

かな子「あ、分かります。私も最初の挨拶の時は緊張したな」

智絵里「私も…。芸能界は怖いところってイメージがあつたから…」

美穂「考えすぎだよ。確かに怖い人もいるけど…」

響子「今、プロデューサーさんの事考えませんでした？」

美穂「し、してないしてない…！確かに顔は怖いけど、優しい人だし…」

響子「でも顔は怖いって思ってるんじゃないですかー！」

卯月「きよ、響子ちゃん落ち着いてー！」

胡蝶「……」

胡蝶（…不思議なもんだね。これがこいつらの日常、って奴なのかい）

智絵里「あ、あの…！」

胡蝶「ん？どうかしたかい？」

智絵里「良かったら、これ…」

胡蝶「これは…？」

智絵里「四つ葉のクローバー…。その集めるのが好きで、葉にしてみんなに渡したりしててなんです」

胡蝶「へえ…。葉か…」

智絵里「こんな時代だし、幸運のお守りなので…。良かったら」

胡蝶「幸運のお守りかあ…。いいね。貰つといてあげるよ」

智絵里「あ、ありがとうございますっ！」

胡蝶「いやいやこちらこそ。幸運のお裾分けだなんて、お前は優しいんだね」

智絵里「そんな事…」

胡蝶「さ、ほら、みんな行っちゃおうよ？急がないと」

智絵里「は、はい！みんな待っててください〜！」　パタパタ

胡蝶「……」



胡蝶（幸運のお守り、ね……。こんなモン、アタシらの間じゃ何の意味もないけど、人間はジंकクスを大事にすんだねえ）

卯月「胡蝶さーんっ!!」

胡蝶「ああ、今行くよ」

胡蝶（ま、殺すなんて何時でも出来るし、こいつらといえるのは楽しそうだ）

胡蝶「しばらくの間は、様子見だよ——」

~~~~~ 数日後 ~~~~~

トレーナー「よし、そこまで！1時間休憩だ。各自、レッスン後のケアを怠るなよ」

響子「はいっ！ありがとうございます！」

トレーナー「ん。それじゃあ1時間後にな」 スタスタ……

智絵里「はあ……はあ……はあ……」

胡蝶「すごい汗だね。大丈夫かい？」

智絵里「は、はい……。ちよつと休憩すれば……」

胡蝶「張り切り過ぎだよ。アイドルがやるライブってのは、この前終わったばかりで、まだしばらく予定がないんだろう？」

智絵里「そうですけど、でも、ライブだから頑張るとかじゃなくて、いっつも頑張っていないと……。私、変なところでドジしちゃうから……」

胡蝶「自分に自信がないんだね。もうちょっとしゃんと胸を張ってしつかりしないと」

智絵里「あう……。プロデューサーさんにもいつも言われます……」

響子「でも胡蝶さんもスゴいですよね？歌もお上手だし、ダンスも体力も……。今のレッスんだって、全然息切らしてませんでしたし」

胡蝶「体を動かすなんてのはね、コツなんだよコツ。無駄な動きをなくせば、自然とどれだけ動いても息が上がりなくなるもんだよ」

智絵里「そ、そういうもののかな……？」

響子「少なくとも、私が見た中でレッスンで息切らさなかったのって、卯月ちゃん達くらいでしたよ」

智絵里「卯月ちゃん達は、ゲッターに乗ってるから……。スゴいですよね……」

響子「ひよっとして胡蝶さんも前に何かしてんですか？」

胡蝶「え？あ、ああ、運動を少し、ね」

響子「へえ、やっぱり体を動かすのって大事なんですネ！」

智絵里「このプロダクションにも、アイドルやる前は、スポーツをやっていたり、体動かす仕事してた人も、結構いますよね」

胡蝶「でも、女は愛嬌なんて言うだろう？アイドルは愛嬌を売る仕事なんだし、そん

な考えすぎないで、気楽にやるのが吉さ」

ガチャツ

新P 「おす、お前ら、休憩中だな？」

響子 「プロデューサーさん！」

智絵里 「お、お疲れ様ですっ」

胡蝶 「サボりかい？」

新P 「なわけねーだろ。ほれ、差し入れだ」

胡蝶 「ふうん。いいね、気が利く男はモテるよ」

新P 「ありがとよ。気を利かせる事が仕事みてえなモンだしな」

胡蝶 「あつははは！何だい？そんな人の顔色窺うみたいな仕事で、ヤになったりしないのかい？」

新P 「誰かにコキ使われたりするよかマシだぜ。ま、要するに慣れだな」

胡蝶 「慣れねえ…」

新P 「そういうそっちはどうだ？もう慣れたか？」

胡蝶 「ああ。お陰様で、先輩方も優しいんでね」

新P 「何だ、お前ら。年上だからって気イ遣つてんのか？先輩なんだからもつと遠慮しねえでガツンと言ってやれ」

智絵里「え…あ、はい！」

響子「いや、ここは素直に返事しちやダメなところだと思うよ智絵里ちゃん？」

胡蝶「プロデューサーからパワハラの強要つてのはどうかと思うよ？」

新P「別にパワハラでもねえだろ」

新P「まあ、お前がここに馴染めてるつつうんなら一つ安心したぜ」

胡蝶「アンタが安心してくれるのはいいけど、アタシも舞台上上げてもらわないとね」

胡蝶「舞台袖でお預け喰らうのもいい加減にしてもらいたいよ？」

新P「おう、そこは待つてな。お前はスジがいいからな。黙つてたつて仕事は入つてくるよ」

胡蝶「本当かい？嘘だつたら後が酷いよ？」

新P「へっ、胡蝶みてえなべっぴんさんに責められるんなら、悪くねえかもな？」

胡蝶「言つたね？その言葉、よく覚えときなよ」

響子「……」

智絵里「…仲良いですよね、プロデューサーさんと胡蝶さん」

響子「それは、胡蝶さんここに来て日が浅いし、プロデューサーさんが気に掛けるのは当然じゃないですか？」

智絵里「そ、そうなのかな…？」

響子「はじめて事務所に来て何日かは、私もそうだったし、智絵里ちゃん達だって同じでしょ？」

智絵里「う、うん……。でも響子ちゃん、どうかしました？」

響子「べ、別に……。何時もと変わりありませんよ？」

智絵里「そうかな？ 何だか、ちよつと元氣ない……。とうか、機嫌が悪そうです」

響子「そんな事ないですよ。今レッスン終わりでちよつと疲れちゃってるだけで、機嫌なんて悪くありませんから」

智絵里「で、でも……」

響子「ほら、プロデューサーさんの差し入れ、頂いちゃいましょう？ 駅前のあの店のシュークリームですよ」

智絵里「う、うん……」

——夕方。

智絵里「それじゃあ、お疲れ様でした！」

胡蝶「ああ、智絵里達も気を付けて帰るんだよ」

智絵里「はい！ また、明日ですっ！」

タツタツタツ……

胡蝶「ふつ、ホントいい子だよ。……」

胡蝶「いるんだろ？とつと出てきな」

鉄甲鬼「……」

胡蝶「まったく…。さつきまでいい気分だったのに、そんな辛気臭い顔を見せられちまつたら興も冷めちまうね」

鉄甲鬼「何をしている。胡蝶鬼」

胡蝶「見ての通り、さ。変わった事は何もしちやいないよ？」

鉄甲鬼「人間社会の偵察なら諜報員に任せておけ。我々百鬼衆の出る幕ではない」

胡蝶「……はあく。仕事、役割、務め。ホント、そんな風にしかものを考えられないんだね」

鉄甲鬼「何が言いたい？」

胡蝶「見てみなよ。ここに生きてる人間って奴は、みんな自由に生きてる人間」

鉄甲鬼「……」

胡蝶「仕事、役割なんてのはあるかもしれない。けどどこの連中は、それ以上に多くのものを持つてる」

鉄甲鬼「それ以上のもの、だと…？」

胡蝶「友達と長電話、日向ぼっこ、家事をしてみたりお菓子を作ったり…後、四つ葉のクローバー集めなんて言ったっけ」

胡蝶「何一つ知らないだろう？同じ役割をこなすでも、アイツらはその合間に好きな事をしてる。人間は趣味、って呼んでるみたいだけど」

胡蝶「ただ戦いのために生きてるアタシらとは違う。アイツらにとっては、アイドル活動だつてそんな“趣味”なのかもしれない」

鉄甲鬼「……くだらん。自ら晒し者になる事に何の意味があるか」

胡蝶「意味なんて求めてる内は答えなんて出ないよ。みんな、好きだからやるんだ」

胡蝶「んで、好きなものを守るために戦うんだ」

鉄甲鬼「……それが奴等の強さの所以か」

胡蝶「おっと、やらせないよ。ここは今、アタシの居場所になりつつあるんだからね」

鉄甲鬼「フンツ、侮るな。元よりそんな卑怯な真似などするつもりはない」

鉄甲鬼「強者は正々堂々、正面から倒してこそ名が上がるというものだ。ゲッターの

強さの拠り所が分かった。今はその事実だけでいい」

胡蝶「殊勝だね」

鉄甲鬼「人間の言う“シユミ”……。それがどんなものか分かるつもりはないが、俺にとつては戦うことがシユミのようなものだ」

鉄甲鬼「ならば、思いきり楽しまなければ損、そういうものなのだろう？」

胡蝶「ははっ！……アタシは見逃してくれるのかい？」

鉄甲鬼「元より、人の話など聞かぬ癖に……。好きにするがいい。ヒドラー元帥には、俺から話しておく」

胡蝶「すまないね、迷惑掛けるよ」

鉄甲鬼「思ってもない事は口にしらない事だ。ではな。念のため、提示連絡は忘れるな」

胡蝶「あいよ。それじゃあね」

胡蝶「……はあ、と」

——
ダッ

胡蝶「やれやれだね……。まったく……」

——。

響子「——はあ……つ、はあ……つ、はあ……つ……！……キヤッ！」 ドテッ

足をもつれさせて転ぶ。

響子「はあ……はあ……はあ……はあ……。そんな……胡蝶さんが……！」

響子「連絡……！誰に……プロデューサーさん……！」

響子「……」

咄嗟に携帯を取り出して、しかし手を止める。

響子「……私、嫌な子だ……」

「大丈夫かい？」

響子「ひっ……！こ、胡蝶、さん……！」

胡蝶「やつぱり、アンタだったんだね……。響子」

響子「ヤ……イヤ……！お願いですから、殺さないで……！」

胡蝶「……」

響子「やあ……いやあ……っ」

胡蝶「はあ……。そんなに怯えられると、流石に堪えるね」

響子「……え……？」

胡蝶「命乞いなんてしなくても、別に殺しやしないよ」

響子「……ど、どう……し……て……？」

胡蝶「殺さないでと言ったくせに、面白いこと言うねえ。殺す理由がないからさ」

響子「で、でも……私、いま……プロデューサーさんに連絡しようとしたんですよ？」

胡蝶「でもしなかったね。何故だい？」

響子「それは……」

胡蝶「ん？」

響子「……。やった、って思ったんです」

胡蝶「やった？」

響子「可笑しいですね？胡蝶さんは最近来たばかりの、まだ新人で、プロデュー

サーさんがそつちに目を掛けるのは分かつてる。智絵里ちゃんにも、自分でそう言ったのに……」

響子「でも、悔しかったんです。胡蝶さんの方が、私よりずっとキレイだし、年もプロデューサーさんと近そうだし。私なんかより……ずっとプロデューサーさんの隣が決まってる……」

胡蝶「……」

響子「だから、さつき見た事、全部話しちやつてそうすれば、胡蝶さんもいなくなつて、またプロデューサーさんの隣に立てるのかな、なんて」

響子「あはは……。何でだろう……？こんな風に言つちやつたら、殺されちゃうかもしれないのに……。でも、言ったらスツキリしちやつたあ……。あははは……」

胡蝶「……」

響子「もう、良いのかな……。こんな汚い、イヤな子は鬼に殺されて、当然だよね」

胡蝶「……バカだねえ、アンタ」

響子「はい……」

胡蝶「何も取りやしないよ。アンタから、命も、男もね」

響子「え……？」

胡蝶「ははは……！可笑しな勘違いをさせちまつたね。安心しな。アタシの好みは、も

う少し手の上で転がせそうな奴だから」

響子「違つ……！胡蝶さんが悪いんじゃない……！」

胡蝶「それに、だ」

響子「つ……」

胡蝶「さつき、殺す理由がないなんて言ったけどね。殺さない理由ならあるんだ」

響子「殺さない理由……？」

胡蝶「ああ。アンタらと出会ってね、まだほんの何日かかもしれないけど、アンタらに情って奴が沸いちゃったんだ」

胡蝶「だからね、プロデューサーなんて男に比べたら、よっぽどアンタの方が好きなのさ」

響子「胡蝶さん……！」

胡蝶「もしアンタがここで、プロデューサーに全部言っちゃうってんなら、そりゃアンタの自由だよ。アタシは大人しくここから去るさ」

胡蝶「けど、もし許されるんなら、もう少しここで、アンタ達と一緒にいたいかねえ」

響子「……。…そう、ですか……」 スツ

胡蝶「プロデューサーに連絡しなくていいのか？」

響子「百鬼帝国って、スゴく……怖いと思います。あんなおつきなロボットに乗って

やってきて、街もみんな壊しちやつて。卯月ちゃん達も連れてつちやつて」

響子「だけど、胡蝶さんは、怖くありませんから……！」

胡蝶「——フフツ。そうかい」

~~~~ プロダクションビル 屋上 ~~~~

胡蝶「——あはは、何だい？ プロデューサーの事、好きだつて言ったのに、まだ告白もしてないのかい？」

響子「だ、だつて……。実際に言うのは、恥ずかしいし……。それに……」

胡蝶「それに？」

響子「……」

胡蝶「まさか、向こうから言つてきてくれたり、なんて思つてんじゃないだろうね？」

響子「うう……」

胡蝶「バカだねえ。あの手の男は自分から好きになろうが、相手にそんな事言うタイプじゃないよ」

響子「ですよねー……」

胡蝶「分かつてんだつたら、ドカンと一発、派手にいかないとね」

響子「自分から、ですか？」

胡蝶「何を怖じ氣づいてんだよ。あんだだけの観客を前にしたライブの時は好きだの愛

してるだの言い回って歌ってるくせに」

響子「あれは……！そう言うのと違いますよ……！」

胡蝶「似たようなもんだろ。アンタが歌ってる歌は、誰に対して歌ってるもんだい？」

響子「それは……。あう……」カア

胡蝶「あつはは！顔を真つ赤にしちやって、可愛いねえ

響子「か、からかわないでください！」

胡蝶「からかつちやいないよ。アタシは本気さ」

響子「胡蝶さん……」

胡蝶「いいかい？命つてのはたった一つ。替えの利くもんじやないんだ」

胡蝶「なら、そのたった一つの命で、やつて後悔するのがいいか、やらないで後悔するのがいいか、考えてみたら分かることだろう？」

響子「……はい」

胡蝶「こんな時代、だろう？そうしたのはアタシらだけどさ。けど、こんな時代だったら、他の女に取られちまうより、二度と会えなくなつちまうなんて事もあるんじゃないか？」

響子「……はい……」

胡蝶「ならさ、幸せになりな」

響子「し、幸せに……」

胡蝶「“命短し恋せよ乙女”だよ。あの男と会えなくなるのが嫌だと思つたんなら、幸せになりな」

響子「胡蝶さん……はいつ」

胡蝶「いい返事だよ。あととはそれを実行に移す、度胸だけだね」

響子「あうう……。それは言わないでください……」

胡蝶「あつはは。それはまあ、アンタが自分で頑張んなよ」

響子「うう……。卯月ちゃんじゃないですけど、頑張ります……。——つて、胡蝶さん？」

胡蝶「何だい？」

響子「どうかしたんですか？涙が……」

胡蝶「え？ああ、顔に出ちまつてたのかい。コイツは良くないねえ」

響子「……やっぱり……」

胡蝶「あつはは！だーかーらー違うんだよ。これはそう言うんじゃないつて」

響子「じゃあ、何なんです？」

胡蝶「んー？……んや、ちよつと、ね……」

胡蝶（自分の生まれの不幸つて奴を、呪つちまつてね……——）

くくく 数日後 某ビル くくく

響子「ついにこの日が来ましたね！胡蝶さん！」

胡蝶「アタシの舞台だってのに、何だってアンタが張り切ってんだい？」

響子「私だってその舞台上がるんですよ！張り切って当然ですよ！」

胡蝶「……たく、いいのかねえ……。新参のアタシが、売れっ子を後ろにおいて立つち  
まっつて」

美穂「気にしないでください。どんな形だって、ステージに上がれるのは、嬉しい事  
ですから」

卯月「ライブが出来る機会も限られてますからね。胡蝶さんステージにたくさんの人  
が来てくれるきっかけになれば……」

胡蝶「まったく、先輩の気遣いに嬉しくて涙が出るよ」

響子「頑張つて下さい！胡蝶さんなら、プレッシャーにも負けないって、信じてます  
から！」

胡蝶「ありがとうよ。ま、せいぜい期待には応えるさね」

卯月「——ふふつ。それにしても、京子ちゃんと胡蝶さん、すっかり仲良くなりました  
たね？」

響子「え？そうかな」

美穂「うん。横から見ると、まるで姉妹みたいだよ」

胡蝶「ふふっ。アタシと響子はマブだからね。ねえ？響子」

響子「ま、マブ……？」

美穂「何ですか、それ？」

卯月「あ、でも私前に菜々ちゃんと言ってるの聞いたことありますよ」

胡蝶「おっと、そんな古い言葉じゃないと思っただけどねえ」

スタツフ「——アイドルの皆さん、準備お願いしまーす！」

卯月「あ、はい、分かりました！」

胡蝶「つと、もうそんな時間か」

美穂「い、いよいよ本番かあ……」

胡蝶「おいおいお、何で先輩のアンタが緊張してんだい？」

美穂「だ、だって、こう言うのは何時まで経ってもなれないよ……」

胡蝶「初々しいねえ。覚悟は出来てんだろ？しっかりしな」

美穂「は……はい！」

卯月「ふふふっ。どっちが先輩か分かりませんね？」

美穂「もう、卯月ちゃ〜くん！」

胡蝶「あっはははは！」



響子「あの、胡蝶さん」

胡蝶「何だい？」

響子「このライブが上手く行ったら、どこか行きませんか？」

胡蝶「どうしたんだい？いきなり」

響子「ほら、胡蝶さんにとっては初めてのステージだし、お祝いしたいんです！」

胡蝶「そうかい…。じゃあ、買い物にでも付き合ってもらおうかね」

響子「買い物…？」

胡蝶「ああ。どうやらアタシはセンスがちよいと古いみたいだからね」

胡蝶「だから、若者のアンタに色々教えてもらおうと思つてね」

響子「…はい！そう言うことなら、微力ながらお手伝いさせていただきます！よろしくお願ひします！」

胡蝶「おいおい、よろしくされるのはこっちだよ」

ズズズズズズズズズ…

響子「—…きやつ！」

胡蝶「大丈夫かい？響子」

響子「は、はい…。でも急に…、地震？」

卯月「いえ、これは多分地震なんかじゃありません…！」

美穂「卯月ちゃん！外を見て！」

卯月「あれは……！百鬼メカ！」

胡蝶「……アイツは……」

響子「胡蝶さん……。知ってるんですか？」

胡蝶「とにかく避難だ。ここにいたんじや戦闘に巻き込まれる。そうだろ？卯月」

卯月「はい！」

—— タツタツタツ…… ガチャンツ

新P「お前ら！全員揃ってつか!？」

かな子「卯月ちゃん！」

卯月「プロデューサー！かな子ちゃんも！」

胡蝶「丁度いいね。今避難しようってとこだよ」

卯月「かな子ちゃん、研究所の方には？」

かな子「連絡しました！待機中だった凜ちゃんが、ライガーで飛んでくるそうです！」

新P「なら、卯月達はそっちに合流だな。残りは俺に着いてこい」

響子「はい！」

美穂「卯月ちゃん、頑張ってね」

卯月「はい！今日のライブは、必ず無駄にはさせません！行きましよう、かな子ちゃ

ん！」

かな子「はいつ！」

ダツ

——ゲッターGコックピット。

卯月「…んしよつと」

凜「卯月、かな子。準備出来た？」

かな子「はい！パイロットスーツに着替える時間はありませんでしたけど、大丈夫です！」

卯月「それで、どうしますか？」

凜「ん。別に私はこのままでもいいんだけど、相手が妙だね」

卯月「…全く動かないって事ですが、ですか？」

凜「うん」

かな子「私達が準備してる時から、微動だにしませんからね」

凜「最初はゲッターを待つてるのかとも思ったけど、ゲッターが到着してからも動かないとなると、なんかあるね」

卯月「畏、ですか？」

凜「うん。先ずは分析してる晶葉の結果待ちだね」

かな子「それにしても、ホントに動きませんね…」

卯月「ちよつと近付いてみませんか？」

凜「……。そうだね。晶葉にデータを送るには、くまなく見回した方がいいか」

ゲッターライガーを前進させ、百鬼メカに近付ける。

卯月「近付いても、攻撃してきませんね」

凜「武器は内蔵式かと思っただけ…」

かな子「武器どころか、動くための足とか、そういうのも見当たりませんね」

卯月「でも、これは地下から現れたんですよ？」

凜「……。頭頂部みたいなのに、切削機関のようなものだけ着いてるのかもしれない」

かな子「けど、今ほとんどゼロ距離ですよ？これだけ近付いても何もしてこないなんて…」

卯月「ほら、触る事も出来ませよ？」

凜「端からパイロットなんて乗ってないのかもね」

卯月「どう言うことですか？」

凜「武器と言う武器はなし。移動してきたのも、地下を掘り進んできただけで、それから面立った動きもなし。…となると」

かな子「なると?」

凜「コイツ自身が、兵器」

卯月「…コレが爆弾か何か、って言うことですか?」

晶葉『待たせたな。悪い知らせだ』

かな子「晶葉ちゃん!…悪い知らせって、何です?」

晶葉『こちらでその百鬼メカの分析をした。結果、そのメカの内部から高濃度の濃縮ウランとほぼ同様の反応が確認された』

凜「濃縮ウラン…。って事は…」

卯月「原子爆弾——!」

——避難シェルター。

響子「じ、自雷鬼…!?百鬼帝国の戦略兵器ですか!」

胡蝶「しっ。声が大きいよ」

響子「あつ…。ごめんなさい…」

胡蝶「…：ブライは、この街ごとゲッターを葬り去る気だよ。あれが爆発したら、こんな都市一つ、まるごと焦土さ」

響子「な、何とか出来ないんですか…?」

胡蝶「無理だね。一度起動した自雷鬼を止める手段はない」

響子「そ、そんな…」 ガクッ

胡蝶「……」

胡蝶「…いいかい響子。何があっても、絶対にここから動くんじゃないよ」

響子「え…？胡蝶さんは…」

胡蝶「アタシは…。アタシに出来ることをするさ」 ダッ

響子「えっ…！胡蝶さん、待ってください！胡蝶さあああんっ!!」

新P「五十嵐！胡蝶がどうした？」

響子「プロデューサーさん…！私…、私…！」

新P「五十嵐…！」

—。

卯月「—…それじゃあ、迂闊に攻撃したら…！」

晶葉『ゲッターGもろとも、都市一つ木っ端微塵だ』

かな子「そんな…！」

晶葉『尤も、次元装置のようなものも確認されている。我々がここで手をこまねいて

いても、いずれ爆発するだろう』

凜「……」

かな子「ど、どうすればいいんですかあ！」

卯月「凜ちゃん、ドラゴンにチェンジしてください」

凜「考えている時間はないか」

かな子「え…?」

凜「オーブンゲツト!」

卯月「チェーリング、ドラゴンツ!」

ゲッタードラゴンにチェンジし、自雷鬼に掴みかかる。

かな子「まさか、ゲッターで百鬼メカを空まで運ぶんですか!?!」

凜「私達3人で、東京に住む数百万人の命を守るなら、安いものだよ」

卯月「かな子ちゃんごめんなさい…。覚悟を決めてください!」

かな子「…はいっ!」

卯月「マツハウイーニング!!」

背中の翼が開き、ゲッタードラゴンが宙に舞い上がる。

晶葉『卯月、高度3万メートル以上まで上がれ。そこまで上がれば、都市に放射能の

被害もないだろう』

卯月「ありがとうございます、晶葉ちゃん」

晶葉『…考えてみれば、コレが百鬼帝国の狙いだったのかもしれないな』

凜「こうすれば、私達だけでも倒せるって訳…」

かな子「これだけの重量の百鬼メカ…。ゲッタードラゴンかポセイドンじゃないと運べませんかからね…」

凜「連中の術中にはまるのは癪だけど…!」

卯月「だからって、大勢の人を犠牲になんて出来ません!」

「相変わらず、言うことは甘ちゃんだねえ」

卯月「——!?…この声、胡蝶さん…?」

晶葉『卯月、後方から所属不明機の反応。恐らく百鬼メカだ!』

凜「新手?」

かな子「も、もしかして乗ってるのは胡蝶さんですか?」

胡蝶「そうだよ」

かな子「ど、どうして…、胡蝶さんが…!?!」

胡蝶「考えれば分かるだろう? そう言うことさね」

卯月「……」

凜「マズいよ…。このまま狙い撃ちされたら…!」

胡蝶「……」

卯月「きゃあっ!」

自雷鬼からゲッタードラゴンを引き剥がし、代わりに自身が張り付く。



胡蝶 「選手交替だよ。ゲッターロボ！」

凜 「…何のつもり？」

胡蝶 「ふっ…。ありがとうよ。お前達のお陰で、初めての本気で笑顔になれた気がするよ！」

かな子 「な、何の事を言ってるんです？」

胡蝶 「こっちの話さ。お前達のその笑顔、無くすんじゃないよ！」

卯月 「胡蝶さん…！」

胡蝶 「勘違いはするんじゃないよ！ゲッターロボには、アタシだってたくさんの同僚を殺されちまったんだからね」

凜 「ならどうするの？なんならこの場で決着を着けても…」

胡蝶 「遠慮しとくよ！アタシにもね、守ってやりたい奴が出来た。ただそれだけの事さね！」

卯月 「胡蝶さん！」

胡蝶 「丁度いいや。卯月、響子に、約束を守れなくて悪かった、って伝えといてくれかな子「ま、待ってください！」

胡蝶 「鬼のアタシが言えた義理じゃないが、長生きするんだよ！」  
メカ胡蝶鬼が、高度を上げていく。

胡蝶（ふふっ。可笑しなもんさね。アタシが誰かのために、命を投げ打つなんて…）

胡蝶（——響子…）

胡蝶「次に生まれ変われるとしたら、人間になりたいもんだね——」

——ドワツ

卯月「……あ！」

凜「……」

かな子「ああ……！」

腹の底に響くような重低音。太陽と見間違えるような白く激しい光円。

地球と宇宙の狭間に瞬いた光は、ほんの数秒の間、直下の都市を照らし出した——。

くくく 早乙女研究所 くくく

卯月「——…それじゃあ、響子ちゃんは胡蝶さんが百鬼帝国の鬼だったって、知って

たんですね」

響子「…はい」

凜「…何をしたか分かってる？敵のスパイを匿って…！」

響子「そんなんじゃないやありません！胡蝶さんは、そんな事のために私達のところに来た

わけじゃ…」

凜「確証はないよ。私達の情報が、百鬼帝国に流れたかも」

卯月「やめてください、凜ちゃん」

凜「…卯月」

卯月「私も、胡蝶さんはスパイ活動をするために来たんじゃないと思います」

卯月「だって、私達とレッスンしたり、一緒に仕事してる時の胡蝶さんは、本当に楽しそうにしましたから」

凜「……」

卯月「少なくとも、響子ちゃんと胡蝶さんは友達だったんです。そうですよね？」

響子「……ライブが終わったら、買い物に行くつて、約束したのに………バカ……」

卯月「…それなら、今はほんの少しの間でも、一緒に過ごした仲間として、悼みたいんです……」

凜「……」

凜「…分かったよ。この事は、私の胸に閉まっておく。晶葉には報告しないでおくから」

卯月「ありがとうございます。凜ちゃん」

凜「私の事はいいから。しばらくは、響子の傍にいてあげて」

卯月「…はい」

凜「それじゃ」

ガチャ バタン…

卯月「…響子ちゃん」

響子「…確かに、胡蝶さんは、私達にとって、敵だったかもしれない」グスツ

卯月「そうですね…」

響子「でも…、だけど…！友達だったんです…っ！大切な人だったんですよお…！」

卯月「はい…。よく、分かりますよ」

響子「う…う…！うあああああ——！！」

卯月「響子ちゃん…」

卯月（いろんな人の、大切な人を奪っていく…）

卯月（絶対に許しません…！百鬼帝国…！——）

くくく 街中 くくく

鉄甲鬼「……」

鉄甲鬼「…作戦は、失敗に終わったか。しかし…」

イヤアタイヘンダツタネエ オレマジビビツタワア ケツキヨクヒヤツキテイコ

クツテナニシタカッタノ？ アハハ——

鉄甲鬼（胡蝶鬼…。貴様は、何故そこまで——）

くくく 後日 くくく

響子「……」

——胡蝶『あの男と会えなくなるのが嫌だと思ふんなら、幸せになりな』

響子（胡蝶さん……）

響子「！」

ガチャツ

響子「おはようございまーすっ！」

新P「——おう、五十嵐。おはよう。相変わらず朝早いな」

響子「プロデューサーさん！今、1人ですか？」

新P「？ おう。この時間にここに来てる人間なんぞ、俺と五十嵐くれえなもんだろ  
うな」

響子「そうですか……」

新P「五十嵐？」

響子「……」

スウ……

響子「あのっ！私、プロデューサーさんに聞いてもらいたい話があるんですっ！」

新P「いきなり改まって……。何だ？」

響子「そのつ、実は、私——」  
つづく

## 第2話『アトランティスの守護神!』

~~~~~ 新早乙女研究所 所長室 ~~~~~

かな子「アトランティスの古代都市、ですか?」

晶葉「うむ。皆も先日、大西洋沖で起こった大規模な地殻変動は覚えているだろう?」

卯月「……そんな事があったんですか?」

凜 「ほら、この間ニュースでもやってたでしょ。津波で沿岸の都市にも大分被害が出たって」

卯月「えく……つと……。ごめんなさい……。朝はゆつくりテレビ見てる時間がないので……」

かな子「私も……。朝御飯食べながら、聞き流しちやつてるかもしれない」

凜 「……まあ、私も真剣に見てたわけじゃないけど。それで、晶葉?」

晶葉「ああ、その地殻変動の影響で、これまで海底深くに眠っていたらしい古代遺跡が姿を現した」

晶葉「近隣の国は、直ぐに調査団を結成して調査に乗り出し、遺跡の壁画などに刻まれた古代文字から、おそらくその遺跡は、多くの古文書にその存在を記されてきた巨大

王国、アトランティスの都市の一部だったのだろうと推測された」

卯月「スゴいじゃないですか！まさに世紀の大発見って事ですね？」

凜「それで、晶葉がわざわざここに私達3人を呼び出したのは、世紀の大ニュースを熱っぽく私達に報告するため？」

晶葉「まあ焦るな。ここからが卯月達を呼んだ話の本題でな。つい一週間ほど前から、その調査団との連絡が取れなくなっている」

かな子「何かあったんですか？」

晶葉「事態を受け、調査団を派遣した国も調査団の搜索や救助のために軍を派遣したが、その軍の部隊とも連絡が取れなくなった」

晶葉「今日の朝になって、その部隊の隊員と思われる男性が1名のみ救助され、救助隊員にこう言ったそうだ」

晶葉『『百鬼帝国に襲われた』とな』

卯月「百鬼帝国……！」

凜「ホント、アイツらはどんな国にも節操なく……」

晶葉「百鬼帝国が、全世界に対して散発的に攻撃を行っていたのは元からだがな」

晶葉「話から察するに、アトランティスの古代都市も、百鬼帝国の手に落ちたと考えて先ず間違いないだろう」

かな子「それで、私達の出番、何ですんね？」

晶葉「そうだ。各国もゲッターに匹敵するスーパーロボットの配備を進めている。だが現状、百鬼帝国に正面から抵抗しうる戦力はゲッターGしかない」

卯月「確かに、ゲッターGなら百鬼メカが2、3体相手でもなんて事ないですけど」
凜（……）

晶葉「ゲッターGの戦闘力を以て百鬼帝国を殲滅し、古代都市を奪回する」

晶葉「これが、今回政府から我々に与えられた任務だ」

かな子「でも、古代都市を占領されちゃつてるって事は、自然とそこが戦場になるわけですよね？」

卯月「古代都市を壊さないように戦わないといけないとなると…、いつものようにはいきませんね」

晶葉「頼むぞ。この遺跡は歴史的価値も高い。今後の調査の事も考えると、損害はなるべく抑えてくれ」

卯月「うう…。が、頑張ります！」

凜「卯月とかな子はプロデューサーに話してきて。今後の予定の調整が必要だよ」
かな子「そうですね。海外行くことにもなりますしね」

卯月「そう言えば、海外っていいんですか？ パスポートとか、領空侵犯とか…」

晶葉 「それについては問題ない。超法規的措置というやつだ」

晶葉 「そもそも、行ったところでのんびり観光してる暇もないだろう？」

卯月 「か、観光するつもりはないですけど……」

かな子 「卯月ちゃん、プロデューサーさんに連絡しないと」

卯月 「あ、そうでした！ それじゃあ晶葉ちゃん、ちよつと失礼しますね」

晶葉 「うむ」

凜 「私は格納庫に行くよ。準備が整うまでにゲッターの方を点検しておきたいし」

凜 「それと、テスターチームにも声を掛けておくよ。向こうの戦力は期待出来ない

んでしょ？ なら、援護くらいこっちで用意しておかないと」

晶葉 「分かった。よろしく頼む」

――。

卯月 「……はい。という訳なので、これから先の予定を確認したいんですけど……」

新P 『成る程、お前らも大変だな。都合の良い事に、今後1週間くらい先は特に予定

も入ってねえぜ』

卯月 「そうですね。ありがとうございます」

新P 『お前に関しては、心配するのも余計なお世話かもしれないねえけどよ』

卯月 「はい！ 油断しないで頑張ります！」

新P『おう、いい意気だな。…ん？何だ、響子。…分かった、それじゃあな島村、無茶すんなよ』

卯月「はい、お疲れ様です！プロデューサー」

プツン――

かな子「今プロデューサーさん、響子ちゃんの事名前で呼んでませんでした？」

卯月「え？…言われてみれば…。何かあつたんですかね？」

かな子「何かつて…、何が？」

凛「2人共、連絡は終わった？ゲッターの出撃準備は出来てるよ」

卯月「はい、こっちはもう大丈夫です」

かな子「あ、ちょっと待っててください…！遠くに行くなら、何時もよりお菓子を…」

凛「……。20分だけ待ってあげる」

かな子「ありがとうございます！」 タツタツ

凛「こっちはゲッターで待ってよつか。卯月」

卯月「は、はい。そうですね…」

―― 格納庫。

主任「ハッチ開けろ〜！作業員退避だ、モタモタすんな〜!!」

李衣菜「あれ、大将。ゲッターG出撃って、警報出てましたっけ？」

主任「リーナ。ここじゃなくて、海外に出張だ。日本じゃ警報もならねえぜ」

李衣菜「ああ、成る程。テスターチームも一緒かあ…」

主任「海外が羨ましいなんて思ってたねえだろうな？」

李衣菜「あ、あはは…！やだなア大将。そ、そんなこと思ってるわけないじゃん！」

主任「…だといいいんだがよ」

古田「ゲッターG、旧ゲッター、どつちも発進準備完了ッス！」

主任「分かった!!」

卯月「——ホントに晶葉ちゃんも行くんですか？」

晶葉「ああ。現地で指示を出すなら、ゲッターに通じた人間が1人はいた方がいいだ

ろう？」

晶葉「それに、何故百鬼帝国が遺跡を襲ったのかにも興味があるからな。その原因を、

この目で確かめたい」

卯月「…分かりました。出来るだけ負担の掛からないように飛びますね」

晶葉「私だつてシミュレーターは受けている。心配は無用だ」

卯月「ですけど…」

主任「ゲッターG！何時でも発進出来るぞ！」

みく「卯月ちゃん、後ろが支えてるにゃ！」

卯月「は、はい……! すいません、直ぐに発進します!」

みく「さつて、久々の出番、張り切つてやつてやるにやん!」

瑞樹「ふふつ。気合いが空回りしないようにね。初海外の仕事が最後の舞台なんて、洒落にならないわよ?」

菜々「ふ、不吉な事言わないでくださいよう!」

卯月「ゲッターG、発進!」

みく「ゲッターロボ、出るにやあつ!」

ズワアアツ――。

~~~~ 洋上 ~~~~

菜々「ふつわあああああ……」

瑞樹「大きな欠伸ね」

菜々「す、すいません……! あまりにも道中が平和だったもので……。昨日は深夜までお仕事でしたし……」

瑞樹「気持ちには分からないでもないわ。こうやつて大海原を見ていると、心が安らいでいく感じがあるのよね」

菜々「ですよね〜! ゲッターの中では潮騒の音までは聞こえなくても、都会の喧騒から離れた景色っていうのは、癒されます!」

みく「2人共言つてる事がババ臭いにや」

菜々「ババくさ…っ!？」

瑞樹「貴女にもいずれ分かるわ」

みく「分かりたくないにやあゝゝ…」

かな子「賑やかですぬ〜」

凜「二応、これから戦闘に行くつて言うのに…。あとかな子、そのアップルパイ何個

目？」

かな子「こ、これから戦闘なんですよね？だから大丈夫です！」

凜「…これ以上かな子が重くなったら、ポセイドン号が飛ばなくなるかもよ？」

かな子「それは流石にありませんよっ!!」

卯月「ふふふっ。晶葉ちゃん、気持ち悪くありませんか？」

晶葉「大丈夫。快適なくらいだ。機内食はまだかな？」

卯月「かな子ちゃんが用意してくれたクレープならありますよ」

晶葉「お、おう…。用意がいいんだな」

卯月「コックピットの中だと操縦桿を握っていなきやいけないので、片手に持つて食べやすいもの、だそうですね」

晶葉（食べやすいのだろうか…？おっと、クリームが…）

卯月「因みに中身の野イチゴなんですけど、今の研究所の敷地内で採れたそうですよ」  
晶葉「あの辺りを散策でもしたのか？」

卯月「はい。この間未央ちゃん達と行ってきたそうですよ？」

晶葉「皆、行動的だな。と言つても、研究所でする事の方が少ないか」

卯月「ですね。私達はゲッターを動かすだけですから。整備とか、晶葉ちゃんがやつてるゲッター線の研究とかはちよつと難しくて……」

晶葉「ゲッターに乗れるだけでも、とんでもない事をしているんだがな」

卯月「そう言えば、最近凜ちゃんとよく2人で執務室でお話してますけど、何の話をしているんですか？」

晶葉「……何、ちよつと書類整理を手伝ってもらっているだけさ」

晶葉「何分、ゲッターの事も何も、早乙女博士から託された紙資料が頼りだからな」

卯月「そうなんですか？……早乙女博士も、心配ですね。1人で倒れたりしてないでしょうか」

晶葉「きつと大丈夫さ。早乙女博士は、私以上の天才だ。自分の限界を越えるような無茶はしないさ」

晶葉（そうだと信じてますよ。早乙女博士——）

ピピッ ピピッ

凜 「……ん？こつちに近付いてくる機影が3つ？」

晶葉 「そろそろ向こうの領空に入るな。おそろく出迎えだろう」

瑞樹 「ゲッター2機のお迎えに戦闘機3機なんて、向こうも余裕がないのね」

菜々 「あんまり言っちゃ可哀想ですよ。どこも余裕がないのは一緒なんですから」

パイロット 『早乙女研究所の方々ですね？我々の基地へ誘導します。着いてきてくだ

さい』

卯月 「了解しました。よろしくお願いします」

みく 「流石にゲッターだと顔パス余裕にやあ」

凜 「こんな特徴的な口ボットも他にないだろうからね」

晶葉 「それも、ゲッターが量産されるまでの話だ」

菜々 「その話、まだ続けてたんですね」

晶葉 「パイロットの習熟が一からやり直しになったただけだ。量産型ドラゴンの生産ラ

インも、順調に稼働している」

かな子 「伊賀利三佐も教導で忙しいみたいですからね」

卯月 「伊賀利さんと連絡先交換してたんですか？」

かな子 「え？あ、はい。何かあった時のために、自衛隊の動きが分かるといいなあ、なんて」



晶葉「とか言って、ホントはスイーツの店の情報交換をしたかっただけなんじゃないのか？」

瑞樹「確かに、甘いものとか好きそうだったものね。彼」

かな子「そ、そんな事ないですよ？」

みく「動揺が言葉にうまくりにゃ」

卯月「…ッ！皆さん、見てください…！」

菜々「これは…」

凜「廃墟、だね…」

瑞樹「にしても、あんまりね」

みく「ビルも何も、全部滅茶苦茶にゃ！」

パイロット『百鬼帝国との戦闘の影響です。この地区にも、20万を越す住人が、暮らしていたんですが…』

かな子「その人達は怎么样了ですか？」

パイロット『大半は避難して、他の町に移りました』

パイロット『しかし中には、自分の生まれ育った街と運命を共にする、と言って聞かない人達がいて…』

かな子「そんな…」

晶葉「どこもそうだ。戦闘というのは、戦いとは無縁の人間から平和と居場所を奪う」  
凜「その上今度は遺跡まで。これ以上の無法は許されないね」

卯月「はいっ！必ずこの国からも追い出してみせます！」

パイロット『心強いですね。さあ、あと30分ほどで基地へ到着しますよ』

卯月「分かりました！」

かな子「——？ 待ってください。今向こう何か光りませんでした？」

菜々「光り…？こっちのレーダーに反応はありませんが…」

かな子「間違いありません！西の方です！」

卯月「あれは…百鬼メカ！」

凜「何かを追ってる…？」

みく「距離遠くてちゃんと分かんないけど、あれは多分トラックにや！」

卯月「!!」

ギョーンッ

凜「~~~~~！卯月!?!」

卯月「トラックを助けます！晶葉ちゃん、しっかり捕まっってください！」

晶葉「ツ…そう言うのは…動き出す前に言ってくれ！」

卯月「みくちゃん達はトラックの保護を！百鬼メカの相手は私がやります！」

みく「りよ、了解にや……!」

卯月「ゲッターレーザーキャノン!」 ジャキツ

かな子「データベースに該当がありますね。トラックを追っているのは、メカ一角鬼、

メカ大輪鬼、メカ半月鬼の3体ですね」

凜「向こうも戦力強化で百鬼メカを量産したって訳。卯月、やるからにはトラックに当てちゃダメだよ」

卯月「分かっています!トラックの後ろを撃つて、百鬼メカを怯ませます!」

飛行軌道で機体に水平にレーザーキャノンを構え、

卯月「!!」

狙いを定め射撃。トラックと百鬼メカ群の間の道路を粉碎し、衝撃波と共に爆煙を生む。

百鬼兵「な、何だあ!?!」

怯んで立ち止まったメカ一角鬼の前に、ゲッタードラゴンが立ちはだかる。

百鬼兵「そんな……!」

卯月「ゲッタートマホーク!!」

ズバアッ

百鬼兵「ゲッ……ター……だと……!」

刹那でトマホークを抜き打ち、メカ一角鬼の首をはねる。

百鬼兵「バカな…!?何故ゲッターがここに!？」

卯月「それはこちらの台詞です!」

凜「私達は桃太郎みたいなものだからね。鬼が出るところにはどこだって現れるよ」

百鬼兵「おのれえ…!くたばれえ!!」ギャンツ

卯月「トマホーク…ブーメランツ!」

車輪を回転させて迫るメカ大輪鬼に、トマホークを投射して迎撃するが、トマホークは回転する車輪に弾かれる。

百鬼兵「ふはははっ!パワーが違うのさ!パワーが!!」

かな子「それはどうでしょう?」

卯月「——スピнкаッター!!」

ズワアツ

トマホークを弾いた事で、空いた隙間にスピнкаッターをねじ込み、メカ大輪鬼の肩の間接を断裂。車輪を一つ切り落とす。

卯月「ゲッターキック!」

飛び回し蹴りで、メカ大輪鬼を横倒しに。

卯月「はあああつ!!」

戻ってきたトマホークを握り直し、両断。

百鬼兵「み、みんなやられちまったあゝ…!て、撤退…!」

凜「逃がさないよ」

卯月「ゲッタービーム!!」

百鬼兵「ギャアアアアツ!!——」

逃げようと背を向けた、その背中にゲッタービームを浴びせ、最後のメカ半月鬼も破壊する。

卯月「他に敵はありませんか？」

凜「…今のところレーダーに反応はないね」

かな子「百鬼メカを相手にした割りには、手応えがなかったですね」

凜「全然連携もとれてなかったし、向こうも習熟中だったんでしょ」

卯月「戦闘が長引かなくて、良かったですね。晶葉ちゃん、大丈夫でした？」

晶葉「何とかな…。トラックの方は大丈夫か？」

卯月「えつと…」

みく「こつちにゃ!ちゃんと保護してるよ」

菜々「ゲッタードラゴンのレーザーキャノンの衝撃で吹っ飛んじやって、間髪一つ

トコでしたけど……」

卯月「すいません！狙いと精度は良かったんですけど、威力を絞れなくて……！」

瑞樹「大丈夫よ。相手とトラックを分断出来ただけでも上出来だわ」

凜「乗ってる人は無事？」

みく「生きてはいるみたいだけど、気を失ってるみたい」

菜々「1人だけで……他の人はどうしたんでしょう？」

晶葉「それを含めて、落ち着いてから聞いてみるか……」

かな子「待ってください、目を覚ましたみたいですよ！」

男「う……うう……！」

菜々「ホントですね。何か言ってるみたいですよ？」

男「ウザーラ……！」

瑞樹「ウザーラ？」

みく「何にやそれ」

晶葉「……検討もつかんな。何かの暗号か……」

凜「待って。トラックのコンテナ部分に亀裂が入って、何か見えない？」

卯月「あれって……、ロボットの頭部、ですか!？」

かな子「もしかしてそれがウザーラ？」

晶葉「ともかく、一旦彼らの基地へ運ぼう。傷の手当てもままならないのでは、おちおち話も聞いてられんからな」

卯月「そうですね。みくちゃん、そのまま輸送お願いできますか?」

みく「合点にや!安全飛行で運んじやうよ!」

キユウウウン——。

くくく 某国 基地施設 くくく

司令官「ようこそ、我が基地へ。まずは、こちらの応援要請に応えてくれた事に礼を言う」

晶葉「礼には及びませんよ。百鬼帝国は全人類共通の敵です。連中が暴れてるところなら、国境なんて関係ありませんよ」

司令官「そう言つて頂けるとありがたい」

司令官「しかし、日本では若者の社会進出が進んでいると聞くが、貴女のような少女が、まさか一研究機関の代表とは」

晶葉「代表など…。私は池袋晶葉。早乙女研究所の所長、代理ですよ」

司令官「ふむ…。二つ結いの長髪に、赤いフレームの眼鏡…。もしか、貴女が噂に聞く日本の天才少女か?」

晶葉「ははっ。日の丸を背負うほど、大層なものじゃないですよ」

司令官「いやいや、お話は予々。何でも、インバーダーの体構造を解明したと」  
司令官「我々ゲッター線研究において、一步遅れた位置にある者達でも、奴等に抗う事が出来る」

晶葉「たまたまそこにいただけです。それより、現在の話をしましょう」

司令官「うむ。：残りのゲッターのパイロットの方々は？」

晶葉「何人かはゲッターの整備の監督を。残りは道中で保護したトラックの乗員に付き添っています」

司令官「搬送された者に異常はないのかね？」

晶葉「頭部を強く打ち、全身に打撲もありますが、他は。ここで話した事も、後々私から皆に伝えるつもりです」

司令官「そうか。では、はじめよう」

司令官「先ずは、これを見てくれ」

晶葉「：遺跡の映像ですか」

司令官「今朝方に諜報部隊が捉えた映像だ」

晶葉「見事に敵だらけですね…。航空戦艦型の百鬼メカも見えるが…、よくもまあ、こんな大部隊を用意したものだ」

司令官「連中は遺跡の敷地内のみ部隊を展開している。遺跡の歴史的価値の高さか



ら、我々が迂闊に攻撃できないのを逆手に取られているのだ」

晶葉「姑息な真似を……。それだけ守りを堅めて、連中は遺跡で何をしているんです？」  
司令官「分からん。ただ、百鬼帝国が派遣したと思われる調査隊や科学者はどうやら、遺跡の地下を目指しているようだ」

晶葉「遺跡の地下?…しかしそうなれば、連中とて遺跡の上でドンパチやられるのは迷惑でしょう」

司令官「そうだな。戦闘が激しくなれば、最悪生き埋めだ」

司令官「我々が撃つてこない。その自信があるんでしょな」

晶葉「なら、そんな連中の鼻っ柱に、1つ思い知らせてやるとしますか」

司令官「ほう、考えがあるようだな?」

晶葉「はい。向こうが防戦の布陣を敷くのであれば、奇襲や陽動は無意味でしょう」

晶葉「百鬼帝国が、我々の攻勢に対して、守りの一手を貫くと言うのであれば、我々はそれを利用するだけです」

くくく 基地内 医務室 くくく

男 「うう……」

卯月 「あつ、目が覚めましたか?」

男 「……」は……、私は、何処かの病院に搬送されたんですか?」

凜 「違うよ。一応、ここは軍の施設。その医務室だよ」

男 「しかし…、君達は…？」

かな子 「私達は、ゲッターのパイロットです」

男 「ゲッター…？そうか、私を助けてくれた…。ははっ、そうか」

卯月 「？ 何か？」

男 「いや、すまない。まずは助けてくれた事に礼を言う」

卯月 「そんな、お礼を言われるような事は何も…」

男 「私は、アトランティスの遺跡を調査していたマキシム教授の助手をしていた者です」

凜 「早速だけど、アンタがトラックに積んで持ち出してきたあの頭部について聞かせてもらおうよ」

かな子 「そうです！あれは、百鬼帝国の新兵器か何かですか？」

男？助手「違います。あれは、ウザーラは、アトランティスが遺した遺産なのです！」

かな子「遺産…?!あれが…、大昔に作られたものなんですか？」

凜 「その割りには、最新技術にも負けてない技術レベルだと思うけど」

助手「私達が、遺跡の調査によって判明出来たのは、先ず第一に我々の推測を大きく上回る発達した技術力です」

凜 「その情報は、どうやって?」

助手 「壁画です。私達が調査に入った古代都市の中央部、そこはかつての宮殿だったようなのです」

卯月 「宮殿…?じゃあそこに、ウザーラも…?」

助手 「はい。当然、ウザーラは頭部だけでなく、体も持っていて、我々は最初宮殿に祀られる石像のようなものだと思います」

助手 「しかし、考古学の権威であったマキシム教授が、ウザーラのすぐ脇にあった壁画に描かれた古代文字を解明する内、それが間違いである事に気付いたので」

凜 「間違い?」

助手 「ウザーラは、アトランティスの守り神として、建造された、古代技術のロボットなのです」

卯月 「ロボットって…、そんな大昔に出来るものなんですか?」

助手 「詳しくは分かりません。しかし、ウザーラの側の壁画には、ウザーラはアトランティスの文明が始まった当初から建造された事、アトランティスの科学力は勿論、錬金術や、魔術まで利用して作られた巨神像だと、記されていたのです」

助手 「おそらく、長い年月と、膨大な数の人員を用いて、作られたものなのでしょう」  
凜 「錬金術に魔術なんて、そんなオカルトで動いたなんて、確認あるの?」



かな子「待つてください!ウザーラに、我々をそこに送り出してくれつつ事は…!」  
助手「アトランティスが沈んだのは、天変地異や神の怒りなどではなく、ウザーラによつて沈められたと言うことです」

かな子「そんな事が…?」

凜「それが事実だとしたら、そのウザーラってロボットは、ゲッター以上の力を持つてるって事になる」

卯月「そんなのが百鬼帝国の手に渡ってしまったら…!」

助手「私とマキシム教授、そして調査団のメンバーは、百鬼帝国に捕まり、遺跡とウザーラの解明を進めるため、奴隷も同様に働かされていました」

助手「ほんの僅かな隙をついて調査団のメンバーが私をトラックに乗せ、予め調査のためと偽って取り外していたウザーラの頭部を持ち出して、遺跡から脱出する事が出来ました」

卯月「それじゃあ、教授達は…」

助手「…分かりません。ですが、これだけの事をしでかしたのです。おそらくは…」  
凜「……」

助手「マキシム教授の助手でありながら、教授を守る事も出来ず…。うう…!」  
卯月「気を落とさないでください!」

助手「…頭部がなくては、いくら掘り出したとしてもウザーラは動きません。その内に、百鬼帝国もろとも、ウザーラを破壊してください！」

かな子「い、いいんですか!?!貴重な資料なんじゃ…」

助手「あんな危険なものは、この世にあつてはいけないのです!ウザーラがある限り、またそれを狙つて、争いが起きる。人間同士だつて!」

かな子「それは…」

助手「だから、そんな悲劇が起きる前に、ウザーラを破壊するのです!アトランティスの文明は滅んでなければならぬ!」

トントン ガチャ

晶葉「失礼する。入るぞ」

凜 「晶葉。指令との話は終わった?」

晶葉「こちらは滞りなくな。そつちは、気が付いたのか。何か話は聞けたか?」

卯月「聞けたなんて、そんなレベルじゃありません!」

晶葉「…どういう事だ?」

凜 「あのウザーラつて奴、予想以上の代物だったみたいだよ」

かな子「一刻も早く破壊しないと!」

晶葉「ふむ?まあこちらも出撃許可は降りてる。ゲッター両機の準備が整い次第百鬼

帝国を遺跡から追い出すぞ」

3人「「了解!!」」

晶葉「君もすまなかつたな。調査団の事も気になるだろうが、今はゆつくりしてくれ」

助手「あ、ああ…」

凜「……」

凜（滅びの運命を乗り越えし時、永劫の繁栄を迎える、か…）

凜（繁栄つて事は、復活を意味してるの？そう言うことなら…）

凜（アトランティスは、まだ滅んでない？——）

くくく 古代遺跡 宮殿 くくく

ヒドラー「ウザーラの頭部を持ち去った人間の捕獲に向かった部隊から連絡は入らぬのか!？」

百鬼兵「は、はい…！捕獲部隊からの連絡は一向になく…」

ヒドラー「何故だ!?相手はトラックがたった一台だぞ!」

百鬼兵「はっ…！それが、連絡員からの連絡によると、人間側にゲッターが現れたよ  
うで…」

ヒドラー「何イ!?!おのれゲッターめえ…！こんなところまでちよつかいを出してき  
おつて…!」

百鬼兵「いかながなされますか…？直ぐに兵を退きますか？」

ヒドラー「バカ者！この遺跡の調査は、ブライ様から直々に賜った命であるぞ！それを反故にする事など出来ぬわ！」

百鬼兵「ですが、既に調査も終了し、ブライ様が望むものは見つけれなかったはずですが…」

ヒドラー「関係ないわ！あの地下で見つけた古代兵器さえ押さえれば、ブライ様も喜んでくださる筈なのだ！」

ヒドラー「連中が我らから奪った頭部さえ、手中に戻ってくれば良いのだ！」

百鬼兵「ひ、ヒドラー様…！」

ヒドラー「今からここにいる全軍を率い、古代兵器の頭部の回収に向かう！」

百鬼兵「ヒドラー元帥…！お言葉ですが、それは………！」

ヒドラー「何だ!?相手はたかがロボットが2機に雑兵戦力が少しだぞ!」

ヒドラー「何故我らに負ける通りがある!?我らは、最初から勝てる通りがあるのだ！」

ヒドラー「我らが負ける筈がないっ!!」

百鬼兵2「ヒドラー元帥!!」

ヒドラー「何だ!?!」

百鬼兵2「ゲッターが…、ゲッターが現れました！」



ヒドラー「何だとお!?!」

—— 遺跡外。

かな子「ゲッターポセイドン、参上ッ!!」

百鬼兵「げえ!ゲッタードラゴン!」

かな子「ポセイドンです!」

凜「ポセイドンはここで固定だよ。分かってるね?かな子」

かな子「はい!先ずは相手を引き付けるんですよ」

百鬼兵「何だ?攻撃してこねえのか?」

百鬼兵B「へへっ、やっぱこのボロっつい廃墟が大切に攻撃できねえんだぜ!」

百鬼兵「なら今のうちだ!いくらゲッタードラゴンでもこっちの火力を合わせりや楽勝だぜ!」

ゲッターポセイドンの前に集結した百鬼メカの軍団が、ミサイルや光線を一齐に撃ち、段幕の雨を降らせる。

かな子「っ…!」

卯月「大丈夫ですか?かな子ちゃん!」

かな子「平気です!このくらい…ッ!」

百鬼兵「はっはああ!ザマアないぜ!」

百鬼兵B 「この調子だ！どんどん戦力を集めろ！質も数で圧倒しちまえ!!」  
卯月 「調子に乗ってきましたね…」

凜 「お陰で予定より早く事が済みそうだけど。単細胞は扱いやすく助かるよ」  
凜 「かな子、そろそろいくよ!」

かな子 「はいっ!…狙いと、威力を絞って…」

かな子 「ゲッターサイクロン!!」

ゲッターポセイダンの生み出した竜巻が、降り注ぐ火薬の雨を一瞬で振り払う。

百鬼兵 「え、っ?」

かな子 「フィンガーネット!」

百鬼メカ軍団の頭上から拡がったフィンガーネットが、一網打尽にする。

百鬼兵 「うおっ!?!コイツあ…」

百鬼兵B 「お前!こっち来んな!身動きがとれねえ…!」

百鬼兵C 「仕方ねえだろ!編みに捕縛されちまったら…」

かな子 「投網戦法です!」

百鬼メカを捕縛したネットに繋がるワイヤーを引き寄せ、一気に体を捻る。

かな子 「大雪山おろしの要領で…!」

獲物を地に引き摺りながら1回、2回と回転。

かな子「ううううううッ!」

回転数を上げていく内に、獲物は重力から解放されて、宙へと。

かな子「てえええええええいっ!!」

そして、回転が限界に達した一点で、天高く放り投げる。

かな子「菜々さん!」

菜々「呼ばれて飛び出てウサミンミン! 気合い入れていきますよ!」

かな子「はいっ!」

菜々「ゲッターミサイル!!」

かな子「ストロングミサイル!!」

大空に放り出された獲物に、左右から放たれた二種類のミサイルが命中。盛大な爆煙を上げる。

菜々「やりました! 作戦大成功です!!」

瑞樹「いくら遺跡を盾にしてたって、その遺跡から出しちゃえば、容赦しなくてもいいものね」ワカルワ

凜「今ので全面に出た百鬼メカは倒せた。次の部隊を展開される前に要塞鬼を落とすよ!」

かな子「はいっ! 行きますよ!!」

卯月「みくちゃん達は、残りの敵の相手をお願いします!」

みく「合点にやあ!」

菜々「こ、このまま続行ですか!」

瑞樹「複数相手ではゲッター3では分が悪いわね」

みく「ゲッター1で行くにあ?」

瑞樹「いいえ。ゲッター2で行きましょう。格闘戦の方が遺跡への被害が少ないわ」

みく「リョーカイにあ!」

菜々「ど、どうでもいいので早く変わってくださいあいつ!!」

百鬼メカの攻撃が迫る。

菜々「オープンゲットオ!!」

瑞樹「チェンジゲッター2!!」

飛来したミサイルの攻撃を紙一重で躲し、ゲッター2になり変わる。

瑞樹「ゲッタービジョン!」

ゲッタービジョンの多重分身を利用して百鬼メカを攪乱し、肉薄。

瑞樹「ドリルミサイル!!」

突出した百鬼メカに、ゼロ距離でドリルミサイルを撃ち込み、

瑞樹「ゲッタードリルツ!!」

即座に、復元したドリルで、怯んだ百鬼メカを貫いた。

瑞樹「先ずは一機!」

みく「今のうちにやあ、かな子ちゃん!」

かな子「ありがとうございます!…よおし…!」

ゲッターポセイドンの足裏をキャタピラに変形させ、メカ要塞鬼目掛け速度を上げる。

かな子「つ!!」

メカ要塞鬼を捉え、跳躍。メカ要塞鬼を眼前に捉える。

かな子「えええいつ!!」

両手を合わせた拳をブリッジ目掛け振り下ろし、破壊。ブリッジからのコントロールを失ったメカ要塞鬼は、高度を落としていく。

卯月「かな子ちゃん!この落下コースだと遺跡が…!」

かな子「あ!そうでした!」ガシッ

ゲッターポセイドンが慌てた動作でメカ要塞鬼を掴み抑える。

かな子「ふうふううんっ——!」

メカ要塞鬼を回転させる。

かな子「未央ちゃん直伝のおくく!大雪山おろしいいいいくくくッ!!」

メカ要塞鬼をぶん投げ、遺跡の外の地面に叩きつけ轟沈。

かな子「これで…、百鬼メカを出される事はない筈…」

ガッツ

かな子「きやんっ!」

卯月「どこからの攻撃ですか!?!」

凜「今の攻撃、ライガーのチェーンアタックみたいだったけど…」

「その通りだ!ゲッターロボG!」

かな子「誰ですか!?!」

凜「新しい百鬼メカ…?」

卯月「何となくですけど、ゲッタードラゴンに似てませんか?」

凜「成る程、ドラゴンをパクったって訳」

「ドラゴンだけではない!我が百鬼メカには、これまでの貴様らの全ての戦闘データが納められている」

凜「ストーリーカードも度を越すと感心するね。で、アンタは誰なの?」

瑞樹「…鉄甲鬼」

卯月「鉄甲鬼…?」

かな子「瑞樹さんが知ってるって事は、いつかの研究所襲撃の時の…!」

鉄甲鬼「そうだ。あの時の突入部隊は、私が指揮をした」

鉄甲鬼「川島瑞樹。貴様もゲッターのパイロットだったとはな」

瑞樹「ふふっ。これまで貴方の同胞を倒してきたのが、こんな小娘で驚いたかしら？」

みく（小娘…）

鉄甲鬼「そうだな。正直に言えばな」

瑞樹「あら、素直なのね」

菜々「瑞樹さん！百鬼帝国相手に漫才してる場合じゃないですよ！」

瑞樹「そうだったわ。ごめんなさい、今立て込んで、忙しいの」

鉄甲鬼「気にするな。こちらの相手も、貴様らなどではない」

かな子「こちらに來ます！」

凜「直々の指名って事ね…！」

鉄甲鬼「この時を待ち侘びていた…！いざ、勝負！」

かな子「っ！」

加速の勢いに乗せた拳を、ゲッターポセイドンの両腕を交差させて防ぐ。

かな子「くくく…！何てパワー…！」

卯月「これまでの百鬼メカの比じゃありませんよ！」

凜「流石に、これまでの私達の戦いを分析してきただけはあるね」

鉄甲鬼「無論だ。今の私は一人で戦ってるのではない。貴様らに倒された幾多の同胞達の無念も背負い戦っているのだ！」

凜 「恨み節は女々しいよ！」

かな子 「ゲッターサイクロン！」

鉄甲鬼 「なんの！」

ゲッターサイクロンに対し、メカ鉄甲鬼は、ジャラリと伸ばした鎖を回転させ、同様の竜巻を起こして相殺する。

鉄甲鬼 「喰らええ!!」

かな子 「——きやあっ!?!」

反撃のミサイル。

かな子 「オープンゲット！」

その爆煙の中で、ゲッターを一度分離。

凜 「チェンジ、ライガー!!」

ゲッターライガーにチェンジ。

凜 「ライガーミサイル！」

鉄甲鬼 「ぬんっ！」

即座に放ったライガーミサイルは、メカ鉄甲鬼のミサイルに撃ち落とされる。



凜 「ツ……ドリルアームツ！」

2つのミサイルが生んだ爆煙の中を突っ切って行く。

鉄甲鬼 「ふん——！」

凜 「チツ……！」

ひらりとドリルの一撃を躲す。

凜 「チェーンアタック!!」

突撃の加速のまま、一度距離を取り、反転してチェーンアタックを撃ち込む。

鉄甲鬼 「面白い！」

凜 「!？」

メカ鉄甲鬼もチェーンを射出。ゲッターライガーのチェーンに絡め、

鉄甲鬼 「こうだ！」

鎖をしならせ、反対方向に放り投げる。

凜 「ぐっ……！オープンゲット！」

叩きつけられる直前、鎖を切り離し、分離。ゲットマシンで高度を上げる。

卯月 「チェエチェーンジ！ドラゴンツ!!」

凜 「あの百鬼メカ……。パワーはポセイドン級、スピードはライガー級みたいだね」

かな子 「このドラゴンでも、敵うかどうか……」

卯月「それでも、万に一つの可能性でも信じて、立ち向かうだけです！」

鉄甲鬼「待っていたぞ！もつとも多くの同胞を打ち破ったゲッタードラゴン！貴様を倒してこそ、同胞の無念は報われる！」

卯月「私達だって、皆の思いを背負ってるんです！貴方達に譲るわけにはいきません！」

卯月「ダブルトマホークッ！」

鉄甲鬼「こちらもトマホークだ！」

メカ鉄甲鬼より上空をとったゲッタードラゴンが、急降下しながら肉薄。トマホーク同士が鏝迫り合い、激しい火花を散らす。

鉄甲鬼「…ッ！」

卯月「うう…っ！」

互いにトマホークを弾き合い、距離を離す。

鉄甲鬼「せいっ！」

卯月「!? ブーメラン！」

メカ鉄甲鬼の頭頂の角から放たれた光線に対し、トマホークブーメランを投げ当てて自身への命中を防ぐ。

卯月「てえええい!!」

再度の突貫。残った一振りのトマホークを大上段に構え振り下ろす。

鉄甲鬼「これしき……!」

卯月「——スピнкаッター!!」

鉄甲鬼「!？」

半身を反らして斬撃を躲したメカ鉄甲鬼に、アツパーのように腕を振り上げ、スピнкаッターでその表装を削る。

鉄甲鬼「こんなもの……!」

卯月「ゲッタービーム!!」

鉄甲鬼「ぐっ……!」

スピнкаッターで開いた装甲の隙間を目掛け、ゲッタービームを放つ。

鉄甲鬼「このっ……!」

強引に、メカ鉄甲鬼を急上昇。バック転のように反転してゲッタードラゴンの背後をとるようにビームを躲す。

卯月「ハッ!？」

鉄甲鬼「せいっ!!」

卯月「きやつ——!」

背中を思いきり蹴飛ばされ、態勢の崩れたゲッタードラゴンは一度、地面に着地。

卯月「——はっ！はあ…はあ……」

凜「卯月、大丈夫？」

卯月「大丈夫です！このくらい……！」

鉄甲鬼「……。計算よりドラゴンのパワーが大きいか……。この機体での実戦データ自体が少ないとはいえ、手こずらせてくれる」

凜（……ドラゴン号のエネルギー出力の上昇が止まらないか。このままだと、ゲッターGの炉心でも持たないかも……）

凜「卯月、このままアイツを調子に乗らせるわけにはいかないよ」

卯月「分かっています。でも、正面突破では、キツそうですね……！」

トマホークを構え直し、立ち上がる。

かな子「……あれ？」

卯月「かな子ちゃん、どうかしましたか？」

かな子「あ、いえ……。大した事じゃないと思うんですけど、今少しだけ、地面が揺れたような……」

卯月「？ こつちじゃ何も関知してませんけど……」

凜「ポセイドン号のコックピットが、一番地面に近いから、ソナーが関知したのかも」

凜 「それにしても、こんな時に地震なんて……。まだ地殻変動の影響が残ってるのかな?」

卯月 「また遺跡が沈んじゃうんですか?」

凜 「それならそれで、仕方ないことなのかもね」

鉄甲鬼 「何をしている!まさか臆したなどとは言わせんぞ!」

凜 「……まったく、せっかちなんだから……」

卯月 「いきますす!ここから離れるにしても、百鬼帝国を放っておく事は出来ませんか  
ら!」

卯月 「——マツハウイング!」

メカ鉄甲鬼に立ち向かうため、ゲッタードラゴンが飛び立つ。

『……ウザーラ……!』

—。

~~~~~ 基地 指令室 ~~~~~

晶葉 「……」

司令 「苦戦を強いられているようですな」

晶葉 「面目ありません。向こうも相応の戦力を用意しているようです」

司令 「無理もない。相手だって、常にゲッターに煮え湯を飲まされている」

晶葉「…せめてあの新型のデータをもう少し集められれば…」

所員「し、司令…！緊急事態です！」

司令「どうした!?!」

所員「ウザーラの…ウザーラの頭が…！」

司令「何ツ!?!」

くくく 遺跡 戦闘区域 くくく

瑞樹「——ドリル、ストオオーム!!」

百鬼兵「くっ…！」

瑞樹「ゲッターアーム！」

瑞樹「はっ！」

ドリルストームで怯んだ百鬼メカを、ゲッターアームでつまみ上げ、他の百鬼メカに投げ当てる破壊する。

みく「一石二鳥って奴にや！」

菜々「これで大分数を減らせましたね…」

瑞樹「…これで卯月ちゃん達に加勢出来ればいいんだけど…。向こうも苦戦しているようだし…」

ズズズズズズ…ツ

菜々「な、何ですか…!？」

みく「じ、地震にや!震源は、遺跡の地下!？」

百鬼兵「お、おい…!頭が飛んでくる!」

瑞樹「!？」

—— 遺跡 地下宮殿。

百鬼兵「ひ、ヒドラー元帥!お早く避難を!崩落が始まります!」

ヒドラー「おお…!巨神が、ウザーラが動くのか…!」

『…ザーラ…。ウザーラ——』

『ウザーラ!!』 ギンツ

—— 空中。

卯月「——ッ!」

凜「卯月、見て!遺跡が…」

卯月「? 遺跡が、崩れる…?」

鉄甲鬼「戦闘中に余所見など…!挑発のつもりか!？」

かな子「貴方こそ!貴方の仲間が心配じゃ無いんですか!？」

鉄甲鬼「仲間だと…?ヒドラー元帥!」

凜「遺跡から何か出てくる!」

かな子「あれって…、おっきなドラゴン!」

卯月「いえ、ドラゴンの胴体に、人の上半身が乗ってます!」

凜「首のない半身…。まさか、あれが…!」

百鬼兵「て、鉄甲鬼様〜!」

鉄甲鬼「むっ、何があつた!」

百鬼兵「頭が…、頭が追ってくる…!」

鉄甲鬼「頭だと!」

百鬼兵「た、助けてください…うわあ——!」

百鬼メカが爆ぜ、その後ろから頭部が姿を見せる。

鉄甲鬼「奴は…?」

メカ鉄甲鬼とゲッターGが呆然と見つめる中、頭部は遺跡から浮上した巨神と合体。

凜「やつぱり…。あれがウザーラの本体」

かな子「アトランティスを滅ぼした古代の神様ですか!」

ウザーラ《——ツツ!!》

卯月「!?」

鉄甲鬼「ぐっ…!これは…!」

復活を告げるウザーラの咆哮。それは、大気を震わせ、その場にいるものの体を震え

上がらせた。

バシユツ

みく「チエーレンジゲツタアアアーッ!」

みく「卯月ちゃん、みんな!大丈夫かにや!」

卯月「みくちゃん!こつちは平気です!」

菜々「あ、あんなの聞いてませんよ!一体何なんですか!?!」

凜「あれはウザーラ…。アトランティスの守護神みただけど…」

瑞樹「その割りには、出てくるのに自分の寢床を破壊しちゃったみたいだけど…」

かな子「話だと、アトランティスを沈めちゃったのも、あのウザーラみたいですよ!」

菜々「そ、そんな危ないのと、まさか戦うつもりですかあ!?!」

鉄甲鬼「くだらん。守護神とはいえ、所詮は古代人の作った玩具。最新科学で生み出

された百鬼メカに、敵うものか!」

瑞樹「この状況でよく言えるわね。貴方にはあれが発する気配が分からないの?」

鉄甲鬼「ぬう…」

百鬼兵「へっ…!守護神がなんだってんだ!そんなもの!」

1体の百鬼メカが、ウザーラに向かっていく。

鉄甲鬼「迂闊な真似はよせ!」

百鬼兵「喰らええ!!」 ドウツ

ウザーラ《……》

百鬼兵「き、効いてねえ……!」

ウザーラ《——!!!》

百鬼兵「う、うわああああああ——!?!」

ウザーラは、再び咆哮を一つの上げると、攻撃を加えた百鬼メカに食らいつき、そのまま噛み砕いた。

鉄甲鬼「バカな……! 特殊合金で出来た百鬼メカを一撃だと!?!」

みく「やっぱりあのウザーラって奴、只者じゃない……!」

卯月「それでも、放っておくわけにはいきません!」

菜々「卯月ちゃんっ!」

卯月「ダブル、トマホークツ!!」

再び両手にトマホークを構え、ウザーラに突撃。

卯月「ていつ!」

ガキンツ

二斧の連撃は、ウザーラの表層に軽く弾かれる。

凜「何て固さなの!?!」

卯月「トマホークがダメなら……!」

言つて、即座にトマホークを放棄。

卯月「ゲッターレーザークャノン!!」

代わりに携えたレーザークャノンを続けざまに撃つた。

ウザーラ《——!!?》

かな子「効いてる!」

凜「いや、違う!」

ウザーラ《ツツツ!!》

卯月「——ッ!きやあつ!」

ウザーラの尻尾による反撃に打たれ、空中を後退。急制動を掛けて態勢を立て直す。

凜「……っ!アイツにとつたら、ゲッターレーザークャノンも蚊に刺されたみたい

なもんなんだよ」

かな子「圧倒的じゃないですかあ!」

みく「それなら合体光線にや!」

卯月「みくちゃん!」

菜々「確かに、ゲッターGとゲッターのダブルゲッタービームなら、あの装甲を抜けるかもしれません!」

瑞樹「……」

鉄甲鬼「…無理だ」

卯月「いきますよ、みくちゃん！」

みく「何時でもOKにや！」

みく&卯月「ダブルゲッタービィームッ!!」

2つのビームが合わされた、巨大な光の柱がウザーラに突き刺さる。

ウザーラ《~~~~ツツ!!?》

かな子「やった！」

菜々「手応えありです！」

ウザーラ《——ツツ!!》

爆煙を掻い潜り、ウザーラが咆哮を上げて立ち上る。

凜「表層を焦げ付かせただけか…」

みく「うう…うにやあ!!」 シュバツ

卯月「みくちゃん!?!」

トマホークを取り出し、ゲッターがウザーラに肉薄する。

みく「鉄は熱いうちに打つ!ゲッタービームで熱せられてるなら、その表装を少しでも削れる筈だよ！」

かな子「そんな無茶苦茶ですよ!」

みく「おりやあああああーっ!!」

ガアアアンツ

重く険しい音が響き渡る。

菜々「ああ…! 振動が腰に響きます…!」

瑞樹「ボケてる暇はないわよ!」

みく「このっ! このっ! このっ!」 ガンガンツ

ウザーラ《——!!》

ウザーラの口に、光が蓄えられる。

卯月「…! みくちゃん、危なあい!」

みく「にやっ!」

急いだ挙動で、ゲッターを突き飛ばしたゲッタードラゴンに、ウザーラから放たれた光線が打つ。

3人「「きやあああああ!」」

稲妻を浴びたように、羽上がるゲッタードラゴン。

かな子「うう…」

凜「何、これ…。普通の光線じゃない…」

卯月「げ、ゲッターごとからだがバラバラになりそうです…!」

晶葉『——おそらく重力制御装置の一種だ』

瑞樹「晶葉ちゃん!」

晶葉『今までウザーラの解析を行っていた。連絡が遅れてすまない』

卯月「いいんです…。それより、あの光線が重力制御装置って…?」

晶葉『そうだ。おそらく、標的の内部に通常の重力とは相反する力の重力を発生させ、内側から破壊する仕組みなんだろう』

晶葉『その証拠に、光線を受けたドラゴンだけでなく、周囲の木々や地面も重力に引き寄せられ隆起している』

菜々「一体どんな理屈でそんな事が出来るんですか!?!」

凜「とんでもない威力だよ。一撃で、ドラゴンが…、ゲッターGがこれだけ追い詰められるなんて…!」

晶葉『心苦しいがここは一度退くんだ。このままでは勝ち目がない』

瑞樹「確かに、その方がいいかもしれないわね…」

かな子「瑞樹さん!?!何を言ってる…!」

瑞樹「分からない? 私達がこうしてる間、ウザーラは攻撃してこない」

菜々「そう言えば、そうですね」

晶葉『気付いていたか。ウザーラは守護神と言われる存在だ。自らに敵意を向ける存在にしか、攻撃しないのだろう』

菜々「あくまで守るためって事ですぬ。その方が、ありがたいって言えば、ありがたいですけど……」

みく「さつきも突撃した百鬼メカを倒したけど、そこで棒立ちの百鬼メカはスルーしてるにや!」

鉄甲鬼「……」

瑞樹「……ともかく、向こうから攻撃してこないなら、ここは態勢を立て直して一度作戦を考えるべきね」

卯月「そんな事、出来ません!」

晶葉『卯月!? やめるんだ!』

グググッ

間接部からオイルを漏らし、動きの鈍るゲッタードラゴンを、無理矢理ウザーラに向ける。

凜「……この状態じゃ、シャインスパークも撃てないね」

瑞樹「やめなさい! 本当に死ぬかもしれないのよ!」

かな子「瑞樹さん……。心配してくれるのは嬉しいですけど……」

卯月「ゲッターは、私達人間の守護神なんです！こんなスゴい力を持った相手だからって、背中を向けるわけにはいきません！」

鉄甲鬼「何故だ……」

『何故だ』

瑞樹「何……？」

晶葉『この声……、ウザーラからか！』

ウザーラ『何故向かってくる……？何故戦うのだ？』

かな子「ホントだ……。ウザーラが、私達に喋ってる？」

みく「しかも都合よく日本語にや！」

ウザーラ『敵わぬと分かっているのに、何故立ち向かう？』

ウザーラ『お前達の敗北は明白だ。これ以上戦っても、お前達には死の運命しか待つ

ていない』

ウザーラ『それなのに何故戦う？』

鉄甲鬼「そうだ……！幾多の百鬼メカを屠ったゲッターGが勝てぬのだぞ？ここにいる

全ての者は奴には勝てん！全ては無駄な事なのだ！」

鉄甲鬼「それなのに、何故戦える!? 貴様らの闘志は折れんのだ!？」

みく「みく達が諦めたらそれでお仕舞いにや！」

鉄甲鬼「!?」

瑞樹「まったく…。自分でも時々うんざりするけど、それが人間なのよ」

鉄甲鬼「人間…? どういう事だ…?」

菜々「折れたら楽かもしれないませんが、諦めたら、逃げたらその時は助かるかもしれません。実際ナナは今ガグブルです!」 ガクガクブルブル

瑞樹「守らなきゃならないものがあるから。だから、諦める事も折れる事も出来ないのよ」

鉄甲鬼「守らなければならぬもの…。そのために…? それだけのために…?」

鉄甲鬼（牛剣鬼殿も息子のために戦った…。胡蝶鬼も、人間の中で何かを見つけたのか…? そのために…?）

瑞樹「貴方も戦士を名乗るなら、その剣を自分以外のために使ってみたらいいんじゃないかしら。きっと分かるわよ」

ウザーラ『争いをやめよ。無意味な行いだ。お前達の死に意味などない』

卯月「争いをやめろ、ですか…」

凜「とぼけた事言ってくれるね。そっちの魂胆は分かっているんだよ!」

ウザーラ『…!』

凜「古代文字が刻んだ壁画の文字…。その最後の文章の意味がようやく分かった

よ」

凜 「永劫の繁栄…、アンタ達は、現代に復活したあと、その力で再び地上を支配しようって言うんでしょ！」

かな子 「え…？」 キョトン

卯月 「貴方達は、百鬼帝国と同じです！例えどんな力を持っていても、その力をのさばらせておくわけにはいかないんです！」

かな子 「そ、そうですね！助け出した助手さんとの約束もあります！」

卯月 「例え私達がどうなろうと、ゲッターがボロボロになつたとしても…！」

凜 「私達は、私達の未来を守るために戦う！」

かな子 「それがどんな相手だって、怯むわけにはいかないんです！！」

鉄甲鬼（自分自身の、未来…——）

3人 「うおおおくくく！！」

ウザーラ 『…：…愚かな』

ウザーラの重力光線が、ゲッタードラゴンを打ちのめす。

卯月 「きやあああああくくく！！？」

みく 「卯月ちゃん！」

菜々 「凜ちゃん、かな子ちゃん！」

ゲッタードラゴンが破壊される。

卯月「……」

凜「……」

かな子「……」

みく「そんな……!ゲッタードラゴンが、負けちゃうなんて……!」

瑞樹「……」

ウザーラ《——ツッツ》

菜々「ああ……!ウザーラが!」

その口にゲッタードラゴンをくわえ、虚空へと飛び去っていく。

鉄甲鬼「……」

晶葉『ウザーラは、こちらで搜索する。テストチームだけでも帰投するんだ』

みく「……了解……」

—。

くくく 指令室 くくく

司令「い、池袋くん……」

晶葉「お気遣いは無用です。不測の事態が起きた、それだけですから」

司令「……」

晶葉「申し訳ありませんが、空軍と、軍事衛星を貸してください。ウザーラがどこへ向かうのか、逃がすわけにはいきませんかから」

司令「…分かった。我が軍でよければ、全力で捜索に協力しよう」

晶葉「感謝します、司令。では、一旦、研究所の方へ連絡するので、これで」

司令「ああ…」

晶葉（ゲッターGの敗北…。事態はもつと深刻か…）

晶葉（ゲッターを目の敵にしてるブライが、この期を逃す筈がない…）

晶葉「……」

晶葉（早乙女博士…。私は、どうすればいいんですか——？）

つづく

第23話 『百鬼帝国の真実』

~~~~~ 新早乙女研究所 格納庫 ~~~~~

整備員 「大将！こっちスタンバイOKです！」

主任 「おうっ！早くこのゲッター増幅装置をゲッターに積み込むぞ！」

古田 「正気ツスカ!?こんなの積んじやったらゲッターが保たないツスよ！」

主任 「バカ野郎！ゲッターが保たねえなら内部構造を強化すりやあい！」

古田 「無茶苦茶ツス!!」

主任 「無茶でもなんでも、ゲッターGがいねえんだから、残ってるゲッターを強化するしかねえだろが！」

古田 「それでゲッターが何とかなくても、パイロットがどうにかなつちやいますよお！」

晶葉 「その問題については対策済みだ」

古田 「晶葉ちゃん！」

晶葉 「忙しくしているな。申し訳ない」

主任 「いいって事よ。それより、パイロットの方は問題ないって？」

晶葉「ああ。ネオゲッター用のパイロットスーツに改良を加えた。これでゲッター増幅装置で増加する分の負担に耐えられる筈だ」

主任「今回ゲッターに積むのは、前までの試作品じゃねえ。ゲッタードラゴンに積んでるのはほぼ同型の正規品だ」

晶葉「その分、仕様がピーキーになって扱いが難しくなるって事だろう？」

晶葉「…テストチームには、頑張ってもらうしかないな」

古田「…卯月ちゃん達、ホントに死んじやったんスカね…」

主任「こらっ！古田、滅多な事言うんじやねえ!!」

晶葉「……。いいさ。悲観的になる気持ちも分からないではない」

主任「晶葉ちゃん、すまねえ…」

古田「す、スンマセン！」

晶葉「大丈夫だ。私とて、卯月達が死んだとは考えていない」

晶葉「ウザーラは、百鬼メカは直ぐ様にトドメを刺した。にも関わらず、ドラゴンには直ぐにトドメを刺すような真似はせず、何処かへと持ち去った」

主任「まさか、卯月ちゃん達を捕らえるのが目的だったって事ですかい？」

晶葉「あくまで推測で、理由は分からんがな」

主任「ひよつとするとゲッターを利用するためかも知れねえ。もし向こうで修理出来

たとしても、扱い方が分からねえんじや意味ねえからな」

晶葉「そう言うことだな。状況は悪くなる一方だ。少しくらい、ポジティブシンキングでいこう」

主任「だそうだ。テメエも分かったか！」　バシッ

古田「は、はいいっし！」

主任「オオっしッ!! 今晚も徹夜だあ！野郎共、気合い入れろよっし!!」

「「はいっし!!」」

晶葉「夜食を用意しよう。時間をみて注文表を用意してくれ」

主任「あいよ！何から何まですまねえな、晶葉ちゃん！」

晶葉「気にするな、お互い様だからな。……」

晶葉「…後は、パイロットのケアか——」

くくく　談話室　くくく

みく「……」

奈緒「…みくの奴、あの日からずっと元気ないな」

加蓮「そんなに気になるなら、何か気分転換になる事でも話してきてあげたら？」

奈緒「何て声かけりゃいいんだよ？」

加蓮「さあ？こう言うのも、覚悟してたはずなんだけどね…」

李衣菜「……」

みく「……みくがあの時、迂闊に動かなきゃ」

菜々「みくちゃん……。あの状況で、誰もみくちゃんを責める事なんて出来ませんよ」

みく「でも、みくが突撃してなかったら、ドラゴンが余計な損傷を負う事がなかったのは事実でしょ？」

菜々「それは……」

李衣菜「あー！もう、鬱陶しいな！」

奈緒「お、おい李衣菜……！」

李衣菜「そうやってウジウジしてるのを見せ付けられるのって、気持ちよくないよ？  
何、同情してほしい訳？」

みく「……あの場にいなかったリーナちゃんに、みくの気持ちは分かんないよ！」

李衣菜「分かりたくもないね！私だって失敗して落ち込む事はあるよ？けど、今のみくみたいに誰かに見えるところで落ち込んでるアピールしない！」

ガッ

みくが李衣菜に掴み掛かる。

菜々「み、みくちゃん……。リーナちゃん……」 アワアワ

みく「リーナちゃんのおとぼけと一緒にしないで！人の命が、生き死にかかっている



んだよ!？」

李衣菜「…何一丁前に逆ギレしてんの? その生き死に掛かる現場で、失敗した癖に!」

みく「——ッ!!」

奈緒「おい、待て…!」

加蓮「奈緒」

奈緒「何だよ! 止めんな!」

加蓮「…」フルフル

バシンッ

強かな殴打の音が響く。

李衣菜「つつう…!」

みく「もう一回言ってみろ!」

李衣菜「…お望みなら何度でも言ってみろよ…!」

口元に着いた血を拭う。

李衣菜「生き死にの掛かる現場で…ガッ!…頭に血が上ったか知らないけど…ッ!」

拳の殴打を受けながら、言葉は止めない。

李衣菜「失敗したのは、みくなんだ!」

みく「…っ!」

李衣菜 「誰も同情しない！誰も慰めない！ロックじゃない！！」

みく 「みくは、みくはどうすれば良かったの!？」

李衣菜 「知らないよそんなの！やっちゃった事は、変えられないんだから」

みく 「そんな……」 ガクツ

膝から崩れ落ちる。

李衣菜 「……。後悔しても仕方ないんなら、これから先を変えるしかない」

みく 「これから先……？」

李衣菜 「私達で、百鬼帝国も、ウザーラも倒す」

みく 「そんなの……、出来るわけないよ……」

李衣菜 「弱音何て言ってる場合!?!卯月がその身に懸けて守った命でしょ!」

李衣菜 「みくが望んだ事じゃないとしても、残されたんなら、その責任を果たさなく

ちや!それから逃げてどうすんの!？」

李衣菜 「そんなのみくらしくないよ!」

みく 「みくらしく……」

李衣菜 「私は、最後の一人になつてもやるよ。仇討ちなんてのじゃない。こんな気持ち、繰り返し味わいたくないから!」

みく 「リーナちゃん……」

奈緒「ハア……。まうったく、アタシらを勝手に殺すなよな〜」

李衣菜「いや、今のはそんなつもりで言った訳じゃ……」

奈緒「もしそんな時が来たら、李衣菜が1人じゃなく、アタシら3人一緒、だろ？」

李衣菜「奈緒……」

加蓮「珍しいー。奈緒がデレてる」

奈緒「なっ！こら、今いいとこなんだから！」

加蓮「いいじゃん、いいじゃん。寧ろ、こういう堅苦しいのって、アタシ達の雰囲気

じゃなくない？」

李衣菜「あははっ。そうかも」

奈緒「李衣菜まで〜！」

李衣菜「あははっ！……ともかく、今の状態じゃゲッターGを除いた私達で何とかする  
しかないかないけど、仕方ないとか悲観的な考えじゃくてね？」

李衣菜「こんなにまだ仲間がいるんだもん。何とかかなりそうな気がするじゃん！」

みく「……」

奈緒「結局それかよ。気持ちだけで勝てりゃ、苦労しないんだぞ？」

李衣菜「でも何より、気持ちが大事でしょ？」

奈緒「そりゃまあ、そうだけどさ」

みく「……」

みく「——まったくリーナチャンは、お気楽なんだから」

加蓮「それは言えてる」

李衣菜「酷っ！今いいこと言ったと思つたよ？」

奈緒「そう言うのを自分で言うからダメなんだ」

李衣菜「そんなあ〜！」

みく「……リーナチャン達といると、クヨクヨしてた自分がバカみたいだよ」

李衣菜「ははっ、そうそう。どんな時でも前向きに、でしょ？」

みく「うんっ！みくは何時だって、自分を曲げないもん！」

李衣菜「調子出てきたじゃん！みくはやっぱり、そうでなくっちゃ！」

みく「……さつきは叩いたりして、ごめんなさい」

李衣菜「いいって。こう言うのも、いい経験だって事でさ」

奈緒「そーそー。こいつ百鬼メカの直撃喰らつたつてビクともしないんだから。気にすんなって」

李衣菜「ちよつとおく、それ奈緒が言う事と違くない？」

奈緒「違わないだろ。お陰でいつもこつちが死ぬ思いしてんだから。少しは反省しろつての」

李衣菜「あれ？これもしかして褒められてない？」

加蓮「ソフツ」

李衣菜「あー！ちよつと今笑ったでしょ！奈緒も加蓮も酷ーいー！」

みく「ホント、バカバカしいくらい清々しい奴ら、にや…」

菜々「はあゝゝゝ…」 ホツ

瑞樹「丸く収まつたみたいね」

菜々「…よく呑気に新聞なんて読んでられますね」

瑞樹「日頃の世界情勢を知っておくのも、悪くないものよ」

菜々「時と場合があるって話をしてるんです！」

瑞樹「大丈夫よ。あの子達くらい年齢になれば、半分はもう大人よ？」

菜々「けど、半分はまだ子供です！」

瑞樹「でも、無茶はしても無謀はしない。その線引きくらい出来て当然でしょ？」

菜々「…大人の理屈です」

瑞樹「勿論、行動が過ぎるようなら止めるつもりだったわよ。…さてと」

菜々「何処か出掛けるんですか？」

瑞樹「飲み会に誘われちゃったのよ。だからちよつと、ね？」

菜々「…ホント、呑気ですねえ」

瑞樹「ちゃんと晶葉ちゃんからも許可をもらってるわ。今後そんな機会も用意出来なくなるかもしれないからって」

瑞樹「菜々さんも、意地張ってないで外でないと、もう呑めなくなっちゃうかもしれないわよ？」

菜々「な、ナナは未成年なので呑みませんー！」

瑞樹「そ。それじゃあ、今日中には戻るわ。何かあつたら連絡、ヨロシクね」

菜々「……お気を付けて」 ジトー

瑞樹「ええ。行ってくるわ」

くくく 北極圏 くくく

ゴンツ ゴンツ ゴンツ

隊員「――よし、開いたぞ！」

隊員2「これは……。明らかに人の手が加わった通路だ。ずっと奥まで続いてるぞ！」

副長「隊長！ やりましたね。やはり我々の仮説は間違えていなかった」

隊長「……」

副長「隊長？」

隊長「今はいい。一先ず奥へ進んでみよう。各員、警戒を怠るなよ」

一同「了解！」

隊員「広い空間に出ました！」

副長「ここは…、何でしょう？ 何処の古代遺跡でも見た事のない造りです！」

隊長「やはりだ…。間違いない」

副長「どういう事ですか？ 隊長」

隊長「この遺跡は、地球外がもたらされたモノだ！」

副長「地球外、ですって!？」

隊長「見てみたまえ。遺跡の内装、全てがこれまでに発見されている古代遺跡と比べ

ても異質だ」

副長「しかし、発想の飛躍しすぎでは!？」

隊員2「隊長――！まだ奥に何かありますっ！」

隊長「何ッ!？」

隊員「隊長…、これは!？」

隊員「この遺跡の、中枢部、なのか…？」しかしこれは…!」

副長「人の頭脳に…、角…？これは一体、何を意味しているんでしょう？」

ゴゴゴゴゴゴ…ゴッ

隊員「わっ！地震だ！」

隊長「違う！これは……！」

~~~~~ 繁華街 ~~~~~

ガヤガヤ

瑞樹（ここは相変わらず賑やかね…）

瑞樹（…人の流れがある、変わらない営みがある人一人の哀しみなんて、容易く呑み込んでしまうのね）

瑞樹（今沈んでいるのは、私の方かもしれけど…）

瑞樹「……あら？」

DQN「おいおいニーチャン！ぶつかつといてだんまりかア!？」

鉄甲鬼「……」

チャラ男「おい！いい加減にしろよ！喧嘩売つてンのかア!？」

瑞樹「あら〜！こんなところにいたの〜？探したわよ〜」

鉄甲鬼「…むっ」

DQN「お、お前は……！」

チャラ男「アイドルの…川島瑞樹…？」

瑞樹「ごめんなさ〜い！彼、無愛想で〜」

DQN「いや、そのそれはいいんすけど…」

瑞樹「お詫びにサイン、特別にあげちゃうから、彼の事許して？あと、この事はなるべくオフレコでお・ね・が・い☆」

DQN・チャラ男「は、はい!!」

— 居酒屋。

店員「お待ちどうさまでした！」

コトツ

鉄甲鬼「……」

瑞樹「人間の作ったお酒は呑めないかしら？」

鉄甲鬼「2、3聞きたい事があるのだが」

瑞樹「あそこで面倒な事を起こされたくなかっただけ。ただそれだけよ」

瑞樹「そんな事よりほら、折角なんだし一杯付き合いなさいよ。まさか、その図体で下戸なんて言わないでしょ？」

鉄甲鬼「……」

クツ

瑞樹「どうかしら?」

鉄甲鬼「悪くない」

瑞樹「そう」

鉄甲鬼「……」

瑞樹「……」

鉄甲鬼「…何とも、不思議な景色だな」

瑞樹「それはこの居酒屋の風景の事かしら? それとも、並んでる私達の事かしら?」

鉄甲鬼「両方だが、後者の方が強いな。…敵と酒を酌み交わすなど、考えられん」

瑞樹「そうかしら? 私達の歴史の中には、クリスマスと言う記念日に一日だけ停戦を結んで、敵も味方も関係なくその日を祝ったって言うのもあるわ。一対一の状況なら、不思議な事でもないんじゃないかしら?」

鉄甲鬼「お前は俺が怖くないのか?」

瑞樹「怖いわよ。でも、もし私をどうにかする気なら、もうやってるでしょう?」

鉄甲鬼「それだけで信用に足るのか?」

瑞樹「この一時だけよ。また戦場で会ったら、遠慮はしないわ」

鉄甲鬼「それは、こちらとて同じ事。ゲッターに乗らぬ貴様らを倒しても、意味などないのだからな」

瑞樹「なら、戦いからは今は離れましょう。はい、乾杯っ」
カント

鉄甲鬼「うむ。：しかし——」

瑞樹「そんなに居酒屋が珍しいかしら？」

鉄甲鬼「ああ。このような場所は、俺の記憶にないな」

瑞樹「日頃の鬱憤を晴らす場所よ。みんなここをストレスの捌け口にしてるの」

鉄甲鬼「そのわりには、皆笑みを浮かべて楽しんでるようだが？」

瑞樹「仲間で呑むのは楽しいもの。楽しくない席なんて、上司の酌をする飲み会だけで充分だわ」

鉄甲鬼「楽しくない事をするのか。辛くはないのか？」

瑞樹「それは、辛いと思う事もあるわよ？けど、最終的には自分のためだもの」

鉄甲鬼「自分のため……？」

瑞樹「そ。みんな一生懸命に働くのも、私が今、ゲッターに乗って戦っているのも、全部は自分に返ってくるからよ」

瑞樹「自分に見返りがないのに、一生懸命になれるって胸を張って言うほど、聖人君子じゃないわよ」

鉄甲鬼「……ウザーラに立ち向かっていった、ゲッターGのパイロット達もそうだった

たな。自分達の未来を守るために戦う、そんな事を言っていた」

瑞樹「そうね……」

鉄甲鬼「俺達は戦いこそが全てだ。それ以外の事など、考えられん」

瑞樹「じゃあ、全ての戦いがなくなったら、貴方達はどうするの？」

鉄甲鬼「全ての戦いだと？」

瑞樹「戦鬪だって永遠じゃない。戦う相手がいなくなれば、何百年先だって戦いはなくなるわ。そうなったら、貴方はどうするの？」

鉄甲鬼「……分からない」

瑞樹「……。哀しいものね。戦い以外にする事がないって言うのは」

鉄甲鬼「それは、哀しい事なのか？」

瑞樹「貴方も、人の中で暮らしてみれば分かるわよ。…あの、胡蝶鬼とかって言う人みたいに」

鉄甲鬼「胡蝶鬼……」

「瑞樹さん、お待たせしました」

瑞樹「あら、遅かったじゃない」

「一応、遅くなるってメール、しましたけど……」

瑞樹「ホント……？——……ごめんなさい、気付かなかったわ」

「もしかして、お邪魔でした?」

瑞樹「そんな事ないわよ。彼とはそこであつて、ちよつと意気投合しただけ。待つて、すぐ行くわ」

「はい。それじゃあ……」

瑞樹「と言うことだから、私はここで。ここは私の奢りにしてあげるから、ゆつくり呑んでいきなさい」

鉄甲鬼「あ、ああ……」

瑞樹「それじゃあ、ね——」

鉄甲鬼「……」

鉄甲鬼（人間、か……）

——。

くくく 翌日 新早乙女研究所 会議室 くくく

晶葉「——昨日未明、日本政府から連絡が入った」

モニターに画像を写し出す。

晶葉「昨日、22:00頃、ロシアの領空内にて確認されたものだ」

美穂「これって、UFO:ですか?」

晶葉「形状をみる限りはな。北極圏から姿を現したとされるこの飛行物体は、非常に

低速でロシア領空に侵入」

晶葉「再三の警告に応じず、ロシア政府は軍隊による攻撃を開始」

アーニヤ「…結果は…?」

晶葉「飛行物体に対して、ロシア軍の攻撃は効果なし。その後も速度を変えることなく、飛行物体は中国領空に入り、現在も南下中だ」

加蓮「このまま行くと、次はこっちに来そうだね」

晶葉「ああ。まるで何かに導かれるように、飛行物体は日本を目指している」

李衣菜「もしかして、百鬼帝国の新兵器!？」

晶葉「その可能性も否定できない。ともかく、我々はこの飛行物体が日本本土に侵入する前に迎撃する」

瑞樹「それが今回の任務って訳ね」

茜「つまり、私達であるの円盤を撃破すればいいんですね!!」

菜々「で、でもでも、ロシア軍の総攻撃を喰らってもピンピンしてるのに、どうやって倒すんです?」

晶葉「確かに、現在の我々の戦力は低下している。だが、その分ゲッターにも、ゲッター斬にも十分な改修は施した」

奈緒「ネオゲッターにも新しい武装を着けてもらったしな」

李衣菜「ゲッタービームキャリア……。あれがあれば、ネオゲッターでもゲッタービームが使える」

みく「ゲッター3機のゲッタービームを合わせれば、どんな鉄壁の装甲だって紙同然にや！」

晶葉「楽観視は出来んが、詳しく話している時間もない。目標はもうすぐ日本海に入る。ゲッターチームは直ちに攻撃し、円盤の撃破に向かってくれ」

一同「了解（にや）ッ!!」

~~~~~ 日本海上空 ~~~~~

みく「……この新しいスーツ、窮屈で息苦しいにやあ……」

瑞樹「仕方ないわ。私達じゃ、増幅装置を着けて上昇した旧ゲッターの負担に耐える事が出来ないんだもの」

菜々「でも、まさか怪我もしてないのに酸素マスクを着ける事になるとは……」

晶葉『少々息苦しいと思うが我慢してくれ。それがないと、呼吸すらままならないと想定される』

菜々「うう……。段々武骨になってる気がします……」

みく「スーツの着心地については我慢するけど、後でヘルメットには猫耳を着けてもらうにや」

菜々「あ、そうですね！ナナのにも前のみたいにウサミミを着けてもらわないと！」  
瑞樹「2人も、ホントブレないわね…」

李衣菜「今回は空中戦だから、戦闘になったら任せたよ」

奈緒「お、おう…！」

加蓮「ネオゲッター2は、周りのフォローをしてればいいんだから。気楽に行こ、奈緒」

奈緒「つて言ってもなあ。結局ゲッタービームは撃たなきゃならないんだし、ちゃんとみくや茜とタイミングは合わせないと…」

加蓮「私達でもフォローするから」

李衣菜「緊張しすぎはよくないって事！ま、何とかなるって！」

奈緒「やつばお前みたいに気楽にはなれんわ…」

晶葉『今回の戦闘の中核はゲッター烈火だ。頼りにしてるぞ』

茜「はいっ！任せてください!!」

美穂「だけど、あの円盤、一体どこから…？」

晶葉『さあな。円盤は北極圏から姿を現したと言うが、その北極では丁度古代遺跡の調査が行われていたそうだ』

美穂「古代遺跡の調査…？」



アーニャ「もしかして、その遺跡が…?」

晶葉『どうだろうな。ただ、その遺跡の調査隊とは連絡が取れていない』

美穂「そんな…!」

晶葉『調査隊の事は、今は忘れよう』

茜「円盤が見えました!」

瑞樹「——肉眼で見ると、余計に大きく見えるわね」

晶葉『ゲッターのカメラからの情報で解析不能…。少なくとも我々の知る金属で出来た代物ではなさそうだな』

菜々「もしかして、本当にUFOなんですか?!」

みく「落ち着いて!ともかく、3機でゲッタービームを合わせるにや!」

所員『待ってください!』

晶葉『何だ!』

所員『ゲッターのいる空域に、何かが接近して来ます!』

晶葉『あの円盤と同じサイズの反応…。これは——!』

アーニャ「百鬼要塞…!」

美穂「どうして百鬼帝国がこんなところに…?」

みく「丁度いいにや!円盤とまとめてここで決着をつけてやるにや!」

ヒドラー「ブライ様！ゲッターが展開しています！」

ブライ「構うな。我々の目的はゲッターを倒す事ではないのだから」

グラール「至急、準備に取りかかります」

ブライ「うむ」

茜「百鬼帝国！ここで会ったが百年目です！覚悟してください！」

ブライ「ゲッターか…。そう急ぐな。楽しみを先にしてしまつては面白味がないだらう？」

加蓮「こつちはもうアンタ達に辟易させられてるの。パツとやられちゃつてくんない？」

ブライ「これはこれは、手厳しいな」

みく「どうせ今回の件もお前らのくだらない企みなんですよ！」

ブライ「ふはははは！短絡的な思考はやはり人類らしいと言えるな」

みく「にやに!？」

ブライ「お前達が今目の前にしている円盤、それはこの百鬼要塞の兄弟と言つていい」

美穂「百鬼要塞の、兄弟ですか？全然似てないような…」

ブライ「無理もない。この百鬼要塞は、その円盤…いや、宇宙戦闘艦と同型の艦を私  
が改造したものだからな！」

葉々「あれが…宇宙戦闘艦、ですか!？」

晶葉『本当に宇宙からやって来たものだったとはな…』

ブライ「今よりも遙か未来の宇宙からやってきた、と言ったほうが正しい」

奈緒「遙か未来だって!？」

ブライ「そう。この艦は時空を越えて現代にやってきたのだ。ゲッターを倒すために  
!」

瑞樹「ゲッターを倒すため…?」

みく「まあた訳の分からない事言ってるにや」

ブライ「訳の分からない事などではない!この宇宙戦闘艦こそ、ゲッターの脅威から  
宇宙を守るために遣わされた、希望の方舟なのだ!」

李衣菜「ゲッターの脅威…!?何を根拠にそんな事を!」

ブライ「言ったであろう?百鬼要塞は、同型の宇宙戦闘艦を改造したと」

ブライ「この要塞は、南極で私が発見したのだ。正確には、私がその時同行した調査  
隊、だがね」

晶葉『調査隊だと?それじゃあ、お前は…!』

ブライ「…そうだ。私も、元は人間だった」

奈緒「嘘だろ!？」

ブライ「…今から20年前の話だ」

ブライ「その時私は、うだつの上がらぬ科学者だった。そして、南極で発見された謎の物体の調査のため、調査隊に同行するよう命令された——」

ブライ「内部調査の一番手に、私は選ばれた。当時から体格はいいが、うだつの上がない若い学者…。私はその為だけに選ばれたようなものだった」

李衣菜「何それ、囲みたいなものじゃん」

晶葉「…内部の様子が分からないんだ。犠牲を減らすため、常套な手段ではあるが…」  
ブライ「…それは大気圏で溶けたと言うよりも、何か、考えられないような大きな力があらゆる方向から加わり、全体がねじ曲げられた、というような具合だった」

ブライ「まさに死の艦」

ブライ「だが、完全に死んでいるわけではなかった。虫の息ではあったがな」

瑞樹「中枢部、動力のようなものは生きていたわけね」

ブライ「そう、まさしく生きていたのだよ。中枢で制御する、1つの頭脳がね」

菜々「ず、頭脳!?!」

ブライ「そう、頭脳だ。1つの生命体の脳髓。それが培養液に満たれたカプセルの中で、私を待っていたかのように生き延びていた！」

ブライ「そして、脳は私に、あるものを見せた、真実を教えたのだ。——それは、遠

く宇宙の様相だった」

——『……奴らが攻めてくる……！ダメだ、これ以上はもう持たん!!』

——『あいつらは強大すぎる!! 打つ手はないのか!?!』

——『ある! ひとつだけ手はある!!』

——『しかし、あれを今行うのは危険すぎる!!』

——『だが、やらねば我々に未来はない!』

——。

ブライ「私は見たのだ。遠い未来、ゲッターの戦いを! ゲッターがあらゆる星を破壊し尽くし、宇宙を蹂躪するその様を!!」

茜「そんな事が信じられると思ってるんですか!?!」

ブライ「お前らが信じようと信じまいと、そんなものは関係ない」

ブライ「だが私は、彼に託されたのだ! あらゆる力と共に、この宇宙の未来を!」

美穂「ふ、ふぎけないください!」

アーニヤ「そうです! ワタシ達が恨まれる理由、そんなものなんてありません!」

ブライ「最早訳などどうでもいい! だが、私は手に入れたのだ! うだつの上からぬ科学者が、一生を懸けても手に入れられぬ力を!」

ブライ「今まで私を見下し、嘲笑ってきた者達を蹂躪し、この星など容易に手中に納

める事の出来る力を！」

李衣菜「何さ！立派な事並べ立てといて、要するに個人的な復讐がしたいだけじゃない！」

ブライ「その何が悪い？貴様らとて感じた事があるだろう？上には上がいる事実を、どう足掻いても勝てぬという劣等感を！」

李衣菜「それは……」

ブライ「……とは言ったものの、宇宙戦闘艦は所々が使い物にならず、ほとんどを直さねばならなかった」

ブライ「結果、艦は百鬼要塞という今の姿となり、百鬼メカも艦内のロボットを改造して造り出していかなければならなかった」

ブライ「そのために随分と時間が掛かった……。ロボットも艦も、大きく性能を落としてしまう結果になった」

瑞樹「？ちよつと待って。それじゃあ、百鬼帝国は……」

ブライ「ふっ……。百鬼帝国なんてものは、元から存在せん」

奈緒「な、何だつて!？」

ブライ「いや、正確にはここから誕生するのだ。ゲッターを始末したあと、この地球を支配する巨大帝国としてな！」

ブライ「百鬼衆も、あらゆる兵員も、私がおの場にいた調査隊の遺伝子を培養して生み出したものにすぎん」

晶葉『恐ろしい事を…。1つの国家に相当する人員と兵力を、たった1人で作ったというのか!』

加蓮「でも可笑しいよ。私達が戦った牛剣鬼は、牛餓鬼の事を息子だつて言つてた」

ブライ「それは私も驚いたよ。まさかあの2人が親子の情に芽生えるとは」

奈緒「マジかよ…」

美穂「あ、貴方は…！生命を何とも思わないんですか!？」

ブライ「大義を成すのに命など小さなものよ。貴様らの歩んでいる歴史とて、多くの犠牲の積み重ねだろうが!」

李衣菜「許さない…！アンタ個人のちっぽけな復讐のために、多くの命を利用したアンタを、私は絶対許さない!」

茜「私も同じです！もしゲッターが脅威になるとしても、他にいくらでもやり方はあつたはずですよ!」

茜「貴方のせいでマサルくんは…！絶対に許しませんよ!!」 ゴオツ

ブライ「何とでも吠えるがいい！私は今日完全になるのだ!!」

ブライ「完全な宇宙戦闘艦…。その中枢脳に接触し、私は全てを得る！そして、世界

を我が物とするのだ!!」

みく「誰がお前の好き勝手にさせると思ってるの!」

奈緒「宇宙戦闘艦って奴を倒す。そんで、お前も倒せば万事解決って事だろ!」

ブライ「ふっ。やれるものならやってみるがいい」

ブライ「百鬼メカを展開させろ」

グラール「はっ!」

菜々「百鬼要塞から、百鬼メカが続々出てきます!」

加蓮「飛行タイプの百鬼メカ…、メカ半月鬼、メカ角面鬼、あとメカ大輪鬼もいるよ

!」

みく「あいつら、盾持ちで装甲も高いから鬱陶しいにやあ!」

瑞樹「言ってる場合じゃないわよ! ブライに接触させないためにも、何としても叩く

わよ!」

一同「了解(にや)!!」

瑞樹(鉄甲鬼、貴方も出てくるのよね…)

グラール「ブライ様。宇宙戦闘艦に乗り込む準備が整いました」

ブライ「うむ。ヒドラー、私が向こうにいる間、この艦は任せる」

ヒドラー「はっ!」





見える高さへ舞い上がる。

みく「…たア…。こ、これは…。」

瑞樹「想像以上ね…。卯月ちゃん達は、こんな性能を乗りこなしていたのね…。  
菜々「だから言つたじゃないですか！…あ、鼻血が…」 タラー

みく「でもここからなら、どんな敵でも狙えるにや！」

みく「ゲッタートマホークッ!!」

みく「にやあッ!!」

百鬼兵「—!!?」

急降下と共にトマホークを降り下ろし、狙いを定めた百鬼メカを両断する。

みく「にやッッフ！生まれ変わったみたいにご機嫌にや！」

瑞樹「…上空から次が来るわよ！迎撃用意を！」

みく「にやっ—!!?」

ガキインツ

彼方から強襲を仕掛けた相手をトマホークで弾き、相対する。

瑞樹「…鉄甲鬼」

鉄甲鬼「その声は川島瑞樹か」

瑞樹「みく、何としても奴を食い止めるわ！」

菜々「でも、相手はゲッターGと互角に戦った百鬼メカなんですよね!？」

みく「こつちだつて今はゲッターGと互角にや!」

瑞樹「つまり、私達にも勝算はあるって訳。みく!」

みく「うにやあつ!」

鉄甲鬼「ツ!!」

ガキイツ——!

奈緒「——くつ!」

周囲に展開したメカ各面鬼のミサイル攻撃を躲す。

奈緒「やっぱりこうなるのかよ!」

李衣菜「奈緒!ここまで来たら覚悟を決めるしかないよ!!」

奈緒「分かつてるっての!——プラズマブレード!!」

プラズマブレードを逆手に構え、メカ各面鬼に肉薄。

奈緒「ぶつた斬れろおおおおおおおおくくくツ!!」

ズワオオツ

ネオゲッター2の反撃に驚いた1機のメカ各面鬼を縦一文字に斬り開く。

加蓮「ヒュ〜。やるう」

奈緒「こつちは集中してんだ!茶化すのは後にしろ!」

プラズマブレードを正面に構え、迎撃の姿勢をとる。

奈緒「さあ……。どつからでも来やがれ……！」

李衣菜「こつちから向かってった方が危険は少くない？」

加蓮「奈緒は慎重なんですよ。私達は、フォローに集中つと」

加蓮「奈緒、敵は正面だけじゃないよ。常に動き回って！敵の位置と攻撃は、こつちで捕捉する」

李衣菜「奈緒はブレードを振る事にだけ集中して！」

奈緒「お、おう！」

茜「火斬刀！チェリヤアツ!!」

メカ半月鬼、メカ各面鬼、メカ大輪鬼の編隊を瞬く間に撃破する。

美穂「それにしても、すごい数の敵……」

アーニヤ「とても、円盤に集中している場合じゃないですな……！」

美穂「どうするの!?!ゲッター斬の斬魔光だけじゃ円盤を落とすのは無理だよお！」

茜「このまま乱戦でも問題ないですけど！そうすると円盤を落とすエネルギーはな  
くになりますね！」

晶葉『完全に予定が狂ったな……。せめて百鬼帝国の動きが掴めれば……』

美穂「見て！百鬼要塞の下が開いて……」

アーニャ「あれは、新手の百鬼メカ…？」

晶葉『どうやら円盤に向かう送り役兼護衛、と言った具合らしいな…』

茜「円盤の上部が開いていつてます！」

瑞樹「どうやらそこが出入り口って事らしいわね」

晶葉『テストチーム！余裕があるのか!?!』

瑞樹「みくちゃんは絶賛で奮闘中よ！言うほど余裕は…ツ…！ないけど…ツ！」

テストチームを映す画面が揺れる。

瑞樹「出入り口なら、他と違って打ち崩しやすいわね！」

晶葉『なら、そこを狙っての一点突破って事か…』

アーニャ「ですが、ゲッター烈火に、一点突破できるだけの能力は、ありません」

茜「悔しい限りです！」

加蓮「…って事は…」

奈緒「アタシかア!?!」

晶葉『…この状況では、ドリルアームが使えるネオゲッター2が適役だな』

奈緒「マジかよ…。地獄の釜に飛び込むのは勘弁だぜ…」

李衣菜「今ブライを倒せるのは私達って事だよ！覚悟決めちゃって！」

奈緒「チクショー！」

ギユンツ

ネオゲッター2が高度を上げる。

鉄甲鬼「むっ、ブライ様を追うつもりか！行かせん！」

みく「それこっちの台詞にやあ！」

トマホークを構え、メカ鉄甲鬼に立ちはだかる。

鉄甲鬼「くっ……！」

菜々「折角の大チャンスなんです！これを逃す訳にはいきません！」

鉄甲鬼「どけ！実力で勝てない事くらい分かるだろう！」

瑞樹「こっちも退けない理由があるからね……！貴方はどうなの!？」

鉄甲鬼「何の事だ!？」

瑞樹「百鬼帝国は1人の男が作った仮初めの国家なのよ！そんなもののために本当に

命を懸けるといふの!？」

鉄甲鬼「知った事か！俺は戦士！戦いの中に生き、戦いの中で死ぬ！そこに大義名分

など存在するものか!!」

瑞樹「胡蝶鬼の想いが、貴女には分からないの——!？」

ブライ「フフフ……。やはり間違いない。中の構造も、全てあの時のモノと同じだ！」

グラール「ブライ様……！これは……！」

ブライ「ふん…。生意気にもこの遺跡を調査していた者がおったのか。艦の浮上の衝撃に耐えきれなかったと見える」

グラール「人間風情がこの超テクノロジーに触れようとした報いですな」

ブライ「クツクツクツ…。感じる…。感じるぞ、兄弟よ。角同士が共鳴しあい、お前の事が手に取るように分かる」

グラール「これが…。宇宙戦闘艦を動かす中枢脳…。」

ブライ「さあ！時は来た！今こそ一つとなろうぞ、兄弟よ！」

ズズズズ…

晶葉『ブライにあの力を手に入れられるような事があつては、最早日本だけの問題ではない。世界が滅ぶぞ！』

アーニャ「アカネ！私達でネオゲッターの進路を作りましょう！」

茜「リョーカイです!!——斬魔光ツ!!」

斬魔光の閃光が天を穿つ。

美穂「今だよ奈緒ちゃん！斬魔光が抜けた穴を！」

奈緒「おっしやああ!!」

両腕のドリルを唸らせ、ネオゲッター2が往く。

李衣菜「私達の明暗を分けるフリーフォールだあ！」

加蓮「世界の命運を握るつので、ゾクゾクしちゃうね」

奈緒「もうどうにでもなれえ!!」

ゴシャアツ

天井の入り口を破壊し、ネオゲッターが内部へと侵攻する。

ブライ「!?」

グラー「ブライ様!ゲッターです!」

ブライ「護衛に迎撃させろ!何としても時間を稼ぐのだ!!」

百鬼メカ『!!』

奈緒「いゝっ!!?オープンゲット!」

バシユンツ

加蓮「ちよつと…!何でいきなり分離するの!？」

奈緒「わ、悪い…。つい…」

李衣菜「加蓮と奈緒はそのままドッキングして!ネオゲッターで何とかするよ!」

奈緒「わ、分かった!」

李衣菜「ゲッターチェンジ!!」

ギリギリのスペースを使い、ネオゲッターが着地する。

李衣菜「晶葉特製のコイツで!」



ネオゲッター1が左腕に小盾を構える。

李衣菜「――ゲッタービィイームツ!!」

ギユンツ――

小盾、ゲッタービームキャリアから放たれたゲッタービームは、立ちほだかる百鬼メカを貫き、そのまま真つ直ぐに後ろへ伸びた。

グラール「ブライ様!危ない!!」

ブライ「!?!」

グラールの必死の飛び込み。その背後をゲッタービームが払い、ブライとの合体の途中だった、中枢脳を焼き払う。

グラール「おのれまたしても…!」

ブライ「よい!グラールよ!」

グラール「しかし…!」

ブライ「我々として生身ではゲッターには勝てん!ここは退くのだ!」

グラール「…はっ!」

李衣菜「ブライが逃げる!?!」

加蓮「待って!この円盤の破壊が最優先だよ!」

李衣菜「そっか!」

奈緒 「コイツも機械で動いてんだから、動力ぐらいどっかに…」

加蓮 「それなら、アタシに考えがある。ネオゲッター3に代わって」

李衣菜 「分かった！」

加蓮 「晶葉！外のみくと茜に退避命令を！」

晶葉 『何をする気だ!?!』

加蓮 「こんなおつきい要塞が爆発するんだよ？念には念を入れた方がいいでしょ？」

晶葉 『…分かった』

奈緒 「アタシらは生きてんだろうなア!?!」

加蓮 「ふふっ。結果は出てみてのお楽しみ♪」

李衣菜 「オーブンゲット！」

加蓮 「ゲッターチェンジ！」

加蓮 「最大出力でいくよ！」

加蓮 「プラズマブレイク——！」

—。

瑞樹 「みく！撤退よ！」

みく 「にやあ。決着は着きたいけど、命には代えられないにやあ！」

鉄甲鬼 「逃げるつもりか!?!」

瑞樹「決着はお預けよ！ケリを着けたければ貴方も退きなさい！」

ゲッター1が高度を上げ、最高速度で離脱。

鉄甲鬼「くそっ……！逃がすものか！」

百鬼兵「鉄甲鬼様！あれを……！」

鉄甲鬼「むっ!!?——」

時間にしてものの数秒。刹那の間合い。

その間に宇宙戦闘艦は眩い光に包まれ、轟音と共に爆発した。

ヒドラー「くそお……！ゲッターめえ……！」

ブライ「良いのだ。ヒドラー」

ヒドラー「ブライ様！それにグラーも。ご無事でしたか！」

グラー「しかし、みすみす宇宙戦闘艦を奴等に落とされてしまいました」

ブライ「構わぬ、と私は言ったのだよ。グラー、ヒドラー」

ブライ「中枢脳が破壊される直前、脳が私に最後の力を託したのだ」

ヒドラー「はっ……？それでは……！」

ブライ「グラー、直ぐに科学者を集めよ。我々に残された力を結集して、百鬼要塞を

改造する」

グラー「はっ！」

「ブライ」そして、改造が済み次第、日本に一大攻勢を仕掛ける！  
「ブライ」その日こそ、人類の…ゲッターの最後の日よ!!」

みく「…ふう。間一髪だったにや…」

菜々「り、李衣菜ちゃん達は…!」

美穂「…ツ！あ、あります！海中に、ネオゲッター3の反応です!」

瑞樹「向こうも間一髪、海に落ちてたみたいね」

李衣菜「あつはははは！まさか加蓮がこんな無茶やらかすとはね！なかなかロツクだったよ!」

加蓮「…誰かさんの影響かもね…」

奈緒「呑気に言ってるなよ！結局ブライは逃がすし、ゲッターも動かないし！生きた心地全ツ然しなかったぞ!」

加蓮「そうだね…。ネオゲッターは、また橘研究所行きかも」

李衣菜「まあまあ。百鬼帝国に手が着けられなくなるよりはよかつたって事で」

奈緒「…まあ、それもそうか」

加蓮「向こうだって何も収穫がなかったって訳じゃ、ないみたいだしね」

李衣菜「…次の戦闘が、最終決戦か…!」



## 第24話 『列島震撼!!』

~~~~~  
???

卯月「——うう……ん……。かな子ちゃん……、そんなにマカロン入りませんよお……」

卯月「……んあつ」

卯月「……ここは……?……知らない天井……」

「気が付いたかい?」

卯月「……?」

男「外傷の方は、問題ないみたいだね。……自分の名前は、言えるかい?」

卯月「え……あ、はい。島村、卯月です」

男「そうか。言語、記憶ともに問題なし。うん。羨ましいくらいの健康体だね、君は」

卯月「えへへ……。ありがとうございます……。じゃなくて、えつと……!」

男「ああ、自己紹介はまだだったね。私は、君達がアトランティスと呼ぶ、古代文明の生き残りだよ」

卯月「そうだったんですか」

卯月「——…っつて、ええ!？」

男「そして、ここはウザーラの体内、その中にある医務室のようなものだ」

卯月「うえ…あ、あの…っ、どうして…?」

男「そのどうして、がどういう趣旨なのか分からないけど、一先ず、君達がウザーラに敗北した後、君達が使っていたロボットと共に君達を回収した。傷の具合が酷かったので、ここで手当てをさせてもらっていったんだ」

卯月「えっとお…。貴方は、お医者さん?」

男「まあ、似たようなものだと思ってくれて構わない。君と他にいた2人の仲間も別の場所で体を休めている。安心しなさい」

卯月「…どうして、助けてくれたんですか?」

男「君達と話をしたくてね」

卯月「お話しを?」

男「そう。我々の間には、まだ幾つかの誤解がある。それを解かなくてはならない、違うかい?」

卯月「それは…」

男「それに加え、私は君達の事を知りたいんだよ。私達の文明が滅んだ後、あの過酷な環境で生まれた君達を」

卯月「過酷な環境？」

男「こちらの話だ。君もまだ目覚めたばかりで混乱している。落ち着くためにも、君の話聞かせてくれないか？」

男「君がどんな世界で生まれ、育ち、そして何を思いこれまで生きてきたのか。それを私に聞かせてほしい」

卯月「…そんなのでいいんですか？」

男「ああ。一体今の人間は、どんな暮らしをしてるのか、それが知りたいんだ」

卯月「……分かりました。それじゃあ——」

くくく 百鬼帝国 くくく

ヒドラー「もうすぐこの百鬼要塞の改修も終わるな」

グララー「はい。今日中には、全工程の作業を終えるでしょう」

ヒドラー「そうなれば、全軍を挙げての総攻撃……」

グララー「次こそゲッター共を根絶やしに出来るでしょう」

ヒドラー「しかし、ふむ……」

グララー「何か心残りがありますか？」

ヒドラー「ウザラだ。あの力さえあれば、我々百鬼帝国の力を磐石に出来るという

もの」

グラール「成る程。確かに、ブライ様は興味を示しませんでしたが、あの力を放つておくにはあまりにも口惜しいと」

ヒドラー「無論、私も時期を知らぬわけではない。行方知れずの古代兵器搜索のために、日本攻略に必要な戦力を割くなど、もつての他だ」

グラール「それでしたら、都合のよい者達がございます」

ヒドラー「誰だ？そやつらは」

グラール「暫しお待ちを」

グラール「一本鬼、二本鬼、五本鬼。三餓鬼と呼ばれる三人衆でございます」

ヒドラー「こやつらが…？たった3人で大丈夫なのか？」

グラール「3人と侮るなかれ。彼らは百鬼衆の中でも選りすぐられた少数精鋭にして、義兄弟程の結束を持つ拔群のチームワークがあります」

グラール「これに我ら百鬼帝国の科学力を合わせれば、必ずやウザーラを手中に納められることでしょう」

ヒドラー「うむ。よく分かった！直ちに攻撃し、ウザーラを奪ってくるのだ！」

二本鬼・五本鬼「はっ！」

一本鬼「我ら三餓鬼の名に懸けて、ウザーラを手に入れて見せましょう！」

ヒドラー「うむ。吉報を待つておるぞ——」

——。 新早乙女研究所 管制室 〳〳〳

所員「……」

晶葉「やあ、調子はどうか？」

所員「池袋所長代理！……ご覧の通り、平穩そのものです」

晶葉「警戒をはじめて早一週間、その間に何の音沙汰もないとは、嵐の前の静けさか……」

菜々『このまま何事もなければいいんですけどねえ』

晶葉「菜々か。退屈させてすまないな」

菜々『いいんですよ。人間何事も、平和が一番ですから！』

晶葉「北海道のネオゲッターチームと、九州の斬チームの方はどうか？」

李衣菜『北海道は快晴、雨が降る気配もないよ！』

茜『九州は曇りですね！敵の反応はありません！』

晶葉「全国で百鬼帝国警報はなし、か……。この天候が続いてくれればいいがな」

—— 北海道。橘研究所周辺区域。

奈緒「——しかし、橘研究所でネオゲッターの整備受けたと思つたら、そのままこつ

ち方面の防衛に就かされるなんてな」

加蓮「こつちの方が直でネオゲッターの装甲の張り替えが出来るから、便利ではあるけどね」

奈緒「けど、いい加減無愛想な隊員の人達と顔付き合わせてご飯食べるのも、何とかしてもらいたいよ…」

李衣菜「確かに。何て言うかこう…、空気が重いよね？」

晶葉「そりゃ、数秒後には戦場になるかもしれない現場で、ダンスパーティーを踊るわけにもいかないからな？」

李衣菜「それはそうだけど…」

瑞樹『何事もメリハリよ。緊張感は大切にしないと』

みく『でも、ここ何日かの瑞樹さんはピリピリしすぎな気もするにや』

瑞樹『……』

菜々『あの何とかって言う百鬼衆の人の事を考えているんですか？』

瑞樹『……それは、関係ないわ』

「二次防衛線より入電！高熱源反応多数確認!!」

奈緒「つと、来たかア!?!」

美穂『こつちも……!向こうに見えるの、百鬼メカだよ!』

晶葉『――始まったな。そこ以外にも百鬼帝国の襲来があったようだ』

李衣菜「量産型ドラゴンの配備が間に合っただけなあ…」

晶葉『無い物ねだりをしてても仕方ないさ。今は守れるものだけでも守らなければ、人類が根絶やしにされてしまう』

瑞樹『出来ることを全力でやりましょう。結果を考えるのは、まだ先よ』

茜『分かっています！市街地には入れさせませんよ！いきましよう！アーニヤさん、美穂さんツ!!』

アーニヤ『Da!!』

美穂『うんっ!!』

李衣菜「よおし、こっちも出陣だあ!!」

加蓮「リーナ、分かっているとと思うけど、今の橘研究所には…」

李衣菜「近くの病院から避難させてきた患者がいるんでしょ？分かっているって！」

加蓮「健康な人は何かあっても逃げられるけど、病人はそうじゃないから…。頼んだよ！」

李衣菜「まっかせて！向かってくる相手は、このソードトマホークの錆にしてやるぜえ〜!!」

――。

所員「ネオゲッター、ゲッター斬、交戦を開始しました!」

晶葉「よし、こっちも準備だ。直に敵が攻め行ってくるぞ」

みく『平穏な時間は長続きしないにや!』

菜々『革命、戦争、平和の三拍子とは無縁でいたいですくす!』

晶葉「ここまで来たら引き返す事は出来んぞ」

瑞樹『それにしても、可笑しいわね…。敵の気配が感じられないわ』

所員「い、池袋所長代理…!」

晶葉「どうした?」

所員「旧早乙女研究所付近で、高熱源反応、多数検知しました…!」

晶葉「何だって!」

晶葉（機能は全てこちらに移しているのに、何故今旧研究所なんだ? 狙いは真ゲツ

ターロボ? いや…:…)

晶葉「まさかな…」

瑞樹『晶葉ちゃん、旧研究所には、私達が向かうわ』

晶葉「ああ、頼む。自衛隊のBT隊は、念のためこちらに待機していてくれ」

『了解!!』

所員「旧早乙女研究所周辺に、敵機動部隊の展開を確認」

所員「尚、確認された敵機動兵器は：ゲッターロボG！」
晶葉「……遂に来たか……！」

「……」 早乙女研究所 「……」

周囲の山林を掻き分けて、無数のゲッタードラゴンが立ち上がる。

未央「ひゅゅゅっ！絶景哉、絶景哉。こんだけのゲッタードラゴンが並んでるなんて」

未央「これが全員味方だったら、心強いんだけどなあ」

ヒドラー「ふふふっ……。やはり素晴らしい……。感じるぞ、ゲッターの力を！」

未央「その声はヒドラーって奴？敵の大將が前線に出てくるなんて、よっぽど人手不足みたいだね！」

ヒドラー「忌々しい人間共め！貴様らが拠り所とする力で滅びるがいい！」

量産型ドラゴンが、研究所へと歩みを進める。

未央「盗んだドラゴンで得意になっちゃって……。盗品に乗って走り出すのは、15までって決まってるんだからね！」

ヒドラー「何の話だ!？」

未央「こつちの話！早乙女研究所だって、襲撃のために何の準備もしてない訳じゃないんだから！」

管制室。目の前の無数のボタンを操作する。

同時に、研究所周辺の地面や岩肌が開き、ミサイル発射サイロや、連装機銃を乗せた兵装が顔を出す。

ヒドラー「ぬう!?研究所を要塞化しておったのか!」

未央「伊達に博士と2人で切り盛りしてる訳じゃないんだから!」

未央「発射ア!!」

ミサイルと機銃を、手当たり次第に発射。

段幕の雨が降り注ぎ、量産型ドラゴンの群れを打つ。

未央「どう!?!」

煙幕が晴れた視界の先には、

ヒドラー「クッククックツツ…!やはりゲッタードラゴン!人間の作った鉄砲玉など、痛

くも痒くもないわ!」

未央「ま、こんなもんだよね。期待はしてなかった…!」

ヒドラー「今度はこちらから行くぞ!」

量産型ドラゴンの額に、淡い光が湛えられる。

未央「マズ…ツ!エネルギーシールド展開——!」

ヒドラー「ゲッタービーイーイムツ!!」

ズアツ

慌てた動作で分かりやすい赤いボタンを押すと同時、研究所に向けて、ゲッタービームの閃光が幾本も伸び、直撃。

未央「わわっ……ふう、間一髪……」

半透明のエネルギーシールドが開き、ゲッタービームを遮るも、爆発に伴う衝撃が、研究所を揺らす。

未央「今ので半分もエネルギーが削られたか……。もう一回同じ事されたら、ヤバイね……」

早乙女『——未央くん。いざとなれば君も地下へ避難し、研究所を自爆させたまえ！』
未央「博士！分かってるってるよ。ホントにホントの最終手段で、使わせてもらいます！」

早乙女『頼んだぞ……。真ゲッターは勿論、君も失うわけにはいかないのだからな』

未央「はいはいと。その前に、色々試せる手段はやつとかないと」

ヒドラー「行くぞ！ドラゴン軍団、我に続けえ！」

未央「重力機雷セット！第3、第4迎撃装置スタンバイ！遠隔操作無人ビイト起動！！」

ヒドラー「そんな小兵の軍勢で、どれ程保つかな？」

未央「まだまだここから！百鬼帝国！本当の戦いは、ここからだよ！」

ウザーラ内部

卯月「——愛を込めてずっと歌うよ——♪」

パチパチパチ…

男「…ありがとうございます。それが、貴女方の歌、ですか」

卯月「えへへ…。これだけじゃないんですよ？もっとたくさん、色々な歌があります」

男「それは、是非聞いてみたいですね」

卯月「私の携帯があれば、何個か入ってたんですけど…」

男「携帯？」

卯月「はい。ちっちゃな…無線機、なのかな？遠くの人とお話できたり、音楽を聴いたり、色々な事ができますよ」

男「そんなものがあるのか…。今の人類は、よほど発達した科学力を持っているみたいですね」

卯月「アトランティスの人も、すごいじゃないですか。ウザーラなんて、すごいものを作るんですから」

男 「…我々アトランティスの文明は、戦う為に進歩したようなものです。街に住む人々の暮らしは、それは酷いものでした」

卯月 「……」

男 「……。着いてきて、もらえますか？」

卯月 「…？はい」

— 隣の空間。

卯月 「……は…？」

男 「左右に並んで見えるのは、冷凍睡眠装置です」

卯月 「冷凍睡眠…？——うっ…!？」

男 「中をまじまじとは見ない方がいいでしょう」

卯月 「…すいません」

男 「いえ、気にすることはありません」

卯月 「あの、この人達は…、何かの病気で…？」

男 「はい。我々のアトランティスは、軍事国家として繁栄を極めました」

男 「ですが、突然、我々の体は未知の病魔に襲われたのです」

卯月 「未知の病魔…」

男 「原因は宇宙から降り注いだ隕石でした。それに付着していたウイルスが、我々

の体に病をもたらしたのです」

男 「病気は深刻で、先ずは皮膚が炎症を起こし、爛れ、やがては内蔵や体の生命維持に必要な器官が腐食して死に至る…」

卯月 「そんな…」

男 「アトランティスの民には病気に対する免疫がなく、多くの者達が犠牲となりました」

男 「ここに生き残っているのは、ほんの一握り、しかも政府や軍に携わった、いわゆる富裕層のみです」

卯月 「そんな…、それじゃあ、他の人達は…」

男 「…このウザーラに収容できる限りでは、アトランティスに住む全ての民を救う事は出来ません…」

卯月 「……」

男 「病魔に対しては抵抗する術を持たなかった我々は、ウザーラの体内で眠りに着き、ウイルスの届かない海底にアトランティスを沈めるしかなかった」

男 「そして、アトランティスのあつた島の火山を人工的に噴火させ、アトランティスを沈めたのです」

男 「ですから、今はここが、ウザーラの体内こそがアトランティスなのです」

卯月「そうだったんですね…。だからウザーラは、向かってくる私達を…」

男「ええ。遺跡となったアトランティスの上で戦い始めた貴女方を、アトランティスに害を為す存在と認識し、目覚めたのです」

卯月「そうとは知らなくて…。すみません」

男「良いのです。アトランティスも、かつては多くの国や人々に、恨まれるような事をしてきたのは事実ですから」

卯月「でも…」

男「私が伝えたかったのは、貴女方が今、とても恵まれた肉体を持ち、そして恵まれた文明の中にいると言うことです」

男「アトランティスは生き残る為に、生き残る人間を選び、力のない人間は生きる事を許されなかったが、貴女方は違う」

男「病魔にも負けぬ強い体を持っている。強い者が弱い者を助ける事が出来る余裕を持っている。私にはそれが羨ましかった」

卯月「…この人達は、助かるんですか？」

男「……」

卯月「あの…」

男「一つだけ、手段はあります」

卯月「それは……？」

男「奥へ行きましよう。そこに、長老が待っています」

卯月「長老……？」

男「今このウザーラを実質的に管理している長です。王は病を患って冷凍睡眠中ですから。王に代わり、今のアトランティスの往くべき道を考えて下さっている方です」

卯月「その人と、私を会わせるために……？」

男「はい。全ては貴女方と長老とを引き合わせる為に。我々に残された最後の手段についても、そこでお話しします」

~~~~~ 日本列島 ~~~~~

日本各地で、百鬼帝国が武装蜂起していた。

各地に散らばったゲッター軍団は、その相手に追われたが、明らかな多勢に無勢であつた。

無数の百鬼メカを相手にしても、引けをとらないほど実践経験を得たゲッター軍団も、たった3機では限界がある。

人類は今、ジリジリと追い詰められつつあつた――。

みく「もうすぐで研究所が見えるにや！」

菜々「未央ちゃん、早乙女博士。もうちよつと待ってて下さいね〜！」

瑞樹「……ッ！止まって！」

みく「——ッ!？」

ギョーン——ッ

立ち止まったゲッター1の眼前、上空からビームが突き立つ。

みく「な……何にや!？」

瑞樹「……研究所に行く前に、相手をしなきゃいけないのがあるみたいね」

菜々「あ、あれって確か……鉄甲鬼、さん……？」

鉄甲鬼「……」

——北海道。

李衣菜「ううりやあああああつ!!」

豪快にソードトマホークを振るい、群がる百鬼メカを蹴散らす。

百鬼メカ《——ッツ!!》

李衣菜「ッ——……オーブンゲット！」

奈緒「ゲッターチェンジ！」

奈緒「おらああ!!」

盾代わりにした百鬼メカを押し退けて、攻撃の姿勢を見せた百鬼メカを分離して巧みに回避。

素早く背後に回ってネオゲッター2に変形し、ドリルアームガンを乱射。目標を蜂の巣にして撃破。

奈緒「——プラズマブレード！」

右手にプラズマブレードを握り締め、振り向き様に横一闪。2機の百鬼メカを両断。

奈緒「……ツ……!!」

プラズマブレードを逆手に持ち替え、今まさに背後から拳を振り下ろさんとした百鬼メカ目掛け深々とプラズマの刀身を突き入れる。

奈緒「——ッ！」

勢いよく引き抜けば、百鬼メカは地面に崩れ落ちる。

奈緒「へ……へへへっ……! どんなもんだよ……?」

加蓮「まだ第一波を凌いだに過ぎないよ……? 油断大敵」

奈緒「分かってるよ……」

李衣菜「ビイト隊の人達は一旦後退して! 弾薬の補給と、陣形の立て直しを!」

加蓮「負傷者は研究所まで下がってね。まだ戦端は開いたばかりだから、無茶は禁物だよ」

「了解ッ!!」

奈緒「しっかし、よくここにこんだけ戦力を送り込んでくるよ」

李衣菜「連中、ゲッターを目の敵にしてるからね。例外はないのかも」

加蓮「お喋りしてる時間はないみたいだよ。次が来た」

奈緒「了解…つて、なんだよありや…」

百鬼兵「ぐははははっ！百鬼メカ巨獣鬼よ！全てを踏み潰せえい!!」

奈緒「で、デカっ…!」

李衣菜「成る程、ロツクな相手じゃん!」

奈緒「お前のロツクの基準が分かんねえよ、もう!」

加蓮「奈緒、先ずはスピードで攪乱してみるけど、無理だと判断したらアタシに代わって」

李衣菜「だね。パワーの勝負になりそう…!」

奈緒「リョーカイ!行くぞ!」

——九州、高速道路上。

美穂「百鬼帝国は、高速道路から市街地に攻め込んでくるみたいだね」

茜「そのようですね!ちえりやああーッ!!」

ゲッター烈火が敵陣に飛び込み、乱戦を演じる。



美穂 「せ、戦車隊の人は無理しないで下さい！後退しながら、砲撃による援護を！」  
アーニヤ 「この敵は、М а н о к : 囹、かもしれませぬ……！周りの警戒と、С в я  
3 b : 連絡を。密に取り合つていきましよう！」

「そこだあ!!」

茜 「——!?!?ぐう……!」

ガギンツ

死角からの不意打ちを、半ば反射で反応し、火斬刀で受け止める。

「ふははは！よくぞ止めた！……ここで会つたが百年目だな、女ゲッターよ！」

茜 「あ、貴方は……?!」

美穂 「……誰だっけ……?」

「ガツ……！俺だ！輪魔鬼だ！忘れたなどとは言わせんぞ！」

茜 「りんま……?」

アーニヤ 「アー、確か、随分前に、そんな名前の百鬼メカと戦つた事、ありますね」

美穂 「えつと……。あー！研究所移動してたの知らないで、前の研究所攻めちやつた

うっかりさん！」

輪魔鬼 「その覚え方はやめろ！」

茜 「確かあの時は、尻尾を巻いて逃げたんですよね！それが今さら何のようです！」

輪魔鬼「そうだともし！だから今日は、その雪辱を果たすために帰ってきたのだ！」

茜「何度来ても同じです！返り討ちにしてあげます!!」

輪魔鬼「ふふふっ…。これを見てもそんなことが言えるかな？」

美穂「な、何!？」

輪魔鬼「今回の俺は一味違うぞ！出でよ！メカ闇虫鬼、メカ甲角鬼、メカ十方鬼、メカ雷獣鬼！」

アーニヤ「百鬼メカが5体…。来ます、アカネ！」

茜「何がですか!？」

輪魔鬼「——合体だああああ!!」

メカ輪魔鬼を中心に、5体の百鬼メカが一つになる。

輪魔鬼「ぐははははっ！見たか！これが百鬼帝国究極の決戦兵器、合体百鬼ロボットよ!!」

茜「合体百鬼ロボット…!？」

アーニヤ「…そのまんま、ですねぇ…」

美穂「でも、何だかスッゴク強そうだよ！」

茜「だからと言って退くわけにはいきません！合体ロボットはどっちが元祖かと言うこと、アイツに教えてやりましょう!!」

ウザーラ内部

男 「さ、こちらへどうぞ」

卯月 「し、失礼します…」

男 「長老殿、客人をお連れしました」

長老 「……うむ」

卯月 「えつと、隣にいるのは…?」

長老 「副臣だよ。色々私の補佐をしてきている」

副臣 「……」

卯月 「そうなんですか…。はじめまして」

卯月 「この人が長老さん…。何て言うか…」

長老 「私の顔が怖いかね?」

卯月 「ご、ごめんなさい!」

長老 「構わんよ。事情は聞いているかもしれないが、私も例の病を発症しているからね」

卯月 「だ、大丈夫なんですか?」

長老 「心配は無用だよ。病を患っていない人間は少ないのでね…。これでも軽症な方

だ

卯月 「そうなんですか…」

長老 「だが、心配は無用だが、猶予はない」

卯月 「え…?」

長老 「……ふむ」

卯月 「あの…っ」

長老 「美しい…。それでいて、剛くもある」

副臣 「……」 コクリ

長老 「我々の新たな肉体にするには相応しい」

卯月 「:!?ど…どう言うことですか!?!」

「卯月ッ!!」

卯月 「この声…凜ちゃん!」

長老 「ほう…。麻醉の量が少なすぎたかな?」

凜 「卯月気を付けて! コイツら、好きな人ぶってるけど、考えは外道だよ!」

副臣 「……」

ドゴッ

凜 「うっ…!」

卯月 「凜ちゃん!」

長老 「小娘を押さえろ!」

男 「……」 ガシッ

卯月 「は…離してください!何をするんですか!?!」

男 「許してくれと言うつもりはありません…。我々には、こうするしか生き延びる術がないんです!」

卯月 「!?…どう言うことですか…?」

男 「さっきの話です。我々の体は、細菌に対する抵抗力が低い。あらゆる細菌、ウイルスが蔓延している今のこの星で生きるには、元の肉体を捨てるしかないんです!」

凜 「それで私達の体を奪おうって、やっぱりアンタ達は侵略者と同じだ!」

副臣 「……」

ゲシッ

凜 「ぐっ……!」

長老 「あまり傷を付けるなよ。脳を入れ換えた後で、何か不都合があつては大変だ」

卯月 「脳を…入れ換える…!?!」

長老 「そうだと。最も効率のよい手段だ。君達も栄えあるアトランティスの為にその体を捧げられる事を光栄に思うがいい」

凜 「自分勝手な事を……！」

長老 「コイツらを手術室へ連れていけ！もう一人の娘もだ！」

男 「……」

卯月 「本当に、本当にこれでいいんですか？」

男 「……すいません」

卯月 「……」

卯月 「あのっ！」

長老 「何だ？命乞いなら聞かんぞ」

卯月 「無理を承知で、お願いしたい事があります」

卯月 「体を入れ換えるのは、私だけにしてもらえませんか？」

男 「!？」

凜 「卯月……何を言ってるの!？」

卯月 「お願いします！2人は私にとって、大事な友達なんです！2人には、叶えたい夢や、未来があるんです！だから！」

凜 「そんなの卯月だって同じでしょ!？」

長老 「ふははは！自分の命乞いではなく、友の命を欲するか。麗しい友情だな。……良からう」

卯月「それじゃあ……!」

長老「貴様が大事と言う、友の内、一人だけ助けてやろう」

卯月「一、人……?」

長老「そうだ。どちらを助けるのかは、貴様が選べ」

卯月「そ、そんな……」

長老「あはははははは! 貴様自身を選んでも、一向に構わんだぞ? ぬあはははは——!!」

卯月「……」

凜「この……クズがあ……!」

男「……」

――。

くくく 避難所 くくく

ガヤガヤ…… フシヨウシヤハコチラニ…… ガヤガヤ…… ダレカウチノコヲシリマセ

ンカ?…… ガヤガヤ……――

藍子「……」

「おー、いたいた。藍子くん!」

藍子「プロデューサーさん!」

ポジパP「無事だったんだね。良かったあ……」

藍子「どうして、ここに……？」

ポジパP「いやあ、あはは……。今担当の子達だけでも無事を確認して回ってるんだよ。それが、私の仕事だからね」

藍子「この中をですか!?!百鬼帝国だつて攻めてきてるのに……」

ポジパP「あははは。交通規制だなんだつて大変だったけどね。藍子くんで最後だ」

ポジパP「よっこいせ」

藍子が腰を下ろす、直ぐ近くで一息吐く。

藍子「……あの、ご家族は……？」

ポジパP「ん？ああ、妻なら平気だよ。と言うよりも、妻と一緒に避難して、安全を確認してからこうしてる訳なんだが」

藍子「そうですか……」

ポジパP「息子にはこんな時くらい妻といろとどやされたよ。だがまあ、避難所で落ち着けず、そわそわしている私が目障りだったんだろう。妻の方から行ってこいと追い出されてしまったよ」アハハ……

藍子「……」

ポジパP「……辛いかい？」

藍子「……はい」



ポジパP「全部は言わなくていいよ。藍子くんは、優しい子だからねえ」

藍子「……ごめんなさい」

ポジパP「簡単に謝っていい事じゃないよ。何かしたいと悩んで、考えれば考えるほど、人は立ち尽くして、袋小路に入ってしまうものだ」

藍子「……」

ポジパP「未央ちゃんと茜くんはいい。分かりやすいやり方で誰かの役に立てる事をしている。だけどそれは、誰にでも出来る事じゃない」

ポジパP「藍子くんが戦いの舞台に出ると言うのは、2人共望まないんじゃないかなあ？」

藍子「それは、分かっているんです」

ポジパP「…悔しいねえ」

藍子「プロデューサー？」

ポジパP「私は仕事一筋だね。こんな仕事を昔からしているから、周りからは色々誤解されてきたけど、この仕事で、家族を養って、守ってきた。…そのつもりだったんだけどね」

藍子「……」

ポジパP「いざこんな状況になってみれば、出来る事なんて何も無い。みんなの無事

をこの目で確認して、良かったと胸を撫で下ろすだけで、みんなの不安をとってやる事も出来ない」

ポジパ P 「60年、無駄に年を重ねただけなんだなあって、痛感させられたよ」

藍子 「そんな事…」

ポジパ P 「けど、藍子くんは違うはずだ」

藍子 「…!」

ポジパ P 「藍子くんには、まだ幾らでも可能性がある。輝く未来がある。その為に行動しようと思える心が、藍子くんにはあるはずだ」

藍子 「…買い被りすぎです」

ポジパ P 「そんな事はない。藍子くんは何時だって、その行動で色んな人に笑顔を見せてきたじゃないか」

藍子 「それは、未央ちゃんや茜ちゃんが一緒にいたからで…」

ポジパ P 「それは違う。確かに、未央くんも茜くんも、素晴らしい行動力を持っている。誰かのために自分を犠牲に出来る強さを持っている」

ポジパ P 「けどね、あの2人だって、藍子くんに笑顔にされていたはずだよ」

藍子 「私に…?」

ポジパ P 「そうさ。辛い現場でも、大変なステージでも、藍子くんが笑顔でいてくれ

たから、2人は一緒に笑顔で、乗り越えてこれてたんだと、私は思っているよ」

藍子「私は…」

「皆さーっーん！(っ)飯ですよー！」

ポジパP「…君は、確か…」

響子「あ、未央ちゃん達のプロデューサーさん！お疲れ様ですっ」

ポジパP「ああ。君も、ここの避難所だったんだね。担当Pと連絡は？」

響子「はいっ。ついさつき電話越しでしたけど」

ポジパP「そうかあ…。何はともあれ、元氣そうで良かった」

響子「心配かけてすいません。あ、ご飯をどうぞ！つて、言っても、おむすびですけ

ど」

ポジパP「ありがたいよ。あ、すまないがもう一つもらえるかね？近くに藍子くんもいるんだ」

響子「そうだったんですか！分かりました。どうぞ」

ポジパP「ありがとうねえ」

男「……」

響子「はいっ。貴方もどうぞ？」

男「うるせえ！」

響子「きやつ！」

ベシヤツ

男「どうせ俺達はこのまま終わりなんだ…。今さら飯食ったって…」

男2「そうだよ…。ゲッタードラゴンもないんだ。ゲッターがたつた3機だけで、勝てるわけない…」

男3「ああ、こうなるんならもつと親孝行しときや良かった…」

響子「……」

「はあくあ！情けないったらないねえ」

男「何だと！」

響子「寮母さん！」

寮母「折角響子ちゃんが握ってくれたご飯を無駄にして…。あんた達、自分が情けないとは思わないのかい？」

男「どうせもう死ぬんだ！飯食って腹一杯になつたってどうしようもねえだろうが！」

寮母「何でそうやって簡単に決めつけちゃうのかねえ…。当たり前を過ごしてたら、当たり前前に生きてられるって？甘えるんじゃないよ！」

男「んだとこのババア！」

響子「——あなたにTiny Tiny ちっちゃなハート ギュツと詰め込んで——」

男2「何だ…?」

響子「きつと皆さん、不安で、ピリピリしてるんですよ? だったら、私がリラック  
スさせてあげます!」

寮母「響子ちゃん…!」

響子「私、こう見えてもアイドルですから! だから、目一杯歌います! それで、きつ  
と皆さんを笑顔に見せますから。だから、聞いてください!」

響子『『待っててね、ダーリン! 恋のハンバーグ♪』』

藍子「……」

ポジパP「きつとね、人間、一人一人に出来る事って全部違うと思うんだ」

藍子「プロデューサーさん…。響子ちゃん…!」

ポジパP「前向きに、情熱をもって。藍子くんには藍子くんの出来る事、戦うだけじゃ  
ない、色んな人の為に出来る事があると、私は思っているよ」

藍子「……」

藍子（私…。私にも出来る事——!）

藍子「プロデューサーさん!」

ポジパP「何だい？」

藍子「お願いしたい事があるんです！」

ウザーラ内部

かな子「……ん……あ、ここは……」

かな子「えっと……、私は……確か、話を聞いて、それで……ああ！」

かな子「——卯月ちゃん!？」

長老「目が覚めたか。丁度いい」

かな子「そ、それどころじゃ……!どこですかここ!?狭くて、暗くて……何だか手術室みたい……」

長老「そう、これから手術をするんだよ。世紀の手術をね」

かな子「世紀の手術……!？」

長老「我々アトランティスの一族が、この弱い体を捨て、再び世界の覇道を進む為の、偉大なる儀式よ！」

かな子「体を……捨てる……!?やっぱりあの時の話は冗談なんかじゃ……!」

かな子「とにかく助けないと……!」

ドン

かな子「痛っ」

長老「ははは。ここは手術を見学する為の空間。手術室とはガラス一枚隔てておる。君達の力で壊す事など出来ん」

かな子「そんな…」

凜「卯月ッ！」

長老「ふふふっ…。お前達のどちらか一人は助けてやると言ったのだが…。結局決める事は出来なかつたようだ」

長老「だから、せめてもの情けに一番最初の栄えある被験者になつてもらおうとな。あの娘も、大切な友人2人が頭を切り裂かれる様を見るのはさぞ辛かろう」

凜「っ…！」

長老「そんな怖い顔をするな。彼女が終われば次は君達の番だ。精々後悔のないように覚悟は決めておくんだな」

卯月「……」

男「…今から麻酔をかけます。痛みや苦しみは感じないまま、楽に逝けるでしょう」

卯月「…ありがとうございます」

男「……」

シュー

凜 & かな子 「卯月（ちゃん） ツ!!」

卯月 「……め……めんね……」

凜 「何……？今、何か言ったの!？」

男 （――ごめんね、か……）

卯月 「う……あ……」

卯月 「――」

凜 「卯月い!」

長老 「小娘をしつかり押さえている。大事な体に傷を付けられては敵わんからな」

副臣 「……」 コクリ

凜 「くっ……この、離せ!!」

長老 「さあ、早く!我々の栄光は、目前だ!早く、早くするのだ!」

男 「……」

長老 「どうした!?!何故手を止める!?!」

男 「出来ない……!」

凜 「!?!」

男 「私には出来ません!」

つづく



## 第25話『激闘!!明日を信じて!』

〃〃〃 神重工業 社長室 〃〃〃

社長「……」

社員「社長!どうしてこんなところに!?早く避難を!」

社長「避難?その必要はないさ」

社員「は……?」

社長「最早ここに戦略的利点は少ない。他の要所を攻めている百鬼帝国にここを攻めてくるのは、本当に最後の時くらいだからな」

社員「ですが、社長の身に何かあれば私共は……!」

社長「ふふつ…、心配は要らんよ。1人の方が逃げ延びるにしても気が楽だからな」

社長「それに、ここには預かっている大切なものもあるからな。それを返すまではここを離れるわけにはいかん

社員「そうなのですか……?」

社長「君は早く避難したまえ。せめて自分の家族くらいは安心させてやるんだ」

社員「は、はい……!社長もどうかご無事で!」 タタッ

社長「……」

社長「——…つまり人生だったな……」

山崎「——失礼します」

社長「……？ 山崎、お前も避難しないのか」

山崎「それはお互い様でしょう？」

社長「そうだな。それで、用件はなんだ？」

山崎「社長に会いたいと言うお客様をお連れしました」

社長「こんな時にか？アポイントもないだろう」

山崎「はい。ですが……」

「失礼しますー！」

社長「君は……」

山崎「貴女……！」

社長「いや、いい」

山崎「社長……？はい……」

ツカツカ

「無礼を承知ですいません！ですが、緊急の用件だったので」

社長「……ふっ……。そうか、そう言うことか」

「まさかここにいるなんて思いませんでしたけど」

社長 「ここには、大事な預かりものもある。それを置いたまま、私だけ逃げるわけにもいかんからな」

「それは…? いいえ、お願いしたい事があって今日はここに来たんです!」

社長 「そうか。…ふっ」

社長 「私も丁度、君に渡したいものがあつたところだ」

ウザーラ内部

長老 「——出来ない…だと!? ふざけるな!」

男 「ふざけてなどいけません! 心清らかな者を手に掛けるなど、私には出来ません!」

凛 「アイツ…」

長老 「心清らかな者だとお…?」

男 「ええ! この少女は、私に現代人の暮らしを言つて聞かせてくれました。それは、我々が望んでいた、豊かに恵まれた暮らしでした! 少女は他人の幸せを、自分の幸せであるかのように私に聞かせてくれました!」

男 「少女は、これからその命を奪おうとする私に、怒りも恨みの眼差しも向けず、これでいいのか、と問いたりました」

男 「そして、最後の瞬間まで憎悪を向けず、友の身を案じていました。最後までです

！清く透き通った心の持ち主でなければ、そんなことあり得ません！」

長老「だからなんだと言うのだ!?!そやつとて、このウザーラに攻撃を加えたではないか！」

男「不幸な考えの行き違いです！意思疎通など出来ていなかったのだから、誤解が生じるのは当然です！」

男「それに、彼女達は色んな人達の為に戦っていると言っていた！この世界に暮らす様々な人々の、大切な人の、そのまた大切な人を守る為の戦いだと！」

男「我々の、アトランティスの戦いは、支配と権力を得る為のもの！そんな戦いを続けていた、我々の方が野蛮ではないのか!?!」

長老「黙れ！下賤な下等種族の小娘などに懐柔されおつて……。もういい！」  
パネルを操作し、ガラスの仕切りを開く。

長老「貴様がやらぬのであれば、私がやるまでの事！」

男「……………っ！」

パリン

長老「!? ……貴様、今何をし……うぐっ——!?!」

副臣「……………うごお……！」

かな子「な、何ですか!?!この人達、突然苦しみだして……」

凜 「理由はどうでもいいよ。とにかくチャンスだ」

凜 「——はっ!」

副臣 「ぐうっ……!」

副臣の鳩尾に蹴りを一発放ち、拘束から逃れる。

凜 「かな子、大丈夫?」

かな子 「はい……。少し、手首が握られ過ぎて痛いんですけど、それより卯月ちゃんを!」

凜 「分かってる。卯月ツ!!」

駆け寄り、揺り起こす。

卯月 「——ん……あれ……?凜ちゃん、かな子ちゃん?」

卯月 「無事だったんですね……。良かったあ……」

凜 「うん。卯月も大丈夫だから」

卯月 「……?何があつたんです?」

かな子 「分からないんです。突然皆さん、苦しみだして……」

男 「突然じゃない。私が、アトランティスを壊滅させたウイルス、そのサンプルを割つ

たからさ」

卯月 「えっ……!?!」

男 「ああ、安心してほしい。このウイルス自体は既に自然界にも存在していて、高い

免疫力を持つ君達には、無害と云つていい」

卯月 「でも、貴方は……！」

男 「構わんさ。これでウザーラを管理するものがいなくなれば、アトランティスも本当に終わりだ」

凜 「アンタはそれでいいの？」

男 「……君達には未来がある。私達の未来は、とつくに終わっていたんです」

かな子 「おかしいですよ……！もつと、時間をかけて、ゆっくり話し合えば、幾らだつて方法はあつたんじゃないんですか!？」

男 「そうかもしれない。だが、病を克服したアトランティスが、君達の新たな敵になつたら？」

かな子 「それは……」

男 「私はね、もううんざりなんだよ。争いの度に、多くの人が傷付くのも、顔も素性も知らぬ人々を蹂躪し、増長していく祖国を見るのも」

卯月 「……」

男 「私の体の限界も近い……。その前に、君達に返さなくてはならないものがある」

かな子 「もしかして、ゲッター？」

男 「そうだ」

凜 「まさか、壊さず残してるとはね」

男 「長老達は、君達の体を奪った後に、侵略の尖兵として使うつもりだったらしい  
…。修理も万全にしてある」

凜 「理由は聞かなかった事しておくけど、都合はいいね」

男 「こつちだ。着いてきてくれ」 ヨロ…

卯月 「私の肩に掴まってください」

男 「…ありがとう。最後まですまない…」

長老 「……ま、待て……」

凜 「…まだ生きてたの」

男 「気にする事はありません。…それより、先を急ぎましょう」

かな子 「は、はい!」

長老 「う…うう…」 ドロオ…

—— 通路。

男 「さあ…、もうすぐ、この隔壁を越えた向こうに、臨時に格納庫として使用して  
いる空間があります」

卯月 「大丈夫ですか…? さつきよりも、顔色が随分悪く…」

男 「…君は、本当に優しいね。こんなになっても、まだ私を助けようか?」

卯月 「助けてもらったんです！当然じゃないですか！」

男 「…そうか…。…ふふっ」

ズウウウン…

通路全体に、振動が伝わる。

男 「…何だ？この揺れは…」

かな子 「ウザーラが動き出したんじや…？」

男 「いや、こちらからの指示もなしにウザーラが動き出すはずがない」

男 「…外部から攻撃を受けている…？」

卯月 「外部からって、一体誰が…？」

凜 「決まってるよ。こんな時に、空気も読まずに出てくる連中って行ったら…」

激しい轟音がして、目の前の外壁が吹き飛ぶ。

卯月 「ゲホッゲホッ…！だ、大丈夫ですか？」

男 「…私は大丈夫だ…。しかし、ウザーラの装甲を突破してくるとは…、何者だ…

？」

「へっへっへっ…。思った以上に苦戦したが、中に入っちゃえばこつちのもんだぜ」

かな子 「顔中角だらけの人！」

凜 「やっぱり百鬼帝国！」



「あん?ンだよ、早速見つかっちまうと運がねえな。死にな!」 ドウツ

男 「危ない!」 ガバツ

卯月 「きやつ…!」

凜 「ツ…!」 パンパンツ

「おおつ…!? テメエも銃を隠し持ってやがったか…!」

『五本鬼、何をしている。さつさと目的を果たせ』

五本鬼 「チツ…! 言われなくても分かつてるよ!」

五本鬼 「運が良かったな! 今のところは命を預けといてやる! 俺にはやんなきゃなんねえ事があるかん…。あばよ!」 ダツ

凜 「…待て!」

男 「いや、放っておいて問題ない…。奴はゲッターとは正反対の方に行ってくれたからな…」

卯月 「しつかりしてください!」

男 「私の事ももういい…。卯月くん、これを最後の隔壁を開ける鍵だ」

卯月 「そんな事より! 今すぐ傷の手当てを!」

男 「ふつ…。手当てをしても無意味だ。私ももうすぐ、病で死ぬ。ウザーラの外装を破壊された今、ウザーラの内部にもウイルスが蔓延するだろう。これでアトランティ

スは本当にお仕舞いだ」

卯月「そんな簡単に、生きる事を諦めないでください！」

男「……本当に、どうして君は……。私は、一度でも君を殺そうとしたんだよ？自分達  
が生き残る為に」

卯月「…誰かが生きたいと言う願いを、誰かが否定するなんて出来ません！だって、み  
んな生きたいじゃないですか！」

凜「……」

かな子「卯月ちゃん……」

男「……ふふっ……ふふふ……。本当に尊い人だ……。君のような人間に出会えた事は、私  
の最期の幸運だったのかもしれないね」

卯月「しつかりしてください！」

男「気にしないでください。命を諦めるわけではなく、運命を受け入れるんです。  
悔いはありません」

卯月「でもお……！」

男「私はここで死ぬ。この国のやり方を私は快く思っていなかったが、それでも私  
の生まれた故郷なんだ。最期の時を、共にさせてくれ」

卯月「……」

男 「そして、出来る事なら、私の願いを聞いてほしい」

卯月 「はい…」

男 「アトランティスと共に、ウザーラを破壊してくれ」

かな子 「ウザーラを破壊!?!」

男 「ウザーラは、アトランティスの民達が希望と、平和への祈りを込めて築いた守護神だ。それを破壊の使徒にされるのは許せない」

卯月 「……」

男 「だから、ウザーラと共に、葬ってくれ。争いに身を窶した愚かな一族を……」

卯月 「…分かりました…っ!」

男 「頼んだ…よ——」

卯月 「……」

凜 「行こう」

かな子 「こんな事、繰り返しちゃいけないって思います。終わらせなくちゃ、ダメです。きっと」

卯月 「はい!」

—。

五本鬼 「ここが制御室か?…えらく簡単な造りだが…」

五本鬼「まあいい。このガレリイ博士が作った服従回路を使えば……！」  
ウザーラ《——!!?》

五本鬼「ふはははっ!!ウザーラよ、俺のものになれ！」  
ウザーラ《——》

五本鬼「大人しくなった……。やった、やったぞ！」

一本鬼『作戦は成功したのか？五本鬼』

五本鬼「おう、アニキ！見ての通りだ。ウザーラは今俺の手足のように動くぜ！」

一本鬼『よくやった。これで栄誉は俺達のもの！』

五本鬼「ああ……、そうだ、な！」

三本鬼『!? ぐああああっ!?』

ウザーラの巨大な口が、メカ三本鬼を捕らえる。

一本鬼『五本鬼!?!何をしている!?!』

五本鬼「言った筈だぜアニキ！今ウザーラは俺の意のままだと！」

三本鬼『や、やめてくれえええ!!』

五本鬼「その証拠を、見せてやるよ！」

メカ三本鬼を噛み砕き、粉碎。

一本鬼『三本鬼い……五本鬼、貴様あ……!』

五本鬼「もううんざりなんだよ！テメエらにアニキ面されるのも、見下されるのも！」  
一本鬼『まさか…、この為にわざわざ自分からウザーラに潜入すると志願したのか!』  
五本鬼「そうよ！俺が言わなくたって、どうせアニキ達は俺に擦り付けてくるだろうからな」

五本鬼「何が俺達だ！これは俺の成果だ！俺だけの名誉だ!!」

一本鬼『わ、分かった…！俺が悪かった！ウザーラはお前のものだ！だから命だけは…！』

五本鬼「うるせえ！そんな言い逃れが通用するかよ！」

一本鬼『ひいつ…！』

五本鬼「くらえええ!!」

重力光線が、メカ一本鬼を内側から破壊する。

一本鬼『ぎやあああ〜!!』

五本鬼「ふふふつ…！ウザーラ、素晴らしい力だ。これがあれば、百鬼帝国だって、地球だってまとめて俺のものだ！」

五本鬼「——!?!」

ウザーラの下腹部から爆発が生じ、ゲッタードラゴンが姿を見せる。

五本鬼「ゲッターめ…！生きていたのか！」

かな子「ゲッター…、修理されて万全、と言うより、前より動きがよくなってませんか？」

凜「きつとアトランティスの技術で改修されたんだと思うよ。でも、それ以外は代わりない」

凜「何時でもいけるよ、卯月！」

卯月「——ゲッターアア——シャアアアインツ!!」

ゲッタードラゴンが光を纏う。

五本鬼「うおっ!?何だ、このエネルギー量は…ゲッタードラゴンに、こんな技があったとは…!」

かな子「い、いきなりシャインスパークなんて…!」

凜「ウザーラを倒すにはこれが一番だと思うよ」

かな子「けど、エネルギーの上昇が止まりませんよ!大丈夫なんですか、これ!」

凜（ドラゴン号のエネルギーが限界寸前まで上がってる…。卯月の怒りに呼応してるの?）

凜「ゲッターを、卯月を信じよう。私達も覚悟決めるよ!」

かな子「…はい!」

五本鬼「ふっはっはっはっ!どんな技で来ようとも、このウザーラがあれば…!」

ウザーラ《……》

五本鬼「ど、どうした…!?ウザーラ、俺の言う事を聞け!何故動かない!」

ウザーラ《——!!》

かな子「ウザーラが…、抗ってる…?」

凜「ウザーラ自身も、百鬼帝国の言いなりになるのは嫌みたいだね」

卯月「いきます!凜ちゃん、かな子ちゃん!」

凜「分かった!」

かな子「はいっ!」

卯月「シャイン——!」

卯月・凜・かな子「ニスパアアア——クツ!!」

——カッ

膨大なゲッター線を纏ったまま突撃。

五本鬼「——!?!」

シャインスパークを纏ったゲッタードラゴンが、ウザーラにぶち当たり、突き破り、貫いた。

ドワオツ

周囲を吹き飛ばすほどの凄まじい熱量と衝撃。その中に断末魔の叫びもなく、ウザー

ラはその中に消えた。

シャインスパークの生んだ光炎を見下ろし、ゲッタードラゴンは悠然と空中に立つ。

卯月「……」

凜「アトランティスの最期、か……」

かな子「今日まで生き延びてきたのに、随分呆気ないんですね……」

卯月「……あの人が、託してくれたからです。アトランティスの人達の分の、未来を」

凜「でも、シャインスパークを使っても、ゲッタードラゴンのエネルギーが残ってる

なんて、アトランティスの技術には、感謝しなきゃいけないみたい」

かな子「そうですね……。コックピット周りもそのままみたいで……。ああ!？」

卯月「ど、どうかしたんですか!？」

かな子「入れておいたお菓子……。全部ダメになってます……。ズーン……」

卯月「ええ……」ズルッ

凜「まあ、私達が捕まってるから、大分日にちが経ってるみたいだし、仕方ないね」

かな子「うう……。勿体ないです……」

卯月「あ、あはは……」

凜「……今頃、日本は大変な事になってるかもね」

卯月「……百鬼帝国。終わりにしなきゃいけませんね」



かな子「グスン…。行きましょう!アトランティスとお菓子の吊い合戦です!」  
凜「お菓子は関係ないと思うけど…!」

~~~~~ 早乙女研究所周辺 ~~~~~

ヒドラー「くらええいつ!!」

振り下ろされたトマホークが、無人のビイトを破壊する。

ヒドラー「どうした!さっきまでの威勢は?お人形遊びはもう終わりか?」

未央「くうく!いよいよ厳しくなつて参りましたよ、つと!」

ポタンをスイツチし、再び無人ビイト隊を展開。

ヒドラー「むっ!小賢しい…」

未央「最終最後のBT隊!これが全滅したら、私は自爆スイツチを押すよ…!」

自爆スイツチのロックを解除しつつ、覚悟を決めてシートに腰を下ろす。

ヴー ヴー ヴー ヴー

未央「んお?こんな非常事態にメール…事務所から?そもそも通信規制だつてされるのにどうやって…」

『もし近くにラジオがあつたら、チャンネルを346chに合わせてみてください。出来るだけ音量を上げて、みんなに聞こえるように!』

未央「ラジオ…音量上げてって、ここには私しかないけど…」

未央「ってこれ、事務所所属のアイドル全員に一斉送信なんだ。だから事務所からわざわざ…」

爆音と衝撃が響く。

未央「くくくつ！…つとお！正直余裕なんてないけど、折角だしラジオラジオ！」

未央「自爆スイッチより先にスイッチ・オン！」

『』

藍子『…あー、あー、これもう入ってますか？…入ってますね』

未央「ナイスタイミング！この声ってあーちゃん？…もしかしてこれって！…よしっ！」

—— 橘研究所周辺。

加蓮「くつ…！！」

ネオゲッター3が後ろに倒れ込む。

奈緒「大丈夫か、加蓮！」

加蓮「大袈裟すぎ。戦いはまだこれからだよ…！」

李衣菜「エネルギー系統に問題はなし！ガンガン行っちゃえ！」

加蓮「オツケー。研究所のみんなくらいは守ってみせるよ…！」

未央『——あー、あー、マイクチエック〜!音量大丈夫〜?』

奈緒「何だあ?」

李衣菜「これって、早乙女研究所からの通信!？」

未央『お、かみやん、リーナ!元気にしてるかい?』

美穂『な、何?何かあったんですか!?!』

アーニヤ『賑やかになりました、ね』

みく『回線全部開いて通信してるにや!?!』

菜々『ちよつと今忙しいんで、お話なら後回しにしてもらえませんかねえ!』

未央『おうおう通信は良好のようだね。今忙しくしてるそのアナタ!DJ未央ちゃ

んから粹なサウンドをお届けするよ!』

奈緒「何だよ!フザケテンなら切るぞ!」

加蓮「奈緒、ちよつと静かにして!」

奈緒「アタシが怒られんのかよ…!」

未央『まあまあ。まずはこれを聞いてくれたまえ!』

李衣菜「?」

藍子『——…皆さん、こんにちは。皆さんは、今何をして過ごしているでしょう?』

茜「この声は……!藍子ちゃん!?!」

美穂「でもどうして？ラジオって今は戦況情報以外封鎖されてるんじゃない？」

藍子『外は今…、騒がしくって大変ですね…。東京でも雲が出てきて、生憎のお天気で気持ちも曇ってしまいそうです』

菜々「こんな時に、ラジオの生放送をやるなんて…！」

瑞樹「よくやるわ。だけど、よくやってくれたわ」

鉄甲鬼「戦闘に集中しろ！」

ガンツ

みく「うにゃ…！」

鉄甲鬼「戦いに無関係なものに何の意義がある!？」

瑞樹「貴方も聞きなさい！平和を願う、当たり前前の日常を守ろうとする人達の声よ！」

藍子『みんな、今はきつと大切な人と一緒にいると思うんです。家族とか恋人と寄り添いながら、不安や恐怖に耐えていると思います。この辛い時が、早く過ぎてくれるように祈っているとします』

藍子『悲しい時、嫌な時間って、過ぎていくのが長く感じますよね』

藍子『だから、これからの時間を皆さんに取って緩やかな時間になってくれれば、そんな思いを込めて』

藍子『この辛い時間が、早く過ぎて、何も変わらない当たり前前の平和な明日が来る事

を信じて、このラジオを送ります』

藍子『高森藍子のゆるふわラジオ。生放送の拡大版、スタートです♪』

――

くくく プロダクション 事務所 くくく

藍子『それではまずはお便りを…。これまで全然ラジオをお届けできなかったので、皆さんからのお便りがたくさんあるんですよ――』

ポジパP「――いやあ、すまないねえマキノくん。君にも危ない橋を渡らせてしまつて…」

マキノ「構わないわ。電波ジャックなんて、大した事じゃないし」

マキノ「けど、良いのかしら？こんな事、貴方だつて只じや済まないわよ」

ポジパP「そうだねえ。まあ、私に出来る事は、みんなの分の責任を取るくらいだからね。いいんじゃないかな」

マキノ「気楽なものね。それが貴方の処世術なのは、分かっていたけど…」

ポジパP「……」

藍子『――♪』

マキノ「…素敵な笑顔ね」

ポジパP「藍子くんは強いからね。どんな状況でも笑顔でいられる、笑顔になれる。」

だから、周りも自然に笑顔になってしまえるんだ」

ポジパP 「本人は気付いてないみたいだけど。でも、だからこそなんじゃないかな」

マキノ 「まるで太陽のようね……。さてと……」

ポジパP 「避難するかい？それなら、避難所まで送るよ。私じゃ頼りにならないかもしれないけど」

マキノ 「お構い無く。それに、あんな姿を見せられて、黙って引き下がれると思う？」

ポジパP 「それは……」

マキノ 「ラジオにゲストは付き物でしょう？私も私なりに、お手伝いしてみるわ。アイドルとしてね」

ポジパP 「……ありがとうねえ」

マキノ 「礼なら、全てが終わった後、まとめて払ってくれればいいわ。貴方なりの形でね。それじゃ」

ポジパP 「全てが終わった後、かあ……」

ポジパP 「……勝ってもらいたいねえ。未央くん、茜くん——」

~~~~~ 早乙女研究所 周辺 ~~~~~

未央 「いやあ、あーちゃんも頑張ってるんだなあ。私も、負けてられないね！」

ヒドラー 「ほらっ！雑魚はこれで最後だ！」

未央「…つと、思ってるうちに…。イツツアピクンチ…」

ヒドラー「覚悟したか!全軍進めい!!」

未央「…え、ええい!来てみる!こっちには自爆スイッチだつてあるんだぞお!」

ヒドラー「何イ!?!」

未央「へ…へ…ツ!いいぜえ、どうせ死ぬんだ。だつたら最後にデカイ花火打ち上げて、アンタら諸とも死んでやる!」

ヒドラー「くだらんはつたりを!」

未央「どうかな?私は恐竜帝国と無理心中した事だつてあるんだよ!」

ヒドラー「ぬう…!」

未央「どうするの!?!いくらゲッタードラゴンつたつて、大出力のゲッターエネルギーの爆発には耐えられないよ!」

ヒドラー「爆発する前に貴様を吹き飛ばしてくれるわつ!」

ヒドラー「ゲッタービー…!」

「ゲッタービーム!!」

ヒドラー「ぬおっ!?!」

百鬼兵「わ…わああああ!!?ヒドラー様…助け…!」

上空から降り注いだ閃光を受け、百鬼ドラゴンが爆ぜる。

ヒドラー「新手だど!? 奴等のゲッターは既にはず…!」

「甘く見るな! 量産型ドラゴンは貴様ら百鬼帝国の力だけではない!」

未央「アキつち!…に、白いゲッタードラゴン?」

晶葉「ああ。何とか間に合ったようだな」

ヒドラー「チツ…! 人間共もドラゴンの量産を進めていたか」

晶葉「と言っても、これは新研究所にあったゲッタードラゴンの予備パーツを組み上げて造った急造品だな」

晶葉「起動までは何とか間に合ったが、塗装までには手が回らなかった」

未央「だから色が白いんだ。けど、ゲッターの操縦、大丈夫?」

晶葉「心配は無用。私用に調整した耐Gスーツもある。ここからは私が研究所を守る!」

ヒドラー「ふんっ! たかが一機で、同じドラゴンを相手に出来るものか!」

晶葉「フフンツ! 性能頼みのお前達に、性能の最大限の引き出し方を教えてやる!」

未央「一番ドラゴンを使えるのは、しまむーだと思っけど…」

未央「まあいいや! アキつちとにかく頑張つて! 私も出来る限りの援護はここからやるよ!」

晶葉「うむ! 私も実戦経験は少ないからな。背中を頼んだぞ!」



未央「おう！本当の戦いは、ここからだぜえ〜！」

くくく 橘研究所 地下シエルター くくく

藍子『——それでは、特別ゲストに八神マキノさんをお迎えしたところで、どんどんお便りを紹介しちやいたいと思います♪』

マキノ『ラジオネーム『名無しのピエロ』∴。貴方のラジオって、リスナーのジャンルは問わないのね』

藍子『はいっ♪何時も色んな人から応援してもらってます!』

ありす「……藍子さんも、マキノさんも、みんな、スゴいな……」

ありす「私は……」

翔「ありすちゃん!」

ありす「翔さん……」

翔「はい、配給品持ってきたよ。一緒に食べよう?」

ありす「あ、ありがとうございます……。あの……!」

翔「李衣菜ちゃん達なら、まだ頑張ってるよ。みんな、諦めてない」

ありす「……そうですか」

翔「……」

翔「にしてもスゴいよね。こんな時でもラジオ放送なんて。流石アイドルって言う

の？ボクにはとても無理だな〜」

ありす「……そうですね」

翔「……ボクは、ありすちゃんの歌が聴きたいな」

ありす「私の歌……。無理ですよ」

翔「ありすちゃん……」

ありす「私、明るい歌なんて持ってませんし、みんなを元気にするなんて、笑顔にするなんて……無理、です」

ありす「私一人じゃ……」

「でしたら、一人でなければ、何の問題もありませんわね」

ありす「え……」

「ありすちゃん、ようやく見つけました」

ありす「桃華さん、千枝さん……。それに、皆さんも……。どうして……」

桃華「ふふっ。そんなの簡単ですわ」

みりあ「ありすちゃんが、北海道でアイドル活動してたって聞いたから、みんなで応援に来たんだよ！」

千枝「それなら百鬼帝国の襲来があつて、みんなで避難しようつてなつただけ……」  
薫「藍子お姉ちゃんのラジオを聴いて、やっぱり行こうつてなつただよ！」

あります「で、でも……!今は百鬼帝国だつて攻めてきてて、大変なのに……!第一、家族はどうしたんですか!」

千枝「プロデューサーさんが説得してくれたんです」

あります「プロデューサーさんが……?」

L・M・B・P（、・ω⊗）b」

あります「……まったく、あの人は……」

桃華「あら、私達の両親を説得する姿は、惚れ直すほどでしたのよ?」

あります「担当アイドルを危険に晒すなんて、非常識ですつ」

薫「でも、また会えたね!」

あります「それは……」

仁奈「みんなで集まれば怖くねーですよ!プロデューサーも守ってくれやがるです!」

みりあ「だから、一緒に歌おつ」

あります「……」

桃華「ありますさん。さつきの貴女の言葉、訂正させていただきますわ」

あります「えっ?」

桃華「明るい歌だから元気になれる、静かな歌だから元気になれる、そんなの関係

ありませんわ」

桃華「大事なものは心です。わたくし達が心を込めて歌えば、例えそれがどんな歌でも、届いた人は笑顔になれるはず」

桃華「それがわたくし達、アイドルの仕事ではなくて？」

みりあ「やろうよ！例え百鬼帝国がいたって、楽しい時間に出来るよ！」

ありす「皆さん…。本気、何ですか…？」

薫「モツチロン！」

千枝「きつと、こういうのは、私達じゃないとできないと思うから」

ありす「そうですか…」

翔「ありすちゃん」

ありす「翔さん…」

翔「思いつきり、歌えばいいと思うよ！ゲッターは必ず、守ってくれるって！」  
ありす「——はいつ！」

——。

加蓮「——ぐっ…」

メカ巨獣鬼に突き飛ばされ、ネオゲッター3が後方に崩れる。

加蓮「まだまだ…。ここから先へは行かせないよ…！」

奈緒「一旦落ち着け!闇雲に行ったって勝てないぞ!」

加蓮「分かっている!奈緒はちよつと黙ってて!」

奈緒「分かっている!」

李衣菜「喧嘩は後!加蓮、前ッ!」

加蓮「——ッ!?!」

横倒しのネオゲッター3を踏み潰さんと、振り下ろされたメカ巨獣鬼の脚を両腕で受け止める。

加蓮「ぐっ…うう…」

李衣菜「マズいね…。エネルギーを!」

奈緒「分離しろ、加蓮く!」

加蓮「今分離したら、リーナがぺしやんこだよ」

奈緒「どっちにしたってこのままじゃ全員ぺしやんこだろ!」

李衣菜「もうちよつと耐えてて!もうちよつと…!」

『~~~~~♪』

李衣菜「…何…?何の音…?」

加蓮「この音、研究所の方から!」

奈緒「スピーカー使っているのか!」

李衣菜「私達にも聞こえるようにしてくれてるんだ」

『~~~~~♪』

加蓮「ねえ、この曲つて…」

奈緒「ああ、『in fact』だな」

李衣菜「ありす…」

『——ホントの、私を、誰も知らない——』

加蓮「いい歌だよね。…ふふっ」

奈緒「のんびり聞いている余裕もないんだけどな」

李衣菜「けど、このライブを邪魔させるわけには、いかないよね！」

奈緒「そうだな！」

加蓮「そうだね」

李衣菜「プラズマエネルギー、両腕部に集束！加蓮、何時でもいけるよ！」

加蓮「うん。それじゃ…！」

操縦桿を握る手に力を込めて、メカ巨獣鬼の脚を持ち上げ、

加蓮「~~~~~！えいっ！」

豪快に放り投げ、転倒させる。

加蓮「さっすきの仕返しだよ！」

李衣菜 「こいつを倒すのは私達の仕事だ!」

「それは俺達も同じだぜ!」

李衣菜 「BT隊!」

奈緒 「ビイトじやデカ物の相手は無理だ!後退して!」

BTパイロット 「おっと、お嬢ちゃんにそう言われたんじや、俺達だつて黙つて下がれないぜ!」

奈緒 「でも…!」

BTパイロット2 「アイドルが自分の仕事してんのに、俺達が後ろで寝てたんじやあ、また給料泥棒つて笑われちゃう!」

BTパイロット 「自分で守りたいもんを自分で衛る!だからこそその自衛隊だぜ!」

加蓮 「…無茶はしないでよ。貴方達に何かあつたら、後ろで歌つてくれてる子達に申し訳ないから」

BTパイロットs 「「おうっ!!」」

巨獣鬼 《——ツツ!!》

メカ巨獣鬼が身を起こす。

加蓮 「みんな、行くよ!」

BTパイロットs 「「了解!!」」

B T隊長「各機、狙いを目標の脚を狙え。我々で動きを封じるんだ」  
バラバララララッ

巨獣鬼《——!!?》

B T隊長「今だ！」

加蓮「はあっ！」

ガンッ

ビイト隊の射撃に合わせ、距離を詰めたネオゲッター3が渾身の右ストレートで打ち倒す。

奈緒「よっしゃ！」

加蓮「これで…！プラズマブレイク！」

倒れ伏したメカ巨獣鬼にプラズマブレイクを落とし撃破。

加蓮「よし、次！」

李衣菜「焦らなくても、どんどん来るよ！」

加蓮「…第二波は容赦ないみたいだね」

奈緒「いくら士気が高くつても、ビイトとネオゲッターだけじゃ貧になるぞ…」

「なら、俺も混ぜてもらっていいか？」

奈緒「誰だ!？」



「橘信一。橘博士の息子で、翔の兄貴だ」

李衣菜「そのロボットは…? ネオゲッターに似てる…」

信一「これは、言わばネオゲッターの兄貴。ウチで開発してた作業ロボットのプロトタイプさ」

李衣菜「ネオゲッターの兄貴…。そんな機体が…」

信一「元々開発してたのは、ネオゲッターに改修されたからな。だから以前に開発してたコイツを再利用しようとしたのさ」

信一「ちよつと起動するまでに時間が掛かっちゃまったが」

奈緒「成る程なく。けど、戦闘用じゃないって事は…」

信一「確かに武装は施されてないが、パワーと性能は折り紙つきだ。足手まといになるような真似はしない!」

加蓮「パワーがあるなら、十分じゃん」

李衣菜「だね。折角だから、それを貸してあげるよ」

ネオゲッター1時に放棄した、ソードトマホークを指す。

信一「良いのか?」

加蓮「ネオゲッター3じゃそれは使えないし」

奈緒「何も無いよりは全然いいからな」

信一「…ありがとう。大切にに使わせてもらおう」

李衣菜「よし、ダブルゲッターで一氣に一氣に形勢逆転だあ！」

信一「俺のもゲッターなのか？」

李衣菜「そりゃ、ネオゲッターのお兄さんだからね！」

信一「そうか。…ふっ」

李衣菜「よっしゃー！派手に決めてやるぜ〜！」

加蓮「行くのはリーナじゃ、ないけどね！」

—。

アイドル達のゲリラ的なライブ活動は、北海道に留まっではいなかった。

高森藍子のラジオを端に発し、全国へと散っていたアイドル達が己の活動へと繋げる切っ掛けとなった。

「正義は必ず勝つ！みんな、アタシと一緒にゲッターを応援しよう！」

「フーン。ここに避難した人は幸運ですね！何せこんなかわいいボクと一緒になんですから！」

「ヘーイ!!暗い顔してるわね!こんな時こそダンスブルよ!!」

アイドル達の声は多くの人々に伝播し、百鬼帝国に反抗する人々へ勇気を与えた。

人類の反撃が始まる——。

—。

くくく 九州地方 くくく

藍子『ラジオの前の皆さん。今、日本の色んな所でアイドルによるゲリラ・ライブが行われてるみたいです』

藍子『そしてなんと、岩手の“ライブ会場”と中継が繋がってるみたいです！志希さん！』

志希『——はいはい。こちらは某学校の体育館。体育館にぎつと500人くらい避難してまゝです。会場は大盛り上がりだよ』

美穂「…みんな、頑張ってるんだ」

アーニャ「Da:…そうですね。みんな、戦っています。武器を使わない、自分なりの方法で！」

茜「尚更私達は負けられませんっ！——火斬刀ッ！」

火斬刀を突き構えて、合体百鬼ロボット目掛け、突進。

茜「ったあー！！」

輪魔鬼「なんの！」

茜「ッ——!?!」

合体百鬼ロボットが、5体に分離し、ゲッター烈火の攻撃を躲す。

輪魔鬼「とったぁー!!」

ゲッター烈火の背後に回ったメカ輪魔鬼が、ドリルを回転させ迫る。

ヒュンヒュンッ

輪魔鬼「ガッ!?!」

美穂「な、何…!?!」

茜「ゲッタートマホークです!」

アーニャ「あのトマホークは、旧ゲッターのです!」

美穂「でも、旧ゲッターは、研究所の防衛をしてるはずじゃ…」

アーニャ「…!あれを…!」

指差した先、曇天の上空に、

美穂「黒い…ゲッターロボ…?」

輪魔鬼「おのれ…。新手か?まだゲッターがいたとは…!」

茜「スゴい悪人顔です!」

輪魔鬼「今のうちだ!」

5体の百鬼メカが、再び合体百鬼ロボットに合体する。

黒いゲッター〜キッ

合体した合体百鬼ロボットに鋭い視線を向けた黒いゲッターが、片手にゲッターマシン

ンガンを構え、乱れ撃つ。

輪魔鬼 「ぐわっ!」

茜 「武装は旧ゲッターとほとんど同じみたいですね!」

美穂 「でも、一体誰が操縦を…?」

「みんな!待たせたわね!」

茜 「この声は…!」

アーニヤ 「ミナミイツ!!」

美波 「久し振りね、アーニヤちゃん!」

美穂 「美波さん!?!撮影で抜けたんじゃ…」

美波 「こんな非常事態じゃ、撮影も何もないもの」

美波 「それに、何かあったら帰ってくるって、約束したから!」

アーニヤ 「ミナミ…!」

茜 「そのゲッターは?」

美波 「これはブラックゲッター。神重工業で改修されて生まれ変わった、プロトゲツ

ターの新たな姿よ」

茜 「ブラックゲッター…!そのままのネーミングですね!」

美穂 「あと、見た目がなんとと言うか、その、悪役みたいなの…」

美波「わ、私の趣味じゃないのよ？きつと社長か、神重工業の人の……」  
輪魔鬼「お喋りはいい加減にしねえか!!」

茜&美波「ッ！」

合体百鬼ロボットの突進を、左右に跳躍して回避。

輪魔鬼「貧弱なゲッターが1機増えたところで！まとめて返り討ちにしてくれるわ

!!

美波「そう簡単にはやらせないわよ！」

茜「この流れは……アーニヤさん！」

アーニヤ「Da！任せてくださいッ！」

茜「オーブンゲッター!!」

アーニヤ「チェンジゲッター！紫電ッ！」

ゲッター紫電が、ブラックゲッターの隣に立つ。

美波「アーニヤちゃん……。戦場のラブライカ、特別ステージの開幕よ！」

アーニヤ「Da、ミナミとなら、どんなステージだって、出来ます！」

輪魔鬼「こちらには百鬼メカの軍団だっているわ！行けい！」

美波&アーニヤ「ッ！」　　ダッ

ブラックゲッターと、ゲッター紫電が飛び出すのは、同時。

アーニャ「千極針！」

美波「ゲッターズパイク！」

ゲッター紫電が自慢のドリルを、ブラックゲッターは拳に着いたカイザーナツクルのようなスパイクを突き立て、敵陣に突撃。

アーニャ「Y p a a a !!」

それぞれに百鬼メカを粉碎。

美波「ゲッターアアーレザーブレエエードツ!!」

左腕の大型のブレードカッターを構え目前に立った敵を切り裂く。

美波「ゲッタートマホーク——！」

ゲッターウイングを翻し、ブラックゲッターを背後に回転させ、

美波「ブーメラントツ！」

トマホークを投じる。

茜「ブラックゲッターは、格闘武器が多めのようなですね！」

美穂「茜ちゃん好きそうだね……」

殺到する百鬼メカの軍団。対する2体のゲッターは、敢然と立ち向かう。

ブラックゲッターが宙返りで飛び、その後方からゲッター紫電が千極針で敵を貫く。

ゲッター紫電の背後に回ったブラックゲッターが、ゲッター紫電の死角を取ろうとした

敵を返り討ち。

ブラックゲッターとゲッター紫電の距離は、装甲のほとんどが接するような距離。少しでも動きが狂えば衝突しそうな近距離を、紙一重で躲し合い、抜け、場所を入れ替わり立ち替わりもつとも近くの敵を攻撃する。

アーニヤ（ミナミの動きが、分かる……!）

美波（私とアーニヤちゃん、互いのゲッターのポテンシャルが違っても、そんなの関係ない!）

アーニヤ&美波 「はあっ!!」

背中合わせに、それぞれ百鬼メカを撃墜。

美穂 「すごい……。息ぴったり!」

茜 「ラブリカの絆の力と言う奴ですか!」

輪魔鬼 「ぬう……!」

その一糸乱れぬ動きに、思わず舌を巻く。

美波 「次は大物を……!行くわよ、アーニヤちゃん!」

アーニヤ 「Ha!ミナミッ!」

跳躍。左右に分かれ、合体百鬼ロボットに迫る。

美波 「スパイラルゲッタービームッ!!」



アーニヤ「蛇旋光!」

輪魔鬼「ぐふっ……!」

双方から放たれる眩い光が、合体百鬼ロボットを打つ。

輪魔鬼「なんの……!これしきいいー!!」

バラララララ——

爆煙の中から立ち上がる合体百鬼ロボットに、ゲッターマシンガンによる弾丸の雨を降らす。

美波「行つて!アーニヤちゃん!」

アーニヤ「千極針!——y p a a a a!!」

輪魔鬼「その手は、喰わん!」

合体百鬼ロボットを分離させ、5体の百鬼メカでゲッター紫電を包囲。

輪魔鬼「先ずは貴様から血祭りに……!」

美波「……こつちの思う壺よ?」

輪魔鬼「!?!」

ブラックゲッターが、右腕でメカ輪魔鬼の体を抑え、動きを封じる。

美波「ゲッタースパイク——!」

左のゲッタースパイクでメカ輪魔鬼の装甲を打ち、貫通。

美波「アンド、ブレードッ!!」

突き入れた左腕の、レザーブレードを引き、内側から切り裂き、メカ輪魔鬼を破壊。ブラックゲッターの左腕に、血の様にこびりついたオイルが垂れる。

アーニヤ「——ゲッター影分身!」

ゲッター紫電が、高速移動の分身の術で、包围していた百鬼メカを逆に包围。

アーニヤ「Y p a a a a a a ——!!」

ゲッター紫電が、残りの4体の百鬼メカを破壊するのは、ほぼ同時。

美波&アーニヤ「ッ!」

2体のゲッターが着地すると同時に、上空に百鬼メカ5体分の爆炎が咲く。

F o o o o o o o o o o o ——!!

美波「な、何…!?!」

周囲、そして無線のスピーカーから響く拍手と歓声。

未央『いやあ、流石みなみん、アーニヤン! バッチリ中継させてもらったよ!』

美波「ちゅ、中継って…! 一体どうやって…!」

B Tパイロット「自分のカメラ映像を提供しました!」

美波「カメラ映像って…」

B Tパイロット「自分達がお二人の動きを邪魔してはいけないと思いましたが!」

美穂「それで、ずっと撮影してたんですか？」

BTパイロット「はいっ！」 ケイレイツ

美波「そんな悠長な…」

未央『いやいや、だけどどこのシエルターも、大盛り上がり。自衛隊の士気も爆上がりだよ!』

アーニヤ「ワタシ達の特別ステージ、たくさんの人に、見てもらえたんですか？」

未央『もちっ!公共放送じゃなかったのが惜しまれるくらいだね!』

美波「…まったく…」

アーニヤ「ワタシ達の戦いで、みんな、元気になれましたね。ミナミは嫌、でしたか…?」

美波「アーニヤちゃん…。ううん。こういうノリも大切よね」

アーニヤ「П р а в и л ь н о!ワタシ達の一勝が、人類のとって貴重な一生です!」

美穂「で、でも…私達と美波さんで、ここは何とかなるかもしれないけど、他のところは…!」

美波「それなら心配要らないわ」

茜「どう言うことですか?」

美波「頼もしい仲間は、私だけじゃないから。——ふふっ」

——。  
 〃〃〃 旧早乙女研究所 周辺 〃〃〃

晶葉「——ゲッタートマホークツ!!」

腰を低く落とし、相手の腰の境目にトマホークの刃を食い込ませ、両断。  
 量産型ドラゴン「——!!」

晶葉「グツ…フ——!」

攻撃の打ち終わり。突き出されたストレートの拳を、体重を乗せた軸の右足を踏ん張り、反動を利用した宙返りで身を翻し躲す。

晶葉「カツ…!」

晶葉（…吐血…。今の動きは私には内蔵へのダメージが大きいか…）

晶葉「動き方は分かってても、体が着いてこないのであればままならないな…!」

未央『アキつちあんまり無理しないで!』

晶葉「無理も承知しなければ、勝てないさ」

ヒドラー「ふんっ。たった1機でよく持ちこたえる。だが…」

晶葉「くっ…!?!」

晶葉（腕が思うように動かん…。衝撃による硬直か…!）

ヒドラー「思うように動かんようだな。これでお遊びも終いだ!」

晶葉「…っ!?!」

ガシツ

ヒドラー「むっ…!?!だ、誰だ!?!」

晶葉の量産型ドラゴンに振り下ろされんとしたトマホークを掲げる腕を背後から掴む影。それは、

晶葉「…ダイノ、ゲッターロボ…!」

ニオン「…:」 グググッ

ヒドラー「貴様は…!恐竜帝国の生き残りか!人間の肩を持つのか!?!」

ニオン「ソイツを助けてやる義理などない。だが!」

量産型ドラゴンの腕を捻り、投げ飛ばす。

ヒドラー「ぬうっ!?!」

ニオン「貴様らがこの地上でデカイ顔をしているのは我慢ならん!」

ヒドラー「小癪な…!所詮は人間共に負けた下等種族の分際で…!」

ニオン「負けている、という意味では貴様も同じだろう」

ヒドラー「何をつ!」

ニオン「フンツ」

晶葉「…何の真似だ」

ニオン「勘違いするな。貴様が死のうが、俺には関係ない」

晶葉「だろうな。百鬼帝国は、私達と貴様らにとつて、共通の敵と言うことか？」

ニオン「そうだ。連中を駆逐するには、戦力は多い方が助かるからな」

晶葉「そう言うのなら、ダイノゲッターを置いてつてくれ。それは元々私達から奪つていったものだろう？」

ニオン「今更恐竜帝国の技術で改造されたコイツを乗りこなせる人間がいるのか？」

晶葉「大した自信だな。ガツカリさせないでもらいたいものだな」

ニオン「お互い様だ。そんなボロボロの体で、俺の足を引っ張るんじゃないぞ」

「お一方喧嘩はそこまででしてー。敵が身内、という訳ではないでしょー？」

晶葉「誰だ？」

芳乃「自己紹介は改めて後程ー。今は芳乃と、名前だけ覚えておいてくださいー」

晶葉「あ、ああ、分かった」

晶葉（人間、か…？ 一体何者なんだ？）

ヒドラー「フンツ！ 雑魚が二匹に増えたところで！」

ニオン「相変わらず、百鬼帝国の鬼という奴は、樂觀的な奴が多いみたいだな？」

ヒドラー「何を……ぬっ!？」

彼方の上空から、無数のビームが百鬼帝国の量産型ドラゴン群に降り注ぐ。

晶葉 「このビームは：：もしや！」

未央 『アキつち！後方から無数の熱源反応だよ！これって——！』

晶葉 「ああ！」

ニオン 「人間共の援軍が到着したようだな」

伊賀利 「お待たせしました！人類軍の量産型ドラゴン軍団、これより作戦行動に入ります！」

晶葉 『量産型ドラゴン：：完成していたのか！』

伊賀利 『はいっ！と言っても今しがたですが』

未央 『でも、何で青色？』

伊賀利 『百鬼帝国が奪ったドラゴンを使ってくる事は想定済みですから、識別出来るよう正反対の色で塗装し直したんです』

未央 『成る程。青い方が味方っぽいもんね』

晶葉 『ゲッターのパイロットが言ってる良いことじゃないな』

伊賀利 『ここ以外にも、百鬼帝国が出現しているポイント全てに我々のドラゴン軍団が展開して、戦闘を開始しています』

未央 『よっしゃー！それじゃ形勢逆転!?!粘った甲斐があった!』

晶葉『ああ、藍子達にも感謝だな。彼女達のお陰で、各地で奮戦している皆も士気を  
持ち直す事が出来たからな』

伊賀利『まったくです。戦力が瓦解していたら、手遅れになっていたかもしれません』  
晶葉『よし、この勢いのまま敵陣を押し返すぞ！』

伊賀利『了解！各機散開、早乙女研究所を守るんだ！』

『『了解ッ!!』』

瑞樹「……どうやら、研究所の方は大丈夫そうね」

菜々「これで、ナナ達も自分達の戦闘に集中できます！」

鉄甲鬼「これまでは集中出来ていなかったという事か。ナメられたものだな！」

みく「にやふっ!？」

メカ鉄甲鬼のトマホークの一撃を受けて、ゲッター1が大きく退く。

菜々「だ、大丈夫ですか、みくちゃん！」

みく「へっっちゃらへっっちゃら！大した事ないにや！」

鉄甲鬼「覚悟しろ。そのふざけた言葉遣いも出来ないようにしてやる」

みく「猫語はみくのアイデンティティーにや！殺されたってやめてやるもんかにやあ  
！」

菜々「そうです！ナナだってみくちゃんだって、自分らしさを貴方にどうこう言われ



る筋合いはありませんよっ!」

鉄甲鬼「…自分らしさ、か」

瑞樹「……」

菜々「戦場だつて何処だつて関係ないんです! ステージの上だつてプライベートだつて、何時でも何処でも、ナナは自分を曲げるつもりはありませんよ!」

みく「その通り! でもそれはみくの台詞だから、あんまり盗らないでほしいにや」

菜々「あ、ご、ごめんなさい…。つい…」

みく「まあ、コイツをやつつけちゃえば、誰にも文句言われる事もなくなるにや!」

鉄甲鬼「ふざけた事を! 常に勝てると思つているのか!」

ガンツ

みく「トーゼン! 負けると思つて戦う奴なんている奴なんていないにや!」

菜々「そして、ナナ達には勝つて、生き残つてやるべき事があるんです!」

瑞樹「未練がある人間は強いわよ。戦う事しか、生きる道を知らない貴方には分から

ないでしょうけど!」

——ガッ

鉄甲鬼「ぐうっ…! なんのっ!」 ジャラッ

みく「にやにやつ!」

鉄甲鬼「ッ！」

みく「に、や、あつ……！」

ストレートに打ち出されたチェーンアタックを紙一重で躲すも、瞬時にチェーンを振るつた一撃を鳩尾に受ける。

みく「ツッ……！」

地面に勢いよく背中を打ち付ける。

菜々「あわわ……！直ぐに態勢を立て直さないと……！」

鉄甲鬼「思い通りにやらせるものか！」

ガンツ

立ち上がり際即座に投げられたトマホークがゲッター1を再び地に伏せる。

みく「にやふっ!!」

鉄甲鬼「まだだ！」

態勢を立て直せないでいるゲッター1に、メカ鉄甲鬼のビームが直撃。

みく「にやあああああああつ!!」

みく「にや……うにやあ……。ゲッターの表装は前のまんまだから、ちよつとくらい手加減してほしいにや……」

瑞樹「話を通じる相手じゃないわよ。……立てる？」



鉄甲鬼「下手な鉄砲をいくら撃ったところで！」

みく「もう一つ！みく達の取って置きを見せてやるにやあ！——ナナちゃん！」

菜々「——ハッ！ここは……ウサミン星ですか!？」

瑞樹「残念ながら地球よ。シャキツとして！」

菜々「は、はいっ！いい加減シリアスになりたいと思います！」

みく「それじゃシリアスは一生無理にや……。——オープンゲット！」

バシユンツ

瑞樹「チエンジゲッター！2ツ！」

鉄甲鬼「どんな形態で来ようと……」

瑞樹「オープンゲット！」

鉄甲鬼「!？」

ゲッターに合体し、狙いを付けられる微妙なタイミングで分離し。

菜々「チエンジゲッター——スリイイ!!」

菜々「オープンゲット！」

またも直ぐ様分離。鉄甲鬼の周囲を旋回して飛行し合体。それを繰り返す。

菜々「チエンジゲッター！——オープンゲット！」

瑞樹「チエンジゲッター！——オープンゲット！」

みく「チエンジゲッター!——オープンゲット!」

鉄甲鬼「こちらを攪乱するつもりか!……だが!」

ゲットマシンの動きに注視し、捕捉。

鉄甲鬼「俺の動体視力をもってすれば、この程度!」

瑞樹「チエンジゲッター——!」

鉄甲鬼「そこだ!」

機影が重なる。瞬間に間合いを詰める。

鉄甲鬼「悪足掻きもこれで終わり……!?!」

鉄甲鬼(ゲッター2の脚……イーグル号がない……!?)

鉄甲鬼「何処だ!?!」

みく「こっここにあああ〜んっ!!」

声が響いたのは、上。

鉄甲鬼「!?!」

みく「ミサイル急降下爆撃にやあああ〜ん!!」

急降下で間合いを詰め、ほぼゼロ距離からミサイルを撃ち込む。

鉄甲鬼「があ……!」

菜々「旧ゲッターにだけ出来る、非常用の2機合体です!」

瑞樹「——ゲッタードリル！」

下半身のないゲッター2が、ベアー号の推力のみで往く。

ギャルルルウウンッ

鉄甲鬼「がっ…！ぐう…。だが、所詮は2機分のエネルギー…。それではこの鉄甲鬼の装甲を抜く事は出来ん！」

みく「それならこれでどうにや〜！」

急降下爆撃から、態勢を直したイーグル号が、素早くベアー号の下にドッキング。

鉄甲鬼「この状態から、合体だと…！」

瑞樹「ナメてもらったら困るわ。私達は、テスターチーム」

菜々「合体訓練なら、卯月ちゃん達以上に繰り返してきます！」

みく「ギリギリの狭い空間でも、嵐の中でも、合体するだけなら朝飯前にやあ！」

瑞樹「これがゲッターに乗り続けた、経験の差よ！ただ戦闘能力を調べただけで、ゲッターを分かった気にならない事ね」

ギユウウウンッ

ゲッタードリルが、メカ鉄甲鬼の表装を砕き、貫いた。

鉄甲鬼「ぐおおおっ!?!」

瑞樹「……」

ドリルを深々と突き刺し、動力部を破壊したところで、引き抜く。

鉄甲鬼「っ…!？」

力を失ったメカ鉄甲鬼はそのまま落下。続いて、ゲッター2も着地。メカ鉄甲鬼の喉元にドリルの切っ先を突き付ける。

瑞樹「また、油断したわね」

鉄甲鬼「……」

鉄甲鬼「俺の負けだ。殺せ」

みく「…随分と潔いんだね」

鉄甲鬼「俺は、戦いに誇りを持って生きる戦士だ。足掻く事を美しいとは思わん」

菜々「でも、それでホントにいいんですか？…死んじゃったら、全部おしまいなんですよ？」

鉄甲鬼「…全て、虚しくなったのだ」

菜々「虚しく…?」

鉄甲鬼「俺が信じ、仕えた国は、存在しなかった。俺自身の命すら、戦うために作られたものだった」

瑞樹「……」

鉄甲鬼「だから、考えるのはやめにしたのだ。戦いの中に生き、そして死のうと」

みく「安っぽいにやあ…。そんなんだから殺してくれなんて、都合が良すぎるにや」  
鉄甲鬼「俺の百鬼メカは敗れた。俺自身も満身創痕だ。戦えない者は、百鬼帝国には  
不要な存在だ」

鉄甲鬼「だから、殺せ。お前達が出来ないというなら、俺は自分で命を絶つだけだ」  
菜々「そんな…」

瑞樹「……」

瑞樹「……ねえ、貴方がくれた白い帽子、南風が飛ばした——♪」

菜々「瑞樹さん…?」

瑞樹『もう、要らない。やっと気付いた。髪なびかせ、小さくなるの見てた——♪』

みく「Angel Breeze…。瑞樹さんの曲…」

鉄甲鬼「曲…。これが、この女の歌う歌、なのか」

みく「うん。バラードっぽくアレンジしてるけど、そう」

瑞樹『風の行方を、追いかけるよりも、向かい風の中、歩き出すの——♪』

鉄甲鬼「……」

瑞樹『何が待ってるの?風の向こう側。行ってみたい。きっと、天使が遊んでる』

瑞樹『虹色の夢と、新しいときめきを』——

瑞樹「……私は、戦場だって歌うわ。踊る事だって、やろうと思えば出来るわ。ア



アイドルだもの」

鉄甲鬼「…アイドル、か。俺達の中には無かった概念だ」

瑞樹「そうでしょうね。アイドルだけじゃなく、貴方は私達の事は何も知らないでしょよ？」

鉄甲鬼「…冷静に考えれば可笑しなものだ。俺達は、お互い知りもしない者達を滅ぼそうと躍起になっていた訳か」

瑞樹「そうね。可笑しなものね。こうして話し合えば、分かり合えるかもしれないに」

鉄甲鬼「……」

瑞樹「…命って、奪い合うために存在してるわけじゃない筈よ。自分の生き方を簡単に決めてしまうのは、早すぎるわよ」

みく「…瑞樹さん…、どうしてそこまでコイツに肩入れするの？」

瑞樹「……。正直ね、はじめて鉄甲鬼と話した時、昔の私に似てるなって思っちゃったのよ」

瑞樹「若い内なんて目の前にあるものだけが世界で、妙な使命感に突き動かされて、がむしやらに走ってる内に年齢ばかり重ねちゃって。他にどんな世界があるかも見向きもしないんだから」

菜々（ナナもそうだったな〜） ジーン…

鉄甲鬼「：俺にとつて、百鬼帝国が全てで、ブライ大帝のために戦い…。そう言うことか」

瑞樹「そう。私には、今の自分に変わる切っ掛けがあつた。だから変わろうと思つて、輝くことが出来た。そうしてくれる人達に巡り会えた」

瑞樹「だからという訳じゃないけど、親近感を持つて、気になつたら、放つておけなくなつちやつて」

みく「確かにコイツ、他の百鬼兵にはあんまり見ないタイプなのは確かにや」

菜々「そうですね。私達が知つてる百鬼帝国の皆さんは、基本こつちを殺しに来てますからね。そう考えると、こうして落ち着いて話し合つてくれる分、マシだと思います」

鉄甲鬼「ふっ…。可笑しな奴らだ。仮にもさつきまで命の奪い合いをしていた敵同士だというのに」

菜々「確かに敵同士ですけど、ナナ達は戦士じゃないんです」

菜々「ナナ達は、たくさんの人に笑顔を届けるアイドルですから。敵味方の壁なんて、ウサミンパワーで楽々越えていけちゃいますよっ♪」

みく「そんな事が出来るのはナナちゃんだけにや」

菜々「ちよっ…！みくちやくん！」

みく「でもま、瑞樹さんがコイツを生かしておきたいって言うなら別に反対はしないにや」

みく「みく達はまだまだ百鬼帝国の連中をやっつけなきゃならないし、体力は少しでも温存しておきたいし」

瑞樹「ごめんなさい。みく、菜々さん」

みく「何で謝るのか分かんないにやあ。ささ、早く研究所のみんなと合流するにや」

瑞樹「…分かったわ。行きましようか」

鉄甲鬼「……本当にトドメを刺さないつもりか？」

瑞樹「ええ。勝負はとづくに着いたわ」

鉄甲鬼「俺に生き恥を晒せというのか」

瑞樹「…生きている者が、その命を放棄する事は出来ないわ」

瑞樹「生きなさい。例えそれが恥ずべき事だとしても、それが貴方の償いよ」

シユバツ

高速移動で、瞬時に消えるゲッター2。

鉄甲鬼「……償い、か——」

—。

~~~~~ 早乙女研究所 周辺 ~~~~~

伊賀利「ゲッターレーザーキャノン、てえーっ!!」

号令に合わせ、青の量産型ドラゴン部隊が、一斉射を行う。

ヒドラー「ぐう…!!人間共め…、調子に乗りおつて…!!」

晶葉「人間の力を甘く見たな。数と力で押されようと、私達は決して諦めない!」

ヒドラー「——ッ!?!」

白の量産型ドラゴンと、ヒドラーの百鬼ドラゴンのトマホークが打ち合う。

百鬼兵「——!?!ぐわあああッ!?!」

ヒドラー「何事か!?!」

みく「前ばっかりで後ろがお留守だにやあ!」

瑞樹「私達も参戦させてもらっていいかしら?」

晶葉「テスターチームか!よく来てくれた」

未央『これで勝負はこつちのもんだく!』

菜々「こつちもギリギリでしたけど」

瑞樹「合流できればこつちのものよ。さあ、このまま押し返すわよ!」

ヒドラー「ぬう〜!」

ブライ『ヒドラーよ、撤退だ。一度退け』

ヒドラー「ぶ、ブライ様…!!も、問題ありません!私はまだ戦えますっ!」

ブライ『今回は我々の負けだ。やはり一度に全国を攻撃したのが裏目に出たのだ。此度の戦の敗因は貴様だけにあるわけではない』

ヒドラー「で、ですが……!」

ブライ『既に多くの戦線は崩壊している。一度態勢を立て直さなくてはならん。そのためにお前の力が必要なのだ』

ヒドラー「……承知いたしました」

ヒドラー「全機撤退だ!一度退けい!」

ヒドラーの号令に合わせ、百鬼ドラゴン軍団が撤退していく。

伊賀利「逃がすか!」

瑞樹「いえ、伊賀利三佐、深追いはしなくていいわ」

伊賀利「ですが!」

瑞樹「追ひ払えただけで十分の成果よ。これ以上続けて、戦力を疲弊させるのは得策とは言えないわ」

伊賀利「…了解です」

瑞樹「晶葉ちゃん」

晶葉「ああ、分かっている。各地に送ったゲッター斬とネオゲッターを戻そう。こちらも、連中の最終決戦に備えなくてはならないからな」

菜々「戦いはこれで終わらないって事ですぬ…」

晶葉「量産型ドラゴン部隊もしばらく周辺の警戒を頼む」

伊賀利「了解！」

未央『待つてアキつち！こつちに接近してる機影があるよ！』

晶葉「何？このタイミングで敵襲は考えづらいが…。数は？」

未央『数は1機。この反応って…！』

卯月「島村卯月、以下凜ちゃんとかな子ちゃん。ただいま帰還しました！」

未央『しまむー！みむつち、しぶりん！』

晶葉「Gチーム…。無事だったか！」

卯月「はいっ！色々ありましたけど、私達もゲッターも、この通りピンピンしてます

！」

晶葉「そうか…。何はともあれ、無事でよかった。事情は後で聞くから、今は研究所でゆっくり体を休めてくれ」

かな子「休めてって…、あれ？戦闘は…？」

凜「ついさつきまで、敵対の反応があつたみたいだけど…？」

みく「それはもうみく達でやつつけちゃったにや」

凜「ホントに…？」

未央『もう。しまむーもしぶりんもちよつと遅い！さっきまで全国的に滅亡の危機だったんだからね?』

かな子「そんな軽く言われたら、にわかには信じられないですけど…」

晶葉「確かに、未央の言い方はアレだが、危なかったのは事実だ」

未央『ちよつとアキっち、アレって何さアレって!』

みく「まったく、戦闘終わった途端いつものノリじゃ、緊張感もあったもんじゃねえにや」

菜々「あはは…」

卯月「でも良かったです。みんな無事で…」

凜「そうだね。それと…」

ニオン「……」

かな子「アレって確か…、前に私達を助けてくれた、ダイノゲッターロボ…?」

凜「…少し振りだね」

ニオン「ああ。まだ生きていたか」

凜「お互いにね」

芳乃「ふふふ。相変わらず素直ではないのでしてー」

卯月「えっ、今の誰ですか?」

晶葉「まあまあ。お互い言い合いたい事もあるだろうし、積もる話もあるだろうが、まずは一旦帰還しよう」

ニオン「……」

凜「……」

晶葉「ゲッターも我々もメンテナンスが必要だ。休息を怠っていい道理は何処にもないぞ。ダイノゲッターも、それでいいな？」

ニオン「……」

芳乃「はいー。こちらでも貴女方の指示に従いましてー。今は人間も恐竜帝国も関係なくー。お互いに手と手を取り合いー、困難を乗り越えてゆかなければならないのでしてー」

晶葉「分かった。そちらの話も後々聞かせてもらいたいが、先ずは協力してくれた事に感謝する。ありがとう、助かった」

芳乃「お構い無くー」

卯月「えつと、凜ちゃんも、そう言うことなので…」

凜「うん。私だって、今がどんな状況かくらいは分かってるよ」

ニオン「フン…」

かな子「百鬼帝国との決戦、ですか…」

凜 「まだインベーダーが残ってるとは言え、百鬼帝国との戦いにけりが着けば平和に一歩近付くんだ。正念場だね」

卯月 「はいっ！アトランティスの人達のためにも、この戦い、絶対に負けられませんっ！」

卯月 「島村卯月、まだまだ頑張りますよーッ!!」
つつく

第26話 『目覚めの時、真ゲッターロボ!!』

~~~~~ 新早乙女研究所 格納庫 ~~~~~

李衣菜「…ふう、やっと帰ってこれた〜…」

奈緒「北海道からだ、一苦労だよな」

加蓮「もう空飛んでるだけで疲れた…。ゲッターもアタシも休息が必要だよ」

主任「おう！ネオゲッターチーム共、今回もゲッターをボロボロにして帰ってきやがったな」

李衣菜「大将〜！今回は私だけじゃなくて奈緒と加蓮も同罪ですよ〜？」

奈緒「ちよっ…！仕方ないだろう〜！」

主任「がっはは！まあ、お前らが元気に帰ってきたんならゲッターも大した仕事が出来たつてもんだぜ」

加蓮「整備ヨロシクね」

主任「任せときな。お前達も、これからは休むのが仕事だぜ」

李衣菜「うん！奈緒、加蓮行くよ」

奈緒「ああ」

加蓮「もう他のみんなは帰ってきてるんだ」

奈緒「そうだな。あたしらが一番遠くなんだから、そりやそうだろ」

李衣菜「つて言うか、こんなたくさんゲッターいたっけ？ほら、あつちの白いゲッター  
ドラゴンとか」

奈緒「ホントだ。つてかあつちの黒いゲッターは何つうか悪人面だなあ」

加蓮「まさにゲッター軍団だね。格納庫も賑やかになつて結構、結構」

李衣菜「あ、加蓮待つてよ」

美穂「卯月ちゃんっ！」

李衣菜「ん？」

卯月「み、美穂ちゃん……！ちよつと……苦しい……」

美穂「本当に、本当に……！死んじやつたと思つて！だから、無事でホントによかつた  
……」

卯月「……ごめんなさい」

美穂「ううん……」

卯月「……」 ナデナデ

李衣菜「卯月と美穂か」

奈緒「Gチーム、ホントよく生きてたよな」

加蓮「アタシ達も割り切って付き合い方変えなきゃー、とか思ってたトコだもんね」  
奈緒「な。トラプリが2人組ユニットになるのは勘弁だよな」

加蓮「それは、アタシと2人つきりになるのがイヤって事？」

奈緒「いやあ、そう言うことじゃなくてな…」

李衣菜「まあまあ。本格的にそういう話になったら、そしたら私が入ってあげるから」

加蓮「却下」

奈緒「却下だな」

李衣菜「酷っ。そう言うところは息ピッタリなんだ…」

奈緒「だって李衣菜がメンバーとか、雰囲気合わないだろ」

李衣菜「そう言うこと思っても言う？フツー」

加蓮「トライアドプリムスはクールでスティックなユニットなの。リーナのロックと

ハートビートはジャンル違うから」

李衣菜「そりゃそうだけど…」

古田「スンマセ〜ン！誰か担架持ってきてくんないツスカ〜！」

奈緒「今度はなんだあ？」

李衣菜「古田さ〜ん、どうかしたんですか？」

古田「あ、李衣菜ちゃん！大変なんです！晶葉ちゃんがゲッターのコックピットで血

塗れで気絶してて……！」

加蓮 「それは一大事だね」

李衣菜 「つて言うか、あの白いドラゴン乗ってたの晶葉だったの？ どうしてまた……」

奈緒 「詮索は後だろ。まずは医務室だ！」

李衣菜 「そ、それもそうだね……！」

タツタツタツ……

~~~~~ 数分後。 会議室 ~~~~~

凜 「それで、医務室に運ばれた晶葉の容態は？」

加蓮 「外傷は目立ってある訳じゃないけど、内臓系が酷いみたい。しばらくは栄養接

種も点滴だって」

凜 「そう……。私達がいけない間、無理させちゃったから」

奈緒 「別に凜のせいじゃないだろ」

李衣菜 「そうそう。元々百鬼帝国の襲来に対してなら、こっちの戦力じゃ少なすぎた

わけだし……。どのみち出撃することにはなってたよ」

瑞樹 「自分がいれば、なんて考え方は傲りね」

菜々 「それよりも先ずはこれからどうするか、です！」

凜 「……。それもそうだね。……ありがとう」

菜々「いえいえ」

みく「これからの話より、先ず話をしてもらいたい奴ならいるにや」

卯月「それって…」

みく「ん」

ニオン「…」

美穂「えっと、ニオン…さん…。でしたよね？」

ニオン「…何だ？」

美穂「ひうつ…。な、何でもないですう…」

茜「美穂さんに手出しはさせませんよー」

ニオン「…フンツ」

芳乃「ニオンさんー？その様な態度は好ましくありませんよー。これからわたくし達は手と手を取り合いー、未来に向かって協力していかなければならないのでしょー？」

凜「協力？」

芳乃「然りー。これから先待ち受ける戦いはー、この地球上万物含めた全ての生命の生き残りをかけた戦いになりましたー」

未央「地球上万物…？随分大きく出たね…。えっと…」

芳乃「依田は芳乃と申しましてー。以後、お見知りおきをー。……」 チラツ

卯月「え…」

李衣菜「な、何…?」

芳乃「——ふふっ」

李衣菜「…」

奈緒「何だよ、知り合いか？」

李衣菜「いや、そんなんじゃないけど…」

李衣菜（違うけど、何だろ…。他人とは思えないような…）

凜「それで、話を戻すけど、ニオンは味方って考えていいの?」

ニオン「ああ。百鬼帝国もそうだが、インベーダー…奴等は地球上の全ての命を根絶やしにするつもりだ」

ニオン「だから、俺達が先ず敵味方の垣根を越えて団結する必要がある。それが俺達の総意だ」

かな子「総意って…。ニオンさんはこれまで何処にいたんですか?」

ニオン「マシーンランドだ」

卯月「マシーンランド…!?!」

美穂「それって確か恐竜帝国の本拠地、だったんだよね…?」

美波「ええ。まさかまだ残ってたなんて…」

ニオン「マシーンランドは本来、地上のゲッター線から逃れるために造られた地下居住施設だ。数億の民を収容するためのものが、たった一つの筈があるまい」

卯月「確かにそうですね…」

みく「納得してる場合じゃないにや！それだけの数が残っていて、どうして協力なんか？」

ニオン「……。そもそも、俺達と貴様らの間には、根本的な意見の相違があるようだ」
アーニヤ「根本的な、相違…？」

ニオン「いくら我々がゲッター線によつて地下に追いやられたと言っても、全ての爬虫人類が侵略行為に賛成しているわけではない」

芳乃「中には芳乃達人類と、和平による解決を望むものも、少なからずいるのでしてー」

瑞樹「穏健派と言うことね」

美波「つまり、その穏健派の一派に今ニオンさんは所属していて、その代表として私達に接触してきた、と言うことですか？」

ニオン「そうだ。俺はゲッター線の影響をあまり受けない、地竜一族の生き残りだからな」

凜「……」

みく「信じられねえにやあ…。そう言ってるアンタだって、様は過激派の1人だったって事じゃない？」

ニオン「信じてもらおうとは思わん。気に入らないなら、何時でも後ろから撃てばいい」

ニオン「その場合は、穏健派の態度も変わるかも知れんがな」

菜々「ひ、卑怯じゃないですか、それ!? ナナ達に拒否権はないって言ってるようなもんじゃないですか!」

ニオン「そうだ。共に生き延びるか、共に果てるか。生き延びたければ、俺を信じろ」
加蓮「軽くこっち脅してくる奴を信じろって?」

ニオン「……」

加蓮「それに、こっちに協力を仰ぐってことは、そっちには1人で生き残る算段がないって言ってるようなもんじゃない?」

加蓮「アタシ達だって、自分達の力だけでこの先どうにか出来るとか、そう御大層に考えてる訳じゃないけど、でもアタシ達は、自分達の力で生き残ってみせるよ?」

加蓮「協力しろって言ってきてさ、それにおんぶに抱っこにされちゃあ、ねえ?」

ニオン「……」

卯月「……私は信じますよ」

茜 「卯月さん!」

卯月 「二オンさんの言うとおりですよ。私達は先ず、敵味方つて言うモノの考え方を
変えなくちやいけないんです」

卯月 「じゃなきや、何時まで経つても平和になんて出来ませんよ!」

瑞樹 「理想はそうかもしれないわよ?けど、許す、つて言うのは一番難しいのよ」

瑞樹 「恐竜帝国全体がそうじゃないとしても、恐竜帝国に家族や友人を奪われた人は
たくさんいる。貴女だつて、大切な人を奪われたんじゃないかしら?」

未央&凜 「……」

卯月 「でも、それは恐竜帝国だつて同じです!戦争つてそういうのが辛いから、みんな
平和がいいつて言うんじゃないですか?」

瑞樹 「……。確かに、このまま言つても水掛け論になるだけね」

凜 「そうだよ。今は身内で争っている場合じゃない」

未央 「みくにゃんも、とりあえずオツケー?」

みく 「むう……。仕方ないにゃ……。納得はしてないけど、言いたいことは山程あるけど、
今は胸にしまつておくにゃ」

未央 「ん。ありがと」

菜々 「皆さんもそれでいいですか?何か意見のある人は今のうちですよ!」

「……」

凜 「うん。取り敢えず、そっちの事情は理解できたから」

芳乃 「ありがとうございます。これより先は、わたくし共の行動で示して行ければと、そう思っております故に、何卒宜しくお願い致します」 ペコリ

凜 「…まだアンタを信用した訳じゃないけど、頼りにさせてもらうよ」

ニオン 「…フンッ」

瑞樹 「それじゃあ、これからの事だけ……」

凜 「みんなにはゲッターの整備が終わり次第、旧研究所に向かってもらうよ」

美波 「旧研究所の方に？」

奈緒 「何でだよ？」

加蓮 「そう言えば、百鬼帝国もこっちじゃなくて旧研究所の方を襲ってきたよね」

美穂 「これまで何度か向こうを攻撃してきたのって、偶然とか百鬼帝国が間違えてたとかじゃないんですか？」

凜 「……」

加蓮 「凜？」

凜 「百鬼帝国の狙いは、真ゲッターロボだと思う」

李衣菜 「真ゲッターロボ？」

かな子「何ですかそれ？はじめて聞きましたけど…」

アーニヤ「新しい…ゲッター、ですか？」

凜「そう。みんなは知らなくて当然だよ。早乙女博士が政府にも内緒にして造り上げたゲッターロボだからね」

奈緒「マジかよ。政府にまで隠して、一体どんなゲッターなんだ？」

凜「それは…」 チラツ

卯月「……？」

凜「今重要な事じゃないよ」

凜「私も、百鬼帝国の正体については、未央達から聞いた。連中がゲッターを目の敵にしてるなら、真ゲッターの起動を阻止してくるのは間違いない」

瑞樹「そうね。現時点で、ゲッターGをも上回るゲッターっていうのは、間違いないものね」

菜々「百鬼帝国にとっては厄介な相手、って事ですか…」

茜「ですが！狙いが分かっているらば対策しやすい！と、言うわけでもあるわけですね！」

美穂「でも、もし百鬼帝国が旧研究所に攻めてこなかったら…？」

美波「いえ、そっちの可能性の方が低いわ」

美穂「どうして…?こっちは卯月ちゃん達だつて戻つてきたわけだし、無闇に攻撃もしてこないんじや…」

美波「逆よ。百鬼帝国にしてみたら、ゲッターGがいて、そこに真ゲッターが加えられたら、本格的に手がつけられなくなる」

みく「つまり、面倒臭くなる前にやつつけちゃえつて事にや?」

美波「ええ。きつと何がなんでも真ゲッターを破壊しに来る筈よ。むしろゲッターGも揃つてる分、向こうにとっては都合かも…」

加蓮「……。百鬼帝国は、円盤に接触して、何かしらの技術を手に入れただろうしね」
奈緒「ホントか?円盤は破壊できただろ?」

加蓮「そうだけど、向こうが何の手土産もなしで、黙つて引き下がったとは思えないんだよ」

凜「何かしらの秘策はある、つて考えた方がいいかもね…」

李衣菜「やれやれ…。無傷で勝利するのは難しいって感じだね」

奈緒「お前は何時も無傷で勝つたことないだろ!」

李衣菜「あ、バレた?」

加蓮「…ふふっ」

凜「…難しく悩むだけ無駄みたいだね」

瑞樹「あら、いいじゃない。余裕があつた方が、緊張でガチガチになつてゐるよりは。ラブの時だつて、そうでしょ？」

茜「瑞樹さんの言うとおりですね！今更後には退けませんし！」

茜「ここが正念場です！皆さん、頑張つていきましょー！！」

アーニヤ「オー♪」

加蓮「…と、アーニヤと茜が締めてくれたところで、アタシ達はしばらくフリーなんだよね？」

美波「そうね。ゲッターの修理が終わるまではね。研究所の外に出られたら困るけど」

加蓮「了解了解。んじゃ、今のうちに何か食べておこつと」

卯月「あ、私達もご一緒にいいですか？」

加蓮「別にいいよ。大した事も出来ないけど、丁度いいし帰還祝いでもしよつか」

かな子「いいですね。それじゃあ、私も何かお菓子を…」

奈緒「いや、流石に生地寝かせたり本格的にやつてる時間はないだろ」

かな子「ええ…そんなあ」

奈緒「そんな泣くほどののか!？」

卯月「あはは…。まだお菓子を口に出来ないから…」

菜々「それでしたら、確か美嘉ちゃんと莉嘉ちゃんが避難する前に作り置きしてたのがいくらか残ってるはずですよ」

かな子「ホントですか!？」 クワツ

菜々「は、はい…。確か調理室の冷蔵庫に…。かな子ちゃん達が何時でも帰ってきていいようにって…」

かな子「ありがとうございます！美嘉さん、莉嘉ちゃん！」 シュバツ

李衣菜「わっ、速っ…！ …あんな俊敏なかな子レッソンの時でも見たことないよ」

菜々「ホント、危ない人みたいだな目付きでしたよ…?」

加蓮「きつと糖分欠乏症だったんだよ。間に合えばいいんだけど」

卯月「そんな病気があるんですか？」

奈緒「ああ、あるなあ。加蓮もたまに患ってるし。ポテト欠乏症」

加蓮「もう、変な冗談言つてないで早く行くよ? 奈緒のせいでポテト食べたくなってきたし」

奈緒「ほらな？」

卯月「あ…あはは…」

ゾロゾロ――

凜「……」

ニオン「……」

凜「アンタは行かないの？」

ニオン「誰が好き好んで女共の姦しい空間に首を突っ込めばならんのだ？」

凜「そつか」

ニオン「お前はどうかんだ？」

凜「私は…、ちよつとね。…あの芳乃つて子の事なんだけど」

ニオン「あいつはお前達と同じ人間だよ。理由は知らんが、突然俺の前に現れた」

凜「突然？」

ニオン「ああ。その時俺は、死に場所を探してあてどもなく旅をしていた。穏健派のマシンランドに俺を導いてくれたのはあいつだ」

凜「導いてくれたつて、芳乃は人間なんだよね？どうしてマシンランドの場所なんか……」

ニオン「さあな。本人曰く『失せ物探しが得意』、だそうだ」

凜「失せ物探しつて…。それ以外は？」

ニオン「何も知らん。あいつが何者で、どこから来たかなど、興味もない」

凜「……」

ニオン「ただ、あいつがゲッターに乗ると、ゲッターのエネルギー出力が上がる。あ

いつ自身の意思も含めて、だから乗せている」

凜 「そうなんだ……」

凜 （それって……まるで卯月と同じ……。どういう事……?——）

ニオン 「……」

凜 「……何？」

ニオン 「……いや、前に会った時よりも、随分と顔つきが険しくなったなと思ってる」

凜 「そう?……意識した事ない」

ニオン 「それだけ修羅場を潜ってきたと言うことか……。このまま戦士になるつもりか?」

凜 「それは……。分からないよ。私は、好きで戦ってるんじゃない。だけど、何もしな
いで死ぬのは嫌だから」

ニオン 「曖昧なんだな」

凜 「余計なお世話だよ。私は死なない。卯月達と絶対生き残って、またステージに
戻る。そこが私達の居場所だから」

凜 「私が本当に望む場所で、私の歌を歌うために」

ニオン 「そうか。それを聞いて少し、安心した」

凜 「え……?」

ニオン「何でもない。ただの気まぐれだ。忘れろ」

凜「そっか……」

ニオン「俺は格納庫にいる。出撃の時間になったら教えろ」 スッ

凜「ニオン」

ニオン「何だ」

凜「もしも全部の戦いが終わって、恐竜帝国とも和解できて、ホントに平和になったら、その時は私の歌を思う存分聞かせてあげる」

ニオン「結構だ。お前とは、まだあの時の決着が残っている。その事を忘れないでもらいたいな」

凜「あの勝負は私の勝ちじゃないの？」

ニオン「あんなものは無効に決まっている。途中で邪魔も入ったからな」

凜「ふうん……」

ニオン「だがまあ、もし勝負に決着が着いたとしたら、その時は、平和の退屈しのぎに聞いてやる」

スタスタ……

凜「……ふうふう」

――。

~~~~~ 早乙女研究所 ~~~~~  
ウウウウウンツ——。

警報を知らせるサイレンが鳴り響く。

李衣菜「昨日の今日で襲撃なんて、思ったより早かったね」

加蓮「向こうにしてみたら、戦力を立て直すにしたって、あんまり時間は掛けられないって事でしょ？」

かな子「それだけ真ゲッターが百鬼帝国にとつて脅威、つて事ですな」

美穂「一体どんなゲッターなんだろう？ここには見当たらないけど……」

晶葉『各員、ゲッターに乗って準備は出来ているな？』

卯月「晶葉ちゃん、動いて大丈夫なんですか？」

晶葉『本調子には程遠いが、黙って寝ている事など出来ないからな。ここで状況を見守るくらいしか出来んが、立ち合わせてくれ』

美波「早乙女博士も地下に籠りつきりだし、後ろに人がいてくれるのは助けるけど、無理だけはしないで」

晶葉『ああ、分かっている』

未央「アキつちのゲッタードラゴンは私が預かるから、安心して〜！」

凜「未央、大丈夫なの？」

未央「ま、合体がオミットされてるなら衝撃は気にしないでいいし、後ろで移動砲台になるくらいなら、私にだって出来るよ!」

瑞樹「今は戦力が一つでも多く必要だもの。頼むわよ」

未央「オツケー! まっかせなさい!」

アーニヤ「それで、百鬼帝国は何処から来ますか?」

晶葉『上、上空から巨大な反応が近付いている』

みく「要塞でまるごと乗り込んできたにや?」

晶葉『恐らくそうだろうな。各機、発進してくれ』

卯月「分かりました! Gチーム、ゲッタードラゴン、行きます!」

茜「斬チーム、ゲッター烈火も行きますよー!」

みく「みく達も出撃にやあ!」

奈緒「ネオゲッターチームは、ネオゲッター2で出るぞ!」

美波「新田美波、ブラックゲッター、出撃します!」

未央「白ドラゴン、本田未央ちゃんいつきまゝす!」

ニオン「芳乃はドコに行った!?!」

晶葉『こちらでは確認していない。格納庫にはいないのか?』

ニオン「見当たらないから聞いている!」

晶葉『この非常事態に一体どこに…。ダイノゲッターは動かないのか?』

ニオン「起動には問題ない」

晶葉『なら、すまないが時間がない。芳乃抜きで出撃してもらえるか』

ニオン「チツ…。ダイノゲッター、出るぞ!」

7体のゲッターが空中に展開する。

茜「さあ!何処からでも掛かってきてください!!」

言った直後、上空の太陽が遮られ、影が落とされる。

菜々「百鬼要塞…!改めて見ると、壮大ですね…!」

未央「へへっ…!地上でこんなでっかい影を落としてくれたのは、こいつが初めてだ

よ!」

凜「まるで今まで地下にでもいたみたいだな言い方だね」

晶葉『呑気に話をしている場合ではないぞ。要塞下部に高エネルギー反応だ!』

美波「高エネルギー反応?」

美穂「もしかして…!恐竜帝国を倒したあのレーザーを使ってくる気じゃ…」

みく「うえええ!?!いきなり全力過ぎにや!」

瑞樹「向こうも短期決戦ってわけね」

卯月「…。時間がありません、皆さん、一度集まってください!」

未央「どうするの？」

卯月「私達のゲッタービームで、相手のレーザーを迎え撃ちます！」

菜々「そんな無茶苦茶なあ!？」

瑞樹「いえ、確かに研究所を守るには、一番可能性の高い手かもしれないわね」

みく「これだけのゲッターがいるんだもん、何だって出来るにやあ！」

美波「そうね。私も乗らせてもらおうわ！」

茜「よおーしっ！やっつてやりましょう!!」

加蓮「ほら、奈緒。アタシ達も、ゲッタービーム・キャリアを使うよ」

奈緒「よ、よおし、今更逃げるなんて出来ないしな！」

ニオン「無茶を言ってくるが、面白い！」

ゲッタードラゴンを中心に、ゲッター軍団が集結する。

同時、百鬼要塞下に蓄えられたエネルギーが、一層肥大化し、放たれる。

「ゲッターアアアービィィームッ!!」

百鬼要塞のレーザーと、ゲッター軍団の束ねられたゲッタービームがぶつかり合う。

晶葉「ぐう……!なんとと言う衝撃波……。レーザーはしばらく使い物にならないか。外はど

うなつた!」

光線のぶつかりによる爆発と、衝撃波が生んだ。土煙が晴れた先は、

みく「うう……。頭の中がジンジンするにやあ……」

瑞樹「生きているだけ、物種よ」

卯月「皆さん、無事ですか？」

美波「ええ、こっちはなんとか。戦闘も続行可能よ」

かな子「でも、あんな攻撃を連続でされたら……」

凜「それは大丈夫だよ。向こうも、あれを使うには相当時間を使うみたいだし」

アーニヤ「アー、やられる前にやれ、ですか？」

未央「アーニヤン、イッツアバウト。けど、そゆことだね……!」

李衣菜「——!?百鬼帝国から敵機の反応!向こうのドラゴンが来るよ!」

ヒドラー「ふんっ。さっきの攻撃で死んでおれば、ムザムザ苦しむ事もなかっただろうに」

凜「そつちこそ。虎の子の戦法が破れて、内心焦ってるんじゃない?」

ヒドラー「バカな事を。貴様らはブライ様の慈悲を蹴ったのだ。1人残らず血祭りにあげてくれるわ!」

ニオン「やれるものならばやってみろ!」

ダイノゲッターがトマホークを片手に突貫。

みく「あ、隊列を考えろにや!」

ニオン「くだらん！弱者に合わせる通りはないぞ！」

みく「にやっ：!?」

美波「言ってくれるわね…！なら、私もいかせてもらおうよ！」

菜々「美波ちゃん!？」

美波「安心して。私のゲッターは近接戦に特化してるから、敵の狙いを引き付けられるわ！」

瑞樹「そうね。私達は美波ちゃん達のフォロワーをしましょう」

みく「了解にや！ダイノゲッターはせいぜい流れ弾に気を付けるにや！」

ニオン「面白い。当てれるものならば当ててみる」

美波「茜ちゃん、一緒にいきましよう！」

茜「はいっ！アーニャさん程ではありませんが、ご同伴させていただきます！」

美波「頼りにしてるわ！——ゲッタースパイク!!」

茜「火斬刀ツ!!」

ブラックゲッターとゲッター烈火が、それぞれの獲物を構え、敵陣に斬り込む。

李衣菜「奈緒！私達も遅れを取るわけにはいかないよ！」

奈緒「つたく…。メインじゃないからって、気楽に言うけどさア、このままじゃ乱戦に飛び込むだけだぞ？」



加蓮「それじゃ、他に何か手は？」

奈緒「それは……」

李衣菜「アームガンなんて鉄砲玉じゃ、ドラゴンの装甲は抜けないよ！」

加蓮「ネオゲッター2の利点はブラックゲッターと同じく、近接戦な訳だしね？」

奈緒「…ああもう！分かったよ！行けばいいんだろ！行けばっ！」

奈緒「——プラズマブレード!!」

卯月「私達も——」

瑞樹「いえ、貴方達は今のうちに百鬼要塞に行きなさい！」

かな子「だけど……」

未央「これはチャンスだよ！向こうが本拠地ごと乗り込んできたなら、大将の首を獲るチャンスだ！」

凜「うん。単機でそれが出来るのは、私達だけだね」

卯月「でも、ドラゴンが離れたら戦力が落ちちゃいます！」

ニオン「ナメられたものだな！」

トマホークで、百鬼ドラゴンを切り伏せながら、

ニオン「貴様ら如きが欠けたところで、問題などあるわけがない！」

美波「そうよ！私達は、みんなの力で勝てるわ！」

茜 「だから、こちらの事は気にせず行って下さい!!」

奈緒 「相手もゲッターなら、こつちも同じゲッターだしな」

李衣菜 「なら、ゲッターを熟知してる分こつちが有利、つてね!」

みく 「だからサクツと行って、勝鬨をあげてくるにやあ!」

卯月 「皆さん……はいつ!」

卯月 「ゲッターGはこれから、百鬼要塞に突入しますつ!」

未央 「よおーしっ! 聞いたねみんな! 私達でしまむー達の進路を切り開くよ!」

「了解ツ!!」

凜 「卯月、突入なら、ライガールのドリルで!」

卯月 「分かりました!——オープンゲツト!!」

凜 「——チェエエーレンジ、ライガアア——ツ!!」

ヒドラー 「貴様らの思い通りになど、させるものか!」

美波 「思い通りさせてもらうわツ!!」

ガギンツ

ヒドラー 「ぬう……!?!」

茜 「貴方の相手は、1人ではありませんよ!」

ヒドラー 「チィ……!」

ゲッタートマホークと火斬刀、ダブルトマホークが火花を散らす。

未央「みくにやん！私達も！」

みく「合点にやあ！」

未央「ゲッターレーザーキャノン!!」 ジャキツ

みく「ゲッターマシンガン!!」 ジャコツ

ゲッターレーザーキャノンとゲッターマシンガンを直線上に撃ち、進路を開けていく。

奈緒「卯月達はやらせるかよッ！」

ニオン「フンツ！付き合ってやる義理はない、がああ!!」

ゲッタードラゴン目掛け殺到する百鬼ドラゴンの群れを、プラズマブレードとトマホークが受け止める。

加蓮「行って、凜！」

美穂「卯月ちゃん、私達の明日を！」

李衣菜「しっかり託したよ、かな子！」

かな子「はいっ！必ず！」

卯月「凜ちゃん！」

凜「ドリルアアアームツ!!」

凜 「うおおおおお——!!」

ドリルを唸らせ、勢いよく百鬼要塞に突撃。

ゲッターライガーは、自らで生み出した黒煙の中に消える。

ヒドラー「お、おのれえ……!」

美波「勿論、追わせるなんて真似、させないわよ!」

茜「貴方達には、どちらかが倒れるまで相手をしてもらいます!!」

ヒドラー「自らの寿命を縮めるとは! 全くもって理解できん連中だ。全機、目の前の愚か者共に攻撃を集中だ!」

態勢を整え、百鬼ドラゴン軍団が来る。

瑞樹「さ、卯月ちゃん達に啖呵を切った以上、ここで引き下がれないわよ!」

未央「モチロンだって! 人類の未来とか、大層なのは分かんないけど、私達の明日が掛かっているだもん! ここでやられてたまりますかって!」

瑞樹「…分かるわ。ここからは自分達自身の明日を切り開く為の戦いよ! みんな、いわね!」

「「了解ッ!!」」

瑞樹「なら、攻撃開始よッ!!」

—。

—— 早乙女研究所、地下。

ツカツカ：

芳乃「……」

早乙女「来たか」

芳乃「だいぶ、待たせてしまいましたかー?」

早乙女「ああ、待ち侘びていたよ。この時をな」

芳乃「わたくしも同じでしてー。では、疾くはじめましょー」

早乙女「うむ。人類の未来が失われる前に、やらねばならん」

——。

~~~~~ 百鬼要塞内部 ~~~~~

卯月「ここが百鬼帝国の中ですか?」

凜「随分広く…。百鬼メカでも通れるようになってるんだ」

かな子「でも、こんなに広い場所…。どうやってブライ大帝を見つけ出すんですか?」

凜「その心配入らないと思うよ。要塞を破壊し尽くせば、向こうから勝手に出てく

る」

卯月「そうですね。恐竜帝国と違って、他に逃げられるところもないみたいですし…」

百鬼兵「ゲッターロボ発見!!——攻撃開始!!」

バラバラバラバララッ

かな子「百鬼帝国の歩兵、ですか…？」

卯月「凜ちゃん…」

凜「分かつてる。だけど、ここまで来た以上、手段を選ぶつもりはないよ」

凜「ライガーミサイルッ！」

「「うぎやあああああ!!?」

一発のライガーミサイルが弾け、密集していた歩兵を吹き飛ばす。

凜「今は暴れさせてもらおう！」

ライガーミサイルを撃ち、チェーンアタックをしならせ、隔壁はドリルアームで貫いて破壊して、ゲッターライガーは進んでいく。

卯月「ここは…」

凜「百鬼メカの格納庫だね。動かれても面倒だから、まとめて破壊するよ！」

ズワアアッ

百鬼兵「ゲッターを、ゲッターを止めろ!!」

百鬼兵2「だ、駄目です！まるで歯が立ちません!!」

百鬼兵「ゲッターの現在位置は!？」

百鬼兵2「はっ！既に格納庫エリアと、第2ブロックを破壊し、第4ブロックも機能

停止！各ブロックの隔壁を破壊しながら、第6ブロックに向かっています！」

百鬼兵「第6ブロックだと…!?」

百鬼兵2「あそこには…確か！」

百鬼兵「最後のチャンスかもしれない！持てる手段を総動員し、ゲッターを第6ブロックまで誘導するんだ！」

百鬼兵2「了解！」

凜「……相手の抵抗が弱くなった？」

かな子「諦めた…?にしては散発的に襲ってくるみたいですけど…」

卯月「私達を誘ってるようじゃないですか？」

凜「いいね。どうせ、何処に行けばいいかわからなかったんだし、誘いに乗ってみよう」

誘われるまま、ゲッターライガーを奥へ。しばらくして、巨大な扉の前に辿り着く。

卯月「丁度ゲッター…、百鬼メカが通れそうな扉ですね…」

凜「さて、この先に鬼が出るか蛇が出るか…」

かな子「鬼は居ますね、確実に。ちよつとおやつタイムに…」

凜「悠長にしてる時間は、ないよ！」

かな子「そんなあ…」

凜 「はあああッ!!」

ドリルアームで扉を破壊。中に歩みを進める。

かな子 「ここは…」

卯月 「広い空間に出ましたね…。一体何をやる部屋なんでしょう?」

「ふふふつ…。それは無論、貴様らの処刑に決まっておろう!」

凜 「——!? 誰ッ!」

叫びが消えた先、暗闇の奥から、それは姿を現す。

卯月 「な…何なんですか…? あれは…」

かな子 「百鬼メカ…。何ですか?」

凜 「いや、コイツは今まで戦ってきたどの百鬼メカとも違う。全く異質の、何か…」

「お初にお目にかかる。私はグララー。百鬼帝国の科学者だよ」

卯月 「グララー…?」

凜 「成る程、ヒドラーと同じ、ブライの腰巾着のお出ましって訳だね!」

グララー 「ははは…つ! これは手厳しい。だが、貴様らの言うとおりかもしれない」

グララー 「貴様らに百鬼衆を悉く葬られ、この百鬼要塞への侵入を許し、我々は今、追

い詰められている」

凜 「ふうん。状況は分かっているんだ。なら、ブライの所まで案内でもしてくれる?」

グラ―「まさか！私が貴様らを連れていくのは、ブライ様の元などではない！黄泉路への案内役なら仕ろう！この百鬼獣、羅王鬼で!!」

かな子「百鬼…獣…!?!」

卯月「羅王鬼って…!?!」

凜「面白いね！それなら、さっさとアンタを倒して、ブライを引き摺り出させてもらうよ！」
グッ

操縦桿に力を込めて、ゲッターライガーを跳躍。羅王鬼目掛け飛び掛かる。

グラ―「遅いわアツ！」
ビュッ

羅王鬼の姿が消える。

凜（――速い…ツ!?!）

卯月「凜ちゃん、左!」

凜「!?!」

ゲッターライガーの脇腹に、羅王鬼の直蹴りが突き刺さる。

凜「ガッ――!?!」

かな子「きゃあああああつ!?!」

態勢を崩したゲッターライガー。吹き飛ばされて隔壁に衝突し、止まる。

凜「つ…!?!何て一撃…。かな子、大丈夫?」

かな子「は、はい！コックピットまで攻撃は届いてません！」

卯月「！ 攻撃された所を見てください！」

かな子「ゲッターの装甲が、溶けてる!？」

凜「……。あの羅王鬼つてマシン自体が、とんでもない熱量を纏ってるみたいだね
……」

卯月「熱量だけじゃありません！周囲の放射線の量も……。まるで、原子炉みたいに……
！」

グラー「ふはははははははっ！当然だろう？この羅王鬼は、百鬼要塞のエネルギー炉と直結されているのだから！」

卯月「エネルギー炉と直結って……、それじゃあ！」

グラー「そう。この百鬼要塞を動かす膨大なエネルギーが、そのまま羅王鬼の力となっているのだ！」

凜「後ろに見えた尻尾みたいなの、それが羅王鬼と要塞を結ぶエネルギーパイプって訳」

グラー「その通り。それ故、外の戦闘に出す事は出来なかったが、貴様らから入って来てくれたお陰で、こうして貴様らを葬る事が出来る！」

グラー「羅王鬼の力の前に消え去れ、ゲッターロボ!!」

グワツ

凜 「——ッ!?!」

目にも止まらぬ早さで振り下ろされた羅王鬼の爪を、紙一重で躲す。かな子「て、鉄骨が溶断されてます!」

卯月「あんなの喰らっちゃったら、一堪りもありませんよ!」

凜 「けど、弱点も分かっている!それなら——!」

凜 「マツハ・スペシャル!!」

ゲッターライガーの高速移動。羅王鬼の背後に回り、エネルギーパイプを狙う。

グラール「馬鹿め!弱点を知っていて対策せぬ輩がおるか!!」

ビュンツ

エネルギーパイプを尻尾のように振るい、ゲッターライガーを鞭打。

凜 「うわっ…!?!」

グラール「死ねい!!」

凜 「くくく…チエーンアタック!」

咄嗟に壁面にチエーンアタックを打ち込み、鎖が引き戻る動作で、強引に羅王鬼を躲

す。

凜 「…ふう」

かな子「ゲッターライガーでも、着いていくのがやつとみたいですね……」

凜「おまけに動物じみた動きをして来るし、百鬼“獣”って言うのも伊達じゃないみたいだね」

グラー「ふふふつ……！ 貴様らの動きなど予測済みよ。この羅王鬼のエネルギーパイプは、貴様のドリルやトマホークでは断ち切れはせぬっ！」

卯月「あんな細いパイプなのに……」

凜「見た目以上に頑丈って事だね」

グラー「さあ、逃げてばかりでは勝負にならない！ そちらから来ないのであれば、こうだ！」

シュルツ

凜「!?」

羅王鬼の全身から飛び出した触手が、ゲッターライガーを捕らえる。

凜「しまった！」

グラー「せいっ！」 グワッ

ゲッターライガーを宙へ持ち上げ、引き寄せる。

凜「ぐつ……！」

グラー「串刺しだッ！」

凜 「――…お…、オープンゲッター！」

ゲッターを分離させ、拘束から逃れる。

グラール「ぬう…。ちょこまかと！」

卯月「これからどうするんです？」

凜 「ドリルとトマホークがダメなら、違うやり方をするだけ。つて訳で行くよ、かな子！」

かな子「はい！…て…えっ、私ですかあ!？」

凜 「ポセイドンのパワーを、見せてあげて」

かな子「…分かりました！」

かな子「チエエーンジポセイドンッ!!」

グラール「ポセイドンだと？」

かな子「こ、こうやって向かい合うと、異様さがなんと言うか…。…武者震いが」

卯月「フアイトです、かな子ちゃん！」

かな子「が…頑張りますっ…！」

グラール「震えておるのか？ならば一思いに楽にしてやるッ！」 シュルツ シュルツ

羅王鬼の触手が、ゲッターポセイドンの四肢に絡み付く。

かな子「うっ…！」

グラ―「このお……！」

かな子「ふ、踏ん張って……！ゲッターポセイドン！」

グラ―「ぬう……、なんと言う……。パワーはこちらの計算以上か！」

かな子「うう……！——えええええ……いつ!!」グワツ

グラ―「ぬおっ!?!」

剛腕を振り上げ、逆に羅王鬼を投げ飛ばす。

グラ―「これしきの事で！」

天井に張り付き、態勢を整え、飛び掛かるように襲う。

かな子「ツ！」

両腕を交差させ、羅王鬼を受け止める。

かな子「くくく——!!」

グラ―「こやつめ……！ならば！」

一度ゲッターポセイドンから離れ、その周囲を上を下に。高速移動で翻弄するように飛び交う。

グラ―「——ここだあ!!」

そして正々堂々、正面からゲッターポセイドンに斬りかかる。

かな子「——ツ!!」

ガンツ

グラー「…ッ!?」

羅王鬼の攻撃を躲すでもなく、防御。

凄まじい熱量を帯びた爪は、ゲッターポセイドンの左腕に半分まで食い込み、しかし止まった。

グラー「バカな…!この羅王鬼の一撃を受け止めるとは!」

かな子「――肉を切らせて…」

グラー「!?」

かな子「骨をお…断ちますっ!!」グワオツ

大きく振りかぶった、渾身の右ストレートを羅王鬼にぶち込む。

グラー「ぐわあああああああっ!?」

胸の装甲をひしやげさせ、その他も大きく歪ませ、羅王鬼が吹き飛ぶ。

グラー「うぐう…。ポセイドンの耐久力を甘く見ていたか」

卯月「ゲッターポセイドンの取り柄は、パワーとタフさですからっ!パワーだけじゃ

ありません!」

凜「かな子、今のうちだ」

かな子「は、はい!」

羅王鬼に繋がるエネルギーパイプを両手で掴み、
かな子「んくくくッ!!」

力一杯、引っ張る。

ギチ… ギチ…

グラー「この…っ！させるかあ!!」 グアッ

卯月「かな子ちゃん！」

凜 「引きちぎった方の勝ちだよ！」

かな子「くくく!!…やああ!!」

—— ブチンッ

グラー「な…なあ…っ」

糸の切れた人形のように、羅王鬼が崩れ落ちる。

卯月「かな子ちゃん、トドメです！」

かな子「はいっ！」

羅王鬼側の切れたパイプを握りしめ、回転。

グラー「うおおおおお——!!?」

かな子「未央ちゃん直伝のく…！」

回転の勢いが頂点に達する。

かな子「大いゝ雪・山ツ！おろしいいゝゝゝ!!」

勢いそのままに、天井に叩き付け、

かな子「ストロングミサイル!!」

二段返し。

爆炎と衝撃が下まで届いた。

かな子「や、やった……!」

凜「お疲れ、かな子」

卯月「これで残るは、ブライ大帝だけです!」

「ハハハハハハハッ!!」

かな子「この笑い声は……」

凜「噂をすれば……」

卯月「影!ですね!」

ブライ「はははは……!羅王鬼すら敵わんか!やはりゲッター、忌むべき力よツ!」

凜「出て来てくれるなんて都合だね。アンタを倒して、この戦いを終わらせるよ」

ブライ「終わらせるだど?面白い事を!ゲッターある限り、戦いは終わらん!」

かな子「ど、どういう事です!?!」

ブライ「だから私が終わらせるのだ!ゲッター、貴様らをこの宇宙から滅ぼしてな!!」

凜 「…何かと思えば、悪党のお決まりの台詞、つて訳」

卯月 「ブライ大帝、覚悟してください！」

ブライ 「覚悟するのは貴様らの方よッ！見るがいい、今は亡き同胞より与えられしゲッターを打ち破る力を!!」

ピカッ——

ブライ 「ぐおおおおお——!!」

ブライの体を稲妻のような光線が貫く。

かな子 「な、何なんですか…!?!」

凜 「まさか、自滅…?」

卯月 「様子が変です！何だか嫌な予感がしてきました…!」

ブライ 「ぐうっ…!ふふふっ…!うおおお…!おおおおお——!!」

筋肉が隆起し、骨格が肥大化し、ブライの姿が、徐々にその大きさを増していく。

凜 「コレが…、百鬼帝国の奥の手…」

ブライ 「ふふふふ…」

かな子 「げ、ゲッターよりも、大きく…!」

凜 「全長およそ100m…。随分な急成長だね」

ブライ 「ふふふっ…。素晴らしい…!ゲッターが小さく見える」

ブライ「ゲッターよ、貴様をこれ以上進化させる訳にはいかん！」

凜（進化…？ブライはそんなところまで…!?）

ブライ「私の手で、貴様を闇に葬ってやるぞ！」

かな子「うう…」

卯月「かな子ちゃん、大きさに惑わされてちや駄目です！兎に角、攻撃あるのみです！」

かな子「は、はいっ！…ストロングミ사일ツ!!」

バシユツ

ストロングミ사일が、巨大化したブライに命中し爆ぜる。

ブライ「…そのような豆鉄砲、私には効かぬ！」

かな子「そんな…！」

ブライ「次はこちらだあ!!」ゴアツ

かな子「!? ゲッターサイクロン！」

巨大ブライが口から吐き出した火炎放射。ゲッターサイクロンで対抗するも、ブライの火炎は容易くゲッターサイクロンを散らす。

かな子「きやあああ——!!?」

ドロツ

ブライ「ふんっ！」

凜「——ッ!？」

踏みつけるために下ろされた足を、ゲッターライガーを側転させて回避。

凜「ライガーミサイル!!」

起き上がり、即座にライガーミサイルを撃ち込んで距離を取る。

ブライ「ふははっ! どうした? 戦い方から恐怖が伝わってくるぞ?」

凜「チツ……!」

ブライ「これでどうだ?」

巨大ブライの角から放たれる雷撃。

凜「——…ああああっ!？」

かな子「だ、駄目です! パワーが違いすぎますよお!!」

卯月「でも、ここまで来て、引き下がれません!!」

バシユンツ

凜「…!?! 卯月!？」

卯月「チエーンジ! ドラゴンツ!!」

ゲッターライガーを強制分離。その後、ゲッタードラゴンに変形。

卯月「ゲッターレーザーキャノンツ!!」 バシユウツ

ブライ「おお…!？」

かな子「ブライを仰け反らせた!？」

卯月「ダブルツ！トマホオークツ!!」

両手にトマホークを構え、巨大ブライに肉薄。

ブライ「ぐぬっ!？」

両腕をクロスさせて受け止めた巨大ブライと互角に力を張り合わせる。

ブライ「やはり障害となつて立ち塞がるか…！ゲッター、ゲッタードラゴンツ！」

卯月「負けられない…！貴方達との戦いのためにいなくなった人達のためにも、負ける訳にはいかないんです！」　バツ

トマホークで巨大ブライの腕を払い、懐に飛び込む。

ブライ「ぬう——!？」

卯月「やああああああつ!!」

かな子「スゴい…スゴいです、卯月ちゃん！これならどんなのが相手だつて勝てちゃいますよ！」

凜「卯月一人で先走りすぎだ！」

かな子「？　どういう事です？」

急いだ動作で、手前の計器をチェック。

凜（やっぱり…、ドラゴン号の出力が臨界点を超えてる…。これじゃあ、あの時と同じ…。このままじゃ…!）

凜 「卯月ッ!これ以上は危険…!」

芳乃 『その心配は無用でして』

凜 「芳乃!ドコから…!」

芳乃 『全ての宇宙を束ねるため、ここで進化を絶やす訳には参りませぬ。悪しき心持つ者は、滅しなければなりません』

凜 「い、一体何を言ってる…」

芳乃 『器はやがて割れましょ?されど、ご安心あれ。今、新たなる器をお持ちします故』

凜 「新たなる器って、まさか—」

くくく 早乙女研究所 上空 くくく

ヒドラー 「くらえっ!」

奈緒 「ぐっ…!」

百鬼ドラゴンの斬撃を、ネオゲッター2のプラスマブレードで辛うじて受け止める。

ヒドラー 「ふははは!憐れなものだな?プラスマには限りがある。だが、無限のゲッター線は、我らにも無限の力を与えてくれる!」

奈緒「ぐぐ…っ！」

ニオン「貴様がそれを言うかア!!」

ヒドラー「ガッ!?!」

ダイノゲッター1の水平蹴りが、百鬼ドラゴンの脇腹を突く。

奈緒「あ、ありがと…」

ニオン「礼なら後にしろ!とつとと態勢を立て直せ!」

奈緒「…分かってるよ!」

李衣菜「奈緒!こつちも言われっぱなしはロックじゃないよ!」

奈緒「お前のロック論に付き合ってやるつもりはないけど!」

奈緒「ドリルアームツ!—おりやああ!!」

ドリルを唸らせ、また別の百鬼ドラゴンを貫き破壊。

奈緒「ふう…。これで何機倒したんだ?」

加蓮「気にしてたら負けだよー?まだまだ沢山いるんだから」

奈緒「…勘弁してくれよ。向こうの言うことじゃないけど、明らかに先に息切れする

のはこつちだぞ?」

加蓮「確かに、このまま長期戦になればヤバイかもね…」

美波「—ゲッターレザードツ!!」

美波「やあ!」

大型のブラックゲッターのレザープレードで、百鬼ドラゴンの首を切断。血飛沫代わりのオイルが宙を舞う。

美穂「美波さん…、ワイルド…」

茜「こちらも負けてられません!ドンドンいきますッ!」

茜「合わせ風車ツ!!」

ブラックゲッターと背中を守り合うように位置を取りながら、ゲッター烈火も火斬刀2本を合わせた合わせ風車を投じる。

カチツ カチツ

みく「にやあ!?ゲッターマシンガンが弾切れにや!」

菜々「相当撃ちまくってましたからねえ…」

みく「…無事に戻れたら、晶葉ちゃんにマガジンを2倍にしてもらうにや」

瑞樹「生きて帰れたらの話よ。ここからは格闘戦で!」

みく「分かっているにやあ!——ゲッタートマホークツ!!」

みく「人間の底力、ナメンにやああ!!」

ヒドラー「ええい!しぶとい人間共め!だが、これでどうだ?」

百鬼要塞から、新たにドラゴンの群れが現れる。

奈緒「マジかよ！一体どれだけ量産してんだ!？」

ヒドラー「ふははははっ！思い知ったか。我ら百鬼帝国は貴様らとは生産力も違うのだ
！」

未央「ウチら以上にドラゴンを量産って、ちよつと大人げないんじゃない？」

ヒドラー「何とでも言え！数でも質でも勝る方が、戦いにおいて勝つのだ！」

百鬼兵「ひ、ヒドラー様…！ゲッターが…！」

ヒドラー「むっ!?!…これは…！」

菜々「な、何が起こってるんです!?!ゲッターが光って…！」

李衣菜「でも、向こうのだけだよ？私達のゲッターは何ともない！」

奈緒「元々プラズマエネルギーのこっちは関係ないだろ。多分」

李衣菜「そうだけど！ブラックゲッターもゲッター斬も、異常ないんだよね？」

茜「はい！こちらは何ともありません!!」

美波「私も同じよ。本当に百鬼帝国のゲッターだけに異常が起きてるみたいね…」

美穂「でも、一体どうして…？」

百鬼兵「だ、駄目だ…！エネルギーを制御できない——！」

百鬼兵2「ゲッター炉心から、光が逆流する——!?!」

ヒドラー「のわあ——!?!」

バシユウツ

アーニヤ「アウ……!」

百鬼ドラゴンの内部から、ゲッター線とおぼしき光が迸り噴き出す。

噴き出したエネルギーの本流は、早乙女研究所へと。

アーニヤ「красивый……」

みく「ゲッター線が光の柱になって……」

菜々「これ……、卯月ちゃん達がゲッターを初めて起動した時と似てる……!」

美穂「見て!研究所から、何か出てくるよ!」

瑞樹「あのシルエツトは……ゲッターロボ?」

美波「なら、あれが……!」

未央「真ゲッターロボ!」

研究所から姿を現した真ゲッターロボ。巨大な光の柱を成すゲッター線の奔流の前に静かに立ち、

美穂「……きやつ!」

膨大と言える量のゲッター線を吸収する。

奈緒「……もう!何が起こってんだよ!訳が分かんないぞ!」

瑞樹「エネルギーを吸いきった……?あれだけのゲッターエネルギーを!」

——ギンツ

ズワツ

奈緒「消えた…?」

加蓮「まさか。飛んでいったんでしょ。とんでもない速度で」

みく「ゲッタードラゴン数十機分のエネルギーを吸収しちゃった…」

美波「残ったのは…」

振り返り、気を失った屍のように地面に転がる無数のドラゴンを見下ろす。

菜々「残らずエネルギーを吸われちゃったんですかね?」

瑞樹「エネルギーだけじゃないわ。生体反応もゼロよ」

ニオン「全部持っていったのか…。たった1機のロボットが」

李衣菜「…真ゲッター、か——」

くくく 百鬼要塞 内部 くくく

ブライ「ぬえええいっ!!」

卯月「くっ…!」

巨大ブライとゲッタードラゴンが、激しい戦闘を繰り広げる。

ブライ「そこだあ!!」 ブオンツ

卯月「ツ!!」

衝撃波を生む勢いで打ち出された拳を、跳躍で回避。

かな子「あうう…！何だかコックピットに伝わる衝撃が、強くなってる気がするんですけど…」

凜（ドラゴンの出力が上がり続けている…。このままだと本当に…）

卯月「——ゲッタービィーームツ!!」

凜「！ 卯月！ゲッタービームはダメツ！」

ヒユウ…：ウウン…

卯月「!? どうしたんですか!？」

かな子「ゲッターが、停まった…?」

凜（エネルギーが危険域に達したら作動するリミッター…。晶葉が用意しててくれたんだ…）

凜「取り敢えず暴発の危険はなくなっただけど、これじゃあ…」

卯月「何だ?もう終わりか!」 ガンツ

卯月「——きやあつ!」

機能の停止したゲッタードラゴンを蹴り飛ばす。

卯月「ふん!さんざん手こずらせてくれたが、呆気ないものだな」

腰から両刃の剣を引き抜き、倒れ付したゲッタードラゴンの首を掴んで持ち上げ、壁

に押し付ける。

卯月「う…動いて…！動いてください！私は、まだ…」

ブライ「ふんっ！」

卯月「!?!」

ゲッタードラゴンの胸部に、剣の刃が深々と突き立つ。

卯月「うっ…」

ブライ「ふふふっ…。一思いには殺してやらぬ。五体を切り裂き、抵抗する力も失った惨めな姿で葬ってやるぞ！」

ザンツ

ゲッタードラゴンの胸部から剣を引き抜き、大上段に掲げて振り下ろし、左腕を切断する。

卯月「きやああっ!!」

断ち切られた左腕は放物線を描いて吹き飛び、断面からは血飛沫のように黒々としたオイルが吹き出している。

ブライ「ふははははっ！勝てる、勝てるぞ！私が勝てば宇宙も救われる！」

かな子「このままじゃ、ゲッタードラゴンが…」

凜「ゲッターだけじゃない、私達も年貢の納め時かもよ？」

かな子「そんなあ！こんな事なら、もつとお菓子を遠慮なく食べておけばよかった…」
凜 「最後の瞬間までそれなんだね」

ブライ「死ねええいつ!!」

卯月「ツ!？」

ズシャアアツ

卯月「——?？」

かな子「わ、私…、生きてる…?手も足も、目も鼻もちやんと付いてますか?凜ちゃん!」

凜 「まずは落ち着いて、かな子。どうやらダメージを受けたのは、私達じゃないみたい」

ブライ「うぎやあああああああつ!？」

青黒い血飛沫を迸らせながら、のたうち回る巨大ブライ。よく見ると、腕から先が断たれている。

かな子「一体誰が…?」

卯月「これは、トマホークですか?」

かな子「でも、こんなおつきなトマホーク、見たことありませんよ?」

凜 「……」

卯月「凜ちゃん？」

凜「…真ゲッター」

卯月「え…。あ、ブライの後ろに！」

ブライの背後に立つ影。

かな子「あれが、真ゲッターロボ…」

芳乃「お待たせしましてー」

卯月「芳乃ちゃんが操縦してるんですか!？」

芳乃「はいー。と言っても真の乗り手ではありませんぬがー」

かな子「真の乗り手？」

芳乃「無論ー。そなたらの事でしたー」

かな子「わ、私達…?」

芳乃「然りー。この力をー、そなたらに授けましょー。それがー、ゲッターの意思でしてー」

凜（ゲッターの意思…）

ブライ「真ゲッターロボか！よもや既に覚醒していようとは！ー」

凜（…やっぱり、ブライも真ゲッターの存在を知ってた）

ブライ「貴様らの思い通りになどさせるものか！死ねえええ!!」

芳乃「……」

巨大ブライが真ゲッターに迫る。

芳乃「……お願い致しますー。真ゲッター」

ブオンツ

真ゲッターが巨大ブライの腕を掴み、一本背負いのように放り投げる。

ブライ「ぐぬう……!?!」

かな子「今、芳乃ちゃんゲッターを動かしたんですか?」

卯月「さ、さあ……。通信のディスプレイからは、動いているように見えませんでしたけど……」

芳乃「これもまたゲッターの意思故ー。まだ死ぬことはー、許されていないのですー」
かな子「どう言うことですか?」

芳乃「時間は限られておりましたー。今のうちにー、こちらにお乗り換えをー」
卯月「分かりました。行きましよう、凜ちゃん、かな子ちゃん」

かな子「はいっ」

凜「……分かったよ」

ゲッタードラゴンを真ゲッターが担ぎ起こし、胸部中央のハッチから真ゲッターに乗り移る。

凜 「……これが真ゲッターのコックピット」

かな子 「何と言うか、あまり代わり映えしませんね」

凜 「……」

凜 （確かに、操縦系統はゲッタードラゴンからそのままだけど、モニターに映ってる出力の数値は桁違いだ。それに、この感じ……）

卯月 「コレが真ゲッターロボ……。真ゲッター1……！」

ブライ 「おのれえ……。真ゲッターの覚醒を阻止できなかつたとは！」

ゆつくり身を起こした巨大ブライと対峙する。

芳乃 「——ゲッターGを再起動致しましてー」

卯月 「芳乃ちゃん、ゲッタードラゴンは大丈夫ですか？」

芳乃 「損傷が激しくー、戦闘には参加できませんがー。何とか持ち帰ることは出来るでしょー」

卯月 「それじゃあ、ドラゴンをよろしくお願いします」

芳乃 「承りましてー。このゲッターにも、まだ使命が残されております故にー」

凜 （……）

ブライ 「こうなれば、例え我が身朽ち果てようとも、ゲッターを滅するのみ！」

凜 「卯月、ブライが来る！」

卯月「はいっ！」

ブライ「うおおおおお——ッ!!」

たちまちに切断された腕部が再生する。

かな子「なんて再生力なんですか!？」

凜「生半可な攻撃じゃするだけ無駄だったってこと…」

卯月「それでも、真ゲッターロボなら！」

卯月(真ゲッターに乗り込んでから、力がドンドン奥から湧いてくる…！これなら！)

卯月「いきますッ!!」 グンツ

バオツ

かな子「——!？」

横に平行移動して見せた真ゲッター1。軽く数十メートルを一瞬で移動し、壁に激

突。

卯月「痛たたた…」

凜「何やってんの…卯月…」

卯月「ち、違うんです！ほんのちよつとレバーを倒しただけで、こんなに移動して…

！

凜「操縦感覚が繊細なの…?」

ブライ「まだ乗りこなせていないようだな！それならば……！」　グアツ
卯月「ツ!？」

巨大ブライの火炎放射を平行移動で回避するが、再び壁に激突し、落下。
かな子「あうっ!」

卯月「全然感覚が掴めない……!?このままじゃ……!」

芳乃「一先ず落ち着いてくださいー」

卯月「よ、芳乃ちゃん!」

芳乃「瞳を閉じー、ゲッターを感じるののでしてー」

卯月「瞳を、閉じる——」

芳乃「真ゲッターを御するのは、力に非ずー」

ブライ「何をするつもりか知らんが、好きにはさせんぞ!」

巨大ブライが来る。

凜「卯月ツ!」

卯月「——」

芳乃「心で感じるののでしてー。その透き通った心でー、ゲッターの声を聞くの
てー」

卯月（——…ゲッターを、感じる……心で!）

一瞬、全ての時が停止したような感覚。何かに導かれるように、心の意識は宇宙へ。

卯月（宇宙……。宇宙のように広い……。これがゲッターの意思……。?）

卯月（……。違う。これは、真理）

卯月（そっか……。こんな……。こんな簡単な事だったんだ——！）

スウ……

目を開ける。目前に巨大ブライが迫る。

かな子「卯月ちゃん！」

ブライ「宇宙のために、死ねええええ!!」

卯月「——ッ」

ガキイン……

卯月「……」

ブライ「!?」

巨大ブライの剣を、ゲッターレザーで受け止める。

ギ……ギギ……

ブライ「このっ！……このおっ!!」

前後上下。剣を動かそうと力を加えるが、ゲッターレザーの合間に挟み込まれた剣は、ピクリとも動かない。

ブライ「どういう事だ!？」

卯月「宇宙のために、滅びる」

ブライ「？」

卯月「それは、貴方達の方です!」グオンツ

剣を掴んだレザーを振るい、剣を破壊。

卯月「やああああ——!!」

反対のゲッターレザーを振り下ろし、巨大ブライの体を袈裟に切り裂く。

ブライ「うおおおお…っ!？」

卯月「ゲッターア——トマホオオオクツ!!」

肩の突起部分から、身の丈より長大なトマホークを取り出す。

卯月「——ツ!!」

かな子「——ツ!？」

シユンツ　ズバァッ

巨大ブライの背後に回り込み、刹那の間にトマホークを振るう。

ブライ「ゴハァア…アッ…!」

胴体か腰、中央と切断され、鮮血を飛沫かせる。

凜「——…い、今…どうやって動いたの…?」

かな子「ゲッターが動いたのも、トマホークを打ち込んだのも、まるで分かりませんでした…」

凜（動きが全く見えなかった…!?これが真ゲッターの…）

かな子「…あつ…鼻血が…」 タラ…

ブライ「は…ははは…ッ。畏しい…。やはり畏しい…ゲッターの力よ」

ブライ「ここまでの強力なパワー…。ひ、悲劇だ…。核以上の悲劇になるぞ…!」

卯月「…」

背後から大上段にトマホークを振り下ろしてトドメを刺す。

ブライ「ガッ…」

倒れ伏す巨大ブライ。

芳乃「感覚は掴めましてー?」

卯月「…はい」

かな子（卯月ちゃん…、何だか感じ変わったような…?）

芳乃「では、参りましょうー」

かな子「えっ?でも、まだブライの息があるんじゃない?」

卯月「大丈夫です。どのみちこの要塞も破壊しなくちゃいけませんから。一緒に」

かな子「…わ、分かりました」

卯月「じゃあ、行きましょう——」

茜「見てください！ゲッターが出てきますよ!!」

美穂「ほ、ホント…?!卯月ちゃん…無事だったんだ…」

アーニヤ「ワタシ達の勝利、ですか？」

瑞樹「まだ百鬼要塞の始末が残ってるわよ」

未央「それなら、ここにいるゲッターの力を合わせて…」

ニオン「待て。様子が変だぞ」

未央「え…?」

バツ

ゲッタードラゴンを後方に下がらせ、真ゲッター1が百鬼要塞と対峙する。

卯月「……」

奈緒「1機で要塞を落とすのか!？」

美波「でも、どうやって…?」

——…んだ……。

李衣菜「——え?」

——ストナーサンシャインを使い!!

卯月「——はいっ！」

カッ

かな子「きやつ…！な、何ですか…？」

凜「ゲッターエネルギーが、真ゲッターを中心に集束してる…。しかも、とんでもない量…！これは、まるで太陽…！」

かな子「そ、そんなの制御できるんですか!？」

凜「…分らない。けど、私達で支えるしかない」

卯月「信じてください」

かな子「卯月ちゃん？」

卯月「ゲッターの力を信じるんです！」

かな子「は…はいっ！」

グオオオオオオオオ——ッ

卯月「——」 スウ…

卯月「ストナアアアア——ッ!!」

卯月「サアアアアア——ッ!!」

卯月「シャアアアアア——ッ!!」

広げた両腕に集束した膨大なゲッターエネルギーの塊を、百鬼要塞へ放り投げた。

ゴール『行こう。もうすぐ時が動き出す』

ブライ「……。分かった。共に行こう、我が友よ」

ブライ「さらばだ人類。ゲッターに選ばれし者達よ——」

ドワオ——

——。

光が収まり、百鬼要塞は、跡形残さず消え去っていた。

奈緒「な、何だったんだよ……。今の……」

加蓮「何て言ったらいいんだろう……。太陽みたいに、眩しくて、すごいキレイだったんだけど……」

アーニヤ「пугающий……怖い……?」

加蓮「うん……。そうなんだろうね、多分。この感じって……」

李衣菜「……ストナーサンシャインだ」

奈緒「は?」

李衣菜「ストナーサンシャインを使ったんだよ」

奈緒「何だよ、それ?」

李衣菜「え……? 何って……」

奈緒「だーかーらー、真ゲッターなんて、あたしらさつき見たばっかりだろ? なのに

何でお前がストナーサンシャインなんて技名まで知ってるんだよ？」

李衣菜「それは……何でだろ？」

加蓮「テキトーに言っただんじやないの？」

李衣菜「テキトーじゃないって！でも……」

加蓮「でも？」

李衣菜「さつき、誰かから教えられたような……。誰なのか、全然知らないけど……」

凜「これが、真ゲッターの力……」

かな子「こんな力って……、こんなものって……！」

卯月「……」

芳乃（……覚醒の時は相成りまして……。真ゲッターロボ）

芳乃「しかし、戦いはこれで終わりではなく……。新たな戦いが、戦いを引き連れ、皆さんの前に現れるでしょう。——彼方より」

第2部 完

つづく

幕間 『真編』

前編 『虚空からの襲撃者』

作業員『……このパネルはダメだな……。マーク！そっちはどうだ？』

作業員2『ダメだ！第2、第4パネルもイカれちまつてる！』

作業員『つたく、百鬼帝国との戦いが終わったばっかだったのに勘弁してほしいぜ！』

作業員3『ボヤくなボヤくな。それよりとつとと作業終わらせて、地球を見下ろしてのティータイムといこうぜ』

作業員2『そいつはいい！こんな時でもないで見下すなんてできないからな！』

作業員『流石に女房の尻に敷かれ続けるのも飽きたってか？』

作業員2『まさか。俺の女房は安産型で、そりやあもう最高の座られ心地だぜ！』

作業員『へーへー。ごちそうさんで』

作業員3『お前ら真面目に作業しろよ……。——ん？』

作業員『？ どうした？』

作業員3『ありやあ…何だ？』

作業員2『え…？——あああああ——!？』

〱。
 〳〳〳 東京都内 〳〳〳

——百鬼帝国との戦い決着から一ヶ月。

美波「——アーニヤちゃん、用意はいい？」

アーニヤ「Dia…やつとここまで、これましたね！」

美波「ええ！みんなに見てもらいましょう！ラブライカのステージを！」

アーニヤ「最高のライブ、最高の思い出しにしましょうね！」

桃華「ラブライカのお二方、出番ですよ」

美波&アーニヤ「はいっ！」

千枝「美波さんとアーニヤさんのライブ、千枝もここから応援してますっ！」

美波「ありがとう。私達も、L・M・B・Gのライブ、楽しみにしてるわ」

仁奈「仁奈達ももちろん頑張るでござーますよー！楽しみにしてくだせー！」

アーニヤ「Dia…ワタシ達が、ファンのみんなを盛り上げて来ますね」

美波「それじゃあアーニヤちゃん、行くわよっ！」

ワアアアアア——

——ライブ会場。

みく「うおおおっ！ 始まったにや！ 美波ちやくんっ!!」

瑞樹「ライヴ前は色々言われてたけど、盛況なようじゃない」

菜々「ですね。ナナもお客さん、心配してたんですけど、杞憂だったみたいですね」
みく「まだまだライヴ会場はちっちゃいけど、こうやって少しずつでも日常を取り戻していったら、それでいいにや」 フンス

菜々「百鬼帝国も残党は確認されてないですよ？ なら、後はインベーターさえ何とかできればホントに平和ですね！」

瑞樹「…そうね」

菜々「？ どうかしたんですか？」

みく「どうせまた鉄甲鬼とか言う百鬼衆のことでも考えてたんでしょ」

瑞樹「違うわ。…ただ、本当にこのまま終わりなのかしら、なんてね」

菜々「まだ新しい敵が出てくるんですか？」

みく「そんな、地底からだって出てきたのに、これ以上ドコから出てくるって言うにや？」

瑞樹「そこよ。そもそも百鬼帝国だって、ドコから来たのか分からないわけでしょう

？」

菜々「確か、ブライは宇宙から飛来してきた宇宙船を改修して要塞にしたって、言っ

てましたね」

瑞樹「と言うことは、その宇宙船を作った存在が、この宇宙の何処かにいると言うことよ」

菜々「うう……。いい加減血生臭いこととは縁遠い存在になりたいですよ」

瑞樹「あら？卯月ちゃん達はともかく、私達は何時だって、ゲッターを降りてもいいのよ」

みく「戦いたくないなら、無理しない方がいいにや。引き際を誤ると、ズルズルと引つ張られてちやうよ？」

菜々「うう……。だ、ダメです！ゲッターを降りる時は、やっぱりみんなで一緒じゃないとー！」

みく「ま、それは一理あるにや」

瑞樹「ここまで一緒に来たんだものね。今更、お先に一抜け、なんて無責任なことは言えないわ」

菜々「ナナ達はもう、後戻りできないところまで来ちゃったんですね……」

美波「みんなー！ありがとうっ!!」

瑞樹「……と、辛気臭い話が過ぎたわね」

みく「そうにや！ライヴは楽しまなきや損にや！アーニヤちゃーんっ!!」

菜々「み、みくちゃん……！あんまり目立つような真似は……。ナナ達も一応、お忍びで来てるわけですから……」

瑞樹「取り敢えず、人数少ない目で来たのは正解だったみたいね」

菜々「まあ、ナナ達が非番だっただけで、後の人達はみんな忙しかったんですよ……。えつと、確か……」

瑞樹「丁度、今の時間は、早乙女研究所で真ゲッターロボへのエネルギー供給試験が行われてる頃ね——」

~~~~ 早乙女研究所 地下区画 ~~~~

早乙女「……」

凧 「……ゲッタードラゴンの増幅装置の調子は？」

所員 「良好です。真ゲッターロボの真ゲッター炉心への接続も問題ありません」

凧 「そう……。この実験が失敗すれば、研究所はもちろん、この辺り一帯が一瞬で吹き飛ばわけだから。扱いは慎重に」

所員 「はい」

主任 「そうならねえように、整備は万全にしてある。余程装置に負荷を掛けねえ限り心配はないはずですよ」

凧 「整備班の人達を疑ってるわけじゃないけど……」

所員 「早乙女博士、エネルギー供給準備完了しました」

早乙女 「うむ。では、真ゲッターへのエネルギー供給を開始してくれ」

所員 「はっ！」

ウウ…ウウンツ…

所員 「エネルギー供給開始ッ！」

主任 「各部に異常は？」

所員 「ありません！予定通り、順調です」

早乙女 「よし、エネルギーレベル上昇だ」

所員 「はっ！」

凜 「……」

ズオオオオオオツ——

「オオツ」

所員 「やった！真ゲッターのエネルギーがアップしてるぞ！」

早乙女 「真ゲッターのエネルギーレベルは？」

所員 「ゲイン50をいったところですよ」

早乙女 「ドラゴンの増幅器の出力を上げろ！」

所員 「こ、これ以上は無理ですっ！」

早乙女「80はいかんのか!？」

バスツ バスツ ボスンツ

主任「いけねえ!これ以上はドラゴンが爆発しちまう!」

凜「実験中止!エネルギー全面カット!」

所員「は…はっ!」

ヒユウウ…ウン…

…。

主任「…収まったか?」

早乙女「…ふう」

凜「今回の実験は、ここまでだね」

早乙女「…せめて80まではいきたいところだったが」

所員「しかし、前日の20%から考えると、一気に30%アップです。新記録ですよ!」

早乙女「記録よりも、事実を進めなければ。何の意味もない」

所員「ですが…」

主任「博士。それじゃあ、ウチらはこれから真ゲッターとドラゴンの点検作業に入ります」

早乙女「うむ。よろしく頼む」

主任「はい」

ツカツカ――

スタスタ

奈緒「よ」

凜「奈緒。加蓮に、李衣菜も。冷やかしに来たの？」

奈緒「違うって。定時の哨戒を終えた、報告に決まってるだろ？」

凜「…そう。で、結果は？」

李衣菜「いつも通り異常なし。快適なフライトだったよ」

加蓮「ま、インベーターが現れたりしたら、こっちにも連絡が来てるわけだけどね」

奈緒「そっちは…、また失敗か？」

凜「失敗じゃない。昨日より30%、エネルギーを上昇させる事が出来たよ」

奈緒「へえ。そりやスゴい」

李衣菜「そう言えば、最近研究所が賑やかだよね。何してるの？」

加蓮「…リーナ、今研究所で何してるか知らないの？」

李衣菜「え？ああ最近アイドル活動も忙しくなってきた色々てんやわんやだから…」

加蓮「まあ、実はアタシもよく知らないんだけど」

奈緒「お前らなあ…」

加蓮「じゃあ奈緒説明して」

奈緒「まったく…。いいか、分かりやすく科学的に言うのだな…」

李衣菜「うんうん」

奈緒「今のままじゃ、真ゲッターにエネルギーがどうしても足りないんだよ」

加蓮「どういう事？」

奈緒「真ゲッターロボな。アレ、メチャメチャエネルギーを使うらしいんだ。だから、研究所にあるゲッターエネルギーだけじゃエネルギーが賄えなくて、真ゲッターも本来の性能を引き出せない」

加蓮「ふうん」

奈緒「そこで、早乙女博士達が考えた訳だよ」

李衣菜「分かった！ゲッタードラゴンのゲッター線増幅装置を使ってエネルギー供給するんだね？」

奈緒「…っ」ズコッ

奈緒「まあ大体分かりやすく言うとなんな感じだよ…」

加蓮「それで、真ゲッターは本来の性能を發揮出来るの？」

奈緒「一応、理論上はな」

凜 「…確かに、分かりやすく科学的な説明だったね」

奈緒 「…いい、いやああたし、理系とか専門外だから、こういう説明はどうも…」

凜 「ううん。専門外にしては分かりやすく、いい説明だったと思うよ。…肝心なところは李衣菜に持っていかれたわけだけど」

奈緒 「それは言わないでくれよ…」

凜 「けど、ゲッタードラゴンの増幅装置を使っても、エネルギーを100%にする事は出来なかった」

早乙女 「宇宙から降り注ぐゲッター線を集めるだけでは、真ゲッターにエネルギーを満たすのに3年はかかってしまう」

李衣菜 「さ、3年…!? 3年後っていったら、私も奈緒も大学生だよ？」

加蓮 「そんな時間は、待ってられないって訳ね」

奈緒 「その割りには凜、何か一安心って感じじゃないか？」

早乙女 「……」

凜 「元々、真ゲッターを使う事には反対だよ」

李衣菜 「そうなの？でも、真ゲッターがあればインベーター相手もグツと楽になると思うけど…」

凜 「インベーター相手に、手段なんて選ぶ必要なんてない。だけど、真ゲッターの力

は明らかに私達には過ぎた力だと思う」

加蓮「そうだね。百鬼要塞を一撃で吹き飛ばしたのも、あれでまだ本来の力を出きってなかったって訳だもんね」

奈緒「だとしたら、真ゲッターが100%…本来の性能を引き出したらどうなるんだ？」

凜「…早乙女博士。今までずっと黙ってきたけど、やっぱり真ゲッターは封印するべきなんじゃないの？」

早乙女「……それは出来ん」

凜「どうして？」

早乙女「これからの戦いには、真ゲッターの力が必要になるからだ」

凜「……。インベーダー相手には、ゲッタードラゴンだって成果を上げてる。博士はこれ以上の敵が現れると、そう思ってるの？」

早乙女「お前達には、まだ分かんらん」

ツカツカ「……」

凜「……」

李衣菜「ま、まあ真ゲッターの本来の力がどういうモノなのか、まだ誰も分からないんだしさ。余計な心配しすぎじゃない？」

凜 「…万が一が起きた時、その時はもう手遅れかもしれないだよ」

奈緒 「凜…」

所員 「渋谷さん。そろそろ時間です」

凜 「もうそんな時間？分かった。すぐに支度する」

加蓮 「これからお出掛け？」

凜 「お出掛けって言うか…。新研究所の方で、新型ゲッターの最終テストなんだ。それに立ち会ってくる」

加蓮 「忙しいね。倒れない程度に頑張りなよ」

凜 「うん。せっかく倒れるなら、かっこよくライヴ中がいいかな？」

奈緒 「あたしらに迷惑かかるような事言うのやめてくれ…」

ウウウウウウ…！

未央 『インベーターが接近してるよ！待機してるリーナ、かみやん、かれん！スクラブル出撃だよ——！』

凜 「やっぱり来たか…」

加蓮 「ゲッター線増幅装置を使ってエネルギー実験してるんだもんね。こっちから呼び寄せてるようなもんか…」

奈緒 「って言うか今管制室にいるの未央なのか…」



李衣菜「名指しで指名されたね。急がなくてちや！」

凜「こつちの相手は取り敢えず任せるよ。何かあつたら、呼んでくれれば」

李衣菜「こつちは任せて！インバーダーなんてネオゲッターでちよんけちよんにしてやるからっ！」　タツ

奈緒「とにかくゲッターに急ぐぞ！そんな時間もないはずだしな」　ダツ

加蓮「それじゃあ凜も気を付けてね」

タツタツタツ…

凜「…さてと、私も急がなくてちや」

李衣菜「はっ、はっ、はっ…！…あ」

芳乃「……」

李衣菜（えつと…、あの子って確か…）

芳乃「依田は芳乃、でしてー」

李衣菜「わあっ!？」

芳乃「何故そこまで驚くのですしてー？」

李衣菜「え…あ、つと、ごめん。まさか気付いてると思わなくて…」

芳乃「この場がにわかに慌ただしくなっております。虚空より破壊者が来るので

しよー？」

李衣菜「破壊者……。まあ、インベーターにはピッタリだと思っけど……」

芳乃「……」

李衣菜「えつと、真ゲッターを見てるの？」

芳乃「はいー。その目をー」

李衣菜「目……？」

李衣菜（そう言えば、意識して見た事なかったな……。真ゲッター、カメラアイに目があるんだ）

真ゲッター「……」

李衣菜「真ゲッターの、目……」

真ゲッター「……」

李衣菜（何だろ……。ずっと奥まで引き込まれるような……。ゲッターの目の奥……）

真ゲッター「……！」

李衣菜「……げ、ゲッターは何を見てるの？」

芳乃「全てをー」

李衣菜「全て？」

芳乃「過去、現在、未来ー。その中にある生命の巡りをー。一所より出でー、同じ場

所に還ってゆくー。その巡り合わせの中にあるもの全て、でしてー」

李衣菜「??……?難しくて分かんないや」

奈緒「おい!李衣菜ツ!何してんだ早く出撃するぞー!!」

李衣菜「ご、ごめん……!そうだったインベーターが来てるんだった。急がなきゃ!」  
ダッ

芳乃「……」

芳乃「……。いずれ分かるのでしてー。この生命と存在を賭ける戦いの只中にいれば  
いずれー……」

~~~~~ 衛星軌道上 ~~~~~

卯月「——ッ!」

コックピット内。急上昇による重力圏からの離脱で、機内の計器や機器が細かく振動
する。

卯月「~~~~~!」

ブレる計器を確認し、ペダルと操縦桿を操作。機体を急停止。

バツ

宇宙に向かうように手足を広げ、大の字に宇宙に存在を示す。

卯月「……研究所の格納庫から、単機での大気圏離脱までに32秒……」

卯月（…遅いな）

晶葉『どうだ、卯月？新型の、ゲッターD2の具合は？』

卯月「え…？あ、はい！良好だと思えますよ…？」

—— 新早乙女研究所 管制室。

晶葉「そうか。そちらでゲッターに異常は確認出来るか？」

卯月『いえ、今のところ特にはありません』

凜「D2のエネルギー出力は？」

所員「今のところ、セーフティゾーンをキープしています。暴走の危険性はないかと」

凜「…そう」

晶葉「よし。そのまま軌道上での機動テストを開始してくれ」

卯月『分かりました！島村卯月、飛行テストも頑張りますっ！』

凜「取り敢えず、テストは何事もなく済みそうだね」

晶葉「ああ。実際、操縦は基本に忠実。それでいて限界性能を引き出せるんだ。卯月

以上にゲッターのテストパイロットに相応しい奴もそうはいないな」

かな子「何はともかく、完成して良かったですね。ゲッターD2」

かな子「——っ！あいたたたあっ…」

莉嘉「もうっ！だから急に動かないでっって言ってるのにいっ！」

かな子「ご、ゴメンね、莉嘉ちゃん」

凛「…さつきから気になってたけど、その足の包帯、どうしたの？」

かな子「はい…。レッスン中に足を挫いちゃって…」

莉嘉「それで全治一週間くらいだって」

晶葉「成る程な。大事じゃなかったただけ良かったじゃないか」

凛「まったく、何時も怪我だけは気を付けて、って言ってるのに…」

かな子「ごめんなさい…」

莉嘉「ライヴも近いから、張り切りすぎちゃったんだよ！ね？」

晶葉「そうか…。ライヴには間に合いそうなのか？」

かな子「はい…。ぶっつけ本番になるかもしれないですけど」

晶葉「それなら安心だな。ぶっつけ本番には慣れているだろう？」

かな子「な、慣れてるわけじゃないですよ…？」

凛「ともかく、足がそれなんじゃしばらくゲッターには乗せるわけにはいかないね」

かな子「う…はい…」

晶葉「まあ、何時インベーターが攻めてくるか分からないとは言え、ゲッターD2が完成すれば戦力の穴は埋まる」

莉嘉「そうなの？」

凜 「今のところ、ゲッターD2は1人で操縦出来るように調整してあるからね」

美穂 「確か、前に晶葉ちゃんが使ってたドラゴンを改造したんだよね？だから？」

晶葉 「それもある。が、合体機構をなくす事で、機体の構造強度自体を高める事が出来るのは、量産型ドラゴンで証明されたからな」

凜 「変形出来なくなつたから局地戦闘能力は落ちるけど、その分、単体での能力を高めるって事だよな」

晶葉 「うむ。卯月に合わせて改良したゲッター線増幅装置も良好のようだし、当面の問題はクリアされたわけだ」

凜 「出来れば、真ゲッターを使うのはなるべくなら避けたいからね……」

晶葉 「あの力は過剰だ。政府の方でも、諸外国から圧力があつたらしいし、直に真ゲッターロボは封印されるだろうな」

茜 「折角造つたのですし！少しもつたない気もしますね！」

凜 「必要以上の力を使わないに越したことはないよ」

P r r r r …

晶葉 「……こちら早乙女研究所。……はい、分かりました。念のため警戒しておきます。

では——」

ガチャッ

美穂 「誰からだったんですか？」

晶葉 「橘研究所だ。N I S A R 北米支部の人工衛星と、連絡が取れなくなったらしい」
茜 「？ その連絡がどうしてここにまでくるんですか？」

晶葉 「連絡が取れないくらいなら問題も小さいんだがな…」

凜 「何かあったって事…」

晶葉 「人工衛星は、軍事衛星のレーダーからも姿を完全に消したらしい」

かな子 「それって…！」

晶葉 「恐らくは撃墜された…。何者かによつてな」

茜 「インベーター以外の敵があり得るんですか!？」

凜 「インベーターはゲッター線を狙う」

晶葉 「それに対して、今回消えた衛星は、ゲッター線とは無縁の衛星だ。インベーターに襲われる理由はない」

晶葉 「今N I S A R 北米支部の方では、原因を調査中だ。まずはその結果を待とう」

卯月 『それなら、私が行きましようか?』

凜 「卯月…。聞いてたの?」

卯月 『はい。ゲッターD2は今丁度衛星軌道上にいますし、衛星が消えたポイントの座標を送ってもらえれば…。機動テストのついでにもなります!』

凜 「どうするっ？」

晶葉 「ふむ…」

莉嘉 「危なくない？あのゲッター、完成したって言っても実戦テストもしてないじゃん！」

卯月 『莉嘉ちゃん、心配してくれてありがとうございます。でも、このまま何もしないでいるのも落ち着かないんです』

晶葉 「…確かに、仮に未知の敵襲だとしても、事前にデータ収集は必要か…」

凜 「決まりだね」

卯月 『分かりましたっ！』

美穂 「卯月ちゃん…、無茶はしないで…」

晶葉 「美穂の言うとおりだ。もし戦闘状態に入ったとしても、試作機は絶対に持ち帰ってくれよ」

卯月 『はいっ！それでは、ゲッターD2北米方向に進路を変えてテストを続行します！』

晶葉 「衛星の座標データは今送る」

晶葉 「…北米支部に連絡を忘れるなよ。後々の混乱は避けたいからな」

所員 「はっ！」

美穂 「な、何だか慌ただしくなってきたね…」

茜 「むう…！嫌な予感がしますッ！」

美穂 「何事も無いといいんだけど…」

かな子 「……」

莉嘉 「かな子？卯月が心配？」

かな子 「うん…。でも、きつと大丈夫だよ」

莉嘉 「そうだよ☆何たって百鬼帝国だってやつつけちやつたんだもん！今更どんなのが来たってへつちやらだよ！」

かな子 「うん。そうだよ。…きつとそう」

かな子 （卯月ちゃん…）

――。

卯月 「――…そろそろ座標地点です」

晶葉 『分かった。そっちのリーダーになにか反応はあるか？』

卯月 「いえ、まだ何もありません」

晶葉 『こちらと同じだ。だが、警戒は怠るなよ』

卯月 「了解ですつ。…あ、何か見えてきましたよ。あれは……」

晶葉 『……衛星の破片か…。これで、衛星が何者かの襲撃を受けた事は確定したわけ

か』

卯月「……」

晶葉『今回ばかりは卯月の責任じゃない。あまりに気に病むな』

卯月「……はい」

晶葉『周囲にあるのは残骸だけか？』

卯月「ちよつと待つてください……。：熱源反応があります」

晶葉『熱を発する反応だと？衛星の動力がまだ生きてるのか？』

卯月「分かりません。丁度、この真上……」

ゲッターD2が宇宙を見上げる。そこには、

卯月「何ですか？…アレは」

晶葉『……。姿はセミの幼体に似ているな……』

卯月「どうしてそんなのが宇宙にあるんですか？」

晶葉『私にも分からん。近付けるか？』

卯月「行ってみます」

少しずつ高度を上げ、目標と同じ位置に。

晶葉『昆虫にしては大きいな……。ゲッターとほぼ同サイズとは……』

卯月「これ、何で出来てるんでしょう？機械みたいにも、そうじゃないようにも見え

ますよ?」

ジジ…

卯月「動きました!」

晶葉『動いた…?生きて、いるのか…?』

卯月「どうでしょう?攻撃しますか?」

晶葉『待て!こちらから仕掛けるのは危険だ』

卯月「それなら…」

晶葉『ゲッターの映像からでは判断できない。抵抗が確認できなければ、研究所まで確保してくれ』

卯月「りよ、了解です…!」

腫れ物に触れるように、慎重にゲッターD2の腕を目標へ。

ジジ…ジジ…

『ゲッター…。ニン…ゲ…ン…』

卯月「喋った!?!ゲッターの事を言ってる…?」

晶葉『今のは通信じゃないぞ?一体どうやって…』

『ニン…ゲン…。霊長…。貴様らが、霊長だと…』

卯月「え?…え…?何の事ですか?どういう事なんです!」

『ふぎけるな!!』

バキイッ

卯月「きやつ!?!」

セミの幼体の背中が割れ、中から何かが弾け飛ぶ。

卯月「な…何があつたんですか…?今のは一体…」

晶葉『卯月!早く態勢を立て直せ!アレは——!』

晶葉『機械仕掛けのセミだ!』

卯月「!?!」

セミ『我らこそ、霊長!』

晶葉『向かってくる!奴は敵意を持った敵だ!迎撃しろ!』

卯月「分かりました!——…ツ!」

正面に飛び込んできたメカセミを、両腕をクロスさせて防御。

卯月「くくく…!…速いツ!?!でも!」

卯月「ゲッターライフル!」 ジャキーンッ

ゲッターD2の手首から、銃身の長いライフルを取り出し狙いを定める。

卯月「!」 バシユウッ

セミ『——!』 ヒュンッ

卯月「躲された!?——!」

その後も偏差をつけて2、3度射撃を繰り返すが、全て躲される。

晶葉『なんて速さだ……!ゲッターD2を上回るとはな!』

卯月「…まるで後ろに目でもついているみたいですね」

セミ『……』

卯月「?」

ゲッターD2に向き直ったメカセミが、左右の羽を高速に振動させる。

卯月「……きゃっ!」

羽の振動で発生した振動波を、ゲッターD2を翻して躲す。

卯月「あ、危ない所でした……」

セミ『……!』

卯月「射撃がダメなら……!」

卯月「ゲッタートマホークツ!!」

ゲッタートマホークを抜き打ち、メカセミに対する。

セミ『!!』

卯月「うっ!」

体当たりしてきたメカセミを、トマホークで向かい打つ。

セミ『ギ…ギ……!!』

卯月「くくく! 固い…!」

セミ『滅せよ! ゲッター!!』

卯月「くくく…!!…やああつ!!」

ガキインツ

トマホークを振り抜き、メカセミを弾き飛ばす。

卯月「はあ…。な、何とか躲せましたけど…」

卯月「今の一撃だけで、トマホークが壊れちゃいました…。残りの予備は一本…」

卯月「このゲッターじゃ…。厳しいかもしれせん…!」

—。

美穂「卯月ちゃん!」

凜「マズいね…。一旦戻したら?」

晶葉「言っても聞かないだろう。間違はなく、アイツが衛星を破壊した犯人だ」

凜「でも、あのスピード…。ライガーと同じか、それ以上…」

茜「美穂ちゃん! 私達も出撃しましょう!」

美穂「でも、アーニヤちゃんがないよ…」

茜「ゲッター烈火だけで何とかします! このままでは卯月さんが…」

『ならん!!』

凜 「……!早乙女博士!」

早乙女 『ゲッター斬は今出撃してはならん』

茜 「何故ですか!博士!」

早乙女 『奴等は次元を越えてやってきた!ゲッターを倒すために!』

晶葉 『次元を越えて……?確かに、衛星でも月の基地でも、その動きを察知する事ができなかつたが……』

早乙女 『お前達の常識の通じる相手ではない!』

茜 「なら……のまま黙って見てればいいんですか!?そんな事できませんっ!!」

美穂 「あ、茜ちゃん……!待って!」

早乙女 『止まらんか!!』

茜 「!!」

早乙女 『……。晶葉くん、凜くん。真ゲッターロボを起動させる』

晶葉 「ですが、あの力は……!」

早乙女 『あの敵は真ゲッターでなくては倒せん!例え倒せたとしても、多くの犠牲が出る!』

早乙女 『犠牲を抑えて勝利するには、真ゲッターの力を使うしかないのだ!!』

晶葉 「しかし……！」

凜 「分かったよ」

晶葉 「凜……！」

凜 「今更、力なんて恐れないよ。例え危険な力だったとしても、それは使うものの気持ち次第で何とかなる」

早乙女 『納得してくれたか』

凜 「勘違いしないで。私は卯月を助けたい。そのために真ゲッターを使えって言うなら、そうするだけだよ」

早乙女 『今はそれでいい。真ゲッターは既に研究所を発っている。直に君の元に着く』

凜 「分かった」

かな子 「あの、私も……」

凜 「かな子は怪我の療養に専念して」

かな子 「そんな！こんな怪我くらい、何ともありませんっ！」

莉嘉 「ダメだよ！これ以上悪化したら、ライヴにも出られないって、先生にも言われたじゃん！」

かな子 「ライヴ……！それでも、卯月ちゃんの命には変えられません！」

早乙女『心配するな。かな子さんの事情も、こちらで把握している』

早乙女『既に3号機には、こちらでパイロットを乗せて、そちらに向かわせている』
かな子「そ、そうなんですか……」

早乙女『凜ちゃんと卯月くんにははじめて合わせてもらう事になるが、上手くやってくれ』

凜「分かった。かな子の分も頑張ってくるから。ここで待ってて」

かな子「……はい」

凜「それじゃ、行ってくる」

――。

バサアツ

凜「……真ゲッター……。本当にこの力が必要になる時が来るなんてね……」

「お待たせいたしましたー」

凜「……芳乃……、3号機に乗ってるの？」

芳乃「如何にもー。此度はわたくしがー、かな子さんの代わりを勤める次第ですー」

凜「最初に真ゲッターを私達に届けたのも芳乃だったっけ」

芳乃「では参りましょー。卯月さんも凜さんもー、ここで失われてはいけないのはー、変わらないのでしてー」

凜 「……うん。よろしく頼むよ」

着陸した真ゲッター1に、素早く乗り込む。

芳乃 「ぱいろつとすーつというものはー、少々キツくー。息の詰まるものでしてー」

凜 （そう言えばパイロットスーツはすっかり着てるんだ……。何か新鮮）

芳乃 「してー、如何様に参りましたよー？」

凜 「……先ずは卯月に合流するのが先だ。1号機はまだ無人だから、自動操縦にして、ゲッター2で行くよ。こっちに合わせられる？」

芳乃 「お任せをー。この身は既にゲッターに委ねております故ー」

凜 「……言ってる事はよく分かんないけど、ともかく分離するよ」

凜 「オープンゲットー！」

真ゲッター1を分離させ、真ジャガー号を先頭に、隊列を変更。

芳乃 「……」

瞑想するように、瞳を閉じ、シートの中央で手を合わせている。

凜 （操縦桿に触れないで……。思念でゲッターを動かしてるとで言うの？）

芳乃 「ゲッターに意思を伝えー、応じてもらっているだけでしてー。何も難しい事ではなくー」

凜 （……こっちの考えを読むのもデフォルトって訳……。でも確かに、機械とは違うけ

ど、正確な動き…)

芳乃「それでは参りますよー？」

凜「何時でもいいよ」

芳乃「ではー」

先に真イーグル号とドッキングした真ベアー号と合体。

凜「チエンジゲッター2ツ！」

しなやかに細い両脚が伸び、僅かに盛り上がった肩に、右は巨大なドリル、左はハサミのような爪。旧ゲッター2に姿が酷似した真ゲッター2に変形する。

凜「うおお——！」

背中の大型ブラスターが火を噴き、加速。

凜「——ツ!？」

凜（やっぱりライガー以上の加速…。けど、使いこなしてみせる…!）

凜「…ツツ! ああああ——ツ！」

ドリルアームを突き出して、大気を切り裂くように進んでいく。

凜（待ってて卯月…。今、行くから…!）

——。

卯月「——!!」

ガギンツ ガギンツ

ゲッターD2が、肉薄するメカセミ相手に刃こぼれしたトマホークで応じている。

セミ『!!』

卯月「きやあつ!?!」

メカセミの前脚の攻撃に、トマホークが根本から折れる。

卯月「つ……!これ以上は……」

セミ『終わりだ!ゲッターの眷属!!』

メカセミの両前脚が振り下ろされる。

卯月「きやあああああつ!!」

ゲッターD2は勢いのままに落下。衛星軌道上の高々度から、天高く煙柱を生む衝撃を放って地面に墜落。

卯月「……!! ゲッターD2はもうダメですか……!?!」

「卯月ッ!」

卯月「その声は、凜ちゃん!」

凜「まだ生きてるの!?!」

卯月「はいっ!ゲッターD2はダメになっちゃいましたけど……」

凜（ゲッターに乗った状態で、あの高さから落ちて無事……?）

卯月「真ゲッターを持ってきてくれたんですか？」

凜「うん。3号機には芳乃が乗ってる」

芳乃「よろしくお願い致しますー」

卯月「そうですか…。分かりました！今、そっちに乗り換えます」

ゲッターD2のハッチをこじ開け、真ゲッターに乗り移る。

凜「本当に大丈夫なの？」

卯月「はい！この通り、ピンピンしてます！早速真ゲッターに合体しましょう！」

芳乃「凜さんもここまでの移動でお疲れでしょー？ここは卯月さんに任せた方がよろしいかとー」

凜「…分かった。頼んだよ、卯月！」

凜「オーブンゲットツ！」

卯月「チェーレンジゲッターアーーツ!!」

真イーグル号を先頭に、真紅の手足に胸部。真ジャガー号の白を同体。旧ゲッター1に姿は酷似するが、コウモリや竜のような黒く大きな翼を担った真ゲッター1が姿を現す。

卯月「よし…。このゲッターなら、真ゲッター1なら…！」

凜「卯月、真ゲッターは早乙女研究所でエネルギー供給を受けて出力が上がってる。

扱いは……」

卯月「ゲッターバトルウイングツ!!」 バサッ

ドッ

凜「——!?!」

真ゲッター1が翼を羽ばたかせ急上昇。瞬く間に地上は世界地図の様相となり、周囲の景色は仄暗い宇宙へと。

凜「——……ッ………つはあ………はあ………はあ………い………今………意識が飛んでた……?」

卯月「真ゲッターロボなら、もう負けませんっ!」

芳乃「目標を捉えましてー。右上方40度ー、距離150でしてー」

卯月「ありがとうございますっ、芳乃ちゃん!」

芳乃「お構い無くー。卯月さんはー、心行くままにー、戦ってくださいー」

卯月「はいっ!そうさせてもらいます!」

凜（なんて上昇速度……。かな子じゃないけど、鼻血が出てきた……） タラア……

卯月「ゲッタートマホーク!!」

真ゲッター1が、柄の長い、長大なトマホークを両手に握る。

セミ『——!!』

両前脚を振り上げて、メカセミが来る。

凜 「——ッ!？」

卯月 「ッ！」 クンッ

トマホークの柄で、メカセミの前脚を受け止め、

卯月 「はああッ!!」

勢いよく薙ぎ、メカセミを打ち払う。

セミ 『ギギイ……!』

卯月 「！」

態勢を直し、対峙しようとする途上のメカセミに追隨。

セミ 『!』

卯月 「やあッ!!」

ズアッ

横一閃。散々武器として扱ってきた前脚を切断。

卯月 「ッ！」

くるり、と手首で柄を回転させ、上段に持ち上げたトマホークを一気に振り下ろす。

ザンッ

縦一閃。メカセミの本体を頭部から後部に掛けて真つ二つに切り裂く。

セミ 『ギ……ギヤア……。よ、よくも……ッ』

卯月「……」

芳乃「二件落着、でしてー」

凜「……！……」

凜（私だけ…、状況に着いていけてなかった…）

セミ『しかし…！これでは終わらん！私の…我々の意志は…ツ！——』

メカセミはそこで事切れた。

凜「コイツ…死んだの…？」

芳乃「死んだ、という言い方が正しいのかは分かりかねますが、倒したものとみ

てー、間違いはないでしょー」

卯月「あの最後の言葉…、どういう意味だったんでしょうね」

芳乃「それは直に分かりましてー」

凜「…ツ！？晶葉、聞こえる？…これって…！」

晶葉『ああ、こちらでも状況を観察しているが…、こんなものをこの目で見る日が来

ようとはな…』

凜「空間が、歪んでいく…！」

卯月「まるで、SF映画みたいですね！」

凜「みたいじゃなくてまんまだよー！」

芳乃「彼方よりの襲来者ー、来たりてー」

空間を歪めて、奈落の底のように奥の見えないワームホールを抜けて、それは姿を現す。

晶葉『これは…材質も構造も理解できないが…、戦艦、なのか?』

凜「さっきの奴と雰囲気似てる…?」

「艦蟲長! ワープアウト成功です!」

卯月「あの戦艦からの声ですか!?!」

「うう…っ! 我々の他、友軍は幾つ残った!?!」

「…友軍反応…ありません!」

「な、何だって!?!」

「恐らく、他の艦は時空の歪みに巻き込まれ、消滅してしまったものトー!」

「我々だけが残ってしまった…違うな。他の友軍が盾となり、我々を繋いでくれたのか…」

「か、艦蟲長! アレを…!」

「アレは、真ゲッターロボ!」

「おのれ…。この時間軸で既に真ゲッターの覚醒は果たされてしまったか…!」

「ど、どうするんですか!?!」

「……。戦う。戦わねばならん！」

「しかし……！真ゲッターの覚醒を阻止できなかった時点で、我々の作戦は失敗したも同じです！」

「まだまだ！例え真ゲッターがいたとしても、ゲッターの起源、そこを絶てばまだ我々に勝機はある！」

「我々は勝たねばならんだ！我々をこの時代に送り出してくれた同胞達のため……、何より、我々の宇宙の未来のために、ゲッターとその眷属は葬らねばならん！！」

「全艦戦闘配置ツ！！我々の持てる戦力をもつて真ゲッターロボをこの宙域に釘付けにする！」

「同時に、攻撃部隊発進！早乙女研究所に辿り着き、その全てを破壊するのだ！！」

「了解ツ！！」

凜 「戦艦が動いた！来るよ、卯月！」

卯月 「と言うことは、あれもやっぱり敵……！」

真ゲッターがトマホークを構え直すと同時、戦艦からの無数のメカセミの軍団が放たれる。

凜 「これはまた……、大した歓迎だね……！」

卯月 「何機かはこっちじゃなくて違う方に飛んでいってます！」

芳乃「彼らの狙いはー、早乙女研究所ー」

凜「本当なの!?!」

芳乃「彼らは時空を越えて訪れしー、進化を拒みし者ー。この宇宙を悪意で満たす者ー。放っておいてはなりません」

卯月「——ッ!」

セミ『行かせぬ!!』

メカセミの軍勢が、真ゲッター1の前に立ち塞がる。

芳乃「やはりー、易々とは行かせてはくれませんねー」

凜「能天気と言ってる場合!? 研究所が危ないかもしれないんだよ?」

芳乃「その為にもー、まずは振りかかる火の粉を払うのが先決でしてー」

卯月「分かりましたっ!」

真ゲッター1のトマホークが唸る。

セミ『ギイ!』

しかし、メカセミの軍勢は、巧みな連携飛行で真ゲッター1を翻弄する。

卯月「……ッ! ゲッターバトルウイング!!」

真ゲッター1の翼を大きく広げ、機体を中央にきりもみ回転。巨大な気流の乱れを作り、メカセミの飛行を阻害し、

卯月 「どういう事ですか？」

凜 「あの戦艦の中だったら、好き勝手暴れられるって事」

卯月 「成る程……」

芳乃 「卯月さん、一旦分離致しましよー」

凜 「……私の出番だね」

卯月 「お願いしますね！——オープンゲット！」

凜 「チェンジゲッター！2ツ！」

凜 「ドリルアアアームツ!!」

合体直後にドリルを唸らせ、メカセミの大群を掻き分け戦艦内部に突撃。

「真ゲッターが艦内に侵入！」

「至急迎撃部隊を向かわせろツ！真ゲッターの好きにさせるなツ!!」

卯月 「ずいぶん広い通路……」

凜 「侵入される事も考えてあるって訳だね」

芳乃 「ですが、この狭さなら、宇宙で戦うより易いでしょー」

卯月 「……熱源反応……迎撃機が来ますよっ！」

凜 「うん。向かってくるなら、正面からドリルで風穴開けるだけだよ」

凜 「さあ、何処からでも……おいで！」

—。
〃〃〃 早乙女研究所 敷地内 〃〃〃

李衣菜「——おりやあああつ!!」 ザンツ

インペーダーの神経中枢をソードトマホークで叩き潰す。

李衣菜「ふう…。一丁上がりつと」

奈緒「大分慣れて来たじゃないか。損傷軽微でインペーダーを全滅させるなんてな」

李衣菜「えっへへへ。そりゃ、私だつて成長しますつて」

加蓮「調子に乗るのは早い早い。リーナは操縦が乱暴で、乗ってるこっちが大変なんだから」

奈緒「あ、それは言えてるかもな」

李衣菜「もおく、上げて落とすのはなしでしょ!？」

奈緒「あつはは。…ん?なんだ、あれ?」

加蓮「待つて…。無数の反応が研究所に近付いてるみたい」

奈緒「近付いてるつて、インペーダーじゃないのか?」

加蓮「違う…。何…これ…?見たことない」

李衣菜「あれつて…虫!？」

奈緒「でっかい虫だあ!」

加蓮 「虫いゝ!？」

奈緒 「何だ？加蓮は虫駄目なのか？」

加蓮 「だ、ダメって言うほどじゃないけど…。あんな大きいもの、苦手じゃなくても無理だって…」

奈緒 「確かにそうかもなあ…」

李衣菜 「2人共!のんびり話してないで、敵だよ!」

奈緒 「お、おう…悪い」

加蓮 「アレと戦うの…?冗談でしょ?」

李衣菜 「冗談抜きでいくよ!空中戦だ、ゲッター2だよ!」

奈緒 「分かった!」

加蓮 「待って!一番大きいのが降りてくる…」

ズウウウ…ン…

加蓮 「これは…」

李衣菜 「…莉嘉が見たら喜びそうな見た目だね」

奈緒 「本気であいつと戦うのかよ?」

カブト 『ギイイイ——!!』

李衣菜 「飛んでる虫も何とかしなきゃいけないのに…!」

奈緒「あいつら、研究所にくつついて何をする気だ？」

加蓮「もしかして、卵を生んでる？」

奈緒「だったら生物なのか？」

李衣菜「考えるのは後！先ずはこのカブトムシを、研究所に近付ける訳にいかない！」

ソードトマホークを構え直し、戦闘態勢をとる。

奈緒「し、習性って、あたしらの知ってるカブトムシでいいのかな？」

加蓮「さあ？こんな大きいんだし、食性は肉食かも」

奈緒「勘弁してくれ！」

李衣菜「何はともあれ：分かんないんだったら、飛び込んでみるに限る！」グツ
操縦桿を握る手に力を込め、ネオゲッターを前進。

李衣菜「でえりやああああッ!!」

ガ：ギンツ

奈緒「~~~~~!」

李衣菜「かったい！」

カブト『ギギイ!!』

加蓮「リーナ避けて！」

李衣菜「えっ、無理……」

ドワツ

メカカブトの複眼から放たれた閃光が、ネオゲッター1を射抜く。

李衣菜「うわああ!」 ガンツ

奈緒「いててて……。さつき誉めたのなしな」

李衣菜「元々上げて落とされてたよね?」

加蓮「前見て!!次が来るっ!」

李衣菜「え——?」

眼前にメカカブトの角。

ゴギヤアアツ——

李衣菜「うぐっ……ああ……!」

装甲を貫かないまでも、勢いと衝撃で早乙女研究所の外壁に叩きつけられる。

李衣菜「へ……へへ……っ。なかなかのパワーじゃん。ネオゲッター3以上かも」

加蓮「ネオゲッターの装甲に助けられたけど、二度目はないよ」

李衣菜「分かっているって。こつちも丁度、エンジン暖まってきたトコ!」

額と口元の血を拭い、バイザーの割れたヘルメットを脱ぎ捨てる。

奈緒「怪我しないとエンジンかからないとか、難儀だな……」

加蓮「ホント。地獄まで付き合う気はないからね？」

李衣菜「もちろん！だからこそ負けられない！必ず勝ってみせるッ！」

—— 研究所内。

所員「う、うわああああっ!!? 幼虫だ！幼虫が入ってくる！」

所員2「コイツら…、研究所を食い尽くすつもりか？」

所員3「火炎放射器だ！火炎放射器でコイツらを焼き払うんだ！」

早乙女「……」

所員4「早乙女博士！博士も早く避難を！奴らの狙いは間違いなく、こここのゲッタードラゴンですっ！」

早乙女「儂は残る。逃げたい者だけ逃げればよい」

所員4「何を言ってるんですか!?!博士なくして、誰がゲッターの研究を続けるんです!?!」

早乙女「分からんのか!?!今がどんな時か！」

所員4「どういう事です!?!」

早乙女「いいから見えておけ！」

所員「見る!!奴ら、ゲッタードラゴンの元に集まって行くぞ!!」

早乙女「……!」

所員4 「…？ゲッタードラゴンの様子がおかしいぞ…？」

所員 「ゲッタードラゴンが…、動いている…！」

ズアオツ

昆虫軍団 『『ギイイヤアアアア!!』』

ゲッタードラゴンの胴体から放たれた閃光が、群がった昆虫を焼き払う。

早乙女 「そうだ。それでいい」

所員4 「誰だ!?あの状態のドラゴンを動かしているのは!」

「はっはっはっは〜!どんなもんだい!正しく、飛んで火に入る夏の虫って奴だね!」

所員4 「本田さん!」

未央 「混乱に乗じて乗り込んで正解だった!私もドラゴンも、まだ戦闘力を失った訳じゃない!」

所員 「だ、ダメです!本田さん!今の状態のドラゴンをそのまま動かし続けては…!」

未央 「何処からでもかかって来い!研究所は、人類の未来は私が守る——ッ!」

——。

卯月 「——未央ちゃん!」

凜 「どうしたの?卯月」

卯月 「…今、未央ちゃんの声が聞こえたような……」

芳乃「……」

凜「未央の……そんな通信、私には聞こえなかったけど……」

卯月「いえ、確かに聞こえたんです。何て言ってるのかまでは分かりませんでしたけど、未央ちゃんの声が……」

凜「……？」

芳乃「……未央さん————」

李衣菜「えっ、未央？何……？——くっ……！」

メカカブトの角とソードトマホークで鏢迫り合う。

奈緒「どうした？」

李衣菜「今なんか声が聞こえなかった？」

奈緒「声え？何か聞こえたか？」

加蓮「ううん。こっちは何にも」

奈緒「何も聞こえないぞ！」

李衣菜「……それじゃあ……私の聞き間違い……？——うわっ！」

角に押され、尻餅をついて倒れる。

奈緒「今は戦闘に集中しろっ！」

李衣菜「それも…そうだね！」

シヨルダーミサイルを眼前に撃ち、メカカブトを怯ませる。

カブト『ギイイイ!!?』

李衣菜「このっ…！」

上から覆い被さるようにのし掛かり、

李衣菜「チエーンナツクル!!」

チエーンナツクルで片目を潰す。

カブト『ギイアアアア!!』

李衣菜「わわっ!？」

角を振り乱し、暴れだすメカカブト。

奈緒「は、早く離れろ！」

李衣菜「そうしたいのは山々なんだけど…」

カブト『ギイイイツ!!』

李衣菜「わあっ!!」

振り回した角に当てられ、宙高く飛び上がる。

李衣菜「!!」

態勢を立て直せず、落下。

李衣菜「ぐう……」

加蓮「このまま寝てるつもり？」

李衣菜「まさか。いい手を思い付いたよ！」

奈緒「……スゴいやな予感がするぞ」

李衣菜「まあ、奈緒達にも少し覚悟してもらわないとだけど」

加蓮「それで勝率あるんでしょ？なら、アタシはやるよ」

奈緒「どーせ止めたってやるんだろ？好きにやれって」

李衣菜「……ありがと。奈緒、加蓮」

カブト『ギイツ!!』

李衣菜「——！」

叩き付けられた角をネオゲッターをローリングさせて避け、立ち上がり、ソードト

マホークを握り締め、

李衣菜「さあ、来いっ！」

ネオゲッターを大の字に立たせる。

奈緒「馬鹿かア!？」

李衣菜「いや、これでいい！」

カブト『ギギギイイイツ!!』

挑発に乗るように、メカカブトは角をネオゲッター1の鳩尾へ。

李衣菜「ぐっ……！」

脚を踏ん張り、攻撃を耐える。

カブト『ギヤアアツ!!』

ブオンツ

角を大きく振り上げ、ネオゲッター1を天高く放り投げる。

李衣菜「奈緒、加蓮！ネオゲッターのプラスマエネルギーを両腕に！」

奈緒「は？」

加蓮「成る程。そう言うことね」

奈緒「どういう事だよ？」

加蓮「今はリーナの言うとおりにして！」

奈緒「お、おう……！」

両腕に込められたプラスマエネルギーがソードトマホークに流れ、青白い稲妻がスパークする。

李衣菜「ネオゲッターの自重に、重力落下が加われば……！」

ソードトマホークを腰溜めに構え、切っ先をメカカブトの方へ。

奈緒「こ、このままぶつかるとは!?」

李衣菜「ソードトマホークが折れるか、そっちを貫くか……!」

加蓮「“矛盾”の答え合わせだね」

奈緒「作戦どころか、“手”ですらないぞ!」

李衣菜「ロツクンロオ〜ル!! イツエエエーイツ!!」

ズシャアアアッ

勢いのままに、メカカブトの背中に落下。鈍い音共に、ソードトマホークは深々とメカカブトの体に突き立った。

李衣菜「高密度のプラズマの熱量…ツ、直に喰らえええええツ!!」

カブト『ギヤアアアアア!!?』

メカカブトの体内に直接流されるプラズマで、青白い輝きが周囲を覆っていく。

『……』

真っ黒く焼け焦げたメカカブトが、異様な臭いを放ちながら崩れ落ちた。

奈緒「…つたく、分の悪い賭けってレベルじゃなかったぞ?」

李衣菜「でも、賭けに勝てたでしょ?」

奈緒「……運の強さは認めてやるよ。…まったく」

加蓮「次は研究所だよ。取り付いてる虫を払わないと…」

李衣菜「うん?…何これ?」

研究所の周囲を、淡い緑の粒子が包む。

李衣菜「これ…。ゲッター線だ」

加蓮「大気中のゲッター線量が上昇してる…。？これ以上は、ゲッターの中にいても危険だよ」

奈緒「一体研究所で、何が起きてんだ…。？」

李衣菜「……」

——…ナ…。李衣菜……。

李衣菜（さつきから私を呼んでるの…誰…？）

未央「うう…！」

ズオオオオオ——

所員「だ、ダメだ！ゲッターエネルギーが、周囲を巻き込みながら溶けていく！」

所員4「本田さん、脱出してください！このままでは、本田さんまで！」

未央「うう——！まだ…まだだ！まだゲッターは死んじやいなあい!!」

所員4「増幅装置の暴走が止まらない…！このままじゃ、研究所もろとも…！」

早乙女「そうじゃ！もつと出力を上げろ！ゲッターの力を解き放つんじや!!」

所員4「博士！何を言っているんですか!?!」

未央「うおおお——うああああ——ッ!!」

ズワアアアアア——ッ

所員「メルトダウンが始まるぞ!」

所員4「…博士!ここはもう危険です!早く避難を!」

早乙女「まだじゃ!まだ…!」

「——」

キッ

早乙女「……未央くん…!」

『ここを離れてください。早乙女博士』

早乙女「もう、いいのかね?」

『はい。もう十分です。ここからは、後は私が。博士には、まだそつちでやらなければな

らない事があるんでしょう?』

早乙女「…うむ」

『なら、これ以上は危険です。早く離れてください』

早乙女「分かった。…最後に一つ、聞かせてくれんかね」

『どうぞ?』

早乙女「今の君には、見えているかね?」

『はい。はつきり見えます！』

『新しい世界が——！』

——。

卯月 「新しい世界って……！」

凜 「未央の声……？今度は私にもはつきり聞こえた！」

卯月 「何が……、研究所で何が起こってるんですか!？」

『ああ、うん。見える、見えるよ。時間と、空間と、そして私。過去と未来は一つの関係に帰結してるんだ』

卯月 「！ 未央ちゃん、それは……！」

凜 「未央！気をしっかり持って！」

凜 「この声……、通信じゃない。理屈は分かんないけど、尋常じゃない」

『心配しないで。私は大丈夫だから』

凜 「大丈夫には聞こえないよ」

『生きているうちは、そう感じるかもね』

凜 「死ぬ気なの？しっかりしてよ！」

『いや、私は死なないよ。私も、ドラゴンも死にはしない』

凜 「じゃあどういう事!？ちゃんと説明して！」

『説明なんて言われても。言葉じゃ難しいかな。多分、卯月は分かっていると思うけど』

凜 「え？」

卯月 「……」

『この状態になって、はじめて分かった。生命は…、純粹になるほどに、強大な宇宙を求めていく——』

卯月 「……」

『大変だね、卯月』

卯月 「そんな事は…ないですよ。今は未央ちゃんの方が大変じゃないですか」

『そんな事無いよ。今のドラゴンは、まだ生まれてすらいない、胎児みたいなものだからね。胎児には母親が必要でしょ？』

卯月 「はい…。ドラゴンを、ゲッターをよろしくお願いしますね。未央ちゃん」

『もちろん、任せてよ』

凜 「2人して、勝手に話を終わらせないでよ！」

芳乃 「凜さんー。凜さんにもいずれ分かりましてー。今は戦闘に集中をー」

凜 「くっ……！」

『それじゃあね。ちよつと名残惜しいけど。卯月、凜』

卯月 「何時もみたくに呼んでくれないんですね」

『それは、再会できた時に取っておくかな。それじゃあ、そろそろホントに行くよ』

卯月「さよならは言いません」

『うん。またね——』

——
ゴオオオオ——

加蓮「研究所に取り付いた虫が、ゲッター線に溶けて消えてく……」

奈緒「おいおい……。ホントにヤバイんじゃないのか!？」

李衣菜「まだ……もうちょっと……!」

奈緒「これ以上ここにいてあたしらに何が出来ると言うんだよ?」

李衣菜「……来た!」

加蓮「アレは、早乙女博士に、研究所の所員?」

奈緒「全員無事だったのか!」

早乙女「……ネオゲッター……。成る程、ゲッター線を使っていないネオゲッターだからこそ、この状況下で正常に動けたという事か」

李衣菜「博士!それに所員さん達も!ここから離れます!ネオゲッターの手に乗って

ください!!」

ネオゲッターの腰を下ろし、広げた両手に早乙女博士と十数名の所員を乗せる。

奈緒「割りどギチギチだな…」

加蓮「新研究所に着くまでは、我慢してもらわないと」

奈緒「李衣菜！慎重に運ぶんだぞ！」

李衣菜「言われなくても分かっているよ！……」

ゲッター線の光に包まれる、早乙女研究所を見上げる。

李衣菜「未央…。ごめんツ！」

コオオオオオオツ——

「攻撃部隊と連絡はとれたのか!？」

「依然連絡は途絶したままです！早乙女研究所の様子も分かりません!？」

「一体何があったのだ？ゲッターGは倒せたのか!？」

「攻撃部隊と連絡がとれない以上、恐らく…」

「全てが無駄に終わったのか…?」

ズウウウウ…ン……

「ぐっ…！何事だ!？」

ブリッジの正面を破壊して、姿を現したのは、ずんぐりした巨大な鉄の山。

芳乃「真ゲッターすりいー。頼みましてー」

「真ゲッターロボ……ここまで辿り着いたのか！」

芳乃「進化を拒みし者達。何故そこまで進化に抗うのでして？」

「当たり前だ！我々は、何者の支配も受けん！」

芳乃「それが、宇宙を滅ぼす行いだとしても？」

「宇宙を汚染しているのは貴様らだろうに……！貴様らさえ宇宙に出なければ、宇宙は我々が支配していた!!」

凜「呆れた。つまり、支配するのはよくて、されるのは結構ですって？」

卯月「貴方達も、根底はブライヤ、ゴールと同じですっ」

凜「芳乃、思いつきりやっちゃって」

芳乃「元よりそのつもりでして」

胸の前で手を合わせ、祈りを捧げるように、

芳乃「火砲展開、一斉解放」

真ゲッター3の膨れ上がった後部が開き、無数のミサイルサイロが姿を覗かせる。

芳乃「みさいるー、すとーむをー」

ドワツ

ミサイルが一齐に放たれ、周囲は爆炎に包まれ、戦艦は空気の張り詰めた風船のように、内側から破裂した。

凜 「――残りの敵機は？」

芳乃 「気配はありませんねー。此度の戦はー、終わりでよいかとー」

凜 「そう。……」

卯月 「……凜ちゃん……」

凜 「……ねえ、私達は、正しい事をしてるんだよね？」

卯月 「それは……」

芳乃 「正しさとはー、誰にとつての正しさなのでしょー？」

凜 「……」

芳乃 「正しさとは曖昧なもの。それを貫く信念がなければー、たちまちにー、折れてしまうものー」

凜 「信念……。未央も、信念に従つて行つたつて事？」

芳乃 「それは私にも分かりませんー。ですがー、あの場で未央さんがゲッターに乗らなければー、私達の未来は断たれていたでしょー」

凜 「未央を犠牲にして、私達だけのうのうと生き残つて……！そんなの許される訳ないっ！」

卯月 「違います。のうのうと残るんじやありません。残されたからこそ、しなくちゃいけない事があるんです」

凜 「卯月……？」

芳乃 「ゲッターの向こう側でしか出来ぬ事、残されたからこそ出来る事。それらは決して、同じものではなく」

凜 「……未央を犠牲にした意識があるなら、ずっと戦い続けろって？」

芳乃 「今はそのような認識でも構わないでしょ。ゲッターを駆り、ゲッターと共に歩むわたくし達は、如何に辛き物事からも、目を逸らしてはならぬのでして」

凜 「……」

芳乃 「さあ、帰りましょ。芳乃達の居るべき場所へ。戦いの傷を癒し、更なる戦いへと向かう為。剣を研がねばならぬでしょ？」

卯月 「……そうですね。少なくとも、今だけは」

芳乃 「わたくし達に定めらし刻限も、もう差し迫っているのですよ？」
つづく

後編 『時は来たれり』

整備員「ふわあゝゝ……！」

整備員2「スゴい欠伸だな……」

整備員「そりや日が昇るまで働かされりやあな。早くベッドで横になりたいぜ」

整備員2「真ゲツターもネオゲツターも激しい戦鬪だったみたいだからな。ま、整備点検も一通り終わったし、これでしばらくゆっくり出来ればいいんだけどな」

整備員「まったくだ……。……ん？」

スウ……

整備員「おい、今の見たか？」

整備員2「あつちは確か、食糧庫がある方か」

整備員「まさかつまみ食いか？」

整備員2「だつたら見過ごせないな。行つてみよう」

タツタツタツ……

整備員「可笑しいなく、誰もいないぞ？」

整備員2「こっちの通路は食糧庫がある以外は行き止まりだぞ？……見間違えたのか

？」

整備員 「ははっ、徹夜明けで疲れてんのかな……。——…ああっ!!」

整備員 2 「…? 何だよ、人の顔見て驚いてんじやねえよ」

整備員 「あ…あ、違…っ」 ガタガタ

整備員 2 「? ホントに何なんだ？」

整備員 「あ…う、うし…後ろ…!」

整備員 2 「あん? 後ろだあ?」 クルッ

』……』

整備員 2 「ヒッ! こ、こいつは…!」

整備員 「あ…あ、ああわわわっ…!」

ゴール 『……』 ニヤリッ

「ひやあああああああ——!!」

—。

~~~~~ 新早乙女研究所 談話室 ~~~~~

美波 「……」

アーニヤ 「……」

みく 「……」

菜々「……」

瑞樹「……」

茜「!!」

美穂「……」

美嘉「……」

莉嘉「……」

かな子「……。あ、あの〜……」

かな子「私の作った木苺のタルト、そんなに美味しくなかったですか!？」

ブホアアツ

美穂「あ、茜ちゃん……!大丈夫?」

茜「ゲホツ……!ゴホツ!すいません……!お茶が!気管に!」

みく「にしても絶妙なタイミングだったにや」

菜々「あああ、床まで溢しちやってますよ!何か、拭くものを……!」 タツタツ……

かな子「……」

美波「だ、大丈夫よ、かな子ちゃん?かな子ちゃんの作ってくれたタルトは、スツゴ

く美味しいから!」

かな子「でも……」

瑞樹「美波ちゃんの言うとおりのよ。甘さ控えめの生クリームに、木苺の酸味が絶妙に合っていて、美味しく出来てると思うわよ。紅茶にもよく合うし」

美嘉「うんうん。アタシなんて止まらなくなりそうだし」

かな子「あ、ありがとうございます…！もしかしたら皆さんのお口に合わなかったんじゃないかなって…」

アーニヤ「そんな事ありません。かな子の作るお菓子はどれも美味しい、ですね」

みく「ま、もし不味かったとしたら、それは使ってる苺の問題だから、かな子ちゃんは関係ないにゃ」

菜々「研究所の敷地内で採れたものですからね。変な物質は入ってないと思いますけど…」 フキフキ

莉嘉「実際美味しかったんだから気にする事ないって☆」

瑞樹「ま、みんなが静かにしてる理由で言ったら、別の理由よね」

一同「……………」

美穂「…………。何なんでしょう…ゲッターって…」

瑞樹「私達には、教えられている事しか分からないわね」

菜々「宇宙線の一つで、地球に降り注ぐ、ごく僅かな媒体から、何十倍にも増幅されるエネルギー体、ですか…」

瑞樹「尤も、晶葉ちゃんと凜ちゃんは、もつとずっと前から色々調べたりしてたみたいだけど」

かな子「知ってたんですか？その事…」

瑞樹「ええ。夜遅くまで晶葉ちゃんの部屋の明かりが点いている事もあったし、2人で深刻そうに話しているのを、何度か見かけたりしてたもの」

かな子「……」

みく「何で手伝ってあげなかったの？」

瑞樹「あまりでしやばるような真似しても仕方ないじゃない？晶葉ちゃんは早乙女博士仕込みのゲッター線の専門家。凜ちゃんはずっとゲッターに乗って戦ってきたパイロット」

瑞樹「最前線で私達よりもゲッターの中で戦ってきたんだもの。きつと私達よりも色々な事に気付かされる機会があったんだと思うわ。だからじゃないけど、2人に任せておけば、なんて思うところもあったのよ」

アーニヤ「リンとアキハは、今も向こうの研究所、ですか…」

美波「地下に沈んだゲッタードラゴンを引き揚げるって言ってたけど…」

かな子「でも、乗ってたという、未央ちゃんは…」

「「……」」

茜 「皆さん、そんな暗い顔をして！どうかしたんですか！」

かな子 「何って…、茜ちゃんは心配じゃないの？未央ちゃんのこと」

茜 「はいっ！どうして心配するんです？」

かな子 「だって…、それは…」

茜 「未央さんは無事ですょ？昨日、連絡もりましたから！」

かな子 「えっ？本当に？」

茜 「本当ですよ！履歴もあります！見ますか？」

瑞樹 「…どう言うことなの…？」

～～～ 早乙女研究所 制御室 ～～～

晶葉 「……」

凜 「良かったね。地上施設だけでも無事で済んで」

晶葉 「だが、地下施設はご覧の有り様だ。ほとんどが同化されて、ドラゴンごと消えてしまった。残っている箇所も、ゲッター線の汚染が激しく、立ち入るにはこうして、防護服を着用しなければならない」

凜 「二部では、結晶化したゲッター線が確認されたみたいだね。それだけ高濃度に汚染されてるって事だけだ」

晶葉 「じきにこの研究所は閉鎖される。その前にゲッタードラゴンは回収しなくては

な」

凜 「そのドラゴンの様子は？」

晶葉 「相変わらずだ。今も地面を吸収して削りながら、極々低速で潜行を続けている」

凜 「ゲッターエネルギーの塊か……。シャインスパークの数十倍、それ以上って感じ？」

晶葉 「このまま潜行を続けて、マントルを抜けて内核に接触すれば何が起こるか分かん。その前に引き揚げたいが……」

凜 「進捗はよくないみたいだね」

晶葉 「ああ。引き揚げようと降ろしたアンカーが、全て同化されてしまう状況ではな。やはり真ゲッターによる引き揚げを考えなければいけないようだ」

凜 「真ゲッターも吸収されるんじゃないの？」

晶葉 「同じゲッター線を使っているからこそ、抗えるかもしれない。どのみち賭けになる事は変わらんがな」

凜 「……」

ゲッタードラゴンが作った、巨大な穴を見下ろす。

凜 「この穴のずっと下に、ドラゴンが……」

晶葉 「肉眼では確認出来ないところまで潜られたがな。これを見ろ」



手前のディスプレイを指す。

晶葉 「ここから地下20000m…、そこに膨大なエネルギー溜まりがある」

凜 「地下20000…、随分な所まで落ちたね…」

晶葉 「様相はまるで繭だ。ゲッタードラゴンを中心に、高濃度のゲッターエネルギーが拡散もせずに渦巻いている」

凜 「繭…。これから蝶か何かみたいに変態して出てくるって?」

晶葉 「……。ゲッターの進化、か」

凜 「ゲッター線は人類を進化させた。早乙女博士のその仮説を信じるとしても、無機物のマシンまで進化させるの?」

晶葉 「脅威に打ち勝つために。…或いは」

凜 「脅威?」

晶葉 「先日現れた昆虫軍団のようにな。彼らだけでも、真ゲッターと互角に張り合うくらいの戦闘能力を持っていた」

晶葉 「そう言った脅威と戦うためには、これからは人類の力だけでは間に合わないのかもしれない…」

凜 「戦いは続く、ね…。早乙女博士は?」

晶葉 「あそこだ」

制御室のガラスの向こうに見える、より地下の一角を指す。

凜 「あんなところに……？」

晶葉 「あそこでドラゴンを観察している」

凜 「早乙女博士は、こうなる事を予測していた感じあるよね」

晶葉 「らしいな。私はそこにはいなかったが、ドラゴンに乗り込んだ未央に炉心の出力を上げるように指示したと」

凜 「未央……」

晶葉 「……樂觀的な事を、言うつもりはないぞ」

凜 「分かっている。これだけのゲッターエネルギーの中だよ。繭の中心温度は数千度を超えている……。きっと未央は……」

晶葉 「……」

晶葉 「そういえばこんな噂を知っているか？」

凜 「噂？」

晶葉 「ああ、科学者としてこんな話は眉唾で終わらせたいが、幽霊の話だ」

凜 「幽霊？……それ、未央も言ってた」

晶葉 「そうなのか？」

凜 「今考えてみれば、早乙女博士が真ゲッターを作り始めた辺りから言ってた……」

あの時博士は、研究所地下のゲッター線量を通常空間の15倍にしてるって言ってた」  
晶葉「ゲッター線の増加に関係あると言うのか？だが、作業員の噂で目撃されたのは恐竜帝国のゴール帝王という話だったぞ？」

凜 「ゴール……？」

晶葉「奴等はゲッター線を憎んでいたはずだ。そんな奴が何故こんなところに姿を現す？」

凜 「……」

凜（……私もあの時、プロデューサーに会った……。プロデューサーもゴールも、死んだ時はゲッター線の中だった……。それに何か関係性が……？）

凜 「……」

晶葉「ゲッター線……。どうやら秘密は、生物や機械を進化させるだけじゃなさそうだな」

タツタツ……

所員「池袋さん！」

晶葉「……何だ？騒々しい」

所員「いえ、大した事ではないんですけど、念のため報告に」

晶葉「報告？」

所員 「はい。早乙女博士は現在、面会や接触は禁止しているので」

晶葉 「ふむ。それで？」

所員 「はい……。何やら、研究所全体のゲッター線量が極々微量に上昇しているようで……」

晶葉 「……。分かった」

晶葉 「……どう思う？」

凜 「この状況で自然増幅はタイミングが良すぎるね」

晶葉 「また何か起きるのか――」

早乙女 「……」

早乙女 「……」

「首尾はどうですか？早乙女博士」

早乙女 「……。また現れたか……。百鬼大帝、ブライ」

ブライ 『ここは居心地がいい。博士、貴方の顔を見ていると心が和む』

早乙女 「何故……。私の前に現れる……。それも、ここのところ毎日のように」

「それを尋ねると言うことは、やはり貴方はまだ、真理には辿り着いていないようだ」

早乙女 「……」

ゴール『無理もない。生命が存在しているうちに理解できる事は限られている』  
早乙女「ゴールにブライ……。2つの勢力の大將が揃いも揃って……。儂を呪いにでも来たのか」

ゴール『呪う？ふふ……。そんなものに興味はありませんよ』

ブライ『それは、貴方自身がよく分かっている筈だ』

早乙女「……」

ブライ『私は博士の力になりたい』

ゴール『貴方の助けになるために、私はここに存在しているのです』

ブライ『我々の時間は無限だが、未来を託すために残された時間は少ない』

ゴール『博士が今手掛けているもの、それは彼女達に遺すゲッターの設計図でしょう？』

早乙女「……!」

ブライ『この短時間の間にこれだけのモノを仕上げたのは流石だが、急場の作業で所々の計算に誤差が生じている』

ゴール『やりましょう。この力は、これからの生命に必要な力だ』

早乙女「……ああ。そう言えば、ブライは人間だった頃、科学者だったのだな」

ブライ『ところで博士、真ゲッター炉心は残さなくても良いのかな？』

早乙女「良い。∴アレは真ゲッターロボの1基があれば、それで良いのだ」  
ブライ『そうか。余計な事を聞いてしまいましたな』

早乙女「構わん。儂の役目も、やがて終わる。後は遺される彼女達と、真ゲッター。そして、儂が最期に遺すこのゲッター達で切り開いていかなければならん」

ゴール『その道は、永く険しいですな』

早乙女「そうだ。無垢なる彼女達を、儂はこの手で地獄に突き落とさねばならん！ならばせめて、手向けぐらい用意しなくては、儂の数十年の研究には何の意味もない！その為に——！」

—— 大宇宙がある。

「——バル艦隊、所定位置に着きました」

「うむ。各防衛線の動きは？」

「第1から第12073600防衛線まで異常はありません」

「空間振動多数検知！敵艦隊がこちらの星系にワープアウトしてきます!!」

「来たか……！数は？」

「第一波……およそ二千万……尚も増加中……！1億……！1000億……！敵反応、増え続けてますッ！」

「我々の戦力を上回るというのか……!？」

「敵、無量大数を超えますッ!!」

「ぬう……！攻撃だ！攻撃開始ッ!!連中をこちらの星域に侵入させてはならん!!」

「敵は既に、第3984500防衛戦までを突破！本艦の射程圏内に入ります!!」

「総攻撃用意ッ!!全艦隊をあげて惑星ダビーンを守るのだ!!」

「目標、射程圏内!!」

「主砲射撃開始ッ！目標は連中の旗艦——」

「——ゲッターエンペラーだッ!!」

—

—

—

~~~~~ 早乙女研究所 パイロット仮眠室 ~~~~~

卯月「——……ふわ……?」

ムクリ

卯月「今の…夢は…？」

コンコン

卯月「はいー？」

奈緒「卯月ー？ いるかー？」

卯月「奈緒ちゃん。はい、どうぞ？」

奈緒「そんじゃ入るぞー」

ガチャ バタンツ

奈緒「お、丁度寝起きて感じか？」

卯月「はい…。おはようございますつ。奈緒ちゃん、それに、李衣菜ちゃんに加蓮ちゃんも」

李衣菜「おはよ」

加蓮「おはー。すごい寝癖だね」

卯月「えへへ…。朝はいつもこんなんで…。李衣菜ちゃんは、もうケガの具合はいいんですか？」

李衣菜「平気平気。あんなのケガの内に入らないよ」

卯月「そうなんですか？ それでもあんまり無茶は…」

奈緒「平気だよ。李衣菜は体だけは丈夫だもんな？」

李衣菜「そう言うこと！ま、この研究所も私とネオゲッターに任せてよ！」

奈緒「あのなあ……。そうやって天狗になると、足元掬われるんだぞ？」

加蓮「ホント、2人共毎度の事飽きないよね〜」

卯月「あはは……」

卯月「あ、未央ちゃんも来てたんですね。気づかなくてごめんなさい」

奈緒「あ？…何言ってるんだよ……。未央は……」

未央『まったくだよ。みんなで仲良く話して〜。私は仲間外れ？未央ちゃん寂しいな』

李衣菜「え？」クルツ

未央『やほ〜』

「「「……」」」

加蓮「えつと……」

奈緒「で、ででで……出たあああああああああ!!?」

未央『何だよ〜。まるで幽霊か何かでも出たみたい……』

奈緒「幽霊だろ!!? ああああ頼むから成仏してくれ……!南無阿弥陀仏……」

未央『だ〜か〜ら〜!幽霊じゃないってば!』

奈緒「ほ、ホントか……?ホントに未央か？」

未央『ホントホント。あ、でも体は触れないけど』

奈緒「やっぱ幽霊じゃねえかよっ!!」

加蓮「ちよつと、奈緒? 少し落ち着きなつて」

奈緒「加蓮はなんでそんな平然としてられるんだよ!」

加蓮「信じられない事なんて、これまでいくらでもあつたし。少しは落ち着かないと、

未央の話も聞けないでしょ?」

李衣菜「目の前にある事が真実だよ」

奈緒「いやあ、そう真面目に言われるとな…」

未央『まあちよつとした幽体離脱みたいな感じかな? そういう意味では、幽霊って言

うのもあながち間違いじゃないかも』

李衣菜「それじゃあ、今の未央の体は?」

未央『まだドラゴンのところにあるよ。私も卯月も凜も、まだゲッターには必要な

だよねえ』

加蓮（卯月…?）

未央『今の私は、ゲッター線って言うプールの中を、自由に泳いでるのに近い感じ。だからゲッター線濃度が濃くなつてる研究所の中だと、こうして意識だけ自由に飛ばせるって訳』

加蓮 「ふうん？ 何だか便利そうじゃん」

卯月 「そうでもないですよ。逆に言えば、研究所の外には出られないわけですし」

未央 『そうだね……。体がドラゴンの中にある以上、ドラゴンからは離れられないわけだし』

卯月 「何時までここに居られそうですか？」

未央 『ん……。まだもう少しは。ここで起こるイベントが一通り終わるまでは、かな？』

卯月 「そうですか……」

李衣菜 「……分かる？」

加蓮 「全然」

奈緒 「つて言うか未央がいるって気付いた時もだけど、何で卯月はいつも通り受け入れてんだよ？」

李衣菜 「卯月は最初から知ってたの？」

卯月 「知ってたつて言うのかな……。何と言うか、無意識に受け入れてたと言うか……」

加蓮 「何それ？」

未央 『まあ、卯月つてそういうところあるよね。天然つて言うかさ』

卯月 「天然じゃありませんよ〜！」

奈緒「……」

李衣菜「こういうの見てると、いつもの風景つて感じだね」

加蓮「ホント。この間あんな事があつたなんて嘘みたいで、ちよつと変感じ」

奈緒「ああ、いつの間にか別の世界に迷い込んだみたいだな……」

未央『にしても酷い話だね。前回まともに出番もないままアレだったからつて、

急遽出番なんて言われてもさ』

奈緒「お前は誰に何の話をしてるんだよ!!」

未央『いや、だって私この回終わつたらしばらく出番ないんだよ?』

奈緒「知るかツ!!」

李衣菜「これもいつも通り……」

加蓮「だね。こっちは安心する」

奈緒「おい!!」

未央『あつはは……つと、そろそろ凜がここに来る時間か』

加蓮「? 凜とは会わないの?」

未央『凜は自分で何とか納得させようとしてるからねえ。そこに私が出てつちやつた

ら、余計混乱させちゃう』

加蓮「何か、分かる気がする」

未央『だから、李衣菜も加蓮も奈緒も、私がここに来たって事は内緒だよ?』

奈緒「お、おう…」

李衣菜「わ、分かった…」

李衣菜「?」
つて言うか今凜が来るって、初めから分かっているみたいない方だったけど、どゆ事?」

未央『ははっ!——もうすぐ祭りが始まるよ』

奈緒「祭りだア?」

未央『そ。みんなの旅立ちを盛大に祝うんだよ。…3人はネオゲッターでスタンバつていた方がいいかも』

奈緒「おい!だからどういう事だってんだ!!」

未央『ごめん、タイムリミットだ。それじゃね——』

スウ…

李衣菜「消えちゃった…」

奈緒「一体何だったんだ…」

卯月「…」

ガチャ

凜「卯月、起きてる?」

奈緒「あ……お……り、凜……」

凜「？ 奈緒も加蓮も李衣菜も……。ネオゲッターチームが3人揃って、ここで何してるの？」

李衣菜「え……？あ、いや……その……」

凜「……？」

加蓮「別に……忙しそうな凜に代わって、卯月を起こしに来ただけだよ」

凜「そうなの？」

卯月「え……ええ、はい……！そうみたいです」

凜「……ふうん」

李衣菜&奈緒「「あははは……」」

加蓮「2人共、もう少し上手くやんなさいよ」 ボソツ

李衣菜「ご、ごめん……。何て言うか、状況の変化に着いていけなくなってる……」

奈緒「加蓮こそ、何でそんな風に平然と出来るんだよ？」

加蓮「演技もアイドルの仕事の一つでしょーが」

凜「……」

卯月「あ……え、で……えーっと、何か用事ですか？凜ちゃん」

凜「うん。研究所周辺のゲッター線量が増加した。この流れだと、近い内にまた何

か起こる」

卯月「そうですか。それじゃあ、早く出撃の支度をしないと……!」

奈緒「ゲッター線の増加で未来が分かるなんて、まるで占い師みたいだな」

加蓮「そんなこと言って、奈緒は自分の髪の毛で、明日の天気分かるんでしょ？」

奈緒「なッ……!それはな……」

李衣菜「それじゃ、奈緒は気象予報士だ」

加蓮「言えてる」

奈緒「お前らなあ……」

凜（……）

卯月「凜ちゃん? どうかしたんですか?」

凜「……ん? いや、ちよつとね」

卯月「?」

P r r r r P r r r r

奈緒「何だ?」

加蓮「備え付けの内線だよ。非常時以外滅多に鳴らないけど」

凜「……」

ガチャリ

凜 「何かあったの？」

晶葉 『おお、凜。まだ部屋にいたか。丁度いい、外を見てくれ。その部屋からでも見れる筈だ』

凜 「外…？」

李衣菜 「何…あれ…？」

卯月 「黒くておっきい…球体…？宙に浮いてますよ」

奈緒 「黒き月か！」

加蓮 「多分それは違うと思う」

晶葉 『つい数分程前に、突然姿を現した』

凜 「何なの？あれ…」

晶葉 『分からん。何せレーダーでアレを捉えることが出来ないんだからな。熱量、質量ともに反応がない』

奈緒 「ウソだろ？あんなデカくて目立つのにか？」

晶葉 『ああ。事実、光を遮ってないだろう？』

加蓮 「…確かに」

凜 「でも、現実には見えてる」

晶葉 『そうだな。そこから導き出されるに、恐らくは空間の歪みが生んだ“像”なの

だろぅと」

李衣菜 「空間の歪み…？空間って歪むの？」

奈緒 「おい、今はバカが口出していい雰囲気じゃなさそうだから静かにしとけ」

李衣菜 「バカって…。…はーい」

凜 「——つまり、またあいつらが現れるって事か…」

晶葉 『恐らくな。しかも、前回はこんな前兆はなかった』

凜 「前回以上の何かが現れる…」

晶葉 『不確定な要素ばかりだな』

凜 「でも、分かりやすく教えてくれるならありがたいよ」

加蓮 「方針は決まった？」

凜 「うん。加蓮達はネオゲッターで待機。あの球体の調査は、真ゲッターロボで行

う。晶葉は新研究所の方に応援の連絡を」

晶葉 『分かった』

凜 「卯月！準備できた？出撃だよ」

卯月 「あ…あちよつと待っててください！…この寝癖が…なかなか直なくて…」

凜 「髪型より今は人類の危機だよ」

卯月 「ああ！そんなあ〜！」

ズルズル…

加蓮「……」

李衣菜「……」

奈緒「……。あ、あたしらもネオゲッターのトコに急ぐぞ！」

—— 早乙女研究所上空。

芳乃「——ほー…」

芳乃「これはまたー、立派なものでしてー」

凜「これだけ近付いても、計器は何の反応もなしか…」

卯月「でも、カメラにはしっかり映ってますよ」

晶葉『肉眼でのみ確認できる事象…。果たしてアレに実体はあるのか、それとも蜃気

楼のような現象なのか…』

卯月「取り敢えず触れてみますか？」

晶葉『何が起きるか検討もつかん。用心してな』

卯月「…はい！」

スウ…

卯月「……」

ゆつくりと、真ゲッター1の腕を球体に近付ける。

——バチンッ

晶葉『何だ!?!』

卯月「球体が割れて…何か出てきますっ!これは…ッ」

『ギィ~~~~ッ!!』

凜「昆虫軍団ッ!!」

球体の裂け目から溢れ出すように、巨大な昆虫の群れが真ゲッター1に群がる。

ギチ… ギチ…

凜「コイツら…、ゲッターを喰い殺すつもり!?」

卯月「~~~~~!——ゲッターレザー!!」

両腕のレザーを広げ、取り付いた昆虫を切り払い、退ける。

卯月「そう簡単にはさせません!キャベツじゃないんですから!」

レザーを展開した腕を構え直し、自ら球体の中に突撃。

卯月「たくさん出てくるのなら、出てくる前に迎え撃ちます!」

凜「いこう、卯月。コイツらが何者なのか、見極めるには丁度いい」

芳乃「……」

——。

所員「真ゲッター1、球体内に侵入します!」

晶葉 「ゲッターを見失うな！ゲッター炉心の反応から、常に位置を特定し続ける！」
 所員 「はっ！」

晶葉 「新研究所との連絡はまだ取れないのか？」

所員 2 「はっ……！それが、新研究所の方も、インベーターの襲撃を受けていると！」

晶葉 「何っ!?!このタイミングでか!?!」

所員 2 「はい。インベーターの数が多く、新研究所に待機しているゲッターは全て出撃中との事です！」

晶葉 (まさか……、偶然の筈がない。なら、インベーターはこうなる事を予め分かっていたとしても言うのか？真ゲッターと、我々を孤立させるために)

所員 「真ゲッター1、球体の中心に接触します！」

――。

卯月 「うあああああああッ!!」

凜 「ううっ……!?!」

芳乃 「……そろそろでしてー」

『……ゲッター……』

卯月 「!?!」

『全てを悟れ……ゲッターロボ。全てを悟るのだ……』

凜 「何……？この声……、空間全体から響いてくる……！」

卯月 「この空間の主ですか!？」

『貴様らは、宇宙の癌!!』

凜 「宇宙の癌——!？」

芳乃 「……そなたらの目的を教えませー？何故このような行いをー？」

『己の意識で確かめよ!』

卯月 「己の意識……？」

『意識で見るのだ。そして知れ!宇宙の罪人!!』

卯月 「……!!」

ズズズ……

凜 「何なの……？……見たことのない星……？」

芳乃 「空間そのものが映写機のようにー。立体的に映像を写し出しているものとー」

卯月 「まるで私達がその空間にいるみたいですね……」

凜 「見て。星の奥から、何か来る……。アレは……」

卯月 「——ゲッターエンペラー!!」

凜 「何て数の……ゲッター……？」

芳乃 「アレはー、ゲッター艦隊でしてー」

凜 「ゲッター艦隊!？」

卯月 「……」

—— 『ゲッターエンペラー。サード・ムーンより敵が来ます』

—— 『任せろ! 月もろとも吹き飛ばしてやるッ!!』

芳乃 「……」

凜 「!？」

ゲッターエンペラーの艦首から放たれた閃光が、月をまるごと吹き飛ばす。

凜 「何なのこれ…? 私達は、何を見せられているの!？」

芳乃 「落ち着きましょー。心を乱せばー、敵の思う壺でしてー?」

凜 「…でも、今のは…。…くっ」

卯月 「今度は奥から何か来ます!」

それは、巨大な幼虫のような影。

凜 「……今度のはリーダーにも反応がある…」

芳乃 「実体のある存在と言うことですねー」

卯月 「と言うことは、あれがこの空間の主…!」

「ようやく空間を安定させることが出来た。これでこの次元に自由に干渉できる!」

卯月 「こ、昆虫人間…!？」

凜 「……成る程…、昆虫軍団を率いてただけはあるね…！」

「ここに来るまでに幾多の犠牲を払うことになった…。だがそれも終わる！ゲッターの滅びを以て!!」

卯月 「あ、貴方達は！何が目的で、何の為にこんな事をするんですか!？」

「何の為にだと…？貴様らを消滅させる為にだ！その為に我らは時空を越えて来た!!」

凜 「時空を越えて来た…？」

卯月 「一体どこから…？」

「戦場から来た！その戦争に終止符を打つ為に！ゲッターの起源を断つ為に!!」

卯月 「ゲッターの起源を断つ…？」

凜 「本当に未来から来たなんて…」

「未来や過去など、時空を越えた今、それは無意味なものになった！ここがゲッターの起源…。その事実を消し去る」

「私、ギィムバグ軍曹が成す！この宇宙の未来の為、全ての生命の安寧の為！ゲッターの存在を、この宇宙から抹消する!!」

凜 「ゲッターが宇宙を滅ぼす…？ゲッターが…宇宙の敵…？」

卯月 「凜ちゃん！あの人の言葉を全部信じちゃダメです！私達は、何時だってゲッターに助けられてきたじゃないですか！」

芳乃「卯月さんの言うとおりでしてー。今のはかの者が片方の側面から見た話ー。真実はー、また別のところにありましてー」

ギムバグ「貴様らはこの星を出てはならぬのだ！ゲッター線にこれ以上宇宙を汚染させるわけにはいかぬ！」

グオン

卯月「——!?何か来る…?大きい…!」

ギムバグ「滅せよ！愚かなる眷属ツ!!」

ギムバグの乗る昆虫艦の背後から、真ゲッターを優に超える異形が姿を現し、ゲッターを掴み、そのまま球体を突き抜け地面へ叩きつける。

卯月「ぐっ…!?!」

ギムバグ「行けい!!ホグラムD7よッ!ゲッターを倒し、ドラゴンにトドメを刺せ!!」

ホグラムD7《ギシヤアアアアッ——!!》

凜「ど、ドラゴン…!?!」

芳乃「かの者らはー、ドラゴンの進化を阻止するつもりでしてー」

卯月「そんな事は…!」

ホグラムD7《グウウウウッ!!》

卯月「…ッ！」

真ゲッター1の前に、ホグラムD7が立ちはだかる。

ギムバグ「よし。クロノウォーム始動！目標、地下のゲッタードラゴン!!」

凜「…こつちの相手はこいつに任せて、あつちは悠々と地下に向かうみたいだね」

芳乃「ともかくここは、この異形を退ける事を第一に考えるべきかと」

卯月「ネオゲッターに支援を要請しますか？」

凜「そうだね…。これだけの相手…、戦力は多い方が…」

芳乃「いえ、そのような場合ではなさそうで」

凜「どう言うこと？」

芳乃「研究所内のゲッター線量が増大してまして。恐らく内部でも、一悶着が起きてるか」と

凜「こんな時に!？」

芳乃「はい。旅立ちの時を祝す、祭りが始まりでして」

――

李衣菜「うおりやああ!!」

ガンツ

奈緒「な、何が起きてるんだよ！一体！」

加蓮「敵に備えて待機してたつもりが、まさか暴走したゲッターの相手をする事になるとはね」

試作ゲッター群>……ズンズン

李衣菜「はあああつ!!」

徒党を成して襲い来る、廃棄同然の試作型ゲッターを拳を握り締め殴り倒していく。

李衣菜「くっ……!格納庫の狭さじゃ、思うように動けない!」

ガツ

李衣菜「しまった……!」

乱戦に乗じて、ネオゲッターの背後に回った1機の試作型ゲッターが、ネオゲッターを羽交い締めにして捕らえる。

奈緒「おいしい!」

正面に立った試作型ゲッターがトマホークを振り上げる。

李衣菜「……ッ!シオルダーミサイル!!」

何とか腰を落とし、シオルダーミサイルでトマホークを振り上げたゲッターを破壊。

李衣菜「こんのお……!」

肘打ちでこちらを羽交い締めしているゲッターを引き剥がし、蹴り倒す。

加蓮「倒しても倒しても、すぐに立ち上がってくる!」

李衣菜「下手なゾンビよりも質が悪いっ！」

晶葉「ネオゲッター！無事か!？」

奈緒「晶葉!?!ここは危ないぞ！何しに来たんだ!?!」

晶葉「そんな事は百も承知だ！だが、暴走の原因は究明する必要がある！」

加蓮「暴走…?」

晶葉「今、研究所のゲッターエネルギーで稼働してるものは全て暴走状態にある！」

李衣菜「ちよ、ちよつと待つてよ…!確かこの研究所のほとんどは、ゲッターエネルギー

ギーで動いてるんじゃない？」

晶葉「そうだ！だからほとんどのはアウトだ！」

奈緒「マジかよ…」

晶葉「早乙女博士だ！博士ならこうなつた原因を知っているに違いない！だから直接

行つて尋ねてくる！」

加蓮「成る程ね。つまりそこに行くまでアタシ達でエスコートすればいいんだ？」

晶葉「頼む！格納庫脇の非常用通路には入れれば、一応は安全の筈だ」

李衣菜「そうと決まれば…——おりやつ!!」

手近に寄つたゲッターから殴り倒していく。

李衣菜「ほらほらドンドン掛かつて来なよ！アンタ達みたいな出来損ないのゲッター

もどき、ネオゲッターがまとめて相手になってあげる!!」

ネオゲッターと試作型ゲッターの乱戦が始まる。

晶葉「よし…、今のうちに…!」

全力ダツシュ。

晶葉「はあ…つ、はあ…つ、はあ…つ!」

晶葉（第一関門突破…!）

非常用通路に入り、階段を下って地下へ。

晶葉（一体何が起こっていると言うんだ…? 博士、ゲッター線は一体何をさせようとしている…?）タタツ

晶葉「——ツ!」

ユラア…

晶葉「こんな時に幽霊騒ぎとは…。先を急ぎたいんだがな」

ブライ『……』

晶葉「そこを退いてもらおうか、ブライ! 今はお前の恨み言を聞いている時間はない!」

ブライ『恨み言などどうでもよい! 私は呼ばれたからここにいます!』

晶葉「誰にだ!」

ブライ『決まっている！ゲッターにだ！』

晶葉「何だと!？」

ブライ『ここは今、ゲッター線が滞留していて、君達にとっては危険な状態にある』

ブライ『だから私が、比較的安全なルートで早乙女博士のところまで案内をする。着いてこい』

晶葉「それを信じろと言うのか？」

ブライ『私は君達を恨んでいないと言った。後は君自身がどうするかだ』

晶葉「……」スタ

ブライ『…賢明だ。では行こう。早乙女博士も待ち侘びている』

ツカツカツカ…

—。

卯月「トマホオオーク！ブウーメランツ!!」

ホグラムD7《グオオオツ!!》ガキンツ

速度を上げて迫るホグラムD7の表装に、投じたトマホークが弾かれる。

ホグラムD7《グオオン!!》

卯月「きやあっ!!」

反撃のホグラムD7の拳の振り下ろしが、再び真ゲッターを地に叩き付ける。

凜 「くっ……。早くしないと研究所と未央が……」

芳乃 「焦りは禁物ですよ。ここは、落ち着いて掛からねば」

卯月 「でも、真ゲッターのトマホークも通用しないなんて……」

凜 「こうなったら、ストナーサンシャインで一気に……」

芳乃 「それは悪手でしょ。すとなーさんしゃいんのえねるぎーが、奥の時空の歪みに衝突すれば、何が起るとも分からず」

ホグラムD7《ウオオオオツ!!》

卯月 「——ッ!? きやああああっ!?!」

ホグラムD7の体当たりを直撃。

卯月 「うぐっ……! うう……!!?!」

衝撃がコックピットを震わせる。

凜 「このまま叩き付けられたら終わりだ!」

卯月 「……お、オープンゲット!」

バシユンッ

卯月 「チエーンジゲッター1!!」

ホグラムD7の背後で再合体。体勢を整える。

ホグラムD7《グウウ……》

卯月 「はあ…はあ…はあ…」

芳乃 「大丈夫でしてー?」

卯月 「はいっ…。一先ずはトマホークを…!」 ジャキッ

ホグラムD7《グオアアツ!!》

卯月 「——ッ!」

ホグラムD7の口に、トマホークの柄を噛ませガード。

卯月 「~~~~~!」

「トマホークブーメラント!!」

ホグラムD7《ギャツ!》

卯月 「今のは…」

凜 「今のトマホーク…、ダイノゲッター!」

ニオン 「大丈夫か?凜ッ!」

凜 「ニオン?どうして…」

ニオン 「研究所で動けるのは俺しかなかったただけだ」

卯月 「新研究所の方は、みんなに任せたんですね?」

ニオン 「そう言うことだ」

凜 「何にせよ助かったよ。ありがとう」

ニオン「…フンツ。そんな事より、このデカ物を何とかするぞ！」
卯月「はいっ！」

ホグラムD7《グワアアアアツ!!》

爪を立て突撃してきたホグラムD7を、左右に跳躍して回避。

ニオン「ゲッタービィイームツ!!」

卯月「ゲッタービーム!!」

左右からのゲッタービーム。

ホグラムD7《グウウ…ウガアアアア——ツ!!》

ニオン「チィツ…!!この程度では焼け石に水か！」

凜「地下に向かつてる敵の事も気になる。時間は掛けてられないけど…」

ホグラムD7《グオオオツ!!》

ニオン「ぐっ…!!」

ホグラムD7の打ち払いを、トマホークを構えて防ぐも、勢いで跳ばされる。

ニオン「お得意のストナーサンシャインとやらは使えんのか？」

卯月「出来ない訳じゃありません!でも、奥の時空の歪みに衝突したら…」

凜「当たらないように地面に向かつて撃つても、その時は地球がどうなるか…」

ニオン「…ならば俺に考えがある。——プテラチェンジッ!!」

ダイノゲッター1が、翼竜へと姿を変える。

ニオン「ダイノゲッターにストナーサンシャインをぶつける！」

卯月「えっ!？」

ニオン「シャインスパークと同じ理屈だ。ダイノゲッターで直接奴にストナーサンシャインをぶち当てる！」

凜「そんな事したら、アンタだって只じや済まないよ？」

ニオン「こちらのゲッター炉心をそつちに同調させる。それで少しの間ならダイノゲッターは持つ」

卯月「それでも、失敗したらニオンさんが……！」

ホグラムD7《ギャオオオツ!!》

卯月「……ッ!?……うっ……！」

2機の間割り込んだホグラムD7の攻撃を回避。

ニオン「時間はないぞ。早くしろ!!」

芳乃「ニオンさんの言うとおりかもしれません。短時間に決着させるには、効率が良いかと」

卯月「……。分かりました……！」

真ゲッター1が構える。

卯月「うあああああああ——!!」

手の平と平を向かい合わせた空間に、ゲッターエネルギーを収束。

卯月「——いきますっ!!」

ニオン「何時でも来い!!」

卯月「ストナアア——! サアアアンツ!!」

遙か向こうの正面にホグラムD7を、その間にプテラモードのダイノゲッター1を置き、狙いをダイノゲッター1に定める。

卯月「シャアアアアイイイインツ!!」

ニオン「——ツツ!!…おとおおお——!!」

ストナーサンシャインを身に纏い、ダイノゲッター1が突撃。

ニオン「しいずめええええええええ!!」

ホグラムD7《!!?!?》

ドワオ

ダイノゲッター1が、ホグラムD7の胴体を貫いた。その体内に、高濃度に圧縮したゲッターエネルギーを残していく。

ホグラムD7《ギヤアアアアア——!!!?》

ゲッターエネルギーは内側からホグラムD7を包み、消滅させる。

芳乃「無事成功、でしてー」

卯月「ニオンさんは…!?!」

凜「生命反応はあるから大丈夫の筈…。それよりもギイムバグを追おう! ゲッター2にチェンジだ!」

卯月「はいっ! — オープンゲット!」

凜「チェンジゲッター2ッ! — ドリルアーム!!」

—。

凜「…奴等、この短時間で随分地下に潜ったみたいだね」

卯月「早く追い付かないと…!」

芳乃「地下5000メートルとなりますとー、そう簡単には辿り着けませんねー」

凜「放射性廃棄物を埋葬する深さか…。そんな深さまで追いかけるなんて、余程の執着心だね」

卯月「それだけゲッタードラゴンを進化させたくないんですね…」

凜「…。連中をそんなに恐怖させる、進化したゲッタードラゴンって、一体…」

芳乃「凜さんー。詮索は後程にー。今はー、ゲッターを、未央さんを守りましょー?」

凜「…分かつてるよ」

ギョルルル… —

「ゲッタードラゴンを確認しました」

「ゲッター線量500！高熱により、周囲が溶解し、溶岩となっています！」

ギムバグ「よし。例え我が死滅しようとも、ゲッターGはここで滅ぼす！遙か未来の為に!!」

「ゲッタードラゴン、視認範囲に入りますッ！」

ギムバグ「オオ！アレか！遂に：遂に辿り着いたぞ！ゲッターG!!」

ギムバグ「クロノウォーム攻撃用意ッ！出撃可能な機体も発進準備だ!!」

「はっ……し、しかし……ここで攻撃を行えば、我が艦も被害を受けます！」

ギムバグ「構わんツ!!元より帰るつもりのない戦いだ……。我らの死が、多くの生命を繋ぐことになる！」

クロノウォームの中央に、エネルギーが蓄積される。

ギムバグ「——撃てッ!!」

ゲッターエネルギーの塊と化した、ゲッタードラゴンに、光線が放たれる。

「主砲、目標に命中！」

ギムバグ「やったか!？」

「……い、いえ！目標健在！」

ギムバグ「——ッ!?どう言うことだ！」

「こちらの攻撃が、ゲッターに吸収されました！」

ギムバグ「何て奴だ…。ええい、艦載機を出せ！ゲッタードラゴンをあそこから引きずり出し、バラバラに引き裂くのだ!!」

多数のメカセミが放たれる。

——ギロツ…

「ひいっ…!」

ギムバグ「恐れるな！アレはまだ完全体ではない！生まれてもいない赤ん坊のようなものだ！必ず倒せるツ！」

「か、艦長…!」

ギムバグ「今度は何だ！」

凜「ドリルハリケエーンツ!!」

ギムバグ「——ツ!」

岩層を打ち砕き、ドリルを最大限まで回転させた真ゲッター2が、ゲッタードラゴンに接触しようとしたメカセミ軍団を押し退けて姿を現す。

ギムバグ「真ゲッターロボか!」

凜「やつと追い付いたよ…!昆虫軍団!」

メカセミの軍団を迎え撃つように正面に立ち、ドリルを突き出す。

凜 「プラズマドリルハリケーソンツ!!」

ドリルの回転によって生まれた旋風が、真空波のようにメカセミを切り刻み破壊する。

ギムバグ 「ええい……あと一步のところまで来ておきながら……!」

凜 「アンタ達の思い通りになんてさせないよ」

ギムバグ 「ぐぐぐ……! 殺せ! 真ゲッターもろとも、我々の未来を消滅させる輩は、全て殺してしまえツ!!」

凜 「本性を出したね……! 何処からでも掛かっておいで!」

『——凜、下がって!』

凜 「——!?! この声は、未央!?!」

卯月 「いいえ、プロデューサーさん!」

芳乃 「……」

ズオオオオ——ツ

セミ 『ギヤアアツ!?!』

『グオオツ——!』

「うわああああツ!?!」

ギムバグ 「何だ!?! これは……、何が起きている!?!」

凜 「どうなってるの…？これ…」

卯月 「この光…。ゲッター線の光！」

芳乃 「光がゲッターどらごんに向かって行き、全てを吸収しているのでしてー」

凜 「吸収…!?喰ってる…。敵を喰ってるの!？」

卯月 「ゲッタードラゴンが生きてるみたい…。一体、何が起きてるんですか!？」

芳乃 「まもなくー」

凜 「!？」

芳乃 「時が始まりましたー」

—。

晶葉 「……」

ブライ 『……ここだ。この部屋に早乙女博士はいる』

晶葉 「そうか…」

ブライ 『これからの君には期待している。ではな——』

スウ…

晶葉 「……」

ガチャリ

早乙女 「……」

晶葉「博士、お忙しいところを失礼します」

早乙女「……いい。私の仕事は、今丁度終わったところだ」

晶葉「そうですか。……今外では大騒動が起きています。何とか収めてはもらえませんか?」

早乙女「その事なら心配はない。騒ぎはすぐに収まる。上の騒ぎはエネルギーのウォーミングアップのようなものだ」

晶葉「ウォーミングアップ:??」

早乙女「そうだ。ここから旅立つためのな」

晶葉「旅立ち……。……早乙女博士、貴方はゲッター線の何を知っているんです?ゲッター線とは、一体……!」

早乙女「ゲッター線とは何か、か……。……正直なところ、僕にもよく分かっていないのかもしれん」

晶葉「何ですって?」

早乙女「人の人生の流れ……。運命のその全てを知るのは、一生命には難しい事だ。それと同じなのだよ」

晶葉「……」

早乙女「僕は、ゲッター線を何十年と追求してきたが、それもゲッターの意思だった

のかもしれない」

晶葉「意思によって人の行動を左右する…。それではまるで神のようですね…」

早乙女「神か…。それとも悪魔か。それを決めるためにも、我々は進化を止めるわけにはいかんのだ」

晶葉「進化…。ゲッターの進化とは何なのですか？」

早乙女「ゲッターの行き着く先…。それが気になるか？」

晶葉「…？」

晶葉「——ッ!？」

目の前の空間が、宇宙に変わる。

晶葉「これは…？」

早乙女「ゲッターの記憶じゃよ。この空間に滞留した、高濃度のゲッター線を介して、晶葉さんの視覚にゲッターの記憶を映像として見せている」

晶葉「そんな事が…。——!!!」

そこで線り広げられる、大宇宙の戦い。

晶葉「アレが…。ゲッター…。？何て大ききなんだ…」

——『突撃だ！これ以上奴等を前進させてはならんッ！』

——『う、うわあああ…。！守れ…。！惑星ダビーンを守るんだ!!』

「ダメだ！奴等の力は強大だ！！…今の一撃で、艦隊の3分の2が吹っ飛んだ！！」
 「せめて…、せめてゲッターエンペラーを覆うゲッター線シールドを何とか出来れば…！」

「ゲッターエンペラー、ダビーン指揮頭直上に接近！皇帝一族は避難を…」

「ダメだ！間に合わん！！」

「『うぎゃあああああ——ッ！！』』』」

晶葉「これは…！こんな事が！」

「見ろお！ゲッターエンペラーが陣形を変える…！」

「あのフォーメーションは…！」

「『ゲッターチェンジだ！！』」

晶葉「——ああ…！」

現実に引き戻される。

早乙女「見たかね。ゲッターの未来を」

晶葉「な…何なんです!?何であんな事が…！ゲッターは一体、何の為にあんな事を！」

早乙女「それが、全ての生命が生き残る為の戦いなのだ！」

晶葉「—」

早乙女「晶葉くん…。ゲッターは全てを消滅させるかもしれん。ゲッターは全宇宙の

敵になるかもしれん」

早乙女「だが、我々の愛する者達は、愛すべき生命は、未来を消滅されてはいかんだ!!」

晶葉「早乙女博士…、それは…!」

早乙女「晶葉くん。全てを理解しようと説明しても無駄なのだよ。全てを理解するには、永劫の時間が流れてしまう」

晶葉「博士にも、分からないと言うことですか…?」

早乙女「そうだ。最初にも言った通り、儂にも全ては分からん」

早乙女「だが、我々は、ゲッターの進化の先頭に立つ我々は!愛する者がいる限り、その為にだけでも戦い続けなければならないのだ!!」

晶葉「…。今はその為に戦い続けると、博士はそういうんですね…?」

早乙女「うむ。間もなく時が来る。その前に、晶葉くんにはこれを渡しておこう」

晶葉「これは…、データディスク、ですか?」

早乙女「ここでの事が全て終わったあと、それを開けてくれ。必ず、ここから先の人類に必要ななるだろう」

晶葉「…分かりました」

早乙女「…それでは、晶葉くんを頼む」

晶葉「!?」

P 『……』

晶葉「この人は……」

早乙女「彼が、出口まで案内してくれる。晶葉くんはまだ人類に必要な人間だ。早く避難するんだ」

晶葉「ちよつと待ってください！私は……！」

早乙女「早く行くんだ！全てが取り返しの着かなくなる前に！」

晶葉「……！」

晶葉「最後に一つだけ、いいですか？」

早乙女「何かね？」

晶葉「博士は、早乙女博士は、これで良かったんですか？」

早乙女「……」

早乙女「ああ、その中でも、君と出会えたことは、僕の人生で最大の幸福だった」

晶葉「……そう、ですか」

早乙女「ではな」

晶葉「はい」

晶葉「……さようなら、早乙女博士」

—。

李衣菜「どわあっ…!？」

壁際に押し倒されたネオゲッター1に、試作型ゲッターが、その鳩尾に鉄骨を連続で叩き付ける。

李衣菜「ぐっ…!ぐっ…!…うう…っ」

奈緒「だ、大丈夫なのか!？」

李衣菜「大丈夫じゃないよ…。けど…!」

試作型ゲッター《—!》》

李衣菜「—…ッ!？」

鉄骨を大きく、振りかぶる。

……。

李衣菜「—…ん？」

加蓮「このゲッター…、止まった…？」

奈緒「た、助かったのか…？」

李衣菜「…はあ…」

ネオゲッター1が崩れ落ちる。

奈緒「うわあっ! ホントに大丈夫か!？」

李衣菜「も、もうホントに限界……。私もゲッターも、もう動けない……」

加蓮「ま、こんだけ狭かったら、変形も出来なかつたから、交代する事も出来ないんじゃないよね……」

奈緒「今回ばかりは、よく頑張ったよ」

李衣菜「あ……ありがと……」

—— 逃げろ。

李衣菜「え……。何……?」

奈緒「どうした?」

李衣菜「今、声が……」

—— もうすぐ時が来る。お前はまだ残るべき人間だ。ここから逃げろ。

李衣菜「逃げろって……、どう言うこと?」

加蓮「……? 研究所のゲッター線量が増えていく……」

奈緒「何だって……?」

加蓮「ヤバイかも……。この間の比じゃないよ。シャインスパークとか、そんなレベルに上がってる……!」

李衣菜「じゃあ、ここにいたら……」

加蓮「マズいね。一貫の終わりって奴?」

奈緒 「冗談じゃないぞ！なら、早くここから離れないと……！」

李衣菜 「……!? ……そう言うこと、なの……」

奈緒 「どう言うことだ!？」

李衣菜 「こつちの話……。……くっ……！」

奈緒 「どうした!？」

李衣菜 「ダメ……。ゲッターの状態じゃ、エネルギーが足りなくて動かない……！」

李衣菜 「はあ……。はあ……」

加蓮（口には出さないけど、リーナの方も限界……？ 戦闘の負傷が思ったよりも大きいみたい……）

奈緒 「じゃあ、どうするんだよ？」

李衣菜 「こつちから合体を強制解除すれば、ネオジャガーとネオベアーにはエネルギーが残ってるから、十分脱出に間に合うと思うよ」

奈緒 「李衣菜はどうするんだよ！」

李衣菜 「……へへっ、ま、何とかなるって！」

加蓮 「ダメだよ」

李衣菜 「へ？ 加蓮……」

加蓮 「これ以上誰も失わせない。リーナが死ぬなら、チームメイトのアタシ達も一緒

だよ」

奈緒「そうだ！一人で犠牲になろうなんて格好つけた真似はやめろよ！らしくない！」

李衣菜「らしくないって、私らしく、ロックでしょ？」

奈緒「違う形でロックを貫き通せよ……このっ！」

李衣菜「奈緒……？」

操縦桿を握り締め、無理矢理ネオゲッター1を起こす。

奈緒「ぐっ……。バランスとるので精一杯だ……。足の操縦は任せたぞ、加蓮！」

加蓮「オツケー。上の重りがキツイけど、やってみせるよ……！」

ギギギ……

格納庫内のゲッター線の光が強さを増す。

李衣菜「ダメだ……！この速度じゃ、ホントに3人も助からないよ！私の事はいいから！」

奈緒「言ってるよ！そっちのコントロールにはロック掛けたからな。強制分離なんて

出来ないぞ！」

李衣菜「……」

加蓮「とは言ったものの、流石にヤバイかも……」

ガンツ

李衣菜「あうっ！な…何…？」

奈緒「ダイノゲッター！」

ニオン「…世話の掛かる奴等だ」

加蓮「助けてもらったのはこれで二度目だね」

ニオン「お前達は凜の仲間だからな」

李衣菜（私、違うんだけど…）

ニオン「何かあつては、アイツに会わせる顔がないからな」

李衣菜「私は？」

奈緒「何はともあれ助かったよ。サンキューな」

ニオン「…ふん。それより、早く脱出するぞ。これだけのゲッター線…。ゲッター線

に耐性があると言つても、耐えきれぬものじゃないからな」

加蓮「うん。リーナの支えは任せたよ」

ニオン「ああ。一旦飛ぶぞ。しっかり捕まってる！」

李衣菜「ねえ、私は—!？」

—。

ギムバグ「うおおおっ——!!」

ギイムバグ「まだだ！クロノウオーム最大出力!!ゲッタードラゴンに突撃をかけるぞッ!!」

凜「アイツら…。自爆するつもり!?」

卯月「それくらいゲッターが驚異って事ですか…!」

芳乃「死力を尽くして参りますゆえー。ドラゴンを守らねばなりませんー」

凜「分かっているよ。こんな地下深くでドラゴンごと爆発されたら何が起こるか…」

卯月「その前に勢いを殺しましょうッ!!」

凜「ドリルアームッ!」

ゲッターエネルギーを旋風のように纏い、加速。

凜「ドリル、ハリケエーンッ!!」

特攻の為最大戦速で飛び込んでくるクロノウオームに、正面から激突。

凜「うおおお——!!」

ドリルの回転が、クロノウオームを砕いて穿ち、真ゲッター2をクロノウオームのブリッジへと誘う。

「「うぎやあああ!!」」

ギイムバグ「ぐおっ…!」

凜「チェックメイト。これで終わりだよ」

ギイムバグ「ぐっふっふっふ…。ゲッター…。その力…。やはり恐ろしい…。悪魔の力よ！」

凜「そつちこそ。研究所をこんなにして、ドラゴンまで…。よつぼど悪魔だよ」

ギイムバグ「ふふふっ…。だが、我々の攻撃は作戦の第一段階にすぎない…」

卯月「え!？」

ギイムバグ「今、私の安定させたワームホールから、直に本隊がこの世界にワープアウトしてくる…。本隊の戦力を以てすれば、例え真ゲッターであろうと…！」

卯月「どうして…。どうしてなんです!?! どうしてそこまでゲッターを狙うんです!？」

ギイムバグ「それが、我々が生き残る唯一の方法だからだ!」

卯月「そんな事…!」

ギイムバグ「進化の途上にいる貴様らにはまだ分からんだろう…。だからこそ知るのだ! その意識で、その目で! ゲッターエンペラーの為す所業を!」

凜「ゲッターエンペラー…?」

卯月「…ッ—!?!」

—。

—「『うおお…! ゲッター線の増大が止まらない…!』」

—「『ダビイーンが押し潰される! もうお仕舞いだ!!』」

『ビックバンを引き起こすだけのエネルギー指数だ！全艦後退!!』

『もうダメだ！間に合わない…!!』

『エンペラーチェンジだツ!!』

卯月（ゲッターエンペラーを中心に、宇宙が震えている…。あの、あの声は…!）

『惑星ダビーン、消滅!!』

『ダメだ…。最早、我々の全ての武器はゲッターエンペラーにとって無意味なものとなった!』

『これ以上戦闘を行っても、我々に勝ち目はなイツ!!』

『ゲッター指数1250を突破！このままでは全てがゲッターに飲み込まれます！戦艦甲長！後退許可を』

『支援艦隊の後退を許可する。我が艦は、ここで殿となり、後退する艦隊を援護する!!』

『し、しかし…!母星を失った今、奴等に太刀打ちできる手段がありません!』

『我が艦の後退はあり得ぬ！我々は指揮艦として、最後までゲッターエンペラーに抗うのだ!!』

『ゲッターエンペラーのゲッター指数、1800を越えますツ!!』

『…バケモノめ…!!』

——『艦蟲長！後退しましょう！後退し、戦力を整え、再戦の機会を伺うのですッ！』

——『いや、過去だ。我々は過去に飛ぶ！』

——『過去、ですか…？』

——『そうだ…。過去における時間軸で、ゲッターの起源を断つ！そうしなくては我々の勝利は永劫あり得んッ！』

——『しかし…！それはあまりにも危険です！ゲッターエンペラーがここに存在していると言うことは、我々の過去への跳躍の失敗を意味しています!!』

——『それでもだ！例え現在は変えられなくとも、未来は変えられる筈だ！』

——『我らの命は、既に尽きたも同じ。ならば、この先の未来の命のために、我らの命の全てを捧げようではないか』

——『…艦蟲長！亜空間内に、安定したワームホールが存在します!』

——『我々のために繋いでくれた者達がいたのか…！よし、空間跳躍用意だッ！』

——。

卯月「——…うっ…!」

凜「今の…、現実なの…?」

芳乃「まごう事無き現実でして。遙か未来の—」

凜 「地球ほどの大きさのゲッターに抗う敵が、時を越えて攻めてくる…」

芳乃 「今確かに言えることは、わたくし達が敗れてしまえば、わたくし達の未来が、失われると言う事」

芳乃 「そしてそれは、凜さんも望まぬところの筈」

凜 「……」

卯月 「全部の答えはこの戦いを潜り抜けた先にあります！消滅か、生存か…！」

ギムバグ 「消滅するのは貴様らだ！ゲッターロボ!!」

凜 「…ッ!?!」

卯月 「オーブンゲット!」

凜 「卯月…!」

卯月 「チェンジゲッター!! 1ツ!!」

ギムバグ 「貴様らも地獄へ落ちろ！刺し違えても、ゲッターを終わらせるツ！」

卯月 「決着を着けます！ここで！」

『ダメだよ！卯月——!』

卯月 「…!?!未央ちゃん…?」

グワツ

凜 「これは…ゲッター線の腕…?」

『卯月達をここで死なせるわけにはいかない!』

ゴワアツ

ギムバグ 「うお…!？」

膨大なゲッター線で作られたゲッタードラゴンが、クロノウォームをゲッタービームのような閃光で焼き払う。

ギムバグ 「おのれえ…、おのれゲッターアア…ああ——!」

卯月 「未央ちゃん…」

『さあ、行くんだ! もうじきアイツらの本隊がこの時間に雪崩れ込んでくる。それを阻止して、見るんだよ』

凜 「何を…?」

『ゲッターの導く未来を!!』

ズオツ——

卯月 「——きやあつ!」

凜 「——ツ!?!…ここは、地上に戻ってきたの?」

ゲッター線が全身を包み、真ゲッターは地面を抜けて、地上、ワームホールの眼前へと。

凜 「地下5000mの深さから、一瞬で!」

芳乃「驚いている時間はないようでしてー」

卯月「ワームホールから、何か出てきます!」

凜「未央が言つてた、昆虫軍団の本隊!?!」

「ゲッター指数2000!!ゲッターエンペラー、我が艦に向かってきます!」

「時空間砲、発射用意ツ!座標距離、前方12ギヤロ!」

「ゲッターの存在する時空は分かっている。何としてもその空間を破壊する!!その為に、死出の旅路に、いざ行こうぞ!!」

ズズズズ…

卯月「来ますツ…!」

凜「大きい…!こんなの、一体どうやって…!」

芳乃「これはまだー、船の先端でしてー」

卯月「例え無茶でも、やってみせますっ!」

真ゲッターが、ストナーサンシャインの構えを取る。

「おお…!時空を越えたぞ…!これで未来は救われる!」

「待つてください!ゲッターエンペラーが、亜空間を潰そうとしているようです!」

「時がない…。機関最大!何としても亜空間を抜けるのだ!!」

「加速の影響で、時空が不安定になります!」

グワアア——ッ

卯月「な、何ですか…!？」

凜「戦艦が崩れていく…!！」

卯月「向こうの宇宙に放り出される…!？」

「ぐう…!！ゲッターエンペラーめえ…!！」

「艦後部消失！機関静止！加速が止まります!!」

「問題ない！これだけの質量が転移したのだ…!！早乙女研究所は潰せる！ゲッターの起源は断たれるのだ!！」

「艦蟲長！あれを…!！」

「あ、アレは…!！」

「真ゲッタードラゴン…!！」

真ドラゴン『!!!』

早乙女研究所を覆い尽くすほど巨大な、ゲッターの姿をしたエネルギーの塊が、昆蟲艦を呑み込んでいく。

「うわああああ…!!ゲッターに飲み込まれるう——!!！」

「おのれえ…!！もうここまで進化していたのか——!！」

ズワオオオオオ——ッ

早乙女「……」

所員「ああ……！」

所員「そうか……。そう言うことだったのか……！」

ブライ『そう……。全てはこうなる』

ゴール『全ては初めから決していたのだ……。生命がこの宇宙に誕生する以前から……』

早乙女「またみんな、一つの形に戻る」

ゴール『行きましょう』

ブライ『我々がここで為すべき事……。全ては遺る者達に託された』

早乙女「うむ。時は来た。旅立ちの時だ」

早乙女「未来へ向かい、更なる飛躍を迎えるために行くとしよう——」

ドワオオオオ——…

——。

卯月「……ここは、未来の宇宙!？」

凜「そうなんだよね。さつきまでゲッターと、アイツらが戦ってた……」

芳乃「そして、アレが——」

卯月「ゲッターエンペラー!!」

ゲッターエンペラー『……』

凜 「これが、ゲッターの行き着く先……」

卯月 「私達は、ここまで来るって事ですか……!?!」

凜 「壮大……。あまりにも壮大すぎて、私達の想像の及ばない世界……!」

（——見てみたい……。ゲッターがどこから来て、どこまで行くのか……!）

凜 「……ッ!?!」

ゲッターエンペラー 『島村卯月、そして渋谷凜』

卯月 「……!」

ゲッターエンペラー 『よくぞ来た』

卯月 「何なんです!?! 貴方は……!?! これから私たちに何をやらせようって言うんです!?!」

ゲッターエンペラー 『それを、これから知るのだ』

——ズズズ……

卯月 「……!?! 後ろに……!?!」

凜 「ワームホール……!?!」

卯月 「真ゲッターが、引き寄せられていく……!」

凜 「離脱できないの!?!」

卯月 「ダメです! 飲み込まれる……!」

「「きゃああああ——!?!」」

ゲッターエンペラー『旅立ちの時は来た。これよりお前達は、ゲッターの真実を目の当たりにする』

ゲッターエンペラー『全てを知るのだ。そしてお前達が、空間をも支配する領域に達した時——』

ゲッターエンペラー『また、会おう』

ズズズ——

——。

くくく 早乙女研究所 跡地 くくく

ゲッターー、ブラックゲッター、ゲッター烈火が飛行している。

美波「……一体何が起こったの……？」

みく「早乙女研究所がまるごと消えてるにや！」

茜「事故とか事件とかいうレベルではないですね!!」

美穂「卯月ちゃん達は……!? 誰か、生き残ってる人はいないの!?!」

アーニヤ「……。生体反応、検知。すぐ近くですね」

菜々「脱出できた人がいたんですね! 良かったあ……」 ホツ

瑞樹「見て。研究所の方から、ダイノゲッターとネオゲッターが向かって来るわ」

みく「リーナちゃんとニオンも無事みたいにや」

「菜々」でも、ネオゲッターの方は損傷が激しいみたいですね…。救助にいきましよう！」

みく「合点にや！」

美波「……いた！道路の方、アレは…晶葉ちゃん！」

茜「生存者がいて、不幸中の幸いのようですね！」

アーニャ「ですね。でも、これからが、大変ですね。きつと…」

美穂「……卯月ちゃん、みんな……」

晶葉「……っは！はあ…はあ…っ！あれは、ブラックゲッターに、ゲッター斬…。救助は間に合ったか…」

晶葉「研究所は…。まあ当然の結果か…」

晶葉「研究所だけじゃない…。あそこに留まった人間や、早乙女博士はきつと…」

晶葉「……」

博士から手渡された、メモリーディスクに目を落とす。

晶葉「早乙女博士…。これを私に残して…」

晶葉「……。ゲッター…。お前は一体何者なんだ…？一体何を考えている…？」

晶葉「一体私達に…、これから何をやらせようとしているんだ——？」

幕間 完

第3部“大戦”編

第1話『Beat Soul, & Rocking my

Heart』

~~~~ 早乙女研究所 跡地 ~~~~

晶葉（防護服）「……」

作業員「いやあ、ホントに一日で全部なくなっちゃったんですね」

晶葉「一日じゃない。一瞬だった」

作業員「はい？」

晶葉「何でもない。…で、何のようだ？」

作業員「あ、はい。早乙女研究所跡地の封印作業、完了しました」

晶葉「そうか。ゲッター線漏れの危険性はないな？」

作業員「はい。計器によるチェックを何重にもして、抜かりはありません」

晶葉「うむ。……」

眼下、ゲッタードラゴンが開けた、巨大な穴を塞ぐように設けられた、分厚い鋼鉄盤



に目を落とす。

晶葉「埋め立てるよりは楽でいいか」

作業員「地下数千メートルに及ぶ空洞ですからね…。勿論ただの鉄板じゃないですよ」

晶葉「確か、中央にゲッター線を吸収する装置が取り付けられているんだっただか」

作業員「この周囲に拡散した高濃度ゲッター線を吸い取ることで、理論上は約10年で無害化できます」

晶葉「それでも10年も掛かるのか」

作業員「環境汚染の中では早い方ですよ」

晶葉「…それもそうか。しかし、何もない更地に鉄板一枚とは、随分殺風景だな」

作業員「管理棟を建設しますよ。ゲッター線吸収装置にトラブルが起きてはいけませんし、何より、今でもあの鋼鉄盤の真下では、消失したゲッタードラゴンの残した残留ゲッター線が、核融合炉のように渦巻いてますから」

晶葉「正に、地獄の釜の蓋だな」

作業員「パンドラの箱かもしれませんが。ゲッターエネルギーは、私達の希望でもあります」

晶葉「君はゲッターに肯定的な考えを持っているのか？」

作業員「自分も、自分の親も、恐竜帝国と百鬼帝国の戦いで、二度ゲッターに命を救われました」

晶葉「そうか…。私も同じだ」

作業員「だから、このままゲッターが社会から排除されるのは、何か違うと思うんですけどね」

晶葉「仕方ないさ。目に見えない危機より、目先の危機だ。目の前に爆発するかもしれない箱があったら、遠くに避難するか、爆発しないように処理するか、そのどちらかだろうか？」

作業員「それは、そうですが…」

晶葉「結局、大事なのはやって来た事、してきた事じゃない。どうやったら生き延びれるか、さ。誰だつて死にたくないし、死にたくないと思つたら危険なモノを取り除く。そうする事で今日まで生き延びて来たじゃないか。私達は」

作業員「…次はゲッターの番、つて事ですか」

晶葉「平和になれば、ゲッターは不要になる。ゲッターが戦力として必要とされないのは、世界が平和に向かつてる証拠だな」 スタスタ

作業員「どちらへ？」

晶葉「何の思い出もない土地という訳じゃないからな。少しその辺を歩いてくる。撤

取作業は任せたぞ」

作業員「はあ……」

晶葉「作業が完了したら無線で知らせてくれればいい。ではな——」

ザツ  
ザツ

鬱蒼と木々が生い茂った、道無き道を進む。

晶葉「確か、この辺りだったか……。……あつた」

それは、研究所脱出の際に使った地下通路の入口。

晶葉「まさか、本当に被害を受けていないとは思わなかつたな」

梯子を伝い、地下の空間へ。

晶葉「地下通路は無事、か……。だが、ゲッター線量は550……。地上の10倍以上か」

晶葉（防護服を来ていても危ないかもしれないな……）

早乙女『……』

晶葉「——!?」ガバツ

「……」

晶葉「誰もいない……。でも確かに人の気配が……。……あの時と同じか」

晶葉「こちらへおいで、と言うことですか。早乙女博士……——」

ツカツカ——

「…………プロダクション 正門前 ……」

李衣菜「…………」

—— 数日前。

李衣菜「——ゲッターロボが、使用禁止?!」

菜々「…………」

かな子「…………」

李衣菜「何で?! どうしてなんですか! 橘博士ッ!」

橘「…理由は、言わなくても分かると思うがね?」

李衣菜「…っ。ゲッターなしで、どうやってインベーターと戦うんですか?」

橘「インベーターの弱点については、晶葉くんと調査で判明している。戦力的な

問題は何処にもない」

李衣菜「…………」

橘「今回のゲッター線暴走事件は、国内で済まされる問題ではないのだよ。既に世論だけでなく、各国専門機関からも、ゲッター線の研究と、使用に関する面で疑問視する声が上がっている」

橘「事件の原因となったゲッタードラゴンも、マントルを越えて消息不明…。これ

では、早急に原因を究明し、弁明すると言う事も出来ん」

李衣菜「でも……！」

瑞樹「落ち着きなさい。あまり博士を困らせるものじゃないわ」

李衣菜「瑞樹さん……」

瑞樹「今回の使用禁止は、あくまで一時的なもの。私達の使っているゲッターの安全が確認されれば、すぐに禁止は解かれる筈よ。そうよね？」

橘「うむ。世間では今、ゲッター線が第二の核になるのでは、という見方もある。早乙女博士の提出した資料も少ない以上、ゲッターには何らかの危険性がある可能性も捨てきれん」

李衣菜「ゲッターの安全を証明するため、ですか……？」

橘「そうだ。ゲッターの潔白を証明するためにも、今は我々に協力してくれ」

李衣菜「……でも、ネオゲッターまで禁止する事ないんじゃないか……」

橘「……。李衣菜くん……。私は、これは一つの機会だと捉えているんだよ」

李衣菜「機会……？」

橘「巻き込んでしまったのはこちら側とはいえ、君達は元より民間人。それも、アイドルだ」

橘「男女で仕事を分ける、と言う昔気質な言い方をするわけではないが、君達は本

来、戦うべき人間じゃない」

橘 「それを踏まえて、この禁止期間中に、各々で考えてもらいたいのだよ」

李衣菜 「……」

橘 「ゲッターとどう向き合っていくか……。後戻りするなら、今からでも遅くはない——」

——そして、現在。

李衣菜 「……」

奈緒 「何不貞腐れた顔してんだよ？」

李衣菜 「奈緒。奈緒も、今日仕事なんだ？」

奈緒 「まあな。まさか、お前と時間が被るとは思わなかったけどな」

加蓮 「あれ？李衣菜に奈緒じゃん」

李衣菜 「加蓮まで……。どんな巡り合わせ？」

加蓮 「さあ？ゲッターの導きつて奴？」

奈緒 「偶然だろ。あたしは事務所まで打ち合わせだけだし」

加蓮 「アタシは、今日は外で仕事だから。その待ち合わせ場所って感じかな」

李衣菜 「私も、プロデューサーが、何か話があるとか……」

奈緒 「ほらな」

加蓮「でも、こうやって3人で顔合わせるの、久し振りだね」

奈緒「そうだな。パイロットで研究所にいた頃は、ほぼ毎日顔を合わせてたから、余計そう感じんのかも」

李衣菜「ゲッター以外だと、意外と接点ないよね。私達って」

奈緒「でもまあ、橘博士の言うとおり、いい機会だったのかもなあ」

加蓮「うん。アタシはそもそも、正義とか大義名分とか？ そう言うのキャラじゃないし」

奈緒「だよなあ。適正があるからって選ばれて、それでなあなあに流されて乗ってるだけだったもんな」

加蓮「誰かを守るーとか。世界を救う、とかそんな大層な事出来るわけないんだし、ゲッターも量産が進んで、普通に自衛隊の人とか乗れるようになったもん。アタシ達はお払い箱でもいいかな？」

奈緒「李衣菜はどうなんだよ？」

李衣菜「えっ？ 私？？」

加蓮「リーナはゲッターに乗りたくて来たみたいない感じでしょ？ やっぱりちよつと悔しい？」

李衣菜「うん…。確かに悔しいけど…、うん。いい機会だと思うよ」

奈緒「いい機会？」

李衣菜「うんっ。だって、これでアイドル活動に専念できるし、ライブだって、もつと色んな事に挑戦できるって事だもんね？」

奈緒「…お、おう」

李衣菜「プロデューサーに言ったら、仕事増やしてくれるかな？歌番組出演とか、ラジオのパーソナリティとか…。ああ、バラエティ番組とかも出てみたいなあ…」

加蓮「……」

李衣菜「ん？何さ、2人して。ゲッタービーム喰らったインベーダー見たいな顔してるよ」

奈緒「いやいや、どんな顔だよ…」

加蓮「何て言うか、意外だなって」

李衣菜「意外…？」

加蓮「アイドル活動に前向きなんだなくって」

李衣菜「え…」。2人共、私の事なんだと思ってるの？私だって、過程は特殊かも知れないけど、アイドル活動は楽しいし。プロデューサーだって、仕事持ってきてくれるから、ちゃんと応えなきゃとか、そう言うのはあるよ？」

加蓮「もうちょっとゲッターの事でごねるかと思ってた」



李衣菜「パイロットの前にアイドルだからね！アイドル活動楽しむのは当然でしょ！」

奈緒「そりゃあ、そうなんだけどさ…」

李衣菜「何？それとも奈緒は、私と会えなくなつて寂しい？」

奈緒「な…?!? なな…な訳あるかア！うるさいのがいなくなつて、むしろ清々してるよ！」

李衣菜「…そうはつきり言われると、ちよつとシヨックなんだけど…」

奈緒「へ？」

加蓮「あーあ、奈緒はそうやってリーナを傷付ける〜」

奈緒「え、あ、傷付けるとか、そう言うんじゃないやなくてな…。え〜つと、あたしだつてほら、張り合う奴いないと気合が入らない時もない訳じゃないとか…ああ〜…！何言つてんだ、あたしは〜！」

加蓮「あははっ」

李衣菜「…へへっ」

奈緒「あ…あく！また嵌めやがつたな！」

加蓮「そんなあく。人聞き悪いよね？」ニヤニヤ

李衣菜「うんうん。シヨック受けたのは事実だし」ニヤニヤ

奈緒「あーっ！もうお前らなんか大ッ嫌いだあーっ！！」

加蓮「…ホントに？」

奈緒「え…。あ、あ…あゝゝゝ！もうッ！勝手にしろ!!」

ダアーっ

李衣菜「あ、走って行っちゃった」

加蓮「いやあ、久し振りに堪能したあゝ…」 ツヤツヤツ

李衣菜「とか言って、私よりは一緒に仕事したりしてるんでしょ？」

加蓮「んー？そうでもないよ。リーダーも不在だしね」

李衣菜「あ…。ごめん」

加蓮「いいよ。気にしてない。別に、凜が死んだなんて思っていないし」

李衣菜「だよね」

加蓮「…アタシ達が研究所から離脱する瞬間…。一瞬だけど、真ゲッターが、空間の歪みに消えていくのが見えた…」

李衣菜「生きてるとすれば、歪みの向こうか…」

加蓮「問題は、そこから帰って来れるかなんだけどね」

李衣菜「そこ、軽く言っちゃう？」

加蓮「深刻に考えても意味ないでしょ？だったら今は、アイドル活動に専念するだ

けだよ」

加蓮「アイドル活動を、精一杯やりきって、楽しい思い出一杯作って、凜が帰ってきた時に嫉妬させるくらいその話をしてあげるんだ」

李衣菜「…加蓮ってさ、前向きだよね」

加蓮「そう?…後ろ向きに考えてたって、良いことなからね」

李衣菜「それは同感。だからこの先、ゲッターがどうなつたって私はアイドルを続ける。私達は、どこでだって輝ける筈だから!」

加蓮「リーナのそう言うブレないところ、アタシは好きだよ」

李衣菜「え…?」

加蓮「アタシは誰かさんと違って、素直クールなの」 スタスタツ

李衣菜「あ…加蓮!」

加蓮「もうすぐ待ち合わせの時間だから。リーナも仕事、頑張んなよー」 ヒラヒラ  
李衣菜「言っちゃった…。素直クールって、加蓮もメンドくさいトコあると思うけど…」

李衣菜「つといけない!こつちも集合時間ももうすぐだった…!急いで行かないと!」

タツタツタツ——

—。

李衣菜 「はあ……はあ……！節電でエレベーター使用禁止なら、初めから言つといてくれればいいのに……！」 タタツ

李衣菜 「はあ……！え……つと、第4会議室、第4会議室……つと、あつた！」  
ガチャバターンツ

李衣菜 「おはようございますお疲れ様です遅れてすいませんでしたー!!」

新P 「おう。朝から盛りだくさんだな。おはようさん」

李衣菜 「プロデューサーさん……。えつと、エレベーターが節電で使えなくて……」

新P 「んなもん、俺達もここにいる時点で知ってるつつの」

李衣菜 「え……あ……」

「あはははははは……」

李衣菜 「？」

「お前、なかなか可愛いな」

李衣菜 「え……、可愛い……？私が？」

李衣菜 「……つて言うか、誰？」

新P 「んじや、揃ったところで話はじめつか。多田、こいつはお前より先にアイドル活動してた……」

「木村夏樹だ。ヨロシク」

李衣菜「よ、よろしく…。えっと、私は…」

夏樹「知ってるよ。多田李衣菜。事務所じや有名だからな」

李衣菜「そ、そうなんですか…?」

新P「世間じゃゲッターのパイロットは秘匿されてるが、事務所じやそんな事ねえかな。口外しなければいい」

李衣菜「へ、へえ…」

夏樹「でも改めて顔を会わせて驚いたよ。まさかこんな娘がゲッターのパイロットなんてな…」

李衣菜「こんなって…。これでもロックを極めるロックアイドルなんですっ!」

新P「自称、な」

李衣菜「自称は余計ですく!」

夏樹「あつはははは!面白いなあ。気に入ったよ」

李衣菜「気に入ったって…。えっと、プロデューサーさん?全然話が見えないんですけど…?」

新P「んだよ…。まだ分かんねえのか?ユニットだよ」

李衣菜「はい?」

新P「だからな、お前と、木村の2人でユニットを組んで歌うんだ。これからのレッ

スンも、ライブに向けた宣伝も、スケジュールはもう用意してある」

李衣菜「私が…？夏樹さんと…？」

夏樹「夏樹、でいいよ。堅苦しいのは嫌いなんだ」

李衣菜「え…？あ、はい…」

夏樹「ははっ」

李衣菜「は…はは…っ」

—。

〃〃〃 私立病院 〃〃〃

加蓮「—…これでよし、と」

患者「あ、ありがとうございます…」

加蓮「いいっていいって。それよりも早く元気になって、家族の人安心させてあげて」

患者「は、はい…！」

加蓮「…ふう、智絵里、そっち、大丈夫？」

智絵里「あ、はい…！こっちはこの人で最後です」

加蓮「そっか。予想はしてたけど、結構な数だよね」

智絵里「そうですね…。怪我人が病室に収まらないで、廊下にまで、こんなにたくさ

ん…」

加蓮「そりや看護師さんも数が足りなくなるわけだわ」

智絵里「…もつと、私達に出来る事、何かないのかな…?」

加蓮「…アタシ達も専門家じゃないからねー。ちゃんとした治療つてなると、責任とれないし、こうやって包帯替えるだけでも、病院の人からみたら力になれてるんじゃない?」

智絵里「でも…」

加蓮「暗い顔してちやダメだつて。アタシ達が今日病院のボランティアに呼ばれたのは、単に看護師の数が足りないだけじゃない」

加蓮「アイドルのアタシ達が、笑顔で元氣なくした患者の人達を少しでも元氣にさせるため何だから。ほら、笑つて」

智絵里「は、はい…!」

加蓮「その調子その調子。さて、後は藍子なんだけど…」 チラツ

藍子「—ふふつ、そうなんですか? 私は—」

加蓮「…」

智絵里「楽しそう、ですね…」

加蓮「…藍子—? 怪我人1人にどれだけ時間掛けるの—?」

藍子「加蓮さん…? 皆さん、もう終わつたんですか? 早いですね…」

加蓮「あのね……。マイペースなのは藍子の良いとこだけど、2時間で3人目……。そんなじやこの一角の怪我人の包帯替えてるだけで日が暮れちゃうよー？」

藍子「すいません……。つつい、患者さんの話に聞き入ってしまったて……」

加蓮「はあ……。智絵里、そっちの包帯はまだ残ってるよね？」

智絵里「あ、はい……」

加蓮「じゃ、残りも手分けしてやつちやおう」

藍子「2人共、ごめんなさい……」

加蓮「いいよ。ゆるふわなのは藍子の持ち味だからね。藍子は藍子のやり方で、患者と接してあげて」

藍子「はいっ。ありがとうございますっ」

加蓮「さて、それじゃあもう一仕事、じゃない……。もう一ボランティアやつちやいますか！」

—。

加蓮「……ふう、ようやくお昼か……」

智絵里「……」

加蓮「智絵里、お疲れ？」

智絵里「そ、そんな事ありません……！まだまだ怪我人は沢山いますから……、頑張れま



す……！」

加蓮「氣負いすぎはよくないよ。ここに入院してる人達だって私達に倒れるまでボランティアしろって言ってるわけじゃないんだから。適度に肩の力を抜かないと」

智絵里「そう言われても……。やっぱり、頑張らないと……！今の私に出来るのは、これくらいしかないから……」

藍子「でも、この病院にいる患者さんも、ほんの一握りなんですよね」

加蓮「一握り何てもんじゃないでしょ。あれだけの戦いがあつた後なんだし。病院とかに避難できた人はいいいけど、逃げ遅れた人だつて……」

藍子「……」

加蓮「ああ、何かごめんね？暗い話するつもりじゃなかったんだけど……」

藍子「い、いえ……。話題を振ったのは、私の方だし……」

「いやあ、午前のお手伝い、お疲れさまでした」

智絵里「あ……」

藍子「院長先生！」

院長「皆さんが来てくれたお陰で、院内が何時もより明るく感じるよ。本当に、感謝してもしきれない」

加蓮「……大した事は出来てないよ。院長も、アタシ達に構つてていいの？」

院長「この病院の関係者はみんな患者に係りきりだからね。院長である私が、代表して礼を言っておかないと」

智絵里「そんな…、お礼を言われるようなことなんて何も…」

院長「いやいや。怪我人の治療なんて、素人はあまりやりたがらないからね。出血の多い怪我人もいただろう大丈夫かい？」

加蓮「大変なのは分かってたから。智絵里は、はじめた頃は顔蒼くしてて心配したけど」

智絵里「うう…。ごめんなさい…」

院長「それが正常な反応だよ。生の肉や臓器を直視する生活には、慣れない方がいい」

加蓮「医者の方がそれ言っちゃう？」

院長「あ…。あはは…。これは一本取られたな…」

藍子「それにしてもスゴいですよね。この病院は、あの時の戦いで出た怪我人を、たくさん受け入れているって聞きました」

院長「怪我人や病人を治すのが、医者の仕事だからね。お陰でスタッフの数が足りなくなってしまうが」

加蓮「私立病院って聞いてたけど、結構おつきいよね」

院長「規模や設備なら、その辺の大学病院にも負けないよ。スポンサーがついてくれ

てるからね」

智絵里「スポンサーさん、ですか……？」

院長「そう。だからウチは、民間の医療研究みたいなこともしててね。代わりに、病院を大きくしてもらえたと言うわけさ」

加蓮「成る程……」

院長「だが、戦争の被災と復興の優先で、その機材の多くも、今は使えないがね」

藍子「あ……」

布で全身を覆い隠された人を乗せた担架が運ばれていく。

院長「……今日で30人目か……」

加蓮「……」

院長「医者である自分が言うべきではないが、人間の限界を感じずにはいられないよ。どれだけ医療が発達しようとも、肝心な機械が使えなければ、途端に救える命は限られてしまう」

藍子「それでも……！もつと多くの命を救えてるじゃないですか！」

院長「そう言ってもらえるのはありがたいよ。……せめて、ゲッターがもう少し上手く、立ち回ってくれたらね」

加蓮「……」

院長「……？」

智絵里「あ…、あの、えっと…」

加蓮「別にいいよ。院長の言ってることは事実なんだし」

智絵里「でも…」

院長「どう言うことだい？」

藍子「あの…、その、加蓮ちゃんは、ゲッターのパイロットだったんです」

院長「…?!?知らなかったとは言え、悪いこと言ってしまったね…」

加蓮「子供が乗つてると世間がうるさくてね。いくら民間研究所だからってやって良いことと悪いことがあるでしょって」

院長「成る程。意見は十人十色だからね。だが、勘違いしないでほしい。ゲッターがいなければこの国は百鬼帝国を退けられなかっただろうし、感謝はしているよ」

加蓮「ん、ありがと。でも全然、守るものも守れてなかったのは自覚してたし」

院長「そんな事はない。事実、条約で兵器の開発を制限されているこの国じゃ、ゲッターがなければまともな防衛設備もなかったんだ。君達は頑張ったよ」

藍子「そう言ってくれるだけでもありがたいです。ね、加蓮ちゃん？」

加蓮「うん…」

院長「教えてもらったついでにもう一つ聞いてもいいかな？ゲッターロボは、確か3

人乗りだろう？　もしや、君以外の2人も…」

加蓮「そ。ここまで来たらいっっちゃっても言いかな…。神谷奈緒と多田李衣菜って、どっちもアイドルだよ」

院長「やはり…」

智絵里「やつぱり、おかしいですよね…？　アイドルがロボットに乗ってるのは…」

院長「いや、組織によって事情は様々だからね…。きつと、君達でなければならなかった理由があるんだろう？」

加蓮「まあ、そうだけど…」

院長「なら、君達がゲッターに乗ることは、宿命付けられていたんだよ。きつと」

院長「…つとすまない。急用を思い出した。私はこれで失礼するよ」

藍子「あ、いや…。こちらこそ、貴重な時間をわざわざ割いてしまって…」

院長「いいよ。院長勤めをしていると、若い子と話をする機会もそうはないから、こっちもいい気分転換になった」

院長「君達はゆっくり休んでくれ。また午後からもよろしく頼むよ。それじゃ」

スタスタツ

智絵里「行っちゃいました…」

加蓮「……」

藍子「加蓮ちゃん、どうかしたんですか？」

加蓮「…いや、やけにあつさりゲッターのパイロットって言うの受け入れたなって。アタシ達だつて、はじめて聞かされた時は、戸惑つたりするのに」

藍子「そうですね…。私も、未央ちゃんや茜ちゃんがパイロットで…、仕方ないけど、やつぱり心配ですから」

加蓮「あ…、ごめん藍子。未央の事…」

藍子「ふふつ、大丈夫ですよ。未央ちゃんからは心配するなつて連絡をもらいましたから。今は離れ離れですけど、きつと必ず、前みたいに元気に帰ってきてくれるつて、信じてますから」

加蓮「へえ、信頼し合つてるんだ」

藍子「はいつ。…つと、話が逸れちゃいましたね…。何の話でしたっけ？」

智絵里「院長先生の様子がおかしい、…みたいな話、でしたよね？」

加蓮「うくん…。でも、他人からしてみればそれだけつて話だし、アタシの勘違いだったかも」

藍子「そうですね。最近、早乙女研究所での事故もあつて、ゲッターへの風当たりも強いですから、それでちよつとナーバスになつてのかもしれないね」

加蓮「そうかも。さ、早くご飯食べちゃつて、午後からに備えよ？」

智絵里&藍子「はいっ」

——。　　〳〳〳　プロダクションビル　休憩スペース　〳〳〳

李衣菜「……」

夏樹「どうしたんだよ？レッスンが終わってから、ぼうつとして、疲れたのか？」

李衣菜「あ、夏樹……。何て言うのかな……。アイドルしてるなー、って」

夏樹「は？そんなの今更だろ？どうしたんだ、いきなり」

李衣菜「いや、今まではゲッターのパイロットもしてたから……。レッスンしてても、学校にいても、百鬼帝国が出たら出撃しなきゃいけないくて……」

夏樹「……」

李衣菜「だけど、今日はそう言う、非常召集も掛からないし、避難のサイレンも鳴らない。ホントに平和になったんだなーって、実感が今になって湧いてきちゃって……」

夏樹「……ああ、そうだよ。ほら……」

李衣菜「え……？」

夏樹「まだ復興は完全に終わった訳じゃない。避難所から帰ることができない奴だっているし、立入禁止で入れない場所がいくらだつてある。けどさ、リーナが守った街なんだぜ？」

李衣菜「私が守った…。うん…！ そうなんだよね！」

夏樹「おう。だからこれからは、ゲッターの事はしばらく忘れて、思いつきりアイドルやってこうぜ！」

李衣菜「うんっ！ なつきちとなら、楽しいライブが出来そうな気がする！」

夏樹「なつきち？」

李衣菜「え？ ああ、ごめん…！ 何か言い間違えた…」

夏樹「いや、いいよ。気に入った。なつきち」

李衣菜「ホント…？」

夏樹「ああ。じゃあ、リーナの事はダリーだ」

李衣菜「ダリー!? ダリーはちよつと…」

夏樹「ははっ。いいだろ？」

李衣菜「…まあ、なつきちに言われるなら、悪くないかも」

夏樹「なら、決まりだ」

「お、いたいたい」。夏樹「！ お前まだこんなトコにいたのか」

李衣菜「え？ 誰…」

夏樹「拓海！ 何だ、お前も仕事だったのか？」

拓海「そんなトコだ。…で、誰なんだ？ そっちのちんちくりんは」



李衣菜「ちんちく…!？」

夏樹「そう言うなよ。こいつはリーナ。アタシの相棒さ」

李衣菜（相棒…）

拓海「へえ…。こいつがなア…。ふうーん…」

李衣菜「な、何さ…」

拓海「何でもねえよ。アタシは向井拓海。今んところは夏樹のダチだ。からよ…」

ズイツ

李衣菜（近っ…!）

拓海「ダチとして言わせてもらうぜ？夏樹のステージ台無しにしたら、ただじゃおか

ねえからな？」

李衣菜「いっ…っ…!」

夏樹「やめろよ拓海。お前、まして凄みがあるんだから、本気でビビっちゃうだろ？」

拓海「本気でビビらせてんだよ。こう言う半分弛んだ奴はガツンと言ってやらねえと

…」

夏樹「悪いな。コイツ元レディースだから、考えがちよつとアツパー決まってるだよ」

李衣菜「はあ…」

拓海「夏樹！余計なこと言ってんじやねえ!!」

夏樹「はいはい…。それで、レッスン終わりにわざわざ探し探して会いに来て、何かようか？」

拓海「おうそうだった。なあ、これからゲーセン行こうぜ！」

夏樹「は？何だいきなり…」

拓海「ああ、今日の現場な。バラエティのロケだったんだけど、そのディレクターがまたえらいセクハラ親父でな…」

夏樹「殴ったのか？」

拓海「いや、プロデューサーの顔を立って何とか我慢してやったぜ…。帰りにアイツを一発殴ってやったが」

夏樹「それは、プロデューサーさんも災難だったな」

拓海「でもアイツを殴ったくらいじゃ収まらねえんだよ！最近色々鬱憤溜まることばっかだし、ここいらで発散しとかねえと、次はあのディレクター、顔見ただけで殴っちまうかもしれねえ」

夏樹「つて言ってもなあ…。復興で計画停電だろ？この辺でやつてるゲーセンなんて…」

拓海「ココからじゃちよつと遠いけど、動くゲーム減らして上手くやりくりしてるトコがあんだよ。な、付き合ってくれよ」

夏樹「はあ、しょうがないな…」

拓海「うっし！決まりだな」

夏樹「ホントはこれからダリーの親睦会なんて考えてただけだな」

李衣菜「え？」

拓海「それなら丁度いい。そっちの奴も一緒について来いよ」

李衣菜「いいの？」

拓海「ああ。人数が多い方が気分転換になるしな！それに…」

李衣菜「…？」

拓海「面白エ事になりそうだからよ！」ニツ

李衣菜（…何か、ヤな予感…）

—— ゲームセンター。

李衣菜「…何だか、思ったよりも静かだね…」

夏樹「稼働してる台数が少ないからだろ。お陰で人も少ないし、アイドルからしてみたらいいけど、やってる意味あるのか？これ」

拓海「復興も人助けも大事だが、娯楽もなきやな。…つと、あつたあつた！これだ」

李衣菜「…バーニングPT？」

夏樹「ああ、確か架空のロボットをテーマにした対戦ゲーム、だっけ？」

拓海「その通り。けど、操作感覚とか、結構作り込んでるんだぜ、これ」

李衣菜「もしかして、私を呼んだのって…」

拓海「お前、ゲッターのパイロットなんだろ？ いっちょ実力を見せてみるよ」

夏樹「あのなあ…。このゲームとゲッターの操縦法が同じだとは限らないし、そういう無茶は…」

李衣菜「やるよ」

夏樹「ダリー…。いいのか？」

李衣菜「うん。何か面白そうだし、勝負挑まれたのに、受けなきゃロツクじゃないって！」

拓海「へえ、肝は座ってんじゃねえか」

李衣菜「じゃなきゃ、百鬼相手に戦えないじゃん？」

拓海「面白エ…。早く席に座りやがれ！」

李衣菜「分かった！」

李衣菜（…とは言ったもの…、ゲームなんてほとんどやらないし、どうすればいいのか何て全然分かんない…）

李衣菜（手元にあるのが操縦桿で、足元にペダル…。見た感じはゲッターと同じ感じだけ…）

拓海「おら、何時までも焦らしてんじやねえ。早くユニットを選べよ」

李衣菜「…つと、ごめん…！え〜つと、ユニットつて…」

李衣菜（ダメだ…。全然分かんない…）

夏樹「取り敢えず、ゲッターに似かよつたのを選んでみればいいんじゃないか？」

李衣菜「似てるつて言つたつて、みんな華奢でゲッターと似ても似つかないし…」

夏樹「ほら、何かゴツいのがあるじやないか」

李衣菜「これ…？えつと…グルンガスト…？確かに他のに比べたらゲッターに近い感

じはするけど…。もう選んでる時間もないし、これでいつか！」

〔BATTLE START〕

拓海「よっしゃ！やつてやるぜ！！」

李衣菜「相手ののは、えーつと…、R―1…？何かちつちやくて弱そうだな…」

拓海「言つたな…！勝負に負けた方が晩飯奢りだからな！」

李衣菜「望むところ！」

夏樹「おいおい…。いいのか、そんな安請け合いして…」

拓海「おらよっ！！」

R―1の蹴り上げ。

李衣菜「うわあ！」

拓海 「T—L I N K ナツコオ!!」

オーラを纏ったR—の拳が、グルンガストを打つ。

拓海 「どうだよ! 念動力だか超能力だかは知らねえが、ゲームだからお構いなしだぜ

!

李衣菜 「くっそ〜…! こっちはまだ操作に慣れてないのに…」

夏樹 「おい、店の中であんま叫んだりするなよ。迷惑だろ?」

拓海 「ドーせ客の数も少ねえんだ。少しは盛り上げてやらねえと!」

夏樹 (拓海、アイドルだつての忘れてないか…?)

李衣菜 「そっちがその気なら…!」

李衣菜 「ブーストナツクル!!」

打ち出されたグルンガストの拳は避けられる。

拓海 「お、ノつてきたな! 面白え!」

R—、肉薄。

李衣菜 「飛び込んでくる!?!」

拓海 「ハジキもナイフも、武器使うのは性に合わねえんだ! 殴り合いで勝負しようぜ

!

拳と蹴り。R—コンビネーション。

李衣菜「くくくっ！そっちに合わせるつもりは、ないって！」

拓海「!?」

李衣菜「オメガレーザー！」

グルンガストの両目から、閃光が放たれる。

拓海「へっへっ…！念動フィールドってか！」

李衣菜「バリアなんてズルい！」

拓海「正当な仕様だあ!!」

そのままT—LINKナツクル。

李衣菜「こんのく…！ファイナルビーム！」

拓海「んな大砲が当たるか！」

李衣菜「酷っ！必殺技くらい当たってくれてもいいじゃん！」

拓海「晩飯が掛かってんだ。誰が手抜きなんかするかよ！」

李衣菜「結局それく？」

夏樹「ダリー」

李衣菜「なつきち、何!?今良いとこ何だけど…」

夏樹「そいつの必殺技それ意外にもあるっほいぞ」

李衣菜「え…?…ホントだ。計都羅喉剣…！」

拓海「お…」

李衣菜「これだあ！」

計都羅喉剣を抜き打つ。

李衣菜「形はちよつと違うけど、剣には覚えがある！」  
突貫。

拓海「うおっ!？」

李衣菜「でやあああああッ!!」

計都羅喉剣を垂直に振り下ろし、振り終わりきらないタイミングで刃の向きを水平に変え、躲したR―I―Iを追撃。

李衣菜「オメガレーザーで！」

逃げ道を減らし、計都羅喉剣の突きで追い詰める。

拓海「…くっそ…!!」

李衣菜「今ッ！」

グルンガストの大ジャンプ。

拓海「…チッ」

李衣菜「必殺の…!!暗く剣ツ殺!!」

降下しながらの大上段と水平斬による十字斬り。



李衣菜「やった…！」

拓海「甘エ！」

李衣菜「これって…」

拓海「R―1のシールドだア!!」

李衣菜「ツ!?!」

R―1が上空へ。

拓海「天上天下ア…！」

エネルギーで出来た剣を構える。

拓海「念動！破砕剣ツ!!」

――。

くくく 鉄板焼屋 くくく

拓海「いやあく！勝った、勝った〜！」

夏樹「…武器は使わないんじゃないのか？」

拓海「おう。だから頑張った方だぜ？リーナはよ」

拓海「何せ、アタシに武器を使わせたんだからさ！」へへッ

李衣菜「むく…」

拓海「ははっ！むくれたってダメだぜ？奢りは約束したんだからな」

李衣菜「それは分かつてるよ。だけど、あと一歩だったのになあ……」

夏樹「まあはじめてにしてはよくやったって。あんま落ち込むなよ」

李衣菜「ありがと、なつきち。でもなあ……」

夏樹「そんな事より、ホントにいいのか？ 拓海の奴、バカ食いしてるけど……足りるか？」

李衣菜「うん。それは本当に大丈夫。ゲッターで戦ったときに出た報酬みたいなのが、結構残ってるから」

拓海「お、そいつあ良いこと聞いたぜ。親父！ お好み焼き追加。もちろん大盛りでな！」

店主「あいよツ!!」

夏樹「少しは出してやれよ。まったく……」

李衣菜「はは……」

夏樹「けど、無理矢理付き合わされたみたいになつたけど、楽しかったか？」

李衣菜「うんっ。こうしておいしいお好み焼きのお店も教えてもらつたし、言うことないよ」

夏樹「そつか……。なら、良かった」

李衣菜「ホントにありがと。なつきち」

夏樹「ん？アタシは何もしてないよ」

李衣菜「ううん。夏樹のお陰で、こうして拓海とも仲良くなれたし、何より、ゲッターの操縦経験がこんな形で役に立つと思つてなかつたよ」

夏樹「ダリー…」

拓海「そういや、オメーは何でゲッターなんか乗ろうと思つたんだ？」

李衣菜「え？」

夏樹「確かに気になるな。ゲッターのパイロットつて、どうやったらなれるんだ？」

李衣菜「それは…、何か適正があるみたいだけど…」

拓海「んじゃあ、お前はそれで選ばれたつて訳か？」

李衣菜「選ばれたつて言うか…。私は、ゲッターに乗りたくて…、適正があつたのは、ホントに偶然つて言うか…」

夏樹「ゲッターに乗りたかつた？」

李衣菜「…こ、この話はやめにしない？そんな面白い話でもないし…」

拓海「いいから！ここまで来たなら言つちまえよ。勝者命令だぞ？」

李衣菜「それ…、ここまで有効なの？」

夏樹「アタシも気になるな。ダリーのこと、もつと知つておきたいし」

李衣菜「なつきち…、……」

夏樹「……」

拓海「……」

店主「はい。お好み焼きお待ち！」

拓海「お、どもっス」

李衣菜「……今から、一年くらい前かな。メカザウルスが、ロツクフェスの会場に現れた時……」

夏樹「それって……」

李衣菜「何？」

夏樹「……いや、いいよ。続けて」

李衣菜「……うん。その会場に、私はいて、ゲッターに助けられたんだよね」

拓海「へえ……」

李衣菜「正直、情けないって思った。メカザウルスに、逃げることしか出来なくて、悔しいって……」

夏樹「でもそれは仕方ないだろ？人間の力じゃ、メカザウルスには勝てないからな」

李衣菜「それでも！私は逃げたくなかった。逃げるなんてカッコ悪いし、ロツクじゃない」

拓海「ロツクだあ……？」

李衣菜「うん。私はそう思った。同じ時に、ゲッターに乗ってるのが卯月だって、私と同じ女の子だつて気付いたから。だからもし私にも出来るならやってみたって。そう思ったんだ」

夏樹「そんな事が……」

拓海「何でえ。要するに、人任せにできないって訳か？」

李衣菜「そうかも。……へへっ」

拓海「つたく……。なかなか言いやがねえから、どんな大層な理由かと思つたら……」

李衣菜「昔語りとか、柄じゃないし……。それに、わたしにしたら結構恥ずかしい話なんだよ？」

拓海「そうかよ。あつ、親父ー！締めの焼きそば頼むぜ！」

夏樹「お前……、どんだけ食う気だよ……」

—— 数分後。

拓海「ふいー。食つた食つた！」

夏樹「一人で5人前は食つてりやな……。悪いな、ダリー」

李衣菜「ははっ。でも、楽しかったから……」

拓海「ふう、ホント、腹パンパン。しばらく何にも入んねー。……ん？」

大男「……」

夏樹「何だ？拓海の知り合いか？」

拓海「さあな。旧い知り合いなら心当たりが多すぎて、逆に分かんねえな」

李衣菜「一杯いるんだ」

拓海「おう。仲良しってんじやねえが」

大男「……」

拓海「おい！何見てんだ、テメー！どつかで見た覚えはねえが、前にぶつ潰してやった暴走族の仕返しか？それとも何時だったか、半殺しにしてやったチンピラの仲間か？ああこの前ゴミ箱ぶちこんだ竜神会だかの恨みか？」

李衣菜「……ホントに色々してるんだ」

夏樹「一応言つとくけど、アイドルやっている今は、ちゃんと足洗ってるぞ？」

李衣菜「ホントかな」

大男「……」

拓海「おい！何とか言ったらどうだ!？」

大男「……」

大男「……。ただ……りいな……」

李衣菜「え……。私い!？」

大男「……殺スツ!!」

ジャキンス

李衣菜「いっ、いつ!？」

拓海「マシンガンかつ!」

夏樹「逃げる——!!」

言い終わらぬうちに、大男の両脇に構えられたマシンガンから、弾丸がばらまかれる。

拓海「畜生……っ!」

夏樹「いいからこつちだ!」

身を低くして弾丸を避け、建物の影に。

拓海「……あいつ……!この国の法律知らないのかよ」

夏樹「法律の通じる相手じゃなさそうだ。ダリー、心当たりは?」

李衣菜「爬虫人類や鬼にはあっても、人間にはないよ!」

夏樹「だよなあ……」

拓海「だが、アイツはリーナの名前を言ってたぜ!？」

大男「!!」

ガガガガッ

拓海「……チイツ!」

夏樹「今は一先ず、逃げるのが先決か!」 ダッ

路地をひた走る。

李衣菜「逃げるって言ったって、こつちの方向って……！」

視界に入る、立ち入り禁止の看板。

李衣菜「やっぱ！百鬼との戦いの被害が一番大きい地区……！」

拓海「逃げてんだ！んなもん気が遣つてられつか！それにこれは……！」

拓海「飛び入りだあ!!」

看板を蹴り飛ばして、突き進んでいく。

李衣菜「とんち利かせていいの!?!」

夏樹「今はそんなの抜きだ!」

ダツダツ

大男「!!」

バラバララララッ

李衣菜「逃げるって言ったって……!逃げてばっかりじゃ何の解決もしないよ!」

夏樹「ツ……!」

拓海「覚悟決めるしかねえか……!」

廃屋の中へ。



李衣菜「こんなトコに入つて、どうするつもり…?」

拓海「決まつてんだろ!」

追つて、大男も廃屋の中に。

大男「…?」

拓海「おい! デカブツ!」

大男「!?!」

拓海「テメー…! 何がなんでもリーナを殺してえみてーだな!」

背中に鉄パイプ。その他にも斧や金槌などで武装する。

拓海「来やがれバケモノ野郎ツ! もう逃げも隠れもしねえ! そつちがその気なら手加

減も必要ねえ! 掛かつてきやがれ!!」

大男「…!」

拓海「金槌でそのどたまかち割つて中身グチャグチャにしてやるぜえ!!」

大男目掛け、突進。

李衣菜「…うわあ…。ホントにやってる…」

夏樹「拓海が時間を稼いでる内だ。予定通りにやるぞ!」

李衣菜「うん…!」

拓海「喰らいやがれ!」 ブオンツ

大男「っ！」

投擲した鉄パイプは、片手で掴まれる。

大男「……！」

拓海「へっ……！流石にやりやがるじゃねえか……おらよ！」

金槌を振り下ろす。

大男「あ……？」

拓海「掛かったな！」

金槌を片腕で防いだ大男の鳩尾に、直蹴りを浴びせる。

大男「う……？」

拓海「後悔したって遅エぞ！死んだって線香上げてやんねえからな！」

大上段で金槌を振り下ろす。

大男「……！」

ガッ

拓海の脚を掴み、放り投げる。

拓海「ぐっ……！」

大男「殺してやる……！」

拓海「へ……へへっ……！」

大男「？」

拓海「……こつちにばつか気い遣つてていいのかよ……！」

大男「……？——！？」

真横からきた衝撃。ワイヤーで束ねられた鉄骨で、大男が吹き飛び、壁にぶち当たつて突き刺さつた。

李衣菜「やつた！大成功〜！」

夏樹「どうだ？」

拓海「普通の人間なら死んでんだろ。……普通の人間ならな」

大男「うごご……」 ムクリ

夏樹「嘘だろ……」

李衣菜「見て！アイツの体……！」

拓海「機械……。そりや身に覚えがねえわけだ」

李衣菜「だからつて、百鬼帝国つて訳でも、……恐竜帝国つて訳でも……」

拓海「正体なんざ、倒してから調べりゃいい！」

夏樹「そうは言つても、サイボーグ相手に、どうやれつてんだ？」

拓海「当たつて碎けるのみ！」

鉄骨が突き刺さつたままの大男に、持った斧を振り下ろす。

大男「ぎゃ…」

拓海「コイツでトドメだあゝゝ！」

先端の尖つた鉄パイプを振り被る。

大男？「ギシャアアアアツ！」

拓海「んだ…？コイツの体ん中から…」

夏樹「下がれ！拓海ツ！」

拓海「ツ!？」

大男の体内から姿を見せた、蛇のような機械の怪物が、拓海の腹部を貫く。

拓海「ぐう…!？」

夏樹「拓海イ!!」

大きく仰け反り、倒れ伏す。

夏樹「大丈夫か!？拓海…!」

拓海「へ…へへっ…!しようもねえモン貫つちまつたぜ…」

夏樹「酷い出血だ…。もう喋るなよ」

李衣菜「あれが本体なの…？」

怪物「フシユルルウウ…!」

李衣菜（…何とかしないと…!このままじゃ拓海が…!）

「頭を下げろ！小娘!!」

李衣菜「！」

夏樹「誰だ？」

李衣菜「いいから言うとおりに！」

夏樹「お、おう……！」

2人が頭を下げ、腰を低くする。同時に、2人の上を飛来した弾丸が、怪物に当たって弾ける。

怪物「キシヤアアアア——!?!」

爆炎に包まれ、燃え尽きる怪物。

夏樹「やったのか……?でも、さっきの攻撃は……」

李衣菜「アンタは……!」

鉄甲鬼「……ケガはないか?小娘」

李衣菜「……」

拓海「遅えよ……。鬼野郎……!」

夏樹「拓海!待ってろ、今止血する」

鉄甲鬼「憎まれ口を叩ける余裕があるなら、大丈夫だな」

李衣菜「どうして、助けてくれたの……?」

鉄甲鬼「理由はない。ただ、通りがけに騒々しい物音を聞こえたから、来ただけだ」  
李衣菜「そう…」

鉄甲鬼「それに、瑞樹の知り合いに死なれては、寝覚めも悪いからな」

李衣菜「え…」

P r r r P r r r :

李衣菜「電話だ…。奈緒…?」

李衣菜「奈緒…? どうしたの?」

奈緒『李衣菜っ! まだ生きてるな?』

李衣菜「いきなり何? 話が見えないんだけど…」

奈緒『今さっきこつちに変な大男が来て…、いきなり襲われたんだよ!』

李衣菜「っ?! そつちも?」

奈緒『そつちもつてことは、李衣菜も襲われたらしいな。加蓮も襲われたつて…』

李衣菜「それで、そつちはどうしたの?」

奈緒『こつちは、ニオンが来てくれてやつつけてくれたよ。加蓮の方も片付けたつて。

李衣菜は?』

李衣菜「…鉄甲鬼に助けられたよ」

奈緒『鉄甲鬼…? 鉄甲鬼がそこにいるのか!?』

李衣菜「うん。今のところ、仇討ちされる気配はないよ」

鉄甲鬼「……」

奈緒『そうか……。何だかヤな予感がするな』

李衣菜「やめてよ。って言える雰囲気でもなさそうだね」

奈緒『何処かで合流するか?』

李衣菜「ううん。こつちにちよつと怪我人がいるから……。だから先に病院に連れてつてくる」

奈緒『そうか……。分かった。気を付けてな』

李衣菜「うん。そつちこそ気を付けて」

ガチャ

鉄甲鬼「…非常事態みたいだな」

李衣菜「まあね。とにかく拓海を病院に連れてかないと」

鉄甲鬼「そうか。女手だけでは大変だろう。手を貸す」

李衣菜「…どうして協力してくれるの?」

鉄甲鬼「さあな。今生きている意味さえ見つけられていないからな。だからかもしれない」

李衣菜「百鬼帝国の事はもういいの?」

鉄甲鬼「帝国の最期はこの目で見た。滅びた国のために復讐する気にはなれん」  
李衣菜「そつか…」

鉄甲鬼「ほら、貸せ。俺が運んでやる」

夏樹「あ、ああ…。悪いな」

鉄甲鬼「いい。先を急ぐぞ」

李衣菜「うん！拓海をお願い」

鉄甲鬼「言われるまでもない」

—。

くくく 中央病院 くくく

〔手術中〕

夏樹「拓海…。助かってくれよ…！」

李衣菜「…ごめん。私のせいだ」

夏樹「それは違う。あの場にいたんだから、仕方ないさ」

李衣菜「けど…！相手の狙いは私だった。私が、引き付けて2人を逃がすべきだったんだ」

夏樹「それで、鉄甲鬼さんが来るまで持ち堪えられたかよ？」

李衣菜「それは…」



夏樹「いいか？拓海は死なない。必ず助かる。それでアタシも、だりーも、みんな助かったんだ。なら、それでいいんじゃないか？」

李衣菜「…うん」

夏樹「だから、拓海の目が覚めたら、謝るんじゃないやなくて、ちゃんとお礼を言うんだぞ？」

李衣菜「うんっ。分かった！」

鉄甲鬼（角隠し）「…」

李衣菜「鉄甲鬼…？どうかしたの？」

鉄甲鬼「うむ。今回の相手は、間違いなくゲッターのパイロットを狙っている。先程の電話相手もそうだろう？」

李衣菜「う、うん…。そうだけど」

鉄甲鬼「それが、簡単に諦めるとは思えなくてな…」

夏樹「まだ追っ手があるってのか？」

李衣菜「…？？ 地震…？」

鉄甲鬼「いや、この揺れは…」

「め、メカザウルスだあ!!」

李衣菜「!？」

夏樹「何だって!？」

病院の正門から外へ出て、3人が見たのは、

夏樹「…嘘だろ」

李衣菜「メカザウルスだけじゃない、百鬼メカもいる!」

夏樹「じゃあ、相手は百鬼帝国と恐竜帝国の生き残りか?」

鉄甲鬼「バカな…!百鬼帝国の残党など聞いたことがないッ!」

李衣菜「よく見ると、百鬼メカもメカザウルスも、何かチグハグに修復されてる…?」

メカザウルス『キシヤアアア!!』

百鬼メカ『!!!』

夏樹「まさか、さっきの追っ手の奴等が…!？」

鉄甲鬼「可能性はあるな…!」 ダッ

李衣菜「鉄甲鬼?何処に行くの!？」

鉄甲鬼「女一人がまだ手術中なんだろう?病院を守る!」

夏樹「アタシらはどうする?」

李衣菜「…一先ずは、病院にしよう!拓海の手術が終わるまでは、離れるのは危険だ

よ」

夏樹「分かった!」

李衣菜 「……これから何が起こるの——？」  
つづく

## 第2話 『不滅のマシン、ゲッターと共に!』

~~~~~ 街中 ~~~~~

男 「何でだよ！コイツら…、戦いはもう終わったんじゃないのか!？」

男2 「言ってる場合かよ！早く逃げないと、俺達も潰されちまうぞー！」

男 「畜生…っ！畜生畜生！畜生ッ!!」 ダツ

男2 「あつ！待て…!!」

男 「ふざけんなアアー!!こっちはやっどこさ復興して、昨日新しい就職先が決まったばかりで！これからって時に！お前ら何様だよ!?!また街を破壊しやがってふざけんなアアーッ!!」

男2 「おいやめろ！死にたいのか!?!」

男 「だけど…!!」

メカザウルス 『!』 ギロツ

男2 「く、来る…!!」

百鬼メカ 『!!』

男 「ふざけんな…!!お前らホント、ふざけんなよッ!!」

百鬼メカ『——!?!』

百鬼メカの正面。男達の後方から、頭上を一直線に飛来した光線が、百鬼メカを吹き飛ばす。

男 「な、何だ…!?!」

男2 「まさか、ゲッター!?!」

男 「あれは今使用禁止されてるんだろ?」

男2 「なら…、…!?!ありやあ、百鬼メカ!?!」

男 「百鬼メカ同士が戦ってる…!?!どう言うことだ!?!」

男2 「俺が知るかよ!」

鉄甲鬼 「……」

百鬼メカ『!!!』

鉄甲鬼 「一角鬼…。三頭鬼、飛竜鬼…、百鬼衆が誇りに掛けて駆った百鬼メカ。何者の仕業かは知らんが、好きにはさせんぞ!!」

トマホークを引き抜き、百鬼メカとメカザウルスの混成軍団に肉薄した。

くくく 地下シエルター くくく

奈緒 「……」

比奈 「ギリッギリ。何とか入り込めたっスねえく…」

奈緒「そうっスね」

比奈「ふふっ。口調、移ってるっスよ」

奈緒「え……。あはは……」

比奈「それにしてもホントに良かったっス。戦闘戦闘で都内にシエルターがたくさん作られたのはそうなんスけど、最寄りのつてなると限られますからね。ここが一杯だったら、また他のシエルター探して、三千里しなくちゃいけないとこでしたから」

奈緒「……」

比奈「上の戦闘が気になるっスか？」

奈緒「それは……」

比奈「はいっス」 つスマホ

奈緒「これは……？」

比奈「現実にも命知らずっているンスね。避難指示出てるのに、生放送っスよ。コレ」

奈緒「……」

比奈「百鬼メカと百鬼メカが戦ってるっスよ。どう言うことっスかね？」

奈緒「…鉄甲鬼……」

比奈「知ってる奴っスか」

奈緒「あたしの仲間を助けてくれたって。言つてた」

比奈「今も何か病院守つてる見たいっスね。つてことはこの百鬼メカは味方っスか」

奈緒「……」

比奈「でも、百鬼メカ同士でやるんなら、ここでやるなつて話っスね」

奈緒「比奈さん……」

比奈「アタシは何も言わないっスよ。無責任なこと、言えないでスし、奈緒ちゃんは優等生っスから」

奈緒「……」

~~~~~ 中央病院 ~~~~~

手術中の灯りが消える。

夏樹「終わった……?先生!」

医者「こんな事態だから、なかなか難しいところだったが、何とか成功したよ」

夏樹「それじゃあ……!」

医者「うむ。傷が塞がるのに少々時間は掛かるだろうが、私生活に支障はない。再生手術を繰り返せば、傷跡も目立たなくできるだろう」

夏樹「……ありがとうございます!」

医者「いや。それじゃあ我々も早く避難しよう。彼女も、このままこの病院の地下

シエルターに連れていく。それでいいね？」

夏樹「はい。よろしくお願いします」

医者「…？君達は？」

夏樹「アタシ達は大丈夫ですから、先に避難してください」

医者「そうかい？それじゃあ…」

李衣菜「…」

夏樹「早く避難しないと危ないぜ？」

李衣菜「なつきち…！拓海は…？」

夏樹「大丈夫だつてさ。何とか助かったよ」

李衣菜「そつか…。良かった…」

戦闘の振動が院内に響く。

夏樹「…外の戦闘、だいぶ激しくなってきたな」

李衣菜「鉄甲鬼が戦ってくれてるんだ。多勢無勢なのに、私達のために…！」

夏樹「なら、だりーはどうしたいんだ？」

李衣菜「私は…」

夏樹「ほら」グイッ

李衣菜「な、なつきち…！何処に行くの？」



夏樹「今だりーが、一番欲しがってるモノがあるところさ」

李衣菜「そ、それって……! 待ってよ!」

夏樹「っ!」

李衣菜「ダメだよ……。これ以上、なつきちを巻き込めないよ……!」

夏樹「今更なんだよ? ここまで来たら、一蓮托生だろ?」

李衣菜「だけど、あの戦闘の中を行くってことだよ? 拓海のケガくらいじゃ済まない

……。ひよつとしたら、死んじゃうかもしれないんだよ?」

夏樹「だりーは何時だって命懸けてきたじゃないか。アタシだって、何の覚悟もなしに言ってる訳じゃないよ」

李衣菜「それに、ゲッターは今使えないんだよ!」

夏樹「ならどうするんだ!」

李衣菜「え……」

夏樹「お前、ずっと戦闘気にしてただろ。病院の窓から、ずっと鉄甲鬼さんの戦闘を見てた」

李衣菜「……」

夏樹「多勢に無勢だつて、分かってんだろ? このままイツ一人に任せちまっつていいのか? それでだりーは納得すんのかよ?」

李衣菜 「…スゴいなあ、なつきちは。私の事、全部分かつちやうんだ」

夏樹 「だりーはアタシとは違うからな」

李衣菜 「え…？」

夏樹 「さ、決まったら行くぞ！」

李衣菜 「…うんっ！」 ダッ

駆け出し、病院の門を抜けて外へ。

夏樹 「どつか、近くじゃないか…！」

メカザウルス 『キシヤアアア!!』

李衣菜 「メカザウルスがこんな近くに…！何か新鮮…！」

夏樹 「だりー！のんびりしてる場合じゃないぞ！」

李衣菜 「う、うん…！」

鉄甲鬼 『貴様ら！何をしている!?!』

夏樹 「鉄甲鬼さん！丁度いい！手伝ってくれ！」

鉄甲鬼 『どう言うことだ…？』

夏樹 「その辺に乗り捨ててあるバイクはないか？」

鉄甲鬼 『バイクだと…？——…チイツ！』

話している間に接近したメカザウルスを、チェーンアタックで打ち払う。

鉄甲鬼『くっ……!形はなんでもいいな?』

夏樹「出来ればスピード出せそうな奴!」

鉄甲鬼『まったく……!』

迫り来る百鬼メカとメカザウルスの群れをいなしながら、手にしたバイクを夏樹の路上に置く。

夏樹「サンキュー。鍵は着いてるな……。よしだりー乗れ!」

李衣菜「う、うん……!ヘルメットは?」

夏樹「振り落とされないように、しっかりと掴まっとけ!」

李衣菜「分かった……!」

夏樹「それじゃあ行くぜ!」

ドロンッ

夏樹「最初からフルスロットルだ!」

ギアを全開に開け、加速。

李衣菜「メカザウルスが来るよ!!」

夏樹「聞こえてるから耳元で叫ぶな!!」

メカザウルス『ギヤオオオオンッ!!』

メカザウルスの放ったミサイルが迫る。

キインツ

李衣菜「鉄甲鬼!!」

鉄甲鬼『小娘には手出しさせんぞ!』

夏樹「相手頼むぞ!!」

メカザウルスに立ちはだかったメカ鉄甲鬼に背を向け、バイクを走らせる。

—— 高速道路。

李衣菜「流石に走ってる車なんて一台もないね」

夏樹「こんな空いてる道なんて滅多に走れないな」

李衣菜「…ねえ、なつきち。さっきの事…」

夏樹「……」

李衣菜「なつきち?」

夏樹「だりーがアタシらにゲッターに乗る理由を話してくれただろ?」

李衣菜「うん…」

夏樹「その時だりーが言ってた、メカザウルスに襲われたロックフェス…。アタシも

参加してたんだ」

李衣菜「え…」

夏樹「その時アタシは、怖くて、どうしようもなくて、逃げるのに必死だった」

李衣菜「……」

夏樹「ははっ、カッコ悪いよな。でも、カッコ悪いアタシと違って、だりーはゲッターに乗れるだろ?」

李衣菜「うん……」

夏樹「なら、下手に氣い遣ったりしないで、やりたいことやってくれよ。だりーはアタシ達の誇りなんだからよ!」

李衣菜「なつきち達の、誇り……」

夏樹「おう!……跳ばすぜ!!」

――

くくく 新早乙女研究所 正門前 くくく

夏樹「……ホントにここまででいいのか?」

李衣菜「うん。流石にバイクでここ破つちやつたら騒動になるし……。ホントにありがとう!」

夏樹「大した事してないって。だりーこそ、ありがとうな?」

李衣菜「?」

夏樹「ゲッターで戦ってくれてき。コレからも、今回も」

李衣菜「なつきち……。…ッ」

李衣菜「なつきちは、カッコ悪くなんかないよ！」

夏樹「え？」

李衣菜「なつきちは、歌だって上手いし、ダンスだって、私よりずっとカッコ良く踊れる。友達も一杯いて、アイドルを楽しんでるって、今日一日一緒にいて分かったよ！」

夏樹「……」

李衣菜「気配りもできるし、優しいし、えーつと後…、とにかくなつきちはロックだしカッコいい！だから、自分の事カッコ悪いとか、あんまり言わないで！」

夏樹「だりー…」

李衣菜「なつきちも拓海も、今日行ったゲームセンターもお好み焼き屋さんも！絶対守ってみせるから！私になつきちをカッコ悪くさせないから！」

李衣菜「だから、なつきちはカッコいいんだよ！」

夏樹「……」

李衣菜「それだけ伝えたかったの！それじゃ！」

タツタツ

夏樹「……」

夏樹「…ははっ。恥ずかしい事臆面もなく言いやがって…。大した奴だよ、まったく

…」

夏樹（…ありがとな、だりー…）

—— 格納庫。

李衣菜「……」 ヒョコツ

シー……

李衣菜「誰もいないよね…？よしよし…」

コソコソ…

「何処に行くつもりだ？リーナ」

李衣菜「っゝ…！大将…」

主任「……」

李衣菜「……。ツ」 キツ

李衣菜「街に敵が来てるんだよ。ゲッターで出撃する」

主任「言ってる意味分かってンのか？今ゲッターを動かせば、お前は犯罪者だぞ」

李衣菜「何で!?!ゲッターは、たくさんの命を守るために造られたものでしょ？今出撃させなくてどうするんですか!?!」

主任「それが法律って決まりだ。例え義理人情に反してたとしても、従わなきゃならねえ。それが秩序を守るって事だ」

李衣菜「そんな理屈…！分かんないよ！」 タツ

主任「待ちなッ！」

李衣菜「！」

主任「どうしてそうやって危ねえ事に首を突っ込みたがる？若えからか!?!それとも、自分が特別だとも思つてんのか!?!」

李衣菜「……」

主任「お前は特別でも何でもねえ。若いから無茶したがンのも分かる。だがな、心配する奴の気持ちがかんねえのか!?!」

李衣菜「大将……」

主任「戦闘なんざ自衛隊の連中に任せりやいいじゃねえか!今は自衛隊だつて、ゲッターに乗つて戦える!リーナがわざわざ戦いに行くことなんかねえんだぜ?」

李衣菜「……」

主任「リーナ。お前が優しい奴だつてのは、整備班のみんなが知つてる。だから心配するがわの気持ちも分かるはずだ。それとも、誰かに言われて、無理矢理……」

李衣菜「違う。それは違うよ、大将」

主任「リーナ……」

李衣菜「確かに、私は戦いから離れる事は出来るよ?戦いから離れて、アイドルとして一人前になって、きっと幸せな毎日だと思う」



李衣菜「だけど、それってなんか違うんだ。上手く言えないけど……誰かが戦って、犠牲になって……。その裏で、私が幸せになったとしても、私は絶対嬉しくない」

主任「……」

李衣菜「やつぱりみんなが幸せにならなくちや。みんなの笑顔があつて、やつとアイドルとして笑える気がするし……。後、何て言うんだらうな……。とにかくイヤなんだ」

主任「イヤだと……?」

李衣菜「うん。私が出来るのに、やらないって言うのがイヤ。イヤな事から目を瞑つて、幸せだけって言うのが、イヤ」

主任「……つたく、欲張りな奴だぜ……」

李衣菜「へへっ……。あ、後、私自身がゲッターに乗りたいたいんだ!」

ダツ

主任「あ、待ちやがれ!」

李衣菜「もう待たないっ!」

タラップを駆け上がり、ゲッターを正面に捉える。

李衣菜「なつきちと大将と、2人のお陰で決心が出来たよ……!私はゲッターに乗る。ゲッターに乗りたいつ!」

李衣菜「行こう!ネオゲッター……。私のゲッターロボ!」

ギンツ——。

タツタツ

橘 「はあ……はあ……はあ……ッ！」

主任 「はあ……あ……。行つちまつたか」

橘 「ネオゲッターロボを……！どうして出撃させた!？」

主任 「博士だつて分かつてたでしよう？アイツは止めて聞くような奴じゃありませんよ」

橘 「だが……、これでは……！」

主任 「いいじゃないですか。時間稼ぎにも丁度いい」 スツ

橘 「何処に行くのかね？」

主任 「班の連中を叩き起こしてきます。アレの仕上げをやつちまいましょう」

橘 「しかし……！」

主任 「橘博士。リーナは覚悟を決めたんです。今度は俺達が覚悟を決める番だと思いませんか？」

橘 「……」

主任 「俺はアイツを死なせたくねえ。アイツには俺より未来がある。だから、アイツ

のため出来ることをしてやりてえ」

主任「博士はどうなんですか？ 国のためとか面子のためじゃねえ、誰かのためには動くんのですか!？」

橘「…分かった」

主任「なら!」

橘「まったく…。昔気質には敵わんな」

主任「へへっ。それが、法律も道理も蹴飛ばしちまう。正真正銘の義理人情って奴よ!!」

~~~~~ 市街地 ~~~~~

鉄甲鬼「喰らえッ!」

チエーンアタックでメカザウルスを押し出し、背後にいた百鬼メカに打ち当ててまとめて倒す。

メカザウルス『……』

百鬼メカ『……』

ゾロゾロ…

鉄甲鬼「つ…。有象無象が…!」

トマホークを構え直し、群れに飛び込む。

鉄甲鬼「——フンッ！」

上段からトマホークを振り下ろし、メカザウルスを両断。

鉄甲鬼「でええいつ！」

続く二の太刀で、複数の軍勢を薙ぎ払う。

鉄甲鬼「——ッ!?ぜいッ！」

背後からの気配に、トマホークを振るう。その先には、

鉄甲鬼「…っ!?牛剣鬼殿…！」

メカ牛剣鬼『……』

メカ鉄甲鬼とメカ牛剣鬼の鏝迫り合い。しかし、メカ牛剣鬼の姿に僅かな動揺を見せ

た鉄甲鬼の姿勢が揺らぐ。

鉄甲鬼「ぐ…がア…！」

力押しで、競り負ける。

鉄甲鬼「貴様らあ…！許さん、許さんぞ…！」

鉄甲鬼の怒りに反し、敵勢が周囲を包囲する。

鉄甲鬼「…くそっ」

李衣菜「シヨルダーミサイルッ！」

メカザウルス『!?!?』

包围していたメカザウルスの一体が、ミサイルの直撃を受けて爆ぜる。

鉄甲鬼「ネオゲッター1だと…!?!」

李衣菜「お待たせ鉄甲鬼! 時間稼ぎご苦労様!」

鉄甲鬼「何故来た!?!」

李衣菜「そんなの、敵が出たからに決まってるでしょ?」

鉄甲鬼「だがお前は! 何をしたか分かっているのか?」

李衣菜「分かっているよ。だけど、鬼が戦っているのに黙って見てるなんて、出来ないよ

!」

鉄甲鬼「お前…」

李衣菜「さ、立って」

鉄甲鬼「…うむ」

差し出されたネオゲッター1の腕を嫌って、一人で立ち上がる。

李衣菜「素直じゃないんだ」

鉄甲鬼「小娘に遅れをとるつもりはない」

李衣菜「へへっ、それじゃ——」

敵勢に向かい、拳を握る。

李衣菜「チエーンナツクル!!」

一番手前の百鬼メカにチェーンナツクルを撃ち、怯ませ氣勢を削ぐ。

李衣菜「やつ！えいつ！」

腕を振り鎖をしならせ、チェーンナツクルの拳を百鬼メカの頭上に叩き下ろす。

李衣菜「右の次は、左！」

手を手刀の形にした左のチェーンナツクルを、百鬼メカの胸部に突き刺し、百鬼メカを破壊。

李衣菜「えええええいつ！」

チェーンナツクルを引き戻し、ネオゲッターで突撃。

李衣菜「うりやつ！」

加速の勢いに乗せて、水平に蹴りを。打ち終わり、空かさず逆脚からの後ろ回し蹴りでメカザウルスを粉碎。

李衣菜「へへへつ、どんなもんだい！」

鉄甲鬼「下がれ、李衣菜！」

李衣菜「おっと！」

反射で操縦桿を引いた直後、ネオゲッターの眼前をメカザウルスの尻尾が通りすぎる。

鉄甲鬼「——でいつ！」

「……地下シエルター……」

「おい、見ろよ。ネオゲッターロボだぜ」

「え？でも確か、ゲッターは今使用禁止なんじゃ……？」

「バカだなあお前。ネオゲッターはプラズマエネルギーで動いてるんだから、暴走事件には関係ないだろ？」

「あ、そう言えばそうか……」

奈緒「……李衣菜の奴……」

比奈「気になるっスか？」

奈緒「……いや」

比奈「……そっスか」

「しかし、ネオゲッター、動き悪くないか？」

「だなあ。案外、素人でも乗ってるのかもな」

「でも、素人の割りにやあ動きは戦い慣れしてんだよな」

奈緒「……」

奈緒（アイツ……。一人で……。無茶しやがって）

比奈「ゲッターって確か、3人が乗ってはじめて真価を發揮するんスよね？」

奈緒「あ……うん……」

比奈「難儀なロボットつスよね。バシッと一人乗りに出来ないんスカねえ」

奈緒「……」

比奈「でも、そういうのも悪くないっス」

奈緒「え……」

比奈「助け合える仲間がいるって、素敵じゃないっスか？生きてるから、喧嘩できるし、分かち合えるっス。1体のロボットでそれが出来るのって、何かロマンがあつて燃えるじゃないっスか」

奈緒「……っ！」

ダツ

比奈「……。行っちゃったスカ。余計な事言っちゃったっスカね……。後で責任取らせられたり……」

比奈「大丈夫っスよね。奈緒ちゃんなら、きっと上手くやってくれると思いますし……」

比奈「……」

比奈「話し相手がいないと、流石に寂しいっスね……。プロデューサーに連絡でも……あ」
比奈「通信規制されてるっス……」

――外。

奈緒「——…っは！」

「奈緒」

奈緒「加蓮っ！」

加蓮「良かった。こっちのシエルターにいたんだ。次の避難先にいなかったら、どうしようかと思つてた」

奈緒「…いいのかな？」

加蓮「…何が？」

奈緒「…迷惑じゃ、ないのかな…？なあなああたし達が、なあなあままゲッターに乗っちゃつて」

加蓮「……」

奈緒「あたし、アレからずっと考えてたんだ。ゲッターに乗る理由…。でも、分かんなくてさ。ゲッターに乗る理由なんて見つからなくて、でも、ゲッターに乗らないって決めようとする、何かもどかしくて…」

奈緒「なあ加蓮。あたしはどうすればいいんだ？こんな気持ちのままゲッターに乗つても、アイツに迷惑、掛けないか？」

加蓮「…意外。奈緒もそうやって、正直に自分の感情見せることあるんだ」

奈緒「茶化すなよ！こっちは真面目に…！」

加蓮「分かっているよ。そんな事」

奈緒「加蓮……?」

加蓮「アタシだって奈緒と一緒に。前にも言ったでしょ。正義なんてかぎすキャラじゃないし、大義名分なんて重すぎ。フザケンなって感じ」

奈緒「……」

加蓮「でもね。リーナが戦っているの見て、何か分かったんだ」

奈緒「何が……」

加蓮「リーナは今、がむしゃらに戦っている。それはリーナが、守りたいものとかを守るためだと思う」

加蓮「だけど、それだけじゃないんだよ。きつとリーナには、今アタシ達が考えてるみたいな正義とか、大義名分とかそんなの関係ない」

加蓮「自分を貫くために戦っている。自分の信じた道とか、自分が望んだ未来とか。そういうのまとめて全部、自分で決めたことを曲げないために」

奈緒「……ロツクな奴だな」

加蓮「きつと不器用なんだよ。本当は探せばいろんなやり方があるのに。でもリーナって、頑固だから」

奈緒「なら、あたしよりもその頑固に付き合うのか?」

加蓮「まさか。リーナの熱さに充てられるのは、奈緒だけで十分でしょ」

奈緒「おい、そんな言い方……」

加蓮「アタシは、アタシのために戦う。誰かにアタシの人生を左右されるなんて真つ平」

奈緒「……」

加蓮「アタシは、アイドルで何かを残したい。それを邪魔する連中がいるなら、アタシは許さない。許したくない」

奈緒「……ははっ。加蓮も充分、李衣菜の側だと思うぜ？」

加蓮「ええ、そんな事ないよ？アタシにあんな疲れる生き方、ムリだつて」

奈緒「……っはっ！ ったく、身近に無鉄砲と激情口マンチストがいると、苦労するよな」

加蓮「何い？ 奈緒はアタシとリーナに流されて乗るつて言うの？」

奈緒「いいや！ あたしもあたしのためだ！ 落ち着いてアイドル活動も出来ないんじゃない、何やつても面白くないからな！」

加蓮「ふふつ。何か吹っ切れたみたいだね？」

奈緒「ああ！ もう難しく考えるのはやめだ。理由なんて、後からいくらでも着いてくるし、来なかったら、その中で見つけ出す！」

「ふむ……。なかなか思いきったな……。だが、聞かせてもらったぞ」

奈緒「え……」

加蓮「晶葉……?」

晶葉「2人共、今の言葉が、2人の決意の言葉だと聞かせてもらったがそれでいいな?」

加蓮「……うん。ウチのリーダーをこのままほっとけないしね」

奈緒「だな。まったく、困ったリーダーだよ」

晶葉「了解した。……先重整備主任から連絡があつた。2人には私に着いてきてほしい」

加蓮「どこ行くの?」

晶葉「決まっている。私達の、ゲッターロボの元だ」

――

くくく 市街地 くくく

メカ牛剣鬼『!!』

李衣菜「うわあ!」

メカ牛剣鬼の剣圧に押され、ネオゲッターが尻餅をつく。

鉄甲鬼「立てるか?」

李衣菜「大丈夫。すぐ立て…、…!?」
ガクン、と膝が崩れ落ちる。

李衣菜（脚の関節に力が入らない…。3号機の自動制御だと、やっぱり…）
鉄甲鬼「どうした？無理なら下がれ！」

李衣菜「ここまで出て来て、簡単に引き下がれないって！」
ビル伝いに、強引に機体を立ち上げる。

李衣菜「おっと…」 グラッ

李衣菜（オートバランスサーじや、今のはキツかったかな…？）

鉄甲鬼「構えろ！敵はすぐに来るぞ」

李衣菜「分かつてる…！」

右腕を体のやや後方に引き、

李衣菜「チエーンナツクル！」

突き出すと同時にチエーンナツクルを放つ。

李衣菜「ツ…こうだ！」

チエーンナツクルの鎖をメカ牛剣鬼の剣に絡め、手から奪おうと腕を引く。

メカ牛剣鬼『…!!』 ググッ…

李衣菜「ぐぐ…！」

鉄甲鬼「いけるか!？」

李衣菜「ツツく…無理っぽい…」

鉄甲鬼「何ッ!？」

李衣菜「踏ん張りが…利かな…、…うわあ!？」

メカ牛剣鬼に鎖を引かれ、ネオゲッターが宙を舞う。

李衣菜「うわあああゝ!!？」

落下地点には、切っ先が突き立てられた剣。

ザンツ

メカ牛剣鬼の剣が、ネオゲッターの腹部に深々と突き刺さる。

鉄甲鬼「…ッ！」

李衣菜「…な、奈緒が乗ってなくて良かった…わっ!？」

乱暴にアスファルトの上に転がり落ちる。

メカ牛剣鬼『!!』

李衣菜「わ…、うわ…!…ウグツ…。」

倒れ、動かないネオゲッターに、メカ牛剣鬼の蹴りや剣撃が浴びせられる。

李衣菜「ッ!…ッ!ゲッターが動かない…?さっきので、バランスがやられた!？」

鉄甲鬼「待ってろ、今助け…」

メカザウルス『グオオオオンツ!!』

鉄甲鬼「くっ……! 邪魔をするなあ!」

メカ牛剣鬼『!!!』

トドメ、と言わんばかりに、切っ先をネオゲッター1に向けた剣を高く振り上げる。

李衣菜「ツ——!」

ザシュツ

李衣菜「——……。……?……?……て、鉄甲鬼……!」

ネオゲッター1とメカ牛剣鬼の間に割って入ったメカ鉄甲鬼が、ネオゲッターの代わりに、メカ牛剣鬼の剣を胴体に受けている。

鉄甲鬼「ぐはっ……!」

李衣菜「ど、どうして……?」

鉄甲鬼「未来ある者を、死なせるわけにはいかないからだ……!」

李衣菜「そんな……!」

メカ牛剣鬼『!』

メカ鉄甲鬼から剣を引き抜き、蹴り飛ばす。

鉄甲鬼「ガッ……!?!」

凄まじい衝撃と破壊の音。ビルを一棟薙ぎ倒し、その瓦礫の中に、メカ鉄甲鬼は崩れ

落ちる。

李衣菜 「鉄甲鬼!」

メカ牛剣鬼 『……』

李衣菜 「大丈夫鉄甲鬼!? 返事して!」

トドメを邪魔された腹いせか、メカ牛剣鬼はメカ鉄甲鬼に迫る。

李衣菜 「くっ……! ネオゲッター! 動いてよ! アンタ、コレでもゲッターなんでしょ!」

李衣菜 「お願い……! 守られっぱなし、助けられっぱなしはイヤなんだ! 助けてもらったお礼も言わないまま、鉄甲鬼を死なせたくないっ!」

メカ牛剣鬼 『……!』

メカ牛剣鬼が、剣を振り上げる。

李衣菜 「お願い! 動いてよオ!!」

爆発音がした。

李衣菜 「:!!」

だが、次の瞬間目に映ったのは、黒煙を揚げ、後方に崩れていくメカ牛剣鬼だった。

李衣菜 「:ミサイル……? 攻撃……援軍……。どう言うこと……?」

「どーだ! ドンピシャだったろ?」

「はいはい。上手上手」

李衣菜「奈緒！加蓮！？どうして…」

加蓮「お待たせく、リーナ。準備に時間掛かっちゃった」

奈緒「李衣菜にお届け物だぞ！」

李衣菜「お届け物…？」

倒れ伏したネオゲッターの上空を、3機のマシンが飛び去っていく。

李衣菜「アレって…！ネオゲットマシン！何で!？」

『最終調整に手間取ってしまった。遅れてすまない、李衣菜くん』

李衣菜「橘博士！」

橘『君が今乗っているネオゲッターは、元々私が開発したロボットに、ゲッターの技術を組み込んで改造した、謂わば急造品だ』

李衣菜「急造品…。ってことは！」

橘『そう。あのゲットマシンこそ、設計データを見直し、君達の戦闘データを組み込み、一から造り出した、真正正銘のネオゲッターロボだ！』

李衣菜「真正正銘の、ネオゲッターロボ…！」

奈緒「そー言うこと！橘博士がネオゲッターの出撃を禁止にしたのは、あたしらの戦闘データを吸い出す目的もあつたんだ！」

橘『正直、私は完成を躊躇った。もし本当に君達のデータを反映させてしまえば、コ

ンピュータが君達の癖も学習して、君達にしか動かす事が出来なくなる』

橘 『それは、君達を完全に戦いの中に巻き込んでしまう事を意味する。それだけは避けたかった』

加蓮 「でも、アタシ達は今そのゲッターに乗ってる。アタシ達の戦い方を、癖を全部生き写したゲッターに。アタシ達の意味で」

橘 『本当にいいのかね？君達はもう、後戻りは出来なくなるぞ？』

加蓮 「くだいよ。例え後悔しても、仲間がどうにかなるのを黙って見てるよりはずつといいよ」

李衣菜 「仲間……。加蓮……。奈緒……。2人共、なかなかロックだね！」

奈緒 「ロック？勘違いすんなよ。お前が無茶ばつかするから、見てないトコで倒れられたら寝覚めが悪いって。だから付き合っただけだからな！」

李衣菜 「うん……。嬉しいよ、ありがとうっ！」

奈緒 「……。ホントに分かってんのか、アイツ」

加蓮 「いいじゃん。リーナの万分の一でも、奈緒が素直だったらもつと良かったのにな」

奈緒 「うるせえよ！アイツは素直なんじゃなくて、単純なだけだ！」

李衣菜 「酷っ！」

加蓮「あははっ」

橘『……。君達の気持ちは良く分かった。ならばこれ以上、言うことはあるまい』

李衣菜「うんっ。橘博士もありがとう！新しいネオゲッターロボ、ちゃんと使ってみせるよ！」

橘「ああ。君達のゲッターロボ、確かに託したぞ」

ブツン——

メカ飛竜鬼『——!!』

奈緒「うおっ!？」

ネオゲットマシンの隊列に、メカ飛竜鬼が飛来する。

奈緒「……つとと！これじゃあ落ち着いて着陸も出来ないな……」

加蓮「先に始めちゃおっか？」

奈緒「だな。それじゃあ加蓮、行くぞ！」

加蓮「何時でも」

ネオジャガー号が先行し、連なる。

奈緒「ゲッターチェンジ!!」

ネオゲッター2に合体。スラスターが火を放ち、高速でメカ飛竜鬼に迫る。

奈緒「ダブルアームガンツ！」 ジャッキツ

左右の腕から銃口を覗かせ、プラズマの弾丸を連射。

メカ飛竜鬼『——!』

奈緒「つるさいっ!!——プラズマブレード!」

咆哮を上げるメカ飛竜鬼に対し、プラズマブレードを逆手に構え、距離を詰める。

奈緒「うおらっ!」

ブレードを横一闪。一刀両断の元、仕留める。

加蓮「次は地上でリーナを回収するよ。アタシに代わって」

奈緒「よっしゃ、任せたよ、加蓮!」

奈緒「オープンゲッター!」

加蓮「ゲッターチェンジ!」

空中で合体。アスファルトの地面を破壊し、土煙と地響きをあげ、豪快に着地する。

メカ一角鬼『!!』

メカザウルス・ドバ『キシヤアアアッ!!』

加蓮「さて、たまには派手に行っちゃっていいかな?!——タンクモード!」

ネオゲッター3の脚部を、無限軌道に変形。

加蓮「パンツァー・フォー!」

勢いよく加速し、突進。

加蓮「はあッ！」

加速に乗せた拳を振り抜いて、メカ一角鬼を一撃で葬り、

加蓮「ゲッタートルネード！」

立ちほだかつた残りの軍勢を、ゲッタートルネードでまとめて吹き飛ばす。

加蓮「さ、今のうち」

敵が消えてクリアになった地面を滑走し、倒れた旧ネオゲッターの前へ。

加蓮「お待たせ〜」

旧ネオゲッターを抱き上げ、ハッチを近付ける。

李衣菜「…よし」

タイミングを見計らって、ハッチへ飛び移る。

李衣菜「…今までありがとね」

地に降ろされた旧ネオゲッターを見送りながら、中へ。

李衣菜「……」

コックピット。シートに座り、操縦桿を握る。

李衣菜「…ゲッターだ。ずっと使ってた」

奈緒「ああ、ゲッターロボだ」

加蓮「ちよつと〜、お二人さん？感傷に浸るのはいいけど、戦闘中なの忘れないでよ

？」

李衣菜 「うん……!分かってるよ!加蓮!」

鉄甲鬼 「……」

李衣菜 「…鉄甲鬼は、気を失ってるの?」

加蓮 「元々ここまで頑張ってもらったんだし、ここからはアタシ達で返していこ」

李衣菜 「そうだね。人類を守るのは、人類の仕事だ!」

加蓮 「それじゃ、後はリーダーに任せるよ。——オープンゲッター!」

3機のゲッターマシンに分かれ、再び上空へ。

李衣菜 「行くよ。奈緒、加蓮!」

奈緒 「おう!」

加蓮 「はーい、つと」

李衣菜 「ゲッターアアーチエエエンジン!!」

新生、ネオゲッター1。

李衣菜 「これが、私のゲッターロボ!」

奈緒 「おいおい…、私達の、だろ?」

李衣菜 「ははっ。そうだね。橘博士が造って、大将が調整して、加蓮と奈緒が乗ってくれる。みんなのゲッターだ」

奈緒「…ま、そう言うことにしとくか」

李衣菜「例え倒れたって、逆境だって乗り越えてまた立ち上がる。ゲッターロボは不滅のマシンなんだ！」

加蓮「敵が来るよ！リーナ、奈緒！」

李衣菜「——不滅のマシンだって言ってるんだあッ！」

左脚で地面を蹴り、跳ね上がって膝蹴りをメカザウルスの顔面に当てる。

李衣菜「…っし！」

着地。動きを止めず。拳を振り抜きメカザウルスを倒す。

李衣菜「チエエエー！ンナツクルツ！！」

チエーンナツクルを放ち、連なつた敵を2体まとめて葬る。

李衣菜「すんごい…。感動の嵐！新しいネオゲッター、何てパワーなんでしょ！」

奈緒「李衣菜！ソードトマホークで決めちまえ！」

李衣菜「え…、ソードトマホーク？」

奈緒「どういう理屈かは知らないけど、ネオゲッターに内蔵されてるんだ」

李衣菜「そうなんだ。よし…！」

加蓮「要領はプラズマサンダーと同じ。拳を突き合わせて…」

李衣菜「ソオオードトマホオークツ！！」

左右の拳を突き合わせて、武器を呼ぶ。手首の基部から青白いスパークが弾け、内蔵された金属チップがプラズマエネルギーによって爆発的に増幅し、ソードトマホークを形作る。

李衣菜「…物理法則もあつたもんじゃないね…!」

奈緒「ゲッターは元からだろ」

李衣菜「それじゃ…!」

ソードトマホークを両手に構え、肉薄。

李衣菜「どりゃああああ!!」

上段から袈裟斬り。百鬼メカを一刀両断。

李衣菜「邪魔だよッ!」

持ち上げたソードトマホークを真横に水平に振るい、百鬼メカの上半身と下半身を切り離す。

李衣菜「つたあッ!!」

メカザウルスの開いた口部に、ソードトマホークを突き込み、メカザウルスから炎を噴き出し爆破。

李衣菜「おりゃああッ!!」

大回転斬り。周囲に接近した敵勢をまとめて断ち切った。

奈緒「…まったく、無茶しやがって…」

加蓮「ホント、動きを合わせるこつちも一苦労だよ」

李衣菜「さア、残るはアンタ一人だつ！」

メカ牛剣鬼『……』バシユツ

李衣菜「わつと…！」

放たれたミスイルを、腰を落として躲す。

李衣菜「このっ…！」

奈緒「待て！アレって…！」

李衣菜「っ…！メカ鉄甲鬼!？」

メカ牛剣鬼『……』

鉄甲鬼「…」

動けないメカ鉄甲鬼を盾のように掴み、晒す。

奈緒「人質代わりつてかよ…？畜生…！」

加蓮「鬼なんだし、無視しちゃっても全然いいんだけどね」

奈緒「それじゃああんまりすぎるだろ！」

李衣菜「私達が来るまで、時間稼いでくれたんだしさ」

加蓮「分かってるよ。鬼だろうとなんだだろうと、アタシ達を助けてくれたことには変

わらない」

メカ牛剣鬼『……!!』

李衣菜「うわあ!」

再び放たれたミサイルが直撃。周囲に濃灰の爆炎が舞う。

李衣菜「痛ててて…」

奈緒「何やってんだ」

李衣菜「人質取られてるんだし、勝手に動けないでしょ。……!」

周囲の黒煙が視界に入る。

李衣菜「これだ!」

加蓮「いい案?」

李衣菜「相手の攻撃をもう一発もらおうよ!」

奈緒「は?」

李衣菜「もう一回ミサイルを爆発させるんだ!」

奈緒「何考えてんだあゝ!」

メカ牛剣鬼『!!』

そうこうしている内に、メカ牛剣鬼からのミサイルが来る。

奈緒「うわあゝゝ!!」

爆炎に包まれるネオゲッター1。

鉄甲鬼「…ッ！」

メカ牛剣鬼『…』

ビルの屋上まで立ち上る黒煙が揺らぐ。

李衣菜「油断した!?!」

黒煙を抜けて、遙か大空にネオゲッター1が飛び上がる。

メカ牛剣鬼『!』

咄嗟に間にメカ鉄甲鬼を置こうとする。

李衣菜「これで、どうだああ!!」

それより速く、ネオゲッター1がソードトマホークを投じた。

李衣菜（ゲームで拓海にやられた戦法の応用だけど…）

真つ直ぐに落ちていったソードトマホークは、メカ牛剣鬼の胸に深く突き刺さる。

メカ牛剣鬼『?!?!』

火花を上げて爆発し、火柱となるメカ牛剣鬼。

李衣菜「やった…!!鉄甲鬼は？」

加蓮「大丈夫。爆発の衝撃で飛ばされたみたいだけど、マシンの方は無事だよ。生体

反応もあるから、鉄甲鬼自身も生きてはいるみたい」

李衣菜「そっか……。良かった……」

奈緒「あのなあ、先にこっちの心配する方が先だろ?」

李衣菜「あ、奈緒。大丈夫そうだね。ケガはない?」

奈緒「よく見ろよ、頭から血出てるだろ!」

李衣菜「そんなの何時もの事じゃん」

奈緒「お前と一緒にするな!!」

加蓮「はいはい2人共々。漫才はその辺にしといて、鉄甲鬼連れて研究所帰ろ」

李衣菜「分かった。研究所まで、もう一踏ん張りだね」

—。

くくく
???

「うぬう……。ゲッターロボめ……。やはり立ちはだかるか……!」

「しかし、ネオゲッターロボ以外のゲッターは未だ出撃できないようです。真ゲッターロボも確認されない今、特に恐れる事はないかと……」

「恐竜帝国と百鬼帝国……。二大の帝国との戦いに勝利した、ゲッター相手に油断はならんぞ。ヤシヤ將軍よ」

「……はっ」

「ゲッター……。貴様らに私が抱いた長年の夢、世界統一の夢は邪魔させんぞ……」

つ
つ
く

第3話 『新たなる支配者!!我が名はランドウ!!』

~~~~~ 新早乙女研究所 医務室 ~~~~~

鉄甲鬼「……ん……?」

瑞樹「……気が付いたかしら?」

鉄甲鬼「……? ここは、知らん天井だな。お前がいると言うことは、早乙女研究所なのか……」

瑞樹「ええ。戦闘中に、意識を失ったそうよ。それで、ずっとここで寝ていたらしいわ」

鉄甲鬼「どのくらいだ」

瑞樹「丸三日ね。体はかなり疲れも溜まっているようだったから、それも出たんだろうって、医者が言ってたわ」

鉄甲鬼「そうか……。結局は死にぞこなったのだな。俺は」

瑞樹「……」

鉄甲鬼「お前達に敗れてから、ずっと旅をしていた。死に場所を探してな。だが、百鬼帝国との戦いも終わったあと、穏やかなこの国に、死に場所などどこにもなかった」

瑞樹「それで、戻ってきたと言うの？」

鉄甲鬼「どうだろうな……。ただ何となく、ゲッターの近くにいれば、死に場所が見つかるよ、そう思い至ったのかもしれん」

瑞樹「何？それじゃあまるで、私達が死神みたいじゃない」

鉄甲鬼「ふつ…、貴様らで言うところの、冗談という奴だ」

瑞樹「…質の悪い冗談よ」

鉄甲鬼「…なあ、瑞樹」

瑞樹「何？」

鉄甲鬼「俺をここで戦わせてくれないか？」

瑞樹「どういうつもりかしら？」

鉄甲鬼「元より貴様らに情けをかけられた命だ。今の俺には戦うべき理由も、生きるべき理由もない」

瑞樹「だから、ここを抛り所にするつもりかしら？」

鉄甲鬼「何も知らぬ者に義理はない。懸けるならば、気心の知れた者の為に命を懸けたい」

瑞樹「あくまで、戦いからは離れられないというのね？」

鉄甲鬼「俺に戦い以外の生き方は想像できん。だが、戦い以外の生き方を知るために



も、今は戦わねばなるまい? お前達もそうしているように」

瑞樹「……」

「成る程な。満更軟弱でもないらしいな」

鉄甲鬼「貴様は……」

ニオン「恐竜帝国の戦士、ニオン」

鉄甲鬼「……亡国の戦士を名乗るか」

ニオン「勘違いするな。恐竜帝国は滅んではない」

鉄甲鬼「それで、俺に何のようだ?」

ニオン「ダイノゲッター2のシートが空いている」

鉄甲鬼「……?」

瑞樹「貴方の百鬼メカはもう動かないそうよ。前回の戦闘のダメージが、想像以上に

深刻だったみたいね」

鉄甲鬼「そうか……」

ニオン「敗軍の将同士などと……、傷を舐め合うつもりはない。だが、貴様にその気が

あるのなら、ダイノゲッターに乗って戦え」

鉄甲鬼「俺に指図するのか?」

ニオン「指図などではない。……提案だ」

鉄甲鬼「フン……。面白い。爬虫人類と馴れ合う気など毛頭ないが、乗ってやろう」

ニオン「素直じゃない奴だ」

鉄甲鬼「貴様とて同じだろう」

瑞樹「はあ……。居候同士が意気投合しちやつて……。ニオン、貴方に鉄甲鬼を引き入れる権限なんてないでしょうに」

ニオン「ふん……」

瑞樹「私だつて同じよ。元は互いに争つた敵同士なんだもの。全員が全員納得できるわけではないし、ニオンだつて、なし崩し的に受け入れられてるだけなのよ？」

鉄甲鬼「……」

瑞樹「けど、確かに貴方を生かしたのは、まぎれもなく私の責任なのよね……」

くくく 新早乙女研究所 正門前 くくく

夏樹「……」

「なーっーきーちー！」

夏樹「……おつ、来たな」

李衣菜「ごめんっ！最後の話が長くなつてさ」

夏樹「いいって。気にしてないよ。それより、今日もお疲れさま」

拓海「今日は学校いる時に衝撃だったらしいじゃねえか。サボれてラッキーだったな？」

李衣菜「あ、拓海もいたんだ」

拓海「ずっと夏樹の隣にいたろうが!どこ見てんだ？」

李衣菜「あはは。ごめんごめん。：って言うか、もう動いて平気なの？」

拓海「あー、医者にはもう2、3日寝とけって言われたんだけどな。そんなに寝てたら体が鈍っちゃうだろう」

李衣菜「いやいや、医者のことなんだし、そこは素直に従つといた方がいいと思っうけど…」

拓海「バカ言つてんじゃないやねえよ。医者でも何でも、誰かの言うことに倣っちゃったら、鬼の拓海の名が廃るだろうが」

夏樹「でも、怪我のお陰で仕事はしばらくレックスンだけ。元々入ってた仕事もキャンセルしなくちやいけなくて、プロデューサーにこつてり絞られてたよな？」

拓海「うっ…。恥ずかしい事バラすんじゃないやねえ！」

李衣菜「ごめん…。私が巻き込んだから…」

拓海「関係ねえつての。あの状況で仲間見捨てちゃったら、お天道さんに二度と顔向けできねえだろうが」

李衣菜「でも…」

拓海「でももしかしてもねえよ。アタシはやりたくてやったんだ。仲間守って出来た傷なら大勲章だぜ！」

李衣菜「拓海…！」

夏樹「アイドル続ける以上は消すしかないんだろ？」

拓海「…まあな。ソイツはちいつと残念だが、アイドル活動には変えられねえからな  
！」

「ふうん、ホントにバイクで来てるんだ」

李衣菜「加蓮。見送りに来たの？」

加蓮「まさか。アタシがそんな殊勝に見える？」

李衣菜「あ…あはは…」

加蓮「にしてもよくやるね。このご時世にバイクなんて。燃料だつて簡単には手に入らないでしょ？」

夏樹「まあね。けど、どんなに規制が掛かっても、相棒を手放すなんてできなくてね」

拓海「昔のツテをあたりやあ質は悪いが燃料は手に入る。ま、用は人脈よ」

加蓮「ふうん…。そうなんだ」

夏樹「ここへ来るのは、プロデューサーだつて忙しいだろうし、その足代わりさ」

拓海「ちよつとしたツーリングにもなるしな!気分転換には丁度いいぜ」

加蓮「それで、リーナはコレから仕事なんだ?」

李衣菜「え?うん。今日はこれからラジオの収録で、夜からちよつとだけだけどボイスレックスとかも…」

拓海「2人のライブの近いからな。ここんどこで気合入れねえと…!」

李衣菜「わ、分かつてる…!分かつてるから、そんな凄まないで…」

夏樹「ああ、最近はい息も合うようになってきたしな。拓海が心配するほどじゃないよ」

拓海「なら、いいんだけどよ」

加蓮「…そだ。一緒に乗せてよ」

夏樹「え?」

拓海「は?」

加蓮「アタシこれからフリーなんだけど、丁度街に行く予定があつたんだよね」

拓海「おいおい…。アタシらはタクシーじゃねえぞ」

加蓮「ダメ?バイクは2台、メンバーは3人。なら、どつちかの後ろが空いてるって

ことだよね?」

夏樹「そりゃそうだけど…」

拓海「ま、どうしてもってんなら、いいぜ」

夏樹「いいのか？」

拓海「ああ。ここでうだうだ話してる時間も勿体ねえしよ」

李衣菜「つて言つても、ラジオの収録まで、結構時間あるけど……？」

拓海「細けえ事あ気にすんなよ！ま、2人分のメットは用意してねえから、それはそつちで用意してもらふことになるが……」

加蓮「了解、りよーかい。ゲッター用のヘルメット持つてくるから待つてて。ついでに準備もしてくるから」

タツタツ——

夏樹「おい、ホントに大丈夫なのか？」

拓海「あ？なんも問題なんざねえよ」

夏樹「けど、ケガだつて関知したわけじゃないんだろ？その状態で行けるのか？」

拓海「心配性だな、夏樹は。女一人乗つけられなくて、単車乗りがやつてられるかよ」

李衣菜「……ちよつと意味分かんないかな、それ……」

—— 駅前。

拓海「——……つと、着いたぜ。ホントにここでもいいのか？」

加蓮「うん。どうもありがとね。無理言っちゃって」

李衣菜（無理言ってるって、自覚あったんだ…）

拓海「構いやしねえよ。帰ってくるついでだしな」

李衣菜「帰りはどうするの？」

加蓮「うん…。久々だし、実家帰って、明日研究所から迎えに来てもらおっかな」

李衣菜「そっか。それじゃあ…」

加蓮「うん。またね」

スタスタ…――

拓海「おし、つけるか」

夏樹「はあ？いきなり何言い出すんだよ」

拓海「何だ、気にならねえか？これからフリーってのにわざわざ街に出てきて何すん

のか」

李衣菜「そりやあ、加蓮だつて友達だつているし、大した用事じゃないと思うけど…」

拓海「そうかあ？男でも作つてデートとかだったら面白くねえか？」

李衣菜「いやあ…ないないっ！加蓮つてああ見えて真剣にアイドルやつてるし、それ

を自分から壊すようなことしなないと思うけど…」

夏樹「まさか、後をつけるために乗せてやったんじゃないだろうな？」

拓海「おう。ちよつと退屈しのぎな。お前らもまだ時間に余裕あんだろ？ちよつと付き合えよ」

夏樹「はあ……。どうするだりー？付き合つてやるか？」

李衣菜「……まあ、何があつてもいいようにつて、だいぶ時間に余裕持つてるから余つてるのは事実だし……」

夏樹「……だな。コイツ一人にして何か問題でも起こされたら大変だからな」

拓海「決まりだな。見失わないうちに行くぜ」

――。

加蓮「……」 スタスタ……

拓海「……」 コソコソ

李衣菜「……」 コソコソ

夏樹「……」

ザワザワ ナンダアレ？ シルカヨ ツテイウカアレアイドルジャネ？ エツナニカノサツエイ？

夏樹「……なあ。これ、逆に目立ってないか？」

拓海「うるせえ！尾行に気付かれるだろうが！」

夏樹「そつちの方が声デカいぞ……？」



李衣菜「あ……!商店街の方に入っていくよ!」

拓海「よっしゃ、後をつけるぞ」

夏樹「だりー……。お前も結局ノリノリかよ……」

加蓮「——」

拓海「……花屋で買い物か?」

夏樹「店の人と話してるみたいだけど、ここからじゃ何話してるかまでは聞こえないな……」

拓海「これは彼氏説が濃厚なんじゃねえか?」

李衣菜「あ……あの店……」

夏樹「知ってるのか?」

李衣菜「うん……。前に教えてもらった。凜の店だよ」

夏樹「凜って、渋谷凜か?」

李衣菜「うん……」

夏樹「つて事は、あの店員は凜の親ってトコか。随分話し込んでると思つたら……」

李衣菜「加蓮なりに気遣ってるんだ……。でも、まさか鼻屑にしてるなんて……」

拓海「店を出たぜ!行くぞ、お前ら!」

夏樹「……だから、そんな大声でしたら気付かれるって」

夏樹「……ここは……」

李衣菜「病院だね」

拓海「……私立病院って書いてら」

李衣菜「ははっ、拓海の予想大ハズレだね」

拓海「るせえ。いいんだよ結果なんざ。暇潰しだしな」

夏樹「じゃ、目的も分かったんなら引き上げるか？」

拓海「……。いや、折角だ。どんな奴の見舞いに行つたか、ツラ拌みに行こうぜ」

夏樹「は？それは流石に……。家族とか、プライベートな関係だつたらどうすんだよ？」

李衣菜「そうだね。それに病院に迷惑掛けるわけにはいかないよ」

拓海「大丈夫だつて。ちよつと影からこっさり見るだけだから。病院にも迷惑掛

ねえよ」

夏樹「部外者が入ってる時点で十分迷惑だろ？」

拓海「んだよ、ノリ悪い。いいよ。アタシだけ行ってくる」

ズカズカ

李衣菜「ああもうダメだつたら……！拓海——っ！」　ダッ

夏樹「はあ……結局こうなのかよ……」

—— 病院屋上。

バンツ

拓海 「はあ……! はあ……はあ……っ!」

拓海 「こ、ここまで来ればもう追っては来ねえだろ」

李衣菜 「はあ……はあ……。だから言ったのに……!」

夏樹 「今後この病院使う事になったら、どんな顔すりやいいんだ?」

拓海 「知るかよ。しつかしトンデモねえ看護師だぜあいつら……。ちよつと入っただけなのにあんな躍起になって追い出そうとしなくてもよ」

李衣菜 「普通病院って、衛生面に気を遣うから、関係ない人来たら、追い出されて当然だと思うけど……」

拓海 「つたく、お陰で加蓮の居場所も分からなくなっちゃった……。こつからどうやって探すか……」

夏樹 「もう諦めろよ。この病院、今いる患者の数も多いみたいだし、探すつたつて一苦労になるぞ?」

李衣菜 「それに、そんな事してたらまた看護師にも見つかつちやうよ?」

拓海 「う……ん……。だよなあ……」

「……んなどころにいたんだ?」

拓海 「ツ!？」

李衣菜 「落ち着いて。加蓮の声だ」

拓海 「ラッキー！隠れようぜ」

コソコソ…

李衣菜 「……いた。誰かと話してる…」

拓海 「ありやあ、女の子…?」

夏樹 「車椅子に乗ってるな。やっぱりここの患者か…」

少女 「お姉ちゃん！また来てくれたの?」

加蓮 「うん。約束したじやん。はい、これ」 つ花束

少女 「わあ……!きれいなお花……。ありがとうっ!」

加蓮 「いえいえ。どういたしまして〜」

キヤイキヤイ

李衣菜 「…楽しそう…。これ、このまま見てていいのかな…?」

夏樹 「いや、十中八九ダメだろ」

拓海 「知ってる顔か?リーナ」

李衣菜 「いや、見たことないけど…って、だからっ、私達はそろそろ帰ろうよ!」

加蓮 「そっちの人達も、そろそろ出てきたら?」

李衣菜「え？」

加蓮「……」 ジー

李衣菜「え、あ……あー、あははっ。バレてた？」

加蓮「そりや、下であんな騒ぎ起こされたらねえ」

李衣菜「あはは……」

拓海「チツ……！看護師どもめえ……！」

夏樹「逆恨みすんなって」

少女「お友達も連れてきてくれたの!？」 パアッ

加蓮「うんっ。ほら、お友達はたくさんいた方が楽しいでしょ？」

少女「うんっ！ありがとう、お姉ちゃん！」

拓海「へへっ、何だ？遊び相手が欲しいんなら、アタシが相手してやるぜ？」

李衣菜「え？拓海の遊びって……」

拓海「ンだよ……。アタシだって、子供らしい遊びの一つや二つ知ってるっての」

李衣菜「そ、そうだよね……。良かった……」

拓海「あ……？どういう意味だ？そりや……」

李衣菜「いやあ、拓海の言う遊びって、もつとこう、危なっかしいの想像しちゃって

……」

拓海 「オメーはいつもアタシをどんな目で見てんだ？」

李衣菜 「え？…あはははは…」

拓海 「笑って誤魔化してんじやねえ！」

李衣菜 「そ、そう言うトコ…！ほら、子供だって見てるんだし、怯えちゃうよ？」

拓海 「あ…？」

少女 「え？私はいつもよりスツゴく楽しくて嬉しいよ？」

李衣菜 「ちよ…！」

拓海 「だそうだ。なら、もつと楽しいものを見せてやろうか？」

少女 「ホント!？」

李衣菜 「あー…。ピエロになるのは勘弁っ！」 ダッ

拓海 「待てゴラアツ!!」

ダッ

少女 「あはははっ」

加蓮 「ははっ」

夏樹 「…やれやれ。この調子じゃ、最初っから気付かれてたな」

「いやあ、今日は賑やかだね」

夏樹 「!?…アンタは…？」

「私かい? 私はこの院長だよ」

夏樹「い、院長……」

院長「ああ、大丈夫だよ。君達が北条くんの友人だと言うなら話は別だ。無理に追いついたりはいしないさ」

夏樹「……すいません。有難うございます」

院長「いやいや、お礼を言うのはこちらの方だよ。北條くん達に来てくれたお陰で、あの子も随分前向きになつてくれた」

夏樹「あの、あの子つて……」

院長「……重い心臓の病気でね。ここに入院して、長い事になる」

夏樹「そうなんですか……」

院長「心臓移植を行うのに、ドナーが見つからなくてね。最近になつてようやくドナーが見つかったんだが、途端、彼女が手術を拒むようになって……」

夏樹「……」

院長「手術の迫つた患者にはよくあることなんだが、彼女は特に酷くて……。我々でも困り果てていた時、北条くんと出会つたんだよ」

拓海「おらリーナ! いい加減覚悟しやがれッ!」

李衣菜「拓海相手にはムリッ!!」

加蓮「良かったねリーナ。病院だから顔が腫れてもすぐに手当てしてくれるよ？」

李衣菜「他人事だからつて〜！つてか、顔面なくなるの前提!？」

拓海「お望みならそうしてやる！」

李衣菜「ひゃ〜っ!!？」

少女「どつちも頑張れ〜！」

院長「……。彼女には身寄りもなくてね」

夏樹「それつて〜」

院長「百鬼帝国との巻き込まれて、亡くなったそうだ」

夏樹「……」

院長「それ故、あの子は自分一人で生き残ることに抵抗があったようにも見える。…  
今でこそそれは感じられないが…、それもこれも北条くんや君達のお陰だよ」

夏樹「アタシ達…？アタシは別に何もしてませんよ？」

院長「笑顔とは、なにより力になる。今日出会った君達も、あの子に充分過ぎきるく  
らしいの力を与えているよ」

夏樹「それならいいんですけど…。うるさすぎませんか？」

院長「あはは。このくらいが丁度いいさ。屋上なら誰の迷惑になることもない」

スツ：



夏樹「あっ……」

院長「私はもう行くよ。屋上へはしばらく誰もいれないようにしておくから、好きに使うといい」

夏樹「あ……えっと、色々有難うございます!」

院長「いいって。あの子の事、これからも頼むよ」

院長「……」

ツカツカ——

—— 約1時間後。市立病院外。

拓海「ん、ん……! 久しぶりに思いっきり体動かしたぜ〜!」

夏樹「おいおい……。病院はスポーツジムじゃないんだぞ?」

拓海「分かっているっての。でもたまにやいいだろ。こう言うのも」

李衣菜「たまにでサンドバックにされるのはごめんなんだけど……」

拓海「はははっ、悪い悪い。ギャラリーがいたんで少し熱くなっちゃった」

李衣菜「もう……。顔は殴らなかつたから良かったけど……」

拓海「ま、リーナもアイドルだしな。その辺は勘弁しといてやったぜ」

李衣菜「その優しさがあるなら、拳を振るう前に発揮してほしかったよ……」

加蓮「3人ともごめんね。何だか付き合わせちゃって」

李衣菜「別にいいよ。こっちは仕事まで暇だったんだし。あの子とも友達になれたし」

加蓮「…ホントにありがとう」

李衣菜「え…」

加蓮「何〜?」

李衣菜「え、あ…いや、加蓮がお礼を言うなんて珍しいな、なんて…」

加蓮「リーナ、それでさっき酷い目に遭ったの、もう忘れたの?」

拓海「記憶が飛んだんなら、もう一発入れて思い出させてやろうか?」

李衣菜「だ、だからごめんって…!それに、お礼を言われることでもないでしょ?」

加蓮「え…?」

拓海「だな。紹介してくれたのは加蓮だが、アタシらが好き勝手暴れて、遊んでやってただけだ。礼なんざ言われたら、ムズ痒くなっちまうぜ」

加蓮「…そうだね。ありがとう」

夏樹「あの子の手術、上手くいくといいな」

加蓮「うんっ」

「あ…」

李衣菜「はい?」

男 「貴女方、さっきあの病院から出てこられましたけど、あの病院の関係者ですか？  
それとも、ご家族か誰かが入院中で？」

李衣菜 「え？ええーつと…、あの」

拓海 「ンだテメエ…、モノ尋ねるならまず何モンか名乗るのが先だろうが」

男 「ああ、これは失礼…。と言つても大した者じゃないんだけどね。ただ、私の知り  
合いが近い内この病院に入院することになって、それでどんな病院か気になってね」

夏樹 「？ 病院のHPとか、クチコミサイトとかあるでしょう？」

男 「まあ、それは確かなんだが、実際に通つてる人の意見を、直に聞いてみたくてね」  
李衣菜 「そうなんですか？ 悪い病院じゃないですよ？ 雰囲気もそうだし、院長もいい  
人だったし！」

男 「ほうほう…。そうですか」

グイッ

李衣菜 「ちよ、ちよつと加蓮…？ い、痛い…」

加蓮 「すいません。急いでるんで」

男 「ああ…ちよつと！」

スタスタ――

李衣菜 「痛い、痛いってば、加蓮！」 バッ

加蓮「…ごめん」

李衣菜「…いきなりどうしたの？」

加蓮「いや、何となくだけど、あの人ちよつと嫌な感じがして…」

李衣菜「え…？ そうかな…」

加蓮「気のせいかもしれないけど、何かを隠してる。そんな感じだった」

夏樹「加蓮の言うとおりかもな…。今の時代、知り合いが入院するっただけで下見つて、怪しいよな…」

李衣菜「なつきちまで…」

拓海「それだけじゃねえ。アイツ、服越しに見ても分かるくらいには鍛えてやがるな。

おまけに姿勢もいいし、ありや格闘技やつてる奴か、そうでなきや軍隊の人間だぜ」

李衣菜「で、でも…、自衛隊の人だとしても、どうして私立病院なんか？」

夏樹「それは…」

P r r r P r r r

加蓮「あ、ごめん…アタシだ。…奈緒から？」

加蓮「もしもし？ どしたの？」

奈緒『加蓮！ お前今何処にいるんだ!?!』

加蓮「え…？ あ、そう言えば奈緒には何も言わずに来ちやつたっけ？」

拓海 「おいおい…。大丈夫かよ」

奈緒 『それで、何処にいるんだよ!』

加蓮 「まあまあそんな怒らないで…。用事を足しに街に来てただけだよ」

奈緒 『街い!?!』

加蓮 「何も言わないで来ちやったのは悪かったよ、ごめん。で、そんなに慌てるって事は敵襲?」

奈緒 『ああ。今ゲッター出迎えに行くから、分かりやすい場所で待っててくれよ』

加蓮 「了解了解」

奈緒 『後、李衣菜にも連絡しないと…』

加蓮 「それなら大丈夫。リーナもこっちにいるから」

奈緒 『え?』

李衣菜 「いるよ!」

奈緒 『お、お前らあたしを置いて…。…まあいいや。とにかく!文字通りマツハで行くからな!』

李衣菜 「コックピットにパイロットスーツ入れといてね!」

奈緒 『分かってるよ!じゃあな!』

ツ…ツ…ツ…ツ…

加蓮「…詮索は後だね」

李衣菜「ちえー…。折角これからなつきちと仕事だったのに…」

夏樹「むくれるなよ。こつちの仕事は後で埋め合わせすればなんとかなるから、な？」

李衣菜「…うん…。夜のレッスンまでには帰ってくるよ」

夏樹「ああ、体温めて待つてるからさ、遅れるんじゃないぞ？」

李衣菜「分かった！行ってきます！」

夏樹「おう！」

タツタツタツ——

くくく 沿岸部 盆地 くくく

李衣菜「——チエーンナツクル!!」

少し離れた位置にいる百鬼メカを貫く。

李衣菜「シヨルダーミサイルッ！」

チエーンナツクルを拳に戻して、空かさずシヨルダーミサイル。後方に控えていたメ

カザウルスの群れを屠る。

奈緒「…今更だけど、ホントこいつら何処から沸いてくるんだろうな？」

李衣菜「誰が利用してるのかも含めて、晶葉が調査中って言ってたけど…」

加蓮「今の段階で分かっているのは、相手には誰も乗っていない、無人機ってことだけだね」

奈緒「無人機なんて、そんな技術力を持つてゐる所があるのか？」

加蓮「そりゃあ、ゲッターだって半分はオーバーテクノロジーみたいなものだし」

李衣菜「とにかく、誰も乗ってないなら遠慮する必要は…」

李衣菜「ないっ!!」

零距离からのチエーンナックルで、メカザウルスを粉砕する。

メカザウルス・ジガ《シヤアアアア——!!》

加蓮「っ…!リーナ、海の方!」

李衣菜「うんっ!水中の敵が相手って事は…」

李衣菜「オーブンゲット!!」

海面に姿を見せたメカザウルスの攻撃を、ゲッターを分離させて回避。

加蓮「ゲッターチェンジ!」

即座にネオゲッター3に合体して水中戦に持ち込む。

加蓮「…急速潜行、なんてね」

沈降、目の前に立ち塞がった敵に拳を振るう。

メカ海王鬼『!!』

加蓮「…つと！危ない危ない…」

背後から接近したメカ海王鬼の攻撃を躲し、

加蓮「ゲッタートルネード！」

ゲッタートルネードで反撃。メカ海王鬼を吹き飛ばす。

加蓮「ミサイルみたいな威力高いのは無いけど…」

加蓮「フィンガーネットで…！」

突き出した掌からネットを放射状に放ち、ジガとメカ海王鬼をまとめて捕縛。

加蓮「——スパーク！」

ネットに高圧電流を通し、捕縛した敵を焼き殺す。

李衣菜「ウツヒョー！やるう！」

加蓮「ま、このくらい簡単簡単」

李衣菜「ははっ、気合い入ってるね」

加蓮「…あの子が退院するまでには、平和な世界にしてあげたいしね？」

李衣菜「成る程」

加蓮「さてと、確認された敵はこんなもん？」

李衣菜「襲ってきた百鬼メカとメカザウルスは全部やつつけたみたいだけど…」

奈緒「……いや、待ってくれ…。何か近付いてくる！」



李衣菜「何かって…何？」

奈緒「分からない！反応がデカイ…。こんなの、百鬼メカでもメカザウルスでも見たことないぞ！」

加蓮「…来るよ！」

ゴオオオオツ——

奈緒「…!!」

李衣菜「大きい…！それに、速い！」

加蓮「確かに、初めて見るタイプだね…」

李衣菜「機械の怪物…!？」

奈緒「こつちが本命ってことかよ…！」

加蓮「面白いじゃん。向こうもようやく本気になってきたってトコ？」

奈緒「マジでやる気か？ここは態勢を整えた方が…」

加蓮「何言ってるの？ここで逃げたら、ネオゲッターの面目が立たないでしょ」

奈緒「ならせめて、慎重に…」

李衣菜「相手の出方が分からないなら、先手必勝だよ！」

加蓮「かもね。元々ネオゲッター3に小細工なんて出来ないし」

ネオゲッター3を加速させる。

奈緒「あくお前ら！人の話くらい聞けえ〜!!」

そうこうする内に、アンノウンへ接近。

加蓮「くっ…。ネオゲッター3より速いなんて…」

???《——!!》 シュルッ

アンノウンの各所から生える触手がネオゲッター3の手足を捕らえる。

加蓮「…こんな細い触手で…!」

両腕に巻き付いた触手を強引に引きちぎり、その腕で脚に着いた触手を引き剥がす。

加蓮「——はっ!」

掴んだ触手をよじ上って本体に接近し、拳を打ち込む。

加蓮「どう…!?!」

李衣菜「ダメ!見た感じ損傷はないよ!」

加蓮「見た目通り頑丈なんだ…!」

奈緒「このまましがみついても海流の圧力に耐えられないぞ!一旦離れろ!」

加蓮「っ…!」

アンノウンから手を離し、離脱。海底に着地して、態勢を整える。

李衣菜「こんな深度じゃ視界悪いよね。もう見えなくなつた…」

加蓮「ソナーだけが頼りだね」

奈緒「何個か熱源が来るぞ! 防御ッ!」

加蓮「——! ……ぐうくつ…!」

ネオゲッター3の周囲に、アンノウンから放たれたらしい魚雷が着弾し、衝撃が響く。

加蓮「くくくう…!」

奈緒「射程は向こうの方が上だ! 長期戦になったらマズい!」

李衣菜「とにかくここから動かなきゃ! 加蓮!」

加蓮「うん…。タンク・モード!」

高速移動形態で海底を疾るネオゲッター3の後方に、魚雷が着弾した煙が立ち昇っていく。

奈緒「畜生…。何処から撃ってくるんだ?」

加蓮「悔しいけど、向こうの方が目はいいみたい」

李衣菜「こっちのソナーに反応は…。正面!」

加蓮「っ——!」

直進で加速の勢いが付いたネオゲッター3と、正面から突っ込んできたアンノウンが、正面から激突した。

加蓮「ガッ…!」

奈緒「うわあああああ!!」

李衣菜「ぐぎぎ……！」

アンノウンの勢いに押され、水圧と板挟みになる。

加蓮「…ま、まさか魚雷の攻撃が囷だったなんてね…」

奈緒「感心してる場合か！このまま叩き付けられでもしたら、ネオゲッター3でも危ないぞ!!」

加蓮「分かってるんだけど、前の敵と後ろからの圧力でゲッターが動かない…！」

奈緒「何か手はないのか？」

加蓮「…一か八かだけ…」

空いている両手で、アンノウンの頭部を押しさえる。

加蓮「2人共、ちよつと痺れるかも！」

奈緒「おい、まさか…」

加蓮「プラスマブレイク！」

背中に集束され、零距离で放たれたプラスマブレイク。

その衝撃にアンノンも思わずのたうち、その隙にネオゲッター3は離脱する。

加蓮「ふう…。間一髪…」

奈緒「ッッッ…。手足がビリビリする…」

李衣菜「抜け出せたんなら、何でもオツケーだよ…！」

加蓮「さてと、また視界から逃げられる前に何とか仕留めなきや…」

李衣菜「でも、零距离でプラズマブレイクの直撃を受けても、大したダメージになつてないって感じだよ？」

加蓮「また同じことしてみる？今度はプラズマブレイクを最大出力で」

奈緒「冗談だろ!?!さっきのダメージに、またダメージを重ねたら、ネオゲッターもプラズマブレイクの衝撃に耐えられない!」

???「<<!!>>」

加蓮「…来る…っ!」

「ゲッターミサイル!!」

???「<<!!>>」

ネオゲッター3に向かって、再度突撃を敢行したアンノウンの顔面に、1対のミサイルが直撃し、アンノウンの氣勢を削ぐ。

奈緒「今のミサイルって…」

李衣菜「ダイノゲッターロボ!」

鉄甲鬼「待たせたな。ネオゲッターロボ」

李衣菜「鉄甲鬼!もう大丈夫なの?」

鉄甲鬼「怪我の事なら心配いらん。俺は人間以上に身体改造されているからな」

李衣菜「はは…」

鉄甲鬼「貴様らの責任者とも話は着いた。これからはダイノゲッターの乗り手として協力させてもらう」

ニオン「…ふん」

加蓮「じゃあ、さっきの攻撃は鉄甲鬼が？」

鉄甲鬼「いや、俺が乗っているのは2号機だ」

奈緒「じゃあ3号機には誰が？」

かな子「私です！」

李衣菜「かな子お!？」

かな子「私だって、卯月ちゃん達と一緒に戦ってたんですから！」

奈緒「だけど、ホントにいいのかよ？」

かな子「はい。色々自分なりに考えたんですけど、卯月ちゃん達が帰ってくる場所は守りたいなって」

李衣菜「そっか…。今は戦力も足りないし、頼りにさせてもらうよ！」

かな子「はい！改めて、よろしく願います！」

ニオン「小娘！芳乃の代わりに乗せてやったんだ。足手まといにはなるなよ」

かな子「はいっ！ニオンさんも鉄甲鬼さんも、よろしく願います！」

李衣菜「それじゃ、味方も増えたところで反撃開始だね!加蓮!」

加蓮「うんっ!かな子、まだダイノゲッターには慣れないだろうから、後ろから援護メインでヨロシクね!」

かな子「分かりました!——ゲッターミサイルツ!」

加蓮「タンク・モード!」

ダイノゲッター3のゲッターミサイルで牽制し、ネオゲッター3が距離を詰める。

加蓮「はああっ!」

海底面を蹴り上げ、渾身のアッパーをアンノウンの胴体に打ち込む。

???《?!?》

アッパーから、アンノウンに取り付いたネオゲッター3を引き剥がそうと、アンノウンが暴れまわる。

鉄甲鬼「かな子、敵の動きはこちらで抑えるぞ!」

かな子「そうですね。——プレシオアーム!!」

ダイノゲッター3の両手が、水棲竜の頭部へと変形。その両腕を、伸縮機構で延ばし、かな子「バイトハング!」

竜頭の顎で、牙をアンノウンの体に食い込ませ固定。頭に繋がる蛇腹の腕は、アンノウンが暴れることで自然に絡み付き、徐々に自由を奪った。

かな子「うう…っ、スゴいパワー…！」

ニオン「しつかりしろ！お前のパワーはそんなものか？」

かな子「そんな事は…、えええっ！ッ！」

ダイノゲッター3のキャタピラを全力で逆回転させ、踏ん張りを効かせながら、アンノウンの力を完全に抑え込む。

かな子「くく…っ！加蓮ちゃん！今のうちに…！」

加蓮「ありがと、かな子。——えいッ！」

抵抗を続けるアンノウンを、拳で連続して殴打。

加蓮「これで…！」

数発目の拳で、遂にアンノウンの装甲を歪め、

加蓮「どう!？」

歪んだ部分にネオゲッター3の背中のホーンを突き立てた。

李衣菜「奈緒！ネオジャガーのエネルギーを回して！」

奈緒「もうやってる！」

李衣菜「ホントだ…。エネルギー充填！加蓮、何時でもいけるよ！」

加蓮「かな子！」

かな子「はいっ！」



ダイノゲッター3が、プレシオアームによる拘束を解くと同時、

加蓮「プラズマブレイクツ!!」

アンノウンに突き刺したホーンから、最大出力のプラズマブレイクが放たれた。

轟音。海中で爆炎は上がらず、爆発の衝撃が海水を通して周囲に拡散した。

かな子「加蓮ちゃん!」

加蓮「――ヘーキヘーキ。アタシ達もネオゲッターも、みんな無事だよ」

かな子「つ……。良かったあ……」

ニオン「しぶとい奴等だ」

李衣菜「へへっ、それが私達の強みでもあるからね!」

奈緒「あたし達も頭数にいれんな!」

鉄甲鬼「何にせよ、状況は終了だな。敵は、あれが最後だったようだ」

李衣菜「何だったんだろ、あの敵……。初めて見るタイプだったけど……」

ニオン「その辺りは科学者連中が調べてハッキリさせるだろうさ」

鉄甲鬼「うむ。そのためにも、我々で回収できるだけの残骸を回収していこう」

加蓮「了々解々つと」

『流石!流石だな!やはり恐るべきゲッターよ!!』

李衣菜「ツ!?!誰!?!」

加蓮 「ゲッターのモニターに、…知らないおじさん？」

かな子 「これ、普通にゲッターの通信回線から入ってるんですか？」

加蓮 「だけど、通信先は普通の回線じゃないよ」

鉄甲鬼 「この老体がゲッターにハッキングを仕掛けているのか!？」

『よもや、我がメタルビーストをも退けるとは、思いもなかったぞー!』

奈緒 「メタル…ビースト…?」

李衣菜 「さっきのデカブツの事!？」

鉄甲鬼 「機械の獣…。言い得て妙だな」

『だが、例えばゲッターが一騎当千の力を持っていようとも、我らの侵攻を阻むことなどできん!』

李衣菜 「侵攻…!?!じゃあ、アンタがメカザウルスや百鬼メカをけしかけてた張本人って訳!？」

『然り!しかしメカザウルスによる侵略は私が世界を制する侵略の第一段階にすぎん!』

加蓮 「世界を制する…。悪党お決まりの台詞だね」

『ふふふ…。私が悪党となるか、貴様らがそうなるか、それはこれからの歴史が決めることよ!』

かな子「貴方の思い通りにはさせませんよ!」

『ほざけ!来るべき未来の真なる支配者が誰であるか!私、プロフェッサー・ランドウが全世界に知らしめる時が来たのだ!!』

李衣菜「プロフェッサー…ランドウ!」

ランドウ『既に我が帝国の礎は完成した!一度我が帝国が動けば、世界は地鳴りを立てて震え、崩れ去るであろう!!』

奈緒「…大言壮語って奴だよな。こーいうの」

ランドウ『何っ!?!』

加蓮「ね。とんだピエロって感じ」

ランドウ『貴様らあ…!この期に及んで我を愚弄するか!』

李衣菜「当たり前じゃん!人一人が簡単に手にできるほど、世界は狭くないしねっ!」

奈緒「それに、同じ事を言っただけで簡単に倒された奴を今まで二度は見てるからな」

ランドウ『我をゴールやブライと同じと嗤うか!』

加蓮「同じでしょ、実際。それでもやるって言うなら、ホントに救いようがない。ただの妄想癖を拗らせた、哀れなおじいちゃんだよ?」

李衣菜「アンタがどんなに力で攻めてきても、私達は屈しない!このゲッターで、持つてる全部の力で、何度だって打ち負かしてあげるよ!」

ランドウ『小娘共が面白いッ！やれるか？真ゲッター無き今、そのゲッターだけで！』  
李衣菜「やってみせる!!」

ランドウ『フ：フハハハハハ!!ならばやってみせる！既に世界各地に散らばった同志達による攻撃は始まっている！』

かな子「そんな！」

ランドウ『抵抗する意志を見せろ！我が軍団に抗って見せろ！そして出来るものならば、世界を救ってみるがいい!!フハハハハハ——!!』

ブツンツ

李衣菜「あ……！」

奈緒「アイツ…、勝手に通信入れてきて、切る時も勝手かよ！」

加蓮「こつちの事情はお構いなしなんでしょ？…で、こつちもあんな啖呵切っちゃつたわけだけど？」

李衣菜「ちよつと、いきなり冷静にならないで…」

加蓮「仕方ないでしょ。向こうは宣戦布告と同時に、世界中で一斉に攻撃を仕掛ける大胆さを持った敵だよ？気持ちだけで動いて、勝てるって相手じゃない」

李衣菜「うっ…」

鉄甲鬼「恐らく、二度の帝国との戦いの間、ずっと力を蓄えていたんだろう。そして、

お前達の力が弱まるのを待っていた」

ニオン「気に入らん話だな」

鉄甲鬼「確かに。しかし、二つの帝国の侵攻にも動じず、着々と力を蓄えていたんだ。強かなのは事実だろう」

かな子「一筋縄じゃないかな相手…。しかも、同じ人間…」

奈緒「…やはり、最後の敵は人間だったな、ってか」

加蓮「やはり、って…、確証でもあったの？」

奈緒「あ…いやあ、そう真面目に突っ込まれると困る…」

鉄甲鬼「一度帰投するぞ。何よりもまずはゲッターの整備、それに今後の打ち合わせも必要だろう」

李衣菜「うん。分かってるよ」

加蓮「ってか、何で鉄甲鬼がしきってるの？」

ニオン「かな子、お前はダイノゲッター3の訓練だからな」

かな子「は、はいっ。…あの、その前におやつタイムは…?」

ニオン「ゲッター3をまともに使えるようになったら、考えてやる」

かな子「そんなあゝ!」

李衣菜「…。プロフェッサー・ランドウ、かあ…」

李衣菜 「なつきちとのレッスン、間に合うかなあ…？」  
つづく

## 第4話『怒りに力を』

キヤスター『——続いてのニュースです』

キヤスター『先日現れた、ランドウと名乗るテロ集団により、世界各地で混乱が続いています』

キヤスター『ランドウのものと思われる機械兵器群、通称メタルビーストがイスラエルなど紛争地域に出現し、政府軍や対立する組織など見境なく攻撃を行い、民間人や市街地に多くの被害が出ています』

キヤスター『この他、ランドウは国連加盟国の主要都市にもメタルビーストを出現させており、各国の軍隊が対応に追われています——』

~~~~~ 新早乙女研究所 談話室 ~~~~~

奈緒「——結構派手にやってるな。ランドウの奴等」

李衣菜「どこの国だって、復興とかで忙しいのに、それもお構いなしなんて……」
加蓮「まるで世界を混乱させて楽しんでるみたい。……ムカつく」

橘「……ランドウ……、まさか本当に生き延びていようとは……」

李衣菜 「橘博士、ランドウの事知ってるんですか？」

橘 「うむ。彼も元は、私と同じ科学者だよ」

李衣菜 「科学者……。確かに白衣着てるし、それっぽいけど……」

晶葉 「アルヒ・ズウ・ランドウ。ドイツ出身。機械工学、遺伝子工学……ありとあらゆる分野に精通した正に、天才科学者だった」

加蓮 「ふうん。晶葉も知ってるってことは、よほど有名な人だったんだ？」

晶葉 「有名ななんてものじゃない。科学者を目指す人間ならば誰しも耳にする。ベガゾーン構想と共に、悪い意味でな」

李衣菜 「ベガゾーン構想？」

奈緒 「宇宙船の都市に、バーチャルアイドルでも出てくるのか？」

加蓮 「何それ？」

橘 「北極基地ベガゾーン……。今から30年ほど前にランドウが世界に向けて打ち立てた一大プロジェクトの礎……」

晶葉 「世界中の企業から資金を集め、優秀な科学者、軍人、技術者を一堂に介し、来たるべき新世紀の軍事、経済に至るまでの技術開発を一手に行う世界意思統率構想……。それがランドウが世界に発した構想理念だった」

橘 「ランドウの言葉によれば、人類は種族、思想、国境の垣根を越えて団結すること

で、多くの人々が思い描く理想の未来の実現を可能とする。ベガゾーンとはそのための礎なのだ」と

加蓮「成る程ね。理屈は分かりやすいけど、それって詐欺っぽくない？」

晶葉「ああ。事実、その通りだった」

橘「ランドウは、彼の理念に賛同し、世界中から集った科学者や軍人に人体改造を施し、自らの手駒となるように仕向けたのだ」

奈緒「うわっ……。…やるのが外道だな」

晶葉「結局、ランドウの企みは国連の放ったスパイによって暴かれ、ベガゾーンは制圧。首謀者だったランドウも、逃走を図ろうとしたところを狙撃され、その行方は北極の海に沈んだ」

加蓮「それが今になってまた出てきたって訳」

晶葉「残された当時の資料に、ランドウが死んだとは明記されていなかったが……」

李衣菜「でも、北極の寒い海に落ちたら、誰だって死んだと思うよね」

橘「ランドウには、自身の遺伝子技術で生み出した忠実な配下がいたと言う。通常の生物よりも遥かに強化された肉体を持つ配下に助けられたのならば、合点もいく」

晶葉「更に自信の肉体にまで改造を施して……。今のランドウは世界を制するという野望の他に、世界に対する復讐心もあるのかもしれない」

李衣菜「何それ？勝手な逆恨みじゃん！」

晶葉「李衣菜の言うとおりで。逆恨みで世界を滅ぼされたあげく、ランドウに明け渡すわけにはいかない」。パサツ

テールの上に資料を置く。

奈緒「何だ、これ？」

晶葉「以前お前達が戦闘した、メタルビーストとそれを操っていた者の検査結果だ」
加蓮「やつとく？結構時間掛かったね」

晶葉「何分未知のテクノロジーも多く使われていたからな。構成材質は間違いなく無機物だが、ナノマシンの集合体で、生物のような動きが可能になってる」

橘「ふむ…。構成するものが機械と言うだけで、インベーターに似ている、と言うことかね？」

晶葉「大まかなところは。メタルビーストを生み出す際に参考にしたんでしょう」

橘「成る程…」

李衣菜「それで、これを操っていた人って、…やつぱり人間？」

晶葉「李衣菜達に重要なのはそちらだろうな。先ずは結果から。コックピットと思われる部位から回収された者を調べてみた結果、エドワードと言うカナダ人の軍人であることが分かった」

奈緒「やっぱそうなるよな…」

加蓮「人間が相手だもんね」

晶葉「ああ。だが、身元を確認していく上で、彼は湾岸戦争時に戦死している事が分かった」

奈緒「はあ?…どう言うことだ?」

橘「人体蘇生…。ランドウはそれについても研究していたと聞く」

李衣菜「じゃあ…!死んだ人間を蘇らせて、手駒にして使っているってこと!?!」

晶葉「分りやすい蘇生ならば、まだ生易しいのだがな…」

加蓮「…どう言うこと?」

晶葉「言った筈だ。メタルビーストは生物と同等の動きを可能にしている。だが、実際に生物の動きは、コンピューターのような正確さでは動いていない」

橘「まさか…!」

晶葉「ランドウは人間の…生物の頭脳を、メタルビーストの制御中枢として利用している」

加蓮「何それ…。人間でもなんでもお構い無く、道具と一緒にってこと?」

晶葉「だろうな。実際、ある意味で言えば、生体部品は恒久的な生産可能だ。しかも、死んだ人間から再利用可能となれば、場合によってはそちらの方が供給の手間は掛から

ないだろう」

加蓮「本気でそんなこと言ってるの？」

奈緒「加蓮、落ち着け。何も晶葉がそう思ってるって訳じゃないんだからさ」

加蓮「……っ。……ごめん」

晶葉「気にしていない。私も、科学者である前に人間であるつもりだからな」

橘「最早、ランドウの研究は狂的領域まで達している」

晶葉「誰かがこの暴挙を止めなくてはならん」

奈緒「それがあたし達って訳だな」

李衣菜「言われなくたって！マッド・サイエンティストに、人間も世界も好きにさせるわけにはいかないよ！」

晶葉「うむ。ランドウに利用されている者には申し訳ないかもしれんが、生きている人間でない以上遠慮はいらん」

奈緒「ああ……！生命を粗末にしたらどうなるか、ランドウに教えてやろうぜっ！」

「「……」」

奈緒「あ、あれ……？」

李衣菜「あ……ごめん……。まさか奈緒がそんな熱い感じで締めるなんて思わなくて……」

奈緒「な、何だよ……！あたしだって冷血じゃないんだ。晶葉からそんな話聞かされて、

黙って頷くだけでいられるかって！」

李衣菜「そうだよねっ、ごめん。気持ちみんな一つだから……」

奈緒「だったらもう少しノツてくれよ！」

加蓮「……」

スタスタ……

李衣菜「加蓮？」

加蓮「ごめん、ちよつと頭冷やしてくる。話はもう大体済んだよね？」

晶葉「ああ。あまり気負うなよ」

加蓮「……分かってるよ。それじゃあ——」

李衣菜「……大丈夫かなあ。加蓮」

奈緒「まあ、アイツも複雑だった時期があるからな……」

橘「それ故、命に対しては特に敏感になるのだろう」

李衣菜「私だって、さっきの話、スゴい嫌な感じしたくらいだし……、ねえ」

晶葉「まあ、もう少し経ったら様子を見てやってくれ。チームメイトのケアは、チームメイト同士、だぞ」

李衣菜「分かってる。……」

——。

くくく 新早乙女研究所 外 くくく

加蓮「——うん。うん……。それじゃ、明日。頑張って」
プツツ——

李衣菜「こんなトコいたんだ」

加蓮「……リーナ」

李衣菜「夜は冷えるよ。上着くらい持ってかないと。はいコレ」 つココア

加蓮「あ、ありがとう……」

李衣菜「苦い方が良かった？」

加蓮「ううん。今はこっちの方が落ち着くかな」

李衣菜「そっか……」

加蓮「……」

李衣菜「……」

加蓮「……そう言えば奈緒は？」

李衣菜「晶葉と橘博士と、これからの打ち合わせ」

加蓮「ああ……」

李衣菜「私達のチームだと、そう言うのは一番適任でしょ？」

加蓮「それは……、そうかも。で、リーナは追い出されてきたんだ？」

李衣菜「ちよ…、違う違うっ。打ち合わせを円滑にするために抜けてきたただだから」
加蓮「それ、あんまし変わんないから」

李衣菜「うう…。っと、それより！きつき、誰かと電話してみたいけど、もしかして前に会った…」

加蓮「うん。明日手術なんだって」

李衣菜「そつかあ…。私もあの日に会って以来、一度も会えてないなあ」

加蓮「拓海はたまに来てたけど？」

李衣菜「え？ホントに？」

加蓮「うん。トランプとか、ゲームとか持って来て。ずっと病院にいたからね…。あの子にはなんでも新鮮みたい」

李衣菜「へえ…。何か、意外…」

加蓮「それ、拓海の前で言ったらまたぶん殴られるよ？」

李衣菜「ははっ…。それは勘弁」

加蓮「……」

李衣菜「……。上手くいくといいね。明日の手術」

加蓮「うん…」

李衣菜「そうだ！明日何もなかったら、私達でお見舞いに行こうよ！」

加蓮「えっ」

李衣菜「私ももう一回会いたかったし、今度は奈緒も連れて、手術が終わった頃を見計らってさ」

加蓮「うん、いいかもね。それ」

李衣菜「うんっ！よおっし、そうと決まったら明日が楽しみになってきた！明日だけは出てこないでよ、ランドウ！メタルビースト——！」

——翌日。

李衣菜「ほら奈緒！早く早く！」

奈緒「そ、そんな焦んなって！入院してるんだし、どっかになんて行きっこないだろ？」

李衣菜「だーけーどー！ほら、加蓮はもう行っちゃったよ？」

奈緒「マジか？見当たらないと思ったら……」

ガシャン ブー

無慈悲な改札。

奈緒「……。もうっ！何であたしばかりこうなるんだあー！！」

~~~~ 私立病院 エントランス ~~~~

加蓮「——はあ……はあ……はあ……」



院長「……」

加蓮「……あ、院長先生っ！」

院長「……あ……ほ、北条くん……」

タツタツ

加蓮「しゅ、手術は……！あの子は……！」

院長「……」

加蓮「……先生？」

院長「……すまない！」

加蓮「……え？」

院長「最高のスタッフで臨んだ。機材に不備もなく、全てが万全の状態だったんだ……  
！だが、術中に予想以上の出血があつて……」

院長「……いや、言い訳は見苦しいね。全て私が至らなかつたんだ……」 ガクツ

加蓮「ちよ……ちよつと先生……。何言ってるのか、全然分かんないよ……？あ、あの子は

……」

院長「彼女は……死んだよ」

加蓮「……」

李衣菜「——…加蓮待ってたら……もう、一人で行くんだから……」

奈緒「待て、李衣菜」

李衣菜「何？」

奈緒「…様子が変だぞ」

李衣菜「様子つて、何か呆然としてて院長が項垂れて…。まさか…！そんな！」  
ダツ  
ガツ

李衣菜「っ!?ちよつと奈緒、離して…！」

奈緒「待てつて。あたしらはあつちで待つてよう」

李衣菜「え…。でも、加蓮は？」

奈緒「今はそつとしといてやろう。な？」

李衣菜「う、うん…——」

数分後。病院出口。

加蓮「……」

李衣菜「か、加蓮…」

奈緒「よ」

加蓮「……2人共どこ行ってたの？あんまり遅いから、迷子にでもなってるのかと思つた」

李衣菜「え…」

奈緒「逆だろ？お前が見当たらないから、その辺を探してたんだよ」

李衣菜「ちよつと……？2人共……？」

加蓮「そうだったんだ……。ごめんごめん。お詫びになんか奢るからさ。それで許して？」

奈緒「もう、しょうがないなあ。じゃ、とつとと行くぞ」

加蓮「うん」

スタスタ……

李衣菜「あ……。……」

「やあ」

李衣菜「え？あ……」

男「また会ったね」

李衣菜「この間の……」

男「今から、ちよつと時間あるかな？……少し話がしたいんだ。ネオゲッターのパイロット、多田李衣菜くん？」

李衣菜「つ……!?!アンタ、何者？」

男「このじゃあちよつと。怪しいものじゃないって事だけは、信用してほしいな」  
李衣菜「……」

奈緒 「李衣菜——！何やってんだ——！早く来いよ——っ！！」

李衣菜 「奈緒……！」

男 「コレから食事かい？なら丁度いい。私が奢るよ。メンバー3人に、聞いてもらいたいことだしね」

李衣菜 「……」

李衣菜 「奈緒ごめん——！ちょっと急用！先に行つてて——！！」

奈緒 「はあ!？」

李衣菜 「すぐ終わるから——！お店決まったらメールで教えて——！！」

奈緒 「……つたく、仕方ないな！先行つてるぞ——！！」

スタスタ……

李衣菜 「メンバーの一人は、今ちよつと……。だから私一人で行くよ。良いでしょ？」

男 「ああ。それでも勿論構わない。着いてきてくれ」  
——。

くくく 喫茶店 くくく

李衣菜 「……」

男 「煙草臭い所で申し訳ない。だが、こう手狭な店の方が、かえって安心するんだ」

李衣菜 「そう……ですか」

男 「私も一本、良いかね？」

李衣菜 「……どうぞ」

男 「あはは……。そう警戒しないでくれ」

李衣菜 「……」

男 「……ふう……」

李衣菜 「おじさん、何者？」

男 「おじさん……。まあいいか。今さら隠す必要もない。私は、政府諜報機関の人間  
さ」

李衣菜 「諜報機関……？漫画とかによく出てくる？」

男 「似たようなものだと思っただい。私は、ある筋からの情報で、あの病院の調査を  
していたんだ」

李衣菜 「ある筋の情報……？」

男 「それは教えられない。知れば、私は君の自由も奪わなくてはならない」

李衣菜 「……」

男 「……。以前にも君達をあつ病院で見掛けたが、あの病院には……」

李衣菜 「……友達が、入院してたんです」

男 「していた……？そう言うことか……。立ち入つたことを聞いてすまない」

李衣菜 「いえ…」

男 「しかし、それなら君に、少し辛い話をする事になるかもしれない」

李衣菜 「え…？」

男 「私がああ病院を調査していた理由だがね、ああ病院には、ランドウと関わっている可能性がある」

李衣菜 「っ…！」

男 「いや、ああ病院はランドウと関わりを持っている」

李衣菜 「ど、どう言うこと…?!」

男 「…この写真を見てくれ。これは、私がああ病院に忍び込んで撮影したものだ」

李衣菜 「これ…?!」

男 「病院の地下…。霊安室よりもずっと深く、通常のエレベーターではいけない階層に存在した研究スペース…。それはそこで収めたものだ。写真にもある通り、ランドウへの報告書も確認できた。それと…」

李衣菜 「…っっ」

男 「グロテスクなモノは苦手だったかな？」

李衣菜 「っ…そ、そんな事は…」

男 「嫌なら無理をする必要はない」 スツ…

李衣菜「……」

男 「ランドウは病院という体面のいい施設を使い、遺体を使って人体実験をしている。これはその証拠なのさ」

李衣菜 「そんな事…、そんな事って…!」

男 「信じる信じないは任せるさ。けど、病院の件は上に報告した。結果、病院の強硬制圧がされることになる。ランドウが関わっている以上、抵抗もあるだろう。病院は、この街から無くなるかもしれない」

李衣菜 「……どうして、その話を私に…?」

男 「君も、この国を守るゲッターのパイロットだからね。相手の遣り口は知っておいた方がいいだろう?」

李衣菜 「……」

男 「連中には大人も子供も関係ない。人間を都合のいい道具と勘違いしている。今まで多くの非人道的なやり方をする連中を見てきたが、その中でもこれは一線を画している」

男 「…言いにくいことだが、君の友達も、ランドウに利用されるだろう」

李衣菜 「…分かってる。こんなの…許しておけないよ」

男 「今この国に、実力行使でランドウを打倒できるのは君達しかいない。自分より

も子供にこんな事を言うのは間違っていると思うが……」

李衣菜「ううん。おじさんの気持ちは伝わったよ」

男「……本当にすまない」

李衣菜「いいよ。……ランドウは必ず倒す……それは、誰かに言われなくたってもう決めたことだから」

――。

―― 深夜、新早乙女研究所。寝室。

李衣菜「……」 Zzzz……

ウウウウン…… ウウウウン……ツ

李衣菜「……!?!?……な、何……っ!?!」 ガバツ

奈緒「何って、警報が鳴ったら出撃だろ!」

李衣菜「しゅ、出撃い……?!?こんな夜遅くに?」

奈緒「相手がそんなの考えてくれるわけないだろ!……ほら、加蓮も早く起きろ!」

加蓮「う……ん……。ぐっすり寝てたトコなのに……!」

奈緒「のんびりしてる時間なんてないぞ!布団から体起こして、目を開けて!」

加蓮「……夜更かしは肌の天敵だし、爪のノリも悪くなっちゃう……」

奈緒「文句と怒りはランドウにぶつける。早く帰ってこれれば、早く寝られるから」



加蓮 「…分かった」

李衣菜 「奈緒は加蓮の着替え手伝ってあげて！私は先に行ってるから！」

奈緒 「お、おう！」

ダツ

—— ネオイーグル号コックピット。

橘 『李衣菜くん、体の調子は大丈夫かね？』

李衣菜 「橘博士！ちよつと眠いけど大丈夫です！戦つてれば覚めますから！」

橘 『そうか…。敵の出現ポイントだが、市街地の真ん中だそうだ』

李衣菜 「どうしてそんなところに…!？」

橘 『分かんらん。時間も遅かったからか、人的被害も少ないそうだ。が、これ以上被害を増やしていいと言うものでもない』

橘 『出撃準備が整い次第、出撃を急いでくれ』

李衣菜 「了解！」

李衣菜 (…敵の出現位置…。おじさんが病院に強硬制圧するって言つてたけど、何か関係があるんじゃない?)

奈緒 「待たせたな、李衣菜！」

加蓮 「2号機、3号機、両方スタンバイOKだよ」

李衣菜「加蓮、目は覚めた？」

加蓮「何とかね。早く迎撃して、ランドウには早いトコお帰り願おうよ」

奈緒「賛成だ。夜襲だなんてされたら溜まったもんじゃないしな」

李衣菜「そうだね。夜更かしはアイドルの敵だしね」

李衣菜（病院の事、2人には言ってなかったけど、言った方がいいのかな…？）

奈緒「何してんだ？とつとと出撃するぞ！」

李衣菜「分かってる！」

李衣菜（…うん。出撃前に変に動揺させたりしちやったら嫌だし…、帰って、夜が明けたら落ち着いて話そう！）

李衣菜「——ネオゲッターチーム、発進！」

くくく 市街地 くくく

奈緒「ひやく…！何だよ、これ…。街が煙と炎で、まるで地獄みたいだな…」

李衣菜「…人に被害は出てないって言っても、街中に出られたら…」

奈緒「折角復興するのに…。メタルビーストは何処だ？」

李衣菜「……。いた！あそこ！」

加蓮「…ッ！あの場所って…。私立病院のある場所…!？」

李衣菜（……！やっぱり…）

奈緒「あれじゃあ、入院してた患者だつて…」

加蓮「…っ」

李衣菜「これ以上被害を増やすわけにはいかない。合体するよ!」

李衣菜「ゲッターチェンジ!」

タコのように、無数の触手を生やしたメタルビーストと対峙する。

李衣菜「行くよ——! ショルダーミサイルツ!」

ショルダーミサイルを命中させて動きを抑え、

李衣菜「やああああツ!!」

ネオゲッターを走らせ、前部と思われる部分から、二股に生える巨大なトカゲの頭を躲し、メタルビーストに飛び付く。

李衣菜「この距離まで近づけば、例えば触手持っても、頭の顎がおつきくても…! ……えっ!?!」

加蓮「あれって、コックピット?」

奈緒「人が乗ってるのか!?!」

加蓮「ガラス越しに見えてるのって、嘘…!」

「その声は、やはり北条くん達かい?」

加蓮「院長先生! どうして…!」

院長「ふふふっ…。後少しのところまで来ていたんだが…。肝心なところで、この国の覚悟を侮っていたよ」

加蓮「どう言うこと!?!」

院長「彼らが悪いんだ。私の崇高な研究の邪魔をするから…。報いを受けるのは当然なんだよ」

奈緒「報い…? 研究ってなんの事だ!?!」

院長「それは…ね!」

李衣菜「ぐっ…!」

メタルビーストが胴体を動かし、病院の跡地へネオゲッターを横倒す。

李衣菜「くっ…!このおっ…!」

加蓮「何…これ…!?!」

李衣菜「っ…!見ちゃダメ!」

モニターに映ったのは、メタルビーストによって破壊された手術台らしきもの。更には培養液の詰まった、内臓器や脳を露出させた人の入ったカプセル。バラバラに解剖され、手足と臓器、胴体などに分けられた人々の残骸など。

一部の人体には、機械を埋め込まれた形跡があった。

奈緒「うう…っ。何だよ、これ…!」

院長「蘇生体だよ。ランドウ様は私に与えて下さった、神にも等しい実験の成果さ」  
加蓮「ランドウ…!？」

奈緒「何が神にも等しい実験だ！ただの人体解剖じゃんか！」

院長「生体部品は有用なモノもあるが不要なモノも多いからね。だから、必要なくなつたものを機械で代用して蘇らせるのさ」

奈緒「機械で蘇らせる…、サイボーグゾンビって訳か！」

院長「その何が悪い？機械部品に交換する事で、生前以上に身体能力も強化される。死や病に恐れる事のない理想の肉体…。それが手に入る、素晴らしい事じゃないか？」

李衣菜「そんなの医者のする事じゃないよ！医者だったら、病気に向き合つて患者と一緒に病気に立ち向かうものでしょ！」

院長「そうさ。これはもう医学を越えた、人類進化の極地に至る実験なんだよ」

李衣菜「何…?」

院長「人間は脆い。病に倒れ、体に欠損が出れば、すぐに身体機能に弊害が出る。何より、死は逃れようのない運命だ」

院長「それら全ての問題を解消し、死を超越する！それこそ人類が思い描く最大にして究極の夢だろう!!」

奈緒「何が夢だよ！人間の体を玩具かプラモデルみたいに…！フランケンシュタイン

だつてもつとマシな外見してるぞ！」

院長「外見はこれから改良していくさ。死んだ人間も生き返る。もう誰も不幸になることはない。死の哀しみを受け入れる必要はないんだ」

加蓮「……っ」

少女だったもの。

加蓮「っ……」

李衣菜「もしかして、あの女の子も……！」

院長「……。彼女に身寄りはなかった。実験のモルモットにするには丁度いい」

李衣菜「ふ、ふざけないで！それで救える命を、アンタは……！」

院長「何を怒っているんだい？技術の進歩には犠牲も付き物。蘇生体の実験が成功すれば、彼女は蘇る！何も心配する必要はない！」

李衣菜「本気で言ってるの……？」

奈緒「ダメだ。最初から思考回路が狂ってんだよ！コイツは……！」

院長「尤も、研究施設を軍の特殊部隊に破壊されてしまったから、それももう叶わないけどね」

加蓮「……」

院長「北条くん、君なら分かるだろう？幼い頃から病弱で、何時も死の危機に直面し

ていたことのある君になら、いかに私の実験が素晴らしいか」

李衣菜「加蓮……」

加蓮「……。確かにね。外で私と同一年位の子達が走り回ってる時に、それが出来ない……。こんな体なら要らないって、ちっちゃい時は思ってたかも」

奈緒「おい！」

加蓮「だけどね、辛い事も、嫌な事も乗り越えるから、人は強くなれるの。それが分からないアンタに、助けられる命を助けないアンタに、医者を名乗る資格はない……！」

李衣菜「加蓮の言うとおり。人間は死があるから、今を精一杯生きようと思えるんだ！」

院長「……はあ、残念だよ。私の理想が理解できないとは」

奈緒「命を命とも思わない奴の考えなんて、分かってたまるか！」

加蓮「アンタは医者なんかじゃない。勿論、神様なんかでもない。命を弄ぶ人間のクズだよ！」

院長「ならば話は終わりだ。死ねッ！」

李衣菜「——ッ！」

振り下ろされた前肢の触手を、後転で躲し、勢いのまま立ち上がって体勢を直す。

李衣菜「加蓮、ネオゲッター3にチェンジするよ！」

加蓮「…え？」

李衣菜「加蓮の怒り、アイツに思い知らせるんだ！」

加蓮「……。分かった…！」

李衣菜「オープンゲット!!」

加蓮「ゲッターチェンジ!!」

加蓮「——ふっ！」

院長「ぐおっ!?!」

上空で合体したままメタルビーストに目掛け落下。のしかかる。

加蓮「くくく…!!そこを…どいて！」

両手でメタルビーストを抑え、病院の位置から引き離す為に引き摺り倒し、車道へ。

院長「ぐう…!!」

加蓮「はあああつ!!」

力強く握った拳に勢いをつけ、渾身のゲッターパンチを叩き込む。

院長「ぐあああああつ!?!」

奈緒「良いぞ!その調子でやっちまえ！」

院長「う…う…!!君達、本気か…!?!本気で私を殺す気か!?!」

李衣菜「何を今さら…命乞いする気!?!」



奈緒「散々命を奪ってきておいて、そんな都合のいい話があるか！」

院長「君達はそれでいいのか!? 自分達の手を血で汚すことになる! 血塗られた手でマイクを持って、ステージに立つのか?」

奈緒「それは……!」

院長「フハハハ……! それにだ、君達の都合で私を殺せば、結局は私と同じ側の人間になると言うことだぞ? 君達はそれでいいのかな? アハハハッ!」

李衣菜「コイツ……! 構う事ないよ、加蓮!」

加蓮「……!」 ガッ

ネオゲッター3の手で、コックピットブロックを鷲掴む。

院長「ヒイツ!」

加蓮「ッ!」

ズルンッ

メタルビーストからコックピットブロックを引きちぎる。

奈緒「加蓮、お前……」

加蓮「殺しはしないよ。コイツにはちゃんと、法の罰を受けてもらうから」

院長「は……ははっ」

李衣菜「それでいいの?」



院長「目標へのコントロールを失ったら、メタルビーストは暴れだすぞ！もうその暴走を止めることは出来ん！」

加蓮「厄介な事してくれるね…」

李衣菜「引きちぎったのは私達だけ…」

院長「ハハハハハハツ!! やれえ！私のメタルビースト！私の研究を受け入れない世界なぞ全て破壊してしまえええ!!」

メタルビースト『!!!!』

奈緒「ヤバイ…！アイツ、滅茶滅茶に暴れ回ってる！何とかしないと…！」

加蓮「分かっているから、ちよつと静かにしてて！舌噛んでも知らないよ！」

加蓮「——タンクモード！」

ネオゲッター3の脚部を車輪に変形させ、突進。

加蓮「このっ…！」

両の拳を叩き込み、抑え込もうとするが、

メタルビースト『!?!!!』

加蓮「きやあつ！」

即座に回転して暴れるメタルビーストに引き離される。

加蓮「ツ…フィンガーネット！」

ネットをメタルビースト上空から四方に展開し、捕縛。

加蓮「リーナ！エネルギー出力を最大に！」

李衣菜「分かった！」

加蓮「——スパークッ！」

ネットに放電。メタルビーストを包むネットで、全身を焼いていく。

メタルビースト『!!』

メタルビースト、ネットを破壊。

加蓮「ッ」

すかさず、巨大な二股の頭部の内、一つを両手で抑え、そのまま小脇にホルドし、

加蓮「…やあああ！」

根本から引きちぎる。

メタルビースト『?!?!』

奈緒「よっしやあ！いい調子だな、加蓮っ！」

李衣菜「このままドメダ！プラズマブレイクを使うよ！」

加蓮「分かっている！プラズマ…！」

院長「フフフ…。殺す…。そうか、君達はその子を殺すのか！」

奈緒「アイツ、この期に及んで何を！」

李衣菜「……まさか、アンタ……！」

院長「君達だって、メタルビーストの解析は進んでいるんだろう？なら、アレが何を  
使って制御されてるか、既に知っているはずだ」

加蓮「っ……！」

奈緒「おい……。まさか、その女の子の頭脳を、制御中枢に……！」

院長「生体部品は入手が容易でいいが、個々に適正や適合があつてね。特に大人のも  
のはなかなか……」

院長「その点、子供はいい。素晴らしい順応性と適応力で、すぐにメタルビーストの  
ボディに馴染んでくれた」

李衣菜「さつき、女の子を蘇らせるって……！ああ言つたのは嘘だったの!？」

院長「まあ、君達を動揺させるための方便、かな？」

李衣菜「外道……！」 ギリッ……

院長「ところで、私に気を取られていていいのかな？」

加蓮「!?——……きやあつ！」

真正面から、メタルビーストの頭部が殴打し、ネオゲッター3をビルへと押し倒す。

奈緒「ぐっ……！」

李衣菜「加蓮、立てる？」

加蓮「……っ……!!」

李衣菜「加蓮! しっかりして!」

院長「あはははは……! いいぞ……! 多少予定は狂ったが、ゲッターを倒せば再起の切っ掛けが掴める! やれッ! 私のメタルビーストオ!!」

メタルビースト『!!!』

院長「へっ? ——」

グシヤアアツ

暴走するメタルビーストの触手が、院長の乗ったコックピットブロックを叩き潰した。

加蓮「あ……」

奈緒「因果応報、自業自得……。その両方だな」

李衣菜「……そうだね。加蓮、後はメタルビーストを止めるだけだ」

加蓮「……」

李衣菜「私達であの子を助けてあげなきゃ」

加蓮「助けるって、どうやって?」

李衣菜「それは……」

奈緒「加蓮、李衣菜に全部言わせんな。……出来るのか? 出来ないのか、どっちだ?」

加蓮「……」

メタルビースト『——!!』

——『お姉ちゃん!』

加蓮「……ゴメン、アタシには、出来ない」

奈緒「……」

加蓮「リーナ、お願い……!」

李衣菜「……いいよ。その為の仲間だもん!」

メタルビースト『——!!』

加蓮「オーブンゲット!」

振り下ろされた頭部による一撃を、ゲッターを分離させて回避。

李衣菜「ゲッタアアアーチエエインジツ!!」

ネオゲッターが着地。メタルビーストと対峙。

李衣菜「ソオオードトマホオオオクツ!!」

両拳を突き合わせ、ソードトマホークを抜き打ち、体のやや右側に両手で構える。

李衣菜「プラスマソード……!」

バチン、と青白い稲妻が弾け、ソードトマホークの刀身がプラスマエネルギーを帯びる。

李衣菜「行くよ……！」

加蓮「……うんっ」

一歩踏み込み、メタルビーストに接近。

メタルビースト『!!』

李衣菜「——ッ！」

一刀。迫った頭部を両断。

メタルビースト『……?!?!』

李衣菜「ッ！」

二刀。メタルビーストの右側の無数の触手を一度で全て切り払う。

李衣菜「ッ！」

三刀。左側の触手を切り払い、これでメタルビーストの動きを封じた。

メタルビースト『……!!』

李衣菜「……えいッ！」

未だもがき、抵抗しようとするメタルビーストの中枢ど真ん中に、ソードトマホークの刀身を深々と突き立て、

李衣菜「うあゝ ああああああッ——!!」

咆哮と共にネオゲッターを跳躍。メタルビーストの前部から背中を周り、後部に掛



けてソードトマホークで斬り裂いた。

李衣菜「……っ！」

ソードトマホークを振り抜き、メタルビーストの後方に着地。ソードトマホークの切断面から、青白いプラズマエネルギーギアが弾けている。

奈緒「……や、やったのか……？」

李衣菜「うん……。コレで全部終わりだ」

ザザ……ザ……

奈緒「何だ……？通信が……」

李衣菜「？研究所から連絡？」

奈緒「いや、そんな感じじゃないな……。これ……」

『ザ……ザ……オ……オ……ネ……オ姉ちや……ザザア……』

李衣菜「この声……！でも、どうして……！」

奈緒「まさか、プラズマのショックで……！」

加蓮「……嘘……」

『——ザザ……ザ……バいばい——』

爆発。

メタルビーストは、消滅した。

奈緒「――…何だよ…。何だよこれ…。こんな後味悪いのって…」

加蓮「……。病院でさ、リーナ、見ちゃダメって言ってたでしょ？」

李衣菜「え？…うん」

加蓮「知ってたの？」

李衣菜「うん…。今日の夕方くらいに、聞かされたんだ」

奈緒「あの人か？」

加蓮「それまで、何でアタシ達に黙ってたの？」

李衣菜「変に動揺させたくなかった。あと、出来れば嘘だと信じたかった」

加蓮「…そっか。……」

加蓮「クツ…うう…つうつ…!!」

李衣菜「加蓮…」

奈緒「……。そつとしておこう。今は心を整理する時間が必要だろ。お互いにさ」

李衣菜「うん…」

奈緒「……」

李衣菜「……」

加蓮「うっ…グスツ…。ごめん…、ゴメンね…!」

李衣菜「……。人の想いも、生命さえ弄んで、争いを拡げるランドウ…。許せない…」

！

！

李衣菜「絶対に許さないッ！私とネオゲッターで、必ずアンタらを倒してみせる――

つづく

## 第5話 『アメリカン・ヒーロー、テキサスマック参上!!』

~~~~~ 新早乙女研究所 ~~~~~

李衣菜 「地上戦艦テキサス？」

橘 「うむ。半年前にアメリカで開発され、就航した新造戦艦だ」

晶葉 「それが、長期航海演習の過程で、日本に寄港する事になった」

橘 「テキサスは、スーパーロボット部隊の運用を想定した強襲艦でもある。当然、ラ

ンドウもその脅威性については理解しているだろう」

奈緒 「日本にいる間に、ランドウの襲撃があるかもしれないって事か？」

晶葉 「政府の方ではそう推測している」

李衣菜 「それで、私達でその戦艦の護衛任務をやれって話？」

晶葉 「そう言うことだな」

加蓮 「けど、もしランドウがテキサスを襲撃するって言うなら、もうとっくの昔にやつ

ちやつてるんじゃない？」

橘 「確かに、狙いがテキサスだけならばな」

奈緒 「それ以外にも狙いが？」

晶葉「今、世界を敵に回しているランドウにとって大切なのは、いかに世界に対して自身の力を顕示できるかだ」

橘「ランドウはテキサスの戦力とそれを護衛する日本の戦力。双方を相手にし、圧倒することで世界に力を示そうとするだろう」

加蓮「成る程。でもそれって、かえってリスク高くない?」

晶葉「逆に言えば、そのリスクに挑むだけの自信があると言うことだろう」

李衣菜「これまで以上の戦闘にはなるって事か…」

橘「日本の戦力もネオゲッターだけではない。先日配備された量産型ネオゲッターの習熟訓練も進んでいる」

李衣菜「量産型ネオゲッター? 配備されてたんだ〜!」

晶葉「ゲッタードラゴンの炉心暴走に伴ってな。今は余計な問題は起こさない方がいい」

奈緒「あんまり歓迎できる状況って訳でもなさそうだな」

橘「ランドウと言う敵が現れた状況では、こちらも戦力を整えなくてはならん」

橘「君達ネオゲッターチームには、量産型ネオゲッターの部隊と共に、寄港したテキサスの護衛に当たってもらうことになる」

晶葉「テキサス寄港は、船員の半舷休暇や補給を踏まえ、一週間は停泊する予定だそ

うだ」

李衣菜「ち、ちよつと待って！その間、ずつと詰めてなきやいけないの？」

橘「いや、君達は学校などの関係もあるだろう。平日中の護衛は、量産型ネオゲッターの部隊であたる事になっている」

加蓮「そつか。それじゃあ安心だね。予定の期間だつて仕事は一杯入つてるし。今更、キャンセルなんてできないしね」

晶葉「取り敢えずはテキサス来日の際の歓迎式と、滞在最終日とその前日の計三日。ネオゲッターチームには現地で待機してもらふことになる」

加蓮「了解了解くつと。ま、艦一つ守るのくらいは、本職の人達にやつてもらわなきやね」

晶葉「艦一つとは言うが、テキサスは1000メートルを越える巨大戦艦だぞ」

奈緒「い、1000メートル!？」

橘「うむ。最大全長1500メートル、最大全幅283メートル、総重量10000トン。5000名以上の船員を擁する超弩級戦艦」

奈緒「ひやく！よくそんなで地上まで航行できるよな…」

晶葉「40メートル級のスーパーロボットの運用も想定されているからな。相応にサイズも大きくなる」

橘 「構想自体は、米ソ冷戦時代からあったらしいがな。冷戦の終結と共に、計画は凍結されていたが、恐竜帝国や百鬼帝国との戦いを経て、軍備強化のために再始動した」

晶葉 「そう言った事情から、戦闘艦としての側面が強いが、それでも20機のロボットを搭載して運用できる」

李衣菜 「20機……。ゲッター軍団合わせても5機位なのに、規模の大きい話……」

加蓮 「でもまだロボットは搭載されてないんだよね？」

橘 「アメリカのロボット戦力の配備は遅れているからな。しかし、同時期に開発されたマシンが1機、護衛用として配備されている」

奈緒 「1機……。それじゃあ、ランドウの戦力からそんな巨大戦艦を守るのは厳しいなあ」

晶葉 「確か、橘博士と懇意にしている博士が開発したんですよね？」

橘 「うむ。開発者のキング博士とは学生時代からの付き合いだね。私がネオゲッターのプロトタイプを造る時も、彼の意見を参考にしたり、彼がロボット製作を始めた時は私の方からノウハウを伝えた。持ちつ持たれつという奴だな」

李衣菜 「へえ。どんなロボットなんですか？」

橘 「彼が幼少期から尊敬している、カウボーイをモチーフにしたロボットだということば聞き及んでいる」

奈緒「カウボーイ…。そりやあまた趣味的な見た目してそうだな…」

晶葉「まあ、ここで資料を読んで知るのもいいが、どんなものは来日した時のお楽しみにおけばいいんじゃないか？」

李衣菜「そうだね。アメリカ製のロボットかあ…。どんな感じなんだろう？」

—。

〃〃〃 数日後、横須賀基地 〃〃〃

— ネオゲッター1内。

李衣菜「んんんんん！つと。本日晴天、波も穏やか！テキサスの航海も好調だよね、きつと！」

奈緒「相変わらず緊張感がないな。これから自衛隊の偉い人とかも来るんだろ？もう少しシヤキツとしろ」

李衣菜「でも、私達は式中もゲッターの中で待機だし。変に畏まってても仕方ない？」

奈緒「それでうっかりペダルでも踏み込んでみる。恥かくのはあたし達なんだからな」

李衣菜「あはは…。流石にそうならないようには気を付けるって…」

加蓮「2人共ちよつと静かにしてよく。こつち集中できない」

奈緒「加蓮は爪の手入れしてんじやないよ…。リラックスしすぎだろ」

加蓮「だって今日は朝早くてそんな時間なかったし、これから誰かと握手の機会とかあったらやだし。身だしなみはちゃんとしとかないと」

李衣菜「そうだよね。向こうのロボットのパイロットとは顔合わせするわけだし、私もちよつと気にした方が良かったかな？」

奈緒「お前らなあ…」

加蓮「まあリーナには昨日してあげただけど」

奈緒「はあ？」

李衣菜「えへへ…。よくギターの練習で爪ボロボロになっちゃうから、たまにお願いしてるんだよね」

加蓮「奈緒も手入れはちゃんとした方がいいよ？アタシには全然やらせてくれないんだもん」

奈緒「だってそりゃ、くすぐったいし…。それに、絶対なんかするだろ！」

加蓮「ネイルの手入れぐらいで何にもしないって。やるとしても、奈緒にしかやんないよ」

奈緒「もう何かする前提じゃないか！」

伊賀利「はははっ、相変わらずお元気ですね」

李衣菜「伊賀利さん！量産型ネオゲッターには慣れました？」

伊賀利「ええ。僕の量産型ネオゲッター1は、以前の量産型ドラゴンと大して代わりませんよ」

奈緒「量産型ネオゲッターって、2と3も量産されてるんじゃないかなかったのか？」

伊賀利「そうなんです、2と3は1と操縦特性が異なるため、習熟期間の短縮も含め、今回の量産は見送られたんです」

加蓮「ランドウが襲ってきてる現状、仕方ないけど…」

李衣菜「大丈夫なの？確か量産型ネオゲッターは、3機の連携で運用されるんですよ？」

伊賀利「その辺りは我々が元より培ってきた連携で何とかしますよ」

奈緒「味方にゲッターがいるのは心強いけど、1号ばつか量産されるのは何かズルいよな〜」

加蓮「まあ戦術とか何とか？統一するには、他の2形態が省かれるのは分かるけどね」
李衣菜「でも、量産型ネオゲッターの配備が進んでいったら、その内2と3も配備されるんじゃないの？」

伊賀利「どうでしょう…。今回の配備も、量産型ドラゴンの封印による限定的なものですし、ドラゴンの使用許可が再び下りれば、量産そのものがされないのでは…」

奈緒「ま、しょうがないよなあ」

李衣菜「そう言えば、伊賀利さん。かな子からの差し入れ、食べてくれました?」

伊賀利「え?は、はいっ!」

李衣菜「そっか」

加蓮「かな子、前の日から気合い入れて頑張って作ってたもんね」

伊賀利「かな子さんが頑張って:!?そうですか:っ」

李衣菜「私と莉嘉も手伝ったんだよ!」

伊賀利「ええ?あ、はい:。そうですよね」

奈緒「? どうしたんだ?」

隊員「どうしたもこうしたもありませんよ!隊長、差し入れを俺達にはちよつとしたか分けないで、ほとんど自分で食っちまったんだから!」

伊賀利「こ、こらっ!そんな事今言わなくても:!!」

李衣菜「へえ。でも珍しいね。伊賀利さんが独り占めしようとするなんて:」

加蓮（ふうん:。成る程）

伊賀利「だから、それは:。と、ともかく!かな子さんには非常に美味しかったと伝えてください!」

李衣菜「え?あ、うん。伝えておくよ」

晶葉『——3人共、それに、量産型ネオゲッター部隊の人達も。ちよつといいか?』
李衣菜「晶葉! どうかした?」

晶葉『今さつきテキサスから連絡が入った。太平洋上で、メカザウルスと百鬼メカの部隊に襲われてるらしい』

李衣菜「!」

伊賀利「な、何だって!?」

奈緒「テキサスマックは何してんだよ!」

晶葉『それが、先方からの連絡によるとだいぶ前に哨戒に出て、今帰ってきている最中だそうだ』

加蓮「一応、戦力が抜けてる時間を狙ってきたって訳」

李衣菜「ランドウが出てくるとは思ってたけど、まさか初日から出てくるなんて……!」

晶葉『そもそも敵勢も多い。ネオゲッターは先行して、テキサスの救援に向かってくれ』

李衣菜「了解!」

伊賀利「我々もお供に!」

李衣菜「伊賀利さん!」

加蓮「ううん。伊賀利さんの量産型ネオゲッターだと、水中戦ならともかく、空中

戦じゃ不利だからこっちで待つてて」

晶葉『こちらの戦力を分断する狙いもあるかも分かんしな。用心に越したことはない』

伊賀利「：了解しました」

李衣菜「それに、百鬼メカやメカザウルス相手なら私達だけでも余裕だつて！」

奈緒「李衣菜！空中戦がメインならあたしの出番だ。分離して代われ！」

李衣菜「うんっ。任せたよ、奈緒！——オープンゲット！」

グンッ

李衣菜「よし、久々にドンピシャのタイミング！」

奈緒「——ゲッターチェンジ!!」

合体後、急加速。海面を駆ける。

晶葉『日本に辿り着く前に沈まれたら敵わん。なるべく急いでくれよ』

奈緒「分かっているって！最初っから全開で飛ばしていくからなく！」

——。

—— 洋上。戦艦テキサス艦橋。

艦橋に衝撃が走る。

オペレーター「右舷部に被弾！」

副長「慌てるな！被弾箇所の隔壁を閉鎖し、被害を最小限に食い止めるんだ！」
オペレーター「了解！」

副長「テキサスマックはまだ戻らんのか!？」

オペレーター2「ど、どうやら向こうにも敵が現れたようで、交戦中の模様！」

副長「…二段構えとは、小癩な真似を」

艦長「まあそういきり立つでない。副官の君が逸ったところで、どうにもならんだらう？」

副長「しかし…！」

艦長「何、これしきの事で、このテキサスは沈まんよ。何せ、アメリカが威信を懸けて建造した弩級戦艦だからな」

副長「……」

艦長「両舷微速。いかなる攻撃を受けようとも、決して速度だけは緩めるでないぞ」
オペレーター「し、しかしそれでは…！敵の包囲網からは逃れられません！」

艦長「それで良い。敵の攻撃に怯まず、前進を続ける我が艦は、敵にとつても精神的威圧になる」

副長「敵側の戦力は、ほぼ全てが無人機だと判明していますが？」

艦長「構わん。無人機からの映像で、ランドウも見ているはずだ。このテキサスの勇

壮をな」

副長 「いくらテキサスが頑丈でも、艦橋を狙われれば一溜まりもありません」

艦長 「ふふふつ…。それこそ要らぬ心配だよ」

オペレーター 「敵機、正面から接近！」

副長 「!? 対空迎撃、急げ！」

オペレーター 「ダメです！間に合いませんッ！」

「ドリルアアアー…ムッ!!」

メカザウルス・バド 『?!?!』

艦橋の目の前で、メカザウルスが爆ぜる。

オペレーター 「!?」

副長 「え、援軍…?!アレは…!」

艦長 「日本領海に入った時点で、我々の勝利は確定している」

オペレーター・副長 「ゲッターロボ！」

奈緒 「へっへっくん！間一髪つてとこだったな！」

加蓮 「まあ、大した数持つて来ちゃって」

李衣菜 「これだけの敵の攻撃を受けて、ピンピンしてるテキサスにもビックリだけど」

加蓮 「弩級戦艦は伊達じゃないって事ね。本格的に沈まれちゃう前に敵をやっつけ

ちやお」

奈緒「おう、まあ任せとけて！——ダブルアームガン！」 ジャキツ

両腕の手を引っ込め、銃身を展開。

奈緒「オラオラオラアアア——！！」

プラズマ弾を乱射し、目についた敵機を撃ち落とす。

艦長『——ゲッターのパイロット。こちらは戦艦テキサスの艦長だ』

李衣菜「艦長さん？ご丁寧にも！ネオゲッターロボが救援に駆けつけましたよ——」

艦長『子供の声……やはり噂は本当だったか……』

加蓮「噂って何の事？」

艦長『いや、こちらの話だ。先ずは救援、感謝する』

李衣菜「いえいえ、どうもどうも」

艦長『間もなくこちらの戦力も合流する。それまでの間だけでも持ち応えてくれ』
李衣菜「分かりました！持ち応えるだけじゃなく、これぐらいの戦力なら全滅させて

やりますよ！」

加蓮「こそ。子供って馬鹿にされるのもアレだしね。奈緒、折角だからアタシ達の実力をアメリカさんに見せてあげよ」

奈緒「おう！元より加減するつもりなんかないッ！」

奈緒「プラズマブレードッ！」

右手首から取り出したプラズマブレードを逆手に構える。

奈緒「おりやああ！」

加速の勢いそのまま突撃し、すれ違い様にメカザウルス・バドとメカ飛竜鬼の主翼を切断し、両機を海面へと墜とす。

奈緒「コイツで……！」

正面に立った、メカザウルス・シグにやや上空から迫り、

奈緒「どうだッ！」

急降下と共に、プラズマブレードの切っ先をシグの頭部に深々と刃を突き立てる。

奈緒「——やあ！」

プラズマブレードを持った腕を振り抜いてシグの頭部を破壊し、勢いを使ってネオゲッター2を反転させ、背後に忍び寄ったメカ半月鬼を下段から縦に一刀両断。

ネオゲッター2の前後で激しい爆炎が広がる。

奈緒「へへっ！どんなもんだって！」

加蓮「3時と6時、2つの方向から次が来るよ！」

李衣菜「向こうはテキサスよりもこっちが厄介だって察してくれたみたいだね」

奈緒「それなら都合いいよ！再生怪人が相手なら、負ける気がしない！どんどん掛かって来いッ！」

ギユンッ

ネオゲッター2が敵陣に飛び込んでいく。

副長「大したものですな」

艦長「ああ。戦い慣れしている」

副長「この国は、二度の帝国との戦いで決戦の舞台になっていきますからね」

艦長「うむ。アレだけの敵に臆する事なく一步も退かず……。あれだけ果敢な者など、我が方の兵の中にもそうはおるまい」

副長「しかし、それが年端もいかぬ少女とは。些か違和感を禁じ得ませんな」

艦長「彼女らには彼女らの事情があるのだろう。何にせよ、我々の護衛を任せられる程度の実力は持っているようだな」

オペレーター「艦長！テキサスマックと通信繋がりました！向こうに現れた敵勢を掃討し、現在こちらへ向かっているそうです！」

艦長「よおしッ！対空砲火、手は緩めるなよ！日米の安保条約が誰の為にあるのか、我々がこれまで誰を守ってきたのか、それを思い知らせてやれ！」

――

奈緒「よっとオ！」

逆手のプラズマブレードの横一閃で相手を真つ二つに斬り断ち、最後の百鬼メカを海に沈める。

奈緒「よくし、と。コレで全部か？」

加蓮「目についたのは取り敢えず落としたって感じだね」

奈緒「水中に敵は？」

李衣菜「海面に水柱は上がらなかつたし、今回は航空戦力だけだったんじゃない？」

加蓮「水中に敵がいたなら、何か動きがあつたわけだし、警戒する必要はないんじゃない？」

奈緒「ホントかあ？それはそれで妙な話な気がするな…」

李衣菜「だね。空と海の両方から攻めれば確実な訳だし…」

加蓮「小手調べか何かだったんでしょ？敵の戦力もそんな感じだったし」

奈緒「そうだな。メタルビーストも出てこなかつたしな」

李衣菜「メタルビーストと言えば、まだ倒してないの、奈緒だけだったね」

奈緒「はあ？何の話だよ」

加蓮「そう言えばそうだね。アタシもリーナも、一度はメタルビーストと戦って、撃破もしてるけど、奈緒はまだだったよね」

奈緒「べ、別にいいだろ！倒したとか倒せてないとか、そういう言い方は不謹慎だぞ！」

加蓮「そうは言っても、ねえ？」

李衣菜「ねえ」

奈緒「ああもう！クラスの女子みたいに通信越しにヒソヒソすんのやめろ！」

李衣菜「女子みたいって言うか女子だし…。でも、あーあ、奈緒には分かんないのか。メタルビーストと戦う大変さ」

加蓮「ね。どっちもの戦闘も結構ギリギリだったよね？」

李衣菜「ねー」

奈緒「ぐぬぬ…」

奈緒（別に、別に悔しい訳じゃないけど、何か未経験の子って言い方、何か腹立つなあ）

奈緒「もうっつ！メタルビーストでも何でも来やがれっつ！！」

艦長『ゲッターパイロットの諸君、談笑中のところ悪いが、大きな反応が3つ、こちらに向かってる。至急迎撃に当たってくれ』

奈緒「マジか!？」

加蓮「ほら、奈緒があんなこと言うから」

奈緒「あたしのせいだよ！」

李衣菜「2人共気を取り直して！相手が見えてきたよ……！」

メタルビースト《——》

奈緒「で、デカ……っ！」

李衣菜「ちよつとした飛行機みたいだけど、ちゃんと黙っばい顔が着いてるんだね」

加蓮「あんなのがいきなり3機……。ちよつと向こうの本気を侮ってたかも」

奈緒「おい！李衣菜と加蓮は戦闘経験あるんだろ!?何かアドバイスしてくれよ！」

李衣菜「いやあ、飛行型のメタルビーストははじめてだし……」

奈緒「何だよ経験者面しといて……！」

加蓮「はいはい。苦情は後で聞いてあげるから」

李衣菜「まずは相手がどう動くかだよね。飛行機に似てるわりには、機銃とか見当た

らないけど……」

奈緒「まさか、テキサスを爆撃しようってんじゃないだろうな……」

メタルビースト《——!!!》》パカッ

メタルビーストの底部が開く。

加蓮「……大正解？」

奈緒「嬉しくないよ！……このっ！」

ネオゲッター2を反転させて、メタルビーストとテキサスの間に割って入る。

李衣菜「スツゴい……。お腹の中爆弾でぎっしりだ……」

奈緒「感心してる場合か！あんなのまとめて喰らったら、テキサスだって一溜まりもないぞ！」

ジャキツ

プラズマブレードを収納して、両腕のアームガンを構え直す。

艦長「——機銃掃射！撃てえいッ！」

3機のメタルビーストから降り注ぐ爆弾を、ネオゲッター2のアームガンによる連射と、テキサスの対空機銃で迎え撃つ。

李衣菜「よし！爆弾だって火薬が詰まってるから、一発当たって爆発してくれれば、後ろに続いているのが連鎖して誘爆してくれてる！」

加蓮「パズルゲームみたいでちよつと面白いかも」

奈緒「呑気だなメインじゃない奴は！」

李衣菜「大丈夫！ちゃんと溢れてるのが無いかは見てるから！」

バラバラバラララッ

奈緒「加蓮、エネルギー残量はどのくらいだ？」

加蓮「んー、40%そこそこってトコ。いけそう？」

奈緒「どうだろうな…。先にあっちが音を上げてくれればいいんだけど」

李衣菜「落下地点が海に落ちる奴は無視して、テキサスに直撃するのだけに狙いを絞って！エネルギーを節約しなきゃ！」

奈緒「ああ…。無傷で済ませられなくなるけど、勘弁してくれよ…。日本に着いたら、その分修理させてやるからなッ！」

バラバラバラバラッ

副長「く…！」

艦長「何処に当たった!？」

オペレーター「ち、直撃ではありません！右舷に掠っただけです！」

副長「…ゲッターを以てしても、本艦は守りきれんか…！」

艦長「いや、あれだけの爆撃とこちらの砲撃にも挟まれた中で、よく出来ている方だ」

副長「しかし、こちらにも補給直前の状態で、弾薬に余裕がありません！このままでは…！」

艦長「ぬう…！」

バラバラバラバラッ

奈緒「…畜生…。どんだけ腹に溜め込んでるんだ？」

加蓮「奈緒、エネルギー10%切ったよ」

奈緒「このままじゃ埒が明かないな……。いつそ向こうの弾薬庫に飛び込んで……」
李衣菜「た、短気起こしちやダメだつて！向こうだつて、もうずいぶん爆弾落としてるはずだし……」

奈緒「けどき！せめて一機は数を減らした方が！」

……！

加蓮「…何？」

李衣菜「加蓮、どうかした？」

加蓮「今何か聞こえなかった？動物の鳴き声みたいなの……」

李衣菜「動物の鳴き声……？こんな海のと真ん中の、しかも空中で？」

…イイン！

李衣菜「…聞こえた」

加蓮「でしょ？」

奈緒「どうした2人共！しっかりしてくれよ！」

ヒヒイイインッ!!

李衣菜「聞こえた！間違いないよっ！今のは馬の鳴き声と……！」

加蓮「…蹄鉄の音？」

「Mac—Riot．fire!!」

メタルビースト《——!!?》

メタルビーストの頭上で爆発が起こり、先頭のメタルビーストが大きく仰け反る。

奈緒「ツ!?何だあ!」

加蓮「あっち、見て!あれって…!」

李衣菜「白馬に乗った、カウボーイ?」

奈緒「もしかして、アレがアメリカのスーパーロボット…!」

「「テキサスマック!!」」

奈緒「おいおい…。見た目が趣味的ってレベルじゃないぞ?」

加蓮「それに関してはゲッターもあんまり言えないけど…」

?「Hey! Youが Japanese. Get a Roboデスカ?」

李衣菜「はい?」

?2「兄さん! Get aじゃなくてゲッターよ!」

?「Oh, Sorry. ややこしいので、間違えてしまいマシタ! やつぱりニポン語、

難しいネ!」

奈緒「何なんだ? 胡散臭い片言で…。男の方がテキサスマックのパイロットなのか

?」

李衣菜（…胡散臭いのは、アーニャも似てるような気がする…）

? 2 「Sorry. ごめんなさい…。兄さん、日本のテレビの影響で変な日本語が癖になつてて…」

加蓮「女の人の方はまだマシなんだ」

「Oh! 自己紹介、まだでしたネ。私はメリー。テキサスマックのサポーターよ」

奈緒「テキサスマックは2人乗りなのか」

メリー「Yes. メインの操縦を担当するのは、兄のジャックなの」

李衣菜「兄弟で操縦してるんだ…。なかなかロックじゃん!」

メリー「ロック…?ですか?」

奈緒「ああ、コイツの言うことはあんまり気にしないでいいから」

李衣菜「ちよつとく! その言い方はあんまりじゃない!」

ジャック「メリー! Japaneseとのお喋りはそこまでだ! 先ずはメタルビース

トからテキサスを守る!」

メリー「Ok! 兄さん! 速攻で片を付けましょ!」

ジャック「Ye es!! ゲッターのLittle girlもミー達のSt age

の盛り上げ役Thank Youネ! 後はミーに任せて、下がって下サーイ!」

奈緒「はあ!」

加蓮「そんな事言われて、奈緒が素直に下がるわけないじゃん」

奈緒「そうそう、あたしは素直じゃないから…って、余計なお世話だ!!」

李衣菜（でもノるんだ…）

ジャック「Reddy:GooooOO!!」

パカラツ パカラツ

奈緒「ってかあの蹄鉄は何でなってるんだ？」

加蓮「さあ？ 気にしたら負けなんですよ」

ジャック「Mac-Raiot! Fire!!」

テキサスマックの左手で手綱を握り締め、右手に散弾銃を持ち、射撃。

ジャック「Bulletはスラッグ弾! Powerはその身で味わうといいネ!」

5発、6発とメタルビーストに命中させていき、次第、メタルビーストは装甲の間から火を噴き出し炎上。そのまま爆炎と化して四散する。

ジャック「オーケー! 先ずは1機!」

メリー「兄さん! 敵の攻撃が来るわよ!」

ジャック「No Problem. ——ハッ!」

テキサスマックが手綱を叩き、馬を走らせ、メタルビーストが口から吐き出す火球の連射を容易く躲していく。

ジャック「そのようなSlowlyな攻撃では、パステチャー・キングの動きを捉える

ことなど出来ませーん！生まれ変わって出直して来ナ！

ジャック「——テキサス！テキサスハンマーを使うヨ！」

オペレーター「艦長、テキサスマックからテキサスハンマーの射出要請が来ています」
艦長「うむ。パレット発射管開け。——テキサスハンマー射出！」

テキサスから射出された、長方形のコンテナから放たれたのは、鎖で繋がれたトゲ付きハンマー。

ジャック「Ok！ コイツでぶっ潰してやるぜ！」

テキサスハンマーのグリップを握り締め、カウボーイが扱う投げ縄の如く振り回し、パスチャー・キングに繋がれた手綱を強かに打ち付けて加速。メタルビーストに迫る。

メタルビースト《——！！》

真正面から突っ込むテキサスマックに、メタルビーストは大口を開け、迎え撃つため火球を溜める。

ジャック「HA—HA！ Monotoneな動きネ！——ハッ！！」

馬に跨がる姿勢から、パスチャー・キングの背をそのまま踏み台にして跳躍。

ジャック「Ya—Haaaaa!!」

天頂に輝く太陽を背に受け、テキサスマックが大空に翻る。

ジャック「Fooooo!!」

す。
上段から鎖をしならせて、テキサスハンマーをメタルビーストの頭部目掛け打ち下ろす。

メタルビースト《!?!?!?》
粉砕。

奈緒「…すげえ」

加蓮「奈緒?こつちだって、黙って見てていいって訳じゃないんだからね?」

李衣菜「1機ぐらい墜とさないで、舐められればなしはロックじゃないよ!」

奈緒「お、おう!そうだよな!」グンッ

ネオゲッター2が急上昇。最後のメタルビーストと高度を合わせる。

加蓮「残りのエネルギーは少ない。奈緒の腕の見せどころだよ!」

奈緒「ああ!見てろよ…!」

ネオゲッター2の加速力で、相手に動かれるより先に、絶対距離を詰める。

奈緒「——おりや!」

メタルビーストの口に、ネオゲッター2の腕を肘の先まで突き入れる。

奈緒「さつきは散々ご馳走してくれたな。そのお礼だ!」

メタルビースト《!?!?!?》

ドウッ ドウッ

!?!?!?

メタルビーストの体内に、アームガンのプラズマ弾を連射で送り込み、炸裂。

ジャック「ヒューツ♪ 最後の獲物を盗られちゃったヨ！」

メリー「残り少ないエネルギーで飛び込んで、なかなか出来ることじゃないわ。素直に称賛しましょ？」

ジャック「That's right. But、戦い方はNonsense. 全くSmartじゃありませんね！」

メリー「…もう」

爆炎が晴れた後、まとわりつく煙やメタルビーストの肉片を振り払うように、ネオゲッター2は腕を振り下ろした。

奈緒「へ…へへっ、見たか!? あたしだってメタルビーストを倒したぞ！」

加蓮「うん。よく出来ました」

李衣菜「何だかんだ言って、やっぱ気にしてたんだ」

奈緒「う、うるさい！でも、お前らが言うみたいなの、苦戦なんて全然しなかったぞ？」
加蓮「そりゃ、敵の狙いもこつちじゃなくて完全にテキサスマックだったわけだし…」
李衣菜「そもそもテキサスマックが来てくれなかったら、私達もテキサスもやばかったんだし、全部テキサスマックのお陰だよな」

奈緒「何だよ…。まあ、テキサスマックに助けられたのは事実だけだよ」

ガクンッ

奈緒「うおっ!?何だ？」

加蓮「…エネルギー切れ。もうネオゲッターだけじゃ自力で横須賀にも帰れないよ」

奈緒「だいぶギリギリだったって訳か…」

李衣菜「て、テキサス〜！悪いんですけど甲板貸して〜！」

副長「艦長、ゲッターが着艦許可を求めているようですが？」

艦長「うむ。助けてもらった恩はあるしな。彼女らの祖国まで、丁重に迎えてあげな

さい」

副長「了解です」

〜〜 横須賀港

—— 格納庫。

李衣菜「——これがテキサスマックかあ…」

奈緒「改めて近くで見ると、ちよつとカッコいいかもな」

李衣菜「そう？ネオゲッターの方が、クールで格好いいと思うんだけど…」

加蓮「ハットにチョッキ、腰にホルスター差して、中身はリボルバー。踵に拍車まで

着けちやつて…。開発者はとことん西部劇が好きだったみたいだね」

奈緒「だよな。名前にテキサスまで入れて、何かこう、ロマン溢れるって感じ、あた

しは悪くないと思うんだけどな〜」

「Hey・ユー達がゲッターチーム？」

李衣菜「う、っ…。もしかして…」クルツ

ジャック「Hello! Nice to meet you! ミーがテキサスマックのPilot、ジャック・キングネー!」

李衣菜「は、はい…。はじめまして…多田、李衣菜です…」

奈緒（体大きいな…。2メートル軽く越えてるんじゃないか?）

ジャック「Oh! やはり日本人、奥ゆかしいデスね? 元氣してマスクー!!」

奈緒（…声も大きい…）

メリー「ちよつと兄さん! 兄さんのハイテンションで話しかけられたら、誰だつて戸惑うでしょ!」

ジャック「Really? コレがAmerican style! もつとFrankに、思っていることを言わなくては、信頼も築けませーん!」

メリー「押し付けるのは失礼よ。その国にはその国やり方があるんだから」

ジャック「I know! “郷に入りては、郷に従え”という奴デスね!」

メリー「…ごめんなさい。オープンなだけが取り柄の兄で」

加蓮「大丈夫。こっちにも似たようなのがいるから。それで、貴女が…」

メリー「ええ。メリー・キング。テキサスマックのハットマシンのパイロットをしているの」

李衣菜「ハット…？あの帽子飛ぶの？」

メリー「飛ぶだけじゃなく、いざという時にはシールドにもなってテキサスマックを守るのよ」

奈緒「それ、メリーさんは大丈夫なのか？」

メリー「ふふっ。その時はワタシはテキサスマックの頭部ハッチに移るからノープロブレムよ」

李衣菜（なら、最初っからそっちに乗ってた方が早いんじゃないや…）

奈緒「でも、ゲットマシンなんかよりずっとちっちゃく見えるのに、あれで空も飛べるなんて驚きだな」

ジャック「H A H A！ アメリカが世界に誇る technologyの賜物デース！
SmallestなIsland countryのJapaneseには到底マネ
出来ませーんね！」

メリー「兄さん！」

李衣菜「？ アメリカのロボット開発技術は、日本より遅れてるって聞いたけど…？」
ジャック「Non non. 常に世界の最先端に行くアメリカが、こーんなSmal

l c o u n t r y に遅れをとるはずがありません！」

奈緒（わあ……。自尊心だけは高いんだな……）

加蓮「そう言う割りには、さつきはテキサス守るのに苦戦してたみたいけど？小国の日本の力を借りる位だったし」

ジャック「大した相手ではなかったネ！あの程度の襲撃なら、テキサスマック1機でも何とでもなりマシタ。テキサスもトーゼン、無事でネ！」

加蓮「それでも、テキサスの損傷が軽くて済んだのは、アタシ達のお陰、でしょ？」
ジャック「ツ……！」

メリー「もういいでしょ、兄さん。彼女達のお陰でテキサスがダメージを受ける事は事実なんだから」

ジャック「……。 yes, ok. ネオゲッターは確かに Strong. ですが、テキサスマックはそれより以上に Very, very, very strongネ！」

メリー「もう……。 負けず嫌いなんだから」

ジャック「No! 3人で動かしてはじめて一人前の Machine に、テキサスマックが負けるはずがありませんッ！」

奈緒「何だよ。あたし達に助けられといて」

李衣菜「でもまあ、3人で一人前って言うのは事実だよな」

ジャック「What!？」

李衣菜「だって、私一人じゃ、パイロットとして一人前じゃないのは、言われた通りだし。戦闘中は奈緒と加蓮に助けられることばっかだし。これまでずっと、私一人で戦ってこれた訳じゃないよ？」

李衣菜「一人で何でも出来るって言うのはスゴいと思うけど、そっちもメリーさんの力借りてるじゃん？ やっぱり、仲間を信頼して、力を貸してもらって言うのは嬉しいし、お互いに支え合ってる…かどうかは分かんないけど…、力を合わせれば乗り越えられることだってあるはずだよ。きつと！」

ジャック「……」

メリー「彼女の言うとおりよ。兄さん」

奈緒「まったくお前は、よくそんな事素面で言えるよな」

李衣菜「ええ？別に変なこと言ってるつもりじゃないんだけど？私は感謝してるよ。いつも私の無茶に付き合ってくれるし…」

奈緒「それは李衣菜がこっちの話を聞かないからだ」

李衣菜「あれ？もしかして私、怒られてる？」

奈緒「当たり前だろ！そんな事で感謝するくらいなら、ちよつとはこっちの話も聞くようにしろってんだ！」

李衣菜「はい…。これからは気を付けるよ」ハハ…

奈緒「ホントだぞ?! これから勝手に突っ込むのはなしだからな!」

加蓮「はいはい。奈緒もそこまで熱くならないで。リーナも反省してるみたいだし、ね?」

奈緒「……。まあ、初対面の人の前でこれ以上醜態晒すのも、悪いしな」

加蓮「もう十分すぎるくらい見せたと思うけど…」

メリー「ふふつ、貴女達はワタシ達とは雰囲気が違うけど、姉妹みたいに仲がいいのね?」

李衣菜「はいっ! そりやもうチームですから!」

奈緒「どうでもいいけど、李衣菜と姉妹っただけは勘弁してくれ」

加蓮「なら、アタシとなら大歓迎?」

奈緒「大歓迎って、…ああ! ここぞとばかりに絡んでくるな!」

加蓮「ええ? いいじゃん。さつきまでリーナとイチャついてたんだし、今度はアタシにもかまってよ。ね、お姉ちゃん?」

奈緒「だあー! あたしは加蓮の姉じゃなっ!」

ジャック「……」

ジャック「Getter team…、ユー達は間違つてマス…!」

第6話 『誇りを賭けた戦い』

第6話 『誇りを賭けた戦い』

~~~~ 廃墟周辺 ~~~~

インベーター《キシヤアアアアアツ!!》

加蓮「リーナ!」

李衣菜「うんッ!」

ネオゲッター目掛け飛び込んできたインベーターを、跳躍で回避。

奈緒「残りはコレで最後だ。さっさと決めちまえ!」

李衣菜「そうする!——プラズマサンダー!」

「Fire!!」

李衣菜「ッ!?!」

インベーター《?!?!?!?》

突如入った横槍で、インベーターが弾ける。

ジャック「ハッハッ! Invaderなんざ怖かねえ! ぎあつとこんなもんだ

ゼツ!」

奈緒「またアイツか！」

ジャック「H H H A！ゲッターチーム、ユー達の動きはインベーターよりS I O W I Y！それじゃあ話にならないネー！」

奈緒「な、何を〜！」

メリー「兄さん！戦う相手が違うわよ！」

加蓮「奈〜緒〜？そうカッコしくない」

奈緒「けどさ……」

李衣菜「結果はどうあれ、戦闘は終わったんだし、早く帰ろうよ！」

加蓮「だね〜。こっちはこれから仕事だし。収録、遅れないようにしなきゃ」

ジャック「……ッ」

メリー「兄さん、これ以上はもういいでしょ」

ジャック「……O k . 帰還しよう」

――。

~~~~ 新早乙女研究所 格納庫 ~~~~

主任「おかえり、お疲れさん！リーナ！」

李衣菜「大将も〜！ネオゲッターの整備、ヨロシク〜！」

主任「おう！リーナもライブが近えんだろ！ここの連中も楽しみにしてツからよ。イ

ンバーダーだろうがランドウだろうが、んなモンに負けねえで頑張れよ！」

李衣菜「ありがとっ！言われなくても、頑張るから！」　タツ

奈緒「……」

加蓮「奈緒く？不機嫌つてのが顔に出てるよ？いつもの可愛い顔が台無し」

奈緒「う、うるさいよ……！余計なお世話！」

加蓮「そんなにテキサスマックに手柄を持つていかれたのが気に入らないの？」

奈緒「だつてさ、今日の出撃だけで4度目だぞ？いつも最後のトドメの時に横槍入
れてきて……。絶対わざとやってるよ」

加蓮「誰がトドメ刺しても、別に関係ないじゃん」

奈緒「そりゃそうだけど……何て言うか、分かりやすく挑発されてる気がするんだよ
なあ……」

李衣菜「わざとでもインバーダーを倒してくれるならありがたいくない？」

奈緒「んく……」

加蓮「確か、戦艦テキサスの修理に時間がかかるから、テキサスマックも日本を動け
ないんだっけ？」

李衣菜「だつて。で、テキサスが修理受けてる間、この国の防衛もやってくれるって」

奈緒「一宿一晩くとか言つてな、それはありがたいんだけどさ。何で早乙女研究所に

いるんだよ?」

加蓮「さあ?向こうにいるよりは、敵襲の情報とかも得られやすい、とかじゃない?」

奈緒「博士達は許可したらしいけど、あんな好き放題させてホントにいいのかよ…」

李衣菜「少なくとも、テキサスが日本にいる間だけだよ。好きにさせたら?」

加蓮「前の戦闘の時、テキサスを上手く守れなかった奈緒の責任でもあるし、我慢するしかないんじゃない?」

奈緒「あ、あの時は敵の攻撃も激しかったし、仕方ないだろ!」

ジャック「H H H A!言い訳は見苦しいぜ!ゲッターチームツ!!」

奈緒「な、何だつて…!」

メリー「もう、兄さん!」

ジャック「ネオゲッターロボ、No big deal!その程度では、この国に住んでいるアメリカ人を任せてはおけませんヨツ!」

加蓮「あく、テキサスマックが日本を守ってくれてる理由って、そう言う事」

ジャック「Japanも可愛そうネ。アイドルに現を抜かしているようなGirlが守り手なんて」

李衣菜「うつつつて…、難しい言葉知ってるなあ…」

奈緒「突つ込むところそこじゃないだろ!何だよ、あたし達はアイドルが本業なんだ

ぞ

加蓮「いや、本業は勉強する事だから、学生じゃない？」

奈緒「そこはこの際どっちでもいいだろ！あたしらがアイドルやってんの、そんなに悪い事かよ？」

ジャック「大有りだ！戦いを遊び半分ですぐに捉えられちゃ叶いません」

メリー「兄さん。この子達は、アイドルをこなしてても、ちゃんと日本を守っているのよ？スゴいことじゃない」

ジャック「No！ 戦いというものをFrivolousに捉えられては困りマース！」

李衣菜「ふえぼ…って、どういう意味？」

奈緒「軽薄とか、軽いつて意味だな」

ジャック「ユー達の一は所詮、Japanese”ごっこ遊び”！遊びで戦場を引つ掻き回してほしくないネ！」

李衣菜「遊びって…。私達だつて命懸けでやってるつもりだけど？」

ジャック「兼業できるPilotなんて戦士じゃねエ！そんなんで世界をランドウから救えると、本気で思っているの力！」

加蓮「あー、戦士としてのプライドとか誇りが何チャラつて、くだらない奴ねー」

ジャック「Wow…!?くだらない…だとツ!」

奈緒「おい、加蓮!」

加蓮「いーじゃん。言われっぱなしってのは、何か癪だし」

加蓮「言つとくけど、アタシらはゲッターのパイロットやってるけど、戦士とか守護者としてやってるんじゃないから」

ジャック「What's?」

加蓮「ゲッターに乗ってるのは、アタシがゲッターに乗れるからで、戦ってるのもアタシの為。アタシがアイドル活動するのを、これ以上誰かに邪魔されたくないから」

メリー「それが、ユーの戦う理由なのカ?」

加蓮「そうだよ。自分の道は自分で切り拓く。アタシは、真つ当にアイドルやるために、今戦ってるの」

李衣菜「加蓮…。加蓮って、意外とロツクだよね!」

加蓮「ロツクかどうかは分かんないけど?誰かになんかあったからって、何かあって責任とれる年じゃない?なら、理由は自分の為にしといた方が、気楽かなーって」

李衣菜「あら…?」

ジャック「God damn! なら、この国はどうなってもいいっての力!」

加蓮「な訳ないじゃん。ファンの人達が居てくれなかったら、アイドルなんて何の意

味もないんだよ？」

ジャック「Huh？」

メリー「確かに、その通りかもしれないわね」

奈緒「少なくとも、ファンの為には戦えるってことか」

加蓮「そ。アイドルやってなかったら、アタシはゲッターになんて乗ろうとすら思わなかったしね？」

ジャック「……Oh……」

加蓮「言い返せないって感じ？ま、アタシはアタシで好きにやらせてもらってるだけだし。こっちライバル視すんのも、そっちの勝手だけど、カリカリしてばっかだと血圧上がるよー？」 スタスタ

奈緒「あーおい加蓮！待ってって！」 タツ

李衣菜「ああく2人共待ってって！」

ジャック「…Shit！ 戦いをなんだと思ってるやがるツ！」

李衣菜「ごめんなさい！ちよつと勝手に言い過ぎました、よね…」 ペコリ

メリー「良いのよ。気にしないで？はじめに突っ掛かったのは、こっちだから。ほら、兄さんも」

ジャック「……」 フンッ

メリー「もう…。気を悪くしないでね？兄さん、頑固で…」

李衣菜「それだけ自分のしてる事に自信と誇りがあるって事ですよ？いいじゃないですか！」

メリー「そうかしら？ただ強情に意地張ってるだけ。子供みたいなものよ？」

李衣菜「けど、みんなの爲って戦えて…。ちゃんと自分を貫いてる。ジャックさんって、ロックだと思います！」

ジャック「Rock？」

メリー「フフツ。アナタなりの誉め言葉、なのよね？Thank You」

李衣菜「え、いやあ…。サンキューなんて、お礼言われる事なんて言ってませんよ」

ジャック「ユーも戦いに専念するつもりはないのか？」

李衣菜「はい。ジャックさんの言ってることも、分かってるつもりです。けど、アイドルって仕事もきつと、今っていう状況に必要だと思っんです」

メリー「それは、どうして？」

李衣菜「だって、どんな時でも笑っていたいじゃないですか！」 ニツ

ジャック「……」

加蓮「リーナ？早く晶葉達に報告行くよー？」

李衣菜「うんっ！今行くー！…それじゃあジャックさん、メリーさん、私はこれで失

礼します！」

タツタツ——

ジャック「……」

メリー「いい子達じゃない。戦いの中に身を置いて、あんな真っ直ぐな目をしてられる人、珍しいわよ？」

ジャック「甘つたれた連中だぜ。あの連中に、百鬼帝国も恐竜帝国も倒されたなんて、とても思えん」

メリー「でも、事実でしょう？あの子達はあの子達なりの死線を潜って、それでもアイドルって仕事に専念しようと足掻いてる。大切な事だと思うわよ？」

ジャック「戦士としてのPrideが全く足りませーん！」

メリー「はあ…、素直じゃないんだから」

ジャック「Notting:戦士でない者と、Shoulderは並べられないからナ！」

メリー「兄さんはそうかもしれない。だけど、あの子達は少なくとも、こつちに肩を並べようとしてるわ。…戦士じゃなくても、同じ戦う者として、ね」

メリー「足並みぐらい、合わせてあげたら？」

ジャック「……」

—— 管制室。

晶葉「——どうだ？繋がつたか？」

所員「いえ、全く。こちらからの応答には返答なしです」

晶葉「そうか……。場所が宇宙では、そう易々とこちらも調査に動けないしな……」

奈緒「ちよつと、加蓮待ってっ！」

加蓮「もう、アタシは別に何とも思っていないって言ってるでしょー？」

奈緒「だけどなく……」

晶葉「奈緒、加蓮。インベーターの迎撃お疲れ様。……どうした？」

奈緒「どうしたもこうしたも、加蓮がテキサスマックのパイロットと口論しちゃって

さ……」

加蓮「奈緒が必要以上に神経質すぎるだけだよ」

奈緒「だからってな、向こうにだって仕事に誇りくらいあるだろ？」

加蓮「先にアイドルをバカにしたのは向こうじゃん」

奈緒「そうだけどさ。あたしだって、遊び半分何て言われて、いい気はしなかったよ。

だけど、売り言葉に買い言葉じゃよくないだろ？それじゃあ溝が埋まるどころか、どん

どん深くなつてつちやうだけじゃんか」

加蓮「……」

晶葉「まあ落ち着け。国籍から異なる相手と、いきなり連携をとらされる事になったんだ。戸惑う気持ちは分かる。お互いに戦う姿勢から違うんだ。一度や二度、衝突する事くらいあるだろう」

奈緒「でもさ、身内で争ってる場合でもないだろう？」

晶葉「だからと言って、触れず当たらず、表面の傷付かない部分だけをなぞっていたところで、お互いの関係が平行線を辿るだけだ。良くなる事も、悪くなる事もない」

晶葉「なら、良くなるにしろ悪くなるにしろ、先ずは一步踏み込んでみて、相手はどういう人間なのか知ろうとしなければな」

奈緒「理屈は分かるけど、向こうも露骨に敵視してくるのがなあ…」

タツタツタツ

李衣菜「奈々緒く、加蓮く！リーダー置いて先に行くのはなしだつて…」

所員「池袋所長代理」

晶葉「ん、どうした？」

所員「これを。衛星の最後の更新記録なのですが…」

李衣菜「え、何？取り込み中だった？」

晶葉「ああいや、大した事じゃない。アメリカの通信衛星の一つが、更新時刻を過ぎても更新されなくなつてな。それを今、向こうの衛星の管理元に問い合わせたところ

なんだ」

李衣菜「へえ……。もしかして、また何時かの昆虫軍団じゃ……！」

晶葉「いや、今のところ目立った動きは見られていない。ただの機械トラブルだと思
うが……」

李衣菜「そっかあ……。その虫相手は気が抜けないからヤだからなあ……」

晶葉「ははははっ。そんなんじや、ジャック達に遊び半分って言われても仕方ないな」

李衣菜「え、っ……。何で晶葉がそれを知ってるの？」

晶葉「そりや、お前のチームメイトが愚痴ってたからな」

李衣菜「そうなの？」

奈緒「……まあな」

加蓮「実際、リーナはジャック達の事どう思ってるわけ？」

李衣菜「えっ？悪い人達じゃないと思うよ？」

奈緒「それだけか？」

李衣菜「それだけって、他に何かある？」

奈緒「はあ……。いいよな、お前は気楽で」

李衣菜「え、何それ？全然褒められてる気がしないんだけど……」

加蓮「遊び半分とか言われて、何とも思わないの？」

李衣菜「まあ、私はアイドルもパイロットも、遊び半分で作ってるつもりはないよ。でも、口で言ったって信じてもらえそうにないし。だったら、行動で示せればいいかなって」

加蓮「……」

奈緒「……」

李衣菜「え、え？何？」

晶葉「ははっ、そうだな。こちらが余計に思慮を回したところで、気疲れしてしまつては仕方がないよな」

李衣菜「え、うん……」

晶葉「まあ何にせよ、いい機会である事には変わりはない。あまり邪険にするんじゃないぞ」

李衣菜「うんっ！色々教えてもらいたいことだつてあるし、同じランドウと戦う仲間同士、仲良くできたらいいなあ」

奈緒「……ホント、お前は気楽だな」

李衣菜「だからそれ、褒められてる気がしないんだけど？」

奈緒「褒めてないからな」

李衣菜「あら……？」

—。

— それから、

ジャック「……?」

李衣菜「へへっ」ニコニコ

ジャック「…な、何のようデースか?」

李衣菜「ギターの練習、付き合ってもらっていいですか?」

ジャック「Huh?」

李衣菜「いや、アイドルの友達から聞いたんですけど、アメリカってロックの本場らしいじゃないですか?なら、ちよつとは詳しいかな、つて」

ジャック「確かに、ミーもRock'n Rollは嫌いじゃないが…」

李衣菜「ならお願いします!奈緒も加蓮もそう言うのには付き合ってくれなくて…。研究所だと練習する場所も限られてて大変なんですよ」

ジャック「ミーも専門的な事はNot understand. そのユーのFriendsに教えてもらえばいいんじゃないか?」

李衣菜「いやいや、そこは問題じゃなくて、ジャックさんに聞いてもらいたいんですよ!私のサウンド!」

ジャック「What's? sound?」

李衣菜「私、ジャックさん達の事色々知りたいけど、同じくらい私達の事も知ってもらいたいから。音楽って、最高のコミュニケーションツールですよ？」

ジャック「成る程、確かにユーの言うことは間違っていないナ…」

李衣菜「ですよ！それじゃあ…」

ジャック「But, Immatureなsoundを聞くつもりはありませーん！」
ダッ

李衣菜「あつ！待って！どこ行くの〜!?」
ダッ

—— 後日。

パスチャー・キング「……ブルツ」

ジャック「H A H A！ ご機嫌だネ、パスチャー・キング！」

李衣菜「あ、いたいた！ジャック〜！」

ジャック「……」
クルツ

李衣菜「パスチャー・キングのお手入れしてたんだ？」

莉嘉「わあ〜！ホントに研究所に馬がいるんだあ〜！」

ジャック「…Who are you？」

李衣菜「ああ、ジャックは会ったことなかったっけ？私のアイドルユニットのメンバーの…」

莉嘉「城ヶ崎莉嘉だよー☆」

ジャック「リカ？ Tomboyみたいなgirldesね」

莉嘉「アタシはboyじゃないよ！」

李衣菜「いや、多分なんか意味があるんだと思うけど…」

莉嘉「そうなの？ まあいいや☆それより馬に触らせてよ」

ジャック「！ 迂闊に近付くと危ナイツ！」

莉嘉「へ？」 ナデナデ

パスチャー・キング「……」

ジャック「…Oh」

李衣菜「流石。莉嘉は動物とも打ち解けるの早いね」

莉嘉「リーナもおいでよ！ 大人しくていい子だよ！」

李衣菜「ホント？ ……よしよし…」 サワサワ

パスチャー・キング「……」

李衣菜「あはっ♪」

莉嘉「ね？ 大人しいでしょ？」

李衣菜「ホント。女の子に優しい、紳士なんだ」

ジャック「……」

李衣菜「動物は簡単に心を開いてくれるのにな」　チラチラツ

ジャック「何ダ？その視線は」

李衣菜「何でもないよ」

莉嘉「ねね、アタシこの子に乗りたい☆乗ってもいいでしょ？」

ジャック「またの機会にしてくれ。今は手綱も鞍も、ここにはないネー」

莉嘉「えー、残念ー」

ジャック「Oh・　悲しい顔はNo　thank　you！時間が合えば、何時でも

乗せてあげるサ！」

莉嘉「ホント!?なら、明日！明日ならいい？」

ジャック「随分と気の早いgirlネー！モチロン構いませんよ！」

莉嘉「やったー☆」

李衣菜「良かったね。莉嘉」

莉嘉「うんっ☆それじゃあジャック、これからアタシと一緒に遊ぼうよ！」

ジャック「What，s？」

莉嘉「パスチャー・キングに乗るのは明日まで我慢するけど、その前にジャックと仲

良くなりたんだ☆」

ジャック「アー、因みにどんなPlay ingするンダ？」

莉嘉「えつとねー、山に行つて虫取りでもいいしー、近くの川で釣りとかでもいいよ！」

ジャック「外見のわりには、Wildネ…」

李衣菜「莉嘉はアウトドア派だからね」

莉嘉「ねー？ジャックは何して遊びたいの？あ、時間の事なら気にしないでいいよ☆アタシ、パスチャーのお手入れが終わるまでここで待つてるから！」

ジャック「んー」

李衣菜「ちなみに、莉嘉、こう見えて体力もあるよ？毎日レッスンしてるし、ワンパクな盛りだし」

莉嘉「ちよつとー！それじゃあアタシがまだ子供みたいじゃん！」

李衣菜「でも、この間大将と遊んだ時、大将へ口へ口になるまで付き合わせて、美嘉に怒られてたよね？」

ジャック「……」

莉嘉「アレは…。あのくらいでへばつちやう大将が悪いの！アタシは全然疲れてないんだから！」

李衣菜「前に出掛けた時も行動的すぎて着いていけなかったって、プロデューサー愚痴ってたし。大の大人を疲れさせる体力ってどうなの？」

莉嘉「うゝ、うるさいっ！それでもアタシはお姉ちゃんみたいなカリスマアイドルになるの！もう子供でも、野生児でもないんだからね？」

李衣菜「はいはい。莉嘉も立派なカリスマギャルになれるよ」

莉嘉「うゝ！何かバカにされてるー！」

李衣菜「で、ジャックはどうするの？」

ジャック「Uh…、それも、またの機会にさせてもらおうよッ！」 ダッ

李衣菜「あ、逃げた」

莉嘉「追い掛けっこ？それでも全然負けないんだから！待てーッ！！」 ダーッ

李衣菜「……。…お前の飼い主、面白いよね」

パスチャー・キング「ブルヒヒイイイツ！！」

—— さらに後日。

莉嘉「——あ、リーナ！そっちに行つたよ！」

李衣菜「よおし、待てえゝ！」

ジャック「Oh no! tomboyの相手は勘弁してくださいッ！」

李衣菜「トム何ちゃらつて、意味はちゃんと調べてきたんだから！」

ジャック「勤勉なのはJapaneseらしいけど、今は関係ないネ！」

李衣菜「私達の相手をする気がないんなら、最終兵器を使うだけだよ……！——かな子

！」

ザッ

かな子「……」

ジャック「!?…Girl…その手にあるものは…!」

かな子「マフィン、クッキー、チーズケーキ…。アメリカでも食べられてるようなお菓子、頑張つて作つてみたんです。一口、どうですか?」

ジャック「……」 ヒョイッ

パクッ…

李衣菜「……」 ゴクリ…

莉嘉「……」 ドキドキ…

かな子「…どうですか?」

ジャック「……Mom…」

奈緒「――堕ちたな」 モグモグ

加蓮「そだね。…あ、このカップケーキ美味しい…。中のカボチャがホクホクで、お

芋みたい」 モグモグ

奈緒「芋みたいなスイーツってなんだよ…」

メリー「ン〜! Very delicious! ママの作ったのと同じくらいに美

味しいわ！」

加蓮「かな子はウチで一番のお菓子職人だしね。ある意味で、最終兵器だよ」

奈緒「ロツキングガールズ包围網……。相手は逃げられない、か……」

メリー「キユートなアイドルで、美味しいお菓子まで作れて、その上ゲッターのパイロツトまでこなすなんて、パーフェクトを超えてるわ！」

莉嘉「はい、ジャック！あーんして☆」

ジャック「リカ！年頃の女の子が、気安くそんな事しちゃいけません！」

かな子「おかわりはまだまだあるので、どんどん食べてください」

ジャック「カナコ、ユーはそんなにSweet'sをどこから持ってきてるンデース？」

李衣菜「ねーねー、このCD聴いてみてよ。もうハートビートなサウンドがロック

なんだから」

ジャック「それはまた後にしてください」

李衣菜「何か私だけ扱い雑じゃない!？」

メリー「フフツ、あんな庄倒されてる兄さんなんて久しぶりに見たわ」

加蓮「女の子の扱いには慣れてないみたいだね。アンタの兄さん」

メリー「あら、分かる？」

加蓮「あはっ。そりやもう」

奈緒「そう言えば、李衣菜は兄ちゃんがいるとかって言ってたな。だから、甘え方が分かるのかもな」

李衣菜「ねーねー、ジャック」

ジャック「あんまり引つ付かないでくナ！動きにくいッ！」

加蓮「そうかも。女の子相手だから、ジャックも下手に手出せないしね」

メリー「もしかしたら、兄さんが変にアナタ達を意識してたのって、それが原因なのかもしれないわね」

奈緒「あく、男だったら殴りあつて友情深めるーとか、そんな感じか？そう言うの、本気であるんだな」

李衣菜「あつ、そうだジャック。はいコレ」

ジャック「？ コレは何デース？T i c k e t？」

李衣菜「うん。今度の私のライヴの。いきなりプロデューサーにお願いしたから、招待席じゃなくて、一般席だけ」

莉嘉「リーナが夏樹達と一緒に出る奴だよね？」

李衣菜「そうそう。最初は興味ないかなうって思ったけど、やっぱり一回だけでも、私達のホントの姿を見てもらいたいし」

かな子「ホントの姿…」

李衣菜「うん。パイロットってだけじゃなく、ステージの上で歌って踊る。輝いてる私を、ちゃんと見てほしいんだ」

ジャック「…考えておきます」

莉嘉「いいよね。アタシもライヴしたいよ」

かな子「我が儘言っちゃダメだよ。私達が立てるステージは限られてるんだし」

莉嘉「それは分かっているけど…。なんでリーナが出るのにロッキングガールズの出番がないのー？」

李衣菜「あはは…。今度、私達3人で出れるように、プロデューサーに言ってみるよ」

莉嘉「約束だよ？絶対だからね！」

李衣菜「うんうん。だから今度、3人でレッスンを頑張ろうよ？」

ジャック「……」

—。

〳〳〳 数日後 〳〳〳

ジャック「〳〳〳♪」

メリー「兄さん、ちよつと兄さん！」

ジャック「ン？メリー、どうかしまシタ？」

メリー「どうかしたじゃないわよ。今日がリーナ達のライブの日でしょ？ホントに行

かないつもりなの？」

ジャック「Yes. 元々のアイドルのSongには興味ないネ」

メリー「でも、折角リーナが招待してくれたのに…」

ジャック「それはGirlの勝手ネ。So. 行くも行かないのもミーの勝手デース」

メリー「もう、どうしてそう素直じゃないのよ？ほんとには兄さんだって、あの子達のこと…」

ジャック「No. ミーは彼女達の事を認めたくもりはナイよ。精々歌って踊って、Fanに愛想を振り撒いてるといいデス」

ウウウウウンツ

ジャック「What's!? 警報…!?」

メリー「ランドウ襲撃のアラームよ！兄さん！」

ジャック「That's right! 分かっています！先ずは状況の確認を…」

晶葉「ジャック、メリー。2人共いるか！」

メリー「アキハ！敵襲？何があったの？」

晶葉「何があったかの前に先ずはコレを見てくれ」ピッ

談話室のディスプレイに映像を映し出す。

メリー「Wow…」

ジャック「市街地にMeteo…!？」

メリー「しかも、尋常な量じゃないわ！」

晶葉「ああ。さらに言えば、これは自然現象による流星雨じゃない」

ジャック「まさか、ランドウがこの隕石群を!？」

晶葉「そうだ。次の映像を見てくれ。アメリカの軍事衛星で捉えたモノだ」ピッ

メタルビースト・ギガント《……》

メリー「これはもしかして、人工衛星型のメタルビースト？」

ジャック「それだけじゃないな…。コイツは…!」

晶葉「以前行方が掴めなくなっていた、アメリカの人工衛星だ」

ジャック「Shit! 奴等、人工衛星を改造したの力！」

晶葉「衛星型メタルビーストは、周辺の衛星を吸収。それを内部で圧縮し、隕石として打ち落としていると推測される。この映像を捉えた軍事衛星も、程なくしてロストした」

メリー「そんな事されたら、衛星からの情報を頼りにするGPS何かは使えなくなってしまうわ！」

晶葉「メタルビーストもそうだが、現状攻撃を受けている市街地の被害も抑えなくて

はならない」

晶葉「メタルビーストの迎撃にはダイノゲッターを向かわせた。テキサスマックは市街地に落ちる隕石の迎撃を頼みたい」

メリー「どうするの？ 兄さん」

ジャック「モチロンOKよ！ この国にもたくさんの方のアメリカ人が住んでマス。その場所をCraterの穴ぼこだらけにさせるわけには行かないヨ！」

晶葉「どんな理由でも助かる。私はネオゲッターチームにも召集を掛けなければならぬからこれで失礼する。頼んだぞ！」

タツタツ——

ジャック「……」

メリー「兄さん、何をしているの？ 出撃でしょ？」

ジャック「メリー、ユーはパスター・キングを連れてテキサスに向かってクレ」

メリー「いきなり何を言ってる。まさか、アレを使うつもり!?」

ジャック「Fightingは常に最悪の状況を想定しておかなければならぬ。だから、念のために行ってクレ」

メリー「でも、ハットマシンがないと、テキサスマックの射撃精度が下がってしまうわ！」

ジャック「心配無用ネー！メリーはミーの射撃senseを忘れたのか？」

メリー「兄さんの射撃は信頼してるけど…」

ジャック「ならこれ以上の問答は無用。H u r r y. 早く行かないと、間に合わなくなるッ！」

メリー「…OK、兄さん。急いで行ってくるわ！」

タツタツタツ——

ジャック「……」

ジャック「さてと。ミーも戦場に行く前に寄り道しないとネ。こちらも急がなくて
は」

——。

くくく ライヴ会場 くくく

新P「あ、あっ!? ランドウが出ただア!？」

智絵理「きやつ…!? プロデューサーさん…?」

新P「——ああ、ああ。分かったよ、つたく！」

響子「プロデューサーさん。もしかして…」

新P「ああ。つたく、やつと場所押さえたライブだったのに…。リーナを呼び戻して

こねえと…」

チヨットキミココカラサキハカンケイシャイガイタチイリキンシ… ノー！イソイ
デルンデス！トオシテクダサイ！！

智絵理「な、何だか外が少し騒がしくないですか？」

新P「何だかってんだ？こんな忙しい時に！」

バアンツ

警備員「君！これ以上は公務執行妨害だぞ！」

ジャック「リーナ！リーナはいるカ！」

響子「きゃあ！…外国の人…？」

智絵理「おっきい…」

新P「ンだテメエ！こっちは今イライラしてんだ。ウチのアイドルに手エ出すってんなら容赦しねえぞ？」

響子「ちよ、ちよつとプロデューサーさん、いきなり喧嘩腰はマズいですって！」

ジャック「Producer？もしかして、リーナのプロデューサーデスか？」

新P「だとしたら何だ？」

ジャック「…。リーナは、今ライヴ中か…」

新P「そうだよ。行つとくが、ステージの方には一歩だつて行かせねえぞ？」

ジャック「OK。敵が現れた連絡は受けてマスね」

新P「敵…。ランドウの事か？」

ジャック「Yes。その事はライブが終わるまでリーナには黙っててください」

響子「え…？」

新P「どういうつもりだ？」

ジャック「ミーにはミーの、リーナにはリーナのPrideがあります。ホンモノのProfessionalは、戦いを簡単に放棄してはいけません」

新P「だから、リーナにはステージで歌い続けろってか」

ジャック「イエース。この国の平和はミーが守ります。ライブをしてるアイドルは、Fanの事だけThinkしてればいいネ！」

新P「…分かった」

智絵理「い、いんですか…？こっちで勝手に決めちゃって…」

新P「俺のアイドルだ。戦うのも歌うも、今は俺が決める」

ジャック「ユーもまたProfessionalのようデスね！」

新P「つたりめエだ！俺はあいつ等に、英雄になつてほしいわけじゃねえ。あいつ等じゃなきや出来ねえ事を、全力でやらせてえんだ」

ジャック「H A H A！素晴らしいProduceデスね！リーナの事は任せマシタ

よ！」

新P「テメエこそ。言ってみせたんだ、情けねえ結果見せたら只じゃおかねえからな？」

ジャック「OK!!任せてくだサーイ!ユ一のテキサスマックが、天下無敵のスーパーロボットだつて事を思い知らせてやるぜ！」

タツタツ——。

智絵理「…行つちやつた」

響子「嵐みたいな人だつたね…」

李衣菜「——?プロデューサーさん?今何か騒がしかつたみたいですけど…?」

新P「李衣菜。たつた今、お前の知り合いが来ていったところだ」

響子「ぶ、プロデューサーさん!」

奈緒「知り合い?こつちに來るつてことは、アイドル仲間か?」

李衣菜「知り合い?家族は客席の筈だし、一体誰が…?」

新P「アメリカ風の外国人つて言つたら、分かるか?」

李衣菜「それつて、ジャック!?!どうしてこつちに…」

加蓮「リーナが招待してるのは知つてたけど、こつちに挨拶でも來たの?」

奈緒「そんな殊勝な奴か?」

加蓮「うん…。どうだろ」

新P 「敵襲だつてよ」

奈緒 「はあ!？」

智絵理 「言っちゃった…」

新P 「だが心配いらねえ。今回出てきた奴は全員、あのアメリカ野郎がやつつけてやるつてよ」

李衣菜 「ランドウの襲撃に、テキサスマック1機で!？」

新P 「ああ。ホントは、ライヴが終わるまで黙つてろつて言われてたんだがな」

奈緒 「きつとランドウはメカザウルスや百鬼メカも送り込んでくる! ジャック一人じゃ無理だろ!!」

李衣菜 「すぐに助けに行かなきゃ!」

新P 「待ちな」

李衣菜 「プロデューサーさん! どうして…」

新P 「あのアメリカ野郎は言つてたぜ。ホンモノのプロは戦いを投げ出さねえつてな」

李衣菜 「でも…!」

新P 「これは、お前とアメリカ野郎の誇りを賭けた戦いだ。アメリカ野郎は、お前がアイドルとしてステージに立つと分かつて、自分のステージに行った」

新P「だからお前も、あいつの戦いを分かった上で、やってみせろ」

李衣菜「……」

奈緒「李衣菜……」

李衣菜「分かった、やるよ！」

加蓮「大丈夫なの？」

李衣菜「正直不安だよ。でも、私だってアイドルなんだ。だから、プロデューサーさんとジャック、みんなの期待に応えたい」

李衣菜「アイドルも、パイロットも、どっちも全力でやるって決めたんだ！だから今は、アイドルとして全力で歌うよ！」

新P「よし、行つてこいッ！」

李衣菜「はいっ！」

—— ステージ裏。

李衣菜（……）

夏樹「ほらよ」

ピトツ

李衣菜「わひやああ!?!:…な、何…?」

夏樹「体、火照つてんだろ？冷たいの飲んで落ち着いとけ」

李衣菜「あ、ありがとう…」

夏樹「何だ？表情が固いぜ？そんなんでファンの人達を楽しませられるのか？」

李衣菜「……！」

拓海「オメーのためにステージ温めといたんだ。台無しにしゃがったら只じゃおかねえぞ？」

李衣菜「うんっ！みんなで最高のライブにしないとだよね！」 ニツ

拓海「へっ…、いいツラになったな」

夏樹「じゃあ行こうか。アタシ達のロックなステージに！」

ダツ

夏樹・李衣菜「——Jet to the Future!!」

——。

ジャック「H a a a a A A A A!!」

ビルが乱立する市街地目掛けて落ちてくる隕石群に、テキサスマックが両手に構えた銃、マックリボルバーが唸る。

ジャック「全く！大した量の隕石ダゼ！一体どれだけの衛星が吸収されちまったんだ！？」

ジャック「——ッ!？」

B A N G !!

避難中の車に降りかかった隕石を、寸でのところで破壊。同時に、マックリボルバーのシリンドラーを開き、空の葉莖を吐き出す。

ジャック「JapaneseもAmericanも、避難する人には隕石の破片一つ触れさせないヨ！」

予備の弾頭を装填。再び、落下する隕石に狙いを定め銃弾を放つ。

ジャック「Y A — H A !!」

B A N G ! B A N G !!

ジャック「——W o w ! ?」

一際巨大な隕石が眼前に迫る。

ジャック「U O O O O O O O H !!!」

2丁のマックリボルバーを立て続けに連射。隕石を破壊するが、

メカザウルス・ブル『ブオオオオオオオツ!!』

ジャック「W h a t , s ! ? メカザウルス! ?」

メカザウルス・ブル以外にも落着した隕石から現れたメカザウルスや百鬼メカが、テキサスマックを包围する。

ジャック「F o o o o ♪ 大した来客ネー。隕石で乗り合わせてくるナンテ。ミーも

J a p a n e s e の G u e s t なん德斯けど」

メカザウルス・ブル『ブオオオオオオオッ!!』

ジャック「OK! M a n n e r の悪いお客さんは、一人残らず実力行使で G e t o u t してもらおうヨ!」

包围する敵に飛び込みながら、マックリボルバーの銃弾を放つ――。

~~~~~ 衛星軌道上 ~~~~~

ニオン「――まさか、ランドウ如きの為に宇宙くんだりまで向かわされる羽目になるとはな」

鉄甲鬼「ぼやいても始まらない。さっさと終わらせるぞ」

かな子「…あの、今さらだけどすいません」

鉄甲鬼「どうした?」

かな子「だって、ランドウは私達と同じ人間で、人間同士の戦いに2人を巻き込んでしまつて…」

ニオン「本当に今更だな」

かな子「あう…」

鉄甲鬼「かな子、勘違いはするな。俺もニオンも、成り行きにまかせて戦っているのではない」



かな子「そう、ですか？」

ニオン「ああ。俺達恐竜帝国の敵はあくまでインベーターだが、それ以前に降りかかる火の粉があるなら、構わず払い除けるだけだ」

鉄甲鬼「俺達も巻き込まれたのではない。自らの意思で考え、この戦いに身を投じると決意したのだ。だから、お前が気に病むことではない」

かな子「ニオンさん、鉄甲鬼さん…」

ニオン「何時ものようにこちらに構うことなく、そこで菓子でも食ってヘラヘラしている」

かな子「へ、ヘラヘラなんてしてないですよ…？」

鉄甲鬼（菓子を食っていることは否定しないのだな）

かな子「そ、それよりも！メタルビーストがこっちの視界に入りましたよっ！早くやっつけちゃいましょう！」

鉄甲鬼「それについては同意だな」

ニオン「言われずとも分かっている！かな子が菓子を食い終わるまでに片付けてやるッ!!」

かな子「い、今は手を着けてませんっ!!」

ズアッ

ダイノゲッター1の速度を上げ、身動きのないメタルビースト・ギガントに迫る。

ニオン「ゲッタートマホークッ!!」

トマホークを構え、ギガントに振り下ろす。

バチイッ

ニオン「——…ッ!?…:…ガアッ!!」

かな子「きゃああああっ!!」

ダイノゲッター1のトマホークがギガントに触れる寸前、ギガントとトマホークの間で青白い稲妻が弾け、ダイノゲッター1を電流が襲い、弾き飛ばした。

ニオン「何だ!?!」

晶葉『こちらでもモニターしていた。どうやら衛星の動力を利用した電磁バリアのようだな』

鉄甲鬼「電磁バリアだと…?」

ニオン「そんな小細工で守りを固めたつもりか!ゲッタービームでバリアごと吹き飛ばしてやるッ!」

かな子「待ってください!下からメタルビーストの反応が接近してきます!」

晶葉『護衛のメタルビーストだな。やはり易々とはやらせてくれないな』

鉄甲鬼「以前、李衣菜達が遭遇した飛行タイプか。だが数はさほど多くない。さっさ

と片付けてしまえ」

ニオン「フンツ！動かない的相手だけでは物足りなく感じていたところだ！精々俺を  
楽しませてみせろオ!!」

目標を飛行型メタルビーストに変え、ダイノゲッターが飛びかかってくる。

かな子（こつちも時間が掛かりそう。李衣菜ちゃん、みんな……）

~~~~ 市街地 ~~~~

ジャック「——Fire！」

カチツ カチツ

ジャック「チイツ……！弾切れカ……！」

メカザウルス・サキ『ギャオオオンツ!!』

ジャック「shit! こうなったら……Fist fight!!」

弾切れの隙を狙って飛び込んできたメカザウルスを正拳突きで応戦。

メカザウルス・サキ『……!?!』

ジャック「YAAAAA!!」

怯んだメカザウルスの懐に潜り込み、首を肩に乗せてホールドし、背負い投げで打ち

倒す。

ジャック「……残りのEnemyは!?!」

メカザウルス・ブル『……』

ジャック「Oh…。面倒そうなのがまだ残ってるネ。——ッ!!」
拳を構え肉薄。

ジャック「ハッ!ヤッ!! YEEH!!」

左右のワン・ツ。そしてストレート。

ジャック「WOOOOOH!!」

捻りを加えた右ミドルキック。

メカザウルス・ブル『……』

ジャック「…ちよつとはReactionがしてほしいところデスね」

メカザウルス・ブル『——!!』

メカザウルス・ブルのストレート・パンチに、テキサスマックが吹き飛ぶ。

ジャック「グッ…!?!」

メカザウルス・ブル『ウオオオオオオオッ!!』

雄叫びと共に、突進。テキサスマックの鳩尾に、メカザウルス・ブルの頭部の二本の角が深々と突き刺さり、テキサスマックを後方のビルへと衝突させ、押し倒す。

ジャック「ウグッ…!まだまだ…!」

メカザウルス・ブル『——!!』

ジャック「ガッ!？」

メカザウルス・ブルの踏みつけ。

メカザウルス・ブル『——ッ!!』 ガンッ ガンッ

幾度となく振り下ろされるメカザウルス・ブルの脚に、テキサスマックの装甲はひしやげ、コックピットのモニターにも亀裂が走り、機体のあちらこちらから火花が弾ける。

ジャック「まだ……!ここで負けるわけにはア……!!」

ガシッ

メカザウルス・ブルがテキサスマックの頭部を鷲掴みにし、高々と持ち上げる。

ジャック「グウ……」

メカザウルス・ブル『——!!』

攻撃が来る。

……。

ジャック「——…? What's!?! これは……!」

メカザウルス・ブルの背中から、腹部を貫いて突き刺さる、それは、

奈緒「へへっ、闇討ち卑怯なんて言うんじゃないぞ?」

ネオゲッター2のプラズマブレード。

奈緒「うおりやあ!!」

腹部に突き刺したプラズマブレードを振り上げ、メカザウルス・ブルの上半身を真っ二つに斬り裂く。

ジャック「……なぜ……」

奈緒「もう大丈夫だな!」

李衣菜「助けに来たよ!」

加蓮（相方が違う……）

ジャック「どう言うことだ!? ライヴは……!」

李衣菜「バツチリ! 最高のステージで終わらせてきたよ!」

奈緒「アンコールまでしっかりな。まだ余韻が残ってるなあ」

ジャック「……」

加蓮「そんな感じだから。こっちはさっさと終わらせちゃうよ?」

李衣菜「立てる?」

ジャック「心配無用ネ! テキサスマックはこれくらいの大ダメージ、ナンテ事ない」

奈緒「なら、頼りにさせてもらおうぞ」

李衣菜「奈緒もここまで移動お疲れさま。あとは私がやるよ!」

奈緒「おう! 有終の美を飾ってくれよ!」

奈緒「ドリルアームガン!!」

ドリルアームガンを乱れ撃ち、土煙を立たせて怯ませ、

奈緒「オープンゲット!!」

李衣菜「ゲッタアアーチエンジン!!」

テキサスマックと背中合わせになるように着地。

ジャック「……とんだPassion girlネー」

李衣菜「パッション……。わ、私が目指してるのは、クールなロック・アイドルだよ!」

ジャック「H A H A H A! Nice joke!」

李衣菜「ジョークじゃない!」

メカザウルス『キシヤアアアアツ!!』

加蓮「メカザウルスが来る。リーナ、おふざけはその辺で終わりして」

李衣菜「う、うん……!……ジャック、コレを使って!」

テキサスマックに、ソードトマホークを手渡す。

ジャック「コレは?」

加蓮「流石に丸腰つてのは情けないしね」

ジャック「……使わせてもらう!」

テキサスマックが、ソードトマホークを構える。

奈緒「李衣菜、隕石にもしつかり気を付けるよ！」

李衣菜「そっちのフォローは任せた！——シヨルダーミサイルツ！」
シヨルダーミサイルで牽制。

李衣菜「うおおおおおっ!!」

メカザウルスの群れへ飛び込む。

ジャック「Y E E E H!!」

テキサスマックもソードトマホークを振り上げ、突貫。

李衣菜「プラズマ：サンダアアー!!」

膨大なプラズマエネルギーが迸り、メカザウルスも百鬼メカも一網打尽に。

奈緒「李衣菜退け！隕石が来る！」

李衣菜「わあっと！」

後方に跳ねたネオゲッター1の目の前で、隕石が弾ける。

李衣菜「気にするのはいいけど、これじゃあ落ち着いて戦えないよ！」

加蓮「ダイノゲッターは今は……」

—— 衛星軌道上。

ニオン「沈めえッ!!」

ザンツ

トマホークで一閃し、飛行型メタルビーストが炎に包まれる。

かな子「護衛のメタルビーストは、今ので最後です！」

鉄甲鬼「これ以上時間を掛けさせるな！やれッ！」

ニオン「言われなくとも！」

ダイノゲッターの翼を広げ、ギガントに迫る。

ニオン「——ゲッターアアービームッ!!」

ゲッタービームの閃光が走り、爆発が起こる。

かな子「や、やった…?」

ニオン「いや…」

ギガント《……》

鉄甲鬼「随分としぶとい奴だ」

晶葉『恐らくだが、電磁バリアを正面に集中させる事で、ゲッタービームを凌いだの
だろう』

鉄甲鬼「成る程…。ゲッタービームと同等の攻撃を、二方向から同時に行えば、バリ
アを突破できるかもしれないと言うことだな」

かな子「そんなこと言っても、今ゲッタービームを撃てるのは、このダイノゲッター
しか…」

「それなら、ワタシ達に任せて！」

加蓮「この声って…」

ジャック「メリー！Nice Timing！」

李衣菜「どう言うこと？メリーのハットマシンに、着いてくるのはパスチャー・キング？」

奈緒「そのパスチャー・キングが引いてるのは、デカイ棺桶？！」

加蓮「…悪趣味なデザイン。中に何が入ってるの？」

ジャック「それは、見てからのお楽しみ！その前にメリー！合体デス！」

メリー「OK、兄さん！」

テキサスマックの上に、ハットマシンが乗っかる。

ジャック「リーナ！コレは返すよ！」

李衣菜「う、うん！」

投げ返されたソードトマホークを受け取る。

ジャック「さあ、ミー達のShow Timeの始まりダゼ！」

パスチャー・キング「ブルヒビイインツ！！」

パスチャー・キングが下ろした棺桶を開き、中に収納されていたパーツを組み上げる。

完成したそれは、

李衣菜「おつきなライフル？」

奈緒「対戦車ライフルとか、そんなのに似てるな」

メリー「テキサス・ハイパワーライフルよ」

ジャック「コイツはToo much High Powerで地上の敵には使えナイ」

加蓮「お空高くに浮いてる的を撃ち抜くには、お誂えつて訳ね」

メリー「けど、コレを使ってる間はこつちも身動きが取れないわ」

ジャック「分かったらリーナ！背中は任せたぜ！」

李衣菜「オツケー！任せてよ！」

ソードトマホークを構え直し、迫る敵陣に斬り込む。

李衣菜「おりやあああ!!」

下から逆袈裟に、メカザウルスを斬り上げる。

李衣菜「はっ!!」

ソードトマホークを水平に振るい、2機の敵機を一刀両断。

李衣菜「トマホーク、サンダアーツ!!」

ソードトマホークの刀身にプラズマエネルギーを収束させて、一気に放ち周囲の敵を薙ぎ払う。

李衣菜「ジャック、メリー！今だよ！！」

ジャック「OK！メリー！」

メリー「∴Target・In sight。——Rock on！」

ジャック「宇宙にいるダイノゲッター！聞こえるカ！こつちに合わせて撃てるな!？」

ニオン『当然ツ!!』

メリー「兄さん、何時でもいいわよ!!」

ジャック「All right!∴1∴2∴3ッ！」

ニオン『ゲッタービーム!!』

ジャック「Fiiiiiree!!」

ズドンツツ

市街地一帯に響き渡る轟音。放たれた弾丸は空中で緩やかに放物線を描き、衛星軌道の目標めがけ飛んだ。

同時、メタルビースト・ギガントにダイノゲッターがゲッタービームを放つ。

電磁バリアを展開してゲッタービームを受け止めたギガントの真下から、ハイパワーライフルの弾丸が貫いた。

ギガント《——!?!?!》

爆発。

晶葉『メタルビーストの爆発を確認した。全く大した威力だ』

ジャック「H A—H A！ ミー達の大勝利！ テキサスマックの眼光に、狙えないモノはありません！」

ニオン『：フツ』

李衣菜「こつちもこれで最後だあゝ!!」

残った最後のメカザウルス。ソードトマホークが斬り伏せて、戦闘は終わった。

—。

~~~~ 数日後、海上 ~~~~

メリー「——兄さん、もうすぐでテキサスと合流ポイントよ」

ジャック「OK。これでやっと祖国に戻れるネ！」

メリー「：あつという間だったわね」

ジャック「：そうデスね。だが、感傷にも浸つてらナイぜ。祖国アメリカでも、ランドウとの戦いが待ってイル」

メリー「本当にお別れを言わなくて良かったの？」

ジャック「今生のお別れじゃないネー。それに、しんみりしたのは性に合いません」

メリー「でも、向こうから来た場合は仕方ないわよね？」

ジャック「？」

李衣菜「ジャーク!!」

ジャック「Wow!リーナ!」

奈緒「あたしらもいるぞ」

加蓮「リーナだけじゃなく、アタシ達でネオゲッターチームって言うの、忘れないでよね〜?」

李衣菜「研究所であんだけ我が物顔で居座ってて、出ていく時は何にも言わないなんてなしだよ?」

ジャック「うっ:」

李衣菜「かな子のお菓子、また食べに来てよ」

メリー「そうね。その時は、平和な時がいいわね」

奈緒「そのためにも、お互い頑張らないとな」

加蓮「アタシ達はアイドルだけどき。目指してるのは一緒だもんね?」

ジャック「そうデスね・ユー達はJapan、ミー達はAmerica。それぞれのために頑張りまシヨウ」

李衣菜「ううん。それは違うよ」

ジャック「What's?」

李衣菜「誰かを守るのに国境なんて関係ない、でしょ?戦ってる理由はそれぞれ違う

かもしれないけど、ランドウを倒すために、私達は力を合わせられる」

ジャック「……」

加蓮「リーナ。そろそろ国境を出ちゃうよ。その前に戻らないと」

李衣菜「そうだね。それじゃ、ジャック、メリー」

メリー「また会いましょうね」

李衣菜「今度はちゃんとライブに来てよ」

ジャック「…そうだな」

李衣菜「え？」

ジャック「平和な世界で、李衣菜の歌が聞ける日の為に、共に戦っていこう」

李衣菜「……」

ジャック「じゃあな！ゲッターを駆るアイドル達！」

メリー「シー・ユー・アゲイン」

パスター・キング「——!!」

パカラツ パカラツ——

李衣菜「は…ははっ。ちゃんと日本語喋れるんじゃないん」

加蓮「面白い人達ではあったよね」

奈緒「あたしすらも他人の事言えないと思うけどな」

加蓮「さ、ああ言ったからには、アタシ達も頑張らないとね〜」

李衣菜「あれ？頑張るのはキャラじゃないんじゃないんじやなかった？」

加蓮「もちろんそうだよ。だから頑張るのはリーナと、奈緒にお任せ〜」

奈緒「あたしもかよ！」

加蓮「トーゼン。さ、今日はもう帰って、ポテトでも食べて寝よ」

奈緒「…太るぞ」

加蓮「何か言った？」

李衣菜「あはははっ」

李衣菜（——…ジャック・キング、テキサスマック…）

李衣菜「アメリカン・ヒーロー、私達のもう一つの仲間…」

つづく



## 第7話『新たな舞台へ!』

北米大陸、アラスカ。

全世界に宣戦布告をしたランドウが、最も戦力を投入し、激戦区となっている。

その日も、プルドーベン油田3キロの地点に、第7騎兵団・海兵隊およそ45000の戦力が集結し、ランドウを迎え撃ち激しい戦闘が繰り広げられていた。

各所で弾ける弾丸、火薬。響き渡る銃声、怒号、爆音。雪と氷に覆われた白銀の大地は、黒煙と炎、血とオイルに彩られていた。

戦車や航空機、迫撃砲に高射砲。あらゆる戦力を以て迎撃するアメリカ軍を嘲笑うように、戦火の中を進軍するメタルビーストの軍勢は、ゆつくりと確かな歩みで、油田へと侵攻していく――。

~~~~~ 新早乙女研究所 談話室 ~~~~~

奈緒「――ランドウの奴ら、無茶苦茶じゃないか」

橘「北米大陸は、ランドウの拠点であるベガゾーンのある北極から程近い事も手伝って、徐々に戦線が拡大しているな」

晶葉「ランドウがベガゾーンを占拠した時、真つ先にアメリカ軍によつて制圧されると思つていたが」

加蓮「けど、向こうもそれは予期してた？」

橘「アメリカ軍の制圧作戦を察知し、それを迎え撃つただけでなく、追撃と同時に北米大陸の3分の1を手中に納めた。今のところ、ランドウの迷惑通りに事が運んでいると見ていいだろう」

奈緒「いくらアメリカ軍も百鬼帝国との戦いで疲弊してたからつて、そんな思い通りに運ぶもんなのか？」

晶葉「こちらの予想以上に、ランドウが戦力を充実させていたと、そう言うことだろう」

李衣菜「くつそく。ゲッターなら、メタルビーストだろうとメカザウルスだろうとけちよんけちよんに出来るのにく！」

晶葉「恐竜帝国にせよ百鬼帝国にせよ、本格的な侵略よりゲッターの打倒を優先していた。だからこそやり易い点はあつたが……」

橘「ランドウに限つては、ゲッターに対する拘りがない。故に、世界各地に戦力を派遣して、確実な侵略を行っている」

晶葉「このまま奴らの思い通りの侵略を許してしまえば、最後には日本を包囲されて

しまう」

奈緒「そうだったらどうなるんだ？」

加蓮「考えなくつても、外国から支援を受けられなかったらアタシ達であれだけの戦力を相手にするのはムリだって」

李衣菜「四方囲まれてフルボッコにされちゃうんだ」

奈緒「…なあ、こつちからアメリカに支援するつてのは出来ないことなのか？」

晶葉「どうだろうな…。ランドウの侵略が、日本にも全くないと言うわけでもない」

橘「これまでの散発的な襲撃は、ゲッターを日本に留めておくための措置なのかもしれんな」

奈緒「あたしらが日本から動いたら総攻撃を仕掛けるぞつて、脅しみたいなものか？」
李衣菜「ゲッター斬や他のゲッターの使用許可はまだでないの？」

晶葉「出ないどころの話じゃないさ。日本政府は、これまでのネオゲッターの活躍から、無理に他のゲッターを使用する必要はないと判断してる」

加蓮「それ、状況見えてるの？ネオゲッターだけじゃ、今の日本は守れても、ランドウを打倒するなんてムリな話だよ」

橘「それだけ早乙女研究所の消失が響いているのだろう。諸外国にしても、ゲッターの参戦には、消極的な姿勢のものが多数だ」

李衣菜「何も、ゲッターだけが要因で起こった事故じゃないのに……」

晶葉「起こってしまえば、原因など些末なものだ。それに、簡単に日本の支援を許してしまうのは、これまでの強国としてのプライドが許さんのさ」

加蓮「プライドとか体裁で、大事なモノは守れないと思うけど」

ランドウ『——この放送を見ている世界各国の人々よ。如何かな？我が軍団の戦闘力
は？世界最強と謳われたアメリカ軍だろうと、我が軍団の前ではご覧の通りだ』

李衣菜「ランドウ……！」

ランドウ『後3週間でアラスカ・カナダは我らランドウの領地となる。そして、3ヶ月後にはアメリカ大陸全土を手中に収める事をここに宣言しよう！』

ランドウ『国連加盟国の諸君らは、この戦いに参加するも、自国の防衛に専念するも諸君らの自由だ。尤も、戦いに参加する余裕があれば、だがな』

晶葉「ランドウめ……。アメリカ以外にもメタルビーストを襲わせておいて、よく言う」
ランドウ『3か月後、アメリカの大地に星条旗はたなびかん！白銀のアラスカの大地が焦土と化した時、誰がこの星の支配者であるかを知るであろうッ!!』

奈緒「くっそ〜！好き勝手言いやがって……」

加蓮「でも、アイツの言ってる事が事実だとしたら、アタシ達にも残された時間は少ない」

李衣菜「行こうよ！私達でアメリカへ！行つてランドウに思い知らせてやるんだ！自分達がどれだけ大言壮語を言つてるのかつてね！」

晶葉「待て。気持ちは分かんなくてもないが、今は落ち着け」

李衣菜「晶葉！政府の決定なんて待つてられないよ！その間に、もつとランドウの被害が増えるかもしれないんだよ？」

橘「ネオゲッターは現状で日本の貴重な防衛戦力だ。それを簡単に外すわけにはいかない」

晶葉「それとも、李衣菜達だけで勝手にネオゲッターを持ち出してみるか？アイドルが国家反逆者とは、前代未聞だが、そんな事で有名になりたいわけじゃないだろう？」

李衣菜「うっ…それはそうだけど…」

ウウウウウンツ ウウウウウンツ

所員『——メタルビースト出現！ネオゲッターチーム、スクランブル!!』

橘「…………。ご覧の通りだ。今この国は、君達の力を必要としている」

李衣菜「…………」

奈緒「仕方ない。パイロットのあたしらが考えたつてどうしようもないんだ。今は目の前の敵を倒すことに集中しよう」

李衣菜「…………」

加蓮「ほら、リーダーがそんなんじや締まんないでしょ。シャキツとして」

李衣菜「うん……」

橘「よし、ネオゲッターチーム、出撃！」

李衣菜「よおーし、ランドウの奴ら、この国には指一本だつて触れさせないんだからあ

!!」

――。

~~~~~ ベガゾーン ~~~~~

ランドウ「……」

パチ……パチ……パチ……パチ……

大男「素晴らしい演説でしたよ。プロフェッサー・ランドウ」

ランドウ「何じや、来ておったのか」

大男「ええ。我々の計画の経過報告も兼ねましてね」

ランドウ「それで？望みのモノは手に入ったのか？」

小男「事態はそう簡単な話ではないよ！あれは今地下深くで眠りにつき、ゲッター線の反応も極限まで抑えているんだ。それを見つげ出すのは、砂浜で形の違う砂の粒子を見つげ出すのに等しい。僕達の科学力を以てしてもね」

ランドウ「ならば見つけ次第報告すればよい。一々些末な報告など聞いていられるか

!

大男「当たり前は着けました。直にいい成果報告が出来るでしょう」

小男「ただ、その為には…」

ランドウ「フンツ。ワシに連中の目を引き付けさせろ、と言うのか。言われんでも今更ランドウの進軍を止めるつもりなどない」

大男「頼みますよ。プロフェツサーの戦いに、この世界の…いや、この宇宙の命運がかかっているのですから」

ランドウ「貴様らも、要らぬヘマをして、尻尾を連中に出さぬことだな  
ツカツカ——。」

小男「——：やれやれ、困った男だね。本当に彼をのさばらせておいていいのかい？」

大男「今のうちは構わないよ。あの男の深い業は、利用するに足る価値がある」

小男「我々の手を煩わせず、この世界を破壊すると言うんだね？」

大男「それが出来れば良し。出来なくても、彼の業が、ゲッターの更なる進化を促すことに変わりはない」

小男「更なる進化…。フフツツ…。胸が躍るね、コーウエン君」

コーウエン「そうだね、ステインガー君」

コーウエン「果たして、これから人類が迎えるものこそ、明日と言う希望なのか…」

ステインガー「はたまた、破壊という名の……」

コーウエン・ステインガー「絶望なのか！それは、この戦いを乗り越えた先にある――」

~~~~~ オホーツク海 ~~~~~

奈緒「ゲッターアーチェーオンジツ!!」

奈緒「ドリルアーム！――おりゃあッ！」

オホーツクの海底から、日本に侵攻しようとするメタルビーストの軍勢に飛び込んだネオゲッター2のドリルアームが、敵勢を一度に貫き粉碎する。

海竜型メタルビースト《――!!》

奈緒「おっと！オーブンゲット！」

最後方に控えていた海竜型メタルビーストが放った、先端を鋭利に尖らせた触手の攻撃を、ネオゲッター2を分離させて回避。

加蓮「ゲッターチェンジ――！」

海中でネオゲッター3に変形し、海竜型メタルビーストに渾身の拳を叩き込み、

加蓮「プラズマブレイク！」

プラズマブレイクを放射。メタルビーストを肉塊以上に粉々に砕き、破壊した。

奈緒「へへっ、ざっとこんなもん、つてか？」

加蓮「ふふっ……。確かに、ランドウがいくらメタルビーストを送り込んできたって、ネオゲッターの相手にもならないんじゃないや、ね」

李衣菜「私達の力を甘く見ないでよね！メタルビーストだってランドウだって、みんなネオゲッターでやっつけてやるんだから！」

橘『ネオゲッターチームの諸君、聞こえるか？』

李衣菜「橘博士！見てくれましたか？今の戦い！メタルビーストの軍団を、日本に上陸させる前に全滅させましたよ！」

奈緒「李衣菜は何もしてないけどな」

李衣菜「そ、それは言いっこなしだって……。2人の勝利はチームの勝利だよ……」

橘『…残念だが、敵戦力に上陸された』

李衣菜「あら……？」

橘『そちらは囮だったようだ。今ダイノゲッターを敵が上陸した秋田に向かわせた』

加蓮「敵戦力って言うけど、メタルビーストじゃないの？」

橘『今のところは何とも言えん』

奈緒「何だよそれ？被害とか出てないのかあ？」

橘 『うむ。被害らしい被害は何も。出現したのもこれまでのメタルビーストとは、毛食が違うらしい』

奈緒 「毛食が違う?」

橘 『上陸した敵の様相は、高さと直径が20メートル程のドーム状の物体らしい』

李衣菜 「それが、新しいメタルビースト?」

橘 『メタルビーストなのか、或いはランドウの新たな兵器か：同様のモノが、他にも青森や岩手など、東北地方の都市を中心に上陸している』

奈緒 「どれもこれも攻撃らしい事は何もしてこないのか?」

橘 『うむ。各所に派遣された自衛隊からの報告によれば、物体は都市中心部まで移動後、あらゆる行動を停止。目立った破壊行動は見られないが、代わりに、物体の周囲に粘糸のようなモノを張り巡らせているらしい』

加蓮 「何それ?こつちを待ち構えて、糸で雁字搦めつて作戦?」

奈緒 「案外爆弾かなんかだったたりしてな。周囲の糸が導線で、触れたらドカン、みたいな」

李衣菜 「それ、シャレになってないと思う」

橘 『……』

李衣菜 「ともかく、何があるか分かんないのは事実だし、ネオゲッターも近くの青森

まで行ってみようよ」

奈緒「近くのつて言える距離じゃないけど、李衣菜の言うとおりだな」

加蓮「なら急ご。嫌な予感がしてきた…」

くくく 秋田市内 くくく

隊長「……」

隊員「隊長。全隊、配置に着きました」

隊長「うむ。ごくろう。住民の避難は？」

隊員「はっ。5キロ四方の住民の避難は完了しています」

隊長「そうか。……」

隊員「あれ、何なんですか？」

隊長「俺に分かると思うか？」

隊員「それは……」

隊長「兵器ならもつとマシな姿をしてる。あんな凹凸はおろか装甲の繋ぎ目もないドームなんて、どうやって作ったのかも分からん」

隊員「素直に怪獣って言ってくれた方がまだ説得力がありますね」

隊長「どちらにしろ自衛隊はコテンパンにやられるのがセオリーだな。…全隊に攻撃指示を」

隊員「こ、攻撃するんですか!?!」

隊長「当然だ。ランドウだがリンボーだか知らないが、連中は自衛隊の実力を舐めてる。たまには我々の力を連中に見せつけねばな」

隊員「ほ、本部の決定を待つてからの方がいいのでは…」

隊長「バカ言え。本部の決定を待つてる間に、目標が動き出したらどうする? 責任を取らされるのは俺なんだぞ?」

隊員「ですが…」

隊長「苦情は作戦が終わってから受け付ける。こここの指揮官は俺だぞ? 黙って俺の言うことを聞け!」

タタタツ

隊員2「隊長! 早乙女研究所より通信が入っています!」

隊長「ああ? この大事な時に何だつてんだ?」

ガチャリ

隊長「あく、もしもし?」

橘『中佐、早乙女研究所、所長代理の橘だ。そちらのメタルビーストの状況を教えてもらえるかね?』

隊長「動きも何も。ラツシユの渋滞みたいにピクリとも動かないんで、今こつちから

攻撃を仕掛けてみるところだ」

橘 『危険ではないかね? 敵の目的も分からない以上、こちらから動くのは…』

隊長 「……ハア……。敵が動き出してから、被害が増えるのと、その前に事前に被害を抑える事、どちらが賢明かは明白でしょう?」

橘 『……ならば、せめてゲッターが到着するのを待つてくれ。敵の反撃を想定しても、こちらの方が安全だ』

隊長 「……。出来るだけ急がせてくださいよ」

橘 『無論だ。至急そちらに向かわせるようにする』

隊長 「では、こちらは作戦に戻りますので」

ガチャ——

隊長 「ようし、戦車部隊前進開始! 射程に入り次第砲撃開始ッ!」

隊員 「げ、ゲッターの到着を待つのではないのですか!?!」

隊長 「現場の判断だ。目標がゲッター到着以前に行動を始める危険性があると判断した」

隊員 「早乙女研究所の忠告は…」

隊長 「ふんっ。戦闘を知らん科学者に、戦い方なぞ分かるか」

隊員 「……」

隊長「なまじゲッターなぞ所有しているから、知識もないのに付け上がる。日本を守るために誰が戦ってるのか、それを連中に改めて教えてやらなくてはな」

整然と並んだ戦車が、ドームまでの距離を詰め、張り詰めた一本の糸に触れる。

ピン——

—— 秋田上空。

橘『ダイノゲッターチームの諸君。自衛隊がドームを攻撃するらしい』

かな子「ここ、攻撃って、いいんですか!?!」

橘『私も悪い予感がする。出来る限り急いでくれ』

ニオン「簡単に言ってくれる。こっちはこれで最大出力だ」

鉄甲鬼「ゲッター2に変形しろ。ゲッター1より最高速度は速いはずだ」

ニオン「分離と変形に時間が掛かる」

——

かな子「——…?!きやああ…!」

ダイノゲッター1の進行方向から、猛烈な衝撃波と爆風が吹き荒れ、ダイノゲッター

1に叩き付けられる。

鉄甲鬼「ぐう…!?!」

ニオン「何だ!?!」

橘 『まさか……展開した部隊が何かしたのか!?』

鉄甲鬼 「この衝撃……。それに、前方に見えるあの爆発光……。もしや……」

かな子 「か、核……。爆発……。?」

李衣菜 「ランドウが核を使っただって!?!」

晶葉 『情報が錯綜している。今は分析の結果が出るのを待て』

奈緒 「街一つ吹っ飛ばす爆発なんて、核以外何があるってんだよ……」

加蓮 「それ以前に、秋田の街にいた人達は……!」

李衣菜 「くそっ!!」 ガンッ

晶葉 『……ゲッター各員は、直ちに帰還してくれ』

李衣菜 「帰還って……! 敵はまだいるんだよ!」

晶葉 『今、ゲッターに出来ることは何も無い。相手を刺激しないためにも、帰還して態勢を立て直すんだ』

李衣菜 「でも……!」

加蓮 「リーナ、晶葉の言うとおりでよ。帰還しよう」

李衣菜 「……っ!」

晶葉 『お前達の憤りは分かる。だが、感情だけで無闇に動くな』

李衣菜「……分かった――」

〃〃〃 新早乙女研究所 解析室 〃〃〃

所員「晶葉さん、分析結果出しました」

晶葉「結果は？」

所員「爆心地から、放射能等は検知されませんでした」

晶葉「なら、少なくとも、核ではないと言うことか……」

所員「ですが……、爆破地点からおおよそ10キロ四方が壊滅……。衝撃波によって、被害は半径20キロにも及んでいます」

晶葉「威力はメガトン級と同等……。そんな兵器を開発できるとは……」

橘「晶葉くん！」

晶葉「橘博士。何かあったんですか？」

橘「ああ。たった今、日本政府にランドウから映像メッセージが送られてきた」

晶葉「……あの爆破を見せて、政府に恫喝、ですか？」

橘「その通りだ。政府高官に送られたものと、同じ映像を送ってもらった」

晶葉「……。分かりました。その映像はネオゲッターチームも見て構いませんね？」

橘「……うむ」

――。

ランドウ『日本政府の諸君。我が帝国の力はご覧になっていただけたかな?これはまだ、これから起こる悲劇の、ほんの幕開けにすぎない』

ランドウ『諸君らにプレゼントした兵器はAV58という。一度その地に固定したAV58は、外部からは除去することは出来ん』

ランドウ『AV58を中心に張り巡らされた触覚は、些細な振動をも本体に伝え起爆を誘発する。もちろん、こちらからも爆破を指示する事も出来る』

ランドウ『諸君らには最早、選択の余地などありはしない。AV58が爆破すれば、一瞬にして数万という人間が蒸発する。諸君らが我らに逆らえば、それだけ悲劇は拡大する』

ランドウ『だが、賢明で聡明な日本国民である諸君らならば、これから起こるであろう悲劇を回避する事も出来よう…』

ランドウ『日本人は優秀な種族だ。私としてもその優秀な種族を滅ぼす事は忍びない。かつて同胞として、強国と共に戦った間柄ならば尚更だ』

ランドウ『全ての武器を捨て、ランドウの元に跪け』

ランドウ『アラスカ戦線のアメリカ軍は壊滅状態。国連に加盟する多くの主要国も、自国に送り込んだメタルビーストの迎撃に追われ動けん。四方を海に囲まれた日本は、既に助けを求めるべき隣人もなくし、孤立している』

ランドウ『今こそ日本政府は、誰に従い、誰と共に未来を歩むべきかを決めるべきである』

ランドウ『故に、これより提示する我らランドウの要求を、冷静に受け止めてほしい』
ランドウ『先ず第一に、自衛隊の海外派遣の即刻中止。派兵中の部隊は、直ちに日本国へ帰還させること』

ランドウ『第二に、日本国内のアメリカ軍基地の撤去。及びアメリカ軍の日本国からの撤退。これから我らと日本は同志となるのだ。敵であるアメリカを助長する行為は一切許さん』

ランドウ『第三に、後日文書で提示する土地、及び現在日本において開発中の軍事ノウハウの提出。軍事援助金として要求する金額を我が帝国に支払うこと。何、これら同志となるのだ。ちよつとした契約金とでも思ってくれ』

ランドウ『そして、日本国が世界に先駆けて研究しているゲッター線研究の即時停止。命令である！』
及びゲッター戦力の即刻引き渡し。これは要求ではない。諸君らに我らが行う、最初の

ランドウ『以上。要求に対しては、諸君らの対外的事情も考慮して返答までに時間を与えよう。しかし、ゲッターの引き渡しに関して、諸君らに考える時間は与えられないッ！』

ランドウ『今より24時間…。それまでにゲッター引き渡しに関し明確な返答が得られなければ、残されたAV58が第2、第3の爆破を起こす!!』

ランドウ『…聡明で優秀な種族である諸君らならば、どうすれば言い分かるだろう。君達の賢明な回答を期待する——』

プツン——

——。

李衣菜「……」

奈緒「……」

加蓮「……」

ニオン「簡単に言えば隷属しろ、と言うことか。大仰な物言い、何を言うのかと思えば」

鉄甲鬼「だが、ランドウの言うことにも真実は含まれている。現状の事態に対し、日本は今協力できる相手がいない訳だからな」

かな子「これから、どうなっちゃうんでしょう…」

晶葉「決まっている。この世に命以上に大事なモノなどありはしないのだからな」

加蓮「ふざけないで。なら、黙ってアイツの言いなりになっていいって言うの?」

晶葉「加蓮…。意外だな。加蓮からそういう意見が出るとは」

加蓮「命が大切って言うのは否定しない。だけどランドウは人の命を平気で踏みにする。そんな奴が、黙って言いなりになったところで、大人しくするとは思えない。この要求を飲んだら、日本はランドウのカモにされるだけだよ」

晶葉「言いたい事は分かる。だが実際、ランドウは一瞬で数万の命を奪える。それはお前達だつて見ただろう」

加蓮「それは……」

奈緒「……。ランドウの狙いは、ゲッターを奪つて、ゲッターでこの国を滅ぼす事、なんじゃないか？」

加蓮「奈緒……」

晶葉「奈緒もゲッター引き渡しには反対か」

奈緒「連中はメタルビーストに追われて、ヨーロッパもアメリカも日本の手助けが出来ないって言つてた。けど、それは連中だつて同じなんじゃないか？」

奈緒「メタルビーストがヨーロッパやアメリカに出払つてるから、今までだつてこっちにまともに戦力を送つてこれなかった。だけどゲッターを渡すつてことは、みすみすあつちに戦力をタダで渡しちまうことになる」

かな子「ゲッターが悪魔になる……？」

奈緒「アメリカでもヨーロッパでも、向こうの戦いが一段落すれば、連中はすぐに日

本に攻撃してくるだろ?もしそうなったら、日本にゲッターがなかったらどうなるんだ?
?」

晶葉「……。奈緒の言っている事は、推測にすぎない。AV58という兵器が、この国に甚大な被害を及ぼす事は間違いない事実なんだ。仮に人的被害を回避できたとしても、爆発によって失われた土地の補填はどうする?住む土地を奪われた人達は、今後何処で生活していけばいい?」

奈緒「損失とか補填とか、そういうのは分かっているつもりだけどさ。その結果、住む土地も住む人も、みんな奪われたんじゃ話にならないじゃないか!」

李衣菜「落ち着きなよ、奈緒」

奈緒「李衣菜!お前だって、アイツらのしてる事が許せないって思ってるんだろ!」
李衣菜「許せないよ!だけど、AV58を上陸させた時点で、私達の負けなんだ」

奈緒「お前……」

李衣菜「……橘博士」

橘「何かね?」

李衣菜「橘博士も、やっぱり晶葉と同じ意見、何だよね?」

橘「……私は、一介の科学者にすぎん。そんな私に、多くの人命を預かる決定を下すことなど出来んよ」

李衣菜「……ッ」

タツ――

奈緒「おいつ！李衣菜、待てよ……」

加蓮「待って。奈緒」

奈緒「加蓮……」

加蓮「リーナの手、血で滲んだ」

奈緒「……」

加蓮「あの映像を見た、最初から。ずっと拳を握り締めて、耐えてたんだよ。悔しいのは、みんな一緒」

奈緒「だけど、だけどき！ゲッターを渡すなんて出来るわけないだろ!?そんな事したら、AV58が爆発する以上の被害が出るかもしれないんだぞ?」

加蓮「分かってる。だけど、今のアタシ達に何が出来るの?アタシ達は、ただのパイロット……ううん。それ以下のただの女子高生だよ。……何にも出来ない」

奈緒「加蓮……、お前までそうやって諦めるのか!?!」

加蓮「……。そう言えばさ、ダイノゲッターはどうなるの?」

ニオン「あれは元より恐竜帝国で開発したものだ。整備を貴様らにさせても、それ以外の手出しはさせせん」

加蓮「とか言って、元はこっちで造った量産型ゲッターでしょーが」

ニオン「答えは変わらん。ダイノゲッターは俺達のモノだ」

加蓮「ふうん……」

奈緒「何考えてんだ」

加蓮「別にー。ゲッターで戦えなくなるなら、アタシ達もお役御免だね。研究所からも、所員登録抹消しちゃっていいよ」

橘「……………」

奈緒「加蓮……！お前、何言って……！」

晶葉「それもそうだな。パイロットでない民間人を、研究所に置いておくわけにはいかないしな。莉嘉はたまに遊びに来るが」

奈緒「お前ら……！本気なのか!？」

加蓮「いーじゃん。これからはこんな山奥に来て、何時来るか分かんない敵の為に、貴重な時間削って待機してなくていいんだから」

奈緒「加蓮……！見損なつたぞ！」

加蓮「あくはいいい。アタシは元々正義感かぎして戦うのなんてゴメンだし。奈緒だつて、気に入らない事があるなら好きにすればいいじゃん？」

奈緒「……！あたしの、好きに……？」

加蓮「そ。あく、解放されたと思つたらお腹空いてきちやつた。最後の記念に食堂行つて何か食べて来よ」

奈緒「……」

晶葉「自室の整理も忘れるなよ」

加蓮「分かつてゐるつて。着替えとか、今日中に持ち帰れそうなのはちやつちやとまとめて帰るから」

晶葉「やるなら李衣菜の分も頼む。アイツはこれからレックスがあるからな」

加蓮「りよーかい。あくあ、楽になるまでが大変だなあ」

スタスタ――

橘「……行つてしまつたな」

晶葉「すいません、橘博士。色々迷惑を掛けると思います」

橘「構わんよ。君達の行動の結果が、黒と出ようと白と出ようと、責任は早乙女博士からこの場を引き継いだ私がとる」

晶葉「有難う御座います」

奈緒「……」

奈緒（……気に入らないなら、好きなようにやる……あたしが、今やりたいことは……！）

くくく プロダクション レッスンルーム くくく

ベイソン…

拓海 「何だよそりや？お前やる気あんのかア？」

李衣菜 「…はあ」

夏樹 「ホント大丈夫か？体調悪いなら、レッスン中止にするか？」

李衣菜 「う、ううん…！大丈夫、大したことないから…」

拓海 「大丈夫って感じじゃねえだろ。レッスンにも身が入ってねえし、ギターの音もふやけてやがる」

李衣菜 「うゝっ…。ほら、朝にちよつと出撃があつて、その疲れがちよつと残ってるだけだよ！」

夏樹 「そういや、ニュースでやってた。大変だったな」

拓海 「そんなにヤベエ相手だったのか？」

夏樹 「そういう話じゃないよ。日本のあちこちにデカイ爆弾が置かれて、ランドウがゲッターの引き渡しを要求してるんだ。渡さなきゃ、爆弾を爆破させるってさ」

拓海 「はア？何だよ、そりや。随分ちやつちい脅しすんだな」

夏樹 「ちやつちいって、東北の方じゃ、相当の被害が出たみたいだぜ？」

拓海 「本気でやる気ならとづくに全部爆弾爆発させてんだろ。ゲッターなんざ必要な

ら、日本をどうにかした後、いくらでも手に入れられらあ。連中には、それだけの力があるんだろ？」

夏樹「…そうかもしれないな」

拓海「要は、向こうに舐められてんだよ。まさか、本当に引き渡すってんじやねえだろうな？」

李衣菜「……」

拓海「おい、まさか……！」

李衣菜「仕方ないよ。脅しでもなんでも、それでみんな助かるなら」

拓海「リーナ、テメエ…、それを黙って見てるんじやねえだろうな……！」

李衣菜「…どうすればいいの？これは、私一人の問題じやないんだよ？」

拓海「バカツ！ならテメエは、ゲッターをランドウなんか簡単に渡してやってもいいってのか!？」

夏樹「やめろよ。だりーがそんな事、思ってるわけないだろ？」

拓海「……」。どうだか。喉元にナイフ突きつけられたからって簡単に降参しまうような奴だ。んな軟弱な神経してる奴、ゲッターがなくなつてよかつたとか内心思つてんじやねえのか？」

夏樹「おい、言い過ぎだぞ！」

拓海「アタシなら、政府を敵に回したって絶対に渡さねえ！敵に渡しちゃうくらいなら、この手でぶっ壊してやるッ！」

李衣菜「…自分で戦ったこともないのに、勝手なこと言わないでよ！」

拓海「何イ…?」

李衣菜「拓海に戦いの辛さが分かるの？まともにメタルビーストに向き合ったこともないのに、自分の考えだけ押し付けられないで！」

夏樹「だりー…。お前…」

李衣菜「血ヘドを吐いて、目の前で大勢の命が奪われる瞬間を見てみなよ。命の重さが分かるから」

拓海「…ああ。確かに喧嘩以外、まともな戦いなんざしたことはねえ。命の重さなんて、実際に戦ってるリーナほど分かったつもりでもねえさ」

拓海「だがな！このままじゃオメエも、アタシら全員、ランドウに血ヘドを吐かされ続けることになるってのは分かる！アタシらはずっとランドウの言いなりになって、誰だって逆らう事が出来ねえようになる！」

拓海「それを阻止できないのは、ゲッターだけじゃねえのかよ!？」

李衣菜「……っ」

拓海「いいか、今のオメエは、弱気になって逃げ腰になってるだけだ！目の前に爆弾

をちらつかされて、縮み上がってるだけなんだよッ！」

李衣菜「……」

拓海「命の重さがなんだ!?!それを一番軽視してんのはどいつだ!?!テメエはそれをほつといて、黙ってられんのかよ!?!」

夏樹「……。その辺で止めとけよ。拓海」

拓海「何だよ、水差すんじゃないよ、夏樹!」

夏樹「お前の言い分も分かるさ。だけど、誰だつてお前みたいに強い訳じゃないんだ」
拓海「戦つてんなら、弱いも強いもねえだろうが!それとも何か?一回死ぬ思いすりゃあ、あとは逃げたつていいってのか?」

夏樹「逃げたつていいだろ?何でそこまでして傷付いて、戦わなきゃならないんだ?」

李衣菜「ふ、2人共……!喧嘩はダメだつて……」

拓海「あのなあ……!出来るんなら、アタシだつてこいつの代わりに戦つてやりてえよ。だが、ロボットに乗って戦うなんて、誰にだつて出来るわけじゃねえ」

拓海「乗つて、戦うつてのは、責任を負うつてことなんだ!一番前に立つて戦う奴が諦めちまつたら、後ろにいる連中はどうすりゃいい?メタルビーストブツ飛ばすことも出来ねえ奴は、一緒になつて諦めるしかねえだろ!」

李衣菜「……!」

夏樹「だからって、アタシらが戦うことを強制してもいいのかよ？それは傲慢なんじゃないか？」

拓海「それがどうしたってんだ！アタシは生きることを諦めたくねえ。だったら傲慢になつたって構わねえ！」

夏樹「お前はそれでいいかもしれないけどさ。傷付いて、辛い思いするのは李衣菜なんだぜ？」

拓海「そんなくらいの覚悟ぐらい、とつくに出来てんだろが！でなきや、今まで何で戦ってきたってんだ？遊び半分で戦ってたわけじゃねえんだろが！」

夏樹「……お前なあ……！」

李衣菜「もういいよ。なつきち」

夏樹「だりー……」

李衣菜「ありがとうね。私のために、言ってくれて」

夏樹「……だりーのため何かじゃないさ。だりーに傷ついてほしくないってのは、アタシの我が儘さ。やっぱカッコ悪いよな。さんざんお前のこと、誇りだとかなんとか言つててさ」

李衣菜「それでもだよ。私って幸せだと思う。私のために、本気で言い争ってくれる人が、2人もいるんだもん」

夏樹「ははっ…」

拓海「ケツ…!」

李衣菜「うん。だからこそ、2人のことちゃんと守りたいって思った」

夏樹「…出来るのか？」

李衣菜「…ホントはね？AV58が爆発するの見て、戦うのが怖くなった訳じゃないんだ。全部、私の言い訳」

夏樹「……」

李衣菜「勿論、死ぬのが怖くないって訳じゃないよ。今回の事で、それを改めて実感したけど、怖いのは、死ぬことだけじゃないの」

拓海「どう言うことだ？」

李衣菜「……私ね、誰かのためって戦ってるつもりなんてなかったんだ。全部自分のため、私がロックでいるために、いようとするために、ゲッターを利用してんだ。誰かのためって言うのは、卯月達がやってくれる。私はその中に混じって、一緒にいるだけで、自分勝手なのを誤魔化せるって思ってたんだ」

李衣菜「けど、卯月達もいなくなつて、今日本を守るのはネオゲッターだけで…。たくさんの人の命を、私が背負わなきゃいけない。もしここで私達が負けちゃったら、もつとたくさんの人が死んじゃう…。そう思うと、戦うのが怖かった。たくさんの人の

命と、責任を背負うのが怖かったんだ」

李衣菜「あははっ…。ホント、ロックじゃなかったよね…。今までやりたいうようにやってて、やりづらくなつたから、今度は逃げようとして…。こんなの、誇りなんて言ってもらわ価値ないよ」

拓海「ホントだぜ。ったくよ。ロックバカのお前が、尤もらしく悩みこんでんじやねえぜ」

李衣菜「ちよつと…。その言い方は酷くない?」

拓海「なら少しは自信持てよ。何のために戦つてようが、どんな理由を背負つてようが、お前はお前だろ? お前らしく、ロックに行きやあいんだよ!」

李衣菜「拓海…!」

夏樹「お前らしく、か…」

李衣菜「なつきち…」

夏樹「ホントにいいんだな? もう、元には戻れなくなるかもしれないんだぜ?」

拓海「お前はホント、水差すよな」

夏樹「大事なことだ! 怖いなら怖いでもいいんだ。戦いから逃げ出したって、何かが変わる訳じゃない。普通のアイドルに戻るだけなんだ。その事に、誰も文句は言わないだぞ?」

李衣菜「……。分かつてる。戦うことがロツクとか、そう言うことを私も思つてるんじゃない」

李衣菜「けどね？なつきちや、拓海：プロデューサーさんに事務所のみんな。私のことを想つてくれてる人がたくさんいるんだ。そういう人達を、守りたいって思った。今の私なら、それが出来る」

李衣菜「だから、守らせてよ！みんなの明日をさ！」 ニッ

夏樹「だりー…」

拓海「へっ、カツコつけてんじゃねえぞ」

李衣菜「えっ…。いいじゃん、ちよつとくらい」

拓海「二丁前に啖呵切つたつて事は、これからどうすりやいいか、ちゃんと分かつてんだな？」

李衣菜「うんっ。2人には、迷惑かけちゃうと思うけど…」

夏樹「迷惑なんかじゃないさ」

李衣菜「えっ…」

夏樹「言つただろ。だりーはアタシ達の誇りだつて。そいつのする事を、迷惑になんて思うわけないだろ」

李衣菜「ホントに…？」

夏樹「ああ。だから、ランドウを思いつきりブツ飛ばしてこいッ！」

李衣菜「うんっ！2人の分もしっかりと、ゲッターの拳に思いを込めてランドウをぶん殴ってくるから——」

くくく その夜、新早乙女研究所 格納庫 くくく

——…タツタツ

李衣菜「……ネオゲッターロボ……。お前も、守ってきたものを壊すのは嫌だよな？」

「ゲッター相手に何喋ってるのくく？」

李衣菜「ゲ……。か、加蓮……。どうしてここに……」

加蓮「リーナこそ。こんな夜遅くに格納庫なんか忍び込んで何してるの？」

李衣菜「……止めないで。目を瞑ってくれと嬉んだけど？」

加蓮「……つてことは、考えることは一緒か……」

李衣菜「え……？」

加蓮「ほら」 ボンッ

李衣菜「わっ！……つとと」

投げ渡されたポストンバックを受け取る。

李衣菜「これ……」

加蓮「数日分の着替えと、日用品、それに生理用品も。着の身着のまま海外旅行も

ないでしょ？」

李衣菜「旅行って…。何をするか、分かっているの!？」

加蓮「言ったでしょ。考えてる事は一緒だって」

李衣菜「…! これは私一人の問題でいい! 反乱分子になるのは、私一人だけでいいんだよ…!？」

加蓮「なら、その反乱分子に1人追加って事で」

李衣菜「本当にいいの…!？」

加蓮「いいのいいの。丁度海外にも行ってみたかったし」

李衣菜「あ、遊びに行くんじゃないんだよ…?」

奈緒「そうだな。あたしらは、ランドウをブツ飛ばしに行くんだ」

李衣菜「奈緒まで…!？」

奈緒「悪いことをする時は、人数が多いほうがいいって言うだろ?」

加蓮「初耳だけど、って…。奈緒、荷物多くない?」

奈緒「あのなあ…。着替えと日用品があつて、食料がなくてどうするんだ? 現地調達は厳しいぞ?」

加蓮「ああ…! そう言えば、確かに」

奈緒「まったたく…。肝心なとこ抜けてんだから。ホント、あたしがいないとダメなん

だな」

加蓮「ありがと。でも、結構な量用意したんだね？」

奈緒「まあな。一応、あたし達6人、これだけあれば何日かは持つだろ」

李衣菜「ん……? 6人？」

かな子「小麦粉とお砂糖の量が少し不安ですけどね……。牛乳は日持ちしないから持つていけないし」

李衣菜「か……かかかな子お!?!」

加蓮「ダイノゲッターチームも行くんだ？」

鉄甲鬼「言っておくが、俺達は反乱分子ではないぞ」

ニオン「元々人間共には、手を貸してやつてる立場だからな。戦う場所を変えるだけだ」

李衣菜「2人は分かるけど、かな子は？」

かな子「きつと卯月ちゃん達がいたら、同じようにするだろうなって」

奈緒「卯月達か……。そうかもな」

かな子「ううん。それだけじゃありません。私自身、ランドウのすることを放つておけないんです。私に何か出来ることがあるのなら、私が出来ることをしたい!」

加蓮「でも、流石にゲッター2機が抜けるのはマズいんじゃない？」

ニオン「フンツ。貴様らの事情など知ったことか」

鉄甲鬼「むしろ、これで使用が禁止されてるゲッターを使わざるを得なくなるだろう」
奈緒「それもそっか」

ニオン「お喋りは終わりだ。とつとと俺達のマシンに乗り込むぞ」

李衣菜「うん。——…って、大将…」

主任「……」

ニオン「どうする？始末するか？」

奈緒「流石に身内は勘弁してやってくれよ…」

主任「オメエら、こんな夜遅くに何コソコソしてやがる？」

李衣菜「私達、これからゲッターを奪って日本から出るよ」

奈緒「政府の決定に従えない過激派が、研究所からゲッターを奪ったって筋書きでな」
かな子「それなら政府の人にも、ランドウにも言い訳になりますよね？AV58の爆
破も、時間を稼げると思うんです」

加蓮「おまけにパイロット登録も所員登録も抹消された、組織とは無関係の人間が
やつてるんだもん。研究所への責任も、少ないはずでしょ？」

鉄甲鬼「それで気に入らなければ、恐竜帝国と百鬼帝国の残党に人質を取られたとで
も、何とでも言えればいい」

かな子「鉄甲鬼さん…」

ニオン「ふん…」

主任「お前達…。本気なんだな？」

李衣菜「…止めても無駄だよ」

主任「誰が止めるなんて言った？」

かな子「え…?」

主任「ほらよ」

李衣菜「こ、この仰々しいスーツケースは…?」

主任「応急処置程度なら何とか出来る工具や資材を入れといた。この中で整備の経験があるのはお前だけだからな。ちったあ役に立つはずだぜ」

李衣菜「役に立つって、大将!」

主任「餞別を渡してえのは俺だけじゃねえぞ」

李衣菜「え…?…整備班のみんな…!」

古田「防寒着や毛布もちやんと持つてかないとダメですよ!」

整備員「李衣菜ちゃん達が準備を終えるまでに、ネオゲッターとダイノゲッターのオーバーホールを終わらせておきました!新品同様に動くはずですよ!」

整備員2「火器弾薬も十二分に。ソードトマホークと同じ要領で、ネオゲッターには

重火器も搭載してます。ランドウ相手に思う存分使ってください!」

奈緒「みんな、仕事が早いんだな」

加蓮「流ツ石、プロフェツショナルだもんね」

李衣菜「みんな、ありがとう!」

主任「ゲッターは俺達が手塩にかけた、子供みてえなもんだ」

古田「それが日本を壊すところなんて、夢の中でも見たくないツスよ!」

主任「それが俺達の総意だ。分かつたらとつと行け! 橘博士達には俺達が言い訳し
といてやる!」

「ほう…。どんな言い訳なんだ? 是非聞かせてもらいたいところだが」

かな子「晶葉ちゃん…、それに、橘博士も…」

橘「これだけの人数、いくらコソコソしていても、隠し通せるものではないぞ?」

主任「うっ…」

晶葉「盛り上がっているようだが、お前達の無責任な行動で、どれだけの被害や犠牲
が出るのか、想像できているか?」

奈緒「ランドウを野放しにしておいたら、それ以上の被害が出る。あたし達はそう判
断したんだ」

加蓮「そ。だからゲッターは奪われたんだよ。政府の正式な決定が出る前に、ね」

橘 「そんな子供の言い訳が、本当に通用すると思うかね?」

李衣菜 「子供の言い訳を、大人の言い分にするのが、博士達の仕事でもあるんじゃないですか?」

橘 「……」

晶葉 「ふっ…。言い切ったな」

かな子 「私達は、死に行くんじゃないですから。それでも、死ぬ気で戦ってきます」
李衣菜 「橘博士も、命を懸けて仕事してくれてもいいんじゃないですか?」

橘 「……ふふっ」

晶葉 「お前達、何をボサツとしている!」

古田 「……?」

晶葉 「私達は、研究所の人間だ。反乱分子からゲッターを守るために、抵抗はしなくてはな」

古田 「…はいっ!」

李衣菜 「よおし、みんな! 捕まる前に早くゲッターに乗り込めえ!」

奈緒 「おう!」

加蓮 「うんっ!」

ニオン 「…茶番だな」

鉄甲鬼「だが、これで行くべき道は決まったな」

ニオン「確かに。なら、たまには茶番に付き合つてやるか！」　ズアツ

整備員「ぎやつ!？」

鉄甲鬼「それもそうだ、な！」　ガツ

整備員2「ヒデブツ！」

かな子「ふ、2人共…何してるんですか…？」

ニオン「俺達は政府の決定に背く反乱分子。なら、向こうに負傷者がいないのは可笑しいだろうが！」

かな子「こ、殺しちやダメですよ〜！」

鉄甲鬼「心得ているツ！」

主任「リーナ！」

李衣菜「大将…！」

主任「…荷物になるだろうが、これも持っていけ」

李衣菜「これって…！」

拳銃。

主任「これからの戦いは、誰もお前を守つちやくれねえ。自分の命と、仲間の命ぐらい、自分で守れ」

李衣菜「……うんっ。ありがとっ！」

タツタツ——

古田「ゲッターに乗り込まれたッス！」

晶葉「やむ終えんな。これ以上研究所を破壊される前に、ハッチを開け！」

古田「了解ッス！」

ミンナーカナラズイキテカエツテコイヨー ガンバレー マケンナヨーツ

李衣菜「…ははっ、これじゃあまるで、盛大に見送られてるみたいだ」

奈緒「みんなの思いは、無駄に出来ないぞ」

加蓮「それは分かるけど、その前に先ずは自分のために、ランドウを倒す！行こ、リ—

ナ—

李衣菜「うんっ！ネオゲットマシン、発進ッ!!」

未だ爆発の起こる格納庫から、ネオゲットマシンが飛び出し、それにダイノゲッターが続く。

——。

奈緒「よし、先ず強奪は成功だな！」

加蓮「そうやって聞くと、本当の悪者みたいに聞こえるけど…」

李衣菜「このままランドウを倒せなかつたら、そうなるかもね」

鉄甲鬼「無論、そのつもりなどないのだろう？」

李衣菜「トーゼンツ。——あつ」

かな子「どうかしたんですか？」

李衣菜（…道路の上にバイクが2台…。あれって、なつきち達だよね…）

拓海「見ろよ。ゲッターが飛んでるぜ」

夏樹「ああ。研究所の方から爆発も聞こえたし、何かあつたんだろうな」

拓海「…生きて帰ってこい、ぐれえ言ってやらなくて良かったのか？」

夏樹「いいんだよ。それを言ったら、だりーが全力で戦えなくなるだろ？」

拓海「はっ…！そうかもな。尤も、生きて帰ってこなかったら、承知しねえけど」

夏樹「……」

夏樹（だりー…。負けるんじゃないぞ…！）

李衣菜「なつきち、みんな。…いつてきます！」

ニオン「先ずはどこへ向かう？」

李衣菜「私達の事を受け入れてもらえそうなところ」

かな子「そんなところあるんですか？」

李衣菜「アラスカ戦線だあ〜!!」

〜〜〜 翌日。 新早乙女研究所 〜〜〜

『———どう言うことだ!?ちゃんと理由を説明しろッ!』

橘 「ですから、先程から何度も申し上げているとおりです、官房長官。ゲッターは、対ランドウ過激派を名乗る連中に奪取されてしまいました」

『早乙女研究所のセキュリティは首相官邸と変わらんはずだ!なのに何故こうも簡単にゲッターが奪われる!?!』

橘 「…予定されていたゲッターの引き渡し…。その打ち合わせのため、警備員が数名抜けており、警備が手薄になっていました。その隙を狙われたものかと」

『何故犯人が警備が手薄になることを知っている!?!所員の中に内通者がいるのではないか!?!』

橘 「我々を疑っておられるのですか?昨夜の襲撃で、私も含め何人もの負傷者が出ているのですよ?」

『……もういい。ともかく残ったゲッターだけでも引き渡しの用意をしろ!今は貴様に責任を追求している場合ではないからな!』

橘 「それが、格納庫を襲撃させてしまったため、残されたゲッターも損壊しており、す

ぐに引き渡しとは行かない状態です」

『貴様……!』

橘 「つきましては、ランドウにゲッター引き渡し期間の延長と、再度の交渉をお願いしたく……」

『……。全ての問題が解決したあと、然るべき場所で責任の追求があると思えよ!』

橘 「はい……!」

晶葉 「……」

ツカツカ——

—— 晶葉自室。

晶葉 (…李衣菜達は戦場へと向かったか。早乙女博士、貴方はこれも、予め知っていたんでしょうね)

晶葉 「……だからこそ、貴方はこれを私に遺した。戦いの激化を予想して、新しいゲッターロボの設計図と、その素体を」

ピッ

晶葉 「早く仕上げなければ……。これからの戦いに必要なる、この力を——」
つづく

第8話『アラスカ戦線』

— アラスカ・カナダ国境線。

兵士「うわあああああッ!？」

兵士「何なんだ!?何なんだってんだよ、アイツらは!」

兵士2「まったくだ。撃つても撃つても、倒れもしねえで向かってくる」

ランドウ兵「……」

ズンズン…

兵士2「ホントに同じ人間なのか？」

兵士3「単に最新技術で武装した兵士つてのとは違うな。やっぱ、体の中身も改造されてんだろ」

兵士「俺はイヤだッ!こんなゾンビみてえな奴らと戦うために軍に志願したんじゃねえ!!俺は帰る!故郷に帰るッ!!」

ガッ

兵士「ウッ…」

兵士2 「隊長！」

隊長 「このバカは後ろで寝かせとけ」

兵士3 「隊長、反撃の準備が出来たんですね！」

隊長 「ああ。こちらも反撃をしながら、ここから後方2キロの地点まで後退する」

兵士2 「2キロ……！こちらの武器も弾薬も、もう限界ですよ!?!」

隊長 「お前も軍人のつもりなら甘えたこと抜かすんじゃないやねえ！それが出来なきゃ俺達やここで死ぬんだよ！」

兵士2 「……！」

隊長 「分かっただらとつとと下がるぞ！その装甲車にありったけの武器と弾薬を乗せろ！」

兵士3 「了解！」

残されたわずかな武器と弾薬を乗せ、装甲車を走らせる。

隊長 「アリー！お前は荷台から敵を撃て！」

兵士3 「了解！——くたばりやがれッ!!」

バラバラバラバラッ

隊長 「よし……！」

アクセルをベタ踏みで、目的地を目指して速度を上げる。

兵士2 「ほ、ホントに間に合うのか……？」

隊長 「こつちの心配してんなら、黙ってジーニーの看病でもしてろ。そいつは故郷に家族を置いてきてんだ。独身のテメエと違って、簡単に死ねねえんだ」

兵士2 「じ、自分にも結婚を約束した恋人がいます！」

隊長 「だつたら俺を信じろ。大丈夫、こつちにや勝利の女神がついてんだ。そう簡単に負けるもんかよ」

兵士2 「……」

兵士3 「た、隊長……！メタルビーストがこつちに来ますッ！」

隊長 「何とか出来ねえか!？」

兵士3 「この車の装備じゃ無理ですよ！」

隊長 「……ッ！ジーザス……！」

陸戦型メタルビースト《——ッ!!》

兵士2・3 「うわあああああ……ッ!!?」

小型竜のように華奢な体軀をした、陸戦型メタルビーストの鋭い爪の一撃で、装甲車が吹き飛び、乗組員が弾き出される。

隊長 「ぐっ……！だ、大丈夫か……？」

兵士2 「た、隊長……！アリーが……アリーが！」

隊長「!?…大丈夫だ、まだ息はある」

兵士2「ですが、このままでは…!」

メタルビースト《——!!!》

メタルビーストが迫る。

「おらああッー!」

隊長「ッ!?」

隊長達の後方から、宙に打ち出された拳が、襲い掛かるメタルビーストを打ち砕く。

隊長「ネオゲッターロボ…!間に合ったのか!」

奈緒「お待たせ!隊長さん達!」

兵士2「ああ…!助かった…!」

奈緒「あたしの後ろに回収班のみんなが待機してる!急いで合流してくれ!」

隊長「いや、我々にもまだ武器はまだある!ここを君一人に任せるわけには…!」

奈緒「状況見ろって!人間サイズの武器じゃ、メタルビーストは倒せないだろ?」

隊長「だが…!」

奈緒「隊長さん達も大事な戦力なんだから、ここは退いてくれよ!」

隊長「…分かった…。救援に感謝する!」

タッタッ——

奈緒「へへっ、…さてと！」

メタルビースト《——ッ!!》

奈緒「一人乗りだからって甘く見るなよな〜! お前らなんかあ!」 バツ

左右の腕に担ったライフルとランチャー、そして両肩のシオルダーミサイルを一斉に展開する。

奈緒「歩兵だって容赦なんかするもんか! ——喰らえッ!!」

一斉射撃。

ドワッ

ネオゲッター1の目前に、無数の弾薬と爆薬がばらまかれ、巨大な黒煙が立ち上った

――。

くくく 野戦病院 くくく

李衣菜「……」 キョロキョロ……

李衣菜「……あ、ネオゲッターが帰ってきた! みんな〜! ネオゲッターが帰ってきた

よッ!」

オオ……! ザワ……ザワ……

兵士4「ゲッター以外の戦力の数はどうだ?」

李衣菜「ちよつと待つて! う〜…んと、ね…。装甲車が一台減つて…。奈緒の奴、

戦力は貴重だつて言ったのに……」

兵士4「一台ぐらいならまたニコイチで直せばいいさ。それより、人的被害が出てないか心配だな」

李衣菜「うん……。取り敢えず迎えに行つてくるね？」 タツ

李衣菜「奈緒く！おかえりく」

奈緒「おう、ただいま。いやあ、今日も大した相手じゃなかったぞ」

李衣菜「また敗残兵狩りのメタルビーストだけ？」

奈緒「ああ。戦車や装甲車じゃヤバイかもしれないけど、やつぱゲッターに掛かればな。……へへっ」

李衣菜「……とか言つて、また装甲車一台壊したよね？」

奈緒「うっ……」

李衣菜「残骸の中から使えるの見つけて、作り直すの大変なんだからね？」

奈緒「それはな……！」

隊長「いいや、リーナくん。彼女は悪くない。後退の指示が遅れた俺にあるんだ」

李衣菜「隊長さん。負傷者の方は……」

隊長「ああ、アリーがメタルビーストの攻撃をもろに喰らっちゃまって、重傷だ。直ぐ

に治療室へ運ばせた」

李衣菜「そうですか……。ごめんなさい、ネオゲッターの修理が遅れて、襲撃への対応が遅れちゃって……」

隊長「補給だつてろくに受けられないんだ。その状況下の中で、よくやってると思うぜ」

李衣菜「逃げ延びてきた整備班の人達がみんな優秀で、正規品じゃないパーツも上手く使いこなしてくれるからです。：私達なんて、何の役にも立ててなくて……」

隊長「メタルビーストに戦線をズタズタにされちまって、命からがら逃げてきた俺達を、あんたらが保護してくれたから、こうして戦力を立て直し、小規模ながら反撃する事が出来てんだ。だからあんま謙虚になりすぎんな。こつちが縮こまっちゃまう」

李衣菜「あ：はは：。そうだ、前に話してた、メタルビーストから部品を回収するつて言うのは……」

隊長「ああ。言われた通り、3体程メタルビーストを回収した。上手く使い回せるといいんだがな」

李衣菜「分かりました！この後ハロルドさん達と行って見てみます」

隊長「よろしく頼むよ。あと、ランドウの兵隊が使っていた武器や弾薬も回収してきた。それらも使えるように出来るかね？」

李衣菜「…どうでしょう？専門的なことは、私には分からないし…。とにかく、整備班の人達と話し合ってみます」

隊長「頼むぜ。それじゃ俺達は休ませてもらうぜ？…」

李衣菜「はい。ゆっくり…とは行かないかもしれませんが」

隊長「ははっ。後は任せませ」

スタスタスタ――

奈緒「……」

李衣菜「奈緒、どうかした？」

奈緒「何でもない。それより、加蓮や他のみんなは？」

李衣菜「ああ、そう！聞いてよ！今日市街地から離れた郊外の方まで行ってみたら、放棄された畑を見つけてさ」

奈緒「へえ、食料になりそうなのか？」

李衣菜「それはまだこれから。ただ育ててたのが、どうもジャガイモみたいで、加蓮が目の色変えて調査について行っちゃった」

奈緒「ああ、ポテト欠乏症を発症してたかあ…」

李衣菜「ジャガイモなんて言っても、ここじゃあ貴重な食料だしね…」

奈緒「かな子は今日も負傷者の看病か」

李衣菜「うん。患者からの評判はいいよ。暖かくて包容力があって、お母さんみたいだつて」

奈緒「ははっ、十代で母親扱いはイヤだなあ」

李衣菜「でも、かな子はやりがいあるつて言つてたよ？死んだ目をしてここに来た兵士の人達が、自分と接して笑顔になつていくと嬉しいんだつて」

奈緒「…そつちの方がアイドルらしいか」

李衣菜「ニオンと鉄甲鬼はゲットマシン2機で偵察に出たよ。もうすぐで帰つてくると思うけど」

奈緒「人手が足りないよなあ。あたしらが3人揃つて、まともにゲッターに乗れないなんて」

李衣菜「それでも、さっきの隊長さんとか、回復した人達が手伝つてくれるようになってるから、もう少しだよ」

奈緒「もう少ししか…。テキサスとは、連絡が着いたのか？」

李衣菜「…まだ。何処かで電波が妨害されてるみたいで、通信機は雑音だらけで何にも聞こえないよ」

奈緒「通信手段を遮断するのは戦争の常套手段だけどさ。あたしらがここに来てから一週間。テキサスと連絡がとれないと、流星にそろそろマズいんじゃないか？」

李衣菜「そうだね…。機材とかはまだ使えそうなのを使い回して何とかなるけど、食料の方はね…」

奈緒「せめて近くにアメリカ軍の本隊がいればいいんだけどな」

李衣菜「…とにかく、軍の誰かと連絡が取れるまでは、現地で手に入れられるので何とかするしかないよ」

奈緒「そのために、ランドウのあの気持ち悪いメタルビーストまで利用することになるとは思わなかったぞ」

李衣菜「見た目はあんただけど、一応はゲッターとか他のマシンと同じ、機械で出てるはずだから…。上手く加工できれば、装甲の代わりくらいには使えると思うんだけど…」

奈緒「ホントに大丈夫か？何か侵食されて見た目変わったたりしないか？」

李衣菜「あはは…。それはやってみないと」

奈緒「…ホント勘弁してくれよ。ネオゲッターだって、ゲッタービーム・キャリアを発電機代わりに置いてて、武装が心許ないんだ」

李衣菜「ああ、あれ…スゴいよね。技術士さんの提案だったけど、ホントにビーム・キャリアのエネルギーを電力に変換できるなんて」

奈緒「日本で何だかんだ言われてるゲッター線だけど、エネルギー問題に直面したら

やっぱ役に立つんだよな」

李衣菜「エネルギーはビーム2発分だけどね。それでも、この病院に必要な機材を動かすには、何とか役立ってるみたいだよ」

奈緒「お陰で、ゲッターはパワーダウンだ」

李衣菜「そこは腕と戦術でカバーだよ」

奈緒「加蓮の台詞を盗ってやるなって。でもまあ、最終的にはソードトマホークで何とかするしかないか」

李衣菜「そうそう。今回の偵察で、ニオン達がランドウの拠点の情報でも持って帰ってきてくれるかも知れないし、そうなったら、いよいよランドウ相手に反撃開始だよ！」

奈緒「……よし、見てろよ……！何時までもやられっぱなしって訳じゃないからな！ ランドウ——！！」

——。

くくく アラスカ プルドーベイ東南20キロ地点 くくく

「ランドウ軍移動要塞 ドラゴンタートル」

—— 指令室。

「……ヤシャ司令官、入ります」

ヤシャ「……ヘルレザーか。接近してきたアメリカ軍の迎撃、大義であった」

ヘルレザー「あの程度、相手にもなりませんよ。米軍はよくもあの戦力で、このドラゴンタートルに攻撃を仕掛けて来るものです」

ヤシャ「恐らく偵察だろう。現に、奴らが最近設立したと言うスーパーロボット部隊は、未だその姿を見せておらん」

ヘルレザー「確か…、ステルバーとか言う玩具の事ですか？たかだか5、6機ロボットが投入されたところで、我々の勝利は揺るぎないと思えますが？」

ヤシャ「奢るな、ヘルレザー。先の2つの帝国も、人間共の底力を見誤ったが故、敗北したのだぞ」

ヘルレザー「…はっ。失礼致しました」

ヤシャ「今は優勢で進めているが、この状況が何時までも続くとは限らん」

ヘルレザー「司令…。司令ともあろうお方が随分と弱気な発言を…。まさか状況に変化があつた訳でもありませんまい？」

ヤシャ「……」

ヘルレザー「まさか…？」

ヤシャ「第4戦線に派遣したメタルビースト部隊が、壊滅したと報告を受けた」

ヘルレザー「…！第4戦線と言うと、確か敗残兵狩りの部隊を展開していた地点ですね。どうしてそんなところか…」

ヤシャ「群れからはぐれた子犬が2匹、アラスカ戦線に迷い込んだらしい」

ヘルレザー「子犬…？もしや」

ヤシャ「ゲッターロボだ」

ヘルレザー「ゲッターロボ…！奴らが今、このアラスカに？」

ヤシャ「そうだ。アメリカ軍の敗残兵が、奴等を中心に戦力を立て直しつつあると報告を受けた」

ヘルレザー「フ…フフフツ…。ゲッターが、まさか自ら、我々にその首を差し出しに来るとは」

ヤシャ「ゲッターと言えど、所詮紛い物のネオゲッターロボ。そんなマシンが今更姿を見せたところで。磐石たる我が戦力は揺るぎない」

ヤシャ「しかし、後顧の憂いは断っておかなくてはな。ランドウ様の覇業を、虫けら如きに混乱されるわけにはいかんのだ」

ヘルレザー「…では、ランドウ様への報告は後回しになさると？」

ヤシャ「ランドウ様は今、覇道を往く最中。雑事は我々で片付けるのが筋ではないか？」

ヘルレザー「御随意に…」

ヤシャ「ヘルレザーよ。此度のゲッター征伐、指揮はお前に委ねる」

ヘルレザー「はっ…。よろしいのですか？」

ヤシャ「ワシはランドウ様から受けたアラスカ・カナダ侵攻のため、このドラゴンタートルから離れる事はできません。だが、ワシの一番の配下であるお前になら、紛い物のゲッター如き倒せるはずだ」

ヘルレザー「は…はっ！ヤシャ司令官の多大な信頼と期待に応え、このヘルレザー、30時間以内にケリを着けてご覧にいきましょう!!」

〜〜 夜。野戦病院 〜〜

かな子「——はくい、みなさん。夕食の準備が出来ましたよ」

李衣菜「やった！今日のスープにはジャガイモが入ってる！」

奈緒「まだ食べられる奴があつたんだな！」

加蓮「ご覧の通りよ。元々アラスカって日本の何倍もあるし、畑って言ったってアタシらの想像する数倍くらい余裕であるんだから」

奈緒「だけどこんだけ探すの、苦労したろ？」

加蓮「そりやもう。畑仕事なんてした事ないし、ひたすら土を掘り返して…、もう腰が痛くなっちゃった」

李衣菜「お疲れ様〜。ここのとこ数倍に薄めたコンソメに、川で釣ってきた名前も

分かんないちっちゃい魚しか入ってないスープばかりだったから、いい気分転換になるよ」

かな子「ごめんなさい…。ホントならもつと栄養価の高いものを食べさせてあげたいんだけど…」

李衣菜「あ、ご…ごめん…。そういうこと言ったんじやないよ…!」

奈緒「ま、状況が状況だしな。レシピが頭の中にあっても、材料がなけりや意味ないって」

かな子「だけど…」

李衣菜「私達がこうなってる原因は、アラスカで暴れまわってるランドウなんだから。そいつらを早くやつつけて、みんなで美味しいものでも食べに行こうよ」

加蓮「そのためにも、偵察の結果はどうだったの？」

ニオン「…ここから東に、およそ100キロほど行ったところに、軍事拠点らしきものを見つけた」

奈緒「マジか」

鉄甲鬼「ああ。おそらく、ランドウの野戦基地だろう。メタルビーストが出入りを確認した」

加蓮「ここを電波妨害してるのって、そこかな？」

ニオン「この病院の周辺に、それらしい軍事施設は確認されていないからな。その可能性は高いだろう」

李衣菜「つてことは、その基地さえ制圧できれば、テキサスと連絡がとれる？」

鉄甲鬼「軍用の無線も用意されているだろう。制圧さえ出来れば、可能だろうな」
奈緒「そつか、敵の拠点を攻めるんだもん。今まで以上の戦闘はあるつて事か……」

ニオン「場所は、ランドウが侵略の拠点として利用している所だ。規模は小さいかもしれないが、これまでの敗残兵狩りのメタルビースト部隊を相手にするのは、訳が違ぞ」

加蓮「怖いのか？」

ニオン「フンツ。貴様らの心配をしてやってるんだ」

奈緒「確かに、戦力は少し心配だよな……」

かな子「少なくとも、ランドウの本隊の一部と戦うわけですからね……」

李衣菜「ゲッターが2機に、動ける装甲車が数台……。うくん、ゴリ押しで何とか行け
そんな気もするけど……」

かな子「テキサスといつ合流できるかも分からないだし、ゲッターが必要以上に壊
れちゃうのはよくないよ」

奈緒「戦車で何でも、戦力を補充できればなあ」

加蓮「軍隊との連携もままならないのに、そんな都合よく……
ガヤガヤ……」

かな子「あら？ 何だか外の方が騒がしくくないですか？」

ニオン「敵襲か」

李衣菜「いや、そんな感じじゃないけど……。車のエンジンの音……？」

奈緒「様子、見てくるか？」

李衣菜「うん。鉄甲鬼達もついてきて。何かあった時、男手は必要だから」

鉄甲鬼「分かった」

――。

軍人「軍曹、到着しました！」

軍曹「……うむ。ここが噂の施設か？」

軍人「はい。見てください窓を布で覆って隠していますが、わずかに灯りが漏れていま
す」

軍曹「ふん。設備だけは立派なようだな。そして、あれが噂のゲッターロボか……」

隊長「――何の騒ぎだア？ これは？」

軍曹「貴官がこの施設の代表か？」

隊長「？ ええ。一応そうなっていますか？」

軍曹「ランドウ討伐に協力しろ」

隊長「いきなりかよ？ 貴殿方が何者か、所属も名乗らねえ相手に？」

軍曹「俺達はプルドーベイ前線基地に配属されていた、第73独立部隊だ。プルドーベイ陥落により、今は各地を周り、兵力となる人材を集めている」

隊長「それで、我々のところまで？」

軍曹「そうだ。ここには日本からやって来たゲッターロボがある。それに貴官のような精強な軍人も数多くいるようだ。にも拘らず、何故戦わない？」

隊長「ここにいる者達は各戦線で敗走し、命からがら逃げ延びた兵ばかりだぜ？ 皆それぞれに手傷を負い、中には動けない者もいる。そんな連中の回復を待たずして、ランドウ相手に戦争など出来ねえよ」

軍曹「軟弱なこと言つとる場合かア!? 今がどんな状況なのか、貴官は理解出来ていないようだな？」

隊長「ンだと？」

軍曹「プルドーベイは陥落し、多くの市街地もランドウの手に落ちた、このアラスカの地で平穏に暮らしていた民衆は、一瞬にして平和を奪われ、難民となって国境を越えたカナダのキャンプに身を寄せ震えている。そんな状況の中で、のんびり兵の回復を待つ指揮官がどこにいるかア!!」

隊長「だがよ、戦力が整ってなくちゃあ効率的な作戦の展開など出来ねえだろが！」
軍曹「貴様それでも精強を極めたアメリカ軍人かア!! 我々には先祖代々より受け継がれたフロンティア・スピリッツがある! それを今見せんで、ランドウが倒せるか!？」

隊長「精神論で何とかなるならなあ……! 俺達やとつくにランドウをアラスカから追いつてんだよ!」

李衣菜「隊長さん? 騒がしいですけど、一体何が……って」

奈緒「スツゲエ大部隊だな。戦車に高射砲、兵員輸送車まで……。こんなのが何処から来たんだ?」

隊長「り、リーナくん……! 彼らは……」

軍曹「東洋系の顔立ち……。貴様らがゲッターのパイロットか?」

李衣菜「え……。はい、そうですけど?」

軍曹「フンツ! こんな小柄な小娘共が、日本からの援軍とはな。まあ、連中にしたら上等な方か。日本人は何時だって、物資は送るが戦争には我関せずで、戦うことを非難しやがる」

李衣菜「むっ……。確かにそうかもしれないですけど、その言い方はないんじゃないですか?」

軍曹「事実を言ったまでだ。今回の戦争だってそうだろう? 戦術兵器レベルの爆弾で

脅されてるか知らんが、自分の国に引きこもり、他国で犠牲者が増えるのを良しとして
いる」

加蓮「血を流さないで、自分の国の人達を守ろうとしてるだけだと思っけど？」

軍曹「自国民を守ると言う大義名分は素晴らしいが、やっている事は相変わらずの弱
腰外交じゃないか。相手の顔色を伺うだけで平和になるなら、人間有史から戦争など起
きてはおらん」

奈緒「…あたしらだって、そうやって思うところがあつたから、こうしてここまでゲッ
ターに乗ってやってきたんだろ？」

軍曹「そうだろう。小娘とはいえ、ゲッターに乗って来たと言うんだ。戦う気がある
のなら我々に協力して戦え！」

加蓮「何それ？こっちにおんぶに抱っこで、ゲッターの力を頼りつきりにする気満々
なのに、協力？」

軍曹「小娘の理屈など聞くつもりはない。ここの代表者の答えは？」

李衣菜「……」

隊長「リーナくん、どうするんだ？」

李衣菜「え…、私が決めるんですか？」

隊長「勿論。ここに拠点を構え、傷付いた我々を治療し、助けてくれたのは君達だ。君

が日本からやって来たゲッターチームの代表だと言うなら、俺達も君の判断に従うさ」

李衣菜「わ、私が、ここにいる人全員のこれからを決める……?」

加蓮「どうするの? 責任重大だよ?」

李衣菜「ち、茶化さないですよ……。一応、真剣に考えるからさ」

軍曹「貴様らに考える余地などあるまい? どこで誰と協力しようと、結果は変わらぬのだぞ」

奈緒「非常時だったのに、そうやって偉そうな態度とってる奴には、協力したくないって言ってるんだ!」

軍曹「何を〜!」

李衣菜「もう〜! 2人共、喧嘩はじめないでよ〜っ!」

——…ツタツツ

兵士4「た、隊長〜! リーナさん! 大変ですう!!」

隊長「どうした!? 何があった!」

兵士4「東の方向から、め、メタルビーストの大群が……!」

李衣菜「こんな時に敵襲!」

奈緒「あんた達が連れてきたんじゃないだろうな!」

軍曹「あん!」

加蓮「辺りには敗残兵狩りのメタルビーストが彷徨っているのに、こんな目立つ大部隊で移動してたら、気付くくなって方がムリだよな？」

軍曹「うっ…」

李衣菜「奈緒、加蓮。その人を責めるのは後回しにして、敵襲に備えよう。先ずは病院にいる怪我人を地下に退避させなきゃ」

かな子「そ、そうですね…！一人じゃ動けない人もいるから、何人かで手伝ってあげないと！」

李衣菜「ニオンと鉄甲鬼も頼める？きっと2人の力が必要になると思う」

鉄甲鬼「承知した」

ニオン「敵はどうする？」

李衣菜「私達で何とか時間を稼いでみせる。行くよ、奈緒、加蓮！」

奈緒「よっしゃ！」

加蓮「その独立部隊の人達も、もちろん協力してよね」

軍曹「だ、だが、ここでこちらの戦力を消耗するのは…」

奈緒「状況見て言えって。ここで協力出来ない奴に、これからも協力できると思うか？」

李衣菜「それに、敵の数が多いなら、逃げるにしたって戦力は減ると思うよ」

加蓮「だったら、ここでアタシ達で追い払った方が早いよね。違う？」

軍曹「む、むうく…」

野戦病院の近くで、爆発と火柱が起る。

奈緒「もうそこまで来てるのか…！」

李衣菜「ゲッターに急ごう！ 私達の病院と、ビーム・キャリアの発電機は何としても守らなきゃ！」

タツタツ——

ヘルレザー「ふ…フフフツ…。ゲッターを始末するために、先ずは近くの拠点に向かうつもりが、まさか向こうからゲッターのいるところに案内してくれるとは…」

ヘルレザー「私はツイてる！ここでゲッターを倒したとなれば、私にとって最高の栄誉となる！」

ヘルレザー「各機、周囲の施設や人間共は好きなかだけ破壊しろ。だが、ゲッターには手を出すな。奴はこの私が直々に始末するツ！」

「「了解ツ!!」

ランドウ兵「ヘルレザー様！ネオゲッターが動き出しました！」

ヘルレザー「フフツ！来たか。さあ、早くその首を差し出せ！ネオゲッターロボ！」

奈緒「アイツら……！ 周りまで滅茶苦茶に破壊しやがって！」

李衣菜「ネオゲッターの整備は終わってる……。エネルギーは十分じゃないけど、3人乗ってるなら！」

加蓮「久し振りだからって、呼吸忘れてたりしないよね？」

李衣菜「流石にそこまでは……。よし、ネオゲッターロボ、起動！」

ウウウウ……ンッ

隊長『リーナくん、先ずはこちらからの砲撃で、弾幕を展開し、敵を牽制する。抜けてきた敵を迎え撃つてくれ』

李衣菜「了解！」

隊長「そちらの部隊も頼みますぞ。こちらの射撃に合わせてくれればいい!!」

軍曹「い、言われずとも！」

隊長「全隊、一斉射ッ!!」

弾道が宙に線を描き、迫り来るメタルビーストや白銀の大地に黒煙と火の柱を生み出す。

李衣菜「ウツヒョー！ 戦車砲が加わるだけで、すごい迫力……！」

奈緒「一瞬で目の前が火の海だ……。間違っても味方の攻撃に当たらんじやないぞ」

李衣菜「うんっ。後ろもこっちに当てないようにはしてくれてるみたいだけど、気を付けるよ！」

加蓮「それと、分かっているととは思うけど、この病院の発電機は…」

李衣菜「絶対破壊させない！ネオゲッターの武装でもあるしね。その為にも、出来るだけ引き付けて攻撃したいけど…」

奈緒「ネオゲッターのエネルギーが心許ない。やるならソードトマホークだ！」

李衣菜「やつば接近戦かあ…。よしッ！」

ソードトマホークを正眼に構える。

加蓮「弾幕から敵が出て来る…！」

李衣菜「何処からでも掛かってきて!!」

メタルビースト《——ッ!!》

李衣菜「やあッ!!」

一歩踏み込み、突出したメタルビーストを真つ二つに切り裂く。

奈緒「李衣菜！発電機が…！」

李衣菜「ッ…！」

即座に身を翻し、発電機に向けて放たれた攻撃をネオゲッター自身を盾にして受け止める。

李衣菜「ぐっ……！でえええいッ！」

反撃。メタルビーストに勢いよくソードトマホークを投じ、貫き破壊する。

李衣菜「チェーンナツクル！」

メタルビーストを破壊し、地面に突き立ったソードトマホークをチェーンナツクルを伸ばして回収。

李衣菜「これでえ……！」

更に、鎖を伸ばした状態で腕を振るう。鎖のしなりに合わせソードトマホークが躍動し、周囲に展開していたメタルビーストもまとめて薙ぎ払った。

李衣菜「どうっ!？」

加蓮「リーナ、奥から何か来るよ！」

李衣菜「!？」

ヘルレザー「ゲッター、覚悟!!」

李衣菜「ぐう……ッ!？」

天高く立ち上る戦闘の黒煙よりも、遥か高くから襲撃してきたメタルビーストを、ソードトマホークで受け止める。

李衣菜「コイツ、今までのと違う!？」

奈緒「ひよっとして隊長格か！」

李衣菜「それでも、こっちとパワーが互角なら……！」

ヘルレザー「甘いわッ！」

李衣菜「ッ！……うっ……!？」

メタルビーストの竜の頭部を模したかのような両肩のアーマーが根本から伸び、ネオゲッターの両肩に噛み付く。

李衣菜「がっ……！」

そのまま押し倒されるネオゲッター。

ヘルレザー「こちらの初撃を受け止めたのは褒めてやる。だが、私のメタルビースト・バトルギガーは止められんッ！」

加蓮「……このメタルビースト、人が乗ってるの？」

ヘルレザー「人お？私はそのような脆弱な存在ではない！ランドウ様の手により生み出された強化人類よッ！」

奈緒「結局容赦はいらないって事だな！」

ヘルレザー「小娘共が調子に乗るなよ！このまま貴様らのゲッターを粉砕してくれる！」

李衣菜「馬鹿にするなあ!!」

シヨルダーミサイルを発射。衝撃でバトルギガーはネオゲッターから離れる。

隊長「ぬう……！怯むなッ！我々に後退はない！！」

メタルビースト《——！！》

隊長「!?」

李衣菜「うああああああ——！！」

隊長「リーナくん……！」

隊長の部隊に迫ったメタルビーストの攻撃を、割って入ったネオゲッターが受ける。

李衣菜「うああ……！」

隊長「な、何故庇った！我々の事なぞ……！」

李衣菜「……た、隊長さんだって、私の大切な仲間だよ……！ムザムザやらせるわけにはいかないって……」

李衣菜「うあ——！」

バトルギガアの肩から伸びた顎が、ネオゲッターを捕らえ、持ち上げる。

ヘルレザー「ふん……。やはり人間など、脆弱な生物！仲間などと言うくだらんモノを庇って——」

ブオンツ

ヘルレザー「お前が死ぬかアッ!!?」

宙高くから、ネオゲッターを叩き付ける。

李衣菜「あ、あああああ……っ!!」

軍曹「げ、ゲッターロボが……!」

ヘルレザー「総員、一斉攻撃!ゲッターの目の前で雑魚共を消し飛ばしてやれッ!」

李衣菜「ぐ……っ……!やらせない……!絶対、やらせるもんかッ!!」

ネオゲッターを立ち上げ、跳躍。バトルギガーを飛び越え、メタルビーストの砲撃を一身に受ける。

奈緒「うあわあああ——!」

加蓮「く……ッ!」

李衣菜「奈緒、加蓮……!ごめんッ!」

奈緒「いいって。こっちは気にすんな!」

加蓮「防御に専念して!こっちも粘るけど、リーナが折れたらそれで終わりなんだからね!」

李衣菜「分かっている……!私達がどうなっても、ゲッターだけは倒さない!」

ガンツ ガンツ ドワッ

兵士「あ、あわわわ……!ゲッターロボが、破壊される……!」

軍曹「て、撤退だ……!ゲッターが盾になってくれている今のうちに、我々は退くんだ

！」

隊長「本気で言ってるのか!?俺達よりも若い少女達が、命を懸けて守ってくれてるつてのに!それを見捨てて、我々だけ助かるつてのか!」

軍曹「そちらこそ状況を見るツ!今の我々に何が出来ている!?!ただの足手まといだ!ここにいるだけ無駄なんだよ!!」

隊長「……!」

軍曹「ゲッターはまだ1機残っている。後方で態勢を整えれば、まだ反撃のチャンスはある。マシン1機に3人の命と、我々大人数の部隊…。どちらかなどと、天秤に掛ける必要はあるまい」

隊長「……。それでも、それでも彼女達は、我らを助けてくれた、命の恩人なのだ!」
ダツ

軍曹「貴様……!何をするつもりだ!」

ヘルレザー「…つまらん。まるで木偶の坊だ。呆気ない」

李衣菜「うつ……!ぐう……!」

ヘルレザー「その程度のマシンで、その程度の実力で、ランドウ相手に戦おうなどとは。片腹痛い!」

李衣菜「ぐあ……!」

バトルギガーがネオゲッター1を押さえ込む。

ヘルレザー「これで終わりだ！ここが貴様らの墓場となるのだッ！」

奈緒「ぬ、抜け出せないのか!？」

李衣菜「ゲッターのパワーが上がらない！背中から押さえられたんじや、シヨルダーミサイルも撃てない……！」

ヘルレザー「フハハハ……！他愛もないな！こちらはまだ、10分の1も実力を出して
いないぞ!!」

李衣菜「くうく……！」

加蓮「……！嘘でしょ？あれて……！」

奈緒「ゆ、輸送用のトラックが、何でこんな戦場のど真ん中に……!？」

李衣菜「ま、まさか……！」

隊長「……」

李衣菜「隊長さん!？」

隊長「ネオゲッターロボ！いや、リーナくん！今助けるぞ!!」

加蓮「輸送トラックで何をする気!？早く下がって！」

隊長「フフツ、それは出来ねえ相談だ！」

奈緒「隊長さん、まさか……！」

隊長「詰めるだけの燃料と、ついでに爆薬も積み込んだ……！メタルビースト一匹、怯ませるには十分だろうがッ！」

李衣菜「そんな……！やめてッ！」

隊長「そいつを押さええて、動くんじゃないぞッ!!」

ヘルレザー「小賢しい真似を……！」

李衣菜「隊長さん……！」

ガシッ

ヘルレザー「なっ……!?!」

隊長「へっ……！1機のマシンと3人の命より、1台のトラックと俺の命——！」

バトルギガーの頭部に、トラックが命中。燃料が火を噴いて積まれた爆薬に引火。爆破は巨大な火炎の奔流となってバトルギガーの上体を包み込む。

ヘルレザー「うがああああああッ——!!」

李衣菜「ッ……！」

ヘルレザーが怯んだ隙に離脱。

加蓮「た、隊長さん……！」

李衣菜「……ごめんっ」

奈緒「2人共、下を見るな！まだ敵はやられちゃいないぞ！」

李衣菜「……！」

ヘルレザー「うああああ……！よくも、よくもおく!!このバトルギガーに傷をおく
ッ!!」

奈緒「な、何だよ……。コイツ！」

ヘルレザー「貴様らがアアツ!!」

李衣菜「ぐう……！」

バトルギガーが暴れだす。

奈緒「ッ……！なりふりお構いなしかよ！」

李衣菜「こつちだつて、私だつて！後には退く訳にはいかないんだあ……！」

ヘルレザー「!?」

正面から飛び込んできたバトルギガーに、ソードトマホークの切っ先を向ける。

ヘルレザー「ぐわああああ……ッ！」

バトルギガーの左肩を破壊。

李衣菜「……頭に血が上がって、動きが単調になる分読みやすいよ！」

ヘルレザー「またしても……！ヤシヤ將軍から賜ったこのバトルギガーに、またしても
傷をく!!」

ガンッ

李衣菜「くっ……！」

怒りに任せて飛び掛かるバトルギガーが、ネオゲッターを押し倒す。

ヘルレザー「我らに淘汰されるだけの旧人類共が、決して許してはおかん！ 貴様のそのボディを破壊して、破壊して、破壊し尽くして！ みつともなく醜い姿で葬ってくれるうツ!!」

滅茶苦茶にネオゲッターに拳や足を叩き下ろす。

李衣菜「ぐ…っ、ぐう…！ だ、ダメージレベルはどんな感じ？」

奈緒「さ、さあな…。計器も何も、滅茶苦茶に壊れてて分かんないや」

加蓮「計器なんて目に見えるものだけじゃない。ゲッターのあちこち壊れてて、今本体そのものが動いているのが奇跡だって」

李衣菜「あはっ…。ゲッターだけじゃなく、私達も、つて意味？」

奈緒「いつそ降伏するか？」

加蓮「冗談」

李衣菜「そうだね。隊長さんの想いを、無駄にするわけにはいかないツ！」 グンツ

李衣菜「シヨルダーミサイルツ!!」

ボンツ

ヘルレザー「ぐわっ?! こやつめ…！ 虫の息の癖にまだ抵抗するかッ！」

李衣菜「今のが最後の一発！次は……！」

奈緒「残ったエネルギー、臨界まで上げとくぞ」

李衣菜「奈緒……」

奈緒「折角アラスカまで来たんだ、足跡は、きっちり残しておかないとな」

李衣菜「ありがと。2人は脱出してもいいんだよ」

奈緒「バカ言え。それならお前も脱出しろつて」

李衣菜「私は……、アイツを押しえなきやだから」

加蓮「だったらアタシらだっているでしょーが。今の状態のネオゲッターで、単独操縦でアイツを押しえ込むなんてムリムリ」

李衣菜「結局、2人もロックなんだから」

奈緒「言つとくけど、死ぬのはロックじゃないぞ」

李衣菜「……分かってるよ」 キッ

ヘルレザー「所詮は無駄な足掻きよッ！これでトドメだア!!」

李衣菜「来るな……！」

バトルギガーが高々と跳躍し、ネオゲッターが身構える。

ヘルレザー「死iiiiiiiiねええええッ!!」

李衣菜「——！」

砲音が響いた。

ヘルレザー「ぐっ——!?おわあああッ!!」

彼方から飛来した砲弾が、飛躍の頂点に達したバトルギガーに命中。爆炎に吞まれる。

加蓮「砲撃…?しかも、戦車なんかのじゃない…」

李衣菜「い、一体何処から…」

奈緒「見ろ!東の方、何かが来る…!」

李衣菜「何…あれ…?ダム?」

加蓮「違う…!おっきなローラーだよ!」

奈緒「只のローラーじゃないぞ…。人型の上半身みたいなのが着いてる。あれもロボット、なのか…?」

「わくっはっはっはっはっはっ!!間一髪だったなあ。ゲッターロボ!!」

ヘルレザー「今のアラスカに、テキサス以外にロボット戦力など…。誰だ?何者だ!」
「誰だとはいきなりご挨拶だな。まあ、丁度いいし名乗ってやるぜ!」

ボブ「俺はボブ・ホスナー」

サム「俺が弟のサム・ホスナー」

ボブ「そしてコイツが、カナダが誇る最硬のスーパーロボット、ロボ・ストーンT5

20さ!!」

奈緒「ロボ：ストーン：!?」

李衣菜「カナダの、スーパーロボット!」

ボブ「そう言うことだぜ!日本のおチビちゃん達!」

李衣菜「お、おチビちゃん：?」

サム「まったく、他人の敷地の目の前でドンパチやられてちや、流石に迷惑だぜ!ラ
ンドウさんよ!」

ヘルレザー「フンツ!そんな凶体ばかりのマシンが1機増えたところで!」

ボブ「へっ!凶体ばっかかってか!面白エ!」

サム「ゲッター!ちよつと退いてな!」

李衣菜「え。。。わあっ!」

ネオゲッターを脇へ退かし、メタルビーストの軍団に向かってその巨大なローラーを
回転させ、前進していく。

ヘルレザー「バカめ。。。!わざわざ死にに来るか!全軍攻撃開始ツ!!」

号令に従い、数十あるメタルビーストから、ロボ・ストーンめがけ一斉に攻撃が行わ
れる。が、

ボブ「ん?あられでも降ってきたかあ?」

サム「風で小石が巻き上げられただけさ、兄ちゃん」

ヘルレザー「こ、コイツ……！メタルビーストの攻撃をモノともしないのか!?」

ボブ「へっ！コイツは来るべき核戦争に備えて開発された秘密兵器よっ！」

サム「その気になりや核の衝撃と熱量にも耐えられる！テメーらの豆鉄砲なんざ痛くも痒くないぜ！」

メタルビースト《——！》

ボブ「お、今度は力比べか？」

何機かのメタルビーストが、ロボ・ストーンのローラーに張り付く。

ボブ「おいおい何だそのへっぴり腰はあく？もつと腰をいれて気張らんかいっ！」

メリメリメリッ

ロボ・ストーンの速度は止まらず、張り付いたメタルビーストを踏み潰していく。

ヘルレザー「さ、下がれ！奴に取り付くのは自殺行為だ！」

ボブ「へっ！そろそろ掃除の時間だな。サム！」

サム「OK兄ちゃん！ショルダーキャノン、スタンバイ！」

大口径のキャノン砲を、メタルビーストに向ける。

サム「発射ア!!」

バオッ

ロボ・ストーンの正面。周囲を爆炎が包み、メタルビーストが吹き飛んでいく。

李衣菜「スゴい…」

奈緒「あんなスーパーロボットがあつたなんて…」

加蓮「世界は広い、ね」

ヘルレザー「くっ…！ええい、上だ！上空から攻撃するんだ！」

メタルビースト《——ッ!!》

指令を受けたメタルビーストが跳躍。

ボブ「おっと」

そのメタルビーストが、突然爆ぜる。

ヘルレザー「何だ!?!」

ボブ「やれやれ、デモンストレーションは終わりってかよ」

ヘルレザー「デモンストレーションだど!?!どう言うことだ!」

サム「ランドウさんよ、まさか俺達が、ロボット1機でこの激戦地に乗り込んできた
とも思ってたのか?」

ヘルレザー「!?!」

李衣菜「あれ…!あの光って…!」

山を越え、大陸を越え、国境を越えて押し寄せる、カナダの国旗を引つ提げた無数の

陸戦部隊。

奈緒「すげえ……！何て数だ！」

ボブ「へへっ、俺達やカナダ義勇軍！国家の危機とアメリカへの義によりこの戦いに参戦するぜ！！」

ヘルレザー「ぐぐぐっ……！カナダ軍の参戦が、こうも早かろうとは……！」

ランドウ兵「へ、ヘルレザーさま……！ここは撤退を……！」

ヘルレザー「バカを言え！この状況で退けるか!?退いてたまるかッ！このまま、私の敗北を認めるなど……！」

ランドウ兵「しかし……！数の上でも相手の方が圧倒的……！こちらは戦線が崩壊していきます！ここは後退し、再戦の機会を伺うのが宜しいかと……グッ!!」

ランドウ兵が乗ったメタルビーストが爆ぜる。

ヘルレザー「!？」

ニオン「——随分と待たせたな」

李衣菜「ダイノゲッター……！ニオン！」

鉄甲鬼「随分と派手にやられたものだな」

奈緒「は、ははっ……。頑張っただろ？あたしら……」

かな子「奈緒ちゃん……。もう大丈夫ですから、ゆっくり休んでください……！」

ヘルレザー「ダイノゲッターにも合流されたか……。だが……！」
ヤシャ『ヘルレザー』

ヘルレザー「や、ヤシャ將軍……！」

ヤシャ『勝敗は既に決した。撤退せよ』

ヘルレザー「ですが……。ですがッ！」

ヤシャ『早くしろ。それともお前は、これ以上私に恥をかかせるつもりか？』

ヘルレザー「ぐう……。ぐう……。ぐうううううッ!!」 ピキピキッ

ヘルレザー「ぜ、全軍撤退ッ!!」

ランドウの軍団が、引き上げていく。

ボブ「あらら。パーティーはもうお終いかい？ デイナーを食い損なっちゃったぜ！」

サム「なら追撃するかい？ 兄ちゃん」

ボブ「いいや、今はこいつらを助けてやらねえと。そっちのトカゲもどきも残念だったな〜！」

ニオン「……フンッ」

鉄甲鬼「我々は念のため、周辺の警戒をしよう。ランドウが後詰め部隊を送ってこないとも限らん」

かな子「そうですね……。警戒に越したことはないと思います」

サム「ならそっちは任せませ。何かあつたらすぐに呼んでくれよな！」

ニオン「氣遣いは無用だ。貴様らは精々、人間同士舐め合っている」

かな子「わ、私も人間側何ですけど〜？」

バサツ ヒュン

サム「何だ？…キザな奴」

李衣菜「——…た、助かった〜」

奈緒「あたし達、生きてんのか…？」

加蓮「痛覚もあるし、ハツチの隙間からアラスカの北風が入ってきてて寒いから、多

分生きてるんじゃない？」

ボブ「大丈夫かい？おチビちゃん達」

李衣菜「あ、ありがとう…。お陰で助かったよ」

ボブ「なあに、大した事ねえって！」

サム「おチビちゃん達こそ、ちっちゃいわりにはよく踏ん張った方だぜ」

李衣菜「あはは…。だけど、隊長さんを守れなかった」

ボブ「戦争なんてそんなもんだ。誰かが命を張って守ってくれるから、次の誰かが戦

える」

加蓮「……」

ボブ「事情を深くは知らねえ。命を犠牲にした事を気にすんなどは言わねえ」
サム「けどよ、守れなかった、つて事ばつかに囚われてちや、今度は自分達が同じようになつちまうぜ？」

奈緒「…戦いは続く、か」

ボブ「そう言うこと！生きてる連中は、同じ生きてる奴のためにしか戦えねえんだから。ほら、立てるか？」

李衣菜「ごめんムリ…。もうネオゲッターのエネルギーもないや」

ボブ「ははっ！仕方ねえな」

奈緒「病院も壊れちゃったし、あたし達の手当てとかもどうすりゃいいんだか…」

サム「ま、もうすぐテキサスもここに来る。それまでの辛抱だな」

李衣菜「えっ！テキサスが来るの!？」

ボブ「おう！俺達やは元々、テキサスからの連絡を受けて、アラスカに来たんだぜ？」
李衣菜「そうだったんだ…」

サム「俺達カナダの戦力と、テキサスの部隊。それに、向こうも欧州とかから逃げしてきたスーパーロボットを集めてるって話だ」

加蓮「世界中からこのアラスカに、スーパーロボットが集結してるって訳？」

ボブ「おうよッ！そんでもって、アラスカを我が物顔で暴れまわるランドウに反撃開

「始さー！」

李衣菜「ランドウに反撃……。遂に、遂に光明が見えてきた——！」

つづく

第9話 『我ら、スーパーロボット連合!!』

ズズズズズズ……

「……」

副長「艦長、ロボ・ストーンが見えました。カナダ軍です」

艦長「うむ。近くにネオゲッターロボは確認できるか？」

副長「はい。かなり損傷しているようです」

艦長「そうか……。まともな戦力も少ない中、カナダ軍が合流するまでの間とはいえ、よく耐えてくれたものだ」

副長「偶然や奇跡では済まされませんな。やはり、彼女達の実力と言うことですか」

艦長「恐らくはそれだけではないと思うがな。合流と回収を急ごう」

副長「日本から来た戦力の中には、百鬼帝国や恐竜帝国の生き残りが混ざっていると報告を受けています。艦内で少々のトラブルが予想されますが？」

艦長「今は、共にランドウと戦う同志なのだろう。それぞれに遺恨がある者もいるだろうが、今の我々には清濁を併せ呑む器量も必要だ」

副長「了解しました。船員への伝達は徹底しておきます」

艦長「頼む。…周辺に敵の反応はないな？」

副長「はっ。展開している偵察部隊からも敵機発見の報告はありません」

艦長「よし、機関減速。カナダ軍およびゲッターチームと合流後、速やかに戦力を回収する。整備班は修理補給の準備、他の者も所定の位置で第二種警戒態勢。テキサスが再び動き出すまで、対空、対地警戒を厳とせよ」

副長「了解です」

—— 戦艦テキサス・格納庫。

整備兵「…これが噂に聞くゲッターロボかよ？」

整備兵2「ああ、あっちの恐竜っぽいデザインの赤い方だろ？カツコいいいな」

整備兵「いやいや、手前の青い奴もだよ」

整備兵2「は？あれはただの鉄屑だろ？」

整備兵「いやあ、ガラクタより酷えっつてのは分かるけどよ」

「そっちの方が直しいがあるってモンだろ？」

整備兵1・2「チーフ!!」

整備班長「テメーら、くつちやべってねえでとつとと仕事しねえか!!」

整備兵1・2 「は、はいっつ！」 ダツ

班長 「つたく」

「あの〜…」

班長 「ン？どこだ？」

「あゝつと、下…下です。目線下に…」

班長 「ン？おお！そんなとこにいやがったのか」

李衣菜 「そんなとこつて…。変なところにいたつもりはないんですけど？」

班長 「ハツハツハツ！悪い悪い。噂には聞いてたが、日本人つてのは、本当にちつちやえんだなく！」

李衣菜 「むう…」

班長 「体はちつちやエクセに、国からロボット奪つてランドウとドンパチしに来るたあ、大した根性だぜ。やるな、ネエちゃん！」

李衣菜 「あ…ありがとうございます。それで、ゲッターの事なんですけど…」

班長 「ああ、お前さん達が使つてきた奴な。正直、スクラップの方がまだマシつて状態だぜ。アテンならねえパーツがぎつと50…いや、それ以上はある」

李衣菜 「そんなに…」

班長 「ああ。よくもまああんな状態で動かせたもんだぜ」

李衣菜「また動かせるようになりますか？」

班長「ハハッ！そいつは心配要らねえ。ここは、ガラクタイじりが好きな連中が、そのまま職にしちまったような連中の集まりだ。ああいう機械の修理なんざお手のものだぜ！」

李衣菜「ホントですか？よかった…」

班長「おう！嬢ちゃん達は怪我の療養でもしながら、ゆつくり待ってるんだな」 スタ
スタ――

班長「テメーら！こいつが元通りになるまで休みはねえぞ!!きびきび働けえ!!」

李衣菜「……。何だか大将に雰囲気似てるなあ」

奈緒「ゲッターはどうだつて？」

李衣菜「何とかかなりそうだつて」

奈緒「そっか。ここまで来て、お客さんでいるわけにはいかないもんな」

李衣菜「奈緒の方はどうなの？怪我、大したことない？」

奈緒「ああ、まあ、軽い切り傷と打ち身だよ。あたしなんかより、加蓮の方がよっぽど酷いつて」

李衣菜「そんなに？」

奈緒「3号機のハッチのヒビから、アラスカの北風をもろに受けて、両手の指先が凍

傷だつて。操縦桿を握るのも、ギリギリだったらしいよ」

李衣菜「そんな状態で……。無理させちゃったかな……」

奈緒「無理と無茶は何時もの事だろ。まあ、患部は切らなくてもいいみたいだけど、しばらくは安静、だつてさ」

李衣菜「そつか……。ネオゲッターも修理が終わるまでは動けないし、加蓮にはゆっくり休んでもらおつか」

奈緒「だなく。あたし達はそれまでゲッターの整備の手伝いでもするか？」

李衣菜「うんつ……。あ、あつちから来るのつて……！」

メリー「Hi!リーナ、久し振りね！」

李衣菜「メリー!それにジャックも。2人共、無事でよかつた」

ジャック「ミーとテキサスマックがP o o rなランドウのメタルビースト如きに負けるはずがないぜ!!」

メリー「心配したのはこつちも同じよ。まさかゲッター2機だけでこつちに来て、まともな後ろ楯もなく戦っていたのでしよう?」

奈緒「それなりにね。けど、結構ギリギリだったから、合流できてこつちは一段落だよ」

ジャック「ゲッターの強奪はこつちでもN e w sになつてたネ。J a p a nの決定に

逆らう反乱分子のせいって事になってたガ」

李衣菜「あはは……。まあ、ランドウを倒すためには、そっちの方が手っ取り早いと思っただから」

ジャック「相変わらず、R o c kな生き様ネ」

李衣菜「でしょ!」

奈緒「今更だけど、その反乱分子を受け入れちゃって、ホントに良かったのか?」

メリー「大丈夫よ。ランドウを倒せば全部キャラに出来るわ」

奈緒「結局そうなるのか……。ま、その為に来たんだ。胸張って日本に帰れるように、頑張らなくちゃな!」

ジャック「その意気デースね!ランドウには一刻も早く、歴史の表舞台からV a n i s hしてもらいまシヨウ!」

李衣菜「うんっ!」

奈緒「それで、2人揃って格納庫に何のようだったんだ?…:出撃か?」

メリー「リーナ達を呼びに来たのよ」

李衣菜「私達を?」

ジャック「ミー達は面識があるからネ!それで、テキサスの艦長に連れてくるよう頼まれたのサ」

奈緒「成る程な」

李衣菜「私達も。メリー達と再会できたし。艦長も、それを分かつて2人に頼んでくれたのかな？」

ジャック「まあ、積もる話は艦長との挨拶の後にして、先ずは艦長室だネ。挨拶が終わったら、ミー達がテキサスの中を案内してあげるヨ」

李衣菜「あ、それなら先にかな子達を案内してくれる？かな子、お菓子作りたくてうずうずしてる感じだったから、厨房できたら貸してくれると助かるかも」

メリー「Wow！またかな子のスイーツが食べられるのね!？」

ジャック「それはGood Newsだネ！テキサスのCrewにも、かな子のSwetsを振る舞ってあげまショウ！」

奈緒「かな子、一体何人前作らされることになるんだ？」

李衣菜「ま、まあかな子もたくさんの人に食べてもらいたいって思ってるし…。結果オーライじゃないかな…？」

~~~~ テキサス・艦長室 ~~~~

艦長「よく来てくれた。ゲッターパイロットの諸君。私が、このテキサスの艦長だ」

李衣菜「は、はじめまして…!」

奈緒「よろしくお願ひしますっ」



奈緒（流石に艦長って言うだけあって、すごい貫禄…）

李衣菜（うわあ…。すごいヒゲ…。手入れとかしてるのかな…？）

艦長「君達は今、祖国にとって反乱分子として扱われている。だが、我々は目的を同じとする同志として、君達を歓迎しよう」

李衣菜「同志…。へへっ、何だか照れ臭いなあ」

奈緒「そう言ってもらえるのは助かるけど、ホントに受け入れてもらっていいんですか？…弾薬の補給とか、今もゲッターの修理とか、そっちの資材でやってもらっちゃってるけど…」

艦長「それについては心配は要らない。我々も礼節を弁えていないわけではないからな。多くの同胞の命を助けてもらったのだ。相応の礼をするのは当然だろう？」

李衣菜「お礼なんて…。大した事はまだ出来てません…。それに、助けようとした人全員を助けられた訳じゃないですよ」

艦長「全ての人の命を守る人間など存在しはしない。大事なのは何人守ったかではなく、一人でも多くの命を救うことではないかね？」

李衣菜「艦長…」

艦長「それにだ。補給に関して心配要らないと言ったのには、もう一つ理由があるんだよ」

奈緒「もう一つの？何ですか、それって…」

艦長「実はね、君達が日本を出奔してから、世界各地に物資や人員の補給、野戦病院にボランティアスタッフが派遣されるようになってね」

李衣菜「そんな事が…」

奈緒「偶然じゃないんですか？それとあたし達に、何の関係が…」

艦長「サクライやサイオンジと言った名前に聞き覚えはあるかね？」

李衣菜「!?…それって」

艦長「やはりな…。このテキサスにも、それらの連名や、ドバイのさる富豪から物資の提供があったのだ。…グリーンランドから、季節外れのクリスマスプレゼントが届いた時は、流石に笑ってしまったがね」

奈緒（ドバイ…グリーンランド…。まさか、だよな…）

艦長「君達の近くで、君達の行動を知った者の中に、心動かされた者が少なからずいたのだろう。物資提供やボランティアを行っている者達の中には、そういった者達の働きかけがあったのではないかと、私は思っている」

李衣菜（みんな…。自分に来るやり方で、ランドウと戦ってるんだ…）

艦長「カナダ軍が我々の元にロボ・ストーンと一部部隊を派遣できたのも、それらの協力があつたお陰でもあるんだよ？」

李衣菜「……」

艦長「だから、このテキサスにある物資も、君達に与えられて然るべき物。そこに君達が後ろめたさを感じることはないんだよ」ニッコツ

奈緒「別にあたしらがなんかしたって訳じゃないんだけどな」

李衣菜「とか言つて、顔がにやけてるよ」

奈緒「うっせ」

ガチャツ

副長「艦長、そろそろお時間です」

艦長「おお、もうそんな時間か」

李衣菜「これから何かあるんですか？」

艦長「うむ。君達が見つけてくれたランドウの軍事拠点に対して、現状の戦力で攻勢を掛ける。その為のブリーフィングだよ」

奈緒「カナダ軍と合流してまだそんな時間経つてないのに、もう攻撃に出るのか……！」

艦長「鉄は熱い内に打つ。相手の虚を突くには、迅速さと臨機応変な柔軟さが必要だ」

李衣菜「くうく。ゲッターが修理中なのが悔やまれるな……」

艦長「君達もブリーフィングに参加するかね？」

李衣菜「勿論ですよ！出たところで、何が出来るって訳じゃないですけど、ジツとし

てるのもロックじゃないし……」

艦長「よかろう。では、付いて来てくれたまえ」

——ブリーフィング・ルーム。

艦長「——以上が、今回の作戦の概要だ」

ボブ「へっ、要は俺達でランドウをぶちのめしやいいんだろう？腕が鳴るぜ！」

サム「折角アラスカくんだりまで来たんだ。少しの手柄も立てねえとこつちの面目がたたないぜ」

艦長「今回の作戦は、我々連合軍のランドウ反攻戦の試金石となる戦いだ。これから  
の戦いは、個人の戦績だけでなく、各スーパーロボットによる連携も重要になってくる。  
その点もしっかりと把握してもらいたい」

ボブ「おうよ！味方に流れ弾を当てなきゃいいんだろ？」

艦長「……他に質問のあるものはいるかね？」

「……」

スツ……

艦長「シユワルツコフ少佐。何かね？」

シユワルツ「ここにトカゲ野郎共がいるのが気に喰わねえ」

ニオン「……」

艦長「…それについては先刻重々に説明したと思うが？」

シユワルツ「それで納得できると思うかよ？特に百鬼帝国のテメエ…。連中には俺達の同胞が山ほど殺されてるんだぜ？そんな奴等と今更肩を並べて仲良しこよしってか？」

李衣菜「…別に、それはニオンや鉄甲鬼のした事じゃないんじや」

シユワルツ「黙んな。ジャツプの小娘」

李衣菜「……。えーつと、じゃつぶつて…？」

奈緒「…日本人の小娘つて事じやないか？」

李衣菜「成る程。ジャツクみたいに、変に片言なんだね！」

ジャツク「Why!?!今、ミーがdisられてるのデス!?!」

メリー「その話し方のせいよ。兄さん」

シユワルツ「くくくッ！ふぎけやがつて…！小娘だろうが黄色い猿のテメエらと馴れ合うつもりは欠片もねえんだよ！何時も何時も状況を引つ掻き回しやがつて！」

李衣菜「ムツ…。私達が何時、何を引つ掻き回したつて言うんですか？」

シユワルツ「お前らの存在そのものがそうだつてんだよ！下手に希望を与えられて、同情されたつていい迷惑だぜ！」

李衣菜「じゃあ何もしないで見てろって言うの？そっちの方が、薄情で酷い人だと思うけど？」

奈緒「止めとけ、李衣菜」

李衣菜「奈緒！」

奈緒「前に会った軍曹の人と同じだよ、こういう奴は。軍隊の思考に凝り固まっちゃって、情とか優しさとかどっかに忘れてきてんだよ。結局は自分の手柄が減るのがヤナだけなんだって」

シュワルツ「ンだどろ……！テメエ！もう一回言ってみろッ！」

ボブ「もうその辺にしとけよ。大人気ないぜ、シュワルツ」

シュワルツ「……チツ」

艦長「……恐竜帝国や百鬼帝国……どこの国の人間であろうと、ランドウに対し、共に戦う同志として受け入れたのは艦長である私の判断だ。故に、異議や異論のある者は直接、私に言ってほしい。個人間で余計な小競り合いやトラブルを起こす事は、ランドウに付け入る隙を与える事になる」

シュワルツ「……」

李衣菜「……」

艦長「しかし、双方に遺恨が残ったままと言うのも見過ごす事はできん。今この場で、

互いの不満をぶつけ合うならそれもまた良し。只し、以降の小競り合いは遠慮してもらいたい。それは、お互いに守るモノをもって戦う諸君らになら、分かる話だろうか？」

鉄甲鬼「……」

ニオン「…俺達に異論はない。ここにいる人間共とも、競り合うつもりも毛頭ない。降りかかる火の粉を払えれば、それだけで充分だからな」

かな子「ニオンさん……」

艦長「了解した。シユワルツコフ少佐は？」

シユワルツ「…ツ！少しでもおかしな真似してみやがれ！背中からでも容赦なく撃つ！その時はジャップ、テメエらも一緒だ。ここに余計なお荷物を持ってきた責任を、しっかりと取ってもらうからな！」

李衣菜「勿論だよ。ニオン達はお荷物じゃない…！私の大切な仲間だから」

シユワルツ「チツ…！」

スタスタツ

奈緒「どっか行っちゃったな」

李衣菜「何なのアイツ、気分悪く」

ボブ「はっはっはっ、酷え目に遭っちゃったな。あんまりアイツの事悪く思わないでやってくれ」

サム「そうそう。アイツの日本人嫌いは筋金入りで有名だからな」

奈緒「そんな個人的な理由でいちやもん付けられても堪えないよ……」

「仕方ないわ。男つてそんなもの。感情的になることでしか物事を解決できない生き物なのよ」

ボブ「おいおい、リンダ。俺達の目の前でそれを言うのかよ？」

リンダ「気安く名前と呼ぶなって、いつも言ってるでしょ。豚は学習能力が低いのかしら？」

ボブ「へいへい。悪かったって、テイラミス中尉」

サム「おっ、怖っ」

李衣菜「えつと……」

リンダ「あら、ごめんなさい。自己紹介が遅れちゃったわね。私はリンダ・テイラミス。イギリス出身の中尉よ」

李衣菜「あ……あ、どうも」

リンダ「ふふっ、固くならなくてもいいのよ。鬱陶しいのは男共だけで、貴女達は関係ないんだから」

奈緒「鬱陶しいって……。一緒に戦う仲間じゃないのか？」

リンダ「ランドウ打倒には仕方ないけど、すぐ感情的になる男なんて、肝心な時に何



の役にも立たないわ」

リンダ「これからの時代、戦場だって私や貴女達のような落ち着いた女性が必要になるのよ」

ナデ：

奈緒「ヒツ…」

ジャック「そこまでデース。いきなりE x c e s sなスキンシップで、リーナ達もビツクリしてマスよ」

リンダ「…そうね。これから戦闘配置だし、ここから先は戦闘が終わった後で、興味があるなら私の部屋に來なさい。何時でも待ってるわよ」 ヒラヒラ

奈緒「は…はあ…」

李衣菜「な、何か変わった人だね…」

サム「変わってるって言や、変わってるかもな。趣味がな」

メリー「その気がないなら気を付けておいた方がいいわよ。その気があるなら、別に止めないけれど…」

李衣菜「あ、あはは…」

艦長「さ、諸君。もうすぐ敵の拠点が見えてくる。パイロット各員は機乗して待機しててくれたまえ」

「了解」

李衣菜「……って言うか、艦長まだいたんだ」

艦長「何か言ったかね？リーナ君？」

李衣菜「あつ、い……いえ！何でもないです……」

奈緒「なあ、李衣菜。あたしら、ホントにこのまま待機なのか？」

李衣菜「うん……。ダイノゲッターは二オン達が使うし、他に機体があればいいんだけど……」

艦長「……。君達、そんなに戦いたいのかね？」

奈緒「そう聞かれたら何かあれだけど、今のあたし達はその為にここまで来たんだ」

李衣菜「まだ来たばっかで、テキサスの勝手は分かんない……。でも、ジツとしてるよりだったら、何か出来ることをしたいんです！」

艦長「そうか。……」

奈緒「艦長？」

艦長「もし君達がどうしてもと言うなら、すぐに用意できる機体が一機種だけある」

李衣菜「ホントですか!？」

艦長「ああ、本来は偵察や船外活動用に持ってきたモノだが、武装も積んであるし、あの程度なら戦闘も出来る」

奈緒「…何だか嫌な予感がしてきたぞ」

李衣菜「どんなものでも無いよりはマシだよ! すぐに案内してください、艦長!」

「待つてよ。アタシも行く」

奈緒「加蓮! お前はしばらく安静だって、先生に言われてただろ!」

加蓮「平気平気。いくら艦の中が安全だって言っても、外でドンパチやられたんじや

落ち着いて寝てなんていられないし。それに…」

李衣菜「それに?」

加蓮「今回、アタシの出番がここだけなんて信じらんない」

奈緒「早く医務室に戻れえ!!」

—。

くくく ランドウ拠点 くくく

ヘルレザー「……」

ヘルレザー「うああくく…」

ヤシャ「—ヘルレザーよ、先刻放った斥候から連絡が入った。カナダ軍と合流した

戦艦テキサスが、貴様がいる拠点を目指し進行している」

ヘルレザー「あああ…」

ヤシャ「遺憾ながら、拠点は放棄。前線を第2戦線まで後退させる。…これは前回の

戦闘でゲッターを仕損じた貴様の責任があるのは分かっているな？」

ヘルレザー「俺の体を返してくれろ……！」

ヤシャ「：既に自我も崩壊しかかっているか。だが安心せよ。今回の戦闘で、見事テキサスの足を止め、我らランドウの覇道に貢献することが出来れば、貴様の体は返してやる」

ヘルレザー「うあああああ！！俺は：私はあああ！！」

ヤシャ「ふふふ……。ヘルレザー！ゲッターを倒せ、連合軍のスーパーロボット軍団一匹残らず蹴散らすのだ！出なければ貴様の肉体は二度と返っては来んぞ」

ヘルレザー「うう……。倒す……ゲッターを倒すう……！！」

ランドウ兵「戦艦テキサスが来ますッ！！」

――。

ボブ「さあくて、パーティーの時間だぜ！ホストは何処だ？」

リンダ「前方キーロ先にうじやうじやいるわよ。：ぎつと30機つてところかしら」

サム「大した歓迎だぜ！こつちも一丁派手にやっ तरीますか！」

リンダ「悪いけど、貴方達は後方に居て頂戴」

サム「はあ？何でだよ!？」

リンダ「そんなデカイ凶体で前に居られたら邪魔なのよ！少しは自覚なさいな」

ボブ「へーへー。ま、あんだだけ敵がいりやあシヨルダーキャノンでもスコア稼げらあな」

メリー「リンダ、アナタのキングダム007の調子はどう？」

リンダ「ここの整備班の人達のお陰で絶好調よ。新品みたいだわ」

メリー「そう。けど、無茶は禁物よ？」

リンダ「ええ。私にはこの後ランドウに奪われた祖国、欧州の解放も待っているんだもの。こんなところで死んでられないわ」

かな子「お菓子の仕込みもバッチリです！この戦闘が終わったら、皆さんで食べましょうね」

ボブ「ははっ！戦艦でティーパーティーってか！」

ジャック「かな子のSweet'sはVery deliciou'sネ！俄然、やる気が出るってモンだぜ！」

ボブ「へえ。それを聞いちや死んでられねえな！行くぜ、兄弟!!」

サム「おうよ、兄ちゃん！」

ジャック「いいMotivationだね。これなら、このFightも楽勝デース」  
シユワルツ「…チツ」

ジャック「ただ、やはりリーナ達がないのは物足りないぜ！」

シユワルツ「あんな小娘共、いない方が清々するぜ！」

ジャック「シユワルツ……。ユーも大概、頑固ネー……」

メリー「……？テキサスからもう一機出てくるわよ？」

「ちよつと待ったあ……!!」

シユワルツ「……ッ！この声……」

ニオン「フツ……」

ギユルウウウンツ

奈緒「主役は遅れてやってくるってか!？」

李衣菜「日本代表の私達を忘れてもらっちゃ困るぜ……!」

かな子「李衣菜ちゃん、奈緒ちゃん!」

ボブ「駆け付けたって、ビイトでやる気かあ!？」

白銀の大地を滑走して合流するBT-23、ビイト。

シユワルツ「テメエ!ふざけるのも大概にしやがれツ!そんな豆戦車で何が出来るっ

てんだ!」

李衣菜「任せてよ!ビイトの操縦は、ちよつとしたもん何だから!」

シユワルツ「そういう問題じゃねえ!!」

李衣菜「奈緒は索敵とビイトのチェックヨロシク!操縦は私に任せて!」

奈緒「お、おう！足手まといにだけはなるなよ！」

シユワルツ「人の話を最後まで聞けえ!!」

ジャック「もうすぐ射程に入りマス！お喋りはそこまでネー！」

シユワルツ「ッ！」

ボブ「そんなじゃ、盛大に花火を打ち上げてやりますかあ!!サム！」

サム「シヨルダーキャノン発射ア!!」

艦長「艦砲射撃用意、：撃てえいッ！」

バ オ オ ツ

目前まで追ったランドウのメタルビースト軍団めがけ、テキサスとロボ・ストーンから放たれた火砲が降り注ぎ、白銀の大地一面を火の海に変える。

リンダ「先に行かせてもらおうわよ！」

ニオン「ゲッタートマホークツ!!」

駆け出したキングダムが両手にヒートブレードを構え、その隣を、トマホークを握り締めたダイノゲッターが滑空して敵に肉薄する。

リンダ「あら」

ニオン「獲物は早い者勝ちだろう？」

リンダ「言うじゃない。かな子ちゃんになら、譲ってあげてもいいのだけど？」

かな子「あ、え…ええと、大丈夫です…」  
ズアアツ

敵陣に斬り込み、陣形を乱す。

シユワルツ「おらよッ！」

ステルバーの両手に構えたマシンガンで狙いを定め、キングダムとダイノゲッターに注意の逸れたメタルビーストの背後を撃ちながら、円弧を描く動きで攪乱。

李衣菜「私達も負けてられない！喰らえッ！」

パパパパ

ビイトの機銃から放たれた弾丸が、メタルビーストの表装で弾ける。

メタルビースト《——？》

奈緒「全然効いてないぞ!？」

李衣菜「まあ、ビイトの銃じゃね」

メタルビースト《——ッ!》

メタルビーストの鋭い爪が来る。

李衣菜「狙い通り！ジャック！」

ジャック「——テキサスソオードツ!!」

メタルビースト《!?!?!》



ビイトの背後から現れたテキサスマックが、上段に振りかぶったテキサスソードで、メタルビーストを真つ二つに切り裂く。

ジャック「Nice, Combinationネー!リーナ!

李衣菜「へへっ!」

「うわおおおおおおおおおおッ!!」

リンダ「何ッ!」

鉄甲鬼「以前ネオゲッターロボを大破させた、メタルビーストの隊長機か!」

ヘルレザー「ゲッターをく!スーパーロボット共を皆殺しにするうくッ!!」

李衣菜「アイツ、メタルビーストに埋め込まれてるの…?」

ボブ「あんなのが人間より優れてるってのか?」

サム「いくら食っても太らねえ体になれたとしても、ああいうのはゴメンだぜ!」

奈緒「見た目はちよつと変わってるけど、アイツは手強いぞ!」

李衣菜「施設を守りながらだったけど、ネオゲッターをスタスタにされちゃったんだ

もんね…」

シユワルツ「へっ、要するに、雑魚ってことだろ」

奈緒「どーという意味だよ!」

李衣菜「そこまで!こつちも気を引き締めないと、油断していいマシンじゃないんだ



バトルギガーが、ダイノゲッター1目掛け速度を上げる。

かな子「食い付いてきた!」

ニオン「正面からか…。面白ッ!」

跳ねて襲い掛かってきたバトルギガーを、ダイノゲッター1が正面から受け止める。

ヘルレザー「グギギ…」

ニオン「フンツ。メタルビーストの隊長格と言ってもその程度か!」

李衣菜「違う!そいつの武器は…」

ヘルレザー「ヒハアツ!!」

バトルギガーの両肩から竜頭の副腕が伸び、ダイノゲッター1の首筋に噛み付く。

李衣菜「ニオンツ!!」

ヘルレザー「バラバラにしてやるう!ゲッターロボオウウ!!」

ニオン「…フツ。貴様こそ、ゲッターの武装を忘れてるんじゃないのか?」

ヘルレザー「!」

ニオン「逃すかッ!」ガシッ

咄嗟に身を退こうとしたバトルギガーを逃すまいと、副腕を両手で押さえる。

ニオン「ゲッターアアビーイーームツ!!」

カッ



翔し、バトルギガアの副腕をもぎ取った。

ヘルレザー「うぎやああああく〜っ!!」

李衣菜「やった!」

シユワルツ「油断すんな! 雑魚はすっこんでやがれ!!」

奈緒「いちいち一言余計なんだよツ!」

鉄甲鬼「そこまでだ。敵が起き上がるぞ」

ヘルレザー「ウツ…ウウ…:…ツ」

ヘルレザー「ウワアアアアツ!!」

バトルギガアの胸部装甲をフルオープン。内部から無数の銃身やミサイルが姿を現

し、眼前に目掛け一斉に放たれる。

ドドドドドツ

ボブ「な、何だあ!?!」

ニオン「チイツ!!」

かな子「ぶ、分離してください! ダイノゲッター1じゃ避けきれませんよお!」

リンダ「…あの敵、自分の味方も一緒に撃ってるわよ!?!」

メリー「何もかもお構いなしだと言うの…?」

奈緒「うわあああ〜?!?り、李衣菜! 一発でも当たらんじやないぞ!」

李衣菜「耳の横で叫ばないでよ！気が散っちゃう…！」  
弾幕の嵐の中を、ビイトがちよこまかと動く。

シュワルツ「あいつら…！何のために出てきたんだ!？」

ヘルレザー「うあああアツ!! 死ね、死ね、死ねええええ!! みんな死んでなくなれええ  
くく!!!」

李衣菜「うわあああつ！」

苛烈さを増すバトルギガーの攻撃の前に、ビイトが巻き上がった雪と爆炎の中に消える。

ジャック「リーナ!!」

シュワルツ「チツ…。言わんこつちやねえ」

ボブ「テキサスマックもステルバーも味方は、一旦俺達の後ろに下がれ!ロボ・スト  
ンならあんな攻撃屁でもねえ！」

サム「けどよ兄ちゃん、我慢比べだぜ?アイツの溜め込んでる火薬の量が、こつちの  
耐久力より高けりや…!」

かな子「李衣菜ちゃん…」

鉄甲鬼「かな子、今は自分が生き残ることを考える。出なければ、次はお前が同じ目  
に遭うぞ」

かな子「分かってます…。分かってますけど、そんな言い方…」

ニオン「鉄甲鬼、ダイノゲッター2で弾幕を抜けられるか?」

鉄甲鬼「無傷では済まされんかもしれんが、やってみよう」

メリー「待って!」

リンダ「弾幕が止んだ…?」

ボブ「余興はもう終わりか?」

ギラツ

ボブ「!?」

周囲に立ち込める爆煙の向こうから、鈍く光る刃がロボ・ストーンの表装を掠める。

ボブ「うおっ!」

ヘルレザー「フウーーーーーッ!!」

鋭い爪を構えたバトルギガーが、ロボ・ストーンの後ろに待機したスーパーロボット達に狙いを定める。

シユワルツ「まだまだ隠し玉があったって事かよ」

ジャック「MagicianだったらもつとHumorousなmagicを見せてもらいたいぜ!」

ヘルレザー「クアッ!!」

シユワルツ「来るぞ!!」

素早く跳躍。リーダーに捉えられない動きで、キングダムに襲い掛かる。

リンダ「ツ……! コイツ、キングダムのヒートブレードと互角なの!!」

ヘルレザー「!!」

リンダ「キヤツ!?!」

浴びせ蹴りを、キングダムの脇腹に。

シユワルツ「リンダ! ——このツ!」

ジャツク「蜂の巣になりなサーイ!」

ヘルレザー「うおおおおお ——!!」

マシンガンと、マックリボルバーの弾幕の中を掻い潜り、肉薄。

ヘルレザー「シヤツ!」

メリー「きやあああつ!?!」

バトルギガラの攻撃が、テキサスマックの頭部を打つ。

ジャツク「メリー! 大丈夫カ!?!」

メリー「ハットマシンへのダメージは軽微よ。ごめんなさい」

ニオン「——ゲッタートマホークツ!」

トマホークを構えたダイノゲッター1が、バトルギガラの背後から迫る。



ヘルレザー「ギイイツ!!」

水平に放たれたトマホーク。その柄を、脇腹と脇に挟んで受け止める。

かな子「そんな…!!」

鉄甲鬼「離脱急げッ!」

ヘルレザー「ダアアアアッ!!」

強烈な後ろ回し蹴りが、ダイノゲッター1の鳩尾に突き刺さる。

かな子「きやあああああッ!!」

白銀の大地に勢いよく叩き付けられる。

ボブ「流石にヤバイぜ!ゲッターがやられちまう前に何とかしねえと!」

サム「けどよ、兄ちゃん!ロボ・ストーンの機動性じゃアイツの動きは追えねえし、下手に砲撃したら味方に当たっちゃまう!」

ボブ「クソツ…!!どうすりゃいいんだ!?!」

ヘルレザー「ゲッター…!!ゲッターロボオ…!!」

シュワルツ「こつちを無視すんじやねえ!!」バラララッ

後ろからの射撃も意に介さず、バトルギガーはダイノゲッター1を指す。

ヘルレザー「貴様さえ、貴様さえ倒せば…!!」

鉄甲鬼「まだか!?!ニオン!」

ニオン「コントロールが効かん！」

かな子「それなら、こつちから強制分離を……！」  
ガンツ

かな子「きやつ……！」

バトルギガーが、ダイノゲッターの動きを抑える。

ヘルレザー「死ねえええええツ!!」

「待てーいっ！」

ヘルレザー「!？」

「正義の少女がピンチの時——」

「おい、何か混ざったぞ」

「ちよつとく、今決めてるとこなんだから黙っててよ！」

かな子「この声……。李衣菜ちゃんに……奈緒ちゃん？」

ヘルレザー「ドコだあっ!？」

サム「なあ兄ちゃん。あれって……」

ボブ「ん?……おお、そう言うことか……」

シュワルツ「プ……プハハハハッ!どう言うことだア!?!そりやあ!」

ヘルレザー「な、何だ!?!貴様ら!何を笑っている!?!」

「ほらあく！何か向こうの空気がグダグダになってきちゃったじゃん！」

「あたしのせいだよ！出来もしない名乗り口上をやるうとするからだろ!」

「だって…。今のタイミングで助けに入ったらかななかロックじゃない？」

ヘルレザー「くうくうくう…！ドコだ!?隠れてないでいい加減に出てこいッ！」

ジャック「H A H A H A ! H e y , いかしたH a t デスね? ドコで買ったんデスカー？」

ヘルレザー「ハット…帽子、だと…?まさかッ！」

李衣菜「あ、バレた？」

バトルギガアの頭頂部にちよこんと乗っかるビイトの姿。

ニオン「バレるも何も、最初からバレバレだ」

李衣菜「そ、そう?結構うまくやれたと思うんだけど…」

ボブ「ハハッ!にしても、よくあの弾幕の中を生き残ってたぜ! 一体どんな手品を使ったんだ？」

サム「いや兄ちゃん。何かの超能力かもしれないぜ？」

ジャック「Non Non Non. あれこそJ a p a n e s e ニンジツと言うものに違いあり

ませーん！」

李衣菜「あつはは!超能力も忍術も、専門家なら知ってるけどね」

奈緒「爆発で巻き上がった雪の中に紛れ込んだだけなんだよなあ、これが」  
ヘルレザー「ぐうぐう!! 何処までも人を馬鹿にしやがってえぐぐつ!!」

李衣菜「どちらにせよ、ビイトの頑丈さを侮ったアンタの負けだよ!」

鉄甲鬼「乗る者によって耐久性を変えるマシンか」

李衣菜「へへっ、ビイトの扱い方は、ゲッターよりも熟知してるかも」

ヘルレザー「ええい! そこから降りろ! 降りろおおぐ!!」

李衣菜「わあ!!」

頭上のビイトを振り落とそうと、バトルギガーが暴れる。

ジャック「H H H A !! メタルビーストでロデオとは、R o c k , n R o l l 極めてや

がるぜ!!」

李衣菜「で…でしよ!」

奈緒「冗談に反応してる場合か! このままだと本気で振り落とされるぞ!」

李衣菜「分かってるって! そんなに降りてほしいなら…」

暴れまわるバトルギガーの上、ビイトは軽く跳躍し、四肢を収納。

李衣菜「こっちから…!」

バトルギガーの頭上で高速回転。

李衣菜「降りてあげるからッ!!」

ズアアツ

ビイトのスピリアタックが、バトルギガの頭上から、股下までを一気に貫いた。

ヘルレザー「アアアアアツ!!」

李衣菜「——っつと！」

回転を止め、着地。

ヘルレザー「ああ……！」

李衣菜「……」

ヘルレザー「あ——」

爆発。

ジャック「THE END・デスね」

ボブ「ビイトで決めちゃうとは、大したものだぜ。まったく」

サム「ああ。これじゃあまるで俺達はデカいだけの木偶の坊だぜ！」

奈緒「ふう……。何とか乗り切ったな」

シユワルツ「残りの敵は？」

ジャック「あの敵がほとんど撃つちまって、動いてる敵は残ってマセンよ」

メリー「リンダ、大丈夫？」

リンダ「ええ。何とか生きてるわ」

鉄甲鬼「お前達も、よく無事だった」

李衣菜「へへっ、ナイス作戦勝ちだつてでしょ？」

ニオン「命が幾つあつても足りなくなりそうだがな」

奈緒「お、あたし達のこと心配してくれてるのか？」

ニオン「…俺じゃないがな」

奈緒「え…？」

かな子「……」

李衣菜「え…あ、かな子？」

かな子「本当に、心配したんですから」

李衣菜「ご、ごめん…」

かな子「許してあげません！2人は今日はおやつ抜きです！」

李衣菜「えく！それだけは勘弁してよッ！」

ポブ「あつはつはつはつ！ま、心配すんなつて。俺達がつつておきのバーガーとポテ

トをご馳走してやるからよ」

李衣菜「それで喜ぶのは加蓮だけだよ」

サム「じゃ、バーガーもいらねえか？」

李衣菜「……いただきます」

リンダ「ふふっ、素直なのはいい事よ。ますます可愛くなつてきちやった」  
メリー「リンダ、彼女達はまだ初なんだから」

リンダ「分かつてるわ。＼はじめて＼の娘には優しいのよ？私」

奈緒「っ」ゾクツ

シユワルツ「……」

ジャック「どうデス？彼女達もなかなかやるダロ？」

シユワルツ「実力は認めてやるよ。だが、馴れ合う気はねえからな」

ジャック「……。素直じゃありませんネー……」

かな子「さ、早くテキサスに帰りましょう？ケーキとクツキー、お菓子が待ってます

よ♪」

ボブ「待ってました！今から楽しみすぎて腹がなるぜ〜」

リンダ「貴方達、これ以上脂肪増やしてどうするのよ？」

ボブ「ハハツ！太るのが怖くてウマイもんがたらふく食えるかってんだ！」

かな子「そうですね。美味しいものを食べ過ぎちゃうのは仕方ないことですよね」

サム「そうですね。明日の天気と体重は、気にしても仕方ないって！」

かな子「はいっ！」

李衣菜「スツゴいい笑顔……」

かな子 「何か言いました？」

李衣菜 「な、何にもく？ね、だからせめて一口！」

かな子 「李衣菜ちゃんは今分おやつ抜きです！」

李衣菜 「そんなあゝ!!」

つづく



## 第10話『悪魔の兵器』

~~~~ アラスカ フェアバンクス ~~~~

廃墟と化した街がある。

ランドウ兵「……」 ザツ

ランドウ兵2「……」

……ウウン……

ランドウ兵「……?」

ギユウ……ウウン……

メタルビースト《——!——!》

ギユルウウウンツ

奈緒「おらアツ!」

メタルビーストの真下。アスファルトの地面を突き破り、姿を見せたネオゲッター2がメタルビーストをドリルで貫く。

奈緒「奇襲成功!! 見たか! ランドウ、ここはお前達が我が物顔で居座っている場所

じゃないぞ！」

加蓮「アンタ達が奪った場所、返してもらおうよ……！」

李衣菜「やっちゃええ！奈緒！」

奈緒「おうっ！」

メカザウルス・バド『キシヤアアアアア!!』

奈緒「おっと！」

メカザウルス・バドの放つ怪音波を躲し、ネオゲッター2は更に上空へ。

奈緒「ドリルアームツ!!」

バド『?!?!』

急降下と共にドリルアームを唸らせ、バドを打ち砕く。

メタルビースト《——!!》

奈緒「この……！」

地上から対空砲火の如く火球を放つメタルビーストに、ドリルアームガンで応戦。

加蓮「ちよつとちよつとく、奈緒？奈緒ばつか目立ってるのは、ズルいんじゃない？」

李衣菜「そうそう。地上戦ならネオゲッター1……」

加蓮「じゃなくて、ここはアタシの復帰第一戦でしょ」

李衣菜「あら……？」

奈緒「しやーないな。やるからには、しっかりとやってくれよ！」

奈緒「オープンゲット！」

加蓮「ゲッターチェンジ！」

ネオゲッター3の変形し、着地。メタルビーストと対峙する。

加蓮「さてと、そんじゃあご期待通り、張り切ってやっちゃいますか！」 グンツ

加蓮「タンク・モード！」

ネオゲッター3のタンク・モードで、メタルビーストとの距離を一気に詰める。

加蓮「はあッ！」

加速の勢いに乗せた拳で、メタルビーストを殴り倒す。

加蓮「さあて、ドンドンいくよ……！——ゲッタートルネード！」

吹き荒れるゲッタートルネードの旋風が、前方に布陣したメタルビーストを吹き飛ばす。

メカ一角鬼《——！》

加蓮「ッ！このお……！」

背後から組み着いたメカ一角鬼を裏拳の一撃でノックダウン。

加蓮「フィンガーネット！」

やや上方にネットを放ち、空中で展開。地上の敵を一網打尽に。

メタルビースト《!!!?》

メタルビースト2《——!!?》

加蓮「ほらほら！」

ネットに繋がるワイヤーをぶん回し、

加蓮「せく…のっ、やあ!!」

勢いをつけて、直上に放り投げる。そして、

ジリッ

加蓮「プラズマブレイク！」

「背中のホーンに収束されたエネルギーが、天高く打ち上がり、ネットに捕縛されたメタルビーストを貫いて破壊。」

李衣菜「ウツヒョク！」

加蓮「どんなもんよ？」

奈緒「やるじゃん」

李衣菜「これでこの辺りのメタルビーストは全部やつつけたかな？」

加蓮「じゃない？追加の敵もないみたいだし」

奈緒「なら、フェアバンクスは解放ってことでいいよな！」

李衣菜「うんっ！私達の作戦成功だよ！」

奈緒「じゃ、テキサスに報告するぞ」

加蓮「ネオゲッターチーム大勝利、ってね」

奈緒「違うだろ！作戦の第一段階成功だ！」

――

くくく 戦艦テキサス くくく

副長「――分かった。直ちに帰還せよ」

副長「艦長、ネオゲッターチームからの報告で、フェアバンクス市の解放に成功した
そうです」

艦長「うむ。これでアラスカの10以上の都市がランドウの手から解放されたわけだ
な」

副長「他の戦線でも、ランドウは後退しているようです。もはやアラスカでの戦いは、
我々に軍配が上がったと考えても可笑しくないでしょう」

艦長「油断してはならん。戦線を後退させたランドウの動きが気になる。アラスカ解
放のために、攻略しなくてはならない場所がまだ残されているのだ」

副長「艦長、それは……」

艦長「ランドウがこのアラスカに侵攻した理由はもちろんそれだろう。我々は軍人と
して、一人の人間として、あの悪魔の兵器を二度と地上で使わせるような事があつては

ならんのだ」

副長「では、我々の次の攻撃目標は…」

艦長「うむ…」

—— 格納庫。

李衣菜「——ふい。たっだいま」

班長「おう、おかえり。どうだい？俺達が整備したネオゲッターの調子は？」

李衣菜「もう最高だよ！前と全然変わらない…ううん、新しく生まれ変わった感じだよ！」

班長「そう言ってもらえるとやりがいがあるぜ。また万全に整備しといてやるからな！」

李衣菜「よろしく！…つと」

加蓮「格納庫なのに、何かいい匂いがするね」

奈緒「きつとあそこだろ。ほら」

李衣菜「みんな集まって…お菓子食べてる!？」

ボブ「おう、おかえり。ビリけつさん」

李衣菜「ボブ！これってもしかして、かな子の…」

かな子「はい。皆さんが必ず勝つて帰ってくるって信じてましたから、たくさん用意してありますよ♪」

サム「ハハッ、確かにうめえケーキだ！このケーキを食い損なって死んじまつら、未練有り余つて天国にもいけねえ！」

ジャック「ホスナーbrothersも、すっかりかな子のSweetの虜みたいネ！」

リンダ「個人の趣味の領域ではないもの。私だって、個人的に教えてもらいたいわ」
かな子「え、えく…つと、お菓子作り」だけ」なら、何時でも大丈夫ですよ…？」

リンダ「ふふつ。照れなくてもいいのに」

シュワルツ「ケツ…。貴重な物資を無駄遣いしやがって」

リンダ「言うわりには、貴方だってしっかり食べてるじゃない」

シュワルツ「そ、それはな…」

李衣菜「とにかく、かな子のお菓子は大好評なんだね…」

ニオン「だが、一緒に戦わせられるこっちは、なかなか堪ったものじゃないぞ」

奈緒「そうなのか？」

鉄甲鬼「生地を寝かせておいたからと、時間を急かされてみる。おちおち戦闘にも集中できる」

李衣菜「あはは……。色々大変だったみたいだね」

ニオン「ランドウの相手など、手遊びのようなものだ。多少の制約は望むところ、だかな……」

加蓮「……って事は、テキサスに帰ってきたのはダイノゲッターチームが一番だったんだ？」

シュワルツ「……チツ」

ジャック「シュワルツ、ユーは惜しかったネ。ホンのTouchの差だったよ」

シュワルツ「テムエは見ちやいねえだろうが！」

李衣菜「えー……と、ニオン達が一位、その次がシュワルツで……」

リンダ「三番は私よ。男共には負けないわ」

ジャック「一本取られちゃったヨ。悔しいぜ」

ボブ「ま、ロボ・ストーンは機動性がねえからな。出遅れちまうのは仕方ねえさ」

李衣菜「私達が最下位か……。う……ん、戦闘は要領よく出来たと思うんだけどなあ」

加蓮「やつば地中から奇襲かけたのが失敗だったんじゃない？」

李衣菜「じゃあ敗因は奈緒かあ」

奈緒「あたしのせいだよ！お前からだって奇襲作戦で行こうって賛成したじゃんか！」

サム「ハハッ！なあ、兄ちゃん。確かピリっけつの罰ゲームは、トイレ掃除一週間だっ

たよな？」

ボブ「ああ。3人には、すっかり働いてもらわなきゃな？」

李衣菜「えー！ホントに？私達女の子だよ？男子トイレもやらせるつもり？」

ボブ「関係あるかよ。誰が一等先にランドウに占領された街を解放して、テキサスに帰ってこれるかかって、賭けに乗ったのはそっちなんだぜ？」

李衣菜「それは…そうだけど…」

サム「なら、観念して罰ゲームを受けるんだな」

李衣菜「むうく…」

加蓮「ま、頑張りなつて。影から応援してるから」

李衣菜「え？」

奈緒「賭けに乗ったのは李衣菜だろ？あたしと加蓮は関係ない」

加蓮「そうそう。リーダーとして良くないよ？そう言うの」

李衣菜「そんなあ〜！」

リンダ「私でよければ、手伝ってあげるけど？」

李衣菜「え…あ、大丈夫です…」

ジャック「Risk&Return・Gambleとはそういうものデスね」

李衣菜「…もうギャンブルなんてしない」

鉄甲鬼「身の程が分かっただけ、いい勉強になったな」

ニオン「授業料はしっかり払えよ」

李衣菜「うゝ！みんな冷たいー！ー」

『パイロット各員へ伝達。次の作戦のブリーフィングを行う。直ちにブリーフィング・ルームへ集合せよ。繰り返し返す：』

ボブ「ケツ。さつき帰ってきたばっかだつてのに、俺達には休みなしかよ」

メリー「ランドウの前線も後退してるつて話よ。アラスカからランドウを追い出すまでもう少し、頑張りましょ」

サム「しゃーない！いちちょ派手にやったりしますかあゝ!!」

リンダ「ここで張り切るくらいなら早くなさいな。ノロマは嫌いよ」

李衣菜「ああ、みんな待ってよ！私まだかな子のお菓子一口も食べてないのに…」

シュワルツ「テメエは一生そこで食つてたつて構やしねえよ」

李衣菜「むう…」

ジャック「シュワルツ！今はリーナをいじめてる場合じゃないネ！」

加蓮「こつから持つてつて、ブリーフィング中に食べればいいんじゃない？」

奈緒「それつてマズくないか？」

加蓮「いいじゃん。ブリーフィングつたつて、こつちは話聞いているだけだし。バレな

いようにこつそりやれば」

李衣菜「そつか!…それじゃアレとコレとああとあつちも!」

奈緒「せめて一個に絞れよ!」

—— ブリーフィング・ルーム。

艦長「諸君、先の都市解放作戦、ご苦労だった。複数カ所への同時攻撃により、ランドウの戦力も、大幅に削ることが出来た」

シユワルツ「俺達の力だけじゃねえ。各地に散らばって、先に展開してた部隊の援護のお陰だ」

艦長「少佐の言うとおりだな。だが、一つ一つの戦闘で勝利しているだけでは、喜んでなどいられん」

李衣菜「何で?こつちが勝つてれば、優勢なんじゃないの?」 モグモグ

奈緒「そこはほら、アレだ。大局とか戦略的勝利とか、色々あるんだろ」 モグモグ

副長「…ゴホン。ブリーフィング中の私語は慎むように。あと飲食もな」

李衣菜「やばっ…。バレた?」

奈緒「李衣菜が余計なこと言うからだろ」

加蓮「2人共静かにしなって」

艦長「…話を続けよう。確かに、戦況的にみれば、我々が優勢であるかもしれん。だ

が、追い詰められた相手が、次にどのような手段に出るか、想像に難くはない」

李衣菜「…えーと？」

シユワルツ「追い詰められて、ドカンとトンでもねえことやらかすってこった」

艦長「故に、我々の次なる攻撃目的地はここだ」

スクリーンに写った、アラスカの地図の一ヶ所を指す。

李衣菜「…？地名も何もない場所？」

メリー「艦長、その場所は…」

奈緒「何かあるのか？メリーさん」

メリー「…ええ。あそこは、地図に記されていないだけで、アメリカ軍の秘密基地があるのよ」

李衣菜「秘密基地？そんな映画やアニメじゃないんだし…。わざわざ存在を隠すなんて、一体どんな基地だって…」

艦長「核ミサイル発射基地だ」

加蓮「え…」

艦長「その場所には、政府が存在を秘匿する、核ミサイル発射基地が隠されている」
奈緒「おいおい…、冗談だろ？なんだってそんな重要なものを隠しておくなんて…」

艦長「重要だからこそだ。最後の手段と言うのは、本当に最後の時まで存在を明らか

にされてはならんのだ」

奈緒「……」

加蓮「でも、ランドウにはバレちゃったから、今占領されてる訳なんでしょ？」

艦長「そうだ。彼らの諜報能力を侮っていた、我々の失態だ」

李衣菜「ランドウの手に、核がある……」

奈緒「それってヤバイんじゃないのか？」

シユワルツ「だから、コレからそれを奪い返す算段をしようってんだろが」

李衣菜「そ、そっか……！」

艦長「基地施設内に核兵器がある以上、高火力のテキサスが手を出すわけにはいかん。

よって、スーパーロボット部隊による制圧作戦を展開する」

サム「何だ。結局いつもと同じじゃねえか」

副長「いつも通りとは限らん。向こうは核を人質にしているようなものだ。もし戦闘の流れ弾が核兵器に飛び火すれば、ここにいる者は皆蒸発する」

サム「……」

奈緒「連中があたし達の接近に気付いて、こっちに核を撃つてくるって可能性もあるんじゃないか？」

メリー「それはないんじゃないかしら？ 基地に保管されている核ミサイルは最低でも

メガトン級……。基地の近くで爆発したら、その基地もろとも大爆発よ」

ジャック「連中ダツテ、核がほしくて占拠したんだ。それをムザムザ放棄するような事はしらないと思うぜ？」

かな子「でも、私達の方には撃つてこなくても、自棄になつて、他の都市に撃つなんてことも考えられますよね？」

艦長「その場合は、我々の全力を以て撃墜する」

奈緒「目の前の戦力だけじゃないく、飛んでいくミサイルも無視できないのか……。当然といや当然だけど……」

ニオン「まっすぐ飛ぶだけのミサイルなど、ただの的にすぎん。むしろいいハンデと言ったところだろう」

ジャック「Oh, Big mouth! けど、ニオンの言うとおりネ！」

艦長「作戦の概要はこうだ。先ず、諸君らスーパードボット部隊が陽動となる攻撃を行い、基地を占拠するランドウの防衛部隊を誘き出す」

艦長「その後、こちらの突入部隊が基地に突入。施設内部からランドウの尖兵を追い出し、基地を制圧する。その間も、諸君らにはメタルビーストの相手をしてもらい、敵防衛部隊の戦力を減らしてもらおう」

艦長「突入した部隊が、核の無力化をすれば、作戦完了だ。何か質問はあるかね？」

「……」

艦長「無ければ、ブリーフィングを終わる。パイロット各位は、出撃命令が下るまで各機体に登場して待機だ」

「了解!!」

李衣菜「さあ〜って、と! 次の戦闘こそ私の出番だあ〜!」

奈緒「……」

加蓮「どしたの、奈緒?」

奈緒「なあ、何でランドウは、今まで核を使ってこなかったんだ?」

李衣菜「え?」

奈緒「今回の攻略対象は、ずっと前にランドウに占領されてたんだろ? なら、テキサスが接近する前に、核ミサイルで迎撃することも出来たはずだろ?」

李衣菜「それは…確かに」

加蓮「撃たなかった理由ね〜。放射能とか、周囲の被害とか考えてたんじゃない?」

奈緒「ランドウがそんな殊勝な奴か? 平然と死人を機械化して蘇らせたり、自分に従わない奴を排除するために、今回の戦いを起こすような奴だぞ?」

加蓮「…何か違う目的があるって、奈緒は思ってるの?」

奈緒「そこまでじゃないけど…。でも、ランドウの動きは何か変だよ」

加蓮「考えすぎじゃない？どっちにしたって、連中の手元に核があるなんて危なっかしくて見てらんないんだし。奪われたものは返してもらわないと」

李衣菜「そうだね。それに、どんな罠があつたとしても、私達のネオゲッターと、スーパーロボット軍団がいれば何て事ないよ！」

奈緒「……。それもそうだな。ここで考えてても仕方ないよな」

李衣菜「そうそう、来るなら来いランドウ！つてね。さ、早いところ格納庫に戻つて、食べきれなかつたかな子のおやつを貰おうよ！」

奈緒「まだ引つ張つてたのか、それ……」

くくく 数分後 アラスカ大陸 西部 くくく

李衣菜「ふふくん。リーナにかかれば、ロックだぜく!!」

鬱蒼と生い茂る針葉樹林の中、戦闘に立つたネオゲッターが小脇に抱えるように両脇に構えた重機関銃とライフルをぶつ放す。

ジャック「Hey! Rock, n Roller!!」

ボブ「余興を盛り上げてやるぜエ!!」

ネオゲッターの射撃に合わせて、テキサスマック、ロボ・ストーンも基地に跋扈したメタルビーストめがけ火を放つ。

シユワルツ「バカ野郎!! 前に出すぎだ! 俺達の目的を忘れたか!」

奈緒「前に出なくちや、獲物も引っかけられないだろ?」

李衣菜「メタルビーストの狙いを惹き付ける! 行くよ、奈緒、加蓮!」グツ
ネオゲッターが前進する。

シユワルツ「チツ…! 勇みやがって!」

ジャック「ハツハッ! いい感じデスね〜!」

シユワルツ「ガキのお守りはゴメンだぜ!」

リンダ「なら下がってなさいな。ここでの手柄は、貴方の分も貰ってあげるわ」
シユワルツ「チツ…!」

李衣菜「よっしや〜いくぜえ〜! ソードトマホーク!!」

弾の切れた銃を捨て、ソードトマホークを抜き打つ。

李衣菜「おりゃあッ!!」

大上段から振り下ろし、メタルビーストを両断。

奈緒「李衣菜! ここでコイツらを全滅させても、意味ないぞ!」

加蓮「早くメタルビーストを引き離しちやって、お楽しみはそれからだよ」

李衣菜「それもそっか。じゃあ、一旦離脱して…——ッ!」

地面を砕き伸びたメタルビーストの触手が、ネオゲッターの脚に絡み付く。

李衣菜「しまった…！うわあ——！」

大地に叩き付けられるネオゲッター1。

李衣菜「いったたたた…。口の中がしよっぱくなっちゃった…」

奈緒「何時もの事だろ！さっさと立て!!」

メタルビースト《——!!!》

李衣菜「いゝっ——!?!」

ドワアツ

メタルビースト《?!?!?!?》

メタルビーストが爆ぜる。

李衣菜「な…何…?…」

シユワルツ「言わんこっちゃねえ！早く退きやがれ!!」

李衣菜「あ、ありがと…」

立ち上がり、即座に離脱。

サム「援護するぜ！早くここまで来な！」

ボブ「とつとと二次会の会場まで移動だぜ！」

メリー「……妙ね」

ボブ「何がだ？」

メリー「敵の戦力よ。あまりにも防備が手薄すぎる…」

ボブ「そうかあ？」

サム「そういや、隊長機らしいメタルビーストも見当たらねえ。雑魚ばっかだぜ」

メリー「使うにせよ取っておくにせよ、核はランドウにとつても重要な兵器の筈でしょ？これじゃあまるで、基地を取り返してくださいと言ってるようなものだわ」

ボブ「気にしすぎなんじゃねえのか？」

サム「こそ！俺達が強すぎるだけだつて！」

リンダ「はあ…。おデブさんはお気楽でいいわね」

ジャック「メリー、どうすル？突入部隊の突入は、もう少し様子を見るように言ってみるか？」

メリー「……。いいえ。ここは予定通りにいきましょ」

リンダ「敵の手に敢えて乗るといわけね？」

メリー「ええ。畏でも何でも、出てきてもらった方が対策も立てやすいわ」

リンダ「フフツ。そう言うの、嫌いじゃないわ」

メリー「社交辞令として、受け取っておくわね」

リンダ「もう」

シユワルツ「テメエら！何時までくつちやべつてやがる！メタルビーストをもつと基

地から引き離すぞ！」

リンダ「せつかちな男はモテないわよ」

シュワルツ「任務中だ！作戦に集中しろ！」

李衣菜「——ここまで来れば……」

シュワルツ「敵は全部ちゃんと付いて来てるな？」

ジャック「No, problem. はぐれた生徒はいませんネー」

ボブ「だったら、とつとつ二次会といこうぜ！」

艦長『ロボット部隊各機、聞こえるか？たつた今、基地に突入部隊が入った』

艦長『各機は引き付けている敵部隊が基地に戻らないよう、各個撃破で止めてくれ』

リンダ「艦長から許可が出たわね」

シュワルツ「ああ。いいな！それぞれ連れてきたメタルビーストを、一機たりとも逃

すんじゃねえぞ!!」

「「了解!!」」

かな子「今のところ相手側に目立った動きは見られませんよね？」

鉄甲鬼「ああ。だが、最後まで何があるか分からん。戦闘は二オンに任せ、我々は周

囲の状況に目を配る。いいな？」

かな子「はいっ」

——テキサス艦橋。

艦長「——副長、調子はどうだね？」

副長「はい。突入部隊からの連絡では、敵の抵抗もなく、任務遂行は順調との事です」

艦長「むう……？ランドウはみすみす、我らに基地を明け渡すというのか？」

副長「何やら妙です。艦長、これは罠なのでは？」

艦長「可能性は高い。しかし、最深部にどのような仕掛けがあるかも分からぬ現状で、兵を引き揚げさせるわけにはいかん」

艦長「罠であるならばこそ、敵の一手を見極める必要がある」

副長「了解。突入部隊の報告を待ちます」

オペレーター「突入した部隊より、緊急入電！」

副長「何だ?!何があった!」

オペレーター「艦長、こ、これを……!」

艦長「これは……!何ということだ!」

—。

ニオン「ゲッタートマホークツ!!」

ズアツ

メタルビースト《?!?!?!?》

ニオン「これであらかた倒したか？」

かな子「…はい。リーダーにメタルビーストの反応はなしです」

ジャック「A—H a. 大したことなかったネー」

奈緒「何か、呆気なさすぎじゃないか？」

ボブ「いやいや、俺達が強すぎんだろ」

李衣菜「そーそー。スーパードット軍団快進撃く、つて」

奈緒「…何か、その後に大本営発表とか付きそうだな」

艦長『スーパードット部隊、各機！速やかに応答せよ！』

ボブ「艦長か？パーティーなら今しがた終わったトコだぜ？」

艦長『そうか！それなら、一刻も早くここから離脱するんだ！』

ジャック「穏やかじゃないネー。一体どうしたんだ？」

艦長『ランドウは基地に起爆装置を仕掛けていた！基地は直に爆破される。基地に貯

蔵された500ギガトンの核兵器と共に！』

李衣菜「ご、500ギガトン、つて…どれくらい？」

シユワルツ「爆発すりゃあ、ここ一帯どころじゃねえアラスカ大陸の半分は余裕で

持つてちまう量だ！」

李衣菜「そんなに!？」

サム「連中は元から、基地ごと俺達をブツ飛ばすつもりだったってのかよ!？」

艦長『ああ、連中は元より、核を重要とも思っていないかったようだ』

加蓮「ま、アタシ達を一網打尽にするには、確かに確実な方法だと思うけど」

シユワルツ「アラスカ大陸に限った話じゃねえ。連中、この地球がどうなつてもいいのか?」

リンダ「起爆装置は解除できないの!？」

艦長『無理だ。起爆装置に高度なプロテクトが掛けられていて、とても残された数分の時間では、到底解除できない』

メリー「そんな:」

ジャック「Hey! Talk timeは終わりだ! とにかく一刻も早くここから離れないと、ミー達も危ないネ!」

ボブ「離れろつたつてよ:。空を飛べるお前らはいいかも知れねえけど、俺達はどうすりゃいいんだ?」

サム「そうだぜ! ロボ・ストーンは飛べないどころか、脚だつて遅いんだぜ?」

リンダ「御愁傷様ね」

ボブ「そりやないぜテイラミス中尉〜！」

シユワルツ「落ち着けよ。お前らのロボ・ストーンは、核の衝撃にだって耐えられるんだろ？」

ボブ「500ギガトンの爆心地の近くにいたんじや、いくらロボ・ストーンだって無事の保証はねえんだぜ？」

李衣菜「もう〜！早く撤退するんでしょ！」

「簡単に逃がすと思ってるのか？」

李衣菜「っ!？」

ジャック「Metal beast!？」

地中から出現したメタルビーストの軍勢が包囲する。

「ネオゲッター!いや、スーパーロボット軍団!ここが貴様らの墓場となるのだ!」

李衣菜「何を〜！」

奈緒「やつと偉そうなのが出てきたな」

加蓮「誰?名前くらい教えてくれても、バチは当たらないと思うけど?」

「よかろう…。我が名はヤシヤ。このアラスカ攻略を任せられているランドウの将軍だ」

かな子「將軍なんて…」

加蓮「アラスカ攻略を？ふーん、要するに、アタシ達に負け続けて敵の大将」

奈緒「加蓮、いくらなんでもそれは言い過ぎだつて」

ヤシャ「いいや。確かに貴様らの言う通りだ。私はこれまで、お前達に煮え湯を飲まされ続けた。ランドウ様から直々にアラスカ攻略を命じられた私が、その信頼を失うほどにな」

ジャック「それで、破れかぶれでミー達だけでも倒そうって腹積もりか!？」

ヤシャ「そうだ！ランドウ様より授けられたこの命……。ランドウ様のためとなるならば惜しくはない！」

リンダ「ハン！悪いけど、アンタみたいなむさ苦しいブ男と心中するなんて真つ平ゴメンだわ！」

ヤシャ「ほざけ！貴様らの貧弱なマシンが、このメタルビースト・ジャコウに敵うと思うな！」

李衣菜「貧弱かどうかは、実力を見てから言えく!!」 バッ

ジャック「リーナ！」

李衣菜「どのみちコイツらを倒さなきやここを抜けられない！あいつの相手は私達に任せて、みんなは他のメタルビーストを！」

ネオゲッターが、メタルビースト・ジャコウに飛び掛かる。

ヤシャ「ほほう…。小娘と侮っていたが、なかなかの気概だな」

李衣菜「でなきや、こんなとこまで来たりしないよ」

奈緒「つて言つても、今回なかなかの貧乏クジだけだな」

加蓮「強敵に自分から飛び込んでいっちゃつて…。負けたら承知しないんだからね、リーナ？」

李衣菜「うんっ！いくら見た目が怖くつたつて…。」 ギギ…

ジャコウとの鏝迫り合いを気合いで押し退ける。

シユワルツ「…つたく、しょうがねえ奴等だ」

ジャック「こつちも早くメタルビーストを片付けるぜ！H u r r y !!」

スーパーロボット軍団と、メタルビーストとの戦闘が始まる。

ヤシャ「どれだけ足掻いたところで、もはや運命は変わらん！お前らはここで灰となるのだ!!」

奈緒「勝手に決めんな！アタシにはまだやりたいことが山ほどあるんだ！ここで人生勝手に終わらされてたまるかって！」

加蓮「そうそう。アイドルとしてだつて、まだ中途半端だし。ちゃんと自分の存在は、残しておかないとね」

奈緒「うんうん」

加蓮「あと結婚したり、子供作ったり」

奈緒「け、けっこ…!?子供って…!加蓮!」

加蓮「えく?違うの?」

奈緒「いや…、別に違わないけど…って、そういう話じゃないだろ!戦闘中だぞ!!」

加蓮「あつははっ!ジョークジョーク。リラックスは必要でしょ?」

李衣菜「…もう、メインじゃないからって…——ッ!」

ガンッ

ヤシヤ「小娘共が馬鹿にしおって…!戦場をナメるなア!!」

李衣菜「ああ…!」

後方へ押し倒される。

李衣菜「ぐっ…!…!このお…!」

腰を地に着けたまま、拳を突き出しチェーンナックルを撃つ。

ヤシヤ「見え透いた攻撃を!」

李衣菜「だつたらこれでどうだく!」

ヤシヤ「!」

ネオゲッターが懐に飛び込む。

ヤシヤ「ぐお…!」

李衣菜「ここまで近付けば……！」

撃ち出したチエーンナツクルを引き戻し、ジャコウを羽交い締めめに。

ヤシャ「だが、貴様にも手はあるまい？」

李衣菜「どうか？——奈緒！」

奈緒「よしきた！」

李衣菜「プラズマサンダー！」

両手に込めた、プラズマサンダー用のエネルギーを直接ジャコウに流し込む。

ヤシャ「ぬおおお——!?!」

奈緒「どーだ！指先に込める、生命の波紋ってな！」

李衣菜「奈緒の言ってることはよく分かんないけど、…意表は突けたかな」

ヤシャ「ふ…ふふふ…」

奈緒「何だあ？」

加蓮「変なトコ打って、頭どうかしちやった？」

ヤシャ「フハハハ！面白いぞ、ゲッターロボ!!」

李衣菜「何…?」

ヤシャ「小娘と侮っていた、それは認めよう。だが、この結果は予想以上だ！」

奈緒「何だよ？アタシ達が何もなくなただやられると思ってたのか？」

加蓮「確かに、まともに戦ったのは百鬼帝国からだけだ。それでも、最後まで戦い抜いたんだから」

ヤシャ「その通りだ！以前までに相手をしていた、自惚れた兵隊とは違う。貴様らの死力、もつと見せてみるオ！」

李衣菜「わっ……！」

オーバースロー気味の、ジャコウのアームハンマーがネオゲッターを襲う。

李衣菜「遊び半分で……！アンタのために、こっちは死力を尽くしてるんじゃない！」
腰を屈め、アームハンマーを掻い潜り、ジャコウの鳩尾に拳を一発。

李衣菜「生きるためにやってるんだあゝ!!」

折れたジャコウの頭に、右の垂直蹴りを叩き込んだ。

ヤシャ「ぐふう……」

李衣菜「どう……っ!？」

ヤシャ「ふふふ……！素晴らしい……、これこそがランドウ様の言う人間の進化！」

李衣菜「進化……？」

奈緒「どう言うことだ？」

ヤシャ「惜しい。実に惜しい。出来ればその進化の行く末を見たかったが……」

加蓮「自爆なんてバカな真似やめれば、見れるんじゃない？」

ヤシャ「バカな。己の我欲のために、大局を見誤るものか」

奈緒「ホントにそれでいいのかよ？死んだって、何にもならないんだぞ！」

ヤシャ「構わん！この命、この先のランドウ様の覇業を思えば惜しくはない!!」

艦長『各機、聞こえるか!?まだ離脱できんか！直にタイムリミットだ…。これ以上は離脱が間に合わなくなる！』

李衣菜「艦長…!？」

ヤシャ「フハハハ！無駄だ。もうネオゲッター2でも間に合わん！」

加蓮「まんまとしてやられたって訳？」

ヤシャ「ここまでは私の予定通り。だが、貴様らはこの手でなぶり殺してやるッ！」

奈緒「ははっ、戦士のプライドってか！」

ヤシャ「そうだ！貴様らの首級、地獄へ持っていく！それが私の、最大の榮譽となるのだ！」

加蓮「アンタの自己満足に、うら若き乙女を巻き込まないでよね！」

李衣菜「そっちは勝手に地獄に落ちるつもりかもしれないけど、私は地獄なんていくつもりないから！」

奈緒「いやいや、そういう問題じゃないだろ！」

李衣菜「どっちにしても、そっちの思い通りになんてやらせない！」

ヤシャ「ハハハッ！例え貴様らに倒されようとも、基地の爆発は阻止できん！どちらにせよランドウ様の勝ちだ!!」

李衣菜「!？」

ジャコウが天高く飛ぶ。

ヤシャ「せやッ!!」

李衣菜「ぐうぐう!？」

ジャコウのドロップキックを、両腕をクロスさせて受け止める。

李衣菜「ツ…何て重い一撃…」

加蓮「ネオゲッターじゃ、正面からぶつかるだけで勝てるって相手でもないね。どうする?」

李衣菜「どうするって…」

加蓮「バカの相手何てしなくても、分離して全力で離脱すれば、アタシ達だけでもかかるかも」

奈緒「まあ、そっちの方が連中の作戦を覆せて、悔しがらせる事くらいは出来るな」

李衣菜「ははっ、あの野獣のおじさんが悔しがるのは見てみたいかもね。だけど…」

シユワルツ「うらあッ!!」

ジャック「Fire!!」

リンダ「はっ！」

ボブ「ぶっ潰してやらア!!」

かな子「ニオンさん、左です！」

ニオン「はあッ!!」

李衣菜「みんなまだ諦めてない。私だけ逃げるなんてできないよ」

加蓮「…言うと思った」

李衣菜「両腕は使える？」

奈緒「衝撃で反応が鈍くなってるかもしれないけど、完全に壊れたわけじゃない」

李衣菜「そっか。だったら…！」グッ

ネオゲッター1の足腰に、再度力を込める。

ヤシャ「来いッ！最後の戦いを、心行くまで楽しもうぞ！」

李衣菜「最後にする気はないって！私は生きる…！生きて、ロックアイドルとして成

功してみせるッ!!」

奈緒（何の決意だよ…）

加蓮「……？待って」

奈緒「どうした？」

加蓮「いきなりリーダーに…。何か、降ってくる」

李衣菜「降ってくる?」

奈緒「上か!」

爆発。衝撃。

巻き上がった土煙が、周囲一帯を包む。

ジャック「What's!」

ヤシャ「何事だ!」

奈緒「ランドウも混乱してる…?」

メリー「どう言うこと?ランドウの攻撃じゃない?」

李衣菜「落ちてきたの…、エネルギー反応がある…?」

かな子「この反応って、ゲッター線!」

「ううっ…」

加蓮「この声って…」

シュワルツ「おいおい、冗談だろ?あの姿は…!」

「真ゲッターロボ!!」

つつく

第11話 『神か悪魔か、真ゲッターロボ』

—— 物語は少し前に遡る。

！。

くくく ??? くくく

卯月「——…痛たたた…」

凜「ううっ…」

卯月「凜ちゃん？大丈夫ですか？」

凜「………」

卯月「凜ちゃん！」

芳乃「気絶しているだけのようでしたー。見たところー、外傷は見当たらずー」

卯月「…そうですか…」

芳乃「墜落の衝撃が原因でしょー。直に目を覚ますものどー。今は現状の確認と致し

ましょー」

卯月「……ここは……」

倒れた真ゲッター1を起こす。

芳乃「ふむ……。廃墟、のようですねー」

卯月「酷い……。ここで一体何が……」

芳乃「……戦闘ではないかとー」

卯月「え……？——っ!？」

真ゲッター1の足元に、マシンの残骸が散乱している。

卯月「これって、ゲッター!？」

芳乃「外へは出ない方が身のためとー。大気中のゲッター線量がー、規定の値を大き

く越えていますとー」

卯月「……ここで、激しい戦闘があつたんですか……?」

芳乃「恐らくですがー、地球全体が高濃度のゲッター線で汚染されてしまっているのかとー」

卯月「どうしてそんなことに……」

芳乃「ご安心をー、卯月さんー。恐らくここは、芳乃達が元いた世界とは異なる世界

ですとー」

卯月「異なる世界……?……どう言うことですか?」

芳乃「遙か未来からの刺客との戦いの後、わたくし達は、ゲッターエンペラーの力により、元いた世界とは別の、異なる地球に送られてしまったのです」

卯月「異なる地球……？よく分からないんですけど、テレビとかでよくやってるパラルワールド、つて言うのですか？」

芳乃「そう言った認識で間違いありません。芳乃達の世界であれば、性急にここまでゲッター線が世界を汚染したりはしませんが……。ここまで高濃度のゲッター線が地球を汚染するには、遙か長き時を要するのでして」

卯月「ゲッター線に汚染された、未来の地球に來ちやっただことですか？」

芳乃「はい。ゲッターエンペラーの導きによりまして」

卯月「ゲッターエンペラー……。未来の宇宙を見た、スゴくおっきなゲッターロボ……」

芳乃「エンペラーの力ならば、時間と空間を超越し、わたくし達を異なる世界へ送り込むことも出来まして」

卯月「どうしてそんな事を？ゲッターエンペラーは、一体何を見せるつもりで、私達をこんなところに……？」

芳乃「真実の一端を……。その一部を垣間見せる為に」

卯月「真実の一端……。それは……」

芳乃「……来まして」

卯月「っ——!?!」

咄嗟に真ゲッター1を後ろへ下げた。真ゲッター1の目の前を、ワイヤーで繋がれた鉄球が横切る。

卯月「これは……!」

「ちっ……!外したか……!」

卯月「げ、ゲッターロボ……!?!どうして……!」

ゲッターポセイドンによく似たゲッターロボが、真ゲッター1の前に立ちはだかる。

「へへっ、久しぶりの上物だぜえ。コイツのパーツを使えば、今より体を強化できる!」

卯月「っ……!?!嘘、だよね……?その声……未央ちゃん!?!」

ミオ? 「ミオ……?そんな名前知らねえな!それより、テメエのパーツとエネルギー、全部置いていきな!!」 ボシユツ

右腕を突き出し、棘付き鉄球が繋がったワイヤーアームを跳ばす。

卯月「ッ!?!」

ワイヤーアームが胸部に直撃し、後ろの廃ビルへと叩き付けられる。

卯月「ううっ……!ど、どうして……!」

芳乃「しつかりするのでしてー、卯月さんー。アレはー、わたくし達の知る未央さんではありませんー。同じ声音を持つだけのに、別の存在でしてー」

卯月「でも、それでも未央ちゃんです！」

ミオ? 「何だ? 反撃しないのか? 完全体と警戒していたが…」
シユルツ

卯月「ぐっ…!!」

真ゲッター1の首に、ワイヤーが巻き付く。

ミオ? 「戦う覚悟のない奴はアゝ!!」

片腕を頭上上げて回し、真ゲッター1を振り回す。

ミオ? 「とつととくたばりやがれえゝ!!」

瓦礫の山へ、真ゲッター1を叩き付ける。

卯月「うう…ッ!」

芳乃「卯月さん…!このままでは、皆危険でして…!!」

卯月「でも…!」

ミオ? 「ハハッ!完全体だから、もうちよいやると思ったが、ウォーミングアップにもならん」

ミオ? 「さあ、お前の体とエネルギーを寄越せ!それで私はもつと強くなるんだ!」

卯月「強くなる…?どうして…!どうしちゃったの!?未央ちゃん!」

ミオ? 「ツツ!!ああ!鬱陶しいなア!!その名前で呼ばれると、頭がムカムカしてくる

！」

ガンツ

卯月「あ、あつ……！」

ミオ? 「お前鬱陶しいからさア、さつきと死んでくんない? お前の命は、私が貰ってあげるからさあ……」

芳乃「卯月さん……! 立って下さい……。このままでは、卯月さんだけでなく、凛さんまでもが……!」

卯月「つ……!?!」

ミオ? 「とつとと……くたばれエツ!!」

卯月「つ……未央ちゃん……!」 ジャキツ

トドメを刺すため、アームハンマーを振り上げたポセイドン似のゲッターに、ゲッターレザーを構えた真ゲッターは、高速で背後へと回り込む。

ミオ? 「な……速……ツ!?!」

卯月「ごめんなさい……!」

ゲッターレザーの閃を描き、ポセイドン似を切り刻む。

ミオ? 「ぐあッ!」

倒れ伏すポセイドン似のゲッター。

卯月「未央ちゃん！すぐにコックピットから出してあげますね！」

芳乃「……。卯月さんー、よく見てくださいー」

卯月「えっ？」

コックピットハッチをこじ開ける。

卯月「——！これって、嘘……」

芳乃「既にー、〃人〃ではないのでしてー……」

卯月「機械に……、ゲッターに取り込まれてるんですか……？」

ミオ？「……めろ……」

卯月「？」

ミオ？「や……め、ろ……。離……すな……。私を……ゲッターから離すな……。ゲッターから

……離すな……」

卯月「み……未央、ちゃん……？」

ミオ？「ゲッターから……離s……」

ゴシヤアアツ

卯月「!?」

「へへっ！やりにい！久しぶりの獲物だぜ〜！」

何処から現れた、ネオゲッターによく似たゲッターが、ソードトマホークのような剣

で、コックピットブロックを破壊した。

卯月「あ……ああ……！」

「ん？あんたは完全体だから、こんなガラクタいらないでしょ？だからコイツは、アタシが頂き〜♪」

卯月「……り、李衣菜ちゃん……？」

リーナ？「？……リーナって誰の事？何か懐かしい感じがするけど。ま、どうでもいいか」

卯月「……」

リーナ？「あ、安心して？アタシはこのバカとは違って、自分より強い奴には喧嘩売らない主義だから」

嬉々とした様子で、ゲッターを解体していく。

リーナ？「へへっ、上等上等。これは使えるね」

卯月「そのパーツを使って、何をするんですか？」

リーナ？「何って、そんなの、強くなるために決まってるじゃん」

卯月「強くなる……？」

芳乃「強くなるとはー、即ちー、進化すると言う事ー」

卯月「進化……。戦うだけが、進化の方法じゃないはずです！」

芳乃「然りー。ですがー、この世界ではー…」

リーナ? 「あんた、この星の奴じゃないね。どっから来たの?」

卯月「え…」

リーナ? 「戦いなんて、この星じゃ日常さ。ほら、見てご覧よ」

促された方向、遙か先では、ゲッター同士が激しい戦いを繰り広げていた。

卯月「そんな…! どうして…」

リーナ? 「生き残るためさ」

卯月「生き残るため?」

リーナ? 「今度は上を見てみて」

卯月「上、ですか?」

見上げる。空には、分厚い暗雲が立ち込めている。

リーナ? 「雲に見えるけど、ただの雲じゃない。ゲッターエネルギーの塊なんだ」

卯月「あ…、ゲッターが…」

無数のゲッターが、暗雲に向かって突撃していき、その度に暗雲から放たれる雷に破壊されていく。

リーナ? 「あつははっ! バカだねえ。パワーが足りないんだ。あんな貧弱な体で無茶したって、どうにもならないのに」

卯月「あのゲッター達は、何でそんな無茶をするんですか？」

リーナ? 「この星から出るんだ」

卯月「この星…地球からですか？」

リーナ? 「そう。アタシ達は、生まれてからこの星に閉じ込められてる。でもアタシ達の生まれたこの星は、ゲッター線に汚染されて、とてもじゃないけど暮らせない」

リーナ? 「こうして機械の体にならなくちゃ、まともに生きていけないくらいにね」

卯月「李衣菜ちゃん…」

リーナ? 「……。だけど、強くなつて、あの雲を抜けられれば自由になれる。広大な宇宙には、こことは比べ物にならないくらい満ち足りた、極楽の星だってあるはずさ！」

芳乃「そなたらはー、そこへ行くためにー？」

リーナ? 「そう！こんな辛気くさいところさつきと出ていって、自由になるんだ！その為に、今はパワーを集める。アイツを越える！」

卯月「アイツ、ですか…？」

リーナ? 「フフツ、この星の守護神様だよ」

卯月「守護神…？それって…」

リーナ? 「聖獣、ドラゴン…！」

卯月「聖獣…ドラゴン？」

リーナ? 「気になるなら行ってみるといいよ。あんたならきつとあそこまで辿り着けるはず。と言うより、早くここを離れないと…」

卯月 「っ!?!」

ザザツ

ゲッターもどき 「けけっ! 見ろよ、完全体のゲッターだ!」

ゲッターもどき 2 「スゲエ…。あの腕一本でもありやあ、かなりパワーアップできるぜ!」

ゲッターもどき 3 「手強い相手かも知れねえが、ここにいる連中が束なりやア…。」
ゲッターもどき 4 「おいおい、協力しろってんなら、分け前は弾んでもらうぜ?」

リーナ? 「ほら、ハイエナが湧いて出てきた」

卯月 「この人達は…!」

リーナ? 「少なくとも、ここじゃあんたは体中にブランドもの付けて、見せびらかして歩いてるようなもんだ。要するに、目立ってんだよ!」

リーナ? 「面倒だから、とつとつこの星から出て行きな! 自由になれる力なら、もう持つてる筈だ」

卯月 「貴女はどうするんですか?」

リーナ? 「どうするもこうするも、ここで生きてるなら、やることは決まってるって

！」ジャキツ

卯月「李衣菜ちゃん！」

リーナ？「義理でも何でもない、獲物を狩るだけ。あんたはさつさと行きな。アイツがいるのは、この暗雲を越えた向こうだ」

卯月「でも…」

リーナ？「どんな温室で育ったかは知らないけど、情けは足元掬われるだけだよ？ 自慢のその体を傷つけられる前に、さつさと行きなッ!!」

ネオゲッター似が、ゲッターもどきに立ちはだかる。

ゲッターもどき2「アア!? んだテメエ！ 雑魚に様はねえんだよ!!」

リーナ？「同じ雑魚に言われたくはないなあ」

ゲッターもどき2「んだとお!？」

ゲッターもどき「落ち着け。数じゃこつちが上。下手な挑発に乗って、こつちの有利を手放すな」

芳乃「卯月さんー、今のうちでしてー」

卯月「……」

芳乃「芳乃達がこの世界の事情に干渉するのはー、あまり良き事とは思えませんー。この雲の向こうにいると言うー、守護神が元の世界に帰る手掛かりであるとすればー、

早急に行つてみるのが得策かとー」

卯月「……ゲッターバトルウイングッ!!」

ズワッ

真ゲッター1、飛翔。

ゲッターもどき3「あつ!待ちやがれ!!」

リーナ?「おっと!」

ゲッターもどき3「ギヤアツ!!」

ゲッターもどき4「テメエ……!」

リーナ?「あんたらの相手はアタシだつて。どつからでも掛かつてきな!雑魚共!!」

」

」。

—— 暗雲内。

卯月「……」

芳乃「卯月さん、顔を上げてくださいー」

卯月「これが、ゲッターが導く未来なんですか?」

芳乃「それは……」

卯月「私達の未来が、ゲッターの戦いの先が、この破滅の未来なら、私は……!」

芳乃「この未来がー、破滅と決まったわけではありませんー」

卯月「でも!」

芳乃「卯月さんもー、感じたのでしょー? はじめてゲッターに乗った時ー、真ゲッターロボを動かした時ー。ゲッター線が導くー、無限の可能性をー」

卯月「それは…」

芳乃「ならばー、ゲッターを信じましょー? 少なくともわたくし達はー、わたくし達の愛するもの達のためだけにでもー、戦い続けなくてはならないのでしてー」

卯月「芳乃ちゃん…」

ピピッ ピピッ ピピッ

卯月「——!?!? 何かが近付いてくる…? 速い…これって、もしかして…!」
ガンツ

卯月「きゃあっ!」

「フッフ…。遂に来た。やっと、ワタシに匹敵する強い奴が!」

芳乃「この声はー…」

卯月「凜…ちゃん…!」

ゲッターライガーによく似たゲッターが、やや上空から真ゲッターーを見下ろしている。

リン? 「ここまで来れるって事は、あんた相当やるね。ほら、見てご覧よ」
卯月「……?」

リン? 「ゲッター線の雷が回廊になつて居るでしょ? 相応の実力を持った者なら、ゲッター線はそいつを撃たず、この先へ導く回廊になる。あんたは認められたのさ。ゲッター、聖ドラゴンにね」

卯月「やめてください、貴女とは戦いたくありません」

リン? 「ハッ! そんな綺麗事が通じるとでも? 弱肉強食は世界の摂理! 戦って勝利したものにこそ、幸福と喜びが約束される!!」

ゲッターライガー似のゲッターが、ドリルアームを唸らせ、真ゲッターの表装を削る。

卯月「うっ……!」

リン? 「あまちゃんでもここを通ることを許されたんだ! ワタシがあんたを倒して、その力を手に入れれば、ワタシはもつともつと強くなれるッ! アイツを越えられる!」
ギヤルンッ

リン? 「ゲッター聖ドラゴンを!!」

目にも止まらぬ速さで、真ゲッターの周囲を飛び交い、すれ違い様にドリルアームで真ゲッターを傷付けていく。

卯月「くっ……！」

芳乃「卯月さんー？」

卯月「ツ…ゲッタートマホーク!!」

ゲッタートマホークを抜き打つ。

リン? 「はんツ! そんなモンが当たるわけ…」

卯月「ツ!!」

ヒュンツ

ゲッターライガー似に追い付く。

リン? 「バカな…! ワタシより速い奴なんているわけ…!」

卯月「やあツ!!」

ズアツ

リン? 「グッ…!」

身を翻したものの、ゲッターライガー似の右腕を切断。

卯月「たあツ!!」

トマホークを突き立て、衝撃波でゲッターライガー似を木っ端微塵に吹き飛ばした。

ベチャリ

卯月「っ…! —…:凜、ちゃん…!」

真ゲッターの眼前、真ゲッターのコックピットのスクリーン上に、リン?の上半身が張り付いている。

リン? 「な…ん、で…」

卯月 「っ…!」

半身の断面は、機械のチューブやノズルが覗いていた。

リン? 「何、で…あんなの…? 何故、ワタシじゃない…!」

凜 「—う…、ん…?」

ズルツ

リン? 「—!」

凜 「ひっ…!」

ずり落ちて、落下していく自分と目が合った気がした。

凜 「な、何…? 今のは…」

卯月 「何でもありません」

凜 「卯月…? どうしたの?」

卯月 「何でもありません…。何でも、ないんです」

凜 「…?」

芳乃 「早く参りませよ。この雷の回廊が、芳乃達を導く先へ」

凜 「雷の回廊？…そもそも、ここは一体…」

芳乃 「最早ここが何処かを考える意味はないでしょー。後はここから去るのみー」

凜 「…分かった。とりあえず、この先に行けばいいんだね？行こう、卯月」

卯月 「…はいっ」

—。

芳乃 「……」

凜 「……」

卯月 「……」

凜 「——…見て、雲の切れ間が……！」

卯月 「雲の向こう…何かある…？」

芳乃 「……」

凜 「この反応…。スゴく大きい、建造物に思えるけど…」

卯月 「これって…！巨大な…！」

凜 「ゲッターロボ…なの!?!」

芳乃 「……」。然りー、これこそがこの地球を守護する者ー…」

「ゲッター^{セント}聖ドラゴン!!」

ズズズ…

凜 「な…何なのコイツ…！無数のゲッターの、集合体!？」

芳乃 「今はまだ、進化の途上にある為、そのように見えるのでして」

凜 「進化の途上…?」

卯月 「何が起こってるって言うんですか…!？」

『島村卯月』

卯月 「!?…は、はいっ」

凜 「聖ドラゴンの声…」

(ゲッターの進化の行く末…。私は見てみたい…——)

凜 「!？」

聖ドラゴン 『君達にはすまない事をした』

卯月 「…どう言うことですか？」

聖ドラゴン 『君達を巻き込むつもりはなかったのだ。しかし、ありとあらゆる世界を

“ヤツ”から守るには、こうするより他に方法はなかった』

凜 「ありとあらゆる世界…」

卯月 「ヤツって、それは誰の事なんですか!？」

聖ドラゴン 『全ての世界を、世界を創造せし神すらも超越する存在!!』

卯月 「神すらも超越する、存在…?」

聖ドラゴン『そう。それは最早、神や悪魔、人などと、あらゆる生命の存在の定義を超えた、虚無の向こう側を支配する存在』

卯月「虚無の向こう側…。そんなのと戦うために、貴方達は進化を繰り返してるんですか!？」

聖ドラゴン『そうだ』

凜「でも、そんなのと戦うって、どうやって…」

聖ドラゴン『それは、進化の果てに辿り着いた者のみを知るモノ。お前達はまだ、その進化の突端に触れたにすぎない』

卯月「!？」

ズアアア…

真ゲッター1の背後に、時空の扉が開く。

聖ドラゴン『さあ、私の話は終わりだ。君達の世界に帰るのだ』

卯月「待つてください!アナタは…!」

聖ドラゴン『いずれ全て分かる。そして知るのだ。その力の意味と、己の存在の意味を』

卯月「待つて…!」

凜「ダメだ卯月…!また、吸い込まれる…!」

聖ドラゴン『往け!! 君達の世界に、新たな脅威が迫っている』

凜「新たな脅威…?」

聖ドラゴン『君達の世界は君達の自身の力で守るのだ。でなければ、この先の答えも、知ることには許されない』

卯月「うっ——」

時空の扉の奥へ落ちていく。

卯月「待って…! 待って…! 待って…! アナタは——」

凜「あぁっ……」

聖ドラゴン『また逢おう。その時は、必ず来る——』

卯月「待ってください…! な、がれ…」

「流竜馬あああああ……!!」

—

—

—。

~~~~~ アラスカ大陸 ~~~~~

卯月「——ううっ……! こ、ここは…?」

「卯月! それに乗ってるのは卯月なんでしょ!? 返事してよ!」

卯月「!?…りいな、ちゃん…?」

李衣菜「やつぱり卯月だ。よかった…、無事だったんだね!」

卯月「李衣菜ちゃん!」

李衣菜「?どうしたの?そう何度も呼ばなくても…」

奈緒「もしかして落下のショックで頭でも打ったんじゃないか?」

凜「奈緒…、加蓮もいるの?」

加蓮「勿論。一応、3人揃ってネオゲッターチームですから」

芳乃「卯月さん?凜さんも。地形からの情報で現在位置が把握できまして。わたくし達はどうやら、アラスカに来てしまったようです」

卯月「アラスカ!?アラスカって、あのアラスカですか!?!」

凜「卯月…、それじゃあ、どこのアラスカの話をしているのか分かんないよ」

李衣菜「芳乃の言うとおり、ここは北米大陸アラスカだよ」

奈緒「だから、早乙女研究所で消えた凜達が、何でいきなりアラスカに飛んできたんだ?」

凜「それは…、分かんないよ」

奈緒「分かんないって、何だそりゃ?」

卯月「これも、ゲッターの導きなんですか?芳乃ちゃん」

凜 「卯月……？」

芳乃 「……」

シユワルツ 「テメエら！戦闘中だ!!何時までお喋りしてやがる!？」

ジャツク 「基地の核爆発まで、もう猶予はないネ！」

ボブ 「再開の喜びを分かち合う前に、このままじゃ一緒にお陀仏だ！」

卯月 「!?……どういう状況なんですか……!？」

凜 「核爆発とか、穏やかじゃないね……」

加蓮 「……」。分かりやすく、簡潔に話すよ？折角のところ悪いけど、このままじゃああ

タシも凜も核爆発に巻き込まれてみんな仲良く蒸発しちゃうって」

凜 「成る程、分かりやすいね」

奈緒 「しかも500ギガトン級：アラスカ大陸の半分は消し飛ばしちゃうってさ」

卯月 「そんな兵器が……」

ドンツ

卯月 「うっ……!？」

李衣菜 「ヤシヤ！」

ヤシヤ 「フツハツハツハツ!!真ゲッターロボ!!貴様らの出現は予想外だったが、貴様

を倒せばランドウ様の憂いを排除することができる！」



卯月「ら…ランドウ…!？」

李衣菜「コイツらの親玉だよ！」

凜「成る程ね…。状況が見えてきた。あんたら、恐竜帝国や百鬼帝国と同じって訳」

加蓮「ただし、今回の首謀者は同じ人間だけだ」

芳乃「…人の業とは、いつの世も変わらぬものでして…」

卯月「誰かの平和を踏みにじって…！それが平気な人なら、許してなんておけませんっ！」

ヤシヤ「…!?ぬお…！」

卯月「ゲッターレザー！」

取り付いたジャコウを強引に切り離し、ゲッターレザーで切り払う。

ヤシヤ「このジャコウを振り払うパワー…！流石の力だ真ゲッターロボ！」

凜「コイツ、戦闘狂い…?」

芳乃「周囲にいる敵対反応らしき存在の…たを集めました。おそらく、かの者が隊長である者」と

凜「コイツの相手をしてても仕方ない。卯月！」

卯月「大丈夫です！真ゲッターの力なら…！」

芳乃「然りー。真ゲッターならば、人の生み出せし悪魔の炎を止めることができま

しよー」

ヤシャ「やらせると思っているのか？」

李衣菜「それはこっちの台詞だあ!!」

ヤシャ「ぬっ!?!」

ソードトマホークを両手に構えたネオゲッター1が、ジャコウと真ゲッター1の間に割って入る。

ヤシャ「貴様……!」

李衣菜「ここは私に任せて、卯月は核を!」

卯月「李衣菜ちゃん……!」

奈緒「まさか、本気でそんなこと言う奴がいるとは思わなかったけどな」

加蓮「今この状況をなんとか出来るとしたら、真ゲッターのとんでもパワーに賭けるしかない」

李衣菜「私達には出来ないこと、卯月達に出来るんだから、行って!」

——行きなッ!!

卯月「李衣菜ちゃん……!はいっ!!」

ヤシャ「雑魚がア!邪魔をするなア!!」

李衣菜「そういう台詞は、私を倒してから言え!!」

奈緒「いや、倒したら言えないだろ」

李衣菜「おりやあく!!」

ネオゲッターが、ジャコウに向かって、ソードトマホークを振り下ろす。

芳乃「卯月さんー、やるならば今こそー」

卯月「はいッ!」

凜「でも、どうやって…」

芳乃「心配は無用ー。ゲッターを信じればこそー」

卯月「……」

リンダ「彼女達は何をする気?」

かな子「分かりません…」

鉄甲鬼「真ゲッターロボの力は、我々の常識を越えている」

リンダ「貴方達の造ったものでしょうに!」

ニオン「…少なくとも、真ゲッターロボの創造に関しては、恐竜帝国も百鬼帝国も関係ない」

鉄甲鬼「ああ。それこそ、あの力が危険だからこそ、ブライ大帝も目覚めることを恐れていた」

かな子「2つの帝国との決戦…。それを超えた先の戦いを見据えて、早乙女博士も建

造したわけですからね…」

メリー「2つの決戦を越えて…」

ジャック「それじゃあ、あの力が必要になるくらいの戦いが、これから待ち受けているとでも言うのか？」

オオオオオオオオ…

卯月「——ゲッターアアア!! シャアインツ!!」

——カッ

凜「真ゲッターロボ、ゲッターエネルギー量が増大してる…」

卯月「……」

『ゲッターだ…。ゲッターの力を信じるんだ——』

卯月（竜馬さん…）

卯月「——いきますッ！」

ヤシャ「させるかッ！」

李衣菜「させるか！お返し！」

キインツ

ヤシャ「ぬう…！私を阻めると思うなア!!」

李衣菜「ぐあ…!?!」

強行突破を図るジャコウが、ネオゲッター1をシールドで吹き飛ばす。

李衣菜「うあ……っ！」

奈緒「分かりやすいのに当たるなよなく！」

李衣菜「っ……！これも相手を油断させる作戦、ってね！」

倒れ込んだ姿勢でチェーンナツクルを放ち、ジャコウの足首を掴む。

ヤシャ「おお……！」

勢いを殺されて、転倒するジャコウ。

ヤシャ「おのれ……！そうまでして死に急ぐか！」

加蓮「勝手に決めつけないでよね。こっちは全力で、生き延びるためにアンタを止め

てるんだから」

ヤシャ「何をするつもりかは知らんが、真ゲッターロボさえ止めれば良いのだ。――

メタルビースト部隊!!」

李衣菜「ッ！」

ヤシャ「望み通り、貴様らの相手はこの私だ!!」

李衣菜「へへっ、やっとやる気になった？望むところじゃん……！」

奈緒「強がつてる場合か！メタルビーストが、真ゲッターのところに……！」

メタルビースト《——!!!》

卯月「——シャイン、スパアークツ!!」  
ズワツ

真ゲッター1が眩い光を放ち、迫り来るメタルビースト達をゲッター線の光が包み込む。

ジャック「Wow!! 何て光ダ!」

加蓮「真ゲッターのシャインスパーク:!?ゲッタードラゴンの倍以上の出力:?!」  
ポブ「まるでモノホンの太陽が降りてきちまったみたいだぜ!」

卯月「このまま、基地の中へ!」

核発射基地へ、真ゲッター1が飛び込む。

シュワルツ「おいおい…。大丈夫かよ?」

ヤシャ「万策尽きての特攻か!」

李衣菜「そんなんじゃない!これは、生きるための作戦だ!」

卯月「——500ギガトンの核…。その光を解き放たせるわけにはいきません!」

ズアアアアア:

サム「何がどうなってる!?」

メリー「分からないわ!ゲッターのエネルギーが強すぎて…!」

リンダ「光が、全てを飲み込んでいる!」

ズオオオオオオオオオオ……

ゲッター線の光が基地内部に拡散し、全てを包み、飲み込んでいく。

凜 「これは……意識が薄れて……、心まで、光の中に……！」

芳乃 「心を強く持つのでしてー。このあまねく光の中に於いてもー、確たる個の存在を意識し続けなくてはー、光と共にー」

（——知りたい……。ゲッターの行く先……その果てにあるものを——！）

凜 （違う！私は……！）

卯月 「うああああああ——！！」

真ゲッターの輪郭さえ不鮮明になるほどの眩い光が基地を越え、アラスカ大陸を照らし、やがて収束した。

——。

艦長 「……むう」

副長 「光が収まったようです」

艦長 「速やかに状況の確認を」

オペレーター 「か、艦長……！大変です！」

艦長 「何が起こった！」

オペレーター 「施設の核兵器が、跡形もなく消滅しています！」

艦長「何だと!」

オペレーター「いえ、核兵器だけではありません!基地の地下施設がまるごと消滅し、モニター上では巨大な空洞になっています!」

副長「あれほどの核を、爆発させずに処理したのか?」

艦長「…周囲のゲッター線の濃度は?」

オペレーター「…正常値と変化ありません」

艦長「バカナ…。あれだけのゲッター線の放出があつたばかりなんだぞ?」

オペレーター「計器は正常…。真ゲッターが、全て収めてしまったと思うより他ありません」

艦長「まさしく、デウス・エクス・マキナと言ったところか…」

副長「人の生み出した悪魔の兵器を越える、ですか…」

艦長「…うむ…。日本の科学者、ドクター早乙女の生み出したあの力、果たして人類を救う神の使者なのか…」

副長「或いは、悪魔を超える悪魔か、ですな」

シユワルツ「何てこつた…。核を、喰つちまつた…!」

ジャック「Jesus…!」



李衣菜「コレが、真ゲッターロボの力…」

奈緒「間近で見るのは二度目だけど、いつ見てもトンデモだよな…」

ボブ「おいおい…、日本は何てモンを造りやがったんだあ？」

ヤシヤ「おのれえ…！真ゲッターロボめえ…！」

凜「ううっ…！終わったの…？」

卯月「はい。コレでもう二度と、ここで核を使われることはありません」

凜「…?! エネルギーが臨界を越えてる…」

芳乃「一度に膨大な核のえねるぎーを吸収しました故ー、えねるぎーを真ゲッターでも抑えきれなくなっていますー」

凜「吸収したの?…ううん、今はそうじゃないね。卯月、少しでもエネルギーを出さないとー！」

卯月「分かりました！行きますっ！」

卯月「——ゲッターバトルウイング!!」

バサッ

核施設のあった場所から、真ゲッターーが飛び立つ。

リンダ「まだ何かするつもりなの？」

卯月「周りにいる、李衣菜ちゃん達を攻撃してた相手を倒します！」

凜 「奈緒達の無線では、メタルビーストって言ってたみたいだけど……」

卯月 「それが何であつても、たくさんの人達の笑顔を奪うなら！」

芳乃 「めたるびーすとを捕捉しましてー」

卯月 「ありがとうございます、芳乃ちゃん。これを……」

地表に目掛け広げた両腕に、ゲッターエネルギーギアが収束されていく。

凜 「奈緒……と、味方のロボットはみんな下がつて！」

奈緒 「お、おう分かつた！ 李衣菜！」

李衣菜 「うん！ ジャックもシュワルツも、今は下がつて!!」

ジャック 「OK!! 核の脅威が去つたなら、こんなところからはとつととおさらばネ！」

シュワルツ 「つたく、今度は何しようってんだ！」

キユオ……ッ

卯月 「——スプリットビーム!!」

ズワツ

真ゲッターの左右の腕から無数のビームが雨のように地上に降り注ぐ。

ヤシャ 「おおおッ!？」

スプリットビームが空を裂き、大地を穿ち、全てをビームの中に飲み込んで、メタル

ビーストを破壊していく。

ボブ「——もう全部アイツ一人でいいんじゃないかな」

サム「俺達のロボ・ストーンの開発にかけた苦勞は何だったんだ？ ったくよ……」

リンダ「ならマシンを降りる？ そうすると何の取り柄もないおデブさんが残るだけだ  
けど」

ボブ「ホント、キツイこと言ってくれるぜ……」

ヤシヤ「ぐう……ッ！ 何と言う威力……。コレが、ランドウ様の恐れていた真ゲッターロボの能力！」

全身の装甲が砕け、表装は黒く煤け、大破したジャコウが立ち上がる先は、全てが吹き飛ばされた焦土の大地。

李衣菜「どーだ！ コレで残るはアンタだけだけど、まだ何かする？」

シユワルツ「……お前が威張ることじゃねえだろ」

奈緒「全くだよ」

加蓮「虎の威を借る何とやら……。一緒に組んでて恥ずかしいよね、ホント」

李衣菜「ちよつとみんな、ボコスカ言い過ぎじゃない？」

ヤシヤ「まさか真ゲッターロボが現れるとはな……。これは予想外の事態だ」

サム「何だよ、負け惜しみかア？」

ヤシヤ「そう言われても仕方ない。私が仕立てたこの状況、こうも容易く覆されると

は！」

シユワルツ「ハッ！大した策士だぜ。もう覚悟は出来てンだろ？この状況で逃げ切れるなんざ思つちやいねえだろうな？」

ヤシャ「……！」

李衣菜「…帰りなよ」

ヤシャ「…何…？」

加蓮「リーナ？」

ジャック「What's!?正気か？リーナ！」

李衣菜「そりゃあ、数ならこつちが勝つてるし、最大のチャンスなのかもしれないけど、今回は結構ハードな戦いだつたじゃん？」

李衣菜「みんな機体にもダメージが溜まつてるだろうし、それにほら、あれだつて。追いつめられたキツネはジャックカルより凶暴とか何とか…」

ボブ「何だアそりゃ？」

ジャック「それを言うなら、窮鼠猫を噛む、じゃないデスカ？」

李衣菜「あれ？そうだっけ？」

ヤシャ「だから私に情けをかけると言うのか？」

李衣菜「情けつて言うんじゃないよ。ここで犠牲を出して、勝つのは簡単。だけど、今

はその犠牲も無駄にしたくないから、出来ることなら退いてくれないかな、つてそういうお願い」

ヤシャ「……」

奈緒「とか何とか言つて…、ホントは休みたいだけなんじゃないのか？」

李衣菜「う、っ…。そ、そんな事…ないよ？」

加蓮「そうそう。休みたいなら休みたいって、素直に言えばいいのに。アタシもそれは賛成だから」

奈緒「おいッ！」

ヤシャ「クツクツクツ…。フハハハハハッ!!」

李衣菜「な、何…?」

ヤシャ「小娘、貴様の名を聞いておこう」

李衣菜「え…?名前…?李衣菜だけど…ううん」

ヤシャ「？」

李衣菜「日本を代表するロック・アイドル!多田李衣菜!ヨロシクう!!」

ヤシャ「……」

シユワルツ「ハア…」

奈緒「お前なあ…」

加蓮「ふふっ、いいんじゃない？リーナっぽくて」

ヤシャ「アイドル：リーナ、か。覚えてぞその名、その存在！」

ヤシャ「アイドルと名乗る貴様が、この私と対等に語ろうとは、実に愉快ッ。ランドウ様に仕える武人として、次こそは必ず、貴様の首を取るッ!!」 バツ

李衣菜「望むところであ〜！正面からの正々堂々の勝負なら、何時でも受けて立つよ！」

加蓮「——と、ウチのリーダーが勝手に決めちゃったんだけど、みんな良かったの？」

ボブ「……まあ、いいんじゃないか？」

サム「核がどうかで、正直気疲れしちまったしよ。冷や汗で少し痩せたんじゃないか？」

かな子「ほ、ホントですか!？」

鉄甲鬼「諦めろ。連中はお前より、すぐ燃烧できる脂肪分を備えていただけだ」

かな子「……」 グスン

ニオン「泣くことはないだろう」

リンダ「それにしても、戦争なんて失うものばかりだと思っただけで、得るものもあるのね」

メリー「どういう意味？」

リンダ「ウフフフ。こんな殺伐としたアラスカ大陸に、可愛らしい子猫ちゃんが、あんなに」チラツ

凜「…っ」ブルツ

卯月「な、何ですか？」

芳乃「何やらー、悪寒のようなものがー」

ニオン「……。あまりは妙な気は起こすなよ」

リンダ「ヤン。怖い」

ボブ「一先ずはコレで終わりかあ」ウーン

サム「早く帰ろうぜ。カロリー使って腹減っちゃまった…」

ジャック「そうだね。一旦テキサスに戻りまシヨウ。ミー達も、状況の整理が必要ネ」

李衣菜「うん。そうだね——」

くくく 戦艦テキサス 格納庫 くくく

凜「——ふうん。こつちでは、私達がいなくなつてから、もう1ヶ月も経つてるんだ」

加蓮「そ。おまけに新しい敵まで出てきて、もう何が何だか」

凜「ここが日本じゃないってことには驚いたけど、まさか加蓮達が、アイドルの仕事

擲ってまで戦ってくれるなんてね」

加蓮「んー。色々あってね」

凜「大体の状況は分かかってきたけど、なら尚更、日本の状況が気になるかな。晶葉とは連絡つかないの？」

加蓮「どうだろ？早乙女研究所とか、晶葉本人の携帯とかには連絡できると思うけど。…長距離通信は向こうに傍受されるかもしれないからって、艦長達が許すかどうか」

凜「別に、重要なことを話し合う訳じゃないから。私から艦長達に直接相談してみるしかないかな」

奈緒「……」

凜「ん？奈緒、どうかした？」

奈緒「いや、落ち着いてるなってさ」

凜「？ああ、私は、もう真ゲッターの力で、未来の宇宙まで行ってるからね。寧ろ知ってる時間の、知ってる世界に帰ってこれて安心してらるくらいだよ」

奈緒「本当なのか？未来の宇宙とか、もうSFの世界の話だな…」

凜「間違いないと思うよ。私はそこで、進化したゲッターの果てを見た気がするから」

加蓮「進化したゲッター？それって何なの？」



凜 「…知らない方がいい」

奈緒 「はあ？何だよ、それ」

凜 「……」

凜 (ゲッターの進化…ゲッターエンペラー。そして、聖獣ドラゴン…)

凜 「もうひとつの宇宙…」

—

凜 「…っ！」

加蓮 「どうしたの？」

奈緒 「きつと疲れたんだろ。今日は色んな事がありすぎた」

凜 「そうかも。少しゆっくりして、落ち着きたいな」

奈緒 「ああ。艦長達が部屋を用意してくれてるって。卯月と芳乃も、同じ相部屋だけ

ど。案内してやるよ」

凜 「ここには慣れてるんだね」

奈緒 「ま、何だかんだで新しい家みたいになっちゃったからな。落ち着いたら、艦内

も見て歩こうな」

凜 「うん…」

加蓮 「それは分かったけど。……」 ジー…

凜 「な、何…」

加蓮 「凜にとつてはさ、昨日の今日だったかもしれないけど、アタシ達にとつては、ね？」

奈緒 「…そうだなあ」

凜 「うっ…。あ、その…心配させて、ごめん」

加蓮 「よろしい。後で食堂のメニュー奢りね」

凜 「え…。ドルは持ってないんだけど…」

奈緒 「ドル以前に、着替えも何も持ってないだろ？」

凜 「う…うん…」

奈緒 「はあく、やれやれ。一から面倒見なきやダメみたいだな？」

凜 「うん…。ごめん…」

奈緒 「いや、いいんだって。冗談だよ。こっちは帰ってきてくれて、嬉しいんだから」

凜 「奈緒…う…」

加蓮 「そうだよ。ずっと、心配してたんだから。生きてたって報告が、今は一番嬉しい」

凜 「ちよつと、加蓮まで…」

加蓮「おかえり、凜」

奈緒「ここで言うのも間違ってる気がするけどな。おかえり」

凜「…た、ただいま」

李衣菜「…：…へへっ」

卯月「行かなくていいんですか？」

李衣菜「えっ？ああ、今は。再会は水入らずってね」

卯月「優しいんですね」

李衣菜「えへへ…。そっちこそ、早く連絡したい人がいるんじゃないの？」

卯月「そうですね。美穂ちゃん、響子ちゃん、智絵理ちゃん。それに、プロデューサーも…。色んな人に迷惑かけちゃいましたから」

李衣菜「なら…」

卯月「でも、もう少しの辛抱です！日本じゃなくて、ここに来たってことは、ここでやるべき事があるはずですから！それが終わってから、ちゃんとみんなに挨拶させてもらいます」

李衣菜「そっか」

卯月「はいっ！島村卯月、もう一頑張りですっ!!」

李衣菜「あははっ。卯月が帰ってきたって感じがするよ。…：…あ」

シユワルツ「……」

李衣菜「シユワルツ……」

卯月「あ、あのっ……！はじめまして！私は……」

シユワルツ「真ゲッターのパイロットだな？」

卯月「……はい」

シユワルツ「テメエ、自分の持った力の意味を分かっているのか？」

卯月「力の意味……」

シユワルツ「日本は核を越えるゲッターを造つちまつた。今まで散々非核だなんだと世界で騒いでおきながら、な。だから日本人は好きになれねえ」

李衣菜「行きなり出てきて何を……！」

卯月「いいんです。李衣菜ちゃん」

李衣菜「卯月……」

卯月「シユワルツさん……で、いいですか？確かに、真ゲッターの力は、私達には過ぎたものかもしれない」

卯月「だけど、今この時にその力が生まれたことには、何か意味があると思うんです」  
シユワルツ「ほう……。あくまでアイツを捨てる気はねえってか？」

卯月「はい。真ゲッターじゃなきゃ、出来ないことがある。真ゲッターの力で、切り

開くことができる未来があるはずなんです！」

卯月「…あんな未来じゃなくて…！」

李衣菜（あんな未来…？）

シユワルツ「その結果、戦い続けることになってるか？」

卯月「はいっ！私は、今を生きます。明日に繋がる今日を守るために、ゲッターの力はあるんです！！」

シユワルツ「…！」

卯月「…！」

李衣菜「えーっと、2人共？」

シユワルツ「…意思は固えつつかよ」

卯月「はいっ！」

シユワルツ「なら、テメエが真ゲッターを守るんだ。小娘だろうが、アイドルだろうが関係ねえ。テメエの力で、真ゲッターの力を守れよ。いいな」

卯月「はいっ！！」

シユワルツ「ヘッ。返事だけは一人前の奴だ。お前の意思は、これからの戦いで見せてもらうぜ」

李衣菜「…それが言いたいだけなら、最初からそう言えばいいのに」

シュワルツ「うるせエ!! テメエは黙ってるツ!!」

ボブ「た、大変だあゝゝゝツ!!」

シュワルツ「!?!」

李衣菜「ど、どうしたの!?! ボブさん!」

ボブ「お、おう…リーナちゃん…! それが大変なんだ…!パイロットの奴等は、全員ブリッジへ上がってくれ」

シュワルツ「大変大変って、それだけじゃ分かんねえだろうが! 何があつたか、簡単にも言えねえのか?」

ボブ「あ…ああ…。アラスカの戦いはブラフだ。俺達はランドウに嵌められたんだよ!」

李衣菜「え…!?!」

卯月「どういう事ですか?」

ボブ「さつき、テキサスのブリッジに、ランドウから直接通信があつたんだよ。連中、スーパーロボット部隊をこっちのアラスカに集結させて、本土の防備が手薄になつた隙に攻撃するつもりだつたんだよ…」

シュワルツ「まんまと乗せられたって訳かよ。…クソツツ!!」

李衣菜「それで、アメリカの方はどうなったの?」

ボブ「ああ。ランドウは通信で、こう言ってきた。ホワイトハウスを占領した、と」  
シユワルツ「何だ?!」

—。

くくく 戦艦テキサス ブリッジ くくく

— ダツ

李衣菜「艦長ツ!!」

艦長「おお、リーナくん…!」

『役者は揃ったようですな? 艦長』

奈緒「つ…? 誰だ…?」

凜「この人が、ランドウ?」

加蓮「ううん。ランドウじゃ、ない…」

ニオン「…! お前は…!」

『……ほう』

凜「ニオン、知ってるの?」

ニオン「…」

『お初に御目にかかる。私の名はラセツ。役職はランドウ様の参謀、と言ったところかな?』

シユワルツ「参謀だと……！そんな奴がわざわざ俺達に何のようだ!!」

ラセツ『そう構えてもらつては困る。簡単な話だ。私は貴殿方と、取引をしたいのだ』

艦長「取引？」

ボブ「ハンツ！脅迫の間違いだろうが！」

ラセツ『口は慎んでもらおうか。こちらには大切なゲストがいるのだ』

大統領『……』

ジャック「Oh……！大統領閣下……！」

ラセツ『ホワイトハウスから、我々の基地へと来ていただいた。私としても、ゲストに手荒な真似をするのは忍びない』

シユワルツ「人質じゃねえか！やることが狡こすいぜ！」

ラセツ『あくまでも、ゲストだよ。それがどうなるかは、今後の貴殿方の対応の仕方によるがね』

サム「コイツ……！」

艦長「……用件を聞こう」

李衣菜「艦長!？」

凜「落ち着いて。まずは相手の出方を見ようよ」

李衣菜「……」



ラセツ『…ランドウ様は、これ以上戦乱が拡大するのを憂いておられる。よって、貴艦の武装解除を第一に——』

ボブ「何が憂いて、だよ。自分から種を撒いたくせに…」

リンダ「お黙りなさい。今反論しても無意味よ」

ラセツ『それと、貴殿方が所有している、真ゲッターロボを、我々に引き渡してもらいたい』

卯月「……！」

凜（やっぱり…）

艦長「……。真ゲッターロボは、我々の管理下にあるものではない。一艦長の判断だけでは、その処遇を決めかねる」

ラセツ『詭弁はいい。貴殿方の、あの力がいかに危険なものかは当に理解できている筈』

ラセツ『その力を、野放し…。ましてや、一介の小娘達の手にのさばらせておくのは、よりその危険性に拍車をかけているとは思わんか？』

艦長「それは…」

卯月「そんな事はありません！」

ラセツ『…貴様は？』

卯月「島村卯月。日本のアイドルで、今は真ゲッターのパイロットをしています」

ラセツ『そうか、貴様が……。では改めて貴様に問おう。真ゲッターロボを渡せ』

卯月「……お断りします」

ラセツ『小娘に状況は読めんのか？ここにいる人間が誰か、分からないわけではなからう。アメリカと言う、世界の中心に立つ国のトップ……。その人間が死ねばどうなる？ランドウと言う、強大な勢力が台頭している現状で。政治・経済がどのように回っているのか、分からぬわけではあるまい？』

卯月『それでも、貴方達に真ゲッターを渡すわけにはいきません』

ラセツ『その結果、多くの人間が不幸になるかも死ぬのだぞ？』

卯月『真ゲッターを渡しても、渡さなくても、きつと変わらないと思います！この戦いで、きつとたくさんの人が悲しい思いをしちやいます……。それなら、私は……真ゲッターで貴方達と戦う道を選びます！』

ラセツ『あくまで抗うと言うか』

副長「……よろしいのですか、艦長」

艦長「大統領の命は、何者にも替えることはできません。だが、それと同じように、多くの命もまた替えることはできません」

副長「究極の選択……。その只中に彼女は立っているわけですか」

艦長「いや、彼女は私達よりも、遥かに多くの人を見て、ラセツの前に立っておるよ」  
卯月「私は、まだ貴方達の事よく知りません…。けど、貴方達は、悪い人だと思うんです！そんな人達に、真ゲッターを渡すわけにはいきませんっ！」

ラセツ『小娘一人で、何とかできると思っているのか？』

凜「二人じゃないよ」

芳乃「わたくし達も…」

かな子「私達も、卯月ちゃんと気持ちは同じですっ！」

芳乃「…ほー」

凜「例え世界の全部を敵に回したとしても、私は卯月の味方だよ」

かな子「そうです！私達3人の心に、真ゲッターの力を合合わせれば、何だってできる筈なんです！」

卯月「凜ちゃん…、かな子ちゃん…」

李衣菜「真ゲッターも世界も、どっちもアンタらなんかには渡してたまるかって、そうでしょ？」

卯月「はいっ！」

ラセツ『……。世界の成り立ち方も知らぬ子供が…！勝手なことばかり言うな！』

李衣菜「何さ！こっちの答えはもう決まってるんだ！」

奈緒「何がなんでも、真ゲッターを渡してたまるかよ。一昨日来やがれって！」

ラセツ『貴様らに選択権があるわけなからう。貴様らが今いるのはドコだ？貴様らが今身を寄せている者の頭はドコだと思ってる!?!』

李衣菜「え…?」

ラセツ『軍隊の人間が政府の決定に逆らえるものか。…真ゲッターの譲渡が、大統領からの命令であれば、もはや子供の意見など関係ないのだよ』

奈緒「はア!」

艦長「……」

ラセツ『さあ、大統領。テキサスのクルーに命じるのです。真ゲッターを押しえろと。

抵抗するものは殺せ、と』

卯月「そんな……!」

凜「…艦長?」

艦長「……」

大統領『……艦長』

艦長「はい」

大統領『果たして、我々はこのままでいいと思うかね?』

艦長「いいえ。私は、違うと答えます」

大統領『そうだろうね。私も、同じように思っていた』

艦長「では、大統領——」

ラセツ『何だ？ 貴様ら、何の話をしている!?!』

大統領『かのような少女が、力にも屈せず、自らの意思を貫こうと言う時に、我々は何をしている？ 今はただ、少女達の意思の障害にしかならぬと言うのなら、ただの足枷ではないか』

ラセツ『それが何だというのだ?』

大統領『我々が、少女達の意思を阻むことなどあつてはならんのだ! 潰すのではなく、伸ばす。生に執着するために、権力という力はあるのではないッ!』

ラセツ『貴様……! 死ぬのが怖くないのか!』

大統領『死など恐れるものか! 私の命は、3億のアメリカ国民のため……いや、それ以上の多くの人々のために捧げるものと、大統領の地位を拝命した時から星条旗に誓っている!』

ラセツ『……!』

大統領『命など惜しいものか! ランドウ! 貴様らを滅ぼすためならば、私一人の命など惜しくあるものか!!』

李衣菜「大統領……」

大統領『テキサスの諸君！大統領からの命を告げるツ!!』  
艦長「はッ！」　　ザッ

大統領『ランドウを倒すのだ！決して屈することなく、怯むことなく！何かあるうとも、世界全ての人々のために、戦い続けるのだ！——ゲッターと共に!!』

ラセツ『貴様……ッ!』

大統領『諸君らは我々の希望である！その諸君らが、多くの人の平和を……!』

ラセツ『この……!』

パアンツ

卯月「ッ!」

凜「……!」

かな子「そんな……っ」

李衣菜「大統領……!」

奈緒「ッ……!」

加蓮「アンタは、また……!」

芳乃「……!」

ラセツ『フウ……!。素直に渡せばよいものを……!』

李衣菜「ラセツッ!よくも……!」

ラセツ『覚悟しておくがいい。貴様らは必ず、私の手でその愚かな決断を後悔させてやる……!』

プツン——

オペレーター「…通信、途絶えました」

副長「逆探知は出来るか？」

オペレーター「いえ、通信先の特定はできませんでした」

副長「そうか…」

「……………」

艦長「…諸君、何をしている？」

メリー「艦長…」

艦長「既に大統領閣下からの最期の命令は下された！我々はこの命に替えても大統領の命令を完遂する！」

艦長「ランドドウに対して、徹底交戦するのだ！皆、悲しんでいる時間はない!!——返事は!!」

「「おうツ!!」」

ジャック「艦長、それでこそだぜ！」

シユワルツ「ランドドウの野郎、今度こそ許しておかねえ……!」

ボブ「俺達の怒りと、アメリカの正義の鉄槌をアイツらにお見舞いしてやろうぜ！」  
リンダ「貴方はカナダ軍でしょう」

サム「そこはツツコンじゃいけねえぜ、テイラミス中尉」

李衣菜「みんな……！」

艦長「さて、奇しくも君達と同じ状況になってしまったようだ」

李衣菜「え？」

奈緒「どういう事だ？」

艦長「今の映像を見ての通りだ。大統領を失った。もうアメリカという国の力を借りることはできんだらう。今は我々も君達と同じ、戦場に迷い混んだ野良犬というわけだ」

凜「当たり前前に補給とかは受けられなくなるかもしれないって事？」

艦長「それでも、まだ我々に協力してくれるかね？」

李衣菜「当たり前じゃないですか！一緒に戦いましょう！ここまで来たなら！」

加蓮「ま、アラスカで拾ってもらった恩もあるしね。それも返さない内におさらばつて言うのは、何か違うでしょ」

艦長「……ありがとう。君達の協力を感謝する」

奈緒「いやいや、まだ感謝されるのは早いつて！」



卯月「一緒にランドウを倒しましょう！全部その後ですよ！」

艦長「うむ。そうだな」

副長「それでは艦長、今後の方針を」

艦長「先ずは近くの米軍基地へと向かう。アラスカ領内ならば、まだランドウの攻勢はない筈だ。そこで、我々の最後の補給を行う」

副長「了解しました。では、テキサスの進路はどのように」

艦長「諸君、これから我々は、辛く険しいランドウとの孤軍奮闘となる。最早我々に正義はなく、個人の正義による武装蜂起に他ならないだろう」

艦長「後生の時代……。我々の名が、歴史上において大罪人となるか、英雄となるか……。それはこれからの君達の働きに掛かっている。いいな！」

「了解ッ！！」

李衣菜「歴史の名を残す戦いかあ……。へへっ、なかなかロツクじやん」

加蓮「ホントはこんな事で名前なんて残したくないんだけどね」

奈緒「それこそ、ここまで来たら一蓮托生だな」

卯月「はいっ。みんなで頑張りましょう！ホントの平和を取り戻すために——」  
つづく

## 第12話『飛べ、焰のごとく!!』

（　　） 戦艦テキサス 格納庫 （　　）

李衣菜 「イツエー！イツ !! みんなー、ノってるかい？」

オオオオオオオオ——!!

李衣菜 「よーし、今日は最後まで全力でロックなビートを刻んでいくから、みんな付いて来てねー!？」

オオオオオオオオ——!!

李衣菜 「行つくぜー!!」

ワアアアアアアッ!!

シュワルツ 「……。アイツ、何やってんだ？」

加蓮 「艦内の士気を高めるための壮行ライブだつて」

シュワルツ 「資材用のコンテナの上でか？」

奈緒 「ステージのつもりなんだろ？整備班の人達だつて忙しいのに、スピーカーの設置とか手伝ってもらっちゃって、まあ」

メリー「でも、ギャラリーもかなり集まって、楽しそうじゃない？」

李衣菜「——8ビートの、風に乗って♪駆け出すよスパークンガール♪」

シユワルツ「:しっかし、ヘツタクソなギターだな」

奈緒「上手い下手じゃなくて、ノリなんだよ。多分な」

卯月「うわあ〜！李衣菜ちゃんの声が聞こえてくると思ったら、もしかしてライブですか？」

加蓮「卯月。サイズ合う服あったんだ？」

卯月「はいっ。こういう格好、何て言うか新鮮ですね！」

加蓮「そりゃ、ここに来なくちゃ軍服なんて着る機会もないんだから」

奈緒「軍服じゃなくて、戦闘服な」

卯月「えへへっ、奈緒ちゃん達とお揃いですね？」

加蓮「ま、アタシ達は自分の着替えならいくつか持ってきてるんだけど、流石に軍艦の中で私服着て歩き回っての言うのもね」

奈緒「ステージ衣装とはまた違うけど、こーやって同じ格好だと、連帯感って言うか、統率感があるよな」

卯月「そうですねっ。それに何て言うか、パイロットスーツとは違う意味で身が引き締まる感じがします」

加蓮「デザインが野暮っただけは、何とかしようもないけど」

奈緒「軍用なんだから、そこに文句は言うなつて……」

卯月「ふふつ。どうですか？ 似合ってますか？」 ケーレイビシツ

加蓮「うーん……。それほどでも」

卯月「えく……！」

シユワルツ「まったく、呑気な奴等だぜ」

メリー「ふふつ。年頃の女の子何てあんなものよ。微笑ましいじゃない。——……あら？」

芳乃「ふむ……。パイロットスーツほどではありませんが。何やら窮屈で、締め付けられるようでしてー」

奈緒「芳乃！ 芳乃にも合うサイズのが合ったのか!？」

加蓮「その驚きはちよつと芳乃に失礼だと思ふよ？」

奈緒「あ……。いや、ごめん」

芳乃「いえいえー、お気になさらず。事実、わたくしに合う衣服はなかったわけー」

奈緒「え？」

メリー「この艦には、私みたいな西洋人に合わせたサイズの服しか用意されていない

から、仕方ないことではあるわね」

加蓮「寧ろ、アタシらに合った衣装があったことが不思議なくらいなんだ？」

奈緒「じゃ、じゃあ今芳乃が着てるそれは？」

芳乃「既にあるものを、わたくしに合うように色々手直しを。りんださんが手伝ってくださいましてー」

奈緒「り、リンダが!？」

加蓮「何か変なことされてない？大丈夫？」

芳乃「はてー？特に変わったことは、何もありませんでしたがー？」

奈緒「そっか…」

芳乃「確かに、芳乃の体を測る際に。リンダさんの方から僅かながらの邪気を感じましたが。実際に、芳乃の害になることは何もされておりませんー」

奈緒（邪気…）

李衣菜「——体中で歌い続けるんだあ〜♪」

卯月「う〜！李衣菜ちゃん見てたら何だかウズウズしてきちゃいました！」

加蓮「だったら、私達も参加しよっか？」

卯月「いいですか!？」

加蓮「元々ゲリラライブだしね。リーナ一人じゃ、盛り上がり欠けるだろうし」

奈緒「あたしだって加蓮だって、卯月だっているんだ。みんなで盛り上げてやろうぜ」  
卯月「いいですね、それ！」

シユワルツ「お前らな……。ここはライブハウスじゃないんだぞ？」

メリー「あら、いいじゃない。こんなこと滅多に出来ない事よ？ 士気向上という名目では、いいんじゃないかしら？」

シユワルツ「そうは言うがな……」

加蓮「それじゃ、トライアドプリムスが3人揃ってるんだし、アタシ達も行こっか？」  
奈緒「ん？ そういや、凜はどうした？」

卯月「ああ、凜ちゃんなら日本にいる晶葉ちゃんに電話で連絡するって言っていました」  
加蓮「艦長から許可下りたんだ？」

卯月「はい。一応、ランドウに通信を聞かれるかもって事で、重要なことを話しちゃわないように、ブリッジで艦長達のいるところで、って事でしたけど」

奈緒「それはそれで落ち着かないな……」  
――。

~~~~~ 日本 晶葉のラボ ~~~~~

晶葉「――…そうか、何はともかく、凜や卯月、芳乃が無事だったことは何よりだ」
凜『ありがとう。そっちも今は大変そうだけど……』

晶葉 「そうでもない。国内は平和そのものだよ。…表面上はな」

凜 『意味ありな言い方だね』

晶葉 「……。日本は完全にランドウに屈した。その結果、一般人の生活が争いから切り離されれば、それで平和ということになるだろう」

凜 『都合の悪いところは見ない聞かないで、無視してれば本人は平和ってこと』

晶葉 「そうだ。報道規制によって、日本ではアラスカの戦いも放送すらされてはいない」

凜 『けど、残りのゲッターを解体して、研究所まで閉鎖しちゃうなんて…』

晶葉 「そのお陰で、東京の幾つかの街に配置されていたA V—58は撤去されたんだ。政府にとっては、それだけでも嬉しいことだろうさ」

凜 『目の前にたんこぶがなくなれば、それで満足なんだね…』

晶葉 「悪いとは言えんさ。私達も、今は自分達が生き残る事に精一杯な状態だ」

凜 『晶葉は、そのA V—58って兵器への対策を、何か考えてない訳じゃないでしょ？』

晶葉 「一応はな。内部に侵入できる入り口を見つけて、幾らか調査することも出来たからな」

凜 『…A V—58は無人机って話なのに、どうして入り口なんかあるの?』

晶葉「我々を弄んで楽しんでるんだらう？ AV-58を解明してみせろ、無力化してみせるとな」

凜『暗にそう言うこと言われてると思うと、無性に腹が立つてくるね』

晶葉「腹を立てたところでどうしようもないがな。今分かつている事は、その自爆メカの起爆装置、及び実際に爆発していると思われるエネルギー体とが、計5本のケーブルで繋がれていると言うことだ」

凜『5本のケーブル…。まさかそれを上手く切断すれば爆発するのを阻止できるのか…』

晶葉「概ねその通りだ。ケーブルは色分けされていて、切断する色の順番を間違えなければ起爆は阻止できると思われる」

凜『……』

晶葉「言っただらう？ 弄んで楽しんでる、と」

凜『陰険な連中なんだね。ランドウって奴等は。端からこつちを見下してるって訳』

晶葉「だからこそその油断や慢心に漬け込みやすい。連中に人間の意地というものを見せてやるさ」

凜『けど、晶葉一人で、大変じゃない？』

晶葉 「一人じゃないさ。協力を申し出てくれた者が、何人かいる」

凜 『協力者?そんな人達が今の日本に…?』

晶葉 「いるさ。しかも、全員アイドルだ。少しはプログラミングに造詣があるからと協力を申し出てくれたものもいれば、協力する対価に何かしらの情報を要求してくる変わり者まで…。皆心強い仲間だよ』

凜 「ホント、心強い人達がいるんだね」

晶葉 「全く、ここがアイドル事務所だということを忘れそうになる。あと一人、単に面白そうだから、と言っている奴もいるがな」

凜 『でも、これでAV-58が無力化できれば…』

晶葉 「ああ、奴等に対して、反撃のきっかけを作ることができる」

凜 『ゲッターロボはどうするの?』

晶葉 「ふふ…。それなら心配は要らん」

凜 『?』

晶葉 「凜、今はまだ詳しくは話せない。が、私は必ず、お前達の元へ、アラスカへ行く!世界の支配者気取りをしているランドウを、引きずり下ろすためにな」

凜 『…分かった。詳しくは聞かないけど、待つてるよ』

晶葉 「ああ、今日はここまでだ。私が行くまで間違っても、ランドウに倒されたりす

んじゃないぞ」

凜 『それはないよ。こつちにも頼もしい人達がいるから。じゃあ——』
プツン——。

晶葉 「……ふう。……つと、主任からメールが入っていたか」

晶葉 「……やはり、2つのエネルギーを組み合わせるエネルギーバイパスに負荷が掛かりすぎる、か。……凜にああ言った以上、完成は急がねばならんのだが——」

コンコン……

晶葉 「誰だ？」

「晶葉ちゃん、私……」

晶葉 「その声は美穂じゃないか。開いているぞ」

ガチャ……

美穂 「は、入るよ……？ 晶葉ちゃん……」

晶葉 「しかし珍しいな。お前がここを訪れるとは」

美穂 「う、うん……」

晶葉 「研究所が閉鎖されて、女子寮を大がかりに改造することはできんと言われて、手が事務所地下のここを用意してくれた。お陰で、多くのアイドルがよく顔を見せるようになったがな」

美穂「そうなんだ…?」

晶葉「壊れた目覚まし時計や、家電製品なんかを持つてくる。ここは、無償の修理屋じゃないんだが…」

美穂「……」

晶葉「それで、何の用なんだ?」

美穂「えつと、ね…」

ゴソゴソ…

美穂「その…、先ずはこれを見て欲しいんだけど」

晶葉「ふむ…。インターネットの動画サイトか」

美穂「う、うん…。それで、流れてる映像が…」

晶葉「これは…アラスカでの戦闘映像だな」

美穂「そう…。映ってるの、真ゲッターロボ、だよな…?」

晶葉「…そうだな」

美穂「そうだなって…!」

晶葉「…美穂、こんなサイトを何処で知った?あまり有名なサイトじゃないだろう、ここは」

美穂「え…。う、うん…。学校で、同級生の男の子達が見てるのを見ちゃって…」

晶葉「それで教えてもらったと言うわけか」

美穂「うん……」

晶葉「……。迂闊な行動は極力控えた方がいい。ランドウの目がどこにあるか分からないから」

美穂「うう……。ごめんさい」

晶葉「……まあ、それだけ卯月の事が心配だったって事だろう。謝るほどじゃない」

美穂「うん……。でも、卯月ちゃん、生きてるんだよね？帰ってきたんだよね？」

晶葉「ああ。ついさつき、凜から連絡があった。卯月も芳乃も、チーム全員無事に帰還したそうだ」

美穂「……良かったあ」 ホッ

晶葉「一月以上も音信不通だったわけだしな。先ずは一安心と言ったところか」

美穂「……」

晶葉「美穂？」

美穂「ねえ、晶葉ちゃん。私達に出来る事、何かないかな？」

晶葉「私達に、か？」

美穂「うん。李衣菜ちゃん達もアラスカに行つて、ゲッターでみんなのために戦つてるのに、私達だけここにいても良いのかな、って」

晶葉「とは言ってもな……。政府の命令でゲッターは全て廃棄。爆破して解体したわけだ。今からアラスカに行くと言っても、簡単なことではないぞ」

美穂「そ、そうかもしれないけど……」

晶葉「それに、だ——」

美穂「……な、何？」

晶葉「……いや、何でもない。勝利を信じて待つ事も私達に出来る事じゃないか。響子や智絵里のように。今戦ってる連中が当たり前の日常を忘れてしまわないように、な」

美穂「……うん」

晶葉「さ、話は終わりか？すまないが、これから助手と今後の仕事の事で打ち合わせがあるんだ」

美穂「そっか……。ごめんね？急に押し掛けちゃって」

晶葉「いいさ。卯月の事を知って、居ても立ってもいらなくなっただらう？」

美穂「……それだけじゃないよ？」

晶葉「……。先ずは落ち着いて、自分の中で整理してくれ。自分が一番に、何をやりたいのかをな」

美穂「……」

晶葉「時間だ。すまないが出ていってくれ。用心の為、ここを出る時は施錠している

んだ」

——プロダクション・1Fロビー

美穂「……」

「美穂さ〜んっ!!」

美穂「あ…茜ちゃん…」

茜「奇遇ですね！こんなところでお会いするなんて！」

美穂「そうかも。茜ちゃんは、今日はレッスン？」

茜「はいっ！ポジティブパッションも今は2人体制ですからね！未央さんが欠けている分は、藍子ちゃんと気合いと根性で補わなければ！」

美穂「き、気合いで補えるものなの？」

茜「気持ちの問題です！」

美穂「そ、そうなんだ…」

茜「美穂さんこそこんなところでお一人でどうしたんですか！もしや誰かと待ち合わせですか！」

美穂「私はちよつと…。…ううん」

茜「？」

美穂「ねえ、茜ちゃん」

茜 「何でしょうか!？」

美穂 「う、うん…。茜ちゃんは、未央ちゃんがいなくなつてやつぱり寂しい?」

茜 「うう…。ん…。確かに少し寂しいですね!」

美穂 「そうだよね…」

茜 「ですが!心配はしてません!未央さんは必ず帰つてきますから!」

美穂 「…スゴいなあ」

茜 「? 何がスゴい、のですか?」

美穂 「心配なんかしてないって言い切れて。私なんて、卯月ちゃんがいなくなったあの日から、卯月ちゃんの事が心配で、心配で…」

茜 「それは当然です!大切な人を心配しない人なんていませんから!」

美穂 「え?でもさつき…」

茜 「私の場合は、あくまで心配しても仕方ないと言う意味です!心配して、考えてモヤモヤするくらいなら!信じた方がスッキリするだけです!帰つてくると信じて、私は私の道をまっすぐ進むだけです!!」

美穂 「やつぱりスゴいよ。茜ちゃんって」

茜 「えへへ…。そうですか?そう言われるとなんだか照れてしまいますね!」

美穂 「…私も茜ちゃんみたいになれたらなあ」

茜 「それはさすがに無理なのは？」

美穂 「そんな簡単に、ばっさり…」

茜 「ああ！いいえ！別にそういう意味ではなくてですね！私達は違うからいいんじゃないですか？」

美穂 「違うから、いい？」

茜 「はいっ！上手く言葉に出来ませんが、思い方も考え方も違うから、私達はチームなんじゃないかと思うんです！」

美穂 「そうかな？私は、自分でももう少し前向きになれたらって思うよ？」

茜 「その時は私が前向きにしてあげますよ！私は考え込んだり、じっとしているのが苦手なので、そういうところをよく周りにいる人達に支えてもらってます！」

美穂 「支えて…」

茜 「そうです！支えて、支えられて！自分に足りない所を誰かが補ってくれるからこそ！今の私は真っ直ぐ走り続けることが出来るんです！」

美穂 「…私も、茜ちゃんの支えになれてるのかな？」

茜 「トーゼンじゃないですか！支えてもらってばかりで、申し訳ないくらいです…！」

美穂 「そんな…。私の方こそありがとう。私なんかでも、茜ちゃんの支えになんて…」

「Oっ！アカネ、ミホー！」

美穂 「あ、アーニヤちゃん！」

茜 「美波さんも！ラブライカでお仕事ですか！」

美波 「ええ。2人も久し振りね」

アーニヤ 「復興応援、頑張りました！」

美穂 「そつか、2人も街を復興させるために頑張ってるんだ…」

美波 「そんな大した事じゃないわ。けど、どんな小さな事でも、自分に出来る事なら何でもやらなくちゃ！」

美穂 「どんな小さな事でも…。そうだよね…」

美波 「美穂ちゃん？」

茜 「しかし、これで斬チーム全員揃ってしまいましたね！」

アーニヤ 「Da…運命、ですかね？」

茜 「かもしれないですね！あははっ！」

美穂 「…ゲッターがあれば…」

アーニヤ 「え？」

茜 「美穂さん？」

美穂 「あ、いや…ええと…。何でもないよ」

美波「何でもない、って言う感じじゃなかったわよ？」

美穂「……えっと、これでゲッターがあれば、アラスカに行けるのかな、なんて」

美波「アラスカに？」

アーニヤ「リーナ達と、一緒に…戦いたい、そういう事ですか？」

美穂「うゝ…ん…。どうなんだろう…？」

茜「はい？違うんですか？」

美穂「戦うって言うのは、…怖いよ」

美波「…そうね」

美穂「コックピットの中においても、ダメージの衝撃を受けると痛いし、私なんて血をただけでドキドキして、どうしようってアタフタしちゃうもん。今までは運が良かっただけで、ひよつとすると死んじゃったらどうしようって、今も時々思うの…」

茜「でも、それでもじつと見ているわけにはいきませんよね？」

美穂「それは…」

アーニヤ「だから、ミホもゲッターがあれば、と言った筈です」

茜「誰かが戦っていて、それを黙ってみていられるわけがありません！怖いなら尚のこと、誰かの傍にいたいものです！その人が自分にとって大切な人なら、尚更居ても立ってもいられない筈です！」

美穂 「…っ！ そうなのかな？」

美波 「ねえ、美穂ちゃん、もしかして卯月ちゃんが帰ってきたんじゃない？」

美穂 「！ どうしてそれを…？」

美波 「何となくだけ…。戦いを怖がってる美穂ちゃんがアラスカに行きたがるなんて、それなりの理由があると思っただから」

茜 「本当なんですか!?!美穂ちゃん!」

美穂 「う、うん…」

アーニヤ 「X o p o Ⅲ o! なら、ここでじつとして、なんていられませんね!」

茜 「すぐ晶葉さんの所に行きましょう! 晶葉さんなら、ゲッターの1機や2機、用意してくれる筈です!」

美穂 「ま、待ってよ!」

茜 「何故ですか!?!美穂さん!」

美穂 「私が行ったって、何の力にもなれないよ…」

茜 「そんなの、行ってみなくては分かりません!」

美穂 「でも! 卯月ちゃんは真ゲッターに乗ってるんだよ? 私達のゲッター斬を何倍も上回る性能の真ゲッターロボに…」

茜 「ですが!」

美穂「私が心配する事なんて何も無いのかも…。私が何もしなくても、卯月ちゃん達はきつと勝つてくれる…。勝つて、帰ってきてくれるよ」

美波「でも、今すぐにも卯月ちゃんのところへ行きたいのよね？」

美穂「……うん」

美波「なら、もつと自分に素直になるべきよ」

アーニヤ「ミホは、卯月のところに行くべきです。ワタシも、アカネも、力になりますよ！」

茜「はいっ！微力ながら力になります!!」

美穂「そんな…！どうして？私なんかの為に、そこまで言ってくれるの？」

アーニヤ「それは、ミホが大切な仲間、だから…」

美穂「仲間…？」

アーニヤ「仲間…。友達だから、会えないと辛いです。アー…やつと帰ってきた、ウツキはミホにとつて大切な友達…。ミホは、ウツキとずっと、ずっと一緒にいたい。違いますか？」

美穂「う、うん…。そう言われると、ちよつと恥ずかしいけど…」

アーニヤ「恥ずかしがることありません！ワタシも、ミナミとずっと一緒に、嬉しいですっ」

美波「あ、ありがとう…。アーニヤちゃん…」

アーニヤ「もし、ミナミと離れ離れ…考えただけでも、胸がはち切れそうです。ミホも、同じ…そう思います」

美穂「……」

アーニヤ「だから、ウツキに会いたい…ミホの、力になりたい。そのためなら、ゲッターのパイロットでも、何でも、ミホの力になります」

美穂「でも、簡単な話じゃないよ？痛いんだよ？辛いんだよ？そんな思いに付き合わせちゃうなんて…」

茜「そんな事、美穂さんは気にしないでいいんです！」

美穂「そんな事って…、気にするよ！」

茜「気にしなくていいんです！みんな、友達のためですから!!」

美波「友達なんだもの。アーニヤちゃんの言った事じゃないけど、その人の事が心配だし、ずっと傍にいたい。そうじゃない？」

美穂「それは…だけど！」

アーニヤ「勝つ…負ける…。そう、簡単な事じゃないと思います。H○…勝つ時でも、負ける時でも…大切な時は、大切な人の傍にいたい…。それは、当然のこと」

茜「傍にいられるのなら、傍にいたっていいんです！美穂さんにはそれが出来る

じゃないですか!」

美穂 「茜ちゃん…」

美穂 (そつか、茜ちゃん、未央ちゃんのこと…)

茜 「その為なら、私はいくらだって力を貸しますよー!」

アーニヤ 「行きましょう? 命を懸けて、友達の傍に!」

美波 「もちろん、私だって気持ちは同じよ?」

美穂 「みんな…」

P r r r r P r r r r

美穂 「え? あ…電話…」

美波 「誰から?」

美穂 「響子ちゃん…。ちよつと、ゴメンね?」

美穂 「——もしもし?」

響子 『あつ! 美穂ちゃん…。良かったあ、繋がって…』

美穂 「な、何? どうしたの?」

響子 『あ、うん。ゴメンね…。えつと、何から話したらいいか…』

美穂 「何があつたの? 落ち着いて、一つ一つずつでもいいから、ね?」

響子 『う、うん…。その、今茜ちゃんと連絡とれるかな?』

美穂 「茜ちゃん?」

茜 「私がどうかしましたか!」

響子 『きやつ!茜ちゃん:?!一緒だったの?』

茜 「はいっ!奇遇ですね!」

美穂 「ちよ、ちよと待って:。茜ちゃん」

スマホの通話をスピーカーで周囲に聞こえるように。

茜 「それで、響子さんが私に用事とはなんですか?」

響子 『あ、違うんです。用事があるのは私じゃなくて:。』

茜 「どういう事です?」

響子 『えーっと、実は私、さつき駅で倒れてる男の子を見つけて:。』

美波 「男の子?」

美穂 「それで!その子は大丈夫!」

響子 『病院に連れていって、とりあえず大丈夫みたいだけど:。』

美穂 「そっか、良かったあ」

響子 『それで、その子がしきりに、うわ言で茜ちゃんの名前を呼んでいて:。』

茜 「何ですって!?!」

アーニャ 「アカネ、その、男の子は、もしかして:。!」

茜 「——っ!!」 ダッ

美波 「あ、茜ちゃん待つて！」

美穂 「響子ちゃん？響子ちゃんのいる病院つて、どこの病院なの？急いで行かなくちや……！茜ちゃんを見失う前に！」

~~~~~ 某病院 病室 ~~~~~

バアンツ

茜 「マサルくうーんっ!!」

響子 「きやあ!?!あ、茜ちゃん……？」

茜 「マサルくん!?やつぱりマサルくんだっただね！」

マサル 「……」

茜 「二体どうしたんですか!?!しつかりしてください！目を開けてください!!」

響子 「あ、ああ！今鎮静剤を打つて、落ち着いた所なんです！命に別状はありませんから、落ち着いてください！」

茜 「そ、そうなんですか……はあ」

美穂 「あ、茜ちゃん……。待つてえ……」 ゼエ……ハア……

美波 「びよ、病院内は……走つちやダメ、でしょ……」 ヘトヘト……

響子 「もう、病院内では静かにしなくちやダメじゃないですか



っ!」

茜 「あう……。すいませんっ!」

響子 「だから声が大きいです!」

茜 「すいません……」

アーニヤ 「アー……。どういう状況、ですか?」

美波 「さ、さあ……?」

響子 「あ!美波さんにアーニヤちゃんまで!皆さん来てくれたんですね!」

美波 「え、ええ……。一緒に電話を聞いてたから、心配だね」

アーニヤ 「それで、その男の子の具合は?」

響子 「全身に擦り傷と、軽い栄養失調だつて、お医者さんが」

美穂 「やつぱり、マサルくん……」

響子 「傷の方は、ずっと山の中を走つてたんじゃないかつて……」

美穂 「どうしてそんな……」

マサル 「う……。ん……」

茜 「マサルくん!」

響子 「もう、茜ちゃんが大きな声を出すから……」

アーニヤ 「?」 大きな声、してたのは響子じゃないですか?」

美波「しつ。静かにしよう？アーニヤちゃん」

マサル「茜…お姉ちゃん…」

茜「マサルくん！大丈夫ですか？」

マサル「お姉ちゃん…！良かったあ…」

茜「マサルくん？」

マサル「お姉ちゃん…。ごめん…！助けて…！」

美穂「えっ？」

茜「一体何があつたんですか!？」

美波「お父さんとお母さん、それに村の人達に何かあつたの？」

響子「マサルくんの村の人達って、確か…」

アーニヤ「Да…百鬼帝国にКоррекция…改造、されてメカ魔王鬼の体にされてしまってます」

美穂「でも、百鬼帝国からは解放されて、今は機械の体を隠して、ひっそり暮らしてたんじゃ…」

茜「そうです！一体、何があつたんですか!？」

マサル「パパもママも、みんな連れていかれちゃった…。ランドウって奴らに！」

茜「な…っ！ランドウ!？」

美穂 「でもどうして？あの村のことは、私たち以外誰も…」

美波 「いえ、もう一つ知ってる所があるわ」

アーニヤ 「日本政府…ですかね？」

美波 「そう。今の政府はランドウのいいなりだもの。きつと情報を漏らしたのよ」

美穂 「そんな…！」

茜 「本当なんですか!？」

マサル 「うん…。ある日、見たこともない鎧を着た人達が来て、パパ達を連れていっちゃったんだ」

茜 「そんな…！」

マサル 「ボクもランドウに連れていかれそうだったけど、パパ達が逃がしてくれて…」

響子 「そうだったんですね…」

マサル 「それで、その事を伝えて頼りに出来るのは、お姉ちゃん達しかいないと思っただから…!だから…!」

美穂 「それで、九州から東京まで!？」

美波 「こんな小さい体で、よく頑張ったわね」

マサル 「あ、ありがとうございます…:ごぎいます…:」 カア…:

響子 「あ、赤くなちゃって、ちよつと可愛いかも」

アーニヤ「…アカネ？」

茜「!!!」

ゴオオオオオオオオ…

美波「あ、茜ちゃん…？」

美穂（茜ちゃんが、燃えてる…）

響子（よく分かんないけど、室内が暑くなったような…）

茜「響子さん…！」

響子「は、はい…？」

茜「マサルくんのこと、よろしく頼みます!!」

響子「はいっ…茜ちゃんは？」

茜「アーニヤさん、美穂さん！」

アーニヤ「……」

美穂「…茜ちゃん」

茜「私はアラスカに行きます！マサルくんの家族を助けなければなりませんっ！」

アーニヤ「Пониmaniе…分かりました。ワタシも、同じ気持ち、です！」

茜「美穂さん！私にも戦う理由が出来ました！これで遠慮はいらぬ！行き

ましよう!!」

美穂「……」

美波「美穂ちゃん？」

美穂（茜ちゃんも、アーニヤちゃんも強いな……。今の私なんかじゃ、付いていっても足手まといになるだけ……）

アーニヤ「ミホ？」

美穂（でも、みんなに置いて行かれない……！そのため、変わらないといけな  
んだ。私は——）

茜「美穂さん！」

美穂「つ——茜ちゃん、アーニヤちゃんみんな！協力してもらいたいことがあるの」

——。

~~~~~ 事務所 プロデューサー執務室 ~~~~~

晶葉「——と、私からの話は以上だ。後はこの資料に書いてある」

新P「……」

晶葉「すまないな。助手には迷惑ばかりかけてしまう」

新P「謝るくれえなら、アラスカに行くつつうバカな考えをやめてもらいたいもんだ
がね」

晶葉「それは出来ない。もうこれ以上ランドウとの戦いを黙って見ている訳にはいか

ないからな」

新P 「それで、俺だけじゃなく色々な所に挨拶回りってか？」

晶葉 「李衣菜達がアラスカに発った時は、それで後に騒動になったからな」

新P 「だからって、事前に挨拶すりゃあ許されるつてもんでもねえだろ」

晶葉 「…すまん」

新P 「…はあ。親御さんは何て言ってるんだ？」

晶葉 「お前の好きなようにやれ、と」

新P 「親御さんも呆れてんだろうが」

晶葉 「だが、私はやらなくてはならないんだ。早乙女博士から、ゲッターを託された

私は…」

新P 「ま、俺はお前の科学熱心な所は嫌いじゃねえがな」

晶葉 「では…！」

新P 「お前が覚悟決めてんのは目を見りや分かるしな。ここでウダウダ言っても仕方ねえんだろ」

新P 「池袋が納得するまで、好きにすりゃいいさ」

晶葉 「ありがとう、助手よ」

コンコン…

志希「しつづれーしまー…って、ありや？晶葉ちゃん？こんなトコいたんだく」

晶葉「志希!? AV-58の解析中じゃなかったのか？」

志希「んく、そうなんだけど…。なあんかスランプって言うか…、マンネリって言うかあ。まあちよつとした息抜きは必要だよねく。にやははっ♪」

晶葉「お前なあ…」

志希「にやつははく！ジョーダンジョーダン。あたしの仕事は一段落したしー。後は実働班にお任せく」

晶葉「実働班？どういう事だ？」

志希「ありや？晶葉ちゃんの指示じゃないの？」

晶葉「指示？私は指示なんか出してないぞ」

志希「え？あ…うくん…。成る程…。にやつはは♪これは面白い事になっちゃったかもく」

晶葉「何？どういう事だ？ちゃんと説明しろ！」

志希「えー？志希ちゃん説明とかメンドくさいのゴメンかなー。だから、分かりやすく言うねっ」

志希「さつきあたし達がいた研究室に美穂ちゃん達が来て、AV-58の解析データを持っていったよ」

晶葉「何だつて!？」

~~~~ 廃墟 ~~~~

美波「——さあ、着いたわよ……」

泉「二番近くのAV—58……。回りの人達は避難して、すっかり廃墟か……」

マキノ「スゴいじゃない。ここまで運転してこれるなんて。車の運転はまだしたことなかつたんでしょ？」

美波「うう……。無免許運転なんて……。大学を出てから免許とる予定だったのに……」

マキノ「誰にも見られてないんだから、気にしない方が身のためよ」

美波「でもお……」

マキノ「どのみちコレが上手く行かなかつたら、その未来も何もなくなるんだもの。さ、泉。私達は準備を始めましょう」

泉「ええ、分かつた。……」

美穂「……」

泉「美穂……。本気でやるんだよね？」

美穂「泉ちゃん、ごめんね。こんな事に巻き込んじゃつて……」

泉「それは別にいいよ。晶葉の仕事に協力するつて言った以上、危ないことに巻き



込まれるのは覚悟の上だったし」

美穂 「そんな…そんな覚悟をしてまで…」

泉 「ま、たまたま私にも出来るってだけだったけど、それで守りたいものを守る手助けが出来るなら」

美穂 「それって、さくらちゃんと、亜子ちゃんのことだよな?」

泉 「まあね。でも、私に出来るのはここまで。後は美穂に託すわ」

美穂 「うん。ありがとう。泉ちゃんも、マキノさんの思いも、絶対無駄にしないから」

泉 「…ふふっ」

美穂 「な、何…?」

泉 「ごめんなさい。真剣な表情の美穂って思ったよりも似合わなかったから…」

美穂 「え、ええ…」

泉 「友達に囲まれて、笑っていた方が美穂らしいよ。早くそういう世の中になるといいね。…じゃあ、頼んだよ」

美穂 「うんっ!」

タツタツ——

美穂 「…よし!」

茜 「では行きますかっ!」

美穂 「えっ!？」

アーニヤ 「アー…アカネ? 周りの糸に触れてはいけませんよ? 慎重に、行きましょう」

美穂 「アーニヤちゃんまで!？」

茜 「水臭いですよ! 一人で爆弾解体なんて!」

アーニヤ 「そうです。アーニヤ達は、チーム! そうですよね?」

美穂 「そうだけど…。今はそんな話をしてるんじゃない?」

茜 「いいんです! 美穂さんのこと、放っておけません! せめて傍にいただけでも一緒にさせてください!」

アーニヤ 「今は、ワタシとアカネが、足手まとい、ですね」

美穂 「そ、そんな事ないよ…!」

アーニヤ 「Herでも、足手まといでも、傍にいさせてください」

美穂 「アーニヤちゃん…。それって…」

アーニヤ 「ダメ、ですか?」

美穂 「ううん。分かった、一緒に行こう!」

茜 「それじゃあ、張り切っていきましよう!」 ズンズン

美穂 「ちよつと、慎重にいかないダメだよ!」

マキノ 「話はまとまったかしら? 少し失礼させてもらおうよ」

美穂「マキノさんっ」

マキノ「先ずはコレを」

美穂「これは…?」

マキノ「通信用のインカムと、カメラよ。カメラは顔の側面…目線の位置に付けて。それで、あの自爆メカの内部をこつちからでもモニターするわ」

美穂「わ、分かりましたっ…!」カチャカチャ…

マキノ「自爆メカの内部の解析結果だけど、中は迷路のように入り組んでいたわ。内部の状況を知っていたとしても、外からのナビゲーションなしに目的地に到達するのは困難に近いかもしれない」

茜「ランドウも優しいんですね! そうやって入り込めるスペースを作っておいてくれるなんて!」

マキノ「晶葉曰く、人間を弄んでいるそうよ。で、コレも持って行って。貴女達の位置を把握するための発信器よ」

美穂「は、はいっ…」

マキノ「元々美穂一人で行く事を想定していたから、発信器もインカムも一つしかないわ。くれぐれもはぐれないように気を付けて」

アーニヤ「Пони мание…分かりました」

茜 「絶対に離れませんよ！」

マキノ「最後にもう一つ、貴女達が私のところに来た時にも言ったかもしれないけど、私達の解析はまだ途中……。完璧じゃないわ。だから、最後までではサポート出来ない。それでも、やるのね？」

美穂「…はいつ。もう決めたんです！」

マキノ「……。そう、ならこれ以上言うことはないわ。自爆メカの入り口はここから丁度反対に回って、裏側。上へ10m程上がったところよ」

アーニヤ「？ 10メートル……」

美穂「上？」

――。

美穂「…はあ……はあ……はあ……はあ……！」

茜 「最初から思わぬ障害でしたね！」

美穂「まさか梯子もないなんて……。ボルダリングなんて経験ないよ……」

アーニヤ「下は見えない方が、オススメ、です……」

美穂「う、うん……」

マキノ『入り口に着いたようね。その辺りに装甲板が小さな正形状に区切られているところがあるでしょ？』

美穂「えーっと、あった！これかな？」

マキノ『それで間違いないわ。そこは四隅がボルトで固定されているだけだから、預けた電動ドライバーで開けられるはずよ』

美穂「分かった。やってみる……！」

装甲板を固定しているボルトを一つずつ、丁寧に外していく。

美穂「全部取れたよ」

マキノ『装甲板は落とさないで。ボルトもなるべくならポケットか何処かに仕舞っておいて。落ちた衝撃が何処かに伝われば、それだけで爆発の危険性があるわ』

美穂「……」ゴクリ……

茜「ならば装甲板は私が持ちましょう！」

アーニヤ「ボルトはワタシが……。ミホは、色々装備してますから」

美穂「あ、ありがとう……。お願いね？」

慎重に外したボルトと装甲板を手渡し。AV―58の内部に侵入する。

茜「侵入成功！先ずは第一関門突破ですね！」

マキノ『中に入っても油断しないで。通路にはみ出している導線に触れれば、AV―58が一瞬で爆発を起こすわ』

アーニヤ「……！」

マキノ『それで多くの人間が一度に吹き飛んでいるわ』

美穂「えっ!？」

泉「もしかして自衛隊が主導した解体作戦のデータを盗み見たの？」

マキノ「ちよつとした参考にね。何事にも、前例のデータは必要でしょ？」

泉「……」

マキノ『入ったら先ずは東に……。そうそつちの方。まっすぐ進んで、突き当たったらT字路になっているけど、そこを左よ』

美穂「突き当たって、左……」

茜「う……ん……。小さいので通路の狭さは気になりませんが、髪の毛が線に触れてしまわないか気になります！私もアーニヤさん達のように短ければ……」

アーニヤ「それなら、アカネ。少し、じつとしていてください」

茜「？」

アーニヤ「これを、こうして……。Ладно……出来ました！」

茜「あはっ！髪を結ってくれたんですか！ありがとうございます!!」

アーニヤ「これで、少しは良くなると思いますよ」

マキノ『その先は吹き抜けになってるわ。落ちないように注意して、そのまま下に降りるの』

美穂「は、はい…っ」

アーニヤ「……」

茜「!!」

マキノの指示に従って、複雑に入り組んだ内部を深部まで進んでいく。

マキノ『——目的地はその辺りね』

美穂「っ、着いたの…?」

茜「ホントですか!?!」

アーニヤ「…もしかして、コレ、ですか?」

マキノ『それね。アーニヤの指したパネルを外して頂戴』

美穂「わ、分かった!」

横に寝っ転がった姿勢で、真上に位置したパネルを外す。

マキノ『目立つ色分けされたケーブルが、見えるかしら?』

美穂「う、うん…。赤が2本と、黄色と黒と青が1本ずつ…。全部で5本」

マキノ『…両サイドが赤、センターが青、その右に黄色で、左が黒…。ここまでは解

析した通りね』

美穂「ま、先ずはどれから切ろう?」

マキノ『最初は青。それは間違いないわ』

美穂「分かった……！」  
パチンツ

茜「何も起こりませんね？」

アーニヤ「最初は、正解……」

マキノ『次は……、貴女から見て左側の赤よ』

美穂「私から見て……、左側の赤……」

茜「爆発しません！」

アーニヤ「順調、ですね！」

マキノ『……』

美穂「マキノさん、次は……？」

マキノ『次は……』

美穂「マキノさん？」

マキノ『……黒は最後よ。いいわね？』

美穂「え……う、うん……」

マキノ『そして、残りの赤と黄色、どちらかはダミーなの』

美穂「ダミー？　どういう事なの？」

マキノ『つまり、それだけは切る必要がない……。それを切った瞬間、その時は爆発し



ないけど、最後の黒を切った瞬間——』

美穂「…っ！そ、それで、そのダミーはどっち？」

マキノ『…分からない』

美穂「えっ!? 分からないって…!」

茜「な、何事です!?!」

マキノ『私と、泉と志希の3人で解析したけど、フェイクが巧妙すぎて、分からなかったのよ』

美穂「そんな…」

茜「美穂さん? どうしたんですか? 一体何があつたんです!?!」

美穂「の、残り3本の線、その内の赤と黄色、どっちは切らなくていいんだけど、どっちなのか分からないって…!」

アーニヤ「Боже мой! ここまで来て…!」

マキノ『だから言ったでしょう。解析は完璧じゃないって』

美穂「……」

マキノ『どうする? やっぱりやめるかしら?』

美穂「……。ううん、やめないよ」

茜「美穂さん!」

美穂「茜ちゃん、アーニヤちゃん。それにみんなにも、聞いてほしいの」

美穂「私ね、ずっと戦うのが怖かった。傷付くのも嫌だし、まだやりたいことだってたくさんあるから、死ぬのなんて考えたくなかった」

アーニヤ「……」

美穂「けどね、それじゃダメなんだって、今日改めて思ったの。マサルくんが、九州から命を懸けて来たのを見た時に。私が怖がつて、引っ込んじやダメなんだって」

美穂「私には戦うことが出来る……。その私が、怯えちゃダメなんだって！」

マキノ「……」

泉「美穂さん……」

美波「……」

美穂「私は、卯月ちゃんの傍にいたい。だけどそれだけじゃなくて、ゲッターのパイロットとして、ちゃんとみんなの力になりたい！そのために、私は、私の中の恐怖を乗り越えたいの！」

茜「!! そう言うことだったんですか！」

美穂「だから、今はみんなの命を私に任せて！みんなの命を、必ず守って見せるから！」

美波『答えはもちろん決まってるわ！頑張つて、美穂ちゃん！』

アーニヤ「ここまで来たら、後には退けませんね！」

美穂「美波さん、アーニヤちゃん……！」

泉『確率は2分の1……。美穂の運に賭けるわ』

マキノ『面白いじゃない。貴女って私の思っていた以上に、無茶を考えるのね』

美穂「えへへ……。きっとそれは私だけの力じゃないかも」

茜「私も美穂さんに乗ります！勢いよく行きましよう!!」

美穂「うんっ！」

美穂（残った線は、赤と黄色切るべき線は……—）

ニツパーの切っ先を導線に掛ける。

美穂「……」フルフル……

美穂（私が……みんなの命を……！）

美穂「はあ……はあ……はあ……」

美穂（これでもし、爆発しちやったら……。う、ううん……大丈夫！自分を信じて……！）

美穂「……っ」

スツ……

美穂「え!？」

両手でニツパーを握る、美穂のその手に、2つの手が重なる。

アーニヤ「…言った筈です。ワタシ達は、チーム、です！」

茜「乗り越えましょう！一緒に!!」

美穂「……茜ちゃん、アーニヤちゃん……うんっ、やろう！」

アーニヤ・茜「はいっ!!」

美穂「…せーの……」

パチンッ——

——外の廃墟。

キイツ

晶葉「っ！」ダッ

新P「あ、おい！晶葉！」

タツタツタツ

晶葉「——コレはどういう事だ!？」

美波「あ、晶葉ちゃん……!」

マキノ「あら、遅かったわね」

晶葉「遅かった、じゃないだろ！解析はまだ不完全だった筈だ！それを勝手に持ち出

して……!」

泉「晶葉に黙ってた事は謝るよ。でも、あのまま悩んでたって、煮詰まるだけだっ

た」

晶葉「だからって実力行使することないだろう!? すぐに美穂達を引き上げさせろ!」  
マキノ「それなら大丈夫よ。もうすぐ出て来るわ」

晶葉「何だと…?」

茜「う、う〜んっ! やつと解放された気持ちですっ! やはり窮屈なところは苦手ですね!」

美穂「あははっ。お疲れ様、茜ちゃん」

アーニヤ「H e t : 茜は何もしてませんよ?」

茜「そんな事は…あれ!? 私はそもそも何しに行ったんでしたっけ?」

アーニヤ「もう、いいです…」

美穂「あはは…」

晶葉「美穂! それに茜やアーニヤまで…」

美穂「晶葉ちゃん! ごめんなさいっ! データを勝手に持ち出しちゃって…」

晶葉「ホントだぞ…。それで、解体は? まさか、成功したのか!」

茜「そのまさかですよ! この通り、もう爆発はしません!」 ガンガン

美穂「ちよつと、危ないから叩くのはやめようよ…」

晶葉「まさか、本当に?」

アーニヤ「Да：最後は、П а р и：賭け、でしたけど」

晶葉「何と言う無茶を……。それでもし爆発したらどうなる？お前達が何かあつたら、どれだけの人間が悲しむか分かっているのか!？」

美穂「分かっているよ。：分かっているつもり」

晶葉「なら……!」

美穂「その上で、晶葉ちゃんにお願いがあるの」

晶葉「：っ。：何だ？」

美穂「私も、アラスカに連れて行ってほしいの。みんなのところに」

晶葉「：言ってる意味がよく分からないな」

美穂「アラスカに、李衣菜ちゃん達の後を追うつもりなんですよ？内緒にしても分かるよ」

晶葉「……」

美穂「私が行ったところで、何の力にもなれないかもしれない。ただの足手まといかもしれない。だけど、それでも連れて行ってほしいの!」

美穂「私は、私よりも小さい子供が、命を懸けなくていい世界にしてあげたい。みんなで当たり前のように笑える日常を取り戻したい。ずっと大切な友達の傍にいたい。そのために、戦いたい!」

茜 「モチロン！美穂さんだけではありませんよ！」

アーニヤ 「ワタシと、アカネ……。ゲッター斬チーム、全員、同じ、気持ちです」

美穂 「例えゲッターがなくても、出来ることはある。だから、連れていって！晶葉ちゃん!!」

晶葉 「……。AV-58の解体で、絆がより一層強まったか」

美穂・茜・アーニヤ 「……」

晶葉 「…分かった。反対したところで、今のお前達なら、無理にでも付いて来かねないからな。それなら、最初から一緒にいてもらった方が安心できる」

茜 「!!」

美穂 「や……」

美穂・茜・アーニヤ 「やったぁーっ!!」

晶葉 「だが、私自身まだ全ての準備が出来ていると言うわけではない。出立の準備が出来るまで、今はまだ英気を養っておいてくれ」

茜 「それは、どのくらい待てばいいんですか!？」

晶葉 「そうだな……。3日……いや、2日で仕上げてみせる」

アーニヤ 「仕上げる、ですか？」

晶葉 「そうだ。必ず完成させる。だから……」

即座にスマホを取り出し、メールを送る。

美穂「ん？」

晶葉「2日後、そこに書かれた場所に来てくれ。必ず迎えに行く」

美穂「分かった。お願いだよ、晶葉ちゃん！」

晶葉「ああ、お前達のためだ。やってみせるさ」

新P「……つたく、結局お前も、島村や多田と同じになっちまったって訳か」

美穂「……プロデューサーさん」

新P「何で揃いも揃って、俺の担当アイドルはこうもお人好しっぽつかなんだ？」

美穂「ごめんなさい……。でも、怖いからって震えてるだけなのはもう嫌なんです！」

新P「……熊本の女は、我慢強くて強気、か」

美穂「それは……！」

新P「お前が俺に最初に言ったことだ。……一度言ったら聞かないのも、九州女の特徴なのか？」

美穂「あう……」

新P「お前の我慢強さと、頑固さがありやあ、何が相手でも負けねえだろうよ」

美穂「……！プロデューサーさん！」

新P「勝って戻ってこい。ついでに、島村達を連れ戻してこい！」



美穂 「は…はいつ!—」

くくく 数日後 くくく

茜 「うおおおー!—!! 旅立つにはいい天気ですね!」

アーニヤ 「ふふっ♪まるでこれから、ピクニックに行くみたいですね?」

茜 「行きましょう! 目指すはアラスカです!」

美穂 「そうだね。これから、行くんだよね…」

美波 「みんな盛り上がりすぎてるところ悪いけど、ちゃんと両親に挨拶は済ませた?」

茜 「はいっ! 全力で突っ走ってこいと言われました!!」

アーニヤ 「ワタシも、頑張って…言ってくれました」

美穂 「私は…、行くなって、引き止められちゃった…」

美波 「美穂ちゃん…」

美穂 「でも最後は、自分で決めたことなら、何がなんでもやり遂げろって!」

美波 「…ふふっ、素敵な両親ね」

アーニヤ 「ワタシ達の事より、ミナミも一緒なんて…良かったですか?」

美波 「ええ。私だって、みんなと戦いたいわって気持ちは一緒なもの。それに…」

茜 「それに? 何ですか?」

美波 「アーニヤちゃんの事が心配なものね」

アーニヤ「ミナミイ……！」

プツプー

「皆さーん！お待たせしました！」

美穂「!! 菜々ちゃん……!?それに瑞樹さんとみくちゃんまで！」

みく「もう、みく達だけ仲間外れとはズルいにやあ！」

美穂「ズルいつて……!どうして私達の事知ってるの？」

瑞樹「つい昨日、事務所の中でウズウズしてる茜ちゃんを見かけたから、ちよつと話しかけてみたら……」

アーニヤ「……アカネ？」

茜「面目ありません！」

菜々「ナナ達だって、ゲッターチームですよ！黙って行っちゃうなんて、寂しすぎます！」

みく「みく達だって戦えるんだもん！置いてっちゃ嫌だよ！」

瑞樹「ここまで来たんだもの、今更引き返せなんて言われても、聞かないわよ？」

美波「ふふつ。ここにいるみんな、気持ちは同じなんですわ？」

アーニヤ「みんなチーム、みんな仲間……。仲間外れは無し、ですわね！」

みく「アーニヤんよく言ったにやあ！それじゃあみんなでレッツゴー！だにやあ!!」

菜々「それで、どこに行くんですか？」

みく「……」

美穂「えーっと……」

晶葉「やれやれ……。結局テスターチームまで集結して、大所帯になったな……」

美波「晶葉ちゃん!? スゴい限じゃない! 大丈夫なの?」

晶葉「何、美穂達の自爆メカ解体から丸2日程、徹夜してただけだ」 ヨロ……

瑞樹「丸2日……。若いからって無茶はダメよ」

菜々「そーですよー! 若いからって、体に無理させてばかりだと、年を重ねてから反動が来るんですよ……」

瑞樹「そうよ。菜々さんだって大変なんだから」

菜々「本当に、膝や腰が思うように動かなくなったり、肩が回らなくなったり……って、違うんですよ? そういう知り合いの話ですからっ!」

瑞樹「そう、知り合いの話ね」

菜々「はい。知り合いの話です」

アーニヤ「……ナナは、時々、スゴく大人みたいな事を、言いますね?」

美波「そうね……。きつと私達よりずっと長い下積みを経験してきたからよ」

菜々「う……。は、早く行きましょう! 晶葉ちゃん!」

晶葉「言われなくても、そうするさ。…瑞樹、ナビゲーションは私のスマホにさせる。その指示に従って目的地に向かってくれ」

瑞樹「分かったわ。貴女は後ろでゆっくり休みなさい」

晶葉「すまないがそうさせてもらう。……」

美穂「晶葉ちゃん、こんなになるまで…。私達との約束を守るために…」

美波「今度は私達の番ね。しっかり報いなくちゃ！瑞樹さん！」

瑞樹「オツケー！早苗ちゃんがいたら、怒られちゃうかもしれないけど、アクセル全開で行くわよ！」

――。

くくく 高速道路 トンネル前 くくく

ブロロオ…

運転手「――…？」

警備員「――」

トンネルの前で警備員らしき格好の男性が制止の合図を送っている。

警備員「すみません。ここから先は現在通行止めです…」

運転手「トンネルの中で事故か？」

警備員「いや、そう言うわけじゃないんですけどね…」

運転手「? じゃあどう言うわけだい?」

警備員「とにかく、ここは危険なので引き返してください」

運転手「:そう一方的に言われてもね。こっちだってこの後ろの荷物を明日までに東京に届けなくちゃいけないんですぜ?」

警備員「直に通れるようになりますから。じゃないと、その荷物の安全も保証できませんよ」

運転手「どういう事だつてんだ:つたく。:ん?」

トネルの向こうから灯りが見える。

運転手「おい! 対向車が来てるみたいだぜ?」

警備員「あ、あれは:!! もう発進するの?!」

運転手「発進? あれは車じゃあねえのかい? あれは一体何なんだ?」

警備員「いいから! 早くバックで引き返して! 荷物と一緒に粉々になるのは嫌でしよう? 私も早く退避しなければ:」

警備員がそそくさと道端の階段に消える。

運転手「何なんだよ、ホントに!」

言われた通り車をバックさせながら、前方に迫る灯りに注目する。

運転手「ん? んん?」

それは、近付いてくるにつれ、全容が明らかになるそれは、車よりも遥かに大きくなる。

運転手「嘘だろ…。ありやあ…！」

薄暗いトンネルの中から姿を覗かせたそれは、

運転手「で、デケエクジラだあ!!」

日の丸をつけたクジラが、車の上空すれすれを飛び立っていく――。

くくく 航空母艦“クジラ2005D” 艦橋 くくく

古田「航空母艦“クジラ” 離陸に成功したッス」

橘「道路上に車両があつたようだが、接触はなかつたか？」

古田「センサーに物体がぶつかったような反応はないッス。恐らく大丈夫かと…」

橘「ふむ…。一先ずは無事に離陸できたか…」

瑞樹「それにしても驚きね…。こんなデタラメな形の巨体が空を飛ぶなんて」

橘「ゲッターGの飛行機能に使われていた反重力機構の応用だよ。晶葉くんがいなければ、完成まで漕ぎ着けることは出来なかつた」

美穂「私達も知らない間に、こんなのを造つてたなんて…」

橘「“クジラ2005D”…。ゲッターロボを運用する上での移動拠点として、建

造された大型空中母艦だ。そのため、基本動力はプラズマエネルギーだが、ゲッターに供給するためのゲッターエネルギー集積装置を搭載している」

菜々「ほええ…。ちっちゃい早乙女研究所、って感じなんですね」

みく「でも、みく達のゲッターは、確か廃棄されたんじや…」

晶葉「ある」

橘「寝ていなくて良いのかね？」

晶葉「休息なら十分取りました。それに、これから戦地に行くって言うのにゆつくり眠ってなんていられませんよ」

茜「それより、ある、とは？まさかゲッターがあるんですか！」

晶葉「その通りだ。コレを見てくれ」

ブリッジ正面の大型モニターに、格納庫の映像を映す。

みく「これって、みく達のゲットマシン！」

美波「それに、私のブラックゲッターもある…。どういう事？」

晶葉「確かに、ランドウの要求と政府からの指示で、ゲッターは爆破、廃棄した」

晶葉「だから、ここで一から組み直したのさ」

アーニヤ「…やる事が、滅茶苦茶、ですな」

瑞樹「全く、ここまで来るとホントに不滅のマシンね」

晶葉「ふふっ、クジラを建造しながらのレストア作業は愉しかったぞ？」

菜々「あ、晶葉ちゃん？目が笑ってませんけど……」

美穂「でも待って、私達のゲッター斬は？」

晶葉「ああ、それか。お前達のゲッター斬は、これだ」ピッ  
映像を切り替える。

茜「？これ、ですか？」

アーニヤ「…私達の知らない、ゲットマシン……」

美穂「もしかして、新しいゲッターロボ？」

晶葉「そう、と胸を張って言える代物じゃないがな。コレは」

美穂「？何か違うの？」

晶葉「詳しい事情の説明は省くが……。真ゲッターロボに匹敵する性能を目指し、ゲッター炉心とプラズマ動力、2つのエネルギー炉を搭載した試作機にもならない試験機だ」

美波「ゲッターエネルギーとプラズマの両立……。そんな事が可能なの？」

晶葉「だから、調整に最後まで苦戦していた。今だって、コンピューターだけで完全に制御出来ているわけじゃない。2つのエネルギーを制御するには、メインパイロットの他2人のパイロットが、逐次手動で調整する必要がある」



アーニヤ「扱いの難しい機体、そう言うことですね？」

晶葉「そうだ。だが、今のお前達なら、このゲッターも使いこなせるはずだ」

美穂「……」

晶葉「そしてもう一つ。このゲッターの炉心には、ゲッター斬の炉心を使っている」  
アーニヤ「…成る程、それでゲッター斬がこれ、だと」

晶葉「うむ。最初はゲッターの完成を急がせるためにやむを得ずだったが、今考える  
と、これもゲッターの導きだったのかもな」

茜「ゲッターの導き？ですか！」

晶葉「お前達が帰ってくることを予見して、ゲッターが更なる進化を遂げるために…」

美穂「更なる進化…。ゲッター斬が…」

晶葉「お前達と、な」

茜「おお…。何だかよく分かりませんが、私達と！ゲッターもまた心は一つと言う  
ことですね!!」

アーニヤ「何だかロマンティック、ですね」

晶葉「どうだ？乗ってくれるか？この新たなゲッターに」

美穂「もちろんだよ！これまでずっと一緒に戦ってきたんだもん！これからだって、  
ずっと一緒にだよ！」

晶葉 「そうか。ならば新しい名前を与えてやらんとな」

美穂 「名前？」

晶葉 「うむ。もはやコレはゲッターロボ斬ではない。ならば、これからの新たな戦いに向かう意味も込めて、新たな名前を付けてやった方がいいだろう」

茜 「いいですね！ 私達の新たなゲッターに！」

アーニヤ 「ミホ、お願いします！」

美穂 「え？ 私なんかが決めちゃっていいの？」

アーニヤ 「Да……素敵な名前を、お願いしますっ」

茜 「私はそういうのは苦手ですから！是非美穂さん！お願いしますっ！」

美穂 「え……ええ……。それじゃあ……」

アーニヤ 「……ワクワク」

茜 「……」

美穂 「私達のチーム、私達の新しいゲッターロボ……。その名前は——」  
つづく

## 第13話『出発、過酷な旅路へ!!』

~~~~~ ドラゴンタートル 司令室 ~~~~~

ヤシャ「……」

「このアラスカ戦線を放棄してコンピューターとお喋りとは、随分と悠長なものだな」

ヤシャ「……ラセツか」

ラセツ「自身の脳とこのドラゴンタートルの電子頭脳とを接続して計算しているのは、真ゲッターロボを打ち倒す方法か、はたまた奴ら連合軍が追ってこれぬ場所でも探さしているのか、どちらだ？」

ヤシャ「何の用があつて来たのだ。このドラゴンタートルは私がランドウ様より賜つた要塞。私の許可なく深部であるこの司令室まで来るとは許されんぞ」

ラセツ「これはこれは。まだご自分の立場を分かつておられぬと見える」

ヤシャ「立場だと？」

ラセツ「貴様はランドウ様の覇業の足掛かりとなるアラスカ戦線で敗走したのだ。そればかりか敵に情けをかけられ、おめおめと逃げ戻ってきた。最早貴様にドラゴンター

トルを指揮する権限などないのだよ」

ヤシャ「……」

ラセツ「この司令室から出ていくのはむしろ貴様と言うことだ」

ヤシャ「……ふん。確かに、度重なる戦いで連中に勝ち星を上げられなかったことは、言
い訳はできん」

ヤシャ「だが、私にも戦士としての矜持がある。敵に情けを掛けられたまま引き下が
ることなどできん！」

ラセツ「戦士としての矜持か。私には理解できん感情だが、安心しろ。貴様の雪辱は
払ってやる。貴様は後方で大人しくしているんだな」

ヤシャ「連中は貴様が思っている以上に、一筋縄でいく相手ではないぞ」

ラセツ「フツ、案ずるな。既に連中の脅威性は、ランドウ様も理解しておられること。
新たに開発されたメタルビーストを4機引き連れて来た」

ヤシャ「新たなタルビーストをだど？」

ラセツ「メタルビースト・ガローン、ギガント、ガルマン、ビーイン。ランドウ様が
誇る史上最高のメタルビースト四人衆で、真ゲッターロボも纏めて地獄へ葬ってやろう

――

~~~~~ 戦艦テキサス 格納庫 ~~~~~

班長「オーライイツ、オーライイツ!! よおし、良いぞ、リーナ! そこに下ろしてくれ  
!」

李衣菜「了解! よつこらせつと!」

ネオゲッターの両手で抱えたコンテナを指定された場所に下ろす。

李衣菜「格納庫に搬入する補給物資はこれで全部?」

班長「おう! 手伝ってくれてありがとなよ!」

李衣菜「このくらい御安いで用だよ。さて、次は…」

奈緒「おいおい、あたしらは今待機任務中だろ? あんまり勝手なこととはするなよな」

李衣菜「あれ? …あはは、そう言えばそうだっけ」

奈緒「あのなあ…。そんなんで、ランドウの襲撃が来たらどうすんだ? ネオゲッター  
のエネルギーは無限じゃないんだから、下手に動いてエネルギーを無駄に使うなよな  
」

李衣菜「は…い…。今ハンガーに入れるからちよつと待ってよ」

慣れた動きでネオゲッターを格納する。

李衣菜「——よいしょ、と」

奈緒「…つたく」

加蓮「奈々緒? テキサスの発進が近いからって、そんなカリカリしない。可愛い顔

が台無しだよ？」

奈緒「っ……。加蓮もたまには緊張感を持ってよな。今はテキサスの発進前で、全体が慌ただしくなってるんだ。シユワルツ達正規の軍人パイロットはみんな周辺の哨戒任務で出払ってるんだぞ？今テキサスが敵に狙われたら、対応できるのはあたらだけなんだからな」

加蓮「そんな心配しなくても、アタシ達の他に天下の真ゲッターロボもいるんだから、何とかなるでしょ」

奈緒「お前なあ……。真ゲッターにおんぶに抱っこで、今まで戦ってきたプライドってのはないのか？」

加蓮「えー？そんなの無いけど？」

奈緒「……」

李衣菜「あー、加蓮はそうかも」

奈緒「何のフォローにもなってるよ！」

加蓮「楽に勝てるなら、それに越したことないじゃん。アタシ達は、戦力だつて限られてる。この基地を出たら、次に補給を受けられるのは何時になるかも分かんない。勝つために手段は選んでられないって言うなら、それこそ真ゲッターの力にでも何でも頼らなきゃ」

奈緒「そりゃあ、理屈ではそうかもしれないけど…。けどさあ…!」

卯月「私達は別に構いませんよ!」

李衣菜「卯月、聞いてたの?」

凜「卯月だけじゃなく、私達もね」

奈緒「凜、それと…3号機のパイロットはかな子に戻ったんだっけか」

かな子「はい。芳乃ちゃんが、あの時から代理で乗つてのがそのままになってただけだからって」

凜「改めてよろしく頼むよ。かな子」

かな子「こちらこそ、ですよ。凜ちゃんっ」

卯月「ランドウって人が、どんなことをしているのかは大体聞きました。同じ人間でも、同じ人間だからこそやっちゃいけないことってあると思います」

凜「そのために真ゲッターの力が役立って言うんだったら、望むところだよ」

卯月「李衣菜ちゃん達より参戦が遅れた分、しっかり頑張らなくちゃ!」

李衣菜「あははっ。卯月はもう十分頑張つてると思うけど?」

卯月「まだまだ足りません!みんなを笑顔にするために、もつともくつと頑張りますよ!」

李衣菜「これは、私達も負けてられないね」

奈緒「そうだぞ、加蓮？」

加蓮「分かっているって。何も全部真ゲッターに任せようって訳じゃない。ランドウには、アタシにだつて思うところがある。アイツとの決着は、この手で付けないと気が済まないからね……！」

奈緒「お、おう……」

李衣菜（加蓮は……あんまり怒らせない方がいいかも……）

加蓮「……ともかく、こつちに真ゲッターがある限りは向こうも下手には仕掛けてこれないだろうし、安心しておやつ食べよう。さあて、今日のおやつは……お、抹茶タルト♪」

奈緒「待て待て！抹茶なんてどっから手に入れたんだ!？」

かな子「それなら、ここの厨房の人から分けてもらったんですよ。たまには日本のものも口に入れてたいだろうって」

奈緒「何でそんなモン持ってたんだ？」

加蓮「細かいことは気にしない気にしない。それじゃあ早速、いったただつきま……」

副長『——ネオゲッターロボ、聞こえているか？応答せよ』

加蓮「……」

李衣菜「ま、まあ加蓮……。どうどう……」



加蓮 「…アタシは馬じゃないよ」

奈緒 「分かったから。通信中は飲食厳禁だ」

副長 『？ ネオゲッターチーム、返事はどうした？』

李衣菜 「は、はいっ！ネオゲッターチーム、全員揃ってます！」

副長 『…：よろしい。哨戒中のテイラミス中尉から報告が入った。ランドウのメタル

ビースト部隊を捉え、交戦中だ。至急応援に迎え』

李衣菜 「了解っ！これよりテイラミス中尉の応援に出撃します！」

副長 『よろしく頼む』

プツン——

李衣菜 「よおし、待機任務は終わり！行くよ、奈緒、加蓮！」

卯月 「リンダさんをお願いします。テキサスは私達に任せてください！」

李衣菜 「護衛としてはこれ以上ないくらい頼もしいよ」

凜 「ダイノゲッターもいるしね。もし地中から奇襲されても、何とかしてみせるよ」

奈緒 「…ネオゲッターより真ゲッターの方が、護衛にしたら頼りになるってことか」

卯月 「えっ…！えっつと…」

加蓮 「それはまあ、ねえ」

李衣菜 「2人とも、そう言うのは言いっこなしだよ…。応援戦力として頼りにされて

るってことなんだからさ……」

奈緒「ま、李衣菜の言うとおりでな。じゃ、真ゲッターに出来ないあたし達の仕事、一丁やってやるかあ!!」

かな子「抹茶タルトの感想、後で教えてください」

加蓮「分かった。かな子のためにも、しっかり生きて帰らなくちゃ」

李衣菜「そう言うこと！それじゃあ、気合いを入れて……」

李衣菜「リーナ、行つきまゝす——!!」

――。

リンダ「——チッ！デカイクセに動きはすばしっこい奴ね……」

キングダムが羽虫のような4枚羽を持つ巨大なメタルビースト・ビーインと対峙している。

リンダ「喰らいなさいッ！」

キングダムの胸部から放たれたミサイルは、ビーインの4枚羽が生む衝撃波で容易く散らされる。

ビーイン「……」

リンダ「……能面みたいに表情のない、不気味な奴ね……。こう言うのは苦手だわ」

ビーイン「……雑魚が一匹……。オレの相手には不足、か」

リンダ「!? 言ってくれるじゃない……私はね、初対面の男に見くびられるってのが、一番癪に障るのよッ!!」 ギインッ

キングダム「ヒートサーベルを両手に抜き打ち、ビーインに飛び掛かる。」

ビーイン「!!」 カッ

リンダ「っ!? きやあッ!」

ビーイン「双眸から放たれた光線がキングダムを射抜く。」

リンダ「……くっ」

ビーイン「……この程度の挑発に乗る。やはり、人間とは短絡的な存在か」

リンダ「言ってなさい、この木偶の坊! すぐにその凶体切り刻んでやるわ!」

ビーイン「カアッ!!」

リンダ「っ……!?!」

ビーイン「口から強酸の息吹が放たれ、キングダムの表装を溶かす。」

ビーイン「……戦果としては、不十分。しかし、任務遂行には十分だ」

リンダ「……のお……! 舐められたまま終わって……」

李衣菜「シヨルダーミサイル!」

ビーイン「ム……?」

リンダ「ネオゲッターロボ!」

ネオゲッターのシールドミサイルが、ビーインの頭部で火柱と黒煙を上げる。

李衣菜「助けに来たよ！」

奈緒「大丈夫か!？」

リンダ「間一髪つてところよ。助かったわ」

加蓮「そりやどうも。にしても、相手は一体だけ？」

リンダ「一体だけだからって油断は出来ないわ。アイツ、これまでのメタルビーストとは格が違うわよ」

李衣菜「一体で攻めてくるだけはあるってことだね…！」

奈緒「これまでののが戦闘員だとしたら、あれは幹部クラスつてことか」

加蓮「そこまでじゃないでしょ。精々今週の怪人“クラスでしょ”

奈緒「そんなもんか」

李衣菜「今週の怪人は毎回倒してるから、これは中盤で強化されたパターンの奴だ」

奈緒「お、李衣菜も分かってくたじやんか」

リンダ（一体何の話してるのかしら…？）

ビーイン「ヌウ…。ゲッター…ロボ…！」

李衣菜「折角乗り込んできたところ悪いけど、アンタはここでゲームオーバーだよ！」

ビーイン「…丁度いい！」

李衣菜「何を！」

ビーイン「丁度、戦果が不十分だった。ゲッターロボ、例え紛い物でも、ここで倒せば、憂いは絶たれる！」

李衣菜「な、っ……！ネオゲッターを紛い物って言ったな！」

奈緒「実際ゲッター線じゃ動いてないしな」

加蓮「名前だけだよね」

李衣菜「もう怒った！絶対許さないんだから！」

ビーイン「…待て、今のはオレでは…」

奈緒「いいぞ李衣菜、やってやれ！」

ビーイン『貴様ら……！』

李衣菜「うおおおおッ！ソードトマホーク!!」

ビーイン「カアッ!!」

李衣菜「なんの！」 ガギンッ

キングダムが直撃したビーインの光線をソードトマホークで弾き、その胴体に斬り込む。

ビーイン「ぐあああっ!?!」

李衣菜「そんな単純な攻撃、喰らう方がどうかしてるって！」

リンダ「……」

李衣菜「あ、あら……？」

奈緒「どーすんだ、地雷踏んだみたいだぞ」

加蓮「2人とも、敵の足下でのんびりするのはやめといた方が……」

李衣菜「え……。——おっと！」

間一髪で、ビーインのテールスイングを躲す。

李衣菜「ふう、危ない危ない……」

ビーイン「……調子に乗るのは、そこまでだ！」

李衣菜「へへっ、図体ばかり大きいだけじゃ、ゲッターの相手は務まらないよ？」

ビーイン「ほざけ!! 我が力の前に屈するがいい!!」

李衣菜「何をく!!」

加蓮「……リンダさん、動ける？」

リンダ「ええ、損傷事態は大したことないわ。まだまだやれる!!」

加蓮「分かった。リーナ、キングダムとの連携で手早く済ませるよ」

李衣菜「オツケー!! 行つくぞく!! ショルダーミサイルツ!!」

ビーイン「むう……!!」

4枚の羽を飛ばたかせて、ショルダーミサイルを躲す。

ビーイン「クワアッ!!」

グオオンッ

李衣菜「な、何…!？」

加蓮「メタルビーストの顔が巨大になって…」

リンダ「何か出てくるわよ!？」

李衣菜「あれは…」

無数の魑魅魍魎が、巨大化したビーインの口から現れる。

奈緒「な…何だこりゃあ!？」

加蓮「待つて…。あの不気味な連中、レーダーに反応がない…?」

キシヤアアアアアッ!!

ネオゲッターとキングダムに絡み付いた魑魅魍魎の吐き出す溶解液が、キングダムの

表装を溶かす。

リンダ「でも攻撃は受けてるじゃない!」

李衣菜「対象が小さすぎてレーダーに反応しないの?」

加蓮「そんな事…」

奈緒「う、うわああああ!!来るな…来るなああああ!!!」

李衣菜「奈緒!!」

奈緒「あたしこう言うのは苦手なんだ!!うわあああ!コックピットに入ってくるう!!」

李衣菜「コックピットに!?ハッチが壊れたの?」

加蓮「……。ううん。そんな事ない。…これであの連中の正体が分かったね」

李衣菜「どう言うこと…?」

加蓮「これは一種の幻覚だよ。物理的にじゃなく、精神的にアタシ達を追い詰めるつもりみたい」

リンダ「でも、キングダムは損傷してるのよ?」

加蓮「それも幻覚。そうだと思いつまらせることで、より一層アタシ達を追い込むんだよ」

李衣菜「そう言うことか…」

ビーイン「クツハツハツハツ!!我が術を見破ったとしても既に遅いわ!!」

李衣菜「このっ…!」

目の前のビーインにチェーリナツクルを打ち込むものの、それはビーインの体をすり抜ける。

李衣菜「!? これも幻影!」

加蓮「レーダーが利かなくなってきた…。この中で正確にアイツを見極めるのは難



しいかもね」

奈緒「うわああああ!!いや…く、来るなああああ〜っ!!」

李衣菜「…私も、奈緒ほどじゃないけど頭がくらくらしてきたかも…」

加蓮「頑張ってるリーナ。どこから敵の攻撃が来るかも分からない上に奈緒がこんなじゃ、迂闊に分離して変形できないんだから」

李衣菜「分かった…!」ク

ビーイン「何をしてても無駄よ! 貴様らは既に我の術中に嵌まったのだ。今頃は貴様らの仲間も、同じように朽ち果てる運命よ!」

リンダ「何だって!」

加蓮「そう…。テキサス発進だって気張って、みんなで出払っちゃったのが裏目に出たってこと…!」

—。

サム「チツ…! こういう時、ロボ・ストーンの機動力の無さってのはヤンなるぜ…」

ボブ「つたく、早く行かねえと李衣菜達がやられちまうぜ!」

メリー「…待って!」

ボブ「ん? どうかしたのかい、メリー」

メリー「さっきここを通った時、こんな崖あつたかしら?」

ボブ「そういや…」

サム「違うルートを通ってるんじゃないのか？」

ジャック「No. リーナ達と最短ルートで合流するために、来た道に戻っているはずです」

ボブ「お、おい…！何か、道幅が狭くなってねえか？」

ズズズ…

メリー「そうじゃない…！崖が迫ってきてる!？」

ジャック「Wrong! コイツは崖じゃない…！」

サム「メタルビーストかア〜!!？」

—。

シユワルツ「ツ…！何だ…コイツ…」

ガギンツ

空中で、ステルバーとメタルビーストがぶつかり合う。

シユワルツ「これまで生きてきた中で、こんな気持ちになるのは初めてだが、気味の悪い相手だぜ」

ステルバーの撃ったマシンガンの弾丸が容易く躲される。

シユワルツ「どうしてここまでオレの癖を知ってやがる!？」

巨大な人面を象ったマシンの上に鎮座した修羅が、ステルバーと対峙する。

シュワルツ 「テメエ、これまでのメタルビーストとは訳が違うみてえだな。一体何もんだ!？」

「……………くつくつくつ……………」

シュワルツ 「!? その声は……!」

「フンツ!!」

シュワルツ 「ぐっ……………!?!」

メタルビーストの持つ巨大な曲刀が、ステルバーを打ち据える。

「この程度の事で動揺するとは。まだまだ未熟だな。それに、戦闘機乗りだった頃の癖が抜けていないのも相変わらずだ。シュワルツ」

シュワルツ 「何故だ……! テメエは百鬼帝国との戦いの時に死んだ筈だ!」

「そうだと。だから甦ったのだ。ランドウ様の素晴らしき科学の力によってな……」

シュワルツ 「ランドウ……様、だとお……!」

「お前も何時までもくだらないプライドに縛られるな。ランドウ様の支配を受け入れたらどうだ?」

シュワルツ 「——ランバートオ!!」

——。

副長「――…テキサスマック、ステルバー…。スーパーロボットは、各地で戦闘を開始したようです」

艦長「ぬう…。一機でも呼び戻せんか？」

副長「各機、共に苦戦しているようです」

艦長「……」

卯月「ううっ…！」

遙か天空からテキサスマグがけて降り注ぐ、真ゲッターの身の丈ほどの径を持つ極大な閃光を、真ゲッターがトマホークで受け止めて流す。

凜「大丈夫？卯月」

卯月「このくらい大したことありません。でも…」

かな子「これじゃあテキサスの上から離れられませんね…」

凜「テキサスの周辺には、他のメタルビーストだつて展開してるのに…」

ニオン「それならば心配無用だ！」

メタルビーストの群れの中で、ダイノゲッターが暴れている。

凜「ニオン！」

卯月「でも、ダイノゲッターだけじゃ、数が違いすぎます！」

鉄甲鬼「だが、それでもやらねばならんのだろう？」

芳乃「戦艦できさすの損失は、今の人類にとつて、大きな痛手となるのでしてー」  
ニオン「ランドウを倒すために必要な力なんだろう！ならば、やってみせるツ!! 貴様らは黙ってそこで見ている！」

ダイノゲッターが敵陣に飛び込んでいく。

かな子「…戦況は圧倒的に不利かもしれないですね」

凜「そうかもね…。それに、さっきのビーム…あれは…」

卯月「真ゲッターも反応してます。間違いなくゲッタービームです」

凜「真ゲッターが？」

かな子「計器には何の反応もありませんけど…？」

卯月「はい…。その、私にもよく分からないんですけど、でもさっきのビームに、ゲッターが共鳴しているような…そんな感じがするんです」

かな子「？ つまり…どう言うことですか？」

凜「……」

凜「…卯月とゲッターの親和性が前より強くなってる。だから、私やかな子に分からないことも、感覚的に分かるのかも」

かな子「でも、ホントにありえることなんですか？ ランドウがゲッタービームを使っ

てくるなんて……」

凜 「別に、早乙女博士だけがゲッター線研究を独占してた訳じゃないよ。ゲッター線を戦闘に転用するぐらいなら、誰でも出来る」

かな子 「そんな……」

凜 「尚更負けるわけにはいかないよ。出来る？かな子」

かな子 「はい……」

凜 （問題は、誰がランドウにゲッターの知識を与えたか、だけど。それを今ここで推測している場合じゃないか……）

卯月 「！ やあっ！！」

二射目のビーム攻撃を弾いて散らす。

かな子 「射撃の間隔は、結構ありますね」

凜 「チャージには時間がかかるのかも」

卯月 「凜ちゃん、上空のメタルビーストの位置は分かかりますか？」

凜 「二応は。上空なんてものじゃないよ。高度約36000。気象衛星とかと同じ高度だね」

卯月 「……真ゲッターなら、一つ飛びで行けない距離じゃないですけど……」

凜 「今の状態じゃ危険かな。テキサスの防衛戦力が少なすぎる。真ゲッターを引き

離すことが目的かもしれないし、これ以上戦力を分散させてテキサスを危険に晒すわけにはいかないね」

かな子「ここで足止めさせるのが狙いなのか、真ゲッターを引き寄せるのが狙いなのか。どっちか分らないと動けないってことですか？」

凜「そう言うこと。後手に回るのはよくないけど…」

卯月「ここでこうして真ゲッターがテキサスの護衛に回ってれば、ランドウの思う通りにはなつてないはずですよ！」

凜「……」

かな子「どうかしたんですか？凜ちゃん」

凜「ううん。最初のメタルビーストの攻撃が、いやに正確だったな、って思つて」

かな子「え？」

凜「今私達は、テキサスの真上に待機してる。アメリカの機能に乗っ取ったランドウが、テキサスに撃つてくる弾道ミサイルを迎撃するのが目的だった訳だけど…」

凜「更にその真上から、テキサスめがけて光線は真つ直ぐ落ちてきた。…真ゲッターがいなかったら、テキサスに直撃だったのは間違いない」

かな子「ランドウは最初から、この位置にテキサスがあることを分かつて、それで狙い撃ちにして来たって事ですか？」

卯月「そうですか？テキサスは基地に留まつてるんだし、遠距離から攻撃するのなら、的になつても仕方ないんじゃない？」

凜「それだよ。例えテキサスが基地のドックにいることが分かつてても、基地のどの辺りにいるかまでは、中の構造を把握してないと分からない筈」

卯月「…え〜つと、つまり…どう言うことですか？」

凜「誰かが遠くのメタルビーストにこつちの位置を教えてるつてこと。…確証はないけど」

かな子「テキサスの中に、ランドウのスパイがいるつて事ですか？」

凜「そこまでは…どうだろ？でも、スパイじゃなくても、近くに斥候がいて、こつちの様子を探つてるとか」

艦長『ふむ…。可能性としては大いにありうるかも知れんな』

卯月「艦長！どうするつもりですか？」

艦長『これよりテキサスを緊急発進させる』

かな子「!?」でも、まだ補給の途中なんじゃ…」

艦長『こうなつてしまつては最早補給どころではないよ。それよりも、テキサスを動かすことで、凜くんの立てた仮説が正しかったことが証明されれば、まだやりようはある』



凜 「テキサスを囷に使うってこと……」

卯月 「お願いします。テキサス発進までは、真ゲッターが何としても守ります!」

艦長 『うむ。よろしく頼むぞ。よしッ!!これよりテキサスは発艦シーケンスに入る!!』

各員は配置に着け!』

凜 「奈緒達にも約束したんだ。責任重大だね」

かな子 「それでも、私達だけでこの巨大戦艦を守り抜かなきゃ行けないなんて……」

ニオン 「このおッ!!」

メタルビースト《——!!》

ニオン 「なんのッ!」

四方八方をメタルビーストに包囲される中、ダイノゲッター1がトマホークを片手に奮戦する。

芳乃 「…敵の数が1、次第にその勢いを増してしまして1」

鉄甲鬼 「ダイノゲッター1の機動力では、時期に捉えられてしまうぞ。俺に代われ!」

ニオン 「ふんっ!仕方あるまい。言ったからにはダイノゲッター2を扱いこなしてみせるのだな!」

芳乃 「多くの敵勢を1、一度に屠るのであれば1、わたくしのだいのゲッター3も1、頼りにして下さいませー」

鉄甲鬼「いざという時になれば頼もう。では行くぞ！」

ニオン「ああ！オープンゲット!!」

かな子「ニオンさん達も流石に苦戦してるみたいですね…」

凜「私達さえここで倒せれば、ランドウにとつて一番の敵対勢力を葬ったことになる。向こうも戦力を使う時を弁えてるって感じだね」

かな子「冷静に分析してる場合じゃないありませんよ！このままじゃ、テキサスが発進する前にニオンさん達が…！」

卯月「こんな時、都合よく晶葉ちゃん達が来たりしてくれませんかね…」

凜「そんな…アニメじゃないんだからそんな都合よく…！」

「———そうですね!!ですから———」

ビュンッ

かな子「きゃっ!…い、今のは…！」

凜「見たことない形…、でも間違いない!」

卯月「ゲットマシン!!」

茜「私があ…来ましたッ!!」

美穂「お待たせ、卯月ちゃん!みんな!」

卯月「茜ちゃんに美穂ちゃんまで!」

凜 「と言うことは、残りの一機に乗ってるのはアーニヤ?」

アーニヤ 「Конецно…もちろん、です!」

茜 「いきますよ!アーニヤさん!美穂さん!ミサイル一斉発射です!!」

アーニヤ・美穂 「はいっ!!」

鉄甲鬼 「ぬおっ!」

3機のゲットマシンの一斉攻撃が、ダイノゲッター2周辺のメタルビーストを蹴散らす。

ニオン 「…随分派手なご登場だ…!」

芳乃 「しかし、頼もしき盟友であることに変わりはないでしょう」

凜 「斬チーム…。流石だね、晶葉」

晶葉 『ああ、約束しただろう?必ずお前達のところに行くよ』

卯月 「でも、一体どうやって?」

晶葉 『テキサスのような移動拠点を持っているのは、アメリカだけじゃないさ』

かな子 「そこにみんな、みんないるんですか?」

晶葉 『勿論だ。戦う必要はない、と一応言ったんだがな。皆一様にお人好しのようだ』

茜 「今頃他のスーパードット達の援護に向かっていると違いますよ!」

晶葉 『こちらで戦闘の様子を確認した辺りから居ても立ってもいられなくなつたみた

いでな。仕方ないから先行させた』

凜 「晶葉、茜達が今使ってるアレ、例の新型が完成したんだね？」

卯月 「新型のゲッターロボですか？あれが！」

茜 「そうです。私たちのゲッター斬は！一度燃え尽きて、そして不死鳥のように蘇ったのです！！」

かな子 「？ どう言うこと…？」

凜 「今はなんでもいいよ。斬チームが来てくれたなら心強い」

晶葉 『いや、今の茜達は斬チームじゃない』

卯月 「え？」

茜 「いきますよ！折角ですし、アレをやりましょうっ！！」

美穂 「あ、あれ…？ホントにやるの…？」

アーニヤ 「やりましょう？その為にワタシとアカネとミホ…3人で一生懸命考えました！」

美穂 「う…うん…！そうだよね！」

卯月 「えつと…アレ、つて…？」

茜 「はいっ！！私と！アーニヤさん、美穂さん！一人一人は小さな火です！がつ！！」

アーニヤ 「二人、力を合わせればПламя…炎…、三人揃えば、もつと大きな焰

“に、なります!”

美穂 「燃え上がる焔、それは、どんな壁も障害も突き抜けて天高く飛び立つ翼に!!」

茜 「いきます——!!」

3機のゲットマシンが、機首を上げて飛翔。

茜 「チエー——ンジッ!ゲッターアアア——ッ!!ファンッ!!!」

雲を突き抜け、太陽の下で合体。

茜 「情熱合体!!ゲッターロボ!飛焰ッ!!」

茜 「私を!」

アーニャ 「ワタシ達を!」

美穂 「甘く見ないで下さいっ!!」

晶葉 『差し詰め、チーム飛焰、と言ったところか』

かな子 「ゲッターロボ:飛焰、ですか!」

晶葉 『正しくはまだ試作段階のプロトタイプ・ゲッター何だが、俗称を付けるのは悪

くない』

美穂 「や、やっぱり恥ずかしいよお:」 カアア:

茜 「上出来でしたよ!練習した甲斐がありました!」

凜 「ちゃんと練習したんだ:」

アーニヤ「Da…本番で、失敗…ダメ、ですからね」

卯月「ゲッター飛焰…。何となく見た目が真ゲッターに似てますね…」

晶葉『フレームは早乙女博士が遺したモノだ。真ゲッターの後に造られたものだろうし、似通っているのはその為だろう』

凜「…肩にでつかく、真…って描いてあるけど？」

晶葉『それは…開発を手伝ってくれた整備班が勝手に付けたんだ』

主任『何言ってるんだ。晶葉ちゃんだって、真ゲッターを越えてやるぞって賛成したじゃねえか』

晶葉『あ、あれは…！私個人の意気込みであって賛成した訳じゃ…』

主任『へっ、何でもいいがよ。…で、茜ちゃん、聞こえるかい？』

茜「はいっ！感度良好です!!」

主任『いい返事だ。だが、そのゲッターはここで開発されてからろくな試運転もしちゃいねえ。少しでもおかしいと思ったら無茶だけはすんじゃねえぞ』

茜「分かりました！全力でいきます!!」

主任『おい、ホントに分かってンのかア？』

茜「大丈夫です！設計した晶葉さんと、手掛けてくれた主任さんを信じます！案ずるより当たって砕けろです!!」

美穂 「砕けちゃダメだよ！」

アーニヤ 「けど、産むが易しと言うのには、賛成、です」

美穂 「…そうだね。ここまで来たんだもん。後は戦って、結果を出すだけだよね！」

かな子 「美穂ちゃん達、何だかチームの雰囲気が変わったと思いませんか？」

卯月 「そうですね。何だか吹っ切れたみたいで…もつとチームって言う感じがします

！」

主任 『…まあいい。プラズマエンジンとゲッター炉心の同調はまだ完璧じゃねえ。

しつかり手綱は握つといてくれよ。お二人さん』

美穂・アーニヤ 「はいっ!!」

凜 「ん…? ゲッター飛焰は、ゲッターエネルギーとプラズマエネルギー…」

晶葉 『ダブルのエネルギーで稼働する。真ゲッターに比肩するための、苦肉の策だが

な』

茜 「いきますよおっ!!——トラアア——イッ!!」

高空で身を翻して、プロト・ゲッターが地上のメタルビーストに迫る。

茜 「ガトリングガンを!!」 ジャキッ

左の腕に、腕とほぼ同じ太さのガトリングガンを携え、

茜 「ドラララララララララッ!!」

連射。密集するメタルビーストの群れに、プロト・ゲッター1の腕程の大きさのガトリングガンの弾丸が、容赦なく突き刺さる。

メタルビースト《——?!?!?》

アーニヤ「メタルビースト、怯んできます！」

茜「トドメは、この爪で……」ジャキッ

プロト・ゲッター1の手甲の隙間から覗いた4本連なつた鉤爪が光る。

茜「ちえりやアあああッ!!」

切つ先鋭い鉤爪が、メタルビーストをズタズタに引き裂く。

茜「チエス……トオオ!!」

勢いよく振り抜いた右腕をそのまま地面に突き立てて軸とし、腰を捻つて右の直蹴りをメタルビーストに突き刺す。

茜「だあああああああ——ッ!!」

前転して立ち上がり、プロト・ゲッター1を回転させて、水平横一線にメタルビーストをガトリングの弾丸で穿ち抜いていき、敵陣中央に位置していたダイノゲッター2と合流する。

美穂「大丈夫ですか!? 鉄甲鬼さん、みんな！」

鉄甲鬼「絶妙なタイミングだ。援護感謝する！」



アーニャ「お礼、は要りません。それよりも、これで形勢逆転、出来ますか？」

ニオン「…無論だ。元より、貴様らの助けなど不要！」

芳乃「おやおやー？強がりには良くないのではー？」

鉄甲鬼「フツ、生きているからこそ強がれる、な。この状況を切り抜けるぞ！」

茜「はいっ！テキサスに手は出させませんッ!!」

ダイノゲッター2と、プロト・ゲッター1が互いに背を預け合い、メタルビーストと対峙する。

卯月「スプリット・ビーームッ！」

真ゲッター1の腕から放つ閃光で、遠方のメタルビーストを狙撃する。

卯月「テキサスの真上にいても、射撃でなら何とか…！」

凜「直上の攻撃の警戒も緩められないから、油断はできないけど…！」

かな子「けど、ここ以外にも、みくちゃんや美波さんが行ってくれたんですね？」

卯月「そうですね。それでも早くメタルビーストを撃退できれば、他の皆さんのテキサス合流も早まる筈です！」

凜「…ちよつと待って」

卯月「どうかしたんですか？凜ちゃん」

凜「私達の知ってるゲッターの戦力は、そこにいるゲッター飛焰を合わせても、みく

達のゲッターと、美波のブラックゲッター……」

かな子「はい……。晶葉ちゃんも、出撃はしてないみたいですし」

凜「メタルビーストが出現したのは、ここ以外だったら3ヶ所じゃなかった？」

かな子「……え、と言うことは……」

卯月「どこか援軍が行ってないところがあるってことですか？」

――。

シユワルツ『――テメエ！ 一体何なんだ!? いきなりしやしやり出てきやがって!!』

みく『折角助けてやったのにお礼も言えないなんて、生まれのお里が知れるにや』

ハツ

シユワルツ『何いッ!?!』

瑞樹『身内争いはそこまでよ。仲間じゃなくても、ここで死ぬ気でもないんでしやう』

？

シユワルツ『……チッ』

ランバート『旧式が一機増えただけでは何も変わらん』

瑞樹『あら？ 随分な言い草じゃない?』

菜々『旧いをバカにするのは許しませんよー! 温故知新の言葉の意味を貴方に教えて

あげます!』

美波『そこのおつきいロボットは出られそうですか?』

ボブ『す、すまねえ…。すっかりメタルビーストに嵌まっちゃったみてえだ!』

サム『はっはっ! 挟まっちゃったぜ!』

ジャック『笑い事ではありません!』

美波『…仕方ありません、ブラックゲッターで中に入ります!』

メリー『危険じゃないかしら?』

美波『大丈夫です! 考えがありますから。ちゃんと皆さんお連れして、メタルビース

トも倒して見せます!』

李衣菜『…皆のところには助けが来たみたいだね』

加蓮「こつちには誰か助けに来るところか、これじゃあ私達がミイラ取りがミイラ」

李衣菜「ははっ、リンダさんをミイラ扱いは酷いと思うよ」

リンダ「きやあつ!! キングダム of 装甲が溶かされる!?!」

加蓮「それも幻覚だから落ち着いて!」

李衣菜「とはいえ、流石に頭の中がボンヤリしてきたかも…」

奈緒「あ…あ…」

李衣菜「奈緒もこんな感じだし、早くなんとかしないと…」

加蓮「…奈緒、お願いだからそのままそこで失禁しないでよね」

李衣菜「何か作戦がある？」

加蓮「一応はね。ちよつとゲッターのコントロール、こつちに貸して貰える？」

李衣菜「分かった。加蓮を信じるよ」

パネルを操作して、ネオゲッターのコントロールを渡す。

加蓮「…よし。正直賭けでもあるんだけど」

李衣菜「え？」

加蓮「いくよっ！」

勢いよくネオゲッターの両手を打ち合わせ、プラズマサンダーの予備動作をとる。

加蓮「プラズマ…サンダー！」

そして、両腕のプラズマサンダーを、頭上に高く放り投げた。

李衣菜「え…どこ狙ってるの？加蓮！」

ビーイン「フハハハッ!! 血迷ったか！」

加蓮「シヨルダーミサイルッ！」

ビーイン「!?!」

空中に放ったプラズマサンダーめがけ、シヨルダーミサイルを撃ち出す。

——カッ

リнда「きやつ…!? 何…?」

ビーイン「ヌオ…!？」

シヨルダーミサイルによって、プラズマサンダーの圧縮されたプラズマエネルギーが弾け、照明弾のように辺りを眩く照らす。

李衣菜「うっ…!けどこれ、何も見えない…!」

加蓮「いたよ、3時の方向!」

李衣菜「えっ?」

ビーイン「ヌオオオオツ…!」

李衣菜「幻が…消えてる?」

加蓮「ビンゴだったみたいだね。あの幻術は、投影みたいなので周囲の風景に映し出してたんだ」

リンダ「だから、至近からの強烈な閃光で霧散した、と言うわけね」

加蓮「そゆこと。対策が分かれば、突破は簡単…!とんだ一発屋だったね!」

もう一度プラズマサンダーを空中に放ち、同じ閃光を作る。

ビーイン「わ、我が幻術が破れるな…!どツ!？」

狼狽えるビーインの脇腹に、ネオゲッターのソードトマホークが深々と突き刺さる。

加蓮「人間の精神力を甘く見たね、ランドウ…!」



瑞樹「後ろよ！」

みく「…っ?!?うにやああっ!!」

背後からのガローンの体当たりの衝撃が、ゲッターのコックピットを揺らす。

みく「うにやあ…。そんな図体で体当たりしてくんにやあ…。痛たた…。舌噛んじやった…」

シユワルツ「テメエの妙な喋り方のせいだろうが」

みく「何をー！助けに来てやったのになんて言い草にや！」

シユワルツ「頼んだ覚えはねえ！それに、助けに来たわりには一方的にやられてるだけじゃねえか！」

瑞樹「それは否定できないわね」

菜々「で、でもでも、反撃の切っ掛けを作る位はできた筈ですよ？」

シユワルツ「そりやあ、まあ…」

菜々「だったら大丈夫です！何もズバーツと出て来て解決するだけが援軍じゃありませんよ♪」

瑞樹「相変わらず菜々さんの前向きさは見習いたいわね」

菜々「ほ、褒めても何も出ませんよお…。それよりも、敵さんがいらつしやいますよ!!」

ランバート「何処までもふぎけた連中だなア!!」

みく「ふんっ! 戦闘なんてバカげた事を大真面目にやる方がふぎけてるんだ: にやあッ!!」

ガローンの剣を右のトマホークで受け止めると同時、左の手でもトマホークを抜き打ち、ガローンの胸部を水平に切り払う。

ランバート「おっ:!?」

みく「ダブルトマホークはドラゴンだけの専売特許じゃないにやあ!!」

右のトマホークを上段から振るい、剣で受け止めたところで左のトマホークを下段から振るう。

ランバート「グッ:!!」

下段からの一撃を片手で抑えるガローンに、水平に蹴りを打ち当てる。

ランバート「うおっ!?!」

みく「どーにや!! 両手だけじゃ怒濤の三連撃は止めきれないでしょ?!」  
ランバート「くだらぬ小細工を: 弄してくれろ!」

みく「うにやっ!?!」

台座の上からゲッターを蹴り飛ばし、距離をとる。

ラセツ『——もうよい。撤退せよ』



ランバート「ら、ラセツ様……?しかし……!」

ラセツ『此度の戦の目的は達した。日本のゲッター共も参戦し、既にビーインを倒された。真ゲッターが相対しているとなればギガントも長くは持たんだろう』

ラセツ『我が戦力を割くのはこの場ではない。早急にガルマンを率いて後退するのだ』

ランバート「…了解しました」

ガローンが引き下がる。

みく「にやつ!逃げる気にや!?!」

ランバート「今回の勝負はお預けだ。命拾いしたな」

シュワルツ「待ちやがれツ……!」

ランバート「シュワルツ、お前も考えておけ。俺達一介の兵士が、本当に従うべき指導者は誰なのかをな」

シュワルツ「それがランドウだったのか!?!」

ランバート「お前達がそれだけの戦力を結集して守れたのは、このアラスカだけだ。ヨーロッパもアフリカもアジアも、最早ランドウ様の手中に収まりつつある。趨勢は決まったも同然だろう」

シュワルツ「……」

ランバート「彼我の戦力を考えて、無謀な戦いに挑むほどお前も愚かではない筈だ。俺個人としても下らぬ戦いでかつての戦友を失いたくはない」

ランバート「ランドウ様も世界を統べる力としてより優秀な素材を求めている。俺の知っているシュワルツコフならば、ランドウ様の時代の良き礎となれるだろう」

シュワルツ「ランバート……！ テメエ、自分の誇りまでランドウに売っちまったってのか?!」

ランバート「フフツ、個人の誇りなど小さなものだ。誇りだと名誉だと、個人的な感情に流されるのでは、長生きなどできないぞ。シュワルツ？」

シュワルツ「ランバートツ!!」

ランバート「さらばだ、シュワルツ。次に会った時に今日の答えを聞こう。お前が愚かで矮小な人間でないことを祈るぞ」

そう言い残して戦場を撤退していく。

みく「待つにやー！ 逃げるなー!!」

菜々「ま、まあみくちゃん落ち着いて下さい……。ここでナナ達が追い掛けても意味ないですよ」

瑞樹「それよりも、状況の整理が必要なようね」

シュワルツ「……チツ。ランバート、テメエは——！」

ランバート『……ガルマン、聞こえるか。撤退だ』

ガルマン「!!」ズズズ…

メタルビースト・ガルマンの巨体が、地面に姿を消していく。

美波「:!!? メタルビーストが引き上げる…?」

ボブ「んだあ? 散々好き勝手やっておいて撤退かア? 面白くねえぜ」

サム「全くだぜ。こっちはもうすぐで、危なくサンドイッチになるとこだったのによ。やり返さなきゃ気が済まないぜ」

メリー「けど、追撃している余裕はないわね」

ジャック「反撃のChanceなら、これからいくらでも巡ってくるサ。それより、リーナ達の方も心配ネー。退いてくれたのなら、むしろLuckだぜ」

ボブ「:…だな。折角美人のネーチャンに助けてもらった訳だしな」

サム「そうそう。ちよつとくらい御近づきになっておかないとな」

美波「あ…あはは…」

李衣菜『みんな! 無事? 生きてる!?!』

ジャック「Oh、リーナ。こっちは全員大丈夫だ。ユーのTempti ngな仲間のお陰でネ!」

李衣菜『て、てんぷら…?』

メリー「もう！兄さんつたら！」

ジャック「H A H A ! S o r r y . 何でもないヨ。こっちの E n e m y は撤退した。急いでテキサスに B a c k h o m e するゾ！」

李衣菜『分かった！それじゃあテキサスで合流しよう』

ジャック「OK！」

加蓮『…ボブ、サム。美波に鼻の下伸ばしてたら承知しないからね?』

ボブ「な、何の事だよ…?」

サム「鼻の下なんか…。俺達は紳士だけ?」

加蓮『ホントかな?』

ボブ「ホントだって。な、今度またハンバーガーご馳走してやるからよ。それで勘弁してくれよ」

加蓮『ん〜。ならよろしい♪』

サム「はあ…」

李衣菜（飼いや慣らされてる…）

—。

副長「—…補給作業の中断作業完了を確認、各部ハッチ、搬入口の閉鎖チェック…」

クルー各員の配置よし。艦長、テキサス何時でも発進できます」

艦長「よしッ！メインエンジン始動、艦底部フロート・システム運転。微速前進開始！」

アーニヤ「——！ テキサスが、動きます！」

美穂「本当……。近くで見ると、やっぱりスゴいなあ……」

茜「まるで山が動いているみたいですね！」

鉄甲鬼「見入っている場合ではないぞ！ 周辺の敵が、テキサス前方に集結し始めた！」

アーニヤ「一点集中で、テキサスにダメージを与えるつもり、ですか？」

芳乃「或いはー、その身を賭してでもー。テキサスに手傷を負わせる為にー」

美穂「そんな……！ 特攻ってこと……!?!」

ニオン「フツ、あり得ん話ではないな。連中の戦力は全て機械だ。無くなったところで、また造り出して補充すればいい」

茜「……勝つためには手段は選ばないってことですか！」

ニオン「面白い！ ランドウの連中の好きにばかりさせるのは癪だからな。向かってくるのは全て叩き落としてやるッ！」

茜「いえ、ここは私達に任せてください！」

ニオン「何？」

茜 「メタルビーストが集まってくれたのなら好都合です！」 グンツ  
プロト・ゲッターが少し高度を取り、テキサスの前方上に位置する。

鉄甲鬼 「何をする気だ？」

茜 「みんなまとめて薙ぎ払います!!」

アーニャ 「Ha! ゲッター飛焰の、エネルギー循環を切り替え…、ワタシはゲッター  
エネルギーを。プラズマ、出来ますか? ミホ」

美穂 「うん。プラズマエネルギー、動力から、直接両肩のエネルギー射出部へ！」

茜 「今回はゲッター飛焰の初陣ですからね! 派手にいきますよ!!」

プロト・ゲッターの両肩の装甲が開き、中から二本のキャノン砲が姿を覗かせる。

アーニャ 「…循環切り替え完了。姿勢制御は、アーニャが。トリガー、お願いします、  
アカネ！」

茜 「はいッ! いきますよ! ゲッターとプラズマ! 両方を備えたゲッター飛焰の必殺  
砲!!」

茜 「プラズマアツ!!——ノヴァアアアアアアアアツ!!」

一瞬、砲頭の先で青白いスパークが弾け、直後に放たれたのは、ゲッターを駆動させる  
高出力のプラズマを叩き付ける破壊の光線。

ドワアツ

敵陣中央への着弾と同時に、プラズマの熱量と爆破の衝撃が周囲に拡散し、半径1キロほどの青白い光炎がメタルビーストの軍勢を呑み込んで拡がり、爆発の余波で辺りの空気を震わせた。

茜 「!!!」

シユウウウ…

残されたのは、大きく穿たれた大地。

茜 「——ふう、どうですか？メタルビーストほどの程度減りましたか!」

ニオン 「ほぼ全滅だ。威力だけは大了なものだな」

芳乃 「これだけ大きな穴をー、テキサスでは通れませんかー」

艦長 『これは、テキサスの進路を迂回させねばならんかな?』

ニオン 「少しは加減しろ」

アーニヤ 「Прощу прощения…やり過ぎてしまいました、ね…」

美穂 「そ、そうだね…。実戦で使うのは初めてだったから、まさかこんなに威力があるなんて…あれ?」

鉄甲鬼 「どうかしたか?」

美穂 「えっ、あ…その、レーダーの不調かもしれないけど、今一瞬メタルビーストの反応があったような…」

茜 「ホントですか!？」

美穂 「うん…。でも、ホントに一瞬だけだったから、私の見間違いかも」

凜 「いや、美穂のは間違いじゃないよ」

美穂 「えっ?」

凜 「動きがスゴい速いから、捕捉するのに手間取ってるけど、こつちでも確認してる」

ニオン 「ああ、確かにすばしっこいのが一匹いるな」

卯月 「に、ニオンさんには見えてるんですか!？」

かな子 「私には、何にも…」

鉄甲鬼 「人間の動体視力では視認できない速度で動いている。お前達が目視できないのも無理はない」

ニオン 「おまけに、かなり小さい」

凜 「成る程、それでさつきまで他のメタルビーストの反応に隠れて捉えられなかったって訳」

ニオン 「全く、木を隠すなら森とはこの事だな」

芳乃 「いい得て妙ですねー。しかしー、これで凜さんの仮説が正しかった事がー、証明されましたー」



美穂「仮説？」

卯月「誰かが宇宙のメタルビーストにテキサスの位置を教えている、つて言ってたあれですか？」

艦長『敵に紛れて身を隠し、上空の仲間はこちらの位置を教えていたか』

茜「ならば早々に仕留めてしまいましょー！」

鉄甲鬼「茜の言うとおりかもしれない。——ハッ！」

ダイノゲッター2の加速で、高速で移動する物体に迫る。

鉄甲鬼「——そこだッ！」

ギガントX1「!?」

背後に回り込んだダイノゲッター2に、一瞬動きを止めた土偶のような姿のメタルビーストだったが、直ぐ様慣性を無視した動きで直上に急上昇し、ダイノゲッター2の攻撃を躲す。

鉄甲鬼「すばしっこい奴だ……！」

ギガントX1「くくくっ……！まさか俺の動きを追える奴がいるとはな」

ニオン「俺も驚いているぞ。あれだけの有象無象の中で、最後に残ったのが貴様のようなチビだったとはな」

ギガントX1「大きさなどは問題じゃない。問題なのは何をやるか、だろう？」ピ

ン

鉄甲鬼「!!」

真上から降り注がれたビームを躲す。

鉄甲鬼「くっ……!」

ギガントX1「ふふふ……。そう簡単に私の傍には近付けさせんぞ」ピーン

上空からのビーム攻撃でダイノゲッター2と距離を取り、人差し指を立てた腕を上空に突き出す。程なくして再び上空からビームが降り注ぐ。

芳乃「これはー、芳しくはないのでしてー。あらすかの地図が変わってしまいましたー」  
鉄甲鬼「気にするところはそこなのか?」

芳乃「あまり地形を凸凹にされますとー、後に復興するのも大変でしてー」

ニオン「それが仕事になれば丁度良からう」

ギガントX1「随分と余裕だな?」

ニオン「ん? ああ、悪いな。貴様があまりに単純だったものでな。集中力が切れてしまつてな」

ギガントX1「何いゝ? 俺が、単純?! この俺が単純だと!?!」

芳乃「ニオンさんー、あまり本当の事を言ってしまったては、相手の方に失礼でしてー」

ギガントX1「な、何を〜! この、劣等種共がア〜!!」

鉄甲鬼「その劣等種に毛を生やしたただけの奴が言うことか？」

ギガントX1「言わせておけばあゝ……もう許さんツ!!」 ピーン

▽……

ギガントX1「……。な、何だ!? どうして……!」

ニオン「フツ。だから単純だと言ったんだ」

ギガントX1「何……ま、まさか……!」 ハツ

芳乃「己のが保身の為に、てきさすより狙いを変えたことが、そなたの策の積み  
でしてー」

—— 遡ること数秒前。衛星軌道上

ギガントX2「つたく、X1め……。何を遊んでいるんだ……。…む」

ギガントX2の視界に、地上から上昇してくる影が映る。

ギガントX2「あれは……! 真ゲッターロボ!」

卯月「!」

ギガントX2「チッ! 言わんこつちやねえ! だから最初にテキサスを落とすとけつ  
つったんだ!」

丸ごとビーム射出器になっている下半身にエネルギーを収束。

ギガントX2「喰らいやがれツ!」

迷いなく直進で迫り来る真ゲッター1に、躊躇うことなくビームを発射。  
ズアアツ

ギガントX2のビームは、直撃。

ギガントX2「あつははははつ!! やった! やったぜ!! この俺が………ツ!?!」

ギガントX2のビームの中を、真ゲッターが突き進んでくる。

ギガントX2「な、何で?!? 俺のビームが、効いてない!?!」

卯月「…ゲッタービームなら、効きません!」

全身に浴びせられるビームを吸収していく。

ギガントX2「うわあああああゝツ!!? ビームを喰ってやがる!?! 化け物がああああゝ

ゝ!!」

凜「ビーストって名乗ってるそっちに言われたくないね」

かな子「卯月ちゃん、このまま一気に!」

卯月「ゲッタートマホークツ!!」

ギガントX2から吸収したエネルギーを纏い、トマホークが仄かにゲッター線の輝きを放つ。

卯月「いきますっ!!」

ギガントX2「く…来るな…! 来るなあああツ!!」

卯月「ええーっ!!」

ズワオ

ギガントX2「がっ…!」

下段からの切り上げでギガントX2を両断。トマホークの切っ先から放たれたエネルギーが衝撃波のように拡がり、両断したギガントX2を粉々に破壊する。

ギガントX2「うあああああッ——!!」

衛生軌道上でギガントX2が爆炎の華となる。

卯月「…目標、撃破できました!」

凜「これで、宇宙からの攻撃の心配は無くなったね」

かな子「後は、地上のアーニヤちゃん達ですね——」

—— 地上。

ギガントX1「バカな…! X2の方を先に倒すとは!

鉄甲鬼「これで貴様は、切り札を失ったも同じだな」

ギガントX1「ま、まだだっ!」

土偶の口からレーザーを撃つ。

鉄甲鬼「何だそれは?」

ギガントX1「ぐう…! こうなれば…!」

撤退しようと引き下がる。が、  
アーニャ「逃がしませんッ！」

ギガントX1「!？」

ゲッター1から変形した、プロト・ゲッター2が死角からギガントX1に迫る。

アーニャ「Y p a a a !!」

ギガントX1「このお……！」

プロト・ゲッター2のドリルアームを上昇して回避。

ギガントX1「いかに速かろうと、奴等ではリーダーですら捉えられない俺を追えるはずがない。奴等さえ振りきってしまえば！」

鉄甲鬼「ならば」

ギガントX1「!!」

ティラノサウルスの姿へ変形したダイノゲッター2が、そのティラノの顎でギガントX1を捕らえる。

鉄甲鬼「俺が捕まえるだけだ」

ギガントX1「おのれえ！離せ、離せえ!!」

鉄甲鬼「今だ、アナスタシア！」

アーニャ「D a !」

茜 「プラズマエネルギーをドリルに集めました!アーニヤさん!!」

アーニヤ 「Спасибо…アカネ。 урааа…!」

プロト・ゲッター2の右腕のドリルアームに、プラズマエネルギーが集束されていく。

アーニヤ 「プラズマ・ドリル…!」

鉄甲鬼 「はっ!」

ギガントX1 「うわあっ!」

アーニヤ 「——アタック!!」

プラズマを纏ったドリルを突きだし、そのまま速度を上げて突撃。

ギガントX1 「うぎやあああああ——!!?」

プラズマでギガントX1の表装を焼き、ドリルで穿ち、内部にエネルギーを放出して破壊し、風穴を開けて貫いた。

アーニヤ 「……」

突き抜け空中へ出たプロト・ゲッター2の背後で、ギガントX1が爆散した。

——。

李衣菜 「見て!テキサスの近くで爆発が!」

加蓮 「見えてる。リーダーには味方機の反応しかないし、あれであそこに残った敵は最後だったんだろうね」

李衣菜「ホントだ……。結構な戦闘だったけど、みんな無事だったんだ！」

リンダ「そのようね。見なさい。みんなテキサスに帰ってくるわ」

加蓮「ステルバーにロボ・ストーン、テキサスマック……」

李衣菜「それにブラックゲッターに旧ゲッター！ 茜達に乗ってきた新しいゲッターもあるみたいだし」

加蓮「そんなもって、向こうからこつちにゆつくり飛んできてるのが、茜達をアラスカまで運んできた輸送機って感じなのかな」

李衣菜「何か空飛ぶクジラみたいで、……ロックとは違うんだけど、ああ言うのも何かアリだね！」

加蓮「以外と名前もそのまんまだったりして」

李衣菜「そんな、まさかあ……」

リンダ「でも、これで日本の戦力も勢揃いしたのよね？」

李衣菜「はいっ！くうく……！ランドウ、首を洗って待ってなよお……！」

リンダ「威勢がいいわね？それでも、ランドウの全戦力を相手にするにはまだ全然足りないのよ？」

加蓮「だからって、ここで黙って向こうの好きにさせたくもないでしょ？」

李衣菜「加蓮の言うとおりでよ！これから先がどんな過酷な道のりでも、私達にゲッ



ター…それに、いろんな国から集まったみんなが力を貸してくれんだから。きっと勝てる！」

リンダ「いろんな国から…。確かに、私のように、まだこことは違うどこかで、ランドウに対して抵抗を続けている国の戦力があるかもしれないわね」

加蓮「それを確かめる為にも、先ずはこのアラスカを脱出する」

李衣菜「そして次に目指すは、シベリアだあゝっ!!」  
つづく

## 第14話『アラスカ脱出』

~~~~~ 航空母艦クジラ・倉庫 ~~~~~

船員「……食料品、日用品、生活必需品……。と、チエツク完了。不備は見当たらないな？」

船員2「ホントなら、出航前に確認するもんなんだけどな」

船員「仕方ないだろ。向こうでバタバタしてるうちに追い立てられるように出てきたんだから」

船員2「これで、食料品にでも不足があったら大変だったな。オレは目玉焼きには醤油じやなきやダメなんだ」

船員「おまけに半熟か？目玉焼きで細かいこと言う男は結婚できないぜ？」

船員2「へっ。目玉焼き程度の我が儘も聞いてくれない嫁さんなんざ、こつちからお断りだつて」

ゴトツ

船員「……何だ？」

船員2「出航する時にネズミでも入り込んだのか？」

船員「お前のカーチャンが心配で付いて来たんじゃないのか？」

船員2「まさか。…ネズミだったら勘弁してくれよ。オレはネズミアレルギーなんだ」

船員「好き嫌いが激しい男もモテないぞ」

船員2「どーせオレは独身貴族だよ」

ソロソロと忍び足で、音のした方へと近付いていく。

「—や、やばっ………こっち来た……」

船員2「ん……？子供の声……？」

船員「おいおい……、幽霊騒ぎは研究所だけで勘弁してくれ……」

船員2「バカ言え！新造艦だぞ？幽霊なんざいるわけ……」

「あっ……わ、わっ……きやあああ……っ!？」

船員xs「!？」

けたたましい騒音が響き、積み重ねられていた荷物が棚ごと崩れて通路に山を作る。

船員「痛たた……」

船員2「ず、随分とでけえネズミがいたもんだな……」

船員「お、おい……。その子……!？」

「あたた……お尻打った……。いった……」

船員2「え？」

「あ」

—。

—クジラ・格納庫

卯月「うわあ〜！ここがホントにクジラのお腹の中なんですか？」

かな子「な、何だかその言い方だと、まるで私達がクジラに食べられちゃったみたいですね…」

凜「外から見ても結構大きかったけど、中も、特に格納庫は結構広く造られてるんだね」

晶葉「ゲッターロボ運用母艦だからな。ゲットマシン状態でも格納出来るように、一つ一つのハンガーを大きく取ってある。お陰で、ゲッターGの機構を応用した反重力装置を積まなければ、まともに飛ぶことも出来ん」

卯月「あっ！」

晶葉「おかえり、卯月、凜。そしてクジラへようこそ、真ゲッターチーム」

かな子「晶葉ちゃん！それに皆さんも！」

瑞樹「全く、心配かけすぎよ」

卯月「えへへ…。すいません…」

菜々「でも、本当に無事で何よりでした。べ、別に死んじやったなんて冗談でも信じてたわけじゃないですけど…。ナナは、ナナは…!」

みく「ナナちゃん!ここでナナちゃんが泣いちゃダメにやあ!ここはみく達がビシツとカツコ良く決めるところなんだから!」

菜々「でも…でもお…!もう一ヶ月以上も音信不通で…、ナナ、今度の今度はホントにダメなんじやないかって。不安でえ〜!」

みく「あ〜、はいはい。分かったからそんなに泣きじやくってほら、顔が大変なことになってるよ。ほら、チーンって」 つハンカチ

菜々「ズビーツ!!」

みく（うわあ…。思いっきりいったにやあ…）

瑞樹「ほらほら、菜々さんはこつちで落ち着きましよう?ごめんなさいね、折角の再会だけど」

凜「ううん。落ち着いてから、ゆっくり話せばいいから」

瑞樹「ありがとう。みく、菜々さん運ぶの手伝って。腰抜かしてるから」

みく「分かったにや。ほらナナちゃん、しっかり掴まって」

菜々「う〜…。ナナはまだ介護される年じやありませんよお〜…」

みく「もう、これじやみく達、何しに出てきたのか分からんにや〜」

凜 「……」

卯月 「何だか、帰ってきたって感じがしてきました！」

かな子 「あ、あれを見てそう思うのは、いい事なのかな……？」

美波 「ふふっ。いいんじゃない？卯月ちゃんにとつては、久し振りの事なもの」

かな子 「それは、そうかもしれないけど……」

美波 「かな子ちゃんにも、はい。コレ」

かな子 「何ですか？お手紙……？」

美波 「かな子ちゃんにとつて、大切な人からだよ。家族以外の、ね♪」

かな子 「家族以外の……。もしかして……！」

美波 「メールも使えないから返事はすぐに書けないけど、帰ったらすぐ挨拶をしに行くといんじゃない？」

かな子 「はいっ！私、頑張りますっ！」

凜 「こっちは相変わらずだね」

晶葉 「毎日飽きないのが不思議なくらいな。凜の方こそ、変わらないのか？」

凜 「……」

晶葉 「変わらない。そうあり続けるのが、一番難しいものだからな」

凜 「研究所がクジラになったみたいに？」

晶葉 「かもしれないな」

凜 「……ここが私達の新しい家になるんだよね」

晶葉 「ああ。常々、一ヶ所に拠点を置いている状態では、日本全域をカバーするには無理があると感じていた」

凜 「だから、簡略的にでも早乙女研究所の機能を、移動できる母艦に集約した？」

晶葉 「このクジラは、小さな早乙女研究所と言っても過言ではない。ゲッターを扱う上で必要な機能と人員は、全て注ぎ込んだ」

凜 「整備員も、研究所の職員も何人かいるんだ。……そう言えば、ゲッター飛焰が見当たらないけど？」

晶葉 「艦長に頼んでテキサスの方に着艦させた。これからの戦いに備えて、整備の効率は上げた方がいいだろうからな」

凜 「プラズマエネルギーで稼働してる飛焰は、あつちで預かってもらうには都合がいろいろ事」

晶葉 「今後連携をとることも踏まえて、みく達や美波も出向させようとも考えている。何事も、コミュニケーションは大事だからな」

凜 「それなら、リンダ・テイラミスって人には注意するように、みんなに言っておい

て

晶葉「ふむ？仲間内で気を張ったり警戒したりするのは避けたいんだが、まあ分かった。その件は承知しておく」

凜「そうして。あと、真ゲッターは…」

晶葉「基本的には、こつちで面倒を見ることになる」

凜「その方がいいかもね。テキサスでももて余してるくらいだったから。整備の方は、李衣菜にも手伝ってもらって、応急処置程度には私達でやってたけど」

晶葉「正直、下手に触ってもらわなくて良かったと思ってる。あれの炉心は、私ですら全容を解明できていない」

凜「これから直ぐに整備してくれる？」

晶葉「無論だ。いくら真ゲッターとは言え、未来の宇宙まで行って、どこにも異常がないなんて事はあり得ないだろうからな」

晶葉「応急処置だけでは細かいところまでは手が届かなかったところもあるだろう。出来れば時間を掛けてオーバーホールをしつかりとやってしまいたい」

凜「分かった。私も納得できないままあれを使い続けるのは、少し不安だったから」

晶葉「不安を払拭しきれるとは言わないが、やれるだけの事はやろう」

凜「けど、真ゲッターが使えないとなると、こつちの戦力は大きく下がるね」

晶葉 「真ゲッターには遠く及ばないが、ゲッターD2ならブラックゲッターと同じハンガーに置いてある。一人しか乗れんが、状況が状況だ。無いよりはマシだろう」

凧 「用意がいいんだ。確かに、戦力が0になるよりは0.1でもあつた方が頼りに出来るし…。私達で使わせてもらおうよ」

橘 『——晶葉くん、聞こえてるかね…』

卯月 「？ これは、艦内放送？ 橘博士、ですか？」

晶葉 「一応クジラの全体指揮をしてもらっている。その方が私が動きやすいからな。…確かテキサスの艦長と会議中だった筈だが」

橘 『聞こえていたら、今すぐブリッジに上がってきてくれ…。頼む』

かな子 「何かスツゴク疲れた感じじゃなかったですか？」

卯月 「そうですね。艦長との会議で、緊張したんでしようか…」

美波 「まさか。橘博士だって、ネーサー極東支部の責任者として、色んな偉い人達と話し合ったりしてる筈でしょ？ 数分の話し合いで疲れるなんて事はないと思うけど…」

晶葉 「何にせよ、私が行けば分かる話だ。すまんな、艦内を案内したかったんだが…」

凧 「いや、私達も一緒に行かせてもらおうよ」

晶葉 「いいの？」

凧 「うん。何か問題があつたなら、一人より二人、二人より三人だよ」

晶葉「確かにそうかもしれないが…」

かな子「あつ、そうだ！橘博士に何かお菓子を差し入れに持っていったらどうですか？」

凜「かな子らしくていいんじゃない？私は、晶葉と先に行ってるから」

美波「それじゃあ、厨房には私が案内するね」

かな子「お願いします、美波さん」

卯月「わ、私は…」

凜「かな子に付き合ってあげたら？こつちよりも人の手が必要でしょ？」

卯月「分かりました！よろしくお願いしますね、かな子ちゃん！」

晶葉「さてと、あまり面倒なことじゃなければいいが…」

くくく 戦艦テキサス・居住区画 くくく

李衣菜「——…と、艦内の案内はこんなところかな？」

美穂「どうもありがとう。でもホントに良かったの？李衣菜ちゃん達3人揃って、私達の案内なんてしてくれて」

加蓮「そんな事気にしない。こつちはパイロットなんて言っても、正規の隊員じゃないんだし」

奈緒「ついさつき戦闘があつたばかりつてのもあるしな。パイロット各員は戦闘配備が解除になるまでは現状で待機、だつてさ」

加蓮「そう言う奈緒さんの退院後の観察もしなきゃいけないしね。いい機会つて事だよ」

奈緒「人を重篤患者みたいに言うな。ただショックで気絶してただけじゃんか。それをわざわざ医務室まで運んで大袈裟に……」

加蓮「え〜？アタシ達なりに心配した結果なのに……。奈緒はそれを迷惑だつて言うんだ？」

奈緒「え……あ、いや、何だよ……。急にしおらしくなるなよ」

李衣菜「加蓮、本気で心配してたよ？意識失つてる加蓮の横で、『このままずっと目が覚めなかつたらどうしよう』つて」

奈緒「そ……そうなのか……？」

茜「確か、李衣菜さん達が相手にしたメタルビーストは、精神攻撃をしてきたんでしたよね？」

アーニヤ「Aa……そう、聞いてます。Dyx……精神……つまり、脳、ですから。受けたダメージが、深刻だったら……」

美穂「後遺症、何て事もあり得たかもしれないんだよね……。本当に目が覚めなかつた

り……」

加蓮「……」

奈緒「な、何だよ美穂達まで一緒になつて！あたしはほら、實際なんともなくてこんなピンピンしてるんだしさ！いいだろ、それで」

李衣菜「いや、まあ奈緒が無事で私達も安心してるんだけどさ。でも、意識失つてる間はどうなるかも分かんなかったわけだよ？」

奈緒「うっ……。それは……」

美穂「大袈裟つて言うのは、言い過ぎじゃないかな？」

奈緒「うく……。わ……悪かったよ……」

アーニヤ「……それだけ、ですか？」

奈緒「あく……。…心配掛けて、ごめん……」

加蓮「……」

李衣菜「加蓮？」

加蓮「……許すっ♪」

奈緒「え……あ……あ……あ……あ……！また……またやりやがったな！しかもみんなで！」

李衣菜「あつははっ」

美穂「あはは……。その、ごめんね？」

アーニヤ「Прошу прощения…ごめなさい、奈緒」

茜「えっ!? やったとは何の事ですか!? 何か示し合わせて…ドッキリですか!」

奈緒「くそお〜! 天然は茜だけかよ!」

美穂「う、ううん…違うよ? 私達も、別に相談とか打ち合わせとかしてたわけじゃないよ? ただ…」

アーニヤ「雰囲気で、察しました」

李衣菜「まあ、何時もの事だしね〜」

奈緒「お前らあ…!」

加蓮「えへへっ♪」ダキッ

奈緒「お、おいちよつと加蓮! 何だよ、いきなり…」

加蓮「心配してたのは、ホントだよ?」

奈緒「うっ…」

加蓮「だから、このまましばらく奈緒を髪の毛もふもふの刑に処すつ」モフモフモフモフ

奈緒「なア!? な、何だよそれ! 意味分かんないぞ! ……つてうわああ!?! やめろ! 髪の毛の中に入ってくるなあ!!」

加蓮「——!!」モフモフモフモフモフモフモフモフ

奈緒「一心不乱にもふもふするなあ!!」

美穂「相変わらず仲良しだね」

李衣菜「いやあ、死線を潜る度に仲良くなってるよ。あの二人は」

アーニヤ「少し、見習いたい、ですね!」

茜「日本に帰ったら、私も藍子ちゃんにやってみましょうか!」

奈緒「お前も見えてないで助けてくれえ!」

茜「それにしてもこのテキサスは広いですね!」

奈緒「おいっ!!」

美穂「ホント、一回周って見ただけじゃ、とてもじゃないけど覚えられないよ」

李衣菜「まあテキサスも軍艦だから。全部覚えようとすると複雑で難しいけど、パイロットの私達はすぐ出撃出来るように格納庫に行く道と、何かあった時のブリッジと、会議とかやるブリーフィングルームの位置を覚えとけば何とかなるかな?」

アーニヤ「格納庫、はこの道を真っ直ぐ、ですね」

李衣菜「うん。ここはパイロットの私室がメインの居住区だから。スクランブルに依られるように、格納庫がすぐ隣になってるんだって。代わりに売店がちょっと遠いし、たまに格納庫の騒音がうるさいけど…」

茜「売店は構いませんよ!ドルは持ってませんから!」

李衣菜「ああそつか、換金してないから…しようとしても出来ないけど。それじゃあ、仕方ないね」

茜「それでは、後はこのパイロットの皆さんとの顔合わせだけですね！」

アーニヤ「アー…ですが、他の人達、何処にもいませんね？」

美穂「そう言えば…」

李衣菜「おつかしいなく。何時もは格納庫か、この辺ぶらぶらしてるんだけどな、みんな」

美穂「そんな、待機してるのにぶらぶらは失礼だよ」

李衣菜「いやいや、待機中だつて哨戒とか色々あるけど、艦内にいる時はみんな大体自由だし、ボブとかサムはたまにポテトとハンバーガー作つて持つてきてくれるし」

美穂「は、ハンバーガーを…？」

李衣菜「このくらいの時間となるとうくん…。あ、今テキサスつてアラスカの海峡に出たところだよね？」

アーニヤ「Да! もうすぐロシア…ですな」

美穂「ふふつ、やつぱりちよつと嬉しい？」

アーニヤ「はい…。不謹慎、だと思えます。けど…ちよつとだけ」

茜「それで、それが何か関係が？」

李衣菜「だとしたらあそこかも」

美穂「あそこ？」

奈緒「おおいっ!! あたしを抜きにして勝手に話を進めるなあ!!」

—— デッキ。

李衣菜「——ほらいた! おーい、みんな〜!」

ジャック「Good morning! リーナ…それと…ナオ、二人羽織りですか?」

奈緒「…まあ、そう言うことにしといてくれ」

加蓮「~~~~♪」 モフツ モフツ

ジャック「?」

ボブ「それよかよ、リーナ。その、後ろにいる可愛い娘ちゃん達を紹介しに来たんだけろ? 早く紹介してくれよ」

茜「か、可愛っ…!」

李衣菜「もう、ボブはすぐそう言うこと言う」

ボブ「何だよ? 俺、ホントの事言っただけだぜ?」

李衣菜「そうかもだけど…。茜はそう言うストレートなのに弱いんだから…」

茜「~~~~っ／／」プシューッ

サム「あ、熱っ! 何だこのネエちゃん…。ヒーターもビックリだぜ」

ボブ「はっはっ、世界一かわいい暖房器具つてところか？」

奈緒「茜を器具扱いするなよ」

茜「せ、世界一…かわいい…！」

アーニヤ「はいっ♪アカネは、カワイイ、ですよ？」

茜「~~~~つ／＼／」

美穂「あ、アーニヤちゃんも、そこまでにしてあげて…」

奈緒「で？待機中のパイロットが揃いも揃って、こんなところで何やってるんだ？」

メリー「何って、見ての通りよ」

ジャック「It's Fishing! 釣りデース」

アーニヤ「……」

美穂「あ、アーニヤちゃん、どうかしたの…？」

アーニヤ「Не что-нибудь…何でもありません」

ジャック「A-Ha?」

奈緒「あく…そ、それで、どうしたんだ？いきなり釣りなんてさ」

メリー「前回の戦闘で私達、補給もそこにアラスカの基地を出ちやっただしょ？」

李衣菜「うん…。あの戦闘じゃ、もう仕方ないけど…」

メリー「それで、食料の方が心許ないのよ」

サム「今後の戦闘を考えると、俺達のマシンの整備何かのための資材を優先するのは分かるんだけどな」

ボブ「だからこうして手が空いてる俺達で食料調達って訳さ」

サム「上手くいきやあシーフードカレーくらい作れるぜ」

茜「シーフードカレー!」

李衣菜「でもさ、釣りじゃあ効率が悪いんじゃないの?このテキサスにだって何千人って人達がいるんですよ?」

ボブ「そりやそうだけどさ、テキサスだって漁船じゃねえんだし。本格的な漁ったつてなあ…」

加蓮「それなら、いい方法があるよ」ボフツ

奈緒「わあ!加蓮!」

加蓮「何?アタシだって何の話も聞いてなかった訳じゃないよ?」

奈緒「そう言う話をしてるんじゃないやなくてな…。あと、人の髪の間から顔出すな」
ジャック「それで?そのNice ideaとは何デスカ?」

加蓮「ま、ここはアタシに任せなさいって」

ボブ「?」

—。

…ポーン ポーン ポーン…

加蓮「……」

李衣菜「……」

奈緒「…いたぞ、加蓮！4時の方向に魚群だ！」

加蓮「フィンガーネット！」

言われた方角に、フィンガーネットを放射。

李衣菜「掛かった？」

奈緒「多分な。加蓮、網を引いてみる」

加蓮「リョーカイ。よいしょ、つと」

網を手繰り寄せると、大きく膨らんだ網が。

加蓮「よくしよし♪大漁大漁。意外と出来るもんだね」

上機嫌な動きで、魚の詰まった網を回収する。

奈緒「間違っても電流流すんじゃないぞ？」

加蓮「それはそれで、この場で調理できていいんじゃない？」

李衣菜「えく？私は久しぶりにお刺身とか食べてみたいなく」

奈緒「ネオゲッターの電力じゃ、その前に跡形残らず消し飛ぶだろ！」

加蓮「大丈夫、その辺は電力調整するから」

李衣菜「それにしても、考えたよね。ネオゲッター3のフィンガーネットで魚獲りなんて」

加蓮「でしよ？ 漁業用の網はなくても、ネオゲッター3の網なら、魚でもメタルビーストでも何でもござれだからね」

奈緒「気持ちと事情は分かるけどさ、艦長もよく許可出してくれたよな。こんなの、兵器を私用で使うのも一緒だろ」

加蓮「まあ、部隊の士気も胃袋からって言うし」

奈緒「言うのかあ？」

李衣菜「まあまあ、ご飯の問題は私達の明日の士気にも関わるんだからさ。この調子で、ドンドン獲ってこうよ」

サム「おーい、加蓮ちやくん！」

加蓮「ボブ、サム！」

ボブ「コンテナを用意してやったぜ。捕まえた魚はここに入れてくれ！」

加蓮「はいはい。せーの、つと！」

網を縛り上げてロボ・ストーンが抱えるコンテナに放り投げ、入れる。

ボブ「よおし、つと。にしても、一度にかなり捕まえたなア」

サム「こりゃ、腕によりを掛けて、カレーを作ってやんなきゃな」

加蓮 「そうして。茜もきつと喜ぶよ」

莉嘉 『いくなく。アタシもカレー食べたいよ』

李衣菜 「へへくん、残念でした〜♪」

奈緒 「ん？」

李衣菜 「つて、莉嘉あ!？」

莉嘉 『気付くの遅いよ〜!』

ボブ 「へえ? また可愛い娘ちゃんかい」

サム 「ホント、リンダが選り取り緑で目を回しちまうぜ」

奈緒 「い、いやいや、いくらリンダでも、流石に莉嘉は…」

サム 「どうだろうな? 子猫を可愛がるくらいするかも知れねえぜ?」

奈緒 「……」

加蓮 「ま、まあ直接接触させなきや大丈夫じゃない?」

李衣菜 「え? え、え…ええ? ゲッターのパイロットでもない莉嘉が、何で? 何でこん

なところに?」

加蓮 「どうしても何も、クジラに乗ってきたんでしょ?」

莉嘉 『へへ〜☆ま、そう言うこと』

主任 『得意気に言ってるじゃねえ! この密航者め!』

ポカッ

莉嘉『いったくい!』

奈緒「密航だつてえ?」

晶葉『ああ。政府にも存在を知らせていない、秘密工場だぞ? 全く、どうやって忍び込んだものやら…』

莉嘉『へへっ☆かくれんぼは得意なんだよ!』

主任『そう言う特技は、友達と遊ぶ時に生かしゃがれ! つたく…美嘉ちゃんになんて言やあいいんだか…』

加蓮「…莉嘉、一応聞くけど、今がどんな状況下分かつてるよね?」

莉嘉『勿論だよ! アタシだつて、100%遊ぶつもりで来た訳じゃないんだから』

奈緒「逆に心配になる言い方するよなあ」

莉嘉『アタシにだつて出来ることくらいあるよ! 料理だつて、お洗濯だつてお姉ちゃんから教えてもらつてるし。戦つてるみんなの助けになりたいつて、アタシなりに考えてきたんだもん!』

加蓮「…ふうん。ま、それが口だけじゃないことをアタシは信じるよ」

李衣菜「ここでどう言つたつて、もう日本には引き返せないんだもんね…」

晶葉『李衣菜の言うとおりで。出発前に気付けなかつた私達にも落ち度はある』

主任『ま、こうなりや俺が責任もって見張つといてやるから安心しな。下手なことはさせねえ』

李衣菜「大将が付いてくれたら安心だね」

莉嘉『えー！何でよりにもよって大将なの!？』

晶葉『当然だろう。私にはゲッターを管理する責任者として、やらなければならぬことがある。卯月達もパイロットである以上、常にお前の傍に付いてやれる訳じゃないからな』

莉嘉『ちえく…』

主任『とんでもない船に自分から乗っちゃまったと思つて諦めるんだな』

莉嘉『…ま、いーや☆これからヨロシクね、大将!』

主任『……』

李衣菜「流石に大将も、莉嘉には敵わないみたいだね…」

ウウウウウウン… ウウウウウウン…ツ

サム「何だ!？」

加蓮「…ランドウ!——…っ!？」

テキサスの警報が鳴り響いた直後、ネオゲッター3の脚に何者かの触手が絡み付き、ネオゲッター3を水中へと引き摺り込む。

加蓮「しまった…何…？…っ!？」

李衣菜「ネオゲッター3が、海に引き摺り込まれる…!？」

奈緒「ともかく、この触手を千切らないとヤバイぞ…!加蓮!」

加蓮「う…うん…!このっ…!」

ネオゲッター3の剛腕で、強引に絡み付いた触手を引き千切る。

加蓮「これで…!」

奈緒「今の触手、見覚えあるけど、まさか…」

李衣菜「あれ!確か前にみんなが言ってた…ドラゴノザウルス…!」

ドラゴノザウルス『ギヤアオオオオンツツ!!』

李衣菜「確か、加蓮と奈緒は、一回アイツに負けてるんだよね」

奈緒「イヤな事思い出させてくれる奴だな…。しかも、アイツはもう絶滅したん

じやなかったのか?」

晶葉『ひよつとすると、ランドウが再生させたのかもしれない』

李衣菜「そんな事も出来るの?」

晶葉『プロフェッサー・ランドウは、科学者としてあらゆる分野に精通していた。遺

伝子工学の類いも、或いは』

奈緒「マジかよ…」

加蓮「どっちにしても、まさかこんなところでリベンジの機会が来るなんてね…！」
奈緒「や、やる気か…?」

加蓮「何怖じ気づいてんの。あんなデカブツをテキサスに接近させるわけにはいかな
いし、水中戦ができる戦力は限られてる。そうでしょ、ボブ」

ボブ『すまねえ！ロボ・ストーンは見た目通りカナツチなんだ！』

加蓮「気にしなくたっていいって。たまにはアタシを頼ってくれても、罰は当たらない
よ」

サム「ああ！帰ったらとびきりのカレーを御馳走してやる！」

加蓮「何時ものポテトもヨロシクね。それなら、アタシもつと張り切っちゃうから」

サム「OK！胃が破裂するまで喰わしてやるぜ！」

奈緒「加蓮相手にジョークでもそれはやめろオ!!」

ボブ「サム、ジョークを言ってるのもそこまでみたいだぜ。奴さん、空からもお出ま
しだ！」

サム「OK、兄ちゃん！テキサスを守るぜえ!!」

奈緒「…ランドウの連中、追撃の手を緩める気はないみたいだな」

加蓮「まったく、お客さんが多くて、ファンサービスも楽しやないね…つと！」

ドラゴノザウルス『——キャシャアアアアッ!!』

ドラゴノザウルスが放った無数の触手を躲す。

加蓮「ネオゲッター3の水中での機動性を、舐めてもらっちゃ困るよ」

李衣菜「けど、ランドウが水中からも攻めて来てるって事は……！」

水竜型メタルビースト《——!!》

メカザウルス・ジガ『ギヤアアアツ!!』

メカ海王鬼「——ッ！」

李衣菜「やっぱり！ドラゴノザウルスだけじゃ終わらせてくれないよね……」

奈緒「懐かしの再生怪人オールスターってどこか……」

李衣菜「ランドウにしたら何時もの事だけど、水中戦用のメカザウルスとかは滅多に

見ないから、余計懐かしく感じるよ」

加蓮「でも、見覚えがないのも何体かいるみたいだよ」

メタルビースト・クラブ《……》ギチギチ……

奈緒「ホントだ。何だありや、蟹か？」

李衣菜「蟹と言えば、アーニヤは北海道育ちだったっけ」

加蓮「なら、蟹の捌き方はアーニヤが来てから聞いてみよ」

奈緒「まずあの蟹でアーニヤを連想するのを止めてやれよ……」

――。

橘 『——ゲッターチーム各員、出撃準備はいいか?』

みく 「何時でもバッチコイにや! ナナちゃん、腰の調子はもう大丈夫?」

菜々 「だ…だだだ、大丈夫ですよ! けど、休む時間も与えてくれないんですね」

瑞樹 「向こうは機械だもの。こつちと違って、休む必要なんてないわよ」

菜々 「はあ…。休まなくても疲れない機械のからだ、ですか…」

瑞樹 「悪くないわね。もう二日酔いや腰痛に悩まされなくなるわよ?」

菜々 「そうですねえ…。特に最近は缶一本でも翌朝キツくて…って、違いますよ!」

瑞樹 「誰に何の言い訳してるのかしら?」

菜々 「うう…! 大丈夫です! 人間は努力と根性でいくらだって限界を越えられるん

です!」

瑞樹 「そうね。アンチエイジングの必要もないなんて、逆につまらないわよね」

みく 「ナナちゃん! 瑞樹さん! 何時までお喋りしてるにや! 後ろが使えてるんだか

ら、さっさと出撃するよ!」

瑞樹 「了解よ」

菜々 「は、はいっ!」

凜 「…発進口は一つしかないから、出撃するにしても順番待ちか…」

晶葉 『すまないな。クジラの構造上、どうしてもな』

凜 「いいよ。お陰でこっちは、ゲッターD2のマニュアルを確認できたから」
晶葉 『使えそうか?』

凜 「真ゲッターより扱いづらいゲッターなんてそうそうないよ」

晶葉 『確かにな』 フフツ

卯月 『凜ちゃん…その、無理しなくてもいいんですよ? D2なら、私も乗ったことありますから…』

凜 「卯月が離脱してた間の一年、私が1号機のパイロットをしてたの忘れてる?」
かな子 「でも、ゲッター1は卯月ちゃんの方が乗り慣れてるのはそうだし…」

晶葉 『経験で言えば、凜のゲッター搭乗時間はこの中で一番長い。過度に心配する必要はないだろう』

凜 「そう言うこと」

卯月 『…そうですね。ごめんさい、引き留めちゃって』

凜 「気にしないでいいよ。卯月が心配してくれるのは分かるから。けど、今日まで卯月には真ゲッターで頑張ってもらったんだし、たまには私も頑張らないと」

卯月 「行ってらっしゃい、凜ちゃん」

凜 「うん。行ってくる」

凜 (これで少し、卯月をゲッターから離せればいいんだけど、焼け石に水かな)

かな子『卯月ちゃんと一緒に作ったパインケーキ、帰ってくる頃には出来てると思いますから、そっちの方も楽しみにしてくださいね♪』

凜 「パインのケーキなら、生きて帰ってこれそうだね」

かな子『何の話ですか？』

凜 「こつちの話。ゲッターD2、発進するよ！」

クジラの口からゲッターD2が飛び出していく。

凜 「あ……つと」

凜 （空中での姿勢制御もオートでやってくれるんだ…）

凜 「んっ……」 ゲツ

レバーを引き、高度を上げる。

凜 （上昇の負担は少ないし、レバーの感覚は滑らか……。真ゲッターほど鋭さはないけど、扱いやすさって言う面では、このくらいが丁度いいのかも）

凜 「でも…足りない、かな…」

美波 「何か言った？」

凜 「ううん、お待たせ。美波、みんな」

先に出撃していたブラックゲッターや、既に合体を終えたゲッター1と合流する。

美波 「ふふっ、何だか新鮮ね。凜ちゃんがゲッター1号機に乗ってるのって」

凜 「茶化さないですよ。一応、初めて乗るゲッターだし、緊張はしてるんだよ」
 美波 「とてもそうは見えないけど、フォローは任せて！」

凜 「胸は借りるつもりでいくよ」

瑞樹 「気楽にいきましょう。気負うだけ損よ」

凜 「瑞樹さんの言うとおりかもね。さてと、敵はランドウの航空戦力…初めて見るタイプだ」

メタルビースト・ビーン《……》 ブーブ…

みく 「可愛いげのないでんとう虫にや！」

菜々 「うわあ…お腹とかりアルですねく…」

瑞樹 「生理的に無理なのは認めるけど、コックピットには吐いちやダメよ？アイドルのにも」

菜々 「が…頑張ります…っ」

ビーン《——!!》

みく 「にやっ?!」

ビーンの体後部から撃ち出されたニードルを、ゲッターを翻して躲す。

みく 「撃つて来たにやあ！この…！喧嘩上等買ってやるから覚悟しろにやあ!!」

右腕にゲッターマシンガンを抜き打つ。

凜 「…喧嘩っ早いんだから」

美波 「あ、凜ちゃん待って！」

凜 「どうしたの？」

美波 「下の方から、ステルバーが…：きやつ！」

下から高速で急上昇してきたステルバーとブラックゲッターがすれ違い、ブラックゲッターの体勢が崩れる。

凜 「美波、大丈夫？」

美波 「だ、大丈夫…。直接ぶつかってはいいから…」

凜 「もう、何なの？」

美波 「メタルビーストの迎撃のために上がってきてくれたんだと思うけど…」

凜 「でも、様子が変だよ。前に出すぎだ」

みく 「うにゃ!？」

シユワルツ 「邪魔だ! ロートルはスツ込んでろ！」

菜々 「ろ、ロートル…?!」

瑞樹 「大丈夫よ、菜々さんの事じゃないわ！」

菜々 「わ、分かっていますよ! 分かっていますよお…」

みく 「こっちの足並み崩して邪魔なんて、喧嘩売りに来ただけなら黙ってテキサスの

護衛でもしてろにや！」

シュワルツ「ウツセエ!!今の俺はムシヤクシヤしてんだ!ランドウの野郎…!ズタズタにしてやらねえと気が済まねえ!!」

前方に展開するビーンの大群にめがけ、STブラスターを乱れ撃つ。

菜々「な、何なんですか?本当に…」

瑞樹「分からないけど、文句を言うだけ無駄みたいね。みく、ステルバーの射線には入らないように注意して。私達はステルバーの後ろに回って、敵機の迎撃よ」

みく「またみくがフオローしてあげなきゃいけないの?」

瑞樹「言いつこなしよ。今の状態の私達じゃ、戦力が一つ欠けるだけでも大変なんだから。感情よりも、現実を優先して、ね?」

みく「…分かったにや。くう…この、アメリカ野郎!後で本場の美味しいステーキの店教えるにやあゝツ!!」

ジャック「——やれやれ、シュワルツにも困ったものネ!」

メリー「困った、くらいじゃすまされないわよ。兄さん」

サム「そうだけ。俺が知ってるシュワルツって奴は、確かに口は悪イが職務と作戦の遂行には真面目な軍人のはずだけ?それが自分から隊列を乱すなんてよ…」

リンダ「男なんて、何時もそう言うものでしょう?…勝手に」

ジャック「…ともかく、応答しても帰ってこないなら連携も期待するだけムダだぜ。テキサスの護衛は残ってるミー達だけで何とかしまシヨウ」

ボブ「でもよ、水中からも敵が攻めてきてるんだぜ？」

メリー「今は、カレン達が対応しているようだけど…」

芳乃「水中戦ならば、わたくしのゲッターすりの出番です。芳乃にお任せを」

美穂「うん。私達のゲッター3なら！」

サム「待てよ。それじゃあ、まともに空中戦が出来るのはジャックのテキサスマックだけになっちゃうぜ」

ジャック「No, Problem. と言いたいところですが、流石に強がってる場合じゃないネー」

メリー「せめてあと1機、航空戦力がほしいわね」

リンダ「それなら、水中には私が行くわ」

アーニヤ「リンダ、が…ですか？」

リンダ「ええ。元々、私のキングダムは海戦用なのよ」

鉄甲鬼「ならば、後は我々とチーム飛焰、どちらが行くかだが…」

美穂「私が行きますっ！」

芳乃「ほー？」

美穂「茜ちゃんとアーニヤちゃんは、前の戦闘で活躍したし、折角の水中戦だもん。私だつて、出来ることをやらなくちゃ！」

芳乃「ならばー、美穂さんにお任せ致しましょー」

ニオン「気合いを入れすぎて、ドジを踏むんじゃないぞ」

美穂「はいっ！お願い、茜ちゃん！」

茜「りよーかいしましたア!!頼みますよ〜ッ!!」

茜「オオーブンゲットオオツ!!」

美穂「チエンジ!ゲッター3イツ!!」

豪快に水飛沫を上げ、プロト・ゲッター3が、海中に潜水する。

美穂「加蓮ちゃん達は…」

茜「美穂さん!敵が来ますっ!」

美穂「!!」

メカザウルス・ジガ『キシヤアアアアアツ!!』

メカ海王鬼「——!!」

リンダ「露払いは任せなさいな!」

プロト・ゲッター3の前方に立ったキングダムが、魚雷を発射して群がる敵を払い除

ける。

リンダ「貴女はネオゲッターのところへ向かいなさい！」

美穂「ありがとうございます！リンダさん！」

アーニヤ「ミホ。カレン達、見つけました。ここから下に45度、方角6時の位置です」

美穂「よし……！」

加蓮「——やあッ！」

ガンツ

巨大なハサミでネオゲッター3を捕縛したメタルビースト・クラブの背中めがけ、両拳を固めたアームハンマーを振り下ろすが、

加蓮「堅い……！」

奈緒「蟹の見た目してるのは伊達じゃないな……」

李衣菜「いつそのことなら脱皮してくれればいいのに」

クラブ《——》ギギギ……

ハサミに挟まれたネオゲッター3の装甲が軋む。

李衣菜「わわわっ！加蓮！ど、胴体は1号機なんだから！早く何とかして!!」

加蓮「そう言われてもね……」

美穂「やああつ!!」

クラブ《?!?!?》

プロト・ゲッター3の拳がクラブを吹き飛ばし、ネオゲッター3を解放する。

美穂「加蓮ちゃん、みんな!大丈夫!」

奈緒「その声、そのゲッター美穂のか!」

美穂「え?う、うん。そうだけど」

李衣菜「な、何て言うか、、厳つい顔付きだね」

加蓮「そだね。あとちよつと悪っほい」

奈緒「加蓮!」

美穂（そ、そうかなあ...?）

アーニヤ「! : :ドラゴノザウルスが、来ます!」

ドラゴノザウルス『ギャオオオオオンツ!!』

美穂「: :!」

リンダ「雑魚は私が引き受けるわ!貴女達はドラゴノザウルスを!」

美穂「分かりました!茜ちゃん、アーニヤちゃん、動力はゲッターエネルギーだけに
して、プラズマエネルギーを両腕に集めて!」

茜「分かりました!」

アーニャ「任せて、下さい！」

美穂「行くよ……！私のゲッター3!!」 グンッ

操縦桿を強く前に押し出して、ドラゴノザウルスに突貫。

ドラゴノザウルス『シヤアアアアッ!!』

美穂「やあああああゝっ!!」

プロト・ゲッター3に襲い掛かった、竜頭の付いた触手の、その頭に拳を叩き込み、

美穂「ゲッターパンチッ!!」

粉碎。

美穂「たああっ！」

突き出した右腕を引き戻す動きに合わせて、左の拳を、ドラゴノザウルスの胴体に直撃させる。

ドラゴノザウルス『!?!』

茜「やれます！行けますよ!!」

ドラゴノザウルス『ッ!!』 ガスッ

美穂「うあ……っ！」

クロスレンジで打ち合うプロト・ゲッター3に抗うように、再度から放った触手がプロト・ゲッター3脇腹に刺さる。

ドラゴノザウルス『キシヤアアアツ!!』

美穂「きやああああつ!!」

そのまま、プロト・ゲッター3を振り切り、岩礁に叩き付ける。

美穂「ぐう…うう…」

茜「大丈夫ですか!」

美穂「だ、大丈夫…!まだまだだよつ!」

崩れた岩礁の中から、プロト・ゲッター3を起こす。

ドラゴノザウルス『ガアアツ!!』

美穂「っ!」

加蓮「ゲッタートルネード!!」

ドラゴノザウルス『!?!』

美穂「加蓮ちゃん!」

加蓮「このまま噛ませ犬で終わらせるつもりは、ないよ!」

茜「よぉ〜し!」緒にしてやりましょう!!」

加蓮「こつちで向こうの気を引いておくから、その内に態勢を立て直して!」

言つて、拳を突き出してドラゴノザウルスに突撃。

アーニヤ「今の内、です。各部チェックを…」

美穂 「そう言えば、ドラゴノザウルスって生き物なんだよね?」

アーニヤ 「あー、そうですね。 Динозавр…恐竜の生き残り、それが進化したモノ、という話でしたね」

茜 「それがどうかしたんですか?」

美穂 「それなら…!」

プロト・ゲッター3の姿勢を海底で安定させ、

美穂 「茜ちゃん、プラズマエネルギーの出力最大! 加蓮ちゃん、ドラゴノザウルスカ
ら離れて!」

茜 「はいっ!」

加蓮 「何?」

美穂 「行くよ!」

幾つも関節が連なる、プロト・ゲッター3の多節腕。その左腕を左方向に、右腕を右方向に。それぞれの向きに合わせて回転。次第に速度を上げていく。

美穂 「プラズマスクリュー!!」

そして、生み出されるのは、プロト・ゲッター3の両腕から放たれるプラズマを帯びた潮流。2つの激流によって、相手の動きを抑え、確実にダメージを与える破壊の渦。

加蓮 「何これ…スゴ…」

奈緒「ネオゲッターには真似できない芸当だな…」

李衣菜「ウツヒョー!! 美穂、最高にロックだよ! そのまま一気に行けえくくつ!!」

美穂「やあああああああゝ!!」

プロズマスクリユーの勢いでドラゴノザウルスを押し出し、そのまま海上へと打ち上げる。

美穂「次は!」

プロト・ゲッター3、浮上。

美穂「この、ゲッター3の火力で!!」

ガシャンッ

プロト・ゲッター3の前面の装甲が開き、中から無数のミサイルが顔を覗かせる。

美穂「お願い…! ナパームレインッ!!」

ドラゴノザウルス『?!?!』

プロト・ゲッター3から放たれたミサイル、それが空中のドラゴノザウルスに当たって弾け、中に詰め込まれたナパームが燃え上がり、ドラゴノザウルスの細胞を焼き尽くしていく。

美穂「トドメは…!」

加蓮「アタシの出番?」

美穂 「はいっ！」

海面から上半身を突き出したネオゲッター3が、黒く焦げたドラゴノザウルスをその背中のホーンに突き立てる。

加蓮 「プラスマブレイクッ！」

真つ黒く焦げて炭化したドラゴノザウルスを、プラスマブレイクで内側から粉碎して破壊。砕け散った残骸が海に沈む。

加蓮 「あちゃく…、ちよつとやり過ぎちやつたかな？」

奈緒 「でも、これで一番厄介な相手は片付けられたな」

加蓮 「美穂のお陰だよ」

美穂 「そ、そんな事…」

茜 「いえ、立派な戦いでしたよー」

アーニヤ 「ゲッター3の性能、しつかり、引き出してみました」

李衣菜 「本当なら美穂の攻撃でトドメだったんだけどね」

加蓮 「いいじゃん。トドメを指すなら念入りに、ね」

奈緒 「おいおい、まだ敵が残ってるのを忘れるなよ？」

茜 「そーですね！美穂さん、まだやれますか？」

美穂 「心配しないで！何時までもリンダさんに他の敵を任せておけないもん！」

李衣菜「よし、この調子で、みんなでアラスカ脱出だあゝ!!」
つづく

第15話『シベリアの城塞!超兵器・ボルガ!!』

~~~~~ シベリア大陸 ~~~~~

凜 「——ゲッターライフルツ!!」 ドシユウツ

メタルビースト・ビーン《?!?》

ゲッターD2が突き出して構えたゲッターライフルから放たれたエネルギー弾が、メタルビースト・ビーンの胴体を貫き爆砕。

美波 「ゲッターレザーブレード!!」

ビーン《?!?》

ズアアツ

ビーン《——!!》

美波 「っ……!」

みく 「ゲッターマシンガン!!」

ブラツクゲッターを背後から奇襲したビーンを、ゲッター1のゲッターマシンガンが制する。

みく「今にや！」

美波「ツッ：ゲッターズバイク！」

怯んだビーンをすぐさまに拳のスパイクで殴打し、頭部を粉碎。

美波「ありがとう、みくちゃん。助かったわ」

みく「お礼はあとで！メタルビーストも大分数を減らしてる、もう一踏ん張りいかにやあっ！！」

菜々「それにしても、こうやって周りを飛び回っていると、てんとう虫と言うよりは、ハエって感じがしますね」

凜「どっちも鬱陶しいのは変わらない、って事？」

瑞樹「お後が宜しいようね。さ、一気にトドメを刺すわよ！」

凜「そうだね、このくらいの数なら……」

美波「私達みんなのゲッタービームで！」

みく「一斉掃射にやッ！！」

「ゲッタービィーッム!!!」

3機のゲッターロボが、それぞれ異なる方角に向かってゲッタービームを放ち、扇状に薙ぎ払って辺りを包囲しているビーンの軍勢を焼き払う。

みく「うにやああああ〜っ！発射口が焼け付くまで、撃ち続けてやるにやあ!!!」



を掲げてる割りには、やることがちっちゃいにやあ」

美波「でも、有効なのは事実よ。私達の戦いに手応えがあれば、士気も持続できるけど、先の見えない戦いだとそうはいかないもの」

凜「美波の言うとおりでね。私達には時間がない。だけど、焦って違う損害を出す余裕もない」

瑞樹「慎重に、且つ果断に。相手の動き方も見極めなきゃいけないわね」

菜々「な、何だか難しい話ですね…」

瑞樹「ま、実際の難しい判断はテキサスの艦長とかが決めてくれるわよ」

美波「そ、それでいいんですか？」

瑞樹「私達は民間のパイロットで、戦闘知識はほとんど素人だもの。ある程度は思考をフリーにして、柔軟に状況に対応できる余裕は必要よ」

瑞樹「言ったでしょ。慎重に、且つ果断に、よ」

みく「みくの知ってる果断って言葉は、お気楽って意味じゃなかったと思うにや」

瑞樹「そこは気にしないの。さ、こんなところで長話も何でしょ」

凜「こんなところ…」

美波「そうですね。私達のゲッターの調子も、万全にしてもらわないと」

菜々「あつ、地上で迎撃してた李衣菜ちゃん達も帰還し始めてるみたいですよ」

みく「みく達も一休みかやあ?」

瑞樹「そうしましょう。整備班の人達も、首を長くして待ってるわ」

美波「凜ちゃんも」

凜「あ…うん。みく達から順番に帰ってていいよ。私はその間、辺りを警戒してるから」

美波「分かった。それじゃあヨロシクね」

凜「うん。……」

凜「…シベリア大陸、か——」

~~~~~ 戦艦テキサス 格納庫 ~~~~~

李衣菜「うう…! たっだいまあ、つと!」

加蓮「これで一段落。あ、あ、ちよつとシャワー浴びたいかも」

奈緒「大丈夫か? この後、アタシ達は見張りの警戒任務だぞ。湯冷めしないか?」

加蓮「ちやちやつと浴びてくるだけだから、心配しない」

奈緒「でもさ、戦闘後だし…」

加蓮「そこまで心配なら、奈緒が温かいココアでも淹れて待っててよ?」

奈緒「はあ? お前なあ…」

美穂「李衣菜ちゃん、奈緒ちゃん、加蓮ちゃん。お疲れさま!」

李衣菜「美穂！」

加蓮「アタシ達と入れ替わりで、チーム飛焰がゲッターで待機だつて。…アーニヤが見当たらないけど？」

茜「アーニヤさんなら、見張り部屋の方にいると思いますよ！」

美穂「ここに來てたから、ずっと外を見てるの」

奈緒「まあ、ちっちゃい時でも過ごしたことある故郷みたいなもんだしな」

李衣菜「私達が行く時、ついでに呼びにいこう」

茜「うう〜…！」

奈緒「ん？茜、どうかしたのか？」

茜「警戒待機…その、あまり得意ではなくてですね…！」

加蓮「あく、確かに、茜ってあんまりじっとしてるイメージないかも」

茜「はい！ジ〜っとしてても、体が勝手に動いてしまうので！」

奈緒「普段、それでどうやって学校で授業受けてんだ？」

茜「相手が向かってくるのをただ待つだけというの…！何故、私達は今回り道をしているのでしょうか!?!」

美穂「回り道？」

茜「ランドウを倒す！それだけなら、ランドウの本拠地に突撃すれば話は早いはず

です!」

李衣菜「まあ、確かに茜ならそう言うよね」

奈緒「茜だけみたいな言い方するなよ。お前だつて気持ちは一緒だろ?」

李衣菜「まあそうだけどき。でも、今蛇牙城に攻め込むのは無茶だつてのは、分かるよ?」

茜「何故です?戦力が少ないなら尚のこと、短期決戦で終わらせるべきです!!」

加蓮「確かに、短期決戦で終わらせられるなら、そうした方が楽なんだけどね」

奈緒「でも、今回は頭を落とすくらいじゃ戦いは終わらない。ランドウが世界中にメタルビーストを展開してるのは知ってるだろ?」

茜「ですが!」

奈緒「今蛇牙城に攻め込んだところで、周りを包囲されたら、あたし達は逃げ場を無くして、それで終わりだ」

李衣菜「だから、そうならないためにも、少しでもランドウの外に出てる戦力を削っておくんだよ」

美穂「けど、その話だけだと結局、こっちが息切れしちゃうんじゃない?」

加蓮「そうかもね。けど、ランドウ相手に抵抗してるのは、アタシ達だけじゃないでしょ?」

美穂「あ…」

茜「どういう事ですか!？」

奈緒「つまり、世界中に展開してるランドウの戦力を削って、どつかで抵抗してる戦力の協力が得られれば、蛇牙城攻略の成功確率はグッと跳ね上がるってこと」

茜「そういうものなんですか…」

李衣菜「あ、あれ…?今いちピンと来てない?」

美穂「それじゃあ、アラスカからロシアに移動したのも、ロシアの戦力と合流するためなの?」

李衣菜「一応そう言うことらしいよ?衛星通信を使って連絡がとれない以上、本当に無事かどうかは、まだ分からないけどね」

奈緒「何でも、テキサスのドーバー砲に匹敵する威力を持った武器を持った、戦術兵器級の能力を持ったロボットがいるらしい、とか何とか」

美穂「ドーバー砲…?もしかして、テキサスの真ん中に付いてる、おつきい砲身のこと?」

奈緒「そうそう。使えば、都市一つくらいまるごと吹き飛ばせるらしいんだけど、それだけ危なくて、簡単には使えないらしいんだよな」

美穂「そうなんだ。でも、それだけの武器を備えてくれる味方がいたら、確かに心強

—— ネオゲッターロボ、コックピット内。

李衣菜「……艦長さん、何があつたんですか？敵は、どこから来るんですか？」

艦長『リーナくん：！?君達はこれから艦内待機だつた筈だぞ！』

李衣菜「偶々まだゲッターの近くにいたんです！こんな短いスパンで敵が来るついでうのも可笑しいし……。どうなってるんですか？」

艦長『……。厳密には、敵襲というわけではない』

奈緒「どういう事なんだ？」

艦長『つい先程の事だ。こちらのレーダーでロシア軍の戦力、ボルガの反応を感知した』

李衣菜「ボルガ？」

奈緒「さっきあたしが話したロシアのスーパーロボットの事だよ。名前くらい覚えてろって」

李衣菜「ご、ごめん……。それで、ボルガが見つかったんですか？まだ撃墜されてないんですね！」

艦長『恐らく、今のところは、な』

加蓮「今のところ？なんか引つ掛かる言い方するね」

艦長『うむ。同時に、ボルガを観測した地点から爆発光と振動を検出した。これらの

事から、恐らく、ボルガは現在戦闘中であると推測される』

奈緒「マジか!」

李衣菜「なら、早く助けにいかなきや!」

艦長『だが、ボルガを観測した地点はここから100kmも先だ。テキサスの機動力では、最大戦速でも間に合うかどうか…』

加蓮「なら、テキサス以上の速度が出せる機体で、先攻すればいいじゃん」

李衣菜「そっか、私達のネオゲッター2とか、ステルバー、あとパスチャー・キングに乗ったテキサスマックなら、急行できる!」

艦長『そうかもしれないが…、ステルバーとテキサスマックはともかく、君達のゲッターは、先の戦闘で負った損傷箇所の修復作業が、まだ終わっていないはずだ』

李衣菜「…どうなんですか、チーフ?」

整備班長「状態は80%ってトコだ。何時もみてえに外装を派手に壊しちゃいるがエンジン部分はほとんどダメージは受けちゃいねえ」

加蓮「外装は派手に、ねえ…」

奈緒「ホント、そういうとこだけ器用に戦うよな」

李衣菜「あははは…」

班長「伝達系統がどうなってるかは分かんねえが、ここまで帰ってきたところを見る

と、動かすくらいは問題はねえと思うぜ」

李衣菜「つて事は出撃してもいいってことだよね！艦長！」

艦長『ううむ……。不確定要素があるウチは、出撃など許可できんのだが……』

加蓮「そんなこと言ってるうちに、ボルガがやられちゃうかもよ？」

奈緒「ボルガはこれからランドウを倒す上でも、必要な戦力なんだろう！」

李衣菜「機動力の高い戦力は限られてる。ゲッター飛焰も、パイロットが揃ってないからすぐには出撃できません！作戦成功のためには1機でも多くの戦力が必要、違いますか？艦長！」

艦長『……。状況的にはやむ終えんか……。分かった、出撃を許可する』

李衣菜「よしっ！」

艦長『但し、くれぐれも無茶せぬようにな』

加蓮「ま、今回のメインはリーナじゃないんだしその辺は大丈夫でしょ」

奈緒「あつ！そっか、会話に流されて忘れてたけど、機動力重視つてことは、メインはあたしか!？」

李衣菜「ファイトだよ、奈緒」

奈緒「くっそ……。まあ、さつきは李衣菜に頑張ってもらったし、あたしも少しはいいところ、見せないとな」

加蓮「そうそう。最近奈緒は横から口だしてるだけなんだから〜」

奈緒「そ、そこは突っ込むなよ…」

艦長『お喋りはそこまでだ。もう一つ、ボルガの近くに、大型の熱源反応がある。これにも注意してくれ』

加蓮「大型の反応? ランドウの戦艦かな?」

艦長『現在地からでは、細かな識別は出来ん。只、大型であるのは確かだが、連中の移動要塞、ドラゴンタートルに匹敵するほどではない』

加蓮「じゃ、そんな大したことはないんだ。なら、ちようどいい前哨戦になるね」

オペレーター『艦長、ステルバーとテキサスマックが発進します』

艦長『むっ、対応が早いな』

シュワルツ「小娘どもがオープンでベラベラと喋りやがるから、これからやること全部筒抜けだ!」

ジャック「ミー達で騎兵隊で、三銃士デスね! Hurry! ロシア軍を助けに行こうぜ!!」

艦長『よし、ステルバーとテキサスマックは順次出撃。ネオゲッターロボは2機に続け!』

李衣菜「了解! 奈緒、ジャックとシュワルツに遅れるわけにはいかないよ。テキサス

から出たら速攻でチェンジだ！」

奈緒「お、おう！任せとけ！」

ボブ『加蓮ちゃん！俺達の分も、頑張ってきてくれよ！』

加蓮「うん！そっちも、何かあつたらテキサスをよろしく！」

サム『任せとけて！加蓮ちゃん達が帰ってくる場所はしっかり守ってやるからよ！』

艦長『各機、発進ッ！！』

李衣菜「オーブンゲット！！」

艦長の号令、発艦と同時にネオゲッター1を分離させる。

奈緒「うおおおっ！！——ゲッターチェンジ！！」

高度を上げながらの水平飛行でネオゲッター2へと変形を完了する。

奈緒「どくだ見たか！これがコンマ0秒の世界の合体だ！！」

加蓮「なかなか上達したんじゃない？」

奈緒「へへっ、あたしだって、ちゃんと成長してるだろ？」

ビュオオオオオ……ッ

加蓮「さつきとうって変わって、吹雪いてきたね」

李衣菜「奈緒！シユワルツ達を見失っちゃイヤだよ！」

奈緒「リーダーにだって映ってるんだ。そう簡単にはぐれるかっての!」

ジャック「ヘーイ、ナオ! パスチャーの後ろに、しっかり Follow me!!」

奈緒「そんな馬鹿デツカイ馬、子供だって見失わないって」

パスチャー・ング『ヒヒイイインツ!!』

李衣菜「ははっ! パスチャーもご機嫌みたいだね!」

メリー「ここのはずつと、テキサスでお留守番だったもの。パスチャーも早く

暴れたいって言うてるわ」

李衣菜「そっか。私達にとっては広いテキサスでも、パスチャーにとってはそうでもないんだ」

加蓮「普段は格納庫の隅っこにある厩舎みたいなどこに入ってるし」

李衣菜「今度、思いつきり廊下を走らせたらどうかな?」

加蓮「いいかもね。ストレス発散になりそう」

奈緒「お前ら適当なこと言うなって。もうそれ、端から見たら軽い騒動だぞ?」

ジャック「だが、It's No Kidding! 面白いことになりそうダネ!」

メリー「兄さんも同調しないの」

シユワルツ「相変わらずな連中だぜ。少しは緊張感持てねえのかよ?」

ジャック「H A H A! It's joke! カリカリしても、いいことないヨ!」

シユワルツ「何イ!？」

李衣菜「ジャックの言うとおりでよ。シユワルツに何があつたのかは知らないけどさ、変に力入れたつて、空回りするだけじゃないかな？」

シユワルツ「俺達は遠足に行くんじゃないやねえ!いつまでも遊び半分じゃ困るんだよ!」
奈緒「ランドウを倒しに行くんだろ!だから、あたし達が力を合わせなきゃいけない

!一人だけじゃ、どんな相手だつて絶対に勝てないぞ!」

シユワルツ「…ケツ」

「み、皆さ〜ん!待ってください〜い!」

李衣菜「ん?この声、かな子?」

加蓮「近づいてくる信号…ゲッターD2?今回はかな子がD2に乗ってるの?」

かな子「は、はいっ!凜ちゃんは操縦が上手なので、D2の損傷が少なくて、エネルギーの補充だけで再出撃できたんですよ」

加蓮「それで、凜は一回お休み?」

かな子「はい。さつき出撃したばかりなので…。ホントは卯月ちゃんも出撃したがつてたんですけど。ゲッターD2は、量産が前提のゲッターですから、そのデータ集めるために、他のパイロットも乗せた方がいいって、晶葉ちゃんが」

加蓮「晶葉が?…ふうん」

奈緒「何だよ?」

加蓮「何でも」

かな子「…それに私も、ちよつと体を動かしたかったので…」

奈緒「お菓子の食べ過ぎか?」

かな子「な!?!ななな、何で分かったんですか!?!」

奈緒「何で分かったって…。…ってか、凶星かよ」

李衣菜「かな子、ゲッターはダイエツト器具じゃないよ?」

加蓮「リーナの言うとおり。ゲッターだと脂肪が燃焼されないで、そのまま筋肉になつて。かな子日本に帰る時は筋肉だるまになつちやうかもね」

かな子「うう…!それは嫌ですう!」

奈緒「なら、ちゃんとした方法で痩せろよ!あと、お菓子は少し控える!」

かな子「…は、はい」

加蓮「何にせよ、ゲッターD2がいてくれるのはありがたいね」

李衣菜「そうだね。今のままで3機…パスタチャーも入れると4機か。それだけだと、ちよつと不安だったし」

かな子「1号機のゲッターははじめてで、お役に立てるか分かりませんが、頑張ります!」

シユワルツ「お喋りはその辺にしとけ。ボルガが見えてきやがった」

李衣菜「ボルガが見えてきたって…、ドコ？」

メリー「こつちのリーダーでも捉えたわ。前方7km先よ」

李衣菜「7km? なら、見えても可笑しくな筈だけど…」

奈緒「ここからじゃ、小高い山しか見えないぞ！」

加蓮「ん？」

かな子「この辺りの地形、データもらいましたけど、この先に山なんてありましたっけ？」

李衣菜「でもほら、影が見えるじゃん。こう…ずんぐりとした」

シユワルツ「だから、それがボルガだつての！」

李衣菜「え？」

黒い影と、シベリアの吹雪で覆われていたものが、近付く事でその姿をはつきりとさせていく。

かな子「あれが…ボルガ？」

奈緒「で、デカ…っ！」

全身を真っ赤な装甲で覆った、全長100mオーバーの巨体が、シベリアの大地にそそり立つ。

加蓮「ホント、山と見間違えるのも仕方無いね」

李衣菜「ゲッターよりも、ずっと大きい!」

奈緒「ロボットって言っているのか、あれ?」

メリー「ええ、正式名称・ボルガ80000。ロシアが建造した“機動要塞”よ」

奈緒(数字だけ立派なの使うなあ…)

前方にそびえるボルガの正面装甲で、大きな爆発が起こる。

加蓮「!?」

李衣菜「そ、そうだよ!ボルガに圧倒されに来たんじゃない!奈緒!!」

奈緒「お、おうっ!」

ネオゲッター2を加速させる。

ジャック「シユワルツ!ナオ達を援護するぜ!」

シユワルツ「援護つつあったってなあ…。こんだけ吹雪いてりゃあ、この位置から撃つ

たら味方に当たるぞ?」

ジャック「メリー!レーダーで敵機を捕捉できるか?」

メリー「それはさつきからやってるんだけど、何か妙なよ」

ジャック「Strange?どういう事だ?」

かな子「…これ、敵の反応より、味方の方が多い?」

奈緒「——ボルガの前に出たか？」

李衣菜「えーっと、今ボルガは後ろにいるから…、うん！前には出れたよね！」

加蓮「ボルガが大きいお陰で、この吹雪の中でもボルガを目印に位置取りできるけど

…

奈緒「相手にして見たらいい的だな。とにかく、敵の数を減らすぞ！」

加蓮「何だか混戦してるみたいだけど」

奈緒「取り敢えず、ボルガに攻撃した火線を目印に攻撃する！」

言った側で、遠く、吹雪の向こうでボルガ目掛けて火線が嘖く。

奈緒「そこだ！ドリルアームツ！！」

砲撃を放った目標を破壊するが、

李衣菜「取り敢えず破壊した…みたいだけど、これ、味方じゃないの？」

目の前のサブ・モニターに光る『パゾロフ8000D』の文字と、味方識別信号。

加蓮「奈緒…やっちゃった？」

奈緒「い、いやでも確かにボルガを攻撃してたし…。あれを敵と見間違うことあるか

?!」

李衣菜「それは、そうかもしれないけど…」

「心配なら要らない。君達が撃墜したのは、間違いない敵なのだから」

奈緒「だ、誰だ!？」

加蓮「落ち着きなあって。知らない周波数……。もしかして、ボルガのパイロット?」

「そうだ。ボルガの指揮を執っている、スミノフだ。君達は……」

李衣菜「テキサスから救援に来ました!その、今の状況って、一体どうなってるんですか?」

加蓮「間違いなく敵、って言ってたけど、識別は味方だし。どういう事?味方同士で戦ってるって事でもないんでしょ?」

スミノフ「ランドウの新兵器だ……。ナノマシンにより、こちらの戦力をメタルビースト化させている」

奈緒「何だよ、そんなのありか?!」

スミノフ「正に意思を持った、ナノマシンのメタルビーストだ。下手に攻撃を受ければ、君達の機体も危ない」

奈緒「マジかよ……。それで識別も味方のままなのか!」

加蓮「やりづらいね。こっち側に残ってるパゾロフはないの?」

スミノフ「こちらから何度も呼び掛けているが、応答するものはない」

李衣菜「そんな!それじゃあ、周りにいるの、もう全部敵ってこと!?!」

スミノフ「パゾロフのパイロットだった者は脱出したか、或いは……」

加蓮「ランドウ……！またろくでもないモノを造って！」
スミノフ「ともかく、遠慮する必要はない。申し訳ないが乗っ取られたパゾロフの破壊を頼む」

奈緒「了解！味方じゃないんなら、こつちも譲ってられないんだ。容赦はしないぞ！」
李衣菜「パゾロフ以外の相手もいるんだから、そつちもしつかりとね」

加蓮「……待って。ボルガに隠れてて気付かなかつたけど、ボルガに匹敵するくらい大きい反応が、向こうにもあるよ」

奈緒「敵の戦艦か……？って、あれは……！」

李衣菜「確か、恐竜帝国の……無敵戦艦ダイ!!」

奈緒「前回から、厄介な奴のオンパレードだな！」

李衣菜「奈緒も加蓮も、あれとはまだ戦ったことなかったよね？丁度いい機会じゃん」
加蓮「出来れば、そんな機会なら来てほしくもないんだけど」

メタルビースト・パゾロフ《——!!》

奈緒「おっと——！プラズマブレードッ!!」

メタルビーストとなったパゾロフの両腕から伸びた触手を、プラズマブレードのプラズマ刃で切り払う。

奈緒「へへっ、そう簡単には触れさせないぞ、ランドウ！」

「ならば、これでどうだッ!!」

奈緒「ぐっ……!」

右から衝撃を受け、大きく仰け反る。

李衣菜「コイツ、メタルビースト・ジャコツ!えーっと、ランドウのヤシャ將軍!」

ヤシャ「ふふふっ、覚えてもらって光栄だよ。ネオゲッター!!」

奈緒「何でコイツがこんなところに……。確かドラゴンタートルはもつと向こうに後退したんじゃない!」

ヤシャ「それもこれも、全ては貴様らのお陰よ」

加蓮「成る程。私達に見逃されて、おめおめと逃げ帰って、アラスカを落とせなかつたから、降格されたんだ?」

ヤシャ「そのとおりだ。ドラゴンタートルすらも手放さなければならず、あんなトカゲ共の使い古しで戦闘の指揮を執らねばならんとはな」

李衣菜「…何て言うか…、大変なんだね」

奈緒「つて言うか、向こうの台詞をとつてやるなよ…。——…とお!」

飛び込んできたジャコツの、青竜刀による上段からの一撃を、プラズマブレードで受け止める。

ヤシャ「だが、お陰でこうして再び相見えることが出来たア!ここで前回の雪辱を晴

らせば、汚名を注ぐこともできよう！」

奈緒「まだ話してる途中だったろ！…問答無用ってことか！」

李衣菜「奈緒、ネオゲッター2じゃパワー不足だよ！ここは私がやるッ！」

奈緒「言ってくれるよなあ。確かに、ネオゲッター2にパワーはないけど！」

ヤシャ「!?!」

ネオゲッター2の懐に飛び込んだジャコツの胴体に、零距离からドリルアームガンを撃ち込み、プラズマを弾かせる。

奈緒「力押しだけが戦いじゃないんだよ！見たか!!」

アームガンを撃った反動で後方に逃れ、ジャコツと距離をとる。

ヤシャ「ぬう…。こんなもの！」

加蓮「奈緒、ジャック達が追い付いてきた」

ジャック「Hey! 騎兵隊の到着だぜ!!」

かな子「李衣菜ちゃん！大丈夫ですか？」

李衣菜「まだ始まったばかりかだしね！みんな、レーダーに映ってる反応は味方でも、ボ
ルガ以外は敵だよ！」

シユワルツ「その話は通信でさつき聞いたよ！容赦する必要がねエってんなら、遠慮
も要らねえ!!」

ジャック「ド派手にFire!!」

かな子「私も、ゲッタービームツ!!」

テキサスマックが右手に構えたマックライフル、ステルバーが両手に構えるSTーブラスター。そして、ゲッターD2のゲッタービームが3つの方向に火を噴き、吹雪を吹き飛ばしてシベリアの大地を爆発の炎で彩る。

ジャック「H A H A H A!!行くぜ!パスチャー・キング!!」

パスチャー・キング『ブルヒヒイインツ!!』

ジャック「Posture—Crash!!」

パスチャー・キング『!!』

雪原を吹き飛ばす爆炎の中を、猛烈な速度で駆け抜けるパスチャー・キングが、体当たりでメタルビースト・パゾロフを吹き飛ばし、

ジャック「Posture—Stamp!!」

パスチャー・キング『ツツ!!』

大きく身を反らせた後の前脚で、メタルビーストを踏み潰す。

李衣菜「ウツヒョー!宣言通り、パスチャー大活躍だ!」

加蓮「ホント、日頃の鬱憤張らしてね、アレは」

奈緒「向こうに突っ込んでる暇なんてないぞ!——行けえ!!」

プラズマブレードを突き姿勢で構え、突撃。

ヤシャ「そんな素人の攻撃で……！」

奈緒「つと……！ドリルアアームツ!!」

ヤシャ「！」

軽く、突撃を躲すジャコツに対し、ネオゲッター2も直後に着地した脚で動きを制止、左のドリルアームを始動させると同時にジャコツに向き直り、再度攻撃を敢行した。

奈緒「このおっ！」

ヤシャ「くっ……！」

回避行動をとったばかりのジャコツは、辛うじてドリルを躲し、ネオゲッター2はジャコツの脇を通り抜ける。

奈緒「くそおっ！あとちよつと左だったら当たってたのになく！」

ヤシャ「そう簡単に、当たってやるわけにいかん!!」

李衣菜「みんな！コイツの相手は私たちで何とかするから！だから、みんなはメタルビーストとダイを！」

かな子「ネオゲッターロボ1機だけで大丈夫なんですか?!」

シユワルツ「つったところで、この敵の数だ。俺達も悠長にしてる暇もねえがな」

李衣菜「そう言うこと！」

奈緒「こつちが無視してって向こうは狙ってくるだろうしな。なら、とことん相手してやるって!」

ヤシャ「心意気は良いぞ…!心行くまで廻り殺してくれるわ!!」

奈緒「何でもかんでも、ゲームみたいにいくと思うなよ!あたしの首は、アンタの汚名返上の道具じゃない!!」

ネオゲッター2とジャコツが交錯する。

ダイ『ギヤオオオオンツツ!!』

かな子「きゃあつ!?!」

無敵戦艦ダイの副砲が吼え、あちこちに火柱を立てる。

シユワルツ「あの恐竜戦艦め…!敵も味方もお構いなしかよ!」

メリー「あつちのメタルビーストも、元々こつちの戦力だったから、当然ではあるけど…。やっぱりダイの存在は厄介ね」

ジャック「あんな奴、テキサスマックのハイパワー・ライフルが使えればOnes hotでKilllingしてやれるのにヨ!!」

かな子「ハイパワー・ライフルって、地上の敵には使つちやダメなんじゃないんですか?」

ジャック「チツチツ。Irregularな相手には例外デース!」

かな子（例外…？）

シユワルツ「ま、無いものに頼ったって仕方ねえ。今この状況で、ハイパワー・ライフルに匹敵…いいや、上回る武器って言やあ…」

ジャック「That's right!!ボルガの出番ネー!」

かな子「？」

スミノフ「うむ。これよりボルガは、超ウエポン砲発射体勢に移行する」

かな子「超ウエポン砲…!?何だかスゴそう…」

メリー「すごいなんてモノじゃないわ。一発でニューヨークの街を吹き飛ばせる戦術兵器よ」

かな子「そんな兵器が…!?」

スミノフ「故に、常に簡単に使えるものではないがね。先ずはこのボルガの体を変形させなくてはいかん」

かな子「そんなおっきいのが、変形するんですか？」

スミノフ「君達のゲッターロボほどではないよ。だが、全てのシステムを移行するのに20分は掛かる。それまでの間、ボルガのほとんどの機能は停止状態になり、自衛することもできない」

かな子「つまり、ボルガが変形するまでの20分間、ボルガを守ればいいんですね？」

スミノフ「うむ。可能な限り敵を近付けるな」

シユワルツ「つたく、テキサスほどじゃねえにしたって、身動きのとれねえデカブツを20分も守らなきゃならねえとは…」

ジャック「だが、守りできればCheckmateだ！」

かな子「でも、ダイの動きを抑えながら、周りにいるメタルビーストも迎撃して…。一筋縄にはいかない、ですよね？」

メリー「敵の攻撃だけじゃなく、メタルビースト化させるナノマシンにも注意よ。敵を絶対にボルガに近づかせるわけにはいかないわ！」

かな子「うう…。こういう時は、考えるより動け、ですよね！」

ゲッターD2が一步、大地を踏みしめ敵陣めがけ駆け出す。

シユワルツ「おいつ！」

かな子「やああああああくっつ!!」

大地を駆ける勢いに乗せ、メタルビースト・パゾロフを思いっきり殴り倒す。

シユワルツ「……」

ジャック「H A H A ! 思ったよりDynamite hustle girlネツ!

かな子「あく…。ゲッター3に乗ってるつもりで、何時もみたいにやっちゃった…」

思わずゲッターD2の手を確認する。

かな子「こ、壊れちゃったり…してないですよね？」

シュワルツ「敵の中で動きを止めんじやねえ!!」

かな子「!」

立ち止まったゲッターD2に殺到するメタルピースト群に、STーブラスターを突き出したステルバーが救援に入る。

かな子「あ、ありがとうございます!」

シュワルツ「ゲッターがドコも壊れてねえんなら、早く立て直せ!」

かな子「はいっ!」

ジャック「メリー!ミィ達も行くゾ!!」

メリー「ええ、何時でもいいわ!兄さん!!」

ジャック「Texas—s—w—o—r—d!!」

かな子「今度は間違えないで…ゲッタートマホーク!」

シュワルツ「…フンツ」

近接武装を構えたテキサスマックとゲッターD2に合わせるように、ステルバーも胸部から取り出したナイフを構える。

ジャック「ノリがいいね!」

シユワルツ「こつちの方が弾を無駄にしなくて済むと思っただけだ」

ジャック「OK. 今のミーの最大火力、マック・ライアットでもユーのステルバーの火力でも、あのDino-battle shipの装甲は抜けナイ」

ジャック「カナコ!メタルビーストの相手:露払いはミー達がスル!battle shipへの攻撃は任せませ!!」

かな子「え?ええ!」

メリー「例え倒すに至らなくても、貴女のゲッタービームの火力が、この中では一番よ」

シユワルツ「こつちの隙を見て奴の足を止める!それぐらいは出来んだろ!!」

かな子「……。何時もは卯月ちゃん達がやつてること……。今は私が、このゲッターを預かってるんだから!やりますッ!」

MB・パゾロフ《——!!》

かな子「っ……いやああああっ!!」

飛び掛かってきたMB・パゾロフをトマホークの切り上げで迎え撃ち、両断する。

かな子「トマホーク……!ブウーメランッ!!」

即座にトマホークを投射し、メタルビーストの群れを払い除け、

かな子「よし、ダイが見えました!——ゲッタービィーームッ!!」

空いた空間から、無敵戦艦ダイの足元目掛けゲッタービームを放つ。

ダイ『キシヤアアアアッ!?!』

足元に爆炎が燃え上がり、無敵戦艦ダイが叫びを上げて動きを止める。

かな子「これでいいですか!」

ジャック「Great!! 上出来デス!」

シユワルツ「なかなかやるじゃなえか。だが、油断すんな! 敵はオメエに狙いを付けたみてえだぞ!」

かな子「え?」

殺到するメタルビースト。

かな子「ええええええくくっ!」

ジャック「シユワルツ! いきますヨ!」

シユワルツ「護衛対象が増えてンじゃねえか。ま、望むところだがな!」

ジャック「パスチャーも頼むぜ! ハイヤアッ!」

パスチャー・キング『ヒヒインッ!!』

加蓮「あつちは、3機で何とか連携できてるみたいだね」

李衣菜「うん。やっぱ、かな子がいてくれて良かった」

奈緒「…お前らなあ、気楽に話し合ってるんじゃって…うおっ!」

ジャコツが振り下ろした青竜刀を、プラズマブレードで弾く。

奈緒「このっ!」

左のアームガンを連射。ジャコツは飛び退いて回避するが、この隙にネオゲッター2は後方へ。ジャコツと距離をとる。

奈緒「今更だけど、戦闘指揮官が私闘にかまけてんのってどうなんだ?」

加蓮「指揮官って言っても、向こうはほとんどAIとか何だし、一回パツて指示出しちゃつたら、後はやることないんでしょ」

奈緒「はくあ。それって一見便利そうだけど、部隊で動いてる意味あるのか?」

加蓮「さあ?元々、インベーターとそう変わらない連中だし」

奈緒「言えてる。あいつらも群体で襲ってくるしな…つと!」
言いながら、飛び込んできたジャコツの攻撃をひらりと躲す。

ヤシャ「コイツ…!さっきからちよこまかと!」

奈緒「悪いけど、あたしは李衣菜みたいに闇雲に突っ込んだりしないんだ。ゲッター2の戦い方も、そんなんじゃないしな!」

再びアームガンを連射し、数発を命中させる。

ヤシャ「この程度!」

奈緒「もつとちよこまかせてもらうからな!——ネオゲッタービジョン!!」

ネオゲッター2の高速機動。幾重もの分身を生み出し、更に、ヤシャ「この吹雪に紛れるつもりか！」

奈緒「ふっふっふっ！使えるものは何でも使わなくちやな！」

加蓮「今の奈緒、スゴい悪役っぽい」

吹き荒れる吹雪の中に身を隠し、分身で惑わせながら、アームガンで動きを抑える。

ヤシャ「おのれ、小癪な…！」

奈緒「このままケリを着けるぞ！李衣菜には悪いけどな！」

李衣菜「まあ…、因縁付けられたのは私だけどさあ…」

奈緒「何だよ？」

李衣菜「いやあ…」

加蓮（調子乗っちゃってるね。これは）

李衣菜（嫌な予感…）

奈緒「いっくぞおっツ!!」

ヤシャ「!—そこかッ！」

ジャコツに真つ正面から飛び込んできた、ネオゲッター2の姿が消える。

ヤシャ「何…!?!」

奈緒「もらったああああ!!」

ヤシヤ「…フツ」

ズゴオ…ツ

奈緒「……がっ…あ!？」

ジャコツの背後に回り込み、ドリルアームで突撃の姿勢に入ったネオゲッター2の鳩尾に、ジャコツの蹴りが突き刺さる。

奈緒「な…何で……」

ヤシヤ「もう一つ!!」

奈緒「あゝ ああああああ——ツ!!」

浴びせ蹴りを放たれ、地に叩き付けられ、跳ねて転がり、静止する。

加蓮「——…痛たたた…。もう、奈緒?しっかりやつてよ」

奈緒「わ、悪い…!けど、何で?完璧に攪乱できてたはずなのに!」

ヤシヤ「元より、私はランドウ様の遺伝子操作により生み出された人造生命体。運動能力も反射神経も、貴様ら無調整の人間より遥かに優れているのだ」

ヤシヤ「あの程度の動き、見切れぬ筈がない」

加蓮「こつちに惑わされた振りをしてたってこと。…陰険」

奈緒「くそっ!最初っから踊らされてたのは、こつちだっただってことかよ!」

ヤシヤ「どうだ?勝機を抱きながら、あっさりと裏切られた気分は?」

奈緒「ううゝ…！このおゝつ!!」

李衣菜「奈緒！自棄になっちゃダメだって!!」

勢いに任せ、ドリルアームを突き出し突進。

ヤシャ「…簡単に挑発に乗るとはな。貴様に私と戦う資格は…ないツ!!」
ガンツ

奈緒「ガツ…!?!」

青竜刀の腹を打ち据え、ネオゲッター2を大地に伏す。

かな子「ネオゲッター2が…！奈緒ちゃん！」

メリー「余所見している暇はないわよ！」

かな子「えっ?!…くっ!」

一瞬ネオゲッターに気を取られたゲッターD2に肉薄したメタルビーストを、辛うじて迎撃する。

かな子「奈緒ちゃん達が！助けにいかないと！」

シユワルツ「他人の心配なんざしてる場合かよ?」

かな子「でも…!」

ジャック「今この陣形を崩せば、ミー達だけでなくカナコ、ユーも危険だヨ。残酷かもしれないが、リーナ達はリーナ達で何とかしてもらおうしかナイ」

かな子「そんな…。——ッ!」

話してる間にも、敵は来る。

奈緒「……」

李衣菜「奈緒!しっかりして!アイツに言われたまま、ここで終わっていいの?」

奈緒「倒さなかつた…。やれば出来たのに、アイツはそれをしなかつた…。剣で殴つて、ゲッターを止めた…。そうしてなきや、今頃あたしは…!」

ヤシャ「もう貴様に用はない。私が決着を着けなければならぬのは、あくまでネオゲッター!リーナ、貴様だ」

奈緒「……っ」

ネオゲッター2の首筋に、青竜刀の切っ先が突き付けられる。

ヤシャ「戦つて私に討ち取られるか、戦わずにここで果てるか。答えは一つだ」

李衣菜「……。奈緒!こんなぼろくそに言われたまま引き下がっていいの!私達のゲッターは、まだ戦えるよ!」

加蓮「調子付いたところこかさされたからって、怖じ気づくのはなしにしてよ?」

奈緒「い、いやだ…!」

李衣菜「え…?」

奈緒「いやだっ!こんな何にもないところで、こんな誰も知らないところで、死にた

くない!!」

加蓮「臆病風に吹かれてる場合? しつかりしてよ!」

奈緒「臆病だつて、悪くないだろ! 自分から死にたいなんて言い出す奴なんて、そっちの方がろくでもないだろ!!」

李衣菜「それはそうだけど…。今までやってこれたじゃん!」

奈緒「いやだ! もう無理だ! 限界なんだ!! あたしは死にたくない! 死にたくないあい!!」

ヤシャ「ふつ、滑稽だな。死の危機に直面して、初めて恐怖に身が竦んだか!」

李衣菜「奈緒を馬鹿にするな! 奈緒だつて、ここまで一緒に戦ってきたんだ! それを嘲笑うなんて、許さないよツ!!」

ヤシャ「だが、そのお仲間は動けるのかな?」

李衣菜「奈緒、立って! 奈緒が動かなきゃ、ホントに死んじやうよ! みんな、ここまですて来たことが無駄になっちゃう! それでいいの!」

奈緒「…あたしは、李衣菜みたいに強くなつてなれない…。やりたい奴がやつてくれ…!」

李衣菜「くつ、奈緒…!」

「プラズマテンペスト!!」

ヤシャ「ぬっ!？」

倒れ伏したネオゲッター2とジャコツの間に入るように横から放たれたプラズマの旋風に、ジャコツは思わず飛び退いて避ける。

ヤシャ「おのれ…!奴等の新たなゲッターロボか！」

加蓮「プロト・ゲッター2。アーニヤ、助かったよ」

アーニヤ「救援に、来ました!リーナ、ナオ!カレンも、大丈夫…ですか？」

李衣菜「うん。私と加蓮は大丈夫…だけど」

アーニヤ「？」

茜「どうしたんですか?何かあったんですか!？」

美穂「奈緒ちゃん?どうして動かないの?」

加蓮「何でもないよ。リーナ、ネオゲッターを分離させるから」

ネオゲッター2を強制的に分離。

李衣菜「っ…!加蓮!」

加蓮「奈緒のネオジャガー号はオートパイロットにしたよ。すぐに合体して態勢を直さなきゃ」

李衣菜「加蓮!奈緒は…まだ!」

加蓮「アタシも、奈緒と気持ちは一緒だよ。アタシだって死ぬつもりなんてない。だ

から、生き残るためにやれることを全力でやらなきゃダメなんだ」

加蓮「色々、整理しなきゃいけない。落ち着いて話し合わなきゃいけない。けど、今やることはそれじゃない。ボルガを助けて、アーニヤ達と一緒に、あのストーカー紛いの將軍くずれをやつつける。臆病者を励まして、チャンスをあげる時間は、ないよ」

李衣菜「……」

加蓮「リーナがやらないなら、アタシがやる。それでいい？」

李衣菜「ううん。ネオゲッター3でアイツの相手をするのは、分が悪いよ。だから――」

李衣菜「ゲッターアーチエエインジツ!!」

ネオゲッターに合体し、着地。

ヤシャ「ようやくその気になったか」

李衣菜「奈緒をバカにしたこと、奈緒をこんな風にしたこと。絶対許さないから！」

ヤシャ「貴様らこそ、ストーカー紛いに將軍くずれとは言ってくれ。我が誇りを侮辱した罪、死を以て償うがよい」

加蓮「どのみち倒す気満々の癖に、何言ってるんだか。ゲッター飛焰こっちはもう大丈夫。かな子達の援護に向かつて」

アーニヤ「ですが……」

加蓮「相手は無敵戦艦ダイだよ。その相手の面倒臭さは、アーニヤだって知ってるはずでしょ」

アーニヤ「Да…そのとおりです」

加蓮「だったら、さっさと行く。こっちはネオゲッターで何とかするからさ」

アーニヤ「Я Понимаю…分かりました!頼みます、リーナ!」

李衣菜「言われなくつても、コイツー機くらい!」

奈緒「……」

加蓮「リーナ、バランサーは奈緒が頼りにならない。オートで何とかやって!」

李衣菜「分かった。私だって、死ぬつもりで戦ってるんじゃない…!だから、今回も

勝たせてもらうよ!」

ヤシャ「ふはははっ!相変わらず度胸だけは人一倍の奴よ!」

李衣菜「シオルダーミサイルツ!!」

ヤシャ「フンツ!」

李衣菜「やあああああツ!!」

シオルダーミサイルを青竜刀で切り伏せ、生まれた煙幕の中を、ネオゲッターがソードトマホークを構えて突き抜く。

ヤシャ「小手先を!」

李衣菜「小手先の小手先なら……！」

上体をソードトマホークで振り抜きながら、右足を軸に踏ん張り、左足をヤシヤの足に引つ掛ける。

ヤシヤ「ぬうん!!」

李衣菜「ここでえ……！」

ヤシヤ「ソードトマホークなど、見え透いた手を！」

李衣菜「チエーンナツクル！」

ヤシヤ「何っ……!!」

倒れ掛かかったジャコツにチエーンナツクルを巻き付ける。

李衣菜「うう……!! やっぱオートだとバランスがやりづらい!!」

加蓮「頑張つて! ある程度だったら、こっちで持ち応えるから!!」

李衣菜「へへっ、加蓮の方こそ頼んだよ。踏ん張り担当!!」

加蓮「無茶苦茶言ってくれちゃって……。でも、それこそアタシも踏ん張りどころだからね!!」

チエーンを限界まで伸ばし、腰を低く落として大雪山おろしのように、ジャコツを振り回す。

ヤシヤ「ぬうううう……!!?」

李衣菜「これで…どうだっ!」

勢いよく振り回したジャコツを、頭からシベリアの雪原に叩き付ける。

李衣菜「これで仕留められるくらい、楽ならいいんだけど」

ヤシャ「ふふふ…フフフフフ…!」

加蓮「痛め付けられて笑つちやつて、そういう趣味なら、遠慮してほしいんだけど?」

ヤシャ「面白い…!やはり貴様との戦いは面白いぞ!リーナ!」

李衣菜「あはは…!全然ありがたくないよ…!」

加蓮「ま、相手の主力がアタシらに向いてくれるのは良いことでしょ」

李衣菜「まあね」

ヤシャ「何を…!」

加蓮「アンタが戦闘指揮官に向かないところはね、そうやって、目の前のことしか見えてないところだよ」

李衣菜「私達は、この先も、この戦いの後の事も考えて戦ってる!」 ガツ

飛び掛かり、ジャコツを抑える。

ヤシャ「貴様…!何のつもりだ!?!」

李衣菜「私がアンタを止めて、ゲッター飛焰が来てくれた!これでもう、この戦いは

私達の勝ちだ!!」

ヤシャ「何を…。…ッ!」

加蓮「やあくつと、気付いた?」

李衣菜「あと30秒ちよつとで、20分が経つ!」

—。

クルー「艦長。ボルガ、変形準備完了しました」

スミノフ「うむ。各員、首尾はどうか」

クルー2「ボルガの損傷度は軽微。超ウエポン砲の使用に問題なし」

クルー3「各部チェック、異常なし。変形時隔壁口ック、確認」

クルー4「変形区画のクルーの退避、完了しています」

クルー5「高質量弾、第2、第3安全装置解除。最終安全装置は変形と同時に解除。現

在待機中」

スミノフ「無敵戦艦ダイとの距離は?」

クルー「およそ4000。この距離だと、高質量弾は無敵戦艦ダイを突き抜け、13,0000km先に着弾すると予測されます」

クルー2「ボルガの地形データを参照し、現在位置から13,0000km先に都市などの建造物はありません!」

スミノフ「…超ウエポン砲使用による影響は、ほとんどないと言っても良いか」

クルー「全て異常なし。艦長、指示を」

スミノフ「よし。総員変形時の衝撃に備え！」

クルー「総員、衝撃に備え！」

クルー「s「……………」」

スミノフ「全体、変形始めッ!!」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ…

アーニャ「!?!」

美穂「な、何の音!?!」

茜「地震ですか!」

ジャック「Wrong!!」

メリー「ボルガの変形が始まったのよ!」

茜「ボルガが、変形する!」

かな子「…山が、動いてるみたい」

シユワルツ「ボサツとしてんじやねえ!敵はまだ来てんだぞ!!」ダダダダッ

かな子「!?!——…変形中のボルガには、近付けさせません!ダブルトマホークツ!!」

ヤシャ「変形など、させるものか!」

李衣菜「おっと!」

ヤシャ「リーナ……！」

加蓮「アンタの相手は、アタシ達、なんでしょ？」

李衣菜「もうちよつと遊んでこうよ！そう焦らないでさ!!」

クルー「ボルガ、変形50%完了」

スミノフ「超ウエポン砲モード、始動!!」

クルー「艦長、無敵戦艦ダイが向かってきます！」

スミノフ「……!?!」

クルー3「ダイの全砲門がこちらに向いています!!」

スミノフ「奴め……あの距離から一斉砲火で圧倒するつもりか!」

美穂「ダイがボルガを砲撃するの……?それなら……アーニヤちゃん!」

アーニヤ「ハイっ!頼みます、ミホ!」

アーニヤ「オープンゲット!」

美穂「チェンジ、ゲッター3ツ!!」

プロト・ゲッター2からプロト・ゲッター3に変わり、ボルガと無敵戦艦ダイの間に

立つ。

ダイ『キシヤオオオオオンツ!!』

美穂「ナパームレインツ!!」

無敵戦艦ダイの一斉砲撃を、プロト・ゲッター3のナパームレインで迎え撃つ。

美穂 「くっくっくっ!」

ダイ 『キシヤアアアアッ!!』

茜 「火力は向こうの方が上!ですか!!少し押されているみたいですよ!」

美穂 「大丈夫だよ!私のゲッター3の武器は…!」

背部の2つ連なったシリンダーを伸ばしてキャノン砲に変形させ、指先もバルカンの発射口のように変形させて正面に向ける。

美穂 「ナパームだけじゃないんだから!!」

ギンツ

美穂 「フルバーストオ!!」

操縦桿のトリガー1つでプロト・ゲッター3に搭載された全ての火器を放ち、無敵戦艦ダイの砲撃を圧倒する。

美穂 「何とか押し切れた!」

茜 「あとは!」

アーニヤ 「Я с прощы…ボルガ!」

スミノフ 「…支援感謝する」

クルー5 「高質量弾、最終安全装置解除!何時でも行けますッ!」

スミノフ「うむ——」

上体を前に下ろし、城塞のように形を変えたボルガの内部から、更に長く巨大な砲身がダイに向かって伸びる。

スミノフ「——超ウエポン砲、発射アツ!!」

大地を揺るがす轟音。

ボルガの砲身から、重力も慣性も無視して放たれた高質量弾。一撃で無敵戦艦ダイの胴体を貫き抜け、予測した通り彼方へと飛んで光の粒となった。

ダイ『?!?!』

しかし!?!?!高質量弾が加速することによって生み出された衝撃によって、無敵戦艦ダイは内側から打ち砕かれ、破裂するように砕け散り、爆散した。

かな子「あれが、超ウエポン砲……」

シユワルツ「余波が来るぞ!構えろ!!」

美穂「きやつ……!ううつ……!?!」

無敵戦艦ダイを破壊した衝撃波がその場一帯に拡がってゆき、スーパーロボットやゲッターの装甲を震わせる。

茜「す、スゴい衝撃ですね……!」

アーニヤ「腕までビリビリ、します……」

茜 「しかし、流石はゲッター3です!何ともないですね!」

美穂 「う、うん…。ゲッター3は姿勢が安定してるから」

かな子 「うう…。こっちは尻餅着いちゃいましたよ」

ジャック 「大丈夫デスカ?立てますか?」

かな子 「は、はい。損傷はないですから」

ゲッターD2がゆっくりと身を起こす。

シユワルツ 「さて、後は残った雑魚共を蹴散らすだけだな」

ジャック 「折角なら、ダイのFireを囲って勝利の舞いでも踊りたいね!」

メリー 「油断しないで、兄さん。寄生タイプメタルビーストの事もあるわ」

ジャック 「心配はNothing!貧弱なEnemyなんて2秒でK.O.ダゼ!!」

シユワルツ 「余計なこと考えて尻込みするよか、前に出てとつと終わらせちゃった

方が気が楽だぜ」

かな子 「早く帰ってお菓子タイムにしましょう!」

茜 「そーですね!私も、ホスナーさん達のカレーが食べたいです!」

アーニヤ 「ミホも、Спасибо:ありがとうございました。あとは、またワタシ

が引き受けます」

美穂 「うん。分かった!——オープンゲット!!」

李衣菜「痛てて…。加蓮、そっちは大丈夫？」

加蓮「うん。とんでもない兵器だよ、その超ウエポン砲って奴」

李衣菜「下手したら真ゲッターのストナーサンシャインと同じくらいの破壊力だよ」
ヤシャ「ぬう…！ボルガを破壊できなかったとは」

加蓮「アンタがこっちに執着してなかったら、どうなってたかは分からないけどね」
ヤシャ「フンツ。やはりトカゲ共の遺した玩具などでは話にすらならんか」

李衣菜「逃げるの!？」

ヤシャ「作戦が失敗となれば長居は無用。貴様との決着も今着けるべきではないな」
李衣菜「そっちから喧嘩売ってきたくせに！」

ヤシャ「次はもつとまともな味方を乗せておくんだな」

李衣菜「何を〜！」

ヤシャ「メタルビースト部隊、後は任せるぞ！」

メタルビースト《——!!》

加蓮「こいつら、殿ってわけ？」

李衣菜「待て！逃げるなあ!!」

加蓮「リーナこそ待ちなつて。今のアタシ達でアイツを追っかけても仕方ないよ」

李衣菜「でも…！」

加蓮「感情的になれるのはリーナの良いところだけ。それで返り討ちにでもあったら堪ったもんじゃない。今は、落ち着かなきゃいけないよ」

李衣菜「…分かった」

加蓮「分かればよろしい。なら、後はアタシが片付ける。メタルビースト程度なら、ネオゲッター3でも余裕だしね。そしたら、かな子達と合流だよ」

李衣菜「うん…。頼むよ、加蓮」

加蓮「誰に頼んでんの。任せなさいって」

奈緒「……っ……っ……!」ブルブル…

李衣菜「奈緒…」

加蓮（何とか状況は凌げたけど、こっちは問題あり、か…）

加蓮「奈緒は、もう駄目かもね」

李衣菜「ダメなんて…!そんな事!」

加蓮「ないって言える? コックピットの中で震えてるのは、リーナじゃないんだよ」

李衣菜「……」

加蓮「戦っているのは、戦える人間だけ。ここまで来たからなんて、戦いを強制するつもりは、アタシにはないよ」

メタルビースト《——!!》

李衣菜「このっ……！」

加蓮「コイツらは相変わらず空気読まないんだから！」

操縦桿を握る手に、力を込める。

加蓮「今ちよつと立て込んでイライラしてるんだから……！容赦なくやらせてもらうよ！」

加蓮「——ゲッターチェンジッ!!」

つづく

第16話『戦う意味』

~~~~ 戦艦テキサス・メインブリッジ ~~~~

艦長「……まずは、貴公達が無事でいてくれて何よりだ。スミノフ艦長」

スミノフ『ですが、ボルガを守るためとは言え、多くの同胞の命を犠牲にしてしまいました。部隊を指揮する立場の者としては、結果を恥じるばかりです』

艦長「確かに。だが、ボルガは今後のランドウ攻略の要となる。貴官の部下達の犠牲は、決して無駄であつたわけではない」

スミノフ『自分もそう思えるよう、これからの戦い、全力で臨むつもりです』

艦長「こちらこそ。まさか補給まで受けさせてもらえるとは……」

スミノフ『ここは、ボルガの超ウエポン砲に使用する高質量弾の製造のために建造された秘密工場です。その為、これまでランドウの侵攻を受けることなく、我々の活動拠点となったのです』

スミノフ『尤も、今ではランドウに電力供給を断たれてしまったため、施設のほとんどの機能は使えず、高質量弾も製造できませんが……』

艦長「……。高質量弾……。それはあとのくらい残されているのかね？」

スミノフ『3発……。既にボルガに装填されている分も含めると、現時点で残されている高質量弾は、それだけです』

艦長「無駄にはできんな」

スミノフ『はい。使用する場合、可能であれば一撃で、仕留める必要があります。例え相手があのドラゴンターゲットであっても』

艦長「……」

スミノフ『現在、我々にとつて最大の障害となるのは、間違いなくドラゴンターゲット。艦長はじめからそのつもりだったのでしょう？』

艦長「……そうだ。移動要塞であるドラゴンターゲットは、ランドウの侵略作戦の要。それを攻略することが出来れば、今世界中に展開しているランドウの指揮系統をマヒさせることも出来よう」

スミノフ『連中の代表である筈のプロフェッサー・ランドウは、未だ蛇牙城から姿を見せてすらいませんからね。前線の指揮も侵攻も全て、配下の幹部に任せている』

艦長「うむ。彼に何の目論見があるかは、この際別にして、それこそが我々が付け入れる隙であるの間違ひはない」

スミノフ『勝ちましょう、必ず。それが、今この場にいる者使命だと感じています』



艦長「そうだな。これまでの、多くの犠牲を無駄にしないためにもな——」

くくく 格納庫 くくく

李衣菜「うわあ……」

美穂「スゴく……大きいね……」

アーニヤ「コレが、ボルガの пуля…弾丸、ですか？」

李衣菜「ゲッターと同じくらいあるんじゃないかな……。痛た…、首痛くなっちゃった」

リンダ「高質量弾。ロシアが極秘で製造した特殊金属で出来た、巨大な金属の塊よ」

李衣菜「リンダさん。キングダムの調整ですか？」

リンダ「ええ。細かい調整は、今しがた終わったところだけど」

美穂「それで、リンダさん。この…高質量弾っていうんですか？これが、金属の塊っ

て言うのは…。中に火薬とか、そういうのが入ってるんじゃないんですか？」

リンダ「ええ。高質量弾は、外側から内側まで気泡一つの隙なく製造された塊なの。

それを、質量兵器として撃ち出すのよ」

美穂「質量兵器……」

リンダ「あら、かわいい顔して、そういうのに興味があるのかしら？」

美穂「え、ええ…つと、私のゲッター3は、砲撃戦も出来るから、ちよつとだけ気に

なるというか……」

リンダ「何なら、これから私の部屋でゆっくり仕組みを教えてあげてもいいのよ？こ  
う……手取り足取り、ね」

美穂「え、遠慮しておきます……」

アーニヤ「アー、ミホは、奥ゆかしい……ですネ？」

李衣菜「いや、こういう場合は……ちよつと違う気もするけど……。要するに、超ウエポ  
ン砲って、結局はおつきな大砲ってこと？」

ボブ「そう言うこと。高質量弾の重さと、ぶつかった時の衝撃で目標を破壊する大  
砲って訳だ」

李衣菜「へえ……。名前と機構の割りには、仕掛けは単純なんだね」

サム「おおい。シンプルイズベスト、だぜ。単純をバカにするなよ」

リンダ「それより、何で貴方達がここにいるのよ？」

サム「ああ、この拠点からの補給物資の搬入の手伝いをな」

ボブ「こんな時こそ、俺達のロボ・ストーンのパワーが役立つってもんよ！」

リンダ「確かに。貴方達のマシンって、工事現場とかにありそうなものね」

ボブ「俺達のロボ・ストーンはロードローラーじゃねえっての！」

李衣菜「あははっ。けど、この高質量弾って、結構スペース取るよね」

サム「そりゃあ、ロボット1機分くらいあるからな」

美穂「ロボットの修理用の機材とか弾薬で、何だか格納庫もモノが溢れてるような……」  
サム「他に置場所もねえからなあ。次の補給が何時になるかも分からねえ以上、この拠点に物資を置いてくつて選択肢もねえし」

ボブ「どうせ使や無くなるもんだ。ちよつとくらいは我慢しようぜ」

李衣菜「うくん……。あの、奥の使つてないハンガーとかは？」

ボブ「あん？ああ、あそこは使つてない訳じゃないぜ」

李衣菜「そうなの？」

リンダ「確か、ステルバーの予備機があつたわよね」

李衣菜「そうだったんだ。ずっと誰もあそこには行かないから、もう使つてないのか  
と思つた」

ボブ「ああ……。別に予備機つて訳でもねえんだよ。あれ」

李衣菜「え？じゃあ……」

サム「あれは、一番はじめのステルバーなんだよ」

アーニヤ「一番はじめの……ですか？」

ボブ「おう。ゲッターだつて、リーナのネオゲッターが始まりじゃねえだろ？嬢ちゃ  
ん達のゲッターロボ飛焰だつてか？あれもプロトタイプつってたら。要はそう言う

こつた」

李衣菜「ステルバーのプロトタイプ…」

美穂「でも、どうしてそんなのがこの戦艦に？誰も使つてないんですよ？」

ボブ「ま、それはシュワルツのもんだからな。俺達にはよく分かんねえな」

李衣菜「シュワルツのなんだ。私物を置いてるつてこと？」

サム「簡単に言つちまえば、そうなるかもしれねえが…」

アーニャ「…？」

ボブ「元々、ステルバーは2人乗りだったんだ。それが、テストパイロットとしてステルバーの開発に関わつてたシュワルツの意見で1人乗りになった」

サム「その間にや、百鬼帝国との戦いがあつて、今ここにいるのはアイツが1人だけだ。それで何となく分かんねえか？」

美穂「あ…」

ボブ「あのステルバーは、シュワルツの相棒の忘れ形見つてトコだな」

サム「今でもたまに、アイツが一人で整備してる。整備班の奴等には、誰にも手を触れさせない。だから誰も、奥のハンガーには近付かねえんだ」

李衣菜「成る程、そんな事情があつたんだ…」

美穂「でも、ボブさん達は どうしてそれを？」

ボブ「何があつたのかは、俺達も詳しくは知らねえ。だけど、試作段階のステルバーとは、テストで何回か模擬戦することはあつたからな」

サム「だから、2人乗りだつてのは知つてた。後は、何となく察しただけさ。今のお前達みたによ」

リンダ「…何かと思えば。以外と女々しい男だつたのね」

李衣菜「り、リンダさん…。そんな言い方はないんじゃないか…？」

リンダ「私だつて、欧州で多くの同胞を亡くしたわ。だけど、それがいくら大切な人だからって、仲間の死にいつまでも引つ張られてるようじゃ、ダメなのよ…！」

ツカツカ…

美穂「あつ、リンダさん…！」

アーニヤ「…行つてしまいました、ね…」

サム「アイツも、欧州で色々あつたみてえだな」

ボブ「ま、戦争状態だしな。不幸自慢だったら何処にだつて山ほどあるだろうぜ」

李衣菜「……」

ボブ「だからこそだぜ、リーナ」

李衣菜「え？」

ボブ「シユワルツの野郎が、お前達にキツく当たんのも、そう言う理由があるんだろ

うぜ。仲間は大事だが、それだけ失ったらトンデモねえ反動を喰らっちゃまう」

ボブ「だから強くならなきゃならねえ。パイロットとしての腕も、心もな」

李衣菜「うんっ、分かったよ！」

美穂（心も強く、かあ……。私は、どうなんだろう？もし、茜ちゃんや、アーニヤちゃんか……）

美穂「……っ」ブルツ

アーニヤ「ミホ」

美穂「あ、アーニヤちゃん……」

アーニヤ「心配、しないでください。ワタシも、アカネも、ミホを悲しませるようなこと、絶対なりません！」

美穂「うん……っ」

『——格納庫に、ゲッターD2が着艦します。出入り口付近の作業員は直ちに待避を。繰り返し——』

ボブ「？何だあ？」

李衣菜「お、やつと来たみたい」

サム「やつと来た？どういうこった？」

李衣菜「ありがとうボブ、サム。いい話を聞かせてくれて」

ボブ「あん?…おお」

李衣菜「私ちゃんとやるよ! 仲間悲しい思いをさせないために、辛い体験をさせないために! その為に——!」

—— 格納庫、出入り口付近。

凜「——…っと。わざわざありがとね、かな子」

かな子『いえ…。晶葉ちゃんに頼まれたこのコンテナを、テキサスに搬入するついででしたから』

凜「確か、ネオゲッター用の新しい武装だっけ?」

かな子『そんな感じで言っていましたね。これからの戦闘に備えてって、ネオゲッター1用のしか、用意できなかったみたいですけど』

凜「これだけの短時間で、用意してくれただけでも十分だよ。後はこっちで整備班の人達に渡しておくから」

かな子『よろしくお願ひします』

凜「うん。それじゃ」

かな子『クジラの方が少し寂しくなっちゃいますね』

凜「止める人がいなくなっちゃったからって、お菓子の食べ過ぎはダメだからね?」

かな子『わ、分かってますよお!』

凜 「ふふっ。それじゃ、卯月をよろしく」

かな子『はい。私が気にするのも可笑しいですけど、凜ちゃんも気を付けてください』

凜 「うん」

かな子『——マツハウイング!!』

凜に背中を向けて、直ぐに飛び立っていくゲッターD2。

李衣菜「おーいっ!」

凜 「李衣菜。わざわざ出迎えに来てくれたの?」

李衣菜 「格納庫で作業手伝ってたからってのもあるけど、まあそんなトコ」

凜 「ふうん。これからよろしくね」

李衣菜 「こつちこそ。凜になら、私も安心してネオゲッター2を任せられるよ」

凜 「期待に応えられるように、出来る限りのことはするよ。∴加蓮の姿が見えないけど?」

李衣菜 「今は、奈緒に付いてるよ」

凜 「奈緒に? そうなんだ」

李衣菜 「凜も奈緒に挨拶していく?」

凜 「いや、今はいいよ。それより、ゲッターのところに行こう」

李衣菜 「ゲッター?」



凜 「うん。今のネオゲッターは、李衣菜達に合わせた仕様になってるって聞いたし。奈緒の癖がどんなものなのか、実際に触ってみて確認したいんだ。このコンテナを、整備班の人達に渡さなきゃいけないし」

李衣菜 「コンテナ？それなら作業用のビイト使わせてもらおうか。ちよつと待って」

凜 「あと出来れば、実際に加蓮も入れて3人で動きを合わせてみたいけど……」

加蓮 「どうも、そつちは無理っぽいね」

李衣菜 「加蓮！奈緒の方はもういいの？」

加蓮 「付いてたつて、向こうは部屋に籠ったきりでこつちの呼び掛けには応えてくれないんじゃないか、これ以上アタシに出来ることはないかな？」

李衣菜 「そつか……、加蓮でもダメなんだ」

凜 「今戦つてる私達が接しても、逆効果かもね」

加蓮 「凜の言うとおりかも。今は少しでも、一人で考える時間をあげた方がいいかもしれない」

李衣菜 「ちようどいい相談役、かあ……」

凜 「こんなところに、プロデューサーだつていないのにね」

加蓮 「無いものねだつても仕方ないでしょ。それより、パイロットは20分後に、ブ



加蓮 「だから言ったじゃん。確認はそこそにしといてって」

凜 「ごめん……。確認作業に集中しすぎちゃって……」

艦長 「ゴッホン！ネオゲッターチームの諸君？」

李衣菜 「え……。あははは……。艦長……。ごめんなさい」

艦長 「君達の事情は察しているが、急場凌ぎのチームをまとめるのと、ブリーフィングに遅れることは別の問題だ。分かるね？」

李衣菜 「はい……」

艦長 「なら、早く着席したまえ」

李衣菜 「はい……」

凜 「ごめんなさい……」

加蓮 「……ごめんなさい」

ジャック 「Oh, リーナ」

李衣菜 「ん？何、ジャック」

ジャック 「OUT!!」

李衣菜 「アウトかあ……」

副長 「早く席に着かんかあ!!」

艦長 「ゴホン……。さて、改めて全員揃ったところで、ブリーフィングを始めよう」

「……」

艦長「それと、今回はボルガのスミノフ艦長と、クジラのクルーとも通信を介して参加してもらおう」

スミノフ『よろしくお願いします』

晶葉『よろしく』

凜（クジラの代表は晶葉なんだ…）

艦長「では先ず、我々の攻撃目標だが、皆も大方見当が着いているとは思いますが、ランドウの移動要塞・ドラゴンタートルだ」

ボブ「遂にその時が来たって訳か…！」

艦長「今、我々が駐留しているこの秘密工場の位置はここ、ウラル山脈を臨む、北緯およそ65度、東経63度の位置。そして、目標であるドラゴンタートルは、ここからさらに南下した、通称・中部ウラルと呼ばれる場所に身を潜めていると推測される」

リンダ「以外と、近場にいたのね」

スミノフ『連中はボルガの破壊を目論んでいました。その為、直ぐに増援を送り込める位置で、こちらの動きを捉えていた可能性があります』

艦長「ボルガの超ウェポン砲が、ランドウにとっても驚異であることに違いはない。それ故、高質量弾製造工場を機能不能としたのだからな」

シユワルツ「だが、肝心のボルガの破壊には失敗した」

サム「そうさ！俺達が守ってれば、そうそう破壊させはしないぜ！」

艦長「うむ。ドラゴンタートル攻略に、ボルガの存在は大きな要となる。しかし、相手はあの巨大要塞だ。超ウエポン砲のみで、簡単に破壊できるとも限らん」

艦長「よつて、ドラゴンタートルの攻略は、ボルガとこの戦艦テキサスのドーバー砲による波状攻撃による破壊を試みる」

美穂「テキサスのドーバー砲……！」

茜「ロシアとアメリカ、お互いに切り札を出し合うと言うことですね！！」

艦長「その通りだ。我々アメリカと、ロシアが誇る二大の超兵器で、ドラゴンタートルを圧倒する」

ボブ「コイツあ…、トンデモねえ戦いになりそうだぜ……！」

ジャック「That's right! テキサスまで前線に出るんだからね。これはHardな戦いになるぜ！」

李衣菜「テキサスが、前線に……」

艦長「そうだ。我々テキサスはもちろん、ボルガも、ドラゴンタートルをその有効射程距離に納めるため、ドラゴンタートルとは距離を詰める必要がある」

晶葉『当然、敵も黙っていないわけだな』

艦長「ドラゴンタートルの正面には、その護衛を務めると思われる艦隊が配置されている。これがその映像だ」ピッ

アーニヤ「これは…」

ボブ「これが護衛艦隊だって？ハハッ、何かの博覧会の間違いじゃねえのか？」

サム「そうじゃなきゃ、トカゲ共と百鬼帝国の兵器の中古市だぜ！」

晶葉『恐竜帝国の艦船型メカザウルス…確か、グダと言ったな…。それに、百鬼帝国のメカ要塞鬼と。頭数だけは十分に備えてきているな』

艦長「既存戦力だからと侮ってはいかん。機動戦力にはメタルビーストも配備され、その総戦力は、一国家の軍事戦力に匹敵すると言っている」

美穂「そ、そんな規模の戦力が、ドラゴンタートルを守ってるんですか…？」

李衣菜「何だかクラクラしてきた。スケールが大きすぎて付いていけないよ…」

加蓮「こんなところでクラクラしてる場合？アタシ達はこれから、その頭が痛くなる戦力を目の前にして戦い行くんだから」

李衣菜「…奈緒じゃないけど、ちよつと逃げ出したくなってきたかも」

シユワルツ「だったら尻尾巻いて日本に帰んな。ゲッターが1機抜けたところで、別に困りゃしねえよ」

李衣菜「ははっ。日本の領空にもいる、ランドウの航空戦力を相手にするくらいなら、

ここで踏ん張ってた方がマシだって」

メリー「ジョークを言えるくらいには、余裕ってことね」

シュワルツ「…フン」

艦長「作戦の概要はこうだ。我々、戦艦テキサスとボルガは、ウラル山脈を沿うように移動し、ドラゴンタートルに肉薄する」

ジャック「H H A H A!! 向こうの連中も、こつちの狙いを掻い潜るためにウラル山脈に入ったんだろうが、お陰でこつちも有利に F i g h t できマースね！」

李衣菜「どういう事？」

スミノフ『中部ウラルは、ウラル山脈の中でもその標高が6000から9000と、標高の低い山が連なっているポイントです』

スミノフ『この地形を上手く利用して戦えば、山を遮蔽物にして身を隠しながら、ドラゴンタートルに接近することは容易です』

李衣菜「向こうもどつからテキサスやボルガが出てくるか分かんないって事？」

凜「それだけに、失敗は許されねえ」

艦長「そう。まさしくこれは、ドラゴンタートルを攻略する千載一遇のチャンスなのだ」

加蓮「でも、ウラル山脈を縫うようにして移動するってことは、それだけ時間も掛かつ

ちやうつてことだよね？」

アーニヤ「ボルガ、は超ウエポン砲を使うための、変形時間もありません」

凜「その間、ボルガは無防備になるし、そもそもドラゴンタートルをウラル山脈から離脱させることにもなる……」

副長「そこで、君達機動部隊の出番なのだ」

艦長「テキサスとボルガが、ドラゴンタートルに到達するまでの間、そして、ボルガが超ウエポン砲発射態勢に移行するまでの間、機動部隊は持てる戦力を以てドラゴンタートルの足止めを行う」

李衣菜「……私達、だけで……？」

ボブ「それって大体どれくらいの時間が掛かるんだ？」

シユワルツ「さあな。一時間で終わりやあ良いところ。ボルガとテキサスの到達が遅れりや、二時間でも三時間でも出来る限りだろうよ」

凜「どのみち長期戦は必死って訳だね」

艦長「先も言ったとおり、これは我々の最大のチャンスなのだ。ドラゴンタートルをウラル山脈から出すわけにはいかない。そして、我々の動きを気取られる訳にいかない。これは、陽動も兼ねた強襲作戦でもある」

加蓮「でも、スーパーロボット軍団とゲッター軍団。2つの火力を集めてもドラゴン



ターゲットを止められるの？」

晶葉『不可能……ではないだろうな。真ゲッターロボは今回の出撃には間に合わんが、それでも、それに匹敵する性能をもったゲッター飛焰がいる』

茜「私達の出番ですか!!」

晶葉『あくまで目的が破壊ではなく、足止めならば、或いは』

リンダ「ここでごちやごちや考えても仕方ないわ。コンマ一秒でも可能性があるなら、今はそれに賭ければいいじゃない」

李衣菜「私達が話し合っているこの瞬間にも、ドラゴンターゲットは移動してる……!」

艦長「ここに集まった諸君らには、素早い行動力と、迅速な対応力が求められる。ネオゲッターロボ、テキサスマック、ステルバーなど、飛行能力を有した機体は直ちに発進。キングダム、ロボ・ストーンの飛行能力を持たない機体はクジラに乗艦し、作戦エリアまで移送、展開せよ!」

サム「マジに全戦力を投入すんのか!」

ボブ「ボルガとテキサスの護衛はいらないのかよ!」

艦長「敵の待ち伏せや伏兵を意識している余裕はない。テキサス、ボルガの双方が会敵しようとも、何としても敵の包囲網を突破し、作戦を強行する」

スミノフ『その分、持ちうる戦力は全力で、ドラゴンターゲットの足止めを頼む』

艦長「この作戦には、我々の今後の趨勢が掛かっている。我々がランドウを妥当するに相応しい戦力となり得るか……。この作戦を成功させられなければ、我々に未来はない！」

「「……………」」

艦長「死力を尽くした戦いである！故に死ぬなどは言わん。だが、生き残れ！それが、今回の作戦の最難関とするミッションである！」

「「……………」」

艦長「返事は!?!」

「「——了解っ!!」」

艦長「よしっ！各員配置につけ！今から十分後に作戦を開始する。スーパーロボット部隊出撃と同時にテキサスは機関最大。ウルル山脈を抜け、ドラゴンターゲットに肉薄する——!!」

——。

ボブ「サム、俺らは急ぐぞ！これから空中にいるクジラにロボ・ストーンを積みこなきやいけねえんだからよ！」　ダッ

サム「パーティに仲間外れはごめんだぜ！」　タタッ

メリー「それじゃありーナ、またこうして、顔を合わせて会えるといいわね。お互い

頑張りましよ」

ジャック「Good bye. は言わないぜ! Good Luck! リーナ!!」

李衣菜「くうく! 艦長も気合い入ってたし、いよいよって感じがしてきたね!」

加蓮「そう言うリーナも気合い入りまくりでしょ?」

李衣菜「まあね。作戦が上手くいくかなんて分からない。けど、今日の私の戦いで、きつと何かが変わる気がする! これこそ正にロックだよ!!」

加蓮「気合いが空回りして、可笑しなミスしないでよね?」

李衣菜「ははっ、肝に命じて、気を付けるよ。…ん?」

凜「……」

加蓮「凜、どうかした? 何か悩みでもあるの?」

凜「…ごめん。2人は先に行つてて」

李衣菜「え? 凜は?」

凜「やつぱりちよつと未練出てきちゃったから。奈緒に挨拶してくる。それだけ」

加蓮「ふうん…。分かった。行こ、リーナ」

李衣菜「ええ…。でも、それなら一緒に…」

加蓮「アタシらが先に行つて、ゲッターを何時でも出撃させられる状態にするんでしょ。今度は作戦開始時間に遅れる気?」

李衣菜「わ、分かったよ…。分かったからそんな引つ張らないでって…！」

凜「……」

—— ネオゲッターチーム相部屋。

コンコン

「……」

凜「奈緒？ 入るよ」

キイ… バタン

「……」

凜「奈緒？」

「……んだよ」

凜「……」

「何だよ…。お前も笑いに來たのか？」

凜「そんなこと、するわけないじゃん。大事な作戦前だから、奈緒の顔を見たくなくなっただけ。だからほら、布団から出てきてくれると、嬉しいかな」

ゴソゴソ…

奈緒「……」

凜「テキサスは本格的にドラゴンターゲットに攻撃を仕掛けるって。ここにいても、

安全じゃなくなるかもしれないね」

奈緒「だから、何だよ。ここよりゲッターのコックピットの方が安全、って言うつもりか？ そんなのあるわけないだろ」

凜「それは分かっている。奈緒のネオゲッター2は、私が預かるから安心して」

奈緒「ああ。凜なら、あたしのクセがついたゲッターでも問題なく操縦できるだろうさ。何たって、凜はあたしと違って、一年も長くゲッターに乗ってるんだからさ」

凜「……」

奈緒「話は終わりか？ だったらもう出てってくれよ……」

凜「ううん、話は……」

奈緒「あたしの事、情けない奴だって、思ってるだろう？」

凜「……。そんなこと、思うわけないよ。奈緒だって、ここまでよく頑張った。情けなくなんてない。奈緒のことを笑う人間がいたとしたら、私は絶対許さない」

奈緒「やめてくれよ。そうやって同情されると、余計惨めな気持ちになる。自分でも分かっているんだ。都合のいい時だけ調子よくて、一回失敗すると、全然何も出来なくな……」

凜「別に、何も出来ない訳じゃないよ」

奈緒「え……？」

凜 「奈緒がゲッターから降りてくれたから、出来る頼み事がだってある」

奈緒 「頼み事って…なんだよ」

凜 「もし私に何かあったら、ハナコのこと、お願い」

奈緒 「はあ!?!お前、何言ってるんだよ!」

凜 「お願い。だって、ここには、こんなこと頼めるのは、奈緒しかいないから」

奈緒 「だからって…。凜が飼ってる犬だろ!自分で責任くらいとれよ!」

凜 「今回の作戦は、大掛かりな作戦だ。こつちの少ない戦力で、一国家の軍事力に匹敵する戦力の相手と戦わなくちゃいけない。命を懸けることになる」

奈緒 「……」

凜 「そうなったら、奈緒の言う責任は取れないかもしれない」

奈緒 「何で…。何でそんなにまで命懸けてやる必要があるんだよ?…あたし達は、アイドルなんだぞ!」

凜 「アイドルだったら、何?」

奈緒 「何って、お前…」

凜 「ううん、違う。アイドルだから、今が命を懸ける時なんだ」

奈緒 「意味分かんないよ…!そこまで戦う意味って、何だよ…」

凜 「当たり前、メカザウルスにも百鬼メカにもメタルビーストにも、インベーター

にも怯えなくていい。みんなが何にも心配しないで、笑顔で、全力を出せるステージを取り戻すためだよ」

奈緒 「それで凜にもしものことがあれば、何の意味もないんだぞ……？」

凜 「意味がない訳じゃない。私は、みんなのステージを取り戻せるんだから」

奈緒 「そんなのに意味なんてないだろ！凜が頑張つて、凜が取り戻したステージなのに、そこに凜がいないなんて！そんなの理不尽だろ!？」

凜 「奈緒……」

奈緒 「どうしてそこまで他人のことで精一杯になれるんだよ！少しは自分のことに気を遣えよ！死ぬのが怖くないのかよ！」

凜 「死ぬのが怖くないなんて、あるわけない！」

奈緒 「……っ！」

凜 「……死ぬのが怖くないわけがない。李衣菜だつて、震えてた」

奈緒 「……り、李衣菜……が？」

凜 「拳を握つて、怖さに耐えて。強がりと言つて、気丈にしてみた。多分、ずっとそうだったんじゃないかな」

奈緒 「……」

凜 「戦闘中でも軽い話をして、ロククつて言葉で自分を勇気づけて。そうやって今

も、自分と戦ってる」

奈緒「アイツが…」

凜「きつと、みんなそうなんだよ。誰だって、自分の中にある恐怖と戦ってる。でも、誰だって恐怖と戦える訳じゃない」

凜「だから、世の中には『守る』って言葉があるんだと思う。だから、奈緒は生き残って」

奈緒「凜…っ！」

凜「もう時間がない。私は行ってくる。必ず、奈緒の未来は守ってせるから…！」  
ガチャツバタンツ タタタツ

奈緒「……」

—— 格納庫、ネオゲッターロボ・ハンガー。

凜「ごめん、遅れた」

加蓮「凜おそ〜い」

凜「遅れた分はきつちりと返すから。それより、晶葉から届いた武装の調子はどう？」

李衣菜「ああこれ？ハンデイミサイルクヤノンって言う奴…。後付けだけど、変形に支障ないのかな？」



整備班長「そこは、アンタらのゲッター開発担当者が作ったんだから心配要らねえだろ」

李衣菜「チーフ！すいません、こんな忙しい時に、仕事増やしちゃって」

凧「……めんなさい」

班長「ハハハッ！何、良いってことよ。それより、この新兵装はそっちの操作一つでパージ出来るようにしてある」

李衣菜「そうなの？」

班長「今回は長期戦だ。弾がなくなったら、遠慮なく切り離して、格闘戦が出来るようにしてくれ」

李衣菜「分かりました！……じゃあ、このゲッターの体のあちこちに付いてるバッテリーみたいなの……」

班長「見た目のとおり、予備エネルギーだ。一応、分離しても問題にならねえ位置には付けてあつから、お前達の戦闘の邪魔になるような事もねえはずさ」

加蓮「攻撃受けちゃったら誘爆しない？」

班長「そんな時はそんな時だ！今から心配すんな！」ガハハッ

加蓮「……戦場のど真ん中で、動けなくなるよりはマシかあ」

李衣菜「とにかくありがとう、チーフ！遠慮なく使わせてもらいます！」

加蓮「ホント、完全プラズマ駆動の名ばかりゲッターだからね」

凜「戦闘中にエネルギーを補給できるのはありがたいね。問題は、その暇があるかどうか」

李衣菜「実際戦いながら考えるよ。さ、シユワルツ達も待たせておけない。出撃するよ！」

ネオゲッターが一步、ハンガーから足を踏み出して、発進口を目指す。

凜「李衣菜、テキサスを出たら、ゲットマシンに分離して、その後しばらくはゲットマシンで維持だよ」

李衣菜「え、何で？ネオゲッター2にチェンジした方がいいんじゃないの？」

凜「それだと、死角から襲撃されたら、多角的に対応できないから」

李衣菜「たかくてき？」

加蓮「凜は、こっちがドラゴンタートルに着くより先に、向こうから仕掛けてくるって思ってる？」

凜「向こうの情報がこっちに流れてる以上、逆もまた然り、って事もあるから」

加蓮「確かに。寧ろ今の状態で、敵がこっちを襲ってこないのも、可笑しな話だよ」

凜「ウラル山脈を抜けるのを優先してるのかも。でもそうすると、今のところ全く

速度を上げていない理由が分からない」

加蓮 「罨があるかもしれない？」

凜 「そうかも。何にせよ、警戒するに越したことはないよ」

李衣菜 「えーつと…」

加蓮 「だって。分かった？リーナ」

李衣菜 「あ、え…あー、うんっ。あははっ」

凜 「ランドウは必ず襲ってくる。それが空からなのか、地上からかは分からない」

加蓮 「だから、ゲットマシンの状態で、どこから出てこられてもすぐ対応できるようにするんだってさ」

李衣菜 「成る程…」

加蓮 「もう、この三人で出撃するのははじめてなんだから、しつかりしてよ」

凜 「今回は今までと違って、出てきた敵を迎え撃つ訳じゃない。こっちから打って出るんだ。敵がどう動いてくるか分からないんなら、警戒は怠れないよ」

李衣菜 「そ、そうだね…。あはは…」

李衣菜 「…奈緒がいないと、この2人は、やりづらいなあ〜」 トホホ…

発進口の前まで到達する。

凜 「…生きて帰ろうね、絶対」

加蓮 「何言ってるの。当然でしょ、そんな事」

李衣菜「こんなところで終われない。私は絶対、もう一度なつきち達と同じステージに立つんだ！その為にも……！」

李衣菜「ネオゲッターロボ、出撃します！」

ダッ

李衣菜「オーブンゲットオ!!」

テキサスを飛び出すと同時に分離して高度を上げる。

李衣菜「あ、ハンデイミサイルキャノン、しっかり収納されてる。それにしても、ゲッターマシンでの安定飛行とか、だいぶ久しぶりだよ」

加蓮「何時も合体する時しか使わないしね」

李衣菜「ちゃんと飛ばせるかなあ。えーっと、どの計器が何なんだっけ？」

加蓮「…はあ」

凜「作戦空域に着くまで墜落しなきゃ大丈夫だよ」

シユワルツ「ようやく出てきやがったか」

ジャック「重役出勤、お疲れさまデース！」

李衣菜「みんなー！待たせてごめん！」

凜「ロボ・ストーンの積み込みは終わった？」

晶葉『ああ。ゲッター2機がかりで持ち上げて、何とかな』

みく「戦闘前に大仕事した気分だにや〜」

美波「本当：。ゲッターの関節、可笑しくなっていないかしら」

ボブ「へへっ、すまなかったな。嬢ちゃん達よ」

シユワルツ「とつとと行くぞ。これ以上時間は延ばせねえ」

橘『うむ。クジラ、加速開始！』

晶葉『ネオゲッターチームとテキサスマック、ステルバーとゲッターD2はクジラの周囲を警戒しながら付いてきてくれ』

シユワルツ「分かってるよ」

ジャック「OK！ 任せてくだサーイ!!」

卯月「ようやく私の出番です！ 頑張りますよ！」

晶葉『：：なあ、凜。ホントに良かったのか？』

凜「卯月をD2に乗せたこと？ 晶葉が造ったリミッターは、今も順調に動作してるんでしょ？」

晶葉『それは、そうだが：：』

凜「戦闘が激しくなるのは、目に見えてるからね。1号機の操縦に慣れてる卯月が乗った方が、リスクは少ない」

晶葉『：：そうかもしれないな。分かった。すまないな、可笑しなことを聞いて』

凜 「気にしないで。それよりも今は、目の前の作戦に集中しようよ」。

李衣菜 「——…だんだん真下の山の高さが低くなってきた…かな？」

加蓮 「飛行距離的には、そろそろその、中部ウラルに入るくらいだね」

李衣菜 「ウラル山脈の周りって、比較するものが少ないから、どの山が大きいのか小さいのかもよく分かんないや」

橘 『警戒中の各機、周辺に異常はないか？』

李衣菜 「つと、上空は大丈夫ですよ」

卯月 「後ろの方も、特に変わったものは見えませんか！」

ジャック 「右舷側、No, Problemだぜ！」

シュワルツ 「左舷側、特に異常は……ん？」

李衣菜 「シュワルツ、どうかした？」

シュワルツ 「——…チツ！」

素早く、クジラの真下へ回り込んだステルバー。直後、ステルバーの右胸部の装甲が弾ける。

凜 「敵襲!?!下から…!」

橘 『地中から襲撃してきたようだな。ステルバーが庇ってくれなければ、本艦に直

撃コースだった』

メリー「地中の敵は、地上からソナーじゃないと探知できない…。そこを突いてきたって訳ね」

シュワルツ「クソツ！」

「クククツ…。ボルガを戦力に加えた貴様らが、短期決戦に持ち込んでくることなど、手に取るように分かるわ」

瑞樹『分かるわ!?!』

みく『瑞樹さん、今はみく達の出ている状況じゃないにやあ!』

加蓮「コイツ、アラスカでも襲ってきた…」

シュワルツ「テメエ…!」

ランバート「アラスカの時の答えは出たか? シュワルツ。今はそんなこと、どうでもいいがな」

シュワルツ「ランバートオ!!」

李衣菜「ランバートって…? 向こうのパイロット、知り合い?」

ボブ『さつき格納庫で話したろう! 元々のシュワルツの相棒だ!』

李衣菜「えっ!?! でもその人って確か…」

加蓮「そりゃ、ランドウのことだもんね。無理矢理生き返らせて、利用してるんで

しよ」

ランバート「利用されているのではない！」

李衣菜「！」

ランバート「ランドウ様は気付かせてくれたのだ。生前の私の愚かさを。そして私に、この素晴らしい力を与えて下さったのだ！」

凜「…考えもバツチリ教育済みって訳」

ジャック「But、これでシユワルツが苛立つてたReasonも分かるってもんだぜ」

ランバート「貴様らをドラゴンタートルに近付かせるわけにはいかん。別行動をとったテキサスとボルガも、今頃別動隊の攻撃を受けている頃だろう」

凜「やつぱり…。こっちの想定通りか」

ランバート「貴様らにとって想定外となるのは、これから貴様らは敗北すると言うことだ」

李衣菜「何をく！やれるもんならやってみる！」

加蓮「アタシ達だって、負けられない理由で、勝算の低い作戦に臨んでるんだ。アンタがここで何と言おうと、アタシ達の役割は果たさせてもらうよ」

ランバート「どこからでも掛かってくるがいい。お前達にも教えてやる。正義や理想



などと生温い感情で戦っても、何もならない現実と言うものを」

李衣菜「だったら、私だって思い出させて上げるよ！正義や理想の大切さ、それを守るために出来る力って奴をね——！」

つづく

# 第17話 『生命を賭ける前哨戦』

~~~~~ ドラゴンタートル 司令室 ~~~~~

ヤシャ「ラセツウツ!!」

ラセツ「これはこれは、ヤシャ將軍。…いえ、元でしたか。ランドウ様からも信用を失い、ドラゴンタートルを降ろされ、前線送りにされた貴方が、今更ここに何用か?」
 ヤシャ「どうもこうもない! テキサスは目前まで迫ってきているのだぞ!? 何故ドラゴンタートルの速度を上げぬのだ!」

ラセツ「何を言うかと思えば。獲物が自らその首を差し出しに向かってくるのだぞ? 功を立てる折角の好機をみすみす見逃せと言うのか?」

ヤシャ「ドラゴンタートルは、このままロシアを抜けて、ヨーロッパを侵攻中の大隊と合流する手筈だったはずだ」

ラセツ「では、貴公は今再び、ランドウ様に恥の上塗りをしると、そう仰られるのか?」

ヤシャ「何…っ!?」

ラセツ「ボルガを戦力に加えたとはいえ、所詮はにわか仕込みの烏合の衆…。そのよ

うな有象無象を相手に、このドラゴンタートルが背を向けたとあつては、ランドウ様の侵攻作戦に影を落とすことにもなりかねんだろう?」

ヤシャ「大局を見て物を言えつ!! 連中が何の策も無しに飛び込んでくるわけがなからう! 手痛い反撃を受けて、ドラゴンタートルが行動不能となれば、結果は同じだぞ!!」

ラセツ「敵の考える手など、たかが知れているだろう? 奴等がドラゴンタートルを落とすにはボルガの超ウェポン砲と、テキサスのドーバー砲に頼るしかない。逆に言えば、そのどちらかを破壊しさえしてしまえば、連中の思惑は潰える」

ヤシャ「ドラゴンタートルの速度を上げる。ラセツッ!」

ラセツ「…イヤだと言つたら?」

ヤシャ「……」

ランドウ兵「「……」」 ザツ

ラセツ「ほう…。貴公もはじめからそのつもりでおいでか」

ヤシャ「全ての者が、貴様に従っているわけではないぞ。ラセツ!」

ラセツ「私を撃つて、このドラゴンタートルを奪い返すつもりか」

ヤシャ「私は、我が命の創造主たるランドウ様に絶対の忠誠を誓っている。ランドウ様の覇業の妨げとなるものは、何であろうと排除する。獅子身中の虫には、ここで消えてもらおう!!」

ラセツ「愚か者が……！忠誠を示すだけでは戦には勝てぬぞ！！」
ヤシャ「撃てえッ！！」

ランドウ兵「二——！！二」

ウラル山脈　　〳〳〳

李衣菜「——いくよ！凜、加蓮！ゲッターチェンジだっ！！」

凜「分かった！」

加蓮「この3人で合わせるの、初めてだからってお手柔らかにはいけないからね」

凜「任せてよ。ゲッターの合体なら、2人よりは場数を踏んでる」

李衣菜「その経験を頼りにさせてもらうよ！——ゲッターチェンジ！！」

ネオゲッター1に合体し、地中から姿を現せ、未だ地上にいるメタルビースト・ガローンに組み付く。

ランバート「小娘風情が……ッ！」

李衣菜「ハンデイミサイルキャノンは温存しておきたいから……！」

ネオゲッター1の両腕でガローンの肩を抑え、鳩尾に膝蹴りを叩き込む。

ランバート「うっ……！」

李衣菜「そのまま寝っ転がりなよ！」

体勢の崩れたガローンを、勢いに任せて押し倒す。

李衣菜「シオルダーミサイルツ!!」

ランバート「ぬお…!?!」

零距离からのシオルダーミサイル。ネオゲッターの周囲が、巻き上がった爆炎と雪で包まれる。

凜「く…っ! 李衣菜、あまりゲッターに影響が出るような戦い方は…!」

加蓮「戦闘中のリーナに何言ったって無駄だつて」

凜「卯月より操縦が乱暴なんてね…!」

李衣菜「まだまだア!!」

ランバート「そうそう貴様の思い通りに…させるかア!!」

李衣菜「うわあっ!?!」

ガローンの双眸から放たれた破壊光線を、反射的に飛び退いて躲すが、拘束の解けたガローンは体勢を立て直しを完了する。

李衣菜「まったく、迂闊に飛び込めもしないよ」

凜「さつき飛び込んだでしょ」

ランバート「ふんっ。貴様らから首を差し出すと言うなら丁度いい」

李衣菜「へんっ。剣の勝負なら負けないんだから!」

凜「待つて。今ネオゲッターの両手、ハンディミサイルキャノンで埋まつてるか

ら、ソードトマホークは使えないよ」

李衣菜「え？」

凜 「どうしても使いたいんなら、ハンデイミサイルキャノンのパージするしかないね」

加蓮 「流石にそれは勿体ないって」

李衣菜 「新装備がネックになるなんて——！」

ランバート 「問答無用ツ！行くぞ!!」

李衣菜 「うわあ〜っ！」

振り被ったガローンの曲刀の一太刀が、ネオゲッターの表装を掠る。

李衣菜 「ひい〜！あんなのまともに喰らったら、ゲッターと一緒に三枚におろされちゃうよ！」

凜 「リアクションしてるくらいなら距離とって！そんなだからバラエティ向きだつてプロデューサーにも言われてる！」

李衣菜 「えっ!?!プロデューサーそんなこと言つて……つてツッコんでる場合じゃない！ええーい、来るなあ!!」

温存したいと言つていたハンデイミサイルキャノンを乱射しながら、ガローンと引き離そうと距離をとる。

卯月「李衣菜ちゃん！今、加勢に……！」

ジャック「そんな暇はなさそうだぜ！上からも来やがッタ!!」

メタルビースト・ビーン《——!!》

晶葉『あの隊長機の奇襲が成功したら、本隊が一気呵成に攻めてくる作戦か』

ジャック「Theory通りって訳かヨ！」

メリー「しかも結構な数……。悪いけど、リーナの方に気を遣ってる余裕はないわね」

卯月「そんな……！」

ボブ『晶葉ちゃん、聞こえるかい？ロボ・ストーン、出撃するぜ!』

晶葉『正気か？今ここでロボ・ストーンを降ろせば、積み込み作業を一からやり直し

だぞ』

ボブ『俺達のロボ・ストーンを最後に積んじまったせいで、後ろがつかえて出れねえ

んだろ?』

サム『一旦俺達を降ろせば、他のマシンも出撃できる。状況は多勢に無勢だ。援軍を

出してとつとケリを着けちまった方が早いぜ!』

茜『考えている余裕はありませんよ！私達がこうしてる間にも、テキサスもボルガ

も、それぞれの場所で戦っています!!』

美波『そうね……。みんな、苦戦してるかもしれないけど、だけど、ボルガやテキサス

の艦長だって、私達が先にドラゴンタートルに仕掛けてるって信じてるんだものね」

茜 『私もそれを信じます！そして、皆さんのために期待に込めてみせます！その為に、今この状況を突破する最善を尽くしましょう!!』

晶葉 『…分かった。この作戦は、臨機応変に状況変化に対応しなければならないのだったな』

橘 『ハッチ開け！解放後、先頭のロボ・ストーンの拘束を解除。発進に備えろ！』

サム 「頼むぜ、兄ちゃん。ロボ・ストーンで降下作戦なんて、やったことないんだからよ」

ボブ 「おうッ！へへっ、本番前に丁度いい予行練習が出来るってもんだぜ！」

リンダ 「ちよつと、後ろが控えてるんだから、早くなさい」

ボブ 「おつと、ティラミス中尉はお休みだぜ？」

リンダ 「どう言うことよ？」

ボブ 「ロボ・ストーンを回収するのにも手間暇掛かるつつたろ？時間短縮のためにも、キングダムはクジラの中で待機しといた方がいい」

リンダ 「けど、戦力は多い方が、つてさつきアンタだつて言つてたじゃない」

サム 「だからって全戦力投入したらいいつてモンでもねエだろ？撤収にも時間掛けてりゃ、ランドウの思う壺だぜ」

リンダ「でも……！」

ボブ「いざつてなったらロボ・ストーンを置いてくだけでいいんだ。そうなったら、パーティーの盛り上げ役は頼んだぜ！」

リンダ「…分かったわよ。その代わり、ちゃんとリーナ達を助けてきなさいよ！」

ボブ「それこそ承知の上だよ！それじゃ、発進するぜ！」

サム「待つててくれよ、カレンちゃん！」

ロボ・ストーンが降下する。

橘『ゲッターロボ、順次発進！』

茜「待つてました！ゲッター飛焰、出撃しますよ！」

美波「ゲッター軍団からは、私とチーム飛焰で出ます！」

みく「よろしく頼んだにや、美波ちゃん！」

美波「こつちこそ。私にもしものことがあつたら、後のことはよろしく頼むわ」

みく「そこは考えないことにしておくから、とにかく李衣菜ちゃんのフォローをお願いね！」

美波「頼まれたわ！——美波、行きますっ！」

茜「チーム飛焰、発進です!!」

ブラックゲッターに続いて、3機のゲットマシンが飛び出す。

橘 「ハッチ閉鎖、各員対空戦闘用意。クジラのエンジンを破壊させるな！」

晶葉 「橘博士、もしもの時のために、オーバーブーストを使用できる状態にしておきます」

橘 「うむ。いざとなれば、敵陣を強行突破し、現状の戦力だけでドラゴンタートルを迎え撃つ」

晶葉 「調整中の真ゲッターを出すことになるかもしれん。かな子も、そのつもりで準備しておいてくれ」

かな子 「は、はい……！」

晶葉 「…頼むぞ、みんな——」

—— 上空。

茜 「チェー—ンジ!!ゲッターアア—ーッ!!ワァンツ!!!」 ガシユツ

茜 「空中は私達で何とかします!美波さんは、ボブさん達と李衣菜さんの援護を!!」

美波 「分かったわ!クジラをお願いね、みんな!」

アーニャ 「ミナミも…。リーナを、お願いします」

美波 「ええ!それじゃあ!」

ブラツクゲッターは地上に降下。

茜 「さあ、クジラには指一本触れさせませんよ!」

ジャック「But, Hustle girl. 無暗に飛び込むだけじゃ、クジラは守れないぜ？」

卯月「付かず離れずの距離で…。射撃を中心に戦わなくちゃいけないんですね？」

ジャック「That's right! Smiling girl! 俺達の後ろに、敵を通しちやNonって事だ！」

茜「そう言うことなら任せてください！ええいつ!!」 ジャコンツ
プロト・ゲッターの両肩から、2つの砲身が延びる。

茜「プラズマ・ノヴァを低出力モードで、それで迎撃します！」

ジャック「OK! なら、ユーは後ろに下がらな。そっちの方が、狙いも付けやすいネ
！」

茜「はいっ！照準はお任せしました！アーニヤさん！」

アーニヤ「Da…:任せてください！」

シュワルツ「とつとと配置に着け！もうすぐで敵が来るツ！」

卯月「ええ!?! シュワルツさん、その損傷で戦闘するつもりですか！」

シュワルツ「小娘が細けえことに気にすんな！只の掠り傷だ！」

ジャック「Non Non. シュワルツ、ユーはテキサスに帰艦してください」
シュワルツ「何だと!？」

ジャック「そのDamageでは長時間の戦闘はムリだ！クジラにステルバーを修理するSkillはNothing!だから、テキサスまで後退するんデース！」

シュワルツ「ふざけるなッ！アイツにやあ……！ランバートには俺が……！」

ジャック「それでムザムザ死ぬつもりか!?それを見せつけられる連中の事を考えろッ
!!」

シュワルツ「…ッ！」

美穂「…あの、お願いですから、後退してください」

シュワルツ「何イ!？」

美穂「…っ！あ、あの……！私達に、今のシュワルツさんをフォローできる余裕なんてありません。でも、だからと言って無茶をしようって言う人を放っておけるほど、私達も冷たくなれる訳じゃないんです！」

シュワルツ「……」

卯月「大丈夫です。このくらいの状況なら、私達だって乗り越えてきたんですからっ！安心して、後退してください！」

シュワルツ「…チッ！」

ステルバーの進行方向を、テキサスの方角に向ける。

ジャック「Thank You, Girl, s. 助かったぜ」

美穂「い、いえ……！私は何も……」

茜「少しカッコよかったですよ！」

メリー「きつと兄さんの言葉だけじゃ、下がってくれなかったでしょうから。後押ししてくれた事に感謝するわ」

卯月「後押しなんて、本当にそんなつもりじゃ……。でも……」

ジャック「何デース？」

卯月「ジャックさんって、普通に喋れたんですね！」

ジャック「……」

メリー「そこは触れないであげて……」

卯月「？」

アーニヤ「*Quiet*……お喋り、そこまで、です。敵が、射程距離に、入ってきます……！」
ジャック「*YAH-HA!!* ステルバーが抜けた分も張り切って行くぜ!!」

茜「はいっ!!どこからでも向かってこい!という感じですよ!!行きますよ——!!」

茜「——プラスマ・ノヴァアツ!!」

ボブ「——シヨルダーキャノン！」

サム「発射ア!!」

ランバート「ふんっ！」

地表で弾けて、爆炎を上げるロボ・ストーンのシオルダーキョノンの砲弾を、軽々と躲していく。

ランバート「デカいだけの木偶人形ではそれが限界だろう」

ボブ「畜生ッ……！フカしやがって!!」

美波「それなら!——ゲッタースパイクッ!」

ロボ・ストーンの影から飛び出し、一気に加速して肉薄したブラックゲッターが、スパイクの突き出した拳をガローンに振り被る。

ランバート「……」

美波「やああっ!!」

ガキインツ

ガローンの曲刀と、ブラックゲッターの拳が打ち合う。

美波「く……っ!」

ランバート「それで一杯か?…所詮はチューンナップをされただけの旧式機と言うことか?」

美波「くっ……!」

曲刀を受け止めて、拳が震えるブラックゲッターに、目の前のガローンが空いている左腕を振り上げる。

ランバート「我が太刀は、もう一振り！」

美波「！ レザーブレードでっ！」

ガンツ

上段から振り下ろされた一撃を、左腕のレザーブレードで辛うじて受け止める。が、

美波「ぐううぐ……！」

ランバート「その程度で……甘いわッ！」

美波「ガッ……！——」

ブラックゲッターの鳩尾に、ガローンの蹴りが突き刺さる。

美波「きやあつ！！」

ボブ「だ、大丈夫か!？」

後方に弾け飛んだブラックゲッターを、ロボ・ストーンが受け止める。

ランバート「……ッ！」 カッ

凜「!!……くっ……！」

ブラックゲッターとロボ・ストーンを一瞥したガローンは、即座に上空を飛んでいたネオジヤガー号を攻撃。

加蓮「凜、大丈夫？」

凜「……直撃はしてない。合体のフォーメーションは、完全に邪魔されたけど」

ランバート「貴様らの考えが分からぬとも思ったか」

李衣菜「どうするの？私と加蓮のマシンはドッキングしちやったよ！」

凜「ここは一度、ネオゲッター3に合体して様子を見るしかないね」

加蓮「また合体邪魔されても仕方ないしね。りよーかい」

加蓮「ゲッターチェンジ！」

ネオゲッター3に合体し、ロボ・ストーンとブラックゲッターと合流する位置に着地。

加蓮「さくて、と。どうする？このままごり押ししてみちやう感じて行く？」

凜「パワーもスピードも、ネオゲッター3よりずっと上だよ。近付くのは、自殺行為

だと思うけど……」

加蓮「遠回しに頼りないって言ってるでしょ、それ。しようがないけど」

ランバート「所詮は烏合の衆か。それだけいてこの有り様とは」

ボブ「つるせえ！昔馴染みだと思つて加減してやりやあツケ上がりやがつて！もう許

さねえ！！」

サム「おうともさ！こんな奴、平たくならしてツンドラの氷で舗装してやろうぜ！」

ランバート「ハッ！昔馴染み、加減か。実に人間らしい、くだらん感情だ」

美波「何ですって！」

ランバート「人間とは実に矛盾した生き物だ。正義を謳い、悪を許さぬと言いながら、

相手に馴染みのある人間がいると、そうしてすぐ感情に左右される」

加蓮「確かにアンタの言うとおりかもしれないけど、知り合いを何の躊躇いもなく撃てる人間なんて、人間らしくないでしょ」

ランバート「人間らしさで勝負に勝てるか！感情で戦争に勝てるものか！！成さねばならぬ事を、本来すべき事を妨害する感情など、それこそ本来唾棄すべきものなのだ！！」
凜「感情を持たない機械の方が、人間より優秀だつて？何で機械や文明の利器つてモノが生み出されてきたのか、その背景を何にも知らないんだね」

ボブ「嬉しいも楽しいも何も分からなくなっちゃったら、それこそ生きてる意味なんざねえぜ！」

美波「それを忘れた貴方になんて、絶対負けるわけにはいきません！」

加蓮「つと、盛り上がってきたところでやってやろうじゃん……！人間らしさを、生きてるつてことの素晴らしさを否定するアンタ達に負けるつもりなんて、元から思つてないから！」

—— 戦艦テキサスサイド。

強い衝撃が、艦全体を包む。

オペレーター「左舷に被弾！！Eブロックに火災発生！」

副長「消火班を急行させろ！絶対に延焼させるな！被弾箇所隔壁閉鎖も忘れるな

!!

オペレーター「了解です!!」

艦長「……」

副長「艦長、やはり全機動戦力を陽動に投入したのが、裏目に出たのでは？」

艦長「こちらの損傷を気にして勝てるほど、連中も甘い相手ではないよ」

副長「ですが、このままでは本艦もドラゴンタートルに肉薄できるか、怪しいところ
です」

艦長「問題は既にやるかやられるかではない。やるしかないのだ。対空迎撃班は何を
している？」

副長「懸命に迎撃してこそいますが、元より機動力の高いランドウの機動部隊、その
上数も多い。このままいけばじり貧です」

艦長「…副砲を開け。そして迎撃班に、敵の動きを副砲の正面に誘導させるようにす
るんだ」

副長「しかし…、テキサスのエネルギーを副砲に割けば、ドーバー砲の充填に時間が
掛かってしまいますが…？」

艦長「構わん。我々は何としてもドラゴンタートルの元に辿り着かねばならんのだ。
回避運動などで余計に時間を取られるわけにはいかん。進路を変更せず、正面突破で出

来うる限りの事をやってみせるのだ！」

副長「了解しました。——副砲用意！発射管開け！」

オペレーター「艦長、本艦に接近する熱源反応を感知！」

艦長「敵の増援か!？」

オペレーター「いえ、数は1:1。この識別は、ステルバーです！」

シュワルツ『…チツ！すんなりと家に帰しちやくれねえか!』

艦長「ステルバー…！被弾しているのか！」

シュワルツ『艦長！そのせいで陽動部隊から弾かれちまつたが、戻ってきて正解だつ

たみたいだな!』

副長「まさか、その状態で戦闘するつもりか!？」

艦長「無理だ！今の状態のステルバーでは、30分ともたんだろう！」

シュワルツ『だからつて、家の前で暴れてるチンピラ共を無視して家に入れるほど、俺

も臆病なつもりはないぜ!』

ステルバーが懐から、STーブラスターを取り出して構える。

シュワルツ『30分なんて要らねえ。10分で片付けてやる…ツ!!』

副長「どうします？艦長…」

艦長「…やむ終えん。ステルバーは本艦の護衛にあたれ！」

シユワルツ『了解した!!』

艦長「ただし、無茶はするなよ! 敵機の機動を、テキサスの副砲に誘導すればいい。そうすれば、トドメはこちらでやる!」

シユワルツ『了解!』

ST―ブラスターを片手で構え、辺りを縦横無尽に飛行するメタルビースト・ビーンに向ける。

シユワルツ『こつちにややらなきやなんねえ事がまだまだ残ってんだ! さつさとケリ着けさせてもらうぜ――!』

――。

くくく 戦艦テキサス・格納庫 くくく

奈緒「――: 衝撃が来るのは収まったか? テキサスも速度上げたみたいだし、ホントに突撃するみたいだな…」

ツカツカツカ…

奈緒「……」

BT―23>…。

奈緒「今ここに残ってるのは、コイツくらいか。けど、コイツを動かせれば、ここから…」

奈緒「…っ！」ブンブンッ

奈緒「いやいやいや！何を考えてんだ、あたしは…！李衣菜や、加蓮達を見捨てて行くなんて…！」

奈緒「…でも、ここに残ったって…。もう、あたしに出来ることなんて…！」

「テメエら！どけッ!!…この…！離しやがれッ!!」

「無茶だつて言ってるだろ!?今更コイツを動かすなんてよ!」

奈緒「?」今の…整備班の班長と、シユワルツ?シユワルツは出撃したはずじゃ?」
コソコソ…

班長「第一、こっちのステルバーは2人乗り何だろ?もう一人はどうするつもりだ?」
シユワルツ「変形しなけりや、一人でだつて操縦可能だ!」

班長「だが、それだと一部の武器が使えなくなつて、性能も本来の半分以下だ。それは、このステルバーのテストパイロットをしていたアンタがよく知ってるだろうが!」
シユワルツ「今さっきまで使つてたステルバーは壊れて使いもんにならなくなつちまつた!今出撃してランドウをぶつ飛ばす為に、俺がこれに乗つていくつまつてんだ!止めんじやねえ!!」

班長「オレは整備士だ。オレがマシンを整備すんのは、前線で戦うパイロットが生きて帰つてこれるように万全を期すためだ!!むぎむぎ死に行くような真似する奴を、は

いそうですか黙って見送ってやれるか！」

シュワルツ「状況つてもんがあるだろうが！ここで俺に構ってる暇があんなら、テメエらはテメエらの仕事してろってんだ!!」

班長「出来ねえから止めてんだろうが！どうしても行くつてんなら、このオレをぶん殴って行きやあいだろうが！」

整備員「は、班長く！喧嘩売ってどうするんですかっ!?」アセアセ

シュワルツ「へっ、いい度胸だ！そうさせてもらうぜ！」

奈緒「——…そ、その辺にしときなよ」

班長「…奈緒、ちゃん？」

シュワルツ「…腑抜けがこんなところに、何のようだよ」

奈緒「な、何だつていいだろ…！今のアンタ、ワガママが通らない子供みたいだぞ。自分の思う通りにならないからって、大人げない」

シュワルツ「何だ?!」

奈緒「メカニツクの人達がどうして止めるか、分かんない訳じゃないだろ？ちよつとは冷静になれよな」

シュワルツ「腰抜けの小娘の分際で、この俺に説教しようつてののか!?!」

奈緒「その腰抜けで腑抜けの小娘から見ても、目に余るつて言ってるんだ。そんな事

も分かんないくらい、頭に血が上ってるのか？」

シユワルツ「…チツ」

奈緒「それに、さ」

バシツ

シユワルツ「っゝ…!!？」

奈緒「怪我、してんじやんか。そんなんでまともな戦闘機動に耐えられるわけないだろ」

シユワルツ「か、掠り傷だ…！」

奈緒「掠り傷でそんな血が出るかっての。あたしに叩かれて痛がるくらいなのに、無理すんなよ」

シユワルツ「こんな怪我が何だつてつてんだ…！俺は兵士だ。大事な作戦の時に動けねえ兵士なんざ、生きてても意味がねえ」

奈緒「……」

シユワルツ「これは、命懸けで戦ってる兵士の問題だ。自分の命が惜しくて戦えねえ外野はすつこんでやがれ」

奈緒「…ともかく、こつちのは、ずっと使っていないステルバーだろ？それをすぐに動かすなんて無茶苦茶だ。だから、先に手当てくらいさせてくれよ」

シユワルツ「日本人の指図は受けねえ」

奈緒「指図じゃないって。お願いだよ。そんな傷放置したまま出撃されたら、こつちだつて気が収まらない」

シユワルツ「……」

奈緒「そのあとは、好きにしたつていいよ。アンタの言うとおり、外野のあたしは口を挟まないからさ」

—— 医務室。

奈緒「——…これでよし、つと。他の負傷者の救護で、軍医の先生も看護兵も出払っちゃつてたけど、包帯とかは少し残つてて良かったよ」

シユワルツ「…礼は言わねえぞ」

奈緒「いいよ、そんなの。こつちだつて、勝手にやっただけだしな」 ガサゴゾ…

シユワルツ「…フン」

奈緒「あたしは医者じゃないから、専門的なことは分かんない。今やったのも只の応急処置だし。本当はちゃんと精密検査した方がいいのかも知れない。ひよつとしたら何処かの骨が折れてて、出撃なんて到底できない怪我かもしれない」

奈緒「そう言つても、出撃するののか？」

シユワルツ「当然だ。この戦場には、俺が引導を渡してやんなきゃならねえ奴がいる」

奈緒「引導……？それって、シユワルツにとって大事な人だったのか？」

シユワルツ「テメエには関係ねえ」

奈緒「関係ないって……。確かにそうかもしれないけど、何でそう考え方が極端何だよ？」

シユワルツ「極端だア？」

奈緒「シユワルツがそんなに必死になるんだ。よっぽど大切な、仲間だったんだろ？
だったら、ランドウの手から救ってやるって言うのが普通なんじゃないのか？」

シユワルツ「救う？はっ、日本人らしい、甘ったるい考えだな」

奈緒「何でだよ!？」

シユワルツ「死んだ人間は死んだ人間だ。メルヘンやフィクションの物語みたいに、
簡単に生き返ったりはしねえ。ランドウの手先になった時点で、アイツはもうランバ
トじゃねえんだ」

奈緒「で、でもさ……!辛くないのかよ？仲間だったんだろ!？」

シユワルツ「戦うってのはそういうことだ。仲間だろうが、自分だろうが死ぬ方が当
たり前。生き残ってる方が奇跡。百鬼帝国が襲ってきた時、死んじまったのはランバ
トだけじゃねえよ」

奈緒「……」

シュワルツ「仲間を失うのは辛くねえ。俺達は、仲間の犠牲を生きる糧にして、犠牲になった奴の分も生き残るために、勝つために戦い抜くんだ」

シュワルツ「犠牲になった奴等が生き返ってくれとは、俺は思わねえ。死んだ奴は充分に戦った。許せねえのは、その死を踏みにじるランドウなんだよ」

奈緒「だから、自分の手で引導を渡すって言うのか？」

シュワルツ「…ああ。ちゃんと始末着けて、この手で眠らせてやんなきゃダメだ」

奈緒「……。やっぱ、戦える人間は違うな。友達だった奴に引導を渡すなんて、あらしには出来ないよ」

シュワルツ「だから、戦場から逃げたんだろうが」

奈緒「…っ！」

シュワルツ「自分が死ぬのも嫌なら、仲間が死ぬのも見たくねえってか」

奈緒「……嫌だよ。思い出を分かち合えるから、友達と一緒にいられるのは楽しいんだ。辛い経験をして、哀しい思い出を増やすなんて真つ平だよ」

シュワルツ「ふうん。ま、いいんじゃないか。どっちみち俺には関係ねえことだしよ」
スクツ

奈緒「…行くのか」

シュワルツ「おう。大分時間くつちまったからな」

奈緒「そうか……」

シユワルツ「ランバートとは、俺の手で決着を着ける。アイツの望んでねえ戦いを、これ以上させるわけにはいかねえ」

奈緒「その為なら、刺し違えたっていいのか？」

シユワルツ「くだいぜ。今ここにある命は俺の命だ。それをどこでどう使うかつてのは、俺が決めることだ。テメエに指図される謂れはねえ」

奈緒「……」

シユワルツ「テメエが生きたいと望んでるように、俺はな、戦場で死ねりやア本望なんだよ。こんな病室で、何にも結果を残せねえでくたばるなんてゴメンだぜ。それこそ、これまで俺の目の前で死んでいった奴等に申し訳が立たねえ」

シユワルツ「お前が生きてえなら勝手に生きてろ！俺がどこで死のうと、テメエにや関係ねえ!!」

そう言い残して、医務室を後にする。

奈緒「……」

奈緒「ああ、そうさ。関係ないよ。シユワルツが死んだって、あたしには関係ない。その筈だろ……」

奈緒「けどさ……、ああもう！分かつてるよ！あたしだって、自分が面倒臭い性格だつ

てのはさ——！」

——。

くくく 格納庫 くくく

シュワルツ「……こいつあ、どう言うことだ？」

班長「テメエがぶつ壊したステルバーを修理してる時間があんなら、こつちの奴を調整してた方が早いからよ」

シュワルツ「それで、作業員総出でメンテナンスか？」

班長「お前さんがコイツに愛着があるのは分かつてる。だが、俺も整備士だ。ここから出してやるなら、万全の状態で飛ばしてやりてえ」

シュワルツ「もう帰ってこないかもしれないんだぜ？」

班長「そう言うな。コイツは特攻兵器じゃねえ。お前らパイロットが死ぬ気で戦って、それで帰ってくるみてえに、コイツだって生き残って戻ってきてえと思ってるだろうよ」

シュワルツ「へっ、そうかよ」

班長「サブ・シートには、俺が乗る」

シュワルツ「はあ？ 正気かよ」

班長「コイツの事は俺も知ってる。ちゃんと2人で乗ってやれば、コイツも本来の性

能が出せる。そうすりゃ、お前も無茶をする必要がなくなるんだろうが」

シュワルツ「だからって、訓練もしてねえ素人を乗せられるわけねえだろうが！第一、テメエはこの責任者だろう！テメエに万が一があつたらどうする!!」

班長「今更俺がいなくなつたところで、動揺するような連中じゃねえよ」

シュワルツ「屁理屈言つてんじゃねえ！素人が乗つて、俺が心置きなく戦えるものかよ！」

班長「なら、万全じゃねえ状態で、俺が黙つて出撃させると思つてンのか!?アアツ!!」

シュワルツ「……」

班長「……」

「だつたら……」

班長「あん?」

シュワルツ「テメエ……!」

奈緒（パイロットスーツ）「だつたら、素人じゃない奴が乗ればいいんだろ?」

班長「奈緒ちゃん……」

奈緒「訓練してらつて訳じゃないけど、戦闘で経験は積んでる。問題ないだろ」

シュワルツ「何しに来た!?!腰抜けは下がつてろ!」

奈緒「関係ないなんて言われて、黙つていられるわけないだろ!シュワルツの傷の手

当ては、あたしがやったんだ。その責任くらいはある！」

シユワルツ「ステルバーの操縦法なんざ知らねえだろうが！」

奈緒「マニユアルはあるだろ。こっちは現役女子高生だ。勉強だつて一夜漬けだつて、覚えるのは任せろよ」

シユワルツ「死ぬのが怖え癖に、生意氣言つてんじやねえ」

奈緒「…死ぬのは、今でも怖いよ。正直腕も足も震えてて、もう訳分かんないくらいだよ」

シユワルツ「だったら引つ込んでろ！」

奈緒「だけど！このまま送り出して、いいわけないじゃんか！仲間が死ぬのが辛くないなんて言ってる奴を、戦場で死ぬのが本望だつて言ってる人間を、黙つて見送れるわけないだろ!!」

シユワルツ「どう言うことだ！」

奈緒「あたしだつて、知ってるんだぞ！そういうのが強がりだつて！李衣菜だつて、アイツだつて強がつて戦つてる！戦わないともっと怖いから、自分が戦つて、命を奪おうとする奴等を追い払わないと、もっと怖いから戦つてるんだろ!？」

シユワルツ「だからなんだ？強がれねえ奴は出てくんじやねえよ！」

奈緒「…強がるさ。あたしはもう、アンタの事は放つておけない」

シユワルツ「何っ…!？」

奈緒「アンタがどんな気持ちで戦ってるのか、どんな覚悟でこれから戦いに行くのか、それを知ったから。あたしはもう、アンタの事を放っておけないんだ」

シユワルツ「……」

奈緒「死んだ人間の犠牲を、生きる糧にするって言うんなら、刺し違えるなんて間違ってるだろ！今死んだらダメだよ！そんなの、ランバートって人だって望んでないぞ、きつと！」

奈緒「だから、…あたしはアンタを死なせない！その為に、戦ってやるさ！」

シユワルツ「…勝手なこと言いやがる」

奈緒「シユワルツだって、自分の命を勝手に使うんだろ？なら、あたしだって勝手にやらせてもらう。文句ないよな？」

シユワルツ「…面倒臭エ女だ。テメエは」

奈緒「…分かってるよ。死にたくない癖に、死にたがってる奴がいると、放っておけない。面倒臭い女だよ、あたしは」

シユワルツ「面倒臭エ女に引っ掛かっちゃった。俺の方が悪いのか、この場合はよ」
奈緒「そうだよ。だから、責任とれよな。しつかりとさ」

シユワルツ「…はあ。負けたぜ、今まで見たことねえタイプの日本人だよ。テメエは」

班長「ほ、本当にいいのかよ？奈緒ちゃん」

奈緒「ああ、もう決めたんだ。それにさ、班長さんに合うパイロットスーツなんて、すぐに用意できないだろう？」

班長「それを言われちまうと……」 トホホ……

奈緒「それにさ、班長にはメカのメンテができる。マシンに乗って、ボタンを押すくらい的事は、あたしに任せてよ」

班長「…分かった。シユワルツ、奈緒ちゃんを乗せるんだからな！必ず、生きて帰ってこいッ！」

シユワルツ「コイツが俺の生き残る理由かよ？」

奈緒「ダメなのかよ？」

シユワルツ「…はっ！日本人は嫌いだが、オメエのファンに恨まれるのだけは勘弁だ」
奈緒「へへっ！じゃ、決まりだな！」

—— ステルバー・コックピット。

奈緒「——うわあ、ゲッターのコックピットより狭いな……。しかも、何だこりや……スイッチが多くてキーボードみたいだな……」

シユワルツ「コイツは試作機だからな。火器管制だけじゃなく、制御系なんかも色々面倒臭くなってる。だからパイロットが2人必要なのさ」

奈緒「今シユワルツがいるのがメインのコックピットか。そっちが戦闘に集中できるように、こっちがほとんどやんなきゃいけないんだな……」

シユワルツ「やめるなら今だぜ」

奈緒「今更だよ。面倒臭いの、あたしにはピツタリだ！」

シユワルツ「オメエが対応してるのを待つてる暇はねえ。出撃するぞ！」

奈緒「任せろ！えーつと、出撃準備……推進器は飛行形態、接続は……これでよしつと。……どうだ？」

シユワルツ「……。テンポは悪いが、上出来だ」

奈緒「よっしゃ！戦闘空域に入るまでに火器管制は覚えとく。行つてくれ！」

シユワルツ「ハッ！口先だけは立派だな！発進する時に気絶するんじゃないぞ！」

奈緒「心配すんなつて。ゲッターより大したことなかつたら、居眠りしちゃうかも知れないけどな」

シユワルツ「……調子のいい奴だ。——ステルバー、発進するぞ!!」

奈緒「おうッ！」

奈緒（李衣菜、加蓮……！あたし、みんなと戦うにはまだ軟弱かもしれないけど、やるだけの事、やってみるよ！）

奈緒「ここににいる一人の人間くらい守ってみせる……！あたしにやれることは、そこか

らだ
つづく

第18話『勝利を目指せ!!』

ランドウ兵「ぐお…っ?!」

ドサツ

ラセツ「これで最後か。他愛のない」

ヤシャ「ラセツ…!こうなれば、私自ら!」

チャキ

ヤシャ「!？」

ランドウ兵?「……」

ラセツ「可笑しな動きをしたら、遠慮はいらんぞ」

ランドウ兵?「フシユルルウ…」

ヤシャ（此奴ら…）

ラセツ「ランドウ尖兵の全てが、私に従っていないなどと言うことは先刻承知の上」

ランドウ兵?「……」

ラセツ「故に、私の周辺はこのように、兵装を統一させた私兵で固めさせているんで

すよ」

ヤシヤ「それでこちらの目を欺くなど、姑息な手を……。一思いに殺したらどうだ？」
ラセツ「はははつ、焦らずに。今ここで殺すような事はしませんよ。貴公にはまだ、利用価値がありますからね」

ヤシヤ「利用価値、だとお……？」

ラセツ「ふふつ、簡単なことだよ。このドラゴンタートルを破壊させたくなければ、貴公が守ればよい」

ヤシヤ「俺を手駒として使うつもりか」

ラセツ「先程の上官への逆行行為を不問とし、手柄を立てるためのお膳立てをしてやると言ってるんだよ。貴公の汚名を晴らすチャンスを与えようと言うのだぞ？」

ヤシヤ「……。ふん……。言われるまでもない。貴様が意地でもドラゴンタートルを動かさぬと言うなら、ランドウ様への忠誠に懸けて、我が身を賭して守り抜くだけだ」
スツ

ツカツカツカ——。

ラセツ「……フフツ、所詮は戦うことしか考えられん出来損ないよ。精々俺のためにその身を削るがいい」

ラセツ「そう、ゲッターによつてこの身を削られ、地下へと追いやられた俺達のように

にな。フッフ…フハハハハ——!!

——通路。

ヤシャ「…」ツカツカ

副官「ヤシャ將軍！」

ヤシャ「貴公、生きておったのか」

副官「はっ、ドラゴンターゲットを完全に指揮下に置いたラセツの目を逃れ、他の者達も健在です」

ヤシャ「そうか。では、直ちに部隊を再編し、ドラゴンターゲット前方に布陣するぞ」

副官「は…？ですが、ゲッター共は現在、ラセツ指揮下の強襲部隊と戦闘中との事ですから…」

ヤシャ「彼奴の配下程度が連中の相手になる者か。奴等は必ず来る！だからこそ、万全の布陣で正面から迎え撃つのだ」

副官「了解しました。この戦、將軍に命を預ける所存であります」

ヤシャ「私は既に將軍ではないよ」

副官「では、隊長。隊のメタルビーストを集めます。では——」

ヤシャ「うむ」

ヤシャ「ラセツめ…。上手く手柄を掠め取るつもりだろうが、貴様の思い通りになど

させぬぞ！」

ヤシャ「このドラゴンタートルが、元は誰のモノであったのか、それを貴様にも思い知らせてやるツ！覚悟しておけ、ラセツ——！」

—。

~~~~ 戦闘空域 ~~~~

ジャック「——Pasture—Kick!!」

パスチャー・キング『ヒビインツ!!』

パスチャー・キングの強烈な後ろ脚の蹴りが、空中を飛来するメタルビースト・ビーンを衝撃波と共に粉碎する。

卯月「ゲッターライフル!!」 ジャキツ

卯月「クジラには、近付けさせませんよ！」

ドウツ ドウツ

射線を安定させるため、腰だめに構えたライフルを斉射。群がるビーンを確実に落としていく。

茜「アーニヤさん！プラズマエネルギーの調子はどうですか?！」

アーニヤ「アー…、まだまだ、グリーンゾーン…。全力で、戦えますっ！」

茜「そうですか！では、思いつきり！行きますよお!!」







アーニヤ「そろそろ успокоивать…落ち着かせないと、ですね」

晶葉「昔のディーゼルエンジンか何かか。アイツは」

橘「…襲撃を受けて、どのくらい経つかね?」

管制官「は…。10分を過ぎた頃かと」

晶葉「橘博士、最悪の想定通り、クジラだけでも先行しなければ、作戦そのものに支障をきたす頃合いです」

橘「うむ。しかし…」

卯月「私達なら大丈夫です!クジラは先行してください!」

橘「卯月くん…」

ジャック「ミー達の事なら、心配Nothing!!必ず合流するぜ!」

卯月「襲撃してきたメタルビースト達に付いていかせないように、ここで喰い止めます!だから、クジラとクジラに残った戦力は、ドラゴンタートルを!」

晶葉「オーバーストを使用できなくなってしまうたら、何もかも水泡に帰してしまいます。ここは、卯月達の決意に応えましょう」

橘「…やむ終えん。クジラ、出力最大!バイパス充填用意ツ!」

ジャック「チーム飛焰、ユ一達も先行しナ!」

美穂「え、でも…」

メリー「今回の作戦は、貴女達が必要なよ」

ジャック「ザコ共の相手はミーに任せて、先に行つて一暴れしてきて下サーイ。H u  
s t l e   g i r l にも C o o l   d o w n が必要なんだろ？」

メリー「ドラゴンタートルの方にいけば、防衛対象を気にせず暴れられるわ。思う存  
分暴れてきなさい！」

アーニヤ「メリー、ジャックの言うとおりで、ですね。ミホ、アカネを止めます」

美穂「うん。茜ちゃん、ゴメン！」

ギツ

茜「あぐあツ!？」

2人のコックピットから、非常時の緊急制止スイッチを押し、プロト・ゲッター1を  
強制停止させ、

卯月「ゲッターマホーク！」

ゲッターD2がすかさずフォローに入る。

茜「うう……はっ！これは……！額から、血が！何故!？」

美穂「茜ちゃん、大丈夫？」

アーニヤ「時間がありません。アカネ、ゲッターを、クジラに」

茜「うえ!?ええ!はいっ!!よく分かりませんが分かりましたッ!!」

晶葉『発進口のハッチを開けている時間が惜しい。ゲッター飛焰は、クジラの背中にしがみついでくれ』

茜「了解しました!!」

美穂「ふ、振り落とされないでね…?」

茜「大丈夫です!何とかなります!!」

管制官「博士、エネルギーチャージ、完了!何時でも行けます!」

橘「よし、各員衝撃に備えてくれたまえ。…オーバーブースト、始動——」

ゴアツ

クジラのメインブースターから、一気に青白い噴炎が上がり、急加速。

莉嘉「う…うう…っ!」

かな子「莉嘉ちゃん、私から手を離さないでね…!」

莉嘉「う、うん…!」

莉嘉（こういう時、かな子つてすんごい頼りになるなあ。安定感が…）

かな子「今ちよつと失礼なこと考えてませんでした?」

莉嘉「う、ううん!そんなこと思ってもないよ☆」

かな子「そう?じゃあ、そんなこと、つてどんなこと?」

莉嘉「それは…!えへ…☆」

音速以上の速度まで加速したクジラは、メタルビーストの追撃も振り切り、一瞬で空の彼方に見えなくなった。

凜 「…クジラが先行できたたみたいだね」

李衣菜 「うん。これで、テキサスが先に来ても、ボルガが来ても集中攻撃を受けることはなくなつた」

加蓮 「お2人さん、気ままに話してるとこ、悪いんだけど！」

加蓮 「——ゲッタートルネード！」 ズアアツ

ランバート 「ふん、そんなそよ風ごときが、どうした？」

美波 「それで足が止まれば！」

ボブ 「喰らいやがれツ!!」

ブラックゲッターのゲッターマシンガンと、ロボ・ストーンのシヨルダーキャノンによる集中砲火が、メタルビースト・ガローンを襲う。

加蓮 「これもおまけにどう？ プラズマブレイク！」

黒煙の中に消えたガローンめがけ、上空に打ち出したプラズマブレイクを、落雷のようになげ落とす。

サム 「どうだ？」

ボブ 「流石に無傷ってことはねえだろ…うおっ!？」

今だ立ち上る黒煙の中から放たれた閃光が、ロボ・ストーンを吹き飛ばす。

加蓮「ボブ！サム！」

ボブ「だ、大丈夫だカレンちゃん…。致命傷にはなっちゃいねえ」

凜「敵は、生きてる…！」

美波「…っ！」

構えを直すネオゲッター3とブラックゲッターの正面、ガローンが黒煙の中からその姿を現す。

李衣菜「…ほぼ無傷…。はは、流石に冗談でしょ？」

加蓮「効いてない、訳じゃないんだろうけど」

ランバート「小娘共、同じ手は通じんぞ？」

凜「だろうね」

ランバート「既にクジラからは見放され、置いていかれたのだ。いい加減、覚悟するが良い」

美波「勝手なこと言わないで！私達は見放されたんじゃないわ！」

李衣菜「この戦いに勝つために、クジラには先に行ってもらったんだ！アンタを突破して、私達もドラゴンタートルの所に行く！」

ランバート「我がメタルビーストに傷一つ負わせられん連中がどうする？貴様らに

は、ここで淘汰される運命しかないわ!!」

ボブ「言ってる! 戦いつてのは、勝つか負けるか、勝負が着いてみるまで何が起こるか分かんねえぜ!」

加蓮「アタシ達の内一人でも倒さない内に、勝った気にならないでよね」

ランバート「…面白い。ここで全員血祭りに上げてくれるわ!」

—。

くくく ウラル山脈上空 くくく

管制官「ドラゴンタワートル、視界に捉えました!」

晶葉「あれだけ大きいと、山脈の山々と見間違えてしまいそうだな」

橘「我々の相手は、ウラルの山々と同格の存在か…」

晶葉「勝算はこれから作りますよ。真ゲッターの調整のため、格納庫に降ります」

橘「短時間で行けるかね?」

晶葉「万全の状態は無理でも、動かせるくらいには持つていきます。今は一つでも多くの戦力が必要ですから」

橘「頼む」

晶葉「かな子、何時でも出撃できるように、スタンバイしておけ」

かな子「真ゲッターロボ…。あれを、私一人で動かすんですか?」

晶葉「心配するな。お前ならやれる。卯月達がいなくてもアラスカで戦っていけたじゃないか」

かな子「…はい。真ゲッターを、よろしくお願いします」

晶葉「ふっ。任せろ」

莉嘉「晶葉!」

晶葉「どうした、莉嘉?」

莉嘉「アタシも真ゲッターに乗せて!」

かな子「莉嘉ちゃん!?突然どうしたの?」

莉嘉「みんなが頑張ってるのに、アタシだけ見てるだけなんてヤだよ!アタシだって戦える!卯月や凜の代わりに、真ゲッターに乗せてよ!」

晶葉「……」

かな子「晶葉ちゃん…?まさか…」

晶葉「何を言っているか、分かっているか?ダメに決まっているだろう」

かな子「……」 ホッ

莉嘉「何で!」

晶葉「戦闘経験のない者を、おいそれとアレに乗せられるか」

莉嘉「経験は少ないかもしれないけど、シミュレーションはちゃんとやってるよ!」

晶葉「だからなんだ。莉嘉、お前は真ゲッターの恐ろしさを何も分かってない」

莉嘉「分かってない、って何が？」

晶葉「ただ操縦桿を握るだけでも、体力と精神力を消耗する。そういう機体だ、アレは」

かな子「……」

晶葉「並大抵の人間なら、精神を持っていきかねない。出撃したところで、戦闘にすらならないかもしれない」

莉嘉「そんなのやってみなきゃ分かんないじゃん！」

かな子「莉嘉ちゃん！」

莉嘉「かな子……？」

かな子「晶葉ちゃんの言うとおりで。真ゲッターは、乗る人を選ぶと思うんです。だから、あんまりその……我が儘を言わないで？」

莉嘉「あ、アタシは我が儘なんて言うつもりじゃ……。ただ、かな子が一人で戦うのは、ちよつと可哀想だから……」

かな子「ふふっ、ありがとう。気持ちだけでも嬉しいよ。でも、大丈夫。莉嘉ちゃんはこちらで応援して？」

莉嘉「でも……！」



晶葉「何も、戦闘に出るだけが、戦う、って事じゃない。それは莉嘉だって、百鬼帝国との決戦の時に学んだだろ？」

莉嘉「うん…」

かな子「今莉嘉ちゃんがいるところが、私の帰ってくる場所だから」

莉嘉「うん。その、頑張ってるね…☆」

かな子「うん。行ってきます！」

—。

茜「ドラゴンタートルが大きくなってきましたね！」

アーニヤ「それだけ、近付いてるって事…ですね」

美穂「ドラゴンタートルの周り、黒い点が全部敵…何だよね…？」

アーニヤ「アー…、怖い、ですか？」

美穂「う、ううん…！だたちよつと、武者震いが…」

茜「いいですね！決戦の時はもう目前です！意気上げていきましょう!!」

美穂「うん…！やろう、私達で！」

橘『ゲッターチーム、出撃せよ！』

アーニヤ「クジラ、から、みく達が来ます」

みく「遂にみく達の出番が来たかにゃ〜！」

瑞樹「状況は、強がってられるほど優勢な状態でもないけどね」

菜々「ほ、ホントですよ。うわあ、リーダーが敵の反応で一杯。ホントに、この数をナナ達だけで相手にするんですかあ？」

ニオン「彼我の戦力差など比較するまでもないな。まったく、人間がこうも命知らずな種族だとはな」

鉄甲鬼「これで作戦が上手く行くのだとしたら、それこそ神業と言うものだ」

芳乃「それを人の業で成してこそ、奇跡と呼ぶのかもしれないね」

リンダ「結果は神のみぞ知る、っという訳ね」

菜々「のっけから不安になるようなこと言わないで下さい！」

美穂「大丈夫ですよ！卯月ちゃんだって、テキサスだってボルガだって、必ず来てくれますから！」

茜「私達はただ、降りかかる火の粉を払い除けるだけです！」

瑞樹「鉄甲鬼達も無理しなくていいのよ？貴方達は、この戦いには関係ないんだから」  
鉄甲鬼「気遣いは無用だ。死地にて命を張れてこそ、我らの命もまた本望というもの」

ニオン「生きることそのものが戦いのようなものだ！俺に放棄する戦いなどない！」

瑞樹「…素直じゃないんだから」

みく「というより、ニオンに関しては単に戦闘狂いってだけな気もするにや」

ニオン「気が触れたキャラ付けをしてる奴よりはマシだろう」  
みく「にやあ!?!いいにや、その喧嘩、買ってやるからゲッターから今すぐ降りろやこのにわかトカゲ人間!!」

菜々「みくちゃん!口調、口調っ!!」

芳乃「まあまあ、身内で争っている場合ではないのでしてー」

リンダ「敵が来るわよッ!」

ランドウの勢力の攻撃が、周囲で弾ける。

みく「にやあ!命拾いしたにやトカゲ野郎!」

ニオン「こつちの台詞だ!」

みく「何を〜!」

瑞樹「みく、いいから戦闘に集中して!クジラは後ろに下がちなさい!」

橘『了解した。健闘を祈るぞ』n

菜々「じ、陣形はどうするんです?」

鉄甲鬼「型に嵌まった陣形など、この戦力差では無意味だな」

芳乃「敵に包囲され、四方から攻撃されるのがオチでしてー」

リンダ「散開して各個に撃破。これに限るわね!」

茜「了解しました!では、ゲッター飛焰!敵陣に飛び込みますッ!!」

菜々「ああ！茜ちゃん！！」

大きく広げた翼をはためかせ、プロト・ゲッターが先行する。

ニオン「後方支援は性に合わん！俺達も行くぞ！」

鉄甲鬼「ああ、好きにしろ」

芳乃「敵は選り取り見取り。如何様にも手をつけてくださいませー」

プロト・ゲッターに、ダイノゲッターもつづく。

茜「ゲッタートマホーク……」

ジャキンツ

茜「——ブウウーメランツ！！」

メカ一角鬼『！！』ズバツ

メカザウルス・ドバ『！！』ズバツ

メタルビースト・ワーム《！！？》ズバアツ

全身を大きく反りかえし、巨大なトマホークを投擲して、群がる敵勢をまとめて両断。

茜「ふんツ！！」

鼻息荒く、帰って来たブーメランを掴み取る。

茜「でえいやあああアツ！！」

トマホークで、更に群がる敵勢を一網打尽にぶった斬る。

アーニヤ「アカネ、燃えていますね」

茜「どおしくしたんですか!!こんなものですかっ!!」 ジャキツ

右手にトマホークを担い、左の手鉤爪を突き出して押し寄せる敵を薙ぎ払う。

美穂「でも、ホントにスゴい数の敵…。こんなのでドラゴンタートルに近付けるの?」

茜「先ずは敵の数を減らすことです!幸い、ドラゴンタートルはほとんど動いていません!!」

美穂「え?」

鉄甲鬼「妙だな」

アーニヤ「ダイノゲッター…。追いついてきました、ね」

鉄甲鬼「ドラゴンタートル、何故動かん?」

ニオン「どうせ俺達を侮っているのだろう?この数では、ドラゴンタートルの破壊など、到底無理だからな」

鉄甲鬼「奴等にとつても、これが陽動だということとは明白のはず。こちらの様子を窺うにも、ドラゴンタートルは必ず動かさず筈だ」

アーニヤ「これは…ワナ?」

芳乃「そこは、考えても仕方ないものと。例え罠でも、今の芳乃達に退路はないのでして」

ニオン「迎り着けなければ足止めも何もない！先ずは邪魔する奴等を蹴散らすに間違いないだろう!？」

茜「その通りです!!敵の数は、倒せば減ります!!」

美穂「そうかもしれないけど…」

アーニヤ「ミホ、心配ですか？」

美穂「…うん」

茜「むっ!？」

眼前に走った閃光を、プロト・ゲッター1は反射的な動きで辛うじて回避。

「はははっ!いい反応だ。なかなかの動きをする!」

茜「貴方は…!誰ですか!？」

美穂「ちよつと待って…。確か、李衣菜ちゃん達と交戦記録があつた筈…!」

アーニヤ「ありました。メタルビースト・ジャコツ…、パイロットは、ヤシャ…。ラ

ンドウの幹部クラス、です!」

茜「大物の登場というわけですか!決戦らしいですね!」

ヤシャ「ネオゲッターロボの姿はないか…。しかし!」

茜「ぐっ!？」

ガンツ

ジャコツの青竜刀と、プロト・ゲッター1のトマホークが打ち合う。

ヤシヤ「貴様らの思惑通り、易々とは行くとは思うなよ！」

茜「ぐぬぬぬぬ……っ！」

ヤシヤ「ハアツ!!」

茜「ガツ……！」

プロト・ゲッター1がパワーで押し負ける。

茜「ううっ……！」

美穂「茜ちゃん！大丈夫!？」

茜「まだまだ……この程度、ダメージにもなってますんよ!!」

ヤシヤ「フハハハツ！やはりそうこなくてはな！」

芳乃「戦いを求めし者！。未来を求めず、目先の衝動、快楽に身を落とす者！」

ニオン「俺達の相手してもらおうか！」

ヤシヤ「フンツ！」

ダイノゲッターの攻撃をいなす。

ヤシヤ「ゲッターが2体と云えど、負けはせんっ！この戦いは!!」

ニオン「ぐう……！」

気迫の籠った斬撃が、ダイノゲッター1を襲う。

美穂「ドラゴンタートルは、ランドウにとつても大事な存在……！」

アーニヤ「向こうも、命懸け……そう言う、事ですか」

ヤシャ「決死なのは私だけではないぞ！」

バツ

鉄甲鬼「何だ、コイツら……！」

美穂「ジャコツが一杯……!？」

副官「ヤシャ隊長！」

ヤシャ隊士「今こそ我らが命を果たす時!!」

鉄甲鬼「このメタルビースト、人が乗っているのか？」

ヤシャ「フフツ……！彼奴らこそ、私と心血を分けた同胞よ……！」

茜「はらから……？」

ヤシャ「手足があるからこそ腕を磨き、技を鍛えた精強な兵共だ！今までの頭脳のみを移植したメタルビーストと同じだと思ふなよツ！

芳乃「業の深き者共ですかー。向こうにとつても、芳乃達にとつても重要な局面ー。

一筋縄では参りませぬとー」

ヤシャ「簡単に行かせはせぬ……！覚悟せよ！ゲッターロボ!!」

ニオン「フンツ、面白くなってきたな!!」



茜「私達にも！何がなんでも引き下がれない理由があるんです!!」

アーニヤ「そのためなら、どんな障害だって！行きましよう!!」

美穂（他のメタルビーストも、みんなこっちに集まってきてる…。分かったことだけど、このままじゃ…ううん）

美穂「私も頑張らなくっちゃ！みんなの力を合わせて、必ず勝つんだ！その為に——  
！」

——。

卯月「——ゲッタービームッ!!」

ビーン<<——?!?!?>>

ズワオッ

太く伸びたゲッタービームが、ビーンを一瞬で焼き払う。

ジャック「これで空中の敵は全部力!？」

メリー「こっちに飛んできてたランドウの援軍が、大人しくなったとは思うけど…」

卯月「きつと、ドラゴンタートルの方でも戦闘が始まったんです!」

ジャック「なら、のんびりとはしてられないナ！リーナ達ハ!？」

加蓮「タンクモード!!」

ギユンッ

加蓮「速度を上げて、一気に!!」

拳を握り、ガローンに向かって速度を乗せながら、

加蓮「ゲッターパンチ！」

ランバート「ふん…」

加蓮「そんなっ?!?」

ネオゲッター3のゲッターパンチを、ガローンは容易く受け止める。

ランバート「半端な拳…!避けるまでもないわ!!」

加蓮「きやつ…!」

掴んだ拳を捻り、小手返しの際領でネオゲッター3を放り投げる。

加蓮「くっ…!」

ランバート「トドメだ！」

美波「加蓮ちゃん!ツ…!」

倒れ伏すネオゲッター3に曲刀を振りかざしたガローンに、ゲッターマシンガン浴びせ、注意を逸らす。

ランバート「雑魚が…。焦るな。一人ずつ始末してくれ」

加蓮「オープンゲッター…」

ランバート「甘いわッ！」

加蓮「きやあつ!!」

合体レバーに手を掛けた寸前で、ネオゲッター3を蹴り飛ばされる。

李衣菜「二度も合体を阻止するなんて…!」

凜「とにかく、一度分離できる隙を作らないと…」

ランバート「そうそう思い通りにさせるものかッ!」

加蓮「ツ…!」

深く積もった雪を柱にして巻き上げるほどの剣圧が、ネオゲッター3を軽々と吹き飛ばす。

李衣菜「これじゃあ分離して合体してる時間もないよ!!」

加蓮「…距離を測ってるだけじゃ、ダメかもね」

凜「どうするの? 加蓮」

加蓮「何とかする。万策尽きたって状況でもないし、まだまだこれからなんだから」

李衣菜「あはっ! いいね、なかなかロツクな感じじゃん!」

加蓮「じゃあ、リーダーからいいねをもらったところで、気を取り直していきますか  
!」

ネオゲッター3を起こし、体勢を整えて状況を確認すると、ガローンがブラックゲッターとロボ・ストーンの方に向かってる。

ボブ「お嬢ちゃん！敵の足を止められるか？」

美波「何をするつもりですか！」

サム「こうなりや奥の手だぜ！」

美波「奥の手って……」

ボブ「説明してる暇はねえ！何がなんでもアイツの動きを止めてくれ!!」

美波「……分かりました！」

美波「マシガンでダメなら……。——スパイラルゲッタービーム!!」

ランバート「ぬっ……!?!」

拡散するゲッタービームをガローンの周囲に放ち、足を止める。

サム「今だ、兄ちゃん！」

ボブ「モード・チェンジだ!!」

ロボ・ストーンが上体をローラーの中へ隠す。

サム「出力最大！何時でも行けるぜ、兄ちゃん!!」

ボブ「コイツでまっ平らにしてやるぜ!!」

ロボ・ストーンの巨大なローラーが唸りを上げ、足を止めたガローンに迫る。

ランバート「これは……、なかなか面白い！」

対するガローンは真つ向勝負を挑み、両腕を突き出してロボ・ストーンの動きを制す

る。

サム「うおっ…!？」

ボブ「嬉しいねえ。俺達のロボ・ストーンに、真つ向から勝負を挑んでくれるとはよ」  
ランバート「木偶の坊の見え透いた攻撃を躲すなど容易い。こつちの方が貴様らには効くだろう!？」

サム「言ってくれるぜ…!ロボ・ストーンの底力を見せてやるッ!!」

ギョルルルルウンッ

ランバート「フハハハッ!ネオゲッターロボ以上のなかなかのパワーだが、それでも及ばぬぞ!」

ボブ「そうかい。お褒めに預かり光栄だぜ」

ランバート「…?」

サム「両手でしっかり抑えといってくれよお。でなきや、アンタはペシヤンコだぜ!」  
卯月「ゲッターライフル!!」

ジャック「Mac-Riot, fire!!」

ランバート「!!」

上空に位置したゲッターD2とテキサスマックの2機から、射撃が雨のように降り注ぐ。

ジャック「H A H A H A !! いいダネ！」

ランバート「彼奴ら…！」

ボブ「ジャック！お嬢ちゃん！遠慮は要らねえ、俺達の事は気にすんな！」

サム「肝の据わった相手さんを、弾丸のシャワーでたっぷり祝ってやるんだ!!」

卯月「分かりました！お二人の気持ち、無駄にはしません!!」

ジャック「H A H A H A ! Party timeの始まりだぜ!!」

ズドドドドドドツ

ランバート「この…！小賢しい蠅共がア!!」ズアツ

視線を頭上に向け、両目の破壊光線を放つが、宙を自在に飛行する2機はこれを容易く回避。

卯月「飛んでくるのが分かってるなら、当たるわけにはいきません!!」

ボブ「オラオラア!! 氣イ抜いてつとこつちが押し潰しちまうぜ!!」

ランバート「ぐぬぬぬう…!! ならばツ!!」

ボブ「うおっ!?!」

上空からの攻撃を無視し、正面のロボ・ストーンに対し、破壊光線を放つ。

ボブ「おおっ…!?!」

ローラーの回転によって、光線はある程度散らせているが、それでも少しずつ焦げ

付くように装甲が歪んでいく。

美波「サムさん、ボブさん!？」

サム「何のこのくらい……! まだまだ行けるよな! 兄ちゃん!」

ボブ「つたりめエよ! 核の熱なんかにはべりやあこんなもん、マツチ当てられたみてえなもんだ!」

ランバート「その痩せ我慢が何時まで持つかな?」

ボブ「さあな。けどよ、伊達に図体がデカイ訳じゃねえんだ。ここで踏ん張らなきゃカナダ軍の面目丸潰れだ!」

ランバート「戯れ言を! こんなごり押しだけでこの私が倒せると思っていたのか?」

ボブ「へっ、ごり押し上等だぜ」

ランバート「んっ…!？」

サム「俺達だってよお、何の勝算もなく無闇に突っ込んだりなんざしないぜ?」

ランバート「!？」

ガシッ

ランバート「これは…!」

ボブ「後は任せませ! カレンちゃん!!」

背後から忍び寄ったネオゲッター3が、ガローンを両脇からがしりと、腰をホール

ドする。

加蓮「やあ〜と掴まえた」

ランバート「彼奴……何時の間に……!?!」

加蓮「正面からのぶつかり合いじゃ、勝てないかもしれないけどさ」

李衣菜「プラズマエネルギー、チャージ完了! いいよ、加蓮!」

加蓮「ネオゲッター3のパワーだつて——!」

ネオゲッター3の両腕に最大の力を込め、持ち上げたガローンをそのままバックドロップで背後、白銀の大地に頭から叩き落とす。

ランバート「ぐお……!」

李衣菜「どうだ! ゲッターの力、思い知ったか!」

凜「別に李衣菜の活躍じゃないでしょ。今のは」

ランバート「まだまだ……! これしきの事では!」

ひつくり返ったまま、宙に浮かんだ足をそのまま、踵落としのようにネオゲッター3へ叩きつける。

加蓮「ふ……ぐっ……!」

ランバート「死ねい!!」

加蓮「フィンガーネット!!」



ランバート「!?」

ほぼ零距离でフィンガーネットを射出し、ガローンを雁字搦めに捕縛。

ランバート「こんなネットごとき……!」

加蓮「やらせない……!」

グオンツ

下半身をタンクモードに切り替え、左右逆方向に軌道し、ネオゲッター3を回転させる。

ランバート「ぐううう……ッ!」

加蓮「そおれっ!」

回転の勢いが最高潮に達したところで、ガローンを宙高く放り投げる。

加蓮「みんな!」

ジャック「OK!!一斉攻撃だ!」

ボブ「俺達の祝砲だ!」

美波「ゲッターマシンガンで!」

卯月「ゲッタービーム!!」

加蓮「プラズマブレイクッ!」

ドウツ

四方八方からの一斉砲撃。体勢を直す間もないガロンに直撃し、爆発。辺りは爆炎に包まれる。

ボブ「やったか!？」

ジャック「Oh!それは言っちゃいけないFlagデス!!」

凜「加蓮!」

加蓮「分かっている!——オープンゲット!」

美波「凜ちゃん!？」

黒煙を突き抜け、3機のゲットマシンが飛び出す。

凜「まだ倒したと決まった訳じゃないからね」

加蓮「いい加減ネオゲッター3じゃ限界だし、分離するなら、このタイミングしかない」

い

李衣菜「用意周到って言うの?もう何が何だか…」

加蓮「勝つために、今は付いてくればいいよ。凜、後は任せるから」

凜「ゲッターチェンジ!!」

ネオジャガー号が戦闘に立ち、ネオゲッター2にチェンジ。

ランバート「ぐ…ぐう…!まだだ…!まだ終わらん!!」

サム「あの野郎、ボロボロになって、まだ動けんのかよ!？」

ボブ「まったくシブてエ野郎だぜ！」

凜「任せて。決着は着ける」

ギユウウ…ウんツ

李衣菜「ちよ、ちよつと！どこ行くの!？」

凜「限界まで加速する！少し喋らないで、舌を噛むよ！」

グンツ

李衣菜「うご…っ!？」

ロシアの広大な空を一杯に使うように、ネオゲッター2が空に一筋の線を描き、加速していく。

ランバート「ぐう…。何をするつもりか知らんが、思う通りには、させんツ！」 ヒュンツ

ガローンが鎮座する、台座のような飛行ユニットを呼び出し、ネオゲッター2を追走する。

凜（追ってきた？スピード勝負なら望むところだけど） グツ

加速するネオゲッター2に迫る勢いのガローンを相手に、更に速度を上げて引き離しに掛かる。

ランバート「ぐうっ！バカな！このメタルビースト・ガローンの方が、性能は上の筈

だ！追い付けぬ筈がない!!」

凜（李衣菜達用に新しく作られたネオゲッター……。私が乗ってたのよりも大分伸びる。これなら——!）

ギョーンツ

加速を止めない。背中のパニアから溢れるエネルギーが勢いを増し、加速することで発生する衝撃を受け止める装甲がガタガタと軋みを上げる。

ポブ「おいおい、ネオゲッター2はどうなつちまつたんだ?」

サム「こつちのレーダーじゃ、もう追いきれねえ。まさか、エネルギーがオーバーロードしちゃまつたんじゃねえだらうな?」

メリー「このままじゃ空中分解よ!」

凜（このゲッターの限界、試す!奈緒、力を借りるよ——!）

凜「——ネオゲッタービジョンツ!」

ランバート「!?」

高加速からの高速機動。ガローンの上空で一回転捻り、ガローンの背後に着ける。

凜「ドリルアームガン!」

飛行ユニットの推進器を狙い、破壊。

ランバート「ぐっ……!」

凜 「今……!」

グンツと弧を描いて急上昇。その後ジグザグと飛行し、距離を調整して速度を維持したままガローンに迫る。

ランバート 「見え透いた突撃など……!」

凜 「フェイントはある!」

ガローンへ水平に迫る機動から、一気に急上昇して、太陽を背に。

ランバート 「おお……!?!」

凜 「——!!」

ランバート 「目眩ましをしようと、来るのが分かっていたらば……!」

ドリルを突き出し、ガローンに急降下してくるネオゲッター2に、破壊光線を放つ。

ランバート 「どうだ!?!」

——ザッ

ランバート 「……!?!」

気配は、後ろからした。

凜 「ドリル……!」

ランバート 「~~~~ッ!」

凜 「アアアアアームツ!!」

ズガッ

急降下中での急制動、ネオゲッタービジョンで光線を回避し、バック転でガロンの背後に着地。刹那のタイミングのダッシュと共に放たれたドリルアームは、咄嗟に回避を行ったガロンの、左胴体を大きく抉り取った。

ランバート「お、おとおおおおくく!!?」

体勢を整えれず、そのまま落下するガロン。

凜「終わりだよ」

そのガロンを足蹴にして動きを制し、抜き放ったプラズマブレードの切っ先をその喉元に突き付ける。

加蓮「流っ石、本当のネオゲッターのパイロット」

李衣菜「奈緒をニセモノみたいに言うのはやめようよ…」

ランバート「ぐうう…。ううううう…ッ!」

加蓮「凜、早くトドメ刺して、晶葉達と合流しよ」

凜「うん。例え、アンタが元は人間だったとしても、ランドウに改造されて利用されている以上、躊躇いはしない」

李衣菜「…ねえ、それなんだけど」

ランバート「うううう…がああアアアア——ッ!!」

凜 「な、何…!?!」

ランバート 「ウアアアアツ!! ああつ! 私は! 俺は!! 俺はアアアツ!!」ズアツ

凜 「っ!?!」

突然、奇声を発し暴れだしたガローンの光線を咄嗟に躲す。が、ガローンを拘束から逃す。

凜 「しまった…!」

加蓮 「今近付くのは危ないと思うよ。様子がおかしい」

凜 「…うん」

李衣菜 「何が起こってるの?」

ランバート 「あ、あツ!! 俺は! オ・レ・は…!」

ラセツ 『ランバート、もうよい。一時帰投せよ』

ランバート 「!? 貴様、キサマア…!」

ラセツ 『むっ? フン…所詮は不完全な有機体か。機械のように制御はできんか』

ランバート 「キサマアアアアツ!!」

ラセツ 『…』ピッピッ

ランバート 「グウ!?! う…ぐ…」。 …」

ラセツ 『貴様の現時点での任務は解く。新たな任務を与える。速やかに帰投せよ』

ランバート「了解しました。ラセツ様」  
ザツ

凜「っ……！逃がすわけには！」

李衣菜「待つて！」

凜「李衣菜？」

李衣菜「私達のやることは、アイツを倒すことじゃない。どうせアイツがドラゴン  
ターゲットに戻ったって言うなら、ネオゲッターだけで飛び込むより、ジャック達と足並  
みを合わせた方がいいよ」

加蓮「確かに。追っても追わなくても、戦うことになるのは一緒だしね」

凜「……それだけが理由じゃなさそうだけど？」

李衣菜「え、っ？あはは……」

凜「どういうこと？」

李衣菜「……うん。アイツは、アレはシユワルツの“敵”なんだ。だから、私達が倒し  
ちやうのは、何て言うかな……筋が違う気がする」

凜「筋が違う？」

李衣菜「シユワルツは、自分の手でアイツと決着を着けたがつてる。それを邪魔する  
のは、ロックじゃないよ」



凜 「感情とか、個人の都合で戦局を左右しちやダメだと思うけど?」

李衣菜 「それは、そうだけどき。だけどその分、私達だって戦う。ランドウの戦力と。わだかまりを残したまま、出来たことをやりきれないで終わるなんて、私なら納得できないかなって」

凜 「……分かった」

李衣菜 「ホントに!」

加蓮 「シユワルツがアイツに手を焼く分、李衣菜が頑張ってくれるんだもんね?」

李衣菜 「ええっ!? ああ……うんっ。任せてよ!」

加蓮 「うふふ! 頼りにしてる」

凜 「方針が決まれば、先ずは卯月達と合流しよう」

李衣菜 「そうだね。……ボルガやテキサスの方も、何事もないといいんだけど——」

——ボルガ・サイド。

ガルマン『!!』

ギリギリギリ……ッ

クルー 「ボルガ、ダメージレベル上昇! このままでは……!」

スミノフ 「くっ……! 何とか抜け出すことは出来んか?」

クルー2 「現在、分離したメタルピーストから挟み込まれ、両腕部とも身動きが取れ

る状態ではありません！」

スミノフ「損害を抑えて状況を打破するのは難しいか……！」

ガルマン『ボルガ…、ココデ、潰ス!!』

左右からの圧力が強まり、ボルガの装甲に亀裂が走る。

スミノフ「…頭部副砲、発射用意!!」

クルー「艦長…!?!」

スミノフ「副砲でこちらを挟み込んでいる片方を破壊し、抜け出す隙を作る」

クルー「ですが、それでは本機にも被害が…！」

スミノフ「もはや手段は選んでられんのだ。ここでボルガを失うことが、何よりの損

失である！」

クルー「は…はっ！了解しました！」

クルー2「頭部副砲、発射用意！」

クルー「弾頭装填…。何時でもいけます！」

スミノフ「目標、メタルビースト右側面部！」

クルー2「ターゲット、捕捉！」

スミノフ「撃てえ!!」

ガルマン『?!?』

ボルガとボルガを挟むガルマンの間で爆炎が広がった。

スミノフ「ボルガ、最大戦速！」

右側からの圧力が弱った隙に、ガルマンの拘束から逃れ、距離を取る。

ガルマン『二、逃ガサン！』

スミノフ「無論、逃げられるとも思っではないさ」

左右に別れた状態から合体したガルマンと対峙するボルガ。

クルー「ボルガ、近接戦闘形態へ移行します」

スミノフ「立ち上がれ、ボルガ!!」

ボルガがその巨体を支えていた両腕を持ち上げ、拳を握る。

ガルマン『グフフフ…。虚仮威シダナ…。両腕で支エテイナケレバ、マトモニ立テ奴

ガ。ソレデ、動ケルモノカ!』

スミノフ「甘く見られたものだな！」

ガルマン『?!』

その足を強くウラルの大地に踏み込み、正面からのストレートパンチで、ガルマンを山肌に叩き付ける。

クルー2「ダイレクト・モーション・リンク良好!艦長、心置きなくアイツをブツ飛ばして下さい!」

スミノフ「心得ている！ドラゴンタートル撃破のため、憂いは残さん!!」  
ガルマン『グフ…!!』

左右のワン・ツ。ガルマンを山肌にめり込ませる。

スミノフ「トドメだ!!」

両腕を握り合わせて、高々と振り上げ、

スミノフ「Y p a a a !!」

強烈なアームハンマーで、ガルマンを粉碎。衝撃で山崩れが起こり、そのままガルマンを埋葬した。

クルー2「へっへっへっ！大勝利だぜ！見たか!!」

スミノフ「気を抜くな！作戦はまだ始まってもない」

クルー2「は、はい！失礼しました！」

クルー「ボルガ、巡航形態に戻します」

スミノフ「うむ。今の戦闘で、大分出遅れてしまった。我々も決戦の地へ急ぐぞ!!」  
「「Y p a a a a a a !!」」

つつく

## 第19話『決戦、ドラゴンタートル!!』

ウラル山脈

李衣菜「……ん……しよ、つと……。ここを、……こうして……つと……」 カチャカチャ

加蓮「リーナ？調子どう？ネオゲッター、どんな感じ？」

李衣菜「加蓮？あとは私のネオイーグル号の電送系をチェックしちやえば、一先ずはOKかなー？」

加蓮「応急処置だけだね」

李衣菜「それは言わないでよ……。こっちだって、ネオゲッターが凜のやる機動に耐えられないとは思わなかったんだから」

加蓮「だね。やっぱ、真ゲッター何て扱ってる人には、ネオゲッターは手狭なのかも」

李衣菜「分かってはいたことだけど。今の状態じゃ、凜には我慢してもらおうしかないって言うっておいて」

加蓮「りょうかい」

李衣菜「じゃ、あと20分位で飛ばせるようにしておくから、もうちよつと待ってて」

凜「……」ボ……

加蓮「すごい気の抜けた顔。こんなの、ファンの前じゃとても出せないね」

凜「…加蓮」

加蓮「派手にゲッターを飛ばして気が抜けちゃった？はい、ココア」

凜「ん。ありがと。ネオゲッターは？」

加蓮「今リーナが応急処置で何とかしてる。あと20分だつて」

凜「そっか……」

加蓮「関節のあちこちが悲鳴上げて、電送系が大変だつてさ」

凜「ごめん……」

加蓮「ま、凜のお陰で状況は打破できたわけだし、感謝はしてるけど」

凜「……」

加蓮「そんな辛気くさい顔しない。この戦いは前哨戦。これから本番が本番なのに

…、凜がそんなんでどうすんの」

凜「…ごめん」

加蓮「また謝る。どうしたの？」

凜 「うん…。私、何にも出来てないな、何て」

加蓮 「何言ってるの?」

凜 「これ、ネオベアーのエンジンの余熱で温めて来たんでしょ?」

加蓮 「まあね」

凜 「李衣菜の方も、ネオゲッターの処置が出来るし」

加蓮 「そりゃ、リーナは整備の手伝いで、ある程度の応急処置くらいは、ね」

凜 「なのに、私は何の手伝いも出来なくて…。私のせいで、ゲッターがこんなになつたのに…」

加蓮 「何? まだこれ以上何かしたいの?」

凜 「何かって…」

加蓮 「戦闘も整備も、何でもかんでも出来るようになって、戦闘のプロでも自称するつもり?」

凜 「そう言うつもりじゃ、ないけど…」

加蓮 「でしょ。リーナが整備が出来るのは、偶々出来るようになる切っ掛けがあったから。それなら、出来る人に任せなさいって」

凜 「…いいのかな、それで」

加蓮 「いいに決まってるでしょ。アタシだってほら、整備手伝いもしないでココア飲

んでるし」

凜 「それは言えてる」

加蓮 「ね。凜が何に対してもストイックなのは知ってるけど、何にでも才能を發揮出来るほど、人間って万能じゃないよ」

凜 「加蓮にそう言われたら、何にも返せないね」

加蓮 「今の状態でも、凜は十分強いよ。凜がいなかったら、きっとあのメタルビーストを倒せなかったと思う。それだけ頼りにしてるんだから、ちよつとの事くらいはアタシ達に任せて、ゆっくり英気を養っておきなさいって」

李衣菜 「ふうく……。応急処置完了く、って……。何？何か話し中？」

加蓮 「ううん。今丁度終わったトコ」

李衣菜 「ふうん？そう……」

ジャック 「Hey, リーナ。ゲッターの整備は終わったか？」

李衣菜 「ジャック！うん。ごめん、周辺の警戒させちゃって……」

ジャック 「H A H A, 余計な気遣いは N o t h i n g! 動けなくなつたゲッターを一機だけ残しておくわけにはいかないからナ！」

メリー 「何処にランドウの伏兵がいるか分からないもの。慎重に動いておくに越したことはないわ」



凜 「その通りだね。けど、ゲッターの修理が終わったなら、ここに長居は無用だ」  
ボブ 「おう！いいよいよドラゴンタートルをブツ飛ばしに行くんだな……！」

サム 「ここからが本番だね。さあ、早くゲッターに乗り込んでくれ！」

加蓮 「うん、分かってる！」

各々のゲットマシンに乗り込み、起動させる。

凜 「発進したら、一先ずはネオゲッター2に合体するよ」

加蓮 「こっちはオツケー」

李衣菜 「分かった」

凜 「ゲッターチェンジ!!」

空中に飛び出して、ネオゲッター2にチェンジ。

ジャック 「さ、今日は死ぬにはもってこいの日だぜ」

卯月 「え？」

メリー 「ネイティブ・アメリカンの考え方の一つよ。所謂死生観の様なものだけど、悪い意味じゃないわ」

ジャック 「またこの言葉を言えるように、全力で生きろ。必ず生きて帰ってこようぜ

！」

李衣菜 「死ぬにはもってこいの日……！そうだね！生きてるって言い続けるために、私



菜々「ど、どどん距離を詰められてますよお！」

みく「だったら手近な奴から吹き飛ばせばいいだけにや！ゲッター……！」  
腹部の発射口を開く。

みく「——ビィイームツ!!」

ズワオ

メタルビースト☒s《!!》

みく「うにやあ……！トマホークブーメラン！」

ゲッタービームで仲間が吹き飛ばすのも厭わず、殺到するメタルビーストを、トマホークを投擲して迎撃。

みく「ここは仕切り直しにや！——オーブンゲット!!」

ゲッター1を分離。メタルビーストの群れの合間を縫うように飛び抜け、

瑞樹「チェンジ！ゲッター、2!!」

上空でゲッター2にチェンジ。

瑞樹「ドリルツ、アアームツ！」ギユルルウウウンツ

右腕のドリルを唸らせ、急降下と共に直下のメタルビーストを頭部から粉碎した。

みく「うにやあ……。グロいにやあ……」

菜々「ウブ……」

瑞樹「構ってる余裕なんてないから、一気に行かせてもらおうわよ！ゲッタービジョン！！」

ゲッター2の高速機動。分身を幾重にも重ね、敵を惑わす。

瑞樹「ドリル、ストオオームツ！！」

ゲッタービジョンで浮き足立ったメタルビーストを、ドリルストームで怯ませ、

瑞樹「やあああああアツ！！」

背中のバーニアに全開で火を入れ、最大戦速で加速。

瑞樹「ゲッターアーム！」

左腕のアームでメタルビーストを抉り、破壊。

瑞樹「ドリルミサイルッ！」

トドメと言うようにドリルをミサイルにして撃ち出し、手近なメタルビーストを破壊。

メタルビースト・ビーン《！！》

瑞樹「きやつ！」

地上で戦闘を繰り広げるゲッター2に、上空からもメタルビーストは迫る。

みく「飛んでくる敵にはゲッター2じゃ不利だよ！」

瑞樹「そうみたいね。オープンゲッター！！」

瞬時に判断を下し、ゲッター2を分離。

みく「うにやああああ!!カトンボ如き合体するまでもないにやあ!!」

機首を上空に向け、寄ってくるメタルビーストをミサイルとバルカンで蹴散らす。

菜々「あれが若きですか」

瑞樹「確かに、振り向いてる余裕はないわね」ワカルワ

菜々「覚悟はしてましたけど、この敵の数は…。弾薬もエネルギーも切れたら不味いですよ?」

瑞樹「ええ。だからそろそろエネルギーは節約しないと」

菜々「でしたら、またゲッター2ですか?」

瑞樹「あら、何言ってるのよ」

菜々「はい?」

瑞樹「こう言う時はよく言うでしょ。〃手〃がなければ力でゴリ押せて」

菜々「よく聞きませんし初耳なんですけど…」

瑞樹「どのみち耐久力の低いゲッター2じゃ長期戦は不利よ。と言うわけで、次は任せろわ、菜々さん」

菜々「やつぱりそう言うことですかあゝ!?」

みく「ナナちゃん!敵がそっちに行つたにやあ!」

菜々「へっ？」

ビーン《——!!》

菜々「ひいつ!!」カチリッ

条件反射で放たれたミサイルが、迫り来るメタルビーストを爆散する。

みく「流つ石ナナちゃん！」

菜々「た、ただのまぐれですよ!!」

瑞樹「まぐれでも大したものよ。さ、この勢いに乗りましょう」

菜々「え、？」

みく「向こうでリンダさんが敵に囲まれてるにや!!」

瑞樹「囲まれてる以上、ゲッター1や2の攻撃で巻き込むわけにはいかないわ。ゲッ

ター3で強行突破して合流しましょう」

菜々「ええええええ!!? 幾らなんでも無茶苦茶すぎません!?!」

みく「考えてる時間はないよ! 瑞樹さん、先に行こつ!」

瑞樹「ええ、分かっているわ」

ジャガー号が先行して高度を落とし、イーグル号が垂直にドッキング。

みく「さあ、ナナちゃん! 早く!!」

菜々「ううう……! 分かりました! こうなりやヤケです! やってやるだけです!!」

菜々「チエ〜ンジゲッター3イ!!」

勢いよく合体した衝撃で派手に地上に着地。轟音と土埃を巻き上げて周辺のメタルビーストを怯ませる。

菜々「く〜く〜…やああああ〜!ゲッタータックル!!」

固い岩盤の大地をキヤタピラで穿って速度を上げ、土煙を上げてゲッター3が持てる最大の速度でメタルビーストの中を駆け抜ける。

菜々「ゲッター…!パアンチっ!!」

加速の勢いをそのまま、死角からキングダムを奇襲しようとしていたメタルビーストを全力のゲッターパンチで粉碎し吹き飛ばす。

リンダ「ゲッター3!?!」

みく「リンダさん、まだ戦える?」

リンダ「ええ、こっちの損傷はまだ軽微よ」

みく「良かった…。ここからはみく達と2機で何とか乗り切るにや!」

リンダ「ええ、助かるわ。帰ったらたっぷりご褒美をあげる」

みく「ほどほどで大丈夫だよ」

菜々「ゲッターミサイルッ!連射連射連射く〜っ!!」

両肩のミサイルを右も左も、上も下も関わらず乱れ撃つ。

瑞樹「大盤振る舞いで、遠慮は要らないわよ！」

菜々「瑞樹さんの方も撃つてください全弾一斉掃射です！」

瑞樹「了解！…何て言っても、機関砲だけどね！」

ズドドドドドドドド

ゲッター3のミサイルと、ジャガー号機首の機関砲が火を放つ。

みく「しっかし、撃つても撃つても、次から次に出てきてキリがないにや！」

リンダ「まったくね。盛りをついたブ男でも、もう少し節操を弁えるわよ」

みく「そっちの方面、みくはよく知らないからツツコめないにやあ」

リンダ「ともかく、2機だけでもいざれ身動きが取れなくなるわね…。せめて味方の位置が把握出来ればいいのだけれど」

みく「そんな事言っちゃって、リーダーがこう敵機の反応に埋め尽くされてたら、近くにいる味方の反応だって見えないよ！」

瑞樹「こんな戦況じゃ、おちおち通信でコミュニケーション取り合うなんてのも出来ないしね」

リンダ「こうして、至近まで来てオーブンチャンネルで会話するのがやつとじゃ、100m離れた味方機と連絡を取り合うもの難しいかしら」

菜々「ま、まさかもうみんなやられちゃったなんて事ないですよね？」



みく「あり得ないにや！美穂ちゃんも茜ちゃんも、そんな簡単にやられるタマじやないにや!!」

瑞樹「悲観的に考えを巡らせるのはやめましょう。心が折れたら、先に倒れるのは私達の方よ」

菜々「そ、そうですけど…!」

瑞樹「今は、味方を信じて、立って戦い続けましょう。大丈夫、必ず勝てるわ」

通信士「メタルビースト、攻撃来ますっ!」

橘「取り舵、回避運動!!」ズオオオオオ

莉嘉「きやあっ!!」

雨あられのように降り注ぐ砲撃の弾幕の中を、クジラが旋回して駆け抜ける。

通信士「こ、これ以上は限界です!」

橘「と言つて、何処に逃げると言うのかね?」

通信士「そ、それは…」

橘「すでに覚悟は決まっているはずだ。この戦いに参加する以上、我々に逃げるこ  
となど許されん」

橘「ソルトガン、投射準備!テキサス合流まで、少しでも我々の力でランドウの戦力

を削ぐのだ!!」

通信士「りよ、了解！」

橘「ソルトガン、発射！」

クジラの艦底部から覗かせた砲門から、地面の敵機目掛けて無数の鍛造弾が降り注いだ。

かな子『ブリッジ、橘博士聞こえますか？こちら真ゲッターロボ、発進準備完了です』  
——ハンガー。

晶葉「突貫作業だったが、どうにか間に合ったな」

主任「しかしよ、計器のチェックも出来てねえ、この状態で出すのは危ないんじゃないやねえのか？」

晶葉「問題が起これば騙し騙し使っていくさ。かな子にはそれだけの实力がある」

晶葉『かな子、通信機器のチェックだ。こっちの声は聴こえているか？』

かな子「あ、晶葉ちゃん。はい、ノイズもなくて良好ですよ」

晶葉『そうか。送受信は良好と。戦闘で孤立することはなさそうだな』

かな子「そっちは大丈夫ですけど、どうして真ゲッター3に合体した状態なんですか？」

晶葉『作業の手順を省くためにな。状況次第ではキツイ戦いになるかもしれんが、分

離と他の形態への合体はしないでくれ』

かな子「それって、真ゲッター3だけで戦うってことですか?」

晶葉『そう言うことだ。オーバーホールしていたものを無理に仕上げたわけだからな。細かい部分は、どうなるか分からん。だから、お前が一番得意なゲッター3の状態で固定した』

かな子「…分かりました。やってみます!」

橘『かな子くん、準備はいいかね?ハッチを開くぞ』

かな子「はいっ!何時でもお願いします!」

莉嘉『かな子…』

かな子「莉嘉ちゃん…。そんな暗い顔しないでください」

莉嘉『必ず、必ず帰ってきてよ!』

かな子「分かっています。またみんなで、一緒にお茶しましょうね」

莉嘉『うん。いつてらっしやい』

かな子「はい、いつてきます!」

橘『ハッチ開放!真ゲッターロボ、発進!!』

かな子「真ゲッター3、発進します!!」

弾幕飛び交う中を降下し、戦場に降り立つ。

かな子「っ……！みんなは……」

晶葉『すぐに敵が来るぞ！構えて！』

かな子「！」

メタルビースト《——！！》

かな子「っ……！ハンマァー……！パアンチ！！」

降下直後の真ゲッター3を狙ってきたメタルビーストを、その剛腕で殴打。

メタルビースト《——?!?》

かな子「……？」

かな子（思ったよりもパワーが上がらない……？）

かな子「なら……！」

メタルビーストにぶち当たった右の拳を引き戻して、すぐさま左の拳を放って今度こそ

メタルビーストを粉碎する。

かな子（……単独操縦でここまでパワーが下がるなんて）

メタルビースト《!!》

メタルビーストが徒党を組んで殺到する。

かな子「っ……！ミサイラストームッ！」

真ゲッター3後部のミサイル・サイロを開き、周囲に放射して殺到したメタルビース

トを蹴散らす。

かな子「パワー不足でも、贅沢なんて言っていられない。何とかやってみせなくちゃ！」

晶葉『かな子、3時の方角に爆発光を確認した。友軍の誰かがその近くにいてもいいかも。救援に向かってくれ』

かな子「え？でも、そしたらクジラが……」

晶葉『こちらの心配は無用だ。いざとなれば、追っ手を振り切って戦域を離脱するくらいの速力はある。こちらの戦力が整う前に犠牲が出る方を避けなければな』

かな子「……分かりました。真ゲッター3、行きますっ！」グッ

群がるメタルビーストを蹴散らしながら、真ゲッター3は爆走。

橘「よし、こちらも攻撃の手を緩めるな！己の身は己自身で守るのだ!!」

莉嘉「かな子……、みんな……」

晶葉「心配するな」

莉嘉「晶葉……」

晶葉「と言っても無理な話だろうがな。だが、大丈夫だ。皆、必ず帰ってくる」

莉嘉「……」

莉嘉（アタシには、ここで応援するしか出来ない……。けど、絶対、負けちゃダメなん

だからね、みんな——！)

ニオン「うわあああああッ!!」

ザンツ

トマホークを大上段に持ち上げたダイノゲッター1の一撃が、メタルビーストを一刀の元、斬り伏せる。

ニオン「しやああああ!!」

そのまま、二の太刀を横に薙ぎ払い、先程切り裂いたメタルビーストを粉碎しながら周囲にまとりつくと敵陣を振り払う。

鉄甲鬼「敵が集まってきているな……。一度距離を取れ」

ニオン「この戦場に距離を取る隙間などあるかッ!!」

応じながら、ダイノゲッター1の手刀でメタルビーストの胴体を貫く。

ニオン「…フン」

芳乃「……ほー……」

鉄甲鬼「……?どうかしたか、芳乃」

芳乃「少々ー。ニオンさんー、少し左へー、ズレて下さいませー」

ニオン「左だと……?」

言われた通りに、左へ。

芳乃「もう少ター」

二オン「一体なんだと言うのだ？」

芳乃「そのくらいいでー、よろしいかとー。ではー…」

鉄甲鬼「？」

芳乃「頼みましてー」

ズ ド ド ド ド ド ツ

二オン「!?」

先程までダイノゲッターのいたポイントにミサイルの雨が降り注ぎ、殺到していたメタルビーストを吹き飛ばした。

二オン「何だ!？」

かな子「ダイノゲッター…!!二オンさん達ですか?援護します!」

鉄甲鬼「真ゲッターロボ…!!動くのか?」

かな子「はい。私一人の操縦なので、パワーは落ちますが、このくらいのメタルビースト相手なら…」  
ムンズッ

メタルビースト

《?!?!》

後ろから真ゲッター3を羽交い締めしようとしたメタルビーストの頭部を鷲掴み、反

対のメタルビーストへと叩き落とす。

かな子「何とかありません！」

芳乃「……」

鉄甲鬼「頼りになるな」

二オン「問題ないのなら手を貸せ。ゲッター飛焰と合流する」

かな子「茜ちゃん達、近くにいますか？」

鉄甲鬼「ああ、現状、尤も厄介な連中の相手をしている」

かな子「厄介な相手……？」

茜「ドゥララララララララララララララッ!!!」

突き出した右腕に装着したガトリングガンから、無数の弾丸を周囲にばら撒く。

隊士「何の！」

隊士2「これを受けよ！」 シュバツ

茜「っ！」

2機の連携でプロト・ゲッター1の射撃を躲し、投じられたクナイを反射神経で避ける。

茜「危ないところでした！」



美穂 「これまでの機械的な動きとは違うみたい…。茜ちゃん、向こうのペースに飲まれちゃダメだよ！」

茜 「分つかりました！向こうがこちらの間合いに入つてこないのなら…！」  
ダツ

茜 「こちらから飛び込むだけです！」

アーニヤ 「H e T : : アカネ！それは、ダメ…！」

美穂 「え？」

アーニヤ 「左… : : z a c a d a、伏兵が、います！」

茜 「…っ!?うあ…！」

横からの衝撃。プロト・ゲッター1が宙を舞う。

茜 「ガッ…！」

大地に落下し、衝撃が伝わる。

副官 「左右の警戒が甘いようだな。まるで素人だ」

茜 「痛た…。伏兵とは、やられました！」

美穂 「茜ちゃん、血が…！」

茜 「少し口を切っただけです！まだ大したことじゃありません！」

アーニヤ 「メタルビースト、来ます!!」

茜 「オーブンゲット!!」

倒れたプロト・ゲッター1にトドメを刺すべく飛び掛かってきたメタルビーストの群れを、ゲッターを分離させて巧みに回避。

茜 「チェンジゲッター1!!落ち着いて態勢を直している時間ありませんか!」

美穂 「茜ちゃんが落ち着いてる時って、そんなにないような…」

茜 「ああ!!それもそうでしたね!」 タハッ

副官 「同志達よ!機を逃すな!!敵を包囲し、一気に仕掛ける!!」

隊士s 「御意!!」

アーニヤ 「アカネ…!」

茜 「はいっ!」 グンッ

前後、左右、斜めから次々に襲いかかる量産型のジャコツの攻撃をその合間を縫うようにいなしていく。

副官 「彼奴、ちよこまかと…!」

茜 「アーニヤさん!ゲッターエネルギーを!!」

アーニヤ 「Haa!…何時でも、大丈夫、です!!」

茜 「それでは、ゲッタービィイームッ!!」

左肩の砲身からゲッタービームを量産型ジャコツの一団に向け放つ。

副官 「そんな大砲など、当たるものか！」

美穂 「確かにそうかもしれない、けど！」

ズワツ

隊士 「くくくつ!？」

茜 「一瞬でも陣形を崩せれば十分です!!」

隊士 「何と…つ!？」

ズアツ

回避行動で左右に散った量産型ジャコツの1機に肉薄し、鉤爪を突き出した拳をアツパーのように振り上げ、その上半身を大きく抉り剥がす。

アーニヤ 「上手く、いきました、ね♪」

茜 「先ずは1機!!」

副官 「むう…!小娘と侮っていたと言うことか…!各機、5番機の抜けた穴を補え。すぐに陣形を立て直すのだ」

美穂 「…やっぱり、向こうの方が落ち着いてるみたい」

茜 「ですね!ですが、落ち着いていようがいまいが、勝った方が勝者です!!」

副官 「真理だな。が、常に勝者になれると思うな!」 バツ

アーニヤ 「来ますか…!」

茜 「右ですか？左ですか!?!どこからでも受けて立ちますよ!!」

副官 「その全てだツ!!」

シユバツ

美穂 「3つの方向に別れた?!」

隊士 「捉えた…!封縛!!」 シユルツ

茜 「…!?!これは…!?!」

左右と正面、3方向に分かれた量産型ジャコツが放ったワイヤーが、プロト・ゲッター1の手首と首に巻き付いて拘束。

茜 「ぐっ!?!この…!?!このお!!」

アーニヤ 「бесполезный!アカネ!無理矢理、はダメ、です!」

茜 「ぬぐぐ…!ゲッターのパワーで千切れないなんて、頑丈ですね…!」

美穂 「そ、空飛んだら強引にでも引き剥がせないかな?」

茜 「その手がありました!」

隊士 「させると思おうか!これで終いよ!!」

副官 「受けよ、包雷陣!!」

バリバリバリバリバリイッ

茜 「ぐううううううッ!!?!」

アーニャ「あゝ…アアゝ…っ!!」

美穂「うあ…! きやあああつ!!」

プロト・ゲッターを拘束したワイヤーを伝い、放たれた電流が全身を奔る。

茜「ぐ…:…あああゝ あああああゝゝッ!!」

副官「はっはア!! コックピットの中で、全身黒焦げになるがいい!!」

茜「ああゝ…:…ぐ…:…グウウウッ!!」ギンッ

隊士「…?げ、ゲッターの様子が可笑しい…!」

副官「まさか! この状態でも生気を失わない!? 寧ろ、闘志を増しているとも言えるか?!」

茜「ウ…:…ガアアアアアア!!」

隊士「ワイヤーが…:。ふ、副官殿!!」

副官「ええい、化け物め…! 一思いにトドメを刺してくれるッ!」チャキッ

小太刀を抜き放つて、プロト・ゲッターに突撃。

副官「ちえああああ!!」

茜「…:…ッ!! フンッ!」

隊士「うわあああつ!」

副官「何とお!!」

両手の鉤爪を使い、ワイヤーを切断。

茜 「ツ!!」

突撃を仕掛けた副官の量産型ジャコツの頭部を、まず潰した。

茜 「フンツ!!」

隊士 「ぎやつ!!」

頭部を失い、力の抜けた量産型ジャコツを、左に分かれた量産型ジャコツに蹴り当てる。

茜 「ゲッタートマホークツ!!」 ジャキツ

隊士 「まずい…! 離脱を——」

茜 「ダアアアアアアアアアアアツ!!!」

重なった量産型ジャコツを、まとめて一刀両断。

隊士 「ふ、副官がやられた…!」

ヤシャ 「恐るべき相手だな。やはり、ゲッターの乗り手は危険、と言うことか」

隊士 「ヤシャ隊長!」

ヤシャ 「臆するな。まだ数の上では我らの方が上。決して陣形を崩すな。動揺を敵に悟らせるな」

隊士 「は…はっ!」

茜 「……はあ……はあ……はあ……っ！わ、私は……」

美穂 「うう……。まだ手足がビリビリするなあ……」

茜 「美穂さん！」

アーニヤ 「2人とも、大丈夫、ですか？」

茜 「は、はいっ！それより、今一体何があったんですか!？」

美穂 「茜ちゃん、何も覚えてないの？」

茜 「……はい。一体全体、何が何やら……!」

アーニヤ 「ワタシ達も、痺れてたので……」

美穂 「私も、一瞬だったし……」

茜 「……はあ。ともかく、状況は打破した、ということでもいいんでしょいか!？」

ヤシヤ 「副官を倒したところ程度で状況は変わってはおらんぞ！ゲッター!!」

茜 「!? ……貴方は……どなたですか!？」

ヤシヤ 「つ……」ズルッ

美穂 「ほ、ほら……!李衣菜ちゃん達の方に付きまどつてた……」

茜 「なるほど、ストーカーですか!」

ヤシヤ 「こちらを挑発する余裕はあるか。そうでなくては面白くない」ジャキ……

ヤシヤ 「我を軽く見たことを後悔して死ぬがよいッ!!」ダッ

茜 「正面からですか！これは受けて立たなければ……！」  
ピリ……ッ

茜 「ッ……!?!」

ヤシャ 「でえええええいッ!!」

茜 「!! ぐううううーっ?!」 ガギイ……ンッ

ジャコツの腕の振り払いを、咄嗟に右腕でガードし受け止めるが、衝撃は殺しきれず、プロト・ゲッター1の体は吹き飛び、地面を転がる。

茜 「がっ……!」

美穂 「きやつ……!茜ちゃん、大丈夫?」

アーニヤ 「今のは、避けられない攻撃じゃ、ありませんでした」

茜 「すいません!反応が遅れてしまって……!」

ヤシャ 「のんびりしている暇などないぞ!!」 ゴアッ

茜 「!!」

ジャコツが口から吐き出した火炎が、プロト・ゲッター1を焼く。

茜 「うううううう……!」

美穂 「あ……茜ちゃん……!」

茜 「お、オープンゲッター……!!」



プロト・ゲッターを分離させて、ジャコツの火炎から逃れる。

ヤシャ「ほう…」

茜「美穂さん、アーニヤさん！すいません！大丈夫ですか!？」

美穂「う、うん。こっちはなんとか」

アーニヤ「こっちも大丈夫です」

茜「良かった…！では、すぐに態勢を立て直しましょう!」

アーニヤ「…アカネ、まだ、体…痺れますか?」

美穂「えっ?」

茜「すこし手足がピリピリしているだけです!この程度で、皆さんに迷惑を掛ける

訳にはいきません!」

アーニヤ「ムリをしても、アカネの身に何かあつては、仕方ありません」

美穂「そうだよ!茜ちゃんだけで体を張らないで!私達だっているんだから」

茜「美穂さん…アーニヤさん…」

アーニヤ「フォーメーションを、組み直します。アカネは後ろに下がって…」

ヤシャ「思い通りにさせると思つかア!」

美穂「!!」

空中に飛び上がったジャコツが、3機のゲットマシンに襲い掛かる。

ヤシャ「悪く思うな。普段なら合体を待つところだが、こちらも決戦なのでな。好機は行かさせてもらう」

アーニヤ「散つて…！回避運動を…！」

ヤシャ「細いの！先ずは貴様からだ!!」

アーニヤ「!!」

美穂「ダメええ!!」

ヤシャ「何っ！」

ジャコツと、プロト・ゲットマシン2号の間に、3号機が割って入り、ジャコツの攻撃を受ける。

美穂「きやああ!!」

アーニヤ「ミホ!!」

美穂「だ、大丈夫だよ…。私のマシンは、装甲が厚いから、盾の代わりくらい」

ヤシャ「大した度胸だ。そんなに死にたければ、先ずは貴様から…！」

かな子「ゲッターホーミングミサイル!!」

ヤシャ「ぬう?!」

プロト・ゲットマシン3号に対して、爪を立てた右腕を振り上げたジャコツに、飛来したミサイルが着弾し爆ぜる。

茜 「真ゲッター3? かな子さん!」

かな子 「向こうの相手は私になります! その内に合体を!」

二オン 「空中の雑魚共は俺に任せろ!」

茜 「皆さん……ありがとうございますっ!!」

美穂 「私が行くよ! 耐久力のあるゲッター3で、みんなのフォロウに回ろう」

アーニヤ 「Da:…分かりました。合わせます!」

美穂 「チェーレンジ、ゲッターア!! —— 3イツ!!」

プロト・ゲッター3に合体し、着地。

美穂 「かな子ちゃん!」

かな子 「はいっ! 同じゲッター3同士、力を合わせましょう!」

ヤシャ 「フン。重戦車が2機に増えたところで何になる?」

かな子 「その重戦車のパワーを……」 ジャコツ

美穂 「バカにしないで!」 ジャキンツ

かな子 「ゲッターホーミングミサイル!!」

美穂 「フィンガーマイスイルキャノン!!」

ズドドドドドドッ

隊士 「うおわっ!?!」

真ゲッター3とプロト・ゲッター3、2体の火器が同時に火を噴いて大地を震わせる。ヤシャ「臆するな！こちらの間合いで戦え！距離を詰めれば向こうの大砲も役には立たん」

かな子「パワーアーム!!」

隊士「や、ヤシャ將軍、危ない…!」

ヤシャのジャコツを庇った、量産型ジャコツの首に、伸びた蛇腹の腕が巻き付き捕縛。隊士「うわあああゝゝ?!」

かな子「ハンマー…! パアンチツ!!」

捕縛した量産型ジャコツを勢いよく引き寄せ、待ち構えるように構えた拳で一撃の元粉砕。

茜「真ゲッターロボ! 流石のパワーです!!」

かな子「でも、今は単独操縦だから、パワーは大分落ちてるんですよ」

美穂「あ、あれで…?」

かな子「今のは引き寄せる勢いも利用しましたから…」

美穂「それでゲッターのパワーを引き出すなんて…。私も頑張らなくちゃ!」グッ

美穂「プラズマキャノン、延伸!」

アーニャ「プラズマエネルギー、チャージ、始めます」

美穂「ゲッターエネルギーを制御に、茜ちゃん！」

茜「はいっ！縁の下で支えているので、遠慮なくブツ放してください!!」

ヤシヤ「そんなモノがこの距離で当たるものか！各機、散開だ！」

美穂「当てられないなら、当てられるようにするだけ！」

ヤシヤ「何をする気だ？まあいい。今だ！充填中のゲッターに攻撃を集中しろ!!」

隊士s「御意ッ!!」

かな子「美穂ちゃん！」

美穂「大丈夫です!!」

グググッ…

美穂「ゲッター金剛、力を借ります！」

美穂「——破岩、掌おっ!!」

渾身の力を込めた掌底を、地面に叩きつける。

ヤシヤ「うおお…!!これは…」

かな子「地震…?ゲッターの力で…!」

アーニヤ「チャージ、完了！ミホ！」

美穂「プラズマキャノン、発射ああっ!!」

ズワオッ

破岩掌が生んだ局地的地震に怯んだ相手に、プラズマキャノンの青白い光線を放つ。

ヤシャ「ぐうくくくつ…!!」

美穂「うあああああッ!!」

プロト・ゲッター3自身を旋回させ、周囲に放射するようにプラズマの線を描き、大地もメタルビーストもまとめて焼き払った。

シユウウウウウ…

美穂「……」

アーニヤ「プラズマキャノンの、稼働維持、限界…です」

茜「ヒユウ—— ツ!!まさに一網打尽!!爽快感が違いますね!」

美穂「けど、あっちの隊長格を倒すことは出来ませんでした…」

茜「ですね!油断大敵ですか…!」

アーニヤ「プラズマキャノン、冷却始めます。エネルギーの再チャージと併せて、次に使えるのは10分後…くらいですね」

美穂「プラズマエネルギーは無限りじゃないから、考えて使わないと…」

ヤシャ「くう…。残った者は…」

隊士「は、8番機、無事です」

隊士2「7番機の自分も…。それと、3番機と6番機も確認できます」

ヤシャ「一度に半数以上の同志を失うとはな」グググッ…

隊士「た、隊長…！隊長の機体は、損傷が激しすぎます…！ここは我らに任せ、一度後退を！」

ヤシャ「後退したところで、あのラセツが受け入れるものか。我らに既に退路など存在せん」

隊士「ですが…！」

ヤシャ「腕の一本や二本、ハンデとしては丁度いい…！それよりも陣を立て直せ。こちらが動きを乱して、勝てる相手ではないぞ！」

隊士「は…はっ！」

かな子「相手が態勢を整えて来ますよ！」

アーニヤ「別のエリアにいた、メタルビーストも、次々、こちらに向かってます」

茜「まだまだ、ランドウの方が優勢、と言うことですか！」

美穂「だとしても、怖がってなんていられない…！必ず、この戦いは勝たなくちゃダメなんだもん！」

「その通りだね！いいこと言うじゃん、美穂！」

ヤシャ「むう…？あの機体は、よもや！」

かな子「ネオゲッターロボ…！待ってました、李衣菜ちゃん！」

ジャック「おっと、ミー達も忘れてもらっちゃ困るぜ！」

卯月「お待たせしました！私達も合流して、戦闘に参加します！」

美穂「卯月ちゃん！みんなも、全員無事で……！」

ボブ「おいおい、そういう感動の仕方はまだちよつと早いんじゃないのかい？」

サム「そうよ！ゲストはどこだい？つて、俺らがゲストか！」

美波「戦場をパーティー会場に例えるなら……。ランドウの布陣に、私達が飛び込んで  
かいくわけだから、確かにゲストかもしれないね」

凜「だったら、会場の事なんて気にしないで、盛大に暴れようじゃん」

加蓮「サンセー。主賓の態度は悪いみたいだし、遠慮しないでお灸据えちゃお」

李衣菜「みんな盛り上がってるじゃん！いいよ、みんなのハートビートをランドウの  
奴等に響かせてやろうじゃん!!」

つづく



## 第20話 『決戦、ドラゴンタートルー2』

「オペレーター―艦長！ドラゴンタートル、リーダーに捉えました」

艦長「そうか。戦況は分かるか？先行したロボット部隊は確認できるか？」

「オペレーター―敵対反応が多く、個々の識別までは…。ですが、作戦領域にて爆発光を確認！戦闘は継続されている模様です」

艦長「むう…。何とかなっているか…！」

副長「しかし、ボルガの反応が見られません。艦長、ここは我らは静観するべきではないか？」

艦長「何を言う、副長」

副長「作戦の格子は、テキサスとボルガによる過重攻撃。つまり、ボルガ無くしては作戦の成功はありません。当然、テキサスが欠けるようなことがあっても…」

艦長「……」

副長「スーパードロップ部隊は、陽動としてその任務を全う出来ています。ここは、作

戦の効率を優先し、我々は後方で支援を行うべきかと」

艦長「……」

副長「幸い、こちらに對するランドウの攻勢は手薄です。このままなら、本艦の損害を抑えることも出来るでしょう」

艦長「……このまま、ならばな」

副長「艦長？」

艦長「状況は常に変化する。戦場において、このままであるなどと言うことはあり得ん」

艦長「戦争において生き長らえるのは臆病な者だが、戦場においては勇敢に飛び込む者が、勝機を掴み得る」

艦長「機関最大!!第3、第4エンジンにも火を入れろ!!」

副長「艦長!？」

艦長「副長、君の言うことは正しいかもしれん。だが、効率だけで戦争には勝てん!」  
副長「ですが……!」

艦長「前線で勝利を信じ、戦う者達を犠牲にするのが、正しいことと言えるかね？」

副長「……」

艦長「いや、この際善悪はどうでもいいだろう。大局的なモノの見方だ。ここで、こ

のテキサスを生かすために犠牲を払ったとして、果たして、この先の戦いに勝てると思うかね？」

副長「それは…」

艦長「あり得んよ。我々には目の前に提示された手札しかないのだ。それを全て切つてしまえば、我々には敗北しかない」

艦長「この戦いで手札を使い切るわけにはいかん！その意味でも、この戦いは我々とつて最高難度の戦いとなるだろう。しかし、それに勝利出来れば、我々に憂いは何一つなくなる！」

副長「この戦いが、我々にとつての試金石ということですか…」

艦長「そうだ。だからこそ、リスクを覚悟の上で飛び込まねばならん！必ず勝つのだ…！自分自身を追い込んで、この先の戦いに勝つために——！」

くくく 戦場 くくく

美穂「卯月ちゃん…！みんな！」

卯月「美穂ちゃん！お待たせしました！」

李衣菜「みんなお疲れさま！これからは私達も参戦するよ！」

加蓮「ま、それで何とかなるって敵の量じゃないけどね」

凜 「そうやって士気が落ちるようなこと言わない…」

加蓮 「でも、事実でしょ？」

美波 「そうね…。気合いで誤魔化しても、数の差は覆しようがないもの」

ボブ 「まったくだぜ…。敵の数がこっちの想定を越えてやがる」

サム 「どこから湧いてきてるんだって。ホント、ゲストの接待も楽じゃないよ」

李衣菜 「どっちかって言うと、こっちがゲストな気がしないでもないけど…」

ボブ 「じゃ、パーティーの主催者が最悪なんだな」

加蓮 「なら、ガツンと言ってやらなきゃ」

卯月 「ガツン、と…?」

美波 「言うには、まだ招待客が足りないわね」

凜 「OK. ボルガとテキサスが合流するまで、死ぬわけにはいかないって訳だね」

メリー 「少なくとも、ドラゴンタートルをドーバー砲と超ウエポン砲を有効射程に収

めるために、前線を押し上げなきゃならないわね」

ボブ 「押し上げるって、あの軍団をかア!？」

ジャック 「That's right!! Metal beastなんざ蹴散らして

やろうぜ！」

サム 「これはもう、神技だね…」

凜 「神技…。悪くない、…。やろう！」

李衣菜 「凜の気持ちも盛り上がってきたところで、ここは一つ、ハートビートにやっ  
ちやいますかあ!!」

凜 「ッ!!」

烈帛の気合いと共にネオゲッター2を疾駆。

ジャック 「Assault!? 何をする気だ、リーナ！」

サム 「馬鹿正直に突っ込んでつたら狙い撃ちにされるだけだぜ！」

李衣菜 「敵に統率の執れた動きなんかさせるもんか…!こつちは愚連隊だあ!!」

凜 「ッ!!」

高速で駆けるネオゲッター2に、メタルビーストの銃口が向く。

メタルビースト 《——》

李衣菜 「2人共、やるよ！」

加蓮 「オツケー」

凜 「任せて！」

メタルビースト 《!!》ズドッ

凜 「オープンゲッター!!」

バシユッ

李衣菜「ゲッターチェンジ!!」

李衣菜「ハンデイミサイルキャノンを喰らえッ!」

ズドドドドドドドッ——

メタルビーストの集中砲火を、オーブンゲットで巧みに躲し、敵陣の中央で再度合体し、ハンデイミサイルキャノンを放つ。

李衣菜「へへっ、右も左も敵敵敵! 狙いを定めるまでもない!」

照準も点けず、目の動きだけで敵を追い、両腕に搭載された火器を乱れ撃つ。

李衣菜「ウツヒヨ〜!! 最高だぜえ!! ロックンロールツ!!!」

バラバラララララッ

凜「……李衣菜、後ろだ。避けて」

李衣菜「分かった!」

阿吽の呼吸で応えて、ヒョイと身を翻して攻撃を躲す。

ネオゲッターーを通り抜けた弾丸は、反対のメタルビーストに命中して爆発した。

李衣菜「あはっ♪乱戦になったら、下手に攻撃してこない方がいいよ? そっちの方が数は多いんだからさ!」

メタルビースト《——》

一瞬、メタルビーストが攻撃を躊躇するのを感じた。この時点で、敵の攪乱には成功

していた。

李衣菜「みんな！今のうちに先に戦ってたグループと、美穂や茜達と合流するよ！」

サム「お、おう……！」

ジャック「言われるまでもないぜ！ Here we go!!」

パステチャー・キング『ヒヒインツ!!』

ボブ「サム！俺達だつて負けてられねえ！全速力で突撃だ!!」

サム「分かったぜ、兄ちゃん！」グイッ

ロボ・ストーンの上体を格納し、ローリング・アタックで、ランドウの敵陣に突撃。

サム「うおおおおおおお!!」

ボブ「おらあつ!! 馴らされてウラルのアスファルトになりてえ奴はドイツだ！まとめ潰してやるぜえ!!」

ロボ・ストーンが地ならしのように走り、その上空をパステチャー・キングに跨がったテキサスマックが駆ける。

ジャック「Mac rifle! Mac riot! 出血大Serviceだぜ

? Fire!!」

2丁拳銃のように両手に構えたマックライフルとマックライアットで狙いを定め、上空のメタルビーストを撃墜させていく。

卯月「私達はどうしましょう？」

美波「そうねえ……」

卯月「ジャックさんとボブさん達みたいに上と下に分かりますか？」

美波「敵の配置とこつちの戦力のバランスで言ったら、それが正しいと思うんだけど……」

メタルビースト《——!!》

美波「ツ!!」ズバアツ

飛び込んできたメタルビーストを、ブラックゲッターのレザードで真つ二つ。

美波「落ち着いて話し合ってる時間はないみたいね……!」

卯月「そうみたいですわね……!」

ブラックゲッターと、ゲッターD2を包囲した敵陣に対し、両機背中合わせに構える。

卯月「向かってきてくれるなら、戦い方は考えなくていいかもしれませんね!」

美波「そうね。まずは敵の数を減らすことを考えましょ」

卯月「はいっ!」

メタルビースト《——!!》

美波「来るわよ、卯月ちゃん!」

卯月「はい!じゃあ、一緒に!」



卯月「ゲッターアアア……!!」

卯月・美波「「ビィイイームツ!!」」

ズワ オ オ ツ

ゲッタービームを薙ぎ払い、包囲した敵陣を焼き払っていく。

美穂「卯月ちゃん…、みんな、スゴいなあ…」

茜「これで形勢逆転!ですかね?」

アーニヤ「まだまだ、敵の方が多い、です。油断、は出来ません」

美穂「そうだね! 私達も圧倒されてばかりじゃダメだよね!」

美穂「ナパームレインツ!!」

ナパームレインによって放たれたミサイル群が、地表で火柱を上げて、メタルビーストを焼いていく。

戦闘は、狙い通りの乱戦となった。敵味方入り乱れ、誰のもとつかぬ銃弾は飛び交い、ビームとミサイルで大地は焼け、ドリルやトマホークで穿ち、抉り叩き付けて、地面上には破壊されたメタルビーストやメカザウルス、百鬼メカの残骸が屍の山のように幾重にも積み上げられていた。

少し離れた位置で戦闘していた旧ゲッターやキングダムも合流しても、戦域は縮まるどころか拡大していく。

ウラルの大地は火の海と化し、爆音と怒号は轟音となって木霊する。

ヤシャ「フンツ!!」

李衣菜「ツ!!」 ガギンツ

ヤシャ「つくづくしぶとい奴だ。これだけの戦力で、ここまで来ようとは」

李衣菜「戦力を増やしたくても増やせないんでね……!そっちこそ、この状況でわざわざ挨拶しに来てくれるなんて、義理堅いじゃん!」

ハン「デイスシルキャノンの砲身で受け止めたジャコツの青竜刀を弾き返す。」

隊士「ヤシャ將軍!お下がりがください!!」

李衣菜「雑魚はスツ込んでなよ!!」 ズワツ

隊士「ぐっ……!」

李衣菜「おおりやあああツ!!」

間に割って入った量産型ジャコツをシオルダーミスイルでまず怯ませ、左右のハンデイスシルキャノンを至近距離で放って粉碎した。

ヤシャ「おのれえ……!」

李衣菜「そっちこそ、私達の相手をするには、味方の質が足りてないんじゃない?」

ヤシャ「言ってくれる……!各機、ネオゲッターを包囲せよ!」

隊士 s 「応!!」 シュバッ

李衣菜 「何?まとめてじゃ敵わないから、今度は一斉攻撃って?」

凜 「相手の動きがおかしい。そんな単純な手じゃないと思うよ」

ヤシャ 「綱を撃てい!!」

シユルツ

李衣菜 「お?」

ネオゲッター1の左右の腕を、量産型ジャコツが捕縛する。

アーニヤ 「あの陣形…。まさか…!」

美穂 「李衣菜ちゃん、逃げて!」

李衣菜 「え?」

ヤシャ 「逃がさぬわ!包雷陣、放てえい!!」

バリバリバリバリイッ

李衣菜 「ツ!」

凜 「あう…!」

ワイヤーから放たれた電流が、ネオゲッター1を打つ。

李衣菜 「アバババババババババ——!」

ヤシャ 「動けまい!これで終わりだ!」

卯月「李衣菜ちゃん!!」

李衣菜「ババババババババ——…なんちやって」

ヤシャ「!?!」

ズドンッ

隊士「ヤシャ將軍…!ぐわあッ——!」

ネオゲッター1を捕縛していた量産型ジャコツの内の1機が爆ぜる。

凜「電流が弱まった…!」

李衣菜「なんだかよく分かんないけど、えいっ!」

隊士「うおっ!?!」

爆炎を上げ、火だるまとなった量産型ジャコツを、反対側の量産型ジャコツに叩き付け、破壊。

李衣菜「これで脱出、つと」

ヤシャ「ええい、何事だ!?!」

李衣菜「確かに。今攻撃したのって?」

ジャック「ミーじゃないぜ!そっちをFollowしてやる余裕なんてないからナ  
!」

ボブ「こつちも同じく、な。ロボ・ストーンじゃ、そんな正確な砲撃は無理だ」

李衣菜「だとしたら誰が…」

「はっ、一人頭数を忘れてもらっちゃ困るぜ」

加蓮「今の声って、シュワルツ？」

ネオゲッターの頭上を、漆黒の機影が飛び去っていく。

李衣菜「ステルバー！そういうことか！」

加蓮「わざわざ助けてくれるなんて、しばらく見ないうちに丸くなったんじゃない？」

シュワルツ「へっ、俺が助けてやった訳じゃねえよ」

李衣菜「？ それってどういう…」

奈緒「こう言うことだ」

加蓮「奈緒！」

凜「…どういうつもり？」

奈緒「凜…」

凜「戦うのは嫌だって、死ぬのが嫌だって、奈緒は、自分からゲッターを降りたんだよね？それなのに、何してるの？」

奈緒「あたしだってさ、恥ずかしいことしてるって分かってるさ。でもさ、放つておけない奴がいたんだよ。目の前にな」

凜「……」

加蓮 「へえ〜…」 ニヤニヤ

奈緒 「な、何だよ…」

加蓮 「ま、いいんじゃない？ 惚れた腫れたも理由にはなるって、ね？」

奈緒 「は、はア!? 何言ってるんだよ！ そんなんじゃないやねえよ…。あたしは、ただなあ！」

凜 「そうやって否定しても、加蓮は逆に面白がるだけだよ」

奈緒 「うっ…！」

加蓮 「ちよつと〜、人の楽しみを奪わないで」

凜 「今が戦闘中じゃなきゃ、別に何も言わなかったけど」

加蓮 「…はあくあ、そんなじゃ仕方ないか」

奈緒 「勝手にそっちで終わらせるなよ！」

凜 「いいよ、奈緒が戦うって言うなら、別にもう止めたりしない」

奈緒 「……」

凜 「シユワルツには迷惑掛けないですよ。ゲッターに乗ってない以上、こっちだって責任は持てない」

奈緒 「…分かった」

シユワルツ 「勝手に付いてきといて、勝手なこと言ってくれぬぜ」

李衣菜 「奈緒を乗せて戦う自信はないんだ？」

シユワルツ「馬鹿言うんじゃねえ。たかが小娘一人、ハンデにもなりやしねえよ」

李衣菜「ホントかな…？シユワルツ、一見クールだけど、すぐ暑くなるし」

シユワルツ「人に助けられといて、口の減らねえ小娘だ」

李衣菜「いやいや。助けてくれたことには感謝してるけど、そもそもプラズマ駆動のネオゲッター、あのくらいの電撃何ともなかったよ？」

加蓮「じゃなきや、水中で堂々とプラズマブレイクなんて使えないしね」

ヤシャ「…ならば、包雷陣には掛かった振りをしたというのか!？」

李衣菜「まあそんなトコ…って、まだいたんだ？」

ヤシャ「私を無視するな！」

李衣菜「やれやれ…。入待ち出待ちは、勘弁なただけだな！」

ヤシャ「フンツ、そんな余裕なぞ、すぐに後悔させてくれる！」

加蓮「それはどうかな？」

ヤシャ「何!？」

李衣菜「そつちこそ、気付くのが遅いんじゃない？」

ネオゲッターが大袈裟に指を立てた腕を天に突き出す。

李衣菜「ここからが本当の、戦いだ！」

同時、戦場に無数に上がる轟音と爆音、衝撃。

メタルビースト!!!?

隊士「や、ヤシャ将軍……これは、ただの爆撃ではありません！戦艦の、砲撃です!!」  
ヤシャ「艦砲射撃……!ということは!」

ジャック「やつと来たか!——T e x i s !!」

ウラルの山々を掻き分け、戦艦テキサスが姿を現す。

副長「艦長、ドラゴンスタートルを、肉眼で捉えました!」

艦長「よおし、各砲座、スタンバイ!!これより、前線のスーパードロイド部隊を援護する!」

針山のように全身に備えられたテキサスの副砲から、火が放たれる。

艦長「ドラゴンスタートルに対して牽制を仕掛ける!ドロー砲、発射スタンバイ、エネルギー充填開始ツ!!」

副長「了解。ドロー砲運転始め!」

オペレーター「了解!ドロー砲、砲身上げ」

オペレーター2「第三、第四動力、バイパスへ。ドロー砲へ直結」

オペレーター「ドロー砲、エネルギー充填開始。充填完了まで、あと360秒!」

艦長「うむ。この戦場にいる、全ての友軍へ」

艦長「ここまでの戦いを耐え凌ぎ、よくここまで共に歩んでくれた。この無謀な、作



戦とも言えぬ作戦に参加してくれたことに礼を言う。ありがとう」

艦長「我々は今、歴史の流れの中にいる。しかし、これが我々にとつての最後の戦いではない！」

艦長「これは前哨戦である。我々の力を過小評価するランドウに、その牙の鋭さと、一撃の重さを今一度再認識させるための、その為の戦いだ!!」

艦長「故に、負けることなど許されん！退くことなど許されん！我々の戦いが、人類全ての反撃の狼煙となることを信じて、諸君らの健闘を祈る!!」

艦長「必ず勝つぞ……ここににいる者、誰一人欠かすことなく——！」

凛「誰一人欠かすことなく、か……」

李衣菜「艦長も無茶言ってくれるよ。あんなの、マシンランドや百鬼要塞落とすのと同じだってのに」

加蓮「ホント、誰かさんと気が合うんじゃない？」

李衣菜「まあ、だからつてもちろん死ぬ気はないんだけどさ。こつちには百鬼帝国と決戦した時とほとんど同じ戦力に、ジャックやシユワルツがいてくれるんだもん。負ける気がしないよ……！」

加蓮「ホント、似た者同士だよ……」

凜 「じゃ、加蓮は下がる?」

加蓮 「まさか。ここで逃げるくらいなら、最初っからこんなところに来たりしないって」

凜 「……ふふっ」

加蓮 「何よ」

凜 「いや、結局は似た者同士だなって」

加蓮 「??」

ジャック 「A—H A!! ミー達も全力でいくぜ!」

メリー 「OK, 兄さん。テキサス、ハイパワー・ライフルの使用を申請します」

副長 「了解した。格納庫のスタッフは、直ちに準備を!」

ジャック 「テキサスマックはテキサスのデツキに降ろすぜ! パスチャー! 好きに暴れてきて下サ〜イ!」

パスチャー・キング 『ヒヒヒイインッ』

空中でも蹄の音を響かせて、パスチャー・キングが単身で駆けていく。

整備班 「ハイパワー・ライフル、スタンバイ完了!!」

ジャック 「Thank You! メリー, Target, Rock on!」

メリー 「……兄さん、何時でもいいわよ!」

ジャック「Fiiiiireeee!!」

轟音を響かせ、立ちほだかったメタルビースト・ビーンを衝撃波で吹き飛ばしながら、ハイパワー・ライフルの弾丸が、戦艦級のメカザウルス・グダを一撃で葬る。

ジャック「YAHAA!! Foooooooo!!」

シユワルツ「…つたく、馬を一匹で遊ばせといていいのかよ」

奈緒「ツツコんでも仕方ないだろ。何なら、あたし達でフォローしとこう」

シユワルツ「馬に手柄取られんのはゴメンだ！突っ込むぞ!!」

戦闘機形態のステルバーが、敵陣めがけて突貫。機体上部や下部から無数のミサイルを放ち、群がるメタルビーストを一掃していく。

シユワルツ「ミサイルの配置は、ちゃんと覚えられたみてえだな」

奈緒「現役女子高生ナメるなって言っただろ。正面と下方と側面の区別くらいはつくさ」

シユワルツ「上出来だ」

奈緒「アンタが素直に人を褒めるなんてな」

シユワルツ「勘違いすんな。お前が出来なきや、俺の命が危ねえんだよ」

奈緒「へへっ、やっぱ素直じゃない」

シユワルツ「テメエにだけは言われたくねえ」

奈緒「はいはい、と。にしても、コイツはホントにスゴいな。まさに全身弾薬庫だ」  
シュワルツ「プロトタイプだからな。正規品より過積載なぐらい積んでやがる」

奈緒「これを一手に制御してたアンタの相棒ってのはマジでスゴい奴だったんだな」  
シュワルツ「……」

奈緒「今のところ、そいつのマシンは確認されていないけどな」

シュワルツ「出てくるさ。奴はドラゴンターゲットルにいるんだ。出てこないわけはねえ」

奈緒「もし、出てこなかったら？」

シュワルツ「こっちから乗り込んででも、引導を渡してやる」

奈緒「…分かった」

シュワルツ「頼むぜ、今はお前が相棒だ。今は目の前の敵の相手を叩く。行くぞ!!」

奈緒「おうっ!!」

オペレーター「ドーバー砲、充填率80%!!」

ヤシャ「フン…。動くだけの的が！飛んで火に入る夏の虫よ！貴様らの目論みも露と消してやろう……む？」

かな子「ハンマーパンチ!!」

ヤシャ「ぐっ……!!」

アームを伸ばして飛んできた真ゲッター3の拳を、青竜刀の腹で受け止める。

かな子「私達のテキサスには……！」

美穂「近付けさせません!!」

菜々「な、ナナだって付いてますよー! 3対1ですよー!!」

ヤシャ「有象無象共がア……！」

美波「テキサスの護衛は、かな子ちゃん達に任せちゃつても大丈夫そうね」

卯月「はい! 私達は、他の人達の援護と、遊撃を!」 ドシユウツ

言いつつ、空中で二つ重なった敵の隙を逃さず、ゲッターライフルを撃ち貫く。

オペレーター「ドーバー砲、発射準備完了!」

オペレーター2「ドラゴンタートルのとの相対距離に問題なし!」

副長「艦長!」

艦長「射線上の友軍機に回避命令!」

艦長「ドーバー砲、撃てえいツ!!」

ズワツ

李衣菜「うわっ!?!…何、何の光!?!」

凜「落ち着いて! ドーバー砲が発射されたんだ!」

加蓮「あれが、ドーバー砲……」

戦場を一直線に貫く青白い光が、敵陣に風穴を開けながら真っ直ぐドラゴンタートルへ向かっていく。

李衣菜「行け……！」

——命中。

爆発と轟音。衝撃によって空気が爆ぜ、衝撃波の拡がりに合わせて爆煙が立ち上った。

ヤシヤ「くう……！」

副長「やったか!？」

オペレーター「待ってください……！状況を確認中です！」

オペレーター2「ま、まさか……！そんな……!？」

艦長「どうした!？」

オペレーター「ドラゴンタートル、健在!？」

艦長「なんだと……！」

爆発の黒煙が晴れた向こう、姿を現したドラゴンタートルは……

副長「無傷……！ドバー砲を直撃で受けてか!？」

艦長「……いや」

晶菓「ドバー砲は直撃していません」

艦長「晶葉くん」

副長「直撃していないだと…？どう言うことだ！」

晶葉「簡単な話です。ドーバー砲が命中する寸前、ドラゴンタートルは物理障壁のよ  
うなものでこちらの攻撃を防いだのです」

副長「物理障壁…エネルギーバリアとでも言うのか」

晶葉「ええ、概ねは。こちらの位置はテキサスからもドラゴンタートルからも離れて  
いたので、その瞬間を肉眼で捉えることが出来ました」

艦長「むう…。何と言う…」

晶葉「更に、バリアが開かれた後、ごく僅かですがバリアのエネルギー源となつて  
いるであろうエネルギーも検出できました」

晶葉「バリアのエネルギー源は、ゲッター線です」

——ドラゴンタートル・司令室。

ラセツ「…くっ」

ランドウ兵「ラセツ様、ご無事で？」

ラセツ「私のことはどうでもいい。それより、状況を報告せよ」

ランドウ兵「はっ！予てより搭載されたバリアは正常に作動。ドーバー砲による本艦  
へのダメージはほとんどありません」

ラセツ「そうか。フツツ、衝撃に脅かされたが、ランドウの造った玩具もガラクタばかりではないらしい」

ツカツカ：

ラセツ「さて、次はどう出る？まさか力押しばかりが策と言うわけではあるまい？」

ランドウ兵「テキサスは脚を止めたようです。周囲に展開していた部隊も、早急にテキサスに向かわせませす」

ラセツ「脚を止めて作戦会議か？敵陣のど真ん中で、悠長なことだ。貴公らが動かぬというのであれば、こちらから向かってやるまでよ」

ランドウ兵「ラセツ様？」

ラセツ「ドラゴンタートルを始動させる！目標、戦艦テキサス!!」

ランドウ兵「は…?」

ラセツ「所詮小蟻程度の抵抗では、この要塞は崩せんと言うことを奴等の身を以て思い知らせてやろう。逃げ場を失い、刻一刻と迫る死の恐怖の中で、後悔に濡れて悔やむがいい!!」

――。

ヤシャ「くつくつくつ…！残念だったな！ゲッター共」

李衣菜「こいつ…！知ってて黙ってたの？ホント性格悪い！」



ヤシャ「敵に奥の手を教える奴が入るものか！」

李衣菜「あ、それもそっか」

加蓮「けど、実際あのバリアは厄介だね」

凜「ドーバー砲を受け止めるくらいには強力。しかもゲッター線だからね……」

瑞樹「エネルギーは無尽蔵。外部から攻撃を集中させても突破は難しいと言うことね」

卯月「真ゲッターの、ストナーサンシャインなら、もしかしたら……」

かな子「けど、今の真ゲッターは、3以外の形態じゃ使えないって、晶葉ちゃんが言うてましたよ！」

美波「力に頼っても仕方ないわ。何か突破口があるはずよ！」

ジャック「そうは言うが、ドーバー砲でも抜けないんじや、ミーのハイパワー・ライフルでも到底Impossibleな話だぜ！」

オペレーター「艦長、ドラゴンタートルに動きあり！艦首をこちらに向け、速度を上げています！」

艦長「連中め……！その質量で我々を押し潰すつもりか！」

ボブ「色んなところから敵が殺到してるぜ！このままじゃ、俺達も身動き取れなくなっちゃう！」

鉄甲鬼「どうする？このままでは、ボルガが合流したとて勝算は薄いぞ」

艦長「…手が無いわけではない」

リンダ「艦長？」

艦長「いかに強大なバリアと言えど、戦艦テキサスほどの質量全てを受け止めることなど出来ん」

副長「艦長、それは…！」

艦長「敵も仕掛けてきているのだ…！ここで動かなくては勝機はない！」

副長「ですが！」

美穂「そんなのダメですよ！テキサスがなくなったら、この先の戦いはどうするんですか？」

茜「テキサスを失うわけにはいきません!!それなら、私達の炉心をぶつけた方がマシです!!」

凜「……」

芳乃「何か考えがありましたー？」

凜「…晶葉。ドラゴンタートルのバリアは、こつちの攻撃をシャットアウトするんだよね？」

晶葉「ああ、そうだ」

凜 「それって言うのは、物理的なものもドラゴンタートルには触れられない、そう考えていいのかな？」

晶葉 「そうだな。あらゆるモノの干渉を阻止する。そうでなくてはバリアの意味はない」

鉄甲鬼 「外部からドラゴンタートルに侵入するのを阻止する目的もあるのか」

晶葉 「あれをドラゴンタートル全周に張られてしまつては、内部に突入して、バリアの発生装置を破壊することは出来ない」

ニオン 「それを確認するとしても、リスクがあると言うことか」

晶葉 「何とか内部に潜り込めればいいんだがな」

凜 「出来るよ。多分だけど」

晶葉 「何?」

艦長 「何か方法を思い付いたと言うのかね?凜くん」

凜 「思い付いたつて言うか…。もしドラゴンタートルのバリアが、物理的なものも弾くつて言うなら、一ヶ所だけ、どうしてもバリアを張れないところがあるんじゃないかって」

副長 「その場所とは?」

凜 「地面。地中までは、バリアは張れないでしょ」

晶葉「…確かに。バリアの有効範囲を計測できない以上、確証は持てんが」

凜「なら、上手くいけばドラゴンタートルの足元から、内部に突入できる」

艦長「ふむ…」

サム「おいおい、本気かよ？」

ボブ「ドラゴンタートルだって、地面の上を浮いてる訳じゃねえ。奴を動かす移動ユニットが足元にはあるんだぜ？」

リンダ「もし運悪く移動ユニットに接触すれば、木っ端微塵じや済まないわよ？」

凜「それでも、敵の攻撃を警戒しながら、ドラゴンタートルの突入箇所を探してるよりは、時間も手間も掛からないよ」

艦長「確かに、乗ってみる意味はあるか…」

副長「艦長…!」

艦長「では、今凜くん以上の案を出せるものはいるかね？」

「「……」」

艦長「では、凜くん達に賭けてみるとしよう」

凜「分かった。任せて」

美穂「え？凜ちゃん達が行くんですか？」

加蓮「そりゃ、言い出しつぺだしねえ」

凜 「言い出した責任は取るよ。…二人は巻き込んだじゃうけど」

加蓮 「ホーントね。何でこんな時だけ都合よくネオゲッターなんかに乗ってるんだか」

李衣菜 「まあまあ、お陰で大役だよ！気合い入れて行こうじゃん!!」

加蓮 「こつちはこつちでやる気だし。あれ？もしかしてアタシが貧乏くじ？」

奈緒 「ははっ、たまには苦労しろよ」

加蓮 「…仕方ない。アタシも賭けにベットしますか！」

凜 「先ずはチェンジだ。乱戦状態だけど…」

李衣菜 「隙は見つけないとね…——つと！」

ブオンツ

振り下ろされた青竜刀を後方に飛び退いて躲す。

李衣菜 「やっぱり突っ込んできた！ヤシヤ元將軍！」

ヤシヤ 「ここは戦場だぞ！思い通りにさせると思っているのか？」

李衣菜 「まいどまいどご苦労様ですとお!!」

距離を詰めてくるジャコツに、ハンディミサイルキャノンで応戦。

ヤシヤ 「くあッ!!」

李衣菜 「このお…！」

ハンデイミサイルキャノンの弾丸を切り払って、尚もジャコツが来る。

李衣菜「しつっこいッ!!」

凜「こんな奴に時間は掛けられないって言うのに……!」

美波「だつたら!」

卯月「私達にお任せです!」

ヤシャ「ぬう……!?!」

飛び込んでくるジャコツを、二本のトマホークが制する。

ヤシャ「雑兵共めが……!」

卯月「今度はこつちが見送る番ですね!」

凜「卯月……」

卯月「行つてください!ここは私達が守ります!!」

凜「……分かつた!」

加蓮「何にせよ、分離するなら今だね。リーナ!」

李衣菜「オープンゲット!!」

ネオゲッターがマシンに分かれ上昇。

ヤシャ「おのれ、行かせん!」

ドシユウツ

ヤシヤ「！」

卯月「それはこっちの台詞です！」

ヤシヤ「出来損ないのゲッターが！そんな機体でこのジャコツを止められると思うな

!!」

バラバララッ

ヤシヤ「ぬお!？」

美波「私がいるのも忘れてもらったら困るわよ？」

卯月「例え出来損ないでも、二人力を合わせれば、十分一人前です！」

美波「凜ちゃん！今の内に！」

凜「はああああああつ!!」

凜「ゲッターチェンジ!!」

凜「——ドリルアアームツ!!」

ネオゲッター2にチェンジし、急降下を使ってドリルアームで地中に突入する。

ヤシヤ「このつ……!行かせん！」

卯月「ゲッタービーム!!」

ヤシヤ「!!」

ネオゲッター2の空けた穴に向かったジャコツの目の前で、ゲッタービームで穴を埋める。

卯月「追わせませんって、言っただはずです」

ヤシャ「むう……。こうなれば……あ！」

—— 地中。

ズズズ……

凜「——……そろそろドラゴンタートルの真下だ」

李衣菜「ホントに？ 思ったより近くない？」

凜「ドラゴンタートル目指して、真っ直ぐ掘ってきたし、地下には敵もないからね」

加蓮「恐竜帝国の地中機雷があったら分かんなかったけど」

凜「流石にそこまで用意周到に準備してないでしょ」

凜「……ん。直上から振動を検知。規模からいって間違いない。着いたよ」

加蓮「さあて、それじゃあ最初のチャレンジと行きましようか？」

凜「このまま真上に上がって、移動ユニットに当たればそれでおしまい」

加蓮「なーんにも出来ずに犬死になって訳ね」

李衣菜「それは恥ずかしいね……」



凜 「この中で運に自信のある人いる？」

加蓮 「一回諦めた人生が、目の前で継続してるんだから、幸運かもね」

李衣菜 「それなら任せてよ！悪運には自信あるから！」

加蓮 「言ってる。リーナってば、いつも悪運に頼ってばっかだから」

李衣菜 「頼ってばっかって…。ちゃんと私なりに考えてはいるよ？」

凜 「…李衣菜のを頼りにしていいのかわかんないけど、今は宛てにさせてもらおうよ」

加蓮 「んじゃ、土の中で長話もなんだし、行きますか〜！」

凜 「そうだね。一斉一代の大博打。行くよ——！」

つづく

## 第21話『決戦、ドラゴンタートル—3』

李衣菜「——はっ！……と……：……ここは、天国……？」

凜「だとしても、こんな殺風景な天国は願い下げだね」

加蓮「言えてる。折角なら、もつと気持ちの良さそうなところで楽になりたいもんね」

李衣菜「つて言うことは、ここは……」

——ドラゴンタートル、内部。

凜「無事突入できたみたいだね」

加蓮「—先ず第一段階は成功つてことね」

李衣菜「随分と中は広いんだね。もうちよつと区画整理されてると思つてたよ」

加蓮「電送管とかよく分かんないパイプとか、もうゴチャゴチャに入り組んじゃつて……」

李衣菜「こんな煩雑に設計するくらいなら、もうちよつと整理しようとは思わなかったのかな？」

加蓮「美的センスの問題でしょ？こういう内装の方がほら、悪の巣窟っぽい」

李衣菜「あ、それは言えてるかも」

凜「内装の感想はそこまで。もっと敵の迎撃とかあると思っただけど……」

李衣菜「みーんな外の戦闘に出てていないんじゃない？ま、運が良かったってことで」

凜「不意打ちがあるかもしれない。二人とも警戒を怠らないで」

加蓮「はーい」

李衣菜「分かったよ」

凜「晶葉、聞こえる？」

晶葉「ああ、通信の感度は良好だ」

凜「外と連絡手段が断たれてなくて良かったよ。で、バリアの発生装置の場所は分

かる？」

晶葉「無論だ。エネルギー源はゲッター線。探知など出来ないわけがない」

凜「流石。頼りになる」

晶葉「おだてるな。待ってろ……、今のお前達の位置から、東へ2000m進んだとこ

ろだ」

凜「分かった。ありがとう」

言われた方角へ、ゲッターを動かす。

凜「……」

李衣菜「……」

加蓮「……」

加蓮「…お腹空いた」

凜「え」ズコッ

李衣菜「あはっ！確かに、今回は長期戦だからね」

加蓮「こんな時かな子がいたら、お菓子の一つでも持ってたんだろいなあ」

李衣菜「んく…。こっちのコックピットには非常食しかないよ…」

加蓮「ちなみに何味？」

李衣菜「んく…つと、これはテキサスから支給された奴だから、カリフォルニアロール味だね」

凜「何それ…」

加蓮「えく。今は芋羊羹味の気分かな？」

李衣菜「もう、加蓮はいつも芋ばかり！芋羊羹なんて食べてると、巨大化してネオゲッター突き破っても知らないよ？」

凜「……」

加蓮「リーナ、それは凜が分からない奴だから」

李衣菜「ああそっか、ツツコミが何時もの奈緒じゃないから…つて、振ったのは加蓮

じゃん」

加蓮 「あははっ。つい何時もの調子で、ね？」

李衣菜 「なら、私と一緒にだ」

凜 「…もう、ふざけてないで。早く装置を破壊しに行かなきゃ」

李衣菜 「はあ〜い。えへへ…」

凜 「先に進むよ」

加蓮 「OK。位置は分かる？」

凜 「うん。バリアのエネルギー源はゲッター線だからね。私達には反応は分かりやすい」

加蓮 「そっか」

凜 「こっちだ。周辺の警戒を宜しく」

李衣菜・加蓮 「了解」

李衣菜 「……」

加蓮 「……」

凜 「……」

加蓮 「…あ」

凜 「もうお腹空いたはなしでね？」

加蓮 「分かってるって。今、カメラになんか写ったと思う」

凜 「ホントに？」

加蓮 「…一瞬だったから、見間違えかもしれないけど」

凜 「何なの？もう…」

李衣菜 「…待って、見間違いなんかじゃないよ」

凜 「え？」

李衣菜 「垂れ下がってるコードの隙間…。赤い眼だけが光ってるのが見えた…」

凜 「赤い眼？…」

加蓮 「アタシのもの、リーナが見たのと一緒だと思う」

凜 「けど、リーダーには何も…」

李衣菜 「コンピューターばっか気にしても仕方ないよ」

加蓮 「技術の面ではランドウの方が上。こっちのコンピューターなんか当てになんないよ」

凜 「ここは、李衣菜と加蓮を信じた方がいいみたいだね」

李衣菜 「…」

加蓮 「…」

李衣菜 「ねえ、今の状況ってさ…」

加蓮 「そうだね。このままだと、こっちが消耗するだけだ」

凜 「それは良くないね。だったら！」

凜 「——ダブルアームガン!!」

背後に振り返りながら、両腕の銃口からプラズマの弾丸を放つ。

加蓮 「わくお、大胆」

李衣菜 「敵がいる位置、分かったの？」

凜 「ううん、手応えはないね。残念ながら」

李衣菜 「じゃあ何で？」

凜 「元々敵のお腹の中だ。遠慮する必要なんて元からない」

加蓮 「あはっ♪」

凜 「なら、敵が大人しく出てくるまで、破壊し尽くさせてもらうだけだ!!」

狙いも定めず、ドリルアームガンを乱れ撃つ。

加蓮 「ヒューヒューッ! やっっちゃえ〜!」

李衣菜 「プラズマエネルギーがちよっと勿体無い気もするけど…」

加蓮 「じゃ、李衣菜が代わる? ここなら、ギリギリ合体できるだろうし」

凜 「——ッ! 待って!」

? 「——!!!」

凜 「ぐっ……！」

横からの攻撃。ネオゲッター2を強引に下げて躲す。

加蓮 「やっとお出ましって訳」

凜 「そうみたいだね。だけど……」

李衣菜 「何……こいつ……？」

凜 「機械の獣……」

李衣菜 「機械の獣でメタルビーストって、そのまんま……」

凜 「ランドウの戦力である以上、そうなんですよ」

? 「グウウウウ……」

加蓮 「何て言うか、気持ち悪い……」

李衣菜 「THE 悪党って感じだね！」

凜 「奴のスピードは侮れない。このゲッターで付いていけるか……！」

? 「ギャオツ！」

凜 「賭けだね——！」

ネオゲッタービジョンを発動。高速機動で相手の猛スピードに追い縋る。

? 「——ッ！」

凜 「ドリルアームガン！」



? 「ギヤツ!?!」

顔面に向かってドリルアームガンを発砲。相手は仰け反って地に倒れ伏す。

李衣菜「やった?!」

凜 「そんな簡単な相手じゃない。すぐに立ち上がってくるよ」

? 「!!」

言った目の前で、相手の姿が消えた。

加蓮 「凜、後ろ!」

凜 「っ!?!…ガッ!」

直後、衝撃。ネオゲッター2が吹き飛ぶ。が、

凜 「クツ…、のオ…!」

ドリルアームを地面に突き立て、強引に制動し、着地。

李衣菜 「痛たた…。まさか一瞬で回り込んでくるなんて」

加蓮 「これまでのメタルビーストとは、またひと味違うね」

李衣菜 「ホント。……ん? 見て、あれ!」

加蓮 「あれ?」

李衣菜 「あのメタルビーストの、右目のところ!」

凜 「右目のところ…? あれって…!」

加蓮 「人間……！それに確か、さっきドラゴンタートルのところに来る前に戦った、ランバートって人！」

凜 「前の機体を破壊されたから、次のメタルビーストの生体ユニットにされたってこと……」

「ふほほほ……！左様。メタルビーストを動かすための核。所詮その程度の存在よ」

凜 「!? この声は……！」

李衣菜 「直接会うのははじめてだね。ラセツ！」

ラセツ 「ふふふつ……。そうであつたな。だが、この邂逅もすぐ終わる。貴様らの敗北を以て！」

加蓮 「簡単に決めてくれちゃつて……。しぶとさじゃ、アンタら謹製のメタルビーストよりもずつと上だよ」

ラセツ 「そのメタルビースト・邪鬼王を相手にして同じことが何時まで言えるかな？」

李衣菜 「メタルビースト……邪鬼王!?!」

ラセツ 「そうとも。行け、邪鬼王。ゲッターへの恨みを晴らせ！」

李衣菜 「ゲッターへの恨みって……？」

加蓮 「ツツコンで暇はなさそう」

ランバート 「ウウ……ギャオオオオ……!!」

凜 「うぐっ……！」

ネオゲッター2めがけ跳躍し、邪鬼王が飛び付く。

凜 「このっ……！」

ランバート 「ギヤアアアッ!!」

ネオゲッター2の首筋に牙を立て、鮮血のようにオイルが弾け飛ぶ。

凜 「うう……！」

加蓮 「ここまで近付かれたら流石に不利だよ」

李衣菜 「一旦分離して！」

凜 「…分かった。——オープンゲッター!!」

ランバート 「!?」

こちらを羽交い締めにしていた邪鬼王から、ゲッターを分離させて回避。

李衣菜 「私が行く! 2人とも合わせて！」

加蓮 「分かった！」

凜 「また私が行っても状況は変わんないだろうし、合わせるよ！」

李衣菜 「よし、ゲッターチェンジ!!」

ネオゲッター1にチェンジして、邪鬼王と相対する。

加蓮 「それで、やると言ったからには作戦の一つでもあるの?」

李衣菜「ない！」

加蓮「そんなハッキリと言ってくれちゃって…」

李衣菜「考えるよりまず動く！ネオゲッターなら、多少攻撃を受けたって！」  
ランバート「ウワアアアアアアッ!!」

李衣菜「来いッ！」

両手を交差させたクロスガードで、飛び掛かってきた邪鬼王を受け止める。

李衣菜「ぐううううっ！」

凜「本当にやられるだけなのは勘弁してね…！」

李衣菜「そんなの分かってる！ネオゲッターは、両手を塞がれたって…！」

李衣菜「シヨルダーミサイル!!」

ランバート「!!」

李衣菜「なっ！」

両肩から放ったミサイルを、邪鬼王は跳躍して回避。

ランバート「ウガアアアア!!」

李衣菜「くっ…！」

手刀を放つように挟り込まれた一撃を、ネオゲッターを捻り、辛うじて躲す。

李衣菜「私のシヨルダーミサイルを躲すなんて…！」

加蓮 「あんな分かりやすいの、何時までも通用しないでしょ」

凜 「だとしても、あの距離で躲すなんて、やっぱり尋常じゃない…」

李衣菜 「見た目通り、化け物って訳だ」

ランバート 「ウゴオオオオッ!!」

李衣菜 「!」

飛び掛かるように放たれた爪の振り下ろしを、装甲板を削りながらも躲す。

李衣菜 「ヒューッ! 危ない危ない…」

加蓮 「ねえ、このまま奴に時間使っちゃっていいの?」

凜 「良くないね。ドラゴンタートルは、テキサスに向かって動いてる。早くバリア

の発生装置を破壊しないと」

李衣菜 「でもさ、こいつを放っておいて、発生装置探なんてのも出来ないよ!」

凜 「単機で突入したのが、裏目に出た…?」

「リアアセエツウウ!!」

加蓮 「な、何…?!」

李衣菜 「聞き覚えのある…。この声…」

ラセツ 「何事か。ヤシャ元将軍殿?」

ヤシャ 「何故邪鬼王が動いている!?!」

李衣菜「やっぱり…。あいつ、私達を追ってきたの？」

凜「状況から言ってるので違うないね」

ラセツ「これは異なることを…。あれも、ドラゴンタートルを守るために配備された戦力の一つ。ここまで攻め入られて使わぬ手はない」

ヤシャ「しかし、邪鬼王はまだ未完成だ！戦線に投入するには早すぎる！」

ラセツ「戦況は待つてなどくれんよ。もし邪鬼王の使用に問題があるとすれば、それは、ドラゴンタートルを防衛しきれなかった貴公にも責はあると言うことだぞ？」

ヤシャ「ぐう…」

李衣菜「ははっ、言葉がないみたいだね」

凜「笑ってる場合じゃないよ。こっちも余裕がなくなった」

ランバート「ガアアアッ!!」

李衣菜「!？」

バオツ

李衣菜「——…？ あれ…？」

加蓮「邪鬼王が跳んだ…」

凜「邪鬼王に攻撃…。誰が…」

シユワルツ「俺だ」

李衣菜「シユワルツ！」

加蓮「どうして……。ううん、どうやって？」

シユワルツ「ドラゴンタートルへの入り口なら、そいつが教えてくれた」

ヤシャ「むう……」

ラセツ「これはこれは。不手際がまた一つ増えたようすな」

李衣菜「何にせよ助かったよ！これで形勢逆転だ」

奈緒「おいおい。数じゃ一緒になっただけだぞ？」

李衣菜「数が一緒になっただけだけでも……！」　　バツ

ヤシャ「ぐっ……！」

飛び上がって、ジャコツに襲い掛かる。

李衣菜「一番面倒な相手は任せた！」

シユワルツ「……！任せておけ!!」

李衣菜「よし。うわああああっ!!」

ジャコツを押し上げながら、ドラゴンタートルの奥へ。

李衣菜「腐れ縁だ。最期まで付き合っただけよ。ヤシャ！」

ヤシャ「ふふっ、ありがたい。だがここを墓場とするのは貴様よ！」

ガンツ

李衣菜「言うじゃん…！今までこつちにやられっぱなしだったくせに！」

ヤシャ「ほざけ！今まで運で生き残ってきた小娘が！」

李衣菜「運も実力の内！その分、実力はこつちの方が上だよ！」

ヤシャ「実力、か…。尚更負けられん！」

鏑迫り合っていた青竜刀を弾く。

加蓮「そう言うわりには、随分ボロボロじゃん」

凜「卯月と美波に、相当やられたみたいだね。それでも、2人を突破して追ってきた

執念だけは認めてあげるけど」

ヤシャ「黙れツ！例えこの身が滅びようとも、ドラゴンタートルを破壊などさせはせ

ぬ!!そのために私はここにいるのだ！」

李衣菜「流石の忠誠心！だからって、ねえ!!」

ヤシャ「ぐうううっ!?!」

水平に蹴りを放ち、ジャコツを突き飛ばす。

李衣菜「こつちにだって、負けられない理由があるんだ！」

ヤシャ「互いに賭けるものを賭けた戦い…。存分に楽しもうぞ！」

加蓮「ここまで佳境に来てて、戦いを楽しむって…」

凜「流石に理解…。したくもないね」



李衣菜「楽しむも遊ぶもない！こっちは勝つために戦ってるんだ！とつとと退いて！」

ヤシャ「フンツ！」

ハンデイミサイルキヤノンが、ジャコツの片腕を吹き飛ばす。

李衣菜「やった！」

凜「油断しないで！敵の雰囲気が何時もと違う！」

ヤシャ「腕一本なぞ……！」

李衣菜「ウソオ!？」

ヤシャ「なんのハンデにもならんわッ！」

李衣菜「うぐっ！」

放たれたストレートの拳を鳩尾に受ける。

李衣菜「このっ……！」

ヤシャ「クアツ……！」

李衣菜「!？」

ネオゲッターが怯んだ隙に、ジャコツが飛び上がる。

ヤシャ「ガアアアアッ!!」

李衣菜「!!」

ヤシャ「死いいねえええツ!!」

李衣菜「死んで…たま…るかアア…ツ!!」

ズアツ

落下速度を加えたジャコツの貫手が、ネオゲッター1の胸部を貫いた。

凜「コックピットに直撃!?!」

加蓮「リーナ生きてる?返事して、リーナ!」

李衣菜「へへへっ、そんな慌てなくても、直撃はしてない。ちよつと横を通り過ぎただけ。お陰で、コックピットの風通しは良くなったけど…」

加蓮「あ…良かった…」 ホツ

凜「…怪我はないの?」

李衣菜「バイザーがふっ飛んで、血は出てる。あと、体の左側が…あれ?」

加蓮「どうしたの?」

李衣菜「左腕が、動かない…」

凜「え…」

李衣菜「何…これ…」

左肩に触れた、右の手にべつとりと血糊が着く。

ジャコツが砕いたネオゲッター1の破片が左側に直撃し、左肩の肩口から脇腹の位置

まで、パツクリと大きく裂けていた。

李衣菜「あ…あ、ああ…!!」

凜「とにかく落ち着いて!李衣菜!」

李衣菜「——ッ、!!」

声にならない悲鳴、絶叫。傷の深さを知覚すると同時、痛覚が脳に痛みを伝える。

李衣菜「うあ、つ!!ああ、つ…!ア、アア、アアアアツ、!!!」

加蓮「リーナ!しっかりして!!」

パイロツトの動きに呼応するように、ネオゲッター1が左肩を抑えて腰を落とす。

李衣菜「ア、ア、ツ…!アアアアアアアアツ、——!!」

ヤシャ「ふん。痛みで動けなくなっただか。所詮はその程度の器だったと言うこと」

加蓮「アイツに好き勝手言われていいの?リーナ!」

ヤシャ「すぐに楽にしてやる。これで終わりだ!!」

凜「李衣菜立って!じゃないと、ここまでのしたこと、全部無駄になる!」

李衣菜「うう…ツ!」

凜「李衣菜!」

ヤシャ「死にいいねえええいつ!!」

李衣菜「うぐ…つ!うがあああああつ!!」

ヤシャ「おお…っ!？」

突如動き出したネオゲッターの右ストレートが、ジャコツの鳩尾を打つ。

ヤシャ「此奴…、息を吹き返したとお…!？」

李衣菜「へ…へへへっ…!？」

凜「李衣菜!？」

李衣菜「流石は極寒の国ロシア。ドラゴンタートルの中に暖房効いてなくて良かったあ…。お陰さまで、止血は出来たよ!？」

凜「そんな状態で戦えるの?？」

李衣菜「もちろん!相手は腕一本、こっちも腕一本、これでイーブンでしょ?？」

凜「……」

加蓮「そこまでだよ。今のリーナは、興奮で痛みを半分忘れてる。下手に落ち着かせない方がいいかも」

凜「そうかもしれないけど…」

加蓮「それに、今のリーナの状態で、合体の衝撃に耐えられとも思えないよ」

凜「…加蓮の言う通りかもね。李衣菜に賭けるしかないか」

加蓮「今は興奮で誤魔化せても、どの道長くは持たない。どちらにしても時間との勝負だね…」

凜 「頼むよ、李衣菜……」

李衣菜 「任された！何度も戦ってきた相手なんて、ここでブツ飛ばしてやる——！」

ランバート 「グウウウウ……ッ！」

シュワルツ 「ランバート……。本気でランドウの犬になっちまうとはな……」

奈緒 「やるのか？本当に……？」

シュワルツ 「当たり前だ。そのために、来た!!」

距離を測り、旋回。

シュワルツ 「おらアッ!!」

ランバート 「!!」

常人離れた動きで、STーブラスターの射撃を回避。

奈緒 「来るぞ……！右だ！」

シュワルツ 「分かってる！」

ランバート 「ギャオオアアア——!!」

シュワルツ 「くっ!!」

STーブラスターを保持したステルバーの右腕が斬り断たれる。

シュワルツ 「チッ……！」

奈緒「大丈夫か!？」

シュワルツ「ナメんなあ！」

断たれた右腕を引き、左手にアサルトナイフを構え、邪鬼王に突き出す。

シュワルツ「オラアツ!!」

ランバート「!!」

突き出されたナイフを、邪鬼王は身を宙に翻して回避。

ランバート「シヤアアアアツ!!」

シュワルツ「…ツツ!？」

奈緒「そらっ！」

ランバート「!？」

背後に回り反撃に転じようとしていた邪鬼王に、腰部からミサイルを発射して迎撃。

シュワルツ「！」

奈緒「忘れんなよ。ロボット状態でもこつちから使える武器は何個かあるって」

シュワルツ「…助かった」

奈緒「そこまで言うなら、ありがとう、くらい言えないのか？」

シュワルツ「うるせえ。来るぞ！」

ランバート「カアアツ！」

跳ね上がり、大きく爪を立てた腕を振り上げて襲ってきたジャコツに、シユワルツ「おらよ!!」

ステルバーの両肩の装甲板を投げ付け迎撃。

ランバート「!!」

邪鬼王は、二枚の装甲板の間をすり抜けてくる。

シユワルツ「見え見えだぜ！」

邪鬼王の爪を、アサルトナイフで受け止める。

シユワルツ「奈緒お！」

奈緒「おっしやあああっ!!」

掛け声に合わせて、発射可能な火器を斉射。

ランバート「!?!」

肩に限らず、胸部や腰部、脚部から腕部まで、全身から放たれた火薬が、邪鬼王を爆煙の中にかき消す。

ランバート「グウオオオオオツ!!」

奈緒「やろう！」

爆煙を振り払って、尚も襲い来る邪鬼王を、胸部の機関砲で迎え撃つ。

ランバート「グウウウウ…!!」

シユワルツ「タフな野郎だ」

奈緒「これだけステルバーの火薬を叩き込んでも、まだピンピンしてるもんな」  
シユワルツ「長期戦になるな。…位置はあっているか？」

奈緒「……ああ、もうちよつと右…で」

シユワルツ「分かった」

ランバート「ウワアアアアツ!!」

シユワルツ「——」

ザシユツ

ランバート「ギヤツ!?!」

飛び掛かってきた筈の邪鬼王の体が仰け反る。

奈緒「へへっ、こつちがパージしたのが、ただの装甲板だとも思ってたかよ?」

シユワルツ「情けねえぜ、ランバート。お前がコイツの武装を忘れちまうなんてよ」

奈緒「単純に出来てるように見えて、以外と計算されて作られてるんだぜ? ブーメラ  
ンってのはさ!」

ランバート「ウグウウウウ……!」

シユワルツ「どうだ? ちったあ目が覚めたかよ?」

ランバート「ウウ……! グオオオオオオツ!!」 バツ



ステルス・ブーメランを背後に受けて、一度は動きを止めた邪鬼王が、先程よりも勢いを増して来る。

奈緒「コイツ、強引に……！」

シユワルツ「ダメージ・コントロールド！出来るな？」

奈緒「もうやってるよ！アイツ……こっちの攻撃が効いてないのか？」

シユワルツ「さあな。倒れねえ限り向かって来るってんなら、倒れるまで叩きのめしてやるだけだ」

残された左手でS Tーブラスターを拾い上げ、構え直す。

シユワルツ「その為にここまで来たんだからよ！」

左へ跳躍し、水平にS Tーブラスターを連射。

ランバート「クアツ!!」

段幕が生み出す爆煙を掻き分けて、邪鬼王が迫る。

ランバート「ウラアアツ!!」

爪を突き出した邪鬼王の突きが、ステルバーの頭部を貫く。

奈緒「シユワルツ!!」

シユワルツ「ゲッターと違えんだ。んなトコにはコックピットはねえよ」

ランバート「オ、オオオオ——！」

シユワルツ「うお…!？」

邪鬼王の肘打ちが、ステルバーの胸部へとめり込む。

シユワルツ「くそっ…!早く迎撃しろ!奈緒!!」

奈緒「バカ言え!この距離で撃つたら、ステルバーだって只じや済まない!」

シユワルツ「構うこたあねえ!今がチャンスだろうが!」

奈緒「チャンスと自爆を履き違えるな!」

シユワルツ「テメエは俺の邪魔するために来たのか!？」

奈緒「無茶してバカな真似させないために付いてきたんだ!忘れんな!」

シユワルツ「このままじゃ2人まとめてお陀仏だぞ?」

奈緒「手はある筈なんだ…。何か手が…!」

ランバート「ウガアアアッ!!」

奈緒「ッ!？」

ズズズズ…ッ

シユワルツ「何だ…?」

ドラゴンターゲットルが揺れる。

シユワルツ「地震か…?」

奈緒「待てよ…。揺れがどんどんデカくなってるぞ!」

ドラゴンタートル全体を包むように始まった揺れは、やがて衝撃となって奔り、ランバート「ウオオオオ!?!」

やがて、ドラゴンタートル内にいる者達の視界は、反転した。

つづく

## 第22話 『辛勝』

—— 数分前、ドラゴンタートル外の戦場。

メタルビースト《——!!》

パスチャー・キング『ツ…!!?』

ジャック「god damn!!パスチャー!」

メタルビーストの攻撃で、パスチャー・キングが爆煙に包まれる。

ジャック「大丈夫か!?しつかりしろ!パスチャー・キング!!」

メリー「生体反応はあるわ、兄さん。けど、あの損傷じゃ戦闘は無理よ」

ジャック「:OK. メリー、お前はパスチャーを誘導してテキサスに戻ってくれ」

メリー「でも、それじゃあ兄さんがサポートを受けられなくなるわ!」

ジャック「それについてはNo, problem. どうせハイパワー・ライフルも

弾切れ、もうサポートの必要もないネ」

ジャック「パスチャーはmechanicの言うことを聞きはしない…。ミーかメリーのどちらか行かないと治療もできない」

メリー「それは、兄さんの言う通りだけど…」

ジャック「だつたら早く行けッ!! 無傷の俺の事よりも、大切なのは家族の命だろう!!」  
メリー「! …分かったわ、兄さん」

テキサスマックの頭部から、ハットマシンが分離する。

メリー「せめてこれだけは置いていくわ。使つて、兄さん!」

ハットマシンから射出されたテキサスソードが地面に突き立つ。

メリー「Good luck. 兄さん」

ジャック「Thank you. My sister」

テキサスソードを抜き放ち、構える。

卯月「パスチャー・キングがやられちゃうなんて…」

美波「戦闘が大分長引いて来てるわね…。元々、無傷で勝てるなんても考えてなかつたけど…」

卯月「これだけ敵に押し寄せられたら、いくら迎撃したつてじり貧ですよね…」

美波「気を抜いてなんていられないわ。私達だって他人事じゃないんだもの!」

卯月「はいっ! パスチャーやメリーさん達の代わりに、私達がジャックさんのフォロ―をしましょう!」

美波「ええ! 互いに死角をカバーしあつて、敵の動きに注視するのよ」

ジャック「頼むぞ Idols. テキサスの護衛も忘れないでくれよ!」

卯月「はい！誰一人、欠かせはしません！必ず勝ちましょうね！」

オペレーター「艦長！レーダーにボルガを確認！戦域に合流します」

艦長「ふむ。そうか」

スミノフ「戦況は通信で把握している！ボルガも砲撃を以て援護を行う！」

菜々「超ウエポン砲モードにはならないんですか？」

スミノフ「現状においてそれは、敵にこちらの無防備を晒してしまうことになります。

ドラゴンタートルのバリアが何時解かれるかも分からない今、機動力を保っておいた方がいいでしょう」

瑞樹「確かに、テキサスにボルガ、こちらの護衛対象が増えるだけだものね」

スミノフ「自分の身は自分で守ります！対空迎撃用意、攻撃開始！！」

ボルガ・クルー「Y p a a a a a a a a !!」

ズズズ：

美穂「つ…！スゴい揺れ…」

アーニヤ「ボルガに、テキサス…ドラゴンタートル。大きいマシンが、一局に集中してますから、ね」

茜「さながら直下型地震のど真ん中と言ったところですか！」

美穂「それだけ、戦況も大詰めってことだよね」

アーニヤ「Θ T o…:そうですね。あとは、ドラゴンターゲットルに突入したリーナ達が、バリアの発生装置を、破壊してくれば、ワタシ達の勝ちは目の前、です！」

茜「ですが、少し余裕がなくなってきたみたいですよ！テキサスとドラゴンターゲットルの距離が近付いてます！」

副長「艦長、これ以上は危険です！一度後退を！」

艦長「…止む終えんか。テキサス後退、ドラゴンターゲットルと距離を取るんだ！」

美穂「テキサスも後退を始めたみたい」

アーニヤ「けど、何時までも逃げ切れるものでは、ありません」

茜「何とかドラゴンターゲットルを足止めできればいいのですが！」

美穂「でも、あんなおつきなのをどうやって…。ボルガなら、受け止められるかもしれないけど…」

アーニヤ「…危険、ですね。最悪、超ウエポン砲への変形の妨げになるかもしれない」

美穂「だよね…。うーん……」

ボブ「うわっと！」

サム「どうした?!大丈夫かい、兄ちゃん」

ボブ「お、おう……。ちよつと足を滑らせちまった……!」

サム「足を滑らせたつて……。地滑りでも起こしたつてののか?」

アーニヤ「ここ……ウラルは、шахта……鉱山として開発されてきました。坑道がこちらこちらに張り巡らされていて……。元々、地盤は緩いかもしれません」

サム「そこにこの戦闘で、山崩れに拍車を掛けちまったつて訳か……」

リンダ「気を付けなさいな。ロボ・ストーンが脱輪なんてしたら、誰も助けてなんていられないわよ?」

ボブ「おう、気を付けるぜ……」

美穂「地盤……。地崩れ……。それだ……!」

アーニヤ「ミホ……?何か、стратегия……作戦、ありますか……?」

美穂「作戦つて言うほど、立派なものじゃないけど……」

茜「何でも構いません!出来ることは何でも試してみましよう!」

美穂「……そうだよね。このまま悩んでるくらいなら……!」グイッ

プロト・ゲッター3を、接近してくるドラゴンタートルの正面、700mの位置に着ける。

副長「ゲッター飛焰、何をするつもりだ?」

美穂「ドラゴンタートルの足を止めてみます!」



副長 「そんなことが出来るのか？」

美穂 「それは…、正直に言うと、分かりません。あくまで、上手くいけば、ですけど」

副長 「二か八かと言うわけか…。今の状況でリスクのある行動は許可できないが…」

美穂 「けど、このままじゃテキサスがドラゴンタワーに踏み潰されちゃいますよ！」

茜 「手をこまねいているより、行動あるのみ！です!!」

艦長 「副長、彼女達の言っていることは間違いではない」

副長 「ですが、艦長！」

艦長 「やりたまえ、君達の思うように。それが君達の力なのだろう？」

美穂 「はいっ！」

美穂 「アーニヤちゃん！」

アーニヤ 「Da！」

美穂 「ゲッター飛焰の全部のゲッターエネルギーを、ゲッターの腕部に！」

アーニヤ 「リョーカイ、制御は、任せてください」

美穂 「お願い。——茜ちゃん！」

茜 「はいっ!!」

美穂 「プラズマエネルギーだけで、どこまで出来るか分からないけど、支えるのを手

伝つて！」

茜 「分かりました！思う存分、ぶちかまして下さい!!」

美穂 「うん…っ！ゲッター飛焰、フルパワーツ!!」

プロト・ゲッター3の各間接の隙間から、淡い緑色のゲッターエネルギーが溢れ出す。クルー「ゲッターとドラゴンタートルとの相対距離、300まで接近!」

スミノフ「まさか、単機でドラゴンタートルを受け止めるつもりじゃあるまいな…?」  
ボブ「な、何だっつてえ!」

サム「いくらゲッターだって、そんなことが出来るのかよ?」

リンダ「サイズ差で考えても、踏み潰されるのがオチよ!」

ボブ「神風っつかよ…!」

サム「これが日本の専売特許っつかア!」

卯月「ふざけないで下さい!美穂ちゃんが考えてるのは、そんな事じゃ…!」

アーニヤ「ゲッターエネルギー、移行終わりました!」

美穂「ありがとう…!全てのゲッターエネルギーを、右腕に!」

アーニヤ「はいっ!」

カアツ

ゲッター線を纏った拳を天高く突き上げる。

美穂「大雪山おろしが使えなくても、私のゲッター3にだって、真ゲッター3負けな

いパワーがある！」

瑞樹「渾身の一撃で、殴り止めるの？」

晶葉「だが、ドラゴンタートルには物理障壁がある。例え、真ゲッター3に匹敵するパワーとは言え……」

美穂「この拳を振り落とす場所はあ——！」

プロト・ゲッター3の見据える、目標は、

ジャック「grand……？」

美穂「天地い……！」 グググッ……

大きく、天を仰ぐように拳を振り被る。

美穂「轟……壊ッ!!!」

渾身のエネルギーを込めた拳を、大地目掛けて打ち下ろした。

ドワオオッ

拳を打ち下ろした地点を始まりとし、プロト・ゲッター3を中心として大地に亀裂が生じ、裂ける。

ズズズズ……ッ

ボブ「ま、マジかよ……！」

リンダ「驚いてる場合じゃないわ！ここから離れないと、私達も危ないわよ!!」

サム「地割れに呑み込まれるぞお!!」

直下型地震のような激しい揺れは、亀裂を広げて地割れを生み、大地を隆起させ、岩塊の捻りを生んだ。

みく「…すっげえにやあ……」

菜々「あれ、ホントにナナ達が乗ってるのと同じマシンなんですかね…」

卯月「見てください! ドラゴンタートルが…!」

美波「艦首が、上がっていく…」

瑞樹「隆起した岩に乗り上げて、地割れに呑み込まれた…」

晶葉「座礁した、とでも言うのか?…まったく」

艦長「はっはっはっ! 面白いことをしてくれる!」

副長「笑い事ではありません! これでは、こちらの陣形も滅茶苦茶だ…!」

艦長「だが、結果としてドラゴンタートルの足止めには成功し、地上に展開していたメタルビースト部隊はほぼ壊滅…。彼女らの賭けは、大成功と言っても良いだろう」

スミノフ「件の少女達は怎么样了? 中心地点にいたのだ、無事では済まないはず…」

クルー「いえ…、レーダーに反応。これは、ゲットマシンです!」

鉄甲鬼「呑み込まれる寸前、ゲッターを分離させて難を逃れたのか」

ニオン「…見た目以上に肝の座った連中だ」

芳乃「それがー、彼女らの強さの源でしてー」

美穂「お、思ったよりもすごいことになっちゃった…」

茜「ですが、思惑通りです！やりましたね！美穂さん！」

美穂「うん…！これでしばらく時間は稼げるよね」

アーニヤ「Хорошее суждение…素晴らしい判断…。それに、勇気、です！」

美穂「えへへ…／＼／＼　そ、そうかなあ…？」

茜「美穂さんにしか出来ない戦い方でしたよ！ナイスファイトです!!」

美穂「ありがとう…。でも、まだ戦いが終わった訳じゃないんだよね…。」

アーニヤ「その通り、です。空中から、敵が来ますよ！」

茜「ここからは私がやります！任せてください!!」

美穂「茜ちゃん？大丈夫なの？」

茜「はい！美穂さんの戦う姿を見ていたら、私だつて黙っていられません!!」

茜「今の私のハートは、熱く！激しく!!情熱的に!!!真つ赤に燃えているのです!!!自分の体の不調なんて、気合いと根性で乗り越えてみせます!!」

美穂「…分かった！行こうよ!!」



ラセツ「座礁……?このドラゴンタートルが!?!…フフフツ」

ランドウ兵「ラセツ様……?」

ラセツ「フハハハハッ!まさしく、してやられたわ!まさか奴等がここまでの事をしてくるとは思わなんだ!」

ランドウ兵「い、如何いたしますか?ラセツ様!」

ラセツ「……ドラゴンタートルは放棄する。残った兵を集め、脱出せよ」

ランドウ兵「ドラゴンタートルを、放棄……?!」

ラセツ「ああ。航行不能となれば、このドラゴンタートルとてここまでよ。動かぬガラクタと心中する謂れはない」

ランドウ兵「し、しかし……!それでは、ランドウ様への示しが……」

ラセツ「ふっ、誰がランドウの元などへ逃げ帰ると言った?」

ラセツ「もはやランドウの元になど退路はないわ。戻ったところで、処刑されるのがオチよ」

ランドウ兵「で、では……!」

ラセツ「直ちに脱出挺の準備をしろ。我々は戦場から離脱する!」

ヤシャ「敵前逃亡だと……!ラセツ、貴様ア……!!」

ラセツ「時間稼ぎは任せたぞ。精々このドラゴンタートルのために命を張るがいい。

それが貴様の、最後の務めとなるのだからな」

ヤシャ「元よりそのつもりだったな!？」

ラセツ「フツ、それがどうしたと言うのだ？」

ヤシャ「おのれえ…!!」

ガンツ

ヤシャ「うおっ…!」

李衣菜「戦闘中に余所見なんて、余裕あるじゃん…？」　ギリギリ…

ヤシャ「リーナ、貴様…っ!」

李衣菜「何があったかは知らないけど、今の揺れで流れは変わった!このまま押し切らせてもらうよ!」

ヤシャ「簡単に言ってくれる!この程度で、状況が変わるものか!」

李衣菜「どうかな?何時だって、チャンスは自分で掴んできたよ!」　ブシュツ

凧「(李衣菜の傷が開いて…)…李衣菜、無茶は禁物だよ。焦ったって何も変わらない」

李衣菜「けど、どっしり構えたって結果は同じ!なら、こつちから飛び込まなくちゃね!」

凧「目的を忘れないで!コイツを倒すことが、私達の目的じゃない!」



李衣菜「そこまで熱くなってないよ。本当に、状況はこっちに傾いてるから……！」  
凜「……？」

李衣菜「立ち止まるわけには行かない！いくよッ!!」グツ

全身を当てたジャコツを押し上げ、壁面に叩きつける。

ヤシャ「ぐっ……！」

李衣菜「うあああああッ!!」

ガゴツ　ゴゴゴゴツ

ヤシャ「破れかぶれか！見苦しい！」

李衣菜「フ——ッ!!フ——ッ!!」

ヤシャ「此奴……！」

李衣菜「ぐううう……！がああああああ……!!」

壁面がひしやげて、歪むほど、ジャコツを叩き付ける。

ヤシャ「ツツ……！暴れるだけでは、戦いには勝てん!!」　ゴオツ

ジャコツの口から放たれた熱線が、ネオゲッター1の全身を焼く。

李衣菜「うう……っ！こんな、こんなことでえ!!」

ヤシャ「うっ……！」

李衣菜「負けてられないんだあッ!!」

炎の中で、ネオゲッターの瞳の輝きは失われず、  
ガンッ

ヤシャ「むっ…？これは…」

李衣菜「へへっ、何だと思う？」

加蓮「ヒント① ただの盾じゃないよ」

凜「……ヒント② ネオゲッターもゲッターロボだよ」

ヤシャ「この状況で、ふざけるつもりか？」

李衣菜「正解は、ゲッタービーム・キャリアだあつー！」

ヤシャ「ぬっ…?!」

李衣菜「ゲッターアアアービィームッ!!」

ズオッ

ヤシャ「うおおおくくッ!!」

李衣菜「これが奥の手ってね！最高にロックに決まったでしょ！」

凜「作者が存在忘れてたみたいだな唐突な使い方だったけど…」

加蓮「奥の手を最後まで残してたって、言ってほしいな〜？」

李衣菜「このまま壁を…、突き破っちゃええ〜ッ!!」

ヤシャ「くく〜っ——！」

ジャコツをゲッタービームで押し上げ、外壁を突き破る。

李衣菜「どおだ!!」

加蓮「ここは…」

凜「晶葉から送ってもらった反応が目の前に…。…そういうこと」

ヤシヤ「外壁を突破するために、このジャコツを利用したと言うか!」

李衣菜「へっへっ! そっちは頑丈そうだし、手っ取り早く済ませるには、こうするのが一番でしょ?」

凜「さっきの揺れで目的地が近付いたことを計算して…」

李衣菜「へへっ、戦いの時にはクールな頭脳とロックなハートってね!」

加蓮「ま、どこまで計算できてたかは怪しいけどね」

ヤシヤ「ここまで到達するとは…! 流石と言うべきか!だが、これ以上先へは進ません!」

李衣菜「あんたの覚悟は分かったよ。けどこつちだつてもう一步も引けない!」

ジャキツ

ヤシヤ「無駄なことを!もうそんな豆鉄砲如きでは怯まぬぞ!」

李衣菜「これが豆鉄砲って言うなら…!」 カシユツ

ヤシヤ「何…っ!?!」

右腕のハンディミサイルキャノンを切り離し、

李衣菜「プレゼントしてあげる！」

左に残されたミサイルキャノンで、切り離れた方を撃ち抜き、爆破。

ヤシャ「このっ……！」

李衣菜「やあああああっ!!」

左のミサイルキャノンを破壊しながら、ジャコツを殴り飛ばす。

ヤシャ「ぐおっ!!」

李衣菜「っし！」

加蓮「あくあ、これでチーフが二丁用意してくれたハンディミサイルキャノンが、ま

とめておじゃん」

李衣菜「これまで充分役立ってくれたよ！礼は言っておく」

加蓮「あとで怒られても、付き合ってあげないよ？」

李衣菜「それはあ…、まあ仕方ない！でもお陰でこれが使えなんだ！遠慮はしない!!」

李衣菜「ソオオオドトマホオオークツ!!」

青白い閃光と共に、ソードトマホークを抜き放つ。

ヤシャ「ようやく来たか！尋常に勝負と行こう！」

凜「奴も……で決着を着ける気？」

李衣菜 「ここまで来たんだ！付き合うつもりはないよ！」

加蓮 「あら意外」

李衣菜 「こつちだつて、余裕ないんだから。速攻で片を付けてやるから!!」

ヤシャ 「簡単にあしらえると思うな！うおおおおつ!!」

李衣菜 「自分から飛び込んだ役目くらい果たしてみせる！行くぞおおおつ!!」

ランバート 「ウオオオオツ!!」

シュワルツ 「チイツ！」

爪を突き立てた邪鬼王の突撃を、アサルトナイフで弾いて流す。

奈緒 「状況変わってるのか？これ」

シュワルツ 「甘えんな。流れは自分で掴んでみる」

奈緒 「…チツクショウ！」

目の前のパネルを操作して、腕や脚からミサイルを乱れ撃つ。

ランバート 「アアアアアツ!!」

奈緒 「くそっ！素早しっこいなあ、もう！」

シュワルツ 「上等だ、奈緒！うおおおつ!!」

ミサイルを掻い潜ってきた邪鬼王の首筋にアサルトナイフを突き立てる。

ランバート「グッ……！」

シユワルツ「これで終わりにしてやるぜ！」

ランバート「ウオ……！ウゴオオオオオ!!」

シユワルツ「ッ！」

邪鬼王の牙が、ステルバーの頭部を押しさえ、噛み砕く。

奈緒「シユワルツ！」

シユワルツ「心配すんな！ステルバーのコックピットは頭部にはねえ……ゲッターと

違ってな」

奈緒「そ、そういやそうだったな……」

シユワルツ「それよりもだ……！おりやあ！」

邪鬼王の腰にしがみつき、動きを抑える。

ランバート「オオツ!？」

シユワルツ「今だ、奈緒ッ！撃てえ!!」

奈緒「ほ、本気か？この距離じゃ、ステルバーだって只じや済まないぞ！」

シユワルツ「悩んでる場合じゃねえ！ここが引導を渡してやる時だ」

奈緒「だったら、尚更……！」

シユワルツ「構うことはねえ！終わらせてやるんだ……この意味のねえ、奴の戦争を

な!!」

奈緒「……分かった!」

ランバート「ウゴオオオオツ!!ガアアアアツ!!」

シュワルツ「終わりだ:ランバート!」

奈緒「全砲門、一斉射撃!!」

バオオツ

ランバート「ウギャアアアアツ!!」

至近距離でミサイルが弾け、衝撃と熱量で邪鬼王の表装が爆ぜ、体を打ち砕いていくが、邪鬼王の動きを抑えるステルバーの装甲も熱量で歪んでいく。

奈緒「やったか!?!」

シュワルツ「いや……」

ランバート「アア:ウア:アアアアアアアアツ!!」

奈緒「まだ動けるのかよ!しつこいったらないぜ!」

シュワルツ「チツ……!」

奈緒「シュワルツ!?!どうするつもりだ!」

シュワルツ「ランバートオ!!」

コックピットのキャノピーを開け、拳銃を構えて直接邪鬼王の右目の位置にいるラン

バートを狙う。

シュワルツ「！」

パアンツ

ランバート「う…!?うう…——」

ランバートが人形の糸が切れたように力を失い、それに合わせるように邪鬼王もその場に崩れ落ちる。

奈緒「お、おっと…」

シュワルツ「……」

奈緒「終わった…のか…?」

シュワルツ「…ランバート…、お前の戦いは終わったんだ。ゆっくり眠れ…」

奈緒「もうランドウの奴等に利用されることもなんだな」

シュワルツ「一人乗りのステルバーだったら、こうはならなかった。あいつを仕留められたのは、お前の協力があつたからだ」

シュワルツ「それだけには、礼は言っておくぜ」

奈緒「…へへっ」

ズズズ…

奈緒「李衣菜の奴…、まだ戦ってるのか」



シユワルツ「さ、感傷に浸るのは仕舞いだ。さつさとあのじゃじゃ馬どもの援護に向かうぜ」

奈緒「おう！終わりが見えてきたんだ、このまま駆け抜けて終わりにしようぜ！」

李衣菜「うりやあああッ!!」

ヤシャ「おおおおおッ!!」

ガギインツ

凜「っ…… 李衣菜、コイツ相手に時間掛けすぎだよ。一旦適当にあしらって、装置の破壊を優先して！」

李衣菜「あしらって何とか出来るなら、始めっからそうしてる……ってえ!!」

フルスイングでソードトマホークを振るい、ジャコツの青竜刀を跳ね上げる。

ヤシャ「分かっているではないか！」

跳ね上がった青竜刀を構え直し、大上段に振り下ろす。

李衣菜「そりや、これだけしつこく付き纏われたらね！」

ヤシャ「訂正しておく。我が牙城のドラゴンタートルを追撃し、攻め込んだのは貴様ら。つまり、付き纏っているのは貴様と言うことだ……！」

ソードトマホークと青竜刀が鏝迫り合う。

李衣菜「ははっ、面白いこと言うじゃん！ま、アンタをアラスカで逃したのは私だから、ケリを着けるのも何も、私に責任があるのは間違いないけど！」

ヤシャ「ほげけ！その首を断って貴様の血でアラスカでの汚名を注いでくれるわ!!」

李衣菜「私の血潮は、アンタのちっぽけな名誉を挽回するための洗浄液じゃないツ!!」

ヤシャ「ツ……!」

ネオゲッターを突撃させ、ジャコツの体当たり。ジャコツを仰け反らせる。

ヤシャ「このっ……!」

李衣菜「プラズマソードツ!!」

バチンツ、とプラズマが弾け、ソードトマホークがエネルギーを纏って青白く輝く。

李衣菜「これが、アンタの運命だあああ……ツ!!」

ヤシャ「そんなものお!」

エネルギーを纏ったソードトマホークの一刀が、身を守るために盾としたジャコツの青竜刀を断った。

ヤシャ「バカな……!私の、青竜刀が……!」

李衣菜「えいっ!」

ヤシャ「ぐお!」

怯んだジャコツを蹴りで突き飛ばし、その反動で跳躍。

李衣菜「ソードトマホーク……！」

ソードトマホークを水平に構え、身を捻り、

李衣菜「——ブウーメラントッ!!」

全身をバネに、ソードトマホークをジャコツに投げた。

ヤシャ「ぐわあああ……!!?!」

凄まじい回転エネルギーを以て放たれたソードトマホークは、ジャコツの胸部を深く  
抉り破壊。そのままジャコツを壁面まで叩き付け静止させた。

加蓮「やった!」

李衣菜「よし、このまま次の目標に行くよ!」

凜「準備は出来てる。エネルギー送るよ」

李衣菜「流っ石、話が早い!」

中空からの落下時間。ネオゲッターが両手を打ち合わせる。

李衣菜「これがネオゲッターのホントの必殺技!プ〜ラ〜ズ〜マ〜!サンダアアア

アーーーーツ!!」

オーバースローのスローイングで投射されたプラズマサンダーは、ドラゴンタートル  
のバリア発生装置を貫き、破壊した。

李衣菜「よおっしっ!任務完了!!」

凜 「そうだね。——…テキサス、聞こえる？バリアの発生装置は壊したよ。これでこっちの攻撃が無効化されることはなくなつた」

加蓮 「これでドラゴンターゲットも、チェックメイトだね」

凜 「敵の要塞と心中するのはゴメンだよ。さつきと脱出しよう」

李衣菜 「へへっ、分かつてるって。けどその前に！」

ヤシャ 「おのれえ…！おのれおのれおのれっ！おのれえ!!」

李衣菜 「へへっ、随分悔しいみたいだね」

ヤシャ 「何故だ…!?何故こうも貴様らの思うままになる?!」

加蓮 「そりゃ、アタシ達が主人公だから…」

凜 「それは言つたらダメでしょ…」 ハア…

李衣菜 「私は、アンタとは違う！私の戦いは、一人のちつぽけなプライドを守るため

のものじゃない！」

凜 「ほら、あんな風に」

加蓮 「おう、正統派だねえ」

李衣菜 「ドラゴンターゲットを破壊するにしたって、まだ時間はある！アンタにも、こ

こで引導を渡してあげるから！」

ヤシャ 「ほざけ！ならば貴様も道連れにしてくれるわアツ!!」

のし掛かった瓦礫を吹き飛ばして、ジャコツが来る。

ヤシャ「うおおおおおくくくッ!!」

李衣菜「チエーンナツクルッ!!」

ヤシャ「ふんっ!」

真っ直ぐに飛んだチエーンナツクルを躲し、そのチエーンを握り掴む。

ヤシャ「バカめ!!」

チエーンを引き、ネオゲッター1のバランスを崩し、引き寄せる。

李衣菜「うわあああっ?!」

ヤシャ「終わりだあッ!!」

ジャコツの拳が、ネオゲッター1の割れた一号機のコックピットを突く。

李衣菜「うぐっ…!!」

ヤシャ「ふはははっ!!このまま押し潰してくれ!」

李衣菜「ま…まだだ!このくらいで!」

ヤシャ「強がりや!コックピットが潰れてしまえば、ゲッターも動かせまい!」

加蓮「…バカだね、アンタ」

ヤシャ「ぐっ…!?!」

ネオゲッター1の蹴りが、ジャコツを打ち、吹き飛ばす。

ヤシャ「な、何故だ!？」

凜 「別に、私と加蓮は、アンタと李衣菜の戦いを観戦してるだけのギャラリーじゃないよ?」

加蓮 「リーナがどうしようもないんなら、アタシ達で戦うだけだ!」

ガンツ

ヤシャ「グフツ!」

ジャコツを蹴り飛ばす。

李衣菜「…本当なら、私の手でケリを着けてやりたいんだけどね」

加蓮「いいから。折角だから休んでなさい。凜、ソードトマホークを拾って」

凜 「分かった。これだね」

チエーンナツクルをスイングさせ、突き立ったソードトマホークを拾い上げる。

凜 「さあ、じつとしてなよ!」

チエーンを引き戻した勢いのまま、ソードトマホークを投擲。

ヤシャ「ぐっ…!」

ジャコツを串刺しにする。

凜 「今だ。やるよ、加蓮!」

加蓮「OK!」

ネオゲッターの手の平を打ち合わせる。

加蓮「プラズマ！」

凜「サンダーーツ!!」

ジャコツに突き立ったソードトマホークが避雷針のように、放たれたプラズマサンダーを引き寄せ、ジャコツの全身にそのエネルギーを迸らせた。

ヤシャ「うおおおおおッ!!」

凜「終わりだよ」

加蓮「もうしつこく付きまどってこないでよね」

ヤシャ「まだだ！まだ終わらん！この程度で…こんなところで——!!」

爆散。青白い稲妻の光と共に、メタルビースト・ジャコツは爆炎の中に消えた。

李衣菜「へへへっ。終わりだね」

凜「うん。けど、ネオゲッターも限界だ」

ガクンッ

加蓮「おっと」

ネオゲッターが膝から崩れ落ちる。

加蓮「ギリギリだったね。ネオゲッターも、私達も」

凜「うん。何だかんだ言って、危ない橋だった」

李衣菜「早く、ここから脱出しないといけないのに……」  
ガンツ

李衣菜「つ……？何？」

シユワルツ「へっ、悪運の強え野郎だ」

李衣菜「シユワルツ……。野郎は違うよ……」

シユワルツ「流石のお前えも、そんだけボコボコにされりやあ、何時もの元氣はねえ  
みてえだな」

加蓮「お互い様でしょ。ステルバーの頭はどこへやったのよ」

奈緒「ははっ。確かに、お互い様だ」

凜「みんなボロボロで、マシンも限界……。けど、勝ちは見えた」

シユワルツ「後は、正解して祝杯にありつけるか、だな。まずは脱出する。しっかり  
掴まってるよ」

李衣菜「分かった……。よろしく——」

——。

オペレーター「ドラゴンタートルから反応二つ。ステルバーと、ネオゲッターです」

副長「両機共に無事……。激戦にして、上々の戦果だと判断します」



艦長「ボルガの様子は？」

オペレーター「既に超ウエポン砲発射態勢への以降を済ませ、待機中。こちらの合図で攻撃を開始するようです」

艦長「そうか」

オペレーター「ゲッターを含め、航空部隊の活躍で、上空に残っていた敵戦力も減少。目下、こちらの障害になる要素は存在しません」

副長「ランドウの地上部隊もゲッター飛焰によつてほぼ壊滅。艦長、機は今でしょう」  
艦長「よし、戦場に展開する部隊に後退命令。至急テキサスのドーバー砲と超ウエポン砲の射線上から退避させろ」

艦長「ドーバー砲、最大出力でエネルギー充填開始!!」

オペレーター「了解。各機後退、テキサスとボルガの射線上から退避せよ。繰り返し」

アーニヤ「アカネ、テキサスから、退避命令…です。ここは下がりましたよ」

茜「ですが！まだ、敵が…！」

美穂「ほとんど壊滅状態だよ。ドラゴンタートルを破壊したら、きつと退いてくれると思うよ。だから私達も、安全なところに一旦下がろう？」

茜「後退…。私達は、勝ったんですか？」

アーニヤ「アー、それはまだ、これから……」

オペレーター「ドーバー砲、発射準備完了！射軸固定、射角問題なし」

副長「艦長！」

艦長「ボルガに繋げ。本艦はこれより、ドーバー砲を使用する。こちらに合わせよ！」  
スミノフ「了解です！既に超ウエポン砲は、何時でも発射できます！」

艦長「よおし——！」

卯月「ボルガの超ウエポン砲と、テキサスのドーバー砲……！」

美波「ゾツとしない光景ね。本来なら街一つも平然と吹き飛ばす戦略兵器クラスの大砲が、二つも」

卯月「それでも今は、一つの目的に向いています！今この瞬間だけは、正しいことに使われてるって、信じてます！」

美波「…そうね」

美波（本当なら、私達も他人のことは言えないかな……？）

スミノフ「超ウエポン砲」

艦長「ドーバー砲」

「発射アッ!!」

ド　ワ　オ　オ　ッ

放たれた二筋の超弩級の砲撃。空を地を、ウラルの山々を震わせ、その砲撃はたちまちに衝撃となった。

鼓膜をつんざくような壮大な爆音が響き、太陽と見間違うような眩い光炎の爆発が怒って、ランドウが誇る超大型移動要塞は、消滅した。

シユワルツ「おお……！」

奈緒「わぷっ！何て衝撃波だ！今のステルバーで持つのか……？」

シユワルツ「心配すんな。アメリカのメカはそこまでヤワじゃねえ」

奈緒「どんな自信なんだ……って、まあいいか。これで終わったんだな。ドラゴンタートルも、お前の後始末も」

シユワルツ「……そうだな」

シユワルツ（ランバート……。もう誰も、お前も起こすような真似はしねえ。先に地獄で待つてろよ……）

李衣菜「……はあ……、はあ……はあ……」

凜「李衣菜、見えてる？」

李衣菜「うん。スッゴいね。今頃、ジャックだったらジーザス、とか言ってるかな？」

凜「そうかもね。作戦が成功したのは李衣菜のお陰だよ」



ゲッターロボ——。

「うわあああああ〜っ  
つづく  
!!!」

## 第23話 『欧州恐竜帝国』

~~~~~ 蛇牙城 ~~~~~

ランドウ「……」

「……ロシアでの戦いは、連合軍が勝利を収めたようですな」

ランドウ「……コーウエン博士、それにステインガー博士もか。わざわざ2人揃って、そんな話をするためにワシのところまで来たと言うのか？」

ステインガー「そ、そうじゃないよ！ボクはただ心配だっただけさ！」

ランドウ「心配？」

コーウエン「少々ドラゴンタートルを切るのが早すぎたのではないかとね。連中に妙なところを勘付かれたりはしないかとね……」

ランドウ「フンツ、心配あるまい。連合軍の頭はワシらを征伐することに終始しておるようだからな」

ステインガー「けど、向こうにもバカじゃないのはいるよ。特に、早乙女の後継者がいるのは厄介だ」

ランドウ「年端のいかぬ小娘など、簡単に目の前の勝利に酔いしれるものよ」

コーウエン「勝ちを奴等に譲ることで、油断させる、と?」

ランドウ「最終的に勝つのは我らだよ。連中は水面下で、自らの足元を見透かされて
いると気付かず、全てを悟った時には既に世界は我が手中よ」

ステインガー「奴等の驚き、慌てふためく顔が、目に浮かぶようだよ」

ランドウ「その為にも、抜かるわけにはいかん。分かっているな? 貴様らに掛かつて
いるんだぞ」

コーウエン「承知しています。もう少しお時間を頂ければ、色好い返事を必ずお返し
しますよ」

ランドウ「猶予はあると思っているのか?」

コーウエン「ええ。そのために、利用できるものは何でも使うつもりです」

ランドウ「:欧州の件は、既に耳に入っていると言うわけか」

ステインガー「ついに猫を被っていたトカゲが本性を現したって訳だ!」

ランドウ「ラセツめ:。ドラゴンターゲットル陥落で我々に見切りを着けたようだな」

ステインガー「所詮は進化の爪弾き者。奴等が生き残る未来などありえないって言う
のにね!」

コーウエン「ですが、それこそ我らにとって好都合。せいぜい連中の目を引く囷とし

て、最後まで役に立つてもらいますよ」

ランドウ「フフツ……。そうだな。地球の支配者を気取るトカゲ共にはそれが相応しいかもしれない」

ブワサアツ

ランドウ「この地球の支配者が誰であるか、奴等にもそれをすぐに教えてやる！」

ランドウ「もうすぐこの古い世界は終わり、新たな時代を迎える——！」

ランドウ「その時こそ、ランドウ新世紀の始まりだ!!」

ランドウ「世界は！地球上のありとあらゆる生命は、このランドウに跪くのだア!!」

ランドウ「フハハハハハハツ!!アーツハツハツハツハツハツハツ——!!」

ステインガー「……」

コーウエン「……」

コーウエン（我々が目的を達するための“罠”……。それは貴方も同じですよ、プロフェツサー・ランドウ）

ステインガー（君がそのちっぽけな野心に支配されている限り、結局君も、君が嘲笑うトカゲ共と同じ範疇の存在であると言うことに代わりはない）

コーウエン（確かに非凡である、素質はある。だが、天才にはほど遠い……）

ステインガー（何て御しやすい道化だろうね？コーウエンくん）

コーウエン（そうだね。だからこそ、今は自分の夢に陶醉させてあげよう。ね、ステインガークン）

ステインガー&コーウエン（真の支配者たるはランドウ、貴様に非ず！この宇宙を統べる、選ばれし者は——！）

——。

くくく 戦艦テキサス・通路

凜 「……」 スタスタ……

加蓮 「……」 スタスタ……

—— 数日前、ドラゴンタートル攻略戦直後。

李衣菜 「——」 ピーッ ピーッ ピーッ

軍医 「……」

凜 「先生、李衣菜の容態は？」

軍医 「……」。正直、息をしている方が奇跡的だよ」

加蓮 「えっ」

軍医 「左あばらの損傷が酷い。肋骨が粉々に砕け散って、何本かは肺に突き刺さっている。それが原因で左肺は破裂、機能は停止。全身に複雑骨折が2ヶ所、大小合わせた骨折が10ヶ所以上……。全身火傷と、凍傷を併発した患者なんて初めてだ」

加蓮「も、もう充分じゃない？」

軍医「……。正直に言えば、これだけの重傷、神経系統にもどれだけ被害を及ぼしているか分からない。然るべき場所で、然るべき設備で精密に検査をしたいところだが、今の我々の置かれた立场上、それは出来ない」

凜「もし李衣菜が回復して、目が覚めてもどうなってるか分からないってこと？」

軍医「そうだ。特に精神状態は……。ひよつとしたらこのまま目覚めないかもしれない」

加蓮「そんな……！」

軍医「私には、それも幸せな選択肢だと思いがね。これだけ傷付き、英雄と讃えられても可笑しくないほど、彼女は戦った。医者として、このまま永久に休ませておくことも彼女のためなんじゃないかとも思うよ」

加蓮「リーナ……」

李衣菜「……」 ピーッ ピーッ ピーッ——

—— 現在。

凜「……」 スタスタ……

加蓮「……」 スタスタ……

凜「……」 フッ……

—— 格納庫・ネオゲッターロボのハンガー

？「チーフ！こっちは準備オツケーですよー！」

整備班長「おう、そうか！ならこっち手伝つてくれ、リーナ!!」

李衣菜「はーいつ！今行きま……あ……えつと……、凜……。加蓮も」

凜「李衣菜……。こんなところにいた」

加蓮「りくいくな〜？」

李衣菜「は、はいつ！」

加蓮「こ〜んなどころで何してるの？」

李衣菜「な、何つて……、見ての通り、ネオゲッターの整備だけど……」

加蓮「……」

ズイツ

李衣菜「ヒイツ！」

加蓮「アンタ、全治何カ月の怪我したと思ってるの？自分の体のことも分かんないく

らいバカなんだっけ？」

李衣菜「ちよつ……！バカは言い過ぎ……」

加蓮「違う？」

李衣菜「……違わないです……」

凜 「加蓮、その辺で一旦落ち着きなよ」

加蓮 「凜……。……」

李衣菜 「……第一、そんな大袈裟に騒ぐほどの怪我だったの？」

加蓮 「っ……!」

凜 「左肩が裂けるくらいの重傷だったんだよ？ 忘れたの？」

李衣菜 「それなんだけどさ、ほら」

患部を見せる。

加蓮 「え……？」

凜 「どう言うこと？」

李衣菜 「見ての通り、傷なんて跡形もなくてさ。ネオゲッターの中で気を失って、氣付いたらテキサスの医務室。体は何ともないし、怪我してたのが自分の気のせいだったみたいで……」

加蓮 「ねえ、リーナの怪我って……」

凜 「全治に一年以上、それ以前に何時目覚めるかも分かんない状態って言われてたけど……」

李衣菜 「え……、本当に……？……そりゃ、このゲッターの惨状を見たら流石にあの時の戦いまでは嘘じゃないってのは分かったけど……」

凜 「ホントに何ともないの？」

李衣菜 「うん。この通り…痛たた…。ちよつと、筋肉痛かも…」

凜 「……」

加蓮 「とーもーかーくーっ。いくらリーナが丈夫だからって、無茶して言い訳じゃないんだから。ほら、とつとと医務室戻って休む！」

李衣菜 「そんな心配しなくても大丈夫…って、痛たたたたっ！」

加蓮 「ほら、痛いんじゃない！」

李衣菜 「そりゃあ、そんな勢いで引つ張られたら怪我人じゃなくても痛いって…痛たたたたっ！」

ズウウウウ…ウン…

李衣菜 「んあれ…？何…？？」

凜 「ゲッターが入ってきたみたい」

李衣菜 「あれって、ゲッターD2…？誰が乗ってるんだろ」 バッ

加蓮 「あ、待ちなさいって！」 タッ

凜 「……はあ」 タッ

タッタッタッ

「おーい！リーナーー！！」

李衣菜「莉嘉あ!? 莉嘉が動かして、乗ってきたの?」

卯月「そういう訳じゃありませんよ…つと、んしょ」

李衣菜「卯月…。ゲッターD2何て持つてきて、どうしたの?」

卯月「ドラゴンターゲットルでの戦闘で、ネオゲッターが大破しちゃいましたから…。修理の時間次第だと、テキサスの戦力が下がっちゃうかもつて、晶葉ちゃんが」

李衣菜「それでD2をこつちに…。じゃあ、莉嘉は?」

莉嘉「リーナのお見舞いだよ。かなりの大ケガだつて聞いたから」

李衣菜「あゝ、そつか」

莉嘉「でも思ったより元氣そうじゃん☆」

加蓮「そうでもないよ。えいつ!」

李衣菜「いったあゝゝゝツ!!」

卯月「加蓮ちゃん、凜ちゃん。しばらくお世話になります!」

凜「こつちこそ。……」

ゲッターD2を見上げる。

卯月「…? どうかしたんですか?」

凜「……。別に。こつちの事もそうだけど、真ゲッターの方は?」

卯月「真ゲッターは、オーバーホールのやり直しだそうです。今回の戦闘でのダメー

ジもありますから」

凜 「そっか……」

卯月 「やつぱり、真ゲッターを使わない方がいいですか？」

凜 「……今はそう思ってる訳じゃないよ。ただ……」

卯月 「ただ？」

凜 「……卯月の方は？ゲッターD2を使ってる」

卯月 「ゲッターD2が、ですか？」

凜 「うん。どこか使いどころが悪かったり、しない？」

卯月 「え……。どうして分かったんですか？」

凜 「え？……」

卯月 「使い勝手が悪い、って言う訳じゃないんですけど……。何て言ったら……。何となく、窮屈だなんて……」

凜 「窮屈？」

卯月 「……はい。ゲッターD2はいい機体ですよ？実際、ドラゴンタートルのとの戦いにも生き抜きましたし。でも……」

凜 「力不足？」

卯月 「はい。力だけじゃありません。スピードも、反応速度も。操縦していると、少

しずつズレてきて、何て言えたらいいのか……。とにかく、足りない、って感じちゃうんです」

凜（……）

卯月「何て……。私の気のせいかもしれないですけど」

莉嘉「あつはは☆リーナも加蓮もー！どっちも頑張れー！」

加蓮「李いい菜あく！早くベッドに戻りなさいってー！！」

李衣菜「ひいー！分かった！自分で戻るから、力尽くはやめてー！！」

凜「まあ、今は加蓮達を大人しくさせよう。このままじゃ整備員の人達にも迷惑になっちゃうよ」

卯月「あはは……」

――。

―― テキサス・艦長室。

艦長「……：そうか。では、ボルガはしばらくロシアに残るのか」

スミノフ「はい。ドラゴンタートルを倒したとは言え、ロシア全土のメタルビーストを殲滅したわけではありません」

艦長「ボルガが、ロシア反攻の旗印となるわけだな」

スミノフ「この広大なロシア……。各地に散らばった部隊を結集し、最後の反攻作戦を

開始する予定です」

艦長「うむ。一日でも早く、ロシアがランドウの手から解放されるよう、健闘を祈っているぞ」

スミノフ「…可能であれば、テキサスの戦力にも反攻作戦に加わってもらえれば、と我々は考えているのですが…」

艦長「……」

スミノフ「我らとて、大局的なものを見ていないと言うわけではありません。故に、ロシアの反攻作戦を早期に終結させることが出来れば、我が軍の総力をもつて、貴艦らを支援することが可能です」

艦長「…確かに。貴官の言う通りかもしれませんが…」

スミノフ「ランドウの動きが気になりますか？」

艦長「……ランドウ、と言うのは違うかもしれませんが」

スミノフ「……？」

艦長「ランドウにしてはあまりにも動きが不可解なのだ」

スミノフ「どう言うことです？」

艦長「先の戦い…。何故ランドウは援軍を送らなかつたのか」

スミノフ「そうですね…。奴等は全世界に部隊を展開していた筈…。一局に戦力を集

中させるまではいかなくても、欧州の部隊を此度の戦いに投入することはできた筈ですね」

艦長「我々を侮っていたのか、何か向こうに不測の事態が起こったのか…」

スミノフ「これまで用意周到に作戦を展開してきたランドウにしてはお粗末なのは理解します。テキサスは、そのために欧州へ？」

艦長「……」

ビ——ッ　　ビ——ッ　　ビ——ッ

艦長「何事だ!？」

オペレーター「本艦に接近する機影を確認!」

艦長「ランドウの部隊か…? 数は？」

オペレーター「数は……1機です!」

艦長「単機でこのテキサスに向かってくる敵だと…?」

オペレーター「…いえ、この反応は…、敵ではありません! データベースに該当あり。ドイツ軍のグスタフH24です!」

艦長「何…!？」

スミノフ「欧州のスーパーロボットがこんなところまで…?」

オペレーター「待ってください、反応がまだ…。これは、メカザウルスです!」

艦長「メカザウルス…？ランドウの部隊か？」

スミノフ「追撃の部隊であることに変わりはありません。こちらから救援部隊を展開させましょう」

艦長「うむ。グスタフのパイロットがいれば、欧州の状況が分かるかもしれませんしな。すぐに救援部隊を出撃させるんだ」

橘『では、こちらのゲッター軍団を動かしましょう』

艦長「橘博士。いいのかね？」

橘『ランドウの陽動と言う可能性も捨てきれません。テキサスに戦力は残しておくべきでしょう』

艦長「助かる。…確か、ステルバーが周辺の警戒中だったな？」

オペレーター「はい」

艦長「ならば、ステルバーだけでも現場に向かわせるんだ」

オペレーター「了解。…哨戒中のステルバーへ。至急救援に向かわれたし。繰り返す、ポイントは——」

橘「よし、こちらにも出撃だ。チーム飛焰、発進スタンバイ！」

茜「こちらは何時でも、スタンバイOKです！」

アーニヤ「行きましょう…。ワタシ達で、仲間を守るんです！」

美穂「ここまで頑張ってくれたんだもん！ちゃんと助けてあげないと！」

茜「ゲッターロボ飛焰、発進します!!」

—— ロシア側国境線付近。

奈緒「しっかし、大したもんだな。敵からの追撃を受けて、ここまで逃げてくるなんて」

シュワルツ「それだけ、逃げてきた奴ア命根性の汚え奴ってことだろうよ」

奈緒「知ってそうない方だな。確か、機体はドイツ軍のグスタフって言ったか」

シュワルツ「ああ、欧州と連絡が取れなくなつて、今の今まで生き残つてたんだ。抜け目のねえ、アイツに決まつてやがる」

奈緒「抜け目ない、か……。別にスゴ腕って訳でもなさそうだな」

シュワルツ「ああ。アイツのスゴさは、そういう技量的なものじゃねえ」

奈緒「ここまで逃げおさせたのも、満更運だけじゃないってことか。ま、でも早く助けてやらないとな」

——ギユンツ

茜「奈緒さ〜ん！シュワルツさん!!おいつきましたよお〜っ!!」

奈緒「ゲッター飛焰も追い付いたか……。って、美穂達が来てないぞ?」

美穂「ご、ごめんね?茜ちゃんが茜ちゃんが先行してるの」

シユワルツ「足並みの悪い奴等だ。それで本当にチームかよ?」

奈緒「そうじゃねえよシユワルツ。個性が違うのが、チーム飛焰の強みなんだよ」

シユワルツ「どう言うことだア? そりゃ」

アーニヤ「アカネ、グスタフを追撃してる部隊は、リーダーに捉えられましたか?」

茜「う~~~~んっ?!?……はいっ! 頭一つ飛び出してるのに後ろから集団で迫ってる

…これですか!」

アーニヤ「アー、はい。それです、ね。データを送ってください」

茜「分かりました! ここをこうして、はいっ! 送っ! 信ッ!!」

アーニヤ「……。メカザウルスは地上に展開しているのみ…ですね。ワタシが奇襲で

仕掛けます。ステルバーは、支援を」

奈緒「な?」

シユワルツ「へえ」

奈緒「アーニヤ、援護は了解した。思いつきりぶちかましてやれ!」

アーニヤ「Да: : : спасибо、お願いします。ミホ、アカネ」

美穂「こっちは何時でもいいよ!」

茜「私も! 速度を落として合わせます!! 何時でもどうぞ!」

アーニヤ「チェンジ! ゲッター2ッ!!」

アーニヤ「行きます…! y p a a——!」
ゲッター2にチェンジしたゲッター飛焰が、空中を滑空してレーダー上の敵陣へ迫っていく。

奈緒「な？」

シユワルツ「お手並み拝見だな。こっちは、グスタフと合流するぞ。レーダーの監視を怠るな」

奈緒「了解。メカザウルスは頼んだぜ、アーニヤ！」

アーニヤ「ドリルツ! アアアームツ!!」

高速回転するドリルがメカザウルスを砕き、破砕音が響く。

「ツ…い…だ、誰だア!？」

茜「それはこっちの台詞です！」

美穂「この周波数…。グスタフのパイロットだよ！」

アーニヤ「テキサス連合軍のゲッター飛焰です。助けに、来ました」

パイロット「て、テキサス…! ゲッターロボってか!?! 噂で聞いたのと見た目が違うな」

茜「ゲッター2形態だからでしょうか? ー以外は、あまりポピュラーではありませんから!」

アーニヤ「……」

美穂「あ、茜ちゃん……ズバリ言い過ぎだよ！」

アーニヤ「別に、気にしてません」

美穂（気にしてる言い方だよ……。それ……）

茜「メカザウルスが来ますよ！」

メカザウルス『グワアアアアッ!!』

アーニヤ「——プラズマナイフッ！」

プラズマのエネルギーを帯びた手刀が閃を描き、肉薄したメカザウルスの頭部が宙を舞う。

パイロット「へえ、なかなかやるもんじゃないか。俺なんかより、随分若く見えるが、少年兵か」

美穂「そういうわけでもないですけど……」

パイロット「ま、女ばかりの少年兵つてのも聞いた事あねえが」

茜「女……?」

シユワルツ「聞き覚えのある声だと思えば、やっぱりテメエか。シャトナー」

パイロット↓シャトナー「へっ、テメエこそこんなロシアの辺境くんだりまで、ご苦労なことじゃねえか。シユワルツ」

奈緒「やっぱ知り合いだったのか？」

シユワルツ「ああ。奴の名はヒム・シャトナー。階級は少尉。生き残ることに
は誰よりも執念深い、抜け目のねえ野郎さ」

シャトナー「ご紹介どうも。お陰さまで、あの地獄のような欧州の中で生き抜いて
やったぜ」

アーニヤ「…あの“欧州”？」

シユワルツ「細けえ事は後回しだ。今はメカザウルスどもをぶつ飛ばす！」

茜「それには賛成です!!」

シャトナー「気を付けな。連中のメカザウルス、これまで戦ってきたものとは性能が
段違だぜ」

アーニヤ「…見慣れない、メカザウルス…」

美穂「そうだね…。今まで出てきたのより、兵器感があるって言うか…」

茜「新型と言うことでは！」

奈緒「けど、メカザウルスの新型なんてランドウが作る意味あるのか？」

シャトナー「へっ、奴等はランドウなんかじゃねえよ」

美穂「え？」

メカザウルス『!!』

“大きなテイラノサウルス”が、その背中に背負ったキャノンから砲を放つ。

奈緒「うおわっ！」

シユワルツ「チツ……詮索は後にしろ！ どうせここでぶっ潰すのに変わりはない！」

アーニヤ「フアントム・ビジョン!!」

シャトナー「!? ゲッター、どこに行った？」

プロト・ゲッター2の高速機動。降り注ぐ砲弾の雨を掻い潜り、爆炎の中に姿を消す。

メカザウルス『グル……?』

美穂「アーニヤちゃん、座標、送ったよ」

アーニヤ「Спасибо……。サポート、ありがとうございます、ミホ」

奈緒「……成る程な。シユワルツ、あたしらは下がろうぜ」

シユワルツ「……連中に手柄を全部渡してやるのは癪だな」

美穂「そんな……。大したことはないよ？ それよりも、今は！」

アーニヤ「Да! ——プラズマテンペスト!!」

シャトナー「うおっ!？」

ギユオオオンツ

指定された座標、敵勢を一網打尽にできるポイントで、プラズマテンペストを広域に

放つ。

メカザウルス『!?!?!?』

!?!?!?』

プラズマを帯びた青白い旋風が、大地ごとメカザウルスの軍団を穿った。

茜 「気分爽快！ですね!!ボンバー……ッ!!」

マシンの壊れる爆発音が連なり、そのあとには静寂が訪れた。

アーニヤ「……状況、終了……です。ふう……」

美穂 「お疲れさま、アーニヤちゃんっ」

シャトナー「たまげたもんだな。機体はトンでもねえみてえだ」

奈緒 「機体は……?」

シユワルツ「そこまでだ。シャトナー、お前のグスタフも、もう限界だろ?」

シャトナー「へっ、こんなのばかりは、隠しても仕方ねえな」

シユワルツ「テキサスまでは引っ張ってやるよ。そういうわけだ、テメエらは……」

アーニヤ「了解。では、ワタシ達は、もうしばらく周辺を патрульный……哨

戒してから帰ります」

茜 「シユワルツさんは、グスタフをテキサスまで連れて帰還してください」

シユワルツ「頼むぜ。何かあればすぐに連絡をくれ」

シャトナー「へえ……。お前、随分と丸くなつたもんだな?確か親の片方の故郷は欧州

だったか。紳士の遺伝子でも甦つたのか?」

シユワルツ「うるせえ。その小うるせえ口閉じねえと、機体ごとロシアのツンドラに

叩きつけるぞ」

シャトナー「ははっ、怖いねえ。くわばらくわばらっつと」

美穂「なんか、独特な雰囲気の人なんだね…」

~~~~~ 戦艦テキサス ブリーフィング・ルーム ~~~~~

艦長「——さて、着艦早々、マトモな手当てもなしに申し訳ないシャトナー少尉」

艦長「だが、我らとて時間を悠長に使っている余裕のない身の上なので…。我々の次の行動を決めるためにも、欧州の状況が知りたい」

シャトナー「余計な気遣いは無用ですぜ、艦長さん。このテキサスと合流できただけでも、生きた心地を味わえるつてもんだ」

ボブ「欧州はよっぽど状況が悪いみてえだな」

サム「だな。シャトナーが単機で撤退してくるくらいだ。それだけ戦力が手一杯つてことだろ？」

シャトナー「ああ、欧州は今や地獄…。南極から侵攻してきたランドウト、あいつら…恐竜帝国のせいだな」

リンダ「恐竜帝国!?!」

メリー「どういう事？」

シャトナー「訳なんざ知るかよ。俺たちヨーロッパ連合軍と、ランドウの連中とが争つてる中に奴等がいきなり襲つてきやがったんだ。奴等、マシーンランドまで出してきやがって」

副長「マシーンランド……！確か、日本からの報告では、あれには地上の大気組成を白亜紀以前のものに作り替える機能があつたと……」

シャトナー「ああ。お陰で欧州の半分以上は奴等の手に落ちちまつた。白亜紀以前の  
大気だ。人間なんざ、生きていけるわけがねえ」

卯月「そんな……！酷い……」

かな子「でも、どうして恐竜帝国が？」

加蓮「確か、アタシ達と停戦を結ぼうとしてるんじゃないやなかつたっけ？」

凜「どういう事が、分かる？ニオン」

ニオン「さあな。以前にも言ったと思うが、恐竜帝国と一枚岩ではない」

みく「ちよつと無責任すぎるんじゃない？」

ニオン「マシーンランドは複数存在していて、その一つ一つで思想や体制は違う。帝王ゴールが率いていたような強行派の恐竜帝国の一派がいたとして、何ら不思議なことではないな」

シャトナー「へっ、だから、テメエは関係ねえってかよ？このトカゲ野郎」

ニオン「……」

凜 「やめてよ。実際、ニオンは関係ないでしょ」

シャトナー「関係ねえ事あるかよ！俺の故郷は、そいつのお仲間に踏みにじられたんだ！」

凜 「だから、ニオンは関係ないでしょ。同じハ虫人類だから仲間なら、ランドウだつて私達のお仲間つて事になるでしょ？」

シャトナー「……っ」

ジャック「リンの言う通りだぜ。少しCool down. シャトナー。ここでニオンを恨んでも、祖国は取り戻せないヨ」

シャトナー「……へっ、レディにはお優しいんだな。どいつもこいつも、鼻の下伸ばしやがって」

ボブ「はあ!?俺がいつ鼻の下伸ばしたつてよ?」

リンダ「貴方は四六時中伸ばしてるでしょう」

ボブ「え?」

サム「そうそう。最近加蓮ちゃんだけじゃなく、茜ちゃんにまでカレーをご馳走して、節操ねえよなあ」

ボブ「そ、そうかあ…?」

シャトナー「…まるで牙の抜かれた狼だぜ。ここはホントに最前線か？」

加蓮「最前線だからって、いつつも気張ってても仕方ないと思うけど？」

李衣菜「そうそう。気を張って疲れてたら、いぎって時に本気になれないしね。リ  
ラックスも大切だって」

加蓮「けどリーナは力抜きすぎ」

李衣菜「え？あはは…」

シャトナー「こんなあまちゃん連中とこれから一緒にやってかなくちゃらねえとは  
な」

ボブ「おいおい、いくらなんでもあまちゃん連中は言い過ぎだろ」

シャトナー「違うかよ？尻の青いガキ共に学生気分なんか持ち込まれて、とぼつちり  
なんて喰らった日にや死んでも死にきれねえぜ」

サム「学生気分って…」

メリー「それでも、ここまで一緒に戦ってきた戦友よ」

ジャック「That's right! 実力は保証するぜ！」

シャトナー「実力、ね。ま、運も実力のうちって言うよな」

凜「私達がここまで勝ち残ってこれたのも、全部運だって言うの？」

シャトナー「それが、乗ってるマシンの性能がいいんだな」

李衣菜 「……あながち否定できないかも」

加蓮 「リーナは黙ってて。話がややこしくなるから」

李衣菜 「うっ……。でもさあ」

加蓮 「リーナ」

李衣菜 「……はっい」

シャトナー 「それとも何かい？これまで、自分達が実力で勝ち残ってこられたと、ア  
ンタらは胸張ってそう言えんのか？」

凜 「そこまで自惚れてる訳じゃないよ。私達が今ここに居るのは、みんなに実力があ  
ったから」

シャトナー 「ほう……。3人よれば何とやら、ね。ガキ共にはおあつらえ向きのマシ  
ンって訳だ」

凜 「いちいち癪に障る喋り方をするよね……。！」

卯月 「り、凜ちゃん、一旦落ちついて……。！」

「イキりながら突つかかかってきてバツカみたい。凜達に実力があるのはトージェンじゃ  
ん！」

シャトナー 「あん？」

卯月 「莉嘉ちゃん……」

副長「ミーティング中だ。関係者以外は立ち入り禁止だぞ」

艦長「よい。副長」

副長「ですが…！」

艦長「これをまだミーティングと言うかね？」

副長「でしたら、何故止めないのでですか？」

艦長「…これから同士として共に戦うのだ。時には背中を預けることもある。互いにわだかまりがある状態では、信頼など生まれんよ」

莉嘉「ホントアツタマ来ちゃう！外で聞いてれば嫌味みたいにさ。大人げなくい」

シャトナー「大人げない、ね…」

莉嘉「実力もなしに、ドラゴンタートルを倒せるわけないじゃん。オジサンこそ、実力がないんじゃないの〜？」

シャトナー「ア、あっ!？」

莉嘉「スゴんだって怖くないよ。怒ったお姉ちゃんの方が百倍怖いもん！第一、それで怒るってことは、凶星突かれてるってことだもんねえ？」

シャトナー「テメエ…！」

莉嘉「祖国がーとか、恐竜帝国がー、とか色々言ってるけどさ、それも全部捨てて逃げてきたのはそっちじゃん。で、茜達にたすけられてさ。どの口が偉そうに言うの？」



シャトナー「……」

莉嘉「ちよつとは感謝してほしいよね。テキサスにがここにいなかったら、オジサンはどうなってたの？ 助けられたらありがとうって、お母さんから教わらなかった？」

卯月「莉嘉ちゃん、もうその辺で……」

莉嘉「何で？ 卯月はイラツとしないの？ 勝手に想像だけでペラペラつてさ。何気に入らないことあつたか知らないけど、こつちに当たらないでほしいよ」

卯月「それは……、そうかもしれないけど……」 チラツ チラツ

シャトナー「……」

莉嘉「何さ、言いたい事があるなら、ハッキリ言えばいいじゃん！」

シャトナー「……ツハア——ツ」

莉嘉「な……何……？」

シャトナー「確かになあ、お嬢ちゃんの言う通りだよ。確かに言い過ぎた。俺は大人げがなかったかもなあ」

莉嘉「フフン！ そうでしょ？」

シャトナー「ああ、悪かったよ。この通りだ」

ボブ「おいおい……。これはどうなっちまってんだあ？」

サム「あのシャトナーがすんなり頭を下げるなんてよ」

シャトナー「人をひねくれ者みたいに言うんじゃねえよ。お嬢ちゃんの言う通りさ。人を見掛けで判断しちやいけねえよ。なあ？」

ボブ「ん……？」

シャトナー「こんなお嬢ちゃんだつて立派に戦つて生き残つてんだ。そこはちゃんと見て、評価してやらねえとな」

莉嘉「え……」

李衣菜「あ……、莉嘉は……」

シャトナー「あ？何だよ、ゲッターにも乗れねえのに、ガキがこんなところにいるわけねえよな？」

莉嘉「……」

シャトナー「どうなんだよ、お嬢ちゃん？」

莉嘉「……シミュレーターはやってるもん」

シャトナー「ハッ！じゃあ何かい？まさか、マトモな実戦経験もねえくせに偉そうに説教にきたつてか！」

莉嘉「……」

シャトナー「そういや、さつき副長に部外者みてえに言われてたよな。そっか、そういうことかよ。くくく……、こいつぁいい」

莉嘉「っ…何さ…！実戦で戦って、結果残してればそんなに偉いの!!」

シャトナー「偉いとかそういう問題じゃねえだろ。ただ横で見ただけの癖によお。そういうのあれだろ、日本の諺で虎の威を借る狐ってんだろ？」

莉嘉「…っ」

シャトナー「テメエの言葉には説得力がねえんだよ。分かったらガキが偉そうに吠えんじやねえ」スクツ

副長「どこへいく？退室を許可した覚えはないぞ」

シャトナー「喋りすぎて疲れたわ。こつちも退いてきたばかり。ちよつとは休ませてくれませんかね？」

副長「貴様…！上官に向かって！」

艦長「良い。詳しく事情を聞くのは後日としよう。少尉、ここまでご苦労だった。ゆつくりとはいかないかもしれないが、しっかり休息をとってくれ」

シャトナー「辛い痛み入りますよ、艦長。それじゃ、自分はこれで…」

ツカツカツカ…

ボブ「何なんだ？…つたく、相変わらず愛想のねえ野郎だぜ」

サム「まあ何だ、あんま気にすんなよ、莉嘉ちゃん。アイツがいけ好かねえのはきつと生まれてからだからよ」

莉嘉「うん……」

李衣菜「ボブ達の言う通りだって。莉嘉は私達の事思つて言つてくれたんでしょ？ それ嬉しかったよ」

加蓮「確かに、シミュレーションじゃ何度もリーナを負かしてるわけだし？ 実力がないつて言われるのは筋違いだよねえ？」

李衣菜「うゝっ……。それは言わないでしょ……」

莉嘉「……そうだよ。アタシだって、出来るもん……」ボソ……

李衣菜「うん？ 莉嘉？」

凜「……」

—— その夜、

晶葉『あははっ。それは災難だったな』

凜「笑い事じゃないよ、まったく。艦長は放任するし、もしもの事があつたら、私達に現役の軍人を止める力なんてないんだから」

晶葉『向こうも分別のある軍人なんだろう？ なら、そこまで思い余ることもしないだろう。だからこそ、私達のような存在が許せないのかもしれないな』

凜「どういう事？」

晶葉『そのシャトナーという軍人にとつても、戦闘は仕事のようなものだ。長年一つ

の仕事をこなしている人間には、相応のプライドのようなものがある。年端もいかない私達が同等の働きをするというのは、そのプライドを貶されたようなものだろう』

凜 「まあ、私達もアイドルやつてるし、分からない訳じゃないけど……」

晶葉 『自分の気に食わないことを許容できる者もいれば、そうでない者もいる。戦闘で、実力を信じてくれるように祈るしかない』

凜 「そういうものかな。やっぱ……」

晶葉 『問題は、寧ろ莉嘉の方だろうな』

凜 「……うん。シャトナーの言ったこと、相当気にしてみたんだし」

晶葉 『出来れば、莉嘉の事をしっかり気を配ってほしいが』

凜 「こつちもネオゲッターの整備があるから、四六時中とはいかないかも」

晶葉 『無茶な行動を起こさないよう、信じるしかないか……』

凜 「そうだね……」

晶葉 『それで？ わざわざこんな時間に、そんな益の無い報告をするために、わざわざ連絡してきた訳じゃないだろ？』

凜 「益がない、って別に愚痴くらいは許してくれるでしょ？」

晶葉 『まあな。それで？』

凜 「……。真ゲッターの事だけだ」

晶葉『真ゲッター？』

凜「オーバーホール、早く仕上げることはできないかな？」

晶葉『……。…どうだろうな。こちらの作業員にも限りがある。それに、機体の不備をチェックするためでもあるオーバーホール、作業を急いで穴を残したくはないな』

凜「そつか…」

晶葉『一応、理由を聞いてもいいか』

凜「真ゲッターの力が必要になる時が近付いてる、そんな気がする」

晶葉『あの時の早乙女博士の様なことを言うんだな。根拠があるのか？』

凜「卯月がね、ゲッターD2を窮屈、って言ったんだ」

晶葉『卯月が？』

凜「その内、ゲッターD2じゃ足りなくなる。卯月にはきつと、真ゲッターロボの力が必要なんだ」

晶葉『そうか…。分かった確認程度だった幾つかの項目はチェックから外しておこう』

凜「ごめん」

晶葉『それにしても意外だな。真ゲッターを使うのに反対していた凜が、そんなことを言い出すとは』

凜 「似たようなことを、卯月にも言われたよ。別に、使うこと自体に反対してたんじゃなくて、過ぎた力に頼ることはどうかと、そう思ってただけだよ」

晶葉『今の状況を見ていたらとてもそうとは思えなくなる、か。そうだな。この先、ランドウがどんな戦力を用意してくるとも限らない。真ゲッターを早いうちに使えるようにして間違いはないな』

凜 「お願い。莉嘉の事も、私達で出来ることは頑張るから」

—— 翌朝。

ウウウウウウウ

けたたましくサイレンが鳴り響く。

加蓮 「んもう…。まだ朝早いってのに…！」

李衣菜 「こんなサイレンで叩き起こされたんじゃ、おちおち寝てもいられないね…」

副長 「敵の数は!？」

オペレーター 「数は…。計り知れませんが！戦艦級の反応があります！」

副長 「戦艦級だと…？シャトナー少尉の追撃部隊にしては随分と大袈裟だな」

艦長 「我々の位置を特定したことで、殲滅に乗り出した、と言うところか」

副長 「遊軍を助けるためとはいえ、部隊を動かしたのは些か迂闊だったようですね」

艦長 「今更言ったところでどうにもならん。総員、第一種戦闘配備、全待機中のパイ

ロットヘスクランブル要請。通達急げ！」

副長「はっ！」

オペレーター「戦艦級の識別判明。これは…無敵戦艦ダイです!!」

艦長「無敵戦艦ダイ、だと…?」

副長「日本における恐竜帝国との決戦で、猛威を振るつたと言う…!」

オペレーター「無敵戦艦ダイ、艦載機を展開!その数多数、いずれもメカザウルスです!」

副長「メカザウルス…!」

艦長「シャトナー少尉の言う通り、敵は恐竜帝国と言うことで間違いはなさそうだな」  
副長「しかし、そうなるとう厄介なことになります。我々にはランドウと言う脅威もあると言うのに」

艦長「この相手に時間をかけていられないと言うのならその通りだ。かと言って、このまま連中が勢力を拡大させるのを放っておくわけにもいかん」

スミノフ『…艦長』

艦長「スミノフ大佐。騒がしくさせてしまつてすまない」

スミノフ『いえ、それは。それよりも、ボルガで貴艦を援護します』

艦長「いや、貴官らにもこれからの戦いが控えているだろう。この戦い、ボルガの援



護は無用だ」

スミノフ『しかし…』

艦長「案ずる必要はない。我々テキサスの乗員も、部隊も、この程度の相手に後れを取るような者など一人もいない」

スミノフ『……了解しました』

艦長「うむ。こんな形の別れになってしまつて申し訳ない」

スミノフ『いえ、……ご武運を』

艦長「お互いにな。また生きて、再会できることを期待しよう」

オペレーター「スーパードボット部隊、発進準備完了しました！」

艦長「よおし！テキサス機関始動！！スーパードボット部隊の出撃と同時に、本艦もロシアの地を発つ。次なる目的地は欧州、かの地を我が物顔で支配する恐竜帝国を撃退する！」

艦長「一度は勝利した相手とはいえ油断はするな。我々の次なる戦いだ…！総員、気合を入れ直せッ！！」

「『了解ッ！！』」

艦長「スーパードボット部隊、出撃！」

卯月「待つてください！」

艦長「君は、島村卯月くん」

副長「何をしている？そこは、ゲッターのコックピットではないのか？」

卯月「はい。今は格納庫の隅っこで…、って違うんです！ゲッターD2の出撃は待つてください！」

副長「どういう事だ…？おい、ゲッターD2の状況はどうなっている？」

オペレーター「はっ…。既にパイロットは搭乗しており、出撃待機中となっております」

卯月「そうなんです！今のゲッターに乗ってるのは、私じゃないんです…！莉嘉ちゃん…！」

艦長「何っ!？」

オペレーター「げ、ゲッターD2、出撃します！」

副長「なっ…！相手は無敵戦艦の異名を取る敵の大型要塞だぞ!?すぐに発進を止めさせろ！」

オペレーター「無理です！後続機が控えて…出撃を中止できません！」  
目の前で飛び出していくゲッターD2。

艦長「何と言うことだ…！」

—— 格納庫。

卯月「そんな…、莉嘉ちゃん…！」

凜 「ごめん。気を付けてたつもりだったけど、止められなかった」

卯月 「いえ、凜ちゃんが謝ることじゃないです。けど、どうしたら」

「卯月ッ！」

卯月 「ひやつ……！このマシンって……」

凜 「BT-23……李衣菜が乗ってるの？」

李衣菜 「細かい話は後の後！D2が出撃したのに、卯月がここにいるってことは、ただ事じゃないってことでしょ。取り敢えず乗って！」

卯月 「でも……」

凜 「李衣菜の言う通りだ。ちよつと危ないかもしれないけど、戦場にいれば、ゲッターD2に乗り移るチャンスがあるかもしれない」

加蓮 「とにかくこんなところで考えてるよりは建設的だよ。行こ」

卯月 「……分かりました！お願いします！」

ビイトに乗り込む卯月と、凜。

加蓮 「あ、凜も一緒に行くんだ？」

凜 「ここに一人残されても、やることもないしね」

李衣菜 「ビイトは3人乗りだけど……」

凜 「無駄に広いんだから文句言わない。ほら、早く追いかけないと」

李衣菜「それもそうだ！莉嘉…。頼むから無茶だけはしないで、頼むよ——！」  
つづく

## 第24話『甦る帝王!!』

橘 「……聞こえているか!? 敵は無敵戦艦ダイを主軸とする殲滅部隊だ! その戦力は計り知れん! 実戦経験に乏しい君が相手をするには、あまりにも相手が悪すぎる! すぐに帰投するんだ!!」

莉嘉 「あく、もうウツサイ!!」

橘 『頼む……応答してくれ、莉嘉くん……!』 ブツツ

莉嘉 「ふう……、やあーっと静かになつた☆もうすぐでメカザウルスが見えてくるって言うのに、今更後に退けるわけ無いじゃん!……さてと」

正面を見据える、眼前にメカザウルスの群れが大挙して咆哮を上げている。

莉嘉 「……シミュレーターで見るのより大きい……。けど、全然怖くなんて無いんだから!」

グオンツ

莉嘉 「ゲッタービイームツ!!」

先手必勝とばかりにゲッタービームを放射状に照射。爆炎が弾け、黒煙が巻き上がる。

莉嘉「どんなもんだい！……あれ？」

黒煙の中から、ゲッタービームなどものともせず、メカザウルスが進軍してくる。

メカザウルス□s『キシヤアアアオオオンツ!!』

各メカザウルスが背負ったり、その両腕に備え付けたりした火器をゲッターD2めがけて一斉に放つ。

莉嘉「わわわわわっ！やばっ……！」

ゲッターD2の身を翻し、滅茶苦茶な飛行で襲い来る弾幕を掻い潜る。

莉嘉「あつぶなあゝ……。前に晶葉達が話してた、対ゲッター線装甲とか言うヤツ？  
くっそ〜！ズッコいんだから！」

メカザウルス『キシヤアアアアツ!!』

莉嘉「っ……このっ……！」

ジャキンツ

ゲッタートマホークを抜き打ち、目の前に迫るミサイル等の弾幕は切り払いながら強引にメカザウルスとの距離を詰める。

莉嘉「だあっしやあああああッ!!」

目前に捉えた、メカザウルスの一体の首を、トマホークでバツサリ切り落とす。

莉嘉「どうだ！ゲッターの武器は、ビームだけじゃないんだから！」

メカザウルス『……』

莉嘉の気迫に、メカザウルスの群れが一瞬怯む。

莉嘉「今だ！とあああああッ!!」

その隙を逃さず、トマホークを構え突撃。密集したメカザウルスの中で、敵を切り刻む。

莉嘉「このっ！このっ！このっ！このおッ!!」 ガシャッガシャッガシャッ

がむしやらに操縦桿を押しては引いて、その動きに連動するように、ゲッターD2は暴れるように立ち回る。

莉嘉「やれる……！出来る！私にも敵を倒せる!!メカザウルスくらいなんて事無いッ!!」

トマホークブーメランを放ち、2、3体のメカザウルスをまとめて切り伏せる。

「フハハハハハッ!!流石はゲッターロボ。メカザウルス程度では相手にも出来んか！」

莉嘉「っ！この声は……！」

ラセツ「やはり最後の壁となって立ちはだかるのは貴様か。ゲッターロボ!!」

莉嘉「あ、アンタ、ランドウの……ってことは、やっぱり欧州を襲ったのもラン

ドウ!？」

ラセツ「ふん……。あの古いぼれの利用価値などとうにないわ。今こそ我々、恐竜帝国が立ち上がり、この地上を一挙に手中に修める時が来たのだ!!」

莉嘉「ランドウを裏切ったの？」

ラセツ「裏切ったのではない。はじめから、狙いは奴の持つ科学力!その奪取が済んでしまえば最早用済み。それだけの事よ」

莉嘉「うっわあ……。悪の組織っぽい悪い台詞……。そうやって誰かを利用して、甘い汁を吸ってばっかだと、結局良いようには行かないんだよね!」

ラセツ「小娘が知ったようなことを!止められるものならやってみるがよい!この白銀の大地に、貴様の屍を晒してくれるわ!!」

莉嘉「やれるもんならやってみるおー!メカザウルスをいくら集めたって、ギッタンギッタンにしちやうんだから!」

ラセツ「ふふっ。我らの兵器がいつまでもメカザウルスだけと思うなよ、小童」  
莉嘉「えっ!?!」

ラセツ「冥土の土産だ!見るがよい!ランドウの持つ技術力を持って完成した、我が精鋭達を!!」

無敵戦艦ダイの格納庫から、“それ”は一斉に放たれた。



莉嘉「!!…あれって、ダイノゲッターロボ!?」

前方に無数に布陣する、ダイノゲッターロボの群れ。

莉嘉「ゲッター1も、2も3も…!こ、こんな一杯…!」

ラセツ「ダイノゲッターロボのデータは、元より恐竜帝国のものだからな。無論、ただデータそのものを量産したわけではない。ランドウの技術によって、各形態にはそれぞれ手が加えられている」

ラセツ「キャプテン・ガルマ、ダイノゲッター軍団の指揮は任せるぞ」

ガルマ「はっ!我ら恐竜帝国に、今度こそ勝利を!!」

莉嘉「先頭のダイノゲッターには、キャプテンまで乗り込んでるの?」

ガルマ「ゲッターの力を手にした今、貴様との戦闘力は互角…。否、我が武の誇りに賭けて、優劣において既に圧倒している!」

莉嘉「っ……」ブルブル…

ガルマ「覚悟せよ!一人でのこのこ死にに來たことを後悔するがいい!!」

莉嘉「うう…っ。くっ…!」

グッ

莉嘉「……から…!だから何なの!?こっちだってゲッターだあ!!」

ゲッターD2、突貫。

莉嘉「うりゃああああ〜っ!!」

水平に、トマホークを振りかぶる。

ガルマ「ふっ…、愚かな」 ガシッ

莉嘉「なっ…!!」

ゲッターD2のトマホークを受け止めた量産型ダイノゲッター1が、そのままゲッターD2を宙へ放り投げる。

莉嘉「わあっ!!」

ガルマ「優秀は既に圧倒していると言っているのだア!!」

Dゲッター1

Dゲッター3

空中で体勢の整いきらないゲッターD2に降り注ぐミサイルとビームの雨あられ。

莉嘉「ああ…っ!くう…!!」

両腕をクロスさせ、攻撃を防ごうとするも、

莉嘉「うあ…!!」

ミサイルが弾けた黒煙から弾き出されたゲッターD2には明確なダメージが残っていた。  
いた。

ガルマ「まだ終わらぬぞ…!行けい!我がゲッター軍団ッ!!」

Dゲッター2 s 「!!」 ギュルウウウンッ

大きく身を仰け反らせたゲッターD2に、ドリルを唸らせ量産型ダイノゲッター2の群れが迫る。

莉嘉「そ…そうそう思い通りに何て…!」

辛うじて攻撃を躲していくものの、表面を掠ったドリルが、装甲を削っていく。

ガルマ「何時までそうしていられるかな？」

莉嘉「くうっ!うう…!げ…ゲッタービーム!!」

ガルマ「ほう…!」

飛び込んでくる敵に何とか反撃。ビームが量産型ダイノゲッター2を貫き、粉碎した。

莉嘉「き、効いた…!そっか、こいつらにはゲッタービームが効くんだ!」

ラセツ「フツ…」

莉嘉「そうと分かれば…!ゲッターアアビイームツ!!」

ガルマ「手の内を透かして…!同じ手が通じると思うのか!」

莉嘉「!」

ガルマ「防御陣形!!」

量産型ダイノゲッター達がスクラムを組むように重なり、その正面に不可視のバリア

のようなものが現れ、ゲッタービームを弾いた。

莉嘉「ど、どうして…」

ガルマ「個々のゲッター炉心を共鳴させることでエネルギーを増幅させ、強固な壁を作り上げる。ゲッターエネルギーのバリアよ!!」

莉嘉「そんな！バリアなんてズルい!!」

ラセツ「卑怯などと！戦いに卑怯もラッキョウもあるものか！勝った者のみが官軍よ!!」

莉嘉「難しいこと言ってる…!!」

ガルマ「御託は終わりか？ならば、各機攻撃陣形！ゲッターにトドメを刺せえい!!」

Dゲッターxs「!!」

莉嘉「きやあああああ〜っ!!」

ビームが、ミサイルがドリルが、雨霰となって降り注ぐ。

ラセツ「フハハハハツ!!見ろ、我々はついにゲッターの力を手中に収めたのだ！出来損ないのゲッターなぞ、最早恐るるに足らず!!」

「それは…どうでしょうか!?!」

ラセツ「何奴!?!」

茜「プラズマ〜〜っ！ツノヴァアアアアッ!!」

ドワオツ

莉嘉「え? きやあつ!」

ゲッターD2の目の前でプラズマが閃光と弾け、押し寄せていた量産型ダイノゲッターの大群を呑み込んだ。

ガルマ「ぐう……! な、何事だ……!?!」

ラセツ「つ……! このプラズマ砲……、ゲッターロボ飛焰とか言う奴か!」

茜「そう……! その通りッ!!」

バンツ

茜「真紅の体に闘志を乗せて! 燃やせ勝利の真つ赤な炎!!」

ババンツ

茜「勇壮合体!! ゲッターロボ、飛焰!!!」

カツ

茜「ご期待通りにただ今参上ッ!!!」

莉嘉「茜……! みんな!!」

ボブ「おっと! もちろん、ゲッターロボ飛焰だけじゃねえぜ?」

ジャック「テキサスマックを添え物扱いは、No Thank you! まとめてクラッカーにしてやるぜ?」

リンダ「ハ虫類ごときに欧州を蹂躪させはしないわ！」

サム「テキサススパーロボット連合、全員揃い踏み、つてか？」

シユワルツ「……」

奈緒「お前もちよつとは愛想よくしろよな」

シユワルツ「ウツセ」

シャトナー「あと、雑魚が一匹な」

李衣菜「ザコって言うなあ!!」ピョンコ ピョンコツ

全長40メートル前後のスパーロボットに囲まれて、10mのビイトが小さく跳ねている。

凜「ま、ビイトじゃ何を言われても仕方ないね」

李衣菜「むくつ。ビイトだって、弱い訳じゃないよ！ビイトなりの個性と戦い方があ  
るんだからっ」

加蓮「はいはい。ビイトへの熱意はあとで聞いてあげるから。余所見してる余裕なんて無いんじゃない？」

卯月「とにかく、今はD2に近付かないと！」

李衣菜「そうみたいだね。隙を見て、何て言ってる暇はなさそう……」

凜「ダイノゲッターが、量産されてる」

サム「おまけに前線は、メカザウルスの大群だ。この群れを崩していくのは一筋縄じゃ無理だぜ…」

ジャック「Don't give up!!やるしかないぜ!!」

美穂「何とかして、莉嘉ちゃんを助けなきゃ!」

卯月「そのためにも、私達がいけます!お願いしますか?李衣菜ちゃん!」

李衣菜「モッチロン!任せてよ」

加蓮「しつつかし、アタシ達が入り乱れた状態だと乱戦は確実。その状況で卯月をゲッターに乗せ換えるつてのも、神業的な話だね」

シャトナー「それでホントに状況が変わんのかア?」

リンダ「実戦慣れしてない素人よりはマシ、程度の認識でも構わないわよ。貴方の場合はね」

シャトナー「ま、兵士としての仕事はしてやるよ。あとは好きにやりやいいさ」

加蓮「ホント、いけ好かない奴…」

李衣菜「まあまあ、戦ってはくれるんだから。こっちはこっちで集中すればいいじゃん」

サム「来るぜえ…!構えろお!!」

メカザウルスが方向を上げ、戦端は開かれる。

メカザウルス『グギャアアアッ!!』

リンダ「美しくないのよ! 貴方達は!!」

キングダムは両腕のヒートブレードを構え、鮮やかな動きでメカザウルスの群れの間を縫うように舞い、メカザウルスを両断していく。

ボブ「サム! 構うこたあねえ! 大盤振る舞いで歓迎してやりな!!」

サム「オラオラオラア!! クラツカーになりてえ奴から向かってきやがれ!!」

ロボ・ストーンはシオルダーキャノンを連射。辺り一帯に爆炎の華を咲かせていく。

奈緒「あたし達はどうするんだ?」

シユワルツ「はっ! ゴタゴタに巻き込まれるのは勘弁だ。後ろから行かせてもらおうぜ!」

ロボ・ストーンの後方から、ステルバーがSTーブラスターで撃ち漏らした敵を狙う。

奈緒「せこ」

シユワルツ「バカみたいに無駄弾撃つ方がスマートじゃねえんだよ」

ジャック「シユワルツの言うことにも、一理あるネ!——ハッ!!」

姿勢を低く落としてメカザウルスの足を払い、

ジャック「Out!!」 BANG!!

転倒したメカザウルスの脳天にマックリボルバー一発で撃ち抜き、機能を停止させ



た。

ジャック「Fooo. 時にはCoolに決めるのもImpotentダゼ！」

メリー「兄さんにクールのイメージはほど遠いわね」

ジャック「H A H A! まさかMy sisterに一本取られるとハ！」

ガルマ「くつ、連合軍の奴等、意外に出来る…！」

ガルマ「ダイノゲッター各機、メカザウルスの支援に迎え!!」

Dゲッター☒s「二!!」

ガルマ「我々恐竜帝国の力に、ゲッターの力が加われば、如何なる相手にも負けはせぬっ！このゲッターの相手は、私一人で十分！」

莉嘉「ば…バカにしちやってえ…！」

ガルマ「ゲッタートマホーク!!」

莉嘉「こつちだつてえ…！ゲッタートマホーク!!」

互いにトマホークを抜き放ち、対峙する。

ガルマ「ほう…。まだ向かってくる気概があるか」

莉嘉「当たり前じゃん！このまま逃げるなんて出来ないよ。このまま逃げたらアタシ

…！アタシ、最高にカッコ悪いじゃん！」

ガルマ「カッコ悪い、か…。…フツ」

莉嘉「大きな顔してられるのも今のうちだあ！やあああああ〜っ!!」

手斧サイズのトマホークを両腕で握りしめて、大上段に振り上げながら、ゲッターD 2は飛び込んでいく。

莉嘉「とおりやあああああ〜!!」

ガルマ「……」グッ……

莉嘉「え……?きやつ……!」

ガルマの量産型Dゲッター1は、静かな動きで飛び上がったゲッターD2の足を払い、氣勢を崩す。

ガルマ「いかに力量差を見せられようと、臆せぬその気概は良し。しかし……」

莉嘉「……あ——」

トマホークの先端をゲッターD2の鳩尾に挟り込ませ、

ガルマ「戦う意志が脆弱ではなア!!」

そのまま、ゲッターD2を地面に叩き付ける。

莉嘉「——カッ……!」

ガルマ「未熟な腕で己が面子を保とうとは、笑止千万!己と相手の実力の差を見極められぬ者に、守る底面などあるものか!!」

莉嘉「うう……ゲホッゴホッ……!うあ〜!口の中切っちゃった〜……。気持ち悪い」

ガルマ「死ねい!!」

ブオンツ

莉嘉「あわわっ!ま、マツハ・ウイング!!」

振り下ろされたトマホークの一撃を、慌ててマツハ・ウイングを開いて飛び立ち躲す。

ガルマ「ちっ…!往生際の悪い奴め…!」

莉嘉「あ、諦めたらダメだつて…!こっちは人間、相手は…ハ虫類だけどコンピューターじゃないのは一緒の希望に縋るつもりか!」 シュバツ

ガルマ「ありもしない希望に縋るつもりか!」 シュバツ  
量産型Dゲッター1も翼を開き、ゲッターD2を追う。

莉嘉「いゝ!?!速っ…!」

ガルマ「ゲッター!キックツ!!」

莉嘉「うあぁっ…!!」

ゲッターD2が衝撃に吹き飛ばされていく。

李衣菜「莉嘉!早く莉嘉のところに急がなくちゃ…!」

加蓮「とは言っても、この敵の数じゃあ…。っ…!」

軽快に跳ね回ってメカザウルスの攻撃を躲す。

李衣菜「くらえっ!スピンアターツク!!」

メカザウルス『?!?』

飛び上がった勢いに乗せたスピリアタックで、メカザウルスを吹き飛ばす。

李衣菜「どうだ！」

凜「ダメだ。これじゃキリがない！」

卯月「もつと何かこう、一撃必殺！みたいなのはないんですか？」

李衣菜「何て言われても、ビイトには斧も剣もライフルも、ヨーヨーもハンマーもないからなあ」

加蓮「意外と、爆弾として使ったら、威力はありそうだけどね」

李衣菜「最後の武器は自爆って？冗談としてはいいかもね。笑えないけど」

メカザウルス『グギヤアアアアッ!!』

李衣菜「わっ！」

シャトナー「頭下げろ!!」

李衣菜「え？あつ、はい！」 ヒョコ

シャトナー「!!」 バオッ

グスタフの腕部速射砲が、メカザウルスを撃ち貫く。

李衣菜「ありがと。ビックリしたなあ…もう」

シャトナー「足手まといなら黙って後ろに下がってろ!!」

李衣菜「確かにビイトじゃ戦力にはならないかもしれないけど、引き下がれない理由があるんです！」

莉嘉「きゃあああああ~~~~っ!!」

李衣菜「莉嘉っ!……早く何とかしなきゃ……!」

茜「ゲッターアアートマホオオオクッ!ブウーメツランツ!!」

ブオンツ

茜「メカザウルスは大したことはありませんが、量産されているダイノゲッターが厄介ですね!」

美穂「うん。一形態だけならまだ何とかって思えるけど、三形態全部がこれだけ量産されちゃうつてると……」

アーニヤ「それぞれが、得意な領域で、波状攻撃……。Поддержка…:対応するのに、精一杯、ですね……!」

茜「ゲッターD2に近付かれなければいいんですが……!動きを抑えられますからね!……っ!」

Dゲッター2『!!』ギャルルウンツ

茜「このっ……!」

量産型Dゲッター2のドリルを躲し、その手で頭部を押さえつける。

茜 「離れて！くださいっ！痴漢くっくっ！！」

オーバースローのような動きで、量産型Dゲッター2を投げ飛ばした。

美穂 「ち、痴漢は違うよね…」

李衣菜 「それだ！」

美穂 「え？」

アーニヤ 「痴漢が、どうかしましたか？」

李衣菜 「そっちじゃなくて…、と悠長にしてる時間もない…！茜！友紀さん秘伝の必

殺技だ！！」

茜 「えっ!?!」

莉嘉 「ゲッタービーム！ゲッタービーム、ゲッタービーム!!」

シユパシユパシユパッ

ガルマ 「ふん…」

莉嘉 「もう！何で一発も当たらないの!?!」

ガルマ 「当てずっぽうな攻撃など当たるものか。良いか、攻撃と言うのは…」

莉嘉 「っ…!」

逃げ惑うゲッターD2に追い縋り、拳で動きを制す。

莉嘉 「ああ…っ!」

ガルマ「こうして当てるものだ!!」

量産型Dゲッター1の腹部が光輝く。

ガルマ「ゲッター! ビームツ!!」

ズアツ

莉嘉「きゃあああああつ!!」

至近距離でのゲッタービームの直撃。これまでにない衝撃が、ゲッターD2を襲う。

莉嘉「う…! あ…あれ…!? ど、どうしてっ…!」

操縦桿からの指示を一切受け付けず、ゲッターD2はそのまま地表に落下。

莉嘉「どうして…!? 何で動かないの?! ねえ! 返事してよ、動いてよお!!」

ヒュウウウ…:ウン…:

莉嘉「そんな…! シミュレーターじゃ、こんな事…」

ガルマ「とうとう足掻きも終わりのようだな」

莉嘉「ひっ!」

ガルマ「一思いに逝かせてやる。せめて貴様の神にでも祈るが良い」 ジャキツ

莉嘉「い、いや…っ!」

ゲッターは動かない。脱出しようにも、体はすくんで動けない。

茜「準備はいいですか! 李衣菜さん!!」

李衣菜「オツケー！何時でもやっちゃって！」

卯月「ほ、ホントにやるんですかあ…？」

加蓮「覚悟決めなよ。うちのリーダーは、やると言ったら絶対やるから」

卯月「加蓮ちゃんは何でそんなに落ち着いてるんですか？」

加蓮「ま、何時もの無茶に比べたらマシな方だし」

卯月「マシ、ですか…」

李衣菜「時間もない！思いっきりやっちゃって！」

茜「分かりました！行きますよお〜!!」

美穂「…卯月ちゃん、ごめんね」

ビートを野球ボールのように握り込んだゲッター飛燕が、空中でさながらピッチャーのようにビートを振りかぶる。

ガルマ「死ねえい!!」

莉嘉「っ……………」

茜「必殺!!アイドル魂完全燃烧ツ!!キャノン!ボールアタックでえ〜すツ!!!」

李衣菜「ウウウツヒョオオオオ〜!!」

卯月「やつぱり無茶苦茶なんですけどおお!!」

ビュウワツツ



ボブ「うおっ!? な、何だあ?」

サム「ロボ・ストーンの上を、何かがスゴい勢いで飛んでったみたいだけど…」  
メリー「今の、リーナ達が乗ったビイトよ!」

ジャック「What's? 人間砲弾力?」

リンダ「確かに、人を乗せた砲弾、かもしれないわね…」

シユワルツ「あんなんコントロール出来んのか? ただの特攻兵器じゃねえか」

奈緒「一緒に乗ってなくて良かったあ…」 ホツ

凜「~~~~っ!」 グルングルンツ

加蓮「~~~~っ!」 グルングルンツ

李衣菜「イヤツツホオオオウ!! このまま莉嘉のどこまで一直線だ!」

Dゲッター1『!!』

李衣菜「へっ、面白いじゃん!」

卯月「やるしかないんでしょ?」

さながらレーザービームのように、物凄い勢いで一直線に飛来するビイトの前に立ち

はだかった量産型ダイノゲッターを、

李衣菜「雑魚はクツ込んでやがれえ!!」

Dゲッター1『?!?!』

勢いそのまま胴体を貫き、破壊。

李衣菜「やらい！このまま一気に!!」

ビイトの視界に、今まさにゲッターD2に襲い掛かるとする量産型ダイノゲッター1を捉える。

ガルマ「これで終わりだ!……むっ!!」

李衣菜「あれええええ??」

真つ直ぐに飛行するビイトは、軌道を変更することもなく、量産型ダイノゲッター1の後ろを通過。

ガルマ「ふんっ。雑魚か」

李衣菜「くくくッ!!ビイトをナメるなあ!!」  
グンッ

ガガッ

卯月「わぷっ!」

着地と同時に急制動。落下の衝撃と、急制動の圧力がコックピット内部を襲う。

李衣菜「どおおおりやあああああッ!!」

反動をバネに跳躍。向かう先は、トマホークを振り上げた量産型ダイノゲッター1の背中。

ガルマ「死ねええイ……がぼアッ!!」

ビイトの頭突き。鐘を打ち鳴らすような音が響き渡った。

李衣菜「へへっ！ビイトの底力、思い知った？」

卯月「あうく……。頭がクラクラしますうく……」

加蓮「けど、こんなんじややつば倒せもしないね。…チツ」

凜「倒すのが目的で来たんじやない。距離を離れたなら、それで十分だよ」

卯月「どうして何事もなかったみたいにお話できるんですか…？」

李衣菜「私らにツッコむのはいいから。早く莉嘉のそこに行つてあげて！」

卯月「え？…ああ、はいっ！——よいしょつと」

コックピットのハッチを開き、ホバリングで宙に滞空しているビイトから身を乗り出し、

卯月「いきますっ！」

勢いをつけて宙に身を投げ、自由落下でゲッターD2のハッチの上に着地。

卯月「……システムがダウンしてハッチが開かない？…仕方ありません。待つててく

ださい、莉嘉ちゃん！」

非常閉鎖装置のコックを勢いよく引いてハッチの風防をパージ。解放されたハッチから、コックピットへと滑り込む。

卯月「莉嘉ちゃん！大丈夫ですか？」

莉嘉「——…うん……」

卯月「良かった…。意識を失ってるだけみたい。起きてください、莉嘉ちゃん！しっかりして！」

莉嘉「うう…つ、ん……？…卯月？」

卯月「はいっ！怪我とか、痛いところはありませんか？」

莉嘉「…アタシは大丈夫。でもゴメン、アタシゲッターを……」

卯月「それなら、きつと大丈夫です」

莉嘉「え…？」

卯月「席、変わってもらっていいですか？」

莉嘉「あ、うん……」

シートからずれた莉嘉と交代。

ピッ ピッ

——ウウウウ……ンッ

莉嘉「あ……」

慣れた動作でパネルを操作し、ゲッターD2を再起動。

卯月「戦闘でのダメージに、落下の衝撃が加わって、ちよつとだけ機能停止しちゃっただけです。私たちを守ってくれるゲッターはそう簡単に壊れませんよ！」

莉嘉「……」

卯月「さて……」

手元のサブ・モニターに機体情報を表示。各部のダメージを確認する。

卯月（…何て言っても、思ったよりもダメージは大きいかも…。間接部の負担が特にでも…）

ページされたハッチの代わりに非常用シャッターを下ろし、ゲッターD2を再起動。

凜「よし、無事にゲッターは再起動できたみたいだね」

加蓮「けど、まともに動くの？パツと見ても大分ダメージ受けてるみたいだけど？」

凜「仮に戦闘は無理だとしても、卯月ならゲッターを持って帰ることくらいは出来

るよ。卯月の方の心配よりも李衣菜、仕事を終えたんだから早く撤退しよう」

李衣菜「分かってる。さすがにこれだけのゲッターをビイトで相手にするのは死にに

行くみたいなんでもんね…」

ガルマ「大人しく逃がすと思ってるのか？」

李衣菜「げっ…！隊長格、復活が早い…」

ガルマ「雑魚だからと情けを掛けてやれば、やってくれおつたな！最早生きては帰さ

ぬわ!!」

加蓮「なーにアタシ達が悪者みたいに言ってるんだか。勝手に情けを掛けようとした

のは、そっちじゃん」

凜 「たつぷりの油断付きだね。それでこっちに文句言わないでほしいよ」

李衣菜 「2人とも、言いたいこと言い過ぎ」

ガルマ 「黙れえ!! 雑魚が粋がりおつて、その振る舞いがどのような結果を生むか、ここでその骨の髄に思い知らせてやる!」

李衣菜 「ほらあ、マジギレしたじゃん!」

卯月 「そうはさせません!」

凜 「卯月? ゲッターD2は動くの?」

卯月 「はいっ。思ったよりはダメージを受けてましたけど…」

グググッ…

両脚一杯に力を込め、ゲッターD2は立ち上がる。

卯月 「ゲッターはまだ戦えます!!」

凜 「……。分かった。無茶はしないで、って言ってもしょうがないか」

卯月 「えへへ…。ごめんなさい」

凜 「分かっているなら、謝らないで」

卯月 「はい。今はとにかく、勝つしかないんです。今を生き抜いて、明日を掴むには。

だから…!」

ガルマ「威勢はいいな。だが、そのボロボロのゲッターで我らのダイノゲッター軍団を前に、どこまで出来るかな？」

DゲッターⅩs 「!!」 ザッ

凜 「ダイノゲッターの量産なんて、面倒なことしてくれるよ」

加蓮 「でもさ、連中ってゲッター線に弱いんじゃないか？ そんな無茶して、体は大丈夫なの？」

ガルマ 「大丈夫なものか。ある程度のゲッター線を中和できるとはいえ、今この瞬間も我が肉体はゲッター線の侵食を受けている」

李衣菜 「じゃあ、体を毒に侵されながら戦ってるって言うの…？ そんな、死んじやつたら何も意味なんてないじゃん！」

ガルマ 「それがなんだと言うのだ？ 恐竜帝国の再興と、再び地上の支配を手に入れるためならば、この命など惜しくはないッ!!」

加蓮 「お国のために殉じますって？ アホらし」  
凜 「加蓮ならそういうと思った。私も、同感」

ガルマ 「ぬかせ！ 所詮貴様らサル共に、我らの高貴な誇りなど分からぬ！」

李衣菜 「そんなので偉そうにしないで！ 命を大切にできない誇りなんかより、ロツクなハートビートの方が、ずっとスゴいに決まってる！」

凜 「張り合ってる場合？こっちの機体はビイトだよ」

李衣菜 「この際機体なんて問題じゃない……これは互いのハートとハート、プライドを賭けた戦いなんだ！」

加蓮 「何か熱くなってる」

ガルマ 「フンツッ！小娘ながらに面白いことを言う！その脆弱なプライドとやら、粉々に打ち砕いてやるわ!!」

Dゲッター-Ⅹs 「!!」

凜 「二斉に来る！」

莉嘉 「この二機だけじゃ勝てっこないよ！早く逃げよう？」

卯月 「…莉嘉ちゃん」

莉嘉 「卯月……？」

卯月 「しっかり掴まっててください！」

莉嘉 「……！」

李衣菜 「よし、先ずは私達が！」

凜 「逃げるの？」

加蓮 「威勢よく？」

李衣菜 「今敵に背中を見せても、ただ的になるだけ。だったら……！」



バツ

李衣菜 「先ずは突っ込む!!」

量産型ダイノゲッター軍団に向かって、ビイトを加速。

李衣菜 「喰らえええ!!」 バババツ

両腕のバルカンを敵陣に向かってバラ撒く。

Dゲッター1『!』

加蓮 「分かつてはいるけど、この火力じゃ抜けないか…」

凜 「反撃が来るよ!」

李衣菜 「オツケー! やってやろうじゃん…!」 ゲツ…

Dゲッター1『s “!!!”』

ズアオツ

李衣菜 「ロックンロオオールツ! ヒヤッホウー!!」

ビーム、ミサイル、銃弾。押し寄せる弾幕の波を、白銀の大地を滑らせて躲していく。

李衣菜 「ほらほらあ! どうしたの、私はこっちだよ!!」

ガルマ 「調子に乗りおって…。望み通り、貴様から葬ってやる。各機チビに火力を集

中せよ!」

李衣菜 「!!」

ビイトの眼前で、爆煙で火柱が上がる。

李衣菜「……ふうー！なかなかロックな攻撃じゃん。そうこなくっちゃー！」

加蓮「余裕かましてる場合？」

凜「もうすぐ、敵に包囲されるよ」

李衣菜「そう、それでいいよ。ビイトはちっちゃいんだから、もつと近付かないと、そんな大砲なんて当たらないよ！」

四方をダイノゲッターに包囲される。

李衣菜「これはこれで威圧的な光景……」

ガルマ「観念したか？せめて一思いで楽になるがいい！」

李衣菜「へへっ！楽になる前に、ロックになりたい！」

凜「上手いこと言ったつもり？」

李衣菜「これが奥の手中の奥の手！行くよ！」 ガシユツ ガシユツ

加蓮「つて、何時ものカーゴ形態じゃない！」

ガルマ「防御を固めたところで、こちらの攻撃を防ぎきれるとでも!？」

李衣菜「この形態の目的は、それだけじゃない！えいっ！」

その場で、ビイトを回転。

ガルマ「何の真似だ……むっ……？」

ビイトの回転によって足元の雪が巻き上げられ宙を舞い始める。

ガルマ「こ、これは…!？」

ギュルン ギュルンッ ブオオオオオオオオ

ビイトの回転の勢いが増すごとに、巻き上げられた雪も勢いを強め、吹雪そして暴風雪へと変わり、視界を白く染めていく。

李衣菜「浜口流忍法・秘技”雪隠れの術”!!」

辺り一帯がビイトの起こした暴風雪により白く塗りつぶされ、その中にビイトの姿は掻き消える。

ガルマ「ぬううううっ!? 所詮はこけおどし! 各機、目標が中心にいるのは変わらん!

一斉射撃で撃ち落とせ!!

DゲッターⅩs 「!!」

ダイノゲッター軍団の一斉射撃によって、舞い散る吹雪を吹き飛ばすほどの爆発が生じた。

ガルマ「やったか!」

爆煙が収まると、そこにはクレーターが一つ。

ガルマ「…跡形もなく消し飛んだか?」

李衣菜「いいや、違うね!」

ガルマ「！」

卯月「上です！」

ガルマ「何とお!!」

上空から声が響くと同時に、ビームの雨が降り注ぎ、密集した量産型ダイノゲッターの軍団を一網打尽に破壊していく。

ガルマ「ぐう……! こちらの包囲陣形を逆手にとつたと言うのか!？」

李衣菜「その通り! 私は、狙いを引き付けるための囷つて訳!」

加蓮「ホント、こんな豆戦車の挑発に乗ってくれて、助かつたよ」

ガルマ「回転してこちらの目を欺いたのは、上空に逃れる瞬間を捉えさせぬためか!」  
凜「下に逃げるよりは安全だからね。先に上昇して待機してた卯月にキヤッチして  
もらつたよ」

李衣菜「さあ、これでこつちも準備が整つた! 卯月、派手にやつちやつて!」

卯月「ほ、ホントにまたやるんですかあ〜?」

加蓮「ビイトの全速力で逃げて、誰かに捕捉されるだけだからね。なら、一気に離  
脱出来た方がいい」

李衣菜「ほら、茜みたいに、気合い入れて。ヨロシク!」

卯月「よ、よお〜しつ! 頑張りますつ!!」

卯月「アイドル魂完全燃焼く！キャノンボールアターーック!!」

李衣菜「ウツヒョー——!!」

ヒユウウウン…ツ

卯月「ありがとうございました。李衣菜ちゃん」

ガルマ「ふつ、味方を逃がして一人で戦うつもりか。こちらにもまだ手勢は残っているぞ!!」

卯月「莉嘉ちゃん、大丈夫ですか？」

莉嘉「う、うん…。なんとか」

卯月「もうちよつとだけ、我慢してください！」グツ

翼を翻し、急降下。

Dゲッターー「!!」

卯月「ゲッターパーアンチ!!」

地面に降り立ち、手近な相手の顔面に渾身の拳を打ち込む。

Dゲッターー「?!?!」

パンチを受けたゲッターは、一撃で頭部を吹き飛ばし、破碎。

卯月「ゲッターキーック!!」

間髪入れず直蹴り。破壊された僚機を乗り越えて姿を見せた量産型ダイノゲッター

2を頭部から粉碎し、左右に分断した。

Dゲッター3「！」

卯月「——！ゲッタートマホーク……！」

Dゲッター3「!!」バオツ

卯月「ブウーメラント!!」

こちらに対して距離を取った量産型ダイノゲッター3を、自ら放ったミサイルごと切り裂いて破壊。

ガルマ「こちらの攻撃に気付くとは、なかなかやる！だが、トマホークを手放したな——！」

Dゲッター3「!!」

得物を手放したゲッターD2に、無数のダイノゲッターが肉薄。

莉嘉「う、卯月……っ！」

卯月「……」

ガルマ「これで終わりよ!!」

卯月「マツハ・ウイング——」

ガルマ「!!」?

卯月「スライサアア——ッ!!」

ヒュンツ ヒュンツ ヒュンツ

広げた背中中の翼が目にも止まらぬ速度で動き、押し寄せた敵陣を縦横無尽に切り裂いた。

ガルマ「こ、これは…あ…!？」

ゲッターD2の周囲に広がる、ダイノゲッターロボの屍。

卯月「…あつと」

回転して戻ってきたトマホークをキャッチ。

ガルマ「ど、どう言うことだ…?これは…。たかが小娘が乗り換えただけで、これほど戦況が覆るものか…!？」

卯月「…まだ、つづけますか？」

ガルマ「何…?ふふふ…!攻め焦ってボロを出したな?最早そのゲッターで戦うことなど出来ぬのであろう!」

莉嘉「う、卯月…!」

卯月「……」

ガルマ「貴様からその問いを掛けると言うのが何よりの証拠!このキャプテン・ガルマ!手負いの獣は逃がさん!」

卯月「…っ」

ガクンッ

卯月「っ：!?ゲッターD2!」

膝から崩れ落ちるゲッターD2。

卯月「お願いです…!もうちよつとだけ!もう少しだけですから!もつて…!」

ガルマ「好機と見たぞ!各機、ゲッターD2にトドメを刺せええ!!」

アーニヤ「Y p a a a a a A!!」

卯月「ゲッター飛焰!」

ゲッターD2と量産型ダイノゲッター軍団の間に、プロトゲッター2が割って入る。

アーニヤ「お待たせしました。ウツキ!」

卯月「アーニヤちゃん!ありがとうございますっ」

ガルマ「ゲッター飛焰か…!あと一歩のところでえ…!」

アーニヤ「おいしい所、持っていくのは、アカネだけじゃありません」

ガルマ「何を?!」

アーニヤ「プラズマテンペスト!!」

ゴワッ

ガルマ「ぬう…!?!」

アーニヤ「ドリルアームッ!」



ガルマ「っ——!!?」

アーニヤ「Y p a a a a !!」

ガルマ「何のおおおおおっ!!」

プラズマテンペストの旋風で量産型ダイノゲッターを怯ませ、その隙を突いたプロト・ゲッター2の鋭い攻撃は、ガルマの渾身の底力で直撃を避けられるものの、すり抜けたドリルアームの衝撃が、掠めた半身を穿つ。

アーニヤ「……っ!」

美穂「お、おしいっ!」

ガルマ「ううう……ぐっ!おのれえい!」

茜「まだやるつもりなんですか!」

アーニヤ「向かってくるなら、手加減、しません!」

ガルマ「調子に乗るな!このキャプテン・ガルマ、小娘などに負けはせん!」

ラセツ「もう良い、ラセツ。撤退せよ」

ガルマ「はっ……!?しかし!私はまだ戦えます」

ラセツ「矜持や誇りの問題ではないのだ。メカザウルスもダイノゲッターも奴等を圧倒できるほど量産することはできない。しかし、お前と言う前線で兵を率いる長たる存在は、そう量産することなど出来ん」

ガルマ「むう……」

ラセツ「大局のために、ここは退くのだ。何、此度の屈辱など、これから幾らでも返すことはできよう」

ガルマ「……了解致しました」

ラセツ「撤退を支援するために、“あれ”を出撃させる。くれぐれも巻き添えを喰わぬようにな」

ガルマ「あれ……!?あれはまだ調整中の筈なのでは……!」

ラセツ「操縦桿を握って動かすくらいのことではできよう。今こちらから出撃させる事の出来る戦力は、あやつしかおらぬからな」

ガルマ「……」

ラセツ「では頼むぞ。私の期待を裏切ることがないようにな」プツンツ

ガルマ「……おのれ……。恐竜帝国再興のためとは言え、あのような不埒者に頭を下げなければならんとは……」

アーニヤ「……?敵の空気が、変わった?」

茜「まさか、逃げるつもりですか!」

美穂「それはそれで助かるんじゃないかな?こつちも、色々不測の事態があつたわけだし……」

アーニヤ「Капитанская Машина…隊長機くらいは、落とします。その方が、後々楽…ですね」

茜「アーニヤさんに賛成です！向こうは手負い、ここは一気呵成にいきましょう!!」

美穂「悪くないとは思うけど…。…ちよつと待って」

アーニヤ「どうかしました、か?」

美穂「うん。無敵戦艦ダイから、何か出てくる…。数は…一機だけ?」

茜「それならば余裕ですね!たかだか一機、まとめてやつつけてやりましょう!」

美穂「でも、それって可笑しいよ。もし援軍を送るなら、もうちよつと数を出すはずだし、この状況で、撤退を支援するだけにしても、一機だけなんて…」

アーニヤ「アー…、強力な敵…。ということですか?」

美穂「多分…。何にせよ、警戒はしておいた方がいいと思う」

茜「考えすぎでは?ほら、増援を有視界で捕捉しますよ!あれは、ダイノゲッターです!」

美穂「ダイノゲッターロボ…。だけど、あれって…」

アーニヤ「ブラックダイノゲッター!」

茜「ブラックダイノゲッター!」

悠然と、それは姿を現す。

茜 「それは、普通のダイノゲッターと何か違うのですか!」

アーニヤ 「かつて、日本での恐竜帝国との戦いの時も、同じものを見ました。その時は、恐竜帝国の幹部が乗り込んだ識別みたいなもの、でしたけど…」

美穂 「あつ、手前のダイノゲッターが逃げちやう!」

ガルマ 「後は任せたぞ」

??? 「……」

ガルマ 「くっ……!」

茜 「おめおめと逃がすものですか!アーニヤさん!」

アーニヤ 「フアントム・ビジョン!!」

プロト・ゲッター2の高速機動。周囲に分身を生み出す動きでブラックダイノゲッターを攪乱しつつ、量産型ダイノゲッターに迫る。

アーニヤ 「そこです!」

ガルマ 「ぬう!」

アーニヤ 「やああつ!!」

量産型ダイノゲッターの背後を取ったプロト・ゲッター2の攻撃はしかし、

ガギンツ

アーニヤ 「!?!」



アーニヤ「それは…、大丈夫、です。でも…」

美穂「でも？」

アーニヤ「ブラックダイノゲッターのパイロット…。あの、声は…」

卯月「アーニヤちゃんも、覚えてますか？」

アーニヤ「ええ…。忘れるはず、ありません。忘れようがありません」

茜「どう言うことですか？恐竜帝国のパイロットに知り合いでも…ツツ!!」

ガツ

??「ゲッター！ゲッター!!ゲッターアアア!!サル共めがあああああくつ!!」

茜「アーニヤさん！回避を!!」

アーニヤ「…!!」

グオオオオツ

美穂「何とか引き剥がせないの?!」

アーニヤ「ツ…ツ…!!」

茜「どうなってるんです?!こっちの機動の、先を回られてしまいます!」

アーニヤ（間違いない…。この声、その主は…!!）

アーニヤ「やああツ!」

しつこくすがり付き、滅茶苦茶に暴れまわるブラックダイノゲッターの顔面に、右腕

の拳を叩き込んで殴り飛ばす。

??? 「うぎやあああああああッ!!!?」

卯月・アーニヤ 「帝王ゴール!!」

つづく

## 第25話 『強くなりたい』

茜 「えっ!？」

美穂 「帝王…：ゴールって…」

茜 「前に日本を襲ってきた恐竜帝国を率いていた親玉でしたよね？」

美穂 「うん…：。卯月ちゃんが、私達がゲッターに乗って戦う切っ掛けになった、最初の敵の筈」

茜 「けど、帝王ゴールは、確か未央さんが最初のゲッターと引き換えに倒したはずでは!？」

アーニヤ 「けど、聞き間違える筈、ありません。あの時の…：決戦の、直前…：！日本全土に宣戦布告した、あの声を！」

ゴール 「うあ、ああああああ〜！！サル共めエ…：！よくも！よくもよくもよくもよくもよくもお〜〜ツ!!」

ラセツ 「フハハハ！余興としてはよかろう？かつて倒した仇敵と戦うと言うのは」



卯月「ラセツ！貴方がゴールを、蘇らせたって言うんですか!？」

ラセツ「左様。恐竜帝国の最終決戦、ゴールがゲッターの光の前に消し去られるより以前に採集しておいた奴の細胞を、ランドウのバイオテクノロジーを用いて培養したのだ」

アーニヤ「つまり、あのゴールは、クローン…。偽物、ということですか」

卯月「細胞を遺しておくなんて、そんなことに何の意味があるんですか？」

美穂「それもだけど、どうしてクローン何て…、そんなこと？」

ラセツ「恐竜帝国を百余年率いてきた帝王ゴールの威光とは、それほどのものと言うことだよ。帝国がマシーンランドで散り散りになっても、未だにゴールを信奉する者は多い」

茜「そういう人達を利用するために、貴方は!？」

ラセツ「そう。恐竜帝国において偉大な存在感を持つ帝王ゴール。それを配下とする私の存在は、さらに人格化される!…尤も」

ゴール「ぐわああ!!死ね!死ね!!死ねええ!!私に逆らう者は、みんな死んでしまえくっく!!」

ラセツ「精神の成熟には、かなり問題があったようだが」

茜「そんなのただ尻馬に乗ってるだけじゃないですか!虎の威を借る狸とは、まさ

しくそのものです！」

アーニヤ「虎の威を借るのは、狐、ですよ？」

茜「あんなのは、狸で充分です！」

アーニヤ「…確かに、人を化かして嘲笑う…。狸にはピッタリ、かもしれませんね」

美穂「狸にも失礼だと思うよ…」

ラセツ「なんとでも言うがいい！貴様らがどれ程愚弄したところで、私が帝国を支配する事実は変わらん！」

卯月「そんな形だけの支配が、何時までも長続きする筈がありません！終わらせませう！私達が、今度こそ何も犠牲にはさせずに！！」

ズオオオオオオオオツ

莉嘉「!? 何…これ？ゲッター線の出力が上がってる…？D2のダメージが…！」

ゲッターD2が淡いゲッター線の光に包まれ、表装のダメージ痕が消えていく。

卯月「倒します！命を命と思わない人を、自分の利益のために、他人の命を利用する人を!!これは、そのための力です！」

ラセツ「ふん…。まだそんな余力が残っていたか。だが、こちらのダイノゲッターとて、一筋縄ではいかんぞ」

ゴール「ああああああアツ!!忌まわしい！忌まわしき、ゲッターの光いいいい!!!」

グアツ

茜 「!! 来ます!アーニヤさん!!」

アーニヤ 「ツ! プラズマファントム!!」 ブオンツ

ブラックダイノゲッターを翻弄しようと、高速機動を展開。無数の分身で包囲し、向  
こうの足を止めさせる。

アーニヤ 「どうですか!？」

茜 「流石です!これで、あとはこっちのペースに持ち込めれば!」

美穂 「ダメだよ!早く、避けて:~!」

アーニヤ 「えつ——?……きやあつ!!」

ブラックダイノゲッターの貫き手が、プロト・ゲッター2の鳩尾に突き刺さる。

アーニヤ 「ア……アア……つ!」

ゴール 「まやかしいいいいいつ!!小癩小癩小癩小癩うううう!!小癩な手をお  
おおおおおおお!!」

茜 「3号機の部分に直撃:~!美穂さん!大丈夫ですか!」

美穂 「——」

茜 「美穂さん!」

アーニヤ 「ミホ……?そんな……」

ゴール「勝つ!! 勝つ勝つ勝つ勝つ!! 勝ったツ!! 死ねえええ!! ゲッターアアアアアアアアア!!」

卯月「ゲッターライフ!!」

ドウツ

ゴール「ぐっ…! あああああああつ!!」

卯月「落ち着いてください、チーム飛焰! 美穂ちゃんはまだ生きてます!」

アーニヤ「卯月…。あ……」

茜「…確かに、生体反応はまだあります…けど…!」

美穂「私なら、大丈夫だよ…」

茜「美穂さん!」

美穂「えへ…:へへへ…。頭を打って、ちよつと意識が飛んでただけ。大したことな

いよ」

アーニヤ「そういうわけにはいきません!」

美穂「相手は来るよ! 後退しようとしても、逃げようとしても、テキサスに帰るなら、

まずは襲ってくる相手を倒すしかないよ!」

アーニヤ「ミホ…」

茜「分かりました! 私達に出来ることは、美穂さんに負担を掛けないう、なるべく

速攻で片を付けるということですね！」

アーニヤ「…そうですね。直ぐに終わらせませう！ウツキも力を貸してください！」

卯月「はいっ、任せてください！」

茜「美穂さんに負担を掛けないと言うことは、ゲッター飛焰は他の形態にも変形できません！アーニヤさんだけが頼りです！」

美穂「…ごめんね？足引っ張っちやっつて」

アーニヤ「H e r t…ハndeにもなりません！」

グンツ

アーニヤ「プラズマナイフ!!」

プラズマを帯びた手刀を構え、ゲッターを加速。

アーニヤ「ワタシが、敵の動きを抑えます。ウツキは、その内に狙撃して、ください！」

卯月「分かりました！行ってください！」

アーニヤ「Y p a a a !!」

ゴール「キシヤアアアアア!!」

プロト・ゲッター2の手刀とブラックダイノゲッターの拳が交錯。

アーニヤ「ここで…、せいっ！」

ゴール「っ！」

腕の側をなぞらせて拳を反らしつつ、上体を仰げ反らせ反転。勢いよくブラックダイノゲッターの胸部中央を蹴りつけ、反動で飛翔する。

ゴール「ぬお〜っ!!?」

アーニャ「ウツキツ!!」

プロト・ゲッター2の蹴りで宙に浮く形となったブラックダイノゲッター、プロト・ゲッター2は宙へと飛び上がり、ゲッターD2とブラックダイノゲッターとの斜線上はクリアになっている。

卯月「ー！」

そこを、狙撃。

ゴール「うがあああッ!!」

茜「やりました！直撃コースです!!」

卯月「これで、致命傷を与えられれば…！」

莉嘉「待って！向こうの様子、何か変だよ！」

卯月「何か？何が…」

ゴール「うううう……。うううおおおお!!ゲッターアアアア〜!!」

莉嘉「な、何あれ…。ゲッターの装甲が歪んでく…」

卯月「ゲッターが、変形してる…?」

莉嘉「他の形態になるの?」

卯月「いいえ、あんな変形の仕方なんて…。ともかく!」グツ

ブラックゲッターを中心に置き、円の機動で水平に回り込み、

卯月「足が止まっているなら、チャンスは今ですね!」

ゲッターライフルのエネルギー弾を斉射。

バチンッ

卯月「何ですか!? こっちの攻撃が、弾かれた…?」

莉嘉「あれ! 向こうのゲッターの背中!」

卯月「背中…? ……!」

莉嘉「ゲッターライフルが生えてる!」

ゴール「ゲッターなどお…、恐るるに足らずううう!! 貴様の力は我のモノおおお

お!!」

茜「いつ…! 一体何が起こってるんですか!」

アーニヤ「ワタシ達のゲッターには、あんな能力はありません。あれは…!」

ラセツ「そう! これこそが新たなブラックダイノゲッターの力! ゲッター合金と、イ

ンペーダーの能力を併せることによって会得した、擬態能力よ!」

莉嘉「ぎたい……？」

卯月「え〜つと、確か虫なんか、鳥に食べられないように植物に姿を似せる……」

ゴール「死ねええええいッ!!サル共オ!!」

アーニヤ「つ……!」

隙を突いて肉薄したプロト・ゲッター2だったが、眼前目掛けて放たれたライフルの光線を紙一重で回避するため距離を取る。

茜「何ですか、あれは!?弾速も、射撃精度も!ゲッターD2のものよりもずっと上ですよ!」

ラセツ「見た目や能力を只々コピーするだけでは芸がないだろう?ブラックダイノゲッターは、受けたダメージから火力と速度、精度を計算して弾き出し、それを凌駕する!」

卯月「こつちがブラックダイノゲッターを倒そうとして、強い武器を使えば使うほど、逆に相手を強くしちゃうってことですか……」

莉嘉「何それ!?そんなのズルじゃん!」

アーニヤ「ゲッターライフルが出来ただけでも、隙がなくなりました、ね」

ラセツ「怯えろ!竦め!!全てが、ブラックダイノゲッターの力となるのだ!!」

卯月「……」



莉嘉「ど、どうするの……？こっちがどんな手を使っても無駄なんだつたら……！」

卯月「それは違いますよ、莉嘉ちゃん」

莉嘉「え？」

アーニヤ「ウツキの言う通り、です。Игры：勝負の勝ち負けは能力の優劣だけではありません！」

茜「最後まで絶対に諦めない！ガッツと心です！」

ゴール「この力でえ……ッ!!殺す!!サル共オオオオオ!!」

卯月「来ます！回避を！」

アーニヤ「ッ！」

背中のライフルを連射し、獣染みた動きで飛び込んでくるブラックダイノゲッターを、2機のゲッターは左右に別れることで去なす。

莉嘉「こんな滅茶苦茶なのはどうしようもないよう!!」

茜「どうにかするんです！私達には、それが出来る筈です！アーニヤさん！」

アーニヤ「Da!もう小細工は使いません！繰り返し攻撃するのが、ダメなら……！」

プロト・ゲッター2を反転。背部のブースターにエネルギーを込める。

アーニヤ「一撃で倒します！」

プロト・ゲッター2、加速。

美穂「つ……！」

アーニヤ「Я сожалю……ミホ、ごめんなさい、です」

美穂「私の事は気にしないで行って！アーニヤちゃん！」

アーニヤ「Дa!!」

瞬く間に遙か彼方に飛んで行き、光の粒に。

ゴール「何だ？何をする何をする気だ?!逃がさん!!」

卯月「ゲッターキック!!」

ガンツ

ゴール「ぐっ……!?!」

卯月「どうです？これはコピーする必要もないでしょう!」

ゴール「こ……こ、ここここ小癪なあ……っ!!小娘え……!!」

卯月「貴方の相手は私です！アーニヤちゃん達はやらせません!」

莉嘉「アーニヤ達を逃がして、それでどうするの？援軍を呼ぶ?」

卯月「違います！あれは、逃げたんじゃありません！この戦いに、勝つための——!」

ブラックダイノゲッターとゲッターD2が豆粒ほどの大きさに見えるまでに距離を空けたプロト・ゲッター2は音速の世界で、しかし更にその速度を上げていく。

アーニヤ「アカネ、ゲッター飛焰のプラズマエネルギーのコントロールをこちらに。

ゲッターエネルギーギーは、お任せします」

茜 「任せてください！ゲッターエネルギーギーは、推進力に全部、ですぬ！」

アーニヤ 「H a. 単純明快：お願いしますね。後は、バランスの制御ですが…」

茜 「このスピードでゲッターがバランスを崩してしまつたら、一瞬で塵芥ですからね！任せてください！体幹には自信があります!!」

アーニヤ 「ふふっ…。任せました。ワタシは——」 クツ

ギユオツ

アーニヤ 「ゴールを倒します!!」

左腕のドリルアームを構える。

アーニヤ 「プラズマ・ビット、展開！」

ドリルアームの根本から、3つの小型ビットが放たれ、ドリルの周囲に展開する。

アーニヤ 「この速度でも付いてきてくれる。流星はアキハの発明、ですぬ。——プラズマエネルギーギー、最大出力!!」

ドリルの周囲に展開したビットにプラズマが疾り、回転。膨大なプラズマエネルギーが、ドリルアームを覆い尽くしたそれは、

アーニヤ 「ハイパープラズマドリルツ!!」

ドリルを突き出す姿勢となったプロト・ゲッター2の全身をも覆い尽くし、巨大な光

のドリルとなり、よりその速さを高めていく。

アーニヤ「：パイロット・セーフティ。皆さんの姿勢を固定しますね」

パネルの操作で、シートの後ろから姿を見せた固定具が、パイロットの姿勢を固定すると同時に、加速で生じる負荷を軽減する。

茜「少々息苦しいですね！」

アーニヤ「ちよつとだけ我慢、です。ミホにも、無茶をお願いしてしまいますね」

美穂「大丈夫だよ。むしろ、こつちの方がちよつと落ち着く、かな？」

茜「正しく、シチューにこそカツが合うって奴ですね！」

美穂「シチュー？」

アーニヤ「“死中にこそ活”がある？」

茜「それです！見せつけてやりましょう！人間の！アイドルの、私達の底力を！！」

アーニヤ「行きます！！」グツ

ギョオオオツ

ブースターの青白いプラズマの火が更に勢いを増し、その速度は高速を超え、音速を超え、

アーニヤ「亜光速へ！！」

美穂「目標捕捉……。スコープ、固定するよ」

アーニヤ「Спасибо、ミホ」

美穂「今の私に出来るのは、これが精一杯だから」

アーニヤ「充分、です。あとは、ワタシが、決める、っだけ！」

遙か彼方に置きさつた敵の機影が迫る。

ゴール「キエエエエイツ!!!死ね!死ね!死ね!死ねえええ!!サルめがああああッ!!」

卯月「——っ!っ!…トマホーク、ブーメラン!!」

ゴール「うぐごおおおっ!!」

熊のように左右の腕を振るい、執拗に肉薄するブラックダイノゲッターの正面めがけ

トマホークを放り投げ、攻撃を回避させる代わりに距離を取る。

莉嘉「こつちのトマホークはもう予備もゼロだよ!どうするの?」

卯月「…スピнкаッター!」

莉嘉「えっ!?!」

ジャキツ、とゲッターD2の両側腕部から、回転する刃が現れる。

莉嘉(ゲッターD2の武装にスピнкаッターはないはずじゃ…?)

卯月「やあ——ッ!!」

ゴール「むううう!?!」

ブラックダイノゲッターに距離を詰められるより先に懐に踏み込み、振り下ろされかけたその腕を受け止める。

卯月「くっ…ううう…!!」

ラセツ「力比べと言うわけか？言っておくが、ブラックダイノゲッターのパワーは、貴様らの知るダイノゲッターのものとは比べ物にもならんぞ！」

卯月「これで、いいんです」 ニコリッ

ゴール「おもしろ…面白、面白い！捻り潰してくれるううううッ!!」

ギギギ…

ゲッターD2の両腕が、軋みを上げる。

莉嘉「このままじゃ、ゲッターが持たないよ！」

卯月「あともうちよつとなんです！だから耐えて…！ゲッターD2！」

莉嘉「あと、ちよつと…？」

直後、ブラックダイノゲッターの遙か後方に、光りが見える。

莉嘉「！ あれって…」

卯月「今です！マツハ・ウイング!!」

ゴール「何いッ!？」

マツハ・ウイングを広げ、急上昇で上空へ。

アーニャ「——y p a a a a a a!!」

直後、ブラックダイノゲッターの背後から迫ったプロト・ゲッター2のハイパープラズマドリルがブラックダイノゲッターを穿ち貫いた。

ゴール「うおおおおおおおッ!!!?」

莉嘉「きやああああ〜っ?!」

大気を震わす亜光速の衝撃波が、上空に逃れたはずのゲッターD2をも揺るがせる。

卯月「ブラックダイノゲッターは!?敵は…!」

茜「やりましたー…か?」

ラセツ「くっ…!流石にゲッターロボ、やってくれる。だが…」

ゴール「うおおおおおおおのおおおれええええええええええ!!!メスザル如きがああああ

ああああッ!!!」

美穂「まだ、立ち上がるの!」

卯月「破壊できたのは、下半身と右半身だけ…!」

莉嘉「どれだけ破壊しても、パーツが残ってたら再生しちゃう!」

茜「なら再生される前に一気呵成に!」

アーニャ「ダメ、です!ゲッター飛焰は、今の攻撃でプラズマエネルギー炉がオーバーロード、してます。後180秒、ゲッターは動けません」

茜 「万事休す…!? そんな事が！」

ゴール「?!?!」

突如、ブキツクダイノゲッターの周囲が爆炎で包まれる。

莉嘉「何!?!」

卯月「この砲撃…、私達の後ろから…!」

ボブ「俺達を忘れてもらっちゃ困るぜ！」

サム「万事休す、つつたらそうなんだろうぜ。敵さんの方がよ」

卯月「ロボ・ストーン! キングダム、グスタフ、テキサスマック、ステルバー! 皆さ

ん!!」

李衣菜「私もいるよ!」ピョコンッ

奈緒「お前は自己主張すんなって」

李衣菜「へへっ、お待たせ!」

美穂「でも、スーパーロボット部隊は、メカザウルスの対応に追われてたはずじゃあ  
…」

ジャック「H A H A H A!! Nice jokeだぜ、ミホ」

シャトナー「俺達があんな雑魚共相手に手を焼くかつての!」

リンダ「精々、数が多いのが厄介だったくらいよ」



奈緒「どんなに改良したって、メカザウルスじゃあ時間稼ぎが精一杯なんだよ！これで、形勢逆転だぞ！」

シュワルツ「雑魚に無駄弾は使わねえ主義だ。残りの弾を撃ち切るにや、ちようどいいのが残ってた見てえだな」

ゴール「うおおおおおッ!!」

サム「な、何だア!？」

メリー「突然暴れ始めたわ！」

シャトナー「辺り所構わずかよ。まさか、自棄にでもなったのか？」

ゴール「うおおおおおッ!!殺す!!消す!!滅ぼすううううッ!!忌々しいサ  
ル共をおおおおおッ!!」

リンダ「それにしたって様子が可笑しいわ」

シュワルツ「アイツ、敵が見えていない…?」

奈緒「狂ってるって言うのかよ…」

ラセツ「…。…フン、クローニングが不完全だったようだな」

莉嘉「ど、どうするの？下手に手を出したら、逆に痛い目にあっちゃうかも…」

卯月「……」

李衣菜「ん…。遮二無二動くだけだったら、攻撃のチャンスはあると思うけど…」

加蓮「だつたらビイトで突つ込んでみる？」

凜「奴の攻撃でドカンか、踏み潰されてペシャンコか。どちらにせよ、巻き添えはゴメンだけどね」

李衣菜「二人とも手厳しい…… トホホ……」

ラセツ「このまま奴等が混乱する様を眺めているのも面白いが、かつて帝王と呼ばれた男の醜態は見えていられん、か」

ラセツ「潮時だ。ゴール、撤退せよ」

ゴール「うおおおおおおお——!!人間?霊長?否ああああ!!!サル!サル!!サルウウウウツ!!滅ぶべき種族ツツツ!!!」

ラセツ「……」ピッ

ゴール「ウッ!!」

美穂「動きが止まった……?」

ラセツ「撤退しろ。貴様はともかく、そのゲッターを失うわけにはいかん」

ゴール「…了解。これより帰投する」

バツ

卯月「……? 撤退していく……」

莉嘉「こつちの数が多いから、敵わないと思つて逃げたんじゃない?」

メリー「それにしたってタイミングが不自然すぎるわ」

シャトナー「何つうか、壊れた人形みたいだったな」

ボブ「見ろよ。無敵戦艦ダイも退いていくぜ！」

ラセツ「今回の戦いで貴様らに引導を渡すことが出来ればとも思ってたが、気が変わった。やはり余興は楽しまなければな。困難があつてこそ、覇道の後に制する世界も御しやすい」

李衣菜「逃げるくせに偉そう！」

シユワルツ「全くだぜ！もうすぐテキサスだつて来る。俺達が黙つて撤退させると思うのかよ！」

奈緒「待てよ！向こうが退いてくれるつて言つてんだ。深追いはヤバイんじゃないか？」

茜「そうですね！卯月さんのゲッターの損傷は激しいですし、何より、美穂さんの傷の手当てをしなくては！」

シユワルツ「…チツ」

メリー「みんな、テキサスが来るわ」

ボブ「戦闘終了、なのか…？」

シャトナー「いいや、始まんのか。俺の欧州を、トカゲ共の好きになんざさせねえ…」

！一匹残らず葬つてやる！」

凜 「そのためにも、今は体制を整えなきや。でも……」 チラツ

卯月 「……恐竜帝国……。争いの種を生むなら……！」

莉嘉 「……」

――。

~~~~ 戦艦テキサス 格納庫 ~~~~

パツシイイインツ

卯月 「あ……」

加蓮 「……」

莉嘉 「つ……あ……」

ボブ 「何だあ？」

リンダ 「ボブ」

ボブ 「ティラミス中尉……」

リンダ 「アンタの機体の損傷も相当でしょ。整備、手伝うわよ」

ボブ 「お、おう……」

李衣菜 「か、加蓮……！幾らなんでも、出会い頭にピンタは……」

加蓮 「ホントはグーで行きたいところを、パーで許してあげただけでも優しいと思っ

てほしいよ?」

李衣菜「加蓮……。ねえ、凜からも何とか言つてよ」

凜「……」

李衣菜「凜!」

加蓮「どうして打たれたかは、本人が一番分かるよね?」

莉嘉「……」

加蓮「分かんないって言うなら、反対の頬もいくよ」

莉嘉「…ゲッターを勝手に動かして、勝手に出撃してごめんなさい…」

パシイインツ

莉嘉「うあ…っ!」

李衣菜「加蓮!」

加蓮「ちつとも分かってない!」

莉嘉「……」

加蓮「無断使用、無断出撃。おまけに乗り込んだゲッターは損傷させたなんて、そんな当たり前の話をしてるんじゃない」

加蓮「莉嘉、もうちよつとで死ぬところだったんだよ!?!」

莉嘉「う…っ」

加蓮「いつも一人で勝手に無茶をして、勝手に傷付いて、一人で無鉄砲する人間にはもう慣れてるから」

李衣菜「それって、私のこと……？」

凜「自覚はあつたんだね」

加蓮「アタシが許せないのは、生きてることの大切さも分かんないで、命を無駄にする人間！」

莉嘉「……」

加蓮「生きてれば、辛いことは幾らでもある。でも、楽しいこと、嬉しいことだつてたくさんある。その尊さを何も分からない内に無駄にして！莉嘉に何かあつたら、日本に残つてる美嘉はどんな思いをするの！」

莉嘉「……お……姉、ちゃん」

奈緒「そこまでだ。ちよつと言ひ過ぎだぞ、加蓮」

加蓮「……」

李衣菜「奈緒！助かつたあ……！」

奈緒「今回の莉嘉の無茶は、莉嘉一人に原因があつた訳じゃない。そうだろ？」

加蓮「けど、アタシは……！」

奈緒「あたしは、加蓮の事は分かつてるつもりだよ」

加蓮「……」

奈緒「それで、莉嘉も加蓮の言いたいことは分かっただろ？」

莉嘉「……うん」

奈緒「なら、この話はこれで終わりだ。加蓮だって、別に莉嘉を責めたい訳じゃないだろ？」

加蓮「それは……」

凜「流石に、死の恐怖を前に一度は逃げ出した奈緒の、言うことは違うね」

奈緒「な……それは言うなよ……。確かに、あたしだって思うところがなかった訳じゃないけどさ」

李衣菜「けど、お陰で助かったよ。私じゃ、凄んだ加蓮を止められないから……」

奈緒「確かに、怒った加蓮は怖いからな」

加蓮「ちよつとく！それじゃあまるでアタシが猛獣みたいじゃない」

奈緒「ま、だからこそ、加蓮が真剣だったのが、こつちまで伝わってくるんだ」

加蓮「……」

李衣菜「へへへ」ニヤニヤ

奈緒「な、何だよ……！」

加蓮「別にー？」

李衣菜「奈緒もたまには、かつこいいこと言うよね」

奈緒「な、っ……！別にかつこいいとか、そういうつもりで言ったんじゃ……」
アハハハッ……

凜「やれやれ……。一先ずは一件落着……。でもないか」

莉嘉「……」

凜「何時まで落ち込んでるの？莉嘉らしくもない」

莉嘉「……やしい……」

凜「え？」

莉嘉「やっぱり、悔しいよ……」

凜「莉嘉……」

莉嘉「李衣菜は、ゲッターじゃなくても戦える。卯月はゲッターを上手に使いこなせる」

凜「……」

莉嘉「アタシは、アタシは……！何にも出来ない！あのシャトナーって人の言う通りだよ！」

凜「……そうだね」

莉嘉「凜……！」

凜 「…私は、卯月ほど優しくもないし、李衣菜ほど甘くもないよ。今の莉嘉に、下手に同情したりしない」

莉嘉 「……」

凜 「莉嘉はどうしたいの？今回の戦いで、莉嘉は何を思った？」

莉嘉 「アタシは……」

凜 「……」

莉嘉 「強くなりたい……」

凜 「ん？」

莉嘉 「強くなりたい！」

凜 「……。分かった」

莉嘉 「え？」

凜 「ゲッターD2の修理は、今日中に終わる。あそこまで扱えたんだ、あとは訓練次第で、どうとでもなると思うよ」

莉嘉 「いいの？」

凜 「今日みたいに、勝手に乗っていかれるよりはね」

莉嘉 「凜……！」

凜 「強くなりなよ。誰かを見返すためじゃなく、自分のためにね」

莉嘉「うんっ！」

凜「それじゃ——」

スタスタ——

莉嘉「うう……っ。よお……しっ！」

ゲッターD2……。

莉嘉「ごめんね、ゲッターD2！こんなボロボロにしちやっつて。アタシ、今度は絶対もつと上手く操縦できるようにするよ！」

芳乃「ほ……」

莉嘉「え？あ、えーつと……」

芳乃「ふむふむ……」 ジーッ……

莉嘉「えつと、……何？」

芳乃「ふむ……。ふふっ、良き眼差しでして——」

莉嘉「え……？まなざし……？」

芳乃「希望に満ち溢れ、事実には屈することなく。力強さと、可能性に支えられし、強かな眼差しなのでして——」

莉嘉「よく分かんないけど、褒めてくれてるってことでもいいのかな？」

芳乃「然り——」

莉嘉「へっ、えへへ……」

芳乃「してー、そなたは何故に戦うのでしてー？」

莉嘉「はえ？」

芳乃「そなたの求める力とはー、そなたが進むべき道と果たしてー、交わるものなのでしてー？」

莉嘉「それは……、えっと……」

芳乃「……」

莉嘉「ああもう！まどろっこしい!!」

芳乃「ほー？」

莉嘉「戦う理由だとか、正義とか悪とか、そんなに大事なの!？」

芳乃「……」

莉嘉「確かに、弱いものいじめとか良くないよ？暴力で何でも解決するとか、サイテーだと思う」

莉嘉「だけど、弱いものいじめをする悪い奴をぶっ飛ばして何が悪いの？アタシを子供だつて笑つて、見下してバカにしてくる奴を見返したいつて、そのために強くなつたらいけないの!？」

芳乃「強かな反骨の心ー。打ち付けるほどに強さを増していくー、赤く燃ゆる刀の如

くー」

莉嘉「アタシは強くなる…！凜にもそう言った。アタシが思ってること、世界中に伝えるために、それが要だ…って言うんなら！ランドウだ…って、神様だ…って倒せるくらい強くな…って見せる!!」

芳乃「ふふっ」

莉嘉「な、何…？芳乃が聞いてきたんじゃん！」

芳乃「強き意志ー、強き心ー、強き眼差しー。そなたも正しくー、竜の戦士でしてー」

莉嘉「？ 竜の戦士？」

芳乃「今は精進に励むのでしてー。大丈夫ー、ゲッターはそなたを選ぶのでしてー」

莉嘉「えー…つと、よく分かんないけど、やるよ！ね、アタシは強くなるから、力を貸してよね、ゲッターD2!!」

ゲッターD2「……！」

莉嘉「…？ 今、ゲッターが何か…。ねえ、芳乃……って」

莉嘉「いない…」

つづく

第26話『超気圧の壁!脅威、メガタイフーン!!』

—— 上空。

凜 「——莉嘉、ちゃんと着いてきてる?」

莉嘉 「うんっ☆リーナ達のネオゲッターマシンは、しっかり見えてるよ」

加蓮 「けど、資材が乏しい中で、艦長も気前がいいよね。整備が終わったばっかのゲッターで、実機の訓練をさせてくれるんだから」

凜 「D2の方はともかくとしても、ネオゲッターは損傷は相当酷かったから。動作テストって名目もあるんでしょ」

加蓮 「ちゃんと動かなかきや戦力外通告でもされちゃう?」

凜 「…どうだろ。少なくとも、ネオゲッターの装甲になる鋼G合金はもう予備がないって言ってたし、もしかしたらもしかするかも」

加蓮 「本気で言ってる?…つと、視界にリーナが見えないな…?」

李衣菜 「フンフンフーン♪ゲッターゲッターゲッター♪不滅のマシン、ゲッター口ポ♪」

ギユルウウンツ グルングルンツ

凜 「……李衣菜。ネオイーグル号の調子はどう？」

李衣菜「調子も何も、絶好調に益々磨きが掛かってきたって感じ！不滅のマシン、ゲッターロボはここにありつてね！」

加蓮「浮かれて調子に乗っちゃってまあ……。勢い余って、そのまま真つ直ぐ地面に激突したりしないでよね」

李衣菜「分かってるって！流石にもう素人じゃないんだし、うっかり失速したりしないよ」ピューンツ

加蓮「あ、こら！隊列乱さないの、もうっ」

ピューンツ

莉嘉「2人揃って行っちゃった……」

凜 「……はあ」

莉嘉「どうしたの？溜め息なんか吐いて」

凜 「……このチームは、卯月達とは勝手が違うなと思って」

莉嘉「……？何でもいから早く訓練しようよ！もう時間なくなっちゃうよっ」

李衣菜「莉嘉の言う通り！時間は有限、帰還命令が出るまでにやることやらなきやね」

加蓮「まったく、誰のせいだと思ってるんだか」

李衣菜「だからごめんって。それじゃあ早速……！」

艦長『……聞こえているか?ゲッターチーム各員。応答せよ』

李衣菜「あり?」ズコッ

加蓮「出鼻を挫かれたね」

莉嘉(コックピットの中で、器用にコケるんだなあ……)

凜「こちらネオゲッターチーム。どうかしたんですか?艦長」

艦長『おお、凜くんか。実はな、現在、我々はランドウの通信妨害から離れて交信可能な衛生との通信を試みていたのだが……』

李衣菜「ふむふむ」

艦長『そこで、欧州圏の気象衛星を確認することができた』

凜「それは、おめでとうございます?」

莉嘉「それと、アタシ達を呼び出したことと、何の関係があるの?」

艦長『ああ、その衛星が、ドイツの国境線付近で不可解な気圧の変化を捉えていてな』

李衣菜「不可解な、気圧の変化?」

艦長『うむ。一見するとそれは、規模の大きいハリケーンのようにも見えるのだが、勢力が強すぎるのだ』

李衣菜「勢力が強すぎるって、どのくらい?」

艦長『観測されたハリケーンは、一つの都市をスッポリと覆い尽くしている。何の予

兆もなく、これほどのハリケーンが起こるなど、欧州ではあり得ん』

凜 「欧州で勢力を拡大してゐるつて言う恐竜帝国が、そのハリケーンを起こしてゐるつて言うの？」

艦長『可能性は低くないと見ている。奴等の生み出す兵器には、我々の想像も越えた、突拍子もないものも存在しているのは事実だ』

加蓮 「だから、偶々外にいて、ついでにドイツ側に近い位置にいるアタシ達に、実態を見てきて調べろ、つて事？」

艦長『その通り。だがな……』

莉嘉 「まだ何かあるの？」

艦長『実はな、ドイツでの異変と聞いた途端、シャトナー中尉がこちらの制止も振り切つて出撃してしまつたのだ』

加蓮 「はあ？何それ」

艦長『ドイツは彼の祖国でもある。無理もないと言えば仕方あるまい』

加蓮 「……」

凜 「とにかく、シャトナーと合流して、そのハリケーンの正体を探ればいいんですね？」

艦長「うむ。もし万が一が起こつた場合は、シャトナー中尉を強引にでも引き連れて、

帰還してくれ」

凜 「了解」

李衣菜 「何だか、そっちの方が本懐になってる気もするけど…」

加蓮 「恐竜帝国も現れた今の状況で、戦力を欠くわけにはいかないし。仕方ないんじゃない?」

凜 「無理は禁物。整備が終わったばかりのゲッターに、戦力の少ない状況でメカザウルスの部隊と遭遇戦なんて、避けた方がいい」

艦長 「では、頼んだぞ」 プツンッ

凜 「…厄介なことにはなったね」

加蓮 「全く。こっちは訓練のつもりでまともな準備なんて、何にもしてないよ?」

李衣菜 「ハンデイミサイルキャノンはともかく、ソードトマホークとか、何時もの武装を載せてきたのは正解だったかも」

凜 「戦闘にならない事を祈るか、出来ることを最大限にやるだけだね。莉嘉、訓練は中止。莉嘉は先にテキサスに戻って…」

莉嘉 「アタシも行くよ!」

李衣菜 「え?」

加蓮 「…本気?」

莉嘉「うっ……。そりや、戦闘じゃ足手まといになるかもだけど、最悪って時になったら、ネオゲッター機で、グスタフを連れて帰ってこれるの？」

李衣菜「それは……確かにそうかも」

加蓮「リーナ！」

李衣菜「い、いやでもさ？ テキサスの現在地からドイツの国境線までは結構距離あるわけだし、援軍って言うのも期待できないでしょ？ 頭に血が上ったシヤトナーをフォローしながら、援軍を待つ方がリスクは高いんじゃない？」

加蓮「……」

凜「今回は李衣菜の言うことの方が、一理あるかもね」

李衣菜「でしょ〜！ へへんっ」

加蓮「紛れ当たりで調子に乗らないの」

李衣菜「ちよっと！」

凜「ともかく、グスタフが先行してるなら急ごう。ゲットマシンの私達は先に行くから、莉嘉はその後ろを付いてきて」

莉嘉「了解☆」

凜「間違っても私達の前には出ないこと。調子づいて敵を追い掛けたり、一人で先走らないで。援護と、私達のフォローに徹して。いい？」

莉嘉 「分かった……!」

凜 「よし。それじゃあ私が先頭になる。フォーメーションを変えて行くよ——!」

—— ドイツ国境沿い。

李衣菜 「……いた、グスタフだ!」 グツ

凜 「待って、李衣菜」

李衣菜 「え、ええ?」

加蓮 「ゲットマシンじゃ止まれないでしょ」

凜 「周囲を警戒しておく必要もある。ここは一旦合体するよ」

李衣菜 「そっか、了解。それじゃあ私が先頭で……」

凜 「ううん。周辺を警戒するだけなら、ゲッター2で良い」

李衣菜 「分かりました……」

凜 「それじゃあ2人とも、私に合わせて」

凜 「ゲッターチェンジ!」

ネオゲッター2にチェンジ。地上すれすれの低空飛行で、走行するグスタフを追走。

凜 「シャトナー!」

シャトナー 「……」

凜 「待って、シャトナー!」

シャトナー「…ガキに呼び捨てにされる覚えはねえな」

加蓮（何それ？…ホント何様？）　ボソッ

李衣菜（加蓮、抑えて！）　ボソッ

凜「…止まってください。ヒム・シャトナー中尉殿」

シャトナー「……」

ピタッ

李衣菜「ようやく止まった〜…」

シャトナー「ガキ共が…。一体何のようだ？」

加蓮「何用もへったくれもないでしょ。一人で勝手に飛び出して…。艦長から首に輪

を掛けてでも連れ戻すように言われてるの」

シャトナー「なら、手前えらだけで戻りな。こっちは今急いでんだ」

凜「二人で暴走しても、何も解決しないと思うけど？」

シャトナー「あア？」

凜「故郷の事で熱くなるのはそっちの勝手だけど、それで足並み乱されるのは私達だつて困るんだよ。テキサスに助けを求めてきたのは、そっちでしょ？」

シャトナー「はっ、半人前が。知ったような口でほざいてんじゃねえぞ。手前え、やっぱいけ好かねえな」

凜 「……」

シャトナー 「テキサスに我が物顔で居座ってる他のジャップ共もそうだが、手前はそ
の中でも一番いい好かねえ。自分には怖いものは何もありますんって目えしてやがる。
世の中の事を欠片も分かつちやいねえ、身の程知らずの目付きだ」

凜 「ご忠告どうも。こつちもギリギリで戦ってるつもりなんで。アンタみたいに、
手前勝手する大人にはうんざりしてるよ」

シャトナー 「んだア? 目上に対する口の聞き方が分かつちやいねえよな。おい」

ジャキ…ツ

李衣菜 「しや、シャトナー…!」

加蓮 「何のつもり?」

シャトナー 「大人舐め腐ってるガキにや、キョーイクが必要だろ。なあ?」

凜 「……」

シャトナー 「撃たれたくねえなら、黙ってそこをどきな。そしたら、今日のところは
勘弁してやる」

凜 「……」

シャトナー 「どした、銃口が怖くて返事も出来ねえのか?」

凜 「……」 ハア…

シャトナー「あん？」

凜 「さつさと撃ちなよ」

シャトナー「何い……っ！」 ギリ……ッ

凜 「尤も、分かっているよね？先に撃つたのはそつちなんだから。その後は、自慢のグスタフが五体バラバラに切り刻まれようと、胴体に風穴開けられようと、文句は言わないでよね」

シャトナー「テメエ……！」 ジャキッ

凜 「私は本気だよ」 グッ……

シャトナー「……」

凜 「……」

シャトナー「……」

凜 「……」

シャトナー「……」

凜 「……」

加蓮「……」

李衣菜「……」 ハラハラ……

莉嘉「……」 ドキドキ……

シャツトナー「……チツ」

李衣菜「……はあく……」 ホッ

凜「……異常もないみたいだし、テキサスと合流しよう」

加蓮「そう言えば、ドイツでの異常調査もあつたんだっけ」

李衣菜「見た感じ、ハリケーンって言うほど荒れてる感じはしないし、特別天気が悪
いようには見えないけど……?」

加蓮「寧ろ、雲一つない快晴。衛星のトラブルなんかじゃない?」

凜「衛星の観測ミスの可能性もあるか……。一度艦長に報告して、もう一回衛星にア
クセスしてもらって……」

シャツトナー「馬鹿ガキ共が。何にもねえから、余計可笑しいんだろうが」

加蓮「だから、それを今から確認しようって言うんでしょ」

シャツトナー「間違いねえ。間違いなく、この間のトカゲ野郎が絡んでやがんだ……!ど
こに隠れてやがる?!」

李衣菜「あ、待って!」

加蓮「こつちの話なんか聞きやしない!全くなんなの?」

凜「……」

李衣菜「凜、テキサスと交信とれた?」

凜 「…いや」

李衣菜 「え？」

凜 「可笑しい。テキサスと通信できない」

李衣菜 「どういう事？別に天気も悪くないし、周りに通信を妨害するものなんて…」

莉嘉 「リーナ、凜！大変だよ！」

李衣菜 「莉嘉！何があったの？」

莉嘉 「メカザウルスの部隊だよ！真っ直ぐこっちに向かつてる！」

李衣菜 「ええ！テキサスに連絡できない、このタイミングで…!？」

加蓮 「やっぱり恐竜帝国の仕掛けた罠だったって事…!」

凜 「……」 ピッピッ

莉嘉 「このままでと、飛び出してっちやったシャトナーと正面から殴りあいだ！」

加蓮 「結局そうなるの？全くどうしようもない！」

李衣菜 「凜！シャトナーを追い掛けるよ！あんな奴だけど、今のテキサスには大切な

仲間の一人だ！」

凜 「…分かつてる。莉嘉も付いて来て」

莉嘉 「了解☆」

加蓮 「いいの？」

凜 「テキサスと通信できない以上、一人にする方が却って危険かもしれない」

凜 「私が先行する。莉嘉は先にライフルを構えておいて、後方から援護を！」

莉嘉 「分かった！ゲッターライフル!!」 ジャキツ

凜 (敵の部隊はホントにメカザウルスだけ…。量産型ダイノゲッターはいない。明らかかな陽動…。とはいえ、今は乗るしかないか…)

凜 「行くよ…。ネオゲッター2!!」

ギユオツ

背中のバーニアに火を入れ、加速。瞬時に迫るメカザウルスの部隊を視界に捉え、左腕のドリルアームをメカザウルスに向けて突き立てる。

凜 「プラズマドリルストーム！」

メカザウルス 『!?』

凜 「ドリルアームツ!!」

プラズマの旋風でメカザウルスの動きを牽制し、脚を止めたメカザウルスをすかさずドリルアームで貫き、破壊する。

メカザウルス 『グギユルアアアアツ!!』

凜 「！」

牙を剥き出したメカザウルスの背後からの攻撃をタッチの差で躲し、

凜 「ドリル——！」

回転するドリルの側面を、メカザウルス目掛け振りかぶり、

凜 「——ラリアットオ!!」

文字通り、ラリアットの要領で腕を振り抜き、メカザウルスを打ち砕いた。

凜 「ドリルアームガン！」 ジャキッ

右手を収納して銃口を伸ばし、プラズマの弾丸で正確にメカザウルスを射抜きながら、敵陣中央で立ち回るグスタフに接近する。

凜 「やっと思い付いた」

シャトナー 「何しに来た!?!とつとテキサスに帰りやがれ!」

凜 「ここまで来たら、もう他人事じゃ済まないから。取り敢えずは、現状を切り抜けるよ!」

シャトナー 「足手まといなんだよ!分かんねえのか!?!」

ドウッ

メカザウルス 『ギヤアツ!?!』

ドウッ

メカザウルス 『グワアツ?!』

グスタフとネオゲッター2を包囲したメカザウルスを、遠方からゲッターD2のライ

フルが狙い撃つ。

莉嘉「そう言うのは、もっとこっちの実力を知ってから言つてよね☆」

シャトナー「…チツ」

凜「いい射撃だよ、莉嘉」

莉嘉「へっへっん☆みんなが訓練に付き合ってくれるお陰で、今じゃ3発に1発は命中するようになったもんね!」

凜「李衣菜よりは早い上達だ」

李衣菜「ちよっ…!どうしてそこで私の名前が出るの…!」

加蓮「反動計算出来なくて、初弾を明後日の方向に飛ばした人じゃ、文句は言えないよね?」

李衣菜「うっ…」

シャトナー「手前えら!ちったあ戦闘に集中しやがれ!!」

加蓮「そんなの分かつてるっての。こっちは凜が優秀だから、凜メインの時はするこ
となくって退屈なんだから。…どっかの誰かさんがメインの時と違って」

李衣菜「最後まで返す言葉がない…」

凜「この…っ!」

ドリルアームガンを単発射撃モードから連射モードに切り替え、群がるメカザウルス

を一掃していく。

メカザウルス『キシヤアアアアッ!!』

莉嘉「! 逃げるの?」

シャトナー「逃がすか! 待ちやがれ!!」

李衣菜「あ、待って…! 凜!」

凜「……」 クイツ

シャトナー「吹き飛びやがれえ!!」

ズドンッ

メカザウルス『!!?』

背中から延びるロケット砲で、メカザウルスを撃ち抜く。

シャトナー「へっ、どんなもんだ!」

李衣菜「今ので、全部?」

加蓮「だとしたら、あんまり手応えが無いんじゃない? こつちをおちよくつてるみたい」

凜「…あながち間違いでもないかも」

李衣菜「え?」

莉嘉「あつた! 南西の方向にまだメカザウルスがいるよ! ……何か逃げてくみたいだけ

ど」

シャトナー「構うことはねえ!トカゲ野郎は一匹たりと逃がしてたまるかよ!」

凧 「…余計なことを」

加蓮「凧?」

凧 「何でもない。ともかく、シャトナーを追うよ」グツ

こうして、ドイツ国境沿いから、ドイツ国内へと進んでいった――。

――市街地。

メカザウルス『……』グルルウ…

シャトナー「追いかけてこもここまでだぜ?これでトドメだ!」

メカザウルス『グギャツ!?!』

グスタフの腕から延びた鞭のようなヒートワイヤーが、メカザウルスの首に巻き付き、断ち切る。

シャトナー「はっ!余計な手間かけさせやがって…」

凧 「市街地…。どうやら、目的地には到着したみたいだね」

李衣菜「どういう事?」

凧 「敵の動きで気付かなかった?連中は明らかに、私達を誘い込んだ」

李衣菜「確かに、攻撃は散発的だったし、撤退のタイミングが不自然ではあったけど

…

シャトナー「丁度いいじゃねえか。トカゲ共が何を企んでいようが関係ねえ。蛇でもサラマンダーでも、何でも出てきやがれてっんだ！」

加蓮「…ねえ、凜が陽動に気付いてたのに、強引にでも引き留めなかったのって…」

凜「概ね、シャトナーと同じだよ」

加蓮「やつぱり。それでいいの？」

凜「テキサスと通信できない以上、リスクはあつたけど、相手の手の内をギリギリまで見極めたかった。それが分からない内にこつちから退くのは、何か負けた気がして嫌だから」

加蓮「出た…。まったく、クールな振りして、すぐ熱くなる」

凜「ごめん。でも、こつちだつて乗つかつてやつたんだ。恐竜帝国の自慢の手品、見せてもらおうじゃん…！」

「フツフツフツフツ！やはり、猿とは後先を考えぬ、愚かな生き物よなあ？」

莉嘉「だ、誰…!？」

凜「…この声」

「私が用意した監獄に、わざわざ足を踏み入れるとは…！」

李衣菜「加蓮!声の発信元って分かる?」

加蓮「全つ然。って言うか、この街全体から、声が響いてきてる…!!」

李衣菜「街全体…?それじゃあ、あいつの言う監獄って…」

シャトナー「何もんだ!?!こここそ隠れてねえで姿を見せやがれ!!」

「ハツハツハツ!まあ、そう焦るな。今のはほんの、デモンストレーションだ。貴様らが足を踏み入れた地、その主が誰であるかを証明するためのな」

シャトナー「ふぎけやがって!人のいなくなった街を勝手に間借りしやがって!とんだ狸野郎がいたもんだぜ!」

「狸とはご挨拶だな。よかろう、ならばしかと、その目に焼き付けるが良い。貴様らを処刑する、その執行人の姿をな」

ズズズズズズズ…ツ

莉嘉「な、何…?地震!?!」

シャトナー「違う!そんなちやちなもんじゃねえ。コイツは…!!」

凜「加蓮、地下をスキキャンして!」

加蓮「もうやってる。大きいのが来るよ!」

「ふはははははははっ!!」

李衣菜「あれって、でっかい塔…?中心に恐竜の頭が付いてる」

加蓮 「いかにもハ虫人類らしい、悪趣味なデザイン」

「その余裕が何時までもつかないかな？ 貴様らには最早、何の猶予も残されてはいないぞ」

凜 「…やつぱり」

莉嘉 「何が？」

凜 「ボールが復活してたからもしかして、と思っただけど、まさかアンタまで蘇ってた

とはね。——バット將軍！」

バット 「久しいな。まだ生きておったか、ゲッターの小娘」

李衣菜 「誰…?」

加蓮 「將軍ってことは、元は恐竜帝国の偉い人だったんでしょ。で、何か因縁でもあったの？」

凜 「思い出すと胸くそ悪くなるって因縁が一個ね。そんな訳だからさっさと地獄に却ってもらおうよ！」

バット 「フハハハハッ!! そう邪険にするな。久方ぶりの再会、私は嬉しいぞ？ こうして黄泉路より舞い戻り、ゲッター、今度は貴様らを地獄の釜の底に叩き落とせるのだからなあ!!」

李衣菜 「一々言い方が大仰なんだよ！ 歌舞伎か日本舞踊の人なの?!」

加蓮 「もしくは、舞台志望の人だね。ミュージカルの」

凜 「気にするところが違うよ、2人共」

バット 「見るがいい!メカザウルス・メガタイフーンの力を!!」

凜 「!」

ウウウウウウウ……ンツツ

加蓮 「……? 何が起こってるの?」

莉嘉 「あ!空を見て!」

加蓮 「え?」

莉嘉 「空が、さつきまであんな晴れてたのに!」

李衣菜 「急に雲が出てきて……。これは……!」

市街地をすっぽりと覆うように、巨大な竜巻が周囲を包む。

バット 「見たか!これこそがメガタイフーン的能力!貴様らを囚える大竜巻の監獄よ

!!

加蓮 「テキサスが観測した、局地的なハリケーンの正体……!」

シャトナー 「けっ!たかが竜巻一つで大仰に!こんなもん!」 ジャキツ

威勢よく放たれたロケット砲が、竜巻の壁に激突して、しかし霧散して消える。

シャトナー 「何!?!」

バット 「はははっ!!どこまでも愚かな種族よ!メガタイフーンの引き起こす竜巻は神

の暴風をも凌駕する！絶対にして不可侵の超気圧よ!!」

李衣菜「グスタフの火力がダメなら、私のゲッターのプラスマサンダーで！」

莉嘉「ゲッターD2のゲッタービームも！」

凜「2人共止めた方がいい。エネルギーを無駄に消耗するだけだよ」

莉嘉「けど、それじゃあアイツの思い通りじゃん！」

凜「そうかもしれないけど、それなら竜巻にぶつけるエネルギーを、別の相手にぶつけた方が手っ取り早い」

李衣菜「そっか！竜巻を発生させてる大本を叩けば……！」

バット「ふん……。力の差を見せつけられても闘志を失わぬとは。流星の蛮族！良からう——」

メガタイフーンの周囲から小さなメガタイフーンと、量産型ダイノゲッターが姿を現す。

バット「貴様らがここで処刑される運命は変わらん！矢引き剣折れ、最期の闘志の一片が枯れ果てるまで、付き合ってやろうぞ!!」

凜「言われなくつても、どうせ逃げ場なんてないんだ。やれる限りの事はさせてもらう！」

シャトナー「ケッ！仕方ねえ、やってやらあ!!」

バット「往け!メカ・タイフーン共、ゲッターを処刑するのだ!!」

莉嘉「ひっ!」

小さなメガタイフーン、メカ・タイフーンが大蛇のように体をくねらせ迫る。

凜「…胴体の部分が触手みたいになって、それで自由に動けるのか」

莉嘉「うえ〜!何か気持ち悪い!」

凜「莉嘉は下がって。相手は予測出来ない動きで迫ってくる。落ち着いて敵が見える位置で、射撃で応戦して」

莉嘉「う、うん…!分かった!」

凜「よし、何とか狙いをこっちに…」

ガク…

凜「…?」

メカ・タイフーン《——!!》

凜「くっ…!」

頭部まるごと使ったメカ・タイフーンの突進を紙一重で避けるが、メカ・タイフーンが地面に激突した衝撃で生じたアスファルトの断片を浴びて、ネオゲッター2のバランスが崩れる。

凜「うあ…っ!」

莉嘉「凜！」

凜「大丈夫！こっちは平気……！」

李衣菜「でも、何かあった？」

加蓮「今の攻撃、凜ならギリギリじゃなくても躲せた筈じゃない？」

凜「……。ゲッターの動き、左半身の挙動が鈍い気がする」

李衣菜「ホント？ちよつと待つて、ゲッターをスキャンしてみる……」ピツ　ピツ

メカ・タイフーン《!!》

凜「この……！」

動きの鈍ったネオゲッター2に、構わず突撃を続けるメカ・タイフーン。

ズガンツ

凜「……！」

メカ・タイフーン《!!??》

シャトナー「言うまでもねえ！足手まといは下がれ!!」

加蓮「こっちはゲッターのご機嫌も伺わなくちゃいけないってのに、こんな時まで

やつかんでこないでよ！」

凜「李衣菜、原因は掴めた？」

李衣菜「電送系統でエラーが起きてる……。間違いなく原因はこれだと思うけど……」

凜 「今何とか出来そう?」

李衣菜 「コンピューターのスキャン結果だから、こればかりは…。一度マシンを止めて、直接見てみないと分かんないよ」

凜 「こんな状況で、止めるって言われても…」

メカ・タイフーン 《!!》

凜 「ちいっ…!」

莉嘉 「うおおおおおっ!!」

加蓮 「莉嘉!!」

ネオゲッター2に襲い掛かったメカ・タイフーンとの間に、ゲッターD2が割って入る。

莉嘉 「ゲッタービー?!ームツ!!」

メカ・タイフーン 《?!?!》

正面からゲッタービー!!ムを放ち、撃墜。

凜 「来ないで言っただでしょ!」

莉嘉 「だからって、後ろで黙って見てるなんて出来ないよ!」

凜 「混戦になれば莉嘉だって危険だ!今は自分の安全を考えて!」

莉嘉 「卯月もリーナも、みんな乗り越えてきた道なんだ!アタシだって、やってみせ

る！」

凜 「感情で言ってるんじゃない！このままじゃ、こつちも莉嘉も！」

シャトナー 「ガキ共！喧嘩してる場合じゃねえぞ!!」

李衣菜 「凜、飛んで！足元が！」

凜 「何…?」

李衣菜 「崩れる…！」

グラア…

ネオゲッター2とゲッターD2が揉み合っていた地面が沈下し、瓦解していく。

莉嘉 「な、何これ!？」

凜 「ゲッターが、落ちていく…?!」

加蓮 「早く離脱して！」

凜 「…ツツ！ダメだ、バーニアに火が入らない…！」

加蓮 「こんな時に、マシントラブルって…」

莉嘉 「きやああああああああ——!!?」

突如出現した大穴に呑み込まれていくネオゲッター2とゲッターD2。

シャトナー 「チツ…！言わんこつちやねえ」

バット 「…彼奴らめ…！よもや地下空間に落ちるとは…」

シャトナー「……ほお。この先にや、余程見られたくないもんがある」と見たぜ」

バット「ネズミが!行かせると思うか?」

シャトナー「はっ! こういう暗くて湿っぽいところに潜り込むから、ネズミってんだろが!」 ドシュツ

バット「むうっ!?!」

グスタフの放った弾丸が宙空で弾け、眩い光が周囲を包む。

バット「閃光弾…!?! 目眩ましなど、猪口才なあ!」

シャトナー「へっ、センサージャミングのおまけ付きよ。AI制御だつて追えやしねえ。手前えらとの遊びを一旦お預けだ」

大穴に飛び込んで消えるグスタフ。

バット「おのれえい! 追え! 連中を逃がすな! 草の根分けても見つけ出し、必ず血祭りに上げてくれるわあッ——!!」
つづく

第27話 『戦いは誰が為に』

莉嘉「——う、うゝ……ん……。待つ……。お姉……ちゃん……。それ、カブトムシのゼリー

——」
莉嘉「はっ！……あ、あれ……？」

加蓮「お、起きた？」

莉嘉「加蓮……。あのね、今部屋でお姉ちゃんが、ペットのカブトムシ用のゼリーを……」

加蓮「どんな夢見てたの？ 一体……」

莉嘉「え……。夢？」

加蓮「まだ夢見てる？ 美嘉は莉嘉が日本に置いてきたんでしょ」

莉嘉「……そっか、夢。夢か……」

加蓮「ようやく目が覚めた？」

莉嘉「あ、うん……。そうだ、アタシ、ゲッターで真つ逆さまに落ちて……。そう、ここ

は!？」

加蓮「ようやく頭が回ってきた感じだね。って言っても、アタシもここがどこかよく分かってないんだけど」

莉嘉「よく分かんないの?…ここ、洞窟?」

加蓮「つて言うよりは地下の空洞つて言った方が近いみたいだけどね」

莉嘉「地下の、空洞?」

加蓮「うん。凜が壁面を凝視しながらぶつぶつ言つてた」

莉嘉「凜が? そう言えば、リーナもみんないない…」

加蓮「リーナは落下したゲッターの調子を見てるよ。特に、ネオゲッターの方はちよつとトラブつてるみたいだしね」

莉嘉「そっか…。凜は?」

加蓮「この空洞の奥を調べに行つたよ。シャトナーと一緒に」

莉嘉「シャトナーも?」

加蓮「うん。アタシ達が落ちた後を追つてきたみたい。何か、ここは恐竜帝国にとつても、見られたらヤバイトコみたいでさ」

莉嘉「ヤバい? ここが、恐竜帝国の拠点か何かってこと?」

加蓮「お、リーナよりは鋭い」

莉嘉「そう? へっへくん、やった☆」

加蓮「喜んでられる状況でもないけどね。アタシ達はずまり、敵陣のど真ん中に落ちたつてことなんだから」

莉嘉「あ……」

加蓮「どの辺に落ちたかは、偵察に出た凜達の結果待ちつてことで、アタシ達は少しのんびりしようか」

莉嘉「い、いいのかな？」

加蓮「ん？」

莉嘉「だって、敵の基地に入っちゃったってことなんですよ？そんな悠長にしてて、いいのかなって」

加蓮「何〜？もしかして、怖い？」

莉嘉「そ、そんな事……ないよ」

加蓮「まあ実際のところ、アタシ達には何にも出来ないしねえ」

莉嘉「……」

加蓮「アタシ達に出来ることは、精々ゲッターに乗って戦うことだけ。まあそれでも十分スゴい筈だけど。だったら、英気を養っておくのも、大事なことじゃない？」

莉嘉「えーきを……？」

李衣菜「ふい〜。何とか一段落……」

加蓮「あ、帰ってきた。おつかれ〜」

李衣菜「加蓮。まあね……」

加蓮 「それで、ネオゲッターの調子は？」

李衣菜 「…本調子ではないよ。まったく、帰ったらチーフに文句言わなきゃ…」

加蓮 「生きて帰れたら、でしょ」

李衣菜 「そういう不穏なことは言わないでよ…」

加蓮 「絶対生きて帰ろう！…って、士気を高めてあげてるの」

李衣菜 「文句言うために絶対生きて帰るって、何か可笑しくない？」

シャトナー 「はっ、敵地にいるとは思えねえな。相変わらず姦しい連中だ」

李衣菜 「シャトナー！それと凜も、偵察おつかれ」

凜 「李衣菜の方もね。全員揃ってるなら都合がいい。一旦状況を整理しよう」

――。

凜 「――…先ずはこれを見て。シャトナーが持ってたカメラで抑えたモノだけ」

加蓮 「へえ、都合よくカメラなんて持ってたんだ？」

シャトナー 「ドイツにいた頃から強行偵察なんてもんをやらされてたんだ。俺のグス

タフにやあ、その為の道具が一式、備えてあんのさ」

凜 「話を戻すよ。私達が知ってるのと、形は違うけど、作業用の機械にコンテナ…」

連中は明らかに、この地下に拠点を築くつもりだね」

李衣菜 「まさか、人の居なくなつた街を自分達の居住地にして、地上侵略の足掛かり

にするつもり？」

シャトナー「間違いないな。：漁夫の利たあこの事だぜ」

加蓮「ホント、ランドウとの戦いに乗じてくるなんて、最低」

凜「人間の倫理観をハ虫類にぶつけても仕方ないよ。問題は、これからどうするかだ」

莉嘉「そんなの、何時もみたいにここをぶつ壊しちゃえばいいんじゃない？」

凜「それが出来る状況なら、ね」

莉嘉「…？」

李衣菜「グスタフやゲッターD2はともかく、ネオゲッターは不調を解消出来てないから…」

凜「そのネオゲッターは？」

李衣菜「二応、応急処置はしてあるよ」

凜「不調の原因は？」

李衣菜「ああ。左半身の伝達系統の電送ケーブルが一つが、交換してない劣化品でね。それで、戦闘の急制動に耐えきれなくてオーバーヒートしちゃったんだ」

凜「そう。私のせいだね、ごめん」

李衣菜「そ、そんな…！凜のせいではないよ。最終チェック怠ったチーフのせいだし、

普段真ゲッターに乗ってる凜じゃ、ネオゲッターは何て言うか…使いづらいだろうし」

凜 「それは奈緒の代わりに2号機を担当することになった時に、把握してたよ。機体の限界性能を把握できない、私が未熟だっただけだ」

加蓮 「はいはい。反省するのはいいことだけど、それでどうするの？ここを脱出するって言っても、一筋縄じゃないよね」

李衣菜 「結局、私達が落ちたのってどの辺りなの？先ずはそこからじゃない？」

凜 「…ここは、多分拠点建設の資材置き場だよ」

加蓮 「そういや、物資っぽいものが置いてあるよね。雑に」

凜 「連中が作業してると真ん中に落ちなかつただけでも、運がいいよ」

シャトナー 「まあ、連中にも侵入者の報は知らされてるだろ。連中、目の色変えて探し回ってやがる。ここが見つかるのも、時間の問題だ」

凜 「どこに行くの？」

シャトナー 「決まってるだろ。トカゲ共にお灸を据えてやるのさ」

加蓮 「話聞いてた？今のアタシ達の状態じゃ、お灸を据えるどころじゃないでしょ」

シャトナー 「手前えらの状況なんざ知ったことかよ。ここの街はドイツの街で、俺が守らなきゃならねえ街だ」

李衣菜 「まさか、たった一人で何とかする気？」

シャトナー「まあ、何とかしてみるさ。そのために、これまで拾ってきた命だ」

莉嘉「気楽すぎじゃない!?今は、生き残ることを考えようよ!」

シャトナー「おう、手前えらはそうするといいさ」

莉嘉「…え?」

加蓮「囹をやるって言うつもり?」

シャトナー「はっ、そんなつもりはさらさらねえな。俺は、俺の気に入らねえトカゲ野郎をぶつとばずだけさ」

李衣菜「でも!それって…」

シャトナー「他人の事を考えられるほどお人好しじゃないんでね。手前えらも、手前えらの事を考えな」

李衣菜「あ、シャトナー!」

駆け足でグスタフに乗り込み、起動させる。

グスタフ「さあトカゲ共、これまでの屈辱、晴らさせてもらおうか!」

李衣菜「シャトナー!」

空洞を抜け、奥へと進んでいく。

加蓮「…行っちゃったね」

凜「ネオゲッター2なら、ドリルで地上に上がれる。ゲッターに急ぐよ」

李衣菜 「っ……！ホントに、本当にそれでいいの？」

加蓮 「本当について、じゃあどうする？」

李衣菜 「どうするって、そりゃあ！」

加蓮 「整備不良のネオゲッターで、どこまで戦える？悔しいけど、シャトナーの作戦に乗るしかない」

李衣菜 「でも、シャトナーは死ぬつもりだ！」

加蓮 「それは……」

李衣菜 「加蓮はそれでいいの？今を生きてる命を、それを投げ捨てようとする人を放っておいて。生きてる内にやれる事を全力でやる。そうじゃないの!？」

加蓮 「……それを言うのは、卑怯だよ」

凜 「じゃあ、李衣菜はどうする？今のネオゲッターじゃ、今まで通りの戦い方は出来ないよ？」

李衣菜 「だったら、方法は一つだ」

莉嘉 「その方法って……？」

凜 「……」

李衣菜 「ゲッターは一つじゃない……！私は、ゲッターのパイロットなんだから！」

量産型ダイノゲッター1の頭部を射抜く。

シャトナー「手前え、何しに來やがった!?!」

李衣菜「決まってる! 恐竜帝国の野望を砕きに來た!」

ゲッターD2のコックピットで、決めて見せる。

シャトナー「氣取ってる場合かよ。何故逃げなかつた?」

李衣菜「この基地を壊しちやえば、みんな帰れる! テキサスの障害も排除できる。一石二鳥じゃん!」

シャトナー「簡単な話じゃねえ。あの敵を見ろ、たつた1機や2機の戦力でどうこうできる代物じゃねえ。小娘はとつと逃げ帰りな!」

李衣菜「ならシャトナーはどうするの?」

シャトナー「手前えの知つたことかよ。俺の命の捨て場所は、自分で決めるだけだ!」

李衣菜「それが氣に入らないって言うから、私はここにいる!」グツ
ゲッターD2が飛び出す。

シャトナー「手前え!」

李衣菜「ここで見てろ! ハ虫人の動かすゲッターなんか…!」

Dゲッター1「!!」キユオ…

李衣菜「負けてたまるかア!!」

量産型ダイノゲッター1が放つゲッタービームを、トマホークで真っ向から迎え撃ち、叩き割る。

シャトナー「何っ!?!」

李衣菜「そんなヒョロいビームで……これが本当の——!」

ビームを払い消し、トマホークを振り被る。

李衣菜「ゲッターの力だああっ!」

一閃。その一撃で叩き伏せた。

Dゲッターs「……!」

李衣菜「トマホーク、ブウーメランッ!!」

Dゲッター2・3「?!?!」

量産型ダイノゲッター1を破壊した爆炎から姿を現したゲッターD2が投射したトマホークが、量産型ダイノゲッターの首を刈り取る。

メカザウルス『キシヤアアアアッ!!』

李衣菜「はっ! トマホークを手放しちやえば丸腰って?」

得物を手放したゲッターD2に殺到するメカザウルスに対し、拳を握り、

李衣菜「甘いっ!」

こちらに牙を剥くメカザウルス胴体を、ゲッターD2の拳が突き抜ける。

李衣菜「トマホークなんかより、こっちの方が慣れてる！」

李衣菜「——ゲッターキック!!」

群がるメカザウルスに蹴りを浴びせ蹴散らしていく。

李衣菜「ほらほらほらあ!! どうしたの!?! この程度じゃ私は、ゲッターは止められないよ!」

シャトナー「チイっ!!」

腕部速射砲が火を放つ。

シャトナー「ンだア…? あンガキ、妙に勢い付きやがって…」

加蓮「あちやく…。もうやっちやってたか…」

シャトナー「なっ…!?! ネオゲッターロボ…?!」

加蓮「やっほー。アタシらに勝手言つたわりには、やられっぱなしだったみたいじゃん」

シャトナー「ガキ共が、揃いも揃って…!」

加蓮「そ。子供だから、気に食わない奴の言うことに黙って従うってのが出来なくて」
シャトナー「…チッ」

莉嘉「凜、ゲッターの調子はどう?」

凜「()まで動かしてみた感じ、やっぱり左半身の挙動に少し違和感があるかも。」

：最初から思いつきり動かせば気にならないけど」

莉嘉「それじゃ、最初から全力だ！」

加蓮「莉嘉、李衣菜がD2に乗ったから仕方なく乗せたけど、フォローとかは考えなくていいからね。とにかく異常がないか計器を見て、操縦桿だけ握ってて」

莉嘉「うん……！戦闘は凜と加蓮に任せるよ☆」

凜「私達自身の心配するより、寧ろ……」

敵陣の中央で大立ち回りを演じるゲッターD2に目を向ける。

莉嘉「リーナが、どうかした？」

加蓮「うん。いつもより、前に出過ぎてるな、って」

凜「ずっとチームを組んで戦ってた加蓮が言うって事は、やっぱり私の勘違いじゃなかったんだ」

莉嘉「ええ？いつもとおんなじに見えるけど……」

加蓮「リーナが何時も前に立って戦うのは、相手の狙いを少しでも仲間から逸らすため。自分の中の、恐怖を押し殺すためだから」

莉嘉「え？」

加蓮「付き合わされる方は堪ったもんじゃなけどね」

凜「それが、今は違う」

加蓮「うん。リーナの戦い方に恐怖を振り払う勢いとか、必死さが感じられない。何て言うか、水を得た魚みたいに生き生きしてる感じ……」

凜「……」

李衣菜「ゲッターアールライフルツ!!」

Dゲッター2「!!」

李衣菜「そこおツ!!」

素早く機体を旋回させ、背後に回っていた敵機をライフルで狙い撃つ。

李衣菜「一つ!」

Dゲッター3「!」

李衣菜「二つ!」

Dゲッター's「?!?!」

李衣菜「三つ、四つ!?!?!」

李衣菜（へへっ……!何だか変なの!戦ってるのに、心が軽いみたい。何にも怖くなく

て、敵がぬいぐるみに見えるちゃう!）

Dゲッター1「!!」

李衣菜「へえ、やるじゃん!」

相手のゲッタービームをひらりと躲して、口元に笑みすら浮かべてみせる。

李衣菜「分かってないんだよねえ！ゲッターの使い方って言うのがまるでさア！ゲッターって言うのは…」ググツ

片手にライフルを、片手にトマホークを担う。

李衣菜「こう使うんだツ!!」

擦れ違う相手をトマホークで切り刻み、距離のある相手にはライフルを乱れ撃ち、葬り去る。

李衣菜「これでまとめて12…って、12って何て言うんだっけ？十二、つ…？まあいいや。どんどん掛かってこいッ！」

李衣菜（やれる…！今ならどんな相手でも、私は負けないッ！）

凜「…前に、ネオゲッターに乗ってた頃、卯月が言ってた。ネオゲッターは他のゲッターとは勝手が違う。ネオゲッターだと、それまで何とも思ってた相手が大きく、怖く感じたって」

莉嘉「それって、どゆ事？」

加蓮「ネオゲッターとゲッターの違い、ね…」

凜「李衣菜にゲッターD2を任せしたのは、失敗だったかもしれない…」

李衣菜「ゲッタートマホーク!!」

ジャキツ

李衣菜「オラア！オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラアッ!!」

メカザウルス『ギヤアアアアアアアアッ!!?』

李衣菜「アツハハハハハッ!!ハハハハハハハハハッ!!」

Dゲッター『!!?』

ライフルを手放し、両手にトマホークを携え、群がる敵を紙切れのように切り刻んで切り伏せていった。

李衣菜「何々？もうお終いなのか？手応えがないなあ」

シャトナー「おい！調子に乗んのもそれぐらいにしとけ」

李衣菜「いいでしょ！勢いに乗った方が！見て、でっかい動力炉。間違いなく、メガタイフーンのだよ」

加蓮「凜はどう思う？」

凜「……動力炉からのエネルギーパイプ、一番太いのが上に伸びてる。多分、この基地のメイン動力も兼ねてるんだと思う」

莉嘉「じゃあ、アレを破壊すれば！」

李衣菜「メガタイフーンはもちろん、この基地も無力化できて、一石二鳥！ウツヒョ〜！最高にロククな展開じゃん！」

シャトナー「調子づいて浮かれやがって、小娘共がよ……」

「ふうむ…。たかだか三匹とは言え、窮鼠も追い込まれば噛み付くという事か」

李衣菜「バット将軍!?!どこにいるの?隠れてないで出てこいッ!!」

バット「我が新たな牙城でこれほどの狼藉…。最早、生きて帰れるとは思わぬことだ」
ズズズズ…

シャトナー「ンだあ?この揺れは…」

加蓮「地中深くから熱源。地面から何かがこつちに迫ってる。…来るよ!」

李衣菜「——?!?!おっと!」

地面を裂いてけたたましい音を響かせるドリルを寸で回避。そして、ドリルの破碎に続くように、それは姿を現す。

加蓮「あれって、前にデータで見たことがある。確か、メカザウルス・ギガって名前じゃなかった?」

凜「いや、よく似てるけど、細かいところのデザインが違う」

シャトナー「どつちにせよ、真打ち登場って訳かよ。…クソが」

バット「蛮勇に猛る愚かなサル共よ、これより先に進みなければ来るがよい。このメカザウルス・テラを、見事討ち滅ぼすことが出来るのならばなア!!」

李衣菜「へっ、ギガの次だからテラだって?ただの改良型に、負けてたまるかアッ!!」

バット「ほう、勇ましいな。小娘よ」

李衣菜「ゲッターアアア！ビィーームツ！！」

ズアツ

莉嘉「きゃっ！」

加蓮「っ…リーナ！ちよつとは加減を…」

凜「…無駄だ」

加蓮「凜？」

ゲッターD2の額から放たれた極大のゲッタービームが生んだ空洞全体を包む黒煙が晴れた先には、

バット「…どうした？貴様の力はその程度か？ゲッターロボ」

李衣菜「な…何っ!？」

莉嘉「あれって、対ゲッター線装甲って奴？」

凜「いや、ゲッタービームがメカザウルスに命中する寸前でビームが歪められた」

加蓮「つて事は、装甲じゃなくて、エネルギーバリアみたいなの？」

李衣菜「なら、直接ぶった斬ってやるまでだ！ゲッタートマホオークツ!!」

バット「面白いッ！やってみるか!!」

2本のトマホークを握り締め、肉薄するゲッターD2に、対するテラもトマホークを構え、迎え撃つ。

李衣菜 「うおおおおお——ッ!!」

バット 「おおお:!!」

2対のトマホークによる鏖迫り合い。当初は加速の勢いを付けたゲッターD2が優勢だったが、

バット 「ふっふっふっ…。フフフフッ!」

李衣菜 「ぐう…!うう…ッ!」

バット 「所詮は勢いだけか?こんなもの、暖簾を押すようだぞ!」

李衣菜 「ぐああッ!」

テラの圧倒的な力に押し切られ、弾き飛ばされるゲッターD2。

バット 「テラ・ミサイル!」

追い撃ちと口部から射出されたミサイルに、躲せずゲッターD2は爆炎に包まれた。

李衣菜 「うあ…あ…ああ…ッ!」

莉嘉 「ヤバッ!リーナを助けなきゃ!」

凜 「今のネオゲッターで、アイツと戦うのは、ちよつと無茶だけど…」

加蓮 「仕方ない?」

凜 「ネオゲッタービジョン!」

ゲッターD2と対峙するテラの背後に素早く回り込み、ドリルを突き上げる。

凜 「ドリルアーム……」

バット 「……ふん」

凜 「うあつ！」

尻尾を打ち付けられ、アツサリと撃沈する。

バット 「どうしたア？ 動きに精細を欠いておるぞ。よもや、一度退けた相手と侮っているのではあるまいな？」

凜 「くっ……！」

莉嘉 「こっちはゲッターが本調子じゃないのに……！」

加蓮 「何て言っても、言い訳にはならないでしょ」

李衣菜 「この……っ、莉嘉……加蓮……！」

バット 「所詮は勢いだけの烏合の衆。真に力を振るいし我がメガザウルス・テラの、その足元にすら及ばぬと言うことだ」

テラが大斧を振り被る。

凜 「っ……！」

バット 「命を以て知れい!!」

李衣菜 「コンの……ッダアアアアアアッ!!」

強引に持ち直したゲッターD2が、テラを横からタックルするように飛び付き、体勢

を崩す。

バット「むおおお…!?」

李衣菜「莉嘉も、加蓮も凜もみんな、やらせるかああアアツ!!」

そのまま押し倒し、マウンテンポジションでテラを殴打。

バット「おのれえ…!まだ足掻く力があるか!」

李衣菜「このっ、このっ、このツ!!」

バット「ふははは…!しかし、まるで子供の悪足掻きだな」

李衣菜「今の私は、誰にも負けないんだ…!キャプテンだって、幹部だって恐竜帝国

だって、私は——!」 キュオオ…

ゲッターD2の額に、ゲッター線が集束していく。

バット「ほう…。この距離でゲッタービームを撃つか。貴様も只では済まんぞ?」

李衣菜「けど、そっちだってバリアは張れない。一蓮托生よツ!」

バット「ほう…。小娘にしては殊勝な覚悟だ」

李衣菜「くらえ!ゲッタービーム…」

バット「だが、なあ!!」 ビカツ

李衣菜「ぐあ…ああ…!」 ビリビリ…ツ

テラの角から放たれた閃光が稲妻のように弾け、ゲッターD2を打ち付ける。

ヒュウウウ…ウン…

李衣菜「え…何…?」

ゲッターD2、機能停止。

莉嘉「リーナ!」

加蓮「前みたいな感じ? D2の機能がシャットダウンした?」

凜「違う。あのビームだ。メカザウルスの発したビームが、ゲッターを強制的にシテムダウンさせたんだ」

李衣菜「くそっ…! どうして… 動けえ!!」

バット「惜しかったなあ、小娘。どうだ? このメカザウルス・テラのパラライズ・ビームの威力は」

莉嘉「パラライズ、ビーム?」

バット「高圧電流で、あらゆるマシンの機能を停止させるのだ。ゲッター線を扱うとはいえ、ゲッターも所詮は機械人形。パラライズ・ビームの餌食よ」

加蓮「それじゃあ、D2は無理矢理無力化されたってこと?」

李衣菜「このっ、このっ…!」

凜「李衣菜、先ずは落ち着いて。ゲッターを再起動して」

莉嘉「でも、こっちから呼び掛けても…」

加蓮「機能停止してるんだから、こっちの通信は聞こえないんじゃない？」
バット「そらッ！」

李衣菜「ぐっ——!?!」

テラにマウントを取るゲッターD2を蹴り飛ばして押し退ける。

莉嘉「リーナ！は、早く助けに行かなきゃ！」

凜「分かつてる。けど……」

メカザウルスs『……!!』

加蓮「黙っては通してくれないみたい」

莉嘉「そんな……！リーナ！」

李衣菜「ぐっ……うう……!!」

バット「フ……ハーツハツハツハツ！遂に、遂にこの時が！忌々しきゲッターロボ！彼奴への雪辱を晴らし、新たな恐竜帝国の礎とする！その瞬間を、このバットが!!」
「やれやれ……。どいつもこいつも、勝つ前に調子づきやがってよ」
バット「むっ?!」

シユルン、と、テラの首に細いワイヤーが絡み付く。

バット「これは……？」

シャトナー「敵より先に勝ち誇った奴アよ、その時点で負けてるって、し分かんねえ

かい？」

バット「貴様は……！」

シャトナー「ほらよッ！」

グスタフの放ったヒートワイヤーから流れた電流が、テラの全身を迸る。

バット「ぬおおおおおッ!!？」

シャトナー「おら！今のうちにその奴を拾って離脱しろ！」

凜「っ……よし」

瞬発力で反応し、倒れたゲッターD2を抱え上げ、テラから距離を取る。

加蓮「アイツ、今までどこに……」

凜「加蓮、操縦、任せるよ」

加蓮「李衣菜のとこ行くの？」

凜「頭に血が上がった李衣菜一人じゃ、本当に足手まといになりかねないから」

加蓮「確かに。こっちは任せて」

凜「お願い」

加蓮「さーて、と。後は奈緒でも居てくれたら、このスペースでもネオゲッター3に

なれるんだけど」

莉嘉「……ごめん」

加蓮「いいって。にしても、3号機のコックピットから慣れないゲッター2で、おまけに整備不良! さて、どこまで出来るか…!」 ギリイ…

バット「貴様あ…! そのような貧弱なマシンで、このテラに勝てると思っているのか?」

シャトナー「さあてな。ま、奴等にや借りが出来ちまつたし、それを返しに來ただけよ」

バット「何、借りだと?」

直後、テラの後方で小さな爆発。

バット「——っ!?! 何だ!?!」

シャトナー「はっ! 線香花火は趣味じゃねえか?」

バット「貴様、何をした!」

シャトナー「大した事あしてねえよ。ちよつとここの電送システムを破壊させて貰っただけだ。この、小型の時限式爆弾でな」

バット「電送システムを…? ……貴様ア!」

シャトナー「基地の機能を落とすのに、わざわざ動力部を破壊する必要なンざねえつてな。これで手前えの虎の子、メガタイフーンもお釈迦様つて訳さ」 ヒヒヒッ

バット「…あの爆発の時か!?!」

シャトナー「煙に紛れるのは得意分野だね。ガキ共もいい時間稼ぎをしてくれたぜ」
バット「おのれえ……！許さんツ!!」

首に巻き付いたワイヤーを逆手に利用し、グスタフを宙に持ち上げ、地面に叩き付ける。

シャトナー「うぐつ……！」

バット「貴様だけは生かしては帰さぬぞ！己が愚行を地獄の底で後悔するが良いわ」
シャトナー「はっ……！ゲッター相手に熱くなつた手前えの落ち度だろうが。大局的に、手前えはもう負けてんのさ！」

速射砲を構え、グスタフがテラと対峙する。

ガコンツ

凜「……李衣菜!!」

李衣菜「このっ、このっ！何で動かないの！何で！」

凜「李衣菜！しっかりして！李衣菜ツ!!」

李衣菜「私は、負けないんだ！私が戦う……。みんなを奪う奴等を……、強い奴、弱い奴……人間を惨めにする奴等と!!」

凜「このっ……！いい加減にして!!」

パチンツ

李衣菜 「……あ……」

凜 「……目、覚めた？」

李衣菜 「凜……？私、ここ……どうして……」

凜 「今までの事、何も覚えてないの？」

李衣菜 「……ううん。何か夢を見てみたいんだけど、でも、ちゃんと覚えてる」

凜 「そ」

李衣菜 「状況は？」

凜 「シャツナーが時間を稼いでくれてる。ついでに、基地の方も無力化してくれた

みたい」

李衣菜 「ホントに？」

凜 「多分ね。そっちの方は、私達を囷にしたみたいだけど」

李衣菜 「スゴいなあ、この状況で。私は……」

凜 「……ゲッターを再起動するよ」

李衣菜 「あ、うん……」

コンソールのパネルを操作するが、反応はない。

凜 「……ダメ、か。完全にイカれてるみたい」

李衣菜 「それなら、私がD2の中を見てきて……あれ？」

凜 「どうしたの？」

李衣菜 「う、うん……。安全装置が外れなくて……。シートから降りられない……」

凜 「……。分かった、私が行ってくる」

李衣菜 「え、でも……」

凜 「スーツのレシーバーはまだ生きてるよね？」

李衣菜 「あ、うん」

凜 「それで私に指示をくれればいから。動けないんだったら、無理しないで」

李衣菜 「う、うん……。ごめん、迷惑掛けるよね。私のせいだ」

凜 「別に。そんな小さいこと気にしないで。それじゃ」

李衣菜 「……」

——！

シャトナー 『ぐっ……このお！』

李衣菜 「!? シャトナーの声だ……。でもどうして？ゲッターの機能は完全に停止して

るのに……？」

シャトナー 『うおおおおおッ!!!?』

李衣菜 「シャトナー！」

加蓮 「——ドリルアームガン！」

バット「むうっ!？」

シャトナー「バカ野郎！余計な真似すんな。手前えは後ろで大人しくしてろ！」

加蓮「助けられてその言い種はないでしょ！ったく」

シャトナー「頼んだ覚えはねえ！おら、攻撃が行くぞ！」

加蓮「!？」

テラのミサイル攻撃を辛うじて躲す。

莉嘉「ちよつと！い、今のはギリギリだったよ!？」

加蓮「ひよいつと簡単に避けられるもんでもないか。やっぱ凜とか奈緒みたいにはいかないわ」

シャトナー「生兵法なら下がりがれ！かえって迷惑だ！」

加蓮「かもしれないけど、正真正銘動かないD2だっているんだよ？素直に引き下がれませんか？」

ドリルアームを突き出す。

加蓮「プラズマドリルストーム！」

バット「ふん。無駄な事」

渾身のプラズマドリルストームは、テラのエネルギーバリアによって弾かれる。

莉嘉「ああ……！やっぱダメなのお!？」

加蓮「クツソ堅いったらありやしない！イカサマなんじゃない？」

バット「貴様のゲッターとは地力が違うのだ！最早、敗北を受け入れて覚悟するのだッ！」

加蓮「誰が！そつちこそ、今の内に調子に乗って、後で足元掬われないように気を付けなよ！」

バット「ハハハッ、精々足掻いて見せるオツ!!」

加蓮「きやあッ！」

ネオゲッター2の周囲に乱れ放ったミサイルが放たれ、爆炎が襲う。

加蓮「もう、すっかり調子に乗っちゃって〜！」

シャトナー「確かに、気に食わねえな」

加蓮「珍しく、意見が合うじゃん」

シャトナー「合ったところで嬉しくもねえがな」

加蓮「何よ、ちよつとは素直になってくれてもいいんじゃない？」

シャトナー「はっ。ならそつちも、素直に退くんだな」

加蓮「グスタフ！どうするつもり!？」

グスタフが前進し、突出する。

シャトナー「うおおおおおッ!!」

加蓮「ちよっと！」

莉嘉「特攻するつもり!？」

バット「覚悟を決めたか。良からう、貴様から地獄に葬ってくれるわアア!!」

テラの腹部の装甲が開き、姿を覗かせた砲門から放たれたエネルギービームが、グスタフに直撃し、爆ぜた。

莉嘉「シャトナー！」

バット「くつくつくつ……。木っ端微塵に爆ぜ……むっ?」

煌々と燃え立つ爆破の炎。その中から姿を見せたのは、

加蓮「あれは……グスタフじゃない……?戦車と、戦闘ヘリ！」

シャトナー「どうだい?ちったあびびったか、トカゲ野郎！」

バット「むう……?!」

シャトナー「グスタフはなア、ヘリと戦車に分離出来んだよツ!!」

戦闘ヘリが内蔵したミサイルと、戦車からのキャノン砲による波状攻撃。

バット「くつ……!猪口才なあ〜！」

シャトナー「流石の大将でも黙ってられねえだろ!いいぜえ、その面が拝みたかったんだ！」

バット「カトンボめ!叩き潰してくれるわ！」

シャトナー「おっと！」

テラのミサイル攻撃を華麗に躲し、地上の戦車砲で反撃。

バット「このお、ネズミが……！」

シャトナー「そらそら、もつと遊んでくれよ」

戦車に狙いを変えたところを、戦闘ヘリが爆撃。

バット「チイツイツ……!!」

シャトナー「ははっ、どうだ？上を意識すれば戦車が狙い撃ち、下を警戒すりやあへ

りの爆撃が手前えを襲う！いいぜ。いい感じだぜ、大将」

バット「調子に乗ってくれろ！そのような小細工……！」

シャトナー「お……！」

テラが動く。

バット「付き合っついてられるか！」

シャトナー「おお……ツ!？」

鈍重そうな見た目からは想像もつかない俊敏な動きで、飛行する戦闘ヘリを捕縛する。

シャトナー「ぐう……！」

バット「単調なパターンの動き、戦車は自動操縦と見た！ならば、それに指示を出す

司令塔を落とせば、一石で二鳥よ！」

シャトナー「はっ！察しいいな…。伊達に大将じゃねえってわけか」

加蓮「シャトナー！」

シャトナー「来るなッ！」

加蓮「ッ！ 格好つけてる場合!?!」

シャトナー「いいから来るんじゃないやねえ！第一、今の手前えらに何が出来る!?!」

加蓮「っ…！それは…!?!」

シャトナー「本当に気に入らねえぜ。手前えらは戦うつてこのホントの意味をこれっぽっちも分かっちゃいねえんだ！」

バット「フンッ！」

テラがヘリを捕縛したアームを強く握り、ヘリの風防に亀裂が走る。

シャトナー「うぐっ!?!」

バット「この状況で仲間割れとはな。つくづく度し難い生き物だ。貴様らサル共は」

シャトナー「全くだ。俺も、柄にもねえことをしてると思うぜ」

バット「…?」

シャトナー「…つたくよお…。ホント、らしくねえぜ。俺は、俺自身の思うままに生きていけりゃあ、それで良かったのによ」

シャトナー「アイツらが、アイツらがいけねえんだ。俺よりも、色んなモノに恵まれてやがる。その癖、それを分からねえで命を捨てようとするアイツらが！」

バット「何の事を言っているのか分からんが、今際の際の言葉はそれで良いか？」

シャトナー「はっ、冷てえな、大将。もう少し付き合えよ」

バット「ふっ、貴様らの茶番に付き合ってやる道理などない」

シャトナー「…：そうかい。なら、冥土の土産に一つ、聞いてもいいか？」

バット「ほう…：殊勝だな、よかろう」

シャトナー「どうしてこつちが本体だと気付けた？メインの司令塔は戦車の方かも知れねえのによ」

バット「ははは…：何かと思えば。そんなもの、貴様が私の攻撃を回避した時点で分かりきっている」

シャトナー「へえ…：そりやまたどうして？」

バット「機械が攻撃を捕捉して躲す挙動と、生物が反射で躲す挙動はどうしても違ってくるものだ。そんなもの、貴様らサル共より優れたハ虫人類であるこの私には、簡単に見切ることが出来るわ」

シャトナー「フフフツ、そうかい。流石だな、大将」

バット「サルの称賛など何の価値にも値せんわ。さあ、これで良かろう。潔く地獄へ

逝けい！」

シャトナー「まあ待てよ。利口な大将だ、このヘリがグスタフの補助動力で稼働して
るつても、とつくにお見通しなんだろうな」

バット「……補助動力、だと？」

シャトナー「おや、気付かなかったかい？1機のマシンが、ヘリとタンク、2機に分
かれるんだぜ？一つの動力で動くわけがねえだろ」

バット「分離時のヘリの動力は、補助動力からと言うわけか！では……！」

シャトナー「主動力は、何処にあるんだろうな？」ニヤリ…

バット「まさか……！」

咄嗟に視線を下に向けた直後、テラの足元から爆発が起こり、火柱が上がった。

バット「うぐおおおおおおッ!!」

シャトナー「よし、今だ！」

戦車の特攻でテラが怯んだ隙に、離脱する。

バット「お……お、お、おのれえええええッ!!謀りおつたな、貴様アアッ!!」

シャトナー「はっ、何言ってるんだ。手前えが勝手に、こつちの口車に乗ったんだろう
がよ」

バット「おのれえ……！許さん！許さん許さんッ!!貴様だけはこの手で抹殺してくれ

るううううくッ!!」

シャトナー「うおおおお……!!?!!へへっ、いいぜえ……元よりトカゲ風情に許してもらおう筋合いなんざねえからなあ!」

回避していた機動から一転し、テラへ向かっていく。

李衣菜「——シャトナー!死ぬつもり!?ダメ……やめて!」

李衣菜「何で!私達の事が気に入らないなら、私達を見捨てたつていい!それなのに、どうして!」

シャトナー『俺は何時だつて、自分の為に戦ってきた!ただ自分が生き残るために!』

李衣菜「シャ……トナー……?」

シャトナー『手前えはどうだ?何の為に戦う。世界の為か、自分の為か?』

李衣菜「そんなの、決まってる!そんなの——」

シャトナー「生き死にかけて戦争なんか、ガキがするもんじゃねえ!そんなもん、その為に生きてきた連中に任せてりやいいのさ!』

李衣菜「それが出来ないから、私はここにいる!辛いことを苦しいことを、誰かに任せつきりするなんてロツクじゃない!私が守りたいモノは、私が守る!」

シャトナー『その為に死んでもいいつてか?その為に、命を懸けるつてか?』

李衣菜「死ぬつもりで、戦つてなんかない!けど、生易しい感情だけで、戦つてらつ

もりでもない！」

シャトナー『はっ！だからそれが、甘えって言うんだ』

李衣菜「何で……！」

シャトナー『いいか、手前えの言葉は薄っぺらいんだよ。そこで、しつかり見とけ。本当の、命を懸けるって意味を……！』

李衣菜「命を懸ける……意味……？」

シャトナー『うおおおおおッ!!』

李衣菜「シャトナーアアアアアッ!!」

バット「死ねいッ！小賢しいサルが！」

シャトナー「うっ……！ぐう……!!」

側部の翼が折れ、プロペラが破損しても、推進装置に点火し、その勢いは緩めることなく、

シャトナー「この……！うおおお！オオオオオッ!!!」

加蓮「シャトナー……？まさか！」

莉嘉「加蓮！止めなきや、早く……！」

加蓮「……もう、手遅れだよ」

莉嘉「そ、そんな……！」

シヤトナー「おおおおおおおおくくくッ!!」

シヤトナー『へっ、皮肉なもんだぜ。自分の為だけに生きてきた俺がよ、命を懸け
……』

シヤトナーを乗せた戦闘ヘリは、コックピットからテラの表装に直撃し、爆発した。
バット「うおおおおおッ!!」

李衣菜「——ッ!?!し、シヤ……トナー……?」

凜「……何処もかしこも、ケーブルが焼き付いて何が何やら……。ちよつと李衣菜、
聞こえてる? 李衣菜!」

『……降りろ』

凜「!?!」

『早くゲッターを降りろ。ここに居るのは、危険だ』

凜「誰……?」

『誰でもいい。今お前がここに居るのは危険だ。最悪、ゲッターに呑み込まれる』

凜「ゲッター? 何を言っ……これは……!」

周囲に薄い緑色の粒子が漂いはじめる。

凜「これって、早乙女研究所の地下で見たのと同じ……ゲッター線の光……」

凜「李衣菜!」

李衣菜「どうして……？シャトナー……」

ドクン……

李衣菜「何で……？どうして……？ずっと、生きるために戦ってきたのに、死んだ……？私達のために？シャトナー……」

ドクンッ

李衣菜「……戦わなきゃ……。このままじゃみんな同じだ。みんな、死ぬ——」

ドクンッ

李衣菜「——!!!」

ゴオオオオオオオオツツ

バット「ぬう……!?何事だ！」

加蓮「ゲッターエネルギーが増えていく……？ゲッターD2……リーナ！」

膨大なゲッター線の光に包まれ、ゲッターD2が立ち上がる。

李衣菜「うあああああああああああツツ!!!」

バット「エネルギーレベル、180だと……!?通常の兵器が、耐えられる筈はない！」

—

李衣菜「……フ——ツ!!」

膨大なゲッターエネルギーによって、地面を融解させながら、ゲッターD2が一步を踏

み締める。

バット「化け物か!？」

加蓮「何がどうなってるの? 李衣菜! 凜! ……つたくもうっ! 誰か応えてくれない訳?!」

莉嘉「何か、怖いよ…。リーナも、ゲッターも…。早く止めなきや!」

加蓮「そうしたいのは山々だよ。けどこのままじゃ、ここにいるアタシ達だつてヤバイよ」

莉嘉「そんな! ネオゲッターでD2を止められないの?」

加蓮「多分、無茶だよ…。ネオゲッターで、どうこうなる相手じゃない。それに……」

莉嘉「それに?」

加蓮「……」

加蓮（情けないけど、どうしようもない…。あのゲッター、怖い…） ガクガクツ

凜 「ぐう…っ?!り、李衣菜…!」

李衣菜 「ウウアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!」

凜 「正気を失ってる…? 止めなきや……きやあつ!」

ゲッター線に気圧され、コックピットの外に弾かれるが、寸でのところでキャノピーの縁を掴み、耐える。

凜 「くっ、ゲッター……！部外者の私を弾き出すつもり?!」

『違う。早くそこから離れる。お前にも分かっているんだろう?』

凜 「お前は、神、隼人……?」

『そう、お前は俺と同じだ。お前はゲッターに惹かれはじめている。お前をここで消すわけにはいかない』

凜 「違う！私は、渋谷凜だ！」

『なら、そこで見届げるか』

凜 「……!?!」

さつきとは反対に力が働き、体をコックピットの側面に押さえ付けられる。

凜 「ぐっ……う……う……っ」

凜（スゴい力で、全身を押さえ付けられてるみたい……。体が全く動かない。声も……、李衣菜!）

李衣菜 「倒す——！殺すツ！命を奪う輩はア……全員ブツ殺すツ!!」

凜 「うあ……あ……!」

『意識をしつかり保て、自分を見失うな。でないと、後戻りは出来なくなる』

李衣菜 「ウアアアアアアアアアツ!!」 ダツ

バット 「ば、化け物め！貴様の思い通りになどさせるものか!!」

エネルギービームは命中。だが、

李衣菜「そんなもの、効くかッ!!」

一切意に介さず、ゲッターD2は歩みを止めず、

李衣菜「死の痛み、思い知れええ!!」

フルスイングの右ストレートがテラにクリーンヒットした。

バット「うぐう…!?!」

李衣菜「ア、アアッ!!!」

バット「ゴハッ!」

李衣菜「ラアアッシヤアアアッ!!」

上体を二つに折ったテラの背中を肘打ち。その後、倒れたテラに蹴りを浴びせ吹き飛ばした。

バット「ぐうわああ…!す…全ての数値が、計測できないだとお…?こんなこと、あり得る筈がないッ!!」

李衣菜「!!!」

バット「だが、しかし!」

向かってくるゲッターD2めがけパラライズ・ビームを放つ。が、

バット「止まら…ないっ!?!まさか、高圧電流を直接受けて、機械の回路が焼き切れぬ

筈がない!!」

李衣菜「はあ…はあ…ッ！」

バット「…機械を超越した存在だと言うのか?! そんなことが！」

李衣菜「フ——ッ! フッ——ッ!!」

バット「く、来るなア!!」

ミサイル、レーザー、バルカン。テラに積載された、ありとあらゆる火器をゲッターD2に放つが、

バット「こ、こちらの攻撃を、無力化するのではなく、吸収している…!? それではア!!」

体勢を立て直し、両腕をドリルアームに変形させて肉薄。

バット「でえええいッ!!」

テラのドリルアームは、ゲッターD2の胴体を貫く。

バット「ふふふ…! どうだ? 間接攻撃ではなく、直接攻撃ならば…:…っ!？」

ズオオオオオオオオオ

高熱で溶けるように、ドリルアームはゲッターD2の体に吸い込まれていく。

バット「こ、このテラすらも吸収しようと言うのか…?! うおおおッ!!」

李衣菜「吸収? お前を喰らう? まさか！」

バット「何っ!？」

李衣菜「お前に味味あわせるは、死の苦しみと虚無だよ!!」 キュオツ…
ゲッターD2の額に、ゲッター線が集まる。

バット「なっ…!お、おのれ!放せ、放せええ!!」

李衣菜「はっはっはっ…!アハハハハッ!!」

凜（これが、ゲッターの力…）

李衣菜「ゲッタービームツ!!」ズワツ

莉嘉「きゃあツ!!」

加蓮「何て威力…?これが、ゲッタービーム…?…ううつ」

莉嘉（太陽、みたい…。けど…）

バット「うおわあああああああ——!!」

（愚かな者、愚かな命よ…）

バット「うおおおお…!誰?何…?我はああああああ!!」

（塵芥も残さず、この光の中、虚無の果てに消えるがよい…）

バット「わ、我はあ…ラセツ様…?ゴール様…!え、いこ…う…栄光のためにイイイ

イイイツ!!——」

テラはゲッタービームの膨大なエネルギーの中に掻き消えた。

李衣菜「はあ……はあ……はあ……」

凜「……あ」

凜（ゲッター線の光が、消えていく。李衣菜の怒りが、静まっていく……）

『……せよ……。……rか、応t……せよ……。聞こえるk……？gッ……チ……せ……よ』

』

凜「この通信……」

加蓮「信号は確認した。テキサスだよ。通信妨害されてても、ギリギリまで来てたみ

たい」

凜「加蓮。そっちは無事？」

加蓮「何とかね。それにしても……」

凜「うん」

李衣菜「バカ野郎ツ!!」

莉嘉「リーナ……」

李衣菜「バカ！バカ！バカばか馬鹿！バカ野郎ツ!!シャトナーの大バカ野郎……!」

李衣菜「私達の事なんて、どうでも良かったくせに！自分一人さえ生きていれば、そ

れで良かったくせに!!それなのに！」

加蓮「……」

凜「それでも、シャトナーは託したんだ」

李衣菜「凜……？」

凜「託すしかなかった。あの中じや、結局、誰かが犠牲にならなきゃ。そうするしかなかった。だからシャトナーは私達に未来を託して、勝利を導くしかなかったんだ」

李衣菜「うっ……！」

凜「だから、私達は受け止めなきゃいけない。自分達の弱さと未熟を」

李衣菜「うう……！うあ……！」

凜「今は泣いててもいいよ。後悔することでは、私達は前に進めないから」

李衣菜「うわああああああああ……！」
つづく

第28話 『想いを掛けた決死行!!』

~~~~~ パリ市街 ~~~~~

ボブ「んにやろおツ!!」

シヨルダーキヤノンの砲口から放たれる無数の弾丸が、眼前に展開するメカザウルスの群れを一掃する。

サム「まさに”入れ食い”だね!」

ボブ「はっはっ!粉々になりたいインなら大歓迎だぜ!まとめてライスシャワーにしてやるツ!」

リンダ「ちよつと!張り切るのはいいけど、あまり街並みを壊すんじゃないわよ。ここをドコだと思ってるの?」

ボブ「はっ!今更花の都なんて気取った所で仕方ねえぜ。こんだけメカザウルスが沸いて出てりやあ、とんだジュラシツク・パークだぜ」

リンダ「相手が無法だからって、こっちがそれに合わせて良い通りじゃないでしょ。パリの街って言うのは、その街並みが市民の生きる活力になるの。無暗やたらに破壊さ

れるわけにはいかないわ」

ボブ「ならよ、ティラミス中尉は敵がわざわざマシンランドの真ん前に人質みてえに置いた凱旋門。あれもぶっ壊さずにマシンランドを攻略しろとも言うのかい？」

リンダ「何を言っているのよ。当たり前じゃない」

サム「簡単に言ってくるよ。凱旋門がマシンランドの前にある以上、マシンランドを破壊すれば、凱旋門にも少なからず被害は出るのは間違いないのに……」

リンダ「凱旋門はフランス人の心。フランス人の命も一緒よ。敵に捕まった、生きてる人間を助けるつもりで貴方達も頑張りなさい！」

ボブ「……堪んねえな、つたくよお……」

キングダムは跳躍し、落下速度を加えたヒートサーベルの刺突で、メカザウルスの一機を屠る。

リンダ「とにかく！マシンランドに取り付くのよ！何としても……！」

ボブ「それは分かっている。分かっているがよ……敵の防衛線に、こつちにやハンディキャップまで付いてんだぜ？」

サム「戦況は圧倒的不利……。闇雲に飛び込んだら、それこそ敵に包囲されるだけだ」

副長『——展開中の全部隊へ通達。全機帰投せよ。繰り返し——』

リンダ「ここで撤退ですって!？」

ボブ「艦長もサムと考えは一緒みてえだな。このまま戦つてたつて、埒が明かねえ」  
サム「俺達が花の都に凱旋するのは、まだ先みたいだね…」

けたたましい破壊音と、爆発音が響き渡る。

サム「な、何だア？」

リンダ「戦闘を継続してる？確かあつち区画を担当してたのは…」

ボブ「撤退命令が聞こえてねえのかよ…！」

茜「~~~~ツ!!」

美穂「ううツ…！茜ちゃん！帰還命令が出るよ！ここは一度体勢を…」

茜「後少しなんです！後少し…！だから!!」グンツ

急制動、急加速の機動でコックピットが揺れる。

美穂「きやあつ！」

アーニヤ「仕方ないこと…。ですが、これでは、流石に…！」

茜「やつと！やつと見つけましたよ！ここで逃がすわけにはいきませんツ!!——メ

カ魔王鬼ツ!!」

ガルマ「ふつつつつつつ…！素晴らしい、素晴らしいな？この力は！」

一直線に真正面から飛び込んだプロト・ゲッター1を、軽く手を捻るように蹴り上げ



る。

茜 「グアっ!!」

美穂 「きやあ!」

茜 「くくくッッ!!」

ガルマ 「お?」

茜 「うるああああッ!!」

空中で身を捻り、強引に体勢を立て直したプロト・ゲッター1がフルスイングで放った拳を、メカ魔王鬼は容易く掴み取る。

茜 「ッ!?!?!グウ…?」 ガッ ガッ

ガルマ 「百鬼帝国と言ったか。ゲッターと張り合っただけはある。連中の技術もバカには出来んな!」

茜 「うあ——!」

そのままプロト・ゲッター1を放り投げ、頭部の角から放つ雷撃を打ち付けた。

茜 「ウアアアアアアアッ!!」

ガルマ 「ゲッターロボが、まるで赤子ではないか!」

茜 「くつ…!グウウ…!返して、下さい!魔王鬼の体は、マサル君のご両親は!貴方に利用されるモノじゃありません!」 グッ

ガルマ「ほう、まだ立ち上がる力が残っているか」

茜「ゲッタートマホークツ!!」

ガルマ「クククツ」

バラツ

茜「!?!」

メカ魔王鬼の体がバラバラと碎ける。

茜「これは…ツ!?!」

ガルマ「黄泉路へと送ってやろうぞ!ゲッター!!」

細かなパーツとなったメカ魔王鬼の破片が、ここに速度を上げて動きだし、無数の弾丸のようにプロト・ゲッターを襲った。

茜「ううう…つ、ガアアアアツ!!」

奈緒「飛焰チーム…?!何か、ヤバそうじゃないか?」

シユワルツ「例の百鬼メカに押されてるみてえだな」

奈緒「こつちから援護できないか?」

シユワルツ「出来ねえ事はねえがよ、あれは何か事情持ちなんだろう?俺達が下手に撃つて、どうなつても知らねえぞ」

奈緒「けど、このままじゃ…」

茜 「うう……い！」

アーニヤ 「ダメージレベルが、上昇……。このままだと、ゲッターが……キヤアツ！」

美穂 「2人ともしつかり！ここで諦めたら……！」

ガルマ 「流石に粘るか。だが！」

メカ魔王鬼の攻撃が苛烈さを増す。

茜 「うわあああああッ!!」

アーニヤ 「くっ……！ゲッターは、限界です！」

美穂 「うう……っ」

美穂 （このままじゃ、ゲッターが壊れちゃう……。そうなったら、みんなが……！）

美穂 「だったら……！」 グググ……ッ

ガルマ 「トドメだ！」

奈緒 「飛焰チーム！」

美穂 「オープンゲット!!」

茜 「っ!？」

アーニヤ 「アウ……！」

金属の波となつて襲つてきたメカ魔王鬼に対し、プロト・ゲッター1は強制的に合体を解除され、1号機と2号機は弾き出される。が、

茜 「美穂ちゃん！」

美穂 「きやああああああつ!!」

一番下にいた3号機は、金属の波に吞まれた。

美穂 「——」

茜 「美穂ちゃん? 美穂ちゃん! 美穂ちゃんつ!!」

アーニヤ「……生体反応、消失……Ложь……」

茜 「ツツツ……くも……よくも美穂ちゃんを!!——ガッ」 ガクンツ

空中に投げ出された1号機と2号機をステルバーが捕縛する。

シユワルツ 「チツ……。手間掛けさせやがる」

茜 「な、何をするんです!? 離して下さい!」

シユワルツ 「一時撤退だって、忘れてねえか?」

茜 「ですが美穂ちゃんが……このまま引き下がれません!」

シユワルツ 「仇討ちがどうのつて、偉そうに言える状態かよ? ちつたあ落ち着いて自分を  
見るようになってから吠えやがれ!!」

茜 「ぐつ……ですが! 美穂ちゃんを見捨てるなんて出来ません!」

奈緒 「とにかく安心しろ! そつちだつて何とかなる! あたしを信じろ!」

ガルマ 「ふん。分離して直撃を避けたか。小賢しい真似を」

黒煙を上げ、墜落した3号機に詰め寄る。

ガルマ「だがまあ、こいつさえ完全に破壊してしまえば、再びの合体は出来ん。ゲッターを1体葬れることに変わりはない……」

李衣菜「プラズマサンダー!!」

ガルマ「ぬっ!?!」

メカ魔王鬼の背中を掠るように、プラズマサンダーが突き抜けていく。

ガルマ「……貴様……! 紛い物のゲッターが、わざわざ死にに来たか!?!」

李衣菜「はっはっ! いくら無謀でも、自分から死には行かないって。勝算があるから、ここにいる!」

ガルマ「ふっ、だが貴様らには撃てんだろう? このメカ魔王鬼の体を!」

凜「やっぱり。知ってて前線に出てきたんだ」

加蓮「気に食わない。何でも自分の思う通りになりますって?」

凜「なら、1つ驚かせてみようか?」

李衣菜「2人共、目が本気じゃない……? まあ、人質を盾にするような卑劣な奴、思い通りにさせるって言うのも癪だけだね!」

両手を打ち合わせ、プラズマサンダーの発射態勢を取る。

ガルマ「ほう……本気か? 所詮、改造された人間は人間ではないと?」

李衣菜「人質を取った奴の言う台詞？こっちだって戦場にいるんだ。覚悟なら出来るよ……！」

凜「ランドウとの戦いで、犠牲はとづくに出てるんだ。不幸は何処にだってあるよ」

ガルマ「ぬう……！ほ、本当に撃つと言うのか？」

加蓮「だから、覚悟はしてるって言ったよ？」

李衣菜「くらえ……！プラズマ、サンダーツ!!」

ガルマ「ば、バカな……!」

李衣菜「シヨルダーミサイル！」

ガルマ「!」

放たれたプラズマサンダーに、シヨルダーミサイルをぶち当てる。プラズマサンダーは弾け、強烈な閃光となって周囲を包み隠した。

ガルマ「ぬおおおおっ!?!こ、これはあ……!」

閃光が消え、視界が正常に戻る頃には、ネオゲッター1は勿論、墜落した3号機もその姿を消していた。

ガルマ「おのれえ……！小賢しいサル共めがア……!」

—— 戦艦テキサス・格納庫。

李衣菜「……ふう、作戦大成功、上手くいったね！」

凜 「何処が。マシンランドも陥とせないで、完璧な私達の敗北でしょ」

李衣菜 「そりゃあ、そうだけどき。そこじゃなくって、敵に一泡吹かせられたし、ゲツター飛焰も助けられた」

加蓮 「助けられたって言える？あの状態の飛焰を見ても」

李衣菜 「うう…。それは…！」

チーフ 「早く担架を！それだけじゃねえ、医務室から止血剤とか、包帯とか…！ああ、何でもいい！とにかく手当て出来る道具を持ってきやがれ!!」

李衣菜 「？ チーフが荒れてる？」

凜 「慌ただしいね」

李衣菜 「飛焰の3号機、パイロットの生体信号が途絶えてるっていつてたけど…」

加蓮 「そりゃ、あんだだけ壊れてれば、信号を出す装置そのものが壊れてたって可笑しくないでしょ」

李衣菜 「そっか。それじゃ、美穂は無事なんだ！」

凜 「負傷の具合も相当みたいだけど。行ってみよう」

李衣菜 「うん！私達にも、出来ることがあるかもしれないし」

タツタツ……

李衣菜 「チーフ、美穂の容態はどうなって…って、まだコックピットからも出し

てないじゃん！」

チーフ「ああ、リーナ達か。違えんだよ、出してないんじゃないやなくて、出せねえんだ」

李衣菜「どういう事」

チーフ「外からの衝撃で、コックピットブロック自体がペしやんこになっちまって、パイロットもその中に挟まれちまってんだ」

李衣菜「だったら、尚更早く装甲板をひっぺがして、美穂を助けなきゃ！」

チーフ「ダメだ。潰れたコックピットの破片が、幾つもパイロットに突き刺さっちゃまって。今下手に装甲を剥がしちまったら、そのまま大量出血だ」

加蓮「よく分かんないけど、美穂を挟んでる装甲が、栓になってるって事？」

チーフ「まあ、そういうことだ」

凜「けど、このままにしておいても、美穂の体力が消耗していくだけだ」

チーフ「分かっている。だから作業員の連中に、応急処置でも治療させる道具を持ってこさせてんだ。だが、医務官の連中もこれからの手術の準備で手一杯で、手が足りねえ」  
李衣菜「それなら、私に任せて！自慢じゃないけど、医務室の事ならよく知ってる。止血剤とかが置いてある場所もバツチリ覚えてるから！」

チーフ「本当か!?そいつは助かるぜ！」

加蓮「まさか、普段の医務室通いが、こんな所で役に立つとはね」



李衣菜「えへへっ、伊達に戦闘で怪我ばっかりしてないからね！」

凜「褒めてない。普段の汚名を返上出来る機会なんだから、さっさと行ってくる」

李衣菜「うっ……！まあ、じゃあ行ってくるよ」

格納庫を飛び出していく李衣菜。

加蓮「まったく、これに懲りて少しは慎重に戦ってくれと、チームメイトとしてもありがたいんだけど」

凜「それで大人しくなるなら、そもそも戦つてもいいと思うよ」

加蓮「言ってる。困ったリーダーをもったよ。ホント」

凜「けど、李衣菜の機転や思いきりの良さで乗り越えられてきた事も、なかった訳じゃない」

加蓮「……へえ、意外に評価してるんだ？リーナの事」

凜「二流、三流のパイロットなら、ここまで生き残つてこれないよ。例えやり方が場当たりのだとしてもね」

加蓮「場当たりの……。けどそのお陰で、アタシも奈緒も、凜も助かってきたか」

凜「ま、後はもう少し、落ち着いてくれればいいかな」

加蓮「わあ、手厳しい。……さて、と——」

茜「……」

加蓮 「そつちは何時までそうしてゐるつもりなの？」

アーニヤ 「アー……リン、カレンも。アカネ、ずつとここから動いてくれません。アカネも怪我をして……手当てしないと、いけないのに」

加蓮 「んじや、3人で運んじやおつか？ここにいても整備員の人達の作業の邪魔だし」  
凜 「確かに、私達3人で力を合わせればなんとか運べるかな。……アーニヤも怪我してるみたいだけど」

アーニヤ 「ОТлично……大丈夫。ワタシのは掠り傷、ですから」

加蓮 「んじや、ちやつちやと始めちやいますか」

茜 「……いです」

加蓮 「ん？」

茜 「私のせい……私のせいで、美穂ちゃんが……」

加蓮 「あつ、動き出した」

凜 「そんな壊れた機械みたいな」

茜 「美穂ちゃん！」

加蓮 「待つて。止まって」

茜 「なつ……！何をするんです?!早く助けないと……私のせいで、美穂ちゃんが！」

加蓮 「今すぐ助けるのは無理なんだつて。李衣菜が止血剤を持つてくるのを待たない

と。整備班長の話、聞いてなかったの?」

茜 「でも……!美穂ちゃん!」

大破したゲットマシン3号機を見つめる。

茜 「美穂ちゃん……!」

加蓮 「茜が1人で熱くなつた結果だね。2人は止めてたのに。可哀想」

アーニヤ 「カレン!そんな、言い方……!」

加蓮 「庇うの?でも、茜が頭に血が上る事さえなければ、美穂がこうなる事もなかつた。違う?」

アーニヤ 「それは……そうかもしれません。けど……!」

加蓮 「ホント、お人好しだね。そちのチームつて。馴れ合うのと、支え合うのは違うから」

アーニヤ 「そんな事……!カレン達のチームと、アーニヤ達のチームは違います!」

加蓮 「そう。だけど、正直言つて迷惑だから、はつきり言つておくよ。いい、茜?」

茜 「……」

加蓮 「下手に勝手に動かないで。邪魔だから」

茜 「……!」

アーニヤ 「カレン……!」



李衣菜「…もしかして、加蓮か凜に何か言われた？」

茜「そ、そんな事は…!」

李衣菜「やっぱり。露骨にテンション低いし、何にもなかったって言う方が無理でしょ」

茜「うう…っ」

李衣菜「あの2人容赦ないからなく。人が気にしてることに平然と言うし、歯に衣着せないって言うか…」

茜「歯が衣…?」

李衣菜「ああ、何でもはつきり言うから、追い詰められたりしてる時って、シヨックデカいんだ。それだけ、こっちの事信賴してるってことだとは思ってるけど」

茜「……」

李衣菜「だからまあ、何を言われたんだとしても気にしなくていいよ。今は状況が状況で、本人達も殺気立ってる感じだし」

茜「……いえ、加蓮さん達は何も、間違ったことは言ってますでしたよ」

李衣菜「え、そうなの？」

茜「はい。加蓮さん達の言う通りです。私が勝手に熱くなつて、美穂ちゃんもアーニヤちゃんも蔑ろにしたから、お2人が私以上の怪我を…!」

李衣菜「茜……」

茜「美穂ちゃんは強くなりました。あの状況で、例えば自分が犠牲になったとしても、私とアーニヤちゃんを助けるって言う決断が出来たんです」

茜「私は熱くなつて、周りに気を遣うことも出来なくて……！変わってないんです！あの頃から、何も……」

李衣菜「あの頃？」

茜「百鬼帝国との戦いの時です。私達がはじめて、メカ魔王鬼と戦った、あの時……！」

李衣菜「ああ、色々派手にやらかしたつて、凜達も言つてた、アレ？」

茜「あの時も、私は誰の命も守れなくて……！逆に、子供に助けられて……。逆上して暴れて……」

茜「あの時から、何も変わつてない。みんな成長してるのに……！強い敵と相対して、自分の中の壁を乗り越えて、なのに、私はずっと子供のまま……！」

李衣菜「子供つて……。私も茜も未成年だし……子供だと思っただけなあ」

茜「それじゃあ、ダメじゃないですか！周りに迷惑掛けて、自分勝手に熱くなつて！遮二無二暴れまわるだけでは、ダメじゃないですか！」

李衣菜「う……ん……。私に言われても……」

茜 「李衣菜さん……?」

李衣菜 「それって、やっぱダメなの?」

茜 「ダメ、ですよ……!ダメなはずです……っ」

李衣菜 「そうなのかな、やっぱり。私も何時も迷惑掛けっぱなしだからよく分かんないや」

茜 「え?」

李衣菜 「だつて、死ぬかもしれない事してるんだよ? 必死で、がむしやらになる事だつてあるし、頭に血が上つて熱くなることだつてある。だつて死にたくはないじゃん?」

李衣菜 「特に私つて、ゲットマシン of 操縦は苦手だし、何時も加蓮達に合わせてもらつてるし、無傷で戦闘終わらせることないし……それで凜からはうるさく言われてるし……」

茜 「……」

李衣菜 「多分、何時死んでも可笑しくなかつたんだつて思つてる。それでもここまできたのは、きっと運が良かっただけじゃなくて、加蓮に奈緒と凜、それにシュワルツとかジャックとかテキサスのみんなや卯月達ゲッター軍団のみんながいてくれたお陰なんだ」

李衣菜 「だから、みんなに感謝してる。今まで助けてくれてありがとうつて。これが

らも、迷惑掛けるけどよろしく、つてね！」

茜 「それで、それで李衣菜さんはいいんですか？迷惑を掛けてるって、そのままです……！」

李衣菜 「うんっ！もう開き直ってる。仲間がいるから、迷惑掛けられるんだしね。迷惑掛けた分、ランドウだつてラセツだつて何だつて、みんな私がやつつけてやるって！」

茜 「……………」

李衣菜 「そうやって応えるのが、迷惑の返し方だと思うんだ。茜も一緒だよ！美穂が茜を守ったのは、茜ならやれるって信じたからだだつて！」

茜 「私なら、やれる……？」

李衣菜 「魔王鬼を倒せるって。囚われたマサルくんの家族達を救い出せるって」

茜 「そんな……私には、そんな力は……」

李衣菜 「だからってこんなところに籠って縮こまって、美穂達の怪我に責任感じてる場合？それで美穂達の想いに応える事になるの？」

李衣菜 「仮に茜が、美穂達に迷惑を掛けているんだとしたら、茜にこうやって悩ませるために、二人は傷付いたって言うの？」

茜 「それは……違いますっ！」

李衣菜 「はつきり言えるじゃん。だったら、こんなところで燻ってるなんて茜らしく



ないでしょ!」

茜 「ちよ……!李衣菜さん、どちらへ!」

李衣菜 「へへっ!」

茜の手を引いて、私室から飛び出す。

李衣菜 「何時だって、雨が降っても槍が降っても日野茜は挫けない、でしょ?」

茜 「……!!」

戸惑う茜を連れて、向かった場所は、

~~~~ 格納庫 ~~~~

李衣菜 「チーフ~!」

チーフ 「おう、リーナ。どうした?まだ出撃命令は出てねえと思つたが?」

李衣菜 「私達にも整備を手伝わせてよ!」

チーフ 「おう……?」

李衣菜 「戦闘続きで、手が足りてないでしょ?ゲッターの事なら、私もよく知って

るしさ!」

チーフ 「成る程……。ありがてえ、助かるぜ!それじゃ早速頼むぜ!」

李衣菜 「オツケーらせて!それじゃあ茜、この軍手着けて、工具持つて!」

茜 「で、ですが李衣菜さん!私は……」

李衣菜「私がサポートするから！これから決戦なんだ。茜達がやる気出してるときに、ゲッターが動かなかつたら意味ないじゃん！」

茜「……」

李衣菜「ゲッターは力だ。私達にとつて大事な力。自分と一緒に戦うゲッターに触れて、分かることだつてあるんじゃない？」

茜「そう、なんですかね……？」

李衣菜「そうだよ！メカと向き合う、自分と向き合う。きっと同じなんだつて思うよ。私達の代わりに痛みを受けてくれるゲッターだから」

茜「………はいっ！」

プロト・ゲッターの整備に取り掛かり始める李衣菜達。

凛「——フフツ、上手く丸く収めてくれたみたいだね？李衣菜」

加蓮「そう？どうせ強引に引っ張っただけでしょ。何時もみたいに」

凛「うん。だけど、李衣菜にしか出来ないことだよ。私達の中ではね」

加蓮「そりゃ、ね。……あ」

アーニヤ「アカネ……」

茜「アーニヤちゃん……それに、美穂ちゃん!？」

美穂「……ここにいたんだ」

茜 「ど、どうして…!? まだ動いちゃいけません! 傷が開いたら…!」

美穂 「でも、戦うんでしょ?」

茜 「それは…」

美穂 「ゲッター飛焰を動かすには、2号機と3号機でエネルギーを制御する人がいるんじゃない?」

茜 「それでも、寝てなくちゃダメですよ!」

美穂 「寝てなんていられないよ。誰かに任せられることじゃないもん。私がやらなきゃ!」

茜 「美穂ちゃん…」

アーニヤ 「アー、アカネ?」

茜 「…?」

アーニヤ 「魔王鬼の事は、マサルくんとの、約束は…もう、茜だけの約束じゃありません。ね」

美穂 「アーニヤちゃんの言う通りだよ。だから、一人で抱え込まないで? 同じ目的、同じ目標に向かって支え合う。それがチーム、でしょ?」

茜 「美穂ちゃん…アーニヤちゃん…! そうです…! そうでしたね!」

アーニヤ 「なら、一人で抱え込むの、良くないですね」

美穂 「一緒にやらせて？また、迷惑掛けちゃうかもしれないけど」

茜 「迷惑なんて、あるわけないじゃないですか！私達は、チームです！」

李衣菜 「あー…、蚊帳の外からだけど、いいかな？」

美穂 「あつ！李衣菜ちゃん！」

アーニヤ 「ゲッターの整備、お手伝いします」

李衣菜 「言ってくれるのはありがたいけど、じゃあ手を動かしてもらっていいかな？
もう時間もあんまりないと思うし。多分」

美穂 「時間…？」

凜 「さっきので強行偵察は終わったんだ。ならば後は、マシンランドを攻略するだけだ」

アーニヤ 「リン、カレン！」

李衣菜 「…見てたんなら、手伝ってほしいな…」

加蓮 「何言ってるの。マシンの整備中は、パイロットは英気を養うのが仕事でしょ」

李衣菜 「むう…。そりゃそうだけど」

凜 「けどまあ、あくまで大局的に見た戦闘だ。個人の事情までは首を突っ込みきれない」

李衣菜 「……？つまり？」

加蓮 「メカ魔王鬼を止めたいなら、止めたい奴が好きにしろ、って事。どうせ次の戦闘でも出てくるのは必至なんだし」

凜 「専属で魔王鬼を止めてくれる人がいるなら、こっちも動きやすいよ」

アーニヤ 「それじゃあ……!」

凜 「ゲッターの整備を続けよう。出来る限りは力になるよ」

加蓮 「で? まずは何をすればいいの?」

李衣菜 「……っ! 装甲の張り替えに、再利用できる装甲の叩き直し、やることは一杯あるよ! 急いで!」

加蓮 「はいはい……。急かしても整備に穴があつたらダメでしょうが」

茜 「ありがとうございます!!」

凜 「お礼は、結果で示してくれるとありがたいかな」

李衣菜 「へへっ、素直じゃないんだ」

加蓮 「十分に素直に、行動で表してるつもりだけど?」

アーニヤ 「カレン、さっきはその……」

加蓮 「さっきは……? 何の事だっけ? アタシは、言いたいこと言っただけだ……」

アーニヤ 「H e t……分かりました。ワタシ達は、チームと言う言葉に、甘えていたのかもしれない」

加蓮「…甘え、ね」

アーニヤ「だから、Спасибо……ありがとうございます、カレン。カレンが厳しくしてくれなかったら、アーニヤ達はまた、同じ事、繰り返してました」

加蓮「そう……？気付けたのは良かったじゃん。こっちは、お礼を言われることなんて何も……」

アーニヤ「リーナの言う通り、カレンは素直じゃない、けど、優しい人、ですね！」

加蓮「優し……！んもう、だから違うってば！」

李衣菜「はいはいっ！じゃ、数に物言わせてちゃったと終わらすよ！えい、えい、おーっ！」

アーニヤ「オー！」

美穂「おー！」

—— 数時間後。

くくく パリ市街 戦闘空域 くくく

艦長『——戦域に展開しているロボット部隊各員、用意はいいか？本作戦は、フランスの首都、パリを解放する為の一大作戦である』

艦長『我々が目標とするマシーランドは、強固な要塞だ。だが、これが移動要塞である以上、その移動を制御する区画が必ず存在する』

艦長『本作戦は、そのマシーンランド中枢、ひいてはマシーンランドそのものを支配下に置くための制圧作戦である』

艦長『頃合いを見計らい、我が方で選りすぐられし精鋭による突入部隊が、マシーンランドに突入する。ロボット部隊各員には、その突入部隊が突入する進路と、彼らの護衛が主な任務となる』

艦長『現在、敵戦力はマシーンランドを中心に防衛陣を築き、こちらの侵攻に対し徹底的に抵抗する構えを見せている。文字通り、猫の子一匹通る隙間も存在しはしない』

艦長『しかし、ここまで幾多の死線を潜り抜けてきた貴官らならば、この鉄壁の敵陣に、糸を通す針穴を穿つことも出来ると私は信じる！総員、今一度奮起してくれ。この戦いが、この先に待ち受けるランドウとの決戦の試金石と心得よ!!』

ボブ「よっしゃあ！やってやるぜ!!」

サム「メカザウルス共…！一匹残らずポップコーンに変えてやるぜ!」

リンダ「…まったく、バカつてのは単純でいいわね」

シユワルツ「全くだ。言うのは簡単だぜ？言うのはな…」

奈緒「ここまで来たんだ。グダグダ考えるだけ無駄だつて。なあ?」

シユワルツ「ハッ、火器担当は気楽でいいぜ。まったく…!」

奈緒「お前の腕を信頼してるんだよ。生きて帰ろうぜ、相棒?」

シユワルツ「…ケツ！」

加蓮「…奈緒が楽しそうにしてる」

李衣菜「え？」

凜「今は仕方ないでしょ。強がりでも、余裕を持つ時間は必要だよ」

加蓮「分かってますけどー？…で、そっちは大丈夫？飛焰チーム」

美穂「は、はい！何とか…！」

アーニヤ「装甲の換装が、全部出来ませんでした。他の形態への変形は、リスクがあります！」

茜「私のゲッターーだけでの戦闘になるわけですね！任せてください！」

李衣菜「頼りにしてるよ！」

アーニヤ「…それよりも、ミホ？」

美穂「わ、私は大丈夫…。ギプスをキツく巻いてもらったし、ちよつとの事なら！」

アーニヤ「無茶はダメ、ですよ」

美穂「そうだけど…。それでも、私の事は気にしないで！マサルくんの家族を助けられるのは、多分この一回だけ。だから！」

茜「……はいっ！今の飛焰で出来る限りを尽くします！」

加蓮「…ふっ」

凜 「良いチームだと思うよ?」

加蓮 「悪いチームなんて言った覚えはないけど?」

李衣菜 「ははっ、素直じゃないんだ?」

加蓮 「リーナ、後で食堂のポテトキングサイズで奢りね」

李衣菜 「何で!?!」

加蓮 「整備手伝ったお礼」

李衣菜 「お礼って…。それに、食堂のポテトって、普通でも1キロくらいあったと思うけど……」

凜 「無駄話はそこまで。これだけの敵だ。こつちも他人に気を遣ってる余裕はないよ」

加蓮 「敵さんも向かってきますから。大人しくしてれば良いのに、働きの者なんだから」
李衣菜 「…って言うか、今まで突っ込まなかったけど、何でゲッター3?」

加蓮 「別にー?何時も誰かさんに迷惑掛けさせられてるんだから、たまにはアタシもやんなきゃね?」

李衣菜 「むう……」

凜 「良いんじゃない?珍しく加蓮がやる気なんだから」

加蓮 「そう言うこと!——ゲッタートルネード!」

ネオゲッター3のゲッタートルネードが、突撃してきたメカザウルスの氣勢を削ぎ落とす。

加蓮「茜、援護お願い！」

茜「了解！ガトリングを撃ちます！」

加蓮「よし、タンクモード！」

プロト・ゲッターが放つ火線を縫い、タンクモードのネオゲッター3が高速機動で敵陣に肉薄する。

加蓮「ゲッターパンチ！」

剛腕を振るい、メカザウルスを粉砕。

凛「…うん。いい、加蓮？私達の目的はあくまでメカザウルスだ。それ以外の敵には目を向けちゃダメだ！」

加蓮「了解っ！雑魚を千切って投げれば良いんでしょ？余裕〜」

李衣菜「一応言っておくけど、突入部隊を乗せた装甲車もあるんだから…！」

加蓮「それも、やられたらおしまい、って言うんでしょ？大丈夫。ネオゲッター3は基本前にいるから、ちっちゃいのを敵に狙わせないよ！」

李衣菜「ホントに大丈夫かな…？」

凛「少なくとも、李衣菜よりは周りが見えてるよ。加蓮は」

李衣菜「うっ……!」

加蓮「そう言うわけだから、そっちはそっちでヨロシクね〜!」

茜「分かりました!美穂さん、どうですか?」

美穂「うん。今探して……いたっ!メカ魔王鬼!」

茜「!」

シユバツ

目にも止まらぬ速さで飛翔するプロト・ゲッター1。

李衣菜「わっ!速〜……!」

凜「二応、機動力は真ゲッター並らしいからね」

李衣菜「それ、ちよつとマウント取って言ってる?」

凜「別に。考えすぎじゃない?」

李衣菜「……ホントに、茜達だけで大丈夫かな?」

加蓮「人の心配している場合?」

コックピットは激しく揺れる。

李衣菜「うわわっ!ちよつと、加蓮!」

加蓮「こっちは避けたりするのが得意な訳じゃないんだし、仕方ないでしよ〜!」

李衣菜「今、わざと攻撃喰らわなかった?」

加蓮「他人の心配してる暇はないって、教えてあげたの。茜達が一番面倒臭いメカ魔王鬼を相手してくれるって言ったんだから、任せちゃえば良いじゃん？」

李衣菜「そんな、気楽な」

加蓮「気楽で言ってるつもりでもないんだけどね。——えいつ！」

言葉を返しながら、ネオゲッター3の拳でメカザウルスを殴り倒し、粉碎していく。

加蓮「フィンガーネット！」

正面にフィンガーネットを放ち、動き回るメカザウルスを捕縛。

加蓮「ホント、落ち着きのない相手って嫌い」

凜「加蓮、ネオゲッター3に追加された新武装を！」

加蓮「言われなくてもそのつもりですよー、っと。——プラズマバレル、延伸！」

ネオゲッター3の背中中のホーン部分が正面に倒れ、キャノン砲のように側頭部から前方に伸びる。

加蓮「インパクトキャノン！」

ホーン先端から放たれるのは高圧縮したプラズマの弾丸。ネットで絡め捕られたメカザウルスに命中し、爆発を以て破壊する。

李衣菜「ウツヒョー！中々の威力！」

加蓮「出力を絞ってる分、エネルギー効率も悪くないかな。精度も良いし。プラズマ

ブレイクより使い勝手良いかも」

凜 「好評みたいで何より。後で改修を手伝ってくれた整備班長にもお礼言わなきゃね」

加蓮 「ふふっ……！メカザウルスを一発で破壊できるパワーに砲撃のキャノン。今のネオゲッター3に死角はないよ！」

李衣菜 「な、何かキャラ変わってない？」

凜 「これは……スイッチ入ったかもね」

李衣菜 「スイッチって何のー?！」

加蓮 「つべこべ言わないの！パリから恐竜帝国を追い出すんでしょ？だったらアタシ達も立ち止まってなんていられない。徹底的にやってやるんだから！」

茜 「ゲッタートマホークツ!!」

戦艦テキサスに向け進軍するメカ魔王鬼の前に、トマホークを携え、プロト・ゲッター1が立ちほだかる。

ガルマ 「……また貴様か。しつこい奴だ」

茜 「ここであつたが百年目！今度こそ、その体を返してもらいます!!」

アーニヤ 「アカネ、台詞がちよつと、悪役、っぽいです」

ガルマ「出来るものならばやってみるが良い。知っているぞ、貴様らはこのメカ魔王を攻撃できない。事情があるのだろう？うん？」

美穂「茜ちゃん、大丈夫？」

茜「……………」スウ…

茜「はいっ！私は大丈夫です!!」

アーニャ「……………」

茜「戦いに必要なのは、クールな頭脳と、熱いハート」

美穂「……………」

茜「お2人が、クールな頭脳で私を引っ張って、私の熱いハートが、2人を見失うことなく共に燃え続けられれば、ゲッターは無敵です!」

アーニャ「…はいっ!」

美穂「うんっ」

ガルマ「さつきからごちやごちやと…。やるのか？死ぬか、どちらだ!？」

茜「黙れッ!!」

ガルマ「!？」

茜「そして聞け!」

茜「私の名前は茜、日野茜！悪を燃やし尽くす焔なり！ですっ!!」

ガルマ「ほぎきおつてく……! 死ねえいッ!!」

茜「はっ!」

メカ魔王鬼の口から放たれた炎をさらりと躲し、メカ魔王鬼目掛けて加速。

茜「やあっ!!」

トマホークの長大な柄をメカ魔王鬼の体に押し付け、体勢を崩す。

ガルマ「ぬう……!?!」

茜「はっ!」

トマホークの柄尻で、メカ魔王鬼の脇腹を打ち、

茜「ゲッターキック!」

メカ魔王鬼の頭部に直蹴り。怯んだメカ魔王鬼を完全に転倒させた。

茜「どうです!?!」

美穂「捕まってる人達、痛いと思うけど、ちよつとの間だけごめんなさい!」

アーニヤ「必ず助けますから。我慢、して下さい」

ガルマ「くつくつくつ……!」

茜「!?!」

ガルマ「効かんなあ……? そんな生ぬるい攻撃、この私にはなあ!!」

茜「!」

ガルマ「くあッ!!」

茜「……………」

地面から顔を上げたメカ魔王鬼の放つ雷撃を、咄嗟に翼を開き、飛び退いて躲す。

ガルマ「フハハハハハッ!逃げろ逃げろお!みつともなく逃げ回れえッ!!」

茜「くっ……………」

執拗に繰り返される雷撃を天に地に、縦横無尽な機動で躲していくプロト・ゲッター
1。

美穂「うう……………」

アーニヤ「ミホ!」

美穂「私は大丈夫だよ。気にしないで!」

茜「…分かりました。ですが、このままでは近付けません……………」

アーニヤ「……………。…!アカネ、ガトリングガンを」

茜「えっ!」

アーニヤ「地面に!」

茜「え…………あっ!そう言うことですか!分かりましたア!!」 ジャコンツ

茜「ドララララララッ!!」

左腕に構えたガトリングガンを地面に撃ち、土煙を舞い上がらせる。

ガルマ「くっ……！これで狙いを逸らしたつもりか！」

腕を振るい、舞い上がった土煙を振り払いながら、

ガルマ「貴様らの狙いは分かっているぞ！この隙に、背後に回り込むつもりで……！」

しかし、土煙を突き破り、プロト・ゲッターが姿を見せたのは、正面。

ガルマ「な、っ……?!」

美穂「私の考えくらい、貴方達なら見破ってくるって、簡単に分かります！」

茜「だから、攻撃の手が止まれば良かったんです！」

ガルマ「貴様ら……っ！」

茜「うわあああああああッ!!」

プロト・ゲッターの鉤爪が、メカ魔王鬼の頭部に突き刺さる。

美穂「これで……！」

ガルマ「ぐ……う……っ」

アーニヤ「！ まだです！」

茜「！」

ガルマ「まだまだア!!」

メカ魔王鬼の火炎攻撃が、プロト・ゲッターを焼く。

茜「うああ……！」

ガルマ「まだだ……！人間共！ラセツ様に拾ってもらったこの命、新生恐竜帝国の建国を見ずして、果てるわけにはいかんのだツ!!」

茜「コクピット温度上昇！熱くなってきましたね……！」　ダラダラ：

美穂「本当……。でもこのくらい、何て事ないよね？」

茜「当然です！アーニヤさん、調子はどうですか？」

アーニヤ「Dia！何時でも準備万端。出力は絞ってあります！」

茜「よおし、それじゃあこれで！」　ジャコンツ

プロト・ゲッターの肩から姿を見せるキャノン砲。

ガルマ「貴様……道連れにするつもりか！」

茜「威力は最低の……！プラズマノヴァー！」　ビーツ

細いレーザーのようなプラズマノヴァーが放たれ、メカ魔王鬼の角を破壊する。

ガルマ「ぐああ……！な、何だ……？」

茜「このっ！」

ガルマ「ぐふっ！」

シオルダータックルでメカ魔王鬼を再度転倒させ、火炎から逃れる。

茜「これで、あのしつこい雷はもう撃てませんね！」

ガルマ「貴様……！それを狙って、敢えて攻撃を受けたと言うのか!？」

茜 「これが肉を切らせて、骨折り損です！」

アーニヤ 「それだとずっと、損してますね。肉を切らせ、骨を断つ、です」
茜 「それです！」

ガルマ 「ふざけおつて〜！」

再び火炎を放つが、飛翔し距離を取ったプロト・ゲッター1には届かない。

茜 「どうしたんですか！私はこちらですよ！」

ガルマ 「おのれえ〜！」

茜 「さあ……もう遠距離の私達を捉えるには、あの技」しかないですよ！」

アーニヤ 「それが、ワタシ達の最後の賭け、ですね」

美穂 「う、上手く行くのかなあ……？」

アーニヤ 「それはそれぞれのСпособность……腕次第、ですね」

美穂 「ど、どうしよう……！緊張してきた！」 ドキドキ……

茜 「大丈夫です！自分を信じて、仲間を信じて、チームを信じれば、必ず上手くいきます！」

美穂 「……う、うん……！そうだよね……！」 ドクンドクンッ

ガルマ 「こちらを挑発するつもりか！最早、生かしてはおかん!!」

メカ魔王鬼の体が分裂する。

限界がありますね……!」

茜 「それでも、喰らい付いていくしかありません! チャンスは、この一回だけ……!」
美穂 「うん……! 正念場は、これから——!」

魔王鬼は飛んだ。マツハの超スピードで。上に下に、時に右左と向きを変え、狂ったように飛んだ。チーム飛焰のゲットマシンを振り払い、引導を渡すために。

みく 「——くつらえー! ゲッタービームにやあつ!」

瑞樹 「……? 待つてみくちゃん。何かが接近してくるわ」

みく 「うにゃ? 何かって、何が……?」

瑞樹 「私にもよく分からないけど……! 機じゃないのは確かみたいね」

みく 「一体何にゃ?」

菜々 「な……! な、ななな……!」

瑞樹 「どうしたのよ、菜々さん。いきなり自分の名前を連呼なんかしちゃって」

菜々 「そーではなく! あれ、見てください! 何ですか、あれ!」

みく 「あれって……」

こちらに真つ直ぐ向かってくる分裂したメカ魔王鬼と、ゲットマシンの群れ。

みく 「や、ヤバいの来てるよ!」

瑞樹 「早く! ゲッターを分離して!」

みく「にや……！お、オープンゲットオ!!」

半ば反射で応じて、ゲッターを分離。先程までゲッターがいた場所をパーツの波が通り抜け、その後には半円状に穿たれた大地が残る。

みく「か、間一髪だったにやあ……」

菜々「本当に何だったんですか？今のは……」

瑞樹「詳しくは分からないけど、でもあの群れの中に、茜ちゃん達のマシンが見えたわ」

菜々「えっ？それじゃあ、あれがメカ魔王鬼……？」

みく「茜ちゃん達も、必死に戦ってるって事？」

パリの歴史ある建築物がガラスのように砕け、街路樹も紙切れのように引き裂かれ、空気が幾つもの割れ目を作った。

ガルマ「くっ……！しぶとい奴等だ！まだ付いて来るか！」

茜「当たり前です！私の体が、どれだけ傷付こうと！ゲッターがどれほど痛め付けられようと！ここまで来たんです！絶対に離しませんよ!!」

ガルマ「その執念に感服すべきか！こうなれば……！」

パーツの流れが止まる。

茜「……！」

アーニヤ「来ました、チャンスです！」

ガルマ「貴様らに合体されるより前に、その戦闘機を破壊してくれるわあ！」

茜「それは無理な相談です！」

ガルマ「何っ!？」

美穂「……っ！……えいっ！」

茜「チエーンジゲッターーっ!!ワンツ!!」

ガルマ「合体している最中の、メカ魔王鬼の中で合体するだとおお!!」

茜「合体は、こちらの専売特許です!!」

まさにメカ魔王鬼へと変形する最中の魔王鬼の中でプロト・ゲッターーに合体。

ガルマ「どういう事なんだ、これはア??」

後は本体にドッキングするのみとなっていたメカ魔王鬼の頭部、魔王鬼のコントロー

ルユニットをその手で掴み、捕縛する。

茜「ここまでは読めてました!アーニヤちゃんと、美穂ちゃんが!」

美穂「合体の順番があるもん。頭部は一番最後に合体するから、必ず孤立する瞬間が

ある、かもって」エへへ…

茜「絶対に離さないと、最初に言った筈です!」

ガルマ「うおおおおお!!放せ~~~~ッ!!」

最後の抵抗とばかりに、火炎を放つ。

茜 「本体からエネルギーを受けられない、今の貴方の攻撃など痛くも痒くもありません!!」

アーニヤ 「アカネ、何時でも、いけます!」

茜 「アーニヤちゃん、分かりました!えいつ」

ガルマ 「うおおおおお〜っ!!」

茜 「もう手加減も、貴方には慈悲も遠慮も情状酌量も要りませんっ!!」 ジャキツ

プロト・ゲッターの肩のキャノンが開く。

茜 「ゲッターアアアーツ!!!ビィィィイムツ!!!」

ドワツ

ガルマ 「ウオオオオオツ!!ラセツ様——!!……」

ゲッタービームが空を貫き、ガルマは断末魔の果てに消え、残されたメカ魔王鬼の本体は地に伏した。

美穂 「や……った……?」

茜 「やりました……!やった!アーニヤちゃんと、美穂ちゃんのお陰です!」

アーニヤ 「H e t ……アカネ、違います」

茜 「?」

アーニヤ「魔王鬼に勝てたのは、アカネの力があつたから。アカネがアーニヤ達を信じてくれたから、です。それに…」

茜「それに？」

アーニヤ「まだ、メカ魔王鬼に勝てただけ、ですね？」

美穂「あ…。そっか」

茜「ふふつ、アーニヤちゃんの言う通りです！勝つて兜の緒を締めよ、ですね？」

アーニヤ「アー…。今回は、合ってます」

茜「よしっ！」

美穂「ふふつ。それじゃあそろそろ行こう？ゲッターはまだ動くよ」

茜「はいっ！マサルくん、遠い地ですが、約束は果たしました。次は、マサルくんの為、日本にいる家族や友人、アイドルの仲間達の為に、必ず倒してみせます！」

美穂「うんっ」

アーニヤ「ええっ」

茜「ランドウ、ラセツ——！」

——。

『——突入した部隊より緊急通信！』

凜「…通信？」

李衣菜「何？作戦が上手く言ったの？」

凜「……いや、それにしても時間が早すぎる。何かきな臭いね」

李衣菜「きな……？」

『突入部隊、恐竜帝国残党の指揮官を捕らえられず！繰り返す——』

李衣菜「え？ラセツを逃がしたの？」

凜「そういうわけでもないみたいだ」

李衣菜「？」

『敵拠点内部には、残された兵力もおらず！既に、敵主力部隊は逃走を凶ったものと思われます！』

李衣菜「逃走……!?でも、どうしてそんな？」

凜「……どうやら私達は、まんまとラセツに嵌められたみたいだ」

李衣菜「嵌められた？」

凜「マシーンランドは、恐竜帝国の拠点だ。連中にとって必要不可欠なもので、パリのこの戦いでも決戦を仕掛けてくると思っていた」

李衣菜「そうですね。ここを無くしたら、ラセツは地上侵略の要を失うようなモンじゃん。それを、自分から手放すなんて……」

凜「ラセツは狡猾で、地上支配の野心を捨てきれぬほど殊勝じゃない。だからこそ、

マシンランドを捨てたんだ。私達をここに足止めする為に」

李衣菜「足止め?! こんだけ戦力を残して、自分の拠点まで囿に使って、足止め…?」

凜「うん。実際この場には、ランドウの手勢のほとんどがいると思う。そこまではないと、私達に勘繰られるからね」

李衣菜「でもそれなら、ほとんどの力を無くしちやったつて事になるんじゃないの? そこまでして、逆転できる方法なんて…」

凜「あるよ。だからランドウはここを陣地に取ったんだ。私達の動きを抑え込み、自分は迅速に目標を制圧するために」

李衣菜「ここから迅速に迎える…?」

加蓮「凜。まさかその話、本気でしてるわけじゃないよね?」

李衣菜「加蓮。戦闘に集中してたんじゃ?」

加蓮「そっちの会話が気になって集中何て出来ないよ。それに、さつきから敵の攻勢が弱くなってきている気がするしね」

李衣菜「え?」

凜「やつぱり。もうここには、防衛する価値もないんだ」

加蓮「それじゃあ、やつぱり…!」

李衣菜「ちよ、ちよっと! 2人で話進めないでよ! 凜と加蓮が何の話をしてるのか、

さっぱり分かんない！ラセツの目的って、私達に逆転できるかもしれない、その目標って一体…!?!」

加蓮「簡単でしょ？恐竜帝国の戦力が当てに出来ないなら、奴等はどこから戦力を調達しようとするか」

凜 「ラセツの目的地は、北極…!」

李衣菜 「北極…? そんな、まさか!」

凜 「そのまさか。ラセツの目標は、蛇牙城だ」
つづく

第29話『死力の追撃戦!!』

~~~~~ 戦艦テキサス 格納庫 ~~~~~

チーフ「——オラア!! キリキリ動けエ!! 時間はねえぞ!!」

整備員s 「二り、了解!!」

加蓮「スゴい活気…。熱に当てられちゃいそう」

凜「冗談言ってる場合? ブリーフィング・ルームに急ぐよ。今後の方針について、艦長から話がある筈だ」

加蓮「話って、ラセツを追うんでしょ? それ以外の選択肢ある?」

凜「だとしても、目的地が問題だよ。このままラセツを追撃すれば、ランドウの拠点到攻め込む事になる」

李衣菜「やってくれたなあ、ラセツの奴!」

凜「ランドウとの決着を考えれば何れは攻め込む事になってただろうけど、時期が早すぎる。まだ世界情勢は落ち着いていないし、ドラゴンターゲットを落とすとしてもランドウの戦力は底が知れない」

加蓮「だからって、ラセツの動きを放っておくことは出来ないでしょ。ラセツとラン

ドウの内、どつちかが倒れても厄介な敵である事に変わりないんだから」

李衣菜「凜、加蓮っ。ここで2人で言い争ってもどうしようもないって！」

凜「……それもそうだ」

加蓮「足並みを揃えるための、ブリーフィングでもあるわけね」

ガラガラガラガラッ

李衣菜「ん？何だ何だ？」

医務官「退いて退いて！担架が通るよ！」

李衣菜「負傷兵の移送か……って、乗せられてるの、美穂!？」

凜「何か、ベルトみたいなの巻かれて、担架に拘束されてるけど」

美穂「あ、李衣菜ちゃん、凜ちゃん。へへ……、掴まっちゃった……」

李衣菜「つ、掴まっちゃったって……」

医務官「まったく。絶対安静だって言っていたのに、まさか医務室を抜け出すなんて

！」

加蓮「リーナじゃあるまいし、立ち直り早くなって思ってたけど」

凜「まさか脱走してたとはね」ヤルジャン

美穂「ホント、大した事ないんだよ？先生が大袈裟に言ってるだけで……!」

医務官「何が袈裟なものですか！全身打撲だけで、少なくとも全治一ヶ月以上の重

症ですよ!」

李衣菜「全身打撲”だけ”?」

医務官「胸骨など5ヶ所以上の骨折に、胸部裂傷、大量出血!それで平然と出歩いて…!解剖されて人体標本にでもされたいんですか?」

凜「確かに、貴重な検体にはなるかもしれないね」

李衣菜「冗談になってないって、それ…。つてか、そんな酷い状態でゲットマシンを動かしてたわけ?!」

加蓮「それ、アンタが言う?」

アーニヤ「あー、ミホ…?」

茜「美穂ちゃん!」

李衣菜「あ、アーニヤに茜も」

凜「こんな状態じゃ、流石にビックリするでしょ」

医務官「アナスタシアさん、美穂さんの脱走に協力した件、しつかり艦長に報告させて貰いますからね!」

加蓮「共犯だったんだ…」

アーニヤ「ミホ……ИЗВИНЯЮСЬ……ごめんなさい、無理をさせてしまいました、ね」

美穂「アーニヤちゃん…。そんな顔しないで？私が頼んだことなんだから。アーニヤちゃんは何も悪くないよ」

アーニヤ「でも…」

美穂「大丈夫。また直ぐに戻ってくるから！」

医務官「全治一ヶ月以上！その間は何があつても絶・対・安・静！です！！隔離用の寢室に拘束して、アナスタシアさん達との面会も一切謝絶ですからね！」

李衣菜「そこまでする？」

凜「ま、仕方ないんじゃない？」

医務官「さ、行きますよ！」

ガラガラガラガラッ

美穂「私、必ず帰ってくるからくっくっ！！」

その言葉が、担架が遠ざかる音と共に木霊した。

凜「……」

李衣菜「……美穂って、意外と丈夫だったんだ」

加蓮「いや、そこに感心するのも可笑しいから」

凜「それで？飛焰チームはこれからどうするの？」

茜「どうするもこうするも、美穂ちゃんがない以上、私とアーニヤちゃんの2人



で、ゲッターを動かすしかありません！」

アーニヤ「けど、それじゃあ、ゲッターの能力は大幅ダウン、です」

茜「美穂ちゃんの体には替えられませんよ！パイロットが一人足りない分は、気合いで補いましょう！」

アーニヤ「…そうですね。気持ちだけでも、ミホと一緒に戦いましょう！」

加蓮「どうしてそこまでポジティブなれるの？このチーム」

凜「さあ？何事も小難しく考える必要もないって、そう言う事じゃない？」

~~~~~ 数分後、ブリーフィング・ルーム ~~~~~

艦長「うむ。パイロット各員、負傷による欠員者などを除いて、全員揃ったようだな」
シユワルツ「前置きはいいぜ、艦長。逃げ出したラセツは何処に行きやがった？何を
考えてやがる！」

奈緒「おい、艦長に対してそんな質問の仕方する奴があるか！」

艦長「構わん。ラセツの狙いや行き先よりも、先ずはこれを見てくれ」

正面のモニターに、1つの映像を映し出す。

艦長「マシーナランド制圧後、ラセツが離脱したと思われる方角に飛ばした無人偵察機により撮影された映像だ」

李衣菜「これって、ウザーラ！」

メリー「ウザーラ？」

加蓮「古代アトランティスの守護神だつてき。凜は前に二度、戦ったことがあるんだよね？」

凜「嫌な事思い出させるね。確か、シャインスパークで木つ端微塵に破壊した筈だけど」

副長「ランドウか、ラセツか。どちらにせよ破片を回収され、修復された、と言う所だろう」

ボブ「へえ？でも、一度はぶつ倒した相手なんだから。だったら楽勝じゃねえか」

凜「確かに、あれが前に倒したウザーラと同じもので、ゲッタードラゴンがあつたらね」

ボブ「おん？」

凜「少なからず、私達の戦ったウザーラは頭を3つ付けてたりしなかつたよ」
艦長「何らかの改造が加えられていると言う事か……」

凜「恐らくは……。それに、さつきも言ったけど、ウザーラを倒したのはゲッタードラゴンのシャインスパーク。今それに匹敵する威力を持つ武装を持つのは……」

サム「ゲッターD2は、ゲッタードラゴンの発展型じゃないのかい？」

凜 「ゲッターD2にシャインスパークは搭載されてないよ。単独操縦が前提のあの機体で、それは色々な意味でリスクが高すぎるからね」

サム 「成る程」

ボブ 「肝心な時に頼りになンねえな」

凜 「それでも…」

メリー 「何？」

凜 「いや、何でもない」

凜 （こんな局面だからって、真ゲッターをアテには出来ない…）

ジャック 「No, No! 心配はNothing! 様は旧式機で倒せた相手って事ダ

ロ? ミー達がPowerを合わせれば、全く敵じゃないぜ!」

リンダ 「それで艦長、ラセツの行き先は？」

艦長 「うむ。偵察機が捉えた位置と向かっている包囲から、目標はやはり北極、蛇牙

城である事に間違いはない」

リンダ 「やはり…」

ボブ 「いよいよ決戦って訳か…! 腕が鳴るぜ!」

シュワルツ 「……」

奈緒 「何だよ、シュワルツも武者震いか？」

シユワルツ「そんなんじやねえよ。ただな……」

奈緒「ただ？」

シユワルツ「可笑しいじゃねえか。ランドウだって、ラセツが接近してるのは気付いている筈だ。なのに、どうして今まで、迎撃する部隊を送ってきやがらねえ？」

奈緒「それは……確かに」

加蓮「アタシ達が欧州に入り始めた辺りからだけど、ランドウの動きが静かすぎるのは、確かに気になるかも」

シユワルツ「そうだ。いくらラセツが謀反を起こしたにしても、恐竜帝国の戦力と挟撃して、俺達を仕留めるチャンスは幾らでもあった」

サム「それをしてこなかった。しなかったのか、何か考えての事なのか……」

シユワルツ「キナ臭え……！何だか嫌な予感がしやがるぜ」

艦長「少佐の懸念は尤もだ。しかし、だからと言ってこのままラセツの動きを看過することは出来ん！」

李衣菜「ランドウの動きを気にして、ラセツの思い通りにさせてたら、結局世界がどうにかなつちやうよ！違う？」

ジャック「That's right! リーナの言う通りダゼ！来るなら何処からでも来やがれ！ミー達がまとめて相手になつてやるぜ！」

リンダ「まったく…。結局、お気楽なんだから」

ボブ「だがよ、分かりやすい方がいいじゃねえか」

サム「そうそう。何より怖いのは、後先を考えて行動出来なくなること、だよ」

艦長「諸君、これより先の戦いを、ランドウおよびラセツ率いる新恐竜帝国との決戦とする！我々の戦力が整わない中であるが、死力を尽くしてくれ！」

一同「了解ッ!!」

副長「……テキサス、間もなく海峡へ出ます」

艦長「うむ。全速前進。ラセツが蛇牙城に到達する前に、何としても動きを抑える」

副長「しかし、相手が所持しているのは嘗てあのゲッターGすらも退けたと言う兵器。

グスタフを失い、整備やパイロットの状態も不十分な今の我々で、何処までやれるか…」

艦長「辛い戦いである事は、これまでもこれから変わらない。だが、我々が動かなくては、戦う力を持たぬ者達の平穏な暮らしが脅かされる事になってしまう」

艦長「我々には、大統領から託された未来を守る使命があるのだ。例え矢尽き剣折れる事になろうとも、守るべき者の為に暴力に抗い続けると言う姿勢を崩すことは出来ん」

副長「抗い続ける姿勢、ですか」

艦長「無論、気合いだけで戦争に勝つ事など出来ん。だが、想いなくしては大局を決める戦いに勝利する事など出来んのだよ」

副長「……」

艦長「心を強く持て。我々は今、歴史の流れの中にいる」

副長「…はっ！」

艦長「ラセツとてこちらの動きは悟っているだろう。周辺の警戒を厳とせよ！」

オペレーター「か、艦長っ！」

艦長「どうした？」

オペレーター「海底から、テキサスの周囲に浮上する反応あり！……こ、これは……！え、

AV-58です!!」

副長「何だと!？」

艦長「機関停止急げえ!!」

洋上の真ん中で、テキサスが動きを止める。その前方と後方、四方を囲うように、計4基のAV-58が姿を現す。

艦長「……ふう」

副長「…間一髪、と言うところでしたね」

艦長「ラセツめ……まさかこんな伏兵を用意してくるとは」

オペレーター「AV-58から、粘糸状の物体が本艦目掛け放たれます」

4基のAV-58から伸びた粘糸で拘束される。

艦長「これで、本格的にこちらの動きを抑えられたわけか」

副長「テキサスが大型艦で助かりましたね。小型艇ならば、小さな波の揺らぎで、AV-58を誘爆させていた」

艦長「天候も幸いしたか」

橘「大丈夫ですか、テキサス艦長」

艦長「こちらは何とかな」

橘「厄介な事になりましたな。まさか連中が、海上であの兵器を投入してくるとは」

艦長「うむ」

橘「直ぐにこちらから、AV-58無力化用の作業班を海上に派遣します。そちらからでは厳しいでしょう」

艦長「いや、そこまでゆっくりする事は出来んだろう」

橘「は？と、言いますと」

艦長「連中は、AV-58を使い、海上の我々の動きを制した。とすれば、次は上空のクジラを狙うだろう」

オペレーター「艦長！レーダーに感あり！航空型のメタルビーストとメカザウルスで

す！」

艦長「やはり来るか……！」

—— 格納庫。

橘『くっ……！各ゲッターチームに緊急スクランブル！直ちに出撃してくれ！』

瑞樹「まったく、ゆっくり休ませてはくれないのね」

菜々「こ、今回なんかペース早くないですか？ナナ達、さつき帰還したばかりですよ？」

みく「それだけ本当の決戦が迫ってるって事にや！弱音なんて吐いていられないよ、ナナちゃん！」

瑞樹「ゲッターの整備は？」

主任「全体で8割って所だ。エネルギー回りは心配ねえが、被弾箇所には気をつけてくれ！」

みく「8割も整備が済んでれば、後は腕でカバーしてやるだけにやあ！出撃するよ！」
美波「みくちゃん達の後ろに続くわ。美波、行きますっ！」

クジラの口を模したカタパルトから、ゲットマシンが発進し、その後ろにブラックゲッターが追隨する。

主任「かな子ちゃん、本当にそれで出撃するの気か？」

かな子「はいつ。真ゲッターの方はともかく、ゲットマシン単体なら使えるんですよ?」

班長「そりゃあ、そうだが…」

かな子「テキサスが敵に拘束されてる以上、少しでも戦力が必要な筈です。例えばゲットマシンでも、メカザウルスの相手くらいなら…!」

ニオン「後ろがつかえてるぞ。さっさとしろ」

主任「…仕方ねえ!無理は済んじやねえぞ」

かな子「はいつ!…何て言ってもちよつとは無茶して、頑張らないと。力を貸してね、真ベアー号!」

ニオン「ダイノゲッターロボ、出るぞ!」

莉嘉「はっ…はっ…はっ…!」 タツタツ

卯月「待ってください、莉嘉ちゃん!」

莉嘉「卯月?」

卯月「今回は、私にD2を操縦させてくれませんか?」

莉嘉「え、でも…」

卯月「何だかじつとしていられないんです。真ゲッターも、1号機と2号機はまだオーバーホールが終わってませんから」

莉嘉「……」

卯月「莉嘉ちゃん？」

莉嘉「何でもないよっ☆こういう状況だもん、ゲッターを使いこなせる、卯月に任せちやつた方がいいよね？」

卯月「そんな事……」

莉嘉「任せたよ、卯月☆メカザウルスをやっつけてね！」

卯月「…はい。莉嘉ちゃんの分も、精一杯頑張りますね！」 タツ

卯月「島村卯月、ゲッターD2、出撃します!!」

バシユウツ

—— 空中。

メカザウルス・バド『シヤアアアアツ!!』

みく「ゲッタートマホオークツ!!」

トマホークを横一閃。メカザウルスを真つ二つに両断する。

みく「足を止めてる間にうじやうじやと！鬱陶しい連中だにや！」

美波「前回あれだけ部隊を展開していたのに、どれだけ戦力を持つているの…?」

鉄甲鬼「マシーナランド以外でも戦力を残していたと考えるのが妥当だが」

ニオン「まんざらバカでもない。ランドウ相手に喧嘩を売ろうとするだけはあるか」

みく「敵を褒めてどうするのー!こんなところで、足踏みしてる時間なんてないのに!」

芳乃「落ち着きましょー?焦りも苛立ちもー、視界を曇らせてしまいましてー」

菜々「それは分かってますけど、でも、この圧倒的不利な状況の中で、北極に急がなきゃならない中で、慌てるなって言う方が無理ですよ!」

瑞樹「それでも、浮き足立つのは敵の思う壺よ」

みく「——っ!?!」

四方から放たれるメカザウルス・バドの音波攻撃を各機それぞれに散り散りになって躲す。

みく「ちい…!おちおち相談してる時間もないにや」

美波「陣形を組んでいても意味はないみたい。散開して各個撃破でいきましょう!」

芳乃「美波さんに同意致しましてー」

ニオン「ふん。好きにやらせてもらおう!」

ダイノゲッター1とブラックゲッターが前に飛び出し、殺到する敵群の迎撃に向かう。

瑞樹「みく、私達は後方で、敵の動きに注意して」

菜々「海面のAV-58に爆弾一発でも落とされたら、大変な事になりますよ!」

みく「1個だけでも街1つを消し飛ばす威力の兵器が4つ…」

瑞樹「いくらテキサスが核の衝撃に耐えられても、これだけの爆発を受けたら流石に只では済まないわ」

みく「下を守りながら上…：難易度激ムズだにや!」

叫び、視界に入ったバドにトマホークを投げ放つ。

バド『…!!』

みく「躲された!?!」

バド『キシヤアアアアツ!!』

みく「うにや…っ!?!」

かな子「みくちゃん!!」

ゲッター1に対して、反撃の体勢を取ったバドを、脇から飛来した真ベアー号のミサイルが撃ち落とす。

みく「…：にやあく…：。間一髪…：」

かな子「大丈夫ですか?」

瑞樹「お陰様で、助かったわ」

菜々「ゲットマシン1機って言っても、今は貴重な戦力ですねぇ」

かな子「ゲットマシン1機だけじゃありませんよ」

卯月「私もいます！」

みく「ゲッターD2には卯月チャンが？これで百人力にや！」

卯月「どこまでやれるか分かりませんが、とにかく頑張りますっ！」

みく「にや？」

菜々「百鬼メカが来ますよ！速いの：確か、メカ半月鬼とか言う奴です！」

かな子「集団に構わないで飛び込んでくるんですか?!」

卯月「——ッ！」

ゲッターD2のトマホークを抜き放ち、突撃を仕掛けるメカ半月鬼を迎え撃つ。

メカ半月鬼「——ギ……！ギギッ!!」

卯月「ぐう……っ！」

みく「卯月チャン!？」

菜々「ゲッターD2が押されています！」

瑞樹「他人の心配をしている暇は、なさそうよ」

メタルビースト・ビーン『!!』

メカザウルス・バド『!!』

メカ大輪鬼『!!』

みく「……メタルビースト、メカザウルス、百鬼メカ！ここは戦争博物館にやあ？」

瑞樹「だからこそ覚悟がいるわよ。一度倒した相手に、負けるわけにはいかないわ！」
みく「合点にやあッ！」

かな子「私も……！出来る限りをやらなきや！頼むね、真ベアー号！」

メカ半月鬼「!!」

卯月「ううっ……！」

勢いを増すメカ半月鬼の突撃に対し、

卯月「こうすれば……！」

トマホークの刃を滑らせ、突撃の動きを受け流す。

卯月「どうです!?!」

体勢を崩したメカ半月鬼に、蹴りを放って距離を取り、

卯月「ゲッターライフル！」

その背中をライフルで撃ち抜き、撃墜。

卯月「はあ……はあ……、やっぱり……」

卯月（何だかよく分かんないけど、ゲッターの動きが重い気がする……。エネルギーも

リミットギリギリ……。無茶は出来ませんね……）

卯月「それでも、晶葉ちゃんや莉嘉ちゃん、みんなのいるクジラに、手出しさせる訳

にはいきません！」

メタルビースト・ビーン『——!!』

卯月「行きます！ゲッタートマホーク!!」

—— 格納庫。

主任「おわつ！モタモタすんな！ガスやらオイルやら、引火する可能性のあるものは全部仕舞うんだよ！でなきや、俺らも安心して避難出来ねえだろうが!!」

古田「は、はいっす〜!!」

主任「……ん？」

莉嘉「………」

主任「莉嘉ちゃん、まだこんなところにいたのか…」

莉嘉「…大将」

主任「こんなところにいちやあ危ねえよ。ま、この艦にいたんじやどこも危ねえどな、今は」

莉嘉「………」

主任「さ、脱出ポッドのトコへ急ぐぞ。あそこなら何があっても、莉嘉ちゃんの命は守ってやれる」

莉嘉「脱出…」

主任「周囲は敵に囲まれてんだ。海上にもAV—58が出て、テキサスの戦力だつて

アテにならねえ。正直なトコ、莉嘉ちゃんをどこまで守ってやれるかも分からねえんだ」

莉嘉「……」

主任「脱出ポッドなら、クジラが墜とされてもいいように、頑丈に出来てる。万が一
て時にや、莉嘉ちゃんの命くらいは守ってやれる筈だ」

グラツ

莉嘉「…っ!? きやあっ!」

主任「大丈夫かい、莉嘉ちゃん! 揺れが大きくなつてきやがった。これはいよいよ急
がねえと……」

莉嘉「……アタシって、やっぱり足手まといなんだ」

主任「……? 莉嘉ちゃん?」

莉嘉「卯月や、リーナ達は何時も戦つて、傷付いて、痛くて、怖くて、辛はずなの
に、それでも必死に前を向いて戦つてる」

クジラの船体が揺れる。

莉嘉「きやつ……だから、アタシだって力になれるんだって、ちっぽけかもしれ
ないけど、アタシにだつて出来ることがあるんだって、ずっとそう思つて来たけど……」

莉嘉「けど、ゲッターを動かすのは卯月の方がずっと上手だし、リーナはどれだけボ

ロボロになっても、最後まで諦めないでどんな強い奴にも立ち向かっていける」

莉嘉「アタシはこうして大将に迷惑掛けて、みんなの足を引っ張ることしか出来ないんだ！」

主任「そいつあ違う！」

莉嘉「!？」

主任「あ……すまねえ。莉嘉ちゃんがあんまり柄にもねえ事言うもんだから声を上げちまつたぜ」

莉嘉「柄にもないって……！アタシだって、必死で考えて、それで……！」

主任「分かった分かった。そんなのは今に始まった話じゃねえじゃねえか。難しく考えるのは、らしくねえぞ」

莉嘉「むう……！大将は何時もそうやってアタシを子供扱いして……！」

主任「ははっ、悪いな。丁度莉嘉ちゃん位の娘がいるからよ」

莉嘉「……それ、前にも話してた」

主任「ああ、そうだったな。ほら、さっさと行くぞ」

主任が先導して、通路を歩き出す。

主任「今頃、何してるか。日本は平和な筈だから、無事でいてくれるとは思うんだが」

莉嘉「……早く会いたい？」

主任「そらあ当然さ。……だが、もう少しの辛抱だ。こつちにも、手の掛かるガキ共がいるからな」

莉嘉「それって、アタシの事？」

主任「莉嘉ちゃんだけじゃねえよ。李衣菜に卯月ちゃんに、何よりゲッターロボは、俺にとつちや我が子みてえなもんだ」

莉嘉「ゲッターが？」

主任「まだ早乙女博士が生きてた頃、最初のゲッターの頃から開発に関わってきたからな。我が子が前線で戦うのに、黙って見ちゃいられねえさ。莉嘉ちゃんと同じよ」

主任「アタシと？」

艦内が一層激しく揺れる。

莉嘉「きやあつ!!」

主任「ンだあ……?この揺れ……。それに、さっきの音……まさか直撃か!?——つ!?!」

莉嘉「た、大将……!」

主任「大丈夫だ、莉嘉ちゃん。しつかり掴まって——……うおつ!」

莉嘉「え……きやあツ!!」

すぐ側の隔壁を突き破り、爆炎が2人を包んだ。

莉嘉「ケホツ…ケホツ…!!最悪く…!!」

主任「ははっ、莉嘉ちゃん…。怪我はないかい？」

莉嘉「アタシは大丈夫…!!って、大将!ち、血が…!!」

主任「へへっ…!!図体がでけえのが、役に立ったみてえだな…!!」

莉嘉「そんな事言ってる場合じゃないよ!すぐに手当てをしないと…!!」

主任「心配すんなって。この図体の通り、頑丈に出来てる」

莉嘉「でもお…!!」

主任「それよりよ、周りを見ろよ。さっきの爆発で火が出ちまつてる」

莉嘉「ああ…!!そうだけど!」

主任「その角を曲がった所に、非常用の消火器がある。そいつを持ってきてもらえねえか?」

莉嘉「いや…!!大将の手当ては…?」

主任「んな事より、この火が燃え広がっちゃったら、クジラは中から爆発しちゃう!自動消火装置も機能しねえって事は、艦内のシステムもおかしくなっちゃったのかも知れねえ」

主任「今一番近くにいた俺達が、この火を鎮めねえと、みんな死んじゃうかも知れねえんだぜ?」

莉嘉「みんな……死……」

主任「な？みんなの役に立ちてえんだろ？なら、今がその時だぜ」

莉嘉「……分かった」

納得しないまでも頷き、言われた通路の角を曲がる。

莉嘉「つ……？……大将！消火器なんて何処にも……」

言い、主任の所に振り返ろうとした時、

主任「……へへっ」ガシユッ

莉嘉の目の前に、隔壁が降りた。

莉嘉「えっ!？」

主任『悪いな、莉嘉ちゃん』

隔壁越しに、主任の声がくぐもって聞こえる。

莉嘉「そんな、大将！どうして……!」

主任『まったく、運が悪かったぜ。隔壁を手動で下ろすコックが、こつち側』にしかねえんだから。莉嘉ちゃんまで閉じ込めるわけには、いかねえよな』

莉嘉「だからって……!待ってて!こつからならブリッジに行ける。すぐに助けを連れてくるから!」

ダッ

主任「……おう、待ってるぜ……。早く、してくれ……。よ……！」

莉嘉「はあ……！はあ……！——晶葉ッ！」

晶葉「莉嘉！まだ避難していなかったのか？」

莉嘉「そうだけど……それどころじゃないの！大将が、隔壁で閉じ込められて……！」

晶葉「何？それはどのブロックの辺りだ？」

莉嘉「えーつと、確か脱出ポッドの方に向かってたから……Mブロック！」

橘「何？」

晶葉「Mブロック……」

橘「では、やはり先程のは……」

晶葉「そういう事、だったようですね……」

莉嘉「？ 早く大将を助けてよ！」

晶葉「莉嘉……」

莉嘉「な、何……？どうしたの？早く行かないと！艦内火災も起きてて、その中に主任はいて……だから……！」

晶葉「すまない。主任を助けることは、もう出来ない」

莉嘉「どうして……！晶葉なら、隔壁を解除できるでしょ？確かに、大将怪我してるけ

ど、急いで手当てすれば……！」

晶葉「違うんだ。そう言う事じゃ、ないんだよ……」

莉嘉「晶葉……」

橘「莉嘉くん。先程クジラは敵メタルピーストによる爆撃を受けた。その中でもっとも損害の大きかった被弾箇所が、Mブロックだった」

莉嘉「そ、そうなの……」

橘「それでな、艦内への延焼やシステムエラー……この艦を失わないためにも、Mブロックは放棄、艦から切り離された」

莉嘉「え……？」

晶葉「自動制御装置も作動せず、誰かが手動で隔壁のコックを降ろさなければ、と話をしていたところで、突然Mブロックの隔壁が降りたのは、こちらで確認出来た」

橘「それがまさか、整備主任の手によるものだったとは……」

莉嘉「それで、これ幸いって、切り離したの!？」

晶葉「……この艦を守るためだ」

莉嘉「晶葉アツ!!」グツ

橘「やめないか、莉嘉くん。晶葉くんを責めるのは、筋違いだ」

莉嘉「……ツ！」

橘 「状況から見て、必ず誰かが行かねばならなかった。何より、Mブロックの切り離しを指示したのは、この私だ」

莉嘉 「っ……………！どうして……………」

橘 「莉嘉くん……………すまない」

莉嘉 「アタシと同じくらいの子供がいたんだよ……………？あとちよつとの辛抱で、ランドウを倒して、家族の所に帰るって！そう言ってたのに!!」 ダンッ

膝から崩れ落ちて、床面に拳を叩き付ける。

晶葉 「……………」

橘 「……………」

通信士 「…博士、戦艦テキサスから通信です」

橘 「……………繋いでくれ」

艦長 『……………橘博士』

橘 「申し訳ありません、テキサス艦長。そちらに援軍を送るどころか、敵襲の迎撃をするだけで精一杯です」

艦長 『ああ、状況は理解しておるよ。その上で、貴艦に頼みがある』

橘 「頼み？」

艦長 『この包囲網を抜け、ラセツを追うのだ』

橘 「ラセツを？」

艦長 『そうだ。ここで共倒れになるよりは、その方がまだ傷跡も遺せよう』

橘 「しかし、それではテキサスが……！」

艦長 『既に、覚悟は出来ている。私も、乗員も！ランドウやラセツの手より世界を救うのは、我々でなければならぬ通りはない！』

橘 「……………」

莉嘉 「まさか、テキサスを見捨てたりしないよね？テキサスには戦力とかそんなじゃない、リーナや茜達だって！」

橘 「……………艦長、貴方の願いは受諾した」

莉嘉 「え……………」

橘 「これより本艦は、敵包囲網を突破し、ラセツ及びランドウとの最終決戦に向かう！」

莉嘉 「博士！」

晶葉 「口を出すな、莉嘉」

莉嘉 「だって！」

晶葉 「博士だって、断腸の思いなんだ。鈍らせるな！」

莉嘉 「そんな……！リーナ……加蓮、奈緒、茜、美穂、アーニヤ、凜……！」

橘 「オーバーブースト、用意ッ!!ゲッター各機を帰艦させろ！」

クジラから、帰艦を告げる閃光弾が放たれる。

ニオン 「何いッ!？」

美波 「この状況で、帰艦…!？」

みく 「橘博士、何を考えてるの！」

卯月 「私達で、ラセツを追うんです」

菜々 「ええ!?!テキサスを、見捨てるんですか!」

瑞樹 「でも、ここで共倒れになれちゃダメだよ、元も子もないとすれば……仕方ないのかもしれないわね」

鉄甲鬼 「…背に腹は代えられんか」

芳乃 「……………」

かな子 「李衣菜ちゃん、みんな……ごめんなさいっ」

展開したゲッターロボが、帰艦する。

橘 「よおし、衝撃に備えろ。オーバーブースト!!」

莉嘉 「……………っ!!」

クジラが加速。質量で正面に展開する敵勢を強引に押し退け、北極までの道を切り開いた。

古田「着艦したゲッターから、整備取り掛かるツスよ！決戦までに、少しでも状態を良くするツス！」

美波「古田さん!?整備班の……主任はどうしたんです?」

古田「主任は……分かんないツス！」

美波「分からないって……」

卯月「……」

みく「みく達だけで先行したとしても、敵は、ランドウにラセツの軍勢……!」

菜々「敵味方入り乱れるのは必至です。ナナ達に勝算は……?」

瑞樹「後ろ向きに考えすぎてもダメよ。やれる事を、やるしかないわ」

かな子「テキサス、無事でいてくれればいいけど……」

芳乃「他を心配している暇は、ないのでしてー」

卯月「主任さん……必ず、ランドウは倒してみせます。だから——!」
つづく

第30話 『北極原の戦い!!』

くくく 戦艦テキサス 格納庫 くくく

李衣菜 「一体何が起きたの!?! 外の状況は！私達は待機つたつて、敵襲があるんじゃない？」

シュワルツ 「ちったあ落ち着けよ。ランドウ由来の戦略兵器で俺達が身動き取れねえつてんだろ」

李衣菜 「うつ……」

ジャック 「シュワルツの言う通りダゼ。ここでユーがPanicになつても仕方ないネ！」

李衣菜 「でもさ！ここで待ち惚けなんて、落ち着かないよ！」

シュワルツ 「ギャーギャー喚いた所で、ここから出られる訳じゃねえだろうがよ」

リンダ 「AV-58の格納庫の出撃口まで張り巡らされて、私達のマシンは例えゲツトマシンだつて出撃不能よ」

凜 「完全に動きは抑えられてるんだね」

加蓮「上手く嵌められたね。AV-58なんて、そんなの今更出してくるとは流石に思わないっしょ」

メリー「完全に油断していたわ。もう全てのAV-58は、使い切ったと思っていたのに…」

ボブ「一つだけでも都市一つを吹き飛ばす破壊力の戦略兵器。それが一度に四つも…。一齐に爆発した日にやあ…：ゾツとしねえぜ」ブルツ…

リンダ「けど、無力化自体は出来る筈よ。一つでも無力化させられれば、その包围網にも穴は出来るわ」

サム「問題は、無力化するまでにどれだけ時間を使うか、さ。現状、AV-58に取り付く手段が限られている上、ここは海の上」

ボブ「当然、陸地のようにはいかねえ。作業が難航しちまったら、それだけ時間を喰っちゃまう」

茜「そんなに待っていられませんよ！クジラに乗った卯月さん達は先にランドウとの決戦に向かったんです！早く加勢しなくては…！」

アーニヤ「アカネ、気持ちは、分かります。ですから、今はみんなで、状況を打破する手段を考えましょう？」

茜「うう〜！何も出来ないと言うのは、歯痒いです…！」

アーニヤ「それにしても、少し……С т р а н н о、妙、ですね」

リンダ「妙？」

アーニヤ「AV―58……やろうと思えば、相手の側からも、起爆させること、出来た筈です」

サム「ああ、そう言えば。その通りだ」

李衣菜「出現と同時に起爆させられてたら、私達、今頃天国行きだったってこと？」
シユワルツ「違え、そんな単純な話じゃねえよ」

ボブ「じゃあ何でラセツはAV―58を起爆させねえんだ？」

加蓮「単純に、今爆破させる必要がないって事じゃない？」

ボブ「だから、何で？」

加蓮「それは……えーっと、凜？」

凜「……AV―58は、私達の動きを牽制するための抑止力だと思う」

リンダ「抑止力？」

凜「ラセツにとつても、ランドウとの戦いに横槍を入れるのは面倒な筈だから。三つ巴になれば、必然と戦闘での犠牲が増える。それを嫌ったって事はないかな？」
シユワルツ「ランドウとの決着が着くまでは、下手な動きはさせねえってか」

加蓮「ない話じゃないかも。アタシ達の殺すのは、ランドウを倒してからの方が効果

的だもんね。…見せしめとして」

ジャック「God damn! 全部ラセツの思い通りってカ!?」

李衣菜「どうにか……どうにかして、ゲットマシンだけでも外に出せないのかな……?」
メリー「確かに、小型マシンに分離できるゲッターなら、この拘束を抜けられそうなものだけだ」

ボブ「でも、いくらゲットマシンがロボットより小型だつたつて、10mもあるんだぜ? そんな隙間つたつてな……」

李衣菜「う……ん……:……あ」

加蓮「何かいいアイデアでも浮かんだ?」

凜「碌でもない考え、の間違いじゃない?」

李衣菜「酷いなく。まあ、確かにちよつと正攻法じゃないんだけどさ」

凜「ほらね」

李衣菜「まあまあ。こんなところでくたばるのもなんだし、一つ、乗ってみない? 上手く行けば、私達だけじゃなく、シユワルツ達もみんな出れるかもしれないよ!」

—— 第一艦橋。

艦長「……クジラは行ったか」

副長「はい。敵の航空戦力は、クジラを追撃するようです」

艦長「敵を追撃するつもりが、まさかこちらが追われる側になるとはな」

副長「あの様子では、北極まで辿り着くまでも、無傷ではいられないでしょう」

艦長「全てラセツの迷惑通りか？せめて一泡噴かせてやりたいところだな」

副長「ですが、テキサスが身動きが取れない以上、我々に出来る事は何も…」

艦長「せめてロボット戦力だけでも、彼女達の元に送り届けてやりたいが…」

李衣菜『艦長！聞こえますか、格納庫の李衣菜です！』

艦長「むっ。どうかしたかね」

李衣菜『えっと、まず状況を確認したいんですけど、テキサスはやっぱり動かすわけにはいかないですよね？』

艦長「…遺憾ながらな。AV-58に拘束され、身動きは取れない状態だ」

李衣菜『やっぱり…』

副長「ついさつき、ラセツ・ランドウを打倒するためにクジラも先行させたところだ」

李衣菜『クジラを？じゃあ、外の敵は…』

副長「全て、クジラを追撃していった。ラセツは、現状で我々を無力化したと思って
いるらしい」

李衣菜『でも、こっちに敵が回ってこないって言うのはラッキーでしたよね！』

副長「むっ…ラッキーだと…？」

艦長「ふはははは……！この局面に於いては、リーナくんの方が前向きに物事を見ているようだ」

李衣菜『はいっ！その上で、私達が出撃する許可を出してほしくて』

艦長「ほう……。許可？」

副長「出撃……？一体どうするつもりだ？」

李衣菜『道を作ります。A V—58を刺激せず、私達が出られる道を。だから、その上で艦長に許可を！』

艦長「アレを刺激せずに、出撃する方法だと……？」

副長「危険です！万が一出撃できたとしても、ここから北極までは、まだ何千キロも離れているんですよ！プラズマ駆動のロボット戦力だけでは、例え北極に辿り着いても戦う力を残しません！」

李衣菜「そこは、外部ジェネレーターとか、エネルギーパックを大量に持つっていつて何とかします！艦長!!」

副長「……………」

「戦艦テキサス、苦戦しているようだな」

副長「何だ？この通信は、どこから……」

オペレーター「艦長！テキサスの後方から、こちらに接近する熱源があります！」

艦長「あれは……!」

李衣菜『えっ……? 何? 何が起こってるの……?』

――。

くくく 蛇牙城 くくく

コツコツコツ――

ラセツ「……」

恐竜兵「ラセツ様!」

ラセツ「ランドウを見つけたのか!」

恐竜兵「いえ、蛇牙城内を隈無く搜索しておりますが、未だ発見に至っておりません」

ラセツ「……妙だな……。静かすぎる」

恐竜兵「我々に恐れをなし、逃げ出したのでしようか?」

ラセツ「世界に対して啖呵を切った男がか? 奴の逃げ場所など何処にもないだろうよ」

恐竜兵「では……?」

ラセツ「何かを企んでいるのは違いない。しかし、その為に自らの根城をもぬけの殻にするとは、ほとほと底の知れた男よ」

恐竜兵「では、ランドウの行方が知れぬ今、人間共にトドメを!」

ラセツ「ふむ……？」

恐竜兵「連中の旗艦、テキサスは既に我らの手中。ランドウとの決戦に備えてこそ、後顧の憂いは断つておくべきです！」

ラセツ「ふう……」

ザシユツ

恐竜兵「え……？ラ……せ、ツさま……」 ドサツ

ラセツ「身の程知らずが。我が戦いに意見するとは」

恐竜兵2「ラセツ様！クジラが、ゲッターが来ます!!」

ラセツ「ふん。身の程知らずが、まだいるようだ」

恐竜兵2「如何なさいます？ラセツ様！」

ラセツ「ふんつ。我ら新世界への見せしめは、テキサス一つがあれば良し！命知らずの無法者共には、その愚行を骨の髄まで教えてやれ!!」

恐竜兵2「ハッ！」

タツタツタツ——

恐竜兵3「ラセツ様——」

ラセツ「今度は何事か!？」

恐竜兵3「ランドウの発見には至りませんでした、例のモノ」と思われる物体を

発見したと、地下区画を搜索していた部隊から連絡が!」

ラセツ「おお……!そうか!……フツフツフツ!ランドウめ、あまりにお粗末じゃないのか?これは」

恐竜兵2「クジラ、戦闘空域に入ります。迎撃のメタルビースト、及び機械化恐竜部隊、展開。改造ウザーラ、中央に配置します!」

ラセツ「よろしい。クツクツクツ……!来るがいい、ゲッターロボ。貴様らのボディをズダズダに引き裂いて、この蛇牙城を彩る墓標としてくれるわ——!!」

菜々「……スゴい、敵の数ですよ……?」

美波「ドラゴンタートル攻略戦の時と同じか、それ以上の数ね」

みく「ランドウとラセツは、戦闘をしてるって話じゃなかったの?」

瑞樹「その様子は見られないみたいね。ラセツが蛇牙城を制圧したか、それとも他の理由があるのか……」

ニオン「敵の事情など知るものか。奴等を全滅させれば話は済むのだろう!」

菜々「な、ナナ達だけで、この数を相手にするんですか!?!」

卯月「泣き言を言っても、弱音を吐いても、立ち向かうしかないんです!——マツハウイング!!」

かな子・美波 「卯月ちゃん！」

ゲッターの速度を上げ、敵陣に切り込むゲッターD2に、ブラックゲッターと、真ベアー号が追隨する。

卯月 「かな子ちゃん、美波さん！」

美波 「何時までも卯月ちゃんに先攻させるわけには行かないわ。頼りないかもしれなけれど、フォローさせて！」

かな子 「今は援護するくらいしか出来ませんが、チームですから。卯月ちゃんに付いて行きます！」

卯月 「……ありがとうございます！」

かな子 「ミサイルを撃ちます！ 怯んだ隙に、2人は突撃を！」

卯月 「はいっ！」

美波 「分かったわ！」

かな子 「えいっ！」

真ベアー号の大型ミサイルが放たれ、黒い爆煙が舞う。

卯月 「ゲッターマホーク!!」

美波 「ゲッタースパイク!!」

そこに、2体のゲッターが黒煙を突き破ってメタルビーストやメカザウルスの軍勢を

蹴散らした。

卯月「っ……!このっ!」

美波「やああああッ!!」

ゲッターD2は両手に携えたトマホークで、ブラックゲッターは右拳のスパイクと左腕のレーザーブレードを使い、敵勢の首や胴体を切り裂き、打ち砕く。

美波「美波、1機撃墜……ふっ。……何て」

卯月「美波さん、こっちのメタルビーストを!」

美波「任せて!」

卯月・美波「「ええええいッ!!」」

殺到する敵勢を退け、道を切り拓いた先には、

卯月「ウザーラ……!」

ウザーラ『キヤアアアアア——ッ!!』

美波「……まさか、ゲッターGを苦しめた相手と、ここで戦うことになるなんてね!」

卯月「怖いですか?美波さん」

美波「ふっ。卯月ちゃんが頼もしいのは、不思議な気分」

卯月「な、何ですか、それ?」

美波「大丈夫。ちよつと怖いけど、気持ちで負けているわけにはいかないものね!」

卯月「させませんッ!!」

ガギインッ

ゲッターD2のトマホークは、改造ウザーラの表装で火花を上げる。

卯月「……っ!」

ゴール「何だ?雑魚か!雑魚がああああッ!!」

1頭の放つ重力光線が、ゲッターD2を狙う。

卯月「くっ……!」

浴びせられる光線を紙一重で躲していくが、掠り受けるダメージは蓄積していく。

卯月「う……ぐ……っ!流石に、受け流しきるのにも限界が……!」

ゴール「死^ぢ、いいいねええエえエえッツ!!」

限界に達し、直撃を受ける。

卯月「あ^ぢ、あ……!あああッ!」

みく「卯月ちゃん!」

体勢を崩して落下したゲッターD2を、ゲッター1がキャッチ。

卯月「みくちゃん……。ありがとうございますっ」

みく「みく達の事、忘れてもらっちゃ困るにや。みく達だつて、ウザーラとは一度、

戦つてるんだからね」

瑞樹「その時は一方的にやられてたけどね」

菜々「ヤケクソになって飛び込んで、卯月ちゃん達がやられる原因を作ったりもしましたよね？」

みく「だから！今度は迷惑掛けないよう、後ろから援護して確実に勝ちに行くにやあ！」

卯月「そうですね！こんなところで、立ち止まるつもりはありません！」

ゴール「ぐあああああつ!! 煩いぞ蠅共めがアアアアツ!! まとめて消し去ってくれるうッ!!!」

落雷のように重力光線が降り注ぎ、大地はうねり、その中心で荒れ狂う改造ウザーラは、さながら神話の龍の様。

みく「下手な鉄砲のサイズがデカ過ぎにや！」

美波「これじゃあ近付けないっ！」

みく「こうなったら…!! 下手な鉄砲には、下手な鉄砲で立ち向かう！」 バッ
ゲッターがゲッターウイングをマントの様に纏う。

みく「スパイラルゲッタービームツ!!」

拡散させたゲッタービームで、降り注ぐ重力光線を迎え撃った。

みく「どうにや!?! みく達のゲッターだって、あの頃からパワーアップしてる！やられ

たままの嘯ませ犬もとい、嘯ませ猫なんてならないんだからね!」

菜々「つて言つても、防戦一方ですよ!」

瑞樹「そうね。このままでは反撃できない。：私達わね」

みく「敵の攻撃を迎え撃てば、道は作れる。後は任せたにゃん! 卯月ちゃん、美波さん!」

卯月「はいっ!」

ビームが交わり合う中を、ブラックゲッターが先導し、ゲッターD2が続く。

ゴール「寄るなあ! 薄汚いサル共があああッ!!!!」

重力光線がゲッターを襲う。

美波「みくちゃん達と同じ要領で……行けるッ!」

美波「——ゲッタービィイームッ!!」

ブラックゲッターのビームが、重力光線を迎撃。

美波「攻撃は私を受け止めるわ! 卯月ちゃん!!」

卯月「ありがとうございます、美波さん!」

トマホークを水平に構え、改造ウザーラに肉薄。

ガギインッ

ゴール「グヒヒッ! 効かん、効かんぞナマクラア? 如何なる攻撃の前デモ倒れル訳に

はいかぬウ!!それモ何億何千万ト言う、ハ虫人類のオ……未来の為にイイイイイッ!!」

卯月「一撃でダメって言うなら……!」

2本目のトマホークを抜き打ち、

卯月「何度でも、叩き込むだけです!!」

ダブルトマホークの連打を、一ヶ所に狙いを定めて叩き込む。

卯月「えいつ、やつ、はつ、たつ……!でえええいつ!!」

ゴール「無駄……!無駄無駄無駄無駄無駄無駄!!」

卯月「やつぱりトマホークだけじゃあ……次は!」

2本のトマホークがボロボロになったところで、

卯月「ダブルゲッターライフルツ!」

両腕でライフルを抜き打ち、連射。

卯月「ええええいつ!!」

ゴール「小賢しい蠅……!サル!小娘エ!!何をやる気かア!!」

卯月「例えどれだけ装甲が厚くても、これだけ攻撃を繰り返せば……!」

攻撃を続けた箇所が赤熱化している。

卯月「ゲ……ッタアアービィーームツ!!」

至近距離で、ゲッタービームを撃ち込む。

ゴール「グギギ……！小賢しい！小賢しいモノで、私はア……！倒れんツ!!」

卯月「ツ……！火力が、足りない……ツ！」

キュオツ

ゴール「!?」

後方から、もう一筋のゲッタービームが飛来する。

卯月「……！……！ダイノゲッター！」

ニオン「フツ……。行くぞ！」

卯月「はいっ！」

卯月・ニオン「ダブルゲッタービームツ!!」

タイミングを合わせた2機のダブルゲッタービームにより、遂に改造ウザーラは爆ぜる。

ゴール「ぐおおおお……ツ!？」

美波「やった!？」

芳乃「否……。表装を穿ち、手傷を負わせただけでしてー」

みく「だとしても、大きな進歩にや！」

瑞樹「直ぐに立ち上がるわよ！気を抜かないで！」

ゴール「やらせるかアアアアアッ!!恐竜帝国の夢をオオオオオオツ!!」

みく「まあだ言ってるにや？ 恐竜帝国なんて、とつくに滅んでるよ！」
ニオン「……………」

鉄甲鬼「色々と、複雑だな。お前も」

芳乃「然りー。今は苦境を乗り越えねばー、先はなくー」

ゴール「ウルアアアアツ!!滅びぬウ…! 恐竜帝国は滅びはせぬウウウツ!!」

卯月「!?」

瑞樹「来るわよっ!」

放射状に拡散して放たれるウザーラの重力光線を散開して回避。

菜々「ゲッター2体ばかりでも倒せない相手、これ以上どうすればいいんですか!？」

美波「2体でダメなら、それ以上の数を合わせれば!」

卯月「態勢を立て直して…!ゲッターD2を中心に、陣形を作りましょう!」

みく「…!卯月ちゃん、危な…っ!」

突進の勢いで突っ込んできたウザーラの、テールスイングが割って入ったゲッター1を打ち飛ばす。

みく「うにやああああッ…!？」

卯月「みくちゃん!」

海中に落下するゲッター1。

卯月「みくちゃん!?大丈夫ですか?応答してください、みくちゃん!」

ニオン「余所見をしている暇はないぞ!」

卯月「っ!」

周囲に放散するように放たれた重力光線を寸でのところで躲す。

卯月「くっ……!」

美波「これじゃあ、みくちゃん達を助けてる暇もない……!」

芳乃「今は信じましょー?みくさん達もゲッターに選ばれし者の身ー。そう易々と倒れる筈はないのでしてー」

鉄甲鬼「ウザーラがまとめて消してくれているとはいえ、メタルビーストとメカザウルスも残っている。周囲に気を回していると、不意を突かれるぞ」

卯月「一度態勢を立て直しましょう。お互いに死角をカバーして、ウザーラの攻撃にも、離れすぎないように!」

美波「了解っ!」

——海中。

みく「うう……ん……」

瑞樹「みく?みく!しつかりなさい!」

みく「ん……にゃ……?ここは……目の前お魚が一杯……勘弁して」

瑞樹「いい加減にい……目を覚ましなさいっ！」　グンツ

みく「ぶにやつ!？」

2号機のコックピットからの操作で、強引にゲッターを立ち上げる。

菜々「目が覚めましたか？みくちゃん」

みく「ん……ナナちゃん……？そうだ、ウザーラ！」

菜々「大丈夫ですよ。今上で卯月ちゃん達が戦ってくれています！」

みく「そっか、ならみく達もここで休んでなんていられない！早く戦闘に戻らないと

……！」

瑞樹「落ち着きなさい。今迂闊に飛び出しても、ウザーラの的になるだけよ」

みく「的……？そういえば……」

瑞樹「気付いたようね」

菜々「ウザーラの攻撃、海中までは届かないようです」

瑞樹「おまけに、展開してる敵の部隊も空中や陸上からの迎撃がメインで、海中戦を得意としている敵はいないわ」

菜々「思わぬ穴、見つけちゃいましたね！」

みく「でも、ここにずっといたって何の解決にもならないよ」

瑞樹「だからこそ、突破口を見つけ出すのよ」

みく「突破口？」

瑞樹「幸い、ウザーラからの攻撃も止んでいるわ。こっちが出ていけないから、後回しにするつもりなんでしょうね」

菜々「他の敵さんも、海中まで来てナナ達を討とうとする人はいません。これなら、落ち着いてウザーラの観察が出来るって事ですよ」

瑞樹「ウザーラを仕留める事が出来るウィークポイント。そこを見つけて、反撃の機転にするのよ」

みく「成る程ーって、ウィークポイントなんて、そう都合よく見つかるものなの？」

瑞樹「さあ？探してみないことには始まらないわ。大丈夫、こっちには目が6つあるし、亀の甲より年の功、頼りになる頭脳だつてあるわ」

菜々「ちよつと、自分の事褒めすぎですよー？瑞樹さん」

瑞樹「……さあ、冷静に状況を分析するわよ！」

みく「……」 ジーツ

瑞樹「……」 ジーツ

菜々「……」 ジーツ

……。

みく「……うう……！ダメにやあ……つ！」

瑞樹「以外と気が短いわね」

みく「そもそも、ゲッターGも苦戦させた相手に弱点があるとか、本気で考えてるの!?」

瑞樹「諦めてしまったらそれこそ何もかも終わりよ。死中にこそ活を見出だすの」

みく「根性論じや結果は出せないにや」

瑞樹「計算だけでは、勝利は掴めないものよ」

菜々「ああもう！こんな時に喧嘩しないで下さい！言い争ったって問題は解決しませんよ！」

みく「それは分かってるけど……！だったら、菜々ちゃんは何か、打開策見つけた？」

菜々「うえ!? あっ、えくつとお……。あ、ほら！卯月ちゃんとニオンさんが空けた穴がありますよ！」

みく「穴……？ダブルゲッタービームの？そんなんで……」

瑞樹「……その手があったわね」

菜々「え？」

瑞樹「考えなくても良い話だったわ。私達で、その穴を広げるのよ」

みく「穴を広げる？けど、みく達のゲッタービームじゃ、大したダメージを与えられないよ」

瑞樹「だから、私が行くのよ」

みく「にや?……ああ、そう言う…」

菜々「まあた難題をしれつと言つてきますね…」

瑞樹「大丈夫。私達なら、出来るわ」

菜々「根拠のない信頼は、時として人を不安にさせますよ…」

みく「ま、賭けてみるのは、悪くないんじやにやい?」

菜々「やるからには、ちゃんと成功させてくださいよ!」

瑞樹「当然じゃない。それじゃあやるわよ、みく!」

みく「うにや! オープンゲツト!!」

海底でゲッター1を分離。

瑞樹「——チェンジ! ゲッター2ツ!!」

海面に接する海中ギリギリのタイミングで合体。海面にはゲッター2の姿を覗かせ、飛び上がる。

瑞樹「ドリルツ、アームツ!!」

そのまま加速して速度を上げ、ドリルをウザラめがけて突き立てる。

ゴール「うぬう!?!」

瑞樹「やあああああッ!!」

ドリルの切っ先を、ダブルゲッタービームの命中した箇所、ウザーラの歪んだ装甲板へと突き立て、穿ち削っていく。

美波「ゲッター2!?!」

卯月「瑞樹さん!」

鉄甲鬼「ドリルでウザーラの傷穴を拡げるつもりか!」

瑞樹「ぐっ…!」

ドリルと装甲の摩擦で生じる激しい火花が、ゲッター2を包む。

ゴール「ぬうウ…?小癩なサル…:五月蠅いハエがアアアアツ!!」

鉄甲鬼「不味い…!反撃が来る、それ以上は危険だ!離れろ、瑞樹!」

瑞樹「まだよ…!もう少し…っ!!」

ゴール「消エテナクナレエエエ!!」

重力光線が、ゲッター2を襲う。

菜々「きやあああああツ!!」

みく「うにやあああああっ!?!」

鉄甲鬼「瑞樹!」

卯月「っ…!美波さん!」

美波「ええ、卯月ちゃん!」

ゲッターD2のゲッターライフルと、ブラックゲッターのゲッターマシンガンで、ゲッター2を攻撃するウザーラの頭部を攻撃し、重力光線を停止させる。

ゴール「サルめが…!」

菜々「か、間一髪でした」

瑞樹「後30秒攻撃を受けていたら、ゲッター共々木っ端微塵だったわね」

みく「冗談じゃないにや…! 流石に天国まで付き合うつもりはないよ!」

瑞樹「分かってるわ。これでもう、十分よ!」

一度、ドリルアームの腕を大きく引き、

瑞樹「ドリルパンチ!」

拳を打ち出すような動作と共にドリルを射出。ドリルを根本まで深く突き刺し、ゲッター2は射出時の反動を使って後方へ。

菜々「うわあああああ…?!」

瑞樹「オープンゲット!」

体勢を崩したゲッター2を即座に分離させ、

みく「チエーンジゲッター!ーッ!!」

ゲッター1に合体。ゲッターウイングを広げ、宙で制動する。

瑞樹「今よみんな。ドリルを狙って!」

かな子「ドリルを…?」

ニオン「成る程。分かりやすいだ!」

みく「みく達のゲッターの力を合わせるにやあ!」

芳乃「よしなにー。心得まして?ニオンさんー」

ニオン「ふんっ、言われるまでもない!」

美波「ゲッター2の攻撃に、4機分のゲッタービームなら!」

卯月「やりましょう、皆さん!せーのっ、で!」

みく「ゲッター!」

ニオン「ゲッター!」

美波「ゲッター!」

卯月「ゲッター!」

4人「二「ビィイーームツ!!」二」

ズ
ワ
ツ

束ねられた4本のゲッタービームが、先ずはウザーラに突き刺さったドリルに命中。ドリルは爆発し、その熱と衝撃によって更に開かれたウザーラの傷を、ゲッタービームが貫き、その内部までも等しく破壊し、ダメージを深く、重く与えていく。

ゴール「ウギヤアアアアアツ!!」

内側からゲッターエネルギーを溢れさせながら、崩壊していく改造ウザーラ。
かな子「やった……!」

みく「ゲッターGを倒した相手に、みく達だけでホントに勝てちゃった……!」

ニオン「気を抜くのは早いぞ。まだ全ての敵を倒した訳ではない!」

芳乃「……………」

鉄甲鬼「どうかしたのか、芳乃?」

芳乃「…邪気はー、今尚そこにありましてー」

鉄甲鬼「? ニオンの言ったことか? それならば皆理解して…」

芳乃「否ー、その事ではなくー」

鉄甲鬼「?」

美波「み、みんな! ウザーラの様子、ちよつと可笑しいわ!」

みく「え!」

芳乃「邪気は潰えておらずー。深く禍々とその闇を濃く湛えていくのでしてー。ゲッターを恨みし者の闇ー。ゲッターを討ちー、その力で世界を手に入れんとするー、帝王の邪気はー…」

ゴール「ア、……ア、ア、アッ……!」

かな子「あれは……帝王ゴール? どうして、ゲッター線の中で生きてるんですか!」

美波「確か、ゲッター線に耐性のないハ虫人類は、ゲッター線を浴びて消滅する筈……」
 菜々「な、何が起ころうとしているんですか……?」

ゴール「ア……アア……! 我が神ユラーよ、申し訳ありません……! 貴方から賜りしこの命を以てしても、ゲッターを倒すことは叶いませんでした……!」

瑞樹「ユラー……?」

ニオン「恐竜帝国で信仰されていた神の名だ。……追い詰められて、とうとう頭が可笑しくなったらしいな」

ゴール「ですがッ! このゴール決して只ではくたばりませぬ! 我に残りしこの力……! 我が生涯の力を掛けて、必ずやゲッターめを道連れにイイイイ!!」

グニヤツ

みく「……! 何にや!?!」

瑞樹「ゴールの体が、崩れていく……?」

鉄甲鬼「いや、違う……!」

かな子「ゴールの体が崩れて、塊になって、大きくなって……! これって!」

卯月「インベーターと同じ!?!」

???『グアアアア……!』

菜々「うっ……! 気持ち悪い……!」

ニオン「黙って見ている場合か！奴の思い通りにさせてはいかんツ！」

美波「けど、あんな状態のを、一体どうやって攻撃したら…」

鉄甲鬼「迂闊に攻撃してしまつては、ゴールに餌を与える事になるかもしれんぞ」

ニオン「くっ…！」

そして、ゲッターと同等、それ以上までに肥大化したゴールの肉は左右上下前後へと延びて形を作る。それは、

かな子「な、なんなんですか、これは!？」

美波「巨大化したゴールの背中から出ている姿、あれって!？」

鉄甲鬼「百鬼大帝、ブライだど!？」

四つん這いになったゴールの背中から、ブライの上半身が生えた、異形の姿。

ゴール&ブライ『グウウウ……』

卯月「これは…この敵は…！」

ラセツ「どうだ？私の用意した余興は。なかなかのモノだったろう？」

ゴール&ブライの後ろから、ブラックダイノゲッターに乗り込んだラセツが姿を現す。

ニオン「っ！キャプテン・ラセツ!!」

ラセツ「インベーター技術のちよつとした応用だよ。ランドウの協力者とやらも、な

かなか面白いものを造り出すものだ」

瑞樹「インベーター、技術？」

菜々「ランドウの協力者って、一体誰の事なんです?！」

ラセツ「貴様らを知る必要はなからう。どうせここで朽ち果てるのだ」

ゴール&ブライ『!!』

瑞樹「!! みく、避けて！」

ラセツ「行け」

ゴール&ブライ『ガア!!』

みく「——!？」

美波「——え……? みくちゃん!？」

一瞬の出来事のようにだった。地上にいたゴール&ブライが、数百m離れた上空にいたゲッターを捉え、気が付いた時にはゲッターはゴール&ブライの足元で地面に叩き伏せられていた。

かな子「な、何て速さなんですか?！」

ニオン「俺達が動く隙さえなかったとは…」

卯月「……………」

瑞樹「みく! 返事をして、みく!!」

みく「……………」

菜々「ダメです！完全に気を失っちゃってますよ！」

ラセツ「どうだ？インベーターの同化能力により生まれた、恐竜の獰猛さと百鬼の戦闘力を併せ持つ究極の兵器の力は！もはやゲッターなど、道端の雑草も同じよ!!」

美波「恐竜の獰猛さと、百鬼の戦闘力!!」

鉄甲鬼「成る程、そう言うことか。はじめからブライの遺伝子をゴールに埋め込んでいたんだな！」

ラセツ「そう、素晴らしいだろう？かつて世界征服を夢見た二大帝王が力を合わせ、今まさに憎き仇敵を倒そうとしているのだぞ？」

芳乃「醜悪の間違いでしてー。生命を弄びー、尊厳を穢すとはー」

ラセツ「何とも言うがいい。勝つために、世界を制するために。方法などは些末な問題でしかない」

かな子「いけない…！みくちゃん達が！」

鉄甲鬼「トドメを刺すつもりか！」

菜々「ゲッターコントロール不能です！ナナ達のコックピットからじゃ、制御を受け付けません！」

瑞樹「こうなったら、一度強制分離させるしか……………」

ラセツ「やれ」

ゴール&ブライ『!!』

菜々「いっつ……!」

瑞樹「つ……!」

ブライの爪が、ゲッター1に振り下ろされる――。

瑞樹「……」

菜々「……」

ゴール&ブライ『……!』

菜々「え……あ」

瑞樹「卯月ちゃん……」

卯月「……」

振り下ろされたブライの巨腕を、ゲッターD2が両腕のスピнкаッターで受け止めている。

卯月「長くはもちません!今のうちに!」

瑞樹「! わ、分かったわ……!」

言葉で正気を取り戻し、1号機のコントロールを自動操縦に設定。

瑞樹「オーブンゲット!!」

ゲッターを分離させ、速やかに離脱。

ゴール&ブライ『……!』

卯月「追わせませんよ!」

ゴールの前脚を蹴倒し、体勢を崩して注意を削ぐ。

卯月「ゲッタービーム!」

そして至近距離からゲッタービームを浴びせ、生まれた爆煙に紛れて、自身も相手と距離を取る。

美波「大丈夫なの、卯月ちゃん!」

卯月「な、何とか…」

軽く誤魔化すが、手元のディスプレイの表示で、両腕の損傷具合はイエローゾーン。

卯月「あれの相手は私になります」

かな子「え…?」

ニオン「正気か?一人で勝てる相手ではないぞ」

卯月「それでも、皆さんのゲッターをこれ以上傷付けるわけには行きません」

鉄甲鬼「何を今更。元より貴様らに拾われた命、捨て去る覚悟ならば出来ている」

ラセツ「フフツ、感動的だな。だが、役割など分けても意味はないぞ」

美波「何ですって!」

ラセツ「貴様ら全員、ここで死ぬ運命なのだ!!」

その言葉に合わせるように、北極の氷の大地が割れる。

かな子「こ、今度はなんですかあゝ!!?」

鉄甲鬼「地下から何か来るぞ!」

美波「地下深くから熱源反応……サイズの推定、200m以上!?何、これ……!」

ラセツ「元は、ランドウが用意していた決戦兵器らしいのだがな。もはや不要になったようだ。だから、貴様らを処刑するためにここで使つてやろう」

大地を裂き、氷河を砕き、それは現れる。

美波「これが、ランドウの決戦兵器……?」

芳乃「怨念、憎悪、復讐……。禍々しき、悪意の塊でして」

ニオン「悪意の塊か。それらしい、醜悪な姿だ」

全体は細身のシルエットをしているが、所々が歪に隆起し、異常に発達している。全身は黒く、その姿は悪魔そのもの。

ラセツ「最終兵器、デビラ・ムウよ!!」

デビラ・ムウ《——!!!》

卯月「うっ……!」

かな子「きゃっ……!」

美波「何……これ……!」

デビラ・ムウが、形容も出来ないおぞましい雄叫びを上げる。

ラセツ「デビラ・ムウも逸っているようだ。早く貴様をスタスタに切り裂き、葬つてやりたいと」

卯月「デビラ・ムウ……! あんなものに、やられるわけには行きません!」

ニオン「どのみち、逃げ場はなくなつたな」

卯月「…美波さん、トマホークを」

美波「え?」

卯月「私のトマホークは、ウザーラとの戦いで全部使っちゃいましたから」

美波「分かつたわ。…はい」

ブラックゲッターの予備のトマホークを受け取る。

卯月「ありがとうございます」

ラセツ「覚悟は出来たか?」

卯月「はい。と言つても、死ぬ覚悟じゃないですよ?」

ラセツ「何?」

卯月「この戦い……必ず乗り越えて、貴方達を倒して、生き残る。そのための覚悟です!」

トマホークの先をブラックダイノゲッターに向け、宣誓するように告げる。

ラセツ「ほとほと理解出来んなあ？愚かしさも勇猛と捉えて計る。こんな程度の低い生物が、本当に地上の支配者足り得ると思うか？なあ、元キャプテン・ニオンよ」

ニオン「ふんっ。支配者かどうかなど問題ではない。少なからず、虎の威を借りて居丈高になつている貴様なんぞより、真つ当な思考回路は持っているだろうさ」

ラセツ「…所詮は貴様も、ハ虫人類の爪弾き者」

ニオン「弾かれたのはお互い様だろう。精々息巻いているがいい。今に吠え面をかかせてやる」

ラセツ「やれるものならば、楽しみにしてやるよ。ゴール、ムウ。ゲッターを粉碎するのだ」

ゴール&ブライ『！』

デビラ・ムウ『！』

美波「く、来る……！」

かな子「……？ 待つてください……後ろから何か……」

卯月「何か……？」

芳乃「皆様ー、芳乃に合わせて左へー。悪しきを裁く鉄槌が下されるでしょー」

かな子「鉄槌……？……これ、すごい速さで近付いてくる熱源反応！」

鉄甲鬼「いいから、ここは芳乃の言うことに従え！巻き込まれたくはあるまい！」
かな子「は、はいっ！」

急いで飛翔する物体の予想進路から外れ、時を待つ。やがて、ゲッター軍団の眼前を
通り過ぎていったそれは、

デビラ・ムウ《——!?!》

デビラ・ムウに直撃した。

ラセツ「むう?!」

轟音と衝撃が轟き、北極の氷原が隆起して砕け散る。

卯月「い、今のは……！」

美波「ボルガの超ウエポン砲！まさか！」

???「待てい！」

ゴール&ブライ『……?』

???「生きている限り！辛いこと、哀しいこと、厳しい現実！人は常に、あらゆる困難
と逆境に晒されています！」

???「どんな逆境も、いかなる困難も払い除ける心の力——」

???「人それを、『根性』と言います!!」

ラセツ「何……?何者だ!?!」

李衣菜「貴様に名乗る名はないッ！」　ピシィッ

茜「あつ！李衣菜さん！それは私の台詞ですよ！」

李衣菜「いいじゃん、いいじゃん！何時も茜ばっかり名乗ってるんだから、たまには横槍入れても、ね！」

茜「…むう、ならば仕方ありませんね！」

アーニヤ「仕方ない、でいいんですか…？」

シユワルツ「…相変わらず締まらねえ奴等だ」

ラセツ「スーパーロボット軍団だど!？」

卯月「ネオゲッター…！李衣菜ちゃんに、みんな！」

李衣菜「へへっ、卯月！助けに来たよ！」

美波「一体どうやって？」

凜「普通のやり方じゃ、テキサスからは発進できない。だから、横穴を開けたんだよ」

かな子「横穴？」

加蓮「横穴って言うよりは、下穴？ピイトを使ってさ」

李衣菜「回転させたピイトの切削力なら、テキサスに衝撃を伝えずに穴を開けられる。艦底にまでは、AV-58の粘糸は張り巡らされてなかったしね！」

ボブ「後はゲッター2のドリルを使って穴を広げりやあ、この通りロボ・ストーンまで発進可能って訳よ！」

鉄甲鬼「なんと…。無茶をする」

ニオン「相変わらず面白い奴だ」

サム「おまけに、最強の助っ人付きさ」

スミノフ「ロシアのランドウとの戦いにはケリを着けた。我々も参戦させてもらおうぞ」

ラセツ「ちい…！雑兵風情が！雑魚がいくら増えたところで！」

リンダ「ふうん？幾らでも相手してくれるって訳？」

ラセツ「何を！」

メリー「今北極に向かってるのは、私達だけじゃないわ！」

奈緒「アフリカ、中国、オーストラリア。各地でランドウとの戦いを終わらせたスーパーロボット達が、ここに向かってる！」

シュワルツ「もう、数でも質でも、優位はなくなるってことだぜ？トカゲ野郎！」

ラセツ「ぐっ…！」

卯月「スゴい…！こんなに、世界中からこんな数のロボットが、私達の所に向かってる！」

凜 「まだ世界には、これだけの味方がいたって事だよ、卯月」

美穂 「負けられないよね。うん、倒れるわけにはかないよ！」

卯月 「み、美穂ちゃん!? ゲッター飛焰に乗ってるんですか!」

美穂 「えへへっ…。AV-58で艦内が混乱してる内に、来ちゃった」

美波 「来ちゃったって、怪我の具合は?」

美穂 「大丈夫。操縦桿を握るのと計器を見るくらいなら、何てことないよ!」

卯月 「よろしくお願いしますね、美穂ちゃん。チーム飛焰の皆さん!」

茜 「はいっ! 3人揃ったゲッター飛焰は無敵です!」

ラセツ 「クククッ! 粹がるなよ、サル共こちらにはゴール&ブライ、それに決戦兵器

デビラ・ムウがいるのだぞ」

シユワルツ 「知るかよ。こっちはとつくに、テメエをブツ飛ばす準備出来てんだ」

ジャック 「俺達をナメた代償は高くつくぜ! 覚悟しナ!」

リンダ 「私達が前線を形成するわ。ボブ、サム貴方達はボルガの直衛に付きなさい」

ボブ 「おう! 連中の動きを抑える役目、任せませ!」

スミノフ 「対空迎撃用意、他国のロボットに遅れをとるなよ!!」

「「y p a a a a a!!」」

加蓮 「盛り上がってるなあ。アタシまで熱くなっちゃう」

凜 「ふつ、たまには派手にいくのも悪くないんじゃない?」

李衣菜 「なら、私達が狙うのは敵の頭だ」

加蓮 「え?」

凜 「……」

李衣菜 「私達でラセツを倒すよ」

加蓮 「……これはまた、大きく出たね」

凜 「向こうはただのブラックダイノゲッターじゃない。何か勝算はあるの?」

李衣菜 「それは……分かんない!」

加蓮 「分かんないって、分かんないかあ」

李衣菜 「けど、相手はゲッターの姿を真似しただけのパチモノだよ。紛い物以下の相手だったら、ネオゲッターロボが負けるわけにはいかない!」

凜 「ま、こつちも相手に散々紛い物だなんだって言われてきたからね」

李衣菜 「ネオゲッターだってゲッターだよ!それをあそこで、デカイ顔してるラセツに教えてやるっ!」

加蓮 「まったく……。このリーダーさんは、熱くなる方向を間違えてるんじゃない?」

凜 「でも、悪くない」

加蓮 「……まあね」

ニオン「リーナ！」

李衣菜「ニオン！悪いけど、ダイノゲッターの偽物の首は、私がもらうよ」

ニオン「好きにすればいい。だが気を付けろ。奴は不死の命を持つ、シ竜一族の生き残りだ」

加蓮「シ竜……？不死なんてまた厄介そうな」

ニオン「ふふっ、だが不死などとは名ばかりだ。奴もハ虫人類。高濃度のゲッター線の前には為す術などない」

凜「高濃度のゲッター線……ネオゲッターでそれが撃てるのは……」

李衣菜「ゲッタービーム・キャリア！」

ニオン「使いどころを誤るなよ。貴様がいれば大丈夫だろうがな、凜」

凜「任せてよ。恐竜帝国の因縁、私が断ち切ってくる」

ニオン「お前の武勇、拝見させてもらうぞ」

李衣菜「あのー、一応私達もいるんだけど……？」

加蓮「でしやばらない。今は敵を倒すことに集中するよ」

李衣菜「なーんか釈然としないけど、やるよ！凜、加蓮！」

凜・加蓮「了解！」

ネオゲッターが敵陣に飛び込んでいく。

卯月「……………」

卯月（戦線が拡大してる…。まだランドウの姿も見えてないのに、これじゃあ損害が増えるばかり…）

奈緒「卯月！」

卯月「奈緒ちゃん！」

奈緒「大丈夫か？」

卯月「はいっ。ゲッターは少し損傷してますけど、まだ戦えます！」

奈緒「そっか。けど無茶するなよ。ここはステルバーで何とかするから、一旦下がって体勢を立て直すんだ」

卯月「…そうですね。頼みます！」

奈緒「おう！」

シユワルツ「お前が安請け合いですんじやねえ」

奈緒「なんだよ。戦うのは一緒だろ。卯月はずっと戦ってたんだ、その代わりくらい簡単に出来るだろ？」

シユワルツ「ケツ！簡単に言ってくれろぜ！…ったく」

卯月「……………」

卯月（このままじゃいけない…。このままじゃ…！）

つ
つ
く

第31話 『北極圏を血に染めて』

~~~~~ 北極 ~~~~~

戦いは続いている。

ボブ「おりやあツ!!」

ジャック「A—ha! 蜂の巣にしてやるぜ!!」

リンダ「容赦はしないわ! 覚悟なさい!」

スミノフ「各国の精鋭に後れを取るな! ボルガ、前進ツ!」

「Y p a a a a a a!!」

美穂「ロシアの人達、元気だね」

アーニヤ「Y p a a a a! アーニヤも、元気一杯、です!」

茜「元気で負けるわけにはいきませんねえ!! 味方の背中は見ませんよ! 前に向かって  
ゴーゴーゴーツ!! ですツ!!」

美穂「メカザウルスも百鬼メカも、どんどん集まつてるよ、茜ちゃん」

アーニヤ「敵の方から、飛び込んできてくれます。手近なものから、片付けていきま

しよう！」

茜 「はいっ！美穂ちゃん、アーニャちゃん、ゲッターのエネルギーは全開で！出し惜しみは無いです!!——ゲッタートマホオオクツ!!」

奈緒 「シユワルツ！敵がクジラの方に向かつてる！護衛の仕事も忘れんなよ！」  
シユワルツ 「…手が足りねえ！そっちの獲物は任せる！」

奈緒 「任せるって…。こっちで制御できる武装にも、限りがあるんだぞ！」  
シユワルツ 「必ず当てる。そうすりゃ足りる筈だ」

奈緒 「無茶苦茶言ってくれるよなあ…。けどまあ、やるしかないか！」

かな子 「みくちゃん…。ちゃんと離脱できたかなあ…」

ニオン 「他人の心配なんぞしてゐる場合ではないぞ」

かな子 「ニオンさん。でも…」

ニオン 「…この状況、ゲットマシンが単機で居座られても迷惑なだけだ。仲間が心配なら、一緒に下がるんだな」

かな子 「……いえ、倒れたみくちゃん達のためにも、必ず勝たないと！」 グツ

ニオン 「……ふん」

美波 「………」

ニオン 「何だ？」



美波「あつ、いえ……！何て言うか、意外に優しいんだなつて」

ニオン「優しい？俺が？」

芳乃「少なからずー、かつての刺々しきは失せたものとー」

鉄甲鬼「確かに、丸くはなつたな」

ニオン「ちつ……！無駄口を叩くのはそれくらいにしておけ……！」

弾丸は飛び交い、氷原は爆ぜ、至る所で怒号と轟音が上がる。戦いは泥沼と化し、辺り一面には破壊されたメカザウルスなどの兵器の破片や弾が切れたり、壊れて使い物にならなくなった銃火器が投棄され、散乱していく。

ラセツ「……全く度し難い。雑草よりも質の悪い蛮族よ」

ヒュンツ

ラセツ「……ふん」

李衣菜「どりやあああッ!!」

ラセツ「蛮族の代表が来たか」

李衣菜「何時までも高いところで、デカイ顔なんてさせないよ！」

凜「気に入らないんだよね。端っから支配者気取りで、高いところから見下してるだけの手合いって言うのは」

加蓮「折角同じところにいるんだもん。お手々繋いでお話ししよう？ね！」

ラセツ「愚かな」

李衣菜「いづくぞー！ーッ」

ソードトマホークを大上段に振りかぎす。

ラセツ「ふん…」

ソードトマホークと、ゲッタートマホークが鏝迫り合う。

李衣菜「ぐっ…！！」

ラセツ「紛い物であることは同じ。しかし、まさに雲泥だなア!!」

李衣菜「ぐあっ！」

トマホークの薙ぎ払われ、吹き飛ばされるネオゲッター1。

ラセツ「地力が違うのだ。貴様らなど端から、相手にもならん」

李衣菜「痛た…！！」

加蓮「ちよつとぐ。しっかりしてよね」

李衣菜「ごめんごめん。本当の戦いは、ここからだって！」

凜「打ち切りになって終わりそんな文句はいいよ」

李衣菜「大丈夫。私達の運命はここで打ち切らせないよ…！必ず勝って、もう一度ファンが待つステージの上に帰るんだ！みんなで!!」

立ち上がり、ソードトマホークを構え直す。

李衣菜「いやああああああく〜っ!!」

気迫の咆哮が轟く――。

卯月「……」

メカ半月鬼『――!!』

卯月「… スピンカッター!」

飛び込んできたメカ半月鬼をスピンカッターで迎撃し、

卯月「ええいつ!」

トマホークでかち割る。

卯月「…: 晶葉ちゃん。聞こえますか?」

晶葉『――どうした、卯月』

卯月「真ゲッターロボを使います」

晶葉『真ゲッターロボを、か…!』

卯月「このまま戦い続けるのは良くないです。一刻も早く戦いを終わらせるためにも、真ゲッターの力が必要なんです!」

晶葉『状況は分かっている。だが、真ゲッターの整備はまだ…!』

主任『ゲッターの整備なら、もう直ぐ終わる』

晶葉「!?!」

卯月『どうかしたんですか？晶葉ちゃん』

晶葉「……。いや、何でもない」

古田「晶葉ちゃん！し、真ゲッターの、残りのゲットマシンの状態が……！」

晶葉「整備は完了したんだろう」

古田「え？……あ、ああ、そうですね……どうしてそれを？」

晶葉「事情などどうでもいいだろう。すぐに出撃準備だ」

古田「はっ……はいっす！」

卯月『真ゲッターは使えるんですね？』

晶葉「ああ、だが、問題はお前の元にゲットマシンを運ぶ手段だ。かな子の乗った真ベアー号は前線、2機のゲットマシンを遠隔操作で操縦するにはリスクがある」

卯月『分かりました！じゃあ、私が一度クジラに戻ります。それで……』

晶葉「バカを言え。今お前が前線を離れたら、敵勢に押し切られるぞ」

卯月『それじゃあ……！』

晶葉「落ち着け。ゲットマシンは、必ずそつちに運んでいく。今は戦闘に集中するんだ」

卯月「……了解」

晶葉（……………）

主任『——大丈夫だ。それなら心配要らねえよ』

晶葉「!? ……心配要らないだと」

主任『戦士なら、まだこの艦にいる——』

晶葉「戦士だと……?まさか!」

通信士「い、池袋女史……!」

晶葉「つ……!今度はなんだ?!」

通信士「く、クジラ内のゲッター炉心に異常発生!艦内のゲッター線濃度が、上昇しています!」

橘「ゲッター線が増幅している?!……この状況、似てはいないか?早乙女研究所が消失した、あの時に——!」

晶葉「ゲッター……!人類を生かすために、傷付いた者までも戦場へ駆り立てるつもりか!」

—— 城ヶ崎莉嘉 船室

莉嘉「……………」

『顔を上げろ、莉嘉ちゃん』

莉嘉「えっ——?」

主任『…………』

莉嘉「大将! どうして…」

主任『人類の終わりが近付いてる。みんなを救うには、お前の力が必要だ』

莉嘉「……どうして? 何でアタシが、みんなを助けなくちゃいけないの?」

主任『……』

莉嘉「みんな、大将の命を見捨てたんだよ。命は大切だって、生きるとは大事だって言ってるのに。こんなの可笑しいよ。アタシ達は誰かを殺さなくちゃ生きていけないの? 誰かを犠牲にして、何かを失って。そうまでして生き延びなきゃならない理由、アタシには分かんないよ」

主任『莉嘉ちゃん……』

莉嘉「大将だって、怒ってよ! 恨んで、憎んでよ! 自分が死ななきゃならないなんて、可笑しいよ。そんな事! なのに、なのにどうして! そんな風に清ましていられるの? そんなの、アタシが知ってる大将じゃない!」

主任『……それはな、俺は知ってしまったんだ。俺の運命をな』

莉嘉「大将の、運命……?」

主任『そうだ。それは予め定められたものなんだ。この宇宙が誕生した瞬間から。あらゆる生命が存続していく為に』

莉嘉「大将が死ぬ運命なんて、そんなの知らない! 大将を犠牲にして、生きたくなん

てない!」

主任『なら、本当に全てが失われてもいいのか? 城ヶ崎莉嘉の未来も、今ここで、未来を信じて戦う仲間達の生命も』

莉嘉「それは…」

主任『世界を閉ざしてしまつては、数多ある世界の可能性を望むことは出来ないのだぞ?』

莉嘉「え…?」

主任『まずは扉を開け。そして世界を臨むのだ』

自室の扉が、勝手に開く。

莉嘉「何で……」

医務官「退いて、道を開けて! 担架が通るよ——!」

莉嘉「……!」

反射的に、部屋から身を乗り出す。

菜々「しっかりしてください! みくちゃん!!」

みく「ううっ……!」

瑞樹「死ぬんじゃないわよ! 私達なんかより早く……! 死ぬんじゃないわよツ!!」

医務官「患者の状態は!」

看護師「血圧上昇、心拍数……危険な状態です！」

医務官「…輸血を、もっと多く！それと緊急手術の用意！」

看護師「手術…!?クジラの外は戦闘中、船体が揺れれば、患者にもリスクがあります！」

医務官「だが、このままにしていたらどのみち危険だ！何としてもこの命だけは、助けなければならぬ！」

看護師「……はいっ!!」

莉嘉「あ……」

主任『みんな、全力で生きているんだ。生きている限りな』

莉嘉「でも……大将だって、助けられたはずでしょ!?!」

主任『本当にそう思うか?』

莉嘉「……」

主任『莉嘉ちゃんにだって、分かっていた筈だ』

莉嘉「でも……それでも!」

主任『希望を持つことと、自分に都合よく解釈することは違う』

莉嘉「だったら、どうすればいいの?アタシは…」

主任『受け入れるんだ。そして、戦え!』



莉嘉「……」

主任『生命を守るんだ。人類の未来を紡ぐんだ。城ヶ崎莉嘉！』

莉嘉「……違うよ……。大将はそんなこと言わない……！アタシを危ない目に合わせるよ  
うなこと、絶対にさせない！」

主任『……』

莉嘉「アンタは大將なんかじゃないっ！」キツ

主任『そうだ。“俺”は莉嘉ちゃんの知る人間じゃない』

莉嘉「消えてよ！アタシを惑わすなら、消えて無くなっちゃえ！」

主任『……』

スウ……

莉嘉「……うっ……うっ……」

菜々「あの、莉嘉ちゃん……？」

莉嘉「あ……えつと……」

瑞樹「大丈夫よ、分かっているから」

莉嘉「ナナちゃん……瑞樹さん……」

菜々「その……整備主任さんの話は、聞きました。けど、何時までもここに閉じ籠つてちやダメですよ」

瑞樹「脱出ポットの用意は出来ているわ。こんなところで脱出出来たとしても、生き残れるかなんて分からないけど、少なくとも安全よ?」

莉嘉「……2人は逃げないの?」

菜々「え?」

莉嘉「みくちゃんが怪我したんでしょ? ゲッターは動かせないよ。それなのに、まだ戦うって言うの?」

瑞樹「……そうねえ。まだ全部を出しきった訳じゃないもの。最後の最後まで足掻かせてもらわ」

莉嘉「最後まで足掻くって……」

莉嘉「そうです! みくちゃんがいなくても、ゲッターで戦うことは出来ます! さっきぶつ飛ばされたダメージは残ってますけど、それでも瑞樹さんのゲッター2やゲッター3で、前線で戦うみんなを支援することは出来る筈です!」

瑞樹「かな子ちゃんもゲットマシンで奮戦してるんですもの。それを見て、1人で逃げ出すなんて、出来ないわ」

莉嘉「どうして? みんながみんな傷付いて、それだけじゃない……死んじやうまで戦って……。そんな戦いに、何の意味があるの? どんなに平和になったって、悪い奴をやっつけたって、死んじやったら意味ないじゃん!」

瑞樹「……………」

莉嘉「大切な人が、突然いなくなる。そんなのヤだよ……。みんな生きてるのに、どうして当たり前みたいに死ななきゃいけないの？人類のためだ、未来のためだって自分の命投げ捨てて……。そうまでして守らなきゃいけないものなの？自分の未来は？自分の願いはどうなってもいいの？」

菜々「莉嘉ちゃん……。そうじゃ、ないですよ……」

莉嘉「大切な人を失って、平然としてなきゃいけないなら、そうやって守り続けていかなきゃいけないものなんて……。分かんないよ。みんな一緒に、滅んじやえばいいんだ！！」

瑞樹「——ッ！」

パツシイイイン……………」

莉嘉「……………」

瑞樹「……………」

菜々「ちよっ……！瑞樹さん！」

瑞樹の平手が、莉嘉の頬を打つ。

莉嘉「……………あ」

瑞樹「みんな滅んでしまった方がいいなんて、本当に思っているのかしら」

莉嘉「……………」

瑞樹「もし本当にそうなんだとしたら。私がここで、貴女を殺してあげるわ」

菜々「瑞樹さん！」

瑞樹「今の貴女はどう思っているかは知らないけど、みんな生きたいのよ。生きて、当たり前のように明日を迎えたい。明後日も、その先も。だって未来なんて、当たり前前にあるものじゃない。そう思ってたでしょ？」

莉嘉「……………」

瑞樹「でもね、今は違うの。簡単に命を奪ってしまった者がいて、抗う術のない者は、簡単に淘汰されてしまう。それこそ、間違っていることじゃない」

瑞樹「力を持つ強い者だけが生き残るなんて、可笑しい事よ。人間には夢があつて、希望があつて、未来がある。明るい将来を望んでいるのは、貴女だけじゃない。生きていくからこそ、誰もが幸せになりたい」

瑞樹「命の強い弱いに限らず、みんな生きているの。その命を守るためなら命だつて掛けられる。だって私は、少なくともゲッターには乗れるから」

莉嘉「…本当に、それでいいの？日本には、瑞樹さんを待つてる人だつてたくさんいるんだよ？」

瑞樹「なら…………私達じゃない、名前も知らない赤の他人が犠牲になるのは、どうでも

いいのかしら？」

莉嘉「……それは！」

瑞樹「今の貴女が言ってるのは、そう言うことよ。ここで戦っても、戦わなくても誰かが死ぬ。貴女は、自分の知る大切な人の死に感傷的になってるだけ。それは大切なことかもしれないけど、それによって今貴女が抱えている考えは、独りよがりなモノだと知りなさい」

莉嘉「………」

瑞樹「行きましょう、菜々さん。ゲッターの状態が気になるわ」

菜々「え？ああ、はいっ！」

立ち竦む莉嘉を通りすぎる。

菜々「あー……つと、莉嘉ちゃん！」

瑞樹「………」

菜々「莉嘉ちゃんの言う通りです。ナナ達がどれだけ頑張っても、自分の明日を掴めないのは、切ないです」

菜々「でも、それは無意味な事なんかじゃないと思うんです。ナナ達が命を懸けて、誰かの命の明日を繋ぐ。誰かの未だ見ない明日が、何かに脅かされない平和な明日になるのなら、それは決して無駄なことじゃない。意義のあることのために、命を懸けられる

のは、素敵なことだとナナは思います」

莉嘉「……………」

菜々「もちろん、死ぬつもりなんてありませんけどね！貪欲なんですよ、ナナ達は。自分の命は大事だけど、ナナ達も知らない誰かの命も同じくらい大事なんです。だから、どっちも守りたい」

莉嘉「守りたいから、足掻くの…？」

菜々「そうですねよ！大切なもの、そのどっちも守ることが出来たら、みんなが望むハッピーエンドです！一人でもたくさんの人達にハッピーエンドを迎えるために、戦いに行くんです！だから…」

ギユツ

莉嘉「!? な、ナナちゃん…？」

菜々「莉嘉ちゃんももう少し信じてください。莉嘉ちゃん達の未来は約束されてるつて。今ここで戦うナナ達もみんな誰一人欠けることなく、日本に帰るつて！」

莉嘉「……………」

菜々「みんなで必ず、勝って帰ります！だから莉嘉ちゃんも、生きることが諦めないで下さい！」　タツ…

莉嘉「……………生きることに、諦めない。それが大将の願いでもあったのかな…？」

……。

ゴール&ブライ『——!!』

シュワルツ「撃て！足を止めちまえばこつちのもんだ！」

迫るゴール&ブライに、火力を集中させる。

ボブ「つつてもよお、何時までもこのままって訳にはいかねえぜ！」

サム「くそおつ!!俺達の攻撃は通じてるのか？まるで手応えを感じない……！」

ジャック「Oh！ 弱音はNo, thank youネ！諦めたらTHE END!!」

リンダ「効いてるって、信じ込むだけでもいいわ！私達に出来るのは、持てる手段の全てを使って、こいつを倒すことだけ！」

ゴール&ブライ『グアアアアツ!!』

ゴール&ブライの背中から放たれた無数の触手が、スーパーロボット軍団を襲う。

リンダ「キャアツ！」

ボブ「オツ！」

ジャック「Shit!!」

シュワルツ「なる…ツ！」

茜「皆さん！一度下がってください!!」

ゴール&ブライの攻撃の前に怯んだスーパーロボット軍団の前に、プロト・ゲッター

1が躍り出る。

茜 「ここは私達のゲッターが!!」

大きく振り上げたトマホークを、勢いよく振り下ろす。

ゴール&ブライ 『……ッ!?!』

茜 「ぐう…!!」

プロト・ゲッター1のトマホークによる渾身の一撃は、ゴール&ブライの腕によって防がれ、その腕半分ほどのところで受け止められる。

茜 「思いの外固いですね…!」

アーニヤ 「反撃、来ますっ!」

茜 「ぐっ——!?!」

尻尾による強烈な鞭打が、プロト・ゲッター1を吹き飛ばす。

茜 「くくくっ!?!アーニヤちゃん、美穂ちゃん! 衝撃に備えてください!」

美穂 「い、言うの遅いよお…」

ゴール&ブライ 『グルルウ…!』

茜 「おっ! 向こうもやる気は十分みたいですわね〜!!」

アーニヤ 「アカネ、ミホはまだ本調子ではありませんから…」

美穂 「ううん。私の事は気にしないで。思いつきり戦って、茜ちゃん!」



茜 「では！お言葉に甘えさせてもらいます!!」

ズアッ

美穂 「うッ——！」

茜 「やああああッ!!」

拳の先に鉤爪を展開させ、ゴール&ブライ目掛けて突撃。

茜 「このオ——ッ!!」

ゴール&ブライ『——!!』

そのまま、ゴール&ブライと格闘戦を展開する。

メリー 「な、何て速度の戦闘なの…!？」

サム 「くそっ…!滅茶苦茶に動き回りやがって!照準が定まらない!これじゃ、援護だつて出来ないぞ!」

奈緒 「あいつの相手は、もう茜達に任せるしかない!」

ボブ 「いいのかよ?それで」

奈緒 「ここでみんな雁首揃えて、戦況を見守つてたつて仕方ないだろ!」

シユワルツ 「それよりも不気味なのはあのデビラ・ムウつて野郎の方だぜ」

リンダ 「確かに、私達の相手はゴールとブライの融合体に任せて、奥に控えているわね」

ジャック「何かを企んでるって言うの力!？」

シュワルツ「さあな。だが、ランドウが秘蔵してたつてんだ。俺達にや想像もつかねえような何かが隠されてるのかも知れねえ」

ボブ「何かってのは、何だよ？」

シュワルツ「分かんねえから、面倒になる前にぶつ潰すんだろうが！」

スミノフ「超ウエポン砲のチャージもそろそろ終わる。奴等を仕留めるためにも、もう少し時間を稼ぐんだ」

奈緒「だ、そうだ。手が空いてるあたしらが丁度いい。一気に攻めるぞ！」

ジャック「ALL Right!! 一気に片を付けるぜ！」

デビラ・ムウ『!!』

おぞましい雄叫びが大地を震わせる。

シュワルツ「チツ！相変わらず気色悪い声だぜ……！」

奈緒「……ッシュワルツ！危ない！」

シュワルツ「?!」

危険を告げる声で、飛来した攻撃を辛うじて回避。

シュワルツ「何だつてんだ？畜生……！」

ボブ「お、おい……！様子が可笑しいぜ？」

メリー「何……？……これ！衝撃に備えて！」

ジャック「What, s!？」

直後、凄まじい蒸気と衝撃波が周囲を包む。

茜「……っつ!!?な、何ですか！今の……！」

美穂「これ……水蒸気爆発じゃない!？」

茜「水上……？何が爆発したんですか！」

美穂「冷たい水とかに、スツゴい熱いものが触れたりすると、その温度差で水分が蒸発するのと同じに、爆発するみたいな衝撃を生むって、前に何かで読んだことがあるよ！」

茜「スツゴい熱いもの……？それが、北極の海水に接触して……」

美穂「この爆発を生んだんだよ！」

茜「成る程……理屈は分かりましたが、これでは！周りが何も見えませんよ！」

アーニャ「後方！8時方向です……！ゴールブライの融合体が……！」

茜「……！」

半ば条件反射で、言われた方角から襲いかかってきたゴール&ブライを迎え撃つ。

ゴール&ブライ『グウウ……！』

茜「助かりました！アーニャちゃん！」

アーニヤ「相手の熱反応、捉えました！これで相手が見えなくても、位置は z a x v  
a т и т ь……捕捉、出来ます！」

茜「これで、何とか戦闘は出来そうですね！」

美穂「でも、奈緒ちゃん達……他の人達とは完全にはぐれちゃったね……」

茜「仕方ありません！信じましょう！ここまで生き残ってこれた皆さんであれば  
きつと無事です!!」

ゴール&ブライ『!!』

茜「!!」

ガギイン——ツ

奈緒「——…んな！みんな!!誰か、誰でもいい！応答してくれ!!みんな、生きてるの  
か!?!」

ジャック「……Off course. 勝手に殺すんじゃないぜ！ナオ」

奈緒「ホントか!?!だってよお、通信が、どこにも繋がらないから……」

リンダ「爆発の影響で、通信の電波が乱れたみたいね」

ボブ「一体なんだったんだ……?今のは」

デビラ・ムウ《ガアアアアツ!!》

シュワルツ「奴の口が光った！」

奈緒「次が来るぞ！避けるッ!!」

ジャック「Shit!」

メリー「ボルガは下がって！」

スミノフ「ぬう……!」

リンダ「ボルガ……!?!」

デビラ・ムウの口部めが放った副砲と、デビラ・ムウの放った弾頭がぶつかり合う。中空で爆発が起き、四方に飛び散ったそれは、

ボブ「見ろよ！これって……」

サム「マグマ……!?!」

シユワルツ「連中、マグマを弾丸の代わりに撃ち出してるつてのかよ！」

奈緒「さしずめ、マグマ砲ってかよ！」

リンダ「あんな攻撃を受けたら、並みのロボットじゃ一瞬で蒸発よ！」

ジャック「仮に躲したとしても、周囲が氷原じゃ、また水蒸気爆発が起こって戦場は

滅茶苦茶だぜ！」

デビラ・ムウ《……!?!》

メリー「デビラ・ムウがこつちを向いたわ！」

デビラ・ムウ《——!?!》 シュオツ……

シユワルツ「チツ……！流石に不味いか……！」

スミノフ「反撃……いや、回避だ！早くここから離れるオ!!」

デビラ・ムウ《!!》

バ オ ツ

デビラ・ムウの口からは、弾丸ではなく、マグマの濁流が吐き流される。

李衣菜「うおっ!?」

凜「大丈夫?」

李衣菜「平気平気。ちよつと衝撃に煽られただけだから」

加蓮「にしても、ちよつと鬱陶しいね。この水蒸気も。周囲がどうなってるのか、全

く分かりやしない」

凜「こつちに他の戦力が回つてこない事を考えれば、みんな上手く戦えてるって事

には間違いないだろうけど……来るよ、左!!」

李衣菜「——!!」

言われた方角に瞬時にソードトマホークの刃を向け、振りかざされたトマホークの一撃を受け止める。

李衣菜「トカゲは身を隠すのも得意だつて?」

ラセツ「笑止！勝つたためにはあらゆるものを利用するのよ！正々堂々など、片腹痛い

！」

李衣菜「そう？けど、卑怯な手を使って、奇襲をすることしか出来ないなんて、態度の割りに器量は小さいんだね！」

ラセツ「ほう……私を嗤うか。だがどうする？この状況では、トマホークは元より、チエーンナツクルもプラズマサンダーも使えまい。お得意のシオルダーミサイルを使ってみるか？」

凜「流石に、こっちの動きは全部読まれてるか」

加蓮「そりゃ、出し惜しみもなくじゃんじゃん使つてればねえ」

李衣菜「むう……！」

ラセツ「所詮はその程度と言うことよ。一思いに、死ね!!」ジャキツ  
ダイノゲッター2のハンドガンを備えた隠し腕が、背後から伸びる。

李衣菜「全部見切れてるって言うなら、こうする!」

ラセツ「!」

ゲッターを分離。

凜「……ゲッターチェンジ!!」

瞬時にネオゲッター2に合体。攻撃対象を失い、体勢を崩すブラックダイノゲッターに、

凜 「プラズマブレード!!」

プラズマブレードの切っ先を叩き付ける。

ラセツ 「その程度の事で……!」

ブラツクダイノゲッター背部の隠し腕が、プラズマブレードのプラズマ刃を掴み取る。

李衣菜 「嘘……っ!?!」

凜 「……ッ!」 グツ グツ

ラセツ 「はははっ! パワーが違うのだよ! パワーが!! そんな蚊の刺すような攻撃など……」

凜 「っ!」

ラセツ 「こちらを抜けると思うなア!!」 ブオンツ

豪快なフルスイングで、トマホークが振るわれるが、

凜 「…………」

ラセツ 「!?!」

それを受けるネオゲッター2が蜃気楼の様に揺らめいて消える。

ラセツ 「これは……」

凜 「ネオゲッタービジョン。ネオゲッターのスピードも、甘く見ないでよね」



ラセツ 「ぬう…?!」

凜 「ドリルラリアット!」

ラセツ 「グアツ!」

回転するドリルを、そのままブラックダイノゲッターに打ち据える。

ラセツ 「おのれ…!小癩な!!」

凜 「いい感じだね。体が温まってきたんじゃない?踊ろうよ」

ラセツ 「……面白い…!私を弄んだこと、後悔しても遅いぞ!!」 グググツ…

ブラックダイノゲッターの右腕がドリルに変形する。

ラセツ 「このゲッターの能力、よもや忘れたとは言わせぬぞ?」

凜 「……ふうん」

ラセツ 「行くぞツ!!」

シユバツ

高速戦闘。水蒸気が周囲を包み、視界が定まらない氷原の中を、水平に移動しながら

ブラックダイノゲッターとネオゲッター2はぶつかり合う。

凜 「……!」

ラセツ 「ふ……ふはははっ!スピードに於いても、やはりこちらに分があるようだな  
!」

凜 「そうみたい、だね！」 ガンガンッ

ドリルアームガンを撃つ。

ラセツ 「そんなもの！」

上空に高く飛んで回避。

凜 「！」

ラセツ 「喰らええいッ!!」

左右の肩からせり出したハンドガンから、雨霰の様に弾丸が降り注ぐ。

凜 「くっ……」

紙一重の軌道で、弾丸の目を掻い潜っていく。

ラセツ 「ははっ！ 踊っているのは貴様の方だなあ？ その踊りは……」

凜 「……」

ラセツ 「見るに絶えん！」

凜 「オーブンゲット！」

ラセツ 「……またア……！」

ドリルを突き出したブラックダイノGetterの急降下攻撃を、Getterを分離させて

回避。

加蓮 「Getterチェンジ！」

上空に急上昇し、ネオゲッター3にチェンジ。

加蓮「インパクトキャノン！」

今度は逆に、インパクトキャノンの雨をブラックダイノゲッターに降り注がせる。

ラセツ「くっ……！」

加蓮「ほらほら、足を止めない」

ラセツ「!?!」

加蓮「そっれっ！」

インパクトキャノンの連射で足を止めたブラックダイノゲッターに、高々度から急降下したネオゲッター3がのし掛かる。

ラセツ「ぐお……っ?!」

加蓮「どう?この攻撃は、コピー出来る?」

ラセツ「ほぎくなッ！」

加蓮「やばっ……！」

ブラックダイノゲッターの脇腹から、新たに出現したインパクトキャノンの砲撃を両腕で受け止めて弾く。

加蓮「ちよっと!そっちコピーするのは反則でしょ!」

凜「この戦闘に、ルールなんてある?」

加蓮「…確かに。一本取られたわ」

李衣菜「呑気言つてないで。次が来るよっ!!」

加蓮「!! ゲッタートルネードッ!」

放たれたブラックダイノゲッターのインパクトキャノンの次弾を、至近距離からのゲッタートルネードで軌道を逸らし、直撃を免れる。

加蓮「お互い、触れあう距離にいるんだから。パワーで勝負してよ、パワーで!!」  
マウントポジションを維持したまま、ネオゲッター3が拳を振り上げる。

ラセツ「ほう……力比べか」

振り下ろされた腕を掴み取る。

加蓮「なっ……!」

ラセツ「面白い!パワーに於いても、このブラックゲッターが勝るぞ!」

加蓮「この……っ!」

ギギギッ…

渾身の力で操縦桿を押しても、ブラックダイノゲッターの腕はびくともしない。

ラセツ「まるで子供だなあ?」

加蓮「……そう。なら、ちよつとくらい噛み付かれても平気だよね?」

ラセツ「?」

加蓮「プラズマブレイク……！」

零距离からのプラズマブレイクが、ブラックダイノゲッターを打つ。

ラセツ「オオオ……ッ!!」

加蓮「オーブンゲット！」

相手が怯んだ隙に、分離。

李衣菜「ゲッターチェンジ!!」

再度、ネオゲッターに合体した。

ラセツ「おのれ、小癩な……！策を弄してくれる」

李衣菜「へっへへんっ！策も小癩も作戦の内ってね！」

ラセツ「その作戦とやらが、貴様自身の首を絞めることになるぞオ!!」 ジャギンツ  
背中から脇から肩から。至る所から副腕を伸ばし、先端にゲッターの武器を展開す  
る。

李衣菜「うわあ……。中学生の魔改造ガンプラみたい」

加蓮「ホント、何でもつけれりやあいってもんでも無いでしょうに」

李衣菜「機体バランスも滅茶苦茶で、あれじゃあまともにも動かすことも出来ないで  
しょ」

ラセツ「サル共の力量で計ってくれるな！」 バオツ

肩から延びたハンドガンと、腰のインパクトキャノン。その他、ありつただけの火器を乱れ撃つ。

李衣菜「うおっ!?!」

一斉射撃を間一髪、飛び退いて回避。

凜「迂闊に下がっちゃダメ!」

李衣菜「え?」

凜「これじゃあ、爆風で雪が舞い上がって……」

水蒸気爆発が生んだ蒸気で、視界が制限される中に更に濃い雪が舞い降りる。

李衣菜「あちゃあ……」

加蓮「大丈夫。ブラックダイノゲッターの熱源は、こっちで捕捉してるよ。真っ直ぐ

こっちに向かってくる」

李衣菜「なあ〜んだ。それじゃ、こっちも簡単!」

ネオゲッターを前傾させ、突進のための勢いを作る。

李衣菜「正面对決だ——!」

蒸気と爆煙と雪を掻き分けて、正面切って突き抜けた先、

ラセツ「!」

李衣菜「……?」

ブラックダイノゲッターは、ネオゲッターの正面ではなく、少しズレた位置から飛び込んできた。

ラセツ「——こちらの動きなど読まず、反応を頼りに飛び込むことしか出来ぬとは……」

李衣菜「くっ……!」

ブラックダイノゲッターの左腕で鈍く光を放っているのは、ドリルアーム。

ラセツ「貴様こそ、立派な山猿よツ!!」

ズギヤツ

ネオゲッターの背後に回り込んだブラックダイノゲッターのドリルアームが、ネオゲッターの背部スラスターに突き刺さる。

李衣菜「ガアツ!!」

凜「李衣菜……」

李衣菜「……こっちは大丈夫!それより、早く背中のスラスターを切り離して!」

凜「え?」

李衣菜「でないと、このままじゃ主動力を貫かれてゲッターは終わりだよ!」

凜「……分かった!」

手元のコンソールを操作して、背部スラスターを切り離す。

ラセツ「むっ……」

李衣菜「え〜つと、ネオゲッター1のスラスターってことは…」

凜「ネオゲッター2の両腕と、ネオゲッター3の脚部」

李衣菜「それじゃ、もう他の形態には合体出来ないってこと？」

凜「おまけに、お得意のシオルダーミサイルも使えないからね」

李衣菜「あーっ！」 ガーンッ

加蓮「分かってなかったんだ」

李衣菜「いやあ、まあ咄嗟の判断というか何というか…。仕方なかったし？」

加蓮「上手く切り返せたから良かったようなもの…。もう一回似たような攻撃を受けたら。次はないよ」

李衣菜「分かっている！同じ手を二度は喰らわれないよ。それに、動力への直撃はさせないって…！」

凜「それって…」

加蓮「自分のコックピットが潰されてもいって訳?!」

李衣菜「ネオゲッターをお釈迦にするよりはいいでしょ」 グッ

加蓮「…バカ」

ラセツ「さて、次はどんな余興を見せてれるのかな？それとも、余興はもう終いか？ならば、ここからは望み通り、貴様らの処刑に移らせてもらうぞ」



李衣菜「そう簡単に処刑されてたまるもんですかって！」

ラセツ「ならば足掻くがいい。その満身創痕のゲッターで。無様に、醜く！その方が見せしめとして丁度良からう」

李衣菜「私とゲッターが満身創痕かどうか、それは自分の体に、刻んでから思い知れえツ!!」

——。

コツツ コツツ コツツ——

主任『よお、莉嘉ちゃん。待ってたぜ』

莉嘉「：別に、アンタの為に来たわけじゃないよ」

主任『それでもだ。覚悟を決めてくれたんだろ？』

莉嘉「覚悟なんて、分かんないよ。でも、このままここで何もしないで死んじやったり、アタシ一人だけが生き残って、後で辛い思いをするのは嫌だって。そう思っただけ」

莉嘉「アタシは、今アタシに出来る精一杯のことを、全力でやるだけなんだ」

主任『十分、立派だぜ。乗りな、何時でも出撃出来る』

莉嘉「うん」

マシンに乗り込む。

莉嘉「えーつと……」

主任『ゲッターの基本はどれも同じだ。先ずは右下の起動スイッチを入れるんだ』  
莉嘉「これだね」

マシンに火が入る。

晶葉「……ん？真イーグル号がアイドリング状態になっている？誰が乗っている？応答しろ」

莉嘉『アタシ』

晶葉「莉嘉？そんなところで何をするつもりだ。それは、只のゲットマシンじゃないんだぞ」

莉嘉『分かっているよ。だけど今は、このゲッターの力が必要なんですよ？』

晶葉「お前に真ゲッターの操縦は無理だ。直ぐに降りろ！」

莉嘉『真ゲッターは無理でも、ゲットマシンを届けるくらいなら出来るよ！』

晶葉「何だと？」

莉嘉『誰かが卯月や凜のところまで持っていかなくちゃいけないんですよ？』

晶葉「それは……そうだが」

莉嘉『卯月が乗り換えた後の、無人になったゲッターD2はどうするつもり？そのままにするのは可哀想だよ』

晶葉「……仕方ないな。くれぐれも無茶をするなよ」

莉嘉『分かってるって。出来るだけのこと、やってみるつもりだから』

晶葉「…それは無茶をするなの答えになってないって、もう聞いてないか」

橘「本当によかったのかね？」

晶葉「莉嘉の言っていることも事実です。それに、ゲッターD2の操縦なら、莉嘉にも覚えはありますから」

橘「そうか…」

晶葉「……」

橘「やはり、ゲッターの示す運命には、何者も逆らえぬ、という事かね？」

晶葉「そうではない、と思いたいところですがね」

莉嘉「……」

主任『大丈夫か？ゲットマシンの無線誘導は、まだ訓練でもやったことがなかったな。真イーグル号のレーダーの範囲から、真ジャガー号を見失うなよ』

莉嘉「わ、分かってるって…。あんまりごちゃごちゃ言わないでよ…」

主任『……』

莉嘉「……大丈夫。画面とか操縦桿の感じとかはシミュレーションと同じ。アタシにも出来る……！」

主任『最後に、一つだけいいか。莉嘉ちゃん』

莉嘉「何？」

主任『莉嘉ちゃんが今の俺をどう思おうと勝手だ。だがな、命つてのはみんな、一つと同じところにあるんだ』

莉嘉「？」

主任『生も死も、同じ一つのところに存在している。ただ一つ、生者にだけ赦されていることは、未来を築くことだ』

莉嘉「未来を、築く……」

主任『そう。死んでしまった人間は、その意志を遺すことは出来ても未来を築くことは出来ない。生き残っている者が未来を信じ、築くこと。それは生きていく上での義務であり、託された意志に応える唯一の方法なんだ』

莉嘉「……よく分かんない」

主任『今はそれでいい。何れ分かる日が来る。その日が来るまで戦い、生き続けるんだ。それを俺は、ずっと見守ってるからよ』

莉嘉「……」

主任『生きることには戦いだ。生きる、城ヶ崎莉嘉。お前が今の俺のことをどう思っているかが、それが俺の願いだけ、莉嘉ちゃん』 スウ……

莉嘉「大将……」

古田「真ゲットマシン！何時でも出撃出来るっスよ！」

莉嘉「……」

莉嘉（大将の願い……。死んでいった人達の願いを背負って、生きていく……）

莉嘉「生きるって言うのは、戦うことなの……？……分かんない。分かんないだけのまま死んじゃうなんて絶対、嫌!!」

莉嘉「城ヶ崎莉嘉！真ゲットマシン、発進しまゝすっ！」  
つづく

## 第32話 『蛇牙城陥落！覚醒、真ゲッタードラゴン!!』

卯月「ゲッターライフル!!」 ドウツ

メタルビースト・ビーン 〓——〓!!?!

卯月「……っ」

手元のディスプレイが、警告を伝える。

卯月「どうしよう……。ゲッターがもう、限界……!」

美波「卯月ちゃん、危ないっ!」

卯月「えっ?」

メカザウルス・ギギ 『グアアアアッ!!』

メカザウルス・ギギの大質量による体当たりを、ゲッターD2を庇ったブラックゲッターが代わりに受ける。

美波「きやあっ!」

メカザウルス・ギギ 『フシユウウ……!』

美波「この……ッ!」

銃口がギギに直で接する零距离で、ゲッターマシンガンを斉射。ありったけの弾丸を

表装が抉れ剥げるまで浴びせ、ギギを撃破。

卯月「美波さん!ごめんなさい…」

美波「私なら大丈夫。それより、何だかゲッターの調子が良くないみたいに見えるけど?」

卯月「はい…。このままじゃ、戦闘以外でゲッターD2が壊れちゃいます」

美波「そう…。なら、卯月ちゃんの分も、もう一踏ん張りしなくちゃ!」

卯月「でも、さっきの攻撃で、ブラックゲッターのダメージも大きくなってるんじゃない?。頭の出血も酷いし…」

美波「それでも、何時もの卯月ちゃんや李衣菜ちゃんみたいな無茶はしてないつもりだよ?」

卯月「……でも!」

「きゃあああああ〜〜〜っ!!?」

卯月「!? 何ですか!」

美波「この声……莉嘉ちゃん!」

莉嘉「だ〜れ〜か〜止めて〜〜〜っ!!」

美波「あれ…!莉嘉ちゃんに乗ってるのって、真ゲッターの…?」

卯月「どうして莉嘉ちゃんが…?」

莉嘉「あつ、卯月！真ゲッターを届けに来たよ☆」

卯月「届けに？」

莉嘉「うんっ☆…って、話してる場合じゃないっ!?」

卯月「莉嘉ちゃん!!」

コントロールを失った真イーグル号が上昇していく。

卯月「ど、どうしよう…?!?ここからじゃ、ゲットマシンに飛び乗ることも出来ないし…」

美波「そうね…。それに、マシンの速度が上がってるみたい。今はまだ大丈夫みたいだけど、このままじゃ中の莉嘉ちゃんがGで押し潰されちゃう！」

卯月「は、早くなんとかしないと！」

かな子「私に任せてください！」

卯月「真ベアー号！かな子ちゃん！」

かな子「私がおとこ合体して、莉嘉ちゃんを回収しますから！」

美波「けど、1号機は暴走状態よ？もし失敗したら、かな子ちゃんまで…！」

かな子「それでも、他に方法はありません！」グンツ

機首を上げて、先行するゲットマシンを追う。

かな子「2号機は無入操縦…：なら、コントロールをこっちに移して…」



真イーグル号に追隨していた真ジャガー号が、真ベアー号の目前まで高度を落とす。

かな子「えいつ!」

無事、ドツキング。

かな子「後は……」

リーダーで真イーグル号を捉え、後を追う。

メカザウルス・バド『ギヤアアツ!!』

メカ大輪鬼『!!』

メタルビースト・ビーン《——!!》

かな子「!? 合体前のゲットマシンをやるつもり…!?」

卯月「トマホーク、ブウーメランツ!!」

ズシャアアツ

かな子「卯月ちゃん!」

卯月「私が守ります!ここは任せて下さい!」

かな子「はいつ!お願いします!」

ギユンツ

卯月「…よおし、もうちよつとだけ、私に付き合ってくださいね。ゲッターD2!」

かな子「莉嘉ちゃん!」

莉嘉「か、顔が崩れちゃう——！」

かな子「……っ！速度が速すぎる……！莉嘉ちゃん！レバーを引いて速度を落として！」

莉嘉「れ、バ……ア……？どれ……？」

かな子「左手側のレバーです！それが速度の調節桿です！」

莉嘉「腕が……腕が動かない……っ！」

かな子「そんな……このままじゃ、本当に天国に昇っていつちやいますよ！その前に、レバーを引いて下さいっ!!」

莉嘉「う……っう……！」

かな子「後ちよつとなのに……」

ビュンツ

かな子「何っ!？」

猛スピードで合体した真ジャガー号と真ベアー号を追い抜き、真イーグル号に接近したのは、

かな子「ブラックゲッター！美波さん!？」

美波「……っ！えいつ！」

真イーグル号を羽交い締めにして、取り押さえる。

莉嘉「へぶっ！」

美波「莉嘉ちゃん、レバーを引いて！」

莉嘉「あ……うんっ！」

レバーを引き、減速。

美波「かな子ちゃん！」

かな子「はいっ！」

真イーグル号にドッキング。ブラックゲッターは離脱する。

かな子「チェンジゲッターー!!」

真ベアー号からのコントロールで、真ゲッターーに変形した。

卯月「——ゲッターパンチ!!」

メカ大輪鬼『?!!!』

卯月「はっ……はっ……!」

メカザウルス・バド『キシヤアアアッ!!』

卯月「しまっ……!?!」

バドの怪音波が直撃し、爆煙を上げて落下するゲッターD2。

卯月「うっ……!まだ……」

メカザウルス・バドs『『キシヤアアアッ!!』』

地に倒れ伏したゲッターD2に、バドの群れが殺到する。が、

かな子「やあああああッ!!」

その更に上空から急降下した真ゲッター1のゲッターレザードで、殺到したバドの群れは瞬く間に切り刻まれた。

ズンツ

ゲッターD2の目の前に着地する真ゲッター1。

かな子「卯月ちゃん、大丈夫ですか!?!」

卯月「かな子ちゃん……。上手く、合体出来たんですね?」

かな子「はい。美波さんがフォローしてくれたお陰で……」

卯月「美波さん?」

莉嘉「卯月、今ハッチを開けるよ!」

ゲッターD2のハッチが開かれ、莉嘉が姿を見せる。

莉嘉「大丈夫!?!頭から血が出てるよ!」

卯月「莉嘉ちゃんこそ。すごい、鼻血ですよ?」

莉嘉「えっ? あっ、これ……。うん。全っ然! 大丈夫だよ☆」

卯月「そうですか? ……そうですね。ゲッターD2、お願いしていい?」

莉嘉「勿論! 任せてよ!!」

卯月「はいっ、お願いします。……っ」

差し出された真ゲッター1の手に飛び乗り、そのまま操縦席へと移る。

卯月「真ゲッターロボ、貴方の出番ですよ。よろしくお願いしますね」

かな子「卯月ちゃん！」

卯月「かな子ちゃん!こうして一つのゲッターに乗るのも久しぶりだよね」

かな子「はい……その、本当に久し振りですけど、大丈夫ですか?」

卯月「私……?……はい——」

背中の翼を開き、急上昇。戦場を一望出来そうな高度で制動。そのまま滞空する。

卯月「大丈夫、みたい。真ゲッターは手足みたいに動かせますよ」

かな子「そ、そうみたいですわね……」アハハ……

未だ、戦闘の音が鳴り止まない戦場にゲッターの視線を向ける。

かな子「後は凜ちゃんだけで……。ブラックダイノゲッター、敵の大將と戦ってるんでしたよね」

卯月「ネオゲッターには、まだ凜ちゃんの力が必要です。だから一先ずは、私達だけで!」

かな子「……分かりましたっ。凜ちゃんの分も、私が卯月ちゃんを支えます!」

卯月「お願いしますね。ゴールとブライの融合体に、デビラ・ムウ……。止めなきやいけない存在は、たくさんいますから」

かな子「分かりました。：何て言ってる間にも、量産型ダイノゲッターの群れが迫ってます！」

卯月「私達を足止めするつもりですか？」

かな子「多分、そうだと思いますけど……でも……」

卯月（まだ凜ちゃんがいらないから、自分で抑えて……）

卯月「ダブルトマホーク!!」

真ゲッター1がゲッタードラゴンの様なトマホークを両手に構える。

卯月「!!」

ダイノゲッターxs「!!?!?!」

刹那の擦れ違いで、10機近い量産型ダイノゲッターが木っ端微塵の粉塵と化した。

卯月「行きましょう、かな子ちゃん！」

かな子「はいっ！」

重力を無視した軌道を描き、亜光速で前線に向かって消えていく真ゲッター1。

莉嘉「スゴ……っ。って、みとれてる場合じゃないよね！」

改めてゲッターD2のコックピットに向かい、シートに腰を下ろす。

莉嘉「ゲッターを再起動つと。まだ動くよね?ゲッターD2」

莉嘉の声に応じるように、ゲッターD2は動き出す。

莉嘉「よおしくよし、いい子いい子。ちよつとダメージ受けてるみたいだけど、D2 だつてゲッターの子!まだまだ戦える!だよね?」

ゲッターD2を立ち上げる。

莉嘉「…ふう。真ゲッターとはえらい違いだなあ。D2の方が全然使いやすいや」

メカ一角鬼『!!』

莉嘉「いゝっ?!?」

美波「ゲッタースパイク!!」

メカ一角鬼『!』

莉嘉「美波さん!」

美波「ブレードツ!!」

ゲッターD2を襲撃したメカ一角鬼を、上空から降下したブラックゲッターが、拳のスパイクで脳天から砕き、レーザーブレードによる一撃で胴体を切り裂いて倒す。

莉嘉「あ、ありがとう…」

美波「お礼は後で。真ゲッターを渡す役目は終わったんでしょ?なら、後はクジラに  
戻る?」

莉嘉「まさか!アタシだつて、そんなお使いのためにここまで来たわけじゃないよ!」

美波「そう…。なら、私からは離れないで!」

莉嘉「りよーかい！アタシだって、生きてるんだ。生きたいんだ！だから、最後の最後まで、足掻かせてもらおうから！」

茜「ゲッタービームムツ!!」

ゴール&ブライ《——!?!》

プロト・ゲッターが右肩の砲門から放ったゲッタービームは、ゴール&ブライに直撃。

茜「むう……やはりこの程度のビームでは、ダメージは与えられるみたいですが……」

「！」

ゴール&ブライ《……!》

アーニヤ「すぐに回復………されてしまいますね……」

ゴール&ブライ《グアッ!》

茜「!」

神速のゴール&ブライの体当たりを、反射で回避。

ゴール&ブライ《ガッ!》

茜「ふんっ!」

つづく下半身、ゴールの噛み付きをふわりと舞い上がって避け、



ゴール&ブライ《!!》

茜 「何のー!」

ゴールの拳を右手で怯なして凌いだ。

茜 「防戦一方…!後一手欲しいところですね!」

美穂 「!? 茜ちゃん見て!足元が…」

茜 「足元…?これは…!」

眼下には先程までの氷原ではなく、煌々と燃えるマグマが映る。

茜 「どういうことですか!」

美穂 「さっきのデビラ・ムウのマグマ攻撃…。それが海水で冷やされて岩石になって、

その上をマグマが流れてるんだ!」

アーニャ 「大陸が増える…:天地創造の景色、みたいですね…!」

茜 「いかにも、最終決戦に相応しい舞台!私も、熱くなってきましたア!!」 ゴオッ

ゴール&ブライ《——!!》

茜 「ゲッタートマホークツ!!」

ゴールの頭部に飛び乗り、ブライの両腕をトマホークの柄で受け止める。

茜 「これで!物理的な攻撃手段は全部封じましたよ!次はどうしますっ!」

ブライ《……!》

茜 「むっ!…これは?!」

ブライの角が怪しい光を放ち、プロト・ゲッターも同じような光を帯びる。  
アーニヤ「どうしましたか、アカネ!」

茜 「ゲッターが…動きません!コントロール不能です!」

美穂 「えっ!?!」

ブライ《ウガオオツ!!》

茜 「ゴッ——!」

ブライのフルスイングを直撃で喰らい、吹っ飛ばされるプロト・ゲッター1。

茜 「うぐぐ…っ!」

アーニヤ「…見えない、力で相手を止める…」

茜 「超常の力…!正しく、超能力とでも言いますか!」

アーニヤ「けど、ユーコの超能力とは違って、種も仕掛けも見当たりませんでした!」

茜 「つまり、真正正銘の超能力…!」

美穂 「そんな、裕子ちゃんの超能力が偽物みたいな…」

『失敬ですね!私のサイキックは本物です!!』 ムンツ

美穂 「!?!」

ゴール《キシヤアアアツ!!》

茜 「くっ!」

ゴールが、自らの口から放った緑色の火炎攻撃を紙一重で躲す。

茜 「やはり……!油断のならない相手ですね!」

アーニヤ「超能力に、強力な炎……パワーもスピードも、圧倒的です……!正面からのぶつかり合いは不利、です!」

茜 「手を考えている暇はありません!それに、活を見出だすには、正面突破が一番ですツ!!」 バツ

ブライ《……っ》

挑発するように、ブライが嗤う。

茜 「でやあああああツ!!」

ブライ《……!》

茜 「ガッ——くっ……!」

ブライの念動力が、突撃を仕掛けたプロト・ゲッター1の動きを再び封じる。

美穂 「茜ちゃん!!」

茜 「ぐっ……!うう……っ!!」

ゴール《……!!》

茜 「このままでは狙い撃ち、直撃……ですが!」

ゴールの火炎がプロト・ゲッターーに迫る――。

美穂「っ！……？」

アーニヤ「アーニヤ達……無事……？」

茜「これは……トマホークが、私達を守ってくれたみたいですよ！」

美穂「この大型のトマホーク……まさか！」

3人「真ゲッターロボ!!」

卯月「大丈夫ですか!?美穂ちゃん、茜ちゃん、アーニヤちゃん!!」

美穂「卯月ちゃん！」

かな子「ここからは真ゲッターも加勢します!ゲッター飛焰は一度下がって体勢を立て直して!」

茜「了解です!」

一度体勢を立て直したプロト・ゲッターーも横に、真ゲッターーが並び立つ。かな子「……こうして改めて見ると、異様な姿ですよ。不気味って言うか……」

卯月「恐竜帝国のゴールに、百鬼帝国のブライが一つになつて……」

茜「まるで、復讐のために甦ってきたようですね!」

卯月「なら、何度だって送り返してあげます!還るべき場所に!」 ジャキツ  
両腕のゲッターレザーを展開。

卯月「っ!」

一瞬で肉薄し、ゴール&ブライの接合部に一撃で半分ほどの切り込みを入れ、

卯月「やあああああッ!!」

返す刃の二撃目で、ブライの上半身を完全に斬り断った。

アーニヤ「やった…!?!」

卯月「いえ、まだです!」

ブライ『……ッ!!』

切断したブライの上半身、断面から肉が水のように溢れ、下半身を形成していく。

巨大ブライ『フウ…』

巨大ゴール『フシユウウ…』

美穂「分裂しちゃった!」

茜「いよいよ極まって、気持ちの悪い存在ですね!」

かな子「けど、これで戦いやすくなるりました!」

茜「間違いありません!それでは、ゴールは任せます!!」

卯月「茜ちゃん?!」

一気に加速して、巨大ブライの頭を押しさえて引き連れていく。

巨大ゴール『ガアアッ!!』

卯月「!?」

巨大ゴールの火炎攻撃を、素早く身を翻して回避。

卯月「勿論、貴方の事を忘れたわけではありませんよ!」

巨大ゴールに向き直り、再度ゲッターレザーを構える。

卯月「やあッ!!」

巨大ゴールの脇腹に一閃。赤黒い血流が飛沫となつて弾けるが、

巨大ゴール『……』

かな子「直ぐに再生しちやつた…!インベーター以上の再生力ですよ!」

卯月「……」

巨大ゴール「グアアッ!!」

卯月「!」

両腕を仰ぐように広げ、凄まじい速度で襲い掛かってきた巨大ゴールを、真ゲッター1は受け止める。

巨大ゴール『ガッ!』

真ゲッター1の肩口に、噛み付く。

卯月「くっ…!」

かな子「ゲッターエネルギーを吸われてる!?こつちのエネルギーを吸収して、進化す

るつもり……!」

その言葉を裏付けるように、巨大ゴールが更にその大きさを増していく。

卯月「…ゲッタービーム!」

額の射出口からゲッタービームを放ち、巨大ゴールの体を両断。

巨大ゴール『ギャアアツ!?!』

卯月「そんなにゲッター線が欲しいのなら……!」

巨大ゴールと真ゲッターの間、真ゲッターの胸部正面の空間上に、プラズマが弾けるようにピリピリとゲッター線が迸る。

卯月「好きなだけ喰らわせてあげますっ!」

エネルギーが集束する。

卯月「ゲッタービィィイムツ!!」

ズワオツ

巨大ゴール『!!!』

高出力のゲッタービームが、巨大ゴールの全身をまるごと呑み込んで灰塵に変えていく。

巨大ゴール『!!——』

断末魔も遺さぬまま、巨大ゴールは跡形もなく霧散していった。

茜 「どお〜〜らアツ!!」

プロト・ゲッターが巨大ブライにのし掛かる零距离で、ガトリングガンを連射する。

巨大ブライ 『ぐ……ぐ……ぐ……!』

巨大ブライの角が怪しく光る。

茜 「ぐっ……!」

巨大ブライ 『ゴアツ!!』

動きの止まったプロト・ゲッターを、巨大ブライの拳が打ち付ける。

茜 「ぐああああアツ!!」

美穂 「あの能力がある限り、近付くのは危険だよ!」

アーニヤ 「先ずはあの角を、何とかしないと……!」

茜 「しかし……魔王鬼のように大きく目立つわけでもありません! 遠くからあの角

だけを狙い撃つと言うのも、厳しいものがありますよ!」

美穂 「じゃあ、どうすれば……!」

茜 「……一つだけ、やってみたいことがあります!」

美穂 「やってみたいこと?」

アーニヤ 「この状況では、何でもやってみましょう! アカネ!!」

茜 「はいっ! 行きますよ〜ツ!!」



プロト・ゲッター1を前傾。巨大ブライ目掛けて突進した。

巨大ブライ『ツ!!』

念動力が、再びプロト・ゲッター1を捉える。

茜「…………ツ!」

美穂「こ、これじゃあ…………さつきと同じ…………!」

アーニャ「…………いいえ、これは…………!」

巨大ブライ『グウアツ!!』

剛腕を振り下ろされ、マグマが作った大地に叩き付けられる。

茜「ぐふっ?!」

美穂「きやあっ!」

巨大ブライ『ガアツ!!』

茜「ツ——オープンゲット!!」

巨大ブライ『?!』

茜「チェンジゲッター1ツ!!」

巨大ブライの追撃をオープンゲットで躲し、瞬時に合体して体勢を立て直す。

アーニャ「それで、何か、分かりました?」

茜「はいっ!勝てます!!」

美穂 「それは、信じてるよ。茜ちゃんだから大丈夫！」

茜 「力を借ります！アーニヤちゃん！美穂ちゃん!!」 グツ

アーニヤ 「はいっ！」

美穂 「うん！」

翼を格納して地に両足を着け、脚を広く開き腰を落としてどっしりと構える。

茜 「さあ、どこからでも掛かってきて下さい!!」

巨大ブライ 『……?』

茜 「どうしたんですかあ！人を散々煽っておいて、まさか自分から動くのは怖くて出来ないと言っても言うんですかあッ!?!」

相手に動くよう挑発しつつ、構えは防御ではなく、迎え撃つ姿勢。

巨大ブライ 『……っ!』

念動力。再びプロト・ゲッター1の動きを封じ、

巨大ブライ 『!!』

目にも止まらぬ速さまで加速。一気に飛びかかった。

茜 「!!」

巨大ブライ 『ウガアアッ!!』

加速に乗せて放たれた巨大ブライの抜き手が、正確にプロト・ゲッター1のゲッター

炬心を貫く。

巨大ブライ『……?』

しかし、プロト・ゲッター1は倒れず、崩れない。

茜「う……ああああああ、ッ!!」

虚を突き、両の手でしつかりと巨大ブライの角を握り締め、

茜「トラアアアイツ!!」

勢いのまま巨大ブライを押し倒すと共に、角をへし折った。

巨大ブライ『ゴガアッ!』

茜「どうです!?!これでもう手品は使えないでしょう!」

巨大ブライ『……ッ!!』

巨大ブライが悔しそうに表情を歪ませる。

茜「来ると分かれば、受け止められるんです!回避するための、反撃するための動きを封じられようと、美穂ちゃんやんの踏ん張り、アーニヤちゃんやんの支え、そして!私の気合いまでは止めることは出来ません!!」

拳を振り振り、鉤爪付きの拳を巨大ブライの口にぶちこんだ。

茜「1人だったならば、貴方の攻撃を受け止めることは出来なかったでしょう!しかし、私達は3人!3本連なる槍は、例えどんな強敵が相手でも決して屈しませんッ!!」

巨大ブライ『グウアアアアアアツ!!』

プロト・ゲッター1を押し退けて強引に立ち上がる。

茜「そして!ゲッターエネルギーとプラズマエネルギー!2つの力で動く、ゲッターロボ飛焔は……!」

巨大ブライ『ウルウガアアアアアアツ!!』

茜「片方の心臓が潰されただけでは、決して止まりませんッ!!」

襲い掛かってきた巨大ブライの懐に潜り込み、一本背負いの要領で投げ飛ばす。

巨大ブライ『ウガアアアアアツ?!』

茜「ゲツツタアア〜!!トマホオオオオオオ〜ッ!!」

空中で姿勢の崩れた巨大ブライに、トマホークを振りかざす。

茜「でええいやあああああアツ!!」

縦一閃。血飛沫が宙に弾ける。

美穂「茜ちゃん!トドメは何時でも!」

茜「ありがとうございますッ!!それでは——!!」ジャキッ

プロト・ゲッター1の砲門を開く。

茜「プラズマツ!!ノオオオオヴアアアアアアツ!!!」

ドワッ

巨大ブライ『——』

超高圧のプラズマエネルギーの奔流の中で、巨大ブライの影は砕けて散った。

茜 「やった……やりました!!」

美穂 「でも、飛焰の……ゲッター斬の炉心が……」

茜 「ゲッターロボ斬……」

アーニヤ 「姿、形は変わっても……長い付き合いでした、ね……」

そつと、ゲッター炉心のあった場所、深く穿たれたプロト・ゲッター1の左胸部に手を添える。

茜 （これまで、ありがとうございました……ゲッター斬、私達はもつと前へ進みます  
!）

アーニヤ 「アー……と、アカネ?」

茜 「はい? 何ですか!」

アーニヤ 「3本連なって折れないのは、矢、ですね」

茜 「えっ? あー……ははっ、はい」

アーニヤ 「?」

茜 「それは、分かっています。……でも」

アーニヤ 「でも?」

茜 「私達は、飛び出したらそれっきりの、矢じやないでしょう？」  
 アーニャ 「……ふふつ、そうですね」

茜 「はいっ！美穂さん、飛焰のプラズマエネルギーは後どのくらい保ちそうですか？」

美穂 「プラズマノヴァ一発を撃つ分位はあるよ。まだまだ戦える！」

茜 「ならば行きましょう！私達の戦いは、まだ終わってません!!」

デビラ・ムウ 《!!!》

奈緒 「……おいっ、おいっ！しっかりしろよ、シュワルツ!!」

シュワルツ 「……つたく、耳元でうるせえんだよ」

奈緒 「何だよ、全然目覚まさないから、こっちは心配して……!」

シュワルツ 「まだまだ死にやしねえよ……。あのクソうるせえインバーダーもどきに、ホントの吠え面を描かせてやるまではな……!」

ジャック 「ああ、シュワルツの言う通りだぜ!!」

奈緒 「テキサスマック！みんな、無事だったんだな！」

リンダ 「当たり前よ。こんなところまで来て、死んでなんてられないわ」

ボブ 「忘れたか？俺達のロボ・ストーンは核爆発にだって耐えられるんだ」

サム「マグマの熱なんか、温泉みたいなモンさ!」

奈緒「そっか…!ははっ、そうだよな!」

メリー「みんな!生還の喜びを分かち合うのはまだ先よ!」

ジャック「Counter attack!! 反撃開始だ!」

シユワルツ「行くぜえッ!!」

「「オオオオオオッ!!」」

スーパーロボット軍団による、総攻撃が始まる。

シユワルツ「奈緒、加減すんじゃねえぞ、ありったけをぶち込め!!」

奈緒「おう!こうなつたら出し惜しみ無しだ!ステルバーの武装、全弾撃ち切るっ!」

ボブ「行くぜえ、サム!ロボ・ストーン、体当たりだ!!」

サム「OK、兄ちゃん!出力最大、あの巨体を平たくしてやろうぜ!!」

リンダ「切り刻んであげるわ!」

ジャック「ALL right! 化け物の活け作りだぜ!!」

デビラ・ムウに突撃したロボ・ストーンがその動きを抑え、テキサスマックとキングダムが持ち前の得物で腕などを斬撃。怯んだところにステルバーのミサイルや銃弾が降り注ぐ。

デビラ・ムウ——!!!?

シュワルツ「喰らいやがれ！」

ステルバーの両肩の装甲、STーブーメランを投擲。首の部分に突き立てる。

シュワルツ「今だ、ホスナー兄弟！」

サム「OK！」

ボブ「おおッ！この距離なら外さねえ!!」

突き刺さったSTーブーメラン目掛けシヨルダーキャノンを発射。

デビラ・ムウ《!!》

ブーメランは爆ぜ、デビラ・ムウから黒煙が上がる。

リンダ「どうよ!？」

メリー「少しは効いた?！」

デビラ・ムウ《!!》

ボブ「ちっ…!化け物がよ…!」

サム「やっぱり、ボルガの超ウエポン砲がないと…!」

シュワルツ「んなこたあ百も承知よ。そろそろ超ウエポン砲のチャージが終わる頃の

筈だ」

奈緒「何やってるんだ…?ボルガ——!」

スミノフ「……調子はどうか!」



クルー1「ダメです!ボルガの全身、70%以上がマグマと岩石によって埋没しています。ボルガ、行動出来ませんッ!!」

クルー2「第2、第3機関室のクルーとの通信、依然途絶したまま!出力上がりません!!」

スミノフ「くっ…!目標を目の前にしながら、動く事も出来んだと…!」

クルー1「このままでは、デビラ・ムウに照準を合わせる事も出来ません!」

スミノフ「…何とかスーパーロボット部隊と連絡を取るんだ。デビラ・ムウ自身の方から、こちらの射線に入ってもらう!」

クルー1「しかし…!それでは身動きの取れないボルガが、狙い撃ちにされる危険があります!」

スミノフ「何を言う!元より覚悟の上。例え刺し違えてでも、人類に勝利をもたらすのだ!!」

芳乃「然りー。その言葉こそ真理、故にー」

スミノフ「!?」

芳乃「共に戦いましょう。人類の明るく光溢れたー、未来の為にー」

スミノフ「何だ…?」

ボルガ全体が僅かに揺れる。

クルー2「これは…:友軍機が、ボルガを持ち上げています!」

スミノフ「あれは、ダイノゲッターロボ……！」

芳乃「務めを果たしましょう。その為の助力をー」

クルー「ゲッター機で、超ウエポン砲の照準を合わせるつもりか!?」

スミノフ「無理だ！例え第3形態とは言え、ボルガの総重量には耐えきれんぞ!?」

芳乃「だいのゲッターすりを、侮らないで頂きたくー」ググググ

溶岩溜まりの中から引き揚げるように、ダイノゲッター3が超ウエポン砲の砲身を持ち上げていく。

ニオン「いくらゲッターロボとは言え、限界はあるぞ……！」

芳乃「ニオンさんの弱音ははじめてでしてー」

ニオン「これは！弱音ではないっ……！」

鉄甲鬼「しかし、珍しいな。よもや芳乃の方から、前線に出るとはな」

芳乃「芳乃もまたー、今と言う時を共に生きる命であるが故ー。この先、無限に広がる未来を手にする為にー、戦いに身を投じるのは、至極当然の事でありましてー」

ニオン「どうせ結果は見えているのだろう？高みの見物をしていると思っていたぞ」

芳乃「見えている結果などどこにもないのですよー？」

鉄甲鬼「そうか？俺達には、お前が未来を見透かしているように見えていたが？」

芳乃「目に見える未来など可能性の一端に過ぎずー。それを手繰り寄せー、実現させ

ることこそ、本当の命の成せる力、でしてー」

鉄甲鬼「つまり、お前もまた、望んだ未来を手にする為に抗う一人の人間、という事か」

芳乃「然りー。故にー、戦うのでしてー」

鉄甲鬼「ふつ、神は甘んじるものに幸を与えず、か」

芳乃「だいのゲッターすりい?そなたの力を見せるのでしてー。そなたもまたー、ゲッターの眷属であればー」

——ギンツ

ダイノゲッター3の全身に、力がみなぎる。

グオオオオオオオ——ツ

奈緒「な、何だっ、地震か!」

ボブ「ありやあ、ボルガじゃねえか!」

リンダ「マグマに埋まっていたのね」

メリー「それを、ダイノゲッターが引き揚げてるの?」

シユワルツ「それだけじゃねえ。超ウエポン砲の照準を、デビラ・ムウに合わせてんだ!」

リンダ「ゲッター単機で、それが出来るの?!」

奈緒「分からないよ！けど、幾らパワーのあるゲッター3だって、あの巨体を持ち上げられるとは思えない」

リンダ「だったら！」

奈緒「でも、芳乃が前に出てやってるんだろ？だったら、それをやるしかないって事だ！」

ジャック「確かに、奴を倒すにはそっちの方が手っ取り早そうだ！」

ボブ「そうと決まりやあ……行くぜ、サム!!」

サム「あいよっ、兄ちゃん！」

ロボ・ストーン「速度を上げて、ボルガの元へ向かう。」

サム「手を貸すぜ、芳乃ちゃん！」

ボブ「腕つぶしなら、ロボ・ストーンだって大したモンなんだぜ？」

芳乃「ありがとうございます。では共に、力を合わせましょー」

ボブ「おうよ！ロボ・ストーン、パワー全開だツ!!」

デビラ・ムウ《!!》

メリー「デビラ・ムウがボルガに気付いたわ！」

ジャック「STOP!! ここから先は行かせないぜ!!」

デビラ・ムウ《——!》

シユワルツ「この野郎っ!」

マグマ砲を撃つために口を開きかけたデビラ・ムウの下顎目掛け火線を集中させる。  
奈緒「好き放題撃たせるかよ!」

リンダ「代わりに、とっておきのお見舞いしてあげるから、そこでじつとしてなさいっ!!」

それぞれの最大限の攻撃が、デビラ・ムウを釘付けにする。

サム「ロボ・ストーン、エネルギー臨界!これ以上は……兄ちゃん!」

ボブ「もう少しだ……!クソツタレ!」

芳乃「ゲッターすりいも、もう一踏ん張りですてー!」

超ウエポン砲を、目一杯に持ち上げ、支える。

クルー「もう少し右上、あと15度!」

ボブ「おおりゃあッ!!」

残された最後の力を振り絞って、ロボ・ストーンが砲身を持ち上げる。

ググンツ

クルー「目標、射線に捉えました!!」

スミノフ「よし……!超ウエポン砲、発射用意!」

ジャック「撃て……!」

シユワルツ「撃てっ！」

奈緒「撃てえ！ボルガアツ!!」

スミノフ「撃てええッ!!」

凄まじい轟音と共に、超ウエポン砲が放たれる。

ドワ オ オ ッ

デビラ・ムウ《!!》——《》

デビラ・ムウに直撃。中心から外殻へと爆炎は拡がり、デビラ・ムウの全身を呑み込んだ。

鉄甲鬼「や、やった……！」

芳乃「ほう……。ゲッターすりいも、よく頑張ったのでしてー」 スリスリ

デビラ・ムウの爆発。途轍もない衝撃波が周囲を襲う。

ジャック「Oh!! 最後の最後で……とんでもない最後っ屁をかましやがる！」

シユワルツ「血飛沫みてえに溶岩まで飛び散ってやがる。まるで火山の噴火だ」

奈緒「でも、勝ったんだよな。……ん？」

シユワルツ「どうかしたか、奈緒？」

奈緒「いや、デビラ・ムウの居た所……何か、妙に窪んでないか？」

サム「窪み？」

メリー「さっきの爆発で、マグマが固まって出来た地面が削れたんじゃない?」

リンダ「…ちよつと待って!これ、只の窪みじゃない!」

シユワルツ「コイツア…!」

李衣菜「…ッ!スッゴい衝撃!何が起こったの?」

ラセツ「ムウがやられたようだな」

李衣菜「えっ!?!」

凜「その割りには、随分と余裕に見えるけど?」

加蓮「そのデビル何とかって、アンタの虎の子だったんでしょ?ゴールとブライの合体悪魔もやられちゃったみたいだし、蛇牙城を制圧して準備したにしては、詰めが甘いんじゃない?」

ラセツ「フツ…:所詮は目先のことしか見えん蛮族風情」

李衣菜「何が言いたいのだ!」

ラセツ「既に手遅れなのだよ、何もかも!貴様らが何をしようと、楔は打たれたのだ!地球を滅ぼす楔がな!」

李衣菜「ち、地球を滅ぼす…」

加蓮「楔!?!」

ラセツ「そうだ。何故ムウが動かなかったか、分かるか？ムウがどの様にしてマグマ砲を精製していたか。いかに脳細胞も乏しいサルと言えど、落ち着いて考えれば分かるだろう？」

李衣菜「こいつ……！」

凜「成る程」

李衣菜「凜！」

凜「安直な挑発に乗っちゃダメだよ。時間はくれるんだ、なら考えようじゃん」

加蓮「それで、なんなの？アイツの言う楔って」

凜「地球を滅ぼす楔……それは、デビラ・ムウの尻尾だよ」

李衣菜「尻尾？」

ラセツ「その通りだ！」ニヤリッ

凜「デビラ・ムウが動けなかったのは、尻尾を地面に突き立てていたから。そしてマグマ砲は、尻尾から直接、地球のエネルギ―を吸収して撃つてんだ」

加蓮「成る程。だからあんな規格外だったって訳」

ラセツ「それだけではない！ムウの尾は、ムウの本体が破壊されると同時に切り離され、爆発の衝撃を伴って地下を指す。貴様らサル共が想像もし得ぬ地下深く、地球の内核をなあ」



李衣菜「地球の核って、確かスツゴい熱いんでしょ?そんな所目指しても、溶けてなくなりそうだけど…」

ラセツ「バカめ!その熱程度で朽ち果てるならばこんな作戦は立てぬよ、さしものランドウもな」

加蓮「それじゃあ…!」

ランドウ「内核に接触した尾は、その付近で爆発を起こす。その爆破こそ小さく大したものではないかもしれないが、それによつて地球の地軸は乱れ、確実に環境は一変する!」

李衣菜「そ、そんなことしたら、ラセツだつて生きてられなくなるよ!それでもいいの!?!」

ラセツ「屈強な肉体を持つ我らハ虫人類と、貴様ら脆弱なサル共。どちらが生き残るかなあ?」

李衣菜「そ、そんな…!それじゃあ、もう地球は…!」

加蓮「もう終いつてこと…?」

ラセツ「フハハハハッ!己が無力を噛み締めるがいい!サル共ツ!!」

加蓮「……プツ……!ふふふっ」

ラセツ「?」

李衣菜「ちよつと、加蓮！まだ笑うの早いつて！」

加蓮「もう、だつて無理だよ、こんなの。我慢出来ないつて！」

李衣菜「私は最後まで頑張つたのに！」

加蓮「いや、にやけてたつて、リーナも」

李衣菜「ええ？名女優だつたと思うけどなあ」

ラセツ「何だ？シヨックのあまり気でも違えたか？」

李衣菜「ん？まだ分らないの？」

ラセツ「何がだと言うのだ！」

凜「……だつてよ、卯月」

ラセツ「っ!？」

卯月「話は全て聞かせてもらつちやいました！」ピースッ

かな子「他のロボットには無理でも、真ゲッターロボなら！」

ラセツ「真ゲッターロボ、だとお!？」

李衣菜「勝手に勝ち誇つて、ペラペラ喋つてくれるんだもんなあ」

加蓮「拍子抜けしちゃうくらい調子に乗つてくれたよねえ。アタシ達の演技に、気持ち良くしちゃつてさ！」

ラセツ「ぐっ……!グググッ……!」

李衣菜「ホント、愚か者はどっちなんだ、つて」

ラセツ「…貴様らぁ!!」

卯月「デビラ・ムウの尻尾を、真ゲッターで止めます!」ギユンツ

瞬時に身を翻して、真ゲッターがデビラ・ムウの作った穴に突入。

ラセツ「くつ、行かせるものか…!…!…!ぐっ?!」

真ゲッターに注意を奪われたブラックダイノゲッターが転倒。

李衣菜「どっちが?」

ネオゲッターは、素早くチェーンナックルを引き戻す。

ラセツ「雑魚共が…!そんなに死にたいか?」

李衣菜「私に付き合うのがアンタの役目!どうせそんなハリボテゲッターじゃ、真ゲッターには追い付けないんだ。だったら、ここで楽しく遊ぼうよ、ね?」

ラセツ「こ、ここ小娘風情がア〜〜ツ!!」

卯月「…尻尾、だいぶ奥深くまで潜ったみたいですね」

かな子「ゲッターの表面温度も上昇してる…。もしかして、もう手遅れなんじゃ」

卯月「そんなことありません!ゲッターを信じよう?かな子ちゃん」

かな子「…そうですねっ」

卯月「…! 尻尾を捉えました!」





李衣菜「そんなこと、勝手に決めるな……つく！」

腕を交差させてブラックダイノゲッターの攻撃を防ぐ、ネオゲッターのあちこちの装甲が剥がれ、内部構造が露出する。

凜「ネオゲッターはそろそろ限界だ」

李衣菜「……ネオゲッター、私と最後まで戦って！」

李衣菜の意思が伝わるようにネオゲッターの目に光が差し、苛烈な砲撃の中を、着実に一歩。

李衣菜「う……ううううーッッ!!」

ラセツ「ハッ！自ら死にに来るか？」

李衣菜「うう……！うおおおおおッ!!」

一歩、一歩の牛歩を歩に。そして走へと。

ラセツ「な、何だ、こいつっ?！」

李衣菜「チェーンナックルもミサイルキャノンも、プラスマサンダーも！ネオゲッターの武装は何一つ、コイツに効きやあしないんだ……！」

肩や脚のアーマーを爆破させ、コックピットのキャノピーも弾け、北極の冷たい風が中に入り込んでくる。

ラセツ「ふんっ」

李衣菜「ガッ……!」

ブラックダイノゲッターが、ネオゲッターを一蹴する。

李衣菜「ま……まだまだあッ!」

ラセツ「分からののか? パワーでもスピードでも、私のゲッターは貴様のゲッターを凌駕している。そんな出来損ないのマシンでは私には勝てん!」

李衣菜「そんなのとづくに知ってるよ! アンタの乗ってるゲッターは、少なくともネオゲッターより性能は優秀だ!」

ラセツ「ならば、何故まだ戦う!？」

李衣菜「心はまだ敗けてないっ!」

ラセツ「……心、だと?」

李衣菜「そうだ心だ! どんな時でも諦めない! 前に進むことを諦めないっ! そうやって今日まで生き残ってきた、人間の心意気だ!」

ラセツ「…はっ! 何かと思えば。そんなもの…」

李衣菜「うぐっ……!」

蹴り飛ばされ、ネオゲッターが宙を舞う。

ラセツ「心意気? 思い? そんなものが何の役に立つ! 己で行動に枷を作り、視野を狭め、己が未来の道を縮めているではないか!」

李衣菜「ぐう……！」

空中で、体勢を立て直せないネオゲッターの腕を持ち、背中を上、地面に対して正面を向けさせる。

ラセツ「だから貴様らは、愚かだと言うのだッ!!」

そして、がら空きになったネオゲッターの背中に、トマホークの切っ先を突きつけ、そのまま勢いよく地面に叩き付けた。

李衣菜「ガアアアアアアッ——!!」

ラセツ「ふんっ。死地の果てで愚行を呪うがいいわ」

凜「——……い、な、李衣菜。生きてる?」

李衣菜「……オチオチ寝てもいられないね」

加蓮「勝手に眠らないでよね。ここまで来て、無責任すぎるよ?」

李衣菜「へへっ、分かってるよ。ちよつとした冗談だつて」

凜「ネオゲッターのエネルギー残量は20%を切つてる。残された時間は、そんなくないよ」

李衣菜「そつか。20%……それだけあれば、十分……！」

加蓮「何か秘策でもあるの?」

李衣菜「あ……ごめん、今回ばっかりは」



加蓮「じゃあどうするの?」

李衣菜「性能でも、能力でも、武装でも。アイツには勝てないんだ。そうなったら、やることは一つ」

ラセツ「むっ?」

李衣菜「私の意地を、通す!!」

ラセツ「!!」

意表を突き、ネオゲッター1の身を反転させて、ブラックダイノゲッターの足を払う。

ラセツ「くっ……!」

李衣菜「やあああああッ!!」

ラセツ「まだ抵抗するのか!」

李衣菜「当たり前じゃん!アンタが作ろうとしてる明日は、私が望む明日じゃない!」  
倒れ込んだブラックダイノゲッターに素早く乗り上がり、マウントポジションを取る。

李衣菜「私達一人一人には、それぞれの明日を描く権利があるんだ!それを蔑ろにして、自分の思うまま好き勝手に世界を変えようとする奴を!許しておくなんて出来ないっ!」

ラセツ「愚か者を通り越した……大うつげがッ!」

李衣菜 「ぐう……！」

ブラックダイノゲッターの貫手が、ネオゲッターの腹部に突き刺さる。

李衣菜 「凜っ！」

凜 「こっちは大丈夫！」

加蓮 「ネオゲッターはアタシ達が支えるよ！リーナは戦って、証明して！リーナのロックを!!」

李衣菜 「凜……加蓮……！」

ラセツ 「揃いも揃って……！うつけ者ばかりか！」

ネオゲッターを弾き飛ばし、立ち上がる。

李衣菜 「うあっ！」

ラセツ 「絶望も、諦めも知らぬと言うか！ならば思い知るがいいっ！己の無力をなアツ!!」

李衣菜 「グアアアアアツ!!？」

倒れたネオゲッターの右腕を引き千切る。

ラセツ 「次は左腕だ！五体を引き裂いてくれるツ！」

李衣菜 「……っ！そんなことは、させないっ！」

左腕のチェー娜娜ックルを飛ばす。

ラセツ「どこに飛ばしている!？」

李衣菜「知りたいんなら、振り返った方がいいんじゃない?」

ラセツ「!？」

引き戻ってきたチエーンナツクルが絡め取っているもの、それは先程切り離れた、

ラセツ「ネオゲッターの背部ユニット…!？」

李衣菜「おりやあああああッ!」

引き戻す勢いで、背部ユニットを打ち付ける。

ラセツ「ぐはあッ!!」

李衣菜「まだまだあ!」

ブラックダイノゲッターに背部ユニットを喰らわせ、次にネオゲッターの左腕が握ったのは、自身の右腕。

李衣菜「怒りの鉄拳!ロケットペアくんチッ!!」

叫び、勢いよく右腕を背部ユニットに叩き付ける。

ドワッ

李衣菜「どくだ!背部ユニットに残ってた、ショルダーミサイルの火薬分の爆発だ!」

ラセツ「お、おのれえ…!」

李衣菜「へへっ、流石に無傷とはいかないみたいだね?」

ラセツ「このくらいの手傷……すぐに再生して……!」

李衣菜「させないよ!」グッ

ラセツ「!」

李衣菜「ゲッターキック!」

勢いよく飛び蹴りを放ち、ブラックダイノゲッターを転倒させる。

ラセツ「ぐあッ!な、何故……?こんなポロポロの体の、どこにそんな力があると言うのだ?!」

凜「アンタは、甘く見過ぎたんだ」

ラセツ「甘く、見た……?」

凜「李衣菜の度胸と——」

加蓮「リーナの覚悟をね!」

李衣菜「これでえっ!」

ラセツ「!?!」

再びチェーリナツクルを地平に飛ばし、ソードトマホークを回収。

李衣菜「トドメだあああッ!!」

ソードトマホークを両手で逆手に構え、ブラックダイノゲッターの左胸、炉心の位置に深々と突き刺した。

李衣菜 「トマホオオオークツ!サンダアアアーツ!!」

ブラックダイノゲッター内部でプラズマが弾ける。

ラセツ 「度胸だと…?覚悟だと?そんなものでえ…:私が負けるものかア!」

李衣菜 「!？」

炬心を貫かれ、機能を停止したブラックダイノゲッターからラセツが飛び出し、キャノピーが砕けたネオゲッターのコックピットを指す。

凜 「!? 李衣菜っ!」

李衣菜 「こ、こいつう…!」

ラセツ 「くっふふふっ…!ハハハハハッ!」

コックピットへ侵入し、李衣菜の首根を掴んで持ち上げる。

ラセツ 「やはり哀れよのお。どれ程強く、粹がって見せたところで、貴様らは所詮、脆弱なサルよっ!」

李衣菜 「ぐっ…:う…:う…:」

加蓮 「アイツ…!」

凜 「ダメだ、加蓮!」

加蓮 「でも!」

凜 「今下手にゲッターを動かせば、李衣菜もゲッターの外に投げ飛ばされる」

加蓮「じゃあ、黙って見てろって言うの？何も出来ないで……！」

ラセツ「安心しろ。1号機のパイロットを始末したら、次は貴様らだ。上から順番に、始末してやる！」

李衣菜「そんなこと……させない……っ！」

ラセツ「ほう？ならば、どうする？」

李衣菜「……こうだ！」

ラセツ「？」

後ろ腰から引き抜いて、ラセツの腹部に突き付けたのは、かつて大将から貰った拳銃。

李衣菜「ッ！」

ラセツ「!？」

容赦なく、引き金を引く。

ラセツ「……ふふふつ、そんなものか？そんな鉛玉など、私には効か……ぬっ?!」

李衣菜「へ……へへっ、アンタら人外に、普通の鉄砲玉が効かないことくらい、全人類百も承知だよ」

ラセツ「貴様……っ！」

李衣菜「アンタにお見舞いしたのは、細胞腐食弾さ！」

ラセツ「ぐっ……うぐう……っ」

李衣菜「このっ!」

ラセツ「ガッ!」

腐食弾で怯んだ隙を突いて鳩尾に蹴りを放って拘束から脱出。素早くシートに戻り操縦桿を引いた。

ラセツ「グオ……!」

コックピットから投げ出され掛けるラセツ。しかし辛うじて、縁にしがみついて抵抗する。

ラセツ「やらせはせん……!このラセツ、何れは恐竜帝国の頂点に立つ男だぞ!」

李衣菜「まだ言ってる!アンタにそんな資質はないんだよ!トップに立つことの大変さは、凜や加蓮が、よく知ってる!」

ラセツ「な、何を……!」

李衣菜「みんな死ぬほど頑張って、みっともなくたつて努力して、這いつくばってでも這い上がる!そういう経験を積み重ねて、そうやって上達して、成長して!トップに上がっていくんだ!」

李衣菜「それを、くだらない体裁で見下して!格好悪いプライドで踏みにじって!誰かを利用してのしがらうとしてる、アンタみたいなロククじやない奴なんか、誰かの上に立つ資格なんか無いツ!!」 チャッキ

再度、銃口を突き付ける。

李衣菜「この世界も渡しはしない！」

ラセツ「小娘如きが……！」

李衣菜「その小娘に、負けるんだ。アンタのプライドは」

撃った。銃口から放たれた一発の弾丸は、ラセツの眉間を貫く。

ラセツ「あ……」

ラセツの手が縁から離れ、宙を舞う。

李衣菜「凜っ！」

凜「……ゲッター——！」

倒れ込みながらネオゲッターが動き、ゲッタービーム・キャリアをラセツに向ける。

凜「——ビームツ!!」

ラセツ「——」

放たれたビームの線はラセツを貫き、蒸発させるようにこの世から消滅させていく。

李衣菜「……はあ……ははっ、大将。大将の銃、役に立ったよ」

戦いが終わり、静寂の中、ネオゲッターが氷原に倒れ伏す。

加蓮「っ……う痛く……もう、受け身くらい取ってよね！」

李衣菜「ははっ、今回は勘弁。許して」



加蓮 「…仕方ない、今回だけだからねっ」

李衣菜 「ありや…? 加蓮が優しい…。珍しいこともあるもんだ…:…って」

ネオゲッターのカメラ、コンピュータ、ありとあらゆる機能がシャットダウン。

李衣菜 「エネルギー切れ…。ゲッター、ホントに最後まで戦ってくれたんだ」

そつと、サブモニターの上に手を乗せ、ゲッターを労う様に撫でる。

李衣菜 「ありがとう、ネオゲッターロボ…。もう傷付かなくていい。誰も、お前を傷付けたりしないから。ゆっくり休んで…」

『ハ虫人類の殲滅、ご苦労だったな。連合軍の諸君』

李衣菜 「!? 何!この声…!」

慌ててコックピットから飛び出る。

凜 「李衣菜…」

李衣菜 「凜、加蓮も!今の声って…!」

加蓮 「間違いない。今まで黙りだった癖に、いけしやあしやあと…!」

李衣菜 「! 見て、空だ!」

ランドウ 『まさにトカゲが如く、しぶとい奴等よ。奴等を討ち、始末してくれたこと感謝するぞ』

加蓮 「プロフェッサー・ランドウ…!」

凜 「空間を使った立体映像……。恐竜帝国も使った、御大層なだけの演出……」

李衣菜 「何さ！お前のために戦ったわけじゃない！」

ランドウ 『お陰で、我が復讐の為の全ての準備が整った』

李衣菜 「え？」

加蓮 「復讐の準備って、それじゃあラセツの恐竜帝国の決起も、全部時間稼ぎのために利用したってこと？」

凜 「……………」

ランドウ 『知るがいい！漫然と無為に生命を消費する旧人類よ！己の愚かさで無知無作為故に迎える終焉の様を！この恐ろしき、破壊の神の力を以て！』

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……ッ

李衣菜 「な、何……っ！地震っ!？」

凜 「いや、ただの地震じゃないっ！」

ランドウ 『これは始まりなのだ！旧態依然とした世界が終わりを迎え、新たな世界が産声を上げる。その世界最後の日の、始まりに過ぎん!』

橘 「一体何が起こったと言うのだ!？」

通信士 「わ、分かりません……これは……地球規模の地殻変動と呼ぶしか!」

橘 「地球規模の地殻変動だ!？」

晶葉「これは、まるで地球全体が震えているようじゃないか…?何か、途轍もない存在に、恐怖するように!」

通信士2「こ、これは…!」

晶葉「どうした!」

通信士2「蛇牙城を陥落させたことで、機能を回復させた衛生からの映像です!ハワイ沖200キロの地点に、火山島が出現しました!」

晶葉「火山島だと…?」

橘「しかし、火山島だけではこれほどの揺れにはならんだろう。他に何か変わったことは?」

通信士2「は、はい…!これは…!出現した火山島周辺のゲッター線濃度が、通常の100倍以上に増幅しています!」

晶葉「通常の100倍、だと…!」

ランドウ『刮目せよ!そして知るのだ…!貴様らが手にし、救いと崇める力の本質を!』

莉嘉「きやあつ!よく分かんないけど、これ良くないよ!」

卯月「…確かに。何だろう、胸が締め付けられるような…」

かな子「卯月ちゃん、大丈夫ですか?」

芳乃「……………」

ニオン「おいっ！これもお前にはお見通しだったのか!？」

芳乃「…然りー」

鉄甲鬼「何と!」

芳乃「最も忌避すべき事態として、承知してはおりましたー」

美波「私達には、もうどうすることも出来ないの？ランドウの言う通り、世界は終わってしまふの!？」

芳乃「戦いましょー」

美波「えっ?」

芳乃「未来を勝ち取るためには、生を勝ち得るためには、戦い、脅威となる全てを、排除するしかないのでしたー」

茜「シンプルですね！そう言うの、分かりやすく最高です!」

アーニャ「ですね。何が相手でも、アーニャ達の覚悟は決まっています。そうですね?」

美穂「うんっ。大丈夫、こつちには真ゲッターだって、みんなだつてついてくれるんだよ!」

卯月「私達が未来に進むために、生きていくために、障害になる脅威…!」

見える立体映像の先、黒く、巨大な物体が現れ、形を変えていく。

ランドウ『これこそがその化身!世界に最後を告げる使者!真ゲッター、ドラゴン  
よツ!!』

李衣菜「真ゲッター……ドラゴンツ!!」

つづく

## 第33話 『南海の死闘！真ドラゴンを討て!!』

シユワルツ「真ゲッタードラゴンだとお!?」

ボブ「こつちのゲッターとは似ても似つかねえじゃねえか！何処が真ゲッタードラゴン何だよ？」

晶葉『似ても似つかない、確かにその通りだな。だが、ランドウの言うことは事実だろう』

奈緒「晶葉？どう言うことだ？」

晶葉『ランドウが真ドラゴンと謳うマシン内部の炉心の反応、それは間違いなく、私達が開発したあのゲッターロボGのモノだ』

奈緒「何だって!?!それじゃあ、あれが…!」

卯月「未央ちゃんが消えた、私達のゲッタードラゴン…!」

晶葉『ああ。かなり大型化し、姿は見る影もなく変わってしまったているが。…ゲッター線は進化を促すエネルギー…あれが、ゲッターが変化した姿だとすれば、間違いなくそれは真ドラゴンと言えるだろう』

サム「どうしてそんなことになってしまったんだ？」

美波「進化……!早乙女博士の俗説が、真実だったなんて!」

芳乃「紛れもなく真実でしたー。この星に住まうわたくし達もー、元はゲッターによりその進化と誕生を促されましたー」

リンダ「その話が事実だったとして、あれが進化の行き着く先?まるで悪魔のようね」  
芳乃「然りー。どらごんの進化はー、黒く醜い悪意を持つものという意味によって歪められてしまいましたー」

ニオン「黒く醜い悪意?」

鉄甲鬼「ランドウの事だな」

卯月「つまり、あれは真ドラゴンの、正しい進化の姿じゃないってことですね?」

芳乃「差し詰めー、真ドラゴンと言うところ、でしょうかー」

ランドウ『真ドラゴンとは、これは手厳しい』

茜「真ドラゴンを返して下さいー!それは、貴方の元にあつて良いものではない筈です!!」

ランドウ『そうはいかぬな。ワシとてこの真ドラゴンを目覚めさせるのに随分骨を折つたのだ。その為に蛇牙城もくれてやったのだ、対価としては丁度いいだろう?』

シユワルツ「蛇牙城を、だと……?」

晶葉『この戦いそのものが、真ドラゴンを目覚めさせるための陽動だったと言うのか

！』

卯月「そんな！」

ランドウ『此度の戦だけではない。ワシは元より、この力を手に入れる事こそが目的だったのよ。この真ドラゴンを！』

莉嘉「えっ！それじゃあ、アタシ達の前に偉そうに出てきた時から……！」

ランドウ『如何にも。ワシが起こした戦いは、貴様らの目を真ドラゴンから逸らす為のもの！』

卯月「そんな……！そんな事のために、どれだけの人が傷付いたか、分かっているんですか！どれだけの人が、住む町を、国を追われて……！大切な人と離れ離れになったか！」

ランドウ『ふんっ。貴様は日常、歩きながらに踏み潰す虫けらの数を数えた事があるのか？』

卯月「……！」

晶葉（しかし解せない……。何故ランドウはゲッタードラゴンの事を知っていた？しかも、真ドラゴンに進化する事まで……。そんな事、早乙女博士だって言っていなかった）

『何故ランドウが知っていたのか、分からないという顔をしているな？早乙女の後継者』

晶葉『?!』

『だがそれも仕方ない！教えられなければ学ばない、自らの考えで至るところはない！



それが人間と言うもの。ボクらもかつてはそうだった!」

美穂「だ、誰…?」

茜「ランドウに協力者ですか!何者です!姿は見せて、名乗ったらどうなんですか!」  
ステインガー『姿は見せよう』

コーウエン『だが、名乗る必要はあるのかな?んん?早乙女の後継者よ』

晶葉『…ステインガー博士、コーウエン博士』

美波「知ってる人なの?晶葉ちゃん」

晶葉『早乙女博士と共に、長きに渡ってゲッター線を共同研究していた科学者だ。かつては旧研究所にも籍を置いていた』

アーニャー「…? でも、アーニャ達が研究所に来た頃には、そんな人達の名前は、聞いたこと、ないですよ?」

晶葉『私達が訪れるずっと昔の話さ。私達が研究所で活動する頃には、彼らはより深くゲッター線の本質に迫る為、月に建造されたゲッター線研究施設にいたからな』

卯月「…待ってください!月の研究施設って…!」

晶葉『そう。人類が始めにインベーターの襲撃を受けた、あの施設だ』

茜「そんな…!それじゃあ、あそこにいるのは、幽霊ですか!」

コーウエン『ふっふっふっ。実に人間らしい、短絡的思考だ。そう思わないか、ステイ

ンガー君?」

ステインガー『そ、そう思うよ、コーウエン君!』

コーウエン『インベーターに襲われた人間は等しく命を落とす。そう思い込んでい  
る。貴様らがインベーターと呼ぶ彼らこそ、人類を滅びの危機から救う、神にも等しき  
力を持った救世主だと言うことも分ならず!』

ステインガー『無為に抗い、争いを生む!何時の時代も人類は、異質な存在に銃を突  
き付ける事しか知らん!』

コーウエン『そんな事だからゲッター線の意味にも気付かぬのだよ。∴そう、進化!』  
ステインガー『進化なし!!』

美波「∴∴∴どう思う?晶葉ちゃん」

晶葉『インベーターに取り込まれたか、若しくはインベーターを何らかの手段を用い  
て利用しているのか。少なくとも、まともな人間ではなさそうだ』

茜「つまり、容赦なくぶちのめしてもいいと言うことですね!」  
ランドウ「真ドラゴンを見ても臆せぬか」

シユワルツ「へっ、テメエら悪党の御託は聞き飽きてんだよ!」

ジャック「真ドラゴンかエセドラゴンは知らないが、出てきた以上はKnock

outだ!!」

ランドウ『はははっ。流石、ここまで戦い抜いて来たことはある』 スッ…  
メリー「何をやる気!!」

真ドラゴンの頭部に、エネルギーが集中する。

ランドウ『ゲッター!ビームツ!!』

ズワアッ

卯月「っ?!——」

邪真ドラゴンの頭部から、真ゲッターのモノと比較しても数倍の威力はあろうかと言  
うゲッタービームが放たれる。

シュワルツ「ッ…!!」

卯月「シャインスパーク…:ううん、ストナーサンシャインにも匹敵する威力のビ  
ムですよ?あれ…」

ボブ「そんなもん何処に撃ったってんだ?」

リンダ「まさか、私達のいる、北極…」

メリー「そんな…! 邪真ドラゴンが現れたのはハワイ沖よ? 幾らなんでも距離が離れ  
すぎているわ!」

晶葉『まさか…! 軌道上の衛星、繋げるものはあるか?』

茜「どうしたんですか! 晶葉ちゃん!!」

晶葉『……』

美穂「晶葉ちゃん……」

晶葉『……今、邪真ドラゴンのビームの軌道から、衛星を利用して目標地点を弾き出した』

美波「その目標は……?」

晶葉『ランドウの目標は、おそらくハワイ本島……』

かな子「は、ハワイって……暮らしてる人達はどうなってるんですか?」

晶葉『今ハワイ近景を観測できる衛星を探している。だが、あの規模と出力のビームだ。恐らく……』

ランドウ『ぬあくっはっはっはっ!! 思い知ったか! これがゲッターの力! ゲッターの恐ろしさ! やがて全世界の国々が地上から消滅する!』

シュワルツ「クソ野郎が……ッ!」

ランドウ『我がデモンストレーション、気に入ってくれたかな?』

茜「貴方は! 貴方と言う人は!! どこまで人の命を弄べば気が済むと言うんですか!?!」

美穂「こんな事したって……言う事を聞かない人はみんな消し去るようなやり方じゃ、誰も貴方に従わない! 地球上から人が消えちゃったら、ただ寂しいだけなのに、ど

うしてこんな事…!」

ランドウ「ふふふっ…。ワシの行いを無駄と言うか。しかし、はじめにワシを、この世界から排除しようとしたのは、紛れもなく貴様らなのだよ!」

ボブ「ハブられた腹いせにしちやあやりすぎだぜ!」

ジャック「首を洗って待ってやがれ!必ず、償いをさせてやるツ!!」

ランドウ『出来るかな?貴様らに。この真ゲッタードラゴンを!!』

リンダ「何…?」

邪真ドラゴンの背から膨大なゲッター線が天に向かって放たれる。

サム「何をしたんだ?今…」

晶葉『ゲッター線を放出したんだ。それも高濃度のゲッター線をだ』

ボブ「高濃度のゲッター線?」

晶葉『餌を撒いたんだ。ここが餌場だと、仲間に知らせる為に』

莉嘉「餌…?仲間…?」

晶葉『来るぞ、インベーターが!!』

ギヤアツ ギヤアツ ギヤアツ ギヤアツ

虚空の彼方から、彼らは現れる。

サム「れ、レーダーがインベーターの反応で塗り潰される…!?何て数だ!」

シユワルツ「くっ……！質の悪い奴等が手を組んだもんだぜ！」

リンダ「これじゃあ、ここを突破出来ても、エネルギーが保たないわ！」

メリー「それだけじゃないわ……。一体どれだけの数のインベーターが、地球に現れたのか……！」

美波「ここだけじゃない、もしかしたら世界中に！」

ランドウ『ふっふっふっ……。楽しみに待つておるぞ？貴様らが私の元に辿り着くのをな……—』

スウ……

ボブ「アイツ！言いたいこと言つて消えやがった！」

メリー「ランドウの事を気にしてる場合じゃないわ！」

美波「迎撃を……！早くしないと、インベーターに包囲されます！」

ジャック「……チツ！」

メリー「兄さん!？」

テキサスソードを大上段に構え、テキサスマックが躍り出る。

ジャック「ハアアアアアアッ!!」

インベーターを両断。

ジャック「ここはミー達が引き受ける。ゲッター軍団、お前達はランドウのところへ

行けッ!!」

卯月「えっ!」

かな子「ダメですよ!ここはみんなで力を合わせないと…!」

鉄甲鬼「そうだ。戦力の分散は、かえってリスクを引き上げる」

ボブ「けど、このまま戦っても共倒れだぜ!」

リンダ「そうね。頭を叩けば戦いは終わる、そんな単純な話じゃないかもしれないけど、真ドラゴンを取り戻せば、まだ生き残る方法はあるかもしれないでしょう?」

ロボ・ストーン、キングダムもインベーターに向かつていく。

茜「皆さん…!」

シユワルツ「勘違いすんじゃないぞ。俺達は尻拭いをしろって言うてんだ。あの真ドラゴンは、テメエらの不始末が原因だろうが」

晶葉『…確かに、その通りだ』

卯月「晶葉ちゃん!」

晶葉『ここで力尽きてしまつては、どのみち未来は拓かれん。ならば1%でも可能性の高い方に賭ける。何時だつてそうしてきたじゃないか』

卯月「それは、そうかもしれませぬ。けど…!」

ジャック「一点突破だ!リーナなら真っ直ぐ向かうだろうぜ!ここで尻込みして、勢

いを殺すな!!」

卯月「ジャックさん……皆さん……!」

晶葉『ゲッター各機、帰還だ。クジラの残る全てのエネルギーを使ったオーバーブーストで、北極圏から離脱する』

美波「……了解」

アーニヤ「Dia……アカネ、行きましょう」

茜「……分かりました……!想いを、無駄にはいけませんね」

美穂「……」

李衣菜「おっ!」

美穂「えっ、李衣菜ちゃん?それに、凜ちゃんと加蓮ちゃんも!」

ニオン「あいつら、何をしているんだ?」

芳乃「おそらくー、ねおゲッターが壊れたのでー脱出してきたものとー」

美波「だからって生身で……!インベーターも迫ってるのに!早く救助しなきゃ!」

莉嘉「だったら、アタシがいくよ!」

卯月「私も!まだ2号機のシートが空いてます!」

奈緒「ははっ、こんな状態でもしぶとい奴だな。相変わらず」

シユワルツ「……奈緒、お前も行け」



奈緒「はっ?何言つて…」

シユワルツ「テキサスに置いてある1人乗りのステルバーの修理も終わってる。もうお前に乗ってもらう必要はねえ」

奈緒「け、けど…アタシは…!」

シユワルツ「何時まで甘えるつもりだ?…テメエはもう、自分の足で立てるだろうが」

奈緒「シユワルツ…」

美波「奈緒ちゃん」

奈緒「ブラックゲッター…」

美波「話は聞かせてもらいました。クジラに戻るならブラックゲッターに乗ってください」

ブラックゲッターが、ステルバーのコックピットブロック付近に手を伸ばす。

奈緒「……………」

シユワルツ「さっさといきやがれ!そっちには、テメエの力が必要な奴等がいるんだろうが」

奈緒「……………」

シユワルツ「俺のようにはなるなよ。後悔はするな」

奈緒「…うんっ。ありがとな、シユワルツ」

シユワルツ「へっ、お互い様だ」

奈緒「え？」

シユワルツ「さっさと行けっつてんだ！」

奈緒「わっ！」

美波「危ない！」

サブ・シートの脱出装置を強制起動させ、奈緒をステルバーから排出。落下寸前のごころを、ブラックゲッターが辛うじて受け止めた。

奈緒「痛たた……相変わらず強引なんだよ……」

シユワルツ「フンッ！」

奈緒「……ふっ」

美波「奈緒ちゃん！早くコックピットの方に！」

奈緒「わ、分かった……！」

美穂「卯月ちゃん達は……」

卯月「こつちも、李衣菜ちゃん達の救助終わりました！」

李衣菜「危ない危ない……。もうちよつとで凍え死ぬとこだったよ……」

晶葉『よし、クジラ機関始動！5分後、オーバーブーストを掛ける！目標はハワイ沖

の火山島！ランドウとの戦いに決着を着けるぞ!!』

「了解っ!!」

—— 移動中。

古田 「ハンガーに入った機体から整備開始してくださいッス!真ゲッターとプロト・ゲッターは大至急!クジラはオーバースト中だから、時間はそんなないッスよ!!」

加蓮 「古田さん、張り切ってるなあ」

李衣菜 「うん…。けど、大将は何処に行つたんだろう?」

晶葉 「その話は後だ」

李衣菜 「晶葉!」

晶葉 「すまないな、あんな戦いの後で。本当は労いの一つでもしてやりたいところなんだが」

李衣菜 「それこそ気にしないでよ!遂に本命が出てきたんだ!」

加蓮 「おまけに、探すつもりだったゲッターGまで引つ張り出してきたんでしょ。一石二鳥じゃない?」

晶葉 「ああ。ゲッターG、真ドラゴンは何としても取り戻さなくてはいけない」

李衣菜 「ジャック達だって命懸けで私達に託してくれたんだ。ここで立ち止まってなんていられないよ!」

凜 「…で、状況は?」

晶葉「現在、クジラの全エネルギーを注いでオーバーブーストを行い、何とかインベダーの追撃を躲している」

加蓮「インベダーに光線みたいな遠隔攻撃手段が無くて助かったところ？」

李衣菜「けど、それでクジラのエネルギーは保つの？」

晶葉「保たんだろうな」

李衣菜「え!? それじゃあ……」

晶葉「安心しろ。お前達を火山島までは送り届けてやるさ。クジラは進路をこのままに、火山島付近の海域に着水する手筈になっている」

李衣菜「なんだ……そう言うことか……」

加蓮「けどそれじゃ、クジラが狙い撃ちにされたりしない？」

晶葉「その危険性はある。いざとなれば、乗組員は全員脱出すればいいだけさ」

加蓮「それでいいの？」

晶葉「命あつての物種だしな。何、全て勝てば、問題ない」

李衣菜「晶葉の言う通り! ランドウをやっつけて日本に帰る! それで万事上手くいくって!」

加蓮「お気楽だねえ、ウチのリーダーは」

晶葉「その為に万全を期しておく必要がある。凜、お前には真ゲッターに搭乗しても

らうぞ。異論はないな?」

凜 「うん。あんなデカぶつゲッターが相手だ。手段は選んでいられないよね」

李衣菜 「えっ?それじゃあ私達は…」

加蓮 「そもそも、私達には乗るゲッターも無いわけじゃん?」

李衣菜 「え?でも、さつき卯月がネオゲッターを回収してたよ?」

加蓮 「あんなの、もう動かないでしょ。それでも回収させたのは、晶葉なりに考えがあつてだと思っけど…?」

晶葉 「ああ、それについて何だが…」

茜 「晶葉さ〜んつ!!お待たせしましたあ!!」

晶葉 「来たか、飛焰チーム」

李衣菜 「飛焰チーム?茜!」

凜 「先に手当てしてたんではよ?応急処置で大丈夫なの?」

茜 「はいっ!掠り傷ですから!」

加蓮 「包帯は重傷に見えるけどね」

美穂 「ふふっ、でもホントに大丈夫だよ?」

アーニヤ 「美穂以外は、ですね」

美穂 「あはは…」

李衣菜「それで、晶葉？ 茜達まで揃って話して？」

晶葉「ああ、先の戦闘でゲッター飛焰も損傷し、ゲッター炉心を失っている」

凜「……」

加蓮「それじゃあ、今のゲッター飛焰は、本来の半分くらいの性能しか出せないの？」

晶葉「まあな。新たなゲッター炉心を用意するには、それなりの設備と時間が掛かる。

そこで、現状の設備で、最大限とまではいかないがゲッター飛焰の性能を元通りに近づける為……」

李衣菜「まさか……ネオゲッターのプラズマ炉を組み込むとか……？」

晶葉「……その通りだ」

李衣菜「やっぱり！」

晶葉「幸い、ネオゲッターのプラズマ炉の損傷は軽微と言っている。それに同じプラズマ炉なら、ゲッター炉心よりも同期させやすい」

美穂「2基のプラズマ炉で、ゲッター飛焰の性能を補うってことだね？」

茜「プラズマツインドライブですね！」

晶葉「この戦力でゲッター飛焰の性能低下は避けたい。少しでも希望を残す為だ。構わないか？」

茜「私達はもちろん構いません！ゲッターエネルギーでもプラズマでも、使いこな

して見せますよ!!」

アーニヤ「アー……アーニヤ達はともかく、リーナは……」

加蓮「別に構わないよね?もう、ネオゲッターの戦いは終わったんだ」

李衣菜「うん……」

晶葉「よし。直ぐに作業に取り掛かる。飛焰チームは待機しててくれ」

茜「了解しました!行きましよう、アーニヤちゃん、美穂ちゃん!かな子さんが保存してたお菓子を輸出してくれている筈です!!」 ダツ

美穂「あ、待つてよ、茜ちゃん!」

アーニヤ「ふふつ、お菓子、楽しみ……ですね」

凜「私も、卯月達と合流するよ」

加蓮「うん。今までありがとね」

凜「大したことはしてないけど」

加蓮「これから頼りにさせてもらうから」

凜「そっか。それじゃ……」

加蓮「うん」

タツタツタツ——

李衣菜「はあ……結局、私達はお留守番か」

みく「なら、みく達のゲッターを使う？」

李衣菜「え？みくちゃん…」

みく「みく達は、さっきの戦いで先に帰還してたから、ゲッターの整備は済んでる。けど、みくはリーナちゃんや美穂ちゃんみたいに頑丈じゃないから…」

李衣菜「……」

みく「戦えるなら、みくのゲッターを使つて」

李衣菜「…けど」

加蓮「アタシ達がゲッターに乗るのはいいとして、2号機はどうするの？そのまま瑞樹さんが乗る？」

「あたしがいるよ」

李衣菜「……あ」

加蓮「…奈緒」

奈緒「元は、チームだろ？いきなり組んだこともない奴と合わせるよりは安全なんじゃないか？」

みく「決まり、にや？」

李衣菜「……うんっ！奈緒が付いてくれれば心強いよ！」

奈緒「…お、おう！」



加蓮 「はぁ……リーダーが言うんなら仕方ないか」

李衣菜 「うん……!大丈夫、きつと大丈夫……」

加蓮 「……?」

李衣菜 「それじゃあ、ネオゲッターチーム、再結成だ!」

奈緒 「ネオゲッターは壊れたんだろ?」

李衣菜 「え?あ……そしたら……」

加蓮 「どうでもいいんじゃない?名前なんてさ」

李衣菜 「ははっ、そうだね!それじゃあ……!」

奈緒 「おうっ!」

李衣菜 「みく達の思いも乗せて、打倒ランドウだツ!!」

—— 1時間後。

通信士 「クジラ、エネルギー残量残り僅か!オーバーブースト、維持出来ません!失速します!!」

橘 「晶葉くんの予定通りか……。よし、クジラの姿勢を安定させろ!」

操舵士 「了解!クジラ、水平を維持。海水面に接触します!」

橘 「総員、対シヨック用意。衝撃に備えよ!」

盛大な水飛沫を上げ、クジラが海面に着水する。

橘 「くっ……！」

通信士 「艦内の被害状況チェックします」

橘 「そんなものは後だ！目標は眼前、直ぐに出撃準備に掛かれ！」

通信士 「り、了解っ！出撃レーン、解放します！」

橘 「ゲッター軍団、出撃せよ!!」

凜 （真ゲッターロボ……。この力、ホントに必要な時が来るなんてね）

卯月 「あのく、凜ちゃん？」

凜 「！ごめん、卯月」

卯月 「大丈夫ですか？何か、ぼうっとしてたみたいですけど？」

凜 「3人で合わせるのは久しぶりだから緊張してるのかも。大したことじゃない

よ」

かな子 「ホントですか？凜ちゃんのコックピットにも、マフィンを入れておいたのでどうぞ？緊張してる時は、甘いスイーツでリラックスですよ！」

凜 「ありがと、かな子。いざとなったら頼らせてもらおうよ。かな子もあんまり気を

抜いて、私をサンドイッチにしないでよ」

かな子 「そ、そんな事しませんよ………多分」

凜 「そこは言い切ってほしいかな……」

卯月「も、もう行きますよ!ゲッターチーム、発進です!」

晶葉『茜。ゲッター飛焰のプラズマ炉の換装と同期は完了してる。感覚はどうだ?』

茜「う〜ん…。ゲットマシンの状態だと、よく分からないですね!」

晶葉『そ、そうか…』

茜「けど、あまり変わりはないと思います!何時も通り、行けますよ!!」

晶葉『だが、ゲッター線と違ってエネルギーは無尽蔵と言うわけではない。何時も通りの感覚でやると、直ぐにガス欠を起こすぞ』

美穂「そこは私達が何とかするから」

アーニャ「私達も、やることは一緒、です。茜を支える…。そして、勝って帰ります!」

美穂「だから、晶葉ちゃんも心配しないで見守ってて」

晶葉『確かに。お前達に任せておけば安心そうだ!』

茜「心配事は何もなくなっただころで!チーム飛焰、出撃しますよお!!」

芳乃「……………」

鉄甲鬼「芳乃、お前にならこの戦いの行く末、分かっているのではないか?」

芳乃「以前にも申し上げた通りです。わたくしに見える未来などは、視界を曇らせてしまう虚構に過ぎず」

鉄甲鬼「だが、助言することも出来たのではないか？この状況を打破する為に。最善の手法を」

芳乃「流れ過ぎ行く時の中で、最善を選ぶと言うことは、必ずしもより良き未来を見出だすとは限りませぬ故。今を生きる私達に出来ることは、全力で抗う事です」

鉄甲鬼「ふっ、そうかもしれないな」

ニオン「何を訳の分からない話をしている？ダイノゲッター、出るぞ！」

莉嘉「よおし……！アタシだって！」

美波「莉嘉ちゃん、気持ち強く持つのは大切だけど、心を落ち着けるのも大切なことよ」

莉嘉「美波……」

美波「いい？戦いには、熱いハートとクールな頭脳、なんて……」

莉嘉「熱いハートとクールな頭脳……うんっ、分かった☆」

美波（ホントに分かったのかな……？）

晶葉『ブラックゲッター、ゲッターD2、準備は出来たか？』

美波「は、はいっ！」

莉嘉「何時でも行けるよ！早く出して！」

美波「り、莉嘉ちゃん!この戦いは、私も上手くサポート出来ないと思うから…!」  
莉嘉「うん…!アタシだって、足を引つ張るために出撃する訳じゃない!アタシに出来る、精一杯をやり遂げるために出撃するんだ!」

美波「ブラックゲッター!」

莉嘉「ゲッターD2!」

美波・莉嘉「出撃(します)っ!!」

李衣菜「初代ゲッターロボ、かあ」

奈緒「卯月達も乗ったんだよな。ゲッターGもネオゲッターも、全部のゲッターの、始まりのゲッターロボ…」

加蓮「ま、改修や改装を重ねたお陰で、卯月達が乗ってた頃の面影はほとんどないけどね」

瑞樹『それでも、コックピット回りは当時のままよ!』

奈緒「瑞樹さん、菜々さんも!」

菜々『自動化が進んで簡略化されたネオゲッターのコックピットとは違います!一部の制御は複雑になってますから、気を付けてください!』

加蓮「確かに、ネオゲッターに比べてレバーやらボタンが多いけど…」

李衣菜「こつちがメインコントロールの操縦桿で、この握るところが拳銃みたいになっ

たのがゲッターマシンガン用の操縦桿……うん、何とかなるよ！」

加蓮「ホントに大丈夫？」

李衣菜「ま、為せばなる！成せばならぬ何事も、つてね？」

加蓮「不安だなあ」

奈緒「……」

李衣菜「奈緒？久し振りのゲッターで緊張してる？」

奈緒「いや……えーつと、うん。あのさ……！」

李衣菜「うん？」

奈緒「その、こんな時にあれだけどき……」

加蓮「何？時間が無いんだから、長話は勘弁してよね」

奈緒「茶化すなよ……でも、そうだな……。ごめんっ」

加蓮「え？」

李衣菜「は？」

奈緒「あたし、ずっと怖かったんだ……。自分が死ぬのもそうだけど、それ以上に、あたしのせいで加蓮や李衣菜に何かあつたらと思うと、怖かった」

加蓮「……」

奈緒「だから逃げたんだ。こんなあたしが、また同じゲッターに乗せてくれたなんて、

おこがましい話だよ。だから、ごめん」

加蓮「……」

李衣菜「……」

奈緒「加蓮……?り、李衣菜……」

李衣菜「なあ〜んだ、そんな事!」

奈緒「そんな事って……お前なあ!あたしは、真剣に!」

李衣菜「分かるよ。自分のせいで誰かが傷付くのとて、耐えられない。まして、それで相手が死んじゃったら、ね」

奈緒「李衣菜……?」

加蓮「けど、そこで逃げたって、何にもならない。奈緒はそれを、逃げた先で教えてもらったんでしょ」

奈緒「……うん。シュワルツは、相棒の死を冒読させないために、懸命に戦ってたよ。死んだ相棒にこれ以上罪を重ねさせないために、最後は自分で引き金を弾いたんだ」

李衣菜「……」

奈緒「あたしは、こうなっちゃいけないって思った。仲間の死に後悔して、敵になった仲間に銃を向けるなんて目に遭っちゃダメなんだ」

加蓮「……」

奈緒「仲間が消えてしまわないように。仲間を守るなら、あたししかない、そう思ったんだ」

加蓮「ふうん……？」

奈緒「勝手な願いだつてのは、分かつてるよ。独り善がりだつて言われても、仕方ない。けど、あたしは、2人を失うのが怖いんだ！李衣菜や加蓮達だけじゃない、凜や卯月、みんなだつて！」

奈緒「あたしは仲間が死ぬので後悔したくない！だから、2人の命を背負いたいんだ。頼むっ」

加蓮「……勝手に殺さないでよ」

奈緒「え？」

李衣菜「今の言い方だと、私と加蓮となら、一緒に死んでいいみたいだに聞こえたよ？」

奈緒「い、いや……！そうじゃなくてだな……！」

加蓮「分かつてる、分かつてるつて。結局はアタシ達のところに戻りたいんでしょ？だつたら素直にそう言えればいいじゃない」

李衣菜「加蓮の言う通りだよ。奈緒は奈緒なんだから。責任とか、後悔とかそんなの気にしてると、そのモフモフの髪も無くなるよ？」



加蓮「あ、それは勘弁」

奈緒「お、お前らなあ……!」

加蓮「それじゃ、地球の平和と、奈緒の生え際の為にも行きますか!」

李衣菜「だね!この戦いをちやっちやと終わらせて守ろう!地球の平和と奈緒の生え際を!」

奈緒「勝手にあたしをハゲキャラ扱いするな〜!」

李衣菜「あはっ、そのツツコミ、待ってた!凜が相手だと言葉がキツくて…」

奈緒「あたしはツツコミ担当かあ!?!」

李衣菜「帰ってきたんだって、安心するよ。またよろしく!」

奈緒「…つたかう」

加蓮「ふふっ!」

李衣菜「よおし、心機一転!ネオゲッターチーム(乗ってるのは旧ゲッターだけど…)  
——」

加蓮「…っ」グッ

奈緒(あたしが守るんだ。守ってみせる…!)グッ

李衣菜「発進!!」

ゴオッ——。

凜 「……李衣菜達が来たね」

李衣菜 「ごめーんっ。お待たせ！」

美波 「ううん。けど、大丈夫？ 乗り慣れないゲッターで、いきなり実戦なんて……」

加蓮 「その為のレクチャーは受けたよ」

李衣菜 「何とかやってみるって」

卯月 「頼りにしてます。お願いしますね？」

奈緒 「お、おう……！ 任せろ！」

アーニャ 「……相手も、敵陣を展開してます」

加蓮 「おいそれとは近付けさせてくれないか。敵は……」

美穂 「これ……ゲッタードラゴン!？」

凜 「ランドウが量産してたの？」

晶葉 『いや、そんな雰囲気じゃないな。恐らく、百鬼帝国が造ったものを、回収して使っているんだろう』

かな子 「そんな事までしてゲッターで戦力を固めてくるなんて……」

晶葉 『余程ゲッターの威光に縋りたいらしいな』

ゲッタードラゴン? 『……!!』

茜 「っ……！ 攻撃が来ますよ!!」

前方に布陣したゲッタードラゴンからのゲッタービーム一斉射撃を、ビームの網目を掻い潜るように、それぞれ散開して躲す。

李衣菜「おっつとつとお!？」

奈緒「ゲットマシンの状態で喰らったら一溜まりもないぞ!」

加蓮「なら、とつとと合体しよつか。リーナ、行ける?」

李衣菜「当然!」

卯月「私達も合体です!」

凜「分かった。ゲットマシン各機、合体フォーメーション!」

茜「了解です!」

卯月・茜「チェンジゲッターーツ!!」

加蓮「奈緒?久し振りだからって、とちらないですよ?」

奈緒「分かってる!感覚は体で覚えているさ!」

李衣菜「よし、ゲッターでの初合体だ!ゲッターチェンジツ!!」

——ドクンツ

李衣菜「——!!」

加蓮「ゲッターチェンジ?」

奈緒「それはネオゲッターだろ?合体出来たから良かったけど、間違えんなよな!」

李衣菜「……」

加蓮「リーナ？」

李衣菜「あ……う、うん……！ごめんごめんっ！気を付けるよ……」

奈緒「頼むぞ、ホント」

加蓮「……」

李衣菜（何だったんだろう、今の感じ……。ネオゲッターで合体した時とは違う……）

莉嘉「まずはゲッタードラゴンを蹴散らせばいいんだよね？」

晶葉『ああ。だが、ただのゲッタードラゴンである筈はない。くれぐれも注意してくれ』

莉嘉「よおし！ゲッタートマホークツ!!」

美波「莉嘉ちゃん！」

忠告を半ば無視して、ゲッターD2が突貫。

莉嘉「どりやああっ!!」

上段からゲッタードラゴンを切り裂く。

ゲッタードラゴン? 『……!!』

莉嘉「やった……?!」

ゲッタードラゴン? 『!!』 ウゾ……

莉嘉「いっつ…!?!」

切り裂かれたゲッタードラゴンの装甲の隙間から、黒い触手のようなものが飛び出してゲッターD2を鞭のように打ち、吹き飛ばす。

莉嘉「きやあッ!」

美波「莉嘉ちゃん!」

茜「でえやあああッ!!」

吹き飛ばされたゲッターD2をブラックゲッターがキャッチ。代わりに、上空からプロト・ゲッターがガトリングガンでゲッタードラゴンにトドメを刺す。

茜「あれは、間違いありません!インベーターです!!」

美穂「ゲッタードラゴンが、インベーターに侵食されてる…!」

晶葉『差し詰め、メタルビースト・ドラゴンと言った所か。厄介なことをしてくれる』  
凜「寧ろ、やり易くなったよ」

卯月「えええいッ!!」

真ゲッターが、メタルビースト・ドラゴンの敵陣に切り込む。

卯月「ゲッターアオートマホオオークツ!!」

トマホークを水平に、全身を使って高速回転させ、発生した真空刃を含む巨大な竜巻で、密集したメタルビースト・ドラゴンを纏めて切り刻む。

かな子「相手がゲッターに乗ったインベーターなら、負ける筈ありませんっ！」  
晶葉『そんなものか』 ハハッ…

卯月「兎に角、邪真ドラゴンに辿り着かなきゃいけないんです！余計な力は使っていないらけません！」

李衣菜「じゃ、雑魚の相手はお任せ、つてね！」

卯月「李衣菜ちゃん！」

シュバッ

真ゲッターの頭上を飛び越し、ゲッターが躍り出る。

李衣菜「行つくぜえっ！」

メタルビースト・ドラゴンが待ち構える。

李衣菜「ゲッターキック!!」

加速の勢いを殺さず、身を捻った水平蹴り。メタルビースト・ドラゴンを吹き飛ばす。

李衣菜「おりやあアッ!!」

蹴り倒したドラゴンの足をすかさず掴んでジャイアント・スイング。豪快な振り回しで周囲のドラゴンを吹き飛ばし、手掴みしていたドラゴンも最終的にに投げ飛ばし、他のドラゴンにぶち当ててまとめて破壊。

李衣菜「ゲッターレザー！」

腕のレザーを展開。人間の首筋の頸動脈を掻き切るように、正確にメタルビースト・ドラゴンの首を刈り取っていく。

奈緒「うう…っ！無茶苦茶だな…：：：飛ばしすぎじゃないか？」

加蓮「調子いいじゃん、リーナ？」

李衣菜「うんっ！よく分かんないけど、このゲッターの使い方、ゲッター自身が教えてくれるみたい！」

奈緒「どういう事だ？」

李衣菜「ゲッターを、手足みたいに動かせる！」

ドラゴンを殴り飛ばし、破壊する。

李衣菜「さあ、卯月！真ゲッターは真ドラゴンに向かって！」

卯月「え…：：：はいっ！」

ウイングを拡げ、真ゲッターは飛翔。

李衣菜「うん…：：：よしっ！」

奈緒「卯月達を行かせて良かったのか？」

李衣菜「そりゃ、どんだけこのゲッターで粘ったって、邪真ドラゴンなんて化け物、倒せるのは真ゲッターだけだ！」

加蓮「なら、アタシ達にはアタシ達の、出来る仕事をしよ？」

李衣菜「やあああああッ!!」

向かってくるドラゴンを、ゲッターパンチで応戦。

李衣菜「…ゲッターウイングの応用法だ!」

言つて、拵げたゲッターウイングをドラゴン目掛けて飛ばし、頭に巻き付ける。

李衣菜「ほら!」

それを一気に引き、相手の体勢を崩すと同時に手前に引き寄せ、

李衣菜「ゲッタートマホークッ!」

抜き打ったトマホークで一閃。メタルビースト・ドラゴンを上体と下体に断ち切つた。

李衣菜「…へへっ」

加蓮「調子に乗らない」

鉄甲鬼「ゲッターライガー、ポセイドンの軍団も来るぞ!」

李衣菜「ゲッター総攻撃って訳…! なかなかロクな展開じゃん!」グッ

卯月「スプリットビームッ!!」

メタルビースト・ポセイドン『?!?!』

立ち塞がったポセイドンを腕部からのビーム攻撃で撃破。

かな子「何か複雑です…」



凜 「今は敵だからね。割り切らないと」

卯月 「見えました!真ドラゴンです!」

巨大な影が、真ゲッターコックピットのモニターを覆う。

かな子 「実際に見ると、映像より大きいですね…!」

凜 「これが、私達のゲッターGなんてね」

卯月 (未央ちゃん…!)

ランドウ 「来るか、真ゲッターロボ!」

かな子 「こんなおっきいの、どうやって攻めるんです?ストナーサンシャインを使い

ますか?」

凜 「……いや、ゲッターエネルギーによる攻撃は逆効果かも」

かな子 「だったらどうやって?」

卯月 「とにかく、攻撃してみるしかありません!」

真ゲッターがトマホークを構え直す。

卯月 「やあああアツ!!」

ガギンツ

卯月 「っ!」

ランドウ 「ふはははっ!無駄な事だ!」

大上段から振り下ろしたトマホークの一撃は、真ドラゴンの装甲表面で火花を散らして終わる。

かな子「か、堅い……！」

卯月「この……っ！」

同じ攻撃箇所を何度か殴り、蹴りを入れる。

ランドウ「痒いわっ！」

卯月「きやあっ！」

真ドラゴンの薙ぎ払い。真ゲッター1は地面に叩き付けられる。

卯月「つつう……！」

メタルビースト・ライガー『!!』

美波「ゲッターマシンガン！」

莉嘉「ゲッターライフルツ!!」

倒れ伏した真ゲッター1に殺到したライガーを、2体のゲッターの射撃兵装が撃ち抜いていく。

美波「大丈夫？卯月ちゃん！」

卯月「美波ちゃん、莉嘉ちゃん。まだまだ行けます！」

ランドウ「はははははっ!!無駄だ無駄!貴様らのゲッターでは所詮、焼け石に水なの

だア!」

ニオン「チツ…!言いたいように言ってくれ!」

鉄甲鬼「だが、このまま為す術がないままでは!」

李衣菜「そんなの誰が決めたの!私達はまだ誰一人倒れてない!倒れない限り、やり様はある筈だよ!」

ランドウ「圧倒的な力を前に絶望せん…。ならば、その身で想い知るが良いわ!!」

卯月「!?」

真ドラゴンの周囲の空間が歪む。

奈緒「な、何をする気だ…!?!」

アーニヤ「真ドラゴンの周りに…:ゲッタートマホークが!」

美波「何もないとところから、トマホークを出現させたの!?!」

晶葉『違う!この島一帯の空間は、高濃度ゲッター線によって真ドラゴンが支配している!そのゲッター線を使って、トマホークを生み出したんだ!』

ランドウ「貴様らも得意だろう?トマホークブルーメランと言う奴だ!」

奈緒「トマホークブルーメランって…:数が出鱈目じゃないぞ…!」

一帯の青空を埋め尽くすほどのトマホークが展開する。

ランドウ「行けいッ!!」

加蓮「来る…っ！」

豪雨の様に降り注ぐ無数のトマホークが、木々を薙ぎ倒し、地面を抉り、空間を覆っていく。

奈緒「ど、どうすんだこんなの…！避けようないじゃないか！」

李衣菜「避けようがないなら…！」

両手にゲッターマシンガンを展開。

李衣菜「迎撃つまで!!」

ゲッターを襲う、トマホークの雨に対し、マシンガンの弾丸を撃ち放った。

卯月「やあああああッ!!」

茜「美波さん、莉嘉ちゃん、ニオンさんも！飛焰の後ろから離れないで下さいね！」

美波「え、ええ…！」

莉嘉「きやあッ!!」

ニオン「くっ…！仕方あるまい！」

真ゲッターとプロト・ゲッターは、それぞれの長柄のトマホークを回転させ、攻撃を弾く。

加蓮「この雨、何時まで続くの…？」

李衣菜「もう…少し！」

カチツ カチツ

マシングンの弾倉が尽きると、雨が止むのは同時。

李衣菜「はあ……はあ……はあ……」

奈緒「な、何とかなった……のか……?」

ランドウ「どうだ?少しは思い知ったか?越えられぬ力の差を!」

袂れ隆起し、荒れ果てた大地の上に、ボロボロになったゲッターが立つ。

ランドウ「…致命傷への攻撃は避けたか」

李衣菜「2人も命を預かる身なんでね」

奈緒「お前は大丈夫なのか?李衣菜!」

李衣菜「大丈夫、ちよつと血が出ただけ。何時もの事だから!」

茜「しかし……敵も味方も、お構いなしですか!」

鉄屑となつて足元に散らばるドラゴンの頭部を蹴り飛ばす。

ランドウ「そんなもの、あとで幾らでも造り出せるからな」

美穂「どうして……!これだけの力、もっと多くの人を救うことだって出来るのに!」

ランドウ「救つて何になる?未来に展望もなく、ただ漫然と命を食い散らかす愚かな

人間なぞ、滅んで然るべきだろう?」

凜「あんたも、その人間の一人だろうに」

ランドウ「一緒にするでない！ワシは、この地球と言う星が生き残る、最善を考えておる!!」

美波「その為に、人類は滅んでもいいと？」

ランドウ「資格はないのだ。人間共に地球を守る資格は！やがて宇宙全体に仇なす人間に、その資格は！」

茜「何を訳の分からないことを！言っているんです!!」

ランドウ「必要ないのだ、この宇宙に！人間も、ゲッターも！故にワシが、この地球を正しく作り直す！」

加蓮「その為に人類を一度滅ぼすって？極論も良いところだね。一人の勝手な理屈で大勢の夢と未来が、奪われていい筈がない！」

ランドウ「その為に宇宙を滅ぼすか！」

李衣菜「秤に掛けるのが間違ってるんだ！宇宙の存亡とたくさんの人達の夢！そんなもの、推し量れるわけじゃないじゃん！」

ランドウ「そうだとも！だからこそ、情に絆され同族以外は切り捨てる、人間共は滅ばねばならぬのだ!!」

ニオン「またトマホークブーメランを使うつもりか！」

卯月「そうはさせませんっ！」

ランドウ「むっ!？」

卯月「ゲッタービーム!!」

真ドラゴンの周辺、歪んだ空間にゲッタービームを放ち、出現前のトマホークを薙ぎ払う。

凜「予備動作は分かり易いんだ。そう何度も撃たせたりしないよ」

奈緒「だからって、空間ごと撃ち抜くかあ？ホント規格外が過ぎるよ」

芳乃「感心する暇も惜しまねばー。今こそ攻撃の好機、でしてー」

莉嘉「そうだ！味方も纏めて吹き飛ばした今なら！」

李衣菜「真ドラゴンを守るものは何もない！」

ニオン「ゲッタートマホオオークツ!!」

各ゲッターが、それぞれのトマホークを構え、突撃。

茜「うりゃっ！」

李衣菜「たあっ!!」

莉嘉「えいっ！」

美波「はっ！」

ニオン「フンツ！」

卯月「てえええいッ!!」

大木を薙ぎ倒すように、同じ箇所に連続してトマホークを打ち付けていく。ランドウ「ふはははははッ！何だ？それで攻撃のつもりか？」

茜「くっ！トマホークでは、ダメーッを与えられている気がしません！」

美穂「それなら私が！茜ちゃん！」

加蓮「こつちも攻め方を変えてみよ。ミサイルとパワーで！」

李衣菜「分かったよ！」

李衣菜・茜「オーブンゲット!!」

美穂・加蓮「チェンジゲッター3イッ！」

美穂「いくよ、加蓮ちゃん！」

加蓮「ミサイルの数じゃ劣るけど、合わせるよ！」

美穂「ミサイルレイン!!」

加蓮「ゲッターミサイル、連射！」

プロト・ゲッター3の各発射サイロからミサイルを一斉に放ち、ゲッター3は肩部からミサイルを連射。真ドラゴンは黒煙に包まれる。

美穂「どう？」

黒煙が晴れ、姿を覗かせた真ドラゴンは、

加蓮「無傷…。冗談でしょ」



美穂「っ……!アーニヤちゃん、茜ちゃん。ゲッター飛焰のプラズマエネルギーを、フルパワーで!」

アーニヤ「了解!」

茜「託しますよ、美穂ちゃん!」

美穂「ゲッターエネルギーなしで、どれだけ出来るか分かんないけど、やらないよりなら!」

腕部にエネルギーを集束させて、突撃。

美穂「天地!轟壊ツ!!」

天地轟壊。渾身の拳を、真ドラゴン目掛けて放つ。

ランドウ「ぬお……っ!」

茜「真ドラゴンが、動きました!」

美穂「揺るがせただけ……。やっぱり、プラズマエネルギーだけじゃ……!」

ランドウ「今のは流石に驚いたぞ?」

美穂「!」

プロト・ゲッター3の頭上から、真ドラゴンの腕が押し潰しに掛かる。

美穂「くっ……!うう……っ」

ランドウ「そのパワーでどの程度持ち応えられるかな?」

美穂 「うあ……! ああっ!」

真ドラゴンの腕を抑えるプロト・ゲッター3の両腕に亀裂が奔る。

凜 「ドリル、ハリケエーンッ!!」

ランドウ 「ぐっ!?!」

真横から飛来した真ゲッター2のドリルが、真ドラゴンの腕部を大きく抉る。

凜 「何とか、ドリルの一点突破なら傷を付けられるみたいだね」

ランドウ 「おのれえ……!」

凜 「今だよ、加蓮!」

ランドウ 「?!」

加蓮 「ゲッターパンチ!」

真ゲッター2の攻撃で怯んだ真ドラゴンの腕部を、ゲッター3の拳による横撃で浮かせらる。

美穂 「オープンゲット!」

その僅かな隙を突いて、ゲッターを分離させ脱出。

茜 「ありがとうございます! 凜さん、加蓮さん!」

加蓮 「いいっていいって」

ランドウ 「ふんっ……これしきの、事!」

真ゲッター2に傷付けられた部分が瞬時に回復。

かな子「何て回復力……!」

卯月「これじゃあ、幾ら攻撃しても……!」

美波「それなら!」

アーニヤ「美波イ!」

ブラックゲッターが肉薄。

美波「一か八か、攻撃してみるだけ!ゲッタービーム!!」

至近距離から、ゲッタービームを放つ。

美波「っ!?何……!」

真ドラゴンに直撃したビームの様相が変わる。

凜「どうしたの?美波……」

美波「え、エネルギーが……吸い取られる!」

莉嘉「えっ!」

美波「きやあっ!!」

エネルギーを根こそぎ奪われ、力を失ったブラックゲッターは海中に没する。

アーニヤ「ん美波イツ!!」

ランドウ「ふはははははっ!愚か者共め!ゲッター線を支配する真ドラゴンに、ゲッ

ター線による攻撃が効くと思うか！」

かな子「ここ、これじゃあ……！本当に打つ手なしじゃないですか！」

卯月「一体どうすれば……」

（——しまむー！）

卯月「！ 今の声……」

凜「どうかしたの、卯月？」

卯月「凜ちゃんにも聞こえませんか？」

凜「聞こえるって……」

（——しぶりん！）

凜「！ これって……」

卯月「未央ちゃんの声です！」

かな子「未央ちゃん!? そんな声、私には何も……」

凜「いや、確かに聞こえた……。これは、あの時と同じ……」

卯月「あれが私達の真ドラゴンだとすれば、あの中にまだ未央ちゃんはいらるんですよ

！」

凜「未央が、ゲッターを通じて私達に呼び掛けてきた……?」

（——お願い、力を貸して!）

卯月「えっ」

凜「え？」

邪真ドラゴンの口から放たれた触手のような針が、真ゲッター2の2号機と1号機の  
コックピット部に直撃する。

凜「ぐあっ!」

卯月「きやあっ!!」

かな子「卯月ちゃん、凜ちゃん!」

「……………」

かな子「凜ちゃん!?卯月ちゃん!!」

ランドウ「何だ…?今の攻撃は…」

李衣菜「かな子、どうしたの？」

かな子「そ、それが、いないんです」

奈緒「いない？」

かな子「はい!卯月ちゃんと凜ちゃんが、コックピットにいないんです!」

加蓮「ウソっ!?!」

かな子「さっきの、真ドラゴンの攻撃を受けた時から、姿がなくなってたんです。ま

さか……！」

奈緒「バカ！そんなことある筈ないだろ！晶葉！そつちからなら、卯月達のコックピットをモニター出来るだろ。どうなってるんだ？」

晶葉『ああ、こちらでもモニターしていた。しかし、攻撃の瞬間は映像も乱れて、何が起こったか……！』

李衣菜「卯月……一体何処に……」

奈緒「はあ!?そんな事が、あり得るのか?」

ランドウ「はははっ、頼みの真ゲッターも、まともに動かんようだな?」

かな子「きやあっ!」

邪真ドラゴンが攻撃を開始する。

李衣菜「ともかく、パイロットが2人欠けたゲッターで、ここに留まるのは危ないよ。一回下がろう」

かな子「で、でも……」

晶葉『李衣菜の言う通りだ。全機帰還してくれ』

ニオン「何だ?!」

アーニヤ「カナコや、リーナはともかく……アーニヤ、達も?」

晶葉『そうだ。今のまま攻撃を続けても意味はないだろう。体勢を立て直す必要があ

る。だから一度下がるんだ』

美穂「そう言っても、邪真ドラゴンが…」

ランドウ「そうだ! 忌まわしき眷族共よ! 何処へも逃がさぬ…うっ!!」

茜「何です!」

突如、邪真ドラゴンが苦しみ出すように空を仰ぐ。

ランドウ「何事だ…! 何が起こっている? コーウエン、ステインガー!」

ステインガー「わ、分からない…!」

ランドウ「分からないだと…?」

コーウエン「真ドラゴン、制御不能です」

ランドウ「制御不能、だと…?! 真ドラゴンのコントロールは、確かに手中に納めたのではなかったのか!」

コーウエン「確かに、真ドラゴンの全ての力は制御下に起きました。今はただ、不測の事態が起こったとしか」

ランドウ「そんな事で納得できるか!」

ステインガー「ボク達も全力で原因を調べているところさ。そうだよ、コーウエン君?」

コーウエン「そうだよ、ステインガー君」

ランドウ「おのれえ……！ぐうおおおッ！！」

天を仰いだ姿勢から一転、巨大な両腕を抱え込み、内側に収縮していき、やがてマシンランドにも似た繭を形作つた。

加蓮「何だったの？」

晶葉『さあな。しかし、連中にとつても不測の事態だったことは確かなようだ』

鉄甲鬼「取り敢えず攻撃は止んだ、か。体勢を立て直すなら、確かに今だな」

晶葉『ああ。皆、急いでくれ。時間に猶予があると言うわけでもないだろう』

李衣菜「……うん、分かった」

加蓮「ま、このまま戦闘続けてても無駄っぽいし。浮き足立っても仕方ないか」

莉嘉「待つて、アタシは美波を救助してくるよ」

アーニヤ「あ……リカ、お願いします」

莉嘉「うん☆任せて！」

李衣菜「………」

李衣菜（卯月、凜……。私達は……—）

つづく



## 第34話『掴み取れ!私達の未来!!』

くくく クジラ 第1艦橋 くくく

茜 「晶葉ちや〜んっ!!」

晶葉 「……騒々しいな」

美穂 「じよ、状況は……! 一体何が……卯月ちゃん達は!」

晶葉 「落ち着け。正直な所、こちらでも見据えかねている」

アーニヤ 「…と、言うとは…?」

加蓮 「全部が想定外、でしょ?」

晶葉 「悔しいが、その通りだ」

加蓮 「だけど、ゲッターに関わってきて、何時もそうだったじゃん」

晶葉 「今回は特に、群を抜いている」

奈緒 「分かりやすくで良いんだよ。真ドラゴンはどうなった? 卯月達はどうした?」

晶葉 「……。全て推測だが、卯月と凜は、恐らく真ドラゴンの中……」

かな子 「真ドラゴンの!」

晶葉 「コックピットから外へ弾き出された形跡はないからな。真ドラゴンによる触手攻撃、あの時に内部へと取り込まれた」

美波 「けど、どうして？ どうして真ドラゴンが、卯月ちゃんや凜ちゃんを取り込むなんて…」

晶葉 「本田未央」

茜 「…！」

晶葉 「真ドラゴンの中には未央がいる。ランドウの支配から逃れるため、未央が卯月や凜の協力を必要したのかも知れない」

茜 「未央ちゃんが…ですか!？」

晶葉 「私の推測が当たっているとすれば、な。3人の力を合わせて、ランドウの支配に抗っているんだろう」

美穂 「それで、真ドラゴンも活動を停止したの？」

晶葉 「現状、真ドラゴンに動きらしい動きは見受けられない。マシンランドにも似ている、繭のような状態をキープし静止している」

鉄甲鬼 「しかし、それで事態が解決したわけでもあるまい？」

晶葉 「だろうさ。実際のところがどうなっているかも分からない上、相手はランドウに加え、ステインガー、コーウエン博士…。ゲッター線の研究に於いては、私よりも先

を行っている。体勢を立て直すにせよ、我々に残された時間は少ない」

ニオン「相手が動き出す前に仕留める。それだけだ」

晶葉「……ああ、まあな」

アーニヤ「作戦……何か、ありますか?」

晶葉「作戦、と呼ぶほど立派なものじゃないがな」

李衣菜「さっきの戦闘もそんな感じだったじゃん?」

奈緒「何でもいいよ。とにかく聞かせてくれ!」

加蓮「ここまで来たんだ。ランドウに一泡吹かせるためなら、何だって協力するよ」

晶葉「そうか……。なら、やることは簡単だ。真ドラゴンに突入し、奴の炉心を破壊する」

美穂「ええ!?!」

晶葉「驚くものでもあるまい?何時もの事だろう」

美穂「それは、そうだけ……」

美波「真ドラゴンに突入ってだけでも、一筋縄じゃないと思うけど……?並大抵の攻撃じゃ、傷一つ付かなかったわけだし……」

晶葉「真ゲッターロボ。真ゲッター2のドリルアームなら、その装甲を貫くことも可能だ」

かな子「真ゲッターで、突入作戦……」

晶葉「そうだ。真ゲッター単機による先行で、真ドラゴンを制する」

美波「真ゲッター機だけで……？」

晶葉「当然、ランドウとてこの状況を静観しているわけではないだろうからな」

美波「こちらの攻勢に対して、迎撃はある……」

晶葉「そう。真ゲッターの突入に際して、露払いとなる戦力が必要であり、真ゲッター突入後、追撃許さない存在が必要となる」

茜「その役割が、私達と言うことですか！」

晶葉「うむ。後はゲッターD2……ブラックゲッターと旧ゲッターは、先の戦闘で使い物にならなくなってしまったからな」

茜「分かりました！李衣菜さん達に、指一本触れさせなければ良いんですね！」

美波「ごめんなさい。私のせいで……」

アーニヤ「……別に、美波のせいじゃ、ないです。それに、どんなハンデがあつても、アーニヤ達は、勝ちます、から！」

美波「アーニヤちゃん……！」

かな子「けど、パイロットは？私以外の、1号機と2号機は……」

晶葉「……」

かな子「晶葉ちゃん？」

晶葉「真ゲッターのパイロット。それについても考えている」

かな子「え？」

晶葉「李衣菜」

李衣菜「はい？」

晶葉「李衣菜達ネオゲッターチームが、真ゲッターロボに乗るんだ」

奈緒「はあ!？」

晶葉「チームワークは勿論、アラスカからここまでの戦闘経験。今のお前達なら、真ゲッターも乗りこなせるだろう」

奈緒「おいおいおい!嘘だろ?李衣菜や加蓮はともかく、あたしは、ずっとゲッターを離れてたんだぞ?」

晶葉「それでも、先の戦闘では合体でも後れを取ることはなかったように見えたが?」  
奈緒「それは…」

美波「私やかなこちゃん、莉嘉ちゃん、即席のチームを組んでも意味ないのよね?」

晶葉「真ドラゴンの内部では、何が起るとも限らない。もしランドウの反撃があった場合、阿吽の呼吸が取れるチームでなければ、作戦の成功はあり得ない」

ニオン「それで、ネオゲッターチームと言うことか」

晶葉「お前達も信頼していない、と言うわけではないんだがな。丁度、李衣菜達はゲッターを失って、手が空いているところだ」

加蓮「確かに。鉢が回ってくるには、お誂え向きだと思うけど？」

李衣菜「真ゲッターロボ、か……！」

晶葉「お前達に、無茶な頼みをしているのは、十分承知しているつもりだ。あれは、並みのマシンじゃないからな」

李衣菜「大丈夫だよ、今更恐れない。きっと私達は望まれて、ここにいるんだ」

奈緒「李衣菜……？」

加蓮「他人のこと心配してる場合？ ホントは、奈緒の方が怖くて怖くて仕方ないんじゃないの？」

奈緒「それは……怖いさ」

加蓮「ふうん？」

奈緒「お前はどうかんだよ？」

加蓮「アタシ？ アタシは……成るように為るんじゃないかなって」

奈緒「はあ？」

加蓮「リーナが先頭に立ってくれる。奈緒が傍にいてくれる。それなら、真ゲッターに乗ったって、ランドウとの最終決戦だって、乗り越えられるよ、アタシ達」

奈緒「っ……!そう言うこと、恥ずかしげもなく言うなよな!」

加蓮「言うよ。これが最後になるかもしれないんだし」

奈緒「く……っ!」

晶葉「そろそろ良いか?覚悟が決まっているのなら、皆、ゲッターに機乗して待機してくれ」

晶葉「これをランドウとの最後の戦いにするぞ……!必ず、この無為な戦いを終わらせるんだ!」

一同「了解(ッ)!!」

——真ゲットマシン各機、コックピット内。

李衣菜「コックピットの雰囲気は、旧ゲッターに近いんだね」

奈緒「卯月達が乗ることを想定したからな。そっちに合わせてんだろ」

晶葉『——それだけじゃない。真ゲッターも早乙女博士が手掛けた、直接のゲッターの系譜に当たるゲッター。だからコックピットにも、共通してる部分が多い』

加蓮「兎も角、前に旧ゲッターに乗ってた経験は、生かせそうだね」

奈緒「ま、ぶつつけ本番で苦しめられるのも、大概にしてほしいからな」

晶葉『何時も通りで結構。頼むぞ、この星の未来が、お前達に掛かっている』

李衣菜「この星の、未来……?」

晶葉『ああ、今日明日じゃない、この先の人類の行く末だ。…期待している』  
李衣菜「あく……。そう言う堅苦しいのはなしで」

晶葉『……は?』

加蓮「そんな大層なものの為に戦ってた訳じゃないしね?」

奈緒「あたし達は、ただあたし達が気に入らないおっさんを殴りに行くんだ」

李衣菜「誰かの未来まで背負うつもりはないし、私が切り拓こうとしているのは、ロツクなアイドルになるって未来だけだしね!」

加蓮「その過程で、次いでに地球を救うんじや、ダメ?」

晶葉『お前らなあ……』

かな子『あ、あの……!』

李衣菜「かな子……どうかした?」

かな子『卯月ちゃん達のことは、お願いしてもいいですか?』

李衣菜「え?ははっ、それくらいなら、全然OK!!」

かな子『……よろしくお願いします!』

加蓮「戻ったらおつきなケーキ、期待してるから!」

晶葉『はあ……もういい。真ゲッターチーム!』

奈緒「真ゲッターチーム?」



李衣菜「卯月達じゃなくて、私達が？」

晶葉『今はお前達が、真ゲッターチームだ』

李衣菜「そっか……よしっ！」

奈緒「……………」

加蓮「……………」

晶葉『——発進だッ!』

李衣菜「発進ッ!!」

ゴオッ

李衣菜「——!!」

奈緒「お…っ!」

加蓮「くっ…!」

クジラのカタパルトから、真ゲットマシンが飛び立つ。

李衣菜「ウツヒヨク〜!これが真ゲッター…!ゲットマシンでも大した暴れ馬じゃん

!」

奈緒「落ち着けよ!あたし達にしてみれば、真ゲッターの能力はまだまだ未知数なん

だぞ!」

加蓮「パワーだけでもネオゲッター以上…!けど、それに怖じ気付いてなんて、いら

れないっ！」グッ

奈緒「おい！加蓮まで……！」

加蓮「のんびりして余裕なんて、ないんじゃない？」

李衣菜「こそ。未知数だろうと何だろうと、使いこなさなきゃならないんだ」

奈緒「そりゃあまあ、そう言われたら……仕方ないよなッ!!」グンッ

速度を上げる2機のゲットマシンに追隨する。

李衣菜「あはっ！その意気だ」

晶葉『試運転はそこまでだ。敵が来るぞ』

李衣菜「敵……！ゲッタードラゴンの量産型！」

奈緒「やつば、ただじゃ通してくれないよな」

加蓮「肩慣らしには丁度良い相手じゃない？」

奈緒「ラスボス前だ。経験値は稼いでおかなかちやな」

晶葉『…本当にそんなノリで良いのか？』

李衣菜「良いんだって。んじやあここはカツコよく、私のゲッターで……」

加蓮「なら、まずはアタシから行かせてもらおうかな。リーナ、奈緒合わせて」

李衣菜「あれえ……？」

奈緒「抜け駆けかよ！」

加蓮「こう言うのは先頭になったもの勝ちだつて」

真ベア一号が先頭になり、隊列を組む。

加蓮「チェンジゲッター、3!!」

空中での合体。落下する最中、地上に展開するメタルビースト・ドラゴンが目映る。

加蓮「丁度良い」

落下。同時に、真下の1機を巻き込んで踏み潰す。

加蓮「潰しちゃうから!」

真ゲッター3のキャタピラを回転させ、押し潰したメタルビースト・ドラゴンを粉碎した。

MB・ドラゴン『……?』

グンツ

MB・ドラゴン『——!』

爆発によつて生まれた黒煙の中から巨腕が伸び、メタルビースト・ドラゴンを力強く殴り打つ。

加蓮「油断なんてしないでよ?張り合いがなくなっちゃ、面白くない……!」

MB・ドラゴン『!!』

真ゲッター3の周りを包囲したメタルビースト・ドラゴンが、一斉にゲッタービーム

の構えを取る。

奈緒「……さ、流星にこれだけのゲッタービームは、真ゲッターだって耐えれないんじゃないか?」

加蓮「全部が直撃なら、多分ね」

奈緒「……躲せるのか?」

加蓮「……こうすれば!」

伸縮する腕を一杯に上空に掲げ、勢いよく地面に叩き下ろした。

奈緒「フグツ——!!」

その衝撃で宙へと跳躍。真ゲッター3の真下を、包围していたメタルビースト・ドラゴンのビームが通過する。

加蓮「ふう。間一髪」

奈緒「うえ……吐きそ……」

李衣菜「あつはははは! なかなかロツクだね、加蓮!」

加蓮「相変わらずロツクの基準がよく分からないんだけど……それより!」  
眼前を見据える。地表に展開したメタルビースト・ドラゴンは捉えている。

加蓮「これで一網打尽。ミサイル——!」

真ゲッター3の後部を前面に反転。サイロを開く。

加蓮「ストームツ!!」

上空から放ったミサイルの雨霰。絨毯爆撃のように畳み掛けて地面を穿ち、メタルビースト・ドラゴンの群れを貫く。

加蓮「たぐまやくつ!意外とストレス解消には良いかもね」

奈緒「調子乗るなよ!メタルビーストのドラゴンはまだ来るぞ!」

加蓮「え?じゃ、奈緒に任せた」

奈緒「は!」

加蓮「アタシはもう十分に仕事はしたし、次はゲッター2で見せてよねって事で、オーブンゲッター!」

奈緒「ちよっ!」

真ゲッター3が分離。ゲッターマシンが飛行する。

奈緒「勝手に合体した癖にさ…。自分勝手に暴れるのも程々にしろよな!」

李衣菜「で、どうする?イヤなら私が行くよ!」

奈緒「…いや、ゲッターの戦い、リハビリはいるよな。ここは乗らせてもらう!」

加蓮「結局、ノリノリなんだから」

真ジャガー号を先頭に、隊列を組み直す。

奈緒「チェンジ!ゲッター2ツ!!」





奈緒「ゲッタービジョン！」

真ゲッター2の高速機動。霞の如く消え失せ、ビームの雨から逃れる。

奈緒「ミラーージュ、ドリルッ!!」

1体のメタルビースト・ドラゴン。その背後に姿を見せた真ゲッター2がドリルで砕く。

奈緒「やらせるかよッ！」

直ぐ様、応戦の姿勢を見せた他の機体に対し、ゲッターアームで応戦。その鋭い爪で、敵を切り裂く。

奈緒「お前らなんかに、捉えられるかよ！」

加蓮「奈緒、次が来る」

奈緒「分かっているって。全部蹴散らしてやる！」

加蓮「やる気だね。けど、アタシ達の本当の目標は、コイツらじゃないよ」

奈緒「分かっている！けどさあ……」

李衣菜「こうも防衛網が厚くちや、簡単には近付けないよ！」

加蓮「弱音を吐いたって、真ドラゴンに接触するしかないんだから。とにかく前身あるのみ！」

奈緒「無茶苦茶言ってるよなあ……。ま、その通りなんだけども！」



「任せてください!!道は私達が切り拓きますっ!!」

李衣菜「この声は!」

茜「プラズマ・ノヴァ!!」 ギュワツ

プロト・ゲッターの閃光が、敵陣を穿つ。

奈緒「飛焰チーム!待ってたぞ!」

茜「遅れました!!ゲッター飛焰、参戦しますっ!」

ニオン「雑魚に目はくれるな。貴様らは本丸を狙え!」

李衣菜「ゲッター飛焰にダイノゲッター、それにゲッターD2!」

莉嘉「ドラゴンくらいなら、アタシにだって相手出来るよ!リーナ達は、真ゲッター

じゃなきや止められない相手を!」

奈緒「……っ!ランドウ……!」

真ゲッター2が、邪真ドラゴンに向き直る。

茜「準備は良いですか!アーニヤちゃん、美穂ちゃん!」

アーニヤ「Конечно!…何時でも」

美穂「行けるよ!相手がドラゴンだって、私達は負けないよ!」

茜「りよーかいです!!トラアアーイーッ!!」

トマホークを携えたプロト・ゲッターが先陣を切る。

鉄甲鬼「ニオン、後れを取るな」

ニオン「指図は無用！雑魚ごとき、駆逐してやる!!」

芳乃「油断はなりませんよ。急いで事は仕損じます故。明鏡止水の心で事にあたりましょー」

プロト・ゲッター1にダイノゲッター1。それにゲッターD2の攻勢により、相手の防衛線が後退する。

李衣菜「防衛線が開いた！奈緒！」

加蓮「みんなが作った隙間を！」

奈緒「お、おう！強行突破なら、ゲッター2の力の見せ所だぜ！——ゲッタードリル!!」

ドリルが唸る。

奈緒「壁があつたって立ち止まるか……！ほら、どけどけどけえくッ!!」

立ちはだかるメタルビースト・ドラゴンを弾き飛ばして、真ゲッター2のドリルは繭となつた邪真ドラゴンの表装へと向かう。

奈緒「らあっ!!」

爆煙が上がり、真ゲッター2はその中に姿を消した——。

—— 邪真ドラゴン内部。

奈緒「——…っと、突入は成功か？」

加蓮「みたい。真ゲッタードラゴンの、内部に入り込んだよ」

奈緒「ここが敵の腹ん中って訳か…」

李衣菜「意外と広いね…」

奈緒「流石に一方通行って訳ではないか…。これ、どっちに進めば良いんだ？」

加蓮「真ドラゴンの炉心らしい熱源は捉えてる。それに向かって進むしかないんじゃない？」

奈緒「炉心の熱源の反応だけが頼りって事か…：…んお!？」

衝撃、振動。コンピュータのアラート音が鳴り響いた。真ゲッター2の足元。尖角のドリルが突き出し姿を覗かせる。

奈緒「これは…!？」

李衣菜「げ、ゲッターライガー!？」

「ここまで来たか!ゲッター線の使徒!」

加蓮「ゲッター線の使徒…?」

コーウエン「貴様らの好きにはさせぬ…!ここで滅ぶが良い!ゲッター線の使徒!」

李衣菜「好き勝手にしてるの相手に、言われる筋合いはない!奈緒!!」

奈緒「おう!」

ギユンツ

真ゲッター2の加速。姿を顕したゲッターライガーに追隨する。

奈緒「ゲッターライガーで、真ゲッターから逃げられると思うなよ！」

ステインガー「ははっ！所詮は霊長類の進化系か！」

奈緒「何!？」

ステインガー「このゲッターは、ゲッターライガーに非ず！」

奈緒「うあ……！」

真ゲッター2の視界から消えたゲッターライガーが、真ゲッター2の背中に直蹴りを放つ。

奈緒「は、速い…?!」

ステインガー「真ゲッターと相対するゲッター！それが並みのゲッターGである筈がないっ！」

コーウエン「正しく、このゲッターこそ真ドラゴンと呼ぶに相応しい」

奈緒「し、真ドラゴンだって…？」

李衣菜「奈緒！向こうの言葉に惑わされちゃダメだ！あれは、ただのゲッタードラゴンだ！」

加蓮「自分の口で、本物だって言う。盗人猛々しいとは、この事だね」

ランドウ「フツ…。状況を読むことも出来ん。所詮は子供」

李衣菜「何を！」

ステインガー「ゲッターに導かれるままに戦い続ける！貴様らに最早、言葉など不要

!!」

コーウエン「私達が介錯となろう。己が愚行を、死の淵で呪うがいい」

ゲッターライガーが、来る。

李衣菜「大層な言葉で言ってくれちゃって…！」

加蓮「これ以上、あんたらに好き勝手されてたまりますかって！」

李衣菜「予定変更だ。こいつらを倒せば、真ドラゴンも取り戻せる！」

加蓮「敵の頭が自分から出てきてくれたんだ。今までの鬱憤、利子付けて返すよ、奈緒！」

奈緒「おう！ニセモノ如きに、負けてたまるかア!!」

迎え撃つ、真ゲッター2。互いのドリルが交差する。

奈緒「くっ…！」

ステインガー「ヒヒッ！」

ガギンッ

火花を散らすドリルの鏝迫り合い。弾いた衝撃で一度距離を取り、睨み合う。

李衣菜「パワーは互角!」

加蓮「まんざらハツタリでもなかったって訳」

奈緒「元々正面から殴り合う気はないんだ。ゲッター2はスピードで!——真ゲッタービジョン!!」

高速機動。相手の視界から掻き消え、一瞬で背後に回り込む。

奈緒「取ったア!!」

ステインガー「フツ!」

捉えたゲッターライガーの姿が、消えた。

奈緒「何っ?!」

ステインガー「——マツハ・スペシャル!!」

立場逆転。ドリルを構えたゲッターライガーが迫る。

李衣菜「直撃コース!」

奈緒「くくくっ! オープンゲット!」

ゲッターライガーのドリルアームが直撃する寸前。ゲッターを分離させて躲す。

李衣菜「ふう…。間一髪く…」

加蓮「一息吐いてる場合じゃない。奈緒も! 罅が明かないからゲッター3で行くよ

!」

奈緒「お、おう……!」

ステインガー「ハハッ!オープンゲット!」

加蓮「!?…チェンジゲッター3!」

コーウエン「チェンジ、ポセイドン!」

ゲットマシンの交錯。真ゲッター3とゲッターポセイドンが対峙する。

加蓮「こつちの真似っ子って訳?おっさんがやっても、可愛げないよ!」

コーウエン「目には目を、歯には歯を。己が無力を思い知るがいい」

加蓮「力比べしようって?仕方ない……!」

真ゲッター3で、ゲッターポセイドンに向かう。

コーウエン「フィンガーネット!」

加蓮「…っ!」

ゲッターポセイドンのフィンガーネットが、真ゲッター3を捕縛。

加蓮「…舐めないで!」

真ゲッター3のパワーで、強引にネットを引き千切る。

加蓮「ゲッターホーミングミサイル!!」

放ったミサイルはゲッターポセイドンに直撃。爆炎が周囲を包む。

奈緒「やったか!」

加蓮「まさか。相手はゲッターポセイドン、この程度の攻撃で…」

コーウエン「ムンツ！」

加蓮「やられるわけないよね！」

爆炎から姿を見せたゲッターポセイドン。両手を組ませたアームハンマーを片腕で防ぐ。

コーウエン「慎重だな」

加蓮「どうも。油断や慢心つてのは、お調子者がすることだから」

コーウエン「しかし…」

ゲッターポセイドンの背後ミサイルが、せり上がる。

李衣菜「まさか、この距離で！」

コーウエン「ストロングミサイル!!」

加蓮「…ハンマーパンチ！」

手に持つて直に叩き付けられるストロングミサイルを、パンチで迎え撃った。

加蓮「……」

コーウエン「ほう…」

奈緒「……あなた。左腕被害甚大…。無茶するよなあ、加蓮は」

李衣菜「まあ、迎え撃たなきゃ致命傷だったわけだし、結果オーライ？」



加蓮 「パワー、アーム！」

コーウエン 「オオ?!」

真ゲッター3の伸縮する蛇腹腕で、ゲッターポセイドンを捕縛。

加蓮 「こんのお:!!」

捕縛したゲッターポセイドンを力任せに振るい、叩き付けた。

「オーブンゲッター!!」

加蓮 「ちつ…!寸前で躲された！」

奈緒 「こつちも体勢を立て直すぞ！」

加蓮 「分かった。オーブンゲッター！」

分離したゲッターGのゲッターマシンを見送り、こちらも分離。

ランドウ 「チェンジゲッター、ドラゴン！」

加蓮 「……?」

奈緒 「あつちはドラゴンに合体するみたいだ」

李衣菜 「なら、いよいよ私の出番、みたいだね！」

奈緒 「任せるぞ！」

李衣菜 「任せてよ!行くよ、加蓮！」

加蓮 「あ、うんっ！」

李衣菜「チェーンジ、ゲッターーツ!!」

『——李衣菜』

李衣菜「!？」

『急げ、李衣菜——!』

李衣菜「な、何…!？」

『時は近い、急ぐんだ!李衣菜!!』

李衣菜「何…?誰なの?!時って…!」

奈緒「——李衣菜ッ!」

李衣菜「!？」

ランドウ「キエエイツ!」

李衣菜「つ……ゲッターレザー!」

大上段から振り下ろされたトマホークの一撃を、腕のゲッターレザーで防ぐ。

李衣菜「ふう……間一髪う…」

奈緒「間一髪じゃないぞ!どうしたんだよ、ボーつとして!」

李衣菜「…奈緒と加蓮には、聞こえなかった?今の声」

奈緒「声…?」

加蓮「何にも。ともかく、戦闘に集中して」



ランドウ「何の！」

真ゲッターと偽真ドラゴンのトマホークが鏢迫り合う。

ランドウ「ギギギ……ッ！」

奈緒「……っ！これが噂に聞く真ゲッターのパワーってか！」

言つて、鼻血を拭う。

加蓮「すかして余裕はないよ。李衣菜を支えて！」

李衣菜「ぐう……！どおりやあああッ!!」

ランドウ「ちっ……！」

鏢迫り合いを放棄。後ろに下がってトマホークを往なす。

李衣菜「くっ……！」

叩き付けられたトマホークが地を砕き、亀裂を生じさせる。

李衣菜「逃がすか！」

真ゲッター、跳躍。

ランドウ「!?!」

李衣菜「ゲッターパンチ！」

一瞬で後退した偽真ドラゴンに追い付き、パンチを見舞う。

李衣菜「ゲッタービーム！」

ランドウ「何の……オープンゲット!」

李衣菜「躲した!」

加蓮「……」

奈緒「どうした?加蓮」

加蓮「私の事はいいから。奈緒も敵の動きを見て」

奈緒「ん?お、おう……」

ステインガー「チエンジライガー!」

李衣菜「ゲッターライガー……!高速形態が相手でも!」

ステインガー「マツハ・スペシャル!」

李衣菜「……!」

ステインガー「なっ……!」

高速移動で飛び込んできたゲッターライガーに対応し、そのドリルをトマホークの長大な柄で受け流す。

李衣菜「こっちは真ゲッターロボだア!!」

から空きの鳩尾に、袈裟蹴りを浴びせる。

ステインガー「ぐぬう……!」

李衣菜「まだまだア!!」

ステインガー「お、オープングェット！」

真ゲッター1のレザールの追撃に、たまらずゲッターを分離。

李衣菜「こいつ、ちよこまかと……！」

加蓮「奈緒！」

奈緒「あ、ああ……！」

コーウエン「チェンジゲッター、ポセイドン！」

ゲッターポセイドンに合体。

奈緒「……あ」

加蓮「見えた？」

奈緒「あ、ああ……。加蓮が言ってるのって……」

李衣菜「例えポセイドンが相手だって！」

コーウエン「ゲッターサイクロン！」

李衣菜「くう……！」

強烈な旋風が、真ゲッター1の自由を奪う。

コーウエン「ストロングミサイルツ!!」

李衣菜「こ、これしきのこと……！」

コーウエン「終わりだ！」

李衣菜「ゲッター……!バトルウイング!!」

コーウエン「ぬっ!」

真ゲッターの翼を広げ、ゲッターを高速回転。ゲッターサイクロンの旋風諸とも、ストロングミサイルを撃ち落とす。

李衣菜「トマホーク、ブーメランツ!!」

コーウエン「オープンゲッター!」

真ゲッターのトマホークブーメランを、オープンゲッターで回避。

李衣菜「また……!」

加蓮「リーナ!こっちも分離して!」

李衣菜「え?」

奈緒「いいから分離しろ!時間はないぞ!」

李衣菜「わ、分かったよ。オープンゲッター!」

言われるがまま、真ゲッターを分離。

加蓮「!」

奈緒「そら!」

ランドウ「ぬっ……!此奴ら!」

真ジャガー号と真ベアー号が、相手のゲッターマシンの進路を阻む。

奈緒「ははっ！思った通りだ！」

加蓮「あいつら、ゲッターの操縦ばかりで、ゲットマシンは全然なっていないね！」

李衣菜「…成る程、そう言うことか！」

ランドウ「それが、どうしたというのなあ!？」

ステインガー「合体してしまえば、こちらのもの！」

ランドウ「行くぞ、チェンジゲッター…！」

李衣菜「チェンジゲッター…！」

ランドウ「何!？」

ランドウ達よりも早く、李衣菜達が動く。

李衣菜「へへっ！こっちは何十回、何百回だつて合体してきたんだ…！」

ライガー号とポセイドン号がドッキングした機体、ドラゴン号が合体しようとしたそ

の間に、即座に合体した真ゲッターが滑り込んだ。

ランドウ「ぬ、ぬぬ…！」

真ゲッターの両腕が、ドラゴン号を捕らえる。

李衣菜「悪いけど、目を瞑ってたって合体出来るよ！」

奈緒「その辺は、プロとにわかの違いってトコだな」

李衣菜「むう…：…何か言い方に刺があるなあ…！」



加蓮「言ってる場合じゃない。リーナ!」

李衣菜「うんっ!ゲッターアアービィーームツ!!」

ランドウ「な、何のオオーームツ!!」

真ゲッター1の額から放たれたゲッタービームの前に蒸発するドラゴン号。しかし、パイロットは辛うじて脱出。

奈緒「あつ!あいつ…」

ランドウ「まだだ…!このような所では終わらんぞ!」

壁面に手を付ける。その部分から金属片が浮き上がり、たちまちに新たなドラゴン号へと姿を変える。

加蓮「何それ…!」

ランドウ「ここが真ドラゴンの内部だと言うことを忘れたか!」

李衣菜「それで、ドラゴンのマシンを生み出せるっての!」

ランドウ「然り!ゲッター線ある限り、私の力が尽きることはないツ!」

奈緒「ゲッター由来で、無尽蔵ってか!チートかよ…」

ステインガー「いい加減にどけえ!!」

李衣菜「おわっ!?!」

真ゲッター1の下敷きになっていたドッキング状態のライガー号とポセイドン号が、

真ゲッター1を押し退け立ち上がる。

李衣菜「くっ……！」

ランドウ「行くぞ！ステインガー、コーウエン！」

ステインガー「ヒヒッ！」

コーウエン「フフフッ！」

ステインガー・コーウエン「オープンゲット!!」

李衣菜「何っ!？」

ランドウ「教えた通り、ここは既にワシらのフィールド。即ち！」

李衣菜「！」

真ゲッター1の背後から、複数機のゲットマシンが飛来する。それは、

コーウエン「チェンジ、ポセイドン！」

ステインガー「チェンジ、ライガー！」

ランドウ「チェンジ、ドラゴンツ!!」

3体のゲッターGとなり、真ゲッター1に立ちはだかる。

3人「「ここう言うこと芸当も出来る!!」」

加蓮「…得意になって何かと思えば、そんなこけおどし！」

奈緒「3人乗ってないゲッターがいくら増えたところで！」

ランドウ「確かにな……しかし!」

ステインガー「ツ!」

李衣菜「——ツ……!トマホークツ!!」

ステインガー「ウギヤツ!」

コーウエン「フツ……!」

李衣菜「ツ……ゲッターレザー!」

コーウエン「オオ……!」

ランドウ「でやあ!!」

李衣菜「ぐっ……!」

ガギンツ

ランドウ「くつくつくつ……!」

李衣菜「このお……ゲッタービームツ!!」

ランドウ「おわあ!」

圧倒的な力で、瞬間にゲッターGの群れを叩き伏せる。しかし、

ランドウ「チェンジドラゴン!」

ステインガー「チェンジライガー!」

コーウエン「チェンジポセイドン！」

直ぐ様復活を遂げるゲッターG。

奈緒「こいつら……！」

李衣菜「これならどうだ……！ゲッ……タアア……ビーイームッ!!」

エネルギーを収束し、腹部から放つゲッタービーム。その出力と破壊力で、ゲッター

Gをまとめて葬るが、

ランドウ「くははははっ！無駄なことだ！貴様らに勝ち目は無い」

コーウエン「フィンガーネット！」

李衣菜「しまった!？」

ステインガー「ライガーマイスイル！」

李衣菜「うわあッ!!」

ランドウ「ゲッタービーム!!」

李衣菜「うゝ ああああッ……!!」

ゲッターGの波状攻撃に、真ゲッターは吹き飛び、叩き付けられる。

李衣菜「ガッ……！」

ランドウ「くつくつく……！なまじ真ゲッターが優れている故だ。一思いには殺さ

ず、じわじわと鬨り殺してくれるわッ!!」

李衣菜「くう……!」

コーウエン「所詮は選ばれた者ではない。猛り狂うだけの小猿」

ステインガー「無力に打ちひしがれ、我々に歯向かったことを後悔するといひ!」

奈緒「畜生……!チート使つてる癖に、イキリやがってえ……!」

コーウエン「チート?はて、そのような概念は知らんな」

ステインガー「だが、生命の真理は知っている!」

加蓮「生命の、真理……?」

コーウエン「そう、それこそは弱肉強食」

ランドウ「強きこそ正義、そう言うことだアツ!!」

李衣菜「ぐあ……っ!!」

ゲッターライガーのドリルアームが、真ゲッターの下腹部を穿つ。

加蓮「っ……きゃあっ!」

李衣菜「か、加蓮……!」

コーウエン「フッフッフ……!」

ゲッターポセイドンが真ゲッターの右腕を引き千切る。

李衣菜「ぐう……!」

コーウエン「ゲッターパンチ!」

奈緒 「うわああああっ!？」

ゲッターポセイドンの拳が、真ゲッター1の胸部を打ち、ひしやげさせた。

李衣菜 「奈緒!」

奈緒 「……………」

李衣菜 「加蓮!!」

加蓮 「……………」

李衣菜 「2人共、しつかりして!こんな所で、寝てる場合じゃ……!」

ランドウ 「不幸なものよ……」

李衣菜 「えっ!？」

ランドウ 「貴様に巻き込まれなければ、一時でも長く生きられたものを」

李衣菜 「何を!」

ランドウ 「志は強く、意思は固く。しかし、実力が伴わぬが故、多くを巻き込み犠牲としてゆく」

ステインガー 「蛮勇を誇る愚行!」

コーウエン 「抵抗を誉れとする醜悪!」

ランドウ 「貴様がこの戦いの中で守れたものはなんだ?」

李衣菜 「私が、守ったもの……」

ランドウ「何故ここまで来れた?何故生きている?それはお前が戦い、勝ち抜いてきたからではない。貴様が、何者かの犠牲によって、守られてきたからではないか!」

李衣菜「何者かの、犠牲……!」

シャトナー『……皮肉なもんだぜ。自分のために生きてきた、俺が……』

偽神ドラゴンのトマホークが、掲げられる。

李衣菜「シャトナー、みんな……!私は……」

ランドウ「心理の何一つも知らぬ子供が、だから未熟だと言うのだ」

李衣菜「……」

ランドウ「ここで死ねえい!」

ゲッタードラゴンが、トマホークを振り下ろす。

ガッ

ランドウ「ぬっ!」

李衣菜「……!」

真ゲッターに残された右腕が、トマホークを受け止める。

奈緒「さつきからごちゃごちゃと、勝手な理屈並べてんじやないぞ……!」

李衣菜「奈緒……!」

加蓮「リーナが未熟だから、アタシ達が死ぬって?冗談じゃない。それだったらこれ

までに何度だつて死んでたよ。アタシだつて、リーナだつて！」

李衣菜「加蓮！」

膝を着いていた真ゲッターが、立ち上がる。

奈緒「李衣菜は何時だつて、守ってきたさ！あたし達のことを！」

加蓮「その為に一人で無茶して、傷付いて。見てるこつちが冷や冷やさせられて、悔しかった」

奈緒「李衣菜が何時も傷付くのは未熟だからじゃない！その身を盾にしてアタシ達が傷付かないようにして、守ってくれるからだ！」

加蓮「リーナの傍で戦ってきた訳じゃない、何時も高い所から人を見下してるだけのアンタ達が、勝手なこと言わないで！」

立ちはだかった、ゲッタードラゴンを蹴り飛ばす。

ランドウ「ぐあ……っ！」

李衣菜「奈緒、加蓮……！」

奈緒「これで、やっと同じになれたな」

李衣菜「えっ？」

加蓮「アタシ達だつて戦ってるんだ。誰かに守られて、無傷で勝ち残るなんて言うんじゃない、面白くない」



奈緒「頼ってくれよ。あたしだって、李衣菜のために傷付くことは出来る」

加蓮「遠慮なんて今更じゃない?アタシ達は、チームなんだから」

李衣菜「:うんっ。そうだ、そうだったね!」

李衣菜「結局私は、一人で抱え込んでただけだった。これは私の戦いだって、2人は、手を貸して貰ってるだけだって。けど、違う」

奈緒「あたし達それぞれ、戦う理由は違うけどさ」

加蓮「それでも、目的は一つの筈でしょ?」

李衣菜・奈緒・加蓮「「ランドウを倒す!!」」

ステインガー「小賢しい奴等だ!」

コーウエン「恐ろしい闘争本能……これこそが、宇宙全体が恐れる人間の……」

ランドウ「だが、今さらどうする!?!そんなボロボロのゲッターで、何が出来る!」

加蓮「何が出来るかなんて、そんなの分かんないけどさ」

奈緒「だからって、もう無理です降参なんて、呆気なさ過ぎるだろ?」

李衣菜「私達は今、ゲッターを通して一つになってるんだ。三つの心を一つに、今なら、何でも出来そうな気がする!」

ランドウ「世迷い言を!戯れ言なら、死んでからほざくんだな!」

李衣菜「死なないっ!死んでたまるか!!これは生き残るための戦いだ!最後の最後まで



れていく。

ステインガー「は、早く脱出するんだ…!」

ランドウ「むう…!」

吸収されたゲッタードラゴンから脱出。直ぐ様新たなドラゴンを創造する。

ランドウ「…化け物め…!」

コーウエン「目的のためには、神に挑むのも厭わぬか。しかし…」

ステインガー「あれだけのゲッター線! 奴等とて只ではすまない! 即ち、奴等が選ん

だ道こそ、自滅!」

――。

李衣菜『……ここは、何処だ? 私は』

加蓮『ここは闇だ。一面に拡がる、白い闇――』

李衣菜『…え? ……誰…』

奈緒『お前は誰だ?』

李衣菜『私…私…私…』

奈緒『境界が曖昧になって、消えていく…』

李衣菜『私は…李衣菜…? 奈緒、加蓮…。…一文字、號――』

加蓮『みんな一緒だよ。一つになろう』

李衣菜『一つに…』

「自分を見失つちやダメです！」

李衣菜『…誰？この声…』

「しつかり自分を見て、操縦桿を握るんだ！」

奈緒『操縦桿…？そんなの、どこに…』

「私達は、ゲッターじゃないよ！」

加蓮『ゲッター…？そうだ、アタシ達は——！』

「強い心で、ここにいてるって、叫ぶんです！ゲッターに！」

李衣菜「私達は、ここにいてる。生きてる！分かったよ、卯月！」

「存在に流されてちや、ダメだよ。ゲッター線って言ったって、所詮は只の力だ」

奈緒「相変わらず厳しいな、凜」

「加蓮達に出来ないことが、私には出来る。逆に、私に出来ないことが加蓮には出来る筈だよ！」

加蓮「期待掛けるじゃん？そうまで言われたら、やってやらないわけにはいかないよ、未央」

“ 叫べ！お前達の心で、魂で！悪の炎をも消し去る、嵐の叫びを！！ ”

「ゲッターアアア——ッ！！チエエインジッ！！」

—。

ランドウ「うおっ!? ゲッターの輝きが…!!」

ステインガー「集束していく…。あの姿!」

コーウエン「真ゲッターロボ…いや、あの姿は…!!」

ゲッター線の光を全て吸収して、その内から姿を現したのは、宇宙の如き蒼をその身に宿す戦闘神。

李衣菜「こ、これは…」

加蓮「アタシ達に、一体何が…」

奈緒「あたし達、ゲッターと一つになったのか?」

李衣菜「ゲッターと一つに…確かに、ピンピンに伝わってくる…! この体を通して、私の中にゲッターが!」

ランドウ「な、何だと言うのだ!? あのゲッターは…!!」

ステインガー「し、知らない…! あんなゲッター、ボクは知らない!!」

加蓮「向こうも混乱してるみたいだね」

李衣菜「なら、一気に決めさせてもらおうじゃん!」

深紅の翼が開く。

コーウエン「—っ!」

李衣菜「ゲッターパンチ！」

ステインガー「コーウエンくんっ！」

目にも止まらぬ速さで、ゲッターポセイドンが吹き飛んだ。

コーウエン「これしきのこと、何も心配要らないよ、ステインガーくん」

ステインガー「おのれ……！ほんのちよつとボクらより先に進化したくらいで！」

コーウエン「ステインガーくん!？」

マツハ・スペシャル。ゲッターライガーの姿が消え、

ステインガー「調子に乗るなア!!」

背後目掛け、ドリルアームを放った。

ステインガー「ぐっ……ぬ、ぬう……?!」

背中に突き刺さったドリルの回転が止まる。否、止められる。

ステインガー「な、何なのだ……?!これは！」

蒼い装甲がドリルを中心に、まるで液体のように渦を巻き、それはやがて流動的な動きを伴って形を変えていく。

コーウエン「逃げて、ステインガーくん！」

ステインガー「あ……ああ……！」

蒼い装甲から、真ゲッター2の上半体が姿を現す。

奈緒「よう、驚いてられるなんて、随分余裕なんだな？」

ステインガー「あ……ぐっ……！」

奈緒「ドリルアームツ!!」

ゲッターライガーの胴体に勢いよくドリルを突き刺す。ドリルの回転で生じた衝撃波で、ゲッターライガーは跡形もなく吹き飛んだ。

コーウエン「ステインガーくん!——ぐおツ?!」

一步前へ踏み出しかけたゲッターポセイドンが爆風に弾ける。

加蓮「安心しなつて。アンタらは一人ずつ、アタシ達が相手してあげるから」

いつの間にか、下半身が真ゲッター3の上体になっている。その脇腹の位置からはミサイルの発射サイロが覗いていた。

ランドウ「こやつら……！」

李衣菜「さあ、こつちも行くよ!」

ゲッタードラゴンに肉薄。

李衣菜「ゲッターアアトマホオオオクツ!!」

右腕がグニヤリと形を変え、大斧が姿を現す。

ランドウ「小娘如きに……!負けぬっ!」

対するゲッタードラゴンも、トマホークで応じる。しかし、

李衣菜「ふんっ」

まさに紙細工を崩すように、木っ端微塵になったトマホークごと、ゲッタードラゴンのボディが両断された。

ランドウ「かはアッ——！」

辛うじてゲッターから脱出するランドウ。しかしその体も、無傷ではなかった。

李衣菜「まだやるって言うの？ 流石にしぶといね」

ランドウ「何だと言うのだ？ 何故突然、真ゲッターにこれほどのパワーが!?」

李衣菜「アンタには一生分かんないよ！」

ランドウ「!?」

李衣菜「生きたいって言う、私達の願い。生命ある者の本能的な願いに、ゲッターが応えてくれたんだ！」

加蓮「生命の重さを軽く見て、学校の床掃除みたいに簡単な気持ちで無関係な生命を犠牲にして来た、アンタ達には一生手に入れられない力！」

奈緒「分かりやすく言うよ。あたし達が生きていくために、お前らは邪魔なんだ！」

李衣菜「だから倒す！ この進化した力で、この神・ゲッターロボで!!」

ランドウ「神・ゲッターロボ、だとお……？」

ステインガー「愚かで矮小な生命の分際で、自ら神を名乗るのか！」



コーウエン「その傲慢、その思い上がり!許すまじ…!」

ランドウ「そうだ、そうだとも!うおおおおおお——ッ!!」

ランドウ「チェンジゲッター、ドラゴン!!」

ランドウ、ステインガー、コーウエンの3人が乗り込んだマシンが合体し、偽真ドラゴンが姿を現す。

加蓮「まだ、懲りないんだ?」

ランドウ「貴様らがどのように進化しようと、どのような力を手に入れようと、この真ドラゴンの中にいる限り、結局は勝ち目などないのだア!!」

奈緒「強がつて何かと思えば、結局はそれかよ?」

李衣菜「何かに縋らなきゃデカイ顔も出来ない、寄生虫が!!」

カッ

ランドウ「!?!」

李衣菜「ゲッタービームッ!!」

ランドウ「うおおおおおおおおおおくくっつ!!?」

神・ゲッターロボから放たれた極太のゲッタービーム。そのまま偽真ドラゴンを天井まで押し上げ、その天井を貫いて邪真ドラゴンの体内から押し出した。

茜「!!」

美穂「な、何…!？」

アーニヤ「あれは…」

美波「巨大な、光の柱…」

晶葉「ゲッター線の光…ゲッタービームだ」

菜々「あ、あれがゲッタービーム!？」

瑞樹「だとしたら李衣菜ちゃん達が？それともランドウ？」

晶葉「戦いは終わってはいないらしいが」

みく「見て！あれは…!」

ニオン「何だ…？あの蒼いゲッターは…」

鉄甲鬼「形状からして、真ゲッターに似ているが…」

芳乃「あれこそは未来を望む者の姿。悪しきより生命を守るための“闘神”——」

かな子「闘神…?」

鉄甲鬼「戦いの神と言うことか。戦いを終わらせるための…」

莉嘉「…」

美波「どうかしたの、莉嘉ちゃん？」

莉嘉「えっ、あつ…何だろう、あのゲッター…」

莉嘉（スゴくて、強そうで、カッコいい…。だけどそれだけじゃなくて…）



李衣菜「ゲッターファイナル…」

飛び込んでくる、偽真ドラゴン。

李衣菜「クラッシュユツ!!」

その心臓部に勢いよく拳を叩き込んだ。

ランドウ「ぐふうッ?!」

シャインスパークの光が、消えていく。

李衣菜「終わりだ。プロフェッサー・ランドウ」

ランドウ「な、何を……!?!」

偽真ドラゴンの内側から光が溢れ、その体が崩壊していく。

ランドウ「これは…!ゲッター線の暴走!?!ゲッターエネルギーが、逆流している!」

コーウエン「どうやら、ここまでのようすな」

ランドウ「!?!」

ステインガー「ここでゲッターを止められれば良かったんだけど、それでも得るものはあった!」

コーウエン「ゲッター線の使者、ゲッターロボ。やはり悔れる存在。宇宙の為にはやはり消し去らねば」

ステインガー「それを再確認出来ただけでも有意義だった。君は、この宇宙の為に名

誉ある最後を迎えるんだよ!」

ランドウ「待て!逃げるのか?どこへ行く気だ!!」

コーウエン「言つた筈だよプロフェッサー・ランドウ。短絡的でゲッター線の真の意味も理解せぬ貴様に生きる資格はないと」

ステインガー「資格なし!君も所詮凡庸の一人と言うことだよ。ここで糧となるだけ、幸せだと思ふことだね!」

ランドウ「何を…!ワシは終わらんぞ…!こんなところで!」

コーウエン「最早問答している時間もないでしょう。さようなら。貴方との時間も、悪くはなかつたですよ」

ステインガー「では、さらば!!」

ランドウ「待て!待て!待て!くれ!!ワシは、ワシはああああくらくつ!!」

崩れ落ち、ゲッター線の熱で溶け落ちていく偽真ドラゴン。世界征服と野望を謳った男の断末魔も、その中に消えていった。

李衣菜「…終わった」

奈緒「何か、呆気なかつたな」

加蓮「身の丈に合わないことした、大言壮語で威張つてるだけだった奴には、丁度いい最後じゃない?」

奈緒「ああ……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：。何だ？光が……」

神・ゲッターロボを再びゲッター線の光が包み込み、真ゲッター1へと姿を戻す。

加蓮「元に、戻った……？」

奈緒「ふう、良かったあ。もう一生あのままなのかと思つたぜ……」

加蓮「あのまんまだと、ライブでステージに立てなくなつちやうし」

奈緒「いや、それ以外にも問題はあるだろ……」

李衣菜「はははっ！つと、それより……」

卯月『……』

李衣菜「ありがとう。助かったよ、卯月」

卯月『そんな……。それを言うのは私達の方ですよ』

凜『私達には、真ドラゴンの動きを止めるくらいしか出来なかつたしね』

奈緒「それでも十分だよ。お陰で、あたし達だけで出来たんだ」

加蓮「ま、それも結局、未央達が力を貸してくれたから、何だけど？」

未央『私達だけじゃ、ランドウは止められなかつた。カレン達だけでも、ランドウは

倒せなかつた？』

李衣菜「つまり、おあいこつてこと」

卯月『そう……：：：：：：：：：：：：：：。ふふっ』

奈緒「大変なのはこれから、だろ?」

未央『…そうだね』

加蓮「真ドラゴンはどうするの?」

凜『私達が、正しい方向に進化させる』

卯月『はい。悪意で歪められちゃいましたから。修正するのも、これからです…!』

李衣菜「そつかあ…結構時間掛かつちゃうんだ」

未央『うん。それで、ついでにお願いがあるんだけど…』

奈緒「お願い?」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

加蓮「…! 真ドラゴンが、動く…?」

ぐいつ、と頭をもたげ、天を仰いだ真ドラゴンの頭部から、ゲッタービームのような

光の柱が放たれ、宇宙に消える。

加蓮「今のは…?」

卯月『これで、ゲッター線を食料にするインベーターは、ここを目指してやってきま

す。今地球の各地を襲っているのも…』

李衣菜「それって…」

凜『これ以上インベーターの好きにはさせない。この星に戦いは拡散させない』

奈緒「その為に、囹になるのか？」

未央『そゆこと。まあ、それでお願いつて言うのが…』

李衣菜「インベーダーの相手は、私達でやれつてことだね？」

卯月『うん。その、勝手なこととして、申し訳ないんですけど…』

加蓮「別にいいよ。卯月の考えには、賛成だし。戦うのは、戦える奴がやればいい」

奈緒「その為に、こつちが出向いてやる必要はないしな。向こうから来てくれるつて

言うんなら、大歓迎だよ」

李衣菜「私達だつて、真ゲッターを使いこなさなきゃいけないんだ。望むところだよ

！」

卯月『…日本に帰るの、遅くなっちゃいますよ？』

李衣菜「折角帰るなら、勝負を決めて凱旋だ！そつちの方が断然…」

奈緒・加蓮「「ロツクじゃん？」」

ズコツ

李衣菜「ちよ、ちよつと2人して取らないでよ！」

奈緒「あははっ！良いだろ。パターンなんだよ、李衣菜は」

李衣菜「パターン?!」

加蓮「あっはははっ！」





## 第4部“異”編

## 第1話『来たる、鬼』

—— モンゴル、メネン平原。

男 「あ、ああ……！」

MB・パゾロフ『!!』

子供 「め、メタルビーストだ！メタルビーストが出た！」

青年 「早くここから離れなきゃ……！早く、父さん!!」

男 「……やめろ……！」

青年 「父さん……？」

男 「やめろっ！これ以上、ここを破壊しないでくれッ!!」

パゾロフ『!!』

子供 「わ、わあっ?!」

青年 「もうダメだ……！」

諦め、身構える。しかし、MB・パゾロフから放たれた触手の鞭が打たれることはな

かった。

青年「……？」

驚いて見上げた視界の先、地面に突き立つ巨大なトマホークが、こちらへの攻撃を弾いている。

青年「これは……」

子供「知ってる！ゲッターだ！ゲッターが来てくれた！」

男「おお、ゲッター……ロボ……」

男達の頭上を2つの黒い影が飛翔していく――。

かな子「あれが最後の避難民でしょうか？」

美波「多分。間一髪、間に合って良かった」

かな子「避難してる人への跳弾を考慮して、トマホークで触手を弾き返すなんて、流石です！美波さん」

美波「大した事はしてないよ。それに、本番はこれから！」

かな子「そうですね……！卯月ちゃんも、李衣菜ちゃん達もいない今、私達だけでも頑張らないと！」

美波「ええ。だけど、無茶は禁物よ。かな子ちゃんのネオゲッターは、まだ修理が終わったばかりなんだから」

かな子「おまけに単独操縦。無茶をしたくても、出来ませんよ。援護に徹します！」

美波「お願いね。それじゃあ……！」

パゾロフ『!!』

かな子「！ ゲッタートルネード！」

MB・パゾロフから放たれたミサイルの軌道を、ゲッタートルネードの突風で逸らす。

かな子「美波さん、今です！」

美波「ええ！ゲッターウイング！」

ブラックゲッターが漆黒の翼を開き、相手との距離を詰める。

美波「ゲッターズパイク！——やあ!!」

スパイクの突き出した拳で、MB・パゾロフの装甲を砕く。

パゾロフ2『!!』

かな子「プラズマブレイク！」

パゾロフ2『?!?』

ブラックゲッターに反撃の姿勢を見せたもう1機のパゾロフを落雷状のプラズマブレイクで制止。

美波「ゲッターレザアーツ!!」

左腕の巨大なレーザーブレードが反り立ち、相対したMB・パゾロフの体を両断。

かな子「ゲッターパンチ!!」

美波「ゲッターキック!!」

ネオゲッター3が捉えていたもう1機のMB・パゾロフも、正面からネオゲッター3、背後からブラックゲッターがそれぞれの一撃によって挟み込むことにより粉碎する。

パゾロフ3『……!!』

美波「逃がさない!」

かな子「フィンガーネット!」

後ろに控え、逃走を図った最後のMB・パゾロフをフィンガーネットで捕縛。

かな子「捕まえました!」

美波「ゲッタービームツ!!」

ネオゲッター3が捕らえたMB・パゾロフを、ブラックゲッターのゲッタービームで蒸発させる。

美波「…これで、この一帯に出没したメタルビーストは全部?」

かな子「周囲に熱源なし…。多分大丈夫だと思います」

美波「そう…」

かな子「戦闘時間320秒、最短記録ですよ!」

美波「かな子ちゃんのお陰ね。被弾も少なくて済んだわ」

かな子「いえ、私の方こそ。私が狙われないように、わざと前に出てくれたんですよ」

ね？」

美波「ふふつ、そろそろ一緒にチームを組んだりしてみる？」

かな子「それも、悪くないかもしれませんがね」

美波「…けど、ここまで晶葉ちゃんの言う通りになるなんて」

かな子「メタルビーストの暴走、ですな」

美波「例えランドウを倒したとしても、戦いが終わる訳じゃない。むしろ指揮系統を失ったメタルビーストは、目的を失い暴れまわる…」

かな子「結局ランドウとの戦いから、何も変わらないって事ですよね」

美波「でも、新しくメタルビーストが生産される訳じゃない。残っているメタルビーストの掃討が終われば、この戦いも終わるわ」

かな子「インベーターも、今は卯月ちゃんや李衣菜ちゃん達が引き付けてくれますから」

美波「メタルビーストを掃討して、インベーターとの決戦に備えたいわね」

かな子「…そんな簡単に、行ってくれるんでしょうか？」

美波「え？」

かな子「恐竜帝国の時も、百鬼帝国の時もそうでした。戦いが終わったと思ったら、新しい敵が出てきて…」

美波「今回も、また新しい敵が出てくる…?」

かな子「はい…。何となくですけど、そんな気がして…」

美波「…:見えない先の事を気にしても、仕方ないんじゃない?」

かな子「それは、そうですね…」

美波「どんな敵が現れたって、私達には描いた未来がある。だからその為にも、負けるわけにはいかない。そうでしょ?」

かな子「…はい」

美波「なら、何度だつて頑張りましょ?きつと戦いを繰り広げた先に、明るい未来が待っているって、信じて」

かな子「はい…:っ。すいません、ちよつと弱気になつちやつて」

美波「気にしないで。私はそれよりも、今日のかな子ちゃんのおやつの方が、気になるかな?」

かな子「そうですね?実は、手作りでプリンに挑戦してみたんです!出撃前に冷蔵庫で、そろそろ食べ頃の筈なんですけど…」

美波「ホント?なら、早く研究所に帰らなくちゃ!」

かな子「はいっ!——オーブンゲット!!」

美波「あ、かな子ちゃん!」

ゲットマシンに分離し、高速で引き上げていく。

美波「もう、気が早いんだから。……」

美波（新しい敵、新しい戦い、かあ……。かな子ちゃんの言ってることも、強ち的外れだとは思えない……。新しい敵が現れて次の戦いが始まって。そして何時もその中心にいるのは……）

美波「ゲッターロボ、か……」

~~~~~ 新早乙女研究所 通路 ~~~~~

美穂「おかえりなさい、かな子ちゃん、美波さん」

かな子「美穂ちゃん、ただいま戻りました〜」

美波「お疲れさま、美穂ちゃん。茜ちゃんにアーニヤちゃんも。飛焰チームはこれから……」

美穂「はい、研究所で警戒待機です」

茜「お昼は美波さん達に頑張ってもらいましたからね！今度は、私達の出番です！」

美波「ふふっ、頼もしい。けど、無茶は禁物だよ？」

アーニヤ「アa……そのために、ワタシと、ミホが居ますよ」

美穂「けど、アーニヤちゃん、たまに茜ちゃんにノつちやうよね？」

アーニヤ「それは……そう言うのが、一番な時も、あります」

美穂「もう〜」

美波「まあまあ、良いんじゃない？最後にチームを上手くまとめられるのが、美穂ちゃんって事で」

茜「その通りです！頼りにしてますよ！」

アーニヤ「ワタシ達の手綱……美穂になら安心して、託せます」

美穂「託される前提なのね……」アハハ……

かな子「頑張ってください。後で差し入れのおやつも持っていきますから」

茜「おやつ！差し入れ!!楽しみしてますっ!!」

美波「ふふっ、それじゃあそろそろ、私達は戦闘結果の報告に……」

かな子「そうですね。えっと、晶葉ちゃんは不在だから……報告はテスターチームに……」

美穂「あ、テスターチームも今はいないよ？」

美波「え？」

茜「至急の用事、とか言っていましたね！晶葉ちゃんに呼ばれて……今は確か……」

えーっと、いな……いなんたら……とか……」

アーニヤ「藺灘波島、ですよ」

茜「それです！」

かな子「藺灘波島？それって……」

美波「伊豆諸島に属する島の1つね。確か、無人島だったと思うけど」

美穂「うん。無人島なのを利用して、ゲッター線を使用する軍用施設を建設する、んだったよね……？それで晶葉ちゃんやゲッター線管理顧問として、そこに……」

かな子「それは分かってるけど、どうしてそこに、テスターチームが？」

アーニヤ「ナー……？ゲッター線を使う施設……実際のゲッターで、使い心地をみる、とか？」

茜「そうかもしれないねー」

美波「理由はともかく……それじゃあ報告はどうしたら……」

美穂「報告書を、まとめておくしかないんじゃないですか？」

美波「それしかないかな……。予定変更しなくちゃ……」

かな子「わ、私も手伝いますから」

茜「それじゃあ、私達も待機室に急ぎましょう！」

美穂「え？うん……」

アーニヤ「出撃もないし、急がなくても大丈夫、ですよ」

茜「それでもですー！」

アーニヤ「？ アカネ」

茜 「何だか分かりませんが、妙に嫌な予感がします!」

美穂 「嫌な、予感…?」

茜 「私にも分かりません!何だかこう、体の奥からむず痒くつて…!どうも何か、落ち着かず!ああもう!私、哨戒に行つてきます!!」 ダツ

美穂 「あつ、待つて!茜ちゃん!」

アーニヤ 「アカネ!アー、ミナミ、カナコ、ワタシ達は、ここで…」

かな子 「う、うん…。どうしたんだろ?茜ちゃん…。何か、何時もと様子違ったよね?」

美波 「ええ。……」

かな子 「美波さん?」

美波 「何でもないので。早く報告書、仕上げなくっちゃ!」

かな子 「…はいっ」

~~~~~ 伊豆諸島 蘭灘波島 ~~~~~

みく 「……ん…!ようやく着いたにや…」

菜々 「ゲットマシン状態での長距離飛行は久々ですからねえ。ナナも、腰の調子が、今一つ…」

瑞樹「そろそろシートに置いてるクッションを変えた方がいいんじゃないかしら？」

菜々「そうかもしれないですね。因みに、何かオススメとか、ありますか？」

瑞樹「丁度、法子ちゃんが好きそうな、真ん中にポツかり穴が開いてるのなんていいんじゃない？」

菜々「真ん中に穴……確かにそうですね。戦闘なんかで長時間シートに座ってる、色々と負担が……って、ナナは痔持ちじゃないですよ！」

瑞樹「あら、法子ちゃんも痔持ちじゃないけど、好みで使ってるわよ？」

菜々「それは……そう言われると、そのう……」

みく「2人は相変わらずにや……」

晶葉「まあ、そのくらい凶太くもなるさ、こんな事柄に関わっていると」

みく「晶葉ちゃん！」

菜々「仕事、忙しくないんですか？」

晶葉「仕事、という程大層なものはないさ。私の勤めは、あくまでゲッター線の管理顧問。ここに敷設中の大規模ゲッター炉心が暴走しないよう、監視しておく程度のものだよ」

菜々「そ、そうなんですか？」

晶葉「大人には大人のプライドというものがあるらしくてな。子供の手など借りなく

ても、立派な施設は出来る、とのことだ」

みく「それで、暇潰しにわざわざ出迎えって訳にや？」

晶葉「概ねはな。私だって、武骨な自衛隊の男連中に囲まれていると、馴染みの顔を見たくもなる」

瑞樹「心中は察するわ」

菜々「それで、今日のご用件は？」

みく「そうにや。意気なりみく達を呼びつけて。ただのホームシックなら晶葉ちゃんが研究所に帰ってくればいいのに」

晶葉「それなんだがな……」

菜々「はい」

晶葉「……まあ、立ち話もなんだろう。一先ずは、建設中の施設を案内しよう」

菜々「え……？」

晶葉「いいから着いてこい。ここスタッフには、研修という名目でお前達のゲッターの整備もさせる。その邪魔をするわけにはいかんだろう」

菜々「あ、成る程」

みく「まさか、その為だけにみく達にゲッターを運ばせたわけじゃないにや？」

晶葉「さあな？単に完成が近づくこのゲッター線稼働基地を、自慢したいだけかもし

れんぞ?」

菜々「そう言うの、自分で言っちゃうんですか…」

菜々「ほえ〜…。一通り見て回りましたけど、流星は最新鋭の軍事施設、ですよね。レーダーも外壁に使われる資材も全部見たことも聞いたこともないようなもので、早乙女研究所なんかよりも防衛は堅牢なんじゃないですか?」

晶葉「対インベーターの最前線となるべく建設された施設だからな。ここが完成すれば、100機近い量産型ゲッターGを運用することになる。安全措施に抜かりは許されないさ」

瑞樹「内的にも、外的にも?」

晶葉「…そう言うことだ」

菜々「どう言うことです?」

みく「それをみくに聞かれても…:瑞樹さん?」

瑞樹「ランドウとの戦いで成果を上げられたとしても、やはりゲッター線、と言う所ね」

みく「…:…?」

晶葉「放射能と言う危険性があるにも関わらず、現状我々が、原子力なんてものに頼つ

ているのと同じ、と言うことだよ。危険性を知りながら、生き残るためと正当性を主張して、反対意見も踏み潰して戦力の拡充を急いでいる」

菜々「けど、それは仕方ないことなんじゃないですか？」

瑞樹「そうね。例えば癌細胞を自ら増やすような行為でも、生き残るためには仕方のないことよね」

晶葉「言うな。その為に最低限、反対派を納得させるために、無人島での建設が始まったんだ」

みく「ここならゲッター炉心が暴走しても、被害は少ないってこと？」

晶葉「ああ」

みく「……はあ……大人の世知辛い事情は分かりたくないけど、細かい部分は一筋縄じゃないかないんだね」

晶葉「それでも、私達は人類の未来の為に動いているんだ。誰に何と蔑まれようが、最早立ち止まることなど出来はしないさ」

菜々「それで、工事も急ピッチで進めてるんですね。わざわざ試作型のゲッターまで持ち込んで……」

晶葉「……」

菜々「晶葉ちゃん？」

瑞樹「そうね。確かに、この現場で稼働しているマシンは、通常の工業機械よりも試作型ゲッターの方が遥かに多いような気がするわ」

晶葉「ここは、ゲッターの運用を前提にした施設だぞ？そして、ゲッターロボは元々宇宙開発用として開発された作業ロボットだ。不自然ではないだろう」

瑞樹「そうかしら？それじゃあ何故、わざわざ私達をここまで呼んだの？ゲッターロボの整備の研修なら、試作型ゲッターで充分じゃない」

晶葉「……」

瑞樹「晶葉ちゃん、貴女何かを試そうなんて、思つてない？」

菜々「何か……？何かつて、何ですか？」

瑞樹「詳しくは分からないわ。だけど、無人島にゲッター線を扱う施設を建造して、ゲッターを集めて……。今回の施設建設は、晶葉ちゃんにとって都合のいい機会だった、違うかしら？」

みく「そんな、何か実験をやるんだとしても、だったらみく達が呼ばれた意味は？」

瑞樹「そうね……実験の先に何かが起こった際の、保険……」

みく「保険!?!」

直後、彼方から爆発音が響く。

みく「——!?……何にや!」



晶葉 「……来たか」

菜々 「晶葉ちゃん……？来たかつて？」

晶葉 「……2週間前だ」

菜々 「え？」

晶葉 「東北のある町からの通報を受けて現場に赴いた。私達は便利屋ではないと言うのに、迷惑な話だった」

みく 「何……？こんな時に何の話をしてるにや?!」

晶葉 「一夜にして一つの町が壊滅した。正確には、その町に済んでいた住人の半数以上が、一夜にして虐殺されたんだ」

みく 「にやっ……?!」

菜々 「そんな事が……？」

晶葉 「そんな話を聞かされれば、誰だつてインベーダーや、ハ虫人類の生き残りの仕事だと想像する。だがそこへ行って私が見たものは、それらの何れとも違う存在との遭遇だった」

菜々 「それって、つまり……？」

晶葉 「そう、新たな敵だ。我々、人類にとつてのな」

瑞樹 「人類の、敵……！」

みく「で、でもどうして、東北に現れたそいつらが、今度はピンポイントでここに？まさか、連中もゲッターを狙って……！」

晶葉「どうだろうな？私は連中をここへ誘き寄せせるために、餌を放っていたからな」  
菜々「餌を、放つ……？」

晶葉「話にあつた東北の町、そこで捕獲した連中の仲間の一匹だ」

みく「っ……！そんな事を……！」

晶葉「ここは四方を海に囲まれた無人島。放した一匹も単に逃がしたのではなく手傷を負わせてある。その状態で脱出を試みるなら、助けを呼ぶしかないだろう？連中の通信手段が、如何なるものかは置いてな」

晶葉「だが昨日、この島に原因不明の落雷が落ちた。藪灘波島は晴天だったと言うのにな。そして、その直後くらいから断末魔のような怪物の叫び声を聞いたと言う作業員の報告が複数あつた」

瑞樹「それで、敵の襲来がある？」

晶葉「ああ、先程の爆発音、そしてこの断続的な振動……。瑞樹達ももう慣れただろう？戦闘の衝撃に他ない」

みく「そんな！ここを襲わせるために、わざわざ……！」

爆発が勢いを増す。

菜々「きやあ!!」

晶葉「真ゲッターはインベーターとの戦いのために動かせん。美波や、飛焰チームも然りだ」

みく「だから、みく達をここに……?」

晶葉「無論、巻き込みたくはなかつたさ。しかし、他に手はなかつた」

瑞樹「言い訳はいいわ。事実を受け止めるだけだもの」

晶葉「……すまない」

瑞樹「段々と早乙女博士に似てきたわ。貴女」

晶葉「……」

瑞樹「行くわよ。みく、菜々さん」

みく「……合点にや!」

菜々「折角の施設を、破壊させるわけには行きませんかからね!」  
タッタッタツツ——。

晶葉「……」

晶葉「ゲッターの、ゲッター線が導く運命には抗えん。それなら、私は……——」

みく「さうて、敵はどこにやあ?」

菜々「あ、あそこ！煙が上がってます！」

みく「…？施設から随分遠くじゃない？」

瑞樹「誰か戦闘している…？試作ゲッター!？」

菜々「そんな…！戦闘用でもない試作ゲッターじゃ…性能はナナ達のゲッターよりも劣るんですよ?!」

瑞樹「尻込みしてはいられないわね。突っ込むわよ、みく！」

みく「任せるにゃ!!」

イーグル号を先頭に機首を下ろし、急降下しながら合体のフォーメーションに入る。

みく「チエーンジゲッターーッーッー!!」

合体しながら更に速度を増し、

みく「ゲッターキイックツ!!」

垂直蹴りで、試作ゲッターと対峙していた“敵”を蹴り飛ばして着地。

パイロットA「ゲッターロボ!？」

瑞樹「試作ゲッターで戦闘なんて自殺行為よ！貴方達は下がちなさい！」

パイロットB「だが、敵を見たこともないタイプだぜ!？」

パイロットA「そのゲッター機だけで、大丈夫なのか？」

菜々「…信用ありませんね、ナナ達」アハハ…

瑞樹「まあ、当てにされるよりはマシじゃない」

みく「それより！あの敵は……！」

体勢を整え、アンノウンと相対する。

アンノウン『グウウ……』

菜々「頭に、角……？何処と無く百鬼メカにも似ているうな……」

瑞樹「角が生えてるって見た目だけは、ね」

みく「見た目だけ……？」

アンノウン『ウグ……ッゲ……ッ……タ……ア………！』

みく「喋った!？」

アンノウン『ゲッターアア!!』

みく「ッ!？」

突如の咆哮と共に襲い掛かってきたアンノウンの突撃を、ゲッター1の身を翻して躲す。

みく「何にや!？こいつ……！」

菜々「ナナ達を見るなり、いきなり襲ってきましたよ」

瑞樹「結局、ゲッターを敵視してるのは、これまでと同じって訳ね」

みく「まくたみく達には分かんないやつかみって訳にや！ホント、どいつもこいつも

よく飽きないにや」

菜々「それで、さつき百鬼メカと似てるのは見た目だけって言うてましたけど？」

瑞樹「奴の体内をスキャンしてみたのよ。そしたら、体内にコックピットのような部分はおろか、機械的なものも確認されなかったわ」

みく「それってつまり……」

瑞樹「まじりつけ無しの100%有機体の巨大生物。敢えて言うなら怪獣って所ね」

みく「……怪獣相手なら、容赦は要らないにや！ゲッタートマホークツ!!」

トマホークを抜き打ち、アンノウンめがけ駆け出す。

みく「うにやああああッ」

両手で携えたトマホークを上段に高々と掲げて勢いよく振り下ろす。

ガギンッ

アンノウン『……!!』

みく「ぐっ……!!」

両手をクロスさせてトマホークを受け止めるアンノウン。

みく「ぐぐぐ……堅いにや……!!」

アンノウン『ゲッターアア!!』

みく「おっと！」

ガードを僅かに開き、覗いた眼光の輝きを直ぐ様察知。後方に身を翻して光線を躲す。

みく「あつぶにや〜…!!」

菜々「流つ石の反射神経ですわね！」

瑞樹「喜んでる場合じゃないわ！次が来るっ！」

アンノウン『シネエエ!!』

みく「んにやあ!!」

続け様に放たれる光線を飛翔して回避。

みく「零距离から射撃なんて、戦いの分かってない素人丸出しにやん！」 ジャキツ

ゲッターマシンガンを構える。

みく「射撃はこうするにやあ!!」

瑞樹「何時もの乱れ撃ちじゃない」

アンノウン『グ……ガツ!?!』

菜々「でも、動きは止まりましたよ！チャンスです、みくちゃん！」

みく「にやあ！喰くらえ〜——！」

コオ…ツ

みく「——ゲッタービイームツ!!」

アンノウン『!!?』

マシングンの弾丸で動きを封じたアンノウンに上空から放たれたゲッタービームは真つ直ぐに延びる。が、

アンノウン『!!』

みく「にやあ!？」

瑞樹「ゲッタービームが…」

菜々「吸収、されちゃいましたあ!？」

アンノウン『キカヌウ!!』

みく「うにやあ?!」

アンノウン反撃の光線を、ゲッターを急降下させて躲す。

みく「ううつ…!ゲッタービーム!!」

アンノウン『ムダ!ムダアア!!』 シユウ…

みく「くうく!やっぱりダメにやあ!？」

瑞樹「ビームによる攻撃は無意味よ。接近戦に切り替えて!」

菜々「けど、近接武器だけじゃ決定力がありませんよ?」

瑞樹「けれどこのまま逃げてるだけでも…。距離を取っても、被害地域が増えるだけ

「よ」



菜々「これまでのパターンだと、吸収できるエネルギーに限度があるかもしれません。ビーム攻撃が、完全に無意味と決まった訳じゃありませんよ!」

瑞樹「そうかもしれないけど、それよりも奴の体に傷を付ける、その隙を突いて攻撃した方が、結果的な被害は少なくて済むわ」

菜々「そもそも傷付けられるんですか? ナナ達の、ゲッターの武器で…」

みく「もうっ! 2人共、言い争いするんなら静かにして!」

アンノウン『ツタアア!!』

みく「にやつ!」

一瞬の隙に、放たれた光線がゲッター1を直撃。

みく「うにやああああああつ?!」

アンノウン『ゲッターア!!』

空中から墜落するゲッター1に、アンノウンが追撃の突進。

みく「がう…ッ」

体勢を立て直すこともままならないゲッター1は、直撃で攻撃を受け、吹き飛ぶ。

みく「ガッ…!」

隆起した地形の、崖面にぶつかって制止。

みく「うう…」

菜々「ぐっ……みくちゃん、ごめんなさい……」

瑞樹「……たつた2発で、これだけ追い詰められるなんて……」

みく「桁外れのパワー……！能力の差は、歴然って事……にや」

菜々「ナナ達だけで勝てっこないですよ……！こんなの！」

みく「諦めちゃダメにや！挫けたらおしまいにや……！こんな所で膝着いてたら、リー

ナちゃんに笑われちゃうよ！」

アンノウン『オワリ……ダアアアア!!』

みく「っ……！」

立ち上がるのがやつとの状態のゲッター1に、アンノウンが迫る。

パイロットA「うおおおおッ!!」

みく「!？」

アンノウン『!？』

パイロットB「おりやああああ!!」

瑞樹「試作ゲッター!？」

突撃を仕掛けたアンノウンに、左右から挟み込むように飛び込んだ2機の試作ゲッターが羽交い締めにする。

パイロットB「へへっ……どんなもんよ？」

瑞樹「その機体では危険よ！早く離れなさい！」

パイロットA「試作機とは言えゲッターなんだ！俺達だって……おわっ!?」

言い終わらぬ内、左右の腕を振り上げ、あっさりと試作ゲッターの拘束を振りほどく  
アンノウン。

菜々「ああ！」

パイロットA「くそっ……！こんのお!!」

ゲッター2によく似た姿形の試作ゲッター。そのドリルを振りかざし、アンノウンを  
攻撃する。

ガギギギツ

みく「みく達の事はいいから！早く離脱を！」

パイロットA「はっ！アンタらの為？違うね！それだけじゃねえ！」

みく「!?」

パイロットA「さっきの一瞬に、俺の仲間が散々やられちゃった！その吊いも出来  
ねえで、男が引き下がれるかア!!」

アンノウン『!!』

ドリルを弾き、巨腕を振るって試作ゲッターを殴り飛ばす。

パイロットA「畜生……ッ！」

倒れ伏しても尚、ドリルミサイルを放ったが、それはアンノウンを貫く事はなく弾け飛び、地面に突き立った。

パイロットA 「つ…この野郎…!!」

アンノウン 『ジャマダ!!』

みく 「つ…!!」

アンノウンの攻撃によって呆気なく破壊される試作ゲッター。

パイロットB 「なっ…!! つ…この、よくもお!!」

続き、ゲッター1によく似た試作ゲッターも特攻を仕掛ける。

瑞樹 「無茶よ!!」

アンノウン 『!!』

パイロットB 「う…ガ…ああ…ツ!!」

アンノウンの攻撃を受け、あちこちの間接からオイルを吹き出し、表装が剥がれても、その試作ゲッターはアンノウンを目指す。

菜々 「ああ…!! どうして…!!」

みく 「もういいよ…!! もうやめてえ!!」

パイロットB 「そいつは出来ない、相談だツ!!」

ゲッターとしての姿を失うほどに傷付きながら、アンノウンの懐に潜り込む。

パイロットB 「これが俺の人生最大の、大博打だあッ!!」

アンノウンの懐で腰に手を回してホールドし、力を込め、

瑞樹「何をする気!？」

パイロットB 「こんのおおおおッ!!」

アンノウン『オ…? オオオオ!!』

アンノウンを持ち上げる。

パイロットB 「さあ、今だ!俺の炉心を撃て!」

みく「えっ!？」

菜々「そんな!嘘ですよね?」

パイロットB 「試作機だろうがこいつはゲッターだ…こいつの炉心に、ゲッタービームを撃てば、炉心内部のエネルギーと同調して威力は爆発的に増大する!」

瑞樹「そうかもしれないけど、貴方は!」

パイロットB 「へへっ、さっきの嬢ちゃん達の会話に乗らせてもらうぜ!」

菜々「つ…:…もしかして、ナナ達の…!」

パイロットB 「炉心のエネルギーで増えたエネルギーなら、この敵だって腹一杯になるだろうさ!…:…ぐっ!」

持ち上げられたアンノウンが抵抗し、試作ゲッターの腕が軋み、悲鳴を上げる。

アンノウン『ハナセ……！ハナセエ!!』

パイロットB「悠長に構えてる時間はねえ！ここで倒さなきゃ、もつと被害が増えるだけだ！だからやれ！撃つんだ、ゲッターロボオ!!」

みく「……」

菜々「みくちゃん……」

瑞樹「みく、辛いなら私がやるわ。コントロールを譲って」

みく「……」

みく「——ゲッターアアービィイームツ!!」

カッ

試作ゲッターの炉心めがけて、ビームは放たれた。

パイロットB「——これが、ゲッター線……！何て温かいんだ……。そうだ、だから俺は

……」

——。

茜「くっ……！ゲットマシンを飛ばしているのに、いなんとか島とか言うのは、まだ着かないんですか！」

アーニャ「蘭灘波島、です」

美穂「晶葉ちゃんからの緊急スクランブルだって、焦る気持ちは分かるけど、落ち着

「こう?」

アーニヤ「そうです。ここで、ワタシ達が慌てても、仕方ありません、ね」

茜「ですが!何だかこうモヤモヤして…!もういつそ、合体して飛んだ方が速くないですか?」

美穂「それは…飛焰にはエネルギーに限りがあるんだから…つて、えっ…きやあっ!」

突如、ゲットマシンの進行方向から強烈な突風が吹き、マシンが煽られる。

アーニヤ「つ…!姿勢のコントロールを…!ミホ、アカネ、無事…ですか?」

美穂「う、うん…。こっちは何とか…」

茜「ですが、何だったんですか?今のは!」

美穂「只の風じゃないよね…。丁度蘭灘波島の方…」

アーニヤ「!」

美穂「何、あれ…!」

見上げた視界の先、蘭灘波島と思われる方角に黒く、巨大なきのこ雲が立ち上っている。

美穂「い、一体何が…?」

アーニヤ「…っ!これは…!」

美穂「アーニヤちゃん…?」

アーニヤ「ワタシ達の進行方向、藪灘波島から、膨大なゲッター線を観測してます！」

美穂「膨大な…?それじゃあ、さっきの突風は…」

アーニヤ「ゲッターエネルギーの、爆発…!」

茜「!」

ギユンツ

美穂「茜ちゃん!」

茜「最早ゆっくりしてられません!とにもかくにも、いなんとか島へ急ぎましょう

!」

アーニヤ「待ってください!」

茜「アーニヤちゃん!」

アーニヤ「ゲッター2に合体しましょう。その方がもつと速い、です」

美穂「合体する為にも、まずは足並みを揃えなきゃ、ね?」

茜「お2人共…!分かりました!」

美穂（ゲッター線の爆発…。まさか2回も見ることになるなんて…）

アーニヤ「ミホ、用意、いいですか?」

美穂「あつ、うん…。何時でも大丈夫だよ」



アーニャ「では、チェンジ！ゲッター2ツ!!」

美穂（茜ちゃんみたいな勘がある訳じゃないけど、嫌な予感がする…）

――。

くくく 施設建設跡地 くくく

晶葉「――…つくは…！これは、爆発の衝撃で飛んできたゲッターの装甲の破片、か…。私を守ってくれたのか？」

装甲の破片と地面との間に出来た僅かな隙間から這いずり出し、焦土となった大地を一望する。

晶葉「みく達、テスターチームは…：生きてはいるだろうな。私が生きていくくらいだ。しかし、この状態では、施設建設はまた、白紙からやり直しだな」

晶葉（それにしても、あの敵…。明らかにゲッターと対峙する時だけ目の色を変えていた。やはり、ゲッター線に導かれて現れる、という訳か）

晶葉「新たな試練、か…。ここまで予測して、貴方はアレを私達に残してくれたんですか」

晶葉（だとしたら、いよいよ私も、貴方を恨みますよ。早乙女博士――）

晶葉「完成は急がなくてはならない、か。早乙女博士、最後の遺産の…」  
つづく

## 第2話 『アーク、胎動』

~~~~ 都内某所 撮影スタジオ ~~~~

カメラマン「——はい、OK!!」

莉嘉「ありがとうございまくすっ！」

カメラマン「今日の撮影はここまで。お疲れさま」

莉嘉「お疲れさまでした〜！」

タツタツ——

スタッフ「さ、撤収するぞ〜。みんな、作業急げ〜」

カメラマン「……」

スタッフ「? どうかしたんスか?」

カメラマン「今日撮影したあの娘、確かアイドルの……城ヶ崎莉嘉ちゃん、だったっけ?」

スタッフ「え? ええ、そうっすけど、それが何か?」

カメラマン「前に噂で聞いた話だと、天真爛漫で無邪気な子って聞いてたけど……」

スタッフ「ええ! 噂通りの、明るい子だったでしょ」

カメラマン「…なあんか違うんだよな〜」

スタツフ「違う、っスか？」

カメラマン「今日来た彼女、天真爛漫で無邪気って言うよりは、何となく子供であろうとしてる、みたいにな〜」

スタツフ「子供であろうと、ねえ。あ、そう言えば」

カメラマン「何だ？」

スタツフ「あの子確か、例のゲッターロボで有名な早乙女研究所と提携してる、アイドル事務所の子っスよね？」

カメラマン「そうなのか？」

スタツフ「ええ、確か。それで、前のほら、ランドウとか言う組織を相手に、海外で戦ってた〜、何て噂もあるんですよ〜！」

カメラマン「戦う？彼女が？流石に眉唾だろう？」

スタツフ「そうは思いますけどね〜。けど、噂の彼女と違和感があるって言うんなら、そのくらいの何かきっかけがあったんじゃないかと、思うんスよね〜」

カメラマン「そう言うものなのか…。まあ何にせよ、どうせ写すなら、裸の彼女を写したいものだな」

スタツフ「犯罪予告？」

カメラマン「違う。何て言うか今日の彼女は、仕事をこなす為に取り繕っている感じがした。もっと素直な、ありのままの彼女を、ファインダーに写したいものだよ」

——撮影スタジオ、エントランス。

莉嘉「……」 トボトボ

「やつほー、莉嘉」

莉嘉「…お姉ちゃん」

美嘉「お疲れ。撮影、大変だった？」

莉嘉「……そんなこと、ある訳ないじゃん。今日も余裕だつて」

美嘉「そう？の割りには、何か疲れてるみたいだったけど？」

莉嘉「気のせいじゃない？疲れてるなんて、それこそあり得る訳ないじゃん」

美嘉「…なら、良かった」

莉嘉「え？」

美嘉「ちよつと、忘れてない？今日が何の日か」

莉嘉「今日？えつと、期末テスト結果が出るのは、来週だよね…」

美嘉「はあ…。アタシとアンタ、ファミリアツインのライブに向けた、合同レッスンの日でしょうが」

莉嘉「合同レッスン…？あ、ああ！」

整備班一同「了解ッ!!」

晶葉「よし。私は何時もの場所に向かう。整備班の指揮は任せたぞ、古田新主任」

古田「は、はいッス〜!」

晶葉「何かあれば秘匿回線で、な」

古田「了解ッス!!」

タツタツタツ——

美波「——晶葉ちゃん!」

晶葉「ん? おお、美波、それにかな子も。どうした? 血相変えて」

美波「どうしたって、蘭灘波島で戦闘があつて、負傷したって聞いてたけど…」

かな子「そうですよ! 実際に頭に包帯巻いて、腕にギプスまで…!」

晶葉「これか? 何、医療班が大袈裟なだけだよ」

美波「そうなの?」

晶葉「ああ、現場にはいたが、戦闘に参加した訳じゃない。爆発の衝撃で吹き飛ばされたくらいだ」

かな子「それじゃあ、ホントに大した事ないんですか?」

晶葉「何度も言わせるな。軽い全身打撲と前腕部骨折。精々全治2ヶ月という所だろう」

かな子「普通それを大した事ないとは言わないんじや…」

晶葉「大した事はないさ。…アイツらに比べたらな」

かな子「アイツら…?」

美波「みくちゃん達、テスターチームのみんなの事?」

晶葉「ああ。ゲッター炉心爆発の爆心地の間にいたからな。例えゲッターに乗って
いようと、無傷では済まされん」

かな子「みくちゃん達は、今…」

晶葉「都心の総合病院に移送した。ここの設備では、手の施しようがなかったからな」
美波「そんなに…」

晶葉「しばらく旧ゲッターは使えん。お前達にも、これまで以上に働いてもらう事にな
るぞ」

かな子「それだけ…?それだけなんですか?」

晶葉「ふむ…?それだけ、とは」

かな子「みくちゃん達は死ぬかもしれない怪我まで負ったんですよ?!それなのに…
!」

美波「かな子ちゃん、気持ちは分かるけど」

かな子「美波さん…!」

美波「ここで晶葉ちゃんを責めても、仕方ないよ。悪いのは、みくちゃん達をやったその相手じゃない」

かな子「それは…！そうですけど…」

晶葉「知りたいか？」

かな子「え？」

晶葉「みく達をやった相手を知りたいか、と聞いている」

美波「相手の事、つて…」

晶葉「…付いてこい」

かな子「…？」

美波「？…」

—。

かな子「ここつて…」

美波「研究所の地下に向かっているみたいだけど、この先に何かがあるの？」

晶葉「みく達を襲った敵…。その仲間の標本さ」

かな子「標本…!?そんなものがどうしてこの研究所に？」

晶葉「私が欲した訳じゃないさ。しかし、日本各地に出現した奴等を駆除し、残った遺体は研究所で回収しろと政府に言われてしまえば、断ることも出来んな」

かな子「どうして、そんな…？」

晶葉「解剖して少しでも敵の正体を知りたいんだらうさ。前に、インベーターの解剖を行ったのが裏目に出た結果だな。…さて、着いたぞ」

美波「ここ、研究所の冷凍庫…」

晶葉「生物だったモノの死骸を腐らせず保管する場所と言ったら、ここくらいしかないからな」

言いながら、白衣の懐からカードキーを取り出し、扉のロックを解除。開いた扉の間から白い冷気が漏れ出す。

かな子「うっ…寒う…」

美波「これが…」

晶葉「そう、これが我々の、新たな敵だ」

冷凍倉庫内に所狭しと並べられた細長い円柱状のカプセル。その中に納められたモノは、

かな子「鬼…？…って事は、百鬼帝国の…」

晶葉「違う」

かな子「え？」

美波「どうして言い切れるの？」

晶葉「違うんだよ。塩基配列から血液中に含まれるその構成要素に含まれるものまで全て、な」

かな子「それじゃあ、これは…」

晶葉「百鬼帝国とは違う存在。正真正銘の鬼、そう呼ぶしかない存在だ」

美波「正真正銘の、鬼…」

晶葉「今全国で、コイツらの出没が相次いでいる。当初はこのような人間大の鬼が、各地に住まう人間を襲い、その肉を喰らっていた」

かな子「人間を、喰らう…」 ウツ

晶葉「しかし今回、はじめてゲッターと同格の大きさを持った鬼が姿を現した」

美波「それじゃあ、みくちゃん達を追い込んだのって!」

晶葉「コイツらの仲間、そう見て間違いはないだろう。多少形状や、特徴は異なるが、頭部と見られる箇所は角のような部位が生えているなど、共通している部分も多い」

美波「…けど待って。外見の特徴って、その時現れた巨大な鬼って」

晶葉「そうだ。これまでの機械仕掛けの敵とは違う。ゲッターと同等の大きさで、ゲッターを上回る力を持った生き物だ」

かな子「い、生き物…!?!」

美波「そんな生物が存在が、あり得るなんて」

晶葉「少なからず、この世界の生物ではない。そして進化したのだ、ゲッターを倒すために。面白いだろう?」

かな子「え…?」

晶葉「塩基配列は百鬼兵と異なると言ったが、それでもこの地球上に存在する生物とそう異なるわけではない」

鬼の標本が入ったカプセルに手を着き、ふつと笑みを作る。

晶葉「では、何故奴等は自らを巨大化させる事が出来る?その因子は、仕組みは何だ?自然界において巨大化などと、非合理的な進化を遂げたその理由は?」

かな子「晶葉ちゃん…?」

晶葉「巨大化した個体は、ゲッターの存在を確めるようにその姿を現した。まるでゲッターと競うようなじやないか?巨大な姿のゲッターロボ、その存在に抗うかのようには見えないか?」

かな子「それは…:ええつと…」

晶葉「憎悪か、敵愾心か。それほどゲッターが憎いのか?自然の摂理をねじ曲げた進化を遂げてまで、滅ぼされなければならぬものなのか。我々は、ゲッターは!」

美波「待つて!…:話がずれてきてない?相手の素性には興味はあるかもしれないけど。今は、晶葉ちゃんが望むような応えは返せないと思う」

晶葉「……すまん。少し暑くなりすぎだな。一度、ここを出よう。長居するような場所でもないしな」

ツカツカツカ――

晶葉「……」

かな子「え、え〜つと、晶葉ちゃん？」

晶葉「少なくとも、奴等の狙いはゲッターだ。これまでの小規模の襲来は、連中で言うところの斥候のようなものだろう。だから試作機とは言え、ゲッターを集めた藪灘波島に奴は現れた」

美波「……一つ聞きたいんだけど」

晶葉「何だ？」

美波「敵の狙いが分かっているんだったら、ゲッター線を放棄する事は、出来ないの？」

晶葉「無理だな」

美波「……少し位、考えてみてくれないんじやない？」

晶葉「敵は今回の鬼ばかりではない。私達にはインベーターとの決戦だって残っているんだぞ？ゲッター無くして、それをどう乗り越える？」

美波「ステルバーのように、世界各国のスーパーロボット軍団がいるじゃない。みんなで力を合わせれば！」

晶葉「無理ではない、か？だがそうなれば、もつと多くの犠牲が出るぞ。美波の家族や、仲間も犠牲になる」

美波「っ……！」

晶葉「インベーターを倒すにはゲッターの力が必要不可欠なのだ。ゲッターを捨てれば、必要のない犠牲を生む事になる。ならば、敵が襲ってくる事も覚悟の上で、ゲッターで戦い続けるしかない」

美波「……」

晶葉「自分達の愛する者を守る為だけにでも、な」

美波「……？ 晶葉ちゃん……？」

かな子「あの、美波さん」

美波「かな子ちゃん、何？」

かな子「私も、ゲッターで戦う道を選びます」

美波「えっ」

かな子「だって、ずっと戦ってきたしから。今更、ゲッターが敵を誘き寄せから、とかゲッター線が危険だからとかでゲッターを捨てるのは、何て言うか……都合が良い気

がしちやいますから」

美波「……」

かな子「私、悔しいんです。みくちゃん達が体を張ってまで戦っていたのに、何も出来なかつた自分が。力があれば、ゲッターがあれば、私だつて戦えたのにつて」

美波「だから、だから私達はゲッターから離れられないの？ゲッターと一緒に、死ぬ瞬間まで戦い続けなくちゃいけないの？」

かな子「私はそうだつて、思います。きつともう、私達とゲッターは運命共同体なんですよ」

美波「運命、共同体……」

晶葉「そうだ。ゲッターと共に生きるんだ。その為に、頼むぞ」

かな子「でも、相手はゲッターの炉心を爆発させて、ようやく倒せるような相手、何ですよね？今の私達の戦力じゃ……ゲッター飛焰に頼るしか」

晶葉「問題はない。もう間もなく、新たなゲッターロボが完成する」

かな子「新たな、ゲッターロボ……!?!」

晶葉「尤も、雛形を遺したのは早乙女博士だがな」

かな子「博士が……？それじゃあ……」

晶葉「早乙女博士が遺した、最後の遺産さ。パイロットも選抜は済んでいる。3人の

内の2人、かな子と美波、お前達だ」

かな子「わ、私と美波さんで…?」

美波「…最後の1人は、晶葉ちゃん?」

晶葉「私は違う」

かな子「え…?じゃあ、最後の一人は…: 一体、誰なんですか?」

晶葉「直に分かる」

美波「直に…?」

かな子「え…: ? どういう事ですか、それ…:」

「おっ、いたいた」

晶葉「むっ、美嘉じゃないか」

美嘉「やつほー★今日も出撃で、お疲れな感じ?」

かな子「え?ええ、まあそうですけど…:」

美波「どうしたの? わざわざ美嘉ちゃんが研究所に来るなんて」

美嘉「どうしてって、ははっ。まさか本当に忘れてるとはね…:」

美波・かな子「えっ?」

美嘉「もうすぐアタシと莉嘉の、ファミリアツインのライブだって。2人もゲストで

出演するんですよ?」

美波「えっ？あゝ、そう言えば……！」

かな子「今日って、合同レッスンの日……！すっかり忘れちゃってましたあ！」

美嘉「全く……。莉嘉が連絡してもでないし、それなら直接って、出向いてきて正解だったわ……」

美波「ごめんなさい……！直ぐに支度してきますから！かな子ちゃんっ！」

かな子「は、はいっ！また後で！その、玄関のトコで待つててください!!」

タツタツタツ——

美嘉「まったく、世界平和は大事な使命だとは思うけどさ？ちよつとはこつちの都合とかも考えてほしいよね〜」 チラッ

晶葉「すまん。卯月達ゲッターチームは勿論、李衣菜達真ゲッターチームも欠いてな」

美嘉「ま、別にいいけど」

晶葉「それにしても」

美嘉「ん、何？」

晶葉「まさか美嘉の方が来るとはな。研究所への用事なら、莉嘉を寄越せば良かったらう。莉嘉の方が、こつちの中に詳しいんだからな」

美嘉「ああ、それは確かにそうだけどさ」

晶葉「？」

美嘉「莉嘉、ここに来ると色々思い出しちゃうみたいでさ」

晶葉「そうか…」

美嘉「今も大変だよ。莉嘉、主任が死んだ時の事思い出して、夜中もたまに目が覚めて泣いちゃうから、一人で寝かせられもしない」

晶葉「精神が未熟であるが故に、か。莉嘉には辛い経験をさせてしまった」

美嘉「…アンタはいくつなんだか」

晶葉「私は良い。とつくに覚悟は出来ているし、それに今回がはじめてと言う訳でもないしな」

美嘉「そっか、晶葉も晶葉で早乙女博士を…」

晶葉「同じ時間を共有し、共に笑い合っていた相手がある日突然いなくなる。何の予告もない以上、覚悟など出来るものではない。まして、莉嘉は面白半分だ」

美嘉「本来なら体験することも出来ない非日常。その雰囲気逆上させているような気は、確かにしてたよ」

晶葉「みずからに与えられたものは、当たり前前に存在し続ける。本意でないにせよ、無意識にそう思っていただけに、反動は大きい」

美嘉「貴重な経験になったって、アタシは思ってるよ」

晶葉「貴重な経験、か」

美嘉「これでもう、無茶を言い出すことは少なくなると思うからさ。…ゲッターのパイロットになる、とか」

晶葉「…主任の死が、それを思い止まらせた、か」

美嘉「主任の家族には悪いけどね。莉嘉が積極的に研究所に行かなくなつて、正直ホツとしてる」

晶葉「美嘉は、莉嘉がパイロットをするのには反対か。やはり」

美嘉「当然でしょ。莉嘉はまだ中学生。これから勉強する事だつて一杯あるんだから」

晶葉「自ら危険な事に足を突つ込むのは快くは思わない。家族ならば尚更、か」

美嘉「大事な妹だからね。莉嘉の未来を誰かに奪われてたまるもんですかって」

晶葉「しかしそれは、美嘉のような、戦う事が出来ない人達を守るための行いでもあるんだぞ」

美嘉「だから何？悪いけど、アタシにとつては何億何千の赤の他人よりも、この世にたった一人の妹の命の方が、よっぽど大事だよ」

晶葉「……」

美嘉「確かに今のご時世、戦わなきや生き残れない時代なのかもしれない。だけ

ど、みんながみんな戦わなきゃいけない訳じゃない。さっきの晶葉の言葉じゃないけど、戦う事が出来ない人達のために、晶葉や卯月達がいるんでしょ？」

晶葉「……。そうだな、確かに美嘉の言う通りだ」

美嘉「でしょ？なら、莉嘉を無理矢理戦わせる、みたいなことはやめてね？そうなら、アタシも黙ってはいられないから」

晶葉「肝に命じておく。が、私も、戦えない者に無理強いをするほど野暮じゃないつもりだ」

美嘉「そ。じゃあ一安心しとく。さっきの晶葉の態度、莉嘉を無理矢理にでも、ゲッターに乗せようとしてるみたいだったからさ」

晶葉「流石にそんな事はしないさ。さ、美波達の準備も終わる頃だろう。そろそろエントランスに向かったらどうだ？」

美嘉「そうする。晶葉達も頑張ってるね、それじゃ」

タツタツ——

晶葉「ああ、それではな」

晶葉「……無理強いでは意味がないのだ、意志がなければ。艱難辛苦をも喰らい尽くす、強い意志がな」

——　そして、数日後。

くくく 都内某所 LIVE会場・控え室 くくく

かな子「皆さくん、ライブ、お疲れさまでしたく」

美嘉「お疲れく★」

かな子「打ち上げ、つて言うにはささやかですけど、おやつを用意してますよ。一息吐きましよう」

美嘉「ささ、やか…？これが？軽くスイーツピュッフエくらいあるけど…」

美波「ちよつと作りすぎじゃない？かな子ちゃん…」

かな子「え、そうですか？」

莉嘉「いいじゃん、いいじゃん。かな子おやつだもん。いくらだって食べられちゃうよー！」

美嘉「あ、こらっ。両手に持って食べない。行儀の悪い…」

莉嘉「えへへく」

美波「ふふつ、莉嘉ちゃんつてば」

かな子「けど、今日はホント、良いライブになりましたね」

美波「ええ、こんな本格的なライブ、1年ぶり…：ひよつとしたらもつとかしら…」

かな子「これまでも復興応援、つて形で小規模のライブはしてきましたけど。そう言う体面も関係なく、ライブが出来たのは、本当に久し振りですね」

美波「ちよつとずつ、本当にちよつとずつだけど、元の日常が戻ってきてるって、事なのかな？」

かな子「そうだと、嬉しいですけど」

美嘉「ちよつとちよつと。ライヴが終わったばかりで、何浮かない顔してるの？早くしないと、ここにあるお菓子、全部莉嘉が食べちゃうよ？」

かな子「ああ！待ってくださいよ、少しは残してくださいっ！」

美波「あはは…。まさか、ほとんどを自分で食べるために用意したんじゃ…」

コンコンツ

美波「あ……はい？」

ガチャツ

晶葉「失礼するぞ」

美波「あ、晶葉ちゃん」

かな子「晶葉ちゃん……ングツ!?ゴホツゴホツ」

美嘉「ああほら、大丈夫？お茶、お茶」

かな子「ゴホツ……ありがとうございます…。ゴホツゴホツ」

美波「所で、どうかしたんですか？わざわざこんなところまで…」

晶葉「こんな所とは。私だってアイドルだ。仲間のライヴくらい観に来るさ」

美嘉「それじゃあ、ライヴの感想を良いに、わざわざ?」

晶葉「ああ。良いライヴだった」

莉嘉「ありがとう、晶葉!」

晶葉「莉嘉も、様になったじゃないか」

莉嘉「へへへっ…!」

晶葉「ああ、それじゃあ」

莉嘉「え、もう行っちゃうの?」

晶葉「ふふっ、いい気分転換になったさ」 ガチャツ

美波「あつ、待って!」 タツ

かな子「美波さん?」

美波「待って、晶葉ちゃん!」

晶葉「:どうした? 血相を変えて」

美波「本当に、ライヴを観に来ただけなの?」

晶葉「可笑しな事を聞く。言っただじゃないか、気分転換にはなったと」

美波「気分転換?」

晶葉「丁度仕事は一段落着いた所だ。暫く研究所に籠りきりでもあったし、ライヴステージなど久しく感じるものもある」

美波「仕事……？」

晶葉「折角だ。見てみるか？」

美波「え？」

晶葉「最後のゲッターロボ」

美波「……！」

晶葉「早乙女博士が遺し、私が仕上げた」

美波「最後のゲッターロボ……」

歩みを止めない晶葉に続く。

晶葉「ふっ……。打ち上げは良いのか？」

美波「私を乗せるつもりなんですよ？なら、確かめてもいいんじゃないって、そう思っただけ」

晶葉「そうか」

かな子「あ、あの……っ！」

美波「かな子ちゃん？」

かな子「私も行きます！」

晶葉「ほう……」

かな子「いいですよ？私も、チームの1人ですから」

晶葉「ふふつ、大層なお披露目会になりそうだ」
ツカツカツカ——

莉嘉「——美波、かな子！……行っちゃった」

美嘉「莉嘉」

莉嘉「お姉ちゃん……？」

美嘉「ダメだから」

莉嘉「え？」

美嘉「行ったら、ダメだから」

莉嘉「……。行かないよ……。何処にも。もう、あんな思いは……」

ビ————ツ　　ビ————ツ　　ビ————ツ

莉嘉「ふえ！な、何……!？」

美嘉「これ……! 敵襲警報！」

莉嘉「敵……？」

美嘉「とにかく避難するよ！急いで!!……えっと、この近くの避難シエルターは……」

莉嘉「敵……敵が来るの……? みんなを傷付ける敵が……。大切なものを奪う敵が……」

莉嘉「アタシは……!——」

——。

ウウウウウウ……ン…… ウウウウウウ……ン……

—— 移動中、車内。

美波「これは、警報が……!?!」

かな子「敵襲ですか!?! 一体何処から……!」

晶葉「異空からさ。見ろ」

美波「えっ、上空?」

かな子「あれって……」

美波「前に早乙女研究所にも現れた、空間の歪み」

晶葉「ワームホールだ。SF的に名付けるのならばな」

美波「それじゃあ、本当に異次元からの敵襲だつて言うの?」

晶葉「恐ろしい執念だろう?ただゲッターを葬る為に、私達には想像も出来ない手段を使って次元の壁を超越し、襲ってくるのだ」

美波「執念……。敵はそこまでして、ゲッターを……!」

かな子「と、とにかくっ!敵が来る位置が分かっているのなら、早く迎撃しなきゃ……!このままじゃ市街地が戦場になって、折角復興した街が!」

晶葉「気持ちは分かるが、直にゲッター飛焰も来る。現れる敵は茜達に任せよう」
かな子「でも……」

美波「私達は、私達で新しいゲッターの所に行くんだよ、かな子ちゃん」
かな子「え？あ……」

美波「この先何があったとしても、ゲッターのところに行けば出撃できる。今は茜ちゃん達を信じようよ」

かな子「……はいっ」

晶葉「では、改めて私達は行くとしよう。新たな地獄への水先案内人、ゲッターアークの元にな」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……

アーク……

芳乃「……ほー」

アーク……

芳乃「……」

アーク……

芳乃「ほ……」

アーク▽……

芳乃「目覚めは近くー。しかしー、焦ってはいけませぬよー。加蓮さん曰くー、年頃の乙女と言うものはー、準備に時間が掛かるものでしてー」

アーク▽……

芳乃「故にー、わたくしが迎えに行つて参りましょー。そなたも準備しておくのですよー?」

アーク▽……! カッ

芳乃「ふふつ。逸る気持ちは、抑えられぬものですねー。ではー」

芳乃「参りましょうか、頼みますねー。ゲッターD2ー——」
つづく

第3話 『仔竜、吠える』

茜 「夜空の星が輝く街に、邪悪な気配が忍び寄る——」

茜 「助けを求め、嘆きを叫ぶ人々の、涙背負って正義の鉄槌!!」

茜 「旋風合体、ゲッターロボ飛焰!!」

茜 「お呼びとあらば、即参上っ!!」

——市街地、夜。

茜 「さあ!! 敵はどこですか! 私とアーニヤちゃんと美穂ちゃんの、このゲッター飛焰が、相手をしますよお!!」

アーニヤ 「探さなくても、もう暴れてます。あそこに!」

茜 「むむむっ……見たことないタイプですね! 棘付き鉄球に体が付いてます!」

アーニヤ 「メタルビーストや、インベーターとは、データが一致しません」

? 『ガアアッ!!』

茜 「おっと!」

相手の下半部。棘付き鉄球に似た部位からミサイルのように放たれた無数の棘を、上空でゲッターを大きく旋回。狙いから外した後に縦横無尽にジクザクと飛来する刺の

隙間を縫うように飛び抜けて往なす。

茜 「数だけは大したものです！そんな攻撃、当たりはしませんよッ！」

アーニヤ 「今の回避パターンを、プログラムにインプット、しました。次の動きで最適化、出来ませす」

茜 「ありがとうございます！で、敵の解析は！どうですか？」

美穂 「ちよつと待って……もうちよつと。出た！……機械反応はあるけど、生体反応？あの敵全体から……」

茜 「つまり……どう言うことですか!？」

アーニヤ 「あれは巨大な生命体……インベーターに似ている……。けどそれとは、別種の、敵です」

美穂 「もしかして、晶葉ちゃんが言った、みくちゃん達を倒した相手……!？」

？ 『ガアアッ!!』

茜 「何の!？」

放たれた攻撃を再度回避。そこから目標に対して直線軌道に入り、一直線に肉薄。

茜 「遠距離からチクチクと……何時までも、やられてるばかりではありません!？」

拳の隙間から鉤爪を覗かせ、反撃。

茜 「たあッ!!」

ガギ…ンツ

? 『……』

茜 「ぐっ……がつ！ 思いの外、固いですね……！」

相手が右腕そのものとなっている巨大な鎌を振るい上げる。

? 『グガアツ!!』

茜 「っ……！」

振り下ろされた大鎌を、咄嗟に両腕を交差させて防ぐ。

茜 「うぎぎぎ……！」

美穂 「何とか攻撃は防いでる……けど」

アーニャ 「この距離で、さっきのミサイル攻撃を受けたら……！」

? 『ッ!?!』

茜 「!? 何ですか!」

プロト・ゲッター1にも響く衝撃。彼方から放たれた攻撃が敵を仰け反らせた。

芳乃 「今の内に回避を。体勢を整えて下さいませ。お早く」

美穂 「ゲッターD2……芳乃ちゃんが乗ってるの?」

アーニャ 「細かい話は後……。アカネ、離脱を」

茜 「了解ですっ！」

素早くプロト・ゲッター1を持ち直し、離脱。距離を取り、ゲッターD2と合流する。

美穂「ありがとう、芳乃ちゃん」

芳乃「……」

美穂「芳乃ちゃん？」

芳乃「何とも禍々しき姿。破壊と殺戮の本能に支配された、悪意の塊でして」

美穂「悪意……？あ、あの敵のこと」

芳乃「暴鬼の如き荒々しき力と、獣の如き闘争本能。決して無視しておくことの出来ない化け物でして……！」

アーニャ「ボウキ……？ケダモノ……キジユウ？」

茜「キジユウ？鬼獣ですか！何も名前がないよりはいいですね！」

美穂「鬼獣……！芳乃ちゃんの言葉じゃないけど、街を破壊する以上、放っておけないのに変わりはないよ！」

茜「ですね！鉤爪が効かないのなら、トマホークでぶった斬ってやりますっ!!」

芳乃「援護は致します故。思う存分、舞い躍って下さいませ」

茜「ゲッターアアトマホオオクツ!!」

ゲッターD2がライフルを構え、プロト・ゲッター1がトマホークを抜き放つ。

茜「——はっ！」

プロト・ゲッターのやや後方、引目の位置に右手で握ったトマホークを構え、一瞬の溜めを作った後、一気に加速。

鬼獣『…!?!』

瞬く間に、鬼獣の懐に飛び込んだ。

芳乃「抵抗はー、させませぬよー」

鬼獣『?!』

ゲッターD2がライフルを撃ち、鬼獣の動きを牽制。

茜「ちよあ——!」

その隙に、大上段に持ち上げたトマホークを勢いよく振り下ろした。

茜「たあツ!!」

鬼獣『?!?!』

縦一閃。トマホークによって断たれた断面から血飛沫が迸り、鬼獣は血溜まりに倒れ伏した。

美穂「な、何か凄惨だね…」

アーニヤ「これで、倒しました、か?」

茜「動かない以上は、そう言うことではないですか? 私達の勝利です!」

芳乃「しかしー、そう簡単にもいかぬようでしたー」

茜「!?」

芳乃「上をー、ご覧下さいませー」

美穂「上……っ?!あれって……!」

芳乃「異界門が再び開かれましてー。先程のは前哨戦とー、そう言うことでございましてよー?」

茜「何が来ようと相手になつてやります!この街をこれ以上、破壊させませんよー!!」

アーニヤ「ワームホールから熱源、複数……これは……!」

茜「どうしたんですか!?!アーニヤちゃん!」

アーニヤ「敵が、鬼獣が……群れで来ますっ!更にその後ろ……Вы да ю щ и й с я……」

茜「ぶら……?どう言うことです!」

美穂「見て!空間が捻れた、向こう」

茜「……!?!あれは……!」

美穂「鬼獣……ううん、ゲッターよりも、一際大きい……」

茜「戦艦ですか?それとも、敵の要塞……!」

芳乃「……ゾルドXX」

茜 「ゾルド……？」

アーニヤ 「どうして、名前を……？」

芳乃 「何としても倒さねばなりません。あれは、この世界に破滅をもたらすモノでしてー」

美穂 「破滅……」

茜 「言われなくても、倒すつもりです！」

美穂 「大きいので、そのゾルド何とかって言うのも勿論だけど、他の鬼獣も……さつき
の鬼獣の仲間、なのかな？」

茜 「UFOみたいなのに人魚型！随分とバリエーションが豊富ですね！」

アーニヤ 「攻撃パターンも予想出来ません。慎重に、って言っても仕方ありません、
ね」

？ 『キシヤアアアツ!!』

下半身が円盤のような形をした円盤鬼獣が来る。

茜 「ぬう……！」

手に持った槍を突き付ける円盤鬼獣の攻撃を、トマホークの柄で受け止める。

茜 「ぐっ……！芳乃さん！」

芳乃 「ゲッターびーむをー」

プロト・ゲッター1が抑えた円盤鬼獣を、ゲッターD2のビームが射抜く。

茜 「やりました！ ナイス援護射撃です！」

芳乃 「いえいえー」

アーニヤ 「一体の撃破で、喜んではいられません…！ 次々、鬼獣が来ます！」

ワームホールを潜り抜けた鬼獣達が次々に迫り、口から火炎や電撃を放ち、ゲッターを攻撃する。

茜 「うわつとー！」

芳乃 「回避をー」

鬼獣の攻撃を躲わしていくが、目標を失った攻撃は真下、地上の市街地へと落ちていく。

茜 「しまった…！」

美穂 「敵を早く倒すことは大事だけど、街の被害を拡大させるのもダメだよ！」

茜 「敵の攻撃は防衛するか、違う方向に流すしかありませんか！ うう…！ 難しい戦闘になりそうですっ！」

アーニヤ 「けど、やるしかありませんよ！」

芳乃 「支援は致しますー。茜さんは茜さんの思うままにー、舞ってくださいー」

茜 「…頼みます、アーニヤちゃん、美穂ちゃん、芳乃さん！」

アーニャ「Da!」

美穂「うんっ!」

芳乃「はいー」

ゾルドXXX『——!』

茜「何の目的があるかは知りませんが、これ以上の無法は許しません!必ず、全員追
い払ってやります!!」

晶葉「さあ、着いたぞ」

美波「…着いた?ここって…」

くくく 旧早乙女研究所・跡地 くくく

晶葉「ここからは歩きになる。暗い上に足元も悪から、気を付けるんだぞ」

かな子「ほ、本当にここに新しいゲッターがあるんですか?格納庫とか、そう言う設
備的なのは、何も見当たりませんか?」

晶葉「施設ならしつかりあるさ。ここにな」タンタンツ

そう言つて足で地面を叩く。

かな子「地面?」

晶葉「では、行こうか」

美波「奥に行くの？進んで大丈夫なの？」

晶葉「ん？ああ確かに、ここら一帯はかつてのゲッター線爆発で、通常と比較しても数倍のゲッター線が滞留している。が、僅かな時間なら問題はない。現に、私はほぼ毎日こうして出入りしていたのだからな」

かな子「ほぼ毎日…？」

晶葉「ああ。うってつけの隠れ家さ、ここは。政府の連中やゲッター線に造詣のない者は恐れて近付かない。幽霊騒動もあるからな」

かな子「幽霊騒動？」

晶葉「事故当時逃げ遅れた研究所員の幽霊が出るらしい」

かな子「ほ、ホントにお化けがでるんですか…?!」

晶葉「インベーターなんてモノがいるくらいだからな。今更現れたところで、驚きもしないが、残念ながら私はまだ出会ったことはない。…何でも白衣を着た小柄な姿で、この辺りを彷徨っているらしいんだがな」

美波（それってもしかして…）

かな子（晶葉ちゃんのこと、何じや…）

晶葉「さて、市街地の戦闘も気になるし、急ぐとしよう。こつちだ」

晶葉を先頭に、薄暗い夜の森の、獣道のような道を突き進む。

美波「それにしても、人目を忍んで、こんな所で開発を進めていたなんて……」
かな子「研究所じゃダメだったんですか？」

晶葉「まあ、既存のゲッターロボだけでも、結果は出せているからな」
かな子「？」

晶葉「政府連中にとつては、ゲッターは人類防衛の要かもしれないが、同時に癌でもある、と言うことだよ」

美波「ゲッター汚染。ゲッター線が持つ危険性は政府にとつても懸念する材料！つ、つてことだよな？」

晶葉「ランドウとの戦いで有耶無耶になつてはいたが、無罪放免、許されたと言うわけではない。そのランドウの戦いの中でも真ゲッターは核エネルギーを吸収すると言う事を仕出かしている」

美波「抑止力としての核が、意味を成さない……」

晶葉「そんな力を日本だけが所有しているも、逆に世界中に拡散されたとしても、今の世界の勢力図に何かしらの変化があるのは明白だろう」

かな子「だから、えつと……ゲッターの運用に慎重になつてる？」

晶葉「そう言うことだ。現存している分のゲッターはあくまで国防戦力として維持することは出来るだろう。しかし、そんな中で新たなゲッターの開発など。諸外国は勿

論、世論も黙ってはいないだろう」

晶葉「…と、ここだ」

そう言つて地面と同化してカモフラージュされたマンホールのような重厚な扉を引き上げる。

かな子「これは…」

晶葉「ここから地下に降りる。降りた先が、あの事故から奇跡的に遭された、研究所の地下区画だ」

かな子「地下区画…」

晶葉「付いてきてくれ。くれぐれも、足元には気を付けてな」

そう言つて、頼りない鉄梯子を下に向かつて進んでいく。その先には、

美波「真つ暗…」

晶葉「待つてろ。今電気を点ける」

かな子「うっ…」

突然の点灯に視界が明滅する。そこは、

——旧早乙女研究所跡・地下区画。

かな子「スゴい…！早乙女研究所の施設、そのまんま…！」

美波「まだこんなところが残されていたなんて…」

晶葉「あのゲッター線爆発に呑み込まれず残っていた空間だ。ゲッター飛焰も、ここで発見された」

美波「え？」

晶葉「もう少し、歩くぞ」

かな子「ま、まだあるんですかあ？」

晶葉「……」

かな子「ああ、待ってくださいー！」

美波「施設が無事だったのは素直に驚いたけど、復旧させるのは大変だったんじゃない？」

晶葉「いいや。この区画専用の予備動力も無事だったからな。開発中のゲッターの炉心も合わせて、さほど苦労はなかったさ」

美波「予備動力まで？何だか都合のいい話……」

晶葉「だからこそさ。この区画が我々に遺されたのは奇跡なのか、必然なのか。ここで眠っていた2体のゲッターは、それを知る鍵でもあるのだ」

かな子「だから、ここに籠るような真似をしてまで、開発を決めたんですね」

晶葉「ああ。まあな」

美波「世間の反対を押し切ってまで？」

晶葉「……」

美波「さっきの話の続き。晶葉ちゃん、外国や政府、世論まで快く思わないことを知った上で、開発してらんでしょ？」

晶葉「政府の目論見は甘いんだ。今脅威となる敵を退けられたところで、この先それ以上の脅威が現れないとは限らない。現に、新たな敵は今まさに我々の目の前に現れたのだからな」

美波「それは、ゲッターを狙って現れた可能性も、あるわけだよな？」

晶葉「そんなもの、卵が先か、鶏が先かの問題に過ぎない。私達は生き残らなければならぬ。そうだろう？」

美波「……」

晶葉「生き残る為には如何なる手段をも講じる。生に対して貪欲でなければ

、何者にも未来は与えられない。……ここだ」

突き当たり。1つの扉の前に辿り着く。

晶葉「その為に手を尽くしたんだ。早乙女博士が遺した資料を漁り、博士が40年と言う長い時間を掛けて築き上げたゲッター線研究の全てを半年と言ふ僅かな時間で吸収し、プロト・ゲッターを、ゲッター飛焰を生んだ」

晶葉「言わばこれは集大成なんだ。早乙女博士のゲッター研究の成果。それを受け継

いだ私の、ゲッターと共に人類を新たな未来へ導く為の——！」

カードキーでセキュリティを解除。気圧が下がる音がして、自動で扉が開かれる。

晶葉「最後のゲッターロボ。ゲッターロボ、アークが……！」

かな子「ゲッターロボ……」

美波「アーク……」

ゲッターアーク………

ズズズズズズズズズ……

かな子「何だか、異様な雰囲気ですね。真ゲッターロボとも、また違う気がします」

晶葉「そうだ。これは真ゲッターとは違う。ゲッターに対して特異な反応を見せる、

卯月の為に作られたゲッターとはな」

かな子「それじゃあ、このゲッターは、一体何の為に……」

晶葉「人類の為だ。私はそう信じる。アークの名の意味と共に、そう込められたのだ

と」

かな子「アークの名前の、意味……？」

晶葉「旧約聖書に登場する方舟や円弧など様々な意味を連想するかもしれないが、

ゲッターアークが由来とするところは、梵字だ」

かな子「ぼん……？」

美波「梵字。確か、古代インドで使われていた梵語を使用する際の□訳文、じやなかったかな？」

晶葉「流星に詳しいな」

かな子「でも、どうして梵字が使われてるんです？」

晶葉「早乙女博士がこのゲッターに何を求めていたのかは今となっては分からない。しかし、アークが冠するその意味から察するに、恐らくは守護神として、ゲッターを完成させたかったんだらうと」

かな子「守護神……」

晶葉「梵字で表されるアークは、日本語に訳すと大日如来。そして、2号機はキリク、3号機はカーン。共に阿弥陀如来と不動明王。どちらも仏教上高位に当たる存在だ」

美波「キリクに、カーン……」

かな子「な、何だか今一、ピンと来ない名前ですな……。馴染みが薄いつて言うか……」

晶葉「アークの最終調整をしよう。2人共、搭乗の準備を」

かな子「搭乗!?いきなり乗るんですか!？」

晶葉「市街地の戦闘が気になると言っただらう?アークの力が必要になる時が来るかもしれない。何にせよ、準備しておくに越したことはない」

かな子「それは、そうですね……」

晶葉「アーク用のパイロットスーツも用意してある。更衣室は直ぐその角だ。さあ、早く着替えてきてくれ」

かな子「え、ええ……」

美波「3人目のパイロットがまだ揃ってないけど？」

晶葉「問題ない。3人目は恐らく、市街地の戦闘に現れるだろう。いや、もう戦っているかもしれない」

美波「……どう言うこと？」

晶葉「これ以上話している時間も惜しい。着替えが終わったら、各コックピットに急いでくれ。かな子は3号機、美波は2号機だ」

かな子「え……？美波さんが2号機なんですか？」

晶葉「確かにそう伝えたが？」

かな子「けど、美波さんはブラックゲッターで、ゲッター1の操縦に慣れてる筈です。それなのに、まだ誰かも分からない3人目を、1号機のパイロットにするんですか？」

晶葉「こうも言った筈だ。これ以上話している時間も惜しい、と」

かな子「……」

晶葉「聞けばどんな答えでも返ってくると思うな。知りたければ、自分の目で見、掴み取るくらいの事はしてみせろ」

美波「その為に、ゲッターアークで戦地に向かえつて言うのね？」

晶葉「ああ、そうだ」

美波「……分かった。行こう、かな子ちゃん」

かな子「…はい」

晶葉「急いでくれ。時間はそれほどないかもしれない——」

ゲッターアーク……！

晶葉「……分かっている。もうすぐだ」

——。

~~~~~ 地下、避難シェルター ~~~~~

莉嘉「……」

美嘉「莉ー嘉ー？どうかした？」

莉嘉「……っ」ブルツ

美嘉「莉嘉……アンタ、大丈夫？」

莉嘉「お姉ちゃん……」

美嘉「大丈夫だから。ここなら莉嘉が怖がつてるようなことは、何も起きないから」

莉嘉「う、うん……」

「パ。パア……？ママア……！」

美嘉「うん？」

男の子「ママ……」

美嘉「君、どうしたの？」

男の子「……お姉ちゃん？」

美嘉「お母さん達とはぐれたの？」

男の子「うん……。避難してたら、他の人達に押されちゃって……」

美嘉「そつか。避難中にはぐれちゃったんだ。それじゃあ、このシエルターの中に……」

男の子「そう思ってたんだけど、何処を探しても見当たらなくて……」

美嘉「え……？それじゃあ……」

男の子「パパ、ママ、まだ外にいるのかな……」

莉嘉「!!」

美嘉「まだそうと決まった訳じゃないよ。別のシエルターに避難したのかもしれないし」

男の子「でも……」

美嘉「ここで君が探しに行って、君に何かあったら、パパとママが悲しむでしょ？」

男の子「……」

美嘉「今上では、ゲッターが戦ってくれてる。戦闘なんて直ぐに終わるんだから。落

ち着いたら、探しに行こう？そんな時にはアタシも手伝うし」

男の子「…うん」

美嘉「よし。…：…莉嘉？」

莉嘉「…kなきや」

美嘉「莉嘉？」

莉嘉「アタシ、探してくる！」 ダッ

美嘉「ちよつと、莉嘉！」

莉嘉「!!」

美嘉「莉嘉ア!!」

くくく 市街地 くくく

莉嘉「…はっ！はっ、はっ、はっ…！」

莉嘉「誰か！誰かいませんか!!男の子とはぐれた人は…!…:…っ!?!」

シエルターを飛び出し、地上に上がった先。見慣れていた高層ビルの街並みは、一変していた。崩れ、瓦礫となった外壁を地面に散りばめ、火を吹き上げるビル群。街路樹にも炎は拡がり、割れ、亀裂が走り、崖の先か断崖のように抉れ、隆起するアスファルトの地面。

そして、それらと共に火を上げ、下敷きになり、或いは道路に取り残された車の中に





ゲッターD2がトマホークで槍を受け止めるも、勢いは殺せず、地面へと墜落。  
莉嘉「うう……！」

また一つビルが崩れ、墜落の衝撃がここまで伝わる。

魚鬼獣『グアアアツ!!』

ブオンツ

魚鬼獣『ギアアアアアアツ!!』

ゲッターD2のマウントポジションで咆哮を上げた鬼獣に、背後から長大なトマホークが突き立ち、動きを止めた。

莉嘉「ゲッター飛焰がD2を助けた……？D2のパイロットは！」

自然にゲッターに向き掛けた足が、不意に止まる。

莉嘉「あ……あ……」

莉嘉（お姉ちゃんの所に戻らなきゃ……！お姉ちゃん、心配してる……）

グググツ……

崩れたビルを支えに起き上がろうとするゲッターD2の元に、プロト・ゲッター1が駆け付け、フオローに。

ダダダダダダダダダッ

莉嘉「きやあつ！」

思わぬ重低音に身がすくむ。

遙か上空から迫る鬼獣の群れ目掛け、腕部のガトリングガンを遠慮なくぶつ放したのだ。

鬼獣群『——!!』

プロト・ゲッター1の射撃に応じるように、鬼獣の群れも各々の口から火炎などを吐き出し、ゲッターD2とプロト・ゲッター1の周囲は爆炎と巻き上がった瓦礫に包まれる。

莉嘉「ああ……！」

拡散した噴煙を吹き飛ばし、プロト・ゲッター1が翼を広げる。どうやら、囷になってゲッターD2が立ち上がる隙を作るつもりらしい。

左腕を突き出してガトリングガンを鬼獣の群れに突き付けながら、右腕で据えるようにトマホークを構えて、プロト・ゲッター1が飛び立つ。

——チャンスは、今だ。

莉嘉「……チャンスって？」

莉嘉（アタシが行って、何になるの？）

——アタシよりも、操縦が出来る人は一杯いる。

莉嘉（なのに、今更行って、また足を引っ張るの？）

——そうやってまた足を引つ張るのか？大将の時みたいに。

莉嘉（そうだよ。あの時、アタシがいたから大将は…）

——大将は、アタシが殺した。

莉嘉（そうなんだ。アタシが動いても、誰かを傷付けるだけ。誰かを悲しませるだけ。それなら、アタシは何もしない方が…）

——違う。

莉嘉「…え？」

——結局逃げているだけだ。誰かの悲しみ、誰かの命。“誰か”に寄り添っている振りをしているだけで、結局自分が逃げたいだけだ。

莉嘉「……」

——自分の知り合いを失って、それがスゴく悲しかっただけで、もう同じ思いはしたくないからって、見て見ぬ振りをしているだけだ。

莉嘉「アタシは…」

——結局“誰か”が傷付くのは変わらない。“誰か”が悲しむことに変わりはない。都合のいい、言い訳でしかないのだから。

莉嘉「そうだ、だから——！」

ダッ

駆け出した。シエルターの入り口がある、地下通路とは逆方向に。

莉嘉「アタシは、逃げたいんじゃない、守られたいんじゃない……！」

莉嘉「アタシは、立ち向かいたいんだ！」

莉嘉「アタシが戦うことで、誰かが悲しむのなら、誰かが辛い思いをするのなら、しませなきやいい。傷付かなければいい！」

莉嘉「アタシが、強くなればいい!!」

そして、辿り着いた。

莉嘉「だから、ゲッター……！」

ゲッターD2の元に。

莉嘉「っ……！」

迷うことなく、コックピットハッチまで駆け上がった。最早手慣れた動作で、ハッチを開く。

莉嘉「芳乃!？」

芳乃「う……ん……」

莉嘉「血が出てるよ、大丈夫?」

芳乃「……ようやく、辿り着きましたかー?」

莉嘉「え?」

芳乃「……申し訳ありません。右目に血が入ってしまいました。よく前が見えないのです。」

莉嘉「待ってて！降ろすの手伝うから！」

芳乃の手を取ってコックピットから引き上げ、そのまま肩を掛けて一旦地上まで降ろす。

芳乃「ありがとうございます、莉嘉さん。」

莉嘉「何て事ないよ☆…本当は、シエルターまで案内してあげたいけど」

芳乃「心配には及びませぬよ。それよりも、繰り手なきゲッターをこの場に残して行く方が、心配なのでして。」

莉嘉「だよね。じゃあ、ゲッター借りるよ」

芳乃「元より其方の力でして。」

莉嘉「そっか。ありがと、芳乃☆」

芳乃「いえいえ。ふふっ」

莉嘉「ん？」

芳乃「やはり、莉嘉さんには白い星がよくお似合いでして。」

莉嘉「何の事？」

芳乃「此方のことでして。それよりも、早く往かねば。茜さん達も危ういで

しよー」

莉嘉「そうだった！それじゃあね！」

やや急ぎ足でコックピットまで駆け上がり、シートに滑り込む。

莉嘉「ゲッターD2、起動！」

慣れた様子で、ゲッターD2を再起動。直後から通信が入ってくる。

アーニヤ「大丈夫ですか、ヨシノ！」

美穂「つて、莉嘉ちゃん!? どうしてD2のコックピットに！」

莉嘉「芳乃が怪我したから。選手交替！」

美穂「選手交替つて、無茶だよ！パイロットスーツも無しじゃ」

莉嘉「スーツは無くても、これがあるよ！」

アーニヤ「…安全ヘルメット？」

莉嘉「うんっ☆前に大将から貰ったの。何時も持ち歩いてるんだから！」

美穂「た、確かに無いよりはマシかもだけど、そういう問題じゃ……きゃあっ！」

通信用のサブモニターにノイズが走る。プロト・ゲッターが攻撃を受けたのだら

う。

莉嘉「待ってて！今行くから!!」

瓦礫を掻き分け、立ち膝の姿勢で、ゲッターD2がその翼を開く。

莉嘉（大将、きつとスongoい怒るだろうなあ…。でも、今は見守つてて。アタシの無茶を）

ゲッターD2、飛翔。

莉嘉「プア——ッ!!」

頭から蹴り付けられるような感覚。急激なGの変化に鼻血が噴き出すのも、操縦桿を緩めはしない。

莉嘉「アタシは……城ヶ崎莉嘉だああアアッ!!」

ゲッターD2は、戦闘を繰り広げる敵陣へと飛び込んでいく。

芳乃「……」

芳乃「竜の戦士、否……まだ生まれて間もない仔竜ですが」

芳乃「こちらは見事起ち上がり、自らの意思で飛び立ちまして」

ヒュ——ン——ン

——ギンッ

美波「な、何……?」

かな子「ゲッターアークが、起動した……?」

美波「最終調整、終わったの? 晶葉ちゃん」

晶葉「いや、まだ途中だったが……。今しがた終わった」

美波「どう言うことなの?!」

晶葉「フアクターは全て揃ったと言うことさ。さあ、出撃だ」

ガコン、と一つ、音がして、土や雑草を落としながら、ゲッターアークの頭上、出撃口の穴が開く。

かな子「ここから直接出られるようになってるんですか」

晶葉「現地までの操縦は2号機パイロットの美波に委譲するぞ」

美波「…了解です」

晶葉「油断するなよ。まだ2人乗りだからフルパワーは引き出せんと言っても、そのゲッターのパワーは、ブラックゲッターとは比べ物にならないんだからな」

美波「それでも、出来ることだけはしてみせるから」

晶葉「それと、コックピットでのおやつタイムも終わりだ、かな子」

かな子「ムグツ…! す、すいません! 調整が長引くと思つて…」

美波「普段通りなのは、いいことだと思っただけだ」

かな子「これが最後ですから! もうちよつとだけ待って下さい!」

晶葉「…締まらないな。構わん、行け。美波」

かな子「えっ? ちよつ、待つ——」

美波「ゲッターアーク、発進!」



かな子「フグッ——！」

美波「!?」

ズアオツ

。

莉嘉「とああアアアアアッ!!」

トマホークが閃を描き、円盤鬼獣の上半身と下半身を両断する。

莉嘉「っ!?!」

咄嗟に身を翻して、背後から忍び寄った魚鬼獣の槍の突撃を回避。

莉嘉「喰らえええ！」

突き抜けていった背後に、ゲッターライフルのエネルギー弾を浴びせる。

莉嘉「茜——！」

茜「合点です！ゲッタービーム!!」

怯んだ魚鬼獣にビームを合わせ、トドメと。

茜「やりましたね！莉嘉ちゃん！」

莉嘉「フフンツ☆討つていいのは、討たれる覚悟のある奴だけだ、つてね！」

茜「流石です！何時の間に腕を上げたんですか？」

アーニャ「アカネ、リカ。お喋りはまだ先、ですよ」

美穂「今ので鬼獣はあらかたやつけたみたいだけど、まだ大物が残ってるよ」

美穂（莉嘉ちゃん、鼻血止まってないし、長期戦は厳しいかも…）

ゾルドXX『……』

茜「むう……仲間がやられても、ずっと黙っているだけで、不気味ですね！」

莉嘉「動かないんだったら、先手必勝！一氣に片を付けてやるッ!!」

茜「莉嘉ちゃん!？」

アーニャ「迂闊、です……!」

莉嘉「えいやああアアアッ!!」

ゾルドXX『……!』

勢いよく振り下ろしたトマホークは、ゾルドXXの装甲に弾かれる。

莉嘉「こんのお……!ゲッタービームツ!!」

直ぐ様体勢を立て直し、ゲッタービームを放つ。が、

ゾルドXX『!』

莉嘉「ウソ……!」

美穂「ゲッタービームが、弾かれちゃった!」

茜「どういふカラクリですか!?!バリアですか!」

アーニャ「……茜が正解、みたいです。ビームが弾かれた正面に、アー……よく見え

ない、障壁のようなもの、捉えました」

茜 「むう……！何と卑怯な！」

美穂 「そんなことより、莉嘉ちゃん！早く離れて！」

莉嘉 「え……？」

ゾルドXX 『!!』

無数に伸びた触手が、ゲッターD2に襲い掛かる。

莉嘉 「うわっ……！キモッ！」

ゲッターD2、急加速でゾルドXXから距離を取り、触手の追撃を躲わしていくが、

莉嘉 「っ……！……くう！はあ……っ、はあ……っ！」

急加速、反転、急制動。それらが掛ける肉体への負担が、パイロットスーツのない莉嘉に襲い掛かる。

茜 「てえええいつ!!」

下方から上昇しつつゲッターD2と触手の間に割って入ったプロト・ゲッター1が、トマホークで追ってきた触手を一閃の元、斬り伏せる。

莉嘉 「あ、ありがと……茜」

茜 「……プラズマ・ノヴァ!!」

礼には応えず、ゾルドXXに対してプラズマ・ノヴァを放つも、プラズマ・ノヴァは

ゾルドXXの手前数メートルのところで、やはりバリアに弾かれて四方に弾ける。

茜 「くっ……フルパワーでも無理なんですか!」

美穂 「今のでプラズマエネルギーの半分を使っちゃったから、同じ攻撃は後1回しか撃てないよ!」

アーニヤ 「しかも、砲身の冷却まで、後180秒掛かります」

茜 「…連続で波状攻撃、と言う訳にもいきませんか……!」

ゾルドXX 『!!』

続けて、と言うようにゾルドXXの上部、人型をした半身部分から、雷撃が放たれる。

茜 「おわっと!」

莉嘉 「きゃあっ!」

左右それぞれに分かれて、攻撃を回避。続けざまにゲッターD2とプロト・ゲッターそれぞれにゾルドXXの触手が襲い掛かる。

莉嘉 「こ、このお……!」

茜 「これでは、合体ビームも撃てませんよっ!」

莉嘉 「くう……!」

襲い掛かる触手をライフルで撃ち落としながら、叫ぶ。

莉嘉 「逃げてたって、ダメ……!それなら!」

茜 「莉嘉ちゃんー！」

莉嘉 「当たって砕けろだあくっ!!」

触手の動きが緩んだ隙に、ゾルドXX本体に肉薄。

莉嘉 「ダブルトマホークツ!!」

トマホーク二刀流で、ゾルドXXの装甲に勝負を挑む。

莉嘉 「このっ、このっ、このっ、このっ、このっ、このっ!!」

トマホークを滅多打ち。左右のトマホークをその刃が砕けてポロポロになっても、交互に振り下ろし続けた。

そして、トマホークの刃がこぼれ、折れて砕け散れば、手で足でゾルドXXを打ちのめす。その姿はまるで、此方の攻撃が一切効かないことに腹を立てる子供のようにだった。

莉嘉 「このおオオオ!!」

両腕もひしゃげて、潰れるほど殴り続け、右足も失い、残った左足で最後の蹴りを放つ。すると、これまで悠然と浮いていたゾルドXXが傾いた。

莉嘉 「やった……!」

美穂 「ダメ! 莉嘉ちゃん!!」

莉嘉「え？」

ゾルドXX『!!』

雷撃が、ゲッターD2の全身を打ちのめす。

莉嘉「きゃあああああつ!!」

茜「莉嘉ちゃん！」

ゾルドXX『!』

残ったゲッターD2の胴体を、幾本かの触手が貫く。

美穂「あ……ああ……!」

茜「くっ……!莉嘉ちゃん、今助け……!」

此方の邪魔はさせません、と言うように、残った触手がプロト・ゲッター1に襲い掛かった。

茜「っ……!退いて下さい!この……っ!!」

トマホークを振り回して触手を刈り取っていくが、目の前に現れる触手が尽きることはない。

ゾルドXX『…!!』

プロト・ゲッター1が触手の処理に追われている間に、ゾルドXXの上部に、光が蓄積される。

莉嘉「あ……アタシは……！」

茜「莉嘉ちゃんっ!!」

ゾルドXX『……っ!?』

莉嘉「………?」

ゾルドXXが弾かれたように横に揺らいだ。いや、弾かれたのだ。

美穂「今のは……」

アーニヤ「トマホーク、ブーメラン……」

反対の方向から投じられた、一対のトマホークによって。

美穂「けど、こっちの迎撃に出られるようなゲッターなんて……あれは……！」

茜「真ゲッター!?!」

莉嘉「違う……。あれは……！」

美波「……間に合った!」

美波（ブラックゲッター以上のパワー……! 覚悟はしてたけど……）

晶葉『まさか、一度戦闘エリアを大きく通り過ぎるとはな。少し肝が冷えたぞ』

美波（これでまだ、フルパワーじゃないなんて……!）

かな子「美波さん! 相手が怯んでます! 今の内にゲッターD2を!」

美波「え、ええ!——っ!」

戻ってきたトマホークをキャッチして構え直し、肉薄。

美波「やああああっ!!」

ゲッターD2を串刺しにして捕らえた触手を断ち斬り、ゲッターD2を解放。

莉嘉「あ…」

力を失い、落下するゲッターD2を掬い上げる。

莉嘉「ううっ…!」

美波「大丈夫…っつて、莉嘉ちゃん!」

かな子「パイロットスーツも着ないで…っつてどうして?」

美波「…ともかく、安全なところに降ろして、手当てを…!」

晶葉『安全な所など、地表にはないだろう。無論、手当てをしている余裕もな』

美波「っ…!だったら、どうすれば…!」

晶葉『1つだけ、安全な場所があるだろう?』

美波「…まさか!」

かな子「莉嘉ちゃんをゲッターアークに乗せる気ですか!?この状態の莉嘉ちゃんを

!」

晶葉「その状態でゲッターD2を操縦していたんだ。もう数分は持つだろう」

美波「持つだろう、っつて、そんな問題じゃ…!」



莉嘉「アタシは、大丈夫だから…」

美波「莉嘉ちゃん!？」

莉嘉「アタシを、そのゲッターに乗せて。ゲッターD2は、もうダメだからさ」

そう言つて、コックピットから這い出てくる。

美波「莉嘉ちゃん…!」

莉嘉「行くよ…! コックピット、開けて!」

美波「…っ」

ゲッターD2のコックピットから飛び上がった莉嘉。そのまま、開いたゲッターアークのコックピットへと入り込む。

莉嘉「おっと!」

莉嘉が乗ったことで球状のコックピットブロックが回転。明かりが点き、モニターやディスプレイが動き出す。

莉嘉「…へへっ、何だろう。初めて見る筈なのに、ずっと待ってた気がするよ」

コックピット正面のサブモニターにアークの梵字が一瞬浮かび、直後に機体の状態などを示す画面へと切り替わり、起動を完了する。

美波（操縦が自動で切り替わった…?!…操縦が一番上のコックピットに優先権が移るのは知ってるけど、それでも、何もしてないのに切り替わるなんて…）

美波「…これは」

視界の端、サイドのサブモニターが告げる。ゲッターアークのゲッター線エネルギー量が上昇している。

美波「まさか、ゲッターアークの、3人目のパイロットって…!」

晶葉『その通りだ』

かな子「嘘、ですよね…?今回だけじゃないんですか?」

晶葉『ゲッターの反応。そして何より、莉嘉自身の意志がそうだと知っている』

美波「けど、今の状態で戦闘させるなんて!せめて私が代わりに…!」

莉嘉「アタシは大丈夫だって、言ったよ」

美波「…!」

莉嘉「ごめんね、ゲッターD2」

抱えていたゲッターD2を、地面に落とす。

莉嘉「さて、行こっか。ゲッターロボアークツ!!」

ヒュンツ、と目にも止まらない動きで、打ち付けられた触手を躲わす。ゲッターアークの姿は、遙か上空へと。

茜「な、何なんですか!あのゲッターは…!」

美穂「ゲッターアークって言ってたけど…」

アーニャ「……ミナミイ……」

莉嘉「やああああアアアツ!!」

上空から急加速。急降下でゾルドXXへと接近し、掌底を喰らわせるように右手でゾルドXXを押さえ付け、

莉嘉「アアアアアツ!!」

そのまま真下の地面まで引き連れ、勢いよく叩き付けた。

莉嘉「——へへっ!」

右腕でゾルドXXの動きを押さえたまま、左手指の先から、鋭利な爪が鈍く光る。

莉嘉「えいっ!」

手刀を突く動作で、ゾルドXXの体に爪を食い込ませ、

莉嘉「っ!」

そのまま、装甲の一枚を引き剥がす。

ゾルドXX『!!』

ゾルドXXも黙ってはいられず反撃。雷撃がゲッターアークを打つ。

莉嘉「うっ……!」

美波「うう……っ」

かな子「莉嘉、ちゃん……!」

莉嘉「だあい丈夫つ！こんなもの、全っ然痛くないっ☆」

ゾルドXXを豪快に蹴り飛ばし、雷撃を停止させた。

莉嘉「はあ…はあ…はあつ。茜！」

茜「は、はいっ！」

莉嘉「今の内、ビームを合わせるよ」

茜「あ……了解です！」

今一度ゲッターアークが飛翔し、プロト・ゲッター1と合流。

莉嘉「狙うのはあそこ。アタシが装甲をひっぺがしたところ！」

茜「…成る程、そのために…！」

莉嘉「やるよ、ゲッター…！」

茜「ゲッターアーク…！」

莉嘉・茜「ビィイームツ!!」

ゾルドXX『?!』

ゲッターアークの額と、プロト・ゲッター1の砲身。2体のゲッターが放ったビームは交差するポイントで合流して強大なビームとなり、ゾルドXXをバリアごと包み込んで破壊した。

盛大な爆発と、舞い上がった噴煙が辺り一帯を包む。

茜 「ふう……。何とか、今回は収まりましたかね？」

美穂 「……。うん、ワームホールの出現とか、増援はないみたい。だけど……」

アーニヤ 「ゲッターアーク、そう言ってましたね……」

美穂 「あのゲッターロボは……」

美波 「……」

美波（私があれば手こずったゲッターアークを、フルパワーを引き出した状態で、一瞬で手足のように動かすなんて……）

美波 「才能とか素質とか、そう言うのは分かるつもりだけど……」

かな子 「す、すごい初陣になっちゃいましたね……。これ、真ゲッターにだって負けませんよ」

莉嘉 「は……ははっ」

かな子 「莉嘉ちゃん？」

莉嘉 「これだよ！ ずっと待ってた！ これが、アタシの力、ゲッターアーク……！」

莉嘉 「フフフツ……クククツ……あはははっ——☆」

『ウオオオオオオオオオオオオオオ——ッ』

美穂 「な、何……!?!」

アーニヤ 「ゲッターアークが……」

茜 「吠えてる…?」

ゲッターアークがその口を開いて天を仰ぎ、咆哮を轟かせる。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオ——ッ!!』

芳乃 「仔竜の産声…。純粹であり、力強く、良き声色でして」

芳乃 「祝祷の時。今正に、戦士は生まれ出でまして」

芳乃 「如何なる悪意も、横暴も、振り払われるでしよ。曇りなき心と、曇りなき刃であれば」

つづく

## 第4話『キリクが駆ける』

~~~~~ 新早乙女研究所 ~~~~~

—— 上空。

通信士「プロト・ゲットマシン、ゲッターアーク、共に帰還します」

晶葉「ゲッターアークは、合体状態のままか」

通信士「そのようです。城ヶ崎さんがパイロットスーツなしでの戦闘でしたので、分離時のリスクを考えた結果でしょう」

晶葉「流石に、ゲットマシン状態のGに耐える事は出来ないか」

通信士「飛焰チーム、アークチーム、聞こえますか？誘導灯に従って、着陸体勢に移行して下さい」

茜「了解です！」

莉嘉「……」

通信士「城ヶ崎さん？聞こえていますか？」

莉嘉「……」

通信士「城ヶ崎さん！」

茜「！」

力を失って、落下を始めるゲッターアーク。

晶葉「美波、状況はどうなっている？」

美波「り、莉嘉ちゃんには、さつきから呼び掛けてるんですけど、返事がないの！」

晶葉「帰還するまで意識が持たんかったか。ゲッターは？分離出来ないか？」

美波「それが、2号機、3号機からじゃ操作出来ない……完全にコントロール不能です！」

通信士「プロト・ゲッターも分離状態です。今合体して、救助に間に合うかどうか……」

晶葉「強制分離は？あれなら、ゲッターがどんな状態であつても分離出来る筈だ」

美波「けど……！今分離すれば、コントロールを失った1号機に乗ってる、莉嘉ちゃん
が！」

かな子「私が何とかします！」

美波「かな子ちゃん？」

かな子「落ち着いて話してる時間ありません。兎に角、今はゲッターを分離させて
下さいっ」

晶葉「強制分離させれば、一瞬だが機体が弾かれて高度も上がる。その間に体勢を整

えるんだ」

美波「…………。オープンゲット！」

バチンツ、とゲッターアークが弾かれるようにして、ゲットマシンに分かれる。

莉嘉「…………」

美波「莉嘉ちゃん！」

分離しても尚、1号機、アーク号の落下は止まらない。

美波（ダメ……。完全に意識を失ってる…）

かな子「美波さん！」

美波「お願い、かな子ちゃん！」

かな子「はいっ」

キリク号を追い抜いてアーク号に接近する。

かな子（…コントロールは失ってるけど、機体は左右に振れてるだけ。これなら…！）

かな子「美波さん、アーク号の前面に行って下さい」

美波「え？」

言われるまま、キリク号をアーク号の前に。

かな子「1、2、3…………1、2、3…………今！速度を落として！」

美波「っ!?う、うん…！」

慌てた動作で減速。

美波「きやつ！」

やや強引に、アーク号とキリク号がドツキング。

かな子「機首を上げて！」

美波「うつ…うつ…うつ…うつ！」

操縦桿を精一杯引いて迫る地面を回避。一瞬、機体底部を擦ったが、高度は持ち直した。

茜「やりました！救助成功です！」

アーニヤ「まだ…！このままだと…！」

美穂「！今度は山に激突しちゃう！」

美波「くくくつ！」

激突を回避する為にも、操縦桿を引き続けるが、

美波（もうダメ…！ぶつかる——！）

覚悟を決めた矢先、目の前に影が重なる。それは、

美波「かな子ちゃん…！」

高速で駆け付けた、カーン号。

かな子「チェンジゲッター!!」

直後、ゲッターは山肌に激突した。

一切の減速を行わなかった勢いそのままに、山肌を沿うように深く抉り、木々を薙ぎ倒す。

美穂「……………」

アーニヤ「ゲッター、は……！」

激突の衝撃で上がった土煙が晴れ、そこには、

茜「犬神家……」

上半身を山肌に深くめり込ませ、両足が不格好に天を仰いだ、ゲッターカーンの姿が。通信士「げ、ゲッターカーン、合体を確認……。パイロットのバイタルサイン、異常無し……」

晶葉「間一髪、何とかなかったか。ヒヤヒヤさせおつて……」

通信士「回収班と、医療班を直ちに向かわせます」

かな子「あ痛たたた……」

美波「か、かな子ちゃん、大丈夫!?!」

かな子「な、何て事、ないですよ……?この子を使うのは初めてですけど、ゲッター3系統は頑丈ですから」

美波「それで、自分から先頭に立って合体を……」

かな子「それだけじゃありません。莉嘉ちゃんも、美波ちゃんも確かにゲッターの縦経験は積んでるかもしれないけど、ゲットマシンの合体だけは経験したことはないから」

美波「……!」

かな子「だから、合体経験だけは先輩の私が、何とかしなくちゃ、って思ったの」

美波「かな子ちゃん……」

かな子「えへへ……!」

美波「……鼻血、出てるよ」

かな子「ホントですか!?どこ?どこ?……ああ!」

美波「あはは……。ありがとう、かな子ちゃん」

かな子「え、えへへ……!それで、莉嘉ちゃんは?」

美波「……。まだ応答無し。生命反応は確認してるから、気を失ってるだけみたい」

かな子「パイロットスーツ無しで、相当無茶してましたからね。ゆつくり休んでくだ

さいね、莉嘉ちゃん」

莉嘉「……——」

——…目覚めよ。

莉嘉「う、うう…ん…っ。ここは…？」

——目覚めるのだ、莉嘉。

莉嘉「！ あ、あんたは…：…ゲッターロボ！」

——聞くのだ。今、お前達の宇宙に破滅の危機が迫っている。

莉嘉「そんなの知ってるよ。だからアタシ達は、ゲッターを使って…！」

——そうではない。違うのだ。

莉嘉「何が？」

——憎しみに支配された邪悪なる者が、禍いをバラ撒こうとしている。悪しき種子によつて正しき血統を濁らせてしまおうとしているのだ。

莉嘉「邪悪なる者…：…悪しき種子…？全然意味分かんないんだけど」

——鬼共はその前触れに過ぎない。

莉嘉「鬼…：…あいつらの正体を知っているの？」

——それは、莉嘉自身が戦いの中で見つけ、知るのだ。

莉嘉「…イジワル」

——このままでは、我々が新たな進化の段階に行く前に、人類と言う種子は淘汰され

てしまう。そのようなことが許されてはいけない。

莉嘉「うん。言ってることは良く分かんないけど、誰かに一方的に未来が決められるって言うのは、面白くないもんね！」

——そうだ。強い心持っている、莉嘉ならこの先の戦いも乗り越えられる。

ギョーンツ

莉嘉『わっ！…何…？…？目覚める、夢が終わる…？待って！』

——忘れるな、進化の時は近い。

莉嘉「ああああああゝゝゝ——っ」

莉嘉「！」 バツ

かな子「きやつ！ビックリしたあ…」

莉嘉「かな子…？それじゃあ、ここって…」

かな子「早乙女研究所の医務室です」

莉嘉「そっか。アタシ、戻ってきたんだ…」

かな子「みんなスツゴク心配してたんですよ。もう一週間も目を覚まさないから…」

莉嘉「一週間!? そんなに…」

かな子「美嘉さんもほぼ毎日お見舞いに来てたんですから。そうだ! 莉嘉ちゃんが起きたって、教えてあげなきゃ!」

莉嘉「ま、待って!」

かな子「はい?」

莉嘉「お姉ちゃんには、連絡しないで」

かな子「え? でも、すごい心配してたんですよ?」

莉嘉「それでも! きつと怒られると思うし…。今はまだ心の準備と言うか…」

かな子「……」

莉嘉「とにかく! あ、後でちゃんと、アタシから連絡するから!」

かな子「…分かりました。でもちゃんと、必ず連絡しなきゃダメですよ? 安否が不明で、待つてるだけって言うのは、本当に辛いんですから」

莉嘉「うん…。分かってるよ…」

かな子「……」

莉嘉「そ、それよりさ! 美波と晶葉は? 2人は、研究所にいるんじゃないの?」

かな子「美波さんと晶葉ちゃんも、任務で外出中です」

莉嘉「任務?」

かな子「何でも山奥の町と連絡が付かなくなつて、それが鬼の仕業なんじゃないか
つて」

莉嘉「調査の仕事なんだ。それじゃあ、晶葉は兎も角、何で美波まで？」

かな子「大型の鬼、鬼獣が出現するかもしれないから。そうなつたらゲッターの出
番です。そうなつた時の為に、現地で状況を把握しておく必要があるつて」

莉嘉「ふうん……」

~~~~~ 山奥の町 ~~~~~

晶葉「やれやれ、町人はほぼ全滅、か……」

視線の先にズラリと並べられる、ブルーシートを被つた死体の列。

美波「……本当に町の人達だったの？あの姿は……」

晶葉「確かにな。ハ虫人類や、百鬼なんてモノを目の当たりにして来たが、この日本  
において昆虫人間で繁栄した町、など、聞いた事はないな」

美波「昆虫……」

晶葉「外見的には、そう形容した方が近いだろう？顎の形状も、眼部に当たる複眼  
も。少なくとも、これまで見てきた鬼共とは、別種の存在だ」

美波「それじゃあ、新しい敵……！」



晶葉「かもしれないし、人間をこんな昆虫人間に変化させるような特性を持つ鬼かも分からん」

美波「人間を昆虫化させて、操ってるって言うの？だとしたら、ここにある遺体の欠損の仕方は……」

晶葉「共食いだな。恐らく」

美波「共食い……！」

晶葉「遺体として回収されたものは、どうやら元が女性や子供だったモノがほとんどと見える。強い配下を残す為、あえて共食いをさせたんだろう」

美波「そんな事……。うっ……」

隊員「池袋さん、解剖手術の用意が出来ました」

晶葉「分かった、今行く。……と言うわけですまん、美波。昨日の話の続きも、研究所に帰ってからだ」

美波「……」

晶葉「美波、お前の気持ちは分からないじゃない。だが実際にこうして、化け物の解剖をやらされている、私がいる。今更莉嘉が戦う事に、何故抵抗する？」

美波「前に晶葉ちゃんは自分で言ってたじゃない。私には覚悟があるって」

晶葉「莉嘉に覚悟はない、か？だがあの時戦闘に参加していた莉嘉はどうだった？同

じゲッターに乗り、共に戦って、何を感じた？」

美波「それは……！」

晶葉「いいか。戦うべきでないとすれば、地球上に生きる全ての人間が戦うべきではないんだ。同時に、全ての人間は生き残る為に、戦うしかない。誰ならば戦って構わない、子供は戦うべきではないと嘯くのは、一方的な偽善に過ぎない」

美波「晶葉ちゃん……」

晶葉「話は終わりだ。……さあ、部屋へ案内してくれ」

隊員「は……はっ」

晶葉「頼む」

ツカツカツカ——

美波「……はあ」

ブロロロロロ……ガチャツ

オイ、イシャハイルカ？ドウシタ？セイゾンシヤダイキノコリガイタナンダツテ!?

美波「？ 何……？今、生存者って……」 タツ

隊員「生存者って、子供じゃないか……」

隊員2「まだ小さいのに、これまで良く無事で……」

隊員3「坊主、お嬢ちゃん、もう大丈夫だぞ」

女の子「うう……ヒック……！」

男の子「おいつ、何時まで泣いてんだよ！俺達、助かったんだぞ！」

女の子「でも、父ちゃんと、母ちゃんがあ……！うわあああんっ！」

男の子「だから泣くなって、お前が泣いたら、俺だって……グスツ」

隊員2「辛かったろうな……」

隊員「兎に角手当てを。誰か、手の空いている者は……」

美波「私がやります」

隊員「君は、早乙女研究所の……」

美波「資格はまだ持ってないですけど、応急処置くらいなら」

隊員「分かりました。部隊の休憩用に建てていた仮設テントが1つ空いています。そこ

を使って下さい」

美波「分かりました。……さあ、一緒に行きましよう？」

男の子「お姉ちゃん……！うう……俺、俺……！」

美波「辛かったね。もう大丈夫だから」

男の子「うう……ツグ……！」

美波「君のお父さんやお母さんの仇は、必ず私達が果たすから」

男の子「ウグツ……お姉ちゃあああんっ!!」

美波「うんうん。もう大丈夫だから。泣いても、大丈夫だから——」

—— 数分後。

美波「これでよし、と」

男の子「ありがとう、お姉ちゃん……」

女の子「……ありがとう」

美波「ふふっ、どういたしまして。もうすぐ、自衛隊の人が君達を安全な所まで連れて行ってくれるからね」

女の子「うん……」

男の子「畜生……あの蜂女、絶対許さねえ……!」

美波「蜂女?」

男の子「そうだよ!全部アイツが悪いんだ!」

美波「まさか、その、蜂女って言うのが、君達の村を襲った犯人?」

男の子「うん。アイツ、蜂の尻みてえなの持ってさ、それを父ちゃんや母ちゃんに突き刺したんだ!そしたら、突然父ちゃん達が化け物みてえに変わっちゃまって……!」

美波「そうだったの……」

男の子「怒らせると怖かった隣のおつちゃんも、優しかった駐在さんも、みんなアイツに化け物に変えられちゃった!許せねえって、この手で復讐してやるって、そう思っ

てんののに、俺、逃げるしか出来なくて……！」

美波「……。悔しかったのね」

男の子「ああ……！悔しい、悔しいよ！俺……！！」

美波「けど、無茶しちやダメだよ。君には、大切な妹さんが残ってるじゃない」

男の子「それは……」

女の子「……」

美波「君？大丈夫……」

女の子「っはあ……！はあ……！はあ……！はあ……」 バタンツ

男の子「カナエ！」

女の子「お、兄、ちゃん……苦し……っ！」

男の子「カナエ、どうしたんだよ！しっかりしろよッ！！」

美波「待って。様子が変……」

男の子「どう言うことだよ!?このままじゃ、カナエが……」

美波（さつきこの子、人が変わった、つて言ってた。それにこの苦しみ方……。もしかしたら……）

女の子「お兄ちゃん……助けて、え、え、ええええええ——！！」

ぼこぼこ膨らむように、関節が隆起し、柔らかく見えた肌黒く変質し硬質化。かつ

て女の子だったそれは、おぞましい昆虫を象った化け物へと姿を変えていく。

男の子「か、カナエ……！」

女の子↓昆虫人間「キヤアアアアアアアアアッ!!」

男の子「お前、刺されてたのかよ!!」

美波「下がって！」

男の子を後ろ手に庇うように立ち、銃口を突き付ける。

昆虫人間「シヤアアアアア……」

美波「う、動かないで……！私、本気だから！」

そう言う手は震えている。

美波（う、撃つの……？本当に……？この子は人間で、女の子で……さつきまで、私達と

同じ姿をしていた……）

昆虫人間「キヤアアアアアアアアアッ!!」

美波「ダメ……つ、撃てない……!!」

シュボッ

昆虫人間「!?!」

美波「!!」

美波の背後から、一発の銃弾が飛来する。銃弾と形容されるほどに小さいそれは、し

かし昆虫人間の胴体に命中すると共に爆ぜた。

美波「きやつ！」

男の子「うう……！」

爆発で飛び散る肉片と衝撃から身を守り、背後を振り向くとそこには、晶葉と自衛隊員の姿があつた。隊員の方は、リボルバーのような小銃を手にしている。

晶葉「どうだ？今うちで試作中の超小型グレネードの威力は？」

隊員「……反動で、肩が外れました」

晶葉「ふむ？反動か……。まだ改良の余地はありそうだ」

美波「晶葉ちゃん……！何で！」

男の子「何でカナエを殺したんだ!!」

先に男の子が、銃を構えている隊員に食って掛かる。

男の子「何で！助ける方法はあつた筈だろう？それなのに……!!」

晶葉「不可能だ」

男の子「え？」

晶葉「これは、ついさつき行つた同じ昆虫人間の解剖結果だ。お前のような小僧に難しい話しても分からないとは思ふが……」

美波「……」

晶葉「奴らは、極微少な昆虫の集合体。それが人間の体内で、その肉をエサとする事で爆発的に増幅する。やがて小さな昆虫の1体1体が細胞となり昆虫人間を形成していく。寄生した人間に成り代わると言っても言い」

男の子「ど、どう言うことなんだよ？」

晶葉「お前の言う、カナエと言う人間は昆虫に食い殺されたんだ。今までそこにいたのは、その人間を象つただけの紛い物だ」

男の子「そんな……！ウソだ……！！」

美波「……」

男の子「ウソだあああああッ！！」

—— 数分後。

バタンツ ブロロロロロロオ……

晶葉「取り敢えず彼は、孤児院に引き取られる事が決まったそうだ」

美波「……そう」

晶葉「せめて、いい親族なり、引き取り手がいるといいんだがな」

美波「あの子を孤独にしたのは、私達のせいじゃない！あんな小さな子の前で、あんなつ、残酷な……！」

晶葉「残酷か。下手に希望を持たせる方が、残酷だと私は思うが」



美波「だからって、あんな言い方までして……！」

晶葉「どんな言い方をしても、死んだと言う事実は変わらない。どんな形になっても、失われたものは帰ってこないんだ」

美波「けど……！」

晶葉「あんな思いをする人間をこれ以上増やさない為にも、原因の究明を急がねばならない。一体何故あんな寄生虫もどきが、人間の体内に……」

美波「……」

男の子「……あの蜂女、絶対許さねえ……！」

美波「蜂女……」

晶葉「蜂女？なんだそれは？」

美波「さっきの男の子が言ってた。お父さんやお母さんが蜂女に教われたって。蜂女に刺されて化け物になったって！」

晶葉「刺されて……？ふむ。それで体内に卵でも産み付けた、と言うところか。それならば合点が行く。早速、その蜂女とやらを捜すとしよう」

美波「でも、捜すって言っても、手がかりなんて何にも……」

晶葉「幸いに名前から外見的特徴は想像に難くない。女と言うからには女体で、蜂と言うのは……蜂のような尻でも付いていたか……」

美波「まだこの辺りにいるとは限らないよ。もうずっと、遠くの町に言ったかも……」

晶葉「いや、その可能性は低いだろう」

美波「え……？」

晶葉「もし場当たりに人間を昆虫人間に変えて配下を増やしているのだとしたら、もつと人口の多い、それこそ都市部で行動を起こした方が効率がいいだろう」

晶葉「ならば何故、蜂女はこんな地方の町に現れた？理由は簡単だ。様は地盤が欲しいんだ。我々の世界を侵略する為の、磐石な地盤がな」

美波「それじゃあ、蜂女はこの町に……巢でも作るつもりなの……？」

晶葉「恐らくな。差し詰め、異世界から放たれた女王蟲と言ったところだろう」

美波「女王蟲……。敵の狙いが巢作りだとしたら……」

晶葉「巢が作れるような空間か……。単に地下なども考えられるが、この被害状況から、相手が隠れる気がないとなると、市街地で、広い空間を確保出来るような場所は……考えながら、広げた町の地図に目を落とすと、

美波「……！ 市民体育館！」

—— 市民体育館。

隊員「……」 ザッ

隊員2「……」 ザッ

隊員3 「……」 ザザッ

隊員4 「……」 ザッ

隊員2 「進路、クリア!!」

隊員 「突撃ッ!!」

ダダッ

隊員3 「な、何だこれは……!」

晶葉 「ああ本当に、何だろうな」

隊員3 「い、池袋さん!」

晶葉 「鉱物のように硬質のモノではない……。幼虫が出す粘糸のようなものを、蜜蝋のようなもので固めているのか? だとしても、蜂の一種なら美しいハニカム構造を作り出すようなものだが……。これはまるで、魔物の巣窟だ」

隊員4 「危険です、池袋さん! 我々より前に出ないで下さい!」

晶葉 「そうか。で、何かいるのか?」

隊員4 「は……? いえ、生物らしきものは何も」

晶葉 「連中の巢まで出向いてやったと言うのに、歓迎もなしか。女王はきつとこの奥だろう。私の事はいいから、先へ進むんだ」

隊員4 「で、ですけどねえ……」

隊員「池袋さんの言う通りにおけ。先に行くぞ」

隊員4「は、はあ…。了解」

ザッ  
ザッ

隊員「……」

隊員2「……」

隊員3「……」

隊員4「……」

隊員「何か、反応はあるか？」

隊員2「はい。ごく僅かですが、奥に熱反応が」

隊員「奥に何かがいるのは、間違いないようだな。皆、気を引き締めろ……！」

隊員3「……っ」

隊員4「…了解」

隊員「……突撃っ!!」

ダッ

隊員「っ……！」

女王蟲「……」

隊員3「こ、こいつが、女王……！」

隊員2 「こいつう!!」 ジャキッ

隊員 「待て、迂闊に撃つな！」

バララララララララララララッ ドゴンッ

隊員 「!!」

巨大昆虫 「ギヤアアアアアッ!!」

巨大昆虫2 「ギイイイイイッ!!」

隊員4 「何だ、こいつ…！」

隊員2 「で、デカイ…！」

隊員 「差し詰め、女王を守る騎士と言ったところか…。だが！」

女王蟲を守るように出現した巨大昆虫に向かって銃火器を放つ。が、

隊員 「ちっ…!!このライフルじゃ、効かねえ！」

巨大昆虫 「ギイイイイイッ!!」

隊員 「て、撤退…！」

隊員2 「ぎゃああああああ!!」

隊員 「ど、どうした…!?!」

隊員3 「あ、ああ…！」

女王蟲 「フフッ…！」

隊員「あ、あいつ……！」

隊員2「あ……あつ……助け……！」

隊員「卵を産み付けているのか……！」

巨大昆虫「ギイイ！」

隊員4「た、隊長……！退路が！」

隊員「……どうやら、我々はまんまと誘い込まれたらしいな」

隊員4「どうしますか？隊長！」

隊員「退路がなければ……！」

後ろの腰から手榴弾を取り出す。

隊員「作るまでだ！」

周囲を覆う粘糸の壁めがけて手榴弾を放つ。

巨大昆虫2「ギャ!？」

手榴弾の爆炎で、粘糸が焼けて道が開ける。

隊員4「み、道が出来た！」

隊員「い、今だ！残った者は直ちに撤退！」

隊員4「了解！」

隊員3「あ……ああ……！」

隊員4 「おい！」

女王蟲 「フフツ……」

隊員 「くっ……！行くぞ、俺達だけでも逃げるんだ！」

隊員4 「りよ、了解っ！」

ダダーツ

晶葉 「……おお、捜していた目標は見つけたか？」

隊員 「それどころではありません。部下を2人、やられました。撤退します。池袋さ

んもお早く」

晶葉 「ふむ、2人も生き残ったか。上出来じゃないか」 タツ

急ぎ、市民体育館から外へと脱する。

巨大昆虫 「ギヤアアアアアツ!!」

巨大昆虫2 「ギヤアアアアアツ!!」

隊員4 「こ、こいつら、俺達を逃がさないつもりですよ！」

晶葉 「成る程な。何故奴らが磐石な地盤を求めながら、敢えて目立つような真似をしたか。不測の事態にも耐えうる屈強な肉体を持つ者を、卵を産み付ける苗床として求めたいとするならば、その判断は妥当か」

晶葉 「これは、連中に対する見解を改めなければならん、か」

隊員4 「感心してないで！絶体絶命ですよ！」

晶葉 「案ずるな。こちらとて無策で敵の本拠地に乗り込んだわけではない」

ズアツ

隊員 「!! あれは！」

ゲッターキリク。

巨大昆虫  $\square$ s 「!？」

巨大昆虫の頭上に姿を現したゲッターキリクが、巨大昆虫をそのドリルの元でまとめて葬り去る。

隊員4 「げ、ゲッターロボ……！」

晶葉 「敵に占拠されているとは言え、公共施設を破壊するのは出来る事ならば避けたかったからな。良くやった、上出来だ。美波」

美波 「はあ……はあ……はあ……はあ……。今のだって、元は……」

晶葉 「人間だった頃の要素など、1つ残らず消え失せている。罪悪感など不要だ」

美波 「だとしても、けど……！」

莉嘉 「無理ならアタシが代わるよ？」

美波 「……うん、大丈夫。今回は私が」

晶葉 「今はそれよりも、女王蟲を追うんだ！」



美波「女王蟲……！」

女王蟲「……っ！」

莉嘉「今のが目標!? ちっちゃい……」

かな子「逃げちやいますよ、追いましょう！」

美波「っ！」

ゲッターキリクの速度を上げ、逃げる女王蟲を追う。

女王蟲「!?」

美波「絶対に逃がさない……これ以上、この町みたいな惨劇は！」

女王蟲「！」

狭い小路や入り組んだ路地へと潜り込み、最高速のゲッターキリクの追撃を躲す。

莉嘉「あいつう……! ちよこまかとお！」

かな子「でも、この先は……！」

市街地を飛び出し、森林の中へ。

女王蟲「……っ！」

それでも、木々を縫うように飛び抜けて、ゲッターキリクの追跡を撒こうと試みる。

美波「ドリルタイフーンツ!!」

しかし、女王蟲の思惑を吹き飛ばすように放った。ゲッターキリクのドリルの旋風

が、か細い木々を薙ぎ払った。

女王蟲「ツ~~~~!!」

かな子「逃げも隠れも、許しませんよ！」

女王蟲「……」

女王蟲の足が止まる。

莉嘉「追いかけてこはもう終わり!？」

美波「なら、これでトドメ！」

かな子「……? 待って下さい！」

美波「何!?!……空が!」

晴れ渡っていた空が、突如として厚い雲に覆われる。

美波「何……? 何なの?」

莉嘉「何でもいいよ。さっさとトドメを！」

美波「え、ええ!……きやあつ！」

暗雲から降り注いだ落雷が、ゲッターキリクを打つ。

美波「くつ……! 今の、只の雷じゃない！」

莉嘉「アタシ達の邪魔をしようっての！」

女王蟲「フフツ。ア——ツ!!」

かな子「女王蟲が…」

美波「哭いてる…?」

女王蟲「アア——ツ!!」

莉嘉「…!! 雲から何か出てくるよ!」

かな子「何か?…これって、巨大な生命反応…! ってことは…」

美波「鬼獣が出てくる!? あれは、ワームホールなの?」

莉嘉「そんな! 前に現れたのは、あんな分かりやすかつたのに!」

美波「気付かれないために、カムフラージュを…?」

かな子「鬼獣が来ますっ!」

莉嘉「あれは…」

美波「昆虫型の鬼獣!」

昆虫鬼獣「…」

女王蟲「キヤツハハハツ!」

昆虫鬼獣「!」

女王蟲「!」

グシヤツ

美波「っ!」

かな子「ひっ……いき、鬼獣が……」

莉嘉「嘘……女王蟲を食べちゃった……!」

昆虫鬼獣「グウオオオオオツ!!」

昆虫鬼獣の瞳に火が灯り、大きく咆哮を上げる。

かな子「……仲間を食べて、やる気になったみたい……」

美波「仲間を食べることで、同化したって言うの?」

かな子「鬼獣が来ます!美波さん!」

美波「!」

昆虫鬼獣「ゴオオオオオツ!!」

勢いを付けてきた昆虫鬼獣の突撃を、紙一重で躲す。

美波「っ……!ゲッターキック!」

突撃の姿勢で空いた脇腹に蹴りを放ち、反動で跳躍して距離を取る。

美波「ドリルタイフーンツ!!」

旋風を直撃させ、動きを封じる。

美波「シザーアーム……!」

ゲッターキックの右手を肥大化させ、巨大なハサミを形作る。

美波「ええいっ!」

足の止まった昆虫鬼獣に一気に迫り、胴体を挟み込む。

美波「シザーークラッシュ！」

挟む力を強め、ギリギリと締め付ける。

昆虫鬼獣「ぐ……ぐ、グウウウ……！」

美波「このまま一気に！」　ギリギリギリ……ッ

昆虫鬼獣「シヤアアアアアッ!!」

美波「きやあっ！」

昆虫鬼獣が口から、溶解液のような液体を吐きかける。

美波「ぐっ……！」

堪らず拘束を解き、離脱。

美波「ゲッターの損傷は……？」

かな子「装甲がちよつと溶けただけで、軽微です！」

昆虫鬼獣「……!!」

昆虫鬼獣が蟬のような羽根を羽ばたかせ、飛翔。

莉嘉「アイツ飛べんの?!」

かな子「あの重量を、あんな羽根でどうやって支えてるんでしょう?」

美波「それを言ったらゲッターも似たようなものだと思うけど……」

昆虫鬼獣「!!」

美波「くっ……!!」

重力落下を加え、先程よりも加速力の増した体当たりを何とか回避。

昆虫鬼獣「うご……っ!」

美波「!?!」

しかし、寸でのタイミングで伸ばされた昆虫鬼獣の腕に捕縛される。

美波「うう……っ!」

莉嘉「美波、分離して……!」

昆虫鬼獣「ガア!!」

地面に勢い良く叩き付けられるゲッターキリク。その後も地面に擦り付けられ、

昆虫鬼獣「フンツ!」

投げ。幾本の木々を薙ぎ倒し、受け身も取れず、地に倒れ伏す。

美波「う……ううっ」

ふらつきながらも立ち上がるゲッターキリク。

莉嘉「もうっ!今の攻撃、分離すればヨユーで躲せたのに!」

美波「……ごめんなさい。実戦中の分離と合体は、経験がなかったから」

莉嘉「リスクを怖がってたら、勝てるのも勝てないよ!」

かな子「言い争いはそこまでです。相手は待つてくれませんよ」

昆虫鬼獣「ウオオオオオオツ!!」

美波「くっ……!!」

肉薄した昆虫鬼獣の左右の拳の連打。集中して動きを見極め、攻撃を一つ一つ躲していく。

美波「このっ……!!」

ぴよん、と上に跳ねて連打を往なし距離を。

美波「ゲッターイリリジョン!!」

ゲッターキリクの挙動を見て、突っ込んできた昆虫鬼獣の前に、ゲッターキリクの姿は姿を消す。

昆虫鬼獣「!?!」

美波「こつちよ!」 ブンッ

昆虫鬼獣「?」

かな子「こつちです!」 ブンッ

昆虫鬼獣「!」

莉嘉「こつちこつちゅ!」 ブンッ

ゲッターキリクの高速度機動が、幾つもの分身を作り、昆虫鬼獣を翻弄する。

昆虫鬼獸「コザカシイ……！オオオオオオツ！！」

昆虫鬼獸が遮二無二近くのゲッターキリクに殴り掛かるも、それは分身。霧の如く霧散し、消え失せる。

昆虫鬼獸「チイ……ツ！！」

美波「これが本命……！」

そう言つて、ゲッターキリクが姿を現したのは、頭上。

昆虫鬼獸「！！」

美波「やああああああツ！！」

ドリルアームを、昆虫鬼獸の背に突き立てる。

昆虫鬼獸「ガアアアアアア——…ツ！！」

ドリルが高速で旋回。甲殻を穿ち、肉を削り、赤黒い鬼獸の血液を飛沫させる。

昆虫鬼獸「ガアアア……」

大地に崩れ落ちる昆虫鬼獸。

莉嘉「やった！」

美波「……うん。様子が……」

視線の先、昆虫鬼獸の背中がぱっくりと割れる。

昆虫鬼獸「グアアアアツ！！」



かな子「分離した!？」

頭部が分裂し、小さな地を這う虫となって大地を駆け抜けていく。

美波「待ちなさい!」

その後を追う、ゲッターキリク。

美波「くっ……このっ……!」

かな子「相手の進路……また市街地に入るつもり!？」

莉嘉「また路地小路に入られたら、ゲッターじゃ追いきれないよ!」

美波「そうなる前に……!」

ギョーンツ

ゲッターキリクの速度が更に増し、前方を逃げる昆虫鬼獣に迫る。

美波「身軽になった、そっちも十分に速いかもしれないけど……」

キリクが、駆ける。

美波「こつちの方が、もっと速い!」

昆虫鬼獣（分離態）「!？」

ゲッターキリクを、昆虫鬼獣の真横に付けた。

美波「終わりよ」

ドリルを鬼獣の眼前に出す。逃げるために加速していた昆虫鬼獣は止まることも出



晶葉「さあな。わざわざ都心にも近くない町に戻ってきて、復興しようとする人間がいるとは思えんが」

かな子「なら、この町もみんなの記憶から、忘れ去られていくんでしようか……」

晶葉「そうだな。こうやって鬼共は、人間の暮らしの裏から、世界を破壊していく」

莉嘉「ねちっこいやり方して……！絶対に許さないんだから！」

晶葉「そうだ。こんな無慈悲を許すわけにはいかない。どんな人間に代わっても、私達が先ず、抵抗する意思を見せねば」

美波「だけどそれは、地獄のように辛い、茨の道だよ？」

莉嘉「美波……」

美波「これは遊びじゃない。ゲームでもない。辛いことが本当にあつて、目を背けたくなるようなことがこれから、幾らだつて押し寄せてくる。それでも本当に、戦うつて言うの？莉嘉ちゃん」

莉嘉「……うん」

美波「……」

莉嘉「もう決めたよつ。突然知っている人を奪われるなんて、そんなの納得できない。だから、逆に奪つてやるんだ」

かな子「奪う、ですか？」

莉嘉「相手の力を。アタシ達から大事なモノを根こそぎ奪おうとする、全ての力を。そのために、強くならなくつちやダメなんだ！」

かな子「莉嘉ちゃん……」

晶葉「お前達が、支えになってやるんだ」

美波「……意思是本物みたい」

莉嘉「そのつもりだよ。だから、ヨロシク☆」

美波「分かった。今のところは取り敢えず、ね……」

美波（私も、今日のこととは忘れられない……。あの子の無念を、この町の悲劇を繰り返さないためにも、私が戦わなくつちや……！そのためなら……！）

晶葉「チームでまとまったと言うなら、今日はもう帰るぞ」

かな子「そうですね。このままここで、感傷に浸っていても仕方ないですし……。研究所に帰って、コーヒーブレイク、しましょうか」

莉嘉「賛成☆」

晶葉「ふふっ、まあ、今日ぐらいは仕方ないか」

莉嘉「……？今日、ぐらい？」

晶葉「我々に立ち止まる時間などない。お前達にもチームとして、一日も速く完成してもらわなければな」

晶葉「明日から、  
チームとしての地獄の特訓だ！」  
つづく

## 第5話 『不動明王』

夜、遅く――。

~~~~~ 新早乙女研究所 シミュレーター・ルーム ~~~~~

莉嘉「――…ふう。ふわあああ~~~~」

美波「ごめんなさい、莉嘉ちゃん。こんな時間まで付き合わせちゃって」

莉嘉「ううんっ！アタシだって、まだまだパイロットとしては半人前だって、分かっているつもりだから。だからトレーニンングって言うなら、大歓迎だよ☆」

美波「ありがとう…」

莉嘉「にしても、にしし☆美波って、ホント負けず嫌いだよね？」

美波「え？」

莉嘉「チームの足を引つ張りたくなくて、訓練時間を過ぎても秘密の特訓なんて。ホント、負けず嫌いって言うか、意地っ張りって言うか…」

美波「そ、それは…：…莉嘉ちゃんの言うことだけじゃないよ」

莉嘉「ん？」

美波「私は、もっと上手にゲッターを使えなくちゃいけない。戦えるなら、戦えるか

らこそ、その力を、誰よりも上手に扱えなきや…」

莉嘉「もしかして、前の戦闘の事、引き摺ってる？」

美波「引き摺ってる訳じゃ…：ないけど…：。だけど、あんな思い、二度としたくない…：つ」

莉嘉「分かるよ。美波の気持ち」

莉嘉「辛いとか悲しいとか、そう言う気持ちを味わうのは、戦ってる人だけで良い。だけど、あんな思いは二度としたくない」

莉嘉「私達は、強くならなきやダメなんだ…：！」

美波「莉嘉ちゃん…：」

かな子「莉嘉ちゃん、美波さん」

莉嘉「あ、かな子」

かな子「そろそろ一息、入れましょう？ ホットチョコを作ってきたんです」

美波「ホットチョコを？ ん…：つ、甘くていい匂い。そっちのバスケットは？」

かな子「こっちはフルーツサンドです。甘すぎないので、ホットチョコに合うかなって」

美波「成る程…：。こっちは桃で、こっちはオレンジ？」

かな子「はい。桃はエネルギーの吸収効率が良くて、オレンジのクエン酸は疲労回復

にいいんですよ」

美波「へえ。一つ、頂いちゃうね」

かな子「どうぞどうぞ。莉嘉ちゃんも」

莉嘉「…うん」

かな子「訓練は大事かもですけど、根の詰めすぎは厳禁ですよ。訓練で体力を使いすぎて、実戦でへとへとになっちゃったら元も子もないです」

美波「…そうね。強くなることは重要だけれど、それを実戦で生かせなきゃ、ダメだよね」

かな子「そうですっ。体調を万全にしておくことも、私達の仕事の一つですよ！」

莉嘉「……」

かな子「どうですか？莉嘉ちゃん。フルーツサンドは…」

莉嘉「…むー」

かな子「え？」

莉嘉「むくくっ！」

かな子「ええ！美味しくなかったですか？何か失敗を…！ああ、クリームにお砂糖入れすぎたかな…」

莉嘉「そんなことないよ！美味しい！かな子の作ってくれるものは何でも美味しい」

!

かな子「そうですか?…良かったあ」

莉嘉「ただ、何かかな子、余裕じゃない?」

かな子「余裕、ですか?」

美波「この中で言えば、かな子ちゃんはゲットマシンの操縦にも、合体のフォーメーションにも慣れてるから。私達よりは余裕があるように見えるんじゃない?」

かな子「そ、そんなことは…」

莉嘉「…も面白いっ」

かな子「莉嘉ちゃん?」

莉嘉「今日はもう遅いし、明日は緑化ボランティアだし。アタシもう寝るね。おやすみ!」タタツ

かな子「ああ、莉嘉ちゃん…!食べて直ぐ寝たら、消化吸收が遅れて脂肪に…」

美波「莉嘉ちゃんなら大丈夫よ」

かな子「そうでしょうか」

美波「そうよ。だから、ね?かな子ちゃん」ガシツ

かな子「はい?み、美波さん…?」

美波「今度はかな子ちゃんが私の特訓、付き合ってくれるんだよね?」ニコツ

かな子「え、えーつと……あの、私も莉嘉ちゃんと同じボランティア活動で……」

美波「あら？ だけどかな子ちゃん、フルーツサンド作る時随分味見しちやつたんじやない？」

かな子「……っ」 ギクツ

美波「摂ったエネルギーを脂肪にしない為にも、ちゃんと消費しないと、ね？」 ニツ

コニコツ

かな子「うっ……は、はいい……」

――。

くくく 郊外、荒地 くくく

かな子「ふわあ……」

藍子「ふふっ、スゴい欠伸ですね？」

かな子「あ……藍子ちゃん。ごめんなさい……」

藍子「いいんですよ。かな子ちゃん達は、毎日大変ですもんね」

かな子「昨日は別の理由で……」

藍子「別の理由？」

かな子「ああいえ、何でもないです……」

藍子「……？」

「かな子さくくくん、藍子しゃ……ああた、っ……い！」 ステンツ

かな子「歌鈴ちゃん！大丈夫ですか？」

歌鈴「ふえく……何でこんなところにまで、バナナの皮が足元にいく！」

藍子「風でどこからか飛んできたんでしょうか？ともかく怪我はなさそうで良かったです」

歌鈴「はいい……。お陰様で、体は頑丈ですから……っ、そんなことより！こつちの植樹に使う苗、なくなっちゃったので、新しい苗を貰いに来ましたっ！」

藍子「あら、そうだったんですね。ちよつと待つててくださいね？……はい、どうぞ」

歌鈴「ありがとうございます！」

かな子「ふふっ。緑化ボランティア、スゴく張り切ってるんですね」

歌鈴「はい！メカジャウルスとか百鬼メキヤとky……っ、色々によものせいで荒れ地になっちゃってまひゆかうやれ……あう……」

藍子「こども、元は人が暮らしてた町かも知れませんが、こうやって木を植えて、緑が溢れる自然に還つてくれれば……。また人間の暮らしが戻つてくるかもしれないですから」

歌鈴「そうです！そう言うことです!!」

かな子「それでそんな泥まみれになるまで、頑張ってるんですか？」

歌鈴「これは……屈もうとしてつんのめって頭から突っ込んだり、立ち上がろうとして尻餅を着いたり……」

かな子「…気合いが空回りしてるんですね」

藍子「それだけ張り切って、頑張ってるんですね！」

かな子「そうですよ。それでもこの辺りを緑で一杯にしたいって、歌鈴ちゃんの一生懸命な気持ち、伝わって来ますよ？」

歌鈴「藍子ちゃん……かな子ちゃん……。ううく……っ」

かな子「ど、どうして泣くんですか！」

歌鈴「お2人の優しさが我が身に染み渡りますく……！お2人こそ万物の慈母！大日如来にも並ぶ仏の化身……！」

藍子「そ、そんなあく……。仏の化身なんて、大袈裟だよ」

かな子「私達は、転んでも倒れてもめげない歌鈴ちゃんがスゴいねって……ん……？大日如来？」

歌鈴「はい？大日如来が、どうかしましたか？」

かな子「何か、最近何処かで聞いたような……」

藍子「最近、ですか？」

かな子「何処で聞いたんだっけ……？」 ウーン……

歌鈴「はあ……？まあ大日如来は仏教の中でも立派な神様ですから、知名度が高いのは
そうですけど」

莉嘉「ちよつと！何してんの!!」

藍子「!? 何ですか？」

かな子「今の声、莉嘉ちゃん……？」

歌鈴「向こうの方ですね……。兎に角行ってみます……あああ！」

ズッテンツ

歌鈴「うわあ〜ん、また転んじゃいましたあ〜!!」

タツタツ——

莉嘉「こくらあ!!いい加減にしないと、ホントに怒るよ！」

男の子「……」

かな子「莉嘉ちゃん！」

男の子「……ちっ」

莉嘉「かな子！藍子も……」

藍子「大きな声なんて出して、何が……これ……」

植樹、種を植えた地が、踏み荒らされている。

歌鈴「酷い……！」

莉嘉「この子が、折角植えた場所を……！」

男の子「……」

藍子「……どうして、こんなことを？」

男の子「何だよ、みんなして善人ぶって樹なんて植えちやつてさ！ここは元々人が住んでた街だろう!!？」

歌鈴「それは……」

莉嘉「その何が悪いのさ？緑が増えて、花が咲けば、こんな荒んだ景色よりはよっぽど良くなるよ！」

男の子「花なんて、すぐ枯れちゃうだろう！樹だって植物だって……またここが戦場になれば、吹き飛んでなくなっちゃうじゃないか！」

藍子「それでも、こうして生きている私達がいる限り、何度だって花を植えることは出来ます。諦めず、続けていけば……」

男の子「……花や樹はそうやって出来て、街の再生は出来ないのかよ？」

藍子「え……？」

男の子「建築家だったんだ、僕の父さんは。この街のビルや家をたくさん作ってたんだ！」

藍子「……そう、だったんだ」

男の子「樹が立派に育つまでどれくらいの年月が掛かるかって分からない訳じゃないんだ。けど、一つのビルを建ててるのだから、たくさんの人がいて、大変で……」

かな子「……」

男の子「本当に何もなかった一つの土地に、たくさんの人が安心して暮らせる街を作るのだから、何十年も掛かるんだ。……なのに！」

かな子「政府は首都とか、主要都市の復興を優先して、ここみたいな地方都市は都市規模の縮小、復興作業も後回しになってますからね……。怒って当然です」

男の子「姉ちゃん……?」

かな子「ごめんなさい……」

男の子「え?」

藍子「かな子ちゃん、ゲッターのパイロットなんです」

男の子「嘘だろ……!? 姉ちゃんが……?」

かな子「街を守れなかったのは、私達の責任、ですよ?」

男の子「……別に、姉ちゃん達が悪いって言うてるんじゃないよ。……ゲッターがいなかったら今頃、日本だけじゃなく世界中どうなってたか分からなかったし」

かな子「ありがとう。でも、貴方の街を守れなかったのは事実です」

男の子「……うん」

かな子「市街地での戦闘だと、相手を倒すので精一杯だったり、敵の攻撃を防ぐ盾代わりにしたりで、建物のことなんて考えたこともありませんでした」

莉嘉「けどそれは、こつちだつて生きる為だし、仕方ないんじゃないの？」

かな子「それでも、こうやって悲しい思いをする子を作っちゃったのは事実です」

莉嘉「……」

かな子「だから、私一人が頭を下げたって済まされる訳じゃないけど、……ごめんなさい」

男の子「……いいよ。頭を上げてよ」

かな子「でも……」

男の子「言ったじゃない。姉ちゃん達が悪い訳じゃないって」

かな子「ありがとう、ごさいます……」

男の子「やめてよ……」

—— その夜。

莉嘉「……」

美波「ふうく……。あら、莉嘉ちゃん？」

莉嘉「あ……。美波」

美波「莉嘉ちゃんはシャワーまだなの？ 昼間仕事したんだし、浴びるだけでも気持ち

いいよ？」

莉嘉「うん……。もう少ししたらね」

美波「……。昼間、何かあった？何だか、浮かない顔してる」

莉嘉「：別に、大袈裟なことじゃないけどさ」

美波「けど？」

莉嘉「：あのね？」

。

美波「……そう、そんなことが」

莉嘉「ホントにもう信じらんない！向こうの言い分も分からない訳じゃないけどさ！折角皆で植えた苗を踏み荒らして自己主張してさ、こっちに文句言わなくなっただけじゃん！」

美波「まあ、向こうも莉嘉ちゃん達がゲッターのパイロットだとは思ってなかったんだし、仕方がないんじゃない？」

莉嘉「それはそうだけどさあ！まったく、戦闘で辛い思いをしてるのはそっただけじゃないっての……！」 プンプンッ

美波「あははは……」

美波（この様子だと、随分溜まってたみたい……。それでも実際に言わなかったのは、成長したってことなのか……？）

莉嘉「にしても、かな子もかな子だよ！ああ言う相手にはガツーンって言つてやればいいのにさ！素直に頭下げちゃうんだもん。こつちも何も言えなくなつちゃうよ」

美波「ああ…（かな子ちゃんのお陰でもあるのね…）」

美波「…？そう言えば、かな子ちゃんは？」

莉嘉「ん？さあ。帰つてくる時までには一緒だったけど、その後は知らないよ？」

美波「え…？それじゃあ、何処に…」

かな子「あつ！美波さん、莉嘉ちゃん。自室にいないから、探しちゃいましたよ」

美波「あ、かな子ちゃ…ん、っ!？」

かな子「パウンドケーキを作つてたんです。ちよつと作りすぎたから、皆でどうかなつて」

美波「パウンドケーキって…、1パウンドどころか10パウンドくらいありそうだけど…」

かな子「はい…。作り始めたら何だか夢中になつちやつて…」

美波「夢中について、それでもこれだけの量を作るのは…」

かな子「これなら夢の30000キロ超ファットケーキもその内実現出来そうですね！」

美波「夢の超ファットケーキ…？」

かな子「まあ、将来の展望の話はこのくらいにしておいて、紅茶を淹れてきますね？
あ、莉嘉ちゃんも炭酸とか、ジュースの方がいいですか？」

莉嘉「……」

かな子「莉嘉ちゃん？」

莉嘉「いらないつ！」　バシッ

かな子「きや…っ！」

莉嘉「昼間あんなことがあって、よく呑気にケーキなんて作ってられるよね?！」

かな子「昼間のこと、ですか…」

美波「莉嘉ちゃん、それは…っ」

莉嘉「前々から思ってたけど、かな子ってプライドとかってない訳？」

かな子「…プライド、ですか」

かな子「…無いですね」

莉嘉「っ…!だから、子供相手にも平気で頭を下げられるんだ!」

かな子「あの時は、ああするのが一番だと思ったから、そうしただけですよ」

莉嘉「頭を下げるのが一番って何？一方的に好き勝手言われて、こつちのこと何にも分かってないのに！」

かな子「それでも、あの子は別にいいって、許してくれました。それで解決で、いい

じゃないですか」

莉嘉「それで解決になるの？あんなことする奴、戦ってる人の気持ちなんて、全く分かってないんだよ？ただ自分が辛い思いをしてるからって、一人だけ悲劇のヒーロー気取りで！アタシだって、かな子だって、みんな……！」

かな子「あんまり知らない人のことを悪く言ったらダメですよ。莉嘉ちゃん」

莉嘉「くくくつ！もう知らない！」

ダツ

美波「莉嘉ちゃん……！」

美波「……」

かな子「追い掛けてあげて下さい」

美波「……かな子ちゃんは、一人で平気？」

かな子「平気ですよ？一人で、耐えるのには慣れてます。莉嘉ちゃんは、そうじゃないから」

美波「……そう」

言いつつ、広げられたパウンドケーキを一つ取る。

かな子「美波さん？」

美波「経験が大事って言うなら、莉嘉ちゃん自身で答えを見つけさせるのも、経験じゃ

ない?」

かな子「ですけど…」

美波「少なくとも、今の私には、気丈に振る舞ってるチームメイトの方が気になるよ」

かな子「美波さん…」

美波「夢中になって、全部忘れて、ケーキ作りに没頭してたんだもんね。そうやって

1人で発散するのは大切だけど、たまには仲間も頼ってほしいから」

かな子「…ありがとうございます」

美波「さ、一緒に紅茶を淹れましょう? 砂糖とミルクを一杯入れて、飛びきり甘いのを」

かな子「で、でも良いんですか? これからの時間に、そんなに糖分を摂るなんて」

美波「カロリーが気になるなら、また私の訓練に付き合っ? お互い、持ちつ持たれ

つ、ね?」

かな子「…はいっ!」

—— 翌朝。

ウウウウウウン…:ウウウウウウン…ツ

通信士『大阪市内に敵襲! 敵は大阪湾より上陸したメタルビーストタイプ。ゲッター飛焰チーム、直ちに出撃。スタンバイお願いします』

茜 「敵はランドウの残党ですか……！相手には慣れているとは言え、気を引き締めなければ行きましよう！」

美穂 「そうだね……！う……ふわあ……」

アーニヤ 「アー、ミホ？ちよつと眠い、ですか？」

美穂 「……うん。ライヴに向けたレッスンで、昨日遅くて……」

アーニヤ 「そう言えば、ワタシが寝た時には、まだ帰ってきてなかったですね」

美穂 「ううん……ダメダメっ！気合い入れ直さなきゃ！」

茜 「さあ……叫び惑う人々の為にも、遅れるわけには行きませんよお！！アーニヤちゃん、美穂ちゃん！準備OKですか?！」

アーニヤ 「2号機、スタンバイOKです」

美穂 「こつちも大丈夫だよ！急ごう、迫り来る敵へ！」

古田 『茜ちゃん！カタパルトもOK何時でも出れるっすよ！』

茜 「了解……！ゲッター飛焰、発進!!」

プロト・ゲッターのゲットマシンが、研究所を飛び立っていく。

—— 研究所内、待機室

莉嘉 「どうしてアタシ達は待機なの!?納得いかない！」

晶葉 「納得をするもしないも、今回出現の報告を受けた敵の規模から鑑みて、茜達だ

「けでも対応可能と判断したまでだ」

莉嘉「それでも、敵だつて増援を送ってくるかもしれないし、バックアップはあった方がいいじゃん」

晶葉「今回敵が出現した方とは、別の方にも敵が現れないとも限らない。それこそランドウの残党でも攻撃の可能性は捨てきれないからな。もしもの為の備えも必要だ」

莉嘉「でもも〜〜！」

かな子「まあまあ、晶葉ちゃんの言う通りですよ。慎重になりすぎて困ることはありません」

莉嘉「…かな子は戦わなくていいから、ラッキーだつて思ってるんでしょ？」

美波「莉嘉ちゃん！そんな言い方…！」

かな子「美波さん、…良いんです」

美波「けど…」

莉嘉「…ふんっ」

晶葉「…ふむ」

所員「晶葉さん？…良かった、ここにいたんですね」

晶葉「ん？どうかしたか？」

所員「はい。新たにゲッター出撃の要請です」

晶葉「何？新たな敵襲か？」

所員「はい。鬼獣出現の報告です」

晶葉「そうか。で、場所は？」

所員「えーっと、位置は関東圏です。栃木県の…」

かな子「それって…！」

晶葉「どうした？」

かな子「っ…！」 ダッ

美波「かな子ちゃん!？」

莉嘉「…！そっか、昨日行ったトコ…！」

美波「昨日…？」

莉嘉「昨日ボランテアで行った場所だよ！アタシ達は一日だけだったけど、今日も

まだやってる筈！」

美波「ってことは…！」

晶葉「アークチーム、出撃スタンバイだ！」

莉嘉・美波「了解！（☆）」

男の子「——…あ痛っ!!」

藍子「!? 大丈夫?」

男の子「お、俺は大丈夫…! 姉ちゃんは、先に逃げなよ」

藍子「足怪我してるじゃないですか! とても大丈夫には見えませんよ」

男の子「このくらいホントに大丈夫だから!」

藍子「…! 怪物が近付いてきてる…。早く、掴まって!」

男の子「や、やめろよ…! 姉ちゃんも逃げ遅れちゃうぞ!」

藍子「怪我してる人を見捨てていくよりはマシです! 手が届く所で助けられる命は、

絶対に助けるって決めたんです!」

男の子「姉ちゃん…」

歌鈴「あ、藍子ちゃん! こんなところに…! その子は…!」

藍子「歌鈴ちゃん…! 丁度良いところに! お願いします、手伝ってください!」

歌鈴「わ、分かります…! しあああうびゃあつ!!」

ズテンズテンツ

躓き転げ、転がり落ちながら2人の元に辿り着き、男の子を担ぎ上げるのを手伝う。

男の子「俺より重傷じゃない…?」

歌鈴「えへへ…! こう見えても鍛えられてましゆから!」

男の子「へ、へえ…」

歌鈴「それよりも急ぎましょう！牛鬼よりも恐ろしいのが来てますっ！」

剛鬼獣「ゴオオオオツ——!!」

男の子「くそう……！何だつてんだよ、この街に何の恨みがあるつて言うんだよ！」

歌鈴「そうですね……。しかし、街への恨みつて言うより……」

藍子「人類そのものへの、強い、怒り……みたいな……」

男の子「その為に街を壊すつて言うのかよお!!」

歌鈴「……!!見てください、あれは……！」

男の子「ゲッターロボ！」

かな子「鬼獣……っ！」

彼方から飛来したゲットマシン、カーン号が地上を行く鬼獣めがけミサイルを放ち足を止める。

剛鬼獣「!？」

かな子「……よし」

美波「待つて！かな子ちゃんっ!!」

かな子「……美波さん、莉嘉ちゃん」

莉嘉「一人で突つ走つて、どうやって戦う気!？」

かな子「ごめんなさい……」

莉嘉「そんなに慌てなくても、襲ってきた相手は逃げないでしょ」

かな子「……ダメなんです」

莉嘉「え？」

かな子「これ以上、あの街を破壊させちやダメなんです！」

莉嘉「あの街を……？もしかして……」

美波「そこまで。鬼獣が動き出した……！」

剛鬼獣「グウウウ……！」

莉嘉「ひゃっ……！」

巨大なアーマーのようになった両肩にそそり立つ無数のトゲをミサイルのように放出。襲い掛かる攻撃を、各ゲットマシンがそれぞれの方向に散開してやり過ぎす。

莉嘉「見た目鈍重そうなのに、卑怯だって！」

美波「鈍重だからこそ、動きをカバーするための武器なんでしょ？」

かな子「……！ ボランティア参加者の避難、まだ終わってない……!?!」

美波「ホント……！歌鈴ちゃん、藍子ちゃん……！」

かな子「……さっきの攻撃を、街に向かって撃たれるわけには行きませんか……！」

美波「それじゃあ、今回の戦闘は……！」

かな子「私が行きますっ！」

カーン号を先頭に速度を上げる。

かな子「チエーンジ、ゲッターカーンッ!!」

空中で合体し、街を背に鬼獣に相對するように降り立つ。

かな子「ゲッターカーン、参上です!」

剛鬼獣「グウ…ッ!ゲッターアア…!!」

莉嘉「喋った!?!」

美波「ゲッターを呼んでる…?」

かな子「ここから先へは行かせません!」

剛鬼獣「死ネ、ゲッターアア!!」

剛鬼獣は再び、トゲを放出。

美波「やつぱり撃ってきた!」

かな子「エネルギー集束…!テストもただだけど…」

かな子「ゲッターバリア!!」

ゲッターカーン正面にうつすらとした薄緑色のエネルギー障壁が展開される。

かな子「く、くううう…!」

トゲがバリアに触れ、爆発。生じた衝撃を間近に受け、ゲッターカーンのコックピツ

トにもその衝撃が伝わる。

男の子「ゲッター…！俺達を守ってくれるの…？」

藍子「…きつと、私達だけじゃありませんよ」

男の子「え…？」

藍子「真っ先に駆けつけてくれた。きつとのあれに乗ってるのは…」

かな子「くくくっ！」

莉嘉「な、何とか持ち堪えてるの?!」

美波「ゲッターカーンに搭載されたバリア、上手く機能してくれたみたいね」

かな子「けど、実戦で使うには…。晶葉ちゃんに色々報告しなきゃ」

剛鬼獣「ゴアアアアアアッ!!」

莉嘉「いゝっ…！突っ込んでくる…！」

美波「遠くからの攻撃じゃ、噂が明かれないと思ったみたいね」

莉嘉「でも、突っ込んでくるだけなら余裕で避けられ…」

かな子「迎え撃つのなら、望むところですよ！」

莉嘉「え——！……っ」

同時、強い衝撃が襲う。

かな子「っ…！」

突撃してきた鬼獣を受け止め、街に入る寸前で踏み留まる。

莉嘉「うあ〜〜〜……。クラクラする……」

かな子「力自慢みたいですけど、それならこつちも——!」

力と力が拮抗する組合の最中、ゲッターカーンが拳を振りかぶる。

かな子「やあああああッ!!」

渾身の拳が、剛鬼獣を殴り飛ばす。

剛鬼獣「グ、グアア……!」

倒れ伏した剛鬼獣に、ゲッターカーンが静かに歩み寄る。

剛鬼獣「!!?」

ゆっくりと起き上がろうとする剛鬼獣の頭を掴み、持ち上げる。

かな子「体勢なんて、立て直させませんよ!」

剛鬼獣を掴んだ腕を大きく振り仰ぎ、

かな子「ふんッ!!」

地面に勢いよく叩き付けた。

剛鬼獣「グアッ!!」

かな子「うっ……!」

追撃を仕掛ける為に近づくゲッターカーンに向かい、上体を起こしてトゲを撃ち怯ま

せ、その内に立ち上がる。

かな子「まだ抵抗するつもりですか?!」

剛鬼獣「シヤアアアツ!!」

両腕を広げ、指先の爪を立てて再度強襲の為、肉薄。

かな子「そんな攻撃で…!」

爪の攻撃を躲し、その手首を抑え、

かな子「ゲッターカーンは——!」

力任せに剛鬼獣の動きを制し、スイング。

かな子「倒せません!」

回転の勢いに乗せ、再び剛鬼獣を地面に叩き付けた。

轟音と地響きが灰塵を生み、周囲を包む。

藍子「きやあっ!」

男の子「スゴい…」

歌鈴「不動明王…」

藍子「え…?」

歌鈴「ああ、いえ…。あのゲッターの姿を見ていたら、何となくお不動さんのイメー

ジがつい口について出てしまっ、ですね…」

藍子「んく……？確かに荒々しいと言うか、そう言う雰囲気はお寺に置いてある不動明王像に近いかもだけど、そんな怖い感じじゃないですよ？」

歌鈴「いえいえ。恐ろしい姿で造形されているあの不動明王は、仏法を離れ外道に堕ちようとする人間を止めるためとも言われているんですよ！」

藍子「そうなんですか？」

歌鈴「はいっ。それに、不動明王は別名『揺るぎなき守護者』とも呼ばれてるんですよ！私達を守ってくれる、立派な守護神なんですよ！」

かな子「けんさく 縄索っ!!」

ゲッターカーンが掌を打ち合わせ、その内側から取り出したのは、片方の先端に独鈷杵の付いた鎖。逆の端は環になっていて、腕に通すことで鎖が手からすり抜けるのを防ぐ。

かな子「はっ！」

先端の独鈷杵を重りにして鎖を回し、遠心力で剛鬼獣めがけて投じる。

剛鬼獣「……！」

かな子「!!」

剛鬼獣「っ!？」

投じられる独鈷杵を警戒し、横に跳躍する回避運動を行った剛鬼獣に対し、ゲッター

カーンは鎖を投じた右腕、力点である腕を捻る事で投じた鎖の方向を変化。真横にスイングさせて、回避に動いた剛鬼獣を追う形で、真横から剛鬼獣を打ち据えた。

剛鬼獣「ガ…ッ!!」

体勢を崩し、落下する剛鬼獣。ゲッターカーンは一度縄索を手元に戻し、再び勢いを付けてから、立ち上がりつつある剛鬼獣に投じる。

剛鬼獣「ウウ…!?!」

じやらり、と鎖がしなり、剛鬼獣の体に巻き付いて捕える。

かな子「…っ! やあああああッ!!」

そのまま、ゲッターカーンを180°回頭。縄索の鎖を肩に背負い、肩を支点として捕えた剛鬼獣を天高く投げ上げる。

剛鬼獣「…!!?!」

かな子「…えいっ!」

僅かな空中遊泳の後、待つているのは落下。鎖を引き、剛鬼獣を大地へと叩き付ける。かな子「まだ終わりませんよ…! はあああああッ!!」

鎖で投げ、叩き付ける。その一連の動作は1回では済まず。2回3回と連続して剛鬼獣を投げ上げては叩き下ろしていく。

その回数、実に12回。

かな子「これで、最後です！」

ジャラッ

鎖を引き寄せ、剛鬼獣をゲッターカーンの懐へ。

剛鬼獣「グウ……！ヤラレヌウ……！！」

ゲッターカーンに抱き止められる様に抑えられた剛鬼獣。最後の足掻きと言うようにゲッターカーンの首元に噛み付く。

かな子「……！」

その足掻きすら何事とも思わぬかのように、頭を引つ搦んで引き剥がし、もう片方の拳で鳩尾を打ち、最後の抵抗力すら奪う。

剛鬼獣「……」

ガクリ、と力を失いゲッターカーンに体重を預けて項垂れる剛鬼獣。

莉嘉「……」

かな子「莉嘉ちゃん」

莉嘉「は、はい……っ！」

かな子「莉嘉ちゃんの言う通りですよ？私は、戦いたくなくてありません。けど、それは私だけじゃないと思います。戦いたくないのは誰だって一緒なんです」

だけ、

かな子「みんな誰かを守りたくて、嫌だから、やらないんじや、きつと納得できないから、今ここにこうしているんです」グッ

剛鬼獣を抱え直す。

かな子「さあ、終わらせませすよ！舌を噛まないように、しつかり掴まって下さいっ！」

グン、と操縦桿に力を込め、ゲッターカーンを回転させる。

莉嘉「ウゴ…ッ!？」

美波「こ、これが、噂の…!？」

かな子「——大いっ!？」

回転はトップスピードを越え、やがて竜巻を生みほどの勢いに。

かな子「雪う〜!？」

周囲の木々をも薙ぎ倒し、引き込み巻き上げても、尚も止まらず、

かな子「山ッ!!」

やがてその回転は臨界に達し、

かな子「おおろしいい〜ッ!!」

烈迫の気合いを込めた叫びと共に、剛鬼獣を天高く放り投げた。

かな子「最後は、未央ちゃん秘伝のトドメです!？」

大雪山の回転を維持し、その中でグツ、と右手に力を込めて拳を固め、落下してくる剛鬼獣を待ち構える。

かな子「——大雪山、おろしパンチッ!!」

大雪山おろしの回転加速を加えた拳が、落下してきた剛鬼獣に深く突き込まれ、その体を血飛沫と肉片に変えながら、木っ端微塵に碎け散った。

男の子「揺るぎない守護者……不動明王!」

日も傾き始めた黄昏時。山の向こうに沈んでいく落陽の日射しを後光のように背負い、ゲッターカーンはそこに立っていた——。

藍子「かな子ちゃん!」

歌鈴「かな子しゃん:アベシ!」

かな子「藍子ちゃん、歌鈴ちゃん!良かったあ、無事で!」

歌鈴「はいっ!お陰しやまでこの通り、みんな元気ですよ!」

かな子「歌鈴ちゃんは、何かスゴく泥塗れだけど:」

藍子「でも、来てくれて本当に助かりました。ありがとうございます」

かな子「そんな…。お礼を言われるようなことは何も……あっ」

男の子「……」

かな子「……」

男の子「…お姉ちゃん」

かな子「ごめんなさい」

男の子「えっ？」

かな子「また、街を壊しちゃいました」

男の子「それは、もう良いって。…俺が悪かったよ」

かな子「え…？」

男の子「だから！姉ちゃんが一生懸命戦ってるのは、目の前で見て分かったよ。だから、昨日は俺が勝手なこと言ったりして悪かったよ。……ごめん」

かな子「ありがとうございます」

男の子「……」

かな子「……」

藍子「……」

歌鈴「あっ……えーつと……」

かな子「あ、あのっ……！」

男の子「な、何…？」

かな子「……その、街を壊したばかりの私が、こう言うことを言うのは、ちよつと可

笑しい気もするんですけど……」

かな子「君の未来に、期待しても良いですか？」

男の子「俺の、未来……？」

かな子「はい。自分の生まれた街が大好きで、お父さんの仕事を誇りに思っていた君が、この壊れた街に、新しい街を築いていく、そんな未来を」

男の子「……」

かな子「勝手なのは分かっています。率先して街を壊す癖に勝手なこと言うなって言うのも、分かります。だけど、私に守れるのは、みんなの未来だけだと思うから」

男の子「みんなの、未来……」

かな子「戦いが始まれば、街は壊れるけど、花は吹き飛ぶけど、それでもつて花を植え続けてくれる人がいる限り、そこに花は咲いてくれるんです。みんなの住む家を、暮らす街を作ってくれる人がいる限り、また街に人は帰ってくるんです」

かな子「だから、何時か未来の君が、またここを豊かな街にしてくれるって、信じても良いですか？」

男の子「……」

かな子「ダメ、ですか……？」

男の子「そんなの、今一生懸命戦ってる人にそう言われたら、ダメって言えないじゃ

ん

かな子「それじゃあ……！」

男の子「俺、頑張るよ。何時か父ちゃんを越えるような、立派なビルを作ってみせる

！」

かな子「はいつ、ありがとうございます！」

男の子「姉ちゃんの大雪山おろしても、吹き飛ばないような頑丈なビルをな！」

かな子「そ、それは……あの、あうう……」

藍子「ふふふっ」

歌鈴「一件らきゆちやきゆでひゆで……あう……」

アハハハハハハハッ

美波「スゴいね、かな子ちゃん」

莉嘉「……うん」

美波「周りのことまで考えて、未来のことまで……莉嘉ちゃん？」

莉嘉「先に研究所戻ってるね」

美波「えっ？」

スタスタッ

莉嘉（かな子……戦いたくないって言うてるのに、あんなに強かった）

莉嘉「私も、強くならなきや…！」

莉嘉（もつと強く——！）

つづく

第6話『姉と妹』

夜。

月明かりが夜の闇を仄かに照らし、その月下には厚い雲海が広がっている。

悠然と、風の赴くままに漂っていた雲海が大きく膨らんで弾け、内から月下に姿を現すモノがある。

莉嘉「くっ……！」

ゲッターアークだ。

莉嘉「……の……！ 一体何処に！」

美波「落ち着いて莉嘉ちゃん！ レーダーで熱源を追って……きやあつ！」

月下に上がったゲッターアークを追って、雲海から姿を現した人魚鬼獣の尾びれによる鞭打がゲッターアークを襲う。

莉嘉「ガッ……！ こんのオ……！」

即座に体勢を立て直して反転し、人魚鬼獣と相對する。

莉嘉「ゲッタートマホークツ!!」

トマホークを抜き打ち、肉薄。

莉嘉「えいっ！」

人魚鬼獣「フンツ……！」

やや大振りに放たれたトマホークを、人魚鬼獣は軽く往なす。

人魚鬼獣「ヤアアアアッ!!」

莉嘉「うあゝ ああつ……！」

反撃の槍撃が、ゲッターアークを襲う。

莉嘉「こ、このくらいでえ……！」

体勢を崩しながらも、トマホークを投げ、人魚鬼獣に当てて怯ませる。

莉嘉「バトルショットカッターアア!!」

両側腕部に据え付けられたバトルショットカッターを構える。

莉嘉「このっ、このっ、このっ、このお!!」

左右の腕を交互に放ち、回避する人魚鬼獣を追い詰める。

かな子「い、幾らなんでも、強いん……きやつ！」

莉嘉「届けええええッ!!」

無茶苦茶な連打で放たれたバトルショットカッターの刃が、人魚鬼獣の偶然に肩口を

撫でる。

人魚鬼獣「ギャアアアアアツ!!」

吹き出す血飛沫に狼狽える人魚鬼獣。

莉嘉「これで！」

一瞬の隙は、見逃さない。

莉嘉「ええいつ！」

踵落として、人魚鬼獣を更に怯ませ、

莉嘉「ゲッタービームツ!!」

ゲッタービームで射抜く。

人魚鬼獣「ガ……ガア……!ダガ、ワガシメイハ——!」

爆散。

静寂の夜闇に爆炎の華を咲かせ、人魚鬼獣は散っていった。

—— 研究所、管制室。

通信士「ゲッターアーク、鬼獣撃墜」

晶葉「ゲッターアークのデータを見せてくれ」

通信士「は？」

晶葉「……ゲッタービーム出力は43%か……。この程度の威力で、よく撃退出来たものだな」

通信士「は……」

晶葉「速やかにゲッターを帰還させろ。パイロットはその後、8時間の休息だ。訓練開始は何時も通り、遅刻はするなよと伝えておけ」

通信士「了解！アークチーム、聞こえますか——」

~~~~~ 新早乙女研究所 格納庫 ~~~~~

整備員「2号機、格納完了しました！」

古田「すぐメンテに入るっすよー！……つたく、今日も派手にやつちやつて〜」

美波「ごめんなさい、古田さん」

古田「あつ、あ〜いや、美波さんが悪い訳じゃないっすよー！」

美波「でも、もう遅い時間なのに……」

古田「好きでやつてることっすから。それに、夜勤の連中はすっかり休憩もとつた後

！何にも心配はいらないっすよー！」

美波「……ゲッターをよろしくお願いします」

古田「言われなくても。……にしても、研究所の近くに出現って聞いた時は、ちよつと

ヒヤツとしたっすよー」

美波「……そうですわね」

古田「美波ちゃん達のお陰で助かったっす。それだけでも、感謝感激っすよー！」

美波「私は、何もしてませんから。それじゃあ…」

古田「はいっす。ゆっくり休んで下さい」

美波「……」

莉嘉「何!?!アタシが悪いって言うの!!」

美波「この声……」

かな子「え、えーつと、だから、そう言うんじやなくて、ですね?今回みたいに、強引なやり方じゃなくても、やりようはあると思うんです」

莉嘉「やりようって何?」

かな子「それは……えーつと……」

莉嘉「……ふうん。結局あれ?かな子は、アタシが弱くて、頼りないって言いたいんだ」

かな子「そんなことは……!」

莉嘉「そうだよね!アタシは、卯月みたいに操縦上手くないし、リーナみたいに機転も利かないし、ここの中で一番子供で、一番頼りないよ!」

かな子「莉嘉ちゃん……!」

美波「そこまでにしよ、莉嘉ちゃん?」

かな子「美波さん……」

美波「戦闘が終わった直後だもん。ナーバスになっても、仲間当たるのは違うと思うよ?」

莉嘉「……」

美波「今は頼りなくなっちゃって、莉嘉ちゃんは莉嘉ちゃんの意思で戦ってる。私はそれを理解してるつもりだから、一緒に戦ってる。思うように結果が出なくて、焦る気持ちは分かるけど、一旦落ち着かなくちゃ」

莉嘉「けど……」

美波「今日はもう遅いから、早く部屋に戻って休もう?ね?」

莉嘉「うん……」

スタスタスタ……

かな子「ありがとうございます。美波さん……」

美波「気にしないで。かな子ちゃんが言うことは、間違ってるから」

かな子「それじゃあ、美波さんも……」

美波「今の莉嘉ちゃんは、1人でひた走ってるようなものだもの」

かな子「何か、いきつかけがあるといいんですけど」

美波「私達でフォロー出来るところは、フォローしてあげればいいと思うわ。……それ

よりも気になることがあるの」

かな子「…はい？」

美波「今日現れた敵のこと」

かな子「今日の…？ああ、研究所の近くに現れて、少しビツクリしちゃいました」

美波「それもあるけど、私達の拠点を攻撃してくるにしては、戦力が少ないと思わない？」

かな子「それは…：鬼獣が一体だけでしたけど…：。偵察が目的だったとか、研究所に転移する予定じゃなかったとか、色々理由があるんじゃないですか？」

美波「それはそうかもしれないけど、簡単に決着がついたのも気になるの」

かな子「…鬼獣に、何か考えがあって行動してるってことですか？」

美波「うん…：。今までの鬼獣出現の例から見ても、今回の相手は手応えが無さすぎる。

明日、訓練が終わった後、研究所の周りを調べたいから、手伝ってもらってもいい？」

かな子「分かりました。茜ちゃん達はアイドルの方の仕事や学校で不在ですから、私達でやることはやった方がいいですね」

美波「お願い。よろしくお願いね」

かな子「任せて下さい。…この話、莉嘉ちゃんにはしなくていいんですか？」

美波「…莉嘉ちゃんは、今は落ち着かせた方がいいかも」





晶葉「莉嘉、今は訓練中の筈だぞ。早くゲッターを訓練区域に戻せ」

莉嘉「このゲッターの限界性能を計ってるんだよ！機体の性能を最大限に発揮するためには必要なことでしょ？」

晶葉「その為に仲間の命を危険に晒すな。お前自身も限界だろう？」

莉嘉「このくらいで、弱音なんて吐いてたら、何時までも強くなれないよ！」

晶葉「強くなる前に死ぬぞ。いいから戻ってこい！」

莉嘉「もうちよつと……もう少しだけ……！」

かな子「り、莉嘉ちゃん……ウツプ——」

莉嘉「……訓練前にお菓子食べ過ぎなんだよ」

ヒュツ……

速度を落とし、高度下げていくゲッターアーク。

——。

かな子「莉嘉ちゃん！」

莉嘉「……何さ」

かな子「さっきの訓練、どう言うつもりなんですか!？」

莉嘉「何って、晶葉にも言った通りだよ。ゲッターアークが何処まで出来るのか、知っておくのは悪いことじゃないでしょ？」

かな子「やり方の話をしてるんです！あんなゲッターの使い方、命を粗末にしてるよなものですよ?!」

莉嘉「だから何なの？ゲッターに振り回されるよりはマシじゃないの？」

美波「莉嘉ちゃんのやり方には付き合いきれないって言ってるんだよ」

莉嘉「…美波？」

美波「莉嘉ちゃん、私達はチームだよ？誰か1人がチームの輪を乱して、足並み揃わなくちゃ意味ないの」

かな子「3つの心を、1つに合わせて戦うのがゲッターロボです」

美波「それが出来ないなら、これ以上チームを組むことは出来ないかな」

莉嘉「何さ…！2人してアタシが悪者みたいに…！」

美波「……」

かな子「……」

莉嘉「う……うう……！アタシだって、アタシだって！足を引っ張る仲間なんて要らないよ！」

晶葉「なら、決まりだな」

莉嘉「晶葉……！それに……」

美嘉「…莉嘉」

莉嘉「お姉ちゃん!? どうして…!」

晶葉「昨日の夜に連絡しさせてもらった。お前、東京での戦い以来、連絡してなかったらしいな」

莉嘉「それは…!」

かな子「必ず連絡するって、約束したじゃないですか!」

美嘉「全く人に心配ばっか掛けさせて…!」 グイツ

莉嘉「あつ…!」

美嘉「ほら、帰るよ! パパやママだつて心配してるんだからね!」

莉嘉「ちよ、ちよつと待つてよ!」 バチンッ

美嘉「莉く嘉くつ!」

莉嘉「アタシ帰らないよ! アタシだつて、ゲッターで戦えるんだ!」

美嘉「たった今チームから抜けたんでしょ!」

莉嘉「それでも、ブラックゲッターだつて、ゲッターD2だつて1人で乗れるゲッターはあるもん!」

美嘉「ゲッターはアンタの玩具じゃないの!」

莉嘉「玩具なんて!」

晶葉「子供に任せるゲッターはないな」

莉嘉「晶葉……！」

晶葉「莉嘉。私は君の意思を汲んできたつもりだ。これまでゲッターに乗って戦う者を、その姿を間近で追って、何の為に彼女達が戦ってきたのかを追っていたつもりだ」

晶葉「莉嘉、君は何の為に強くなる？」

莉嘉「何の為に……？」

晶葉「自分の為か、誰かのためか？強くなつてその力を何に使う？破壊のためか、守る為か？」

莉嘉「そ、そんなの決まつてる……！アタシは……」

晶葉「……」

莉嘉「アタシは……」

美波「……」

晶葉「答えられないのなら、お前をゲッターに乗せるわけにはいかないな。それは、主任の遺志にも反することだ」

莉嘉「っ……！」

美嘉「もう分かつたでしょ。ここにアンタの居場所はないんだよ。ほら、帰るよ」

莉嘉「……知らない……！」

美嘉「莉嘉？」

莉嘉「アタシ、絶対帰らないッ！」 ダッ

美嘉「あ、こらっ！ 待ちなさい、莉嘉!!」

晶葉「…行つたか。またパイロットを選び直さなきゃならんか」

美波「何て言つて、ホントはそんなこと露程も考えてないんじゃない？」

晶葉「さあな。少なくとも、今の莉嘉をゲッターに乗せるつもりがないのは本心だよ」

美波「今の莉嘉ちゃん、ね…」

かな子「……」

美波「かな子ちゃん、どうかした？」

かな子「私、ちよつと言い過ぎちゃいましたよね？ 落ち着いたら、ちゃんと謝らなきゃ

…」

美波「…ホント、優しいよね。かな子ちゃんは。……ん？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……ッ

美波「何…？ 地震…？」

晶葉「いや、地震にしては……様子が可笑しい——！」

直後、それは来た。

研究所の床面を、内壁を裂き、砕き、姿を覗かせたのは巨大な樹木の“根”だった。太く所々にオレンジ色の球体が点々と着いたその根は瞬く間に研究所に入り込み、通路を

横切り、格納庫を埋め尽くし、瞬く間に研究所を覆い尽くした。

晶葉「うっ……ぐっ……!」

美波「晶葉ちゃん!大丈夫?」

晶葉「ああ、飛び出してきた根が掠っただけだ。大した怪我じゃない」

かな子「それにしても、いきなり何なんですか?この根っこは…」

晶葉「ただの樹木の根な訳があるか。普通の植物の固さで、研究所の内壁を貫けるわけがない」

美波「と、言うことは…」

張り巡らされた根の隙間を掻い潜って駆け出し、管制室と通信出来る端末の元へ。

晶葉「こちら格納庫。管制室、聞こえるか?」

通信士『——こ、こちら管制室…っ!』

晶葉「現状の報告を。研究所、いや、外の状態はどうなっている?」

通信士「け、研究所の近くに、鬼獣らしき反応を確認しています」

かな子「……!」

美波「やっぱり…!」

晶葉「鬼獣の現在の動きは?」

通信士『動きらしい動きは、確認されていません』

晶葉「動きがないだと…?」

美波「ともかく、この根はその鬼獣に繋がっているのね?」

通信士『はい…。敵は、植物型とも言える鬼獣です。研究所全体を覆っている根のよ  
うなものと、出現している鬼獣は繋がっています!」

晶葉「こちらを捕らえて、様子を伺っているとでも言うのか?」

美波「植物型の鬼獣、と言うことは、もしかして、昨日の鬼獣が…!」

晶葉「わざわざ種蒔きに来たと言うことか。随分回りくどい事をするじゃないか…  
—っ!」

直後、研究所内に響き渡る爆音。

かな子「くっ…!何…?」

整備員「根が…!根が爆発したぞ!!」

晶葉「何だと…?皆、不用意に根に触れるな!」

美波「もしかして、根に付いてるこの球体が…!」

晶葉「現状では判断出来ん。ともかく、下手に動くな。それこそ、敵の思う壺だぞ!」  
かな子「ゲッターは…?出撃出来るんですか?」

晶葉「飛焰は根が絡みすぎて無理だな。アークなら、辛うじて出撃出来るか…?」  
かな子「アーク…。莉嘉ちゃんは…」

美波「莉嘉ちゃん…!？」

莉嘉「う……うう……何なの？もう……!」

美嘉「莉、嘉……!」

莉嘉「つ……!お姉ちゃん……!」

美嘉が、内壁と根の間に挟まれている。

莉嘉「お姉ちゃん!」

美嘉「莉嘉は、無事?」

莉嘉「お姉ちゃん、アタシを庇って……?!」

美嘉「怪我はしてないみたいだね……。突然だったけど、無事で良かった……」

莉嘉「アタシのことなんてどうでもいいよ!直ぐ助けるから!」

言って、近くの内壁に備え付けられた非常用の手斧を手取る。しかし、

莉嘉「きやあつ!」

響く爆音。

所員「な、何だあ!？」

所員2「球体が爆発したぞお!球体に触るなって、池袋さんが!」

莉嘉「……!球体……!？」



挟まれて身動きの取れない、美嘉の目の前に球体がある。

莉嘉「そ、そんな……どうしたら……」

美嘉「……アタシの事はいいから、莉嘉は逃げな」

莉嘉「で、でもお……!」

美嘉「ここにいたって、アンタは何も出来ないでしょ?」

莉嘉「アタシ……アタシは……!」

美嘉「アンタは、1人だと無茶ばかりするんだから。ここはお姉ちゃんの言うことを聞きな」

莉嘉「放って、おけないよ……!」

通信士『鬼獣、行動開始。研究所に向かってきます!』

莉嘉「鬼獣……!この根っこも、鬼獣のせい……!」

美嘉「莉嘉ツ!!」

莉嘉「!?」

美嘉「……アンタは、逃げな」

莉嘉「お姉ちゃん……」

美嘉「アンタにまで何かあったら、パパとママはどうなるの?どっちかだけでも無事に帰って、安心させなくちゃ」

莉嘉「そんな、どっちかがいなくなるみたいな言い方、しないでよ……！」

美嘉「ははっ……！大丈夫。莉嘉はアタシが、守るから……★」

莉嘉「…守る……？お姉ちゃんが、アタシを？」

莉嘉「アタシは——！」

ダツ

美嘉「莉嘉ア!!」

ダダ——ツ

莉嘉（お姉ちゃん……！）

莉嘉（お姉ちゃん——！）

莉嘉「お姉ちゃんツ!!」

——。

整備員「1、2、3、4……！」

古田「よおし、みんな慎重に……！よし、切断完了っス！」

かな子「これで、アークのゲットマシンは何とか動かせますね！」

晶葉「ああ。球体に触れなければ、爆発はしないみたいだな」

美波「けど、問題はどややって出撃するか……」

古田「カタパルト、出撃口は根が複雑に絡んで、排除するのは不可能っスよ！」

美波「何処かに、根の隙間がある筈よ」

古田「そんなことを言ったって……!」

かな子「もつと広く、根を追って下さい!何処かに、ゲットマシンでも入いる隙間がある筈です!」

古田「隙間……隙間、隙間……。……と、ありました!」

晶葉「何!?!」

古田「ですが、その場所は!」

晶葉「その場所は!?!」

古田「研究所の地下です!」

かな子「研究所の、地下……!?!」

美波「それなら、ゲッターキリクなら!」

かな子「けど、パイロットが足りませんよ!」

晶葉「…仕方ない。私が行こう」

かな子「晶葉ちゃんが……!?!」

晶葉「この状況では致し方ないだろう。大丈夫、ある程度ならば耐えられるさ」

かな子「そんなこと、言っても……!」

晶葉「時間はない。準備を急ぐぞ」

莉嘉「——待つて！」

美波「…莉嘉ちゃん」

莉嘉「アタシを、ゲッターに乗せて」

晶葉「…出来んな」

莉嘉「分かつてる…！分かつてるよ…。アタシが子供で、未熟で、いい加減だつて！」

莉嘉「…アタシ、やつぱり子供だよ。みんなが心配する気持ちも、どうして不安に思うのかも、アタシには分かんない」

美波「莉嘉ちゃん、それは…！」

莉嘉「ただアタシは、出来ないことを出来ないって諦めたくないんだ！」

美波「……！」

かな子「出来ないことを、諦めない…」

莉嘉「出来ないまま終わりなんて、そんなのイヤだよ！アタシは、出来るまでやりたい。途中で、諦めたくなんてないっ！」

晶葉「それでやるのが、ゲッターで戦うことか？とんだ自殺志願者だな」

莉嘉「立派なこと何て言えないよ。立派な理由がなくちや戦つちやいけない？そんなの誰が決めたの？」

美波「それは…」

莉嘉「アタシは、戦うことは出来る。なら、それ以上だつて出来るかも！」

晶葉「その為に、死ぬぞ？」

莉嘉「死なないよ……！アタシが、ゲッターで出来ること、それを見つけるまでは、絶  
対死なないっ！」

晶葉「子供の無謀か……。その根拠は何処にある？」

莉嘉「分かんない。何にも分かんないけど、分かんないままで終わりにしたくないか  
ら……！」

晶葉「……話にならない。お前達はどう思う？」

美波「……」

かな子「……どう、つて、言われても……？」

莉嘉「美波、かな子……」

美波「莉嘉ちゃん。私達は、貴女に付き合つて死ぬつもりはないよ？」

莉嘉「それは、分かつてるよ。だから、えーつと……その……」

かな子「莉嘉ちゃん……？」

莉嘉「ごめんなさいっ！」

かな子「えっ？」

莉嘉「アタシ、どうしてゲッターに乗るのか、どうして戦いたいのか、そう言うのは

分かんないけど、分かっていることはあるよ？美波とかな子は、ずっとアタシのことを見てくれたってこと。お姉ちゃんが教えてくれた」

美波「美嘉ちゃんが…」

莉嘉「きつとアタシは、まだ守られる立場なんだよ。だけど、アタシは守られるだけで終わりたくない。自分出来ることを、自分の目で自分の力で確かめたいんだ！」

美波「…だから？」

莉嘉「だ、だから…！えーつと、その。これからもずっと迷惑掛けちゃうかもしれないし、傷付けたり、苦しい思いをさせちゃうかもしれない。だから、ごめんなさいっ！」

美波「だからごめんなさい、つて…」

かな子「私は良いと思いますよ？」

美波「かな子ちゃん！」

かな子「全然、迷惑なんかじゃないですよ。こうして分かって、頼ってくれますから、迷惑なんかじゃないです」

晶葉「それでいいのか？」

かな子「良いんですよ。こう言うので、それに莉嘉ちゃんを一人でゲッターに乗せるより、お目付け役がいた方が良くないですか？」

莉嘉「そゆことそゆこと」 ニシシツ☆

美波「莉嘉ちゃんが得意気になることじゃありません！」

コツツ

莉嘉「あ痛〜っ！」

晶葉「…話はまとまったのか？」

かな子「私の方は…。美波さん…？」

美波「…：はあ。かな子ちゃんの言うことも、一理ありそうかも」

莉嘉「それじゃあ…！」　　パアッ

美波「これ以上話してる時間も惜しいし。とにかく、今は莉嘉ちゃんを信じるわ！」

莉嘉「やりい〜☆」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ…：ツ

莉嘉「とお…：ととっ！」

かな子「莉嘉ちゃん、危ない！」

晶葉「早くしろ！外の鬼獣が動き出したらしい」

美波「鬼獣が…!？」

莉嘉「つて言うか、出撃するにしてもどうやって？カタパルト根っこまみれで、発進

なんて出来ないよ！」

晶葉「それなら心配するな。…秘策がある」

莉嘉「秘策？」

——そして、

莉嘉「……で、出撃の準備を整えてマシンに乗ったのはいいけど……」

莉嘉「どういう状況なのこれえー!?」

プラーン

機首を床面に向けて、縦に連なって宙吊りにされているゲットマシン。

かな子「現状、研究所の出撃口には鬼獣の根が張り巡らされていて、通常の手段では出撃出来ませんから」

莉嘉「その事情はさつき聞いたけど、だからって何で宙吊りにされなきゃいけないの？」

晶葉『これが最も適切な方法だからだ』

莉嘉「晶葉！」

晶葉『研究所全体を覆っている根だが、その分地下には隙がある。ゲッター機が、ようやく通れるような隙間だがな』

美波「ゲッターキリクのドリルを使って、その空間を通り抜けるってことだよ、莉嘉ちゃん」

莉嘉「だからって、こんな滅茶苦茶な……!」



晶葉『ごちやごちや言っていないで覚悟を決めろ。出来ること、全部出来るようになるんだろ?』

莉嘉「…っ! よおうし、来るなら来い!」

晶葉『そう、その覚悟だ。今、物資搬入用のエレベーターを下に下げる。それで幾分でも距離が稼げる筈だ』

美波「……」

かな子「……」

莉嘉「……」

晶葉『失敗すれば揃って地獄行きだ。とちるなよ?』

莉嘉「今集中してるんだから、余計なこと言わないで…」

かな子「大丈夫ですよ」

莉嘉「えっ?」

かな子「莉嘉ちゃんの命を、私に預けて下さい。そうすれば、きっと上手くいきますから!」

莉嘉「命を、預ける…。仲間を、信じて…」

かな子「はいっ。そうやって預け合って、信じ合って来たんです! 卯月ちゃんも、李衣菜ちゃんも!」

莉嘉「かな子……うんっ、分かった！アタシの命、かな子に預ける☆」

古田「アンカーを放すっスよ！」

美波「……！」

古田「……えいつ！」

ゲットマシンを固定していたアンカーが切り離される。

莉嘉「やああああっ!!」

僅かしか余裕の無い間隔。瞬く間にアーク号とカーン号はドッキング。

かな子「行けえええっ!!」

躊躇うこと無くカーン号を加速させ、キリク号の後部に向かう。

美波「チエンジゲッターキリクツ!!」

本当にドッキングが完了したのか、していないのか、刹那のタイミングでの叫び。

重質量物が地面に激突する音が響くのは、ほぼ同時だった。

土が煙幕となつて巻き上がり、格納庫全体を黄土色で覆う。

古田「ケホッ…ケホッ…！う、上手く行つたっスかあ？」

晶葉「ああ、見ろ」

古田「…っ！この大穴は——！」

。

植物鬼獣「……」

濃灰色で、歪で巨大な樹木。

そんな異様な姿をした植物鬼獣は、爆弾の付いた自身の根で覆い尽くした新早乙女研究所に極低速だが近付きつつあった。

植物鬼獣「……」

彼の使命は至ってシンプル。全てのゲッターの拠点である早乙女研究所を破壊すること。その方法もシンプルそのものであった。

些細な衝撃で爆発する自身の根。

その根で研究所を覆い、後は自分自身が飛び込むだけ。

巨大な質量を持つ自分が倒れば、その衝撃で根は連鎖的に爆発し、早乙女研究所は跡形も残さず消え去るだろう。

例え自分の命と引き換えになっても。

この宇宙から、ゲッターの起源を絶つことが出来る。

その為に彼は生み出されたのだ。だから彼の行動に迷いはない。

植物鬼獣「……？」

植物鬼獣の脚。大地に深く張り巡らされた移動用の根が、ささやかな振動を捉える。

——…イイインツ

同時に響く金属音。これは――、  
ズワオ

ゲッターキリクだ。

植物鬼獣「!!」

直ぐ様応戦。地中から根の先端を突き出し、巨大な針の様に尖らせてゲッターキリクを狙う。

美波「オーブンゲット!!」

分離。ゲットマシンは3方向に分かれて根の攻撃を躲す。そして、

莉嘉「チエーンジゲッター! アークツ!!」

赤いゲッターロボ、ゲッターアークが姿を現す。

莉嘉「よくもアタシ達を苦しめてくれたよね! そのお礼、倍にして返してあげるから  
!」

美波「ちよつと待って!」

莉嘉「…つとと!」

前に向けて、勢いを付けようとしていたゲッターアークが、つんのめるようにして動きを止める。

莉嘉「もう、何さ?」

美波「まずは研究所を覆っている根を、奴から切り離さなくちゃ！」

莉嘉「根を？」

かな子「そうですね。あの鬼獣を倒した瞬間に、衝撃で爆発するかもしれないし、鬼獣が盾として使ってくるかも知れませんが」

莉嘉「…まずは人質救助からってこと…」

植物鬼獣「オオオオツ!!」

莉嘉「うわああっ!?!」

再び放たれた根による攻撃を掻い潜り、何とか攻撃を躲す。

莉嘉「こんなんじや何処の根を切り離せばいいか分かんないよお！」

美波「今から私が分析するから。何とか時間を稼いで！」

莉嘉「時間を稼ぐって…。それに、ちよつとの衝撃で爆発しちゃうんじや、攻撃した衝撃でも爆発しちゃうんじやない？」

かな子「爆弾を傷付けず衝撃を与えず、本体から切り離せる場所が何処かにある筈です」

莉嘉「そんなの本当にあるの……わわっ！」

鞭や槍の様に繰り出される無数の根を往なしていく。

莉嘉「くっ……！」

かな子「莉嘉ちゃん、前！」

莉嘉「えっ……」

後ろから追ってくる根ばかりに気を取られていた、ゲッターアークの眼前に巨大な樹木の柱が立ち、勢いのまま激突。

美波「うあ……!?!」

莉嘉「きゃあっ！」

かな子「だ、大丈夫ですか……?」

莉嘉「クツソ……! 鼻がペツタンコになったらどうするの……!?!」

怯んだゲッターアークの右脚を、這いよった根の1つが絡め取る。

莉嘉「まっず……!?!」

一度上に持ち上げられ、勢いよく地面に叩き付けられる。

莉嘉「ぐ……うう……!」

植物鬼獣「死ネエエ!!」

莉嘉「いっ……!?! ゲッタービーム!!」

倒れ伏したゲッターアークに殺到する無数の根を、頭部からの細いゲッタービームで薙ぎ払う。

美波「……! そっか……」

かな子「っ！ ダメですよ、莉嘉ちゃん！迂闊に攻撃しちゃ…！」

莉嘉「そんなこと言われたって、こっちが倒れたら元も子もないでしょ！」

かな子「それはそうですけど…！」

莉嘉「…えいつ！」

未だに脚を拘束していた根も、ゲッターアークの爪先で切り払い、再度上昇する。

美波「2人共、研究所に繋がる根の位置が分かったわ」

かな子「ホントですか!？」

莉嘉「以外と早かったじゃん！」

美波「それに関しては、莉嘉ちゃんのお陰かも」

莉嘉「ホント!?!…っつと！」

尚も植物鬼獣の攻撃は続く。

莉嘉「な、何でもいいや！それで、その根の位置は…！」

美波「あの鬼獣の後ろだよ」

莉嘉「鬼獣の、後ろお!？」

かな子「そう言えば、鬼獣はさつきから、こっちに背中を見せようとしませんね…」

美波「相手にとつても、爆破を完璧に成功させたいんじゃないかな」

かな子「だから離れた安全なところからじゃなく、自分の手で起爆を…?」

美波「多分だけど…。でも、追い詰められればどう言う行動に出るか分からないから、先に切断しておくに越したことはないと思う」

莉嘉「それで、ゲッターで切れそうな所は…?」

美波「相手の真後ろ、根本の部分の数メートルは、爆弾らしい球体は見当たらない」

莉嘉「相手の真後ろ…。その距離まで近付いて、切り離さなきゃならないってこと?」

美波「うん。それは、私のゲッターキリクでも、ゲッターカーンで力任せに引き千切ることも出来ない。トマホークみたいに勢いよく叩き切るんじゃない、一瞬で断ち切らないと…!」

かな子「そんなこと出来る、アークの武装は…」

莉嘉「…バトルショットカッターだけ?…あうっ!」

追ってきた根の鞭が、ゲッターアークの肩を掠る。

莉嘉「そもそも、こんな攻撃の中を掻い潜るなんて無理じゃない?!」

かな子「方法ならありますよ!」

莉嘉「方法…?」

かな子「オープンゲットです。ゲットマシンの大きさと速度なら、この攻撃を躲して相手の背後を取ることも出来る筈です」

莉嘉「分離してから、鬼獣の真後ろでの高速合体するの?」



美波「けど、戦闘中の分離と合体は、まだ経験が……。ぶつつけ本番でやるなんて！」  
かな子「出来ませよ！ 私達は、チームですから！」

美波「……」

莉嘉「…アタシ達が今ここで考えたって、他に方法は思い浮かばないんだ。なら、やろうよ!!」

美波「…分かった！」

植物鬼獣「アアアアツ!!」

莉嘉「…っ！」

根の鞭打を躲して一度高度を取り、体勢を整える。

植物鬼獣「チヨコマカトオオオツ!!」

莉嘉「オープーンゲツト！」

迫る根の突きに合わせ、ゲッターを分離させた。

植物鬼獣「!？」

真つ直ぐ延びた根に沿う様に飛び、アーク号は上段、植物鬼獣の頭上を飛び越す位置を飛行。キリク号は中段を、植物鬼獣の中腹から背後へ回り込む位置を取り、カーン号は地面すれすれを飛び、機首を上げることによって背後に回すと同時にキリク号の後部を捉える。

莉嘉「チエンジゲッター！アアアアック！！」

合体シーケンス。その間に植物鬼獣が振り向こうとする。

莉嘉「バトルショットカッター！」

ジャキンツズワアツ

莉嘉「——！！」

植物鬼獣「……！？」

植物鬼獣が振り返りきる寸前で、ゲッターアークの腕のカッターが背後の太い根を切り断った。

莉嘉「……」

美波「……どう、なったの……!?」

かな子「……見て下さい！研究所を覆った根が！」

莉嘉「枯れていく……」

美波「成功……？やった……」

植物鬼獣「オオオノオオレエツ！！」

植物鬼獣の、怒りの咆哮が木霊する。

美嘉「うう……ん……。あつ……！」

美嘉を挟み込んでいた鬼獣の根が、痩せ細って枯れていく。

美嘉「これって……まさか！」 ダツ

走り、外を一望できる展望台を目指す。

美嘉「はっ——！」

たどり着いたその先、視線を上げた向こうでは、

植物鬼獣「ゴオオオオツ!!」

莉嘉「くっ……！」

ゲッターアークが戦っていた。

美嘉「莉嘉あ!!」

莉嘉「……!?お姉ちゃん……っ！」

かな子「えっ?」

莉嘉「お姉ちゃんの声が聞こえた……」

かな子「美嘉さんの声……?そんなの……」

美波「通信も入ってないし、気のせいじゃない?」

莉嘉「ううん。絶対聞こえた」

かな子「そんなこと言っても……」

莉嘉「お姉ちゃんが見てるんだ。尚更負けられないっ！」 グンツ

ゲッターアークが勢いを付けて、植物鬼獣に肉薄。

莉嘉「とりゃー！」

左手の爪を立たせ、植物鬼獣の中腹を切り断つ。が、

植物鬼獣「無駄アアア……！無駄ア!!」

瞬時に傷付いた箇所を修復する植物鬼獣。

莉嘉「なにそれズルい！」

かな子「もしかしたら、鬼獣が張り巡らせている根、そこから大地のエネルギーを吸って再生力に変えてるのかも」

美波「それはあり得るかも。だとしたら……」

莉嘉「鬼獣にこの辺りを不毛の大地にされるわけにはいかないよ！かな子！」

かな子「はいっ！」

莉嘉「力仕事、任せちゃっていい？」

かな子「勿論ですよ♪」

莉嘉「それじゃあ……！」

植物鬼獣「クタバレゲッターアアアッ!!」

莉嘉「オープーン、ゲット!!」

かな子「チェーレンジゲッターカーン!!」

植物鬼獣の攻撃に合わせゲッターを分離。

美嘉「!」

瞬時にゲッターカーンに合体し、植物鬼獣にのし掛かり、怯ませる。

かな子「さあ、周りの植物に迷惑な雑草さんは、間引きですよ!」

ゲッターカーンの両腕で、植物鬼獣の両脇から力強くホールドし、

かな子「ふん……ぬう……つ!」

力任せに、引っこ抜く。

植物鬼獣「ヤメロ……ヤメロオオオツ!!」

植物鬼獣の抵抗。無数の根の鞭でゲッターカーンを殴打する。が、

かな子「ん……つ!!」

ゲッターカーンは怯まない。

かな子「これでどうです!」

更に両肩のホイールを回転させ、襲い来る鞭を迎撃。植物鬼獣の反撃を許さない。

かな子「んのお……ツ!!」

そして、

かな子「ええ……いつ!」

メリメリ、ブチブチと植物鬼獣の根を大地から引き剥がして、そのままの勢いで放り

投げる。

かな子「やりましたあ!!」

莉嘉「ナイスかな子!後はアタシが…!」

かな子「お願いします!」

莉嘉「地面に落下する前に決めてやるツ!!」

かな子「オープンゲット!!」

ゲッターカーンの分離。そしてゲットマシンは天高く舞い上がり、

莉嘉「チエエーンジ!ゲッターアアアーツ!!アアアーツク!!!」

天空の支配者が降臨する。

美嘉「あれが、莉嘉…!」

片側三枚、計6枚の剣のような翼を広げ、植物鬼獣に迫る。

植物鬼獣「オオオオオツ!!」

莉嘉「ゲッターアアーツ!トマホーク!!」

触手のように根を伸ばして放たれる植物鬼獣の迎撃を、抜き放ったトマホークで叩き

切り、

莉嘉「りゃあツ!!」

植物鬼獣に直蹴りを浴びせ、相手を更に空高く跳ね上げる。

莉嘉「ううっつりや！」

トマホークブーメラン。トマホークを投げ、植物鬼獣を軽く弾き飛ばす。

莉嘉「ゲッタートマホーク!!」

もう一本のトマホークを抜き、再度植物鬼獣へ向かう。

莉嘉「やあっつ！」

植物鬼獣「ソウ簡単二ハ…！」

莉嘉「っ…！」

襲い来る根や枝先の攻撃を軽く往なし、切り払いながら肉薄。

莉嘉「とりやっつ！」

上部の太い枝を一刀のもと切断。同時に、戻ってきたもう一本のトマホークを掴み取る。

莉嘉「これ、スングいんだよ☆」

言いながら、両手に掴んだトマホークの柄同士を繋ぎ合わせる。

莉嘉「ツイントマホーク、ランサアアーツ!!」

柄の両端に刃がある、ツインランサー状に形成したツイントマホークランサーをブンブンと振り回す。

莉嘉「行くよ——っ!!」

ゲッターアークを突撃。振り掛かる根の攻撃に対して、回転させたツイントマホークランサーを盾代わりとして突き出すことで、今度は避けもせず掠らせもせず、一直線に植物鬼獣を目指す。

莉嘉「たぁーっ!!…えいつ!」

すれ違いざま、一瞬の轟撃。その内に両サイドのトマホークの刃を交互に振り下ろし、その途中でトマホークを分離させたダブルトマホークで、瞬く間に植物鬼獣を切り刻んだ。

莉嘉「必殺、二天一流…なんちゃって☆」

莉嘉「どう?今のカツコ良かった?」

美波「…余裕たっぷりね…」 ハハ…

かな子「あはは…」

莉嘉「…と、危ない!」

ギョーンツ

力を失って落下する植物鬼獣の先回りをして、ゲッターアークが迎え撃つ様に地上へ降りる。

莉嘉「お姉ちゃんも研究所の人達も危ない目に遭わせたんだもん。塵一つ残させてなんてあげないんだからあ!」 ゲツ



莉嘉「美波、かな子も一緒に！」

美波「…ええ！」

かな子「はいっ！」

莉嘉「やるよ、ゲッターアーーッ——!!」

美波「っ！」グッ

かな子「!!」ガシユッ

3人「「ビィーームッ!!」」

ドワッ

植物鬼獣「——っ……!!?」

放たれた三位一体のゲッタービーム。植物鬼獣の全体をも容易く呑み込むそれは、天を貫いて真っ直ぐに伸び、先ほどの言葉通り、鬼獣をその形跡も残さずこの世界から消し去ったのだった。

——。

通信士「目標の消滅を確認」

晶葉「他に鬼獣の気配は？」

通信士「今のところ特には。もし残っているとすれば、今こそが絶好の機会だと思いませんが？」

晶葉「それもそうだな。アークの最後のゲッタービーム、出力値は計測出来ているか？」

通信士「はい。エネルギー出力123%。彼女達の中では最高記録ですよ」

晶葉「何とか、チームとして形になったと言う所か…」

通信士「晶葉さん？」

晶葉「直ぐに呼び戻して、所員総出で鬼獣の残骸掃除だ。人でも必要になる、飛焰チームにも召集を掛けておいてくれ」

通信士「了解です」

晶葉「……ふう」

所員「池袋さん！」

晶葉「むっ、どうした？」

所員「はい、研究所代表代行の、池袋さん宛に連絡が…」

晶葉「私に？政府の連中からじゃないだろうな？」

所員「そ、それなんです、連絡してきた相手は…」

……。

晶葉「何？それは本当か？」

所員「はい、先方は出来るだけ早い返答をと、言ってきました」

晶葉「やれやれ。一体何をさせられるんだか…」

晶葉「本当に大変なのは、これからかもしれないな…」

つづく

## 第7話 『旅の始まり』

~~~~~ 太平洋上 ~~~~~

莉嘉「フンフ〜ン☆海〜は広い〜なあおつきい〜なあ〜♪月〜は昇〜る〜し〜フフフ
ンフンツフ〜ン♪」

かな子「何だかご機嫌だね、莉嘉ちゃん」

莉嘉「フンツ☆そう見える〜?」

かな子「はいっ。美嘉さんにゲッターに乗ることを許してもらえたのが、とつても嬉
しかったんですね?」

莉嘉「あ〜うん、そうかな? あははっ☆」

美波「あれはでも、完全に許しをもらったって感じじゃ、ない気もするけど…」

莉嘉「いーのいーの。もうとやかく言つてこないって言つてたんだし、アタシはアタ
シのやりたいことをやる! そう決めたから!」

美波「それはそうだけど…」

かな子「まあまあ美波さん。私達がしっかり見守つていけば、何も問題ないんですか

ら」

美波「それを頼まれたから、やるからにはしつかりしなきゃって、思うものでしょ？」
かな子「ちよつと気合い入りすぎなんじゃ…？」

莉嘉（……）

—— 植物鬼獣戦終了直後。

莉嘉「——もうっつ！どうしてアタシ達までこんな力仕事しなきゃいけないわけ!？」
作業着に身を包み、シャベルとツルハシを片手に、研究所内に散らばった枯れた根の残骸を猫車に集めては外の山へ捨てに行く。

その作業を繰り返すこと、既に十数度。夜の闇もすつかり深い時間となっていた。

かな子「研究所の機能をいち早く回復するためですよ。仕方ないです」

莉嘉「夜遅くまで子供が外出していると、お巡りさんに補導されちゃうよ」

美波「ここは研究所の敷地内だから、大丈夫じゃないかな？ほら、警備員さんも見逃してくれてるし」

警備員「……」 チラチラッ

莉嘉「むうく……」

美嘉「あつははつ★莉嘉、何そのカッコ！」

莉嘉「お姉ちゃん！」

美嘉「作業着なんか着込んで夜遅くまで……。ゲッターのパイロットも大変だねえ」

莉嘉「怪我の方は？もう歩いて大丈夫なの?!」

美嘉「大したことない。ちよつと胸とお腹を擦っただけ。打ち身になつてゐるから、酷く見えただけだよ」

美波「でも、一応安静にしてた方が言いと思いますけど……?」

美嘉「そりやそうなんだけど。もうすぐパパが迎えに来るつて言うし、その前に、莉嘉と会つて直接話したかつたんだ」

かな子「話を?」

莉嘉「お姉ちゃん。アタシ、帰らないよ。パパが来たつて、絶対帰らない!」

美嘉「莉嘉……。ま、アンタは少なくとも、研究所の掃除が終わるまでは帰つてくるのは許さない、かな?」

莉嘉「それは……!そう言うんなら、お姉ちゃんも手伝つてよ」

美嘉「怪我人に無理させるんじゃないの★」

コツンツ

莉嘉「痛つ」

美嘉「自分に出来ることは出来るトコまでやるんでしょ」

莉嘉「えっ?」

美嘉「はつきり言つて、許した訳じゃないよ？勝手にしなつて、傷付こうが後悔しようが泣き喚こうが、それはもうアンタの自業自得なんだからね、つて。それだけ」

莉嘉「……」

美嘉「アンタ、家族に見捨てられるんだよ？それでも、やるの？」

莉嘉「……」

かな子「莉嘉ちゃん……」

美波（……）

莉嘉「……やるよ」

美嘉「……そっか」

所員「城ヶ崎さ……美嘉さん。お迎えの車がお見えになりましたよ」

美嘉「あつ、有り難う御座います。——…それじゃ」

莉嘉「お姉ちゃん！」

美嘉「好きにしなよ。精々、美波達に迷惑掛けないように頑張んな」

莉嘉「……」

美嘉「あと……」

美嘉「今日は助けてくれて、ありがとう——」

——
現在。

莉嘉（お姉ちゃん、アタシ頑張る……！お姉ちゃんも誰も悲しませないで、アタシに出来る限りのことを——！）

かな子「莉嘉ちゃん？」

莉嘉「わあっ……か、かな子……もう、いきなり話しかけないでよ。ビックリするじゃん」

かな子「さつきからずつと呼び掛けてたんですけど……」

莉嘉「え、そうなの？」

かな子「はい。それより、そろそろ指定のポイントですよ」

莉嘉「もう？何か早くない？」

かな子「道中、トラブルらしいトラブルもありませんでしたから。音速を越えて飛べるゲットマシンなら、こんな距離あつという間ですよ」

莉嘉「へえ……つと、でも思った通り、何にもないね？辺り一面大海原じゃん！」

美波「確かに、可笑しな任務よね。朝いきなり呼び出されたと思つたら、数日分の荷物まとめて、海へ行けなんて……」

莉嘉「ホント。いきなりでどこ行くのかも分かんないし、全然まとめられなかったよ」

かな子「その後ろの大荷物、それなんですわね……」

莉嘉「どっかに泊まることになつたらさ、遊ぶものがないとつまらないじゃん？だか

らトランプとかボードゲームとか、一杯持ってきたんだよね〜」

かな子「玩具ばかり……。遊びに行く訳じゃないんですよ?」

莉嘉「とか何とか言って、かな子だって、小麦粉とかお菓子作る道具で一杯なの、知ってるよ?」

かな子「え、ええっ!? だって、数日の出張のつもりで準備しろって言われてたし」

莉嘉「出張の準備で、小麦粉とお砂糖が必要なんだ?」

かな子「だって、小麦粉とお砂糖があれば、大抵のモノは作れるし……」

莉嘉「だからってコックピットパンパンになるまで持ってこなくても良かったんじゃない?」

かな子「うっ……!」

美波「2人とも、そろそろフォーメーションに入るよ。指定ポイントに近付いたとは言え、まだ目的地に到着した訳じゃないんだから」

かな子「りよ、了解です!」

莉嘉「了解☆ホント、美波って真面目だよね〜」

美波「……」

かな子「それじゃ、目標は海中ですし、カーンで行きましょう」

美波「了解。フォーメーション!」

一度上昇して、隊列を並び替える。

かな子「チェンジゲッター！カーン!!」

空中でゲッターカーンに合体し、派手な水飛沫と共に海の中へ。

かな子「さあ、超深海の世界に出発です！」

かな子「急速潜航っ！」

太陽の光を受けて、青く輝く海。しかしその光が届くのは、ほんの200m程だと言
う。

それを過ぎると海の青はより一層深みを増し、夜の闇よりも暗い黒の世界へ。

莉嘉「なくんにも見えない。眠くなっちゃいそう。ふわあ……」

かな子「今、ライトを点けますね」

パチリ、とゲッターカーンのカメラアイや足先のライトが点灯するが、それでも視認
できる距離は50mに満たない。その視界の中で照らし出されたのは、

莉嘉「何これ……雪」

美波「マリンスノーだよ」

莉嘉「まりんすのー？」

美波「元は魚の排泄物とか、プランクトンの死骸なんだけど……。こうやって光を反射
して、降り注ぐ姿が、雪みたいに見えるでしょ？」

莉嘉「ホント、何かキレイだね……」

美波「そうでしょ？まさかこの目で見られるなんて……！」

かな子「そう言えば、美波ちゃんはお父さんが……」

美波「海洋学者なの。だから、小さい時から深海の話なんかも聞かされて……わあ……！」

ゲッターカーンのライトに引き寄せられたのか、形容し難い醜悪な外見の深海魚がカーンの目の前を通る。

莉嘉「うげえ……何あれ……。キモオ……」

美波「深度は……うん、もう4000mを越えてる。外の気圧は推定でも300気圧前後、この環境下で生き残れるよう、あれも進化した姿なんだよ。スゴい……！」

ゲッターカーンの周りに深海魚達が集まってくる。

かな子「戦闘してる時は、こんなに集まってこないのに……」

美波「魚は臆病だから。戦闘してる衝撃とかを気配で感じ取って、安全なところに避難してるんでしょうね」

かな子「成る程……。考えたこともありませんでした」

美波「スゴい……！スゴいスゴい！あはっ！子供の頃に見た図鑑と一緒に……。こんな間近で、動いてる姿を見れるなんて……。感激！」

莉嘉「美波、何か楽しそう」

かな子（もしかして、さつきまで静かだったの、自分の中の興奮を抑えてた…？）

美波「あ…」

先程まで殺到していた深海魚達が、一気に散らばって離れていく。

かな子「…深度6000mを越えます。ここからは、ほとんどの生き物は生きていけない環境です」

美波「…はあ…。ちゃんとカメラに収められてればいいんだけど…」

莉嘉「カメラなんて持ち込んだの!？」

かな子「深海行きって決まった時、余程楽しみにしてたみたいですね」

美波「…さあ！早く任務を終わらせて深海層に戻りましょう！こんな機会滅多にな
いんだから！」

莉嘉「えつと…アタシ達が戻るのは地上、だよね？」

かな子「もうツツコむのはやめましょう。話が進みません…それより」

深海6000メートル超。漆黒の海底に目を向ける。

かな子「ライトはほとんど意味がありません。2人のコックピットに備え付けてある
ソナーを見ながら、365度異変がないか警戒して下さい」

莉嘉「警戒？…って、365度」

かな子「今回の出撃がどう言った趣旨のものか分かりませんから。戦闘とは聞かされてないですけど、念のために警戒はしておくべきだと思いますよ」

莉嘉「だからって、右も左も上も下も、全部警戒するの？」

かな子「ここまで暗くなるとカメラの映像は頼りにならないし、私の目も2つだけだから…」

美波「一番身近な所にある…宇宙、か…」

かな子「……」

莉嘉「……」

美波「……」

かな子「……」

莉嘉「…つだあく…つ！こんなのいつまで続けるのお?!」

かな子「それは、目的地に着くまで？」

莉嘉「そもそもその目的地って何処なの？晶葉が出発する前に入力しただけで、アタシ達には何にも教えてくれてないじゃん」

かな子「ええ、目的地は着いてからのお楽しみだ、とか何とか…」

莉嘉「それでこんな深海くんだりでソナーとにらめっこまでさせられちゃ溜まんないよお…」

美波「莉嘉ちゃん、深海は悪くないよ」

莉嘉「え？あ……ごめんなさい」

かな子「ともかく、もうすぐ目的なのは間違いない筈です。順調にいけば、後数十分で……」

ピ——ッ　　ピ——ッ　　ピ——ッ

莉嘉「何っ!？」

美波「熱源接近！下から……数は、3つ！」

かな子「これは……！」

バド・ザイ・ズー『キシヤアアアアッ!!』

莉嘉「三大メカザウルス!？」

かな子「くっ……！」

半ば条件反射で、ゲッターカーンを後退させるが、

かな子「くううう……！」

三大メカザウルスが一斉に放った魚雷が直撃。

莉嘉「きゃあああッ!!」

かな子「大丈夫、ゲッターカーンなら、このくらい……！」

バド『キシヤアアッ!!』

メカザウルス・バドが、ゲッターカーンに組み付き、カーンの肩口に噛み付く。

かな子「くっ……!!」

美波「気を付けて！いくらゲッターカーンでも深海の水圧……。装甲に1つでも穴が空けば……!!」

かな子「はいつ！こんな甘噛みくらいで……!!」

ゲッターカーンの肩のホイールが回転し、バドを弾き飛ばす。

かな子「ゲッターニードルミサイル！」

ホイールに備え付けられた、無数の針をミサイルとして飛ばす。

バド『!』

ザイ『!!』

ズー『!!!』

しかし、三大メカザウルスは素早い機動で無数のニードルミサイルを回避。

かな子「っ!! このメカザウルス……!!」

ザイ『ギャアアアッ!!』

かな子「ぐう……!!」

深海であることを厭わず、寧ろ優雅に泳ぐようにしなやかな動きで、メカザウルス・ザイが迫る。

莉嘉「な、何か速い…!？」

かな子「やっぱり、深海用に改造されてる…!？」

ザイの突進を躲したゲッターカーンに、待ち構えていたメカザウルス・ズーの頭部の殴打が襲う。

かな子「あう…!？」

ザイ『ガアアアアアツ!!』

かな子「そう簡単には!？」

更に突進してきたザイを、両手で抱き込むように受け止めて捕縛。

かな子「やらせませんツ!!」

そのまま、ゲッターカーンの力任せにザイを締め上げて、圧壊。

かな子「いくら深海用に改造されていようと…!？」

残る2体のメカザウルスと対峙する。

かな子「元々水中用のゲッターカーンには、相手にもなりません!？」

水中を縦横無尽に駆け抜け、再びの魚雷を掻い潜る。

かな子「チェンジ!カーンローバー!!」

ゲッターカーンの手足を収納。両肩を一つに合わせ、巨大なホイールを形作る。

かな子「——メイルストロームツ!!」

ホイールそのものとなったゲッターカーンを高速回転させ、産み出した渦潮の中に2体のメカザウルスを封じ込める。

かな子「一網打尽ですよ!——ニードルスパイラルツ!!」

残る渦潮の余韻の中にニードルミサイルを投射。体制の崩れたバド、ズーを鋭いニードルが串刺しにして爆ぜ、まとめて深海の藻屑とした。

かな子「…ふう、やりました」

美波「けど、今のメカザウルスは…?」

莉嘉「ランドウとかの応急処置とは違ってたよね。ってことは、恐竜帝国の生き残り?!」

かな子「恐竜帝国の生き残りが、攻撃を仕掛けてくるなんて…」

美波「まさか、恐竜帝国の罨!」

莉嘉「罨って、今回の指令を出したのは晶葉だよ?」

美波「晶葉ちゃんの指令も、外部からもたらされたもので、その元々が、罨だったとしたら…!」

莉嘉「そんな…!」

かな子「可能性は、あるかもしれませんがね」

???「ふむ…。まずは及第点、と言ったところか」

かな子「……!」

莉嘉「この声、何…!?!」

美波「メカザウルス……恐竜帝国、有人機となれば…」

かな子「キャプテンクラス!」

???「然りッ!!」

かな子「!?」

黒い影を纏って、それはゲッターカーンを下から上へと横切る。

かな子「速いっ!?!」

美波「データ照合……データに無い機体……。と言うことは、新型……!」

かな子「新型のメカザウルス…」

莉嘉「つてことは、やっぱりこの敵は、恐竜帝国!」

???「冷静だな!だが、それで良い!!」

かな子「…来るっ……!」

美波「待つて!敵のエネルギー出力……この反応つて!」

???「勘が良いのがあるな?そうだ、この機体、じっくりとみるが良い……!」

かな子「ぐっ……!」

飛び付くように強襲してきたメカザウルスの攻撃を右腕で防ぐ。

莉嘉「このメカザウルス、ゲッターに似てる…」

かな子「ゲッター型の、メカザウルス…!?!」

ゲッターカーンと対峙した、そのメカザウルスの姿は、確かに恐竜の獣脚類。逞しい後ろ脚に、鋭い爪を覗かせる小さな前脚。鋭い顔つき。しかしその中にはゲッター、特にゲッターの意匠が見受けられた。

???「そう！これこそ、我ら恐竜帝国の技術の結晶！——メカザウルス・ゲドだツ!!」

莉嘉「メカザウルス…!」

かな子「ゲド…?!」

美波「間違いない…!あのメカザウルス、動力に使ってるのはゲッター線よ!」

莉嘉「ゲッター線…!?!でも、恐竜帝国の人達って、ゲッター線に弱いんじゃない?」

???「それも然りい!故に、我々はゲッターを克服したのだア!!」

小柄な肉体からは想像も付かない、絶大な力がゲッターカーンを弾く。

かな子「うあ…!」

???「どうした!?!風に聞く程の強さではないなあ、ゲッターロボ!!」

莉嘉「調子に乗ってくれちゃって…!やっちゃえ、かな子!」

かな子「はいっ!——縋索!!」

ジャラリ、とゲッターカーンの懐から縋索を抜き放つ。

かな子「はっ!!」

シュツツと、水中でも罫索を鋭く投じる。が、

??? 「フツ!!」

一気に上昇し、罫索の突きを回避。

かな子「まだです!」

??? 「甘いな!」

鎖をしならせ、上に逃げたゲドに追撃を仕掛けるが、それすらも掻い潜られてしまう。

??? 「お返しだ!」

かな子「うう…っ!」

ゲドの背に乗ったロケットノズルの先端から放たれた魚雷が、2筋の線を描きゲッターカーンに直撃。

??? 「こちらのターンは終わらぬぞ!」

かな子「!?」

更にゲドの口から放射される光線。その攻撃はゲッターカーンを上昇させて躲す。

莉嘉「今の攻撃、ゲッタービーム!」

かな子「向こうもゲッター線を使っているなら、多分…」

美波「パワーはゲッター3、スピードはゲッター2並でゲッタービームまで…!」

莉嘉「ゲッターの能力を1つに集めるなんてゼータク！」

かな子「かなりの強敵なのは、間違いありませんね……！」

???「どうした？もう打つ手なしか!？」

かな子「くっ……！」

断続的に放たれる魚雷を高速機動で躲していく。

かな子「…何とか、隙を捉えなきゃ……！」

莉嘉「もうメンドくさい！かな子、アタシに代わって！」

かな子「ええ。でも……！」

莉嘉「あれを使う！アタシが吹き飛ばしてやるから！」

かな子「あれって……。まさか、ここで“アレ”を使う気ですか!？」

莉嘉「ここだから、最適なんでしょう？」

かな子「…ゲッターカーンじゃ罅が明きません、か。分かりました！」

かな子「オープンゲット!!」

???「むっ!？」

莉嘉「チェンジゲッター！アークツ!!」

???「ほう……！」

莉嘉「つ……！水中専用のカーンと違って、アークじやっぱり視界が悪い！」

??? 「自ら不利を晒すとは…。何か策があると見た！」

ゲッターアークのカメラからは、深海の闇は差程照らされず、ゲドの姿を見失う。
??? 「どのような策を講じるつもりかは知らぬが、その身が保つかな!!」

莉嘉 「どこから……。きやあつ!!」

ゲドの高速の突撃。四方八方から行われる襲撃に晒される。

莉嘉 「くつ…う…!!」

美波 「やつぱり、アークじゃ…。水中じゃ動きが鈍い！」

莉嘉 「それが何!? 相手がどこに逃げようとどこから来ようと、これなら！」 ゲツ
ゲッターアークのウイングが変形。大仏の後光のように開き、青白い光を放つ。

??? 「何だ!？」

莉嘉 「散々ビービーゲッター線を垂れ流すだけで…! ゲッター線だって、こういう使
い方も出来る」

ゲッター線がスパークに変わる。

莉嘉 「水中ならよく伝わるよ…! どんな所にいたってね！」

莉嘉 「——サンダーアア!! ポンバアアア—ツ!!」

ゲッターアークの全身から放たれる、稲妻の奔流。超高压のプラズマエネルギーが、
周囲に響き渡った。

??? 「ガアアアアツ!? こ、これは……あ?!」

高速でゲッターアークの狙いから逸れるように移動していたゲドも、この攻撃には脚を止める。

??? 「ぐっ……! ううつ……! しかし! 水中で放ったのが仇となったようだな……! 威力は拡散し、倒すには及ばん!」

莉嘉 「けど、動きは止めたよね?」

??? 「!?」

莉嘉 「ツイントマホークランサー!!」

動きの鈍ったゲドを捕捉し、ツイントマホークを構え、一気呵成に迫る。

??? 「くっ……! う、動け……! メカザウルス・ゲド……! 制御系がショートしたのか!」

莉嘉 「これでえ!!」

??? 「ぐう……! ここまでか!」

ゲッターアークが、ツイントマホークランサーを振り上げる。

??? 「——参ったあ!!」

かな子 「は?」

美波 「え?」

莉嘉 「お?」

全ての動きが、一瞬にして止まる。

??? 「はははっ！ 参った参った！ 女だてらにやりおるわい。流石、ゲッターのパイロット。伊達ではないと言うことか」

ハッハッハッハッハッ!!

かな子 「え？ あ、あの……何……？」

莉嘉 「今、参った、つて……」

美波 「ゆ、油断しちやダメだよ。何かの罠かも……」

かな子 「でも、何か向こうは解決してるみたいですよ……？」

「そう言うことだ、ゲッター。こちらには最早、交戦の意思はない」

かな子 「!! 今の声つて……！」

美波 「ニオン、さん……!？」

莉嘉 「あれつて、ダイノゲッターロボ！」

鉄甲鬼 「ああ。仕掛けてきたのはこちらだが、剣を納めてもらっても良いだろうか」

莉嘉 「え？ ああ……うん」

振り上げたトマホークを下ろし、僅かに後退。

??? 「ニオン！ 貴様の言う通りだったぞ。彼奴ら、想像以上にやりおる！」

ニオン 「実戦経験は貴様以上だと言っただろう、キャプテン・ドロス。力試しは良い

が、それでこちらのメカザウルスを3機も失うとは……」

??? 「すまんすまん！その分は海底鉱山からの資源輸送でも何でも、幾らでも補填してやるやるわい!!」 ガハハハハッ

ニオン 「まったく……」

かな子 「……どう言うことですか？」

ニオン 「あちらのメカザウルス、それを操るパイロットは敵ではない。ただ、地上から来るゲッターのパイロットに、いたく興味を示されてな」

美波 「それで、いきなり襲い掛かってきたって言うんですか!？」

??? 「そちらの方が貴様よりも本気になるであろう？こちらよりリスクを犯すのだ。本当の実力が分からなければ、意味はない」

莉嘉 「だからって、奇襲なんて卑怯なやり方で……!？」

ニオン 「まあ、その辺りは恐竜帝国らしい。手荒な歓迎と言うことで納得してもらおう。こんなところで積もる話もあるまい？」

鉄甲鬼 「我々が先導する。お前達は付いてきてくれ」

莉嘉 「？ ……付いていくって、何処に？」

鉄甲鬼 「何だ、晶葉から聞かされていないのか」

??? 「なあに、連中も恐竜帝国と戦った事があるのなら分かる筈であろう。向かうは、我

らが牙城よ」

かな子「恐竜帝国の牙城って、もしかして……!」

???「ほれ、もう見えてきたぞ」

美波「見えてって……!?こんな深海に、巨大な熱と、金属の反応……」

かな子「これって戦艦とかのレベルじゃないですよ。…要塞のような」

ニオン「そうだ。ゲッター線によって地上を追われた、我々恐竜帝国の安息地。我々
“ 穏健派 ” が、貴様ら人間共と交流を行うために建造された……」

莉嘉「マシーンランド……!」

深海の闇の中から、やがてそれは巨大な陰影となつて姿を現した――。

くくく マシーンランド軍事区画 格納庫 くくく

ハ虫人兵1「……」

ハ虫人兵2「……」

ハ虫人兵3「……」

ゴウン……ッ

ハ虫人兵1「!?」

ハ虫人兵2「く、来るぞ!」

ザペア……ッ

ハ虫人兵3 「これが、”人間”が作った、ゲッターロボ……！」

莉嘉 「……ここが、恐竜帝国の拠点、マシーンランドの中……」

美波 「格納庫って聞いてたけど、私達の所とは、随分様式が違うみたいね」

莉嘉 「周りにいるのも、みんなハ虫人類だね。当然だけど」

ハ虫人兵 『……』ジロジロツ

莉嘉 「ううっ……ホントに降りて大丈夫？いきなり撃たれたり、とか」

美波 「ここは穩健派のマシーンランドって言ってたから、多分大丈夫だと思うけど……」

とにかく、相手方を信用しましょう」

莉嘉 「うう……うん」

恐る恐るハツチを開き、慎重に顔を覗かせる。

パイロットガデテキタゾ……！チイサイナマダコドモカ……？ヒヨワソウダナ……アレナ

ラオレノテデモ……オイジヨウダンデモヤメロヨコクヒンダゾ

莉嘉 「な、何かスゴいジロジロ見られてる」

美波 「仕方ないよ。きつと、ずっと深海で暮らしていた人達だろうから、ハ虫人以外

の人類なんて見慣れて無い筈だもの」

莉嘉 「だけど、珍獣みたいに遠巻きにされるのって、いい気はしないよ」

美波 「誰だって、分けの分からないものが目の前にあつたら、見つめちゃうでしょ。」

ちよつとの我慢だよ」

莉嘉「何か、理屈で正当化されてる感じだなあ」

美波「…と言うより、かな子ちゃんは？」

莉嘉「さあ？何か途中から静かになってたけど…」

カーン号のコックピット部へ向かい、ドアをノックするようにキャノピーを叩く。

莉嘉「かな子ー？どつたのー？…さっきの戦闘でどつか怪我したとか」

美波「ハッチを開くわよ、かな子ちゃん」

外側のコンピューターから、カーン号のハッチを開く。すると、

ドロオ…

莉嘉「うえう…！何これ…」

コックピットの中から溢れ出す、白濁した粘度の高い液体。

ナンダ!? ニンゲンノカガクヘイキカ? ショウグンニホウコクヲ…! ザワザワ…ツ

かな子「…プハツ! 美波さん、莉嘉ちゃん! ありがとうございます、助かりまし

たあ…」

莉嘉「かな子…!何か真つ白になってるけど、大丈夫なの?!」

かな子「は、はい…何とか。もう少しで窒息するところだったけど…」

莉嘉「それ大丈夫じゃないよ!」

美波「…かな子ちゃん、これってもしかして、小麦粉？」

莉嘉「え？」

かな子「はい…。小麦粉とか、牛乳とかお砂糖が混ざり合った、ほぼケーキの元です」
莉嘉「どうしてこんなことに…。もしかして！」

かな子「まさか戦闘になるだなんて、思ってもみなくて…」

美波「戦闘機動の衝撃よ。圧力で、全部弾けちゃったんだ…」

かな子「最後の一押しになったのは、アークのサンダーボンバーでしたけどね」

莉嘉「あ、あははは…」

かな子「それより、引っ張り出してくれませんか？身動きが上手く取れなくて…」

美波「わ、分かった…。…」

意を決して、小麦粉の海の中に足を突っ込む。が、

ズブ…ッ

美波「!？」

狙っていたコックピットの縁ではなく、内側の方へ入ったらしく、思いの外足が沈み込み、慌てて脚を引っ張り出す。

美波「……」

美波（足の踏み場が、分からない…!）

鉄甲鬼「…何をしている？お前達」

莉嘉「あつ、鉄甲鬼、それにニオンも！」

ニオン「兵達が騒がしいからどうしたものかと来てみれば、何だこれは？」

莉嘉「助けて！かな子が小麦の海に沈んじやう！」

鉄甲鬼「小麦の海、だと…？」

美波「私達だと手が届かなくて…ニオンさん達なら！」

ニオン「まったく…。何をやっているんだ。貴様ら」

鉄甲鬼「かな子、手を出せ」

かな子「は、はい…」

鉄甲鬼「よし、行くぞ…」

ズルツ……ズプツ……ズルンツ

かな子「あうう…」

莉嘉「あつははつ☆今のかな子を温めたら、そのままビスケットに出来そうだね？」

かな子「自分がお菓子になるのはゴメンだよ」

ニオン「来て早々シャワーか。このコックピットも、洗わせんとな」

かな子「うう、すいません…」

鉄甲鬼「誰か手の空いている者はいるか！」

ハ虫人兵「は、はいっ！」

鉄甲鬼「彼女をシャワー室へ。あと、着替えもな」

ハ虫人兵「りよ、了解であります…っ！さ、さあ…こちらへ」

かな子「はい。本当にすみません…」

ハ虫人兵「い、いえ…！光栄であります——」

スタスタスタ——

美波「……」

鉄甲鬼「心配するな。手荒な事など、起こりはしない」

美波「それは、疑ってるつもりは、ないつもりですよ？」

ニオン「お前達は、大人しく目的地に着くつもりはないのか？」

莉嘉「アタシ達は落ち着いて目的地に向かったよ！手荒なことをしたのはそつちで

しょ？」

ニオン「それは……」

???「おっ！お前達、まだこんな所におったのか？」

莉嘉「その声…！さっきのメカザウルのパイロット…！」

???「そう言う貴様は…成る程、赤いのパイロットだな？随分と小さいではないか

！」

莉嘉「むっ……！そっちの図体がデカ過ぎなの！あんな小柄なメカザウルスに乗ってるのが、こんな大トカゲ何て……」

???「ガハハハッ！器量とは見てくれにも出るものよ……と、パイロットは2人だけか？となると、貴様が黄色いのの……？」

美波「い、いえ……！私は……」

莉嘉「アンタが仕掛けて来たせいで、ドーナツのタネになりかけてシャワー室だよ！」
???「ふむ……？何やら迷惑をかけたようだな。すまんっ!!」

莉嘉「え？ああ……うん」

???「ふっ。ドロス殿の潔さには、流石の莉嘉も毒気を抜かれるか」

莉嘉「ドロス……？」

ドロス「おうッ!!改めて自己紹介だ。キャプテン・ドロス、一応このマシンランドでメカザウルス部隊の戦闘指揮なども任されている」

莉嘉「う、うん……城ヶ崎莉嘉。ゲッターアークのパイロット、だよ」

ドロス「ほほうそうかそうか。これからよろしく……！」

莉嘉「きやつ——!?!」

握手し、振り上げたドロスの腕が軽々と莉嘉の体を宙へ揚げる。

ドロス「おっとと！本当に軽いのお、お主。ちゃんと飯を食っておるか？」

宙に放り投げられた莉嘉の体を抱き止める。

莉嘉「ウツサイ！そっちがデカ過ぎなんだってば！」　バシバシッ

美波「莉嘉ちゃん……！あんまり暴れちゃ……！」

ドロス「あつはつはつはつ！気にするな。幼子ほど元気であれば善哉善哉！」

莉嘉「アタシは子供じゃないよう!!」

鉄甲鬼「それよりも、だ。ドロス殿」

ドロス「ん？おお、分かっている。王も既に、首を長くしてお待ちだ」

美波「王？」

ニオン「このマシーンランドの王。我ら穩健派の代表であらせられるお方だ」

莉嘉「そんな偉い人と、これから会うの!？」

美波「どうして私達がここに呼ばれたのか、何をさせられるのか、そんな事も知らされてないんですよ？」

ニオン「それも王自らの口から直接は話されるだろう。そっちの方が、お前達も納得する筈だ」

美波「……」

ドロス「一先ずはワシに付いて……」

莉嘉「どうしたの？」

ドロス「…先ずは、黄色いののパイロットを待つか？」

莉嘉「ああ、そだね」

かな子「…ふう、さっぱりしたあ」

莉嘉「お帰り、かな子。恐竜帝国の服、似合ってるね？」

かな子「そ、そうですね…？パイロットスーツも汚れてしまったので、借りたんですけど」

ドロス「ほう、彼奴が黄色いののパイロットか？」

かな子「はい…？黄色いの…：カーン号の事なら、そうですね…。この方は…？」

莉嘉「さつき戦ったメカザウルス・ゲドのパイロットだよ。キャプテン・ドロスだつてさ」

かな子「この人が…」

ドロス「ふむ。ちっこいのは違って、肉付き良く健康的ではないか」

かな子「に、肉付きが良い…？」

莉嘉「あ、今かな子が気にしてること言ったー！」

ドロス「むっ？」

美波「もう、そんな事は今は良いでしょう？」

ニオン「全員揃ったのなら、早く行くぞ」

かな子「はい！って、行くって何処へ？」

莉嘉「王様に会うんだってさ」

かな子「王様……？ええ!!？」

鉄甲鬼「その驚きももう終わった。とにかく付いてこい」

かな子「終わったって……。ええ……」

不満を残しながらも、言葉には従って進む。

莉嘉「あつ、メカザウルス・ゲド！」

ドロス「うむ。先程の戦闘で、思った以上にダメージを受けたようだ……」

かな子「見れば見るほど、ゲッターロボに似てますね」

ドロス「開発された初期の段階では、ゲッターを仮想敵としていたからな。ゲッター

線も使っているのだ。相応しいデザインだろう？」

莉嘉「それだけ、恐竜帝国がゲッターに執着してたつてのが、良く分かるデザインだ

よ」

ドロス「む、むう……」

美波「恐竜帝国がゲッターに対抗する手段を開発してたのは知ってたけど、まさか独力でここまでモノを造り出すなんて……」

鉄甲鬼「いや、ゲドは恐竜帝国の技術だけで産み出されたものではない」

莉嘉「え？」

鉄甲鬼「その完成には、早乙女研究所も技術的に大きく関わっている」

莉嘉・かな子「ええ!?!」

ニオン「早乙女研究所も技術提供には協力的だった。貴様ら、まさか俺がただで力を貸してやつてるとでも思っていたのか？」

美波（成る程…）

ニオン「尤も、ゲドも技術段階では、まだ試作機に過ぎんが」

かな子「充分、メカザウルスとしては完成してると思いますけど？」

ニオン「……メカザウルスとしては、な」

かな子「…?」

鉄甲鬼「そろそろ謁見の間だ。分かっているが王の御前。粗相の無いようにな」

莉嘉「うう、そう言われると、緊張してきた…!」

—— 謁見の間。

莉嘉「……広っ!」

美波「マシーンランドの最高権力者と、来賓が顔を合わせる場所だもの。それなりの造りにはなっているよ」

「莉嘉「…何だ、待ってるって言ってた割りには、まだ王様来てないじゃん」
ニオン「当然だろう。既に裏で控えておられる。勘違いはするな。我々が、迎え入れる側だ」

莉嘉「ええ…?」

ドンツ ドンツ ドンツ

ニオン「!」

鉄甲鬼「!」

ドロス「!」

莉嘉「え?何、何?」

美波「莉嘉ちゃん、兎に角、ニオンさん達に合わせて!」

莉嘉「う、うん…!」

突如響き渡る打楽器の音。ニオン達の動作に合わせて、莉嘉達も膝を着いて、頭を垂れる。

「カムイ王の、おなあくりい〜!!」

莉嘉（カムイ、王…?）

美波（それが、穏健派の恐竜帝国を纏める…）

かな子「王様の名前…!」

カムイ
「……」
つづく

第8話『双竜激突』

~~~~ マシーンランド 謁見の間 ~~~~  
カムイ「……」

莉嘉「……」 ドキドキ

美波「……」

かな子「……」

カムイ「……良い。各々、楽にせよ」

ニオン「……」

莉嘉「……お」

ニオン達の動きに合わせて、顔を上げる。

カムイ「……」

美波（この人が、このマシーンランドの王……？）

かな子（何か……）

カムイ「珍しいか、私の顔は」

美波「あつ……！ い、いえ……！ そのような事は……！」

莉嘉「何かニオンとは違うよね。ドロスとも違う感じ」

美波「り、莉嘉ちゃん……！」

カムイ「良い。君達も、ここに来る道中、ここの民達に好奇の目で見られてきただろう。お互いにまだ交流が少ない。お互い様と言う奴だ」

美波「あ、有り難う御座います……」

カムイ「それに、その者の言うことは間違つてはいない。ハ虫人類として、私は純血ではないからな」

かな子「純血じゃ、ない……？」

カムイ「混血種……。つまりはハーフなのだ、私は。ハ虫人と人間の」

美波「!? 人間と、ハ虫人のハーフ……」

カムイ「誕生経緯は長くなるので省くが、その出生の為にここでは王の真似事をさせられていると言つておこう」

ドロス「お、王……！ 真似事とは流石に……！」

カムイ「言葉が過ぎたか？ 王の戯れ言だ。流せ」

ドロス「……」



カムイ「さて、話を戻そう。先ずは長旅、ご苦労だった。そして良く、我々の要請に答えてくれた」

莉嘉「要請って、アタシ達は何で呼ばれたのかも聞いてないんだけど？」

鉄甲鬼「莉嘉、王の御前だぞ。言葉遣いには……」

カムイ「良い。彼女らはあくまで客人だ。礼節を咎めていては、話も進まない」

鉄甲鬼「……」

カムイ「……今回、わざわざ地上から君達を読んだ理由は、大きく分けて2つだ」

美波「2つ……?」

カムイ「1つは、我々の元で開発された新兵器。そのテストに付き合ってもらいたい」  
「い」

かな子「新兵器の、テスト……?」

カムイ「そう。我々恐竜帝国の技術力と、君達人類の、早乙女研究所のゲッター研究技術を合わせた新型兵器。その名も、ゲッターザウルス」

莉嘉「ゲッターザウルス……!?まさか、恐竜帝国製のゲッターロボ!?!」

カムイ「うむ」

美波「ゲッターロボのテスト……と言うことは、私達乗り込んで、稼働状況をチェックしたりするんですか?」

カムイ「いや、ゲッターザウルスのパイロットは既に選抜されている。君達に協力してもらいたいのは、稼働試験中の計測と、模擬戦闘の対戦相手などだ」

莉嘉「計測に模擬戦？それなら、メカザウルスでも出来るんじゃない？」

ドロス「それはそうなんだがな。そちらのゲッターと直接手合わせすることで、ゲッターザウルスもその能力を引き出せるであろうとな。それに、お主らのゲッターアークと性能評価テストを行うことで、我々のゲッターがどれ程ゲッターに比肩出来るのか、それを計りたかったのだ」

かな子「…成る程」

ドロス「それと、な」

美波「まだ、何か？」

莉嘉「2つあるって言ってた頼みごとの、もう1つ？」

ドロス「いや、それとは直接関係ある訳ではないのだがな、…パイロットの練度向上にも、付き合ってもらいたいのだ」

かな子「練度の？」

ドロス「この恐竜帝国に於いて、ゲッターのように分離合体出来るマシンを扱いこなせる者も、そうはおらん。ならば、我らよりもずっとゲッターを手足のように操れるお主に、ご教授の程を是非とも、おう思ったのだ」

美波「私達に出来ることなら、何でもお手伝いしますけど…。その、チームとしてはまだ日が浅いですよ？」

ドロス「それでも構わぬ。奴等にとっても、良い刺激となるだろう」

美波「奴等…?」

ドロス「後で正式に紹介はする。ザウルスチームの連中だ」

美波「はあ…」

莉嘉「どんな人達なのか、楽しみだね?」

かな子「けど、ゲッターアークと性能を比べるゲッターを造るなんて…。目的はインペーダー打倒、だけですか?」

カムイ「フフツ…:…:そうだ。それが、2つ目の要請でもある」

美波「2つ目の…?」

カムイ「恐竜帝国の急進派…:…:彼らとの戦いに、協力してもらいたい」

美波「恐竜帝国の、急進派…?!」

莉嘉「それって、前にヨーロッパで戦ったラセツの一団の事じゃないの?みんなやつけたんじゃ…:」

ニオン「あんなもの、氷山の一角に過ぎん」

美波「一角…:…:と言うことは、私達人間との対応について、強硬な姿勢を執ってる人

達が、まだ……」

ドロス「それが今、ここで急進派と言われている一団。奴等のマシンランドもまた複数存在しておるが、その中でも特に大勢力だと目されておるのが、帝王ゴールの遠縁に当たる、キャプテン・グールが率いる一団だ」

かな子「急進派……キャプテン・グール……？」

カムイ「急進派の中心人物とされているのは、帝王ゴールの実孫であるゴール3世。しかし、皇子はまだ幼い。そこで、実権を握っているのが」

美波「その、キャプテン・グールとかつて言う、ハ虫人……？」

カムイ「うむ。グールは摂政を名乗り、実質的に急進派を支配している。彼らの強硬な姿勢は、グールの圧政によるところが大きい」

莉嘉「？ 待つてよ、ゴール3世って、2世は……？」

カムイ「消息は不明だ。先の恐竜帝国とゲッターの戦いで、戦死したとも言われているが……」

かな子「その、グールって人を倒せば、恐竜帝国の戦争を終わらせることが出来るんですか？」

ニオン「事はそう小さな問題ではない。が、敵の大将の首を落とせば、その勢いを削ぐことは出来るだろう」

ドロス「急進派は、ここ最近になって活動が積極的になってきておる。丁度、お主らが地上でランドウとか言う人間を打倒した前後からだ」

美波「……ランドウとの戦いで、私達も疲弊してる……。そこを狙い目つてこと……？」  
鉄甲鬼「それも攻勢の1つ。だが、地上に進出する前に、穩健派の存在が邪魔なようだな」

カムイ「急進派は今、他のマシーンランドの勢力も併合し、徐々にその勢力を拡げている。このまま勢力の拡大を続けられれば、何れ我々の力だけでは手に負えなくなるだろう」

莉嘉「それで、アタシ達の力が必要だつて？」

カムイ「ああ。我々穩健派が、人間と同盟を結び、友好的関係を築いていると言う姿勢を、急進派の連中にも見せる必要がある」

莉嘉「それって何か意味あるの？」

ドロス「大いにあるさ。我々の戦いは、敵を殲滅するだけではない」

莉嘉「……？」

美波「つまり……ハ虫人類にとつて、人類は共通の敵つて言う認識だから。その人類と争うことなく、手を結ぶことで地上進出の目標が達成出来るとしたら、急進派の人にしてみれば、都合が悪いんじゃないかしら？」

莉嘉「…そうなの？」

かな子「えーっと、急進派の人達は、私達人間をやつつけることで、勢力内部の士気を保つてる筈だから、その人間をやつつける必要がない、つてなれば、内部の士気を維持するのも、大変になっちゃうと思うの」

莉嘉「アタシが、恐竜帝国と一緒に戦つてるだけで、向こうは内部分裂するかもしれないんだ…」

鉄甲鬼「それだけでなく、上手く取り入れれば、自分達も穏健派のように人類と共生できると、考える者も出てくるだろうな」

ニオン「細やかな心の隙が、現体制への疑念に代わり、革命や離反に繋がる。貴様らにも分かる筈だ」

ドロス「急進派とは言うがな。全てのハ虫人が、急進派のやり方に従っているわけではない。それぞれの理由や事情から、仕方なく奴等のやり方に従わざるを得ない者達もおるのだ」

カムイ「そう言う者達に、私は訴えたいのだ。過去の因縁に囚われて、戦うことの愚かさ、その無為を」

莉嘉「成る程…。つまり心理作戦つてことか…」

カムイ「現状で我々穏健派と、人類間の交渉も順調に進んでいるわけではないが。互

いの関係が歩み寄りつつあると言う姿勢は、急進派にとっては耐えがたい動揺となるだろう」

ニオン「それに、俺達と急進派との戦いは、人間共にとつても無関係、と言うわけはないからな」

美波「そうですね。仮に急進派の勢力が、穏健派を上回るようなことがあれば、かつての恐竜帝国との戦いのようなことが、また……」

カムイ「私個人としても、同じ歴史が繰り返されるのだけは避けたい。異種族同士の怨恨が、未来まで続くこととなつては、何れはこの星をも食い潰してしまうやもしれぬ事態になつてしまう」

カムイ「そうならぬ為にも、頼む。我々に力を貸してはくれないだろうか」 スツ

美波「!? そ、そんな……! 頭を上げて下さい!」

かな子「美波さんの言うとおりです! 王様が、穏健派の代表が、頭を下げることなんかじゃないです!」

莉嘉「心配しなくても、今さらここから逃げるなんて事、アタシ達はしないよ!」

美波「さつきまでの話で、事が深刻なのは理解しました。正直ゲッター機だけじゃ役不足になるかもしれません。それでも……」

かな子「ニオンさんにだつて、ランドウとの戦いの時に手伝ってもらいました! 受け

た恩を返さないのは、それこそ仁義に反するってことですよ！」

カムイ「……感謝する。有り難う……」

莉嘉「よおーっし！それじゃ、先ずは何をするの？出撃？偵察？マシーンランドーつをブツ飛ばせて言うなら、何だつてやるよ！」

カムイ「そうか。では、ドロス、ニオン。彼女らをゲッター開発区へ」

莉嘉「へ？」

ドロス「了解ですぜ！」

莉嘉「待つてよ！戦うんじゃないの？」

ニオン「その為の準備も、必要だと言った」

莉嘉「なあんだ、戦うんじゃないの……」

ドロス「まあまあ。一先ずは顔合わせといこう。それに、客人であるお主らにはさきやかだが歓迎の宴の用意もある」

莉嘉「歓迎!?ごちそうが出るの？」

ドロス「おうともさ！恐竜帝国宮廷料理人達の腕に縊りを掛けて、盛大な馳走を振る舞うと約束しよう」

莉嘉「ホントに!?うわあ、今から楽しみだなあ〜」

かな子（異文化の料理……。楽しみのような、不安なような……?）



ドロス「馳走の為に、先ずは腹を減らさねばな」

莉嘉「うんっ！何だって手伝っちゃうよ！ささ、ゲッター開発区とか言うところ、早く行こ！」

ドロス「おうおう！そう急ぐでない……！」

美波「……えーっと、何かすいません……」

ニオン「……単純な奴だ」

カムイ「……フフツ」

――。

~~~~ マシーンランド内部 ~~~~

莉嘉「へえ、その、ゲッター開発区つてのには、モノレールに乗っていくんだ？」

ニオン「皇居から徒歩では、距離があるからな。貴様らも長距離の移動に戦闘、謁見で疲れただろう？」

莉嘉「ぜん然っ！何なら、もう一回戦えるよ☆」

鉄甲鬼「先程のは冗談ではなかったと？タフな奴だ」

ドロス「ガハハッ！ちっこいのに大した奴だ。ますます気に入ったわい！」

莉嘉「ちよっ……！そんな乱暴に頭撫でないで……！髪が乱れる……」

ドロス「おお、すまんすまん！」

莉嘉「もう……っ、王の前だとあんなに大人しかったのに……」

ドロス「はっはっはっはっ！それは、王の御前、自重くらいするわ。お陰で疲れたわい……」

ゴウン…… ゴウン…… ゴウン……

かな子「あ、モノレールが来るみたいですよ？」

莉嘉「うえ……デザインは恐竜モチーフなんだね」

ニオン「デザインなどどうでも良からう。さっさと乗れ」

莉嘉「う、うん……」

莉嘉達を乗せ、モノレールは動き出す。

莉嘉「おお……真っ暗。こう言うのは、東京の地下鉄と変わらんなんだ」

ニオン「ただの交通機関だからな。何を期待していたのかは知らんが」

莉嘉「ねえ、ゲッター開発区まではどのくらいなの？」

鉄甲鬼「……大体、30分と言ったところか」

莉嘉「そんなに!?!:はあく。することもないし、ちよつと寝よつかな」

美波「……あの、1つだけ気になることがあるんですけど」

ドロス「何だ？」

美波「カムイ王の事です」

ドロス「王の？」

美波「王は、ハーフ、何ですよね？人間との…」

ドロス「おうともさ！故に我らの…」

美波「その人間って…？」

ドロス「……」

ニオン「……」

かな子「それ、私も気になってました」

莉嘉「Zzzz……」

かな子「あ、莉嘉ちゃん、本当に寝ちゃいましたね」

ドロス「…我々、ハ虫人類は地上進出を目指し、あらゆる試行錯誤が行われてきた。

ゲッター線を弾く防護服の開発、投薬によるゲッター線の克服…」

美波「……」

ドロス「同化計画も、その試行錯誤の1つだった」

かな子「同化計画…？」

ニオン「ゲッター線に選ばれた人類。ゲッター線に対して、ハ虫人以上に耐性を持つ人類。そのDNAをハ虫人のものとして手に入れられれば、間接的にだが、ゲッター線を克服したことになる」

美波「まさか…！同化計画とは…!？」

ニオン「ハ虫人と人類の交配を試みる計画だ」

ドロス「千竜一族など、生来ゲッター線に耐性を持つ者を地上に送り、人類のサンプルを拉致。遺伝子検査を行い、人間との交配が可能と判明した事で、計画は進められた」
かな子「それじゃあ、無理矢理……！」

ニオン「お前の想像しているようなことはないぞ。そもそも実験と称して進める時点で、人工受精で試行回数を増やした方が、結果は望める」

美波「想像……」 チラッ

かな子「へ、へんな想像をした訳じゃ……」

ドロス「事実、人間とハ虫人では、種族として交配が可能と言うだけで、受精確率は極めて低かった。計画が行われている間に誕生した受精卵はごく僅かで、生後順調に育った個体も少ないと聞く」

かな子「計画が行われている間……？ 計画は、凍結されたんですか？」

ドロス「うむ。あくまで、ハ虫人の純血を支持する勢力の反対を受けてな。実際に、成果も上がらなかったからのお」

美波「それで、計画に参加させられた人達は……」

ドロス「……多くの人間は、当時のマシンランドの環境に耐えられず、命を落としていった。後は……」

かな子「後は……？」

ドロス「おっと」

プシューツ

モノレールの昇降口が開き、ドロスが立ち上がる。

かな子「降りるんですか？」

ドロス「おう。ワシのような普通のハ虫人は、ここで降りて防護服を着込まなくては、ゲッター開発区のゲッター線に耐えられんのだよ」

かな子「成る程……」

ドロス「お主らが降りる駅は次だ。……あー、話の腰を折って悪かったの。では」

プシューツ

美波「……」

かな子「……何だかはぐらかされた感じがしますね」

ニオン「……生き残った残りの人間は、人体実験の被検体にされた」

かな子「っ！」

美波「!？」

ニオン「お前ら人間の体を解明し、効果的に始末する方法を模索するためにな」

かな子「そんな……そんなことって……！」

鉄甲鬼「落ち着け。ドロス殿とて、その話を自らの口に出したくなかつたからこそ、
憚つたのだ」

美波「……」

鉄甲鬼「虐殺や人体実験など、まともな神経を持った者が肯定などするものか。だが、
戦時期という状況もある。反対したくとも一兵士や一個人の発言力では、止めることな
ど出来んよ」

かな子「…そう、そうですよね…」

ニオン「それに、人体実験の全てが悪い結果をもたらした訳ではない。今このマシー
ンランドに、貴様らがこうしていられるのも、人体の解明があつたからこそだ」

美波「…そっか。本来なら、ハ虫人の暮らす大気の酸素濃度は、白亜紀以前のものと
同じ…」

ニオン「人間を解明することで、人間とハ虫人両方が暮らせる酸素濃度が分かつたん
だ」

アーツギハーケンキュウカイハツクマエー ケンキュウカイハツクマエー オリグ
チハーヒダリガワー

鉄甲鬼「目的の駅に着いたな。降りるぞ」

――。

研究開発区

莉嘉「……ふわぁ……！眠……」

かな子「ここ、研究開発区って書いてますけど……？」

ニオン「このマシーンランド内で使用される科学技術の解明・研究を一手に引き受ける区画だ。ゲッター開発区は、ここから更に歩いた、区画の最奥にある」

莉嘉「ええ、まだ歩くの……？」

鉄甲鬼「文句を言うな。まだ疲れてないんじゃないのか？」

莉嘉「ちよつと眠ったら、何か体がダルくて……。ふわぁ……」

かな子「疲れが一気に打ちやっただけですね。もう少しの辛抱だから」

莉嘉「う……ん……ドロスはぁ……？」

かな子「ドロスさんなら、防護服に着替えるって……」

ドロス（防護服）「おお、皆の衆！何とか間に合ったわい」

莉嘉「ド……ロ……ス……！」

ダキツ

ドロス「おお……！どうしたんだ莉嘉ちゃん。様子が可笑しいようだが……」

かな子「ちよつと寝惚けてるんです」

ドロス「成る程……。そう言うことか」

莉嘉「ドロスウ、何そのカッコ。ダツサくい」

ドロス「莉嘉ちゃん。これはな、ダサイとかではなく、ワシの体をゲッター線から守るための…」

美波「今の莉嘉ちゃんに、真面目に話すだけ無駄だと思います」

ドロス「むう、仕方がない。それっ」

莉嘉を持ち上げ、自らの肩に座らせるように担ぐ。

莉嘉「うわあ、高い、いい、座り心地い…」

ドロス「まったたく……手間を掛けたな。改めて、向かうとしよう」

—— ゲッター開発区、入り口。

ドロス「見えてきおったぞ」

かな子「随分頑丈そうな扉…」

鉄甲鬼「嚴重管理区域だからな。安全面の管理は徹底している」

ニオン「マシーナランドは密閉空間だからな。この区画からゲッター線が漏れ出せば、一部のハ虫人は一溜まりもない」

かな子「成る程…」

美波「この向こう側で、ゲッターの研究が…」

ドロス「さて、中に入るぞ」

ドロスが二重にロックが掛けられた電子制御を解除。ロックが解除され、重厚な扉が開く。中からは、

「だーかーらー！何度言ったら分かるんだ!?お前は!そのマシンはお前の玩具なんかじゃないんだぞ!!」

莉嘉「んむ…?」

かな子「ひっ!」

ドロス「おうおう、やっておるな。ゾル?」

ゾル「ドロス!もうお前が代わってくれ!俺じゃあアイツらの面倒は見切れん!」

ドロス「はっはっはっ!しかし、我々の中でゲッターと戦った経験があるのはお主だけだ」

ゾル「戦ったって経験だけで、奴等に操縦訓練の手解きが出るものかよ!」

かな子「あのく、この人は…」

ゾル「ん?お前の後ろ…:…それに、肩に乗っているのは、人間?!」

ドロス「おう。前に話したろ。人間側からの協力者で、しばらくここに身を置くことになる。後ろのはかな子と美波、こっちは莉嘉」

莉嘉「ううくくん、むうく…!」

ドロス「美波ちゃん、こっちはキャプテン・ゾル。ワシと同じキャプテンクラスだが、

今はザウルスチームの操縦訓練の教官をしている」

美波「よろしくお願ひします」

かな子「よ、よろしくお願ひします……！」

ゾル「ここに来るのはゲッターのパイロットだつて聞いたぞ？まさか、この娘達が？！」
ドロス「その通り！何、実力はこの手で確認済み。ワシが、保証するわい」

ゾル「そ、そうなのか……！でもこれで助かった！頼む、奴等の教官を代わってくれ！」
美波「そんなに手の掛かる人達なんですか？」

ゾル「手の掛かる、何てもんじゃねえよ……つたく！まだ若え、実戦を知らない世代つてのはどうしてこう……！」

ドロス「はっはっはっ！それこそ、昔の我らのようではないか！」

ゾル「ぐう……！」

ドロス「若い時程、目上の人間の言葉を素直には聞けぬもんよ。自分が昔したことが返つてきてると思つて、真面目にやるんだな」

ゾル「……はあく。俺はもう少し優等生だったよ」

莉嘉「むう……？ドロス？ゲッターザウルスは……？」

ドロス「おう、そうだったな。ゾル、先ずは我らのゲッターのお披露目をな。この、地上から来た申し子達に」

ゾル「そうだな……」

ドロス「連中は、外で訓練飛行中か？」

ゾル「うん。……おい、ザウルスチーム、聞こえるか？今のお前達の姿を、地上のゲッターチームが見ているぞ」

『!?!』

ゾル「俺の言うことを聞きたくねえのは分かる。だが、人間相手にくらい、立派な姿を見せてみる」

『チツ……仕方ねえ！行くぞ、ガンリユー、ゴズロ』

『了解』

『了解……』

莉嘉「ふにや……？ゲットマシン？」

『チェーンジゲッターアアー!!ザウルスツ!!』

莉嘉「っ!？」

目の前の大型モニターに映像が映し出され、ゲッターザウルスが姿を見せる。

かな子「これが恐竜帝国の造った、ゲッターロボ……」

莉嘉「ゲッターザウルス!!」

ニオン「……随分と悠長な合体だな」

ゾル「厳しいお言葉をどーも。合体タイムは、7.62秒か…。まだまだだな」

美波「何だか、ゲッターG……ゲッタードラゴンによく似ていますね？」

ゾル「我々の中でも、ゲッタードラゴンの活躍は飛び抜けて有名ですから。真ゲッターなんかをモチーフにするよりも、親近感があるだろう？」

かな子「それは、どうなんでしょう？ 雰囲気はドラゴンですけど、シルエットは恐竜っぽいですし、違うゲッターですよ」

ドロス「そう言ってもらえれば、ゲッターザウルスの開発者冥利に尽きると言うもの」
『さあ、次の指示はなんだ？ 教官殿』

ゾル「……訓練は終わりだ。至急、マシーンランドに帰還せよ」

『はあ!? 合体したばっかだぜ?』

ゾル「そのゲッターの炉心はまだ不完全だと説明したばかりだろう。合体したのも今日が初めてだ。炉心の状態を詳しく解析し、データを集める必要がある」

『何だよ。期待させやがって』 プツンツ——

美波「合体テスト、上手く行って良かったですね…?」

ゾル「ああ。ゲッターへの合体までが今日の予定だったから、君達が気にする必要はないよ。さて、このまま開発ドックへ行こう」

かな子「開発ドック？」

ゾル「ゲッターザウルスの整備を行っていると聞き。ゲッターザウルスの開発主任もそこにいる。きつと君達にも会いたがっている筈さ」

かな子「成る程…。それに、ゲッターザウルスも間近で見れるんですね？」

莉嘉「……」

美波「…？莉嘉ちゃん、さつきからずっと押し黙ってるけど、また寝ちやった？」

莉嘉「もう、目が覚めたよ。ドロス、下ろして」

ドロス「ん？おお」

ひよいと、ドロスの肩から飛び降りる。

ゾル「いいかな？主任の他にも、君達にとつては懐かしい顔もいるかもしれない」

莉嘉「懐かしい顔？ハ虫人の知り合いは、そんなにいないけど？」

ゾル「ハ虫人じゃない、人間だ」

莉嘉「人間？アタシ達以外の…」

—— 開発ドック。

かな子「…はえ、これがゲッターザウルス…」

美波「見た目はドラゴンだけど、カラーリングは黒っぽいのね」

ゾル「深海迷彩だ。ゲッターザウルスは、全領域での戦闘を可能としているが、今は深海での戦闘を想定し、調整している」

かな子「その為に、深海でも優位に戦える塗装つて事ですね」

ゾル「…お、いたぞ。ほら」

美波「あれは…」

莉嘉「芳乃…!」

芳乃「ほー? おやー、皆様方ー。お待ちしておりますー」

莉嘉「どうして芳乃がマシーナランドに?」

芳乃「これはまた異なる事をー。芳乃はだいのゲッターのぱいろつとー。であれば、

その身はゲッターと共にありますー」

莉嘉「その割に、前の出撃の時には乗ってなかったみたいだけど?」

芳乃「それは戦の為ではなかった故ー。こちらで時の行く末をー、眺めさせて頂いた

次第でー」

美波「芳乃ちゃんは、ここで何を?」

芳乃「今はこのー、ハン博士に付き添いー、ゲッターについて、それなりの教授をー」

莉嘉「ハン博士?」

ハン「やつ」 ヌツ

莉嘉「きやあつ!?!」

ハン「はっはっはっ! 驚かせてしまったかな? 何、旧交を温めているようだったので、

邪魔しては悪い、とな」

莉嘉（すんごい髭…）

かな子「えっと、あの……貴方が……」

ハン「うむうむ。待つておったぞ。地上人のゲッターパイロット！」

ドロス「ハン博士だ。このマシーンランド、随一の科学者にして、恐竜帝国に於けるゲッター線研究の全てを一手に引き受けている」

美波「結構偉い人、なんですかね？」

ハン「はっはっはっは。ま、そんな事もあるかのう？」

莉嘉「…何か、全然そんな感じしないね」

ハン「んおっ?!」 ガックシ

芳乃「しかし、このゲッターザウルスを手掛けたのも、ハン博士なのですよー」

ハン「そうじゃそうじゃ」

ニオン「それで、そのゲッターザウルスの調子は？」

ハン「ふむう……。完成度としては4割弱……と言ったところかのう」

莉嘉「何だ。完成にはまだまだ遠いんだ？」

ハン「ぬう……。最近の子供は、遠慮を知らんのお……」

ゾル「呑気にしているがハン博士、ゲッターザウルスの出陣式はもう10日後に迫っ

てるんですよ？」

ハン「分かっておる。何とかこの、第1形態の状態でも戦闘出来るように調整しておる。出陣式には必ず間に合わせてみせるわい」

かな子「出陣式？」

ドロス「ゲッターザウルスの完成と、急進派との開戦をここの民達に公に発表するための式典だ。兵の士気を高め、戦争状態になる事を民達に拡く伝える目的がある」

美波「そんな式が……」

ドロス「うむ。この穏健派のマシンランドには、戦いを嫌ってやってきた者達もある。そう言った者達にも理解してもらわねばならんからな。これからの戦いは、平和を勝ち取るための戦いであると、な」

莉嘉「ふうん……」

ニオン「何を他人事みたいにしてている？その出陣式には、お前達も出るんだぞ」
かな子「へえ……って、ええ!？」

鉄甲鬼「当然だ。これから共に戦う戦友として、王直々に紹介されるのだ」

莉嘉「ああ……成る程……」

ドロス「それまでは、お友達にもある程度行動に制限がつく事になる」

美波「下手に私達が一般の人達の目に触れて、混乱が生じるのを防ぐため、ですか？」

ドロス「そう言うことじゃな。すまんの、しばらく窮屈を強いる」

莉嘉「…まあ、そう言うことなら、仕方ないんじゃない？」

ゾル「そつちもそうだが、頼むよ、博士」

ハン「皆まで言わすな。ワシはこのマシーンランド随一の天才科学者じゃぞ？」

莉嘉「自分でそう言っちゃう人って、逆に信頼出来ないよね」

ハン「うっ…！」

かな子「莉嘉ちゃん、さつきからハン博士に厳しくない？」

「それでよ、俺達は何時まで、ここで待ち惚け食らつてなきや行けないんだ？」

美波「…？ 貴方達は…」

「そろそろ紹介してくれてもいいんじゃないですかね？ゾル教官殿」

ゾル「お前達…。いや、すまない。忘れてた訳じゃないんだが」

かな子「3人のハ虫人…ってことは、この人達が…？」

ゾル「そうだ。ゲッターザウルスのパイロット、ザウルスチームのバイス、ガン

リユー、ゴズロの3人だ」

ガンリユー「よろしく」

ゴズロ「よろしく…」

バイス「……フンッ」

ゾル「バイス、ガンリユー、ゴズロ。この人達が昨日話した…」
ガンリユー「人間のゲッターパイロットの方々、でしょう？」

莉嘉「城ヶ崎莉嘉だよっ☆」

美波「新田美波。よろしくお願いします」

かな子「三村かな子って言います。私のことはかな子で構いませんから。よ、よろしくお願いしますっ！」

ゴズロ「…個性的な面子だな」

かな子「個性的だなんて…」

バイス「しっかりとした驚いたぜ。どいつもこいつも細っこくて。見るからに温室育ちですって顔してやがる」

莉嘉「……!!」

ゾル「バイス！」

バイス「こんな女子供でも操縦出来るんだ。確かに、人間のマシンってのは進歩して
るみてえだな」

莉嘉「そう言うそっちは、ゲッターを真似したマシンを動かすのもやっとな感じ
みたいだね？」

バイス「何っ!？」

美波「莉嘉ちゃん！」

莉嘉「事実でしょ？恐竜帝国最新鋭とか言つて、新型機のパイロットに選抜されたので天狗になつてる感じだし？その癖合体のタイムはアタシ達よりずっと下とかww」

バイス「んだとオ……！テメエ、もう一辺言つてみやがれ！」

ガンリユ「落ち着け、バイス。相手は人間の大使だ。何かあれば、お前だつてただじゃ済まないんだぞ」

ゴズロ「先にけしかけたのはお前だ。お前が悪い」

バイス「……チツ」

莉嘉「へっへっ！悔しかったら合体くらい一人前にしてみせてよ！」

美波「莉嘉ちゃん。流石に言い過ぎだよ」

バイス「……けっ、力じゃ勝てねえと、口だけは達者に進化するみてえだな」

莉嘉「悔しかったら勝負してみる？アタシのゲッターと、アンタのゲッターでバイス「!？」」

莉嘉「それなら力は対等でしょ？ゲッターが傷付くだけなら、修理すれば済む」
バイス「……」

ハン「おいおい！勝手に話を進めるでない！ゲッターザウルスは開発中だと……」
バイス「だが、第1形態は使えるんですよね？」

ハン「そ、それはそのう……むう……」

バイス「I形態だけ使えれば十分だ。口先だけの小娘など、叩き潰してやる……!」

ハン「ほ、本気でやる気なのか……!?!」

鉄甲鬼「自分も賛成です。ハン博士」

ハン「鉄甲鬼?」

鉄甲鬼「先も話した通り、出陣式までの期間も僅か……であれば、幾つか行程を繰り上げて、稼働データを得ておく良い機会です」

ハン「そうは言うがのお……」

鉄甲鬼「それに、これから肩を並べて共に戦うもの同士。遺恨があつては取れる連携も取れなくなるでしょう。悪影響を及ぼすガスは、ここで吐き出させておくべきです」

ハン「……仕方ないの」

かな子「まさか、本当にやるんですか? 莉嘉ちゃん」

莉嘉「鉄甲鬼の許可も出たんだもん。遠慮なく、ぶっ飛ばして良いってことですよ?」

鉄甲鬼「ああ。だが、ここでやる以上私闘と言うわけにはいかん。お前達がこれから行うのは、決闘だ」

莉嘉・バイス「決闘(だと)?」

マシーンランド内 訓練場

莉嘉（アーク搭乗）「マシンランドの中に、ゲッターがそのまま戦闘出来るくらい空間があるなんて……」

バイス（ザウルス搭乗）「今でこそメカザウルスの訓練や、兵器の試験で使われている場所だが、元は闘技場だったのさ、ここは。反逆者や敗走してきた軟弱者を見せしめに処刑するためのな」

莉嘉「……ゲッターザウルス！」

バイス「そっちは3人まとめて、掛かってきても良かったんだぜ？」

莉嘉「いいよ。そっちと条件が一緒じゃないと、後で愚痴愚痴言われるのもメンドいし」

莉嘉「はっ！あくまで勝つつもりってか？」

鉄甲鬼（ダイノゲッター2搭乗）「両者そこまで。此度の決闘、発案者は俺だ。故に立会人を務める。いいな？」

莉嘉「もちろん☆」

バイス「……ああ」

鉄甲鬼「では、ルールの確認を行う。双方、パイロットは1人、使用するゲッターの形態は1形態のみ。今合体している形態以外のゲッターへの変形は禁止だ」

莉嘉「……」

バイス「……」

鉄甲鬼「使用武器は、ハン博士より提供して頂いた訓練用の刃や破壊要素を潰した武装を使用する。ゲッターアーク、ダブルトマホーク。ゲッターザウルス、ダブルシユテルン」

莉嘉「うんっ！」 ブオンッ

バイス「応っ！」 ジャキッ

鉄甲鬼「よし。それ以外の武装の使用は一切禁止とする。破った者はその時点で敗北。それ以外、相手に致命傷と判断される箇所に一撃を入れるか、先に相手に降参させた方の勝利だ。両者、異存は？」

バイス「ないっ！」

莉嘉「こっちも！」

鉄甲鬼「……では」 スッ

莉嘉「……」 グッ

バイス「……」 グッ

——訓練場脇、管制室。

かな子「な、何だか大変なことになっちゃってませんか？」

美波「そう？ 私は、実戦中に問題が起きなくて良かったって、逆に安心してるけど」

かな子「けど……」

ガンリユー「俺達としても、最近のバイスの増長にはうんざりしていた」

かな子「…そうなんですか？」

ゴズロ「ああ。キツイお灸を、据えてもらおう」

ドロス「ほっほっほっ。良く見ておけよ、ゾル。ゲッター同士の戦闘など、そう見えるものではないからな」

ゾル「そんなこと言ってる場合か？ 決闘だ何だって理由付けても、実機の戦闘だぞ？ 機体は兎も角、パイロットに何かあつたら……！」

ドロス「心配しすぎだ。実戦から離れて、かなり神経質になったのう、お主」

芳乃「ハン博士もー。恐れるようなことにはならないのでしてー」

ハン「そうは言うがの芳乃ちゃん。ゲッターザウルスは今日やつと合体試験を行ったばかりじゃぞ？ もし万に一つがあれば……！」

芳乃「座して時を待ちましょー。これもー、ゲッターの導きなればー」バリバリ……

美波「そう言えば、さつきから芳乃ちゃんは何を食べてるの？」

芳乃「深海いか煎餅、でしてー」

美波・かな子「深海いか煎餅?!?!」

鉄甲鬼『——始めっ!』

ニオン「始まったか——！」

莉嘉「やあああああッ!!」

バイス「ぐっ……!」

鉄甲鬼の掛け声が終わらぬ内に、ゲッターアークは突貫。

ガギンツ

打ち下ろされた左のトマホークを、ダブルシユテルンの柄で受け止める。

莉嘉「まだトマホークはもう一本……!」

バイス「ぬううう……!!?」

真横から水平に打ち出された右のトマホーク。咄嗟に受ける左腕をダブルシユテルンから離し、トマホークを受け止める。

莉嘉「くっ……!」

バイス「これで、緒戦を制したつもりかア!!」

莉嘉「ぐっ……!!?」

ゲッターザウルスの蹴りが、ゲッターアークに突き刺さる。

莉嘉「ううっ……!」

バイス「形勢逆転だな!」

莉嘉「っ……!!」

上段から振り下ろされたダブルシユテルンの鉄球を躲す。

莉嘉「そう簡単に……!!」

ゲッターザウルスから距離を取り、訓練場の外壁上をナメるようにゲッターアークを飛ばし、

ギユンツ

バイス「消えた!?!ガッ——!!」

急制動。ゲッターザウルスの視界から外れ、背後に回って蹴りを放つ。

莉嘉「逆転なんてさせないっ……!!」

バイス「はっ!確かに、口先だけじゃないみたいだな!」

莉嘉「はああああああくくくっ!!」

バイス「だが!」

ガギインツ

莉嘉「!?!」

ゲッターアークの追撃の一撃を、ダブルシユテルンで打ち返す。

バイス「所詮は、我々の劣等種!人間の、子供に過ぎんツ!!」

莉嘉「あうっ……!!」

打ち上げたダブルシュテルンが、ゲッターアークを跳ね上げる。

バイス「戦い方を知らん！まるで暴れる子供だな！」

莉嘉「言つたなあ……！」

反転。ゲッターザウルスに向き直り、突き付けられた攻撃を躲す。

莉嘉「そつちこそ、アタシ達が地上で戦つてる時も、海底に潜んでるだけだった臆病

者の癖に！」

バイス「好きで潜んでいた訳じゃない！」

鏢迫り合う狭間から、激しい火花を散らす。

バイス「混乱している時期に、我らが出ていっても、余計な混乱を生むだけ……！大局

を理解することも出来ん子供に、王の決断が理解出来るものかア!!」ガンツ

莉嘉「王様、教官！従つてばっかり！自分の意思つてないんだ？」グツ

バイス「何だと!？」

莉嘉「アタシ達は、リーナは、自分の意思で戦いに行つたよ。みんな悩んだし、後悔もした！けど、それでも！ランドウをやつつけた！地上の平和を一步近付けたんだ！」

ズガンツ

バイス「ぐっ……!?このっ！」

莉嘉「きやつ！」

バイス「結果論だ！全て貴様らの都合の良いように行くわけではない！一度上手く行ったことを、得意気にそう言うから、子供だと言うんだ！」ズアツ

莉嘉「っ…！アタシが子供なら、そっちは何!?」ギイイインツ

バイス「何…!？」

莉嘉「言われなきや何にもやらない癖に、命令されるのはイヤだから反抗して！アタシなんかより、よっぽどガキじゃん！」

バイス「なっ…!?!ガキ、だど…?俺がガキだと!？」

莉嘉「子供に凶星突かれたくらいでムキになっちゃってさ！このガキツ！ガキガキガキガキツ!!」

バイス「っ…!! ぶっ殺すツ!!」ズンツ

莉嘉「きやあああああツ!?!」

鉄甲鬼「バイス…!」

莉嘉「止めないで、鉄甲鬼！」

鉄甲鬼「…!?!」

莉嘉「今の攻撃は致命傷じゃない…!でしよ!?!やっとな面白くなってきた…!」
そう言つて、垂れた鼻血を拭う。

バイス「へっ…!後悔しても遅いぞ？」

莉嘉「そつちこそ、後で泣いて謝ったって知らないから！」

バイス『喰らえ、小娘え!!』

莉嘉『へへくん☆誰が！鬼さんこちら〜』

バイス『ちつ…！一々腹の立つ…!』

莉嘉『ははっ！気に入らないなら最初から、そう言えばいいんだ！へんにスカしちやつてさ、カッコ悪い!』

バイス『俺の性分は、カッコ良いとか悪いとか、そう言うものじゃない!』

莉嘉『そう言うものじゃないなら……あ、痛いんだ?』

バイス『貴様アツ!!』

ガンリユー「……」

ゴズロ「……」

かな子「あ、あのー…何と言うか、その…」

ニオン「みつともないな」

ゾル「ああ。とてもマシーンランドを背負って立つ、戦士とは思えん」

ゴズロ「まるで子供の喧嘩だな」

かな子「意外と似た者同士……なのかな?」

芳乃「しかしー、お2方共ー、本心をぶつけて、言葉と刃を交わしておりますー」
ドロス「…芳乃ちゃん言う通りかもしれないな。バイスもまだ若い。ああして気遣いせず、全力でぶつかれる手合いが、必要だったのだな」

ゾル「…確かに、ゲッターザウルスの完成に焦るばかりで、パイロット一人一人のケアを怠っていたのかもな…」

芳乃「ハン博士は如何でしたー？良きデータは取れておりますかー？」

ハン「機動がハチャメチャすぎて何の参考にもならんわい！」

芳乃「それはー、それはー…」

ハン「2人共、ゲッターを目茶苦茶にしおって…！この後の整備を考えるだけで頭が痛い！」

美波「……」

かな子「美波さんは、さつきから押し黙って、どうしたんです？」

美波「…あつ、いや…。何でもない」

かな子「……？」

美波（ゲッターアークのエネルギー傾向…。私達が乗ってない分、2人分欠けてる筈なのに、パワーが落ちてない…。寧ろ、増えている…？）

かな子「これ、ゲッターアークのエネルギー線量ですか？…この波形」

美波「何か分かる？かな子ちゃん」

かな子「分かるつて程じゃないですけど、何となく、卯月ちゃんの時に似てるなつて」

美波「卯月ちゃんに…？」

ニオン「……」 チラッ

芳乃「…ほー？何かー？」

ニオン「この決闘も、ゲッターの導きだと言ったな」

芳乃「そうでしたかー？まー、深い意味はないのでしてー」

ニオン「…そうか」

—。

莉嘉「——このつ、このつこのつこのつ！」

ダブルシユテルンの柄で防御するゲッターザウルスに向かって、左右のトマホークを

乱れ打つ。

バイス「ぐうううくくくつ!!？」

バイス（何だ…!!?こいつ、段々とパワーが上がっている…!）

莉嘉「そおおりやあああッ!!」

バイス「うっ！」

ゲッターアークの直蹴りが、ゲッターザウルスの鳩尾に入る。

莉嘉「これでえ!!」

バイス「何のおくくッ!!」 バチンッ

莉嘉「!?」

トマホークを大上段に振り上げたゲッターアークの目の前で、ゲッターザウルスが分離。

莉嘉「——!!」 ピキーンッ

バイス「チエンジザウル……!!」

莉嘉「だあッ!!」

ゲッターアークの背後に回り、合体を行ったゲッターザウルスに、ゲッターアークは高速で振り返り、勢いの突いたトマホークをゲッターザウルスに打ち付ける。

バイス「ガ……ア……ッ!?!」

吹き飛ばされるゲッターザウルス。

バイス「どんな反射神経だ!?!分離したゲッターの動きを見切るとは……っ!?!」

前方にいた筈のゲッターアークがいない。

バイス「何処に……!?!」

——ギンッ

バイス「……?!」

背後に、感じたことのない、殺気。

バイス「うがあああああッ!?!」

背中に直撃を受け、倒れ込むゲッターザウルス。

バイス（な、何だこれは…!? 本当にさっきの、小娘が出している気配か…! これでは…!）

莉嘉「や、あああああッ!!」

バイス「化け物…!」

恐怖が先行し、ゲッターアークから大きく距離を取る。

ズシヤア……ンッ

目標を失ったトマホークが地に打ち下ろされ、土煙が柱になって立ち上る。

バイス「はあ……はあ……はあ……」

バイス（訓練用の武器だぞ…? あれを直撃で受けていれば、俺は……いや!）

バイス「恐れるな…! 俺は恐竜帝国の戦士。戦うために生まれ、そのために育てられた! あいつとは、恵まれた環境で生まれ育った、奴とは違う!!」 キッ

莉嘉「……」 ズズズ……

バイス「俺は負けない…! 俺があ……! 負けるものかアッ!!」

莉嘉「……」 フッ……

バイス「!?」

まるで糸の切れた人形のように、ゲッターアークが目の前で崩れ落ちる。

バイス「……何、だ……?」

鉄甲鬼「おい、どうした? 莉嘉、返事をしろ」

莉嘉「……」

鉄甲鬼「これは……気を失っている? いや、眠っているのか?」

莉嘉「……Zzzz」スピーツ

鉄甲鬼「疲れているとは言ったが、戦闘中に意識を失うとはな。肝が座つていと言
うのか……」

バイス「……」

鉄甲鬼「決闘は中止だ。お前も、この結果では満足せんだろう? アークを格納庫まで
運ぶ。手伝ってくれ」

バイス「あ、ああ……」

バイス（さっきの一瞬。ゲッターアークが動いていたら、俺は反撃出来ていただろう
か……? 勝っていただろうか、俺は……）

ハン「ふうふうっ……!」

芳乃「何とか人心地ですかー？ハン博士ー？」

ハン「寿命が300年は減ったわい」

ハン「しかし、まあやはり人間側で開発されたゲッターはスゴいのう。ワシのゲッターザウルスはまだまだじやと痛感させられたわ」

美波「……」

かな子「……」

ハン「うむ？どうかしたのか」

かな子「いえ、まあ……その……。何と言うか……」

ハン「ふむ……？」

芳乃「莉嘉さんも疲れが残っていたのでしてー。美波さん達も休ましましよー？ここで
の戦いはまだ始まってもおりませぬ故ー」

かな子「そうですね。ここで色々考えても、仕方ない気がします。今は莉嘉ちゃんの
ところに行きましよう？美波さん」

美波「ええ、そうね……」

芳乃「……」

ツカツツカ——

美波（今回の戦い、ゲッターアークの動きは、3人で乗ってる時よりも、ずっと研ぎ

澄まされてるように見えた……。だとしたら、私達の意味は……？——
つづく

第9話 『響く歌声』

~~~~~ 深海 ~~~~~

美波「ドリル……アターック!!」

コモド「ぐっ……!」

ゲッターキリクのドリルアームが、深海用に改造されたメカザウルス・ゼンIIを弾いて吹き飛ばす。

ハ虫兵「コモド様!」

コモド「チイ……!よもや、穩健派が人間共と手を結ぶとは……!」

ハ虫兵「い、如何なさいますか?」

コモド「……。この事は、グール様に報告せねばならん。一時退くぞ!」

ハ虫兵「はっ!!」

莉嘉「ああ待って、逃げるなあ!」

ゼンIIを中心とするメカザウルスの部隊が、引き上げていく。

ドロス「追う必要はないぞ、莉嘉ちゃん」

莉嘉「でも……」

ドロス「『穩健派』として、我々の戦いは専守防衛。打って出るのは、出陣式を終えてからだ」

莉嘉「う………!」

かな子「追い返しただけでも立派だよ。……それより」

鉄甲鬼「……ああ」

ゲッターキリクにダイノゲッター、そしてメカザウルス・ゲド。その場にいた全ての者達の視線が、深海を漂う一隻の小型潜水艇に集まる。

潜水艇パイロット『……我々に交戦の意思はありません!ここが、カムイ殿下が率いる穩健派のマシーンランドだと聞いて、決死の思いで急進派のマシーンランドを同志達と抜け出してきたのです!どうか我々にも、殿下のお慈悲を!』

ニオン「……亡命者か」

鉄甲鬼「妙だとは思わないか?……タイミングが不自然すぎる」

ドロス「我らがマシーンランド内の情報が、急進派にも漏れていると思うか?」

鉄甲鬼「マシーンランド一つとは言え、小さな規模の話ではない。どこかに急進派と通ずるパイプがあっても可笑しくはない」

莉嘉「けど、急進派って体制も悪いんでしょ?逃げてきたって言うのは、ホントだと

思うけどなあ……」

ニオン「あの潜水艇の乗員全てが、本当に急進派の体制に嫌気が差して出て来たのなら、な」

かな子「スパイが紛れ込んでるって言うんですか？」

鉄甲鬼「若しくは、殿下の命を狙っている手合いが、だな。出陣式も近い。もし急進派が殿下の暗殺を狙っているとすれば、これほどの好機は他に無い」

美波「だから、この亡命が妙なタイミング？」

ニオン「ああ、出陣式でカムイ王が出てくるタイミングを、狙っているとしか思えん」  
ドロス「……とは言えな、平和を求めて、命から逃げて出し手来た者達を、穏健派として見捨てるわけにはいかん。兎にも角にも、マシンランドまで誘導してやらねば」  
莉嘉「それなら、アタシ達が先導するよ！人間の存在を見たら、何か反応があるかもだし」

ドロス「潜入者として選ばれたのなら、分かりやすい反応を示したりはせんと思うがの」

莉嘉「まあまあ。美波、キリクを潜水艇に近付けて☆」

美波「ええ、分かった」

ギユンツ、と海中でも特に抵抗の無い動きで、ゲッターキリクが潜水艇に近付いてい

く。

かな子「ハン博士が施してくれた深海用の調整、調子はいいいみたいですな」

美波「うん。これなら、かな子ちゃんだけに負担を掛けずに戦えるよ」

莉嘉「潜水艇のパイロットさん、聞こえる？ マシーンランドまでアタシ達が誘導するから、付いて来て！」

潜水艇。パイロット『おお……！我々を受け入れて下さるのですか！有り難う御座います！』

美波「出陣式も近いので、直ぐに自由、と言うわけには行きませんが……。監視も付きます。そう言うのは、分かりますよね？」

潜水艇。パイロット『ええ、勿論。穏やかな暮らしを得る為に、身の潔白を証明しようと言うのなら、我々としても望むところです！』

美波「……。では、付いて来て下さい」

潜水艇。パイロット『了解です。よろしくお願いします』

莉嘉「……何か、普通に逃げてきただけの人っぽいよね」

かな子「うくん……。どうなんでしょう？ 私達だけじゃ、やっぱり判断出来ませんよ」  
潜水艇。パイロット『あの……。助けていただいて、このようなことを尋ねるのも不躰かとも思うのですが……』

莉嘉「何々？」

潜水艇パイロット『貴女方、もしや恐竜帝国に協力していると言う人間……？そしてそのマシンが風に聞く、ゲッターロボでは……』

美波「……私達の事は、穩健派の人達だつて全員が知りませんよ？どうしてそう思うんですか？」

潜水艇パイロット『それは……恐竜帝国において、女性の戦闘兵など、聞いたことがないからです。3人乗りのマシンと言うのも……』

かな子「……恐竜帝国は旧体制つて、ドロスさん達も言つてましたよね。やっぱり戦闘も、男の人がするもの、つてイメージなのかな」

美波「急進派の中では、人間側の協力者の話は有名なんですか？」

潜水艇パイロット『え？ええ……あくまで、噂レベルでしたが……』

美波「……そうですか」

「……………」

――。

~~~~~ マシンランド内 会議室 ~~~~~

莉嘉「で、亡命してきた人達は、他の兵士達に丸投げしちゃったけど、ホントに良かったの？」

ドロス「ああ。急進派からの亡命と言うのも、一度や二度の話ではない。ちゃんとそう言った者達を受け入れる為の、然るべき機関が存在している」

かな子「そうなんですか？…それだけ、急進派の体制が良くないってこと、何ですかね…？」

ドロス「政治の主体が軍であることは間違いない。しかしそれよりも、戦うことが嫌になった、と言う側面の方が強い気はする。これまで亡命してきた者達の話、聞く限りな」

莉嘉「ふうん…。戦いたくなくて穏健派まで逃げ延びてきたのに、その穏健派が急進派に対して攻勢に出るなんて聞いたら、さっきの人達もシヨックを受けるのかな？」

かな子「でも、仕方ないとも思ってるかもしれないよ。急進派の人達が、穏健派の人達を目の上のたんこぶにしてるのは、周知でしょうし」

ゾル「亡命者が気になるのは分かるが、こっちの事も気にかけてもらって言いかないかな」

美波「今は出陣式の打ち合わせの時間だよ。こっちにも集中しなきゃ」

莉嘉「あつ、うん」

かな子「ご、ごめんなさい…！」

ゾル「それじゃあ先ず、今回出陣式を行う会場の見取り図を見てもらおうか」

かな子「…結構広いんですね。武道館くらいありそう」

ゾル「ぶどうかん？そつちの尺度は分らんが、マシーンランド内で祭事が行われる際に使用される式場だ。10000人程度は収容できる」

美波「……？ マシーンランド内の全員が見る、つて前に言つてましたよね？ここに全員、入るんですか？」

ゾル「まさか。入場を許されているのは、一部の有力者や、所謂上流階級と呼ばれる民達だけさ」

ドロス「テレビ中継はされるから、入場出来ない者はそつちで観覧することになる」
かな子「成る程……でもそれで、殿下の言葉が全員に届くんですか？」

ニオン「殿下が民に向けて言葉を発する、これは重要行事だ。王の言葉に限つては、スピーカーなどを通してマシーンランド全体に流される。聞き逃したとあつては、場合によつては重罪も免れない。聞き逃すものなど、居はしない」

かな子「…何と言うか、厳しいんですね」

ドロス「人間との和平も考え、このマシーンランド内でも、随分体制の改革は行われてはいるが、まだまだ古い慣習は抜けん。王政がそうであるように、お主達から見れば、少々異様な光景に見えるかもしれんが」

ゾル「話を戻すぞ。殿下からの言葉は全部で2度。1度目は観衆や民達に向けた挨拶だ。ここで、このマシーンランドが戦争状態に突入する事、その意味と意義について、

王から民へお話になられる」

美波「民の不満感情を高めないために、これからの戦いが正当なものであると、お話になられるんですね？」

ゾル「そうだ。そして2度目は、君達兵士に向けて、士気を高める檄をお掛けになる。が、2度目の王の言葉の前に、君達にはそうだな、所信表明のようなモノをしてもらう」

かな子「所信表明、ですか？」

ドロス「要するに、簡単な自己紹介だ。ここにいる者は、地上の人間をまともに見たことなど無いのだからな」

ゾル「自分達が穩健派の協力者なのだ、簡単にアピールしてくればいい。そう気負う必要はないさ」

かな子「そ、そう言われても、多人数の前で挨拶するんですよね？私、そう言うのは慣れてないって言うか……」

美波「大丈夫だよ。ライヴする感じでやれば、何とかなるって」

かな子「そ、そうかなあ……」

ゾル「お前達にも挨拶はしてもらおうぞ。さつきから他人事みたいな顔をしているが……」

バイス「……」

ガンリユー「……」

ゴズロ「……」

ゾル「何せ、我らが穩健派の、最新鋭機のパイロットだからな。しつかりやれよ？」
バイス「…心得てますよ」

莉嘉「……」

ドロス「どうかしたかい、莉嘉ちゃん？さつきから難しい顔してるが…」

莉嘉「何かさく、詰まんなくない？」

ドロス「はあ…？」

ゾル「詰まん、ない…？」

莉嘉「だってさく？聞いてれば、王様の言葉とか士気を高める、理解してもらおうとか、そんなんばっかりでさ。折角の式典なんだし、もっとパーっと、パレードみたいに派手な感じでやってもいいと思うんだけどなあ」

ゾル「派手な感じ…」

ニオン「フツ、貴様らしいことを言う」

美波「ダメよ、莉嘉ちゃん。マシーナランドが戦闘状態に入るのは、真剣なことなんだから。それを茶化すような真似をしちゃ…」

莉嘉「えく！でも…」

ゾル「そうだな。それに、申し訳ないが、我々には君の言う感覚はよく分からない」
莉嘉「へ？」

ドロス「うむ。結局のところ、我々はハ虫人類。戦うことに特化してきた一族だ。それは、かつて恐竜帝国と刃を交わしたことがある、君達にも分かるだろう？」

美波「……」

ドロス「メカザウルス、そして要塞マシンランド……。戦うための技術に特化してきた分、それ以外のモノについては疎いのだ。だから、莉嘉ちゃんの言う派手、と言う概念についてもミサイルや弾丸を盛大に撃ち合うことしか想像が着かん」

ニオン「……」

ゾル「地上にいた君達には、我々の式典は地味に見えるかもしれない。けど、我々にすれば、これでも十分に華やかなんだ。意図を汲みきれず、すまないと思うが……」

莉嘉「……」

—— 打ち合わせ終了後、アークチームの部屋。

莉嘉「むうくくくつ……！」

かな子「莉嘉ちゃん、機嫌直して」

莉嘉「だつて……！」

美波「郷に入っては郷に従え、だよ。ここの人達も、ご馳走で歓迎してくれたじゃない」

「い」

莉嘉「ご馳走って……あの深海魚料理？」

美波「住む空間も手に入れられるものも限られてる、この人にとっては、充分ご馳走だよ」

莉嘉「…美波、一番がつついて食べてたもんね」

美波「が、がつついてなんて……ただ、深海魚は貴重で、市場でも出回ることがほとんどないから、ちよつと興奮しちゃっただけで…！」

莉嘉「でもさ、アタシ達、このままでいいのかな？」

美波「え？」

莉嘉「マシーナランドで、穏健派の人達のお世話になって、戦うだけで、ホントにそれでもいいのかな？」

かな子「それは…」

莉嘉「恐竜帝国の人達は戦うことしか知らないって言ってたけど、アタシ達はもつとたくさんのお事を、教えて上げられるかもしれないでしょ？」

莉嘉「ここに来て戦うだけじゃ、結局穏健派の人達にも、人間は自分達と同じように、戦うことしか知らない種族だって、思われちゃうかもしれないよ」

莉嘉「ちゃんと、戦う以外に、楽しいことは一杯ありますって、本当に人間と和平が

結べたら、こんなことが出来るようになりますって、教えてもいいんじゃないかな？異種族交流ってそう言うことじゃない!？」

美波「…莉嘉ちゃん。もしかして、ライブ、するつもり？」

莉嘉「ライブ…! いいじゃんそれ! ライヴしようよ! 新曲とかは無理でも、持ち歌なら2人も出来るでしょ?」

かな子「けど、やるっていつても音源は? 音響設備もそうだし、今から振り付けの確認なんかして、間に合うかどうか…」

莉嘉「う〜う〜ん…」

美波「そうね。分からないことは、分かる人に聞けばいいんじゃない?」

かな子「美波さん!」

美波「私も、莉嘉ちゃんの意見に賛成かな。私達は、お互いの事を理解してない。だったら、私達の事をちよつとでも分かってももらえるように、出来る努力はすべきだっと思うの」

かな子「美波さんの言うとおりかもしれないけど…」

莉嘉「それで美波、分かる人ってPくんのことだよな?」けど、マシーンランドじゃ、スマホも電波届かないよ?」

美波「ふふつ、ここで一番、そう言うのが詳しい人に、助けてもらいましょ?」

莉嘉・かな子「詳しい人？」

「ハ」 ハン博士の部屋 「ハ」

ハン「何？外と連絡が取りたいじゃと？」

莉嘉「そう！ハン博士の部屋って、私室なのに研究所みたい色々設備があるでしょ？
それで何とか出来ない？」

ハン「ふくむ……。出来んこともないがの、個人の設備なぞたかが知れとる。誰とでも
簡単に連絡が取れると言うわけではないぞ」

莉嘉「そつか。それじゃあ、Pくんに連絡するのは……」

ハン「ぴーくんと言うのが誰かは分からんが、人間の個人連絡用の端末、それにアク
セスするためのネットワークに接続するのは、容易ではないわい」

莉嘉「むう……」

美波「それじゃあ、一旦早乙女研究所を經由して、晶葉ちゃんに仲介を頼んでもらっ
たら？」

かな子「あ、確かに。メカザウルス・ゲドやゲッターザウルスは早乙女研究所の技術
協力を得て作った、って言っていましたね」

ハン「うむ。早乙女研究所となら、何時でも連絡可能じゃ」

莉嘉「よし、じゃあそれで決まり！早く研究所に連絡とって！ほくら、大使様の命令

だぞ、はくやくくく！」

ハン「お、おうおう、分かった分かった！分かったからそうせつつくでない…。今接
続しとるところじゃ——」

数分後——。

晶葉『——成る程な。仔細は理解した。が、思いの外面白いことを考えるな、お前達
も』

莉嘉「面白いとか、そんな風に考えてた訳じゃないよ。本当のアタシ達を、この人
にも見てもらいたいって！」

晶葉『本当の莉嘉達、か』

かな子「これからの戦いに向けての決意とか、所信表明とかそう言うのって、慣れて
なくて気の利いたことは言えないと思うんです。だけど、ライブって言う形だったら、
自分を表現出来るかなって」

美波「何て言うか、場違いになるかもしれないけど、私達の文化の少しだけでも、こ
この人達に知ってもらうのは、悪いことじゃない筈だよ」

晶葉『確かなな。助手には私から連絡しておく。この映像通信で、私のスマホ越しに
会話するより、直接顔を会わせて話し合った方がよりスムーズだろう』

美波「お願いできる？」

晶葉『ああ。助手には研究所に来てもらえるよう説得するさ。人類とハ虫人類の友好が掛かっているかもしれないんだ。しっかり、成し遂げてなくてはな』

莉嘉「うんっ！」

晶葉『私のところでも、分かる機材などはリストアップしておく。莉嘉達は衣装の調達なども考えてみてくれ』

莉嘉「衣装？」

かな子「あ……パイロットスーツでライブをするのは、華に欠けますね」

莉嘉「じゃあ、マシーンランドで仕立て屋を探さなくっちゃ！時間も無いけど、協力してくれるかなあ」

晶葉『夜にまた連絡しよう。莉嘉達はマシーンランドで出来ることを頼む』

莉嘉「了解☆それじゃ、また数時間後」

晶葉『ああ、では——』プツンッ

莉嘉「よしっ、やるぞお☆」

かな子「けど、衣装を手に入れたとして、着替えはどうします？式典に参加してる間は、そんな時間ありませんよ？」

莉嘉「それなら、アタシに良い考えがあるよ！」

かな子「良い考え、ですか？」

ハン「ちよ、ちよっと待っててくれい！」

莉嘉「うん？どうかしたの、ハン博士」

美波「あ、通信機を貸して下さって、有り難う御座います！」

莉嘉「またしばらく借りることになると思うから、よろしくね☆」

ハン「むう？お、おう……ではなく！」

莉嘉「？」

ハン「今の話し、出陣式でらいぶとやらをすると言うことじゃが、それは式の予定に入っておるのか？」

莉嘉「うんっ！これがアタシ達の所信表明だつて！」

ハン「所信表明、じゃと……？」

莉嘉「ハン博士にも色々手伝ってもらうから、よろしくね」

ハン「何い?!」

美波「ライブで使う音響設備とか必要な機器は、ここじゃ多分、手に入らないと思うんです。舞台装置なんかも。ですから、機材の製作の方をハン博士に手伝って頂ければ……」

ハン「わ、ワシにはゲッターザウルスの調整と言う仕事があるのじゃぞ？」

莉嘉「あつ、そうだ！殿下の演説で使うつて言つてたスピーカーライブに応用できな

いかな？」

かな子「それが出来れば、このマシンランド全体にいる人達に、私達の歌を聴かせることが出来ますね！」

ハン「待て待て待て待て待てっ!!殿下が使用なさるものは、出陣式のために、特別に用意されたものじゃぞ?!それを勝手に使うとなれば、最悪、罪に問われる可能性も……!」

莉嘉「下手をすればってことは、やってみなくちゃ分からないってことだよな?」

ハン「屁理屈を言うでない!」

かな子「……お願い、出来ませんか?」

ハン「そ、それもワシがやるのか……?」

莉嘉「ハン博士なら、ゲッターザウルス開発の功績で、罪問われてもキャラでしょ?」

ハン「むう!」

美波「私達も、決して遊び半分で言ってるんじゃないんです。今日の式典の打ち合わせで、恐竜帝国の人達が、戦い以外の嗜好をあまり知らないって聞いて、私達の知っていること、少しでも知ってもらえたらなって」

ハン「ぬ……!」

かな子「ハン博士には、危ない橋を渡らせちゃうかもしれません。けど、人間と八虫人の未来のために、協力してくれませんか?」

ハン「せ、せめて王や、式の運営に携わる者達に、許可を取ってからでは如何のか？」
莉嘉「もうのんびりやってる時間はないんだよ！アタシの思い付きで、ギリギリになっちゃったのは、ごめんさい…。だけど、ハン博士達が式を無事に成功させたいって思ってるように、アタシも最高の式を作りたいの！」

ハン「最高の、式…？」

莉嘉「マシーンランドに住む人達に、ちゃんと分かってもらいたいんだ！城ヶ崎莉嘉って人間の事を。誤解のない、ちゃんとした形で。次いでに、アタシ達の歌も気に入ってもらえてくれたら、もつといい☆」

ハン「…気に入るかどうかは、この反応しだいじゃろ？」

莉嘉「だからいいんじゃないから逃げる、くらいなら、上手く行くって信じて試してみてもいいでしょ？」

ハン「むう…つ。はあ…」

ハン「今回ばかり、じゃぞ」

莉嘉「…っ！ホント…！」

ハン「ああ、ワシの負けじゃよ」

莉嘉「つゝゝゝいやったあああ!!」

美波「よろしくお願いします！」

かな子「よろしくお願いします!!」

ハン「出来る限りは、手を貸してやるわい。それと、さつき言っておった仕立て屋、そつちの方も、こちらで手配しておこう」

莉嘉「ホントに!?!」

ハン「ああ。お主らがマシーンランドを駆け回って探すよりも手つ取り早かろう。この事には、ワシもそれなりに詳しいからのう」

莉嘉「へっへっ! スンゴイ、頼りになるじゃん、ありがと☆」

ハン「ふふふっ、莉嘉ちゃんに感心されるのは初めてじゃのう。よもや、この程度の事とは、思わなんだが」

莉嘉「だったら、アタシ達は、持ち歌の振り付けの確認と練習!」

美波「残された期間で、バツチリ仕上げなくちゃね」

かな子「だったら、私達の練習風景を撮影して、プロデューサーさん経由で、トレーナーさんに確認してもらうって言うのは、どうでしょう?」

莉嘉「いいじゃん! それなら、私達の目線だけじゃなくて、しっかり指導もしてもらえそうだし! うっつ、何だか俄然、やる気が出てきた!」

ハン「何かは分からぬが……そのらいぶとやら、お主達がそれほど、情熱を注げるものらしいの」

莉嘉「トーゼン！そうと決まれば、ライブに向けて気合い、入れるよ！オー☆」
 美波・かな子「オーツ!!」

こうして、マシーンランドを奔走する日々が始まった――。

朝早く起きて、プロデューサーとライブの方法を確認。必要な機材をメモ、内部構造など設計図として晶葉から送ってもらい、それをハン博士に手渡した。

午前から午後にはパイロットとして訓練。ザウルスチームの訓練に参加し、廉どの向上に努める。急進派からの襲撃がある時は、その迎撃に当たる日も少なくはない。

夕食を摂った後の夜以降はライブに向けたレッスン。振り付けの確認から、一連の流れを通して行う。そしてレッスンはライブ用のセットリストの作成。自身のソロ曲だけでなく、一部ユニット曲なども、今回独自の編成で行うことも決定した。

朝の内に早乙女研究所に訪れてくれたプロデューサーとのやり取りは、日を追う毎に減っていったが、次は式典会場の改修作業へと変わり、タイトなスケジュールが変わることはなかった。

そして、3人のダンスレッスンは、毎夜、夜通し続いていた――。

♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~

莉嘉「はっ、はっ、はっ――！」

美波「莉嘉ちゃん、ちよつとテンポが速くなってる！もつと曲に合わせて、歌を体で表現するように、つてトレーナーさんに言われた通り！」

莉嘉「——うんっ！」 タツ タツ

かな子「良くなつてますよ！頑張つて下さい、莉嘉ちゃん！」

♪~~~~♪~~~~♪~~~~

バイス「……」

ゴズロ「何を見ている。バイス」

バイス「…ゴズロか。ガンリユーも」

ガンリユー「とつくに就寝時間は過ぎてるぞ。…まさかお前に、花を愛でる趣味が

あつたとはな」

バイス「そうじゃない」

ゴズロ「だつたら、何だ？」

バイス「……」

ガンリユー「しかし、連中は何をしてるんだ？聞きなれない音楽に、手足をヒラヒラ動かして…。全く訳が分からん」

ゴズロ「だが、彼女達の目、あれは戦士の目だ」

ガンリユー「…確かに、真剣そのものと言うのは、気配で伝わってくる」

莉嘉「——！」 タツ タツ タツ

ガンリユー「……しかし、アークチームは今日も……」

ゴズロ「ああ。急進派の襲撃に、迎撃に出ていた筈だ」

ガンリユー「……。恐竜帝国同士の戦いだからと手を抜いているのか、我々の想像以上に体力が無尽蔵なのか。どちらにせよ、大したバイタリティだ」

バイス「……あの小娘は」

ガンリユー「バイス？」

バイス「危険だ——」

莉嘉「はっ、はっ、はっ、はっ——！」

そして、出陣式当日を迎える——。

くくく 入場口前 通路 くくく

かな子「はあ……！何だか緊張してきちゃった……！」

美波「大丈夫よ、落ち着いて」

かな子「ほ、ホントに上手く行くんでしょうか？その前に、私達の歌、ハ虫人の人達に気に入ってもらえなかったら……！」

莉嘉「そんなの今気にしたって仕方ないよ。やれるだけのことはやったんだ、後はそれをぶつけるだけ！」

かな子「このいしよ……じゃなくて、スイーツの仕掛けも、上手く作動するかどうか……」
美波「テストは上手く行ったんだし、きつと大丈夫だよ」

莉嘉「かな子が前の日にスイーツ爆食いして、お腹が出っ張ってなきやね〜」
かな子「莉嘉ちゃん！」

莉嘉「あつはは☆」

ニオン「随分と、余裕だな」

かな子「だから、私は余裕ないんですってば！」

鉄甲鬼「それほど普段通りに出来るのだ。気後れすることもあるまい」

かな子「うう〜……」

芳乃「万事ー、塞翁が馬、と申しましてー。皆様の思い切りを存分に出せばー、事態は良き方向へとー、自然に流れて行くでしょー」

『それでは、入場して頂きましょう！我々が誇る、勇ましき戦士達に!!』

莉嘉「来た……っ！」

ギィ、と軋む音を立てて、目の前の重厚な扉が開く。

バイス「……」

ガンリユー「……」

ゴズロ「……」

オオオオ……ッ

莉嘉「ん……？」

ハ虫人「……」

ハ虫人「……」

ハ虫人「……」

かな子「な、何だか……空気が重い、ですね」

美波「……ここは、穏健派のマシーランドだもの。戦うための戦士、歓迎されるわけは……」

ニオン「……ふんっ」

司会『……各々、壮々たる面持ちで戦いに臨みます。皆様、拍手を』

パチパチパチパチ……

莉嘉「はは……っ、歓迎されてないなあ」
……。

莉嘉「……」

美波「……」

かな子「……」

バイス「……」

ガンリユー「……」

ゴズロ「……」

ニオン「……」

鉄甲鬼「……」

芳乃「……」

司会『それでは、マシーンランドの皆様には、カムイ殿下からお言葉があります！』

ザワ……ッ　　ザワ……ッ

莉嘉「……！」

美波（殿下の姿が……）

カムイ「……」

………。

カムイ「皆の者、此度はよく集まってくれた。私のこの声を、会場の外で聞く者達にもだ」

カムイ「本当に、よく私の元に集まってくれた。戦いを忌み、嫌う……」
「穏健派」として。しかし今日、今宵、私は王として、ここに集ってくれた同志達に、残酷な話を告げなければならぬ」

カムイ「それは、我々穏健派の者達が、急進派の勢力に対して、攻勢を仕掛ける、と

言うものである！」

ザワザワザワ……

カムイ「このマシーンランドに住まう者達が、地上に暮らす人間達に対し、争いに頼らず平和的な手段での和解と、共生を望んでいることは重々に承知している」

カムイ「だが、我々ハ虫人と、種族の異なる人間達との和平……それを実現するには、幾多の困難をも、乗り越えなくてはならない。その事を先ずは理解していただきたい」

カムイ「急進派との戦いは、正しくその一つなのである」

カムイ「人間への劣等感と対抗意識を捨て、人間達と手を結ぼうと言う我ら穏健派に対し、急進派と呼ばれる者達は、遺恨を遺恨のままに出来ぬと、旧き怨讐に縛られたまま、地上から全ての人間を滅び去るまで戦い続けるつもりだ」

カムイ「しかし、それでは何も、解決しない。怨讐による戦いは、新たな怨讐を生む。今多くのハ虫人が人間達に向けているような怨念を、今度は我々が向けられる……そんな未来しかあり得ない」

カムイ「血で血を洗う争いは、新たな争いを生み続けるだけ……。それでは何も生まれぬ。我々は、本当の意味で変わらなければならぬ！」

カムイ「かつての恐竜帝国が撒いた種を、我々自らの手によって摘み取るのだ！ そうでなくては、ハ虫人に安息の時など、永劫に訪れはしないっ！」

カムイ「…無論、苦しい道となるだろう。同じハ虫人達と戦う事になる。皆の者には新たな哀しみや苦悩を強いる事になるだろう」

カムイ「だが、分かつてほしい！急進派との戦いは、互いに憎み合い、滅ぼし合う戦いでない。争うことで全てを勝ち取ろうとする急進派に、異なる手段であつても、平和を手にする方法はあると、それを伝える為の戦いであると！」

カムイ「戦いの無為無意義を、急進派に伝えるのだ。破壊によつて生まれるモノは無いと、例え祖先の異なる種族だろうと、手と手を取り合い共存する事は出来るのだと！」
カムイ「一度過去を清算し、ハ虫人同士がいがみ合うこと無く、手を取り合う為に。今一度、私に付いて来てはくれないだろうか？」

カムイ「我々ハ虫人類が、新たな未来を歩む為に。その歴史の礎となる為に——!!」

……

……

…ワ

ワアアアアアア——ツ

「信じてるぜ、殿下ツ!!」

「そうだ、俺達で終わらせてやるんだ！」

「お前達も頼むぜ！必ず、〃生きて〃帰ってきてくれよ才!!」

オオオオ——ッ

莉嘉「スゴ…ッ！ハ虫人の人達が…！」

かな子「あんなに重々しい雰囲気だったのに…。言葉で、納得させた…？」

美波「これが王の、言葉の力…」

莉嘉「でもそんなの、私達だって負けてないよ！」

司会『此度の戦乱に向かう戦士達からも、お言葉を頂戴したく思います』

莉嘉「！ 来た来た…！」

かな子「ホントに大丈夫かな…」

美波「ここまで来たら、覚悟を決めましょう」

司会『それでは、急進派との戦いの為、我々穏健派の元に駆け付けてくれた、戦士達の紹介です!!』

莉嘉（よし…！合図は、ここだ！）

バチッ バチッ バチッ

式場の明かりが、一斉に落とされる。

カムイ「…？？」

司会『これは、停電ですか？』

ザワザワザワ…ッ

莉嘉「へへっ、いい感じいい感じ☆盛り上げる前に、注目してもらわないとね！」

バイス「貴様……！この停電騒ぎは貴様の差し金か!?」

莉嘉「差し金なんて言い方やめてよ！ライヴの上でスポットが当たっていいのは、アイドルだけ、何だから☆」

バイス「アイドル、だと……?!」

鉄甲鬼「……フツ」

~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪

流れ出すメロデー。

莉嘉「来た……！美波、かな子っ！」

美波「うんっ！」

かな子「はいっ！」

合図に従い、2人が左右、両側から莉嘉が着込んだパイロットスーツに“見立てた”衣装が、軽い力で引き裂け、中からステージ衣装「キラデコ☆パレード」に身を包んだ莉嘉が姿を見せる。

莉嘉「ライヴステージでもたまにやる、早着替えの応用……！」

バイス「貴様、その格好……」

莉嘉「これがアタシの戦闘服……ううん。アタシが決めて、Pくんが選んでくれた！」



全身でアタシを表現する、アタシだけの衣装だ!!」 バッ

そのまま、スポットライトに照らし出された、ステージの上へと駆け出す。そして、  
シユパツ パラパララララ：

と、火花を散らして上がるのは、ステージから噴き上がる、火花のシャワーだ。

莉嘉「マシーンランドのみんな〜！ハ虫人類のみんな〜！！はじめまして☆アタシが莉嘉だよ〜！」

莉嘉「みんな、今日はアタシ達の出陣式に来てくれて有り難う〜そしてカムイ殿下も、アタシ達に声を掛けて下さって、有り難う御座います!!」

莉嘉「これは、アタシ達なりの、ほんのちよつとの挨拶の気持ちです！みんな楽しんでくれて、それで、アタシのファンになってくれたら、嬉しいな☆だから——！」

後ろで鳴り響いていた音楽が、より一層大きさを増す。

莉嘉「みんなのハートを動かして見せるから!!王よ、ハ虫人よ!アタシの歌を聴けえ〜☆」

莉嘉『——ずっとずっと言えないことが〜♪でもでもでもでも言えなくい☆(ドンマイツ!!)』

莉嘉『ねえ、お願いっ!とどけ、この胸のリズム♪(ハイッ! ハイッ!!)』

莉嘉『D O K I ☆ D O K I ☆のちに、ワケわかんない!この気持ち〜♪』

~~~~~♪ ~~~~~♪ ~~~~~♪

バイス「何だ、この音楽は……」

ガンリユー「まるで聴いたことがない……」

ゴズロ「だが、不思議だ。リズムが耳に届く度に、心が躍るようだ」

ドロス「この高鳴り……戦に勝った、勝鬨の時に似ている……」

美波「どうにか、最初は上手く行ったわね……」

かな子「はい。音響をお願いした兵士さん、リハーサル通りにやってくれと、いんですけど」

美波「そこはなるように祈るしかないよ。さ、私達も急がなきゃ、莉嘉ちゃんの曲も、そう時間がある訳じゃないよ」

かな子「はいっ！」

バイス「……！お前らまで……！」

「ノーブルヴィーナス」美波「……ええ。莉嘉ちゃんだけに歌わせるなんて、勿体無いもの」

「ドルチェ・クラシカ」かな子「私や美波さんだって、歌って踊る、アイドルなんです」

バイス「アイドル、これが……」

美波「ステージの上で、曲と歌に自分を乗せて、自身を表現する者。形作られた世界

で、多くの人々を魅了する者」

かな子「喜び、楽しい、幸福、みんなの嬉しいって言う気持ちを、もつと多くの人達に響き渡らせる、それが、アイドルです」 タツ

スポットライトの灯りに導かれるように、ステージへと駆け上がっていく2人。

バイス「アイ、ドル……」

ドロス「あれが、彼女達の本来の姿、と言う訳か」

莉嘉『——♪』

ドロス「ははっ……！ 険しい顔付きをしているより、らしいではないか！ がっはっはっはっ!!」

ゴズロ「この娘達が、本当に危険な存在だと思うか？ バイス」

バイス「……」

ガンリユー「ふふっ、流石のバイスも、文句が出てこないみたいだな、つと……ん？」
ガンリユー「鉄甲鬼やニオンさんは……？」

美波『Do you now venus? Be your venus ガラス
の檻から♪傷つき、抜け出す程の、恋を、させて——♪』

~~~~~♪

かな子『夢のティアラ♪見つけるから♪涙も跳ね返すような♪虹のシヨコラ♪集めな

がら♪これからも、歩いてく〜♪』

く〜♪

観衆「おお…」

観衆A「おおお…!」

観衆B「おおおつ!!」

オオオオオオオオ

観衆「スゴい…!何かは分かんが、だが不思議と、胸が熱くなるっ」

観衆A「これが人間の、歌…!」

観衆B「もつと、聴きたいっ!」

観衆C「もつと歌ってくれ!もつと、私達の知らない音楽を、もつと!!」

観衆D「こつちを向いてくれ〜!!お〜いっ!!」

観衆E「あ、ズルいぞ!俺もだ、俺も!!」

ワアアアアアアツツ

莉嘉『ははっ、会場もいい感じに盛り上がってきたみたい!』

美波『それじゃあ莉嘉ちゃん、かな子ちゃんっ。今度は3人一緒に!』

かな子『はいっ!』

3人『『『お願いシンデレラ!!』』』

キヤアアアアアツツ

カムイ「…ふつ、俺の次の言葉は、必要なさそうだな——」

出陣式会場で始まった、アイドル僅か3人によるライヴ。それは、王の言葉を流すために備えられたスピーカーを通して、マシーンランド全体を包み、そこに住む全てのハ虫人類の耳に、マシーンランドを震わせ、響き渡った。

多くのハ虫人が、聞き慣れぬメロディーに戸惑い、声に驚き、歌に酔いしれていった。

——。

ハ虫人「いい歌だったぞ〜!!次は何を聴かせてくれるんだ〜!」

???「……ちつ。簡単にほだされやがって。軟弱者共が!……だが」

憲兵「……」 ボーッ

???「任務を遂行するのは、今だな」

スタスタスタツ チャキツ

カムイ「……」

???「穏健派の王……いや、カムイ……!テメエの命は、この手で!」

カムイ「……っ!?!」

「——そ〜までだ」

ガシッ

??? 「な、っ…!？」

短剣を逆手に持ち、王に振り下ろされんとした腕を、鉄甲鬼が掴み上げる。

ニオン「生憎と、あいつらの歌は聞き慣れているんでな。今更聞き惚れる程ではない」

鉄甲鬼「皆の注目がライブに向けられている隙を突いたつもりかもしれないが、功を焦ったな」

ニオン「さあ、その面を見せろお!!」

腕を振り上げ、暗殺者が目深に被ったフードを払う。

ニオン「何…っ?!? 貴様…!」

??? 「……」

鉄甲鬼「人間…? いや、だが…」

カムイ「お前だったのか、ウロン」

ニオン「ウロン…?」

鉄甲鬼「お知り合い、なのですか…? 殿下」

ウロン「知り合い? はっ、そうだな。もつと言やあ、幼馴染みみてえなモンだ。同じ施設で生まれた、な」

鉄甲鬼「同じ施設…とすることは、まさか!？」

ニオン「人間と恐竜帝国の、混血児……」

ウロン「そう、元は同じ計画の元に生み出された者同士。だが片方は今や数万の八虫人をまとめる王さままで、片方はちやちな暗殺者。どうしてこれ程の差が突くのか、お前らには分かるか？」

ニオン「それは……！」

ウロン「分かるよなあ!? 今玉座に座るカムイ様は、恐竜帝国に万が一があつた場合の為に、ゴール帝王の遺伝子によつて作られた混血児！」

カムイ「……」

ウロン「そして俺は、人間と地竜一族の遺伝子を掛け合わせて作られた、忌むべき雑種だからだ！」

ニオン「何だと……!? 貴様が、地竜一族の……！」

ウロン「はあッ!!」

鉄甲鬼「やらせるか!!」

強行に出たウロンの前に立ちはだかり、王までの進路を塞ぐ。

ウロン「くっ……！」 ダッ

ニオン「逃がすか！」

鉄甲鬼「殿下、お怪我は？」

カムイ「大丈夫だ。それより…」

鉄甲鬼「はっ」

カムイ「ウロンを、頼む」

鉄甲鬼「…お任せを」

ニオン「急ぐぞ、鉄甲鬼！」

鉄甲鬼「応!!」

タツタツタツ——。

ニオン「奴め…! 格納庫へ向かっているのか!」

鉄甲鬼「格納庫の機体を奪って逃げるつもりか。させんツ!」

くくく 格納庫 くくく

ニオン「侵入者は!」

ハ虫兵「に、ニオン様…!」

ニオン「…酷い有り様だな」

ハ虫兵「申し訳ありません。兵を3人、やられてました」

ハ虫兵2「ぐっ…!」

鉄甲鬼「…傷は浅いな。恐らく、持っていた剣に、毒が塗られていたのだろう。早く

負傷者を医務室へ」



ハ虫兵「はっ！」

ニオン「侵入者が向かった方向は、分かるか？」

ハ虫兵「はっ、第3格納庫の方へ」

鉄甲鬼「第3格納庫だと？あそこには、確か……」

ハ虫兵「はっ、ゲッターザウルス計画で開発された、プロトゲッターザウルスが保管されている筈です」

鉄甲鬼「……任務が失敗した時の逃走手段も、念頭に入れていた、と言うところか」

ニオン「ダイノゲッターの所に急ぐぞ」

鉄甲鬼「最早、盗まれるのは避けられん、か」

ニオン「ならば、マシーンランドの外で迎え撃つ！」

2人はダイノゲッターロボのハンガーへ。すると、

鉄甲鬼「!？」

芳乃「……待ちくたびれたのでしてー。深海エビ煎餅がー、無くなっちゃいまーいー」

鉄甲鬼「芳乃、何故……？」

芳乃「悪しき兆しの流れを辿ればこそー」

鉄甲鬼「……お前は、ライヴに参加しなくてもいいのか？」

芳乃「らいぶは莉嘉さん達が盛り上げてくれるでしょー。らいぶの熱を無駄に覚ませ

てしまわぬ事もー、芳乃の務めでしてー」

鉄甲鬼「…分かった」

ニオン「準備は出来たか？時間が惜しい、出撃するぞ」

鉄甲鬼「こっちは大丈夫だ」

芳乃「何時でもー」

ニオン「ダイノゲッターロボ、出撃する!!」

ハンガーへの注水を待たず、ダイノゲッター1自ら海面に飛び込み、そのままマシンランド外の深海へ。

ニオン「奴は何処だ!?!」

鉄甲鬼「真下だ。今、浮上してくる」

ニオン「来たか!」

深海の暗黒から姿を見せるのは、ゲッターザウルスに酷似した1体のマシン。

ウロン「…このマシンも、俺も同じだな。生まれた時からメカザウルスではなく、ゲッターにも非ず!」

ニオン「ふん…。さながら悲劇のヒーローと言ったところか」

ウロン「キャプテン・ニオン…!地竜一族の貴様には、何故俺のような存在が生まれ  
たか分かるか」

ニオン「興味もない」

ウロン「へっ、そうかよ！」　グワッ

ニオン「っ！」

プロトゲッターザウルスの拳を、軽く躲す。

ウロン「高く止まったつもりか！癩に障る…！」

続け様に放たれる蹴りも、往なしていく。

ウロン「俺は、恐竜帝国の実験で生み出された…！ハ虫人類が、どの程度ゲッター線

に対する抗体を持つことが出来るのか、ただその為に！」

ニオン「興味はないと、言ったあ!!」

ウロン「くっ…！」

執拗に纏わり付くプロトゲッターザウルスを、払い除ける。

ウロン「ぐう…！俺と、俺と戦え！キャプテン・ニオン!!」

ニオン「…！」

ウロン「俺の命は、生まれた瞬間に役目を終えた。俺が、生き続ける為には、俺の能力を恐竜帝国に捧げるしかない！」

鉄甲鬼「その為に、急進派に力を貸すと言うのか!？」

ウロン「貴様には分かるまい！蔑まれる存在でしかない俺には、戦士として戦うこと

でしか、存在価値は生まれないうつ！」

鉄甲鬼「我々と共に来ることも出来ただろう。何故そこまで、急進派に肩入れする!？」

ウロン「舐めるな！」

ニオン「ぐっ……！」

不意を突いた体当たりで、ダイノゲッター1が怯む。

ウロン「俺は、誇り高き恐竜帝国の戦士だ！分かるか!?この牙も爪もなく、鱗すら持たない、このサル共と変わりない醜い姿！」

ウロン「俺は、俺自身の血筋が憎い……俺の体に流れるサルの血を、全身を掻き筆つても掻き出したくなる、俺の惨めさが!!」

ニオン「……誇りは、お前の心を埋めたりはしないぞ」

鉄甲鬼「もう少し莉嘉達の歌に耳を傾けてみる！人間の持つ文化の尊さが分かる筈だ！」

ウロン「姦しいだけの歌など聴いていられるか！俺は戦士として、恐竜帝国の礎となるのだ!!だからこそ……！」

ガンツ ガンツ ガンツ

プロトゲッターザウルスの攻勢に、ダイノゲッター1が追い詰められる。

ニオン「っ……！」

ウロン「俺と戦えッ！キャプテン・ニオン!!」

ニオン「くくくッ!!」

上へと上昇して、追撃を逃れる。

ウロン「カムの暗殺には失敗した……今更こんな試作機を持ち帰ったところで、その穴埋めにもなりはしない!」

鉄甲鬼「だから、俺達の首級を手土産として持ち帰ると?」

ウロン「穩健派のゲッターを倒したとなれば、俺の戦績にも箔が付く!」

上へと退避したダイノゲッターを追う。

ウロン「ザウルストマホークツ!!」

両手に片刃のトマホークを担い、頭上高く掲げる。

ニオン「ふん……」

大上段から振り下ろされたトマホークを、躲す。

ニオン「…憐れだな、貴様は」

ウロン「何!?!」

ニオン「己を嫌い、全てを憎み……あらゆる可能性に触れることを拒んで、只妄信的に恐竜帝国の誇りに縋るか」

ウロン「何が悪い!? 誇りと、勝利の栄光だけが、俺を満足させてくれるんだくっ!」

ニオン「っ!!」

ウロン「な、にい…?!」

プロトゲッターザウルスのトマホークを、白刃取りで受け止める。

ウロン「くっ…!!このっ、は、離せえ〜!」

鉄甲鬼「恐竜帝国が、貴様に何をした?」

ウロン「…!?」

鉄甲鬼「お前を生んだのも、お前を惨めにしたのも、お前自身じゃない。お前を蔑んだのは、お前が仕える純血のハ虫人達じゃないのか?」

ウロン「だ、黙れ…!!」

鉄甲鬼「ハ虫人の中で育った…。可能性は狭められただろう。だが、人間の血を分けて生まれたお前には、人間に寄り添って生きる道もあつたのではないのか?」

ウロン「黙れえツ!!」

受け止められたトマホークに力を込め、強引に押し切る。

ウロン「俺は戦士だ!俺は戦士として、恐竜帝国を作るんだあ〜!!」

ニオン「…つくづく、憐れだな」

芳乃「馬の耳に念仏、かような言葉も御座いましてー」

鉄甲鬼「幾ら訴えても無駄、と言うことか。全ては遅すぎたのだな」

ウロン「死ねええええくッ!!」

ニオン「っ!ゲッタートマホークッ!!」 ジャキッ

ウロン「……あ?」

素早く抜き放ったトマホークが、プロトゲッターザウルスのトマホークを払い、弾き飛ばす。

ニオン「ふんっ!」

がら空きになったプロトゲッターザウルスの鳩尾に突き。

ニオン「はあッ!!」

上体を折り曲げ、怯んだプロトゲッターザウルスの頭部を切断。

ニオン「はっ!」

背中のウイング、左肩、両足を斬り断ち、

ニオン「でえいやあッ!!」

腰部めがけ上段からトマホークを打ち、プロトゲッターザウルスをかち割った。

ウロン「…あ……え、ああ……?」

バラバラに裂かれたプロトゲッターザウルスは、深海の高水圧に抗う術を無くし、ひしゃげ、潰れていく。

「」

爆発することもなく、プロトゲッターザウルスだったモノは只の金属片として、海の藻屑となり散っていった。

ニオン「……………」

カムイ「……………そうか。ウロンを助けることは、出来なかつたか」

鉄甲鬼「既に、骨の髄まで恐竜帝国の思想に染まっています。己の命を賭して、己の使命に殉じようとする程に」

カムイ「……………そうか。出陣式の中での出撃、大義であつた。今は身を休めてくれ」

鉄甲鬼「……………」

莉嘉「あ、ニオン、鉄甲鬼！こんなところにいたあ!!」

ニオン「……………莉嘉、美波達も一緒か」

莉嘉「今まで何処に言つてたの？出陣式終わつちやつたよ？」

鉄甲鬼「それは……………」

カムイ「式の最中に急進派の不穏な動きを察知してな。申し訳ないが、彼らを出撃させて対応にあつた」

鉄甲鬼「……………」

かな子「そうなんですか？」



美波「それで、急進派の動きは……」

芳乃「只の偵察だったようでした。わたくし達が向かった時には、既に退いた後でしてー」

かな子「けど、不安ですね。このまま大攻勢があったり……」

カムイ「心配はいらない。それよりも、今日の式典の事だが……」

かな子「うっ……」

美波「……」

莉嘉「えくつと……」

カムイ「素晴らしい贈り物だった。感謝する」

莉嘉「え？」

カムイ「民達が沸き立ち、あのように色めき立つ姿など、はじめて見た。私も王としてはまだまだ未熟だと、痛感させられた」

美波「そんな……！私達は……」

カムイ「此度の式で、マシーランド内の者達の気持ちは1つとなつたろう。明日からは攻勢に臨む。君達も体を休めてくれ」

莉嘉「……っ！うんっ、ありがと、カムイ殿下☆」

美波「有り難う御座います」

かな子「ありがとうございますっ！」

莉嘉「それじゃあニオン、鉄甲鬼、芳乃！また明日ね」

ニオン「…ああ」

鉄甲鬼「夜更かしなどするなよ」

芳乃「ではではー」

スタスタスタ——

鉄甲鬼「…良かったのですか？殿下」

カムイ「当然だ。彼女達もまた、我らの事を考えればこそその行動。裏で起きていたゴタゴタなど、知らなくても良い」

鉄甲鬼「お心遣い、痛み入ります」

ニオン「……」

鉄甲鬼「ニオン？」

ニオン「先に休ませてもらう。後は任せたぞ」

鉄甲鬼「何？おい、勝手に……！」

芳乃「別に良いかとー。ニオンさんもー、今日は色々と、ありましたからー」

鉄甲鬼「…そうだな」

—— ダイノチーム、私室

ニオン「……」

ニオン「……ふう」

ニオン（ウロンと言ったか……。混血とは言え、俺は……）

ニオン「凜——」

『——強く、そう強く。あの場所へ、走りだそう——♪』

つつく

## 第10話『蠢く蜥蜴』

~~~~~ 交易マシーンランド内 花園 ~~~~~

コモド「——此度は、謁見の機会を頂き、有り難う御座います。ナーガ様」

ナーガ「……」

コモド「ナーガ様にあらせられましたは、変わらぬ健勝のようで。本日も見目麗しく……」

ナーガ「……世辞は良いのです。大切な話と、伺いましたが？」

コモド「……はっ。この交易マシーンランドに、反体制派勢力の大部隊が迫っています。故に、我らが本隊の駐留を許して頂きたく、参じた次第で御座います」

ナーガ「……」。まだ幼い次期王ゴール3世、その擁立を快く思わない反体制派勢力の征伐……。貴殿方の部隊の一部が、この交易マシーンランドに駐留を続けている理由は、そうでしたかね？」

コモド「仰られる通りです。しかし、反体制派勢力も日増しに戦力を肥大化させているのです。この交易マシーンランドが、反体制派によつて墜ちると言うことにもなれば、先代の統治者でもありました、ナーガ様の母君も、さぞ悲しまれることでしょう」

ナーガ「母は、このマシーンランドを争い事とは無縁の、平和であらゆるハ虫人達が種族や階級の垣根を越えて、交流を行うことの出来る美しい場所にしようと尽力していました。私は、そんな母上の理想を尊敬し、母上亡き後もその夢の為に、今日までマシーンランドを統治してきたつもりです」

コモド「ナーガ様の心の清らかさは重々、承知しています。ナーガ様自らが手塩に掛けられましたこの花園も、その御心の美しさがあつてこそ」

コモド「しかし、世俗には御心の美しさを偽善と吐き捨てる者達があります。咲き誇る花々を、いとも容易く踏みにしれる輩がいるのです」

ナーガ「……」

コモド「この交易マシーンランドは、決して反体制派の手に墜ちてはならぬもので。ですから、私は……」

ナーガ「反体制派……。本当にそのような輩がいるとすれば、恐竜帝国全体の安寧にとつても、由々しき事」

コモド「そうです……！ですから、ナーガ様……！」

ナーガ「ですが、貴殿方の言う反体制派が、本当の所、穏健派であつたなら？」

コモド「……！」

ナーガ「何時までも籠の中の鳥ではありませんよ。母の名を騙り、上手く言い含める

つもりだったのでしょうか」

コモド「言い含めるなど……！我らにやましいことなど、何も！」

ナーガ「では何故、穩健派と呼ばれる勢力が、手に槍を持ち、今正にここに迫ろうとしているのでしょうか？」

コモド「ですから！奴等は今の王制に反旗を翻す、テロリストだからで……」

ナーガ「穩健派の者達がテロリストであるとすれば、貴殿方はどうなのでしょう？王の名の元に、従わぬ者を力で押さえ付けようとする貴殿方は。圧政者ですか、虐殺者ですか？」

コモド「……っ！」

ナーガ「私も、信用出来る者を通じての、話でしか知らぬ事。今ここに向かっている勢力が、貴方の仰るような反体制派か、平和的な解決を模索している筈の穩健派か。それは、私自らが話してみれば分かることです」

コモド「それは……いき、危険ですつ……御身にもしもの事があれば……！」

ナーガ「何故？私の身に何かあった方が、貴殿方にとっては都合が良いのではなくて？」

コモド「……」

ナーガ「反体制派の勢力に討たれるのであれば、それは私の世俗への疎さが招いたこ

と。貴方はグールに事の顛末を報告し、交易マシーンランド奪回の為に部隊を率いれば、結果的な兵の損耗は変わらないでしょう?」

コモド「ですが…」

ナーガ「まだ、何か?」

コモド「ナーガ様が話された上で、連中が穩健派であるとすれば…?」

ナーガ「…このマシーンランドを、彼らに明け渡したいと考えます」

コモド「は…?今、何と?」

ナーガ「当然の帰結です。今日まで貴殿方の高慢さに気付けなかった、自らの手を汚さず、世間の広さを理解しようとしなかった私には、統治者の資格はありません」

コモド「であれば我々が!グール様がいるではありませんか!」

ナーガ「言葉巧みに、息を吐くように偽りを並べられる者達を、信用することは出来ません」

コモド「ぐ、ぐう…っ」

ナーガ「話しは終わりです。直ぐに駐留している兵を連れて出ていきなさい」

コモド「小娘がア…!」

ナーガ「!?!」

ナーガの身を後ろ手に羽交い締めにして拘束し、後頭部に拳銃を突き付ける。

コモド「愛でられるだけの飾りであれば、良かったものを……！」
ナーガ「本性を顕しましたね……！」

コモド「何、可笑しな事さえしなければ、手荒なことなどしやしませんよ。潔癖性の世間知らずと言つても、貴女はグール様のお気に入りなんでね……」

ナーガ「くっ……！誰か……！」

「……にはもう、誰も来ませんよ」

ナーガ「っ……！ドラゴ！助けっ……」

ドラゴ「……」

ナーガ「ドラゴ？」

ドラゴ「残念です、姉さん。まさか姉さんが、王への反逆を、企てていようとは」

ナーガ「!?ドラゴ、貴方……何を言っているの!？」

コモド「はっはっはっはっはっ！弟の方が、よっぽど聡いぞ？恐竜帝国の栄光を取り戻すためには、誰に仕えるべきか、分かっている」

ナーガ「コモド……！ドラゴに一体何を……！」

ドラゴ「俺は何も、可笑しな事など吹き込まれてはいないよ、姉さん」

ナーガ「それじゃあ、どうして……？」

ドラゴ「俺も考えたんだ。姉さんがグール様の元を離反する者達を乗せた潜水艇に、

自らの息が掛かった間者を忍び込ませ、穩健派共の実態を知り、此度行動を起こそうとしたように」

ナーガ「グールのやり方が正しいと？彼のやり方は、ただの恐怖政治よ?!」

ドラゴ「それでも、今帝国を動かしているのは、摂政であるグール様。そのやり方に異を唱える姉さんは、国家反逆者と言われても仕方がない」

ナーガ「争いは何も生まないわ！このままでは、同じハ虫人類同士が、互いに滅ぼし合うまで戦うことになってしまふ…！それが分からないの!?!ドラゴ!」

ドラゴ「言葉だけで、話し合いで全てを解決しようと言うのは理想論だよ、姉さん。血を流すこと無くもたらされた平和に、価値など生まれはしない」

ナーガ「今を生きる私達が、そうやって諦めてしまったらダメなの！争わず、奪わず、傷付けず！あらゆる命を尊重し合って生きる道を模索もしないのが、間違っているのよ!」

コモド「ご高説は結構。だが結局、サル共に媚びへつらう未来を、我々は認めるわけには行かないのでね」

ナーガ「きやあ!」

ナーガをドラゴに投げ付ける。

コモド「連れていけ」

ドラゴ「はっ！」

ナーガ「コモド……！人間への劣等感に支配されている貴方達では、決して恐竜帝国を支配することなど、出来はしません！破滅は破滅を生むのです……必ず……！」

ドラゴ「……残念だよ、姉さん。本当に」

ナーガ「ドラゴ……！母さん……うう……っ——」

~~~~~ メカザウルス・グダ 艦内 ~~~~~

莉嘉「……」

美波「莉嘉ちゃん、どうしたの？小窓なんか覗いて……」

莉嘉「あ、美波！ねーねー、あの外に見えるのって、何か分かる？」

美波「え？……クラゲの一種に見えるけど……見たことないわね」

莉嘉「もしかして、新種!？」

美波「どうだろう？深海は、まだまだ人類の調査が、ほとんど及んでない所だから……」

莉嘉「……そっかあ。けど、何か不思議だね。戦艦型メカザウルスの中から、深海の景色を眺めてるなんて」

美波「そうね……。メカザウルス・グダなんて、前のランドウとの戦いでも、たくさん撃墜した気がするわ」

莉嘉「それに今乗ってるんだよね?……」

美波「どうかした?」

莉嘉「…これから、戦争しに行くんだ」

美波「莉嘉ちゃん…」

莉嘉「勘違いしないで?アタシ、やるからにはやるよ!ハ虫人類が相手になろうと、鬼が出てこようと、戦いの火種になるんなら、纏めてやっつけるだけだもんね!」

美波「鬼…。そう言えば、前に研究所と通信したこともあったけど、現れていた鬼獣はどうなったのかな…?」

莉嘉「アタシ達に何も言っただけでこないってことは、ゲッター飛焰だけで何とかなってるんじゃない?」

美波「…だと良いけど」

ガンリユー「…おや、お2人共、こんな所にいましたか」

莉嘉「ガンリユー!」

ガンリユー「もうすぐブリーフィングの時間ですよ。ブリーフィング・ルームに行きましよう?」

莉嘉「うんっ☆」

美波「ええ」

くくく ブリーフィング・ルーム くくく

ドロス「――全員、揃ったな？」

莉嘉「うんっ。アークチームは、全身揃ってるよ」

バイス「ザウルスチームも、欠員はない」

ニオン「ダイノチームは、言うまでもないな」

ゾル「みんな、元気そうだな。よしドロス、説明を頼むぞ」

ドロス「むう……。立場上仕方ないとは言え、こう言うのは慣れんな」

莉嘉「まあまあ、ここにいるのはほとんど身内みたいなもんだし、気軽な感じで頼むよ」

ドロス「軽く言ってくれるわい……と、オホン」

ドロス「それでは、作戦の概要を説明するぞ」

ドロス「今回の作戦の目的は、交易マシーンランドの制圧だ」

莉嘉「交易？」

美波「広義には物品をお金とかで物々交換することだけど、この場合は交通や要所同士を繋ぐ中間ポイントってことじゃないかな？」

ニオン「美波の言う通りだな。このマシーンランドは、他のマシーンランドを結び、それぞれの場所で製造された物品などを交換したり、交流を行う要所として設けられたポ

イントだ。…かつてはな」

かな子「かつて？」

ゾル「今は急進派の勢力によって制圧され、俺達穩健派のマシーナランドを攻撃する際の補給基地となっている」

鉄甲鬼「交易ポイントとして用意されたと言うことは、複数のマシーナランドと近い位置に接していると言うことだからな。前線基地にするには、最適だと言える」

ドロス「だが、逆に言ってしまうえば、我々が急進派を攻略する上でも、ここは要所となりうる」

かな子「その為の制圧作戦なんですね」

ドロス「作戦は簡単だ。現在、無人機のメカザウルスによる攻撃を加えている。敵の前線が崩壊したところで、主力である我々がマシーナランド内部へ侵入し、敵の指揮中枢を制圧する。それで、敵側の命令を受けている無人メカザウルスは無力化出来る」

ゴズロ「そうなれば、敵の陣形も自然に崩れる、と言うわけか」

ゾル「急進派の指揮中枢さえ制圧してしまえば、こちらのものだ。相手側の無人メカザウルスも指揮下に置いて、一気に急進派勢力を追い払ってしまおう」

莉嘉「追い返すだけ？ 交易マシーナランドにいる戦力を、纏めてやつつけちゃえばよくない？」

鉄甲鬼「殲滅はあまり意味を為さないだろう。前線基地とは言え、展開している戦力も、ほとんどは無人機。倒してしまったところで、痛手とはならぬまい」

ニオン「寧ろ、戦力として使えるモノは、こちらのモノとして再利用した方がいい」  
ドロス「総力戦を仕掛けるのは、この戦いを制した後だ。それで大丈夫か？ 莉嘉ちゃん」

莉嘉「むう…。なら、我慢する」

ドロス「いい子だ。はっはっはっ!!」 ワッシ ワッシ

莉嘉「もお、頭撫でないでよ」

ゾル「作戦自体は簡単に見えるかもしれないが、成し遂げるのは楽じゃないぞ。さっきも言った通り、ここは急進派にとっても、攻撃の要所なんだ」

かな子「当然、相応の防衛戦力は整えている、ってことですよね？」

ゾル「正直な話、この作戦の為に用意されたメカザウルスの数で、敵の防衛戦力を切り崩せるかも怪しい所だ。各々にはほとんど実力で、マシーンランドまで辿り着いてもらうことになる」

かな子「それなら、ゲッターアークは防衛戦力の突破と、突入部隊の支援に回るのはどうでしょうか？ マシーンランド内部の構造なら、ニオンさんや、ドロスさんの方が詳しくそうですね、指揮中枢の破壊って言っても、私達に出来るかどうか…」

ゾル「どのみちゲッターアークにも突入はしてもらうさ。マシンランドに侵入して、作戦が完了って訳じゃない」

美波「マシンランドの中でも、戦闘になるかもしれないってことですよね？」

ドロス「それもあるがの、指揮中枢を破壊する以上、ワシらは機体を降りての白兵戦となる。当然、その間はゲッターにせよゲドにせよ、無防備な状態となる訳だな」

かな子「作戦を完了させるまで、無人になった機体を守る存在も必要ってことですね」  
ゾル「マシンランド内部での制圧作戦は、無人メカザウルスでは決して成し得ない。

急進派との前に、皆には死力を尽くしてもらおうことになるが……と」

莉嘉「ん？どったの？」

ゾル「…最終的に俺が仕切ってないか？」

莉嘉「別にいいじゃん？様になってるよ？」

バイス「教官としての経験が生きましたな？キャプテン・ゾル？」

ゾル「あのなあ…。階級上は、ドロスの方が上なんだぞ？」

ドロス「ワシのような猪武者には部隊の統制など向かん。出来ることなら、お主に任せたいかの？」

ゾル「…つつたく」

芳乃「作戦の確認は、この辺りで良いのではなくてー？」

ゾル「ああ。交易マシーンランドまでは、予定では後1時間あまりで到達する予定だ。敵防衛戦力の迎撃がない限りは、30分後に無人メカザウルスを展開し、作戦を開始する。機乗するのもその頃だ。それまでは、待機室での待機を基本とし、出撃までは各々の判断を優先とする。以上！」

「了解ッ!!」

――。

「交易マシーンランド 格納庫」

ドラゴ「……」

コモド「出撃の待ち遠しいか？ドラゴ」

ドラゴ「…コモド様」

コモド「先頃、反体制派勢力のメカザウルス部隊と、こちらの防衛部隊が戦闘に入った」

ドラゴ「その割りには、随分悠長だな」

コモド「連中の目的ははっきりしている。ならば、迎撃には戦力を割かず、マシンランド内部での防衛に専念すればよい」

ドラゴ「……」

コモド「貴様にも働いてもらおうぞ？」



ドラゴ「…分かってるさ」

コモド「勘違いするなよ？貴様を受け入れたとは言え、貴様は“王に反旗を翻した”反国主義者の弟だ。信頼を勝ち取るために、精々尽くすがいい」

ドラゴ「…姉さんは？」

コモド「今は牢に入ってもらって、大人しくして頂いている。グール様の元へお届けしようにも、まずは反体制派を退けなくてはならんからな」

ドラゴ「そうか」

コモド「お前には専用のメカザウルスを与える。使いこなしてみせるんだな」

ドラゴ「見たことの無いタイプだ」

コモド「我々の協力者の技術を得て、新たに開発されたメカザウルスだ。これまでのメカザウルスと比較しても、類の無い能力を持っている」

ドラゴ「協力者？」

コモド「ゲッターを恨む者、だ。一兵卒程度が、深く知ることではない」

ハ虫兵「コモド様！敵陣の中に、ゲッターロボを確認！」

コモド「遂に動いてきおったな…！ドラゴ、奴等の相手は任せるぞ」

ドラゴ「…コモド様は？」

コモド「私は、ナーガ様を移送する潜水艇の準備を進める。何、このマシンランド

では、貴様に地の利があるだろう？協力者の部隊も付ける。存分に、奮起するがいい」  
ドラゴ「……了解」

—— 深海。

メカザウルス・ドバ『グギャアアアッ!!?』

眼前で、メカザウルスが弾ける。

莉嘉「うおっ!?やばっ……!」

かな子「すごい弾幕……。致命傷に当たらないようにだけでも、気を付けなきゃ……!」  
ニオン「敵の攻撃に怯むなよ! 有人部隊である俺達は、何としてでもマシーンランド  
に取り付け!!」

ゴズロ「だ、そうだ。バイス、先陣を他に譲るな」

バイス「分かっているさ!……っ!!」

メカザウルス・モバ『ギャアッ!!』

バイス「ダブルシュテルン!!」

モバ『?!?』

目の前に現れたメカザウルス・モバにダブルシュテルンを打ち付け、粉碎。

バイス「無人機ごときに、後れるものか!」

ジガ『シヤアアアアツ!!』

バイス「ぬうツ!？」

ゾル「させるかツ!!」

ジガ『?!?!』

ゲッター!ザウルスを死角から襲ったメカザウルス・ジガを、間に割って入ったゲッターザウルスによく似たマシンが、ダブルシユテルンで打ち倒す。

ガンリユ―「有り難う御座います、キャプテン・ゾル」

ゾル「何、大したことじゃない、つて……結局俺が隊長なのか?」

バイス「くっ…」

ドロス「プロトギガスの調子はどうだ、ゾル?」

ゾル「ああ、今のところ、問題らしいところは何も無い」

美波「ゲッターザウルスの量産化が、もう始まつてるなんて…」

ゾル「こいつはその量産の為の試作機だけだな。その分、性能も元のザウルスとは遜色無い。足手まといにはならんさ」

莉嘉「けど、ホントにいいの?戦いは嫌になった、んじやなかったっけ?」

ゾル「まあな。けど、出陣式での君達のライヴと言うものを見て、思ったのさ。俺だけが辛いことから逃げてちゃ、ダメだつてな」

莉嘉「へへっ……!……きやつ」

小さな振動が、コックピットを襲う。

ドロス「話し込んでるところ悪いが、今は戦闘中だぞ!」

莉嘉「もう、かな子?」

かな子「ご、ごめんなさい、莉嘉ちゃん!」

美波「かな子ちゃんは悪くないよ……。それよりも、マシーランドまでの距離だけども……」

鉄甲鬼「肉眼ではシルエットをぼんやり確認出来るだけだ。まだ1km以上離れてい  
るだろう」

芳乃「それまでに乗り越えなければならぬ峠は、まだまだ幾つもありまして」

莉嘉「こんな所で怯んでなんかいられないよ!どうせ敵の拠点に乗り込むなら、目指すは一番乗りだ!」

かな子「私達が先に乗り込んで、右も左も分からないんじや、意味ないような……」

美波「道を付ける、って言う役割だと思えば、無意味じゃないんじやない?」

かな子「……カーンで道を切り開けば、ニオンさん達も続きやすくなる、ですか……。分  
かりました!」グッ

かな子「チェーンジ、カーンローバー!!」

掛け声と共に、車輪形態に変形。

かな子「行きますよ……！ゲッター大車輪!!」

周囲に渦を巻き、高速回転。

かな子「スパインクラッシュャー!!」

カーンローバーと化したゲッターカーンの高速回転で海中を掻き進み、側面に突き出したスパイクで、立ちほだかるメカザウルスを問答無用で粉碎していく。

ドロス「おお……!」

ゴズロ「やるな……。思い切りがいい」

鉄甲鬼「よし、カーンに続くぞ。芳乃」

芳乃「お任せあれー。だいのゲッターすりい」

芳乃の声に呼応するように、ダイノゲッター3の胸の眼光が激しく光り、その姿を変えていく。

芳乃「太古の海を征した雄々しき姿ー。これこそー、だいのゲッターすりいのもう1つの姿ー。水棲竜の化身ー、ぷれしおもーど、でしてー」

プレシオサウルスへと姿を変えたダイノゲッター3が、咆哮を上げる。

芳乃「はうんど、すとリーむをー」

潮流の咆哮。2叉に延びるプレシオサウルスの頭部、それぞれから激しい潮流の渦が

放たれ、前方のメカザウルスの群れを吹き飛ばす。

芳乃「みさいる、ぶれすー」

次に口腔奥からミサイルを吐き出し、体勢の崩れたメカザウルスを破壊。

芳乃「ばいと、はんぐー」

尚も肉薄したメカザウルスをプレシオサウルスの牙で噛み付き、

芳乃「くらっしゅでしてー」

上半身と下半身に引き裂き、破壊。

芳乃「さあ、今の内でしてー。我々ゲッターにー、続くのですー」

ゾル「お、おう…」

ガンリユー「おっとりした大人しい娘かと思えば、意外な一面もあるものですね…」

ドロス「はっはっはっ！豪快なのは結構！さあ、このまま勢いに乗ってしまおうでは

ないか!!」

カーンローバーとダイノゲッター3を中心に、敵陣を割って強引にマシンランドまでの進路を突き進む。

美波「かな子ちゃん！マシンランドが大きくなってきたよ！」

かな子「となると、最終防衛ラインはそろそろ…えいっ！」

カーンローバーから、ゲッターカーンに変形。

かな子「ゲッターミサイル、展開！」

両肩のスパイクを収納し、代わりに無数のミサイルを展開。

かな子「ミサイルトルネード!!」

両肩の車輪を回転させながらミサイルを発射。周囲にミサイルをばら撒き、一掃戦力を展開させた防衛線を内側から崩していく。

かな子「今の内です!どこか侵入出来そうなポイントは…」

ゾル「そこだ!直ぐ下の突起から侵入出来る!」

かな子「下…?」

ゲッターカーンの真下、100m程の地点に、マシンランドの突起の一つが覗いている。

ゾル「よし…。ザウルスレーザーキャノン!!」

プロトギガスが、ゲッターレーザーキャノンのような長銃を構える。

かな子「ゾルさん!」

ゾル「俺とドロスは、ここで敵の追撃を食い止める。任務遂行はお前達に任せるぞ!」

かな子「けど、2機だけじゃあ…」

ニオン「ゆっくり話し合っている時間はない。指揮中枢を落とせば敵の動きも停まる」

バイス「つまり、ここは先輩方に任せるのが得策、と言うことだ」

かな子「：分かりました。任せます、ドロスさん、ゾルさん！」

ゾル「ああ！」

ドロス「おうよ!!」

かな子「急速沈降！」

そのまま、急加速で沈降していき、マシンランド内部へと侵入した。

—— 交易マシンランド、内部。

ゲッターカーンらが出入り口のゲートを強引に破壊して侵入。海水の浸水を防ぐための隔壁が閉じ、排水機構も動いてゲッターと共に入った海水を自動的に排出していく。

かな子「：何とか侵入成功、ですか？」

ニオン「今の所はな」

美波「敵の迎撃は：」

バイス「ここじゃないだろうな。ここは、マシンランドの外壁付近だ。派手にドンパチやって、外壁を破壊した時の被害は、この連中がよく分かっている」

莉嘉「なら、一旦休憩って感じ？」

ガンリユー「一先ずは。外にいるゾル様や、ドロス様のことも考えると、そうゆつく



りともしていられません」

鉄甲鬼「作戦完遂に、小休止など必要ないな。直ぐに移動しよう」

かな子「了解です。えっと、中心部は…」

芳乃「こちらでしてー。交易ましーんらんの地図はー、だいのゲッターにいんぷつとされております故ー」

ゴズロ「よし。敵中枢を指して、移動しよう」

莉嘉「待つて！ゲッターザウルスはともかく、アタシとニオン達は屋内戦を考えて変形した方が良くない？」

鉄甲鬼「…一理あるな。では、我々は突破口を開く意味でもダイノゲッター2に」

莉嘉「こつちは勿論、ゲッターアークで決まりだよね？」

かな子「分かりました。ふふっ」

美波「莉嘉ちゃんに合わせる。それじゃあ…」

かな子「オーブンゲット!!」

芳乃「おーぷんげつとー」

鉄甲鬼「チェンジダイノゲッター2ツ!!」

莉嘉「チェンジゲッター！アークツク!!」

ゲッター1機がようやく通り抜けられるような空間でゲッターの分離・合体を行い、

その勢いのままダイノゲッター2が先行し、目前に迫る隔壁に目掛け突進。

鉄甲鬼「ドリル、クラッシュ!!」

豪快に、隔壁を粉碎して、開けた空間に出る。そこは、

莉嘉「うわあ……!」

一面に広がる花園と、緑豊かな森林群だった。

美波「…穏健派のマシンランドとも、また趣が違うのね」

ニオン「ここは数多のマシンランドとの交易ポイント。互いに穏やかな心で交流が行えるようにと、先代の統治者の頃から、保養所としても整備されてきた」

かな子「空も高く見える……。とてもマシンランドの中とは思えませんね」

バイス「否が応でもそう思うさ。迎撃部隊が出てきた」

ダイノゲッター2達の前に、迎撃のメカザウルス部隊が立ちはだかる。

かな子「…こんな所でも戦闘を仕掛けようなんて!」

バイス「どちらの立場か分からん台詞だな。仕掛けてきたのは、俺達の方だ」

かな子「それは、そうかもしれないけど……」

莉嘉「昔の偉い人が作った自然を破壊しないためにも、戦いにさっさとケリを着ける

! それに限るよ!!」 グンツ

ビュン、とゲッターアークが加速。

莉嘉「バトルシヨットカッター!!」

メカザウルス・ボア『!?』

瞬時に肉薄、着地、構えを流れるように繋ぎ、先頭のメカザウルス・ボアを切り裂く。

メカザウルス『s』——!!!』

莉嘉「っ…!」

ゲッターアークの突貫に怯まず。メカザウルスの部隊が放った銃砲撃による弾幕を、ヒラリと軽い動きで躲けていく。

バイス「だあああアツ!!」

敵の動きがゲッターアークに引き付けられている所に、ゲッターザウルスが上空からダブルシユテルンを振り下ろす。

バイス「大した威勢だ。が、考え無しに付き合わされるのは御免だぞ」

莉嘉「何々!?!」

メカザウルス『ギヤアアアアツ!!』

鉄甲鬼「ふん…」

ゲッターアークとゲッターザウルスの隙を突こうとしたメカザウルスを、背後から忍びよったダイノゲッター2のハンドガンが撃ち抜く。

鉄甲鬼「お互い様だな。皆、死角のカバーを忘れぬようにな」

莉嘉「鉄甲鬼！ありがと☆」

バイス「：ちっ」

かな子「それで、敵の指揮中枢は…。ここからマシーンランドの隅から隅まで探すんですか!？」

芳乃「その必要はないでしょー。木を隠すには森と申しますがー、無人のめかぎうるすを指揮するにはー、それだけ行き来が易い方が良ろしいかとー」

かな子「えーつと、つまり?」

美波「敵の指揮を執っている人が、寝食を行いながら、同時にメカザウルスに指揮を出せるような場所…」

ニオン「即ち、統治城、と言うことだな」

莉嘉「統治城…?」

ガンリユー「あそこです」

ゲッターザウルスが指差す先、中世ヨーロッパの建築様式に似た大きな城が聳えている。

ゴズロ「交易マシーンランドの統治者が住まう城だ。ここを中心地と言っても、差し支えないだろう」

かな子「で、でも、あんな目立つところに…。本当に?」

鉄甲鬼「闇雲に探すより、目的地があつた方がいい。一先ず目指してみるのも、悪くないだろう」

莉嘉「ここで考えてるよりはね、つて。よし、行こう！」

バイス「おい、待て！陣形をだな……！」

勇み足気味のゲッターアークを先頭に、統治城を目指して突き進んでいく。

バイス「……」

ニオン「……」

莉嘉「……？」 ザッ

木々を掻き分け、森林地帯を進む。

ニオン「……妙だな」

莉嘉「ねえ、もつと攻撃してくると思った」

鉄甲鬼「これは……何かの罠か？」

莉嘉「アタシ達で先行しよつか？」

鉄甲鬼「……」

芳乃「それは危険でしょー。こちらの戦力を裂くこともー、相手の策かも知れずー」

バイス「しかし、このまままとめて敵の術中に堕ちてしまえば、それまでだ」

芳乃「焦りは禁物でしょー。疑心暗鬼に陥るもー、敵に付け入る隙を与えるのでし

てー」

ガンリユー「しかし、これでは…!」

バイス「——何だ…:うおッ!」

莉嘉「バイス!」

ニオン「ゲッターザウルス? どうした!」

突如、ゲッターザウルスの機影が、周囲から消える。

莉嘉「何処に消えたの!」

鉄甲鬼「落ち着け。レーダーはゲッターザウルスを捉えている」

美波「…:だけど、これは…:」

かな子「ゲッターザウルスの反応が、2つ…:」

芳乃「ともかく追いましょ。直ぐ向こうでしてー」

莉嘉「バイスツ!!」

鬱蒼と繁る木々を掻き分けて、離れたゲッターザウルスの反応を追う。そこには、

莉嘉「!」 ゲッターザウルスが、2体…:」

かな子「どう言うこと、ですか?」

バイス「『気を付けろ! そっちは偽物だ!!』」

バイス「『!』」

かな子「今のは……」

美波「バイスさんの音声信号が、両方のゲッターザウルスから、同時に出て……」

莉嘉「これじゃあどっちが本物か分かんないよお！」

バイス「『くそっ！俺の真似をするんじゃないやねえ！この卑怯者！』」

バイス「『っ！』」

バイス「『こうなれば、俺がこの手で直接……！』」

2機のゲッターザウルスが、戦闘態勢で向かい合う。

莉嘉「バイスの声が二重に聞こえてくるよ。何か気持ち悪い……」

ニオン「内部分析で何か分かるか？鉄甲鬼」

鉄甲鬼「……いや、分析結果も両方とも同じだ。ダイノゲッターの視認情報的には、ど

ちらも同じ、ゲッターザウルスだ」

ニオン「……芳乃は？」

芳乃「……」

ニオン「黙りとは珍しい。お前にも、分からないことがあるのか」

芳乃「芳乃も万能ではなく。正しくこれは、生物的に完璧な“擬態”なのでし

て」

美波「……擬態？」

莉嘉「これじゃあ、一体どっちを援護したら…」

バイス「…：…っ！」 ジリ…

???「どうした？来るんじゃないかったのか」

バイス「!？」

???「ならばこちらから、遠慮無く」 シュバツ

バイス「ぐっ…！」

片方のゲッターザウルスが素早く動き、相対したゲッターザウルスの懐に飛び込み、掌底を打ち付ける。

???「お前達も！」

莉嘉「きやつ!？」

鉄甲鬼「ぐう…：…っ!？」

ゲッターザウルスがしなるように俊敏に動き、ゲッターアークとダイノゲッター2を打ちのめして距離を取る。

かな子「な、何…：？あのゲッターザウルス…！」

莉嘉「ゲッターザウルスの動きじゃないよ！それに何だか、素早い！」

???「揃いも揃って簡単に惑わされるとは…。これが恐竜帝国の仇敵、ゲッターロボか

！」 ハッ



バイス「くっ……！こちらの姿を真似しやがって……！この猿真似野郎！」

???「残念ながら。これがこのメカザウルス・ピクノドンの最大の能力なのでな。折角手に入れたモノを、そう簡単に手放すわけではないだろう？」

鉄甲鬼「メカザウルス……」

かな子「ピクノドン？」

ガンリユ「相手に擬態する能力を持ったメカザウルス。しかし、タネが割れてしまえば何てことはない！」

???「ふふっ、果たしてそうかな？貴様らも感じただろう。このピクノドン、対象の内  
部構造や発信信号まで完璧にトレースする。味方信号を発するものを、貴様らのマシン  
は攻撃できまい！」

ニオン「ならば、手動で狙いを付ければ良いだけだろう！鉄甲鬼っ!!」

鉄甲鬼「応！」

莉嘉「アタシも！」

バイス「俺達だって！」

莉嘉・バイス「ゲッタービーム!!」

ダイノゲッター2のハンドガン、2筋のゲッタービームが、ピクノドンが化けたゲッターザウルスに集中し、爆発が起こる。

バイス「やったぞ！」

ゴズロ「油断するな。熱源はまだ消えてない。こちらの攻撃を回避している」

ニオン「猿真似だけじゃなく、すばしっこさも奴の取り柄らしい」

???「ハハハハハッ！戦いは始まったばかりだ。思う存分、楽しもうじゃないか！」

爆煙が晴れ、視界が開けた、そこには、

莉嘉「ゲッター……アーク……」

???「人間共の新型ゲッター……。なかなか面白い機能を持つているようだな……」

美波「マズい……みんな、離れて!!」

鉄甲鬼「何だ!?!」

???「密集陣形でそっちは使えんだろうが、こっちは気を遣う必要がないぞ」

ゲッターアーク（ピクノドン）の背中のウィングが後光のように開く。

???「サンダーボンバアアアーツ!!」

バリバリバリバリッ

莉嘉「きやあああああッ!!」

鉄甲鬼「うおおおッ!!」

バイス「ぐあああああッ!!」

放たれたサンダーボンバーが、3機のゲッターを打ち付ける。

莉嘉「う……う……」

雷撃に怯み、倒れ伏すゲッターアーク。

???「くつくつくつ……。これはいい……！ 穩健派の精鋭のゲッター部隊も、まるで烏合の衆だ！」

バイス「ぐつ……！ 借りた威で調子に乗ってえ……！」

???「ものの次いでだ、1つ教えておこう。俺の名はドラゴ。まだキャプテンですらない恐竜帝国の一兵士。そしてこれから忌むべきゲッターを倒し、恐竜帝国の英雄となる男の名だ」

ニオン「ドラゴ……」

ドラゴ「お前達とは長い付き合いになりそうだから……。以後お見知りおきを、頼むぞ」

莉嘉「あ、あんまり見知っておきたくないかな……」

地に手を着いて、強引に立ち上がる。

莉嘉「ここで決着を着ける……！ 絶対！」

ドラゴ「ふつ……」

つつく

## 第11話 『死線』

ドロス「くらえいッ!!」

バオツ

メカザウルス・ゲドが放ったゲッタービーム・プレスが襲い来るメカザウルスを次々に焼き払う。

ゾル「遅い…ッ! 突入部隊は何をしているんだ!？」

ドロス「落ち着け。突入が成功したところで、それで作戦そのものが成功したわけではない。寧ろ、正念場はこれからさ」

ゾル「こちらの戦力には限りがある! 長期戦は不利だぞ…」

ドロス「それは、ニオン達とて把握しておる。今はただ、吉報を待つんだ!」

ゾル「いよいよ厳しくなってきたな…! っ…! ……危ないっ!」

ドロス「ぬうっ!？」

飛来した魚雷からゲドを庇い、プロトギガスの左腕が吹き飛ぶ。

ゾル「ぐう…!」

ドロス「すまん……！大丈夫か、ゾル」

ゾル「ああ。破損部分は切り離して、隔壁は閉じた。水圧で潰されることはないさ」  
ドロス「…それならいいが」

ゾル「油断するなよ」

ドロス「うむ。作戦成功前にやられてしまつては、元も子もないからの。今一度、氣を引き締めるとするか」

ゾル「頼むぞ。ここで背中を任せられるのは、ドロスだけだ」

ドロス「お互いにな」 ニッ

無人のメカザウルスが、ゲドとプロトギガスに殺到する――。

くくく 交易マシーンランド 内部 くくく

莉嘉「きやあッ!!」

木々を薙ぎ倒し、地に倒れ伏すゲッターアーク。衝撃で花びらが散り、ゲッターアークの眼前に舞う。

莉嘉「こ、このおく……!」

ドラゴ「ふんっ……脆いぞ。ゲッターロボ」

バイス「でえええいッ!!」

ドラゴ「おつと……」

鉄甲鬼「……っ！」

ドラゴ「その程度で！」

ゲッターザウルスが先制して隙を作り、そこをダイノゲッター2が突く。巧みな2機の連携も、軽い身のこなしで身を翻すゲッターアーク（ピクノドン）に往なされ、反撃を受ける。

莉嘉「バイスッ！鉄甲鬼!!」

バイス「くっ……！」

鉄甲鬼「大丈夫か？」

バイス「損傷は軽い。まだ動ける……！」

ニオン「コイツにばかり時間を割いてはられないぞ！」

鉄甲鬼「分かっている！だが……！」

莉嘉「ここは任せて！」グッ

力を込めて、ゲッターアークが立ち上がる。

ガンリユー「ゲッターアーク、戦えるのか!？」

莉嘉「モツチロン☆ほんの掠り傷だよ！」

鉄甲鬼「強がるのはいい。だが、援護もなく、単機で奴の相手をするつもりか？」

かな子「相手を倒すことに集中しちやったら、それこそ相手の思う壺です」

美波「勝てるかどうかはともかくとして、私達が足止めになれば、あのドラゴって人だつて、ニオンさん達を追えない筈です。ですから、ゲッターザウルスとダイノゲッターは、作戦の遂行を！」

ゴズロ「…囿をやるという訳か」

莉嘉「それだけで終わるつもりはないよ！ニセモノ相手に、負けるわけには行かないつて☆」

ニオン「ふっ…。ならここは任せるぞ」

バイス「本気ですか!?!ニオンさん！」

芳乃「莉嘉さん達の言うことも真理でしてー。今わたくし達に出来ることはー、仲間を信じることー」

バイス「……」

鉄甲鬼「死ぬなよ、莉嘉！」 バッ

ガンリユー「バイス、莉嘉さんの気持ちを無駄にしては！」

バイス「…分かっている！」 シュバッ

その場を後にし、統治城へと向かう。

莉嘉「…誰に言ってるの？まったく」

ドラゴ「わざわざ死を選ぶとはな」

莉嘉「へえ。防衛部隊なのに、焦って二オン達を追ったりしないんだ？」

ドラゴ「焦る必要などない。貴様らを始末した後で、ゆつくりと残りの奴等を潰していけば良い」

莉嘉「ふうん？ そう言う勝ち誇った台詞は、本当にアタシ達を倒してからにしてよね……！」

かな子「莉嘉ちゃん、一人で無理しないで。こつちにはカーンも、キリクもあるんだから」

美波「かな子ちゃんの言う通りよ。あつちは1人かもしれないけど、こつちは3人。チームワークで翻弄すれば、活路は開けるかも」

ドラゴ「ふっ。俺が1人でお前達を迎撃に来たと？ そんなこと何時言った？」

莉嘉「!?」

ドラゴ「この砦を守るのは、俺1人じゃない。見ろ」

その声に合わせて、木々の中から姿を現す。それは、

莉嘉「鬼獣……!?!」

鉄球鬼獣「グウウ……」

美波「どうして……!?! マシーンランドに鬼獣が……!」

かな子「しかもこの感じ……あのドラゴって言う人の指示を聞いてる?!」



ドラゴ「我々にも協力者がいるのだ。穏健派と呼ばれる者達が、貴様ら穢らわしいサル共に協力を要請しようにな」

かな子「協力者…？それじゃあ、あの鬼獣は…」

美波「インベーターのような独自の生態系を持つ生物じゃなく、誰かが私達の世界に、故意に派遣する、生物兵器ってこと?!」

かな子「鬼獣の主が、この世界に鬼獣を派遣する理由って…!」

美波「まさか、ゲッター…!?!」

ドラゴ「それを知る必要はない。行けッ!!」

牛鬼獣「ブオアアアッ!!」

鬼獣の群れが、襲い来る。

莉嘉「くっ…!」

一気呵成に攻め立てる鬼獣の群れに、ゲッターアークは一時後退。

莉嘉「ツイントマホーク!ランサアアーツ!!」

後方で体勢を立て直し、柄尻同士を突き合わせたツイントマホークを構える。

莉嘉「ッ!!」 グンッ

牛鬼獣「!?!」

今度は臆せず、鬼獣の懐に突貫。

莉嘉「やあああッ!!」

敵陣の只中に飛び込み、トマホークを振るう。

莉嘉「ダブルツ! ラビリントゥス!!」

グ オ ア ツ

豪快に振るわれたトマホークの双刃が、旋風を起こして鬼獣を巻き上げ、真空刃を伴って切り刻む。

ドラゴ「…ほう」

一度に複数体の鬼獣を肉塊に変え地に落とし、ゲッターアークがピクノドンに向き直る。

ドラゴ「ただの雑魚ではないか。…面白いッ!」

莉嘉「余裕かましてられるのも今の内!…ゲッターの猿真似したの、後悔させて上げるから!」

美波「まだ鬼獣は残ってるから、ドラゴにばかり気を取られちゃダメだよ。莉嘉ちゃん」

かな子「私達は勿論だけど、ニオンさん達も心配ですね…。あつちにも鬼獣の群れが…」

美波「…私達も、仲間を信じるしかないよ。今は、自分達の戦いに集中しましょう!」

「バイス「このッ！」

ゲッターザウルスのダブルシユテルンが、鬼獣の頭部を粉碎。辺りに脳漿と粘度の濃い血液を飛沫かせる。

バイス「何だ!? コイツら…！」

ガンリユ「明らかに恐竜帝国の戦力じゃない！」

芳乃「陰と陽を司る者の使いでしてー。心も義も持たずー、ただ私怨によつて暴れ狂うモノー」

ゴズロ「陰と、陽…? 暴れる? お前の言い方は、良く分からんな」

芳乃「むー」

鉄甲鬼「芳乃の言葉は確かに難しいが、鬼獣と呼ばれているモノ達だ。確か、今人類を襲っている筈だが」

バイス「そんなものが、どうしてマシーンランドの中に？」

ニオン「考えている暇などないぞ! 襲ってくる以上はこちらの作戦を妨害する障害! 潰せば良いだけの話だ！」

鉄甲鬼「しかし、このままでは埒が明かないぞ」

バイス「…:もうすぐ統治城の護衛用メカザウルスの格納庫。そこまでの道は一方通

行だ」

鉄甲鬼「…敵の動きを抑制出来れば、迎撃のしようはある、と言うことか」

芳乃「ともかく向かいましよ。あちらの奥でしてー」

ニオン「ザウルスチームが先に行け！殿をやる！」

バイス「了解！」

ダイノゲッター2が鬼獣を惹き付け、その間にゲッターザウルスが格納庫内へと。その後をダイノゲッター2がつづく。

鉄甲鬼「無事か!？」

バイス「被弾は少ない！」

ガンリユー「……？ 妙ですね…。統治城を護衛する戦力の格納庫の筈が、メカザウルスが出払っている？」

ゴズロ「誘われている…？とすれば、ここは外れか！」

鉄甲鬼「……。いや、無人メカザウルスへの指令信号はここから出ている。敵の指揮中枢が、ここにあるのは間違いがない」

ガンリユー「ならば、何故…？」

ニオン「考えても仕方ない！俺達が勝つには、ここしかない！」

バイス「……よし、ガンリユー。お前が指揮中枢の破壊に向かえ。ゴズロはその支援

だ」

ゴズロ「バイスは？」

バイス「ゲッターザウルスを守る！」

ガンリユー「…確かに、妥当な選出か。ゴズロ」

ゴズロ「分かった。バイス、死ぬなよ」

バイス「誰に言っている！」

ゴズロ「はっ…：…そうだな」

ゲッターザウルスの2、3号機部分のコックピットが開き、ガンリユー、ゴズロが武器を伴って降りてゆく。

ニオン「鉄甲鬼、貴様も芳乃を連れていけ！」

鉄甲鬼「…：ガンリユー達を援護するんだな。それは分かったが、何故芳乃も？」

ニオン「水先案内人だ。失せ物探しは得意なんだろう？」

芳乃「然りー。失せ物探しもー、目的地までの水先案内もー、必ず導いてみせましょー」

鉄甲鬼「闇雲に城内を走り回るよりはいいか。付いてこれるか？芳乃」

芳乃「心配は無用でしょー。共に参りましょー」

鉄甲鬼「ゲッターは任せる。コックピットを損傷させるなよ」

ニオン「言われるまでもないッ！」

芳乃と鉄甲鬼もゲッターから降り、ダイノゲッター2とゲッターザウルスが並び立つ。

バイス「そっちも1人か」

ニオン「ハンデを付けるには、丁度良い！」

バイス「お互いにな。精々戦果を上げてやろうじゃないか！」

ニオン「さあ、鬼獣如き、好きにはさせんぞオ!!」

――。

スタスタスタスタ――

芳乃「こちらでしてー」 テクテクテク

ガンリユ―「しかし、こんな小娘を連れて、破壊任務とは…」

鉄甲鬼「どうした？小娘1人、護る自身もないか？」

ガンリユ―「そう言うつもりは、ありませんが…」

ゴズロ「敵の迎撃もある。白兵戦になる」

ハ虫兵「いたぞ！こっちだ！」

ゴズロ「…このようにな」

ハ虫兵「撃てッ!!」

バラバラバラバラッ

ゴズロ「乱戦になれば、護りきれぬ保証はないぞ」

芳乃「危ないのでしてー」

鉄甲鬼「ならば——！」

鉄甲鬼がハ虫兵の弾幕を掻い潜り、先行。

鉄甲鬼「はっ！」

ハ虫兵「ぎゃっ！」

鉄甲鬼「やっ！」

ハ虫兵「がっ！」

鉄甲鬼「たあッ！」

ハ虫兵「ひでぶっ!?!」

瞬く間に、展開した部隊を制圧してみせる。

鉄甲鬼「…乱戦になる前に、終わらせればいい」

ゴズロ「……」

ガンリユー「これは、一本取られましたね…」

芳乃「ではー、足を止めずに参りませよーかー。…ふむー？」

鉄甲鬼「どうした、芳乃？」

芳乃「いえいえー。さあ、次はこちらでしてー」

芳乃の導きによって、城内を進んでいく。すると、

「ぬう!?! 貴様ら……!」

ガンリユー「なっ……!?! 貴様ら!」

ゴズロ「キャプテン・コモド。急進派の将校か……!」

コモド「……思つたよりも侵攻が早かつたか……!」

鉄甲鬼「將軍が我先に敵前逃亡とは、急進派も底が見えたな!」

コモド「大局も見えぬ者は威勢がいい。私の邪魔立てをするならば、容赦はせんぞ?」

ハ虫兵「!!」 ザッ

鉄甲鬼「ガンリユー、ゴズロ。援護は任せる」

ガンリユー「了解です!」

ゴズロ「了解した」

バラバララララッ

ハ虫兵「ぐおっ!?!」

鉄甲鬼「ふんっ」

コモドを守るように、対峙した護衛のハ虫兵。機銃を構えるガンリユー、ゴズロ援護

射撃の元、鉄甲鬼が素早く退けた。



鉄甲鬼「…相手にもならん。兵の訓練は、もう少ししっかりやっておくことだな」

コモド「ぐぬぬ…！」

ガンリユー「さて、キャプテンの討伐は、我々の任務に含まれていませんが、どうします？」

ゴズロ「…待て」

ナーガ「…！」

鉄甲鬼「コモドの後ろ…。女人か？」

ガンリユー「あれは、ナーガ様!？」

鉄甲鬼「ナーガ？」

ガンリユー「交易マシオンランドの統治者だった筈です。それが今、コモドに連れられていると言うことは…！」

鉄甲鬼「状況が見えてきたな…！」

コモド「ふん…：…いい気になるなよ。こちらも作戦を達成するため、2重に戦力は用意している」

鉄甲鬼「何？」

ゴズロ「だが、ハ虫兵が後何人来ようと…！」

コモド「そうか。では、こいつなら、どうかな？」

ゴズロ「!?」

通路狭しと立ちはだかったのは、全長2mを優に越える巨体を持つ、獣脚類の恐竜。

恐竜『グギユルアアアッ!!』

鉄甲鬼「騎兵竜か…!こんなものまで用意しているとは」

芳乃「……」

コモド「はっはっはっ!貧弱なサルなど、噛み砕いてしまえ!!」

恐竜『グルルルウ…』

ガンリユー「どうします?騎兵竜が相手には、こちらの火器では…!」

鉄甲鬼「流石に厳しいか…?」

芳乃「……」

ゴズロ「芳乃…!?!」

鉄甲鬼達が驚くのを余所に、恐竜へと澱みなく歩み寄っていく。

恐竜『グウウウ…』

芳乃「……」

鉄甲鬼「何をする気だ?芳乃」

コモド「ふっふっふっ。あまりの恐怖に気でも違えたか?」

恐竜『グアアッ!!』

コモド「噛み砕けー！喰い殺してしまえーッ！！」

芳乃「……」 スッ

コモド「……？」

天を仰ぐように両腕を開く芳乃。その腕の先は、立ちはだかる恐竜を迎えるかのように向けられている。

芳乃「さあ、早くこちらへー。おいでませー？何も恐れることなどー、ないのですよー」

恐竜『……』

コモド「何をしている?! 貴様の主を忘れたか? 早くその子ザルを噛み潰してしまえい!!」

恐竜『……ッ』

コモド「!?」

芳乃の小さな手に吸い寄せられるように、恐竜はその頬を寄せ、子供が甘えるように擦り寄っていく。

芳乃「よしよし。いい子いい子ー、なのでしてー」

恐竜『キューン……』ゴロゴロ……

甘える声を出す恐竜。

ナーガ「……!!」

ガンリユ―「これは……どう言うことですか？」

コモド「バカな……!? たかがサルに、懐柔されたと言うのか!？」

ゴズロ「最早、理解が追い付かん」

芳乃「聡い子です。芳乃に心を開き、全てを委ねて下さいませ」

コモド「調子に乗るな！」

恐竜『キシヤアアアツ!!』

コモド「……私に牙を向くと言うか……？」

鉄甲鬼「形勢逆転だな。一人で尻尾を巻いて逃げると言うのなら、見逃してやる」

コモド「ぐ……!ぐ、ぐうう……!!」

恐竜『グルルル……ツ!!』

コモド「ぬう……ツ!! この屈辱、決して忘れん! 忘れぬぞ!!」

ダツ――。

鉄甲鬼「行つたか。さてと……」

ナーガ「……」

ガンリユ―「ナーガ様! ご無事で……」

ナーガ「……助けて頂き、ありがとうございます」

ガンリユー「いえ、我々にとつても、全くの偶然でした」

ナーガ「…そうですね。貴殿方も、このマシーンランドを、制圧しに来たのでしょうか？」

ゴズロ「制圧？いえ、我々は…」

ナーガ「同じことです。このマシーンランドを、戦いのために利用するつもりで、ここに来た筈です」

ゴズロ「それは…」

鉄甲鬼「ええ、貴女の仰る通りです」

ガンリユー「鉄甲鬼さん！」

鉄甲鬼「私達の任務は交易マシーンランドの解放…。しかし、作戦完遂後は、急進派の勢力を退けるため、活動拠点として協力頂くことになるのは、紛れもなく事実でしょう」

ナーガ「何故そこまで、強硬に事態を解決しようとするのです!?もつと平和的に、分かち合う方法はある筈です！」

鉄甲鬼「急進派の人達にも、貴女のような考えを持った者がいれば、或いは」

ナーガ「……」

ガンリユー「現状、多くのマシーンランドが、急進派勢力によって制圧されました」

ゴズロ「急進派によって制圧されたマシーンランドに待っているのは、グールによる  
圧政だ。言論の自由も許されず、逆らう者に待っているのは、死」

鉄甲鬼「急進派のやり方に沿う、と言うのも戦いの終わらせ方の一つでしょう。しか  
し、その先に待っているのは、強硬な恐怖政治による支配と、地上を取り戻すための、人  
間達との戦いです」

ガンリユ「それでは、これまでの恐竜帝国と何も変わりません。本当の平和、真に  
争いのない世界を実現させるには、今我々が、血を流さなくてはいけないのです！」

ナーガ「それでも……！同族同士、傷付けなくても……！みんなで手を繋げる道が、何処  
かに……！」

芳乃「そうしてー、未来を閉ざしてしまおうのでしてー？」

ナーガ「……！」

芳乃「未来を開く者はー、今に抗える者ー。如何なる力を前にしてもー、己を貫ける  
者でしてー」

ナーガ「けれど、自分の命の為に、他人の命を奪うのが、正しいことなの……？」

芳乃「死人に口はないのですよー。残念ですがー」

ナーガ「……！」

芳乃「生きとし生ける者達はー、倒れて行った者達の無念を背負いー、また、彼らの

夢を叶える為に、生きるのではありません。決して一人で生きるのではありません。スウ……

恐竜『グルルウ……♪』

芳乃「ご心配なく。一人で悲しむのではなく、皆、支え合うのではありません。それを望む者が集まれば」

甘えてくる恐竜をあやししながら芳乃は言う。

芳乃「共に生きましょー？人とハ虫人が手を取り合う架け橋には、そなたが必要でしてー」

ナーガ「……」

統治城全体を振動が襲う。

ナーガ「これは……」

鉄甲鬼「外の戦闘……統治城に近付いているようだな」

ゴズロ「外と言うと……莉嘉達か」

ガンリユ「ここも何時までも安全と言うわけではありません。ナーガ様！」

ナーガ「……っ！」 ダッ

ガンリユ「ナーガ様!?!」

――。

鉄球鬼獣「ガアッ!!」

莉嘉「こんのおくく!!」

上空から襲い掛かった鉄球鬼獣を、左手のトマホークを投擲して斬り断つ。

かな子「莉嘉ちゃん、左!」

莉嘉「——!?!」

ドラゴ「こつちだ」

ゲッターアーク（ピクノドン）の蹴りが、脇腹に刺さる。

莉嘉「ガッ……!」

鬼獣xs「!!!!」

衝撃で吹き飛ぶゲッターアークに、鬼獣の群れが殺到する。

莉嘉「ううくく……ンツ!!」

鬼獣達の攻撃が直撃する寸前、ゲッターを強制的に分離させ、包囲網を潜り抜ける。

莉嘉「チエーンジゲッターーッ!アーーック!!」

敵勢を視界に収められる上空で、合体。

莉嘉「ふうく……。間一髪」

かな子「大丈夫?莉嘉ちゃん」

莉嘉「うん☆多勢に無勢でも、まだまだこれから……!」

美波「直ぐに攻勢が来る……!構えて!」



莉嘉「来るなら来てよ！さっきのお返し——！」

ゲッターアークのエネルギーを収束させる。

莉嘉「本家本元のくく……サンダーボンバアアツ!!」

バリバリバリバリイッ

鬼獣  $\boxtimes$  s 「?!?!」

サンダーボンバーを炸裂させ、再び殺到した鬼獣群を灰塵に帰す。

美波「やった……？」

かな子「今ので、かなりの数の鬼獣は倒せたけど……でも……」

莉嘉「最後に厄介なのが……！」

ドラゴ「ふっ、そのゲッターの動きは、粗方分かっているからな」

莉嘉「っ！ 皮肉のつもり!?!」

ドラゴ「雑魚共の始末に随分と体力を使ったようだが、どうかな？」

莉嘉「まだまだ……！今から泣いて土下座したって……うお!?!」

ピクノドンの手刀。ゲッターアークが大きく仰け反った。

莉嘉「ふ、不意打ちは卑怯……！」

ドラゴ「最早語る言葉もあるまい。一思いに逝け！」

莉嘉「もう勝った気分になっちゃって……！えいっ！」

追撃を仕掛けたピクノドンに蹴りを放ち、一度距離を離す。

ドラゴ「むっ？」

かな子「けど実際問題、向こうの方が素早いですよ。このまま正面からぶつかっても、じり貧になっちゃいます」

美波「私達、3人の力を合わせて、活路を見出だすしかないわ！」

莉嘉「美波の言う通り、かな！」

ドラゴ「思い通りには！」

莉嘉「オーブンゲツト!!」

ドラゴ「くっ……!!」

ピクノドンの攻撃に合わせ、ゲッターを分離。

美波「チェンジ！ゲッターキリクツ!!」

木々を縫って合体し、木の影からピクノドン目掛け突撃。

美波「ドリルアームツ!!」

ドラゴ「ぐっ……!!」

回転するドリルと、ピクノドンのトマホークが鏝迫り合う。

ドラゴ「この程度の攻撃では……!!」

美波「ドリルパンチツ!!」

ドラゴ「!?」

罅迫り合いの状態で、ドリルパンチでドリルを撃ち出し、強引に体勢を崩す。

美波「オープンゲット!」

かな子「チェンジゲッターカーンッ!!」

ピクノドンが怯んだ隙を突き、ゲッターカーンにチェンジ。即座に手足を収納し、カーンローバーになる。

かな子「スパインクラッシャー!!」

ドラゴ「おおお…!?」

高速回転するカーンローバーが、ピクノドンを地面に叩き付けた。

かな子「っ…!! 手応えはあったのに!」

美波「倒しきれない…? 何て装甲なの?!」

ドラゴ「並のメカザウルスならばやられていた。俺程度では付け入る隙もない高速合体…。流石にやる!」

莉嘉「へへんっ☆っただけそっちがアタシ達をマネしようよ、1つの体じゃゲッターの3つの力を、全部真似するなんて無理でしょ?」

ドラゴ「それはどうかな?」

莉嘉「え!」

ドラゴ「このメカザウルス・ピクノドン、見くびってもらっては困る！」  
ゲッターアークの姿を模したピクノドン。その背が隆起し、複雑に変形。さながら阿修羅のように左右の肩から副腕が伸び、右側はドリルアーム、左はカーンの車輪へと、変形していく。

莉嘉「何それ!? ……キモ…っ」

かな子「そこで出る感想がそれですか…?」

美波「…似たような能力を持った相手が、前にもいたけど…」

莉嘉「だって見たまんまじゃん! ゲッターアークはあの姿が格好いいのに! ドリルとか車輪とか付けちゃって、小学生のプラモの改造じゃないんだから!」

ドラゴ「姿などどうでもいい。貴様らに勝てさえすればなア!」

かな子「きやつ…!」

ゲッターカーンに、ピクノドンがコピーした車輪が襲い掛かる。

かな子「ぐっ…!」

ドラゴ「はははっ! 動きが鈍いぞ、ゲッター!!」

車輪によって、殴り飛ばされる。

かな子「うあゝ ああ…!」

吹き飛ばされ、城壁に衝突。崩れた瓦礫と共に、へたり込む。

かな子「うう……」

莉嘉「かな子、しっかり！」

美波「ここは、統治城の近くまで来ちやったみたいね……」

莉嘉「城の中にはニオン達がいる筈だよ！ここで戦うのはマズいんじや……」

かな子「…何とか、ここから引き離さなきゃ」

ドラゴ「フンツ！」

かな子「!!」

ピクノドンのドリルアーム。その腕部を掴み、辛うじて直撃を抑える。

かな子「ぐ、ぐ……ぐうぐうっ！」

ゲッターカーンの眼前に迫る、ドリルの切っ先。

莉嘉「かな子、分離して！」

かな子「うう……！それしかありません……。——オープンゲット!!」

ドラゴ「ぬっ！」

莉嘉「チェンジゲッターアークック!!」

ドラゴ「ゲッタービーム！」

莉嘉「!?!」

ゲッターアークの合体の直後、放たれたビームを間一髪、身を翻して躲す。

莉嘉「あつぶなく…」

美波「こっちの合体直後を狙ってくるなんて…」

ドラゴ「合体した直後は動きが止まる。そこを狙ったつもりだったが…」

かな子「まだ未熟な、私達の連携を狙われたみたいですね」

美波「さつきのは上手く躲せたけど、次また上手く行くとは限らない…!」

莉嘉「だったら、アタシが決着を着けてやる!ゲッタートマホーク!!」

トマホークを携え、突撃。

莉嘉「やあああッ!!」

ドラゴ「フンッ!」

2つのトマホークが激突。

莉嘉「ぐぬぬぬ…!」

ドラゴ「どうした?焦りが太刀筋に出ているぞ!」

ガギンッ

莉嘉「きやああッ!!」

攻撃を弾かれ、地面に勢いよく叩き付けられるゲッターアーク。

莉嘉「まだまだあ…!」

かな子「…!?統治城の外に、人が…!」

美波「え!？」

ナーガ「——」

美波「ハ虫人の……女の人……？」

ドラゴ「姉さん……！」

莉嘉「姉……?!お姉ちゃん……？」

ナーガ「ドラゴ……!もう止めてっ!!」

ドラゴ「姉さん……!今更何を……！」

ナーガ「これ以上の戦いなんて無意味よ……!これ以上傷付くのは、もう止めて……!」

ドラゴ「姉さんこそ、現実を見ろ!ゲッターの力無くしては、脆弱な存在……。こんな

奴等と対等になどなれるものか!こんな奴等、俺が潰してやるッ!!」

ナーガ「止めなさい!!ドラゴッ!!」

ドラゴ「……ッ!」

ナーガ「何故分らないの!?!争いはまた新たな争いを生むだけ。貴方の戦いは、貴方

自身の自己満足でしかないのよ!!」

ドラゴ「……何故だ」

ナーガ「ドラゴ……!」

ドラゴ「何故そこまで、サル共の肩を持つ!?!奴等の支配を受けることが、我々にとつ

て正しい未来だと言うのか!!」

ナーガ「支配とか、そう言うのじゃないのよ!お互いに手を取り合い、共生するためには……!」

ドラゴ「2つの種族に、共生などあり得ん!あるのは支配するか、されるか。それだけだ!」

ナーガ「違う!お互いのわだかまりを捨てれば、必ず手と手を取り合える筈よ!私達が諦めてしまうのは、ダメなの……!」

ドラゴ「……はあ、もういい」

ナーガ「ドラゴ……?」

ドラゴ「姉さん……。姉さんは俺にとつて、かけがえの無い家族だった。父も、母の顔も知らない俺にとつて、貴女存在は限りの無いものだった」

ドラゴ「けれど、姉さんが、ハ虫人の誇りを捨て、サル共に恭順する道を選ぶと言うのなら、そんな貴女はもう要らない」

ナーガ「ドラゴ……!」

ドラゴ「せめて、俺の中で生きてくれ、姉さん!」

ピクノドンが、ナーガに向けてトマホークを振り下ろす――。

ガギンツ



ナーガ「!?」

ドラゴ「っ!!」

莉嘉「ぐぎぎぎ……!!」

ピクノドンとナーガ。その間に入って、ゲッターアークがトマホークを受け止める。

莉嘉「勝手に2人で盛り上がらないでよね……アタシ達の戦いは、まだ終わった訳じゃないんだから!」

ドラゴ「死に損ないがア!!」

莉嘉「まだ死んだ訳じゃないツ!!」

ピクノドンを弾き飛ばす。

ドラゴ「くっ……!!」

莉嘉「……ドラゴのお姉ちゃん、か。ちよつとやりにくくなるかな。けど……!!」

ドラゴ「遠慮無くトドメを刺してくれる!死ねえ!!」

莉嘉「ゲッタービーム!!」

ドラゴ「!?」

襲い掛かるピクノドンを、ビームで退ける。

莉嘉「へへっ、さっきの仕返し☆」

ドラゴ「だが、こんな付け焼き刃で!」

シユバツ

ドラゴ「!?」

莉嘉「アンタは!!」

ゲッターアークのトマホークが、振りかざされる。

ドラゴ「くっ……!」

莉嘉「自分の事を心配してくれる人の気持ち、考えたこと無いんだ!」

ドラゴ「何が言いたい!?」

莉嘉「アンタのお姉ちゃんは、ずっとアンタのことを考えて、アンタの身を案じてるってことだよ!」

ドラゴ「そんなもの……!そんなこと、貴様に分かるものか!」

莉嘉「分かるよ!私にだって、お姉ちゃんがいる!だから分かる!!」

ドラゴ「何:!:?」

莉嘉「アンタの気持ちだって分かるよ。お姉ちゃんって、ちよつと先に生まれたからって偉そーにしてくるし、何をやるにしたって2言目にはダメダメって、正直鬱陶しいって思う時もあるよ」

ゲッターアークとピクノドン、2体の轟撃が激しさを増す。

莉嘉「けどそれは、アタシに傷付いて欲しくないから。後悔して欲しくないから!自

分の傍にいる、かけがえの無い家族には、明るい未来を送って欲しいからなんだって。アタシは分かった！」

ドラゴ「敵の戯れ言を……聞く気はないッ！」

莉嘉「ぐう……！」

ドラゴ「はああああッ！」

莉嘉「ツ……！バトルシヨットカッター!!」

ガギインツ

ドラゴ「ぐうッ!?相手のゲッターの動きが速くなっている……!?!」

大上段で斬り掛かったピクノドンを、バトルシヨットカッターで迎え撃つ。

かな子「莉嘉ちゃん、すごい気迫……」

美波「……」

美波（アーク号のゲッターエネルギーレベルが上昇してる……。これは、まるで……）

莉嘉「アンタはア!!」

バトルシヨットカッターで、ピクノドンの持つトマホークに競り勝つ。

莉嘉「そうやって耳を塞いで目を瞑って、自分だけの世界に閉じ籠もって!自分の思う通りにならないからって駄々捏ねて!アタシより年上みたいだけど、まるで子供じゃん」

ドラゴ「貴様ア……！」

莉嘉「そんな子供に絶対負けな……！他人の気持ち……大切な家族の気持ちも考えられないような奴に、負けるわけなんかないッ！」

ズオオオオツ

ゲッターアークが携えたトマホークの刃に、ゲッター線の光が宿る。

莉嘉「やあああああゝッ!!」

ドラゴ「くっ……！」

ズワオツ

ドラゴ「何?!」

大きく後ろへ飛び退いて、トマホークの一撃を躲す動きをしたピクノドン。しかし、打ち下ろされたトマホークから、真空刃のように放たれたゲッターエネルギーが、着地したピクノドンを貫いた。

ドラゴ「ぐう……!?!今のは……?アークの力をコピーしたピクノドンに、あんな能力はなかったが……ぐうッ!?!」

吐血。

ドラゴ「ガッ……はあ……つ。これは、ゲッター線の影響か……。このままでは、長くは保んか……」

バサツ、と翼を開いて、ピクノドンが後退していく。

莉嘉「逃げるの!？」

美波「待って、莉嘉ちゃん」

莉嘉「!？」

美波「深追いは禁物だよ。難敵を退けられただけ、良しとしましょう?」

莉嘉「……」

鉄甲鬼「囹役、ご苦勞だったな。ゲッターアーク」

かな子「鉄甲鬼さん! ザウルスチームの人達も」

ガンリユー「お陰で、こちらは目的を果たしましたよ。今頃、外の無人メカザウルス

は、無力化させられた筈です」

ゴズロ「手柄は、貰った」

かな子「そっか……。それじゃあ、作戦は、成功……」 フウ……

芳乃「帰って勝鬨を上げるのでしてー」

莉嘉「アタシ達の勝ち……。あ……」

ナーガ「……」

鉄甲鬼「ナーガ様、でしたな」

ナーガ「……はい」

鉄甲鬼「このような手段で拝謁したこと、御許し下さい」

ナーガ「いえ…。今は統治者と言う立場でありませぬ故、どうか氣を楽にして下さい」  
鉄甲鬼「しかし、このマシーンランドをよく知る者、と言うのは間違いないでしょう。ここを拠点とし、指揮を執っていた急進派の者達も撤退しました。であれば、我々が敬意を払うべきは、貴女になります」

ナーガ「…そうですね」

鉄甲鬼「それを踏まえた上で、幾つか許可して頂きたいことがあります」

ナーガ「許可して頂きたいこと…？」

鉄甲鬼「1つは、我々、穩健派勢力の部隊の駐留。そしてもう1つは、この交易マシーンランドを、急進派勢力との戦いの為の拠点として頂きたいのです。その為の許可を」

ナーガ「……。分かりました」

鉄甲鬼「有り難う御座います」

ナーガ「1つだけ、いいでしょうか？」

鉄甲鬼「無論です。どうぞ」

ナーガ「話を、させて下さい。貴殿方を指導する者と、穩健派の統治者と…——」

ドラゴ「カハツ…！くつ…！ゲッターロボ…：対ゲッター線処置を万全に施したピク

ノドンのコックピットまでも貫いてくるとは……！」

再びの吐血。吐き出されたモノが、シートの足元に赤黒い血溜まりを作る。

ドラゴ「ぐっ……ぐ……ぐ……ぐう……！ 死なん……！ 俺は死なんぞ……！ この惨めなまま……死んでたまるか……っ！」

『おい！ 何時まで黙っている!? 聞こえていないだろう！ 返事をしろっ!!』

ドラゴ「マシーンランドからの脱出艇……。乗っているのは……」

コモド『貴様っ！ 乗っているのは分かっているぞ！ ドラゴ!! いい加減返事をせんか！』

ドラゴ「コモド……様……」

コモド『貴様ア……！ マシーンランドを捨てておめおめと逃げ出すとは！』

ドラゴ「お互い様でしょう？ 貴方こそ、ナーガ様はどうされたのです？」

コモド『うゝ、うるさいっ！ 貴様に統治城の防衛を任せたのが失敗だったわ……。名誉挽回の機会を与えてやる。精々感謝するのだな』

ドラゴ「名誉挽回の、機会……？」

コモド『俺を本丸まで護衛しろ。無事に帰還出来たならば、今回の失態については不問にしてやる』

ドラゴ「……」

コモド『どうした？早く復唱せんか！』

ドラゴ「アンタを生かす意味が、俺にあるんですかね？」

コモド『は？』

グシヤア

ピクノドンが脱出艇を握り潰す。

ドラゴ「……キャプテン・コモドは、反体制派勢力と果敢に戦い、名誉の戦死を遂げられた。そう伝えておきますよ。ふふふっ……！」

ドラゴ「俺がキャプテンになる！俺が兵を率いる、力を得る！そうすれば、忌まわしいゲッターも、姉さんだって、必ず——！」

つづく



## 第12話『暴竜の城』

~~~~~ 統治城 応接間 ~~~~~

ナーガ「久し振りね…。暫く見ない内に、随分と立派になって」

カムイ「……」

ナーガ「最後にこうして顔を会わせたのは、何時だったかしら」

カムイ「もう何年も、昔の話になります。各マシーンランドの代表が集まった、園遊会の時の……」

ナーガ「…思い出したわ。あの時、私は人生で初めての社交界に緊張していて、貴方はまだ幼い子供だった」

カムイ「ええ。純血ではなく、雰囲気に馴染めずにいた私にも、貴女は優しくしてくれましたね。実の姉だと思って、慕ってくれて良いとも」

ナーガ「…そんな小さかった貴方が、今は穏健派の代表……王だなんて。まだ信じられないわ」

カムイ「私自身、分不相応なのは、理解していますよ」

ナーガ「……！ ごめんなさい、そう言うつもりじゃ……」

カムイ「謝る必要はありませんよ。今だって、本当のところは必死なんです、政に関わるのは。正直に言つて、武器を手に、前線に立つ方が性に合っている」

ナーガ「可笑しな事を言わないで。貴方までが戦いの道を選ぶようになってしまったら……！」

カムイ「ふっ……分かっていきますよ。人間とは、平和的に会談するつもりです。しかしその前に先ず、彼らの信頼を得なければならぬ」

ナーガ「それが、急進派勢力を倒す大義名分、と言う事なの？」

カムイ「グールは人類を見下し、自分が正当な地上の支配者だと、己の才量を過信している。そんな人間では、まともな話し合いも出来なければ、最早人類など関係なく、地球そのものが破壊されてしまうだけだ」

ナーガ「…確かに、グールのやり方は先代ゴール帝王と同じ。それではまた同じ轍を踏むか、より最悪の結果を生むと言うのだけには、同意します」

カムイ「だけ……？」

ナーガ「けれど、今の貴方のやり方も、性急過ぎるわ」

カムイ「……」

ナーガ「今日も人間側のゲッターロボをはじめ、穏健派勢力は出撃しているそうね」

カムイ「急進派勢力の拡大を防ぐ為には、一刻も早く彼らの拠点となっているマシー

ンランドを解放しなくてはなりません」

ナーガ「その為に、兵に休息も与えず出撃を強要するの？それではグルルと同じよ、貴方も」

カムイ「……。強要は、していないつもりです。人間側の協力者、莉嘉達もこの戦いの重要性を理解してくれています」

ナーガ「貴方には、大義名分の他に、急進派との戦いを急ぐ理由があるのではなくて？」

カムイ「それは……」

ナーガ「分かっている……いいえ、理解するわよ。だって、貴方のお母様は……」

カムイ「だとしたら、貴女は俺を笑いますか。ナーガ」

ナーガ「……」

カムイ「貴女の言う通りですよ。俺には、母さんにはもう時間がない。母さんの故郷である地上、地上に降り注ぐ太陽を、せめて一目でも見せてやりたい……！その為には、マシーンランドを海上にでも浮上させる許可を、人類に取り付けるしかないんだ！」

ナーガ「その為に、明確な結果があるのね……」

カムイ「そうだ。俺は、俺の為に戦っている。穏健派の敵を、ハ虫人類の大義名分を王の名の元に利用して……！」

ナーガ「貴方……！」

カムイ「笑うなら、笑って下さって結構です。蔑みも、非難も受け止めましょう。しかし、我々はもう動き出したのだ。この勢いを、止めるわけには行かないっ！」

ナーガ「……」

カムイ「俺は、ハ虫人と人間のハーフ。だが、母さんは純粋な人間だ……人間の為に力を貸してもらうぞ、ゲッターロボ——！」

~~~~~ 交易マシーンランド 格納庫 ~~~~~

ハ虫整備兵「ゲッターアーク、帰還します！」

プシユウウ……

莉嘉「ふう……やあつと帰ってこれた……。本日の業務終了了☆」

かな子「お疲れ様、莉嘉ちゃん」

莉嘉「お互い様じゃない？」

かな子「ううん。今日の戦闘は、本当に良く頑張ってくれたよ。もう毎日みたいに出撃してて、まともに寝てる時間もないのに……。体、しんどくない？」

莉嘉「へへっ☆全々然！逆に目が冴えてて、眠れないって感じ。戦えって言われたら、まだまだ戦えそうな感じだよ☆」

美波「……」

かな子「へ、へく……。私は疲れてもうダメかなあ……。流石にちよつと眠いかも……」

莉嘉「ははっ！ ゆっくり休んで！ 次の出撃までは、まだ時間がある筈だよ」

かな子「えくつと、莉嘉ちゃんは……」

莉嘉「アタシは……ほら、来た！」

かな子「え……？ あっ」

ハ虫子供「莉嘉お姉ちゃくん!!」

かな子「あの子達は……」

莉嘉「莉嘉の友達☆穩健派のマシーンランドから一緒に来たんだ！」

かな子「そつか……。ここは自然域が広いから、ちよつとした自然公園みたいだもんね」

莉嘉「そーそー！ マシーンランドって人工の居住施設だけど、ここには虫もいて昆虫採集も出来るし、そう！ この前カプトムシも見つけたんだよ！」

かな子「カプトムシ、ですか？」

莉嘉「アタシの知ってるのとは大分見た目違うけど、ここで独自に進化したものなんだつて。スゴくない？ 帰ったらお姉ちゃんに自慢しちゃおうつと」

かな子「あははっ。戦闘終わりなのに、元気ですね」

莉嘉「当ったり前じゃん！ じゃ、おやつはヨロシク☆」

かな子「おやつ……？ あ、莉嘉ちゃん！」

元気良くコックピットから飛び出して、子供達の元へ向かっていく。  
莉嘉「お〜い、今行くよ〜!! あははははっ☆」

ハ虫子供「お〜いっ!! あははははっ!」

かな子「ああ…。行っちゃった…」

美波「それじゃあ、私も」

かな子「美波さん。また、ハン博士の所?」

美波「ええ、そんな所」

かな子「ハン博士もここに研究室を移して大分経ちますけど、最近よく通ってますね?」

美波「うん…」

かな子「目的は、晶葉ちゃんとの通信ですか? 何か気になることも…」

美波「大したことじゃないわ、まだ…」

かな子「まだ?」

美波「何でもない。…私なりに、調べたいことがあるの。それじゃあ!」

かな子「あつ、美波さん!」

強引に会話を打ち切り、ゲッターアークの元を離れていく美波。

かな子「行っちゃった…。美波さんも莉嘉ちゃんも、最近みんな、違うことをしてるなあ…」

かな子「……。何か、変わっていつてる気がするな。みんな——」

バイス「……」

ガンリユ「彼女達もここへ来て、もうすぐ一月ですか」

ゴズロ「連中も、すっかりここに馴染んだようだな」

ガンリユ「関係者以外は立ち入り禁止の筈なんですけどねえ」 チラツ

ハ虫兵「はっ、莉嘉さまのご友人は、立派な関係者ですので！」

ガンリユ「……まったく」

バイス「……」

ゴズロ「まだ警戒しているのか？」

バイス「そう言う訳じゃない、が……」

ガンリユ「が……？」

バイス「……」

カムイ「気になることがあるのなら、直接聞いてみれば良い」

ゴズロ「!？」

ガンリユ―「で、殿下…？何故ここに…？」

カムイ「兵を労うのも、王の務めだからな」

ガンリユ―「ですが…」

カムイ「…」

バイス「殿下も、莉嘉の事が気になるので？」

カムイ「…まあ、そんな所だ」

子供「莉嘉ねーちゃん。今日は何するの？」

莉嘉「そうだね。鬼ごっこは昨日もしたし…つと、うん？」

カムイ「…」

子供「あつ！王様！」

子供2「王様、こんには！」

カムイ「ああ。…」

莉嘉「何？」

カムイ「君も、これだけの者の信頼を得るようになったか」

莉嘉「信頼？かどうかは良く分からないけど、一緒に遊んで、楽しんでるだけだよ」

カムイ「そんな中、出撃させて悪かったな」

莉嘉「何で？戦うために、アタシは来てるんだよ？そこは気にしないでよ」



カムイ「…辛くはないか」

莉嘉「全く然つ☆この子達のためにも、アタシは戦ってるんだって。実感できるから、まだまだ戦えるよ！」

カムイ「そうか…」

莉嘉「だから、ありがとね☆カムイ！」

カムイ「ありがと…?」

莉嘉「アタシとみんなを会わせてくれて！カムイが晶葉に頼んでくれなかったら、こうはならなかったよ」

カムイ「私も、君達に協力を要請して良かった」

莉嘉「お互い様って訳だね？」

カムイ「これからも、私達のために戦ってくれるだろうか？」

莉嘉「当たり前じゃん☆カムイとなら、きっと上手くやれる。人間とハ虫人、共生だつて出来ると思うから！」

カムイ「そう思ってくれることは、ありがたく思う」

莉嘉「アタシはやるよ！何でもかんでも、気に入らない奴を力で押し伏せようって相手を、1つ残らず叩き潰すんだ」

カムイ「……」

莉嘉「アタシに難しい話は分からないよ？難しいことは、出来る人がやってくれらる。だからアタシは、目の前に来る悪い奴をやつつける！それで開けてくることも、必ずあるでしょ？」

カムイ「…ああ、そうだな」

莉嘉「うん！だからカムイは、後ろでデーモンとしてて！どんなことがあつても、必ず勝つて見せるから！——それじゃ、行こ？」

子供「うんっ！」

タツタツタツ——。

カムイ「……」

バイス「殿下？」

カムイ「人間だろうとハ虫人だろうと、関係ない、か。彼女ならば、或いは」

バイス「え？…ええ、そうですね」

くくく ハン博士の研究室 くくく

晶葉『そろそろ、来る頃だと思つていたよ』

美波「……」

晶葉『毎日、決まった時間に出撃。急進派のマシーンランドを襲撃し、作戦後帰還。帰還後は真つ直ぐ、ハン博士の研究室だ。いよいよルーチンも身に付いてくる』

美波「……」

晶葉『少しは、博士に対して申し訳なさそうにしてみればどうだ？毎日毎日、小1時間も研究室を占拠されては、溜まったものではないだろう？』

ハン「いやあ、その……。ワシは……のう……」

晶葉『……やれやれ。それで、今日は何が知りたい？何の資料が欲しい？と、言っても、早乙女博士から引き継いだ資料も、私と凜で調べた資料も、もう粗方渡した筈なんだから』

美波「……」

晶葉『美波、科学者として、ゲッター線に興味を持つてくれるのは嬉しいがな、こちらも状況は逼迫しているのだろう？今は目の前の事に集中すべきだと思うが』

美波「……卯月ちゃん」

晶葉『……何？』

美波「それに、李衣菜ちゃん」

晶葉『……』

美波「2人とも戦いの中で、ゲッターのエネルギーを増大させたことがある。どちらも土壇場と呼ばれるような状況や、正念場で」

晶葉『ふむ……。確かにそうかもしれないな。それが？』

美波「卯月ちゃんと李衣菜ちゃんのケースは、状況に左右されているようにも見える。戦いの中で、仲間を失ったり、追い詰められた状況を覆すために、ゲッターが2人の意思に応えたと言っても過言じゃないわ」

晶葉『それに対して、莉嘉は違うと?』

美波「これは、交易マシーンランド解放戦に参加した時のゲッターアークのデータ。ううん、アーク号のデータだよ」

晶葉『これは…』

美波「ある一定の時間から、アーク号のエネルギー”だけ”急上昇してる」

晶葉『……』

美波「この時間は丁度、ゲッターアークが統治城まで追い込まれた所、私達の前にナーガさんが現れて、ドラゴとナーガさん、2人が姉弟だと知った瞬間。莉嘉ちゃんがドラゴに対して、明確に怒りを抱いた瞬間よ」

晶葉『成る程。莉嘉の怒りにゲッターが応えたか』

美波「だとしても、この増大の仕方は歪じゃない? 卯月ちゃんと李衣菜ちゃんの時は、ゲッターが、ゲッターロボそのものが、パイロットの意思に corresponding しているみたいだった。けどこの場合は、そうじゃない」

美波「ゲッターがパイロットの意思に呼応してるんじゃない。莉嘉ちゃんが、ゲッ

ター線を引き出している。そう言う風に、私には見えるんだけど」

晶葉『……』

美波「ゲッターには、私達には分からない秘密がある。どうなの？晶葉ちゃん！」

晶葉『…確かに、莉嘉はこれまでの誰にもない、ゲッター線に対する高い親和性を持っているようだ』

晶葉『だが、それがどうかしたのか？』

美波「!? 分からないって言うつもり!? このまま戦い続けてもいいの!? 莉嘉ちゃんは  
どうなるの?!」

晶葉『ゲッターに対して、随分と熱心になったじゃないか。美波も、ゲッターに取り憑かれたのか?』

美波「……!」

晶葉『なあ、美波。先の戦いで、莉嘉やお前達に不都合があったか?』

美波「それは……ないけど」

晶葉『ならば、それが真実だ』

美波「真実……?」

晶葉『今回も、そしてこれまでも、ゲッターは我々人間の側に付き、その力を貸してくれた。莉嘉の場合にしてもだ。美波が心配するほど、悪い方に転んだりはないさ』

美波「どうして、そんな……」

晶葉『ゲッターの力を信じろ、美波』

美波「……」

晶葉『急進派が自身の勢力として、鬼獣を使用してきたと言う報告は、かな子から受けている。同時に、鬼獣の裏に誰か糸を引く者がいる可能性もな』

晶葉『連中の目的が何なのかは見当が付かん。だが、我々に敵対し、ゲッターに反旗を翻している時点で、我々の未来を阻む障害であるのは間違いない』

晶葉『鬼獣の黒幕の正体……その真意と、美波達が手にする未来。それら全ての答えに辿り着くためには、今を生き残るしかないんだ。そして、今生き残るためには……』

美波「ゲッターに乗って、戦うしかない……」

晶葉『そう言うことだ。急進派との戦いも、決戦が近いだろう？吉報を待っている』

プツン——

美波「……」

ハン「向こうから勝手に切るとは、珍しいのう。美波ちゃん？」

美波「……」

——。

~~~~~ 急進派マシーンランド 玉座 ~~~~~

ハ虫兵「第3マシンランド、陥落ッ!!」

ハ虫兵2「第5、第7マシンランドからも、派兵していた部隊が次々に敗走して来ています!」

ハ虫兵「反体制派の勢力が、日増しに拡大していつています!各マシンランドでの敗走だけならまだしも、兵や民にも、次々に反体制派へと離反する者達も増え……このままでは……!」

シユルンツ

ハ虫兵「ぎゃっ!!」

ハ虫兵2「ひィっ!!?」

グール「負けました、負けましたと……口を開けば詰まらぬことばかり……。言われずとも分かっておるわ!」

ハ虫兵2「あっ……あぁっ……!」

グール「貴様!」

ハ虫兵2「はいいッ!!自分は、グール様に忠誠を、永遠に誓う所存でありまアす!!」

グール「ほほう……。先程の奴とは違って骨のある奴、ではなく。先の戦闘で、ゲッターは確認されたか?」

ハ虫兵2「は……?はっ!先の第3マシンランド、第7、第14マシンランドでの

戦いでも、穩健派のゲッターロボ部隊を確認しております」

グール「ほう……。ゲッターはまとめて動かしておるのか……。…そうとも、貴様らにとつてゲッターロボは我々への最大の戦力。割けんよなあ」

ハ虫兵2「ぐ、グール様……。次の作戦は、どのように？」

グール「……。もう良い。今各地で敗走が続いておるのは、戦線を拡大しすぎたが故の綻びが原因。空気を入れすぎた風船を割れぬようにと守つても無駄なのだ。必ず、針の一刺しで破られてしまう」

ハ虫兵2「はあ……」

グール「マシーナランド制圧に出した部隊を引き上げさせい。さすれば、連中も、決戦と意気込んでここに攻め入つてこよう。そこを、我々の最大の戦力で一気に壊滅させる」

ハ虫兵2「成る程……。了解致しました！では、至急派遣中の部隊に撤退命令を出します」

グール「頼むぞ」

ハ虫兵2「はっ！」

タツタツタツ——。

グール「……。ふう」

??? 「随分と勇ましいですね」

グール「何用だ。貴様の謁見を許した覚えはないぞ。ドクター・マクドナル」

マクドナル「水臭いことを。我らの間に、遠慮は無用でしょうか？」

グール「遠慮は無用だが、不躰では些か、今後の信頼に欠ける」

マクドナル「これはこれは。失礼を」

グール「して、何用だ」

マクドナル「例の兵器の最終調整が終わりましたので、そのご報告までに」

グール「貴様らの虎の子とやらか。随分と掛かったものだな」

マクドナル「何分生体機械であります故、調整は繊細でしてね。グール様の覇道の

采配のように」

グール「ふんつ、笑えん冗談だ。その虎の子が、交易マシーンランドでの戦いに間に

合っておれば、みすみす奪われずに済んだやも知れぬものを……」

マクドナル「ご指摘は尤も。必ずや、次の戦いで成果を挙げてご覧に入れましょう」

グール「精々恥を掻かぬようにな。ゲッターの相手、負けるわけにはいかん」

マクドナル「……。グール様は、本当にゲッターに勝てると思いで？」

グール「何だと？」

マクドナル「気分を害されましたらご容赦を。ただ、来るべき決戦に備え、後の帝王

の覚悟を、確認しておきたく思いましたね」

グール「無論、負けるつもりなど毛頭ない。ゲッターなどと言う存在にはな……！」

マクドナル「……ほお」

グール「ゲッターは恐竜帝国の、いや、ハ虫人類全体の仇敵！ゲッターへの勝利なくして、この恐竜帝国の真の統治者など成り得ぬ。まして、ゲッターの庇護を受ける憎きサル共と手を結ぼうなどと……。生温い和平政策など、愚の骨頂!!」

マクドナル「流石。それでこそ、我が主が認めた同志と認めた御方」

コンコン

『ドラゴ、参上しました。お呼びでしょうか、グール様』

マクドナル「おや、来客のようですね」

グール「良い。貴様もそこで控えておれ」

マクドナル「はっ……」

グール「……。入れ」

ドラゴ「失礼します。……？」

マクドナル「……」

グール「心配無用だ。これこそ、我々の覇業に尽力してくれている、我が同志」

ドラゴ「同志……。貴方が……」

マクドナル「……」 一礼

グール「早速だが、ドラゴ。貴様、キャプテン・コモドの最期を看取ったそうだな」

ドラゴ「……。はっ。ゲッターを相手に、勇ましい最期でありました」

グール「うむ、そうか……。貴様のような有望株を遺したのも、コモドの手腕によるものなのだな」

ドラゴ「……」

グール「貴様にキャプテンの称号を授ける。これからは貴様が兵を率い、我々恐竜帝国の未来の為に戦うのだ」

ドラゴ「はっ！ 真の恐竜帝国の未来は、グール様の元に！」

グール「よろしい。キャプテン昇格に伴い、貴様に専用の兵器を与える。メカザウルスではない、我々の新兵器をな」

ドラゴ「メカザウルスではない、新兵器……？」

マクドナル「グール様、まさか……」

グール「貴様の虎の子は信頼しておるよ。だからこそ、我ら恐竜帝国の精鋭が駆らねば。恐竜帝国の新たな歴史と栄光が、今ここから始まるのだ」

??? 「……御意のままに」

グール「では、キャプテン・ドラゴ。我が同志を伴い、格納庫に。決戦の行方を左右

するのだ。期待しておるぞ?」

ドラゴ「はっ! 必ずや、グール様に勝利を!!」

~~~~~ 数日後 ~~~~~

莉嘉「……」ポーツ

かな子「…かちゃん? ……莉嘉ちゃん!」

莉嘉「うわっ?! いきなりどうしたの? かな子」

かな子「さつきから何度も呼び掛けてましたよ?」

莉嘉「え? あく……そうだった?」

かな子「もうっ。…やっぱり、ちよつと疲れてます?」

莉嘉「大丈夫大丈夫。体の力を抜いて、緊張を解してたんだよ。ほら、戦闘前のリラッ

クスタイムって奴」

かな子「なら、いいんですけど」

莉嘉「それよりもさあ、何で今日はゲッターキリクで出撃なの?」

美波「何時もは、莉嘉ちゃん達に頑張つて貰ってるから。偶には、私も頑張らないと」

莉嘉「ふうん?」

かな子「ですけど、幾ら深海用に調整して貰ったって言っても、水中じゃキリクのス

ピードは生かせないですよ？」

美波「そのくらいの手合で、実力で何とかしてみせなきゃ」

莉嘉「何でもいいけど、苦しくなったら直ぐにアタシかな子に代わってよ？今日の戦いは、恐竜帝国にとっても大事な戦いだもん。みんなの足を引っ張る訳には、いかないよ！」

美波「……」

ニオン「貴様も、大局の流れは見えるようになったんだな」

莉嘉「そりゃあ、アタシは子供だけど、急進派最大のマシーンランドを叩くって言われたら、決戦が近いことくらい察するよ」

ニオン「…そうか」

鉄甲鬼「最後の戦い、と言うわけではないがな」

莉嘉「けど、グールとか言う偽帝王を倒すんでしょ？アタシ達が勝てば、急進派の勢いは小さくなる……！」

ドロス「だが、倒すことばかりが、今回の作戦ではないことを、忘れるなよ？」

莉嘉「ドロス！」

ドロス「確かに、急進派マシーンランドの制圧は、今回の作戦の達成すべき目標の一つ。だが、もう一つの本命が……」

バイス「皇子・ゴール3世の救出！」

莉嘉「それは、さっきのブリーフィングで聞いたけどさ。けど今の穩健派には、カムイ殿下だって、ナーガさんだっているんでしょ？皇子の存在って、そんなに大切なの？」

ゾル「生まれの血が持つ力と言うものでな。古い人間ほど、そう言った血筋や順列を気にする」

ガンリユー「その点、ゴール3世皇子は前帝王ゴール様の直系筋……。カムイ殿下の事を混血だからと、快く思わない人間を、納得させる材料にはなるのですよ」

美波「王族の正当な後継者が、穩健派のやり方に賛同してくれた方が、今後穩健派にとっても動きやすいって事ですか？」

「それだけではない」

ドロス「この声……殿下!？」

莉嘉「後ろからおっきい反応……。これって！」

かな子「私達が知ってるのと形が少し違いますけど……無敵戦艦ダイ!？」

ゾル「深海用に改造されたダイだ。まさか、殿下が御自らとは……」

バイス「……あれは」

ダイの口が開き、中から艦載機が放出される。それは、

美波「メカザウルス・ギガス……。もう実戦に?」

莉嘉「何か1機、派手なのがいるよ！」

そう言うって莉嘉が指したのは、ギガス部隊の先頭に立つ、金をあしらった装飾の豪奢なギガス。

ドロス「あれは、王族用に開発されたギガス！」

鉄甲鬼「と、言うことは、あれに乗っているのは……」

カムイ「同道させてもらう」

ゴズロ「やはり、殿下……！」

ドロス「何故自らメカザウルスに……？」

カムイ「ふっ。王が先頭に立たねば、民達は付いてきてはくれまい？」

ドロス「しかし……！御身にもしもの事があれば……！」

カムイ「良いのだ。私の事など最早……」

ドロス「……今、何と？」

カムイ「先程の話を続きだ。ゴール皇子を救い出しても、その威光を利用するだけなら、結局はゴールと同じ」

カムイ「皇子はまだ幼い。だがゆくゆくは、地上の人間達とも手を結べる、新たな恐竜帝国を背負って立つ存在になって欲しいと考えている」

ゾル「王位を、皇子に譲ると言うのですか……!？」

カムイ「ゴール皇子は王位継承権第一位。当然の話だと思いが？」

バイス「それでも、今我々を率いているのは貴方です！」

カムイ「使命を全うする。真の王に想いを託す。偽りの王としての、最期の使命を！」  
ハ虫人一同「「殿下ッ!!」」

莉嘉「想いを託すなら、ちゃんと生きて帰ってこなくちゃ、ダメだよね？」

カムイ「……」

莉嘉「命懸け〜とか、死力〜とか、カツコつけたことばつか勝手にやって、後のことは生き残った人達にお任せ〜って言うのは、流石に無責任だよ」

かな子「私もそう思います。その、皇子に穩健派の想いや考えを継いで貰いたいって言うのが殿下のお考え、だったら、それも殿下の使命として、全うするべきだと思います」

美波「穩健派の事だけじゃありません。人間の事、地上の事……これからの恐竜帝国の未来の事……。ちゃんと皇子と正面から向き合って、ちゃんと教えられる人じゃないと……」

莉嘉「カムイなら適任だよ☆だからちゃんと生きて帰って。モチロン、アタシ達だつてカムイを死なせないように頑張るから！」

カムイ「……」



鉄甲鬼「頑張るのは、莉嘉だけじゃない」

芳乃「然りー。王の身を案じるのであれば、己の身を槍とし盾とし、王を守ることに、全力を尽くすのでしてー」

ドロス「おお、そうだな！王の覚悟を無駄にするなど、家臣が尤もしてはならぬこと」  
バイス「言われるまでもない！これまでのように、俺達が勝てばいいだけの話だろう！」

ゾル「やりましょう！殿下がいてくれれば、百人力、鬼に金棒です！」

カムイ「…皆、感謝する」

莉嘉「へへっ☆…カッコいいマシンだね？」

カムイ「私は、普通のでいいと言ったのだがな。王の活躍は、後の喧伝にもなる」と

莉嘉「左の腕、ドリルになってるんだ？」

カムイ「ああ。何故だが、この方が無性にしっくりと来てな。急場凌ぎだが、付けさせた」

芳乃「牙城が見えて参りましたー」

莉嘉「!? 牙城……急進派のマシーナランド、つて……デカっ！」

かな子「海底奥深くまで、ずっと広がってる……。これまでのマシーナランド3つ分、いや、それ以上じゃないですか!？」

ニオン「元々は恐竜帝国の種を存続させる、メインマシーンランドの1つだったからな。人工が増える度に増設を行い、この規模になった」

ドロス「故に、敵の戦力もこれまでの比ではないぞ。改めて覚悟は出来ておるか？ 莉嘉ちゃん！」

莉嘉「当ったり前じゃん！ 興奮しすぎて武者震いがしてくる……！ 必ず攻略してみせるよ、この暴竜の城——！」

つづく

# 第13話『彼方へ…』

~~~~~  
??? ~~~~~

ツカツカツカ——

マクドナル「……！」

??? 『ようやくか……。もう直ぐで寝入ってしまうところだったぞ』

マクドナル「既にお待ちであったとは。申し訳ありません」

??? 『良い。ほんの手遊びに、少々先行きを見通したまでの事。余興よ、余興』

マクドナル「は……」

??? 『して、趨勢はどうなっておる？』

マクドナル「急進派と言う勢力も、そう長くはないでしょう。グールめは充分な野心を持つておりますが、ゲッターに歯向かうには力が足りぬのです」

??? 『ふむ……。やはり蜥蜴風情に、ゲッターの相手は荷が重かったか』

マクドナル「対するゲッターは日が経つ毎に力を増しております」

??? 『ゲッターアーク……。繰り手は城ヶ崎莉嘉……ふっふっふっ』

マクドナル「……?」

???『美しい…。そうは思わんか? マクドナル』

マクドナル「は…?」

???『戦場に立つ姿は戦女のように凛々しく、それでいて黄金に煌めく流れる髪に、決意と好奇心、そして隠しきれぬ悲哀を秘めた眼差し…。戦乱の中で完成された芸術とも呼べよう』

マクドナル「……」

???『幼いながらに強く、勇ましく、美しい。そこにゲッターと言う力が宿り、今の彼女と言う器が形作られている』

マクドナル「それには同意致します。年端の行かぬ小娘とは思えぬ程、獅子奮迅の力を見せつけております」

???『その器、この手で壊してやりたいものよ。彼女の全てを奪い、心の枝葉一枚まで折り散らして屈服させ、我が手中で飼育してやりたいものよ…っ!』

マクドナル「では…」

???『予定通り、計略を進めよ。ゲッターを然るべき舞台へと誘うのだ』

マクドナル『ご随意のままに…——清明様』

清明『愉しくなってきたではないか。ゲッターアーク、城ヶ崎莉嘉…。早く相見えた

いぞ? くつくつくつ——』

くくく 急進派マシーンランド 近隣海域 くくく

カムイ「第1、第2攻撃隊は前進!! 同時、無敵戦艦ダイはマグマ砲を斉射せよ! 突出してくる敵迎撃部隊の第一陣を、可能な限り砲撃で落とすのだ!!」

ダイ『ギヤアアアオツ!!』

カムイの指揮に従い放たれふ無数のマグマ砲。深海でも冷える事のない赤いマグマの砲弾が、カムイの戦力を削ぐ為に出撃した迎撃部隊の一団を穿ち、一瞬仄かな爆炎を生んで散らす。

バド『キシヤアアアアツ!!』

ザイ『グオオオオツ!!』

ズー『ガアアアアツ!!』

ジガ『シャオオオオツ!!』

同時、左右から押し寄せるメカザウルスの群れがぶつかり合い、破壊、破壊の乱戦が展開される。

バイス「はあああツ!!」

ゾル「うおおおツ!!」

ドロス「でえええいツ!!」

有人部隊も前線に切り込み、ゲッターザウルスと、ゾルの駆るギガスはダブルシュテルンやトマホークを振るって敵メカザウルスを粉碎し、その後方でゲドが魚雷を斉射。前進する2機を支援する。

莉嘉「スゴ：ツ！ランドウとの決戦でも、こんな激しくならなかったよ！」

かな子「正に大決戦……！気を抜いたら、ゲッターでも撃墜されちゃいますよ！」

莉嘉「そんなへま今更しないから大丈夫！ね、美波！」

美波「ええ！作戦の規模は違つても、する事は前の交易マシーンランド戦の時と同じ。皇子救出の為に、先ずはマシーンランドに突入しないと！」

莉嘉「一点突破なら、キリクの見せ場だね！やっちゃえ、美波☆」

美波「やあつ！」

ゲッターキリクの加速。水中の抵抗をもともせずグングンと速度を上げ、敵陣にそのドリルの切っ先を突き付け、飛び込んでいく。

美波「ドリル・アーム!!」

渾身のドリルによる一撃。唸るドリルが周囲に海流の衝撃波を作り、複数のメカザウルスをまとめて撃破していく。

美波「このまま押し切ります！——っ!?」

ゲッターキリクの横を、一迅の旋風が駆け抜けていき、ゲッターキリクに肉薄してい

たメカザウルスを貫く。

美波「これは…」

カムイ「支援する。共に突破口を切り開くぞ」

美波「カムイ殿下…!」

カムイ「ゲッターキリクか…。何故だろうな、隣に立つと、不思議な気持ちになる」

美波「あ、ありがとうございます…?」

カムイ「実戦は初めてだが、足手まといにはならん!」

美波「心強いです。では、一緒に!」

カムイ「ああ!!」

美波・カムイ「ドリル、アター…ツク!!」

ゲッターキリクとカムイギガス。2つのドリルが1つの巨大な螺旋となって厚く展開した敵の防衛戦を穿つ。

ゾル「!?ゲッターキリク…!カムイ殿下!」

鉄甲鬼「道が拓いたな!」

ドロス「皆の者、2機の後につけっ!!」

バイス「了解!!」

ゲッターキリクとカムイギガスが穿ち抜いた防衛網の穴に、後続が続いていく。

美波「……！殿下、危ないっ！」

カムイ「!?」

美波「きやああっ!!」

突撃の姿勢にあつたカムイギガスに放たれた横撃を、ゲッターキリクが庇い、代わりに受ける。

カムイ「大丈夫か!?」

美波「はいっ。損傷は軽微です！」

莉嘉「けど、ドリルアタック中に横から攻撃を仕掛けてくるなんて……！」

かな子「美波ちゃんを攻撃した相手の反応、捉えました！スゴく速い……！」

莉嘉「これ、水中の速度……！」

かな子「反応がこつちに向かってくる……。戻ってきます！」

美波「っ……！」

敵の動きに合わせて機体を正対させ、ドリルを翳して敵の突撃を受け止める。

美波「ぐう……！こ、この敵は……！」

かな子「メカザウルスじゃ、ない……！」

ドラゴ「そうだ」

莉嘉「その声……ドラゴ!?そのマシンに……マシンなの？」

かな子「確かに、マシンって言うよりは怪獣……生き物みたいな……」

ドラゴ「そうだ。これこそが恐竜帝国に与えられし、究極の生物兵器・空魔獣グラン
ゲンだ!!」

かな子「生物兵器……」

莉嘉「空魔獣グランゲン!?!何かカッコいい!」

かな子「な、名前だけじゃないかな……」

ドラゴ「今日こそその首級をもらうぞ、ゲッターロボ!!」

美波「うう……!」

力づくで組み合うゲッターキリクを弾き飛ばす。

美波「っ……!何て、パワー……!」

かな子「これまでのメカザウルス以上……ううん、百鬼メカやメタルビーストなんか

よりもずっと上です!!」

ドラゴ「そんな生半可な連中と一緒にされては困るな!」

シュルン、とグランゲンの右腕が触手に変わり、ゲッターキリクを捕縛。

美波「しまった!?!」

ドラゴ「そのまま深海で潰れるがいい……!」

美波「くう……う……っ!」

莉嘉「こんな細っこい触手、パワーで千切れないの!？」

美波「ダメ：っ！キリクのパワーじゃ…！」

莉嘉「手も足も出ないの!？」

ニオン「うおおおッ!!」

ドラゴ「!？」

ダイノゲッターのトマホークによる、大上段の一撃が、ゲッターキリクを拘束した触手を斬り断つ。

ドラゴ「ふん…。命拾いましたか」

美波「あ、ありがとうございます！」

鉄甲鬼「礼なら後回しだ！今は体勢を立て直せ！」

美波「は、はいっ！」

グランゲンから距離を取り、ダイノゲッターらと合流する。

ドロス「やれるか？美波殿」

美波「大丈夫ですっ！こんな損傷くらい…！」

ゾル「よし、ならば一気に敵のエースを…」

かな子「いえ、ここは…」

莉嘉「莉嘉達にお任せって！」

ニオン「何…?」

バイス「まさか、お前達だけで、あれの相手をするつもりか!」

かな子「確かに、敵の能力は未知数です。だからこそ、ここで時間を掛けられるわけには行かない筈です!」

鉄甲鬼「…確かにな」

ガンリユ―「正気ですか!? 私達くらいでも、支援に残った方が…」

カムイ「戦いは始まったばかりだ。マシーンランド防衛に展開している部隊も、これが全てではない」

ゴズロ「マシーンランドに突入した後の戦闘も考えると、下手に戦力を割くのは危険、と言うことか…」

カムイ「美波、かな子、莉嘉」

3人「…はい」

カムイ「任せたぞ」

美波「了解しました!」

莉嘉「へへっ、任せられた☆」

かな子「皇子を、お願いします」

カムイ「ああ。皆、我に続け!」

ニオン「了解ッ!!」

芳乃「莉嘉さん達ー、よしなにー」

マシーンランドへと突撃を敢行する仲間達を見送る。

ドラゴ「……ふん」

莉嘉「カムイ達は追わなくていいんだ?」

ドラゴ「2兎は追わずだ。まずは貴様との決着を着けるぞ、ゲッター!」

莉嘉「へえ、意外と女々しいんだ。ま、向かってくるなら望むところだけど……美波
!」

美波「ええ!」 グンッ

ドラゴ「っ!」

ゲッターキリクが高速機動。グランゲンがそれに追隨する。

美波「!?!」

ドラゴ「遅いな!」

美波「きやつ!?!」

グランゲンの触手の鞭打が、ゲッターキリクを打つ。

ドラゴ「どうした? スピードが自慢なのはなかったのか?」

美波「くう……!」

ドラゴ「ふっ…!!」

美波「なっ…!!待って!!」

突如、高速でゲッターキリクから距離を取ろうとするグランゲンを追撃。

美波「ぐっ…!!」

ドラゴ「ふふっ…」

莉嘉「ううっ…!!」

かな子「美波さん、落ち着いて下さい!これ以上は、水圧でキリクがバラバラになっ

ちやいます!」

美波「くっ…」

莉嘉「ダメ…!!止まっちゃ…!!」

美波「え?」

ドラゴ「そうか、止まるのか」

ゲッターキリクが速度を落としたのは、敵陣の只中。

ドラゴ「やれ」

かな子「分離を…!!」

美波「間に合わない…!!」

集中砲火が、ゲッターキリクを襲う。

3人「「きゃああああッくく!!」」

ドラゴ「他愛のない」

美波「くっ…!」

ギユンツ

ドラゴ「何…?」

美波「ドリル…! タイフーンツ!!」

ゲッターキリクを上昇させて弾幕をすり抜け、包围していた敵陣に上部からの旋風を放つ。ドリルから放たれた旋風は海流のうねりを生み、周囲にいた敵メカザウルスを破壊した。

美波「はあ…はあ…はあ…」

かな子「あのグランゲンつての相手に、周囲の敵も無視出来ない…。ゲッターキリクじゃ、流石に不利ですよ」

莉嘉「チェンジだよ、美波! アタシに代わって!」

美波「…未だ、全ての手を尽くした訳じゃない。もう少し…!」

かな子「悠長に出来る相手じゃないんですよ! ……っ!?!」

美波（変形の間を作ってくれるような相手じゃない…! 先ずは何としても、氣勢を削

がなきや!」

美波「シザーアーム!!」

ドラゴ「ふふっ……!」

シユルンッ

美波「?!」

触手の腕が絡み付き、ゲッターキリクの腕を絡み取る。

美波「くっ……!んん……んん……っ!」

ドラゴ「所詮は速度重視!パワーもなく、自慢のスピードも水中では生かせんのではなあ!」

美波「きやあっ!」

ドラゴ「攻略など容易いぞ、ゲッター!!」

投げ落とし、体勢の崩れたゲッターキリクに、腕の触手を鎌のように鋭く変化させたグランゲンが迫る。

ドラゴ「トドメだ!」

美波「っ……!」

かな子「オープンゲット!!」

美波「——きやっ!」

ドラゴ「チイツ！」

3号機側からの強制分離。合体が解け、ゲットマシンが散る。

美波「っ！」

莉嘉「うう……！」

かな子「莉嘉ちゃん、美波さん……ごめんなさい」

莉嘉「ううん。ナイス、ファインプレー☆……わっ！」

アーク号の正面に、グランゲンが立つ。

ドラゴ「パワーダウンしてみすみすやられるのが、ファインプレーか！」

莉嘉「くっ……！このお……！」

波状に押し寄せるグランゲンの触手攻撃を紙一重で躲していく。

莉嘉「っ！合体もさせてくれないなんて、ちよつと大人げないんじゃない？」

かな子「任せて下さい！」

莉嘉「かな子！」

かな子「ええええいッ!!」

加速したカーン号が、グランゲンの背中目掛け体当たりを仕掛ける。

ドラゴ「ぐお……!?!」

美波「かな子ちゃんっ！」

かな子「痛う……今の内です！莉嘉ちゃんと美波さんは合体して下さい！」

美波「え……」

莉嘉「アタシが先頭になる！美波続いて！」

美波「…分かった！」

ドラゴ「くっ……！させん！」

かな子「未だ相手をしてもらいますよ！」

カーン号のバルカンとミサイルを至近距離で放つ。

ドラゴ「ぐうう……！カトンボが……！」

莉嘉「かな子も、早く！」

かな子「はいっ！」

射撃の反動を使ってグランゲンから離脱。既に合体したアーク号とキリク号に追隨する。

莉嘉「チエーンジゲッター……！！アークック！！」

莉嘉「かくなき子……！すごい頑張ったじゃん！お陰で助かっちゃった☆」

かな子「カーン号の装甲の厚さのお陰ですよ。ベアー号やポセイドン号だったら……」

莉嘉「まあまあ、お陰で形勢逆転！一気に決めるよ！！」

美波「……」

ドラゴ「アークへの合体に成功しただけで勝てる気では、舐められたものだな！」

莉嘉「さあね！けど、下で見ててずつとウズウズしてたんだ！大人しくしてた分――

！

バド『キシヤアアアツ!!』

莉嘉「っ!!」

瞬時に展開したバトルショットカタターで、肉薄したバドを切り刻む。

バド『?!?!』

莉嘉「暴れさせてもらうから！」 シュバツ

ドラゴ「!!」

莉嘉「ダブルトマホークツ!!」

両手にトマホークを構え、敵メカザウルスの一団に飛び込んでいく。

莉嘉「ダブルツ！ラビリントゥス!!」

左右のトマホークを唸らせ、柄尻の部分を結合してツイントマホークを形成し、巻き

起こすトマホークの旋風に巻き込ませ、一網打尽に破壊する。

ドラゴ「このお!!」

莉嘉「!!」

グランゲンの一撃を、受け止める

莉嘉「気が早いね！アタシは好きなものは最後に取っておくタイプなの！」

ドラゴ「戦場で舐めたことを…！何処まで人をこけにするつもりだ!？」

莉嘉「こけに何てしてないよ。それより、そっちこそいいの？ゲッターアークの武器、何か忘れてない？」

ドラゴ「何…！」

ゲッターアークのウイングが開く。

莉嘉「普通でも痛いけど、水中だともっと痛いよ！」

ドラゴ「——！」

莉嘉「サンダーボンバーツ!!」

バリバリバリバリ

ドラゴ「ぐっ…！」

サンダーボンバーが深海を眩く照らし、その雷撃によって周囲の敵を破壊する。

ドラゴ「くっ…！小ザル風情がア…！」

莉嘉「ありや？意外にしぶといんだ」

ドラゴ「……殺すツ!!」

莉嘉「もう凄まれたって怖くないよ。散々アタシのこと舐めてるだこけにしてるだつ

て言つてさ、結局人を見下してるから、足下掬われるんじゃないの?」

ドラゴ「……」

莉嘉「あはっ☆もしかして凶星?」

ドラゴ「!!」 グンツ

莉嘉「っ!?!」

グランゲンが高速で移動し、ゲッターアークの視界から逃れて深海の闇に消える。

莉嘉「…凶星突かれて本気ギレってトコかあ……きやつ!」

死角から一撃。ゲッターアークが仰け反る。

莉嘉「あう……!ぐっ……がっ……!う、っ……!」

高速移動からの一撃、そして死角外への離脱。断続的に行われる一撃離脱戦法に、為す術無く打ちのめされるゲッターアーク。

莉嘉「うぐう……っ!」

衝撃で弾み、正面のコンソールに頭部を打ち付ける。

美波「莉嘉ちゃん!?!」

莉嘉「はっ……へへへっ……!」

額から鮮やかな赤い血の流れが下へと伝う。

莉嘉「面白くなってきたじゃん!」

美波「莉嘉ちゃん…：…!!」

かな子「美波さん?どうかしたんですか?」

美波「…：…うん。大したことじゃ…」

ドラゴ「…：…ッ!!」

莉嘉「——!!」

ガギインツ

ドラゴ「…!?!」

莉嘉「隙を、狙ってくるんだもんね?だったら、そう言うのを作っちゃえば…!」

ドラゴ「こちらを誘い出したと言う気か!」

莉嘉「乗ってくれたじゃん!やあああッ!!」

グランゲンの一撃を受け止めたバトルシヨットカッターを勢い良く払い、弾く。

ドラゴ「チイッ!」

莉嘉「おりやあああああッ!!」

ドラゴ「甘いッ!!」

目から怪光線を放ち、一気呵成に出たゲッターアークを制する。

莉嘉「隠し球アリって訳。そこなくなっちゃ!」

ドラゴ「…こいつ」

莉嘉「莉嘉達だつて負けないよ！いやああああッ!!」
トマホークを構え、肉薄。

ドラゴ「くっ……!」

莉嘉「逃がさないッ！」

ヒュンッ

ドラゴ「何…!?!」

距離を取る為離れた、グランゲンに瞬時に迫る。

莉嘉「やああああッ!!」

ドラゴ「何のおおおお!!」

振りかざされたトマホークを紙一重で受け止める。

莉嘉「ぐぎぎぎ……イッ!」

ドラゴ「やられてなるものか……!俺は!」

莉嘉「ガッ……!」

罅迫り合いに破れ、弾き飛ばされるゲッターアーク。

莉嘉「くっ……!このっ」

ドラゴ「互角……?ゲッターと互角……?聞いていた話と違う……いや……」

莉嘉「まだやるって言うの?いい加減、ケリを着けさせてよ!」

ドラゴ「全てはこいつのせいか！こいつが…！」

莉嘉「！」

ズアツ

ドラゴ「!?…ぐっ！」

一瞬、姿を消したゲッターアーク。次の間にはグランゲンの上空に立っており、そこから急降下で全重を乗せた蹴りを浴びせた。

ドラゴ「バカなあ…！俺は、ハ虫人類だぞ!?サル共よりも、遥かに優れた身体能力を持つ、ハ虫人類を以てしても捉えない速度で動くなどと…！」

振り向き様に触手を鞭の様に払い、背後にいるであろうゲッターアークを狙う。

莉嘉「っ…！」

繰り出された一撃は、トマホークで受け止める。

シユルンツ ギユル…

莉嘉「…?何…?!」

ゲッターアークのトマホーク伝いに、グランゲンの触手が腕に絡み付く。

ドラゴ「獲ったぞお!!」

伸ばした触手の腕を引き戻し、グランゲンが迫る。

莉嘉「っ…！ゲッタービーム！」

ドラゴ「何の！」

真つ正面から向かってくるグランゲンに対して放たれたゲッタービームを、グランゲンも目からの怪光線で相殺し、尚迫る。

ドラゴ「でええやあああああッ!!」

莉嘉「ううううううっ!!」

グランゲンのもう片方の腕を変形させた鎌と、ゲッターアークのバトルショットカッターが打ち合う。

莉嘉「っ！」

ドラゴ「想定済みだ！」

莉嘉「!?」

グランゲンの鎌が、液状となつて弾けるように蠢き、変貌し、バトルショットカッターを覆い尽くした触手として纏わり付く。

莉嘉「そんな…！」

ドラゴ「これでは引き離せまい。終わりだ！」

両足をも触手に変化させて、ゲッターアークの胴体、そして両脚部を捕縛し、完全に拘束する。

ドラゴ「このまま捻り潰してやるわ!!」

ゲッターアークを拘束した触手の四肢に力を込め、ゲッターアークを締め上げていく。

美波「表装に亀裂…!? 莉嘉ちゃん、脱出を…:きやつ!」

かな子「まだ浸水はしてないみたいですけど、このままじゃ…」

ドラゴ「倍返しだ!人をこけにした報いを受けるが良い!」

更に怪光線を放ち、ゲッターアークを追い詰めていく。

美波・かな子「きゃああああッ?!」

ドラゴ「ははははっ!苦しめ、苦しめえ!真綿で首を絞められるような苦しみの中、少しずつ迫る死の恐怖に戦き、死んでいけえエッ!!」

莉嘉「——」

——:dダ

ドラゴ「ふはははははははッ!!」

——まだまだッ!!

莉嘉「——:うん」

ドラゴ「ん?」

莉嘉「アタシは、約束したんだ。お姉ちゃんと、絶対に悲しませないって!だからッ」
グンッ

ドラゴ「何…っ!？」

莉嘉「ナーガ、ごめんっ！」

グオオツ

莉嘉「ううううあああああゝゝゝツ!!」

ゲッターアークの手首や肘、体の各関節部からゲッター線の持つ淡い薄緑色の光が溢れ出している。

美波「な、何…？何が起こってるの？」

かな子「分かりません…。けどこの感じ、暖かくって、優しい感じ…」

美波「……!」

手元のディスプレイに計器を映し出す。

美波（何なの…？このエネルギー量の増大…。ゲッターアークの許容量を軽くオーバーしてる。なのに、ゲッターは暴走せず、安定してる…？）

美波「今ゲッターアークを包んでいるのは、アーク自身から溢れた、余剰ゲッター線…」

かな子「急激に増大したゲッター線を、自ら放出することで、炉心の暴走を抑えてるんですね！まさかアークにそんな機能が…」

美波（いや、アークにそんな機能は…）

莉嘉「今のゲッターアークなら…！えいつ!!」

ドラゴ「うおおっ!!」

ゲッターアークを拘束するグランゲンの触手を、力任せに振るい、強引に引き剥がす。ドラゴ「くっ…！先程とは比べ物にならんパワー…！オーバーブーストとでも言うか!!」

莉嘉「アンタを、倒すよ！」グググツ…

かな子「…：…：莉嘉、ちゃん…：？」

美波「その、顔は…」

鋭い眼光でグランゲンを睨む莉嘉。その瞳の下から頬を伝い、そして手足の末端まで這うように、ゲッター線と同様の薄緑色の細い、脈の様な線が明滅して奔っている。

美波「莉嘉ちゃん、大丈夫なの…?!あれは、どう言うことなの…？かな子ちゃん!」

かな子「わ、私にも分かりません!卯月ちゃんも李衣菜ちゃんにも、あんな反応は…!!」

莉嘉「うやあああああッ!!」

グンツ

かな子「きやつ…!!」

その場に残像を残す速さで、ゲッターアークは動く。

ドラゴ「ぐっ……！このお!!」

迫るゲッターアークに、反撃として右腕の触手をブーメランとして飛ばす。が、
莉嘉「ふんっ」

容易く弾き、ブーメランを灰塵に帰す。

ドラゴ「この……！止まれえ!!」

怪光線を受けても、ゲッターアークは止まらない。

ドラゴ「ゲッターを包むエネルギーが、バリアになっているのか？……うあ！」

莉嘉「はあああああッ!!」

ゲッターアークのパンチで、グランゲンが吹き飛ぶ。

ドラゴ「ぐあああああッ!!」

莉嘉「!!」

ゲッターアークは尚、追撃の手を弛めず。

ドラゴ「くっ……！あれは何だ……？俺は何と戦っている!? あんなもの、ゲッターロボなどでは……」

莉嘉「ッ!!」ズオアッ

ドラゴ「ひっ……!」

左右のワンツー。膝蹴り、浴びせ蹴り。左の手でグランゲンの頭部を抑え、そこに膝

蹴りを浴びせる。そして、グランゲンが怯んだところを、その鳩尾に直蹴りを放ち、再び吹き飛ばした。

莉嘉「ふうくくくくくつ——！」

ドラゴ「化け物だ……奴は、化け物だ!! はじめから、俺達の手にも負える筈がないっ！」
莉嘉「ゲッターアア……！ トマホークック!!」 ギュンツ

ドラゴ「つ……！ 来るな……来るなア!!」

両手にトマホークを携え、尚迫り来るゲッターアークに、怪光線を乱れ撃つ。が、当然のごとく、効果はなく、

莉嘉「!!」

ドラゴ「あつ……」

気付いた頃には、ダブルトマホークによって、両腕が切断されていた。

莉嘉「必殺——！」

ドラゴ「ね、姉さん……助け……——」

莉嘉「二天一流ツ!!」

懐でトマホークによる乱舞を受け、グランゲンは粉微塵の海の藻屑となって、消えた。

莉嘉「はあ……はあ……はあ……はあ……つ」

かな子「り、莉嘉ちゃん、大丈夫……？」

美波「……」

美波（ゲッターロボ……うん、ゲッター線……。それに、莉嘉ちゃんは……）

美波「そっか。そう言うことなんだ……」

かな子「何か分かったんですか？美波さん」

美波「うん。大したことじゃないよ」

美波（私の考えている通りだとしたら、私と、かな子ちゃんの役目は……）

かな子「……？莉嘉ちゃん、本当に大丈夫？」

莉嘉「だ、大丈夫だよ……！このくらい……！」

かな子「とてもそうは見えませんか。水中戦なら、本分はカーンの領域です。一旦代

わって、休んで下さい」

莉嘉「……うん。ありがとう」

かな子「いえいえ」

莉嘉「オープンゲット！」

かな子「チェーンジゲッターカーンッ!!」

ゲッターアークから分離し、素早くゲッターカーンに変形。

かな子「よし、つと。そうだ、シートの後ろに、クレープを置いておいたので良かったらどうぞ？」

莉嘉「うん…」

かな子「……。さて、今ので一番の難敵は倒したと思うけど…」

美波「まだ敵の勢力は残ってる。作戦を完遂するまでは、油断禁物だよ」

かな子「はいっ。…ニオンさん達の方、上手く行っていると良いんですけど…え？」

美波「何…？」

ズズズズズズズズズズ：

莉嘉「わひゃっ?! な、何…!」

かな子「この音、地震…?」

美波「違う…! 揺れてるのは、地面じゃないっ!」

かな子「…! マシンランド——!」

くくく マシンランド内部 指令室 くくく

ダンッ

グール「どう言うことだッ!!」

ハ虫兵「ヒイツ!!」

グール「戦力は向こうの倍以上! メカザウルスを上回る兵器も、将の能力も士気も!

全て穩健派ごとき連中を上回っている筈だ!!」

グール「なのに何故、こちらが圧されている!? 我々が、追い詰められていると言うの

だ!?!」

ハ虫兵「ぐ、グール様、落ち着いて下さい…。まだ勝機を無くしたわけではありません。ん…。体勢を立て直して、反撃を…」

グール「ワシに指図をするなあ!!」 シュバツ

ハ虫兵「フグツ…」

グール「はあ…!はあ…!はあ…!はあ…!つ!!」

マクドナル「どうやら、ここまでのようですな」

グール「ぐぬぬぬう…!マクドナルウ…!よくも平然と、ワシの前にその顔を出せたものだな!」

マクドナル「貴殿との付き合ひもそろそろ仕舞い。此度はお別れの挨拶をと思ひましてね」

グール「別れだと…!?!何の役にも立たん不良品を押し付けおつて!貴様一人逃げ仰すとも言うか!!」

マクドナル「我が主のご命令でもあるのですよ。それに、冷たく暗い海の底で蠢く蜚蜚共と最期を向かえるほど、ここに義理はありません」

グール「貴様ア…!端から我らを利用するつもりで!」

マクドナル「貴殿方がゲッターを倒せばそれで僥倖。しかしやはり、既に何もかも

遅すぎたようだ」

グール「遅すぎた、だと…!？」

マクドナル「然り。故に我々は幾度と無く時間を超越し、抗い続けているのです。ゲッターの起源を断つ為に」

マクドナル「まあ、今回ばかりは、多少事情が異なりましたがね」 ツカツカツカ――

グール「ゲッターの起源だと…？待て、何処へ行k……ぐう…!？」

グールに対して、背を向けたマクドナル。しかし、その後ろ腰にレーザー銃の様なものもを構え、撃っていた。

グール「ま、マクドナル……！貴様何をし……うぐつ……が、はああああッ!!」

突如苦しみ、のたうち回るグール。

マクドナル「ご安心を。その光は貴殿を殺すものではありません。我々からの最後の助力、有意義に使って下さい」

グール「は……はヒッ！ふく……ふ、ふふ、ふうざあけるうなア……!!マクドナルウ!!」

マクドナル「王としての最期の姿。きっちり見送らせて頂きますよ。砂城の王の、憐れな最期の姿をね」

グール「うう……うっ……うっ……う……う……っ!」

ツカツカツカ——。

バイス「ここが指令室か!？」

ガンリユー「ここに敵の司令官、宰相グールが!」

ゴズロ「だが妙だ。ここに来るまで、敵の抵抗が少なすぎる」

ガンリユー「何かの罠かもしれませんがね…。殿下は下がって下さい」

カムイ「…うむ」

バイス「…よし、ロックを解除した。開けるぞ」

電子ロックを解除し、開かれた扉の向こうには、

カムイ「!」

グール「…:うう」

蹲つて悶えるグールの姿。

ゴズロ「これは…」

ガンリユー「惨い…。追い詰められて、味方同士で…?」

バイス「にしては、状況が妙だが」

カムイ「おいっ! しつかりしろ、グール! 一体何があった!？」

グール「うあ…? カムイ…?」

バイス「殿下、危険です!!」

グール「か……カアムウイイイイツ!!」

カムイ「!?」

バイス「このっ……!」

グール「ぐっ……!」

自らを抱え上げたカムイに、そのまま襲い掛かろうとしたグールを、間に入って強引に引き剥がす。

グール「カムイイ……! 貴様だ……元はと言えば貴様が! ワシに楯突かなければアツ!!」

カムイ「……グール。貴様のやり方は間違っている。相手の全てを破壊し、奪い尽くして支配しようとするのでは、我々の始祖である恐竜達の時代から、何も変わらない!」

グール「その何が悪い!? 勝利し、勝ち取ってこそそのオ……栄光おとおおツ!!」

カムイ「グール……?」

ガンリユ「様子が可笑しい……。殿下、下がって!」

グール「うぐっ……! お……が、ああアアアアツ——!!」

グールの体が、肥大化してゆく。

ゴズロ「これは……!」

カムイ「皆、退け……！彼奴はもう、グールではない。これは……！」
指令室を圧迫するほど、肥大化したグールを見て撤退を指示。一方で、グールの肥大化は収まることはなく。

バイス「奴め……！このままマシーンランドを破壊するつもりか!？」

カムイ「グールの身に一体何が……」

ガンリユー「詮索は後ですよ。このままでは、我々も揃って、海の藻屑です」

ゴズロ「ゲッターへ急がなければ……！」

マグマの熱にも、深海の水圧にも耐えうるマシーンランド。その重厚な外壁や、隔壁にすら押し止めることは出来ず、肥大化を続けるグール。その体積、重量にマシーンランド全体が振るえ、そして遂に、卵の殻を破って生まれ落ちるように、自らのマシーンランドを破壊しながら、それは姿を現す。

巨大グール『ウグオオオオオオオオオオオツ!!』

かな子「な、何なの……これ……！」

美波「自分達のマシーンランドを破壊してまで……。急進派の最終兵器なの!!」

ニオン「違う!!」

莉嘉「ニオン！無事だったんだ……！」

鉄甲鬼「ああ、何とかな」

かな子「それより、兵器とは違うって……それじゃあ、あれは…」

ニオン「あれは、急進派の首領、宰相グールだ」

かな子「ええ!？」

美波「それが、どうして、あんな…!」

ニオン「分からん!だが、どうなったところで、奴を討つと言う目的は変わらない!」

莉嘉「そうだ!あいつを倒せば、急進派の勢いを弱めることは出来る!」

かな子「そう言っても、あの大きさ……ざっと100m、それ以上あるかも…」

美波「……いや、この瞬間も巨大化を続けてる…!」

巨大グール「オオオオオオ……!グオオオオオオオツ!!」

苦しみ、悶えるように暴れまわる巨大グール。遮二無二振り回される腕に、周囲のメカザウルスが粉碎されていく。

かな子「敵も味方も、お構い無しですか…!？」

鉄甲鬼「と言うよりも、己の力を、制御出来ていないようだな」

莉嘉「ただその力のまま、暴れてるだけ…!？」

美波「どのみち、このままにはしておけないわ」

かな子「カムイ殿下や、ザウルスチームの皆は…?」

芳乃「彼らも容易くやられる程、か弱き存在ではないのでして。持てる力を、

グールに向けましょー」

グール「ウオオオオ!? ゲッタ…? オオオオオ!! ゲッタアアアアアッ!!」

かな子「くっ…!?!」

ゲッターカーンに向かって突き出された腕部の一撃を受け止める。

かな子「ぐっ…うう…!」

鉄甲鬼「かな子!」

かな子「大丈夫です…! 何とか…:ゲッターニードルミサイルツ!!」

体勢を立て直し、巨大グール目掛けニードルミサイルを放つ。

巨大グール「…!?!ウオオオオオツ!!」

かな子「これじゃあ効かない…!?!…:っ!」

振り下ろされた巨腕を、辛うじて躲す。

かな子「このっ!」

ゲッターカーンを横切る巨大グールの腕を殴り付ける。

莉嘉「効いた!?!」

かな子「いえ…。ゲッターカーンのパワーでも、後何万発殴れば良いか…」

鉄甲鬼「大樹を揺るがすようなものだ。簡単にはいかんぞ!」

ニオン「くっ!ゲッタービームツ!!」

ゲッターカーンの後方から、ダイノゲッター1がビームを放つ。が、

ニオン「効かんか!」

芳乃「むー」

鉄甲鬼「どうした? 芳乃」

芳乃「ゲッターの力を吸収しているのです。彼の者1、異端なる者共の力を手にしてましてー」

鉄甲鬼「…異端なる者の意味は、よく分からんが…」

ニオン「ゲッターエネルギーは吸収されると言うことか!」

美波「それじゃあ、迂闊に攻撃するのは不味いんじゃない?」

鉄甲鬼「ああ、生半可な攻撃では、奴を増長させるだけだ」

莉嘉「なら、もう一気に攻めるしかないってことだよな?」

ニオン「奴もハ虫人類。如何にゲッター線への耐性を付けようと、一度に高濃度のゲッター線をぶつければ、耐えられるものではあるまい!」

芳乃「然りー。しかしそれはー、だいのゲッターだけでもー、ゲッターあくだけで、敵しいものでしょー」

かな子「力を合わせるって事ですか」

巨大グール「グウオオオオオッ!!」

かな子「!?」

ニオン「くっ……!」

巨大グルルからの攻撃を躲す。

美波「幸い巨大化したグルルに、特別な攻撃手段はないみたい」

莉嘉「なら、今の内にチェンジだ! かな子、アタシに代わって」

かな子「え? でも、莉嘉ちゃんは……」

莉嘉「もう十分、休憩出来たよ。ゲッターエネルギーを使うならゲッターで、ゲッターに合わせるならゲッターアークだ!」

かな子「……了解です。——オープンゲット!」

莉嘉「チェンジゲッターアーク!」

ゲッターアークに変形し、ダイノゲッターと並ぶ。

ニオン「莉嘉、やることは分かってるな?」

莉嘉「うん! ゲッターアークで、何処まで出来るかは不安だけど……」

鉄甲鬼「実際にやってみるしかないな……!」

かな子「……どう言うことですか?」

美波「……ここは水中だから、単純にゲッタービームを合わせても、威力が減衰されてしまう」

莉嘉「出来た……！」

かな子「気を抜かないで、莉嘉ちゃん……意識を集中させないと、全部持っていかれちゃう……！」

美波「うっ……！このゲッター線の流れは、確かに……」

かな子「これを使うのに必要なのは、強い心です！心の、意思の力で、放つて下さい！！」

莉嘉「心の、意思の力で、放つ……！」

ニオン「こちらは何時でも良いぞ！」

莉嘉「うううううう——ッ！！」

圧縮したゲッターエネルギーの光球を構える。

莉嘉「ストナーアアアアッ！！サアアアアアッ！！シャアアアアアアアッ！！」

ニオン「うおおおッ！！」

ゲッターアークの放つストナーサンシャインに、プテラ・モードのダイノゲッターーが飛び込む。

ニオン「高濃度のゲッター線、扱いは任せるぞ、芳乃！」

芳乃「芳乃にお任せあれー」

ニオン「ウアアアアアアッ！！」

ダイノゲッターーがゲッターエネルギーを纏い、巨大グールに向かっていく。

ニオン「シャイン——！スパアアアークツ!!」

ゲッターアークのストナーサンシャインと、ダイノゲッターーのシャインスパークの合わせ技。ストナーサンシャインスパークが、巨大グールの体に突き刺さる。

巨大グール「うおおおおッくくく!!?」

ダイノゲッターーが巨大グールの体を貫き、その体内から、ゲッター線が広がっていく。

巨大グール「う、うううおおおオ!!ゲツツタアアめええええ!!我は……ワシは恐竜帝国の王のおオオオオオオツ!!」

ゲッター線の光の中に、巨大グールは消滅していった。

美波「倒、した…?!」

莉嘉「今出来る最大限を叩き込んだんだもん。やったよ!」

かな子「ダイノゲッター……ニオンさん達は……!」

鉄甲鬼「無事だ。何とかな」

芳乃「多量のゲッター線を使用した為に、ニオンさんは意識を失っておられますが」

「

かな子「そうなんだ。良かった…」

???「見事な勝利だ。ゲッターロボ」

莉嘉「誰!？」

???「我らの科学力で巨大化したグールすら、一撃の元に葬り去るその力、やはり脅威となる悪魔の力よ!!」

かな子「グールのいた所に、小さい生命反応…これ、人間?」

美波「ウソ…!ここは深度6000m以下の超深海よ!？」

かな子「けど、うん。間違いなんかじゃありません!見て下さい、あれ!!」

美波「本当に人なの…?」

莉嘉「あの肌にあの顔、ハ虫人類じゃない。只のおっさんにしか見えないけど…」

???「1つの時間に数多のゲッターが集う…:あのお方が仰る通り、やはりここも危険な世界」

???「危険分子となりうる、その芽は1つでも潰しておかねばなるまいっ!」

莉嘉「いきなり出てきて偉そーに!こっちに喧嘩を売るつもりなら、名前くらい名乗ったらどうなの!？」

???「私など名乗る程でもないが、いいだろう」

マクドナル「私はマクドナル。カーター・マクドナル!」

美波「カーター・マクドナル…」

かな子「やっぱり、私達と同じ、人間…：…何ですか？」

美波「だとしても、どうして私達に敵対するような事…」

マクドナル「ゲッター、そして城ヶ崎莉嘉」

美波「え？」

莉嘉「アタシ？」

マクドナル「我が主が貴様に会いたがっている」

莉嘉「マクドナルの、主？」

かな子「つまりこの人は、莉嘉ちゃんを迎えに来た遣い…？」

マクドナル「主は待ちかねている。さあ、共に行こうぞ！」

美波「あれは…！」

マクドナルの背後の空間が歪む。

莉嘉「何時も鬼獣が出てくる、ワームホール…」

かな子「それじゃあ、あの人の主って…！」

美波「私達の世界に、鬼獣を送り込んでくる張本人!?」

マクドナル「如何にも。鬼獣は我らが尖兵の1つである」

莉嘉「それじゃあ、急進派が鬼獣を戦力として使ってたのも！」

マクドナル「全ては、我が主の仰せのままに。己の使命を果たしたまでの事」

かな子「酷い……！鬼獣のせいで、私達やハ虫人類の人達にどれだけ犠牲を生んだか……！」

マクドナル「酷い……？なれば、貴様らの戦いは全て、正当化されるものだと言うのか？」

莉嘉「当ったり前でしょ！戦う力もない人達を犠牲にして！それで平然としていられるアンタ達が正義だなんて事があるもんか!!」

マクドナル「……ほう」

莉嘉「アンタの後ろにいるのが、鬼獣の親玉って言うんだったら話が早い！直接乗り込んでアタシが倒してやる！」

美波「迂闊よ！こんな用意周到に出てくるんだもの。何か罠が仕掛けられてる筈……」

莉嘉「うつ……」

マクドナル「残念だが、是が非でも来て貰う。その為の手筈も整えたのだからな」

かな子「手筈……？」

マクドナル「これが視えるか？」

莉嘉「……？」

マクドナルの手元に現れたのは、小さな漆黒の球体。

莉嘉「それが、何だって言うのさ!？」

美波「待って。可笑しい……あの球体、熱も何も、計器には反応してない!」

かな子「え……?でも、ちゃんと目に見えてますよ?」

鉄甲鬼「美波の言う通りだ。磁場にもセンサーにも、あらゆるレーダーにすら、あの球体は捉えられていない」

莉嘉「じゃあ、あれは……」

マクドナル「貴様らには分かるまい。物体としては捉えられぬが、物質として確実に存在する。云わばこれは、小銀河の種よ」

莉嘉「それが何だって言うの!？」

マクドナル「それも分からぬか。まあ良い、教えてやろう。この種……ストーカー01としておこう。これは自身の周囲にある物体を蝕み侵しながら、少しづつ巨大化していく」

マクドナル「巨大化を止めぬストーカー01は、やがてこの地球をも包み込み、全てを飲み込む」

マクドナル「つまり、人間だろうとハ虫人だろうと滅びる運命にあると言うことだ」

美波「……?!？」

かな子「そんな……」

莉嘉「そ、そんなのっ、そのストーカって奴を破壊すれば、済む話じゃん！」

鉄甲鬼「無理だ……。リーダーに映らぬモノをどうやって破壊する？」

莉嘉「それは……」

マクドナル「ストーカ01の制御装置は我が主の手元にある。貴様達の選ぶ道は2つに1つだ。貴様達が拠り所とする地球と共にストーカに呑み込まれて消滅するか、貴様らがワームホールと呼ぶ、このゲートを潜り抜け我が主と対峙するか」

莉嘉「……ッ！」

マクドナル「先に行つて待つているぞ。懸命な判断をするのだな」

莉嘉「待て！——んもう、言いたいことだけ言つて消えたくー！」

かな子「……で、どうするの？ 莉嘉ちゃん」

莉嘉「決まつてる！ 罨でも何でも、相手の根城にかちこんで、ふんぞり返つてる大将の首を獲る！」

美波「けど、今の状態で飛び込むのは危険すぎるわ！ せめて、体勢を立て直さなくちゃ」

莉嘉「そんな悠長なこと言つてる間に、ゲートが閉じちやつたらどうするの!? 今追わなきゃ、チャンスが2度も来てくれるとは限らないんだよ！」

美波「でも……！」

鉄甲鬼「無論、我らも堂々するぞ。莉嘉」

莉嘉「ううん。ダイノゲッターはここに残って」

鉄甲鬼「何故だ!？」

かな子「ダイノゲッターは、ゲッターアークのストナーサンシャインを受けた影響で、大分損耗してる筈です」

鉄甲鬼「お前達とて、無傷ではないだろう」

莉嘉「それでも、崩れちゃったマシーンランドから、カムイやザウルスチーム、ドロス、ゾルを探さなきゃいけないし、まだ抵抗してる急進派の勢力も残ってる。ダイノゲッターの力は必要だよ」

鉄甲鬼「……此奴らだけで行かせても良いのか？芳乃」

芳乃「莉嘉さんの仰る事にも筋は通っておりまして。敵の大將に肉薄する機会を逃す手はないかと」

鉄甲鬼「しかし……!」

芳乃「大丈夫でして。運命は莉嘉さん達に味方してくれていまして。必ずや、勝って勝鬨を上げるものと」

莉嘉「芳乃にそう言って貰えたら、安心だよ☆」

莉嘉「……よし」

第14話『異界変』

「……dんか……」

ドロス「カムイ殿下!!」

カムイ「……っ!ここは……」

ドロス「殿下……ご無事で」

カムイ「ああ。なんとかギリギリ、ギガスのコックピットに滑り込めた。……ゴール皇子は?」

ドロス「はっ、皇子の方もご無事で。今、ゾルの奴が無敵戦艦ダイにお連れしている所です」

カムイ「そうか……。…しかし、酷いものだな。マシーンランドが……」

ドロス「はい……。幾つか切り離して、難を逃れたものもあるのですが、グールのいた指令室を含めた王室区などを要する本体は、ほぼ壊滅です」

カムイ「グールも、倒されたのか?」

ドロス「ええ。ニオンと莉嘉ちゃん達が共闘して、討ち取ったようです」

カムイ「そうか……。…そうだ、莉嘉達は?ゲッターアークは何処にいる?」

ドロス「ああ、それですが……少々込み入ったものになっていくそうぞ……」

カムイ「……？」

鉄甲鬼「そこからは私が話しましょう」

カムイ「ダイノゲッターロボ……」

鉄甲鬼「先ずは見て頂いた方が早い。殿下、こちらへ」

カムイ「ああ、分かった」

カムイ「これは……」

鉄甲鬼「やはり、先程よりも大きくなっている……」

カムイ「大きく？ 一体これは何なのだ？」

鉄甲鬼「カーター・マクドナルと名乗る、急進派側の協力者なる者が置いていったモノ……」

カムイ「レーダーやあらゆる計器に捉えられず、しかし確実に存在するモノ……」

鉄甲鬼「恐らく。そして、マクドナルなる人物が言うには、これは空間を侵しながら」

カムイ「何だと……?! それでは、この球体が大きくなっているとどうのは……」

鉄甲鬼「空間を呑み込みながら、肥大化している証でしょう。先程無人のメカザウル」

スを飛び込ませましたが、球体に呑まれたきり帰ってきていません。球体を攻撃することも、無意味と言っていていいでしょう」

カムイ「我々は、自らの星が呑み込まれていくのを、黙って見ているしかないと言っ
のか……？」

鉄甲鬼「いえ、まだ望みはあります」

カムイ「本当か？」

鉄甲鬼「この球体……連中はストーカ01と呼んでいましたが……その制御装置は、
カーター・マクドナルを擁する敵拠点の中にあるそうです」

カムイ「そうか。それで、敵の位置は？」

鉄甲鬼「こことは異なる、次元の彼方……。このストーカ01を破壊するため、莉嘉達
もここから旅立っていきました」

カムイ「ゲッターアークが……。今からでも、援軍を送ることは出来ないのか？」

鉄甲鬼「いえ……。ゲッターアークが飛び込むと同時に、異界へと繋がるワームホールは
閉じました。奴等の世界と、我々の世界を繋ぐ接点も分らない以上、こちら側から干
渉するのは、難しいでしょう」

カムイ「そうか……。莉嘉達の勝利を信じるしかないと言うことか」

鉄甲鬼「ええ。ストーカ01が拡がり続ける以上、こここのマシーンランドも危険です。

速やかな移動の指示と、グルグルが倒れた今、急進派のマシーンランドだったここを纏める者の声が必要です。殿下、お下知を」

カムイ「…分かった」

カムイ（王と言う肩書きがなければ、共に飛び込んでやれたものを…。莉嘉、そしてゲッターアーク、君達人類と、ハ虫人の未来を、頼んだぞ…）

芳乃「……」

芳乃「莉嘉さん。如何なる時も、ゲッターの力を信じるのでして。ゲッターは、決して、敵ではなく」

—。

ズウウウンツ

くくく
???
くくく

莉嘉「痛くいつ！もう、落ちるなら落ちるってそう言つてよ！」

ワームホールを潜り抜け、高度から地表へと落下したゲッターアーク。その質量と衝撃が激しく砂塵を巻き上げる。

莉嘉「ゲッターは……よし、起動には問題ない。美波？かな子！」

美波「……」

かな子「……」

莉嘉「気絶してるの？2人揃って情けないなあ、もう。……と」

ゲッターアークを再起動して、立ち上げる。

莉嘉「ここは……」

ゲッターアークが墜落した場所。そこは、大地が大きく抉られた、巨大なクレーター
の丁度中央部だった。激しい戦闘でもあったのか、足元には戦車や戦闘機の残骸が見え
る。

莉嘉「ゲートを抜けて、たどりついた先は砂漠でした？もっと派手な敵の軍勢とか期
待してたのに……」

正面下、小さなサブモニターがポツリと光る。

莉嘉「うん？該当地形データを更新……？何の事って、ここ……東京!？」

サブモニターが写し出した情報に驚愕する。

莉嘉「ここ、東京なの!?!日本の？アタシの知ってる？……わざわざワームホールを潜っ
て、東京に出た、何て事ないよね」

改めて左右に視線を泳がせて、荒廃した世界を見渡す。

莉嘉「アタシ達が恐竜帝国に行ってる間に、ここまで荒れちゃうって言うのも、考え

らんないし。って事は、前に卯月達が話してた、リカ達の知ってる、よく似た世界……パラレル・ワールドって事?……ん?」

サブモニターの情報も、更新される。

莉嘉「大気中のゲッター線量が、普通の何倍もある?別に暮らせない訳じゃないけど、どうして……?こんなの、早乙女研究所であった事故でもなくちゃ、こうはならないよね」ゲッターアークの歩を一つ。

莉嘉「ここで、何があつたの……?一体この世界は……!」

突然、足元から衝撃が走る。

莉嘉「きやつ……!何……?」

衝撃の正体は、地面に半分以上埋もれた、兵器の残骸だった。兵器の残骸だと思つていたそれが、動き出す。

莉嘉「な、これ……ううん。こいつ……!」

大型戦車を中心に戦闘機、ロケット、戦艦の主砲らしきモノまで組み合わさり、一つの形を成していく。

結合獣ボンブ『グゴオオオオッ!!』

莉嘉「へっ、戦争で犠牲になった怨念の集合体、何て言わないでよね!もし向かつてくる気なら……!」

ボング『!!』

ボングが戦車砲を撃つ。

莉嘉「!」

瞬時に反応して身を捻り、戦車砲を回避。

莉嘉「何か、動きが鈍い……? 2人がまだ寝てるから? 美波、かな子!」

美波「……」

かな子「……」

莉嘉「くっ……! バトルショットカッター!!」

莉嘉の要求に対して、何時もより反応の鈍いゲッターアークを引き摺りつつ、バトル

ショットカッターを構えて、ボングに肉薄。

莉嘉「はあッ!!」

ボング『!?!』

バトルショットカッターを振るい、ボングを一閃。

莉嘉「ははっ、見た目通り鈍いんじゃない! これでえ……!」

刹那の連続攻撃で、ボングをバラバラにした。

莉嘉「へへんっ☆ユューヨー!」

ボング『……!』

莉嘉「何…?」

バラバラになった筈のボングが、動き出す。

莉嘉「コイツ、何で…? きゃあっ!」

集合体から単体の戦車や戦闘機となったボングのパーツが、四方からミサイルや砲撃でゲッターアークを襲う。

莉嘉「バラバラになって攻撃なんてえく…! このっ!」

翼を開いて舞い上がり、ボングの敷いた包囲網から脱する。

莉嘉「かな子と美波が起きてなきや、サンダーボンバーは使えない! ーっずっ潰していくしか…!」

そう言う視界の先で、再びボングが合体する。

莉嘉「っ…! ゲッタートマホーク!!」

ボング『!!』

莉嘉「ツイントマホーク、ランサアアアーツ!!」

ボングの一斉砲撃を躲し、トマホークをツインランスに変えて肉薄。

莉嘉「うおおおッ!!」

ボング『!!』

ボングのドリルアームと鏢迫り合う。

莉嘉「ううっ……！パワーが今一上がらない！美波、かな子。さっさと起きて——！」

ゲッターアークの、遙か後方。そこに控えている部隊があった。

戦力は戦車、装甲車両、戦闘ヘリなど前時代的なものが数多く、ゲッターほどのサイズの人型兵器が1つ。

部隊を率いる為、先頭に立つ軍用車両から身を乗り出し、双眼鏡でゲッターの戦闘を覗く影が、1人。

隊長「ありやあ……」

隊員「た、隊長……！」

隊長「情けねえ声出すんじゃないやねえ。よく似ているが、違う奴だよ」

隊員「そう、なんですか……？」

隊長「ああ。だが、一体何処のどいつだ？あんな悪趣味なマシンを作りやがったのは……ともかく！」

どっかりと、シートに戻る。

隊長「全隊、そのまま待機だ。司令に連絡して、指示を仰ぐ」

隊員「た、隊長！」

隊長「耳元でうるせえ！一体なんだって…」

隊員「1号機が前進します！」

隊長「何い!?野郎、また命令違反か！待て、行くんじやねえ!!」

隊長「行くな、號——！」

。

ボング『!!』

莉嘉「くう…！」

ボングの豪腕のスイングで、ゲッターアークが弾け飛ぶ。

莉嘉「つ…！アタシには、やらなきゃならないことがあるんだ！こんなところで、お

前なんかにい…！」

ボング『!!』

莉嘉「ぐっ…！」

ボングの砲撃が、直撃。

莉嘉「ぐう…：…ううう…：つ！いい加減に起きろおおおつ！」グアツ

美波「!?」

かな子「きやつ!?!」

美波「こ、ここは…？」

かな子「何……戦闘中……？敵が、きやつ！」

断続的な砲撃。ボングの攻撃がゲッターアークを襲う。

美波「な、何が……?! 敵の拠点に乗り込んだんじゃ……」

莉嘉「何か違うっばい！とりあえず、コイツをやつつける！」

かな子「ゲッターアークが苦戦するほどの、強敵……？」

莉嘉「違うよ！今まで2人が寝てたから、全力を出せなかったの！」

美波「え……？」

かな子「えつと、ごめんなさい？」

ボング『ゴアアアアッ!!』

莉嘉「！」

ボングの攻撃をヒラリと回避。

莉嘉「うん、ゲッターもさっきまでと違って、思う通りに動く！これならッ!!」

ボングの反応速度を越え、背後に回り込み、

莉嘉「ゲッターキック!!」

思い切り蹴り込み、ボングを吹き飛ばす。

莉嘉「トドメを刺す！いくよ、美波、かな子!!」

美波「え、ええ！」

かな子「はいっ！」

莉嘉「サンダーアアアアツ!!ボンバアアアアーツ!!」

ウイングを開くのではなく、右腕にエネルギーを収束させてサンダーボンバーを放つ。

ボング『?!?!?』

莉嘉「分離?したければすればいいじゃん！」

ゲッターアークのサンダーボンバーを、ボングは体を分解し、躲そうとするが、

莉嘉「アタシは絶対に逃がさないから!!」

収束して放ったサンダーボンバーを拡散させ、散らばったボングのパーツを、各個撃破していく。

莉嘉「これで、トドメだあああアツ!!」

これまでの鬱憤を晴らすようにサンダーボンバーを炸裂させ、ボングを完全に粉碎した。

莉嘉「はあ…はあ…はあ…」

かな子「今のは…。と、ともかく、ここは、どこなんですか？」

美波「見た感じ、あのマクドナルドって人が言ってた敵の本拠地って感じは、しないけど…」

莉嘉「ホントだよ。相手の親玉も、纏めてやっつけてやるつもりだったのにさ」

かな子「まあまあ。とにかく、情報は集めなきゃですね。先ずここはどこなのか。私達は、何処を目指せばいいのか……ん？」

美波「かな子ちゃん？」

かな子「こつちに向かつてくる熱源があります。数は1つ……」

美波「まさか、敵の増援？」

莉嘉「何だろうと、来るなら来い！全部やつつけてやるから！」

反応が迫る方へと振り返り、構えたゲッターアークの眼前に、クレーターの外縁からそれは来る。

美波「あ、あれは……!？」

莉嘉「ネオ、ゲッター……!？」

かな子「いいえ、似てるけど……違う……!？」

高高度から砂塵を巻き上げて着地した、それは青い上半身に黒の下半身、それに赤いバックパックを背負っている。

パイロットA「へえ、苦戦してたみてえだが、1人でやったのか！流石の力だけ、真ゲッターロボ……！悪魔のマシンッ!!」

かな子「えっ!？」

パイロットA 「誰が乗っていようが関係ねえ！覚悟しやがれ!!」
莉嘉 「っ……!」

パイロットA 「ナツクルボンバー!!」

莉嘉 「きやつ!?!」

突き出した腕から、撃ち出された拳を紙一重で躲す。

莉嘉 「このっ……!ゲッターに似てるからっつてえ!」

美波 「待って、莉嘉ちゃん!」

莉嘉 「美波!けど……!」

パイロットB 「待て、號っ!」

かな子 「……?違う人の声……。やつぱり、あれにも複数のパイロットが」

パイロットA 「待ってどう言うことだよ、剋!お前だつて、アイツに家族を……!」

パイロットB 「よく見ろ!真ゲッターとは別のマシンだ。それに、戦隊長から待機命令が出ていただろう?聞こえなかったのか!」

莉嘉 「アイツ……!仲間割れしてる!今の内に……」

美波 「こつちから手を出すのはダメよ、莉嘉ちゃん」

莉嘉 「えー、何で?」

美波 「私達にも分かる言語……日本語を話してる。だとしたら、少なくとも話が出来

る相手だと思わない?」

莉嘉「でも、あっちがああのマクドナルって奴の仲間だつて言う可能性もない訳じゃ…」
美波「使っている戦力が違うよ。マクドナルは鬼獣を操つてたみたいだし、こういう機械の兵器は使わないんじゃないかな?」

莉嘉「だけど!」

かな子「もしマクドナルと繋がっていて、私達を倒しに来たのなら、ああやつて仲間同士で言い争いはしらないと思います。もう一人のパイロットの方は、話を通じそうですよ?」

美波「ともかく、私が話してみる。こつちからの攻撃は、極力避けて」

莉嘉「…分かった」

パイロットA「大体、剽は何時も、軍規だ命令だつて、自分の考えつてもんがねえのかよ!」

パイロットB「だからと言って、お前が単機先行して勝てるのか?部隊が足並みを合わせなくては、確実な勝利などあり得ん!」

パイロットA「へっ!強い相手に尻込みするなんて嫌だね、俺は!立ち塞がるものは、全て振じ伏せてやるッ!!」

美波「お取り込み中の所すいません!」

パイロットA「あ、っ？何だ…って、女の声？」

パイロットB「女性が乗って動かしているのか？そのマシンを」

美波「そ、そうですね…。じゃなくて、あの、カーター・マクドナルと言う人を探しているんです。聞いたことありませんか？」

パイロットB「カーター・マクドナル…？」

パイロットA「知らねえな。そうやって、俺達を油断させる作戦かよ？」

美波「ち、違いますっ！私は、貴方達と戦うつもりは…」

パイロットA「はっ！言い訳言ったって聞かねえや！そのマシンに乗ってるなら分かるだろ。ゲッターは、人間の血を求めてるんだよ」

美波「人間の、血…」

莉嘉「美波、やっぱコイツら敵だよ！ゲッターの事を悪く言って!!」

かな子「落ち着いて、莉嘉ちゃん！」

パイロットA「今度はガキの声…。一体どんなチームだってんだよ」

パイロットB「號！お前もいい加減にしないか！これは、俺達だけの判断で行動するのはマズい。一度隊長の指示を…」

パイロットA「危険分子はやれる内に潰す！俺達のゲッターが、このマシンに敗れるものかよ！」

「——そこまでだ、號」

パイロットA「……!」

パイロットB「隊長……!」

かな子「また来ましたね。今度は、軍用車両……? ううん。もつと一杯、戦力が……」

莉嘉「とか言つて、戦車とかばつかじやん。その気になれば、ゲッターアークだけで殲滅出来る……!」

かな子「だから、それはダメなんですつて。……この感じだと、この人達は本当にマクドナルと関わりは無さそうですね」

美波「え、ええ……」

パイロットA「……へっ、そんなもんで、本気で俺を止められるつて思つてる訳じやないだろう? 車さん」

隊長「忘れるなよ、最終安全装置はこつちにある。いざとなれば、そのマシンの全機能を停止させるだけだ」

パイロットA「っ……!」

隊長「それに、この命令は俺だけのものじゃねえ。総司令直々の命令でもある」

パイロットA「……姐さんの……!?!」

隊長「分かつたら大人しくしとけ。……向こうのマシンと交信出来るか?」

隊員「通信の波長が分かれば」

隊長「…面倒臭え、スピーカーを貸せ。オープンで話し掛ける……ん？」

美波「そちらの部隊の隊長の方、聞こえますか？」

隊長「…向こうから呼び掛けてきやがったか」

美波「この通り、武装は放棄します。こちらに戦闘の意思はありません。そちらの指示に従います」

隊長「随分と素直だ。それに、利口な話し方をする」

隊員「罨、でしょうか？」

隊長「…さあな。だとしたら、純粹すぎだ」

パイロットA「……」

美波「ただ、1つだけ話をさせて下さい。私達は、こことは違う、別の世界から来ました」

隊長「別の世界、だあ…？」

パイロットB「そんな、荒唐無稽な…！」

『成る程ね』

隊長「司令！聞こえてたんですか」

司令『まあ、これだけの音量で話をされたらね。通信を繋いだままにしておいて良

かったよ』

隊長「…奴の話、信じるつもりで？」

司令『逆に、そっちの方が納得がいくでしょ？少なくとも、私達の世界にゲッターを作り出す人間がいるとは“考えられない”からね』

隊長「……」

美波「私は、私達は、自分達の世界を救う為にやってきました！無暗な破壊や戦闘をする為に来た訳じゃないんです。どうか、私達の話聞いて下さい!!」

隊長「……何て言ってますが？」

司令『興味深いね。自分達の世界を救う為に、ゲッターに乗ってきた少女達。どんな話をするのか、是非聞いてみたい』

隊長「では……」

司令『丁寧に案内しろ。異世界のゲッターと言うのにも興味がある』

隊長「……了解」

隊員「…宜しいんですか？」

隊長「宜しいも宜しくないも、命令ならば仕方ない。連中は敵じゃねえってんだ。一先ずはそれを信じる」

隊長「おい、そのゲッターロボ！ゲッターなんだろう？そのマシンは！」

美波「っ!…はいつ!」

かな子「あの人、ゲッターを知ってる…?」

莉嘉「さっきのロボットのパイロットも、ゲッターって言ってたよ」

かな子「どう言うことなんでしょう?この世界にも、ゲッターロボが…?」

隊長「司令がお前さんらと是非に、話がしたいそうだ。基地まで案内する。付いて来い」

美波「分かりました。よろしくお願いします」

隊長「よし。…おい、號! 奴の武器を回収しとけ!」

パイロットA「っ!?!何で俺が!」

隊長「テメエしか持てる奴がいねえんだよ。つべこべ言つてねえで手エ動かせ、手エ!!」

パイロットA「…チツ」

隊長「部下がすまなかつたな。一先ずは、頭を下げさせてもらう」

美波「いえ…」

隊長「一時休戦つてただけだがな。この先どうなるかは、お前さん達と司令との話し合
い次第だ」

美波「はい…っ。行こ、莉嘉ちゃん」

莉嘉「はあくい。後で包囲されてズドン、とかされなきやいいけど」

かな子「それは、ならないように祈るしかないですね」

莉嘉「……ちえ」

隊長「全軍転進ッ！帰投するぞ!!」

隊長の号令に合わせ、180度回頭した部隊が、一齐に動き出す。装甲車両や戦車の移動速度に合わせながら極低速で、ゲッターアークも飛行。

美波（ゲッターロボ……。この世界にも、存在してみたいだけ……。けど、さっきのロボットのパイロットは、ゲッターを敵視してるみたいだった……）

かな子「それにしても酷いですね……。ここ……」

美波「うん……」

莉嘉「見渡す限り砂漠と、草木も生えない荒廃した大地。それに埋もれた廃墟。世界の終わりって、こんな感じなのかな？」

美波「ちよつと、莉嘉ちゃん！」

隊長「全部ゲッターのせいさ」

美波「え……？」

隊長「10年前、ゲッターが全部変えちまった。世界の在り方、倫理……その全てを……」

莉嘉「10年前……？」

かな子「その、大変だったんですね……？」

隊長「同情してくれるな。どのみちお前達には、関係のねえことよ」

かな子「はい……」

美波（……）。この世界で、一体何が……

莉嘉「……！見えてきたよ！ここ……！」

かな子「この場所、地形……！間違いありませんっ！」

隊長「お前達にも、見覚えがあるのか」

美波「は、はいっ……！私達が知っている場所……建物によく似ています。これは……」

莉嘉・かな子「早乙女研究所!!」

隊長「ほお……」

莉嘉「何か要塞みたいになってる！」

かな子「ホント、研究所というよりは、軍用施設ですね」

美波「でも見て、奥の方。廃墟になってるけど、確かに早乙女研究所の陰が見えるよ」

隊長「司令じゃねえが俺も興味が湧いてきたぜ。お前さん達の元いた世界つてものに

よ

隊長「——ここが俺達の基地。そして、地上再生の要となる拠点、早乙女研究所だ」


~~~~~ 早乙女研究所 格納庫 ~~~~~

ザワザワ ザワザワ ザワザワ

莉嘉「うう……恐竜帝国に行った時より歓迎されてない感じ……」

かな子「攻撃を仕掛けてきた位ですからね。この人達の司令官って人に助けられたよ  
うなものです」

莉嘉「ね、これ降りて、ホントに撃たれないよね？」

美波「取り敢えず、信じてもらう為の行動はしなきゃ。私が先に行くから、後ろに付  
いてきて」

莉嘉「……うん」

かな子「分かりました」

隊員「パイロットが降りてきましたよ」

パイロットA「さて、一体どんな奴なのか、その面拝んで……って、ええ!?!」

パイロットB「乗っていたのは、やはり全員女性……と言うより年端も行かない少女  
に見える。あんなのが、ゲッターロボを……」

隊長「……」

隊長（このチーム構成、まるで……）

パイロットA「あんな子供が……。くっ……!」 ダッ

パイロットB 「おい、號!!」

パイロットA 「お前からあ!!」

莉嘉「!?!」

隊長 「お前…っ!このっ!」

パイロットA 「ぐっ…!」

莉嘉達に襲いかかって来たパイロットを、隊長が羽交い締めにする。

パイロットA 「車さん…!止めるなッ!」

隊長 「テメエは、これ以上迷惑掛けんな!」

パイロットA 「ぐぬぬぬ…っ!」

隊長 「おお…!?!」

羽交い締めにされたパイロットの力尽くの抵抗に、隊長が揺らぎそうになる。が、

隊長 「ふっ…!」

パイロットA 「うっ…!?!」

抵抗するパイロットAに、一度その力を緩め、

隊長 「先輩直伝!」

パイロットA 「ぐあッ!!」

流れるように自身の勢いに乗せ、投げ飛ばした。

隊長「ふんっ。ひよっ子が……」パンパンッ

隊長「お前さん達、怪我はねえか？」

かな子「あの技は……！」

隊長「ウチの若いのが、重ねてすまねえな。俺は戦隊長をやってる、車弁慶だ」

美波「あつ、私は、新田美波と言います」

弁慶「若エのにしっかりしてるな。ウチの若いのは大違いだ」

美波「あの、さっきのは……」

弁慶「ああ、アイツはウチのパイロット、一文字號つつつてな。ま、ちと訳ありだな。つつても、ここじゃ訳なしの方が少ねえ訳だが」

かな子「……」

弁慶「と、んな事はどうでもいいやな。んで、アンタがチームリーダーかい？」

美波「いえ、私は……その……」チラッ

莉嘉「ん？あ、アタシは城ヶ崎莉嘉だよ☆」

弁慶「……まさか、そっちのちっこいのが？」

莉嘉「何々？あ、リーダーの話？それなら、美波がリーダーで良いと思うよ？」

美波「……そんなノリで良いの？」

莉嘉「頭使うのはアタシに無理だし、こういうのを任せるなら、美波が良いかなって

☆「ニシッ

かな子「私も莉嘉ちゃんの意見に賛成……あ、私は三村かな子って言います」

美波「……と、言うわけで……」

弁慶「はっ、随分と気安いチームみたいじゃねえか。さあ、こつちだ。司令官が待つてる」

美波「その前に、1つよろしいですか？」

弁慶「何だ？」

美波「ゲッターアークに、パイロットを1人残していつでも良いでしょうか？」

弁慶「……へっ。ここで簡単に付いてくる程、流石に素直じゃねえか」

美波「すいません。貴殿方を疑う訳じゃ、ありませんけど……」

弁慶「分かるさ。お前さん、2号機のパイロットだろ？」

美波「……！」

莉嘉「スゴーい！何で分かったの?!」

弁慶「2号機のパイロットつてのは、そのくらい疑り深くなきゃならねえつて、トコだな。因みに、アンタは1号機、そつちの丸つこいのが3号機つて所だ。違うか？」

莉嘉「スゴいスゴい！全問正解だよー☆」パチパチッ

弁慶「へへっ、大したことじゃねえや」

かな子「丸っこい……？」ズーン……

美波「あの、それで……」

弁慶「つと、悪いな。話の腰を折っちまった。悪いが、司令はお前さん達全員と顔を合わせたらしい」

かな子「全員と、ですか？」

弁慶「ああ。尤も、今この研究所で、ゲッターに触りたがる奴なんざ数える程もいねえが。そこは信じてもらうしかねえな」

美波「……」

「安心して良いよ。君達のゲッターには誰一人、指一本触れさせない。ゲッターに近付く者、破壊しようとする者は銃殺刑だ。私の権限を以て、約束するよ」

莉嘉「誰……？女の人？」

かな子「けど、この声……何処か、聞き覚えが……」

號「姐さん……！」

莉嘉「あねさん……？」

弁慶「司令、わざわざこつちに来なくても……」

司令「何、パイロットだけじゃなく、直にこの目で見たかったんだ。異界から来た、ゲッターと言うものをね」

そう言つて、ゲッターアークを見上げる。

司令「あれが…」

莉嘉「この司令官つて、ええ!!?」

美波「貴女は、ウソ…!」

弁慶「おおつと、すまねえ。この人がこの総司令つて、知り合いか? お前ら、別の世界から来たつて、言つてたじゃねえか」

かな子「はい…。ここは、私達が住んでいた世界と違う世界。その筈です。けど…」

莉嘉「アタシ達を知ってるのより、少しその…大人になつてる雰囲気があるけど、間違いない、よね…?」

莉嘉・美波・かな子「凛ちゃん(っ)!!」

リン? 「まさか、懐かしい顔にも会えるとはね」

~~~~ 早乙女研究所 司令室 ~~~~

リン「さてと、まずは…何て話したら良いのかな?」

莉嘉「えー…つと…」

かな子「その…」

美波「あのつ、1つだけ質問しても良いですか?」

リン「ん? どうぞ。答えられることならね」

美波「その、言いづらいかもしれないですけど、司令の年齢って…」

リン「ああ、それは確かに辛いかも」

美波「す、すいません！」

リン「いいよ。そつちも気になってるみたいだし。…でもまあ、どうなんだろうね？
ずっとバタバタしてて、正確に数えてる時間なんかなかったけど…。あれ”からもう
10年も経つから、記憶が間違つてなきや、そろそろ25つてとこかな」

美波「25…」

かな子（大人になった、凜ちゃん…）

リン「私も懐かしいよ。昔馴染みにこうしてまた会えて…」

莉嘉「リン…！」

リン「尤も、私の知ってる美波、かな子、莉嘉の3人は、10年前に死んでる筈だけ
ど」

3人「…!?」

リン「隣り合った限りなく近く、そして遠い世界。私達の生きる世界とそつちの世界
は、そう言う関係にあるみたいだね」

美波「そ、そうみたいですね…」

リン「さて、先ずはそつちの話を聞かせてもらおうか。何故この世界に来たのか。こ

の世界に、何を求めてきたのか……」

美波「……はい——」

美波「——以上が、私達がこの世界に渡ってきた経緯です」

リン「……そつか。恐竜帝国との共闘、和平……。そっちにも興味あるけど……」

かな子「やっぱり、こつちの世界にも、ゲッターロボが……恐竜帝国が……！」

リン「いたよ。私が生まれる、ずっと前に、元祖ゲッターチームに倒されたけどね」

美波「凜ちゃん達より、前のゲッターチーム……」

リン「伝説のチームさ。恐竜帝国に百鬼帝国……。2大勢力の侵攻から、世界を救った英雄ってね」

莉嘉「英雄……」

美波「因みに、そのメンバーは……」

リン「流竜馬、神隼人、巴武蔵。それに、アンタ達も話したでしょ、車弁慶って。あの人もゲッターチームの、予備パイロットだった」

美波「そうだったんですか……」

莉嘉（流、竜馬……？どっかで……）

リン「それよりも、そこを話してる場合じゃないよね。現状は」

かな子「そうです！私達は、一刻も早くストーカー01を止めなきゃならないんです！」
リン「そう。だけど、ストーカー01……。そう言った名前の兵器に心当たりはないね。悪いけど」

かな子「いえ、良いんです。……すみません」

リン「ただ、それに関わってそうな勢力なら、1つだけ心当たりがある」

美波「勢力……？恐竜帝国や、百鬼帝国みたいな、ですか？」

リン「百鬼帝国まで存在を知っているとはね。益々君達の世界と、私達の世界の類似性を確かめなくなる。……ともかく、その2つの勢力をも越える科学技術を持った恐るべき人類の敵さ」

莉嘉「人類の敵……？」

リン「アンドロメダ流国」

莉嘉「アンドロメダ、流国……」

リン「奴等はその名乗っている。その攻撃理由はシンプル、人類と言う種の抹殺」

かな子「人類の抹殺だなんて……どうしてそんな……」

リン「さあね。奴等が攻撃を仕掛けてくる理由までは分からないよ。だけど、アンドロメダ流国の為に、既に世界各国で、私達の同志が壊滅している」

美波「壊滅……」

リン「故に外からの支援は期待で出来ず、頼る存在もなく……。このままでは真綿で首を絞め上げられるように滅びを向かえるだけ……。そう思っていたところに、君達が現れた」

美波「私達も、一緒に戦え、と？」

リン「君達の世界にストーカー01という兵器を送った人物……。カーター・マクドナルと言う人物に心当たりはないが、それだけの科学力を持つと言うことは、アンドロメダ流国に関わる人物である可能性が高い」

かな子「少なくとも、戦いの中で手掛かりが得られるかもつてことですね？」

リン「勿論タダでと言う訳じゃない。協力してくれると言うなら、ここの施設を一部君達に貸し与えるし、ある程度なら施設内・外での自由行動も認めよう」

美波「……」

リン「どうかかな？君達も、協力者が誰一人としていない異界の地で、孤軍奮闘するよりも良いと思うが……」

かな子「確かに、私達だけじゃゲッターの整備をするのも一苦勞ですし……。何より、体を休められる場所があるってだけでも、気持ち的に助かっちゃいますね」

莉嘉「アタシも！リンの話聞いてたらムカムカしてきた！理由もないのに、何で理不尽に滅ぼされなきゃいけないの？そんな相手私がやつつけてやる！」

リン「頼もしいな。私が知ってる莉嘉よりも。さて…」

美波「……」

リン「君の判断は、どうかかな？」

美波「…ここの人達は、随分私達の事を忌避してるみたいですけど」

リン「それなら心配要らない。君達が戦力として加わってくれるのなら、その立場を私が保証する。こここの連中にも納得させるさ」

美波「口で納得しても、本当に納得してるとは言えないと思います」

リン「……」

美波「私達がここに来たことによって、ここの人達の間には不和を生じさせてしまうなら、私達は…」

リン「……そうか」

莉嘉「えー!? リンに協力しないの?」

かな子「別に協力しないと言う訳じゃありません。アンドロメダ流国と戦えば、マクドナルの事が何か掴めるかも知れませんが。ただ、ここで戦う必要はないって事ですよね?」

美波「うん。私達は、独自にアンドロメダ流国に対応すれば良い。私達がここに残ることによって、私達を快く思わない人に不満を持たせるのは、良くないでしょ?」

莉嘉「それもそっかあ…。うーん…」

かな子「時間掛かっちゃうかもしれないけど、何とか頑張ろう？ 莉嘉ちゃん」

莉嘉「そもそも、この人達はどうしてそんなにゲッターを敵視してるの？ ゲッターチームは2つの帝国の襲来から、人類を救った英雄なんですよ？」

リン「それは…」

美波「10年前、何ですよ？ その時に何かがあった。うーん、ゲッターが何かを起こした」

リン「どうして、その事を？」

美波「ここへ向かう途中、弁慶つて言う隊長さんが言ってたんです。10年前、ゲッターが何もかも変えた、つて」

リン「…そう、弁慶さんが、そんな事を」

かな子「一体何があったんですか？」

リン『10年前、あの日——』

——『ゲッター炉心のエネルギーが増大していく?! リミッターは？ 抑えられないの?!』

——『だ、ダメですっ！ 完全に制御出来ない…！ ゲッターを、止められませんか!!』

——『そんな…！ ダメだ、これを撃ったら…!』

——『ゲッターを、止めてええ!!』

——『卯月ツ!!』

——『いやあああああツ!!』

リン「……」

かな子「あの、リン……さん……?」

リン「——ゲッター災害」

美波「ゲッター災害?」

リン「そうとしか呼べないものだよ。その日、1日にして、一瞬にして世界は高濃度のゲッター線に包まれた。人間にすら害を及ぼし、多くの命を奪うほどのゲッター線にね」

莉嘉「ウソ……」

かな子「どうして、そんなことに……」

リン「起きてしまった以上、原因を探ったところでどうにもならないよ。多くの人々が大切な家族を、仲間を一瞬で失い、住む土地を追われたのは間違いないんだ」

かな子「それで、リンさん達は10年間……」

リン「ずっと、地下で暮らしてきたよ。地表ギリギリのところに、ゲッター線観測施設を作ってたね。それで、地上のゲッター線量も落ち着いて、いよいよ地上再生だとして

きたと思つたら、アンドロメダ流国の襲撃」

莉嘉「……」

リン「正直なところ、私は君達の事を、戦いを終わらせる為に神が送ってくれた遣いのように感じていたんだけど……。君達の意見にも一理ある。共に戦えないと言うのを、強要するのも筋違いだからな」

美波「……あのっ」

ウウウウウウン——ッ

莉嘉「な、何…!?!」

かな子「これは…!?!」

美波「敵襲警報!?!」

リン「…そうか。遂にここに攻め込んでくるか。アンドロメダ流国、いや…」

リン「諸葛孔明——!」

つづく

第15話『舞が如く』

~~~~~  
???

「晴明！晴明はおるかッ!!」

孔明「ええい、晴明は何処だ!？」

晴明「……」

孔明「晴明……!こんな所で高イビキなどかきおつて……!起きんか、晴明ッ!!」

晴明? 「……」 スウ……

孔明「!?これは……」

「ふっふっふっ……。私の分身が、如何なさいましたかな、孔明様?」

孔明「……晴明」

晴明「慧眼と謳われし臥竜とも称された御方が、我が術を見抜けぬ筈がありません  
なあ?何か、余程の事がおありのご様子」

孔明「よくもぬけぬけと……!これを見ろ!!」

孔明が手にする水晶球。その中にゲッターアークの姿が映し出される。

孔明「ほう……これは……」

孔明「知らぬ存ぜぬとは言わせぬぞ。マクドナルを使い、わざわざ異界よりゲッターを呼び寄せた理由は何だ！」

孔明「理由、ですか。ふふふっ……」

孔明「孔明！」

孔明「いえ。ただ、鷹狩り等と……犬畜生を追い立てる趣味は持ち合わせてはおりませぬ故」

孔明「……どういう意味だ？」

孔明「将のいない馬など畜生も同じと、そう言うことです」

孔明「つまり、ただの狩猟では手柄にならぬ、と」

孔明「流石、戦国乱世に名を馳せた諸葛孔明殿。よく分かってらっしゃる」

孔明「今は、乱世の時代ではない。分かっているのか？大女王メルドウサ様の意に反する行いをしているのだぞ」

孔明「重々、承知の上ですよ。しかし、ゲッターを打倒せずして、本当に我々は奴らに勝てたと、本当にそう言えるのでしょうか？」

孔明「何い？」

孔明「ゲッターを倒さなくては。でなければ、真にゲッターに勝利したとは言えぬで



しよう」

孔明「その為の手柄と言うか。ふんつ、今で無くても良かったらうに。貴様の要らぬ横槍のせいで、我が策そのものが瓦解するところだったのだぞ!？」

孔明「だが実際に瓦解したわけではありませぬ。あれはゲッターとは言え、エンペラーではないのです。貴方様の策に我が術をもってすれば、打倒も差程難しいことでもありますまい？」クツクツクツ

孔明「ふんつ。まあ、貴様がやる気になったと言うのであれば不問にしておこう。だが、これからはより一層大女王様の為に励むのだぞ」

孔明「ふふつ……。御意に……」

孔明「孔明め……全く余計なことをしてくれる……」

孔明「ゲッターが現れたとなれば、最早一刻の猶予もない！因縁の地、早乙女研究所に残る最期の人類を掃討する！兎猿猴ツ!!」

兎猿猴「ここに！」

孔明「前線の指揮は任せる。憎きゲッター線の使徒、人類を始末し、この宇宙に我々の勝利を轟かせるのだアツ!!」

兎猿猴「御意ツ！我々の勝利を!!」

——　そして、現在。

莉嘉「何、これ……！」

司令室の窓からも捉えることの出来る、夥しい数の敵が早乙女研究所全域、浅間山の全てを包囲している。

美波「これが、この世界の敵……！」

リン「私達はインセクターと呼んでる。アンドロメダ流国の尖兵さ」

かな子「インセクター……。あんまり昆虫っぽくは見えないですけど……？」

リン「夥しい数で群れてる姿が、虫みたいでしょ？」

かな子「成る程そう言う……」

莉嘉「見て！鬼獣もいるよ！」

そう言って指す地上には、鬼獣の群れが。

美波「本当……」

リン「あれが鬼獣……。はじめて見るな」

美波「え？」

リン「でも、これで話が繋がった」

かな子「私達の目指す先と、アンドロメダ流国は繋がっている……！」

莉嘉「まずはこの状況を何とかしなきゃ………っ!？」

美波「今度は何!？」

インセクターの軍勢の遙か後方。そこに更に無数の小さな昆虫の群れが集まり、ひとつの影を成していく。それは、

リン「諸葛孔明！」

美波「孔明：!?あの：：？」

リン「本物かどうかは知らないけどね。けどそう名乗ってる、アンドロメダ流国の司令官さ！」

かな子「あの人が：：！」

莉嘉「アイツさえ、アイツさえやっつければ！」

孔明『愚かなる人類共よ』

莉嘉「……！」

孔明『我らアンドロメダ流国に抗う為にゲッターを引き入れたつもりだろうが、それこそ大いなる過ちよ！』

美波「あの人、私達がここにいる事を知ってる？」

リン「随分な地獄耳。じゃなければ、昆虫の親玉らしく、虫の知らせでもあったか」

孔明『ゲッターこそ悪しき害悪、宇宙の癌細胞！それに依り従い生き延びようとする貴様らもまた、宇宙にとって不必要な存在!!』

莉嘉「好き勝手言っちゃってえ：：！ゲッターで叩き潰してやるツ!!美波、かな子！」

美波「う、うん……！」

かな子「ええ！」

リン「待って！」

莉嘉「止めないで！さつき共闘の話はなしって言ったけど、こうなったら話は別だよ！ゲッターを敵に回したことを、後悔させてやるんだから！」

リン「そう言っただけで貰えるのはありがたいよ。だけど、順番が肝心だ。このまま出ていったって、袋叩きにされるだけだ」

莉嘉「え、順番……？」

リン「そう、先ずは見て貰おう。私達の精一杯の、全身全霊の抵抗を」

司令室のデスクに歩み寄り、手元のコンソールで通信機能をオンに。

リン「総員、聞こえる？第一種戦闘配置。非戦闘員は避難を急いで、戦闘員は所定の位置に」

リン「やるよ、オペレーション『クジャク』!!」

弁慶「急げッ！オペレーション・クジャクが発令されたぞ!!」

整備兵「は、はい!!」

弁慶「敵はすぐそこまで迫っている。死にたくなけりやあ避難を急げ！號、テメエの

担当はDブロックだった筈だ」

號 「車さん！それじゃあ、ゲッターは誰が動かす？」

弁慶 「ゲッターの出番はもつと後だ。戦闘員が一人でも欠けたら、クジヤクは成功しねえ！」

號 「けどよ……」

弁慶 「剷！號を引つ張つて連れていけ！」

剷 「了解」

號 「ちよつ……！行動が早えな、苦しつ……！は、放せ!!」

剷 「作戦遂行が優先だ。さつさと来い！」

弁慶 「溪！そつちはどうだ？」

溪 「整備班の避難はもうすぐ終わるよ！大将も配置を急いで！」

弁慶 「了解だ！指示が出るまで出てくんじゃねえぞ。……ん？」

??? 「親父いくつ！」

弁慶 「てめえ……！何でこんな所に!？」

??? 「アタシも戦う！」

弁慶 「はあ？バカな事言ってる場合か!？」

??? 「バカなんかじゃないよ！だって、親父は……！」

弁慶「ヒヨツ子のでめえよりは、こういう状況に慣れてる。危なくなっても何とかな  
るさ」

??? 「でも…」

弁慶「テメエには、チビ共の面倒を頼んでる筈だぜ？」

??? 「……」

弁慶「お前はチビ共の親代わりだ。そんなお前に何かあつたら、チビ共はどうする？  
アイツらの気持ちは、お前がよく分かつてる筈じゃねえか」

??? 「うん…」

弁慶「分かつたらさっさとシエルターへ行け。チビ共を安心させてやるんだ」

??? 「分かつた。……」

弁慶「ん？」

??? 「必ず、必ず生きて帰ってきて！絶対だよ!!」 タツ

弁慶「……つたく。一番難しいことを言いやがる…。さて、と——」

孔明『……。何だ？静かすぎる…』

リン「来なよ。早乙女研究所の恐ろしさを見せてあげる」

孔明『!? 兎猿猴、退け!!』

兎猿猴「は…?」

リン「撃てえ!!」

バ オ オ ツ

兎猿猴「オオオオオっ!!」

要塞と化した早乙女研究所。その要塞部分、に留まらず浅間山の岩肌や周辺の森林部が盛り上がり、中からミサイルポッドやトーチカ、数々の機関砲が姿を見せる。針の筵のように宙に向かって突き出した砲台から無数の砲弾、ミサイルが一斉に放たれ、研究所を包囲していた敵勢を射抜く。

絶える間もなく弾丸が空を覆い、空中のインセクターは勿論、地上の鬼獣達までも爆炎の華に変え、空を大地をと深紅の色で彩っていく。

兎猿猴「うおおおおっ!!?これはアアッ!!」

孔明『おのれ、猪口才な…!!』

兎猿猴「しかし…!幾ら弾幕で防御を固めようと、無限に続くものではあるまい。貴様らを守る弾薬、それが尽きた時が最期よ…!」

リン「これが全部だとは思わないでよね…」

兎猿猴「!?!」

リン「ゲッターチーム、出撃!!」

早乙女研究所の正面。3つ、縦に連なったゲートが開く。





リン「彼女達を出撃させたのは、戦術的な判断だよ、號」

號「戦術的判断……？」

剋「それは、俺達が頼りないってことですか？リンさん」

リン「お前達は、まだチームとして完成していない。そんな状態で、ゲッターを失わせるわけにはいかないね」

號「パイロットが1人足りなくらい、ハンデにもならねえ！俺達はやれるぜ、姐さん!!」

リン「自惚れるな！」

號「……！」

リン「状況を見る。気持ちや気概で勝てるほど、戦争は甘くないんだよ」

剋「だから、脇役をやれと？」

リン「脇役をやれと言うんじゃない。大人になれと言うんだ」

剋「……」

リン「そして、よく見ておけ」

號「見る……？」

リン「本当のゲッターチームの、戦いを——」

莉嘉「へへっ、さつき見てた時より、大分敵が減ってるじゃん！」  
かな子「ゲッターアーク単機だけじゃ厳しいのは確かでしたから、リンちゃ、司令官さんの言う通りだったかもしれないね」

兎猿猴「現れおつたな！ゲッターロボ!!」

莉嘉「!?アンタが隊長？」

兎猿猴「如何にも。ゲッター、宇宙の為に散れえ!!」

莉嘉「!!」

金箍棒を構えた、兎猿猴の突進を空中でヒラリと躲す。

莉嘉「宇宙だ何だって、話をおつきくして！」

ゲッターアークがトマホークを抜き放つ。

莉嘉「ゲッターの首が欲しいなら、シンプルにそう言えく!!」

兎猿猴「っ！」

ガギインッ

兎猿猴「ぬううううっ!!」

莉嘉「やあああッ!!」

兎猿猴「皆の者、掛かれえ!!」

莉嘉「!?」

兎猿猴と鏢迫り合いを演じるゲッターアークの背に、薙刀や鉄球を構えたインセクターが迫る。

莉嘉「オープンゲット！」

インセクター「!?」

莉嘉「チェンジゲッター！アーク！」

ズワオ

莉嘉「おりゃああああつ!!」

インセクター「?!?!」

インセクターの攻撃を素早く分離して躲し、再度合体。反撃に転じ、トマホークで切り伏せる。

兎猿猴「ぬう?!」

莉嘉「雑魚が！寄って集ってさ！アンタ達とは——！」

一度高速で急上昇し、敵陣を見据える。

莉嘉「出来が違うんだあああツ!!」

そして、急降下と共にツイントマホークランサーを振るい、殺到していた敵勢を纏めて粉碎した。

兎猿猴「くっ…！やれ、掛かれえ!!」

ゲッターアークを包囲するように、インセクターが襲い掛かる。

莉嘉「オーブンゲット!!」

すかさず、ゲッターを分離。

兎猿猴「逃がすなア! 追えッ!!」

ゲットマシンとなった3機をインセクター達は追う。が、

莉嘉「美波、次は任せた!」

美波「分かった!」

かな子「行きますよ!」

それぞれが敵の動きを陽動するように動き、逃れ、正面には立たせず、しかし一瞬の隙を突いて1つに連なる。

美波「チエンジゲッターキリク!!」

ゲッターキリクに合体。シザーアームを振るい、密集した敵を弾く。

美波「っ!」ギョーンッ

大空狭しと駆け抜けるゲッターキリクを追走するインセクター。

美波「こっちのスピードに、付いてくれる!?!」

と言うように、インセクターでは追い切れない。

美波「ドリルアームッ!」

ゲッターキリクを反転。こちらを追走する為、一列に連なっていたインセクターに、ドリルを構え飛び込む。

美波「ドリル……！アターック!!」

一直線にドリルで貫き、破壊。

美波「ダブルドリルタイプーンツ!!」

両腕をドリルアームに変形させ、発生させた旋風に巻き込みながら、殺到してくるインセクターの群れを撃退していく。

兎猿猴「ぬ、ぬう……!?!」

孔明『兎猿猴！我らの本懐を忘れるな!』

兎猿猴「は……はっ!」

莉嘉「! 美波、研究所にインセクターが!」

美波「研究所の人には手は出させない……!ここは……」

かな子「私の出番ですね!」

美波「オーブンゲット!!」

かな子「ええええいつ!!」

ゲッターキリクを分離。ゲットマシンの最高速度で、研究所に殺到するインセクターを追いつく。

かな子「チェンジ、ゲッターカーン!!」

兎猿猴「構わぬ!纏めてやれえいッ!!」

かな子「ゲッターバリアアアアアアッ!!」

インセクターから放たれたレーザー攻撃を、ゲッターカーンから研究所全体を覆う様に展開したバリアで防ぐ。

かな子「ニードルミサイル!!」

敵の攻撃が止むの間髪入れず、ゲッターカーンの左右の方からニードルミサイルを断続的に放ち、空中に無数の爆炎を咲かせた。

兵士「お、おお……!」

兵士2「ゲッターが、俺達を守ってくれるのか……?」

剋「これが、ゲッターの戦い……!」

弁慶「流石に、伊達じゃねえな。ゲッターの能力を、完全に引き出してやがる」

號「何でえ!あのくらい……!」

リン「出来るか?」

號「……出来る!」

リン「そう。……ふふっ」

莉嘉「かな子!正面から来るよ!」

かな子「！」

牛鬼獸「ブオオオオオツ!!」

かな子「うう……！」

インセクターの爆発が生んだ爆煙の中から飛び出すような牛鬼獸の突撃を受け止める。

牛鬼獸「!!!!」

かな子「ううっ! ううんっ!!」

牛鬼獸の動きを受け流し、持ち上げて、こちらの流れに持っていく。

弁慶「!? あ、あの技は……！」

かな子「直伝——！」

そのまま勢いに乗せ、ゲッターカーンを回転。

かな子「大雪山……おろしいいっくくッ!!」

大雪山おろしで放り投げ、牛鬼獸を打ち砕く。

莉嘉「よおし、この調子で行くよ。やっちやえ、かな子!!」

かな子「はいっ! 早乙女研究所には、指一本触れさせません!」

前進するゲッターカーンが大地を振るわし、地上の敵を薙ぎ倒す。

ゲッターキリクは風と共に宙を駆け、敵を吹き飛ばした。

そして、ゲッターアークは烈火の如く。トマホークを振るい、バトルショットカッターを縦横無尽に振り乱し、向かってくる敵を切り伏せていった。

孔明「……!」

インセクターを手玉に取り、反撃を許さず、常に有効なポジションで反撃し、撃墜する。まるで舞いを踊るかのような鮮やかな動きは、早乙女研究所に残る全ての人々を魅了した。そして、

莉嘉「サンダーボンバー!!」

ゲッターアークの雷撃が、全ての敵を消し飛ばす。

莉嘉「さ、残るはアンタだけだ!」

兎猿猴「ぐっ……!ぬぬぬう……!」

ゲッターアークと、兎猿猴が対峙する。

兎猿猴「あれだけの数の我が配下を、ものの数分で倒すとは、恐ろしい奴……!」

莉嘉「……へへっ☆」

兎猿猴「だが、負けん!我らに敗北は許されんのだアツ!!」

莉嘉「やああああッ!!」

トマホークと金箍棒。それぞれ手にした得物を掲げ、交差と同時に振り下ろす。

ガギインツ



快音一発。轟撃が響き渡り、2つの巨影が交差する。

兎猿猴「……」

莉嘉「……」

兎猿猴「……っ?」

兎猿猴の得物が、中央から真つ二つに折れる。

兎猿猴「バカな…!?我が神珍鉄、金箍棒が!」

莉嘉「シンチンだかチンチンだか分かんないけど、只の棒っ切れって事!」

美波「り、莉嘉ちゃん…!」カアツ//

莉嘉「終わりにしてあげる!」

兎猿猴「何とおツ!!」

莉嘉「遅い!」

金箍棒を失いながらも、反撃の為構えを取る兎猿猴。しかしゲッターアークは、その背後を取る。

兎猿猴「——ツ!!」

莉嘉「!!」

トマホークの連撃。首を胴をと兎猿猴を姿形も残らぬほど切り刻み、塵芥に変えて風に散らせた。

莉嘉「へへっ、どんなもんだい！」

リン『油断しない。まだ敵を全滅させた訳じゃないんだからね』

莉嘉「うへえ。つて言っても、もう粗方やつつけちやつたはずだよ？」

かな子「いえ、まだ厄介なのが残ってますよ」

美波「諸葛、孔明……！」

ゲッターアークを振り仰ぎ、ゲッターよりも更に巨大な孔明の影に向き直る。

孔明『ぬう……！』

莉嘉「何さ！名前ばかりで、仲間は大了ること無いんじゃない？」

孔明『聞きしに勝るゲッターロボ！流石と言わざるを得んか……』

莉嘉「降参するなら今の内だよ。さっさと負けを認めちやえば？」

孔明『その言葉、今は嘸み締めておこう。だが必ずや、我々は貴様に勝利する！』

莉嘉「……降参する気はないって？」

孔明『終わらせぬ。終わりはせぬ！この戦いは聖なる戦いなのだ。我々がゲッターを凌駕し、この宇宙全てを手中に収める為の!!』

莉嘉「ふざけんな！そんな馬鹿げた事、させるもんか!!」

孔明目掛けゲッタービームを放つ。が、

莉嘉「ビームがすり抜ける！」

美波「あれは、立体映像みたいなものだから、幾ら攻撃しても意味ないよ」

莉嘉「クツッ。卑怯者お！出てきて戦えく!!」

孔明『ふふふっ…』

???'孔明様、此度の所は、もう宜しいでしょう。孔明様が欲していたゲッターのデータも充分でしょう』

莉嘉「!? あれは…!」

美波「孔明の後ろ、あの人って…!」

かな子「カーター・マクドナル!」

マクドナル『我が招待を受け、よく来てくれました。ゲッターアークチーム、いや…』

城ヶ崎莉嘉』

美波（っ…!?!莉嘉ちゃんを、名指しで…）

マクドナル『存分に歓迎して差し上げましょう。貴殿方の死を以て!』

孔明『控えよ、マクドナル。退くのだろうか?』

マクドナル『はっ…』

莉嘉「あ、待て…!」

空中に映し出されていた孔明達の姿が消え、青空が戻る。

莉嘉「くう…!言いたいこと言うだけ言って逃げるなんて…!サイッター!!」

リン『話は繋がったみたいだね』

かな子「はい。そちらの敵、アンドロメダ流国に、マクドナルはいる」

莉嘉「直ぐにでも突っ込んでやっつけてやりたい……!けど……」

かな子「恐竜帝国での戦いから、ろくに整備もしないでここまで来ましたから……。流石のゲッターアークも限界ですよ。せめて、まともな整備を受けさせられれば良いんですけど……」

リン『任せて。研究所を守ってくれたお礼ぐらいは、させてもらうつもりだよ』

かな子「ありがとうございます。それと、話があるんですけど……」

剽「なかなか降りてこないな……。もう戦いは終わったんじゃないのか?」

弁慶「通信で司令と話をしてるみてえだな。ま、連中にも連中の事情があるってところだろ」

號「けつ、ちったあ出来るかもしれねえが、俺だってゲッターに乗ってりや、あのくらいい……!」

弁慶「ヒヨツ子が。命があっただけマシだったろうが」

號「何い!?!」

剽「……」

剽（あれだけの戦力……。恐らく、俺達の力だけだったならば、苦戦を強いられてい

た。それをたった一機で……」

號 「俺達のゲッターだつて奴に負けちゃいねえ！そうだろ、剋!？」

剋 「……本当にそう思うか？號」

號 「んあ……？お、おう……！つたりめえだろ！」

剋 「……。隊長、奴は真ゲッターロボと同じです」

弁慶 「……」

剋 「あの力は、あまりにも危険すぎます。強すぎる力は、より強大な力を呼び寄せる

……」

號 「ハンツ！上等じゃねえか。どのみち勝たなきゃ生き残れねえ戦いだ。向こうか

ら来てくれるなら大歓迎だぜ！」

剋 「お前の言うことは、ただの楽観視だ。あのゲッターと、真ゲッターロボと同等の

力を持った敵相手に、何の用意もなく勝てると思つていいのか？」

號 「やつてやらなきゃならねえんだろが。今更怖じ気付いたかよ？」

剋 「……」

弁慶 「心配するな、剋」

剋 「車隊長……」

弁慶 「號のバカを見習えとは言わん。だが、お前は心配しすぎだな」

剽 「…そうでしょうか」

號 「誰がバカだ、誰が！」

弁慶「余計な事に頭を取られて、体が強張つちまうと、いざつて時に力を出せねえ。今は目の前の事に集中しとけ」

剽 「ですが、隊長も見たでしよう？あの力は…」

弁慶「確かに、人類が恐れるべきモノかもしれないねえ…。けどな…」

「「ゲッターツ!!」」

號 「!？」

弁慶「あの姿に、魅入れちまった者がいるのも確かだ」

剽 「あれは…!」

號 「ガキ共…!避難させたんじゃないのか!？」

弁慶「ああ、だが…」

??? 「ヒューツ!ゲッター!カッコイイツ!!」

弁慶「あのバカ…」

美波「あれは…」

リン『ウチで預かってる孤児達だ。何分、地下居住施設じゃ、賄いきれないんでね』

子供「ありがとーっ!ゲッターロボツ!!」

かな子「ありがとう…。あはは…」

リン『大人はどう思うか。それは1人1人に聞いてみなきゃ分からないよ。けど子供には、ゲッターはヒーローとして映ったみたいだね』

莉嘉「ヒーロー、か…」

リン『どうだろう？子供のヒーローを追い出す真似は、大人としてはしたくないんだけど』

美波「ここに残れ、って事ですか？」

リン『大人だって生き残るには必死だよ。その為に、手段は選んでいられない。君達が強くなってくれるなら、心強いよ』

かな子「…私達を狙って、今まで以上にアンドロメダ流国が攻め込んでくるかもしれないかもしれませんよ？」

リン『変わらないよ、結局。ゲッターアークがここにいても、いなくても。アンドロメダ流国は襲ってくるんだ』

莉嘉「アタシ達がここを離れても、リン達の戦いは終わらない」

リン『なら、一蓮托生だ。私達なら、3人の力になれる。どうだろうか？』

美波「……」

かな子「そうですね。今回の戦いで、アンドロメダ流国の規模は分かりました。正直、

ゲッターアークだけじゃ、厳しい相手です」

美波「かな子ちゃん！」

かな子「事実じゃないですか。今回はたまたま、運が良かったかもしれないですけど、次がそう行くとは限りません」

美波「……」

莉嘉「アタシ達にも、協力してくれる人がいたらもつと心強いって、そう言うことだよね。かな子！」

かな子「はい。それで、余計な戦いを増やしてしまうかもしれないし、迷惑を掛けちゃうかもしれませんけど……」

リン『決まりだね。そのゲッター用に格納庫のハンガーを空けさせる30分待つて』  
かな子「分かりました」

莉嘉「ヨロシクね☆」

リン『こちらこそ。それじゃあ、また後で——』 プツンツ

美波「……本当に、これで良かったのかな……？」

かな子「勝手に話を進めちゃって、ごめんなさい。だけど、何処で戦っても同じなら、私達も万全な状態で戦えるようにしておくのは、大事だと思っただけです」

かな子「これは、私達だけの戦いじゃない。私達の地球の運命を背負った、戦いでも



あるんですから」

美波「…そうだよ。私達も、手段なんて考えてられない、か」

莉嘉「暗い顔しない、しない！温かいご飯に、ベッドで寝られるんだよ？それだけでも最高じゃん☆」

美波「莉嘉ちゃん、もしかして野宿しなくて良かった、とか、思っていないよね？」

莉嘉「えっ？…えへへ☆」

かな子「あはは…」

—— その夜。

くくく 早乙女研究所 ゲッターアーク格納庫 くくく

カツカツカツカツ——

リン「……」 フツ

カチャカチャカチャ…

リン「どう、捗ってる？アキハ」

アキハ「ん？おお、リンか。まあ、ボチボチな」

リン「悪いね。こんな夜更けまで、たった一人で」

アキハ「気にしないさ。この研究所で、こいつに触りたがるような奴も私くらいなものだろう」

リン「…まあ、ね」

アキハ「それに、今はこいつを私以外に触れさせたくはないな。何たってゲッター科学の宝の山だ。爪先から指先まで、この手で調べ尽くさない限りはなあ…！」

リン「へえ…：興味深いね。アキハがそう言うほどなんだ？」

アキハ「ああ、ああ！これは正しく、本当の真ゲッターと言うべきものかもしれんぞ  
！」

リン「本当の真ゲッター？」

アキハ「そう、ゲッター炉心の構成を見てみる。我々が知るどのゲッターのものよりも緻密で、洗練されている」

リン「…マシンの専門的なことはよく分からないけど、それってつまり？」

アキハ「我々が目指すゲッター炉の完成形と言うことだよ！10年前のあの日に、この炉心が完成していれば、あんな悲劇は起きなかつただろう」

リン「成る程ね。私達の技術で、再現出来るかな？」

アキハ「どうだろうか…。我々からすれば、何十年も先の技術のようにも見える。これを一朝一夕で再現すると言うのは…」

リン「そっか…」

アキハ「それに、ふむ…」

リン「どうしたの？」

アキハ「詳しくは、この炉心をばらしてみなければ分からないが……。恐らく、この炉心は未完成なのではないか？」

リン「未完成？」

アキハ「ああ、この炉心は芸術だ。緻密で、繊細で、洗練されている。だからこそ、専門家の目からは一点だけ欠けている面が際立ってしまう」

アキハ「形として美しく見える。だが、完成されているわけではない。さながらミロのヴィーナス像のようだ」

リン「そんな状態で動いているのか……。大丈夫なの？暴走の心配は？」

アキハ「その心配ないだろう。寧ろ、ゲッターエネルギーを安定的に扱う、その一点にのみ集中して、この炉心は設計されていると言っても過言ではない」

リン「じゃあ、欠けている部分の意味は……」

アキハ「このゲッターからすれば些細な問題なのだろう。若しくは、欠けている部分を補う何か、何処かに存在しているのかもしれない」

リン「何処かって、何処に……」

アキハ「さあ、そこまでは。それより、パイロットはどうしてる？」

リン「とつづくに寝たよ。まだ味方として、信頼出来るって訳でもないだろうに。余程

戦い続けてきたんだろうね」

アキハ「明日には身体検査出来そうか？」

リン「気が早いね」

アキハ「当然だ。ゲッターから離れて暮らしてきた我々とは違う、ゲッターと共に戦い続けた者達だぞ？ゲッターの申し子かもしれん」

リン「ゲッターの申し子、か」

アキハ「ええい、無理なら血液検査くらいさせろ！このゲッターだけではない。あいつ等の体にも、ゲッターのメカニズムを解く鍵があるかもしれないのだ！黙ってなどいられん！」

リン「その前に、アキハには頼んだことがあるでしょ？」

アキハ「分かっている。その完成の為にも！」

リン「取り敢えず、このゲッターのデータがあれば、ちよつとは進められるでしょ。私も急がないと」

アキハ「…このゲッターがあるのに、まだアレに拘るつもりか？」

リン「当たり前でしょ。その為に、ここまでやってきたんだ」

アキハ「ふんっ。完成したところで、乗りこなせる奴がここにいるとは思えんが」

リン「心配要らないよ。パイロットには検討を付けてある」

アキハ「何だと…？」

リン「このゲッターを分析して、完成を急ぐんだ」

リン「私達の新ゲッターロボを——」

つづく

## 第16話『犬と猿と』

~~~~~ 早乙女研究所 格納庫 ~~~~~

溪 「いやあ、悪いね。パイロットは地上じゃ体を休めるのも仕事なのに、資材運びなんて雑用手伝わせちゃってさ」

かな子 「いえ、いいんですよ。ゲッターの整備は、私達にとっても他人事じゃありませんし……えつと……」

溪 「南風溪。アタシはパイロットじゃないから、自己紹介はまだだったよね。ここで整備士をやらせてもらってるんだ」

かな子 「は、はい……！溪、さん……。私は……」

溪 「知ってる。アンタ達が思ってる以上に、ここじゃもう有名人だよ？」

かな子 「そうなんですか？」

溪 「そりゃ、ゲッターに乗って異世界からやってきた、何て触れ込み、注目されないわけ無いって。それにしても……」 ジーツ

かな子 「……えくつと……？」

溪 「こうして顔を合わせてみてなんだけど、ちよつと意外」

かな子「意外、ですか？」

溪「うん。もつと怖い人かと思ってた。だから安心した」

かな子「安心……」

溪「これから一緒に戦つてくんだもん。コミュニケーションの取りづらそうな人と、こつちも気を遣つちやうじゃん？」

かな子「私、気を遣わせない……ですか？」

溪「うんうん。だって、同じ女同士じゃん」

かな子「成る程。一理ありますね」

溪「そうそう。改めて、これからよろしくね、かな子」

かな子「はい、溪ちゃん！」

溪「……つと、それじゃあ、運んでくれた資材はここに置いてくれていいから」

かな子「ああ、はいっ！」

持ってきた小さめのコンテナを床に置く。

かな子「ふう……。あの、この資材って……」

溪「ああ、質はよくないでしょ？何たって、廃墟にあつた廃材とか、廃墟になつてる建物の鉄筋を再利用してゐるんだからさ」

かな子「廃材や廃墟、そのものを……？」

溪 「アタシ達には貴重な資源なんだ。武器を作るにせよ、弾丸を作るにせよ、素材には金属がいる。だけど、この国じゃあ金属が取れる鉱山なんかも、多くはないでしょ？」

かな子 「え、ええ……多分。地理は詳しくないですけど」

溪 「だからこうして、廃墟に残った使えるものを再利用させてもらってるって訳けど、倉庫にあつた資材も少なくなつてたな……。また近い内、資材調達か」

かな子 「資材調達……。廃墟に出てつてことですよ？ 大変じゃないですか？」

溪 「大変だけど、働かざる者食うべからず、だからね。アタシに出来ることなら、小さな力仕事だって何だってやるよ」

かな子 「私にも出来ることがあつたら、何でも言つてください。ゲッターに乗つてるお陰か、体も丈夫なので、心配ありませんよ」

溪 「ありがと。かな子は何て言うか、いい子だねえ。アイツにも少しは見習わせたいわ」

かな子 「アイツ……？」

「テンメエ！こん畜生ツ!!今日という今日は許しちやおかねえ!!」

溪 「噂をすれば……」 ハア……

かな子 「この声って……」

—— 格納庫、一画。

號 「オモテに出やがれ！そのなめしくさった態度、改めさせてやるツ!!」

莉嘉 「へへくんだ☆悔しかったら捕まえてみなよ〜!」

號 「こんにやろツ」

整備士1 「ひいつ!」

整備士2 「や、やめてくださいお2人とも……!ここには精密機器もあるんですから……」

號 「うるせえ!関係ねえ奴は引っ込んでな!さもねえと……!!」

溪 「そこまでにしときな、號!」

號 「あ……?溪」

かな子 「號さん……それに、莉嘉ちゃんも……またですか?」

莉嘉 「あ、かな子!アタシは悪くないよ!」

號 「んだとお!?先に喧嘩売ってきたのはテメエだろうが!」

莉嘉 「アタシは本当のこと言っただけだもくん!それをムキになっちゃってさ!大人

げない!」

號 「コイツ……!言わせておけば……!」

溪 「だから、その辺にしとけて。じゃないと……」

リン 「もういいよ、溪」

溪 「り、リン……司令……」

リン「もう、手遅れだからさ」

號「姐さん！こんな奴の手なんざ借りるこたあねえ！今すぐ追い出そうぜ！！」

剗「いい加減にしないか！お前も、何時までも子供じゃないんだぞ！！」

莉嘉「やくい、怒られてやんの☆」

美波「莉嘉ちゃんも。私達は協力することになったとは言え、ここの人に迷惑を掛け
ていいってことじゃないんだよ？」

號・莉嘉「「だけど、コイツが…」」

號「真似すんな！」

莉嘉「真似しないで！」

美波・剗「「はあ…」」

かな子（何だろう…。似た者同士みたいな気もするけど…）

リン「兎も角、2人ともパイロットとしての自覚が足りないようだ。今回の騒動の罰
として、2人でトイレ掃除。施設内の全てのトイレを、2人手分けしてやるんだよ」

莉嘉・號「「はあ?!なんでアタシ（俺）が!!?」」

號「「…っ!」」

莉嘉「っ」

號・莉嘉「「だから!!」」

剋 「ですが…」

かな子 「何とか一件落着つて感じですね？」

溪 「まあ、これで大人しくなつてくれればいいんだけどね」

かな子 「そう言えば、その……さっきの話。司令の左腕つて…」

溪 「ん？ああ、義手なんだ。それも特別製で、かなり頑丈な奴。それで殴られたら、

號だつて一発で伸びちゃう」

かな子 「義手…？どうして…」

溪 「さあ？詳しいことは何も。でも、10年前の災害で、無くしたらしいよ。面白い

話でもないし、誰も聞きたがらないけど」

かな子 （…この世界のリンちゃん。何があつたのかな…）

—— 研究所内、某トイレ。

號 「つたく、何だつて俺がこんなことを…！」

莉嘉 「ぼやかさないですよ。こんなの、学校のトイレ掃除と一緒にゃん」

號 「あのな、テメエの世界の都合なんざ知つたこつちやねえが、こつちは8つの時か

ら10年間、ほとんど地下シエルターで暮らしてんだ。学校なんざ、まともに通つたこ

ともねえ」

莉嘉 「…そっか」

號「……。テメエも、くつちやべつてねえで手工動かせ。元はと言えばテメエのせいだろうが」

莉嘉「はいく!? 仕掛けたのはそっちでしょ?! 自分の短気を人のせいにしなさい!」

號「あ、あん!?!」

莉嘉「唸つたつて怖くないもんねえ、えいつ!」

號「ゴ、フ……ッ」

手にしたモツプのブラシ部分で、號の顔面を突く。

莉嘉「へへくん、先手必勝☆」

號「この……! やりやがったなあ!!」

莉嘉「どっからでも……」

「お〜いたいた! 號、発見〜!」

號「あん……」

莉嘉「この声……」

殺気だったトイレ内に、間の抜けた声が響いた。

號「……んだよ、友紀義姉ちゃんか。どうした急に」

友紀「えっへへ。剋から聞いたよ? 格納庫で問題起こして罰掃除だつて? 全然反省してないじゃん!」

號 「うっせ。義姉ちゃんには関係ねえだろうが……ん？」

莉嘉 「…姫川友紀？」

友紀 「え？そうだけど…。君は確か、この前入った、ゲッターのパイロットだよね？そんな人に名前を覚えられてるなんて、光栄だな」

莉嘉 「え、あ……そう言うことじゃないけど…」

友紀 「違うの？」

號 「案外、こいつの世界にも義姉ちゃんがいるのかもな」

友紀 「こいつの世界…？」

號 「俺達とは違う世界から来たんだとよ。細けえこたあよく知らねえけどよ」

友紀 「へえ。ね、そうなの？」

莉嘉 「えく…つと……うん」

號 「へっ、凶星かよ」

莉嘉 「そ、そうなんだけど…。いいのかなあ、こんなこと、別世界の本人に話しちゃって」

友紀 「いいっていいって！名前と顔が一緒なだけで、別人なんだし。そっちの世界のあたしのこと、もっと教えてよ！」

號 「どんな感じも何も、姐さんが10年も年喰っちゃまってるらしいからな。義姉

ちゃんなんて、まだ10歳のおチビちゃんもおチビちゃんだろうよ」

莉嘉「それなんだけど、そうでもないんだ」

友紀「え？」

莉嘉「アタシが知ってる、友紀のそのまんまなんだ。だから余計、ビックリしたって言うか」

友紀「へえ。不思議なこともあるもんだ」

號「それでいいのか？」

友紀「で、で？異世界のアタシってどんな感じ？やっぱ女子野球で活躍してるとか、野球選手と結婚してるとか!？」

莉嘉「い、いや…？野球選手でもないし、野球選手と結婚もしてないよ」

友紀「何だ…」

莉嘉「けど、アイドルとして活動してるよ。だから友達だし」

友紀「ええ!?あ、アイドルウ〜?!」

號「似合わねえ〜!!」 ゲラゲラッ

ムギユッ

友紀「あたしも全く同意見だけど、笑う必要はなくないく？」

號「痛え痛え。分かったから耳つねんなよ!」

友紀「しっかし、アイドルかあ……。全然想像つかないなあ。そっちの世界のあたしに、一体何が……」

莉嘉「詳しくは知らないけど、アイドルとしてはノリノリだよ？性格もあんま変わわないみたいだし、友紀にも出来ると思うけどな」

友紀「え、そうかな？」

號「無理無理。酔って腹踊りやるくらいのがしつくり来るぜ」

友紀「……」 スツ

號「無言でバット振り上げるのはやめろよ……。それは人殴るものじゃねえって、車さんも言ってただろ？」

友紀「ま、その話はまたなんかあったら詳しく聞かせてよ」

莉嘉「う、うん……（アタシの知ってる友紀より怖いかも……）」

號「んで、結局義姉ちゃんは何しに来たんだよ？わざわざ冷やかに来たんなら、帰れ帰れ」

友紀「ただの冷やかしじゃないよ！ね、今から野球しようよ！」

號「はあ？さつき自分でも言ってたろうが、罰掃除中だつて」

友紀「どーせ反省してないでしょ？だったら、時間は有効に使わなくちゃ」

號「野球やんの何処が有効利用なんだよ」

友紀「子供達が喜ぶよ！やっぱみんな、人数少なくて試合より人数をちゃんと合わせた試合がしたいんだよ〜！」

號「お断りだ。第一、ああ言うスポーツは性に合わねえんだよ。血が沸かねえ」

友紀「ええ〜?!いいじゃん、お姉ちゃんの頼みだよ？子供達も待つてるよ！」

號「知るるかっ！用が済んだんならとっとと帰れ！」

友紀「もう〜…」 ショボン…

莉嘉「へえ？野球、出来ないんだ」

號「ん？」

莉嘉「ねえねえ、その野球、アタシが入るのはダメ？」

友紀「ええ？アタシ以外はほとんど男子だし、莉嘉ちゃん腕細いし…」

莉嘉「腕細くてもゲッターのパイロットだよ？体力も身体能力も、ちよつとしたもんなんだから！」

友紀「あ、そう言えばそうだっけ？なら〜、いつか！」

莉嘉「よし決まり！」

號「おい！罰掃除をサボる気か?！」

莉嘉「そんなの、野球の試合が終わってからやればいいじゃん？別に時間は決められてないだし、何なら夜にやった方が反省って、感じが出ていいじゃん！」

友紀「そう！良いこと言うねえ！青春は一度きりだよ？」

號「どういう意味で使つてんだよ、それ……」

莉嘉「まあ？司令や弁慶さんに怒られるのが怖いなら？號は一人でせつせとトイレ掃除に励んでれば良いんじゃない？」

號「!?……誰が！」

莉嘉「尤も、スポーツマンシップに乗つとるのがイヤで、ルール無用で相手を殴るのが趣味の號には、野球なんて高尚な遊びに参加も出来ないから仕方ないんだろうけど」

號「んだとう……!」

友紀「お?お、おお?!」

號「良いじゃねえか、やってやる！」

莉嘉「お、野球出来るの?」

號「はっ！チビに教授されるまでもねえ。だが後悔すんじゃないやねえぞ?ギタギタにしてやるからな……!」ゴゴゴッ……

莉嘉「へえ?ギタギタに出来るんなら、やってみなよ!!」ゴゴゴッ

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ

友紀「お、おお……これは面白くなる、予感！」

くくく 屋外練習場 くくく

莉嘉「あ、ちゃんとした野球のグラウンドでやるわけじゃないんだ」

友紀「あははっ。ちゃんと整備してたら土地が足りなくなるからね。広いところがあるだけでも充分！……と、おーい！みんな、連れてきたよー!!」

莉嘉「あ……」

美世「遅ーい。時間掛けすぎだよ、何処まで言ったのかと思っちゃった」

友紀「えへへ……。ごめんごめん！號が見つからなくてさあ」

美世「もう、野球の試合しよって言うのは、アンタが言い出しつぺなんだから。そう言う時は、アクセル全開にして、バアーっと走って来なさいよね」

茄子「まあまあ、美世ちゃん。その辺で」

美世「むう……」

友紀「あはは……と、ん？」

莉嘉「……」

友紀「あ、もしかして、この2人も”知り合い”？」

莉嘉「うん。原田美世に、鷹富士茄子だよね？」

茄子「え？そうですけど……」

美世「どうして名前を？こんな子、ここの施設にいたっけ？見覚えないけどな」

友紀「この子じゃなくて、ゲッターのパイロットだよ。ほら、この間ここを守ってくれた」

美世「ああ、アンタが勝手にシエルターから子供達外に出して、後でしこたま怒られた時の」

友紀「だつてえ〜。戦つてるゲッターの姿がカッコ良かったから〜！」

茄子「それにしてもすごいですね〜。こんなちっちゃいのに、ゲッターに乗つて戦つてたんですか？」

莉嘉「へへ〜ん、そうでしょうそうですね〜！」

友紀「それでこの子、じゃない莉嘉は、違う世界から来たらしいんだけど、莉嘉のもといた世界にも、同姓同名のアタシ達がいるんだつてさ〜！」

美世「ええ〜!？」

茄子「まあ〜」

友紀「莉嘉が知ってるつてことは、この2人も、アイドルなんだ？」

莉嘉「そう。3人でユニットも組んでるよ〜！」

美世「え〜? アイドル……私がアイドルかあ〜。ちよつと想像出来ないな」

茄子「そうですね〜。ちよつと現実と、掛け離れすぎて……」

美世「ね〜? 私がアイドルなんて、アイドルプロデューサーの車が故障してた、ぐら

いのことがないと接点ないよ」

友紀「あたしは……応援してる球団が勝った日なら、気分良くてスカウトでも話くらいは聞いちやうかな？」

茄子「2人とも、何だか妙に具体的な言い方しますね」

號「おい」

友紀「ん？」

號「井戸端会議しに来たんじゃねえんだろ。とつとと始めようぜ」

友紀「あ、そうだったそうだった！それじゃあ皆準備……」

號「つつても、アンタらは見てるだけで良いぜ」

友紀「え？」

號「莉嘉、バッターボックスに立ちな」

莉嘉「アタシ？」

號「俺が投げる。それで勝負を着けようじゃねえか」

莉嘉「……へえ、1対1で、やる気？」

美世「あのさ、私の勘違いじゃないんなら良いんだけどさ」

友紀「何？」

美世「あの2人、何か空気悪くない？」

友紀「うん。何かさつきまで格納庫で喧嘩してたらしいよ」

美世「そんなの連れてきたのか、アンタは！」

友紀「うん。だって、火花バチバチの方が、面白くなりそうじゃん。実際なつた！」
タツ

友紀が2人の間に割って入る。

莉嘉「うん？」

號「ンだ？邪魔する気か？」

友紀「そうじゃないよ。決闘にせよ勝負にせよ、見届け人は必要でしょ？アタシ達がなつたげる！」

號「ふんつ。好きにしな」

友紀「よくし決まりく！それじゃあ、キャツチャーは美世！」

美世「え？わ、私い?!友紀がやりなよ。言い出しつぺでしょ」

友紀「そしたら実況出来ないじゃん。あ、茄子は解説で、アタシの隣ね？」

茄子「はい。分かりましたよ」

美世「ちよつ…！私だけ危なくない!?茄子も何か言つてよ〜！」

茄子「怪我だけはしないで下さいね〜」

美世「軽っ！」

友紀「はいはい！各々配置に着いたろ！ようし、皆ベンチに下がってろ！」

子供「えく？野球の試合するんじゃないのく？」

友紀「それよりもっと熱いのが見れるからさ！」

子供「熱いの？」

友紀「そう、本物のゲッターパイロット2人による、血沸き肉躍る最高のビックカード！」

子供「え、號兄ちゃんは知ってたけど、あのちっちゃいのもゲッターのパイロットなの？！」

友紀「？」

友紀「そう言うこと。だから危ないから、皆は下がってろ。その代わりに、見物料はタダだよー！」

子供達「二はくいつ!!」

友紀の先導で、子供達が練習場の脇へと捌け、中央に號が、そこから少し距離を置いて、バツタボックスに見立てた場所に莉嘉が立つ。

號「いいか！ヒットでもホームランでも、俺から一本取れりやお前の勝ち。代わり、3振したらお前の負け。負けた方は勝った方に二度と逆らわねえ。それでいいな？」

莉嘉「一方的に条件突き付けられるのは気に入らないけど…。シンプルなのはいいよ！返り討ちにしてあげる！」

號「へっ、その減らず口を黙らせてやるよ！」

友紀「それじゃあピッチャー、投球練習を」

號「必要ねえ」

友紀「そっか。それじゃあ、試合開始!!」

美世（キャッチャー装備）「お、お手柔らかにね〜…」

號「……」

莉嘉「ふんっ、ふんっ、ふんっ！」

2、3度素振りをしてから、バットを構える。

友紀「さあ、静かに盛り上がって参ります、屋外練習場！ピッチャーは我らが早乙女研究所のエースにしてゲッターロボのパイロット、一文字號！こうして野球の試合に参加してくれるのは初めてなので、投球は未知数」

友紀「対してバッター、こちらは異世界からの挑戦者になります。話題のゲッターロボ、アークのパイロット、城ヶ崎莉嘉！こちら打率は未知数！茄子さん、この試合、どうなると思いますか？」

茄子「ふっ、友紀ちゃんが一番楽しそうですね〜」

號 「…行くぜ?」

莉嘉 「いつでもッ、来いッ!!」 ブンッ ブンッ

號 「……」 スッ

友紀 「ここでピッチャー、ゆっくりと構え…」

號 「うおりやッ!!」

友紀 「投げたーッ!!」

スパーンッ

莉嘉 「…っ!?!」

美世 「っ…! 痛う…」 シュッ

友紀 「ストラアアイクツ!!ど真ん中、直球!しかし驚くべきはその速度!」

茄子 「…どのくらい、だったんですか?私じゃ、目で追えなかつたんですけど…」

友紀 「ちゃんとした機械がないから目測だけど、ざっと160キロ…」

茄子 「そんなに…?」

友紀 「球速はプロ級…。號選手、大口に違わない実力を持っています!さあ、莉嘉選手、あの豪速球を打ち返せるのか…!」

莉嘉 「……」

號 「へっ、降参するなら、聞けぜ?」

莉嘉「あつは☆こんなバカ正直なボールで、勝った気にならないでよね！」ギユツ
 號「…そうかよ。なら、正々堂々終わらせてやるぜツ!!」ブオンツ

莉嘉「!!」グツ

號「!?!」

友紀「あ、当たったー!?! 莉嘉選手、號選手の豪速球にバットを当てました!」

茄子「駄洒落ですか?」

友紀「ですが、打球は大きく逸れ、ファール。これで2ストライク。追い詰められ
 した莉嘉選手。逆転はなるのか?」

號「ツ!!」ブオンツ

莉嘉「!!」カキンツ

ブンツ カキンツ ブンツ カキンツ ブン カキンツ ブンカキンツ ブンツ

カキンツ…

友紀「これは…投げと打ちの応酬だ〜っ!! 號選手の投球は一切乱れない! しかし、
 応じる莉嘉選手も全く乱れなく打ち返す!! 今のところ、全てファールですが、バッテ
 イングがまぐれではないことを証明している!! これは流れが変わったか!!?」

美世「〜〜〜! っ! そ、そろそろ決着を着けてほしいんだけどな〜」ヒリヒリ

號「…分かった」

美世「え!？」 パアッ

號「認めてやるぜ。お前は、強い」

美世「そっち?!」 ガーン…

莉嘉「今更? アタシは、強いよ!」

號「故に、本気を出す!!」

左手に嵌めたグローブを外し、そして、

友紀「一文字號…。本当は左利きか! 面白いッ!!」

茄子「面白くなってきましたね、友紀ちゃんが」

子供「號兄ちゃん頑張れ〜!」

子供2「お姉ちゃんも頑張れ〜!」

子供達「どっちも頑張れ〜ッ!!」

友紀「ギャラリーも盛り上がりつつ参りました。さあ、ボールを左に持ち変えた號選手。

その実力は…」

號「行くぜえッ!!」

莉嘉「——ッ!」

ズワ オッ

美世「へブッ!」

友紀「投球は……ボール！しかし、受けたキャッチャーが吹き飛んだあ〜!!」

茄子「右で投げた時より、ずっと速い……!」

友紀「160キロなんてもんじゃないよ!170……いやもつと出てるかも!」

茄子「そんな投球、人間に出来るんですか!」

莉嘉「……」

號「焦んじゃねえよ、遊び球だ。勝負はまだこれから、だろ?」

莉嘉「……モッチロン☆」

號「ははっ!今のも打つ気でいんのかよ?大した奴だ」

莉嘉「トーゼンでしょ!負けるつもりで、勝負を挑む人はいないって」

號「……! けっ、はじめてだぜ。戦闘以外で、俺をここまでコーフンさせた奴はよ

!」

莉嘉「やつとエンジンが掛かった?なら、来なよツ!!」

號「おうツ!」

美世「もうやだあ〜!!私やめる〜!!」

友紀「ええ!!美世、もうちよつとなんだからさ!あと少し踏ん張ってよ!!」

美世「無理無理無理ツ!!あんなのもう1球受けたら死んじゃう!」

友紀「大袈裟な〜。野球ボールで死んだ人はいないよ」

美世「だったら私がその第1号になるッ！」

友紀「むうく……。仕方ないなあ。それじゃ、キャッチャー交代！4番、姫川友紀！」
美世が投げ出した防具を拾い上げる。

美世「最初っからそうしてよ！バカ！もう知らないッ!!」

茄子「お、よしよし。怖かったですね。もう大丈夫ですからね」

美世「茄子子〜！」

友紀「ふふっ……」

友紀（不思議な感じ……。號のあの投球を見てから、スツゴい心臓がバクバクしてる……！）

友紀（あの球をこの手で掴みたい、あの2人の勝負を、もつと間近で見たい——！）

友紀「さあ、試合再k——」

弁慶「くおらあッ!! 莉嘉、號！テメエら、こんなところで何してやがる？」

莉嘉「げっ」

號「車さん……」

弁慶「司令からトイレの罰掃除だと聞いて探してたんだがな。罰をそっちのけで、野球かい？」

號「ち、違えよ……これには深い訳が……」

莉嘉「そうそう！掃除はこれからやるつもりだったんだって…」

弁慶「言い訳無用ツ!!」

莉嘉「ヒツ…!!」

弁慶「司令官の慈悲がテメエらには分からねえみてえだな？」

號「……」

弁慶「言っても分からねえ奴に、体で分かせてやるのが俺の仕事だが…」 キツ

友紀「っ…!!は、はい…っ!」

弁慶「誰が唆したかってのはハッキリしてつからな。後でみっちり灸を据えておくとするか」

友紀「えーっ!?!」

美世「自業自得でしょ！精々しばかれる!」

茄子「骨は拾って上げますからね〜」

友紀「そんな茄子まで〜!ねえ、あたしは皆のためを思つてえ!!」

莉嘉「それじゃあ、アタシ達は…!!」

弁慶「バカ野郎！テメエらも一緒にしごいてやるから覚悟しとけ!!」

莉嘉「そんなあ〜!!」

弁慶「だが、その前に出撃だ。2人準備を急げ」

莉嘉「へっ、出撃？」

號「敵襲警報は聞こえないぜ？」

弁慶「そう言う訳じゃねえからな。詳しくはマシンに乗り込んでから話す。いいからついて来い」

號「分かったよ……。了解」

莉嘉「了解☆：勝負はお預けだね？」

號「命拾いしたな？」

莉嘉「ははっ。じゃあ皆待たね〜！今度はちゃんと試合しよ!!」

子供達「またね〜っ!!」

莉嘉「…あの子達のためにも、生きて帰らなきゃね？」

號「言われるまでもねえ!!」

タツタツ——

くくく 格納庫 各ゲットマシン・コックピット くくく

リン『——全員、揃ったようだね』

莉嘉「……」

美波「……」

かな子「……」

號「……」

凱「……」

弁慶「おう。出撃メンバー、全員集合だ。欠員無し」

リン『了解。それじゃ、まずは簡単に作戦の概要を説明するけど、皆の任務は部隊の護衛だよ』

莉嘉「部隊の、護衛？」

リン『そう。今、ここから少し離れた旧都市部の郊外では、先発した部隊が不足した資材を補充する為の資材調達任務を遂行中だ』

かな子「資材調達？ 溪ちゃんがさっきそう言ってた…」

リン『研究所を出ての資材調達は危険を伴う。近付いた人間の匂いに反応して、地下から巨大昆虫群が襲ってくるんだ』

美波「巨大昆虫群？」

凱「10年前のゲッター災害以降、地上やその付近で高濃度のゲッター線を浴びたことよって進化した昆虫群の総称です。既にデータは、整備作業に併行して貴女方のゲッターにもインプットしてあります」

莉嘉「うげ…。アリとかクモとか、そんなのがおつきくなってるの…？ だとしたら、気持ち悪〜！」

號 「流石におチビちゃんは、虫は嫌いか？」

莉嘉 「嫌いって程じゃないけど…。あんなのがおつきくなってワシャワシャしてるって考えたら、やっぱキモくない？」

かな子 「確かにそうかも…」

美波 「サイズが大きいのもそうだけど、外殻も鋼鉄みたいに堅いつてありますけど…」

リン 『モノの例え。だけど実際はもつと、それ以上だよ』

莉嘉 「それ以上!？」

弁慶 「ああ。歩兵の火器じゃ傷1つ付かねえからな。あれをやれんのは、お前達のゲッターくらいのもんだ」

莉嘉 「成る程。じゃあ、アタシ達で資材調達してる人達を守ればいいんだね？」

リン 『そう言うこと。調達部隊はもう出発してる。皆も早く出撃して』

莉嘉 「了解☆」

剗 「了解しました」

かな子 「それにしても、アトランティス流国もいるのに、巨大昆虫なんて…。随分敵が多いんですね？」

弁慶 「ああ。まるで蠱毒だ。この星で一番強力な毒を、生み出すようための、な」

美波 「蠱毒…」

號「そうだけ、俺達がまとめて出払っちゃまって、アトランティスの奴等はどうすんだよ？」

弁慶「今日の資材調達は、それほど離れたエリアじゃねえ。もしアトランティスの奴等が現れたとなりや、どつちかが戻りやあいさ」

號「簡単に言ってくれなせ」

莉嘉「：気になってたんだけど、弁慶さんのそのマシンは？」

弁慶「コイツか？コイツはレデイコマンド号。ゲッターをサポートするために開発された支援機さ。野郎の俺が乗り込むにや、ちよいと洒落た名前だな」

莉嘉「ふうん、支援機？」

弁慶「専ら、號達のゲッター用さ。アイツ等のはプラズマボムスと言って、ゲッター線とは違うエネルギーで動いてる分、ガス欠が多いからな」

弁慶「それを補う為に、この機に予備のバッテリーが内蔵されてるのさ。いざとなりや、ゲッターに直接給電出来る！」

莉嘉「そつか、まともに戦うためには、お守りが必要なんだ？そっちのゲッター」

號「言ってるよ。ゲッター線なんて危険な力に頼るよりは百倍マシだぜ」

話している内に、ゲットマシンは格納庫へと移動していく。

弁慶「んじゃ、俺が先に行く。テメエら、遅れんじゃねえぞ！」

先んじてレディコマンドが出撃。

剽 「よし、號。俺達も続くぞ！」

號 「あいよ〜っ！ゲットマシン、発進準備OKだ」

號達のゲットマシンがカタパルトに上がる。

號 「莉嘉、精々ハジをかくなよ」

莉嘉 「は？」

剽 「號！早く出撃だ」

號 「了解！ゲッターチーム、出るぜ！！」

ゲットマシン、出撃。

莉嘉 「……？何なのアイツ、いきなり……」

リン 『ふふっ、號の言った言葉の意味がよく分からないみたいだね』

莉嘉 「リン？」

リン 『ハジとは、ゲッター戦闘用語で死を意味する。失敗すれば、死』

かな子 「えーっと、つまり？」

莉嘉 「恥かいて死ぬなっこと？アイツにしては優しいこと言うじゃん」

リン 『今回の場合は、恥ずかしい死に方をするな、じゃないかな。例えば、発進時の

ミスによる事故とか、合体事故とか』

莉嘉「……はあ？」

リン『つまりは、簡単な挑発だよ』

かな子「確かに、こつちを気遣う言い方では、なかったかも……」

莉嘉「何様のつもり!? こつちの台詞だつての! 號なんかに負けてられないっ!! 行くよ、美波、かな子!!」

シユバツ

美波「あ、莉嘉ちゃん……!」

かな子「待つて!」

先走るように出撃したアーク号を追ってキリク号、カーン号と続いていった。

リン『……。ゲッターアーク、チームか』

—— 上空。

號「んお? ようやく来やがったな……!」

莉嘉「待つて——!」

號「よう、遅かったじゃねえか。本当に、ハジかいてんのかと思つたぜ」

莉嘉「んな訳ないでしょ! 回りくどい言い方して! そう言うトコ、ホント気に入らない!」

號「姐さんから意味を聞いたか……。んだよ、俺は心配してるんだぜ? おチビちゃん

が、高いところにビビって、チビっちまわねえかってよ!」

莉嘉「……!余計はお世話!それにアタシはおチビちゃんじゃないって、何度言えば……!」

號「俺から見たらおチビちゃんだろうが。悔しかったら、俺よりもデカくなってみな」

莉嘉「このっ……!」

弁慶「テメエら、戦闘前だ。いい加減にしねえか」

剽「そうだぞ。特に號、女性相手に情けないと思わないのか!」

號「思わないね。あんな、キャンキャン五月蠅い子犬風情によ」

美波「莉嘉ちゃんも。何時も突っかかっていくけど、號くんの何がそんなに気に入らないの?」

莉嘉「…別に。ただキーキー喚く山猿みたいで、目障りっただけ」

美波「そんな……」

號「誰が山猿じゃ!!」

莉嘉「そっちこそ!子犬って、ちよつと可愛いけど……けどやっぱ、アンタに言われんのはバカにされてるみたいでイヤ!!」

剽・美波「はあ……」

かな子「まさに犬猿の仲、なんですかね？」

弁慶「つたく、これから先が思いやられるぜ……」

かな子「せ、戦闘中は、流石に戦闘中はしつかりしますから。……多分」

弁慶「そこは自信持ってフオローしてほしかったぜ、お嬢ちゃん」

リン『そろそろ目的区域だよ。各自、フォーメーションは？』

弁慶「お、おう……！つと、虫けら共、もう出てきてやがるのか」

美波「あれが……」

巨大蟻《ギチギチ……》

巨大蟻2《ギチ……》

剋「……まだ、調達部隊とは距離がありますね。これなら迎撃が間に合います」

弁慶「よし、俺が援護する。號達は南に進んで、虫けら共の迎撃に当たれ。ゲッター

アークは東だ」

剋・美波「了解っ！」

莉嘉「うえ……。この距離で見ても、やっぱキモ」

號「おい、おチビちゃん」

莉嘉「……だ……か……ら……！」

號「細けえこたあ置いとけ。それよりも、さっきの続き、ここでしねえか？」

莉嘉「さっきの……？」

號「勝負の続きだよ。どっちが虫けら共を多く踏み潰せるか」

莉嘉「……いいね、乗った」

號「よっしゃ！合体したら勝負開始だぜ？行くぜ、剋!!」

剋「あ、號……！待て……！」

號「フォーメーションッ!!」

無人のゲットマシン2号機を誘導し、1号機が先頭に行く。

號「フルパワーチャージ、セットアップ!!チェンジゲッタアアアアッ!!」

號「おらあッ!!」

上空でゲッターに合体。落下しながら地上の巨大蟻1体に狙いを定め、重力落下を加えた踵落としてその頭部を砕く。

號「行くぜえ!!」

着地後、素早く立ち上がり、付近でこちらを威嚇する巨大蟻にパンチを一発。

號「おらよ、逃げんな！」

パンチで怯んだ巨大蟻の首を絞め上げ、引き寄せ、持ち上げ、

號「そらッ!!」

腰を捻った巴投げで、別の個体の巨大蟻にぶち当てる。

號 「ナツクルボンバー!!」

縫れ合い崩れ落ちた2体の巨大蟻に拳を撃ち出し、胴体を貫いて完全に沈黙させた。

巨大蟻《ギギ…イツ!!》

號 「へへっ、まだまだだぜ?」

そう言つて、背中のブースターに回つたゲットマシンのローターを手に取る。

號 「ブーメラン、ソーサーツ!!」

アンダースローで高速回転させて投擲し、巨大蟻を頭部から真つ二つに切り裂いた。

莉嘉 「っ…! ふくん、ズルなんかして、よつぽど自信無いんだ? かな子、美波、私達も行くよ!」

かな子 「は、はい…!」

弁慶 「莉嘉、撃墜数のカウントは俺がやっというてやる。コイツはそう言うのも得意だな」

莉嘉 「本当!」

弁慶 「ああ。誰かが正確に数えてなくちゃ、終わつた後で言い合いになるだけだからな。心置きなく、暴れてこい」

莉嘉 「やった♪」

美波 「いいんですか?」

弁慶「そう言う奴等だ。白黒はつきり付けてスッキリすんなら、そうしてやった方が後々のためだ」

美波「…そう言うもの、ですか」

莉嘉「美波、何してるの？早く行くよ!!」

美波「え、ええ…!」

莉嘉「チェンジゲッター! アアアアック!!」

ゲッターアークに合体。ウイングを開いて上空で高度を維持しながら、巨大蟻に狙いを定める。

莉嘉「相手は選り取り見取り…。ゲッターアークの武器は!」

ゲッターアークを視認し、威嚇行動を取る巨大蟻に対し、急降下。両手の鋭い爪を立て、巨大蟻に迫る。

シュバツ

巨大蟻《?!》

1体の巨大蟻の目の前に滑り込むように着地。同時に、爪を立てた左の貫き手を、その頭部目掛けて放った。

莉嘉「これでえ…!」

更に右手を突き入れ、ゲッターアークのパワーで左右に引き裂いていく。

ブチブチブチイッ

莉嘉「……」

左右に絶たれた巨大蟻の肉塊に目を落とし、

莉嘉「えいつ！」

それを、周囲で様子を窺っている巨大蟻に投げつける。

莉嘉「フッ——！」

頭部に掛かった仲間の屍を振り払う巨大蟻の隙を突いて、背後に回り込むゲッターアーク。腕のバトルショットカッターでたちまちに切り刻む。

莉嘉「そりやあゝっ!!」

更にバトルショットカッターを振るい、生み出した真空波によって、まとめて4、5体の巨大蟻を紙吹雪のように散らした。

莉嘉「よし、次！」

かな子「いい調子だよ、莉嘉ちゃん！」

美波「近くには調達部隊の人達もいるから、ゲッタービームやサンダーボンバーは使っちゃダメだよ。なるべく接近戦で仕留めて」

莉嘉「こんだけ蟻がウジャウジャしてるのに、武器にも縛りがあるって言うの……
面白いじゃん☆」

爪を以て迫り来る巨大蟻を切り払いながら、ニヤリと微笑む。

莉嘉「アタシにも、これがあるツ!!——ゲッタートマホークツ!!」

ゲッタートマホークを手に取り、構える。そして、

莉嘉「ん？」

かな子「どうかした？」

莉嘉「敵が攻撃して、来ない？」

美波「…確かに。何だかこつちの様子を窺ってるような」

かな子「そうですね?でも、向こうは昆虫、ですよ?そんな知能があるんですか?」
弁慶「連中は虫けらだが、体と共に頭脳も進化している。並の思考が出来る人間と戦ってると思ってもらっていいぜ」

かな子「人間と同じ…」

莉嘉「兎も角、敵の狙いも動けば分かる!任せろよ、美波!」

美波「分かったわ!」

莉嘉「いづくぞ!!」

トマホークを振り上げ、巨大蟻に突進。が、

莉嘉「!?!」

かな子「トマホークを、躲した!?!」

巨大蟻が跳躍し、振り下ろしたトマホークを躲す。

莉嘉「…これって」

美波「何か、こつちを誘導してるみたいじゃない？」

かな子「誘導…？まさか、私達を調達部隊から引き離すつもりで…!?」

美波「…だとしたら、敵の行動に乗るわけにはいかないよ」

莉嘉「うゝむう…」

悩みながらトマホークを振るうが、やはり巨大蟻は、ゲッターアークを調達部隊から引き離すように動く。

莉嘉「近接攻撃でやってる限りは、敵の思う壺だよ！」

美波「ゲッターアークじゃ、確かに状況は不利かも…」

莉嘉「うゝん…。しゃーない！ここはかな子に任す!!」

かな子「え？」

美波「昆虫軍隊の迎撃と、部隊の護衛を考えれば、ゲッターカーンの方が立ち回りのには有利かも」

かな子「でも、いいんですか？ 號さんとの勝負は…」

莉嘉「…」。この際、勝負なんて言ってられないよ！お願い!!」

かな子「…分かりました！」

莉嘉「オーブンゲット!!」

かな子「チエンジゲッター!カーンッ!!」

凄まじい土煙を巻き上げ、ゲッターカーンが着地する。

巨大蟻《……!?!》

美波「昆虫達が動揺してる…?」

かな子「だとしたら、それがチャンスです!」

かな子「ゲッターニードルミサイルッ!!」

ゲッターカーンの肩からミサイルが弾け飛び、巨大蟻を貫いていく。

莉嘉「流つ石☆ニードルミサイルなら、ゲッタービームとかとは違って調達部隊を

気にせず撃てる!」

かな子「莉嘉ちゃんと美波さんは、レーダーの警戒をお願いします。ゲッターカーン

の後ろには、1体だって通すわけには行きませんか!」

美波「分かったわ!かな子ちゃんは戦闘に集中して」

かな子「!」

巨大蟻《ギイツ!!》

かな子「えいっ!」

廃墟の影から飛び上がり襲い掛かる巨大蟻に、ゲッターカーンの拳を放って迎撃。腕

を持ち上げ、拳に乗せた巨大蟻を、そのまま地面に叩き付け粉碎した。

かな子「次は……。……！」

巨大蟻の群れは、あくまでゲッターカーンを調達部隊から切り離すつもりなのか、更に距離を置いたため、後ろに下がっていく。

かな子「やっぱり、私達と調達部隊を分断するつもりで……。ですけど、縋索！」
体の中央で手を合わせ、内から鎖を生み出し、縋索を携える。

かな子「えいっ！」

鎖の先端に付いた独鈷杵を重石に、延縄の要領で飛ばし、逃げる巨大蟻を縛り上げ、捕縛。

かな子「やあッ!!」

鎖をしながら手元に引き戻し、両肩のホイールを回転。

かな子「スパイン・ブレイカー!!」

思いつき引き寄せた巨大蟻を、勢いそのまま、回転するホイールに叩き付けて粉々に打ち砕いた。

かな子「何処まで逃げようと、捕まえるまでです！」

巨大蟻《……》

巨大蟻の群れが動揺するように足を止める。

かな子「動きが止まった？なら…」 シュッ

手にした縄索を再度投擲。今度は、群れの周囲を鎖で囲うように飛ばし、逃げ場所を封じる。反対方向から戻ってきた独鈷杵を左手で掴み取る。

かな子「ニードルミサイルツ!!」

ニードルミサイルを真上に放つ。上空で飛翔する速度を無くしたミサイルは、そのまま下に向かつて落ちていく。

縄索の鎖によって、包囲された巨大蟻の群れへと。

かな子「名付けて、教令輪陣です…!」

陣の中に落下するミサイルが、無作為に爆ぜ、爆炎が業火となって燃え上がり、捕らえた巨大蟻の群れをその熱で跡形もなく焼き払った。

かな子「…南く無く。——ちよつとカツコ付けすぎですかね…？」 アハハ…

莉嘉「カツコイイよ、かな子☆この調子でどんどん行こうっ!」

弁慶「——待て、號!戻ってこい!!」

莉嘉「!？」

剋「つ…!隊長の声が聞こえないか、號!前に出過ぎだ!このまま、調達部隊との距離が…」

號「敵さんが来ねえから、こつちから向かつてるだけだ!奴等を一匹残らず潰

「しゃあ、結果は変わらねえだろうが!」

剽 「目の前にいるのだけが勢力とは限らないんだぞ?!後方から増援があつたらどうする?調達部隊に、巨大蟻を迎撃出来るだけの戦力はないんだぞ!」

號 「ウダウダ考えて戦闘は出来ねえ!…おらあッ!!」

水平に跳躍し、こちらに背中を向ける巨大蟻目掛けて蹴りを放つ。

號 「——レッグブレエードツ!!」

脚部からせり出した刃で、巨大蟻を切り裂く。

號 「どんなもんだ!?!逃げたアリンこ共はこれで全部か?」

剽 「まだ任務中だぞ、気を抜くな!敵を倒したのなら、早く迎撃位置まで後退だ」

號 「へいへい…。分かりましたよ、と?」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ…

號 「何だ?」

剽 「地震…?違う、地下から何か…!」

《ギイイイイイイッ!!》

號 「コイツはア…!」

剽 「巨大な、クワガタ…!?!奴等の仲間なのか!?!」

巨大鋏《…》キチキチキチ…ッ

剽 「…俺達の相手を、コイツにさせるつもりだったらしいな。敵の狙いは」

號 「へっ、上等じゃねえか。やつと面白くなってきやがったぜ！」

剽 「危険だ！後退し、アークチームに救援を頼もう！」

號 「誰が！あのおチビちゃん共に…！これは命を懸けた戦いだぜ！危険なんぞ、承知の上だあゝツ！！」

剽 「退がれ、號！くっ…！」

號 「おりやあゝゝツ！！」

上空に跳躍し、蹴りを放つ。

ガンツ

號 「…ゝっ!?」

巨大鍬《……》

號 「コイツ…！堅え…！」

巨大鍬《ギイイイイツ!!》

號 「うおわっ!」

首を振り、ゲッター1号を弾き飛ばす。

號 「つつうゝ…。やってくれやがった虫野郎…!!只じやおかねえ！」

剽 「追撃が来る。しっかりしろ！」

號 「!?」

起き上がろうとしたゲッター1号の背中を前肢で踏みつける。

號 「コイツ……!」

巨大鍬 《ギャアアアツ!!》

巨大鍬の口から垂れた液体が、ゲッター1号の表装を焼き、蒸気を立ち上らせる。

剽 「これは……まさか、酸か? 號、このままでは、ゲッターが溶かされる!」

號 「分かってんだよ、そんなこと……クツソ、こんにやろツ!!」 ゴロンツ

強引に横に転げながら、踏みつけから脱出。

號 「うりゃ!」

体勢を崩した巨大蟻の腹を蹴り飛ばしながら立ち上がり、距離を空ける。

號 「お?」

剽 「…甲殻に覆われた背中と違って、腹部は弱いみたいだな」

號 「そうか……。それさえ分かれば!」

腹部を見せ、横倒しになった巨大鍬に肉薄する。が、

巨大鍬 《……!!!》

號 「うおツ!?!」

巨大鍬が背中を開き、羽を高震動させ発生させた突風で、ゲッター1号の足を止める。

號 「クツソオ……！」

巨大鋏は、そのまま飛翔。

號 「畜生ツ！降りてきやがれ！卑怯者ツ!!」

ゲッター1号のカメラでも視認出来ないほどの彼方へ飛び去ったかにみえた巨大鋏だが、

號 「ん……？」

剽 「戻ってくるぞ！」

號 「チツ……！」

遠方から高速で迫る巨大鋏の突撃を何とか横に逸れて躲すが、高速飛翔する巨大鋏が作った真空刃が、ゲッター1号の表装に傷を付ける。

號 「俺のゲッターに傷を付けやがってエ……！」

剽 「熱くなるな！冷静に動きを見極めて、攻撃を躲せ!!」

號 「くっ……！」

その後も、右から左から、前から後ろから巨大鋏の突撃は続き、受け流すゲッター1号が一方的に手傷を受けていく。

號 「これじゃあ罫が明かねえ！」

弁慶 「退け、號ツ!!この相手は、お前のゲッターじゃ圧倒的に不利だ！」

ゲッター1号に向かっていく巨大鋏にミサイルを撃ち込む。だが、

弁慶「つ……！やっぱコイツのじゃあ、火力が足りねえ!!」

號「くつ……！せめてゲッター2に合体出来りゃあ……！」

剋「パイロットのいないゲッター2に、この中で合体するのはリスクが高い！」

號「危険、リスクが高い……！時には賭けに出てみなきゃ、勝てるもんも勝てねえだろ

うが！」

剋「失敗した後を考えろ！ゲッターが合体出来なくなるかもしれないんだぞ!」

弁慶「バカ野郎共ツ！ケンカなんざしてる場合か!?!上だ!!」

號「——!!」

突進攻撃から手段を変え、ゲッター1号の真上から全体重を掛けて、巨大鋏がのし掛かる。

號「チツクショウ!!また酸で俺達を溶かす気か!?!」

剋「いや、違う……！號ツ!!」

號「!!」

ゲッター1号の頭部めがけて放たれた、巨大鋏の鋏の大顎をそれぞれ左右の手で辛うじて受け止める。

號「ぐ………ぐぐぐつ……！」

巨大鍬《……》ギチギチギチ……ッ

何とか押さえ込むが、じわじわと、ゲッター1号に巨大鍬の切っ先が迫る。

剽 「號、大丈夫か？」

號 「へっ、そう簡単にやられやしないぜ！」

弁慶 「コイツ……！號を離せッ!!」

レディコマンドのミサイルをありったけ撃ち込むが、効果はない。

剽 「アークチームに救援を要請するぞ！」

號 「待て!!」

剽 「これ以上まだ可笑しな意地を張るつもりか!？」

美波 「……かな子ちゃん、ゲッターチームから、救援要請が！」

かな子 「え!?!號さん達が、ピンチなんですか？」

莉嘉 「……」

美波 「莉嘉ちゃん、分かっているとと思うけど、人の命が懸かっているんだよ？」

莉嘉 「分かってる……！分かってるよ！でも……」

號 「来るんじゃないねえ!!」

莉嘉 「!!」

號 「テメエ等の助けなんか必要ねえぜ、こんな奴に……！」

剋 「號……！お前は、まだ……！」

號 「テメエ等がそこを離れたら、誰が調達部隊を守る!!」

莉嘉 「……！」

かな子 「ですけど……！」

莉嘉 「……。號の言う通りだ」

かな子 「莉嘉ちゃん……？」

莉嘉 「オープンゲット!!」

かな子 「きやつ、莉嘉ちゃん!？」

ゲッターカーンの合体を強制解除。

莉嘉 「チェンジゲッターアークツ!!」

莉嘉 「調達部隊には、かな子の友達もいるんでしょ？だったら、絶対に攻撃させない

！アタシが、命に代えても守って見せるツ!!」

かな子 「けど、それじゃあ……！」

美波 「莉嘉ちゃん、分かっているの!？」

莉嘉 「分かっているよ！號が、ゲッターがあんなのに負けるわけ無い！只強がつてるだ

けの奴なら、とつくにやられてる!!」

美波 「そうじゃなくて……」

莉嘉「アタシは、皆の命を守る！そっちは、勝手に突っ走ったそっちの自業自得だから、勝手にして！何かあったって、死んじやったって、泣いてなんかやらないから!!」

號「ハッ……！言ってくれるぜ、おチビちゃんよお」

巨大鍬《……!!》

巨大鍬が、大顎の力を更に強める。

號「ぐう……このつ、虫けら風情がよ……！クワガタなら黙って、カブトムシと相撲取ってろってんだ!!」

ゲッター1号の腕に力を込めながら、背中の中のローターが静かに回転を始める。

號「俺を……俺のゲッターを、ナメるなアツ!!」

ローターの回転が臨界に達する。

號「マグフォース・サンダー!!」

巨大鍬《?!?!》

ゲッター1号のローターファンから放たれた電磁光線、マグフォース・サンダーが、巨大鍬の巨体を吹き飛ばす。

巨大鍬《……っ》

號「!?……動きが鈍った……?」

剽「……。そうか、進化した奴等の剽殻は鋼鉄以上。本当に金属のように変質して

るとしたら……！」

號 「そうか！車さん、エネルギーチャージだ！」

弁慶 「何だと!?!」

號 「これまでの戦闘と、さっきのマグフォース・サンダーで、ゲッターのエネルギーを大分使っちゃまった！エネルギーを補給するなら、奴が怯んでる今しかねえ！」

弁慶 「何をするつもりか知らねえが、分かった！」

ゲッター1号の背後に回ったレディコマンドがその場で滞空し、給電用チューブをゲッター1号の背中にセットする。

弁慶 「……チャージ、開始！」

レディコマンドに積まれた予備バッテリーから、エネルギーがゲッター1号へと急速に給電される。

號 「フルパワー・チャージ、完了ッ!!おっしやアアッ!!これまでの恨み、倍にして返してやるぜえ!!」

巨大鍬 《……ギイツ!!》

体勢を立て直した巨大鍬が、激昂したように荒ぶり、ゲッター1号に迫る。

號 「迂闊だぜ！」

腰を低く落として、迎撃の体勢を取ったゲッター1号のローターが、再び回転する。

號 「へつ、へへへつ……！やったぜ、ザマーミロ！……つと?!」
同時に、ゲッター1号も崩れ落ちる。

弁慶 「信じられねえ。さつきやったエネルギーを、一度に使いきりやがった……！」

號 「大戦果だぜ。こりゃあ勝負あつたな」

剽 「ああ、あの敵を1人で倒せたんだ。十分な戦果だ」

號 「……。なあ、何で最後は手を貸してくれたんだ？」

剽 「お前の覚悟が分かったからな」 ボソツ

號 「何？」

剽 「何でもない。終わるなら手早く済ませたかっただけだ。それに……」

號 「それに？何だよ」

剽 「“時には掛けることも大事” だろ？」

號 「は……ははっ！ そうだ、ギャンブルも大勝利だ!!」

剽 「調子に乗るなよ。今回はたまたま、上手く行っただけなんだからな」

號 「へいへい、分ったよ。車さん！ また補給頼むわ！ まだ戦いは、終わってねーんだしよ」

弁慶 「テメエ……このエネルギーだつてタダじゃねえんだぞ!!」

莉嘉「これで……！終わリッ!!」

トマホークを振るい、巨大蟻の一匹を斬り断つ。

莉嘉「よし、増援は……!?!」

弁慶「連中の出現は疎らになってる。調達部隊の撤退も完了した。俺達もとつとどずらかるぞ」

莉嘉「……つてことは」

弁慶「作戦、終了だ」

莉嘉「やった……！終わったあゝ!!」

かな子「はあ……今回は長期戦でしたね？莉嘉ちゃん、本当にお疲れ様でした」

莉嘉「かな子も頑張ってたじゃん！美波も、サポートありがと☆」

美波「ええ……」

號「さ、それじゃあ結果発表と行こうじゃねえか。なあ？」

莉嘉「……!?!」

弁慶「いいのか、莉嘉ちゃん」

莉嘉「いいよ。元より、勝負自分を放棄したつもりはないし」

弁慶「……分かった。それじゃあ、結果を発表するぞ」

莉嘉「……」

號 「……」

弁慶 「今回の戦闘、個人の撃墜数、トップは一文字號、183体。城ヶ崎莉嘉は、102体だ」

號 「よっしゃー！」

莉嘉 「うう……分かってたけど……」

弁慶 「だが」

號 「うん？」

弁慶 「三村かな子、157体。チームでの合計撃墜数は、アークチームがトップだ」

號 「何だよそりゃ!?!そっちの丸いものの撃墜数も入るのか!?!」

かな子 「丸いの……」

弁慶 「当然だ。お前達はシングルで戦ってる訳じゃねえ。特に、ゲッターカーンの活躍は目覚ましい。巨大昆虫群の撃墜、調達部隊の護衛……双方とも、十分な数値を示している」

かな子 「そんな……。たまたま、今回の作戦と相性が良かっただけですよ」

弁慶 「それだ。ゲッターカーンと、作戦の性質との相性……。それを戦いながら把握し、個人的な勝負を捨てて判断を下したのは莉嘉だ。かな子の撃墜数を、莉嘉のものと共同とするに足る十分な理由になる」

號 「だがよ、俺は虫けらの中でもデカブツをやつつけてるんだぜ!」

剗 「それはお前の、自業自得でもある」

弁慶 「剗の言う通りだ。アークチームのお陰で、調達部隊への損害は軽微。戦闘の影響で、輸送車輛が幾つか損傷したが、人的被害は0。それは、アークチームの十分な戦果なんじゃねえか」

號 「んだよ……それじゃあ、俺の負けってことか!」

弁慶 「いや、勝負は引き分けだ」

莉嘉・號 「引き分けえ!!」

弁慶 「ああ。この結果じゃ、テメエ等も納得しねえだろ。これで白黒着けたって何にもならねえ」

剗 「妥当な結果だな。これでは」

美波 「そうね。下手に優劣を着けるモノでもないかも」

號 「チツ!しようにねえか…」

莉嘉 「…勝ちを譲ってあげてもいいよ?」

號 「ンだとお…?」

莉嘉 「今回は、負けるつもりだった。負けてもいいって思った。だって、それでたくさんの方が守れたんだもん。だからさ…」

號 「ナメんな！ジャリガキに勝ちを譲られるほど、落ちぶれちやいねえ！」
莉嘉 「ジャリって、そんな言い方……」

號 「……チームワーク、ってかよ」

剗 「そうだ。俺達は今回、その面で完全に彼女らに負けた」

號 「だが、こっちは2号機にもパイロットがいねえんだぜ？」

剗 「2号機にパイロットがいたとして、お前に合わせられたか？」

號 「……」

剗 「アークチーム……。女だてらにチームを組んでいるのは、伊達じゃない。彼女達から学ぶことは、まだまだ多そうだな——」

つつく

第17話『溪、出撃す』

かな子「……はあ」

かな子（莉嘉ちゃんの勢いに任せて来ちゃったけど、みんな大丈夫なのか……？）

——マクドナル『ストーカ01は、やがてこの地球をも包む込み、全てを呑み込む』

——マクドナル『つまり、人間だろうとハ虫人だろうと滅びる運命にあると言う事だ

!!』

かな子「……っ」ブンブンッ

脳裏に沸いた“最悪の想像”を掻き消すように頭を振る。

かな子「今は弱気になっちゃダメ……！皆を信じて、頑張らなきゃ……！」

溪「1人でブツブツ……格納庫で何やってんの？かな子」

かな子「ひゃあッ!? け、溪ちゃん……?! 何時の間に……」

溪「何時の間も何も、ここはアタシの職場だよ？かな子こそ、格納庫の隅っこ何か

で、サボリ？」

かな子「さ、サボりなんかじゃ、ないですよ？これは……」

溪「ん？……へえ、それがかな子達の世界のケータイなんだ？」

かな子「え？あ、こっちの世界にスマホは…」

溪「スマホって言うんだ？ふうん……で、男の待ち受け眺めて、ホームシツク紛らわせてたんだ？」

かな子「……！み、見ないで下さいっ！」

溪「別に隠すことじゃないじゃん。かな子も、意外に隅に置けないんだ」

かな子「ちよっ……違……！この人は、そう言うんじゃないって…」

???「どう言うつもりだ!? 號ッ!!」

かな子「きゃっ……！何……?」

溪「あく、號達のチームが訓練から帰ってきたね」ヤレヤレ…

かな子「え？けど、今の声、凱さんでも弁慶さんでもなかったみたいですけど…」

溪「新しい補充要員だよ。今まで不在だった2号機のパイロット候補が、ようやく補充されたんだ」

かな子「それで、今まで飛行訓練をしてたってことですか」

溪「うん。けど、あの調子じゃ、また號が問題起こしたみたいだね。こりやまた徹夜

かなあ」ウ……

~~~~ 格納庫 ゲットマシンドック ~~~~

???「聞こえているのか、號!? 貴様、俺を道連れに地獄に行くつもりかあッ?!」



號 「……。仰ってる言葉の意味が、よく分かりませんね。星一尉?」

星 「分からないい?!なら、俺をわざと殺すつもりだったのか!」

號 「だから、道連れだの殺すだの、そう言っている言葉の意味が分からないと、そう言ってるんですよ」

星 「しらばつくれやがって……!飛行中にわざと失速して高度を落としただろう?下手をすれば、編隊を組んでいた俺達が、巻き添えを喰らう所だったんだぞ!」

號 「それは……!」

剽 「お言葉ですが、一尉。それは、貴方の2号機の進入速度が速すぎた為の緊急措置です。あの時號が失速してでも強引に離脱していなければ、1号機はサンドイッチにされるどころでした。號の判断は、間違っではありません」

星 「なら貴様らは、俺がミスをしたと言うつもりか!?この俺が!!」

號 「アンタ意外誰がいるんだつうーんだよ……」

剽 「號、今は抑えろ」

星 「俺はなア、ずっと空軍で戦闘機に乗ってきたんだ!貴様らがおしめ履いていた頃からずっとだ!空軍のホープとだって呼ばれていたんだぞ!」

號 「全部10年前の話だろーが」 ボソツ……

星 「それが、10年前の悲劇を生んだ悪魔の眷属のパイロットとやれと、わざわざ連

れてこられたんだぞ？その意味が分かるか!？」

剷 「ですが、通常の戦闘機と、ゲットマシンとでは感覚は違います。特に合体のタイミングは、いくら航空機に乗り慣れていようと、簡単に掴めるものではありません。ですから、この訓練の間だけでも、我々の指示に従って…」

星 「バカにするなよ！経験も技量も、貴様らヒヨツ子共に負けるものか!!貴様らが俺に合わせてりゃあ良いんだよ！」

號 「……。一尉、お言葉ですが…」

星 「特にお前だ！司令や戦隊長から、お前のことはよく聞いている！規律を乱し、己の好き勝手行動する！貴様のような奴が、周りを殺していくんだつ!!」

號 「ははっ！そうですかい？ま、アンタの言うことあ否定しはしねえが…!」  
ガシツ

星 「むっ…!？」

號 「俺にデカく出たいなら、あんまり醜態晒すのはやめましようや。ギヤーギヤーギヤーギヤー喚くのは、端から見りゃ、弱い犬が吠えているようなもんだぜ？」

星 「……!」 キョロキョロ

整備士「つ……」 スタスタ

整備士2「……」 スタスタ…

號 「お互い、マヌケをしないように気を付けましょうや。これ以上はただ〃ハジをかく〃だけですぜ？」

星 「ぐっ……！」 バシッ

號 「おおう、痛い」

星 「訓練結果を報告してくる！その後は、シミュレータで引き続き訓練だからなッ！！」

剗 「了解！」

號 「了解でありまあすッ！！」

星 「フンッ」

スタスタ——

號 「……行つたか」

剗 「號。今回は助かったとは言え、あまり年上を挑発するような物言いは、するものじゃない」

號 「なら、アイツの好き勝手させても良いのかよ？」

剗 「ちつぽけなプライドが、生きていくために必要な者もいる。仕方ないさ」

號 「これからあんな奴とチームを組んでいかなきゃならないのかよ。……やつてらんねえぜ」

溪 「號くお！」

號 「わつ、溪!? んだよいきなり……抱き着いてくんな」

溪 「まくた怒鳴られて、今度は何したの？」

號 「何したつてな……」

剗 「今回は問題を起こした訳じゃない。ただ、一尉の考えにそぐわなかっただけだ」

溪 「一尉? ああ、この間入つてきた？」

剗 「元空自隊員らしいな。だがまだ、ゲットマシンの勝手が分かっていないようだ」

溪 「ふうん? ま、また號が無茶な操縦をして、ゲットマシンを壊したとかじゃな

きゃ、あたしは何でも良いけど」

剗 「…マシンは壊れた訳じゃないが、大分負担を掛けはしただろうな」

溪 「えく!? もう、アンタは!!」

號 「耳元で叫ぶな。仕方ねえだろ。こっちは死ぬかも知れないトコだったんだから

よ」

溪 「だからつてねえ……。ここの資材だつて無限じゃないのよ? もうちよつと自分の

手足だと思つて大切に扱つてよ」

號 「悪いが、俺は自分の体を大切にしたことなんざ、一度だつて無いんでな」

溪 「むう、あー言えばこー言う……」

號 「へっ、そんなにゲッターが大事なら、いつそお前が乗っちゃまえばいいんじゃないかねえか？」

溪 「え、あたしい〜？」

號 「ゲッターの整備を担当して、ゲッターのことは自分のことよりよく分かってんだろ？ゲットマシンにビビるようなへなちよこ乗せるよりよっぽどマシだぜ」

溪 「ムリムリムリ！そりゃあ、腕つぶしなら普通の女の子よりあるだろうけどさ？大の男だつて失神するようなマシンに、あたしが乗れないって」

號 「けどよお…」

リン 『——ゲッターチーム、それにアークチーム。ゲッターパイロット各員は、至急会議室に集合。これからブリーフィングをやるよ。直ぐに集まって——』

號 「あん？ブリーフィングだと…？んな予定あつたか？」

剽 「今後の方針が決まったんだらう。兎に角、会議室へ急ぐぞ」

號 「おう。…ん？」

タツタツタツ——

莉嘉 「號〜！早速新入りを病院送りにしたつて本当？」

號 「莉い〜嘉あ〜…！誰だ!?!んなこと言い出した奴は!!！」

剽 「普段の行い。自業自得だな」 ハア…

くくく 研究所内 会議室 くくく

號 「何い〜!? 昆虫共を殲滅する、だあ!？」

剷 「話を大きくするな、號。あくまで、早乙女研究所近隣に位置している連中の巢であるコロニー、その1つを攻略する、そう仰ったのだろうが。司令官は」

號 「だがよ、1匹残らず始末しろってんだろ? 結局の所はよ」

リン 「まあね。それがつまり、攻略するって事だからね」

號 「1つのコロニーを根城にしてる虫けら共は、少なくとも数千体だ。そんな所にゲッター2機だけでは、流石姐さん。アンタ鬼だぜ」

リン 「それくらいの事、難なくやっていけなきや、これから先は生き残れないって事だよ」

號 「どう言うことだ?」

弁慶 「司令は、この戦いを黒平安京攻略への試金石にしようってんだよ」  
剷 「黒平安京の…!？」

かな子 「あ〜…」

リン 「うん、何?」

かな子 「その、コロニーとか、黒平安京とか…。こつちに来て日が浅い私達には何が何だか」

弁慶「…だよな。アークチームには、その辺の説明も必要か」

リン「コロニーってのは、単純に巨大昆虫が生息して、繁殖してる根城さ。かつて人類が反映した廃墟の地下深くに根付いてる。だから“コロニー”」

美波「成る程…」

莉嘉「それじゃあ、黒平安京って言うのは？あの昔京都辺りにあったって言う？」

リン「それに似てるから、そう名付けたってだけ。正確には、そうアトランティス流国の本拠地って所」

莉嘉「アトランティス流国の、本拠地…!？」

弁慶「そう目されている場所、だがな。だが、これまでにそこに攻め込んだ部隊の戦闘結果などから、本拠地であることには間違いはねえ」

莉嘉「本拠地だって分かってるのに、どうして攻め込まないの!？」

號「おいおい、人の話はきっちり聞くんだけ？おチビちゃん」

莉嘉「…むっ」

號「攻撃ならとづくにしたさ。俺達じゃねえ、他の国の多くの軍がな」

莉嘉「……!」

リン「だが、その結果がどうなったかは、今私達が置かれている状況を見れば、言わなくても分かるよね？」

莉嘉「……」

リン「コロニーに存在する数千の巨大昆虫群……。これを殲滅することが出来なければ、黒平安京を攻略するなんて到底出来はしない！」

星「しかし、それには少し……。時期尚早ではないかと！」

リン「……」

星「我々のチームは、まだ発足したばかりです。チームとしての練度も、合体の精度も、完全ではありません！この状況での命を賭した作戦など、リスクしかありません!!」

弁慶「……」

號「あのなあ……」

星「この際ですから、上申致します！自分は、この若僧共とはチームは組めません!!」

リン「……ふうん。何故？」

星「何故……?!理由は、明白ではないですか！気が逸る若僧共とでは、まともなフォーメーションすら組めません！もつと熟練したパイロットに……」

リン「確かに、號と剋はまだ若い。だがゲットマシン、ゲッターロボの操縦経験に関しては一尉、貴方よりも上だ」

星「し、しかし……。このままでは、自分の身がもちません!!」



リン「はじめのうちには、誰でもそうだよ。星一尉。経験が必要だと言うなら尚のこと、今回の戦闘でしっかりと積めば良い」

星「くくく……っ！た、隊長……車戦隊長だつて、何か思うところはあつた筈です！」

弁慶「……確かに、ゲッターの操縦に於いて、チームワークは重要だ」

星「……そう、だからこそ……！」

弁慶「だが、チームの信頼つてのは一方通行じゃねえ。號達は勿論だが、お前さんもメンバーに歩み寄らなくっちゃあな。得られるもんも出来ねえだろうよ」

星「ぐっ……！」

リン「心配するな」

星「は……？」

リン「號も剋も、そしてアンタも。私が信頼して、選抜したメンバーだ。訓練でも氣を失うこと無く帰つてきてる。今の3人は、間違いなく優秀なメンバーだよ」

星「……っ」

リン「話はそれくらいで良いだろう。それじゃあ、細かい調整に入るよ。今回は攻撃部隊にも出撃してもらおう。攻撃部隊にはコロニー入り口に布陣している防衛戦力を削いでもらう。ゲッター各機がその後突入。それから——」

—— 会議終了後、格納庫。

ツカツカツカ――

リン「……」

弁慶「…司令」

リン「…何？」

弁慶「司令は今のパイロット、今のチームで本当に完璧だと思っておいでで？」

リン「どういう意味？」

弁慶「確かに、星一尉を見つけ出すには苦労した。ここだけじゃねえ、他の地下都市を巡って歩き、貴重な戦闘要員を譲って貰うって言うんで、それなりに出すものも出ました」

弁慶「だが、奴はゲッターのパイロットになる器じゃねえ」

リン「……」

弁慶「本当は司令だって分かってる筈だ。星一尉と、號達じゃあ、チームにはならねえ」

リン「……溪」

溪「うん？あ、お姉ちゃ……じゃなくて、司令官！」

リン「ゲットマシンの調子は？」

溪「調子もどうも…。號の乗るゲットマシン1号は、今日は訓練でしか飛んでない

のに、戦闘でもこなしたみたいにもボロボロだよ……」

弁慶 「星からも報告は受けてる。また無茶な軌道をしたみてえだが……」

溪 「そうしなきゃ、マシンも號達もバラバラになってた。理屈は分かるんだけどさあ〜」

リン 「號の機転で、マシンもパイロットも無事だったって訳だ」

溪 「司令?」

リン 「號は一見無鉄砲に見えて、機転が利く。剽は、少し慎重すぎるけど、それでも冷静な戦術眼を持つてる。2人に足りないのは、3人目のパイロットってだけだ」

弁慶 「なら、その3人目は誰だって良いって訳ですかい?」

リン 「それは私より、貴方の方が分かっている筈だ、弁慶さん」

弁慶 「……」

リン 「けど、私達には時間がない。頭数を揃えている余裕なんて、当然。その場凌ぎでもやって見せなきゃ、滅びるだけだ」

弁慶 「…死人が出ますぜ。必ず……!」

リン 「この作戦で死ぬくらいなら、死なせてやった方が寧ろ親切じゃない?」

弁慶 「……言っている意味は、分かりますがね」

溪 「司令……車隊長……」

リン「……。このマシンを乗りこなせるのは、神に選ばれた天才か、よつぼどのバカか。そのどちらか、だね」

溪「……」

溪（バカか、天才か、ね…）

溪「あたしは…」

—— 作戦までの準備と、偵察と思われる程度のアンドロメダ流国の部隊との戦闘を経て数日。巨大昆虫群殲滅の当日を向かえる。

~~~~ 群馬県・前橋市内 ~~~~

巨大蟻《……》ギチギチ…

巨大蟻2《……》ギチギチ…

巨大蟻《……?》

空から、無数の砲弾と爆弾が降り注ぎ、JR前橋駅前に布陣していた巨大蟻の軍勢を吹き飛ばす。

號「へへっ、ザマアーミロだぜ!!」

弁慶「ようし、攻撃部隊は後退！ゲッター突入の障害になるなツ!!」

美世「後方支援の為に補給は済ませるよ！弾薬の尽きた車輛からこっちに來て！」

弁慶「おう、美世。助かるぜ」

美世 「えっへへっ！私は私で出来ることやっただけだから気にしないで？…と、そっちはもつとキビキビ動く」

友紀 「ひえく…！」

茄子 「友紀ちやくん、フアイトですよ」

友紀 「美世、人使い荒すぎ！作戦中だと人変わりすぎだよっ！！」

美世 「命懸かかってるんだから真面目にもなるでしょうが。ほら、口よりも手を動かす！」

友紀 「ひいっつ！」

號 「しっかし連中、駅の入り口をそのままコロニーの入り口に利用してるたあ、洒落てんじゃねえか？」

剗 「地下に広がる広大な空洞であることには変わりないからな。一から掘り進めるよりも、何かと便利だったんだろう」

號 「なら、とつと返してもらおうとしますか！行くぜツ！！」

剗 「待て！今回の俺達の役割は後方支援の筈だ。先方はゲッターキリクが務める」

號 「ちえ…！出鼻を挫かれたぜ」

美波 「ご、ごめんなさいね？何か…」

剗 「気にしないで下さい。それよりも突入を。我らの存在に気付いた昆虫群が後発

を出してくる前に！」

美波「了解！ 莉嘉ちゃん、かな子ちゃん、行くよ！」

かな子「こちらは何時でも！」

莉嘉「美波のドリルをお見舞いしちやえ〜！」

ゲッターキリクがドリルを突き立て、駅の入り口をドリルで押し拵げながら突入していく。

星「……」

剱「……。顔色が優れないようですが、大丈夫ですか？ 一尉」

星「…問題ない。お前達は戦闘に集中しろ」

號「まさか後方支援で良かったなんて、思っていないでしょうね？」

星「う、うるさい…ッ！ 無駄口を叩いている暇があるなら、とつとと小娘共に続け！」

號「分かっていますよ。…つたく」

星「いいか、小僧共。年齢で見ても経験で見ても、この俺がこのチームで一番高い。

よつてこの作戦でのチームの指揮は俺が執るっ！」

號「だからそれは…」

剱「號」

號 「……はいはい」

星 「いや、この作戦だけではなく、今後一切の指示は俺がする。異論は認めん。死にたくなければ、貴様らは黙って俺の言うことだけを聞け！いいなツ!!」

剽 「……了解」

號 「ちやくんとイニシアチブをとってくれれば、誰も逆らわねえっての」

美波 「!?」

剽 「どうした!?!美波さん!」

巨大蟻 \boxtimes sキィ イイヤアツ!!

星 「ひいつ…!?!」

剽 「後発部隊か…! 思ったより接触が早い…!」

美波 「ドリルタイプフーン!!」

空洞の深い暗闇から姿を表した巨大蟻の軍勢にドリルの旋風を放ち、敵の陣形を乱しつつ、体勢を整える。

美波 「やああツ!!」

ドリルを突き立て、突貫。唸るドリルの一撃で、巨大蟻を粉砕する。

巨大蟻 《ギイツ!!》

美波 「…っ!」

巨大蟻《?!?》

サイドから襲撃してきた巨大蟻に、右腕のシザーアームを振りかざして怯ませ、

美波「これで……！」

正確に首の間接を切り落とし、沈黙させる。

星「ああ……始まった……！」

號「戦闘開始ですぜ、一尉。指示を！」

星「あ、ああ……」

剗「一尉、しっかりして下さい！」

星「うう……つ！ま、マグフォース・サンダーだ……！まとめて吹き飛ばせつ！！」

號「はあ？この狭い空間でか？冗談だろ、ゲッターキリクまで巻き添えになる！」

良いながら、両肩背後のローターを手に取る。

號「ブーメラン・ソーサー!!」

ゲッターキリクの両脇を通してブーメラン・ソーサーを投射し、ゲッターキリクの眼前に迫った巨大蟻を切り裂く。

美波「ありがとう、助かった！」

號「礼を言ってる場合じゃ、ねえんじゃねえか？」

美波「!!」

巨大蟻 ☒ s キ ャ イ イ イ イ イ ツ ! ! !

巨大蟻は次から次に襲い来る。

號 「こいつうツ!!」

正拳突き。巨大蟻の胴体を貫き、沈黙させる。

剷 「距離を取っている余裕はないな。格闘戦になるぞ!」

號 「へっ、望む所だぜ!!」

巨大蟻 《ギイツ!!》

號 「レッグブレード!!」

星 「うう……っ」

巨大蟻 《!!》 グシヤツ

星 「あ……っ!」

號 「うりやあツ!!」

巨大蟻 《…ツ!!》 バキツ

號 「おらおらおらおらおらあツ!!」

星 「ああ……!」

巨大蟻 《ギイイイイイイッ!!》 ギチギチギチイツ

星 「うわあああああッ!!」

剗 「星一尉!？」

星 「も、もう無理だあツ!! 助けてくれええ!!」

號 「どうしたんです? 一尉! ……くっ!」

意識を星へと向けた一瞬の隙に、ゲッター1号は押し倒される。

號 「こいつ…!」

星 「うあああ…! 何故だ…?! 何故動かない…?! 俺をここから出してくれえ!!」

剗 「一尉! 合体時は、全てのコントロールはメインが優先されるようになってます

! 忘れたんですか?!」

星 「何イ?!? 號おろ! コントロールをこちらに譲れえろ!! 今すぐにだあツ!!」

號 「何を言ってるんです!?! 敵は目の前、今そんなことをすれば、一尉だって只ではす

みませんよ!」

星 「俺の命令を聞けと言った筈だ!! 貴様、反逆罪で死にたいのかア!」

號 「言ってることが無茶苦茶だぜ…。…っぐ!」

巨大蟻の顎が、ゲッター1号の首に噛み付く。

號 「こんにやろ…!」

巨大蟻の鳩尾を数発殴り、トドメに膝蹴りを入れて、何とか切り離す。

星 「うわあああああろっ!! ここから出せ、出してくれえろ!!」

號 「おっと、暴れんなよ、一尉！」

錯乱した星の影響で、ゲッターのバランスが崩れる。

巨大蟻《ギイイツ!!》

號 「ちいッ!!」

美波 「やああッ!!」

体勢の崩れたゲッター1号に迫る巨大蟻を、ゲッターキリクがドリルでその背から打ち砕く。

號 「ゲッターキリク！」

美波 「これで借り貸しなしに出来るかな？」

號 「へへっ……！」

剗 「號！俺達は一度後退しよう！一尉がこの状態では、戦闘の続行は不可能だ」

星 「あひやひや……あは……っ」

號 「…実戦の空気に吞まれやがって。やっぱ素人じゃねえか」

莉嘉 「邪魔なものは降ろしてきた方がいいよ」

かな子 「そうですね。万全を期すためにも！」

號 「…チッ。俺の獲物、独り占めすんじゃねえぞ!!」

来た道を戻り、後退するゲッター1号。

美波「…手荒い激励だと思っておくわ」

かな子「ここでやられる訳にはいかないのは勿論、前線も後退させるわけにも行きませんよ…！」

美波「正念場なのは分かっている…！ 號の言葉じゃないけど、ゲッターキリクで、全てを殲滅させるつもりで、行くよ!!」

莉嘉「やっちゃえー!!」

—。

友紀「ゲッターが戻ってくるって？ 何で？ どつか被弾したとか？」

弁慶「んや。どうもパイロットが、伸びちまったらしい」

友紀「パイロットが伸びたって…あの新人さんが？」

弁慶「訓練だけで実戦を知らなけりやあそうなる。ともかくゲッターの受け入れ準備だ！ 担架を用意しとけ！」

友紀「了解っ!!」

前橋駅入り口からゲッター1号が姿を現し、部隊と合流する。

星「あ…あ…あ…」

弁慶「…コイツはダメだな。後方の車輛に乗せておけ」

號「ゲッターは直ぐに出るぞ!!」

弁慶 「待て、状況が状況だ！パイロット2人じゃ、ゲッターの力は出せん!!」

號 「ならどうしろってんだよ!」

弁慶 「……俺が乗る」

友紀 「親父が!」

弁慶 「おいおい……。俺を誰だと思つてやがる?元よりゲッターのパイロットだぜ?」

友紀 「けど補欠じゃん」

弁慶 「それを言うなよ。昔取つた杵柄は、まだ腐つちやいねえ。サポートくらいは出来る筈だ」

剗 「確かにな。この場では隊長が一番適任だろうな」

號 「……いや、車さんはダメだ」

剗 「は……?」

弁慶 「んだとう……?何がダメってんだ?!」

號 「車さんは隊長なんだから、後ろでドシツと構えてればいいんだ。危ないことは若いのでやる!」

弁慶 「なら、誰を乗せる?!」

號 「それはだな……つと!」

1号機のコックピットから飛び降り、向かった先は、

溪 「は？」

號 「お前だ」

溪 「え？」

號 「お前が乗れ」

溪 「ええ〜ツ!？」

友紀 「何で!!」

茄子 「どうして友紀ちゃんが？」

號 「友紀義姉ちゃんは危なっかしいし、美世義姉ちゃんは車にしか目がねえ。茄子義姉ちゃんは何つーか頼りねえしよ」

友紀 「危なっかしいって!？」

美世 「車にしか……って、合ってるか……」

茄子 「頼りない、ですかあ〜」

號 「その点、お前なら整備の手伝いもしてる分、ゲッターを知ってる。付け焼き刃だが、この中じゃ一番都合がいいぜ」

剏 「お前にしては考えたようだが……。本気か？」

號 「剏。その場凌ぎじゃ、ダメなんだよ。俺達が、莉嘉達に負けないチームになるには！分かるだろ？」

剋 「……」

溪 「嘘でしょ……？あれは、冗談じゃ……」

弁慶 「溪を、本格的にパイロットに据えるってか？」

號 「そうだ。俺達はガキの頃から一緒にここまでやってきた！俺達に合わせられんのは、溪しかいねえ！」

溪 「そんな、無理だよ……。あたし、女だし」

號 「莉嘉達だつて同じだろうが！その上、莉嘉はまだ13だ！今だつてアイツらは俺達が戻ってくるのを信じて戦つてる！お前だつて、命は懸けられるだろうが!？」

溪 「……」

號 「やれるさ！そのためのフォローはする！俺を信じろ!!」

溪 「……」

—— 2号機コックピット。

溪（パイロットスーツ） 「結局、こうなっちゃうんだから。あたしも押しに弱いと言
うか、何とと言うか……」

剋 「溪、大丈夫か？」

溪 「剋。あたしは大丈夫だよ。ちよつとシートが湿つぽいけど」

剋 「それは……」

溪 「戻ったら整備のおっちゃん達に言つて全取つ替えさせる。じゃないと、気持ち悪くてしょうがないもん」

剋 「…落ち着いてるんだな」

溪 「そう見える？なら良かった」

剋 「……？」

溪 「大の大人が、ビビつてチビるくらいだよ？実戦つて。緊張とか恐怖とか、何かもうゴチャゴチャで、自分でも意味分かんない」

剋 「無理なら無茶するな」

溪 「ううん、無理じゃない。ゲッターには少なくとも、アンタと號が乗ってるからね。その分は、少し安心出来るよ」

剋 「……成る程な」

溪 「何が？」

剋 「號がお前を誘つた理由だよ」

溪 「ふうん？」

號 「お前ら、準備は出来たか？」

剋 「こつちは何時でもいける」

溪 「出来なくてもやれつて言うんでしょ？つたく人使いの荒い！」

剋 「早く美波さん達のところに戻ろう」

號 「いや、先ずはゲッター2にチェンジだ」

溪 「はあ!？」

剋 「何故だ、號!？」

號 「理由は単純明快さ、ゲッター1じゃ、今回の戦闘じゃ役に立たねえってことだ」

號 「マグフォース・サンダーは、動きを止めるのには良いが、エネルギーを食い過ぎる!この作戦にレディコマンドの支援はないんだ。後方で支援するにせよ、ゲッター2の方が効率がいいぜ」

剋 「だが、溪はゲッターの操縦ははじめてなんだぞ?」

號 「何、実戦になったら俺達に任せてくれりゃあいい。合体も、剋が間に入って、フオロー出来る。だからゲッター2なんだ!」

剋 「だがな……!」

溪 「ああもう分かった!話が進まない!こつちも泣き言は言わないよ。號のやりた
いようにやりな!」

號 「いい覚悟だぜ。それでこそだ!いくぜ!」

溪 「おうツ!!」

號 「オープンゲッター!!」

ゲッター1号を、分離。3機のゲットマシンが宙高く舞う。

剏 「溪！機体がブレている。まずは安定させるんだ！」

溪 「そんなこと言ったってえ！これでも精一杯頑張ってるの！」

剏 「剏！お前が先輩なんだ、リードしてやんな」

剏 「簡単に言ってくれる……！」

溪 （今はとにかく、剏と、號を信じて……！）

剏 「……そこだ！」

2号機と3号機がドツキング。

號 「やりやあ出来んじやねえか。——んじや、行くぜ！」

溪 「チェーンジ、ゲッターアアーツ!!溪っ！」

合体。赤いボディを持つゲッター2号が、空中に誕生する。

溪 「出来た……!あたしにも、合体が……！」

號 「喜んでる場合じゃねえぜ。本番はこれからだ！」

溪 「分かってるよ。ドリルアームで、一気にキリクに追い付く！」

號 「その意気だ！行けッ!!」

溪 「ドリルアームッ!!」

號 「アークチームの奴等、俺達が行くまで死ぬんじやねえぞ……ッ!!」

地下深くを目指し、ゲッター2号は行く。

かな子「……?!美波さん、何か、広い空間に出ましたよ!」

美波「ええ…。随分奥まで来たみたいだけど…」

巨大蟻“s……!……!”

美波「歓迎会は、終わってないみたいね…!」

ゲッターキリクの周囲に布陣する巨大蟻の群勢に対して、両腕をドリルアームに変えて、迎え撃つ体勢を取る。

美波「——やっ!」

広がった空間に躍り出るように、跳躍。

美波「タイフーン・ランブルツ!!」

左右の腕から放つドリルタイフーンをそれぞれ上下、左右に乱れ撃ち。空間一体を旋風で満たして、巨大昆虫の群れを吹き飛ばす。

美波「まだまだあああッ!!」

テキイ——ンツ

莉嘉「!? 気を付けて、美波!」

かな子「どうしたの? 莉嘉ちゃん!」

莉嘉「感じる…。こんなの、今まで出逢ったこと無い…。こんな大きな…」

巨大兜《ギギイイイイイツ!!》

莉嘉「カブトムシ☆!!」

かな子「そのセンサー、巨大昆虫相手にも有効なんですわね…」

美波「頼りになるよ!…莉嘉ちゃんには悪いけど…」

巨大兜《!!》

美波「ゲッターイリユージョン!」

ゲッターキリクの着地を狙って、逞しい一本角を掲げて迎え撃ちに来た巨大兜を、高速機動で躲す。

美波「ドリル…!アターック!!」

巨大兜の上空に回り込み、重力落下と共にドリルを突き込み粉碎する。

莉嘉「ああ…!アタシのカブトムシ…」

かな子「莉嘉ちゃん、もしかして捕まえるつもりだったんですか…?」

莉嘉「ごめんよ、大和不動丸…」

かな子（名前まで付けてる…!?)

美波「別の部屋に行くよ。…ここは」

かな子「これは…巨大昆虫の卵、ですか…?」

美波「目標の1つの、繁殖室に付いたみたいね」

莉嘉「これ全部が連中の……。……うげえ、キモオ〜」

美波「無抵抗の卵を破壊するのは、ちよつと忍びないけど……!」

繁殖室と呼ばれる、床から天井まで昆虫の卵がびっしりと詰まった空間に、両のドリルアームを向ける。

美波「ダブル・タイフウウンツ!!」

巨大な旋風を繁殖室全域に伝わるように放ち、詰まった卵を粉々にした。

かな子「これで、作戦の第一目標は完了、ですか?」

美波「繁殖室が、1つとは限らないけど……」

莉嘉「1個破壊出来ただけでも十分だよ!あとは女王格の破壊だ!」

美波「そうね。號くん達のゲッターと合流する前に、無茶をするのは控えましょう」
道中に襲い来る巨大昆虫を蹴散らしながら、最奥を目指して進む。

かな子「思ってたけど、結構広い巢ですよ。百鬼帝国の要塞以上かも……」

莉嘉「百鬼要塞に突入したかな子が言うんだもんね……。コロニーって言われてるのも、大袈裟じゃないんだ」

美波「女王格は何処に……!?——……っ!?」

かな子「美波さん?!」

女王蟻《ギイイヤアアアアアツ!!》

莉嘉「他のアリさんと違って、一際大きくて、羽がある!」

かな子「間違いありません!女王格です!これを倒せば……!」

莉嘉「周りの巨大昆虫も一網打尽!って、簡単にはいけません!」

かな子「はい。巨大昆虫は、指揮中枢を失ったことになりました!」

莉嘉「つまり、恐竜帝国での戦いと同じ状況……!」

美波「コイツさえ倒せば……!たあツ!」

跳躍。ドリルアームを構え、女王蟻に突撃する。

美波「やああああああツ!!」

女王蟻《キイイイイツ!!》

美波「つ……!?!」

女王蟻は口から液体を噴霧。ゲッターキリクを迎え撃ち、怯ませた。

美波「くっ……!」

かな子「美波さん、止まっちゃダメです!」

美波「え?」

女王蟻《!!》

美波「きやあツ!」

女王蟻の長い前肢が、ゲッターキリクを強かに打ち付ける。

美波「あ、あッ……!!」

地面に落下し、土煙を上げる。

莉嘉「痛い……!!」

美波「ごめんなさい、莉嘉ちゃん、かな子ちゃん……」

莉嘉「もうう、すっかりしてよね!」

美波「何とか切り返す!とりあえずはそれで!」

かな子「次が来ますよ!」

美波「!!」

続けざまに放たれた液体を、跳躍して回避。

かな子「……。あれは、強力な酸みたいですよ!受け続けたらゲッターキリクでも危な

いですよ!」

美波「分かったわ!」

莉嘉「下手には近付けないよ!どうするの?」

美波「……キリクなら、高速移動で!」

ヒュン、と残像も残さないキリクの高速機動で、一気に女王蟻に肉薄する。

美波「ドリル・アタアアーツク!!」

ガギイ……ンツ

女王蟻《…!!》

美波「ぐっ……！固い……い！」

女王蟻《!!!!》

女王蟻の羽根が高速で振動し、発生したソニックブームがゲッターキリクを吹き飛ばす。

美波「くっ……！」

巨大蟻《ギイイイツ!!》

かな子「!? 美波さん！」

美波「っ……！まだ……?!」

「やあああああッ!!」

ズギヤオオオンツ

美波「何っ!？」

號「まだ死んでねえな？アークチーム！」

莉嘉「號……！遅いよ！遅すぎて、全部アタシ達で持つていくところだった☆」

號「へっ、そうかい？じゃあ、残りの獲物は頂くぜえ!!」

溪「ちよ、ちよっと待つてよ……！」

かな子「え？溪ちゃん…!?どうして…」

溪「へへっ、色々あつてね…。うう…!」

襲い掛かってくる巨大蟻の攻撃を往なす。

溪「こ、攻撃が…来る…っ!っ、號…!」

號「慌てるなよ。コントロールをこつちへ移せ。大体の戦闘は剋が、足回りは俺がやつてやる」

溪「りよ、了解…!確かコンソールを…ここう!」

剋「よし。ゲッターの挙動はこちらでコントロール出来るが、武装の使用はそつちからの音声入力が必要になる。使う時は指示を出すから、対応してくれ」

溪「分かった…!」

莉嘉（コックピットで、叫ぶだけなんだあ…）

號「それじゃあ、行くぜえ!!」

剋「ドリルアームだ、溪!」

溪「さ、早速…!?…ど、ドリルアームツ!!」

ゲッター2号のドリルが唸る。

剋「行くぞおッ!!」

ゲッター2号が、巨大蟻達に躍り掛かる。

剽 「たあッ!!」

正面に捉えた巨大蟻をドリルで穿ち、次から次に粉碎していく。

剽 「キリク! 雑魚の相手は自分達がやる!!」

號 「メインデイツシユは譲つてやる! 女王格は任せませ!!」

美波 「…了解!」

剽 「ブレストボンバーだ。この空間なら、敵を一網打尽に出来る!」

溪 「りよ、了解…! ブレストボンバーッ!!」

ゲッター2号の胸部から、一対のミサイルが放たれ、爆発と共に舞い上がる火柱が、巻き込んだ巨大蟻を焼いていく。

女王蟻 《…!!》

美波 「っ…!!」

ゲッターキリクめがけて放たれた酸を回避。

美波 「ドリル…! パンチッ!!」

ドリルアームに変化させた腕を、ジェットの噴射に乗せて女王蟻に放つ。が、

美波 「やっぱり弾かれる…!」

かな子 「ドリルで貫けないとなると…。カーンのパワーで圧倒するか、アークで突破するか…」

莉嘉 「なら、アタシにやらせてよ!!」

美波 「莉嘉ちゃん…?」

莉嘉 「號も仲間を連れて、ここまで戻ってきたんだ。アタシだって、やれることやらなきや!」

かな子 「ふふふっ。随分やる気になってるみたいですね」

美波 「それじゃあ、莉嘉ちゃんに任せるよ。——オープンゲット!」

號 「むっ!?!」

溪 「この空間で合体するつもり!?!」

剱 「迷いなくその判断を下せるとは…。兎も角、合体までの間、邪魔させるわけにはいかないぞ!」

號 「なら、どうする!?!」

剱 「ゲッターストリングだ、溪!」

溪 「ゲッターストリング…。了解!」

ゲッター2号の腕から、細いワイヤーが放たれる。

剱 「號! 奴等を囲むように動け!」

號 「あん?」

剱 「早くッ!!」

號 「…あいよー！」

ゲッター2号はやや後退。そこからグルッと水平に回り、射出したワイヤーで、巨大蟻を囲うように移動していく。

剷 「(こ)で……(こ)うだー！」

ゲッター2号の腕を引き、ゲッターストリングのワイヤーを以て、巨大昆虫を締め上げる。

剷 「今だ、プラズマシヨックをー！」

溪 「え？う、うんっ！」

操縦桿のトリガーを引き、ゲッターストリングに超高压のプラズマエネルギーを注ぐ。流されたプラズマによって、縛り上げられた巨大蟻達を焼き尽くす。

剷 「よし、今だー！」

莉嘉 「援護ありがと☆美波、かな子！」

美波 「ええ！」

かな子 「はいっ！」

莉嘉 「チェーンジゲッターアーク!!」

巨大昆虫の巣窟に、ゲッターアークが立つ。

溪 「本当にゲッターを合体させた…！」

剗 「流石の練度だな。俺達の目指すべき姿とも言えるだろう」

溪 「あたし達も？あんな風に……」

號 「違うな。あいつ等を越えるくらいになるんだ……」

溪 「あの合体を越える……!?それは流石に……」

剗 「無理じゃないさ。彼女達だって、ぶつつけ本番で、いきなり出来た訳じゃないだろう」

溪 「……」

莉嘉 「さあ、一気にケリを着けるよ！ゲッタートマホークツ!!」

美波 「え!?!」

莉嘉 「うおおおおおツ!!」

美波 「ゲッターキリクのドリルでも貫けなかった相手に、トマホークじゃ……」

かな子 「いえ、いけるかもしれませんよ。今の莉嘉ちゃんなら」

莉嘉 「やああああああッ!!」

トマホークを掲げ、女王蟻に迫るゲッターアーク。そのトマホークの刀身が、ゲッター線の輝きを纏う。

莉嘉 「ううりやあああッ!!」

女王蟻に肉薄した、刹那の間にゲッターエネルギーを纏ったトマホークは縦横無尽に

振り回し、女王蟻を切り刻んだ。

莉嘉「トマホオオーク！ハリケエエエーンッ！！」

女王蟻を切り裂きながら、ゲッターエネルギーが竜巻のように弾け、女王蟻を粉微塵に吹き飛ばした。

かな子「やった…！」

美波「トマホークハリケーン？」

莉嘉「うん。前にも似たようなこと出来たから、名前着けてみたの。カッコいいでしょ？」

美波「う、うん…」

美波（似たようなことが出来た…？莉嘉ちゃんが、よりゲッターとの親和性を高めてるってことなの？）

莉嘉「つて言つても、何時でも出来る訳じゃないけど。何て言うか、やれる！つて思つた時に出来る…：…みたいなの？」

かな子「けど、これで女王格は倒せました。後は…」

莉嘉「雑魚を殲滅させるだけ！そっちもいけるよね？號！」

號「当つたり前えよ！剋、湊気張れよ！」

湊「やれなくても、やんなきゃいけないんでしょーが！」

剋 「これが出来なければ、黒平安京の攻略はない！やってやるさ!!」

美波 「辛くなったら、私でもかな子ちゃんでも代わるから、無理はしないで！」

莉嘉 「うんっ☆それじゃあこのまま一気に、行けえーッッ!!」

つづく

第18話 『集う者達』

~~~~~  
???

「攻撃はまだか？」

「ゲッターへの総攻撃は！」

「一刻も早く、ゲッターの眷属、地球人類に裁きを！」

裁きを!!

「「裁きをツ!!!」」

仕官「孔明様。各部族の戦士達が、総攻撃はまだかと今日も詰め掛けてきております」

孔明「…うむ」

仕官「これ以上の攻撃の先延ばしは、兵達の士気にも関わります。どうかここは、勇氣あるご決断を」

孔明「…早乙女研究所への攻撃は、一度失敗しておる。時空を超越して現れし忌み子、ゲッターアークの参戦によってな」

孔明「数多の時間と時空を超越し、この黒平安京に集いし同胞達と言えど、ゲッター



アークの力の前にはあまりに無力。無駄に兵力を損耗するだけの戦いは、大女王メルドウサ様もお許しになるまい」

武官「犠牲となる身であるのは、とうに覚悟の上！我々はただ、ゲッターを吊し上げ、一族の無念を晴らすことが出来るのであれば、この命など惜しくはありません！」

仕官「我々の中に死を恐れる者など只一人としておりません！孔明様、どうか……！」

孔明「……むう」

晴明「おやおや……。今日は一段と賑やかなことで。血気盛んな者共が、ゲッターの血祭りを始める前祝いの宴でも、催しておられるのかな？」

仕官「せ、晴明様……！」

武官「占い師風情が……！ここは崇高な軍議の場であるぞ！控えい！！」

晴明「占い師風情とは、これは手厳しい……。独力では安定させることも出来なかった地球との空間を繋ぎ、人間共を駆逐する争いの拠点として、この黒平安京を貸しているのは、はてさて誰であつたか」

武官「ぐっ……！」

仕官「我々への多大極まる厚意には、感謝をしております。故に、我らアトランティス帝国での立場も認め、ある程度の振る舞いにも目を瞑つてきたのではありませんか？」

清明「機は、今ではありませんよ？」

仕官「何と…っ?!」

清明「星を読み解きました。この黒平安京の天上には、今死兆星が輝いております。無策の攻勢は、ただ己の醜態を晒すことになるでしょう」

武官「では…！総攻撃は何時…!!」

清明「さあ…。そこまではまだ…：…これより先の事象を見抜くには、より長い時間を要します」

武官「ふんっ、肝心な所で宛てにならない！」

マクドナル「ですが、今後の行動の指標にはなるでしょう。皆様方、焦りは禁物で御座います」

武官「地球人共めが、我々に指図などと…!!」

孔明「良い。控えよ」

武官「…」

孔明「清明よ、其方の助言、しかと聞き入れた。此度の大規模な攻勢は、しばらく見送るとしよう」

清明「…痛み入ります」

孔明「しかし、我々が攻勢の指示を出さぬことによつて、兵達の中には不満を唱える

者共も現れよう。我々がゲッターに成す術無く、ただ手をこまねいているだけなのではないか、とな」

清明「……」

孔明「此度の作戦の遅れは、貴様がゲッターアークを招いた事が一端でもあるということ、努々忘れぬようにな……」

清明「……無論で御座います。故に、次は私自らが出陣しましょう」

仕官・武官「!?」

孔明「ほう……。大陰陽師・安倍清明自らが、とな?」

清明「はい。口先だけで、とは不服に思う者もおりましょう。であれば、私自ら戦場に立ち、証を立てるまで。であれば、仕官の方々も文句はありますまい?」

仕官「…我々は、まあ」

武官「…ふんっ」

清明「我が出陣に伴い、血気盛んな各部族の英傑様にも、是非その力をお借りしたく存じます。なるべくの選りすぐりで。さすれば、戦士達にとつても、丁度良いガス抜きとなるでしょう」

孔明「少数精鋭による威力偵察と言うわけか。…行つてくれるか?」

清明「お命じとあらば、今すぐにでも」

孔明「良い覚悟だ。…他、晴明の言に異を唱える者はおるか？」

仕官「……」

武官「……」

孔明「では、軍議は閉廷とする。晴明には兵を集め、練度を高める期間を設ける。1週間でモノにしてみせい!!」

晴明「は……。必ずや、期待に答えて見せましょう」

マクドナル「晴明様、お気を付けて」

晴明「マクドナル。我が不在の間、屋敷の方は任せる。それと——」

マクドナル「——」ボソボソツ……

孔明「…………」

——。

くくく 早乙女研究所 上空 くくく

號 「行くぜ！チェーミングゲッター號ツ!!」

空中で3機のゲットマシンが合体。ゲッター1号が完成する。

號 「どうでえい！バシツと決めつてやったぜ!!」

剽 「まだまだ！2号機との合体タイムがコンマ2秒遅い。溪、まだ動きに無駄が多いぞ」

溪 「りよ、了解……！」

剱 「1号機の形態は今後の戦闘でも多く合体することになる。やると決めたからには、何時までも及び腰でいて貰っては、困るな」

溪 「あ、あたしは……怖がってなんか……！」

剱 「おーおー、いつになく気合いが入っちゃってまあ……」

剱 「號、茶化すつもりか!？」

號 「いえいえ、指示には従いますよ。リーダーさん」

溪 「こちらも！もう一度お願い！出来るようになるまで、何度でも……！」

剱 「……。よし、もう一度分離だ、號」

—— 地上。

弁慶 「……」

友紀 「おお、やってるやってる……！」

弁慶 「友紀か……」

友紀 「司令官も莉嘉ちゃん達も基地を空けてるって聞いてたけど、號達は気合入りまくってるねえ」

弁慶 「……ふんっ、あんなもん、まだまだ未熟って証明してるようなもんだ。所詮、ケツの青い奴等が集まったチームってことだ」

友紀「そんなこと言つて、ホントは結構期待してる癖にく。で？シブヤ司令官は土地勘もない異世界人を連れ立って何処に？」

弁慶「……秘匿事項だ。話すことは出来ん」

友紀「え〜？何それえ。もう……」

友紀達の上空を、ゲットマシンが過ぎ去る。

友紀「へえ〜、結構様になつてるじゃん。あのくらいなら、アタシにだつて出来そうだね？」

弁慶「……」

友紀「親父？」

弁慶「各砲座の整備状況はいいのか？友紀」

友紀「そつちは美世達に任せたよ。もう少しで終わるつて」

弁慶「……チビ共の面倒は？」

友紀「今はお昼寝の時間だよ。心配しなくても、手の掛かる子達じゃないから」

弁慶「ふつ……。昔のお前らとは大違い、つてか」

友紀「うつ……。それは……」

弁慶「昔は酷かつたもんだ。毎晩毎晩、夜泣きしてよお」

友紀「む、昔の話はいいじゃん……！それよりもどう？號達は」

弁慶「……お前にや関係ねえだろ」

友紀「むう……。親父、ゲッターの話になると、一気に無口になるよね？」

弁慶「お前に関係ねえ話をしても仕方ねえだろうよ。お前は、出来ることだけやりやあい」

友紀「…それじゃあ、アタシがゲッターに乗って戦えたら、もうちよつとまともに話してくれる？」

弁慶「ゲッターにや関わるんじゃねえ!!」

友紀「!!」 ビクッ

弁慶「……と、すまねえ。だがな、もういいんだ。これ以上は」

友紀「これ以上……？」

弁慶「ゲッターに人生を滅茶苦茶にされる被害者は、な」

くくく 日本某所 移動中 くくく

アキハ「ほくう……」 ジーツ

莉嘉「……」

アキハ「ほうほうほう……。こうして間近で見た限りでも、普通の人間とは遜色無いように見える。…が、感じる……。感じるぞ……！ 貴様の体中から、ゲッターに乗る者のゲッター線の匂いを」

莉嘉「ちよつと臭いみたいない方しないでよ。ちゃんとお風呂は入ってるんだから」

アキハ「くつくつくつ…！体の中までは一緒なのかな…？先ずは血中に含まれるゲッター線濃度から見てみるとしよう」 シャキーンツ

莉嘉「何でお注射持つてるのー!？」

アキハ「それはようやく、お前達の体を検査できる機会を貰ったからだ」

莉嘉「こ、ここ車内だよ…？」

アキハ「私を信じて。まだまだ若輩の身であることは自覚しているが、解剖も究明も得意分野だ」

莉嘉「どつちも注射の要素はないよ?!」

アキハ「ええいうるさいっ！黙って私に採血させろ！」 ガバツ

莉嘉「ねえー！この晶葉何かキヤラ違くない!？」

アキハ「動くな！針が上手く刺さらないだろうが。それとも何かもつと拷問とか薬物投与とか、別の角度からの検証がお望みかな？」

莉嘉「いゝ…い！」

アキハ「隙ありだ」

プスツ



莉嘉「ギャー……ッ!!」

リン「……ふっ」

かな子「この世界の晶葉ちゃんも、色々あったんですね？リン……シブヤ司令みたいに」

リン「まあね。特にアキハは、間近で知り合いの死を目の当たりにし過ぎた。だからちよつと、気が触れてるかもしれない。下手に近付くのは、推奨しないね」

かな子「どうしてそんな人を同伴で連れてきたんですか……？」

リン「ま、前々から君達の身体検査を打診されてたのは事実だし、いい機会だったからね」

かな子「いい機会、ですか？」

美波「……そろそろ、教えてくれませんか？司令」

リン「……」

美波「どうして、今回私達を研究所から連れ出したんです？しかも、ゲットマシンの輸送車輛まで用意して」

リン「大した用事じゃないよ。ただ、私の仕事を手伝ってほしかっただけ」

美波「なら、號くん達の方が、良かったんじゃないですか？こつちの世界の事情なら、彼らの方が詳しいですし」

リン「號達じゃ、私情が入っちゃうかもしれないから」

美波「私情……？」

リン「手伝ってほしい仕事って言うのは、ある人物の解放、救出だよ」

かな子「ある人物の……」

美波「解放……？」

リン「そう。実は君達がこの世界に現れる前から、予てより交渉はしてたんだけどね。こつちが下手に出てるのをいいことに、向こうからはあまり色好い返事が貰えていないんだ」

アキハ「だから、痺れを切らして強行手段に出ようと言うわけだ。クールな振りをして、コイツも私と、大概変わらない」

かな子「えっと、解放とか救出とかって言うことは、相手は何処にいるんですか？この車輛は、一体何処に……」

リン「A級刑務所」

かな子「……え？刑務所……？」

リン「そう。その中でも特に歴史に残るような重罪を犯した、A級囚人を収監しておくための牢獄……」

かな子「牢獄……。リンさん、そんな所に、知り合いが？」

リン「……」

かな子「リンさん？」

リン「一応聞いておきたいんだけど、3人は人間相手に戦ったことは？」

美波「人間と……？そんな経験、あるわけありません」

リン「……だよな」

美波「人間相手に、ゲッターで戦わせるつもりですか？」

リン「あくまで、念の為の保険だよ。私達だって、平和的に解決出来るに越したことはない」

かな子「保険……。私達を用意してまで、助け出したい人って、一体……」

リン「きつと、3人も知ってる人だとは思うよ。人となりは別にしてね」

美波「え？」

かな子「一体どんな人なんですか？A級囚人になる程の罪を犯す人なんて、私達に心当たりのある人なんて……見当も付きません」

アキハ「犯した罪、か……。10年前、ゲッター災害の引き金を引いた張本人。つまり、現在の世界の有り様を作った元凶さ」

美波「ゲッター災害を引き起こした……?!」

かな子「って事は、その人もゲッターのパイロット」

リン「勿論。本人も望んで引き起こしたわけではないんだろうが、悲劇を起こした責任は、負わなければならぬ。だから10年間、投獄されていた」

美波「まさか、司令はその人を、再びゲッターに乗せるつもりで……！」

リン「ああ。君達の実力を疑う訳じゃない。だが、黒平安京を墜とす為には、ゲッターアークと、號達のゲッターだけではまだ力不足なんだ。我々の手にある新たなゲッターロボ。それを御せる乗り手が必要になる」

美波「新たなゲッターロボ……？そんなものも開発していたんですか？」

美波「うん。號達のゲッターは私達がノウハウを培うための試作機。アトランティス流国に勝つには、準備は万全にしないと。私達の戦いに、敗北は許されないわけだからね」ギョツ……

言いながら、左の拳を強く握る。

美波「司令……。まさか司令自身も、戦うつもりで……」

莉嘉「でもさ、本当にゲッターに乗れるの？その人。10年も刑務所に居て、しかもゲッター災害を引き起こした張本人なんですよ？アタシなら、流石にゲッターはもう勘弁、つてなつっちゃうかも」

リン「乗るよ、必ず。体の方も、恐らく心配は要らない」

美波「ハッキリ言うんですね？」

リン「戦う理由はあるからね。戦うつもりがないなら、あんな所で10年も生きてやらない」

莉嘉「……? どう言うこと?」

かな子「けど本当に誰なんですかね? 私達も知ってる人で、ゲッターに乗ってる…。そしてリンさんが一緒に乗る……まさか!」

リン「そう、刑務所に囚われているのは——」

剽「……ふう」

友紀「お疲れ。はい、差し入れ」

剽「有り難う御座います。その……友紀、義姉さん……」

友紀「ん。よろしいっ」

剽「……」ゴクゴクツ

友紀「しっかし、別にコックピットの中で派手に運動してるでもないのに、そんな汗だくなるんだねえ? やっぱ大変なんだ、ゲッターの操縦って」

剽「……。ゲッターの操縦には、体力に集中力、それに精神力と何より気力が必要不可欠になります」

友紀「気力って……こう、最後は気合で動かす……的なの?」

剽 「そうではなく……。どのような状況に追いやられようとも、諦めることなく、己を律する。そのための気力です」

友紀 「ふうくん？ま、スポーツの世界でも、最後に物を言うのは気合だしね」

剽 「それで、ゲットマシンの調子はどうなんです？ 號の奴は相変わらず荒っぽい操縦ですが、飛べない訳じゃないんでしよう？」

友紀 「そりゃあそうだけど……。まさか、また実機に訓練するつもりなの?！」

剽 「当然です！ 早く自分達のチームも、一人前にしなくちゃいけませんから」

友紀 「だからって、さっきの訓練から戻ってきてまだ5分も経ってないよ？ ちよつとはクールダウンしなつて」

剽 「しかし……！」

友紀 「今この早乙女研究所を防衛出来る最大戦力は剽達のゲッターロボなんだよ？ アンドロメダ流国の戦力がまた何時攻めてくるとも分からない状況で、いざつて時ゲッターが動けなかつたらどうすんのさ？」

剽 「……」

友紀 「司令も莉嘉達もいなくて、肩に力が入るのは分かるよ？ けど万一の事は考えなくちゃ。何時もは慎重な剽らしくないよ」

剽 「何時もは、ですか……。能天気な義姉さんに言われてしまったら、返す言葉もない

…」

友紀 「能天気って…」

剽 「けど、急ぐ理由は司令達が不在だからだけじゃない」

友紀 「え？」

剽 「司令は言っていた。この前の巨大コロニーの殲滅作戦…。あれは黒平安京攻略のための試金石だ。つまり、近い内に黒平安京に攻め込むつもりなんだ、司令は」

友紀 「それは…!」

剽 「今日ここを離れたのもきつとその為だ。司令は、恐らく…あの人を…」

友紀 「あの人…?」

剽 「……兎に角!俺は皆の足手まといになりたくないんだ!シブヤ司令官の足手まといには…!」

友紀 「そっか…。でも、焦るのは良くないよ?剽はチームなんだし、皆で足並み揃えなくちゃ、ね?」

剽 「チームワーク、か…。だが…」

友紀 「?」

號 「お〜い、剽?何時まで休んでんだあ?」

溪 「早く訓練の続きをしよう?さっきの反省点は、號と復習したからさ!」

剽 「案外、余計な心配かもしれませんよ？」

友紀 「ホント、いいチームだ」

剽 「ふふっ…」

友紀 「しっつかし意外だなあ。剽が、そこまで司令の事が好きだったとは」

剽 「な、っ…?!」

號 「はっ！ンなもん、今更だろ？」

溪 「ホントホント。昔っから剽は、シブヤ司令にゾツコンだもんね？」

剽 「ち、違う…！司令は、俺の命の恩人で…だから！」

號 「へーへー。分かっつてっから」

溪 「頑張つて強くなろう！司令官殿のためにもね！」

剽 「くくくっ…！」

ウウウウウウツ ウウウウウウツ

友紀 「!?」

溪 「これは…！」

剽 「緊急警報…っ!?」

號 「敵が来るぞおっ!!」

—— 出撃。



剽 「號、まだ研究所全体の避難は完了していない。研究所から離れすぎるなよ」

號 「分ーつてゐるって！さて、溪！実戦は二度目だ。緊張しちやいねえだろうな？」

溪 「まあまあね。メインを任せられない限りは、何とか」

號 「へっ、ヨユーありそうじゃねえか。…んで、敵は…：…あん？」

メカザウルス・ギガ 『…』

メカ牛剣鬼 『…』

メタルビースト・バトルギガ 『…』

鉄球鬼獣 『…』

號 「ンだよ…。あの足が棘付き鉄球みてえになつた鬼獣だかつて化けモン以外は、ゲッターにもデータが残つてゐる雑魚じゃねえか。アークに倒され過ぎて在庫がなくなつたか？」

『くつくつくつ——。見てくれに惑わされ、彼らから発するものを何も感じぬか。愚かなものよ』

號 「誰だ!？」

叫び声の先、遙か先の上空が歪み、ワームホールのような空間が現れ、それは姿を現す。

剽 「お前は、安倍晴明っ！」

號 「へえ、幹部の一人のご登場って訳かい？面白いねえ」

剗 「落ち着け。どうせ何時もの幻影だ。実体はない」

清明 『確かに。孔明が見せるものはそうかも知れぬが、この清明のは一味違うぞ？』

號 「どういう意味だ!？」

清明 『こう言うことだ。——破つ!!』

清明が2本の指で添えてピンと立てた呪符。気を込めて清明が宙に放つと、呪符から雷が放たれ、ゲッター1号を打ち付けた。

3人 「二うわあああああツ!!」

清明 『ふむ…。ゲッターアークの姿が見えぬな…。莉嘉がいないと言うのは、少々見当が外れたが…』

號 「畜生…ッ!やってくれたじゃねえか!——ナツクルボンバーッ!!」

お返しと言わんばかりにナツクルボンバーを放つ。が、

清明 『ふっ…』

ナツクルボンバーは清明の体をすり抜け、そのまま戻ってくる。

號 「何…!？」

剗 「無駄だ!やはり奴には、実体がない…!」

號 「向こうだけ一方的に殴れるってのかよ…?反則じゃねえか、ンなもん!」

溪 「あんなのと、一体どうやって戦えばいいのよ?」

晴明 『まあ、余興としては丁度よい。紛い物のゲッターロボ、血祭りに上げるとしよう』

剡 「先ずは目の前の敵からだ!倒せる奴から攻撃するんだ!」

號 「おうツ!!」

晴明 『倒せるもの、か。ふふふつ…』

溪 「待って!奴らの様子、何か変だよ!」

晴明 『——』

剡 「あれは、呪文か?」

號 「何でもいい!先手必勝だぜ!!」

晴明 『数多連なる次元の果てより、我が願い聞き届け集うがいい!我らが仇敵、ゲッターより宇宙を救う為に!来たれいツ!!』

メカザウルス、百鬼メカ、メタルビースト、鬼獣。四体の身に頭上から紫色の雷が落ちる。

號 「うおおおおおツ!!」

メカザウルス・ギガ 『——!!』

號 「何…っ?!」

魂の抜けた人形のように立ち尽くしていたギガが、向けられたゲッター1号の拳を掴み取る。

號 「こ、こいつう……！ 抜けねえ！」

ギガ 『!!』 カッ

ギガの目に、生き物のような火が灯る。

號 「ぐわああああ……っ!!？」

力任せに腕を振り上げ、ゲッター1号を投げ飛ばす。

溪 「きやつ!!」

剗 「油断するな、號！ データとして知っているだけで、はじめて戦う相手であることには変わらない！」

號 「言われなくなつて分……つてるよ、まったく！ だが、とんでもねえパワーだぜ、アイツ。……!!？」

メカ牛剣鬼 『!!？』

號 「このっ……！」

ギガの攻撃に気を取られている内に、背後に回り込んだメカ牛剣鬼の剣戟を紙一重で躲す。

號 「ブーメラソナー!!」

劍先が表層を撫でた直後、すかさず反撃に移る。が、

メカ牛剣鬼『!!』

バトルギガー『!!』

號「うお……!!」

メカ牛剣鬼は、ゲッター1号の視界から消え失せるような高速移動で姿を消し、目標を失ったブーメラソナーが森林を薙ぎ倒す中、続けざまに現れたメタルビースト・バトルギガーの両肩の竜頭が伸び、ゲッター1号を押し倒す。

號「ぐう……なるお……!!」

鉄球鬼獣「……」

號「なっ……コイツ……」

背後からゲッター1号に迫った鉄球鬼獣が、ゲッター1号を捕らえ、羽交い締めにする。

號「こんにやろう……離しやがれっ!」

メカ牛剣鬼『……』

メカザウルス・ギガ『……』

バトルギガー『……』

溪「や、ヤバイよ……號……!」

捕らわれたゲッター1号に3体のマシンのマシンが迫る。

號 「くっ……んぐ……っ！離せ、離せってんだよ、この——！」

拘束から逃れるために暴れまわっていたのを中斷。両足を大きく振り上げ、勢いよく下ろす事で遠心力によって足を地に着けそのまま、腰を低く落とす。

號 「離し……やがれえええッ!!」

そのまま鉄球鬼獣の腰に乗せ、一本背負いのような要領で、迫る敵目掛けて鉄球鬼獣を投げ飛ばした。

「!!?!」

投げ飛ばされた鉄球鬼獣と衝突し、豪快に倒れ伏していく。

號 「へっ、見たか！ゲッターのパワーを甘く見るんじゃねえ!!」

剋 「二度退け、號！体勢を立て直すんだ！」

號 「立て直すつつったって……！」

剋 「分離しろ！それで一度は、大きく距離を取れる筈だ」

號 「……了解！オーブンゲット!!」

ゲッターを分離。一度高度を取り、空中へと逃れる。

號 「しっかし可笑しいぜ！こんな言い方したかねえが、連中、何か強すぎねえか？」

剋 「確かに。残されているデータと比較しても桁が違いすぎる！」

晴明『さもありなん。それは貴様らが、ゲッターの使徒であるが故に!』

號「何い? 訳分かんねえ言い回してねえで、ハッキリ言いやがれ! テメエがイカサマしてますってな!」

晴明『くつくつくつ…! 貴様らには聞こえぬか? 奴等のゲッターに対する、怨嗟の叫びが』

號「怨嗟の、叫びだあ?」

メカザウルス・ギガ『——ニクイ…!』

メカ牛剣鬼『——ワガイノチヲウバイシゲッターガ、ワガドウホウヲアヤメシ、ゲッターガ!』

バトルギガ『——ゲッターハウチユウノテキ…』

鉄球鬼獸『——ユエニイカシテハオケヌ。タオス、カナラズ。コノイノチニカエテモ…!』

『『——潰すツ!!』』

溪「ひつ…! な、何なのよ、あれ…!」

號「怨嗟の叫びだと、御大層に。只の恨み節じゃねえか」

晴明「然り! 怨嗟、怨讐…。それらがあのマシン共を器として集まり、満ちる事で奴等に力を与えているのだ!」

剱 「何だと!？」

晴明 「妖刀、と言うものを知っているか？妖しく、しかし艶かしい輝きを放ち人々を虜にし、手にした者を狂気に駆り立て、生きる者の血を吸い魂を喰らう。その妖刀よ」

剱 「あのマシン達は、妖刀と同じだと言うのか!？」

晴明 「然り。そしてその器に、ゲッター打倒に燃える勇士の魂魄を込めることにより、死者の怨念と生者の思念……。2つの念が1つの目的を遂げるため、より力を増幅させる……!」

剱 「何だと……!？」

號 「けつ、陰陽師が理屈を語りやがってよお……!」

晴明 「さあ、今宵妖刀は血に飢えておるぞ？忌むべき敵、ゲッターの生き血になア!!」  
號 「悪イが呪いの人形にくれてやる命なんか1つもないぜ？1匹残らず、叩き潰してやるツ!!もう一度合体するぜ、溪、剱!」

剱 「……いや、ここは俺が行く!」

號 「何だと、正気か？ゲッター3じや、さつきみたいな切り返しは出来ない!」

剱 「確かに、運動性能による咄嗟の切り返しと柔軟な対応力では1号機の方が優勢だが、今回は研究所の防衛も兼ねている。あまり柔軟に動きすぎでは、敵に研究所が人質に取られてしまう可能性も考えられる」



剽 「研究所を背にして戦うなら、前方への攻撃力に優れたゲッター3だ！」  
號 「だからつてよお……」

言い募る言葉を遮るように、敵の攻撃が始まる。

湊 「きやあツ!!」

號 「ちっ!」

剽 「話している時間はないぞ!合体だ!!」

號 「分かったよ!フォーメーション!」

剽 「行くぞおツ!!」

剽 「フルパワーチャージ、セットアップ!チェンジゲッター剽ツ!!」

水平に低空飛行を始めた2号機に1号機が垂直に突き刺さり、更に3号機が続く。  
黒いボディに赤イトサカが光る、ゲッター3号が大地に立つ。

剽 「よし、俺達が最終ラインだ。敵を一步も、俺達の後ろへ行かせるんじゃないぞ  
!」

號 「心配しなくても、連中は俺達を倒すことに躍起になってやがるつて!」

剽 「望む所だ!このゲッター3の火力は……!」

両脇に抱えた火炮が開く。

剱 「伊達ではないぞ!!」

バ オ ツ

剱 「インパクトキャノンツ!!」

両脇の砲筒が吼え、放たれた砲弾が火柱を生み、衝撃波が敵を吹き飛ばす。

剱 「この弾幕……そう易々とは近付けさせん!」

溪 「けど……速いのが来るよ!」

剱 「あの剣持ちか……!」

メカ牛剣鬼 『!!』

剱 「ぐう……!」

剣が振り下ろされる直前に、柄を握ったメカ牛剣鬼の腕を抑える。

剱 「こうすれば……!」

左右のキヤタピラを前後逆に回転。ゲッター3号を回転させ、その勢いに乗せてメカ

牛剣鬼の頭を叩き、地に伏せる。

剱 「小回りだつて利く!」

メカ牛剣鬼 『……!』

メカ牛剣鬼は立ち上がつて跳躍。ゲッター3号から距離を取る為に動く。

剱 「貴様だけは、逃がさん!ハーブンミサイル!!」

インパクトキャノンと同じ砲口から、弾装を切り替え発射。ワイヤーと共に放たれたミサイルが、メカ牛剣鬼にワイヤーを巻き付け、捕縛した。

剽 「さあ、こつちへ来い！」

そのままワイヤーを引き戻し、零距离でメカ牛剣鬼を取り押さえる。

剽 「この距離なら、どんな武装でも、そうそう外しはしないな！」

溪 「まさか、あれをやる気!？」

號 「面白え! やつちまえ、剽!」

剽 「俺達のゲッター最大の攻撃だ…! 喰らえ!!」

ゲッター3号の胸の赤い部分が強く光りを放つ。

剽 「ブレスト…! ビイームツ!!」

ズ  
ワ  
オ  
ツ

ゲッター3号の胸部から放たれた超高熱戦が、メカ牛剣鬼の上体を焼いて一瞬で蒸発させる。それでも尚余力を残しているブレストビームの熱戦は空間を一直線に突き抜け、周囲の木々を薙ぎ払い山の岩肌に当たって盛大な爆発を生んだ。

剽 「見たか、ゲッター3の力を！」

號 「まくだー機倒しただけじゃねえか。奴等、次から次に来るぜ」

剽 「…直に戦隊長も出撃する筈だ。取り敢えずは、これで持ち堪えてみせる！」

くくく A級刑務所 応接室 くくく

所長「ですからね？ 今日わざわざ直接お越しになっても、私共の答えは変わりませんよ」

リン「……やはり、解放してはくれませんか」

所長「ええ。彼女は正式な裁判により判決が下ったA級囚人。それを簡単に釈放したとなれば、我々の沽券にだって関わってくる」

リン「タダで、と言ってるんじゃないよ？ 今日電話越しじゃないからね。納得してもらえるよう、しっかりと現物も持ってきた」

テーブルの上に、アタッシユケースを置き、その中にぎつしりと詰まった金塊を見せつける。

リン「政府がまともに機能しなくなつて使えなくなつた日本銀行券じゃない。どの国でも、どの都市でも使える一級のモノだよ」

所長「……」

リン「決して、安い額で話してる訳じゃないと思うけど？」

所長「……正直に言えば、ですね？」

リン「……」

所長「彼女をここから追い出したいのは、我々も一緒なんですよ」

リン「何……？」

所長「彼女ほど狂暴な囚人を、私はかつて見たことがない。嚙猛で協調性に欠け、いつ爆発するかも分からない。危険な爆発物のようなものだ」

リン「……」

所長「奴1人の為にこの10年間でここに投獄されている囚人が5人、看守が2人殺られているんだ。まるで、猛獣でも飼っているような気分だよ」

リン「……そう」

所長「あんな厄介者、とつとと刑務所から追い出して、何処で野垂れ死のうとも関係ないんですがね。しかし……我々の言いたいことは分かるでしょう？」

リン「……と、言うとは？」

所長「彼女がこの刑務所で出した損害は決して少なくはない。その上、囚人共の方はどうでも良いが、彼女は罪のない看守2名の命も奪った。その内の1人は、子供が近く小学校に入るのだとか」

リン「つまり？」

所長「損失と賠償を、支払って頂きたいのですよ。本来なら彼女の血縁者に請求するところですが、残念ながら彼女には身寄りがない。ならば、彼女の身柄を欲する貴女方に請求させて頂くのが、妥当な落とし所だと……」

リン「……」

所長「刑務所の修繕費、看守2名とその家族に対する損害賠償の額を計算させて頂きますと……。こんな端金で解放してしまつては、我々が損害を被つただけになつてしまつと、そう言うことです」ニヤリ……

リン「……成る程」

所長「分かつて頂けましたかな？」

リン「ああ、よく分かつたよ……端から私達と話し合う気なんてなかつたつてね」

所長「は？」

リン「!!」ゴッ

惚けた面を晒す所長の顔面に、左のストレートが突き刺さる。

所長「ガッ……!!」

腰を掛けていたソファーごと後方に倒れ込む。

所長「あ……ガア……!え、衛兵……!衛兵……!!」

ガチャツ

リン「ッ!」

間髪入れずに懐から取り出した拳銃を構え、入つてきた2人の衛兵に発砲。放たれた弾丸は的確に衛兵の膝を射抜き、衛兵を屈服させる。

リン「……」

所長「ひ、ひい……っ！」 ソロオ……

リン「……！」 パキユンッ

所長「ぎやあああああ……っ!!？」

リン「先ずは耳。次は目か……鼻か！どっちに弾丸をぶちこまれない!？」

所長「ひい……っ!!お助け……!!」

リン「なら教えな。そいつの監房はどこ!?番号は!」

所長「さ、3階ですう!番号は、E—3751!」

リン「……分かった」

応接室を後にしつつ、机の上のアタッシユケースを回収するのも忘れない。

リン「端金でも受け取っておけば、少しはいい思いも出来たかもしれないのにね」

タツタツタツ——

—— 刑務所内

リン「はっ……はっ……はっ……はっ……はっ……!」

リン「Eの……3748、49……50……ここ!」

そして、“彼女”の元に辿り着く。

リン「ウツキ!!」

ウヅキ「……リン、ちゃん……？」

リン「……久しぶりだね」

ウヅキ「本当に……10年ぶり、位ですか？」

リン「うん……それくらいになる」

ウヅキ「目を、覚ましていたんですね」

リン「うん。ウヅキがこうやって、ブタ箱に閉じ込められてる間に、ね」

ウヅキ「……そうですか。それで、ここまで」

リン「扉を開けるよ。ちよつと下がって……」

ウヅキ「行きません」

リン「……」

ウヅキ「リンちゃんが目を覚ましたのが何時か分かりませんが、この10年間、面会にも来なかったリンちゃんが、今ここに来た理由はなんですか？」

リン「……」

ウヅキ「また私を乗せるつもりなんですよ？ ゲッターに」

リン「……言い訳をするつもりはないよ」

ウヅキ「10年前、何があつたか………忘れた訳じゃありませんよね？ 私の、たった一度の愚かな行為の為に、何万………いえ、何億と言う人が犠牲になつたんです。私のだけ」



じゃない、リンちゃんの家族も」

リン「……」

ウツキ「あの悲劇を繰り返すわけには行きません。だから、私はずっとここにいた方が……」

リン「そう思うなら、何で今生きてるの？」

ウツキ「……それは」

リン「生きて罪を償うため？まあ、ウツキは真面目だから、そのくらいは思えるかもね。私知ってる10年前の“綺麗な体”ウツキなら」

ウツキ「……！」

リン「今のウツキのその体……。もう一度アイドル活動が出来るような、綺麗な体？」

ウツキ「……所長が言ったんですか？」

リン「いいや。けど分かるよ。あの所長を見て。この刑務所はそれくらい、倫理観も欠如してる、最低の畜生道だって事くらいはね」

ウツキ「……」

リン「その為に、看守と囚人を合わせて7人も殺ったんだよね？」

ウツキ「……綺麗な体、ではないかもしれないですけど。だからって安い体でもないですから」

リン「弱味を笠に凌辱されて、人間としての尊厳まで奪われて……。それでも10年間、人間相手に手を汚してまで生き続けた理由は何？」

ウツキ「それは……」

リン「真ゲッターロボを破壊するため、でしょ？」

ウツキ「真ゲッターロボ……！」

リン「目に光が戻ったね」

ウツキ「……真ゲッターは、リンちゃん達の所にあるんですよね？」

リン「残念ながら」

ウツキ「え……？」

リン「真ゲッターは奪われたんだよ。今の私達を脅かしている敵にね」

ウツキ「奪われた……？」

リン「あの事件以来、真ゲッターに触りたがるものはいなかった。その隙を突かれた。真ゲッターロボの絶大な力……それを欲する者にね」

ウツキ「真ゲッターを、欲する者……！」

リン「10年前……。確かに私達は子供だったよ。ちよつと力を使えるくらいで調子に乗って、自分出来ることの領分を弁えてなかった」

リン「だからあの悲劇は起きたし、今の私達があるのも、自業自得だ。……けど」

ウヅキ「……」

リン「真ゲッターがなければ、あんな悲劇は起こらなかった。今ウヅキは、そんな事を考えてる。逆恨みに近い、怨讐を」

ウヅキ「…悪いですか？」

リン「悪くないさ。お陰で、ウヅキは今日まで生きていてくれた。刑務所の中で地獄を見せられても、ね」

ウヅキ「……」

リン「真ゲッターを破壊するんだったら、それは同じゲッターでしか成し得ない。私はその場になかったけど、ウヅキならその意味が分かる筈だ」

ウヅキ「…ミオちゃん」

リン「ミオの事は、本当に残念だったよ」

ウヅキ「思いの外、冷たいんですね」

リン「どうにも、私情だけで動けない立場にいるとね」

リン「ともかく、今の私達の敵の手に真ゲッターがあれば、10年前以上の悲劇が起こるかもしれない。真ゲッターを破壊するって言うウヅキの思いと私達の務め……目指す場所は一緒だと思うけど？」

ウヅキ「…いいんですか？」

リン「ん？」

ウツキ「本当にいいんですかって、聞いたんです」

リン「どういう意味？」

ウツキ「後悔するかもしれないよ？少なくとも、人類の未来とか希望とか、そういうもの、今の私に関係ないですから」

ウツキ「本当に、私は私の目的を果たす。ただその為なら……！」　ギラ……

リン「ふふっ……。いいんじゃない？それでこそ、ここまで来た価値があると言うものだ」

ウツキ「変わりましたね、リンちゃん」

リン「お互い様。ま、変わらない方が可笑しいか」

ウツキ「そうかもしれないね」

リン「下がって。今扉を開ける」

銃弾を監房の鍵の所に撃ち込み、施錠を強引に破壊。ドアを開ける。

リン「さあ」

ウツキ「意外に強引、ですね」

所長「あそこだ！撃て、殺せえ……ッ!!」

リン「！」

ウヅキ「所長っ!？」

所長「脱走だ!それに共謀者も!殺せ、殺せ、殺せ、殺せ!!」

衛兵 $\square$ s「はっ!!」

バラバラララララララッ

リン「立ち直りが意外に早かったな…」

ウヅキ「どうしますか?」

リン「こつち!」

ウヅキ「はい!」

機銃を構えて迫り掛けてくる衛兵達に背を向け、走り出す。向かった先は、

ウヅキ「屋上、ですか?」

リン「ああ。ウヅキの部屋が、屋上の近くで良かった!」

屋上に続く階段を一気に駆け上がり、外へ。

リン「はあ…はあ…はあ…はあ…」

ウヅキ「はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…」

飛び出した屋上。刑務所は断崖絶壁の上にそびえ立っており、リン達の視線の先には大海原が広がっている。

所長「くつくつくつ…!追いかけてこは終わりか?ネズミ共が…!」

リン「さあ？ 私達は、羽根の生えた天使かもよ？」

所長「ほざけッ!! 世界を破壊した悪魔共が！ 私がここで、天誅を下してやるわ」

衛兵  $\boxtimes$  s 「……」 ジャッキッ

所長の左右に展開した衛兵の機銃の銃口が、リン達を狙う。

ウツキ「っ……！」

リン「天誅、ね……」

所長「撃てッ!!」

リン「アンタらに下される覚えは、ないッ!!」

ズガンッ

所長「な、何だぁ……!?!」

リン達に向けて銃弾が放たれようとした、まさにその時、リンと所長との間にあつた空間を何かが隔てる。

ウツキ「これは……！」

それは、赤く巨大な手。いや、

ウツキ「真ゲッターロボ……!?!」

リン「ううん。よく似てるけど、違う。ゲッターロボアーク。私達の、新しい仲間さ」

ウツキ「ゲッターロボ……アーク……」

莉嘉「どくお？ タイミング、バッチリだったでしょ？」

ウヅキ「!? この声って…」

リン「間一髪。赤点ギリギリって所。もっと早く来られなかったの？」

莉嘉「厳しいこと言うなあ」

リン「周辺の護衛部隊の掃討は？」

莉嘉「とづくに終わってる！ たかだかビイトだもん！ 相手にもならないって☆」

リン「ふうん。ま、そこは上出来かな」

莉嘉「えへへ☆」

美波「話はそのくらいにして、早く乗り込んで下さい！ 長居は無用の筈です！」

リン「それもそうだ。ウヅキ、行くよ！」

ウヅキ「あ……はい！」

リン「まさか、パイロットスーツがなくちゃ乗れない、何て言わないよね？」

ウヅキ「心配は要りません！」

所長「あ……あ！ う、撃て！ 脱走犯を逃がすな!!」

衛兵「は……はっ!!」

気を取り直した所長が、発砲の指示を出す。放たれた弾丸は悉くゲッターアークの手によって阻まれ、その間に2人は胸部のハッチから、ゲッターアークのコックピット

に滑り込む。

莉嘉「ちよ……！何で2人揃ってこっちのコックピットに!？」

リン「こっちが近かったんだ。いいから上昇！」

莉嘉「う……。しっかり掴まってよね！」

ウイングを開き、ゲッターアークは急上昇。瞬く間に刑務所から遠ざかっていく。

ウヅキ「最後まで何か喚いてましたね……」

リン「逃げ切れればこっちのもんだ」

莉嘉「何か小物っぽい感じの人だったね。アイツなら、ビーム一発くらい撃つても良

かったかも……」

美波「ダクメ。事故でも暴発でも、殺人は立派な犯罪だよ？」

莉嘉「じよ、冗談だつて……」

ウヅキ「やっぱりリカちゃん……。ミナミちゃんに、カナコちゃんまで……」

美波「……」

かな子（この人が、この世界の卯月ちゃん……）

美波（年齢は司令の事も考えると27歳くらい……。昔の面影は、あんまり感じられな

いよね）

アキハ『ウヅキの救出には、成功したようだな』



リン「うん。思いの外順調だったよ」

アキハ『そうか。で、新調した義手の調子はどうだった?』

リン「悪くないよ。元の腕とそう変わらない。これなら、私にもやれる…!」

アキハ『それは良かった』

リン「もう少し待ってて。今そっちに合流して…」

アキハ『いや、その必要はない。たつた今研究所から連絡があつた。研究所が今、アトランティス流国の襲撃を受けているらしい』

莉嘉・美波・かな子「!!?」

ウヅキ「アトランティス、流国…?」

リン「詳しい話は後ですよ。それでアキハ、私達はこのまま研究所に戻ればいいんだね?」

アキハ『ああ。車で戻るよりも、そっちの方が早いだろう?』

リン「分かった。莉嘉、聞いた通りだ。研究所に急行してくれ」

莉嘉「え?でも2人は降ろしていった方がいいんじゃない?」

リン「構わない。降ろす時間が惜しい、何より都合がいいだろう」

かな子「リンさん、まさか…」

リン「そう言うこと。アキハ、車さんにも私達が来るまでに準備を整えておくように」

伝えておいて」

アキハ「了解した。無茶をするな、は……必要ないか」

リン「善処はするよ。…と、ウツキ、早速なんだけど」

ウツキ「戦うんですよね」

リン「そうだ。人類の平和を妨げる敵が、また現れた。奴等を倒すために、力を貸してほしい」

ウツキ「いいですよ。助けてもらいましたし。何より、リンちゃん達の仲間の危機なんですよね？」

リン「…うん」

ウツキ「なら、早く行きましょう。ここで立ち話してる時間も、勿体無いですよ！」

莉嘉「んもう、2人で勝手に決めちゃって！アークの最高速度はパイロットスーツ着てもヤバいんだから、鼻血で失血死しても知らないんだからね！」

言いながら、ゲッターアークは研究所を目指し、加速していく。

かな子（何だろう…。この世界の卵月ちゃん……言葉遣いとか、物腰とかは私が知ってる卵月ちゃんとそう変わらない筈なのに……違う。決定的な、何か……）

つづく

## 第19話『新たなる竜』

剽 「ぐうおツ…!？」

衝撃が伝わり、コックピットが小刻みに揺れる。

號 「やられっぱなしじゃねえか、剽!」

剽 「ゲッター3の機動力は、地上では大きく落ちる。回避には期待するな!」

號 「ご自慢のタフさで勝負しようってのか。大した度胸だ!」

溪 「呑気抜かしてるのはいいけどさあ、このまま攻撃を受け続けたら、流石にヤバイよ!」

剽 「もう1機落とせれば、戦況は大分有利に成る筈だ!」

意気を入れてインパクトキャノンを放つが、射線を読んだ相手は素早く移動し、砲撃を回避。

剽 「くっ…!」

號 「大砲はダメだ。先ずは動きを止めねえと!」

剽 「ならば……ぐうっ!？」

遠距離から鉄球鬼獣の棘ミサイルがゲッター3号の周囲に落ち、新たな衝撃を生む。

清明『くくくつ……』

號「畜つ生……あんにやろ、高みの見物でほくそ笑みやがつて……！」

剽「さつきみたいに術を使われただけマシだ。今は襲つてくる相手に集中しろ！」

メカザウルス・ギガ『!!』

剽「ぐつ……！」

肉薄し、ギガが大上段から振り下ろしたトマホークを、両腕を交差させて受け止める。

剽「うぐぐぐ……つ！」

溪「剽、左！」

剽「何……!?!」

バトルギガ『!!』

ギガの攻撃を受け止め、ゲッター3号が足を止める中、その真横からバトルギガが迫る。

剽「しまった……！」

バオツ

溪「…………？」

迫っていたバトルギガが、砲撃を受けて吹き飛んでいる。

溪 「今のは……」

剱 「研究所からの支援攻撃だ！」

號 「今頃かよ。遅すぎるぜ！」

弁慶 『すまねえ。援護が遅くなっちゃった！』

剱 「戦隊長！レデイコマンドは?！」

弁慶 『ちよつと所要があつてな。レデイコマンドで支援には行けねえ！エネルギーが危なくなったら心配しねえで後退しろ！』

剱 「しかし……それでは基地の防衛が……」

弁慶 『今遠出してる司令達に連絡を入れたところだ。直にゲッターアークも帰ってくる！ここで無茶して、下手に被害を増やすんじゃないやねえ！』

剱 「……了解！出来る限り時間は稼ぎます！——溪！」

溪 「は……な、何？」

剱 「バルカンだ！2号機のバルカンを撃て！」

溪 「バルカン……。了解！」

ゲットマシン2号機の機首バルカンが放たれ、正面に立ったギガに痛撃を与える。

ギガ 『グウウ……！』

剱 「今だ！」

バルカンでギガが怯んだ隙を突いてガードを解き、左右のパンチを放ってギガを殴り飛ばした。

弁慶「…よし。その調子だ、剋。もうちよつとだけ、持ち堪えてくれよ」

友紀「親父い!!」

弁慶「友紀…? テメエ、持ち場を離れて何してやがる!？」

友紀「親父の方こそ! このままだと、號達やられちゃうよ?!」

弁慶「心配しなくても、そう簡単にくたばるようなタマじゃねえよ。あいつ等は」

友紀「けど…!」

弁慶「それに、今からアレを動かす。友紀は余計な心配何ぞしねえで、とつと持ち場に戻れ」

友紀「アレ、つて…! でもアレは確か、まだパイロットがいないって…!」

弁慶「そのパイロットを出迎えに、司令は朝から出掛けていったんだ。何時でも出撃出来る様、これから準備に入る」

友紀「準備つて、まさか親父が乗るつもりじゃないよね?…ゲッターに!」

弁慶「つたりめえだろうが。3人乗らなきや、ゲッターは力を發揮出来ねえ。これから司令が連れてくる奴と、司令と。それ以外にここでゲッターに乗れるのは、俺だけだ」

からな」

友紀「止めてよ！レディコマンドとは訳が違うんだよ？親父の体は……！」

弁慶「余計な心配はすんなと、言った筈だぜ？」

友紀「……！」

弁慶「我が子も同然の若造に心配されるほど、落ちぶれたつもりはねえや。この体の事なら尚更……」

友紀「……なる」

弁慶「あ？」

友紀「アタシが乗るって、言ったんだ！」ダッ

弁慶「何……!?こら……友紀！待ちやがれッ!!」

言うが早いか、管制室を飛び出していく。

美世「はあ……はあ……はあ……！もう、友紀……！」

茄子「友紀ちゃん、待つて下さ……！」

弁慶「はあ……はあ……っ！んにやろう……！足だけは現役の頃の俺より速くなりやがっ

てえ……！」

美世「隊長……!?友紀、隊長のところに言った筈じゃあ……」

弁慶「おお、美世、茄子。丁度良い、急いで格納庫まで行って友紀を捕まえてきてく

れるか？」

茄子「格納庫？何かあったんですか？」

弁慶「友紀の奴、ゲッターに乗るなんぞ言い出しやがった……！」

美世「はあ!？」

弁慶「あのバカにマシンを好き勝手させるわけにやあいかねえ！だから早く、奴を取っ捕まえねえと……！」

茄子「分かりました！行きましょう、美世ちゃん」

美世「わ、分かったけど、格納庫まで結構距離あるような……」

茄子「とにかく急ぎましょう？大変なことになる前に……！」

美世「んもう！こんなことなら、室内を走れる車でも作っておくんだったあく!!」  
ダアツ——

—— 格納庫。

友紀「はあ……はあ……はあ……。これが、新ゲットマシン！」

発進準備を済ませ、カタパルトに乗せられた3機のマシンが目に移る。

友紀「本当に開発してたんだ。ゲッター線で動く、正真正銘のゲッターロボ！」

茄子「友紀ちゃん——！」

友紀「げっ！茄子く？親父の差し金だな……つたく！」



パイロットスーツも纏わず。急いだ調子で手前の赤い1号機のコックピットに滑り込む。

茄子「友紀ちゃん！」

美世「ぜえ……！はあ……！ぜえ……！はあ……！つ！」

茄子「可笑しな考えは止めてください！友紀ちゃん!!」

美世「ぜえ……！ゲッターに……乗る……！とか、はあ……！車と、違うんだから……！つ！止めときなつて……！ぜえ……！」　　ぜーハ——

友紀「何を言っても遅い遅い！乗っちゃえばこつちのもんだもんねえ!!」

起動スイッチをオン。新しいグル号のエンジンを火を入れる。

友紀「ずっとシミュレーションはしてきたんだ……！（みんなに黙っただけど……）ゲッターマシンくらい！」

弁慶「友紀イっ!!」

友紀「発進!!」

ゴ　オ　ツ

友紀「——!!」

エンジンの回転が上がり、カタパルトの上を走り出す。

弁慶「くそ……！発進口を閉じろ!!」

友紀「新型をいきなり壊す気!?冗談でしょ!」

目の前で降りてきた発進口の隔壁を、ミサイルで破壊。

友紀「うう……!」

速度は高まり、新イーグル号は空へ。

友紀「ヒヤッホーッ!!」

茄子「あゝ……」

美世「行っちゃった……」

友紀「くう……!やっぱシミュレータとは違うや!体が押し潰されるかと思った!さて……」

空中で旋回して速度を慣らしつつ、目標を探す。

鉄球鬼獣『——!!』

剽「ぬう……!!」

大鎌を振るう鉄球鬼獣と、ゲッター3の拮抗。しかし、飛来したミサイルが鉄球鬼獣に直撃し、その巨体が大きく仰け反る。

剽「……!?何だ!」

友紀「今の内!早く攻撃して!」

號「その声……!友紀義姉ちゃん!」

剽 「うおおおおッ!!」

晴明 『……ほう』

ゲッター3号の下部先端に取り付いたドリルが唸り、怯んだ鉄球鬼獣を弾き飛ばす。その上空を、新イーグル号が飛んでいく。

湊 「あれは……開発中だったゲットマシン!」

號 「何だと!」

剽 「開発していると言う噂は聞いていたが……本当だったとはな」

友紀 「へへっ、じゃーん! 颯爽登場〜! どうう? ちよつとは助かったでしょ?」

號 「しつかし、まさか友紀義姉ちゃんが乗ってるとはな……二重で驚かされたぜ」

友紀 「このくらいなら余裕、ヨユー♪」

號 「足を引つ張りに来たんじゃねえだろうな?」

友紀 「なっ……! アタシの腕を疑ってるなく! それなら!」

機首を反転。ギガに照準を合わせる。

友紀 「よく狙って……そこだ!」

機首からビーム砲を発射。確かな爆炎を生む。

ギガ 『!!』

ギガの反撃のミサイルを、新イーグル号をロールさせて躲す。

號 「おお！」

友紀 「へっへ〜ん♪どう？アタシの超フアインプレー！」

湫 「アタシよりも操縦上手いんじゃないの？」

剗 「だがああして調子に乗っていると、すぐに落とされるんだぞ」

友紀 「あつはははっ！そんな都合良くなならないならな……とおっ!!」

新イーグル号の背後から、鉄球鬼獣の無数の棘ミサイルが迫る。

友紀 「そ、それは……流石に卑怯じゃない？」

號 「奴らに卑怯もらつきようもうあるかよ？」

友紀 「ちよつとはアタシの肩を持ってよく?!」

新イーグル号に、ミサイルが命中する。

友紀 「きやあくっ!!」

晴明 『ふん……。若すぎたのだ。己の未熟さを悔いて、死ね!!』

友紀 「くう……！」

木々を薙ぎ倒して墜落した、新イーグル号に鉄球鬼獣が迫る。

號 「やべえ！助けねえと……！」

剗 「ダメだ、ゲッター3の機動力では……！」

鉄球鬼獣『——!!』

ズオンツ

鉄球鬼獣『?!?!』

溪 「あれは……!」

新イーグル号に振り下ろされようとした、鉄球鬼獣の大鎌を弾いたものは、

剽 「ゲッターアークの、トマホーク!!」

莉嘉 「呼ばれて飛び出て、いざ参上!!」

溪 「ゲッターアーク! 莉嘉……!!」

莉嘉 「お待たせ☆へへくん、ちよつとは待ちかねてたでしよ〜?」

號 「今回ばかりは、な。おチビちゃん」

リン 「新イーグル号は、もう出撃してるみたいだね」

かな子 「出撃と言うか……。墜落してるみたいですけど?」

ウヅキ 「使えなくなった訳じゃないんですよね? それなら……」

リン 「行くの?」

ウヅキ 「…はい」

美波 「ちよつと待って! まだゲッターは宙空ですよ? まさか、飛び移るつもりじゃ……」

ウヅキ 「それが、今一番最適なやり方です」

リン 「寧ろ、出撃してきてくれて、手間が省けたって感じだ」

美波「この人達、本気で言ってるの…?!」

莉嘉「ちよつとでも高度を落とすよ。接触するのは一瞬だ。その隙に飛び降りて」  
リン「有り難う。助かる」

莉嘉「……!」

ゲッターアークを地表スレスレまで降下。滑空し、墜落した新イーグル号に迫る。

ウヅキ「……今!」

タイミングを見計らって、降下。新イーグル号のコックピット付近にしがみつく。

ウヅキ「っ……!」

キャノピーの凹みに手を掛け、維持し、開閉装置の位置まで移動。

ウヅキ「これが、新ゲットマシンの……新しいゲッターロボ……!」

ロックを解除し、ハッチを解放。

友紀「……」

ウヅキ「…生きてますか? ……生きてますね。降ろしますよ」

友紀「っ……ん。ん………! アンタは……!」

ウヅキ「マシンは貰います。研究所までは、一人で帰れますね?」

友紀「アンタ……アンタはア……!」

ウヅキ「恨み言は、戦いが終わってから聞きます!」

ドンッ

友紀「あ……！」

友紀を蹴落とし、ハッチを閉じる。

ウヅキ「新ゲットマシンのコックピット……。私が知ってるのと、ちよつと違うけど……いける……！」

墜落した場所から、新イーグル号が飛び立つ。

友紀「わあっ！」

ビュンッ

友紀「くっ……！司令も親父もはじめから……！アイツを乗せるつもりで……！あのマシンを……!!」

莉嘉「赤いのが出たよ！1号機じゃない？」

リン「そうだ。イーグルは無事……。ジャガー号と、ベアー号は？」

弁慶「今出撃した！」

上空に2筋の飛行機雲を生んで、2機のマシンが来る。

リン「新ジャガー号……！」

弁慶「2号機は今、俺が無線で誘導してる……！乗り込むんなら、任せるぜ！」

莉嘉「まさかとは思うけど、あれにも飛び乗るつもりじゃ……！」

リン「当然！」

莉嘉「ああもう！どうにでもなれ！！」

グンツ

ゲッターアークが上昇して、新ジャガー号に高度と位置を合わせる。

メカザウルス・ギガ『！！』

バトルギガー『！！』

剽「ハーブーンミサイル！！」

ゲッターアークを追うギガとバトルギガーを、ゲッター3号のワイヤー付きミサイルが捕縛。

剽「俺達を忘れて貰っては困るな！」

鉄球鬼獣『！！』

ウヅキ「させません！」

上空から迫る鉄球鬼獣には、新イーグル号が応ずる。

リン「よし……！」

莉嘉「今だよ、行っちゃえ！！」

その隙にアークのコックピットから飛び出して、アークの掌に移ったリンが、新ジャガー号目掛けて宙に飛び出す。



リン「くらくらっ！……よし！」

多少風と衝撃に煽られながらも、コックピットの縁をしつかりと掴んで体を持ち上げ、内部へと滑り込んでいく。

リン「自動操縦解除……。こっちは行けるよ」

弁慶「行けるのかい、司令？」

リン「義手の調子は良いよ。合わせられる。ウツキ！」

ウツキ「はい！」

新イーグル号が天高く舞い上がり、それに新ジャガー、新ペアーが追隨する。

弁慶「——行くぜ！」

新ペアー号が新ジャガーとドツキング。

リン「ウツキ、行くよ!!」

ウツキ「…はい！」

新ジャガー号が新イーグル号とドツキングし、そして、

ウツキ「チエーンジゲッタアア!! ーッ!!」

新ペアー号から足が延び、新ジャガー号から腕が。新イーグル号の機首が頭部へと変形してその目が光り、完成する——。

弁慶「…つうぐ……」

リン「成ったね、新ゲッターロボ……！」

ウツキ「シン・ゲッターロボ!？」

リン「そ。ちよつとは洒落た、ネーミングでしょ?」

ウツキ「……洒落の効いた、皮肉だと思えますよ」

晴明『これは……新たな竜、ゲッターロボか!』

ウツキ「……あれは……！」

晴明『お初に御目にかかります、シمامラ・ウツキ? 貴女の事も、お待ちしておりますよ?』

ウツキ「……嫌みに感じるくらいの姿勢の低さ、気に入りませんね」

晴明『これはこれは……。礼儀礼節は、心得ているつもりでしたが……』

ウツキ「貴方が誰であろうと関係ありません。その雑魚共を従えてるってことは、結局は私達の敵なんでしょう? なら、ただぶつ潰すだけです」

晴明『地獄に生きて強かになられたようで、私のささやかな歓迎、受けていただきます!』

ギガ『……!!!』

晴明の櫂に合わせて、ギガが動く。

ギガ『!!!』

ウヅキ「……」

ギガ「?!」

ギガの大振りな上段からのトマホークの連打を、流れに身を任せる様な自然な動きで左右に翻して躲していく。

リン「弁慶さん！まさか気を失ってないよね？」

弁慶「つ…バカ野郎…！ちよつと古傷が疼いたただけだ！俺に心配は要らねえから、思いきりやりな!!」

リン「だつてよ、ウヅキ！」

ウヅキ「元よりそのつもりです！リンちゃんこそ、振り回されて気絶しないで下さいね！」

リン「言つてくれるじゃん！」

ウヅキ「ゲッターアアトマホークツ!!」

新ゲッターの肩から鉄球が射出。その鉄球を先端に置いて長大な柄が伸び、片側に刃が付いたトマホークを手に取る。

ウヅキ「やあああッ!!」

横一闪。ギガが両手に携えたトマホークを払い飛ばす。

ギガ『!!』

ウヅキ「おっと！」

ギガが口から放つた火炎を大きく飛び退いて躲し、空中で体勢を立て直す。

ウヅキ「——っ……りやあッ!!」

そして豪快に、ギガに飛び蹴りを浴びせる。

バトルギガー『!!』

ウヅキ「——！」

莉嘉「バトルショットカッター!!」

着地した新ゲッターを狙って、横撃を仕掛けたバトルギガー。その両肩から伸びる竜頭を、間に入ったゲッターアークがバトルショットカッターの刃をその首筋に突き立て、動きを制している。

莉嘉「リカ達の事も忘れて貰っちゃ困るよ！」

ウヅキ「アテにはします。借りにはしませんけど」

莉嘉「なくんかアタシが知ってるウヅキと全然違う。でもまあ……！」

バトルショットカッターを肥大化させ、そのまま竜頭を切断。

莉嘉「そっちの方が、接しやすいくけど☆」

バトルギガーのすぐ脇を駆け抜けけると同時に、全身を切断。バトルギガーを細切れにして、地に還した。

ウツキ「…なかなかやるみたいですね」

リン「頼りにはなるよ。こっちも、ブランクだなんて言ってもらえない」

ウツキ「みたいですね。なら…!」

ギガのミサイル攻撃を、新ゲッターIを上昇させて回避。そのまま一度天高く舞い上がり、

ウツキ「やあああああゝゝゝツ!!」

ギガの頭上に急降下。その勢いの乗せたまま、トマホークで大上段に切り裂いた。

ギガ『……』

脳天から真つ二つに割れ、爆散するギガ。

鉄球鬼獣『——!』

ウツキ「トマホオオウク!ブーメランツ!!」

次に鉄球鬼獣に狙いを定め、トマホークを放る。

ガギンツ

ウツキ「……?」

新ゲッターIのトマホークと、何か鉄球鬼獣を介して交差し、新ゲッターIの手元に帰ってきたのは、本来のモノとは違う双頭の斧。

ウツキ「これは…」

莉嘉「へへっ☆」

ゲッターアークが、新ゲッターのトマホークを構えている。

ウヅキ「あつちの、ですか」

莉嘉「一緒にやろうよ！」

ウヅキ「…面白い！」

地上から新ゲッターが飛び出し、空中からゲッターアークが飛び出す。タイミングはほぼ同じ。

ウヅキ「ダブルトマホオオークツ!!」

莉嘉「インパクト☆」

鉄球鬼獣を中心にその前後で躲し合う。すれ違いざまに、互いに担ったトマホークを振るい、鉄球鬼獣を十字に斬り伏せた。

ウヅキ「……。こんなもの、ですか？」

莉嘉「えっへへっ☆上手く決まったね?——…さてと」

晴明『……』

莉嘉「後はアンタだけだけど、どうする?」

晴明『…お見事。この晴明、完敗で御座います』

莉嘉「へえ? 以外に素直なんだ?」

清明『無論。賞賛させて頂きますよ。我が心血を注いだ精鋭達を、手間を取らずに退けた。その技にして妙技、その力にして至高』

清明『そして恐ろしき、ゲッターの力をね…!!』

莉嘉「褒めてくれてありがと☆…で、ゲッターの恐ろしさが分かったなら、とつと尻尾を巻いて、地球から出ていってよ」

清明「そうはいかぬ。正義は我らにあるのだ。作戦に少々の修正は必要だろうが、ゲッターよ。必ずや貴様等に天誅を下してやるぞ…!」

ウツキ「天誅、ですが…。その言葉、さつきも聞きましたけど、弱い犬ほどその言葉を振りかざしたがるんですね?」

清明『ふん…。精々足掻くが良い。貴様らの命運は変わらぬ』

溪「あれは…!?!」

清明の頭上に、ワームホールが現れる。

莉嘉「逃げる気!? そうはさせない…!」

かな子「莉嘉ちゃん、待って…!」

莉嘉「ゲッタービィームツ!!」

清明『印——!!』

ワームホールの中に消えゆく清明に向かい放ったゲッタービーム。清明は中指と人

差し指を立てた右手で印を結び、五芒星の結界を張ってビームを防ぐ。が、

晴明『……ほう』

ゲッターアークのビームは結界を突き破り、晴明の幻影を突き抜けていく。

莉嘉「ええ!!」

かな子「だから止めたんです。攻撃するだけ無駄ですよ」

莉嘉「でもお……」

晴明『ふむ……。やはり距離があつてはこんなもの……。しかし、着実にそのゲッターを乗りこなしつつあるようだな?』

莉嘉「次はこうはいかないから!必ず、そのにやけ面に一発かましてやる!!」

晴明『くつくつくつ……。!では、黒平安京でまつておる。相見えるのを楽しみにしておるぞ——!!』

そう言い残して、晴明の幻影は消えた。

莉嘉「くつ……!」

美波「チャンスだったかもしれないけど、落ち着いて。まだ全てのチャンスがなくなつた訳じゃないんだから」

莉嘉「……うん」

ウヅキ「黒平安京……。リンちゃん」



リン「何？」

ウヅキ「真ゲッターは、そこにあるんですね？」

リン「それを知って、今から向かうつもり？」

ウヅキ「……」

リン「今回はゲッターアークもいて、上手く出来たけど、私から言わせればまだまだ、流さん達にも程遠いよ。もつと訓練して、莉嘉達みたいに、ゲッターを手足みたいに動かせるようにならなきゃ。それに……」

ウヅキ「それに？」

リン「他のパイロットが、限界みたいだ」

弁慶「ハア……ハア……ハア……」

號「ちつ、晴明の野郎、俺達は眼中になしかよ」ケツ

剗「今の俺達のゲッターでは、アークと新ゲッターの2機が一蹴した奴等を、1体倒すのがやっとだった。仕方ないさ」

號「なら、もつと力を付けろつてのにかよ？ゲッターは生き物じゃないんだぜ？どうやって……」

剗「そのためには、先ずはもつと腕を磨け」

號「腕………実力か」

剽 「そうだ。今の俺達が、今以上の力を望んでも、その力に振り回されるのがオチだ。だから、どんな力でも制御出来るように、俺達自身が力を付けなければ……！」

號 「んだよ、自分を鍛えろって言いてえなら、最初っからそう言えって。相つ変わらず回りくどい野郎だ」

剽 「溪もだぞ？今以上に、訓練を厳しくしていくからな」

溪 「え……？あ、うんっ」

剽 「どうした？」

溪 「いや……ただ、司令がつれてきたあのパイロット……。もしかして……」

剽 「何だ、その事か。後々、司令から正式な紹介がある筈だ」

號 「の割りにやあ、お前は端っから知ってたような口振りじゃねえか」

剽 「知ってた訳じゃない。そう推測出来ただけだ」

剽 「現状で、司令や車戦隊長などと同等にゲッターを操れるとしたら、彼女以外ないだらういからな——」

—— 戦闘終了後、司令室。

リン 「皆、今日は本当にお疲れ様。それぞれの奮戦のお陰で、研究所は守れた」

號 「姐さんよ。劳いの言葉なんざ要らねえんだぜ？特に今日のところはよ」

リン 「……」

號 「それよりも早く、後ろの奴を紹介してくねえか？」

リン 「…彼女は」

ウヅキ 「私は、シママラ・ウヅキです。…足手まといには、ならないつもりです」

號 「へえ、だがよ。俺達は忘れちやいねえぜ？10年前の悲劇が、誰のせいで起こったのかをなあ…！」

莉嘉 「待つてよ！今は身内で争ってる場合じゃなくない!？」

號 「関係ねえ奴は黙ってる！俺だけじゃねえ、ここにいる奴等全員、コイツに復讐する権利があるんだ！」

莉嘉 「で、でも…」

かな子 「莉嘉ちゃんの言う通りですよ。先ずは落ち着いて下さい」

號 「だから！」

かな子 「部外者なら尚の事、私達にも知る権利がある筈です」

莉嘉 「え…」

號 「あん？」

かな子 「莉嘉ちゃんも気になりませんか？」

美波 「私達が司令から聞いたことは、10年前、ゲッター線が暴走する“災害”が起こったってことだけ」

かな子「実際その時に何が起こったのか。それが分からなくちゃ、誰の味方も出来ないですよ」

リン「……」

號「へっ、災害ね…。相変わらず姐さん、口が上手えや」

美波「…どう言うこと？」

號「災害ってのは間違いないじゃねえさ。人災と言う名のな」

かな子「人災…?!…それを、ウツキちゃんが!？」

ウツキ「……はい。10年前のあの日、私達は真ゲッターに乗ってたんです」

莉嘉「真ゲッターロボ…!？」

弁慶「予めに言つとくが、ウツキ達が進んで、じゃねえ。あん時やそうするしかなかつたんだ」

かな子「どうして…?この世界には、アイドル以外のゲッターチームがいた筈じゃ…」

弁慶「先ずは、その辺りの説明からか」

リン「ゲッターチームが恐竜帝国と戦っていたのは、今からなら50年近くも前、1

970年代頃の話だ」

美波「それじゃあ…」

弁慶「恐竜帝国に百鬼帝国……日本国内に於ける二度の戦いに、世界を巻き込んだら

ンドウとの大戦……。三度の戦いを乗り越えた人類は、更なる発展の新天地を求め、宇宙へと旅立った……」

莉嘉「宇宙……。そんな所まで……」

美波「けど、1970年……。そんな時代に、ゲッターロボの技術が……?」

弁慶「ああ……。今考えりゃ、そこだけ歪に、進化してたのかもしれないな」

リン「兎も角、流竜馬率いるゲッターチームは、宇宙へと旅立った進宙艦隊の旗印として、超下級宇宙戦艦へと進化したゲッターと共に旅立った。地球には有事の際の防衛用として真ゲッターロボだけが残されたんだ」

ウツキ「そしてあの日……。あれは突然、虚空の彼方から現れたんです」

美波「虚空の、彼方から?」

弁慶「恐らくは、宇宙の彼方で竜馬達と戦った連中の生き残りだろうな。連中は報復の手段として、竜馬達の生まれた母星である、地球への攻撃を開始した」

リン「ゲッターロボが、ただ腕の立つパイロットを有り合わせただけじゃ機能しないのは、莉嘉達も知ってるよね?」

弁慶「ゲッターの操縦にや、技術と、チームワークが必要だ」

かな子「そこで選抜されたのが、ウツキちゃん達……」

ウツキ「皆も守ろうと、私達は戦いました。アイドルであることも忘れて、毎日毎日

必死に！けど、侵略者の攻撃は止まず……」

リン「戦いを終わらせるため、私達は決めたんだ。ストナーサンシャインを使おうって」

ウヅキ「けど、それが間違いだったんです。あの時の私達に、あの力は過ぎたものだったんです」

弁慶「ストナーサンシャインに蓄積されたゲッターエネルギーは留まるところを知らず、制御不能に陥り、暴走状態のまま放たれた……」

かな子「暴走状態の、ストナーサンシャインが……」

リン「暴発したストナーサンシャインは一瞬にして東京の街を消滅させ、数十万人と  
言う人間を蒸発させた」

莉嘉「……！」

ウヅキ「それだけじゃありません……。ストナーサンシャインの衝撃は地軸を乱し地球環境を一変させ、地球一帯を覆った高濃度のゲッター線は、人類すらもその生活の場を地下へと追いやりました」

リン「この辺りは、前に説明した通りだよ」

美波「……」

弁慶「ストナーサンシャインの衝撃に耐えられず、リンはそれから半年以上、昏睡状

態になった」

美波「昏睡状態って、それじゃあ……！」

リン「目を覚ました時には、もうウツキは扉の向こうだった。私は、ウツキー人に罪を背負わせた、卑怯者だ」

かな子「あの……」

リン「何？」

かな子「ゲッターのチーム、ってことは3人ですよね？チームワークを優先にした……」

それじゃあ、リン司令達の3人目のパイロットは……未央ちゃんは……！」

ウツキ「ミオちゃんは……」

リン「……死んだよ」

かな子「そんな……！死……?!」 ヨロ……

美波「かな子ちゃん、大丈夫!」

かな子「……すいません。けどやっぱり……ちよつと……」

莉嘉「宇宙から来たって敵は……!」

弁慶「10年前のあの日以来、地球に現れてはいない。竜馬達が何か手を打ったか、ストナーサンシャインに恐れをなしたか。それとも、自分達で手を下さなくとも、滅びると判断されたか、だろうな」

莉嘉「そんな…」

ウヅキ「全て私のせいです。私に、ストナーサンシャインさえ使わなければ…！」

號「懺悔ご苦労さん。引導は渡してやるぜ」 チャキ…

拳銃を突き付ける。

莉嘉「號…！」

號「言つた筈だぜ。俺にはコイツを討つ権利がある。それとも何か？今の話を聞いても、奴さんの肩を持つてののか？アンタは…！」

莉嘉「それは…」

リン「ウヅキを撃つなら、私も撃ちな」

號「なっ…！姐さん!？」

リン「10年前の復讐を果たすつて言うんなら、私だつて同罪だ。私にも、撃たれる権利はある」

號「だ、だが…！姐さんは…！」

リン「罪を償つたと言つてくれる？それなら、ウヅキだつて罪は償つた筈だ。10年間檻の中で、凌辱までされて…！」

美波「り、凌辱…!？」

莉嘉「…つて？」



美波 「莉嘉ちゃんはまだ知らなくて良いです！」

莉嘉 「…………？」

號 「だがよ…………実際にストナーサンシャインを撃つたのは、ソイツで…」

リン 「止められなかったのは、アタシだ」

號 「それでも！」

ウツキ 「私が、憎いですか？」

號 「…………つ」

リン 「ウツキ…」

ウツキ 「大丈夫です。下がってて下さい」

リン 「分かった」

號 「…覚悟を決めたってかよ？」

ウツキ 「覚悟…。そうですね。命を捨てる覚悟なら、とつくに出来てたんです」

號 「なら…！」

ウツキ 「けど、まだ死ねません」

號 「どう言うことだ!？」

ウツキ 「この手で、真ゲッターを破壊するまでは…！」

號 「…………はっ、責任転嫁ってか？」

ウヅキ「何と言われても、思われても構いません。だけど私は、この手で真ゲッターを破壊する……それを果たすまでは……！」

號「……それだけが生きる望み、つてか?」

ウヅキ「はい。だからこの命、貴方に預けます」

號「預ける、だあ?」

ウヅキ「全てが終わったなら。好きにして貰って構いません。……貴方が望むなら使用済みこの体だって」

號「笑えねえ冗談は聞きたくねえ」

ウヅキ「そうですか」

號「……だが、アトランティス流国をぶっ飛ばすために、アンタが必要だって、姐さんがそう判断したなら、今はそれに従う」

莉嘉「つ……それじゃあ……！」

ウヅキ「ありがとうございます、ごさいます……」

號「けつ、感謝されることなんかねえや」

溪「よく言った! 號、偉い!!」 ガバツ

號「ガッ……! 何だよ……」

剗「一時はどうなるかと思っただぞ」

號 「剷……テメエまで……。んだよ、お前らだつて……！」

溪 「號の言う通りだよ。だから、私達は止めなかった」

號 「……」

剷 「お前の言う通り。ここで誰かが動かなければ、誰も納得しなかつただろう。だがお前が動いてくれた。だから今、この結果を受け入れることが出来る」

號 「……いい噛ませ犬だぜ。つたくよ」

弁慶 「何とか、丸く収まったか……」

リン 「ホント、何とかね……。——……車さん？」

弁慶 「ウ、グツ……」

バタツ……

リン 「車さん!!」

號 「どうした!?!」

剷 「戦隊長!?!どうしたんです、車戦隊長……！」

バアンツ

友紀 「親父! いるツ!?!」

美世 「はあ……はあ……はあ……」

茄子 「はあ……はあ……はあ……」

莉嘉「友紀……2人も……」

友紀「!? 親父……! だから言わんこつちやない!」

ウヅキ「何が……。一体どうしたんです……?」

茄子「お養父さんを……早く医務室に……」

友紀「絶対に……! ゲッターに乗せちゃいけない体だつて、分かつてたのに……! 親父い

……!!」

つづく

## 第20話『友紀、猛る』

弁慶「……っはあ……はあ……はあ……」

竜馬「……」

隼人「……ふっ」

武蔵「……」

弁慶「はあ……はあ……っ。待つ、待ってくれ……！竜馬、隼人……先輩ツ!!」

竜馬「あばよ——！」

弁慶「待ってくれ……！俺を、置いて行かないでくれえ——ツ!!——」

——。

弁慶「——…っ!! 今のは……夢、か。随分と、情けねえ夢を見ちまったもんだ」

弁慶「ここは……医務室か。俺ア、そうか司令室で倒れて……ん？」

友紀「Z z z z……」グーグー

弁慶「……ったく。嫁入り前の体を、あんまり冷やすもんじゃねえぞ」

そう言って、自分に掛けられていた布団を掛ける。

友紀「ウーン…。パパ、ママア…。お兄ちゃん…。ドコ…?」

弁慶「っ。……」

友紀「親父い…」 Zzzz…

弁慶「…友紀」

弁慶（昔、竜馬達に1人置いていかれた時は、自分の不甲斐なさを悔やんだもんだが…。結局地球に俺1人残ったのは、良かったのかも知れねえな…）

弁慶「友紀…。美世と、茄子もだ。お前達は何があつても、必ず俺が守ってやるからな。この身に代えても——!」

友紀「おや、じ…?」 ムニヤムニヤ…

友紀「私だつて、親父のこと…」

莉嘉「ゲッタートマホーク!!」

早乙女研究所から少し離れた浅間山の山間部で、戦線が展開している。

莉嘉「ダブルツッ!ラビリントゥス!!」

柄尻同士を突き合わせたツイントマホークを振るい、殺到するインセクター達を宙へと巻き上げ、体勢が崩れたところを今度はダブルトマホークで切り刻む。

かな子「アトランティス流国も、大分本格的に攻めてくるようになってきましたね……」

美波「ええ。このまま防戦を続けるだけじゃ、何時か押し切られるかも……」

莉嘉「だから、相手の本拠地を攻める為に皆準備してるんでしょ？先ずは経験値を稼いで、レベルアップだ〜！」

両手のトマホークをブーメランにして一度手放し、腕部のバトルシヨットカッターを展開。肉薄するインセクターを切り伏せ、戻ってきたトマホークをキャッチ。そのまま背後へと振り向き、背後から迫ろうとしたインセクターを、バツサリだ。

かな子「……そんな、ゲームじゃないんですから」

美波「……」

美波（確かにゲームじゃないけど、ここの所莉嘉ちゃんの戦闘効率は格段に上がってきてる……。莉嘉ちゃんの柔軟性と、順応力と言えばそれまでだけど……けど）

莉嘉「これでどうだ！——ゲッタービームツ!!」

ズ オ ア ツ

莉嘉「へへ〜ん☆あらかた雑魚はやつけたって感じ？」

かな子「まだです！ここから7時方向、新ゲッターが囲まれています！」

莉嘉「え!？」

かな子「今、號くん達が支援に向かっていますけど、私達も行きましょう！」

莉嘉「分かった！」

ウヅキ「くっ……！」

リン「ウヅキ、敵に飛び込みすぎだ！一度後退して……うっ……！」

ウヅキ「やあああああッ!!」

水平にトマホークを大きく振るい、インセクターを真つ二つに両断する。

ウヅキ「…ダブルトマホーク——！」

右の肩から、もう一つのトマホークを抜いて左手に構え、

ウヅキ「ブーメラントツ!!」

両のトマホークをブーメランとして投じる。

インセクター《!!》

弁慶「うぐっ……!?!」

手に槍を構えたインセクターの突きが、新ゲッター1を襲う。

ウヅキ「ぐう……!このオ!!」

手元に帰ってきたトマホークを構え直し反撃。インセクターを一刀の元、切り捨てる。

インセクター1《!!》

インセクター2《!!》



インセクター3 《!!》

新ゲッター1を包围しつつあるインセクターの軍勢が、一斉に頭頂部からビームを放ち、新ゲッター1に直撃させる。

リン「ああ…っ！」

ウヅキ「う…：…ぐう…！こんなもの…！」

トマホークを新ゲッター1の正面に翳し、放たれ続けるビームを、防ぐための盾とする。

ウヅキ「こんな…：…もので!!」

トマホークの刃に、受け止めたビームが集束していく。

ウヅキ「負けてたまるかア!!」

ビームを帯びたトマホークを一振る。新ゲッター1に放たれたビームを、まとめて元のインセクターへと返し、次々に破壊した。

ウヅキ「はあ…：…はあ…：…はあ…：…！」

リン「ウヅキ、まだ敵が来る！」

ウヅキ「っ!？」

インセクターが爆発した爆煙の少し下方向から、槍や差す叉を構えたインセクターが突撃してきている。

溪 「ブレストボンバー!!」

ウヅキ 「……」

弁慶 「號達か！」

新ゲッター1に迫っていたインセクターを、ゲッター2号のミサイルが制する。

剽 「よし、敵が動きを止めた！」

號 「一気にやっちゃまえ、溪ッ!!」

溪 「うん……ゲッタードリル、フルスロットル!!」

臨界まで回転したドリルを突き立て、捕捉したインセクターへ迫る。

溪 「トルネエード・アターック!!」

高速回転するドリルに、加速の勢いを乗せ、インセクターを次々に貫き、粉碎した。

溪 「やった……!」

剽 「油断するな。全てが台無しだぞ」

溪 「もう、ちよつとくらい良いじゃん」

剽 「……まあ、もう油断しても問題なさそうだな」

號 「大分ゲッターに慣れてきたんじゃねえのか？」

溪 「えへへ……。訓練の成果、出せたかな？」

號 「このくれえ、まだ基礎の基礎が終わったってトコよ」

溪 「え〜?」

剽 「ふつ、誰が言っているんだか」

號 「良いじゃねえか。俺達は形になりつつある」

剽 「俺達は、な。問題は…」

ウツキ 「……」

――。

~~~~~  
??? ~~~~~

武官 「失態だな清明！威力偵察とは言え、決して少くない犠牲を払うことになったぞ?」

清明 「……」

武官 「若き勇傑達はその命を散らしたのだ。皆、使命の為なら命を捨てることすら厭わない、誇り高き戦士達であった。その代価、何として払う?!」

清明 「…若人とは、何時の世も勇み、逸るものです。使命に殉ずることを厭わぬと言うのであれば尚の事、その時期が少し早まっただけと、そうは思えませぬか?」

武官 「詭弁を……!」

清明 「それに、良いではありませんか。これで残るは、我々戦を知る者同士、慎重な軍議が執り行えると言うもの」

武官「貴様、まさか最初から……！」

孔明「もう良い。軍議が進まん」

武官「しかし……！」

孔明「確かに犠牲があつたとは言え、孔明の威力偵察のお陰で、連中が隠していた新たなゲッターロボを引き摺り出すことが出来たのだ。それも十分な収穫と言えよう」

武官「……」

孔明「孔明。此度の戦の責は、最早問うまい。しかし、状況は苦しいぞ？ 只でさえゲッターアークに苦しめられておると言うのに、更なるゲッターなど……」

仕官「やはり、ここは総攻撃あるのみでは？」

孔明「その必要はありませんまい」

仕官「何!？」

孔明「我らにとつてゲッターは倒すべき敵……。しかしそれは奴等とて同じ事。であれば、然る後に向こうから来てくれるでしょう」

孔明「……この黒平安京を、決戦の舞台とするか」

孔明「追い詰められた窮鼠は恐ろしいもの……。しかし、わざわざ飛び込んでくるのは正しく袋の鼠。その為にも、ここは新たなゲッターのデータを集めるのが肝要かと」

孔明「ふむ……。しかし、こちらとてこれ以上無用な犠牲を生むわけにも行かぬ。ある

程度、手勢は出させてもらうぞ」

孔明「……御随意に」

—— 軍議終了後。

孔明「……して、私一人を残して、何用でしょうか、孔明様？」

孔明「はぐらかすつもりか？分かっておるだろう。真ゲッターロボの事だ」

孔明「真ゲッターロボ……」

孔明「マクドナルと共に貴様に預け、調査は進んでおるのであろう？使えるようになるのか？」

孔明「孔明様は、ゲッター共の始末に真ゲッターをお使いになるつもりで？」

孔明「毒を制するには、同じ毒を以てしてだ。真ゲッターならば、異界から訪れしゲッターアークにも対抗出来よう」

孔明「確かに……。しかし、やはりゲッターとでも言うべきでしょうか。マクドナルがもたらした人造の兵も、我が術式による制御も、一切受け付けてはおりません」

孔明「……つまりは、使えぬと？」

孔明「戦力としては。しかし、利用価値はあります」

孔明「ほう……？」

孔明「人間共との決戦の折りには、成果をご覧にいたしましょう。今はまだ、ごゆるり

とお待ち下さい」

孔明「分かった、期待している。それと…」

清明「は…」

孔明「この朽ち果てた黒平安京で、半ば死を待つだけであった貴様に第2の命を授け、ゲッター打倒の機会を与えた事、ゆめゆめ忘れるでないぞ」

清明「…承知しております。清明のこの命、全ては孔明様と、孔明様が仕えるアトランティス流国の為に」

孔明「分かっておれば良い。必ずやゲッターの首級を…。ではな」

ツカツカツカ――

清明「…ふん」

くくく 早乙女研究所 食堂 くくく

莉嘉「ふいぐ…！食べた食べた！ご馳走さま☆」

美波「出撃があつたから仕方ないけど、ちよつと遅い昼食になつちやつたね」

かな子「それならいつそ、このままティータイムでもしちやいます？おやつならありますよ？」

莉嘉「わーい、やった☆」

美波「食料資源だつて貴重なんだから。新ゲッター無駄遣いしてると、また怒られちゃうよ?」

かな子「う…」

バンツ

かな子「きやつ!?!」

號「——都合の悪いところはシカトか?あ、あん!?!」

莉嘉「まゝた號が誰かに喧嘩吹っ掛けてるの?」

美波「そんな、號くんをチンピラみたいに…」

かな子「號くんが噛み付いてるの、ウツキ…:…さん?」

ウツキ「…」

溪「號、私達にも何かあったって訳じゃないんだからさ。もうその辺で…」

號「へっ、相変わらずお人好しだな、溪はよ。だが、俺は我慢出来ねえ質なんぞな。ビビリのトーシローの世話なんぞ、真つ平御免だぜ」

溪「え?ビビリのトーシローって…」

剗「流石に號も気付いていたか…」

溪「どう言うこと?」

號「へっ、何を怖がつてんだか知らねえが、腰が引くついてるのは戦い方を見りや分

かるぜ」

剽 「わざわざ敵陣に飛び込んでいったりな。そういう作戦があるのならばともかく、あれではただの投身自殺だ」

溪 「…へえ」

ウツキ 「……」

號 「おい、ちったあ何とか言ったらどうなんだ？それとも、この俺にもビビってんのか？」

ウツキ 「……」

剽 「そう絡むな、號。ブランクは本人も自覚している。今は多めに見ておこうじゃないか」

號 「だがよお……」

剽 「真ゲッターでの戦闘経験があるのも事実なんだ。司令官も、期待していることだしな」

號 「司令……姐さんが？」

剽 「ああ。でなければ、新型のゲッターロボを、10年も収監されていた人に任せないだろう」

號 「あ……そりやそうだ。なんせ、俺達がいるんだからな」

溪 「流石にそれは自惚れが過ぎるんじや…」

剏 「司令は貴女に期待しているんだ。貴女なら、第2の流竜馬になれると。だから今日のような戦い方は、俺達だけじゃない、司令だって失望させることになる。それだけは、覚えていてもらいたいですね」

ウツキ 「……」

溪 「あゝ……」

號 「くくつ……！俺なんかより、よっぽど嫌味つたらしいぜ……」

ウツキ 「……mせんから」

號 「あん？」

ウツキ 「別に協力も助けてくれとも、頼んでませんから」

號 「テメエ……!!」

弁慶 「號！テメエ、こんなところでも喧嘩かア!？」

號 「チツ……！車さんか。耳が早え……!」

弁慶 「つたく……。喧嘩なんぞしてる暇があんなら、とつとと飯喰って訓練にでも行け

！

號 「……車さんは良いのかよ？」

弁慶 「あん？」

號 「俺が言えた義理じゃねえかも知れねえけどよ。アイツは危険だぜ」

弁慶 「…確かに。だが持つてるもんは一級品だ。戻ってきた覚悟もあるしな。アイツが1号機で戦うことに、文句はねえよ」

號 「しかし!」

弁慶 「テメエも、アイツの覚悟は効いたんだろうが。だったら今さらグダグダ抜かすんじゃねえ」

號 「覚悟は認めるが、及び腰じゃ話になんねえぜ」

弁慶 「及び腰、か…」

號 「アイツは何にビビってるんだ?今更敵になんて、訳ねえよな?」

弁慶 「10年前の悲劇で心に傷を作ったのは、テメエらだけじゃねえってことだ」

號 「…どう言うことだ?」

剗 「……」

友紀 「あーっ、いたー!!」

弁慶 「友紀か。何か用か?」

友紀 「何か用、じゃないよ!また出撃したんだって?もう、無理はしないでつて言ってるのに!」

弁慶 「無理なんざーっもしてねえよ。お前さんが心配しすぎなだけだ」

バシインツ

弁慶「痛　く……っ。　テメエ……！」

友紀「こんなか弱い乙女に叩かれてそれじゃあ、無理してない何て言う方が無理だつて」

弁慶「ぐっ……。友紀でか弱いんなら、ゴリラだつて非力だろうよ」

友紀「どういう意味!？」

弁慶「言葉通りだ、怪力娘。俺の心配なんざ要らねえから、自分の貰い手の心配でもしてやがれ」

友紀「それこそ余計なお世話！親父が乗るくらいなら、アタシに乗せてよ！」

弁慶「友紀には無理だつて言つてんだろうが！」

友紀「そんなの、やってみなきゃ分かんないじゃん！」

弁慶「やつたところで、調子乗つて墜されたじゃねえか」

友紀「あれは……！ちよつと油断しちやつて……」

弁慶「実戦で油断する奴に、ゲッターは乗りこなせねえ！抜かしてる暇あつたら、テメエの持ち場に戻れ」

友紀「くく……っ」

弁慶「休憩時間もそろそろ終いだ。皆、食うもんだけはしっかり食つとけよ」　スタス

タスタ：

友紀「……」

弁慶「グツ……」

ドサツ

友紀「親父！」

剗「隊長!？」

弁慶「……」

友紀「親父、しっかりしてよ！親父い!!」

號「おいおい、ホントに友紀姉のパンチが効いたつてののか？」

溪「ど、どうしよう……。医務室……」

美波「落ちていて。兎に角、医務室から先生を連れてきて。それと、弁慶さんを運ぶなら、もつと男の人の手もいるかも……。かな子ちゃん、お願い」

溪「う、うん……!」

かな子「分かりました!」

美波「號くん、剗くん、手を貸して。先ずは仰向けに……」

號「お、おう……!」

剗「了解です」

友紀「親父……」

「……」 医務室 「……」

友紀「——先生、親父は……」

医師「鎮痛剤を投与しました。容態は安定していますし、直に目を覚ますでしょう」

友紀「良かったあ……」 ホツ

號「何他人事みてえにホツとしてんだよ。半分は義姉ちゃんのせいじゃねえか」

剗「バカ。戦隊長ともあろう弁慶さんが、友紀さんに叩かれたくらいで気絶するわけはないだろう」

號「じゃあ、何でだよ？」

剗「恐らくは、ゲッターを操縦した負担が掛かっているんだろうが……」

溪「車隊長もゲッターのパイロットだったんだよね？そりゃ、現役でパイロットやるにはちよつと歳いつてるかもしれないけど……」

友紀「ううん。號の言う通りだよ。親父がこんな体になったのは、アタシのせいなんだ。アタシが言うことを聞かなかったから……」

美波「え？」

友紀「10年前だよ、あの災害の時」

號「災害？んな昔話になるのかよ？」

友紀「10年前だよ、あの災害の時」

號「災害？んな昔話になるのかよ？」

友紀「10年前だよ、あの災害の時」

友紀「うん。あの時は、親父もゲットマシンに乗って生き残りがいないか、日本中を飛び回って。私は、生まれ育った宮崎にいて……」

——10年前。

友紀（幼）『パパ！ママ！お兄ちゃん!!』

弁慶（若）『おーい、誰かいなかったかア!!?』

友紀『!? だ、誰…?』

弁慶『!! 誰かいるのか? 返事をしてくれ!!』

友紀『ここ！ここにいますよ!!』

弁慶『子供…? 1人か!』

友紀『ううんっ！パパとママと、お兄ちゃんもいるの！助けて!!』

弁慶『何…!? つて……コイツは……』

友紀『おじちゃんなら、パパとママを助けられるよね? お願い!』

弁慶『……』 フルフル……

友紀『え…?!』

弁慶『火がそこまで迫ってる。車のガソリンに引火しちまったら大変だ。さ、早く

こっちに』

友紀『……いや!』

弁慶『何だって……?』

友紀『アタシ、みんなと一緒にいる!』

弁慶『だ、ダメだ……!お嬢ちゃんの家族は……!』

友紀『違うもん!だって約束したもん!今度のお休みに皆でドームに行こうねって。パパもお兄ちゃんも、約束破らないもん!だから、ずっと一緒にいるんだもん!』

弁慶『聞き分けのないこと言わないでくれ……!きつとお嬢ちゃんの命は、お嬢ちゃんの家族が生きてくれて守ってくれたものなんだ!だから、それを粗末にしちゃいけない!!』

友紀『パパ……!ママア……!』

少女が家族の亡骸に寄り添う向こう側で、大破した車両に火が点く。

弁慶『不味い……!おい、早く!早くこっちへ来るんだツ!!』

友紀『ヤダ!!パパもママもお兄ちゃんも、皆一緒にやなきや、絶対ここから動かない!!』

周囲に火の手が拡がり、爆発の兆候が強くなる。そして、

弁慶『ちつ……!伏せろオ!!』

友紀『え……?』

周囲を覆った炎が車両のガソリンに引火し、爆発。辺り一帯は爆煙に包まれ、衝撃波

が襲う。

友紀『きやあーっ!!』

弁慶『ぐう……!』

衝撃波が収まり、爆煙が晴れる。

友紀『あ……』

弁慶『はあ……はあ……はあ……。怪我はないかい？お嬢ちゃん』

友紀『う、うん……』

弁慶『へっ……。そいつあ良かった。お嬢ちゃんの体を傷物にしちまったら、命がけで嬢ちゃんを守った親御さんに、顔向け出来ねえからな』

友紀『おじちゃんは……っ!』

少女が目を見開いた先、弁慶の大きな背中には、爆発で飛んできたと思われるコンクリートや金属の破片が突き刺さっていた。

弁慶『へへっ……!俺ア、昔っから頑丈なだけ取り柄だな……。このくらいっ、掠り傷みてえなものだ』

ヨイシヨ、と無理矢理にでも体を起こして見せる。

友紀『だ、ダメだよ……!お医者さんに……』

弁慶『もうこんなところまで、医者は来ねえよ』

友紀『うう……』

弁慶『それじゃ、何だ。おじさんを助けると思っ、ここは一緒に来てくれねえか？』
友紀『う……うん……』

かな子「それじゃあ、弁慶さんは、10年もずっと、背中の傷を放置したままなんですか?!」

友紀「流石に、そのまま放置って訳じゃないよ？ずっと応急処置で、誤魔化してて!」
剗「そうなんですか？」

医師「…はい。私としても、一刻も早い手術を、と呼び掛けてはいるんですが…。ただ自分が前線を離れるわけにはいかないと、頑なに断られてしまいました…」

剗「それでも、首に輪を掛けてでも患者の体のことを考えてやるのが、医者つてもんなんじゃねえのか?!」

医師「それは…」

剗「やめろ、剗」

剗「けどよ…」

剗「医師の方が、俺達なんかよりもずっと事の重大さを理解している筈だ」

医師「……」

美波「10年前の責任を負って、リンさんが司令を務めるとしても、現場で指揮を執る人間も必要になる。そしてそれは、誰がやっても構わない、と言うほど、簡単な役割じゃない」

溪「確かに、戦闘経験もあって、貫禄もある。面倒見も良いし、隊長がいたからあつし達もここまで体制を整えることが出来たんだよね…」

弁慶「ま、そう言うこつた」

友紀「親父！」

弁慶「心配掛けたな。もう大丈夫だ」

かな子「…本当に、大丈夫なんですか？」

弁慶「へっ、若え奴らに心配されるほど、耄碌した覚えはねえ」

號「ロートルが気張るのは勝手だが、歳は考えなよ」

弁慶「何だと？」

剗「アトランティス流国との戦いが終わったら、手術を受けて下さい。必ず」

美波「弁慶さんが友紀さんや號くん達を大切に思つてるように、友紀さん達にとつても、弁慶さんは大切な人なんですよ」

弁慶「…考えとくよ」

溪「絶対だよ？約束だかんね？」

弁慶「おうおう。アトランティス流国との戦いを終えるために、こんなトコで油売って良い分けねえだろ。とつとつと持ち場に戻れ!!」

ウウウウウウンツ……ウウウウウウンツ……

號「!?」

友紀「敵襲!？」

美波「まさか、1日に2度も襲撃を仕掛けてくるなんて……!」

剗「アトランティス流国も、いよいよ本腰を入れてきたと言うことか!」

弁慶「詮索は後だ。テメエら、さっさと出撃、準備だ」 ヨッコイシヨ

友紀「親父!まさか出撃するつもり!？」

弁慶「つたり前えだ。ゲッターのパイロットに、休んでる暇はねえよ」

友紀「止めてよ!さっき倒れたばっかなんだよ?」

医師「友紀さんの言う通りです。今のままでは、古傷が開いてしまう可能性もあります」

友紀「ほら、お医者さんもこう言ってるし、大人しく休んでなよ」

弁慶「へつ、敵さんが来てるって時に大人しく寝てられるかよ!號、美波ちゃん行く

ぜ」

號「……」

美波「わ、分かりますけど…」

友紀「……」ズズズズズズ……

湊「え？ゆ、友紀さん？その手に持つてるのは…」

友紀「大人しく寝てろって……言ってるんだア!!」

ドゴシヤアアツ

弁慶「うゝっ……!」ドサツ

かな子「きやあつ!?友紀さん……!」

號「バットで車さんを殴り倒しやがった……!」

剗「大丈夫ですか!?!隊長!」

友紀「へんつ、親父がそう簡単にくたばるもんか!」

號「バットは人を殴るもんじゃねえんじゃないのかよ?」

友紀「それは、時と場合による」

號「何だよ、そりや?」

友紀「兎に角、出撃だ!みんな行くよ!」

かな子「え?それじゃあ、まさか」

友紀「ゲッターにはアタシが乗る!先生、親父を任せたまよ!」

医師「あ……はあ……。ええ……」

—— 格納庫。

莉嘉「美波、かな子！遅くい!!」

かな子「え、莉嘉ちゃん？何時の間に…」

美波「そう言えば、何時の間にか見えてなかったけど、今までどこに？」

莉嘉「えつへへ、ちよつとね。ウツキ、戦闘頑張ろうね☆」

かな子「え？」

ウツキ「……」

かな子「まさか、ウツキ…さんと一緒にいたんですか？」

莉嘉「まあまあ。敵はすぐそこまで来てるんだよ。早く出撃準備！」

美波「え、ええ…」

タツタツタツ——

リン「ウツキ！用意が良いね」

ウツキ「3号機のパイロットはまだですか？」

リン「そう言えば…：：：弁慶さんは…」

友紀「はいはい！おつ待たせ〜!!」

リン「ん？」

友紀「選手交代！キャッチャー車選手に代わり、4番、ピッチャー姫川〜！」

リン「交代……? どう言うこと?」

號「そのまんまだよ、姐さん。車さんは怪我で欠場だ」

リン「怪我……成る程ね。こっちは事情分かったけど、ウツキは?」

ウツキ「誰でも構いませんよ。…足を引つ張りさえしなければ」

友紀「へへっ、じゃあ決まり!」

號「調子に乗ってハジかくんじゃねえぞ!」

友紀「分かっているって! それじゃ、4番姫川、入場!」

勢い良く3号機のシートに乗り込む。

リン「いい? 非常時だから任せるけど、3号機はゲットマシンの中でも重量がある分
コントロールも難しい。この間1号機を飛ばせたからって、油断しないこと」

友紀「分かっているつもりだよ。あたしだって、遊びや冗談半分で乗るって言うてるん
じゃない」

リン「そりゃあね。ゲッターの操縦はチームプレーだ。1人だけ浮かれてもらったら
困るよ」

友紀「あのさ」

リン「何?」

友紀「今回の出撃で、ちゃんと結果を出せたら、親父じゃなくてあたしを、正規のパ

イロツトにしてもらっていい？」

リン「……考えておくよ」

友紀「…よし！」

ウヅキ「みんな出ました。私達も出撃しますよ」

リン「こっちは何時でも」

友紀「応ッ!!」

ウヅキ「新ゲットマシン、出撃!!」

――。

號「さあて、次はどんな敵さんが…」

溪「レーダーでは捕捉してるよ。数は……1？」

號「あん？んだよ、畳み掛けてきた割りにやあ大したことねえじゃねえか」

剗「油断するな。それだけ、強力な力を持った敵の可能性もある」

かな子「フォーメーションはどうしますか？」

美波「そうね…。新ゲッターチームが遅れてる？先ずは私達で様子見をした方がいいのかも」

莉嘉「なら、アタシが先行する！」

剗「では、自分達が3号機で後方から支援を。號！」

號 「あいよー！」

アークチームが1号機を、ゲッター號チームが3号機を先頭にし、それぞれフォーメーションを組む。

莉嘉 「チェンジ！ゲッターアーク！！」

剽 「チェンジゲッター、剽！！」

空中での合体後、ゲッター3号は着地。その間に、ゲッターアークは目標に肉薄する。

莉嘉 「何か地味な相手だね」

かな子 「一体どんな能力を…？」

莉嘉 「能力を見せる前に倒すよ。動きも鈍そうだ！」

??？ 《…？》

莉嘉 「バトルショットカッター！！」

敵の首筋目掛けバトルショットカッターを振り下ろす。が、

ガギインッ

莉嘉 「…?!」

バトルショットカッターは、その首を刈り取ることはなく、表装に受け止められる。

美波 「意外と堅いみたいね」

莉嘉 「この…っ」

剷 「下がってくれ、ゲッターアーク！」

莉嘉 「!!」

剷 「インパクトキャノン！」

剷の掛け声に合わせて、ゲッターアークを上空に飛翔。その空間にインパクトキャノンの弾丸が飛び、敵に直撃。

莉嘉 「ゲッタートマホークツ!!」

間髪を置かず、トマホークを引き抜いたゲッターアークが、落下しながら黒煙の中にトマホークを振り下ろす。

莉嘉 「どう？」

美波 「待って……これは……？」

莉嘉 「どうしたの？」

美波 「敵の内部から、高エネルギー反応が出てる！」

莉嘉 「だから何？爆発でもするの?!」

美波 「ううん。爆発って言うより……これは」

かな子 「見て下さい！あれは……」

黒煙が晴れ、姿を現したのは、

莉嘉 「何……コイツ……？」

溪 「光の、獣？」

莉嘉 「さっきまでの奴と違う？どう言うこと!？」

剽 「不味い……！早くそこから離れるんだ!!」

莉嘉 「え？」

??? 《——!!》

光波獣ピクドロン 《キシヤアアアアアツ!!》

バリバリバリバリバリバリイッ

莉嘉 「きやあああツ!!」

ピクドロンの咆哮と共に放たれた青いプラズマの放電攻撃に、ゲッターアークが吹き飛ぶ。

號 「おい、生きてるか?! 莉嘉!」

莉嘉 「だ、大丈夫……。だけど……」

かな子 「ゲッターアークの装甲を貫通してくる程の電力なんて……。まだピリピリする……」

美波 「……どうやらあれが、向こうの本気の姿みたいね」

ピクドロン 《……》

號 「へっ、こっから本番ってかよ? 面白え!」

剷 「しかし、何故いきなり姿形を変えた…？あれが真の姿だと言うのなら、最初からそうしていれば良かったものを…」

ピクドロン 《——！》

號 「来るぜ、剷！」

剷 「!?」

接近するピクドロンに反応するが、

剷 「っ…!?速い…！」

先程とは打って変わって俊敏な動きを見せるピクドロンに、零距离まで肉薄される。

ピクドロン 《……！》

渓 「何…？」

ピクドロンの腕が触手のようにうねり、ゲッター3号に巻き付き、そして、

バリバリバリバリバリッ

剷・號・渓 「「うわあああああゝゝッ!!」」

ゲッターアークを吹き飛ばした電流を、直に浴びせられる。

莉嘉 「くっ…!! 剷達を離せえ!!」

電流攻撃を放つピクドロンの脇腹目掛け蹴りを放つ。

莉嘉 「っ…!! 効いてない!？」

美波 「何か……バリアのようなもので弾かれてるみたい」

剏 「ぐおああああ……ッ！」

かな子 「このままじゃ、剏さん達が……！」

ピクドロン 《……？》

剏 「うあ……」

ピクドロンが、ゲッターから手を離して距離を取る。その間を、一筋のビームが薙ぎ払った。

莉嘉 「今のは……」

ウヅキ 「……」

溪 「新ゲッターロボ！」

號 「へっ……。来るのが遅えんだよ……」

リン 「大丈夫？」

剏 「こちらは、何とか……。これは……！」

溪 「剏、何か分かったの？」

剏 「あ、ああ……」

友紀 「にしても、何あの敵……。気持ち悪く！」

リン 「見たことのないタイプだ。動きも速そう。ゲッター2に変わる？」

ウツキ「……いえ、一先ずはこのまま……！」

トマホークを携え、ピクドロンに肉薄。

ウツキ「はっ！」

ピクドロン《!!》

袈裟懸けに振るったトマホークを躲し、腕を鞭のようにしならせ、反撃。

ウツキ「っ！」

ピクドロン《!?!》

ウツキ「っ……！」

ピクドロンの攻撃を上体を反らせて躲し、トマホークの柄でピクドロンの脇腹を1突き。ピクドロンを怯ませる。

ウツキ「やつ！」

脇腹を抱えて俯くピクドロンの横っ面を、トマホークで打った。

ピクドロン《……?!》

ウツキ「…頑丈な相手ですね」

美波「何だか、動きが良くなってる？」

莉嘉「へへっ。何処の世界でもウツキはウツキって事だよね」

かな子「どう言うことですか？」

莉嘉「こつちの話☆さ、眺めてないで加勢しに行くよ！」

剱「待つて下さい。奴に無計画に攻撃を加えるのは、危険かもしれません」

莉嘉「え？」

剱「奴がこの戦闘で、姿を変えた理由が分かったんです」

ピクドロン《!!》

ウヅキ「っ……この……！」

先程の一撃で激昂したらしい、ピクドロンの猛攻を躲しながら、柄の長いトマホークを器用に振るい、攻撃を捌いていく新ゲッター1。

ウヅキ「このままチマチマ攻撃していても埒が明かないですね……」

友紀「おおう、思いつきりやっちゃええ〜！」

ウヅキ「……っ！」

友紀「え……？」

リン「ウヅキ、しっかりして！」

ウヅキ「げ、ゲッター……ビーム……！」

意を決するように、至近距離でゲッタービームを放ち、ピクドロンを一度引き離す。

ウヅキ「……？」

リン「これは……」

友紀「どしたの？もしかして、ゲッタービームが効いてない？」

リン「そのまさか」

友紀「え、マジい？」

リン「それだけじゃない……！」

ゲッタービームを受けたピクドロンが、巨大化していく。

剱「やはり……！」

リン「こちらのエネルギーを吸収してる？」

剱「そうです。あのエネルギーのヴェールに見える奴の表面は、こちらの攻撃を防ぐバリアの機能を兼ねると同時、エネルギーを吸収する能力があるようです」

美波「それで、最初は鈍く動いて見せて……」

剱「我々の攻撃を誘ったんでしよう。察するに、単純なエネルギーだけでなく、ミサイルの爆発エネルギーや、トマホークを打った時の衝撃エネルギーなども吸収出来るのでは？」

莉嘉「何それ？攻撃するだけ無駄なこと？そんなのズルじゃん！」

ウツキ「……！敵が……」

ピクドロン《キシヤアアアアアッ!!》

莉嘉「!？」

剷 「くう……っ！」

ウヅキ 「っ……！」

咆哮と共に周囲一帯に高圧電流を放出し、ゲッター各機の回避行動も虚しく、電流に打ち付けられる。

ウヅキ 「ぐっ……！」

剷 「向こうの攻撃も強力になっている……！」

リン 「状況は圧倒的に不利か……！」

莉嘉 「あんなの一体どうやって倒せって言うの!？」

美波 「……それぞれがバラバラに攻撃するんじゃなくて、攻撃を一点に集中させれば、もしかしたら」

リン 「成る程ね。可能な限り出力の高い攻撃を一点に集めて、奴に吸収する間を与えなければ、倒せるかもしれない」

友紀 「けど、あの光の皮みたいなのがバリアになってるんでしょ？先ずはそれを何とかしなきゃ！」

莉嘉 「何かこう、ふうふうって強い風でもぶつけたら、引っ剥がせたりしないかな？」

かな子 「そ、そんな簡単にはいかないんじゃない？」

ウヅキ 「……でも、やってみる価値はありそうですね」

かな子「え？」

トマホークを構えた新ゲッター1がピクドロンに接近する。

ウヅキ「はっ！」

付き出した腕。手元にトマホークを、新ゲッター1に対して水平になるように構え、ウヅキ「やあああああッ!!」

トマホークを高速回転。その回転で竜巻のような旋風を生み出し、ピクドロンに浴びせた。

ピクドロン《……!?!》

豪風にたじろぐピクドロン。風に煽られる光のヴェールが、微かに揺らぎを見せた。

剷「おお……！」

號「これはホントに、引き剥がせるんじゃないか?！」

ピクドロン《……!!》

ピクドロンも黙ってはおらず、腕を鞭のようにしならせ鞭打。豪風を発生させる新ゲッター1を叩き落とす。

ウヅキ「きやあッ!!」

地面に叩き付けられた新ゲッター1に、ピクドロンが迫る。

かな子「ウヅキさん達が……！」

莉嘉「っ！」

ゲッターアークがトマホークを構える。

莉嘉「トマホーク、ブウーメランツ!!」

新ゲッター1から気を逸らすため、トマホークを投じた。

莉嘉「!?!」

かな子「ゲッタートマホークが、呑まれちゃった!?!」

美波「もしかして、トマホークそのものをエネルギーとして吸収したって言うの?!」

ピクドロン《……》

莉嘉「っ……!」

ピクドロン《——!!!》

カッ

ピクドロンの頭部、口腔と思われる位置から放たれた青白い光線。高圧を越える、超
高圧のプラズマ光線が、ゲッターアークを強かに撃ち抜いた。

莉嘉・美波・かな子「「きやあああああッ!?!」」

プラズマに包まれ、電流がパイロットを襲う。

剽「ゲッターアークッ!!」

リン「…不味いね。ウツキ、体勢を立て直すんだ」

ウヅキ「はい……！奴の化けの皮を剥がすまで、何度でも……！」

友紀「待って！」

リン「どうしたの、友紀？」

友紀「要は、アイツの光の皮を引つ剥がせばいいんでしょ？なら、あたしに任せてよ」
リン「友紀に？でもどうやって……まさか」

友紀「へへっ、トマホークの竜巻なんかより、もつと大きい、嵐を起こせるかもよ？」
リン「……出来るの？」

友紀「論より証拠！為せば成る!!」

リン「……分かった。ウヅキ」

ウヅキ「仕方ありませんね。……オープンゲット！」

新ゲッター、分離。

莉嘉「うう……何……？」

溪「新ゲッター……何をやる気なの？」

友紀「うう……！いよいよ初投番だ……。気合い入れろ、あたし！」

リン「タイミミングは任せるよ」

友紀「ば、バッチコイ……！」

友紀（緊張に負けるな、恐怖に負けるな……！頑張れ、あたし!!）

友紀「チエーンジゲッターアアー3イツ!!」

地上すれすれ、低空で合体した新ジャガー号と新イーグル号に、新ベアー号が突き立ち、まるで山のような巨体を持つ、新ゲッター3が姿を現す。

剷「ゲッター3だと!?!」

友紀「さあ、あたし達の力を見せてやろうぜ、ゲッター3ツ!!」

そう言つて、蛇腹になったアームを勢い良く伸ばし、ピクドロンに絡み付かせる。

ピクドロン《!!?!》

バリバリバリバリバリイッ

ウツキ「っ……!」

リン「ぐっ……!?!」

友紀「ぐおおおおっ!!」

ピクドロンに絡み付いたアームを伝い、高圧電流が新ゲッター3を襲う。

號「おいおい、何考えてんだ!?!死ぬぞ、離せっ!!」

友紀「へっへっへっ……!こんな、親父のしごきに比べたら……。そつちの2人も、まさか気絶してたりしないよね?」

ウツキ「ツツ……まさか……!」

リン「はっ、義手を修理してもらうことだけが気掛かりだね。アキハが直すついでに、

要らない機能を付け足さないかと。電流なんて気にならない！」

友紀「流つ石！なら後は、コイツとゲッターの、我慢比べだあ!!」

ズリリ、と抵抗するピクドロンを強引に引き摺り倒し、そのまま、引き摺り続ける。

かな子「あれは……まさか!？」

新ゲッター3のキャタピラを左右、前後逆に運動させて体を回転。その勢いは次第に増していく、最初は引き摺っていたピクドロンを、宙へ持ち上げる。

友紀（親父にしごかれる度、説教喰らう度、受けてきたんだ。要領は嫌でも、体で覚えてる……!）

友紀「うわあああああ——ッ!!」

新ゲッター3を中心に高速回転が竜巻を生み、その中に圧力を、衝撃を生み、ピクドロンのヴェールを揺らがせる。

友紀「直伝!……ではないかもしれないけど……」

やがて新ゲッター3の腕に組み敷かれたピクドロンは宙高く舞い上がる。

友紀「大雪山おろしッ!!」

凄まじい遠心力で宙へと弾き飛ばされたピクドロン。その全身を厚く包み込んでいた光のヴェールは、大川山おろしの嵐で霧散した。

ピクドロン《……!!》

ウヅキ「っ……っ……っ……！」 ガクツガクツ

リン「やっぱり、ビームは撃てない？」

ウヅキ「！」

リン「気付いてはいたよ。けど、ここは力を合わせなきや。撃つて、ウヅキ!!」

ウヅキ「……」

莉嘉「怖がつてちや、ゲッターは力を貸してくれないよ！」

美波「え……？」

莉嘉「ゲッターが力を貸すのは、未来を生きようとする人間だけ、だ!!」

ウヅキ「……っ!!」

ウヅキ「——ゲッター……！」

ウヅキ「ビームツ!!」

キュオオツ

新ゲッター1の腹部から放たれた一筋の閃光。先に放たれた2つのビームと交わり、

ピクドロンを貫いた。

剋 「これが……！」

友紀「あたし達の……！」

莉嘉「トリプルダイナミック☆スペシャルだあツ!!」

ピクドロンの体から火柱が噴き上げ、やがて轟音を伴って、爆ぜた。
友紀「やった……！」

號「へっ、俺達だけ1号機じゃねえつてのが、気に入らねえぞ」

剗「仕方あるまい。このゲッターの中で、最も威力の高い武装が、このブレストビームなんだから」

莉嘉「へへっ。アタシ達、3体のゲッターが力を合わせれば、怖いモノなんて何にもないかもね☆」

かな子「流石に大袈裟ですよ」

溪「けど、そうかも」

リン「それじゃあいよいよ、次は……」

ウツキ「黒平安京……安倍晴明……。そこに、真ゲッターも……！」

~~~~~ 早乙女研究所 談話室 ~~~~~

溪「……成る程。それで、ウツキさんは昔のこともあつて、ゲッタービームを撃つことを躊躇ってたんだ？」

ウツキ「……」 コクッ

リン「ストナーサンシャインでなくても、ゲッタービームでも、使うのは同じゲッター



線。かつてのような暴走事故が起きてしまうかと、ウツキの中で不安になって、抵抗があったんだ」

號 「んだよ、威勢良かった割りに、繊細だったんだな」

剗 「だが、今回の戦闘で、ウツキさんはそれを克服した」

ウツキ 「莉嘉ちゃんの言葉…」

莉嘉 「へ？」

ウツキ 「未来を生きる…。私が何処まで生きるのか、それは分からないですけど。でも、こんなところで終われない。そう思ったら、自然と手に、力が戻ってました」

莉嘉 「へへっ。やっぱり、ウツキは卯月だね☆」

號 「当たり前だろ。何言ってるんだ、お前」

かな子 「まあまあ。厳しい戦いだっただけですし、取り敢えずブレイクしましょう？ パンケーキを用意したんです。今日は特別だって、食堂の人がお砂糖たくさんくれたんですよ」

友紀 「わあい！食べる食べるく!!うわあ、どれも美味しそう!」

かな子 「ああ…!そんながつつかなくても、一杯用意しますから…!」

號 「パンケーキごときで目を輝かせやがって…。ホント子供なんだよな、義姉ちゃん」

剋 「まあ、初陣だったこともある。今日くらいはいいじゃないか」

溪 「ん？そう言えば何か忘れてるような…」

??? 「友と紀と…」

美波 「…あ」

友紀 「…あ〜」 タラア〜…

ガシッ

弁慶 「俺に手を上げるたあ、いい度胸してんじやねえか。あ、？」

友紀 「お、親父と…目、覚めたんだ？元気になった？」 ダラダラ…

弁慶 「おう、お陰様でな。こうしてテメエを締め上げれる程度にや、良くなったよ」

ギリギリギリギリギリ…

友紀 「ちよっ…！親父、マジ…絞まってる…！首絞まってるから…！死…ぬ…ッ」

弁慶 「ホントに無茶ばっかしかやがって…！テメエの本当の親父や家族が、今のお前を見たらなんて思う？頼むから、危ねえことだけはやめてくれと、何度も…！」

リン 「そのくらいにしといてよ、弁慶さん。大切な、私達のチームメイトなんだから」

弁慶 「義理とは言え親子の話だ。司令は下がって…っつて」

ウツキ 「…」

弁慶 「司令、今なんと…？」

友紀「（力が弱まった…？） 今だ!!」

ゴイイソソッ

と、踵で弁慶の股間を強打。

弁慶「いっ、っ……!!」

怯んだ隙に、拘束から脱する。

弁慶「っ、く……っ！一度ならず二度までも……！テメエ、俺のこと何だと……！」

友紀「親父は親父だよ。あたしの大切な、親父だ」

弁慶「……なあ？」

友紀「さつき親父は、本当の親父の話をしたけど、あたしの家族は、もういない。だから今日の前にいて生きてる親父が、世界にたった一人だけの、大切な親父なんだ」

弁慶「友紀……」

友紀「だから、あたしだって親父のこと守りたいんだ！昔の古傷を背負って、無茶してほしくないんだ！あたしだって、親父の力になることが出来るんだ！何時までも、子供扱いしないでよ!!」

弁慶「……」

リン「親代わり、はもう十分なんじゃない？」

弁慶「司令……」

リン「二十歳ともなれば、もう充分、一人立ちしたつていい歳だ。それに、今日の友紀の戦闘は、粗削りだったけど立派だったよ。弁慶さんに見せられないのが、残念なくらい」

弁慶「俺に？」

かな子「見事な大雪山おろしでしたよ」

弁慶「何？大雪山おろして、お前……」

友紀「ずっと投げられてきたんだもん。体で覚えるよ」

弁慶「……へっ、それはお前が、やんちやな悪ガキだったから、だろうがよ」

リン「司令官としての務めを放棄するんじゃないけど、私が前線に出る以上、後方で指揮を取る人間が必要だったんだ。弁慶さん、だから……」

弁慶「分かったよ……」

友紀「それじゃあ……！」

弁慶「もう好きにしろ。ここで反対して、何度もバットで打ちのめされるのは、勘弁だからな」

友紀「っく……！やったあゝ!!」

リン「ウツキも、それでいい？」

ウツキ「私は誰でも構いません。足手まといにさえならなければ。……けど」

リン「けど？」

ウヅキ「頼りに出来るメンバーは、心強いですね」

リン「ふっ……。そうだね」

友紀「よし、それじゃこれから歓迎会やろうよ歓迎会！新生新ゲッターチームの発足と門出を祝して、ペアつと派手にさ、ペアーつと！」

號「はあ？そう言うの、祝われる側から提案することかよ？」

莉嘉「いいじゃんいいじゃん！何か面白そう!!」

友紀「ね、今日は特別に、ビール開けていいよね？あたしのお陰で戦闘でも勝ったんだし、ちよつとくらいご褒美があつても、ねえ？」

リン「……程々にね」

友紀「やったー♪そうと決まれば、美世や茄子も呼んでこよつと！2人にもきちんと話さなきゃだしね。う〜〜！楽しくなるぞお〜!!」

かな子「すっかり舞い上がってますね……」アハハハ……

溪「ホント。結局酔い潰れた義姉さん達面倒見るのあたしらなんだから。ちよつとは加減してよね〜？」

弁慶「……ふっ」

—— 10年前。

友紀（幼）『……』

弁慶（若）『……』

兵士『あの子、すっかり心を閉ざしちやつてますね……。無理もないですけど』

弁慶『……』ズカズカ

兵士『あつ、弁慶さん……！』

弁慶『よお、嬢ちゃん』

友紀『……』

弁慶『あゝ……あのな、俺と、キャッチボールするか？』

友紀『……今はしたくない』

弁慶『うっ……』ガクッ

友紀『……おじさん』

弁慶『な、何だ……？』

友紀『お怪我、大丈夫なの？』

弁慶『あ？あゝ、あははっ。前にも言つたら？俺ア、頑丈なんだよ』

友紀『そう……』

弁慶『……。なあ、嬢ちゃん』

友紀『何……？』

弁慶『嬢ちゃんは、野球好きかい？』

友紀『……うん』

弁慶『俺もだ。野球は国や、人を越えて分かり合える、そう言うもんだと思ってる。ほら、言葉のキャッチボールって言葉、あるだろ？』

友紀『……』

弁慶『分かんねえか？そのーつまりだな……ボールに思いを込めて投げて、それを受け取る。思いの交換をするっつうか……うーん……。つまりだな……』

友紀『ふふっ、可笑しなおじちゃん』

弁慶『あ……。すまねえ、口下手だよ……』

友紀『ううん。……ほら』

弁慶『ん？』

友紀『キャッチボール、するんでしょ？』

弁慶『あ……お、おう……』

弁慶（励ますつもりが、気を遣われるとは……。情けない……）

シュツ パシーン シュツ パシーン シュツ パシーン シュツ パシーン……

友紀『っ……！』 シュツ

弁慶『ははっ、いい球投げるじゃねえか！』

友紀『っ……!』

弁慶『なあ嬢ちゃん。やっぱ、誰かとやる野球ってのは、楽しいよな?』

友紀『キャッチボールでしょ?』

弁慶『キャッチボールでもよ。一人で壁打ちなんてやってても、虚しいだけだろ?』

友紀『それは……』

弁慶『人が集まって、チームになって。お互いの頼りないところも補いながら、1つの目標に向かって協力する。野球ってのは、最高のスポーツだぜ』

友紀『……』

弁慶『一緒になって投げて、打って、競い合つて。同じ時間を共有したなら、それはもう、家族みてえなもんだ』

友紀『家族……?』

弁慶『そうだ!嬢ちゃんの辛いところも、痛いところも、全部カバーしてくれる。そんなチームみたいな家族が、必ずお前にも出来る!何なら、俺がその第1号になる!』

友紀『おじさんが……?』

弁慶『だから、何時までも下を向くんじゃねえ!下ばっか見てたら、舞い上がった打球を見逃しちゃうぞ?』



友紀『……』

弁慶『あー……だから、その……だな！俺は……！』

友紀『チームみたいな家族って、何か可笑しくない？』

弁慶『あ……？……そうかも知れねえな』アハハ……

ビュンツ

弁慶『うおっ!?!』

友紀『あたし、姫川友紀！』

弁慶『あ？あ、嬢ちゃん……名前……』

友紀『おじちゃんみたいに、ホントに出来るかな？』

弁慶『何が……』

友紀『チームみたいな家族！皆とキャッチボールすれば、おじちゃん以外にも出来る

かな？』

弁慶『!!……ああ絶対だ！必ずだ！約束する！何時か友紀にも、チームみたいな家族

が——』

—— 現在。

友紀「ほら〜號〜？今日のMVPだぞ〜？お酌しろ〜！」

號「ああん？いい加減に調子に乗ってんじゃねえぞ、酔っぱらい!!」



## 第21話『黒い高樓』

早朝。

チュンチュンチュンチュンチュン……

號 「……」

~~~~~ 早乙女研究所 池袋研究棟 ~~~~~

アキハ 「こんな朝早くに来客とは珍しい。尤も、ここを訪れる物好きな人間など、限られていたが……」

號 「相変わらず徹夜ですかい？池袋博士」

アキハ 「ははは……っ。1つの命の内に究められる事など、たかが知れているからな。寝ている余裕があるんだったら、1つでも思い付いた事を試してみたい。好奇心とはそういうものだろう？」

號 「そう言うもんかね」

アキハ 「そう言うお前こそなんのようだ？確か今日は、アトランティス流国の居城、黒平安京に乗り込むんだったらう？いいのか、作戦開始前に、こんな所で油を売っていて」

號 「まあな。自慢の博士の好奇心を、ちよつと拝借したくつてね」

アキハ 「ほう？ 私の研究成果をか？」

號 「博士は研究所きつてのマッドサイエンティスト。常に人を殺す方法を考えていることで有名さ。だから日夜、人を殺す兵器の研究をしているんでしよう？」

アキハ 「少々語弊はあるが、な。しかし、戦闘はゲッターでやるんだろう？ ゲッター用の装備は、格納庫に上げているものだけで、ここに秘蔵しているものなどないぞ」

號 「そうじゃねえよ。俺はこの手で、清明の野郎に引導を渡してやりてえのさ」

アキハ 「ふむ。稀代の陰陽師と謳われた、安倍清明を？」

號 「ああ。あの野郎のにやけ面、今思い出しただけでも腸が煮えくり返る……！ あの人を小馬鹿にして見下した面に、どかんと風穴空けてやるのさ！」

アキハ 「それで、私の研究物に目を付けたと言うわけか。良いだろう」

號 「……！」

アキハ 「こつちだ。私のアトリエはな……」

號 「……アトリエだあ？」

アキハ に促され、地下室の奥へ。

號 「……は……！」

—— 地下武器庫。

アキハ「ここにあるのが、取り敢えずの10年間、私が究め生み出した芸術品の数々だ。好きに見ていつてくれ」

號「殺人兵器が芸術作品ね…」

アキハ「当然だ。君は、死をどう考える？」

號「死？」

アキハ「そうだ死だ。全ての生命が須くして背負っている宿命。あらゆるモノの終点、それが死だ」

號「はあ…」

アキハ「私はこの10年間、その死について研究していた。死とは逃れられるもの。必ず向かえなければならぬものだからこそ！その姿は美しく、鮮烈に彩られなければならないイッ!!」

號「ご高説どーも。しっかし色々あんなア…」

アキハ「ただ効率だけを追求しても面白くないからな。これなんか自信作だ、80ミリの劣化ウラン弾。どんな分厚い隔壁も貫通出来る」

號「ほう…」

アキハ「これなどはどうだ？火炎と強酸、2種類の方法であらゆる敵を殲滅するガス式放射器だ。……極めつけは」

號 「!!」

アキハ 「どうだ！義手型グレネードランチャーだ。自分の手と握手しながら相手を倒す。実に味わい深い武器だと思わんかね?!」

號 「あく……俺は、まだ五体満足でいたいんで……」

アキハ 「そうか。残念だな……」

號 「もつとこう、小さくて、取り回しやすいものはねえのか?……ん?」

氣になって手に取ったのは、1丁のマグナムリボルバー。

號 「これなんて丁度良いぜ。案外普通のも作ってんだな」

アキハ 「ああ、それは比較的初期段階の試作品だ。私にとっては失敗作なんだが……」

號 「失敗作?」

アキハ 「うむ。見た目の面白くないだろうか?」

號 「兵器としちやマトモなんじゃねえかな」

アキハ 「本当に、面白味のないモノだ。ただのマイクロニトログレネードを100分の倍数で濃縮しただけの、小型爆縮弾を撃ち出すための道具だよ」

號 「小型爆縮弾、だあ?」

アキハ 「これだ」

號 「……ふうん?変わった形してんだな」

アキハ「弾頭の先端末広がり螺旋状の溝が掘られているのは、貫通力を上げるためにドリルを参考にした構造だ。弾頭そのものを回転させて撃ち出すことで、どんな強固な表皮をも確実に貫き、その内部で火薬を炸裂させ、対象を内側から破壊する。そういった弾だ」

號「そいつをこいつはア……6発も込めれんのかよ。まるで拳銃サイズのグレネードランチャーだ」

アキハ「だがその分、反動は元々のマグナムの比ではない。まともな人間には、先ず使いこなせん」

號「ハッ！俺を並みの人間扱いする気かよ」

アキハ「…確かに、貴様の腕っぷしなら、或いは使いこなせるかもしれないな」

號「決めたぜ。こいつにする」

アキハ「そうか。しかし、陰陽術にのみならず、仙術や妖術にも精通していたと言われる相手だ。そう簡単に撃ち抜けるとは思えんがな」

號「昔の人から見れば、現代の発達した科学も魔法だと言うぜ。大丈夫、自分の作品を信じな」

アキハ「勿論、科学が古臭い術式に負けるとは思っていないさ。戻ったら是非、使用心地の感想と、清明がどう芸術的に吹き飛んだかの、レポートを頼む」

號 「へつ。科学が魔法なら、アンタは立派な悪魔だぜ。池袋博士」

—— 研究所内、通路。

號 「……」 スタスタスタ……

おもむろに腰のホルスターに納めた拳銃を取り出し、握り込み、正眼に構える。

號 「……」。へつ、俺の手にもピツタリ収まって……思ったよりしつくり来やがる……

気に入ったぜ。へへつ」

「……nがいます。もう一回」

號 「あん？ここは……」

シミュレーター室。

號 「こんな早い時間に、使ってる奴がいるのか。……ん？」

莉嘉 「ねえ、もう日が昇っちゃったよ？一旦休もうよ」

ウヅキ 「ごめんなさい。けど、今の動きが出来るようになるまでは」

號 （あれはウヅキ……に、莉嘉もいんのか……）

必要性はないが、思わず壁にもたれ掛かり、身を潜める。

莉嘉 「あんまり根を詰めても仕方ないっつゝ。戦闘になればアタシ達だってフォロー

するし、號達だって……」

ウヅキ 「それじゃあ、駄目なんです」

莉嘉「でもお〜」

ウツキ「みんなにおんぶに抱っこになつてちや、ダメなんです。この手で真ゲッターを破壊する……！その目的を果たすためにも、自分の力で困難をはね除けられるようにならなきゃ、ダメなんです……！」

莉嘉「もう充分スゴいと思うけどなあ、ウツキは」

ウツキ「私が納得するまで、付き合つてくれるつて言いましたよね？」

莉嘉「うへえ……。もう迂闊なことは言わないようにする」

ウツキ「いい勉強になりましたね。それじゃあ引き続き……」

莉嘉「もうっ！せめて朝食の時間くらいは取らせてよね〜!!」

號「……」

ツカツカツカツカ——。

そして、作戦開始の刻限を向かえる。

~~~~~  
???

孔明「我が同胞達よ、時は満ちた!!」

マクドナル「……」

孔明「永きに渡り敗北と言う屈辱に耐え、嘗胆に尽くし今、ゲッターと雌雄を決する時である!!」

武官「……」

孔明「この広大な宇宙を制するのはゲッターか？否！」

仕官「……」

孔明「無味蒙昧たる地球人類を庇護するゲッターに、その資格やなし！崇高な目的、意志を持つ我々こそが宇宙を統べるに相応しい存在なのである!!」

晴明「……ふっ」

孔明「今日ここで、この黒平安京をゲッターの墓地とし、我々の新たな門出とするために！奮起せよ諸君、今宵が、雪辱を果たす時であるツ!!」

ワアアアアアアア——

孔明「晴明！」

晴明「……はっ」

孔明「首尾はどうなっておる？」

晴明「全て良好。あと半日も待たぬ内、この大鬼門は開き、隔絶されていた世界と世界の隔たりはなくなるでしょう。そして、何万何億と言う遙か時を超えた軍勢が地球に流れ出し、僅かばかりのゲッターなど正しく蟻の子を蹴散らす如く。立ち処に決着は着くでしょう」

孔明「うむ。その後は一気呵成に地球を制圧。人類を駆逐するだけか。…容易い。勝

てるな？この戦」

清明「然り。ですが、既にゲッターはこちらに向かつております。このままでは大鬼門が開ききる前に、奴等が黒平安京に辿り着くのは必至」

孔明「ふむ。ならば歓迎してやるとするか。マクドナル！」

マクドナル「ここに」

孔明「兵を率いてゲッターを迎い撃て。最悪黒平安京に辿り着こうとも、大鬼門さえ破壊されなければよい」

マクドナル「御意に…。では清明様も、私はここで」

清明「…健闘を」

マクドナル「はっ…」

孔明「さあ、何時でも良い。何処からでも良い。来るがいい、ゲッターロボ——！」

莉嘉「トマホオオーク、ハリケエエーンツ!!」

トマホークに蓄えたエネルギーを一直線に放ち、前方に布陣した鬼獣の群れを吹き飛ばす。

かな子「少しずつですけど、敵の攻撃が強くなって来ますね」

美波「それだけ本拠地に近付きつつあるってことだと思う。だから莉嘉ちゃん、あん

まり飛ばしすぎないで。まだリハーサルみたいなものだから、本番までの体力がなくなっちゃうよ」

莉嘉「了解☆じゃ、美波代わって？」

美波「そうね……分かった」

莉嘉「よし、オープンゲット！」

美波「チエンジゲッター、キリク！」

ゲッターアークから、キリクに変わる。

リン「…ウツキ、こっちもスタミナの配分には気を遣おう。何時でも代わって」

ウツキ「はい。今のところ、その必要は感じませんけど」

友紀「流っ石く！けど、痩せ我慢は禁止だからね？こっちも、ベンチ温めるためにい

るんじゃないんだからさ！」

リン「まともな訓練期間を用意出来なかったから、友紀は友紀で心配なんだよ？」

友紀「ははっ！口より行動で示して見せますっ！いざとなったら、頼りにしてよ

！」

リン「…言われなくても、必要なら手段を選ぶ気もないけど」

ウツキ「フツ!!」

空中に布陣するインセクターに、新ゲッターがトマホークを振り下ろす。

號 「……っ」

溪 「まったくもう、ウヅキさん達は心強くなって、頼りになるねえ」

號 「くっそ〜……！俺にもやらせろ!!」

剽 「駄目だ。黒平安京がある琵琶湖までは、まだ距離がある。エネルギーを温存するために、俺達はゲットマシンで航行した方がいい」

號 「けどよ……!」

剽 「いくらレディコマンドが同行してるとは言っても、プラズマには限りがあるんだ。黒平安京に着いたら思いっきり暴れさせてやる。今は堪えろ」

號 「頼むぜ。まったくよお……」

溪 「でさ、そのレディコマンドのパイロットなんだけど……」

茄子 「何ですか〜?」

溪 「……本当に大丈夫なの?」

茄子 「訓練はしました!ゲットマシンのように合体する訳じゃないですし、何とかなるんじゃないですか?」

溪 「何とかって……相変わらず気楽な……」

剽 「車隊長が後方に控えたとは言っても、戦力を温存しておくような余裕はないんだ。義姉さんには頑張ってもらいましょう」

號 「しかし、さつきから不思議と、茄子義姉ちゃんの方には攻撃がいかねえんだよな……」

溪 「そうね。いつても、直撃になるようなコースじゃないし……。偶然にしては出来すぎてるよね……」

茄子 「ふふつ。10年前から大怪我と大病だけはしたことがなくて」

友紀 「運がいいんだよね、茄子は。ある意味、パイロットとして適任だよ」

茄子 「邪魔にならない程度には頑張りますからね」

號 「へっ、暴れられねえ鬱憤だ。ありったけのミサイルをぶちこんでやるッ!!」

剗 「義姉さんの奥ゆかしさの万分の一でも、見習ってみろ……」

こちらを黒平安京へ進まさんと、迎撃に現れる鬼獣やインセクターを返り討ちにしなから進んでいき、滋賀県へと入る。

美波 「そろそろ、琵琶湖が見えてくる筈だけど……」

友紀 「見えた!あれが……」

ウツキ 「黒平安京……!」

黒の楼閣がそびえ立つ、禍々しい都がゲッターを迎える。

號 「遂に……ここまで来たぜ……!」

『ようこそ。ゲッターの御子達よ』

莉嘉「その声は晴明！」

晴明『私もこの時を、待ち侘びておりましたよ…』

號「首を洗って待つてたつてか！今日こそ始末着けてやる、覚悟しやがれツ!!」

凱「…妙ですね。ここに来て、敵の攻撃が止んだ」

かな子「ここが本拠地なら、もっと厚い防衛網を敷いていても可笑しくない筈ですけど…」

晴明『その必要がないのですよ』

美波「必要がない…!?!」

晴明『こちらをご覧下さい』

晴明の背後に現れたものは、

號「何だ…:…:ありやあ…:…」

美波「あれって、これまでとは比べ物にならないくらい大きな、ワームホール！」

莉嘉「ワームホール…!?!ってことは、何処かの空間と繋がってるの…?」

かな子「向こう側の空間が見えてる…。あれは、全部アトランティス流国の戦力、ですか?」

晴明『ご明察。この大鬼門は、直に繋がり、我らがアトランティス流国の本隊をこの地球に召喚する』

友紀「アトランティス流国の本隊…!？」

茄子「い、一体どれだけの戦力が…」

リン「鬼門の表面に見えてるのだけでも1000や10000じゃない…。規模は想像も出来ないね…!？」

ウツキ「……」

號「脅しやがつて!直に<sup>つて</sup>ことはまだ繋が<sup>つて</sup>ねえ<sup>つて</sup>ことだろうが。なら、テ  
メエをぶちのめしやあ門は閉じる。そういう仕組みなんだろう?」

晴明『またまたご明察。この大鬼門、維持するのにも相応の力量が必要でね。私を欠いては、アトランティス流国で再び結ぶことは不可能』

號「だったら話は早え。いくぜ、溪、剋!!」

溪「あ、號!」

剋「待て!」

號「フルパワーチャージ、セットアップ!チェンジゲッターアア、號ツ!!」  
ゲッター1号に合体し、荒廃したようにも見える、黒平安京の町へ舞い降りる。

晴明『その意気や見事。この晴明の首級を獲り、高々と掲げて見せなさい——』

號「うおおおおツ!!ナツクルボンバー!!」

晴明『——出来るものならね』





剷 「あ、待て！號……！」

勢いに任せ、ゲッター1号がウザーラに飛び込んでいく。

號 「うおらアツ!!」

マクドナル 「ふん……雑魚が!!」

號 「ゴツ……！」

飛び掛かったゲッター1号に、ウザーラは巨大な尻尾を強かに打ち、地面に叩き付ける。

號 「痛ててて……」

剷 「迂闊だぞ！あれだけの大きさの敵に、考えなしに飛び込むなど……」

溪 「説教は後！次の攻撃が来るよツ!!」

マクドナル 「先ずは1つ!!」

號 「っ!!」

ウザーラの竜の頭部から、雷撃のような攻撃が放たれる。

剷 「っ…………！」

溪 「…………！」

號 「……っ！……んあ」

マクドナル 「……仕留め損なったか」

尻餅を着いたゲッター1号。その前にゲッターキリクが立ち、右腕のドリルアームが煙上げている。

剷 「ゲッターキリク……！」

號 「助かったぜえ……」

かな子 「お礼は良いですから、早く体勢を整えて下さい！」

號 「!?」

かな子 「ウザーラが吐き出すのは引力光線です。喰らえば、どんなゲッターだってバラバラです！」

溪 「ほ、ホントに!?」

剷 「何時までも倒れているわけにはいかない。號、一度退くんのだ」

號 「ちつ、しゃあねえ……！」

ゲッターを立ち上げ、一度後方に退く。

美波 「な、何とか間に合った……！」 ハアハア……

かな子 「美波さん、後退を……」

マクドナル 「ただではおかんぞ！」

美波 「くっ……！」

ゲッターキリク目掛け放たれた、ウザーラの引力光線に再びドリルをぶつけ、その旋

風で弾き飛ばす。

美波「っ……！」

マクドナル「ほう……流石に一筋縄ではいかんか」

美波「一度下がるよ」

莉嘉「えっ、何で……！」

かな子「体勢を立て直さなくちゃ、ウザーラ相手は無理ですよ！」

莉嘉「う……」

晴明『そうはさせぬ！』

リン「何……？」

晴明『これを見るがいい！』

黒平安京のほぼ中心部に当たる塔を中心に、黒平安京全体を覆うようにエネルギー状の結界が展開される。

溪「これって……！」

剽「結界……俺達を閉じ込めたつもりか！」

晴明『これでまさしく袋のネズミ。大人しくウザーラの餌食になるがよい』

號「こんなこけおどし、内から破壊すりゃあそれで終いだろが」

リン「そんな一筋縄にもいかないみたい」

號「あん？どう言うことだ」

リン「今展開されてる結界のエネルギー源を調べてみたんだ。あれは晴明の術による単純な結界じゃない。あれは、ゲッターエネルギーのバリアだ」

莉嘉「ゲッター線……？ってことは……」

リン「エネルギーの源はあの塔の地下深く、そして、この炉心の反応は間違いない……真ゲッターロボだ」

ウヅキ「つ……！真ゲッターロボ……！」

美波「それじゃあ、こつちから脱出するために破壊するのは……」

リン「エネルギーの消費を考えても、現実的じゃないね」

マクドナル「フンッ!!」

ウヅキ「!!」

ゲッターの一团に向け振り下ろされたウザーラの尾を、散開して回避。

號「ウダウダ話し合っても仕方ねえ！ここを突破するにやあ、コイツを倒すしかねえんだろうが!!」

美波「この戦力だけで、ウザーラを……?!」

リン「その口振り、さつきも気になってたけど、前にもウザーラと戦ったことが……？」  
かな子「はい、2回くらい……どつちもギリギリでしたけど」

號 「そつちの世界でも大物つてことか」

莉嘉 「前に戦った時は、これ以上の戦力に、真ゲッターもいた！だけど!!」

友紀 「こつちだつてアウエーゲームは覚悟の上で来たんだ！バツターボックスにも立たないで下がったんじや、ここまで来た意味がない！」

ウツキ 「真ゲッターロボを捉えるところまで来たんです。誰が相手だつて、私は、やります！」

新ゲッターがウザーラの頭部を蹴飛ばす。

マクドナル 「ほほう……」

かな子 「やるしか、ないみたいですね……！」 グツ

マクドナル 「侮るなよ。このウザーラは、我ら百鬼帝国の技術で手を加えたもの。ランドウ如きの俄仕込みと一緒にされては困る」

友紀 「百鬼帝国……!? 大昔に親父が倒したつて言う……?」

溪 「大昔つて言うつと、隊長悲しむよ……?」

かな子 「まさか貴方は、百鬼帝国の生き残りなんですか?」

號 「ンな奴が何の用だ!? 大将の仇討ちか!」

マクドナル 「ふっ……そんなもの、最早些細な事に過ぎん」

美波 「……私達が、ランドウの手に落ちたウザーラと戦っていることを知っていた。

貴方は一体……」

マクドナル「我は、真実を知る者」

ウヅキ「真実……？」

マクドナル「そう。全ては宇宙を守るため。我々の未来のために、ゲッターを消し去る！」

號「またかよ。未来だ宇宙だと……そんな大それた言葉で、俺達がビビるとでも思つてンのかよ？」

莉嘉「そうだ！アタシ達は今を生きてるんだ！アンタを倒して、アタシは前に進む!!」  
ウヅキ「邪魔立てするなら、返り討ちにするだけです」

晴明『そう焦るでない。宴はこれからよ——』 スッ  
指をピンと二本立て、口元に寄せる。

晴明『全ての時空に蠢く鬼どもよ、我が声に応えよ。……この京へ集うがいい！ 我と共にこの地、この時にて討ち果たすべし！ 全ての災いの源……ゲッターロボを!!』  
叫び、口元に寄せていた手を高々と天に掲げる。すると、晴明の声に、実際に応えるように黒平安京の四方に濃い紫色の五芒の陣が現れ、中心部より現れるのは、

剋「何だ……コイツら……鬼獣、なのか？」

美波「けど、こんなタイプは見たことない……」

友紀「何て言うか……気持ち悪い」

晴明『窮奇、樛杻、饕餮、渾沌……天下に仇なす四凶の鬼獣。禍いの源、ゲッターを討つために集いし、究極の鬼獣よ!』

號「はっ!その面じゃ、どっちが敵か分かんねえな」

窮鬼獣《——!!》

溪「は、速いつ!？」

剗「號、後ろだ!!」

號「ぐう~~~~つ!？」

翼の生えた虎を模した、窮奇の鬼獣、窮鬼獣が素早い動きでゲッター1号に組み付く。

窮鬼獣《ガアツ!!》

窮鬼獣の牙がゲッター1号の首筋に噛み付き、表装を貫く。

美波「號くん……!」

かな子「美波さん!」

美波「!？」

渾沌鬼獣《グアア!!》

ゲッター1号の動静に気を取られたゲッターキリクの真上から、大きな犬の様相をした渾沌鬼獣が襲い掛かる。



美波「くっ……!!」

咄嗟のレバー操作で機体を後ろに引かせ、辛うじて渾沌鬼獣の攻撃を躲す。野太い3つの爪がゲッターキリク表面を撫でた。

莉嘉「向こうの方が数が多いよ。他を気にしてる暇はなさそうだよ!」

美波「先ずはあの鬼獣を何とかしなきゃ……っ!?」

体勢を立て直そうとしたゲッターキリクの側面から、羊のような、悪魔のような醜悪な姿をした饕餮鬼獣が迫り殴り掛かる。

美波「きゃ……っ!」

莉嘉「痛いっ!!何でこっちは2体がかりなの!?!」

マクドナル「貴様だけは生かしておかん。必ずや、ここで雌雄を決する!」

かな子「向こうも私達を狙ってきてくれるみたいですね……!」

莉嘉「なら正々堂々と、1対1で勝負してほしいよ……」

友紀「ごめん……!こっちも手一杯で、そっちには手を貸せそうにもない!頑張つて!!」  
ウヅキ「はあッ!!」

猪のような牙を持ち、荒々しく立ち回る構机鬼獣に、新ゲッター1はトマホークで応じている。

かな子「…一度に複数を相手するには、キリクじゃ不利です。ここはアークにチェン

ジを！」

美波「その隙があれば……はっ！」

ゲッターキリクを跳躍させ、ウザーラの光線や饕餮・渾沌鬼獣の猛攻を退ける。

莉嘉「隙がないなら、作るしかないよ！」

美波「ええ……！ドリルタイフーンツ!!」

ドリルの旋風で黒平安京の廃屋を巻き上げて、襲い来る鬼獣達の攻勢を削ぐ。

マクドナル「この程度……！」

美波「ゲッターイリユージョン！」

マクドナル「むう！」

ゲッターキリクの高速機動で、ウザーラの視界から逃れる。

マクドナル「後ろか!?!」

背後に振り替えるも、そこに姿はなく。

美波「オープンゲット!!」

声が響いたのは、上。

莉嘉「チエーンジゲッター！アーーーック!!」

マクドナル「ぬう……っ！」

莉嘉「ゲッタートマホオ……ク!!」

上空でトマホークを抜き打ちながら、急降下と共に振り下ろし、ウザーラを打つ。

マクドナル「ぐおお……！」

莉嘉「!!」

ガギンツ

饕餮鬼獣《——!!》

渾沌鬼獣《!!》

トマホークを構えた両腕をそれぞれ左右に開き、側面から強襲してきた鬼獣を受け止める。

マクドナル《むんっ!》

莉嘉「ゲッタービーム!!」

正面からのウザーラの引力光線をゲッタービームで打ち消す。

莉嘉「やああああああくくくッ!!」

全身を捻って、トマホークを振るう動きで、ゲッターアークを中心に巨大な竜巻を生み、肉薄した鬼獣も吹き飛ばす。

莉嘉「……ふっ」 チャキッ

マクドナル「…合体を許してしまうとは」

莉嘉「キリクなら勝てると思った? キリクでも、美波は負けないよ?」

美波「莉嘉ちゃん、流石にそれは…」

莉嘉「アタシが相手をするのは、アンタが1人じゃアタシにも勝てない、ヒキョー者だからってだけ。覚悟してよね…!」

マクドナル「その大口を、地獄で後悔するがいい…!」

饕餮鬼獣《ぐうう…!》

渾沌鬼獣《うううう…!》

莉嘉「つ…:…:…:来い…!!」

2体の鬼獣と1体の巨竜に、ゲッターアークが対峙する。

ウヅキ「トマホーク、ブーメランツ!!」

檣杵鬼獣《!!?》

新ゲッター1が投じたトマホークが檣杵鬼獣を打ち、廃屋の中へと叩き落とす。

檣杵鬼獣《—!!》

ウヅキ「チツ…!」

黒煙の中から立ち上がった檣杵鬼獣が、口から吐き出した濃い紫色の溶解液を、ゲッターウイングを翻して躲し、

ウヅキ「やあああああッ!!」

トマホークを振り上げ、突貫。

ガギインツ

ウツキ「ぐっ……!!」

構杵鬼獣《……!!》

加速と共に振り下ろされたトマホーク。しかし、構杵鬼獣はその腕で受け止める。

友紀「鎧も鱗もないのに、どうなってるの!?!」

リン「今更奴等の体組織に興味なんてないよ。ただ、あの腕がゲッターのパワーを受け止めるくらい、強靱なだけだ」

構杵鬼獣《!!》

ブオンツ

ウツキ「っ……!!」

トマホークの刃を受け止めた腕を振り回し、そのまま力任せに新ゲッター1を投げ飛ばす。

友紀「きやあああッ!!」

投げ飛ばされ、廃屋を薙ぎ倒しながら地を滑る。

リン「大丈夫? こっちは何時でも代われるよ」

ウツキ「…大丈夫です。まだ」

友紀「来るよ!!」

橈杙鬼獸《ゴアアアアアアツ!!》

雄叫びを上げながら、橈杙鬼獸が迫る。

ウヅキ「っ…!!」

ズガン、と新ゲッター1の全身、コックピットに衝撃が伝いながらも、新ゲッター1の両腕は、しっかりと橈杙鬼獸の牙を受け止めている。

ウヅキ「くくく…っ」

友紀「押し負けてるよ！力比べじゃ不利だ!!」

ウヅキ「力比べじゃなきや…!」

腕に込める力を一瞬弛め、跳躍。

ウヅキ「ふっ…!」

橈杙鬼獸の鳩尾に目掛け、蹴りを放つ。

橈杙鬼獸《…!?!》

橈杙鬼獸を蹴り飛ばし、距離を取る。

リン「…パワーと、直線的なスピードは向こうが上。ゲッター2なら、ある程度攪乱出来るけど…」

友紀「もう、こんな時に茄子は何やってるの?」

茄子「ここでくす」

友紀「ここって、結界の外!？」

茄子「はい。私だけ突入する前に結界が張っちゃって…」

友紀「もう、ラッキーなのかどうなのか…」

リン「ある意味、ラッキーだよ。茄子、茄子は一旦研究所に帰還して、状況を報告してきて」

茄子「了解です」

リン（もしかしたら、弁慶さんに任せた“アレ”の調整も、終わってるかもしれないね…）

ウツキ「結界…」

リン「あれは厄介だね。結界のお陰で、空中戦がメインの1号機も十分に戦えないウツキ……。さっきの話に乗りましょう」

リン「さっきの?」

ウツキ「ゲッター2なら、あいつとの相性が良いって話です」

友紀「え?でも、合体する隙がないんじゃない?」

ウツキ「隙がないなら作るだけです。直線的な加速に優れているだけなら…!」

檣杵鬼獣《!!》

檣杵鬼獣の大きな腕の振り下ろしを、檣杵鬼獣の側を飛び退くようにして避ける。

ウヅキ（この攻撃じゃない…）

友紀「直線的な加速…？」

リン「成る程ね」

ウヅキ（一度大きく距離を取る。あの鬼獣には遠距離攻撃の方法がないみたいだから、そうすれば…）

檣杵鬼獣《ウガアアアアアアツ!!》

ウヅキ「勢いに任せて、こっちに突っ込んでくる！」

友紀「まさか…！」

檣杵鬼獣がまっすぐに突っ込んでくる。その巨体が徐々に近付き、やがてぶつかるか否かと言った、刹那のタイミングで、

ウヅキ「オーブンゲツト!!」

ゲッターを分離。檣杵鬼獣をやり過ごす。

友紀「くあく…無茶するんだあ〜」

リン「けど、あいつはこっちに対応出来ないみたいだよ」

友紀「ホント。本物の猪みたたく、突っ込んだら簡単には止まれないんだ！」

リン「今の内に合体だ」

ウヅキ「後は任せます。リンちゃん」





號 「あんにやろ……！ 抜け駆けかよ！ ぐっ……!!」

ゲッター1号のガードが崩され、横転。

號 「チツクシヨ……！」

剗 「余所見している暇はないぞ。少なくとも、コイツは俺達が1人欠けては倒せる相手じゃない！」

號 「仕方ねえ……！」

窮鬼獣の飛び掛かりに対応してゲッター1号を跳躍させ、攻撃を躲し、意図して黒平安京内を駆けるウツキの近くに着地。

號 「ウツキィ〜!!」

ウツキ 「……!?!」

號 「受け取れ！」 ビュッ

ウツキ 「ー」 パシッ

號 「池袋博士の秘密兵器だ！ 丸腰でカチコミもねえだろ？」  
ウツキ 「……ありがとうございます！」

號 「へっ……！ おっと！」

背後から飛び掛かってきた窮鬼獣を軽く往なす。

號 「テメエを忘れた訳じゃねえぜ？ 掛かってきな!!」

窮鬼獣《グルウウウ…!》

號 「うおらア!!」

孔明 「……」

孔明（2、3 誤算はあったが、計画は順調…。ウザーラ達が敗北を喫することになるうとも、半刻も経たぬ内に大鬼門は開かれ、遙か未来の大宇宙から呼び寄せたアトランティスの軍勢によって、ゲッターを殲滅させることが出来るであろう…）

孔明 「問題は晴明よ…。抜かるでないぞ……」  
つづく

## 第22話 『明の星々』

ウヅキ「……ここが」

~~~~~ 黒平安京・本丸内部 ~~~~~

ウヅキ「侵入自体は簡単でしたね。後は……」

外の方からは、断続的に衝撃が続いている。

ウヅキ（戦闘は……リンちゃん達に任せます。私は、真ゲッターを……！）

ウヅキ「!?」

鬼兵「グウ……」

鬼兵2「グルル……」

ウヅキ（警備の兵士……。……） チャキツ……

號から託されたマグナムを握り締める。

ウヅキ「!!」 バッ

鬼兵「!?」

ウヅキ「ッ!!」 ドッ

突き出したマグナムの銃口から火が噴き上がる。

鬼兵「?!?!」

マグナムから放たれた小型グレネード弾が弾け、爆ぜる。通路の四方に爆風が拡がっていく。

ウツキ「うう……！」

鬼兵2「っ！」

ウツキ「くっ……！」 ドオツ

2発目のマグナムを叩き込み、続く鬼兵も破碎。

ウツキ「ふう……」

銃口を下ろし、一息。

ウツキ「……これ、人の使うものじゃありません」 ヒリヒリ……

反動で痺れる腕を軽く振る。

ウツキ（……残弾は6発）

ウツキ「節約しないと、いけませんね……！」

タツタツタツ——。

ウツキ「！」

鬼兵「……」

ウヅキ「つ……」 サツ

本丸内部を巡回している兵士を認める度に物陰に身を潜め、慎重に内部を巡って行く。

タツタツタツ——。

ウヅキ（かなり入り組んで……まるで迷路みたい……）

鬼兵「……！」 ウロウロ……

ウヅキ「つ……！」 サツ

鬼兵「……？」

ウヅキ「……」 ホッ

ウヅキ（この調子じゃ、中をいくら調べても埒が明かない……。真ゲッターは大きな口ポット……置いておくなら、もつと広い空間がある筈……。この辺りにそんな空間があるとなれば……）

ウヅキ「……地下」

???「こんなところで何をしているのだ？」

ウヅキ「……重要な作戦の最中でも、ずいぶんフットワークが軽いんですね」

晴明「……」

ウヅキ「退いてください。號や莉嘉はともかく、私は貴方に用はないんです」

晴明「凶に乗るなよ。小娘風情が、ゲッターから降りて何が出来る?!」

ウヅキ「退いてと、言っているんです!」 ドウツ

後方に下がるバックステップを入れながら、今度は両手で構えたマグナム・グレネードを放つ。

晴明「そのような玩具で……!」

晴明の眉間目掛けて真っ直ぐに飛翔した弾丸はしかし、瞬時に展開した結界によつて弾かれる。

ウヅキ「っ……!」

晴明「縛!」

ウヅキ「!?」

印を結び、宙に浮かび上がった五芒の陣をウヅキに放つ。ウヅキを覆うように展開された陣は、その体を縛り付け、宙に捕らえる。

ウヅキ「ぐ……!」

晴明「その程度の力で、この私を倒すことが出来ると!? 自惚れるなよ、雑魚が!」

ウヅキ「っ……!」

晴明「貴様ら自身の力など、我らにも遠く及ばない。貴様らが戦えているのは、一重にゲッターの力に過ぎん。所詮貴様等などは、宇宙を汚す塵芥田に過ぎんだ!」

ウヅキ「だから、貴方と戦うつもりはないと…」

晴明「ならばどうする？このまま握りつぶしてやろうか？んんツ!?」

ウヅキ「確かに、このままやられっぱなしじゃ、いけませんよね」

晴明「捻り潰してやる。己の無力さを地獄で悔いるが良い!!」

ウヅキ「ぐっ…！う、うう…！」

ウヅキを縛り上げる力が強くなる。骨が軋みを上げ、肉が悲鳴を上げるが、手足の自由は利かず、動かせるのは辛うじて指くらいのもの。

ウヅキ（指だけでも動けば…!）

晴明「くっはははははっ!!ゲッターに乗った貴様を倒せぬのは心残りだが、これはこれで良い余興になった。貴様らの仲間も、直ぐに後を追わせてやる」

ウヅキ「勝ち誇るの、少し早いんじゃないですか？」

晴明「…:…?」

ウヅキ「!」ズドッ

拘束されても、決して手放さなかったマグナム・グレネードを撃った。

晴明「何い…!?!」

弾丸を放つ先は、真下。

ズワオッ

グレネードが炸裂し、床面がけたたましい轟音と共に爆ぜる。

晴明「くっ……!!ぬう……ッ!!」

思わぬ衝撃に怯み、晴明の術が解ける。宙へと放り出されたウツキは、そのまま破壊された床面から更に下、覗きだした奈落の闇へと消えていった。

晴明「……」

――。

~~~~ 黒平安京 ~~~~

號「レッグブレード!!おらあッ!!」

烈迫の気合いと共に放たれたレッグブレードは、しかし空を斬る。

窮鬼獣《……!!》

號「にやろお……!ちよこまかちよこまか逃げやがつてえ……!」

剱「下手に敵を追うな、號!精彩を欠いた動きは、無駄にエネルギーを消耗させるだけだ!」

號「つつてもよおく。野郎にこうも好き勝手動かれたんじや、マニユアル通りに動けつつう方が無理だぜ」

溪「確かに、アタシ達のゲッターとじや、相性悪いかも」

剱「今さら相手を変えてもらおうわけにもいかないだろう。ここは、多少リスクを負

うことにはなるが、肉を斬らせて骨を断つ、だ！」

號 「追いかける訳じゃなく、向かってきたところをぶっ飛ばしてやる訳か、面白え!!」

溪 「どのみち長期戦に持ち込まれるわけにはいかないね…」

剗 「まだまだ正念場だ。気持ちで負けるな、溪！」

溪 「うん…！」

號 「さあ、どつからでも来やが…：…れえ…!？」

溪 「きやあー！」

不意に、コックピット全体に大きな衝撃が走り、視界が左に大きく揺れる。周囲の廃墟を薙ぎ倒しながら、ゲッター1号が転倒したと理解した所で、左から飛んできた何か  
が衝突したのだと悟る。その何かとは、

號 「痛つつ…。おい莉嘉ア！ちったあ周り見て飛んできやがれ!!」

莉嘉 「無茶言わないでよ！こっちだって自由に動けない中必死に…！」

美波 「莉嘉ちゃん、前を見て！」

窮鬼獣 《!!》

饕餮鬼獣 《!!》

莉嘉・號 「!!？」

もつれて倒れ込む2機のゲッターに同時に迫った鬼獣の一撃を、咄嗟に立ち上がった  
躲す。

莉嘉「くっ……！」

號「おら、やりやあ出来んじゃねえか」

剗「……。この結界のせいで、空中戦を得意とするアークは、思うように戦えないみたいだな」

號「変形も出来ないってかよ？」

剗「出来ない訳じゃないだろうさ。しかし、この状況に、あの敵の数だ。タイミングを掴むのも、至難の技だろう」

號「けっ、清明のトコに乗り込んだウツキは何やってんだ……！」

剗「敵拠点の内部がどうなっているかは、分からないんだ。ウツキさんを信じて、今は待とう」

號「それがさっき俺に、肉を斬らせてくとか言った奴の言葉かよ」

剗「無茶は承知の上だ。今はやれることを、全力でやるぞ！」

號「あいよ。結局、目の前の奴を叩きのめさなきゃならねえんだ。最後まで足掻いてやるよッー！」

溪「……」

深（プラスマエネルギーの残量は約60%だけど……このままじゃ……!）

莉嘉「くっ……!」

マクドナル「フハハハハハツ——!」

莉嘉「!?」

稲妻が連なるように襲い掛かる重力光線を掻い潜り、ゲッターアークを上昇させ、辛うじて往なす。

美波「莉嘉ちゃん、ゲッターを上昇させ過ぎると……!」

莉嘉「!?……きゃあッ!!」

上空を天幕のように覆う結界に接触し、雷に打たれたような衝撃が奔る。

莉嘉「うう……」

かな子「高度を取る時は気を付けなきゃ……」

莉嘉「気を付けろって言われても……うう……!」

美波「とにかく低い高度で、地表を広く使って躲して!」

莉嘉「むう……!あの結界さえなかつたら自由に戦えるのに……!」

マクドナル「精々苦しむがいい!!」

莉嘉「っ!」

続けざま放たれる重力光線を往なし、時には廃墟を盾にして躲していく。が、

渾沌鬼獣《——!!》

莉嘉「!?」

眼前に現れた渾沌鬼獣が大顎を開いて覗かせた牙。ゲッターアークを急制動させることで、その口に飲み込まれずに済む。

莉嘉「うう……鼻打った〜!」

美波「あの顎に粉碎されると考えたら、軽傷だと考えなくちゃ」

莉嘉「もう……。上は雷、下は獣!これなんだ……つて」

かな子「礼さんの真似ですか?」

莉嘉「今の状況だよ!もううツ!!」

グン、とゲッターアークを急旋回。百鬼ウザーラの重力光線と、饕餮・渾沌2体の鬼獣の追撃を何とか躲す。

かな子「は、反撃する隙もありませんね……」

美波「この攻撃の中、無茶をするよりはいいよ。このまま、チャンスを見計らつて!」

マクドナル「ふふふつ、手も足も出んか、ゲッターロボ!」

莉嘉「多勢に無勢で、調子に乗ってえ……!」

美波「ちよつと、莉嘉ちゃん!」

ゲッターアークを反転。追いつがる鬼獣と、ウザーラの攻撃に向き合う。

マクドナル「覚悟を決めたか？」

莉嘉「……」

かな子「莉嘉ちゃん……？」

莉嘉「……っ！」

百鬼ウザラの重力光線が降り注ぐタイミング、後数秒で直撃する刹那のタイミングでその光線を躲し、

莉嘉「ここで……！」

ゲッターアークが躲す方向を予想していたのか、2手に分かれた鬼獣の内、渾沌鬼獣とかけ合う。

莉嘉「トマホーク……！」

意を決した眼差しで、対する渾沌鬼獣にトマホークを振り上げ、

莉嘉「トルネードツ!!」

トマホークの刃に込めたエネルギーを放ち、渾沌鬼獣を粉碎した。

莉嘉「へへっ、やっらい……☆」

マクドナル「ぬう……っ」

美波「無茶苦茶よ……」

かな子「けど、厄介な鬼獣を1体倒せました！」

莉嘉「これで形勢逆転!とはいかないけど、イーブンには持つてこれたよ!」

マクドナル「これだけの窮地に晒されながら、まだ諦めず、尚も足掻くか」

マクドナル「やはり恐ろしい…!恐ろしいものよ、ゲッターは!」

莉嘉「まくたゲッター?アンタが戦ってるのはゲッターだけじゃない。アタシもだつて忘れてるんじゃない?」

マクドナル「然り。しかし、貴様だけの力でここに立つていられたか?これまで生き残つてこられたか?今の貴様と言う存在を形作つているのは、ゲッターロボの力に於いて他にあるまい?」

莉嘉「それは…!」

マクドナル「本来ならば鬼は愚か、トカゲにも勝てぬ脆弱な存在…。それを悪魔にも抗えるほどに支えているのは、紛う事なきゲッターの力。宇宙をも蝕み喰らい尽くす進化の力よ!!」

美波「宇宙…?進化…?ゲッター…?」

美波(前に弁慶さんも言つてた…。ゲッターロボと言う一部分だけが、歪に進化していたつて。ゲッターが、戦うために進化しているんだとしたら、それは…!)

マクドナル「特に貴様達の宇宙は異質。ほんの短期間の間にあらゆる時間のゲッターが揃いすぎた。貴様らの宇宙が他の宇宙を喰い潰すのも、最早時間の問題。故に、滅ぼ

さなければならぬ！」

莉嘉「うっさい！だつたら何!?アタシ達が力を持つているから、それが気に食わないから滅ぼすつて言うの!?!」

マクドナル「否。貴様らが滅びることこそが、宇宙本来の正しき姿なのだ！」

莉嘉「はあ!?!」

マクドナル「貴様らが滅びる事で宇宙は静寂を取り戻す！他の宇宙を侵さぬ静かな宇宙に！」

莉嘉「何……勝手に他人の宇宙の形を決めちゃって！アタシ達が力を手にするのも、ゲッターに乗つて戦うのも、そうやってアンタみたいのが攻撃してくるからじゃん!!」

シユバツ

かな子「莉嘉ちゃん!?!」

高ぶる激情と共にトマホークを構えて百鬼ウザーラに突貫を図るゲッターアーク。

莉嘉「っ!!」

勢いよく振り下ろすトマホークは、しかし百鬼ウザーラの表装に弾かれる。

ウザーラ《——!!》

反撃の重力光線を躲し、再び距離を取る。

莉嘉「くっ……!」



かな子「私達が戦つてたものより、大分装甲も固くなつてます。考えなしじゃ、勝ち目ないですよ」

莉嘉「ならどうすれば…」

かな子「よく見てください。ウザーラの中心には、制御塔を兼ねる人型の本体があります。マクドナルがウザーラを操つてるとすれば、居場所は間違いなく其処です」

莉嘉「じゃあ、其処に攻撃さえ届けば…！」

かな子「そう、届きさえすれば…」

ウザーラと饕餮鬼獣の猛攻は続いている。

莉嘉「こんな状況の中で、あそこをピンポイントに攻撃しなくちゃいけないなんて…！」

かな子「それも、並大抵の攻撃じゃありません。アークの渾身の一撃を叩き込むんです！」

莉嘉「アークの、渾身の一撃…」

マクドナル「くつくつくつ…！苦しめ、精々苦しむがよい！」

饕餮鬼獣《!!》

重力光線の雨で逃げ道を塞いだところに、饕餮鬼獣が襲い掛かるのを、トマホークを盾にして何とか防ぎきる。

莉嘉「ぐううく…!!」

美波「……」

かな子「絶対に諦めちゃダメだよ、莉嘉ちゃん」

莉嘉「当たり前じゃん!こんな廃墟みたいなくたびれたトコで、やられてなんてたまるかー!」

飛び上がった饕餮鬼獣の下を潜り抜け、百鬼ウザラの重力光線を躲して、大地を強く踏みしめながら勇ましくトマホークを振り仰ぎ、百鬼ウザラに斬り掛かる。

マクドナル「…フンツ。単調な」

が、百鬼ウザラがこちらに背を向けたかと思うと、ゲッターアークに向けられたのはその尻尾。大木よりも凶太いウザラの尻尾によつてゲッターアークは弾かれ、城壁を成す黒平安京外縁の壁面に叩き付けられる。

友紀・號「莉嘉ッ!」

檣杵・窮鬼獣《!!》

號・リン「ぐつ…!」

莉嘉「ぐつ…うう…!」

かな子「大丈夫!?莉嘉ちゃん!」

莉嘉「えへへっ…!このくらいへーキへーキ!リーナだって、もっとヤバい状況を、乗

り越えてきたよ……！」

かな子「それは……」

美波「李衣菜ちゃんであって、莉嘉ちゃんじゃないよ」

莉嘉「それはそうだけ……」

美波「……やっぱり、私達は滅びるべきなのかもしれない」

かな子「!? 美波さん!?」

莉嘉「何言ってるのさ、美波!」

美波「何もかも可笑しいじゃない! 私達が今こうしている事も、鬼とかそう言う、決して抗えない筈の存在と戦えていることも!」

莉嘉「だったら何!? それじゃあ美波は何のためにここまで来たの!? そうやってリカ達が滅びるべきかどうか、見定めるためなの!」

美波「それは……」

莉嘉「忘れないでよ! アタシ達の後ろには、リカ達が帰らなきやいけない世界は! 今目の前のアイツに、滅ぼされようとしてるってことを!!」

美波「……」

莉嘉「アタシが何でゲッターに乗れてるのとか、どうして戦えるのとか、そうやって考えることはあるよ。けど、そうやって考える前に、今やらなくちゃいけないのは、マ

クドナルを倒すこと。そうしなきゃ、卯月だってリーナだってお姉ちゃんだって、美波の弟さんだって！誰一人も守れないんだ」

美波「……」

かな子「ウザーラが来ます！」

莉嘉「!?」

突っ込んできたウザーラの体当たりを、ゲッターアークを飛翔させてやり過ごす。

かな子「莉嘉ちゃん！」

莉嘉「大丈夫。高度は考えてるよ」

マクドナル「敵を前にして仲間割れか？相変わらず、人類と言うのは度し難い」

莉嘉「うっさい！アンタなんかリカ達の気持ちなんか分かるもんか！宇宙とか世界とかデツカイこと言つて、何万つて言う命を踏みにじるアンタに、アタシ達の悩みが分かるもんか！」

マクドナル「貴様らこそ！踏み滲られる虫けらの気持ちなど、考えたこともあるまい？」

莉嘉「……！もうホントに頭来た！今さら泣いて謝つたつて知らないんだからあ!!」

ダブルトマホークの柄を突き合わせトマホークランサーとし、ゲッターアークはその攻める手を弛めない。

—。

~~~~~  
 ??? ~~~~~

ウツキ「……つう……ん」

目を開く。しかしそれすらも実感出来ない程の漆黒の空間を視界は招き入れる。

いやに重く感じる身を起こすと、肌 जिメつとした感触が張り付く。ここは、先程までの黒平安京内部のような造られた空間ではなく、空洞や洞窟のような自然的な空間のようだ。

ウツキ（……そうだ。私は、晴明に襲われて……逃れるために……）

思い、上空を見上げるが、その上空すら、落ちてきた場所が分からない程漆黒に染まっている。

ウツキ（かなりの高さから落ちた、その筈だけど……）

手足に意識を通すが、痛みを感じることはなく、自身が思う通りに動く。筈。

ウツキ（兎に角、ここに留まっているのも危険、か）

晴明が追い掛けてくるかもしれないし、何よりここは敵地だ。そう思い直し、両足に力を入れ、立ち上がる。

ウツキ「……」

やはり特に不調を感じることはない。落下の弾みで、號から託されたりボルバーを何

処かにやってしまったようだが、兎も角、自分はここまで頑丈だったかと思ひ直して
ると、

ウツキ「……?」

暗闇の中で、何かが光った。蠟燭は愚か、光源らしいモノが一つもない空間なのだ。
光るものがあれば嫌でも目につく。

ウツキ（あれは…）

ある程度の警戒はしつつ、出口の手掛かりもないので光を目指す。

足元を確認しながら、ゆっくりとした歩調で進み、光の正体がハッキリとする近くま
で歩み寄る。

ウツキ（刀…）

地面に突き刺さって立った、ヒビ割れ錆び付いた、朽ちた日本刀だった。

ウツキ（けど、何で…）

ヒビ割れていることも、錆び付いている事も一目見た瞬間に分かると言うのに、その
刀は光源もなく光っている。いや、刀自身が光を放っている。

ウツキ（……っ）

畏か、それとも清明の幻術か。思いを巡らせど沸き上がる好奇心で、刀の柄に手を振
れる。

カアツ

ウヅキ「これは…!？」

ウヅキが柄に振れた瞬間、刀がその刀身から放つ仄かに緑を湛えた光を強めた。

『おお……この輝き……初めて見たが…』

ウヅキ「っ……!誰ッ!？」

突如響いた自身とは別の声に、思わず刀を地面から抜き放つて、構えながら周囲を見回す。が、刀が照らし出した先には、人影らしいものはない。

ウヅキ「……?」

『ははっ、そちらではない。こちらだ』

ウヅキ「!？」

「言われ、背後に振り返る。すると其処には、

ウヅキ「…死体…?」

洞窟の岩壁にもたれ掛かるように倒れ朽ち果てた、古い日本の甲冑を身に纏った遺体が、横たわっている。

遺体? 『我は頼光……源頼光。かつて、その童子切丸を賜り、晴明打倒の命を受け、そして果たせなかった。憐れな武士だ』

ウヅキ「みなもの、らいこう…?それに、童子切丸…」

言われ、自身が手にした刀に目を落とす。

頼光『その刀の名だ。朝廷が天より授かったとか、鬼の棲み付いた山を一刀の元斬り伏せたとか、そう言う逸話を持つモノだ』

ウヅキ「そうだったんですか…」

とてもそうは見えない、と言う言葉は胸にしまっておく。

頼光『長く待ち望んでいた。童子切丸の、真なる担い手が現れるこの日を。晴明に立ち向かい、しかし後一太刀及ばず、この暗闇の中で己が無力と屈辱に苛まれる日々を堪え忍び、ようやく…』

ウヅキ「私が、ですか…?」

頼光『如何にも。其方が手にした瞬間の童子切丸の輝き…。それは在りし日の私にも導き出せなかったものだ。其方こそ、紛う事なき童子切丸の担い手』

ウヅキ「…。大したことはないですよ、私は。どんなに優れた力があっても、大切なものを何一つ、守ることも出来ませんでしたから」

頼光『…そうか。其方もまた、戦いの中で苦悩する身であったか』

ウヅキ「……」

頼光『…其方、名は何と申す?』

ウヅキ「…シママムラ・ウヅキ」

頼光『ふむ。ウヅキ、か。良き名だ』

ウヅキ「ありがとう、ございます?」

頼光『ウヅキよ、私の頼みを聞いてもらえないだろうか』

ウヅキ「頼み、ですか?」

頼光『その童子切丸を用い、晴明を討つてはくれまいか』

ウヅキ「晴明を…?」

頼光『黒平安京の地下深くへと落ち延び、我が身滅びても尚、艱難辛苦に耐えて今日までここで新たな童子切丸の担い手となる者が現れるのを待ち侘びていたのは、一重に晴明の首級を上げる、その一念があつてこそ』

ウヅキ「……」

頼光『時は流れ、最早我が故郷たる都も存在せぬであろう。しかし、晴明の暴虐、悪逆の為に数多の民が泪を呑み、多くの同志達が私の眼前で散つていった』

頼光『それだけの犠牲、それだけの想いを託されながら、私に出来たことは、晴明に一太刀浴びせることだけ。奴がその傷から立ち直り、今尚のうのと生きていると思うと、腸が煮え練り返る…!』

ウヅキ「…そう言われても、困ります」

頼光『一方的で、不躰な頼みであると言うことは、重々承知している。しかし、既に

血肉の果てた我が身では、皆の悲願を遂げられぬのだ!」

「こんな所に居ようとは……しかし、やはりしぶといものだな? ゲッターのパイロットとは……」

ウツキ「!? 晴明……!」

頼光『晴明……ッ!!』

晴明「ふんっ。死に損ないが2人、か……。1人は最早悪霊紛いの物の怪だが……」

頼光『悪霊か。確かに、貴様への未練と、貴様の最期を見届ける為に、今日まで永えてきた!』

晴明「なれば今すぐ滅してくれよう。二度と現世へとまろび出でぬようにな」

頼光『っ……!』

晴明「……だが、先ずは」

人差し指と中指を立てた右手を、そのまま右へと突き出す。頼光と会話する隙を突き、童子切丸で斬り掛からんとするウツキを、その姿勢のまま空中に固定した。

ウツキ「くっ……!」

頼光『ウツキッ!!』

晴明「油断も隙もない。小賢しいだけの猿など、黙って隷属しておれば良いものを」

頼光『晴明……ッ!!』

晴明「悔しいか？だが何も出来ぬであろう？魂魄のみとなった落武者風情に」

頼光『……っ』

ウヅキ「ぐっ……くっ……うう……!!」

拘束から逃れるよう身を振って足掻くも、晴明の術中に嵌まった肉体は、それ以上の動きを見せない。

晴明「つくづく、愚かなものよなあ。……丁度良い」

そう言つて、拘束したウヅキを宙に浮かべ、そのまま何処かへと歩き出す。

頼光『待て、晴明ッ!』

晴明「精々吠えているが良い。貴様の相手は、最早飽いた。地に魂を縛られた憐れな姿のまま、虚空の時を生きるておれ」

ウヅキ「——…うっ」

どのくらい連れ回されたか、視界が開け、明るい空間が現れた。

ウヅキ「ここは……」

先程までの空気、雰囲気をぶち壊すかのように、鉄と機械で打ち付けられた、格納庫のような無機質な広い空間に出る。

晴明「さあ、10年来の再会ぞ。此奴も待ち侘びておつたであろう。主の帰還をな」

ウツキ「うつ……！」

術を解かれ、前方に投げ出される。倒れ込みながら、僅かに面を上げた、その視界には、

ウツキ「真ゲッターロボ……」

左胸のゲッター炉心を中心に、何やら大小様々なチューブのようなものでグルグルに拘束された、真ゲッターロボの姿が。

ウツキ「これは……」

晴明「マクドナルの試行錯誤の名残だ。孔明は真ゲッターの炉心を、何やら利用する手立てを考えていたようだが……私には欠片も興味がない」

ウツキ「興味がない？……同じ、仲間なんじゃないんですか？」

晴明「同志とは、ゲッター打倒と言う志を同じくするのみ。根元思想、思惑は各々それぞれだ。ゲッターを倒す為には一枚岩であらねばならぬ。と言うわけではない」

ウツキ「……」

晴明「貴様に最後のチャンスをやろう。真ゲッターロボに乗り、我と戦え」

ウツキ「どうして、こんな回りくどいやり方を？こんなことをしなくても、貴方達で勝手に真ゲッターを破壊して、私達を殺せば良かった。違いますか？」

晴明「ふんっ。それでは面白くないだろう？」

ウヅキ「面白く、ない？」

清明「湧かぬのだよ。血湧き肉躍る戦いがあつてこそその生命！奪い、奪われ、また奪い返す。その応酬があつてこそ、得られる物に万感たる想いが宿ると言うものだろう？」

ウヅキ「貴方の言っていることは、全く理解出来ません、ね！」

振り向き様、構え直した童子切丸を、下から斬り上げるように振るうが、その動きはまた清明の術によつて止められる。

清明「自惚れるな、と言つた筈だ。貴様らはゲッターの寄生虫。ゲッターなくしては生きられぬ。憐れで矮小な生き物なのだ！」

ウヅキ「勝手に、決めるな……！」

清明「……?!」

童子切丸の刀身が輝きを増していく。

清明「これは……！」

ウヅキ「何でもかんでも、貴方の思い通りに行く……！」

刀身が振るえる。童子切丸に、力が籠る。

ウヅキ「——思ふなッ!!」

気迫の籠つた斬撃が、清明の術を斬り破つた。童子切丸の刃が、白銀の弧を描き、咄

嗟に身を引いた清明の鼻筋を撫でる。

清明「くう…!?ば、馬鹿なあ?!」

死人のように血色のない、清明の白い肌の鼻筋から垂れた紅の線がつうつと顎へと伝い、落ちていく。

清明「我が術を破るだと…?人間如きが…!」

ウツキ「これは…」

思わず、手元を見やる。錆び付き朽ち果てた剣。そう思っていた童子切丸が、まるで生まれ変わったように、刀身から白銀の輝きを放っている。

清明「この…!」

ウツキ「…:…:…:」

緑の輝きを強めた童子切丸を、正眼に構え直す。

清明「調子に乗るなよ、女郎が!貴様など…!」

ウツキ(確かに、私に特別な力なんて、ない。あるとすれば、この童子切丸と呼ばれた刀に。だから…:…:)

ウツキ「やあああああッ!!」

清明「!?!」

ウツキ(今は、刀の力を信じます!!)

威勢良く、大上段から斬り掛かった。童子切丸の刃は、瞬時に展開された清明の結界を容易く切り裂き、

清明「おっ……!!？」

清明の右肩口から左脇腹へと、袈裟に斬り付けた。

清明「ぎやあああああああああッ!!!？」

声が裏返る程の雄叫びと共に、鮮やかな血の噴水が、清明の体から迸る。

清明「おのれ……！おのれおのれおのれおのれおのれ——！おのれッ!!シイマアムウラ
〜ウツキイ〜〜ッ!!」

憎々しげな叫びを残しながら、清明の姿は、まるで幻のように消えてしまった。

ウツキ「……」

頼光『やったな、ウツキ』

ウツキ「頼光、さん……」

頼光『我が魂魄も、肉体の軀から解き放たれたらしい。ウツキが童子切丸を抜いた時に。私はもう、現世に別れを告げねばならぬらしい』

頼光の姿が光に包まれ、足元から消えていく。

頼光『最後の最後に、良いものを見られた。遂に我が同胞達との悲願を……』

ウツキ「まだ終わってません」

頼光『何？』

ウツキ「あの程度で終わるくらいなら、きつと貴女でも悲願は遂げられてましたよ」

頼光『…ははっ。確かにな。そうかもしれん』

ウツキ「けど、大丈夫です。後はゲッターが、清明を倒しますから」

頼光『ゲッター、か』

そう言つて、正面に聳えている真ゲッターロボを見上げる。

頼光『我が時代にはなかつた、巨大な鎧だな。これを使い、お前が清明を倒すのか？』

ウツキ「それは…まだ、分かりません」

頼光『そうか。私にも分からないな。こんな巨大なものは、私の時代にはなかつたか

らな』

ウツキ「けど、ゲッターは他にもあります。黒平安京の外で、私の仲間が戦つてくれ

ています。あの人達なら、きつと」

頼光「ウツキの同志、か。ならばその言葉を信じるとしよう」

頼光の体が、上半身まで消え掛かる。

ウツキ「……」

頼光「ウツキよ。最後に一つ、覚えていてほしい。足掻くことが出来ると言うのは、生

きているからこそ、なのだ」

ウヅキ「足掻く、こと…?」

頼光「先程の太刀筋、其方は晴明の思い通りにならぬと、必死に生き足掻こうとしたから、出来たことではないか？」

ウヅキ「それは…」

頼光「足掻ける、と言うのは素晴らしいことだ。少なくとも、暗闇の地下深くで魂だけの存在となった私には出来得なかつたことだ。強い意思があり体があるから、人は最後まで足掻き続けることが出来るのだと」

ウヅキ「……」

頼光「力を恐れ、捨ててしまうくらいなら、利用してしまえ。生きる為に。其方はまだ生きていると言うことを、忘れないでくれ……」

スウ……

ウヅキ（頼光さん…）

頼光の言葉を胸に秘め、その歩みは真ゲッターロボのコックピットへと――。

~~~~~ 早乙女研究所 格納庫 ~~~~~

美世「――ふう…。最終チェック終了！何時でも行けるよお養父……隊長！」

弁慶「おう！…何とか、形にはなつたつてトコか」

美世「本当はコイツ用の自律回路も仕上げたいとこだったんだけどね」

弁慶「仕方ねえだろ。巨大昆虫相手の戦闘データじゃ足りねえってんだからよ」

美世「そうだけど…」

弁慶「航空機を一つ飛ばして、戦闘でゲッターを支援しながら…。肝心のトコの設定も上手く行つてねえコイツを独り立ちさせるまでには、時間が足りねえんだ」

美世「だからって、廃棄になつてるゲットマシンのコックピット抜き出して無理くりくつ付けるのも、大分ハードだったんですけど？開発を手伝つてくれた整備班の人達も、設計データから見直しくつて、嘆いてたくらいだし」

弁慶「俺ア昔気質な質でな。やっぱコンピュータなんかより人の手で飛ばした方がずつと信頼出来るのよ」

美世「だからって…」

弁慶「今はそんな話してても埒が明かねえ。問題は誰が操縦するか、だが…」

通信士『車戦隊長！研究所のリーダーがレイコマンドを捉えました。こちらに真っ直ぐ向かつて来ている模様』

弁慶「何イ!?レイコマンドだけか？」

通信士『ゲッターをはじめ、他の機影は確認出来ません』

弁慶「どう言うことだ…?」

美世「茄子が帰ってきたの？」

弁慶「ああ、ともかく様子を見に行くぞ。もうすぐ肉眼で見える筈だ」

美世「う、うん……！」

茄子「ふう……」

美世「大丈夫だった？茄子……って、額から血が……！」

茄子「ここに戻ってくるまでに、追撃してきた鬼獣に何度か襲われまして……」

弁慶「機体もかなりやられちまつてるな……。無事に戻ってこれただけでも運が良かったか」

茄子「えへへ……」

弁慶「何があつた？」

美世「そうだよ。他のみんなは？」

茄子「黒平安京で、戦ってます。結界に閉じ込められて、私だけ、入る前に……」

弁慶「成る程な。それを知らせに来てくれたか。助かったぜ」

茄子「いえ、私じゃ足手まといで、何にも出来ませんでしたから」

弁慶「そんな事あねえさ。號達に今、力が必要だつて事が分かつた」

茄子「力……？」

美世「そう！前々から開発が進んでいた“アレ”が遂に完成したんだ！」

茄子「アレ…？もしかして、“アレ”が…！」

弁慶「おう。尤も、有人操縦に切り替えた影響で、パイロットがいねえんだが…」

茄子「私が行きます」

弁慶「…いいのか？傷の手当ては…」

茄子「車隊長は司令から基地を任されてるでしょう？だったら、今マシンを動かせるのは、私だけです」

弁慶「だが…」

茄子「皆、一生懸命戦っているんです。私が、ここでゆっくりしている訳には行きません…！…つつう」

弁慶「おい、無茶すんな！」

美世「…」

茄子「無茶、では…」

弁慶「精密検査してねえんだ。頭以外も、骨が折れてるかも知れねえ」

茄子「でも…」

美世「私が乗る」

茄子「え…？」

美世「私が操縦するよ」

弁慶「だが、お前は車以外の操縦はてんで出来ねえんじや…」

美世「そ、そんなこと言われてられる状況じゃないでしょ？私だって、一応訓練は受けてる」

弁慶「それで、適正がねえとかさんざん愚痴ってたんじやねえのか…」

美世「うっ…！だけど！今の状態の茄子を行かせるよりずっと良くない?!」

弁慶「そりやあ、そうだけだよ」

美世「決まり！時間もあんまりないんだし。私着替えてくる！」　タタツ

そして――、

美世「うう…。ああは言ったものの、実際やるとなると緊張するなあ…。えうつと、これが高度計で、これが…：…気圧計？あとこれは…うう…」

茄子「水平器、ですよ」

美世「茄子！精密検査は？って右腕ギブスカ」

茄子「はい…。ちよつとヒビが入ってるだけみたいですけど…。やっぱり美世ちゃんに任せるしかないみたいです」

美世「う、うん…！任せて…！」

茄子「はい。これを」

美世「これは…？」

茄子「急ぎですけど、願を掛けたお守りです。美世ちゃんが號達のところは無事に辿り着けますようにって」

美世「辿り着いてからが本番なんだけどね」アハハッ

茄子「大丈夫です。美世ちゃんなら出来ます。自信を持って下さい」

美世「うん……！私も、私に出来る全力で、頑張ってみるよ！」

弁慶『準備はいいか？何時でも出せるぞ！』

美世「あつ、了解！それじゃあ……」

茄子「はいっ。いってらっしやい♪」

美世「うん。いってきます——！」

——。

くくく 黒平安京 くくく

マクドナル「むっ!？」

號「見ろよ！上空を覆っていた結界が……」

友紀「晴れていく！もしかしてウツキが……！」

マクドナル「まさか……！晴明様がやられるなど……！」

莉嘉「いよいよ、アンタしかいなくなつたんじやない？」

マクドナル「ぬう……！」

リン「油断禁物だよ。今はこつちを油断させるため、何処かに潜んでるだけかもしれない」

溪「けど、それじゃあ結界が消えたのは…」

リン（…まさか）

剷「……………見ろ！中心の本丸が…」

剷の驚きと同時に本丸の存在を掻き消して、地下深くから天目掛けて立ち上つたのは、

友紀「何、あれ……………キレイ…」

リン「ゲッター線の光…」

友紀「この光、全部!? 私達のゲッターだって、これだけの量は…」

美波「この光、見覚えがある…!」

かな子「はい。このエネルギー量、間違いありません」

號「どう言うことだ!? ウツキが真ゲッターを破壊したんじゃないのか?」

かな子「いいえ。ゲッター炉心を暴走させたとしたら、もつと広範囲に爆発が広がる

筈です。この反応は寧ろ…」

溪「むしろ? むしろ何なの!」

莉嘉「っ! 見て、出てきたよ!」

膨大なゲッター線の輝きに包まれて、黒平安京の地下から、それは姿を現す。

凱 「あれは……」

號 「見間違える筈はねえ。ありや……!」

溪 「真ゲッターロボ……!」

かな子 「この世界の……!」

美波 「……? 私達の知ってる真ゲッターと、少し違うような……」

友紀 「え?」

リン 「いや、あれは、私が乗ってたものとも、少し違う……」

友紀 「どう言うこと……? あれは、奪われた真ゲッターじゃない?」

リン 「いや、そんな筈は……」

かな子 「そうですね。真ゲッターロボは、2機も3機も作れるものじゃありません。

あの反応そのものは、間違いなく真ゲッターです」

溪 「じゃあ、一体……」

莉嘉 「……」

光が収束して、真ゲッターロボが明確にその姿を晒す。その姿は、

莉嘉 「黒い、真ゲッターロボ……!」

つづく



## 第23話『輝き共に』

——真ゲッターロボ、コックピット内。

ウヅキ「…ここは、あの頃のままですね」

コックピットハッチを開き、眼前に広がった光景を見て、独りごちる。

万感の想いもなくシートに腰を掛け、左右に大きく広がるメインモニターの中央下、小さなサブモニターの脇にあるスイッチに手を掛け、起動する。

ウヅキ（よし、動く…。この何年かは、まともな整備もされてない筈だけど）

タッチ式の液晶パネルを何度か叩いて操作し、画面を切り替えていく。

ウヅキ（ゲッター炉心…：出力調整…。安全装置の解除…）

かつて、一度だけ指導を受けた手順を踏んでいく。それはもしもの事があった時、ゲッター炉心のエネルギーを全解放し、故意的に炉心暴走を引き起こす、ゲッターロボにとつての最終手段。

ウヅキ（やってしまえば、パイロットも只では済まないですけど…。私の命なんてもう、どうでも良いですから）

1つ2つと、幾重にも重なっている安全装置を解除していき、いよいよ最終安全装置

の解除。その可否をパイロットに問う画面が、ウツキの目に写る。

ウツキ（貴方の手に掛からなくてごめんなさい。けど、許してくれますよね？ 號——）  
思い、タッチパネルを操作する指先を、『OK』の方へ。

『——死に急ぐには早いんじゃない、シマムー？』

ウツキ「……」

『あれ？ 10年ぶりの再会だつて言うのに、無視？ 悲しいなあ』

ウツキ「……るさい」

『ん？』

ウツキ「ミオちゃんの姿を使って、私を惑わす気ですか？ ゲッター！」

ミオ『惑わすなんて心外だなあ。今シマムーの目の前にいるのは、正真正銘、ホンダ・

ミオちゃんですよ？』

ウツキ「出鱈目を……！ だつてミオちゃんは、10年前に……」

ミオ『ウツキの放ったストナーサンシャインの弊害で精神に異常を来した？』

ウツキ「……っ！」

ミオ『それで、気が狂ったまま真ゲッターを破壊しようとして、そして……』

ウツキ「やめて……！ やめてください……っ！」

ミオ『……良いんだよ、シマムー。私がああなつたのは、シマムーのせいじゃない。私

は、あそこでああなる運命だったんだ』

ウツキ「運命……?」

ミオ『そう。あの頃の私は、バカだったから。ゲッターと1つになって、寧ろスッキリしてる』

ウツキ「そんなこと……!ミオちゃんはそんな風に言いませんっ!私の知っているミオちゃんは……!」

ミオ『どうしても信じてくれない?』

ウツキ「当たり前です!ゲッターは私も、リンちゃんも!みんなの人生を滅茶苦茶にしたんです!!今更信じてなんて……!」

ミオ『だったら、ゲッターの操縦桿を握ってみれば良いよ』

ウツキ「……?」

ミオ『真ゲッターを自爆させる。ウツキのその意思が変わらないのはよく分かったよ。けど、それなら最後に1つ私の言うことを聞いてくれても良いんじゃない?』

ウツキ「…何をさせる気ですか?」

ミオ『何にも。操縦桿を握って、何にも感じなかったのなら、真ゲッターを自爆でも何でも、好きにすれば良いよ。私は停めないよ』

ウツキ「……」

ミオの言葉を疑いながら、恐る恐ると両腕は、ゲッターの操縦桿に触れる。  
ウヅキ「——!!」

その瞬間、操縦桿に触れた指から、腕を伝わり、脳に直接、電流が走るような感覚が来た。

ウヅキ「これは……!」

そしてウヅキの目に映ったのは、先程までの無機質なコックピット、ではなく、広大に拡がる宇宙。その中の地球。太古の時代から脈々と受け継がれる進化の系譜——。

ミオ『分かるでしょ? 時間と、空間と、ウヅキ自身の関係が。どうして、宇宙に無数に存在する星々の中から地球が選ばれ、地球に生命が溢れたのか……。ウヅキなら、分かる筈だ』

ウヅキ「……出鱈目です。こんなの……」

ミオ『真実だって、ウヅキには分かってる筈だよ?』

ウヅキ「……」

ミオ『どうして人類がゲッターに選ばれたのか……。そもそも人類と言う存在は何故誕生したのか……。』

ウヅキ「し、ん、か……」

ミオ『そう、進化。地球の海と言う小さな環境でしか生きていけなかったちっぽけな

微生物が、何故陸に上がろうと思いつたのか？陸に上がり、一度は恐竜と言う最強の進化を遂げながら、結局は毛皮も爪も、牙も持たない脆弱な進化をするに至ったのか…』  
ウツキ「そんなの…っ」

ミオ『分かっている筈だよ。今のウツキには、何の為に私達が存在していて、ゲッターに選ばれたのかも』

ウツキ「……」

ミオ『新しい環境への最適化、天敵から身を守る為の強化……進化とは、全ての生命に平等に与えられた権利だ』

ミオ『しかし今、その進化を阻もうとする者達がいる』

ウツキ「……」

ミオ『彼らの行いは虚無に対する閉塞だ。進化を内へ内へと封じ込め、自分達の宇宙に閉じ籠ることで、来るべき虚無による滅びから逃れようとしている』

ウツキ「そのの、何が悪いって言うんです…?」

ミオ『結局は、それは緩慢な滅びだって、理解している筈だよ？私達が虚無を乗り越えその先の無限に至るには、上へ上へ、進化しなくてはならない』

ウツキ「その為に、奴らを倒せって言うんですか。たくさんのモノを犠牲にして…!」  
ミオ『犠牲なんかじゃない。少なくともあの時の私は、ウツキをゲッターから守る為

に、犠牲になろうとしたんじゃない』

ウヅキ「ミオちゃん……」

ミオ『ウヅキ……。全ての存在はみんな同じエネルギーから発生しているんだ。生と死ももちろん、物質も生物も全て同じところから発生して、同じところに還って往く。そして進化は繰り返され、宇宙は存在していくんだ』

ウヅキ「私達が存在している限り、宇宙は消えない……」

ミオ『そして、その宇宙を守る為に、ゲッターは存在している』

ウヅキ「それが、それが真実だとしたら、私は……!」

ミオ『何も恐れることはないよ。行こう、シマムー!』

ウヅキ「……はいっ!」

ミオ『ははっ!良い顔。その目を待ってた。行こう!!』

ウヅキ「神を名乗る無法者が、宇宙を滅ぼす前に!」

ウヅキ「発進——!!」

ギンツ

—。

黒平安京。その頭上に重くのし掛かった暗雲と、暗雲を照らす光によって、赤黒く

禍々しい空の下、悠然と、しかしその場にいる者全ての注目を浴び、宙に佇む異質な存在。

美波 「黒い…」

かな子 「真ゲッターロボ…?」

美波(何だろう…。何処と無くだけど、雰囲気もブラックゲッターに似てるような…) 號 「…んだよ…。!どう言うことだよ!真ゲッターを破壊するって話じゃなかったのか!?!どうして動いてやがるツ!?!」

ウツキ 「…些細な事を、気にしてる場合ですか?」

號 「あん?」

窮鬼獣 《グウアツ!!》

號 「うおツ!?!」

こちらの死角を突き、背後から強襲を仕掛けてくる窮鬼獣。咄嗟に身を翻し、ブーメランソーサーで反撃するが、それも軽快に躲かれてしまう。

號 「…クソツ!」

剋 「確かに、真ゲッターに気を取られている場合じゃなさそうだな」

號 「剋!」

溪 「言いたいことは分かるよ? だけどここは一旦落ち着いて!」

剷 「真ゲッターを破壊しようがしまいが、ここを乗り切らなくては、未来はないんだぞ」

號 「畜生ッ！何だつてんだ！ドイツもコイツも!!」

マクドナル 「真ゲッターロボ……あれほど我らを拒絶しながら……やはり人類を選ぶのか……うおっ?!」

莉嘉 「えっへへっ☆隙あり〜」

マクドナル 「小癪な……」

莉嘉 「きやつ！」

ゲッターアークの目と鼻の先に突き付けられた龍頭から放たれた重力光線を、辛うじて躲す。

莉嘉 「ゲッタービーム!!」

マクドナル 「ぐっ……!」

莉嘉 「こつちだつて何時までもやられっぱなしじゃないんだ！隙を見せたんなら潔く、倒させてもらおうよ……!」

マクドナル 「くうう……!行け、饕餮鬼獣！」

饕餮鬼獣 《!!》

黒い真ゲッター目掛け、饕餮鬼獣が飛び掛かった。



ウツキ「——」

ミオ『敵が来るよ、ウツキ』

ウツキ「!!」

爪を立て、襲い掛かる饕餮鬼獣を、黒い真ゲッターが殴り飛ばす。

饕餮鬼獣《!!》

マクドナル「ぬう……!」

友紀「あれが、真ゲッターの力……」

ウツキ「……!!」

ウツキ「そうか、これが真ゲッターロボ……そして、私の使命は——!」

饕餮鬼獣《!!》

ウツキ「っ……!」

饕餮鬼獣が大きく口を開く。その口へと大気を吸い込むと共に、黒い真ゲッターからもエネルギーを吸い上げ始めた。

ウツキ「これは……?」

マクドナル「フハハハ……! 饕餮鬼獣の誇る無尽蔵の食欲だ。真ゲッター程度のエネルギー

ギーなど瞬く間に……」

ウツキ「瞬く間に、何?」

マクドナル「?!」

真ゲッターからエネルギーを吸収する、饕餮鬼獣の体が、風船のように膨れていく。ウツキ「どう?ゲッター線の味は?さぞ美味しいんでしよう」

饕餮鬼獣《……!!》

ウツキ「そんなに欲しいのなら……!」

黒い真ゲッターの右腕に、エネルギーを集束させる。

ウツキ「好きナだけ、喰らえツ!!」

バオツ

腕を突き出す動作と共に、ゲッタービームのような光線が放たれ、そのまま饕餮鬼獣を貫き、粉碎した。

饕餮鬼獣《——》

マクドナル「バカなあ……?!饕餮鬼獣……!」

莉嘉「これで、頭数もこつちと一緒だ!」

マクドナル「ぬうう……!」

「気圧されるでない、マクドナルツ!!」

リン「この声は……」

マクドナル「晴明様!」

ウツキ「……!」

上空に黒く濃い紫の暗雲が立ち込め、その暗雲から幾重もの紫電の雷が降り注ぎ、黒い真ゲッターを打ち付ける。

ウツキ「ぐっ……!」

晴明「このままゲッターの隙にさせて良い道理など、ある筈がない。有数の星々の命運の為に。我々こそが正義だと、違えるな!!」

剽「安倍晴明……やはり生きていたか!」

友紀「何……?雲の中から何か出てくる……?スゴく、巨大な……!」

かな子「鬼獣!」

ゲッターをも遙かに凌ぐ巨体で、黒平安京にゆつくりと舞い降りたのは、灰色の体を持つ、これまでの鬼獣とは比べ物にならない程の、圧倒的存在。

晴明「必ずや、この宇宙から消し去ってくれる、この鬼獣王で!!」

ウツキ「さっきまでの余裕はどうしました?それだけ、ゲッターが怖い?」

晴明「黙れ!貴様に受けた屈辱……!その身の芯まで刻み込み、この晴明に傷を付けた事を、無間地獄の彼方まで後悔させてくれるツ!!」

ウツキ「どうやらそっちが本来の“顔”みたいだな。丁度良い」

そう言いながら、黒い真ゲッターが肩から抜き放つたのは、自身と同等程の長大な柄

に、鈍く光る黒い刃が対象の首を狩り取るように反り描く、大鎌だった。

ウツキ「ゲッターサイト……！」

清明「さながら告死の死神と言うわけか！面白い!!この清明を黄泉へと誘えると思うなよ!!」

黒い真ゲッターが見上げるほどの体躯を誇る鬼獣王。ゲッターサイトを構え、対峙する。

友紀「真ゲッターにウツキが乗って……清明まで出てきて……!ああもう訳分かんない!どうなってるの!」

リン「友紀が焦ったところで何にもならないよ。ウツキが真ゲッターを動かしたんだ。こっちはこっちで……」

檣杵鬼獣《!!》

リン「何とかしなくちゃね……!」

檣杵鬼獣の突撃を往なして、着地。

檣杵鬼獣《!!》

リン「!?」

新ゲッター2の動きに反応して、身を翻した檣杵鬼獣が、宙返りするように身を捻らせ、新ゲッター2の前に着地。

リン「器用な立ち回りも出来るんだね」

友紀「言ってる場合……ゴフツ」

檜杣鬼獣の拳が新ゲッター2の鳩尾に突き刺さり、吹き飛ぶ。

リン「ガツ……！」

檜杣鬼獣《!!》

廃墟の家屋を薙ぎ倒して、倒れ伏した新ゲッター2に、檜杣鬼獣が迫る。

檜杣鬼獣《ブオオオオオツ!!》

リン「ぐっ……！」

マウントポジションを取り、新ゲッター2に対して優位を取る檜杣鬼獣。新ゲッター

2は左右の腕を交互に突き出し、懸命に抗う。

リン「くっ……！」

友紀「上手く払い除けられないの!？」

リン「パワーが上がらない！」

友紀「くっそ……!こっちからじゃ手助けなんて出来ないし、一体どうしたら……」

バオツ

檜杣鬼獣《!?!》

リン「何!?!」

構机鬼獣が仰け反る。その怯んだ隙を逃さず、アームで殴り拘束から逃れる新ゲッター2。

友紀「た、助かった〜…」

リン「けど今の攻撃…まさか!」

新ゲッター2が視線を向けた、遙か先、そこには、

美世「ほ、ホントに当たった〜…」

茄子『ナイスショットですよ、美世ちゃん』

美世「ナビゲートありがとう! 何だか茄子がすぐ傍にいるみたいを感じるよ!」

茄子『心は何時も、美世ちゃんの傍にいますよ〜』

美世「あはは…! 茄子が言うのと冗談に聞こえないなあ…つとお!」

低空飛行で家屋に激突しそうになる寸前。強引に機首を上げた急上昇で衝突を躲し、上空に上がるその影は、

リン「あれは、Gアームライザー!!」

友紀「完成してたの!?! やりい!」

美世「アンタ的にはランニングホームランギリギリセーフ、ってトコかな?」

友紀「美世が操縦してるの? 大丈夫?!」

美世「それは私が一番心配してるけどさ…」

茄子『黒平安京まではこれました！あとは何とでもなる筈です！』

リン「心強いよ、まったく…！」

瓦礫を押し退けて立ち上がる、檜杵鬼獣に対峙する。

リン「若いのが頑張ってるのに、私がやられっぱなしじゃ、カッコつかないよね！」  
一步を強く踏み込み、檜杵鬼獣目掛けて突撃。

リン「——ゲッタービジョン！」

と、見せ掛けた高速機動。

檜杵鬼獣《??》

敵を見失い、辺りを見渡す檜杵鬼獣。

リン「——!!」

檜杵鬼獣《!!?》

しかし、新ゲッター2が現れたのは真後ろ。

リン「ドリルアームツ!!」

その脳天からドリルアームを突き入れ、檜杵鬼獣を粉碎する。

リン「ふう…」

友紀「美世達のお陰で、何とかなった！アリガト！」

美世「あははは…。どういたしまして…？」

リン「直ぐに號達の救援に向かって。號達には、Gアームライザーの力が必要だよ」  
美世「う、うん………で、號達はどっち？」

友紀「レーダー見れば分かるでしょ？」

美世「レーダーって、簡単に言うけどさあ……」

茄子『そっちはセンサーですよ』

美世「何が違うのさ……!!」

リン「黒平安京の中央で、デカク陣取ってる奴がいるでしょ？ウザーラと、今は晴明が操ってる、鬼獸王とか言う奴。アイツらを挟んだ、反対側だ」

美世「へえ。あ……え……と、もしかしてグルツと回っていかなきゃ行けない感じ？」

友紀「真ん中を突っ切って行けば直ぐだよ！」

美世「む、無理無理！ムリでしょ!?!あんな大怪獣総進撃みたいなど真ん中突き抜けていくなんて！絶対標的にされる！」

茄子『正に、飛んで火に入る何とやら、ですからね』

美世「そんなんなったらあんな奴の攻撃なんて避けようないよ。自信持って言える」

友紀「ちよつとは自分の操縦技術に自信持とうよ」

美世「Gアームライザーが車だったら……！」



リン「何でもいいけど、時間に余裕はないよ。戦闘時間も大分長引いてる。號達のゲッターのエネルギーも残り少ない筈だ」

鬼獸王《!!》

美世「ひいッ!けど、そうだよね!號達を助けるために来たんだもんね!」

友紀「おっ、覚悟決めた?」

美世「真ん中を突っ切るようなバカはしないけど!」

黒平安京中央、ゲッターアークや黒い真ゲッターが相對する百鬼ウザラや鬼獸王の様子を伺いながら、中央のやや外側、比較的距離の短いルートを選び、回り込んでいく。

窮鬼獸《!!》

號「なるお!コイツ!ちよこまかとお!」

剗「號、エネルギーの残量が、20パーセントを切った!もうマグフォース・サンダーは使えない!」

號「チツ!ブーメラソサーに、レッグブレードを合わせても、10分でケリを着けなきゃならねえってか!」

深「そんな、今まで1発も攻撃が当たってないのに…。一体どうすれば…」

號「弱音は吐きたくねえが、せめて奴の足を止められりやあ!」

窮鬼獸《!!》

溪 「號、後ろ！」

號 「チイツ……！」

美世 「うおりやあああああ……っ!!」

窮鬼獸 《!!?》

ゴシヤアツ

ゲッター1号の背後から忍び寄った窮鬼獸に、その真横からGアームライザーが全速力で迫り、激突。

號 「何だ?ありやあ……」

窮鬼獸と接触したまま、彼方へと連れ去るGアームライザー。

剗 「Gアームライザー、完成したのか!？」

茄子 『はい。號さん達が待ち望んでるものも、ちゃんと持ってきましたよ』

號 「マジかよ!?!こりやあどん底からの逆転サヨナラだぜ!!」

溪 「待ってよ!いきなり実戦で、ぶっつけ本番でやる気!?!」

號 「上等だろうが。ここで一発、形勢逆転だぜ!」

そう言つて、一步。ゲッター1号の踏み込みを強く、

號 「っ……らあッ!!」

宙空へと躍り出る。

茄子『美世ちゃん、私達も』

美世「う、うん……!」

Gアームライザーを制動。鼻先に乗せていた窮鬼獣を地面へと落とす、機首を上空へと持っていく。

美世「プロテクターの制御は任せちゃってもいい?」

茄子『はい。遠隔操作でも出来るよう、予め調整してくれたんですよね?』

美世「予め言うか、元は自律制御だった時の予備、だったんだけどね……」

上空で旋回。機体の軸を、ゲッター1号に合わせる。

茄子『號さん、準備いいですか?』

號「おう、何時でもやってやろうじゃねえか!」

茄子『では、エネルギープロテクター、射出します!』

號「プラズマエネルギー、放出!」

Gアームライザーから、ゲッター1号へ向けて放たれた装甲片。それが、放出され、電磁石のような働きをするプラズマエネルギーに引き寄せられ、導かれるようにゲッター1号の腰に、脛に、胸に吸い付いていく。

剷「エネルギープロテクター、ドッキングを確認」

溪「システム・リンク……完了!號、プロテクターからの増幅エネルギーだよ、受け

取って！」

號 「来たぜ来たぜ来たぜえくくく!!正にフルパワーチャージ・セットアップ！」

装着された装甲片、エネルギープロテクターから、増幅されたエネルギーを受け取り、ゲッター1号の尽きかけていたエネルギーが、再び甦る。

號 「これが俺達のゲッターの真の姿、強化型ゲッターロボ1号いや……」

號 「スーパーゲッター號だア~~~~ッ!!」

ゲッター1号改め、スーパーゲッター號が、瓦礫を押し退け立ち上がった窮鬼獸と対峙する。

窮鬼獸 《……!!》

號 「へっ、これで形勢逆転だぜ、トラ助」

窮鬼獸 《!!》

爪を、牙を立てて飛び掛かる。が、

號 「スーパーゲッター號だと……!」

窮鬼獸 《!?!》

號 「言ってたんだア!!」

豪腕を振るい、窮鬼獸の横つ面を強打。自慢の牙をへし折り、再び瓦礫の山へと吹き飛ばす。

號 「へへへっ、流石のパワーだ。負ける気がしねえ！」

剗 「雑魚相手に時間を取られるな。次で仕留めに行け！」

號 「あいよ。相変わらず厳しいぜ……」

溪 「ソードトマホークでやっちゃえ！」

號 「おう、行くぜ！」

スパーゲッター號がその両拳を打ち合わせる。

號 「磁鋼劍・ソードトマホオオークツ!!」

それは、鏢にトマホークが付いた両刃の劍。

號 「おりゃ！」

瓦礫で上手く身動きが取れない窮鬼獣に、突貫。

號 「だあありやアツ!!」

大上段からソードトマホークを、先ず一閃。

號 「!!」

続けざまに刃を返し、横一閃。窮鬼獣を十字に斬り伏せた。

號 「へっ、どんなもんだよ？」

溪 「ヒュー、カッコイイ！」

剱 「勝った気でいるな。まだ大物は残ってるぞ」

號 「分ーってるよ。こっちはまだまだ戦いたくてウズウズしてんだ……」

立ち上がり、宙を仰ぐ。

號 「清明……！ テメエから出てきたつてんなら、都合がいい。その首叩つ斬つてやるぜえ!!」

その狙いを、清明が駆る鬼獣王へと向け、跳躍した。

ウツキ 「……！」

バックステップで身を翻した、黒い真ゲッターの眼前で砂塵が舞う。大木よりも一層太い鬼獣王の腕が、地面から生えてきているようにも見えた。

ウツキ 「トマホーク、ブーメランツ！」

左手を肩口に掛け、横へ一気に振り払う動作で、一度に複数のトマホークをブーメランとして投擲する。が、

清明 『悔るなよ。最早真ゲッターなどと、取るに足る相手ではないわツ!!』

ウツキ 「……」

鬼獣王の強靱な皮膚は、トマホークの刃すら、容易くは通さない。

ウツキ 「……ゲッターサイト！」

再度ゲッターサイトを構え直し、鬼獣王の放つ光線を右へ左へと素早く移動して躲しながら肉薄。

ウヅキ「やあッ!!」

勢いよく振り下ろすも、カッンともカキンともつかない軽い音が響くだけ。

ウヅキ「……」

晴明『蚊でも、刺したのかア!!』

ウヅキ「?!」

振り下ろされた最早鉄球そのものと言った鬼獣王の右腕を、ゲッターサイトの柄で辛うじて受け止めるが、黒い真ゲッターはその衝撃で吹き飛ぶ。

ウヅキ「ゲッタービーム……!」

受け流した衝撃でやや距離を取りつつ、ゲッタービームを放つ。

晴明『ふはははっ! 温い、温いわッ!! そんなものオ!』

晴明は鬼獣を全体を覆い尽くすほどの結界を展開。ゲッタービームを防ぎきる。

ウヅキ「…やれやれ」

ミオ『ウヅキー人じゃ、流石にキツイ?』

ウヅキ「キツイと言う訳じゃ、ないですけど」

ミオ『お、強がり? 珍しいねえ。けど、大丈夫』

ウツキ「？」

ミオ『もうすぐ…』

號「清明、覚悟ツ!!」

清明『何?!』

鬼獸王の後頭部に、空中から飛来したスーパーゲッター號の飛び蹴りが刺さる。不意の攻撃に、鬼獸王の巨体が、わずかに揺らいだ。

清明『貴様は、一文字號…!』

號「へっ、覚えてもらえて光栄だぜ。その礼に、地獄へ送つてやる!」

清明『ほざけ! 貴様如き蟻風情に、何が出来よう?!』

號「男児三日会わざればカツも喰つてみせよつてよ!」

剗「刮目して見よ、だ。大事などころを間違えるな」

號「そうだったかア? 兎も角、今のコイツはただのマシンじゃねえ。俺達人間の持てる力の全てを注いで完成した、スーパーゲッターロボだ!」

清明『はン! 人間程度の持てる力など…。叩き潰してくれるわア!!』

號「やってみろ!!」

振り下ろされた腕を跳躍で躲す。思い切り地面を打ち、土煙を上げるその腕に着地、ソードトマホークをその表面に突きつけ、



號 「うおりやあああああッ!!」

腕を斬り付けながら、鬼獸王の頭部を目指し駆け上がる。

晴明 『甘いわ!!』

號 「うお!？」

鬼獸王の口から放たれた紫炎の業火。迫っていたスーパーゲッター號を炙るが、

號 「つぶねえ〜。もう少しで丸焼きになるトコだったぜ…」

空かさず飛び退いたことで、直撃は避ける。

ウツキ 「あれが逆転の鍵、ですか？」

ミオ 『そう。2つのゲッターの力を合わせて、奴を倒すんだ』

ウツキ 「2つの力を…」

そう言いながら、視線はスーパーゲッター號が握るソードトマホークへ注がれる。

ウツキ 「剣…。そうだ」

そう言つて次に視線を向けるのは、操縦席の脇に立て掛けられた、抜き身の童子切丸。

ウツキ 「これなら…」

ミオ 『それを使うつもり?』

ウツキ 「最初から、分かっていたんでしょ?」

ミオ 『さあ。けど、運命は無数にあるからね。ウツキはその中から、1つを選んだ。そ

れだけの事だよ』

號 「マグフォース・サンダーっ!!」

スーパーゲッター號が、合体したことで強化されたマグフォース・サンダーを放つ。

晴明 「そんなものがア!!」

號 「へっ、真正正銘の化け物かよー」

晴明 「所詮はその程度！人間の技術など、恐るるに足らず!!」

友紀 「だったらこれは、どう!?!」

晴明 「!?!」

鬼獸王の背後から放たれ、シウルシウルとその全身に巻き付くのは、

號 「友紀義姉!!」

新ゲッター3のパワーアーム。

友紀 「へへっ、新ゲッター3参上!!加勢するよ!號、ウツキ!!」

晴明 「おのれ…!乗り手の足らぬゲッターなど…!」

鬼獸王が身を振り、新ゲッター3の拘束を解かんと暴れまわる。

友紀 「パイロットが足りない分はくくく…!気合いで補う!!」

晴明 「気の持ちようでも何とでもなるなどと…!真に思っておるのかア!!」

友紀 「あっ!」

新ゲッター3の延びきったアームを逆手に、軽く持ち上げ、反対側へと叩き付けた。  
溪 「友紀義姉ちゃん!」

友紀 「ダイジョーブダイジョーブ! 生きてる生きてる!! しかしホント参ったなく。  
ウツキー人欠けるだけで、こんなにパワーが上がらないとは…」

リン 「ゲッターのパイロットの意味、身に染みて分かってくれた?」

友紀 「うん! でもまあ、今はやれるだけの事を全力で、やるだけだあ!!」  
体勢を立て直し、新ゲッター3のミサイルサイロを開く。

友紀 「ミサイルストーム、発射あ!!」

ミサイル一斉射による雨あられを、鬼獣王に見舞った。

晴明 「うぐっ……!」

號 「まだあるぜ!」

晴明 「!?!」

號 「ダブル・ナツクルボンバー!!」

ミサイルストームで怯んだ鬼獣王の鳩尾に、ダブル・ナツクルボンバーをお見舞いし、  
ついに鬼獣王を、黒平安京の大地に伏せた。

ウツキ 「……」

ミオ 『なかなかなやるじゃん。新しい世代も』

ウツキ「…しばらくゲッターを任せます」

ミオ『あいよ』

晴明「ぐ……！調子に乗るなよ……！愚かなサル共がアアツ!!」

友紀「うつ……！何……？」

號「奴さん、いよいよマジになりやがったか！」

友紀「…へえ。それじゃあ、追い詰めてはいるってことだ！」

剽「強がっている場合じゃないですよ。新ゲッターのミサイルに、自分達のダブル・ナツクルボンバーでも、ほとんどダメーヅになつてないと見るに……」

リン「ネガティブになつたら、今度はこつちが押し切られる。どんな状況でも、気持ちは強く持つんだ。剽！」

剽「……了解！」

號「へっ！言われなくても、ソードトマホークが折れたって諦めてやらねえよ！」

友紀「人間の底意地の悪さ、晴明の骨身に嫌って程分かせて上げないとね！」

溪「うん？真ゲッターロボが……ウツキさん？」

黒い真ゲッターが、やや鬼獣王よりも上を位置取るように上昇し、フェイスガードのようになつたゲッターの頭部下半分を覆うハッチを開いている。

剽「一体何をするつもりだ？」

號 「いよいよ気でも狂ったってかよ?」

ウツキ 「……」

童子切丸をグツ、と握り締め、

ウツキ 「……はっ!」

宙へと身を投げた。

リン 「……!」

號 「!?」

溪 「嘘お!」

友紀 「ゲッターから飛び降りた!」

剽 「何を考えているんだあ?!」

晴明 「死にに來たかア!!」

逆手に刃を構え、鬼獸王目掛けて落ちるウツキに、鬼獸王の腕が迫る。

晴明 「握りつぶしてくれろッ!!」

號 「させるかよ!!」

晴明 「!?」

ウツキに向かって伸ばされる腕に、スーパーゲッター號が組み付き、全身の力を持って、腕の動きを制する。

晴明 「此奴め……！」

號 「いけえええええ!!シマムラ・ウツキイイイツ!!」

ウツキ 「!!」

空いているもう片方の腕が動く前に、ウツキの小さな体はスツと鬼獸王の懐へと落下。  
下。

その胸の中央部分に、深々と童子切丸を突き立てた。

ウツキ 「……！」

童子切丸から手を離し、再び身を宙へ。落下し行くウツキの体を、真下に回り込んだ黒い真ゲッターが回収する。

號 「すげえ……。あの刀、奴の体を貫きやがったぜ」

晴明 「こんななまくらなど……!蚊に刺されたほどでもない」

ウツキ 「刀の部分を攻撃してください」

號 「何だつて?」

剗 「成る程、あれは蟻の一穴か!」

號 「アリの……いっけつ?」

剗 「そう、千里の堤も蟻の一穴から。どんな堅牢な砦であろうと、些細な綻びから崩れ落ちる!」

號 「成る程、そう言うことかよー」

リン 「友紀、こっちはゲッター1に合体する。急いで！」

友紀 「？ 1号機たって、パイロットがいないよ？」

リン 「操縦は私ができるから。早く分離を!!」

友紀 「そんなに急かして……一体何なんだか。——オープンゲット！」

リン 「チエーンジゲッター、1ツ!!」

號 「行くぜええええッ!!」

組み付いていた腕を蹴り付け、跳躍。上空で新ゲッターが1号に合体する先で、ソードトマホークを構え直したスーパーゲッター號が突貫。

晴明 「思い通りになど……!!」

ウツキ 「今度は、私が相手です」

スーパーゲッター號へと狙いを定めた鬼獣王に、黒い真ゲッターが立ちはだかる。

晴明 「小癩な……!!」

號 「おりゃあああああッ!!」

そしてスーパーゲッター號が、鬼獣王の胸部、童子切丸をその上から、押し潰すようにしてソードトマホークを突き刺した。

ウツキ（有り難う御座います。童子切丸……）





ウヅキ「準備はいいですか？リンちゃん」

リン「当たり前でしょ。ふふっ、こうして並ぶとちよつと不思議な感じがする」

友紀「人間の力に、ダメ押しであろ!!」

ウヅキ「ゲッター……! ビイームツ!!」

ダブルゲッターから放たれる、2筋のゲッタービーム。最大限の力を込めて放たれたビームは、真つ直ぐにソードトマホークの柄尻に直撃。そこから先程のプラズマと同様に刀身を通して鬼獣王の内側で弾け、炸裂していく。

晴明「うおおお……! 忘れぬ……! 決して忘れぬぞ……! この屈辱……! この敗北……! 我は、必ず——!」

プラズマとゲッター線の光に包まれ、消えていく晴明の体。

晴明「おのおおおれええええ——!!」

おぞましくも聞こえる断末魔の叫びを残し、鬼獣王は跡形もなく消滅した。

號「へっ、呆気ねえもんだぜ」

ウヅキ「これで、残るは……」

莉嘉「きやあああああッ!!」

地面に強かに叩き付けられたゲッターアークが、瓦礫を押し退けてゆつくりと身を起こす。

マクドナル「おのれ…！人間共め！よくも晴明様を…ッ!!」

莉嘉「ツイントマホーク！ランサーアーツ!!」

地面を踏み込み跳躍。柄尻を付き合わせたトマホークランサーに、渾身の力を込めて振るう。

マクドナル「そんな情弱な力で！」

莉嘉「くっ！」

マクドナル「滅せよ!!」

ウザーラの龍頭の口から直接放たれた、先程までの落雷型の重力光線とは異なる大口径の破壊光線。ゲッターアークの装甲を焼き、衝撃で再度地面へと叩き伏せる。

莉嘉「ぐう…」

友紀「莉嘉ちゃん!?みんな!!」

剱「流石に分が悪そうだ」

號「おう。早く助けに…」

ウツキ「待って下さい」

號「はあ?!」

ウツキ「今は、まだ」

友紀「今はまだって…」



など、何の意味もない！」

莉嘉「強がりなんかじゃないやい！アタシは、絶対絶対せつたい、アンタに勝つ!!  
そのためにここにいて、ここで戦ってる！」

マクドナル「ほう、ではどうする!?!」

莉嘉「…さあね！」

マクドナル「やはり、策などないではないか！」

莉嘉「そんなの最初からないよ！万策なんて言うほど、頭良くないし！ほんのちよつとの発想と直感！それが1万の作戦の中にない逆転の一手を生むかもよ？」

マクドナル「ほざけえツ!!」

莉嘉「うわ…っ!!」

再び、雨のような重力光線の雷が、ゲッターアークを襲う。

マクドナル「貴様らの滅びは最早変えられぬ!!せめて潔く、散るが良いツ!!」

莉嘉「ぐう…!!」

辛うじてゲッターアークを飛翔させ、重力光線を掻い潜る。

莉嘉「変えられないことなんてあるもんか…!越えられないものなんてあるもんか!  
絶対諦めてなんて、やるもんかアアツ!!」

ミオ『今——』

ウヅキ「……うん」

マクドナル「トドメだあッ!!」

莉嘉「!？」

ウヅキ「——っ!!」

マクドナル「ぬう!？」

百鬼ウザーラとゲッターアークの間に、黒い真ゲッターが割って入り、百鬼ウザーラが放った破壊光線を、トマホークで弾き、彼方へ吹き飛ばす。

マクドナル「貴様……！順番に片付けてやろうと言うに、わざわざ死にに來たか！」

ウヅキ「…莉嘉。いや、アークチーム」

莉嘉「……？」

ウヅキ「受け取って！」

そう言つて、ゲッターアーク目掛けてゲッタービームを放つ。

莉嘉「!!——」

マクドナル「ふははははっ！何をしている？まさか仲間割れか？」

ウヅキ「……」

號「アイツの言う通りだ！味方を攻撃するのに、何の意味があるってんだ?!」

友紀「止めなくて良いの？司令！」

リン「…うん」

友紀「え？」

剽「攻撃、にしては様子が違うようだぞ」

溪「…一体何が起こってるの？」

ウツキ「ゲッター線は、進化を促すエネルギー」

マクドナル「だから、何だと言うのだ？」

ウツキ「怖し、貶し、奪う。貴方達とは違う」

莉嘉「——!!!」

莉嘉（何だろう。スゴく、全身が温かい…。この感じ、スツゴク怒られた後、お姉ちゃんに抱き締められた時に似てる…）

莉嘉（温かくて、懐かしくて、優しい…。ずっとここにいたいって思っちゃう。目の前まで真っ白で、何にもなくて、自分が何なのかも分かんなくなってる…）

莉嘉（でも、ダメなんだ。それは甘えなんだって。そう言うんでしょ？ 大将）

主任「……」

莉嘉「分かってるよ。莉嘉はまだ生きてるもん。だから全力で生き続けて、やれるとこまでやってやる！だから、見てて！」

主任『——』 コクリ

莉嘉「アタシは——!!」

ドワアアアツ

マクドナル「むう!？」

まるで、朝日が上るような光景だった。ゲッターアークを包み込んでいた、黒い真ゲッターロボのゲッタービームの光を呑み込んでいくように広がり、それは一つの光の柱となって天を貫く。

莉嘉「アタシはアタシだ!城ヶ崎莉嘉だ!!」

深く傷付いたゲッターアークに、光が戻る。

マクドナル「所詮こけおどしよ!」

莉嘉「本当にそう見える?」

マクドナル「……!」

莉嘉「正義とか、大義とか、そんなこと分かんない!だけど、アタシはアタシで、アタシには生きていてほしい人が一杯いて、みんなと作りたい未来があるんだ!」

ビシイツと威勢よくを百鬼ウザラを指差す。

莉嘉「それを邪魔しようってアンタが言うから、許せないんだ!!」

マクドナル「遠い未来よりも目先の願望か!」

莉嘉「当たり前じゃん!今を楽しく、幸せに出来ない奴が、1000年先の未来を良く





放つ。

マクドナル「!!」

莉嘉「——!!」

しかし、ゲッターアークをバリアのように覆う高濃度のゲッターエネルギーが、その破壊光線を受け止め、吸収していく。

マクドナル「おのれ……！我が力をも己の力とするつもりか!?ゲッターめ!!」

莉嘉「うううううッ!!」

かな子「すごい……。今のエネルギー量だけでも、真ゲッターの数倍以上……！それなのに、炉心が安定してる！これなら……！」

莉嘉「まだ!!」

かな子「えっ?」

莉嘉「エネルギーがうまく上がらないっ!」

かな子「エネルギーが……?あ……キリク号!」

美波「……っ」

莉嘉「美波、お願い!力を貸して!!」

美波「私……」

莉嘉「やつとここまで来たんだ!ここまで来たんだ!!アタシは、こんなところで終

わりにしたくないっ！」

美波「……」

莉嘉「今ならよく分かる……。美波が感じてる、不安も、恐怖も！だけど、怖がつてるだけじゃ進めないの！塞ぎ込んだら、全部ダメになっちゃう！アタシは、アタシの未来が欲しいの!!」

美波「私は……!」

かな子「……私の知ってる卯月ちゃんが、よく知ってました。ゲッターの力を信じる、つて。ゲッターの存在とか、私が今ここでこうしてる理由とか、確かに分からなくて不安に思うことはたくさんあるかもしれません」

美波「……」

かな子「だけど、何時だってゲッターは、私達が未来を繋ぐ為に力を貸してくれました！だから、あんな一方的で、暴力を押し付けてくる人なんかより、私はゲッターを信じます！」

美波「……っ!」

かな子「私達を信じて下さい、美波さん！」

莉嘉「お願い、美波。戦ってえ!!」

美波「……っ!」



マクドナル「バカな……！こんな力が……！ゲッターアアアア——ツ!!」

百鬼ウザーラを打ち破り、地に咲いた光の華は、世界を照らした。

號「これが、ゲッターロボの力、なのかあ……？」

友紀「キレイ……」

百鬼ウザーラを倒して尚、溢れ返るゲッターのエネルギーは光の柱となり真っ直ぐに天へ延び、地球を汚染するなどと言うことはない。

ミオ『……成ったね』

ウヅキ「……はい」

ミオ『これで、私達の役目ももうすぐ終わりだ』

ウヅキ「でも、油断は出来ませんよ」

ミオ『誰に言ってるの？』

ウヅキ「それもそうですね」

戦いが終わり、息を吐きながら天高く上る光の柱を、モニター越しに掴むかのように手を伸ばす。

ウヅキ「天……それよりも高いところに、まだ——」

つづく

## 第24話『女神の黄昏』

くくく  
???  
くくく

タツタツタツ——

美波「はっ…はっ…はっ…はっ…！」

美波（ここは……—）

美波「はっ…はっ…はっ…はっ…！」

美波（走つても走つても、廃墟が続く…。ここは……！）

美波「はっ…はっ…はっ…はっ…！」

美波（廃墟になった、東京の街…!?)

暗く、重く漂う雲の下、人影もなく、廃墟となった東京の街をひたすら走り続ける。

美波（誰か…誰か…！生き残ってる人は…!）

美波「!？」

走つて、走つて、走り続けて。やがてその目に映ったものは、

美波「アーニヤ…ちゃん…？」

アーニヤ? 「——」

大切な仲間の、無惨な姿。

美波「……いい——」

美波「いやあああああああッ!!」

~~~~~ 寝室 ~~~~~

美波「——はっ!」

美波「はあ…はあ…はあ…はあ……」

美波「今のは……夢……?」

莉嘉「……スピ——」 Z z z ……

かな子「すう…すう……」 Z z z ……

美波「……。莉嘉ちゃん、かな子ちゃん…。私は……」

—— 翌日。

カチャ カチャ カチャ

美世「ん~~~~…つと!これでよしっ!どれどれ……」

カチツ ドルンツ

美世「あはっ♪掛かった掛かった!何とか動きはすると思うけど……」

美波「ありがとうございます。美世さん」

美世「いやいやこのくらい。ホントはこんな間に合わせじゃなくて、ちゃんとしたのに乗ってほしいけどねえ」

美波「…贅沢は、言ってられませんから」

美世「けど、ホントにこれで行くつもり？ 廃車から使えるもんを継ぎ接ぎしただけだから、動作の保証は出来ないよ？ 道中の修理も難しいだろうし…」

美波「そんな、遠くに行こうって言うのじゃないですから。…多分」

美世「ふうん？」

莉嘉「美波く!!」

美波「莉嘉ちゃん、かな子ちゃんも…」

莉嘉「美波……ゼエゼエ……何か、ゼエ……溪達から聞いたんだけど……!」

かな子「莉嘉ちゃん、少し落ち着いて…」

莉嘉「美波が研究所から出ていくって!」

かな子「大袈裟、ですよ？ まさかここでお別れになるわけなんて…」

美波「……」

莉嘉「美波……?」

美波「かな子ちゃんの言う通りだよ。アトランティス流国との戦いも一段落したし、ウザーラもマクドナルも倒した今、私達の世界も救われた筈。ただ、元の世界に帰る方

法もハッキリとしないから、少し気分転換でもしよっかなって」

莉嘉「本当に……？」

かな子「アトランティス流国との戦いが落ち着くまでは、戦闘戦闘で詰めっぱなしでしたから。気持ちは分かりますよ」

莉嘉「だからって、食堂をお菓子で一杯にするなって、リンが怒ってたよ？」

かな子「そ、それは久しぶりだったから、少し張り切りすぎちゃっただけで……」

美世「お陰で3日間、私達まで3食、ご飯の筈が、スイーツパーティーだったけどね？」
かな子「あうう……」

美波「そろそろ行きます。美世さん、ホントにありがとうございました」

美世「私はいって。それよりも気を付けなよ。アトランティスが倒れても、人を襲う小鬼がいなくなった訳じゃないし、巨大昆虫だって」

美波「分かってます。莉嘉ちゃんとかな子ちゃんも、それじゃあ——」
ブロロロロロロ——。

莉嘉「美波、行っちゃった……」

かな子「心配しすぎだつて。直ぐに帰ってきますよ」

莉嘉「……そうだといいいけど」

リン「……」

アキハ「行ってしまったか。引き留めなくて良かったのか？」

リン「言って聞くようならね」

アキハ「黒平安京での戦い、何があったのかは興味もないが、アークチーム的には、なかなか堪えるモノがあったらしいな」

リン「考えてみれば、ゲッターに乗ってさえいなければ、アイドルをやってるだけのただの女子大生だ。あの美波は」

アキハ「あの美波、か。若く、多少頭が回るからこそ、ゲッターと言うものに思うところがあると言うのも、1つや2つではないか」

リン「そんなところでしょ。下手に見知った人がいるところにいるより、誰も知る人いないところで、1人でそつとさせておくのも大人の対応の1つだ」

アキハ「だが、戻ってこないかもしれないぞ？」

リン「その時はその時でしょ。そもそも文字通り、住む世界が違う。莉嘉もかな子も、帰る手段を探し始めてる。何時までも彼女達に甘えてるわけにはいかないよ」

アキハ「その為にも、この真ゲッターロボの調査作業は急務、か」

リン「この間の戦い、孔明が全く姿を現さなかったのも、気になる」

アキハ「後世に名を残す天才軍師、か。確かに、あれがかの有名な伏竜であれば、彼1人の采配で、我々は敗北していたかもしれないな」

リン「孔明と孔明……2人の連係が上手く行ってなさそうなのは、攻めてくるタイミングとかから分かってたよ。けど、今回孔明は、この地球と遙か彼方の宇宙の次元を1つに繋いで、アトランティス流国の大軍をここに呼び寄せようとしていた」

アキハ「連中にとつても大事な作戦を控えた決戦だった、と」

リン「孔明は戦闘を孔明に一任していた。そして負けるだろうことも、恐らくは予測出来ていた筈」

アキハ「では何故、孔明に助けを出さなかったのか。若しくは、孔明を倒させることが、孔明の目的だったか——」

リン「幾度か相対して思ったのは、孔明は味方においても、厄介なタイプだってことだ。薄ら笑いを浮かべて、何を考えているのか、まるで分からない」

アキハ「それで被害が大きくならない内に処分を？しかし、切り捨てるにしても早すぎるだろう。連中にとつては、私達の存在こそが、目下倒すべき目標であった筈だ」

リン「その目標を逸らしても、孔明を討たせる必要があった……？」

アキハ「その意味とは？」

リン「……。分からない。分からないけど、このまま大人しく黙っている必要性も絶対はないよ。必ず、近い内に何か手を打ってくる筈だ」

アキハ「その時に、こいつを使う、と？」

リン「戦力は多いに越したことはないでしょ。ウツキはこれに、乗り続けるつもりらしい。けど、乗ってる最中に1人言を呟いてもいたし、呪いや曰くがないかも、念入りに」

アキハ「オカルト方面は専門外なんだがな」

リン「冗談だよ。私としては、問題なく動くんならそれでいい。ただ、真ゲッターが何故黒くなったのか、そもそもこれは本当に私達の知っている真ゲッターなのか。その辺りがハッキリしないと、私的にも気持ち悪い」

アキハ「その程度ならお安いご用だ。ま、前回の作戦の後処理でもしながら、気ままに待っててくれ」

リン「頼んだよ」 スタスタ――

くくく 廃墟 くくく

ブロロロロロロオオ…

美波（…）

整備もされず、ひび割れた箇所から雑草が除くアスファルトの道の上を、美世にレストアしてもらった軍用車を走らせる。

美波（何処まで進んでも見えてくるのは廃墟、廃墟…。地上で暮らしてる人は、本当

に何処にもいないのかな?)

車を走らせながら、横目で廃墟を見流していく。

美波(10年前のゲッター災害……。それさえなければ、この世界も……)

目の前に広がる惨状をゲッターが作った。そんな思いが内から沸き起こる。

美波(恐竜帝国、百鬼帝国……ランドウは兎も角、皆ゲッターを警戒していた。ゲッターを恐れていた……?そしてマクドナルも言っていた、ゲッターは宇宙を破壊する……)

この廃墟を生んだ実情を考えると、現実味も増してくる。

美波(もし彼らの言う通り、ゲッターが宇宙を滅ぼすんだとしたら……その為に、私達を利用していただけだとしたら……。このままゲッターで戦い続けることが、本当に正しいことなの……?)

「きゃーーーーッ!!誰かーーーーッ!!」

美波「!?」

美波(女の子の、悲鳴……!?研究所や地下居住施設以外に、人が……?)

慌てて車を止め、耳を澄ます。

「いやーーーーッ!!」

美波「やっぱり空耳じゃない……。こつち!?」

車から飛び降り、声の響く方をも止めて、廃墟の路地へと足を踏み入れていった。

美波「はっ…はっ…はっ…はっ…!!」

女の子「い、いや…!!」

鬼「……」

女の子「来ないで…!!」

鬼「ぐわあああああッ!!」

美波「こつちよ!!」

鬼「!?!」

耳から外した護身用イヤリング型爆弾を、女の子を爆風に巻き込まないように鬼の背後やや後方を目掛けて投擲し、爆破させる。

鬼「ぐぎゃ…っ!?!」

女の子「きゃっ…!!」

美波「伏せて!!」

女の子「え…?」

美波「頭を押さえて、しゃがむの!早く、急いで!!」

女の子「……っ!」

美波「よし…!!」

美波に言われるがまま、女の子が頭を抱えてしやがみ込んだのを確認して、美波が腰から抜き放ったのは少し昔のSF映画に出てきそうな、少々安臭いデザインの光線銃。

美波「!!」

ミヨワンミヨワンミヨワンツ

鬼「ぐ……わ、ああ……」

ドロオ……

女の子「ひっ……!」

光線銃の先端から放たれた青白いリング状の光線。それに包み込まれるように受けた鬼はドロドロ口に液化化し、原型を失って一面に散らばった。

美波「……アキハちや……アキハさんから借りた有機細胞分解銃……思った以上に危ないかも」

女の子「……」

美波「君、大丈夫?」

女の子「ひっ……!」

美波「あ、安心して? 私は貴女と同じ人間だよ。ほら、角もないし……さつきはちよつと怖がらせちゃったかもしいけど……」

女の子「……」

美波「えっと…」

美波（気まずい…。そもそもどうしてこんなところに、こんな、小さな子が…）

「あ、いたー！」

美波「え？」

男の子「先生、いたぜー！こっちだよ！！」

「はいはい。大声を出さなくても、聞こえていますよ。何にせよ、無事で何よりでした」
美波（この子と同じくらいの男の子…。それに、先生…：良かった、やっぱり保護者が…）

尼僧「あら？貴女は…」

—— 廃寺。

尼僧「この度は、私共子を助けていただき、有り難う御座いました。旅の御方？」

美波「いえ、私はただ、偶然居合わせただけですから…」

尼僧「それも仏のお導きです。あの子を守って下さるよう。お陰で、命が失われることはなかったのですから」

美波「はあ…」

少年「先生ー！ただいまー！！」

尼僧「はい。おかえりなさい。道中、危ないことはありませんでしたね？」

少年「当たり前だつての！それよりも見てくれよ、これ！」

尼僧「まあ、立派な鮭、ですね？貴方が？」

少年「いいや、俺も手伝ったけどよ、ユカリが釣ったんだぜ！」

尼僧「そうなのですか？」

少女「わ、私はただ、竿を持ってただけで……」

尼僧「謙遜することはありませんよ。ユカリが皆の為に食材集めに走っていたことは、仏様も見ています。その為、微力を貸してくれたのでしよう」

少女「は、はい……！」

尼僧「しつかりと、感謝して食すのですよ」

少女「うん……！」

少年「それじゃあ行こうぜ！先生後でな！」

尼僧「はい。また」

タツタツタツ——

尼僧「皆、元気な子達です。健やかに育つてくれて……」

美波「他にも、たくさん子供達がいいますよね。ここは一体……」

尼僧「……」

美波「あの……」

尼僧「あの子達は、望まれない子、でした」

美波「望まれない、子？」

尼僧「……」コクリ

尼僧「貴女も知っていますね？10年前の災害は」

美波「…は、はい」

尼僧「災害の後、人々の暮らしは荒れ、人心も荒みました」

美波「……」

尼僧「未来に展望が持てず、現実から目を背け、一時の快樂に身を任せた者達が何人も、何人もいたのです…」

美波「それって…」

尼僧「誰も悪くありません。いたとしても、誰も責めることなど出来ません。ですが実際に、生まれ落ちてしまった命はあるのです」

美波「それが、あの子達…」

尼僧「親となる者達からは愛されず、愛を知らず…。忌み子の様に嫌われ、疎まれる日々を送り、生まれ落ちたことに意味がある筈なのに、救われないなどと言うことがあつて、良いのでしょうか？」

美波（研究所にいた孤児達も、きっと…）

美波「それで、そう言った子供達を保護してるんですね？…まだ、お若く見えるのに…」

尼僧「…はい。私自身、まだまだ修行中の身であることは自覚していますが」

美波「そんな事…！ここにいる子供達は、みんな幸せそう暮らしてるじゃないですか！貴女がここにいる子供達から先生と慕われているのは、そう言う意味だと思います！」

尼僧「ふふふつ、有り難う御座います。私も、そうであると、信じています」

美波「先生…」

尼僧「目の前にある、手を差し伸べられる命を、無下にはしない」

美波「え？」

尼僧「昔、ある人にそう教えてもらいましたから。未熟だからと、見て見ぬ振りをするのは違う。そう思ったのです」

美波「手を、差し伸べられる、命…」

尼僧「はい」

美波「あの、私にも手伝えること…！何か、何かありませんか？」

尼僧「え？ですが、貴女は…」

美波「急いでる旅じゃありません！それに、ここでこうして出会えたのも、何か意味

があると思うんです！」

尼僧「意味、ですか……分かりました。食堂へ案内します。そろそろ夕げの時間ですからね。子供達に、何か振る舞って上げて下さい」

美波「は、はいっ……！」

――。

男の子「うめえ……!!」

美波「本当？ありがとうございます」

男の子「ホントホント！な、ミユキ？」

女の子「う、うん……」

男の子「先生が作ってくれるのより上手いよ！」

美波「ええ!!」

女の子「そっか。じゃあ後で先生に言っとくね」

男の子「え?!そ、それはやめてくれよ!そう言う意味じゃなくてさ……!!」

美波「じゃあどういう意味？」

男の子「それは、そのう……」

美波「ん？」

男の子「……／／」カアッ

少年「赤くなつてら」

美波「あははっ♪」

男の子「もう、からかわないでくれよお!!」

美波「ふふっ。何だか、本当の家族みたいね？」

少女「先生のお陰です」

美波「先生の…」

女の子「先生に助けてもらわなかったら、今頃…」

少女「今はまだ、あちこちに鬼もいて、大変な世の中だけど、私みんなとなら絶対にずつと一緒いられるって、そう思ってるんです。それで、いつか本当の家族に…」

美波「……」

少女「あつ、今は…」

美波「いい夢だよ。こんな世界なんでもん。絶対幸せにならなきゃ、ね？」

少女「…はいっ!」

少年「よくし、そろそろ火い消して寝るぞ。あんまり火を点けて夜更かししてると、鬼が寄ってくるって先生に怒られちゃう」

美波「そう言えば、その先生は…」

少年「あゝ、多分墓参り」

美波「墓参り？それって先生が大切って言ってる人の……」

少年「うん。でもその人の分だけじゃなくて、一杯なんだって」

美波「一杯？」

少女「先生、私達と暮らす前は、僧侶として、10年前に亡くなった日本中の人達の供養をしてたそうなの」

美波「日本中の……!？」

少年「何か申し訳ねえよな。俺達がいなきや、先生もやりたいことやれるのかも、とかさ」

美波「そんなこと……先生、みんなと一緒に今の暮らしが幸せで楽しいって言ってたから、貴方達が気にすることじゃないよ！」

少女「でも……」

美波「ほら、暗い顔してたら、先生も心配しちゃうから！貴方達と一緒にいることが、今の先生が一番やりたいことなんだよ。だから、ね？」

女の子「うん……!」

美波「それにしても、日本を供養して歩くなんて、並大抵の覚悟で出来ることじゃない。先生、昔は何をしてたんだろう……」

男の子「あ、俺聞いたことあるー!」

美波「え？」

男の子「何か、あいどる、つて仕事？してたらしいぜ」

美波「アイドル……」

女の子「うん……。お歌もスゴく上手なんだよ。夜は怖いから、何時も子守唄を歌つてもらうんだけど……」

美波「そんな人が、どうして尼になつて供養なんて……」

少女「罪滅ぼしつて、言つてた……」

美波「罪滅ぼし……」

美波「先生、顔付きとか身のこなしから見ても、年齢はリン司令と同じくらい……。それに、あの目、何処かで……」

美波「まさか、ね——」

—— 廃寺、裏庭、石碑前。

尼僧「今日は、不思議な出逢いがありました。貴方を失つて、10年になつたこの年に、こんな……。これも仏のお導き？それとも……ミナミ——」

——。

~~~~~ 早朝 早乙女研究所 格納庫 ~~~~~

ザワザワザワザワ……

アキハ「ん……？」

リン「……」

アキハ「これはこれは司令官殿。こんな時間に格納庫とは、何か入り用かな？」

リン「真ゲッターの調査報告書の提出は、今日の日暮れまでに、つて話だった筈だけど？」

アキハ「そうだったか？……だとしても、簡単には行かないが」

リン「簡単には、行かない？」

アキハ「装甲を一枚裏返せば裏返すほど、コードの1つ、配線を巡る度に、新たな興味湧いてくる！これほどのモノ、一両日中に報告書をまとめろなど、それこそ不可能の所業だ!!」

リン「つまり？これは私達の知る真ゲッターじゃないと？」

アキハ「違うな。これは、真ゲッターロボが建造された当時、残された真ゲッターの開発資料だ。ここに残されている開発資料の型番と、真ゲッターに使われている部品の一部が一致した。これは紛れもなく、ここで建造された真ゲッターだ」

リン「なら、興味が尽きないって言うのは？」

アキハ「変質しているのだよ。全ての物質が、著しく！進化と言ってもいい！これは、ここで開発された真ゲッターでありながら、その枠を越えたゲッターと言っても過言で

はない!!」

リン「進化…」

アキハ「そうだ、進化だ。ゲッター自身が、己自身をも取り込み、完成された個として存在している」

リン「つまり？」

アキハ「ゲットマシンへの分離は、最早不可能だろうな。互いに同化し合い、分離しようにも出来ない状態にある。その分、耐久性など、一部の性能は向上している」

リン「ゲッター1以外の形態へは？」

アキハ「分からね。が、今のところ変形は出来ないと見ていいだろう。第一、1号機以外はコックピットも潰れてしまっているんだ。変形出来たとして、どうコントロールする？」

リン「実質は、単独操縦のゲッターと一緒か…」

アキハ「だが、能力はそれを補ってあまりあるものだぞ！まるで、予めそうある為に存在していたかのように！」

リン「そうある為に…？けど、ゲッターロボは…」

アキハ「3人のパイロットが乗り込んでからはじめて真価を發揮する。しかし、それ自体がまどろっこしいと思わないか？」



リン「……」

アキハ「3人のパイロット、そう言えば簡単に聞こえるが実際にはそうじゃない。乗り込んだ3人のシンクロニシティ……精神レベルまでの完全な同調こそが力となる。その前提そのものが、兵器として不合理すぎたのだ」

リン「このゲッターは、そうじゃない？」

アキハ「そう、だからこそ興味深い！これまでのゲッターとは？このゲッターが生まれた意味とは？私達を持つゲッターロボの概念がまた、覆ろうとしている!!」

リン「……何でもいいよ。この黒い真ゲッターは……」

アキハ「!! それについてもだ」

リン「え？」

アキハ「黒い真ゲッターと言うのも芸がないと思わないか？コイツは最早、真ゲッターとは別種のゲッターロボ。我々には新ゲッターもあることだし、何か新しい名前を付けてやりたいところだ」

リン「はあ……名前？」

アキハ「おおい。呼称とは大事なものだぞ。これからもずっと黒い真ゲッターと呼んでいくつもりか？かと言って、ブラック真ゲッターでは安直に過ぎる……。真ゲッターブラック……或いは、ゲッターノワールと言うのも……ん？」

格納庫の隅、ハンガーで整備を受けるゲッターアークが目映る。

アキハ「ゲッターロボ、アークか…」

リン「どうしたの、急に」

アキハ「……確か、アークと言うのは仏教における梵字……大日如来から来ているんだったな」

リン「ああ、前に莉嘉達が、そんな事を言っていた気がするね」

アキハ「大日如来……アーク。…タラーク……真ゲッター・タラクと言うのはどうだろうか？」

リン「たらく？その感じだと、何か仏教の神様に関係ありそうだけど…」

アキハ「ゲッターには似合いの、名前だと思いがな……む？」

ザワザワザワ…

リン「あれは、號？」

號「……」

溪「やめなつて、號……！」

剋「おい、聞いているのか？號!!」

アキハ「どうやらそのようだ、な！」

黒い真ゲッターのコックピットから飛び降り、號の目の前に立つ。

アキハ「どうした、號。バズーカに手榴弾、C4まで……巨大昆虫出現の報は出ていない筈だがな」

號「はっ！害虫駆除には違いねえけどよ。俺ア…」

チャキツ

號「コイツをぶっ壊す!!」

溪「號！」

リン「真ゲッターを？正気？」

號「つたりめーだろ！寧ろ、姐さんの方がどうかしちまつたんじゃあねえのかい？ここにいる奴等も、全員だ！・テメエら、真ゲッターが10年前に何をしたか、忘れた訳じゃねえだろう!!」

整備士s「……」

號「なのにも揃いも揃って、ご丁寧に整備なんかしやがって……こんなものツ!!」  
シユツ

肩に担いだバズーカ砲が火を噴き、放たれた砲弾が黒い真ゲッターの表装で弾け、爆ぜる。

ウワアアアツ!!

剽「……っ！やめろ、號!!」

號 「止めるな、剷！お前だつて知つてゐる筈だ！コイツは残しておいぢやならねえ！コイツは全てを狂わせる悪魔のマシンなんだ!!」

剷 「お前の気持ちは分かる！だがな、ここには整備士がいるし、ガスや液体燃料、可燃性の物質だつてあるんだぞ?!そんな火薬を持ち出して、他に誘爆したらどうする!!」

號 「……チツ！」

「それに、分かつてゐるでしょう?」

號 「!？」

ウヅキ 「そんなもので、真ゲッターは破壊出来ない」

溪 「ウヅキ、さん……!」

號 「……さあ、どうだかな?例えゲッターにとつては鉛弾でも、炉心に直撃させりやあ……」

アキハ 「そうなれば、私達もまとめてみんなお陀仏だ。お前はそれでも良いのか?」

號 「俺アかまやしねえよ。人類を滅ぼし欠けた悪魔を退治したんだ。喜んでお袋達に会いに行ける」

剷 「お前なあ……!」

ウヅキ 「……」

バツ

號 「うん?」

ウヅキ 「真ゲッターは、破壊させません……!」

號 「へえ、そいつはどういう見だい? はじめは、アンタが言い出したことじやなかったか?」

ウヅキ 「分かってます。だけど今は、真ゲッターを破壊させるわけにはいかない……!」  
號 「…そうかい。だったらよ」 チャキキ…

今度は懐から出したハンドガンの銃口を、ウヅキに突き付ける。

溪 「號!」

號 「真ゲッターの後は、アンタをやるつもりだったんだ。どっちから先にやっても、結果は変わらねえ」

溪 「な、何言ってるのよ!? バカな真似はやめなよ、號!」

號 「バカでも何でも結構! 端からそう言う話だったろうがよ」

溪 「けど……ウヅキさんは黒平安京でも一緒に戦った、仲間じゃない! 助けてくれたことだって……!」

號 「仲間だア? はっ、俺は端から、コイツに気を許したつもり何ぞねえよ」

溪 「え……」

號 「清明を打倒する為に、見逃してやっていただけだ! もうそれも終わった。なら、

預けてた命を渡してもらおうぜ…」

ウツキ「……」

溪「本気なの……號！」

號「だがまあ、溪の言う通りだ。アンタに全くの義理がないわけでもねえ。大人しくそこを退いてくれたら、後の始末をどうするか考えてやる」

ウツキ「……」

號「さっさと退けって言ってるんだ！聞こえねえのか!？」

ウツキ「真ゲッターは壊させない……!」

號「何故だ!?アンタだってコイツに恨みがある筈だ!コイツは存在するだけで人類を、地球を滅亡に導く!機械で象った化け物なんだぞ!？」

ウツキ「それでも、悪魔や化け物の力だったとしても、この先の人類には必要な力なんです!!」

號「ハツキリと言うじゃねえか。晴明以上の敵が、まだ現れるって言うのかよ?」

ウツキ「黒平安京の戦いははじまりに過ぎません。もつと恐ろしい敵が、ここにやってきます」

號「何故そう言い切れる!？」

ウツキ「ゲッターが、真ゲッターがそう言っているんです」

號 「ゲッターが…？はっ、やっぱイカれてやがるぜ、アンタ。マシンが人と喋りするのによ？」

ウヅキ 「口を利けなくても、”理解る”んです」

號 「真ゲッターに乗れば、悟りを開いて万物を理解するとも言いつもりか？」

ウヅキ 「貴方も乗ってみますか？真ゲッターに」

號 「真ゲッターに…」

言われ、思わず真ゲッターを見上げるが、咄嗟に考えを振り払うように頭を強く振る。

號 「そうやって丸め込まれるかよ！そもそも、この先どんな敵が現れようが、俺には俺達のゲッターがある！真ゲッターの出る幕はないぜ」

ウヅキ 「…貴方達のゲッターでは、人類を守りきることは不可能です」

號 「やってやるさ！真ゲッターの力がなくなつたつて、俺達の力だけでやってやる!!」

ウヅキ 「…やっぱり、言葉では分かってくれませんかね」

號 「…これで最後だ。そこを退け」

ウヅキ 「退きません。真ゲッターロボは、守らなくちやなりませんから」

號 「…そうかよ」

溪 「號…やめてえ!!」

號 「っ!!」

パアンツ

アキハ「!!」

リン「!!」

剽「!!」

溪「!!」

ウヅキに向けられ、真つ直ぐに放たれた弾丸。

ウヅキ「ツ——!!」

腰を落として、頭部に向かって放たれた弾丸を往なす。舞った長髪の隙間を弾丸が一直線に駆け抜け、何本かが宙に躍った。

ウヅキ「つ……!」

姿勢を低くしたまま、足元を強く踏み込み疾駆。10メートルもない號との距離を一瞬で詰めた。

號「何…?!」

ウヅキ「はあッ!!」

膝を深く落とし、一瞬で力を込め、真つ直ぐに伸ばす跳躍。その動きに腰と背骨、そして肩肘手首と一直線に連なる部位に渾身の力を込めた掌底を、號の顎に喰らわせた。

號「うぐ……」



脳が揺れ、ふらつきながらも倒れず、何とか持ち堪える。

號 「ぐっ……この女ア……！」

リン 「號」

號 「!? 姐さん……！」

ストーン、と背後から號の首筋に手刀を落とす。

號 「カツ——！」

一瞬の強烈な一撃により、意識を失いかける號。その隙を逃さずに両手を締め上げて拘束し、地面に組み伏せる。

號 「ぐっ……！」

リン 「次はもつと、理性的に立ち回るんだね」

號 「くっ、姐さん！何故だ!？」

リン 「號のとってもはただ憎いだけの相手かもしれないけど、私にとっては大切なチームメンバーの1人だ」

號 「結局それかよ……！見損なつたぜ……くそつ、放せ！放しやがれえ!!」

剗 「代わります」

リン 「剗。頼んだ」

剗 「了解」

號 「剷……！テメエもかよ……！」

剷 「冷静になれ、號。ここで真ゲッターを破壊してどうなる？ウツキさんを殺して、どうなる？お前の手が血で汚れるだけだ」

號 「だからって、コイツらのしてきたことを許せって言うのかよ？」

溪 「簡単じゃないのは、分かるよ。だけど、これから世界を復興させるには、色んな人と手を取り合っていていかなきゃならない。個人の主張とか、執念に拘ってる場合じゃ、ないんだよ」

號 「…クソツ」

リン 「営倉に連れていけ。少し頭を冷やさせろ」

號 「くっ……。俺は、納得した訳じゃねえからな……！」

剷 「號が迷惑を掛けました。自分達もこれで失礼します」

溪 「……」 ペコリ

剷 によって、連行されていく號。

ウツキ 「……」

アキハ 「間一髪のところでは弾は避けたようだが、怪我はないか？」

ウツキ 「特には、少し手首が痛む程度です」

アキハ 「そうか。…今更だが、勘違いしないでやってくれな。アイツは何処までも

真つ直ぐで、そして恐らく、この研究所で誰よりまともだ。人間臭いと言い換えても良い」

ウヅキ「はい。彼の言うことは、間違つてはいませんよ。それに、私ももうすぐ……」

アキハ「もうすぐ？」

リン「ところでウヅキ、さっきの話だけ……」

所員「司令！大変です!!」

リン「!? 何かあった？」

所員「基地のレーダーが、鬼獣らしき反応を捉えたのですが……」

リン「鬼獣？」

アキハ「鬼獣は晴明が召喚する存在だった筈。それがいきなり……妙だな」

リン「さっきウヅキが言っていた恐ろしい敵に関係がある？」

ウヅキ「……いいえ。多分これは……」

莉嘉「リンー！さっき管制室の人が慌てて出てったけど、何かあったのー？」

かな子「まさか、新しい敵が!？」

友紀「こっちは何時でも、スタンバイ出来てるよ！バッチコイ!!」

リン「……。兎に角、私は管制室で情報を整理してくる。ウヅキは……」

ウヅキ「真ゲッターで待機します」

リン「分かった。それじゃ！」  
タツタツタツ——。

——真ゲッター、コックピット。

正面のメインモニターから、メインの下と操縦桿の各サイドにあるサブモニターが点灯し、コックピット内が明るくなる。

アキハ『真ゲッター、タラクの状態はどうか？ウツキ』

ウツキ「…たらく？」

アキハ『そのゲッターの新たな名さ』

ウツキ「そう言えば、新ゲッターなんて皮肉なゲッターもありましたね」

アキハ『整備は一通り済ませてある。黒平安京でいきなり起動した時よりは使いやすい  
くなっている筈だ』

ウツキ「ありがとうございます」

アキハ『気にするな。ただ仕事をしたただけだからな』

ウツキ「アキハちゃんは」

アキハ『ん？』

ウツキ「どうして真ゲッターを直してくれたんですか？」

アキハ『何だ、そんなことか。私にとってはどうでも良いんだ。10年前だ、真ゲッ

ターだと言うのは』

ウヅキ「どうでも良い？」

アキハ『誰を恨もうと何を憎もうと、10年前に私達の大切なモノが奪われたのが事実で、その事実を変えられないんだ』

ウヅキ「…冷たいんですね」

アキハ『人間、そうやって心に整理を付けて生きていくものだ。尤も、今の私も遺された者の使命を果たす為に、生きていけるようなものだかな』

ウヅキ「遺された者の、使命…」

アキハ『お互いに、辛いよな』

ウヅキ「アキハちゃん？」

アキハ『気にするな。ゲットマシンに変形出来ないタラクは、カタパルトから射出される。真上の搬入口を開けるから、そこから出撃してくれ』

ウヅキ「…了解！」

空いた搬入口から、陽光が差し込み、ゲッターを照らし出す。

ウヅキ「真ゲッタータラク、出撃します!!」

シユバツ、と目にも止まらぬ速さで、真ゲッタータラクは飛び立った。

かな子「鬼獣の出現方向、昨日美波さんが向かっていった辺りらしいですけど…」

莉嘉「大丈夫！美波だってゲッターのパイロットだよ？そう簡単にやられたりしないって☆」

かな子「だと良いですけど……イヤな予感がします」

リン『アークチームも出れる？パイロットが1人足りないけど』

かな子「このチームでは初めてですけど、何とかやってみます！」

莉嘉「ウツキー人に無理させるわけにもいかないしね！何時でも出して！」

リン『分かった。無人のキリク号の制御はどっちが？』

かな子「私が担当します！」

リン『分かった。それじゃあ、健闘を祈るよ』

莉嘉「こっちのリンにしてはシユシヨだね？ゲッターアーク、発進!!」

カタパルトから飛び立っていくアークゲットマシン。

友紀「ねえー！何で私は基地待機なのさ!?!」

アキハ「司令命令だ。抑えろ」

友紀「けど……」

アキハ「そもそも、今回は司令自らが管制室の方に行ったんだ。ウツキはタラク、お前1人じゃ新ゲッターは動かせんだろう」

友紀「なら、溪とか剽を乗せれば……」

アキハ「簡単に言うな。ゲッターは3人一組のマシン。チームを組んだこともない即席チームで、そうそう合体を成功させられると思うな」

友紀「むう……！」

アキハ「何、出撃したのは真ゲッターに、それに匹敵する性能を持つゲッターアークだ。それこそ、本物の神か悪魔にでも遭遇せん限り、簡単に負けたりはせんよ」

友紀「……」

美世「……」

茄子「……」

—— 廃寺。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

少女「ひつ……何、あれ……！」

女の子「先生……怖いよ……」

尼僧「……」

美波「そんな……まさか、あれは……!?!」

美波が見上げる彼方に舞い降りる、小山ほどの巨体を持つ、異形の影。その中心部に

は、

美波「安倍晴明?!?!」

晴明 『クツクツクツクツクツ——！』  
つづく



## 第25話『散る命、胸に』

~~~~~ 廃墟群 ~~~~~

晴明ロボ《オオオオオオオオ……!》

美波「安倍晴明……!? どうしてここに……それに、あの姿は……!」

晴明『くつくつくつ……! ゲッターを離れ、この様な所に居ようとはな。新田美波!!』

美波「私を、追ってきたと言うの……?! 私を狙って!」

晴明『くくつ……!』

晴明ロボ中央下部。御者のような鬼が手綱をしならせ、晴明ロボが吠える。その雄叫びに呼応するように動いた触手の1つが、手近な廃墟のビルを破壊する。

破壊されたビルの破片が落下する先は、

子供達「……え?」

尼僧「っ!!」

美波「危ないッ!!」

咄嗟に飛び込んで子供達を抱え上げ間一髪、下敷きになるのは免れる。

女の子「きゃあつ!!」

美波「っ……!!大丈夫?」

女の子「…うん」

美波（今の攻撃、明らかにこの子達を狙ってた…。私じゃなく…!）

美波「どうしてこんな事を!？」

晴明『分からぬか?それこそが貴様の贖いよ!!』

美波「贖い!？」

晴明『そうよ!ゲッターに関わった事を恨み、失意に打ち拉がれて、死ぬッ!!』

無数の触手が波のように押し寄せてくる。

美波「……ッ!!みんな走って…!逃げてっ!!」

少年「う、うわあああああッ!!」

ダ———ッ

美波達の背後に迫る触手の群れ。しかしその触手が実際に触れることは、今の所のない。

晴明『アーヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッ!!良いぞ良いぞ!精々逃げよ、惑え!一時でも余を愉しませてみせよ』

美波（こっちが逃げ惑うのを見て楽しんでるなんて…!）

少女「ねえ、どう言うこと、なんですか？さつきまでの話…。あの人…。鬼と知り合
いななの？」

美波「……」

美波（私のせい…。私のせいなの？私がここにいたから…）

少女「ねえ!!」

尼僧「それ以上、この方を責めてはいけません」

少女「先生……でも」

尼僧「人を憎んでも、過去は変わりません。また、命によつて償われる罪もありませ
ん。今の私達に出来ることは、皆で生き残ることです。違いますか？」

少女「……」

尼僧「…良い子です。ですから、貴女も、自分を責めてはいけませんよ」

美波「……」

尼僧「貴女がここにいたから、貴女にこの子達を任せられるのです」

美波「えっ？」

尼僧「この先を少し行つたところに天然の洞窟があります。シエルターの代わりくら
いにはなる筈ですから。子供達を、頼みます！」

美波「先生!!」

美波に子供達を託し、列から外れていく。

美波「先生、一体何処へ」

男の子「うわっ！」

美波「っ！」

躓き、転びかけた子を、辛うじて手を掴み、引つ張り上げる。

美波「しっかり！」

男の子「う、うん……！」

尼僧に言われた洞窟を目指し、足を止めることなく走り続ける。が、

晴明『どうした？ 足が重くなっているようだぞ？ 追いかけてこも限界かなあ？』

クツクツ……

美波「っ……！」

少年「はあ……はあ……はあ……はあ……！ も、もう駄目だ……。こうなったら、俺が囿に……」

美波「だ、ダメ……！ そんなことしても意味は……！」

少年「けどよ、このままじゃみんな……」

美波「諦めないで！ みんなの先生を信じるの!!」

男の子「そうだよ、兄ちゃん！」

少年「うう……！」

清明『ふんっ、詰まらぬ。では先ず——』
ガンッ

美波「今度は何…!？」

清明の言葉が遮られる。と同時に、背後に迫っていた触手の群れが退いた。清明ロボが怯んだせいでと気付いたのは、数刻遅れた後。

清明『ふうん？ 面白い。余興があつたかあ!!』

そう言つて清明が視線を向ける、その視線の先には、

美波「あれは、…ゲッター紫電!？」

突き出したドリルからは蒸気を上げ、所々が正規品ではないパーツで修復されてこそこそいるが、清明ロボに相對するその姿は、間違いなくゲッター紫電。そして乗り込むのは、
尼僧「……」

美波「まさか、先生が乗っているの？ それじゃあ先生は、本当に…!」

清明「ふふふっ…! 紛い物でさえなく、そのような間に合わせで、この清明を相手にすると言うか!」

尼僧「…いきますッ!!」

シュバッ

清明「身の程を知れッ!!」

それぞれが鋭い槍のように、先端を鋭く尖らせた触手が、ゲッター紫電に向かつていく。

シュンツ

晴明「何…?」

真正面から飛び込んだように見えたゲッター紫電。しかし触手の穂先が届く直前、その姿は消え、

尼僧「……!」

現れたのは背後。

尼僧「千極針ツ!!」

晴明の背後めがけ、ゲッター紫電のドリル、千極針の切っ先を叩き付けるが、

尼僧「ぐっ……!」

千極針が、怪物と化した晴明の背中を貫くことはなく、

晴明『……は』

尼僧「あう!」

纏わり付いた蠅を落とすように、叩き落とされるゲッター紫電。

女の子「先生!!」

美波（やっぱりゲッター紫電じゃ…。先生、それを覚悟で…）

——『目の前にある、手を差し伸べられる命を、無下にはしない』

美波「……」ギョッ……

美波「みんな、足が止まってるよ。急いで」

少年「え……でも」

美波「私達の為に、時間を稼いでくれているの。急いで!!」

少年「う、うん……!」

ダッ——。

尼僧「くっ……!」

晴明「ふん……」

鞭のように振るわれた触手を、再度ゲッター紫電を高速機動させて回避。

晴明『ほう……まだ足掻くか。だが……』

ヒュンッ

尼僧「……!?!」

晴明『動きが止まっているようだぞ?』

尼僧「っ……!!」

ゲッター紫電の足元に向けられた攻撃を、跳ね上がることで辛うじて躲す。

尼僧（……確かに、今のままでは……ですが!）

尼僧「お願いです、保って、下さいっ！」

清明『む……？』

ゲッター紫電の速度が上昇していく。

尼僧「ゲッター影分身!!」

そして無数の分身を作り出し、清明ロボを包囲した。

清明『……愚策を、弄すな!!』

周囲に無数の触手を放ち、分身は掻き消されていく。が、

尼僧「私は、ここです……!」

ゲッター紫電の本体は、太陽を背負い、空中。

尼僧「やあああああッ!!」

ゲッター紫電の渾身の力を込め、千極針を突き立て、清明ロボめがけ加速する。

清明『……ハッ!』ギンッ

尼僧「!？」

清明の赤く染まった眼が怪しく光り、結界のような障壁がゲッター紫電の攻撃を食い止める。

尼僧「くっ……!」

清明『惜しかったなあ?しかし……』

バリバリバリバリイッ

尼僧「きやあぁあッ!!」

結界から千極針を伝いゲッター紫電に電流が奔る。

晴明『この程度ではなア!!』

更に紫炎が噴き上がってゲッター紫電を天高く吹き飛ばし、無造作に地に落とす。

ズウウウ……ン……

尼僧「ぐう……」

晴明『なかなか愉しませてもらったぞ。安心して眠るが良い』

晴明ロボ、晴明が従える魔獣の口が開く。その奥には、淡い紫を湛える怪しげな光が、

その輝きを強めている。

尼僧「私は、まだ……!」

晴明『死ねエ!!』

晴明ロボから放たれた破壊光線が、ゲッター紫電に迫る。

ヒュンッ

尼僧「!! これは……!」

光線がゲッター紫電に直撃しようかと言う寸前、ゲッター紫電の目の前に何か突き

立ち、光線を弾いてゲッター紫電を守る。それは、

尼僧「真ゲッターロボの、トマホーク……！」

ウツキ「無事、みたいですね」

尼僧「ウツキ……!? それと……黒い、真ゲッターロボ……」

ウツキ「お互いに、大分様変わりしましたね」

尼僧「そうみたいです。ですが、今は……！」

ウツキ「はい。死に損ないを、今度こそ……！」

晴明『死に損ないとは随分……。しかし、待ち焦がれていたぞ。おウツキ！ 貴様を地獄への道連れにするのを!!』

ウツキ「勝手にこっちの未来を決めないで。地獄に落ちるなら、一人で落ちろ」

晴明『連れないことを言うな。さあ、黄泉路へ共に旅立とうぞ……!』

ウツキ「人間を捨てて、執念深くなったみたいですね」

莉嘉「ちよ……と待ったあ……!!」

尼僧「え？」

ウツキと晴明、両者の緊張が高まったその合間を、ゲットマシンが駆け抜けていく。

莉嘉「私達も忘れてもらっちゃ困るよ☆」

かな子「莉嘉ちゃん！ キリク号が自動操縦だから、あんまり先行しすぎないで……」

尼僧「そんな……嘘……」

ウヅキ「やっぱりそうなりますよね……」

尼僧「どう言うこと、なんですか……?」

ウヅキ「詳しくは長くなるので……。ただ、私達が知っている人達とは、良く似ている別の人と、そう思ってもらえれば」

尼僧「良く似ている、別の……?……なら!」

かな子「……あのゲッター紫電に似てるゲッター、乗ってるのは……もしかして……」

莉嘉「だとしても、今の晴明の方を何とかしなきゃ!」

かな子「……10年前の災害で、本当に色んな人が人生を狂わせたんだ」

晴明『それもこれも、貴様らが蒔いた種よ』

莉嘉「何!?!」

晴明『ゲッター! 貴様らの存在は、宇宙には不要なのだ!』

莉嘉「そうやって何でもかんでもゲッターのせいにして! そもそもアンタ達が攻撃してこなきゃ、アタシ達も戦ってないっての!」

晴明『果たして、本当にそうかなあ?』

かな子「え……?」

晴明『地球に降り注いだゲッター線が、八虫人類を生んだのだぞ? ゲッターの存在は、戦いと共にある! 貴様らがゲッターと共に生き続ける限り、こう言った破壊は避けられ

ないのだ!!」

言いつつ、廃墟を無造作に破壊する。

尼僧「ゲッターの存在……」

ウツキ「確かに、貴方の言う通りかもしれませんが……」

晴明『フンツ!!』

莉嘉「だからって、そんな逆恨みみたいな屁理屈、聞き入れられる訳ないじゃん!」
かな子「そうです。貴方はただ、体の良い理屈に便乗して、自分の思うがままに暴れたいだけ……。そんなの、ただの我が儘です!!」

晴明「ほう……我を罵るか。この晴明を!」

莉嘉「散々人をバカにしておいて今更何を! 行くよ、かな子!」

かな子「はいっ! キリク号、合体モード!」

莉嘉「チェーミングゲッター! アーック!!」

ゲッターアークに合体し、晴明ロボに対する。

晴明『良かろう。手始めに2号機の乗り手からやるつもりだったが、どちらが先でも

結果は変わらぬ!』

かな子「2号機の乗り手……。まさか美波さん!」

莉嘉「だからこの近辺に現れたって言うの? やることが汚い!」

晴明『ほぎきたければ、好きなだけほぎくが良い!!』
ウツキ「!?」

晴明ロボから放たれた無数の針による攻撃を、各ゲッターはそれぞれバラバラに動いて躲していく。

かな子「っ……! 本当なら、美波さんと連絡を取って合流したいところですけど……」

莉嘉「この攻撃の中じゃ、ユーチョーに乗せてる暇もないよ! それなら……!」
両手にトマホークを構える。

莉嘉「まずはコイツをブツ飛ばす!!」 グンツ

晴明ロボめがけ、突貫。

莉嘉「えいっ!!」

晴明『ハアツ!!』

ズ シ ヤ ア ツ

晴明『!?』

莉嘉「てえええいッ!!」

晴明『くっ……!!』

ゲッターアークの初撃に対して、結界で応じた晴明。しかし、振り下ろしたトマホークはその結界も容易く断ち斬り、すかさず放たれた2撃目のトマホークを飛び退いて躲

す。

莉嘉「逃がすか……！」

清明『この……っ！』

莉嘉「!!」

後退する清明ロボを逃すまいと、真正面から飛び込むゲッターアークに対し、清明ロボは紫炎を放つ。が、ゲッターアークは瞬間移動とも取れる目にも止まらぬ速さで上空に逃れ、攻撃を躲している。

清明『これは……』

かな子「うう……！莉嘉ちゃん、今のは強引すぎじゃ……」

莉嘉「何言ってるの！相手は今までみたいなんじゃないんだよ？これくらい動けなきゃ！」

かな子「そ、それは、そうかもしれないけど……」

清明（これは、思ったよりも面白いことになるやも知れぬぞ……）　クククツ……

清明『……？』

清明が身を振った。その鼻先をヒュンツ、と剣線が抜ける。

ウツキ「貴方の相手は、アークだけじゃありませんよ」

清明『無論、忘れてなどおらぬぞお……。シマムラ・ウツキイイツ!!』

ウツキ「ゲッターサイト！」

ヒュオン、と風切り音を立て、ゲッターサイトを振るう。

ガギンツ

目にも止まらぬ速さで右方向から横撃を仕掛けた真ゲッタータラクの一撃を、清明ロボの巨木のような腕で受け止める。

ウツキ「っ……！」　ギリギリ……ッ

清明『流石の殺気よなあ？ 貴様が何処から来るのか、動きが手に取るように分かるぞ
!!』

ブオンツ、と腕を振るい、真ゲッターを吹き飛ばす。

ウツキ「っ……！」

清明『クッククックッ！』

ウツキ「!？」

体勢を立て直す真ゲッタータラクに追撃を仕掛けるように、清明ロボが放つ無数の光弾による攻撃を掻い潜って躲す。

清明『ヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッ!! 良いぞ良いぞ………んん？』

莉嘉「!!」

清明『ふんツ!!』

莉嘉「ぐう…!!」

真ゲッタータラクを追う清明の背後を取ったゲッターアークを、清明ロボの尻尾が打ち据える。

莉嘉「うう…!!」

清明『どうしたあ？少々熱くなっておるか？城ヶ崎莉嘉』

莉嘉「まだまだあ!!」

かな子「り、莉嘉ちゃん…！今のは避けれない攻撃じゃ…」

莉嘉「うわあアツ!!」

かな子「り、莉嘉ちゃ…：きやあつ!!」

落ち着く間もなく、ゲッターアークは飛び立つ。

莉嘉「やあああああツくくく!!」

バトルショットカッターを展開し、清明ロボに突っ込む。

清明『フフツ…!!』

莉嘉「うあああああアツ!!」

かな子「莉嘉ちゃん、避けて!!」

飛び込むゲッターアークを、清明が陣を張って待ち構える。

清明『破アツ!!』

莉嘉「ぐあっ…!?!」

紫の光波が、ゲッターアークの焼き、地面に叩き付ける。

かな子「きやあっ!?!」

晴明『くつくつくく…! 飛び掛かる野生の獣を狩るのは、容易いもののお?』

莉嘉「うう…」

晴明『フツ!!』

ウヅキ「っ!」

不意を突こうと様子を伺っていた真ゲッタータラクを、紫の雷で迎撃。

晴明『そう焦るでない。順番に始末してくれる』

ウヅキ「……」

かな子「……」

かな子（ゲッターアーク…。1号機のエネルギー出力が異常なくらいに上がってる…

? 莉嘉ちゃんが私の声を聞いてくれないのもこれの…。美波さんが乗っていないせい

?）

莉嘉「ぐっ…! 舐めるなあ…!!」

かな子（美波さんと合流しようにも、今の状態じゃ話を聞いてくれない…。第一、晴

明もきつとそれに気付いてる…。こっちの思う通りにはさせてくれないよね…）

莉嘉「はあ……あッ!!」

シュバツ

かな子「あう…!?!」

晴明『!?!』

ゲッターアークが高速に動く。

晴明『ぐっ…!?!』

瞬間移動のような動き晴明の背後に現れたゲッターアークの蹴りに、晴明の表情が歪む。

莉嘉「!!」 シュンッ

晴明『少し素早くなったようだな…!?!しかし!』

再度反対側の死角に現れたゲッターアークを、蹴り飛ばす。

莉嘉「ぐっ…!?!」

晴明『思考が単調ではなア!!』

かな子（このままじゃ…!?!）

体勢を崩す、ゲッターアークに晴明ロボの魔獣が口を開く。

晴明『滅せよ、ゲッター!!』

莉嘉「……!?!」

かな子「オープンゲット！」

バシユンツ

莉嘉「きやつ！」

清明『むっ?』

強制分離。放たれた魔獣の破壊光線を躲す。

莉嘉「う……ん……?あれ、かな子?」

かな子「(分離させたので正気に戻った?)…:作戦変更です。ここは、カーンのパワー
でいきます!」

莉嘉「わ、分かった…!」

かな子「チェンジゲッター!カーンツ!!」

ゲッターカーンに変形し、清明ロボと相對する。

清明『ふうん…』

かな子「甘く見ないで下さいね…!」

清明『小娘…。存外に聡いようだな』

かな子「…:何のことでしょう?」

清明『クククウ…ツ!相對したことを後悔しても遅いぞ?』

かな子「!?!」

晴明ロボから放たれた無数の針を、眼前にゲッターバリアを展開して防ぐ。

晴明『……』

かな子「針には針を！お返しです!!——ニードルミサイル!!」

ニードルミサイルを、晴明ロボ目掛け斉射。ほぼ全弾が命中し、爆ぜるも、

晴明『こんなものか？不動明王の名が泣くぞ?』

かな子「……（ミサイルの威力が……。だけど、出力はこつちで抑えなきゃ）」

ウツキ「やあああああッ!!」

晴明『!?!』

ひよい、と軽い身のこなしで、背後から迫った真ゲッタータラクの攻撃を往なす。

晴明『五月蠅いハエだ!!』

ウツキ「くっ……!」

かな子「ウツキさん、カーンの後ろに!」

ウツキ「……っ」

無数に浴びせられる光弾の雨を躲し、ゲッターサイトで弾いて凌ぐ真ゲッタータラクを後退させ、自身が展開するゲッターバリアの範囲に入れ守る。

晴明『む……』

かな子「大丈夫ですか?」

ウヅキ「…大した損傷はありません」

かな子「でしたら、ゲッターカーンが援護します。ウヅキさんは隙を突いて、接近して下さい！」

ウヅキ「…了解」

かな子「お願いします。後そちらの…えーっと、ゲッター紫電は動きますか？」

尼僧「ええ…。損傷はありますが、行動に問題はありません。まだ戦えます！」

かな子「分かりました。それなら無理はせず、カーンの所に。ゲッター紫電なら、後方支援でも戦える筈です！」

尼僧「承りました。ただ一点だけ」

かな子「何ですか？」

尼僧「彼方の山には、攻撃の手を近付けさせたくないのです」

莉嘉「何で？」

尼僧「私の連れの者がそちらに避難しています」

かな子「（と言うことは美波さんもその辺りに…？）…分かりました、戦線を反対方向に移しましょう。ただし晴明には気取られないように、慎重に！」

尼僧「ええ！」

かな子「行きますよ…！ミサイルスパイラル!!」

尼僧「蛇旋光!!」

ミサイルの一斉射と蛇旋光を同時に、晴明ロボに放つ。

晴明『ぐっ…!?!』

ウツキ「はっ——!!」

晴明『ぬう…!』

ウツキ「ダブル・トマホオオークツ!!」

ガギンツ

ゲッターサイトに代わり、新たに取り出した2本のトマホークを大きく振りかぶって

晴明ロボに振り下ろす。

晴明『粹がるなよ、小娘共オ…!!』

致命傷にはならないものの、晴明が憎々しげに叫ぶ。

ウツキ「トマホーク、ブーメランツ!!」

晴明『ちいッ!!』

投射されたトマホークを、触手で払い落とすも、その直ぐ後に、真ゲッタータラクが肉薄している。

晴明『……!?!』

ウツキ「ゲッターレザー…!」

莉嘉「やった……!」

尼僧「……いえ」

晴明『…フウ』

ウヅキ「……!?!」

真ゲッタータラクの、レザーの刃が晴明の頭部を真つ二つに切り裂こうとした寸前。シユルリ、とタラクの足に巻き付いた触手が、タラクを地面へと引き摺り下ろす。

ウヅキ「……つく!」

晴明『ふん…』

ウヅキ「ガツ…!」

晴明ロボの脚が、真ゲッタータラクをじりじりと踏みつける。

晴明『容易いものよなア? たった一時の好転で、勝てると思ひ込んだのかア? んんく?!』

踏みつける力を強める。真ゲッタータラクの装甲が、軋みを上げた。

ウヅキ「あゝ あ…ッ!」

晴明『くあつはははッ!! このままにじり潰してやるのも面白いが…』

言いつつ脚を離し、即座に蹴り飛ばす。

ウヅキ「つ…!」

廃墟のビルに衝突し、そのまま崩れ落ちる真ゲッタータラク。微動だにしないタラクに、触手の先端を槍のように尖らせた清明ロボが迫る。

かな子「ウツキさん！」

莉嘉「かな子ッ！」

かな子（今のゲッターカーンの攻撃じゃ、清明を止められない……！と言って、最高速度でも守りに入りきれない……。カーンローバー……変形は間に合うの……？）

清明『さあ、黄泉への旅立ちぞ!!』

ウツキ「ぐぐ……つ、まだ……！」

触手が真つ直ぐに、真ゲッタータラクへと伸び、

ガギイン——ッ

美波「……ここが、先生の言っていた……」

少女「避難場所の、洞窟……」

少年「この辺、結構岩盤が厚いみたいなんだ、先生曰く。だから、もしなんかあった時は、ここを使おうって」

美波「そう……」

美波（ゲッターを降りても、戦闘が近くで起こってしまった……。特に今回は私がい
から……）

美波（それ以前にも、ゲッターから離れた莉嘉ちゃんに、卯月ちゃんの時も。美穂ちゃんだって、初めはゲッターに乗ることを拒んでいた筈なのに、最終的には乗り込む道を選んだ…）

美波（戦いから逃れようって言うの、もう虫が良い話なのかもしれない。私達はもう…）

女の子「お姉ちゃん？」

美波「えっ」

男の子「お姉ちゃんも、行くんだよね？」

美波「それは…」

少女「私達を助けに来てくれたゲッター、お姉ちゃんの仲間なんだよね？」

少年「だったら、行った方がいいって。俺達だけなら、きつと何とかなるしさー！」

女の子「それで、その…先生を助けて！私達の先生を！」

美波「…分かった！みんな、ありがとう！」

1つ、例を残し、洞窟を後にし、走る。遠くからは爆音が聞こえる。

美波（戦闘が、大分遠くに…。みんな…！）

廃寺の手前に停めた軍用車に乗り込み、走らせる。

美波（そうよね…。ここまで来たのなら、何れ意味が分かる時が来るかもしれない…）

その為にも、今は莉嘉ちゃん達と生きて、ゲッターの意味を突き止める……!

全長40メートルを超える巨大兵器と怪物の激突。そう時間も掛からない間に、視界に捉えることは出来た。その戦況は、

美波「——!?!」

ゲッター紫電が、串刺しにされていた。

尼僧「……グフツ」

ウツキ「……どうして」

尼僧「どうして? 仲間を助けるのに、理由が必要でしょうか?」

ウツキ「でも、貴女だって、私を恨んでいる筈です。私は貴女の大切な人を……」

尼僧「……昔の話です。この10年、貴女はその罪を命で償おうとはせず、今ここにいます。ならば、貴女はその命を、償いの為に使っているのではないですか?」

ウツキ「仏の道に進むと、そういうのも分かるようになるんですか?」

尼僧「さあ。私も修行中の身ですので。ただ、そうであれば良しと……うつ!」
ウツキ「……!」

ゲッター紫電の体が、突き刺さった触手によってゆっくりと持ち上げられる。

晴明『邪魔ぞ。雑草が』

1本の触手がゲッター紫電の腹部を貫いている。その部分に、更に幾本もの触手を突

き立て、四方に広げ、ズタズタに切り裂いた。

美波「あ……ああ……！」

ウヅキ「……」

美波「先生ツ!!」

残骸と化したゲッター紫電が落下していく中、美波は軍用車を急がせ、速度を加速させた。

清明『はっ！余計な手間を掛けさせおつて……。次は貴様の……』

かな子「うわあああああッ!!」

ゲッターカーンの拳が、清明ロボを吹き飛ばす。

清明『ふん……。温いぞ』

ゲッターカーンの両腕へと触手を伸ばし、拘束。

かな子「……っ！」

こちらの体勢を崩そうとする触手に抗い、

かな子「チェンジ……！カーンローバー!!」

カーンローバーに変形。触手を引きちぎり、回転を加速させていく。

かな子「スパインクラッシュャー!!」

最高速のスパインクラッシュャーで、清明ロボに迫る。も、

晴明『……ふっ』

晴明はそれを、結界で容易く受け止める。

かな子「くっ…?!」

晴明『そんなものかア？ 貴様の攻撃が一番、生つちよろいぞオオツ!!』

紫炎の業火が放たれ、ゲッターカーンが包み込む。

かな子「きゃあっ!!」

その身を灼かれたゲッターカーンが、地面に倒れ伏す。

美波「はっ…! はっ…! はっ…!」

気が付けば車から飛び降り、小高な丘と化した山を、一目散に駆け抜ける。

美波（先生…! 先生…! 先生…!）

高くから廃墟の町を一望し、落下したゲッター紫電の残骸から、目当てのモノを見つけて出し、息が切れるのも関わらず走り抜ける。

美波「先生ッ!!」

辿り着いたのは、ゲッター紫電のコックピットブロック。電子制御が絶たれ、開かなくなったハッチを強引にこじ開け、中に入り込む。

美波「先生!?! しっかりして下さい! 先生!!」

尼僧「——う……あ……」

美波「先生！大丈夫で……」

尼僧「ああ……迎えに来てくれたのですか……？ミナミ……」

美波「!?」

美波（先生……。私を、こっちの世界の“私”と間違えて……）

優しく、美波の頬に手が添えられる。その感触は温かいものではなく、冷たく、頬にはべつとりと血糊が付いて垂れた。

尼僧「けれど……ごめんなさい……。私には、まだ……。生きるべき、理由が……」

頬に添えられた手が、力なく落ちた。ゆつくりと慣性に従って、ぷらぷらと揺れている。

美波「え……あ、先生……」

尼僧「——」

美波「アーニヤちゃん……」

目の前の光景と、かつて悪夢で見た、仲間の無惨な姿が重なる。

美波「……っ!!」 ギリイッ

目の前の命を救えなかつた無念と悲しみ、そして激しい怒りが巻き起こるのは、同時。

美波「何よ……何なのよ……！これ!!」

再び、廃墟の町を走り出す。

美波（ゲッターが勝っても負けても、どっちも地獄じゃない…!）
美波「だったら…!」

己への激しい怒りと、確かな決意を瞳に宿らせ、その行く先は自分のいるべき場所。
清明『ふはははははっ! どうしたどうしたあ?! その鈍重な姿では、舞いも踊れぬかあ?
? 少しはこの清明を愉しませてみせよ…!』

かな子「くう…!」

無数の触手を鞭のようにしならせ、ゲッターカーンを打ち付けている。

莉嘉「全然やられっぱなしじゃん! やる気ないなら、アタシに代わって!」

かな子（…1号機のエネルギーを抑えなので精一杯…。私1人じゃ、莉嘉ちゃんを抑え
きれない…!?)

かな子「何とか、しなくちゃ…!」

ゲッターカーンの懐から縄索を取り出し、水平に打ち払って触手を退ける。

清明『ほう…。まだまだ楽しめるか?』

かな子「はあ…はあ…はあ…!」

美波「かな子ちゃんツ!!」

かな子「美波さん!」

清明『ククツ…! 自ら死地に飛び込むとは…面白いつ!!』

シユツ

美波「きやあつ!!」

清明が放った1本の触手が、美波の足元の大地を掬い上げ、その身を宙に打ち上げる。

清明『2人の目の前で八つ裂きにしてやろうツ!!』

莉嘉「やめてえええ!!」

ウヅキ「ゲッタービームツ!!」

清明『!?!』

美波に注意が逸れた清明の横つ腹を、真ゲッタータラクのゲッタービームが狙い撃つ。
つ。

ウヅキ「まだ……終わつた訳じゃないですよ……!」

清明『貴様……っ!』

かな子「はあ……っ」

莉嘉「一安心じゃないよ!早く美波を助けなきや!」

かな子「は、はいっ!オープンゲッター!!」

ゲッターを分離させ、2号機は宙を舞う、美波の元に向かう。

かな子「掴まって下さい!美波さん!!」

美波「!!」

飛んできたキリク号のキャノピーの縁にしがみつぎ、風圧に耐えながらハッチの開閉スイッチを目指す。

美波「くっ……ぐうう……んっ！」

美波（こんな、所で……！こんな所で！）

美波「死んでたまるか……っ！」

スイッチに指を引つ掻け、ハッチを開ける。そして半ば身を投げ出すように、コックピットに飛び込んだ。

美波「はぁ……はぁ……はぁ……！」

莉嘉「おつかえりー☆美波？ー人旅は楽しかった？」

美波「……最悪だよ」

莉嘉「え……」

かな子「美波さん……」

美波「かな子ちゃん、私は大丈夫だよ。大丈夫、だから……」

かな子「本当、ですか？」

美波「うん、本当に」

美波「どっちに進んでも地獄なら、自分の意思を通せる方に進むだけだから……」
ボソッ

かな子「えっ?」

美波「何でもない!」

莉嘉「それよりも、3人揃えばこっちのモンだ!ゲッターアークで一気に決めちゃおうよ!」

美波「待つて!最初は、私にやらせてくれない?」

莉嘉「へえ?何か、いきなりやる気じゃん!」

美波「ええ…。あの晴明のにやけ面を、正面から殴ってやらないと気が済まないの!!」

莉嘉「そう言うことなら全然オツケー☆いくよ、かな子!」

かな子「はいっ!」

キリク号を先頭に加速。次々に押し寄せる晴明ロボの触手攻撃を掻い潜り、隙を窺う。

晴明『…チツ』

莉嘉「ゲットマシンだからって、簡単に落とせると思わないでよね!」

かな子「そこです!」

正面に現れた触手を機首のレーザーで焼き払い、空間に一瞬の隙を作る。その間を駆け抜けながらカーン号とアーク号が合体し、

かな子「美波さん!」

美波「ええ!!」

キリク号とドツキング。同時に網のようになった触手に包み込まれるが、

美波「チエーンジゲッターキリク!!」

次の瞬間には合体したゲッターキリクが、包んだ触手を切り刻んで、宙に躍り出る。

晴明『しかし、ただ動きが速いだけでは、……!!?』

晴明ロボを中心に、円を描く形で加速していたゲッターキリクの姿が、晴明の視界から消える。

晴明『消えた……?』

意識を周囲に飛ばし、気配を探る。

晴明『上か!?!』

見上げる頭上。しかし天上には落ちかけた太陽以外姿がなく、

美波「——うおおおおおッ!!」

ゲッターキリクが飛び込んできたのは、正面。

晴明『ぬう……!?!』

美波「ドリル……! パンチッ!!」

本当にストリート・パンチを打ち出すような動作で、右のドリルアームを晴明の眼前めがけ撃ち飛ばす。

清明『っ…!!?くううく…!!』

咄嗟に、清明ロボの腕を齧り直撃は避けるもの、防いだ手の平に深々と突き刺さったドリルの先端が、清明の鼻先に触れる。

清明『おのれえ…!!』

美波「まだ！」

清明が目の前のドリルに気を取られている間にも、ゲッターキリクは接近しており、美波「シザーアーム！」

巨大なハサミのように変形した左の腕、シザーアームで清明ロボの腕を鋏み込み、

美波「スラーツシユ!!」

その巨腕を切断。赤黒い血飛沫が、辺り一帯に噴き出す。

莉嘉「やり☆」

かな子（…莉嘉ちゃん程じゃないけど、2号機の出力も上がってる…。美波さんが迷いを断ち切ったって言うのも、間違いじゃないみたい）

かな子「だったら、私も…!!」

グンツ

美波「!!」

清明『調子に乗るなよ…!!小娘如きがア!!』

至近距離のゲッターキリクに、無数の針を飛ばすも、その針が貫いたキリクさえ、霞の如く消え去る残像で。

清明『くそっ……！何処へ消えたと言うのだ!?!』

ウツキ「翻弄されてますね」

清明『黙れッ!!おのれ……!この清明を謀ろうとは……!!』

美波（何……?急にゲッターの動きが良くなった……。まるで本当の私の手足みたいに、思うように動く!）

かな子「美波さん」

美波「かな子ちゃん?」

かな子「思う通りに戦って下さい!ゲッターは、必ず力になってくれます!」

美波「……うん!」

莉嘉「何だか良く分からないけど、やっちゃえ☆」

美波「安倍清明ッ!!」

清明『!?!』

美波「己の思うままに生き、思うように血肉を啜り!己の快楽を満たす為だけに争いを生み他者を虐げる愚か者!!」

清明『貴様……!この清明を愚弄するか!!』

美波「命を軽んじ、命を命と厭わない、その所業！その横暴！貴方は最早清明ではなく、清明を語る悪鬼羅刹！！」

清明『はっ！弱者の命がどうしたと言うのだ？寧ろ混沌迷原罪の理から解放してやったのだぞ？この清明の業こそが、正しき救済だと言えよう？』

美波「死による救済…。それは確かにあるかもしれない…。けど！貴方がやっているのは救済なんかじゃない！！貴方がこれまでした事は、これからしようとした事は、決して許しはしません！！」

清明『だからどうした？この清明、貴様らに裁かれる謂われなどないわ！』

美波「だから、あの世で裁きを受けるんです…。！」

清明（今度こそ上か…。！）

美波「あの世の閻魔の元で…。！現世から旅立つて！」

清明『ほざいたな！消えるのは貴様らだ、ゲッターロボ！！』

清明ロボの魔獣の口から破壊光線が放たれ、ゲッターキリクを撃つ。

清明『ふひやひやひやひやひやひやッ！！ゲッターと共に、黄泉路へと消え去るが良いッ！！』

高らかに勝鬨を上げるように吠える清明。しかし、ゲッターキリクへ直撃したかのように見える攻撃は、キリクのドリルによって受け止められていた。

美波（こんなもので……!）

晴明ロボの破壊光線を受けても尚、欠けず、砕けず。ゲッターキリクのドリルは、回り続ける。

晴明『むっ……!?!』

破壊光線を穿ち、払い、ゲッターキリクは光線の中を真っ直ぐに加速していく。

美波「ドリル——!」

やがてその回転は、破壊光線をも巻き込み、巨大な光の槍となって、魔獣の頭部を貫く。

美波「ストリィイイームツ!!」

晴明ロボを貫いたドリルが、その回転に吸収したエネルギーとゲッターエネルギーを伴い、その名の通りの潮流を生んで、貫いたものを砕き、吹き飛ばした。

晴明『うぎやあああああ……ッ!!』

ゲッター線の光の潮流の中に全てが掻き消え、魔獣が構成していた下半身の大部分を失った晴明ロボは、大きく後退し地に伏せる。

莉嘉「やったく☆」

美波「やった、じゃないよ。これからトドメ、お願いね?」

莉嘉「よおし、まっかせなさい!」

美波「オーブンゲット！」

莉嘉「チエーンジゲッターアーク!!」

ゲッターキリクからゲッターアークへと変形し、真ゲッタータラクの隣で並び立つ。

莉嘉「どう？良かったら最後、一緒に」

ウツキ「…そうですね。私も、清明には恨みがあります」

莉嘉「じゃあ決まり☆」

ウツキ「今度は彷徨わずに逝って下さいね。迷惑ですから」

莉嘉「ダブルツ！」

ウツキ「ゲッター！」

莉嘉・ウツキ「ビィィーームツ!!」

ゲッターアークと真ゲッタータラク。ゲッター2機によるダブルゲッタービームが

清明ロボを包み、蒸発させていく。

清明「くお…!お、おのれえ…この清明も、ゲッターの前にはここまでと言うこと

かアア…?」

ウツキ「……」

清明「ふっ…!くくくっ…う!真に、残念ぞ?シママラ・ウツキ、城ヶ崎莉嘉あ…!」

莉嘉「な、何アイツ…。いきなり…!」

叫び、右手に構えるのは、逆手に握った小太刀。

孔明「フグツ!!」

その小太刀を、有らん限りの力を込めて、自らの心臓部へと突き立てた。

突き刺された切り口から小太刀の刃、柄を伝い、血が雫となって陣に落ちると共に、陣の輝きが一層強さを増していく。

孔明「この孔明の命を以て、救いを求め、仕りまする……!」

孔明「神風よ……お!!」

力尽き、倒れ込んだ孔明。陣の赤黒い光りが、孔明の遺体を包み込むようにその輝きを強めそして――。

――。

くくく 廃寺 石碑前 くくく

少年・少女「s」「……」

美波「みんな、その……ごめんなさい」

少年「どうして姉ちゃんが謝るんだよ?」

美波「それは……だって……」

少年「戦いに行ったのは先生なんだぜ?」

男の子「うん……! 僕達を守るために、一生懸命……戦ってくれたんだ……グスツ」

少年「バカ……！泣いてんじやねえ！泣いちまったら、先生が心配して、成仏出来ねえだろうが……！」

美波「……」

かな子「えっと、貴方達は、これから……」

少女「ここを離れようと思います」

美波「え……？」

少女「鬼も巨大昆虫も少ない、安全な場所だけど、先生との思い出も一杯ある場所だから……。それに……」

かな子「それに？」

女の子「先生が中断していたこと、私達でやり遂げようって思ったんです」

美波「中断していた……。ゲッター災害の被害者の供養……」

男の子「それが僕達に出来る、先生への手向けになると思うから」

美波「そっか、そうだね」

莉嘉「うくん……。でも、子供達で歩き回るのは危なくない？」

かな子「そうですね……。せめてあのゲッターが直せれば……」

莉嘉「さっきの戦闘で壊れちゃった、ゲッター紫電？」

美波「それなら、研究所でなら直せるんじゃない？」

莉嘉「確かに！」

少年「本当か？良いのか？」

美波「ええ。当然だよ」

少年「そっかあ……。やった！」

少女「先生の形見だもんね。私達にとっては」

莉嘉「そうと決まれば善は急げだ！研究所に帰ろ！」

かな子「あ、ウツキさん」

ウツキ「……」

かな子「真ゲッター……タラクの調子はどうですか？」

ウツキ「起動に問題はありません。……真ゲッターには、簡易ながら自己修復機能があ
るので」

かな子「そう言えばそうでしたね……」

ウツキ「……それよりも」

かな子「はい？」

ウツキ「研究所と連絡が取れなくなりました」

莉嘉「えー!？」

美波「本当、なの？」

ウヅキ「はい。こちらの通信機に問題はありません。向こうの方でトラブルなのか、それとも…」

莉嘉「それってヤバくない?！」

かな子「ヤバいはヤバいですね…！」

美波「まさか、これが孔明の策…?」

莉嘉「アタシ達を誘き出す為に!？」

ウヅキ「分かりません。…だけど、まずは私達で、様子を見に行くべきでしょう」

美波「…あ」

少年「へへっ、俺達の事なら心配しないでくれ。ここらの土地勘はあるし、鬼や昆虫ぐらいなら、俺達だけでも逃げられる」

美波「うん…!それじゃあ、ちよつとだけ待ってもらえるかな?必ず戻ってくるから」

男の子「うん!いつてらっしやい!」

女の子「いつてらっしやい」

少女「気を付けて…」

美波「うんっ。莉嘉ちゃん、かな子ちゃん!」

かな子「はいっ!」

莉嘉「鬼が出るか蛇が出るか、早乙女研究所に帰還だあゝつ☆」

第26話 『真竜がいく』

——ここは、火山島。かつてゲッターGが邪真ドラゴンとして覚醒し、真ゲッターをはじめとするゲッター軍団の活躍によって再び眠りに着き、再度真ドラゴンとしての正しき覚醒を待っている場所。

休眠状態となった真ドラゴンが放つ膨大なゲッター線に誘われ、常に無数のインベーターが波のように押し寄せるこの島で、真ドラゴンを守る為にインベーターの群れにたつた1機で果敢に挑む影があつた。それこそ、

李衣菜「ゲッターアアアーバトルツ!!ウイイイングツ!!」

我らが、真ゲッターロボ。

李衣菜「うう…!!りやあああああッ!!」

真ゲッター1の全身を捻らせて錐揉み回転。ゲッターバトルウイングから真空波を断続的に放ち、インベーターの群れを切り刻みながら吹き飛ばしていく。

奈緒「まったく!知性がないからって、毎日毎日懲りもせず!」

加蓮「けど良いんじゃない?お陰で対策を考える必要もなくて、リーナでも余裕

じゃん」

李衣菜「ちよつと！何かバカにされてない!?こつちだつてえ!!」

長大なトマホークを構え、振り回した風圧でインベーターの体勢を崩し、

李衣菜「ちやんと考えて戦つてるつもりだけど!」

トマホークの刃で斬り、穂先のランサーで貫きながら、次々に粉碎していった。

李衣菜「ふう…」

奈緒「ま、この1ヶ月くらいで、大分上達したよな。あたしら」

加蓮「そりゃあ、ご飯食べる時と寝る時以外、ほとんど戦つてばつかなら、操縦も上手くなるつて」

李衣菜「1ヶ月か…。もうそんなになるんだ」

奈緒「なあ。寝て飯食つて戦闘して。サラリーマンの方がもつとまともな生活してるつて」

加蓮「ねえ、せめてちよつとでもいいから、シャワー浴びたいわ」

奈緒「今のあたしら、絶対アイドルじゃないよな」

李衣菜「絶対アイドルじゃないね」

李衣菜・奈緒「にへへへへ…!」

加蓮「絶対にファンに見せられないカツコで何笑い合つてんだか」ハア…

ピピツ　ピピツ　ピピツ

李衣菜「……ん？この反応……」

奈緒「インベーター!?またかよ!」

加蓮「……確かに。これまでこの短いスパンで襲撃してきたことはなかった。多少は戦法を変えてきたって感じ?」

奈緒「勘弁してくれ!一息入れる間もないのかよ……」

李衣菜「言っても仕方ないよ。とにかく、真ドラゴンを倒されるわけにも、奴らの巢にさせる訳にもいかないんだ!」

加蓮「……で?その眠り姫様は、何時目覚めるって?」

李衣菜「それは……」

奈緒「風呂入れてないからってやつかむなよ。真ドラゴンとか、そう言うのは兎も角、あの中にいる凜はどうする?誰が守ってやる?」

加蓮「……」

奈緒「だから、凜に貸しを作ってやるつもりでやってやれ。あたしは、それで納得してる!」

加蓮「……まったく。ポテトセットだけじゃ済ませてやらないんだから!」

李衣菜「覚悟は出来た?なら行くよ!奈緒、加蓮!!」

真ゲッター1が再度襲来したインベーターの群れに飛び立つ。

李衣菜「ゲッターレザー！」

両腕のレザブレードを反り立たせ、拳を打ち出す構えで振りかぶる。

李衣菜「っ……!しやあッ!!」

勢いよく腕を振るい、1体のインベーターを斬り断つ。

李衣菜「よしっ、この調子で……!」

加蓮「……っ?!リーナ、足元!」

李衣菜「え?」

襲来したインベーターに応じる為、空中に立つ真ゲッター1。その遥か下方、地中深くから伸びた1本の触手が、真ゲッター1の足に絡み付く。

李衣菜「これ……っ!」

勢いよく、地面に叩き付けられる真ゲッター1。倒れ伏す真ゲッター1の前に、地中から巨大なインベーターが姿を現す。

李衣菜「っ……こいつ、いつの間に……!」

奈緒「ここは高濃度ゲッター線地帯だ。仕留め損なつたインベーターは、時間が経てば復活するぞ!」

李衣菜「向こうにとつても有利なフィールドってこと……?い……っ!?!」

インベーター《!!!》

インベーターの口部から放たれた槍のように尖鋭な舌による一撃を、

李衣菜「オープンゲット！」

真ゲッターを分離させて回避。

李衣菜「チェンジゲッターーツ!!」

即座に合体。

李衣菜「ダブルトマホーク、ランサアアーツ!!」

巨大なトマホーク、トマホークランサーを振り下ろし、一刀の元、インベーターを斬り伏せた。

李衣菜「ふう…」

加蓮「一息入れない！まだまだインベーターは5万といるんだから」

李衣菜「うへえ…。テンション下げること言わないでよ、加蓮」

奈緒「流石に5万は言いすぎだけどな…。だとしても、この数はいい加減…!」

李衣菜「こつちだってもうお構いなしだ！どつからでもかかって…:…ん?」

加蓮「この反応って…」

真ゲッターが、インベーターと対峙した直後、そのインベーターの群れに対し降り

注いだのは、ミサイルや銃弾の雨霰だ。

奈緒「これは…」

加蓮「キングダム、ロボ・ストーン、テキサスマック…。ステルバー！」

李衣菜「スーパーロボット軍団のみんな！」

ジャック「Hi!リーナ!随分待たせたみたいだな!!」

リンダ「私達も加勢するわ!今の内に体勢を立て直して!」

サム「久々のサプライズだ、出し惜しみすんじやねえぞ、兄貴!」

ボブ「おうよ!加蓮ちゃんにちつとは良いトコ、見せねえとな?」

加蓮「もう充分魅せられたよ、カッコいい!最高!」

ボブ「…:出血大サービスでいくぜえ〜〜ツ!!」

バオツ バオツ バオツ

シュワルツ「熱くなりやがって…。バカ共が」

奈緒「シュワルツもサンキューな。助かったよ」

シュワルツ「ハツ!別にテメエの為なんかじゃねえ。勘違いすんな」

奈緒「あはっ。そう言うことにしといてやるよ」

ジャック「メリー!TargetはNo thank you!敵は向こうから向

かって来る!片っ端から落としてやるぜ!!」

メリー「OK、兄さん。バックアップは任せて!」

ジャック「Macriot. fire!!」
テキサスマックのマックライアットから放たれる大口徑の弾丸が、インベーターの胴体を貫き、吹き飛ばす。

ジャック「Knock out! Ahh!!」

奈緒「嘘だろ…!? 通常兵器は、インベーターに効果ない筈じゃ…」

リンダ「通常兵器じゃないもの。劣化ゲッター線兵装よ」

李衣菜「劣化ゲッター線兵装…?」

ボブ「そ。リーナ達んトコの池袋博士が提唱して開発された、秘密兵器よ!」

李衣菜「私達の? 池袋博士って言う…」

奈緒「晶葉の事だよ」

李衣菜「ああそうだ! 博士くなんて言われても、ピンと来ないね…」

加蓮「一応スゴいらしいよ? 現状ゲッター線研究じゃ、唯一だから」

李衣菜「それもそっか。その晶葉が提唱したとなると…」

メリー「威力はお墨付き。それは今見て、分かってもらえたかしら?」

李衣菜「…だね。こっちもどうかしてられないや」

シユワルツ「こっちの事は良い。テメエらは研究所へ急ぎやがれ!」

李衣菜「へっ、早乙女研究所? 何で、いきなり?」

奈緒「そうだ、こっちは今までずっと、ここで戦ってきたんだぞ？」

サム「おいおい……」

リンダ「その様子じゃ、本当に知らないみたいね……」

加蓮「知らない？何の事……？」

ジャック「池袋博士の予想、的中デース」

ボブ「空、見てみな」

李衣菜「空……？」

促され、見上げた先。ハトやカモメの様にインベーターが空中を泳ぐその向こうには、無限かのように続く青空と、

李衣菜「太陽みたいに、輝く星が……2つ……」

奈緒・加蓮「太陽が2つ!!」

くくく 新早乙女研究所 くくく

李衣菜「はっ……はっ……はっ……はっ……!」

バアンツ

李衣菜「晶葉!!」

晶葉「……来たか」

李衣菜「大変だよ、晶葉！太陽が二つで……空がキレイで、兎に角大変なの！」

晶葉「こちらは重々に承知している。先ずは落ち着け」

李衣菜「え…?」

茜「晶葉さんの思った通りでしたね?流石です!!」

李衣菜「茜…?ってか、飛焰チームのみんなも…」

奈緒「だから、焦んなって言ったる?」

加蓮「ホント、アーニヤも美穂もいるのに…。我らがリーダーながら、恥ずかしい」

美穂「えへへ…」

アーニヤ「けど、これで全員、集合です。アキハ」

晶葉「ああ。天体が大変なのは認識している。我々の方では、数日前からずっとな」

奈緒「数日前…。そんなに経つのか?」

加蓮「それだけ、あたし達が戦闘漬けだったってことでしょ」

李衣菜「違いない。で?何なの晶葉、あれは…」

晶葉「順番に説明する必要があるか…。太陽と共に浮かんでいるように見える恒星、あれは元々、木星と呼ばれていたものだ」

奈緒「木星だつて!」

晶葉「そう。太陽系5番惑星木星。そして今は、膨大なゲッターエネルギーを放出し輝く、ゲッター太陽だ」

加蓮「ゲッター太陽…?」

奈緒「つてことは何か?あの太陽みたいなのが木星で、真ゲッターや、ドラゴンのシャインスパークみたいなのがゲッター線の塊だつてのか?!」

晶葉「理解が早くて助かる。そう言うことだ」

李衣菜「どうしてそんなことに…」

美穂「ステインガーとコーウエンつて人…あの2人だよ」

李衣菜「!?あの人達が…」

晶葉「これは10日前、フランスの月面展望台が捉えた映像だ」

そう言つて、李衣菜達の前の正面モニターに1つの映像を写し出す。

李衣菜「これ…!ゲッタードラゴン…」

晶葉「正確にはメタルビースト・ドラゴンだ。この映像を観測後、木星の恒星化が起こつた」

奈緒「奴ら、木星にドラゴンの炉心をぶつけでもして、木星をゲッター太陽にしたつてのによ…!」

晶葉「少し違うな。木星の周囲にある衛生群それらをぶつけ木星の核爆発を誘発し、そこにゲッター炉心をぶつけることで、ゲッター太陽を誕生させたのだ」

加蓮「御託は良いよ。地球にまで光が届く程の恒星、ゲッター太陽つてことは、イン

ベーダーも呼び込んできちゃうんじゃない？」

奈緒「そうだよ……！今よりもっと多くの、それこそインベーダーの本隊みたいなのが、この地球圏に……！」

李衣菜「そんな……！そうなる前に、ゲッター太陽を何とかしなきゃ!!」

茜「……」

アーニヤ「……」

美穂「……」

李衣菜「……？どうしたの？3人共……」

晶葉「状況は、もっと逼迫している」

李衣菜「え？」

晶葉「木星に属するガレリオ衛星群第3衛星ガニメデ。それが今、木星の衛星軌道から外れ、地球に向かって移動している」

奈緒「なんだって……!?!」

加蓮「まさか、大昔のパニック映画みたいに、地球にぶつける、何て言うんじゃないよね？」

晶葉「その通りだ。現在のガニメデの軌道をシミュレートしたところ、十中八九地球との衝突コースに入る」

李衣菜「それも、ステインガーとコーウエンの2人が…!？」

晶葉「ゲッター太陽…。連中にしてみれば、地球よりも優秀で、恒久的なエネルギーの供給源は確保出来たんだ。人類なんて厄介なおまけ付きの地球は、最早無用の長物なのだろうな」

加蓮「冗談じゃない!連中にとつては手近なガソリンスタンドかもしれないけど、こつちにとつては唯一無二の居住可能惑星だ」

晶葉「そうだ。だからこそ、連中の暴挙を許すわけにはいかん」

奈緒「だからつてどうすんだよ?ガニメデつて言やあ、月よりデカいんだぞ…!」

李衣菜「折角莉嘉達がストーカー01を何とかしてくれたばかりだつてのに…!」
悔しげに右の拳を左の掌に打ち付ける。

茜「悔やんでも仕方ありません!!兎に角目の前に迫ることを何とかしましょう!」

李衣菜「茜の言う通りだ!真ゲッターの力なら…:直ぐに出撃しよう、奈緒、加蓮!!」

晶葉「おいっ、待て!」

ダダー…ッ

晶葉「…まったく、最後まで人の話を聞かない奴らだ…!」

茜「晶葉さん!私達も続きます!」

晶葉「…お前らは知っているだろう?この後、国連軍のリニアレールガンがガニメデ

に対して攻撃を行う。我々が動くのは、その結果を見てからでも遅くはない」

茜 「しかし、何かあつてからでは、間に合いません！」

アーニヤ 「アカネの言う通り、です。地球の、存亡の危機、です」

美穂 「私も、このままじつとしてるなんて出来ないよ！国連軍の作戦の邪魔はしないから、宇宙空間で待機だけでもさせて！」

茜 「行きましょう、アーニヤさん、美穂さん」

アーニヤ 「ダー！」

美穂 「うんっ！」

ダッ

晶葉 「…はあ。朱に交われば、何とやらか。アーニヤはまだしも、美穂までとはな…」
フッ

通信士 「晶葉さん、国防相からご連絡です」

晶葉 「分かった。回してくれ」

受話器を取り、2、3相槌を打って電話を切る。

晶葉 「……」

通信士 「晶葉さん？」

晶葉 「結果オーライか」

通信士「は……？」

晶葉「我々も発つぞ！準備しろ!!」

李衣菜「う……つく……!!」

急上昇で重力圏を抜け、宇宙へと上がる。

李衣菜「……つと、ウツヒョー！何だか体が軽くなったみたい！これが無重力！」

奈緒「なあ、勢いで出てきたのは良いが、ホントに大丈夫か？宇宙戦なんて、誰も経験ないぞ？」

加蓮「それを今ここで言うのはないっしょ、奈緒。それに、地球をどうにかしちゃう隕石が迫ってるんだから、悠長に訓練してる時間なんて、どこにもないじゃん」

奈緒「そりやそうだけどさあ……」

李衣菜「習うより慣れよって！卯月達だって、最初の宇宙戦で、インベーターを倒してるんだ。何とかなる！」

奈緒「その能天気さを、ちよつとでも見習わなきゃならないのか……？」　ハア……

李衣菜「能天気って……」

茜「李衣菜さーん……ッ!!」

加蓮「ゲッター飛焰も来たの？」

アーニヤ「当然、です。この星を守るためのゲッターロボ。リーナ達だけに、無理をさせません！」

美穂「木星とか、月より大きい衛星とか。規模が大きすぎて、よく分かんないけど。でも！やれるだけやってみようよ！力を合わせて！」

奈緒「だな。その為に、ゲッター乗ってるみたいなものだしな！」

晶葉『まったくどいつもこいつも、気の早い連中ばかりだな。ゲッターのパイロットと言うのは』

李衣菜「晶葉！…と、早乙女研究所の管制室じゃ、ない？」

晶葉『ああ。あそこでは衛星通信にも限界があるのでな。衛星軌道上にある、ムーンシャドーへ移動させてもらった』

李衣菜「…むーんしやどー？」

晶葉『対インベーター用に人類が総力を挙げて建造した、衛星前線基地さ。宇宙から飛来したインベーターの動きをいち早くチェックし、世界の各都市に通信を飛ばすことが出来る。今回はガニメデ攻略戦の司令本部として使わせてもらうがな』

奈緒「そんなもんで造られてたのかよ」

晶葉『結果から言わせてもらう』

加蓮「結果？」

晶葉『先頃、国連軍が保有する対インベーダー用決戦兵器“リニアレールガン”によるガニメデ迎撃作戦が展開された。その結果だ』

李衣菜「そんな作戦が展開されてたの!？」

晶葉『しつかりと説明するつもりだったんだがな。お前達はそれを聞かないで、さつさと出撃してしまった』

李衣菜「あはは…」

加蓮「けどそんなの、晶葉がアタシ達に帰投指示を出さない時点で失敗したってことじゃん」

美穂「あ…」

晶葉『…まあ、その通りだ』

茜「やはり、ここからは私達の出番と言うことですね!」

晶葉『今度こそ話を最後まで聞け。ただ失敗したんじゃない。リニアレールガンが放った弾丸が、何者かに撃ち返されたんだ。リニアレールガンは、返ってきた弾丸で撃沈された』

美穂「そんな…!」

アーニヤ「何者か、とは?」

加蓮「そんなの、もう名前を出すまでもない。“例の2人”でしょ」

奈緒 「是が非でも地球を消したいんだな…!」

李衣菜 「けど残念、地球にはまだゲッターロボがいる!」

晶葉 『それは、相手だって承知しているだろうな』

美穂 「私達の攻撃を防ぐための、インベーダーの群れがいるってこと…?」

晶葉 『ああ。それもこれまでに見たこともない数の、インベーダーが観測されたらしい』

アーニャ 「これまでに見たことない…?」

晶葉 『インベーダーを観測した天文台の所員曰く、インベーダーの数が多すぎて、ガニメデの姿を正確に観測出来ない、そうだ』

美穂 「そんな数を…!? 真ゲッターと、ゲッター飛焰だけで…」

晶葉 『いや、お前達だけに無理は背負わせんさ』

茜 「どう言うことですか?」

晶葉 『直に分かる。…ほら、レーダーに見えてきた筈だ』

奈緒 「これって…」

李衣菜 「物凄い数の、ゲッタードラゴン!」

晶葉 『そう。インベーダーとの決戦を想定し、世界各国に生産と配備を急がせていた、量産型ドラゴン軍団だ!!』

弧を描いて視界から消える、地平線の向こう、東西南北四方八方から、無数の量産型ドラゴンが真ゲッターとゲッター飛焰の元を集ってくる。

奈緒「す、凄い数のゲッターだ……！」

晶葉『総数は11, 934機。インベーターの数に対してはまだまだ心許ないが、そこに集ったのは地球の危機を打開するために自ら立ち上がった者達だ。頼りにしてくれ』

伊賀利「李衣菜さん！皆さん!!」

李衣菜「伊賀利さん！もしかしてゲッターD2に乗ってるのが……」

伊賀利「ええ。修理の完了したゲッターD2を自分が受領させていただきました。ドラゴン軍団の戦闘指揮も、自分が一任されています。まだまだ実力不足だとは思いますが……」

李衣菜「心強いよ！伊賀利さんのゲッターD2に、これだけの数の量産型ドラゴンがいれば……！」

晶葉『ガニメデを有視界に捉えるぞ』

李衣菜「あれが……」

地球に迫るガニメデを、肉眼に捉える。

李衣菜「まだ全然小さく見えるけど……距離感狂っちゃうね」

奈緒「そんなことよりもだ、そのガニメデの目の前を霧みたいに黒く覆って見えるのが、インバーダーってことで良いんだよな？」

晶葉『ああ。間違いない』

奈緒「ははっ、目眩がしてきたぜ……」

李衣菜「なら、最大出力のストナーサンシャインで盛大に開戦といきますか？」

晶葉『待て。ストナーサンシャインはギリギリまで使うな』

李衣菜「え？何で……」

晶葉『最大出力のストナーサンシャインは、ガニメデを破壊する最後の手段だ。炉心に掛かる負荷を考えれば、連続使用は許可出来ない』

李衣菜「そんな！卯月の時はそんなこと言ってなかったのに！」

奈緒「そもそも、卯月はそんなストナーサンシャインを連打したりしなかったからな」

李衣菜「うっ……」

加蓮「そもそも、アタシ達はホンモノの真ゲッターのパイロットじゃないしね？」

李衣菜「ひ、人を偽物みたいに言わないでよ！」

茜「兎も角、今回の作戦は具体的に言いますと……」

アーニャ「真ゲッターが直接ガニメデの中に突入、中心に向かって、最大出力のストナーサンシャインを撃って破壊……」

美穂「私達は突入する真ゲッターの護衛と…」

晶葉『突入口の確保。と言ったところだが、忘れるなよ？ガニメデが地球の重力圏に入った時点で、作戦は失敗だ。砕け散った破片が、重力に引かれて地球に落ちるからな』

奈緒「制限時間付きかよ…!」

加蓮「ま、元より悠長にやってる暇も無さそうだけど」

晶葉「作戦名を“天の穹矢作戦”とする。どうだ?』

李衣菜「天の穹矢…」

奈緒「あたしらは星に向かって飛んでいく一本の矢つてところか…」

加蓮「無事に帰れる保証もなしって訳ね?」

李衣菜「勿論、文字通りの矢で終わるつもりはないよ…!私達が、真ゲッターの力でやつてやるんだ!」

奈緒「おう!」

加蓮「負けたらアイドルも夢も、あつたもんじやない。久し振りに、本気を出しますか!」

茜「私達も行きますよ、美穂さん、アーニヤさん!」

アーニヤ「ダー!行きましょう、みんなで地球を、守るんです!」

美穂「負けられない…!必ず、勝たなきゃ…!」

茜 「よし……！」

バンツ、と威勢よく宇宙空間に立ち、ガニメデを指差す。

茜 「世のため人のため！インベーターの野望を打ち砕く、ゲッターロボ飛焰!!この日輪の輝きを恐れぬのなら、掛かってきなさいツ!!」

口上を掲げ、勢いよくガニメデ、そしてインベーターの群れに向かっていく。

伊賀利 「真ゲッターに続け！総員——！」
量産型ドラゴン軍団が身構える。

伊賀利 「——突撃ツ!!」

連合兵 \square s 「「「うおおおおおおおおツ!!」「」」」

そして、戦端が開かれた。

茜 「李衣菜さん！先制攻撃です！ここはゲッタービームで!!」

李衣菜 「いいねえ！任せて!!」

茜 「いきますよ、ゲッター……！」

伊賀利 「先鋒、ゲッターレーザーキャノン構え！目標、正面インベーター群!!」

李衣菜 「…ビームツ!!」

伊賀利 「斉射ツ!!」

真ゲッターとプロト・ゲッターがそれぞれビームを左右に薙ぎ払い、その後を無

数のビームが柱のように伸びてインベーターの群れを穿ち、爆ぜさせる。

奈緒「うひゃあ！は、はじまったあ!!」

李衣菜「よし、このまま勢いにつて、一気に……!」

奈緒「無茶はするなよ?真ゲッターがダメージを受けすぎると、作戦そのものがおじゃんだ!」

李衣菜「出来るだけのことはするよ!こつちだつて新しい武装があるんだ!」

そう言つて、真ゲッターの腕を振る。その手に握られたのは、ライフルよりは小さく、ハンドガンよりは大きい銃器。

李衣菜「ゲッターブラストキャノン!!」

その銃先を、インベーターの方へ向ける。

李衣菜「ジャックとシュワルツ仕込みの射撃センス!喰らつてビビるなあ!!」
ズワツ

銃口からゲッターエネルギーの弾丸が放たれ、インベーターを射貫く。

李衣菜「ウツヒョー!なかなかの威力じゃん!これなら……!」

両手で構えていたブラストキャノンを片手で担い、素早い射線移動で次々にインベーターを射貫いていく。

李衣菜「百発百中!どう?」

加蓮「全く然。敵の数が減つてないんですけど？」

李衣菜「そ、そんなことは……」

加蓮「これじゃあ、ガニメデに着く頃には、重力圏を越えちゃうね」

奈緒「なら、加蓮がやるか？」

加蓮「仕方ない。そう言うのは、ゲッター3の十八番だし。ね？美穂」

美穂「うんっ。今度は私達の番！」

李衣菜「もう、出番がないからって、はしゃいじゃって」

茜「ですが、分かりました！」

李衣菜・茜「オーブンゲッター!!」

伊賀利「各機、ゲットマシンを援護！インベーダーを近付けさせるな！」

李衣菜「ありや？もしかして心配されてる？」

茜「援護は感謝ですが！お手を煩わせるつもりは！」

ギョーンッ

伊賀利「は、速い……!?!」

加蓮・美穂「「チェーンジゲッター3イッ!!」

分離から目にも止まらぬ速さでインベーダーをも攪乱し合体。

連合兵「あれが本当のゲッターパイロットの実力……!」

連合兵2「俺達も負けていられねえぜ！」

加蓮「どう？どっちが多く落とせるか、競争しよつか？」

美穂「えへへ…。遠慮しておきます」

加蓮「なくんだ、残念。なら、一斉に！」

美穂「ミサイルレインツ!!」

加蓮「ミサイルストーム!!」

真ゲッター3のミサイルサイロから、プロト・ゲッター3の全身からミサイルが、手前からインベーターを射貫いて粉碎し、爆破の波を後方まで生んでいく。

通信士「敵損耗率、6%！」

晶葉「っ…！インベーターの層が厚すぎるか…」

晶葉『加蓮、美穂！面の攻撃では、効果が薄い。攻撃を点に集中させるんだ！』

加蓮「ありやりや…。ゲッター3の火力でもほとんど削れないか」

美穂「気合い入れたのに、ちよつと残念…」

アーニャ「大丈夫です。ナオ、ここはワタシ達で！」

奈緒「オツケー！出番終了だ、さっさと代われ、加蓮」

加蓮「や、強引」

美穂「オープンゲッター！」

加蓮「オーブンゲット！」

漫才の分、真ゲッターがやや遅れて分離。しかし合体のタイミングは遅れず、

アーニヤ・奈緒「チエーンジゲッター2ツ!!」

アーニヤ「アーニヤが先行します。着いてきて下さい！」

奈緒「おう、水先案内、任せた！」

アーニヤ「プラズマ・テンペスト！」

プロト・ゲッター2のプラズマ・テンペスト。プラズマを帯びた旋風で、眼前に迫ったインベーターを吹き飛ばし、

アーニヤ「プラズマ……ドリル、アターック!!」

プラズマを纏ったドリルによる突撃で、層となったインベーターの壁を穿つ。

奈緒「あたしもいくぞ……ドリルアームツ!!おらあつ!!」

プロト・ゲッター2の後に真ゲッター2が続き、突破口を押し拡げる。

連合兵「くっ……!真ゲッターとゲッター飛焰だけを突出させていいのか!」

伊賀利「彼女らも歴戦の戦士です!奈緒さん達を信じましょう!」

連合兵2「何、背中は俺達を守ってやりやあい!」

連合兵3「その通りだ!アイツらが活躍するところをただ見てるだけなら、ここまで来た意味がないぜ!!」

伊賀利「皆さんの言う通りです！各機攻撃の手を緩めず、全てのインベーダーを殲滅するつもりで戦って下さい!!」

ピピッ ピピッ

伊賀利「……？何だ、この反応……。これまでのインベーダーより、ずっと速い!? 李衣菜さん——!」

李衣菜「何……?! うわあっ!?」

奈緒「おわっ!」

アーニャ「ナオ!」

突然の衝撃に、真ゲッター2の動きが止まる。

奈緒「こっちは大丈夫! 大した攻撃じゃない」

加蓮「ホント、大した攻撃じゃないんなら、しっかり避けてよねえ」

奈緒「あのなあ……」

茜「しかし! 突撃中の真ゲッター2を捉えて攻撃してくるとは……!」

美穂「……見て、あれ……」

李衣菜「あれは……」

足を止めた真ゲッター2とプロト・ゲッター2の前に姿を現した3体のインベーダー。その姿は、

李衣菜「ゲッターロボ……？」

シルエットそのものはゲッター、真ゲッターロボと酷似している。しかしその表装、何より、全身に不揃いに並ぶ大小様々なオレンジ色の瞳孔似た部位が、それがインベーターであることを実感させた。

晶葉『…恐らく、擬態の一種だろうな』

李衣菜「擬態？」

晶葉『そう。生物界の中には、自身とまったく異なる生物や、天敵に擬態する種も存在するとは聞くが……』

茜「ならば、コイツらも……!？」

アーニヤ「ゲッターと戦うため……ゲッターを倒すために……」

美穂「進化したって言うの……?この姿に……!」

晶葉『そうだな。敢えて名付けるとすれば、インベーター・ゲッターキラーと言ったところか』

奈緒「インベーター、ゲッターキラー……」

キラー1《……》

キラー2《……》

キラー3《……》

加蓮「わざわざ3体分に擬態してくるなんてね。それだけ、アタシ達のゲッターを恐れてるってことでオツケー？」

李衣菜「所詮姿を真似しただけの偽物なんだ…！あんなのに負けてられない！奈緒！」

奈緒「おう、分かってらあ!!」ギユンツ

真ゲッタービジョン。目にも止まらぬ高速機動でキラ2に迫り、ドリルを突き出す。

奈緒「おらあつ!!」

キラ2《——》ヒュンツ

奈緒「なっ…!?消えた…?」

加蓮「奈緒、後ろ！」

奈緒「えっ…」

キラ2《!!》

真ゲッター2の後方、やや上部に姿を現したキラ2が構えたドリルアームのような部位が、触手のように伸びて真ゲッター2を狙う。

奈緒「うわっ?!こいつ…!触手のドリルアームかよ!」

間一髪飛び退いて、初撃は躲すものの、その後も触手は執拗に真ゲッター2を追う。

茜 「奈緒さん！アーニヤさん、直ぐに支援にいきましょう!!」

アーニヤ 「ダー!……!?」

真ゲッター2の援護に向かおうとしたプロト・ゲッター2の前に、キラ3が立ちはだかる。

茜 「…屍を越えていけと言うことですね!アーニヤさん!」

アーニヤ 「…プラズマ・ファントム!!」

プロト・ゲッター2の高速機動。一瞬でキラ3に迫り、

美穂 「ゲッターエネルギー、集束完了!アーニヤちゃん!」

アーニヤ 「ドリル!…!クラッシュ!!」

ゲッターエネルギーを込めたドリルクラッシュを直撃させる。が、

アーニヤ 「…固い…っ!」

プロト・ゲッター2のドリルは、キラ3の甲殻に阻まれ、エネルギーも霧散した。

美穂 「これ!…!相手の中から高熱反応!?! 躲して、アーニヤちゃん!」

アーニヤ 「!?!」

プロト・ゲッター2が急いで交代すると同時、キラ3の体内から溢れ出す膨大な蒸気。そして中から飛び出したのは、

アーニヤ 「ミサイルストーム…。ううん、ミサイル型のインベーター、ですか!」

「体勢を変えて、高速で宇宙を駆けるプロト・ゲッター2の背後を、無数のミサイル・インベーターがびったりとくつついて来る。

美穂「こ、こんなの避けられないよ……!」

茜「アーニヤさん、一度分離を……!」

アーニヤ「……!?!」

回避運動を続けていたプロト・ゲッター2の眼前に、突如拳が現れた。

アーニヤ「これは、ゲッターキラーの……!」

さながら、ゲッター3のパワーアームのように、プロト・ゲッター2の軌道を先回りして伸びたキラー3の拳が、強かにプロト・ゲッター2を打つ。

アーニヤ「あう……!」

怯んだプロト・ゲッター2に、ミサイル・インベーターが迫る。

アーニヤ「お、オープンゲット……!」

辛うじてゲッターを分離させ、ミサイルの群れを躲す。

茜「チェーンジゲッター……!」

そして、プロト・ゲッター1に合体し、

茜「ドラララララララララッ……!」

両腕のガトリングガンで、先ずはミサイルを蹴散らす。

茜 「ただの擬態じゃありませんね！ゲッターの能力も、しつかり会得しているとは！！」

美穂 「どうしよう…。あんまり相手をしている時間もないよ！」

茜 「兎に角、攻撃あるのみです！何か活路を見いだせるかも……!?!」

直感でゲッターを仰け反らせる、その鼻先を白閃が薙いだ。

茜 「成る程…！ゲッターと言うことは、貴方が相手、と言うことですか!!」

キララー 《……》

プロト・ゲッターーに対峙するキララー。その手には真ゲッターのトマホークをより禍々しく、より先鋭にしたトマホークが握られていた。

茜 「望むところですよっ!!」

プロト・ゲッターーと、キララーが飛び出すのは同時。瞬時に両手の鉤爪を展開し、インベーダーの群れを掻い潜りながら、キララーのトマホークと鏢迫り合いを演じる。

茜 「はっ！やあッ!!」

キララー 《……》

茜 「うりやあああああッ!!」

勢いよく右の鉤爪を振り下ろし、キララーのトマホークを弾く。

キララー 《!!!?!!》

茜 「よし……美穂さん、エネルギーのチャージは!?」

美穂 「何時でもいけるよ!」

茜 「それならば!!」

キララーに接する距離まで飛び込み、再度トマホークを展開させないようにその両手を掴み制する。そして、

茜 「プラズマ・ノヴァアアアッ!!!」

ほぼ零距离と言った間合いから、出力一杯のプラズマ・ノヴァを打ち込む。辺り一帯がプラズマの生む爆煙に包まれた。

美穂 「やった……?」

茜 「……どうです」

爆煙から距離を置き、事態を静観する。煙が宇宙に霧散していった後、そこにあったのは、

キララー《……》

ほとんど無傷の、キララー。

アーニャ「ゲッター飛焰の……最大出力の、プラズマ・ノヴァが……!」

美穂「効いてないなんて……!」

茜 「つ……!」 ジャコンツ

悠然と立ちほだかるキララーに臆せず、再度砲門を開くプロト・ゲッター1。

美穂「待つて！プラズマ・ノヴァのチャージには、まだ時間が…」

茜「まだ完全には再生しきっていない筈です！その隙に波状攻撃を叩き込めば…！」

両肩の砲身にエネルギーを充填させる。

茜「ゲッタービームツ!!」

至近距離から放たれたゲッタービームに、キララーは無反応。直撃。

茜「今度こそどうです?!」

アーニャ「待つてください、様子が…」

ゲッタービームを受けたキララーの体内で、エネルギーが増幅している。

美穂「ダメ…!!避けて！」

茜「!?!」

キララー《!!》

プロト・ゲッター1のビームを吸収。跳ね返すように自身のゲッタービームとして撃ち出した。

茜「ぐあああああッ!!」

美穂「きゃあああッ!!」

アーニャ「っ……………！大丈夫ですか？アカネ！」

茜「な、何とか……………！致命傷ではありません！ですが!!」

美穂「こつちのゲッタービームを吸収して跳ね返すなんて！」

茜「それもそうですが……………これでは……」

シユルシユルシユルツ

茜「!?!」

キララー1に気を取られた際に、背後から忍び寄ったキララー3の両腕が、プロト・ゲッター1を捕縛する。

茜「ぐっ……………しまった……………!?!」

奈緒「茜……………うあ!!」

キララー2の触手ドリルアームにドリルアームで抗っていた真ゲッター2も、触手に巻きつかれ捕縛される。

奈緒「これは……………ぐう……………っ！」

加蓮「うう……………!!」

電流のような衝撃がコックピットに奔り、

美穂「きやあああああっ!!」

アーニャ「これは、ゲッターのエネルギーが……」

李衣菜「吸収されてる!?このままじゃあ…」

伊賀利「李衣菜さん!皆さん!!……くっ!」

インベーター☒s《……!》

救援に向かおうとする量産型ドラゴンを、無数のインベーター群が阻んでいる。

李衣菜「うあああああ……!」

茜「ぐううう……っ!」

キラー3《!!》

キラー2《!!》

キラー1《……?》

ズオツ

奈緒「っ……!?!」

彼方からの攻撃により、ゲッターを拘束していたキラー3とキラー2が吹き飛ぶ。

奈緒「な、何だ……?」

加蓮「ドラゴン軍団が、助けてくれた……?」

美穂「けど、ドラゴンが展開している方とは、違う方向から来たような……」

晶葉「今の攻撃は……?この局面で援護できるような軍隊など、地球にはもう……」

通信士「これは……!」

晶葉「どうした!？」

通信士「地球側から熱源反応!この反応は、無敵戦艦ダイです!!」

晶葉「無敵戦艦ダイだと!？」

地球から、それは浮上してくる。

アーニヤ「まさか…」

李衣菜「あれって…!」

「「恐竜帝国!!」」

晶葉「バカな…!?ここは宇宙空間だぞ!?単純なゲッター線量で言えば、地球よりも遙かに多い筈…。なのに何故!？」

恐竜オペレーター「アンチ・ゲッター線フィールド、動作正常。本艦へのゲッター線の影響を70%カット。現状の対ゲッター線装甲で対応可能域です!」

カムイ「うむ。ギガス隊、随時展開。人類軍の援護を!」

晶葉『まさか王自ら戦場に出てこようとは…』

カムイ「これは、早乙女研究所の池袋博士」

晶葉『無敵戦艦ダイが宇宙に出たことも興味深いが、その前に、ハ虫人類の海上への進出は、停戦条約により禁じられている筈…』

カムイ「条約違反に関しては何びをしよう。そこに責があるとすれば、この戦いの後、

然るべき処罰も受けよう」

晶葉『全ては覚悟の上、と言うことか?』

カムイ「無論。我らとて地球に生きる生命の1つ。巨大衛生の衝突など看過できるものではない。何より…」

晶葉『何より…?』

カムイ「ここで起たぬは、地球を救うために旅立ったアークチームへ、不義を示すことになる!!」

晶葉『アークチームへの不義、か…』

「その通り!!」

ズシャアッ

茜「うおっ!」

回転しながら飛来したトマホークが、プロト・ゲッター1を捕縛していたキラ3の腕を断ち切る。

茜「これは…」

美穂「見て、あれ!」

茜「あれが…!恐竜帝国の…!」

バイス「精々、莉嘉達に感謝することだな」

アーニャ「ゲッターロボ！」

バイス「これが噂の真ゲッターロボか？聞いていたより、大したことないな！」

李衣菜「違う違う！真ゲッターはこっち！」

バイス「ん？だがこっちの奴の肩には、“真”とあるが？」

茜「それはそのお……」

ガンリユー「無駄話はその辺りにしておけ」

奈緒「まったくだ。結局、噂より大したことないのは事実だろ？」

李衣菜「むう……！」

ゴズロ「体勢を直せ。敵はすぐに来る」

加蓮「こればかりは、向こうの言うことが正解だね」

恐竜オペレーター「マグマ砲、次弾装填完了!!」

カムイ「うむ。砲撃開始！我々の熱、血潮を、宇宙ごときが冷やすことの敵わぬことを見せてやれ!!」

無敵戦艦ダイから放たれるマグマ砲が、インベーターを燃やしていく。

晶葉『……素晴らしいな』

カムイ「元より技術力では、我々恐竜帝国の方が秀でていたことは、申し上げておく」
晶葉『違う。ここは素直に、援軍に感謝しておくべきだな』

救援に現れたゲッターザウルスを中心に、真ゲッター2、プロト・ゲッター1が体勢を立て直す。

李衣菜「アンタ達、もしかして莉嘉が派遣されてた先の…」

ガンリユ「そう。かつては穩健派と呼ばれていた一派さ」

カムイ『急進派を制し、今は我々が支配権を握っている。莉嘉達の協力がなければ、ここにだってこうしていられなかつた』

美穂「だから、一緒に戦ってくれるんですね？」

バイス「はっ！勘違いすんじゃないやねえぜ。地球がなくなっちゃったら、莉嘉と決着をつけることも出来なくなるって、それだけよ」

カムイ「聞けえ！恐竜帝国の若き兵達よ！ゲッターは既に、我々の忌むべき敵などではない！隣に並び、共に脅威に立ち向かう同胞なのだ！」

カムイ「そして人間達にも聞いてほしい…！これまでの恐竜帝国の行い、戦いの中で、多くの者が大切な家族を、仲間を失ったことは、紛う事なき事実であろう。これまでの我が同胞達の非道・非業を許してくれと頭を垂れたところで、到底許されるようなことではない事は承知している…！」

カムイ「だが！我々は一人の少女により、人とハ虫人類が歩み寄ることが出来る可能性を知った！その未来への大いなる可能性を、ここで失うわけにはいかないっ！！」

カムイ「人間達の憎しみも、ハ虫人類の怒りも、この皇帝・カムイが受ける！だから共に戦うのだ！共に戦ってほしい……この地球の新たな未来の歴史を、これからも踏み標していく為に！！」

「うおおおおおッ！！」

烈火の如き勢いで、メカザウルス・ギガスの軍団が、量産型ドラゴン軍団の戦列に加わり、インベーダーの軍勢を押し返していく。

ハ虫兵「人間達に負けるなッ！我々の意地を見せてやれ！！」

連合兵「へっ！何だよ。折角の良いところ、恐竜帝国なんかにつけていかせるな！！人間の底力を、もう一度奴等に見せてやるんだッ！！」

ウオオオオオオオオオオ

奈緒「…何か、スゴいな」

加蓮「うん……。当てられちゃうくらい熱くって、気持ちいい！」

奈緒「おっと！」

再度触手を伸ばしてきたキラー2の攻撃を、軽快なステップで躲す。

奈緒「そう何度も同じ手を喰らってたまるかよ！」

加蓮「油断しない。もう1体来る……！」

奈緒「何……？」

キララー《……》

奈緒「くっそ……！何がなんでもあたしらを通したくないってか！」

バイス「なら、今度こそ真ゲッターに加勢させてもらうぜ！」

奈緒「!? 恐竜帝国のゲッターチームか！」

バイス「バイス。そしてコイツはゲッターザウルス。二度は言わん」

ガンリユー「しかし、インベーターが作ったゲッターが相手とは」

ゴズロ「腕が鳴るな。実力の見せ処だぞ、バイス」

奈緒「無茶だ！アイツはゲッター飛焰のビームだつて跳ね返しちまう！生半可なゲッター兵器じゃ意味ないぞ！」

バイス「生半可、か。ゲッターザウルスの新兵器を試す相手には丁度良い!!」

ズワオツ

奈緒「うおっ!？」

言うが早いか、ゲッターザウルスがゲッターの光に包まれる。

加蓮「この輝きは……」

李衣菜「ゲッターシャイン!？」

ガンリユー「既にゲッター線は恐れるものではないと、カムイ様も申し上げた筈です

よ?。」

ゴズロ「何も進化しているのはゲッターに選ばれた貴様らだけではない。見せてやれ
 バイス、恐竜帝国の意地と技術の、進歩の力を！」

バイス「うおおおおおッ!!」

ゲッターザウルスのゲッターシャインが、臨界を越える。

バイス「ザウル……スパアークッ!!」

ゲッターザウルス版シャインスパーク。ザウルスパークが、キララーを貫く。

キララー《?!?!》

ザウルスパークのエネルギーを吸収しきれず、崩壊していくキララー。

李衣菜「やった……!」

バイス「へへっ……! どうだい……?」

加蓮「……大丈夫なの?」

ガンリユー「流星に、ゲッター線遮断服を着ていても、影響は免れられませんか……」

奈緒「その状態で戦えるのか?! 厄介なキララーを1体でも倒してくれたんだ。もう退

がってくれても……」

ゴズロ「俺達の心配なら無用だ! それよりも早くガニメデへ!!」

茜「そうですね! キラーが残り2体なら!」

バイス「俺達で止めてやる!!」

李衣菜「奈緒！2人の言う通りだ！今のうちに！！」

奈緒「お、おう……！」

ガニメデに進路を向ける真ゲッター2に、キラ2とキラ3が迫るも、

茜「真ゲッターの行く手は！」

バイス「邪魔させん！」

李衣菜「よし、このままガニメデまで直行だ！」

インベーターs《!!!!》

加蓮「流石に、ゲッターキラは他には見当たらないか……」

奈緒「もう止められないからな！真ゲッタービジョン!!」

真ゲッター2の高速機動。幾つもの質量ある分身を生み、インベーターを攪乱しながら、

ら、

奈緒「ゲッター！ミラーージュドリルツ!!」

目にも止まらぬ速さのドリルの連続突きで、迫るインベーターを貫きながら進路をこじ開けていく。

奈緒「ガニメデの表層が見えた！このまま突っ込むぞ！」

加蓮「OK！」

李衣菜「対シヨック用意つと！」

激突音と砂塵が響いて、真ゲッター2の姿がガニメデの地中深くに消える。

ギヤルギヤルギヤルギヤルギヤルギヤルツ

李衣菜「…これ、何処まで掘り進むつもり？」

奈緒「さあな。適当なところで空洞でも作…:…ん？」

目の前を覆っていた岩盤が消え失せ、空洞に出る。

奈緒「何だ…:…ここ…:」

加蓮「奈緒、下を見て」

奈緒「下…:…これって…:！」

真ゲッター2の眼下に広がっていたのは、赤く煮えたぎるマグマのような、ガニメデの地層。

奈緒「どうなってやがんだ…:？」

李衣菜「どうも何も、ガニメデの核でしょ」

奈緒「この距離で核なら真ゲッターでも溶けてるよ。それにこの空間…:」

李衣菜「都合だよ。急いで変形だ！」

加蓮「考え事してる余裕はないよ」

奈緒「…くそっ！オープンゲッター!!」

李衣菜「チェーレンジゲッター1!!」

合体後、間髪をおかずにストナーサンシャインの発射体勢をとる。

李衣菜「これでチエックメイトだ！」

李衣菜「ストナーアアアアアアアッ!!」

李衣菜「サアアアアアンツ——!!」

奈緒「待て、何か来る！」

加蓮「ガニメデの方から…?あれって!？」

キララー《!!》

李衣菜「シャインツ!!」

キララー《!!》

奈緒の制止が届かず、放たれたストナーサンシャイン。

李衣菜「ストナーサンシャインを受け止めた!？」

奈緒「よく見ろ!アイツの体！」

李衣菜「体…?…ガニメデの中に続いている?」

加蓮「つてことは、ガニメデそのものがインベーター!？」

奈緒「分析は後だ!躲せ!!」

李衣菜「つて言っても、何処に避ければ…!」

奈緒「クツソ…!これもコーウエンとステインガーの差し金かよ…!」

キララー《!!!》

李衣菜「うわぁ——ッ!!」

ガニメデと融合したキララーが吸収したストナーサンシャインのエネルギーが、真ゲッター1に跳ね返ってくる。

3人「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ!!?!」

ガニメデの外へと弾き出される真ゲッター1。しかし、それでも勢いは止まらず、

晶葉「真ゲッターが!?!どうした!」

通信士「ガニメデ内部にエネルギー反応を確認!これは、インペーダーです!!」

晶葉「何…!?!おのれ…!既にガニメデもインペーダー化させていたと言うことか!」

通信士「真ゲッターロボ、引力に引かれて地球に落下します!」

晶葉「マズい…!あの角度では、真ゲッターでも燃え尽きてしまう…!」

キラリ光って急降下。流れ星となる真ゲッター1。

通信士「…真ゲッターロボ、シグナル、ロストしました」

晶葉「…まさか」

李衣菜『大丈夫!』

晶葉「李衣菜…!生きてるのか!?!」

李衣菜『そっちの観測圏内から出ただけ!こっちは大丈夫!』

奈緒「何が大丈夫だよ!? ゲッターも、あたし達もボロボロだ!」

李衣菜「あつははく…。ごめんごめん。けど、バトルウィングをクッションにして、2人は守ったじゃん?」

奈緒「お前はなあ…! 何時もそうやって、1人で傷付いて…!」

李衣菜「2人に何かあつたら、凜に申し訳ないからね。…さて、と」

大破して装甲の殆どが剥がれ落ち、内部構造を剥き出しにした真ゲッター1を強引に立ち上がらせる。

晶葉『まさか…! まだやる気じやないだろうな?』

李衣菜「当たり前! 私達が何とかしないと、地球が粉々になっちゃう!」

晶葉『無茶だ! さっきの最大出力のストナーサンシャインで、真ゲッターの炉心も限界だ。それに、今の真ゲッターの状態で大気圏を離脱しようとするれば、そのまま空中分解で今度こそ終いだ!』

李衣菜「だからって、何もしない訳には…!」

晶葉「お前はよくやってくれたよ。ありがとう…」

李衣菜『晶葉…』

通信士「まもなく、ガニメデが地球の重力圏に入ります。晶葉さんも、早く避難を!」

晶葉「避難だと? 今更何処に逃げ場所がある?」

通信士「それは……」

晶葉「ふっ……。この衛星から、地球の最後を見ることになるとはな……」

美穂「そんな……！作戦は失敗なの？」

アーニヤ「終わり……？アーニヤ達は……！」

茜「まだです！まだ……！ここには、ゲッター飛焰の炉心があります！それを直接叩き付けば……！」

バイス「はっ！人間にしては思い切ったことを考えるじゃないか！悪くない……！」

ガンリユー「確かに、地球がなくなれば、どのみち失くなる命です」

ゴズロ「ならば、どこで、どのように使おうと、俺達の勝手だな」

伊賀利「当然、我々もお供させて頂きます！」

茜「伊賀利さん……！」

伊賀利「ゲッター炉心なら、ここに幾らだつてあるんです！遠慮なく使つて下さい！」

連合兵「その通りだ！アイドルだけに、美味しいところ持つていかせるかよ！」

ハ虫兵「地球がどうにかなるって瀬戸際だ！やってみる価値ありますぜ！」

美穂「ん……？これ、無敵戦艦ダイが前に出てくる!？」

バイス「カムイ様!？」

カムイ「兵達ばかりには逝かせぬぞ！このダイで、貴君らの盾となろう！」

ガンリユー「で、ですが……！それでは……！」

カムイ「恐竜帝国にも、まだ若き希望はある！その者の未来を、この星の明日を守るための戦いなのだ……！さあ、皆の者、ダイに続けえ!!」

ワアアアアアアッ

奈緒「クツソオ……！戦場にいるのはバカばつかかよ……！」

加蓮「けど、皆の言う通りだ。結局死ぬならアタシ達だって……！でしよ、李衣菜？」

李衣菜「うん……！ゲッターがバラバラになろうが、私達が木っ端微塵になろうが！この星を守るためだってんなら何だってやってやる！こんなところで……！」

茜「終わって……！」

バイス「負けて……！」

伊賀利「諦めて……！」

カムイ「終わらせて……！」

連合兵「インベーターの無法を……！」

ハ虫兵「許して……！」

「「「「——たまるかあああああアッ!!」「」」」

—。

「——…あ」

「おはよ。ようやく起きた？」

「あ……はい。李衣菜ちゃんの……ううん。もつとたくさんの方が聞こえま
した」

「みんなまだ戦ってるんだよ。私達も、眠ってばかりもいけない」

「はい。……大丈夫、ですよ？」

「大丈夫。自分を信じて」

「2人が力を貸してくれたんだもん。だからこの子も、きっと力を貸してくれる」

「後は、卯月の号令を待つだけだ」

「——はいっ。分かりました！」 スウ…

卯月「チエエーンジゲッターアアアア——ッ!!」

ジャック「Fire!!」

BANG!!

ボブ「今ので最後か？」

ジャック「イエース！この島を襲ったインベーターは、今のでLastだぜ!!」

サム「何だ。意外に呆気なかったな」

シュワルツ「…もうインベーターを送る必要がねえからかも知れねえぜ」

ボブ・サム「「え？」」

シュワルツ「空を見てみな」

ボブ「空、だあ？」

サム「あ、ありやあ…！」

リンダ「まさか、衛星ガニメデ…!？」

メリー「そんな！もうこんな近くまで…!？」

ジャック「God dam!!リーナ達は!？」

シュワルツ「さあな。出来ることは、やっただろうよ」

メリー「何か、打つ手はないの…?」

ボブ「無理だろ。あんなもん見せられちゃ…」

サム「流石に何も手が出てこねえよ。次元が違いすぎる」

シュワルツ「…一環の終わりってかよ…!」

リンダ「……ん？これは…」

ジャック「Hey!どうかしたか、リンダ？」

リンダ「ここ一帯のゲッター線濃度が上昇しているわ」

メリー「……本当！もうすぐ危険域を越えるわ！私達のマシンでも耐えられなくなるわよ！」

ジャック「Shit！直ぐに撤退だ!!」

ボブ「一体何が起こるってんだア:!!」

通信士「……これは!?!」

晶葉「……今度はなんだ?」

通信士「超高濃度のゲッターエネルギー反応確認！これは、真ドラゴンが現れた、火山島からです！」

晶葉「火山島……真ドラゴン……まさか目覚めると言うのか？このタイミングで！だが、どうする!?!」

火山が火を噴く。高濃度のゲッター線が、大気に異常を引き起こし、空は風で吹き荒れ、海は荒波でうねり、嵐の様相をも越える、正に神話の天地創造のような光景の中、その渦中で、島そのものを吹き飛ばすかのような噴火を産声に、それは姿を顕す。

卯月「——真ッ！ドオオラゴオオンッ!!」

姿そのものはゲッタードラゴンに酷似しているが、これまでのゲッターを凌駕する巨軀、全体的にマッシブで、雄々しいシルエット。嵐を統べるように、それらを従えて悠然と立つ、その姿こそ真ゲッタードラゴン!!

晶葉『卯月！卯月なのか!?!』

卯月「晶葉ちゃん！はい、お久し振りです!!」

晶葉『最悪のタイミング過ぎるぞ！地球は、もう…!』

卯月「とにかく直ぐ、そつちに行きますね？——真・マツハスペシャル!!」
シユンツ

指の一本も動かさず、今までのものが蜃気楼かのように消え去った真ドラゴンの姿は、

通信士「わっ!?!」

瞬時にして、晶葉達のいる衛星ムーンシャドーの眼前に現れた。

晶葉「……これが、真ゲッター、ドラゴン…」

バイス「何だ、あれは!?!」

美穂「ゲッターロボGの反応…。もしかして、卯月ちゃん!?!」

卯月「はいっ！ただいま戻りましたよ、美穂ちゃん!」

美穂「卯月ちゃん…？ホントに卯月ちゃんだあ…!」

茜「と言うこと、あれが噂の、真ゲッタードラゴン!?!」

アーニヤ「アー、何か不満が？アカネ?」

茜「ああいえ、何と言いますか…。もつとウザーラみたいのが出てくると思って

まして…」

卯月「今回は人型で！その方が何かと使いやすいですから！」

アーニヤ「はあ…？」

ガンリユー「油断するな！飛焰チーム！」

茜「うあ…!?!」

バイス「くそっ！」

プロト・ゲッター1とゲッターザウルスが相手取っていたキラ2、キラ3が両機を押し退けて飛び出してくる。

ゴズロ「真ドラゴンに狙いを定めたか！」

美穂「卯月ちゃん！その相手は、只者じゃないよ！」

卯月「美穂ちゃん…ありがとうございます。確かに只者じゃなさそうですね…。けど…！」

それぞれにドリルと拳を構えて、キラ2とキラ3が迫る。

卯月「こつちも、ただのゲッターじゃありません！」

ガギインツ

美穂「え…？」

バイス「な…っ!?!」

真ドラゴンに向けて放たれた、キラー2とキラー3の攻撃を、真ドラゴンの胴体、そして下半身からその姿を覗かせたゲッターライガーとゲッターポセイドンの上半身がそれぞれ受け止めている。

キラー2 《……!?!》

凜 「真ゲッターにも出来る芸当だよ？真ドラゴンに出来ないと思わないで！」

キラー3 《?!?!》

未央 「しっかし、インベーダーの分際でゲッターを真似しようとは、フテー奴らだ！」
アーニャ 「リン……それに、ミオ！」

未央 「チャオ！アーニャン！不肖本田未央！長い沈黙を破りただいま帰還しました
!!」

茜 「本当に、本当に！未央ちゃんなんですわね!?!」

未央 「やだなー茜ちゃん！正真正銘、本物の私さ！今回はちゃんと、足も付いてる！」
美穂 「足……?」

凜 「お喋りはそこまで。先ずはこのゲッター擬きをやるよ！」

未央 「アイサーしぶりん！いっちょ派手に、やっ तरी ますか〜！」

キラー2・3 《!!》

真ドラゴンの気配を察知して、即座に距離を取るキラー2、キラー3。

凜 「逃がさないよ。チェーンアタック!!」

未央 「フィンガーネット!!」

シウルシウルシウルツ

ゲッターライガーの腕から伸びたチェーンアタックと、ゲッターポセイドンのフィンガーネットが、キラ2と3をそれぞれ捕縛する。

キラ2・3 《……!!》

未央 「それじゃあしぶりん? 1、2、?」

凜 「仕方ない。……3っ!」

未央のカウントに合わせた凜の掛け声に合わせて、それぞれの獲物を振るい、真ドラゴンの正面で打ち合わせる。

凜・未央 「今だ、卯月!」

卯月 「ゲッタービームツ!!」

正面でもつれ合うキラ2とキラ3を、まとめて額からのゲッタービームで蒸発させる。

バイス 「…何て威力だ」

茜 「飛焰のビームでは倒せなかった、ゲッターキラを…!」

凜 「さて、残るは…」

卯月「…はいっ」

視線を上げて、ガニメデを睨む。

卯月「こちら真ドラゴン！真ドラゴンの正面、戦場にいる友軍は、直ちに退避してください！」

カムイ「…何？」

伊賀利「退避…？」

卯月「ゲッタービームを撃ちます！」

真ドラゴンの両手を拳で強く握り、腕を左右に大きく開いてゲッタービームの発射体勢を取る。

バイス「ゲッタービームでガニメデを破壊するだど!?」

晶葉『真ドラゴンなら、出来るかもしれん…。だが、既にガニメデは地球の重力圏に入っている！破壊したとして、砕け散った破片が地球に降り注ぐぞ!』

カムイ「それくらいならば、我々の総力を上げて可能な限り粉碎すれば良い！」

茜「何も手がないよりましです！」

晶葉『手段は選んでられんか…!』

卯月「——!!」

ゲッターエネルギーが、真ドラゴンを中心に集束していき、真ドラゴンの全身をも覆

うのような巨大なエネルギー場を形成していく。

卯月「ゲッター……！」

パリパリと稲妻のように、真ドラゴンの周囲でゲッター線がスパークし、エネルギーが臨界を迎える。

卯月「ビィーームツッ!!」

そして放たれる、超特大級のゲッタービーム。真ドラゴンの全長を優に凌ぐ直径の光線が、真つ直ぐにガニメデに向かっていき、その前に展開するインベーターすら塵芥のごとく消し飛ばして、ガニメデの地表に激突した。

晶葉「…む？これは…」

そして、放出され続けるゲッタービームは、ガニメデを貫通はせず、その表面を覆うように広がっていき、

伊賀利「ああ…!?!」

ガニメデの全体をすっぽりと呑み込んだ。

連合兵「何が起こってんだ？」

ハ虫兵「信じられん…!俺達は、何を見せられている!?!」

ビームに覆われたガニメデが、鉛玉を溶かすように少しずつ、少しずつその径を小さくしていき、

バイス「……」

カムイ「……」

茜「……!」

先程まで地球に迫っていた危機が、まるで幻だったかのように、木星の第3衛星ガニメデは消滅した。

通信士「……」

晶葉「……完全に、消し去ったのか……? 破片も、ほんの一片の欠片も残さず、月以上の質量を持つ、あの衛星を……あつはは」

加蓮「確かに、もう笑うしかないかも」

卯月「李衣菜ちゃん! 真ゲッターチームのみんな!」

凜「奈緒も加蓮も、お疲れ様」

奈緒「お疲れ様、じゃねえよ!」

李衣菜「ホント! 美味しいとこだけ持ってっちゃってさ!」

卯月「あはは……」

未央「まーまー。未央ちゃんの快気祝いなんだし、これくらい派手にやっても、ね?」
加蓮「ね? って、可愛く言われても、ねえ?」

奈緒「いくらゲッターがトンデモだとは言ってもよお、流星にトンデモが過ぎねえか

？」

卯月「すみません…。あんまり時間を掛けてるわけにもいかなかったので…」

李衣菜「？ どう言うこと？」

卯月「莉嘉ちゃん達を迎えに行ってきますね？」

美穂「ええ!？」

奈緒「出来るのか!？」

卯月「はいっ！何処の世界に行つたのかは、ゲッター線が導いてくれますから！後は、

そこと空間を繋ぐだけです！」

奈緒「空間を繋ぐって、しれっとんでもないことまた言つてないか？」

李衣菜「私達も行くよ！」

卯月「大丈夫です。直ぐに帰ってきますから」

美穂「直ぐって…」

卯月「ビックリさせないために先に言っておきますけど、この時空では、今から大

体5分後くらいです」

アーニヤ「そんなに早く…?」

未央「いやいや。その間に向こうでは結構な時間を使つては来るんだよ?」

アーニヤ「…?よく分かりません」

凜 「まあ、何事もなければ、無事にアークチームは連れて帰ってくるだけだから。それだけを覚えててくれれば良いよ」

卯月 「ゲッタートマホーク！」

肩口から長大なゲッタートマホークを取り出し、何も無い空間を切り裂く。

アーニャ 「空間が……」

晶葉 『自在に時空間を切り開けるのか？』

卯月 「そんなところです。時間と空間のメカニズムは、ゲッターには解明されていますから。それじゃあ、ちよつと行ってきますね？」

美穂 「う、うん……いつてらっしやい……」

凜 「急ごう。向こうの時間にも限りはあるよ」

卯月 「はいっ！」

ズワツ

真ドラゴンが突入すると同時、裂かれた空間は閉じ、通常の空間に戻る。

茜 「……」

アーニャ 「……」

美穂 「……」

加蓮 「……」

奈緒「……」

李衣菜「……あー、何か、嵐みたいだったね？」

奈緒「あたし、キツネにでも化かされてるんじゃないかって思った」

李衣菜「あははっ！確かにそうかも」

美穂「でも、地球の危機は去ったんだよね？取り敢えず……」

晶葉『ああ。私も、これまでのことがで全部冗談のように思えてきたが……』

加蓮「とにかく帰ろつか？これからまた忙しくなりそうだし。少しくらい、ゆっくりしてもバチ当たらないんじゃない？」

李衣菜「そうだね。……うん、帰ろう。私達の地球へ——!!」

—— 異空間内。

卯月「……間に合ってくれば、良いんですけど」

未央「大丈夫。卯月が心配しなくても、莉嘉達はちゃんと乗り越えてくれるはずだし、ゲッターアークだって、莉嘉達を守ってくれる筈だよ」

卯月「そうですよね。……うん」

凜「少なくとも、神を騙る無法者は、黙ってみてられないよね」

卯月「はいっ！そのためにも……！」

卯月（莉嘉ちゃん、美波さん、かな子ちゃん……！待ってて下さいね——！）

つ
つ
く

第27話『四神降臨』

—— 上空。

莉嘉「は〜…つぐ！ モグモグ…：ん〜っ!! かな子の特製マカロン、どれを食べても
おいしい〜☆」

かな子「ホントですかあ！ ありがとうございます！」

ウヅキ「…相変わらず、能天気と言うか、マイペースと言うか…」

美波「けど、それもスゴいことなんだと思いますよ？」

ウヅキ「スゴい？」

美波「研究所との通信は相変わらず不通。私自身、悪い予感はしています。本当なら、
もつと不安や緊迫感でピリピリしてても可笑しくないかもしれませんが。けど、そんな状
況の中で何時も通りに振る舞える、平常心を保っているのは…」

莉嘉「ンンツ…!? お茶こぼしたあ…」

ウヅキ「ただ神経が凶太いだけじゃ…？」

美波「そうかもしれませんが…」 アハハ…

ウヅキ「貴女も、何だか雰囲気が変わった気がします」

美波「え？」

ウヅキ「何日か前の貴女は焦り……迷い、そうですね、戦うことに迷いを抱えているようにも見えました。今はそれが……」

美波「感じられない、ですか？」

ウヅキ「……ええ」

美波「……開き直ったって言うんですかね？ 私なりに考えて、考えて……。それで結論なんてでなくて、考えることも馬鹿馬鹿しくなってきたって言うか……」

ウヅキ「成る程」

美波「けど、自棄になった訳じゃないですよ？ 何を考えても、どう行動しようとも、今を生きてるって真実は、ちゃんと見えてますから」

ウヅキ「今を、生きる……」

美波「はい。私は今も、現在を生き続けているんです。過去でも未来でもない、目の前にある今を。それを、これ以上誰かに荒らされるわけにはいかない」

ウヅキ「だから、戦う？」

美波「誰かに人生を左右されるなら、自分で決めた方が良いと思いませんか？」

ウヅキ「ふっ……。貴女の言う通りかもしれませんね」

莉嘉「…っと！自動操縦解除してっと、休憩終わりー☆そろそろ研究所が見えてくる筈だけど…」

かな子「何だろう…。空が、不思議な感じ…」

美波「本当…。分厚い雲の合間から光が…。何て言うか、神話的一幕みたい」

ウツキ「!? ……空に見惚れてばかりもいられませんよ」

美波「え？」

莉嘉「地上！研究所が…！」

かな子「ウソ…」

ゲッターアークと真ゲッタータラクの眼下に広がったのは、要塞と化し、鉄壁の守りを誇っていた筈の新早乙女研究所が廃墟と化した光景であった。

かな子「酷い…」

莉嘉「アタシ達が出撃してる間に、一体何が…」

美波「こちらアークチーム、早乙女研究所応答して下さい！誰か!!」

「ザ ザーッ…ザ ザザッ…ザザ…」

美波「通じた!? 誰か！聞こえますか!？」

「ザザッ…聞こえて…ザッ…る…。…………よ」

ウツキ「この声は、リン？」

かな子「シブヤ司令ですか!?!無事なんですか!?!」

リン『うん…。私や晶葉は、地下格納庫にいたから、何とかね。それに、何人かのスタッフや弁慶さんも無事だよ』

莉嘉「……」

かな子「良かったあ…」 ホッ

ウツキ「何があつたんです?ただ敵に襲われたつて訳でも…その敵も見当たらないし」

リン「…正直、私達にも何が何だか…。突然光が降ってきたと思つたら…」

莉嘉「光…?」

その言葉を聞いて、莉嘉達の視線は背後、異様な雰囲気を漂わせる、空を覆う暗雲を切り裂く後光に向けられる。

「——彼らは裁きを受けたのだ」

かな子「ひやつ!?!何…いきなり声が…」

ウツキ「…通信信号応答なし。何処かからの通信や、機械から流れてる音声じゃない…!」

美波「何と言うか、空間全体から響いてるような…」

莉嘉「みんな見て!空!雲が…!」

かな子「裂けて……あれは……?!」

ウヅキ「……」

新早乙女研究所の上空を覆い尽くしていた暗雲が左右に分かれるように裂け、ゲッターに降り注いだ神聖さを帯びる光。それを背に受け、舞い降りてくるは、4つの影。

美波「あれは……何なの……? 鬼獣とも、人間とも、マシンとも違う……!」

ウヅキ「全く異質の、敵……ッ!」

かな子「敵……? 敵なんですか? 敵と言うより……」

莉嘉「……っ」

「次は貴様らの番だ。ゲッター!」

莉嘉「やつぱり! アンタ達が研究所をこんな風に!」

「然り。そこが災厄の由縁たる場所。早乙女研究所なれば」

莉嘉「まーたそれ? 結局アンタもゲッターが宇宙の悪だつて? 悪いけどそーゆー台詞は聞き飽きてるんだよね!」

「……」

莉嘉「何ー? だんまり決めてこっち見下して、そんな睨まれても怖くなんてないから!」

「……稚拙なり」

莉嘉「はあ？」

「世間に対して無知。言動をして無恥。我らの前に立つにはあまりにも稚拙。最早知性など欠片もない、獣にも劣るその姿。正に蛮族そのもの……」

「ふえっふえっふえっふえ……っ！」

莉嘉「ハアッ!? うるさいうるさいっ!! そもそもいきなり出てきて、こつちの事は何でも知ってる事情通なフリして、名前も名乗らない奴に訳分かんない説教される覚えなんてないんだけど!」

「ふんっ……。蛮族だが礼節は弁えるか。よかろう。我が名は、多聞天」

「増長天」

「持国天」

「広目天」

多聞天「汝ら人間共が敬い、畏れる者……。貴様らの言葉を借りれば、神と呼ばれる者なり」

莉嘉「はあ? 神い?」

美波「随分大きく出てきたけど、妙に納得できる……。かな子ちゃんを感じてたものは……」

ウヅキ「神を前にした時の、畏怖……!」

多聞天「然り。汝ら、下等な生命には備わつておるのだ。神に抗うなどと言う蛮行を犯さぬよう、それを抑止する因子が、その本能として」

莉嘉「はっ！何が神さ！かな子も、美波も騙されないで！大体自分の口から神つて言う奴に、マトモな奴はいない……！」

多聞天「しかし……。信仰心の薄れと何より、ゲッター線に触れた影響か……：畏れと言う感覚すら麻痺した者も存在するようだ」

ウヅキ「……貴殿方が本当に神だとして、そんな存在がどうして突然？」

多聞天「突然ではない。この裁きは必然なのだ」

かな子「裁きが、必然？」

広目天「己が無知と、是が非にも生き残りたいと言う傲慢さが招いた、正しく自業自得」

美波「どう言うことなの……!？」

持国天「諸葛孔明と言う名に聞き覚えはあるか？」

ウヅキ「諸葛孔明……アトランティス帝国の……」

多聞天「彼の者の嘆きと、命を賭した叫びにより、馳せ参じた。この宇宙をゲッターの脅威から守る為に」

莉嘉「結局、アンタらもアイツらのご同輩つて訳！どんな理屈を並べても結局やる気

だつて言うんなら……！」 ジャキンッ

バトルシヨットカッターを展開。

莉嘉「こつちだつて、とことんやってやるだけだあああ……ッ!!」

予備動作もなく、一気に加速して多聞天の首を狙う。

増長天「むうんっ！」

莉嘉「ぐっ……！」

間に増長天が立ちほだかり、携える錫杖が、バトルシヨットカッターの刃を受け止める。

増長天「この……不心得者が!!」

莉嘉「うあ……っ!」

錫杖を振り払い、ゲッターアークを吹き飛ばす。

多聞天「増長天」

増長天「何、不心得者を懲らしめるだけだ。見事改心させ、黄泉路へと導いてやろう」
ヒュン、と消えるような動きで体勢を整え、こちらも体勢を建て直したばかりのゲッターアークへと向かう。

増長天「応龍！」

莉嘉「っ！」

体に巻きついた龍を召喚し、ゲッターアークに火炎を吹かせる。

莉嘉「危な…っ！」

増長天「ここよ！」

振り上げた増長天の錫杖が、戟へと姿を変える。

莉嘉「くっ…！」

増長天「やああッ!!」

莉嘉「きやあああああッ!!」

戟による一撃を受け、再び吹き飛ばされるゲッターアーク。その一撃は直撃にも見え
たが、

増長天「咄嗟に直撃を避けるとは…。まともに受けておれば、一思いに逝けたものを
…」

莉嘉「何が一思い…だ！やっぱ改心させる気とかなんじゃん!!」

ガサリ、と倒れ付した木々から状態を起こすゲッターアーク。

かな子「ちよ、ちよつと莉嘉ちゃん、落ち着いて…」

美波「かな子ちゃんの言う通りだよ。落ち着きがないのは何時もの事かもしれないけ

ど、相手が相手だから、一旦冷静にならないと…」

莉嘉「冷静？どうして冷静でなんていられるの?!」

かな子「え？」

莉嘉「アイツらは、研究所を破壊したんだ！」

美波「それは…けど、みんな無事だったじゃない？」

莉嘉「地下格納庫にいた、リン達はね」

かな子「地下格納庫に、いた…？」

美波「……！ 地上には、孤児の保護施設が……！」

かな子「あ……っ！」

視線を向ける先、廃墟と化した地上施設はどんな災害を受けた後よりも悲惨の光景で、どこが何だったのかすら分からない。

多聞天「ゲッターに侵される前に、原罪から解き放ってやったのだ。無垢なる魂は無垢なまま、極楽浄土へと召されるであろう」

莉嘉「勝手なことばっか言わないで！結局アンタ達はゲッター憎いゲッター許さんで、関係ない子供まで巻き込んだ……！」 ジャキッ

ゲッタートマホークを強く握り締めた、ゲッターアークの姿が消える。

増長天「なっ…!?ど、何処へ…？」

莉嘉「——!!」

たじろいで視線を左右に振った増長天の背後に、ゲッターアークはその姿を現す。

増長天「後ろか——！」

莉嘉「絶対に……！許さないッ!!」

勢いよくトマホークを叩き付け、増長天の脳天から胴体に一閃。パツクリ割れた切り口から血飛沫が立ち上る。

増長天「ぎゃあああああッ!!?」

莉嘉「ッ!!」

増長天「この……っ！」

震える腕を微かに振り、その指示を受けた応龍が、追撃を仕掛けたゲッターアークを横から突き飛ばす。

莉嘉「くっ……！」

応龍「シヤアアッ!!」

莉嘉「邪魔するって言うなら、容赦しないよ！」

ガンッ ガキンッ

多聞天「……」

持国天「……いかな」

広目天「ゲッターめ……。こちらの想定以上に力を付けておる……」

多聞天「想像以上に進化しているようだ。これも、ゲッターの為せる技か」

持国天「我が支援に行こう。……む？」

ゲッターアークと増長天の戦いに高みの見物を決め込んでいた3体の神の元に降り注いだゲッタービームを、それぞれが散開して躲す。

ウツキ「ゲッターはまだもう1機……。まさか忘れていた訳じゃないですよね？」

広目天「愚かな……。やはりその身を以てしなくては分からねか」

持国天「……」

広目天「持国天？」

多聞天「広目天、持国天に任せよ。それより、増長天と協力し、向こうのゲッターを止めるのだ」

広目天「……はっ」

フツ、と広目天の姿が消える。

ウツキ「……ゲッタートマホーク！」

持国天「……」

肩からトマホークを取り出した真ゲッタータラクに対し、持国天は口元に手を翳し、するりと長大な剣を引き抜いて見せる。

ウツキ「まるで大道芸ですね」

持国天「往くぞ、ゲッターロボ!!」

ウツキ「はあッ!!」

真ゲッタータラクと持国天が空中で激突。己の得物をぶつけ合い、鏢迫り合う。

—— 研究所地下。

リン「くっ……!」

所員「シブヤ司令、大丈夫ですか?」

リン「私は大丈夫。それより生き残った所員を集めて、直ぐに脱出用意!」

所員「は……? 脱出、ですか?」

リン「そうだよ。上でゲッターがドンパチやつてるんだ。ここだって何時までも安全じゃない。奴らがゲッターに気を取られている内に、研究所を放棄して脱出する。だから急いで!!」

所員「は……はっ!」

リン「……くっ。地上再興まで、もう少しだったのに……!」

アキハ「ふっ。奴等の目的が、ゲッターの庇護を受ける人類の抹殺だとしたら、何処へ逃げても一緒だな」

リン「アキハ……? 何処へ行くつもり……?」

アキハ「野暮用だ。遂にこの時が来たのだな……」

リン「アキハ……?」

増長天「くそっ……!!」

増長天の攻撃が空を切る。

かな子「チェーリングゲッターカーン!!——縋索!」

合体後、直ぐに縋索を握り、投射して増長天を応龍もろとも捕縛。

増長天「うお……!!?」

かな子「そお……れえっ!!」

増長天を中から引き摺り下ろし、地面に叩き付けた。

増長天「——」

広目天「ふっふっふっ……!!」

倒れ伏した増長天の姿が、広目天に変わる。

かな子「えっ!?!」

広目天「神に縋索とは……。正しく不心得者の極み!」

言いながら体の正面で両手を握り、印を結ぶ。

広目天「獄炎!!」

かな子「……っ!」

そして放たれた黒々とした地獄の業火を、握り締めた縋索を高速に回転させることで弾いていく。

かな子「くっ…!!ニードルミサイル!!」

即座に両肩の棘をミサイルとして飛ばし応戦。これに対して広目天は、

広目天「ふっ…」

白い巻物を翳した。

広目天「喰らええいっ!!」

広目天の握った巻物が包帯のように細く周囲に飛び散り、広目天に向かって真っ直ぐに飛来していたニードルミサイルを包み込んでそのまま呑み込んでいく。

かな子「う、嘘…!?!」

広目天「お返しだ!」

次に筆を手に取り、巻物に何かを素早く書き込み、ゲッターカーンに向けて飛ばした。

かな子「これは…!?!」

飛ばされた巻物の紙はゲッターカーンに巻き付き、

広目天「衝!」

広目天の言葉と同時に、巻き付いた紙に紋様が浮かび上がり、ゲッターカーンに電流のような衝撃を与える。

三人「「きゃあああああアツ!!」」

広目天「くっくっくっ…!!そのまま滅せよ…!」

莉嘉「か、かな子……！分離して……！」

かな子「うう……つ、オープン、ゲット!!」

広目天「ぬう……！」

分離して高速から逃れ、

美波「今度は私が……！チエンジゲッターキリクツ!!」

上空から急降下しながら、ゲッターキリクがそのドリルを突き立て肉薄。

広目天「むう……！」

広目天は、次は手にした巻物を掛け軸のように展開。己の盾としてゲッターキリクの攻撃を受け止める。が、

美波「ドリル……！ストリームツ!!」

広目天「……お……！」

ゲッターエネルギーを纏ったドリルの余波により、数十メートル程後ろに後退。

広目天「くっ……！やっつけてくれる——」

その広目天の姿も変わり、

多聞天「……」

多聞天がゲッターキリクと対峙する。

美波「……！」

莉嘉「今さら怖じ気付いたなんて言わないでよね、美波！」

かな子「あの人、あの4人のリーダー格みたいですから、倒すことが出来たら状況を有利に出来るかもしれません」

美波「分かっている……！行くわよっ!!」

ゲッターキリクの高速機動一瞬残像を残してその場から消え失せ、同時多聞天の周囲を回り無数の分身で取り囲む。

多聞天「……」

莉嘉「何？ずっと黙って突っ立つちやつてさ！もしかして、こっちの動きが速すぎて追いつけない？」

多聞天「……」

莉嘉「無視すんなー!!」

かな子（莉嘉ちゃんの言う通り、こっちを捉えきれてない……とは思えないけど……。なら、見切られてる……？まさか……）

美波「……はっ!!」

不動を貫く多聞天の異様さに意を決するようになり、ゲッターキリクが分身の中から飛び出す。

美波「ドリル……アターック!!」

多聞天の死角を付き、背後から肉薄したドリルは正確にその背を捉える。

美波「っ…!？」

莉嘉「キリクのドリルで、貫けないの!？」

多聞天「所詮は…」

美波「っ…!？」

多聞天「その程度ッ！」

防御も行わず、背中でドリルを受け止めた多聞天の放つ裏拳が、ゲッターキリクを彼方へ吹き飛ばす。

かな子「う…:…:ぐっ…:…:大丈夫ですか？美波さん！」

美波「こっちは大丈夫…:…:っ…:ヘルメットが…:…:！」

バイザーの割れたヘルメットを脱ぎ捨てる。

美波「あの敵、これまでの相手と違う…:…:！」

莉嘉「伊達に神様名乗ってる訳じゃないってこと…:…:？」

多聞天「そうだ」

かな子「…:…:！」

倒れ伏し、立ち上がることもままならないゲッターキリクの前に、瞬間移動のように多聞天がその姿を見せた。

多聞天「所詮は人間。この神の手の平からは抜け出せぬ」

莉嘉「誰が孫悟空だつての！美波！」

美波「っ……う、うん……！オーブンゲット!!」

莉嘉「チェンジゲッターアーク!!」

多聞天「ゲッターロボ、アークか……」

莉嘉「……何よ？」

多聞天「その赤き姿……。人の心を誘惑し、やがては宇宙を滅ぼす。悪魔に相応しき、悪しき姿よ！」

莉嘉「ホント何？恨み言とかなら、もっと分かりやすく言つてほしいんだけど?!」

トマホークを構え、多聞天に肉薄。

莉嘉「ダブル！ラビリントスツ!!」

トマホークによる目にも止まらぬ怒涛の連撃を打つ。

莉嘉「っ……!」

かな子「アークのトマホークでも、傷一つ付かないなんて……!」

莉嘉「流石にインチキなんじゃない!?この……!!」

多聞天「貴様の存在を、許すわけにはいかんツ！」

美波「!! 莉嘉ちゃん、下がって！」

莉嘉「へっ?」

多聞天の腹部から放たれた、神々しい光を宿す光線が、ゲッターアークを突き飛ばす。莉嘉「っ……!ふう……」

咄嗟に光線をトマホークで受け止め、直撃は避けた。

莉嘉「!? トマホークが……!」

光線を諸に受けて黒く焦げ付いたトマホークは、そのままボロボロとゲッターアークの手から溢れ落ちた。

莉嘉「くっ……!……ん?」

偶然か、持国天と戦っていた真ゲッタータラクと背中を合わせて突き合う。

ウヅキ「……そっちも苦戦しているようですね」

莉嘉「そっちこそ! 楽には勝たせてくれないみたいだね……!」

多聞天「勝つだと? 我々にか?」

莉嘉「トーゼン☆アンタ達を倒さなきゃ、リカ達は明日に行けないんでしょ?」

持国天「くっくっくっ……!」

増長天「ふえっふえっふえっ……!」

広目天「ふふふふ……!」

莉嘉「何? 何が可笑しいのさ!」

広目天「まったく……！恐れを知らぬとは悲しきことよ」

多聞天「これだけの力の差、格の違いの差を見せつけられて、まだ抗う術があると思ってるのか」

莉嘉「力の差？格の違いの差？うんっ、全っ然分かんない！言つとくけど、アタシはまだ全然、本気とか出してないから！」

かな子「またそんな、分かりやすい強がりを……」

莉嘉「強がりでも何でも、諦めたらそこで終わりなんだ！アタシはここで、まだ倒れるわけにはいかない……！」

持国天「強がりこそが己を奮い立たせる最後の意地と言うわけか」

増長天「ならばその最後の意地、容易く手折ってやろう!!」

美波「っ……来る……！」

その手に携えた戟を持ち直し、ゲッターアークめがけ加速する。

増長天「……ぎゃっ!？」

莉嘉「……?？」

ゲッターアークに迫っていた増長天が、背後からの攻撃を受け吹き飛ばす。

かな子「今の攻撃は……」

莉嘉「間違いないよ、マグフォース・サンダー……！」

三人「二號（さん）ツ!!」

號「へっ！タイミングはバツチリだぜ！子犬ちゃんよ!!」

莉嘉「無事だったんだ！」

號「懲罰房に送られたお陰でな」

莉嘉「懲罰房に？」

溪「號みたいな身体能力お化けに、簡単に脱獄されないよう、房自体が頑丈に出来るからね」

號「オメエらも俺を連行して近くにいたから、助かったんだぜ？じやなきや今頃、瓦礫の下敷きでペシヤンコだぜ」

凱「胸を張って言うことか……」ヤレヤレ

広目天「ほう……。神の威光を恐れぬ者がまだおるのか」

號「神だかヤニだか知らねえが、恐れるモンなんざ姐さんと車さんの逆鱗だけだぜ」

莉嘉「意外とあるんだ？」

號「ウツセ」

溪「けど、ホントにやる気？何て言うか戦う気力が根こそぎ奪われていくような……只の相手じゃないって感じ」

號「ビビってんじゃねえ！こういう勝負は、先に音を上げた方の負けよ！ここが正

念場だ、おりやあ!!」

ソードトマホークを携えて、スーパーゲッター號が、増長天に躍り掛かる。
ガギンツ

増長天「っ……!」

號「おらよ!こいつでかつ捌いてやるぜえ!!」

増長天「此奴…!?ゲッターの力も持たず…!その程度の力で!」
戟を振り払い、スーパーゲッター號を吹き飛ばす。

號「ぐっ……!」

増長天「身の程を知れいッ!!」

號「……っ!」

「フィンガーネット!!」

増長天「むっ!」

スーパーゲッター號に追撃を加えるため放たれた応龍を、投射されたネットが捕らえる。
る。

かな子「フィンガーネット!?あの技は…」

「何も助かったのは號だけじゃねえぜ。ちよいと、格納庫ですつと寝かせちまつたコイツを、起こすのに一苦労したがな」

美波「あれって……ゲッター、ポセイドン……？」

弁慶「おうよ！何かあった時のために整備だけはしておいて正解だった。何処の馬の骨かは知らねえが、俺達の家でもある早乙女研究所をぶっ壊した、そのツケはきっちり払ってもらわなきゃな!!」

深「だ、大丈夫なの……!?隊長！」

弁慶「分離と合体さえしなきゃりや、負担なんざねえのと同じだ。心配は無用よ」

凱「しかし……」

弁慶「へっ、口じゃ言っても伝わらねえか。ならよ」グイッ

フィンガーネットに捕縛され、脱出しようと暴れまわる応龍を引き寄せ、

弁慶「ぬうん……!!」

ゲッターポセイドンを中心に回転させ、応龍を持ち上げる。

弁慶「直伝！大雪山おろしいいいいッ!!」

渾身の大雪山おろしで、応龍を投げ飛ばす。

弁慶「二段返し!!」

吹き飛び、体勢の崩れた応龍にストロングミサイルを撃ち、二段返しを以て応龍を粉々に吹き飛ばした。

増長天「ぬう……!!」

弁慶 「どんなもんってんだ！俺もポセイドンも、まだまだ現役よ!!」

號 「へっ、ロートルが無茶してんじやねえ」

弁慶 「ンだとう!?!」

號 「溪、凱！何時までも寝てるわけにはいかねえぞ！」

溪 「分かつてる！隊長だつて体張つて戦つてるんだ！」

凱 「何時までも戦隊長におんぶに抱っこでは格好も着かないからな！誰が相手でも構わん！やつてやれ、號！」

號 「おうよ！オメーらも足引つ張ンじやねえぞ！」

多聞天 「むう……」

莉嘉 「おりやあッ!!」

ガギンツ

不意を突いてゲッターアークが振り下ろしたトマホークを、多聞天はその肌で受け止めていた。

莉嘉 「何ぼんやりしてるの？こっちの勢いに圧倒されちゃった？」

多聞天 「……何も、何も悟らぬのだな。お前達は」

美波 「悟る……？何を」

多聞天 「何故鬼のような存在が生まれた？何故孔明は、晴明は結託し、彼方の宇宙で

はアトランティス流国が生まれ、遠き時空を越えこの地球に舞い降りようとしたのか」
かな子「それは……」

多聞天「地球を出たお前達人間が何をするのか。ゲッターに依り従うお前達はどうなってゆくのか、それを悟るのだ！ゲッターロボ!!」

ガンツ

語気強く、言葉が続ける多聞天を、ゲッターアークは蹴つ飛ばす。

莉嘉「何？ごコーセツつて訳？神様つて偉そーに話すのが好きだよ？勝手なイメー
ジだけど。話す相手を見下してさ」

多聞天「最早、言葉では留められぬか」

號「こっちは説法聞きに来た訳じゃねえんだ。テメエらだつて、同じだろうが」

ウヅキ「数の上でなら、もう一緒ですよ。さつきまでみたいなこっちを惑わす戦法も
させません」

広目天「ぬう……！調子づきおつてからに！」

持国天「落ち着け、広目天。有象無象がより集まったところで、所詮は烏合。鎧袖一
触の手に過ぎん」

號「鎧袖一触かどうか、その体に刻み付けてやるぜえ!!」

莉嘉「いっくぞ〜!!」

増長天「来るがよい！ゲッターロボ、人間共!!」

4機のゲッターロボと、四天王とがぶつかり合う。

ゲッターはトマホークやミサイル、ソードトマホークなど、それぞれが持てる限りの力を全力でぶつけ、四天王もそれぞれに得物を持ち、時に瞬間移動や巻物から炎を、天から雷を招来し、超常の力を以てゲッターを滅ぼすべくその力をぶつける。

空気が振るえ、分厚い雲すら霧散し、木々が薙ぎ倒され大地が裂ける。壮絶な戦いを真横に、1台の軍用車が早乙女研究所の跡地から彼方へと走り抜けた。

アキハ「……つと、始まったか。間に合ってくれば、良いが——」

美世「……つと、ふう。やくつと外に出れた……あ?」

瓦礫の山を掻き分け、非常階段への入り口だった場所から外へと出ると、そこでは激しい戦闘が繰り広げられている。

美世「うう……つ。何なの、あれ。誰か……!」

戦闘の余波が生む暴風や衝撃波に煽られながら、他の生存者を探して廃墟を進む。

美世「誰か……!無事な人は……誰か……。……!」

叫びながら辺りを見回すと、地面にへたり込んで座っている、見知った人影を見つける。

美世「茄子!!」

茄子「……」

美世「良かった……!無事だったんだ……!……茄子?」

茄子「……また、私だけ」

美世「また……?一体何が……!!」

茄子が項垂れる向こう。そこには、瓦礫の山となり原形を失った、孤児の保護施設が。

美世「そんな……!嘘……」

茄子「……sだけ、衝撃で吹き飛ばされたんですよ……」

美世「え?」

茄子「可笑しいですよね?また私だけ、生き残りちゃいました……。父と母を亡くした10年前のあの日から、もう誰も失わないと決めたのに!」

美世「茄子……」

茄子「運が良いなんて、嘘っぱちです。ホントは周りを犠牲にして、周囲を不幸にして!そうやってただただ生き延びているだけなんです!」

美世「そんな事……そんな事ない!少なくとも私は、茄子が生き延びてくれて良かったって、ホントにそう思ってるよ?」

茄子「……ダメですよ。きっと私は、誰にも愛される価値なんてないんです。美世ちゃ

んだって。ずっと一緒にいれば何時か美世ちゃんだって！生き延びるために殺しちゃうかもしれないんです!!」

パシインツ

茄子「……あ」

美世「……っ」

美世の平手が、強かに茄子の頬を打つ。

美世「そんな……！可笑しな事言わないでよ！子供達は、茄子が殺したの？違うでしょ！子供達を殺したのは、今ゲッターが戦ってる訳の分かんないアイツら！アイツらが理由も言わないで、一方的に殺したんだ！茄子のせいなんかじゃない！」

茄子「……けど、私が生き延びてしまったのは事実なんです。10年前の、あの日と同じように」

美世「だったら死んでみるって言うの？死んだら両親に逢える？子供達に謝罪出来る？今の苦しみから解放されて、楽になれるの!？」

茄子「……」

美世「あり得ない！絶対はない!!私達は生きてるんだ！生きているから、こうして話して、叩いて。怒って叫んで！気に入らないって憤っていられるんだ！だから……！」

ギユツ

茄子「……!」

美世「全部自分のせいにして背負わないでよ。そんな、生きてることが不幸みたいな顔しないでよ…。これ以上、顔見知りがいなくなるなんて、ごめんだよ」

茄子「美世ちゃん…」

ガシヤンツ

美世・茄子「!?!」

友紀「おお! 2人ともこんなところにいた〜」

美世「ゆ、友紀!?! どうしたの、そんなボロボロで!」

友紀「どうしたもこうしたもないよ。こんなところにいたらそっちだって危ないんだから。ほら、こっち来て手伝って!」

美世「手伝う?」

友紀「そ、ゲッターを動かすんだ。パイロットがあと2人いる」

美世「ゲッターを動かす…? ゲッターって、新ゲッター!?!」

友紀「当然。瓦礫の山から掘り出す作業は、生き残った人達で、もうほとんど終わってるよ」

美世「けど、この研究所にパイロットなんて、もう…」

友紀「いるじゃん。私と…」

美世「私と、茄子お!？」

友紀「もちろん無茶しろなんて言ってる訳じゃない。操縦桿を握ってくれただけで良い!それでも、ゲッターが力を引き出すには、2人の力が必要なんだ!」

美世「私達の力が…」

茄子「どうして、そこまで…」

友紀「ん?」

茄子「どうしてそこまでして、戦おうって思えるんですか?相手は、研究所を一瞬で廃墟にするような相手です。見て下さい」

茄子が指を向ける先、四天王と戦うゲッター達は、押されてこそいもないものの優勢と言う風にも見えない。互角、いやジリジリと追い詰められているようにも見受けられ

た。

茄子「ウヅキさんが、號達、莉嘉ちゃん達ゲッターの熟練のパイロット達が全力で立ち向かって、まだ1人も倒せていないような相手。そんなのを相手に、今更付け焼き刃みたいな私達がゲッターに乗って向かったところで、勝率が上がると思えません」

友紀「……」

茄子「それでも、立ち向かおうとするのは、何故ですか?」

友紀「だったら、このまま受け入れられる?ただ一方的に力で滅ぼされるのを、何も

出来ないままただただ死んでいく未来を!!」

茄子「それは…」

友紀「あたしは、イヤだね!こんな所で、こんな形で終わるなんて。10年前、親父に助けられた時、誓ったんだ!何がなんでも生きて、生きて、生き抜いて!自分のやりたいことをやりきるまで、どんなに汚くたって生きて続けてやるって!」

茄子「どんなに、汚くなっても…」

美世「やりたいことって…?」

友紀「さあ?…でもさ、別の世界から来た、莉嘉達に会って思ったことがあるんだ」

美世「莉嘉達に?」

友紀「この世界で、アイドルって言うのをやるのも、悪くないかなって」

美世「えっ、アイドルう?」

友紀「莉嘉達の世界じゃ、あたし達だっただってアイドルなんですよ?だっただら素質あるって。きつと!」

美世「あはは…。そうかなあ?」

友紀「大丈夫。根拠はないけど、何か上手くいく気がするんだよね。だから、さ!」

美世と茄子の、2人に向かって手を差し伸べる。

友紀「自分の運命は自分で開くんだ。行こうッ!!」

美世「……」

茄子「……」

顔を見合わせる、2人の答えは――。

弁慶「うおおおッ!!」

ゲッターポセイドンが放つ渾身のパンチ。対する増長天は、戟の柄でその拳を受け止め、往なす。

弁慶「……つと!」

號「車さん、頭下げて!」

弁慶「!?」

言われ、慌てて姿勢を低くしたゲッターポセイドンの頭上を、ソードトマホークの刀身が抜けていく。

號「でえええいッ!!」

増長天「小癩な……!」

スーパージェッター號の轟撃をまたしても戟で受け止める、増長天の姿勢が僅かに崩れる。

弁慶「バカ野郎!俺を殺す気か!?!」

號「意表を突いたんだよ!相手のな!」

増長天「形振り構ってられんか……だが！」

號「おわっ!？」

尚もソードトマホークで攻勢の意思を示すスーパーゲッター號を、戟を振るい軽く弾き飛ばす。

増長天「雑草が……!踏みにじられても何度でも！」

號「おう!雑草根性、舐めんじゃねえ!!」

地に倒れ伏しながらも、マグフォース・サンダーを放ち、増長天を捉える。

號「車さん、今だ!」

弁慶「ストロングミサイルツ!!」

マグフォース・サンダーに捕捉された増長天に、ストロングミサイルが直撃。黒煙が上がる。

莉嘉「やああああッ!!」

広目天「…!!」

また別の場所では、ゲッターアークと広目天、真ゲッタータラクと持国天が激しい轟撃を交わす。

持国天「たあッ!!」

ウツキ「っ!!」

素早い剣捌きで放たれる持国天の剣撃を、真ゲッタータラクは容易なものは躲し、直撃になるものはトマホークでその軌道を逸らして相對する。

ウヅキ「はっ！」

真ゲッタータラクのトマホーク、その先端のランス部で持国天の頭部を狙い突き入れるが、持国天は首を軽く捻ることのでその攻撃を躲す。

ウヅキ「……」

持国天「ふっふっふっ……！」

ウヅキ「……ふっ」

持国天「?!」

トマホークの刃がサイトへと早変わり。持国天の頸を再度狙う。

持国天「くう……！」

広目天「焼き払えい!!」

莉嘉「!!」

広目天が広げる絵巻から放たれる地獄の業火が、ゲッターアークに放たれる。

広目天「やったか……!?!」

莉嘉「——っ！」

広目天「ぬっう!?!」

しかし、ゲッターアークは即座に広目天の背後にその姿を現す。

莉嘉「バトルショットカッター!!」

広目天「ぐぬう!!」

バトルショットカッターを展開し、突き出されたゲッターアークの右ストレートを、一氣に後退することで回避。

広目天「天動招雷・響鳴衝破ツ!!」

莉嘉「サンダーボンバアアーツ!!」

広目天が空かさず絵巻から召喚した轟雷と、片腕に集束したサンダーボンバーで撃ち合う。

広目天「チィ…ツ!!」

持国天「広目天!!」

広目天「持国天!!」

気付けば、持国天と広目天が背中合わせに。そして、それぞれにゲッターと対峙している。

ウツキ「ゲッター…!!」

莉嘉「ゲッター!!」

ウツキ・莉嘉「ビィーームツ!!」

持国天「ぬう……！」

広目天「ぐおおおおッ!？」

それぞれに、向けられたゲッタービームを受け止めるが、爆発。爆煙が辺りを包む。

號「どうだ!？」

ウツキ「……」

弁慶「……まだ、気を抜くのは早えみてえだぜ」

美波「っ……！」

増長天「……」

広目天「……」

持国天「……」

戦闘が生んだ煙が晴れ、三天王が姿を現す。ほとんど無傷の姿で。

かな子「さつきまでの攻撃、全然効いてない……!？」

凱「まさか……!多少なりとも、ダメージは与えている筈です!」

溪「まるで次元が、違いすぎる……!」

多聞天「はじめから分かりきっていた筈だ。貴様らでは、我らには勝てん!」

號「へっ、上等じゃねえか!んなデケえ面して、あとで吠え面かくんじゃねえぞ……」

!」

溪 「でもどうするの!? あたし達が束になっても、あの4人の内、1人でも倒せるかどうか…」

弁慶 「作戦、小細工。小手先が通用するような相手じゃねえことは、確かだ」

ウヅキ 「……」

莉嘉 「くっ…!今のゲッターの力じゃ…」

アキハ 『苦戦しているようだな』

美波 「アキハさん!? 研究所じゃない、一体何処に!?!」

アキハ 『ちよつと野暮用でな。そんなことより、どうだ? 自称・神様は倒せそうか?』

凱 「こんな時に、悠長なことを…!」

號 「倒せそうか、じゃねえだろ。コイツらを倒さなきゃ何ねえんだろうが!」

アキハ 『號の言うとおり。だが、倒す術はあるか?』

號 「そりゃあ…」

アキハ 『まったく…。いいだろう、私が授けてやる。ゲッターアーク!』

莉嘉 「!? 何…:…これ…」

ゲッターアークのコックピット、サブモニターにマップと、ポイントを示したマーカーが映し出される。

アキハ 『何でもいいから指定したポイントに來い。お前達に私から、いやこの世界か

ら最後の力を授けてやる』

かな子「最後の、力……？」

美波「この世界から……」

莉嘉「兎に角、ここに行けば、今の状況をひっくり返せるの？」

アキハ『ああ。そこで戦っていても状況は変わらんだろう。ならばここは、私に乗れ』

莉嘉「……分かった！」

美波「けど、いいの？ 私達がここを離れたら……！」

號「俺達を見くびるんじゃない！」

ウヅキ「時間稼ぎ……4人の内3人くらいなら、こつちで引き付けられます」

弁慶「連中だって、ここにいる全員、この場から逃がす気はねえだろうからな。俺達

の心配はすんな！行ってこい!!」

莉嘉「うんツ！ 弁慶さん、ウヅキに、號！ここは任せる!!」

ギョんツ

方向を変え、指定されたポイントへ、最高速で向かうゲッターアーク。

持国天「むっ、奴等……1人逃げるか」

増長天「1匹たりとも逃がすものか！ここは我が……」

多聞天「待て、増長天」

増長天「多聞天？」

多聞天「あのゲッターの動き、何か妙だ」

広目天「妙？」

多聞天「連中が何を考えているか、それは分からぬ。だが奴のあの背中……。あれは、敵を恐れ逃げ出す者のそれではない」

持国天「何か秘策があると言うことか」

多聞天「我が往こう。持国天、増長天、広目天。お前達は、ここに残る者達に裁きを」

三天「「応っ！」」

多聞天がゲッターアークを追う。

號「ちっ……よりによつて一番厄介な奴が……！」

増長天「多聞天は追わせんぞ！人間」

號「はっ！テメエらこそ、ここに残ったことを後悔するんじやねえぞオ!!」
——。

莉嘉「くっ……！」

ゲッターアークを追う、多聞天がゲッターアークの周囲に雷を落とす、その行く手を阻む。

莉嘉「トマホーク、ブーメラン!!」

堪りかねてゲッターアークを反転させ、多聞天目掛けてトマホークを投じるも、多聞天が携える金箍棒によって、容易く弾かれる。

莉嘉「っ……！」

美波「莉嘉ちゃん、今は指定された場所に向かうことに集中して！」

莉嘉「分かっている！けど……！」

幾つかの雷が、ゲッターアークの肩や脇腹を掠める。躲し続けるのにも限界が生じつつある。

莉嘉「くくく……っ！もう、ウツサイ!!」

携えたトマホークにエネルギーを蓄え、トマホークハリケーンを多聞天に直撃させる。

多聞天「……」

莉嘉「くくく……っ！」

かな子「下手に反撃して、直撃を受ければゲッターアークだって只じや済まないかもしれません。厳しくても、今は逃げー択です」

莉嘉「くっそく！今に見ててよく!!」

言いつつ、ゲッターアークの速度を、更に上げる。

美波「心配しなくても、ゲッターアークの速度ならもうすぐ……。……！」

かな子「どうかしましたか？」

美波「うん……。アキハさんが指定したポイント……改めて確認したら、ここって私達が最初にこの世界にやってきた……」

莉嘉「着いた！」

森林や廃墟の群れを越え、指定ポイントに辿り着く。視界が開け、赤茶げた地面が深く掘り鉢上に挟られている、巨大なクレーターにも見える場所。

美波「ここ……はじめに来た時は事情を知らなかったから、分からなかったけど……もしかして……！」

アキハ『そう。この場所こそ、10年前、世界の全てを覆った場所さ』

美波「やっぱり！」

莉嘉「どう言うこと？」

美波「10年前に起きたゲッター災害……。その発端となった、真ゲッターがストナーサンシャインを撃った場所……。それがここなんだよ」

かな子「ええ!？」

多聞天「正しく忌み地と言うことか……。人間共が飽く事なく力を追い求め、身に余る力を手にしたことで、地獄を生んだ場所……」

多聞天（しかし何だ……？この感覚は……。単に高濃度のゲッター線が周囲を覆っている

わけではない…。もつと異質な…)

莉嘉「ぐつ…！多聞天…！」

かな子「そんなところに、ゲッターの力があるんですか？」

アキハ『ああ。これから、地獄の釜の蓋を開ける！』

美波「地獄の釜の?!」

かな子「蓋…!?!」

リン『どう言うことなの？アキハ』

アキハ『おお、リン。そこは、地下の通信室か。止めてくれるなよ』

リン『止めるに決まってるでしょ。地獄の釜の蓋を開くなんて!』

美波「地獄の釜…。まさかこの世界にも、そう呼ばれるものがあつたなんて…！」

アキハ『ほう…。お前達の世界にもあるのか。それは興味深い。…が』

話をしながら、コンソールで最後の電子ロックを解除する。アキハの目の前に、小さなバルブが現れた。

リン『何してるの？早く引き返して。アキハ!』

アキハ『10年…。長いものだったよなあ』

リン『アキハ…?』

アキハ『10年前、真ゲッターがストナーサンシャインを撃った、ゲッター災害が起

きた後の話だ。一度放たれ、消費されたエネルギーは、本来霧散し、跡形も残さず消える。その筈だった』

アキハ『だが、真ゲッターが放ったストナーサンシャインのエネルギーは霧散する事なく、この爆心地のど真ん中に滞留し尚、そのエネルギーを増大させたのだ』

リン『世界中を覆う高濃度ゲッター線で、私達もみんな地下への避難を余儀なくされた。私達に出来ることは、滞留するエネルギーがこれ以上ゲッター線を放出しないように蓋をし、封じることだけだった』

美波「それが、この世界の地獄の釜……」

アキハ『厄介極まりなかったよ。10年前の災害が残した、余りにも大きすぎる傷跡……。その為にこちら一帯は再開発の目処も、あのアトランティス流国すら、ここには手を出そうとしなかった。何の為にと、ずっと考え続けていたが、ようやく今日、その意味を理解した』

かな子「もしかして、私達に授ける力って……」

アキハ『そうだ。10年前に災いをもたらしたゲッターエネルギー。私達にとっては疫病神に他ならない地獄の釜のエネルギー溜まり……。根こそぎ持っていけ!』

莉嘉「そんなこと、ホントに出来るの!?!」

美波「さあ……。流石に前例がないから。ゲッターエネルギーそのものを、直接受け取

るなんて……」

かな子「ストナーサンシャインの……ううん、10年もの間に増大したそれ以上のエネルギーを受けることになるんです。最悪、ゲッターアークでも消滅しちゃうかも……」

莉嘉「リスク滅茶苦茶なギャンブルじゃん！」

アキハ『いいや、ギャンブルなどではない！私には、その確信がある！』

美波「アキハさん……」

かな子「私も……このままじゃ、神様にも勝てないんです。それなら、リスクを追っても、チャレンジしてみるべきだと思います！」

莉嘉「……」

かな子「それに、ゲッターは何時も私達の味方ですから。卯月ちゃん的に言うなら、ゲッターの力を信じる、です！」

莉嘉「ゲッターの力を信じる、か……。分かった！」

アキハ『釜の蓋はもうすぐ開く！早く爆心地の中心まで来い！』

多聞天「そんな思い通りに、させると思うか!?!」

アキハ『私を攻撃するか？それでもいいぞ。貴様の攻撃でも、釜の蓋は破壊されるだろう。結果は変わらん！』

多聞天「むう……!」

リン『アキハ！今からでも考えを変えられない？』

アキハ『そんなもの……愚問だな』

リン『そう……』

アキハ『釜の蓋を開けた結果、どうなるかなどは、元より分かっているさ。だからこそ、私なんだ』

リン『それは……』

アキハ『死んでいると言うならそうなんだ。10年前から、当に私は死んでいた。恩師早乙女博士を、目の前で失った時、何で私なのだと悩みました。非力な己を悔やみ、生きていても仕方ないと、自暴自棄になりました。だからこそ、その為の10年だったのだと、今なら理解る！』

リン『……』

アキハ『人類の事は任せたぞ。ではな』

リン『アキハ——』

通信を切る。釜の封印が緩み、足元から仄かにゲッター線の光が、辺りに立ち上ぼり始める。

アキハ「これがゲッター線の光……。間近に見るのは初めてかもしれない……。こんなに、美しいものなのか……」

アキハ（この美しい光が、数多の命を奪いもする…。分からないものだな、結局…）
アキハ「——！」

ゲッターの光が、アキハを包み込む。

アキハ「ゲッターの光…！宇宙…！進化…！確かに宇宙とは、生命があつて初めて、その存在を確立させる…！宇宙と生命との関係性はいや、ゲッターと生命の関係は！宇宙が誕生した時から起因しているのか!!」

アキハ「理解つた！理解りましたよ、早乙女博士つ!!だから博士は、博士でなく、私に！ふふふつ——！」

アキハ「さあ、ゲッターが待っているぞ…。早く来い、ゲッターロボアーク!!」

バルブが開き、地獄の釜が開かれた。堰を切つたように膨大なゲッターエネルギーが天を目指して噴き上がり、アキハの視界も白い闇に吞まれて消える。そして——。

莉嘉「…アキハ？」

多聞天「んっ…！」

ストナーサンシャインが生んだクレーターをも破壊せん勢いで噴き上がるゲッターエネルギーの波に多聞天は後退。ゲッターアークはその輝きに包まれ、消える。

多聞天「これほどのエネルギーを溜め込んでいたとは…。しかし、これだけの量、ゲッターロボなどでは一溜まりもあるまい…」

言葉を溢しながら、光の向こうに視線を注ぐ。

多聞天「!?」

光の中から、影が現れる。それは、

多聞天「この気配は、まさか…！」

その身に光を宿した、ゲッターアークだ。

つづく

第28話『遙かなる旅路』

リン「……」

所員「……よし、よし、分かった。司令、最後の非戦闘員の戦闘区域外への脱出が、たった今完了しました。後は我々だけです」

リン「…分かった。みんなも脱出を急いで」

所員「は…。司令は…?」

リン「私は、もうしばらく見届けていくよ。この戦いと、人類の行く末を——」

地下格納庫の制御室。そのモニターには地上で微かに生きている監視カメラからの映像を繋いでいた。そこには、

広目天「きえええいっ!!」

弁慶「ぐううう…ツ!!」

尚も激しくぶつかり合う、ゲッターと神々の戦いが映し出されていた。

増長天「はああああッ!!」

號「何のおくくく!!」

増長天の素早い戟の連続突きを、ソードトマホークで弾いて往なす。

増長天「しぶとい蟻んこ共め！」

號「何く!? テメエ言うに事欠いて、この俺を虫けら共と同じと言ったなア〜!?」

増長天「取るに変わらぬ! 貴様らと、一寸の虫とは!」

號「ならよお!」

増長天「むっ!?」

ソードトマホークで強く増長天の戟を打ち払い、

號「コイツで……どうだ!」

つづいて、ソードトマホークを地面に突き立て、その柄にしがみついたまま、スーパー

ゲッター號を跳躍。ソードトマホークを支柱に、遠心力を込めた蹴りを浴びせる。

増長天「うおっ!」

號「どんなもんだ!? 舐めんじゃねえ!!」

持国天「増長天!」

ウヅキ「貴方の相手は、私の筈です」

持国天「……っ!」

増長天へと視線が泳いだ持国天にトマホークを振り下ろし、彼を逃がさない。

持国天「ちい……っ」

ウツキ「……はっ！」

トマホークを振るって身を弾き、持国天と一度距離を取り、

ウツキ「…莉嘉の真似をする訳じゃないですけど」

真ゲッタータラクのトマホーク。その刃がゲッターエネルギーを帯びる。

ウツキ「っ!!」

さながら瞬間移動のような動きで、持国天に肉薄。

持国天「くっ……！」

ウツキ「トマホーク・ストームツ!!」

刹那、持国天に連撃を叩き込む。

持国天「ぐお……」

広目天「大丈夫か、持国天」

持国天「ああ、傷は浅い」

號「ちっ……！」

弁慶「號、ウツキ! 一旦下がれ!!」

號・ウツキ「!?!」

弁慶「ゲッターサイクロン!!」

増長天「うおおおおおッ!?!」

ゲッターサイクロンが増長天を吹き飛ばし、持国天と広目天に叩き付ける。

増長天「人間共め……！無駄な足掻きを、まだ続けるか」

號「ンだア？無駄かどうか、決めるのはテメエらじゃねえ！」

広目天「所詮は滅びるが運命！潔く受け入れるが良い！」

ウヅキ「丁重にお断りします。少なくとも、貴方達みたいなのに屈するために、今日まで生きてきた訳じゃありません」

持国天「己が持った力の意味にも気付かず、あくまで宇宙を滅ぼす為に生き足掻くか。

…なれば！」

持国天の頭上に暗雲が渦巻き、彼が手にする剣に、落雷がエネルギーとして収束していく。

弁慶「…流石にやべえか……！」

広目天「逃がさぬ！」

剋「これは……!?!」

広目天の絵巻が3機のゲッターの周囲を走り、結界を展開して包围する。

持国天「受けよ、裁きの雷だ!!」

凄まじい電光が、3機のゲッターを打つ。

號「うわあああああッ!!」

弁慶 「ぐうおおお!!」

ウヅキ 「ううっ……!」

増長天 「ふえっふえっふえっふえっ……! 悪しきを払う神の雷の前に、塵芥も残さず消え去るが良い!!」

溪 「げ、ゲッターが動かない……!」

剱 「ぐおお……! この状況が続けば、ゲッターも、俺達もマズいぞ!!」
號 「分かってる! 分かってるがよ……!」

持国天 「ふふふふっ……!」

増長天 「ふえっふえっふえっ!」

広目天 「くっくっくっ……!」

「みんなは、やらせないよ!!」

持国天 「何だ!？」

ギヤルルルルルッ

弁慶 「こ、この音は……」

響き渡るドリルの音。

溪 「これは……ゲッター2のドリルだよ!」

ズワッ

持国天「ぐおっ!？」

破砕音を響かせ、大地を裂き、足元から持国天を襲う、それは、

「「新ゲッター2!!」」

美世「もうう！戦闘には参加しなくて良いって言ってたのに！」

友紀「まあまあ。発進口が壊れてる以上、ゲッター2で地面を掘り進んでいくしかなかったんだからさ！」

美世「こつから分離して合体しろっての…?」

茄子「大丈夫です…！やるって決めたんですから、自分を信じて下さいっ！」

美世「……うっ」

弁慶「友紀…。それに、美世と茄子が乗ってるのか!？」

茄子「はいっ！」

美世「成り行きでねえ…」

弁慶「無茶苦茶だ…！素人が出て勝てる相手じゃねえ！とつとと退がれ!!」

友紀「分かってる！だから今は、私が1号機に乗ってる！」

弁慶「関係あるか！」

増長天「お喋りはそこまでだ！」

美世「ひいっ!？」

勢いよく振りかざされた増長天の戟を、慌てた動作で躲す。

増長天「何者かと思えば、未熟者めが！己が愚行を呪いながら冥府へと逝くがよい！」

美世「ね、粘着してこないでよオ〜!!？」

友紀「落ち着いて、分離のレバーを引いて！」

美世「分離のレバーって、これ!!？」

増長天の攻撃を辛うじてのところで躲しながら、分離・合体用のレバーに手を掛ける。

美世「えつと……ここから……」

友紀「オープンゲット！」

美世「お、オープンゲット!!」

バシユンツ

増長天「むうっ！」

新ゲッター2を分離させ、攻撃から逃れる。

美世「た、助かった〜……」

友紀「油断しない！直ぐにフォーメーションを組むよ！あたしに続いて！」

広目天「ふんっ、カトンボ共が！一気に叩き潰してくれ……うお!!？」

新ゲッターマシンに狙いを定めた広目天を、地上からのミサイルが狙い撃つ。

広目天「何を……！」

號 「ソイツはちよつとやり口が狡いんじゃねえか？ 神サマよ」

弁慶 「友紀達はやらせるかよ！」

広目天 「くっ……！」

ウヅキ 「今の内です。友紀！」

友紀 「分かってらア!! 美世、茄子！」

美世 「う、うん……！」

茄子 「はいっ！」

天高く、1列に連なったマシンは1つに。

友紀 「チェーンジゲッターアアアアアアアアアア!! 1ツ!!」

新ゲッター1が神々の前に立つ。

広目天 「くう……！」

持国天 「さりとて、有象無象が1匹増えた程度では……！」

友紀 「それはどうかかと……！」

グンツ

友紀 「うおッ!?!」

持国天 「何だと!?!」

勢いよく操縦桿を倒した、新ゲッター1が目にも止まらぬ早さで持国天の背後に現れ

る。

友紀「この……えいっ！」

状況が掴めず、取り敢えず持国天に蹴りをお見舞いする。

持国天「グフツ……！」

増長天「持国天！おのれえ……！」

友紀「うわあ!？」

新ゲッター1に対して、薙ぎ払うように戟を打つが、その刃は空を切る。

友紀「はっ……はっ……はっ……はっ……！」

新ゲッター1の姿は、空の色もその濃さを増す遥か上空に。

溪「な、何が……どうなってるの……？」

剗「新ゲッターの性能、あんなものだったか……!？」

増長天「奴め、何時の間に!？」

広目天「なれば私が……!破アツ!!」

友紀「……っ!？」

広目天の絵巻から放たれた、旋風を伴った業火が新ゲッター1に襲いかかるが、

友紀「……あり？」

業火は新ゲッター1に届かず、目の前で見えざる力によって弾かれたように消滅し

た。

友紀「ど、どーなってるの？マジ…」

増長天「広目天、ふざけている場合か!？」

広目天「ふざけてなど…：我が術が届かぬ筈が…!」

友紀「何だかよく分かんないけど、これなら!」グツ
気を取り直して、操縦桿に力を込める。

増長天「!？」

友紀「ふっふっ！これで、どうだ!」

渾身のゲッターパンチで、増長天を吹き飛ばす。

広目天「此奴…!」

友紀「はっ!」

持国天「おおおッ!!」

友紀「おっと!…：…と?」

持国天「ぬう…!」

友紀「これは、お返し!」

持国天「くっ…!」

広目天「ぐう…!」

神の体と新ゲッター1の表装が接するような至近距離で、しかし広目天と持国天をも手玉に取り、新ゲッターは大立ち回る。

増長天「思い通りになど……させぬわッ!!」

広目天「一度に掛ければ……!」

持国天「……はあああッ!!」

三天王、それぞれの雷やら炎を模した攻撃が波状的に新ゲッター1を襲う。

友紀「わっわっ! 流石にヤバいか……?」

幾つかの攻撃が新ゲッター1の表装を掠めていくが、直撃となるようなものはない。寧ろ攻撃自体が新ゲッター1を避けていくかのように逸れていく。

ウヅキ「あれは……」

ミオ『新ゲッターなら大丈夫だよ』

ウヅキ「……ミオ」

ミオ『あれも人類に託された、希望の1つだ』

ウヅキ「希望……?」

ミオ『まあ、見てなよ』

友紀「へっへっ! 神様名乗ってる割りには、ピッチングのコントロールもまともに出来てないんじゃない?」

増長天「おのれ……！これならば！」

友紀「へっ？」

増長天の神速で、一気に新ゲッター1に肉薄。振り上げた戟を振り下ろす。

増長天「きえええいッ!!」

友紀「いゝ、いいいっ!!」

バキンッ

増長天「なっ……!!」

友紀「っ……!!」

振り下ろされた戟の刃が、新ゲッター1の鼻先で粉々に砕け散った。

増長天「ば、バカな……!!」

友紀「……っしやあ!隙アリ!!」

増長天の鳩尾を思いきり蹴飛ばす。

友紀「どうだ!」

増長天「このお……!」

持国天「一度退がれ!増長天!!」

増長天「くっ……!」

広目天「一体どうなっているのだ……!!あの力は、まるで……」

持国天「見てみよ、ゲッターの周囲を！」

広目天「何!？」

天高く立つ新ゲッター1。その新ゲッター1を中心に、うつすらと周囲の空間が歪んでいるようにも見え、ある種の領域が新ゲッター1を包み込んでいるようにも見える。

増長天「あれは……」

持国天「……宇宙だ」

広目天「宇宙、だと……!？」

持国天「奴等3人全員、と言うわけではないだろう。奴等の中に、己の宇宙を確立させている者……その兆しを見せる者がおる」

増長天「宇宙の、確立……!？」

広目天「まさか……!我らが存在する、この空間を支配すると言うか!？」

持国天「まだその片鱗に過ぎん。力も未熟で、支配できる空間もごく僅かであろう。しかし、悔るわけにはいかん！」

増長天「ごく僅かだろうと、人間風情に……許せんっ!」

広目天「ぬうんっ!心眼……!」

正面で印を組み目を瞑る。心の目を用い、新ゲッター1の中を見通す。

広目天「むうう……!」

茄子「——!!」

広目天「!!……いた！奴等の一番下、3番目の乗り手だ!!」

茄子（お願い……！友紀と美世の命だけでも守って……！）

増長天「彼奴か！ならば！」

友紀「うわっ!?!」

再び飛び上がった増長天がその手で新ゲッター1を押さえ付け、そのまま急降下。新ゲッター1を地面に叩き落とす。

友紀「ぐうわっ!!」

茄子「友紀ちゃん！」

増長天「ここまでだ！人間共」

美世「ヤバっ……！」

増長天「貴様の力は、人間が持つにはまだ早い！貴様は、生きてはいけけないのだ!!」

茄子「……っ!?!私……」

友紀「っ……!?!……んで……！」　ギリイツ

増長天「何……?!お……！」

マウントポジションでのし掛かる増長天の、その頭を押さえ返し、上体を起こす新

ゲッター1。

友紀「何でそんなこと……！お前に決められなくちゃならないんだア……ッ!!」

勢いよく腕を振るい、今度は増長天を地面に叩き付けた。

増長天「ぐぼあッ!!」

友紀「生きてちやいけなない?!死ななきやいけなない?!それを決められるのは自分自身!

相手の命を簡単に否定出来るような奴は……!」

増長天「っ……!」

放たれた新ゲッター1の直蹴りを躲し、上空へ。

増長天「くっ……!」

それを上回る速度で、新ゲッター1は更に上へ。その手にはトマホークが握り込まれ、刃は強くゲッター線の輝きを帯びている。

友紀「そっちの方が、いなくなっちゃえく……ッ!!」

増長天「ぐう……ッ!!」

急降下と共に、増長天の胴体に刃を立てる。

友紀「どおおりやあああああッ!!」

そのまま、増長天の体を真つ二つに切り裂いた。

持国天・広目天「増長天ッ!!」

増長天「ば、バカな……!?!」

呻き声を残し、力なく大地に落ちた増長天の肉体は霞のように消え失せた。

広目天「な、何と言うことだ……!」

持国天「…成る程な」

広目天「……?」

持国天「奴等の力だ」

広目天「奴等……?しかし、特異点は1人の筈」

持国天「うむ。しかしその力は先程も言ったとおり未熟。恐らく本人自身、意識的に制御出来てはおらぬだろう」

広目天「何……!?!だが、こちらの攻撃に対しては確かにゲッターを護り、増長天を仕留めたあの力は、正しく……!」

持国天「そう。だから、指標となる存在がその力を引き出していたのだ」

広目天「指標……?そうか、1番の乗り手……」

持国天「然り。ゲッター……想像以上に厄介な存在よ」

號「お喋りはもう、お終いかい?」

持国天・広目天「!?!」

飛び上がり、振り下ろされたスーパーゲッター號のソードトマホークを、持国天が腕

を翳して受け止める。

號 「俺達を忘れてもらっちゃ困るぜ！何も俺達は、新ゲッターの腰巾着じゃねえ！」

持国天 「……。貴様らには、資格はない!!」

腕を振るってスーパーゲッター號を引き剥がす。弾かれたスーパーゲッター號は宙返りを打って体勢を整え、着地。正眼の構えで持国天に睨みを利かせる。

持国天 「悔り難しは新ゲッター……。然れど、貴様らは所詮……」

ウヅキ 「だつたら何ですか？」

持国天 「……!!」

トマホークを構えた真ゲッタータラクが、上空から奇襲。

ウヅキ 「例えそこに、天と地ほどの力の差があつたところで、私達は生きること諦めません」

持国天 「それがゆくゆく、己の宇宙を滅ぼすと知つてもか!!」

號 「関係ねえよ！」

スーパーゲッター號のダブル・ナックルボンバーが、持国天の背中を突く。

持国天 「ぐっ……!!」

號 「宇宙が滅びようがどうなるうが、知つたこつちやねえ！今の俺達に取っちゃ、俺達の未来を脅かしてるアンタこそが乗り越えなくちやならねえ敵なのよ!!」

溪 「身も蓋もないね……」

剽 「だが、自分達人類も、決して愚かじやない。宇宙が滅びる時が来ると言うならば、それを乗り越えるために更に更に足掻くさ」

持国天 「たかだか人間の知恵で、乗り越えられると思うか!？」

剽 「それを信じられないお前達に、説法をしてもらおう謂れはない!」

ウツキ 「ゲッタービーム!!」

持国天 「おお……!？」

地面に向かって、降り注ぐように放たれたゲッタービームが、持国天を地に落とす。

ウツキ 「今です。號!」

號 「おうよー!」

天を仰いで倒れ伏す持国天が立ち上がらぬ内に、スーパーゲッター號は逆手に持ったソードトマホークを突き立てる。

持国天 「ガッ……!」

號 「喰らいやがれ……ッ!」

今度こそ持国天の胴体を貫いたソードトマホークの刀身が、青白いプラズマの光を宿す。

號 「トマホーク……!サンダアアアアアアッ!!」

バリバリバリバリバリバリバリイッ

持国天「ぐうおああああああああッ!!？」

広目天「持国天！」

弁慶「ゲッターサイクロン!!」

持国天に加勢しようとした広目天の動きを、ゲッターポセイドンのゲッターサイクロンが制する。

弁慶「號達の所へは行かせねえぜ？」

広目天「くう……!このようなこけおどしで！」

茄子「だったら、コレでどうです!？」

広目天「!？」

ゲッターサイクロンの上空から落ちてきた新ゲッター3が、広目天にのし掛かり、そのまま地面に叩き付ける。

弁慶「茄子!？」

茄子「友紀ちゃんだつて、美世ちゃんだつて頑張ったんです!私だつて!!」

広目天「……!この程度ッ!!」

茄子「きやつ！」

のし掛かる新ゲッター3を押し退けて、広目天が立ち上がる。

茄子「っ……！ゲッターミサイル!!」

弁慶「ストロングミサイルツ!!」

新ゲッター3のミサイルにストロングミサイルを合わせ、広目天を挟み撃ち。

広目天「ぬう……!？」

弁慶「おりやあっ！」

怯んだ広目天を、そのまま羽交い締めにする。

弁慶「娘達に手出しさせるかよ！」

広目天「き、貴様ア……！」

弁慶「大・雪・山おろしいいいッ!!」

広目天「ぐわあ……っ！」

そのまま、大雪山おろしで広目天を持ち上げる。

弁慶「いくぞ、茄子!!」

茄子「はいっ!!」

弁慶「おおお……!りやあああああッ!!」

茄子「ミサイル、ストームツ!!」

大雪山おろしで天高く投げ飛ばした広目天に、新ゲッター3の全弾頭をぶつけ、2機の連携を以て二段返しと成る。

広目天「ぐお……っ！」

友紀「サンキュー茄子！後は任せて！」

茄子「お願いします。オープンゲット！」

友紀「チェンジゲッター1!!ウツキッ！」

ウツキ「…はいっ！」

友紀「ダブル！」

ウツキ「ゲッターア……！」

友紀・ウツキ「「ビィーームッ!!」」

新ゲッター1と真ゲッタータラクから放たれたダブルゲッタービームが、広目天を灼く。

広目天「くっ……うう……！」

友紀「ぐうう……！美世、茄子お……！力を貸して！」

美世「ど、どうすれば良いのか分からないけど、とにかく！」グッ

茄子「私達の、力の限りに!!」グッ

操縦桿を握る手に力を込める。

友紀「いけええええええッ!!」

広目天「うおおおおおおお……!!？」

エネルギーが増幅されたゲッタービームのエネルギーの中で、広目天は蒸発した。

持国天「くっ……！広目天までも……！」

號「ちっ……！しぶてえ野郎だ」

持国天「……っ!?」

ズオオオオオオオ

弁慶「何だ!?!」

彼方の空、地から噴き出し天を貫く、巨大な光の柱が上がる。

美世「今度は何!?!」

溪「キレイ……」

剱「……間違いない。あれは、ゲッター線の光だ!」

號「ゲッター線だ?!?!一体何が……」

弁慶「それだけじゃねえ見ろ!」

號「!?!」

號達の上空を、打ち寄せる波のように、柱と同じ色を宿した光が柱へと向かっている。

ウツキ「これは……」

リン『地球上を覆っていた高濃度ゲッター線が収束している。あのゲッター線の柱、

ゲッターアークの元に!』

剽 「ゲッターアーク!」

號 「アイツら、地球を覆っていたゲッター線まで力に変える気かよ……!」

持国天 「多聞天……くっ!」

號 「あ、おいっ! 待ちやがれ!……!?!」

飛び立つ持国天を追い掛けようとしたスーパーゲッター號が力なく崩れ落ちる。

剽 「エネルギー切れだ。俺達に出来ることは、ここまでと言うことだな」

號 「くっ……! 後は莉嘉達に任せるしかねえのか」

弁慶 「何、アイツらなら心配しなくても良いだろうよ。友紀達も、無茶して追撃とか、

考えんじゃねえぞ」

美世 「あ、当たり前だよ……! ここまで出来れば、もう十分だよね? 友紀?」

友紀 「……うん」

茄子 「私も、何だかスゴく、疲れちゃって……」

弁慶 「とんでもねえ初陣になっちまったからなあ。ま、よく頑張った」

ウツキ 「……」

リン 『ウツキもありがとう。タラクも整備しなくちや。一度帰投して』

ウツキ 「……」

リン 『ウツキ?』

ウヅキ「リン。ここから少し言ったところに、小さな町の廃墟があります。そこに、子供だけで頑張っている子供達がいるので、助けてあげて下さい」

リン『……?分かったけど……どうしたの?急に』

ウヅキ「……それじゃあ」

シユバツ

リン「ウヅキ!?何処に行くつもりなの?応答して。ウヅキ!!」

ミオ『大丈夫。心配要らないよ、リン。時が来たんだ。旅立ちの時だ』

リン「み、ミオ……?どうして……何を言ってるの?そうやって、今度はウヅキまで連れていくつもり?!」

ミオ『違うよ、そうじゃない。人間は誰でも、使命を持って宇宙に生まれてくる。それを果たす時が来たんだ』

リン「意味が分からない!ウヅキの使命と、旅立ちと!一体何の関係があるって言うの!私達の中であつた1人だけここに残される事が、私の使命だつて言うの!」

ミオ『船頭は必要だよ。後は、任せただから』

リン「待って!私を一人にしないで……!応答して——!」

リン「ウヅキイイイイッ!!」

——。

多聞天「……」

持国天「多聞天!!」

多聞天「…持国天か」

持国天「何があつたのだ？」

多聞天「見てみるがいい」

持国天「……？」

多聞天に促される視線の先、今だ尚火山噴火のように地の底から膨大なゲッターエネルギーを放出させている地獄の釜の中央。

天に地に、一点に集束するゲッターエネルギーの渦の中央には、エネルギーを受けてその輝きを身に宿し、悠然と佇むゲッターアークの姿が。

持国天「まさか…！我が身、理の崩壊を気にも止めず、性懲りもなく力を求め続けるか…！ゲッター!!」

多聞天の返事も待たず、ゲッターアークに向けて加速する。

持国天「はああッ!!」

剣を握る手に力を込め、持国天を認識しているのか、微動だにしないゲッターアークに振り下ろす。

持国天「とああああッ!!」

持国天の剣は空を切り、白閃を描く。

持国天「何処へ言った？」

ゲッターアークが現れたのは、持国天の背後。

持国天「!?」

莉嘉「!!」

ゲッターパンチが、持国天の右頬を弾く。

持国天「ぐおっ!？」

莉嘉「うあああああッ!!」

頬を打たれ、体勢を崩した持国天の鳩尾に、蹴りが突き刺さる。

持国天「ぐう……おのれ……!!」

莉嘉「はあ……はあ……はあ……っ!……スゴい」

思わず、己の手元に視線を落とす。

莉嘉「体の奥から力が沸き上がってくる……指先から、頭のとっぺんまで熱く滾って

くる……!」

美波「コレが、地獄の釜に封じられた、ゲッターの力……!」

かな子「ゲッターアークのエネルギーが、もう計測出来ない……。コレだけのエネルギー

ギーを受けても、暴走しないなんて……。……ううん」

ゲッターの力をその身で感じ取る、3人の体の表面を緑色をしたゲッターエネルギーの線が明滅して脈打つ。

持国天「今でもまだ遅くはない！引き返せ!!」

莉嘉「っ!」

剣から雷撃を放つ。持国天の攻撃を瞬間移動で躲し、再び背後を取ったゲッターアークのバトルショットカッターを、しかし今度は即応し、持国天はその剣で受け止める。

莉嘉「っ…!」

持国天「己が手にした力を悟るのだ！その力は、人間が手にしていないものではない！」
莉嘉「だったら？黙って大人しく、アンタ達に成敗されてろって？そんな一方的なお

願い…!」

持国天「!?」

莉嘉「聞いてあげるかア!!」

持国天の顎を蹴り上げ、宙に吹き飛ばす。

持国天「カツ…!?!」

莉嘉「ゲッタートマホーク!!」

ゲッタートマホークを抜き打ち、ツイランサー状に。跳ね上がった持国天より先に上空に回り込み、待ち構えた。

莉嘉「とあああああ〜ッ!!」

トマホークを振るいながら、持国天の体を真下に突き抜け、即座に左、直後右斜め上と、縦横無尽に持国天を覆い、その体を切り刻んだ。

持国天「げ、ゲッター……!」

5体をバラバラに切り刻まれ、盛大に爆ぜ散る持国天。

美波「四天王の1人を倒した!」

かな子「コレで残るは……」

莉嘉「後、1人……!」

多聞天「……」

腕を組み、仁王立ちでゲッターアークを見下ろしていた多聞天が、その腕を解く。

莉嘉「っ……!?!」

かな子「何……? さっきまでと、気配が……」

美波「いよいよ本気づてこと……? 莉嘉ちゃん、気圧されちゃダメだよ」

莉嘉「っ……分かってる! ……グッ

多聞天「ゲッター……」

莉嘉「っ!」

多聞天「……行くぞお!!」

ヒュンッ

莉嘉「!?」

まるでいきなり結果を叩き付けられたように、先程まで構えも取らず、棒立ちだった多聞天。にも関わらず、咄嗟に眼前に翳したトマホークにはその拳が打ち付けられている。

莉嘉「うあ…!!」

攻撃を防いだ程度で、その衝撃は殺せず。勢いよく吹き飛んだゲッターアークは、岩壁に激突。

多聞天「ううるあああああッ!!」

寸分も間を置かず、多聞天が蹴りの姿勢で飛び込んでくる。

莉嘉「!!」

ゲッターアークを急上昇。攻撃を躲すが、多聞天の蹴りを受けた地表はその衝撃でごっそりと抉られた。

かな子「な、何て攻撃…!?!」

莉嘉「ビビってばっかじゃカッコつかない!今度はこっちの番だ…!」

トマホークを構え直し、多聞天に臆せず特攻。

莉嘉「っ!」

多聞天の懷に飛び込み、トマホークを振るう。

多聞天「ふんっ」

莉嘉「っ……！」

多聞天「とあッ!!」

莉嘉「ああッ!!」

トマホークを止められ、突き出された貫き手を辛うじて躲し、再び多聞天の胸部目掛けダブルトマホークとした2刀の刃を振り下ろす。それでも、多聞天の表皮は摩擦で僅かな蒸気を上げるだけで、

莉嘉「くうう……！」

多聞天「破アッ!!」

奥歯を噛み締めた莉嘉の前に、掌から放たれた神の轟火を、後ろに跳ねて躲す。

莉嘉「こんのお……！」

美波「落ち着いて！熱くなりすぎても、勝てる相手じゃない！」

莉嘉「分かってるよ！けど、ここまで攻撃が効いてないんじゃない……！」

かな子「莉嘉ちゃんの全身全霊で戦ってください！私達のことには気にせず！」

莉嘉「……かな子、後悔してもしらないから！」

かな子「え……？……ひゃあッ!!」

グンツ、とゲッターアークを急加速。

莉嘉「トマホーク、ハリケエーンツ!!」

トマホークの刃にゲッターエネルギーを宿し、加速をつけて一気に振り下ろす。

多聞天「……」

莉嘉「これを……!連打アアアツ!!」

瞬く合間に左右のトマホークからトマホークハリケーンを込めた一撃を無数に打ち続けた。

多聞天「っ……!」

莉嘉「今、ちよつと痛いって思ったでしょ?」

多聞天「……っ」

莉嘉「更にい……!」

ゲッターアークのウイングが開き、エネルギーが腕部に収束していく。

莉嘉「サンダーアア……!ボンバアアアツ!!」

零距离から、サンダーボンバーが炸裂する。

多聞天「ぬうううツ!!」

莉嘉「っ!?!」

サンダーボンバーを受けて尚、多聞天は迫る。

莉嘉「ゲッターアアービィーームツ!!」

そこで、続いてゲッタービームを浴びせる。

莉嘉「くっ……! うう……っ!」

限界を超えた出力で放たれるゲッタービームに、コックピット内の計器は割れ、小さな爆発が辺りで起こる。

莉嘉「み、美波……かな子……!」

美波「う、うう……!」

かな子「んんんんツ!!」

莉嘉「こんのおくくツ!!」

3人の力を以て、肥大化したゲッタービームが、多聞天を包み込む。

美波「不味い……! 莉嘉ちゃん、離れて!」

莉嘉「!!」

急いで多聞天から距離を取ると同時、盛大な爆発が周囲に拡がる。

かな子「はあ……はあ……はあ……!」

美波「はあ……はあ……はあ……!」

莉嘉「はあ……はあ……はあ……や、やった……?」

かな子「どう、でしょう……?」

美波「やるだけのことは、やったけど…」

莉嘉「これでダメなら、いよいよ…。…。!?」

祈る思いで見つめた爆煙の向こう。ゲッタービームにより、あちこちが砕け、ダメージを受けた印象を残すものの、多聞天は、そこにいた。

かな子「つ……。そんな…!」

美波「化け物……。いえ、これが神の力だと言うの…?」

莉嘉「……」

多聞天「恐ろしい」

莉嘉「何?」

多聞天「あの短時間の間に、コレだけの力を身に付ける。やはり恐ろしきはゲッター。

そしてその力の源……」

ふっと、視線を地獄の釜の底に向ける。

多聞天（異様な気配を感じてはいたが……。あの先、肥大化したゲッター線によって空間が歪み、1種の門となっておるようだ……。そこから流れ込んでくるものは……）

多聞天「……やはり、か」

莉嘉「はあ!?こつちをバカにしてんの!?!」

多聞天「ついて来るが良い。面白いものを見せてやろう」

に!!」

多聞天「何故、か…」

莉嘉「どうせまたアンタの差し金なんでしょ?こんな大掛かりな手品まで用意して…!」

多聞天「否ッ!!」

莉嘉「!!」

多聞天「そして、自らで感じるのだ。この宇宙の異質さを」

莉嘉「宇宙の、異質さ…?」

言われ、改めて全天に拡がる広大な宇宙を見渡す。

莉嘉「……」

かな子「感じろって、この宇宙が、何か…」

美波「でも、確かに…:…何だろう、静かすぎると言うか…」

莉嘉「…:…っ」

かな子「莉嘉ちゃん?」

実際に宇宙に立つゲッターアークを通して、その装甲板を通して、張り巡らされた電送管、ゲッターのフレームを通して、その手が握る操縦桿を通して、この宇宙が莉嘉の脳に訴え掛ける。

莉嘉「…怖い」

美波「怖いって…」

莉嘉「この宇宙、怖いよ…！生命をドコにも感じないっ！」

美波「い、生命…？」

多聞天「より純粹なる者。ゲッターを通して、感じ取ったようだな」

かな子「どう言うことなんです?！」

多聞天「この宇宙は、破滅した宇宙なのだ。貴様らがその力を求めて止まない、ゲッターの力によって！」

美波「またそんな事…！」

多聞天「信じられぬか。ならば…」

ゲッターアークの直ぐ傍まで接近。

多聞天「その目で見えるが良いッ！」

そのまま、ゲッターアークの首筋に手刀を落とす、近くに見えていた惑星に、その身を叩き落とした。

莉嘉「う…あ…」

美波「莉嘉ちゃん、大丈夫…？」

莉嘉「う、うん…何とか…?!？」

メインモニターに映る、ゲッターアークの視線の先、上体を起こすアークが、その手を置いていたのは、

かな子「これって、ゲッターロボの残骸!？」

美波「それも、1つじゃないみたい。見て」

莉嘉「……!？」

ゲッターアークが落ちた惑星の地表には、その大地をびつしりと覆い尽くす程の無数のゲッターロボの残骸が広がっていた。

莉嘉「こ、これって……!」

美波「ゲッターが戦った、後……? 一体何と……」

かな子「何かって言うより……」

莉嘉「……っ」

かな子「ゲッター同士が、戦い合った……?」

美波「ゲッター同士……味方同士で……?」

多聞天「そうだ」

莉嘉「っ……!」

多聞天「これが、貴様達の未来の姿だ」

美波「私達の、未来……?」

多聞天「ただただ力を追い求め、敵を喰い潰し、生命を喰い潰し、星を喰い潰し……。やがては他者の宿す宇宙をも自らの手にしようと潰し合い、自滅」

莉嘉「あ……あ……っ」

多聞天「これが貴様達の言う進化の果て。生命なき宇宙はもはや虚無なる闇と同じ。ゲッターがもたらす宇宙の終焉よ」

かな子「そ、そんなこと……！信じられると思ってるんですか!?!」

多聞天「まだ、虚勢を張るか。しかし、ゲッターの申し子よ」

かな子「っ……莉嘉ちゃん?！」

莉嘉「……」

美波「莉嘉ちゃんが、ゲッターの申し子……?」

多聞天「貴様には等に分かっておる筈だ。今日の前に広がっている光景が、まやかしか現実か」

莉嘉「あ、アタシは……」

美波「莉嘉ちゃん！気をしっかり持って!!」

莉嘉「!! それでも、アタシは……!」

多聞天に向き直る。

莉嘉「ゲッタービーム!!」

多聞天「……」

多聞天に向かつて真つ直ぐに伸びたゲッタービーム。しかしそのビームは、突如として多聞天の前に現れた仮面によって防がれた。

莉嘉「何!?!」

美波「あの仮面……ううん、あれは……!」

増長天「ふえっふえっふえっふえっ……!」

広目天「くくくくくく……!」

持国天「ふふふふ……!」

かな子「そんな……!あの人達は、倒した筈じゃ……」

増長天「ふっ、倒した、か」

持国天「然り。我らはゲッターの力の前に、倒されはした」

広目天「しかし、先刻も名乗った筈よ。我ら、生命を超越せし者」

多聞天「我らに生死と言う理は通用せん。ただそこにあるのは、存在と言う概念のみ」

莉嘉「何さ、それ……」

美波「倒しても倒しても、幾ら戦つても無駄なこと……!?そんな相手、どうやって……」

かな子「莉嘉ちゃんも美波さんも、しっかりして下さい!倒すことが出来なかったと

しても、相手が諦めるまで戦い続けなければいいんです!」

持国天「ふむ。小娘ながら、真理を突く」

多聞天「我らが敵わぬと、そう悟ってしまえば、最早存在する意味などありはしない。だが……」

広目天「それまでに、人の心が保つかな？」

莉嘉「!? 今度は、何を……」

四天王が、ゲッターアークの四方に座する。

増長天「はアアツ!!」

広目天「はっ!!」

持国天「はアツ!!」

多聞天「ふんっ!!」

4柱それぞれが中指と人差し指を立てた印を結ぶような形の手を翳し、ゲッターアークに向けて思念を送る。

莉嘉「っ……! 何、これ……う……あ、ああ……!」

美波「うう……: 気持ち……: 悪い……: つ。あ……や、あああ……!」

かな子「頭が……: 割れそ、う……: つ!」

増長天「ふはははははっ!! 真正正銘の神通力よ。人間には耐えられまい!」

広目天「そのまま、ゲッターごと潰えてしまえ!」

莉嘉「くっ……うう……っ、こんな、所で、え……！」

苦悶を浮かべる、莉嘉の視線に、ゲッターの残骸が映る。

持国天「これで1つ、我々の役目も終わる」

多聞天「また1つ、宇宙に安寧が訪れよう」

莉嘉「っ……！ アタシも、こんな……っ！」

かな子「それで、いいんですか……？ 莉嘉ちゃん……！」

莉嘉「かな子……」

美波「確かに、多聞天の言うことは、本当の事……かもしれない……！ ゲッターが、宇宙を滅ぼしたっ、事も……！ 莉嘉ちゃんが、私達が……つ力を追い求めていたことも……！」

莉嘉「……」

美波「けど……っ！ 私達が生きていたっ、て願ひも、真実の筈でしょう……!？」

莉嘉「それは、だけど……！」

かな子「思い出して下さい……っ、莉嘉ちゃんは、莉嘉ちゃん1人のために、戦ってる訳じゃ、ない筈です……っ！ 莉嘉ちゃんが、生きたいって言う願ひは……！ ……莉嘉ちゃん1人のものかも……しれません、けど……！ それを望んでいてくれる、人だ……私達の帰りを、待っていてくれる人達だ………いる筈です……！」

莉嘉（お姉ちゃん……！）

美波「未来だって、宇宙だって、大切なことだけど……それでも、ただ、愛する者のためだけに、今は戦おうよ……？」

かな子「私達は、こんな所で終わる筈じゃ、ないです……よね……？ 私はまだ……立ち上がれます……！」

美波「私も、まだ戦える……！だから！」

かな子「一緒に立ち上がって下さい！」

美波「一緒に戦って！」

美波・かな子「莉嘉ちゃんツ!!」

莉嘉「——うわああああ——!!!」

ド オ オ ツ

広目天「な、何だ……!？」

増長天「この輝きはゲッター線……！だが、奴等にこれ程の力は！」

持国天「これは……!？」

ゲッターアークを中心に、爆発的に膨れ上がるゲッターエネルギー。それに呼応するかのように、惑星全体を覆っていたゲッターの残骸に、微かに残されたゲッターエネルギーが、破滅の宇宙を覆っていたゲッターエネルギーが、ゲッターアークに吸い寄せられていく。

多聞天「ゲッターめ…！まだ滅んでいなかったのか…!?」

莉嘉「——!!」

吸い寄せたエネルギーをも自身の力に変え、ゲッターアークが放つ輝きは、コックピットな内部までも包み込んだ。

莉嘉「そうだ…！ゲッターの力は、宇宙を滅ぼす力なんかじゃないッ！」

美波「これは…？ゲッターの力なの？私の中に、莉嘉ちゃんを、かな子ちゃんを感じる…」

かな子「自分を強く持つて下さい、美波さん。やっぱり、そうだったんだ…」

美波「かな子ちゃん？」

かな子「ゲッターだけじゃ、これだけの力を制御出来ません。神に匹敵し、それを上回る力を手にするためには、私達、ううん、莉嘉ちゃんが、莉嘉ちゃんが必要だったんです」

美波「莉嘉ちゃん？さっきの、莉嘉ちゃんがゲッターの申し子って言うのは…！」

かな子「…美波さん、ここからは私にも分からない領域です。今まで以上のエネルギーが、私達にも流れ込んでくると思います。それでも、決して自分を見失わないで下さい！」

美波「自分を…」

かな子「この世界に生きているんだと言う、確固たる自分を！」

美波「…分かった！」

莉嘉「美波、かな子！アリガト☆アタシ、もう迷わないッ！」
ググンッ

美波・かな子「!!!」 ビクンッ

電流を受けたように、2人の体が一瞬跳ね上がる。

美波「うあ…」

かな子「これが、ゲッターの、莉嘉ちゃんの力…！」

莉嘉「!!」

増長天「ぬっ!?!」

神も知覚できない動き。超神速を以て増長天を蹴り飛ばす。

広目天「おのれ！我らが術を破るとは…！」

莉嘉「相手が神様だろうと悪魔だろうと！未来は、誰かに教えられるものじゃない！」

広目天「ぐっ!?!」

神通力を突破してきたゲッターアークにたじろいだ広目天のその目の前に瞬間的に現れ、殴り飛ばす。

持国天「くっ…!?!」

莉嘉「未来は、この手で掴み取るもんだアッ!!」

持国天「このお……！」

瞬間移動で持国天の正面に立ち、掌底を以てその体を吹き飛ばした。

多聞天「絶望を突き付けられても、まだ力を追い求めるつもりか！」

莉嘉「アンタ達の言う絶望は、アタシ達の絶望じゃない！アタシにとって絶望的なのは、アタシの未来が紡がれないことだアツ!!」

鋭い爪を突き出した、ゲッターアークの手刀。多聞天の表皮を抉り、赤黒い血を滴らせる。

多聞天「ぐ……ぬう……！」

莉嘉「やつと歪んだね。その顔が見たかった……！」

多聞天「悪魔め……！」

三天王「『多聞天ツ!!』」

莉嘉「!!」

ゲッター目掛けて放たれた攻撃。しかし、既にアークは分離している。

広目天「くそっ……！どこへ言った!?!」

増長天「合体前だと言うのに、動きが早すぎる……!?!」

持国天「……！増長天、上だ!!」

増長天「!!」

持国天の声に、天を仰いだ増長天を、巨大な竜巻が包み込む。

増長天「こ、これは…!？」

美波「貴方達の相手は、アークだけじゃありませんよ？」

増長天「!!」

美波「ドリルアームツ!!」

上下左右に留まらず、四方八方と竜巻の中から姿を現すゲッターキリクのドリルが、増長天の体を削っていく。

増長天「くあ…」

美波「これで！」

増長天「くっ…!! 調子づきおって！」

戟を強く握りしめ、上空に狙いを定める。

増長天「今度は騙されん!!」

上空から迫るゲッターキリクに、反撃の姿勢を見せる増長天。

増長天「ぜえええいッ!!」

美波「ドリル…!! ストリイイームツ!!」

激突するドリルと戟。しかしその勝負は、呆気なく着いた。

増長天「う…?」

その穂先からバキバキと碎かれ、粉々に散つていく戟。ドリルは止まらず、そのまま増長天をも貫いた。

増長天「おお……」

口からドリルをぶちこまれ、体を貫かれて見る影もなくなった増長天はそのまま四散。

広目天「ぞ、増長天……！」

それから差程も間を置かず、広目天を捉えて地中から伸びたのは、ゲッターカーンの長い両腕。

広目天「ぐう……!?こ、これは……！」

地を裂き大地を砕き、姿を見せるゲッターカーン。

かな子「必殺……！」

広目天の頭を抑え、蛇腹のような腕で全身を雁字絡めにし、引き寄せる。

かな子「大雪山……!おろしいいいいいッ!!」

広目天「ぬおおおおおっ!!」

大雪山おろしで、天高く広目天を放り投げる。

広目天「何の……これしき……！」

かな子「チェンジ・カーンローバーッ!!」

宙で体勢を立て直す広目天に、カーンローバーが迫る。

かな子「スパイン……！クラツシヤアアアアアアツ!!」

カーンローバーのスパインクラツシヤアが、広目天に突き刺さる。

広目天「ぐ……っ！ぬっ、ぬっ、ぬっぬううううおああああッ——!!」

断続的な回転で押し寄せるスパイクに、広目天は挽き肉のように挽き潰され霧散。

多聞天「同化が始まったか……!」

持国天「しかし奴等……！ゲッターの力に呑み込まれておらぬ！寧ろ……!」

かな子「呑み込まれる、ですか？」

莉嘉「そんなの、力に怯えてる弱虫が言うことだよ！」

美波「例えどんな強大な力でも、生き残るためになら利用して、自分の力に変える。それが、人間と言う生き物です！」

その瞳に強い意思と決意、覚悟を宿す、3人の体を這い回るゲッター線の脈が、明滅を止め強く光輝いている。

持国天「奴等め、ゲッターと同調している……？3人全員……否、3人だからか！」

多聞天「ゲッターが3人の乗り手を必要とする訳、か」

持国天「1人では、宇宙は只の虚空！漆黒の闇に過ぎん。己を他人と自覚する他者の存在……。それがあって宇宙に意味が生まれ、そして3人で……!」

かな子「ミサイルスパイラルツ!!」

持国天「!?」

無数に飛び交うゲッターカーンのニードルミサイルが、持国天を襲う。

持国天「こんなものでっ!!」

美波「チエンジゲッター! キリクツ!!」

持国天「っ!!」

美波「シザーアーム!!」

ゲッターキリクのシザーアームが、持国天の腰をガツチリと挟み、拘束。

持国天（分離、そして合体のタイミングが、完全に掴めん…!!）

美波「たあああああッ!!」

そのまま、持国天を地面に叩き付け、大地を擦りながら引き摺っていく。

持国天「こ、このお…!!」

美波「オーブンゲツト!!」

持国天は口から火炎を放ち、ゲッターキリクを狙うが、キリクは等に分離し、

莉嘉「チエンジゲッターアア!! アーツク!!」

ゲッターアークが合体している。

莉嘉「ゲッタービーム!!」

持国天「くっ……！ただ純粹な力のみで、神の存在を脅かすと言うか……！ゲッターアア
……ああああ——！！」

ゲッタービームにその身を灼かれ、持国天は爆散。

多聞天「ぬう……ゲッターロボめ……！」

莉嘉「！！」

多聞天「ぐう……っ！」

背後に回り込んだゲッターアークのトマホークを、寸前で躲す。

莉嘉「へえ？避けるなんて、随分余裕ないじゃん？」

多聞天「調子に乗るなよ……！人間！！」

一度ゲッターアークから退いた、多聞天の体が大きく、巨大化していく。

かな子「大きい……！これが、多聞天の本当の姿、なんですか!?!」

美波「可笑しい……あの大きさ、本来なら重力崩壊を起こしても可笑しくないのに！」

莉嘉「ふんだ！今さら大きくなったところで、アタシ達がビビるとでも思った？」

多聞天「これが本来の力の差なのだ！貴様達が、我々に抗うなどと……！」

多聞天が巨大な光の剣を振り上げる。

かな子「な、何て巨大な……！」

莉嘉「その分避けやすいよ！あんなの……！」

劍が振り下ろされる直前、ゲッターアークは瞬間移動で、惑星の重力圏を抜けた遙か彼方、宇宙空間へと飛び出している。

美波「見て！」

かな子「星が……」

それでも、多聞天の光の劍は、先程までいた惑星を容易く両断した。

多聞天「分かったか!?これが神々と、ちっぽけな生命体の力の差だ！」

莉嘉「フフンツ♪けど、そうやって力を誇示したがる奴って、大体弱虫なんだよねっ

☆

多聞天「何!?!」

莉嘉「アンタがどれだけデカかろーが、強かろーが!もうそんなの関係ないってこと!」

多聞天の眼前に飛び込んだゲッターアークの拳が、多聞天の鼻っ柱を打ち、その巨体を簡単に仰け反らせる。

多聞天「ぬーおお……!?!」

莉嘉「もうお互いに言葉は要らないんだ。アタシ達を納得させたいなら、倒れるまで向かってきな!!」

多聞天「……ならば！」

莉嘉「やああッ!!」

多聞天とゲッターアークの拳がぶつかり合う。その間から生まれた衝撃波は、近くの星々をも軽く吹き飛ばした。

多聞天「ふんッ!!」

莉嘉「はあッ!!」

多聞天は金箍棒、ゲッターアークはトマホーク。それぞれの得物を手に、轟撃を交わす。その一轟一轟が生む衝撃もまた、数多の惑星を粉々の小惑星群に変え、戦闘の影響でぶつかり合う小惑星が、幾つものブラックホールを生んだ。

莉嘉「だあああああッ!!」

多聞天「とあああああッ!!」

天地をひっくり返し、宇宙に渦を巻き起こし、破滅と新生の直中で激しくぶつかり合う。

正に神戦。正に神話の光景。

多聞天「ぬううおおおおおッ!!」

莉嘉「ぐっ…!?!」

その壮絶な戦いの中、やはり神の称号を持つ多聞天が、優勢かに見えた。

美波「やあああッ!!」

多聞天「!?」

かな子「はあああああッ!!」

多聞天「ぐうつ!!」

しかし時に、ゲッターはその姿をキリクと、カーンと変え、己の全身全霊を以て、神に抗っていた。

かな子「はあ…はあ…つ。私達、3人の力を合わせても、やっと互角ですか」

美波「やつぱり、今までで戦った中で一番強い」

莉嘉「あはっ☆だからこそ、倒しがいがあるつてもんじゃん!」

かな子「そう言うもんですかねえ…」

多聞天「あくまで戦いを楽しむつもりか、ゲッター!」

莉嘉「へへっ、そっちこそ辛くない? 宇宙だ数多の生命だーって、重たいの背負って戦ってさ」

多聞天「貴様達とは覚悟が違うのだ! 我らの戦いは、より多くの宇宙を守るための…!」

莉嘉「だったら、受けてみなよ」

多聞天「何?」

莉嘉「アタシー人の覚悟が、ちっぽけかどうか…!」

ナルトマホークも霧散して消える。

多聞天「……」

莉嘉「へへっ……どう……?」

見上げる先、巨大な多聞天の両腕は斬り断たれていた。が、

多聞天「この程度……!」

その損傷が嘘だったかのように、一瞬で両腕を再生させる多聞天。

多聞天「!!」

かな子「莉嘉ちゃん!!」

莉嘉「!?」

多聞天の腹部から放たれた一筋の閃光。咄嗟に身を翻すが躲しきれず、ゲッターアークの左半身が吹き飛ぶ。

莉嘉「くっ……!」

左腕は一瞬で塵芥と消え、閃光が突き抜けた余波で頭部をはじめとする幾つかの表装も剥がれ落ち、ゲッターアークの内部構造が剥き出しになる。

莉嘉「ちよつと油断したなあ……」

美波「心はまだ、折れてないよね?」

莉嘉「……トーゼン!」

多聞天「最早雌雄は着いた。その損傷では他のゲッターに変わることも出来まい。潔く、滅びを受け入れるのだ！」

莉嘉「潔く？ゴメンだよ!!アタシは、最後の最後まで戦う！」

美波「莉嘉ちゃんだけじゃない。私達の気持ちも一緒だよ！」

かな子「ここまで来たんですから。戦いますよ、それがゲッターに乗る者の宿命、なのかもしれないし」

『その通りです!!』

美波「この声は……」

かな子「私達の知ってる、卯月ちゃん!？」

莉嘉「これ……ゲッターエネルギーが集束して……」

美波「ううん。全く違う次元から、桁違いのゲッターエネルギーが来る……!」

ゲッターアークに後光が差し、認識。宇宙の外側からここに溢れ返ってくる、巨大なゲッターエネルギー。その正体は、

多聞天「来たか、真ゲッタードラゴン!!」

莉嘉「真ゲッター、ドラゴン……!」

卯月『莉嘉ちゃん、美波さん、かな子ちゃん!お待たせしました!』

かな子「卯月ちゃん……!ホントに卯月ちゃんなんですか!?!」

未央『私もいるよん♪みむっち!』

かな子「未央ちゃんまで!？」

美波「一体どうやって、ここまで…?」

卯月『ゲッターが導いてくれたんです。3人を迎えに来ましたよ!』

莉嘉「迎えに…?」

凜『…と言つても、私達がそっちに着くまでは、もうちよつと掛かるんだけど』

未央『何かいい感じにピンチっぽかったからさ。真ドラゴンのエネルギーだけ先に

送つといたよ!』

美波「送つといたって…。そんなピザのデリバリーみたいな…」

卯月『真ドラゴンの力、アークに託します!』

莉嘉「真ドラゴンの力…。それって…」

未央『おっと!』

莉嘉「!？」

真ドラゴンの方に注意が向いた、ゲッターアークに放たれた多聞天の攻撃を、強力な

ゲッターバリアが弾く。

多聞天「真ドラゴンめえ…!」

美波「不意打ちなんて、そっちも余裕がない証拠ですね」

多聞天「その真ドラゴンの姿を見ても何も気付かぬか？その悍ましき姿こそ、ゲッターの行き着く果て！」

莉嘉「悍ましい？全然！むしろアンタなんかよりよっぽど、神々しくてカッコいいよ☆」

卯月『そうですか？えへへ……。ありがとうございます！』

未央『何でしまむーが喜んでんの…』

凜『……多聞天は、莉嘉達の力で倒すんだ』

莉嘉「えっ!?一緒に戦ってくれないの?」

凜『一緒には、戦えない。もし莉嘉達が私達の力に継るようなら、真ドラゴンがそっちに辿り着く前に、アークは倒されるだろうね』

莉嘉「……っ」

未央『その代わりにエネルギーを託すんだ。使って、真ドラゴンのエネルギーを!』
真ドラゴンの姿を象っていたエネルギーが、ゲッターアークの中へと吸い込まれていく。

莉嘉「——!!これが、真ドラゴンの力……!」

美波「ゲッターの力だけじゃない……。卯月ちゃんの、凜ちゃんの意味……」

かな子「それにもっと多くの、人達の意味が……!」

卯月『そうです。たくさんの方の意思を繋いでいくことが、ゲッターの使命なんです！』

凜『力だけじゃ、ゲッター線だけだったなら、それは宇宙を漂う、他の宇宙線と変わらない』

未央『人間がゲッター線に意味を見出だし、ゲッター線にゲッターロボと言う人形の器を用意した。だから、ゲッターの進化は始まったんだ』

美波「ゲッターの力に、人の意思……」

多聞天「それこそが滅びの始まり！ 良いか、器に魂を入れてはならぬのだ!!」

かな子「そんなの、貴方に決めつけられる謂れはありません！ やりましょう、莉嘉ちゃん！」

莉嘉「……」

美波「莉嘉ちゃん？」

莉嘉「……大将」

かな子「大将……？……あ」

大将『——正念場だぜ。絶対敗けんじゃねえぞ』

莉嘉「……うん、うんっ。負けないよ、絶対。ここにあるアタシの未来は、大将が繋い

でくれた未来だもん！」 ゲッ

操縦桿を握る手に力を込め、多聞天を見据える。

凜 『いいい？多聞天だけを射貫こうとしちやダメだ。多聞天のもつと向こう、宇宙そのものを貫くイメージで』

美波 「宇宙そのものを?!」

未央 『4000万光年先まで届かせる気持ちで、思いつきり撃つてやれ!!』

かな子 「4000万光年…。むちゃくちゃな数字ですけど、今のアークなら!」

卯月 『信じてください。莉嘉ちゃんもゲッターと1つになってますけど、ゲッターもまた莉嘉ちゃんですから!』

莉嘉 「分かった!美波、かな子やるよ!これが正真正銘、最後の1撃だ!」

美波 「ええ!」

かな子 「はいっ!!」

多聞天 「来るか!ならば、正面から打ち砕いてやるまで!」

莉嘉 「ゲッ……タアアア——!!」

3人 「「ビイイイイームツ!!」」

多聞天 「破アアツ!!」

多聞天が撃ち出す閃光と、ゲッターアークのゲッタービームがぶつかり合う。

多聞天 「ぬううううう……ッ!!」

多聞天の姿が、ゲッタービームの中に消えた。爆煙が辺りを包む。

莉嘉「……」

美波「……」

かな子「……」

多聞天「……」

爆煙が晴れ、その向こうから多聞天が姿を見せる。しかしその姿、肉体の殆どが既に失われ、再生する気配はない。

多聞天「我らの敗北、か……。今は敗けを認めよう……」

莉嘉「……」

多聞天「しかし忘れるなよ。純粹な願いも、潔白の祈りも、強大な力はその姿を醜く、悍ましく変えてゆく。貴様達がいるのは、その途上だと言うことを……」

莉嘉「好きに言えばいいよ。アタシはアタシの夢を叶える。その為に、ゲッターの力を出来る限り、利用してやるまでだって」

多聞天「ゲッターを利用、か。大きく出たものだ」 フツ……

莉嘉「あはっ☆今笑った？」

多聞天「ならば後は、見守るとしよう。貴様達人類の趨勢を……」

そう言い残し、多聞天は灰となり、宇宙に散っていった。

かな子「……やった……？」

美波「勝った、の……？私達、本当に……？神様に……」

莉嘉「ふい……。や……と終わ……たあ……」

大きく息を吐き、シートに深くもたれ掛かる。

卯月「お疲れ様です！莉嘉ちゃん、皆さん！」

莉嘉「卯月!!」

戦いが終わった後の宇宙に、真ドラゴンがその姿を現す。

美波「これが、真ゲッタードラゴン……。単独で時空を越えてくるなんて」

未央「大変だったねえ、ミナミン。さ、早く帰ろ……！」

かな子「もう何でもあり……って事ですかね？……けど、迎えに来てもらえて、何か安心です」

莉嘉「そだね。こんな何処だかよく分かんない宇宙で、美波とかな子と3人だけ……」

言うのも、大変だったし」

凜「帰る方法も分かんないのに、よく迷わずワームホールに飛び込むもんだよ」

莉嘉「えへへ……☆」

美波「多分、褒めてないと思うよ？」

卯月「けど、早くこの宇宙から離れることには賛成です。早くしないと……」

かな子「……!?何ですか、あれ……！」

真ドラゴンとゲッターアークが見据える遙か先から、こちらに向かってきているのは、

未央「さっきの奴等の仲間、みたいなもんかな？」

凜「厄介だね。ゲッターに惹かれて向かってきてるみたいだ」

かな子「あんなのが、まだいるんですか!？」

未央「ま、宇宙は広いから」

かな子「答えになってませんよ〜!」

莉嘉「もしかして、あいつらも倒さなきゃならない感じ…!？」

「それには及びません」

莉嘉「!？」

ウヅキ「奴等の相手は、私がします」

美波「真ゲッター、タラク…!」

卯月「貴女は…!」

ウヅキ「……」

未央「わお!これはややこしいツーショット!」

凜「茶化さないの。今真剣なところ何だから」

ウヅキ「…貴女達は、ずっと一緒なんですね」

卯月「はい。私達は、ずっと一緒です！」

ウヅキ「…そうですね。けど、忘れないで下さい」

卯月「……？」

ウヅキ「私もまた、貴女が進む先の、1つの可能性だと言うことを」

卯月「……はいっ」

ウヅキ「なら、早くこの宇宙から出て行って下さい」

かな子「本気で戦うつもりですか!？」

ウヅキ「はい。私もタラクも、その為に今日まで……貴女達の未来を守る為にここに
いるんです」

莉嘉「けど、真ゲッタータラクだけじゃ……!」

ウヅキ「いいえ」

莉嘉「？」

ウヅキ「タラク〃だけ〃じゃないですよ」

「うおおおおおおお〃〃〃ッ?!?!」

何かが、莉嘉達の方に吹き飛んでくる。

莉嘉「うわっ……!何……?」

美波「あれは、ゲッター?」

かな子「けど、あんなゲッターロボ……」

男「チツ……やってくれるじゃねえか!」

戦闘の衝撃で飛ばされてきたらしい、そのゲッターロボは、様々なゲッターのパーツを継ぎ接ぎして作られたような、歪な形をしていた。

男「テムエは……いや、違うな。誰だ?テムエら」

美波「えつと……」

男「ま、誰でもいいけどよ。早くここから離れねえと、どうなっても知らねえぞ」

卯月「はい。私達は行きましょう、莉嘉ちゃん」

莉嘉「けど……」

凜「私達の宇宙の戦いも、まだ終わってない。ここはタラクに任せるんだ」

莉嘉「……分かった」

渋々頷き、真ゲッタータラクに背を向ける。

卯月「……頑張ってください」

ウヅキ「言われなくても。頑張ることだけは、得意分野でしょう?」

卯月「……はいっ」

ウヅキ「さよならです。もう巡り逢う事もないように」

その言葉で見送り、真ドラゴンとゲッターアークは、真ドラゴンが作ったワームホール

ルの中に消えていく。

男 「…さあて、次はどいつを…。 ……?」

悪態を吐く男の寄せ集めゲッターの隣に、真ゲッタータラクが並び立つ。

男 「テメエ、何のつもりだ?」

ウヅキ 「何も。ただ、力の限りこのゲッターを暴れさせたくなっただけです」

男 「…けつ、成る程。そう言うことかよ」

ウヅキ 「……?」

男 「テメエも、俺と同じ穴の貉つてことだ。気に入らねえなら、全部ぶっ壊しちまえてな!」

ウヅキ 「ふふっ…。 そうかもしれませんがね」

ほぼ同じタイミングで、それぞれの得物のトマホークを構える。

男 「骨は拾ってやらねえからぞ」

ウヅキ 「心配無用です。勝手に暴れて、勝手に戦うだけですから」

男 「へっ、それじゃあ…。」

男 「いくぜえええええええッ!!」

ウヅキ 「うおおおおお——ッ!!」

迫り来る神々の軍勢に、力強く立ち向かって——。

第4部完
つづく

番外編 『折り重なるセカイ』

~~~~~ 亜空間 ~~~~~

莉嘉「——…でね、そこでアタシが……ズバツつと！」

未央「おおう、リカは異世界でも大活躍だ」

莉嘉「えへへ☆でしょ」

かな子「もう、號さん達や、異世界のリンさん達の協力があつたことも、忘れちゃダメですよ」

莉嘉「わ、分かってるよ」

凜「それにしても、別の世界の私達、か」

美波「今も不思議な感じ……。2人の凜ちゃんに出逢うことになるなんて……」

かな子「そう言えば、あの後どうなっちゃうんでしよう？ 研究所も、ポロポロにされちゃいましたし……」

美波「!! 廃墟の子供達のこと……!」

未央「その辺は大丈夫じゃない？ あっちの世界のしまむーが言ってくれたって」

美波 「そうかな…」

莉嘉 「けど、ウヅキだって戦いに行っただでしょ？」

凜 「残酷な言い方をするようだけど、向こうの世界の問題は、向こうの人達で解決してもらえないよ」

莉嘉 「それはそうだけど…」

卯月 「……」

未央 「ん？しまむー、寄り道したいの？」

卯月 「未央ちゃん…。寄り道って言うんじゃない？」

凜 「大丈夫だよ。卯月だって分かっているでしょ？」

卯月 「……」

凜 「真ドラゴンを通して、私達は繋がってる…。だから卯月が考えてることも分かるよ」

卯月 「莉嘉ちゃん達には、知る権利はあると思うんです」

莉嘉 「何々？何の話？」

未央 「折角ここまで来たんだし、元の世界に戻る前にちよつと寄り道していかない？」

かな子 「寄り道、ですか？」

未央「そそ。ちよつと見てもらいたいものもあるし」

莉嘉「見てもらいたいもの？」

未央「それは見てからのお楽しみ♪」ニシシッ

美波「けど、いいの？ 私達の世界の方も、時間がないんじや…」

凜「まあ、ちよつとくらいならね。…エンペラーがどう思うか」

卯月「きつと、私達の行動も折り込み済だと思えますよ」

凜「それもそっか」

莉嘉「…ともかく！ こうして帰れる目処が着いたのも卯月達のお陰だし、ドコにだつて着いていくよ！」

卯月「ありがとうございます。それじゃあ…」

手近な空間をトマホークで切り付け、次元に裂け目を作る。

卯月「こつちです。行きましょう？」

美波「…思つてたけど、そんなお手軽なんだ」

凜「真ドラゴンがいなくなれば、この空間もなくなる。だから急いで」

莉嘉「わ、分かつた…！」

急かされ、慌てた動作で真ドラゴンに続いて亜空間を飛び出す。その先には、

莉嘉「うあ——！」

かな子「これは、ゲッター…?」

美波「…なんて、巨大な…!」

ゲッターアークの眼前に広がったのは広大な宇宙、その宇宙をも覆い尽くさんばかりに点在している、無数のゲッターを模した巨大戦艦だった。

凜「遥か宇宙で戦うゲッター艦隊。その一部だよ」

かな子「一部、ですか?これが…」

未央「今は、ある目的」で本隊からも離れてる分艦隊だし。規模もそれなりなんじゃないかな?」

美波「主力艦隊ですらないなんて…」

凜「私達がこの宇宙空間に留まってるのもマズイ。早く旗艦に合流しよう」

卯月「はい。そうですね」

莉嘉「宇宙にいるのもマズイの?」

凜「ま、ここは私達からしたら遥か未来の宇宙だからね」

かな子「遥か未来の、宇宙…」

美波「ゲッターが進化して、人類を地球から遥か遠くにした外宇宙で、未来の人達は一体何を…」

未央「そんなの決まってるじゃん。戦いさ」

美波「!? 戦い…」

卯月「こつちです。旗艦の方からゲッターロボが出撃するみたいですから、ぶつからないように注意して下さいね」

莉嘉「あれが未来のゲッターロボ…?」

艦隊中央の旗艦と思われるゲッター戦艦からさながら流星群の輝きのように、無数のゲッターロボが出撃していく。

莉嘉「…ん? あれって…」

その中に、

莉嘉・美波・かな子「「ゲッターアーク!?!」」

莉嘉「…!」

拓馬「あん?」

美波「…!」

カムイ「…!」

かな子「つ…!?!」

獺「何だ!?!」

偶然か、2体のゲッターアークがすれ違う。

莉嘉「今のは…」

凜 「私達の目的はこつちだよ、莉嘉」

莉嘉 「で、でも……！」

卯月 「それも含めて、説明できると思いますがから」

莉嘉 「……」

美波 「卯月ちゃん達は、あんまりビックリしてないみたいね」

かな子 「はい。兎に角今は卯月ちゃん達からはぐれるわけには行かないみたいですね」

――。

ゲッター戦艦 内部

美波 「……ここが、第一艦橋？」

莉嘉 「中也広くいつ！」

かな子 「……人が」

男 「おお、来たか！待っていたぞ」

こちらを認め、近づいてくる男に、未央は近寄っていく。

未央 「やーやーお待たせ。むさっちゃん！」

莉嘉 「むさっちゃん？」

男 「はははっ！むさっちゃんはやめてくれ。これでも今は、ここで艦長を任されてい

るんだぞ?」

未央「知ってる知ってる。頑張ってるんでしょ?むさっちゃん」

男「…まったく」

かな子「お2人は知り合いなんですか?」

未央「ん、いや?」

かな子「いやって…」

男「しかし、ゲッターと言う因果で結ばれた関係と言えば、まったくの他人と言うわけでもないだろう」

美波「貴方は…」

男「俺の名は巴武蔵。元は正真正銘、ゲッター3のパイロットだった男さ」

美波「正真正銘…?」

卯月「武蔵さんごめんなさい。いきなり押し掛けちゃって。…迷惑でしたよね」

武蔵「わはははっ!気にするな。お前達がここを訪れるであろうことは、ゲッターエンプレーの意思も含め、既に予見されていた」

莉嘉「私達がここに来るって、予め知ってたの?」

武蔵「うむ。時空のシステムは解明されているからな。時空を越えようとすれば、特殊なエネルギーが働く。それさえ分かれば、何が起こるかくらい計算できる」



莉嘉「何か、スゴ…」

武蔵「それで、お前達がここを訪ねたわけだが…」

卯月「はい。私達の方で説明しても良かったんですけど…」

武蔵「お前達には荷が重すぎただろう。まあ、ここは先輩に任せておけ」

卯月「お願いします」

美波「…一体何の話を」

武蔵「折角だ。順を追って話そう。こちらも先程、すべきことを終えて手が空いたところなんぞな」

かな子「すべきこと…?」

莉嘉「もしかして、さっきのゲッターアーク…!」

武蔵「ほほう、流石に勘がいいな。しかし、彼らの戦いは彼らのものだ。今は、お前達の話しようじゃないか」

莉嘉「アタシ達の…?」

武蔵「気にしたことはないか? 何故一介のアイドルに過ぎない自分達が、違和感なく戦うことが出来ているのかを」

かな子「…それは」

武蔵「ゲッター線適正、君達の世界ではそう言っているのだったな。ゲッターを操る

のに必要な、類稀なゲッター線への親和性……。ならば何故それが、お前達アイドルに備わったのか」

美波「…理由が、あるんですか？」

武蔵「ある！」

美波「！」

武蔵「話は過去に遡る…。およそ2500年程前、この戦いの発端…。全てはそこに起因している」

かな子「2500年前…!？」

莉嘉「うへえ、想像も出来ない！もうリカが知ってる人類の歴史なんか、軽く越えちゃってるんだ」

武蔵「お前達が暮らしている、もっと先の未来の話ではある。お前達からすれば、もっと世代を重ねた後だ。人類は太陽系を離れ宇宙に進出し、そこに新天地を求めた。しかし、それが新たな敵との戦いの歴史の始まりでもあったのだ」

美波「広大な宇宙…。人類と同じように知性を持った存在がいても可笑しくはないけど…」

武蔵「奴等は、その広大な宇宙をも自らの手中に収めようと、多くの星を荒らし回っていた。宇宙に出てその生息圏を拡大させ始めたばかりの人類など、奴等にとっては邪

魔者でしかなかったのだ」

かな子「そうして戦い始めたのが、2500年前、何ですか？」

武蔵「うむ。奴等の力はあまりに強大で、人類は一度滅亡寸前まで追いやられた。ゲッターエンペラーの存在がなければ、人類に未来はなかったかもしれん」

かな子「ゲッターエンペラー…。卯月ちゃん達も言ってたけど、それほどの力を持ったゲッターなんですか」

武蔵「そうとも。今我々が攻勢に転じていられるのも、ゲッターエンペラーの圧倒的な力があつてこそだ」

凜「けど、ゲッターエンペラーの力は、圧倒的過ぎた」

美波「どう言うこと？」

武蔵「第一次オリオン大戦と呼ばれる戦いを乗り越え、続く第二次、第三次大戦をも我らが制した時、己の敗北を悟った奴等は最後の手段に出たのだ」

莉嘉「最後の手段？」

未央「どーしても勝てない、って相手に出会った時、リカならどうする？」

莉嘉「それは……絶対負けないように努力するよ。その相手よりもっと強くなる！」  
未央「…そだね。けど、自分の限界を感じたとして、それでも、どんな手段を使つて

も勝つとしたら？」

莉嘉「どんな手段でも？」

美波「……まさか」

武蔵「そう、連中が講じた最後の策。それは時空を飛び越え、過去に遡り、ゲッターの起源を絶つことだった」

かな子「ゲッターの起源を……!?過去に遡るなんて……!」

美波「仮にタイムスリップして過去を変えても、それは異なるパラレル・ワールドを生み出すだけなんじゃ……」

武蔵「お嬢ちゃんの言う通り。だが、我々が解明した時空と空間のシステムによれば、過去を変えることによって現在に与えられる影響が、まったくゼロではないと言うことも計算で分かっている」

美波「そんな……!」

武蔵「だが、それはあまりにもリスクの大きい、即ち賭けだった。科学的な知識を持つ文明であれば決して触れぬ悪魔の領域……」

莉嘉「でも、相手は手段を選ばなかった……?」

武蔵「ああ。エンペラーに追い詰められる中、時空を破り兵器を送り込んだのだ。それも1つや2つではなくな」

かな子「一度に複数の戦力を、過去へ送ろうとした、んですか？」

武蔵「それもある。しかし、時空間への挑戦は敵にとっても最後の博打。その成功率を少しでも高めたかったのだろう」

莉嘉「下手な鉄砲も何とやら、だ」

武蔵「そして、イレギュラーは起こった」

美波「イレギュラー？」

武蔵「時空の裂け目から過去へと送られる筈の兵器の1つが、空間の歪みに吞まれ、想定した時間軸から遠く離れた、最早異世界とも呼ぶべき遙か遠き宇宙に漂着してしまっただ」

莉嘉「遙か遠き宇宙って？」

武蔵「それこそはゲッターエンペラーの力も及ばぬ宇宙。ゲッター線と言う概念を持たぬ世界であった」

かな子「ゲッター線概念がない世界…!？」

武蔵「先ほどのパラレル・ワールドに通ずる話だ。多元宇宙…宇宙には自分達が見ている宇宙以外に、様々な可能性の分岐によって無数に存在しているとすると話だ」

武蔵「多元宇宙の可能性は様々で、全ての宇宙が深く、密接に関わっているわけではない。1人の存在の有無、1つの要素の存在で、その有り様は変わるのだ。故に、ゲッターに関わる宇宙が無数にあるように、ゲッターが存在しない宇宙も、同じ数だけ存在

している」

莉嘉「ふえく……」

美波「でも、ゲッターの概念を持たないってことは、その世界は……」

武蔵「ゲッターが存在しようとしていないと、兵器を送り込んだ敵の目的は同じ。人類の抹殺と、地球の壊滅。奴等が辿り着いた宇宙にも、当然地球は存在していた」

武蔵「本来であれば戦いも闘争とも無関係の異世界……。我々とも関係を持たない宇宙だったが、その為に滅びゆくのを、エンペラーはよしとはしなかった」

莉嘉「けど、ゲッターエンペラーでもその宇宙には干渉出来ないんでしょ？ 一体どうやって……」

武蔵「直線干渉することは出来んが、奴等の後を追ひ、力を送り込んだ。つまり、ゲッター線の存在しない宇宙に、ゲッター線を誕生させる事は出来たのだ」

美波「成る程。ゲッター線は人類が発見したエネルギー。その宇宙にも人類がいるとすれば、いずれはゲッター線を発見することも出来る」

武蔵「そう。そして我々の目論見通り、その宇宙の人類もゲッター線を発見した。我々と異なる時間、歴史を掛けてな」

かな子「ちよつと待つて下さい。その話を私達にするつて事は、その元々ゲッターが

存在しなかった宇宙は……」

武蔵「君達の宇宙だ」

莉嘉・かな子「!!」

かな子「私達の、宇宙：!? それじゃあ……!」

莉嘉「アタシ達の宇宙には、元々ゲッター線なんかなかった……?」

武蔵「ゲッター線だけではない。本来、存在する筈のないものを強引な手段で存在させる……。それがたった一つの構成要素だったとしても、それだけで宇宙の有り様は著しく変容する。言ってしまうえば、世界を改変させてしまったのだからな」

かな子「そ、それじゃあ、恐竜帝国とか、百鬼帝国なんかも……」

武蔵「我々の世界改変の影響に他ならない。本来の君達の宇宙は、争い事とは無縁の、穏やかで静かな宇宙だったのだからな」

かな子「そんな……」

莉嘉「その、世界改変の影響で、アタシ達がパイロットに?」

武蔵「うむ。それぞれの多元宇宙には、そこに生きる人々が果たすべき宿命……因果とても呼ぶべきモノが存在している。お前達は自分がアイドルになると言う事実には、何の疑問も感じてはいなかっただろうが、それがお前達が自分の宇宙で果たすべき宿命、因果だったからなのだ」

美波「私達の、因果…」

武蔵「もちろん、それぞれがアイドルにならない可能性も存在してはいる。多くの場合で、お前達は様々な理由でアイドルになるのだろう。それと同じように、ゲッターの戦いはその宿命を追うべき者達に因果が与えられる筈だった。俺や流竜馬、神隼人と言う名前に、どこか覚えがあるだろう？」

莉嘉「流竜馬…：神隼人…」

美波「私達が飛び込んだ、異世界でゲッターチームだつてリン司令が言つてた…」

莉嘉「それじゃあ…！」

武蔵「お前達が訪れたあの異世界は、君達の世界が誕生したことでまた分岐して発生した多元宇宙の1つだ。ゲッターが引き起こす悲劇と厄災…。その側面が肥大化された、な」

卯月「だから、私達が出会つた、もう1人の私は、私のもう1つの可能性なんですな」  
武蔵「そう言うことだ。そして、あの世界で悲劇が起こつた一因は、あの世界のアイドル達がゲッターの因果を負つていなかったことにある」

莉嘉「ゲッターの因果？」

武蔵「お前達の世界にゲッター線が生まれるのと同じ、引き起こされた世界改変によつて因果関係に齟齬が生じ、本来定められた者達が負うべきゲッターの因果が、まっ



たく異なる者達へと受け継がれたのだ」

卯月「それが、私達……」

武蔵「ゲッターに選ばれし者、ゲッターと共に戦い続ける宿命付けられし者・流竜馬の因果をお前、島村卯月が。ゲッターを追う者、ゲッターに魅入られし者・神隼人の因果を、渋谷凜が」

凜「ん」

武蔵「そしてこの俺。チームークールでナイスガイ、伝説の男・巴武蔵様の因果を……」

未央「この宇宙一の天才美少女・本田未央ちゃんが受け継いじやったって訳！」

武蔵「ま、未央ちゃんの場合は俺だけと言うよりか、色々不幸なもんを背負い込んだ

まった気もするがな」ガツハハハハツ

未央「まったく、最低な人生になったモンだ！」

美波「私達が、別の人が背負う筈だった因果を……」

かな子「と言うことは、私達も……」

武蔵「そうだ。さっきもう一機のゲッターアークとすれ違った時、何か因縁めいたモノを感じただろう？それが、お前達がアークチームの因果を背負っている証拠だ」

莉嘉「本当のアークチームの、因果……」

武蔵「尤も、アークチームは構成的にちよいと特殊でな。お前達に継がれた因果は、お

前達の中でも変質して、特異なものになっちまつてる。…ともかくだ！」  
アイドル一同「「？」」

武蔵「こうなつてしまつた以上は言い訳になつてしまつてしまつたが、ここまでの世界改変は、エンペラーにもまつたく予測出来なかつたのだ。だがその結果、本来戦う宿命にない君達を戦いに駆り立ててしまつた。本来その運命になかつた、死ぬ必要のない者達を死に追いやつてしまつた事も、我々にも責任の一端はあるだろう」

武蔵「この俺が頭を下げてどうなる問題でもないが、すまなかつた」

莉嘉「……」

かな子「……」

美波「……」。卯月ちゃん達は、この事を？」

卯月「はい。私達は、真ゲッタードラゴンを目覚めさせた時、その中で全てを知りました」

美波「そう。……」

莉嘉「頭を上げてよ。武蔵！」

武蔵「……」

莉嘉「確かに、ゲッターに関わつたことで、悲しいことも、辛いこともあつたけど、そもそもゲッターエンペラーが私達の宇宙にゲッターを与えてくれなかつたら、今ここに

アタシはいないんだから」

武蔵「そう言ってくれるか？」

莉嘉「言うよ。寧ろ感謝して。きつと武蔵さん達の宇宙にアタシがいたら、何も出来なくてもっと悔しい思いをしてたんだ。けど、ゲッターが力を貸してくれる、ここにいる城ヶ崎莉嘉は、自分の力で未来を拓けたんだよ。だから、すまなかつたなんて止めてよ☆」

武蔵「莉嘉ちゃん…」

卯月「莉嘉ちゃんだけじゃありません。私達もです」

凜「泣いても笑つても、結果は変わらないでしょ？ゲッターエンペラーは私達にチャンスくれたんだ。自分達で未来を築くチャンスを」

未央「アイドルだけやってれば、確かに幸せだっただろうし、本当はその姿が正しいんだろうけど、本当の私達が出来ないことを出来てるって言うのは、ちよつとお得かな？」

美波「ずつと疑問でした。疑問を抱えて、開き直つて…。でも今日、こうやって部分的でも真実を知ることが出来て、今は納得してます。後は、自分の力で生き残るだけ！」  
かな子「責任なんて感じしないで下さい。途方もない戦いの中で、手を差し伸べてもらっただけでも、ありがたいんですから」

武蔵「お前達……ありがとう」

莉嘉「あ、むさつちん泣いてるー！」

武蔵「ち、違うわい！目にゴミが入ったんじゃない！と言うか、お前までむさつちん！」

莉嘉「えー、いいじゃんむさつちん。可愛いよ？」

武蔵「か、可愛い……？」

かな子「スゴいんですよ？未央ちゃんにあだ名をつけてもらえるの。未央ちゃんの握手会に来た人くらいなんですから」

武蔵「それは本当にスゴいのか？」

美波「ふふふつ。本当に、今日は有り難う御座いました！」

武蔵「……へつ、いいって事よ。頭を下げといてこう言っちゃ何だが、エンペラーはお前達に期待している」

莉嘉「え？」

武蔵「経緯こそまったくの事故であったが、その結果、そちらの宇宙のゲッターは我々が知るものとは異なる歴史を紡ぎ、我々とも違う未来を導きつつある。特に、恐竜帝国との関係についてなど、興味深いことが次々に起こっている」

莉嘉「恐竜帝国と？」

武蔵「宇宙とは広大だが、2つ以上の知性体が共生することなど出来ん。同じ知能と

価値観を持っていても、種族と言う絶対的な確執がある以上、争いは避けられん。それが、我々の出した結論だ」

卯月「……」

武蔵「しかし、お前達は恐竜帝国と肩を並べて戦い、共に新たな歴史を刻もうとしている。これは我々の中にはなかった、まったくの新しい可能性、異なる進化の可能性なのだ！」

美波「異なる、進化の可能性……」

武蔵「お前達ならばエンペラーとは異なる進化を……。いや、ひよつとしたらその先でさえも……」

凜「武蔵さん、ストップ」

武蔵「ん？ふふつ、そうだな。そこから先は、まだ誰にも到達できぬ未知の領域……。想像で語るのは無粋か」

未央「それじゃあ、私達はそろそろ帰るよ。自分達の宇宙に！」

武蔵「ああ。そっちの世界の俺にも、ヨロシクな」

未央「こっちの世界の……確か、柔道界で重鎮やってるんだっけ？前にゆかちーが言ってた」

武蔵「ゲッターとは関わらない可能性、か……。そんなもの今の俺には想像出来んが、重

鎮と呼ばれるのなら悪くないかもしれない。隼人辺りは、刺激がないんで退屈してそうだが」

卯月「それでは…」

武蔵「おうっ！もう会うこともないだろうが、達者でな！」

〃〃〃 戻って、亜空間 〃〃〃

莉嘉「何か、面白い人だったね」

美波「ね。未央ちゃんが因果を負ってるって言うの、何か分かるかも」

未央「何をく！この美少女のドコにあのむさつちんみたいな駄肉があるって言うんだい?!」

凜「…その胸じゃない?」

未央「あー、しぶりんってば、私のダイナマイトボディに嫉妬していじめる」

凜「ダイナマイトでもないでしょ」

卯月「あつはははっ！2人とも、喧嘩はダメですよ?」

莉嘉「何か、ニュージエネレーション完全復活って感じだね?」

かな子「そうですね。3人がまた揃うまで、何だかスゴく時間が掛かったみたいで…」

美波「もう、私達の戦いは終わった訳じゃないのよ?気は引き締めなくちゃ!」

莉嘉「そうだよね。さっきの話を聞く限り、まだアタシ達の宇宙を帰る切っ掛けになつた兵器も、宇宙の何処かに残つてゐることでしょう？」

卯月「それなら心配要りませんよ」

莉嘉「え？まさかそれも真ドラゴンの超絶千里眼で分かっちゃうの？」

卯月「そ、そう言う訳じゃないですけど……」

凜「その兵器は、インベーターが持つてる」

かな子「え!？」

未央「と言うよりも逆だね。私達の宇宙のインベーターは、その兵器が生んだんだ。ゲッター線を利用している人類、その母星である地球を手つ取り早く見つける為の尖兵としてね」

美波「それじゃあ、インベーターとの決戦で……」

凜「間違ひなく、連中は切り札として使ってくるだろうね」

莉嘉「望むところじゃん！ガッソ、とケリ着けて終わらせてやろうよ！アタシ達の世界の戦いを！」

凜（この戦いを終えても、全ての戦いが終わる訳じゃないと思うけど……）

未央（何てたつて、しまむーが背負つてる因果が、ゲッターと戦い続ける、流竜馬の……）

卯月「莉嘉ちゃんの言う通りです！まずはインベーターとの決戦！その為にも早く帰りましょう！」

卯月・莉嘉「私達の宇宙へ!!」  
つづく



## 最終章

### 前編『Step on Stage』

~~~~~ 軌道衛星 ムーンシャドー ~~~~~

タツタツタツタツタツ……ウイーン

—— 内、管制室。

李衣菜「晶葉ッ!!」

晶葉「おお!全員、無事に帰還出来たようだな」

李衣菜「うえ?お、お……つて、無事?」

晶葉「卯月、わざわざ異世界まで莉嘉の迎えご苦労だった」

卯月「へ?あ、ええ……私と言うより、ほとんど真ドラゴンのお陰ですから」

晶葉「それでも、我々ではどうすることも出来なかったさ。宣言通り、ホントに5分で帰ってきた時は度肝を抜いたでは済まされなかったぞ」

卯月「あはは……」

晶葉「そして、莉嘉」

莉嘉「え?…はいっ!」

晶葉「戦いの最中だったことは聞いてる。実に勇氣ある決断だった。そして、私の達からの側では分らなかったが、ストーカー01の消滅の為、尽力してくれたのだろうか？」

莉嘉「ストーカー01……：そう言えば……」

かな子「元々、その為にゲートに飛び込んだんです。結局こつちでも、無事に止められたのか、分からなかったですけど……」

美波「けど、私達の地球が無事みたいで、本当に良かった」

晶葉「3人の活躍に対しては、私1人が頭を下げた程度では足りないな。本当に、大義であつた」

莉嘉「えへへ……。アタシ、褒められるようなことしたのかな……？」

晶葉「ああ。ちよつと見ない間に、一人前の顔付きにもなつた」

莉嘉「へへ……：イッシシ☆そーでしよー、そーでしよー」

加蓮「ちよつと、晶葉……？」

奈緒「莉嘉達が立派なのは認めるけどさ、今地球がこうして無事なのは莉嘉達だけのお陰じゃないだろう？」

晶葉「勿論、分かっていると。真ゲッター、飛焰……：その両チームがまず起つてくれた。そのお陰で真ドラゴンも覚醒出来たし、今日の地球がある。茜をはじめ、奈緒立ちにも感謝しているさ」

加蓮「そうそう。凜達も感謝しなよ？アタシ達が戦つてなきや、真ドラゴンだって無事に完成しなかつたんだから」

未央「モチモチ♪後でバーガーでもポテトでも、何でも奢らせてよ。未央ちゃん、腕を振るっちゃうんだから！」

凜「未央はお金出すだけでしょ」

未央「そ。大盤振る舞い」でね？」

凜「……まったく。調子に乗つて、後で貸してつて泣きついて知らないから」

未央「もう、しぶりんはツレないなあ。……つと、復活祝いだ、茜ちゃんも後でカレー食べに行こ？あーちゃんと、3人で！」

茜「勿論ですとも！我らポジティブ・パッション！堂々の復活です!!」

美穂「ふふつ、茜ちゃん、嬉しそうだね？」

アーニヤ「早く、3人揃う日が、来ると良いですね？」

アツハハハハハッ

李衣菜「……」

李衣菜「……じゃなくてえ!!」

晶葉「む？どうした李衣菜。まだ何かあるのか？」

李衣菜「あるかないかで言えばおおあだよ！何でわざわざ、私達を帰還なんてさせた

の!？」

晶葉「それは……莉嘉達も異世界から帰還したんだ。状況の整理は必要だろうか？」

李衣菜「そんな悠長な……! 木星が太陽だよ?! インベーターが終結して、コーウエンとステインガーが最終決戦つて時に……!」

晶葉「落ち着け。熱が入りすぎて逆に要領が分からん……」

かな子「けど、何か不穏なことは聞こえましたね」

美波「ええ、木星が太陽、とか……」

晶葉「……。確かに、今我々が置かれている状況は、とても余裕がある、と言う状況ではないが」

莉嘉「どう言うこと?」

晶葉「先の作戦に参加した、茜達にも改めて聞いてもらいたい。これが現状の木星だ」
大きなメインモニターに、展望台のカメラで捉えた木星を映し出す。

莉嘉「何、これ……? どうなっちゃってるの?」

アーニャ「これが、今の木星、です」

凜「正確には、メタルピース・ドラゴンの炉心によって強引に核爆発を誘発させられた、ゲッター太陽化した木星」

かな子「ゲッター太陽……!」

美波「これが、木星……！」

晶葉「極僅かな速度だが、今も少しずつ、核分裂を繰り返しながら赤色巨星化している。そう遠くはない内に、このゲッター太陽は太陽系そのものを呑み込むだろう」

莉嘉「太陽系を呑み込むって……!？」

美穂「太陽って言うくらいなら、どこかで安定しないのかな？太陽系を呑み込む前に」
晶葉「先ず、あり得ないだろうな。本来の太陽と異なり、これは外部からの強い圧力で

強引に核分裂されている。それが何時まで続くかも想定出来ない上に、これは宇宙空間のゲッターエネルギーまで吸収しているゲッター太陽だ。どこまで大きくなるかなど、そもそも予測出来るものでもないだろう」

美穂「そんな……」

李衣菜「分かっているなら、そのゲッター太陽を何とかしなきゃ!!真ドラゴンもいるし、アークだって帰還した!今すぐにでも木星に乗り込んで、何とかしなきゃ!!」

かな子「確かに、帰ってきて早々ですけど、そんなこと言ってる余裕はなさそうですね……!」

莉嘉「うんっ!せっかくみんなで守った地球だ、早く何とかしなくちゃ!」

晶葉「落ち着け。帰還した再確認したが、ゲッターアークは無傷じゃないだろう?」

莉嘉「それは……そうだけど……」

晶葉「損傷しているのはアークだけじゃない。李衣菜達の真ゲッターだって、外装から作り直さなければならぬくらい、状況は最悪の筈だ」

李衣菜「わ、私達は奥の手を使えば……!」

晶葉「周りをよく見ろ。目先の脅威に躍起になって視野狭窄になってどうする?これは単純にお前達だけの問題と言うわけじゃない。ゲッター太陽を打開する為にこそ、今は時間が必要なのだ」

奈緒「具体的には、どのくらいだ?」

晶葉「…半年、と言うのは、流石にゲッター太陽も待つてくれないか」

アーニヤ「半年……?ゲッターを整備するにしても、随分な帰還に思えますね?」

晶葉「…うむ。まだ私の構想の話でしかないが……」ピッ

言いつつ、次にスクリーンに映し出したのは、黒い画面に緑色のグリッドラインで描かれた、何かの設計図。

奈緒「何だ、こりゃ?」

加蓮「何かの設計図……晶葉が考えたの?何かゲットマシンみたいに見えるけど……」

李衣菜「全長……1, 600km!ど、どういう規模の、何なの!?!」

晶葉「木星での作戦を想定した、超々弩級ゲッター線運用戦艦だ」

莉嘉「超々度級戦艦!？」

晶葉「木星での戦いでは、ゲッター太陽を鎮静化させることは勿論だが、集結したインベーダーとの戦いとなるだろう。真ドラゴンを中核としたゲッター軍団のみならず、我々としても量産型ドラゴンの部隊を編制し、充分に想定される状況に対応したい。その為にも、我々の移動要塞となる母艦の存在は必要不可欠だ」

美波「規模の問題は兎も角として、実現可能なものなの？こんなサイズ…」

晶葉「地球の重力下では不可能でも、月面ならば可能だ。また、ゲッター運用に適した小型艇を量産するよりは、寧ろ効率が良い」

奈緒「デカいおもちゃ箱に何でもかんでも構わず入れちまえてことか…」

晶葉「簡単に言ってしまうばな」

卯月「この姿、何となくですけど合体前のゲッターエンペラー、エンペラーに似ています」

晶葉「そうなのか？ならば、竣工した暁には肖って“エンペラー級”とでも呼ばせてもらおうか」

李衣菜「それで、実際に完成にはどのくらい掛かるの？流星に半年つてのは、私達は待てないよ?」

晶葉「……3ヶ月」

李衣菜「3ヶ月……」

晶葉「それで必ず、何とかして見せる」

美波「大丈夫なの？ さっきの想定の半分で……」

晶葉「しつかり準備させてもらえるなら、1年でも10年でも時間をかけるさ。しかしさっきも言った通り、悠長に構えている余裕がないことも理解はしている」

晶葉「日本政府だけじゃない、世界中の政府にも話は理解させる。この地球と言う極限られた範囲の中で、その持てる技術力の全てを注力させよう。必ず、3ヶ月で間に合わせて見せる」

晶葉「だから、今は人類に時間をくれ」

李衣菜「……」

加蓮「どーなの、リーナ？」

奈緒「そうだ、一番に晶葉に噛み付いたのはお前だぞ、李衣菜？」

李衣菜「そんな突っつかなくたって……」 チラツ

卯月「……」

李衣菜（ここまで晶葉の話を聞いてて、卯月達は何も言っていない……。つて事は晶葉の言う通り、少なくとも3ヶ月先迄は大丈夫ってこと……？）

卯月「……？」

李衣菜（…だとしたら、これ以上喰い下がっても仕方なさそう）

李衣菜「…分かったよ」

晶葉「感謝する。全ての支度が終わるまでは…折角だ、李衣菜達も羽を伸ばすと良いだろう」

奈緒「真上にゲッター太陽があるって言うのが気にならなきゃ、そうさせてもらうよ」
晶葉「なら、地球も恋しくなってきた頃だろう。それぞれ、ゲッターを早乙女研究所に置いたら、解散だ」

一同「了解!!」

トリアエズヤスミカーカエツタラナニシマスカ？ワタシハヒサシブリニコツチノセカイノスーツバイキングデモ…ワタシハ…

雑談をはじめながら退出していくアイドル・パイロット達。

晶葉「…行ったか。…ふう、何とか、時間を稼ぐことは出来たな」

残された晶葉は、ドツカリと椅子に腰を下ろして大型モニターを下げ、強化ガラスの向こうに拡がる宇宙に目を写す。

晶葉「ゲッターアークの戦いは、結局その目で見ることは出来なかったな。ゲッター線も、遂に私の手を離れた、か」

晶葉「だが、それでお役御免とは、流石に“ツレない”だろう？ゲッター」

ニヤリ、と口の端をつり上げた笑みを作る。

晶葉「折角ここまで来たんだ。その戦いの行く末を、お前が何処まで向かうのかを、それを見届ける権利くらい、私にだってある筈だろう?」

晶葉「その為の場所は、私自身で用意させてもらうさ。お前達の最前線の、1分1秒をつぶさに観測出来る、私専用の居場所をな」

晶葉「お前にとっては不要かもしれないが、私は最後まで付き合わせてもらおうぞ、ゲッター……!」

晶葉「くつくつくつ……! あつはつはつはつはつは——ツ!!」

そしてあつという間に、時は流れた——。

くくく 街角 喫茶店 くくく

奈緒「……で、あれから2ヶ月半、か」

李衣菜「……」 チューツ

奈緒「……お前ら、あれから何してた?」

加蓮「アタシい? アタシはほら、学校の友達としばらく振りにあつたり? 里奈とか唯達とカラオケ行ったり? もうビックリしたよ。楽曲も流行も、全然ついてけない。気分は浦島太郎って感じ?」

奈緒「そりやあまあ、そうだな。あたしらが戦ってる間にも、この国は前に向かって

進んでんだなあって」

加蓮「ねえ。つたく、誰のお陰で、今日まで平和を享受出来てんだか」

奈緒「言うなよ。そう言うの求めて戦ってたわけじゃないだろ？」

加蓮「それりやあそうだけど…。にしても」

奈緒「ん？」

加蓮「ここ、良い雰囲気だね。ちよつとタバコ臭いけど」

奈緒「おお、アイドル3人で集まっても、周り全然騒がないしな。こんな穴場、よく

知ってたな、李衣菜」

李衣菜「ん？え、ああ。うん…」

奈緒「ん？何だよ？」

李衣菜「何でも…！何でもないよ！」

李衣菜（ランドウと戦ってた頃に、政府の人に連れてきてもらった店とは言えないなあ。あの時のことは、加蓮も…）

李衣菜「ほら、3人で落ち着いて集まれる場所って言われてたから。ここなら、人も少ないかなって…」

奈緒「ま、何でも良いけどさ」

加蓮「それで？わざわざアタシ達集めて、今日はなにしようって訳？奈緒」

奈緒「あ、それはだな…。まあこの2ヶ月くらい、チームで集まることもなかったし、何してたのかなって」

加蓮「何？つまりは寂しかったって？」

奈緒「さっ…！寂しかったとか、そんなんじゃないって…！李衣菜もほら！この間に、夏樹達と会ったりしてたんじゃ？」

李衣菜「うん…」

奈緒「何だよ、会ってないのか？」

李衣菜「うん…。私も、連絡はしてみたんだけどサツパリでさあ。何か忙しいみたい」
奈緒「…まあ、向こうもアイドルだからな」

李衣菜「にしたってさ！この2ヶ月間一度も会えないなんて、何か可笑しい気がするんだけどなあ」

奈緒「はっはっはっ。ま、運がなかったな」

李衣菜「え、それで済む話？」

加蓮「そう言う奈緒は、この2ヶ月何してたのさ？」

奈緒「あたしか？あたしはまあ、色々だよ…」

加蓮「色々？」

李衣菜「結局奈緒も暇してたんじゃないの？……あ」

奈緒「どうした？」

李衣菜「いや、今外の方……」

奈緒「外……？」

加蓮「何かあったの？」

李衣菜「いやあ一瞬だったし、人違いかも……」

加蓮「まあまあ、ここで日がな一日駄弁って時間使うのも勿体無いし、折角ならちよつと見てみようよ」

奈緒「何だよ？偉くノリ気じゃないか」

加蓮「そう？」

奈緒「ああ。お前も李衣菜と同じものでも見たのか？」

加蓮「ん、別にそう言う訳じゃないけど……」

奈緒「けど？」

加蓮「強いて言うなら、女の勤、かな？」

—— 市街地。

加蓮「……それで？李衣菜が見かけたって言うのは」

李衣菜「うん。確かこつちの方に……あ、いた！」

奈緒「あれは……」

かな子「……」

奈緒「かな子、だな。珍しいな、1人か？」

李衣菜「ね。何かお洒落してるし、これから待ち合わせかな？」

かな子「……」 ソワソワ……

加蓮「……ふうん」

莉嘉「あつ！李衣菜、奈緒、加蓮！おっいッ!!」

李衣菜「おつ、莉嘉！それに……」

美波「莉嘉ちゃん……！かな子ちゃんに気付かれちゃう……!」

奈緒「美波まで……。2人揃って、かな子の尾行か？」

美波「び、尾行とか、そう言うんじゃないの……!ほら、莉嘉ちゃんが……」

莉嘉「あく、美波アタシ1人に責任擦り付ける気く？話聞いた時は、アタシよりノリ

気だった癖に……」

美波「ノリ気とかじゃ……ただアイドルとして、かな子ちゃんが節度ある付き合いが

出来るかどうか……」

莉嘉「はいはい。分かった分かった」

奈緒「節度ある付き合いって、待ち合わせの相手は男なのか!？」

美波「そ、それもまだ決まったわけじゃ……」

莉嘉「いやそれは間違いないって！あのかな子が、わざわざアタシに連絡してきて、フアッションチェックお願いしてくるなんて、女友達とかアイドル仲間と出掛けるなら、わざわざアドバイスなんて聞いてこないって」

加蓮「確かに、莉嘉の言う通りかもね」

李衣菜「しつかし、かな子がねえ。相手はどんな人なんだろう」

奈緒「意外だよなあ。そんな雰囲気一切出てなかったのに。…ってか、ずっと異世界にいたろ？一体何時から…」

加蓮「全部含めて、相手見たら分かるんじゃない？」

かな子「……あ」

莉嘉「来たみたいだよ！」

美波「っ……………！」

奈緒「一番喰い気味だったな」

李衣菜「嘘……！あの人……」

かな子「こっちはです。伊賀利さんっ！」

一同「「伊賀利さん!?!」」

かな子「……………」

サツ

奈緒「大声出すなつて」 ヒソヒソ…

加蓮「ゴメンつて。でもビックリしたから」 ヒソヒソ…

奈緒「そりゃあそうだけど…」

美波「2人とも、言い争いしないで。余計に見つかっちゃう」

李衣菜「確かに、美波が一番”その気”なのかも」

莉嘉「みんな静かに！かな子達の会話聞こえない！」

かな子「……??」

伊賀利「どうかしましたか？かな子さん」

かな子「あ、いえ……何でも」

伊賀利「？ そうですか。にしても、申し訳ありません。お待たせしてしまつたよう

で」

かな子「い、いえ……。私も、今来たばかりですから」

伊賀利「そうですか？だったら、良いのですが…」

かな子「それよりもほら、行きましょう？私、今日を楽しみにしてたんです」

伊賀利「楽しみに…？本当ですか!？」

かな子「あ…。す、スイーツバイキングを、です！伊賀利さんのオススメの店だつて」

伊賀利「あ…。ええ…！かな子さんも、きつと満足頂けると思います！」

かな子「ふふっ。本当に、私、こっちに戻ってきてから、スイーツを食べるの、ホント楽しみにしてて」

伊賀利「こっちに……そうですね。かな子さんは……」

かな子「伊賀利さん？」

伊賀利「正直に、自分が情けないです。日本自衛隊の、量産型ドラゴン軍団のエアースみたいに、周囲の人は言ってくれますが、実際、前回の騒動でも、かな子さん達に頼るばかりで……。自分は、市民を守る為に志願したと言うのに……!」

かな子「……伊賀利さん」 ギュッ

伊賀利「か、かな子さん……手……」

かな子「それでも、伊賀利さんは一緒に戦ってくれたじゃないですか？地球に木星の衛星が衝突しようとした時も、李衣菜ちゃん達と一緒に戦ってくれたって、聞いてます。そうやって守ってくれるから、私達だって思いきって飛び込んでいけるし、どんな場所だって戦えるんです」

伊賀利「……」

かな子「次の戦いでは、はじめと一緒に戦えますね。その時になったら、きつと、民間人も、自衛隊もアイドルも。そんな垣根なんて関係なくて、みんながみんな生きるために戦いに行くと思うんです。だから、自衛隊だから、何て気負うのはやめましょう?」

ニコツ

伊賀利「気負う……：そうですね。生きる為に、未来を掴む為に。皆、同じ想いの下戦う、仲間ですよね！」

かな子「はいっ。だから、今を楽しみましょう。：エスコート、してくれるんですよ？」

伊賀利「……はいっ！」

互いに手を取り合い、雑踏に消えていく2人。

莉嘉「……あ、2人が行っちゃう……！追いつけなきゃ！」

奈緒「いや、流石にここまでだろ」

美波「ええ!？」

李衣菜「美波がそんな驚くの……」

加蓮「これ以上は、馬に蹴られて何とやら、だよ」

奈緒「相手が伊賀利さんなら、爛れた関係にもならないだろ。色々真面目そうな人だし」

李衣菜「あんまり他人のプライベートをコソコソ覗き見るのもロツクじゃないし。相手が分かったなら、私もここまでかな？」

莉嘉「でも……」

奈緒「晶葉が決めたあたし達の休暇も残り少ない、そんな貴重な1日を、かな子の後を着けるだけで無駄に使うつもりか？」

莉嘉「うゝ……ん……」

加蓮「よくし、莉嘉は良い子だね。代わりにお姉さんがとっておきのパフェを奢ってあげる」

李衣菜「美波も良いよね？」

美波「……流石に、私1人になってまでストーキングなんて、出来ないよ」

奈緒「しつかし、まさかかな子がなあ……」

莉嘉「ホントだよおゝ……。今の今まで全くそんな気配出さなかったのに、一体どこで……」

美波「まあ、伊賀利さんは自衛隊員だし。今は量産型ドラゴン軍団の隊長もしていて、私達とも、だいぶ前から接点はあったと言えば、そうだけ……」

加蓮「ま、出会い何て何時どこであるかなんて、分かんないわけだしね」

李衣菜「そういう加蓮も、カナダのホスナー兄弟とやり取りしてるでしょ？」

莉嘉「えっ!!」

加蓮「ちよっ……! どうしてそれを知って……!」

李衣菜「え? やゝ……ランドウと戦ってた頃から仲良さそうにしてたし、もしかした

らそうなのかあって…」

加蓮「…ホントにそれだけ？」

奈緒「そんな詰め寄ってやるなよ。お前だって休憩室とかでやり取りしてるの隠したりもしてなかっただろ。盗み見るつもりもなくたって勝手に目に入るって」

加蓮「うゝ…」

奈緒「遊びか友達か、加蓮の気持ちは知らないけどさ、本気ならちゃんとどつちかに決めとけよ」

加蓮「それは…分かってるけど…。ポテトもハンバーガーも、どつちも美味しい…」

李衣菜「ははっ。すっかり胃袋掴まれたってわけだ」

加蓮「…そう言うリーナだって、ジャックとやり取りしてるっでしょ。そつちはどうなの？」

李衣菜「ええ？別にジャックだけじゃなくてメリーとも連絡は取ってるし、ちよつと年の離れた男友達かお兄ちゃんみたいいな感じっていうか…」

奈緒「ま、李衣菜に恋愛は縁遠いもんな」

李衣菜「そういう奈緒は？シユワルツと連絡とりあったりしてないの？」

奈緒「バツ…！な、ななな何でアタシが！あんなクソ真面目のガッツリ職業軍人みた

いな奴なんかと……！連絡なんか取らなくちゃならないんだよ？」

李衣菜・加蓮（怪しい……）

莉嘉「…ねえ、何かさ」

美波「うん、莉嘉ちゃん」

莉嘉「李衣菜達がかな子を庇ったのって、向こうは向こうで余裕があったから？」

美波「私達、置いてかれちゃったみたいね。私達が異世界に言ってる間に……。ううん、

それよりもつと前から……」

莉嘉（美波が遠い目をしてる……）

李衣菜「よおし、人数も増えたことだし、気を取り直してカラオケでも行きますか

！」

奈緒「お、李衣菜にしては良い案出すじゃんか」

李衣菜「私にしては、どう言うこと!？」

加蓮「まあまあ。そろそろ目立ってきたし、場所を変えるなら早くしよ？」

オイ、アレツテアイドルノ……エ？ナンカノサツエイ？ウソーワタシナンノヨウイモ

シテナイー

李衣菜「そ、それもそうかも……」

奈緒「とにかくここから離れようぜ」

「ん？お〜いつ!!」

李衣菜「やばっ！ファンに気付かれた?!」

奈緒「いや、あれは…」

友紀「やほー。何か人だかりが出来てると思ったたら、何かの撮影？」

加蓮「だつたら声掛けてきちゃダメでしょーが」

友紀「あ、それもそうか。あははっ！」

莉嘉「……」

友紀「ん？どつたの？アタシの顔になんか付いてる？」

莉嘉「あっ…。いや、ううん。何でもない」

莉嘉（そっだよ。こつちの世界の友紀で、向こうの世界とは、関係ない…）

美波（莉嘉ちゃん…）

友紀「撮影でもないってことは、みんな今フリーなんだよね？だつたら、お姉さんと良いところ行かない？」

李衣菜「良いところ？」

友紀「東・京・ド・ー・ムッ♡」

加蓮「…言うと思った」

友紀「ねーねー、時間あるならいいでしょー？こんだけのアイドルが応援してくれ

ば、最近低迷中のキャッツも盛り返してくれと思うんだ！」

奈緒「そう言われてもなあ……」

加蓮「折角の素敵なお誘いだけど、アタシ達も先約があるんだよねえ」

友紀「そんなあ……。残念……」

莉嘉「……ねえ、友紀」

友紀「ん、何〜？」

莉嘉「変なこと聞かもしれないんだけどさ、車弁慶って人の名前、聞いたことある

？」

友紀「車弁慶？」

莉嘉「うん」

友紀「へえ〜、結構渋い選手知ってるね？」

莉嘉「渋い、選手……？」

友紀「うんっ。車弁慶と言えば、70年代キャッツを支えた、名捕手だよ！」

莉嘉「名、ほしゅ……？」

友紀「そ。分かるように言えば、キャッチャーだよ。名、って言っても、何かスゴい賞獲ったとかじゃないんだけどね。けど、安定したプレイングでチームの縁の下の力持ちで、同期のツワブキ投手とも名コンビって言われてたんだよ！」

莉嘉「そ、そうなんだ……」

美波（形は違っても、こうして小さな縁は繋がっているのね……）

友紀「何々々、お父さんから聞いたのかな？ 莉嘉ちゃん、やつぱりちよつと野球に興味ある？ 何なら、莉嘉ちゃんだけでもアタシに付き合ってくれて良いんだよ？」

莉嘉「あ、や……いやあ……そう言うわけじゃ……」

奈緒「ほらほら、あたしらに絡んでる内に、開場時間過ぎちゃうんじゃないか？」

李衣菜「そうだよ。応援してるチームの試合なら、開幕から見なくっちゃ」

友紀「それもそうだね！ ゴメンっ♪」

李衣菜「また今度誘ってよ。私も莉嘉も」

友紀「その時は絶対一緒に応援してよね？ 絶対だよ！」

タタツ

奈緒「……嵐みたいな人だったな」

加蓮「そだね」

莉嘉「それじゃあアタシ達も行こう！ こうしてる時間も勿体無いよ！」

奈緒「お、おう……」

李衣菜「そう言えば、さつき友紀に何か聞いてみたいんだけど、あれって何だったの

？」

莉嘉「こつちの話！何かもうスツキリした！」

李衣菜「そつか…」

美波「ちよつと懐かしい気持ちになったの。ただ、それだけだから」

莉嘉「さあ、アタシ達も目的地向かって、レッツゴー！」

奈緒「で、お前が仕切るのかよ」

――。

~~~~ レッスルーム ~~~~

「1、2、3、4、5、6、7、8……1、2、3、4、5、6、7、8……！」

卯月「はっ……はっ……はっ……！」

???「やっぱり、ここにいた」

卯月「え……？……あ、凜ちゃん。未央ちゃんも……」

凜「お疲れ。相変わらず熱心だね？」

未央「熱心を通り越して真面目過ぎるんじゃないの〜？」

凜「気持ちは分かるけど。私達にとつては、久し振りのライブだ」

卯月「はい……。私や美穂ちゃんのピンク・チエック・スクール、凜ちゃん達のトライ

アドプリスに未央ちゃん達のポジティブパッション。それに……」

凜「私達3人の、ニュージエネレーション」

未央「ホントひっさびさの出番だね〜」

卯月「はい。でも、この為に戦ってきたんですよ。また私達、3人でステージに立つ。その為に」

未央「私達の戦いも、ようやく報われる時が来たって感じだよね！」

凜「ちよつと気が早い気もするけど。まだインベーターが残ってる。それに、ライブの日だって決戦の日ギリギリだ」

未央「いーじゃんいーじゃんっ！ゲッター軍団、決戦の前夜祭！パーツと派手に、ぶちかましてやろうじゃん？」

卯月「そうですね。……」

未央「ん？それでしまむーは、楽しみすぎて落ち着かないのかい？」

卯月「私ですか？うん……それもありますけど……」

凜「けど？」

卯月「正直、不安なんです。久し振りにファンの皆さんの前で、ちゃんと上手く、踊れるのかなって」

未央「あ〜あ〜」

凜「確かに。落ち着いて考えなくても、私達には色んなことがありすぎた」

未央「ねえ。思えば遠いところまで来たもんだ」

凜 「今は元の場所に戻ってきてるけど。私達が歩んできた道のりは、普通のアイドル、只の女子高生が歩むには、ちよつと特殊だったかも」

未央 「ロボットのパイロットになって、世界を救うだけならまだしも、未来の宇宙に飛ばされたり、訳分かんないところに飛ばされたり。ホント、ハチャメチャだったよね」

卯月 「私は違う世界の自分にも会いました」

未央 「そういえば、そんなこともあったね」

凜 「色んなことがありすぎて、アイドルの仕事からは、確かにかけ離れてたね」

卯月 「はい。今度のステージも、プロデューサーやたくさんの人達が用意してくれた、大切な舞台です。たくさんの方の努力を、たくさんの方の楽しみや思い出を、残念なものにするなんて出来ない。そう思っちゃおうと」

凜 「不安、にもなるか」

卯月 「……はい」

未央 「もう、しまむーもしぶりんも固いんだから。大丈夫、きつと何とかなるよ！昔取ったなんとやらって奴でさ！」

卯月 「未央ちゃん……」

凜 「流石。何か月も真ドラゴンの中で寝てた人は言うことが違う」

未央 「ちよつと……？人を3年寝太郎みたいに言わないでよ。私だって、真ドラゴン

の中で黙ってたわけじゃないんだから」

凜 「その割にすんなりランドウに捕まって、簡単に利用されたりして…」

未央 「うう…！…！しいまあむ…！しぶりんがいじめる」

卯月 「あはは…」

凜 「まあでも、未央の言うことも間違っではないかも」

卯月 「え？」

凜 「私達はアイドル。ファンの人達は勿論だけど、もっとたくさんの人達を笑顔にするために、ステージに立つ。それなら、先ずは自分からライブを楽しまないと」

卯月 「自分から、ライブを楽しむ…」

未央 「しまむーは優しいから、誰かの為につて悩むのはらしいけどさ？私達は何時だって、ぶつつけ本番で何とかしてきたじゃない？だから大丈夫、何とかなるって！」

凜 「あんまり褒められたことじゃないけどね。けど、今は未央の言う通り、私達3人、それに卯月には美穂や響子達、未央にも茜や藍子、私にも奈緒と加蓮がいる。これだけの仲間がいるんだ。ライブは絶対成功する」

卯月 「それを伝えるために、わざわざ？」

未央 「違う違う！だから練習もほどほどにして、みんなで遊びに行こって、友人のお誘いだよ！」

卯月「友人のお誘い……」

凜「どうか？根を詰めてばかりでも、仕方ないと思うけど？」

卯月「……はいっ。お2人の言う通りだと思います！」

未央「それじゃあ……！」

李衣菜「おお！加蓮の言った通り、ホントにいた」

凜「……」

加蓮「でしよ？あの3人は真面目なんだから。頼まれなくてもここにいてるって」

奈緒「そうじゃなくても、ここには来るだろ。今度のライブを成功させたきゃな」

加蓮「むっ？それじゃあ奈緒は、アタシ達は次のライブ、チケットでいいから遊び惚

けてるって思ってるんだ？」

奈緒「なっ……！別にそこまでは言っていないだろ……！」

莉嘉「あはっ☆何はともあれ、これで誘う手間は省けたね」

美波「みんなでフリーって言うのも少ないし、折角ならカラオケでもどうかなって、み

んなで話し合ってたんだけど……」

未央「これもゲッターの導きって奴？」

凜「ただ、行動原理が重なっただけでしょ」

卯月「私は構いませんよ。たくさんのほうが、もっと楽しいですから！皆さ〜んっ!!」

凜 「……やれやれ」

未央 「へへっ！」

そして――、

李衣菜 「――みんな、会場の様子見た？お客さんの入り、スングいよ〜！」

――ライブ当日。

みく「相変わらず趣がないにや〜。そう言うのはステージが始まってからののお楽しみでしょ」

李衣菜 「いやあ流石に久し振りだしさあ？うう〜ん、何かウズウズしちゃうなあ〜」

奈緒 「ははっ。けど、今回ばかりは李衣菜に同意かもな」

加蓮 「ふふっ、この時のためにずっと戦ってきたわけだしね。悔いのないライブにしなきゃね？」

茜 「フアンの皆さんを元気にして、私達も気合を入れていきましょう!!」

美穂 「うんっ！ライブを成功させて、次の決戦も勝つ！」

アーニャ 「Dia! 最終決戦の前哨戦、ですぬ！」

かな子 「お菓子もたくさん用意しましたから、一杯食べて、ライブに備えて下さいね！」

莉嘉 「言われなくても、頂いちゃってるよ〜☆」

ニオン「……ふん」

凜「何スカしてんの。お手伝いの癖にさ」

ニオン「好きでやっているわけじゃない」

凜「それこそ何言ってるの。恐竜帝国順化の為に協力してるんでしょ。ちゃんと真面目にやんなきゃ。そっちの王様も、ニオンの働きに期待してるんでしょ」

ニオン「だが、まだ全ての戦いが終わったわけじゃない」

凜「それは、みんな分かってるよ。だけど、戦ってばかりだと、心が荒んでいくだけだよ」

ニオン「要は気分転換というわけか。……」

凜「まだ何かある？」

ニオン「決戦だ決戦だと盛り上げているが、今木星に集結しているインベーダーも、ごく一部の部隊に過ぎん。恐竜帝国にしても、まだ全てのマシーンランドが、穏健派の意向に恭順したわけじゃない」

凜「……」

ニオン「本当の戦いはこれからだぞ？お前達は、それが分かっているのか？」

凜「答えはさつき言った。それに、私達は戦う為に生きてるわけじゃない」

ニオン「……」

凜 「そつちのマシーンランドでやったっていう、莉嘉達のステージの映像、見たよ」

ニオン 「…そうか」

凜 「皆、心奪われてた。ハ虫人類が知らない、私達の文明に。みんな興味を持って、耳を傾けてくれてた」

ニオン 「全てのハ虫人類が、貴様らの歌に耳を傾けるわけではないぞ」

凜 「それでも、そう言うところから歩み寄っていくことが出来る。武器を手を取らず、分かりあえる可能性があるのなら、恐竜帝国との闘いだって、長く続くことじゃない」

ニオン 「…前向きだな」

凜 「卯月にも李衣菜にも莉嘉にも影響は受けたからね。…ちよつと、こつち来て」

ニオン 「……ん？」

凜 「ネクタイが曲がつてる。今のニオンは恐竜帝国の代表でもあるんだから。あんまりだらない姿してると、そつちの責任者に言いつけるよ」

ニオン 「まったく…。こんな息苦しいものを、ずっとつけていないとだめなのか？」

凜 「メリハリは大事だから。とにかくこつち向いて」

ニオン 「くっ…！おい、顔が近い…！」



瑞樹「…春が青いわね」

鉄甲鬼「それが人間的な詩的表現なのか？」

瑞樹「そんなところね。そっちはどうかしら？仕事にはもう慣れた？」

鉄甲鬼「パイロットをしていた方がよっぽど気が楽だ。気を遣う事が多いのは、どうもな…」

瑞樹「パイロットじゃなくても、元は科学者だものね。これまで全く違う仕事、何て言うのは、気苦労も多いもの」

鉄甲鬼「だがまあ悪くない。俺が本当に戦う必要がなくなるのならば、ああして人間のように働くのもな。…お前の近くで」

瑞樹「あら、嬉しいことを言ってくれるじゃない。なら、仕事に慣れてきたりしたら、私の専属マネージャーとして雇っちゃおうかしら」

鉄甲鬼「望むところだ。…その為にも、先ずは」

瑞樹「ええ、このライブを終らせて…」

菜々「木星に陣取ったインベーターを、追い出しちゃいましょう！」

スタツフ「すいませくん、アイドルの皆さん。間もなく開演時間ですので、スタンバイ、お願いします」

全員「「はーい（にや）っ!!」」

未央「よーし！それじゃあ今回も、この美少女未央ちゃんの魅力で、ファンみんなを悩殺しちゃいますか！ね、しまむー？」

卯月「はいっ♪悩殺できるかは分からないですけど、島村卯月、全力で頑張りますっ！！」

未央「その意気だ！パイロットこなして、一回り逞しくなった新生ニュージエネレーション、魅せていくよ！！」

凜「それ、アイドルとして正しい姿なの？」

李衣菜「正しくても、そうじゃなくても、私達の変わらない帰るべき場所ってね！みんなに証明しに行くよ」

莉嘉「アイドル城ヶ崎莉嘉、それにみんなも！ここにありつてね☆」

ニオン「意気込みは分かったからとつとといけ。ファンが待っているんだらう？」

凜「言われなくても……」

ニオン「ん？」

凜「随分前の約束。私達が何の為に戦ってきたか、しっかりと見せつけるから」

ニオン「裏方では、舞台は見えんがな」

凜「ステージ裏にくらい響かせてみせるよ。私のサウンド。しっかりとその体に刻み付けて見せるから、覚悟してよね」

ニオン「面白い。戦闘以外で、俺を沸かせてみせると言うか！」

瑞樹「まったく、見せつけてくれるわね」

鉄甲鬼「私も期待している」

瑞樹「あら？」

鉄甲鬼「お前がどんな歌を奏でるのか、どんな舞を見せてくれるのか。かつて私に言つて聞かせてくれたものがどんなものなのかを、しかと見届けさせてもらう」

瑞樹「……これは失敗出来なくなっちゃったわね」

かな子（2人ともいいなあ……。伊賀利さん、見に来てくれるかな……）

美波（かな子ちゃん、伊賀利さんのこと考えてるよね、絶対……）

李衣菜「それじゃあみんな、気合入れていくよ！！」

奈緒（だから、お前が締めんのかよ！）

莉嘉「誰の思い出にも残る、最高のステージを作っちゃおう！」

茜・アーニヤ・美穂「「おーッ！！」」

加蓮「結局、まとまりがないんだから……」ハア……

ステージの幕が上がる――。

~~~~~ 数日後、月面軌道直下 ~~~~~

月面を眼下に置き、真ドラゴンを先頭にしたゲッター軍団が行く。

未央「ふいっ…。いいライブだった…」

凜「まだ言ってる」

未央「だって、本当に最高のライブだったでしょ？」

卯月「そうですね。観客も盛り上がりすぎて会場が一体になって…。忘れられないステージになりました」

加蓮「最後のいい思い出になった？」

奈緒「おいおい。さすがに縁起でもないだろ。あたし達のライブは、あれで最後なんかじゃない」

加蓮「分かってるって。＼あれ以上＼のライブを、アタシ達のアイドル活動が続けていく為にも、取り敢えず頭の上のたんこぶを潰しに行く…！」

かな子「たんこぶって、ゲッター太陽が、ですかあ？」

莉嘉「あはっ☆確かにどデカイたんこぶだ」

瑞樹「太陽何て一つで十分なものね」

みく「こつからはみく達もパイロット…！ほら、見えてきたにや！」

卯月「あれが…！」

ゲッター軍団の進路上に、巨大な影が姿を現す。それこそは、

卯月「ゲッター戦艦!!」

李衣菜「おつきい…」

菜々「まさか、本当に3か月で完成させるなんて…」

瑞樹「晶葉ちゃんをはじめとした、世界中の科学者達が力を結集した結果ね」

美波「けどこのサイズ…：…一体ゲッターが何機積めるのか…」

晶葉『想定で15万機以上だな』

茜「晶葉さん!!」

晶葉『待たせて悪かったな。こっちは何時でも発進出来る。今ハッチを開けるから、お前達も着艦してくれ』

卯月「了解です」

李衣菜「そういや、宇宙で着艦するなんて初めてだけど…」

奈緒「おい、一気に不安になるようなこと言うなよ」

晶葉『相対速度だけ気を付けてればなんてことないさ』

李衣菜「まあなるようになるって!当たって砕けるだ!」

加蓮「だから、当たって砕けたら駄目なんだって」

—。

ゲッター戦艦 第一艦橋

ブオン

卯月「……」

莉嘉「……おお……」

晶葉「ようこそ。ゲッター戦艦”エンペラー級” 1番艦、その第1艦橋へ」

菜々「……えつと、ナナ達……格納庫に着艦して、晶葉ちゃんの言うとおりに何か、白くて丸いパネルみたいなのに乗った、んですよね……？そしたら……」

瑞樹「一瞬で第1艦橋だなんて、古いSF映画ね」

晶葉「皆が入ったゲッター用の格納庫からここまででは、日本の丁度半分程の距離があるからな。通常の手段で移動しては、日が暮れてしまうからな」

奈緒「だからワープパネルって、飛躍しすぎだろ」

加蓮「奈緒はこういうの嬉しいんでしょ？」

奈緒「いや、実際に体験するとなると……」

晶葉「ん？ところで、1人足りないようだ……」

加蓮「……」

晶葉「？」

かな子「李衣菜ちゃんなら、医務室です」

晶葉「医務室だと？」

奈緒「あの馬鹿、格納庫に真ゲッターで頭から突っ込みやがって…」

晶葉「成る程。医務室もいきなり稼働といったところか」

未央「それで？まさかアキっちがこの艦の艦長？」

晶葉「いやいや。クルーも含め、今は打ち合わせを終えてこっちに向かっている。そろそろ戻ってくる頃だろう」

卯月「クルー？」

凜「艦長の他にも、オペレーターとか、操舵の人達、まとめてこの艦を制御している人達の事だよ」

卯月「へえ。一体どんな人なんでしょうね？」

晶葉「お前達もよく知っている人間だよ」

未央「へ？」

アーニヤ「アーニヤ達も知っている、ですか？」

美波「だとすると、またアイドル？」

奈緒「いやいやいや。ロボットの操縦ならともかく、戦艦を動かすのは流石に無理だつて」

加蓮「敢えて、晶葉の言い方が意味深でも、大方、テキサスの艦長でしょ」

晶葉「さて、到着してからのお楽しみだな」クッククック

ブオン

「すみません。遅くなりました」

未央「え？」

晶葉「噂をすれば、艦長殿のご到着だ」

茜「艦長、ですか……この声って……」

藍子「ふふつ、ビックリしちゃいましたか？未央ちゃん、茜ちゃん」

未央「あーちゃん……って、ええ!？」

美穂「藍子ちゃんが、ゲッター戦艦の艦長さん?!」

藍子「はい。ふふつ、みんなを驚かせようと思って、黙ってました♪」

未央「い、いやでも、艦長だったって、そんな簡単に……」

晶葉「お前達が真ドラゴンの中にいる間に、色々頑張ってたんだぞ。テキサス艦長の下に、直接手解きを受けに行ったりな」

茜「そうだったんですか!」

藍子「茜ちゃんもパイロットの方で待機になってたから分からなかったよね。ふつ、センスがいいって褒められたんですよ?」

未央「センスがいいって、本当に……」

菜々「けど、艦長服姿も様になってますね」

藍子「ありがとうございます。以前にお仕事で使用したものを参考にさせてもらっ
たんです」

晶葉「他のクルー達は？」

藍子「皆さん、もうすぐ来ると思いますよ」

美波「他のクルー？」

みく「ちよつと待つにや。艦長が藍子ちゃんと言うことは…」

「おう、オペレーターから操舵まで、お前らと同じアイドルだよ」

みく「やっぱり！」

夏樹「…つと、李衣菜の姿が見当たらないな。藍子と一緒に、ビックリさせてやろう
と思ったのに」

加蓮「それなら、後で医務室にお見舞いに行つてあげて」

拓海「んだよ。また怪我してんのか。相変わらずだな」

奈緒「せつかくだから背中叩いてくれよ。パイロットとしてもつと自覚を持って」

晶葉「夏樹は艦の火器管制、拓海は操舵を担当してもらう」

卯月「もしかして、あつちのバイクみたいになつてるシートが…」

拓海「おう、アタシの操舵席だ。イカすだろ？」

卯月「えーつと…その…」

夏樹「バイク感覚で操舵出来ても、1人で乗ってるわけじゃないんだぞ？」

拓海「分ーってるって。デカイバイクを転がすようなもんだろ？任せとけって」

夏樹「…ホントに分かってんのかね」

瑞樹「それで、後ろの貴女達は…」

マキノ「ええ。紹介が遅れてしまったわね」

泉「まあ、目立つつもりもなかったけど」

晶葉「彼女達にはオペレーターینگをお願いしている」

泉「と言っても、私は艦内管制で、みんなとあんまり関係ないと思うけど…」

マキノ「戦闘管制は私が担当するから。何方かと言うと私の方がお世話になるわね」

未央「オツケーオツケー！どっちにしても頼りにしてるよ。マキノン、イズミン！」

藍子「それでは、これよりゲッター戦艦は起動シーケンスに入ります。超弩級ゲッ

ター炉心の臨界後、およそ一時間後には、木星を目指し、空間跳躍を行います」

奈緒「お、おいおい…！ミーンティングもなしに、いきなり飛び込むのかよ…！」

晶葉「今更そんなことしなくても、目的は分かっているだろう？」

卯月「はいっ！私達の真ゲッタードラゴンに、このゲッター戦艦があれば、大丈夫で

す！」

凜「2機のゲッター…正確には1機と1隻のゲッター線を集中させ、暴走状態の

ゲッター太陽を鎮静化させる」

未央「その後、真ドラゴンとゲッター戦艦で分けて太陽化したエネルギーを吸収すれば、事態は解決だ」

美波「そうやって言えば簡単に聞こえるけど……」

加蓮「実際は数万を超えるインベーダーの大群に、ステインガーとコーウエンもいる。ゲッター太陽に近付くのだって、簡単な話じゃないよ」

李衣菜「ゲッター太陽を真ドラゴンとゲッター戦艦のゲッタービーム射程圏内に入れるまで、護衛することが私達の目的ってことだね？」

晶葉「そう言うことだ」

藍子「パイロット各員は、それぞれのゲッターに搭乗して待機を。泉さん」

泉「はい」

藍子「機関室に伝達。ゲッター炉心を起動させて下さい」

泉「了解です。——機関室、聞こえますか」

かな子「それじゃあ、私達は格納庫に移動して……」

ビー……… ビー………

莉嘉「何!?!」

晶葉「予想していたが、随分早かったな」

加蓮「これだけの規模、超弩級ってことは、それだけ膨大なゲッター線を放出するってことだしね」

凜「むしろ、今日まで隠し通せたのが不思議ってトコだね」

卯月「——っ！」

卯月・李衣菜・莉嘉「インペーダーッ!!」

っづく